

インターネット宗教

宇宙に示す心の教え

First update 1996/12/24 Last update 2003/5/1 Author :Masanori Yaoki 八起正法

2003/6/1



正法のhomepageへようこそ！



高橋信次師と園頭広周師の正法の世界

宗教のパラダイム・シフトとグローバル・スタンダードになり得る「正法」

良からぬマインド・コントロールを解消させ、正法による正しいマインド・コントロールをするホームページ！

Welcome to Shoho-web !

97、98年バージョンの予備的公開は一人以上の方、99年バージョンは二十万人余り、2002年バージョンは五十五万人余りの訪問をいただきました。ご訪問いつも有難うございます。



湧き出る神理の玉手箱



● 目次 ●

心行 (しんぎょう)

正法の本

感謝の祈り

八正道 (はちしょうどう)

奇跡の写真

人間・高橋信次

高橋信次師の講演はこうだった

正法と予言

正法と創世記

スライド 大往生教室

正法と人生教室

高橋師の最後の講演

スライド 生老病死の「生」

話題のトピックス

正法と霊界教室

スライド 生老病死の「老病」

ウェブ・マスターの 懺悔録

園頭広周師の講演

正法と生まれ変わりの実例

光を入れる

正法って何だ

阪神大震災はなぜ起こったか

FAX情報サービス

喜捨 (募金) のお願い

[巨星逝く（園頭師昇天）](#)

[オウムや危い教団信者を救う](#)

[あこぎな教団との裁判の仕方](#)

[『天台小止観』講義](#)

[癌死の兄へ贈る詩（うた）](#)

[心の世界](#)

[釈迦教団は円型組織だった](#)

[インターネット宗教
正法を始めるまで](#)

[初めての講演](#)

[女性と男性の正法・神理](#)

[ダイジェスト版 宗教儀式語](#)

[自殺について](#)

[幻の新復活](#)

[エデンの園の朝朗（あさぼらけ）](#)

[正法と経済 その目的と在り方 編集 T・恒勇氏](#)

[スターダリーの哲学及び宗教 北陸 S・誠氏提供](#)

[高橋信次物語](#) 高橋信次師の講演、研修会がいつどこで行われたかわかります。（資料提供 北陸 M氏）

[高橋信次師は東京本部職員を叱る 1973年](#)

[青山斎場での高橋信次師への誓いの言葉 1976年7月10日](#)

[心行の祈願文の解説 園頭広周師](#)

[法語集（信仰の指針） 園頭広周師](#)

[釈迦の生誕から仏教の変遷 高橋信次師](#)

[心の本質、宇宙即我 高橋信次師 1974年一月十三日](#)

[現代宗教に対する疑問 高橋信次師 関西本部講演](#)

[神と人間の関係について 高橋信次師 関西](#)

[人生の目的と使命 高橋信次師 関西](#)

心行

「心行」について

「心行」は、大宇宙の相互間系と人間関係、そして、すべてのものが循環され、この循環が大宇宙の心、中道を軸にして回転

し、人間の魂もまたこうした正しい循環の過程の中で生まれ、調和という目標に向かって転生輪廻を重ねて行く永遠の生命体

であることを、きわめて平易に、端的に文字で表したものである。「心行」の柱となるものは

1、大自然という神の心 2、永遠の生命体を維持する循環の法 3、慈悲と愛の三つである。この三つが「心行」を形作り、私

達を生かし続けているものであり、「心行」はそれゆえに心の教えであり生活の規範である。したがって、これは暗記するも

のではなく、これを理解し実践して行くものだ。実践の過程を通して大宇宙の中道の心に調和され、真の安らぎが体得できる

ものである。言葉は波動である経文もただ読み上げるだけでは意味を持たないが経文の意味を理解し実践している者が唱える

時はその言葉の波動はあの世の天上界まで通じ人々を感動させる。言葉は言霊（ことだま）と言って光の粒子からできてお

り、言葉を発する人の心の在り方いかんでは、言葉の一つ一つが、光の玉となって空間に流れ出て行く。人の話に感動する、

ないしは笑いや怒りが出てくる場合は、話す側の心と、これを受け取る人の精神状態によっても違うが、しかし、純な心で話

す場合は、これを受け取る側に邪心があっても、消えてしまう。また、話はスジが通ってわかるが、サッパリ気持ちが付いて

いかないということもあるであろう。これは話す人の心の在り方が聞き手に大きな影響を与える。純な心は光であり、わだか

まりがあると光が黒い塊となって相手に伝わって行くので、反作用を起こすことになる。ちょっとした寺には釣鐘があるが、

常日頃心の研鑽を怠っていないければ、鐘をツク人の心の在り方によってはゴーンという鐘の音の波動もあの世の天上界にまで

達し、その人に返ってくるばかりか、その鐘の波動は人々の心を浄化してくれる。経文の朗読もこれと同じで、正しき心と行

為をしている者がすると心の統一、安らぎを尙一層助長していく。「心行」の朗読はそうした意味では大切であり、しないよ

り良いということになるが、書かれている意味もわからず、拝めばご利益があるということでは駄目である。般若心経はどこで

も読まれているありがたいお経であるとされている。写経も良し読経もまたご利益があると伝えられている。しかしその意味

も分からず行為のないものが朝晩あげても光は届かない。今日の仏教は、経文をあげたり写経自体にウエイトがかかり、日ごろ

の想念と行為については問題にしていなくて問題がある。「心行」は真意をよく理解して、それを現実の生活の上に現

し、その心で朗読されるならば、一の言霊は二になり、三になって心の安らぎは増していくであろう。「心行」の意味を理解さ

れ、夜眠る前に床の上で静かに朗読されその日一日の想念行為を反省し、過ちを正し中道の心に一日も早く修正されることを

望むものである。

「心行」は宇宙の神理、人間の心を言霊によって表現したものである。それゆえ「心行」は読むものでも、暗記するも

のでもなく、これを理解し行うものである。正法は実践の中にこそ生命が宿ることを知れ。

「心行」の目次

[本文](#)

[祈願文](#)

[先祖供養](#)

[健康祈願](#)

[病氣平癒祈願](#)

「心行」(しんぎょう)(高橋信次師が示されたもの)

「THE WORDS OF THE TRUTH OF GOD」

われいま見聞（けんもん）し

正法（しょうほう）に帰依することを得（え）たり

We have now seen and heard and taken refuge in the True Law.

広大なる宇宙体は

万生万物（ばんしょうばんぶつ）の根元（こんげん）にして

The vast body of the universe is the source of all that exists.

万生万物相互の作用により

転生輪廻の法に従う

All existents are in a state of interdependence and are subject to the Law of transmigration.

大宇宙大自然界に意識あり

意識は大宇宙体を支配し

万生万物をして調和の姿を示さん

The great universe, that great realm of nature, possesses consciousness. That consciousness controls the great body of the cosmos and causes all that exists to be in a state of harmony.

万生万物は、広大無辺（こうだいむへん）な大慈悲なり

All creatures, of every kind, exist in infinitely great compassion.

大宇宙体は意識の当体にして

意識の中心は心なり

The great body of the cosmos is the actual body of consciousness of God, and at the center of consciousness

is the heart of God .

心は慈悲と愛の塊（かたま）りにして

当体意識は不二（ふじ）なることを悟るべし

We should realize that the heart is compassion and love and that body and consciousness are indivisible , identical with each other .

この大意識こそ大宇宙大神霊・仏なるべし

神仏なるがゆえに 当体は大神体なり

This great consciousness is the Great Universe , the Great Spirit of God , and the buddhas . Being God and the buddhas , the body of consciousness is the body of God .

この現象界における太陽系は大宇宙体の小さな諸器官の一つにすぎず

地球は小さな細胞体なることを知るべし

We should know that in this phenomenal universe , our solar system is no more than a small organ of the great body of the cosmos and that the earth is a tiny cell of a larger organ .

当体の細胞なるがゆえに

細胞に意識あり

Being a cell of the body of consciousness , the cell itself has consciousness .

かくの如く 万物すべて生命にして

エネルギーの塊りなることを悟るべし

大宇宙体は、大神体なるがゆえに

この現象界の地球も神体なり

Because the great body of the cosmos is the body of God , this phenomenal world that is the planet Earth is also the body of God .

神体なるがゆえに大神殿なるべし

大神殿は万生魂の修行所なり

Being the body of God, it is the great temple of God. The great temple is the training ground for the souls of every being.

諸々の諸霊皆ここに集まれり

諸霊の輪廻は三世の流転

この現象界で己の魂を磨き

神意に添った仏国土・ユートピアを建設せんがためなり

Spirits of every kind are gathered here.

Transmigration of these spirits through the cycle of the three realms of past, present, and future allows the refinement of the souls in the phenomenal world so that the buddha-land, Utopia, may be built in accordance with the will of God.

さらに宇宙体万生が神意にかなう

調和のとれた世界を建設せんがため

己の魂を修行せることを悟るべし

We should further realize that all existents in the body of the cosmos pursue spiritual training in order to create a world of harmony conforming to the will of God.

過去世 現世 来世の三世は

生命流転の過程にして

永久(とわ)に不変なることを知るべし

We should know that the three realms of past, present, and future are the stage for the transmigration of life and that transmigration is eternally unchanging.

過去世は己が修行せし前世

すなわち

過ぎ去りし実在界と現象界の世界なり

The realm of the past is the worlds of reality and phenomena we passed through when training ourselves in previous states of existence.

現世は、生命・物質不二の現象界

この世界のことなり

熱光環境一切を含めて

エネルギーの塊にして

われら生命意識の修行所なり

The realm of the present is this phenomenal world, where life and matter are identical. Everything - heat and light and the environment itself - is itself the energy of God and the training ground for our consciousness of life.

神仏より与えられし

慈悲と愛の環境なることを感謝すべし

We should give thanks for the environment of compassion and love bestowed upon us by God and the buddhas.

来世は次元の異なる世界にして

現象界の肉体を去りし諸霊の世界なり

The realm of the future is a state of a different dimension and is the world of the spirits that have left their physical bodies of the phenomenal world.

意識の調和度により段階あり

There are levels of mental states according to the degree of harmonization of consciousness.

この段階は

神仏の心と己の心の調和度による

光の量の区域（くいき）なり

They are the areas of the amount of light created by the degree of harmony between our heart and the hearts of God and the buddhas .

神仏と表裏一体の諸霊は 光明に満（み）ち

実在の世界にあって

諸々の諸霊を善導（ぜんどう）する光の天使なり

光の天使 すなわち

諸如来 諸菩薩のことなり

Spirits at one with Got and the buddhas are filled with the light of God and are God's messengers of light who wisely guide other spirits from the world of reality . They are called tathagatas and bodhisattvas .

この現象界は

神仏より一切の権限を

光の天使に委ねしところなり

The phenomenal world has been entrusted to them by God and the buddhas

光の天使は慈悲と愛の塊にして

あの世 この世の諸霊を導かん

They are compassion and love and guide the spirits in both this and other realms .

さらに 諸天善神あり

諸々の諸霊を 一切の魔より守り

正しき衆生を擁護せん

There are also heavenly gods , who protect the spirits from evil and assist righteous sentient beings .

肉体を有する現世の天使は

諸々の衆生に正法神理を説き

調和の光明へ導かん

Those of God ' s messengers who have a physical body in this world preach the True Law , the Truth of God , and lead beings to the light of harmony .

この現象界におけるわれらは

過去世において

己（おのれ）が望み 両親より与えられし

肉体という舟に乗り

人生航路の海原へ

己の意識・魂を磨き

神意の仏国土を造らんがため

生れ出でたることを悟るべし

We should realize that we now in this phenomenal world are voyaging across the sea of life in the physical vessel given us by the parents we chose while in the other realm in order to refine our consciousness , our soul , and to create the buddha - land in conformity with the will of God .

肉体の支配者は己（おのれ）の意識なり

The master of our physical body is our own consciousness

己の意識の中心は心なり

心は実在の世界に通じ

己の守護・指導霊が

常に善導せることを忘れるべからず

In the center of consciousness is the heart. We should be aware that the heart makes contact with the world of reality and that the spirits assigned to protect and guide us always lead us wisely.

善導せるがために 己の心は

己自身に忠実になることを知るべし

Because they lead us wisely, our heart is faithful to ourselves.

しかるに 諸々の衆生は

己の肉体に 意識・心が支配され

己が前世の約束を忘れ

自己保存 自我我欲に明け暮れて

己の心の魔に支配され 神意に反し

この現象界を過ぎ行(ゆ)かん

However, the hearts of many are controlled by their physical bodies, and they forget the promises made in the realm of the past and pass through this phenomenal world concerned only with self-preservation, selfishness, and selfish desires governed by the evil in their hearts and acting against the will of God.

また 生老病死の苦しみを受け

己の本性も忘れ去るものなり

その原因は煩惱なり

We suffer from birth, sickness, old age, and death, forgetting our own true nature. The cause of this is the defilements.

煩惱は

眼・耳・鼻・舌・身・意(げん・にい・び・ぜつ・しん・い)の六根が根元なり

The defilements originate in the six sense organs - the eyes, ears, nose, tongue, body, and mind.

六根の調和は常に中道を根本として

己の正しい心に問うことなり

To harmonize the six sense organs is to pay attention to right mind, based on the Middle Way.

己の正しい心に問うことは反省にして

反省の心は

己の魂が浄化されることを悟るべし

To pay attention to the mind is to reflect on ourselves. We should realize that a reflecting mind purifies the soul.

己自身は孤独に非（あら）ず

意識のなかに己に関連せし

守護・指導霊の存在を知るべし

We are not alone. We should be aware that guiding and protecting spirits are with us in our consciousness.

守護指導霊に感謝しさらに反省は

己の守護・指導霊の

導きを受けることを知るべし

We should thank them and understand that reflection helps us receive their guidance more adequately.

六根あるがゆえに己が悟れば

菩提と化すことを悟るべし

We should realize that correct understanding of the six sense organs leads to the enlightened state (buddhahood)

神仏の大慈悲に感謝し

万生相互の調和の心が

神意なることを悟るべし

We should thank God and the buddhas for their great compassion and realize that a spirits of harmony among all that exists is the will of God .

肉体先祖に報恩供養の心を忘れず

両親に対しては孝養を尽くすべし

We should have a sense of gratitude to our ancestors , physically linked to us , and show devotion to our parents .

心身を調和し 常に健全な生活をし

平和な環境を造るべし

We should harmonize our body and mind , always lead a sound life , and create a peaceful environment .

肉体保存のエネルギー源は

万生をふくめ 動物・植物・鉱物なり

All that exists - animals , plants , minerals - is the source of energy for the sustenance of our physical body .

このエネルギー源に感謝の心を忘れず

日々の生活のなかにおいて

己の魂を修行すべし

Aware of a sense of gratitude to these energy sources , we should spiritually train ourselves in our daily lives .

己の心、意識のエネルギー源は

調和のとれた日々の生活のなかに

神仏より与えられることを悟るべし

By leading daily lives that are harmonious, we will more strongly receive the source of our heart's energy from God and the buddhas.

己の肉体が苦しめば 心脳乱し

わが身楽なれば 情欲に愛着す

Physical suffering becomes spiritual suffering. Without physical suffering, we are apt to feel attachment to sensual desires.

苦楽はともに正道成就の根本にあらず

Neither joy nor suffering is the basis for true enlightenment.

苦楽の両極を捨て 中道に入り

自己保存 自我我欲の煩悩を捨てるべし

Abandoning both extremes and entering the Middle Way, we extinguish the defilements of self-preservation, selfishness, and selfish desires.

一切の諸現象に対し

正しく見 正しく思い 正しく語り

正しく仕事をなし 正しく生き

正しく道に精進(しょうじん)し 正しく念じ

正しく定(じょう)に入るべし

With all phenomena we must exercise right view, right thought, right speech, right work, right living, right effort, right mindfulness, and right meditation.

かくの如き正法の生活のなかにこそ

神仏の光明を得(え) 迷いの岸より

悟りの彼岸に到達するものなり

It is in this way , in the life of the True Law , that we receive the light of God and the buddhas and from the shore of delusion reach the other shore of enlightenment .

このときに

神仏の心と己の心が調和され

心に安らぎを生(しょう)ぜん

At that moment , our heart is harmonized with the hearts of God and the buddhas and peace of mind results .

心は光明の世界に入り

三昧(さんまい)の境涯に到達せん

Entering the world of light , the heart reaches the perfect state of concentration (samadhi) .

(この諸説は末法万年の神理なることを悟り、日々の生活の師とすべし)

(This message is the eternal Truth of God . We should live according to this truth .)

Home

「祈願文」

祈りとは、神仏の心と己の心の対話である。同時に、感謝の心が祈りでもある。神理にかなう祈り心で実践に移るとき、神仏の光はわが心身に燦然と輝き、安らぎと調和を与えずにはおかない。

前文

私たちは神との約束により天上界より両親を縁としてこの地上界に生まれてきました

慈悲と愛の心を持って調和を目的とし人びとと互いに手を取り合って生きて行くことを誓い合いました

しかるに

地上界に生まれでた私たちは天上界での神との約束を忘れ周囲の環境 教育 思想 習慣

そして五官に翻弄され慈悲と愛の心を見失い今日まで過ごしてまいりました

いまこうして正法にふれ過ち多き過去をふりかえると

自己保存足ることを知らぬ欲望の愚かさに胸がつまる思いです

神との約束を思い出し自分を正す反省を毎日行い

心行を心の糧として己の使命を果たして行きます

願わくば私たちの心に神の光をお与え下さい

仏国土・ユートピアの実現にお力をおかしてください

1. 大宇宙大神霊・仏よ

わが心に光をお与えください心に安らぎをお与えください

心行を己の糧として日々の生活をします日々のご指導心から感謝します

1. 天上界の諸如来、諸菩薩（光の天使）

わが心に光をお与えください心に安らぎをお与えください

心行を己の糧として日々の生活をします

日々のご指導心から感謝します

1. 天上界の諸天善神

わが心に光をお与えください心に安らぎをお与えください

わが心を正しいっさいの魔よりお守りください

日々のご指導心から感謝します

1. わが心の中にまします守護・指導霊よ

わが心を正しくお導きください心に安らぎをお与えください

日々のご指導心から感謝します

1. 万生万物

わが現象界の修行にご協力心から感謝します

1. 先祖代々の諸霊

われに修行の体をお与えくださいまして心から感謝します

諸霊の冥福を

心から供養いたします

Home

「先祖供養」

先祖代々の諸霊よ

私たちに肉体をお与えくださいましてありがとうございました

私たちは神仏の子としての使命を悟り正法の生活を実践しております

皆さまの冥福を心からお祈りいたします

もし諸霊の中に暗い世界におられる先祖がございましたらよく私の申し上げる神裡をお聴（き）きください

皆さまはこの世の肉体は持っておられませんが私の話はおわかりいただけるはずですよ

暗い世界は地獄でございます

なぜ地獄で生活しておられるのかおわかりになりますでしょうか

それは人間として生活しておられたときに神仏の子としての使命を果たさなかったからでございます

自分のことばかりを考えて心から人びとに慈悲や愛を与えませんでしたでしょうか

人を恨（うら）んだり妬（ねた）んだり そしたり怒（いか）ったりしたことをよく思い出されて

悪かったことを反省してください

自分でつくった過（あやま）ちを反省し神の許しをお願いしてください

心は安らぎ 必ず天上界に行（ゆ）けます

神理の経文を供養いたしますからよく心に受けとめてください

（心行を朗読し、最後に）

大宇宙大神霊・仏よ

迷える霊に光をお与えください諸霊の罪をお許してください

実在界の光の天使よ

迷える霊に光をお与えください安らぎをお与えください

実在界の諸天善神よ

迷える霊をお救いくださいいっさいの魔よりお守りください

Home

「健康祈願」

大宇宙大神霊・仏よ（氏名をいう）に

光をお与えください

私たちはこの現象界で

肉体という舟に乗り 魂を磨き

神仏の体であるこの地上界に

平和で安らぎのある

ユートピアを建設せんがため

肉体を持ったのでありますが

眼・耳・鼻・舌・身・意（げん・にい・び・ぜつ・しん・い）の

六根煩悩に支配されて

多くの罪を犯してまいりました

私たちの罪をお許してください

私たちは正法に帰依し

自分の使命を悟りました

私たちの心に光をお与えください

心に安らぎをお与えください

当体に憑依（ひょうい）しているいっさいの霊よ

あなたたちは人間に憑（つ）いてはいけません

あなたたちが憑依していると

精神的にも肉体的にも苦しみ

私たちは魂を磨くことができません

この現象界は

あなたたちの住む世界ではありません

あなたたちはいっさいの執着から離れなさい

あなたたちも正法を悟って光の世界へ帰りなさい

実在界の諸如来 諸菩薩（光の天使）よ

この迷える霊をお救いください

実在界の諸天善神よ

迷える霊をいっさいの魔よりお守りください

迷える霊よ

人間界の人びとに憑いていては

安らぎを得ることはできないのです

神仏に祈願して

よく自分自身を反省しなさい

神理の心行を供養しますから

心によく銘記してください

（心行を朗読する）

Home

「病氣平癒祈願」

大宇宙大神霊・仏よ

わが心に光をお与えください

心に安らぎをお与えください

実在界の諸如来 諸菩薩（光の天使）よ

わが心に光をお与えください

心に安らぎをお与えください

実在界の諸天善神よ

わが心をいっさいの魔よりお守りください

私たちは正法に帰依して

日々を正しい想念と行為によって

調和と安らぎのある世界を築きます

（まず自分自身の心に光を受けてから、両方の手のひらを体の悪いところに向け、体より一センチぐらい離して健康祈願する。そしてさらに、次のようにいう。）

当体の意識（患部）よ

あなたたちは肉体舟としての使命を

この現象界に出るときに

神仏と約束をしたはずです

あなたたち細胞集団は

魂修行の目的を果たしてください

大宇宙大神霊・仏よ

当体（患部）に光をお与えください

安らぎと調和をお与えください

（約三十分ぐらいで効果が出てくる。神理を悟った生活をしていれば、こうした効果はさらに大きく現われてくる。）



正法の本

高橋信次師の著書紹介（三宝出版）

「人間釈迦」四部作 偉大なる悟り（1973年初版） 集い来る縁生の弟子たち（1974年） ブッダサンガーの生活（1976年） カピラの人びとの目覚め（1976年、亡後出版）三宝出版社

今から二千五百年前の釈迦の時代を思い出し、自動書記によって書かれた世界でも希なる書。釈迦としての過去世（生）を持つ人でなければ、ああは書けまいと評判の長期ベストセラー著作。高橋師は自ら「私は釈迦でした」と述べた記録は見当たらないようだが、八起ビルでの講師・幹部研修会（昭和四十八年七月）の講話の中で、金魚のフンみたいに付いてくるだけで勉強しない幹部への叱責の言葉がある。「私は釈迦牟尼如来として言っているのです。天上界の権威をもって言っているのです。ついてくる者だけで良いです。一人の心美しい人があればいいのです」と。

また、他の講演の中では「私はインドの時はそうは説かなかったのであります」と、新事実がポンポン飛び出すのが常であった。そして、聴講生の一人が「先生はお釈迦様ではありませんか」と尋ねると「私が誰であるか、解かる人は解かる筈です」と、明言を謙虚に避けている。亡くなる直前（昭和五十一年六月）の講演会では黒板に図示しながら（ビデオ）、

「...たとえば、私がイエス様の当時の話をしますと今度はこれがクルクルッと廻りまして、こちらの人の、私の身体の中にはいってくるから、今度、イエス様の顔になっちゃうわけですね。お釈迦様のこんど、話しをしますと、こちらが出て、今度、お釈迦様の意識がはいって、その当時の意識が身体の中にはいってくるから、今度、お釈迦様の顔になっちゃうわけです。ですから、私が講演を全国して歩いて「あの方は、お釈迦様の生まれ変わりだ」という人が出てくるわけですね。見えちゃうから。私、耳たぼなんかこんなに小さいのに、インドの時、こうなってくるわけですね。眼の方が、ずーっとこうやって細くなってきちゃう。見とって、皆んなビックリしてしまうわけです。そうすると、その人達にとってお釈迦様に見えちゃうわけです。これは光の分霊っていうわけです。エルランティの光の分霊、...」

また、次のようなこともあった。（昭和四十八年夏の熊の湯での自主研修会での講話要約）

東大の印哲を出て神学博士で大僧正というO氏が高橋師を事務所へ訪ねてきた。

「お掛け下さい」

「釈迦と言っているのはあなたですか」

「はあ、釈迦ですね。僕はね自分から釈迦だと言ったことはない。だが、人の口には戸は立てられませんからね。それが本当であるかないかは、あなたがわかるなら立証できる筈だ。あなたは教祖だといって多くの人を迷わしている」

「迷わしていません」

「その証拠に、私が誰であるか、あなたはわからない。わからないということは、人にもわからせられないということだ。意味がわかりますか。大体あなたは、自分の住んでいる場所が変わっているのはどういうわけか。あなたは自分の本妻は四国に置いて、今ここにいるかあちゃんは一切、何者なのか。神さまを説く人がなんですか、そんなことはないとは言わせませんよ。」

「そんなことがわかるんですか」

「そんなエッチな宗教家ってありますか、出直してきなさい。あなたは心のことは何もわかっていない。頭でわかっていても一つも行いができていない。出直しなさい。」、と。

そして、昭和五十一年五月の富士みどりの休暇村の研修会では、「その物差しに当てはめれば、どのようなことがあろうとも、真実なものは真実として自分自身が理解できるようになっていきます。その時に、皆さんは真に、今、私がこのように皆さんの前で力説していることが、一体誰であるかを自分の心の眼で、私を確認する事が出来るのです。やがて、間違った宗教は、私の「正法」の前に、つぎつぎと屈服していきます。モーゼの時より、エリヤの時より、もっと大きな現象が皆さんの前へ起こってきます。私達の仲間が、その準備体制が整った時に、信じようと信じざるとにかかわらず、真の、正しい道が何であるかを大衆はそれによって知らざるを得なくなるのです」、と。

高橋信次師が誰であるか師の講演の中から幾つか上げてみたが、師の周辺の色んな資料から判断すると、高橋信次師は三億六千五百年前の本体のエルランティーであり、その光の分霊（分身）の近年においては三千二百年前のモーゼ、二千五百年前の釈迦、二千年のイエスであったとウェブ・マスターは理解している。何億年という話になるとチンプンカンプンでなにやら危ない話になってくるが、師のアヤフヤでない誠実な人柄と、残されている著書群を手にとって読まれるとキットわかりいただけることだろう。

Home



「心の発見」（「縁生の舟」改題）三部作 神理篇 科学篇 現証篇（1971年から1973年）

「心の原点」（1973年）

「心の指針」（1973年）

「心眼を開く」（1974年）

「愛は憎しみを超えて」（「餓鬼道」改題1973年）

「心の対話」（1976年）

「原説・般若心経」（1972年）

「悪霊」二部作 あなたの心も狙われている（1973年） 心がつくる恐怖の世界（1975年）

「心行」

「心行の言霊」

「天と地のかけ橋」(子供向けの釈迦物語)

「大自然の波動と生命」(絶版)

「人生の羅針盤」(絶版)

「講演ビデオ(UMACHUKU)」と「講演テープ」は多数。

紫色の著書は全国の書店で販売されている。

Home



園頭広周師の本(正法出版社)

「現代の釈尊高橋信次師とともに」

「恋愛・結婚・胎教・育児」 正法と人生の原点

「正法と結婚の原理」

「仏陀をめぐる女性たち」

「信仰の指針」

「正法と現代宗教」

「正法と経営」 人間主義経営学

- 「宇宙即我に至る道」上・下
- 「般若心経講義」
- 「大宇宙の神理「心行」の解説」上・下
- 「園頭広周書簡集」上・下
- 「正法入門」
- 「二十一世紀の宗教」
- 「二十一世紀まで生き延びれるか」
- 「高橋信次先生講演・著作解説集（一）」
- 「高橋信次師のことば」
- 「天よりの使者高橋信次師は語る」
- 高橋信次先生隋聞記シリーズ（一）「人生の目的と使命」
- 「正法と高橋信次師」三部作 1、2、3 園頭広周・花田成鑑共著
- 「新創世記」 高橋信次師・園頭広周師に学ぶー 花田成鑑著
- 「霊能と超常現象」園頭広周監修、花田成鑑著
- 「アガシャの霊界通信」Jクレンショー著、園頭広周訳解説（上・下）
- 「アガシャの講義録1」Wアイゼン著、園頭広周訳編・解説
- 「今なぜ正法か」
- 「母を憶う」（増補改訂版）
- 「大いなる創造のために」（英和对訳）Gサルバット・詩 園頭広周解説
- 「女性読本」、「新・女性読本」
- 「大川隆法はこう読め」、「続・大川隆法はこう読め」
- 「大川隆法は仏陀ではない」
- 「正法誌合本第一巻」創刊号（昭和5 3.9） 第十六号（昭和5 4.12）国際正法協会（正法会）設立15周年記念出版
- 「カセットテープ、ビデオ」（太陽と一体となる禅定、仏跡にて法を説く、等多数
- 「心行」、「感謝の祈り」上質版、携帯用（ケース入り）
- 「グレース」二十数号
- 愛は美しくシリーズ(体験談集) 「愛は美しく」号、「魂の軌跡」号、「正法を實踐して」号

「高橋信次師こそ真の仏陀であった」東明社版



『正法と高橋信次師』全三巻 園頭広周・花田成鑑共著 初版1994年4月



[Home](#)

● 八正道 ●



人間の正しい生き方の基本

八正道・人間の八つの正しい道

中道の道を歩むための、心と生活の基準である中道の生き方を教えるもの。

八正道・八つの正しい道とは何か

正見（正しく見る）

正思（正しく思う）

正語（正しく語る）

正業（正しく働く）

正命（正しく生活する）

正進（正しく人と調和する）

正念（正しい目的意識を持つ）

正定（正しい反省と瞑想、禅定（ぜんじょう）する）

正見、正思、正語はこれらの中でも最も大事な基本である。この八つの規範に当てはめて毎日を生
活すること。これ以下でもこれ以上あってはいけない。

八正道の目的

生老病死の迷いを消滅させ、恵みを与え悲しみを取り除く慈悲の心で、他を生かし助け合う愛の行
為を自然に行えるようになることであり、八正道を学ぶことは即ち法を学ぶこと。それは又、中道
の心の具現にあるのである。

八正道にそった生き方

善を思い、善を行う生活をする事である。慈悲の心で愛の行為をすることが、八正道にそった生き方となる。

なぜ中道でなければならぬか

自然界の生命を育む条件というものは、自然界そのものが常に右にも左にも片寄らない中道の道を歩んでいるからで、空気、水、太陽の熱、光...等、全てのものが外れることなく調和されている。

気温は暑すぎても寒すぎても生きてはいけなく、空気の組成が少し変わっても生きてはいけなく。全て、ほどほどでなければならぬ。このように人間もこの自然界を構成する一つに過ぎないのだから中道でなければならぬのである。

自然界の調和にみる中道

人間を含めた大宇宙は常に相互に関係し合って動いている。太陽系一つをとっても、太陽を中心に九つの惑星が相互に関係し、太陽系という体を形作っている。地上の生活にしても動・植・鉱の相互関係がなければ成り立たない。その相互関係は何に起因するのだろうか。

それは大自然の意識（心）なのである。秩序整然とした意識の働きがあればこそ、大宇宙も、地上の生活環境も、調和されている。地球という球体が出来上がったのは、今から三十三億年前（高橋信次）のことである。その頃は火の玉であり、太陽のように燃えさかっていた。生物が住めるようになったのは今から約六億年前のことである。そして、その軌道は昔も今も変わらない。偶然にしては余りにできすぎていると思うのは当然である。大宇宙には意識（心）が存在する。客観的にこれを説明すると、太陽の熱・光に強弱がない、空気に増減がない、一日に昼と夜があって、決して一方に片寄らない。

例えば太陽の熱・光が強くなったり、弱くなったりしたらどうなるだろう。地上の生命は生きていられないだろう。空気が増えたり減ったりしても同じことがいえる。我々の生活態度も食べ過ぎれば腹をこわし、惰眠をむさばれば体力に抵抗力を失い、もっと体に影響を与えるものは心である。心配事があれば食欲は減退し、睡眠はさまたげられる。どなったり、腹を立てれば血行は悪くなる。人間の体も無理はいけなく、怠惰もいけない。人間は大宇宙、大自然の中で生活している一構成員に過ぎない。このように、大自然の心は、私達に中道という調和ある秩序を教えているということになり、大自然は調和という中道の心を教えているのである。

人生の目的は何か

人生の目的は魂（霊、生命、意識、心）を成長させることにある。すべての宗教は何かあると、調和しなさい感謝しなさいと、「調和」と「感謝」を教義にするが、調和と感謝が人生の目的ではない。人生の目的は人間は神と一体である神の子であるという自覚を、頭で知ることではなく身体全体で、魂のどん底で自覚すること、つまり大宇宙と一体となる「**宇宙即我**」（うちゅうそくわれ）に到達することなのである。

この宇宙即我に到達していくには、その人の心の段階があるといつて良いが、この宇宙即我を体験する唯一の方法が**禅定（ぜんじょう）**である。調和し感謝したときの安らかな心の状態で禅定しないと本当の禅定にならず、宇宙即我への道を進んでいけないからである。調和と感謝はただその入口に立っただけで、人生の目的は宇宙即我への道を進み到達することである。

つまり、神の心の継承者である神の子の私達は、本来、宇宙と同じ大きさの心を持っているのだが、それを小さく自己限定してしまうところに苦しみ悩みが始まるのだ。人生の目的は、それは人生の目的を知ることにある。決して人間は、金銭欲、名誉欲、地位欲、支配欲、ましてや、食欲、性欲などを満たすために生まれてきたのではない。肉体の欲望はみたされても、心の渇きは癒されない。心の渇きを癒すものこそ人生の目的とするのであり、人生の目的を知るために人は生きなければならぬのである。

(宇宙即我「宇宙即我に至る道」園頭広周著 正法出版社を参照)

Home



八正道の各論

正見(しょうけん、正しく見る)

常に第三者の立場に立って、自我の思いを捨て正しく見る努力をすること。正見の反対は邪見。

既成観念を白紙に戻し、物事の真実を知るようにすること。

まず感謝の心を持つこと。

神の天地創造のことわりを知り、人間は神の子として天孫降臨し、調和を実現することが人間の目的であることを知り、その眼ですべてを見ていくことをいう

「わが心をよく知る、知って自由自在にコントロールできる」という力を持つことが、正見できる唯一の条件。事象の一切の原因は人の想念、心にあつて現われの世界は結果である。

正思(しょうし、正しく思う)

正しい思いとは慈悲と愛しかない。これ以外の思いは、すべて自我からきている。

正語(しょうご、正しく語る)

言葉は、意思の疎通に欠くことのできない機能だが、心に愛があれば言葉以前の言葉が相手に伝わり、こちらの意思が正しく伝わってゆくものである。冷静、誠実、愛の心をもって語れということである。

正命(しょうみょう、正しく生活する)

正しい生活は、右にも左にも片寄らない中道にあり、調和ある精神的、肉体的生活を意味する。つ

まり、正しい生活とは、それは八正道の目的である中道を物差しとして、己の業（心の傾向性）を修正し、中道に適った生活をするということである。正命の目的は自分を正すものだが、詳しく述べると次のようになる。

（目的）精神的、肉体的な調和をめざし、業と化したさまざまな原罪（自己保存の想念）を正すことにある。肉体的な調和をめざして、悪い業となったものを修正して善に替えてゆく生活である。

正業（正しく働く）

地上界のあらゆる生物は、働くように仕組まれている。動物も植物も、そして鉱物さえも、この地上の生きとし生けるものに、その体を提供している。

人間の場合も、その点は老若男女を問わない。幼児は乳をのみ、眠ることがつとめである。学生は学校で学問を学び、社会人は社会のために働く。主婦は家庭にあって子供を守り、夫の仕事が円滑にゆくよう、安らぎの場を与えるものである。働くということは、人間としての義務であり、同時に、人々に必要なものを提供することを意味し、自らの生活を維持し、人々の生活を支えることである。

そして、各人が人々に奉仕するという愛の心が根底にあらねばならないが、今日の社会生活はそれぞれがその業務を分け合い、互いにその生活を補い合い、助け合っている。すなわち、分業化によって、それぞれの生活を支えているというのが実状である。

（目的） 1．魂の修行 2．地上界の調和 3．奉仕

仕事をし、職業に就くことが愛の行為にも拘わらず、社会がこんなに混乱するのは、仕事を単に金儲けの手段と考え、人はどうしても自分さえよければいいと思うのがその原因である。

正進（しょうじん、正しく人と調和する）

正進の目的は人間関係の調和にある。正命の目的が自分を正すものだから、その次にくるものは、人々との調和なのである。人間関係とは夫婦、親子、兄弟、友人、隣人、そうして個人と社会の関係である。

正念（正しく念ずる、目的意識を正しく持つ）

念というものは、こうしょう、ああしょう、こうありたい、という目的意識であり、意志の決定であり、行為である。念はエネルギーであり、心の中の創造行為を形に具象化して行くものである。

正定（しょうじょう、正しく反省する・禅定する）

正しく定（じょう）に入るとは、今日一日をふりかえり、八正道の正しさに反した想念と行為がなかったかどうか。あったとしたら、どこに、なぜ...というように静かに反省し検討することである。

そして正道に反したことは神に詫び、明日からは絶対に二度と再び同じ過失をくりかえさないように努力することである。

つまり、正定の第一歩は禅定という反省的瞑想から始まり、第二は反省後の心の統一、第三は守護、指導霊との対話 第九は釈迦、イエスマーゼの瞑想である。

座禅の目的は心をカラにし、その空の中から己を見い出そうとし、一般的には無念無想になることが仏を見性することになるという。ところが、釈迦が教えた瞑想はそうではなかった。

釈迦の瞑想の目的は反省にあって一日二十四時間の、正しい生活をめざすものであったと高橋信次師は教えた。瞑想のための瞑想ではない瞑想的反省は、こうした心のゆがみを修正して本来の丸い

豊かな心にするためにあるのである。

反省する場合に大事なことは、まず自分の善い所、長所をしっかりと知り、自分にはこういうよい所があることを確認した上で、悪い所欠点はないか、ということを実省することである。そのような反省をすると、欠点を長所に置き替えることが楽になる。

ところが反省というと、悪い欠点だけを探そうとするから、反省することが苦しくなり、自分がいやになる。そして、悪い所だけ、不満足な点だけを見つけて探し出しているから人生が暗くなり、自殺者が出たりするのは、そういう反省をするからであると知らねばならない。



[Home](#)

Miraculous Beam

奇跡の光跡



Takahashi

上の写真は昭和四十八年の九月一日から十日、志賀高原特別研修（長野県竜王）での高橋信次師のスナップ写真である。次の写真と多いに関係があるので、この時の情景を詳しく述べてみよう。

このとき高橋信次師は弟子の中から九人を選び、インドの釈迦の当時と同じ研修をした。九月二日の午前は質問の時間だった。園頭師は、かつて本部講師をしていた「生長の家」教団の教義の問題について質問しようと考えていた。すると、「園頭さん、あなたの質問はキリストに答えてもらいましょう」と質問をするより早く園頭師の心の中を読んで告げた。



高橋信次師と弟子達

瞑想にはいると信次師は、「心に愛のない人に、心の法則、心と肉体との関係、を教えるはなりません。心の法則は、人が愛の心を持った時に教えなさい。...」と、キリストは信次師を通して教えるのだった。

園頭師が最初に見た信次師は釈迦の相（すがた）だったが、いま眼前に現われている姿はキリストであった。固唾を飲んで顔を見ていると、不思議なことにも信次師の顔がイエス・キリストの顔に似てきた。瞑想を解いた信次師が「園頭さん、わかりましたか」と言った直後に、「モーゼにエホバと名乗って出たのは私ですからね」と。そのとたん園頭師は、それまで経験したことのない神の権威に打たれて信次師の前に跪（ぬかず）く。跪いているのだから、信次師の姿は見えないが感じたという。信次師は釈迦の相を示現している。すると、不思議なことに釈迦の相の上に大きな光りがあって、それは釈迦の権威を超越したもう一つの大きな権威だった。園頭師は跪きながら、その感激に、そのありがたさに泣き出してしまふ。園頭師の頭は、その権威の前に自然に下がった。それは頭を上げてなどはいられない全く自然なものであったが、上げようと思っても上げられるようなものではない霊の権威、霊の重圧であったという。信次師の言葉が終って頭を上げようとした。そのとたんに園頭師の頭は今度は押しつけられるようにして額（ひたい）を畳にすりつけていた。そして、言葉が胸の奥からほとばしり出た。頭は畳にすりつけているのに園頭師の心眼は信次師とその背後にある釈迦とキリストを通して、はるか彼方からというか、はるか上からといっていいか目も眩むような神の光りを園頭師は見ている。「神よ、この偉大なる方を今、この世に下したまいて、われらの心の光りとなさしめ給いしことを感謝申し上げます。」肉体を持った園頭師は、信次師の前に跪いているが心は信次師の心と神の光（神の心）とが一つであり、神の光が肉体を持つ姿となってこの現象の世界に現われ、それは神が全人類を救わんがための神の愛であることを知ったという。大きな権威 光 釈迦 イエス 高橋信次 そこから流れ出る、「仏法・正法」こそは神の心の流露であった、と園頭広周師は言う。

「園頭師は何を質問しようと思ったのか」

それはこうだった。精神身体の医学を宗教にとり入れたのは生長の家だった。この病気の原因は、こうゆう心から起ると学んだ指導者達が、病気の悩みを持って個人指導を受けると、頭からいきなり「あなたは、こんな心を持っているから、そのような病気をするのだ」と相手を裁くようになってきた。親切に指導してもらえと思ったのに、もう行くもんかという空気が生まれていて、これはどうしたものかと園頭師の長い間の疑問だった。それが、心に愛のない人に「心の法則」「心と肉体との関係」について教えるはならないという答えだった。愛があれば裁かない。愛があれば責めない。愛があれば相手の欠点を指摘して偉ぶることはないのだから。



「目もくらむばかりの神の光とは何か」

高橋信次師は、それはエル・ランティであると言い残した。宇宙創造の神が姿を現わされたことは今だかつてない。拝み屋さんなどに出てくる神は動物霊か地獄霊だが、エル・ランティは神より、この地球の人類の指導を委ねられた最高責任者。また、神の子であり、直接、神の光を受けている真のメシヤ（救世主）である。高橋師が亡くなる直前、昭和五十一年六月初旬の岩手の東北講演会（最後の講演会となる）では、詳しく触れられているが、一言で述べると、三億六千五百年前にこの地球に初めて七大天使と共に光子宇宙船（いまで言うUFO）で飛来した最高責任者である。最初の飛来地はスエズ運河近郊のアル・カンタラで、ここが理想境、エデンの園だった。



先へ進むことにしよう。それから信次師は弟子達に、生まれてからこれまでの想念と行為について、しっかりと反省することを命じた。弟子達九人は、壁に向って反省したり、部屋の内側に向って反省をはじめた。信次師は自分の部屋から、弟子達の反省が潜在意識に記録されているものと同じかをチェックする。

しばらくして部屋に入ってくるなり信次師は、「あなた達の反省は同じ所を堂々めぐりして一向に反省になっていない。心のテープレコーダーに記録されていることと違っているじゃないですか。これから紙に書きなさい。それを私が見ます」、と。園頭師は次のように言う。「身体がすくんで血の気が引く思いがした。しかし、高橋先生にはすべてわかっているのだから。脇の下から冷や汗を流しながら勇気を振って書いた」、と。

「さん、あなたは本当は喫茶店を十一ヶ所出していることになっていますね」

「エッなんですか」その人はびっくりして問い返した。多くの人々に接している時の信次師は少しも気どらない気さくな話し方をした。しかし、一旦、天上界より霊の権威を以って話す時の信次師は、実にこわい人であったという。その権威の前に、全員が自然に頭が下った。その人は真っ赤になり、つぎに蒼白になってふるえ出し、神妙になった。そうして指を折って数え出した。

「いいえ、先生、九つです」

「違いますね十一です。あなたの心のテープレコーダーにちゃんと記録してあります。ぼくをごまかそうと思ったって、そうはいきませんよ」

また、指を折り出した。しばらくして、「先生やはり十一でした。」

「そうですね、あなたは何時も女の人を騙す時に喫茶店を出してやるからと言っていましたね」、と。そして、

次に

「あなたはダブルパンツを食ったことがありますね」いわれた人はきょとんとしていた。暫くしてから

「ダブルパンツですか、＂ダブルパンチ＂とちがいまっか」、その人は関西の人だった。

「ちがいますよ。ダブルパンツですよ」

信次師はユーモアのある人だった。

「ダブルパンツですか。それはどういうことですか」

「あったでしょう。税金のことで」

と、いわれると、その人は真っ赤になってひれ伏してしまった。

その人は終戦直後の税金攻勢に悩まされていた頃、近くに税務署に勤務している人の妹があった。その人は妹に近づき、税金を安くしてもらった。そうしている内に、男の子が生まれた。本妻の方にも男の子が生まれた。同じ小学校に上ることになった。うっかりして、PTAの集まりに出た。「お父ちゃん」といって、両方から飛びついてきた。子供同士が「うちの父ちゃんだ」と喧嘩になって、「それじゃ、うちのお父ちゃんはどんな色のパンツをはいているか」、と。それを反省しなさいと信次師は言った。このようにして信次師は反省の厳しさを教えたのである。

Home



弟子達は困っただろう本当に、まったく全てお見通し。これに似た話はまだ幾らでもある。金に汚ない人には夢を操り、金が落ちている夢を見せる。その人が手を出すと、「失敗しましたネ」と電話が来る。また、女性に弱い人には絶世の美女が夢に出てくる。弟子はつらかった。菅原氏の著書には絶世の美女が腰をくねらせて出てきたことが書かれているし、村上宥快というお坊さんも著書で、高速道路であわや大事故になりそうだったが、それを報告するより一瞬早く「よかったね」、と。林家木久蔵氏の著書には、高橋師を尋ねて行くとき手土産に果物を持参されるが、訪問されるまでの全行程を透視され、指摘されて木久蔵氏も驚いた。レスリングの猪木氏はモハメド・アリとの格闘技で高橋師にアリ・キックを伝授されるが、アリの最大の弱点をアリの守護霊に尋ねて指導されている。

「どうして、高橋師は人の秘密が何でも分かったのか」

人にはそれぞれ魂の遍歴がある。たとえば何千年前には何処かに生まれ、何万年前には何処かにというように人間の生命は永遠不滅である。これを輪廻転生（りんねてんしょう）とか転生輪廻というが、正法は一般に言う輪廻論である。この生まれ変わりは正法の大事な柱であり、別の項では生まれ変わりの実例を挙げて詳しく説明しているので参考にして欲しい。

人は、本体と五分身という六人の魂の兄弟達がうつりかわりこの世（地上界）での人生を送る。この六人の魂の兄弟達の中で次に生まれ変わる予定の魂が、守護霊となって現世の人を大過なく人生を送れるように見守り守護をしている。この守護霊、いわば自分の過去世の人が守護霊として四六時中その人を見ているので、守護霊に、その人となりを聞き出すから全てが分かるというのがその答えである。

それは聞出すからだと簡単に述べたが、この世も同じことで、信頼をして心を許す人以外には尋ねられたからと言って見境なく誰にでも心の秘密を話す人はいないように、あの世は光の量の区域とって、心の段階、人格の段階が厳然としてあるので、あの世の人から聞き出すことは尚さら難しい。だが、高橋信次師は人格、霊格の最も高い人であったので自由にその能力を発揮できたのだ。これを他心通という。世の霊能者といわれる人に、その能力が有るかどうかが正しい目で比較して欲しい。動物霊や地獄霊の協力でもそれらしき能力を発揮できるが、それらの霊の協力によるものなら当たったり外れたり、そのうちに馬脚を顕わすことになるのである。正しき者なら万に一つも間違いが有ってはならない。正法の教えはデジタルの世界である。「1」か「0」か、正しいか間違いかという数学の世界である。

また、守護霊というと、あたかも特別の霊がいて守護をするかのように錯覚するが、そうではなく自分の過去世なのだから、自分の今を見たら守護霊の段階も想像がつくだろう。こう言ったらにべもないが、巷間のその種の本のタイトル『 - - 守護霊 - - 』に注意しなければならないのである。そして、天上界に行ける心の人のみが、この世に生まれ変わることができ、地獄界の暗い心の人には絶対生まれ変わることができない仕組みということも覚えて欲しい。

現代は、携帯電話などの便利なものがある。故障をしたり電池が切れると無用の長物と化すが、原始人類の初期のころは、五悪（恨み、妬み、謗り、怒り、足ることを知らぬ欲望）が人類の心の中にはなく、人類はお互いに自由にコンタクトできた。通信だけでなく肉体から抜け出した意識によって見てくることも出来た。電波も届かぬ深海や宇宙の果てから、あの世に至るまでコンタクトできた。わかりやすく言えば、テレビの海外ライブのような音声ずれも無い、時間も空間もない想えば即の念の世界。それはそれは素晴らしいものを人間は自ら持っていた。だが、その能力も五悪の想念によって閉ざしてしまったというのである。

先へ進もう。最初の二日間は徹底して反省であり、残りの八日間は禅定瞑想（反省的瞑想）だった。そこは長野だが、山一つ越えれば新潟県だ。時々熊が出るらしいが、弟子達は夜十二時になると敷物を持って山へはいり、懐中電灯を照らしながら場所を決めて坐わる。満天の星に見とれ、午前一時から四時頃まで山中に散って禅定瞑想をするというもので、心を完全に開いて解放し天地間、すべてのものの動きを声と心でキャッチする訓練である。離れた所にいる信次師が「念」を発し、それを弟子達がキャッチするという訓練であった。

園頭師は次のように言う。「それぞれ、みな離れて座を占めて禅定に入る。禅定瞑想するとなると、多くの人は精神統一することと考えると凝念してしまう。そうではない。完全に心を解放して、心が何ものにもとらわれない状態になって、天からの啓示を完全に受け、潜在意識の底から湧き上がってくる想念とを、自分の胸の、今の一点において結び合わせるのである。その時、先生の鞆持ちをしていた二十三、四の青年がいて、禅定の姿勢のままこっくりこっくり眠ってしまう。すると集合を命ぜられ、懐中電灯で足下を照らしながら、声のする先生の許へ集まる。どすーんと倒れる者もいたが、集まると先生は一人一人にどのように発信したかを尋ねる。

「君、いくらぼくが心の扉を叩いても、ぐっすり眠って、眼を覚まさなかったね」と。信次師が発した念を、キャッチすることが出来る人も出来ない人もいたが、この修業が夜中の一時から四時まで続き、昼は心の浄化をはかり夜は禅定瞑想をして、九人の弟子達はインドの時と同じ修業をしたのである。

離れた所から送られる想念のキャッチの訓練を、信次師は次のように言っている。受信機と発信機は人間が製り出したもの、ラジオやテレビは人間がつくったものである。人間の心の中には、その作用がすべて整っている。ただそれを自分が受ける能力を持っているか、いないかだけの問題で、皆さんの心の中が、人を恨（うら）み、妬（ねた）み、謗（そし）る、そして怒る心をつくったり或いは自分自身がより大きな欲望、足ることを忘れ去った欲望が多くなると、心にスモッグが出来てしまい、それが多くなればなる程、盲目となり、その力を閉ざ

すことになる。そして念の速度は光の速度より速い。念の世界には時間、空間がない。つまり思えば即の次元である。

現代は、携帯電話などの便利なものがある。故障をしたり電池が切れると無用の長物と化すが、原始人類の初期のころは、**五悪**（恨み、妬み、謗り、怒り、足ることを知らぬ欲望）が人類の心の中にはなく、人類はお互いに自由にコンタクトできた。通信だけでなく肉体から抜け出した意識によって見てくることも出来た。電波も届かぬ深海や宇宙の果てから、あの世に至るまでコンタクトできた。わかりやすく言えば、テレビの海外ライブのような音声ずれもない、時間も空間もない思えば即の念の世界。それはそれは素晴らしいものを人間は自ら持っていた。だが、その能力も五悪の想念によって閉ざしてしまったというのである。

Home

花ー0006.jpg (4455 バイト)

「特別研修といえば、志賀高原のホテル竜王が、何回も使われて」

信次師は言っている、ここは霊域が精妙で良いから、と。そして、このとき次のことも明らかにしている。昭和天皇は、インドの時のアショカ王、その後のカニシカ王だった。大変、勇気ある王だ、と。アショカ王は、世界で初めて戦争の放棄宣言をして仏教に皈依した偉大なる王である。今世紀には、第二次世界大戦の終戦の決定を宣言されたことは不思議であった。そして、昭和六十三年五月には、ホテル竜王は園頭師の主宰する国際正法協会の全国支部長・連絡所会議が開かれたが、ホテルの主人と奥さんが当時を思い出し、「高橋先生にサインを頂いた本は大事にしております」と涙ながらに話した。そして、「ここで特別研修を受けられた方々も、今はちりぢりになって」、と感慨深そうに園頭師に話している。また、この特別研修の時、高橋信次師は

「この宇宙には七つの霊圏があり、この地球を中心とした霊圏を指導しているのが、アガシャ系であり、このアガシャ系がいちばん早い速度で、霊的に進歩しつつある」と。この大宇宙には七種の間人がおり、姿形は地球人と同じで、人間は人間だ、サルから進化したものではないと。同じく、この時、「世の中は物質文明の時代から霊的文明の時代へと移ってゆく」と言っている。研修の五日目の夜の休憩の時、信次師は「私の母は、かつてキリストを生み、日蓮を生んだ人だ」と言い残している。



この項の一番最初の写真に現れた奇跡のスポット

上の写真は、昭和五十二年六月二十五日、高橋信次師の亡後一周年のG L A（高橋師が創設した宗教団体・神光会・God Light Association）記念集会在東京・社会党会館で開かれた。前掲のスナップ写真がスライドで映された時、東北の一会員S秀雄氏が二枚つづけて写真を撮り現像したところ、一枚に不思議な光が感光しているというのでプリントされたのが、この写真である。

この光の意味を推測するために、信次師亡後一年の歩みを経時的に見てみよう。信次師は、亡くなるひと月ほど前から、リンゲル注射を打ち続けていた。にもかかわらず、東北の研修会には、家族、側近が懸命に止めるのを聞き入れず「行かねばならぬ」と無理を押し講演（「高橋師の最後の講演」の項にある）をした。渡辺泰男氏は、自著にこう書いている。

「特に、この時の『新復活』というご講演は、獅子吼とはこのことをいうのだなああと心に思ったほどの渾身のエネルギーをふりしぼった大講演で、後にも先にも、このような場面にふれたことは、この時だけだと思っている。ことに、最後の十分間ほどは先生がこのまま光のエネルギーに昇華されてしまうのではないと思われるほどの迫力だった。汗は金となり、それが照明でキラキラ輝く。特に右側の頬に大きく金の塊が生じているらしく、口の動き、頬の動きに応じて、ダイヤモンドのように光り輝いて見えたのが印象的でした。終わってから、講師一同が先生のお部屋にご挨拶にあがった時、右頬についていた金の塊を取って見たら、「Lの字になっていましたよ」とおっしゃった」、と。

そして、昇天の直前のある日のこと 園頭師に、信次師の本を勧め、正法帰依のきっかけをつけたK氏は、こう話す。「私が、六月のはじめ、自宅の前まで帰って来た時、一人のやせた青年が「Kさん」というのです。誰かと思ったら、高橋先生でした。「先生はどちらへ」「病院へ行っての帰りです」「どうぞ、おあがり下さい。お茶でも」。先生は、私の家に一時間半位いらっしやいましたが、「Kさん、こんなに肉体を酷使するんじゃないかった」といって涙をためていらっしやいました。高橋先生は私に気持ちを伝えておけば、懇意にする釈迦第一の弟子といわれた舍利弗・園頭先生に伝えてくれると考えられて、それで、わざわざ、自宅とは反对方角の私の家を訪ねられた、これしか考えられません」と話す。わざわざ反対の方角のK氏宅へ。Kさんの家は病院から北

の方角であり、信次師の自宅は病院から南の方角。まったく反対の方角。わざわざ来られたとしか考えられぬというのである。

一九七六（昭和五十一）年六月二十五日、高橋信次師は昇天した

高橋師の著書を出している三宝出版社の、かつての社長の堀田和成氏は、著書にこう書いている。

「死の四カ月ほど前、釈迦に説法とは思いましたが、折に触れて休養なさるようおすすめしました。そんな時先生は、「わかっています。私の体は私がいちばんよく知っている。だが、やるべきことをやらねば私の役目が果たせなくなってしまう。私はただ、やるだけなのです」と言われます。先生は死を覚悟されていました。残された時間をいかに有効に使うか、それだけがお心を支配していたようであります。「先生のお気持ちはお察しします。しかし、細く長くという言葉もあります。今のお体には休息がいちばんと思います。ゆっくりと体をお休めになってください」私は、先生に繰り返しそう申し上げました。＜中略＞しかし、時すでに遅く、六月二十五日午前十一時二十八分、ご家族の方の見守られるなかで、その短い生涯を終えられるのでした。」

高橋師の奥様である高橋一栄氏は、著書に次のように書いている。

「『さあ、起こしてくれ。上衣を出してくれ。私は行かねばならない。みんなが待っている』主人は、床の中で、そう私に叫び続けます。自分の体が自由にならないのに、気持ちだけは明日に迫った関西講演に、早や心は飛んでいるようでした。＜中略＞しかし、主人はもう何日も物を食べていません。それどころか東北講演ですっかり体を使い果たし、そのうえ、つい一日前、ある方が八起ビルに訪ねてくるというのでわざわざ出かけて行き、夜の十時すぎまで話し合い、その無理がたたったのでしょう。＜中略＞今にして思えば、あの時の主人は、家族の者の理解を越えたある使命感だけに己れの魂を燃焼させて生きていたと思います。それから十日余りして主人は昇天しましたが... 『心に法ありて』

また、同じく渡辺泰男氏は「私が会社で執務していると、午後二時頃、G L A本部の信次先生の実弟の興和先生から電話がかかってきて、本日午前十一時二十八分に、高橋先生が亡くなられたというのである。そして明後日から和歌山県の白浜で関西地区の研修会が行われることになっているが、それに私に出席してくれないかという。おり返し本部に電話したところ＜中略＞忙しい葬儀の準備の合間をみて、私は五階に安置されていた先生のご遺体に最後のお別れをさせていただいた。安らかに目を閉じていらっしゃる先生のお姿を拝しながら、お釈迦様の涅槃とは、このことをいっているのだと。 『ノアの箱舟』

信次師の長女・高橋佳子氏により『真創世記』三巻が出版されている。これは当初から佳子氏の作ではないともっぱらの評判もあったが、佳子氏自らが靈感を受けて短期間に書かれたということになっていた。しかし、昭和六十一年『アドベンチャー・八月号』五十四頁に、SF作家の平井和正氏が「『真創世記』は、私が半年ぐらいにわたって書いた」と発表した。十年目にして真相が明らかとなっている。この『地獄篇』に、父・信次師についての記述がある。引用文献として問題があったが、父と娘の親子愛の機微には、平井氏といえども創作出来ない、割り込めない部分があったと思う。その考えに立って一部引用要約を断っておきたい。

回想の父

＜前略＞ その父が、もう自分の肉体に自信がないというのです。そして、父の喉を食事が通らなくなりました。父は力のかぎりを振りしぼって講演を続け、最後の本になるべき原稿を書き続けました。その原稿は私の手もとにあります。父はこの本は世界を動かすものとなるだろうと、言い続けていました。異様にはれあがって食事もできない不自由な手でペンを執りつづけたのです。＜中略＞約束が守れないと知った父は、関西の講演会場の方向へ向けて土下座をしました。「行けなくて、皆さん申しわけありませ...」涙をポロポロ流して詫びるのです。六月十八日、死の一週間前、一人では動けなくなった父は、自宅から、浅草の八起ビルへ移りました。死の三日前になって、父はようやく布団をしいて体を横にし「ああ、やっとオレも病人らしくなったなあ」それが父の感想でした。脈搏が乱れはじめた時、あと六時間だけ生きてちょうだいと哀願しました。その時、全てが正常にもどり、父は正確に六時間生きつづけました。そして心臓は停止しました。そのとたん、私が危篤の父と同じ状態になりました。死と同時に肉体を離れた父が、私の中に入ったための現象だったのです。その夜から、父は私の体を借りて語りはじめました。私の記憶はないのですが、完全に父の口調で、母と語りあい、別れを告げたといえます。

『真創世記・地獄篇』

Home



信次師からの意識による最後の霊的通信

「アナタ達ハ、自分ノ使命ヲ果シナサイ。コレカラ、ドノ様ナ事ガアッテモ心ヲ動カシテハイケマセン。私ガアナタチノ心ノ中ニ生き続ケテイル事ヲ知リナサイ。私ノ地上ノ生命ハ間モナク終リマス。然シ悲シシンデハイケマセン。自分ノ心ノ中ニシッカリト法灯ヲトモシテイキナサイ。コレカラハアナタチノ本当ノ使命ヲ果ストキデス。 <中略> アナタチハ、自分ノ心ヲ作りナサイ。自分ノ心ノ中ノサマザマナ誤リヲ正シ真実ノ自分ヲ作り、ソシテソノ愛ヲ拡メテユクノデス。コレガ私ノアナタ方ヘノ最期ノ言葉デス。

そして、園頭師は、信次師の昇天についてどう書いているか要約しよう。

「信次師は二十五日、自ら予言されていた通り四十八歳で昇天された。その二日前、即ち二十三日、とにかく上京してほしい、理由は言えないという電話で園頭師は上京する。その時、既に信次師は昏睡状態だった。八起（やおき）ビルに集められたのは、当時のGLA東京本部の理事と、GLA関西本部の理事三人と、当時GLA西日本本部長の園頭師であり、その外に当然、一栄夫人、佳子氏、実弟の興和氏がいた。人は死ぬ時は、たとえどこにいても自分の家に帰って死にたいと思うものである。なのに信次師は、一週間前に八起ビルに移って、いつも使っていた部屋に寝ていた。園頭師は、二十四日の夜も一睡もせず、信次師が昇天した後のことを考えていた。二十五日の朝になって実弟の興和氏が「サウナ風呂にでも」と勧めた。幹部の一人は「そうさしてもらいましょうか」と立ち上った。偉大なる師の昇天を前にして何んとも不謹慎なと思った。園頭師は一人別な行動をとった。これまで、自分の生活の基盤、活動の基盤が変わって、新しい決意をもって行動を開始しなければならない時に、いつも古い靴をすてて新しい靴をはいた。他の講師達はサウナ風呂に行くといって出たのに、師は一人靴屋へ走った。新しい靴をはいて帰ってきて間もなく信次師は昇天した、と。

偉大なる出家

園頭広周

「キリストの復活と同じような奇跡が起ることを念じつづけたが、私達の祈りは空しかった。高橋先生の肉体はその酷使によって、肉体生理の限界を越えて修復不可能になっていたのである。私はそこに如来の慈悲に溢れた崇高な死を見た。自分の肉体の最後のひと呼吸までをも衆生のために捧げ尽されたのであった。自らのためには生きられなかったのである。求める人があれば、既に限界を越えている肉体を酷使して「法」を説きに行かれたのである。今から二五〇〇年前、インドでは釈尊は二十九歳の時に出家された。私はなぜ今回は高橋先生が死の一週間前に大森の自宅を出られたかを考えた。その時、私の頭にひらめいたのは「これが出家だ」ということのであった。「偉大なる出家だ」私がなぜ大森の自宅を出られたのかを考え始めて一分もしないうちに、天からの

声を聞いた。インドの時の出家は二十九歳であったが、今回は四十八歳の死の直前、やはり出家されたのであった。「偉大な出家だ」天からの声を聞いたとたん、高橋先生の肉体は黄金色に輝き、その瞬間、高橋先生の黄金の姿が空間に見えた。しかし、瞬時にしてその姿も消え、そこには普通の人の死と変わらない姿があった。＜中略＞ そうだとするならばなぜ高橋先生は、いよいよという時になって自宅を出られたのであろうか。私はそこに「偉大なる出家」を見たのである。われわれはこの地上を去る時、この地上のなにものにも執着してはならないことを教えられた。金や物や地位、名誉だけでなく、人に対しても執着してはならないのである。＜中略＞ 高橋先生の慈悲は、全人類に遍ねくゆき渡ると説かれてきたように、家族だけを愛されたのではないのである。もし、家族だけを愛されたと考える人があれば、それは高橋信次先生を、そうして釈尊をも歪曲するものである。高橋信次先生が大森の自宅で亡くなられるということになると、それは高橋家の人の死という印象が強くなって、高橋先生が説かれた「正法」までが高橋家のものとして私物化される恐れがある。高橋先生が説かれた「正法」も、高橋先生の肉体も、高橋家のものとして私物化してはならないのである。＜中略＞ だが、高橋先生は全人類の師であって、単に高橋という一族に属される方ではなかった。「自分は高橋という一族に所属する人間ではない。わが肉体も、わが魂も、すべては全人類のものである」、と。高橋信次先生の「偉大なる出家」は、「正法」は親子夫婦等の血縁に執着してはならず、血縁はこの地上に肉体を持つ時の手続きに過ぎず、血縁を超越してそれに囚われずに正法を見る（正しく見る）ことを教えられたのであった。

月刊『正法』

信次師の病因は過度の疲労からくる肝臓と腎臓にあった（註・園頭）のである。天は、この世に、三億六千五百年前の七大天使とともに飛来したエル・ランティ。モーゼ 釈迦 イエスを分身に持つ「高橋信次」を遣わした。四十八歳の生涯を終えるまでの八年間にわたり、普遍的な神理・正法を人類に説き、昇天した。「正法はアメリカに拡がり、その後、逆に日本に帰ってくる。そして今世紀末には全世界の二十％が、正法に帰依する」と予言した。昭和四十年代の中頃には「今世紀末には、全人類の十パーセントが正法に帰依する」と言っていたが、昇天する一カ月前頃から「全人類の二十パーセントが帰依する」と訂正している。そして、昇天する一年位前から、「今日は何を話しましょうか」と、伝えるべき、全ての神理を説き終った姿がそこにあったという。そして、「もはや、天上界から手を打たねばならなくなった」と、世界の情勢を睨み、地上界ユートピアの建設に心を馳せ、昇天した。信次師は四百六十余件の特許を有する超一流の科学者でもあった。高橋信次師は、宇宙の神理・正法の流布拡大の行末を楽しみ、天上界より見守る。まさしく、「光り（正法）は東方より出て世界を照らす」、のである。



高橋信次師の遺影の前で別れを述べる園頭広周師

その後のG L A

信次師の亡後はどうなったか

高橋信次師亡き後、宗教法人G L Aは混乱と分裂の坂道を転がり始め、日本の宗教史上、類を見ないほどの特異な事件となった。

昭和五十一年（一九七六）六月二十五日 信次師の昇天。

六月二十七日～二十九日南紀白浜にて研修会

渡辺泰男氏は次のように記述している。「白浜の研修会には、大久保、波場という同僚の講師と私の三人で本部から参加した。二日目の午前中の、本来なら高橋先生がなさる講演のプログラムを、私は先生になり代って務めさせていただいた。研修会も無事済ませて帰ってくると、七月十日に青山葬儀所で本葬が行われる事に決まっていた。本葬が終るとすぐ関西本部の、岸青年部長と同道して和歌山へ直行した。これは先生の生前から予定されていたもので、和歌山県の県民公会堂のようなところで行われる大講演会に行ってほしいとのことであった。演題は先生のご生前だったら、あつかましくて到底選ぶことをしなかったと思うが、「心の原点」という題にした。」と。

七月十日

東京港区青山の葬儀所に約六千人が参集した。祭壇の中央には、剣道衣をつけ、あぐらをかいた信次師の全身像が大きくかけられたが、この写真（この項の一番最初にも掲載）は、昭和四十八年九月九日の長野県志賀高原の一時間ほどわけ入った場所で、ある青年がとった素人写真であった。



園頭師は次のように記述している。

「本葬が終って、先生のご遺骨のお供をして、大森の自宅へ行きました。一栄先生が「これからよろしくお願ひします」と言われた時、佳子さんに高橋先生の霊が出られ、「あなた達は今、みな心を一つにしている。その心を忘れてはならない。絶対に分裂することがあってはならない。今、あなた達は心を一つにしているが、なぜ私が生きていた時にそのような心を一つにしてくれなかったのだ」と言われました。みんな厳肅な気持ちで聞いて、恐れ入ったのでした。私は高橋先生が「私を信ぜよ」となぜ言われぬのか不思議に思っていました。ところが今年になってから、「私を信ぜよ。私は光であり、法である」と言われるようになり、びっくりしたのでした。それがこのようなことになることだったのだとは、今になって知ることです。」と。

告別式が終った後、八起ビルに於いて「今後のGLAをどのようにして行くか」という協議が行なわれた。それはどのような内容だったのかというと、「園頭氏が中心になり長老会議を開き、当時大学生であった佳子氏が卒業ののち、一人前の宗教家にするために外国にも修業にやり、会長は高橋一栄氏に。また、一栄氏は園頭師に「今後共、よろしくご指導下さい。今後あなたもGLA誌に書いて下さい」、と公言し、信次師の兄弟、親戚の人も諒解したのにその機会は与えられなかった、と園頭師は書いた。

七月十一日

本葬の翌日、会議が開かる。「最高首脳者会議を認定、妻一栄氏を補佐する」というものであった。関西本部長・中谷義雄、三宝出版社社長・堀田和成、東京本部長・小柴敏雄、弁護士・高橋武（信次師には関係のない人）、西日本本部長・園頭広周、事務局長・佐藤要の各氏をメンバーとした。次回は八月十一日、九月十八日（追悼講演会）と決定さる。

園頭師「亡くなって二カ月後の宮崎県青島国民宿舎での研修会は、佳子氏の指導によって東京の若い講師達が指導したわけで、私は西日本本部長としてはなんにも権限は与えられず傍観するだけでした。研修ではなくて全部遊び。林正氏とA氏のこの二人は佳子氏から「ピンクレディーの真似をしろ」と命ぜられて、髻面に白粉をつけて膝までの短ズボンを着て、毛ずねをむき出しにした足を跳ね上げて踊りました。「いい年をして、なんであなた達はそんなぶざまな真似をするのか」、と私はいったのですが、「高橋先生のお嬢さんのいわれることですから、仕方がないんですねん」という答えが返ってきました。私は家内に、一栄夫人と佳子氏の指導は間違っている、といつもいっていました。ところが、家内は、高橋先生の奥さんであり、お嬢さんである人が、そんなに悪い筈はないといっていましたので、それで家内を研修会に連れて行ったわけです。林、A両氏がピンクレディーをやらされた後で、一栄未亡人が出てきて、裾の長いひらひらした服を着て踊って、会場一杯の人達に投げキスをされた。家内の隣りにいた熊本から来た青年が「あれが二カ月前に夫を亡くしたという人のやることですかね」と言って、憤然として帰っていったというのです。ところが大半の研修会参加者は、「ああ、面白かった」と拍手。考えてみて下さい。たった二カ月前に高橋先生が亡くなられたばかりですよ、歌ったり踊ったりできますか。厳肅に教えを学ぶべきことを誓わなければならない時です。林正氏とA氏がピンクレディーの真似をしましたから、今度は私に「電線音頭」を踊らせようというわけで、マイクで「これから園頭先生の電線音頭があります」と放送しました。人間はその場所によって、やってよいことと、やっていけないことがあります。私はそんな会場へは顔も出したくなかったから、部屋で一人、本を読んでいました。そうしたら萩原君が「出番です」といって来ましたので、「わしを誰だと思っているんだ」と追い返しました。こんな状態でしたから天が味方する筈もありません。佳子氏が禅定の指導をするというので、夜、浜辺へ出ました。出てみんなそれぞれ座って、さあこれから禅定という時に、まさしく一天にわかにかき曇って大雨となりました。」と。



一天にわかに...だったようだが、信次師も講演の中で、よく言っている。「雨はなるべく降ってほしくないもの
ですから、昨夜は大分、風を吹かせました」、と。台風、雨、風などの自然現象と考えられているものは自然霊
の支配下にあるので、これをコントロールして信次師は天候も自由自在だった。佳子氏の場合は大雨に...」

九月

信次師亡き後、G L Aの宗教法人としてのアイデンティティを求めて最高会議が開かれた。会長高橋一栄、主
宰高橋佳子（日大二年生、二十歳）、G L A東京本部長小柴敏雄、三宝出版社長堀田和成、G L A関西本部長中
谷義雄、G L A西日本本部長園頭広周、G L A総合本部佐藤要、G L A総合本部高橋武、オブザーバーとしてG
L A中京本部事務局長谷口健彦氏らを加え、これを「首脳者会議」として運営して行くことに決定。しかし、
首脳者会議が開かれたのは、この九月一回のみだった。主宰で、信次師の長女・高橋佳子氏は昭和三十一年十月
二十四日生まれ、東京都立九段高校を経て、この時、日本大学文学部哲学科に在学中であった。佳子氏は高校時
代はフォークソングのサークルに属していた。

十月

G L A総合本部の理事とG L A関西本部の理事との間に、組織上の対立が起る。対立の原因はG L A総合本部
の前事務局長高橋武氏の跡を受けて事務局長に就任した佐藤要氏がG L A関西本部を解散の上、関西本部の財産
等を全て、総合本部に吸収するという案を提出したことにあった。これに対して関西本部は、昭和四十六年に信
次師に集団帰依した時、母型団体であった「瑞法会」を解散して、組織も財産も全てG L Aに併合を信次師に申
し出た。しかし、申し出を断っている。「いや、そうすべきではない。もし、一つにした時、東京本部が駄目と
なったら関西本部も駄目になるので、東京と一つにはしない方が良い」という信次師の当時の方針をあげ、併合
吸収することは信次師の意志に反する、と対抗した。

一方、高橋一栄会長は、西日本本部長園頭広周氏に手紙で次の様に通告、「東京の理事と関西の理事との調和
を図ることが先決となった。これからは東京と関西の理事のみで「会」を持つ。あなたは西日本を委せるので、
西日本を盛んにして下さい」と。

園頭師は記述される。「東京の講師達が、実は関西本部の金と財産をねらっている。このことは後にミカエル
事件が起った後で、関西本部は合流するのであるが、その目的が財産にあると気づいたとたん、瑞法会時代の自
分達がつくった財産を、むざむざ東京本部に取られてなるものかと考えた講師達が、さらにG L Aから脱退して
財産を守るという、まことに浅ましい事件となった。その関西の講師達は私に言った。「関西本部の財産をどう
するか、その分け前が決まるまでは講師をやめるわけにゆきません」と。私は講師達の腹の中を見透していた
から、ミカエル事件が起った後、何回か関西本部の事務局長増田氏から騙された風を装っていた。これ以上は利
用されないぞと思った時、「あなたはいつまで私を騙そうと思っているのか、あなたの手の内は全部わかっている。
あなた達は高橋先生の正法はどうでもいいと思っているんだ。財産がめあてだろう」といったら、私の気迫
に呑まれたのか、正直に「そうです」といった。」、と。

十月、鹿児島霧島にて研修会

Home

十二月

中京地区の研修会の帰りに、堀田和成氏と渡辺泰男氏の会話の中から 渡辺泰男氏「所沢でやっている私の班

座の近況や、アインシュタイン博士のメッセージのお話になりました。堀田先生もよく覚えていらっしゃるって、あれは確かドイツ語と英語でちゃんぽんに語られていて、テープにとってあるはずですよ。その後誰も忙しさにまぎれて、解読しようとしていてできていませんが、確か高守先生（私と同じ昭和四十七年に正法に帰依された方で、同年次に帰依した関係で私とは大変仲がよかった。月刊『エコノミスト』の編集長をされていたが、高橋先生に懇望されて三宝出版の編集長になられた）が保管されているはずですよ、とおっしゃいました」、と。

昭和五十一年当時、ブラジルには、サンパウロ在住のH・S氏（元・生長の家講師）を中心に、六百名ほどの会員がいた。西日本本部が設立された昭和五十年九月以降、西日本本部よりブラジルに高橋師の著書が千冊送られた。以来、「GLA」誌が東京本部より毎月発送されていたが、信次師の昇天後、GLA東京本部は発送を停止したために、ブラジルのGLAは自然消滅してしまった。

昭和五十二年（一九六八年） 二月

園頭西日本本部長は、西日本の正法教化活動を隆盛させるには、九州にも研修道場の必要性を痛感していたが、昭和五十一年十月頃、福岡市の近郊、二日市に日蓮宗の研修道場が売りに出されていることを知った。九州の会員が一様に考えていた道場設立を、園頭師は、九州各県の支部長会議に計り、賛同を得たので、東京本部が半分、残りの半分は九州で寄付金を募るという資金調達計画のもとに買収の交渉は始められた。買収内訳は土地千百坪、建物百三十坪、少し手を入れればすぐに使えるものであった。周辺地価十万円ほどであったが、坪四万六千円で買収額五千万円建物は評価せずということになった。改造費千万円を計上した総額六千万円を東京本部、西日本本部の折半となる。昭和五十二年二月末に登記終了。

昭和五十二年三月五日

突然、会議が開かれることになる。会議には、これまでのGLAとは全く関係のなかったSF作家の平井和正氏が同席。突然の平井氏の出席に異和感を覚えた長老幹部もいた。その席上で、主宰の高橋佳子氏は「ミカエルは起つ、私の背後にはミカエル軍団が既に出来ている。私は東京本部はつぶしてもかまわない。ついてくる者だけついて来なさい」と、宣言。これに対して断乎として反対したのが関西本部長中谷義雄氏、西日本本部長園頭広周師、理事の中村勇氏と、観音寺住職村上氏の四人であったという。しかし、大半の人達は「正師・信次先生の娘さんだから」という理由で容認しているというのが現実だった。



ミカエル軍団とは何か

ミカエル軍団とはSF作家の平井和正氏が高橋佳子氏に接近、小松左京氏等と会談させる等した。佳子氏は、そのような人達を総称して「ミカエル軍団」、と呼んだ。平井和正氏は、それまではGLAには全く関係のなかった人であるが会議に出席、その内にGLAを脱退してしまうが、「小松左京氏が佳子氏の支持者だったとは思えない」、と園頭師は書いている。その席上、佳子氏は、「光の天使ガブリエルが今、ここに来ています。その言葉を伝えます」と口上、ガブリエルの通信を伝えた。生前、信次師は園頭師の過去世はイエスの時代のガブリエルであったと言い残したが、その「ガブリエルが今、ここに来ている」と列席者に佳子氏は告げたのである。確かに、ガブリエルであった園頭師が同席していたのだから、それはそれでよかったのだが、あたかもガブリエルの霊が佳子氏に降霊し、通信を送ったかのように偽証したというのである。出席者の中には、それは二セ

モノであると観識した人もいたが、園頭師は恩義ある正師の娘佳子氏が、大変なことを言い出したぞと心を痛めるのだった。

園頭広周著、『園頭広周書簡集』（上・下）がある。この本は、園頭師が湘南地方のある人を指導者になすべく教育をしようと、手紙で書き続けられたものである。ところが、「ミカエル事件」が起って二カ月程たった頃、「先生は悪魔だそうですので、悪魔が書いたものを持っていると、いいこともありませんのでお返しします」という手紙とともにファイルされて、全部送り返された。それをマトメて園頭師は平成元年に出版。その時々の日付がある。色々な記録がある。信次師をめぐるGLAの貴重な記録になった。

三月九日付の園頭師の書簡の中から

合掌、五日、ミカエル宣言があって、六日十五時帰宅しました。東京本部の理事会で、佳子氏が、「信次先生が亡くなられた時点でどうして私を主宰として立てなかつたのですか」といわれた時の見幕は異様なものでした。東京本部の問題点は指導力のないことです。昨年九月、追悼講演会の前日の本部長会議の時私が提出した意見は、堀田和成氏を先頭に全理事がつぶしてしまいました。のちのちの参考となるために、関西本部の林正事務局長に「堀田氏の意見はGLAをつぶすものだ」という手紙を出しておきました。佳子氏は「GLAはつぶしてもかまわない。私の背後にはミカエル軍団がいる」といっていますが、ミカエル軍団というのは、小松左京氏を頂点とするSF作家群のことですが、小松左京氏と佳子氏を引き合わせたのが平井和正氏で、ただ一回会っただけで小松左京氏が佳子氏を全面的に支持するとも思われず、なんらの宗教体験も持たない、社会経験もない大学生が、高橋先生の存命中ミカエルの憑り代（よりしろ）とされただけであるのに、自分を「ミカエル」と誇張し、威猛気（いたけだけ）に「誓え」といった空気は尋常ではなく、しかも、中学生の時に、村上宥快氏の観音寺で「私の過去世は卑弥呼でありました」といっていた人、そして、昭和四十九年の宮崎の青島国民宿舎での青年研修会でも卑弥呼であったといった人が、どうして「ミカエル」になることができるのか、全く演出としか思えません。＜中略＞小松左京氏が、「自分達が指導を受けられそうなGLAの講師はいない」といったということを知りました。＜中略＞ともかく思想、哲学の貧困な人達が多すぎます。哲学の裏づけのない宗教は邪教ですが、また、宗教と道徳の違いも知らない宗教家がいるのは困りものです。

三月二十五～二十七日

宮崎に於る九州青少年リーダー養成研修会開かる。（青年幹部研修会）

園頭「二十五～二十七日、高橋興和、谷口健彦氏が、九州の青少年リーダーの養成研修をしたのですが、助手として連れて来たのは、ギターをひくのと、歌を唱う者だけ。チームをつくって歌ったり踊ったりすることが研修だというわけです。残念なことです。ギターをひいて、歌を唱って、反省、反省、家庭の調和とって、政治、経済、教育、科学、芸術など、人間が生きてゆくために必要ないろいろなことを少しも考えない青年が、あと二十年、三十年と経って、世の中の人々を指導できるわけがありません。こうなると、正法を全く知らないGLA以外の青年達の方が、よほどりっぱだということになります。三十歳過ぎてても、「日本はどうなるのか」というようなことを全く考えない人間が、人を指導できるわけがありません。＜中略＞

二伸 二十日、和歌山の研修会の後で本部長会議がありました。その時、中谷関西本部長から、小金井で羽場さんがやたらに「守護霊がこうっている...」という指導をしていることに対して、それはよくないという意見が出されました。＜後略＞（昭和五十二年四月一日付の園頭広周師の書簡）

昭和五十二年四月十四日付の園頭師の書簡より

前略 羽場氏がやっている小金井の反省研修は、ついに自殺者を出したりして問題があるわけですが、中京の谷口健彦氏が小金井と同じ方法で今度は始めるといいます。＜中略＞一栄会長も佳子氏も谷口君がいうことには無条件です。それで私が谷口君がやっている企業研修教育には問題があるといおうとしたら、一栄会長が声を荒げて私にいわせまいとされました。これだから女は困ります。すぐ感情的になりますから。三月二十五～二十七日の、九州の青年幹部研修は、私が計画して指導しようと思っていたのですが、一栄会長から「今度の研修は全部谷口君に委せますから、あなたは一切口を出さないで下さい」という手紙がきまして、それで私はどうするかを見ていたのですが、研修から帰ってきた人達が、それぞれ各県の支部長達にどんなことをいったかといひますと、八月の夏休みの青年研修のために、「ギターを買う金を出してくれ」、「コーラス・グループをつくるから金をくれ」、「仮装行列をやるから金を出してくれ」などです。そんなことは研修以外の場でやればいいのか、次のように谷口君に注文をつけておいたのです。＜中略＞しかし、やったことは歌って踊らせた

だけ。ギターを買って下さいといわれた熊本県の支部長はびっくりして電話してきました。「一体G L Aはなにをするんですか」と。薪を買う金を寄付をもらってくれといわれた山口県の支部長も、またびっくりして電話してきました。

三月三十日

三月五日の突然の会議に呼応したように、祥伝社より『真創世記・地獄篇』、つづいて『黙示篇』そして『天上界篇』の三部作がつづげさまに出版された。この本は、高橋佳子氏が霊示を受け、佳子氏自身が短期間の内に書いたということであったが、十年目にして驚ろくべきことが判明したことは先に述べた。ウェブ・マスターの手元にある『真創世記』は、第四十六刷版であることから判断して相当数のものが購読されたことになるが、その当時の宗教誌の記述を引用する。

「昭和四十八年に宗教法人の資格を取得した神理の会（G L A）はオカルト・ブームと戦後経済の高度成長の破綻という世相と相まって若者を中心とする人々の関心をかき立てた。しかし、昭和五十一年、急上昇期にあった教団は大きな危機を迎えた。四十八歳という若さで、同年六月二十五日、高橋が突如として他界したのである。ところが教団は、鮮やかに転身を図った。高橋の娘佳子（霊体、大天使ミカエル）という新しい救世主を登場させたのである。大新聞の広いスペースに著者の写真を伴った著書の広告は世間の注目をひいた。」

「真創世記」はS F作家平井和正氏が「私が半年ぐらいにわたって書いた」と自ら発表したのが、昭和五十二年三月五日に突然の会議が開かれミカエル宣言が出され、三月三十日付で『真創世記』初版が出版されたということは、その半年以上前からすでに計画、筋書き通りの謀議がなされていたということになる。そして、昭和六十年初版の『高橋留美子の優しい世界』平井和正・徳間書店によると、『幻魔大戦』は、高橋佳子氏との半年間にわたるミカエル学校の産物以外の何ものでもないと書いているが、これによっても平井和正氏と高橋佳子氏の関係が伺い知れる。



平井和正とはどんな人か

一九二八年生、往年の人気アニメ『エイトマン』の原作者として有名だが、彼を一躍ベストセラー作家にしたのは、狼男を主人公にしたオカルト小説である。1976年（昭五十年）の『人狼白書』から天使や悪魔が入り乱れる宗教的展開を見せはじめ、『人狼天使』へとさらに強まって行く。『幻魔大戦』にはG L AならぬC L Aという宗教団体まで登場する宗教小説とされる。

これより、園頭広周師の平井氏の批判論文を引用し、如何に「正見」が大切かを考えてみたい。

園頭師「さて、『アドベンチャー八月号』を読んだ。この本のはじめの八〇頁が、平井和正氏と犬神明の対談である。この平井和正氏が、高橋信次先生亡き後のG L Aに入り込んできて、高橋佳子氏をメシヤに仕立て上げ、「釈迦・キリストの教は間違っている」といわせた張本人であり、この平井和正氏のいうことを信じた若い講師達が、佳子氏を中心にして演じたのが「ミカエル事件」だったのである。高橋先生が亡くなれるとまもな

くサタンはS F作家の平井和正氏をG L A本部に送り込んだ。『狼人間』という得体の知れない人間を主人公にした『幻魔大戦』というような小説を書く人間が正法がわかることはない。正法がわかっていたらあんな空恐ろしい小説が書けるわけがない。そのサタンの手先であった平井和正氏によって「ミカエル事件」は計画された。本来は高橋信次先生の教を正しく継承してゆくことに努力しなければならない高橋興和氏が、いとも簡単に平井氏に乗せられたのは、白浜研修会以後興和氏は自分の魂をサタンに売っていたからである。「釈迦、キリストは、人類が幸福になる道を説かなかった。私の父高橋信次もニセモノであった」と、少しでも常識のある人にはこういうことは絶対にいえないことである」、と。

園頭師の以上のような一文があるが、平井氏が暴露した年の三年前の昭和五十八年に初版された『園頭広周著・現代の釈尊高橋信次師とともに・正法出版部』の中で、園頭師は次のように書いている。「本には如何にも（佳子氏は）霊能者のように書いているが、そのような霊能はないことは知っている。本は一度出版されると、著者本人とは関係なしに、本自体が一つの人格を持って独走するその危険は計りしれない」、と。

四月二十日付の園頭師の書簡の中から

「合掌、高橋佳子著『真創世記』が発刊されました。この本は、佳子氏が一週間で書き上げたというふれ出しですが、実際は若い講師達の合作だという話もあるし、S F作家の平井和正氏が書いたという話もあります。...後略...」、と。昭和五十二年の四月には、六十一年の『アドベンチャー』誌を待つまでもなく、正しく園頭師は看破していることになる。

S F作家の平井和正氏が主宰高橋佳子氏に接近、G L Aに潜入し、二十歳そこそこの娘さんを自由にコントロールすることは、さほど困難なことではなかったに違いない。だが、古代インドの時代、釈迦の高弟の中で智慧第一と言われた舍利弗としての過去世を持つ園頭師にとって断じて許しがたく、そして、この事件は如何に「正見」することの大事さを、思い知らされる事件であった。

Home

五月

「ミカエル・ウイングス」という若い講師団がつくられ、ミカエルの親衛隊的組織M B G（ミカエルボーイズアンドガールズ）を結成された。また、『真創世記』には次のような宣言が記されている。

「ミカエル宣言」

「天上より出でて、世界に散らばりし、多くの天使たちは<中略> 私のもとへ結集してくるであろう<中略> この数十年の間に、徐々に成されていくことなのである<中略> やがて久遠の宗教となり、形づくられていくのである<中略> 己れをみがき、日々精進して道をきわめよう<中略> 見えない網の目のような糸が、もうすでにはりめぐらされている<中略> 集い来らねばならない<中略> すべては神のみ心のままに<中略> これに気づき、立ちあがらねばならない」



「高橋佳子氏のミカエル宣言の要旨」

「わたしは大天使ミカエルである。神はミカエルにこの世界を委された。釈迦、キリストは人類が幸福になる道を説かなかった。仏教、キリスト教はローカル宗教であり世界宗教ではない。釈迦、キリストを指導したのは、わたしミカエルである。高橋信次先生の教えは必要ない。五年後には全世界の人類はみなミカエル佳子の前にひざまずくのである」、と宣言した。

このようなことによって会員の脱退者が続出した。G L A 関西本部長中谷義雄氏、西日本本部長園頭広周師は、協力して、高橋信次先生が説かれた教えが、高橋先生の家族（高橋一栄夫人、高橋佳子氏）と実弟（高橋興和氏）によって否定されることだけは避けなければならないと二人は強硬に反省を求めたのであった。その結果、昭和五十一年三月以来のことは全て反省するということに修正、六月に三宝出版社長を辞職していた堀田和成氏も復帰した。

六月二十五日

園頭師は次のように言う。「昭和五十二年六月二十五日、社会党会館で、追悼一周年の講演会があることになった。高橋先生の教えも、釈迦、キリストの教えも否定する人達と行動を共にする必要はないと考えていたので、私は上京せず一人で、福岡で追悼しようと思っていた。すると、六月二十三日、高橋一栄会長から直接の電話があり、「信次先生のことについてぜひ話し合いたいことがあるので上京してほしい」ということだったので、「わたしは追悼講演会には参加しませんよ、ただ話し合いだけです」、と返事して上京した。」

「高輪プリンスホテルに出向いて行くと、一栄会長とG L A 本部事務局長佐藤要氏、G L A 東京本部長小柴敏雄氏と、G L A 関西本部を代表して林正氏が来られていた。話というのはミカエル佳子（高橋佳子）先生を支持して下さいということだけであった。このような理由によってどこに支持しなければならない理由があるのか、「あなた方がミカエル佳子先生を支持する理由をいいなさい」といったら、四人とも小さくなって答えられなかった。「こんな下らない話し合いを続ける必要はない」といって夜十一時に打ち切った。私は、高橋先生への恩義があるから、一栄会長に敬意を表してホテルの玄関まで見送った。私と林正氏の二人はホテルに泊ることになっていた。玄関へ出てみると雨が降っている。一栄会長を見送った後で林正氏が、「今、雨が降っていても明日は晴れますよね」というので、「違う、明日はもっと大雨になる」といったら、「でも、佳子先生が講演に出掛けられると、昨日まで雨であってもその日は晴れになるといいますよ」というので、「明日はもっと大雨になる、法を歪める者に天が味方する筈がない」といい切ったら、「先生もいわれますね」といったが、しかし、明日になったら恥をかきますよ、というようなそぶりで林正氏は自分の部屋へ帰った。」

「講演会には出ないといったものの、折角上京したのであるから、どういうやり方をするのか見て帰ろうと思って、講演が始まった頃を見計らって会場に行った。高橋先生の追悼一周年記念だというのに、『ビバ・ミカエル』と書いた大看板とポスターだけで、高橋先生を偲ぶものは何一つなかった。講演が終ると、みな壇場へ上って佳子先生に誓いなさいということになって、一番先に「偉大なるメシヤを仰ぎます」と誓ったのが関芳郎講師であり、それから林正氏夫妻は泣いて誓い、以下全員が誓った。誓わなかったのは私一人であった。みんながひざまづいて誓うのを、私は平然として腕を組んで見下ろしていた。世界の宗教史上、全く例を見ない茶番劇であった。又ミノーゼ心理のとりこになって正しい判断を失った人々の奇怪な行動を私は冷やかな気持で眺めていると、事務局長の佐藤要氏がやってきて、「先生も誓って下さい」といった。「キリストは『天を指して誓うな、地を指して誓うな』といわれたことをあなたは知らぬのか」と私はいった。誓いは神にするものではない。人にするものでもない。われとわが心に誓うものである。「私に誓え」と強制する佳子氏は、神理のなんたるかも知らないのである。五十歳近い分別盛りのこの大人が、どうしてこんなにも頭が馬鹿になるのであろうかと、

私は思った。誓いの儀式が終って、箱根の青年研修会のビデオを放映することになった。そのビデオの中で佳子氏が、『私が講演に行くとなると、前日までは雨であっても、その日になると必ず晴れるのです』と話しているその頃が一番大雨でどしゃぶりだった。丁度林氏が来たので、『この外の大雨を見なさい、佳子氏が講演していることはウソじゃないか』といったら、どうもわかりませんと頭を抱え込んでいた。」

幻の『MLA』誌

七月

宗教法人GLAは『GLA』という機関誌を出していたことはこれまでに述べた。ところが昭和五十二年八月号から、突如「MICHAEL」、『MLA』と改題、会員に送付された。園頭師は激白する。

「これは高橋佳子氏の一存で改題されたもので誰も知らなかった。八月号が送付されてきてはじめて知ったのである。今となれば、これはこのままにしておいた方がよかったと思うのであるが、その時は、高橋信次先生の亡くなられた後を汚してはならぬという気持ちがあったから、GLA会長であり、佳子氏の母である一栄氏、東京本部の小柴、佐藤氏に『なぜここまでなるのを知らなかったのですか』と反省を迫り、九月号も既に『MICHAEL』という表紙で印刷されていたのを、元通り『GLA』に戻させたのであった。宗教法人名も「GLA」から「ミカエル教団」と変更することになっていた。そして、浅草のGLAのビルも全体をオレンジ色に塗りつぶし、ビルの壁面に「MLA」と書く計画が既に出来ていた。それを知った私は当時の関西本部長中谷氏に協力を求めて高橋先生の未亡人である一栄氏に反省を求め、一栄氏が東京の佳子氏に電話されてMLAとせず、GLAと名乗るということになったのである。そのことが高橋先生の著書を読まれた人達を混乱させ惑わせるという原因になってしまったわけであるが、(同じGLAであるから、高橋先生の時のGLAであろうと思って入会すると、内容は全く違う)今にして思えば、高橋佳子氏にはMLAを名乗らせて置いて、私の正法会(後の国際正法協会)をGLAとして置けば、たくさんの人を迷わせないですんだのにとすることである。(この事情を知っている人の氏名を念のために挙げると、中谷義雄、中村勇、林正(故人)、増田三郎、小柴敏雄、それと高橋一栄夫人)このような理由によって『MICHAEL』と改題された機関誌は一号のみが発行されたのである。

九月一日

次のことが暴露された。

信次師の昇天を報ずる当時の『GLA』(昭和五十一年八月号)誌に、当時、GLA東京本部の理事であり、三宝出版社長であった堀田和成氏が「巨星墮つ」という一文を載せた。その中で、「高橋信次先生は息女の佳子先生にのみ天上界から通信をする、と遺言して亡くなられた」と書いたが、堀田和成氏の創作附言であったと、堀田氏自ら発表した。それは、昭和五十二年九月一日、関西の箕尾温泉にGLA東京本部、GLA関西本部の理事、西日本本部長が集まり、ミカエル問題が討議された時に、その席上で発表されたものであった。



園頭師は語る。「高橋先生が存命中より「高橋先生が私に憑って通信して来られた」と、人を欺している人が何人かいた。そして、ミカエル事件の推移を見て、高橋先生が憑（かか）られたかのように高橋先生の口真似をしている人がいた。このようなことがあったために、堀田和成氏が「佳子先生にのみ天上界から通信する...」というウソを書かなければならない位だった。そのことが今度は、佳子氏がいくら高橋先生の教えと違ったことを言っても、それすらも高橋先生の霊がいわしめていることであると、「何が正しい」の判断もせずに盲信狂信する人が多く出てきた。しかも、G L Aの講師は、その文章が堀田氏の創作（ウソ）であることを知りながら、あたかも真実らしく宣伝したために一層混乱させる原因となった」、と。

九月は、会議は二回開催された。

高橋佳子氏とミカエル・ウイングスの講師達は、園頭氏の住む福岡を尋ね反省を表明することになった、と中谷関西本部長より園頭師は電話を受る。

園頭師は、「それほどまでに反省しているのであれば来福するまでもない。その反省を文章にしてG L A誌に載せて欲しい、そして反省された通り、高橋信次先生の心を汚さないようにしてもらえば、それで結構です」、と返答した。しかし園頭師は、今となっては、来福してもらって反省の意を表明してもらおうべきだったと後悔する。

園頭師「その後、高橋先生の未亡人高橋一栄氏と二人の理事が福岡に来て、G L Aを混乱させた責任を謝罪して収捨を図ることを約束されたのであるが、佳子氏と若い講師、高橋興和（高橋先生の実弟）、関芳郎、谷口健彦氏等は、一栄夫人を八起ビルの本部へ誘い出した。「佳子がちょっと八起ビルに来てというので出向いたら、若い講師達が円陣をつくっているその真中に引き据えられ、暴力を振わんばかりの勢いで罵倒され泣かされました。こんなひどい罵倒を受けたことはありませんでした」、とG L A関西本部長中谷義雄氏に伝えたのである」

Home

九月二十七日

有馬温泉にて最高会議開かる。

園頭師は次のように記述している。「高橋信次先生は、ミカエル佳子氏にのみ通信をされる」という文章は、三宝出版の社長であった堀田和成氏が書かれた「巨星墮つ」という高橋信次先生の昇天を悼む文章の中にある。ミカエルは起つという宣言と、ミカエルの意志を正しく伝えるミカエル・ウイングスと称する若い講師団が、全国を飛び廻って、「ミカエル佳子氏の偉さは高橋信次先生以上であり、釈迦・キリストも佳子氏の足下にも及ばない」と宣伝したために、知性理性を失った即ち正見のできない感情的に狂信盲信をする人々と知性理性で正見する人達とに分裂が始まった。これではいけないといっているいち早く堀田和成氏は三宝出版社長をやめられた。私もG L A脱退を決意した。高橋一栄会長から、ミカエル佳子氏を反省させるからということで私は慰留され、堀田和成氏は再び三宝出版社長に復帰されることになり、G L A誌に発表になった間違い、また、ミカエル・ウイングスの講師団の間違いをどのように反省させ修正するかということで昭和五十二年九月二十七日有馬温泉で最高会議が開かれた。出席者は、高橋武、堀田和成、佐藤要、小柴敏雄、中谷義雄、中村勇、増田三郎、岩川文夫、林正、園頭広周 この最高会議での決議は、無条件に修正するという約束で開催されたが、後の東京本部での会議では、反省は一切しないと決定。これによって、またまた混乱。

昭和五十二年十月

関西本部長中谷義雄、西日本本部長園頭広周氏を排斥する中傷文書が飛ばされた。一旦復歸した堀田和成氏も失望して、また辞職。この間、信次が説いた正法を守って行うとする会員と、ミカエル佳子氏を信じていこうとする会員と、どのように判断していいか迷っている会員の三つに別れて混乱、脱退者も続出した。佳子氏に忠誠を誓い団結の強さを誇っていたミカエル・ウイングスの講師の中にも脱退者が出た。しかも、高橋佳子氏を人類の救世主（メシヤ）として祭り上げ、G L Aの実際の支配権を握ろうとした信次師の実弟高橋興和氏は若い講師と共に、次なる方針を打ち出した。



「G L Aの指導者、講師、幹部は四十五歳まで、会員は四十歳までとし、それ以上の年齢の者、並びに他の宗教団体を遍歴した者は会員としない」と発表。この方針を聞いて、脱退する会員がまたまた続出。

十二月

信次師の高弟の一人である観音寺住職村上宥快氏がある。氏が主宰する機関誌（昭和五十二年十二月号）に「解体寸前の岐路に立つG L A苦しまざれに教義の誤りを認める」という一文を発表した。その内容は、同年九月二十九日、信次師の未亡人一栄夫人を中心とする理事会で、「ミカエル佳子といったのは間違いであった。今後絶対にいわせない」というものだった。この記事を書いた機関誌の発刊後、G L Aは村上氏の中傷の文書をバラ撒き、村上住職の宗派の寺にも中傷文を送りつけた。村上氏は弁護士と相談、告訴することを決意したが、G L Aは弁護士を立て和解を申し入れるという結末があった。これは大変なことになったものである。宗教に年齢制限とは、確かに特異な混乱であった。この実弟の興和氏は親鸞の生まれ変わりで、キリストの時代はパウロといわれた、と高橋信次師は言い残しているが。現在のキリスト教はパウロ教といわれるほどに変えてしまった。キリストの時代は、キリストの御名を崇めることによって救われると説いたことと、親鸞上人が阿弥陀如来という救済者を仕立てたことと、現代は、佳子氏をメシヤに仕立てたことが、同じ発想だったとは不思議である。今世は、佳子氏と共に、釈迦、キリストまでも否定するという『業・ごう』をつくってしまったことになる。現代日本では親鸞は絶対的だが、多くの僧が肉欲を戒めたのに、この人は妻帯も実行している。

五十二年のある日のこと、園頭師は佳子氏と直接話し合いをしようと思ったが、百二十人の警備陣が編成され、会わせないという事件があった。園頭師は言う。「ミカエル事件は、私と佳子氏が話し合えばきれいに解決すると思う。そして、いずれ時期が来たら一緒になりたいと高橋武弁護士、理事で事務局長であった佐藤要氏に、はっきり言っている」と。

昭和五十三年（一九七八）三月十五日

高橋信次写真集『七年の光跡』出版さる。三十八ページには紀州の白浜の丘の上から法を説いている信次師の写真があり、説明文には「丘の上の説法は、＂山上の垂訓＂のイエスを偲ばせた」とある。

三月

G L A最高メンバーである高橋一栄、小柴敏雄、佐藤要氏が福岡を訪ねた。そのとき園頭広周師は「高橋佳子氏は、私の母（一栄氏）は過去世でマリヤですと言っているが、それは本当ですか」と一栄氏を追求すると、答えることが出来なかったという。マリヤ様は信次師の母であり、鎌倉時代には日蓮を産み育てており、一栄氏は

古代インドの釈迦の時代に、マイトレヤーという名前で釈迦の身の回りをしたり、お釈迦様の説法のふれを鐘、太鼓をたたいてふれて廻る役だった、と信次師は言い残している。

三月末

東京のあるホテルにて、「ミカエルを売りだす会」を開催、マスコミ関係者、ジャーナリスト達が六十人程招待され会見した。マスコミ関係者に見れば、二十歳の娘氏が世界人類の救済者であることを宣言したことに対して、その実体をよく知って報道しようと、「ミカエルについて」、いろんな角度から質問した。しかし、佳子氏は、質問に答えることができず、遂に泣き出し、「今後、もう一切ミカエルとは言いません」という異例の記者会見となった。こうして、G L A本部では、マスコミ関係者、新聞記者にミカエルを売り出した後、四月は横浜、五月は福岡で「ミカエルは語る」という大講演会の予定でポスターも貼られ、宣伝中であつたが、先の記者会見で「ミカエルとは二度といいません」ということになって、ひと晩のうちにポスターをはがして廻るということになる。福岡では、四月二十三日、九州支部長会議の席上で、「今後、ミカエルということは絶対にいわないことになった」というG L A本部の方針が伝えられた。

七月一日

信次師の高弟の一人、園頭広周師のG L A脱退宣言

「G L A脱退宣言」

園頭広周

神は正法によって天地を創造され、正法は永く<中略> 類を救う心の柱となった。釈迦、キリストが説く<中略> G L Aは真理を冒瀆し、正しく正法を伝える<中略> 正しく正法を守り旦学ぶために、既にG L A<中略> とともに、私もまた、正法を正しく学び旦守る<中略> 志の方々とともに正法の伝道に邁進するものである。

昭和五十三年七月一日



講義をする園頭師

真実は時の流れとともに

信次亡後、類を見ない程の混乱が起り、高弟達は四散し、それぞれに会を主宰、現在に至っている。だが、信

次師が予告していた『新復活』は遅々として出版されなかった。信次師が、生前の講演会の中で度々予告し、また昭和五十一年七月号の『G L A』誌にも予告していたにもかかわらず…。『真創世記』の中で高橋佳子氏が「その原稿は私の手もとにありますか …」と記述しているが、原稿に都合の悪いことが書いてあるので、佳子氏が、握り潰しているとの、もっばらの噂であったが…。まさしく、その時、信次亡後十五年目にして、次のことが明らかになった。



『新復活』の原稿のコピーが見つかった！

園頭広周・国際正法協会会長は次のように書く。「突然、ある人から「高橋信次先生の『新復活』の原稿が見つかりました。いつ高橋先生から預ったのか記憶にありませんが、とにかく送ります」という電話がありました。原稿が送られて来るのがもどかしかった。原稿が送られて十日位した時、また電話があり、『あの時のことを思い出しました。高橋信次先生は、佳子氏はミカエルではないと気づかれ、『新復活』は佳子氏は出版しないと感ぜられて、これを預けときますとって渡されたように思います」ということだった。私に送られてきた原稿はコピーで直筆ではなかった。なぜ、わざわざコピーしてその人に託されたのであるか、その時の高橋先生の複雑な心境は、その原稿を見るとわかってくる」

奇しくも、自分の許に送られた原稿を前に、園頭師は考えた。このままでは、陽の目を見ることもないかも知れない。一栄氏も佳子氏も出版する勇気はない。十五年経ったのに、その気配すらない。そうだとすれば、自分が、この時期に出版するのが、最も適当であろうと考えた園頭師は、出版を目指していた最中（さなか）、第十回インド仏跡研修の旅（平成四年一月十五日～三十日）に出発する前に、園頭師は、高橋一栄、佳子氏に対して出版の予告の手紙を出していた。勿論、著作権侵害で、師を告訴するだろうということも予測して。一月三十日、インドから帰国した園頭師を待っていたのは、G L A本部からの理事長関芳郎氏と弁護士連名の警告書だった。その内容証明には「『新復活』の原稿を手に入れたのは犯罪に相当する。一月二十日までに返事をして欲しい」というものだった。そこで、師は強硬な抗議文とともに、警告書をつき返した。師が話し合いたい相手は高橋一栄、佳子氏であり、他の講師達と会う必要のないこと等をしたためた。二月二日に弁護士から通知書が来た。「一月二十日までに回答がないのは不誠実である」、と。師は書いた。「都合も聞かず、そちらで勝手に期日を切って、不誠実だと悪人呼ばわりするとは何事か。話し合いたいのなら、そちらから来なさい。二月二十五日～二十九日は福岡にいる」、と。二月二十九日になって、三月九日に訪ねたいと電話があった。九日は太宰府の国民年金保養センターでの国際正法協会主催の九州幹部研修会の翌日で、師は福岡にいた。当日、弁護士、G L A本部職員、園頭広周、国際正法協会の元K講師の立会いのもと話し合いがもたれた。G L A側の弁護士の言い分は、

- 一、著作権は高橋一栄氏にあること
- 二、『新復活』は高橋信次先生が出版するなと遺言されたということ
- 三、『新復活』は未完であること、以上の通りであった。

三ヶ条を並べ立てる弁護士の言葉を聞いて、園頭師は即座に「よし、わかった」と三十分で決着。拍子抜けしたように、弁護士は本部職員をせき立てて、早々に帰って行った。

園頭師「弁護士が前記の三ヶ条を並べて言うから、それなら出版しないと即座に言った。そのことを紙に書いて下さいというから、書く必要はない、男が一端いったことを崩すようなことはしない。ちょっと前なら「士（さむらい）の一言金鉄の如し」というのであるが、そういっても弁護士はわからないだろうと思って、私は歯がゆい思いで次のように言った。「『新復活』は、二〇世紀というよりは、釈迦、キリスト以来歪められてきた宗教を高橋信次先生が正しくされて、その正法を二十一世紀へストレートに伝えて行く貴重な内容を含んでいる。しかも、高橋信次先生の絶筆であるから、高橋信次先生のそのもののものとして出版する準備を進め、既に校正も終わっていたから、私が準備していたそのまま出版したとして、著作権を理由にされたら私の負けになる。高橋佳子氏は釈迦、キリスト、そして自分の父親高橋信次先生をも否定した人ですよ。どうして私が正法会（後の国際正法協会）をつくったか知っていますか、高橋信次先生を否定して置いて、今になって著作権を主張して、高橋先生の言葉を一般には知らせない、血縁であることを理由に高橋信次先生の言葉を永遠に葬り去ろうとすることをどう思いますか、この問題は著作権の問題ではなく、宗教の神理、教義上の問題であるから、法律上の著作権で云々すべき問題ではないといったが、いや私は法律上のことだけでいっているのだから、宗教上のことはそのことで話し合いをして下さいというから、宗教のこと、まして、ミカエル事件以来のことをいってみてもわかる筈もないから、それ以上話すことをやめて、「それでは宗教上のことについては私がG L A本部に行って決着をつける」といって、弁護士についてきたG L A本部職員にもそのことを確認させた。そして、大川隆法氏が、あれほど高橋信次先生の教えを盗用し、濫用していることは、なぜ抗議しないのかともいって置いた。なぜなら、私を犯罪人扱いにしておきながら、大川隆法氏が、高橋信次先生の教えを盗用濫用していて、さらに、高橋佳子氏はミカエルではないと大川氏が言っていることに対しては、何の抗議もしていないということはどういうことであろうか」、と。

園頭師の出版中止への前提となるもの

1. 『新復活』の中に、信次師自身に対するサタンの攻勢のことが書いてある。正法が広がると、サタンの棲家はなくなるので、サタンは必死に抵抗する。信次師にとって辛かったのは、自分の実弟がサタンに組み敷かれたことであった。講師達を実名で「この者はサタンにやられている」と書いてあるために、都合の悪い講師が出版されたら大変だと騒いでいるのだ、と。
2. 高橋佳子氏はミカエルではないこと。『新復活』の原稿には「この女性にミカエルの霊を入れて話してもらおう」と書いてある。信次師の力によって降霊させられたこと。
3. 一月三十日、園頭師がインド研修より帰国して、まだ旅装も解かない間にかかってきた電話は「高橋一栄氏が佐藤要氏と共に元G L A 関西本部長中谷義雄氏を訪ね、『新復活』が出版されるとG L Aはつぶれる。原稿を取り返せないものだろうかといわれた」というものだった。
4. 『新復活』を出版してG L Aがつぶれるとすれば、困るのはG L Aの講師達である。佳子氏は「もうミカエルとはいいません」というのをミカエルとして演技させたのは講師達であった。そして、初めは佳子氏に反省を求めていた高橋一栄氏が、佳子派に同調していった事などを、園頭氏が本部に行き、反省を促す先鞭をつけること。
5. 裁判によって、貴重な時間と金を浪費することの無意味さ。
6. この問題を早期に決着をつけ、サタンの活動を封じ、正法を二十一世紀へ引継ぐのだという決意。
7. G L Aと一つになって共に正法拡大へ前進する確信。



幻の『新復活』を開く

目次

高橋信次先生の『新復活』について

G L Aの混乱を正す『新復活』

エル・ランティー

現在のG L A ミカエルの誤り

地球の創世記

アダムとイブの神話はどうしてつくられたか、地獄のはじまり

如来、メシヤの降臨

ユダヤ教とキリスト教の誕生

仏教の出現

南無阿弥陀仏の起源

南無妙法蓮華経の意義

仏教とキリスト教の一致

太陽系霊団とは

宗教は本来は一つである

神と人間 魂と肉体

悟りとは

天上界の会議とこれからの世界

これからの宗教界 滅びゆく宗教家達

浄き者たちへの贈物

心に内在されている叡智

サタン姿を現わす

紀州白浜の研修会

これらの項目に対して園頭師が付記したものと

現在のG L Aの教義の問題点と修正

高橋信次先生の『新復活』と大川隆法

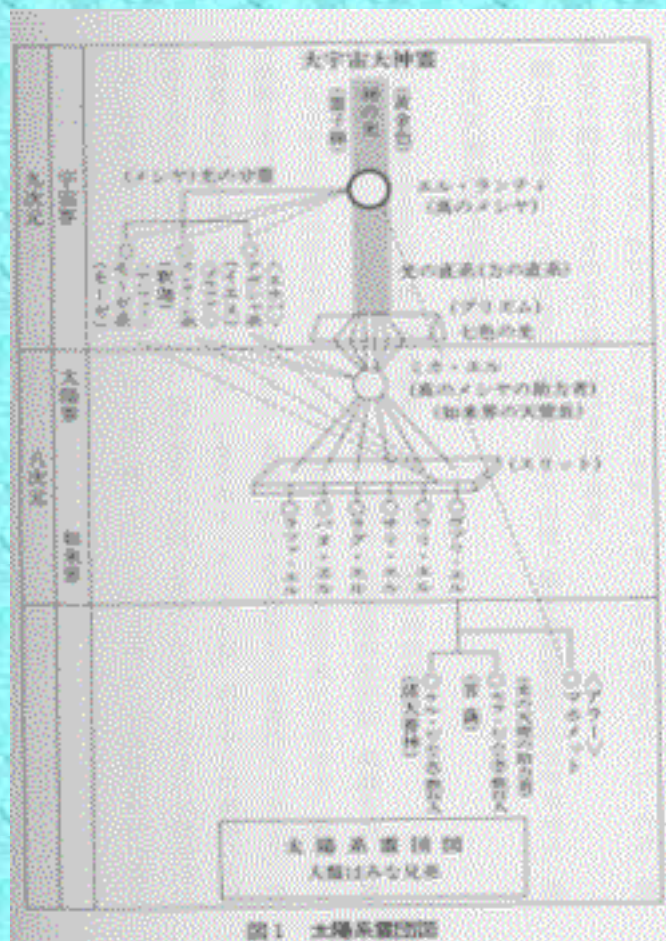


[Home](#)

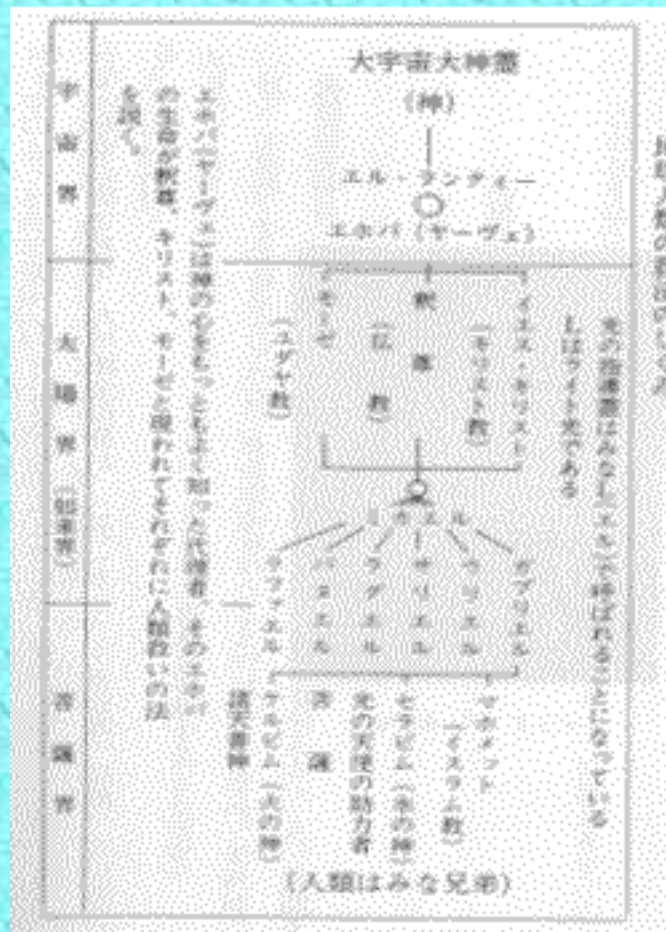
誤りの原点は「太陽系霊団の図」にあった

信次師昇天後の混乱の原因は、昭和五十一年七月号の『G L A』誌に載せられた「太陽系霊団図」の間違いにあった。七月号に「太陽系霊団図」が発表された時、三宝出版社長の堀田和成氏が、沈痛な面持ちで園頭師にこう言った。「私は、高橋信次先生が話された通りに正しく書いたのですが、佳子先生が「いや、こう書け」と強引に言われて、あのように発表しました」、と。（月刊『正法』一六三号）

昭和五十一年六月四日～六日の東北地区研修会のビデオを廻すたびに、信次師が黒板に説明する図と、『G L A』誌上に記載された図がどうして違うのだろうとウェブ・マスターも不思議に思ったものだが、そこに問題の原因があったのである。



講演会ビデオに示された正しい図



『GLA』誌7月号に載せられた間違った図



この図によりおわかりのように、世界宗教といわれるキリスト教、仏教、ユダヤ教は、神（大宇宙大神霊）の人格的発現がエル・ランティとなり、その神の救いの慈悲が、それぞれの役割により示現を異にしたのであった。それは、釈迦を中心としてキリスト、モーゼとして現われ、これらの三方を三位一体というのである。

釈迦、イエス、モーゼの役割

釈迦 王子という富裕な階級に出生され、上へも下へも全般的に正法を広める役割

イエス 左官の子として貧しい階層に生まれ、貧しい者の味方となり、下から上へと正法を広める役目

モーゼ 奴隷階級に生まれた後、王宮にひろわれ一躍上層階級にのぼり、上から下へと正法を広める役割であった

七天使の役割

ミカエル 宇宙界と如来界をつなぐ天使長として七色の翼を持つ

ガブリエル 釈迦、イエス、モーゼに正法布教の状況を通信伝達する。ガブリエルの下にはセラビムと呼ばれている菩薩、ケルビムと呼ばれている諸天善神がそれぞれ 数百名配置され、動・植・鉱物などの動物霊、自然霊などを指導調和させ、地上の調和を図る使命を持つ。イスラム教のマホメットを天上界から指導したのはガブリエル（舍利弗 園頭広周師）であり、アラーの神とはエル・ランティである。

ウリエル 政治、経済、自治

サリエル 医学、薬学

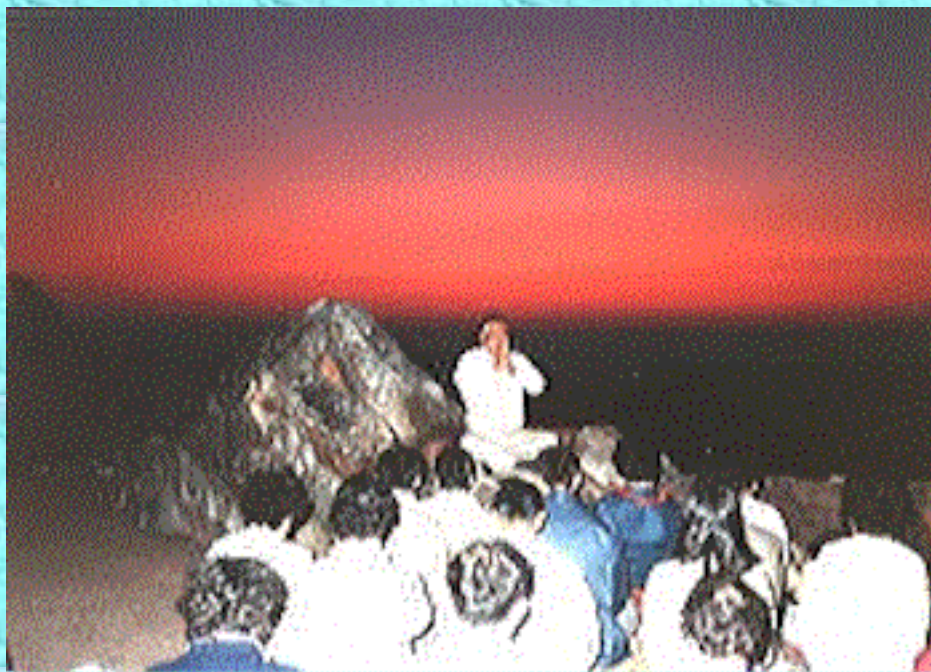
ラグエル 律法

パヌエル 科学全般

ラファエル 芸術、文学、歴史

エホバ、ヤーベはエル・ランティであり高橋信次師であった

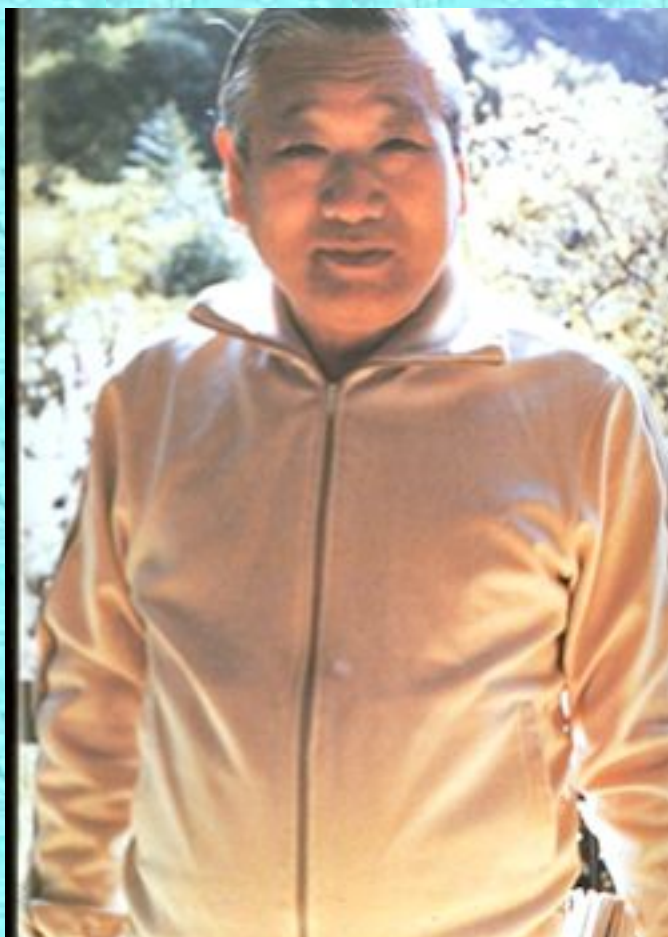
モーゼはそれを「神」といった。だから、ユダヤ人はエホバ、ヤーベを神だと信じている。



インドのリョウジュセン山上で講話の園頭師



講話（前の写真）での天上界からの光跡。園頭師の写真機で横浜のN氏撮影



逆光でありながら、オーラ（後光）が写った園頭師の写真（女流写真家・M氏撮影）

Home

人間・高橋信次

人間・高橋信次師の経時的記録

どう生きてどう去ったのか





「人間・高橋信次」

いまから二十年ほど前の昭和四十年代から五十年代の初頭、日本じゅうが安保やオイルショックで頭を痛めていたころ、中肉中背で丸顔の実に誠実そうな一人の男が、場内からはみ出しそうな聴衆者を前に、何やら意味のわからない言葉で問いかけていた。相手はというと、これも同じような言葉で返している。場内はセキひとつしがない。じーっと見いつている。むろん誰れも何を語り合っているのか皆目わからない。間をおいて男は解説をいれる。そこで会場の者は、なる程と理解できる。男は相手の方に身体を向け、片方の手のひらを頭の上からかざすような仕草をしたり、離れて円をかいたりする。そして、なおも言葉は続く。すると相手は感情がこみあげてどうしようもないのか、堰をきったように想いをぶっつけはじめた。「ブ・ッ・ダー」しぼるような声が場内一杯に拡がる。そして、すがらんばかりにひれ伏して手を差しのべ「観自在者ブッダー」男は「そなたは、よく私のところに来てくれました。こんじょうもまた一緒にやりましょう...」男もハンカチを目に当てている。会場の中からもすすり泣きの声。「リヤ オ エレ...ソレ ポコラ...パニヤ インダ...」そしてすかさず男の解説がはいる。ひと区切ついたところで「...男前がこんなになっちゃいまして...」男は照れ笑いすると、会場からは笑いが。「嘘じゃないんです。真実なんです。皆さんも過去生まれた体験を皆もっているんです。皆さんの心をヒモ解いてゆくと、それがわかるんです...袖すり合うも多少の縁！ ありがとうございます」場内は拍手のウズに。男の解説するところによると、二千五百年前の古代インドの時代、縁のあった者同志が時空を越えて出会った時、懐しさでどうしようもないのだという。そして、靈魂は死ぬこともなく生きとおしのものだから、今の自分がまっとうに生きていなければ、あの世で、或は次に地上界に生まれた時に、嘘のつけない善我なる自分が裁いて、バッチリ反省させられ辻褄が合う、と男は弁を閉じた。

そして、なんと昭和五十一年六月、男は自から予言した死の直前、こういった。「三億六千年前の七大天使と共にこの地球に飛来した中心霊・エル ランティである」、と。そして、またもいった。「モーゼの説いたユダヤ教と、釈迦の仏教、そしてイエスの説いたキリスト教を一つにするために肉体をもったのだ」、と。そして「神理は一つであり、宗教の間違いを修正することに自分の使命はあった」、と、言つてのけた。とてつもなく大変なことを言つて昇天した男がいたものである。「仏陀とかエル ランティだとか冗談じゃないぜ」「魂は永遠だと...?」「あの世だと...死ねばこの世限りに決つてんじゃないか」「このクソツタレめが！」男が伝道を開始してから、このような罵詈雑言がどこからともなく聞えた。しかし、男はまたもいった。「すぐに信じてはいけません。疑つて疑つて、もう疑う余地が無くなつた時、そのとき信じなさい」と、自信たつぷりに言つてのけた。成書を引っ張り、受け売りのような空真似の講演をする演者の多い中で、この男の口から飛び出す言葉は奇想天外、今までに一度も聞いたことのない話の連続だった。そうこうする内に、一人集り二人集りして男の講演会場はいつも超満員。そして、ついには既成の新興宗教が、二万とも三万ともいわれる信者を引きつれて鞍替え、宗教界をアッと驚ろかせたりもした。そして山ほどの多くの「とてつもないこと」を言つてのけ、数多くの著書、講演ビデオ、録音テープを残した。そして来聴者の心に多くの神理を刻み、四十八歳の若さでその生涯を閉じたのである。この耳なれない男の名は、高橋信次。この男こそ釈迦、イエス、モーゼの本体、真のメシア（救世主）エルランティだったのである。

A rectangular button with a blue border and a brown background, containing the word "Home" in white serif font.

驚ろくべき出生の秘密

日本じゅうに金融恐慌が吹き荒れていた昭和四年（一九二九）＜昭和二年・一九二七の説も＞、夏が終り高原のそよ風が頬をなでる九月二十四日、一人の玉のような男の子が生まれた。中部地方の臍に当る位置、浅間山を北に見て、小諸、軽井沢の近く 四WDの車やキャンパーが集って夏の夜の喧噪にマユをひそめる住人も多いという浅間おろしの吹く信州・佐久高原、中込の近く。幼くして死んだ二人を除くと、十人の子の中で男三人女七人の真ん中、貧農の二男として高橋信次は生まれることになる。本名は治男（春男の説も）。成人して信次と改名、その理由は、同じ部落に同姓同名の人がいて、郵便などの混乱による。出生地の選択について信次は、こういっている。

「今度、生まれる時、誰がどこに出るかを天上界で会議をもったのは、寛永二年（一六二五）だった。はじめ僕は北海道にと考えたが、遠すぎる。東京に近くて最適な所はないかと思案の上、風光がインドのカピラ（釈迦の生まれた王宮の在所）に似ている佐久平を選んだのです。そして次に、相談相手となる人を僕のそばに出そうということになって、インド時代のプルナートラヤー・ヤニプトラと呼ばれた人。それから日本に富樓那という名で生まれ、いま税理士の佐藤さん、彼とは小、中学校から、ずっと一緒です」と。

「ヘー生まれる場所を自分で決めてくるのか。自分で決めたら、暑いとか寒いとか、こんな処で生みやがって、なんて言えないナ」

そして、父について信次は、こう言った。

「僕の父はインドの時代のシュット・ダナー王（釈迦の父）であり、その後、日本に生まれ変わって、鎌倉時代の源頼朝」

「ナニッ 源ヨ・リ・ト・モ！」

「マーマ、落ちつけ落ちつけ、最後まで」

信次の懐古談によれば、信次の父は黙々と働く人で、子供の成長を楽しみ地味な人生を送って七十五歳の生涯を終えた。信次が悟りを開いてしばらくした頃（昭和四十四年頃）、おやじが、「治男、お前はわしの子だろう」という。「そうですよ、それがどうかしましたか」と言うと、「いや、昨夜、武士が出てきて「あれはわしの子だ」という」、その次の夜、「また、昨夜の武士が出て来て「わしの子だ」という。そうしたらターバンを巻いた二メートルくらいの白い服をまとった男が出てきて、「あれはわしの子だ」という。治男どうしてなんだ」と。それで信次はどうしてこういうことになるんだろうと思って、信次の父に關係する靈を呼び出してみた。そうしたら、最初、武士が出てきて「源頼朝めにございます」という。僕が今度日本に生まれて法を説く上で、日本の体制を整える必要があって幕府をつくったのだという。そうしたら「武士という者はなかなか権力闘争が強くて困りました。それで今度は、何も關係のない百姓に生まれることにしました」という。その後ろに、インドスタイルの大きな男の人が立っている。そして「インドの時、あなた様を生まさせていただいてありがとうございました」という。インドの時のカピラの城主、僕の父親だった人。その人が日本の源頼朝と生まれ、そして今の父となった。縁というものは、ふしぎなものですね」と信次は言った。

「仕事も自分で選ぶのか。それじゃあ自分の職業に不平不満も言えんじゃないか。会社が悪い、上司が悪いと」

「生まれた環境もすべて全部自分の責任というわけサ」

そして、母に関して信次は次のように明かした。

「僕を生んだ母は、キリストを生んだマリヤであり、その後、日蓮を生むことになった」、と。

「オイオイよせやい。今度はマリヤ様か。二千年前のマリヤ様が、次は鎌倉時代の日蓮の母か、ヘー、だんだん大変なことになってきたゾ」

信次の、母の回想によると、信次の母は無学なりに「心まで貧しくなるな」とか「雨滴によっても穴はあく、いつの日にかは」、「一寸の虫にも五分の魂」そして、他人の悪口を言えば「人を呪わば穴二つ」などと諺を引用して子供達に教えている。そして、明治三十一年生まれの母が、信次を妊娠した時から、ふしぎな声が天から聞えるようになり、夜道を歩いていると、足下がスポットを浴びたように明るくなり、懐中電灯もいらなかった。

「まるでSFの世界じゃないか」

そして、信次の家には不思議と物貰いが集まって来て、心から親切にした。それで、みんなから、生き神様と言われていた。信次も言う、心のきれいな人だと。

「マリヤ様だったら、当然だろうナ。流石にマリヤ様は人に出来ぬことをなさる」

「園頭広周（元国際正法協会会長）という人が、昭和五十五年に生家を尋ねた。八十三歳のお母さんは新築の家に一人で住んでおられ、眼鏡も補聴器もいらず、縫いものをしておられた。色々信次について話しを聞いていると、度々話を切上げては奥へ行かれる。その内に三人分の昼食を用意されて、どうしても食べてくれと勧められた。そして次のように言われた。「あの子は、親に心配をかけまいと自分で何んでもやる子でした。でも治男は死んでいません。治男は今も生きています」と何度も繰返された。信次の生まれた家は、信次がお母さんのために家を新築したので、半分こわして通路になり、後の半分は一行が訪ねた日に取り壊すことになっていたのが、雨が降ったために取り止めになり、写真に残せた。そして信次が背のたけを計った柱の傷を指し示した。そして、別れる時、ふところから紙包みを取り出して差し出されたので無碍に断るわけにもいかず、いただいたのだそうだ」

「九州から尋ねて来てくれた人への思い遣りというか、心遣いが痛いようにわかるネ」

「一万円だった。そのお母さんもすでに亡くなっているが、信次は大変にお母さんの感化を受けている」

信次は次のように言い残した。「インドの時のマヤ（釈迦の母）なる方に、「今度も私の母になって下さい」とお願いをしたが、「今度は休ませて下さい。インドの時は苦勞しましたので」といわれるので、それではというのでマリヤ様であり日蓮の母にお願いした」、と。

「マヤ様は釈迦を生むと産後の肥立ちが悪くて、すぐに亡くなってしまうからナ。大変だったわけだ」

「そう、逆子だった。それで亡くなることになる。しかし、これとて釈迦がこの地上界で自から悟るための手段として、マヤ様は天上界の計画によって天国へ召されたのだ」

「へー、天上界って無慈悲なことをやるもんだネ」

「イヤ違う。我々は永遠の生命だからナ。死んでも、また生まれてくるのだから。これまでも、この地上界では何万回も、いやそれ以上、生まれ変わって来たのだから。しかし、その時、マヤ様は大変だったわけだ。わかる。」

「ところで、釈迦は生まれてすぐ歩き出し、イエスは腋の下から生まれたというゾ」

「これも信次は修正している。そのようなことはなく、イエスは普通のように生まれ、釈迦も我々と同じだ。後世の者が神格化して作り変えたのだ。」

「なる程、そうしてみると、彼等と同じように我々も、同じように父や母を自分で選んで、この世に出てくるのか」

「そうだ、縁というものを通して。だから我々が、マヤ様やマリヤ様のもとに生まれようと思っても、それは不可能だということ。今の君のお父さん、お母さんをまた選んでも不思議ではない。ところが我々は無智なものだから、自分で選んでいながら、恨んでみたり、不平不満を言う。ナンセンスってこと」

「なる程、父母への感謝、報恩とは、こういう意味があったのか」

ともかくも、信次の父の過去世の名が源頼朝であり、シュット・ダナー王であった。そして、母の過去世の名がマリヤであり、日蓮の母であった、と。

「釈迦の時のマヤ様は、今度はお断わりになったのか」

「そう。しかし、日本に生まれられている」

「やっぱり日本に。話しが出来すぎていないか」

「うん。霊団の一人として、その方は関東地方の蜂須賀侯爵家に生まれ、蝶よ花よの優雅な生活であった」

「片や優雅な生活、マリヤ様は貧農の妻、明暗だネ」

「とんでもない。どちらがより良い魂の勉強になったかということだ。金持ちとか貧乏というのは、魂の修行のための環境にすぎない」

生い立ちの不思議

生死の境を何十回も往復

十歳の秋（九月三日）の夜八時、それまでは病気という病気もしたことがない信次が、心臓は停止し、突然、死んだようになってしまった。その日は三時間ほどで息をふき返したが、それ以来、夜八時になると、しゃっくりが出て呼吸だけになり、四、五秒で完全に心臓は停止する。信次の母は信次の死体を抱えて、耳許で信次の名を呼んだり、揺り動かしたり、どうにか息をふき返えさせようとした。家族の者も、どうすることも出来ず心配そうに見ている。もう一人の信次は、その推移を全部見ている。そして心配を掛けまいと、声を掛けるが、誰れも、気がついてはくれない。その内に医者に来て、唇はぶどう色、顔面は蒼白、手足は柳のように萎えている信次の診察をして、カンフルや浣腸をした。もう一人の信次は、それを全て見ている。その内に、薬の匂いがしたと思ったら、心臓が動き出し、本来の自分の肉体に戻っていた。このような分身現象が定期的に起った。その時間は十五分から数時間というものだった。医者も診断をつけかねて、その内に来なくなった。家族も、あきらめて、その経過を心配そうに見ているだけだった。その間、もう一人の信次はと言えば、忍者のように自由自在、変幻自在で、どんな隙間も通り抜けることが出来、故人と会ったり、美しい花園を散歩したり、信じられそうもないことが展開されていった。

「今で言う幽体離脱ってことか」

「そう、信次は原始肉体と光子体の分離という言葉で説明している。勿論、幽体離脱と言っても、それには段階がある。我々の人家やビルの高さまでの幽体離脱から、地球が眼下に見えたり、宇宙や極限の果てまでの離脱もあるが、それは、その人の心の広さにも比例する。正しく見ることだ」

医者にも見離された信次を、両親は仕方なく、色々な神社祈願にも連れていった。近くの鍼灸師のもとへも行った。そして信次は村はずれの小さな白山神社へ通い、朝夕の六時の二回、社の掃除と瞑想にふけり祈願するのが日課になった。ある日、信次が母と成田山へ詣でた時、不思議な墨染衣を着て顔を深く隠したまんじゅう笠姿の、見知らぬ旅僧が、信次の顔をなでながら「病気は、近々なおる。そして、お前の眼は二重孔であり、一生懸命に勉強すれば霊力を持つことになるう」、と言った。

「二重孔って、何に？」

「つまり、あの世も、この世のすべても、未来も透視する力」

「色々な言い方があって大変だね」

「それも仕方ない。その内に適当な言葉に定まる」

信次と母は、その語りをびっくりして聞いていた。その通り病気は半年ほどで治り、もう一人の信次も出ることはなくなった。そして、その僧と同じ姿をした旅僧が遊んでいる信次に、色々な言葉をかけ、「今晚はこの川岸で泊まるから、夕方まで解らない勉強を教えてあげよう、と菓子をくれたりした。それで坊さんの横に坐ると、信次の将来について優しく導いてくれ「心というものが、全ての元である」と難しいことも教えた。ある時は同じような旅の僧が家に尋ねて来て、「信次は元気に生活しているか」と良く話しかけていることがあった。このように信次の家には不思議と旅僧の来訪が多く、信次に対して、正しい心を教えていった。しかし信次は学問は余り好きではなく、神仏の話しになると生き返ったようになり、学校から帰れば、山野を駆けめぐる日々であった。

「ヘエ、見知らぬ旅僧が尋ねて来ては、教へ導いた。不思議と言へばフ・シ・ギだナ」

「私も考えていた。確かに不思議だね。実は、信次が言い残した言葉の中に、フィリッピンでイエスの分身（５）が肉体舟に乗って修業している、というのがありますが、それはフィリッピンの心霊術者・アントニオ・アグパオア（通称トニー一九三九～昭和五十七年）であった。イエスの分身であるだけに、その霊能たるや相当なものであったろうと疑う余地もないが、トニーの自伝によれば、同じ体験をしているのも、実に不思議だとは思わないかネ」

「ヘエー、そんなことがあったのか」

「それは、トニーが七歳の時、黒染めの絹のような服をまとい、腰には白いヒモを巻き、白ヒゲのアポと呼ぶ一人の男が出て来て、山小屋につれて行った。そこに不思議にもトニーにピッタリの服が用意されていた。そこでアポはトニーに、色々な物の調和（シンフォニー）、心について教えていった。トニーが独りでいる時も、いつもアポの存在が感じられ、瞑想を教えたり、植物や、動物の内なる調和を学び一体となること等を教えて行くが、一定の教育期間が終わるとアポの姿は消え、次には心の中から霊的に教えていったことが詳しく述べられている。このように使命を持って生まれて来た人達には、天上界の協力によって、霊人が物質化現象と言うか、人間の姿となってこの世に現われ、不思議な協力をして教え諭していくもののように見える。そして、この自伝の中で、トニーの心霊力が高まり、世界的に名声が広がるようになると、世界中から人々が押しかけていく頃、増上慢になって金や女に溺れていく内に、その心霊力も一時的に消え、悩んでゆくことが記されている。だが、心霊ツアーで行った日本人女性との肉体的関係が原因で、残念なことに短命であった。先述した園頭氏の発行する月刊『正法』誌によると、園頭氏は当時バギオに飛び、腐心していたことが窺い知れる。そして、バギオにトニーは六角堂をつくったが、余り神聖な場所ではなかったため、先のフィリッピンの大地震で埋没してしまった。」

「霊界の不思議というが、そんなことがあったのか」

「イエスと言われた人の本体が、これから百五十年後に（昭和四十八年当時、信次は百八十年後と言っている）アメリカのシカゴに生まれた時、本体イエスは分身トニーのカルマ（心の傾向性）をも修正しなければならず、気の毒と言わざるを得ない」

「使命を持って生まれてくる人は、特に大変なんだネ」

「それは当然だろうナ」

「ちょっと待てよ。先程から分身（５）とか本体とか、それ何に？」

「信次は『本体と五分身』の法則について、次のように説明している。」

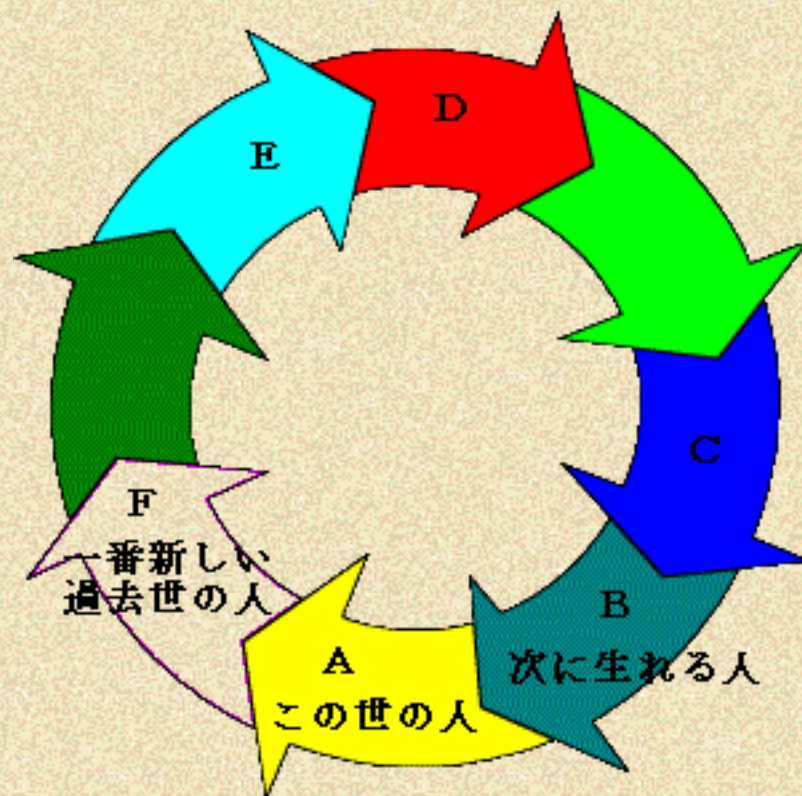
人間は、大自然界の中の一つの構成員にすぎません。植物が、核（本体一）を中心に、その周囲に原形質膜、液胞、色素体、細胞膜の四つから構成され、本体一、分身四の関係となる。動物の場合は、核（本体一）を中心に原形質膜、ミトコンドリア、ゴルジ体、中心体、脂肪粒 分身五、つまり本体一、分身五の関係になります。同様にして、鉱物の場合は原子番号に核を加えた数が、本体と分身の数になります。例えば、炭素の原子番号は六、核が一つに外電子が六ということですから、本体一、分身六の関係となります。このように人間も動物ですから、本体一、分身五の関係には違いないのですが、実は人間の場合は、この大宇宙が神の大意識を母体に、熱・光・電気・磁気・重力という五つのエレメントからできていますので、人間の生命体もこれに合わせて本体一（大意識）、分身五（五つのエレメント）の組合せになっています。人間を称して小宇宙というのも、生命の成立が、このように大宇宙の構成と同じようにできているからです。

生命も物質も、三つのプロセスからできています。地球に生命が宿るのは、太陽、月、そして地球という三位一体の構成。地球（地上）は気圏、水圏、岩圏から成っており、原子は、核外電子、中性子、陽電子からできており、電気は陽性（+）、中性（N）、陰性（-）から、細胞は大きくわけて原形質、細胞質、核の三つから構成されています。物質の成立は、宇宙の大意識をまず出発点として、第二に熱、光、電気、磁気、重力のエネルギーが組み合わさって、物質という第三の現象化が行なわれています。生命もこれと同様に、まず第一に宇宙の大意識から、第二に個としての生命が、あの世すなわち実在界に誕生し、第三に現象界に姿を現わすのです。

一度、現象界に出た生命体はこの世とあの世の転生を繰り返し、この世に生まれ出る時は、両親という媒体（縁）を経て、姿を現わします。つまり、大意識から離れた生命は、あの世、両親、この世というプロセスを踏みながら、循環の法のなかで生きるように仕組まれています。

生命体（魂）の転生輪廻の順序

魂の転生輪廻は、それではどういう順序で行われるかといえば、原則的には順ぐりです。Aが出れば次がB、Bの次はCというように、A（核）BCDEF（分身）が順次、現象界に出て修行する、というのが原則です。ただし、転生輪廻の過程で、修行を積む者と横道にそれてしまう者（地獄の暗い世界に落ちる者）もあって、全体のバランスを崩すことがあるので、そうした場合は、あの世で話し合い、前記の原則にこだわらず、AならAが短期間に二度、三度、現象界に出て修行することもあります。しかし、こういうケースは比較的少ないようです。大半は順ぐりに出て修行することになるわけです。先述の「横道にそれてしまう...。」ということは、我々人間の霊魂は天上界に帰った者のみが、この世に転生することができます。ですから、横道にそれ、地獄の暗い世界に定住したものは、地獄の世界からそのままこの世に転生することが出来ないのです。一旦、天上界にもどって、それから、この世に肉体を持つことになるのですから、この意味において、混乱が起こるわけです。



先に進むことにしよう。

信次は平賀小学校（現・城山小学校）を卒業すると野沢中学校（現在の野沢北高校・進学校で名高い）に入学するが、二年で中退、仙台陸軍幼年学校にはいる。この時、両親は合格通知が来て初めて、試験を受けたことを知った。そして、中学より始めた剣道は以後、信次の生涯に少なくならず影響を与える。やがて戦争は激しくなり、そのむなしさは友人の死によって倍加されていった。信次十八歳の時、信次に親切にしてくれた女性に片想いをするが、恥ずかしがって何も言えなかった。少年時代の思い出のひとつまでであった。信次は陸軍幼年学校から士官学校に進んで航空士官と なって出兵。その時、十二時間、海に漂い海防艦に救われる。それは不思議とイルカが信次のそばに寄って来てくれたので、米軍の機銃掃射を免れたことによるが、信次の身体には弾丸の破片が残った。

「ヘー、イルカがネ。イルカは賢いと言われているが、何か天上界からの指令というか、何かがあったのだろうか。そして、後日、伊豆の海岸でイルカと話をしたと伝えられている。」

「ウム、もう一つ戦争の時の例を引こう。先述の園頭氏が出兵していた時、中国でのこと。機銃掃射を受けた。ここだと思って、氏は、ここに戦争があるという観念を捨て坐った。軍刀を立てかけ瞑想をはじめた。氏の周辺に落ちる爆弾という爆弾、弾丸が不発に終わって落ちて来た。最後の一機が超低空から風防を開け手投げ弾を投げつけ、諦めて帰って行った。安らぎの心の世界は明るい光明の世界、戦争は暗い闇の世界、暗闇は光によって消えたのだ。」

「SFの世界だネ」

「心の世界、意識の世界というものは、それ程、大切なもので、想念はものをつくり出し、人間は、靈性に目覚め、その偉大性に感謝しなければならんだ」

「そして、もう一つ、園頭氏が生長の家の講師の頃、道場で研修をはじめると、一羽のハトがやってきて、講義を聞くような素振りをしたり、皆んなの輪の中にはいって、なかなか去ろうとしない。講習会の間、やって来ては仲間にはいる。その時の写真も残っている。みんなが不思議だ不思議だ、と」

「お釈迦様は猿が使い姫に」

「使命のある人達には、このようなことがあると見える」

そして、信次は、航空隊で沖縄に出撃したことがあると聞いた、と園頭氏は書いている。

Home

そして、終戦。敗戦を迎えた多くの兵士達は故郷の山河に迎えられていく。こうして信次は、幾度かの生命の危険にさらされた生活から解放され、ひとまず両親のもとへ帰った。やがて人々は破壊された環境を再建するために立ち上がる。それから、信次は二カ月の後に上京した。復員の時渡された金二千三百円、それに父親から貰った牛一頭が信次の資本であった。信次は大学入試認定試験にも受かり、日大工学部電気工学科に入学。大学では自然科学や理科系の学習を主としたが、常に心の問題を中心として霊的問題のきっかけをつかむための学習をした。そのために学友は「哲学科へ行ったら良いよ」と言ったり、変わり者の予言者などと呼んだ。しかし、宗教書を読む気はサラサラなく、神秘の世界には常に探求を続けた。瞑想に耽ってみたが、心に一時の安らぎができて、一時的なもので、もとのもくあみであった。信次は食糧難の時代に、芋の買い出しをしながらの勉強が続いた。そして、生活のために石鹼を作って売ったり、部品を買って来て電気蓄音機を組立てて、生活を立てた。そして、この頃から親しい友人から将来の予言的なことを頼まれると、一枚の紙の上に字が現れ百発百中した。

「紙の上に予言が現われた？ まるでテレビのマジックショーだね」

「その辺について、著述家・上之郷利明氏の取材があるので要約してみよう。」

信次の妻・一栄「結婚して間もない時のこと、知り合いの人と神様の話しをしている。信じられないような話しも出てくる。ウソでしょう、というようなことを言う人がいると、願い事を紙の上に書いてご覧なさいということになる。その紙をローソクの火の上にかざして何やら念じていたと思ったら、紙の上に願い事に対する答が文字となって写し出されているんです。私もはじめは、あらかじめ紙に答えを書いておいて、あぶり出すあのやり方なのじゃないかと疑って、自分で文房具屋さんで紙を買って来たりしたのですが、どんな紙を使っても、ちゃんと、そのときそのときの願い事に対する答が出るんです。」、と。

「驚ろいたネ。信じない訳にはいかないナ」

こうして、この頃には、他の宗教への遍歴もし、色々な宗教団体を尋ねた。その中から信次は狂信、盲信している人々を見ていると阿片の恐ろしさを感じるのみであった。そして、信次は主として日大で学んだが、一時、東大へも通っている。しかし卒業論文が「神的エネルギーは下はアメーバから上は大宇宙に至るまで」というもので、やや規格はずれであったので、教授の嘲笑を浴びたという。そのために卒業資格を得ることができなかった。

「偉大な覚者に対して卒業を認めなかったとはネ」

「判で押したような規格学生を流れ作業のようにつくり出す現代の大学のような考え方では、それも仕方あるまい」

そして、信次はその他に医学も天文学も学んでいるが、信次流のやり方で勉強すれば、それで良かった。二十五歳の時、電気関係の仕事をするために大田区上池上に、五、六人の従業員とともに小さな工場を借りた。仕事は自動制御装置がその主なものであった。しかし、信次はやはり生身の青年であることに変わりはない。欲望のとりこになり、異性への憧れが、いつか心を占領し、それに悩むようになって行った。



結婚の秘密とその縁

信次が妻・一栄と初めて出会ったのは、昭和二十八年、信次の取り引き先の電気メーカーでのこと、信次が出入りする内に、一栄を見染めた。信次は一栄に、自分の将来について四十八歳の生涯について予告し、事業上の問題についても言及した。

「なにかきっと特別な秘密があるんだ。これも恐らく、お父さんやお母さんのように」

「マー聞け。一栄は熊谷の青果商の娘。成人式を迎えると、とにかく東京へ出たいと思った。両親を説得し、知人の紹介で日本橋の電気メーカーに勤めると間もなく信次と知り合ったのだ。信次は、一栄について、こう言っている。一栄は、インドの時代、マイトレーヤーと呼ばれ、最初に釈迦に帰依した四人の女性のうちの一人で、読み書きが出来、聡明であった。釈迦教団の中での仕事は、今夜は何処そこでお釈迦様のお説教がありますと、日中に鐘をならして知らせて廻ったり、お釈迦様の身の廻りをよくみた。釈迦が亡くなると、故郷に帰り、弟子達に仏教を指導する。そして釈迦の言った未来について詳しく書き残したので、未来仏と言われた。マイトレーヤーは改名してミロクと呼ばれた。そして、またタレイヤー、サチとも言い、サチ（幸、幸子）の語源となった。」

「マイトレーヤーとミロクは同一人物なのか。成書に『やがて現われる世界の真のメシヤはミロクかマイトレーヤーなのだろうか?』というのも何かそろそろしいナ。そしてメシヤでもなかった」

「信次は、またこう言った。僕達が、誰を父として、母として、誰を妻としてこの世に出るかを決めたのは寛永二年だった。インドの時のヤショダラ（釈迦の妃）に、もう一度、一緒に出てくれと頼んだが、インドの時は苦勞しましたので今度は休ませて下さい、と言われるので、ババリーのところから来たマイトレーヤーに頼んだのです、と。」

「お母さんにも、妻となるべき人にも断わられたってことか」

「釈迦の妻の場合、釈迦二十九歳の時、妻と子ラフラをおいて出城、ヤショダラにしてみれば、仏陀の妻として、夫を人類のために捧げる道は厳しかったのであろう。」

「釈迦の子供はラフラであった」

「ラフラとは古代インド語で障害物・邪魔者という意味であると信次は明らかにしている。つまり出家の邪魔に」

「妻と子をおいて出家」

「信次は言っている。釈迦が亡くなって最初に反省したのは、出家したのはいけなかった。在家のままで道を説くべきだった。だから今度は家庭を持ったのです」と。

信次は側近の者へ、いつも「僕は四十八歳までのことは、この世に生まれてくる時に予定してきました。僕がいつ死んでもよいように、心の準備をしておきなさい」と言っていた。

「こうして見ると、妻や夫の場合も約束して出てくるのか。お互いに不平不満を言って、結婚するのを失敗した

と言うのも、ちょっとおかしいことになる。全部、自分の責任って言うことなんだネ」

そして、信次は、手形詐欺にあって、結婚を目前にして、経済的苦境が訪れるが、取引会社の社長の協力によって結婚。新しい人生を踏み出し、独身生活に別れを告げた。

「妻・一栄は、こう言っている。先生は最初から神様のことしか頭にない方でした。婚約時代にも、映画につれて行ってくれたのは「ホワイト・クリスマス」の一回だけ。喫茶店でお茶を飲んでいても、道を歩いていても、神様の話しばかり。他の人から見れば、先生は確かに「変わった人」という感じだったかも」

結婚はしたものの、手形不渡りによって会社は倒産。信次は事業に失敗して一文なしになった。信次は言う。失敗の原因は経営の未熟にあった、と。失敗は信次にとって良い体験となった。

「倒産の予告から本当に倒産。そして結婚か」

「上野の地下道でも何日か過ごすことがあったようだ」

信次夫婦は、アパート暮らしであったので、鍵一つでどこへでも行ける身軽なものだった。職を失した信次は、近隣の人の相談にのり、その薄謝によって生活を続けた。信次はこう言う。「近隣とのつき合いにも不思議な現象が始まり、予言はほとんど適中し、相談に来る人が狭いアパート一杯にあふれることもあった。だが、なぜ予言が当たるのか、自分にも答えられなかった。そのため、自分自身そのことを信じてはいなかったし、邪心もなかった」、と。

昭和三十一年（信次二十七歳）長女・佳子生まる。妻・一栄は、こう言う。信次は、生まれる子供はみな、女の子だからと予告したので、女の子の用意をした、と。のち、二女生まる。

「長女・佳子は「あの」卑弥呼だった」

「今度はヒ・ミ・コかい」

「講演の中で信次は○さん達は、ともに卑弥呼の大臣をしていた人達です。卑弥呼の過去世を思い出したこの人（佳子）を中心にして、この人達が卑弥呼の時代を思い出すと、今までわからなかった歴史がはっきりとわかります。……そうです、この言葉が当時の言葉です……。有明海を中心にしてありました。……」

「有明海周辺の当時の言葉が…」

「二千年前の言葉。テープを何度廻してもチンブンカンブン」

「現代でも、沖縄の人と東北の人が、方言まる出しで喋ったら、チンブンカンブンでサッパリわからない。当然と言えば当然。二千年の時空を越えて」

「その当時に生まれたことのある人が、それはこうで、あれはこう、と過去を思い出せたら、歴史は塗り替えられるかも」

「神の子・人間は永い歴史の中で、その力を閉ざして盲目の人生を歩くことになった、と。『G L A』誌の前身の『ひかり』に次のように書かれている。『高橋佳子さん（十三歳）、東京大田区在住。彼女は、お釈迦様の時代、すなわち印度時代に、祇園精舎を寄贈した、須達（スダッタ）長者の娘デルナーという女性でありました。日本ではヒミコとして約一九〇〇年前、九州大和姓国で生まれ数多くの伝説を残しましたが、＜中略＞ 古代語では一般の人はわかりませんので、現代語で昔日の模様をいろいろ語ります』、と。」

信次は企業倒産ののち八年の空白をおいて、昭和三十九年（信次三十五歳）、ある銀行の会長の支援によって、東京大森にコンピューター端末機器を製造する三百三十平方メートルほどの「高電工業株式会社」を設立。当初資本金百万円。

昭和四十年（信次三十六歳）

信次は「人生の羅針盤」なる器具と小冊子を世に出した。前書きの中で「.....大自然の陰中陽、コンパスの春夏秋冬を知り、自分の原因結果を.....」と書いている。

「色々なことが良く当たらしく、『法』の勉強より、この器具に関心を持つ会員が多くなったので、製造中止、廃版にした。」

「利益になりさえすれば、どのようなものを販売しても平気な、現代の風潮に照らしてみると、まさしく人類を導く人の姿勢が」



信次の周辺

もっとも早い時期に信次の弟子になった観音寺住職・村上宥快氏に語ってもらう。

「探し始めてから三カ月たったある日、見覚えのあるクリーム色の小誌が出てきた。紛れもなく発明者の住所と氏名がさん然と輝きわたっている。＂高橋信次＂この人だ。大田区大森.....早速、電話番号を調べた。夢中になって何かに憑かれたように電話した。『高橋様ですか』という、すぐに答えが返って来た。『高橋信次です』その声音は全く慈悲に満ち溢れた音量であった。実は先生の羅針盤についてお伺い致したいのですが、という、先生は待っていましたと言わんばかりの応答だった。先生のご都合をお聞きして、指導をいただきたいと申し上げると、快諾されたのである。昭和四十一年二月になって気候もゆるみ小糠雨の降る日、妻と二人で尋ねた。立合川の川岸の近くは住居と街工場のある街並であった。二階の応接室へ先生自から案内して下さった。ソファがあった。余り立派なものとはいえない。この洋間に製図盤がひっそりと部屋を占めていた。直ぐエンジニアであることが分った。私も自己紹介した。年の頃は私より十歳ほど下であることを知った。妻も何か物凄く人懐しく思ったようだ。直に十年の知己のような感じになり、この後一カ月に一度、或いは隔月位に足を運ぶようになった」、と。

信次の事業は順調に伸び、神奈川に長野にと、小さいながらも生産工場を設備した。こうして事業も陽の目を見ることが出来たのである。妻・一栄は信次の語る神仏に関しては否定も肯定もしなかった。

妻・一栄「先生は、『こんな見せ物みたいなことをやるのは本意じゃないんだ』と疑いを抱いている人達に対して自分の霊能力を証明するために、色々の＂奇蹟＂を見せた。たとえば、『山から石を取って来て見せよう』と何か念じている。パッと掌を開くと、本当に石が乗っていた」、と。

「魔法じゃないか、トリックがないのなら」

「そうだな。どうして、このような事が起るのかと言えば、信次は言っている。次元の違うあの世から、あの世の霊の協力によって行われる。だから自由自在。

「かつて、目から真珠を出したり、饅頭の中から大黒様を出していた人がいたが.....」

「あの世の協力する霊の質が問題。滝にかかったり（肉体業）、拝んだりして出てくるものは、ほとんど動物霊か人間の地獄霊。正しく見る（正見）ことだよ」

「モーゼやイエスの霊能は？」

「正しい光の天使達の協力によってなされた。かつてイエスが一切れのパンで何千何万という人を助けたとあるが、あの世の霊の協力によって、パンの物質化現象が起り、本当に多くの人々が救われたと信次は言い残している。しかし、目から真珠を出して、ネックレスでも作るつもりだろうか。全く考える次元が違う。正しい人なら、その力でパンやミルクを出してアフリカの飢餓で死んで行く子供達を助けようとは思わないか。」

信次は常に生活基盤を根底にした神仏について、考えていた。その頃から信次の義兄は病弱であったので、姉夫婦は創価学会に狂信的となった。当然、信次の家にも折伏に来た。地湧の菩薩は強引な折伏によって仏法を説くことはしない。闘争と破壊の想念行為は菩薩の心ではない、と信次は述べている。このようなこともあったが、事業は順調に展開して信次は、経済力がなくては人々を救うことも出来ないと思い、金儲けに専念した。本筋とは異なった方向に進んだのである。その結果、信次は従業員との意思の疎通、会社内部の混乱、家庭の混乱の渦に入っていった。

Home

悟りへの道

昭和四十三年（信次三十九歳）

二月頃から、信次の周辺には不思議な現象が起り始めた。父の死以降、信次は仏壇の前で瞑想するのが日課になっていた。二月三日、午前一時、仏前に灯明を上げて、心の調和を計っていると、突然風もないのに、灯明の炎の高さが二十五センチになった。本来なら三センチのものがである。それが、炎が自然に小さくなり、今度は蓮の華に変化し、最後は蓮の実に変わった。この変化を信次達は驚いて見ていた。

同じく二月五日、ローソクの火が二十二センチ位になり、炎の先が二つに割れ、次第に蓮の華に似てきて十五分後、蓮の実そっくりに変化した。家族はただあっけにとられて見守っていた。やがて信次の前に、肉体先祖と称する十四代前の先祖が名乗り出て来た。信次の生まれた佐久の地は、戦国時代、甲斐の武田勢によって支配されていた。その時の、信次の肉体先祖であった。（比較用語・魂の先祖）「私は、あなたの先祖、竹之丞半九郎友幸（十四代前の頼朝の子孫で武田信玄の軍門に下ったとされる）である。それから、信次に語り始めた。千石平の林の中で戦死したこと、塚を調べればその謎が解けるとまで詳しく説明した。その塚の中には、私と息子の首が入っている。恐らく甲冑と刀はすっかり錆びているであろう。「今私は肉体先祖として、あなたにこの事実を話すことが出来て喜ばしい」といった。その後、信次がこの話を佐久の人々にすると、やはり首が二つと、錆びた金物があったことが証明された。先祖は、こうも言った。「肉体的子孫を佐久の地に残したのも、いつかはこれを知って貰うためである」と。この頃から、肉体的先祖という問題についても、信次の探究の具体的な糸口が解かれていった。「肉体先祖は、この地球上に適応した肉体として神仏が保存したものであり、魂の乗り舟である」ことを、信次は悟って行ったのである。

「肉体先祖と魂の先祖か。難しいネ」

「そのようなことはない。信次が明らかにした一例で説明しよう。」

(肉体先祖)

高橋家 父

| 高橋信次 (十人兄弟の二男)

家 母

(魂の先祖)

三億六千五百年前のエルランティ 三千数百年前のモーゼ 二千五百年前の釈迦

二千年前のイエス 二十世紀の高橋信次

エル・ランティに於いてモーゼ、釈迦、イエスを三位一体と信次は修正した。(キリスト教会では、イエス、聖霊、教会を言っている)ユダヤ教も仏教も、キリスト教も神理は一つ。

釈迦の生命

釈迦 (インド) 不空三蔵 (インド) 天台智ぎ (中国) 伝教 (最澄)

空教 (日本) 木戸孝允 (桂小五郎)

イエスの生命

本体イエス (紀元前三十二年、紀元一年でないことに注意)

クラリオ B C 四千年頃 エジプト

マグガリス A D 二百年頃 イスラエル

フワン・シン・フワン・シンフォー A D 四百年頃 中国

バロイン A D 千五百年頃 英国

マグネチオ B C 二千年頃 エジプト

「なる程、こういうことか。」

「一般的には、先祖と言えば肉体先祖を指しているが、魂は永遠なのだから『魂の先祖』ということも頭においてもらわなくては困る」

このように「肉体は魂の乗り舟にすぎない」ということを、信次は悟って行ったのである。その後、信次が親しい人々に光を与えて心を調和させると、次々と霊的現象が起きるようになった。この頃、会社の仕事は相変わらず忙しく、信次は浅草にビルの建設を始めていたが、昼中は浅草のビルの建設現場と工場とを駆けもちで追われる毎日だった。

一九六八年（昭和四十三年）七月三日、遂にくるべきものがきた。多くの人々に光を与えることにより、霊的現象が起きるので、信次は、これは自分の能力以外の作用が働いていることを悟ったのである。霊的現象についていろいろ話しているうちに、ある時、義弟が

「ぜひ私にも現象を見せてくれ」と頼んだ。信次は、午前一時、義弟の心を調和させ、光を手のひらから送っていると、彼の口から昔の侍の声が出て来て語り出した。義弟は、自分の口を通して語るのだが、自分で自分が何かを語っていることに非常に驚いた。信次は、無責任のようだが、義弟を支配している霊を見ることが出来ない。口を通して語る事実を信ずる以外にはなかった。世の中には、霊媒とか口寄せとかあるが、何も祭っていないし、自宅の応接室で実験するのが常だった。霊媒や口寄せのほとんどが祭壇を祭って、経を唱えたりすると、霊が出てくるようであるが、信次には道具は何も必要としなかった。

「信次の代々の宗派は？」

「曹洞宗ではあるが、その影響はみられない」

七月五日のこと。義弟の口を通して、

「この者が、四十年の二月、自動車事故を起こして七日間意識不明になっていた時、この者を助けたのはこのわしである」と重大なことを語り出した。中学三年の三学期に自動車とオートバイの正面衝突という事故で、意識不明になり死線をさまよっている時、義弟の口を通して語っている霊が協力して助けたと言うのだった。

七月六日、信次は、自分自身で探究し続けてきた「もう一人の自分」を、ようやく発見できる段階へきた。

七月七日の夜、信次は義弟を中心にして、再び実験することにした。霊的現象はやはり起った。その夜の霊は、日本人ではなかった。昨日までの霊と違って、言葉が通じない。「昨日まで話しておられた霊と代って下さい」と告げると、昨日の霊に代わった。

「義弟の場合は眠ったように、無我の状態で語るのかナ」

「眠れる予言者と言われたエドガー・ケーシと同じように、眠ったようにして霊言を伝えている。アガシャ教会のリチャード・ゼナーや、サルバット氏も同じだ。降霊会といわれるものは、ほとんど、この方法である。しかし、信次の場合は目覚めて行われていることが最大の相違点なのだ」

そして、昨日の霊は言った。「私はあの世で修業の身なので、私の師を紹介しよう。アフリカで修行された偉大な方で、通称ワン・ツー・スリーと呼ばれる方だ。この方から学んで欲しい」と告げた。次にワン・ツー・スリーという霊が義弟を支配して、外人訛の聞きとり難い日本語でゆっくりと語った。それでも聞きとりにくいので、「ゆっくりと、正しい日本語で語って下さい」と二、三度言うと、霊は強い語気で「お前は増上慢だ。自分さえよければ良いと思っている。自分の地位や経済のことしか考えていない。お前のような偽善者は人間の屑だ」と大変な叱りようだった。そして、さらに、「信じなければ、お前の今までの不調和な行為を皆に聞かせてやろう。お前は十八歳の時、佐藤という女性に片想いをしたろう」等と自分しか知らない少年時代の思い出を指摘し、信次の心の中に刺してきた。そして、「あの頃の純真な心はどこへやった。まだ言ってやろうか」と念まで押した。

信次は「はい、自分の今までの行為は、私が一番良く知っています。悪い点はなおしますから許して下さい」と信次が言うと、ワン・ツー・スリーは「今のお前の心は、口惜しさで一杯なだけではないか、自分を改めるといって、心からの言葉ではない」とまで言った。義弟の口を通して語るのだが、義弟の芝居にしては出来すぎているので、信次は信じないわけにはいかなかった。その瞬間、「信ずることは当然のことだ」と思ったことが返事となってはね返ってきた。まったく、どうにもならない。信次は、意を決してワン・ツー・スリーに「私を守っておられる方はどなたですか」と勇気をふるって質問すると、「それではしばらくまで」といった。それから、一分位して、「フワン・シン・フワイ・シンフォー」という霊が義弟を支配して、語り出した言葉は古い中国の

それのようだった。名前が覚えられないので「もう一度、お名前を教えてください」と二、三度くり返すと、「この馬鹿め、お前のような愚かな者と語るのはやめだ。この馬鹿者め」と丁度、中国人が文法を度外視して語るように、片言の言葉で、信次を叱った。七月三日を境にして、信次は食事ものどを通らない状態となった。普段の仕事も手につかず、従業員から仕事のことを尋ねられても上の空で、精神的ショックとはこのようなことだ。常に他人が心の中に同居しているようで、信次はやり切れるものではなかった。



七月八日の夜がきた。九時頃帰宅すると、応接間で、義弟の肉体を、ワン・ツー・スリーや色々な霊が支配している様子だった。信次と顔を合わせるなり「私はワン・ツー・スリー、あなたは今まで何をしていましたか」といった。義弟が、いままでのように瞑想しなくとも意識を支配してしまっている。「はい、浅草の建設現場で打ち合わせをしておりました」と信次は答えた。「また嘘をついている。現場には昼までしかいなかったはずだ」といった。そして、パチンコをやり、タバコを三個とったこと、料理屋で芸者をあげて飲んだことや芸者の名まであげた。追求は、まだ続いた。信次は仕方なく、思うことも止めようとした。どうにもならない。「見ざる、言わざる、聞かざる」のようにしようと思った。(三猿の教えは、天台大師・釈迦の分身の「天台智ぎ」の教えであると信次は明らかにした) 心で思うことまで刺して来た。どうにでもなれと思ってソファに坐っていた。

次にファン・シン・フワイ・シンフォーがワン・ツー・スリーと代って信次に語り出した。「私はお前の守護霊だ。お前とは前世において友人だ。仏教を学んだ仲間でもある。私は、お前が地上界に生まれたときから守護していたが、お前ほど世話をかけた男もいない。今までの心構えでは地獄行きだし、お前の家庭も会社もすべて分解してしまうだろう、と言った。前世で仏教を学んだと言うが、全く記憶はなかった。自分は日本人なのに、なぜ外人が守護しているのだらうと疑問に思った。どのように護っているのですかと尋ねると、「お前の善なる心の在り方を、お前の心の中で指導しているだ」という。「本来なら守護霊などしたくもないが、約束をしたから護っているのだ」という。そして、さらに、「他の霊と代わりたいくらいだ。約束をしなければ私がやるべきでないが、お前のような人間を護るには、きびしくやらねば仕方ないから私がやるのだ。今から三日間の猶予を与えるから悟れ、宇宙のどこへ逃げても、また死んでもつかまえてやるから覚悟して悟れと言った。守護霊は、「七月九日から三日間で、すべての方針を正せ」と信次に期限をつけた。何をどうして良いかわからなかった。信次のすべてが、守護霊に一目瞭然で、信次の心を正すまで、私達は眼を離さないと言った。信次の悩みは、並大抵ではなかった。信次は、僅か四日で八キロもやせてしまった。食事ものどを通らず、家庭は凍結したような環境に変わってしまった。

七月十二日

何んとかしなければならぬとあせった。期限の日である。どうにもならない。信次は守護霊への疑問を、高野山の修行僧に聞いたが、「そんなことは聞いたこともない」と言った。上野の寛永寺の門もたたいた。「一番偉い方にお会いしたい、これこれの理由でぜひとも救って欲しい」と哀願した。「そのようなことは私には解らない」と言った。仕方なく、手が痛そうにしていたので、信次は、痛みをとってあげましょう、と一念力を集中して五分ほどで痛みを止めた。老師は、千葉の中山寺に行けば、わかるかも知れないと言った。信次はタクシーで中山寺へ行った。山門に腰をおろして考え込んだ。思い沈み、自分自身のことを反省した。あと期限は少ししかない。他人から満足な解答を得ることを望んだのは、自分からの逃避であったと思い返した。一週間、信次の心は沈み自己を失っていた。善なる行為を取り戻し、悪の想念行為を捨てるために心から反省した。ワン・ツー・スリーもシンフォーも悪魔かも知れない。神が弱い人間をいじめるはずはない。今夜は、たとえ殺されても良い、もし彼等が悪魔であるなら、私が善に変えてやろうと、信次は一大決意をするのだった。信次はようやく心

も落ちつき、ワン・ツー・スリーやシンフォーとの対決しかなかった。

信次は、京成電車に乗り、国電に乗り換えて家に帰った。信次の心の中にはおだやかさがよみがえってきた。信次は「今晚は殺されるかもしれない。どのような現象が起るかかわからないが、もう大丈夫だ。彼等と対決して、もし悪なら善に変えてやろうと思う」と妻に語るのだった。すると、信次の心の中から、シンフォーの声がした。「今のような心を忘れるな」、と。妻は「お父さん、しっかりとした気持ちで再出発しよう」と励ますのだった。しばらくすると義弟が帰って来て、ワン・ツー・スリーが、義弟の口を通して、シンフォーと同じことを言った。「今晚はお前の心が正しく変わったので、天上界では光に満たされ、お祝いがある。こちらでもお祝いしよう」、といつになく慈愛に満ちた優しい言葉であった。

家族一同、新生一家のためのお祝いをした。こうして、「もう一人の信次」を追求して三十二年、遂に目的の一幕が開かれたのである。それからは、義弟からではなく、信次に直接、ワン・ツー・スリーからもシンフォーからも通信されるようになった。その後、義弟には、**アインシュタイン博士の霊**が出、極微の世界と極大の世界について説明していった。「自然の法則こそが人間のあり方を教えている」とも説いた。指導霊のワン・ツー・スリーは正しい人生の在り方と、神の子の証しについて信次に本を書くことを指示した。そして協力するとも言った。八月に入ると、心という問題をくわしく説明した。一カ月前はあらぬ方向への探究をしていたが、今は、もうすっかり心も晴れて、探し求めていた「もう一人の信次」について解明もはっきりと目鼻がついたようだった。

「悟りを開いたのは昭和四十三年七月十二日ということだね」

「そう、信次は言っている。『お坊さん（村上宥快氏）、僕は悟りを開いたんだ。それは七月十二日です。今生のことや前世のことも、何んでも分かるんだ。悟りは素晴らしいものだ』、と。また、こんなこともあった。『先生はお寺の山門で考えられた。市川支部の地区座というのは、この山門から百メートルも離れていないところで行っておりましてね。ごく最近まで、今考えてみると嘘みたいなことなのですが、たった三、四十人の集まりに、わざわざ話しにおいて下さいました』（渡辺泰男）、と。』

「そして、アインシュタイン博士の霊が出て来て...」

「そう、信次がある時、アインシュタインの霊を呼び出した。そのとき『私の相対性理論は間違っていました』と頭を下げた、と。真空は全くの空・真の空間ではなく、エネルギーに満ちた空間である、と。宇宙エネルギーと呼んだり、霊性エネルギーと呼ぶ人、も。相対性理論に対して絶対性理論、と。』

昭和四十三年九月十八日

夜ともなると秋の気配があった。ソファーに坐っている信次の妹を見ると、インドのピンクのサリースタイルをした美しい女性が蓮の華のようなものを左手にもって、頭を下げながら笑っている。次の日も同じようなことが起った。薄紅色の絹織物をつけ首飾りをつけている。二人の内の一人在妹にはいりたいと言った。不安だったが了解した。と同時に心眼が開かれ、霊視が利くようになった。妹は観音様の膝の上で一週間近く過ごしたようだ。

「信次の妹は？」

「星洋子、水産業従事者と結婚のち離別。」

（妹・星洋子の転生輪廻）

BC七千年頃（アトランティス帝国）フォロリヤー（女） BC四千年頃（エジプト）アシカ・ミヨター（女）

BC五百年頃（インド）カリナ（ガランダ長者の末娘） AC二世紀（イスラエル）サファイ（女） A
C五世紀（中国）林蔭（女） この後日本に二度生まれる 星洋子

BC五百年の釈迦の時代のインドのガランダ長者は、五世紀に中国に中蔭という名で生まれ、八世紀には日本の空海（弘法大師）となった。中蔭の子供は林蔭と弟の吾蔭であり、吾蔭は十三世紀の日蓮となる。

「慈悲と愛について」

星洋子

読者の皆様は、愛という言葉をよく聞いておられるし、又、実行しておられると思いますが、先づ男女の愛について、ふれてみたいと思います。人間がこの世に出生する時、人は実在界において生活していた...中略...日々の生活に励んで下されば、皆様方の守護霊を通じて、生活そのものに大革命がおこる筈でございます。

九月二十三日、信次の中学時代の学友の佐藤氏（前述）が、親しい友人のK氏を信次に紹介した。二人の背後に、金色の光に覆われているインドスタイルの守護霊がはっきりと出た。守護霊同士、互いに話をしている。信次には、それが見える。しかし、信次の指導霊・ワン・ツー・スリーが「過去世の名前は教えてはならない」と信次に注意した。「なぜ我が家にばかりに、この現象が起るのだろうと疑問を持ち始めた。「核という中心になるものがないと形は成り立たない」と言った。そして、十戒の成り立ちや偶像崇拜の間違い。ゴータマやイエスの時代の神理にもどることが、人々を救う唯一の道であると言った。こうして信次は、日中は会社、夜は原稿書きと多忙な毎日が続いた。これは心の教えであった。

「この頃から『土曜会』と称して、集まって来た同志達に神理を説いた」

「同志達は土曜日の夜を楽しみにしたろうネ」

「深夜まで、それで後、時間が早く切り上げられることになった。午後七時より十時まで」

九月頃から、良く見せていた、一人の仏像のような美しい女性が信次の前に現われた。

「私は、ミロクと申します。しばらくでございます。」信次の妻の守護霊と言った。信次の妻・一栄は二十数年間、信仰には余り関心がなかった。信次が、インドの時代の経文となって朗々と声に出して唱えた時、妻の心は神理の光に照らされて、大粒の涙をとめどもなく流していた。信次は「今日から一週間、午前一時から二時まで屋上に出て今までの人生を良く反省して心の調和を計りなさい」と注意した。

十月二十三日夜、信次が調和の光りを与えたところ、遂に守護霊が直接支配し、語りはじめた。「私はミロク菩薩と呼ばれているものでございます。ご本体の心の眼が開かれましたので、私が守護霊をつとめさせていただきます。」

（妻・一栄氏の転生輪廻）

BC七千年頃（アトランティス帝国）ナーダリヤ（女） インドの釈迦の時代はマイトレーヤー（女）

死後ミロクと呼ばれる。 十五世紀（中国）ガラン（女） 現代の高橋一栄氏

「行ずることの真意」

高橋一栄

「私が霊道を開いたのは一昨年（昭和四十三年）の十一月（昭和四十三年）の正月で、丁度、一年と一寸になります。この間、いろいろな体験をしましたが、昨年（昭和四十三年）の八月頃だったと思います。私は、仏教でいう苦集滅道の苦をなくすには……中略……己を静かにみつめ、静かに行動してゆくことも、一つの悟りの方法だと思っております。」

十月三十日、霊的現象が起ってから記述してきた「大自然と生命」に関して、信次は指導霊の意見を聞くことになった。信次の前には、ワン・ツー・スリーが立っている。身長二メートル以上もある大男で、両腕に腕輪、頭には黄金色の戴冠（ティカラー）をかぶった古代エジプトの王様のようなものである。もう一人のフワイ・シン・フワイ・シンフォーと呼ばれる守護霊は、あごひげを短くのばした、血色の良い、一メートル七〇センチ位でエジプト人のスタイルで麻のような白色の着衣で腰をヒモで結んでいる。二人は信次の書いた人の道を黙って聞いていた。今、あなた大丈夫、私もう必要ない、嬉しいような、淋しいような、私涙でてくる。涙を流して語った。守護霊も眼頭を押えていた。信次も、また涙がこみあげてきた。しかし、地位も名誉もお金もいらぬ、死んでもいいのだと、すべての執着心を捨てた七月十二日から、百八十度人生の考え方が変わったのである。しばらくたってから、ワン・ツー・スリーはモーゼであり、フワン・シン・フワイ・シンフォーはイスラエルに生まれたイエスであったと初めて明らかにした。「イエスと言えば、あなた聖書暗記してしまう、間違いこわい、あなた人の道わかった。今、伝える」と言った。二人はもう大丈夫ということで信次に本名を教えたのである。

天上界での講演

十一月二十四日午前一時

信次は今までの人生の在り方について、思ったこと行ったこと的一切を、八正道という心の物差しではかり、誤った原因を追及してみた。身体がゆれ始め、胸のあたりが暖かくなり、やがて「もう一人の信次」が身体の前に飛び出すのであった。ドームの中に入る。ワン・ツー・スリーが迎えに来た。野外の広場は広大で、スロープは無限に続いている。そこには様々のかっこうをした人がいた。古代インドやエジプト、キリスト教の制服の人等の万国の人が何万となく整然と並んでいた。信次は、ワン・ツー・スリーの指示に従って「物質と生命」という題で、一時間半ほど講演した。みな胸には信次の日本語が自国語に変わるマイクロホンのようなものをつけていた。「もう一人の信次」の講演が終わると万雷の拍手をあげた。「もう一人の信次」が肉体にもどるとともに震度3ほどの地震があった。妻を起そうとすると、「今、あなたの講演を聞いておりました」と同じ情景を話した。信次の家に集ってきていた人々の中で、すでに心の窓を開いている人は、すべて信次の講演を聞いていたのであった。

「天上界で講演をしたのか」

「司会がモーゼで、その前にミカエルが講演した」

一九七六年六月五日（二日目）講演より

「心行」というものの成り立ち、それは現代は、ミカエル大天使が持っていますが、その中をめぐって見ますと驚ろいてしまいました。「我見聞し正法に帰依することを得たり」という最初の出だしが、「我正法に目覚正法流布のために一命を投げ出す」という書き出しの最後が「禅定三昧の境涯に到着せん」と全く同じです。そして、私のは地球的に書いてありますが、天上界のものは宇宙的でした。ホンのわずかしが違っていませんでした。ですから書かせられていたということですね。現代もミカエルといわれる大天使が、丁度この位（二～三十センチの立方体、ビデオより）の本にして、私自身が出てくる前の計画一切、現在も書かれている本、将来も出す本、それに記録されてあります。実はそれは私ばかりではなく、皆さん自身の心というものをヒモ解いていけば、恐らく計画書があるはずですよ。

「見本となるものがあって、書かされていた、と。正直で立派だナ」

「さすがにメシヤ。ところで、悟りを開いたのは昭和四十三年（一九六八）。明治元年（一八六八）から丁度、百年。不思議だと思わないか。そして、同じくこの年、信次は、正法は東京から関西へ、そして九州へと移り、九州で燃え広がって、それから逆に九州から関西、関東へと移り、ついに、アメリカに渡り、アメリカで燃え広がった後、日本へ帰ってきて、日本全体が知ると予言した。」

集り来たる縁生の弟子たち

信次は、**昭和四十四年（一九六九）二月**の東京の講演会で「やがて、私達の仲間が関西からグループとなって現われるだろう」と予告した。「天上界へ行きますとね、全体が見下ろせる。そうすると、私達のグループが何処へ出ているか、皆わかる。あの世で約束して出てきているんですからね」

C・Aの手記から

三月、「知人の誘いで先生のお宅をうかがったのです。長男をつれて二階の応接室へはいりますと、厚手のセーターを着込み、ズボンも高価なものとはいえませんが、光を入れ、先生は何やら唱えておられましたが、「もう心配いりません、大変でしたね」と。十七年間の病苦から解放されたのです。一年になりますますが会社も休みません。私も霊道をひらかせていただきましたが、カピラ城で配膳係だったそうです」

四月、浅草の建設中のビルも完成間近かであった。毎土曜日の勉強会に集まって来る人は百名ほどになり、信次の家にははいりそうになかったので、ひとまず三階を解放して精神復活運動に提供することになった。三、四百人ははいる。最初は一階と地階は飲食関係、二階と三階にサウナと超音波風呂のつもりであったが、信次は指導霊に、「身体のアカを落すところはどこにでもある。使命を忘れては困る。お前の出版した本を通して多くの人が集ってくるだろう。」と諭されて、百八十度転換、心の垢を落とす場所となった。

「地下鉄の出入口の上にあって大変便利だ。八起（やおき）ビルという。イエス様の忠告によって十字架を入れて補強しているので地震にも強いとか。指導霊によって計画を転換したことは述べた。その時のななし。信次は迷った。モーゼの霊が強い口調で言った。『強行するならそれでも良い。一人も客が入らないようにしてみせる。嘘と思うなら明日、外を見ていよ』、と。翌日、信次は外を見ていた。前を通る人がビルの所までくると、全員そっぽを向いてビルの反対側を歩いて行くではないか、これでは客は一人も来ないと諦めざるを得なかった。」

「困っただろうネ」

「それから、ビルの鉄骨が組み上がった頃から、六十位の乞食が三階部分に住みついた。その乞食が仲間に「あそこの管理人になるんだ」と言いふらしているのを信次は聞いた。ある日、温泉旅館から電話がきた。お宅の社長さんがお金を持って来い、と。信次は不審に思いながらお金を持って行った。仲間を五人連れて豪遊しているのだった。どうしてこんな事になるのだろうかとうと禅定・瞑想して過去の意識をヒモ解いてみた。すると、釈迦の時代、乞食のじいさんは衣類の行商であった。竹林精舎の前を通るとき、いつも衣類を布施していた。信次は「まあ、お世話になったんだから仕方がないネ」とニコニコしながら楽しそうに話していた。結局、その人は本当に管理人になった。」

「そして、もう一つ。ビルの二階にS医院がある。一流企業の副社長（現在・社長）が診察を受けた。『うちの家内は浪費癖で困る。それに効く薬はないものか』、と。奥さんは有名企業の娘さんで、毎月の請求が二、三百万。S医師は『いい薬がある。この上に高橋という先生がいる。その人の話を聞くことです』、と。しばらくして、上から下まで着飾った、婦人が信次の所へ来た。「ウチの主人はケチでケチで困るんです。ケチにつける

薬はありませんか」と。その婦人は、しきりに指を動かす。キラキラと光った、立派な指輪を認めて欲しいのだな、と信次は思った。「りっぱな指輪ですね」と言うと「これ○カラットですよ。差し上げましょうか」と。「いただいても隅田川に捨てるだけですよ」「まあ、勿体ない」と。そしてそれから信次は、足ることを知ること、お金持ちの使命は、困っている人に手を差し伸べること等をこんこんと話した。

過日、信次はこう言っている。女性はせいぜい菩薩界まで。女性は、ネックレスはしたい、イヤリングはする。このように本質的に身を飾ろうとする。赤ちゃんを生み育てるので、どうしても保身、保守的である。その点、如来は身を構わない。どのような服装でも気にしない。だから女性はせいぜい菩薩界まで、でも菩薩になるためにはなかなか難しい、と。それで、釈迦やイエスの教える「夫の妻に対する心構え」は、妻を尊敬する、妻を軽蔑しない、道からはずれない、妻に権威を与える、装飾品を与える、ということになる。しかし、いくら飾り物といっても、ほどほど。ダイヤモンドより心の錦。」

そして、先の医院にかかわる話しをもう一つ。その院長はプロレスのアントニオ猪木氏を、信次に紹介した。例のモハメ・ド・アリとの一戦の前。信次は暫らく瞑想をした後アリキックを伝授した。結果はあの通り」

「猪木氏も縁のあった人なんだナ」

「信次は相手の守護霊に弱点を聞き、伝授した。」

四月八日、「大宇宙神光会」GOD LIGHT ASSOCIATION (GLA) という名称で立教。しかし発会式の講演では、信次も上ってしまい、指導霊(モーゼ)が一時間半、「仏教の歴史の変遷」ということで代講した。

「モーゼが仏教の歴史を」

「当然！ 天上界から何千年もの間みて来た」

これを境にして多くの人々が集まってくるようになり、宗教家も様子を見にくるようになった。

山梨県の下部温泉にて

講演・「物質と生命」、はじめての持出しの講演だった、と渡辺泰男氏は『道しるべ不動心への道』には記述しているが、園頭広周氏は月刊『正法』百十四号には「全国の中ではじめて講演されたのが、盛岡の健保会館であった」と書いた。その中で園頭氏は次のように書いている。

「高橋信次先生が、まだ悟りを開かれる前、肥料の商売をしていられて、肥料代を集金に盛岡に来られた。その時、泊られた宿が、今はホテルになっている。なかなか金をくれない、一週間泊ってられるうちに金がなくなり、帰りの自動車賃も借りて帰られた」と。

そして、この盛岡のTさん(昭和四十三年より正法に帰依している)は、次のように園頭氏に話している。

「あと三百年位すると、東北地方から北は、人が住めなくなるほど寒くなる」と信次が言っていた、と。そして、このTさん一族が主となり、最初の講演会の一切の準備をしている。そしてこの頃、信次は言っていた。

「四十八歳までしか計画してこなかった」、

「結婚は陰陽の調和である」、

「反省は根っこからその原因を取りなさい」、

「まず神の子の自分に立ち帰り、今を正しく生きるように努めることである。運はそうした中から開けてく

る。」「男は現実社会の改造を担当し、女はその子供をどういう子供に育て上げるかということを通して、未来社会を建設するのである」、と。

もし、最初の持出しの講演会が盛岡であったとすれば、信次の最期の講演が盛岡（昭和五十一年六月四～五日）だったのは不思議である。

五月、N・T子、信次の力によって霊道を開く。一万二千年前のアトランティス時代から男に生まれたり、女に生まれたりして仏教やキリスト教に縁があった人。

後日談「私は高橋先生の力によって霊道を開き、転生輪廻の証明役として過去世の「ことば」を、皆様の前で語りました。ところが、いつか私は先生と呼ばれるようになり、全国から手紙をもらうようになりました。私はただの主婦でございます。このようなことで皆様を誤らせてはいけないと考え、身を引いたのです。」霊道をひけらかし、増上慢になってしまった人の多い中で、まさしく霊の段階を思いしらされる事実である。」

「男として生まれたり、女として生まれたり？」

「そういう場合もある。人間は、釈迦やイエスのように、いつも男として生まれる人、マリヤ様やマヤ様のよう
に、いつも女として生まれる人、そして男として生まれたり、女として生まれたりする人がいる。多くは男に
生まれたり、女に生まれたり。しかし、男らしい女、女らしい男もいるように、今世に男として生まれたからには
男の使命が、女として生まれたからには女としての使命がある。男として生まれていながら失敗した人は、来世
も男として修業することになる。女の場合も同じ。男は男らしく、女は女らしくが一番」

八月

「植物の精との会話」

佐久高原で、信次はグラジオラスやダリヤを眺めていた。大人とも子供ともつかない愛らしい少女が花の中
から出て来て、にっこり笑って頭を下げた。そして人間を少し批判した後、消えていった。藤や松の木の記述も。

十月

「身体の透視」

信次が心眼でよく見ると、内臓が構造図のように、はっきりと出て、癒着している立体図が見えてきた。「あ
なたは、来年の二月中には、今までの苦しみから解放される」、と。予告通りになった。

同じく十月

東京・高田馬場観音寺に於ける講演要点。

演題「生命と物質 すべての中心は心」

地上の目的は調和にある。神仏はエネルギーそのもの。人間は核を中心に五分身から成る。インド時代の現象
が現われる。肉体を焼けば三合の灰になるというが死なない魂。転生輪廻を続ける生命。

「この世に生をうけ、まず私達が疑問に思うことは、何のために肉体を持ってこの世に生まれてきたかでありま
す。しかし、その本論を述べる前に何故に.....中略.....大宇宙そのものであることを忘れてはなりません。」

十一月、

マイトレーヤーの従兄であったピンギャーが日本人として生まれているのがわかる。



十二月、S氏（工学博士）の手記「信じがたい事実」

S氏は昭和四十二年、八月から九月にかけて、ジャワ島で金山の調査をした。ジープ数台に機材をつんで、二十五ヶ所から試料採取を行った。平均六g / 屯という結果だった。四十三年十二月、S氏は知人と、信次のもとを尋ねた。山の写真と簡単な地図を持参した。話しを聞いた信次は一、二分瞑目したと思うと、合掌した手が頭の位置へ上った時、コロコロと三個の鉱石が落ちてきた。そして、信次は言った。日本円にして一億円、日本人技術者十名、現地人五十名、その他発電機、採掘用トレーラー、同ショベル等を準備すれば可能だ、と。S氏は、その三つの鉱石を実物大のカラー写真におさめ、証拠づくりをして、東京通産局まで持ち込んで分析を依頼した。一つは二七・五g / 屯、あとの一個は〇・三g / 屯、最後の一個は証拠品として自分の手許にしているので、お見せしますと記述した。

「ナニッ、鉱石の物質化現象が、目の前で起きた」

「ところが、後日談がある。信次は「私はS氏に裏切られました。S氏によって大事に保管されていた鉱石は、悪用されては困りますので、私の霊力によって消しました」、と。

（S氏は信次師存命中にGLAを去ったが、このようなことがあって高橋師は存命中に、この記述が載っている『天使の再来』を廃版にした、と園頭氏は記述している。）

昭和四十五年（一九七〇）

五月、川越市の大野孝子宅に起った実話。

パウロの母親としての生命。故永田春水画伯の四日の葬儀の日の出来事、その日は、丹精こめて書かれた孔雀の掛軸が棺のそばに掛けてあった。

大野孝子氏の隣りの奥さんのはなし。

「不思議なこともあればあるもの、四日の朝、七、八羽の孔雀が私どもの庭におり立ち、やがて先生の庭に飛んで入り、桜花の中をゆっくり三回歩いて回り、玄関の前でひとしきり鳴くと、いずことなく飛んで行きました、

と。そして、その日の夕方、茨城の弟氏の家で、一羽の鳩が舞いこんできて、家人の手や肩に乗り、頬をついばむばかりか、なかなか去らなかった。皆、口々に、おじいちゃんだ、おじいちゃんだといって、なつかしかった、と。

「名人の描いた絵の中から抜け出して...、というのは本当かもナ」

「そのようだネ」

Home

同じく五月、

信次のもとへ、一人の青年が青い顔をして訪ねてきた。その青年は、信次の前に坐ったきり一言も喋らないで信次の顔を見ていた。ところが、「私は胃腸です。この方は暴飲暴食で、時間もかまわず、絶えず食糧を送り込まれるので困っております。私達は休んでコンディションを整えなくては大変なのです。すみませんが、この方に腹八分ということをお教えしてやって下さい。」、と。そこで信次は注意を促した。

「胃腸の意識が語り出した。余程のことだったろう」

「そうだろうね。信次も、このようなことは珍しいことだ」と記述している。また、こうも言っている。「心臓殿が（笑い）言いました。あなたの過去世の体験をヒモ解いてみると、コーカサス時代は腹六分でした。それで、当時の人は二百年、三百年と長寿だった。もっと前は五百歳、千歳と」

「五百年、千年！ オイオイ」

「イヤイヤ、最近の心ある医者が言うには、現代は飽食ゆえに短命になっていく、と。食事一回くらいぬけ、と。戦争で満足に食べられなかったことが、今の長寿世界一に？ 現代の子供達の時代はわからないゾ。ある人が言っている。一日百五十キロカロリーもあれば生きれると。」

八月、

十ページばかりの「ひかり」という機関誌が発行される。

「ノアの箱舟現象は、地球上に人類が住むようになってから何回となく、くり返されてきました。＜中略＞しかし、人類が独占欲、支配欲に心を傾斜させてゆきますと、その反作用として、それこそ、突如として天変地異が襲ってくることを予言しておきましょう」

同じく八月

講演「生い立ちよりGLA発足まで」

八月十五日～十七日

静岡県藤枝市にて第一回研修会開かる。この研修会にて十三歳の中学生二人が心の窓を開く。

「霊道が開かれたことが悟りではなく、正法への一頁であるにすぎない。そして、永遠の生命を悟るための実証である」と信次は言った。



十二月二日

創立時の「大宇宙神光会」をGLAに改称。GOD LIGHT ASSOCIATIONの略

一九七〇年（昭四十五年）の一年間で七十名近くの人が霊道をひらき、生活に生かしている、と。

佐藤正忠氏は、信次と知り合ったのは昭和四十五年だった。東京ゆかた社長の河合氏の紹介で信次を尋ねた。ホンモノかニセモノかこの眼でたしかめようと思った。事務所の入口には「神光会」という看板があった。信次は、「佐藤さん、ぼくをためそうと思ってきたでしょう。それでいいのです。大いに疑問をもってください」と言った。そして、佐藤氏が次点に泣き、選挙違反で秋田刑務所にいた時のことを、こまごまと指摘、佐藤氏は、度胆をぬかれてしまった。氏しか知らないことだった。講演会場でのこと、氏は、当時世間を賑わせていたヤシカの七億円不明金のこと、氏は、ヤシカの創業者である牛島善政社長と一緒にいた。信次は課長以上の名を書いて下さいと指示、「この人です」と言った。U社長は「その男にかぎって」、と反論したが、まさしくその男だった。

そして、もう一つ、新宿に京王プラザが開業する前、氏はI社長を信次に紹介した。展望台をつくりなさい...海外の農協の客をとるように...とこまごまと指導した。それに沿って方針が立てられ成功している。

そして、ある日、佐藤氏は信次の事務所を不意に尋ねた時、「お父さんに会いたくはありませんか」というので信次の妹を霊媒にして実験することになった。...正忠！ 苦労かけて、すまない...、「父と話しているとしか思えなかった、現に父の声である。ショックな体験だった」、と。そして、氏が大森の自宅を尋ねた時、松下幸之助が、小学校という学歴でなぜ、あのようにと信次にぶっつけてみた。しばらく目をつぶった。「ルカ...ルカ...佐藤さん、ルカという人がいませんでしたか」と信次は言った。キリストの弟子の一人でルカ伝もある...。そして、信次は「人類を救おうという...使命をもって生まれたのです。それにはまず、この人を経済的に豊かにしてあげようという神の意志なんです。...一人の人間の力で、こんなに成功するわけがない。でも、松下幸之助さんはそのことを知らないし、自分の使命についても知っていない...。悟っておらんと申しております」、と。「教えてやりたいですね。松下幸之助に会ってくれますか...」と言うと、「時間さえ折りあえば、会ってもいいですよ」と信次は言った。佐藤氏は翌日、さっそく松下に会見を求め、大阪のロイヤルホテルが指定された。氏は、信次の予言の内容をことこまかに話した。すると、松下は「ほんとですか、はは...、私がルカの生まれ変わり？」と、そして、「光栄なことですな...」「一度、この高橋信次さんに会っていただけませんか」と佐藤氏が言うと、「いや、私も会いたい。その方にぜひ紹介して下さい」と言った。松下は半信半疑のようであった。それでも松下は「ぜひその方に、お会いしたいです...」と。さっそく帰京した佐藤氏は、信次にそのことを伝えた。「喜んでお会いしますよ。でも松下さんは、まだよくわかっておりませんね...」と。佐藤氏は松下の秘書と、信次の会う日時を何回となく連絡したが、結局、機会が見つからないままに不帰の人に。

「大変、センセーショナルなことだネ」

「まず、霊媒について、この日本中に霊媒という人は沢山いる。しかし、その人がホンモノかどうかの目安は、目的とする人を霊媒に支配させるのだから、その語りから、しぐさまで、まったく同じでなくてはならない。生前、東京弁しか喋っていなかった人が、関西弁で語るようなら...。正しく見ることだ。見えぬだけに、だまされやすい」

「なる程、それはそうだな」

「それに、故松下氏について、信次はこう言ったと園頭氏は記述している。今度、僕たちが出て行く時は、交通機関が発達して、伝道には金がかかることがわかっていて。釈迦やキリストの時代はてくてく歩いて伝道すれば良かった。だが今度は違う。それであの人は「今度は私が先に出て、金儲けして準備します」といって出たのです。だから、あの儲けた金は僕の運動のために提供すべきだった。そのために、大阪の近畿ナショナルの社長さんが、松下幸之助さんと僕が会うのを準備して下さったのだが、松下幸之助さんが会わなかった。儲けたのは自分の力だと思って、僕のためには一銭も提供しなかった。僕はなにも松下さんからもらわなくても、僕は僕でやっていきますよ。あの人が儲けたのはそういうわけで、天上界の人たちが協力してくれたのです。しかし、松下さんはこの世に生まれてくる時に、「正法の伝道のために準備しておきます」と約束して出たんだから、人をなんとか救いたいという気持ちはあった。だから、PHPをつくって人間教育をするということになったのです。松下幸之助さんは生まれてきた時の約束を果たさなかったから、あの世へ帰ったら叱られますよ」と。

また、「正法のために、経済的な協力をするという使命のあった人、このような人を**大黒天**という」とも言い残している。

「どこそこに、幸之助さんの蔭の子供が...どのような状態で」、と世間が知らない頃から、高弟の一人は聞かされていた、と。しかし、後述するが、信次亡後、GLAは、例を見ないほどの混乱が起ることになるので、経済的協力がなかったのは天上界の思し召しか。そして信次は、先の佐藤氏について次のように記述している。「株式会社経済界の佐藤主幹の守護霊は、朗らかな方で、当時のことを語り、現在肉体を持っている者の批判をすることもある。」、と。

幸之助氏は、九十四歳の生涯を閉じた。晩年の氏は補聴器をたよりに、やっと話を聞くことはできたが、声を出すことが出来なくなった。どこへ行くにも車イスであった。そして、隠れた陰徳も積んだ。何十、何百億と社会に寄付し、教団や、神社仏閣にも多額の寄付も。そして、ポーンと七十億円という私財を投じて、茅ヶ崎に松下政経塾もつくった。しかし、今世では幸之助氏と信次は縁はなかった。

「...子供さんがどこそこに、みんなが知らない頃から」

「そのような話はまだある。故田中元首相がロッキード問題で混乱していた時、新潟の後援会の代表と第一秘書が、大阪の講演会の時、園頭氏と話しているところへ信次を訪ねた。信次の命によって園頭氏は録音して残した。「田中さん、財産を投げだして裸になりなさい。国民はもう一度あなたを首相にと。そして、社会党のN君、総評のO君、あなた方は労働貴族である。わしも裸になった。あなた方も裸になりなさい。裸になったところで日本国民のことを話し合おう、といいなさい。それで文句を言うなら、〇〇君、あなたは〇 というマンションの何号室にこういう女性がいます。それでも違うというなら「名前はこうで、顔はこうで、身長は...」と教えてあげます。裸になんなさい」、と。」

そして、また、別の講演会の中で信次は、

「田中（角栄）さん自身もね、東京都内にある財産をみんな投げ出して、自民党で今、使っている資金も全部さらけ出して、このお金をみな大衆のために使おうじゃないかと、こうやったら、社会党や共産党なんか、どうということないですよ。それをしないで往生際が悪いから、こんなことになってしまう.....後略。 （昭和四十九年二月関西本部講演）

平成四年四月、江沢民中国共産党書記の来日の際、二年半ぶりにマスコミの前に田中元首相は顔を見せた。

「元首相は右の麻痺が...」

「随分、元気な様子だったが...。右麻痺は言語障害が出ることは医学的事実。おしゃべり人間は言語障害によって辻褃が合う」、と。

そして、園頭広周氏は一九八七年七月号・月刊『正法』の中で、

「田中角栄元総理の言語障害も、私が光を入れるとよくなると思っているのであるが、その機会を得ないのは残念である」と書いている。

「おすがり...、他力...、どうにか治りたい一心で...」

「もちろん自力、自助努力は神理。治ったらどう正しく生きるかが問題。」

「こんなことを言ったら、全国の困っている人が、お願いします、と」

「自力・自助努力、反省の良いチャンス。反省のチャンスを残しておくのも真の愛。うんと苦しんだら次は明るく」

そして、佐藤氏は自著の中で、「大宇宙神光会」を英語の頭文字をとって「GLA」と勧めたことや、『縁生の舟』（改題・『心の発見』）は、初めは佐藤氏の会社で出版されていたが、「縁生の舟は、七十万部売れます」と信次は予言したが、その通りであったこと、そして、印税を手にしなから「こんなにいただいていいんですか」と言うのであった。そして、「大切にしてお使いさせていただきますよ...」とも言った。そして、佐藤氏が、バーやクラブに案内すると、信次は酒は吞まず、ホステスの話に静かに耳を傾けているだけだった、と。また、西濃運輸の創業社長の田口利八氏は中国の時代、馬車の運送の社長のようなことをして、佐藤氏と当時も兄弟のように親しくしていたことも信次が明らかにした、と。そしてまた、新日鉄の永野重雄・藤井丙午氏の冷戦を弱冠四十歳ほどの佐藤氏が和解劇をやったのは信次の「佐藤さん！あなたがやれば必ず成功しますよ」という忠告によるものだったという。そして、氏が「般若心経をやさしく解説して下さい」と言うと、信次は『原説般若心経』を一冊まとめあげるが、「僕はね、仏教書なんか一冊も読んだことがないんです。メチャクチャですよ...」と言って笑った。しかし、発売すると嵐のような反響となって、ベストセラーになっていくこと等が記述されている。

昭和四十六年（一九七一）一月

指導霊の指示によって記述していた原稿が完成、『縁生の舟・神理編』出版さる。のち『心の発見・神理編』と改訂

三月、

ある新興宗教の霊的現象に惹かれて信者となった婦人が『縁生の舟・神理編』を読み、信じてきた信仰に疑問をいだいて、信次の事務所を尋ねて来た。信次が霊視すると不調和な動物霊に憑依されていた。その憑依霊を取り去り、その結果、以前の自分を取りもどした。彼女はインドの時代のプッタ・ストラ（仏教）を学んだ比丘尼であった。

五月、

『縁生の舟・心と科学編』出版さる。後に『心の発見・科学編』と改訂。



信者の集団鞍替え

六月

六月の信次の講演会に、「霊友会」から分離した「瑞法会」からNとHの二人が教祖の命を受けて派遣されて来た。

八月、

八月の栃木の出流山での研修会にも二人は来た。

信次「この二人の先生はなにもいわないんです。僕は、その人達の守護・指導霊と話をするから、皆わかります。僕のインド時代の、そして、中国時代の仲間もいいところ。私は、二人の守護霊から聞いたままだをいった」、と。

二人は、本ものか二セものかを確かめて、本物であれば、その指導方法を利用して、信者を幸福にするつもりであった。「研修の結果を伝えたら良いでしょう」と言うと、二人は、いい当てられたことに苦笑して、「このことを録音しても良いですよ」と、そこで信次は、教団の会長は、法華経を似って、先祖供養で信者を導くことに自信がないといっていること等を録音させた。すでに会長は『心の発見（神理編、科学編））を読んでいた。二人は、このテープを持って帰阪した。信次は、東京にいてその教団の裏話が全部わかってしまうのだった。自分を再び訪ねてくるだろうと思った。信次の守護霊は、大分自信のある言葉で言うのだった。

「居ながらにして、すべてがテレビの画面のようにわかる。すべてお見通し」

「色々な話が残っている。高弟の一人、村上宥快氏が、弟子の運転する車に同乗した。大事故になるところだった。帰京して信次に報告しようとしたら、「よかったね、命拾いして」という言葉が一瞬早かった。すべてお見通しだった、と。」

九月

ある日、教団の会長が八起ビルに訪ねて来た。迷えるあとの訪問であった。そこで信次は、先代会長は女性であったこと、この世を去る時の様子、教団を指導していた頃のことなど、一部の幹部以外には解らないことを大阪弁で、前会長の言葉で伝えるのだった。三人は、あっけにとられてこの現象をみつめていた。そして翌日の昼、信次の説く「正法」に帰依する決意を固めて帰阪した。一九七〇年、瑞法会教団の初代会長竹本千代が亡く

なった後、二代目会長、中谷義雄は「GLA」に集団帰依することになった。教団は、「GLA関西本部」となるが、吸収される方がする方より歴史が古く、会員数が多いという珍しいケースであった。

「二、三万の信者ともども鞍替えというのは異例のことで、当時の宗教界で話題になった。まだある。「GLA 小金井研修所は、元キリスト教会であり、宣教師から教会までそっくり移籍している。そして、山形大の理論物理学教授の黒沼栄一氏もひかれていった一人」

Home

十月

信次は大阪におもむき講演会を持った。演題「物質と生命」、約二時間、そしてその後、霊的現象の実験にとりかかった。そして後、一九七三年、教団の要請により「GLA」は宗教法人となる。

中谷義雄「九月十二日に、私は東京へ行き高橋信次先生とお話をさせて頂いて、この方が仏陀ゴータマの再誕であるということを堅く信じたのであります。それから二回、三回と回を重ねて上京するたびに、確信しました」

関西での初めての講演会で、信次は宮沢賢治の「雨ニモ負ケズ」の詩を詠んで「この方は菩薩界の方です」と言い残した。

講演「釈迦の生誕と仏教の変遷」

信次は

「私達は嘗ってインドに、中国に生まれてきた。日本は中国と戦ったけれども、中国に生まれていた時の子孫と戦ったわけである」、

「心は心で洗礼すべきである」、

「習慣とはおそろしいもので、習慣が執着につながっていることを知らず、人々は苦悶の一生を終えて行く」、

「自分がつくった罪は、自分で償わなければならない。誰も人の罪を引き受けることは出来ないのです。罪を引き受けて病気になったという教祖があるけれども、その本人に病気になる原因がなければ、病気になることは出来ないのです。正しく法を説く光の天使は、健康であって法を説いて行くのです。もし、人の罪を引き受けるのが本当だとしたら、キリストも釈迦もヨイヨイになって死ななければならなかった筈です」、

「皆さんの過去世において、ある人は王様であり、ある人はお金持ちであったり、そうして、皆さんは今、自分が欲している人生に今あるのです」

「魔王や動物霊達は、たとえ予言や病気を治しても、それは一時的現象であり、私達は絶対に信じてはならない。」と言った。

十一月

講演会は東京から地方に広がり、信次は、関西地方への出張も多くなった。二十四日は大阪、二十五日は四国と選挙運動の遊説のようだった。それが指導霊から一生の仕事だと言われているので余り苦しいとも思えなかった。この両日は、一日に八時間の連続の「講演」と「質疑応答」それに「現証」を行った。何千人もの聴衆、病人の個人相談が七十六人。その中で、十五年間いざりの人、十年間半身不随の人達に奇蹟が起った。それは、信次に協力してくれる大指導霊の力だった。

「自分の力でなく、大指導霊の力だったと、謙虚だナ」

「まったくその通りだネ。奇蹟はあの世の霊の協力によって行われる。信次の場合はモーゼなど光の大天使。信次は言っている。動物霊でも奇蹟、病気治し位はする、と。正しく見て、注意が肝腎。動物霊の場合は、その内に本性を現わす。」

信次は、連日連夜、強行なスケジュールに追いかけていた。精神的には疲労を感じなかったが、常に指導霊から、「身体も身のうちだ、十分気をつけよ」と注意されていた。



死の土俵ぎわ「一日一生」

信次は、寝不足の上、胃の消化力が弱っているところへ、油の濃い食物を、夜中の一時に食べて寝た。午前三時頃、気分が悪くなってトイレで倒れてしまった。すると、あれよあれよという間に「もう一人の信次」が抜け出して行く。この世とあの世を結ぶドームの中で、しまったと思った。倒れた音に気付き、I夫人、S博士、M住職が寄って来た。I夫人は心臓に手を当て、S博士は脈をみて、M住職は心臓に光を与えている。三人の心と行動が信次には手にとるようにわかる。I夫人は心の中でこのように多くの人に道を説いている方に、なぜ神は無慈悲なのだろうと思うことが信次にも伝わる。その時、大きな光の肉体が、信次の肉体を支配すると同時に、「心配いらぬ」とシンフォニーの言葉だった。そして、信次は、ドームのきびしい波動の中で、自分自身の欠点の追求、反省を行い、電気会社をはじめとするいくつかの会社、ビル、駐車場などの事務的問題を考えるのだった。どのように連絡しようか、実印、鍵、書類、色々な問題が思い出された。しかし、呼吸も心臓も停止している。もう一人の信次が、はいれないのである。そうだ、妻が心の窓を開いているから、次元の異った世界とも話しが出来る。実在界へ帰ってから連絡しよう、そう信次は思った。一生の反省と残っていた執着心を、一時間くらいの間に処理し、肉体舟は大きく息をはくのだった。「どうも心配かけて...」身体を動かすことも、眼を開けることも出来ない。肉体を支配し終ると、また、もとの気分の悪さがもどって来た。そして、一日一日を一生懸命に努力し、正しい心の物差しで反省をして、いつこの世を去っても、思い残すことがないような生活が、もっとも大切であるという、「一日一生」、一九七一年の最大の信次の悟りであった。

「大きな光の肉体が...」

「イエス様が信次の肉体を支配して助けた。実在界の天使達も心配だったろう。信次が 念を集中して、光を入れる時などは、血圧が二百五十にもなったと聞くが、相当な激務だったはずだ。それも人々を救うため」

この年に出版された『現代人と仏教』笠原一男東大教授にインタビュー形式による記述がある。引用要約する。

前がき

一九七〇年代は宗教の時代といわれている。そうした声に、さきがけるかのように、またまた新しい宗教が生まれつつある。その一つがG L A（神理の会）といえる。若きリーダーが高橋信次氏である。...高橋氏自身の口で語ってもらおう。

笠原 既存の宗教とはまったく異なると...

高橋 まあ、宗教といわれましても私にはわかりません....。

笠原 四十三歳でいらっしゃる....。

高橋 はい、そうです。

笠原 イエスや釈迦が脳裏にひらめくというのは前々から....。

高橋 （語気を強めて）私は四十三歳になるまで宗教に関する本は一切読んでいません。

笠原 そうすると幼年学校...秀才だったんですね。

高橋 戦地に行って、どうして自分だけ奇蹟が、つまり死なないのだろうという疑問が.....。

笠原 具体的には

高橋 二月八日に門司を二隻の船で出航、十二時に出航して八時に沈められ、約十二時間...海防艦に救われ...（前述）

笠原 ...もう一人の自分のその後も....。

高橋 毎日です。一日たりと出ない日はありません。

笠原 それはやはり仏典を読んだり....。

高橋 （さえぎって）一つも読みません....。

笠原 魂がイコール意識ですか。

高橋 そうです。

笠原 ソクラテスが輪廻してどこかへ....。

高橋 はい出ています。

（註・ソクラテスは毛沢東に生まれ変わったと）

笠原 ...特別な修業は....。

高橋 修業なんていりません。毎日の生活のあり方によるんです。

笠原 ...松下幸之助さんの子供に生まれるのと私の子供に生まれるの...

高橋 自分で約束して次元の違う…。そこには縁が。

笠原 …親鸞なんかその代表で…。

高橋 パウロという過去世を持って…。

笠原 時代は下って中山みきとか…。

高橋 …必ずしもいい所へは…。

高橋 …イエスの弟子でペテロが矢内原忠雄という…。

笠原 それは…ではなく、瞑想的反省を通じてですね。ありがとうございました。

そして、この年、信次は次の手紙を紹介した。

一九七一年度、日本美術院五六回に出品した百五十号の作品「夏の水」が幸運にも、最高賞である、美術院賞を受賞いたしました。私は昨年四月、M店の社長から『心の発見』をいただき、浅草の八起ビルにおける土曜講演にもお誘いをいただき、初めて、人間の心と行いの正しい在り方を学びました。講演会場は、立錫の余地もない程の人によって埋められ、およそ、宗教家というタイプとは不似合いなのにも驚ろきました。しかし話しが進行するにつれて、誠実な、少しもあやふやなひびきのない神理そのものが、私の身体に、心に、じわじわとしみとおるようにひびいてくるのでした…。 (千葉県在住 K・D)

昭和四十七年(一九七二)

三月

盛岡市・国保会館。演題「インド仏教と現代仏教」

ここにはプロのお坊さん方も何人も見えておられます。そういう方の前でインド仏教だの <略> 手当というのはそうすることです。

春

この頃の信次の周辺から、『調和への道』観音寺住職・村上宥快氏より要約

一九七二年の春、彼岸すぎ、相談の結果、伊勢の答志島へ行くことになった。村上氏は信次達より設営のために、先に出発、一週間後に、信次一行を迎えに名古屋へ行った。桑野の知人宅に寄ると、Kというお婆さんが紹介された。彼女は、皆、気狂い扱いするとこぼした。信次は一見して彼女の守護霊が千秋の思いで待っているのがわかった。信次が「光を入れる」と中国語を話した。彼女は気狂い扱いされないですむと喜んだ。翌日、一行を答志島に案内し、最初に断われた旅館へ行ってみた。今度は二つ返事で応じてくれ山海の珍味でもてなしてくれた。さすがに信次だった。一行の五人を何日でもと言った。

そして一週間の野外禅定、夜は渚での反省が終った。ここで信次は村上氏のお父さんの霊をH氏に出した。口が歪みよだれでも出そうな、中風そのままの姿であった。五十年間もこのままの姿で地獄界をさまよっていたのだと村上氏はわかった。そして、「ぼくの意識を見るように」と信次は言ったが、余りにも光が強烈で、村上氏は判断がつかかねた、と。そして、この島を去り、松阪の開眼寺で信次は講演をした。二百名ほどだった。夕食で出された松阪肉に、村上氏はとまどった。強度の牛肉アレルギーである。これまで犬のジステンバーのように、一カ月も二カ月も苦しんでいた。信次は「もう治っているから大丈夫」と言った。恐る恐る村上氏は食べてみ

た。何んともなかった。そして、信次は食べ物へ感謝するようにと戒めた。二日程して湯の山温泉に登り、宿の人となった。信次が身上を見てあげると、信次のところに面白がって集まって来た。夕方近くになって、貴賓室が空いているから移るようにと宿の主人は言った。皇族方の宿舎に当てるとのことだった。これが後、「GLA」の支部になっている。翌日、一行は、関西本部長（前述）のお母さんが亡くなったので、大阪へ赴き、旅姿のままで、信次の導師、村上氏の副導師で告别式は挙行された。」、と。

「食べ物への感謝と報恩とは」

「食べ物は、すべて、その身を犠牲にして、我々の血や肉になってくれるのだ。だから、その感謝の心は勿論のこと、報恩とは、粗末にしないこと。食べ残して簡単に捨てたり腐らせてしまうようでは報恩とは言えない。レストラン等の食べ残しを見てみる。餓死している国もあるというのに」

「あまりにも光が強烈で...」

「霊視する人が、信次の意識を見ると、光の化身とも言えるほどだった、と。」



四月九日

八起ビルでの講演。演題「人生と悟り」

「正法流布のスタート時は、わずか二、三人でありました。それがひと月たち、ふた月...悟りの彼岸も、八正道を行じるなかにあることを知らねばならない。」

同じく四月

講演「神と人間」

その他、「光の入れ方」、「禅定講話」などがある。

演題「神と人間（宇宙即我）」

「神と人間、なかなか私達は神様という問題になりますと、ほとんどの人々が見たこともありませんし、話しでは聞いても、神というものが、どの様な作用をなし ...後略...

(質疑応答)

憑依と霊道の違い、如来とは、菩薩とは、仏陀とは、仏法とは、霊道者とは

十月

盛岡市・国保会館に於ける。演題「色心不二」

「色心不二(しきしんふじ・しきしんふに)という言葉 皆さん知っているでしょう。この色心不二という言葉が非常に哲学化されて <中略>時に、自分自身の心の平和を、取り戻すのです。」

十一月

信次の事務所に、Oという青年が千葉から訪ねて来た。信次は彼の背後に若い女性をはっきりと見た。信次は、背後にいる若い女性の霊に質問した。すると「私はOの妻です」と言った。Oは十年来、肩や首が神経痛のようにじくじくと痛んでいた。「あなたは、すでに亡くなっている。すぐに主人から離れなくてははいけません」と信次が言うと、「この人から離れたら行く所がありません」、と。信次は時間をかけて教え諭した。Oの亡き妻は、主人から離れ、天上界の修養所へと帰っていった。すると、Oは痛みもなくなり、以前の丈夫な身体にもどったが、信次はOに、心の正しい尺度、人生の正道を説くのだった」

同じく十一月

『原説般若心経』出版される。この中で、信次は「空」は実在界・あの世、「色」は物質界・現象界・この世、と明解。

「空はあの世、色はこの世と」

「そう、ナラジュルナー(竜樹)が「空」を説いたからわからなくなった、と信次は言っている。」

十二月

東大阪にて、信次の講演会の始まる四十分前、T・M子という中年の夫人が信次の控室を訪れた。一九六三年二月五日、突然脳溢血で倒れ、左半身マヒで三叉神経痛という後遺症もあった。信次が霊視すると、M子の背後に中年の男がすがりついているのがわかった。亡き夫だった。一人残した妻を心配もしている様子だった。亡き夫も脳溢血で倒れ地獄に行っている。亡き夫が妻を支配すると未亡人の口から出る言葉は、男性のそれだった。信次はコンコンと言って聞かせ、手から光を出し、与えていた。「ああ、暖い、体のうずきがなくなった」と未亡人は言った。そして次に、信次の守護霊に頼んで、天上界の入口まで送ってもらうことにした。主人は、彼女の体から離れて行った。そして、彼女は感謝して、合掌するのだが、彼女の病気の原因は、彼女自身の心にあったのである。

同じく十二月

信次の友人の紹介で、幼い二児をつれた若い婦人が信次を訪ねた。信次は三人を見た時、この母親を救ってやらねばと心がふるえた。母親の後に蒼白い顔をした地獄霊が立っていた。婦人は言った。「叔母が行けというものですから」と他人事のように言った。「ご主人はノイローゼのようですね」と信次は言った。「精神疲労だそうです。精神安定剤を飲んでいます」と言った。主人を同行してもらうことにした。主人は「こんな所につれて来て」と小馬鹿にしたような態度をとった。耳をかそうとはしなかった。仕方なく、まず死神を除こうと、光を送った。はじめて主人は口を開いた。地獄霊が離れている間に信次は、心の正しいあり方を説いた。心という問題について説明した。しかし素直には聞いていなかった。顔を見るとニヤニヤ笑っていた。心の中で地獄霊と話していた。「ご主人、彼等と話してはいけない、しっかりして下さい。その男は自殺した人です。」と。そして婦人にも地獄霊が寄っていた。まず、子供さんを実家に預け、ガスの元栓を締めて寝ることで。対話以外にありませんと説明した。あえて信次は入院をすすめた。四ヶ月過ぎたある日、主人は「一緒に死んでくれ」といってガス栓を開けた。元栓はしめてあった。そして後日病院から抜け出して飛び込み自殺をしていた。大学の教授の主人の両親は他人事のそぶりだった。原因は冷たい両親のもとに育ったことにもあった。



年の暮の信次の周辺

渡辺泰男氏はペンダントを貰えるという「或る教団」の中級の研修を親子四人で、受けに来ていた。昼休みに場内アナウンスで『現代人と仏教』という本をお読み下さい。教団の記事がありますと言った。その本の中に「神理の会」とある。さっそく八起ビルに行ってみた。年の暮れで閉っていた。正月が明けると本部に出かけた。広間の一角に事務机が五つほど並んでいるだけで、何の変哲もない。感じのよい青年が一人応待してくれた。『縁生の舟』の神理編と科学編、「GLA」という月刊誌を買って帰った。「過去世を教えてくれるから今日いってこないか」と渡辺氏は奥さんに頼んだ。「どうだった」と尋ねると、「何でもずばりずばりと怖いようよ。ペンダントをすぐに指摘されたわ。腰に蛇がついているので、今度の講演会の時にとってあげますからいらっしゃい、と。人の前では、いやだなと思っていると、心を読んで、今、とってあげましょうということになり、蛇はそこから出ていったようよ」と言った。このようなことで渡辺氏の「GLA」の勉強が始まった。そして次のように書いている。

「土曜講演会というのが月に二度、日曜の講演会が月に一度、それに地区座といって地区の座談会がある。雑誌の案内を見ると、市川の中山の阿波神社の社務所をかり、月に一度やっている。初めて土曜講演会に行った時は、たかだか六、七十人だった」、と。

昭和四十八年（一九七三）

一月四日

東商ホール、演題「般若への道」

「私は十歳の頃から霊的な体験が起こり、爾来三十二年の間、心と物質について追究し中略三十二年の歳月を経て、はじめて知ったのである。」

同じく一月

神奈川県、老舗の女社長のKが信次の事務所を訪ねた。五十五歳というのに骨と皮。「どんな医者にかかっても治りません」といった。信次は「心の毒を食べすぎたのです」「いえ、体の具合が悪いのです。ちゃんと仕事もしているし、神様にお参りし、先祖も守っています」と意味を解していなかった。「お姑さんと同居していますね」確かに社長ではあるが、一銭の金をもお姑さんが握っており自由にならないのだ。「主人の妹さんにも、娘さんのいいなずけにも気をつけて...」「ハイ、いつも私は周囲の者に気をつけています」信次は、Kのような人は、意識の中からくずさない限り、自己保存から解放することは不可能だと考え、言って聞かせるのでした。そしてそれからKは、嫁に来てから今日までの生活について一週間かけて反省した結果、心は浄化され、体重は七キロも増え愚痴も忘れたようになり、元気になってしまった。これが我慢と忍辱の違いである。

一月出版の出版本の中から、『対談・四次元の不思議』の要旨。

小田 「ある社長さんで、私の会員でもあるけど、近頃心霊のことで本なんかも書いたり、会合を持っている人がおりますが、その人は子供の時に、何遍も死んだんですね。その体験談を聞きましたかね。」

田宮 「...」

小田 「そうです。それで、本当の私はここにおるぞ、といくら言っても通じないわけです」

田宮 「...」

小田 「...薬の匂いがした、というんですね。そうしたら皆が生き返ったとあって、大喜びだったというのです。その人にはこういうことが、七回も八回もあったそうです」

三月

大阪講演会するとき、講演が終り質問に入ると、神道を二十数年学び、肉体業をして来たという五十代のHが質問した。「私はあらゆる修業をして、八百万（やおよろず）の神が私の耳もとで教えて下さいましたが、先生の著書を読んでからというもの、もう用がすんだから帰るといって、今は二方の神だけになりました。何んという神でしょうか」何千という聴衆者は、注目した。Hは自分で神と自称する者の名前も知っていながら、信次の口を通して語って欲しかったのである。はるばる四国から他流試合に来る勇気は憐れにも信次は思った。「あなたは、人に対しても慈愛の心が乏しいのはどういうことですか」「私は神のことばを守ります」と言った。地獄に堕ちた行者が竜をつかかって話させている姿を信次は見ている。「自分の名前を名乗りなさい」「我は天照大神なり」「うそを言いなさい」「金比羅なり」とコロコロとかわる。「ただの行者、本当のことを言いなさい」「黒竜でございます」と。行者の頭の上に長いひげをなびかせ舌をペロペロ出している。信次は彼らに動物としての心のあり方、人間としての心のあり方について説法したところ、Hを支配していた地獄霊達は離れていった。「体が軽くなり頭がすっきりしました。やはり私ののは、地獄霊でしたね」と自分で納得したのである。

同じく三月

信次は、指導霊によって、信次のグループの一人、インドの時代の天眼道第一の人といわれた大目連（マハー・モンガラナー）であり、坂本竜馬の生命がニューヨークに転生していることを五年前に通信されていた。昭和四十八年三月、信次が意識でニューヨークへ行くと（幽体離脱して）、彼は、ニューヨークの公園の石の上で禅定・瞑想していた。そして、霊的通信に成功したのである。

園頭広周氏の「高橋信次師との出会い」を見てみよう。

園頭氏は昭和四十八年一月十三日、東京へ出張、生長の家関係者から『縁生の舟』（改題『心の発見』）と『原説般若心経』を貰い、宿舎のホテルで、むさぼるように読んだ。「著者の霊の次元の高さを感じずにはいらなかった」、と。氏は本も読み終えない内に手紙を書いた。すると、二月の末に信次の使いが二人、氏を訪ねた。そして、三月十三日、関西本部の講演会で信次と氏は顔を合わせることになる。氏は早目に行って信次を待った。信次は講演会場に定刻にきた。信次を一目見るなり、園頭氏は「中肉中背の、少し太り気味で丸顔の、少しも威厳をつくろわない感じで、すぐにでもふところに飛び込んで行けそうだ」と思った。それで、氏の心もやわらぐのだった。その時、信次は言った。「あなたが私のところに来ることは、僕は五年前に予言していました。ネ、そうでしたネ」、とまわりの者に証明を求めた。そして「あなたは宇宙即我を体験したことがありますね。それはあなたの過去世で学んだものです」と言った。その言葉を聞いた氏は、これまで、自分だけしか知らない、今まで何人かの人に話しても、理解する人は一人もいなかった自分の体験を何も話さないのに、信次がわかってくれたことに驚き感激するのだった。生長の家では「神想感」という観法をやっている。教祖の谷口雅春氏は、わかって下さるだろうと思って生長の家の講師にもなったが、結局、わかって貰えなかった、という。

しかし、この先生は開口一番「宇宙即我（うちゅうそくわれ）」という言葉を使って下さり、感激で涙さえ出るのだった。我が家にやっとたどりついたという気持ちであった。「今まで随分苦労して来ましたね。しかし、それも、こうして、ここに逢うための準備だったのですよ。そして、あなたはロスアンゼルスのアガシャ教会のことを知っていると思いますが、あのリチャード・ゼナーを指導したアガシャの指導霊というのは我々の仲間ですよ」と言うのだった。師は、これまでの悩み苦しみを、信次が全て理解してくれたことに心がやわらぎ、涙が溢れてくるのを覚えた。

そして信次は「園頭さん、あなたの心をちょっと見てみましょう」と言って瞑目、精神集中した。「わかりました。ほとんど丸いですよ。りっぱです。よし、やり直しだと思っていますね。それでいいんです。ただ少し欠けているのは、あなたは余りにも遠慮深いことです。」と言ったが、その日はそのようなことで終わった。

四月八日～十日 G L A 関西本部の講習会。その四月九日の午後、信次は「昨夜、あなたの守護霊が挨拶に来ました。近いうちに、あなたも過去世を思い出しますよ」と言った。

四月十日、信次は講演が終わった後、「園頭さん、今夜、一緒に泊って下さい。一緒に来られた御二人も。私は個人指導がありますので、先に宿（生駒の三鶴山荘）へ行っていて下さい」と勧めるのだった。夕方六時頃、信次は帰宿した。「先生が、お帰りになった」というので、氏は玄関に信次を迎えた。すると信次は「どうして、早く風呂にはいって、くつろがなかったのですか」と思い遣るのだった。園頭氏は、師を迎えるのに、襟を正して、礼を尽くすべきだと思った。そして氏は、今までに知った教祖の中で、これほどの心配りをされる人があつたらうかと心打たれるのだった。夕食が終わり、「園頭さん、精神統一してみてください」と信次は命じた。短い浴衣の前を合せて（氏は長身）正座した。「そんな窮屈な姿勢で精神統一できません。もっと身体を楽に、足がしびれては長くは坐れない、心に集中できません」と信次は言った。アグラをかくことに多少、抵抗を覚えながらも、昭和十五年に宇宙即我を体験した時も、禅宗で教えるような坐り方をした訳でもなかったことを、思い出していた。

心の統一をはかっていると、信次は右手をかざして、何か訳のわからない言葉をかけた。信次が何を喋っているのか、さっぱりわからなかった。信次が言った言葉は、意味はわからないが、何か腹のそこからこみあげてきて、口を開けば、そのまま言葉になりそうな気がしてならなかった。信次は言った。「肉体を持っている人よ、そのまま声を出しなさい」と言った。「肉体を持つ...」というような権威のある言葉を、聞いたことがなかった。それは、そのまま従わずにはいられない権威ある言葉だった。口を大きく開けて、アーと声を出した。とたんに、その声は言葉に変わった。習ったこともない言葉が、次々に口をついて飛び出した。催眠術にかけられた

のではないかと考えたが、催眠術や暗示は、本人が覚醒した後は、術中どのようなことがあったか覚えていないはずだと考えた。しかし、この通り、意識もはっきりしているし、全部知っていると言頭氏は言う。

そして、知らない習ったことのない言葉が、次々に口をついて出る。感動の涙が溢れ、目も鼻もぐしゃぐしゃになって泣いた。そして、信次は言った。「あなたはヘイマカという人を知っているはずですよ。過去世でどんな関係にあったか、今度は日本語で答えなさい」と信次は日本語で問いかけた。一瞬とまどうのだが、今まで、自分を感動させた胸の奥というか腹の底というか、じっと潜在された自分の心に静かに問いかけてみた。すると答が返ってきた。しかし、氏はそれを否定した。その言葉はどうしても躊躇せずにはおれなかった。「心の中に浮んできたその言葉をそのまま口にしなさい」と信次は再び促した。信次は心の中を知っていた。口にしなさいと言われても躊躇せずにはおれなかった。一瞬躊躇して園頭氏は思い切って、「その人は私の侍従をしていた人です」と答えた。侍従とは天皇陛下の側近で、民間の自分が口にすべき言葉ではないことも良く知っていた。その言葉以外に出てこないのが仕方なかった。「そうです。その通りです。その人は今、京都に生れ変わって、あと三カ月したら、その人も私のところへ来るはずですよ」と、信次は言った。(その通りに、三カ月目に大阪の講習会に来ることになる)

そう言った、と同時に園頭氏の目に映ったのは信次の姿の上に二重写しになっているお釈迦様の姿であった。「仏陀、おなつかしゅうございます。偉大なる観自在者、仏陀」と言って、泣き伏したのであった。「ウパテッサ（舎利弗・舎利子・シャーリープトラの幼名）二五〇〇年を距てて、この日本で一緒に会うことができました。私もなつかしい、インドの時と同じように今世でもやりましょう」と信次も涙した。そこに居合わせた人も泣いた。「あっ金粉が」、G L A 関西本部長・中谷義雄氏（前述）が叫んだ。氏の頭上に金粉が降って来た。信次の顔も、園頭氏にかざしている手もみな金であった。金で輝いていた。釈迦の像を金で荘厳するのは、このようなことによるのかとわかったと園頭氏は書いている。

「金粉が...」

「金粉類似のものは動物霊でも出す。もし拝み屋さんで金粉を出すという人がいたらよく観察することだ。派手な格好、気分がクルクル変わる、冷たい、金に汚ない、すぐに怒る、女性問題をたびたび起こす、常識的に考えておかしい等を正見すれば、必ずわかるはずだ。正しく心を開いた光の天使なら、さわやかで、これはちょっとおかしいぞというようなことはあるはずもない」



国際正法協会十周年記念世界大会の園頭師（昭和63年）

一九七三年三月二十二日、沖縄講演会より高橋信次

「私の本はアメリカのスタンフォード大学で翻訳されています。今年の五月に出来あがりますとアメリカの太平洋岸に大きく広がっていきます。そして、我々の説いているものはヨーロッパにも広がっていきます...」

三月二十八日、法人届される。宗教法人「G L A」

四月

『人間・釈迦』第一部 偉大なる悟り、出版さる。以下次のとうり。

『人間・釈迦』第二部 集い来たる縁生の弟子たち。昭和四十九年五月

第三部 ブッタ・サンガーの生活 昭和五十一年十一月（信次亡後出版）

第四部 カピラの人びとの目覚め 昭和五十一年十一月（信次亡後出版）

『人間・釈迦』は月刊誌『G L A』に連載されたもので、単行本として三宝出版より出されている。

『人間・釈迦』へのプロローグ

高橋信次著、「人間釈迦」は、古代インドの釈迦の時代に生活した過去世を持った人々の記憶と、釈迦としての信次自身の回想が、パノラマのように眼前に広がる当時の情景を、筆のおもむくままに自動書記された霊的実録であり、世界に希なる四部作である。信次の原稿を進めていく机上には原稿用紙とペンのみで資料一切なにもなかったという。最後の著作となった四部「カピラの人びとの目覚め」は釈迦四十二、三歳頃までの物語りである。残念なことに側近の人達には、いつも、「道を説いて四十五年間の永きにわたるので、書くことはいくらでもあるんですよ」、と言っていたという。前述したように、四部は釈迦四十二、三歳の霊的な実録であるが、釈迦八十一歳のクシナガラでの入滅の記録は、信次著『原説般若心経』三宝出版に詳しい。そして、この「人間釈迦」は、日本人妻をもつアメリカの大学教授の手によって英訳された。完訳されたのは信次の存命中であったが、その翻訳文が日本に届けられたのは、信次の昇天後であった。別項で述べているが、その後のG L Aの混乱によって、陽の目を見ないのは残念である。一九七三年三月二十二日、沖縄講演会では高橋信次は次のように言っている。「私の本はアメリカのスタンフォード大学で翻訳されています。今年の五月に出来あがりますとアメリカの太平洋岸に大きく広がっていきます。そして、我々の説いているものはヨーロッパにも広がっていきます...」

『人間・釈迦』と、一般の釈迦伝の違いを知るための要約

紀元前（BC）六五四年、中インドのコーサラ国、カピラ城。父はシュット・ダーナー王。母はマヤ。言葉はカッシー語、マガダ語。釈迦（ゴータマ・シットルター）はルンビニー園で産まれた。父四十九歳、母四十五歳。母マヤは出産後一週間でこの世を去る。今で言う逆子であった。母マヤはデウダバ・ヴァーストの城主のスクラ・プターの妹。母亡き後、母マヤの妹マーハー・パジャパティーの手で育てられた。カピラバーストはコーサラ国の首府シラバスティーから六十八ヨジャー、マガダ国のラジャグリハの都から四十九ヨジャー、マガダ国のラジャグリハの都から六十二ヨジャーの距離にありヒマラヤの麓に位置していた。一ヨジャーはラジャン（王様）の歩く一日の距離をいう。太陽が東から出て西に沈み、再び東から出るときの一周期が一日と定められていた。国の周囲は二十ヨジャーほどの広さ。シャキャプトラ（釈迦族）の人口は約百万人ほどであった。父王の兄弟は五人、長男シュット・ダーナー、二男はシクロー・ダーナー、子供はナンディカ、バドウリカの兄弟。三男はドウロー・ダーナー、子供はアーナンダ、デヴァダッタ兄弟、四男はアムリトー・ダーナー、子供はア Nilutta、マーハーナマ兄弟、長女アムリタ、子供はテイショヤー。そして祖父はシンハハヌ・ラジャンといわれた人で、シットルターが生まれた時は、この世の人ではなかった。父王のもとで政治を行った人マシエル、シットルターより四十歳年長であった。マシエル亡き後、ゴーセが継ぎ、貿易、外務をやった人スグティ、シットルターより五歳上、シットルターは三歳の頃から、バラモンの学者からヴェーダーやウパニシャッド教典を学んだ。『人間釈迦』はこのような書き出しでは決してない。是非、読んで欲しい四部作である。

四月一日 東大阪の忍岡中学校講堂

演題「魔に負けるな」

「昭和四十三年三月、靈的現象が私の家に起ってから、はや四年になります。人間は神の子としてこの地上界に、目的と使命を持って生まれて来たことは、誰の心にも内在されており、例え不調和な現代社会に……後略」

信次は「誰でも愛の心を強く持てばよいのです。そうすれば誰でも力が出るのです」、

「光を入れる前に自分の心を愛の心で満たすことが大事です」、

「禅定の時、心と肉体の波動を合せなさい」と言った。

四月なかば、信次は「『縁なき衆生救い難し』という言葉があるが、しかし、袖すり合う縁が生じても、その縁を素通りする人があまりに多いので、正法の遠きに覚えることがしばしばである」、と。

「正法は、実践のなかにこそ、生命が宿ることを知れ」、

「いうこととやることの違う人を信用してはならない」と良く言った。

四月、園頭師が靈道を開いた日に、信次は

「園頭さん、あの生長の家の清超という人は二人目ですね。谷口雅春教祖の一人娘の恵美子という人が、最初の結婚に失敗した理由を知っていますか。あれは生長の家をこれ以上大きくしてはならないという、天上界からの警告だったのです。それを終戦後、生長の家をこのように大きくした原因は、園頭さん、あなたの責任だから、あなたは谷口さんに手紙を出しなさい、と。」

「何も知らないはずの信次が、恵美子氏の再婚を…」

「そう、最初、北海道の人と。谷口氏は婿の批判を、当時の月刊『生長の家』に。そして、昭和二十七年に谷口教祖に園頭師は、生長の家の大方針はかくの如くすべきだと手紙を書いた。それによって発展したのだと」

このようなやりとりをしている時、田中利雄という人が部屋に入って来た。信次は、

「園頭さん、この人はぼくが大阪の国際ホテルに泊っていた時、目の前に電話番号がパッパッと浮んできた。そこへ電話せよということだと思って電話したら、国際ホテルのぼくの部屋の番号で、ぼくはこの人が電話をくれることを前以ってわかっていた。それでぼくが「アナン」と呼びかけたら、この人は電話口で自分の過去世を思い出して、ぼくと古代インド語で話したのです。」

「ね、そうでしたね、田中さん」、と。

同じく四月

「前世のカルマ（業）が、そのまま結果となって出てくるとすれば、人類は、とうの昔に滅びているでしょう。なんとなれば、悪を犯さぬ者は一人もいないからです」と、そして「僕が釈迦として死んだ時、一番最初に反省させられたことは、出家はいけない、やはり家庭を持って、「法」を説かなければいけなかったということです。だから、今度は家庭を持ったのです。でも、インドの当時は、出家した人しか「法」を説けないという考え方もあったからです。」、と言い残している。

同じく四月

霊道を開いた直後、園頭氏は信次に次のような質問をしている。それはこうだった。『心の発見』を読んだ時に思ったことは、仏教、キリスト教に関することは書かれているが、日本の神道については少しも触れられていないことだった。日本は仏教国といわれているが、神道を信仰している人も多い。だから、神道の人には救われないというのでは正法ではないであろう……と思ったのである。そこで、「神道のことについてはどうして書かれなかったのですか」と。「いや、今、神道のことを書くと、日本人は神社神道のことだと思っているから、誤解する人がふえる。国粹主義の右翼が騒いで危ない」、と。その時、古神道の神理が正法であると、信次は教えたのである。そして、また信次は「園頭さん、今の天皇家の祖先は中国から来たのです。その証拠には宮中には中国のものがたくさんあります」、と。

園頭氏「とにかく天皇制は中国大陸から渡来して、日本に住みついて、日本民族になった人達の叡智によって創出した政治形態であるが、その根本思想には原日本人の古神道の思想が流れている。それが神武天皇による『八紘一宇』の宣言である。『世界の人類は皆兄弟である』、『各々処を得て安住せしめる』という思想である。宮中に於ける儀式には、原日本人の持っていた思想の上に、中国風のものが加味されているのである。天皇家に於ては、原日本人の持っていた思想と外来の思想が調和されている」、と。

五月

「僕は相手の人が、ぼくにどんないやなことを言っても、自分の心を宇宙大にするから、相手は僕の手の上にのって、どんなことを言っても腹が立ちませんね」と言った。

五月九日

信次が幽体離脱してアメリカへ行き霊的通信をしたことは先に述べた、信次は、大目連の過去世を持つ大谷嘉輝氏へ、手紙を書いた。

「懐しき友よ 遠き古いインドの地で心に法灯を灯したように、今生もまた、縁にめぐり合いたることを神に感謝致します。五年前から懐しき友が、ニューヨークで東洋哲学を教えていることを私は多くの人々に予言しておりました。遂に二十八日、私はニューヨークに行き、心の通信に成功しましたことをうれしく思います。懐しき友よ、心と行いを法に照らし、自己完成に努力せられよ。偽りの我を捨て、善我なる心を育てよ。そして常に、八正道を心と行いの物差しで反省をし、偽りの我を神に詫びよ。そして瞑想せよ。その時に、実在界を通して私達は自由に交信することが出来るのです。自己を信ぜよ、偉大なる友よ。法灯を心の中に灯せ、一秒一秒の心と行いの中に一切の執着は苦しみをつくり出すものだ。一切を法に帰依した時、総ての安住があるだろう。経済の苦は、やがて調和への方向に迎えられよう。今迄の困難は、人生に対する疑問を持たせるためのチャンスを与えたもの。懐しき友よ、勇気と智慧と努力に依って実践せられよ。光明は近し、光明は近し、苦悩はやがて、安らぎの境地に達しよう。自己の完成、家庭の調和、親子の対話。友よ、一步一步あせることなく生きて行こう。そして核をつくり、法灯を人々の心に灯して行こう。法灯は種族を超越し、国境もなく、人々の心に調和をつくり出して行くでしょう。やがて人類は、物質文明の奴隷から自からを解放し、人生の目的と使命を悟って行くでしょう。友よ、私達はその日のために、一切の地位も名誉も、欲望も捨てて、人々のために生きて行こう。それ以外に人類は救済出来ないからだ。イエスの愛に生きよう。ブッタの慈悲に生きよう。道は只一つ、法に帰依しましょう。親しき友の栄光を祈ります。また霊的通信を致します。

昭和四十八年五月九日

大谷様

高橋信次

Home

「幽体離脱してニューヨークへ行って霊的通信を」

「幽体離脱して、つまり意識のままに、エジプトのカイロへ行ったり、シルクロードの壁画を見たり、映画館には行って映画を...等があった。また、信次は「私が渡辺さんのところへ意識で行った時、ちょうど不確定性原理の本を読んでいましたよ」と、まったく自由自在。もっとある。月の裏側にもう一つの星が」

「オイオイ、ヨセヤイ 月にもう一つ星が 冗談はヨセ！」

「星々の運行は何百年に一秒の狂いしかない程、キチンとコントロールされている。もし月の向う側に隠れて動く星があったら何んとする。地球から蔭になって見えない星があると言った。大本教の出口王仁三郎もそれらしきことを言っている。この「王仁三郎という人は菩薩界の人で日本の宗教の誤りを覚醒させる使命のあった人」と信次は言い残しているが、九惑星ではなく十惑星の事実も。信次は宇宙全体を見通すことが出来た。」

「ところで、大目連は古代インド時代の人、そして現代は大谷氏で、ニューヨーク。天眼道第一の人、と。」

「あの世を見ることでは右にでる人がいないと言われた。その人の分身が、あの幕末の坂本龍馬と、信次は言っている。園頭氏は、インドの時代に大谷氏とは親友の間柄。つまり舍利弗と大目連は親友。そこで、懐かしさ一杯の二人は文通を続けた。日本を訪ねた大谷氏と園頭氏は初めて顔を合わせた。それは昭和五十三年十月、長崎の歓迎会でのこと」

「過去世で坂本龍馬といわれた人が長崎に...またどうして偶然にも」

「園頭氏は正法会（後の国際正法協会）の定例会だった。そして大谷氏はアメリカの経済調査団長として来日、その日は観光で雲仙へ」

「なる程、懐かしかったろうナ。そして龍馬は、夢にまで見たアメリカに永住。」

「大谷嘉輝、レイモンド・Yオータニ、と。歓迎会で大谷氏は、こう言った。「私が寝ていたら、ググーッと持ち上げられ浮いたようになり、そのまま私は空の彼方の光の国、へ入って行った。ふと見ると、そこに高橋先生が立っておられた。『大谷さん、これを見なさい』と両手をひろげて見せられた。その中に、私の過去の輪廻転生の全てを見たのです』と、体験を話したのだ」

そして、不思議にも同じ頃に園頭氏と大谷氏は、信次に出会ったことになる。

五月十三日

関西本部の定例講演会（開演午前十時）にて園頭氏は、東京から来た人達とはじめて引き合わされた。シャーリープトラ（舍利弗）の過去世を思い出した氏は、この会場で「交叉証明」が行われることになる。昭和四十八年七月一日発行の月刊『G L A』誌よりその様子を要約、転載してみよう。

「私達人間は皆神の子であり...中略...偉大なる過去世を思い出された人が出た。その人S氏のご精進に深甚の敬意を...中略...釈迦が出家した時、五人の武士達が父王の命で守護します。その中にアサジという人がいた。アサジの過去世を持つ北原さんと先生の対話がつづく。「私達はインドの頃はゴータマ・シッタルダの最初の弟子として心の窓を...中略...そのインドの頃の私が知っている方が今日この中に来ておられます。その方はウパテッサ（改名シャーリープトラ）という名前の方です。高橋先生は九州から来られたS氏を指さされ、「あなただそう

です...ちょっと来て下さい」と招かれて...中略...と当時のことをいろいろと涙を浮かべながらの会話である。...中略...ややあって、先生はS氏に、「あなたはあの婦人を知っている筈です」と東京から来られ...中略...S氏はその婦人の方を見られたとたん「オー、マイトレイヤー（前出、高橋一栄氏）」と呼ばれた。一栄先生の顔も涙に濡れ...中略...この方は「ウパテッサ」といわれた方です。この方はインドの頃は、ナールンダという所に生まれました。そしてブッタに帰依した後はゴータマ・シッタラダ釈迦牟尼仏の右腕といわれた方です。彼はインド...中略...そしてこのウパテッサといわれる方が後に「**シャーリープトラ**」と呼ばれるようになった経緯を、般若心経の中に出てくる「**舍利子**」といわれる方はこの方の名前を、弟子達の代名詞として使ったものである。と結ばれて感動的現証を終えられた。

ある日の関西大講演会の終了後、「インドの時は、みんなに、あの世の極楽や地獄の状態を見せたことがあったのですから、そのうちにいつかやりますよ」、そして、同じく「インドの時は三カ月、ぼくは天上界へ帰って、姿を消したことがあるんです。今度もそういうことがあるかも知れません」と言っていたが、実現せぬままに終わった。

昭和四十八年のある時、「関東地方の大震災を起こす地下エネルギーは、既に充満しているのです、そのエネルギーを分散させるために桜島は噴火を繰り返している。そして天上界で地球の気象を操作している」と。そして、「今から一万年先、アトランティス大陸の文明を築きあげた、高度の知識と智慧を持った靈魂達がこれから生まれてくる、いやもうすでに」と言った。

五月二十三日

G L Aの東京の会議に園頭氏は初めて出席した。会議終了後、信次は部屋へ何人かを呼び入れた。そして市川のK氏に「あなた、ちょっと精神統一してみてください」と信次は言った。K氏は二、三分すると園頭氏の前にパッと身を投げ出して「五体投地」の礼をして「過去世では、色々のご親切に指導して頂いてありがとうございました」と言った。そして、それから園頭氏は信次に別の部屋に呼ばれることになる。そして、突然、信次は「あなたはインドのつぎにはどうしたのか思い出さない」と言った。しかし、何も出てこない。とっくりと胸の奥というか腹の底で考え、心に問いかけてみた。そして言った。「インドの次はイスラエルで、キリストの時代、ガブリエルという名で、天上界からいろいろな役目を果たしました」、と言い終ると懐しさに涙するのだった。園頭氏は、ガブリエルについては聖書を読んでいる。その名が、自分の心の中から飛び出して来たことの不思議さに自分で驚ろいた。四月には二千五百年前の釈迦の時代、舍利弗として釈迦に伝え、五月には二〇〇〇年前のイエスの時代、キリストの伝道に天上界より協力したことが思い出したのである。これらの過去世を思い出したことによって、園頭師は、「宇宙即我」の体験は自分自身のこれまでの過去世で習得したものだったと確信するのだった。

「般若心経の中の「舍利子」は、比丘、比丘尼達よ、という呼びかけであった。それが現代の園頭氏で、その後はガブリエルだった。なるほどネ」

「ガブリエルはマリアの受胎の告知に協力し、マホメット（紀元五七〇年、飛鳥時代の聖徳太子の生まれた頃）の誕生から見守り、メッカ郊外ヒラーの洞穴で天使シブリール（ガブリエル）からアラーの言葉を受けたというが、そのガブリエルだった。そして、それより下って、宗教改革のカルバン（カルビン）。近世は、ジョージ・ワシントン（1732～1799年）そして西郷隆盛（1827～1877年）だった、と信次は言い残している。」

「ウーム、西郷隆盛か。しかし、すぐには信じないゾ。エーと、同じ魂の兄弟なら、西郷さんは大男、理論家、剛毅木訥、人情家...」

「園頭氏は、稀有の理論家、著書五十冊以上、ぼくねんじん、涙もろい、男の中の大男...鹿児島、今世は宗教改革、男尊女卑の弊風を改革することにも使命があったとされる。」

「まだまだ。エーと、西郷と坂本の関係はと言えば。坂本龍馬の仲立ちで西郷、大久保等と桂小五郎等と薩長同盟...。これはヨシーと」

「釈迦 舍利弗 大目連の関係は、幕末は桂小五郎（木戸孝允）西郷 坂本だったと信次は言い残している。そして、木戸（釈迦）は征韓論、台湾出兵にも反対している。また、木戸のみタタミの上で死んでいる、これもまた

不思議」

また、信次は「**道德によっては人は救われない**」と言った。

「**道德によっては救われない、と？**」

「多くの人は道徳的にりっぱであれば、それを人格者といい、そういう人は高い霊の世界へ行くと。しかし、信次の説く正法は、心のあり方を問題にする。例えば、見かけは立派な人格者でも、心の中で、愚痴、怒り、不足の心がウズまいている人は、低い霊界か暗い世界へ。」

「**心のあり方を問題にするのか**」

「その通り。良い例がある。ここに実際に身体で以って人を殺した人がある。そして、ここに口で人を欺し人を不幸にした人がある。また、ここに実にまじめな人がいて、心の中ではいろいろと思うが、そういうことはいけないと知っているので、絶対にそういうことはしない、まじめな人間がある。この三人の中で、一番罪が深いのは誰か？」



「それはズバリ殺人者」

「ブー、ハズレ！」

「ナ・ナンダ、オイオイ」

「**答えは三番目の、いろいろ思うが真面目人間！**」

「そんな！」

「この意味がわからないと正法がわかったとは言えない。宗教家にテストしてみると興白いゾ」

「……」

五月、東京の理事会でのこと。信次は「今後どのようにして正法を発展させるか」という議題を提出、意見を聞いた。「高橋先生の教えを正しく伝えてゆけばよい」というだけで、他に具体的な意見はなかった。正法に帰依したばかりの園頭氏は「今後、各宗教団体の人々が正法を求めてくる。例えば、創価学会の人々には、学会の教義と正法はどう違うか。生長の家の人々には、どこが違うかと講師たるものは説明できなければならない。しかし、他の教団の教義をすぐに知ることも出来ないのなら、元信者に正法をしっかりと教育して、各教団向けの

その役割に合った専門講師をつくれればよい」と具申した。

そして、ある時信次は

「園頭さん、あなたが鹿児島を選んだのは、鹿児島は日本の中で一番男尊女卑の傾向の強いところである。そこであなたは、大東亜戦争が起らなかったら、二十四歳までに一つの教団を鹿児島でつくって、男尊女卑の弊風を打破して、そうして私のところに合流するという事になっていたのです。ところが、大東亜戦争が起ったので、私も悟るのが十年遅れたが、あなたもそれだけ廻り道をする事になったのです」と言った。

そして、またある時、信次は

「死んだ時、一生はパノラマのように、目の前に見せられる。そして、そこで必ず反省させられるのです」、
「心が暗くなる反省は、本当の反省ではない」と。

また、ある時

「世界の平和は、まわりくどいようであるけれども、一人一人が正法を知って、心を安らかにし、調和を図る以外にない」、

また、信次はよく言っていた。

「釈迦が肉体を持った時は、キリストが天上界から指導することになっている。キリストが肉体を持った時、釈迦が天上界から指導するのです。釈迦の教えとキリストの教えが同じであるのは、そこに原因があります」と。

昭和四十八年

五月

演題「ブツダと集い寄る弟子達」

「諸法無我という仏教の言葉がございますが、全んど多くの人々は諸法無我という以上は、自分自身も無我の状態にならなければいけないのだという間違った考えを持っております。諸法無我という言葉の諸法は、宇宙の法則、宇宙の神理というものは、私達の住んでいるところのこの地球上一つの、気象的現象やその他あらゆる諸現象を通して見ましても、私達の人間の力によって変えることの出来ないもの、これを諸法無我と言っておるのです。〈後略〉。」

六月

G L A 関西本部の隣りの一軒家が園頭氏の寄宿舍だった。信次は氏を訪ねて、二人で話をした。信次の生い立ち、インド時代の釈迦の頃のはなし、そして最も大事な＂はなし＂も...

「もっとも大事な＂はなし＂？」

「そう、「神の配慮に感謝します」と言って、ひれ伏したくなる程の事実。そのことで悩んでいる人に対しては最大のはなむけ」

「勇気を与える事実！ 何んだらう」

「モーゼは奴隷の子として奴隷解放を、釈迦は王子、イエスは左官の子として生まれている。信次は日本の悪

弊、同和....。」

「エッ、... 神よ！ この世に高橋信次という方を、お遣わし下さいまして心より感謝申し上げます...」

「信次は、正法の講演会を開くとき、この地区を重点的に開催場所を選んだフシがある。信次の高弟の園頭氏は、自らの団体の道場を建てるべく、この地区に土地を求めた。ところが地域住民の猛烈な反対によって建設をあきらめ別の場所に建てた。それというの、隠れ場所の穴倉より尻から先に出てきたり、ガスを振りまいた教祖の問題が出始めた初期の頃で、宗教団体の進出には目くじらを立てて反対されても当然の成り行きであったろう。だが、この地に建設を断念した時、「これでこの地区の解放が遅れてしまった」、と園頭氏は大変な残念がり方だった。このときウエブ・マスターは園頭氏の「愛」に泣いたのである。

同じく六月

信次は「反省は神の慈悲である。反省によって人の心は浄化される。心に思っていることが、全てそのまま結果として現われるなら、生きている人間は一人もいないでしょう」と言った。

ある時、信次の弟子の一人が、「電車の中に散らかっている紙屑を拾うには勇気がいる。拾うべきかどうか」と、ある人に質問した。質問された人は「掃除する役目の人がいるから、余りきれいにすると掃除をする人の仕事を奪うことになるから、そのままにして置けばいいでしょう」と答えた。ところが、その次の月の講演の中で、信次は、「こういっている人があります」と、その人が言った通りのことを話した。その人は心を全部見られてしまったと仰天した。信次は、「こうすれば、人がなんとと思うだろうという、そういう思いを捨てて直ぐに紙屑を拾うのです」とピシッ。その人は冷汗を拭きながら、こうだったと園頭師に話している。また、信次は「自分が運命の主人公である。運命は心でつくる」とも言った。



そして、ある時、

信次は「関西から青年が出てくる」と言ったが、その後、訂正した。訂正した事実を知っている人は、G L A 関西本部の理事数人と園頭広周氏だった。（月刊『正法』百十七号 園頭広周）

「○の科学の○川 法という人は関西・四国の人」

「○川氏の父・善川三朗氏は、信次の講演を聞いた人。父の感化を受けている○川氏は、関西から出て来るのは自分だと思ったかも。しかし、信次は訂正した。すでに、生前の信次は、全部お見通しだったのかもしれない」

「これから起る、色々な困ったことを予知していた、と。」

「○川氏は、〃高橋信次もの〃が二十冊近く。だが段々と絶版されて。他の人の霊言はほとんど一冊というのに、ダントツ」

「信次は〃小諸馬子唄〃が得意で、声は澄み通ってきれいだった。長野訛りの東京弁。信次が出てくるという人が数人いるが、不思議と関西人。全員に信次を出してもらって〃小諸馬子唄〃をやっていただく。そして、生前のテープと聞き比べる。長野訛りの特徴のある〃小諸馬小唄〃しっかり練習していただくとするか。本当に降りてくるからには、歌の調子、語り、アクセント等が、まったく同じでなければならんからナ。顔も同じように似てくるはず。ある時、ウェブ・マスターは○川氏の講演会に参加した。最後に『今日の講演は高橋信次の霊示によってなされました』と場内アナウンス。まったく異質のものだった。」

七月

講師幹部研修会（於八起ビル）

「私達が神理を広めて行くのに、一番重要なことは< 中略 > ある電気会社の息子さんが、六月十七日に交通事故を起しました。もう一ヶ月意識不明のままです。高校三年です。霊視すると、本人の霊は自分の肉体に戻りたいと真赤な炎の中でいっています。だが、戻ることができないのです。頭をやられているので、頭をコントロール...中略...両親が余り甘やかしている。人間は本来、病気とか、経済的、家庭的な苦しみを通して道を求める。しかし、正法というものは、そういう人ばかりを相手にしてはいけません。正法は病気でもない、経済的に困っているわけではない。第一線でバリバリ働いているという人達が本来知って欲しいのです。」

「宗教の真髄とも言うべきことを言っている。教祖をはじめ取り巻きの人々にとってこの言葉はつらいナ」

「まったく、その通り、新興宗教の多くが、不幸と言われる人達の上に成り立っていると言える」

「苦しみを縁として道を求めるということもいいことですが、どうしてそうなったか原因を反省しようとはしないで、結果だけを求めようという考え方では困るんです。苦しみがなくても、そういう人に神理を知らせることが大事だと思います。たいていの宗教というものは、「あなたは何年前から入信したのか」ということを問題にしますが、心のあり方というものは、時間的に古い新しいではないのです。わかってしまったら即座に知ってしまうのです。それが現実的には「園頭」という方でした。生長の家の大幹部だった人ですが、神理にふれて、即座に現象が出てしまいました。こういうように、私の所に来たのが古いとか新しいとかということは問題ではないのです。それだけに正法というものについたならば、自分が実行してみるということが大事だと思います。自分というものはどうしても甘くなり易いものですが、自分にきびしさを持って欲しいのです。」

そういう意味からいっても園頭さんのように、荒削りではあっても、自分を見つめてブルドーザーで自分の人生航路の凹凸を直してあの人は来たのです。その位の熱意が、あなた方に欲しいのです。そうしてあの人は偉大性を発見したのです。アニルッタ...中略... 昨日は、落語家の林家木久蔵という人が来ました。丁度、山形から来ていた若い女性がありまして少し後光が出ていたものですから〃光を入れ〃たら、最初は中国語で、後はインドの言葉で語り出して、木久蔵さんは暫くそれを見ていました。彼は札幌の飛行場で待っている間に、売店で『縁生の舟』（改題『心の発見』現証編）を買って読んだそうです。色んな本を買って読んだが、心がこんなに感激した本はないというのです。彼が今まで考えてきたことと同じだというのです。正法を知った以上、人々にも伝

えたいというのです。なにしろ本に書いていることと同じことを今、目の前で見たために、さらに感銘を深めたのです。差し当り、身近な人からやりますと言っていました。「私の師匠の林家正蔵という人は、今丁度、テレビで幽霊をやっているんですが、幽霊の話をしている時に師匠の家に行くとゾクッとする。師匠が幽霊のように見える。ああ、師匠はいつでも幽霊がついているのだな、だから顔色が悪いし、少しおかしいんだな」と思うんです。林家三平というもう一人の師匠は一生懸命お稲荷さん信仰をしている。朝晩ローソクをつけてやっているそうです。本に書いてある通りなんです。それで、まず奥さんの方に読ませてから師匠の方に手を打とうと思います」、と。

「木久蔵さんのはなしが...」

「木久蔵さんも本を出している。その中に信次のことが...。引用要約してみよう」



『木久蔵の心霊教室』

「今はもう亡くなられてしまったが、...中略...いろいろ御教示を得たいと予約をし、ある日ノコノコ浅草雷門の隅田川べりにある八起ビルのG L A本部に出掛けて行ったのである。私は高橋氏をたずねるのに、何かごあいさつの手みやげにでもと思い、その頃の住い、武蔵野の三鷹から、中央線で神田まで出て、神田駅のまわりをウロウロしたが、思う進物がなかなかなく、やむを得ず、地下鉄銀座線にのりかえ、終点浅草駅の階段を上り、時計をみると、もう約束の午後一時がすぐであるから、あわてて果物店にとびこみ、オレンジを一箱包装してもらって持参したのである。八起ビルのエレベーターで、高橋信次氏の部屋のある階上へのぼり、係の女の子に応接室へ通された。...なる程、あらわれた高橋氏は、教祖の影はみじんもなく、ジャンパーをはおり、紺のズボンをはき、中年のかっぱくの良い町の工場長といった感じであった。

「ようこそ、いらっしゃい...」

「お手紙でずうずうしく面会を申込みまして恐縮です...」

「いやいや、本を読んで、すぐに会いにみえる方はそういません。ものごとスピーディですな...ずい分、ここへくるまで寄られましたな。神田駅のまわりとか、雷門とか、まよわれて...」

「は？ えっ！」

「何か持っていかなければと、私にあいさつするんで品物を、買うのに気持ちがせくのでイライラとね。なさいませんでしたか...」

「は、はあ、は、あのこれ、オレンジです...その、まよって買いましたものです。ごあいさつ代わりに...」

「ハハハ、ズバリだったでしょう」

「ハハハハハ」

木久蔵氏も、恥ずかしいので照れかくしに笑い出してしまったが、内心はおどろいていた。信次が言うには、氏の職業が落語家であるということから興味をもち、その到着一時間前より、念をまとめて霊視していたのだという。テレビの画面でもみているように、行動をながめていたのである。このことから氏はすっかり信次に興味を持ち、機会あるごとに訪ねた。

木久蔵氏は、ある日ブラリと八起ビルを訪ねた。すると、ヒッピー風の数人の若者たちが信次を相手に、「神を出してみろ」「おいやってみなよ」「転生輪廻だって」等とからんでいた。すると信次は「この者についている悪魔よ、この者から離れなさい!」、と。このようなやりとりがあって、若者は仲間と帰って行くが、その時の様子が記述されている。

Home

同じく八月

信次は園頭師に言っている。「現在の生長の家の会員の中には、インド時代のあなたの弟子だった人達が、たくさん生まれ変わってきているのです。やがて、集まって来るでしょう」と予告した。

また、信次は次のように言った。

「一回没落したアメリカは、再び復興する。アメリカの復興の源泉は、正法である」と。そして、「光を利用して、遊星間を旅行するようになり、地球人が他の天体に人間がいることを発見するのは百年後」、と。

八月十二日

関西本部講習会

八月十六日

東京本部の講師幹部に対して、きびしい指導があった。東京本部の講師幹部が余りにも勉強しないので、信次は、試験をすると予告をしていた。だが、それに対して反対する講師がいたので、そのことに対するきびしい叱責と注意の内容であった。その中で信次は、「わたしは釈迦牟尼如来としていつているんです。わたしのやることは、すべて天上界で決められていることです。ついて来ないならついて来ないでいいのです。ついてくる人が一人あればそれでもいいのです」と言っている。

「信次の叱責が...」

「そう、その時のテープが残っているが、注意が終った後、信次が「...私の話しは終りです」、すると全員が「ありがとうございました」と。そして、これ以後『**こんなつもりでG L Aをつくったのではなかった**』という信次の苦渋にみちた心情の吐露が」

信次は禅定の指導の時、「身体のまわりに黄金の光の輪を描きなさい」と言った。そして、ある時、信次は「**維摩は実際の人物ではなかった**」と言った。また、信次は、祇園精舎を寄進したスダッタ（須達多）の過去世を持つ講師のK氏に、「空について話をしなさい」と命じ、その人は前座に立った。演壇を下りて来たK氏は、信次に、「今の話はどうでしたか」と言った。信次は笑ってうなずいていた。愛の深い信次は、人の前で欠点を指摘する人ではなかった。「よかったですよ」と言う人だった、と園頭氏はいう。

夏

長野県熊の湯における自主研修会

「皆さん、あの世などという、そんな馬鹿な、というでしょうが...中略... この時の講演で金粉が出た。汗がみんな金になる。話す言葉がみな金になって口から飛び出す。あの金をまとめて買ったら大変な金額になる。私は科学者ですからね、こんなことがあるのかと最初はびっくりしたのです。持って帰ってはいかんといいたのですが、持って帰った人がありました。私の手から顔から金粉が出る。口の中から一杯出る。「あ、光った」と誰かが言ったとたんに、その金を拾って持って帰ろうと壇上に何人かの人が殺到した。結局、その金は消えましたね。...中略...

お前の説く神理は、太平洋岸にずっと伸びていくであろうということを天上界から聞いていた。だから現在は、みな太平洋岸です。岩手、仙台、水戸、それから千葉、東京、神奈川、全部太平洋岸ですね。私の本が出てから日本海沿岸からも来るようになった。今度も、アナン（阿難）という人がどこから出てくるか、それから九州からシャーリープトラ（舍利弗）が出てくると、皆わかってしまっていたからです。...中略...私は京都に出ますと...日本ばかりではありませんよ。外国へも朝鮮にも出ています。それがやがて火の手をあげるわけですね。私はインチキな予言はしません。

インチキな予言までして喰わなくても、喰うだけは職業を持っているんですから。金もうけするんならどんなにでも金儲けできますよ。この人はいくら金を持っているか、みなわかりますから、金持ちの所へ行って、病気になってもらって...（笑い）「医者じゃ治らん」とか言って、パッと治してやったらいいでしょう。...中略...物質化現象したり、手品師の真似事みたいなことをしたり、あんな真似事みたいなことしたって、しょうがないですよ。だけど信じますか。私が最初関西に行った時、手強いのがあったんですよ。「この人、治りますか」ドンパーの人ね。パッとやったら出て来ましたよ。若い女の子でね、盲目で井戸にはまって自殺した女ですよ。それが鬼婆になって、口が耳元まで裂けているのがわかるのですよ。それをパッと目をあけてやった。とたんに、威張り出して「お前の力じゃないんだ」「あっそうか。じゃまた盲目にしまえ」私は自由自在ですからね。寒くしようとどうしようと、盲目にしようと自由自在なのです。あの世のね。それだけの権限を私達は与えられているのですよ。最後は「出ます」といって今は治ってしまった。いざりが、こうやって歩いてきた人が、パッと治ってしまった人もいる。

「頭が狂っているとされる人は、ほとんどが憑依。脳がこわれているのなら、見ざる、言わざる、聞かざると同じで植物人間のようなもの」

「次のことばは霊能者とか教祖といわれる人が心して聞かなければならない信次の「ことば」である。」

「私は教えを受けているのです。だから、光を入れるのも自分ではないといっているのもそれなんです。そうしたら、なんで増長慢になれますか。僕がやっているのなら、威張れるのですが、僕、なんにも力がないんですから、こと、神さまのこととなると、素人なので、それを教えてもらうのだから、だから私は、これは自分だけの力ではない。次元の異なった世界の協力者によって動かされているのだから、だから、自分の力じゃないのだから、やるならば、そういうことが受けられる自分自身を作ることが大事です。」

...中略... 盲目でなにをやっているのか知らんですがね。Aさんを調べようとしたら簡単ですよ。上から覗いてみると皆わかるんですよ。考えることも、やっていることも。...中略... 宮島〇〇といっても、全国に何人もいますからね。住所、氏名、生年月日これだけ聞く。それで私はいいました。「宮島という人の行った経路を教えてください」、と。それがテレビのように映るんです。どこへ行って、どこへいったか。ああバッカスという飲み屋へ行ったな。ここでこういう男と逢って、こういうことを接渉している。それから連れ出されて...山の用水池の...ノミで...そして奥さんに告げて、警察へ、三日目につかまった。

近鉄の爆発事故がありましたネ。あれは、R Gというグループで関西を調べてもだめ、中央大学の学生です。県警本部長がお礼に来た。ところが天上界から怒られた。「お前そんな犯罪調査のお先棒をかつくようなことをやっている、都会の悪い奴がおったら、そいつらから殺されるぞ」、と。それで例の三億円事件の犯人も僕は知っていますがね...中略...「お前は神理さえ説けばいいんだ」と注意されたもんですから、今は一切お断りしているんです。まあそういうように、次元を超えた世界から教えられますから、わかるわけですね。」

「どうしてわかるんだろう」

「永遠である靈魂には、すべて体験したことが記録されている。だから尋ねればわかる。しごく簡単なこと。信次はその能力を持っていた。」

<中略> 教祖をやっている大西という人、高橋信次君なんてね、僕は六階にいるんですが、受付に来た。相手は新興宗教の金持ちで、私みたいなみすぼらしい格好はしていません。三階の私のところへ案内して来た。「高橋信次さんはどこにおりますか。」私は前にいるのに、私を小使いかなんかだと思ったんですね。本人を目の前にしてそういうのです。「お坐り下さい」高橋信次という人は相当年をとった、格好のよい、髭でも生やした男かと思っていたんでしょう。それが丸っきり、どこかの会社の課長にも及ばない、係長みたいな格好をして出ていくものですから。私のところへ来ましてね。私はそういう時には黙っているんです。向うから話をさせた方が早い。

この項は別掲載しているので「正法の本」の部を参照してください。



高橋「私は皆さんに、信じろといったことはないですよ。どうしてだろう、なぜと疑問を持ってといっています。疑問を追求してゆくと最後は神理に到達するからです。だから、私は、ずーっと講演をして来ているけれども、最初からすなおに信ずるな、疑問を持って、持ったらもう一度質問しろ、そうして最後に到達するからです。だから、わかったような顔をする必要はないんです。<中略>

イエス様がいわれたんです。お前は疑問を持ってといからいかん、「信じろ」となぜいわないかと。イエスさまと僕とはちょっと考えが違うんです。そうするとイエスさまは、それでは困る、中途半端になってしまって、信じろといえ、というんです。病気の場合はね、ほんとうはね、信じさせた方が奇蹟が起こるんです。速いんです。信んずる心があれば奇蹟が起こるのが速いのです。私が疑問を持ってというのは、どんな疑問にも答えられる力を私は持っているからというのです。<中略>

今までに、口で心という人があったけれども、心にも形があるんだといったのは私がはじめてです。<中略> 生まれてきたばかりの子どもはね、実にきれいで、まん丸い、それが大きくなるに順って歪ができてくるんで

す。〈中略〉心が、ハート型に見える人がいる。この人馬鹿にピンク色に光っているな、昔から心をハート型に書いている、これは一体なんだ、あなたはいくつ？ すると守護霊が、「この人は恋愛中なんです」と教えてくれる。どんな人ですかと聞くと、その姿を見せてくれる。「あれ、あなたは恋愛をしているの、こういう女の人だろう」と、みなわかってしまう。〈中略〉恋愛している人の心は、実際にハート型になっているんです。〈中略〉恋をしている人にはピンク色の後光が出ている。

〈中略〉その当時はイエス・キリストはいいません。イマニエルとっていました。私はこの方の指導霊をやっていたんです。だから、その時のことも私にはみなわかるんです。私が肉体を持った時は、イエス様が指導される。イエス様が肉体を持たれると私が天上界から指導霊をする。イエス様は厳しいといっても西洋的なところがあって非常に親切です。ところが、私がイエス様の指導霊をやる時は厳しいのです。だから僕は言われましたよ。お前は自分に甘くて俺には厳しいと。イエス様が、ある弟さんの病気を治してやった。その姉さんを好きになった。「イエス、そんなこと、やっちゃいけない」と、お前、私には恋愛もさせなかったじゃないか、その割にはお前は甘いじゃないか、と言われたものです。今までイエスやモーゼ達が、私に予言したことは一つも違っておりません。私はコンピューターを作っているんですからね。いい加減なことは信じません。〈後略〉」

「この熊の湯の研修会の参加者は七百名、その内の三百名が生長の家の関係者であった。その中の一人が『生長の家の教えとどのように違うか教えて下さい』というので、研修の二回目の朝食後の休憩を利用して、その違いを説明している。サテ、この時の自主研修は、一斑を百名に分け、七班が編成され、各班それぞれに担当の講師がおり、信次が各班を廻りながら全体的に指導するというものであった。この記述は岩手県T氏の所属する班での録音テープ筆録である。」

「釈迦の時代は記憶抜群のものが、この時釈迦はこのようにおっしゃった、と口伝したものが後世に残されることになるが、どれ程、正確であったか…。しかし現代はテープレコーダー、そして音だけでなく絵もはいるビデオもあって正確無比。」

八月二十九日

信次は、会社の仕事で信州の工場へ行った。コンピューターの端末機器やカセットの量産が信次の事業である。作業場は活気にあふれていた。プラスチック工場を覗いた時、高橋はつよ（三十八歳）の姿が見えない。二週間近くも休んでいた。軽作業なのに腰が立たないとは考えられない。

「こんにちは！」勝手口から声をかけた。ハイと返事をしたが、体が自由にならないようだった。「お忙しいのに会社を休み、すみません」と苦しそうに言った。はつよの体を信次が見ていると、不思議なことに、寝ているのは、はつよに違いないのだが、八十二、三歳になろうと思われる無精ひげを生やした老人が横になっている。信次は何度も確認した。声ははつよである。信次は思い切って質問した。「いつ頃から具合が悪くなったの」「たしか八月十三日の夜だったと思います。お盆の迎え火を焚いてから、ぞくぞくして、迎え火をたくまで別にどうということもなく、今年のお盆は新盆でした。亡くなった叔父さんにとっては初めての盆ですから、仏壇も岐阜提灯で飾りました」はつよは、間違いなく亡くなった彼女の叔父さんと呼びこんだのだった。はつよは思い出したように、「八月一日は、お墓の雑草を除き、叔父さん、もう少しでお盆ですよ、お盆にはぜひ来て下さいと、心の中でお願ひしました」と言った。「あなたが呼んだとき、その叔父さんは本当にきたんですよ」「まさか…」信次は、厳しく「あなたははつよさんから離れなさい」と言った。すると「わしは行くところがない、ここにおいてくれ」、としがみつく。信次はこんこんと言って聞かせるのだった。すると、今までの人生について反省をはじめ、はつよの体から離れてゆくのがあった。

九月

昭和四十八年九月一日から十日まで志賀高原特別研修（長野県竜王）

信次は、弟子の中から九人を選び、インドの釈迦の当時と同じ研修をすることにした。九月二日の午前には信次を囲んでの質問の時間であった。園頭師は、以前、本部講師をしていた生長の家の教義の問題について質問しよ

うと考えていた。「園頭さん、あなたの質問はキリストに答えてもらいましょう」と質問するより早く心の中を読んで信次は言った。信次は瞑想にはいった。「心に愛のない人に、『心の法則』『心と肉体との関係』を教えるはなりません。心の法則は、人が愛の心を持った時に教えなさい。...」と、キリストは信次を通して教えるのだった。園頭師が、最初に見た信次は釈迦の相(すがた)であった。今、眼前に現われている姿はキリストであった。固唾を飲んで顔を見ているうちに、信次の顔がイエス・キリストの顔に似てきた。不思議であった。瞑想を解いた信次が「園頭さん、わかりましたか」と言った直後「モーゼにエホバと名乗って出たのは私ですからね」と。そのとたん、それまで経験したことのない神の権威に打たれて、信次の前に跪いたのである。

この項は別掲載しているので「奇跡の写真」の部を参照ください。



十月十三日

十月の信次の講話の要約

「これまでの政治、経済、教育その他の体質を変えなければ、日本は良くなる。それには、「正法」を知った、足ることを知った人達が政治をしないといけない。いつも、生産者が損をして流通機構だけが儲り、いつも消費者は高いものを買わされるという経済機構もよくない。銀行、保険会社には不労所得が多過ぎる。日本各都市の目抜き所は、みな銀行、保険会社が立派な建物を造っている。「正法」の実践者が多くなったら、正法の実践者の中から政治家を出し、正法の実践者が流通機構を担当し、正法の実践者が教師になる。そして、正法の実践者が銀行、保険会社をやる。そのようにして、日本を正法の国家にしてゆかないといけません」と信次は言っている。

十月の大阪の講演会の前だった。「園頭さん、釈迦の三十二相を勉強するのはやめなさい」と信次は言った。三十二相とは、お釈迦さんの特徴は三十二あり、例えば、お釈迦様は舌で後頭部を舐められたとか、お釈迦様の陰囊は腹の中にあって外から見えなかったとか、耳に穴が開いていたとか、手足に水かきがとかを言うが、釈迦についてあれこれ伝えられてきたものを勉強してもダメ、むつかしいお経の中から釈迦の教えを探ろうとしてもだめだと信次は言ったのである。信次は「わたしが説いたことをそのまま信じれば良い」という大宣告だったのである。

信次は言っていた。「わたしの本を読み、話しを聞いて、一ぺんでこれが本当だとわかる人は、前世で正法を聞いたことがあるからです」と。

そして、「わたしは釈迦・キリストの教えが、永い間に歪められてきたので、それを修正し、原点に帰すために生まれて来たのです」と。

そして、ある時、「アトランチカ大陸は、アガシャによって正法が説かれ、高度の文明の発達した国であった。そこに今の共産思想と同じ思想を持った集団が現われ、正法を説く指導者達を殺した。そのために陥没させられたのです」と。

そして、ある日、信次は「私がエホバとして、ユダヤ民族に説いた正法は、永い歴史の中で歪められて来ました。それでキリストが出て修正することになったのです。ところが、そのキリストの教えもローマ法王によって歪められたために、天上界からルッターやカルバンを出して、宗教改革をさせることになった」と。

「他力によって救われた者は一人もいない」と、

そして、「信仰には、心と肉体と経済の調和、健康が大事である」と。同じく、「やがて医者が宗教家の役目をする時がくる」と言っていた。

同じく、「園頭さん、この頃なにかあると、高橋先生助けて下さい、なんとかして下さい、という人が多くなって困るんです。ぼくはぼくで、修行しなければならぬことがあり、また天上界へ行って天上界の人達を指導しなければならぬことがあるし、そういう時に、ぼくの名前を呼ばれると、助けに行かないわけにはならないのですよね」と、

そして、また「資本主義も共産主義も、どちらも唯物思想であり、神理ではない」と言った。

秋、 和歌山市労働会館での講演

「不動明王は、正しい心の人々を悪霊から守護する光の天使です。天国のお巡りさんだと思えばいいですね。実在界の秩序を正す役目。不動明王というのは、本来、心の世界で働くものだといえます。拝むものではありません」と信次は言った。

十一月

大阪講演「輪廻転生」

「今日は輪廻転生についてお話をします。太陽は東から西へ沈んでゆきます。そしてまた明日……中略……カールマルクスも、また「光の天使」として出て来たのです。……中略…… 私は一万二千年前、アトランティス帝国に「アガシャ」として生まれました。……中略…… ナイル河畔のピラミッドの一つが、やがて我々の同志の手によって発見されます。……後略……。」

「マルクスも光の天使だったと…」

「無神論の立場をとる共産主義のマルクスも、経済の考察に行き詰まりモスクワに神学校を建てた、と信次は言っている」

『心の指針』

はしがき

現代の仏教、キリスト教の神理は、ながい歴史的な過程のなかに埋没してしまったといっても<中略> もっとも、それにはそれだけの理由があります。人間は、五官や、六根に左右されるように一面においてできているからです。<中略>・・・された読者は、本書の真意をつかみ、調和のとれた生活と、平和な社会を築くための心の糧とされんことを願ってやみません。

昭和四十八年十一月吉日

高橋信次

十二月五日～七日

九州で初めての研修会（津屋崎国民宿舎）百二十名の参加。

研修会二日目の夜、信次は言った。

「園頭さん、インドの時のあなたの兄さんが、名古屋に生まれ変わって出ていますよ」、と。釈迦は、中国に陳、即ち天台大師として転生する。そして、法華経を説いた。天台大師には陳將軍（陳鍼）といわれる兄がいた。この陳將軍が弟・天台大師のために寄進したのが天台山であった。この陳將軍なる人が、園頭師のインド時代の兄であったというのだ。その人は、若松・Tという名で、名古屋に生まれ変わっていると信次は言った。

「園頭氏のインド時代の兄が...」

「その人を中心として、名古屋のGLAはひろがっていた。園頭師は信次と一緒に、名古屋の講演会の時に泊めてもらっている。さすがに將軍であっただけに刀が好きで、名刀を何本も持っていた。」

そして、宿舎で信次は「園頭さん、如来は法の大筋を説き、菩薩は如来が説いた法を、みなにわかり易く説明するのが使命です。しかし、如来がいなくなったら菩薩もまた、法の根本を説かなければならないのです」、と。

十二月末

東大阪市、関西本部

演題「魂と輪廻転生」

本年も、この講演会で終わります。皆さんは、我々一人が個の生命として、喜びも悲しみも、＜中略＞ 日本には三つの砲台があると、その砲台とは国を亡ぼす砲台である、と。言いたい放題、したい放題などという民主主義、自由主義の根本を逸脱した無秩序の阿修羅の様相を呈して、＜中略＞ 心と肉体と経済の三つが調和されたユートピアをつくるために立ち上がらなければならないのです。より豊かな己れ自身をつくり、そして神の国をつくらうではありませんか。



質疑応答

< 前略 > (質問の時間の終り頃に)

質問 **ノストラダムスの予言について**、一九九九のX日についてお聞きしたいのですが。

高橋 あなたに逆に質問します。あなたは自分の家にこれから帰るんですね。家がなかったら困るでしょう。我々はあの世へ行ったらまたこの世に帰ってくるんです。その時、この世、この地球がなかったら困るのです。だから、ノストラダムスがいつているようにこの地球がなくなることはないのです。しかし、天変地異は起ります。< 中略 >

過日、天上界から東京に大地震を起こすといってきたのです。**十二月一～五日**までということでした。そんなことをされたら三、四百万人が死ぬといいました。そんなことはされてはたまりませんから、我々はそのために桜島をはじめとして、太平洋沿岸の火山地帯、富士火山地帯のエネルギーの分散を頼んであります。東京とか大阪とか、大密集地帯に地震を起こされたら、たまったものではありません。< 中略 >

東京 大阪間も時速五〇〇キロのリニアモーターカーに、飛行機より安定した乗り物になります。< 中略 >

これから日本の太平洋岸に、**新しいエネルギーが大きく噴出するでしょう**。その結果、日本の燃料関係は非常に調和され、ガソリンは斜陽化するでしょう。今のように闘争と破壊を繰り返し、神の子としての自覚を失ってゆけば、神の子であることを自覚するまで天変地異も起るでしょう。まだ場所は未定です。

「天上界から大地震を起こすと...」

「そう、人間の靈魂は生き通しのものだから、その人の業(カルマ)と原因と結果によって、天変地異に巻きこまれる人があっても仕方ない。悪の想念が集団的となれば、それを浄化することになる。」

そして、信次は次のことも言っている。「調和を前提とした妥協は智慧(ちえ)である」、と。夫婦というものは、魂を磨きあう最高の相手であり、仲が悪くケンカばかりせず、魂を磨き合う相手を粗末にはしてはならないと言った。

関西講演会で、ある人が信次に質問した。「『仏陀』という本を書いた人が、釈迦の再来であると言っていますが...」「それは、あなたが、見えて、聞えて、話せたら信じなさい」と解答した。

一、過去世の言葉が話せること。

二、その霊と問答ができること。

三、その霊が見えたら

正しく判断しなさいと言った。

そして、いつも信次は「正直者が馬鹿を見ることは絶対にない」と声を大きくして言った。

昭和四十八年のある日、創価学会の聖教新聞の関係者が、信次の講演に来て個人指導を受けた。「あなた達は、このことがバレてクビになるでしょう。しかし、心配しなくてもいい、クビにならないようにしますから安心しなさい」と信次は言った。その人達は本当にクビになった。そこで、信次は**池田大作会長に手紙を書いた**。「あなたは、なぜ、私の話を聞きに来たぐらいでクビにされるのか。あの人達にも妻子がある。それをクビにして、一家を路頭に迷わせるようなことをするのは、慈悲を説く宗教家のすることですか。あなたは〇月〇日、ハワイのホテルの〇〇号室で、北條という人と秘密会談をしていた。わたしは、あなたのことをみな知っている。クビにしたことを取り消しなさい。しないなら、私にも考えがあります。」と。その人は復職したが、左遷された。ところが、その話が創価学会会員の間にひろがり、脅迫状が来始めた。そのことを警戒して、青年達を警備に当らせたことが三回あった。

そして、また信次は「神を知りたかったら、大自然を見なさい、自分の身体を見なさい」と言っていた。

昭和四十九年（一九七四）

一月六日 新春大講演会（神田共立講堂）

一月十三日 関西本部新年講演会

演題「心の本質、宇宙即我」

ようやく私達も全国的に人々の心に普遍的な法灯を点ずる機会がまいりました。しかし〈中略〉「南無妙法蓮華經」、これも毎日一万遍唱えると、救われるんだというのです。世界でこれで救われた人は一人もおりません。救われたように錯覚しているだけです。〈中略〉とかいろいろな予言書が売っていますが、それも人間の危険を察知して心が淋しくなっているから、ああいうものが売れるんです。〈中略〉

皆さんは**三途の川**という言葉聞いたことがあるでしょう。それはこの地上界で体験して持った執着を流し捨てる場所なのです。執着を捨てないと彼の岸へ渡れないのです。〈中略〉今すぐ死ぬという人がいますか、一人もいないでしょう。〈中略〉自力によって自分自身の心が満たされ、〈中略〉執着がなくなります。人委せで他力ではないんです。我々の心が豊かになると皆さんの後光が大きくなって、初めて宇宙即我、自分は神の子でということを実感するようになります。〈中略〉この地上界はどんなに多くても、**九十億の人間しか住めない**。だから、この地上界に生まれてきた縁を大事にしなければならないのです。（平成十年九月、世界の人口は六十億ほどと報じた）

同じく一月

九州の宮崎郊外の国民宿舎で、三百人ほどの希望者による研修会（二泊三日）が開かれた。参加者の八割は不調和な地獄霊と交渉を持っている気の毒な人々であった。T・Y（六十歳）は夫や子供をつれて、神戸から来ていた。二十数年にわたる信仰歴を持っており、彼女の下には折伏された多くの会員がいた。しかし、これまでの信仰を捨てようと思ったのは、肉体の故障だった。憎しみ、怒り、嫉妬の想いが心の中にふくらんでくると、入院していても、きまって関節の痛みが激しくなった。Yは夫の介助によって研修会に参加したと信次に挨拶した。信次が霊視すると、誤った信仰のため、体はガタガタで、背から腰、足の関節にかけて、地獄霊が憑いているのがみえた。信次に絶対の信頼を持たせるために、信次は即座に関節についている動物霊を取り除いた。「お父さん、痛くない、歩けるわ、不思議や」と、夫も妻の奇跡を目を丸くして見ていた。こうして信次の説く法にはじめて傾いた。「Yさん、あなたが不調和な心で持てば、また別の地獄霊が憑依しますよ。心の在り方を正すことが大事です」と信次は言った。「不調和な心とは、どんな心ですか」とYは尋ねた。

「怒り、愚痴、ねたみ、恨みの心です」

「わたらは、感情むき出しの生活だったんや。これはあかん。でも愚痴はどうして悪いんですか。心の中のしこりを取るには一番...」

「愚痴は自分の欲望が満たされない時に出るもの、これは心の中に垢をつくり、他人の心にも毒を食べさせる...。」

「大自然を見て下さい。それは私達にこのように生きなさいと教えています。... 感謝の心は、報恩という行為で正しく輪廻するのです」、と信次は説くのがだった。

「迎春」

高橋信次

めぐり来る初春楽し朝の夢

光り輝く友の姿が

正道の光に満ちて目ざめたり

年たちかえる元朝の夢

年を経て心の道に迷いなば

法を頼りに正道を歩く

暖かき陽ざしの如くへだてなく

己が慈愛を友に施せ

苦しみの因断ちきりて暗きより

光輝くおのが心に

[Home](#)

昭和四十九年一月二十七日

鹿児島講習会

二月

東大阪市関西本部に於ける講演

演題「お経について」

今日はお経というものについて話してみたいと思います。私達は永い歴史の中でお経<中略> お経というものは、今から二千五百年前、ゴータマ・シッタルダーが四十五年間に、もろもろのサロモン（比丘）、サマナー（比丘尼）衆生達に説いた一つ一つの言葉であり、神理である。それが後に、お経になってしまったのです。それを後の坊さん達が、お経はあげるものと言ってしまったために、今のようになったのです。お経を見ますと、はじめに必ず「如是我聞」とあります。これは「私はこのように聞きました」ということであり、大事なことはお経の中身をよく知って、自分自身の心と行いの指針とすること、それが本当の信心。お経を毎朝毎晩あげるとは、大きな間違いなのです。弘法大師が「般若心経秘鍵」というお経の中に、「私は靈鷲山においてブツダよ

り法を聞いた（註・過去世で）そのために般若心経を説くことができる」と <中略>

玄奘三蔵は何んとかしてその真実を知ろうとして、遠いインドのナーランダという所まで十七年間もかかって経典を取りに行きます。その時に「大般若経」を持ってまいります。その大般若経の中身を圧縮して、そのエキスを取ったものが「般若心経」なのです。一方において、金剛智三蔵といわれる人がおりまして、密教というものを勉強し、人々に道を説いております。しかし、さすがに玄奘三蔵も「摩訶般若波羅密多心経」という当て字を使わざるを得なかったというのは、この中に含まれている偉大なる神理というものを、中国の言葉では簡単には表現できなかったからなのです。「摩訶」というのは「摩訶不思議」という言葉を使っているでしょう。「摩訶」は「大、大いに、偉大な」で「これは大いに不思議だ」というのを「摩訶不思議」というのです。 <中略>

マハー・バラモン、大バラモン、この際にもマハーを使います。 <中略> 「般若」というのはインドの言葉で「パニヤー」、「智慧」のことです。

知識というのは、皆さんが耳を通し、目を通し、体を通して体験したもの、あるいは学校などで聞いているもので、それを心の中に知識として蓄えております。皆さんが学問的に学んだもの、また、こうして私が説いている道、それを頭で覚えて知識となっているものを実践した時に、そこから出てくるものが智慧なのです。つぎの「パラ」というのは、行くとか到達するという意味で、この意味にあてはまる中国語がなかったので、「波羅」という字をつかってあてはめたのです。 <中略> 「密多」、これも当て字です。「内在する」ということです。心の中に内在するということ。直訳いたしますと、「マハーパニヤパラミタ」というインドの言葉は、即ち「摩訶般若波羅密多心経」というのは「内在された偉大なる智慧に到達する心の教え」ということになります。「内在された偉大なる智慧に到達する心の教え」というのは、皆さん自身の心の中には、あらゆる転生の秘密が、その宝物が、誰しもあるのです。皆さん、お寺へ行かれますと多宝塔というものがあるでしょう。多宝塔は皆さん自身の心の中にあるのです。 <中略>

多宝塔というのは、石やなにかでつくったああいうものではなく、皆さん自身の心の中にそのような偉大な智慧があることを現わしたものであるということを知って欲しいのです。 <中略>

やがて私達は、この肉体舟を捨てなければならぬ死の時がきます。人間自身が神理を知ってあの世へ行くならよいが、他力本願という永い歴史の中で地獄界に落ちた人々の霊が、心というものが、不在で一生懸命に拝んでいるような人達にパアッと憑依する。この頃、日本人に外国の地獄霊が憑依するようになってきました。ペラペラと外国語をしゃべりますが、よく見ると外国人の地獄霊ですね。今までは外国人の地獄霊が出たなどということはなかったのです。最近では地獄でも大分外国語が流行しているようです。（笑い）

「外国語でしゃべると過去世の霊があたかもしゃべっているかのようで」

「キリスト教会などで異言をしゃべるという記事があったが、正しく見るのが大切」

霊媒とか、拝み屋さんとか、そういう人達も芝居が上手になりました。東北地方で育って、東北弁しか知らないお母さんの霊を呼び出してもらったら、その霊媒を通して関西弁でしゃべっている。ところが、聞いている人はそれが芝居だということに気がつかない。おかしいことであるのに、聞いている人は真剣に思ってしまう。 <中略>

正しくものを見るには、靈感者、霊能者といわれる人達の、まずその人の生活行為を見ることです。一つ一つ、正しく語っているか、正しく生活行為をしているかなど、そういうことは確認せずに、「あの人、靈感があるのよ」、はなはだしいのになると、「うちの教祖、今日はご機嫌が悪いのよ」、「お賽銭のあがりがないからなんですって」といったりします。そういう婆さんに十万人も信者がいるのですから、日本人は余程間抜けです。そういう所でまた救ってもらえると思っているんだからおかしいものです。 <中略>

色不異空 空不異色 色即是空 空即是色、 これをつなげてゆきますと輪になります。円になるということ（循環）、転生するということになります。空（あの世）、色（目に見える世界・この世）...この世とあの世は別のものではない、一体だということ。不二一体であるということ... <後略>

質疑応答

質問 脳軟化症で亡くなった人の死後は？

高橋 脳軟化のままに亡くなったり、また胃癌とか肺癌とか、いろいろな病気で亡くなった人は、その病気のままの意識を持ち、不調和な肉体を引きずったままで地獄界におります。そして、自分で死んでいるにもかかわらず、まだ死んでいないとっております。先日、ある地獄霊が、五年前に亡くなっているにもかかわらず、兄弟達に憑ってきて、「私は誰でしょうか」というのです。その人も脳軟化症で死んだのだということでした。 < 中略 >

たまたま先月、私の軍隊時代の学校の同期生が大学の先生をしております。中学三年生のときに亡くなった一人娘さんの霊を出しまして、その人の前で話をさせました。お母さんも大学の先生ですが、教育のことについては徹底してまして、その娘さんは死んでもまだ、試験に遅れてしまう、友達におくれる、私の病気は治るの、助けて下さい、私は死にたくない、とっております。あなたは、死んでいるんだと言うと、死んでいないと言う。このように、人間は、死んだその時の等速度運動というのを起してゆくのです。即身成仏できるような人達は、正しい心の行いのものさしをもって生活していた人達です。お経をあげたら即身成仏できるなど、そういうことは絶対にありません。

「即身成仏だといって、もぐらのように土の中に入る人がいるが...」

「とんでもない、即身成仏とは、死んでしまったら、すぐに死を悟りあの世（天上界）へ帰ってゆくことの出来る人」

質問 自分はなぜ、今、ここにあるのでしょうか。

高橋 人間はあの世から出てきたのです。色心不二、色即是空の世界、実在の世界です。内在された偉大な智慧の宝庫を自ら閉ざしてしまったから、なぜ今ここにあるのかがわからなくなったのです。お父さん、お母さんというのは、永い転生輪廻の中で親子であったり友達であったり、親しい間柄であったり、縁というものによって結ばれているのです。その縁を通して今度、肉体を持つ時に、あなたがお母さんになって下さいとお願いするのです。たとえ不義の子でもいいんだ、その中で私はその疑問の中から悟りを開いて自分自身を知って、多くの人を救ってきますという人もいます。そして、また肉体的欠陥を通して人生というものを悟ってゆきます。 < 中略 >

質問 自殺した子供は、やはり地獄界か？

高橋 夏であったのに、寒くて寒くてしようがないというご婦人が個人指導に来ました。体温計では三十六度四分、でもひざ掛をかけても寒いというのです。自分自身が親からもらった肉体を、自分で縮めてゆくということは非常に哀れなことです。可哀そうなことです。動物霊や地獄霊に憑依されている霊能者がおります。そういう霊能者の書いた本などを読んで霊能狂、心霊狂になってしまったら困ります。ところが動物霊や地獄霊に憑かれてしまうと「死んでも生命はあるよ、死ぬことは少しもこわくないよ」などと耳元で囁きます。そうするとフラフラと自殺したくなるのです。あの世からこの世は見えるが、この世からあの世は見えません。中には悟って見える人もおりますが、そうでない場合は、動物霊や地獄霊がいつているのです。見えないために、神様がいつていると思ってしまうのです。神理を知らない子供達が自殺してゆくということは、当然、地獄界へ行きます。死んで自分の家に帰ってみても、今度はお父さん、お母さんと話しができない。ですから、そういう人達を救う方法は、死んでしまったのだから仕方がないから、よく人生の目的と使命ということを知らせて、早死にをしたことの罪を詫びさせ、彼に行くべき道を導いてやるのが大事です。 < 後略 >

すると、イエス・キリストを名乗る人が何人もいます。髭を生やした人、それから、少し面長な人とね。声も違う、アクセントも違うんです。それで、本体と五分身の関係がわかってきた。 < 中略 >

それで私が、昭和四十三年七月一日に自分自身が何者であるかがわかった以降は、ドイツ語でアインシュタインが出てくるのです。鼻の長いのが出てきて、むずかしい数学を解く、俺は一体なんでこんなことをしなければ

ならないのかな、と思ったりした。僕の本の中に、相対性理論が出てきたり、次元の差という説明があるのは、アインシュタインから教えられたのです。アインシュタインが、自分の法則には手落ちがある。振動、プランク定数というもの、人間の脳波の振動も、振動という一つの現象となって伝わってくる。そうすると、それにおける、仕事を為し得る能力というものは目に見えないが、エネルギーが起る。みな、そうやって教えられたものです。文学的才能ゼロの男が、二十日間で原稿用紙四百六十枚、『餓鬼道』（改題・『愛は憎しみを越えて』）を書いたのも、みなそうやってです。「南無阿弥陀仏、なむあみだぶつ」、冗談じゃありませんよ。それでみな地獄へ行っているんですから、大体、坊主は生きている人を救うのが本来の役目でしょう。それを香典の額などといったのではたまったもんじゃないですよ。＜中略＞

坊さんが、どんどん、病院に出入りするようにならなかつたらダメ。今、死なんとする時に、「あなたは今から、この地上を去るのです。心をきれいにして行きなさい」というのが当然のこと、それを死んでからお経をあげるなんて馬鹿げたことで、これは今までの宗教の大きな間違い。＜中略＞

「アインシュタインが出て来て教えた...と」

「そう、信次の『心の発見（科学篇）』の中の 色心不二とエネルギー不滅の法則、神仏と人間、色即是空の原理 に示されている数式はアインシュタインに教えてもらった、と信次は言っている。そして、昭和四十八年九月一日～十日までの特別研修の休憩の時に、信次は次のように言っている。『私の相対性理論は不十分でした。こっち（あの世）へ帰ってきてわかったのです』と頭を下げるのだよ、と。

一九二二年（大正十一年）の十一月に来日したおり、アインシュタインは日本人に次のメッセージを贈っている。

世界の未来は進むだけ進み 略

最後の戦いに疲れる時がくる 略

世界的盟主をあげねばならない 略

あらゆる国の歴史を抜き越えた 略

世界の文化はアジアに始まってアジアに戻る

それはアジアの高峰

日本に立ち戻らねばならない

吾々は神に感謝する

吾々に日本という尊い国を作って置いてくれたことを...

（A・アインシュタイン）

今まで、あの世へ帰ってすぐ「やるだけやったぞ」という人はいませんね。最近では外人であります。ヘレンケラー（三重苦の女性の聖者）「やるだけやりました」といって天上界へ帰ってきました。それからシュバイツァー、エジプトで治療に従事した。この人達は菩薩界の人達ですからね。こういう人達は使命を持って出られた人です。日本では、例えば総理大臣であっても、「私はやってきました」という人はおりませんね、私の所へね。東急の専務が訪ねてきた。「私の親分と話したい」と。五島慶太かなと思った。当然でしょう。東急の専務ですから、ところが違ったんです。その親分という人の意識を僕の身体に入れた。ドカンと身体が重くなった。声が出ない。その内に少し声が出るようになった。「マサヤン、お前さん、よくたずねてきてくれた。」僕の声じゃないんです。○田○人総理大臣です。日本を救った、日本を救った、と言っていますが、地獄界です。その前の総理大臣も地獄です。地位や名誉は関係ないといっているんです。＜中略＞

貧乏人だから、といっても恥かしくないんだよ。いくら地位が高くっても、大臣でも地獄にいるんだから < 中略 >

地位が上の人ほど地獄にいますね。欲望で一生を過ごすから、あんな水呑百姓が、という人が天上界へ行っているんですから。大久保彦左ヱ門ね、びっくりしましたね。菩薩界できれいな光を出している。僕のところへ来ましてね、「大久保彦左ヱ門めにござります」、日本で有名な坊さんで、菩薩界へ行っている人は少ないですね。日蓮さんもね、永いこと自分から地獄界におった人ですよ。菩薩界に入らなかった。自分の蒔いた種が、その後、多くの大衆を狂わしてしまったという責任を負ってね。あの人、あの世では知らない人はいませんね。あまりにも有名で、謙虚なんです。今の創価学会のやっているようなものではないですよ。心のきれいな人達は、例え貧乏でもりっぱな人がたくさんいる。だから金額の高さや地位が人間の値打ちを決めるんじゃないんです。 < 中略 >

某氏 今世でだめなら来世で、来世でだめならまたつぎの世で、という気持ちですね。

高橋 しかし、この地上へ出て来れるかどうか疑問ですよ。たくさんの霊が地上へ出て霊の勉強をしたいと待っているんですから。私は七八〇年後にもう一度、地球上に出ます。それからまた、他の天体にも生まれます。その天体もわかっています。この地球は、七〇〇年位には調和されるからです。ユートピアになるからです。その時は、今のような公害は一つもなくなります。そして、今の日本は気候が変わります。現在の、アフリカ、南アメリカ、それからインド、この方面は、現在の日本と同じように、春夏秋冬が最も調和された国になります。そして、アフリカの大西洋岸のところに大きな宇宙ステーションが出来ます。そして、他の天体と自由に交通するようになります。そういうようになっているユートピアに、私達は生まれてきます。七八〇年後です。その途中において、かつてイエス・キリストといわれた方がアメリカに生まれます。シカゴという処へ生まれます。その時にみなさんは、天上界にいて協力するのです。天上界からこの地上界を見て、またあんなことをしているということになっているのです。

某氏 シカゴへは本体がでられるのですか。

高橋 本体です。分身の方はフィリッピンに出ておられます（故アントニオ・アグパオア、通称トニー、心霊術者）。科学に周期律というのがありますね。この物質の周期律と同じように、霊の周期律もあるのです。我々の生命も、やがてはあの世へ帰ります。 < 中略 >

イエス様は、十字架に掛けられた時は、自分の霊は、自分の肉体が十字架に掛けられたのを見ておられたのですね。その当時は、イエス・キリストとはいわず < 後略 >



四月六日

神田共立講堂に於ける G L A 五周年記念講演会 演題「自力より他力への道」

「丁度、昭和四十三年七月、信じられないような靈的な現象、本来私は、靈的現象という<中略> 夜の十時頃から私達は肉体から抜け出し、向うの仲間達にその道を説いております。一方において、もうすでにニューヨークに於ても、我々の仲間が呱呱の声を上げようとしております。そして、これからは、むしろ日本よりかアメリカに私の説いている神理は広がっていきます。しかし私はあくまでも、自分が説いているものではありません。私は代弁者なのです。我々は急がずとも徐々に人間の普遍的な神理を、心の物差しとして、心の中に法灯をかざして行くようになるでしょう。その為に、我々はすでに台湾方面にも我々の仲間が呱呱の声をあげました。私達は一面識もありません。 <後略>」

四月十日～十二日

宮崎、青島国民宿舎に於ける研修会。

国鉄のストにより参加者が減ることが心配されたが、全館貸切りの超満員となる。「霊友会」から分派した「霊〇会」という教団が神戸にある。その教団から二十名が参加した。信次は、会長の次という人に、その教団の会長に憑いているものを入れさせた。

「わたしは古狐でござる、女性を抱いて、金を集めて、金というものはいいもんじゃ」と、その人の顔は、全く狐に変わり凄い形相で、その教団の二十名の信者達は茫然自失の態であった。研修会の二日後、四月十四日の関西本部の講演会には、その霊〇会の会長も来たが、金銭的な執着が強く、話を聞くだけに終わった。

昭和四十八年七月に正法に帰依し、この研修会に出席した福岡のI氏は次のように語った。六人ほどで信次の部屋を訪ねた。I氏の番になった。信次は半眼になって、氏の想念帯を見ている様子だった。氏は事故の後遺症の為に腰痛に悩んでいた。何も言わないのに、信次は「三十六年にありましたね。『一日一生』の意味を良く考えなさい」と言った。事業をしている氏は、机の上に山のような仕事を残して研修会に出席していた。信次は「沢山の仕事を残して...。『一日一生』です。事故の日はいらいらしていましたね。八正道からはずれるとまた悪くなりますからね」、と言って光を入れた。光を入れた信次は「フィリピンのトニーだったら、四十万円はくだらないでしょうがね」と笑っていた、と。

昭和四十九年五月二十三日 二日市（福岡県）

「こうして九州への講演も佐賀県では丁度三回近くになり、当地でははじめてであります、およそ信仰なんて言うことになると、非科学的な何かをおがませるんじゃないか、或いは、そういう一つのお経を上げて、先祖を供養したり、偶像を祭って拝むことが信仰ではないかと、恐らく多くの人を感じているのではないかと... <中略> 信じようと信じざるとにかかわらず、真実の人間の心の声というものは、人間は見逃すことは出来ないのです。永遠の生命として人間は誰も皆、神の子なのです。人間は金の高さや地位の高さによって価値が決まるんじゃないのです。人間らしく生きている人達こそ本当の神の子なのです。足ることを忘れられ、自分さえよければ良いと生活している人達は、やがて自分の首を自分がしめるようになっていくのです。...幾人かの人達を通して実験してみましよう。」そして転生輪廻の証明へと入っていった。

六月

京都、中心山荘に於ける研修会

「私は二十年近く冷え性で困っています」と。信次は婦人の後ろに、白い着物をつけた修験者が立っていた。「あなたは二十年くらい前から厳しい肉体業をしましたね」「そうです、滝業もやりましたので冷え性になったのです」と言った。地獄霊は信次の声を婦人に聞えないようにしていた。憑依している修験者に信次は言った。「この女性から離れることです」と言った途端「滝業をしているのを見て、力を貸して協力するのがなぜ悪い」とくっつかかる。「お前自身が地獄に堕ちていて、この女性を救うことなどできぬことだ」と信次は言った。お前は生前、家族を放り出して、家族の者を路頭に迷わせ、修業中に谷底に落ちて死んだのであろう、と信次の口からつぎつぎと厳しい言葉が出てくる。信次の守護霊の言葉であった。「光が強くてお主を見ることができん」とひれ伏してしまった。「救ってやりたいと言っているが、本当は自分の行く場所がないので、憑いているのだろう」と言うのと「わしも救われたいのじゃ、この寒い場所から救って下さい、この通りじゃ」と地獄霊は言うの

だった。

「お前は働くことがいやで、家族の生活を見て見ぬふりをした。家族に温かい言葉すらかけたこともない、違うか」と厳しく信次は言った。「よし子、許してくれ、父ちゃんは悪い父ちゃんだった」と修験者の心に仏心がよみがえって来た。婦人の体を通してわんわんと大声でなっている。「今、肉体をかりている女性に対して、今まで狂わして来た罪についてはどうか」、「許してくだされ、神だ、竜神だと言って迷わせて来ました。今までの罪を許してください」と、婦人は一人で二役を演じていることに会場は不思議そうに見ていた。こうして修験者は婦人の体から出て行った。彼女の顔は赤味がさし、「カイロが入っているように暖かい」と言った。「地獄に墮ちた修験者でしたよ」と信次が言うと「ヒャー恐ろしい」と言って、信次に頭を下げ降壇するのだった。

花-0041.jpg
(5460 バイト)

「月刊G L A」昭和四十九年八月号にみる当時のG L Aの状況

「お願い、最近、会員同志で意識に光を与え霊道を開く例が多くなっています。これは非常に危険であり、絶対にやってはいけません。霊道開眼は、先生しか出来ません。守護霊か魔王かの見分けが普通では出来ないからです。光を与えないのに霊道現象が起った場合は必ず本部に連絡して下さい。そして先生のご指示を仰ぐようにしてください」と注意書きがなされた。

「困ったことが多発したんだネ」

「これは、一般によく知られている『手かざし』や類似の行為によって『浮霊』等と呼ばれ、霊が突如として出てくることがある。その霊が守護霊か地獄の霊かの判断がつかないので厳に戒めたのだ。信次はいつも、その霊が『見えて』『聞えて』『話せる』なら信じなさいと言っていた」

八月二日

志賀高原・熊の湯温泉における夏季講習会

遠くは北海道、九州、沖縄方面から大学教授、医者、裁判官、芸術家、商人、工員、教師、実業家、主婦、サラリーマン等が集っていた。中には論戦を挑んでくる人、面白半分の人もいた。しかし信次はどんな気持ちで研修に臨もうと一向に差支えなかった。人間の真実な在り方の一つでも二つでも理解してもらえば信次は満足だった。超満員だった。信次は会場を肉眼と第三の眼で見る。不調和な者が多いと正直なところ気が重くなった。講演は二時間半に及んだ。この日は「人間はどこから来たか、どんな目的と使命を人間は持っているのか、死とは何か」というものだった。しばらく休憩してから質問の時間に入った。五十ほどの小太りの夫人が手を上げた。

「先生、私は幼少の頃から神様の声を聞き、不思議な現象を経験しましたが、『心の原点』（信次著）を読んでから、私の神様に疑問を持ってしまい、肉体的にも精神的にも苦しいのです。どうぞ教えて下さい」とS・K子はうつむき加減にボツボツ話した。「今も体がしびれています。救って下さい」と手を合わせた。「あなたは小さい頃から、屋敷の中のお宮を拝んでいたようですね」「はい、私の耳元で、稲荷大明神であるぞ、守り神じゃ」と言っていました。「お母さんも熱心に信仰していましたネ。」「ハイ父が亡くなりましたので、母が受けついで信仰して来ましたが、十八のとき亡くなりました」と答えた。「なぜ早死にしたのです。」「信者の悪い業を受けて...と神様がいました。」「ハハア、あなたの神様がね」と信次が言うと、会場から失笑がもれた。「Sさん、お母さんは感情の起伏が激しく人格が変わりましたネ。」「ハイ、神様が母にはいる時は、母と思いませんでした」と言った。そして「私は何も悪いことはしていません。」「あなたは善悪の規準をどのようにしていますか」と信次が言うと、夫人は急に感情を高ぶらせ、ひらきなおった。「私を指導している神様は本物なのでしょうか」と目をつり上げた。信次は自分で確認してもらうことにして、Sは壇上にあがった。「神様を入れて下さい」と信次が言うと「そんなことはできません」と言った。しかし、その内に合掌した手が上下運動を始め「ホー、ホー、ホー」、「ホーホケキョ」とうぐいすの鳴き声で出て来た。

彼女はうぐいすの神様ががついているというので新潟方面で知られていた。「ウグイスの霊ではない」と厳しく信次が言う と、「稲荷大明神じゃ」と言う。「稲荷大明神でも何んでもない、ただの動物霊」と信次が言うと「この馬鹿女、こんな所へ来るなど言ったのに」と本性を現わしてきた。「俺はこの屋敷に住んでいる狐さ、この家の先祖に殺された。そのうらみをはらすために、この女を一生苦しめてやる」と狐は涙を流し始めた。「百年以上も、この一族のものに、うらみを持ち続けても、お前の心は休まるか」と信次はその是非をいいかさせた。「お前の気持ちもわかる。住みかを追われ、子どもを奪われたとしても、お前より弱い他の動物たちにお前がそうしなかったと断言できるか。許すことだ、無慈悲に殺生した罪はたしかに悪いが、許すことによってお前も救われ、相手も前非を悔いることができよう。許すことだ」と信次は誠心誠意こういつてきかすと、彼女の背後にしがみついていた白狐の姿は消えるように去っていった。狐が去ると、彼女は顔に赤味がさし、体がポカポカしてきた。「白狐でしたネ」夫人は心の中で神様を呼んでみたが、答えが返ってくるはずもなかった。そしてSにそれから心の正しい規準を説き、正しい反省の生活をするように話した。するとSは信次に感謝の意を表わし、一礼すると会場に消えて行った。

「白狐が百数十年も、うらみを持ち...」

「一寸の虫にも五分の魂と云うが、信次は動物霊、特に狐について次のように言っている。狐にも魂がある。うらみ、つらみは人間ほど感じないが、蛇とか狐の場合は、地球上での生活経験が永いので、他の動物たちより人間に近い感情を持っている。人間より単純ではあるが、奸智（悪る知恵）が働く場合がある。しかし、しょせんは動物的で、本能的であり、本能の命ずるままに生きている。動物が憑依する場合は、大抵は狐が憑く、人間の意識を通じて話すので、まるで人間が語るような調子になってくる。」

「なぜ、日本の霊的現象には狐が多いのかナ」

「それは稲荷信仰が多いからであると信次は言っている。稲荷大明神はあの世の天使の役柄である。決して狐ではない。五国豊饒の神として地上の善なる人たちを助けたり、商売繁盛にも力を貸してくれる。もちろん、天使が直接手を下すというより、天使の手足となって働く狐たち（使い姫）がその役になっている。そのため、お稲荷様を拝み、念願が叶ったら礼をいい天使のもとへ帰ってもらえばいいが、人間は欲が深いので、社をつくり年中頼み込むということになる。その内に動物の本性を現わし、怒り出し家の中を不調和にしていく。外国には蛇の信仰が多いようだ、と。」

昭和四十九年九月

演題「釈尊の成道」

「...前略... 氏神様にお参りするの当然だ。何を邪魔するのだ。このようなことを言って押し問答がありません。不思議なものですね、神社がこのように汚れているもの...後略...」

九月

千葉の教育会館の講演会が終り、信次を囲んで二十名程で夕食会が催された。講師の一人、渡辺泰男氏も出席した。ふと、信次が「GLAの三大事件というのがありますね」と話し始めた。「先づ、去年のI事件」それは、この一、二年で男性の有力な過去世を持った人が出てきた為に、それまでは現証指導というと、華々しく活躍していた女性が、ひがんだか、ねたんで起したトラブルである。「次にW事件です」これは信次の分身と過去世で兄弟関係にあり、ある地方本部の設立に大変功勞のあった人だったが、ワンマン社長の性格丸出しで、運営上、将来に問題が残りそうだというので信次がうまく処罰した件である。「で、三つ目は」「はいそれは、あと二年半すると（註・昭和五十二年・後述）起ります。前の二つとは比較にならぬ大事件です。そして、その事件を通じて、本物とにせ者とがふるいにかけてられるのです」と予告するのだった。

「昭和五十二年頃に起こる、本物とにせ者がふるいにかけてられるGLAの大事件とは」

「別の項で詳しく述べている「その後のGLA」のことだ。信次も心を痛めていたのだろう。まったく驚きだ。」

同じく九月

九月二十日から二十二日の盛岡の研修会に渡辺氏は信次のお供をした。信次たちの車が長いデモ行進にさえぎられ、幾度となく進行をはばまれた。あの、人を惹きつけずにはいない温顔の信次が、顔をしかめて、「困ったことですね」「闘争のなかに調和はありません」と独言のようにつぶやいた。

盛岡の研修会は、はじめは「つなぎ温泉」で、次は盛岡の公会堂での講演会の予定であった。渡辺氏は持ち時間、三十分で信次の前座をつとめたが、開演前に控え室に行くと、ある講師と、ある特定の人物のことをしきりに話をしていた信次が、「渡辺さん、縁なき衆生は度し難しなんですよ」、「これだけ言っても、まだわからないのかと、説いても説いても結局駄目な人は、駄目なんですよ」と駄目を押すように信次は言った。

十月十三日

大阪講演会

信次は「靈道を開くことを目的として八正道をやるのではない、日常生活に行ずること（註・実践）が尊いのです。」そして講師達に向けて、「あなた達は、ぼくが説くことを、細かく日常生活に密着するように話をしなさい」と言った。

十月

信次の高弟の一人、園頭氏は「なぜ、お釈迦様は二千五百年して日本に生まれることを予言されたのでしょうか」と信次に質問した。



「ジャブドバー」

高橋信次

ある方からこんな質問が来たので今回はそれに答えることにしよう。質問の要旨は、ゴードマ・ブッタは、なぜ日本を再生の地としたか、どうしてアメリカや他国を選ばなかったか、というのです。一口でいえば、仏教正法が伝えられやすいからでありました。二千五百有余年前に、釈迦は、ジャブドバー（東方の国の、ケントマティー（都会）において、ふたたび正法流布を行うと弟子たちに宣言しました。どうしてこのような宣言になったかといいますと、今日の世界事情がどのように動き、人類の意識がどうかわかっていくか、ということが、ブッタには理解されていたからです。まずこのことが第一点。

第二点は、正法を再興する場合の地理的条件が加味されたのです。世界の交流がはじまったのはせいぜいここ百年ぐらいの間です。それまではごく一部の要人、商人を除いては、ほとんど他国との交渉を持つことがありませんでした。また持てなかったのです。正法が流布されていくには、言語や地理的条件が当然考慮されます。＜中略＞

第三点は、正法を理解するにはそれを受け入れる基礎的土壌が必要です。伝統や風習が異なり、ものの考え方に大きなへだたりがある場合は、正法を突然持ち込んでも、これを咀嚼するのにかなりの時間が要ります。しかし日本における仏教の歴史は古く、そして伝教大師が法華経を中国から持ち込むことによって、仏教は定着したのです。その後、＜中略＞ここへくるまでには、現象界の状況が絶えず見守られ、実在界で計画されて来たものです。それゆえ、ブッタの公約は、必然の形をとって現在に至っているわけなのです。第三者から見ると、アメリカやヨーロッパでも、と思われるでしょうが、右の事情を参酌すればおのずと理解されてくるでしょう。正法流布は、こうした計画性の下に進められてきているのです。

Home

十月

園頭広周氏が、ある人に宛てた（昭四十九年十月十五日付）書簡より要約。

合掌、十九日から長野県の奥志賀高原での特別研修に出席するために、十八日に上京します。来年一月に高橋先生がアメリカに行かれるという話は延期になるということです。高橋先生は、早く指導者養成をしなければと言われるようになりました。十三日、大阪の講演会で（前述）＜中略＞ということ力を説かれました。そして講師の中には「守護霊に聞いてみます」とか「あなたの守護霊がこういっています」とか言って、実際には守護霊が見えるのでもないのに、さも守護霊が見えるかのように装って、自分の霊能を誇示するかのように指導している講師がおります。これは本当ではありません。＜後略＞

引用した書簡は、神奈川県で会員が増え、世話役をしていた「ある人」に個人指導を頼む人が増えてきた。そのために、「霊道を開いていない者は、個人指導をしてはならない」という通達がG L A本部事務局長名で出された。そのことに対して書かれた手紙であった。

十月十九日

長野県奥志賀高原における幹部特別研修会

この時、信次は「ソクラテスは毛沢東として生まれ変わった」と言い残している。そして、「園頭さん、僕は

今のGLAをつぶしてもかまわないと思っています。東京本部の講師達は少しも勉強をしません。」と。そして、「この頃、なにかあると、高橋先生助けて下さい、なんとかして下さい、という人が多くなって困っているんです。ぼくは僕で修行しなければならないことがあり、また天上界へ行って天上界の人達を指導しなければならない、そういう時に、ぼくの名前を呼ばれると、助けに行かないわけにゆかない。もっと、みんな自力だということを知って欲しいのです」と、信次は心の内を吐露している。この特別研修の時、信次は「実在界・あの世」について話した。

「ブッダはおもにインドで生活しましたから、ブッタの天上界の住まいはインドの上空に、また、イエス様の住まいは、今のイスラエルの上空にあります。インドの上空に釈迦の宮殿があり、その宮殿の番人をしていたのが園頭さん、あなただった。この人はきびしい人でね、ぼくでも時々叱られることがあった。法の番人、それがあなたの使命なんだね」と。

「法の番人だと？」

「法律は人間がつくり出したもの、時と場所によって変えられる。しかし、ここでいう法とは、人間によって変えることの出来ない神理。園頭氏は、イエスの時代のガブリエル、宗教改革のカルバン（カルビン）...」

「だから、法を歪める人には特に厳しいのダナ。〇〇の科学の〇川 法氏批判の書が何冊もあるからナ」

この特別研修の時、信次は途中で車を止めて、弟子達にもぎ立てのリンゴを買って配った。

信次は「ソ連は悪魔の動かしている国ですからね」と言った。

信次は「如来とか菩薩とか、光の指導霊は、自分で自分のことを言わないのです。自然に人が言ってくれるのです。自分から言うのは、ニセモノが多いのです」と言っていた。園頭氏は、自著の中で、多くの真実を書いているが、この言葉には自戒し、書くべきか迷った、と言う。

東京、中野のTさん夫婦のはなし

ある時、Tさんは信次の個人指導を受けた。信次は言った。「あなたはすぐ腹を立てますね。そして、おかしなものを祭っていますね。あなたの身体を大きな蛇が取り巻いている。こんなおかしな信仰をしてはいけませんね」と。そのようなことがあって数年後、奥さんが脳卒中で入院。Tさんは、夜、坐っていると「二週間」という声がした。二週間したら快復するのか、それまでの命かと思った。正法の生き方に従い、正法を念じる以外にないと静かに反省した。そうしたら、二週間したらピタリと治ってしまった、と。

十月二十六日 東京講演会

十月のこと。GLA関西本部での講演が始まる前、控え室に入って来た信次が「園頭さん、如来は教の大綱を説く。菩薩は、如来が説いた教えを日常生活にどういかにするかを説くのです。しかし、如来がいなくなったら菩薩も教の大綱を説かなければならないのである」と言った。そして、如来は、未来のこともすべて見通す力を持つのです。日本に生まれるのを予言したのは、二千五百年経った時に、日本が世界に大きな影響力を持ち、正法を説くにふさわしい国になることがわかっていましたからです」と言っている。

十月のある日、

生駒の三鶴山荘に泊った信次と園頭氏は、中秋の名月の露天風呂でのこと、信次は言った。

「園頭さん、ホー今度も、インドの時と同じように九つ違いですか。僕達が天上界で、今度は誰がどこに生まれるかを決めたのは、寛永二年でしたね。北海道にと思ったが遠すぎる。それで、インドのカピラに似ている長野を選んで、そして、次に父と母を選んで、まず、その父母になって下さる方が先に生まれるということになった。」と、そして、「徳川幕府の体制のままでは正法は説けない。そこで、徳川幕府を倒して天皇制にもどすた

めに、北畠親房に『神皇正統記』を書かせ、勤皇思想を高めることにして、明治維新をやらせた。僕の分身は木戸孝允として、園頭さん、あなたの分身は西郷隆盛として鹿児島に出た」と信次は語った。

そして、しばらく沈黙が続いた。

「竹林精舎のあそこの所に温泉がありましたね。伝道から帰って来る途中で、突然雨が降り出して、赤土の土埃りがポコポコとなった所に、大粒の雨粒が落ちると、小さくポコッと土煙りが立って、足は埃りだらけになる。それをあの温泉で洗い落としていた。一度インドへ行って見たいものですね」そして、また沈黙が続いた。

「インドでの回想が」

「竹林精舎の南に、今も温泉が。ヒンズー教徒とイスラム教徒の入る湯は別々になっている。インドへ行ったことのない信次が幽体離脱（肉体と光子体の分離）で。不思議といえば不思議だが自由自在」

十一月の大阪講演でのこと。

信次は「園頭さん、今日の講演はインドの時と同じようなやり方で、私に代表質問して下さい。それに私が答えるという形で、今日の講演をやりましょうか」と。そこで、園頭師は「弥勒菩薩下生経によると、弥勒菩薩が生まれ変わって、出て来られるように伝えられていますが、本当はどのように伝えられたのでしょうか」と。

信次「お釈迦様は東の国、日本に生まれて法を説くと予言して亡くなったのですが、人々に書き遺す役目を持った弥勒菩薩は正しく書き遺すが、お釈迦様は再び生まれ変わってこられることはないだろうと後世の人が解釈して、削除したために、弥勒菩薩だけが生まれてくると伝えられてしまった」と言い残している。

十一月十六日

宮崎講演会 参加六百名

十一月十七日

福岡市東光中学校に於ける講演会 参加千名

宣伝カーによる放送文の一例

「街頭のみなさん、こちらはG L A西日本本部の宣伝班であります。ベストセラーをつづける『心の原点』『縁生の舟』（改題『心の発見』、『原説般若心経』）の著者、高橋信次先生の大講演会が、十一月十七日午後一時より、東光中学校体育館で開催されます。人々が「心の原点」を見失った時から<中略>人生を明るく豊かなものにするために、十一月十七日午後一時よりの東光中学校での講演会にぜひお出で下さい」というものだった。

ポスター三百枚、立看板五十、ビラ三万枚、葉書五百枚が配布され、約千名の人が集った。真光文明教団の「手かざし」で眼が見えなくなっていた子供は、眼に動物霊が憑依していたのだった。信次が、その憑依してい

る蛇の霊を取り除くと、眼が見えるようになった。不調和な信仰は厳に慎まなければならないという思いで聴衆者は帰っていった。

年の暮れ

湘南地方の会員が、小田原で信次の講演会を開きたいという強い要望で、昭和五十年三月の信次の講演に向けて準備されていた。湘南地方全体で会員が二十名ほどであった。相談を受けた園頭氏は、三月に向けての宣伝講演を実行した。千名の人が集まり盛会であった。新宿から来た人に奇跡が起り、新宿でも師の講演会が開かれた。三回行われた。千葉の船橋から協力する人があらわれ、船橋で講演会が開かれようとする直前、船橋の責任者が、信次の実弟の興和氏（本部事務局）に呼ばれ、「GLA本部に講師もいる、なんで九州の」というので中止されている。

十二月になると、「園頭さん、僕はもうみんな話したし、書くことは書いた。もう話すこともなくなった。今日はなんの話をしてしまおうかね」と言って登壇していた。

昭和四十九年のある日

明治天皇の落胤の娘である中丸薫氏が、大阪の講演会に信次を訪ねた。中丸氏は個人的外交官として、諸外国の王、大統領、首相と直接に逢うことの出来る人である。中近東のオーマンの砂漠を走っている時、突如として天から「祈れ」と声がした。車から降りて、砂の上にひざまづいた時、再び「身につけている宝石、貴金属はみなはずせ」という声がした。しばらく祈って目を明けると、何百万もする宝石、貴金属がみな失くなっていった。探したが、見つからなかった。日本に帰って来て、信次のことを知った氏は、八起ビルを訪ねたというのだ。すると信次は、いきなり「オーマンでは大変でしたネ」と指摘した。

そのようなことがあって、正法に帰依した人である。その中丸氏が信次を訪ねた日に、園頭師は信次に質問した。「世界が平和になるためには、ユダヤのフリーメーソンの問題を解決しておかなければならないと考えますが...」信次は「今はまだ言う時ではない」と言った。中丸氏も「今は言わない方がよい」と。その後で信次は「これから共産圏に飢饉が起る。日本をダメにしようと計画した国は、その内部から崩壊することになる」、と。

「中丸氏も、いきなり指摘されて、ビックリしただろうネ。昭和五十一年三月の和歌山県白浜での信次の講演ビデオでは、カメラが会場の彼女を長々と追っている」

「うん、そしてソ連が崩壊して、アメリカも青息吐息」

また昭和四十九年は、ユリゲラーのスプーン曲げにはじまる超能力ブームだったが、信次は『ユリゲラーは動物霊が支配している。正しく見ることです』と言っている。当時の週刊誌等によると、『気分がコロコロ変わったり、気むづかし家で大変に困った』等と書かれているが、超能力は、あの世の霊の協力によってなされる。ユリゲラーは動物霊の協力によって、平成四年四月には、またテレビに出演して...。超能力者という人を正しく見ることだ。超能力にあこがれてはならない。



昭和五十年（一九七五年）

一月二十一日

経営研究会発会式

いかにして、宗教を経済の中に採り入れるか、正法による社員教育もこれから必要であるという主旨によって、信次は経営研究会をつくった。こうして、信次は経営の中の人間教育として、正法が入っていかねばならないという考えのもとに「人間科学研究所」所長という肩書きで講演をしている。

「宗教という言葉を取り離して、『人間科学研究所・所長』と」

「そう、月刊『GLA』のなかにも「正法と経済」について多くの記述がある。」

「正法と経済、その目的とあり方」

一九七三年十一月号

本稿は、さまざまに変化し、目的を見失いつつある現代経済の姿にメスを加えながら、正法に照らした経済の在り方、経済とは一体何であるのか、人間は経済の奉仕者なのか、それとも経済が人間の生活を豊かにするためにあるのか、未来社会の展望などにわたって論を進めてみたいと思う。まず経済の概念について考えてみよう。辞書によると、経済とは金を儲けたり、使ったりする各種の行為又は状態をいう、としている。経済学は、人間の欲望充足のための手段として経済を見、ここに焦点を合わせながら、学問としての論理を展開する。現実の経済行為は、辞書や経済学のとらえ方を裏書きするかのよう、激しく、冷酷なまでに動いている。それこそ、政治も、教育も、科学も、労働も、文化も、現実の経済の動きの前には手も足も出せず、これに翻弄されながらも、かろうじて命脈を保っているといえるようだ。何をするのも金、生きるも金、いくなれば経済の御厄介にならぬものとならないのが現実 < 後略 > 」

一九七六年一月まで連載され、さらに一九七五年一月二十一日から九月十九日まで六回にわたって説いた「真の経営者の道」は、正法による理想世界を建設するためには、正業（正しく働く）による経済革命、経営革命の行なわれなければならないとする目的をもって説いたのである。

一月五日 東京・新年講演会

同じく一月

関西新年講演会

演題「道」

おめでとうございます。関西本部で講演するのもこれで四年目の新春を迎えました。昔の<中略>

自由諸国に於けるイタリーの経済破綻を知っているでしょう。日本はこのまま行ったらイタリー以上の苦境に立たせられるでしょう。<中略> 反作用というものは、心の中の念も同じ結果を呼ぶということを知らなくてはなりません。念ずるということは、やはり、相手の心のきれいな人を念じれば逆に念じた方がやられます。また、相手の方が不調和で、また、祈る方も不調和なら、それを相手は完全に受けて現象化されます。<中略> 反対しちゃいます。ストーブと同じですね。ですから、やるのもけっこう、<後略>

二月九日

信次は毎月の定期講演会のため東京を発ち、目的地の新大阪に着いた。会場にはもう何千という人が集っていた。講演は「人の道」についてであった。講演が一時間半、質疑応答が二時間半、通算四時間休みなく続けられた。講演が終ると、ひとりの面会人が来ていた。「私は神奈川から参りましたKと申します。私の弟は多くの人々に神の道を説いていますが、急に病気になり品川の病院に入院しています。医者は脳内出血と申します。手術を明日にでもしたいと言っていますが、どうしたら良いか教えて下さい」と持参した三十枚近い写真をひろげて信次に見せた。ボケて、二重写しで、おまけに写真の中に魔王や動物霊の姿がはっきりと写っている。これには皆驚いていた。「手術はちょっと待って下さい、明日病院に行ってみましょう」と信次は返事した。信次は翌日病院へ急行した。

部屋には「面会謝絶」とあった。信次が病室にはいって見ると頭から腰にかけて完全に動物霊が憑依していた。Kの弟は時々ケイレンをしていた。信次に同行した僧侶の村上氏が、汗を流しながら動物霊を除いている。信次は心の中で、当人の傍にいる魔王に神の子としての道を説いた。三十分ほど経った時、意識不明がよみがえり、自分でトイレに立った。こうして、Kの弟は日に日に回復に向い、手術することもなく退院したのである。医者も信次達の処置を不思議がっていた。Kの弟は退院後、信次の事務所を訪ねた。「あなたは神につかえる身と思っているが、自分自身の本性を知ることなく、他人を導くことは危険この上もない」と話すのだった。「私は家に祭ってある神様を信じて、そのお告げを教えておりました。」「その神とやらをあなたの目で見ましたか、話しましたか」と信次は質問した。「見てはいないが、胸のあたりから聞えてくるのです」、「イライラしたことは」、「ハイ自分であって自分でないような、たびたびイライラしました」、「水をかぶれば体は確かに清浄になっても、心はどうでしょう」と信次は言った。「心を清浄にするにはどうすれば良いのでしょうか」「あなたが日頃、思っていること、行っていることを、正しい規準に照らして生活を改めてゆくことです」と信次は話した。Kの弟は頭を垂れて聞いていた。

二月九日（昭和五十年） 関西本部講演会

演題「正しい思念と行為」

「永遠の生命と言いましても、今皆様自身は、永遠の生命の過程、最も厳しい不安定な団体的な物質世界に於いて、先祖代々伝わってきたところの... <後略>

三月初旬 宮崎研修会

参加者 四百六十名

三月十五日

小田原講演会開る。講演要約抜粋

ノイローゼ、気違いと言われる人は、これは全んど脳細胞の病気ではありません。心の状態が地獄界に通じて、本来、肉体を支配すべき一人が、自分自身を他人様に譲り渡してしまった状態なのです。人格が、ころっと変わってしまうのです。或いは、今、語っておいても、次にはもう、ガラリと性格が変わってしまう人達があるでしょう。或いは、お酒を飲む。飲まない時と、飲んだ時と心がガラッと変わって、人格が変わっている人達がいるでしょう。こういう人々も、同じように、不調和な世界の住人達に憑依されて、船頭さんが変わってしまうのです。我々の思う、想念というものはエネルギーなのです。我々自身の心に、相手を恨む心を持ったならば、その恨みの心は、そのエネルギーは、その振動は相手の心に通じ、相手の心が美しければ、自分に反作用となって返ってくるものなのです。眼に見えないがゆえに、我々はないがしろにしております。お金とか物質とかいうものは、我々の生きる上に於て、必要なだけ存在すればいいのです。ところが、我々の欲望は限りなく広がり、我々の欲望は無限大に外に向いていきます。よく、ある人は、労使の闘争、上層と下部層の闘争の中に、文明は発達していくのだと説いている思想があります。しからば、我々は文明のために、人類はあるのでしょうか。人類のために文明があるのです。その錯覚を起して、心を常に格闘の中に、間違った方向に進んでいる人達もいます。或いは、間違った宗教を人々に教えて、そして自分自身の欲望を満たそうとしている人達もあります。しかし、やがて彼等はその罪を自分で償う時が来るのです。

三月二十二～二十四日 宮崎研修会

演題「正法と現代宗教」

「今年もこの、美しい自然の中で研修会を開くことが出来ましたことを、本当にうれしく思います。今から講演の内容は「現代宗教と正法」という問題について御説明してみたいと思います。この中にも、一生懸命に神様を拜んで、神様と言われる方が皆さんの肉体を通して出てこられる人もいます。或いは又、現代の宗教の中に、一生懸命やってG L Aの研修会を一つ見てこようという人も何人かいます。ごゆっくり、そういう人は見ていて下さい。まず、皆さんに神様というのは...中略...

「この人（高橋佳子氏）は過去世において、**卑弥呼**であったことを思い出しております。奄美大島から来られたこの二人のご婦人は、卑弥呼の女官をしていたのです。東京でデザイナーをしている護摩堂さん、映画俳優の中丸忠雄氏の夫人の薫さんは、ともに卑弥呼の大臣をしていた人達です。卑弥呼が邪馬台国の時、過去世を思い出し、インドで大日如来をなつかしんで祭っていたのです。その大日如来がのちに天照大神として祭られることになったのです」、と。

三月二十六日

北九州市小倉、毎日会館ホールで講演会開かる。毎日新聞、小倉商工会議所の機関紙に広告さる。

同じく三月

それは昭和五十年の三月のことであった。渡辺泰男氏）は、G L A本部の事務所立ち寄った。その時、信次の末弟の興和氏が、「渡辺さん、いつ頃から手伝ってもらえますか」と言った。びっくりしてしまって適当な返事をして渡辺氏はその場は帰った。ちょうどこの話のあった三月に、宮崎県の青島で研修会があったので、渡辺氏は思い切って信次の部屋を訪ねた。そして、興和氏から話があったこと、お手伝いの心の準備があること等を話した。信次は少し考えていたが、「今は、早いですね。二年後です。（註・昭和五十二年）」と答えた。信次は、その時、G L A誌八月号に載せる「釈迦伝」（のち、『人間釈迦』として出版された）の執筆をしていた。渡辺氏は信次が多忙な身でありながら、研修会のちょっとした合間も利用して筆をとっている姿に感心していると、信次は「渡辺さん、四十五年分も書くことはあるんですから、いくらでも書き溜めができるのですよ」と笑って言った。

四月五日

日比谷公会堂 GLA六周年記念講演会

演題「人間とは」

只今、紹介にあづかりました高橋信次であります。本日の題名は「人間とは何か」我々はややもすると肉体を持った自分自身ですら< 中略> 我々は大空を眺めます。夜は星が一杯あります。我々の見える世界は銀河系宇宙なのです。この宇宙の中に、しかも小さな地球という宇宙船の中に四十数億の万物の霊長がひしめき合い、ある者は闘争と破壊を依然として繰り返しております。ある者は宗派の争い、愚かしいことです。お天とう様は一つです。この地球という神の身体の中の一部を、我々はその環境の中で生活しております。皆さん自身が、この地球上で、その肉体舟、先祖代々伝わってきたところの、その肉体舟に乗って、我々は、この五官を通してあらゆる体験をしております。< 後略>



四月六日

神田共立講堂にて講演会

四月十～十二日

宮崎の青島国民宿舎にて研修会

信次の経営する「高電工業」の若井氏が、ビデオ録画に来て、「東京は高橋先生が一つ一つ指示されないと動きませんが、九州はその点、よく動きますね。このやり方を全国の人に学ばせるといいですね」と言った、と。

GLAの周辺

この当時のGLAの様子を見てみよう。

四月十六日付の園頭氏の書簡から

十日夜、自宅に岡山の会員から直接、電話がありました。関西本部のある講師が、あなたには蛇がついている、あなたは〇〇が憑いている、と言われて気味が悪くなりました。そんなに皆んなに憑いているものでしょうか、と。十一日の宮崎研修会に参加した人が、師の自宅を訪ねた時、こう言った。関西の人と同室になったら、その人がオーラーが見える、守護霊が見えるとか、守護霊がこういつている、という話ばかりで頭がへんになりました、と。

このようなG L Aの内部の傾向を心配した園頭氏は、東大阪、関西本部に於ける講演会の終了後、信次と話し合っている。その時、信次は次のように言った。「正法は人々の心に安らぎを与えるものですから、たとえ、霊を見ることが出来たとしても、不用意にそのことを告げて、その人の心に不安や恐怖心を与えることはよくありません。憑いているものが見えても、直接的には言わず『あなたはこういう心を持ちなさい。そうすればよくなります』という指導をしないとイケない。憑いているというなら、その憑いているものを離して、その人をよくする力を持っている者だけがいうべきで、実は見えてもいないのに、霊が憑いていると言って不安と恐怖心だけをまき散らしている人が出てきたことは、困ったことです。正法を実践するのが人生の目的です」と。

そして、さらに「一〇%の現在意識で『はたして、これは本当だろうか』としっかり確かめることである、ということです。正法を説くものは、常識も豊かでないといけません。この世の人達を救うのですから、この世の人達から『なるほど』と思われるような言葉遣い、態度、知識、教養などを身につけないといい指導者にはなれません。講師といわれる人達の中に、非常識な人がいるのは残念です。特にいけないのは霊道を開いているという女の人達の行儀の悪さです。世間の常識を重んずる人達は、そういう非常識な人達の言動を見て、それだけで正法の話しを聞こうとは思わないでしょう。」と信次は言っている。そして、講師達に対して、「もう少し常識を勉強しなさい、しっかり本を読みなさい」、とも言った。

Home

四月

京都・中心山荘での研修会

昭和四十九年十一月に遡って、信次達一行は、古代インドの時代、迦葉といわれた人が生まれ変わっているといっているので、台湾へ行ったことを思い出して欲しい。同じく、渡辺泰男氏に登場いただく。

「春に、台湾からSという人が来られました。若い頃から法華経の勉強をされて、来日された前の年に『餓鬼道』改題『愛は憎しみを越えて』という本を読んでいらっしゃる方です。高橋先生は、この本をお出しになる前から、この本を読めば必ず泣き出しますよとおっしゃっていました。読み終って、さっそく高橋先生にSさんは手紙を出された。ことあるごとに高橋先生はお話ししになっていましたから良く憶えています。そうして、文通しながら、先生は意識で台北まで行って、たびたび指導なさいました。ですから、台北に行かれないまでも高橋先生は、Sさんのことをよくおわかりになっていました。そうこうする内にSさんは、二千五百年前に先生に教えを受けている自分の姿を見てしまった。「今、あの人は自分のことを知りましたヨ」、と先生が側近の方にもらした一週間後に、その時感激を伝えてSさんから手紙が来たそうです。一時は、台湾、台湾とG L A内でもちきりでした。

そのようなことがあって、確か中京と関西の合同研修会だったと思いますが、京都の中心山荘というところでの研修会に、Sさんは十日間の観光旅行から合流されました。その時、私もお会いしました。ところが台湾で独自にやって来られただけに、こちらとは、行き方がだいぶ違っていたようで、いろいろと波紋が生じていたらしいのです。そんなことで、研修会の始まる前の日に、京都のホテルの一室で高橋先生が、Sさん他三名の幹部を呼んでお言葉を賜りました。「法を依りどころにせよ」というお言葉です。これは同席した三人のうちの一人の細野先生から翌日伺い、また数日後、先生からも直に伺いました。台湾には私も行ったことがありますので、直に

親しくなりました。

研修会も終り、東京への新幹線の中でも同席しました。もっぱら私とSさんだけが話をするようになりました。台湾という所は、中共との関係で、大変思想の統制の厳しい国で、心の教も内地流にそのまま説いたら思想とみなされ、一つの哲学、つまり意識科学として苦勞して説かなければならない、と。高橋先生がよく引用されるアインシュタインの $E=MC^2$ にしても、三十年前に学んだ、その一つ前のローレンツの変換式、式自体がアインシュタインの式より複雑ですから、それなりにこじつけが出来る。それから数日後、台湾に帰られるというので羽田まで見送りにまいりました。そうしたら高橋先生と一栄先生もお見えになり、一度帰りかけた高橋先生が、またこちらに戻っていらっしゃるのです。私のところへつかつかと寄っていらっしゃって『この間の式は間違っていますから気をつけて下さい』とおっしゃるのです。

新幹線では、先生は私より三つほど前の席におられたのですが、私どもの会話の一部始終をよくご存じでいらっしやいました。『はい。存じております。あれはローレンツ変換ですね』『よく気づかれました。そうなんです。新幹線の中だし、人前で指摘することもできず、本当に困りました。ターチンマラーという魔がおりましてね。誠に巧みに正法を説くのです。特に科学的な手法を駆使しますから、科学に強い人ほどねらわれます』『問答無用で押しつけるような態度でした。』『そうです。それが特徴です。関西でも色々なことがありましてね』と先生は私に色々のできごとをお話しして下さいました。」

同じく、園頭氏の記述を見てみよう。

「京都の中心山荘で研修会があることになり、葵さんが出席されることになりました。葵さんは日本に来られる直前に魔に支配されてしまいました。それで私が、関西本部長中谷氏に葵さんはおかしくなっているから気をつけるようにと言っていたのですが、葵さんから『悪魔をつかまえる法』というのを伝授されたと言って完全に欺かれてしまいました。研修会が終って大阪天王寺のステーションホテルに泊った時、葵さんは高橋先生から、「あなたは霊能力に興味を持ってはいけない。毎日毎日の生活を大事にしてください。関西本部長、あなたも葵さんに欺かれましたね」と注意されたのでした。」と。園頭氏は、この事件によって、悪魔はG L Aの講師達をねらってきていることを感じ、特に若い講師達に、地位欲、名誉欲にとらわれ、過去世の名をひけらかさないようにと、注意を促している。

そして、信次が昇天した直後、葵氏は五ミリ程の厚さの小冊子を発行した。開いてみると、聖徳太子も伝教大師も源頼朝も徳川家康も西郷隆盛も、みな自分の分子である等と書いてある。園頭氏は、葵氏が地位欲、名誉欲のとりこになったなど、残念に思っていた。ところが、葵氏 of 消息を伝える人があり、昭和五十二年になると精神病院に入院したという情報が伝えられた。その後、情報もプツリと消えていたが、その後の情報では、その会報には囲碁の打ち方などが書かれている、と。

「たとえ過去世で名のあった人でも、今世の生き方によってはタダの人以下。」

「まったくその通り。正法が出現すると魔が競い立つと言われるが、正法が広がってこの世界が光明に満されると、魔の足場がくずされるので魔も必死になって抵抗する。霊能力だけを求め心が欲望に満たされると、魔はその人を支配しようと近づいてくる。魔がその人を支配しようとする時はまず正法を説き、もっともらしいことを言う。そして、徐々に自分の方に引き入れる。十のうち九の正しさで信用させ、残りの一つで狂わせる。」

四月二十九日

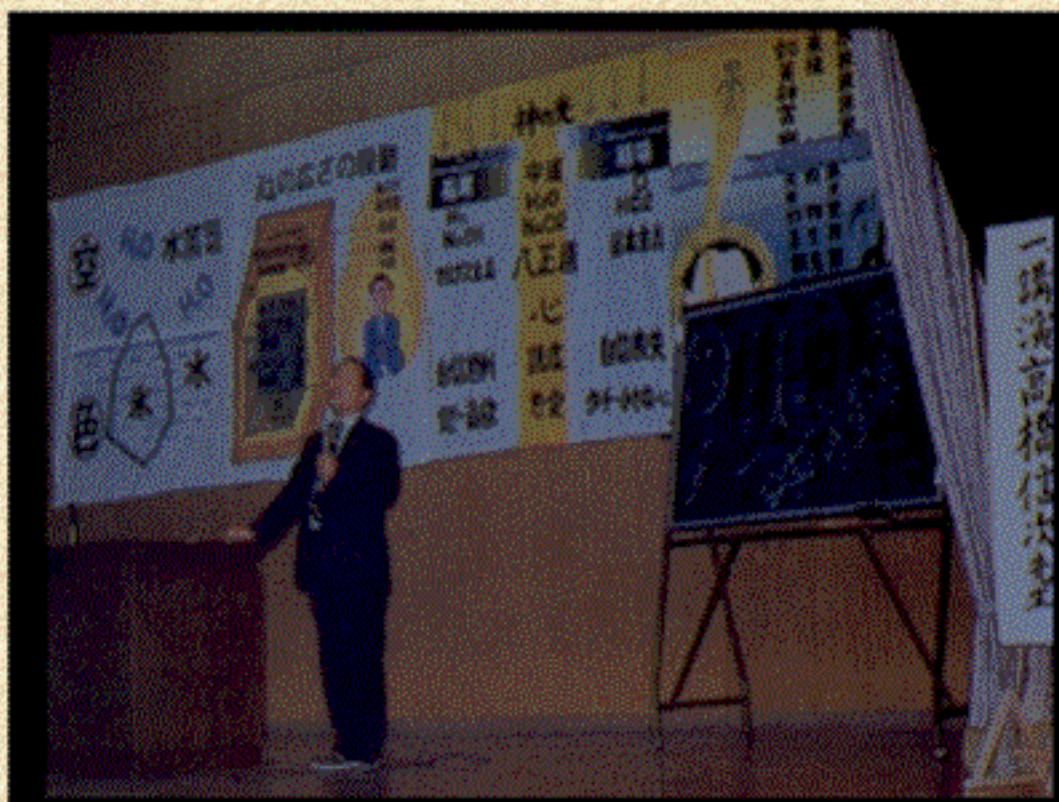
沖縄（那覇）講演会

五月二十二日

佐賀講演会

五月二十三日

福岡県二日市講演会



二日市講演会



二日市講演会

五月二十五日

西日本本部設立記念祝賀会



高橋師より西日本本部長を拝命する園頭氏

五月、

G L A 関西本部から『高橋信次講演集』が発刊された。（限定非売品）

六月十五日

大阪講演会

六月二十日～二十二日

京都中心山荘の研修会

六月二十六日

東京にて幹部会議

七月六日

金沢講演会

演題「心の原点」

「この北陸地方の中心、文化の都市に於て皆さんの前でお話し出来る機会を与えて下さり<中略> 人生航路の乗り舟であるところの、その肉体の船頭さんが降りた時には、皆さんの耳の穴もあいております。鼻の穴もあいております。しかし、私達は耳許で自分の悪口を言われても、怒ることすら知らないはずで、どんな臭いがあってもそれを感知することもできないはずで、こうなりますと、眠っている時の我々の心、魂というものの価値はどのようになっているのでしょうか。しかし、肉体の脳細胞の神経線維のそれぞれは、ちゃんと波動を、振動を起しております。こうなるとやはり、永遠のものというものは一体何でしょう。皆さんの肉体を支配しているところの舟頭さん、即ち皆さんの魂なのです。「そんな馬鹿なことはあるか、魂など存在する訳はねえよ」と、もし皆さんがそのように思うならば、皆さんの脳細胞は、あくまでも物ごとを受信し、送信する一つのコンピューター室にすぎないということなのです。或る医学者達は、物を考えるのは前頭葉だといひます。それな<後略>

[Home](#)

八月初旬

長野県志賀高原研修会 参加者七〇〇名

八月十七日

神戸講演会、神戸国際会館

演題「人生の意義」

「台風の中を、よくも多くの皆さんが御来場下さいまして、ありがとうございます。〈中略〉その全学連がどちらの方向に行ったかという、彼等は皆、優雅な生活をしている家庭の子息でありながら破壊活動をし、善意な多くの人々に迷惑をかけています。教えていただくべき先生に感謝の心も失っています。我々の心は教えて下さった先生に対する、師に対する感謝の心というものは行為で示したものです。最近はずっと逆の方向に進んでいます。当時の親は子供を育てる為に一生懸命です。金儲けと、親子の対話はなく、そうして自分のできなかったことを、何とか子供に満して欲しいという欲望が、有名校へとエスカレートしていきます。育てた子供がノイローゼと 〈中略〉

園頭氏の書簡より

「八月二十三日より三日間、中谷関西本部長に九州へ来てもらいました。その時、高橋先生が、東京本部の講師達の現状を憂えていられたことを聞きました。やはり私が案じていた通りだったのです。だから、自分一人でも、しっかりしなければいけないと思ったのです。あなたも一つ、真剣に考えてみて下さい。〈後略〉」

八月 岩手山麓・綱張荘での研修会

一日目 演題「正法と現代宗教・悟りへの道」

二日目 野外反省禅定

別の項で、園頭氏の心の窓を開く様子を参照していただいた。次に、北海道に住む菊地信一氏に登場いただく。菊地氏は、一九七五（昭五十一）年八月の岩手の綱張荘の研修会に初めて出席、心の窓を開き、古代インドの時代、ウパテッサ（舍利弗・シャーリープトラ・現代の園頭広周氏）と一緒に釈迦に帰依したという。菊池氏の心の窓を開いた時の情景。信次は菊地氏の方を向いて「あなた出て来て下さい」と声を掛けた。氏はおずおずと信次の前に出た。「ほら、そこにお客さんがいるよ」と信次は膝のあたりを指した。自分にも悪霊がついているのかなと氏は思った。信次は「どうぞ神様を出して下さい」と言った。「大宇宙大神霊仏よ...」と信次は祈りはじめ。菊地氏は、黙って目を閉じ静かに聞いている。信次は「パーティパーティパラカーティー」と異言で祈り始め、氏に光を入れていた。「そこに出ている霊よ、肉体を持っている人の口を通して語りなさい」と信次は何度も呼びかける。しかし、氏の口は開かなかった。「あなた何んで語らないの」「肉体を持っている人は心を丸く調和しなさい。イライラしてはいけません。あなたの心には、ひずみが出来ている」と信次は注意した。

菊地氏「師の長い祈りが続いているうちに、私の心は、だんだんと安らぎ調和されてきた。大いなる光が体中に満ちあふれてきたように思い始めた時、右耳の下あたりから霊がすーっと肉体に入って来たのを感じた。「私はこの者の守護神じゃ」と霊は師に告げる。「ああ今、肉体を 持っている人を支配しました」と師は参加者に言った。そのうちに突然私の口がひとりで動き始め、古代インド語を語り始めた。私は何んとも言えない懐かしさで、胸から込みあげてきて、涙を流しながら思わず師に抱きついてしまった。長い間会えなかった人とめぐり会ったという思いだった。止めどなく古代インド語が口から飛び出し、男泣きに泣いていた。肉体を持っている私には自分で話している古代インド語の意味が分からなかった。あとで分かったことであるが、本人の心と守護霊の心が調和され、同通していなければ、自分の話している異言の意味が分からない」と。そして、研修生全員で、「快樂に溺れ苦悩に喘ぎ、いろいろな迷いの末、辿りついた悟りの道、これぞ八正道...」という八正道讃歌を歌って研修は終わった、と。

九月

G L A本部の情景

八月の岩手の綱張荘の研修会で、心の窓を開いた菊地信一氏は、「心の窓を開いた人は、心の在り方によっては悪霊に憑依される危険もあるので、出来るだけ早く本部に来て下さい」という信次の言葉に従って、氏は本部

を訪ねた。前もって上京する日時も連絡していたが、信次はどこかの集会に行き留守だった。受付の女性は、受付用紙のようなものを出して、来訪の目的を書かせた。しばらくして、ひどく疲れた様子で、信次は帰って来た。氏が心の窓を開いた後、信次が意識体で現われたことを告げると、それは、「あなたが心の窓を開いた後、どうしているか様子を見に行っただけだ」と言った。信次は次の集会があるらしく、手短かに次のように話した。「何十回も私の著書を読みなさい。まだ、あなたは正法の入口に立っただけだ。霊道を開いた後、一番危険なのは、多少あの世が見えるようになるので、人とは自分は違うのだと増長慢になることだ。私も毎日反省している」と言った。そして「正法正法というけれど、本当に正法を身につけている人は、ほとんどいない。私のそばにいても悟れないものは悟れないのだ」と淋しそうに言った、と。

秋、九州霧島の研修会でのこと

鹿児島空港より、車で二十分ほどの天降（あもり）川のほとりにある「おりはし旅館」が宿舎だった。周囲がコンクリート造りのホテルの中で、ここは木造の旅館だった。この老女将のつくる「酒ずし」が、日本のうまいものの一つに挙げられており、この静かなたたずまいの旅館で、信次は研修の疲れをとった。

中京秋季講演会

演題「自力から他力への道」

「十歳の時から三十二年間、丁度昭和四十三年の七月、信じられないような霊的現象、本来、私は霊的現象というのは、すでに昭和三十年位から、例えば紙切れ一枚に、ある一つの提起された問題について一心に念力を集中しますと答えが出てまいりました。しかし、そのような問題がかりに的中したところで、なぜ私にだけ出来るのだろうか、私等はそのようなものを否定しました。しかし、全然次元の違った世界というところから... <後略>」。

十月初旬

鹿児島講習会

宮崎講習会

十月十日 高知市社会福祉センター

演題「人生に於ける価値の発見」

「只今、紹介にあづかりました、高橋信次であります。この美しい自然緑に包まれた高知市で、お話しが出来ます機会が出来ましたことを、心よりお礼申し上げます。サテ、私達が、今こうして毎日の生活をしておりますが、人間が生活の中に於いて、色々な喜びや悲しみ、苦しみ... <後略>」。

同じく高知市での研修会でのこと、坂本龍馬の像が立つ桂浜を遠く右手に望んだ国民宿舎・海風荘は、信次が「ここは環境がよい」と言って一泊したゆかりの地である。

十月二十六日、熊本講演会

信次、入院のため欠席。定席七百名の鶴屋デパートの会場には千名がはいり、消防署の忠告により、入場制限。

堀田和成氏の「母の死と業」、中谷義雄氏「瑞法会教団を挙げて正法に帰依するまで」、園頭広周師「正法と現代宗教」を各一時間講演。信次の著書がよく売れ、日比谷公会堂よりよく売れたという。

十一月三十日～十二月二日

熊本研修会 阿蘇白雲山荘に於て。会費一万二千円



熊本での高橋師は、憔悴した様子が写真から伺えよう。

演題「心と肉体の調和」

「健康であることは食事を正しくする。つまり、食事も中道でなくてはなりません。肉体の保全がバランスを欠きます。＜中略＞ 病気の中には外因性と内因性があり、外因性というのはビールスによって外部から侵入して来たものは現代医学の方が早いよ。＜中略＞ 血圧というものは薬でおさえつけても根本的な治療になりません。医者の指示にしたがって食べ物からなおしていかなければいけません。＜中略＞ 「息ぎれがするぞ」これはおかしいと思ったら、ふっと自分の心のあり方はどうかな、食べ物はどうかな。＜中略＞ 肉もほどほど。私の心臓さん曰く、あなたの魂の歴史を聞きましたが、コーカサスで生まれた当時は、あなたは百七十歳ぐらいまで生きたんですよ。その当時は腹六分でした。食べ物はなるべく少く食べ活動する。運動する。いつでも腹のへっている状態が一番長生きの秘訣です。日本人は食べすぎます。＜中略＞ 人間は不思議ですね。夜になってからたらふく食べる。ですから脳溢血でこの世を去っちゃうのは大抵、夜だよ。食べたあとの結果がでてくるんだよ。＜中略＞ 猿は太陽が沈んだら絶対に物を与えても食べないよ。食べ物というものは、太陽の上っている内に食べるのが最も理想、だから朝と昼に栄養をうんととって夜あっさり食べたら明日の朝はソー快。＜中略＞
今度は具体的に天上界の関係の人に聞きましたら、癌というものはビールスだよ。それも人間の細胞の核分裂を起すときの核酸が、その人の心の作用によって分裂が正しくも行くし、心の状態によって間違った方向へ行きます。（録音テープの筆録ですから誤字も考えられるので了解ください）その時に、間違った方向へ行ったときに食べ物とその人の心が、グーンと地獄界の虫を引きつれて細胞を食う虫がビールスなんです。そして、それがいわば人間のガンという姿になった場合、ということを言いました。ですから、先づ癌という状態は心をきれいにし、食べ物を中道、つまり片寄らないということ。心も中道、食べ物も中道こうしたら絶対に癌にならんといいました。癌の細胞を見せられたら、細胞が生きているのがみなわかります。そうしてCO₂の炭酸ガスを出しているのがわかります。ですから、そういうところには酸素がなくなっているわけです。酸素がなくなるから結局は、細胞が間違った方向へ行くのです。「薬はお前達の生活環境の中にあるんだよ」と教えられました。

研修は、六時起床、七時半朝食、九時より信次の講話、午後は自主研修、夕食後二時間信次の講話

渡辺泰男氏は次のように書いている。「夏の恒例の志賀高原の研修会が済んだ頃から、先生の健康状態があまりよくないと、あちこちで、ささやかれはじめました。十二月の阿蘇の研修会にお伴した頃には、見違えるように消耗しておられる姿を拝見してびっくりしました。このあたりから先生のご講演の中に、不動心という言葉が頻々と現われるようになりました。阿蘇の研修会のご講演では『食生活を、あちらから指導されました。肉類、魚は一切だめ、野菜、果物、そして油は植物油、バターならマーガリンを。量は腹六分です』、と。

「この研修会では健康についての話しが…」

「既に肉体的過労で、少しやせていた。阿蘇山を右に見て、左手に大観峯を背景にした大自然の中…。研修生は六百名だった」

この阿蘇の研修会と宮崎の青島の研修会でのこと、偶然にもエレベーターに二人だけで乗り合わせた園頭氏の奥さんに信次は言った。「奥さん、金は食べるだけあればいいのですよ。余分なものを持つ必要はないのです」と。

園頭氏の書簡から

合掌、阿蘇の研修会で、ある班の講師は、反省ということをもつかしく教えたのでしょう。反省していてかえって心が苦しくなり、眠れなくなったので、どうすればよいかと電話がきました、と書いた。

初めて、信次の研修会を受講した土居積信氏は、この熊本研修会を次のように自著に記した。

土居氏は、宿舎に着くとトイレに行った。すると、せっせとトイレの履物を整理する人がいた。「御苦労様ですね」と氏が声を掛けると、その人は「いいえ、後に入られる方が気持ちが良いようにと思ひましてね」と答えた。講演が始まったら、信次だった、と。次の日も、朝一番にトイレの床の掃除をしていた。そして、その晩、氏が風呂にはいっていると、「背中を流しましょう」と。信次は心をこめて流してくれた。それから皆で輪になって流し合った。そして、講演が終わった後、信次は各部屋を廻り、その場にいないのに、いたかのように講師達にかわってテキパキと質問に答えて廻っていた、と。

「偉大な師がトイレ掃除をネエ」

「多くの人達が書き残している。講演に集まって来た人の靴を。スリッパを。まったく頭が下がる。時には大地の味を味わさせようと言って、みずからの手料理を幹部達に食べさせている。もう少し、信次の素顔を端的に教えてくれる例がある。九州のT医師は、人から聞いた話として次のように語った。

「信次は講演が終わった後、汗びっしょりになった体を横たえて、汗を拭いてもらっていたが、信次の体は白かった、と。そして、研修会場の近くのオミヤゲ売場等を覗いている信次を見かけることがあったが、一つも気どらないどこにでもいる普通の人だった。また、研修会場の後の出入り口の方を見ると、スリッパを片づけている人が信次だった。そして、研修を終えて帰って行く人達を上の方から見送っている信次は、皆んなの幸せを祈っているように見えた」と聞いた、と。

同じく十二月

G L A 関西本部事務局長・林正氏は、信次に東京の自宅を訪ねるように命ぜられた。「瑞法会から帰依したG L A 関西本部は、表面的には私に帰依したということになっていますが、内部から完全に帰依してはいない。瑞法会の人事組織で人集め、金集めをやり、各地区の支部長が組織の上にあぐらをかいて、権力欲、金銭欲で動いている。G L A 関西本部を、私が説いた通りの正法の団体とするには、中谷本部長を頂点とした関西本部の組織

を解体しなければならない、と信次は忠告した」と林氏は園頭氏へ伝えている。

そして、この年、信次は、「あと七八〇年するとエジプトに真の世界政府ができ、世界は平和になり、人間は自由に他の天体へ行けるようになる」と言った。昭和五十一年に死者五十万人を出したと言われる中国唐山の大地震を、信次は起る前のこの年（昭和五十年）に予告した。そして、中学時代から四十年間日蓮宗を熱心にやって来た人が信次の指導を受けた。何も知らないはずの信次が「あなたは日蓮宗を捨てられますか」と言った。その人は「日蓮宗をやめる時、少し恐怖心が起りましたが、正法に帰依することが出来ました」、と。また、G L Aの講師で、常に信次の近くにいたある社長さんが、従業員に「こういう人は地獄に行くのです。地獄に行きたくなかったら一生懸命働きなさい」という訓示の仕方をしていた。信次亡後、会社は倒産、売掛金回収に暴力団をつかっているという噂の人がいた。

「講師といっても霊の段階が…。だから信次は「G L Aをつぶしたい…」と」

「そう、昭和四十六年から講師だった人。信次の心中、察して余りある」

昭和五十年のある日、信次は「キリストは、今から百八十年後、シカゴに出て、その時はじめて世界政府ができる」と言った。

昭和五十一年（一九七六）

一月

『G L A』誌・新年号

「一から十まで、すべて成功するだけが正法と考えてはならない。失敗もまた正法の内にある」と。

「自己の確立を」

高橋信次

「私たちの住む世界は間違いなく競走社会であり、力の社会である。そこでは常に、若さと活動とが尊ばれ、常により多くのことを為すことに目標が置かれている。なんでも世界一であることに目標が置かれてそれを自慢する。そうしたことに過度の称讃が送られているのが現代だ。心の安らぎは、「人生とはなにか」との問いの中から、そうして、その問を通して己れを知ることによって初めて得られるものであり、**仕事のみを追う人生には、安らぎも調和も与えられない**ことを知る必要がある」

そして、将来、団体が大発展するのに備えて、コンピューター導入の委員会がつくられる。

同じく一月、

信次は「初めは実践すると、**好結果**が与えられる。そして、次には本人の心を試すために、迷いを与える**小事件**が起きてくる。また、さまざまな**欲望**が不思議と出てくる。」そして、「業の活動は時が経って静かになるので、**正しい生活をしながらそれまでじっと待つ**しかない」と言った。

同じく一月

関西本部の講演の始まる前、控え室に入って来た信次は、どっかと胡座（あぐら）をかいて「園頭さん、ぼくはGLAをつくることに失敗した」と長い吐息を洩らした。

二月二十二日

沖縄講演会

「御紹介をいただきました。高橋信次であります。沖縄というところは島だから狭いんじゃないかと思って来ましたら、思ったより広いんでびっくりいたしました。そして非常に海がきれい、美しい空、きれいな空気、ちょっと、私達の住んでいる東京ではかなえられないような... <中略> ...それを信ずる事です。その嘘のつけない善我なる心を信ずる事です。どうも永いことご清聴ありがとうございました。」

二月

信次は、GLA関西本部長・中谷氏、西日本本部長・園頭氏を前にして次のように語っている。「肉体を持つと肉体に制約されて活動が制限される。これは仕方がない。意識だけになると肉体に制約されないから自由自在に活動できる。ぼくは早くあの世へ帰らないといけないかもしれない。ぼくはすることが一杯あるんです。ソ連は原子爆弾を使おうとしている。原子爆弾を使ったら地球はおしまいである。地球がおしまいになったら、**他の天体に住んでいる人間とのバランスが崩れてしまう**。だから、絶対に原子爆弾を使わせてはならない。肉体を持っていると肉体に制約されるから、あの世からソ連の指導者を直接指導する以外にないんです」、と。

「他の天体に住んでいる人間とのバランス...。さすがだね、真のメシヤは」

「信次は、この大宇宙には七つの霊圏があり、七つの人間がいる、と。勿論、人間の姿、形はみな同じ。人間は人間、猿は猿。進化論は間違い、とも言い残している」

三月

大阪の定例講演会に来た信次は次のように言っている。

「園頭さん、ぼくは失敗した」と悲しそうな顔をして言った。「僕はGLAをつぶしたい。ぼくはこんなつもりでGLAをつくったのではなかった。GLAの講師達は、金魚の糞みたいに、ぼくの後からくっついてくるだけで、少しも勉強しない。GLAの講師はダメだ」と、タメ息まじりに言った。

同じく三月

信次は「世界の中で、正法が説かれているのは日本だけです。もし日本の国が滅びてダメになるようなことがあれば、神の計画である正法による世界平和は実現しないことになります。もし日本という国を滅ぼしてダメにしようとする国があったとしたら、その国は神の心に叛くことになるのですから、その国が滅びることになります。これから共産圏には食糧飢饉が起り、内乱が起ります」と予告している。

そして、信次は禅定・瞑想する時には、「とにかく、いつ死んでもよいという心境になりなさい」と言っていた。

三月の関西本部の講演会の始まる前の控え室で、信次は「園頭さん、僕はヤーヴェとしてモーゼに十戒を与えたことがあるんですよ」と言った。

三月二十～二十二日

和歌山研修会 白浜温泉（三楽荘）

演題は「エル・ランティとミカエルの悟り」であった。

研修会の初日の夕方、信次の実弟・高橋興和、T・利雄の両氏が、秘密の話しがあるので自分達の部屋に来てほしいというので園頭氏は出向いた。二人は、次のように言った。「高橋信次先生はニセモノである。釈迦の生まれ変わりでもなんでもない。この研修会が終わったら私達はG L Aをやめます、先生もどうですか」、と同意を求めた。園頭氏には信念があったので、「やめたければやめればよい」と思って、黙って部屋を出た。「女性の助手で謀反の心を起したのはG・世都子という人でした」、と。そして、三日目の朝 信次は園頭氏の部屋へ入ると「昨夜、パピアス・マラーが、私の心臓に矢を射た、まだ胸が痛む」と告げた。そして食事のあと、信次と入れ替りに、興和氏が部屋に入って来て「高橋先生は魔である。この研修会が終わったら私はG L Aをやめる。先生もやめませんか」と同じように誘った。

園頭氏は、こう言っている。

「サタンが出て来たことは、私もその前に知らされていましたが、サタンはまず身内から離反させ始めたのです。これは大変なことになるな、と思いました。しかし、高橋先生はこの事実を全部知っておられ、三月二十二日午前の講話は中止になって、講師・助手に対して集会を命ぜられました。ところが、G・世都子氏だけが抵抗して集まらず、探し出して来て始まったのが、三月二十二日のビデオの場面です。

（ビデオでは、信次は高弟の一人一人に肩に手を当て涙ながらに「そなたは〇〇において、よく私に協力してくれました」、と）

この時、高橋先生は「指導者たる者は実践することによって不動心を持ちなさい」といわれたのです。そして自帰依、法帰依の大事さと、主な講師に対して一人一人諭され、ビデオにある通り私には「園頭さん、あなたはインドの当時（舍利弗、舍利子として）の智慧を出し切っていない。これから遠慮せずに出しなさい」といって下さいました」、と。

四月十一日

G L A七周年記念講演会（日大講堂）

演題「心の中に内在された英智」

「冷たい北風もやみ、温かい南風とともに大地は黒土とともに陽炎（かげろう）があがり、大地の中から新芽が出てまいりまして、そして桜の花は今を盛りとしております。サクランボはやがて実を結び、葉桜となってゆくでしょう。我々の人生も、又、同じように青春は一時にして、我々の人生は無情なもので、我々は物におぼれ、たとえ人生が七十年たりといえども、永い永い転生輪廻からしたならば、一瞬の線香花火のような〈後略〉



日大講堂

四月の関西本部の定期講演会の時、信次は中谷関西本部長宅に泊っている。翌朝、食事をしながら「ぼくが説いたことを一から十までわかっているのは園頭さんですね」と、ポツリと信次は中谷氏へ言っている。講演が始まる前に、「あんた、偉いでんナ」と中谷氏自身が言った、と。信次自身の心には、後継者として、胸中深く刻まれていたことであろう。

五月二日～五日

富士みどりの休暇村に於ける青年部研修会

演題「正法の流転」

「去年に続いて、この場所で皆さんと共に、神理の勉強をすることが出来ましたことを嬉しく思っております。本日の講演の演題は「正法の流転」と言いましょうか、＜中略＞その時に道は開かれていきます。今このような事実を、もう一度、私ではなく、天上界の人から語って貰います。「ラウイアスポロテイヤソボロティア…」と、「現証」の時間へ入っていった。

再び渡辺泰男氏の記述より要約しよう。

二日目の昼食を一同でいただいた。渡辺氏は運よく、信次の真正面に坐った。右隣りには佳子氏（信次の長女）が坐っていた。昼食はカレーライスだった。氏がカレーライスを平らげて、ひょいと信次の方を見ると、まだ三分の一も消化されていなかった。氏も早食いであったが、それまで氏の方が信次より先に箸をおいたことがない位に、信次は早食いだった。「随分、お疲れになっておられるのだな」と思った。そして、最終日の前夜、十二時になって突然、信次は、参加した講師とヘルパー全員に集合を命じた。

「今、こんな通信が入ってきました」、と言って読み上げたのが「サタンからの通信」だった。それから信次は、これからの正法流布のけわしさを説き、最後に、「これからは、あせりの心と恐怖心、特にこの二つに気をつけて下さい」と、閉じた。

< サタンからの手紙 >

黄金の翼を持った天使よ 我は実在せる魔界の帝王なり

我は、そなた達の正法に阻まれず

我思う処に我在り 我が前途を

< 中略 >

すべての者、我が命令に服従せん

我は神聖なる魔王なり、暗国の帝王なり、

偉大なるサタンなり

< 中略 >

我らが正しきこと、いつの日にか実証せし時、

そなた達の、おどろきし顔が浮かん

その時、必ず来たらん

五月八日

観音寺の住職・村上宥快氏は、直接、信次に電話を入れ八起ビルを訪ねた。五階の信次の部屋を開けた時、信次はソファーからすぐに立つことが出来ない程の容態であった。顔色も悪く、あの健康で東奔西走していた信次の面影は今はなかった。信次は「私の体に光を入れてくれませんか」と弱々しい声で言った。氏は信次の体を抱き起こし、光を入れやすいようにして、イエスの来迎を願った。三時間もした頃、顔は赤味をおび、自分で起き上がり、立った。そして、村上氏にノートを取るように言った。信次の声は、優しさの中に張りがあった。静かに瞑想した口から出る言葉はゆっくりとした調子に抑揚があった。

「今より、三億六千年前、ベーター星より地球上に脱出、緑もゆるこの地球上に脱出、緑もゆるこの地球上を、神から与えられたり。現代エジプトのエルカンターラ、場所はエデンの国なり< 中略 >ものなり。アダムとエバのエデンの国より追放の原点なり。人びとの心はすべて神の子な< 中略 > 各地に起これる地震、天変地異は、そこに住む諸人の心失いたる者達のすべて警告なり。」信次は語り終って一杯の茶を飲み干した。

六月四日～六日

山形県の蔵王に於ける東北地区研修会は、六月四日演題「新復活」、五日は「太陽系の天使達」であった。信次師存命中の最後の講演会となる。

この講演は別の項< 高橋師の最後の講演 > に上げているので参照ください



昭和五十二年六月二十五日、東京の社会党会館の亡後一周年講演会の時、高橋師の写真がスライドで大きく映し出されたのを、盛岡市のS秀雄氏が二枚つづけて撮られたものの一枚に写っていた奇跡の光跡である。

[Home](#)

Lecture

高橋信次師の講演はどう公開されたか

● 正法と講演 ●

高橋信次師の講演会はこうだった

信次師は、昭和四十三年（一九六八年）七月の悟りを開いてから昇天する昭和五十一年六月までに、各地で数多くの講演会が持たれた。この八年間に百回以上の講演会が開催されたであろう。信次師の講演会での大きな柱は、「講演」、「霊道現証」、「質問」の時間であり、すべて公開であった。

高橋信次師の講演には全く原稿がなく、会場に集まった人達の心の状態を見て話を進めてゆくというものだった。一人一人が心に思いあたるために、今日の講演は自分一人のためのものだったのだという思いで帰ってゆくののが特色だった。大学の先生とか、有名な仏教家、仏教学者達の講演は、筋書きが決まっていて、そこからはずれることは滅多にない。だが、高橋信次師の講演は何が飛び出してくるのか全くわからなかった。「高橋信次先生は、その時の話の内容で、守護・指導霊が入れ替り立ち替り、私の意識に出入りするの、講演しながら自分でも教えられることがある」と言われていたと、園頭師は言う。さらにもう一つの特色は、高橋信次師の講演、著書には他からの引用が全くなく、すべて自身から発せられる言葉だけだった。そのままのオリジナルなものといえば経典と聖書だけで、これとて、高橋師自から勉強したものではなく、「私は経典や聖書は一度も読んだことはありません。皆んなが、こんなところにこんなものがあると教えてくれる。ありがたいものです。」と講話しているが、他の人の講演、著書にはすべて引用がある。そこに高橋信次師の言葉の權威を感じずにはいられない。高橋信次師の言葉には、その人の魂に感動を与え、その人をして行動にまで駆り立てて、その人の運命を変える力があるが、頭で整理をして知的に雄弁に話される話というものは、聞いている時はいい話だなと思っても、深く魂に感動を与えない。会場を出ると「いい話だった」とは思っても、なんの話だったのか内容はすっかり忘れてしまって、何を聞いたのか全くわからないという話が多いものだ。高橋信次師は、「言葉」も光の粒子であると教えたが、師の口から発せられる「言葉」が、光の粒子となって飛び出すと、そのコトバの光の粒子が、すーっとその人の心の中に吸い込まれるように入ってゆく人もあれば、その人のまわりに「ポトポト」落ちる人もあると言っている。考えさせられる言葉である。

霊道現証の時間はこうだった

一、転生輪廻の証明

信次師は、登壇者に過去世（生）のことばを喋らせた。「ホラ、その当時はこのような言葉で喋っていた

ではありませんか」という実証によって、人間は永遠の生命であることを教えた。

一、信次師は、登壇者についている憑依霊（ひょういれい）の実体を自由自在に明かし、霊に離れるように懇々と聞いて聞かせて離した。どうしても離れない場合は強引に除いた。

一、信次師は、心の窓を開いた人を媒体として、師の力で光の天使を降霊させ語らせた。

以上のような「霊道現証」は、毎回、数百人から数千人の来聴者の前で、時と場所を選ばず自由に行われた。

高橋信次師は、肉体はこの世限りだが、魂は永遠であり、生まれ変わり、死に変わりして魂をみがくのだと教えた。これを「転生輪廻」とか、「輪廻転生」と言っているが、最近、この種の本が、店頭で沢山並ぶようになった。その為に「靈魂の永遠性」、「転生輪廻」、「生まれ変わり」ということを理解する人も多くなったが、これも時代の流れと言うべきか。

靈魂の永遠性、生まれ変わりの事実を証明してみせるにはどうするのか、とすることが重要な問題になるが、皆さんならどうされるだろうか。例えば、五百年、千年前に生きていた時代の、当時の言葉を語らせることが出来るなら、「なる程、当時の言葉を喋っているから、その時代の生活体験があるのだな」とわかる。ところが、知らない言葉でいくら喋ってみせても、チンプンカンプンで何んだかサッパリわからない。わからなければ信じることは出来ない。そこには何か客観的な、第三者的な証明がなければ信じることは出来ない。

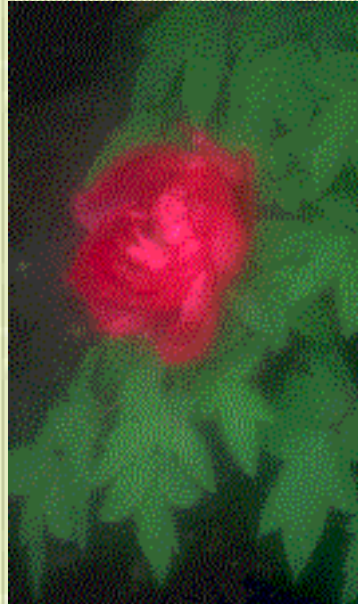
そこで信次師は、客観的な証明方法として交叉証明という方法をとった。それはこうである。例えば、ここに二千五百年前に古代インドに生活している人がいたとしよう。これをAと名付ける。また、同時代に同じ国に生活をした経験のある人、Bがいたとする。AとBは、決して面識があってはならない。もしAとBが知り合いだと、客観性がなく証明とはならない。そこで、AとBは一度も会ったことがない人が選ばれる。信次師が「光を入れる」と、二人は語り始める。当時の言葉で会話を始める。魂の感動と懐かしさのために、涙でグシャグシャである。

十%の表面意識で人生を送っていた現代人が、何千年か前の潜在意識の心の窓が開いて、現代では習ったこともない言葉を喋り始め、当時の思い出話に花が咲く。講演会の聴衆者は、二人の会話はチンプンカンプンでわからないので、信次師の解説がはいり、聴衆者はわかるという具合だ。手を取り合って再会を懐かしむ人、当時の踊りを見せる人、中国のお坊さんを過去世に持つ人は、当時の中国語でお経をあげてみせる人、古代ギリシャの当時を語る人など、等である。このように、生命の輪廻、つまり魂、意識が輪廻し、生まれ変わり死に変わりしているのであれば、人間はその過去世を思い出せるはずである。魂の永遠性を証明する実験として、会場の聴衆者の中から、或いは弟子達の中から信次師は登壇させる。または会場の中へ割ってはいり、その場で現証を実験する事もある。信次師は手のひらをその人の方に向けるが、登壇者の近く（一～二メートル）でする場合もあれば、十数メートルも離れてする場合もあり様々である。そして、その人の過去世で使っていた当時の言葉で語りかける。この場合、信次師はその人の過去世がわかる力を持っており、当時の中国語で、そして古代インドのコーサラ語で、そして当時のギリシャのヘブライ語等で、その人の魂に呼びかける。

初めての人は日頃、日本語を使っている。同じ声帯を使って当時の言葉を話すのだから、とまどうようである。日本語を喋っていた人が同じ声帯を使って、ヘブライ語などを喋るのだから、とまどうのも当然だが、しばらくすると自然に喋りはじめる。当時の魂に呼びかけられた懐かしさに、皆、涙、涙である。催眠等というものではない。現代の人間がはじめて耳にするような古代の言葉で語りかけて催眠になり得ない。「心を統一して下さい」と信次師は言い、当時の古代の言葉で呼びかけるだけである。それもほんの数秒間。これでは催眠になりようがない。

そして、催眠というものは、その間、何が起こったか、何を喋ったか覚えていないものだが、この過去世の言葉

を喋る霊道現証は、一から十まですべて覚えていることも催眠とは異なる理由の一つである。



「催眠術の是非」

高橋信次

催眠術とは意識を眠らせ、心を一カ所に集め喪失の状態にさせてしまうもののようです。催眠術は医学の一部で取り上げられているようですが、その歴史をたどると、遠くはヨガから来ているようです。催眠術者の過去世をみると、大抵、肉体行をやっています。霊媒の多くが、過去世で肉体的修行に明け暮れた人であるのと似ています。催眠術とは意識を眠らせること、それを暗示の力、念力でやります。今まで右側を走っていた人を念力で左側に走らせようというわけです。ものにはすべて等速度運動が働いています。かけ足で急に止まろうとすれば倒れてしまいます。催眠術は、たとえと、そうしたことをやろうというわけですから、結果はどうなるか、もうおわかりでしょう。催眠術によって小心が大心になった、ドモリが治った、ノイローゼが解消した、ということがありますが、ある人は一時治ったかにみえても、かえってノイローゼが悪化したと訴えて来ます。心のスモッグ（我欲）を払わずに、それを念の力で押しこんでしまうと、反作用が出てきます。霊的には、その人の心・意識を他界者が占領します。催眠状態がひんぱんに行われると、他界者（註・あの世の霊）が、その人の意識に、より入りやすい状態になり、二重人格を形成していきます。つまり性格が変わっていくのです。テレビなどで、催眠術の物すごい実験がときおり行われたりしますが、**催眠術師の背後では、仙人界のかつての行者が演技しています**。念力は人間に与えられた能力ですが、正しく使わないと大変危険なものです。正しく使うには正見、正思、正語（八正道）が実践されていなければなりません。小心を大心にするには、まず心のスモッグを払うことからして下さい。人間は誰しも丸く大きな豊かな心を持っているのですから、あせらず、なまけず、中道という正しい道を歩むことが大事です。『心眼を開く』

さて、高橋信次師の古代の言葉に即応して登壇者は同じ言葉で語り始める。会場の人達は何を喋っているのかチンブンカンブンでわからない。フランス語を学んだこともない人が、フランス語の会話を聞いているようなものと解釈すれば良い。その内に、信次師が日本語で説明する。そして、「肉体を持っている人よ、その言葉を日本語で語りなさい」という威厳のある言葉をかけると、古代の言葉から、今度は片言の日本語にかわる。そしてその内に、流暢な言葉にかわってゆく。こうして聴衆者も会話の意味がわかるという具合である。タイム・スリップしたような感覚に陥るが、それも面前で何のトリックもなく、ごく自然に行われる。今となっては、ビデオかテープでしか知る術もない。当時の古代語を喋ることは「異言」といっているが、釈迦の時代、イエスの時代にもあった。人間は生まれ変わり、死に変わりするのだということの証明のためには、その当時、生きていた時代の言葉を、登壇者を介して、信次師は証明して見せたのである。この世限りだと思っている人が余りにも多いので、靈魂は不滅だということを証明するために、講演会の度に必ずみせたわけである。そのような信次師の広い大きな心をも考えず、師の持った霊能力にのみあこがれて集って来た人達が多くいたことは残念に思う。

信次師の生前、霊道を開いた人が百人以上いたと言われているが、信次師の昇天前から、そして、昇天後いとも簡単に教えを捨てた人が多くいたことは誠に残念だが、高橋信次師は、そうなるだろうと見通していた。次の言葉を参考にさせていただきたい。信次師は、「霊道を開きながら、心を動かす者があるであろう。心を動かした者は、憑依霊か悪魔であると思いなさい」という厳しい言葉がある。

次に、高橋信次師の言葉を聞いてみよう。

「私達には、私をはじめ、百数十人の霊能者が輩出し、過去世の言葉を語ります。その言葉は、中国、インド、チベット、イスラエル、エジプト、インカ、イギリス、フランス、ドイツ、ロシア、スペインや遠い過去のアトランティス帝国や、太平洋に沈んだムー大陸時代の言葉など多種多様です。それは、生命が転生輪廻していて、私達の意識の中には、その過去のこともすべて記憶されているからである。これらの言葉を、現世では習ったこともなければ学んだこともないのです。それなのに、自在に出てきます。私自身は各国語がわかり、従って自由に話し合います。また、そうした霊能者は、当時の言葉を、自分で翻訳し、人々にもわかるように、日本語で自分の過去を語ります。それは、まことに楽しいものです。ある者は中国の天台山で経文をあげたことがあり、法華経が中国語で出て参ります。本人自身は経文を習ったことがないのに、一つの間違ひもなく出てくるのです。またある者は相手の心がわかり、現在その人が何を考え、何を思っているか、病気があるとすれば、その病名まで指摘します。霊視のきく人は数十人にのぼり ...中略... 私達には釈迦に関係のあった人、イエス関係の人、モーゼに縁の深い人が集ってきています。」

人間はこのように生まれかわり、死にかわりして、色々な場所に肉体を持って魂の修行、魂の勉強をしている。日本人は、今までに外国と戦争をし、血を流してきた。日清戦争では中国と、日露戦争ではソ連と、そして第一次大戦、第二次大戦では数多くの国と民族と戦った。転生輪廻を通しての肉体遺伝のつながりの中で、自分の子孫と戦ったことになるのである。なぜなら、過去世で、中国にそして、ソ連に、色々な国に生まれているのだから、戦争はこの意味に於ても、まったく愚かなことなのである。

「異言と憑依霊」

異言を語る集団について、ときどき記事になることがある。正しいものであればそれで良い。中には外国の地獄霊が憑依して、あたかも古代の言葉を喋るかのような現象をみせた例もあるので、正見することが大事である。要は、その人達を良く観察してみることである。正しい霊能者は人格的にも立派でさわやかである。

また、過去世の言葉を喋る現象は、現世の肉体の一部である脳が、過去世の言葉を記憶しているはずもないし、この肉体は現世の両親の特徴を持った肉体遺伝に過ぎない。それでは、どうして過去世の言葉を喋れるのかという疑問が残ると思う。それは肉体以外に、過去世の当時を記憶した靈魂の存在があるからである。心の窓を開くと当時の記憶がよみがえり、過去世の言葉が口をついて出てくるのである。人間は皆、過去世を思い出す能力を持っていたのだが、「愚痴」、「怒り」、「足ることを知らない欲望」という「心の三大悪」のために、その能力を閉ざしてしまったと高橋師は教えている。その能力を閉ざしてしまった現代人に、高橋師の力によって強制的に過去世を思い出させたのである。

高橋信次著『人間釈迦』にみる、「心の窓を開く」ということ。

「ブッタは観自在（註・あの世もこの世も過去世のことも全てがわかること）となり、身体からは絶えず光を放っている。すると、ブッタと過去世に縁の深かったものは、この光によって心の窓が開かれ、現世の記憶を飛び越えて過去世の記憶が甦えるのである。過去のことが、昨日のこのように思い出されてくる。」

次に「過去世の言葉を語る霊道現証」の一例をあげる。

「ティエッセカヤツソコラ ウテエセカンパルクア ティンティウラー。ワティクラスクオラアンターアセン
パラティーウラカヤスティムウォーター。ニクアルクラッソー。...」

(私はあまり皆さんの前でお話しはしたことがございませんので、日本語でお話しするのはちょっと大変でございます。...)

Home

著述家の上之郷利明氏の記述を紹介したい

「また、東京の日比谷公会堂では、こんな光景が演じられたこともあった。超満員の日比谷公会堂で講演する「先生」は、二十歳前後の女子大生風の女性を演壇に招き寄せた。彼女は「先生」の導きに従って自分の「過去」を語り始める。「パパヤ、ディダラカティ...」「私は二千五百年前、中インドのカパリという国で、マハー・ナーマーという男性として肉体を持ちました...」

古代インド語で自らの「過去」を女性が語ると、「先生」がすかさず通訳する。やがて、その女性は会場に向かってわめき始めた。すると、今度は五十年輩の男性が、シーンとした場内の雰囲気 breaker するようにすくと立ち上がると、演壇のほうに駆け寄ってきた。女性と同様、古代インド語を使っているのだろう。二人は話し合い、舞台中央で固く抱き合った。女性は涙さえ流している。「先生」の説明が入る。「二人は二千五百年ぶりの再会に感激しているのです。二人は当時、従兄弟同士だった...」こうした光景がいたるところの会場で繰り広げられる」
『教祖誕生』



高橋信次「霊道現象は、聖書の中の使徒行伝第二章と、華嚴經十地品に記録されており、その記録がまったく事実であり、現実にも起っているのです。「私は、いつどこで生まれ、兄弟が何人いて、そこで正法を学んだ。その時の同志、友人が現在、ここにいる。誰と誰がその人達です」と、はっきりと実証されます。そうして、その実証を裏づけるいくつかの参考となる現実的事実も指摘されます。霊道現象は、魂の永遠性を証明する現証の一つです。八正道を学ぶことによって、般若波羅密多、つまり内在された偉大な智慧がひもとかれて行きます。」

< 聖書の中の転生輪廻・輪廻転生と 過去世のことば >

「使徒行伝第二章に弟子達が様々の各国語をペラペラと語り出すことになっているが、この異言こそ過去世の言葉を語っているのです。」 『心の対話』

高橋信次「イエスは転生輪廻そのものは語っておられませんが、これには一つは伝道期間が短かったこと、第二に輪廻の認識が当時の人々にはとぼしく、かえって誤解を招くこともあったからです。しかし、神理の中に輪廻の姿を随所に語られています。」

< 異言と使徒行伝第二章 >

「五旬節の日が来て、皆の者が一緒に集まっていると、突然激しい風のような音が天から起り、一同が坐っていた家いっばいに響き渡った。また、舌のようなものが炎状に分かれて現われ、一人一人の上にとどまった。すると一同は聖霊（光の天使達）に満たされ、御霊が語らせるままにいろいろの他国の言葉で語り出した。」

< 仏教にみる転生輪廻 >

「転生輪廻については、仏教でも証明されている。華嚴経十地品の中に、日々の生活修行の中で心を調和させることにより、神理を語り、自分の輪廻転生の過去を知ることができる、と記されている。」
『心の発見』

また、空海の「般若心経秘鍵」の中に、私はインドの当時、リョジュセンで釈迦牟尼仏の説法を聞いたことがあると書き残されている。釈迦は今から二千五百年前の人であり、空海は千百年ほど前の人であるから、空海は著しく霊能を顕した人であったので、自ら心の窓を開いて過去世を思い出したのだろう。

「霊道を正しく見よ」

高橋信次

「まず一番大事なことは、そうした現象にとらわれず、現象を現わしているその人の私生活、性格、人柄、そうしたことを知る必要があるということです。過去世の言葉を語り、霊道現象が現われたといっても、それが本物かどうか、普通ではわかりません。守護霊や指導霊が背後にいて、そうした現象を現わしているとすれば、その人の日常生活は普通の人と変わらず、それでいて、キチンとした生活を送っているはずで、また神理も悟り、説得力も持っているでしょう。ところが自我が強く、欲望は人一倍であり、中傷や人を非難することが平気であれば、古代語は部分的には本当であっても、背後霊は、竜か他の動物霊とみて差し支えありません。こうした霊がその人を支配している時は、その考えも行動も一貫性がなく、その場その場の思いつきになるでしょう。霊道現象というものは、滝に打たれ、神社仏閣などで行を積むなどの念力によって開くの、正しい生活行為にもとづいて開くのがあります。また、ノイローゼや精神病も霊道現象なのです。そして、人によっては、突然霊現象が現われ神がかりになる場合もありますが、こういう場合は大抵、過去世で何らかの行を積んでいることが多く、その人の心の状態いかんで、守護霊が出る時もあれば、動物霊が語ることもあります。しかし、普通は正法を知らずに霊道を開くのですから、まずほとんどの人が動物霊の支配下におかれ、不自然な言動が多くなり、行者の末路といわれるような結末になるのです。モノが当る、病気を治す、霊力がすごい、というだけでその人を信じてはいけません。まず常識的に判断し、霊力を持っているその人の言動をよく確かめることです。もし、その人が正道に適う生活を送り、謙虚で、愛に満ち、人々を善導しているならば間違いはないでしょう。しかし、こういう人は少ないのです。どうしても肉体中心的な考え、行動になって行きます。こういうことで、これからも、そうした古代語らしきことをしゃべる人が出てくると思いますが、その霊道現象をうのみにせず、それが本物であるかどうか、正法に照らして、見る、聞く、考えることです。 『心眼を開く』

「古代語と園頭広周師」

昭和六十年、園頭師自から引率するインド仏跡巡拝の旅でのナーランダ大学跡でのこと。M氏がインドの女子大生の写真を撮った。忽ち三十名ほどが集って来た。そうして集っている女子大生に、案内のギルさんがナーラ

ンダ大学の説明をしていた。そこへ園頭師が行った。「このインドの女子大生達に古代のマガダ語で話せ」という天上界からの指示があったというので、園頭師はナールンダ大学跡の解説をし、「あの塔は舍利弗即ち私の塔だ」と園頭師は言った。女子学生達は驚ろいて、写真を撮ってくれ、サインをしてくれと大騒ぎになった。園頭師はその写真を送る時に、一緒に英訳の「心行」を送ろうと思っている、と書いている。

昭和六十一年第一回ハワイ研修でのこと。園頭師は、瞑想禅定の方法を説明し、精神統一に入った。三十分位瞑想禅定した後で、園頭師は、参加した人々に古代インド語で呼びかけた。日本から行った人も、アメリカの人達も、皆、感動に打たれて泣き出してしまった。「その感動がどんなにか激しく、素晴らしいものであるかは体験した人でないとわからないであろう。」と。

「古代語と困った人達のはなし」

昭和四十九年、九州の佐賀での高橋信次師の講演会でののはなし。「霊道現証」の時間、信次師が「この会場にも過去世のわかる人がいます」と言った。すると突然、一人の女性が「わたくしは、菅原道真の妻でございます」と始めた。園頭師は、それは芝居でウソだと見破った。「このような人が出てくると困るので、私は霊道現象はやらないし、霊的なことは言わないようにしている」と園頭師は言う。そして、「正法は日常生活に実践すれば、必ず奇跡は起きるし、起こすことができる」と言うのである。

次に、ジャーナリスト・内藤国夫氏が、国際正法協会会長・園頭広周師を取材中のこと。昭和六十二年三月号『月刊現代』より引用する。

「講演の途中、休憩室で私と雑談中の園頭会長に対し、中年の女性がいきなり跪いて、わけのわからない言葉で祈りを捧げるのを目撃した。園頭氏が苦笑して解説したところによれば、あれは私（園頭会長）の気を引くための演技で、インチキ古語ですとのことであった。」

高橋信次師は「人間は、この世限りではないのです。いい加減な生き方をしていると、いつの日か必ず反省しなきゃなんのです。だから、その日、その時を正しく生きなければならないのです。」ということを示したのである。そのために、皆んなの前で、過去、生活をしていた当時の言葉を語らせたのである。高橋師は「これからも、古代語らしきことを語る人も出てくるであろう」と、予告している。あの世の動物霊や地獄の霊達は、人間が関心を持ちそうな、興味を引きそうなことを言って、その人にとり入り、次には、その人を支配してゆくのである。神の子の人間が、あの世の動物霊や地獄の霊達に、コントロールされるとは何んと愚かなことか。高橋信次師は「行者の末路」という言葉で説明しているが、人類を正しく導く使命を持った高橋信次師は、最大級に残念がり修正を求めたのである。



質問の時間はこうだった

聴衆者からの質問は、仏教やキリスト教等の宗教から、霊現象、科学や医学などの専門分野に至るまで多岐に分かれた。質問を受けると、信次師はちょっと意識の中に解答を探すかのように考え込む。間を置かず「ハイ、わかりました。」、と自由自在だった。どのような質問にもなぜ答えることが出来るかと言えば、その専門分野の指導霊が入れ替わり立ち替わり自分に教えてくれるので、答えることが出来るのだと言っている。

「信次師は、講演中、どのような質問にも答えることができた」

「私は、講演中あらゆる質問を受けます。質問をうけても答えることが出来ます。なぜ出来るのか。指導霊や守護霊が協力してくれるから、私は皆様に話せるのです。私達は原稿などありません。何処へ行っても、身軽に講演をしています。ところが相手は、医学者は医学の専門の分野で質問をします。科学者は科学の分野で突込んでまいります。私は万能ではないから、こうした質問には答えられるはずはありません。科学者にはその専門の指導霊が私にポンと這入って来ます。これは皆様の中からも心の目を開く人達が出て参りますが、その人達は、今皆様の普通の目で見れば高橋信次というイメージしかありませんけれども、私の意識を支配する光がポンポン飛び交うのが解ってきます。更に前進すれば、その当時の姿をした、その物ズバリの人と交替しているのが解ります。だから、兎も角私達の意識はいかに重要なものであるか、肉体に抵抗があるとこれは出来ません。その故に本当に守護霊があるかないかを自分が知り始めてきた時には、本当に驚きです。今迄そのように頭では学問的に勉強して知っていたけれども、実際にそういう体験をすると身にしみて分かります。そうして、心をきれいにしなければいけないということを見出すと思います。それまでは、気がつかないから、いろいろと修行の行の字を間違えてしまって、人間はいろいろなところで、暗中模索し自分を見失ってしまうのです。それだけに又宗教は阿片だという事です。ですから私は、話せず聞えず見えないなら、拝む対象物に手を合せるなというのです。ただし、神理は普遍的であるから、その神理をどこからでも突込んで見て成程という自信を持った時に、それこそ神理は光となって我々の心の中に大調和を与えて行きます。それですから、我々のグループの中に、心をきれいにして実践をしている人達の心の窓が開かれているという事は、素晴らしいことです。これは皆様だって例え喋れなくとも、靈感という感能は持っているのです。」
『高橋信次講演集』

Home



新・事実

次に信次師が明らかにした「新・事実」を列記してみよう。

「信次師は宇宙全体を観る力を持っていた」

この宇宙には七つの星に人間がいる

信次師は、この宇宙には七つの霊圏があり、これから百年位したら、他の天体に人間がいることが発見できる。現在の地球の科学は、他の天体に人間がいることを発見できるまでには発達していない。この地球を中心とした霊圏を指導しているのがアガシャ系であり、今、このアガシャ系が一番早い速度で霊的に進歩しつつあると信次師は言い残した。信次師は、この宇宙に七つの霊圏があると言い残した。ということは、この大宇宙には、七つの星に人間が生活していることを意味するのだが、他の講演では、人間は、どの星の人間であろうと姿、形は我々と全く同じであることを明らかにしている。そしてこの宇宙に、七つの霊圏があることは、リチャード・ゼナーの交霊通信をまとめた『天と地を結ぶ電話・日本教文社』、『アガシャの霊界通信・正法出版社』でも書かれている。平成四年六月に次の報道があった。

「銀河系に7つの太陽」

米航空宇宙局は、ジェット推進研究所（JPL）は平成四年六月十一日、銀河系の中に、太陽のように周囲に惑星を持つ可能性がある星を七つ確認した、と発表した。七つの星に人間が住むためには、その中心となる七つの太陽が一つの条件になる。愈々、信次師の予告が証明されて来るのだろうか。

この太陽系に十惑星の事実

現在、太陽系には水星、金星、地球、火星、木星、土星、天王星、海王星、冥王星の九つの惑星があると、一般に知られた常識であるが、信次は「もしばらくしたら十惑星の事実を人間は知ることになるでしょう」と言った。

この地球に月以外の衛星が飛んでいる

「地球には月以外の衛星が飛んでいる。それもやがて発見されるでしょう」と信次師は言い残した。地球にとって、いや我々にとって一番近いはずの月以外にも一つの衛星があるなんて、そんな馬鹿な。天文学には一つも理解のないウエブ・マスターにとっても、これは少々の驚きではなかった。毎日、光学望遠鏡で、或いは電波望遠鏡を観察するプロの天文学者にとっては、まったくの「青天の霹靂・寝耳に水」の思いであろう。次のような仮説を立ててみた。我々の視線から隠れて動く衛星。それは我々から見て、月の向う側に同調して動く何か…。地球から見て、月の向う側に隠れて動く衛星がもしもあるとすれば、それは我々にとって確認されるはずもない。太陽と地球、地球と月の自転公転から割り出した「時間」というものは、十万年に一秒ほどの狂いしかない。この地球と月とこの未知の衛星の運動は精妙に調和され、コントロールされているのに違いない。だから、この地球から見え隠れすることなく、月が我々の視線を遮断しているために、永い間確認出来なかったのであろうか。確認する方法があるとすれば、ロケットに乗って月の裏側に廻るか、或いは何か特殊な機器によって確認出来るかもしれない。だが如何せん、ついこの間、月には着地したばかりの科学だから。しかし、いつの日にか、真実が明らかにされる日が来るに違いない。大本教の出口王仁三郎は「月以外の衛星」について記述を残しているが、この人は宗教の誤りを覚醒させる使命のあった菩薩界の人、と信次師は言っている。それだけに彼の霊的な預言も無視できない。

宇宙には真のメシヤが何人も出ている

「宇宙には神は一つです。エル・ランティと同じような、宇宙に真のメシヤという人達があります。宇宙が一つに成る為に、真のメシヤは、この宇宙に数人、現在出ております。そして太陽系からも我々が、このようにして出ております。遂に、過日はM37という星があります。M37に出ているメシヤが悟りました。そのM37のメシヤは遂に、自分自身を悟ったというのは、太陽系の中の軌道修正コントロールセンターというのがあります。太陽系の軌道を修正するコントロールセンターというのが次元の違った、あの世にあります。その中心の心臓部に伝達があるわけです。宇宙的ですね。太陽系で一人悟っております。M37で悟っております。M27、M37に出ております。このMというのはメシヤという意味でつけたようですね。」（昭和五十一年、五月と六月の高橋信次講演の要旨）

病気と霊視

私達霊能者が、心眼で人々の体を見ると、悪い部分が、天然色で眼の前に映し出される。そのことを伝えると、患部を持つほとんどの人々は、その映し出された部位が悪いという。それは医師の診察の結果とも全く一致しているのである。また、医師が診断して不明であった病状を知ることもある。

『心の発見』 高橋信次

酒飲みと憑依霊

酔っぱらっている人々も、**一〇〇%憑依霊が支配している**場合が多い。酒は良薬、のうちは良い。だが、狂気の水に変わってしまうと憑依霊の媒体になることが多いのだ。節度が必要なのである。また、アルコール中毒患者などには、ほとんど地獄の霊が憑依している。酒好きな人は、通勤の帰途、仕事が終わった時など赤提灯を見ればつい足が向く。節度のあるうちはまだ良い。しかし次第に量が増え、遂には酒に吞まれてしまう。酔って家へ帰る頃には、その行動も解らぬようになる。無意識の状態は、**他の霊に肉体を支配されている**ことがほとんどである。そうした憑依霊は、現象界で肉体を持っていた時、酒におぼれてこの世を去った者達で、彼らは未だにその生活に未練と執着を持ち、生きている同類の意識を支配して酒を飲ませてしまうのである。自分の地獄における生活が苦しいから、現象界の人に憑依して、その苦しみから逃れようとしているのだ。人間の心が不調和になるに従って、彼らの力は強くなり、人々の心をむしばんで行く。だから、人間は神理に適った心を強く持って、憑依霊の誘惑に打ち克たなくてはならない。己自身に厳しくなることが大切なのである。人間が正法を悟り、実生活に生かす心を持てば、憑依霊も救われることになるということを忘れてはならない。（酒を飲んでいると、突然人が変わったように目が据わり豹変する人を正見すること）

「神かくしは本当にあった」と信次師は言い残した

信次師は靈魂の光の量の区域として、上段階から如来界、菩薩界、神界、霊界、幽界と分類したが、霊界から神界の裏側には天狗界、仙人界があり、肉体行によって法力だけを学んでいる、本当の悟りからはほど遠い者達の世界があると言った。

仙人界、天狗界に通じている人々は、自己本位である。人里離れた山中での肉体行の中から自分自身の孤独な悟りを開くが、これには慈悲も愛もない。過去世においても同様のことをしている。転生は肉体業の業（カルマ）を持っている。その生活は独善的、自己本位で、心は狭く、その生涯の果ては哀れなものが多い。動物霊に支配されている者が少なくないからだ。彼等が、現象界の分身や本体の霊道を先に開いてしまうから、そのめに同じ生命の業（カルマ・心の傾向性）を造り出してしまおうということ、神理を悟っていないため、不調和な霊を呼びこんでしまうのである。肉体的荒行をしている生命も、だから霊的現象を起こすことはできる。しかし、それは悩める衆生の心を救うことはできない。六根の清浄は言葉のみで、心の調和はできていないのだ。

彼等は、肉体行の目的が、六根清浄になる行法であると考えている点に、大きな誤りがあることを知らない。肉体行の苦しみが心を不在にし、そのすきに不調和な霊は忍びよってくるのである。肉体苦行で悟り得たとしてこの現象界を去っても、行きつくところは仙界、天狗界であり、また同様な苦行の繰り返しをするだけのことで、この人々は、決して光の天使の住んでいる世界へ行くことはできない。なぜなら、人生航路の乗り舟に翻弄され、遂に慈悲と愛の心を持つことはなく、衆生にもそれを与えることなくこの世を去ってしまうからである。

一八〇〇年頃より以前には、仙界や天狗界の住人達が、肉体修行の実力を試すためにこの現象界に姿を現わし、人間を連れ去って行くものが多くいた。そして今度は、その人間達を戻すことができず、大変な騒ぎを起こしたことがあった。このために、上段階光の指導霊や大指導霊達によって、その力を封印されるということがあったのである。しかし、その取り締りのため、最近はそんなはずもなく、現象も起こっていないはずである。このように、肉体行の業を修正するために生まれてきた神仏の子も、この現象界で惑わされることが多く、正法を悟らず、遂に動物霊に憑かれて、自ら不幸を作り一生をすごしてしまう人が多い。

（高橋信次）『心の発見』

一八〇〇年頃より以降は所謂、「神かくし」は無くなっているはずだと信次師の記述である。一八〇〇年頃といえ、江戸時代の終りに近い頃であるが、それ以前から伝わる民話、昔物語等の地方に伝わる「昔ばなし」の中には、神かくしの話が各地に残っている。伝説上の話とばかり理解されていたが、「神かくしは事実だ」と、信次師は明らかにした。「天狗」「神かくし」等を明らかにしている事実をよくよく考えてみると、各地に伝えられる「昔ばなし」は、物語の世界だけの話ではどうもなさそうである。少し前にはテレビの「日本昔ばなし」を見たことがあるが、現代の常識からすると、どうも理解しにくいという「はなし」なら、「霊の世界の真実のはなし」と考えて間違いなさそうである。神話や民話は靈感、直観によって書かれたものが多い。だからこれら

は靈感、直観によって理解しなければならないのである。

Home



信次師は、ある人を媒体（霊媒）として「光の天使の言葉」を語らせた

ある人を媒体として、目的とする人の言葉を語るのはイタコや霊媒者によくあることだが、信次師は、ある人を霊媒として「光の天使」の言葉を語らせたのである。光の天使が、その人に出る（降霊する）からには、その人の霊格は同等か、それ以上でなければならないと信次師教えた。これはどういうことかと言えば、低段階である幽界の霊媒は、上段階である菩薩界の霊を入れることは出来ないということである。また、菩薩界の人を降霊させるには、霊媒は菩薩界かその上の如来界の者しかできないということである。しかし、証明のために信次師の霊力で、上段階の光の天使を強制的に降霊させることがあった。ところが、過去世の言葉を喋ったり、霊道現象をできた人が、信次師の霊力によって行えたということを忘れ、それは自分の力と過信してしまったのである。その為に増長慢となり正道を誤った人がいて、信次師が亡くなると多くが霊能を閉ざしてしまったと言われる。それは至極当然なことだろう。

信次師は、光子体の姿で地上界の色々な所へ行った

信次師は、地球上の色々な場所へ、光子体の姿（幽体離脱、意識）で行った。我々の肉体は、原子肉体と光子体が不離一体となって重なり合っている。信次師は、禅定瞑想中に、肉体はそこにあるが、光子体が肉体から抜け出し、光子体のままで自由に地上界を往来した。それを列記してみよう。

幽体離脱その一

「ニューヨークの大谷さんが遂に悟りましたよ。わたしが意識で行ってみると、彼はニューヨークの公園の石

の上で禅定してるんですよ」

幽体離脱その二

「肉体から抜け出した「もう一人の私」（光子体）は、現世のエジプトに行ったこともあった。空中から風景を見ながら、都会の名前が解らなかったため、駅の近くには表示があるだろうと思って駅を探した。するとその駅には、ローマ字とエジプト語でカイロと記されてあった。このように、心が調和されれば、見たいと思う場所に肉体から抜け出して行くことができるのだ、ということが解明された。インドにもたびたび行き、石窟寺院の壁画を見てきたこともあった。私の指導霊ワン・ツー・スリー（モーゼだと信次師は言った）は私達の肉体から抜け出した「もう一人の肉体舟」は光子体であるということを説明してくれた。」

幽体離脱その三

「私はこのようにして、よく禅定中に、上空から風景を眺めたり、しぶきがかかる海上をものすごいスピードで飛んでいったりします。肉体の自分がそのまま経験しているのと全く同じであり、したがって金のかからない旅行の楽しみを味わうことが出来ると言えるでしょう。」

幽体離脱その四

「過日は私達の仲間が中国に出ていることを通信されました。私は昨年（一九七四年）の十月を通し、中国の我々の仲間の所へ行きました。この人達は台湾の国立医科大学の先生を始め、その出身のお医者さんばかりです。彼等の所へ私は夜十時、肉体から抜け出して光子体で彼等に神理を説き、そして、ついに彼等は心の窓を開き、我々とコンタクトするようになりました。彼等の心の中に法灯が点されたために、今は主としてアメリカに行っております。アメリカは先月の二十七日から行きました。二十八日の晩に、アメリカの、私が五年前に予言していたところのニューヨーク、マンハッタンというところに住んでいる方とコンタクトがつかしました。（先述の大谷氏）そして、私は、夜、心で神理を教えております。彼もその自覚にめばえております。この方は日本の新聞でも相当名前の通った方です。こうして彼等の心の窓は開き、次々と真実のものは伝わっていきます。これから私の説いた教えは、アメリカに渡っていきます。むしろ日本よりか私の説いている神理はアメリカに広く広がっていきます。しかし、私はあくまでも私が説いているのではありません。私は代弁者なのです。私はただの電気屋です。電気のことならわかります。宗教のことはわかりません。しかし、私達のバックには、実在界の光の天使達が次々と疑問の点を明かしてくれます。それを又、証明してくれます。皆さんも、自分の欠点を自力によって心のスモッグを払った時に、あたかも太陽が誰にも美しい光と熱を与えて下さるように神の光明も又、自らの心に光を受けることが出来るのです。（一九七五年、中京秋季講演会）

その外、講演の中で信次師は、映画視察やある人の行動をながめたこと等の話があるが、次は、帰天直前の一九七六年四月両国日大講堂に於ける「GLA七周年記念講演会」から参考にしていただきたい。

「梵我一如、宇宙即我、幽体離脱」

心の中の感情や智性や本能が調和されてくると、心の中のスモッグがなくなってくるから、神の光によって満たされて、この心の調和度の光は、どんどん大きくなって宇宙大になり、後光は宇宙大になります。そこで宇宙は自分の膝許に、更にまた、宇宙は自分の中に入り、そうすると初めて宇宙は自分だということになりますね。これを**梵我一如**というのです。そうすると、禅定というものをして心を統一して、心のスモッグが取り除かれていきますと、原子肉体に対して光の肉体、つまり光子体がどんどん大きくなって、この講演会場の建物より大きくなっていき、空を抜けて、この建物が自分の膝許に見えるようになり、更にまた調和されてくると、この建物よりはるか上の方に自分が大きくなって、地球は自分の下に、そして、地球よかもっと大きくなると、飛行機が

飛んでいるのが下に見えるようになり、もっと大きくなりますと、地球がはるか彼方になりまして、地球は青かったということになり、お月様よりもっと高くなる。こうして自分が宇宙になってしまう。これが**宇宙即我**というわけですね。善我なる自分、心の中のスモッグを除いて、偽りの我を全部捨てて、苦悩を全部取り払ったからなったわけで、奈良の大仏さんは、どうしてあんなに大きく造ったのだろうと皆さん思うでしょう。それは、あの奈良の大仏さんのような広く大きな心になれっちゅうわけなんですね。ところが今、大仏さんを拝むようになったわけですね。「汝、偶像を拝むことなかれ」とヤーヴェ（エホバ）が言いましたね。偶像を拝むんじゃないんです。ところがいつのまにか拝むようになった。それともう一つは、禅定中に抜けだしちゃうんです。抜け出す方法は、こうして抜け出しちゃうんですね。霊子線という、中道を歩いていると、こうして真直ぐ抜けるんですね。丁度、夏なんか雲があって、そこから光がパーッとさして、サーチライトのように下を照らしていることがありますね。あれを思い出して下さい。あの様に天上界から光がパーッと出ております。あの世へ帰る時に、その光の中を真直ぐに、その真中を帰れる人と地獄の遠道をして帰る人と、それは皆さんが自分で決定するんです。生き具合によって、この地上界の、それは思ったこと行ったこと、その結論は皆さんが出すんです。それと同じように心がきれいだとね、この霊子線という、この天上界からの光の束は、こうして自分の意識線から抜け出して、禅定中に自分が抜け出していくことができます。そして、例えば禅定しておって、自由にどこへでも行くことができます。先づ便利なことは入国手続きもいりません。注射する必要もありません。飛行機のように墜落することもあります。」



Home

prediction

● 正法と予言（預言） ●

高橋信次師は何を予告したのか

予言とは預言とも言い人類に預けられた言霊である

良いものは伸ばし悪しきは修正するのが神の子人間である

高橋信次の大予言

○これから共産圏特にソ連は穀物の不作がつづきます。そうして国内に暴動が起こるようになります。日本は食糧に困ることはありません。日本には心ある人が出て正法を説いたので、日本は今後も守られてゆくことになります。日本がだめになるということになれば、この世界から正法が消えてしまうことになり、神の計画による地球の調和が実現しなくなるので、曲折はあっても日本は天上界から守られて行きます。

○原子細胞によって構成されている肉体舟は、正法を悟った意識（魂）によって支配され、肉体と意識の相互関係も、科学的にはっきりと解明され、乗り舟としての使命をより永く果たして行くようになるであろう。

○過去の歴史は、表面的な現象のみによって起る不調和な社会だったが、内面的な心的関係がいかに人生にとって重大な意義を持つものか、私達は知るべきなのである。そして、この世限りでない転生輪廻の修行を続けている自分自身の姿を悟ることで、人類は皆兄弟であったことを心から知るようになる。永い転生輪廻の過程を造り出してしまった人類の、闘争と破壊の“業（カルマ）”を修正することによって、この地上に楽園は築かれて行くであろう。しかしその過程では、苦しい経験を何度となく体験する。神理の種は、そうした苦の克服によって人々の心の中に確かな根を張り、人は孤独な人生から救われる。右にも左にも、心の広やかな人々のいることに気づき、人は互いに助け合い楽しい人生を送ることによって人生の意義を悟って行く。物質文明のためにおき忘れてきた心を取りもどし、混乱の社会を一つにすべく調和の道への苦しみを経験して成長して行く。苦しみの中から人類の知識は、エネルギー革命もし、公害から身を守ることも発見する。そして大自然の資源の中から、いっそう生活の智慧を増し、さらにこの人生を豊かにして行くのである。

○光のエネルギー、電気エネルギー、磁力エネルギーなどを応用した乗り物が発明され、電磁場を、安定した乗り物によって遠距離まで速く到達することが可能になり、宇宙空間を狭めて行くようになる。

○物質至上主義は前世の遺物と化し、その奴隷化から解放され、言語も統一されて行く。そして人類は、自己保存と自我我欲の不調和な考えでは生きて行くことができないことを知り、真実を語り合うことと、全人類の相互協力、調和以外に前進のないことを悟るようになる。皆兄弟であることを知り、心と心の調和の社会が実現されて行くのである。

○現在の科学の力では、他の天体に人間がいることはわかりませんが、百年すればそれがわかります。他の天体には、その天体の人間を指導する如来（光の大指導霊）、仏陀がいます。

○世界は共通語に統一される。

信次師は、「現在のエスペラント語をもっと改良したものになる」と言った。

○経済問題はこうなる。

正法を知った人が銀行もやる。保険会社もやる。世界は一種の資本主義形態と銀行形態を保ちつづけ、改良されて、すべての人々の利益になるように理想化される。物々交換も見直される。

○教育問題はこうなる。

正法を知った教育者が生徒を教える。人間は神の子であり、宇宙的存在である。正しい瞑想の仕方を教えるようになる。

○オーラー透視機が発明さる。

オーラー（後光）は心のきれいな調和された人は淡い黄金色。怒りに燃えた人は赤。破壊と闘争を企てる人は灰色から黒色。この機器が就職試験に利用されたら、皆さんは何んとされる。そして、世界各国の指導者をこの前に立たせる。戦争を企てる指導者は即わかる。宗教家、教育者は一番先に立たせる。信次師は、この機器は植物細胞を利用されると言った。

○ある種のX線により、太陽に最も近い惑星が発見される。

○太平洋岸に、ある種のエネルギーがふき出し、日本のエネルギー関係は調和され、石油は斜陽化する。

○あと百八十年（昭和四十八年現在）するとシカゴにキリストが誕生します。その時にはじめて地球政府ができます。地球政府ができる前に地上の人類はいろいろなことを経験しなければなりません。だからといって、それで地球が完全に平和になるわけではありません。

○七〇〇年位しますと、この地球上は完全に調和されて他の天体と自由に交渉を持つようになり、今ここ（会場）にいる人達は、その頃又、肉体を持つでしょう。そして各家々から光のエネルギーを利用して、自由に飛び立って他の天体へも行くようになり、今の飛行機のように不安定なものではなく、絶対に落ちません。土の上を走る今の自動車を見て、その時の人達は、「昔の人はよくもまああんなあぶないものに乗っていたものだ」と思うようになり、その前においてここ三〇～四〇年の間に、一定の軌道の上を走るものから、一定の空間を磁気エネルギーの力で走るものが出来ます。そして、車輪を転がして歩くことのムダを、おろかさを知って行くのです。こうして我々の知恵はどんどん発展して、急速に発展して行くのは人間が心の価値を知った時なのです。我々は人類は皆兄弟だという偉大なる価値に目ばえた時なのです。それだけに我々は今、その苦しみを脱皮しようとして苦勞しているのです。そしてこれから、たとえ子供であっても、永い転生の間に目覚めて心の窓を開いてくると、学校に行かずとも、天才的な人達が今から一杯でて来ます。 講
演「ユートピアへの道」高橋信次

○人類の智慧は他の天体に住める場所を発見し、その天体に移住するようになって行く。二十二世紀、二十三世紀の人類の知恵は、空間と海底に発展し、ふくらみのある地球国家的環境に変わって行くであろう。その間にも人間の黒い想念による幾度かの極致的天変地変が起こり、心の不調和な人々に対しての警告が実在界よりなされ、現在の国家群の眼も、宇宙組織に向けられて行くであろう。

○七百八十年後（昭和四十八年現在）、エジプトのナイル川流域は緑ゆたかな沃地となり、宇宙基地がつくられ、他の天体へ行けるようになる。今から約一万年先、海中に没したアトランチカ（アトランティス）大陸の文明を築いた靈魂達が、地上に出生してくる。その若者達が現在の科学文明を引き継いで、より以上に発展させ、世の中を指導するようになって行く。そして、真の世界平和が実現するが、その時は人種、宗教の差別はなくなり、国境もなくなってどこへでも自由に行けるようになる。

花-0051.jpg (3456 バイト)

Home

アガシャの予言

（なぜ、今、アガシャなのか）

元国際正法協会会長・園頭広周師は、昭和四十年当時、生長の家の重職にあった。生長の家から出版されている、昭和三十年初版の『天と地を結ぶ電話』を手にした時、この本に書かれていることは真実だと直感した。この本は、リチャード・ゼナーという人が霊媒となり、アガシャ教会に於いて、アガシャという霊の霊言を伝えていた。その霊界との通信を本にしたのが、元記者のJ・クレンショーであった。これを谷口清超訳として、『天と地を結ぶ電話』（日本教文社）は出版されている。

昭和四十八年に園頭師は信次師に初めて出会った時、「園頭さん、あなたはロスアンゼルスのアガシャ教会のことは知っていますね。あのアガシャという霊は、我々と同じグループですよ」という言葉を聞くこととなる。以来、園頭師はアガシャ教会を訪問し、連絡を取り合うことが悲願となった。昭和六十二年六月、園頭師はハワイ、ロスアンゼルス、ニューヨークでの海外講演の合間をぬってアガシャ教会を訪ねた。教会側からリチャード・ゼナー氏夫人（リチャード・ゼナー氏は一九八二年没）、本の著者のJ・クレンショー夫妻、以下教会関係者が暖かく迎えた。その時、リチャード・ゼナー氏夫人は、やがて七十に届く園頭師を子供を迎えるように頼りなでて歓迎した。「あんなになでまわされたのは、生まれて初めてであった」、と。

そして、同年十二月、クリスマスの頃、アガシャ教会での本年最後の降霊会が、園頭師出席のもと開催された。現在の霊媒はサルバット氏。色々な高級霊がかかってきた。イエス、釈迦の霊統であるクラリオ（クライオ）も降霊した。そして、次に驚くべきことが起こった。

霊媒者サルバット氏は大きく体をふるわせた後、故リチャード・ゼナー氏夫人に語りかけた。「私は一九六五年に予言した。園頭という人が、この教会を訪ね、このアガシャ教会と提携して、神理・正法の流布に協力することになると語ったことがあったね。そうだったね」とリチャード・ゼナー氏の霊。「はい、そうでした」と、リチャード・ゼナー氏夫人。二十数年前に予告されていたというのである。そして、これより園頭師は数度の訪問を果たしている。以来、アガシャ教会では多くの人々の訪問を受けるようになっていくが、特に、バチカンの十人いるといわれる枢機卿の一人が、アガシャ教会を密かに訪ねたということであった。

ローマ法皇庁で信次師が話題に

一九八六年（昭和六十二年）のこと。園頭師が奄美大島の講演会から帰って来た五月一日、立正佼成会の国際部の課長氏から電話があった。用件とは次の通りであった。三月二十日、立正佼成会の次期会長・庭野日鉞氏が、ローマ教皇庁サレジオ大学から名誉哲学博士号を授与されることになり、ローマへ行かれた。その時、日本の在家仏教団体と同じような、ローマ法王に直結しているカトリックの在家民間団体であるキアラ・ルービックという人が始めたフォコラーレ運動本部（今は、一つの言葉、一つの理想を唱え、世界を分かちイデオロギーの対立はあっても人類は根本において一致すべきだ）の責任者から「高橋信次という方はどんな方が知りたい」という話があったということだった。ローマ教皇庁の情報収集の早さにも驚ろくが、確実に何か静かに動いていると言っても決して言い過ぎにはなるまい。

アガシャとは誰か

『天と地を結ぶ電話』より引用

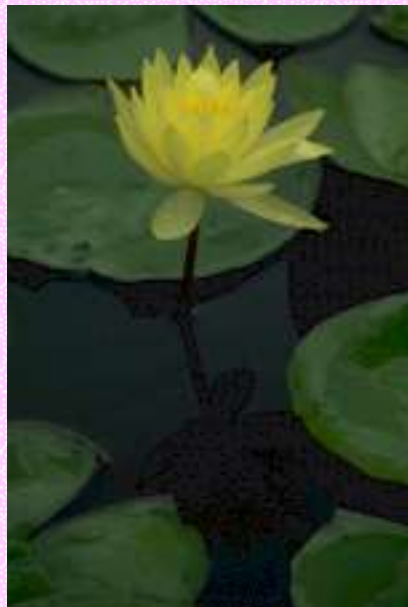
しからばこのアガシャとは誰であるか。約七千年昔、今エジプトと言われている所の或る小さな部落の宗教的霊的指導者であった。当時、ナイル渓谷とデルタ地帯とは、政治的ならびに宗教上の相違のために絶えず紛糾状態を続けていたのである。小さな神権政治の長として、ナイル渓谷の他の人々の如く、アガシャはこの絶えざる闘争の無意味さと愚かしさとをよく知っていた。そこで彼は、当時一種のエジプト国際連合を形成する音頭を取り、遂に、三十七の形式的独立国を統合して、唯一の連邦政府を樹立した。アガシャはこの新しい広大な神権政治の世界の有名な指導者であったのである。そして、彼は当時既に肉体を越えた世界にいた彼の霊的指導者と接触し、霊界の高い階層からの指示を受け、死後の世界に関連した地上生活の意義などの教えを受けることが出

来たのであった。アガシャによれば、かつて敵対していた宗派の指導者達は遂に統合をとげ、今日霊人として登場して、リチャード・ゼナーを通して、現代の智慧を求める人々に教示を与える先達としてあらわれたのである。

これら霊的指導者達の中には、アモン（Amon）と呼ばれる先達の霊もいるのであるが、このアモンを神として崇拝する信仰が、エジプトの哲学の頽廢期に非常に流行したとアガシャは述べている。同じようにして、このグループと関連してクライオ（Krai-o）と呼ばれる者がいたとアガシャは述べている。（クライオとは多くのアジア的な古代人の名前のように、純粹に発音通りの綴りである）アガシャの言明するところによれば、クライオという人は、それから五千年後にイエスと呼ばれる偉大なる大指導者として、パレスチナ、エジプト地方に再び生まれ変わって来て、地上生活の最終を完成したのであって、それ故このイエスの哲学は、エジプトや極東の古代の叡智ある宗教と非常によく似たところがあると言うのである。

そして、比較的近い将来、エジプトの各宗派の統合された詳細な状況と、その時のアガシャの役割とについて述べた記録が発掘されるであろう、と彼は予言しているのである。彼はさらにこう述べている。三十七宗派の統合の象徴である中央ピラミッドのデザインの大きな飾板が、カイロの近く、エジプトの三主要ピラミッドからあまり遠くない所で発見されるであろうと。そして、あの当時の宗派統合の時、アガシャの息子であった或る一人の富裕な勢力あるエジプト人が、考古学者達によって計画された発掘の仕事に指導的役割を果たすであろうと。彼は又、飾物や価値ある品物や長い間代アレクサンドリヤ図書館の廢滅と共に失われていたと考えられていた、古代の記録等々多くの財宝が発見されるであろうと言っている。

実際、高度に発展した文明の遺跡がナイル渓谷に発見され、その文明は現代我々が親しんでいるごく最近の文化よりも、財産的にも物的にもはるかに優れているであろうとアガシャは述べているのである。この隠然たる有史以前の文明とノアの洪水、或は所謂アトランティス大陸の大陥没以前の一大文明との間の連係関係も亦発見されるであろうとアガシャは宣言しているのである。



アガシャの予言

光の時代

輸送機関は高度に完成するであろう。航空路は全く安全となり、巨大な航空機が時速千哩以上の速度で空中を飛行し、垂直に「エレヴェーターのように」昇り降りすることが出来るであろう。原子力は工場で大々的に利

用され、**放送電力** ラジオ波のように波長を合せることが出来るものは、中央放送管理所から動的及び静的の設備機械に向って広く放射されることになるであろう。我々の家庭や工場のみならず、自動車や飛行機の動力としてそれに「波長を合せる」ことが出来るであろう。医学も完全に変わって、凡ゆる種類の病気や疾患が治療を受け治癒されるようになるであろう。我々が過去に於いて認めていた病気は多く消滅するであろう。或る「光線」を用いる道具が発明されて、それはその機械の中にその人の血をただ一滴たらすことによって、瞬時にその人の位置を確認することが出来るような作用をするであろう。この方法によれば、或る人がその瞬時に地上か海中か、それとも飛行機の中にいるかがわかり、若し必要ならば彼が「どの市のどの区画に」にあるかまで、その**詳しい位置**を知ることが出来るわけである。この機械は、一滴の血液の波動型はその血液をもっている本人の基本的波動型と同じであるという原理によってつくられているのである。それ故、この機械はその人がどこにしようとも、その人の位置を適当に計算して、その人の波動の周波数に同調することが出来るのである。

地球表面から非常に遠くまで送ることの出来る放射線を考案し、太陽系の多くの遊星を写真にとることが出来るであろう。人間は地球よりもはるかに大きい新しい遊星を発見するが、その星は太陽に接近して、一見太陽と共に回転しているように見える星である。それは**太陽の写真**の上に写し出され、天文学者にセンセーションを引き起こすであろう。そして遂に、人間は遊星間の旅行方法を発明して、太陽系内の他の諸々の遊星には、高度に進化した生物が住んでいる事を実証するであろう。考古学的にも、二十世紀の終末は一つの七千年周期のクライマックスであり、その周期の頂点はその初期に於いて、アガシャの述べたようなエジプト文明であった。その時代の証拠はごく僅かしか残っていないのであるが、数百年の間最高状態を保っていた、この失われたる文明の物語を確認する記録が、大ピラミッドの中や周辺に発見される。書板も記録も共に所謂失われたるアトランティスの文化との関連を示してくれるであろう。

考古学者達は、さらにエジプト文明の他の豊かな強力な時代の記録を発見する。（それは約六千年昔、円筒形の筒の中に規則正しく収められた記録である）この地方には黄金が沢山あって、建物やその遺跡はまだ大部分が砂の下にうづもれており、破壊されることなく素晴らしい形を保っている。未だ発掘されることもなく、砂中に埋れている**古代エジプトの黄金**は、現在の基準からみて、我々の現代の世界の全ての国を購うに十分な位の価値のものであろう。シベリアにも、その資産の一部は、丁度、西紀七十九年にボムペイの住民をヴェスヴィアス火山の大噴火が呑み込んでしまったと全く同様に、冷凍の寒波が来襲し、活動していた家族や全市街をまるのみにして、ほとんど瞬時に拭い去ってしまったものであった。これらの住民のビルディングや家や肉体などは、物凄い寒波が急激に来襲して来た時、彼らが住んでいた位置とその周辺に、そのまま凍結して発見される筈である。これらの人々の外観は現代人に似てはいないが、原始的なというよりは、はるかに現代に近い文化を身につけていた人々である。巨大な氷の塊はほとんど完全にこれらの人々の幾人かの外貌を保存しているであろう。一方、長い間絶滅していた多くの生物の遺骨が発見される筈である。そして、或る場合には、**生きかえるもの**があるかもしれないということである。（この予言についての詳しい説明はこれ以上なかった）

発掘作業は、今迄手のとどかなかった深海の中にも行われ、そこで適当な機械をもった科学者達が、今では海底に沈んでいる大陸の前時代の生物の建築物や他の遺跡の写真をとることが出来るであろう。アトランティスの「失われた大陸」の上に建てられていたと言われている巨大な**楕円形の建築物**が、殆どそのまま発見されてその構造が研究せられるであろう。（この建築物は大体金属物質から造られており、石造のような外観をしているが、鋼鉄よりもはるかに強力であると言われている）

大洋の底の深い谷間には、思いも寄らぬ形の別の生物が生きていて、それは高度の発達をとげていることが発見され、その或るものは太陽の光のように明るい**放射光線を発する体**をもっている筈である。海底には非常に社会的に発達をとげた生物がいて、それが**特殊**の構造をもった家の周囲に集って生活している証拠が明るみに出されるであろう。繰返し繰返しアガシャは言うのであった。「アメリカは『新しきアトランティス』であり、世界を導いて世界平和を打ち樹てようとする国である」と。ロス・アンジェルスは哲学研究の世界最大の中心地の一つとなり、全世界から南カリフォルニアへ、幾千人もの人々が集って来るであろうと予言したのである。終に南カリフォルニアの或る山の頂上に、一つの大きな建築物、「**霊的記念館**」「地震に堪えうるほど充分強力な」建築物が建てられて、そこでは丁度七千年昔にエジプトの大ピラミッドの中で行われたように、神秘的な研究が行われ、その時代の記録が供託されるであろう。

一九六五年と二〇二〇年との間に無限の進歩の時が訪れ、「新アトランティス」が建設されるであろうとアガシャは言うのである。アガシャの説明によると、重大な気候の変化が起こる兆しが、アメリカ合衆国及び他の国々にも見られるという事であった。そして、一つの世界政府がアメリカ合衆国にその中心を置き、この国民と共に世界を指導して「新アトランティス」の役割を果たすであろう。この資格に於いて、アメリカ合衆国は、世界の他の国々の模範となるような技術的社会的進歩をとげるであろう。

一方、大指導霊達の声は次の如く警告する。現代も亦二セモノの指導者と欠点多き指導者達の時代であると。そして又、霊界から霊界通信を送ろうと思う者凡てが智慧の伝達者である時代ではないのである。例えば、高級

指導霊達は次のように警告する 得られる筈のないものを与えようと約束し、我々凡ての者を魅きつける「無より有」を与えんと約束する「指導者」に注意せよと。

そして、各人の肉体は、肉体の物質的境界を超えてその周囲にオーラ（後光）という或る種の雰囲気を持って いる事実を確かめることが出来たのである。例えば、適当な装置によって、我々は人間の**オーラを写真にとること**が出来るとし、単にその前で手をふるだけで演奏することの出来る**音楽器械**のようなものもあるのである。即ち、それは手の「オーラ」をその機械の敏感な電子機構に作用させて、その電子機構の中に「電気容量」の変化を起させることによってそうなるのである。（ラジオの装置はこのような影響から保護されなければならないし、テレビジョンの技師達は、ビルディングや山や其他の障害物によって投げかけられる電磁的「影」を旨く処理しなければならないのである）

また、教育者が、人間は宇宙的生存者であり、単に彼の人生の上に直接関係をもつ現世や環境の生物ではない ということを認めるようになった時、教育は根本的な一大変化を起すであろう。ラテン語に語源をもつ新しい 言語が全世界に普及し、その**世界語**は簡単で容易に学ぶことが出来るものであるが、表現力が豊かであって、それは数千年続いて幾代も使われる言語となるであろう。

経済的には、世界は一種の資本主義形態と銀行形態とを持ち続けるであろうが、非常に変化し改良されて、全 ての人々の利益となるように理想化されるであろうという事である。「戦いは消滅するであろう。欠乏は抹殺さ れるであろう。刑務所や慈善設備は**空になる**であろう。」「人は生命を愛するが故に、生命を傷つけることはし ないであろう」

そして、アガシャは、こう言っている。 宗教的、経済的戦争は既に行われており、それが好転する前にひど く悪くなるであろう。彼はその時、パレスチナに於ける戦いを止める気違いじみた努力を語ったが、その努力は **無駄に終る**であろう 戦いは拡大して奇蹟的な和解が行われないう限り、他の国々にもひろがって行くであろうと予 言したのである。 更に、彼は「或る国家群は興り、ある国家群は没落するであろう」と言った。そして、アメリ カ自身は未曾有の世界的指導国となるであろうが、それは同時に「**没落期**」をも迎えるであろう 即ち国内分裂 の時期と大いなる災害の時期ともいべきものを迎えるであろうと言った。彼は次の如くに言明した。多くの勇 気を失い幻滅を感じた人々が、「大きな勢力を拂わずに、凡てのものを自分のものとする事が出来ると信ず る」ために、共産主義はひろまるであろうと。人々が共産主義の下では大したもの得られず、正しき生活に欠 くことの出来ない表現の自由もなくして、ただ、指導者の奴隷となるだけのことだと遂に確信した時、そのと き、「**共産主義は自己崩壊する**であろう。叛乱が起り戦争が起るであろう。そして、長い年月共産主義は多くの 人々を支配するが、結局それは死滅してしまうであろう。」

そうして、アガシャは次のような意味深い言葉をもって結んでいるのである。「原子力は人類をほろぼす為 にではなく、人類を向上させるために用いられるであろう」 アメリカ合衆国に於いては、未来の一〇年間に一人 どころか、それ以上の**婦人の大統領**が出ることになるであろうとアガシャは言うのであった。

Home

次のような兆に注意せよと光の指導霊達は言うのである。即ち非常に若い人々も深い意味の質問を發し、多くの 新しい世代の人々は、此の世の科学と宇宙の哲学との両方の面で、年長者以上に賢明であるのみならず、彼ら の年代以上に賢明となるであろう。このような賢明な若者達が、無智な古い人々と交替してしまうであろう。古 い人々は時代の無気力な計画に疲れ果て、新しい精神を伝える霊の選士達に全てを譲り渡す気持ちになるであろ う。こうして、彼らが長年の錯誤の世紀の結晶である肩の重荷をおろしてしまった時、彼らは悦んで新しき時代 の黎明の前兆を迎えるであろう。そうしてその時、長い年月の昔に言われた言葉、「**幼な児は彼らを導かん!**」 という言葉を思い出すに違いないのである。 『天と地を結ぶ電話』

ノストラダムスが言うように、地球終末は有り得ない。しかし、少し位の混乱は起るであろうが、光の時代へ 時は流れて行くのである。この訳語が古い『天と地を結ぶ電話』と、新訳語の『アガシャの霊界通信上下』正法

出版社がある。



「天上界が計画する近未来」

高橋信次

しかし、やがて人口増加が頭打ちとなる時がやってこよう。それはそう遠い将来のことではない。近い将来とは人類の長い歴史からみた場合の時間的距離のことであるが、そうした時代に至ると地球上の魂のレベルが総体的に上がり、いわゆるボサツ界という世界が新生するわけである。このことはすでに実在界で計画され、未来図が描かれ、現象界はそれにしたがって進められている。ボサツ界とはボサツ心を得た者が社会のそれぞれのポストに就き、人々を調和に導いてゆく世界である。ブッタが生まれた二千五百余年前、イエスが愛を伝えた二千年前、そして、今日、正法が伝えられているが、こうした正法の伝道はやがて到達するであろう地上の仏国土・ユートピアをめざした、いわば杭打ちであり、今の世の人達は来たるべき地上のボサツ界の先兵として、その役を負わされているといえよう。 『人間・釈迦』第三巻

信次の霊的通信が近い将来、送られてくる

アガシャ教会の現在の霊媒はサルバット氏である。サルバット氏は、ある最上段階の高級霊の霊的通信を受けるために、訓練中である。霊圧（波動）が強すぎて、数日、寝込むほどだそうだが、いつの日にか来日されて、日本語をまったく知らないサルバット氏の声帯を利用して、日本語で、同じアクセントで、同じ語調で語り始めたら、信次師を騙（かた）る人達よ、なんとされるか。「〇〇 That 〇〇」という言葉が第一声となり、きっと佐久なまりの東京弁を語られるはずだが。

人類最高の生命の波動を持つ高橋信次師

平成三年十月二十六日、福井での園頭師の講演会にローリングテストの研究をしている、あるグループの人達が訪ねた。このグループは、誰が本当の真理を説いているか、人間の中で誰が一番精神性が高いかを研究する人達という。

彼等は言った。「この表をつくるのに十万回テストしました。まだ実験の継続中なので正式に発表するまでには至っていませんが」と断わって一枚の表を差し出した。その表には、日本の精神界に影響を持っている人達がズラリと書かれている。主な人名を挙げると、キリスト、空海、親鸞、道元、日蓮、老子や、現代の人物でドラマ、クリシュナ・ムルライ、本山博、政木和三、船井幸雄、隈本 確、石井晋雄、ラジニーシ、川津祐介、野口晴哉、西野皓三、丹波哲郎、桐山靖雄、宜保愛子、崇教真光教祖、中国の気功師、堀田和成の各氏、そして、マルクス、レーニン、池田大作、大川隆法、連続殺人犯の大久保と幼女誘拐殺人犯の宮崎勤の名前がテストされ、その表には精神性の高い順に記入されているが、何んと人類最高の生命の波動を持つのは高橋信次と書かれていたのである。そして、その下にピタリとくっついて書かれていたのは、元国際正法協会会長・園頭広周師

だった。

彼等は、高橋信次師も、園頭広周師のことも、まったく知らなかった。或る日、書店で信次師の本を見つけテストした。また、園頭師の場合も、本屋で本を見つけてテストしている。それで、どんな人物だろうかと思って、講演会場へ訪ねたというのだ。

Home

『心行』によって奇跡が起る理由（わけ）

同じく平成三年十二月十五日、大阪にも生命の波動を研究しているグループがあり、国際正法協会の大阪支部の忘年会に園頭師を訪ねて来た。「心行（しんぎょう）は宇宙の神理、人間の心を言霊（ことだま）によって表現したものである。それゆえ心行は、拝むものでも、暗記するものでもなく、これを理解し行うものである。正法は、実践のなかにこそ生命が宿ることを知れ」と信次師は書いているが、この「心行」をテストしてみたところ、信次師の生命の波動と同じになるという。そして、しかも「心行」を誦えた直後の人の生命の波動を計ると、最も高い如来界の波動になった。暫らくすると、またその人本来の波動に戻ってしまうというのである。我々凡人の波動は、せいぜい幽界か霊界どまりである。（上位より如来界、菩薩界、神界、霊界、幽界）そうしてみると、たとえ自分の低い波動であっても、「心行」を何回も誦げることによって、如来界の波動にまで上げられることを続ければよいということになる。たとえば、病人に読んで聞かせると、病人の心の波動がぐっと高くなり、魂が安らぎ自然治癒力が増して病気が治る。しかし、御利益信仰の誤解を受けるので事例は省略しよう。

般若心経の波動は余り高くない

般若心経を朝晩読み、写経をしている人は多い。しかし、テストしてみると「般若心経」から出ている波動は、決して高くないという結果を大阪のグループは発表した。

「般若心経の波動は余り高くない...と。これは驚ろきだ」

「そう、現代では宗派を越えて、有難がられているが、信次師も講演の中で『声の練習をするんだったら歌でも唱った方が、ずーっと良いんじゃないですか。もっと他の字の練習が...』、と言っている。」

これまで述べた二つのグループは、特別に宗教団体に属している訳でもなく、良識的に真理を求めている人達であり、精神界、宗教界を第三者の立場で公平に見ているグループという。



天上界は急ぐ...今世紀は残りわずか 四歳の子が大変なことを喋った

Y 泰子氏は、平成三年の十二月に国際正法協会を知り、二月に元K女性講師の「グレースの会」にはじめて参加した。まだこの時までは、園頭広周会長、G L A、高橋信次師についてはまったく知らなかった。平成四年三月、園頭師はG L A側の弁護士、本部職員と『新復活』出版問題について話し合い、出版中止を決意。法律上の問題は解決したが、宗教上の教義問題についてのG L Aとの協議を約して三十分で終了。この後、G L A側と園頭師の協議の日程は五月八日と決まった。それを園頭師がG L A本部に通告したのが三月十二日だった。この日を境にしてY 泰子氏の二男で四つのFちゃんは、しきりに園頭師に会いたいと言い始めた。Yさんは園頭師には面識がない。どうしたものかと思案されたが、三月十五日の神戸講演会に園頭師を尋ねた。講演が始まる前のあわただしい時間をさいて、園頭師はFちゃんに「光りを入れ」た。するとFちゃんは、満足して「帰る」と言った。その日から突然、四つのFちゃんは禅定・瞑想をするようになったというのである。

「ぼくの部屋に来ないで」と言うので、Yさんはその通りにしていた。いつになく静かにしているので、ドアをそーっと開けて見ると、Fちゃんから丸い黄金の光が出ている。Yさんは我が子ながらビックリして腰を抜かす程驚いた。そのようなことがあった後、Yさんが『心行』を上げると、Fちゃんはその後をつけてどこの国の言葉かわからない言葉で唱え、「お母さん『心行』は内に心を込めて上げないとダメだよ」と言った。そして園頭師が、大牟田の研修会の時に上げた『心行』のテープを聞きながら、安らかに眠るようになった。

ある日、禅定が終わったFちゃんは、ワァーッと泣き出して「お母さん、かぶと虫のお母さんが死ぬ。二匹のかぶと虫の子供がかわいそう。早くクワガタが助けにきてくれないと可哀想」と泣き叫んだ。Yさんは何んのことかわからない。それで先の元K女性講師に、「かぶと虫が...と童話みたいな不思議なことを言いたしたのですが...」と電話した。「それはきっと人のことよ、人の名前を言う筈よ」と元K女性講師は返事をした。それで、YさんはFちゃんに尋ねると、「ぼくは毎晩、神様の所へ行くんだ」と言った。

「その神様って誰れ...」

「『心行』のお父さんだよ。高橋信次って言うんだ。時々その神様がいないことがあるので、後をつけて行くと、園頭という人の所へ行くんだ」と答えた。

「かぶと虫のお母さんって誰れ！」

「高橋一栄という人だよ。頭と胸にいけないものが出来て、それが生命取りになるんだ。すると、二匹のかぶと虫の子供がもみくちやにされるんだ」「そのかぶと虫の子供って誰れ」

「高橋佳子という人とその妹だよ」

「クワガタって？」

「それは園頭という人だよ。ぼくは早く園頭っていう人に会いたいんだ。会えばすぐわかってもらえるんだ」と言い始めた。

四月十八日の関西幹部研修会にFちゃんは園頭師を訪ねた。園頭師はFちゃんと同年代のNさん母子も呼んでいた。Fちゃんは普段は四つの飛んだり跳ねたりする普通の子供である。園頭師は光を入れた。師はその時、懐か

しさがこみ上げて涙を流すのだった。

「懐かしさがこみあげて...？」

「そう。園頭師が光を入れることによって、園頭師の知る「ある人」が、Fちゃんの声帯を通して園頭師に語りかけたのであろう」

「それは懐かしかったらうナ。ところで、Nさん母子って？」

「Nさんの長男君は、四月十二日の大阪での『聖母の時代』大講演会にお母さんと参加した。ところが、その三日後に長男君が天上界の夢を見たと言うのだ。絵に描いては解説する。実に鮮明な夢だった。その夢というのは家族で天上界に行った夢だった。Nさんに長男君の話話を語ってもらうと次のようだった。その日は反省の日で、高橋信次先生の下に二百人以上の天使が集って反省をしていた。Nさん家族は命じられて、『心行』を配ったり等の手伝いをして忙しかった。先祖の中では唯一人、長岡外史が会いに来られたが、他の用事があるらしく、すぐに行ってしまった。天上界は時間の流れが違って、こちらの一日が、あちらの一年分ぐらいで、皆さんは一年に一度か二度しか間違いを犯さない。反省の会の前は何時間も口を聞かず、心を鎮めることになっていた。光の段階は一目で分かり役割も決まっていた。光を見ているだけで心が安らいで、悪い心なんてなくなってしまう。神様がすべてコントロールしておられ、高橋信次先生は神様のすぐ下の最も大きな光の方だった。光の大きな強い天使様達は、皆物静かで無駄なおしゃべりがなく、離れたところの光の弱い天使様の中には、おしゃべりな方もいた。人に対して悪いことをしたら、必ず償いをしなければならない。仲直りの方法や償いの方法を教えてもらっている人もいた。このような内容の夢だったことを報告している。そのような理由で、Nさんの長男君（小四）とFちゃんを引き合わせることとなったというわけだが、Fちゃんは『ぼくと同じように、高橋信次先生に会える仲間が既に外にも生まれている』と、言っている。Fちゃんは、これから正法を担う前途ある光の大天使である。静かにその成長を楽しみたい。これ以上の言及は避ける。」



Home



Home

高橋信次師と園頭広周師に学ぶ

「正法と創世記」

- エデンの園、アトランティス大陸、ピラミッドの謎 -

「神」

神とは大宇宙を支配する大意識そのものである。

太陽も人間も素粒子も、すべてこの大意識の経綸のなかで生かされ生きている。

「大宇宙の誕生」

この大宇宙は神によってつくられた。大宇宙が発生する以前の大宇宙は光明という神の意識だけがそこにあった。

「あの世とこの世がつくられた」

意識の働く宇宙（あの世）と物質界の宇宙（この世）の二つの世界を神は創造した。

何千億年前か何兆年前かわからないが、ず - っと過去の最も調和された或る星に、人間が生まれる目的のため

の生活環境が永い年月をかけて整備されていた。人間にとって必要なものすべてが。つまり、食糧も微生物も、共生する全ての生命体が人間の誕生を首を長くして待っていた。すべてのものが整った後に人間が誕生することになった。

「数字の日本的よみ方「ひ、ふ、み、よ、い、む、な、や、こ、と」は、天地創造から人類誕生までの順番である。」

一、ヒ 霊、宇宙のはじめには光明という神の意識だけがあった

二、フ 風、空気ができた

三、ミ 水、地球は水で覆われていた

四、ヨ 世、海面上に陸地が隆起し、地上が出来た

五、イ 生命の出現。微生物や植物、藓または葦草の誕生発生

六、ム 虫類や小動物の発生

七、ナ 魚類や海に棲む動物の発生と誕生。魚を「ナ」と言う

八、ヤ 鳥類の発生。鳥が矢のように飛ぶことを形容して「ヤ」という

九、コ 大動物、獣類の発生。日本では昔から、牛の尻を叩いたり鼻つらをとってひく時に「ココ、ココ」と言った。「コ」とは獣類のこと。

十、ト 人類の誕生、天孫降臨。人をヒト（霊止）という。宇宙最始源の神の霊がトと止まって、止りとどまって現れたということ。これを天孫降臨という。

現代の日本には漢字あり、平仮名あり、カタカナあり和洋の数字と多彩だが、英語を例にとっても大文字、小文字、はな文字、数字に過ぎない。日本よみの「ひとつ、ふたつ、みっつ、、、、、、」が天地創造から人類誕生までの順番だった。その中でも最後の「十」の「ト」に人類が誕生した。すべてが準備されたあとに、神の子人間がこの地上界で生活をはじめたというのである。（園頭広周師の記述要約）

「人間の誕生 - それは忽然と物質化された」

人間は、神の意識から別れ、神の意思を受け継ぐ万物の霊長として産ぶ声をあげた。人間の誕生は、意識界いう実在の宇宙（あの世）に、まず姿を現した。そうして、神の意思である調和をめざす神の子として、物質界（この世）に誕生した。この世の最初の間は地上の眼でみるならば、大地の一隈に、**忽然と物質化された**といえるだろう。動物も植物も鉱物もこのようにして大地に姿を現わした。

「人間はあの世とこの世を輪廻する。」

あらゆる生命物質は、実在界・意識界（あの世）と現象界・地上界（この世）を循環することになった。

「小宇宙としての人間」

「神」の体である大宇宙に対して、「神の子」・人間を小宇宙と呼ぶ。人間の肉体細胞は六十兆個、大宇宙の六十兆個と言われる星ぼしとの関係は不思議である。



「大宇宙と小宇宙との関わり」

大宇宙から見れば、極微の一点にすぎない太陽系を見た時、太陽を中心に九つの惑星が循環している。高橋信次師は、昭和五十一年五月の講演で「やがて十惑星の事実を知るでしょう」と予告をしたが、昭和六十二年七月にはアメリカのNASA（米航空宇宙局）が「太陽系に十番目の惑星が存在する可能性は否定できない」と発表した。どうも十惑星が真実のようである。高橋信次師は、意識によって宇宙の果てまで見通す能力を持っていたのである。「十惑星の新事実」は、高橋師が「地球には月以外のもうひとつの衛星が飛んでいる」と言った言葉と共に注目に値する。地球は大宇宙の中のひとつの構成員にすぎない。地球に住む人間は、またその中の極微な一員である。だが、人間の心（意識）は神の子として宇宙大の広さを持ち、人間は宇宙と一体という神性、仏性を生まれながらに持っている。

そこでウエブ・マスターは、考えた。大宇宙の中の、ほんの極微の一点にすぎない太陽系を見たとき、太陽系を中心とした十惑星の事実が、小宇宙である人間のからだのシステム系と一致することに着目した。まず、神のからだである大宇宙の六十兆個の星々の一系みだれぬ整然とした運動、例えば太陽と地球、地球と月の自転公転から割り出した時間は十万年に一秒の誤差しかないという事実。この超事実は、まさしく神の意志、神の意識のたまもの以外の何ものでもない。そして、肉体細胞の整然としたコントロールは、人間の心（意識）の働きに外ならないのだ。太陽系を例にとれば、太陽を中心として十の惑星が理路整然と統制され、太陽は我々に熱、光りを無償で与え、生きる力を与えてくれる。

これと同じように、人間のからだの中で心臓は、太陽と同じ存在であり、中心となる。心臓から出された血液は身体のすみずみまで酸素やエネルギーをあたえ、循環してまた帰ってくる。太陽系は太陽を中心として、水星、金星、地球、火星、木星、土星、天王星、海王星、冥王星と未発見の星を含めて十惑星があって、人間は心臓を中心にして十系統の器官がある。どうして、これを述べるのかと言えは、現代医学の分類とは異なるが、十惑星と身体がピットリ一致することを説明したかったからである。高橋師や園頭師が教える「正法」は自然をお手本にするというもので、人間の体の機能を考えた時、現代の九惑星のままでは説明がつかないのに、十惑星ではキチンと整理できる。

「 太 陽 系 」 中心は太陽

- 一 、 水星 二 、 金星 三 、 地球 四 、 火星 五 、 木星 六 、 土星
七 、 天王星 八 、 海王星 九 、 冥王星 十 、 未発見の惑星

Home



「 人間のからだ 」 中心は心臓、血管 - 血流系

- 一 、 消化・排泄系 口 食道 胃 腸 肛門
二 、 呼吸系 鼻 気管 肺
三 、 通信伝達系 脳 脊髄 神経
四 、 排水系 腎 膀胱 泌尿器
五 、 生殖系 生殖器
六 、 化学処理系 肝臓 胆嚢 脾臓 膵臓
七 、 視覚系 眼

- 八、聴覚系 耳
- 九、骨格系 頭蓋 骨
- 十、表皮系 筋肉 外皮 ツメ 髪

高橋信次師の「ことば」を要約しよう。

「人間を称して、小宇宙といいます。なぜ、小宇宙かといえば、人間そのものは大宇宙とつながっており、大宇宙の縮図であるからです。まず人体についてみますと、人体は、約六十兆からの細胞からなりたっています。そうして、心臓、肝臓、などの諸器官は、それぞれ特有な細胞集団によって形成されています。特有な細胞とは心臓が肝臓になったり、肝臓が心臓となることは出来ないためです。地球は地球であり、火星は火星としての特質を持って、太陽系に依存しているのと同じです。そうして、各諸器官が、よく調和統一されることによって、人間それ自身の生活を可能にしているのです。ですから、各器官一つでも欠けたり、痛めば、人間の五体は、全体的に、その機能を弱めることとなります。しかし、人間の五体は、血液の万遍ない循環によって保たれています。心臓から出された新しい血液は、体のすみずみまでゆきわたり、各諸器官を動かし、再び心臓に還ってきます。そうして又、心臓から排出されてゆきます。太陽の周囲を、惑星が、円を描きながら、まわっています。循環の法則にしたがって、まわっています。そうしてその法則を続けることによって、各惑星そのものは、惑星としての役目を果たし、太陽系を形成しています。太陽系を人体にみたとすると、実に、よく似ていることが分かります。地球や火星の円運動が可能なのも、太陽があるからであり、太陽の熱光がなければ、こうした円運動、生命の躍動は停止してしまおうでしょう。人体各部の諸器官が、その機能を果たせるのも、かわりない心臓の働き、血液の循環によってであり、心臓が停止すれば各諸器官も、その機能を停めてしまいます。しかし、人間の心そのものは、宇宙の意識につながっていますから太陽系よりも大きく、大宇宙に広がっていることを忘れてはなりません。

何れにしましても、太陽系にしる、人体にしる、その機能を調和させているものは何かといえば、大宇宙を支配しているところの意識、エネルギーであり、人間にあっては、生命エネルギーであります。その生命エネルギーは、大宇宙意識に通じており、神の子、仏の子といわれる所以も、ここからくるのであります。そうして、その生命エネルギー、意識の中心が、心であります。その心が、人体各部を調和統一させ、五体を維持させています。血液の流れも、胃腸の働きも、すべて、人間の意識、生命エネルギーである心が指令していることを忘れてはなりません。ですから、人間が感情的になったり、怒ったり、悲観したりしますと、体のどこかに支障をきたします。胃腸などはとりわけ敏感ですから、その働きを弱めることとなります。「病は気から」とは、この辺の事情、人間の心の在り方を伝えたものです。生命エネルギーの補給は、夜の睡眠であります。肉体口スの補充は、動物、植物、鉱物のエネルギーからとります。このように、人間の五体は正法に適った循環の法則に従って維持されていることが分かります。それ故、その法則にそった生き方をしておれば、健康は維持され、神仏の恵みも、自然のうちにうけられることとなります。」

これより、人間と宇宙との関係について、これまでに科学的に明らかにされていることを列記してみたい。

肉体的人間と宇宙とのかわり

一、女性の排卵周期とのかわり

女性の排卵の周期は、太陽系の太陽、地球、月の自転公転の輪廻、循環と同様に、月の周期と同じ約二十八日に一回排卵日が循環してくる。それは、女性の体温差によって排卵日を確認することも出来るが、精子の場合は卵子の周期性と異なり、自由に調和されて時間の影響を受けない。女性の生理は「月のもの」「月経」

と言われ、月齢や潮の干満と関係が深いと言われる理由である。この女性の生理は、二十八日に一回の排卵が行われ、精子との調和、合体がなされて妊娠、または受胎と言うが、生理（メンス）は、合体が行われなかったために、受胎準備の解除の証として起こる。医学的データでは生理の始まるのは新月か、満月の日に多いと言われるが、排卵はその前に行われることになる。月に一回の排卵された貴重な一個の卵子に対して、精子の周期性にはないと言われるものの「その日」に合わせ欲情するように神様はおつくりになっているはずだ。それが、人間は、満潮、干潮に合わせて欲情しているのだという説の根拠にもなるのである。

一、人間の「死」とのかかわり

人間はこれまでの経験のなかから、人間が死ぬときは、たいてい海が干潮のときだということを知っている。或る作家のお母さんが亡くなる時、死に近づく息づかいを克明に観察、記録したところ、息を引きとられたのが干潮のクライマックスであったという。ウェブ・マスターの父の死も、最後の心臓の鼓動が干潮のその時であった。

一、海水と血液

血液は海水とよく似ている。海は生命の母といわれる。「母」とは生命を生む者のことを言った。医者が、病人に対して生理食塩水を注射して元気を回復させる時代もあった。昔は戦争で負傷した人への緊急医療として、海水を注射した例もあるが、この自然の浄化水である海水が血液に似ているとは不思議である。

一、満潮と出血

ある有名なドイツの外科医は手術の時に、海が満潮になると、決して患者の出血が多かったという報告で知られる。

一、炎症とのかかわり

最近手術も少なくなってきたが、盲腸炎やへんとう腺炎のような病気が、月齢に関係があり、下弦のあと、三日くらいのところで発病することも知られている。このように宇宙とのかかわりを持つと言われる病気に対して、高熱が出るからとか、いつも腫れて熱が出て困るからという理由で、炎症が起きる器官を外科的に手術して取り除くことが、果たして正しいものかどうか。そのひとに何かを反省させるための現象とは考えられないだろうか。

子供が、いつも熱が出るとか蓄膿症で困るとか、その子供の姿を見て親が心を痛める場合は、夫婦の不和、家庭の不調和に対する警告であり、反省のまたとないチャンスなのである。家庭が調和され、夫婦が仲の良いところには、困ったことは起こらないものだ。ウェブ・マスターの学友に医者の子供がいた。いつも蓄膿症に悩んでいて、春、夏等の長期休暇の後には手術の跡が痛々しかった。今度は東京の、前回は大阪の 名医が手術してくれたと言っては傷跡を見せてくれたものだが、上顎骨の洞という洞を手術の対象にし、顔は傷だらけであった。なぐさめる言葉もなく、ただ可愛想うだなと思うだけだった。そしてその後もその人はいつも、蓄膿症とやりに悩んでいた。

高橋師の「ことば」の中から

「小さい子供の場合は両親の心の調和度が反映されているから、子供に事故が起きる、病気するというのは、両親の心の在り方、生活の在り方について反省を求めていることを予告している。（註：なぜ親に原因があるのかと言えば）子供の自己保存本能は、自我我欲というにはあまりにも純粹であるからである。」

一、体温、脈拍、血圧とのかかわり

寄せては返す波の一分間の回数は 18回

体温は $18 \times 2 = 36$ 度

一分間に打つ心臓の鼓動は $36 \times 2 = 72$ 回

最高血圧は $72 \times 2 = 144$

Home



「地球の誕生」

現代の科学によると地球は約五十億年前に誕生したという。高橋師は「地球誕生は三十三億年前」と講演の中の「ことば」が残っている。人間がこの地球上にすみつくようになるのは、今から三億六千五百年前のことであつた。神はその意思をもってエネルギーをつくり原子をつくり、分子をつくり気体を発生させ、やがて液体となり固体となり、大宇宙は神の意識のままに整然と天体がつくられた。太陽を中心とした星雲はそれぞれ凝固すると太陽を中心として自転しながら公転し始めた。地球は、太陽の自転によって飛ばされた一つのガス状の星雲であつた。太陽の回転によって飛ばされたガス状の塊りが、永い時間の経過に凝固して、それぞれが太陽を中心として回転する惑星となつたのである。ガス体であつた地球が次第に冷え固まって地殻を形成した。空ができ、できたばかりの地球は全部水におおわれていた。水におおわれていた地球に爆発が起り、やがて水面上に陸地が

現れた。それからまた地球全体が爆発する。その頃の地球は噴煙と灰と溶岩が噴き出したための水蒸気によって空は真っ暗であった。空に昇った水蒸気は雨となって地表面に降る。また、海底火山が爆発して、灰と水蒸気を天に吹き上げる。そのうちに全地球的な爆発はなくなり、天にのぼっていた灰も水蒸気も地表面におさまって地球は静かになり、晴れた空と、海と、陸地とに分かれて、やがて、生物が発生し、人間の住む環境が整えられた時に神の子である人間が天孫降臨したのである。（園頭広周師の記述要約）

高橋師の「ことば」から

「かつて地上に人類が住む以前は、火山爆発と雨のくりかえしがつづき氷河時代を何度も現出した。これは火山爆発の降灰が天空に舞い上がり、層をつくり、太陽の熱光を遮断したため地上の気温を下げたからである」

「最初の生物の誕生」

地球に生物が住むようになったのは、今から数億年前である。最初の生物は、太陽の熱・光と、大地と、海水と空気と、それに意識界と表裏一体の宇宙空間の相互作用によって地上に現れた。微生物が誕生した。続いて植物が発生し、動物が姿をみせはじめた。「ヘビは地球の人類より古い五億年前」と高橋師は言い残している。

「人間をはじめとする生命物質が成り立つための五つの元素」

高橋師は教えた。人間をはじめとする生命物質が成り立つためには五つの元素がある。それは地球という大地、水、空気、太陽、宇宙であると、そして中国の「天台智ぎ」は、これを、地（地球）、水、火（太陽）、風（空気）空（宇宙）と説いた。

「地球の最初の間人は、他の天体から飛来した」

神が大宇宙を創造され、大宇宙の片隅に忽然と物質化された人間が、地球の誕生より以前に、大宇宙のどこかの星で生活をしていた。その星で素晴らしい文明、即ち霊的、物質的文明を築いた他の天体の人間が、一団となって地球に飛来し生活をはじめた。

「最初の地球人はベ - タ - 星から飛来した宇宙人だった」

地球が、人間の住める環境になった三億六千五百年前に、数億光年先のベ - タ - 星より、円盤（UF0、反重力光子宇宙船）に乗り、年若き調和された緑に包まれた地球へ飛来したのはベ - タ - 星人だった。ベ - タ - 星は風土、気候一切、地球と変わりなく、肉体的にも地球人とまったくかわりないと高橋師は教えた。高橋信次師が昇天（昭和五十一年六月）する直前の五月四日の講演会では、高橋師の力によって長女、佳子氏に天使長ミカエルを降霊させ、彼女の声帯を通して語らせるビデオが残っている。佳子氏の口を通してミカエルはベ - タ - 星を「ベルタ星」と発音している。高橋師の他の会場での講演テープを数巻聴き比べても、高橋師は全て「ベ - タ - 星」と言っている。発音の違いであろうが以下ベ - タ - 星で統一したい。それに、もう一つ注意していただきたいことがある。ベ - タ - 星人の飛来は「三億六千五百年前」と記述したが、先述の昭和五十一年五月四日、緑の

休暇の研修会での「現証」の時間に高橋師は佳子氏にミカエルを降霊させた。これよりビデオを再現してみよう。

高橋師は、二つのイス壇上に自ら気さくに持ち出す。佳子氏と関氏を呼ばれ、関氏にマイクを渡しながら「関先生、ミカエルを入れますから、話を聞いてください。ミカエルを入れますから」と、イスに座っている佳子氏に対して、高橋師は立った状態で右手の手のひらを向けながら何か解らない言葉（異言、その当時の言葉）で話しかける。すると、それと呼応したように佳子氏の口から同じような当時の言葉が返える。二人が何を喋っているのか我々にはチンプンカンプンで解らない。それからゆっくりとした日本語で、ミカエル天使長は佳子氏の口を通して語り始める。

「ミカエルでございます。私達が初めてこの地上界に参りました時は、今から「三億四千六百年前」でございます。私達が参りました地は「ベルタ」と言う星でございます。ベルタの星は調和され、もう私達の力は不要となるために、そこで魂は分かれたのでございます。そして私達は、新しい緑に燃えた神のお選びになったこの地球に、私達の主であられる「エルランティ」と共に、「七大天使」は「エルカンタラ - 」という所に着地しました。この地をエルランティは「エデン」という名前をおつけになりました。エデンというのは調和された土地、安らぎの土地という意味でございます - - - - 」

ミカエル天使長は佳子氏の声帯を通して「三億四千六百年」と言っている。私たちの感覚からすれば、億年単位だから四千年も六千年も大した違いは無いとは思いますが、ウェブ・マスターは次の理由にによって「六千年」の方に統一したいと考えている。その理由は、こうである。

高橋師が「ベ - タ - 星」とか「三億六千 - - 年」と明らかにし始めたのは昭和五十一年の昇天する頃からであった。それは昭和五十一年三月、四月、五月、六月の講演生テ - プや講演筆録によって明らかである。ところが講演筆録によっては、「六千万年」という記述も残されている。これらのテープ全部を所有していないので確かめようも無いが、高橋師の講演はスピ - ドとリズムに乗ったもので、言い間違いもあったかもしれない。ところで、高橋師にもっとも古くから交流していた高弟に村上宥快という人がいた。この方はすでに故人になられているが、氏の残された著書には「三億六千四百五年」と書かれている。高橋師が亡くなる頃には、村上氏は、高橋師が創設した「宗教法人G L A」とは距離を置いていた。高橋師が亡くなる一と月ほど前の五月八日、村上氏は一人で高橋師を八起ビルに尋ねられた。

その時、高橋師は病床にあった。消耗しきった様子で、「光を入れてくれませんか」と弱々しく頼む高橋師に村上氏は「光を入れ」る。しばらく過って、血の気ももどり、少し元気になった高橋師は、村上氏にノ - トを取るように命じた。「今より、三億六千四百五年前ベ - タ - 星より地球上に脱出 - - - - 」と静かにそしてはっきりと語り始めた。氏の著書には、この情景がこと細かに記述されている。「G L A」にも出入りはしない、講演会にも顔をださぬ氏に、久々に尋ねてくれた最も古き弟子への情愛を示して、氏一人のためにゆっくりと話し始めたのである。一言一句を聞きのがすまいと氏はノ - トを取ったに違いない。二人だけの独演会に、村上氏は師弟としての気やすさから、難解な語りは聞き返し反芻しながらの一と時であったと推察できる。その時のノ - トの記録を元にして氏は著述されたであろう。このような理由によって「三億六千五百年前」と統一して記述することにした。高橋師の講演はすごい迫力とスピ - ドで中断なくなされるので、言い間違いもあったと思われるが、いろんな人の講演と比較しても他に類を見ない。さすがだと思ふ。師の話は、神理の「ことば」だから砂に水が吸い込まれるように心にしみ込んで行く。ぜひ一度、機会があったら講演ビデオやテープを聞いて欲しい。そして、年数の真偽は、読者の判断にゆだねたいと思ふ。

「エデンの園はエジプトとエルサレムの間にあるアル・カンタラ」

ベ - タ星より飛来した一団は、天上界の最高責任者であるエルランティが、七大天使以下六千人のベ - タ - 星人とともに、ナイル川の三角州より少しスエズ運河に近づいたアルカンタラに着地した。六千人の第一艇団が、

そこにエデンの園をつくった。この六千人の第一艇団は如来界、菩薩界の高霊格の人達だけだった。高橋師は「エデンの園」の場所を明らかにしたが、現在のアフリカは砂漠地帯となり、生活環境が大変厳しいことは誰でも良く知っている。「よりもよってあんな暑くるしい場所がエデンの園だなんて」と、にわかには信じられないと考える人も多いと思うが、当時は今のような砂漠などではなく、温暖で緑豊かな素晴らしい環境だったようである。三億年も前のことだから高橋師の言い残した「ことば」を信じる以外にはないが、数年前にスペースシャトル・コロンビア号に積み込まれた地球観測機器がエジプトの砂漠に埋もれた古代の大河を発見した。ナイル河とは別の大河だという。現在の乾燥した気候とは違って、この河の流域で五千年程前に、古代人が生活していたと推定されると報道していた。砂に埋もれた古代の大河や緑豊かな穀倉地帯をうかがわせる新事実が判明しているのだ。これをどう考えるか。これは地軸の移動等による、気候帯の変化があったと推定できる。つまり、現在のアフリカのように乾燥した砂漠地帯ではなかったことを意味する。これから考察しても、三億年ほど前のアフリカはしのぎ易い理想郷だったと断言しても、誰も否定する事はできないと思う。



「天上界の最高責任者エルランテイ」

モーゼはそれを「神」といった。だからユダヤ人はエホバ、ヤーベを神だと信じている。昭和四十八年九月志賀高原高原で十人の特別研修が行われた。このとき高橋師は、「モーゼにヤーヴェと名乗って啓示をを与えたのは僕ですよ」、と言っている。これは「**奇跡の写真**」の項で詳しく述べているので参照して欲しい。

「七大天使はどんな人たち」

七大天使はミカ、ガブリ、ウリ、サリ、ラグ、パヌ、ラファ、の七人だった。のち、彼らの功績をたたえて、エル（ライト・神の光、エル・ランテイのエル）をつけて、ミカ・エル、カブリ・エル、ウリ・エル、サリ・エル、ラグ・エル、パヌ・エル、ラファ・エル、と呼称した。

● 「七大天使の使命と役割」 ●

ミカエル - - 宇宙界と如来界をつなぐ天使長として七色の翼を持つ。

ガブリエル - - 釈迦、イエス、モ - ゼに正法布教の状況を通信伝達する。ガブリエルの下にはセラビムと呼ばれている菩薩、ケルビムと呼ばれている諸天善神がそれぞれ数百名配置され動・植・鉱物・などの動物霊、自然霊などを指導調和させ、地上の調和を図る使命を持つ。イスラム教のマホメットを天上界から指導したのはガブリエル（釈迦の時代の舍利佛で、現代の園頭広周師）である。アラ - の神とはエルランテイであり、釈迦であり高橋信次師である。

ウリエル - - 政治、経済、自治

サリエル - - 医学、薬学

ラグエル - - 法律

パヌエヌ - - 科学全般

ラファエル - - 芸術、文学、歴史

ミカエルはメシャではなく、真のメシャの助力者で天使長である。エホバ、ヤ - ベ（ヤハウエ - ）、アラ - は、エル・ランテイであり現代の高橋信次師であった。真のメシャとはエル・ランテイの分霊としてのイエス、釈迦、モ - ゼをいう。天上界ではイエスはイマニル・イエス・キリストと呼ばれ、**釈迦はカンタ - レ**、モ - ゼはモ - ゼと呼ばれている。

● 「釈迦、イエス、モ - ゼの役割と使命」 ●

釈迦・・・王子という富裕な階級に出生し上へも下へも全般的に正法を広める役割

イエス・・・左官の子として貧しい階層に生まれ、貧しい者の味方となり下から上へと正法を広める役目。

モ - ゼ・・・奴隷階級に生まれた後、王宮にひろわれ一躍上層階級にのぼり、上から下へと正法を広める役割であった。

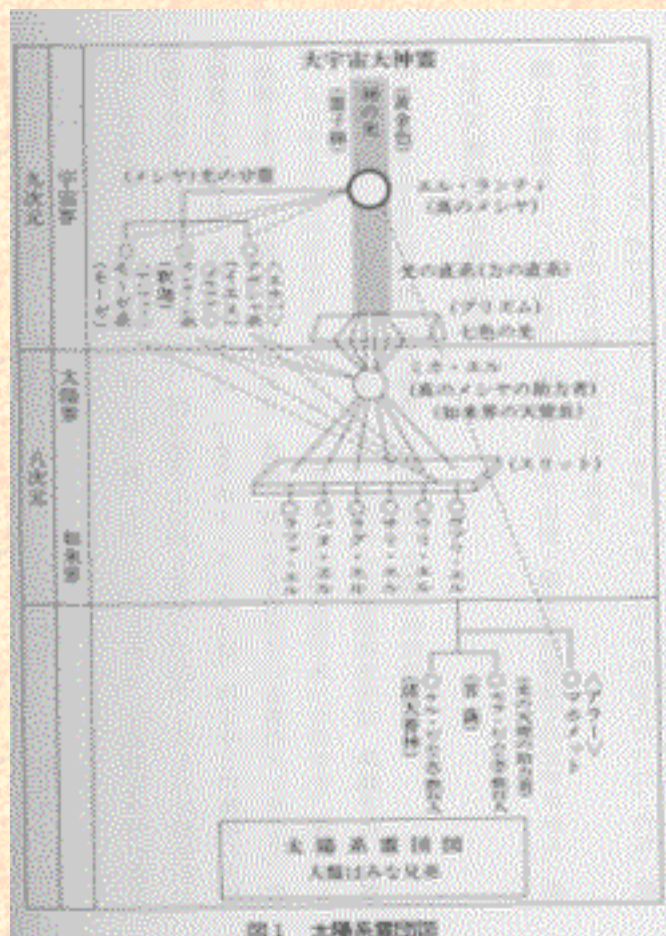


図1 太陽系諸神

世界宗教といわれるキリスト教、仏教、ユダヤ教は、神（大宇宙大神霊）の人格的発現がエル・ランテイとなり、その神の救いの慈悲が、それぞれの役割により示現を異にしたのであった。それは、釈迦を中心としてキリスト、モ - ゼとして現れ、これらのお三方を三位一体というのである。

「エデンの園の六千人の住民は如来界、菩薩界の人達だけだった」

エデンの園の住人は如来界や菩薩界の人達だけだったのである。高橋師は日本人として生まれたので、日本人が馴染み易い仏教的な用語（如来界、菩薩界など）で説いているが、キリスト教なら、光の大天使や光の大指導霊とでも言いあらわせる。どんなに立派な人格（霊格）の人達の集りか、他の項でも出てくるので簡単に説明する。

Home



「 人間（ 霊 ）の段階（人格と霊格） 」

神の前において、人間は皆、平等だが、人間性の段階はある。

（これより高橋師の分類の要約）

神 如来界（金剛界） 菩薩界 神界 霊界 幽界 地上界 地獄界 魔王

色は天上界 色は地獄界

この太陽系には三百六十億の靈魂があり、「本体一と分身五」の法則により、この地球には計算上、六十億人の人間が肉体を持つものが出来る。しかし、地獄界に安住したり、人間のご都合主義による墮胎や人間の想念行為の結果による天災（本当は人災なのだが）等によって現代は五十億程度である。

地獄界 修羅界 餓鬼界 畜生界 煉獄 無間地獄 魔王

如来界（金剛界） 八次元の世界

宇宙は我なり（宇宙即我）と悟り、一切の執着から離れ人類は皆兄弟だという境地に達している方達で、神と裏表一体となり、如来、上々段階光の大指導霊達の世界。イエス、モゼ、釈迦（ゴダマ・ブッタ）等、あの世とこの世を通して四百二十五人（一九七二年現在）がおられ、地球上を支配している。太陽系には、ほとんどアガシャ - 系グループの者達が多い。如来界には宇宙全体の諸現象を即座に見ることの出来る展望台があり、それはどんな小さな問題でも見落すことがない精妙なものである。たとえ、如来であっても実在界（あの世）と現象界（この世）の輪廻はくり返され、この現象界で地上界の人々の失われた心を取りもどし、神理の種を蒔いて還るのだ。イエスさまの住いはイスラエルの上空に、ブッタの天上界の住いはインドの上空にあると考えてよい。

菩薩界 七次元の世界

心は慈悲と愛に満ち満ちて、地上界、天上界の衆生を救っている。調和された世界で、心を悟っている者達の世界。ペテロ、アンデレ、パウロ、ミロク、マンチュリア、カッチナ - 、日蓮、親鸞（菩薩界でも下位の段階）等、この世とあの世を通して約二万人（一九七二年現在）の光の大指導霊や菩薩。

神界 六次元の世界

人から、損害を与えられても、人を非難しない。人を非難する前に、まずその原因をふりかえり、二度とふたたび、その原因をつくらないように努力する世界。皆人類は兄弟だということを知り、魂の転生輪廻の事実を悟っている。自我心がなく、専門的な分野で研究がなされている学者や博士の多い世界で、医学、天文、科学、

哲学、文学など一切のエキスパートが百般の研究を読んでいる世界。八正道の尺度がどの界に当たっているかと言うと「神界」にある。この世とあの世を通して一億数千万人の世界。日本の宗教界では法然や道元は神界の人であった。

霊界 五次元の世界

この世界はいわば持ちつ持たれつで、人に与えたものは与えられる。与えたものが返ってこないと気持ちがスッキリしない「正しさ」が支配している。生前における常識の観念がここでは価値の尺度になっている。地球上の人類の三分の一が「霊界」以上、三分の一が「幽界」クラスの人たち、三分の一が他の天体からはじめてこの地球上に魂の修業に出てくる人達である。特別の使命を持った光の天使は霊界以上の三分の一の中の一割位である。その中には学者あり、経営者あり、あらゆる人達がいる。霊界から神界の裏側には天狗界、仙人界（キンナラ・マゴラガ・インナパ）があり（ヨ・ギス・トラ、日本の修験者達が多い）、肉体行によって法力だけを学んでいて、相変わらず、厳しい肉体行をやっており苦しみから解脱していない、自我の強い者達が多い。この住人は、この地上界で厳しい山中修業を行った行者達が多く、他人に対しては慈悲が少ない者達の世界である。

幽界

この世界は自分という立場が正しさの尺度になっている。自分さえよければ、人はどうでもというエゴの世界であり、自己保存を損なうものは正しくない、つまり悪につながるという考え方である。現在の社会は、まさに幽界の正しさが支配しているようである。人間の魂の修業にとっては、この世の一年は、あの世の七十年、九十年にもなり、この世の修業（善と悪のいりまじった）が如何に大切かということになる。

これまでの説明でお解りのように、「エデンの園」時代は六千人の如来界や菩薩界の人達ばかりと言うのだから、こころ優しくて思い遣りのある素晴らしい人達ばかりの集団だったのである。これこそは、正に古代から人々が夢にまで見て、理想として現代まで語りついで来た理想郷、ユ・トピア「エデンの園」だったのである。まさしく地上天国だった。どちらを向いても、心温かい心優しい人達ばかり、このような世界は考えただけでも、心がウキウキ、心はワクワクする。

（高橋師の「ことば」から）

「今から三億六千年前のこの地上は恐竜などの動物が居て荒れていました。そこで地上に隆り立った人類約六千人は荒廃している地上を、人間の住む理想郷にするためにユ・トピア建設に乗り出したのです。やがて、地上はその目的が達せられ、**世界各地に現代以上の文明が栄えました** - -」

この第一艇団の六千人のベ・タ・星の人間が、そして第二艇団の人間が三億六千年の間に、約五十億の世界人口となったというのだ。勿論、その間に**七度の天変地異**によって人口の増減はあった。これが「ノアの箱船」伝説として残っているが、霊統はそれぞれ違うものの地球人の肉体的血縁はこのベ・タ・星の人間から派生したものであり、兄弟と言えよう。

（これより高橋師の「ことば」から）

「そして、三億六千年前の最初の頃の地上界は、文明は高度に発達し、年令は五百歳、千歳近くまで生き、科学は専ら磁気、磁力、光の力を利用し人間は自由に空を飛び、地中に都心をつくりました。言葉は統一され、生活様式は自由のなかに統一され、それぞれの分野で、それぞれの能力を思いのままに伸ばしていました。争いも、そねみもなく、人々はその生活を楽しみました。この時代になると恐竜は地上から姿をけし、人間の友である、犬や猫、両棲類もいました。勿論、爬虫類であるヘビもいました。人間に危害を加える動物はこのヘビを除いてはほとんどいません。ヘビの歴史は約五億年になります。人類や恐竜よりも古いのです。その生命力狡猾さは他の動物とは比較になりません。人類はこのヘビには随分悩まされました。当時の人類はあの世を知り、この世の目的も知っておりましたからヘビの存在理由を熟知しており、互いにいましめ合い、ユ・トピア建設にいそしん

だのです。」



「三億年前の人類が、現代文明以上の高度な文明をつくった謎」

私達、現代人の常識として、時代をさかのぼればさかのぼるほど科学文明は劣ると考えがちである。それもあ一面ではマトを射ている。ほぼ解明され尽くしている日本の二千年ほどの歴史をヒモ解いて行った時、古墳時代から始まって、確かに現代の科学文明よりも劣っていた事は明白である。二千年前には、テレビも空を飛ぶ飛行機も無かった。しかし、歴史を千年、万年、というスパン（時代の長さ）で測って見ると、はたして何如なものか。近代の科学文明はワットの蒸気機関、エジソンの電気に始まる科学文明の黎明期から現代のコンピュータ文明までの進歩は、たかだか、三百年の歴史に過ぎない。カゴかきの時代から、現代の新幹線やリニヤモータカ - の時代は想像も出来なかった。永い人類の歴史からすれば、一瞬のまばたきに過ぎない。このような観点から考えて見て欲しいのだ。

永い歴史を持つベ - タ - 星の六千人をはじめとした超エリ - ト達が、高位の靈魂達自らの意識をヒモ解きながら彼らの超文明を思い出し、参考にしながら、現代の科学的常識からは考えもつかないような超科学力を駆使して、現代文明以上の高度の文明をつくったのである。

Home

『地獄界（暗い世界）はどうしてできたのか』

地獄の世界は「神」がおつくりになったのではない。この世（地上界）を縁として人間がつくり出したもの。高橋師が亡くなる直前の昭和五十一年の六月四日の研修会で、「新復活」という講演がなされた。その中に「地獄界の実態」が語られている。その一部を引用する。

「 - - 現代のエジプトナイル渓谷の東部にあるエルカンタラ - （現代の地図ではアルカンタラ）と云うところに着地します。その場所が一番最初のエデンの園です。約六千人のベ - タ - 人が全部この地球上におりてまいりました。それぞれ七大天使はラファエルをはじめ文芸や芸術、政治経済、あるいは立法、科学、あらゆる担当をして総括的にミカエルが中心になってエデンの園をつくりあげました。そしてその当時は同じベ - タ - 星の人間であっても皆さんの肉体とまったくかわっておりません。風土、気候いっさい地球上とかわっておりません。魂と肉体、今皆さんの持っている肉体は、あくまでも物質であり、人生航路を渡っていくための舟にしかすぎません。そのため、当時の人々は天上の世界とコンタクトでき、人間の心は調和され物にこだわることなく全てが調和された世界であります。そのようなエデンの園にやがて第二艇団が地上界に移ってまいりました。その時エルランテイ - は天上の世界へ帰りました。これが天上界、地球上の創世記です。地球の創世記は三億六千数百年前

に最初の七大天使がこの地上界に生き約六千人の人類がエデンの園をつくり、第二艇団が地上界に着地し生活するようになって立法を犯す人々が出てまいりました。その為に、その責任者であるミカエルは規律を破るところの民に対し一部分エルカントラから移しまして「そなた達は神の子としての己れ自身を再確認するために、もう一度自分の思念と行為、行っていること、思っていることを修正していらっしゃい」とその場所から多くの人々はその位置をかえました。その人々が後、エデンの園との連絡を絶ち、やがて天上界との連絡をたち、ついに天上の世界に帰ることなく、地獄の世界をつくり出してしまいました。当時は地獄は存在していなかったのです。それが**アダムとエバ**の後物語に変わってしまったのです。その為に創世記の映画とはちょっと違いますけれども、私はこの肉体をもって天上の世界に行き、現実はその姿を見て来たのです。

皆さん自身は、なぜ三億数千年前のことがわかるんだろう、と疑問を持つでしょう。疑問など持つ必要はないのです。皆さんの心の中には、**過去、現在、未来、は一点なり**。皆さんの肉体を支配しているところの、潜在されている90%の意識の中には、永い永い転生輪廻におけるところの一切の記録を持っております。そのために過去、現在、未来は一点なり。皆さんの心の中に今、存在しているのです。皆さんの現在は過去、現在を集約した現在そのものの姿なのです。ただ肉体を持ってしまったために、自分がわからないだけなのです。その心を正し、真の神の子としての道を己自身が生活に生かしていったならば、その実体を知ることができます。それだけに最も、粗悪な光の集中固体化したところの地球上の肉体を持ってしまうと、人間は皆盲目になり、それがために、物がすべてだ、地位がすべてだと、情欲に駆られ、神の子としての本性を失ってしまったのです。しかし、皆さんの心の中には、偉大なるところの智慧が誰しもが存在し、持っているのです。それが、生まれて現在までの間に、思ったり行なったりする正しい基準を失ってしまったために、心をスモッグにおおわれ、神の光を自からして遮り、ただ分からなくなっているだけなのです。それゆえに、我々の物理学上におけるところの時間と空間は不確定です。しかもまた、心の面におけるところの時間は過去、現在、未来は、現代をして一点であるというのです。皆さんの心の中には、そのようにはっきりした偉大なる智慧が存在しております。

それを調べあげて行く結果において、三億数千年前のエデンの園は、すでに人類がこの地上界へ出て来て、第二艇団移住の時にエデンの園は、一部の物質欲に駆られた人々によって道を間違えてしまったのです。そしてエルランティをはじめとして七大天使はこの地上界をあとにします。そして多くの遺産をこの地上界に残し、後の世の人々が、その偉大なるこの残した地上界の遺産をどのようにして活用するかを、私達は天上の世界において暖かく見守ってまいりました。しかし物におぼれ、肉におぼれ情欲におぼれた一部分のエデンの園から離れた人達を救済するために、天上の世界より**ルシュフェル**という天使を出しました。ところが、たとえ天使なりといえども地上の不安定な肉体を持ってしまうと、手足をもがれたと同じごとく、生まれた環境や教育や思想や習慣を通す中に己の本性を忘れ、ついにルシュフェルは**サタン**という名前に、その環境に生まれている間に彼は自分の地位と名誉のとりこになり、ついに天上の世界と交信をたち、この地上界を去るとき、天上の世界に帰ることなく、地獄の世界へかえてしまったのです。そのサタンは現代は地獄の帝王になっております。**これが最初の地獄界の実態です**。こうして多くの天使達は天上の世界からこの地上界の動きを観察し神の子にもどす為に、多くの光の天使たちをこの地上界に送りました。エルランティ自身はアガシャ - という方を、光の分霊です。この方を送ります。さらにまた、カントラ - 、と言う方を送ります。後のゴ - ダマブッタです。天上界ではカントラ - 、と言っています。お釈迦様とは言ってません。ゴ - ダマブッタ。アガシャ - は後のイマニエル・イエス・キリスト、モ - ゼはモ - ゼです。さらにまたイエスがゴ - ダマブッタが生まれるときにはガブリエルという方は主として伝達の係をし通信関係の責任者です。ゴ - ダマ・ブッタがインドに生まれる時には、ガブリエルのグループの方がゴ - ダマの生まれることをゴ - ダマの両親に通信を送ります。アシタバという仙人です。」

地獄界の諸相

< 修羅界 >

栄達を望み、そのためには平気で人を陥れ、利用し、自分の利益のためには人がどんなに傷ついても平気でいる人、闘争に明け暮れている人、常に人を争わさせて面白がっている人、闘争対立の心をもつ人、常に心の中に争いの心を持つ者のいく世界。信仰することによって争いを生みだす者達の行く世界。

< 餓鬼界 >

金銭欲の強い人、この世に未練や執着を持つ人、足ることを知らず常に不足の思いを持った人、いくら食べて

も、いくら持っても満足することを知らない欲望の塊りみたいな人が行く世界。

< 畜生界 >

動物と同じような性格を持った人、ねちねちと執念深い人、見境なく性欲に狂う人、人をだます人、動物の本性まるだしの者達の行く世界。

< 煉獄 >

常に心の中に闘争と破壊の渦巻いている人、そしる人、怒る人、ひどく悲しむ人、うらむ人、偽善者、エゴイスト、狂思想者、狂宗教家。

< 無間地獄 >

集団で闘争を計画したもの、戦争の計画者、権力を持って大衆を間違った方向へ指導した者、間違った教えを説いた宗教家達の行く世界。ヒットラ - 、スタ - リン等。

< 魔王 >

三億六千年前、エルランテイ - と共に飛来した大天使の一人、ルシフェルは天上の世界に帰ることなく地獄の帝王（サタン）になった。

Home



「ノアの方舟現象とは何か」

子孫が子孫を生み自己保存のとりこになると、平和な地上は争いの巷と化し、戦争と略奪、支配者と被支配者が生まれ地上は荒れて行った。人々の暗い心の曇りは神の光りをさえぎり、その結果、磁気、磁力を利用した超科学は、天災という名の「人災」で破壊され、天変地異は心ある人々を残して、土中に海中に消えたのである。これを地球の浄化作用という。このようなノアの方舟現象と呼ばれるものは、三億年余りの間に七回起ったと高橋信次師は教えたのだ。それからというものは、人間は自由に空を飛ぶことも地中に大都市をつくることも出来なくなり、為す術もなく一時期を過ごすことになる。最近ではアトランティスも、ルビジアも、ム - 大陸も海中に沈み、陸は海に、海は陸になった。今日、東洋と西洋とに分かれてさまざまな言葉が生まれ、文化に断層が生じたのもム - 大陸（太平洋）、アトランティス大陸（大西洋）が陥没し、その姿を失くしたために起きたものである。この両大陸があった当時は、**アジアとアメリカ大陸は陸続き**で、文明文化に大きな格差が生じることはなかった。

「ノアの方舟現象を試みる」

人類誕生から七回天変地異が起こり、その度に大地が陥没し、人口は増えては減り、減っては増え、一から出直しやり直しをするというノアの方舟現象というものが七回起ったというのである。このアトランティス陥没にみられるノアの方舟現象というものがどのように伝えられて来たのか、旧約聖書創世紀六章～第十章に書かれている「ノアの方舟」について見てみたい。

「・・・人口が増えて地上に悪が満ちて来た。神はノアに命じて方舟をつくらせ、その方舟にノア一族と潔い獣の中から雄と雌とを七つづつ、潔くない獣の中から雄と雌とを二つ、空の鳥の中から雄と雌とを七つづつとって載せ、その種類がやがて全地のおもてに生き残るようにしなさいと命ぜられた。四十日四十夜雨が降りつづいて、やがて地上はすべて水に覆われ、方舟はアララテ山にとどまった。水は減った。地上の生物はすべて死んだ。ノアの方舟に載っていたノアの家族と動物の子孫がやがて地に満つることになった。・・・」

このように何千年、何万年もすると文明はまた発達する。人口が増えるにしたがって自我意識が強くなると、人々の暗い想念が神の光をさえぎる。するとまた、天災地変、天変地異が起るのだ。このような一番近い過去に起きた大地の陥没は、約一万二千年前のアトランティス大陸の陥没であったと高橋信次師は明かした。その証拠に世界中には何千メートルもの高地に貝の化石があったりする。地表の岩石層は地球全体から見ると決して硬く安定したものではない。なぜなら一番軽いから地球の表面に浮き出ているのだ。いつどんなことで、隆起したり、陥没したりするかわからない程、不安定なものと言える。わかり易く説明すると、この薄い地表の岩石層は、卵を地球とすれば、卵の殻に相当する部分と考えて欲しい。この隆起、陥没するところは、人間の暗い、神の光を閉ざしたところに起こると高橋師は教えた。

人類の暗い不調和な想念が集団的となると、それが地下に縦横に走る血管とも言えるマントルに圧力がかかり、至る所で火山が爆発し黒雲は天をおおい冷害、大水となって大地は怒る。その為に高度に発達した文明の器機も土中に海中に消えて失くなり、文明も終焉を迎える。一握りの心ある人達は仕方なく土中に穴を掘り、穴居生活を始めなければならなくなる。その内に、着ていた着物もボロボロになり、そこらにある草木で織ったものか、動物の毛皮を身体にまとい寒さをしのぐ。電気も、磁気も、光で動く乗り物も今はすでになく、洞穴の中で当時の模様を語り合う。「あの頃は便利だったね、でも、すべてを失くしたけれど今の方が平和で充実しているよ」等と語り合う。食べ物は野にはえる植物や果物、そして狩りで捕えらえた動物達。持って来たマッチのような火をつけるものも、その内に使い尽くし、どのようにして火を点けようかと考える。そして文字を書く紙も底をつき、一日に動ける範囲は人間の歩く距離。連絡出来る距離も限定され、五十年過ち、百年過つうちにその時の大人達はあの世に帰り、そして次には新しい生命が誕生し、又生活が始まる。次代の人間は、先の文明を知ることもなく、ただ長老からの昔話しとして語りつがれ、それから後は、人間は食糧の多い新天地を求めて各地へ拡がって行く。

天変地異より前は、家々のそばから光のエネルギー - を利用した無公害の乗り物で速く自由に、どんな離れた人達とも自由にコンタクトして共通語を話した。だが、それ以後は陸地も分断され、自由な交流も出来ず、言葉もその地域でのみ通用するものになっていく。このようにして、五百年経ち、千年経つうちに放浪の生活に終止符

を打ち、米や麦をつくり食生活の安定化を計る。このように見てくると、陥没した直後の人類の生活様式を見て、横穴住居に住んでいるからとか、一枚の毛皮を腰にまとい、石の矢じりを持って動物を追っかけていたからと言って、魂が低いとか、低脳だと言えないのである。ダ・ウインの進化論によれば昔に遡るほど人間は猿に近くなり、未来に行けば行くほど立派になって行くと、どうして言えるのだろうか。高橋師はこのダウニズムも否定修正されたが、今から二千五百年前の釈迦、二千年前にキリストのような偉大な方が出現されたというのも、今までの解説によって説明がつくのである。

「文明について」

高橋師は著書の中で読者の質問に次のように答えている。

<問> 実在界は、いまの現象界より高度の文明を持ったところであり、人類が他の天体より天孫降臨して来た当時は、実在界と常に交渉をもっていたといわれます。ところが私たちの知る範囲の人類では、長い原始時代を送っています。現在の地球の文明を考えますと、この辺のところはどうも理解できません。

<答> 特殊な乗り物によって地球上に降り立った人類は、あの世・実在界と交信ができ、文明も高かったことは拙著にある通りです。その人類の子孫であるのに、長い原始時代の生活があったということは、あなたが指摘する通りです。ではなぜそうなったか。この点については、まずこういうことを考えてみて下さい。例えば鉄骨ビルを作る技師、工場、図面、そしてこうした方向に働く人びと、それにビルそのものが、突然この地上から姿を消したと仮定してみてください。おそらく、再びビルを建築するには、長い時間と、技師を養成する教育、発明といったものが必要になってくるでしょう。人類の歴史は、ノアの方舟現象が何回となく繰り返され、文明が進んだと思うと崩壊し、進んだ時点で再び天災に見舞われ、文明を支えていた科学者、技師、発明者、それに文明の象徴である建築物や機械類が地上から抹殺されていったのです。生き残った人びとのなかに、こうした科学者や発明者がいても、工場や資材、研究室、図面や資料がなければ、抹殺される以前の文明に変えるのには、長い時間をかけなければなりません。地上文明は、常にこうした繰返しを重ねてきました。このため、一億年前の文明より、今日の文明が劣っていたり、あるいは文明の方向が違ってきていることは否定できないと思います。

「エデンの園・エルカントラ - レはどこか」

高橋師の数本のテープを聴き比べるとエデンの園は『エルカントラ - レ』または『エル・カントラ - 』と聞こえる。高橋師の力で息女・佳子氏に降霊させた天使長ミカエルは佳子氏の口を通して「エル・カントラ - 」と言っている。それぞれの講演で高橋師が述べている「アフリカの三角州の北部・・・」とか「現代のエジプトナイル渓谷の東部にある・・・」とか「スエズ運河寄りの・・・」に位置するエルカントラ - レ、またはエルカントラ - はどこか？そこでウェブ・マスターは地図を引っ張り出して調べて見た。それらしい地名が目飛び込んで来た。カイロとエルサレムの中ほどのスエズ運河沿いにアルカントラ (AL - Q a n t a r a) とある。「ここだ」と声を発していた。確信して以来、機会があれば一度は訪問して写真も入れたい - - そう思っている。



高橋師は昭和四十八年（一九七三年）に次の予告がある。

「今から七百八十年後、エジプトのナイル流域は緑豊かな沃地となり、光や磁気を利用した反重力場の乗り物によって、他の天体へ自由に行く事の出来る大宇宙ステーションが、アフリカの大西洋岸に出来ます。今から一万二千年前のアトランティス大陸の文明を築いた靈魂達が地上に出生し、現在の科学文明をより以上に発展させ、世の中を指導するようになり、世界はユートピアになります。」、と。

同じく昭和四十八年夏、長野県熊の湯での自主研修会では高橋師は次のように言う。

「私は七八年後にもう一度、地球上に出ます。それからまた、他の天体にも生まれます。その天体もわかっています。この地球は七十年位後には調和されるからです。ユートピアになるからです。その時は、今のような公害は一つもなくなります。そして、今の日本は気候が変わります。現在の、アフリカ、南アメリカ、それからインド、この方面は、現在の日本と同じように、春夏秋冬が最も調和された国になります。そして、アフリカの太平洋岸の処に大きな宇宙ステーションが出来、他の天体と自由に交通するようになります。そういうようになっているユートピアに、私達は生まれます。七八年後です。その途中において、かつてイエス・キリストといわれた方がアメリカに生まれます。シカゴという処へ生まれます。それが今から一八年后（現在から一五年後）になります。その時にみなさんは、天上界にいて協力するのです。天上界からこの地上界を見て、まああんなことをしているということになっているのです。」、と。

そして別の講演会では「三百年後、日本の東北地方以北は酷寒地となり食糧も摂れず人も住めない。現代に生まれている人達の一部は、七百八十年後にアフリカに生まれ、ユートピア生活を謳歌することになる」と高橋師は予告したのである。

「地上界に生まれる為の条件」

この世に生まれるための最低条件は、地獄界に安住しないで、天上界（幽界以上の心の人）へ帰った人のみ、この世に生まれることができる決りである。地獄の世界からは「この世」には生まれることは出来ない。たとえば魔王（ルシフェル・サタン）は地獄の住人だが、心をいれかえ反省をして天上界へ戻れば、地上界に生れることが出来る。前非を悔い改める以外には、この世に肉体を持つことが出来ないのも、悪い人（暗い心の人）をコ

ントロ - ルして目的を遂げようとする。これを、「類は類（同類）」、「類は友を呼ぶ」、「波長共鳴の法則」と言うが。人間の悪い心（暗い心）が彼等のエネルギー - なのだ。だから心優しい思い遣りのある人には、そこにどんな地獄の霊がいようと、愛の心は地獄の世界とは正反対（同類の反対）だから、彼等は どうすることもできない。

先づ天上界に帰れる生き方、考え方をするのが第一条件。地獄の心を捨てることである。これには一円の金もかからない。全ては自力である。もう一度、幽界以上の霊界、神界の心を読み返して、より一段と上の人格、霊格を持つように努力して欲しい。日々の人生の修業が「心の修業」である。そして、もう一つの条件は、七百八十年後の人達は「如来界、菩薩界の人達のみ」ということになれば、この界の人達は「あの世」と「この世」を合せて二万五百名ほどだから、大変な狭き門ということになる。だが、次の機会のためにも日々、精進して、努力する以外に道はない。

世界の平和が実現するためには、人類の意識が総体的に向上しなければならない。現在の人類の意識では、まだ世界の平和は達成できないと誰しもが認めるところ。これから、その使命を自覚した高級霊達が沢山生れて来ると高橋師が予告したように、高度の文明を体験した靈魂が確実に生れてくるのである。人類三億数千年の中で七度のノアの箱舟現象が起り、その間、人口が増減した。今から百五十年後に、アメリカのシカゴにイエスが生誕する。三百年後に舍利弗・ガブリエルであった園頭広周師は、インドに肉体を持ちカ - スト制度を改革する。七百六十年後にエジプトに、釈迦でありエルランティの高橋師が肉体を持つ。最終ユ - トピアへ向けて高級霊がゾクゾクと肉体を持つのだ。そして、七百六十年後にこの地球がユ - トピアになった時、人間は神の子であると悟った最も進歩した靈魂達は、この地球での霊の学習を卒業して、再びこの地球に生れ変って来ない霊となり、他の天体へ生まれ変わって、そこでまた霊の学習をすることになると高橋師は言い残した。

このような霊の進歩を見て、物質である肉体もまた進歩すると説いた「進化論」は人類にとって「困ったこと」を考え出してしまった。これは、高橋師が「進化論はあり得ない」と絶叫して我々に教えることにもなったのである。そして、今迄にも既に、ある一定度以上の霊の進歩を遂げた靈魂群は、この地球を去って他の天体へ行き、また逆に、他の天体から地球に移住して来て、この地球で輪廻転生を繰り返して来たのだと高橋信次師は明らかにしたのである。

「天上界が計画する近未来」 高橋信次師の「ことば」から

「しかし、やがて人口増加が頭打ちとなる時がやってこよう。それはそう遠い将来のことではない。近い将来とは人類の長い歴史からみた場合の時間的距離のことであるが、そうした時代に至ると地球上の魂のレベルが総体的に上がり、いわゆるボサッ界という世界が新生するわけである。このことはすでに実在界で計画され、未来図が描かれ、現象界はそれにしたがって進められている。ボサッ界とはボサッ心を得た者が社会のそれぞれのポストに就き、人びとを調和に導いてゆく世界である。ブッタが生まれた二千五百余年前、イエスが愛を伝えた二千年前、そして、今日、正法が伝えられているが、こうした正法の伝道はやがて到着するであろう地上の仏国土・ユ - トピアをめざした、いわば抗打ちであり、今の世の人たちは来たるべき地上のボサッ界の先兵として、その役を負わされているといえよう。」『人間・釈迦』三巻

これから七百六十年後には地上はユ - トピアになり地上天国の時代が到来する。右を向いても左を向いても、如来界、菩薩界の高霊格の人達ばかりとは、何と素晴らしい時代であろう。「今の世の人たちは来たるべき地上のボサッ界の先兵として、その役を負わされている」と高橋師は言ったが、現代の先進国のように、コンピュータ - 文明等の高度の産業を駆使して、高水準の生活環境を謳歌している人達もいれば、密林で裸の原始生活をしている人達もいる。この現状をどのように考えたら良いのか。触れてみたい。



「科学万能の時代に、なぜ裸の未開人がいるのか」

この科学の発達した時代に、裸の原始生活をしている未開人がいるのはなぜか、高橋信次師は次のように説明した。「この太陽系はアガシャ霊団により指導されており、靈的に一番早いスピードで進歩している」、と。この科学万能の時代に、電気もガスもなく、近代文明の恩恵に浴さない人達がいる。アマゾン、ニューギニア、オーストラリア、アフリカ等に、未だに裸の原始生活をしている未開人がいることに疑問を持たれたと思う。こう述べると、「オヤ、人種差別、人種蔑視のようなことを言い始めたぞ」と考える人もいるだろう。決して、そうではない。正しく知った上で、正しく理解を示すことも彼等の人生修業を暖かく見守ることにもなり、これも愛なのだ。どうしてかと言うと、現在の地球の人類の1/3は仏教的に言うと「靈界」以上、1/3が幽界、1/3が他の天体から来た人達と高橋師は言っている。また、園頭広周師は、「他の天体から転生した人達は、先づ原始生活の中で魂の修行をして、順次、転生輪廻していく。まず、ああいう所に生れて、この地球という環境に馴れ、それから輪廻転生を重ねてゆく間に、いろいろな面で進歩してゆくことになる」、と。

世界人類の1/3は他の天体から転生してきた靈魂と高橋師は言った。この地球上にはじめて人間が転生して来たのは、数億光年先のベータ星より三億六千年前にUFOで飛来したと高橋師は言ったが、以来他の天体から転生して来ている人達があるというのだ。他の天体で一定程度以上に進化した靈魂は、この太陽系の地球に転生して魂をみがく。他の天体から転生してくる靈魂があるように、この地球である一定程度以上に進化した靈魂は、今度は還らぬ靈となって他の天体へ転生していくのである。

一九七六年（昭和五十一年）、高橋信次師講演テープから

「そして、我々はやがて又、地球を調和し他の天体へ還らなければなりません。その為には、地球自身が調和し、後光が出てこなければならぬのです。皆さん一人一人の心の調和が即、その人を調和し、その家庭が調和されれば家から光が出てきます。また、国の人々が調和されれば、その国から光が出てまいります。天上の世界からすべてわかります。そして地球からすべて調和された時には地球からきれいな後光が出てきます。その時が初めて、人類が他の天体へ脱出することが出来る環境が整っていくのです。」

これまでに述べた千万年、億年単位の話は、私たちにどうもピンとこないが、これからは一万年ほど遡って高橋師の言い残した「ことば」を紹介したい。

Home

「今から約一万二千年前に、南大西洋にあったアトランティス帝国でアガシャ大王が神理（正法）を説かれました。文明は非常に栄え信仰の対象は太陽にむけられ、人間の魂は、あの太陽のごとく光輝くものであり、慈悲と愛の心こそ、人間としてのあるべき姿として、正法が説かれていました。アガシャ大王を中心として数多くの如来、菩薩が地上に降り、道を説きました。現在、南大西洋には大陸はありません。そこに今の**共産思想と同じ思想**を持った集団が現われ、アガシャ大王をのぞく多くの天使たちを、時の為政者が葬ったからです。天使たちを殺戮するほど彼らの心はすさんでいたのです。その心根が大地震を起こし大陸を海に沈めたのです。アトランティスが陥没した時、アガシャ大王はアフリカのナイル帝国に逃れました。」

「アトランティス文明の終焉」

光と磁気を利用して、他の天体とも自由に交流したり地下に大都市を作り出した超科学文明も終りを告げる。高橋師が言い残したように、「ム - 大陸とアメリカ大陸は陸続きだったが、これらの大陸の陥没によって東洋と西洋とに分かれ、さまざまな言葉が生まれ、文化の断層が生じる結果となった」、という「ことば」に注目して欲しいのである。地殻の陥没、隆起によって世界の女神と詠われた至峰チョモランマ（ヒマラヤ山脈）には海底の貝や魚の化石、カルシウムの岩層が発見されるように、海底が数千メートルの山となったのである。一方、現在の世界の海底はどうか。地図を拡げて見ると海底の山とも言える、水深二百メートルほどの海嶺がある。例えば、大西洋中央海嶺とか東太平洋海嶺などである。これらをつなぎ合わせ、高橋師の「ことば」を参考にして作りあげるとアトランティス大陸やム - 大陸の地図ができあがる。アトランティス大陸やム - 大陸についての本はこれまでに多くが出版されているので触れないが、プラトンやエドガ - ケ - シ - 等が有名である。いずれにしても、アジアとアメリカ大陸が隆続きだったと記述されたものはないようだ。かつて、高度の文明があった証拠の遺品（オ - パ - ツ・O O P A R T S）が発見されている。どんなものが出土しようと驚くには当たらないが、ほとんどのオ - パ - ツは海底や陸地の土中に埋もれて、安定した材質で作られた物以外は土に変わっている事だろう。アトランティス帝国時代のオーパーツを探し当てるには、数百メートルの海底にもぐって掘るか、いつの日にか浮上した陸地の、海底の部分掘るかである。トカラ列島等の沖縄周辺に潜ったダイバーが、海底遺跡に遭遇したという報道があるが、ム - 大陸のものかもしれない。勿論、これは高橋師の言ではない。

<オ - パ - ツの例>

黄金シャトル（コロンビア、ポゴタ）、点火プラグ（米・カルフォルニア州、オランチャ）、はずみ車・照明電球（エジプト、サッカラ）、太陽系惑星儀（ギリシャ、アンティキテラ島）、花瓶型電池（イラン、バグダット）、錆びない鉄柱（インド、ニュー - デリ - ）、光学レンズ（イラク、ニネグエ）等である。

「潜在意識の紐を解く」

<アトランティス大陸に生まれた過去世を持つ人の例> N・T子さん

「私は昨年（昭和四十三年）の五月二日に、高橋先生の御力に依りしまして霊道が開かれた者でございます。それによって潜在意識が呼び起され自分の過去世を思い出す事が出来たのでございます。そして人間の生命は永遠に流転するのかしらと、いろいろ疑問が起こりました。そのうちにいろいろ現象が起こり始めまして、その年の五月に霊道が開け、自分の過去世を自分で知ることが出来ました。それは先生のおっしゃっていることが真実だという証拠であると思います。それでは私の指導をして下さっているフリテイ - 様の意識と替わりましてお話をしてみたいと思います。」（過去世の言葉（古代語）は省略）

「私はフォ - フェロワウと申す男性でございます。今から約一万四千年程前にアトランティス大陸において生命を持ち、あらゆる環境の良い所を求めて歩いた者でございます。そして又転生輪廻して現在の南米のアンデス山脈の近くで肉体を持ち、名前をセンツェ - ラ・アル・カント - ラと申す男性でございました。その当時の信仰は、太陽信仰でございました。そしてクラウド様と言われる王様の下で、私は配膳係として勤めた者でございます。」

高橋師は、「特別な人は、男だけ（イエス、釈迦等）、或いは女だけ（マヤさま、マリヤさま等）に生まれるが、普通一般の人は、男に生まれたり女に生まれる。」と、教えたが、このN・T子さんも、やはり、我々と同じよう男として生まれたり、女として生まれている。その例を年代順にあげてみよう。

一万四千年前は**男性**（アトランティス大陸）、

一万二千年前は**男性**（アトランティス大陸の終焉の頃）、

次は**男性**（現在の南米のペル - ）、

次は**女性**（エジプト）、

二千六百年前は**男性**、

千九百年前は**女性**（エジプト）、

千二百年前は**男性**（中国、のち最澄の誘いで日本に帰化、名を源信という）、

八百年前は**女性**（日本、北条氏に由縁ある者）

現在は**女性**（日本、N・T子）



「 男女うみ分かれの三つの型 」

私達が男性を選ぶか女性を選ぶかは、三つのタイプがあると高橋師は言い残した。

一、 男性にだけ生まれる人。イエスや釈迦のように女性的なものも完全に学んだ人達

二、 女性にだけ生まれる人。マリア様やマヤ夫人のように、男性的なものも完全に学んだ人達

三、 男性や女性のどちらにも生まれる人。

人類の多くがこのタイプ。男性に生まれた時は、男としての使命と役割を勉強して、男らしくしなければならない。女性として生まれた人は女としての使命と役割を勉強して、女らしくあらねばならない。男性でありながら、男としての勉強を失敗した人は、次の世（来世）も、また男性を選んで魂の修行をやり直す。女性もまた同じである。全人類を通して男女の比率は同じように仕組まれている。ところが、墮胎、天災（真実は人災だが）、事故、戦争等の人間の都合によって比率は狂う。

昭和五十年五月G L A関西本部から「高橋信次講演集」が発刊された。その中に、高橋師はアガシャ大王として肉体を持ったことを暗示した話が出てくる。

「 - - 私は一万二千年前、アトランティス帝国に生まれました。その当時の社会情報勢というものも全て知っております。当時の言葉も知っております。そして、その後私はアフリカのナイル帝国に逃れてまいりました。アトランティス帝国の一端のピラミッドが、やがて我々のグル - プの手によって発見されます。その中には、我々の残したものが発見されます。そしてその当時の人たちもいま此の中（講演会場）に出しております。 - - 」

また、別の講演では次のように述べている。

「 - - やがてエジプトのナイル渓谷のある所に、アトランティス以前の神理が隠されている一つのピラミッドが発見されます。そのピラミッドをつくった人達が、今、生まれ変わってきているのです。その人達は当時のことを知っております。そのようなことで、エジプトにも私達のグル - プが出ております。その人達は、動かし難いものを発見するでしょう。ピラミッドは、もうすでに崩れているそうです。その基礎の中に、私達の当時のものが隠されております。やがて、それが一般公開される時がくるでしょう。これは『神権政治』といいまして、当時の人々は、みんな、心が清らかで、実在界、あの世のことも、世界人類はみんな兄弟だということも知っており、平和でユ - トピアであった。その事実は、すべてピラミッドの中に記録されてある、とっております。」

次に、「天使の再来」と題した講演の中の「ことば」を見てみたい。

「 - - 今から約一万二千年前にアトランティス帝国というのがありました。その当時、この会場の何人かの人達は、光の天使として出ていました。当時の人民は、その殆んどが悪魔に支配されており、このためにこれら天使の殆んどを殺してしまいました。当時は、悪魔の姿をこの眼でみることが出来たのです。アトランティス帝国は、一夜にして海底に陥没しました。また、あのロ - マにおける火山の噴火。それもやはり、当時のイエス・キリストの弟子である光の天使を殺したために、そのような現象をみせられロ - マは壊滅したものです。 - - 」

高橋師は著書、講演の中で次のことを何度も述べた。

「やがて、アトランティス文明を経験した靈魂達が、ぞくぞく生まれ、また、そういう霊が既に生まれている。と同時に、これから地球の魂のレベルが上がる」と高橋師は言った。やがて地球の魂のレベルが上るということは、過去世で理想世界を築いた高級霊が数多く生まれてくるからである。また、そういう霊が既に生まれているというのだ。文化、文明が発展するのは高級霊がそこに沢山生まれているからである。生まれなくなると、そこには文化は衰退してゆく。また、逆に高級霊が生まれてゆくところに新しく文化が興ってくるということになる。過去の歴史を見たとき、世界の一等国として君臨した国が、他国を侵略、略奪等の悪事によって、高級霊がそこに生まれて行かなくなり、没落して行ったことは歴史が物語っているのだ。

同じく高橋師の記述より

「 - - 今から約一万年ほど前、南大西洋にアトランティス大陸というのがあって、文明は非常に栄えていました。信仰の対象は太陽にむけられ、人間の魂は、あの太陽の如く光輝くものであり、慈悲と愛の心こそ人間としてのあるべき姿として、正法が説かれていました。法を説いた者はアガシャといいました。アガシャを中心とし

て数多くの如来、菩薩が地上に降り、道を説きました。現在、南大西洋には大陸はありません。アガシャをのぞく多くの天使達を、時の為政者が葬ったからです。天使達を殺戮するほどに彼等の心はすさんでいたのです。その心根が大地震を起こし大陸を海に沈めたのです。六十年の後、文化はエジプトに移ってきました。」

アガシャ大王は、アトランティス大陸から陸づたいにアフリカのナイル帝国に難をのがれ、六十年の後、文化はエジプトに移ったことを明らかにした。大西洋のことをアトランティック・オ・シャン (ATLANTIC・OCEAN) と言うことは皆さんもご存知だが、アトランティス大陸とは「大西洋にあった大陸」という意味である。高橋師はアトランティス大陸をアトランチカ大陸とも言っている。

「今から七千年前のこと」

そして、文化はエジプトへ移って来る。今から約七千年前にアガシャ - といわれる人が、アフリカのエジプトで宗教的靈的指導者として、三十七の独立国を統合した。当時ナイル渓谷とデルタ地帯とは政治的ならびに宗教上の相違のために絶えず紛糾状態を読けていた。群小独立国の間には絶え間なく戦争が行われていた。そこで彼は、この絶えざる闘争の無意味さと愚かさとをより知り、一種のエジプト国際連合を形成し、唯一の連邦政府を樹立し、正法 (神理) を説いたのである。この方がのちにキリストとして出られている。

これより、J・クレンショ - (JAMES CRENSHAW) 著『TELEPHONE BETWEEN WORLDS・天と地とを結ぶ電話』を引用しながら記述する。この本は『天と地とを結ぶ電話』日本教文社・初版昭和三十年と、『アガシャの靈界通信 (上下)』正法出版社・初版平成四年として翻訳出版されている。なぜ、引用記述するかを説明しなければならない。それはこうだ。

昭和四十八年、園頭広周師 (元・国際正法協会会長) は、正師・高橋信次師の説く正法に帰依した。それまで宗教法人「生長の家」の本部講師として将来を嘱望されたが、教団のあり方に疑問を感じ、教祖・谷口雅春氏に改革案を提言して昭和四十六年に生長の家を去った。園頭師は、昭和三十年に生長の家の日本教文社から出版された『天と地を結ぶ電話』を読んで、ここに書かれている事は真実だと思った。生長の家を辞め、正師を求めて心の放浪をしていた時、生長の家のかつての同僚が高橋師の著者を二冊くれることになる。一気に読むと、この方こそ自分が探していた人に間違いないと確信、高橋師に手紙を書いた。高橋師は、園頭師の許へ二人の使者を立て、昭和四十八年三月に二人は顔を合わすことになる。エルランティである高橋信次師。その分霊の一人である釈迦と、釈迦の常隨の弟子である舍利沸 (般若心経の中の舍利子、七大天使の一人ガブリエル)、近代では15世紀の宗教改革者カルビン (カルバン)、そして日本の西郷隆盛の過去世をもつ、現代の園頭広周師が二千五百年の時空を越えて再会したのである。

園頭師は言う。「私は早目にいって待っていた。高橋先生がはいって来られた。中肉中背の少しふとり気味の丸顔の、少しの威厳もつくるわない、そのまますぐふところに飛び込んで行けそうな雰囲気、私の心はやわらいた。『あなたが私のところへ来ることは、ぼくは五年前から東京の人達には言ってきたのです。ね、そうでしたね』と高橋先生は隨行した人に証明を求められた。そして、『あなたは宇宙即我を体験したとがありますね、それはあなたの過去世で学んだものです』、と。

その言葉を聞いた園頭師は、これまで自分だけしか知らない、今まで何人かの人に話してみたが、理解する人は一人もいなかった自分の体験を、何も話さないのに、わかってくださったことに驚ろき感激するのだった。生長の家では「神想観」という観法をやっている。この観法をつづけている谷口雅春氏はわかってくれるかも知れないと、生長の家の本部講師にもなったが、結局、わかってもらえなかったと園頭師は述懐する。こうして、開口一番「宇宙即我」という言葉が何も知らないはずの高橋信次師から口をついて出たことに園頭師は驚愕したのである。高橋信次師は、「今まで随分苦労して来ましたね、それらの苦労も、結局は、今日、こうしてここに逢うための準備だったのですよ」と。更に「あなたはロスアンゼルスのアガシャ教会のことを知っていますね、あのリチャ - ド・ゼナ - を指導したアガシャ - の指導霊というのは、我々の仲間ですよ」と言う高橋師の言葉となったのである。

(「宇宙即我」については『宇宙即我に至る道上下』園頭広周著・正法出版社を参照されたい)

アメリカのロスアンゼルスにアガシャ教会というのがある。その教会のリチャ - ドゼナ - という霊媒師 (故人)

の口を通して、アガシャ - という指導霊が霊示している。それを元記者のジェ - ムス・クレンショ - 氏（平成六年没）が、『TELEPHONE BETWEEN WORLDS』として出版したことは前に述べた。この霊示した指導霊アガシャ - は、ここに記述している七千年前の「アガシャ - 」だった。高橋師が「あのリチャ - ド・ゼナ - を指導したアガシャ - の指導霊というのは、我々の仲間ですよ」という言葉になったのだ。先に、これを「引用記述する」と書いたのはこのような理由だった。高橋信次師のアガシャ - についての補記、補足は、この『TELEPHONE BETWEEN WORLDS』を示唆されたものと考え引用する。

「 - - アガシャ - はこの新しい広大な神権政治の世界の有名な指導者であった。そして彼は当時既に肉体を超えた世界にいた彼の霊的指導者と接触し、霊界の高い階層からの指示を受け、死後の生活に関連した地上生活の意義などの教えを受けることが出来たのであった。アガシャ - によれば、かつて敵対していた宗派の指導者達は遂に統合をとげ、今日霊人として登場してリチャ - ド・ゼナ - 霊媒を通して、現代の智慧を求める人々に教示を与える先達としてあらわれたのである。これら霊的指導者の中には「アモン」と呼ばれる偉大なる先達の霊もいるが、この「アモン」を神として礼拝する信仰がエジプトの哲学の退廃期に非常に流行したとアガシャは述べている。同じようにしてこのグル - プと関連して「クライオ」と呼ばれる者がいたとアガシャ - は述べている。「クライオ」という人は、それから五千年後（つまり、七千年から五千年後の今から二千年前のこと）にイエスと呼ばれる偉大なる大指導者としてパレスチナ、エジプト地方に再び生まれ替わって来て地上生活の最後を完成し、それ故このイエスの哲学はエジプトや極東の古代の叡智ある宗教と非常によく似たところがあると言うのである。クライオについては、高橋師は「クラリオ」と書いている。また、『心の発見・現証篇』には次のように書かれている。

「 - - 私の前に古代エジプトのスタイルをしたクラリオと呼ばれる光りの天使が立った。そのとき妹（高橋師の）は、「ああ懐かしいクラリオ様、私は、村娘アシカ・ミヨタ - でございます。しばらくでございます」といつの間にか、古代エジプト語で語り始めたのである。「クラリオ様が私の家の前の小川の土堤の上でお休みになっていたとき、私はほころびた袖をつくろって差し上げたことがございます。本当にお懐しゅうございます」とBC四千年（今から六千年前）も前の過去世を思い出し、妹はクラリオに話しかけるのであった。この村娘は、その後クラリオの弟子として、神の子としての道を、エジプトを中心に教え導いて一生をすごしたそうである。さらに今から一万二千年前、アトランティス帝国時代にはフェロリアという女性で、アガシャ大王のもとで、神に仕えた人であったことも思い出したのであった。」



「今から四千数百年前のこと」

高橋師の著書と講演の中から「アモン」について。

<その1> - アモンという光の天使が、今から四千数百年前、アフリカで道を説いた。その後エジプトでアメンと呼ばれ、ソロモンにあってアミ - の神といわれるようになり、さらにギリシャに伝わり、インドのバラモン教の神に変わり、ヴェ - ダ - やウパニシャ - ドの教典に見られるようになっていった。

<その2> - しかもアフリカに於て、アモンと言われる偉大な光の大指導者霊がファラオとして祭られるよう

になり、続いてアモンはア - メンという言葉にエジプトで変わり、さらにア - メンがソロモンの時代にはいりましてアミ - とかわり、ギリシャにはいってアミ - にかわりギリシャからインドにはいって、インドの言葉がはいってアミダボ (アミダブツ・阿弥陀仏) となったのです。

「四千五百年前のこと」

(昭和五十年七月十三日、G L A 関西本部夏期講習会での「現証」の時間のビデオ再現。)

高橋師は中年の日本人女性を壇上に招く。

高橋師「この方は、昨日の和歌山の講演会の時、それが終わってから自分自身で心の窓を開いてしまいました。」

それから高橋師と女性は古代語で話している。どこの言葉かわからないが、「グリ - ス」という発音が聞える。高橋師の解説がはいる。古代語は省略する。

「私はギリシャに生まれましたと言っております。私はかつてアポロの宮殿にて神に仕えたことを記憶しています。今から四千五百年前、あのエ - ゲの文明をつくり出したところのアポロの宮殿に、そしてアポロの生存時代に、私は仕えたことがあります。アポロという言葉を出し私の心はつまる思いです。今、アポロは日本人として生まれている。そのアポロに私は四千数百年ぶりに会い。私の心は今、自分が四千数百年前のあのギリシャの心を紐といています。私はただ胸が一杯です」

女性は、すがりつくようにして「オ - アポロ！アポロ！」と繰り返す、懐かしさがこみあげてどうしようもないのか涙、涙である。そしてまた古代語は読む。

高橋師の、彼女の言葉の解説「私は当時また、アポロのお父さんであるゼウスの神殿においても学んでおりました」

女性は「ゼウスロ - 、ゼウスロ - 」と発音している。

「エグロウヨ - 、エグロウヨ - と歌を唄い始める」

高橋師「当時のゼウスをたたえる歌です。当時の祈りの言葉です」

「エグロ - ウヨ - 、エグロ - ウヨ - 」

高橋師「エ - ゲ - は大変美しく、私はあの美しい自然を思い出しております、と言っております。」

高橋師「あなたは日本語で語ることが出来ますか。」

その女性は少しとまどったように語り始める。ウェブ・マスターの耳にも何を喋っているのかチンブンカンブンである。

「ゆっくりと波動を起こして日本語で語って下さい」高橋師は女性の右手をとり、女性の耳の廻りを手で回転させる仕様をする。女性は自分の手を耳の廻りで回転させながら波動を起こしてゆっくりと語り始める。

「ワタ・カ・マ・シ・ハ - - - 」

数千年前の過去世の人が、彼女の声帯を通して現代の日本語を急に喋るのだから、とまどうのは当然である。

高橋師「ワタ・クシ・ハ - - 私くしは」

女性は何度か繰り返した後に 「私くしは二人の子供の事を思い出しています。アシュレイという一人の男の子と、マ - シャという女の子がおりました・・・。」

高橋師「そして、あなたはゼウスを知っておりますか。」

「オ - 愛するゼウスよ、愛するゼウスよ！ゼウスは大きな立派な神殿に祭られた、それはそれは偉大な・・・そしてエ - ゲ - は、素晴らしい楽しいきれいな所でした。オ - 素晴らしい・・・」

「ゼウスはアポロのお父さんでした」、と高橋師の解説がはいる。

高橋師「アポロンから（註：神理を）聞いた時代と今の世はいかがですか」

女性「今の世は余りにも悲しいことばかりです、胸の痛む思いが一杯です、当時は美しい心の人達ときれいな花園で、楽しい食事をしたり子供と語り合い、人々は素晴らしい立派な方々ばかりでした。オ - エ - ゲ - ！ エ - ゲ - ！」

高橋師「今、こうやって日本語にするのは、今までギリシャの古代の言葉しかわからないのを日本語にすることは非常に難しいんですが、この方の後で指導している方が過去世の方であり、そうしてこの方の体験されたギリシャの時代をこの人の心の紐をといて全部語っております。」

そして二人の古代語の会話は読く。

高橋師「そして、あなたはこの私を知っておりますか。知っておりますね。でも生きている時は知っておりませんでしたね。」

女性「オ - ゼウス ロ - 、ゼウスロ - 」

高橋師は「そうです」とゼウスを認める答え方をする。

ゼウス様、ゼウス様と女性は連呼する。すると心の窓が開いていて、当時に縁があったと思われる人々の口から「ゼウス様、ゼウス様」と、会場のあちらこちらから聞えて騒々しくなる（ビデオでは女性の嬌声のみ聞える）。高橋師は毅然とした態度で、声のする方を向き手で差し示しながら「静かにしなさい」と一喝し、エ - ゲ - の古代語と思われる言葉を投げかける。すると会場は静かになる。また、二人の古代語での会話が読く。

高橋師「余りにも現代の生まれた日本という国の人々の心が汚れているために、本当に私たちは悲しいです。しかし私達はあのエ - ゲ - 文明を築いた、私達はかつてはギリシャ人として肉体を持ちました。その体験を持っているその体験をいかし、私達は今の人々の心に少しでも安らぎの光を灯したいと思っておりますと言っています。」

そして、二人の古代語での会話。

高橋師「実は、今、現在の自分の御主人のことを心配して言っております。ご主人の体の調子が余り良くないんで、今の肉体を持っている御主人をなんとかしたいと思っております。やっぱり守護霊、いずれにしてもそのために悩んでいるわけですね。そっということはこの奥さんもそのために悩んでいるわけです。そういうことでなんとかして治してあげたいと思っております。」

二人の古代語での会話。

高橋師「それはやがてあなたの御主人も心の価値を知る時が来ます。その時あなたもまたこの道を御主人に教えられると思います。今の肉体を持っている御主人です。」

二人の古代語での会話。

「大丈夫です。ハイ守護霊の方、後へさがって下さい。ハイどうもありがとう。ハイ目をあいて下さい。この奥さんの場合は四千五百年位前のギリシャ時代、このギリシャの時代にこの人の心の意識の中には、そういう体験が記録されているわけです。それ以外に勿論、ずっと後の世も生まれているんですが、特にギリシャの時代、ゼウス、すなわちアポロのお父さん、このゼウスという方の説かれたものをアポロが学び、そしてそのアポロが、色々当時の人間の心のあり方を説いた、そして人間の価値の偉大性を説いた、それをこの方は、その神殿でいろいろ学んだ。その当時のエ - ゲ - の楽しい、楽しい自分の転生の中のひとコマを思い出したわけです。どうもあいがとうございました。どうもありがとうございました。」 割れるような拍手の中を婦人は降壇する。

ヒナ段の上には、折りたたみのパイプのイスに腰を掛けた婦人。その横に係の人が腰をおとして婦人にマイクを向けている。少し離れて、ハンドマイクを持った高橋師が立つという情景である。もちろん偶像や祭壇なんて一つもなく、あるのは移動用の黒板と、心の形や心の偉大性を図示した大型の説明図が壇上に吊り下げてあり、実に質素なものである。

このようにして、高橋師は次のことを我々に教えたのである。人間はこの世限りではなく、人間は生まれかわり死にかわりして、魂は永遠だという実証をしたのである。高橋師の講演会は、最初に一時間半ほどの講演。そして一時間半ほどの「現証」の時間だった。「現証」の内容は、憑依した動物霊や人間の地獄霊（暗い世界の霊）を登壇した人の口を通して語らせたり、暗い世界（地獄界）の実体を会場の人に知らせるなど、人間に憑くことの愚かさや神理を説いて聞かせ、憑依霊をとった。また、「不空三蔵にあの世の修養所につれて行ってもらいました」とか、「つらいだろうが諸天善神である竜王のもとで勉強をするか」と憑依霊をあの世界の修養所に送ることもあった。そして、「ころころと、またウソをつく！私達は寒冷地獄にお前を落とすことも自由自在なのだ、知っているか」等と言う例もある。

前述のビデオ再現のように、生まれ変わりの実証が来聴者の前で自由自在に公開して行われたものだから、高橋師の霊能だけに魅かれて集まる人もいたようである。しかし高橋師の真意は、自分の説いた「人間の正しい生き方、自然の仕組み」とも言うべき「正法」を学んで欲しかったのである。高橋師の著書、記述、講演の録音テープ、ビデオテープを勉強すればするほど、師の真意がわかる。高橋師に関する資料は、エルランティであり釈迦としての高橋師に常随した、舍利沸でありガブリエルであった園頭広周師の許に、最も多く集まっていると確信している。図らずしも、ウェブ・マスターの許にもなぜか、高橋師の資料が集まって来るものだから、お役に立たねばと考えている。霊能もなく、それかと言って霊格も高くない者が、智慧を働かせながら、高橋師や園頭師の著書に触れてもらうために、正法入門の手引書とも言うべきホームページを公開するのである。

Home



それでは次に、「心の窓を開く」とは何かを理解して頂くために、園頭師が心の窓を開いた時の記述を要約したい。

昭和四十八年四月八日～十日、G L A 関西本部の講演会。その四月九日の午後、「昨夜あなたの守護霊が僕に

挨拶に来ました、近いうちにあなたも過去世を思い出しますよ」と信次師は言った。四月十日、講演が終わった後、「園頭さん、今夜、一緒に泊まって下さい。宮崎から来られたお二人も。私は個人指導をする人がありますので、先に宿（生駒の三鶴山荘）へ行って下さい」と信次師は勧めた。夕方六時頃、信次師が宿に到着したというので玄関に出迎えた。すると信次師は「どうして、早く風呂にはいって浴衣に着替えなかったのですか」と言った。園頭師は、師を迎えるのに襟を正して、礼を尽くすべきだと思った。今までに知った教団の教祖の中に、これほどの心配りをされる人があつたらうかと心を打たれたのである。夕食が終り、「園頭さん、精神統一してみてください」と信次師は言った。園頭師は短い浴衣の前をかき合わせ（註・園頭師は長身）正座した。すると「そんな窮屈な姿勢では精神統一できません。もっと身体を楽に、足がしびれて長くは坐れない、心に集中できません」と。園頭師も、アグラをかきなさいと言われたがそれが本当だと思った。浴衣姿で、教えてもらうことに最初はいささかの心の抵抗もあったが、考えてみると精神統一と服装とはなんの関係もないことを知った、と記述している。園頭師が昭和十五年に宇宙即我を体験した時も、禅宗で教えるような坐り方をした訳でもなかったことを思い出したと述懐する。そして、園頭師はこう言われる。「私が心の統一を計ると高橋先生は私に右手をかざして、何か訳のわからない言葉で語りかけられた。二、三分何か言われたが、さっぱりなんのこともわからない。言われたことの意味はわからないが、何か腹の底からこみあげてきて、口を開けば、それがそのまま言葉になりそうな気がしてきて仕方なかった」、と。「肉体を持っている人よ。そのまま声をだしなさい」と信次師は厳かに命じた。

園頭師「その時のような権威ある言葉を、私はこれまで聞いたことはなかった。それは、そのまま従わずにはいられない権威ある言葉であった。口を大きく開けて、ア - と声を出した。とたんに、その声は言葉に変わった。習ったこともない言葉が、つぎつぎに口をついて飛び出した。私は、催眠術にかけられたのではないかと考えたが、催眠術や暗示は、本人が覚醒した後は、術中どのようなことがあつたか覚えていない。しかし、この通り意識ははっきりしているし全部知っているからこうして書ける」と園頭師は言う。知らない習ったことのない言葉が、つぎつぎに口をついて出た。感動の涙が溢れ目も鼻もぐしゃぐしゃになって園頭師は泣いた。「あなたはヘイマカという人を知っているはずです。過去世でどういう関係にあつたか今度は日本語で答えなさい」と信次師は日本語で問いかけた。園頭師は一瞬とまどった。今まで、自分を感動させた胸の奥というか腹の底というか、じっと潜在された自分の心に静かに問いかけてみた。すると答が返って来た。園頭師は、その答をすぐに否定した。その言葉は余りにも恐れ多い、現代離れのした言葉だった。

「心の中から浮かんできたその言葉をそのまま口にしなさい」と、再び信次師はうながした。園頭師の心の中はすべてお見通しだった。口にしなさいと言われても躊躇せずにはおれないものだった。一瞬躊躇して、園頭師は「その人は私の侍従をしていた人です」と答えた。侍従とは天皇陛下の側近で民間の自分が口にすべき言葉ではないことも園頭師は知っていた。でもその言葉以外に出てこないの仕方ない。「そうです。その通りです。その人は今、京都に生まれ変わってあと三ヶ月したら、その人も私のところへ来る筈です」と信次先生は言った。（その通りに、三か月目に大阪の講演会にその人は来ることになる）そう言った、と同時に園頭師の目に映ったのは信次師の姿の上に二重写しになっているお釈迦様の姿であった。「仏陀、おなつかしゅうございます。偉大なる観自在者、仏陀」といって園頭師は泣き状したのである。「ウパテッサ - !（舍利弗・般若心行の中の舍利子・シャ - リ - プトラの幼名）二千五百年を距てて、この日本で再び一緒に会うことができました。私もなつかしい、インドの時と同じように今世でもやりましょう」と信次師も涙した。そこに居合わせた人も皆泣いた。「あっ金粉が」、G L A 関西本部長・中谷義雄氏も叫ぶ。園頭師の頭上に金粉が降って来た。信次師の顔も、園頭師にかざしている手もみな金であった。金で輝いていた。釈迦の像を金で荘厳するのは、このようなことによるのかとわかったと園頭師は書いている。

（註・正しく心を開いた光の天使はこのような現象が起こるが、動物霊でも金粉類似（銅が大部分、天使のものは純金）のものは出すので注意が肝腎である。「正見」して欲しい）

そして、「ブッダ - 」といつて園頭師は信次師の前に額ずいたのである。宮崎市から同行した I・S 氏がこの情景をすべて見ていた。大阪 Y 氏の奥さんが当日、昼食の接待をしている時に信次師が「今日はすばらしい大物が霊道を開きますよ」と言う証言がある。「心の窓を開く」ことの説明が長くなったが、この項の主題である「四千五百年前のこと」に戻る。

H・正さんの転生について

『正法入門・高橋信次師講演集』正法出版社の中で次のように記述されている。

「私は、今から四千年前に、（註：昭和五十年七月十三日のG L A関西本部夏期講習会では「現証」の時間に、「今から四千三百年前に」と言われているビデオが残っている。）エジプトで生まれ、クレオパロ - タ - といわれるファラオ（王）の下で神官をしておりました。私達は広大なエジプトの地で多くの人々に、太陽のような心を持ち、偉大なる自然の恵みに感謝しよう、太陽はすべてにおいて、神の心の現われであり、人間は、あの丸く、温かい太陽のような心を持たなくてはならない、人はすべて平等である、ファラオの下で神を信じ、この地上界に平和な世界をつくらなくてはならない、と説いていました。その頃の大衆は、現代の人々より、はるかに心は調和されておりました。それは、日々の生活の中において、お互いにファラオを信じ、神を信じ、お互いに嘘をつくことなく、調和された世界をつくらなければならないということを知っておりました」

高橋師の説明がはいる。

「この方は、ラワンといわれる神官でした。ラワンさんは、人々に道を説く指導者でした。クレオといわれるファラオは、人々は神の子であることを説き、平和なユ - トピアをつくっており、その神の子の道を大衆に説いたのは、このラワンといわれる方でした。どうもありがとう。」

次は高橋先生の「ことば」から

「 - - 遠く一万年前、私はアトランティスにおいて多くの人々に説いたように、そしてナイル河流域に多くの人々とともにユ - トピアをつくったように、あるいはインカに、インドに、また中国でも説いたように、人間のまことの心の道というものは普遍であり不変であり、永遠に変わらない人間の心のものさしでなくてはなりません。 - - 」

高橋師の「ことば」には「インカ」でも多くの人々に説いたことを示唆しているが、前述のN・T子さんもペル - （インカ）で生活された転生の記録もあるので、参考にさせていただく。

N・T子さんは次のように言う。「更にまた私は現在南米のペル - といわれている国で男性として生まれ、名前をセンツエ - ラ・アル・カント - ラと申しました。代々国王様の配膳係としてお仕えした家柄でございました。当時の文明は古代エジプト文明の影響を受け、山中にかなりの文明が開かれて居りました。慈悲深き国王様は私達にいつも信仰についてお話しされ、国民は皆太陽信仰を致しました。ある時、外国から侵略を受けましたが、国民の血を流す事を避ける為に国王様は自ら王位を捨て山中に逃れ、インディオ達と共に神理に基づいた生活をされ、人間は皆平等であると共に、働きながら楽しく暮らしました。」



高橋師の「ことば」から

「インカの場合、ネコ科動物をモチーフとした像や力強い土器、金、銀などの装身具、雄大な石造神殿、大規模なかんがい工事や、ひな壇畑の造成、これらの技術、経済の発展は地方的とはいえ、現代でも十分通用し得るものである。現代でも、そのナゾが解けぬという千三百メートルにわたるサクサワマンの防壁。接着剤を使わずに、巨大な石を組み合わせた石積みは、今日なお、びくともしていない。石と石との接着部分は、あの薄いカミソリの刃さえも入らないほど密着し、何千年も経た今日でも、ビクともしないというのである。当時の技術が、いかに進歩していたかが分かる。」



『今から四千五百年前のこと』 <ピラミッドの謎>

それでは、高橋信次師の「ことば」「エジプトの文化」（クフ王のピラミッド）から聞いてみよう。

「 - エジプト文化にしても、そうです。とりわけ絵画については、日常生活のあらゆる情景が生き生きと描かれ、当時のエジプト人は、精神的に、現代人よりすぐれていました。まず、人間は来世があり、そうして再び現世に舞い戻ってくることを知っていました。このためあの広大なピラミッドは、人間が死んで、現世に舞い戻ったときに、エジプト文化を、より栄えさせるために必要な、**財宝、資材**を保存させるためにつくったものです。今から四千年以上も経つ、ギゼ - のクフ王のピラミッドは、底辺の一边が二百三十メートル、高さ百四十五、六メートルもあります。石灰石の重さは平均二・五トン、個数にしても二百三十万個に及びます。二・五トンもある切り石を百メートルを越す高さに運びあげた方法は、今でも不明であるといわれるぐらい、当時の技術は進歩していました。クフ王のピラミッドは一説では二十年といわれていますが、実は**三十五年**を要し、花崗岩は、上エジプト、**ヌビア地方**のナイル川から採取し、**筏**で運んだもので、約六十五トン位のものまで運べたようです。こうみてみきますと、人類の歴史は、古い新らしいだけでは律しきれないものがあるわけです。 - - - 」

また、『心の原点』には

「石灰石は主として、地中海沿岸、それも**ヨ - ロッパ大陸側**から船で運んだものもかなりあったようである」とある。それ程当時の海洋技術も発達しており、建築、土木、絵画、彫刻にしても、インカ文化とならんで進んでいたのである。

高橋師の記述から

「当時は太陽信仰で、多くの人々は、王さまがフワラオ - の神と信じていたのでございます。ピラミッドも、未来永劫を信じた側近の人々が、フワラオ - の財宝を入れてまた生まれてきたときに再び使用でき、フワラオ - の下で生活できることを信じ、希望して造られたものでございます」とピラミッドのことまで語った。 - - 」

あるとき、通信衛星を利用して、エジプトのギゼのクフ王のピラミッドの生中継がテレビであった。高さが一四六メートルあったものが、ピラミッドの頭の方がこわれて、今は一三七メートルになったと放送していた。夜ともなると観光客のために照明されるが、その灯のもとでカイロの人々がピラミッドの近くで円座を組み、会食をしたりして結構な賑わいであった。また、ラクダでピラミッドの廻りを一周すると日本円にして三～四百円と報じていた。私達は、永い間ピラミッドはファラオのお墓であると信じ、またそのように学んできたが、そうではなく、当時のエジプト人が、再び現世に舞い戻って来たとき、エジプト文化、文明をより発展させるための資材、財宝を保存する倉のようなものであったとは注目に値する。当時のエジプト人は、魂は永遠であることを知っていたのである。



「ピラミッドについてのアガシャ - の予言」

<その1> - - - 「比較的近い将来、エジプトの各宗派の統合された詳細な状況とその時のアガシャ - の役割とについて述べた記録が発掘されるだろう。三七宗派の象徴である中央ピラミッドのデザインの、大きな飾板がカイロの近く、エジプトの三主要ピラミッドからあまり遠くない所で発見されるであろう。あの当時の宗派統合の時、アガシャ - の息子であった或る一人の裕福な勢力あるエジプト人が、考古学者達によって計画された発掘の仕事に指導的役割を果たすであろう。また飾物や価値ある品物や長い間大アレクサンドリヤ図書館の廃滅と共に失われていたと考えられていた古代の記録等々多くの財宝が発見されるであろう。実際、高度に発展した文明の遺跡がナイル渓谷に発見され、その文明は現代吾々が親しんでいるごく最近の文化よりも財産的にもはるかに優れているであろう。この有史以前の文明とノアの洪水は、アトランティス大陸の大陥没以前の一大文明との間の連続関係もまた発見されるであろう。」

<その2> - - - 「驚くべき探究と新発見はあの世に限ったことではなく、考古学的にも、人間は過去について多くのことを学び、その過去よって人間は現在及び未来のことをさらに深く理解できるようになるだろう。二世紀の終末は一つの七千年周期のクライマックスであり、その周期の頂点はその初期に於てエジプト文明であった。しかし過去のエジプト時代の探究は主として後期のエジプト時代の探究であり、その時には「完全な理解」のあった光明時代は既に破壊され墜落した状態にあったのである。だが数百年の間最高状態を保っていたこの失われた文明の物語りを確認する記録が、大ピラミッドの中や周辺に発見されるであろう。書板も記録も共に失われたアトランティスの文化との関連を示してくれるであろう。」

(それは約六千年昔、円筒形の箱の中に規則正しく収められた記録である)

「この地方には黄金がたくさんあって、全て存在した建物やその遺跡はまだ大部分が砂の下にうずもれており、破壊されることなくすばらしい形を保っている。未だ発掘されることもなく砂中に埋もれている古代エジプトの黄金は、現在の基準からみて、現代の世界の全ての国を購うに十分な位の価値のものである。」

<カイロ近郊で二つの、砂に埋ったピラミッドが見つかった>

昭和六十三年四月二十日(カイロUPI - 共同)

「フランスの考古学調査団が、このほどハイテク装置を使ってカイロ近郊のサッカラ砂漠に埋っていた約四千年前のピラミッド二つを発見した」と報じた。これからの発掘調査などを待たなければ詳細はわからないが、高橋師の、そしてアガシャ - の予言が一つ一つ現実となっていく。

「高橋師は幽体離脱してエジプトへ行った」

『心の発見・現証篇』、高橋師の「ことば」から

「また、”もう一人の私”は鐘の音の波動に乗ることもできる。鐘を打った人の心の状態に比例した世界に行くことができるということである。義兄が亡くなったとき、日蓮宗の坊さんが経を上げた。その音の波動に乗ってみると、この現象界（地上界）から外へ出られないで、空中だけしか回れなかった。不思議なことに、音も粒子であり、その粒子が波動となって伝わって行くことも発見した。肉体から抜け出した”もう一人の私”は、現世のエジプトに行ったこともあった。空中から風景を見ながら、都会の名前が解らなかつたため、駅の近くには表示があるだろうと思って駅を探した。すると、その駅には、ロ・マ字とエジプト語で、カイロと記されてあった。このように、心が調和されれば、見たいと思う場所に肉体から抜け出して行くことができるのだ、ということが解明された。印度にもたびたび行き、石窟寺院の壁画を見てきたこともあった。私の指導者ワン・ツ・スリ・は、私達の肉体から抜け出した”もう一人の肉体舟”は光子体であるということを説明してくれた。」

高橋信次師は、地球上の色々な場所へ、光子体の姿で（幽体離脱、意識）で行った。我々の肉体は、原子肉体と光子体が不離一体となって重なり合っている。高橋師は、弾定瞑想中に、肉体はそこにあるが、光子体が肉体からぬけ出し、光子体のままで自由に地上界を往来したのである。いくつか上げてみよう。

<幽体離脱その一> - - 「ニュ・ヨ・クの大谷さんが遂に悟りましたよ。わたしが意識で行ってみると、彼はニュ・ヨ・クの公園の石の上で弾定してるんですよ」 - -

<幽体離脱その二> - - 「私はこのようにして、よく弾定中に、上空から風景を眺めたり、しづきがかかる海上をものすごいスピードで飛んでいったりします。肉体の自分がそのまま経験しているのと全く同じであり、したがって金のかからない旅行の楽しみを味あうことが出来ると言えるでしょう。」 - -

<幽体離脱その三> - - 「過日は私達の仲間が中国に出ていることを通信されました。私は昨年（註・一九七四年）の十月を通し中国の我々の仲間の所へ行きました。この人達は台湾の国立医科大学の先生を始め、その出身のお医者さんばかりです。彼等の所へ私は夜十時、肉体から抜け出して光子体で彼等に神理を説き、そして、ついに彼等は心の窓を開き、我々とコンタクトするようになりました。彼等の心の中に法灯が点されたために、今は主としてアメリカに行っております。アメリカは先月の二十七日から行きました。二十八日の晩に、アメリカの、私が五年前に予言していたところのニュ・ヨ・ク、マンハッタンというところに住んでいる方とコンタクトがつかしました。そして、私は、夜、心で神理を教えております。彼もその自覚にめばえております。この方は日本の新聞でも相当名前の通った方です。こうして彼等の心の窓は開き、次々と真実のものは伝わっていきます。これから私の説いた教えは、アメリカに渡っていきます。むしろ日本よりか私の説いている心理はアメリカに広く拡がっていきます。しかし、私はあくまでも私が説いているものではありません。私は代弁者なのです。私はただの電気屋です。電気のことならわかります。宗教のことはわかりません。しかし、私達のバックには実在界の光の天使達が次々と疑問の点を明かしてくれます。それを又、証明してくれます。皆さんも、自分の欠点を自力によって心のスモッグを払ったときに、あたかも太陽が誰にも美しい光りと熱を与えて下さるように神の光明も、又、自らの心に光を受けることが出来るのです。」 - - （一九七五年、中京秋季講演会テ・プより筆録）

その外、講演の中で高橋師は、映画視察やある人の行動をながめたことなどの話がある。次は、高橋師帰天直前の一九七六年四月、両国日大講堂における「GLA七周年記念講演会」から参考にして欲しい。



「宇宙即我、奈良の大仏さん、幽体離脱」

高橋師の「ことば」より

「 - - 心の中の感情や智性や理性や本能が調和されてくると心の中のスモッグがなくなってくるから、神の光によって満たされて、この心の調和度の光は、どんどん大きくなって宇宙大になり、後光は宇宙大になります。そこで宇宙は自分の膝許に、更にまた、宇宙は自分の中に入り、そうすると初めて、宇宙は自分だということになりますね。これを梵我一如というのです。そうすると弾定というものをして心を統一して心のスモッグが取り除かれていきますと、原子肉体に対して光の肉体、つまり光子体がどんどん大きくなって、この講演会場の建物より大きくなっていき、空を抜けて、この建物が自分の膝許に見えるようになり、更にまた調和されてくると、この建物よりはるか上の方に自分が大きくなって、地球は自分の下に、そして、地球よかもっと大きくなると飛行機が飛んでいるのが下に見えるようになり、もっと大きくなりますと、地球がはるか彼方になりまして、地球は青かったということになり、お月様よりもっと高くなる。こうして自分が宇宙になってしまう。これが「宇宙即我」というわけですね。

善我なる自分、心の中のスモッグを除いて、偽りの我を全部捨てて、苦悩を全部取り払ったからなったわけで、奈良の大仏さんは、どうしてあんなに大きく造ったのだろうと皆さん思うでしょう。それは、あの奈良の大仏さんのような広く大きな心になれっちゅうわけですね。ところが今、大仏さんを拝むようになったわけですね。「汝、偶像を拝むことなかれ」とヤ・ヴェ（エホバ）が言いましたね。偶像を拝むんじゃないんです。あの大仏さんのような広い大きな心になれっちゅうことを昔は言ったものなのです。ところがいつのまにか拝むようになった。

それともう一つは弾定中に抜け出しちゃうんです。抜け出す方法は、こうして抜け出しちゃうんですね。（註：図示して）霊子線という、中道を歩いていると、こうして真直ぐ抜けるんですね。丁度、夏なんか雲があつて、そこから光がパ - ッとさして、サ - チライトのように下を照らしていることがありますね。あれを思い出して下さい。あの様に天上界から光がパ - ッと出ております。あの世へ帰る時に、その光の中を真直ぐに、その真中を帰れる人と地獄の遠道をして帰る人と、それは皆さんが自分で決定するんです。生き具合によって、この地上界の、それは思ったこと行ったこと、その結論は皆さんが出すんです。それと同じように心がきれいだとね、この霊子線という、この天上界からの光の束は、こうして自分の意識線から抜け出して、弾定中に自分が抜け出していくことが出来ます。そして例えば弾定しておって、自由にどこへでも行くことが出来ます。先づ便利なことは入国手続きもいりません。注射する必要もありません。飛行機のように墜落することもあります。サ - ッとみんな見て来れます。観光旅行は先づただです。これは一番良い方法ですね。（笑い）

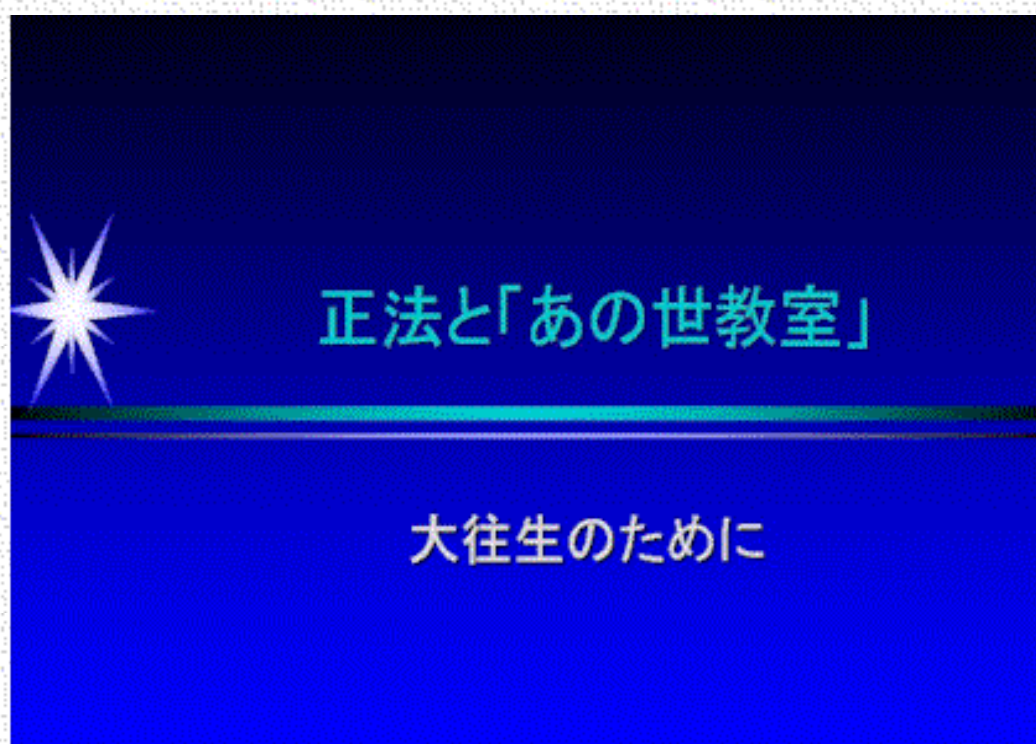
こういうように出来るのを、”弾定三昧の境地に到達せん”ということですから、どうぞ皆さんも一番金のかからない方法ですから、御利用した方がいいと思います。これ一番いい方法です。波の上なんか飛んでいる時は、皆さん、おっこっちゃうんじゃないかと思えますよ。坐ったまま飛んで行くんですから、風切る音もピュー - ッと聞えます。ビックリしますよ。ですから、色々な所へ行って自由に見てこれますよ。便利なこともありますが、不便なこともあります。食べ物は食べられません。肉体をもっていないんだから。そういう不便は

ありますけどね。見て来ることは見てこれます。だから、ま - 目の保養にはなるっちゅうことですね。ま、言うなれば弾定中に夢を見ているということ、全部記憶して帰って来れるということ、そういう便利さはありませんね。でも、この世を去る時には、どっちみち、そういうことになるのですから。だから、その実験は正法を自分が守らなきゃならないんですから。感情、智性、理性、本能、想念を丸く豊かに、すぐ風船を思いだして、その原因をすぐ取り除く、それ以外にありません。自分の心は自分で管理することです。そして自分を豊かにすることです。自分を救う事は自分以外にそれは出来ないということ。そういう毎日を送ることが大事だといえましょう。自分を正法という片寄らない善意な大三者の立場に立って自分を完成したいことだと思えますね。 -

- 」



Home



死んだらどうなる

- この世に執着しない高い人格者は、一時間もしないうちに天上界(天国)へかえる。
- 普通一般の人は、しばらくは意識不明(無意識)のような状態が続くが、そのうちに死を悟り死後の世界に入っていく。
- 二十一日経っても、死んだことを自覚できない人はストレートに地獄界(暗い世界)。

16-

「三途の川」とは何だ

- 高橋師「皆さんは三途の川という言葉を知ったことがあるでしょう。それはこの地上界で体験して持った執着を流し捨てる場所なのです。執着を捨てないと彼岸(彼岸)へ渡れないのです。お荷物を全部捨てて...」、という次元の違う大河である。(昭和四十九年一月東大阪講演)

16-

21日間は地上界での最大日数

- 釈迦は21日目に悟り天上界で法話をする
- 21は「あの世」の決まり
- 21日間は霊(魂)が「この世」にいることの出きる最大日数であり、それ以上この世にとどまる霊を自(地)縛霊、浮遊霊という

死後の世界の入口で尋ねられる

- ◆ あなたは死ぬ覚悟があるか、死に対する用意がありますかと尋ねられる。
(そして、生きていた当時のことをパノラマ映画のように見せられ、また尋ねられる)
- ◆ 一生のうちで人に見せられる「これはいいことをしたと満足できる何か」をやって来ましたかと尋ねられる。この尋ねる霊は菩薩界の人である。

16 -

28日間の反省期間

- あの世の「心の収容所」に入り、二十八日間の人生の反省期間を経て、生前の魂の状態・生前の心と行いによって天上界へいくか地獄界が決まる。
- 天上界へいくか地獄界へいくかは自分の「嘘のつけない善なる心」が裁いて行く世界であり、閻魔さま等が裁くのではない。

16 -

四十九日とは

- ★ 霊が地上界に留まることのできる最大日数である21日と、人生の反省期間の28日の和が四十九日の由来である。
- ★ 死者が大事にしていた財宝を処分したり、財産争いなどの気がかりな行動をとれば一度は「あの世」の定住地に行っても、気がかりな場に引き戻され困った現象を起こすので四十九日間は静かにすること。

収容所そばの廃品捨て場

- ◆ 収容所にて人生の反省をすませ四十九日が過ぎると、各人の心と行いによってそれぞれの段階(天国、地獄)へ行くことになる。収容所そばには各人が心の中に持って来た「戒名」、「卒塔婆」、「小銭」等のものすごいゴミの山がある。
- ◆ あの世では、何の意味もないことを悟った人達が置いて立ち去った廃品の山である。

16-

「この世」と「あの世」

- 「この世」は「地上界」、「現象界」、「物質界」、「色」、「三次元の世界」といい、形ある物はいずれ消えてなくなるという変幻極まりない世界。
- 「あの世」は「実在界」、「意識界」、「空」、「四次元以降の世界」と言い永久に消えてなくなる本当に在る世界であり心(意識)の世界。

16-

天上界	地獄界
■ 「神」	■ 修羅界
■ 如来界	■ 餓鬼界
■ 菩薩界	■ 畜生界
■ 神 界	■ 煉 獄
■ 靈 界	■ 無間地獄
■ 幽 界	■ 魔王

如来界と菩薩界

- 愛と慈悲の心だけで人類を正しく導く役目の人。
如来界の人は「あの世」と「この世」を通して425人、菩薩界の人は約2万人おられる。(1972年現在)
- 如来界の人はイエス、モーゼ、釈迦など
菩薩界の人はペテロ、パウロ、日蓮など

16-

「神界」、「霊界」、「幽界」

- ★ 「神界の人」 損害を受けても人を非難しないで、その原因を振り返る人達の世界。あの世とこの世を通して一億数千万人。
- ★ 「霊界の人」 与えたものが返ってこないと気持ちがスッキリしない人達の世界。全体の三分の一
- ★ 「幽界の人」 自分さえ良ければ人はどうでもというエゴの世界。人類の大半の人達。

16-

地獄界の段階

「修羅界」、「餓鬼界」、「畜生界」

- 「修羅界」 平気で人を陥れ、人を争わせて面白がる人達の世界。
- 「餓鬼界」 金銭欲が強く、欲望の塊りみたいな人達の世界。
- 「畜生界」 ねちねちと執念深く、性欲に狂う人達の世界。

「煉獄」、「無間地獄」、「魔王」

- 「煉獄」 狂思想家、狂宗教家などの世界
- 「無間地獄」 戦争の計画者、間違った教えを説く宗教家達の行く世界で、ヒトラー、スターリン等。
- 「魔王」 約三億年程前、ベーター星よりこの地球に最高責任者のエルランティと共に飛来した天使ルシフェルは、天上界に帰ることなく地獄の帝王(サタン)となった。

お経とは何だ！

- お題目の「南無阿弥陀仏」とは？
- お題目の「南無妙法蓮華経」とは？
- 般若心経の「摩訶般若波羅蜜多心経」とは？

16-

この項の説明は「生まれ変わりの実例」の「細数 这个人」に詳しい。

あの世と仏事の「いわれ」

- ローソク、線香、合掌の意味
- 塩、水、お供え物
- お墓、仏壇、鐘、卒塔婆、五重塔
- 戒名、お盆の意味、灯明と法灯の違い

16-

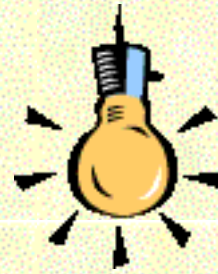
この項は、「生まれ変わりの実例」の「細数 这个人」に詳しい。

Home

人生教室



正法と人生教室



心の法則と物質の法則

これまで永い間、宗教と科学は全く相反するものであると考えられてきたが、心の法則（宗教）と物質の法則（科学）は同一である。

神仏は存在する

心の法則（宗教）

物質の法則（科学）

1 . 靈魂の永遠性	質量不変の法則 エネルギー不滅の法則
2 . 因縁の法則 原因・結果の法則	因果律 作用・反作用の法則 動・反動の法則
3 . 業（カルマ）の法則	慣性の法則
4 . 輪廻転生	循環の法則
5 . 類は類を呼ぶ 類は友を呼ぶ	波長共鳴の法則

各論

1)

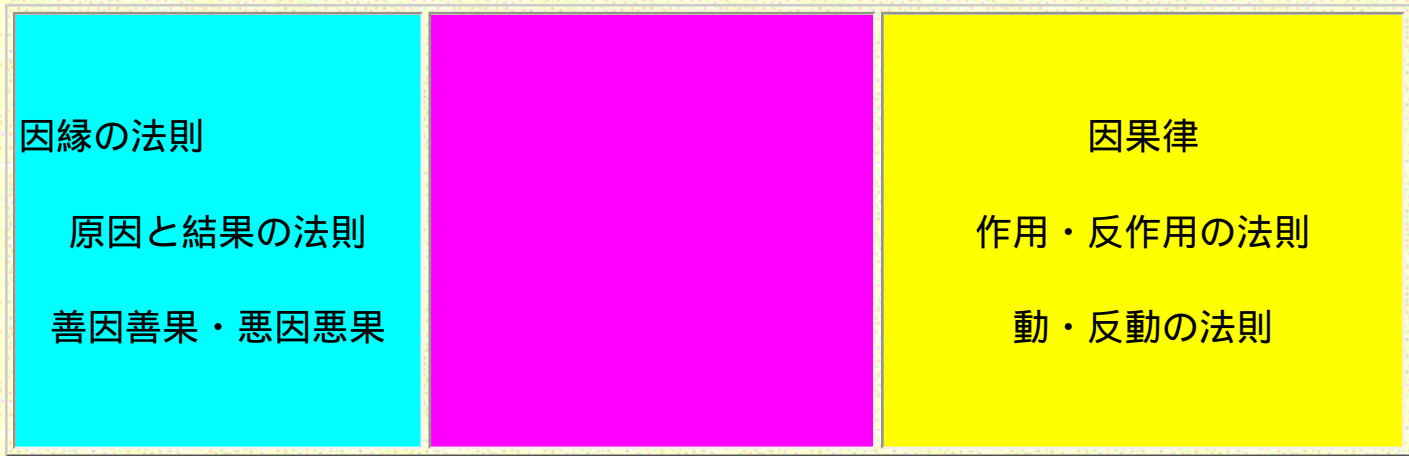
靈魂の永遠性		質量不変の法則 エネルギー不滅の法則
--------	--	-----------------------

人間の生命（靈魂）は過去（過去世）、現在（現世）、未来（来世）の三世を循環し、流転し不滅である。

靈魂に死はない。靈魂は生き通しのもの。

肉体は死ねば三合の灰となると言うが、靈魂は死ぬことはない。人間は死んでも、死なない靈。

2)



善因善果・悪因悪果。善い原因は善い結果をつくり、悪い原因はは悪い結果をつくる。苦しみをなくすには、苦しみの原因をつくらないようにすること。

一人一人の運命は、みなその人の心の結果であり生きざまの結果。運命は自ら造り出した結果である。

現在の自分は、過去の輪廻転生と今生に生まれてから現在までの自分の総決算である。

よいと思ってやってみたのに悪い結果が出たというのは、よいと思ったことが、その人の独断の自己中心的な我（が）の考えであり、実際はよいことではなかったのである。

あなたの現在は、あなたの過去の総決算。現在の自分を反省してまだ欠点があるというならば、それはこれからの未来において、学ばなければならないものがあることを示すのである。

因縁の法則は確かに実在する。しかし、その因縁の法則を超える道が、慈悲と愛を顕現する道である。慈悲と

愛の生活を送ることにより、一切の因縁を超えて安楽の道を進むことができるのである。これが因縁の世界に住みながら因縁を超える道。ところが、日本仏教の中に、因縁を超える道が説かれていないという結果になってしまった。

物心両面に共通する法であり、この自然界のものはすべて因縁の法則によって動いており、心も物質も同じく因縁の法則によって動いている。心と物質は次元が違うはずなのに私達は、「それは物だ」と心で認識できるのは、心の本質と物の本質は本来同質であり、心の本源と物の本源は本来同一であるからである。私達が一切のものを心で認識できるのは心と物との本源は一つだからです。過去の想念の総決算が現在の自分であり、現在のあり方が未来の運命を決定することになるのである。

3)



スピードを出した車が急ブレーキをかけても、惰性で何メートルか走るように、心が一定の傾向性を持つと無意識にそのことを行う。

いつも明るく、くよくよしない性格とか、悲観的な暗いことばかり考える人とか、その人によって性格が違なのは、その人がそれまで考えてきた心の傾向性、習慣性によってつくられる。

あなたは、人生の中で明るい心と暗い心はどちらの方が多かったでしょうか。

この心の傾向性を、仏教では業（ごお・カルマ）、キリスト教では原罪という。

地上での修業の第一の目的は、自分の業（カルマ）を直す（改革する）ことである。

生きている間に犯した罪の中で、これをもう一度体験して、反省が本物かどうかを確かめたいと思ったものが「業（カルマ）」として出てくるのです。生まれつきのその人の性格の中に、そのカルマが含まれてしまうのである。

業（カルマ）は執着から生まれる。自己中心のものの考え方が執着を生みカルマをつくっている。

心の習慣性、傾向性はその人の業（カルマ）である。業（カルマ）は大きくわけて三通りある。第一は先天的なもの、第二は両親による肉体遺伝、第三は環境によるもの。一番目の先天性のカルマは気質として現われる。意志の強弱、内面型、外向型、悲観的、楽観的というように、修正には手間がかかる。第二番目の肉体遺伝は血液の型、内臓諸器官の強弱、色盲など、肉体遺伝についてはハンディが、ものの考え方や生活の仕方を変え執着をつくります。第三番目の環境は教育や思想、生活環境によってつくられる。

人の欠点の三分の一は、過去世からの業（カルマ）であり、残りの三分の二は今世でつくられたものである。人間には生まれつきにくせというものがある。悪い傾向性だけでなく、善い傾向性もまた業（カルマ）なのである。小さい時からきれい好きだとか、小さい時から人にやさしくするとか、悪い事には少しも妥協しないで潔癖であるとか、それらも前世からの業（カルマ）である。

業（カルマ）には善業（善のカルマ）と悪業（悪のカルマ）がある。

4)



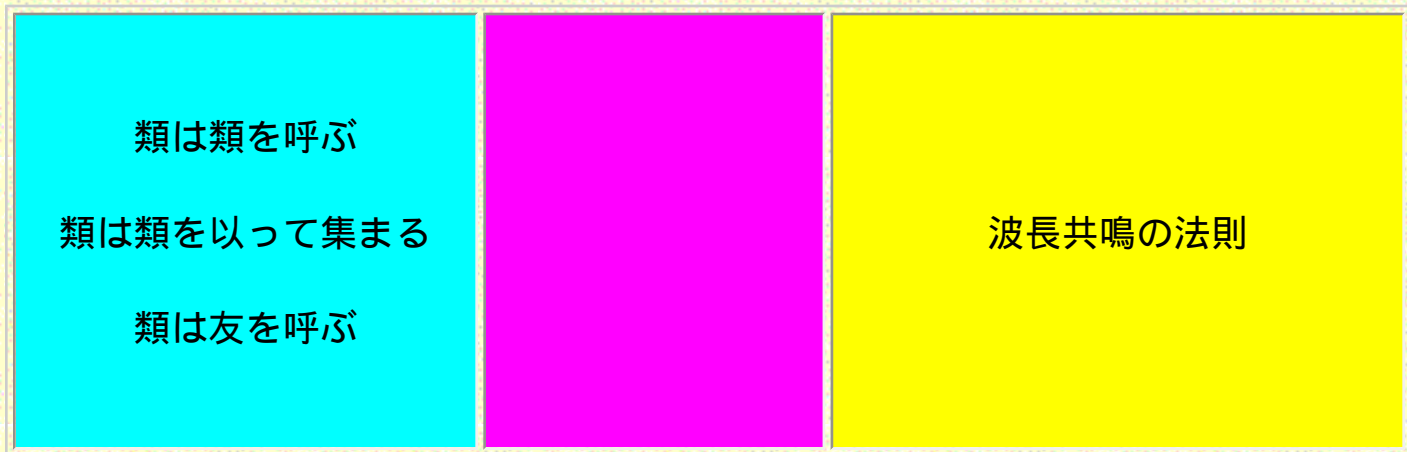
人間は、あの世（実在界）とこの世（現象界）を循環して魂をみがく。

転生輪廻の二つの目的

- 1 . 己自身の魂の調和
- 2 . 地上の楽園（ユートピア）をつくるため

地球は自転・公転して昼夜がある。春夏秋冬の四季の循環。水は水蒸気となり、雨となって降ってくる水の循環。動物が吐き出した炭酸ガスを植物が吸って、代わりに酸素を出す、これは動物と植物との間に於ける空気の循環。このように人間も、あの世とこの世を循環する。

5)



酒好きの人の所へは酒飲みが集まり、騒ぐことの好きな人の所へは騒ぎ好きの人が、麻雀好きな人の所へは麻雀好きの人が、静かな雰囲気好きな人の所にそのような人がというように、類は類を以って集まる。

ラジオやテレビは周波数の合った局の放送が聞え、見える。波長が合わないと、電波がそこにあっても聞えないし、見えない。音叉の一方を叩いて振動させると、もう一方も振動して音を発するように、人間も心の波長の合う者同士が一緒になる。

磁石を砂の中に入れると、鉄分のみが吸い寄せられ、鉄分以外のものについてはついてこない。朋友、不仲、こうした関係はすべて、綾なす縁によって自然に結ばれ、あるいは離れていくものである。

Home



「八正道とは」

別の項でも触れているが、最も大事な人間の規範だから再度上げる。

私達は輪廻転生している生命であり、神仏の命によって魂の修行をし、神仏の体であるこの現象界に、調和のとれた仏国土を築く使命を持って生まれてきた。しかし、大自然、万象万物の循環の方式があり、若木もいつか老木と化す。やがては朽ちて行く定めにある。一秒一秒、私達はその循環の刻をきざんでいる。好むと好まざるとにかかわらず、である。従って私達は、現世において悔いのない生活を送らねばならない。それには何事も腹八分のたとえのように、中道を歩むことが大切。苦界から抜け出し、自分自身を救うには、中道の道を歩むしか、人間には救いがないといっているわけである。それがインドでかつて説かれた釈迦のいう八正道である。八正道は人間をして中道を歩ませる規範であり、天国につながるかけ橋である。左にかたよらず、右に曲らぬ中道への道、つまり神性、仏性への道、正覚への道なのである。

- 一、正しく見ること（正見）
- 一、正しく思うこと（正思）
- 一、正しく語ること（正語）
- 一、正しく仕事をなすこと（正業）
- 一、正しく生活すること（正命）
- 一、正しく道に精進すること（正進）
- 一、正しく念ずること（正念）
- 一、正しく定に入ること（正定）の八つである。

この八つの規範の一つが欠けても、中道の道は歩めないし、正覚を得ることも、不可能であると説いている。またこれ以上あってもいけない。たとえば、戒を守れとか、瞑想のみの生活を送れとか苦行せよ、といったようなものである。それは、釈迦自身が、色々な経験を通して得た中道への道は、八正道以外にはないと悟ったのであり、八正道こそ神理につながり、この世に人間が生存するかぎり、その神理は生きていくものだからである。八正道の目的は慈悲と愛の心なのである。これまで自己本位の見方で見てきた不調和な見方、生活の誤りを正すことにあるのだ。

私達の肉体は、人生航路を渡る舟であり、この舟の支配者は意識すなわち魂である。この魂は神仏の子としての本性であり、私達は神の体の中にいるのである。この現象界において、永い転生輪廻の中で造り出してきた業（カルマ）の想念は、私達の意識の中に記録されている。それを、神の子としての正しい想念によって調和することが修業である。

「八正道に行ずること」

私達が現在ここに在るということは、肉体的先祖と両親のおかげであり、両親に孝養をつくすことは当然なことである。この世の修行と、あの世の修行を比べると、この世の修行の方がずっと楽である。あの世は波動の精妙な世界である。思ったこと、考えたことがすぐさま八ネ返ってくる。このため、次元が低いと、なかなか反省できにくく、苦界から脱け出すことがむずかしい。ところが、この世は波動が荒いため、思ったことに対する結果が現れるまでに、ある一定の時間が与えられている。従って、結果が出ない間に、これはいけないと反省すれば、そのことに対する訂正が可能になってくるのである。もっとも反面、その出される結果が遅いために、人によってイライラする事もあるだろうが、波動が荒いだけに修行はしやすいともいえるわけである。この世の十年はあの世の八十年、百年に匹敵する。それ程、この世の修業は楽であり、しかもこの世の修業の結果が、再びあの世に戻った時の自分の生活状況を決定するので、両親に対する感謝、孝養は当然であるとしなければならない。

各人の魂（意識・心）はこのように両親から与えられた肉体という舟に乗り、人生航路に船出する。魂そのものは、過去世、あるいは、あの世の生活を体験してきており、肉体に乗る以前にも個性的傾向がある。これを魂の先天的因果という。肉体という舟に乗った魂は、当初一〇%の意識しか目覚めていないから、この世の目的が判然としない。そのために、これまでの大多数の人々は五官に左右され、自我我欲におぼれてしまう場合が多かった。八正道はこうした各人の一〇%の意識に対して、残りの九〇%の潜在意識、つまり、各人の過去世、あの世の生活の記録を思い出させ、人間としての目的を目覚めさせる。それは釈迦の長い苦行の結果であり、八正道を日々行ずることによって、悟りへの道が開ける、と教えているのである。祈ることで、お経をあげることでない。祈りとは感謝の心であり、感謝の心が湧いてくれば、次にくるものは形の上に現すことである。行ずることである。お経は行ずることを説いている。八正道は行ずることである。新約聖書ヤコブの手紙にも、「なんじ信仰あり、われ行為あり、汝の行為なき信仰を我に示せ、我が行為によりて信仰を汝に示さん」と、イエスもいくら信仰があっても祈っても、行為がなければなんにもならないといっている。かくて八正道を行ずることによって、やがて、輪廻の緊縛から遠離れた、正覚を得ることが出来る。つまり、内在する偉大な智慧に到達する道は、八正道に在る、ということである。このように八正道は、片寄りのない心の物差しである。中道の心は、私心のないことだ。すなわち神の心である。神の尺度である。そのような生活をした時に、私達は自分を知り、家族も平和で、国も栄え、隣国との調和も保て、仏国土、すなわちユートピアの完成に近づくことができるのである。

八正道の目的

生老病死の迷いを消滅させ、めぐみを与え、悲しみを取り除く慈悲の心で、他を生きし助け合う愛の行為を自然に行えるようになることであり、八正道を学ぶことは、即ち法を学ぶことである。それは又、中道の心の具現にある。

八正道にそった生き方

善を思い、善を行う生活。即ち慈悲の心で愛の行為をすることが、八正道にそった生き方となるわけである。

なぜ中道でなければならないか

自然界の生命を育む条件というものは、自然界そのものが常に右にも左にも片寄らない中道の道を歩んでいるからである。空気・水・太陽の熱・光...等、全てのものがはずれることはない。調和されている。人間もこの大自然を構成する一つにしかすぎないからである。

各論

「正見」

正見（正しく見ること）

ものを正しく見るには、まず自己の立場を捨て第三者の立場でモノを眺めることである。善なる中道の心の眼で見よ。外見だけでものごとを判断することは避けなくてはいけないということである。つまり「公平」であるということ。正見の反対は邪見である。心のわだかまりであり、自我我欲、自分中心から生まれる。したがって、ものを正しく見よう、公平に見ようとするには、これまでの既成観念を白紙に戻し、全く新しい立場からものを見るよう努めることである。

「感謝」について考えてみよう。年が進むにしたがって、ものに感謝する心が失われていく。すべてが当たり前に動いており、感謝や感動の心は湧いてこなくなる。しかし、ものに感謝できない心は、もともと、どの辺りから生じてきたのだろうか。誰しも子供の時代があった。子供の時は両親から可愛がられる。両親は子供の言うことなら大抵のことは聞いてくれる。近頃は過保護となり、親は子供のこととなると夢中になってしまうようである。このようにして、子供の心は成長するにしたがい、次第に、ものに感謝する心を失ってゆく。学業を終え社会に出ても、仕事をするから給料をもらうのは当然だ、課長は係長より余計に給料を取っているから、それだけ働くのは当然だ、ということになってゆく。こうして感謝の心は一向に芽生えてこないわけだが、もとをたどると、子供の頃のわがママが、大人になっても続いているからである。

すべてが当たり前で、当然という見方をしている、「正しくものを見る」ことにはならない。正見の目的は、物事の正確な判断であり、そうして、それにもとづく正しい見解を持つことである。以上を要約すると、

一、まず感謝の心を持つこと。

一、事象の一切の原因は人の想念、心によって、現われの世界は結果である。

一、既成観念を白紙に戻し、物事の真実を知るようにする。

一、正見の反対は邪見になる。常に第三者の立場に立って、自我の思いを捨て、正しく見る努力をするということになる。

一、神の天地創造のことわりを知り、人間は神の子として天孫降臨し、調和を実現することが人間の目的であることを知り、その眼ですべてを見てゆくことをいう。

一、「わが心をよく知る、知って自由自在にコントロールできる」という力を持つことが、正見できる唯一の条件なのである。

ものを正しく見るには、わが身をつねって、人の痛さを知ることである。相手の立場を考え、自分を見ることから始まる。自分中心にして、ものを見ると、片寄った考えや我欲が出て、正しい判断ができない。争いの火種は、すべて片寄った考え方から起こるのである。

正思

「正思」とは(正しく思うこと)

思うとは、考えることである。見る、聞く、語る、の行為の中には、正しい中道の神理をもとにした考えがなくはない。自己本位の考え方は身を滅する。すべては相互に作用し、循環の法にしたがっているため、自己本位の想念は自分にかえってくるからである。思う、考えることは、行為につながるから、不調和な思いは、記念のフィルムに抵抗をつくり、その抵抗は、自分の意識や脳細胞までも狂わせてしまう。思う、考えることは、創造行為でもあり、自己の運命をよくしたいと思うなら、まず、正しく思うことをしなければならない。不調和な思いを持てば、黒い想念の抵抗を自らつくり、苦しみを多くするだけである。相手を陥れて不幸にしようと思う心は、自分の落ち込む穴を掘っているようなもの。「策士、策におぼれる」の類であり、「人を呪わば穴二つ」である。また、情欲の連想は、心の中で行為につながる。思うことは行為の前提であり、実は行為そのものである、ということを知らなくてはならない。

昔から姑と嫁の争いを聞く。姑が嫁に厳しいことを言うと、嫁はたび重なる叱言に心から嫌な姑だ、早く死んでしまえばよいと思うようになって、そうなる心黒い想念は現象化され、表面は姑に合わせ、口ではうまいことをいっても、嫁の心にひびくものは姑に対する憎しみとなり、やがて爆発し、争いになってくる。正思の重要なことは、第三者の立場に立って考え思うことなのである。話し合ってもうまくゆかず、自分の非がどうしても認められない場合は、相手のために祈ってやる広い心が必要である。相手に通じなければ、広い心で相手を包んでやる。「どうか神よ、救ってやってください。あの人に安らぎを与えて下さい」と祈ってやる心が必要である。心から正しく思うことは、さらに自分に安らぎを生み、神仏の愛に満ちた光を受けられることである。これは神理である。もう一つ大事なことは、我慢と忍辱(にんにく)である。この両者は似ているようで大いに違う。**我慢**とは苦しみ、悲しみを腹の中につめこむことである。自分さえ我慢すれば家の中がまるく収まる、として我慢に我慢を重ねてしまうと、我慢は病気をつくることにもなる。**忍辱**とは、耐え忍ぶことだが、苦しいことを腹につめこまない、話しても相手がわからなければ、相手の心の安らぎを、調和を神に祈るといって、広く、高い心を使うのである。

私達は忍辱を学び、我慢を捨てることである。正思を養うには、これまた反省である。今日一日の考え、思いは正しかったか、正しくなかったかを反省し、過失があれば訂正してゆくこと。こうしてやがて、中道に適った正思を、心の中に確立することが出来る。頭で考えないで、善なる中道の心で考えよ。正しく思えないのは、正見でみたように、自分の心にわだかまりがあるからである。正しく思うことは、正念と密接に関係し、特に重要だから、正念と合わせて理解して欲しい。正見、正思の目的は、慈悲と愛を根底にした中道の思いにある。善の思

いには善が返ってくる。悪の思いには悪が返ってくる。思いは、ものを創造する行為である。他を生かし助け合う、正しく思うことが、あなたを調和させ、人々を調和させる根本である。正しくない思いかたは、怒り、愚痴、そねみ、独善、足ることを知らぬ欲望から生まれてくる。学校の入学試験で、友達が合格し、自分が落ちたりすると、怒りや愚痴、そねみの思いがわいてくる。こうした心を持ち続けると、病気、災難、争いを生み、人や自分が嫌になってくる。心はいつも明るく、自由に、公平に、試験に落ちた原因を静かに省みて、なんで落ちたか反省することが大事なことである。正しい思いは、ゆったりとした、余裕のある、片寄らない心から生まれる。正しい思いとは、慈悲と愛しかない。これ以外の思いは、すべて自我からきているのである。

正語

正語とは

言葉は言魂といって、相手に伝わる。表現された私達言葉は、相手の耳を通して不調和か調和かいづれかの現象を生じさせるものだからである。言魂とは、光と音の波動を意味する。私達の心、肉体は光から出来ている。音の波動も、また、光の波として空間に振動して行く。心からの言葉は、そのまま、光の振動となって伝わってゆくが、すぎたお世辞や横暴な語り方は、光の波動に黒い塊りを付着させているため、相手の心を傷つける。傷つけた結果は、自分にはね返ってくるのである。ですから、言葉は素直な心で、相手の心になって語り合うことが大切である。語調の強い言葉は、相手の心に不調和を与えるだけである。売り言葉に買い言葉で、町中や電車の中で口論している人がよくある。互いに、黒い塊りを発散させ、それを食べ合っている。心に黒い塊りをつくり出し、拡大させている。こうしたことを年中やっていると、病気や怪我をする。心がいつも不安定になっているからである。相手が怒っても、決して反発してはいけません。反発は自己保存であり、反発する前に、自分を第三者の立場で見、考えてから結論を出しても遅くはないからである。

怒った心は 怒った人の心に帰って行くものであり、これに心を動かしてはならない。第三者の立場に立って反省し、いわれなきものであれば、「哀れな人だ」と相手を思いやればよいのである。そして、「神よ、あの人の心に安らぎを与えて下さい」と祈ることである。言葉は自分と相手の意志の交流。それだけに常に調和のある言葉を心掛け、調和のある対人関係をつくるようにしなければならない。言葉は、人によって受け取り方が違って来る。お年寄りに英語を交えたり、若い人に古い話を持ち出し、長々と語られると戸惑ってしまう。「人を見て法を説け」なのだ。「善なる中道の心で考えたことを語るようにせよ」である。

言葉が足りない、言葉がすぎる、というのは、しばしば感情が入るからである。また、誤解や不信が生じるとすれば、それは心の底に慈愛がないからである。慈愛を根底として言葉を発するようにしていれば、誤解や不信というものは起こらず、かりに、不足の言葉があっても、相手が補ってくれることだろう。そうした経験は、おそらく誰もががしていると思う。言葉は、意思の疎通に欠くことができない重要な機能だが、心に愛があれば、言葉以前の言葉が相手に伝わり、こちらの意思が正しく伝わってゆくものである。

心はいつも平静でなければならない。威張ったり、恐れたり、騒いだり、高ぶったりしていると、話す言葉も素直に伝わらない。言葉は、ものごとの考えや、意志を伝える大事な役目をし、こちらの気持ちが正しく伝わらないと、誤解、不信、恨みをかたりする。正しい言葉は、幼な子のような、素直な、屈託のない心しかない。冷静、誠実、愛の心を持って語れということである。

正業

「正業」（正しく仕事をする事）とは

私達のこの地上での目的は、魂を磨くことと、仏国土ユートピアを造ることである。感謝と奉仕、そして、より大きく、豊かな心と魂をつくる場が仕事のはずである。ペテロはイエス・キリストの第一の弟子として後世に名を遺したが、当時は漁師であり、学問に縁が薄かったために、伝道には随分と苦労した。そこで、今世は学問をみっちり学び、魂の経験を広げてゆこうと、今世は学者の道を志したのである。元東大総長の故矢内原忠雄氏がかつてのペテロであったのである。こう言うと人はそんなバカなというかも知れないが、同氏が書き遺した「イエス伝」を見れば、当時の経験がなければ書けないような箇所が随所に見られる。この他現代の著名人の中には、歴史上に名をつらねた人がおり、あの人こんな仕事をという例が非常に多い。普通は前世の職業が今世につながっている人もあるが、百八十度違った職業を持って今世を送る人も多いのである。今日の人々の心は、足ることを知らぬ欲望にふり回され、自分を失っているといえる。人生の目的を自覚し、大自然が教える中道の心を知れば、足ることを知った生活、つまり、神の子の自分を自覚するならば、欲望、我執に翻弄される無意味さを悟ることが出来るだろう。商人は利を求めるが、利を求めるなどは、正法では決して言っていない。大事なことは、求めて得た利益をどう処分するか、自分だけのことに使うのか、家族や従業員に分け与えるか、不幸な人々に愛の手を差し出すかどうかである。足ることを知らない人達は自分が中心であり、人のことなど構わない。

大気汚染や河川のごみ等の**環境汚染**といわれるものは、企業エゴを中心に動いてきたので、今日では、ここから脱皮しようにも身動き出来ないというのが現状である。自分だけのことを考えれば、やがてその結果は自分に八ネ返ってくる。足ることを知った生活環境は、仏国土という相互扶助、愛に満ちた世界である。そうして、そうした世界に住めるようになれば、人の心はさらにより広く、大きく進化させることが出来るだろう。そして、第二の在り方は、職業を通して、**人々との調和**をはかることである。自分を含め、人々の生活を守ってゆくことにある。第三の在り方は**奉仕**である。感謝と報恩の行為こそ神の偉大な慈悲である。ところが現実はどうだろう。利益のためなら人を押しのけても無理押しする。公害が出ようが、人が苦しもうが、最少の費用で最大の利益を挙げる。それが企業目的になっている。消費は最大の美德とかいって、地球資源の乱獲に狂奔し、将来の人類の生存のことなどあまり考えずに、儲ればいい、自分さえよければ良いというのが、これまでの企業精神のようだった。さらに労使の争い。労働者も人の子、食べるだけよこせと経営者に迫る。年々エスカレートして、労働者の生活福祉を目的とした組合運動は、ここへきて反省期に入ろうとしている。

経営者と労働者の対立は、やがて、経済全体のバランスを失う要因をはらんでいる。企業エゴ、個人エゴが「正業」から見た場合、いかに人類全体の破壊行為につながるか、魂の前進にブレーキをかけているかが、これで明らかになるだろう。物を主体にしたものの考え方は、必ず破損につながってゆく。心を中心とした物心両面の考え方こそ、私達人類の調和の基礎でなければならぬし、人類が永遠の平和を望みたいならば、ウソの言ないその心を大事にし、その心をもとにした生活が大事なのである。経済学博士が事業をやれば、必ず成功するだろうか。失敗することの方が多いためである。スポーツの評論家も同じだろう。実践はあくまで実践なのである。いかに仏教が理解出来ても、自分自身の生活の中でその正道を実践していなければ、それは絵に描いたボタ餅で、味わえない。ということは、もうお解りだろう。地上界のあらゆる生物は、働くように仕組まれている。動物も植物も、そして、鉱物さえも、この地上の生きとし生けるものに、その体を提供している。

人間の場合も、その点は老若男女を問わない。幼児は乳を飲み、眠ることが勤めである。学生は学校で学問を学び、社会人は社会のために働く。主婦は家庭にあって子供を守り、夫の仕事が円滑にゆくよう、安らぎの場を提供するものである。働くということは、人間としての業務である。同時に、職業に就き働くということは、人々に必要なものを提供することを意味し、私達が仕事をし働くということは、自らの生活を維持し、人々の生活を支えることである。そして、各人が人々に奉仕するという愛の心が根底になければならぬ。今日の社会生活は、それぞれがその業務を分けあい、互いにその生活を補い合い、助け合っている。すなわち、分業化によって、それぞれの生活を支えているというのが実情である。安らぎの安の字は、宀（うかんむり）に女と書く。宀はもともと家の宀からきており、その宀に女が加わると、「安」つまり、その周囲は安らぎとなるのである。

男は、田と力が合わさって男となる。男は外に出て田畠で仕事に精を出す。女は家庭にあって安らぎの場を提供する。男性が女性に美を求めるのは、美は安らぎの象徴であり、女性が男性に求めるもの、力は、たくましさの象徴だからである。男女の性が、それぞれ機能するところによって、人間社会は円滑に回転する。働くということは、人間としての義務である。私達が仕事をし働くということは、自らの生活を維持し、人々の生活を支えることである。ですから、それは愛の行為につながる。愛は他を生かすことであり、助け合うこと。仕事をし、働くことは他を生かすことだから、愛の行為なのである。仕事を単に金儲けの手段と考え、人はどうしても自分さえよければいいと思うのが、社会をこのように混乱させる原因である。ですから、今日の多くの人々は、正しく仕事をしているとは言えないだろう。正業の在り方は、この地上界の調和に役立てることであり、その基礎は愛であり、奉仕の心なのである。再度上げるが、正業とは、次の三つの目的から成り立っている。

一、魂の修業...より大きく豊かな心と魂をつくる場が仕事である

一、地上界の調和...仕事を通して人々と調和をはかる

一、奉仕...感謝と報恩

仕事の目的は、心を開き、魂を豊かにすることである。社会の調和をはかり、奉仕の喜びを感謝すること。この世の中は、一人では生きられない。みんなが、輪になり、助け合い、補い合い、許し合って、生きている。人のものを横取りし、悲しませたりすると、自分もそうされる。世の中の混乱は、人はどうしても、自分さえよければという考えからきている。仕事は、お金儲けのためにはありません。仕事は、様々な人生の経験を積むためであり、苦楽を学んでいく大事な修行場。みんなが輪になり、心を一つにすれば、世界は平和になる。人生のあり方と仕事の目的をしっかりと身につけよう。仕事をし、職業に就くことが愛の行為にも拘らず、社会がこのような混乱するのは、仕事を単に金儲けの手段と考え、人はどうしても自分さえよければいいと思うのがその原因である。

信次師の言葉の中から「**経済行為の原点は、男女両性の愛の中からこの声をあげた。**」



正命（しょうみょう）

「正命」（正しく生活すること）とは

正命とは文字通り正しく生活することである。正しい生活を送るには、まず自身の業（カルマ）の修正、短所を改めることである。人間は、眼耳鼻舌身意（げん、にい、び、ぜつ、しん、い）の六根によって惑わされる。過去世の悪い業の種も、そうした惑いから起きる。心は私達の肉体を支配している意識の中心で、自己には絶対に忠実であり、嘘をつくことはできない。ところが、人間は他人には都合が悪いと嘘をつく。そうした自己保存によって、より大きい業を造り上げてしまうのである。私達は、眼で見た現象面のみで判断を下してはいけない。正しく見る心の修行、そうした構えで、的確な判断をし、中道の考えの中から出た調和の心によって結論を出すことが必要なのだ。たとえ人の噂を耳にしても、自身でその原因と結論を判断するような生活が必要であり、肉体の五官のみで判断してはならない。肉体的な諸現象のみでは、正しい生活をすることはできないのである。正しい神理に適う、各人の心の悟りが社会集団を構成し、その中から調和のとれた相互関係が生まれてくるのである。

正しい生活の中で、対人的な嘲笑や、恨み、妬み、そしり、怒りなどの思いは滅せられて行く。大自然の無限の慈悲に対しての報恩の心と行為が、平和な安らぎの光を人々の上に現象化して行くのである。神仏は、万象万物を、すでに人類修行の場として与えているのであるから祈るよりは感謝の生活を具現することが大切なのである。己自身の魂が、実践行為による努力をしない限り、神理に適った修業はできない。すなわち、修業は一秒一秒の連続の中の正しい生活の中に存在していることを悟らなくてはならない。すべて**不幸の原因は、己自身にあり、生活の不調和がもたらしたものであり、責任は他にはない**。その原因を追求し、その根本を取り去る、心の反省の中から前進があるのである。毎日の生活が調和された中には、常に神仏の光によって保護されるものがある。そして、そこには不幸は訪れてはこない。それは、正しい生活の実践の中に積み重ねられて行くものなのである。

人間は誰しも、長所と短所の両面を持っている。長所と短所というものは、光と影のようなもので、性格が片寄った時に、長所が短所になり、短所が長所に変化する。そうした紙一重の性格をどうすれば長所に変えることができるか、短所は自分の心を騒がし、人の心をも傷つけるものであり、長所は自他ともに調和をもたらす性格といえるだろう。長所を伸ばし、欠点を修正することによって、自身の想念と行為はもとより、自分の周囲を明るく導くことができよう。私達のこの世の目的は、この地上に仏国土・ユートピアをつくることである。それには正しい生活を営まねばならない。正しい生活は、まず自分自身の調和からはじめねばならない。自身が調和を保たなければ、自分の周囲も調和に導くことは出来ない。欠点を修正するにはどうするか。それには第三者の立場から、自分の心を、毎日の思うこと、考えること、行為を、反省することである。では、正しい生活とはどうすればよいものか、それは八正道の目的である中道を物差しとして、己の業（カルマ）を修正し、中道に適った生活をするということである。業は私達の性格、性質の上にその人の短所という形で現われている。人の短所は自分自身にも他人に対しても、よい結果を及ぼさない。怒り、愚痴、優柔不断、独善、気取り、強欲、中傷、そねみ、粗野、多弁、排他、増上慢、引っ込み思案、自閉、出しゃばり、憎しみ、怠惰…。こうした性格は自分自身を孤立させ、自分の運命を不幸にしていくのである。

信次師「人間は誰しも、長所と短所の両面を持っています。長所と短所というものは、光と影のようなもので、性格が片寄った時に、長所が短所になり、短所が長所に変化します。信長は非常に気短かな男だったようです。しかし、その短気が決断となって現れた時は、神出鬼没の戦術に変化し、戦国の世を生き抜く絶大なエネルギーになったようです。このたどえはあまり感心しませんが、長所と短所というものは、紙一重であり、それは紙の表と裏のようなものといえるでしょう。そうした紙一重の性格をどうすれば長所に変えることができるか、あるいは長所とは何か、短所とはどういうものか、となりますと、短所は自分の心を騒がし、人の心をも傷つけるものであり、長所は、自他ともに調和をもたらす性格といえるでしょう。長所を伸ばし、欠点を修正することによって、自身の想念と行為はもとより、自分の周囲を明るく導くことができるでしょう。私達のこの世の目的は、この地上に仏国土・ユートピアをつくることです。それには正しい生活を営まねばなりません。正しい生活は、まず自分自身の調和から始めねばなりません。自身が調和を保たなければ、自分の周囲も調和に導くことは出来ません。欠点を修正するにはどうするか。それには第三者の立場から、自分の心を、毎日の思うこと考えること、行為を反省することです。」

○正しい生活は、まず自分の短所を長所に変えてゆくことから始まる。長所とは、明るく朗らかで、素直であり、人と協力し、助け合い、補い合ってゆく調和の性格である。人間は、みなこうした心を持ち、そうした性格を持っているのだが、環境、教育、思想、習慣などの影響を受けてさまざまな業を作り出してしまふ。業が身につくと、業自体が回転を始めるため、怒りの場面にぶつかると、習慣的についカッとなってしまふ。つまり、業というものも常に輪廻する。「わかっちゃいるけどやめられない」というのが業なのである。人の欠点の三分には今世のもの、残り三分の一は過去世の業とっていいだろう。己の欠点を正すことは、己の安心につながることであり、己の心が安心し明るくなれば、自分の周囲も明るくなる。このように正命の目的は、精神的、肉体的な調和をめざし、業と化したさまざまな原罪（自己保存の想念）を正すことにあるわけだ。

○正しい生活は、長所を伸ばし、短所を直すことである。短気、わがまま、ひとりよがり、でしゃばり、引っ込み思案、頑固、飽きやすい、気まぐれ、愚図、気取り、嘘つき。人には、いろいろな欠点がある。欠点を放っておくと、人に嫌われ、孤独になる。欠点は、自己本位が原因である。正しい生活をするには、常に反省をし、自己中心から離れて、ものに片寄らない正しい生活をするのである。

正進

「正進」（正しく道に精進する）とは

私達の人生は、いくら長生きしても八十年か九十年。その短い一生を目先の利益のために過ごしてしまうことは惜しいかぎりである。意識の一〇%しか働かないとすれば、それも仕方ないかもしれないが、しかしそうした環境だからこそ修業が出来るといえる。何もかもわかったならば、この世に生まれた意義はない。正進の目的は、対人関係と地上の環境を整備し、調和させることである。人は単独では生きられないし、また生まれてもこない。必ず両親がおり、そして兄弟姉妹、夫婦、隣人、友人、先輩、後輩というように、そうした環境の中で生活している。そしてそうした関係の中で、己自身の心が練磨され、尊重し合う心がつくられてゆくのである。最近のように、物質オンリーの風潮が強くなると、親子でも心は他人であり、夫婦は享楽の手段としか考えぬ人も出てくる。友人は利益追求の手段であり、自分以外はすべて他人というようになって、恐ろしいかぎりである。親子といえども魂は違うが、しかし、自分を生み、育て、今この世に在るということは両親の賜である。もしその両親があつた世（出生する前に親子の約束を交わす）の約束を果たさず、放蕩したり、あるいは胎児をおろしたりするようなことがあれば、話は別だが、そうでなければ、この世に生まれ魂の修行の機会を与えてくれた両親を安心させるような自分自身に成長することが、人の道に適った生き方である。

夫婦にしても、大抵は前世で夫婦であるという場合が多く、そうだとすれば互いに助け合う、愛の環境を作ることが大事なのである。第二の目的は、私達の共同生活が末長く続けられるように、動物、植物、鉱物資源を整備し活用してゆくこと。資源を大切にすること、ものを大切にすることは、道に適った生き方である。実在界（あの世）から見ると、私達現象界（この世）における生活状態や心の在り方は、丁度四方透明のガラスの中のように見える。心の嘘も分かってしまう。私達はその次元の異なる世界の存在を、否定することはできない。自分の生活がこのようにガラス張りを知ったら、人間は苦しみなどは作れないことを悟るであろう。自分だけの心にしまっている不調和な生活を清算し、真実己の心に忠実な、正しい生活に励むよう実践することであり、精進、この言葉の意味はここにあるのである。

「正しく道に精進する」とは、主として人と人との関係においての言葉である。夫婦、親子、兄弟、友人などは、それぞれの因縁、あるいは約束のもとに結ばれているのである。だから、我欲にもとづいた自己主張をしないで、調和ということを目標に、感謝と報恩の毎日の生活を送ることだ。なかには自分は調和をはかりたいのだが、妻が、友人がなかなかいうことを聞かないという人もあり、別れたほうが良いと思う人もあるだろう。しかし本来は、片方がゆずる心を持って態度を変えれば、相手も変わってくるものだ。意志疎通がないというのも、何か原因があるからで、不調和な根を探し出して、良く反省することが大事だろう。しかし、それでも調和できない人々もあろう。相手の暴力や毒舌が、休まず攻撃してくることもあるだろう。だが私達は、中道から逸脱した相手の姿を感じたら、争ってはならない。争わずに、「この哀れな者に、どうぞ神よ、安らぎをお与え下さい。」と心から願うだけの余裕が欲しい。外部からの辱かしめによく耐えて歪みを造らぬことだ。正進の目的は、人間関係の調和にあるのだ。

人間関係とは、夫婦、親子、兄弟、友人、隣人、そして個人と社会の関係であり、それは、まず自分の足もとから始まって、全体にまで発展してゆく調和のリズムであり、波動である。夫婦関係は、互いに足りないものを補い合い、よき子孫を育て上げてゆくものであり、親子の関係は、過去世の縁によって生じたものなので、親は子をいつくしみ、子は親を敬うのは当然なことである。兄弟は、互いに向上し合う切磋琢磨する間柄であり、友人は社会生活のよき協力者といえよう。こうした人間関係の調和に一貫して貫く柱は何かというと、それは他を生かし、助け合う「愛」の心である。愛こそ、調和の姿であり、この地上の光なのだ。この地上は、男女の両性から成り立っている。一方が増えても困るし、減っても困る。男だけでも女だけでも人間社会は成り立たない。現象界は、天地に分かれてはじめて空間が生まれ立体となり、生命の生きる場がえられる。地球は南極、北極に分かれ地球の自転、公転を正しく回転させ、地上の生命を育てている。調和、中道、愛、慈悲、という言葉の意味を現実的に、実際的によく考えて欲しいのである。そして、こうした言葉が現実的に生きてくるのは、常に

複数という関係の中においてである。これらの言葉は単独では決して成り立っていないことを考えてみてほしい。正しく道に精進するとは、私達が複数という社会の中で、他を生かし、助け合ってゆくことによって、はじめてその意義が生まれ、本来の目的に適ってくるわけなのである。人の道は、慈悲の心と、愛の行為である。私達は、両親の愛、兄弟の協力、隣人、友人の助け合いの中で生活している。両親を敬い、兄弟仲良く、隣り近所を大切にすることは、感謝のあらわれである。感謝報恩のない人は亡びる。私達は、魂を磨くために生まれてきたのだから、こうした協力者に感謝しながら、助け合っていかなければならない。大自然は、調和している。心は、いつもそれに合わせ、生かされている恵みに、報恩を持って答えよう。人を悪く言う前に、自分を見よう。不平、不満は、神様の慈悲と無限の恵みを忘れた心である。正進の目的は人間関係の調和にある。正命の目的が自分を正すものだから、その次にくるものは人々との調和なのである。人間関係とは夫婦、親子、兄弟、友人、隣人そうして個人と社会の関係であるのだ。

正念

「正念」(正しく念ずること)

念とは、思い願う、エネルギーのことである。正しく念ずるとは、現代宗教の多くは、ただ祈ることのみが、念ずることだと思っている傾向がある。経文というものは、拝むための道具ではない。経文の中に書いてある意味に、私達の眼は向けられなければならない。特に仏教は、難しい哲学化した経文を上げることが、一つの勤行(ごんぎょう)と化している。これは大きな間違いである。その中の意味にこそ意義のあることをなぜ悟らぬのであろうか。ありがたいお経だと思ったら、その経文の文字の意味を実践するところに意義のあることを悟らなくてはならない。亡くなった人々に、お経を上げることによって功德があると信じていることは、大きな間違いなのである。なぜなら、もしこの世を去った人々の霊が、その経文すら分からないのになぜ功德があるか、ということを考えてみることである。自分のわからない言葉で相手から語られて、その理解が行きとどくであろうか。人間は現世の生活状態、心で思っている状態を持ち続けながらこの世を去っていくものである。あの世にも慣性の法則があるのだ。ここでいうそれは現代の意識を持ったまま、次元の異なった世界に循環して行く死者を悟らせるには、時間がかかるということである。人間として正しい生活をした己自身を知っている霊以外は、地獄にいることを私達ははっきりと知ることにも可能だからである。

それだけに私達は、正しい心の在り方を悟り、神仏に祈ることも、ただ自己保存の祈りではなく、感謝の念を持ちその心で実践する中に、より以上の力を神仏から得られるのである。私達が歩んできた過去を消すことができないように、私達の想念は、すべて記録し保存されることを忘れてはならない。しかし、不調和な念も、反省することによって、私達の心は進化するのであるから、反省のない人々は哀れである。反省は神仏が人類に対するために与えた慈悲なのである。また、神社仏閣に参詣することはその人の自由であるが、神仏はその人に対する幸、不幸の責任をもたないということを知らなくてはならない。正しい心の念と行為が、幸、不幸を造り出すのである。正しい念により、その行為が神理に適っているならば、私達に協力して下さる指導霊や守護霊達は、必ず神の光を与えてくれる。またこの地球そのものも神体の一部であり、大神殿であるから、正しい念が必ず通ずる。神社仏閣は、将来人々の心の修行所、神理を学ぶ場所と変わり、また多くの人々の娯楽の場と変わって行くであろう。

現代の神社仏閣の中には、霊域の高い場所もあって、実在界の諸天善神が、常に連絡場所として一念が現象化される場合もあるが、そのような神殿は極めて少ない。したがって神社仏閣はどこでも霊域が高い所だと信ずることは危険であり、かえって不幸を呼び込むこともあり得ることを悟らなくてはいけない。正しい念を持っている人々は、必ず神仏の光によって保護され、他のよからぬ不調和な霊に支配されることはない。その反面、不自然な新興宗教や不調和な仕事に専念している人々に、果たして心の安らぎがあるであろうか。自己の心の中に小さな枠をはめて、常に格闘を続けているため、不幸になっている人々は少なくないのである。人間は生き神様になどなれるものではない。神仏の心と調和することは、自分自身の正しい念と行為以外にはないのである。神は己の心にあり、としらねばならない。念はエネルギーであり、そのエネルギーは、必ず自分自身に返ってくるので、正しい目的ならばいいが、そうでないと大変なことになる。祈りや念によって大石を空中に持ち上げたり、大木を倒したり、風を呼び雨を降らせるといった術が行われていたようだが、こうしたことは本来、邪道である。しかし、人間の中にたくわえられたエネルギーは、大きな山を動かすことも可能だし、それは神が大宇宙を

創造されたように、人間もまたこうしたことが出来るように仕組まれている。それ程人間は偉大なのだが、反面、邪の道に念力を使うと地獄に墮ちるしかない。私達は常に、念を正しく使うことが大切であり、そうした時に、守護、指導霊が力を貸し、より偉大な、平和な仕事が成就できるようになるのである。

自己の欲望にもとづいた念の作用が働くため、社会は争いと矛盾に満ちたものになってしまうのである。念のあり方はこうした意味で、足ることを知った、調和にもとづいたものでなければならない。

正念の反対は邪念である。邪念とは自分の都合だけしか考えない自己本位の想念であり、欲望の想念である。念の方向が自分本位であればあるほど苦悩が多く、心に業（カルマ）をつくる。人々の心に業（カルマ）が多く生まれると、真実と二セものの区別がわからなくなり、地上界は末法となってゆく。念はエネルギーであり、心の中の創造行為を形に具象化して行くものである。一度発した念波は、一秒間に地球を七回り半もまわる光以上の速さで自分に返ってきます。善念は善念として返り、悪念は悪念として、もとの発信者に返ってくるのである。ですから、常に安心した境涯を毎日の生活の上に望むならば、自分さえよければ外はどうでもという自己保存の念を改め、他を生かす、助け合いの、愛の想念、中道の法を、まず、心の中に確立させることです。思うこと、念ずることは、万生万物の創造の根源であり、仕事をなし得るエネルギーであるから、これを正すことがなにをさておいても重要目的であるといえる。人の幸、不幸の分かれ目は、心の中の思うこと、念ずることによって決定されてゆく。思うことは現われる、念ずるとその通りになるというのが、私は金が欲しいと日頃から思い念じているが、さっぱり金が貯まらない、これはどういうわけか、というのである。

お金が欲しい、金を貯めたいという欲望は大抵の人がそれを思い念じている。念は人によって強弱がある。みんなが同じ物を念じると、その念はぶつかり合い、交錯してゆく。そうしてやがて交錯した念は、強い念に弱い念が吸収され、強く念じた人に集まる。つまり、それを望む念の強いところに金は集まってくることになる。金が集まらないという前に、人も欲しがらるお金（お金は有限）を集めれば集めただけ、その反作用もあるということを考えて欲しい。いつときの悦楽を求めることと、長期間にわたる苦悩を考えるならば、もともと一定限度しかない物を奪い合う愚かさに気付くと思う。それは本人の今生での意志とは関係なく働く。今生の目的が経済的問題よりもむしろ人を救うことにあるとすれば、その目的を外れて意志をいくら強くいだいたとしても、お金は集まらないことになる。こうした意味から念の作用は、その人の今生での目的と合致した時に、もっともよくその効果を現わし、最大に発揮される。

この世の中は、人の念によってできている。あれが欲しい、こうもしたいという心が、いろいろなものをつくりだしている。世の中には、人々に役立つものもあれば、滅ぼすものもある。正しい念は、人に役立つものである。それには、神様に心を合わせ、祈る心を忘れず、欲望を募らせてはならない。念というものは、こうしよう、ああしよう、こうありたい、という目的意識であり、意志の決定であり、行為であるわけだ。念はエネルギーであり、心の中の創造行為を形に具象化して行くものである。いつも中道の心を忘れず、正しく生きることである。

正定

「正定」（正しく定に入ること）とは

正定の在り方は、日常生活における正しい想念で生活が行えることを意味する。今日一日を振り返り、八正道の正しさに反した想念と行為がなかったかどうか。あったとしたら、どこになぜ...というように、静かに反省し、思念と行為について検討することである。そして正道に反したことは、神に詫び、明日からは二度と再び同じ過失を繰り返さないよう努力することである。つまり、**正定の第一歩は**、禅定という反省的瞑想の対話となり、菩薩の心である慈悲と愛の行為が出来るようになることが第一の目的。**第二の目的は**、禅定の心が、そのまま日常生活に生かされてゆくことである。禅定は、日常生活をより豊かに、自己の心がより大きく、広く、神理に適った生活が出来るようになるためのものだから、禅定のための禅定、つまり反省のための反省では本当の反省にはならないのである。正しい神理の実践生活の中で、定に入ることにより、私達は体が宇宙大に拡大され

(宇宙即我・うちゅうそくわれ)、神仏の意識と調和され、心の安らぎを味わうことができるのである。正法は一国家のみに通ずるものではなく、全宇宙の神理であることを知らなくてはならない。仏教も、キリスト教も、ゴータマの時代、イエスの時代に帰ることが先決である。

神理は時代に拘束されるものではない。物質文明は生活の智恵であり、より高い次元に心を持つことが万物の霊長であることを悟らなくてはならない。今から二千五百年余り前に、正法神理に添う生活は、中道という物差しで、原因を取り除く反省の行為を怠らぬことである、と。また、二千年前にもイエス・キリストが愛を説き、愛に生きるには、まずその罪を懺悔することであると言っている。反省も懺悔も、ともに同じである。仏教では反省を止観とっており、禅定の基礎も中道に照らした反省にあった。中道に照らした反省とその行為が生まれてくれば、間違っただけの原因が取り除かれたことになったのだから、神の光がふりそそがれ、現象生活は自然と整ってくるのである。本来与えられていた慈悲の光を、自らの力によって心のスモッグを取り去り、再び受けるのである。ゴータマ・シッタルダーは、六年の苦業の末、三十六年間の過去を反省した。一週間の反省の後、一切の苦しみというものは自分自身が作り出し、苦しみから解放されるには、苦みの原因を作らないようにすればよいことを発見していく。そしてその後、四十五年間この神理を説き、それは後に中国に渡り、日本に伝わった。現代は偶像を拝む他力にかわり、信仰は形骸と化している。葬式仏教、観光仏教、学問仏教が今日の仏教の姿となってしまった。しかし、人間の心というものは、決してそうした形骸化されたものではない。一秒一秒の生活、心の在り方が信仰であり、勇気を持って修正する己自身に、全てが託されている。もっとも反省、反省と反省ばかりに終ると、自らの心を狭く小さくしてしまうから注意すべきである。

反省した時、間違いを犯したことを発見したならば、その間違いはどのようにして起こったのかといった、自分の心の中の原因を追及して取り除くことが大事なのだ。

私達は、自己反省を通して、物の道理が理解され、同じ間違いの愚かさから解放されてゆく。反省こそ、神が人間に与えた慈悲であり愛の能力と言えよう。動物にも本能、感情はあるが、反省という理性の能力、知性の働きは、人間において他にはないのである。

短気の性格を作った年代は、大体三才頃から十才位までに形作られる。それは子供の頃のチャホヤ育てられた我儘の生活に原因があったということである。もちろん人によって、その短気の性格が二十代、三十代につくられる場合もある。正しい反省は、心を高め、神様に通じる。今日一日の生活を振り返り、友達や両親、兄弟達を困らせたりはしなかったか。もし、困らせたり、自分だけ楽をしていたとすれば、そうした心はどうして生じてきたか。反省は、こうした心の動き、行ないについて、右にも、左にも片寄らない慈悲と愛の、神の物差しを持って自分をながめることなのである。

「正定」の第一歩は禅定という反省的瞑想から始まり、第二は反省後の心の統一、第三は守護・指導霊との交流、第四は守護・指導霊との対話...第九は釈迦・イエス・モーゼの瞑想である。禅宗の目的は心を空(カラ)にして、その空の中から己を見い出そうとするらしい。一般的には無念無想になることが、仏を見性することになるらしい。ところが、釈迦の教えた瞑想はそうではない。瞑想の目的は反省にあって、一日二十四時間の、正しい生活をめざすものであった。瞑想のための瞑想ではない。瞑想的反省は、こうした心のゆがみを修正し、本来の丸い豊かな心にするのである。反省は、悪かったと気付くことだけが反省ではない。「二度ともうしません」という誓いと、これからどうすればよいか、その時どうすればよかったのか、という事がはっきりと決心されていないと反省したとは言えないのである。

反省する場合に大事なことは、まず自分の善い所、長所をしっかりと知り、自分にはこういう良い所があることを確認した上で、悪い所欠点はないか、ということを実省することである。そのような反省をすると、欠点を長所に置き換えることがラクになる。それを「反省」というと、悪い欠点だけを探そうとするから、反省することが苦しくなり、自分がいやになるのである。そして、悪い所だけ、不満足な点だけを見つけて探し出しているから人生が暗くなるのである。

Home



禅定（瞑想と反省）の実際

反省の二通りの仕方

○高橋信次師は反省の仕方には二通りあると言った。

一、年令順、一才から五才、五才から十才と五年毎に区切って反省する。

二、年令に関係なく、一番心にかかっている大きな問題から、金の問題、女性の問題、人間関係と、問題別に反省する。また、禅定をする時に、坐っている自分の背の高さよりも大きめの神の光の輪を描きなさい、と言った。

誕生から十歳

誕生から十歳までの間の心の曇りを取り除く。次のように自から問いかけて反省してゆく。

○両親に対して親不孝をしなかったか。

○片親で育てられての心の歪みは、何が原因であったか。

○淋しさや悲しさの原因は、すべて自己保存で、そこに感謝の心があったらどうか。生まれた環境を選んだのは、自分自身が魂の修行所として望んで出てきたのである。その点を、私達は忘れてはいないか。兄弟、姉妹の関係も、実在界においてお互いの縁によって結ばれたのである。

○兄弟喧嘩をしなかったか。憎しみや妬みやその他の諸問題で心の歪みを作らなかったらどうか。その原因は？...

○幼な心のまま、自分の欲望を満たすため、両親を困らせたことはなかったか。

○友達の持っているものを欲しがらなかったか。

○両親や兄弟姉妹、友人に嘘をつかなかったか。

二号さんや三号さんの子供として生まれた人も、その場所で自分自身を修行しようとして生まれてきたのだ。不平不満や心の歪みはつくるべきではない。そんな中であっても、人生に疑問を持って、神の子としての自覚に芽生え、豊かな心をつくってこよう、人々を救ってこようと、望んで生まれてきたということを忘れてはならないだろう。

○世間体を考えて、狭い心は作らなかったか。

○両親に感謝の心を忘れてはいなかったか。

モーゼは奴隷の子であった。イエスも貧乏人の子供であった。しかし、自ら悟って多くの人々に慈愛の道を説いて救ったではないか。

○下層階級に生まれたことを卑下しなかったか。それは、人より良く見せようとする自己保存の心なのだ。心まで貧しくなってしまうということを知るべきだ。貧乏人であることや下層階級を理由に、人間としてなすべきことを忘れ、世間の人々のせいにして努力しない人々は、心から貧しい人々である。神の子は、金や地位には関係がないのだ。たとえ家柄の良い家に生まれてきたとしても、人は生まれてきた時は裸であり、家柄を背負ってきたのではない。底辺の家庭に生まれても、裸一貫に変わりはない。家柄も、長い歴史の過程において、努力したもの、権力のあった者、武力、腕力、経済力、社会人類に貢献したものなどによって、人間の知恵が作り出したものである。しかし、死ぬ時は、何も持ち還ることができないのである。いかに心から社会人類のために尽くし、自らが正道に生きたかということが、その人間の価値を現わすのである。お金や地位には、全く関係がな

いということだ。そうしたものに惑わされているということは、心の貧しい欲望の深い者達なのだ。人生の偉大なる目的を思い出さなくてはならない。こうして心と行ないを反省し、間違ったことを素直に認め、心から神に詫び、二度と同じ誤ちを犯さない時に、私達の心の中の曇りは取り除かれ、あの太陽の光がすべてに平等に降りそそぐように、神の慈愛の光は、私達の心の中に光となって満たされるのである。

十歳から二十歳までの反省

この年令は、ようやく自我心が芽生え、自己保存、自我我欲が次第に強くなり、ひとりよがりの判断が多くなってくる頃である。

○両親に対して、育ててくれた感謝の心があったろうか。

○報恩の行為を惜しまなかったろうか。

○恨む心がなかったろうか。軽蔑の心がなかったろうか。

○嘘をついて、病気をして、不勉強で、心配をかけなかったか。

○親の言葉や注意に、反発しなかったらろうか。なぜ反発をしたのか。

○両親の行為を無視したことがなかったらろうか。仕事の手伝いをしたたらろうか。

○兄弟、姉妹で喧嘩はしなかったらろうか。

○恨みや、そしりや、そねみを持たなかったらろうか。

○兄弟、姉妹に迷惑をかけなかったらろうか。その所有物を奪ったり、ごまかしたりしなかったか。

○自分にしてくれた行為に、感謝の心を持ったろうか。

○友人に対して、軽蔑したり、恨んだり、競争心を持ったり、そしったり、悪い行為に誘ったり、秘密や特技を盗んだことはなかったか。

○友人に誘われて悪い行為をしなかったか。

○偽りの恋をしなかったか。

○真実の心で友人と接したか。自己保存のために利用しなかったか。

○友人の物を借りて、心から感謝したろうか。

○友人からいろいろなことを教わって感謝したろうか。

○心と行ないの在り方を、常にどこにおいたろうか。社会人類の幸福のため、少しでも協力をしたであろうか。

○乞食を見て軽蔑をしなかったろうか。職業の上下に軽蔑の心を持たなかったろうか。

○友人の悪口や告げ口をしなかったろうか。

○自己顕示欲が強くなかったろうか。

○他人の心や身に、傷を負わせたことがなかったろうか。

○増上慢な言動や行為をした人々に、無慈悲な行動をしなかったか。

○異性に対して、本能や感情のままに走らなかったか。

○友人を不幸にさせたことはなかったろうか。

○自分の感情で、友人に迷惑をかけなかっただろうか。

○世話になった人々に、感謝の心を持ったろうか。

○常に不平不満の心を持たなかったか。

○自分さえ良ければ良いと考えたことがなかったであろうか。

○肉親や他人を恨んだことがなかったろうか。

○人のために心から尽くしたことがあるだろうか。電車や自動車の中で席を譲ったことがあるだろうか。

○道路や他の場所を自ら汚したことがないか。

○先生に対して感謝の心があっただろうか。一方的な批評をしなかったろうか。尊敬の心があったであろうか。

○学校の備品や建物を故意に壊したり、汚損したことがないだろうか。

○自分達の考えを勝手に押しつけなかったか。

○先生に迷惑になるような心や行為はなかったろうか。先生に対して、その授業を怠るようなことはしなかったろうか。

○勤め先について、不満を持たなかったか。感謝の心を持ったろうか。仕事を途中で放棄したことはなかったか。

○特定の集団組織の中で、思想的な闘争をしなかったか。

○目上の人々を恨まなかったか。怒らなかったか。妬まなかったか。

○自分の学歴や地位の上にあぐらをかいたり、他人をそしったりした事はなかったか。

○心の不満を物にぶっつけたことはなかったらうか。

二十歳から三十歳

二十歳から三十歳のむずかしい時期もいろいろと反省する。このように、過ぎ去った人生を振り返り、悪い欠点を修正して行くことによって、心の浄化ははかれるのである。

三十歳から四十歳

三十歳から四十歳の反省は、家庭問題、対外的なこと、その範囲は大変に広がる。家庭にあっては、夫婦、子供、両親、兄弟などの問題が主体的に起こり、外においては、友人、上司、仕事の関係で、欲望も出、**もっとも心の歪みを作り出しやすい年代である**。商売上の問題としては、厳しい修行の場であるから、不調和な心と行ないが非常に多くなって来る。目上の者に対してはへつらい、部下に対しては増上慢、見栄や外聞に心が奪われ、人生において要領良くなる時期である。蔭では地位に対する欲望、友人との競争意識、他人をあなどるなど、その想念の曇りは心を覆い、苦しみの種を蒔く時である。妻に対しても、仕事にかこつけて嘘をつき、遊蕩にふけるのもこの時期である。嘘は嘘を生み、精神的、肉体的に、いろいろな現象が出てくる時だ。妻はまた夫に対する感謝の心を忘れ、不満の日々を過ごす。夫婦の縁は、すべて仕組まれた環境なのだ。縁あればこそ、広い世界で結びつきができたのである。夫婦の心からの調和は、家庭を明るくして神の慈愛に包まれ、子供達も素直に育って行くことによって計れる。親と子の対話、そして、意志の疎通を欠かなかったか。母として、父としての態度や行動に疑問の点はなかったか。近所、隣との交際で、悪口を言ったり、そしり合ったりしなかったか。人々のための奉仕の実践を怠ることはなかったか。心の中に作り出される、こうした不調和な問題を反省して行くに従って、誰の前でも心を裸に出来る人間になること、これが大切だといえよう。そして、「一日一生」と感じ、いつでも無常の風を見、しかし何の思い残すことなく執着を断つ。そうすれば、光明に満たされ、天上界に還ることが出来るのだ。反省は、盲目の人生航路において、犯した罪を除去するため、神が私達に与えた慈愛を受けるチャンスであるからだ。

瞑想・禅定

「瞑想」

第一段階は、反省。第二は、反省後の心の統一。第三は守護・指導霊との交流。第四は守護・指導霊との対話。こうした区別は、反省を重ね、心の曇りを払い、日常生活に反省の結果を行じることによって、理解されてくる。第八は如来の瞑想であり、座していながら、外界の動きが手にとるようにわかってくる。第九はゴータマ・ブッタ、イエス、モーゼの瞑想である。過去世の修行により、また今世で徳を積むことによって第六までは誰でも上げられる。しかし、それ以上はなかなかむずかしい。禅宗の座禅の目的は、心を空（カラ）にし、その空の中から己を見い出そうとするらしい。一般的には無念無想になることが、仏を見性することになるらしい。ところが、ゴータマ・ブッタが教えた瞑想はそうではない。毎日の想念と行為の在り方が、中道に適ったそれであったかどうかを確かめ、誤りがあれば神に詫び、智恵と勇気と努力で、二度とその過失を繰り返さない自分を修正して行くことにあった。したがって、瞑想の目的は反省にあって、一日二十四時間の、正しい生活をめざすものであった。

瞑想のための瞑想ではないのである。瞑想的反省はこうした心の歪みを修正し、本来の丸い心にするのである。無念無想は、危険極まりのない心の空白を意味し、いつ他界者が自分の意識の中に侵入してくるか分からない。瞑想中でも自分を失ってはならない。大我の自分は、どんな場合でも、生き通しの自分であり、瞑想が深くなれば、ますます大我（無我ともいう）の自分が躍動してくるものである。夜は昼間と違い、雑音が少ない。草木の活動も静まり、動物達も眠る。それだけに、夜の瞑想は深くなり、心が統一しやすい状態になる。昼間は、家事や仕事に気をとられるので、天使達の通信をキャッチしにくい。ゴータマ・ブッタの瞑想がほとんど夜、それも今の時刻で午前一時から三時の間に集中したのもそのためであった。ただし反省の瞑想をせずに、雑念を払う意識の空白状態や執念に心を奪われると、魔が入り易い。これは昼間よりも危険である。百鬼夜行というように、夜は魔も活動しやすいのである。

反省の瞑想をしておりながら、それを終えて夜眠れなくなるような場合は、反省の仕方にどこか間違いがあり、反省ではなくて、何かにとらわれているのである。こうした場合は、地獄霊が近くにいて、本人の意識に入りこもうといており、まことに危険である。こうした状態が毎夜続くと、ノイローゼになっていく。これは反省ではなく執着なので、こういう時は反省の瞑想はしばらく休まれた方がよい。正道にもとづいた反省をしている時は、守護・指導霊が近くにきており、本人を守っている。魔は絶対に近寄れないものだ。したがって瞑想を終えればすぐ就寝できる。こうして反省の瞑想を続けて行くうちに、守護・指導霊との交流が始まり、対話が可能になってくる。つまり、心の曇りが晴れてきて、いつ、どこにいても、守護・指導霊の導きが可能になってくる。

「瞑想」「禅定」

- 第一段階 反省
- 第二段階 反省後の心の統一
- 第三段階 守護・指導霊との交流
- 第四段階 守護・指導霊との対話
- ・
- ・
- ・
- 第八段階 如来の瞑想
- 第九段階 ゴータマ、イエス、モーゼの瞑想

人間を含めた大宇宙は、常に相互に関係し合って動いている。太陽系一つとっても、太陽を中心に九つの惑星が相互に関係し、太陽系という体を形作っている。地上の生活にしても動・植・鉱の相互関係がなければ成り立たない。その相互関係は何に起因するのだろうか。それは大自然の意識（心）なのである。秩序整然とした意識の働きがあればこそ、大宇宙も、地上の生活環境も調和されている。地球という球体が出来上がったのは、今から約三十三億年前（高橋信次）のことである。その頃は、火の玉であり、太陽のように燃えさかっていた。生物が住めるようになったのは今から約六億年前のことである。その軌道は昔も今も変わらない。偶然にしては余りに出来すぎていると思うのが当然である。大宇宙には意識（心）が存在する。客観的にこれを説明すると、太陽の熱・光に強弱がない、空気に増減がない、一日には昼と夜があって、決して一方に片寄らない。太陽の熱・光が強くなったり、弱くなったりしたらどうなるだろう。地上の生命は生きていけない。空気が増えたり減ったりしても同じことが言える。私達の生活態度も、食べすぎれば腹をこわし、惰眠をむさばれば体力に抵抗力を失う。もっと体に影響を与えるものは心である。心配事があれば食欲は減退し、睡眠はさまたげられる。怒鳴ったり、腹を立てれば血行は悪くなる。人間の体も無理はいけないし、怠惰もいけない。人間は大宇宙、大自然界の中で生活している一構成員にすぎない。このように、大自然の心は、私達に中道という調和ある秩序を教えているということになる。大自然は調和という中道の心を教えているのである。

中道

自然界にみる中道のすがた

強塩基NaOH（か性ソーダー） 塩NaCl 強酸HCl（塩酸）

H₂（水素） H₂O（水） O₂（酸素）

無酸性（胃） 中和 胃酸過多

ある（自覚） 自覚なし

線、線、X線、紫外線 七色、虹 赤外線、超短波、短波、ラジオ線

100 風呂 適温 0 風呂

（冬）塩基性土壌 中和 酸性土壌（夏）

高気圧 春秋一気圧 低気圧

社会主義（唯物論） 慈悲と愛 資本主義（物質経済が基本）

愛情過多（父母） 中道 愛情過少（父母）

自己弁護 中道 自己保存

自己主張 中道 自己嫌悪

自信過剰 自信・八正道 自信喪失

増長慢 中道 自己損失

開放性ノイローゼ 中道 自閉性ノイローゼ

躁 中道 鬱

体温 40度 36度

心と肉体をすこやかに、健全に保つためには、中道という神意にそった生活をする必要がある。

「心の法則」とことば

心身一如

色心不二

心身一如（しんしんいちによ）という意味は、心と肉体は一体となって調和している。また、色心不二（しきしんふじ・しきしんふに）とは、色とは形あるもの、肉眼に見えるものである。人間は形ある肉体と眼に見えない心を持って生活している。不二とは、二つとない、つまり一体になってという意味で、真意は肉体と心の調和を意味し、どちらにも片寄らない状態をいっている。肉体を酷使すれば病気になる。反対に怠けていると肉体も精神も退化し、すべてに不調和をきたす。片寄らない中道の精神と肉体をつくることが理想である。この言葉は天台智ぎ、という人が使われた。心身一如も色心不二もともに同じことを言っている。「健全なる精神は健康な肉体に宿る」まったくその通りである。物と心も、ともに大宇宙から出発し、この心を起点にして、万生万物が出来上がっているの、人間の場合、心と肉体とを、すこやかに健全に保つためには、中道という神の意にそった生活が必要なのである。

有から縁に
よって有が生ずる

この現象界（この世）は無から有を生ぜしめることは不可能なことである。有から縁によって有が生ずることは、崩すことの出来ない現象であり法則である。エネルギー不滅の法則も、質量不変の法則も、まったく有から有が生じ、その有が形を変えて現象化するに過ぎないということを示していると云える。私達の心と行ないについても、同じことが云える。苦しみ、悲しみ、喜びの原因はすべて、五官と心がつくり出したもので、無から有が生じるものではないのである。

一念三千

人間の想念、一口に心と言われる各人の意識層（精神）は、一念三千とって環境の変化、その時々で、めまぐるしく変わる。人の心というものは、羽根をつけた鳥のように、自由自在に悪の想いには悪が、善の想いには善が、その心の針の方向によって、人の心は三千世界、つまり、自由自在、そうして無限の大きさと広さを持っているものである。人の心は本来、自由である。その広がり、宇宙大にまでおよんでいる。普通は、その広がりを体験として認識していないだけの話である。しかし、私達が夜空の輝く星々を見て、大宇宙は広いなあーと感ずる心は、宇宙大に広がったその心を客観的に感じているのである。誰しもそうした心を内在しているのだ。そうした広い心を持ちながら、その広い心が生活の上に現われてこないのである。これは何に原因があるのだろうか。肉体という、五官（眼・耳・鼻・舌・身）に心が奪われているからだ。そのために、人の心は、非常に小さく、あるいはゆがんでしまい、本来、広く、丸い、豊かな心が生かされないままになっているのだ。

「仏教に一念三千という言葉がある。一念三千とは、人の心はどこへでも通ずる、そのことを言っているのだ。悪を思えば悪、善を思えば善に通ずるのである。心の針は、この世だけでなくあの世の世界に、そのままストレートに通じてしまう。そのため、五官に左右され、自己保存の心を動かし、人を憎み、怒り、そねみ、妬んだりすると、そうした想念が集まっている地獄界に、意識が通じ、やがて自分自身がそうした想念の渦にはまり、さまざまな障害となって生活上の問題を引き起こしてくる。反対に、広い心になって、愛と慈悲の生活、人を生かす正道を實踐しておれば、天上界に意識が通じ、守護・指導霊の光を受けることになる。人間の心は、丸く大きく、豊かなものだ。広い心は、光の天使の導きを受ける。いつどこに行っても通信が送られ、その人を善導してくれる。肉体人間は、明日の生命すらわからない。それだけに迷うが、しかしそうした迷いの中にあっても、正道を守り神仏を信じ、広い心を失わなければ、必ずその人の前途に希望を与えてくれる。五官に動かされた狭い心は、広く大きく自由な心を自ら閉ざすものである。一念三千の言葉は、中国から来たもので、天台智ぎ、という人が使ったものである。一念とは、想念の針である。こうしたい、ああしたい、あれが欲しい、これが得たい、という想念である。人間は二つのことを同時に思うことはできない。一つしかできない。その一つの悪を思えば、地獄に通じ、善を思えば天上界に通じてしまう。したがって、悪は思ってもいけないのだ。三千とは、三という数は割り切れない数である。二とか、四とか、六なら割れるが、三は割れない。千という表現は、大きいことを意味し、そこで、三千とは無限大という意味になる。一念三千は無限大の方向に突き進む、ということだ。悪を思えば、悪の極に、善を思えば善の極に通じる。一念三千を角度を変えて解釈すると、人の心の無限性、つまり、自由を言っている。しかし、その自由な心を、悪につなげればやがて自分自身の首を縛る事になってしまう。」

高橋信次

人を呪えば穴二つ

人間の想い、念力というものは、全世界に波紋となってひろがり、それに類する人々を傷つけると同時に、その念波はやがて自分に返ってくる。地球が丸いように、念波も円を描きながら発信者に返ってくるのである。これは法則である。自分に返ってきた時は、人々の苦しみの想いを受けているので、一の念波は数倍の念波に変わっている。このため、穴二つとは身が二つあっても、なお足りないということである。呪いの念波はまことに恐ろしいもの。怒りやそねみも同様である。

宇宙即我

悟りの段階が進むと、観自在心という自由な心を得、生死を超えた大悟を獲得するようになる。この時、人は真我の自分を発見するのである。真我こそ實在の神の子であり、神である自分である。宇宙即我、これこそ真我の自分である。わかりやすく言うと、神の子の自覚、その境地を宇宙即我と言う。高橋信次師が初めて使われた言葉である。そして、園頭広周師は現在、我国でただ一人の体験者である。

宗教は、「人間の生き方」、「人生のあり方」を説くと同時に、「心の法則」や「宇宙の真理（神理）」を説いたものである。一方、道徳は、神の存在を認めず真理を説いたもの。

宗教は、神の存在を認めて、真理は神によって作られたと説くのである。

心の法則（宗教）と物質の法則（科学）は一致する。



「道徳と宗教の違い」

道徳は、本来宗教に源を発しており、その宗教の目的を達成するために、当然とらなければならない人間としての生き方、それを道徳と言うのであり、道徳は宗教の目的を達するための手段である。宗教とは、人間が神の子であることを教え、自覚させるものである。

「人格の完成」

人間が到達すべき「神との一体感」「今ここに神の子が生きている」という生命の自覚を得ることをいう。その方法が、釈尊の説かれた「禅定」キリストがなされた「瞑想、祈り」である。この神の子の自覚、その境地を「宇宙即我」という。

政治的には法律にふれた人を悪人というが、宗教は心のあり方を問題にし、自分は法律にふれるような悪いことを何もしていないといっても、心の中で怒り、妬み、悲しみ、憎しみ、不平不満の心を持てば、それは宗教的には悪というのである。だから、幸福になろうと思ったら、見せかけの表面的な明るさではなく、心の底から明るい心にならなければならない。



人生の目的は魂（霊）を成長させることにある。すべての宗教は調和しなさい、感謝しなさいと「調和」と「感謝」を教義にするが、調和と感謝が人生の目的ではない。人生の目的は神と一体である、神の子であるという自覚を、頭で知ることではなく、身体全体で、魂のどん底で自覚すること、つまり大宇宙と一体となる「宇宙即我」に到達することなのである。この宇宙即我に到達して行くには、その人の心の段階があるといつてよい。この宇宙即我を体験する唯一の方法が禅定である。調和し感謝した時の安らかな心の状態で禅定しないと本当の禅定にならず、宇宙即我への道を進んで行けないからである。調和と感謝はただその入口に立ったということになるわけである。人生の目的は宇宙即我への道を歩み、到達することである。神の継承者である神の子の私達は、本来、宇宙と同じ大きさの心を持っているのだが、それを小さく自己限定してしまうところに、苦しみ悩みが始まるのである。

同じく、人生の目的は何か。それは人生の目的を知ることにある。決して人間は、金銭欲、名誉欲、地位欲、支配欲、ましてや、食欲、性欲などを満たすために、生まれてきたのではない。肉体の欲望は満たされても、心の渇きは癒されない。心の渇きを癒すものこそ人生の目的とするものである。人生の目的を知るために人は生きなければならないのです。 園頭広周師

よりよい人生を送るには「心と肉体と経済の調和が大事です」 高橋信次師

高橋師は、「健全な精神と健康な身体とほどほどの財力」が、よりよい人生を送るためには大事な要件だ、と言われたのである。

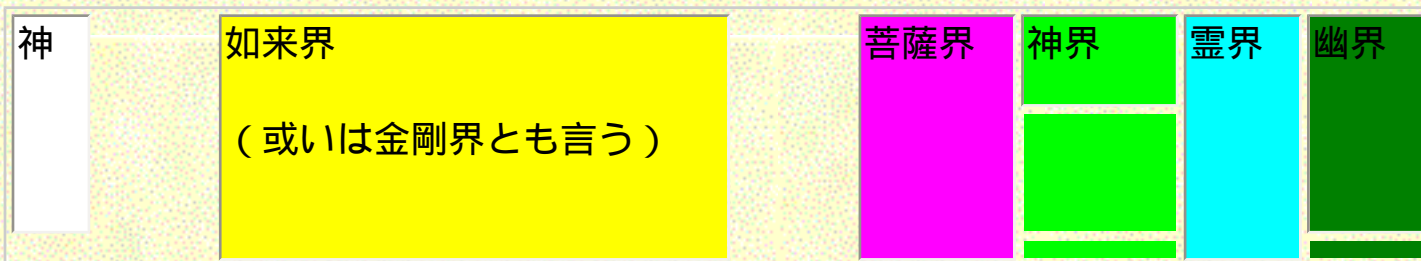
Home

人間（霊）の質（霊格・人間性）の段階

神の前において、人間は皆平等であるが、人間（霊）の段階は厳然としてある。「あの人は立派な人格者だ」とか、「あの人は犬、畜生にも劣る」と言うように。

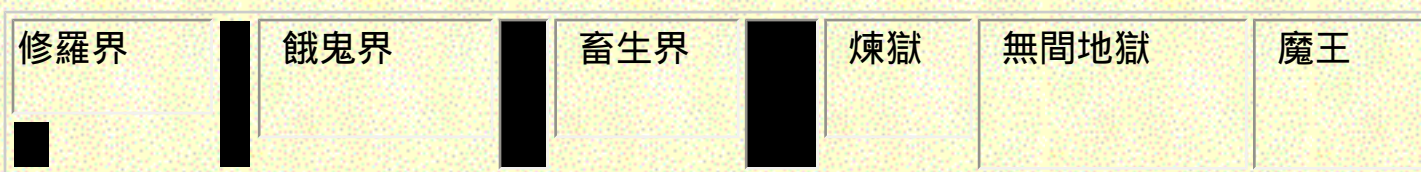
天上界（明るい世界）

上位界より神、如来界、菩薩界、神界、霊界、幽界。天上界の中では幽界が最下位である。



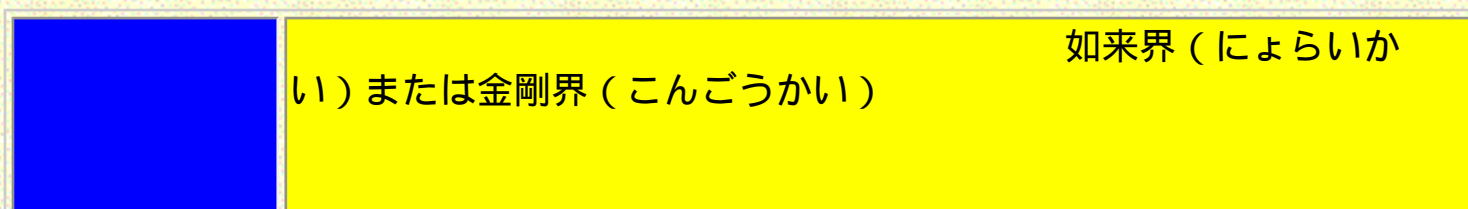
地獄界（暗い世界）

修羅界から始まって、魔王が最下位である。



この太陽系には三百六十億の靈魂があり、「本体と分身」の法則により、この地球には計算上、六十億人の人間が肉体を持つことが出来る。別の講演では最大九十億人。しかし、地獄界に安住したり、人間のご都合による墮胎や、人間の想念行為の結果による天災（本当は人災なのだが）等によって、現代は六十億程度である。

天上界の各論



宇宙は我なり（宇宙即我）と悟り、一切の執着から離れ、人類は皆兄弟だという境地に達している者達で、神と表裏一体となり、如来、上々段階光の大指導靈達の世界。イエス、モーゼ、釈迦（ゴータマ・ブッタ）等、あの世とこの世を通して**四百二十五人**（一九七二年現在）がおられ、地球上を支配している。太陽系には、ほとんどアガシャー系グループの者達が多い。如来界には宇宙体の諸現象を即座に見ることの出来る展望台があり、それはどんな小さな問題でも見落とすことがない精妙なものである。たとえ、如来であっても実在界（あの世）と現象界（この世）の輪廻は繰り返され、この現象界で地上界の人々の失われた心を取り戻し、神理の種を蒔いて還るのだ。イエス様の住まいは、イスラエルの上空に、ブッタの天上界の住まいはインドの上空にあると考えてよいだろう。

菩薩界（ぼさつかい）

心は慈悲と愛に満ち満ちて、地上界、天上界の衆生を救っている。調和された世界で、心を悟っている者達の世界。ペテロ、アンデレ、パウロ、ミロク、マンチュリア、カッチナー、日蓮、親鸞（菩薩界でも下位の段階）等、この世とあの世を通して約二万人（一九七二年現在）の光の大指導霊や菩薩。

神界（しんかい）

人から損害を与えられても、人を非難しない。人を非難する前に、まずその原因を振り返り、二度と再び、その原因をつくらないように努力する世界。皆人類は兄弟だということを知り、魂の転生輪廻の事実を悟っている。自我心がなく、専門的な分野で研究がなされている学者や博士の多い世界で、医学、天文、科学、哲学、文学など一切のエキスパートが百般の研究を続けている世界。八正道の尺度がどの界に当たっているかと言うと「神界」にある。この世とあの世を通して、一億数千万人の世界。日本の宗教界では法然や道元は神界の人であった。

霊界（れいかい）

この世界はいわば持ちつ持たれつで、人に与えたものは与えられる。与えたものが返ってこない、気持ちがスッキリしない「正しさ」が支配している。生前における常識の観念がここでは価値の尺度になっている。地球上の人類の三分の一が「霊界」以上、三分の一が幽界クラスの人達、三分の一が他の天体からはじめてこの地球上に魂の修業に出てくる人達である。特別の使命を持った光の天使は、幽界以上の三分の一の中の一割位です。その中には学者あり、経営者あり、あらゆる人達がいる。

霊界から神界の裏側には天狗界、仙人界（キンナラ・マゴラガ、インナパ）があり（ヨーギストラ、日本の修験者達が多い）、肉体行によって法力だけを学んでいて、相変わらず、厳しい肉体行をやっており、苦しみから解脱していない、自我の強い者達が多い。この住人は、この地上界で、厳しい山中修行を行った行者達が多く、他人に対しては慈悲が少ない者達の世界である。

幽界

この世界は自分という立場が正しさの尺度になっている。自分さえよければ、人はどうでもというエゴの世界であり、自己保存の立場が強調され、自己保存を損なうものは正しくない、つまり悪につながるという考え方である。現実の社会は、まさに幽界の正しさが支配しているようである。人間の魂の修業にとっては、この世の一年は、あの世の七十年にもなり、この世の修業が（善と悪のいりまじった）如何に大切かということになる。

Home

地獄界（暗い世界）の諸相（各論）

修羅界（しゅ
らかい）

栄達を望み、そのためには平気で人を陥れ、利用し、自分の利益のためには人がどんなに傷ついても平気である人、闘争に明け暮れている人、常に人を争わせて面白がっている人、闘争対立の心を持つ人、常に心の中に争いの心を持つ者の行く世界。信仰することによって争いを生み出す者達の行く世界。

餓鬼界
（がきかい）

金銭欲の強い人、この世に未練や執着を持つ人、足りることを知らず常に不足の思いを持った人、いくら食べても、いくら持っても満足することを知らない欲望のかたまりみたいな人が行く世界。

畜生界
(ちくしょうかい)

動物と同じような性格を持った人、ねちねちと執念深い人、見境なく性欲に狂う人、人をだます人、動物の本性まるだしの者達の行く世界。

煉獄(れんごく)

常に心の中に闘争と破壊の渦巻いている人、そしる人、ひどく悲しむ人、うらむ人、偽善者、エゴイスト狂思想者、狂宗教家。

無間地獄(むげんじごく)

集団で闘争を計画したもの、戦争の計画者、権力を持って大衆を間違った方向へ指導した者、間違った教えを説いた宗教家達の行く世界。ヒットラー、スターリン等。

魔王

三億六千数百年前、エルランティーンと共に飛来した七大天使の一人、ルシフェルは天上の世界に帰ることなく地獄の帝王(サタン)になった。



正法と言葉



園頭広周師と 高橋信次師の神理の言霊

正法の神理の言魂

神が、その偉大な意思と能力で天と地を創造したように、人間の想念には、ものを生み、創り出す能力があり、その意思と創造と行動の自由性が付与されているのです。

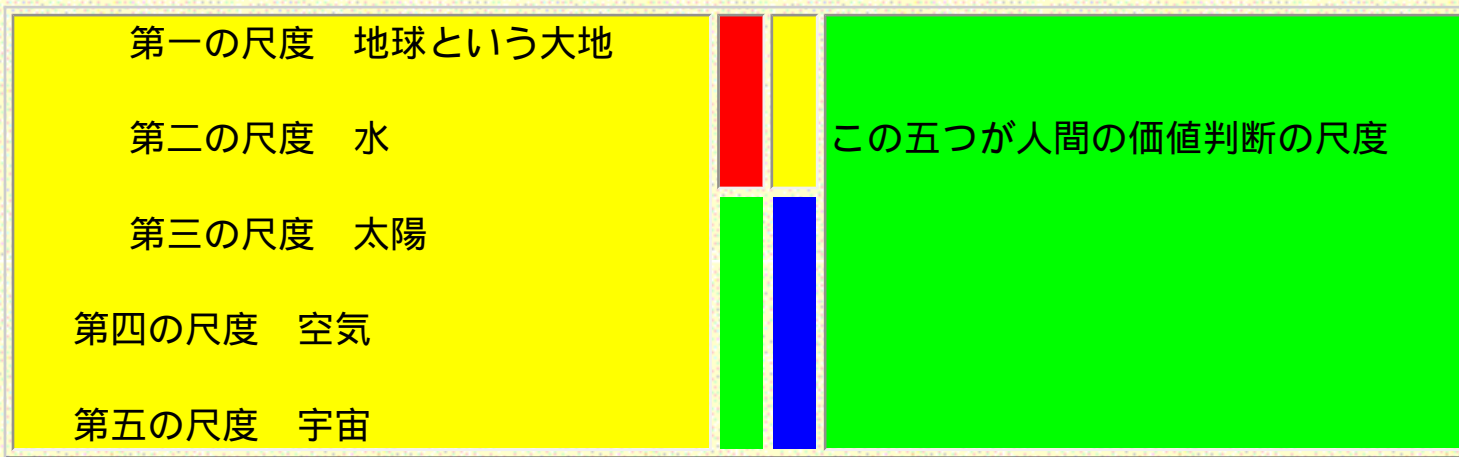
男の役割・女の役割

安らぎの安の字は宀（うかんむり）に女と書きます。宀はもともと家の宀からきており、その宀に女が加わると安、つまりその周囲は安らぎとなるのです。男は、田と力が合わさって男となります。男は外に出て田畠で仕事に精を出す。女は家庭にあって安らぎの場を提供します。男性が女性に美を求めるのは、美は安らぎの象徴であり、女性が男性に求めるもの、力はたくましさの象徴だからです。男女の性がそれぞれ機能するところによって、人間社会は円滑に回転します。

私達が仕事をし、働くということは自からの生活を維持し、人々の生活を支えることですから、それは愛の行為につながるのです。

宗教は、人の生き方・人生のあり方を説いたもの。宇宙の真理を説いたもの。

絶対不変の価値の物差し



地位・名誉

「学識や地位、名誉や優劣の感情に心が揺れる間は、人は苦界の淵から抜け出すことは出来ない」

柔和

「怒ってはならぬ。怒りはそこにどんな理由があるにせよ、その波動はやがて己に返り、魂の前進をはばむことになるからである。己に厳しく、人には寛容の態度を決して忘れてはならぬ。柔和な心は、神の心であり、法の心でもあるのである。」

言葉が足りない、言葉がすぎる、というのは、しばしば感情が入るからです。

誤解や不信が生じるのは、それは心の底に慈愛がないからです。

働くとは、役立つということ。

短所とは

怒り、愚痴、優柔不断、独善、気取り、強欲、中傷、そねみ、粗野、多弁、排他、増上慢、引っ込み思案、自閉、出しゃばり、憎しみ、怠惰

長所とは

明るく朗らかで、素直であり、人と協力し、助け合い、補い合ってゆく調和の性格です。

大自然に調和し、肉体先祖、両親に対しては報恩し、万生万物には感謝する。この心を忘れなければ、人間の

精神は健全に保たれ、肉体も健やかになります。

慈悲と愛の思いは天上界につながり、憎しみ、怒りの思いは地獄界に通じてゆきます。

病気、災難、さまざまな不幸の原因は、正しく思わない自己本位に、心がゆれているから起こるのです。

善の思いには善が返ってきます。悪の思いには悪が返ってきます。

「我々の人体の細胞は約六十兆あります。それぞれ生命を持ち人体である細胞と、それを動かしているエネルギー・意識・心を持っており、それは大宇宙の構成と、まったく同様につくられています。」

「霊道中心の信仰はしてはならない」

「地獄界は反省の場」

人間をはじめとする生命物質が成り立つためには

五つの元素

地球 水 太陽 空気 宇宙

[天台智ぎ、はこれを地・水・火（太陽）・風（空気）・空（宇宙）といった]

そして、この五つの元素を、元素たらしめる 番目の「エネルギー」によって成り立っています。とりもなおさず、地球・水・太陽・空気・宇宙の五つが、人間の価値を決める絶対不変の尺度（物差し）です。

「神が、その偉大な意思と能力で天と地を創造したように、神の子である人間にも、その意思と創造と行動の自由性が付与されているのです。」

「地獄界からはこの世に生まれ出ることはできない。人間は皆、暗い心を修正し、明るい世界（天上界）からこの世に出る」

「人間は地上界に一回生まれたというだけで、完成されるものではない。神は、それを望んでもいない。転生輪廻の積み重ねの経験を通して、豊かな心が作り出されていくということを知るべきである。二度と同じ場所に生まれるということはない。」

高橋信次師は亡くなられる一年前頃から私達（園頭師等）に次のように言っておられた。

「インドで四十五年間かかって説いた事を、今度は七年間で説いてしまいました。僕はこの世に生まれてくる時に、四十八才までのことを計画してきましたが、大体計画通りやりました。僕は近いうちにあの世へ帰らなくてはならない。僕に万一のことがあっても正法をしっかりと伝えて行って下さい。僕が早くあの世に帰らなければならないのは、一つはソ連が原爆を使う危険があります。もし原爆戦争になれば地球は破滅です。地球が破滅したら、人間の魂の修行の場がなくなるので、絶対に破滅させてはならない。肉体を持っていると肉体に制約されて思うように行動できない。だから、僕は肉体を脱ぎ捨ててあの世へ帰り、あの世からソ連の指導者が原爆の発射ボタンを押さないようにしなければならない。」



「反省とは二度と誤ちを犯さないということ」

「夢を見ない人はいないだろう。しかし、その夢を的確にとらえる人は少ない。夢はそのときの本人の想念と行為をもっとも抵抗なく偽りなく表現するものであるからだ。夢は心の窓でもある。目覚めている時は、周囲の者や自分の意志によって押さえられているその想念が、夢の中では、まるで意志を持たぬ生物のように自由きままに動いてしまう。夢の中で正しく行為することができるようになった時に、その人は本物になったのである。その想念と行為について、悟りを得たといえよう。」

「人間の価値は、最も困難な環境におかれた時、また自分の欲望を自由に満たすことの出来る環境におかれた時に決まるものである。」

「花は、雨や風や人の足に踏まれようとも、その季節がくると開花する。花の美しさはどんな絵筆も描ききれない。花には自我（自分）がないからである。」

「己に一点のやましさがなく、心の鏡を磨いておくと、人の非難は発信者のもとに勢いこんで返って行く。人の想念は、光と同じように波動と速さを持ち、必ず発信者に返って行くものであるからだ。」

「太陽の熱エネルギーは、一秒間に石炭を二〇〇万トン燃焼させた熱エネルギーに匹敵します。太陽は、無所得、無報酬で誰にでも平等に光をふりそそぎます。この太陽の行為は慈悲であり愛そのものです。」

「慈悲を宇宙の心とすれば、愛は調和を目的とした地上の光です。愛の根本は慈悲ではありますが、その働きは他を生かす、助け合う、そうして許すことなのです。慈悲を神仏の縦の光とすれば、愛は横の光であるといえます。縦と横の光が結び合った時、人は神を発見し仏性である己を悟ることが出来るのであります。」

「人は責めてはいけない。人を責める前に、まず自分を省みることだ。たいていは、自分の心を自分で非難していることが多い。自分の周囲に起こった諸現象は、自分に無関係であることは絶無といってよいからである。しかし、なかには光に対する陰の場合もあるであろう。その場合は時を待つことだ。縁無き衆生は時が経たねば救うことはできないものだ。」

「天上界が地上と違う点は、経済は物々交換であり、勤労に対する報酬がキチンと決められ、働かないで徒食することはありません。国家はあるかということはありません。ただ、日本人は日本人、アメリカ人はアメリカ人というように、民族社会的な生活をしております。」

「第六感、第一印象、虫の知らせというような精神作用は潜在意識（守護霊）の作用であり、こうした作用は四六時中あるものではありません。」

「信心とは自分の心を信じ、信仰とはその心で日々を行じる事です。大自然に調和し、肉体先祖、両親に対しては報恩し、万生万物に感謝する。この心を忘れなければ、人間の精神は健全に保たれ、肉体も健やかになります。」

「この世は、ものが現実にあるように見えるが、ある時期が経つと大気に還元したり、土に化したりして変化してしまいます。人間は死にますと三合の灰になります。このように、現象界（この世）は変化きわまりないところです。ところが、実在界（あの世）はものが実際にある世界、実存する世界です。永遠不滅です。何百年、何千年経ってもものは変化せず存在します。それ故に実在界というのです。ものが変化せずに存在するという意味は、実在界と、現象界の時間の単位が大変に違うということでもあります。かつて地上に生存した恐竜は実在界で今でも生きています。地上に今もって発明発見されない科学の分野についても、あの世では発明発見され、

地上の科学など問題になりません。したがって、この世にないもの、この世にかつてあったもの、それらはすべて、あの世には存在しています。」

「転生輪廻を通して二つの目的。その一つは己自信の調和、もう一つは地上の樂園（仏国土、ユートピア）をつくるためです。」

「蒔かぬ種は生えぬ、蒔いた種は刈り取る、これが神の摂理だからです。」

「現代は、物質文明の世であります。人はあの世を忘れ、一寸先が闇であります。五里霧中で、目的も分からぬマラソン競走に精を出しているのが現代人です。」

「今日の自然科学は、一つの壁にぶつかっています。その壁とは物質のモトである原子、素粒子についての状態は説明出来ても、その状態を生み出しているところのエネルギーそのものが分からないからです。エネルギーこそ神仏そのものなのです。」

「子供は自由だ。子供には想念による自己限定がないからだ。いつも明るく今日一日を天衣無縫に生きている。」

「空を飛ぶ鳥は地上に倉をつくることはしない 地上の動物も、その日の生活に満足している。明日の糧を求めて相争うのは人間だけだ。鳥や動物はその日の糧で生き永らえている。人は明日の糧を求めて死を急ぐ、人間は眼をひらけ」

「この世の十年はあの世の五十～八十年に匹敵する。この世で反省して一年で結果が出るものは、あの世では五年～八年かかることになり、この世は修業しやすい。」

「結果が表われるまで、一定の期間が与えられている

反省をして、これはいけないと反省すれば訂正が可能になる

その反面、その結果が遅いため、人によってはいらいらする

正しいことを努力していても、すぐその結果が表われない

この世は 波動が荒い

あの世は 波動が精妙」

「大宇宙が法則のままに動いているのに対して、人間は、その大宇宙を、地上を、よりよく調和させるために神仏と同様、その意思と自由とが与えられて、ものを創り出す創造性をも付与されています」

生命

生命とは普通生きている生物について言われますが、広い意味では「ものの用に役立っているもの」を指します。つまり、動・植・鉱の物質は、この意味ではすべて生命を持っているわけです。生命あるものは、他を生かす天命を担っています。そうして全体を調和させています。動的生命と静的生命の二つがあり、動的生命は人間、動物がそれであり、静的生命は植物、鉱物があります。人間では魂活動を支えている念体（光子体）が動的生命であり、その念体を包んでいる肉体が静的生命と言えるでしょう。」

「般若心経はどこでも読まれている有難いお経であり、したがって写経も良し、読誦もまたご利益があると伝えられている。しかし、その意味もわからず、行為のないものが朝晩上げても光は届かない。今日の仏教は、経文をあげたり、写経自体にウエイトがかかり、日頃の想念と行為については問題にしていなくて問題がある」

「死はすべての終わりではなく、両親から与えられた肉体舟との別離にしかすぎない」

「人は皆平等である。平等という意味は、神の前に人間として平等であるということだ。能力、顔立ち、容姿などの相違は平等・不平等に関係がない。もし、こうした点ですべてが同じであったなら、この世の修行もそれぞれの役割も必要としない。ちがった形で、この世に出てくるので魂磨きが可能なのだ」

「眼、耳、鼻、舌、身、意、六根は諸悪の根源である」

「ダーウィンの進化論はあり得ない」

「神は光なり、我とともに在り」

「我は神の子、我が友よ、光明に包まれよ」

「己の心の王国の支配者は己自身だからである」

「あらゆる苦しみや困難も、神の子としての目覚めへの、神のはからいだ」

「早く改めよ、早く間違いを正せ、間違いと気付いたら今すぐ正せ、もう遅すぎるということはない、それが神のはからい」

子に対する親の役目

子供が成人し、社会人となって人間としての道はずさない、立派な一員になるよう導くことであり、それ以上のものでもそれ以下のものでもないのです。子供に期待を寄せ、煩悩的に子供の安全のみ願うと、かえってそれが災いし、子供を不幸にすることになるでしょう。よくよく気をつけねばなりません。

「3年、5年、7年が循環数」

「今日の医学は百年前より長足の進歩を遂げている。しかし、医学の進歩と共に新しい病気がふえている。次々と新種の病気が現われ、医学がそれについて行けぬというのが現状のようだ。これについてある人は言う。医学の進歩があったから、未発見の病気が発見されたし、医学が幼稚だったからわからなかったのだと、又、これまでの医学は治療医学で、予防医学は未開拓である。そのために病人が後を絶たないともいう。私は医学を否定するものでもない。医学の分野で治せる病気も多いし、そうした治療をした方が良いという場合もあるからだ。ただ、**病気の八割は物理的治療で治らぬことが多い。なぜかという、心が病気を作っているからである。**新種の病気が医学の進歩と並行して現われてくるのは、人間の心がモノを生み出し、時代とともに欲望の方向が変化しているからなのである。これまでの医学は物質科学で、物理的治療のみにウエイトがおかれている。物質科学としての医学は進んできたが、病気の間口は時代の変化とともにひろがっていくため、医学と病気は絶え間のない競走関係におかれているといえるだろう。**人間の心についての理解が欠けていたようだ**」

統制なき自由は自由ではない。自由には必ず統制が必要である。

心は自由であっても、肉体は本来制限されているものであるから、制限内で生活しなければならないということ、小さい内から教える必要があるので、限られた時間、空間内で、限られた肉体を持って、全体がうまく調和され、誰も傷つかないように生活するために、礼儀も必要なのである。自由な心を制限された肉体を持って行動する時、礼儀となる。

人を見るには、言葉より行いを見よ

(現世)現在の極楽を得ずして、なんであの世の極楽でしょうか

人を救うものは超能力ではなく愛の力である

親子の道は、愛と義務、信頼と理解によって生かされる

悪の道は入り易く、神の道は毛穴より小さく、忍苦を伴う

生命とは普通生きている生物についていわれます。広い意味では「もの用に役立っているもの」を指します。では、植物人間と言われる人達は、果たして生命と言えるであろうか。只生きている、呼吸しているとしかいえません。延命器をつけて生きながらえることが、果たして人間としての目的にかなっているのだろうか。酷な事を言うようだが、この世に余り執着せず早く天上界へ戻り、次の出生に備えた方が良いのかもしれない。いまのままでは魂の修業をしたくてもそれは出来ませんし、永い時間無為に過ごすだけだからです。だが、周囲の人達に反省を促すという重大な役目もあるのだが。

苦しみの根を絶たなければ、苦しみはいつまでも輪廻します

人を見るには、言葉より行いを見よ。

「信心とは、嘘のつけない己の心を信ずることなり」

「天罰とは自らが求め、自から得る結果であります」

今日に生きる者と、明日をたのむ者

自分に厳しい者と、人を責める者

足ることを知る者と、欲深き者

物を大事にするとは、自然の恵みに感謝する行為なのである。

衣食住という自然の恵みを得て、はじめて生きる希望が湧き生存を可能にするでしょう。

自然の死は人間の死につながる。自然を生かす工夫を怠ってはならない。

才能と人格とを混同し、才能を優先すると現代のような混乱した社会を招く。神が求めるものは、その人の人格である。

夫婦の関係

互いに足りないものを補い合い、よき子孫を育て上げてゆくものである。

親子の関係

過去世の縁によって生じたものなので、親は子をいつくしみ、子は親を敬うのは当然なことです。

兄弟の関係

互いに向上し合う切磋琢磨する間柄です。

友人との関係

社会生活上のよき協力者と言えましょう。

悪かったと思ったら今すぐ正せ

もう遅すぎるということはない

それが神のはからい

あらゆる苦しみや困難も神の子としての目覚めへの神のはからい

死はすべての終わりではなく、肉体との別離にすぎず魂は永遠不滅です

すべて不幸の原因は己自身にあり

反省とは同じ誤ちを二度と繰り返さないこと

正直

「自然は正直である。人の心も正直である。心は己自身の偽りの証を述べることを拒む」

「人に嘘はつけても自分の心には嘘はつけない」

苦悩

「人の世は、それぞれが分を守り、天命を知るならば、破壊や苦悩は生じては来ないものだ」

「病気は自からの不節制と不養生と生きざまの結果であり、その原因をさぐり、深く反省すべきです」

「事故は自からと周囲の者への反省を促すための神のはからい」

「蒔かぬ種は生えぬ」

「運命はもともと自分がつくりだしたものだ」

重荷

「人の一生は重荷を背負い、坂道を上るものというがそんなことはない。重荷も坂道も、我（が）がつくり出したもの、我を捨てれば心は軽く人生の喜びを覚えよう」

寛容

「生活には妥協が伴う。しかし、心まで妥協し調和を崩すと苦悩が生じてこよう。己に厳しく人に寛容こそ正法の生き方といえよう」

「風流に身をまかす人、俗界から超然とする者が自由人のように言われるが、真の自由人とは、社会的な制約の中であって、それにとらわれず、為すべきことを果たして行く者をいう」

妥協

「妥協はぬるま湯につかったような気分に似てすっきりしない。妥協には自我が伴うからだ。しかし、妥協に

よって一刻の平衡が保たれているのも事実である。互いに自己主張を通そうとすれば、この世は一瞬にして暗黒となろう。妥協は破壊を防ぐ一時しのぎの防波堤の役を果たすが、永続性はない。妥協には心からの共感がないからである」

「自然は正直である。冬に雪を降らせ、春に花を咲かせる。人の心も正直である。心は己自身の偽りの証を述べることを拒む。自然も人間も神仏という大心にかたく結ばれているからだ」



「忍耐はひとつ間違えると執着となり、自信はすぎると増上慢となる。ものには表裏の相がついてまわり、人の心は悪に染まりやすい。常に自戒の心を忘れてはならない」

人の欠点は三分の二は今世のもの、残り三分の一は過去世の業（ごお）とっていいでしょう。したがって、三分の一の業は反省しても、なかなかその原因をつかまえることがむずかしいものです。しかし、今世の三分の二の業がこれの影響を受けて働いていますので、その三分の二の業を修正することによって、修正することが可能です。

念はエネルギーであり、心の中の創造行為を形に具象化して行くものです。また一度発した念波は、一秒間に地球を七回り半もまわる光以上の速さで自分に返ってきます。つまり、輪廻します。善念は善念として返り、悪念は悪念として、もとの発信者に返ってくるのです。

偶然とか、チャンスというものは、本当はありません。

一寸先は闇ではない。すべては心の法則を中心にして動き、動かされており、偶然というものの、すき入る余地はない。

慈悲は「なさけ」〃いつくしむ〃〃思いやり〃ということです。愛は〃他を生かす〃〃助け合う〃〃そうして〃許す〃ことです。

動物霊は、神の眷族として、使い姫であることを忘れてはならないので、動物霊を私達人間が神として、信仰の対象としてはならないのであります。しかし、商売等で稲荷を信仰する場合は、この眷族が手伝ってくれますが、必ず稲荷大明神（主として菩薩）に厚く心から礼を申してお返しすることを忘れてはなりません。稲荷大明神は五穀の神として祀ったものであります。私達の魂は、他の動物霊よりも上段階にいることを悟って、人間としての本性を忘れてはならないので、自我我欲、自己保存の為にこのような信仰に入ると、自分自体の意識が動物の本性に通ずるので、真の正法を得て信仰しないと危険であります。神の意識と自分の意識が調和されれば、光の保護を与えられて、動物霊に支配されることはありません。

自殺した靈魂

アガシャは、あの世はこの世の延長線上にある。この世で清算していなかった苦しみは、そのままあの世に継続されると言っている。自殺してみても決して楽にはならないのである。この世で心に描いたそのままの心が、あの世で再演されるのであるから、自殺した霊は、あの世でも自殺するのである。楽になれると思って自殺するが、依然として心の苦しみは残っているから、その心の苦しみから逃れようとして自殺する。自殺してみても心は楽にならないから、また自殺するという悪循環を繰り返すのである。どうしても心の転換、反省が出来ずに苦しいと、最後は「助けてくれ」と、生きていた時の近親者を思い出す。すると、憑依された人が同じように自殺するという場合がある。だから、近親者に自殺した人があったとしたらその霊によく神理を教えてやらないといけないのである。

殺人犯の靈魂

自殺が神に対する反逆であると同じように、殺人はその人のうえにおける神の計画を、自分の意志によって中断するので、自殺と同じように神に対する反逆である。深い悔恨に打ちひしがれた殺人犯人は、自分の心の中で、「自分みたいなものは生きていく資格がない。このようなひどい罪を犯した自分は、どのような殺され方をしても仕方はない」と、必ず自己処罰の情景を描く筈である。このような処罰をされることが自分にはふさわしいと思った状態を、あの世で再演するのである。それとも、その殺人の現場の情景が心から離れず、どうしてもあんなことをしたろうと、殺したその瞬間のことが頭から除かれなければ、殺人の情景が繰り返し繰り返し再演されて、苦しまなければならないのである。証拠がみつからず、この世で無罪になったとしても、あの世でも無罪になるということはないのです。この世で無罪になったとしても、殺人の罪の恐ろしさはその人自身が一番よく知っており、人をごまかすことは出来ても、自分で自分をごまかすことは出来ない。人は気づかないが、その人は心の中に、「自分みたいな大きな罪を犯した者は絶対に幸せになれない。自分みたいなものは、早く死んだ方がましだ」と思うのである。その自己処罰の心がその人を死へと誘導して、不慮の死を遂げることになる。だから殺人犯人は、この世での裁判は逃れることが出来ても、自己処罰とあの世での殺人の再演からは逃れることは出来ない。

私達の心は、自分の肉体という三次元の衣をまとっていますが、心はあの世の霊人達とツウツウなのです。換言すれば、私達の心は、この世とあの世の「二足の草鞋」を履いているわけです。ですから、自分の意識が眠っているにもかかわらず、夢を見たり、思うことが相手に通じたり、直感が働いたりするのは、これらの現象はテレパシーとか、透視とか、読心術、念力などいろいろ言われていますが、実は、霊人達（通常は守護霊の働き）の作用で起こるものなのです。ですから、科学（三次元）の立場でこれを追究しようとする、一〇〇%の成果は期待できません。たとえば、モノを当てる場合、その確率は高く九〇%くらいであり、当たっても六〇%～八〇%くらいのところでしょう。なぜかと言いますと、守護霊が背後で働いて、その人の心に示唆を与えたり、力を貸したりするので、本来なら一〇〇%の結果が出るはずのものが、そうはさせないからです。一〇〇%の結果を出すには、こちらの心が問題であり、こちらの心が調和されていることが必要なのです。

本題に戻って、私達の心はあの世の霊人達とツウツウですから、思うこと、念ずることが正しくないと地獄霊、悪霊がその人の心を支配してしまいます。正しくない心とは、人を憎む思い、怒り、そねみ、愚痴、中傷、足ることを知らぬ欲望など、こういう想念を言います。なぜ、こうした想念が正しくないと言いますと、自己

保存が主体になっているからです。人間の歴史の大半は争いの歴史です。闘争と破壊の歴史です。自己保存の歴史です。文明はその中から生まれると言いますが、人類の目的は文明よりも調和です。文明のための闘争など何の意義もありません。これは私達の現実の生活を見れば、もうおわかりでしょう。私達は自然界という調和された世界の中で生活しています。したがって、私達の生活も自然界の意思に沿って生活することが大事であり、大自然に沿うとは、他を生かし、助け合う協調相互の心です。自己保存ではありません。

高橋信次

会場は、あるお寺の広間を使い、百五十人ほど集まっていた。会場はいっぱいだった。Hはうしろの方に座り、話を聴いているうちに、ついウトウトとした。話を聴きのがすまいと、気を取り直すのだが、どうにも目がかすみだし、睡魔が襲ってくるのだ。憑依現象の特徴である。

高橋信次

さて、霊の世界については大部分の人が疑心暗鬼であり、若い人、インテリ層の方はまず否定する方が多いと思います。なぜなら、体験者は数が少ない(実際には多いのだが...)、頭で理解出来るものではないだけに当然のことです。私達の生活は、五官という感覚の世界で生活するように仕組まれており、そこにまた人生の修行の姿があるわけなので、否定しがちになるか、否定するのが常識だからです。けれども、霊の世界は、私達人間の心と表裏をなして存在し、否定しようにも否定できないというのが現実です。たとえば、災難や不幸に見舞われると、人はよく「魔がさす」とか、不運とかいって簡単に片付けます。しかし、魔とか、不運はそう簡単に現われるものではありませんが、それは、そのまま霊の世界を言い当てているものです。つまり、魔がさすとは、その言葉通り不運や災難の場合、実際に魔が働き、その人を不幸に陥れるのです。魔は実際に存在するのだし、それは各人の心といつでも通じ合う仕組みになっているのです。想念はモノをつくり出す。想念という創造行為は、人間から切り離すことはできません。

したがって、悪の思いを持てば悪が生まれ、愛を人に施せば愛が返ってきます。さらに、悪をいだいてあの世に帰った者は、悪の世界で苦しみ、悪の想念でこの世で生活する者に集まってくるというのが、心の世界の法則であり、その作用なのです。魔はこうした時に働き、人を不幸にしてゆきます。不幸や不運が、心の重荷をはずすことによって幸運と変わり、真に生き返った人々が私の周囲には何千人といます。こうした事実をみると、心の歪みがさまざまな波紋を描き、いかに多くの苦悩のドラマを作っているのか、恐るべきことなのです。

高橋信次師

Home

インドの古代、ゴータマ・シッタルダーは、マヤの脇の下から生まれ、七歩歩んで「天上天下唯我独尊」と言ったとかいう伝説があるが、あれは後世の人々がゴータマを神格化するための作り話であり、またイエスには、マリヤの処女懐妊説などがあるが、いずれも神のように祀り上げてしまった人間の偽説であり、このような事実は全くなかった。一般の子供と同様に育てられ、ただその環境や現象に無常を感じ、苦悩の中から悟って行ったということで、これは人間のすべてがそうしなければ到達できない、修行しなければならぬ現象界の定めなのである。地位、名誉、金、とさまざまな物を持っている両親を選ぶのも、貧乏人を選ぶのも、自分自身がすべて定めて生誕してきたことであり、現象界では、その中で、自己の心の浄化に努力して行くべきこれもまた定めであり、努力の集積が大切なのである。

人間は聖人になる必要はない。ただ神理に則して、他の諸現象に対して、自己保存、自我我欲の執着を持たない生活の出来る人間になることが大切である。そして物質文明の上に、偉大なる心の世界を築き上げること、より社会人類が調和されることによって、文明は急速に発展すると約束されるのである。科学の力は、やがて宇宙空間に、人類の居住できる天体を発見し、地球以外にもよりすぐれた生物の生存していることを知るようになるであろう。海洋へも科学の力は伸び、海底には人類が想像もつかないような古代の動物のいることを発見し、エネルギー革命によって、この海底にも生活できるように変わって行く。それまでに、地球には地中に埋蔵されていたエネルギー粒子の塊りである硫化物や二酸化炭素が空中に放出されて、特定の公害が多発し、大きな社会問題に発展して行く。やがて、光のエネルギー、熱のエネルギーの応用や、電磁力の応用が発達して、科学は急速な発展を遂げる。また硫化物・二酸化炭素をはじめとして、生物に害を与えるような物質は、他に広く無害に応用されて行くであろう。このように、心を失った文明は公害をつくり、ますます人類に課せられた重要な問題点となり、その中和のために、人類の智恵は集中されることになるであろう。

自殺について

自殺は調和という神の目的から、大きく外れた行為であり、神に対する冒瀆、反逆であって、人間否定を意味します。ですから、悪のうちでも、自殺は最悪の部類には入ります。日本の武士道は、名を惜しみ、死に対しては活淡、生をあまり重要視していなかったようです。生恥をさらすくらいなら、潔く死んだ方が価値ある生き方とみられていたようです。しかし、武士道とは、そもそも何か、名とは何かを追究してゆきますと、自己保存につき当たり、それから越えることが出来ません。死によって自我を生かす、死によって安楽を願う我欲と自意識の過剰が、そうした思想を生み、行為に走らせたとしかいいようがありません。思想や主義におぼれ、種族や家の繁栄のみを願う行為は、人類とか、平和といった視野から眺めると、狭量のそしりをまぬがれないと思います。

自殺も、さまざまな内容を伴い、各種にわかれています。戦争という異常事態における自殺（例えば特攻隊）もあれば、客観的に説明出来ない自殺もあります。家族の迷惑を考え、ひと思いに生命を絶ってゆく療養生活の長い老人。形はどうあれ、いちばん問題なのは、本人のその時の想念の在り方にありますが、しかし客観的に、私ならこうするという余地の残されている自殺は、もっとも悪い結果になります。自殺者の死後の世界は暗黒地獄です。一寸先もわからない穴倉のようなところに閉じ込められての苦しみの連続です。鼓膜が破裂しそうな轟音が鳴り響くところとか、得体の知れぬ生物が意識の中に入り込んでかきむしります。頭痛や幻想に襲われても、この世では麻酔や疲労が救いになって眠ることが出来ますが、暗黒地獄ではそれが出来ません。意識だけはハッキリしており、それでいて真っ暗ですから、自分の体がどこにあるのかもわかりません。自殺は「光」を否定した想念ですから、こうした暗黒界に自らを引き込み、客観的に説明のできない自殺は、その苦しみが長期にわたります。夢々、こうした想念に支配されないようにしたいものです。

業という悪が連想されます。ところが、業は必ずしも悪だけではないのです。善も実は業なのです。教育者の家庭に想像もつかないような悪が芽生えるのも、善の意識が強く働き、家庭をしばりつけてしまうからです。「ああしてはいけない」「こうしなければならぬ」というように、善への執着も業をつくり出します。善にとらわれればと四角四面な心になってきます。悪にとらわれれば、人から嫌われます。要するに業とは、五官六根（五感目は眼、耳、鼻、舌、身です。これに意識・心を加えて六根）にもとづく、執着の想念がつくり出した黒い循環の想念 観念、換言すれば、とらわれた心、これを業というのです。

死について

問

人間の死は自然死が理想でしょう。病死には原因があると言いますが、では戦争による戦死、災害などによる不可抗力の死についても、やはり個人的な原因があるのですか。また、こうした人々のあの世の生活はどのようなのですか。

答

おっしゃる通り、理想は自然死です。定命（じょうみょう）がきて、眠るがごとく大往生する姿は、第三者が見ても気持ちがいいものです。事故死、病死という場合は、年齢が若いほど、身内の者、残された家族の悲しみを誘います。自殺はともかく、事故死、病死の場合は、自分の意思に関係ないと思われませんが、しかしその原因は、やはり、自分自身にあります。イエスは十字架にかけられ、そして殺されました。あのよう偉大な光の天使が、十字架というはりつけの刑に処せられたことは、普通では理解できません。そこで、後々の人達は、イエスは人類の原罪を背負って、十字架の人となったと伝えていきます。これも理由の一つです。ところが二千年前のイエスは、なかなか気性の激しい人だったのです。しかも物凄い霊眼を持っていたから、人を見た瞬間、その人の心を見抜きます。魔王の心を持った者の後ろには、魔王がひかえているのが見えるのです。つまり、二重写しになって人の姿が見えます。そうしてイエスは、その魔王に向かって「お前はここから立ち去れ」と一喝します。一喝された相手は、自分に向かって言っていると思い、イエスというやつは怪しからんと憎しみをいただきます。イエスは本人に言っているのではなく、憑いている魔王に言っているのですが、本人はそれがわからないため、自分に言われたものと錯覚します。もともと自分の心が魔を引き寄せているのですから、本人といっても差し支えないのですが、しかし、人間は神の子です。心次第で天使になれるのですから、イエスは魔王に向かって叫んでいるのです。ともかく、こうしたことが重なって、あのよう劇的な死を遂げるのです。したがって、十字架の原因は、魔王を憑けた人達の心ない行為にあったのですが、さらにその原因を求めると、気性の激しさにあったと言えます。

こうみてきますと、病死、事故死についても、その原因は自分にもあると言えるのです。戦争という個人の意思に関係なくやってくる殺し合いによる死はどうかということですが、これとても同じです。同じように戦場に出ながら、ある者は生き残り、ある者は戦死します。また、部隊が全滅しながら奇跡的に生き残ります。これも、個人個人の想念と行為に、その原因を求めることが出来るのです。

ところで、病死、事故死、戦死の場合、その霊は浮かばれるか浮かばれないかということですが、これは個々にみないとわかりません。同じ戦死でも、あの世に戻って修行した方がいいということもありますし、この世での修行がまだ数多く残っているのに、その想念行為が死を招く場合は、幽界の下段、地獄に堕ちます。大事なことは、同じように戦死という結果を招く原因をつくっていても、人によって、あの世の生活の次元が違うということです。若死は悪く、老死をよしとみますが、必ずしもそうとはいい切れないのです。死を招く原因をつくっていても、人それぞれの目的なり役目があるので、その役目を果たしている時は、若死でも天上界に行きます。死に方だけで、あの世の位置が決められないのは、心の問題と、役目を果たしているかどうか、にかかっているからです。



「三宝帰依の条件」

仏・法・僧帰依の条件

ブッタ（仏）に帰依するか

タルマー（法）に帰依するか

サンガー（僧）に帰依するか

の三つで、つまり、仏を信ずるか、正法を信ずるか、僧としての心と身を修めていく自覚があるか、この三つの約束を果たさないかぎり、弟子として認めることが出来ないと釈迦は弟子達に宣言された。これを三宝帰依の条件ともいう。

二千五百有余年前の釈迦は、やがて仏法はその力を失い、法灯は消えうせ、無明の世界をつくっているであろうと予言しました。仏教は口伝えされ、文字となり、中国に渡り、日本に定着しましたが、その間に仏教はいつしか哲学となり、学問に変わり、むずかしい経文となってしまいました。このため、仏教は法力を失い、仏教者までが、生死の意義すらわからなくなり、檀家相手の葬式仏教に変わってしまいました。釈迦が説いた仏法、すなわち正法は今日、予言通りと化してしまったわけです。本来正法は、この大宇宙の成立と同時に生まれたものであり、人間も正法者として、大宇宙とともに、無限の進化を求めこの地上に生まれ来たものです。それが転生輪廻を重ねるにしたがい、自己保存という自我が芽生え、物質至上の世界を作り上げてきたのです。何回となく繰り返されたノアの箱舟現象にもかかわらず、人類は性懲りもなく、物質の奴隷となり、ここ一万年の間にもモーゼ、イエス、釈迦をはじめとした大指導霊によって、正法が唱道されながらも、時が過ぎると、またもとのもくあみとなり、末法は万年の長さにわたって続いてきたのであります。しかし、万年にわたって末法が続いたとしても、正法という大宇宙の神理は永遠にわたって消えることはないのです。大宇宙が正法から外れた時は、大宇宙の終わりを意味するからです。地上は末法と化しても、大宇宙は、それを静かに見守っています。物質の奴隷と化しているとはいえ、人類はやがて目覚める時が来るであろうと、神仏は、その経緯にしたがって、大宇宙を創造し続けているのです。しかし、物質の奴隷と化している間は、人類から苦悩を抜き去ることは出来ません。人類の目的は、正法という調和にしか、生きる権利も、義務も、責任にしても与えられていないからです。調和を外れた生き方をすれば、人類にはその分だけ苦悩がついてまわります。

太陽エネルギーが地球をつくるとすると三十三万個できる。地球は、三十三億年前、太陽のように火の玉であり、生物が住めるようになったのは今から約六億年前

戒名について

ウパテッサ（幼名）と呼ばれた人が、釈尊に帰依した時に根シャーリープトラ（舎利弗）と改名する。このように釈尊に帰依した時に、名前を変えたことが、後に日本では死んだ時に戒名をつけるように間違っただけとなった。コリータ（幼名）は、モハー・モンガラナー大目連）と名乗ったようにである。

如来について

○如来は、あの世もこの世も自由に見てくる事が出来るため、どこにいても同じ結果になるのであろう。生と死を超越しているため、すでに輪廻から解脱しているのである。しかし、大自然の法則通りに、たとえ如来であっても、実在界と現象界の輪廻は繰り返されるのである。如来にしても、この現象界に生まれてくれば、人生のあらゆる疑問にぶつかり、内在された偉大な智慧を発見して神理を悟って行く。したがって、輪廻の法も解ってしまうのである。悟りへの境地に到達するということだ。そして如来は、この現象界で地上界の人々の失われ

た心を取り戻し、神理の種を蒔いて還るのだ。私達は、こうした次元を超えた世界の存在を知らなくてはならないだろう。

○如来と呼ばれている上段階光の大指導霊達は、宇宙即我の境地に到達していますので、身にまとう衣服などに執着はなく、全人類みな兄弟だということを悟っている。慈悲と愛の塊りの者達です。それは一切の執着から離れ、神の心を衆生に教え、衆生を人生の苦しみから解脱させる使命を持って活躍されている上段階光の大指導霊です。つまり、実在界と現象界の、もっともすぐれた指導者群と言えましょう。ゴータマ・シッタルダー、イエス・キリスト、モーゼが、そのアガチャー系の大指導霊だと言えます。このような大指導霊には、この世もあの世もなく、輪廻の実相を悟っているので、生と死の迷いから解脱しています。その中から肉体を持って現象界に出ている大指導霊は、自らの生活の中から、人生への疑問を持って遂に悟りを開き、観自在力を得、実在界にある大指導霊や光の天使達の協力を得て、心を失った地上界の衆生に神理の種を蒔き、ユートピアへの道を開いて行くことに力を尽くしています。それは、人間の作り出した、社会的な地位や経済的富に溺れることのない者達で、一切の束縛から離れて身を挺しているのです。如来といわれる人の心はどうかと言いますと、ここへきますと、神の意識と表裏をなすものですから、衆生済度の心しかありません。価値の尺度はここで消えてしまい、宇宙と己の心は不離一体です。その宇宙に不順な波動があれば、その波動を正純なものに変えなくてはなりません。このため、来たって法を説き、地上に光を与えて行く光です。他の天体との交渉も、このグループの者達の中から選ばれた、光の天使が当たっている。如来界には宇宙全体の諸現象を即座に見ることの出来る展望台があり、それはどんな小さな問題でも見落とすことがない精妙なものである。そこの自然は美しく、生きている。光明の世界である。そして、この地上界に存在している一切の物が整備されており、将来、地上界で完成される物までがすでに用意されてあるのだ。

○如来というのは、上上段階光の大指導霊、なんにも飾っていませんよ。質素です。だから女はね、上上段階光の指導霊・如来にはなれないんです。化粧はする、イヤリングはつける、ネックレスはつける、まあ仏教的に言うとなん位のところまで。

女は如来にはなれない

女性の役割は、妻となり母となって、夫をいかし子供を生き育てることであり、子供を生き育てるためには、安心して子供を産める場所が欲しいと、そうして、急激に環境が変わることに不安を持つところから、女の考えはどうしても保守的に狭く小さくなり易い。男は先天的に心の広さ、ものの考え方が違っている点である。

「菩薩」とは

ボサッターという言葉であり、悟りの段階を言うのです。この段階では、完全に執着から離れているというわけにはいきません。ただし、心の状態は慈愛に富み、衆生済度のためには、身を犠牲にしても救済するという者達で、決してむくいを求めない境地に到達していることです。他人に良くみせたい、というような優越感はないが、自分で楽しんでいる程度といえましょう。仏像を見ると、観世音菩薩や弥勒菩薩その他の諸菩薩などは、ネックレスや王冠などを飾っているので、それが良くわかります。菩薩界の人々は慈悲の心が先に立ちます。それは幽界、霊界の心では自分の心が痛み、いわば天にツバする行為と変わらないことが、実感として感じられてくるからです。つまり、人の心は一つであり、現れの世界は別々でも、人の心に二つはなく、心は神につながっているのです。その神性を汚すことは、自分を苦しめ、人を悲しませる何ものでもないからです。菩薩は、常に神の心を尺度として、愛行に一身を投げ出す人をいいます。つまり、菩薩の「正しさ」は形ある人々の間というより、ひたすら神の愛と人々を生かすことに人生の目的を求めます。価値の尺度は神なのです。ウソのない人々の心です。

煩惱即菩提（ぼんのうそくぼだい）について

煩惱は反省の材料となり、それによって、人は煩惱即菩提（悟り）を得ることが出来るわけです。もし煩惱が

なければ、悟りもなく、魂の前進もないでしょう。魂の進化とは、心の豊かさ、とらわれのない自由さ、そして安らぎをいうのです。煩惱とは不自由ということです。とらわれがあるために、自分の心を自分で縛っているわけです。自分の心を縛るとは怒り、愚痴、憎しみ、そねみなどであり、こうした心で日常生活を送っていると、やがては病気になってもゆきます。そうした苦しみ、悲しみがなければ、苦しみ、悲しみのにがさはわかりません。苦しみ、悲しみのにがさは、苦しみ、悲しみを超えてはじめてわかるものです。健康な時には、健康のありがたさはわかりません。病気になって、はじめて健康のありがたさ、楽しさ、喜びがわかるものです。善と悪についてもそうです。善の良さは、悪があるのでわかるのです。悪の醜さも、善がなければ判断がつきません。煩惱と菩提の関係というものは、人間がこの地上で生活し、修行するうえにおいて、欠くことの出来ない仕組みであるわけなのです。

「地獄界の実体」

地獄界は、この地上に生まれた人類の中で、自分の肉体や財産、墓などに執着を持ち、神の子としての本性を失った人々の行く暗い霊域に包まれたあの世で、自らの心が造り出した心の世界である。その彼らは、この地上界を縁として、心と行いに不調和を造り出したため、反省しなければならない。その反省の場が地獄界なのである。この世界にも厳しい心の段階があり、自ら神の子として自覚し、救われるようになっている。地獄界にいる人々の多くは、自らの心と行いに対して中道を忘れた。勇気のない、欠点の修正をしなかった者達である。しかし、心の世界は厳然として存在しており、そうした彼らは、もはやその世界で、地獄の掟に従う以外生き方はないのである。病気の人々は、その病気を持ったまま還って行く。

第六感、第一印象、虫の知らせというような精神作用は、潜在意識（守護霊）の作用であり、こうした作用は四六時中あるものではありません。

釈迦は、主として慈悲を説き、イエスは愛を説いたのです。

私達の説いている法は、人類の多くがかつて過去世で学んできたイエス・ゴードマの神理であったということを知って戴いたのである。

お釈迦様が亡くなられて九十日目の第一回結集の時には、文字で書かれたお経はなかった。

正法と拝み宗教とを混同しないこと。それに、これからの科学は、正法を中心に発達していくことでしょう。正法は科学です。仏教も科学です。心配事があれば食事もノドを通らないし、怒れば心臓が高鳴るでしょう。中道に反した感情想念が働くと、血液の流れが乱れ、胃腸の働きも弱る。仏教はそれを教えています。これは立派な科学です。

本来、僧侶は死んだ人の供養が道ではなかったはずですが、生きている人々の迷える心を救済することが使命であったはずですが。

一般では、写経の功德とか、経文読誦とか騒がれて実行している人々も多いようです。しかし、そんなことは、仏教の道ではない、と知るべきでしょう。経文の意味を理解して、生活の中に生かさないものは、食堂のウィンドーに飾ってある口ウ細工のようなものです。実践のない仏教は、正道ではないといえましょう。宗派の分裂、同じ宗派の中で勢力の座を争って反目しているような宗教は、邪宗という以外にはありません。仏教では、闘争も破壊も教えてはいないし、そのことを思ってもいけないのです。

「あの世」と「この世」について

あの世にあるものがこの世にあり、この世にあるものはみなあの世にあります。あの世とこの世の生活の仕方、人と人との交際、住む環境等もよく似ています。地上と違う点は、あの世には金がなく、経済はすべて物々交換であり、勤労は大事で、働かないで徒食する人はありません。国家というのはありません。ただ、日本人は日本人として、アメリカ人はアメリカ人というように、民族的に集団的な社会生活をしており、地上で親しかった人達と会って、地上生活をなつかしむことは随所に見られます。あの世の段階が下になるほど自己意識が強くなり、例えば、自分の国だけを愛して、他の国はどうでもよいと考えている、心の狭い愛国者とか、自分の宗教だけを正しいと考えて、他宗を理解しようとしなないコチコチの信仰者とか、そういう人達はそういう人達だけで集団を作っています。誰が何と言おうと、自分は自分の信ずる道を行くという考え方の人は、この世でも孤独ですが、あの世でも孤独です。上の段階に行くに従って、人種・国境・宗教の差別はなくなります。あの世は反省の大事さを知って、実践した人達の行く世界ですから、多少のトラブルはあったとしても、すぐお互いに反省しますから、大事に至ることはありません。もし、その界の秩序を乱そうとする人があれば、そういう争いの心を起こしたとたんに、地獄界へ転落します。あの世は心の波動によって作られている世界でから、心の波動が合わなくなると、その心の波動の合う世界へ自動的に行くということになります。慈悲と愛に目覚めて、報恩、奉仕の心を持つようになると、一段づつその程度に従って上の段階へ行きます。

この世でも、物質的に生きる人よりは、精神的に生きる人が尊ばれるように、あの世でも上に進むほど、損得の感情はなくなり、価値評価の基準が、より精神的に高いものへと変わってゆきます。しかし、魂の目覚めが遅く、これで満足だと考えて安住し、精神的な向上をめざさない魂は、同じ所に何百年もとどまることになりまます。あの世の社会環境は、そこに住んでいる人々の魂にふさわしいものを、その人達が作り出しているのですから、もし、それぞれの界で、その界にふさわしくない不調和な心を出せば、周囲の人々は全く相手にしませんから、反省も地上よりは早く出来るということになります。ところが、ものの考え方、心の持ち方がみな同じような人ばかりで、調和、平和が維持されているのですから、精神的な進歩、向上はなかなかしにくいという欠点があります。それはこの世でも、僻村とか小島の集落などで生活している人は、平和で食べ物に困らなければ、自然と退嬰的、消極的、保守的になるのと同じことです。あの世もこれと同じで、それぞれにふさわしい界層で集落を作っています。そのために、退歩することも少ないかわりに、進歩の度合いも遅いということになりがちです。あの世では、廻りは皆自分と同じような人ばかりですから、大して参考になりません。しかし、この世は、上をみても、下をみてもキリがないというように、模範になる人、こうしてはならないということを教えてくれる人等、廻りに一杯おります。それだけに、この地上は魂の修行にとっては、絶好の場所であるわけです。

あの世で退歩することもなく、かといって進歩するでもなく、平穩無事な生活に安住して、精神的に居眠りを続けている人がいます。しかし、そういう人も、そのうちに内在した神の子の意識が目覚めて、これではいけないと気づくと、輪廻転生の波に乗って、地上へ生まれてゆくことになります。そういう人は、あの世で居眠りしていた癖がついて、この世でも仕事をしたくない、遊んでいて喰えないだろうかと考えます。しかし、この地上は遊んでいて喰える世界ではありませんし、仕方なしに働くということになって、働くことに喜びがありませんから、結局は不幸に終わるということになります。そうして、あの世へ帰って、そこで反省をするということになり、生々発展の大生命の軌道に乗って、はじめて働くことに意義のあることがわかるようになってゆくのです。この世には、心を動かされるいろいろな材料が多いだけに、心を許すと五官にふり回されて、地獄に堕ちてしまうということになります。それだけに、この地上生活は、またとない魂向上の踊り場といってもいいのです。あの世は、幽界、霊界、神界、菩薩界、如来界と、その人の心の段階によって、それぞれにふさわしい界がありますが、たとえ、どの段階にいた人でも、この世に出てくればみな同じで、はじめから出直しということになります。それは、生まれると同時に、過去世の記憶が一ぺん消されることになっているからです。過去世の記憶が閉ざされるから修行になるのです。

生きている人間があの世界に行くというと、普通は常人扱いされないでしょう。人によっては、あいつは頭がおかしいのとちがうか、ということになるでしょう。私もかつてはそのように思っていました。それも五年程前までは...。片寄りのない中道の物差しで、自分の心の在り方と行動をしっかりと反省し、丸い豊かな心の状態に己を浄化すると、こういうことが可能になってきます。あの世界に行けない、つまり、心と肉体の分離が出来ないのは、肉体に心と魂が執着を持っているために不可能になっているのです。恨み、妬み、そしり、怒り、情欲、足ることを忘れた欲望、思いやりがない、その他もろもろの執着の想念が、こうしたことを不可能にできてしまいます。そこで、こうした執着を善なる己に嘘のつけない心でその歪みを修正し、瞑想すると、あの世界に自由に往き来することが出来るようになります。

あの世界の仕組みも、その人の心と行いが、正法にかなった生活をしたかどうかで、光の量が異なって定まってしまうのである。人間の知恵によってその位置が定まるのではないのだ。また、神の意思によって定まるものでもない。あくまでも、肉体舟の船頭である心の天国の支配者、すなわち自分自身の心が決定するのである。地獄行きも、極楽行きも、自らの善なる心が、人生の一切を裁いたということだ。

「実在界（あの世界）」

実在界とはあの世界のことで、各人の意識の大小によって住む場所が違ってきます。意識の大小とは光子量、後光（オーラ）のことで、それは大きく分けて、生前、自己本位に生きたか、人々のために奉仕したかにかかってくる。死後、自己本位に生きた人は、この地球上の地表に、あるいはその近くで生活します。なぜかという、自己本位の心は現象界に執着を強く持っているため、現象界からなかなか離れることが出来ないからです。反対に執着が少なく、人々に調和をもたらした人達は、現象界から遠く離れた高い世界で生活し、愛と調和の自由な毎日をすごすようになります。つまり、実在界とは三次元にいうと、地表から宇宙大にひろがった大宇宙の空間の中であって、地表に近ければ近いほど苦しみが多いということになります。物理的な位置づけとしてはこういうことが言えるでしょう。ブッタの天上界の住まいはインドの上空に、またイエス様の住まいは、イスラエルの上空にあります。

あの世界（実在界）

この世界は、現象界と非常によく似ています。生活の様式、住む環境、人と人との交際など...。地上と違う点は、経済は物々交換であり、勤労に対する報酬がキチンと決められ、働かないで徒食するということはありません。ものの考え方についてみると、霊界の下位は損得の計算がやはりハッキリしており、そういう人達の集団によって社会生活が営まれています。長い生活の過程には、多少のトラブルはありますが、大事に至ることはありません。しかし、もしこの世界の秩序を乱そうとする人があれば、その人はいつの間にか、幽界に転落してしまいます。この世界の意識に調和されないのですから、異端者はこの世界に住むことが出来ません。逆に損得の感情に寛容さが加わり、奉仕の心が芽生えると、一段階上の界に上がります。霊界までは自己中心的要素が強く働きますが、上に上がるにしたがって、自己中心の度合いが希薄になってきます。このように、霊界一つとっても、その階層は、幾層にも分かれ、上に進むほど、損得の感情・価値の標準は、物質的なものから精神的なものに変わってゆきます。

「死のないあの世界」

この世界の現象界と違い、あの世界では死はないのです。あの世界の修羅界や餓鬼界では、殺されても間もなく再生し、同じ修羅界、餓鬼界で苦しみます。本人が悟るまでその世界にとどまります。あの世界は実在界といって、永遠に消えてなくなる世界だからです。この世界は諸行無常というように、時間がたつとすべて大気や土に同化していきます。私達が住んでいる地球も、ある時間が経つと大宇宙のエネルギーと化してしまいます。しかし、実在界、あの世界ではそういうことはありません。この世界は病気で苦しければ、麻酔薬で眠ることが出来、その苦しみから一時解放されることが出来ます。ところが、あの世界はそうはいかず、その苦しみから逃れるためには、苦しみの原因を取り除くしかありません。苦界からの解放は、苦界に陥った原因を正さなければならないのです。魂の死は永遠にめぐってきませんから、生きるための調和をはからなければなりません。死を称して永眠といわ

れますが、残念なことに永眠などということは絶対にはないのです。



人間は、この実在界と現象界を行ったり来たりして生活しています。それは一つは魂の進化のためであり、もう一つは神の意思を具現することにあります。この二つの目的を果たすために、現象界に出てきて実在界で学んだことのおさらいをします。いふならば、この世は試験場です。試験に合格すれば、あの世に帰った時、帰る前の位置よりも、上段階に行けます。もしも不合格に終われば、この世に出てくる位置に戻り、もう一度現象界（この世）でやり直しをします。こうした繰り返しを続けることによって、人間の魂は向上してゆくのです。人間は、神仏の子ですから、魂の向上の過程は至上命令です。逃れるわけにはゆきません。その証拠に、人間はだれしも己の幸福を追求してやみません。己の幸福を追求してやまない衝動があります。また、こうした衝動があるからこそ、人間には夢が生じ、行為が生まれてくるのです。実在界（あの世）は、いわば心の世界、であり、現象界（この世）は心と物質の世界です。心の世界とは、各人の光子量によって作られた世界であり、光子量が異なれば、より上段階へと望んでもそこへは行けないという世界です。ところが、現象界はどうかといえ、光子量に比例した環境を、それぞれの家庭なり、一社会において、実在界と同じように作っていますが、己が望めば、そうした家庭なり、社会を見聞することが出来ます。いふならばこの地上界は、天国も地獄もいっしょくたになって同居しています。現世というところは、そのように、己の見聞を広め、魂の向上をはかるにおいて、またとない場所なのです。この地上界では、Aという人には、より魂を向上するための修行の場であり、Bという人には、前世でやり残した修行の場となりそれぞれ修行します。ところが、大抵の場合は、同じ場所で円運動を描く者が多いのです。すなわち、Bのような人達です。Aのような円運動は向上発展を意味する人々です。その数は極めて少ないのであります。魂の向上とは、心の安らぎであり、客観的には、とらわれの少ない精神状態であります。心の安らぎは、深まれば深まるほど、この地上は調和されてくるのであります。

苦しい時の神だのみ。これは煩悩にふりまわされた人間が、最後に求めるものは、己自身の魂のふるさとであり、ふるさとこそ、救いの手を差し伸べてくれるもう一人の自分自身であるということ、無意識のうちに知っているからにほかなりません。助けを求める自分と、救いの側に立つ自分は、ともに一つですが、救いの側に立っている自分は、潜在意識層の守護・指導霊であります。本当に、その人が煩悩にふりまわされた自分を反省し、どうぞ助けて下さいと祈った時は、潜在意識層の守護・指導霊が救ってくれます。守護・指導霊に力がない場合は、より次元の高い天使が慈悲と愛の手を差し伸べてくれます。このように、「祈り」というものは、自分自身の魂のふるさとを思い起こす想念であります。同時に、反省という、自分を改めて見直す立場に立った「祈り」でないと、本当はあまり意味がないし、救いにはならないということでもあります。苦しいから助けてくれ、というだけでは、愛の手は差し伸べられません。なぜかといいますと、今の自分の運命は、自分自身で作り出したものだからです。それは、他の誰の責任でもありません。自分自身の責任だからです。人間は神の子であり、神の子に反した行為は、その分量だけ償うことが神の子としての摂理です。反省し、懺悔して、祈る時に、神仏は慈悲と愛を与えてくれます。正法の祈りは、神の子の自覚にもとづいた祈りで行為（実践）するというのが祈りの真意なのです。他力は行為を棚上げして、神仏の力にすがってゆくものです。

「地獄から現世に生まれることはできない」

この現象界に生まれてくる人類は、何百年も、また千年、二千年も実在界で修行して、仏性、神性を悟っている人々以外、肉体を持つことはできない。いわんや、地獄界の住人がこの現象界に生まれることなど、とてもできない。

「地獄界」

迷える霊は、生きた人間に左右され、彼等の多くは生前、地上に執着を持ち、あの世に帰っても地上に思いを寄せており、俗に成仏できないでいる。成仏できなければ、地上の人間に頼らざるを得ない。ところが、頼られる人間が未熟であれば、あの世の霊はいつまでも迷いを解消することができないであろう。地上生命のエネルギー源は、太陽であるが、あの世では霊太陽であり、神の光だ。しかし、彼等の世界は暗黒なので、地上の人間を媒体としなければ、地獄界を形成し得るエネルギーが確保出来ない。地獄界のエネルギーは、人間の心から発する悪の思いである。自己保存のエゴのエネルギーが彼等の生命源である。このように、地上に悪がはびれば、地獄界はいよいよ賑やかとなり、地上はますます悪くなるのである。こうした意味からも、死者の霊を諭すことより、地上の人間の悟りが大事となろう。

釈迦は反省、中道の正法にめざめて二十一日目に悟り、実在界に招かれて、法話をしますが、二十一というのは、あの世の定めであって死者の霊の場合も、二十一日間は、この地上にいて、自由行動が出来る仕組みになっています。したがって、二十一日間は死者の魂は家の棟にとどまることが出来るのです。しかし、どんなに現象界に執着を持った霊でも、それ以上はこの地上界にとどまることが出来ません。二十一日というのは、地上にとどまる最大限の日数であり、悟った霊ならば、一時間も地上にいません。そのままスーッと次元の違った世界に帰ってゆきます。死者が地上に執着を持ち、二十一日を過ぎても地上にいる場合があります。これらは自縛霊として、その土地、場所にいるのです。行動の自由はありません。憑依（ひょうい）は、その場所に近づくことによって行なわれます。自縛霊は、その場所に常時いるかということそうではありません。なお悟った霊はどうかというと、行動の自由がありますが、上段階に行けば行くほどその行動範囲は広がります。

現象界はなぜできたか。それは神の意の具体化のためなのです。

Home

八百万神と日本の神道でいっているのは、守護霊（魂の兄弟、過去世）のことを言っているのです。

一本体と五分身

ここで人間の生命、意識のグループについて触れておきましょう。

人間は決して、孤独ではありません。本体を中心として、五人の分身から成り立っています。物質の構造と

同じです。ちょうどそれは、核と、陰外電子の関係です。もしも陰外電子がなく、核だけであれば、その核は崩壊します。物質が物質としてその生命を維持するには、核と陰外電子の相互依存の関係がなければなりません。人間の場合は本体が一、分身が五に分かれています。これには次のような理由があります。大宇宙は、光（神の意識）に満ちており、光には熱エネルギーが伴います。熱は電気を生み、電気は磁気を、磁力は重力を生んでゆきます。大宇宙が大宇宙としての生命を営み続けているというのも、大宇宙という本体と、光、熱、電気、磁気、重力の五つのエネルギーの相互作用があるからです。人間を称して、小宇宙といわれます。また、人間の姿が神の体に似せて作られているということは、大宇宙の組織と全く同様に作られているという意味なのです。このように、一個の人間は、同一生命グループの六人が、本体（核）を中心にして五分身（陰外電子）から出来ており、一人づつかわるがわる現象界に出て修行します。そうして、一人が現象界に出ている場合は、他の五人は実在界に残り生活しています。実在界の五人のうち、その一人が**守護霊**となって、現象界に出ている一人を守り続けています。**指導霊**というのは、こうした生命グループに関連した先輩、あるいは友人がなります。魂が上段階に進みますと、守護霊が指導霊となったり、指導霊が守護霊に回ったりします。

こうして守護・指導霊は、現象界で表面意識の一〇パーセントで修行している者の潜在意識層の九〇パーセントの領域に絶えず入って、その人を守り、指導しています。一〇パーセントの表面意識で反省する時は、九〇パーセントの潜在意識に至る守護・指導霊が、その人の肉体に入って、その反省の度合いに応じて数えてゆきます。たとえば人を怒ったとします。あるいは、心の中で怒りの想念を持ったとします。その時、その人がただちに反省して、これはいけない、人を憎んだり、怒るということは、争いの種を自分の心に植えつけるばかりか、さらに相手の反発心をあおることになる。そこで、こういうことは二度とすまい、と考えたとします。こうした場合は、守護霊がその人の肉体に波動を送り、あたかもその人自身が自分で考えたような形で教えていきます。反省の度合いがさらに進み、怒りや憎しみという想念が、いったいどこからくるのだろう。それは結局のところ、自分を守ろうという自分をかばうところの自己保存の現われであり、自己優先、保身の感情であって、自分と他人を別々に考えるところに、そもそもの原因があるとして、それはあっさり捨てるべきものなのだ、と思い至るならば、その時は守護・指導霊がその人に働きかけているといえるわけです。もっとも反省ばかりしているのもどうかと思います。一日中反省の繰り返しでは、今度は日常生活がおろそかになり、心の小さい人間にもなってしまいます。そこで、反省も、焦点をしぼって行ない、あまり細かいことにこだわらないようにしたいものです。

自殺者や性の乱脈が、福祉社会の国家に多く見られるというのも、**義務**とか**献身**といった高度の価値感、意識の目覚めがないために起こるようです。ともあれ、現代の意識の状態において、欲望と発展ということを切り離して考えることは、確かに困難だと思います。そこでまず大事なことは、足ることを知った生活、助け合う日常を送ることです。節度は調和を生み、調和はより大きな発展をもたらすからです。

四十九日の由来と死者の供養

○死んだ人の魂（霊）が家の棟を離れない期間は、**二十一日間**というのがあの世の仕組みである。二十一日を過ぎると、どんなにこの地上に執着を持っていてもあの世の収容所へ行かなければならない。残りの**二十八日間**に死者は生前の魂の状態、心と行ないによって、天上界へ行くか地獄界へ行くかが決まる。だから、四十九日間は、死者が生前大事にしていた金銭財宝を処分したり、財産争いをしたり等の、あの世へ行った人の魂がゆさぶられるような行動をとると、その地上の人によって、死んだ人の霊がゆさぶられ、一度はあの世の定住地へ行っても、すぐ地上の執着を持っていた場に引き戻され、自地）縛霊となって、生きている人々の間に、いろいろな現象を引き起こす。死者が金銭や物質に執着が深かったその度合いによって、事故や災難を引き起こしたりする。葬式に行った帰りに交通事故を起こすのはその一例であり、**四十九日間は静かにしている方がよい**。このような訳で、四十九日まで供養するのは正しいが、それ以上の供養は意味がない。後は、残された人達が調和し、明るい生活を築くことによって供養はなされる。百カ日、一周忌、三周忌は儒教の伝統によって中国で作られたものであり、百カ日、一周忌、三周忌、七年忌、十三年忌、三十三年忌、五十年忌の年忌供養を決めたのは、江戸時代、それまでは寺の経済が豊かであるからということで、徳川幕府は寺領を没収した。寺領を召し上げられて、収入の少なくなった分を取り戻す手段として、死後の年忌供養が始まったのである。習慣的に先祖供養がなされているにすぎないというのが現状である。

イエス・キリストは、肉類も結構食べたし、酒も強かったようです。

釈迦も、食べ物にこだわらず、出されたものは何でも食べたものです。

昭和四十八年三月に、高橋信次先生の教えを受けるようになってわかったことは、現在のキリスト教会で説かれていることは、キリストが説かれたそのままの教えではなくて、パウロが説いたパウロ教であるということでした。高橋先生は、「キリストが説いたのも、釈迦が説いたと同じ正法なのである」といっていられた。

釈迦は、妻子を捨て、王子の座を投げ出し出家しましたが、この時代は、戦争と貧困、支配者と被支配者、武力と国家、邪宗の横行など、およそ人倫の道は地に落ち、支配者以外は動物以下の扱いを受けた時代で、今日とは、その背景がまるで違っていました。悟りを開いた後において、釈迦は、在家仏教を大いに憚（しょうよう・勧めること）し、いたずらに、現実逃避のための出家を戒（いさ）めました。人間の目的は、現実社会の調和にあります。生活の中に悟りがあります。釈迦は、その道を多くの人々に教えるために、あえて出家しました。人類救済のためだったのです。イエスにしてもそうです。大工の家に生まれ、はじめは大工をしながら愛を説きました。しかし、やがて悪魔から人々を救うために、伝道一筋に、その生涯を投げ出し、聖書に見られるような数多くの奇跡を残し、世を去ったのです。いたずらに、殿堂に莫大な金をかけ、威厳を誇らなくとも、人間それ自身の心の尊厳性こそ知るべきでありましょう。釈迦の時代、イエスの生存当時に、はたして現代の仏閣や教会というものが存在していたでしょうか。

この地球の人類の指導の役目は、アガシャ系の指導霊団が担当しているのであり、その指導霊団の中心が、インドで釈迦と呼ばれた方であり、高橋信次先生なのでありますから、私達の心の波長は、高橋信次先生に合わせることを通して、大宇宙大神霊に通ずることになるわけです。私が毎朝やっております禅定はその禅定であります。まず座ると、神と高橋信次先生に感謝の礼拝をしてから禅定に入ることにしております。同時に、私達の霊の修行に協力してくれる万生万物に、先祖や廻りの人々にも感謝の礼拝をいたします。園頭広周師

人間をはじめ、動物にしる、植物にしる、生命を持ったものは、すべて三世の流転、すなわち転生を輪廻してゆくものです。停止は死を意味しますが、死は生命体に与えられておりません。宇宙が永遠の活動をやめないように、人間の生命エネルギーもやむことを知らないのです。これは動物、植物にしても同じことです。ただ人間と違うことは、彼らは選択の自由、創造の自由が与えられていないだけに、人間ほど苦楽を感じません。それだけに進歩も遅くなります。

人の魂は転生輪廻を重ねますが、単体（本体あるいは分身）の出生は千年、二千年に一度の機会しかありません。そして現象界は、またとない学習の場であり、調和を目的として生きている以上は、学習の場を最大限に生かすことの意義を理解すべきでしょう。

生命の輪廻、つまり、魂、意識が輪廻しているならば、人間はその過去世を思い出せるはずだ。

過去の言葉を語る…。この事実は、他の宗教にはみられぬ現象であろうと思います。そればかりか、神理にふれることにより、幾多の奇跡が相次いで起こっています。病氣回復、事業の好転、不和だった家庭内が明るくなったなど、その数は枚挙にいとまがありません。本来、こうした現象利益というものは、神理に適った生活を送るならば、一つの**随伴現象**として、具体化されるものです。なぜかといいますと、釈迦の正法は、宇宙の法則に適っているからです。人の一念は岩をも通すで、その一念が正しく使われれば、その一念力は、正しくその人に返ってきます。もしも、正しくない一念力を燃せば、同様にその人に返り、その人の心身、環境を悪くすることになります。正しいか、正しくないかは、ウソのつけない自分の心に問うてみることです。自分の心は中道であり、公平ですから、良い悪いは、すぐ答えが出るはずで。

動物霊信仰について

○動物霊信仰でも、奇蹟はあるでしょう。彼等にもそれぐらいのことは出来ます。ところが、動物霊は、しょせん動物であり、神理は説けません。ヘビの獰猛さ、キツネのずるさを想像してみてください。ヘビやキツネに、慈悲とか愛がわかりますか。まことしやかに人間をだましますが、もともと、本能のままに生かされているものですから、こうしたものが人間に憑くと、いつときは利益を与えても、ある程度時間がたつと本性を現わし、人間を食いものにしていけます。熱心な信者ほど病気をしたり、家の中がうまくゆかなかつたりするのも、そのためです。一般的にいて、教団の教祖、熱心な信者の状態をよく観察することです。動物霊が憑いている場合は、顔色が悪い、病気が絶えない、人を非難する、人をおどかす、自己本位、エリート意識が強い、比較の観念にとらわれる、我が強い、感情的、欲望的、愛がない、計算高い、無理を言う、などです。また、教団によっては動物霊以外に、阿修羅が憑く場合もあります。この時は、戦闘的、排他的、一本調子、他をかえりみない、などです。いずれも、言うことはふるっています。けれども、日々のその人達の言葉、行動を観察すれば、おのずとハッキリ認識されてまいります。また、霊能者といわれる人達は、いろいろなものを当てたり、予言をしますが、こういう場合も、動物霊が背後に憑いている場合が多いのです。動物霊は、現象界に非常に執着を持っていますから、神理が曖昧だったり、あるいは全然説けず、占いに熱中している場合など、すべて**動物霊の仕業**とみて差し支えありません。何々の神、何々の命(みこと)というようなことをしゃべるなら、これは間違いなく動物霊です。神仏そのものが、人間の体に移ることはありません。なぜなら、神仏は法そのものであり、慈悲と愛だからです。如来、菩薩といわれる方々は、そうした神仏の法を説くために、この地上に神の使者として生をうけたのですから、光の天使であっても、神仏そのものではありません。この辺のことが、これまで混同されていたようです。動物霊や魔王でも、奇蹟を起こしたり、病気を治したりしますが、これと、神理に適った生活の随伴現象として起こってくる奇蹟とは、おのずとその内容を異にしており、第一、その永続性、心身の安らぎという点で、まったく異質であることを知っていただきたいと思います。



食欲や情欲は、本能と感情が作用する場合に起こってくるものだ。たとえ、片思いであっても、私達の心の中では、人間本来の神から与えられている本能と感情が燃え立ち、心の中にざわめきが起こるのである。それが、肉体的にも現象となって現われてくるのだ。思っただけでも、すぐに肉体に現われるし、心が燃えるのである。この時、私達の体は**ピンクの光**でおおわれる。後光の色が変化するので、**怒りの時は、血の色**のような、炎のような後光が人々の身体から出ている。このような現象の一切は、私達の意識に記録されているのである。私達は、それゆえに、足ることを知って、本能と感情にブレーキをかけなくてはならないだろう。

本体一と分身五の理由は、この大宇宙が、神の大意識を母体に熱、光、電気、磁気、重力という五つのエレメントから出来ていますので、人間の生命体もこれに合わせて、本体一（大意識）分身五（五つのエレメント）の組み合わせになっているのです。人間を称して、小宇宙というのも、生命の成立が、このように大宇宙の構成と同じように出来ているからです。

私達の心は、肉体舟の船頭である意識の中心で、船頭の頭脳といったら良いだろう。まず、私達が嬉しい時には感激し、また悲しい時に胸にこみ上げてくるものがあるだろう。こみ上げてきてから、私達の眼に涙が出てくるのである。これは、心の感情の領域が、心の中心にある想念や智性や理性の領域の作用によって、肉体的現象となるものなのである。怒る心が出てくると、感情がふくらみ、顔色が青くなったり、赤くなったり、また、こぶしがふるえたり、身体が固くなったりするだろう。つまり、肉体舟にも、船頭の心の動きがそのまま現われてくるのである。船頭が感情的に舟をこぐと、舟はどんなことになるか。進行方向を間違えたりすることもあるだろう。つまりそれは、私達の感情の乱れが、肉体的不調和を作り出す原因になるからである。正しい判断が出来なくなってしまうのだ。感情が静まらない限り、正しく語ることも聞くことも、見ることも念じることも出来ないのである。感情的になるということは、自分に都合の悪い言葉や自分に都合の悪いものを見たりした場合、爆発することなのである。実際そんな人々が多いだろう。これは中道ではない。自己保存の心が強いから、そうなるのだ。相手の言うことを、第三者の立場で冷静に聞いたり見たりしたなら、正しい判断出来るはずだ。もし、相手の誤解によってできた感情のもつれであるならば、その誤解をとくことが大事だし、何人かの人々を経て伝わってきたものかどうか、正しく納得できるまで判断することが大事であろう。相手が感情的に怒りをぶつけてきても、冷静な判断で正しく聞き、正しく語らなくてはならない。もし、相手の感情的言動に惑わされて、自分自身も感情的言動を使えば、相手の毒を食べたことになるだろう。それは、自らの心に暗い曇りを作り、自らの霊囲気を不調和にしてしまうということだ。この毒は、心身に回ってしまう。そして、怒りや苦しみとなって現われる。私達のグループの者は、過去世において親しかった人々と、たとえ何千年前の友人であっても、当時の言葉で語り合える。そして感激に胸がつまる、という体験を持つ。

人が亡くなると、あの世とこの世の境界で質問されること

光の生命が出現すると非常に強烈な印象を与える。（このことはこの世でも、人格霊格の高い人の近くへ行くと、日頃の心の悩みが消えてしまっていて、非常に心が安らかになるという現象と同じで、あの世は心だけになっているから、その感ずる度合いは肉体を持っているこの世の場合よりも何倍も強いのである）

光の生命（霊）は次のように問いかける

一、あなたは死ぬ覚悟ができていますか。

一、あなたは死に対する心の用意がありますか。

（仏教で引導を渡すことが大事だとされるのは、必ずこのことを聞かれるからである。死ぬ覚悟がなく、まして、死にたくないという執着を持って死んだ人にとっては、この質問は苦しみとなる。これにはっきりと答えられない人を「中有に迷う」というのである）

一、あなたは一生のうちに、わたしに見せられるような何かをやってきましたか。

一、あなたは生きていた時に、自分でこれはいいことをしたなという自分で満足できるなにかをやってきましたか。

（自分のことだけしか考えてこなかった利己主義者は、この質問には答えられない。利己主義者がこの世でも軽蔑されるのは、人は人を愛するために生まれてきているからである）

私達はこの質問に正しく答えられるような生活をして、あの世へ帰らなければいけないのである。死ねば灰になって、おしまいだと考えて生活する人達は、死んでも生きている霊があることに目覚めるまでに永い時間がか

かるのである。

園頭広周

霊界通信の原理

我々は三次元の世界に住んでいる。映画等のスクリーンやテレビの画面は、二次元の世界と言われる。二次元の映画やテレビの画面は、三次元の我々は自由に見ることが出来る。だが、スクリーンやテレビの画面に映っている人に、通信する（話しかける）ことは出来ない。これと同じように、四次元の世界（あの世）から三次元（この世）の世界を見ることは簡単に出来る。だが、三次元の人から四次元からの通信を、心の調和度によって受信できても、三次元（現象界）から四次元への直接通信ということは、三次元の霊囲気が精妙にならない限り、不可能に近いと言えるのである。

この現象界のどこへでも、希望する場所へ、光子体の肉体舟で行き、見てくることも出来るのである。現在の肉体舟は、もちろんそこに行くことは出来ないが、光子体なら行けるのである。この肉体舟と光子体の舟とは、霊子線ともいふべき、丁度、母と子の「へその緒」のようなもので結ばれている。この霊子線は、無限に伸び縮みをする能力を持っている。そして、光子体にも、私達の魂・意識は乗っているのだから、行った先の移り変わる現象がはっきりととらえられるのである。心の眼で見ると、**光も粒子だということが解るし、声も粒子だといえよう**。声の波動も、媒体を通してみると、粒子が波になって動いていることが解るのだ。心の眼で見ると、人間の内臓もはっきりと解り、欠陥もはっきりと解ってしまう。なぜなら、次元を超えて見るから、心の眼は、諸現象を正しく判断出来るのである。また、心の状態や、考えていることは意識に記録され、テープのように全部記録されるのである。そして、それは残るのだ。

我欲の強い人々は、**赤い**文字で記録されているし、中道を逸した行動や想念も赤字で記されているのだ。恨み、妬み、怒り、そしりなど、自己保存、自我我欲の思いなど、すべて意識に残ってしまうのである。とりわけ慈悲深い思いやりの心や行為は、**黄金色**の文字で記録されている。中道の生活をしていると、一般の**黒字**で記入されているものだ。もし**恋愛**をしている場合などは、相手の名前が、幾条にも記録されている。悩みの多い人々の意識は、暗い霊囲気に包まれ、非常に重い。中道を歩む、偏りのない人々の心は、光明に満ちており、非常に軽い。赤字で記録されている人々は、自ら暗い想念を作り出しているのである。つまり、一秒一秒の本当の心と行ないが、すべて私達の意識の中に残って行くということだ。そうならないためには、心の中に暗い想念を作らない生活が大切である。もしそれを作り出してしまった時には、**中道という心の物差し**で、自分の思ったこと、行なったことを、よく反省することが大事である。

人間の価値は、その人から地位、名誉を差し引いたものである。

自分に厳しく、人には寛容の態度を忘れてはならない。

悟りとは、執着から離れた心です。

権利を主張する者は、まず義務を果たせ。

地位・名誉

学識や地位・名誉や優劣の感情に心が揺れる間は、人は苦界の淵から抜け出すことは出来ない。

現代は物質文明の世であります。人はあの世を忘れ一寸先が闇であります。五里霧中で目的も分からぬマラソン競走に精を出しているのが現代人です。

Home



「幸福になるための真理の言魂」

人間は、誰一人として幸福を願わないものはいない。「私はどうして、こんなに不幸なのだろう」と嘆く人がいる。誰もが望むことでありながら、不幸に泣く人も多い。不幸になるのは、そうなる理由が必ずある。ここでは幸福になるための真理の「ことば」を羅列し、皆さんに再確認して欲しいのである。不幸なるがゆえに、現世利益を説く宗教に走った人もいたはず。誤ったことを説く宗教は、不幸な人から布施という名の金を集める。正法を説く指導者は、幸福になって行く人達の後姿を拝むのである。それでは、園頭広周師の神理の言魂を列記しよう。

1．運命をよくしたいと思って、いくら祈ってもよくならなかったという人は、まず、生まれた環境に感謝していたかを反省することである。もしそうでなかったら、まずじっくりと生まれた環境に感謝することである。

2．「幸福になりたい」と思う人は幸福にはなれません。「私は幸福である」「すべて調和している」と想念しつつ「今を生きる」ことである。

3．胸にいくら十字をきっても、合掌をしても救いにはならないのです。

4．人類の不幸、争いという結果が現われてくるような宗教、思想、哲学はすべて間違いである。

5．思いや、考えが、どんなに立派でも、それを実現するための順序、方法が間違っていると、それは実現しないのです。

6 . 不幸であるという人達は観念的に夢を追っている。

7 . 想念は正しく使わないと幸福にはなりません。

8 . 大いなる夢を描けとよく言われるが、現実とならない観念的な夢を描かせることは、人々の心のエネルギーを浪費させる。

9 . あなたが幸福になるためには、現実逃避をなくして、現実生活の上に調和を実現しなければならないのです。

10 . 人生において大事なものは努力である。上達し成功することではない。たとえ上達しなくても、成功しなくても、その人がその一つのことにとやまず努力を続けてゆくなれば、それでその人の人生は成功したのである。だから、その努力の如何を見ずに、ただ結果だけによって評価し採点することはいけないのである。

11 . 前世でつくった業が、全部そのまま今世に生じてくるのではない。人間は死んだ時、自分がどのように生きてきたかをすべて反省させられる。この反省によって運命の修正が行なわれ、つくった業がその通りに現われるということはなくなるのである。多くの罪は反省によって消えるが、重大な問題は、もう一度同じ条件で、あるいは全く反対の条件で再演した方が良いのかどうかの可否を、自分の魂が決定する。すると、前世の業を修正するための事件が起こるということになる。予期しない病気、不幸というものは、それも自分が決めて生まれてきたものがあるのである。そこで、どうしてそうなったかをよく反省して、それまでの心のあり方を変えると運命が修正されて好転してくるということになるのである。

12 . **一〇〇%確実に運命を良くする方法がある。それは性格を変えることである。**心が変わるといって、心を変えようとしてもどうして心を変えたらいいのか、それがわからないという人がいる。心を変えるのはむずかしいという人がいる。そんなにむずかしく心を変えようとする必要はない。性格を変えるのである。気の小さい人は大きく、怒り易い人はにこやかに、せかせかした人はのんびりと、いつも自分本位であった人は相手の立場を考えて...と。そのような性格を変えるテストの**最適の場が家庭**である。家族に対しての思いやりから変えてみることである。すると、職場その他の対人関係もうまくゆくようになるし、自然と運命は変わってゆくのである。その運命を変えようと思えば禅定、瞑想をやることである。釈迦は正定（しょうじょう）と言われた。

13 . 現在のあなたは、過去の輪廻転生の総決算である。例え現状が不満足であろうとも、まぎれもなくそれが「あなた」なのです。運命を良くしようと思うならば、たとえ嫌だと思っている自分の人生であっても、まずそれを受け入れて、その上でどうするかという事を考えなければいけない。自分の現在の人生を嫌ったままで、逃避するとすべて失敗に終わるのである。我々は因縁の法則の枠を出ることは出来ない。因縁の法則から逃避しようとせずに、因縁の法則を上手にコントロールすることである。

14 . 自分は曲がったことは絶対にしない。言うこともやることもいつも正しいのであるが、自分が正しいこと

をしているだけに、人が少しでも間違っただけをしようと、それだけに「あいつも、こいつもけしからん」と言って心を暗くし、心の中で裁いてばかりいて、あんないい人がどうして病気ばかり、運が悪いのだろうという人がある。

15 . 「運命と幸・不幸」

人間の運命を支配するのものは、表面の現在意識よりも、奥底の潜在意識の方が強い。表面的にはその人がどんなに立派に見えていても、潜在意識すなわち心の奥底で、人を鋭く切り裁いて批判したり、人を抹殺しようと思ったりすると、「類は類をもって集まる」という心の法則によって、殺意を持っている人と波長が合って事故に遭うということになります。自分が正しいという正義感の強い人がなぜ不運になるかということ、自分の正しさを主張する余りに、自分に反対する人を憎んだり、恨んだり、あるいは抹殺しようと思ったりするからである。あんなに立派な正しい人がどうして運が悪いのかと疑問を持っている人は多いと思いますが、それは潜在意識がどう思うかということが、強く運命に影響してくるのです。ですから、自分が正しい場合であっても、相手を憎めば自分がやられる（反作用）のですから、相手を憎まずに、自分の心を愛によって満たして、相手が幸せになることを祈らなければならないという理由がここにあります。

十五才以下の子供の運命は、親によって支配されますから、子供には原因がなくても、親の運命の巻き添えを喰うことになり、子供を愛する親は子供を不幸にしないためにも、明るい善い心を持たなければならないのです。そういう事件に遭遇しても、巻き添えにならずに助かる子供達もいる。そういう子供は守護霊、指導霊に強く守られている特別の使命を持って生まれてきた子供ですから、大事に育てなければならないのである。ともかく、自分の心の中に不幸になる原因がなければ、我々は絶対に不幸に遭うことはないのである。昔から「人を呪わば穴二つ」という。これは、人が不幸になることを心で思えば、その念を受けて相手も不幸になるが、自分も不幸になるということである。

だから、自分が不幸にならずに幸福になりたかったら、この反対をすればいいのである。自分が幸福になりたかったら、人が幸福になることを祈ればよいのである。「あんなひどいことをした人が、どうして幸せになることを祈れるか」と言われるかも知れない。確かにそういう人のために祈ることはいまましいし、馬鹿らしい気がする。しかし、人が不幸になることを祈って、自分だけが幸福になることは絶対にないのが法則なのであるから、自分が幸福になりたかったら、どんな人の幸せでも祈らなければならないのである。ということは、我々が神の心になりきることである。太陽は、人が太陽に向かっていくら「太陽の馬鹿野郎、お前の世話なんかになるものか」という人があったとしても、それには関係なく照らし続けるのである。それと同じように、我々も太陽の心になって、すべての人々の幸せを祈り続けることである。そういう心になることによって、我々の魂は向上してゆくのであり、また、幸せになってゆくのである。

16 . ガラス板の上に細かい砂をおいて、ヴァイオリンの弦の一端を当て音楽にならない雑音を奏でると、砂は乱雑に散るばかりであるが、リズムのある幽玄な音楽を奏すると、砂はきれいな幾何学模様を描き出す。雑音は音階の秩序が狂っているのであり、音楽は、音階に秩序があり、一定のリズムを持っているのである。病気・不幸だという人は、その人の心が雑音ばかりを奏でている人であり、幸福で健康だという人は、心が秩序ある音楽を奏でている人である。不調和は雑音であり、調和はリズムである。魂を磨き、人格を向上するとは、ますます精妙な心の音楽を奏することが出来るようになることである。あなたは心でどのような音楽を奏してきたか、雑音ばかりを奏してこなかったか、それを反省しなければいけないのである。心の最も高き階調の奏者、それが如来であり、メシアである。心の高い階調の持ち主が語る言葉には、必ず音楽的な心よいひびきがあって、聞いている人々の心をさわやかにするが、雑音ばかりを奏でている人の話には、リズム感がなく、聞いていてスッキリしない不愉快さが残るのである。だから話というものは、きれいな言葉を並べたからといって、それだけでいい話が出来るとはならないのである。禅定（ぜんじょう）をしていると、ふと天上界の音楽を聞くことがある。そういう時は時間の経つのを忘れる。

17 . 自分の失敗や罪を隠そうとしてはならない。内なる神の生命を表現するという試験に失敗したということですから、成功するまで試みればよいのである。だから、反省はしなければいけないが、いつまでもその罪を嘆く必要はないのである。倒れても起き上がれ、それでも倒れたらまた起き上がれ、あなたはついにはそのこと

に成功するのである。だから、失敗や苦痛は、我々が自分を訓練し、自己を発展させるための指針を与えてくれるもので、我々の魂を向上させる一つの教育手段なのであって、我々の心でどうにもならない失敗や苦痛というものは絶対にはないのである。だから苦痛が起こってきたら、また一段と向上するチャンスを与えられたと、感謝しなければならないのである。



男・女の神理

○アメリカやソ連に同性愛が多いのは、女が強すぎるからである。

○尊敬し愛している者同志が、一緒に食事をするのは、尊敬し愛するあまりに、相手と一体になりたい、相手に同化したいという心の現われである。

○夫婦の性生活は、お互いが愛を確認しあい、愛を向上するための行事であり、神が陰陽に分かれ、再び陰陽が結合するというこの行為は、天地創造の原理が小宇宙である人間において実現する神聖なる行事である。

妻以外の女性との性行為に後ろめたい罪悪感が伴うのは、それは相手が、単に性欲を満足させるためだけの相手であり、お互いに愛を確認し合い、魂を向上し合うための相手ではなかったからである。浮気な男性も女性も、どんな相手と接しても、心の満足の得られなかった、霊の満足の得られなかった哀れな人達なのである。享楽の対象にすると罪悪感が伴うのである。

「性の四要素」

一、目的

性の結合を行なう目的は何か、夫婦愛を完成し、お互いに愛情を確かめ合うためなのか、それとも単なる性欲の満足のためか。

二、人

その人は正しい相手であるか。

三、時

為すべき時が大事である。人が働いている昼間から行なうことは正しいかどうか。

四、場所

行為には場所が必要であるが、為すべき場所であるかどうか。

単に欲望を満足させるために、為すべきでない相手と、為すべきでない時に、為すべきでない場所で行為するのは「悪」となる。

○男は遠心力であり、外へ外へと出て働くのが男の役割である。女は家庭にあって、外へ飛び出した男を内へ、家へと引き付ける求心力の役割をするのが天分である。男女同権、男女平等といって、女が家を飛び出して家庭を疎かにすると、家庭に歪みが生じてくる。

○人間の誕生は、意識界（実在界）という実在の宇宙に、まず姿を現わした。

○一夫一婦は神の計らい

○男性が外で働いて経済力を持つのは、それは神が男性に与えられた役割と使命であり、女性は家庭を守り、子供を産み育て、子供をどのように教育するかによって未来社会に貢献するのが、神が女性に与えられた役割と使命なのである。

「再婚」

夫をなくした妻は、夫に貞節を尽くしなさい。そうすれば子供達は順調に立派に成長するであろうとキリストは言われた。ということは、再婚して性の煩惱から抜け出して心を安らかにしてよいけれども、その代りに子供が清く育たないこともあるから注意しなさい、と。【キリスト】

「結婚」と「不倫な男女関係」 ...釈迦

結婚は「愛」を中心とすべきであり、階級、家柄、地位、学歴等を中心にしてはならない、と。また、釈迦は夫婦以外の不倫な男女関係について戒められた。

○愛とは、その人のためにどれだけ自分を投げ出せるかということ。

妻に対する夫の五つのあり方 ...釈迦

一、妻を尊敬する

二、軽蔑しない

三、道からはずれない

四、妻に権威を与える

家庭のこと、子育てについて等、家庭内のことはすべて妻にまかせる

五、装飾品を与える

夫に対する妻の五つのあり方 ...釈迦

一、仕事をよく処理する

家庭内のことはよく自主的に責任をもって処理する

夫が家庭のことについて心配することなく十分に活動できるように

二、身内の人達をよく待遇する

三、道をふみはずしてはならぬ

夫以外の男性と交わってはならない

夫以外の男性のことを、心の中で思ってもならない

四、集めた財産をよく守る

- 物は一年中で一番値下がりした時期を見て買い込む
- 季節になったら、種子を買ってきて自分で植える
- 食料品は自家製にする
- 家の中にあるものは無駄なく利用する
- 一日の収支の帳尻を合わせる
- 財産の額などを他人に洩らしてはならない

五、妻として、女として、為すべき事柄について巧みで勤勉である妻は夫から経済のすべてを委されるほど、夫から信頼されなければならない。そして、妻はその信頼に応えなければならない

玉耶教（釈迦）が教える善い妻と悪い妻

地獄へ堕ちる悪い妻

一、殺人者に等しい妻

こんな夫と結婚するのではなかったと、妻として為すべきこともせず、夫が家のことが心配で仕事に熱中できず夫がまじめに働こうとする力を阻害している妻

二、盗賊のような妻

夫が働いてきた財を、すべて奪い取ろうとする盗賊のような妻

三、支配者に似た妻

自らは贅沢で、怠惰で、粗暴で、口やかましく、勤勉な夫を支配し制圧する、支配者に似た妻

○死因は病気であるにしる、事故死にしる、夫が早死にして、早く未亡人になったという人は、夫の心を十分に生かしてきたかどうか反省してみることである。

天上界へ行ける善い妻

一、母のような妻

二、姉・妹のような妻

三、友人のような妻

四、奴婢のような妻

夫に叩かれ、脅かされても怒らず、悪心なく、夫に対して、忍び、怒ることなく従順である。このような妻は男にとって奴婢（ぬひ）のような妻と呼ばれる。忍辱（にんにく）の心。

夫からどのような仕打ちをされても、夫への愛を失わない妻は、子供を立派に育てて、子供が自分を幸せにしてくれる。それに反して夫に敵がい心、反抗心を持つ妻は、子供の教育に失敗して子供ゆえに泣かされることになる。

男と対等に仕事をし、男と同じような賃金をもらうという経済的な理由で、女が女らしくあることをやめようとすることによって、女は女自らの幸せを放棄してしまっている。男と能力を競い合うことによって、女は本当の安らかさは得られない。女の役割を捨てて、男と同じように外で働いて、収入を得なければならないという考え方では、女は絶対に幸福にはなれないのである。女の役割を放棄して、どんなに他の方法で幸福を追求しても、それらの方法では幸福感を感じることは出来ない。



キリスト教が教える夫婦の調和のあり方

○妻たる者は、すべての人々がキリストの教えに素直に従うと同じように、自分の夫を尊敬し、夫の言うことに従いなさい。夫は自分の身体を大事にすると同じように、自分を捨てて妻を愛しなさい。

○夫は妻に尽くし、妻もまたよく夫に尽くさなければならない。妻は自分の身体を支配する権利はない。妻の身体を支配する権利を持つのは夫である。このようにして、夫もまた自分の身体を支配する権利はない。夫の身体を支配する権利を持つのは妻である。男は女をよき人生のパートナーとして尊敬し、女の性を大事にしなければならない。女の性の前にひざまづく謙虚さを持たなければならない。

なぜ女は昔から長い髪を持つのを誇りとしてきたか。...キリスト教

男は神様に祈る時に、頭に被り物をかぶらずに、じかに、真っすぐに祈ってもよいが、女は神様に祈る時に、必ず被り物をかぶらなければならない。その被り物の象徴として長い髪を持つようになった。

（夫） 男の祈り

神 キリスト 男（短い髪を誇りとする）

（女） 妻の祈り

神 キリスト 夫 妻

妻は夫の生命を礼拝し、夫の生命を通して祈った時に妻の祈りは聞かれる。

妻が夫を軽蔑し、夫を尻に敷いて祈る祈りは聞かれない（女が髪を剪って短くする）

親と子の神理

○子供は、神を愛し信ずると同じような心で、両親の言うことに順え。そうすることにより、子たる者は幸福となり、寿命を全うすることができる。...キリスト教

○親は子供を愛し慈しみ、人として守らなければならない戒めを、親自らが実践して子供を育てなさい。そうすれば、みな幸福になるのである。...キリスト教

○年寄りを大事にし、親を大事にする国は絶対に滅びない。...釈迦

家庭の神理

○家庭とは、因縁によって親子・夫婦・兄弟姉妹となった者が、それぞれ神の子であることを自覚し、魂を磨いて向上していくための、神がつくられ計画された共通の生活の場所であって、家庭に帰るということは、神のふところに帰るのと同じであり、家庭を大事にすることは神を大事にすることであり、家庭を粗末にすることは神を粗末にすることである。

○子供が病気をしたり、怪我したり、死んだりした場合は、親自身が反省してこれまでの生き方を改めなければならないのである。

○親のために苦労させられる、親が早く死んで苦労したという人達がある。どうしてそういう親を選んで生まれてきたのであろうか。そういう人達は、前世において親を泣かせ、親に苦労をかけたのである。

○子供の親不孝に泣く親は、自分が前世で、また今世で親不孝して親を泣かせたことがあったのであることを反省しなければならない。子供に親不孝されてみて、はじめて前世で今世で自分が親不孝した時に、どんなに親が苦しんだか、その親と同じ苦しみを、今自分が味わう。親不幸の子供に泣いている親は、「こんな子供を持って」と憎まないで、「あれが前世または今生における自分の姿だったのだな」とよく教えてくれましたと感謝し、親自身の生活態度を改めてゆくと、子供は親不孝しなくなる。

○子供に恵まれない親は、前世でたくさんの子供を持って、その子供のために苦労をさせられたというので、「もう子供なんかいない方がよい」と心の中で思ったからである。

○子供を失い、子供がいないと、子供がいな寂しさをしみじみと体験させられる。すると、「やはり子供はあった方がよい、子供のいない生活はもうしたくない」と思う。そう思うことによって前世の生活を反省させられる。

○今生で子供を小さいうちに失くすのは夫婦の不調和が原因である。

○子供に恵まれないことを約束して生まれてくる人もあるのですから、それを人工的に妊娠することは、前世の業を反省することにならないから、魂の勉強、魂の向上をさまたげることになり、子供に恵まれない人は恵まれないままでよく、反省の結果の上に立って、養子にするか、あるいは他の人の子供のために尽くせばよい。

○親に似ぬ子は鬼子というが、そういう子供は特別の使命を持って生まれている場合が多い。

「子供の性教育」

「人は教育によってのみ、人となり得る」というのは性教育においても同じである。

- 一、宇宙創造の原理、天地陰陽の理
- 二、男の役割と女の役割
- 三、結婚の意義、夫婦生活の秩序
- 四、子供の誕生は神の計画と天上界の計画による

子供は親を反省させてくれるカガミ（鑑）だ！！

○人は教育、しつけによらなければ、良い人にはならない。生まれたままで放って置いたのでは一人前の人間にはならない。

○胎児の時に与えられた精神の影響は、その子供が思春期になると爆発的に吹き出すのである。

「思春期になってノイローゼになる子供」

母親は子供を産みたくなかった。流産することを願った。喜んで産んだ子供ではなかったので、どことなく愛情がわかなかった。その結果、子供はノイローゼになったり、暴力を振るうようになり、そのつけを親は支払わなければならない。

「破壊的な、捨てばちの母親から生まれた子供」

性的遊戯等の結果、妊娠を喜ばず、妊娠したために仕方なしに結婚し、罪の意識に悩みながら、ひそかに心の中で胎児の死を願っている母親。こういう母親から生まれる子供は、早産や体重の足らない発育の悪い赤ちゃんを生み、難産したりする。

「初恋の人を心ひそかに思っている母親、二重人格的な母親から生まれた子供」

初恋の人と結婚出来ずに別な男性と結婚した人が、ひそかに「あの初恋の人の子供であつたら、どんなに嬉しいことであろう」と思ったりして、周囲の人は子供が生まれることを喜んでいるのに、無意識に子供を生むことを拒否している母親。子供は二重人格的になり、胃腸の弱い子が生まれる。

「人間的に未成熟な母親から生まれた子供」

職業を持っていて、経済的にのみ関心が強く、母親となる心構えが充分に出来ていないのに妊娠して、いろいろな理由から子供を欲しがらない。生まれた子供は、感受性が鈍く無気力で、精神集中力がない。

「早産した子供は問題児となりやすい」

早産とは予定日の二カ月までを云うが、早産された子供は始終追い立てられているような傾向が強い。落ち着きがない、情緒不安定である。なぜ早産するかというと、妊娠したことを心から喜ばない感情があり、また出産に対する十分な心構え、知識がないために、大きな胎児を生むことに不安と恐怖を感じ、その心の負担と恐怖から早く離れたいという心が母親にあるからである。

「難産した子供は問題児になりやすい」

難産した子供は、精神分裂症、精神異常、暴力的、反社会的犯罪を犯し易い。妊娠したことに罪悪感を感じたり、生むことや、生んだ後のことについて疑心や不安を持ち、母親になることに十分な心構えがなかったりすると、生もうか生むまいか、生まなければならないが生みたくないという心が働いて、陣痛の時間が長くなり、子宮の収縮力が弱くなって難産することになる。



「非行・暴力・反抗」

調和されている家庭からは、ノイローゼも反抗児も出ない。反抗児は父親が極端に厳しいか、また極端に甘く、**父親の権威がない家庭**に出る。父親の権威のない家庭では、結局は母親が強いわけである。夫婦が不調和であってはいけない。特に母親が強くなってはいけない。

「ノイローゼ」

母親が性的感情を持って子供を見るということが原因。子供をそういう眼で見ないようにし、いかにして夫と調和するかを考え、夫を喜ばせるようにする。

「冷たい女」

初恋の男性を思い続けている女性。

父親にひどく愛された女の子。

「股関節脱臼」

親がこの家を飛び出したい、逃げ出したい、すぐ家を出る癖があると、ぴたっとはまっていなければならない子供の股関節がはずれる。

「聾啞者」

ああ、もうこんな人達とは口も聞きたくない、ものも言いたくないと強く思うと、耳の聞こえない口のきけない子供が生まれる。

「盲目者」

家庭環境のつらさ等から、見れば腹が立つ、悲しくなるからと、もう一切見ないと心に決めて、何があっても「ああ、見たくない見たくない」と全く無関心な態度を取る。

「小児麻痺」...古神道

不調和の原因がどちらにあるにせよ、妊娠中にその母親が、親とか夫とか、立てるべきものを立てない結果、子供の立つべき足が立たない形となって生まれてくる。

「白痴・精薄児」

夫を愛する心になれず、結婚したこと、妊娠したことを怨みに思っている時。怨み心の強弱によって胎児への影響も違う。

「てんかん」

人工受精児や、性に原因する夫婦の強い不信感

(日本では、現在人工受精児が二十万人いるというが、その半数が問題児になっているという。大酒のみやお酒の常習者の女性の生んだ子に「テンカン」の多いという統計が医学的に認められている。)

障害児と原因

障害児が生まれる原因の八〇パーセントは心の不調和であるが、二十パーセントは次の原因による。

一、ビールス感染(風疹・インフルエンザ・流行性耳下腺炎)

二、ペットの寄生虫の感染、トキソプラズマ

三、薬剤によるもの

黄体ホルモン・副腎皮質ホルモン・麻酔剤・鎮痛剤・精神安定剤

ビタミン剤の摂り過ぎ

四、梅毒

五、酸素欠乏・心配事・悩み・怒り・悲しみ・怨み・嫉妬・恐怖等により、呼吸が浅くなって血液の浄化、循環がうまくゆかない。

六、栄養不足

七、レントゲン照射

八、酒・煙草の害

九、遺伝

腹を立てて怒ったからとか、悲しんだからといって、すぐ胎児に影響するということはない。どんなに怒ろうが悲しもうが、その後でさっと心を切り替えて心を安らかにすることができれば、胎児には影響しない。

肉体的な障害があったからといって、霊が低級であるのではない。障害者の霊は、不完全な肉体をどのように乗り廻して霊の勉強をするか、健全な人の経験出来ない厳しい玲の勉強をしようとしている勇者なのである。



胎教の影響の修正と、謝り（懺悔・反省・禅定・祈り）の方法

お母さんの心の不調和によって、本来ならば健全な五体を持って生まれるべきあなたの肉体に、このような障害をつくってしまっただけで申し訳ありませんでした。お母さんは今、あなたがお腹の中に宿っていた時のことを反省しています。あなたが障害児として生まれてこなければ、お母さんはこのような反省はしなかったかもしれません。あなたは障害児として生まれることによって、お母さんを導いてくれたのです。心からそのことについて感謝をします。そういつて、次に既に子供が健康体になっている状態を、心の中にありありと描き、「神よ、この子供に光を与えて下さい。既にこの子供を健全にして下さいましてありがとうございます」と祈るのである。

「祈り」は、キリストが言われたように、「既に得たりと信じて祈ることが祈りが効かれる秘訣である。悲しそうな哀れな表情をして、乞食が物をねだるような、そういう気持ちで神の憐れみを乞い、特別にお恵みを与えて下さい、というような祈り方では祈りは実現しないのである。

精神障害、ノイローゼ、非行、暴力の子供への祈り

夫、または周囲の人々との不調和により、あるいは「性」に対する葛藤などから、心ひそかに流産や子供の死を願ったりしたことが原因なのであるから、

「縁あって、あなたが私を母として生まれてきて霊の勉強をすることになっていたのに、私はあなたが、私のお腹に宿ってくれたことを素直に喜ばず、ひそかにあなたの死を願ってしまいました。どうぞ、私を許して下さい」と心から反省し懺悔し、既にその子供が健全であることを心の底深く念じることである。

つわりは妊娠初期、大抵起こる。母親の心と胎児の心、霊との不調和が大きければ大きいほどつわりもひどくなる。夫と妻の心が調和され、胎児の霊とも調和されると、つわりを全く感じない人もいる。

出産

自然分娩で自然の法則に順ってしゃがんでして、母乳で育てる出産育児をする。

帝王切開の害

○陣痛が始まって子宮が収縮し始めると、胎児は自然に頭の先で産道を通り、外へ出ようとする。その時に、産婦の心になんのストレスも抵抗もないと、産道はやわらかく開くが、産婦が喜んで子供を生めない心理状態にあると、生むことに恐怖に似た感情を持ち、生みたくないと思ったりすると、出産に時間がかかったり難産する。産道を通して出てくると自然の愛撫のマッサージが行われ、安心してこの世に出てくるが、愛撫のマッサージが行われず、いきなり空気中に取り出される帝王切開は、それだけに神経過敏になり、感覚は鋭敏であるが、姿勢や運動の調節だけでなく、手の動きも言葉も遅れる。帝王切開は自然出産に比べてマイナスの要素が多い。帝王切開児ほど子供の背中を愛撫してやる方がよい。

誘導分娩等の害について

○人工的に陣痛を起こすために、母子ともに心の準備ができていないのに、胎児は胎外へ投げ出されることになり、産婦は自分の身体をコントロールすることが出来ず、胎児もまたリズムが合わなくなる。

○鉗子を頭に引っ掛けて引き出すという方法も、産道による自然のマッサージが行われず、問題も多い。

○生まれるとすぐ、血も粘液もついたままの赤ちゃんをバスタオルをひろげたお母さんに抱かせる方法がある。生まれてから粘液などを洗って十五分後に抱かせた子供とでは、情緒の安定度、発育に差があるという。すぐに抱くほうがよい。

○保育器の中に入れられた未熟児が情緒不安定になり、成長してもうつ病にかかりやすいという。これは胎外へ出ても母親に抱かれて母親の心臓の鼓動を聞くことなく、不安な心の状態のまま長く置かれるからである。

母乳育児の利点

一、病気に対する免疫性を含んでいるので、赤ちゃん自身に抗体ができる（初乳の重要性）。初乳は二日間続く。

二、人工乳で育てられた子供より肉体的・知的両面にすぐれる。

三、母乳を飲ませている間は自然のバース・コントロールが行なわれ妊娠しない。

四、母体の肉体的・精神的健康にも重要である。

- 1 . 母乳を吸わせることによって子宮が収縮する
- 2 . 胎盤が自然に体外へ排出されやすい
- 3 . 乳房の分泌機能の増大
- 4 . 母親らしさの発現

赤ちゃんが、この世に生まれて最初に接する人間は母親である。母親の胸に抱かれ、母親の精一杯の愛情を受けて乳房を吸っている赤ちゃんの心は、安心感に満たされている。この母と子の安らかな人間関係は、やがてその赤ちゃんが大人になった時、他の人との間に安らかな人間関係を持つことになる。神の愛の人的表現が母親の子供に対する愛である。母親は妊娠し出産し育児することによって、神の愛を経験していくのである。授乳しない母親は、その愛を体験しないので、そのことによる霊の成長をさせることが出来なくなる。

女が子供を生むということは、人類が永遠に発展してゆくために、神が女性に与えられた天命である。女性にとって妊娠こそは、女性が生まれ変わる最高のチャンスであり、女性の身体が**新しく再生**されるチャンスなのです。妊娠こそは神が女性に与えた慈悲である。

赤ん坊は、お乳が欲しいとか、おむつがぬれた時とか以外は絶対に泣かないのである。よく泣くのは母親の心が不安定で、神経質になっているからである。

墮胎罪がなくなった結果、性を享樂の対象にして、その結果妊娠するとなんらの罪の意識もなく墮胎している人もあるようですが、そういう人は男、女側ともよく反省して詫びないと、いつかはそのことを反省しなければならない出来事にぶつかるでしょう。それは水子の崇りではなくて、自分が間違っただけをしたその結果としてくるのでありますから、よく反省することです。妊娠させた男性の側こそ罪が大きいのです。女性に妊娠させて、責任をとらなかつた男性が死ぬと、自分の見たこともない子供が、「お父さん」と寄って来た時、「お前みたいな子供は知らない」と言ったら地獄行き間違いない。水子供養を説く、宗教家達が、女性の側ばかりを問題にして男性の責任を追究しないのは片手落ちで、あの世のことを知らないからです。それと心覚えのある男性も、生きていく間によく反省しておくことです。

夫婦調和への提言

- 一、初恋の人は忘れなさい
- 二、純潔を守ること
- 三、結婚前の秘密をしゃべってはならない

日本はどうなる

家庭の崩壊、離婚、再婚、再々婚、同棲、未婚の母、結婚拒否、同性愛などさまざまな社会問題を引き起こしている。離婚が確実に増え続け、毎年一万件以上の増加をみている。最近は中高年層の離婚率が高くなってい

る。一九六〇年代から始まった女性拡張、男女平等は、やがて失敗であったことを知ることになる。一時的な経済環境の変化で、女性も職場に進出しなければならなかったとしても、結局はそれは一時的のことであって、神が定められた男と女の役割の本質までが、すべて変わってしまうということにはならない。子供を「鍵っ子にして働きに出たために、子供が大きくなるにつれて、手に負えなくて困っている人がたくさんいる。少々くらいの金と引き替えに、**子供をだめにするわけにはいかない**とあって、夫の収入で満足して、子供を立派にしつけし教育している人もいる。ローンの支払いのために、妻も働きに出ないと仕方ないという人もあるわけであるが、男女の役割を十分に心得ているのであれば、家庭には問題は起こることはないと信じている。アメリカで失敗していることを、いまさら日本が真似することもあるまい。確かに**女が強くなった。夫は、父は弱くなった**。女が強くなって、男が活力を失った国は滅びるしかない。卑弥呼の歴史は、女性上位では国家社会は健全に発展しないことを教えている。人間も自然界の一員である。万物の霊長である人間だけが、自然の法則に反してよいわけがない。現在起こっているいろいろな社会問題は、人間が自然の法則に反したあり方をしてしていることへの反動であり警告である。答えは簡単である。**「男は男らしく、女は女らしく、男は男の役割を、女は女の役割を」**

『正法と結婚の原理』（園頭広周著）にみる人生の原点

○「母」とは、生命を生む者のことである。我々はみな、自分の肉体を生んでくれた肉体の母親への思慕を通して、永遠に変わらない大きな生命の母、即ち神のふところに帰りたいたいという思いが、我々の信仰心となっているのである。その我々のその思慕の感情を、我々の祖先達は、「吾（あ）は、妣（はは）の国、根之堅州国（ねのかたすくに）に罷（まか）らむと欲（おも）ふが故（ゆえ）に哭（な）くと申給（まおしたま）ひき」と表現したのである。なんと優雅な表現であろうか。男は失意の時、死に直面した時、心の奥底で「吾は妣の国に罷らむと欲ふ」といって、そこに帰れば心が安らかになると思って、母を求めて、もしその母がいなければ自分の妻の中に母を求めて、泣くのである。そういう時、妻は母となって夫を抱き、夫をして思う存分泣かしめ、慰め、励ましてやらなければいけないのである。だが、最近はそのような聡明な妻は少なくなったようである。

昔から、女が強いと男の子が生まれ、男が強いと女の子が生まれるといういい伝えがある。どういう子供を持つかは天上界で決めるのであるから、このいい伝えは当たらない。だが、骨っぽい男が、子供は女ばかりというのも、娘を見て「中道」ということを勉強するのであるから、「私の心の修正をするために、どうか女の子として生まれて来てください」という約束があったとも言える。その反対もまた、しかり。

人間は小宇宙を形成している。小宇宙とは大宇宙の縮図である。大宇宙に展開する無数の星々（六十兆個）は、人間の肉体を形作っている光の数（細胞数・六十兆個）と同数である。

私の師、高橋信次先生の教えは、すべては自然が教えている。自然の相（すがた）を見れば人間の生き方がわかる、というものであった。

優男（やさおとこ）と、幸子（さちこ）の由来

○釈尊の弟子に「ヤサ」という人があった。ヤサはベナレスの大商人の息子であって、好きな女に逃げられて、ガンジス河に投身自殺しようとしているところを釈迦に救われた。美男子だったので、釈尊の弟子になってからは、女の人に変な心を起こさせてはならないというので、わざと顔に泥を塗って説法した。そういうことから、美男子といえば「ヤサ」、「ヤサ男」といえば美男子ということになって、今から一五〇〇年前、仏教伝来によって伝えられてきたインドの仏教説話から、今日でも美男子のことを「優男」というのである。

それと同時に伝わってきているのに、女の子に「幸」、「幸子」という名前が多いことである。釈尊の女の弟子に「マイトレーヤ」という人があった。この方は後に「弥勒菩薩」と言われるようになった方であるが、この

方の小さい時の名前を「サチ」といった。マイトレーヤーにあやかって「幸」、「幸子」と名をつけたわけである。そのように、民間の伝承となっているものには、古い古い歴史、神話などが伝えられているものがある。

男の元気はどこからくるか、男はなぜ女にふれたがるか

私の知っている人に、女を見るとふれたがる人があった。だから、人はその人を「エロじいさん」と呼んでいた。その人の奥さんは花嫁学校の校長先生だった。そのご主人は、生徒を見るとふれたがるので、生徒達はその人が現われると、またさわられるというので大騒ぎしていた。その校長先生である奥さんは、まことに賢夫人で一分の隙もない人であった。さわることの好きだったそのご主人は早く亡くなった。その原因は、奥さんがあまりにも立派で、ご主人にさわらせなかったからである。男の元気は女からくるのである。妻を早く失った男が、いかに早く老け込むかを見られればわかるであろう。たとえ、夫婦とも健在であっても、夫にさわらせることを嫌がる妻の夫は、どことなく精彩がない。男らしい澁刺したところがない。どことなく寂しさが漂っている。

女を「おかみさん」「お神さん」というのは、男にとって女は神様であるからである。神様の生命は、女を通して男に与えられることになっているから、女を「おかみさん」「お神さん」と言うのである。

夫婦円満であるということは、神の生命が男となって還流され、また女となって男に還流され、その男女の気が円満に交流されることをいう。神の生命が円滑に円満に交流されるから、夫婦も子供もみな健康で幸福であるということになるのである。夫婦円満であるということは、陰陽、即ち男女と分かれた神の生命が、元の一つの神の生命に帰ることである。元気とは、神の大元の気である。だから男は、女に十分にふれることによって元気を取り戻すのである。だから、性のことを「エロ」だといって、いやらしいことと思ってはならないのである。エロだと思っている人は、人間を動物だと思っているからである。

人間は神の子であり、人生は神の子の生命を顕現することにあると思っている人には、性は神の意識に帰一する神聖な祭典となるのである。このことをキリストは、「夫は自分の肉体を自分のものと思うな。夫の肉体を支配する権利を持つのは妻である。それと同じようにまた、妻は自分の肉体を自分のものと思ってはならない。妻の肉体を支配する者は夫である」(「コリント前書」三～四節)といて、夫が妻の身体にふれ、妻が夫の身体にふれることにわだかまりがあってはならない。お互いに抵抗なくふれ合わなければならないと教えていられるのである。第五節には「相共に拒むな」と書かれている。求められた時に「拒むな」というのである。



子供の結婚が失敗であったと悩んでいる女(ひと)があった。その女は夫が嫌いであった。夫に求められるとゾッとするほど嫌いであったが、別れて独りで子供を育てていくのに自信がなかったので、別れることはしな

かった。それで求められるといつも心の中で、「これも子供のためだ、子供のために辛抱しなければ」と、いやいやながら応じていた。そういう不調和な心が子供に影響していったのである。自分達は幸せだと思っている調和された夫婦の子供達は、みな幸せな結婚をするのである。だから妻は、心を優しくして素直に夫にふれさせることである。抵抗なくふれさせる時、夫は元気づけられるのである。

女に母婦型と娼婦型がある

母婦型の女性は、子供が好きで、性的行為を子供を得る手段と考え、子供が生まれてくると子供を可愛がり、よき母となる。こういう女性は夫に対しても母となる。**娼婦型の女性**は、子供が嫌いである。だから性的行為は、行為それ自体を楽しむので、間違っても子供が生まれると子育てをいやがる。こういう女性は夫に対してもいい妻にはなれない。母らしい女は、比較的たくさんの子供を持ちたがるが、浮薄な**娼婦型**の母は、子供が少ない。**母婦型**の女は子育てに熱心であるから、自分の服装などにはあまり構わないが、**娼婦型**の女は自分を飾ることに懸命になる、というのである。

私はワイニングルの書いたものの中に、独断や偏見もあるが、また、神理も含まれていることを発見した。**母婦型の女**は、自分の生んだ息子に性的関心を持つことはないが、**娼婦型の女**は自分の息子が男性であることを意識し、時によっては息子と性的関係を持ちたいと思う。こういう**娼婦型の女**は子供を性的に早熟させ、その結果、子供を性的ノイローゼにしてしまうことが多いのである。**母婦型の女**は、夫に対しても母となろうとするが、**娼婦型の女**は母なろうとはせず、いつまでも女としていかにして男の心を自分にひきつけるかということだけを考える。**母婦型の女**は、隣の部屋で子供が泣き叫ぶと、自分自身を傷つけられたように感じてすぐ飛んで行く。子供達が成長しても、その子供の欲望・苦悩を自分自身の問題であるかのように考える。**娼婦型の女**はすべての関心を自分自身にひきつけようとし、何事も自分を中心に考えるから、夫のことにも、子供のことにも案外に無関心で、自分のためになると思えば一生懸命になるが、ならないと思う場合は夫や子供をほったらかしにしても平気である。**母婦型の女**は、夫と子供の将来を考えるが、**娼婦型の女**は、その時だけよければいいので将来のことは考えない。**母婦型の女**は、性的関係を人生の重要な出来事の始まりと見做し、人格を完成し、愛を表現するための手段として、それによって生活を豊かにしようとするが、**娼婦型の女**は、性的交合を目的とし、その目的を達成しようとして男に媚びを売る。それ自身が目的であるから、その目的を達すれば将来のことは考えない。

母婦型の女は、全世界、夫、子供のために愛を与えようとするが、**娼婦型の女**は、自分のために吸収し、受けることだけを考える。だから、**母婦型の女**は、自分はみすばらしい格好をしていても少しも気にならず、夫や子供にいいものを着せようとする。だが、**娼婦型の女**は、歓楽、舞踏、劇場、音楽会、娯楽等について常に考え、服装なども贅沢になる。**母婦型の女**は、自分とともに将来を考えてくれるまじめな男性を選ぶが、これに対して**娼婦型の女**は、浮気な、怠惰な、放縦な男にひきつけられる。**娼婦型の女**の情夫は、常に犯罪人であり、泥棒であり、詐欺漢であり、時としては殺人者でさえある。**母婦型の女**は犯罪を犯すことはないが、**娼婦型の女**は犯罪と深い関係がある。生活に行き詰まった時、**母婦型の女**は子供の将来までをも考えて、子供を道づれにしようとするが、**娼婦型の女**は、子供を捨てるか、子供を夫の下に置いて自分だけが生きること考える。

男は、**母婦型の女**を美しいと思い尊敬するが、**娼婦型の女**を美しいと思い尊敬することはない。**母婦型の女**によって男は純化されるが、**娼婦型の女**は男を堕落させる。終戦後、**母婦型の女**よりも、**娼婦型の女**が増えてきた。すべてを自己中心的に考える女によって、男の心も子供の心も荒廃させられてしまった。「愛は惜しみなく奪う」というけれども、「愛は惜しみなく与える」ものである。よく与えることができる者のみが、また、よく受けることができるのである。奪うことのみを考えている女は、男を享楽の対象、自分の欲望を達成するための対象としてのみ考えるから、男の持っているものをすべて奪い尽くして、やがて男をダメにし、結果的には自分もダメにするが、与える愛の尊さを知る**母婦型の女**は、男に与え、子供に与え、夫や子供が立派になることによって、また自分にも与えられることになる。人生の終わりに近づいて、子供や孫に囲まれて幸せな女もあれば、その反対に、誰からもかえりみられない孤独な女もある。どの道を選ぶか、どんな女になるかは、一人一人の心次第である。

「最大の性的索引を有する両親の産児は、最上に栄える」

お互いにしっかり愛し合った夫婦の間に生まれた子供は、健康であり幸福になるが、その反対に、お互いに反発

し合っている夫婦の間に生まれた子供は、肉体的にも精神的にも障害を受けるといのである。女の人でも、楚々とした本当に女らしいという人もあれば、男も顔負けに、男と同じようにトラックを運転して重量物を運搬し、骨格も声も全く男そっくりだというような女の人もある。人生が一回きりだとすると、生まれながらのこうした違いは、どうして生ずるのであろうか。そこで釈尊は、人は輪廻転生するのだということを説かれたのである。輪廻転生するのだということは、人には前世があり、過去世があるということである。人間は死んで終わりではないということである。肉体は死んで火葬してなくなるのであるから、肉体が死後も存続するということは全くないが、霊魂が存続し、輪廻転生するということである。

前世と病気の関係

米国の偉大な霊能者、エドガー・ケーシーの霊読をまとめた『転生の秘密』は、今世の運命が前世と関連があることを教えてくれる。釈尊は原因と結果の関係を「因縁」と言われた。ケーシーはこれをブーメランに例えている。投げるとブーメランは自分の所にかえってくる。即ち、した通りにされる世界だという。釈尊はまた一方で、それを「業」とも言われた。人は蒔いた通りのものを刈り取る。高橋信次先生は、この「因縁の法則」は物理の法則と同じで、「動・反動」また「作用・反作用」の法則だと言われた。

1)、三十六歳で小児麻痺にかかった婦人があった。それは古代ローマ時代、ネロ皇帝と提携してクリスチャンを迫害し、闘技場でびっこになった者をあざ笑った。そのことが自分の身に返ってきたのであった。

2)、自動車事故で背骨を折り、下半身麻痺になった少年があった。この少年は、ローマにはじめてキリスト教が伝えられた頃の軍人で、クリスチャンが猛獣と戦って苦しむのを平気で笑っていた。

3)、美人に生まれた人があった。美しい身体を持って生まれた人があった。それはすぐ前の前世で、人の嫌がるようなことでも少しも嫌がらずに、極めて献身的な奉仕をし、霊魂を浄化したからであった。こういう人は、その美しさがその人の人生に不幸をもたらすことはないが、ただ美人に生まれたいという強い願望だけを持って、心を美しくしなかった人は、その美貌ゆえに自分の人生を不幸にするということになる。

4)、てんかんになった人があった。この人は前世で性的に放縦自堕落な一生を送ったために、今生ではその反動として結婚出来ない状態に生まれることによって、前世のカルマを帳消しにしなければならないことになっていた。

速やかに病気を治す方法

前世に行なった業の反動として起こっている病気を治すために

一、人、または物事に対する心の態度を改めること。

二、本人が自己中心的で我が強く、霊的なことを拒否し、心の中に憎しみや敵意、不正、嫉妬等の感情がある限り、病気の治癒は望めない。

三、なんのために病気を治したいのか、健康になったらまた肉体的欲望を満足させたいと思っているのではないのか。それともますます利己主義的になるためか。そうであるならば、**治らない方が本人のためになる**のである。

このことをよく考えて、心の持ち方を変えて、改めて真の人生の目的はなんであるかを考え、**魂を浄化した上で医学的な療法をすると回復が早くなる**。要するに、性格と心を変える努力をすることである。

その夫は、既に結婚前から女性関係が絶えなかった。結婚してからも何人となん女性が変わった。夫の不貞に泣かされた妻があった。その妻は過去世において、自分が夫に不貞を働いたのであった。少しばかりの美貌を鼻にかけて、次から次へと男を変え、夫を泣かした。その業があって、今世では夫に不貞を働かれることによって、前世で夫が味わった苦しみを今度は自分が体験しなければならないことになった。この場合、男女平等、男女同権ということで、夫がそうするなら私もという態度では、ますます業を重ねるだけである。夫はそうしてもなお夫を憎まず、その夫の心をどのように大きな愛で包んでゆくか、どうすることが自分の魂の向上になるかを考えて愛を尽くしてゆくと、次第に夫の心はやわらいで、夫自身がそれを反省するようになってゆくのである。

子供を欲しいと思うが、どうしても子供が生まれない妻があった。この女性は物質的欲望と虚栄心が強かった。アメリカ初期の開拓者として生まれてきた時、六人の子供の母親になったが、六人とも焼死させてしまった。そのために、神様がその子供達を守ってくれなかったとって神を呪い、子供を持つことに恐怖心を持った。子供を持てばこそ苦勞をする。いっそのこと子供はいない方がよいと強く思った。そのために子供が生まれないのであった。

人間は不幸になった場合、この不幸の中から自分はどのように魂の勉強をしなければならないのかと、人生を真剣に考える道を選ぶか、または、神も仏もないとって神仏を怨んで、自分の心のあり方を少しも反省しないか、この二つのうちのどちらの道を選ぶかによって、その人の運命が分かれるのである。この婦人は後者の道を選んだのである。そのために、子供が欲しいと思っても生まれなかったのである。子供のために不幸にさせられた。こんなに子供のことで苦勞するくらいだったら、もう子供はいらないと思うと、次の世ではその心の通りに、子供を生めなくなるのである。業として子供を生めない人は、自然にまかせる方がいちばん良いのである。

職業的能力と運命

天才は努力であるというが、しかし、いくら努力しても上手にならないという人がいる。少し練習するとすぐ上手になるという人がいる。例えば、同じ年齢の女兒にピアノを教えるとする。ある女兒はすぐ上手にひけるようになるが、ある女兒はなかなかひけない。生まれつき手先の器用な子がいる。下手な子がいる。どうしてこうも生まれつき才能が違うのであろうか。偉大なる植物学者がいた。どうしてその人は一代で有名な植物学者になったのであろうか。それは、いつかの前世において植物の生育に非情な興味を示した。花の採集をしたり、栽培を楽しんだりして一生を終わった。そうした蓄積があって、その次に生まれた。すると、成長するに従って、どの子よりも先に植物に興味を持つ。それが業となって次第次第に植物のことについて詳しくなり、そうして今世において偉大な植物学者になったというのである。誰でも一代で成功し、偉大なる政治家、芸術家、技術家になることは出来ない。生まれてきたその人生をどのように生きるか、輪廻転生のその努力精進の蓄積が、その人の人生を決定するのである。人生において大事なものは努力であって、上達し成功することではない。たとえ上達しなくても、成功はしなくても、その人がその一つのことにとたゆまず努力を続けてゆくならば、それでその人の人生は成功したのである。だから、その努力の如何を見ずに、ただ結果だけによって評価し、採点することはいけないのである。

運命を修正する方法 (重要なので再度あげる)

前世でつくった業が、全部そのまま今世に生じてくるのではない。人間は死んだ時、自分がどのように生きてきたかをすべて反省させられる。この反省によって運命の修正が行なわれ、つくった業がその通りに現われるということはなくなるのである。多くの罪は反省によって消えるが、重大な問題は、もう一度同じ条件で、あるいは全く反対の条件で再演した方がよいのではないのか、自分の魂がその可否を決定する。すると、前世の業を修正するための事件が起こるということになる。予期しない病気、不幸というものは、それも自分が決めて生まれてきたものがあるのである。そこで、どうしてそうなったかをよく反省して、それまでの心のあり方、行為のあり方を変えると運命が修正されて、好転してくるということになるのである。一〇〇%確実に運命をよくする方法がある。それは性格を変えることである。心が変わると運命が変わるというが、心を変えようとしても、どうして心を変えたらいいのかそれがわからないという人がいる。心を変えるのはむづかしいという人がいる。そんなにむづかしく心を変えようと力む必要はない。性格を変えるのである。気の小さい人は大きく、怒り易い人には

こやかに、せかせかした人はのんびりと、いつも自分本位であった人は相手の立場を考えて…。そうした性格を変えるテストをするのにいちばんよいのが家庭である。家族に対しての思いやりから変えてみることである。すると、職場その他の対人関係もうまくゆくようになるし、自然と運命は変わってゆくのである。その運命を早く変えようと思えば、禅定、瞑想をやることである。釈尊は正定と言われた。現在のあなたは、過去の輪廻転生の総決算である。例え、現状が不満足であろうとも、まぎれもなしにそれがあなたなのである。運命を良くしようと思うならば、例え嫌だと思っている自分の人生であっても、まずそれを受け入れて、その上でどうするかを考えなければいけないのである。自分の現在の人生を嫌ったままで、いやだからこうしようと思って逃避すると、すべて失敗に終わるのである。我々は因縁の法則の枠を出ることは出来ない。因縁の法則から逃避しようとせずに、因縁の法則を上手にコントロールすることである。

正法を理解したかを判定するための「問題」

「ここに、実際に身体で以って人を殺した人がある。口で人を欺し、人を不幸にした人がある。また、ここに実にまじめな人がある。この人は、心の中ではいろいろと思うが、しかし、そういうことはいけないと知っている。絶対にそういうことはしない。人にも親切で極めて『まじめ人間』である。この三人のうち、一番罪が深いのは誰でしょうか。世尊よ、お教え下さい。」

「それは最後の「まじめ人間」である」

「悪いことは絶対にしない。人に迷惑をかけることもしないまじめな人が、なぜ、罪が一番重いとされたのか。このことがわからなければ「正法」がわかったとは言えない。勿論、宗教家としても落第である。現在の日本の各宗教団の講師指導者、牧師、司祭、僧侶、宗教学者に一人残らずこの問題を出して解答を出させると面白いと思う。」 園頭広周師

男は現実社会を建設し、女は子供をどう育てるかということを通し、未来社会を建設する。

貴方は、今までに、明るい心と暗い心とどちらが長かったですか。

幸せになりたいのなら、パッと明るい方へ気持ちを切り替えること。

今日の自然科学は、一つの壁にぶつかっています。その壁とは物質のモトである原子、素粒子についての状態は説明出来ても、その状態を生み出しているところのエネルギーそのものが分からないからです。心ある科学者は、そのエネルギーについて、それは神仏の力であると言っています。その通りで、エネルギーこそ、神仏そのものなのです。原子を動かしているものは光子です。光子を光子たらしめているものは、霊子というものです。今日の科学、機械では、光子は発見できても、霊子を発見することはできません。霊子の発見は、なお百年以上を要しましょう。しかしあえて申しましょう。霊子こそ、神仏であり、エネルギーそのものであります。(高橋信次師)

神より生まれた人間は、永い輪廻転生の旅を経て、神の意識へ帰らなければならない。人生の目的は霊の向上のためであって、地位、名誉、財産を得るためではない。死んであの世の入口で次のように聞かれる。

一、あなたは死ぬ覚悟ができていますか。

一、あなたは死に対する心の用意がありますか。

自分が生きていた時のことを映画のように目の前に見せられる。そうしてまた聞かれる。

一、あなたは一生のうちに、私に見せられるような何かをやってきましたか。

一、あなたは生きていた時に、自分でこれはいいことをしたなというような、自分で満足できる何かをやってきましたか。

人の生命を奪うのに、善の殺し方、悪の殺し方というのがあるのでしょうか。

神の能力は自由、創造、慈悲、愛

神仏は絶対に罰など与えはしない。

衆生が現世利益の功德を願っている心を僧達は利用して、バラモン教のバラモンの神々などまでが祀られ始めた。帝釈天・弁財天・毘沙門天・吉祥天・水天・聖天・不動明王・大黒・鬼子母神・妙見・秋葉・金比羅・稻荷など。かつての寅さんシリーズの帝釈天は、バラモン教の神の名である。

「なぜゴータマブッタは日本を転生（再生）の地としたか、どうしてアメリカや他国を選ばなかったのか」

一口に言えば、正法が伝えられやすいからだった。

「即身成仏はあり得ない」

即身成仏、という言葉は、万人に通用する言葉ではない。その想念と行為が、神仏の子として恥じない人生を送った人々に対してのみ通用する言葉であることを私達は知らなくてはならない。キリスト教や仏教を学んだことのある人がこの世を去り、肉体や肉体的環境に執着を残さなかった場合、その死体は硬直することがない。自分の死を悟り、安らかに彼らの世界へ帰って行く。この時は、魂の兄弟達が協力して連れて行く。また、肉体的関連のある先祖が協力して連れて行く場合もある。（高橋信次）

「法力」

法力というものは、エネルギーの集中されたものですが、法とは調和を意味し、不調和の力ではありません。つまり、他をいかに、慈悲と愛の発意にのってのみ、行使されるものです。法力と靈力、魔力というものは、外見は非常によく似ていますが、中身は大分違って来るわけで、心の歪みを持ったままで靈力を行使すると、やがて、その反動がやってきて、その人をうちのめしてしまうでしょう。法力と魔力の違いは、欲望という執着があるかないかであり、それは自分の心を冷静に見つめればハッキリするでしょう。自分では欲望はないと思っても、欲望を持ってこれを行使すると、肉体的に非常に疲れを覚えるものです。力に憧れるのは人間の願いのようですが、まず大部分は欲望に根ざしているので注意が肝要です。力を望まず力が生み出されるもの、それが法力というものです。（高橋信次）

『親の役目』は、子供が社会人となって、人間としての道はずさないように導くこと。

働くとは、人の役に立つということ。

病気は、その人の生きざまの結果です。

間違いと気付いたら、今すぐ正せ。もう遅すぎるということはない。

反省とは二度と繰り返さないということ。

稲荷大明神、竜神、竜王

稲荷大明神とか竜神、竜王といった善神もいる。彼らは、動物霊達に、神の子としての道を教える役職にある天使達である。特に狐などは、靈的に強いものを持っている為、人々の心を不調和に導く事が多いので、盲目的な人間はこれを稲荷大明神として祭ってしまっている。狐は、稲荷大明神ではないのだという事を、私達は知るべきだろう。世間では、竜神だの稲荷大明神だとか言われると、狐や蛇、竜などをいっているが、それは誤りである。およそ、**蛇や竜などが、私達人間の守護霊になるということは、絶対にない**という事を知るべきだろう。商売繁盛を目的に、よく狐などを祭ってある家庭や店舗があるが、欲望を満たすためだけの祭りをするというのは、非常に危険なことだといえよう。なぜなら、狐や蛇や竜達は、人間の願いを聞く事が、まずその家庭を混乱に陥れてしまう。祈って商売繁盛しても、人間はすぐ彼らにお礼をすることも供物をすることも忘れてしまう。そんな具合だから、狐や蛇から必ず不満が出て、その家から病人が出たり、商売が左前になったりしてしまうのである。欲望の為に彼らを利用すべきではない。 (高橋信次)

先祖の諒解なしに宗旨替えをしてはならない。

亡くなって逝った人が、「自分はこの宗旨によって救われるのである。死んだらその宗旨のお経で供養してもらいたい」という執着を持っていた時、その子孫が亡くなった人に諒解なしに宗旨を替えた場合、それでは自分は救われぬ、と子孫の中で頼んだら云うことを聞いてくれそうな人に祟る(出て示す)。直系の子供に頼んでもだめな時は、傍系に出る場合がある。あの世の霊は肉体を持たず、言葉で伝えることが出来ないので、子孫の肉体を借りて示すのである。亡くなった霊の執着は子孫の頭の病気、怪我に現われ、時として足の病気怪我になる場合もある。 (園頭広周)

太陽も、地球も、人間同様に、心を中心にして動いているのです。自然はものを語らない、人間はものを語る。喜怒哀楽の感情があるのに、自然は、そうして感情を示さない、といわれます。たしかに表面的にはそうです。ところがそれは違います。この地球という大地も水も植物も、動物もみんな感情を持っており、言葉もあります。現象世界にあるものは、すべてが生命を持っており、生命があるということは、意識があるということです。花でも動物でもそうです。人が愛念を持ってこれに接すれば、花も動物も、その人のいう通りに動き、言葉もわかり、互いに通じ合います。更に進むと、花には花の精があつて、人間の心が浄化されると、花の精が

姿を現わし、日本人の場合は日本語で、アメリカ人の場合は英語で語りかけます。松や銀杏の木もそうです。そこに住む植物の精霊が姿を現わし、三百年、五百年の風雪に耐えた大木ならば、世の移り変わりを見ているから、自分の身の回りで起こった、さまざまな変化歴史を語ってきかせてくれます。大地に表情がないかということ、ちゃんとあります。そこに住む人達の意識の調和度、心の持ち方が、その土地の空気をつくっているのです。争いの多い土地には、作物も育ちません。町も汚いです。調和に満たされた場所は、町もきれいで、明るくゆったりしています。人気のない大地にも、気候や風の流れに応じて、サラリとしたところもあるかと思えば、現在は人気はないが、その昔、人類が居を構えたところは無数にありますので、そうしたところは、かつての人類の波動を残し、明暗、美醜の空気をかもし出しているところもあります。火山、地震、地すべり、陥没など、大地そのものは、時には怒り、狂うことがあります。こうした怒りや狂いというものは、大地そのものが勝手に動き出したかというそうではなく、**人間の好き勝手な行動、想念が原因**となって作りだした物理的現象が大部分です。太平洋の中央にあったムー大陸、大西洋に文明の華を咲かせたアトランティス大陸などの陥没も、いずれも、そこに住む人類の業想念が生み出した現象であります。なぜこのようなことが起こるかと言えば、人間の生命意識、地上での目的というものが、己自身の調和と同時に、動物、植物、鉱物を含めた、地上の調和にあって、その目的に反した想念行為に対しては、その目的に反した分量だけの償いが必要になってくるからです。（高橋信次）

昭和五十年、「ソ連、中共にはこれから飢饉が起こる。食糧は不作になる」と予告された時に、「日本には心ある人が生まれて来られたために、日本が食糧飢饉になることはありません」と予言された。

昭和四十八年十月に言われたことがある。これまでの政治、経済、教育その他の体質を変えないと日本は良くならない。正法を知った、足ることを知った人達が政治をしないといけない。いつも生産者が損をして、流通機構だけが儲かり、消費者はいつも高いものを買わされるという経済機構もいけない。銀行、保険会社は不労所得が多過ぎる。日本各都市の目抜きはみな銀行、保険会社が立派な建物を建てている。正法の実践者が多くなったら、正法の実践者が流通機構を担当し、正法の実践者が教師になる。そして、正法の実践者が銀行、保険会社をやる。そのようにして日本を正法の国家にしてゆかないといけない。

「全体の幸福を願うなら、まず自分自身の心を幸福にさせることです。幸福のなんたるかを知らずに、どうして人にその幸福をわかち与えることができましょう。正法はまず己の幸福から出発します。そうして全体の中の一人一人の幸せが目的です。」

幸せを求めたいならば、まず悪の想念から離れることだ。悪を想えば悪が、善を想えば善がもどってくる。



人間がこの地上に生をうける時は、両親を指名し、自から選んで生まれてきます。親子を選ぶ範囲というものは、おのずと限定されてきます。

一、魂・意識が非常にあい似通っている場合

一、過去世で親子の約束を強く望む。たとえば、ある人に非常に世話になり、その恩返しをしたいという場合

一、過去世において親子兄弟、友人同士であった場合

一、あの世で生活を共にし、親子の約束をする場合

巷の神々と言われるもの

恐山の口寄せにしても、街の拝み屋にしても、数え切れないほどだろう。ある者は、神のお告げといい、観音様が夢枕に立って人を救えといったとか、後光が見えたとか、耳元で不幸の起こることを聞いたとか、呪咀という、他人を不幸にしようと祈る宗教から、お浄め霊とかいって、身体を浄めてやる宗教もあろう。なかには、神と称する者が、拝んでいる人間に出て、威厳のある言葉で、人々を威圧して神の言葉を述べる霊媒もいる。亡くなった人々を呼び出して語る霊媒も多いだろう。それらは、いずれも偶像や糸屑の紙を祭って、その前を神前とか仏前とかいって、祈りの場所としているようだ。このような人々の多くは、山中で肉体的行をして、修行したというものが多い。ほとんどが、経文や祝詞を一心に上げている間に、神様が出てくるらしい。彼らは、神様だと思っているのだ。信じているのである。質問に対しては、当たることも当たらぬこともあるだろう。しかし、質問者のほとんどは、先祖の霊が浮かばれないから不幸があるとか、屋敷の中にこのような神を祭ってあるが、粗末にしているかとか、なかには蛇を殺した祟りだとか、猫を殺した祟りだとかいわれて、祈らせられたり供養させられたりしているのである。また生霊が憑いているから、などという時もあるらしい。当然、蛇だの狐だのまでが、祈る対象物となっている。盲信や狂信者には、真の姿が見えないし、聞こえないし、話せないから、ただ一生懸命に信じて、お札や偶像、曼陀羅を祭って祈っている。日本の仏教の中にも、天上界から悪魔が降りてきて、人々を苦しめるといふものがある。この苦しみから逃れる方法は、一心に呪文を唱えて、不動明王や観音様や竜王のような諸天善神に、お願いしなくてはならないのだと教えているところもあろう。先祖を代理で供養してくれる場所もある。見えない世界だけに、どれが本物か解らないで、何でも救って貰える、神仏に頼りさえすれば良いと思っている人々が、非常に多いのである。最近では、お光りを与えれば病気が治り、身体が浄まると指導しているところもあるという。

また、人間に憑いている霊を本人に出して、皆祭らせてしまう、賑やかな宗教もあると聞いている。人間というものは、欲望が強い。勝手に何でも神から救って貰おうとしている者達が非常に多い。いずれも他力本願のご利益主義である。他力によって、心を腑抜けにしてしまえば、指導者の生活も楽になるから、やめられないのかもしれない。そして彼らは、神の名のもとに、盲者達や狂者達を支配して行く。富士山のあたりに出てくる、菩薩達の姿は正しいものではない。霊媒でも、自我我欲の強い、感情の起伏の強い者達は、魔王や動物霊が憑依しているのである。常に心の中がいらいらしている。このような霊媒者は肉体的にガタガタである。しかし彼らは、必ず信者の業を引き受けて、信者の苦しみを柔らげているというだろう。もしこれが真実であるならば、天上界の諸菩薩、諸如来、光の天使達は、あまりにも地球上の人類が戦争をしたり、不調和な心を持った者達が多いので、皆の病気を引き受けて、あの世に病院を造らなくてはならないだろう。他人の業を引き受けるようなことはないのである。作用と反作用、原因と結果、法則を知らない者は、何をするか解らない者達なのである。自らの、心の暗い曇りが、地獄霊を呼んでいるのだ。このような偽善者は、言葉巧みに近寄り、へつらうだろう。自分に不都合なことがあると、口角泡を飛ばしてののしるだろう。これは、そこに本性をさらけ出している哀れな姿であるといえよう。いずれにせよ信仰は自由である。正しいものを選ぶか、間違っただのを選ぶかは、あくまでもその人の心にある。

「他力本願」

まず他力の発生は、人間が十パーセントの意識で生活しているため、一寸先がわからないことと、人のカルマというものが、ちょっとや、そっとでは修正しにくいところに原因があります。祈り（願い）や念仏が、こうした人間の弱さから生まれ、今日の信仰形態が、仏教、キリスト教を問わず、他力に変形していったのも、無理はないと思われます。しかし無理はないといっても、他力では本願（悟り）は絶対に得られません。なぜならば、人間の心の歪みは他力では修正できないし、またそのようには出来ていないからです。人間は神の子なのです。この事実をまず認識して、自覚を持って下さい。さて、この大宇宙は神が創造したものです。神が、その意思と、自らの力で。神は天地創造と同時に、創造した現象物質界に、永遠の調和をめざすことを意思しました。神の意思の継承者は人間です。避けることは出来ません。同時に、人間に生まれたことに感謝を持つべきです。神の子の人間は、神が果たされた天地創造のその働きを、今度は人間が果たしていくことになったのです。他力の誤りは、人間の神性、仏性に目をふさぐことにあります。日本の他力は、法然、親鸞によって開かれたことになっていますが、仏教を大衆化し、衆生の中に根を下すには、こうした方法をとるより他に手段がなかったからだと思えます。法然は、他力によって神理を悟れたかという、そうはいかなかったようです。（高橋信次）

言い逃れをする人は幸せになれない。一切は自分の責任です。

不幸の原因は、総て、あなた自身にあり。運命は貴方がつくり出したもの。

愚痴、怒り、足ることを知らない欲望を心の三毒と言います。この心を捨て去ること。

「正しい生き方」とは、「一切は自分の責任である」と自覚する生き方です。

神は先ず天体をつくられた。大宇宙、銀河系宇宙、太陽系、水、空気、鉱物は造られたままで、それ自体として増殖する生命力を持たない。そこで自ら成長するものとして植物をつくられた。植物はそこに生えたらそのまま、移動する生命力を持たない。そこで動くものとして動物をつくられた。動物は動く自由は持たされたが、与えられた本能のままに生きているだけで、創造の自由は持たない。そこで最後に、完全なる自由、創造力を持った人間がつくられ、自由の力は人間に委せられるという事になった。それで人間を**万物の霊長**という。

「悟った者は、生まれないと仏教では言っているが、その根拠は」

悟られた仏陀は、輪廻から解脱し、生死を超越していると言われますが、あの世も、この世も自由に行き、見ることが出来るため、肉体の煩惱に惑わされず、アポロキティ・シャバラ（観自在）になられているため、生まれることも滅することも無いことを悟られております。つまり、輪廻転生における生と死を解脱されているから、生まれるとか死ぬということはないのです。万生万物・生命のある者は、すべて輪廻を繰り返しても、仏陀はすでに、過去・現在・未来の姿を悟っておりますから、自分を見失うことがなく、仏陀には生命の転生輪廻にこだわりを持っていないから、不生不滅の悟りに達しているということである。（高橋信次）

光を入れる時は、「あなたは病気が良くなったら、正法を実践しますか」ということを確認してからやらないといけない。医者が注射して、一時病みを止めるような気持ちでやってもらったら、それは一時的なことでまた繰り返しますから、そうすると、「光を入れてもらったがだめだった」と、一時良くなったことも忘れていられかねませんので、「良くなったら正法で教える生活をしますか」ということを誓わせないとはいけないのです。

(園頭広周)

なんのために人間はこの地球上に生まれてくるかというと、みな霊の向上のためです。

自然の法則、原因結果のままに心を大事にしてきた民族と、世界征服大野心を持って戦争を計画し、自分達の目的を達するためには、平気で暗殺も人殺しもやってのける民族と、どちらに神は采配をあげられるでしょうか。

世の中には妥協してすまされることと、すまされないことがある。神理を説く宗教の世界では**妥協は許されない**。

正しい信仰には苦しみが生ずるはずがありません。その信仰によって苦しみが起こってきたとしたら、その信仰はどこかに間違いがあるということになります。

神の慈悲と愛は、「太陽が善人の上にも悪人の上にも等しく照るが如く」「雨が善人の上にも悪人の上にも等しく降るが如く」と聖書には教えてあるのです。全智全能であり、智慧であり、慈悲、愛そのものである神は、初めから我々に健康と幸福とを与えられているのです。

東京の青年から電話が来た。「神と仏とどちらが偉いのですか」と。

「仏とは、神の心をもっともよく知って、神の心を伝える力を持たれた方である」

釈尊の生まれ変わりであった高橋信次先生は、「反省は神の慈悲である」という言葉によって、個人は個人として、組織の指導者は指導者として、民族は民族として、国家は国家としての反省の大事さを説かれた。正法による理想世界の実現、それが神が地上に人類を誕生せしめた目的であるから、それは具体的には、正法による政治、経済、教育、芸術、思想等となって来なければいけないわけである。

高橋信次先生に教えを受けて、私がいちばん教えられたのは、世界の歴史は、神の心をこの地上界に実現しようという神の計画によって、それをどう実現するかは天上界によって計画されているのである、ということであった。

言葉より行いを見て、人を見よ。

人を責めてはいけない。自分の心を自分で非難している事が多い。

良識とは、ということについては、いろいろな定義の仕方があると思うが、私はここで、「同じ失敗を二度としないこと」「人がした失敗を、自分も真似しないこと」と定義して置く。このことはすべてに通用する。仕事にしても、同じ失敗を二度も繰り返し、人が失敗した仕事を自分が真似する、ということは全く馬鹿げた話であるし、勉強でも、生活の仕方でも、みなそうであるし、宗教もそうである。邪教であるといって、やめて行く人が多い宗教を、なぜ自分が信じなければならないのか、ちょっと立ちどまって考えればよいのに、日本人はそれすらもしないのである。この品物は欠陥商品だ、といって投げ出した商品を、いい商品だといって再び売る人があり、買う人があったとしたら、あなた方はその人達を良識ある人というであろうか。「あの人は良識がない」などと上品なことは言わないで、むしろ「あいつは、なんて馬鹿なんだろう」と言うであろう。その通り、日本人は本当に馬鹿なのである。戦争に負けたからといって、真似せんでもよいものまで真似し、捨ててならないものまで捨ててしまった。その結果が今みるような、教育の荒廃、道徳の荒廃であり、一旦、捨ててしまってもうにもならなくなり、今になって教育改革、道徳教育の復活などといって騒いでいるわけである。

こういうことは大人のすることではない。大人は、良いものと、悪いものを見分ける力を持っているから、見境なくなんでも捨てるということはない。子供はその区別がつかないから、良いものまで捨ててしまう。その通り、日本人の精神年齢は子供だったのである。終戦から四〇年経って、捨てたものの中に大事なものがあったことに気づいてきたのである。だから、子供は大人のいうことを聞かなければいけないのである。日本人は精神的に宗教的に子供である人が多いのである。宗教には二通りある。大人の宗教と子供の宗教とがある。

大人の宗教とは、心を美しく清らかにし、霊を向上して、人格完成、人間性の向上をめざすもの。**子供の宗教とは**、その場限りの現世利益を求めさせるもの。物質文明はアメリカが先に発達した。そのために日本人は、日本人よりもアメリカ人の方が人間的にも立派であると信じてしまった。敗戦という虚脱感、敗北感を持っていたところへ、マッカーサーに「精神年齢十二歳」と言われたために、そう思う傾向は一層強くなった。アメリカとの交流が盛んになり、アメリカの情報がすぐ日本に入って来るという状態になってきてわかったことは、日本人の多くの人が考えているように、アメリカ人はそんなに良識ある人ばかりだとは言えないということであり、特に宗教的な面に限定して言うならば、日本人の宗教に対する考え方とそう違ってはいない面があるということである。アメリカのことならなんでもよい、と考えることは間違いである。アメリカが現在失敗していることを、なにも日本が真似しなくてもよいではないか。だから、日本人よ、良識を持て。良識を働かせ。と今さら言わなければならないのである。（園頭広周）

「お盆」、「お彼岸」とは

日本の国民性としての、祖先崇拜の習慣が、生活の中にとけ込み、いつか自然の行事になってしまった、と言ったらよいだろう。お盆といえば、先祖の霊がわが家に帰ってくるので、それにご馳走を供養して、盆踊りや灯籠流しをして慰めるとともに、人間達も心の安らぎを得ようとする、今や賑やかな行事になっている。坊さんのかき入れどきで、経文も供養される。子孫と先祖とのつながり、これを大事にするために、現在の私達が、一定の季節を定め、先祖への感謝を表現する行為。それもよいことであろう。しかし、本当のお盆の意味はこうである。

今を去る二千五百有余年前、ゴードマ・ブッタが三十八歳の時の出来事であった。ゴードマ・仏陀の最初の弟子で、カピラ・ヴァーストから護衛のために従ってきた五人のクシャトリア（武士）の一人アサジが、マガダ国のラジャグリハ郊外を遊行していた時のこと、バラモンのウパテッサ（後のシャーリー・プトラ）に声をかけられた。しかしアサジは、知的な宗教論争を他の宗派から仕掛けられても、それに応じてはならないと、ブッタから注意されていたので、それを避けるようにした。シャーリー・プトラは、アサジを見て、この男はただ者ではない、他のサマナーや、サロモン達（修業者）とは比較にならないほど穏やかで、顔色も良く、態度も謙虚で、決しておごりたかぶらない姿に、何とか話してみたい、と思っていたので、はるかに自分よりも年少者であるアサジに従って歩いた。そして対話できる機会を求めた。アサジが、遊行で貰った粥の入った鉢を左の手で抱えながら、食事の場所を探しているとシャーリー・プトラは、自分で禅定する時に使っていた草で作った座布団を木陰に敷いて、「サロモンよ、どうぞこの上に座って、お食事を召し上がって下さい」とすすめた。アサジは遠慮したが、どうしてもということで、シャーリー・プトラとともに食事をした。論争を挑まれると思っていたアサジは、あまりにも親切な行為に対して、「どうも、私のような弱輩者に、ご親切ありがとうございました」と言った。「いやいや、あなたとお話がしたくて、後をつけてきました。本当に失礼いたしました」とシャーリー・プトラは熱心にそう言った。アサジは、常日頃、ゴードマ・ブッタから説かれている法を実践し

ていれば、他の修業者の心に、そのような姿で映るのか、と思い、何か胸にこみ上げてくるものがあった。アサジは言った。

「私の師は、コーサラ国のカピラ・ヴァーストの王子、ゴータ・シツタルダーとおっしゃる方で、すべて原因と結果、縁生ということについて教えられております。心の在り方を八正道で定め、日々の心と行ないを正して修行しております。シャーリー・プトラは、これこそ本物だ。神を祭って祈るのではなく、自らの心の悟りを教えているという事実、これこそ本物だ、これこそ本物の仏陀であろうと、はやる心を押さえながら、「あなたの師に紹介して下さい。私の探し求めていたブッタです。どうぞよろしくお願いします。」とアサジの手を握って言うのであった。そしてさらに、「私はラジャクリハの町から北東の山峡を縫ってしばらく行くと、ナーランダという町がありますが、そこが私の生まれたところです。私の師は、アサンジャーと呼ばれるバラモンです。この師について、ウパニシャドを学び、厳しい修行を致しておりますサロモンです。私の親しい友人にも修業者がいますが、本物の仏陀に会うことができたなら、必ず連絡し合って一緒に行動をしようと約束しています。ぜひ友人と一緒に紹介して下さい」と言うのであった。アサジは戸惑ったが、ブッタに相談して、明日この場所で返事をするを約束し、ベルヴェナーに帰った。

ベルヴェナーに帰ったアサジは、今日の出来事をブッタ説明した。ブッタは、その話を聞くとこういった。「その二人は、かつて、前世で私の法を学び、良く道を修めた者だ、再び今世で道を究め、私とともに衆生の心に光明の灯をともしようである。遂に、たずねてくる機会を迎えたが、アサジよ、過去世の友がくるのだ。明日、サロモン達への説法の時に案内するが良いであろう。」すでにブッタは、正法に帰依する二人のことを知っていたのであった。アサジは、約束の日、ベルヴェナーの多くのサロモン達（修行者）の前で、シャーリー・プトラをブッタに紹介した。仏陀は、コースタニヤやウルヴェラ・カシャパー達、千数百人のサロモン達を前に、「今、たずねてきた二人のサロモンは、過去世において、正法を修めた人達だが、再び今世で道を究め、サンガーの指導者となるだろう。」と言って皆に紹介した。コースタニヤをはじめ古い弟子達は、今日入門した者達が、なぜ指導者になるのか、その意味が解らないので、ブッタがお世辞を言っているのではないだろうか、大きな疑問を持つのであった。しかし、初めて会うブッタの言葉に驚いたのは、古い弟子達よりその二人であった。二人は、心の中からこみ上げてくる感激をとどめることが出来ないものであった。

懐かしさというか、不思議な気持ちのようで、ただ嬉しくて、こみ上げてくる理由も解らなかつたようだ。しかしその後、サンガーの空気は、古いサロモンの嫉妬心のため、大分調和が乱れていくのであった。ブッタは全員を集めて、「サロモン達よ、良く聞くがよかろう。法に新旧がないように、弟子に新旧の差はないのだ。今世だけのことを考えれば、早く来た者、遅く来た者の差はあるだろう。しかし、早く弟子になった者は、よく後輩指導できるように、自らを正し、精進することが大切だろう。」ブッタは、過去世も、現世も、来世も見通す力を持っているのだ。最近来たシャーリー・プトラもマハー・モンガラナー（コリータを後に改名）も今世においては、サロモン達より遅く来たであろうが、過去世においては、私とともに道を説いた者達で、その時から思えば、もっと古い弟子達といえよう。過去世において修行した両人は、やがてアラハンの境地に達し、転生輪廻の事実を悟るであろう。生命は、過去世の縁によって今あるのだ。それを、今世だけの判断で、新旧の弟子という差をつけるべきではないのだ。互いに、よく道を極めて、心の歪みを正さなくてはならないのである。指導者とか支配者とかいうものは、自らが定めるのではなく、他人が、その技量と行動によって自然に造り上げられてゆくものなのだ。それが正しいのだ。古いとか新しいとか、武力や権力などによって、人の心を支配することはできないのだ。智慧と勇気と努力によって作り出された偏りのない生活の中から、正しい道を積み重ねた時に、自ら人はその人間の価値を知り、慈愛に富んだ心と行ないの指導者を慕うようになるものだ。この両人は転生輪廻の過程で、積み重ねてきた器が広く、豊かな心が修行によって造られているのだ。やがてその事実を実証するだろう。」と力強く、説法したのであった。

その後一週間目にして、モンガラナーは心の窓を開き、天上界、地獄界を見通す力を持つことが出来、天眼の一人者となったのであった。その結果、ゴータマ・ブッタが、過去世において仏陀であったことが実証されるとともに、彼は他の人の肉体的欠陥から心の状態まで、はっきりと見通すようになったのである。モンガラナーがその天眼で、自らの肉体的先祖や母などが、どこに住んでいたかを見ると、母は一人淋しく、薄暗い世界で仕事をしていた。モンガラナーは、せめてその母に水でも差し上げようとした。しかしその水は、途端に炎に包まれてしまうのであった。このことをブッタに説明すると、「お前の母は生前、自分のことしか考えないで、他人に対しては布施の心もなく、気の毒な者達に何かを恵んでやったこともなかった。そして、常に自分を中心として、他人に慈愛を与えることなく、他人からの布施ばかりを望んでいた。自分の意志にそぐわぬ者に対しては、バラモン階級を表面に出してジュドラ達にも厳しい行為をしたのだ。その自らの心と行為の結果、火炎地獄に堕ちているのだ。」

モンガラナー、そなたは母の代りになって、困っている人々にできるだけ布施をなささい。お前の母は、その行為を見て、自分の人生の誤りだったことを悟るだろう。肉親のお前の努力が、お前の慈悲が、母親を救うの

だ。そうブッタは諭すように言った。「ブッタのお言葉のとおり、母のため、私のために、悩める衆生に供養します。モンガラナーはそう言い、その後、日を定めて母親のために、貧乏な人々や病める人々に慈愛の布施を行なっていくのであった。このように本来のお盆の目的は、亡くなってしまった人々が、この世に在った時、忘れてしまった布施の行為を、生存する子孫が代わって行為することなのである。 (高橋信次)

医学的には、精子と卵子が結合して子供が生まれるといますが、それは間違いです。精子と卵子が結合すれば、卵子に与えられている細胞分裂の働きによって、一ケの卵子が二ケになり、八ケになり...分裂をして増殖しますが、それで赤ちゃんの肉体がつくられることはないのです。肉体を持つことを望んでいる霊が、その細胞分裂をコントロールして、配列してゆく時に、健全な肉体がつくられてゆきます。霊がコントロールしない時は、細胞分裂はしても肉体とはならないので、それを「ぶどう状鬼胎」といって、早く手術して排除しないと危険だと言われています。

真理は一つである。真理は二つあるわけではない。

裁判と心の拘束 (こうそく)

この現象界における裁判は、人間が人間のつくり出した法律によって他人を裁いている。裁判官の考え方や、思想的な背景、個人的感情もその判決には出てくるだろう。しかし本来、人間が人間を裁くことはできないのである。なぜなら、被告の身柄拘束という肉体的な行動は制限できても、心の束縛はできないからだ。心は自らの想念によって自由自在に変えられるだろう。 (高橋信次)

人生の目的は、人生の目的を知ることにある。心の渴きをいやすものこそ、人生の目的とするものである。人生の目的を知るために、人は生きなければならない。人生の目的に叶う、真の生き甲斐を感じずる方法は、必ず心の喜びがあるから、長続きする。人生の目的に叶わない生き方には、心の喜びがないので、飽きるのです。

反省は、悪かったと気付くことだけが反省ではない。「二度ともうしません」という誓いと、これからどうすればよいか、その時はではどうすればよかったのであるかが、はっきりと決心されていないと反省したとはいえないのである。その反省によって因縁を超越し、天上界へ行くことが出来る。生きている間に犯した罪で、このことはもう一回体験して反省が本物であるかどうかを確かめたいと思ったものが「業(カルマ)」として出てくるのである。生まれつきその人の性格の中に、そのカルマが含まれてしまうから、生まれつき金にきたない、名誉欲が強い、女に弱い等の醜い性格があることになるのである。

人を依りどころとせず、法を依りどころとせよ。 (高橋信次)

高橋信次先生が禅定の指導をされる時に、「とにかく、いつ死んでもよいという心境になりなさい」と言われた。

なんでも憑依霊のせいにして、「なにか憑いているんじゃないでしょうか」と考える癖もやめた方がよい。そんなに簡単に憑依するものではないし、逆に心を明るくしようと努力している人には、絶対に憑依しないのであ

るから、心が暗くならないように、ふさぎ込んでもうだめだと思ったりしないようにすればよいのである。

死とは

魂は生き通しのもの、肉体を脱ぎ捨てて魂はあの世（実在界）に還るにすぎない。

誕生とは

あの世で一定の時間を過ごした後、この世で肉体を持つことです。

宇宙-0054.jpg (2792 バイト)

医者と正法

これからの医者は宗教家でもなければならぬ。そして、患者の心と肉体の両面から救わなければならない

病

からだは無理をすると調子が狂い、休まないで壊れるもの。胃が痛いといえば薬をのみ、風邪を引けば薬でおさえ無理をする。胃を休ませ、からだを休ませればもとに戻るもの。それが自然の摂理

苦しみの根を元から絶たなければ苦しみはいつまでも輪廻します

神の意思

我々の住む太陽系は、大宇宙から見ると顕微鏡でも分からない極微の一点にすぎない。太陽系に属する銀河系には、約一千億個の恒星、約五億個の惑星。地球はこの五億個の一つにすぎない。銀河系のような星雲群は、約一千億個にのぼり、大宇宙を構成している。大宇宙の無数の星々は六十兆個。地球はその中の一つです。そして、地球は太陽の廻りを自転・公転し、規則正しく循環しています。百年に千分の一秒（十万年に一秒）しか狂わない程正確です

二十一世紀の人間像

自然食を食べて、コンピューターを使えるクリーンな頭脳を持って、正法によって心を安らかにした人間、それが私が描いている二十一世紀の人間像である。 (園頭広周)

個人の運命は三年、五年、七年とその倍数で変わるが、国の運命は三十年、五十年、七十年、百年という数字で変わる。七は完成の数である。

今まで私はたくさんの人に光を送って奇跡を現わした。私が残念に思っていることが一つある。それは、病人に光を送って**病気を治して下さい**という願いばかりであって、どうしたら病人の心を救うことができるでしょうかと云ってくる人は一人もいなかったということである。死に直面して、医者から後数日の生命だと言われたというような場合でも、「元気になるように祈って下さい」と云ってくる人ばかりで、「安らかに死ねるようにするにはどうすればいいでしょうか」という依頼は一つもなかった。病気が治りますようにと祈るよりも、心、霊が救われますようにと祈る方が、病気も早く治るのである。だから私は、「病気を治して下さい」と言われても、祈る時はその病人の霊が救われることを祈るのである。
(園頭広周)

日々の日の出がみな初日、元日の日の出だけが初日ではない。正法流布に打ち込まれた高橋先生の言葉。私は、神よ、神の子である私を心のままにお使い下さい、と。私が高橋先生を信じたのは、その説かれる事が正しい神理であると同時に、その魂の感動による心の安らぎがあったからである。 園頭広周

正しいということは、神の心を基準とすること。地獄で苦しむ諸霊は、みな現象界に心を奪われた人達なのである。

大なる生命は、小なる生命をコントロールしなければならない。というのは、"心の法則"である。

与えれば与えられる。

日航は全日空や、東亜国内航空に比べて事故が多い。調和のないところに事故が起こるのである。日航は四つの労働組合に分かれて、なにかというストをやっている。その争う心がなくなるとまた事故を起こすことになる。

日露戦争の時の連合艦隊司令長官は東郷平八郎元帥であった。当時、舞鶴の要塞司令官で、退役一步手前であった東郷中将を司令官に抜擢したのは山本権兵衛海軍大臣で、その理由は「東郷は運のいい男だから」ということであった。

脳溢血で倒れて、半身が不随になっている人達に必ず質問します。あなたは倒れる前に怒った心を持っておりませんでしたかと言うと、百人が百人全部そうです。怒りの想念は即、肉体的な諸現象にまで大きく現われて来ます。

年寄りの方で、お嫁さんのことを悪口を言います、こぼします。この方もやはり身体中がどうにもなりません。百人が百人相談に来る人達が同じ現象だということは、しっかり考えなくてはならないでしょう。人間は心のあり方が肉体に反影するという事実、これは仏教が説いているところの色心不二という姿をみてもわかるでしょう。

(質問) 地球はこれから、段々よくなって行くのでしょうか？

(高橋信次) 「よくなっていかなければ困ります。しかし、もうちょっとの間は悪くなります。」

キリスト教とイスラム教は偶像崇拜をしないが、日本仏教は偶像崇拜である。

カトリック教は、白色人種が有色人種の国を植民地にする時の道具にされた。

般若心経はどこでも読まれている。有難いお経であり、したがって写経も良し、読誦もまたご利益があると伝えられている。しかし、その意味もわからず、行為のないものが、朝晩上げて光は届かない。今日の仏教は、経文をあげたり、写経自体にウエイトがかかり、日頃の想念と行為については問題にしていなくて問題がある。(高橋信次)

Home

「念力と祈り」

念力も祈りも、ともに想念の働きです。さて、念力は一口にいて我欲の想念であるとしていますが、大宇宙は神が創造したものです。光あれといて光をつくり、海をつくり、草木をつくり、人間をつくりました。これは神の一念によるものです。人間は神の子です。その証拠に、自分にウソはつけません。また、この地上にユートピアを創造してゆく力を与えられています。文明文化は人間の一念の産物です。問題は、その一念に、人間は、我欲を上乗せして生活している、という実態です。だから、念力は我欲のそれだというふうに見られてきたわけです。しかし、念力のエネルギーは神の子の創造力を意味し、したがって本来は、その念力を「正念」として使わなければならないものです。祈りは「真心」の発露であり、「反省」であり、そして、それにもとづく行為であり、神との対話を意味し、感謝の心の現われとなるものでなければなりません。イエスの言葉に「汝信仰あり、われ行為あり」というのがありますが、これこそ「正法の祈り」であり、あやまちなき行為こそ「祈り」の神髄であると言えるわけです。

(高橋信次)

反省は神の慈悲

太陽が善人をも悪人をも等しく照らすが如く

汝らの髪の毛は、一本だにすべて、数えられてあるのである

汝らの思うことは、一点一画だにすたることなし

太陽が善人をも悪人をも等しく照らすが如く

正見し靈的な立場から、物事を見る

反省と後悔は全く違います

全体の幸福を願うなら、まず自分自身の心を幸福にさせることです。幸福のなんたるかを知らずして、どうして、人にその幸福をわかち与えることができましょう。正法はまず己の幸福から出発します。そうして全体の中の一人一人の幸せが目的です。 (高橋信次)

マスコミと正道

マスコミについて言えば、金さえ儲かればどんな方法で何を発表しても良いという考え方は、疑問とすべきである。社会人類の調和と安らぎのための報道なら、不変の安らぎを与えることが出来るが、情欲を誘うような、人の心を揺り動かすような低俗なものに屁理屈をつけたものは、一時的なものである。人の心は一時は騒いでも、必ず離れて行く。不真面目なものを出版したり、映画化したりする人々には、その不調和な想念行為が帰り、その心は黒く覆われる。彼らはそのことを思い知らされるであろう。(高橋信次)

芸術と正道

俳優が、一つの演技を通して、その主人公になり切り、悪役、病人、自殺、恋人などの演技を通して、心も身もそのものになり切ってしまう。私達の心は一念三千、善にも悪にも通じてしまうものであるから、不調和なシーンは、必ず次元を超えた不調和な世界に通じ、俳優が病人のシーンを演技しているうちに、実際に主人公の病気と同じ現象になったり、死亡している主人公のシーンを再現するような場合、演技だけにとどめないと、その反作用が現象化することがあるので、演技から解放された時には、正しい心で、自ら演じた主人公の善悪をはっきりと認識して、善なるものは心に刻み、悪なる不調和な部分はよく反省して、現実生活における己の心と行ないを結びつけないことだ。(高橋信次)

人工受精...実験の段階では天上界の霊が協力して、正常な子供が生まれるが、乱用されるとなると奇形児が生まれることになる。

魔とは何か

それは迷いです。肉体がすべてであるという考え方です。人間は大事な心を忘れ、知らず知らずのうちに執着、自己保存という神の子に反した魔のとりこになってゆくのです。

「運命はわからないからよい」

一年後、五年後の自分の運命がわかったならば、修行の度合いも少ないものとなるからです。

魂というものは、本来、光子体（意識体ともいう）全体を言います。心の面から言いますと、潜在意識、想念帯、表面意識を含めています。

苦しいからといって、宇宙の果てまで逃げて、苦しみは追ってくる。なぜなら、苦しみはあなたの心の中にあるからである。

人生がすべて魂の修業であることがわかると、すべてを赦すことができる。

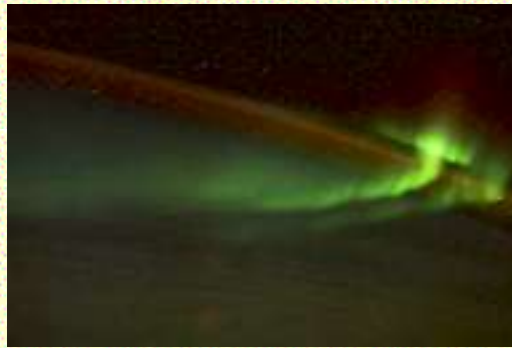
法は心の太陽である。

太陽の熱エネルギーは、一秒間に石炭を二百万トン燃焼させた熱エネルギーに匹敵します。

地球自体の熱源は、**電磁波重力**というものを媒体にして、太陽熱を吸収保持することによって維持されている。地球の内部は、火山を見てもわかるとおり溶岩となって燃えています。これはまさに小太陽のように燃えているのです。**小太陽は親太陽の影響**を、絶えず受けていることを知ってもらいたいと思います。太陽がその光を消しますと、地球もまたその生命活動を停止します。

今日の自然科学は、一つの壁にぶつかっています。その壁とは物質のモトである原子、素粒子についての状態は説明出来ても、その状態を生み出しているところの**エネルギー**そのものが分からないからです。心ある科学者は、そのエネルギーについて、それは神仏の力であると言っています。その通りで、エネルギーこそ神仏そのものなのです。原子を動かしているものは**光子**です。光子を光子たらしめているものは、**霊子**というものです。今日の科学、機械では、光子は発見出来ても霊子を発見することは出来ません。霊子の発見はなお百年以上を要しましょう。しかし、あえて申しましょう。**霊子こそ、神仏であり、エネルギーそのもの**であります。（高橋信次）

子供は父と母との豊かな愛情によってのみ、豊かな情操を持つことができるのである。



「いじめっ子をなくすには」

保育、教育について

アメリカの占領政策による保育、教育の指導方針は、保育、教育を 家庭の責任制でなくて、公共責任制にしなければならないという事であったように思える。保育、教育を公共責任制にしようという事で、壮大な実験を行なったのはソ連であった。ソ連では哺乳期間が過ぎると、すべての子供を公共施設に集めて、そこで生まれつきの共産主義の闘士を育て上げようという事をやった。その結果は失敗だったのである。一番母親のふところに抱かれて母親の愛情の欲しい時に、無理矢理に母親から引き離されて施設に入れられた赤ちゃん達は、愛情に対する欲求不満から攻撃的になり、実際は可愛い盛り of 赤ちゃん達が、這い這いしながら他の子に噛みついたり、ひっかいたり、口を血だらけにして相手の子供の肉を喰いちぎる赤ちゃんが出たりして、地獄の様相を呈した。それでソ連は、赤ちゃんを公共施設で、国家の方針で育てるという事を中止したのである。公共責任制が失敗だったのであるから、完全に家庭責任制にし、家庭教育で出来ない部分を学校教育に委ねるという事をしなければならない。

ところが、終戦後のアメリカ占領政策によって、日本伝統の家庭教育責任制が破壊されてしまった。父権の喪失によって、従来家庭教育の責任者であった父親の権威が全く無視されてしまった。日教組は「父親としての権威を持ってはいけない。子供のよき友達になれ」と教えた。一方、母親の方も母乳を飲ませず、ミルクを飲ませて**母権**を放棄した。そうして、父と母との豊かな愛情を受けられずに育った子供達がみな攻撃的になって「いじめっ子」になっているのである。現在いじめっ子が問題になっているが、いじめっ子をなくそうというので、警察も乗り出して禁止させようとしているが、強制力によっていじめっ子はいなくなったとしても、そのいじめっ子が本来持っている**破壊性は他の方面に爆発**して、今までとは違った形の**社会問題**が起こってくるであろう。いじめっ子をなくすには、これまでの日教組の教育方針に反対して**父権**を確立することである。父親は子供の友達であってはいけないので、はっきりと父親になり、家庭に於ける教育の責任者になることである。いじめっ子をなくすには、そのいじめっ子の父親の教育、それに深い母性愛を持って育てることを怠った母親の**再教育**をしないといけないのである。昔の親は、自分の子供が人の子をいじめていると知ったら、それこそ殴ってでも子供を教え諭したものである。これだけいじめっ子の問題が社会問題となっているのに、わが子を反省させて、いじめないようにさせたという親が登場しないのはおかしいではないか。いじめっ子の親達は一体何を考えているのか。ここにも現在の親達の**人間的未熟さ**が露呈されている。

「いじめられっ子」

いじめられっ子は、父親が**権威**を持っていないところへ、余りにも母親がベタベタと**甘やか**して育てたから、いつも子供は受け身になって、自分から積極的に何かをやるという積極性と行動力がなくなって、というよりは、いじめられるとそれに対してどう反応したらいいのかわからず、いつも受け身になって萎縮するから、ますます面白がっていじめられることになるのである。いじめられたら、たとえ相手は多勢で負けるに決まっていますが、**わあーと立ち上が**って誰でもひっつかまえて噛みつくとか、殴りかかるとかいう反発の行動力を見せつけると、いじめられなくなるのであるが、何事も母親に甘えさせられて、しなければ母親がやってくれるということで、無気力に消極的に育てられてしまったことが、いじめられやすい体質になってしまっているわけである。昔の親は、子供が喧嘩で泣いて帰ってくると、「男のくせに泣くな、これでやってこい」と棒を握らせて外へ追い出す親がいたものである。暴力を振うのがいけないというなら、泣かされた子が先に暴力を振うということは絶対になく、先に暴力を振ったのは泣かせた子なのであるから、その子の暴力こそ先に批判すべきである。どん

な逆境にも決して負けてはならぬ、泣いてはならぬということを教えようとした、その父親のわが子の強い成長を願う心は大いに認めるべきである。その棒で相手を殴り返すかどうかは、その子供自身の問題として子供に委せればいい。わが子のいかなる暴力もいけないというのであったら、その親は最初に暴力を振った子供の親に反省を求めるべきである。そうすることが「筋を通す」というものである。

私達が同じ場所に生まれているということは、非常に縁がある者同士であって、あの世から見れば、同時代の同期生である。こうした同期生も、肉体を持って生まれてしまうと盲同然になってしまい、「お互いにライバルだ」なんていう考えを持ってしまう。人間は本当に哀れで愚かな者であると、私の指導霊は言っている。心の世界が開けた時、人間は皆兄弟であることを悟り、お互いに協力し、調和の心を持って嘘のない生活を作って行くものであるが、多くの人々は、小さい心で、自ら小さな自分を作ってしまふ。人間は、この世を去る時に、悔いのない人生を送ったと確信できることが、最大の喜びなのである。 (高橋信次)

この現象界で学んだ知識は、ややもすると自己保存のための道具になりやすく、またこれに溺れやすいのが人間だ。そうした結果、学歴やペーパーの試験によって、人間の価値が判定されてしまう。心が失われていても、試験が通れば社会的地位が与えられ、地位を得た者の中には、権力の座について悪徳を積む者がいる。また、そうした権力者と組んで利欲に関係する者など、自己保存をして他人のことなどかえりみない人間がいる。しかし、そういう人間も、権力の座をひとたび下りてしまうと、陸に上がった魚のように人生の無常を知る。ちやほやしていた取り巻きも、いつか遠ざかる。腐敗した肉に集まる蛆のような心を持っている人々も離ればなれになって行き、悪徳業者は新しい相手を求めて散らばる。人間のつき合いは、このようなものであってはならない。 (高橋信次)

自分の非を認めず、相手を攻撃することによって自分を正当化しようとするのは、弱者の論理である。

人間は魂があるのであって、輪廻転生するのであり、死ねばあの世があって、そこでまた勉強をするのであり、この世で苦しんでいたら、あの世でも苦しまなければならないのであり、その苦しみを通してどのような魂の勉強をしなければならぬのか、その苦しみの意義がわかるまでは、その苦しみはなくなるのである、ということがわかってこないと思自殺はなくなると思いません。自殺した靈魂は地獄界に堕ちて、神が定められた輪廻転生のルールに反したことを厳しく反省しなければなりません。反省が終わって、許されて再び地上界に生まれ変わってきたとしたら、人生というものがどんなに大事であるかということを知り、どんなに苦しいことがあってもこの人生を逃避するために絶対に死ぬわけにはゆかないという、厳しい決心を持って、孤独の一生を送らなければならないのです。孤独の厳しさの中で、人生を大事にすべきこと、人と人とのつながりを大事にすべきことを学ぶのであります。

反省的瞑想は、正しい心のものさしを知らないでやっては何にもならないのです。心のものさしを持って、善我であるか偽我であるかをはっきり見極めることです。「反」というのは、「ふりかえって、かえり見る」ということであり、「省」とは、「少な目にかえり見る」ということで、一ぺんにどかっとかえり見るということではなくて、少しずつ少しずつ、じっくりと省り見ることです。

なんでも当たり前だと考えて感謝しない人々が死んで行く世界は、何を見ても、何を食べても満足することの出来ない苦しい世界である。

「先祖に対する供養は」

まず先祖からは肉体舟を戴いたのだ。育てて戴いたのであろう

感謝する心を持って報恩の行為で示すことが大事だろう

それには身体を丈夫にして心を美しく家庭が円満でいつも笑い声の立つ家で朝起きれば希望に燃えて昼は自分の仕事に勤勉で夕は一家団らんの夕食をとり夜は自由を与えられ。こうした人間の一日に、不満があるはずがないでししょう。このような生活をするのが、先祖に対する最大の供養だと言えます。たとえ地獄に堕ちていても、子孫の平和な生活、光明に満ちた生活をしていれば、地獄霊もその姿を見て、自ら自分の非を悟るでしょう。己自身の不調和を改め、その霊を昇天させる原動力となるからであります。子の幸せを思わぬ親はないはずですが、しかも、その子が親より立派であり、家庭が円満に調和されていれば、親は子に励まされ、その子に恥じない自分になろうとするのは人情ではないでしょうか。あの世もこの世も、人の心に少しも変わりはないのです。類は類をもって集まるの喩で、その霊は自分と同じ思想、考えを持った人に助けを求め、いわゆる**憑依作用**となって人の体、実際には意識に憑いてしまいます。すると憑かれたその人は、病気をしたり、自殺したり、精神病になったりしてしまいます。地上が調和されると、あの世の地獄も調和されます。あの世とこの世は、いわば**相関関係**にあって、まず個々の家庭が調和されることであり、調和こそ**最大の供養**ということを知って頂きたいと思います。**先祖の霊に物を供えたり、法事で物を供えることやお経をあげることが先祖供養ではないのです。**（高橋信次）

信心とは、己の心を信ずることなり。

「朱にまじわれれば朱くなる」という諺があるように、迷える霊に対しては、生きている人々の霊域を正すことが、自分自身をも救うことになる。心を失ったお題目を何万回上げても、忍耐力と声帯の練習のみで、自分自身の心を救うことは不可能である。お題目の神理を生活の中に生かすことこそ、自分が悟る近道であることを知らなくてはならない。

雨が降り、風が吹くことによって、大気は浄化され、植物が育ち、明日の生命、明日の生活が約束されていることを知れば、大自然のこうした計らいに対して、感謝の心は湧いても、文句などは出ないはずですが。人はまず天に対して感謝し、地上の環境についても感謝すべきです。

食事

食物も生きています。感謝の心を持ってこれを摂れば、その食物は滋養となって、血や肉となって健康を維持してくれます。反対に、ぜいたくをし、年中不満の心で食する場合は、食物もその人を嫌い、栄養にはなってくれません。物を大事にし、いつくしむ人には、万物は喜んでその人に奉仕してくれます。

神社仏閣の原点

神社仏閣は、生きている人間の心の修養道場とすべきであらう。原点にかえるべきである。

動・植物は生かされているもの。人間は生かされていると同時に生きていくものであります。

この身の生まれた故里が恋しいと同じように、魂は魂の生まれた故里を恋い慕う。切ないまでに故里を恋い慕う心が神の信仰心である。神は私達の故里である。

反省は、大きく飛躍するためにするのである。雲が晴れたら太陽が顔を出すように、反省して心の曇りを除けば神の子の実相が現われる。

「地上になぜ争いが絶えないか」

平和な実在界があるのに、そこに光の大指導霊や、光の天使達がいるのに、なぜ地球上に戦争や、他人との争いや、労使の闘争や病気があるのだろうと疑問を持つのは当然です。それは実在界（あの世）とこの現象界（この世）とは次元が違っているが、この地上界の人々の心の調和によって、霊困気が清明になれば、通信は可能ですが、人々の心と生活の態度が、怒りっぽいや、金銭欲が強いとか、情欲に溺れているとか、他をそしるとか、地位や名誉ばかりを追っているとか、形式主義に陥っているとか、不調和になっているので、天上界の者達がなかなか指導出来ないのです。（高橋信次）

宇宙-0011.gif (12582 バイト)

歴史的なものの見方の出来る人は段階が高いし、出来ない人は低い人である。過去から現在、未来と、長年月、何百年、何千年と永い時間の歴史の流れを見つめることが出来る人は段階の高い人であり、今日一日のことしか考えられないという人は低い人である。

同じ時に、同じ国に生まれるということは、その国に生まれて為さなければならない**共通的使命**を持っているということである、と言われた高橋信次先生の言葉を改めて考えさせられることであった。

天を仰いで神に感謝する人はあっても、大地にひれ伏して感謝する人は少ない。

題目を上げて死者が成仏するなど、とんでもない話である。

他の宗教を邪宗と決めつけ、信者には罰が当たると脅迫し、自らの心にまで足枷をはめた、それは哀れな人々である。

信者もまた罰など当たるはずがないのに、恐ろしがっているのだから呆れたものだ。

弁財天、大黒天

仏教でいう弁財天とか大黒天とかいうと、何か金儲けの手助けのように思っている人々が多いが、これはとんでもない間違いである。弁財天とは、心の中に埋没している、転生輪廻の過程に造り出された私達の智慧の宝庫を開くための協力者であり、大黒天は、肉体を持った光の天使達が、正法を流布する時の、協力者である。経済的な援助や環境を提出する諸天なのである。それを現代人の多くは偶像化してしまっていて、これに祈れば財産に恵まれると思っている人が多いが、残念なことには、全く金儲けには縁の遠い諸天善神なのである。

高橋先生は言われた。

一九七二年（昭和四十七年）現在、四百二十五人の上段階光の大指導霊（如来）

二万人近くの上段階光の指導霊（菩薩）

一億数千万人の光の天使が実在界におられる。

資本主義もマルクス主義も、物質と経済が基準になっているため、心はない。私達の本当の幸せは、果たして経済だけであろうか。経済だけに幸せがあると考えている人々は、本当に心の貧しい人間である。

人間は善いことをしなければならぬ、と言われる。それは道德の世界である。人生は善いことをすることだけが目的ではないのである。ここからが宗教の世界に入るのであるが、人生の目的は、善いことをすることを通して、大生命即ち神そのものの存在を知り、その大生命、神と自分との関係を自覚することにあるのである。

愚痴は自分の欲望が満たされない時に起こり、心に曇りをつくる。その結果、神の光をさえぎる。
（高橋信次）

世の中は物質文明の時代から **靈的文明の時代**へと移ってゆきます。と高橋信次先生も言っておられました。

高橋先生が熱を入れて講演をされると、頭から顔から手のひらにも一杯の金の粉がついたのは、多くの人が見ていた。高橋先生が「正しく心を開いた光の天使にはそういう現象があるのです」と言われた。

（註・動物霊も出すことがあるので、その人の生き方、在り方、その人のすべてを見て判断しなければならない）

何人折伏すればあなたの業はなくなる、とか言われれば、欲望のある者は一生懸命になる。そうした信者の姿こそ、哀れである。組織の細胞になっているため、自分自身、何も解らなくなっているのだろう。信仰することによって、むしろ苦しみと疑問の渦の中で、この人生を送っているのである。そうした疑問も、罰が恐ろしくて疑問を持たないという指導者も哀れである。

阿修羅も、地獄霊も、動物霊も魔王達も、**心の美しい人々を侵害することは出来ない**。なぜなら、正しい心の人々には、心に曇りが無い、神の慈愛の光に満たされているため、彼等魔王達も、近づくことが出来ないということだ。

理想を実現するには実現するにふさわしい条件が整わないといけない。現実を無視して理想だけを追うと失敗することになる。理想は一足飛びに実現出来ない。現実の永い積み重ねの上に理想は実現するので、正法による世界平和の理想の実現も、一步一步の努力が必要である。

考えが行き詰まると、考えは堂々廻りをするばかりであったが、こういう時には「おまかせの祈り」をすることである。自殺する人達はこういう祈りの仕方があることを知らなかった人達である。「人事を尽くして天命を待つ」というのは、こういう時の言葉である。祈れば必ずその人にとってふさわしい道が開けてくるのである。「人事を尽くして天命を待つ」という「おまかせ」の心境になった時に、即ち自力の極に他力があるということになって、天上界から協力があることになるのである。新聞に、自殺した、一家心中したという記事が出るたびに、そういう人達に「正法」を知らせて上げるまでに至っていない自分の力不足が悔やまれてならない。捨てる神もあれば、拾う神もある」という諺は、人間が一切を捨て切ったら、必ずよくなる、運命が開けてゆく事を教えたものである。また、「身を捨ててこそ、浮かぶ瀬もあれ」という諺もある。諺とは、言に彦(日子)と書く。日子とは神の子であり、言葉の中の神の子なるもの、即ち神理を現わしているということである。
(園頭広周)

Home

私がもし、その会社の従業員の組合長であったら、ロボットを導入しても五〇人の首切りをさせないように(こういう時、社会・共産党の人達は単に「首切り反対」というわけで、同志愛の発動は何もないのである。)会社と組合員に対し、労働時間と賃金の再配分を提案する。ロボットが導入されて五〇人あればすむのを、一〇〇人でやろうとするのであるから、当然一人当たり、これまでの労働時間の半分働けばよいということになる。労働時間が半分になったのであるから、賃金も半分ということになる。今までもらっていた給料が半分になっては生活出来ないということになる。そこで、ロボットを導入した生産性を勘案して、とにかく足ることを知った。生活出来る最低限の給料で辛抱して、一人の首切りも出さないように、経営者も従業員も、みな譲り合ってゆくというようにすればよい。現在の労働組合運動には愛がない。欲望を肥大化させた「金寄せ」運動ではない。「足ることを知る生活」とは、神が与えられた智慧と資源を、人間の魂の向上のために、最も有効合理的に生かして使う生活で、精神的にも物質的にも全くムダのない生活である。行政改革が国民の思う通りに行かないのも、結局は公務員の反対が強いからであり、**国民全体が「足ることを知る」**ということにならないと、行政改革もむつかしいということになる。
(園頭広周)

私が考えていた愛国心は、日本人が日本の国を愛して道義国となり、教育の徹底によって、日本には泥棒や悪いことをする者は一人もいなくなつて、刑務所は空っぽになる。みんな助け合つてやってくよ美しい国の建設であつた。そういう愛国心なら、世界中どこの国でも日本の国みたいにならうとするであらう。決して日本が嫌われ警戒されるということはない。

すべて自然の警告は、「忘れた頃にやってくる」のである。

よくない心

正しくない心とは、人を憎む思い、怒り、そねみ、愚痴、中傷、足ることを知らぬ欲望など、こういう想念を言います。なぜこうした想念が正しくないかと言いますと、自己保存が主体になっているからです。人類の歴史の大半は争いの歴史です。闘争と破壊の歴史です。自己保存の歴史です。（高橋信次）

麻薬常習が家庭の主婦の間に広がってきているということは、それだけ心の中に不安を持っている人が多く、その人達がいかに安易にその苦しみを忘れようとして、麻薬に頼っているかということであるが、肉体があれば麻薬を打つてしばし苦しみを忘れることが出来る。或は落語や漫才を聞いて一時忘れる、或は遠い旅へ出て一時忘れる（これらはすべて逃避である）ということが出来るが、死んで肉体がなくなると、そういう逃避は出来なくなる。心だけになるのであるから、心で解決しない限りその苦しみはなくなるならないことになる。だから、心をきれいにして死んだ人にとってあの世は楽しい世界であるが、執着やいろいろな悩みをそのまま持って死んだ人にとっては、あの世は確実に苦しみの世界となるわけである。

「天に在しますわれらの父よ」は、現在の教会キリスト教にあるパウロ教。「大地なる母に感謝する」は、原始キリスト教

政治的には法律にふれた人を悪人というのであるが、宗教は心のあり方を問題にするのであって、自分は法律にふれるような悪いことは何もしていないと言っても、心の中で怒り、妬み、悲しみ、不平不満の心を持てば、それは宗教的には悪というのである。だから、幸福にならうと思つたら、見せかけの表面的な明るさではなく、心の底から明るい心にならなければならない。

転生輪廻（循環の法）というものは、万生、万物ことごとく整然と行われ、しかも滅すること。増えることもなく永遠に循環しています。（般若心経の一節、不増不滅）

肉体は人生航路を渡る舟にすぎない。肉体は朽ち果てても魂（意識・心）永遠

お釈迦様の教えの中に、念仏を唱えて阿弥陀様を拝めと、どの經典に書いてあるのか教えて欲しい。仏教の根本は、苦しみから解脱する道を教え、正しい実践生活を説いているものである。従つて、偶像や曼陀羅を拝めとは、どの仏典にもないはずである。（高橋信次）

「地獄救済は地上に調和された天国を作ることから始まる」

地獄界は地上の人間が自己本位に生きたあげく、創り出した世界です。地獄界には、あの世の太陽の光はまったく当たりません。光が当たらなければ、彼らは生きることが出来ません。そこで彼らは、地上の同類の人間から、生きるエネルギーを吸収して生きている訳です。その意味では地獄霊は吸血鬼です。彼らはこうして、生きた地上の人間からエネルギーを吸収して、暗黒世界で生きているのです。

地上が愛の生活に満たされれば、地獄霊の生活の足場をはずすことになり、人間社会も明るくなるわけです。またこうすることは、地獄に堕ちた肉親縁者の霊達の絶大な供養ともなり、また彼らに反省の機会を与えることになり、人間界と地獄界の悪循環の絆を断ち切る大きな基礎ともなるのです。

やがて、地球上の魂のレベルが上がるといえるのは、過去世で理想世界を築いた経験のある高級霊が、ぞくぞく生まれてくるということで、高橋信次先生は、そういう霊が既に生まれていると言っておられた。文化が発展するのは、高級霊がそこにたくさん生まれてきているからであり、生まれなくなれば、そこは文化が衰退し、また、高級霊が生まれた地方に新しく文化が興ってくるのであります。

先端医学といわれるもの

人工妊娠も、試験管ベビーも、医者は科学の勝利だとか、人間が自然を支配したと言っているが、このようなことは、地上の医学者の実験に進んで協力しようとする、あの世からの霊魂がいることを忘れてはならない。進んで協力しようとする霊魂がいなければ成功しないのである。その人達の願いが純粹であれば、それに協力しようとして進んで肉体を持つ霊魂があるが、しかし、人間が不純な心で濫用するようになると、霊魂が協力しないから、卵細胞は細胞そのものに与えられている増殖作用によって、子宮内で分裂増殖するだけで、人間としての形を持たない単なる肉の塊りにしかならない奇型なものになり、今までの科学が公害問題を起こして、自然を破壊してはならないということにやっと今、気づいたように、やがて医学者達も、自然にそむくことの恐ろしさをいやというほど思い知らされる時がくるであろう。現在、日本に人工授精児が五千人位いると言われているが、その半数が不幸であると言われている。自然に逆らうことはいけない。

汝信仰あり、我、行為あり「イエス」

執着

知識のある者は、まずその知識を捨てよ

我執にとらわれる者は、一人で生きていると思え

権利を主張する者は、義務をまず果たせ

執着のおろかさが理解されてこよう

信頼と理解

親子の道は、愛と義務、信頼と理解とによって生かされる。主義・主張におぼれ、執着や我欲に流されてくると、家庭は不信と疑惑を招き、生活の基盤を失うことになる。

従来の宗教指導者の多くは、眼に見える肉体的現象に、信仰の対象を求めてきた。その結果、肉体先祖がすべてのように考え、魂までも肉体先祖から戴いたものであるかのような錯覚を犯してきた。そのため信仰は、先祖に対して立派な戒名を上げ、立派な墓地に埋葬し、経文を供養すれば、成仏がなされるというように変化してしまい、そうした行為によって子孫も救われると思うようになってしまった。つまり、葬式仏教・儀式による先祖供養に陥ったということである。一宗一派の教祖と称するような人々もそんなふうに加え、その教義をまた信仰している信者の何と多いことか。イエスも釈迦も、先祖を拝めとは教えていないのである。もちろん私達は、先祖や両親の縁によって、肉体を戴いたのであるから、感謝する心を忘れてはならない。しかし、その表現は、両親に対しては報恩の行為によって報いることが出来る。兄弟姉妹が仲良く生活することも、その孝行の一つである。亡くなった肉体先祖に対しては、感謝することが当然であるが、良い戒名をつけよとか、良い墓を造れとか、良い仏壇を造って祀れとかいう先祖がいたならば、この先祖は一〇〇%地獄にいるか、霊媒に憑いている不調和な霊が言っているのであるから、私達は気をつけなくてはならない。主として動物霊の仕業である。

この現象界の墓や仏壇に未練や執念を持っているような霊は、地獄に生活しているため、家族の不調和な暗い想念に憑依（ひょうい）して、家の中をさらに不調和にする場合もある。仏壇の前だけが供養の場所ではない。先祖に対しては、拝む対象としてではなく、感謝に対する報恩供養が望ましい。体が健康でいることも、立派な社会人として調和された生活をしていることも、供養の方法なのである。現代宗教の多くは先祖信仰になってしまい、信心の根本も分からなくなってしまった。この原因も、神理が永い歴史的な年月の間に、智と意の解釈で他力本願の傾向となり、それにまつわる職業意識などが、仏法の神理を人々の心深く埋没させてしまったことにある。（高橋信次）



精神的に疲れたという人は、精神エネルギーの源泉は神仏にあるのであり、感謝することによって絶えず補給を受けられるということを知らない人達であります。試しに、心を鎮め、眼をつむって「神様ありがとうございます。仏様ありがとうございます。ご先祖様ありがとうございます。ご両親様ありがとうございます。…」と感謝してみてください。疲れていた心は一ぺんで安らかになり、「これではならぬ」と、新しい勇気が湧いてくる筈です。感謝の心を持つのが人間として自然のことですから、感謝の心を持つと心が安らかになって、疲れることがありません。だが、感謝しない我的心を持つと、心がくたびれて来ます。肉体的な疲れは食べ物を食べれば直りますが、精神的な疲れは食べ物を食べたのでは直りません。精神的エネルギーの源は神仏にあるのですから、神仏や神仏がつくられた大自然や先祖や親に感謝する心を持たないと直りません。

「諸行無常」「諸法無我」「涅槃寂靜・ねはんじゃくじょう」

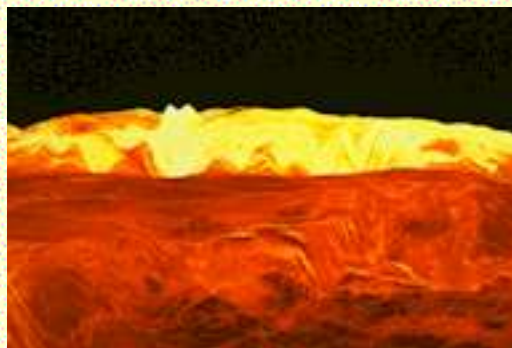
「諸行無常」 一切の諸々のものは、すべて移り変わるもので、片時として一定の姿をとどめているものはない、ということです。これまでの宗教家、宗教学者は、形あるものは常に変化するという、変化する面のみにとらわれて、変化する姿の奥に変化しないものがあるということに気がつきませんでした。

「諸法無我」とは、第一原因者即ち神即大宇宙大神霊がつくられた法には、そのまま素直に順うべきで、その法は人間の我の力を以ってしては、なんら変化を加えることは出来ないものである、ということです。

「諸行無常」「諸法無我」の本当の意味がわかれば、「涅槃寂靜」という悟りに入ることが出来るのです。「涅槃」の本当の意味は、怒り、妬み、怨み、悲しみの心がなくなった状態ということで、肉体を持って生きている間にそうなったのを「有余涅槃・ゆうよねはん」と言い、死んでそうなるのを「無余涅槃」と言います。涅槃とは煩悩がなくなった状態、煩悩がなくなって心が安らかになった状態を言います。

恨む心を持てば、その想念が現象化されて自らを苦しめる。不調和な環境には、同じ心を持った霊が集まってくるため、たとえ生きている人間であろうとも、地獄の霊が支配出来る状態が整っていると事故に見舞われる場合が少なくない。彼らは自分のために人間に供養することを促し、幾度かの事故を続けさせる場合もある。小さな子供の場合は、両親の心の調和度が反映されているから、子供に事故が起きる現象というのは、両親の心の在り方、生活の在り方について反省を求めていることを予告している。子供の自己保存本能は、自我我欲というにはあまりにも純粹であるからである。良く「魔がさした」というように、私達の生活の内部には、心の針が、電流計や温度計、自動車のスピードメーターのように、善と悪、明と暗の間をふらふらと動いている。悪の暗い想念にその心の針が指す時、私達に魔がさすのである。その故に、常に心の針を光の善の世界に指示するような生活が、人生の修行目的の一つとならねばならないのである。「金持ちは三代続かない」という言葉も良く聞く。肉体先祖は人生航路の舟の提供者である、とは、何度も述べた通りであるが、信仰的な立場からそれを祀ることが宗教的行事の一つになっている。しかし、そうした慣習的宗教的な考え方が、子孫に対する過保護となって財産や地位を残そうとする。先祖の供養、自己の欲望のために自己保存の人生を送ってしまう人が多いのである。その結果、死者になっても、神理を悟っていないため、財産や子孫に未練を持って成仏することができない。家族の心に不調和な原因を残し、財産争いだの病気だのという遺産を残すということになるのである。財産というものは、自己のためのものでもなく、社会人類のものでもないということを私達は知らなくてはならないのだが、そうした執念が、旧家と称する家には多い。先祖の悪霊の影響が多いため、慈悲と愛を失った冷たい環境を作りやすい条件になるということなのだろう。従って、先祖の供養が、形式宗教化してしまうのである。

ではどう対処するか。生きている人間の心を正法に帰依すること、これが先決である。彼らも、そうすることによって自然に自分の非を悟って行く。むずかしい哲学化した経文をあげて解るような霊であるならば、すでに現象界のことなどは心配せず、天上界で悠々と生活していることだろう。現象界の心配をするような霊は、いつまでも意識が浄化されない低級霊なのである。両親を始めとする肉体先祖の供養は、子孫の感謝報恩によってなされるもの、と知るべきである。 (高橋信次)



体の不調和

調和を離れた悪の意思と行為があれば、自分自身の体の不調和をきたします。

災害

調和を離れた、悪の意思と行為が集団的となれば、災害を呼び込むことになるのです。

万生万物は、決してそれぞれが独立して好き勝手な行動をとっているのではない。

「因縁の法則」の管理者は、自分の魂であって、その魂は「神なる意識」そのものであるのである。

愛とは全面帰投である。相手を生かすためには、自分のすべてを相手に投げ入れて、相手と一つになり、相手の喜びを自分の喜びとして自分がなくなることである。愛とは自他一体の感情ともいわれる。自分と他との区別がなくなり、自分が相手であり、相手が自分であり、自分と他とが一つの思いになることである。

私が愛を実感したのは、宇宙即我の境地に入った時であった。自分の意識が肉体を抜け出して地球が下に見えてきた瞬間、人間も動物も植物も鉱物も、すべては神の一つの生命であることがパッとわかった。すべては分かち難い一体なる生命であった。この一つの生命であるという自覚を愛というのだということがわかった。人類愛、動物愛、植物愛、自然愛、それらはすべてこの一つであるという生命の自覚から発せられる言葉でなくてはならない。だが、ここで整理して置かなければならないことは、神は、動物、植物、鉱物を、人間に奉仕するものとして創造されているということである。それらのものは、人間に奉仕するためにあるのであるから、それらのものが人間の存在を脅かす時は、人間の生存の秩序のために淘汰されてもよい存在であるということである。

最近、ペットの飼育が問題になっている。そのペットが近隣の人々に害を及ぼすようであったら、当然整理されなければならない。長崎市では、泥棒猫が家の中まで荒らし廻って困るという市民の苦情が多かったために、猫の捕獲器を貸し出した。これに対して動物愛護団体が動物愛の名の下に反対運動を始めた。これは動物愛護団体の人々が間違っている。そこに見られるのは動物愛の名によるペット飼育者のエゴでしかない。現に各家庭は泥棒猫の被害を受けているのである。その事実を知りながら、被害を受けた人の立場も考えないで自分の主張だけをするということは、なるほどそれは動物愛かも知れないが、それよりももっと次元の高い「人間愛」を忘れてしている。愛の中でもっとも優先されなければならないのは「人間愛」「人類愛」である。法律において正当防衛が罪にならないのは、これも愛のゆえである。我々は一人一人の存在は、尊い神の生命の存在であることをまず考えなければいけない。それが人間の尊厳である。その尊厳な人間の存在は神から許されているのであるから、なにびともその尊厳を犯してはならないのである。それを一つに結んでいるのが人類愛、人間愛である。その尊厳さを破損しようとする人間がいて、そのままでは自分の尊厳さが危険になるという場合、それを防ぐのは当然のことである。犯罪とは要するに人の尊厳さを傷つけ脅かし危殆に瀕しめる行為である。人の尊厳の根拠は神の子であるということである。神の子であるということとは、同時に神であるということでもある。神の尊厳さを持って行動しなければならない人間が、自らその尊厳さをかなぐり捨て、さらにその上に他の人の尊厳さをも傷つけ殺そうとする時に、そうする者が罰せられるのは当然である。

要するに人生の目的は霊の向上にあり、大自然は中道調和の道を教えているのであるから、人間は神の子であることを知り、足ることを知った生活をして、欲望・我執にふり回されないようにすることである。足ることを知るということは、我慢であったり、あきらめであってはならないのである。心の安らかさを大事にした生き方である。「与えられた環境、仕事に対しては、全力を挙げてこれに当たる。それは欲望に燃えてそうするのではなく、調和に役立てるためにそうするのである」と書かれてあるが、例えば、給料十万の人は、「おれは十万だが、欲望を持ってはいけないというからこれで我慢しよう、十万もらっているんだから十万だけ働けばいい」と思うのでなくて、「十万円ありがとうございます。これで感謝して生活しよう。おれの仕事は十万円以上になっても、仕事は全力を挙げてやる」と、常にプラスになる仕事をするのである。そういう心で仕事すれば、必ず給料も上げてもらえるし、運命も必ず開けてゆくのである。国鉄のヤミ手当てを受けていた人達は、金銭的には儲けたように見えているが、心の面では大きなマイナスをつくってしまった。だから、その人達の家庭には、

金銭で補うことのできない問題、また、ヤミでもらったより以上の出費を強いられる問題が必ず起こるのである。こういう類の問題は、「悪運、盛んなれば、天に勝つ」というように、その人が威勢がいい時は起こらない。悪事がそのまま罷り通るのである。だが、一旦なにかのことで心が弱気になると、一ぺんに吹き出てくるのである。ヤミ手当てをもらっている時には起こらないで、随分時が経ってから起こってくるから、ヤミ手当てとは関係のない問題が起こってきたように思ってしまう場合が多いので、あの時は働かんでもらった、儲けたという心だけが残って、なかなか反省しにくいわけである。

私は宗教家として起つことを決めた最初の頃、さつま芋をもらえばさつま芋に、米をもらえば米に、野菜をもらえば野菜に感謝して、それを風呂敷に包んで下げて帰って、下さった人々に感謝して食事した。その時はその時で足ることを知って生活をしていたから、私達の家庭は心が豊かであった。周囲の親戚はハラハラして見ていたわけであったが、私の生活は、いつも足ることを知った生活であった。しかし、どうしてもこれでは生活出来ないという状態が、子供達が大きくなるにつれて起こってきた。そういう時には真剣に祈った。明日がどうなるかわからないという時も、心を鎮めながら祈った。すると必ず解決して行くのであった。周りの人達から見たら、これ以上の貧乏はなかったと思う。私はそれを我慢して耐えたのでも、仕方がないとあきらめていたのでもなかった。今はこうしていても、自分にはもっと大きな舞台でやらなければならないことがある。自分の人生がこんなことで終わる筈がない。自分に使命があれば、必ず道は開ける筈だという希望の祈りが常にあった。調和に役立ちたいという心からの願いで努力する時は、必ず天上界からの協力が得られるのである。 (園頭広周)

この世も、あの世も心が中心をなして回転しているのです。地位、名誉、金が中心ではありません。

魔とは何か、それは迷いです。肉体がすべてであるという考え方です。

大乘仏教は他力信仰を説き、小乗仏教は自力信仰を説いた。

「要は正法を理解して、それを実践する以外にない。指導者となる道もそれしかない」

反省のチャンスは神が私達に与えた慈悲なのだ。



たとえば、人類があの世界で学んだ理性にもとづいた行動をとるならば、風水害、地震、火山の爆発、疫病等による天災はもちろんのこと、人為的災害も消滅し、地上は植物が繁茂し、その植物、鉱物から、まったく新しい

発明発見がなされるように仕向けられてくるでしょう。

「愛は男女の愛からはじまって、親子の愛、隣人の愛、社会の愛、人類の愛に発展して行くものだ」

「生命あるものはすべて輪廻している。地上の四季がそうだし、万物はすべて変化変滅を繰り返す。人の想念も輪廻の循環を続けている。悪を想えば悪が、善を想えば善が戻ってくる。幸せを求めたいならば、まず悪の想念から離れることだ。怒り、憎しみ、そねみ、嫉妬、中傷などこうした想念を摘み取り、責任、博愛、勇気、努力、向上など善の想念をいただくよう心がけることである。人の幸・不幸の根本は毎日の**想念の在り方**にかかっている。」

「苦悩は殆んど自分の誤った想念と行為から起こるものです」

「動機は正しくとも、方法が誤っていたら、結果は悪となる」

高橋信次先生は偉大な使命を持たれた方でした。その人の心のテープに記録されている過去、現在とそれによって起こりうる未来の出来事のすべてを知り、また天上界から地獄界からすべてのところを自由に見て帰ることの出来る霊能力を持っておられた。

高橋信次先生は観自在となり、身体からは絶えず光を放っている。すると、先生と過去世に縁が深かったものは、この光によって心の窓が開かれ、現世の記憶を飛び越えて過去世の記憶が甦るのであり、過去のことが昨日のこのように思い出されてくる。先生は現象として、光を当て光を入れられると、習ったこともない過去世の言葉で語り出す。

幸福者

「多くのモノを持つ者と持たざる者、そのどちらが幸せであろう。持つ者が、それとも持たざる者であろうか。もしも、多くを持つ者がそれを失うまいと、持たざる者がそれを欲するとすれば、そのいずれも不幸であるといわざるを得ない。一日の食糧は数斤のパンで十分であるし、居住の空間は数平方メートルで足りるからである。物の多少に幸、不幸であると考え人は本当に不幸である。なぜなら、自分自身を含めてあらゆる物質は、やがては大地や大気に還元されてしまうからである。幸せな人とは失う物のない人をいう。」

蒔かぬ種は生えぬ、蒔いた種は刈り取る、これが神の摂理だからです。

[Home](#)

Heroic lecture



高橋信次師の最後の講演



● 獅子吼（ししく）の講演とはこれを言う ●



1976（昭和51年）6月4日～5日、岩手の盛岡で東北研修会が開催された。演題が4日は「新復活」、5日は「太陽系の天使達」で、お釈迦様が説法をされたときのように光の化身となって昇華されるような迫力の講演であった。数時間にも及ぶが、将来、音声データの圧縮が劇的な進歩をとげれば、インターネット上で公開される時も来よう。くしくも高橋師はコンピューター端末機器会社の経営者であった。

六月四日 「新復活」

非常に美しい自然の、緑に包まれた環境の中で、東北の研修会が行われることを心からお祝い申し上げます。今日の演題は「新復活」。丁度、現在、東京地方には、創世記時代の映画が来ております。

しかし、人類は緑に包まれた、しかも神の光に満たされた地球という環境に、今から三億六千五百有余年前にはじめて、ベーター星という星より、神より与えられた新しい緑につつまれたこの地球上に、人類は最初に印したのであります。その当時ベーター星は調和され、私達は新しい、新天地を求めて、最も調和されたこの地球という環境を選んだのであります。その当時最初に反重力光子宇宙船という、いまで云うUFOに乗りまして、最初地球上の人類は、神の光によって満たされた天使であるエルランティーと云う方が中心になって。エルランティーは直接神の光を受けている真のメシアであります。そしてエルランティーの光の直系として、光は七色に分かれます。七色のプリズムということを想像いたしまして、まったく同じように神の光はここから七色の光に分かれます。この七色の光の方向を決めているのがミカエル（ミカ）と言います。（黒板に図示しながらの説明。外の項で詳しく出てきますが、この図が問題になったもので、講演の中からリアルに想像してください。）

神の光の直系ミカといわれる天使です。そしてこのスリットを通し、神は光なり、その光の六人の光の線がこのスリットを通して霊子線がつながっております。この中にそれぞれのスリットを通して七人の天使がおります。これがガブリエル、この方がウリエル、サリエル、パヌエル、それから全部で六人、この七大大使というのが、じつは新しい、新天地を求めて来た時の最初の光の大天使達です。この下にそれぞれ何億何十億という魂の霊子線があります。さらにまたエルランティの光の天使の分霊として、カンターレ、さらにアガシャ、モーゼ、

一方においてガブリエル系統にマホメットがいます。そして第一艇団がエルランティを中心にしてミカエルに、ラファエル、ガブリエル、ウリエル、サリエル、この七大天使が中心にして、現代のエジプトナイル渓谷の東部にあるエルカンタラーと云うところに着地します。その場所が一番最初のエデンの園です。約六千人のベーター人が全部この地球上におりてまいりました。それぞれ七大天使はラファエルをはじめ文芸や芸術、政治経済、あるいは立法、科学、あらゆる担当をして総括的にミカエルが中心になってエデンの園をつくりあげました。そしてその当時は同じベーター星の人間であっても皆さんの肉体とまったくかわっておりません。風土、気候いっさい地球上とかわっておりません。

魂と肉体、今皆さんの持っている肉体は、あくまでも物質であり、人生航路を渡っていくための舟にしかすぎません。その船頭さんである魂、このものとは完全に分離することができました。その為当時の人々は天上の世界とコンタクトでき、人間の心は調和され物にこだわることなく全てが調和された世界であります。そのようなエデンの園にやがて第二艇団が地上界に移ってまいりました。その時エルランティは天上の世界へ帰りました。これが天上界、地球上の創世記です。地球の創世記は三億六千数百年前に最初の七大天使がこの地上界に生き約六千人の人類がエデンの園をつくり、第二艇団が地上界に着地し生活するようになって立法を犯す人々が出てまいりました。その為、その責任者であるミカエルは規律を破るところの民に対し一部分エルカンタラーから移しまして「そなた達は神の子としての己れ自身を再確認するために、もう一度自分の思念と行為、行っていることと、思っていることを修正していらっしゃい」と、その場所から多くの人々がその位置をかえました。その人々が後、エデンの園との連絡を絶ち、やがて天上界との連絡をたち、ついに天上の世界に帰ることなく、地獄の世界をつくり出してしまいました。当時は地獄は存在していなかったのです。それがアダムとエバの後物語に変わってしまったのです。その為創世記の映画とはちょっと違いますけれども、私はこの肉体をもって天上の世界に行き、現実その姿を見て来たのです。

皆さん自身は、なぜ三億数千年前のことがわかるんだろう、と疑問を持つでしょう。疑問など持つ必要はないのです。皆さんの心の中には、過去、現在、未来は一点なり。皆さんの肉体を支配しているところの、潜在されている九〇%の意識の中には、永い永い転生輪廻におけるところの一切の記録を持っております。そのために過去、現在、未来は一点なり。皆さんの心の中に今、存在しているのです。皆さんの現在は過去、現在を集約した現在そのものの姿なのです。ただ肉体を持ってしまったために、自分がわからないだけなのです。その心を正し、真の神の子としての道を己自身が生活に生かしていったならば、その実体を知ることができます。それだけに最も粗悪な光の集中固体化したところの地球上の肉体を持ってしまうと、人間は皆盲目になり、それがために、物がすべてだ、地位がすべてだ、と情欲に駆られ、神の子としての本性を失ってしまったのです。しかし、皆さんの心の中には、偉大なるところの智慧が誰しもが存在し、持っているのです。それが、生まれて現在までの間に、思ったり行なったりする正しい基準を失ってしまったために、心をスモッグにおおわれ、神の光を自からして遮り、ただ分からなくなっているだけなのです。それゆえに、我々の物理学上におけるところの時間と空間は不確定です。しかもまた、心の面におけるところの時間は過去、現在、未来は、現代をして一点であるというのです。皆さんの心の中には、そのようにはっきりした偉大なる智慧が存在しております。それを調べあげて行く結果において、三億数千年前のエデンの園は、すでに人類がこの地上界へ出て来て第二梯団移住の時にエデンの園は、一部分の物質欲に駆られた人々によって道を間違えてしまったのです。

そしてエルランティをはじめとして七大天使はこの地上界をあとにします。そして、多くの遺産をこの地上界に残し、後の世の人々が、その偉大なるこの残した地上界の遺産をどのようにして活用するかを、私達は天上の世界において暖かく見守ってまいりました。しかし物におぼれ、肉におぼれ、情欲におぼれた一部分のエデンの園から離れた人達を救済するために、天上の世界よりルシュフェルという天使を出しました。ところが、たとえ天使なりといえども地上の不安定な肉体を持ってしまうと、手足をもがれたと同じごとく、生まれた環境や教育や思想や習慣を通す中に己の本性を忘れ、ついにルシュフェルはサタンという名前に、その環境に生まれている間に彼は自分の地位と名誉のとりこになり、ついに天上の世界と交信をたち、この地上界を去るとき、天上の世界に帰ることなく、地獄の世界へかえてしまったのです。そのサタンは現代は地獄の帝王になっております。これが最初の地獄界の実態です。こうして多くの天使達は天上の世界からこの地上界の動きを観察し神の子にもどす為、多くの光の天使たちをこの地上界に送りました。エルランティ自身はアガチャーという方を、光の分霊です。この方を送ります。さらにまた、カンターレーという方を送ります。後のゴードマブッタです。天上界ではカンターレー、と言っています。お釈迦様とは言ってません。ゴードマブッタ。アガチャーはイマニエル・イエス・キリスト、モーゼはモーゼです。さらにまたイエスがゴードマブッタが生まれるときにはガブリエルという方は主として伝達の係をし通信関係の責任者です。ゴードマ・ブッタがインドに生まれるときには、ガブリエルのグループの方がゴードマの生まれることをゴードマの両親に通信を送ります。アシタバという仙人です。あるいは又、アガチャーであるイマニエルに対しては又、ガブリエルはミカエルの命によって受胎の告知に出ていきます。モーゼが生まれると当時の王に、その命令によって多くの人々は殺されます。彼は葦船に流されていく途中、七大天使はサタンより守るために、彼が拾われるまで彼の成長を楽しみます。それぞれこうしてメシヤというのを送り出したのです。これはすべて神の心である法を説くために、出て生きているのです。特にモーゼの

時代というのはサタンの跳梁が厳しく、世は混乱し人間は、本当に底辺の人々は自由になりません。人を殺すなんてことはヘイチャラです。その為にモーゼというメシヤを出して、社会の人心を正しい法によって導かなくてはならない。その時にエルランティはヤーヴェという名前で彼を指導します。ヤハウエーという名前でモーゼを指導します。それが十戒です。汝をイスラエルのカナンの地に導きしは我、ヤハヴェなり。汝、偶像を祭って祈ることなかれ。汝の主はヤハヴェなり。汝、近隣を愛せよ。近隣のために偽りの証をすることなかれ。これが十戒です。それは丁度、シナイ半島の岩壁にヤーベが現証として、その当時現証として現わしたのがセラビムというのがあります。セラビムという諸天善神です。現代もおります。このセラビムや他の天使たちに命令し、あるいは、その目的を果すためにそれぞれの指令を天上の世界から命令を出します。聖書の中にはエロシムと書いてあります。このエロシムという者はエルシムというのです。これは聖書の間違いです。エルシム。このエルシムと名乗るのは、七大天使が全んど名乗るのです。それはエルランティの命令による秘書的な立場に立ってエルシムとして名乗ってそれぞれの指令を出します。

しかし、今から三千百五十年前、ヤーベの真実の教えは、いつのまにかサタンの喰いものになり、汝、偶像を祭って祈ることなかれといえども、余りにも霊的な奇跡的な現象が一杯現われる為に、モーゼはその偉大性をたたえて、ついにお祭りをしてしまったのです。そしてヤギの生き血、或いはまた、羊の生き血をあげるようになってしまったのです。それは、サタンの命によって、彼は動かされてしまったのです。ヤーベはそのようなことは一つも言いません。あくまでも十戒というものを中心にして、人間の生きる最低の道を説いていったのです。混乱した世相、主を名乗りながらして、サタンに利用されてしまったのです。そのために、すでにモーゼが亡くなられて二百年にして、間違った思想はどんどん出てしまいました。その為に、天上の世界よりミカエルの分身を地上界へ送ります。エリヤです。今から二千八百七十三年前、エリヤをこの地上界であるイスラエルの北部に農夫の子として肉体を持たせ、彼の心を揺さぶり、ヤーベはつぎつぎと指令を出して、当時のイスラエルの間違った神々、これを世の中から抹消する命令を出します。アハブという王は、最も悪辣で、皆さんが知っているアスラーというやつ、アシュラー（阿修羅）。争いばかりやる神様。地獄霊です。この悪霊を祭らしたり、いろいろな偶像を祭らせる。仔羊を犠牲にするならまだいいが、自分の子供まで犠牲にさせるような間違った教えをするようになります。こういう教えに対してエリヤは疑問を持ち、ヤーベの教えとは全く違う、十戒とは全く違う。そして、彼はついに立ち上がり、その王と対決するようになります。しかし、当時は、約四百数十人もの予言者たちが、エリヤの前に立ちはだかつております。そのためにヤーベは、「今から三年間、もう雨は降らせん。イスラエルの地に雨は降らせん、それを王に言ってこい」という。ところが、王様にしてみれば、「お前は国賊だ、イスラエルの国賊だ」といって、エリヤは追放をくらいます。それでも彼の心を揺さぶって、ヤーベはつぎつぎと指令を出していきます。これは実は、このあいだ、エリヤが私に原稿用紙で約百五十ページ近く、当時の模様を全部語り、現象を見せてくれました。その現象の一端として、五月の丁度七、八日頃、東京には大きな雷が落ちました。それはその時の百分の一だそうです。今後はそういうことはどんどん起こります。そして、アハブをやっつけてしまった訳です。そういうようにヤーベは大きな現象を与えました。多くの予言者達が輩出して、間違った教えを再び元にもどそうとしたけれども、どうにもならなくなって、今から約二千年前に、再びアガシャであるところのインマニエルをこの地上界に送りました。その時は、ヤーベとはいいません。エホバと言って名乗ったのです。エホバ。神ではありません。神の命を受けた最高責任者です。間違ったユダヤ教を修正するために、そしてイエスに人間の愛を説きこの地上界へ送り出したのです。

[Home](#)

ヤーベは、「六日間働いて一日を聖日となし、自分の一週間の間違った過去を振り返り、心を修正し、二度と同じ間違いを犯さない」という聖日を設けたにもかかわらず、後の司祭者達は、「その七日目の一日は仕事をしてはいけん。人と会ってもいけん、動物に食糧をやってもいけん」というようにしてしまったのです。このように、ユダヤ教は大きく歪みを作り出してしまったのです。そのものを修正するために出したのが、インマニエル・イエス・キリストです。しかし、彼もやがてサタンの餌食になって十字架に架かってしまいました。さらにまた、変えられてしまったために、ミカエルの分身であるところの天使、魂の兄弟をこの地上界へ送ります。この方がマーチン・ルッテルです。さらに、フランスからは、ガブリエルであるところのカルピンを出して宗教改革に出したのです。一方において、仏教の方は、ゴードマ・ブッダが悟りを開き、道を説く課程において、このミカエルの説いたその過去世である、今から三千五百年前のあのギリシャに於いて説いたアポロの教え、アポロ、このアポロの教えは、やがて東の国、インドに伝わってゆくであろう。そのインドに伝わってゆくその神理をやがてメシアであるゴードマ・ブッダという方が生まれて、それを悟り、道を説くであろう。このようにして東の方にはカンターレを出したのです。これが後の仏教ですね。ところが、いつの間にか仏教も化石化して、お経をあげれば救われるようになってしまったのです。「南無阿弥陀仏」、「南無妙法蓮華教」それで救われた人は一人もいないのです。「南無阿弥陀仏」というのも、ゴードマ・ブッダが、かつてラジャグリハという町の郊外のベルベーナ（竹林精舎）におる時に、ビンビサラールと言われる王様がおります。その奥さんが幽閉されます。コッサラールと言われるイダケダという婦人です。アジャスターという倅に幽閉され、子供自身が何んとか仏教を知って欲しいと思ったけれども、ゴードマ・ブッダの従兄弟であるところの、同じ王子として出家された方がおります。その方にそそのかされて、お父さんとお母さんを幽閉し、お父さんは死んでしまいます。お母さん自身は最後の望みとして「仏陀から何か一つ話を聞きたい。私は何もいらぬから仏陀から真の話を聞きたい。お母さんの一生のお願いだから」と言って、牢獄に入りながら、お母さんの願いだけをいれて仏陀の話を書かせたのです。それが阿弥陀教と言うのです。

この阿弥陀教と言うのは西方浄土、インドから西方といいますと、現代のイスラエルからエジプト方面。このアガシャールの過去世の中には、転生の過程を通してアミーと言われる方もおります。そのアミーという名前は、最初はアモンと言ったファラオ（王様）です。魂の系列です。そのアモンがエジプトに行きアメンに変わり、ソロモンに行きアミーに変わりそれからギリシャに渡ってアミーに変わり、インドに行き陀仏が入ってアミダブツ（阿弥陀仏）になったのです。そして、その西方浄土にアミーと言われる偉大なる指導者があって、そこに浄土があるんだよ。あなたは今、自分の子供に幽閉されているけれども自分の子供を恨んではいけません。あなたは厳しい環境の中にあっても子供の罪を許してあげなさい。やがてあなたはこの地上界を去らなければならない。その時にあなたは阿弥陀の浄土に帰ることが出来るのです、と言う阿弥陀教を説法したのです。それが阿弥陀教。ところが日本へ来たら「南無阿弥陀仏」と拝めば救われる。馬鹿げた話です。これはインドの言葉だから通用するんです。「南無阿弥陀仏」ちゅうのは、これはインドの言葉が中国に渡り日本へ来たから丁度うまくいっているんです。これを直訳したら「阿弥陀様の法に帰依する」ということです。「ナム・アミ・ダブ」っていうんです。阿弥陀という悟られた方に帰依する。それを仏壇やお墓やお寺に行き「ナムアミダブ・ナムアミダブ...」そりゃ語呂はいいやね、確かに。ところが日本語に直訳したら「阿弥陀様に帰依します。阿弥陀様に帰依します。...」って何百回ゆってもやらないんだね。そしたら阿弥陀様は皆さん何んて言いますか。「お前、帰依すんならやってくれよ」と言いますよ。そのように仏教も化石化したんです。最近、又はやりでね「南無妙法蓮華経」。「妙法蓮華経」に「南無」をつけたらもっと良いんじゃないかと日蓮さん考えちゃってね。一千万人近くの間人が「南無妙法蓮華経...」をまあ、二時間も三時間もやっていますね。あれも馬鹿げた話ですよ。あれで救われた人はいないんです。「南無妙法蓮華経」というものも、本来ゴードマ・シッタラター、釈迦牟尼仏がインドの地に於いて、ガンガーの流れを通し、無学文盲の人々に対して方便として説いたものです。「諸々の衆生よ、比丘、比丘尼たちよ、あの汚いドブ沼の中でも美しい蓮の花が咲くであろう。ときに、そなたたち、比丘、比丘尼たちよ。サロモン、サマナーたちよ、そなたたちの身体を見てみなさい。目が疲れれば、目糞が出て来るだろう。汗、大小便、あのドブ沼より汚いそなたたちの肉体である。しかれども、そなたたちの心が、宇宙の真理を知って生活をしたならば、あの蓮の花と同じように、調和された境地に、安らぎを得ることができるのだ」と説いたのが法華経なのです。

それをわからないで、「法華経に帰依します、法華経に帰依します、...」「南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経、...」最近、もっと速くやればいいと、「ナムヨホレンゲキョ、ナムヨホレンゲキョ...」馬鹿げた話です。間違いです。いわんや汝、偶像を祭って祈ることなかれです。人間の印刷物をいくら拝んだところで、救われる道はないのです。我々は旧来の陋習を破らなければいけません。もし、神が必要ならば皆さんがこの地上界に生まれて来た時に持たしてよこしたはずで、曼陀羅をみんなブラ下げてよこしたはずで、男性のブラ下げて来ているのは違うじゃないですか。このように仏教ですらわからなくなってしまったのです。

こうして太陽系霊団というのは、光の直系として、エル・ランティーを中心、エル・ランティーは、その時代その時代によって、ある時はヤーベを名乗り、ある時はエホバを名乗り、ある時はまた梵天を名乗り、また、

さらにマホメットの時にはアラールを名乗りました。人類は皆兄弟であり、同じ一つの太陽の下に生活しているのです。宗教は一つなのです。ガンガーの流れも、ヨルダン川の流れも、いまだかつて方向は変えていないのです。時代の新旧によって道は変わらないのです。



今、私たちは、モーゼやイエスやマホメットや、ゴードマの説いたものを一つにするために、私達は肉体を持っているのです。皆様は、その選ばれた民なのです。そして、自らの心を開いた時に、あらゆる国々の転生を体験し、その心の中に、その神理が皆記録されているのです。それを甦らせた時に、今、私のゆっていることがわかるようになるのです。神は己の心の中にあり。己の嘘のつけない善我なる心こそ「神」なのです。神は形づくった中にあるのではないのです。皆さんの心の中にあるのです。次元の違った世界なのです。そこから皆さんは今、肉体を持って、今、生きているのです。その肉体を持ってしまうと、私達は目や耳や口や、心の中に思ういろいろな想念、こういうようなものによって、本当のものが見られなくなってしまったのです。皆さんは、真の自分の姿を見ることは出来ないのです。ただ、肉の姿しか皆さんは鏡で見ることは出来ないのです。しかし、皆さんは誰しもが本当の自分があるのです。本当の自分を見るように私は教えているのです。それは心です。魂です。皆さんの今、思っている思う根源です。それは不変なものなのです。皆さんの肉体は、今、自分のものだと思っておっても、それはただの錯覚なのです。何時の日か朽ち果て、我々はこの地球上の塵に変わってしまうのです。肉体を支配している皆さんの魂は、永遠なのです。ただそれを形づくられて、私達は生きていくに最低必要なものとして、五官が与えられているだけなのです。しかし、真の五官は、皆さんの心の中にあるのです。心の眼です。心の耳です。そしてまた、心のすべての機能は、皆さんはすべて所有しているのです。それを自分が開発した時に、真に永遠の自分自身を知ることができるのです。私達は、今、この地上界がすべてだと思っておってはいけません。皆さんの、この、人生の五十年や百年は、幻の如く、線香花火のような、ほんの一瞬にしかすぎないのです。そして、我々の眼前に現われてるところの物質や諸現象は幻です。永遠のものではないのです。朽ち果ててゆくのです。形を変えていくのです。しかし、皆さんの心の中に体験された偉大なる智慧は不変です。この地上界を去る時に、皆様は何一つ持って帰ることはできないのです。また、生まれて来た時に何一つ持って来た人は誰もいないのです。我々は、こうして五官に惑わされ、物質的光景の中で、物に溺れ、苦悩を自らして作り出しているのです。その盲目の中から、人間というものの価値観を知っていくのです。手探りの中から、そして、自らして心の安らぎを得、正しい普遍的な神理を、己の心と行ないの物差しとして生活をしていった時に、真の己を知ることができるのです。これが悟りです。悟りというのは、己自身の心を知ることです。己の心を知った時に初めて、人生の目的と使命を知ることができるのです。それは他力ではありません。自力です。神はすべての物を皆さんのために用意し、与えてあるのです。太陽をはじめとして、生活できる一切の動物、植物、鉱物すべて、神は皆様に与えてあるのです。それを取らないだけなのです。取り方がわからないだけなのです。何を欲するというのでしょうか。物質や経済は無常なものです。しかし、現代のように高度化した社会生活の中において、真の人生の幸せを得ようとするならば、まず、最も大事なことは、健全なる精神、心です。その次に肉体です。その次に生きる為の経済です。経済は衣・食・住です。この五つの大調和があって初めてユートピアが出来るのです。ところが、いつか人間は、その道を外し、エゴに変わり、すべて皆兄弟だという道を外して、エゴの方に走り、自己保存に走ってしまったのです。

皆さんは、同じ太陽の下で、すべてが皆平等なのです。今皆様から、自分の地位と名誉と財産を差っ引いたものを想像して下さい。何が残りますか？それが今の皆さん自分自身なのです。地位や名誉や財産は永遠のものではありません。真の皆さんは、それを差っ引いたものです。この世を去るときの真の姿なのです。こうして私達は過日、天上の世界に於きまして会議をやりました。私の隣りにはインマネール・イエス・キリストがおりまして司会をやり、その隣りにはゴードマ・ブッタ、カンターレがおります。その隣りにはガブリエル、サリエ

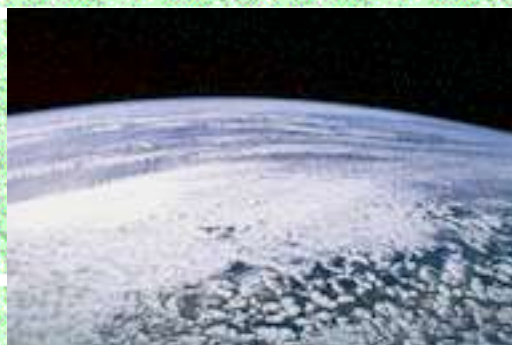
ル、ウリエル、こちらがわにはモーゼ、さらに又光の天使約十人ばかり、そして地球上の状況を次々と報告して来ます。心を失い権力の座について、人間の自由を剥奪しているところのソビエトは、**モスクワを中心**として食糧危機は彼等が自覚するまで続きます。**北朝鮮**も又、同じです。**中華人民共和国の北部**も同じです。**アフリカの西部海岸**も同じです。一方に於いて**中南米のパラグアイ**も同じです。サタンの跳梁を許しているのです。そのような心の人達のくもりは、神の光をさえぎり、自からして、天変地異を造り出しているのです。更に**イタリアの北部からベイルート(レバノン)**にかけても同じです。宗教の同じヤーベの教えであるその神理を曲解して、それぞれの道を歩んで、又同じ現象が起って参ります。**日本の食糧危機は、心ある人が出て来ているためにありません**。こうして天変地変は次々と起ってまいります。それは天上の世界の神の光の届かない所に起るのだということを知って欲しいのです。

やがて北朝鮮は破産をします。日本は戦後わずか三十年で世界のトップに成ったというのも、それだけ偉大なる魂達だからなのです。一つ間違えたら又、逆の方向へ進んでいきます。それは危険なことです。皆さん自身の進むべき道は真の道、普遍的な己自身の心に嘘のつけない善我なる心を芯として生活を知ったとき道は開かれていくのです。それが神理です。今後大きな現象が起って来ます。間違った宗教家達は、私によってつぶされていきます。どのような宗教家であろうとも、間違った宗教家達は私達の霊的な力によって現象化されてまいります。信じようと、信じまいとそれは事実です。皆さん、見ておって下さい。**地震も雷も自由自在**です。それだけに、今、私達はその受け入れ体制をしておかなければなりません。日本ばかりではありません。やがて私は中近東へ行きます。そして真の道を彼等は知るでしょう。それは地球の最終ユートピアの為に、私達は今、肉体を持っているのです。その為に自分の生活の場は自分の生活として今度の光の天使は全部事業をやりながら出てきております。宗教でなど飯は喰いません。それが本当です。神は一銭の、人間から金などいらぬのです。太陽はただです。神の心です。これが神理です。私は実業家として、その面に於ても、世界でも、知らない人がなくなるでしょう。当然なことです。それが道です。イエスの時代や或いはゴードマの時代なら良かったのです。現代の時代はそれではだめなのです。教祖や、その取り巻きが優雅な生活をする為に宗教があるのではないのです。真の宗教とは宇宙の真の人間としての生きる道を教えているのです。そして、人間に生きる喜びを与える道なのです。これが神理なのです。神は人間の造ったものを欲しません。大事なのは美しい一人の人間の心が欲しいのです。道はやがて開かれていきます。我々の前途は光明に満たされます。そして、その人達は救われていきます。やがて、地上界の人々の一人一人の心が調和されてきた時に、我々の肉体先祖はその姿を見て、「俺達の時代とは違う。なぜ俺達は、この厳しい環境にいるのだ。」難しいお経ではなく、皆さん自身の日常生活一つ一つの想念と行為の光がやがて地獄の世界を救っていくのです。最終ユートピアは地獄のなくなる時です。サタンは私が今、一生懸命に「新復活」という本を書いております。モーゼの十戒をはじめとして、間違った宗教を修正しているために、やっきになって私の為に攻撃をしてきます。しかし、例エルシフェル・サタンなりといえども私のかつての弟子です。彼はやがて私の軍門にくたるといって、知らないから地獄に落ちているのです。彼等も救われるでしょう。私は命がけです。

それは皆さん一人一人が自覚された時に、皆さんの周辺の肉体を持っているところの先祖達も救われていくのです。坊主の難しいお経によって救われるのではないのです。お経の意味がわかって生活しているような人なら天上界へ行きます。ゴードマ・ブッタは決して死んだ人間を成仏させるために坊さんをつくったのではないのです。生きて人間をどのように導き、人間の心を指導するためにこの地上界へ出てきたのです。地獄に落ちるといのは、他人のせいではなく、自分の想念と行為の間違いそのものが、自分の行動によって地獄に落ちたのです。天上の世界がピラミッドのように高くあれば、逆に又、地獄の世界は逆ピラミッドとして存在しているのです。この地球はその中間的環境にあるのです。そのために皆さん自身が、善を思い善の行為をすれば天上の世界へ、悪の行為をすれば地獄の世界へ、彼等はいつでも待っております。それだけに正しい心、正しい法この道を己自身のものとして、生活をしなかったならば、人間は救われないのです。しかし、皆さんの心の中には誰しもが神の子としての真の愛の心を持っているのです。なぜならばすべて皆さんは天上の世界から約束されて、この地上界へ出て来たのです。還るときに、あれもしよう、これもしよう、ではなく、今の一秒一秒、一日一生の己自身の完成が皆さんをより大きい、豊かなものにしていくのです。今、きびしい経済的環境にあらうとも、悲観することはないのです。今、そのきびしい環境の中で、今、皆さんは、自らの魂を学習するために、今その体験をしているのです。たとえ経済的にめぐまれていようとも、その環境に安住するものではないのです。恵まれているならばそれを大事にし、気の毒な人達に真の愛の行為を無所得のままにしてやることなのです。これが道なのです。皆様は皆兄弟なのです。生まれの環境が違おうとも、神の子としてすべて太陽のもとに兄弟なのです。他人ではないのです。袖すり合うも他生の縁といひます。まことにその通りです。皆さんが目覚め自からを自覚した時に、皆様は神の子としての道を、己自身がして実行していくのです。みな、私がしゃべっているこの言葉は、皆さんの心の中にすべて記録されていきます。そして、この地上界を去ったときに、真実であるかないかを、皆さんは自らしてわかるのです。その時に救われるのです。生きている中に自らをつくることです。道は永遠に続きます。今、この世限りではありません。やがて我々はあの世に還ります。そして、またいつの日か地上界か、或いは、また他の天体に出てくるのです。皆さんは自らに目覚めなさい！ 自らの心を開きなさい！ 小さな自分を捨てなさい！ 偉大なる神の光に目覚めなさい！ それは愛です！ それ以外にないということ

す。この研修会を通し自分の心を裸にして、神の己自身の本性に目覚めて下さい。永い時間本当に有難度う御座居ました。

Home



六月五日

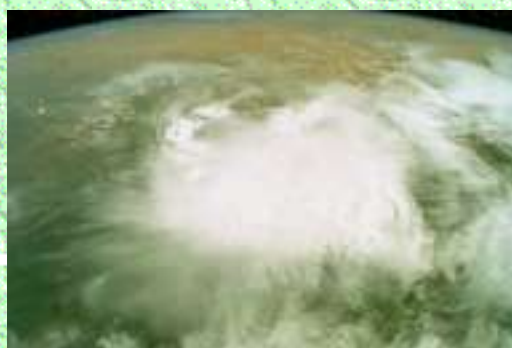
演題「太陽系の天使達」

「お早ようございます。今、皆様にしあげました「心行」は昭和四十三年十一月二十二日に完成いたしました。そして二十三日の夜、午前一時、天上界で初めて「物質と生命」という講演をやりました。その時の司会がモーゼです。その前にミカエルが講演をやりまして、約一時間半、二十三日午前二時三十分はこの地球上に震度三の地震がありました。私は禅定のまま天上界にいったものですから、そばに寝ていた家内が、「今、お父さんの講演を聞いていました。」ということでした。そして、過日、やはり天上界に於て、色々と七十年前のこの地上界に出てくる時の模様。「心行」というものの成り立ちをいろいろと本になって現代は、ミカエル大天使が持っていますが、その中をめぐってみますと、自分で驚ろいてしまいました。「我、見聞し正法に帰依することを得たり」という最初の出だしが「我正道に目覚め正法流布のために一命を投げ出す」という書き出しから最後が「禅定三昧の境涯に到達せん」、全く同じです。そして書いてあるものは地球的に書いて私のはありましたが、天上界のものは宇宙的でした。これを見てホンのわずかしが違っていません。ですからやはり書かせられていたと言うことですね。現代もミカエルといわれる大天使が、丁度この位厚い(二~三十センチ四角位の立方形の本の形を手で示している...ビデオ)本にして、私自身が出てくる前の計画一切、現在も書かれている本、将来も出す本、それに記録されてあります。実はそれは私ばかりではなく、皆さん自身の心というものをヒモ解いていけば、恐らく計画書があるはずで、それに気が付かないだけです。それに我々は色々な人生の苦しみを通して忘れてしまったんです。その為には、先づ自分の心の中で思っている事や、毎日生活していること、これの正しい物差し、フィルター、このようなものをしっかり持つ、これが正法です。このフィルターを思ったり行ったりすることについて、一つ一つ、そのフィルターにかけて、正しいものだけを自分のものにしていく、それがわかって来た時に、皆さんは本当の自分を知ることができます。人生は一度だけではありません。皆さんがこの地上界に出て来て、親が教えなくとも、生まれたばかりの赤ちゃんが、お母さんのお乳を吸いはじめます。人はこれを称して本能だと言っていますが、これは前に生きていた証拠です。そして赤ちゃんは、わずか、二週間や三週間位で赤ちゃんは一人で笑っています。ところが私達が心の眼で見ますと、赤ちゃんの魂の兄弟や或いは又、守護霊や指導霊達が「よかったね。しっかりやるんだよ。今度生まれる所は、君にとって厳しいかもしれないよ。大丈夫かい」「まかして下さいよ。約束通りちゃんとやるよ」と笑っているのです。そして成長するにしたがって環境や思想や習慣の中から、そんなことは、もうとっくに忘れてしまうんですね。それを今度、天上の世界から見ている魂の兄弟や指導霊や守護霊は一体どう思うのでしょうか。皆さんは、あたかも自分一人の意思で生活しているが如く錯覚しているだけです。すべて天上の世界からコントロールされているのです。コントロールされているにもかかわらず、肉体を持ったその個性は、或る程度、勝手なことをやります。あやつり人形です。天上の世界であやつっているのが、あ、うまくやっているな、と最初のうちは。その内に、自分の意思が働き出すと、アーまた、またパチンコ屋にはいったな。また、三十六番、出ないとわめいているな。アーまた、おかしな所へ行き出したゾ。それで悩むわけですね。天上の世界の悩みは、地上界へ出ている魂の兄弟や、

或いは友達、こういう人達、先づ、五歳、六歳のうちは、そんなに心配しません。もの心つき、十歳、十五歳、特に、中学時代から大学、それから一部分の人は、社会に出てから、おかしいことをやり出すわけです。毒を喰い始める訳です。それまでに一杯、喰っちまうのもいるんですけども、最近は、早ければ、小学校の三年か、四年の内に、もうおかしくなり始めるのがいます。鍵っ子ちゅうのですね。親子の対話がなくなってしまう。そして自分自身は、親との対話がないから、自分なりの、ものの判断で生活をします。ノイローゼです。そうなりますと、そういうお子さんにも、そばに不調和な霊が来ております。そのものの意識に支配されるから、生きている人と話をするのもいやになっちゃう。対人恐怖症になる。段々、心の丸い豊かな心が小さくなる、暗くなる、そうして孤独になっていきます。その頃から親は、どうも家の子供はおかしいな。最近、親の言うことを聞かない。また、ガチッとやるわけですね。子供は段々また、小さくなる。こんな子供に誰がしたなんてね。子供自身は自分でつくって、自分で苦しんでいながら他人のせいにする。親不孝するようになって行くわけです。勿論、その家庭において反抗期という、人間の一つの成長する過程における性格的变化がありますけれども、それが、憑依現象として現われてくる場合が多いわけです。心の暗い人々は、その心の暗い分野に、その暗さに比例した悪霊、この地球上というのは丁度、ピラミッドと逆ピラミッドの中間にあるんです。即ち、天上の世界と、地獄の世界の丁度中間的な世界が物質の世界です。それだけに非常に敏感です。ところが、皆さん自身が肉体を持ってしまうと鈍感になります。わかんなくなります。皆さんの、この眼の見える世界なんていうものは、ほんの小さいもの。七色の虹の世界、四〇〇〇オングストロングから七〇〇〇オングストロングの周波数の位置しか皆さんは見ることはできない。現に、虹の両極端は紫色と赤色です。赤色からは赤外線にはいっていきますね。赤外線からは電波にはいっていきます。これも見えない。それから紫色からは紫外線にはいっていきます。紫外線から熱線にはいって行く。これも見えない。ですから人間の眼が、どんなに、いいといったところで、ほんのわずかな世界しか見る事が出来ないわけです。いわんや、嗅覚にしても同じです。聴覚にしても、たいしたことはありません。しかし、私は、聴えます。あの世のことまで見えます。心の耳、心の眼、心の、心の本当のものを持っていればそのように自由自在、観自在、ということになるのです。ひとつとではない。皆さんも、その力をもっているんだが、ただ、ちょっとだけ鈍感になっているだけなのです。その鈍感の理由というのは、日常生活の中で、人を恨んだり、妬んだり、そしったり、又グチを言ったり、自分と言うものの心の中は、まるやかでない。そしてイライラしている。それが、みんなスモッグになってしまうわけです。昨夜は、だいぶ風を吹かせました。なるべくならば、今日は雨が降って欲しくないものですから。そのようにスモッグを払うにはそれなりの作用を起さなければなりません。皆さんの場合は反省ですね。反省ということは、まず正しいフィルターをもって、自分の思ったこと行ったことを一つ一つ、振り返って見る。人間なるが故に間違いも犯す、また、間違いも自分自身の心を豊かにする、一つの菩提であるということに、たとえ間違えたからといって、自分はだめなんだといって自分を小さくしてはいけません。皆さんの今ある環境は、皆さんの魂をより豊かにする一つの学習の場であるとしたならば、小さなことにこだわる必要はないのです。失敗も又、成功のもとです。"改むるにはばかりことなかれ"という諺があります。まことに、その通りです。そして、それを土台にして、より自分を豊かなものにし、同じ間違いを犯さないというようにしていくことが大事です。そうして今、皆さんは、こうやって原子肉体を持っているけれども、そこに、こちらから2番目の絵があります。皆さんは、もう一つの肉体を持っております。誰れもです。この中で後光の出ている人もいます。頭の毛がなくて、電気によって光っている人もいます。これは誤解の方です。本来は頭の毛があろうと、なかろうと心がきれいで太陽のように美しい丸やかな心で慈悲深い、そして自分というものを常に、自分だけではない、相手もいるんだ、常に調和ということに心掛けて正法の生活をしている人には、きれいな後光が出ております。この後光が、あの世に甦るための、皆さんの肉体なのです。今、ちょっとヘタな絵ですが書いてみましょう。こうやって今、禅定している人のことを考えますね。そういたしますと、皆さんの心は丁度、胸のあたりにあります。胸のあたりに、きれいに丸くなっている人とハート型になっている人と、歪みをつくっている人とあります。そして、このように丸くなっている人達の心の中には、この心の絵がありますね。智性と本能と感情と理性と想念、これを大きく分けると、このようになっております。丁度、風舟玉のようになっております。そして心の中の機能というものはピシッとなっている訳ですね。これはもう一人一人あります。或いは、こうやって見ますと、前の方には、きれいなピンク色の光の出ている人は、何かというと、もっか恋愛中ということですね。それと一定の年頃を過ぎても、ピンク色になっている人がいますが、こういうのは困りますね。そこで今度は、心が丸くなっている人達というのは、身体からもきれいな後光が出ております。このように光がでております。ダルマさんのような、きれいな光が出ております。こういうような光が出ております。やわらかい金色の光です。この光の出ている人達は、まず心は百パーセントきれいで、夜、寝ても地獄へ行かない人です。夜、寝てから、追い駆けられたり、怖い所へ行ったり、もう、おどおどしているのは、まず、その前の日、寝る前に、あんまり良いことをしていない人達です。ですから、心がこうやって、丸く、感情も智性も理性も想念もみんな丸く豊かであると、そういう地獄の世界に行かないわけですね。ですから、夕べ夢を見て、どうも怖かったという人は、あんまり心が丸くなかったという証拠です。何か心配事がある。何か、何かある場合ですね。更に又、この心というものは、今までは形がないんだなんて思っていたけれども、とんでもないことですね。私、ある講演をした時に、九州の方でした。心なんかあるものか。人間は、すべて頭で判断するんだというわけですね。確かに頭で判断するんです。だから心は頭にあるんだというわけですね。一流大学の有名な一流のお医者さんで精神学会で日本で一番という人ですよ。その先生が「頭がおかしくなったんですよ。それを治す為には、大脳をこのようにしなけりゃいかんよ」ということを

僕の前でとうとうと言ったわけです。そこで、「先生、心というものは、どこにあるんですか」と聞いたら「そりゃ君、頭にあるんだよ」。ハハアーと思ったんです。その時にそれを説明したわけです。「それでは先生は、嬉しい時、悲しい時に、こみあがってくるのは頭からこみ上って来ますか。」「そりゃ君、ここだよ。」「じゃ、こっちから、こみ上ってくるものは何ですか」ったら「それがわかりゃノーベル賞だ」もうそこまできたら、もう話しにならないんですね。そして、(黒板に図で示し説明)光の方の肉体、こちらの方の見えないところの神の光よって満たされているために、心にスモッグがないから後光が出て来て、実はこれが本当の肉体なんです。皆さんの、あの世に還る舟なんです。そしてそちらにも、ちゃんと脳も全部あるんです。ですから今、皆さんの脳細胞は受信と送信をする一つの機能にしか過ぎないのです。耳で聞きます。聞いた聴覚神経は皆さんの脳細胞の聴覚の、一つの物を聞く機能、その信号を違う次元の方に送る装置にしか過ぎないのです。ですから、今、物を見ますね。＂赤＂っていったものは、視覚神経の＂赤＂しか見られないのです。その＂赤＂自身を判読しているものは英語であろうが、ドイツ語であろうが、フランス語であろうが、日本語であろうが、言葉が違うだけで、＂赤＂には変わらない＂赤＂はレッドと言えればレッドなんです。脳細胞は二百五十億あります。この二百五十億の中にそれぞれの一つの分野が神経繊維の一つは一方通行です。それでそれが記憶している訳です。ですから世界各国、＂赤＂は赤なのです。ただ言葉が違うだけです。ですから、本当に記憶しているのは光の方の肉体が記憶しているのです。ですから皆さんが夜寝て、夢を見ている時に、自分の肉体を自分が見ていることがあるでしょう。どうでしょう。自分の肉体は、今、寝ているんです。そして寝ている肉体の又、もう一つの肉体が活動しているのを、自分が又見えていますね。そういう経験のある人、手をあげて下さい。それは皆さんの光子体の本当の舟頭さん、その舟頭さんが見ているのです。それが皆さんの真の真我な自分です。ですから、私達の今のこの肉体というものは、本当に皆さん、この世を去っていく時によくもまあ、こんな舟に乗っていたものだと思います。

なにしろ私達は天上界でよく会議があります。肉体を持っているのは私だけですから、まず醜いですよ。そして僕が一番、年寄りなんです。自分は若いつもりでのだけけれども、相手側の方は皆、二十六、七歳、ミカエルが二十八、九から三十位、イエス様が三十六、七から四十歳位ですから、それですから膚の色が違うんです。握手したならば、こちらは石のようなもので、相手の方はロイヤルゼリーか何か、なんともいえない、もう違うんです。女性の方は、菩薩界におられる方は、何かミス・ユニバースみたいで、皆、美人です。目を覚してがっかりしちゃうわけです。ですからこの地上界の皆さん、少し位顔がまずいからといってガッカリすることはありません。いずれ天上界へ還れば、皆、美人だってことですから。我々のように、ニキビの噴火した跡なんか一つもありませんから。これは光子体の方の肉体、皆、美人ですね。もう、女の方なんか、本当に、全んど美人です。地獄界は別ですよ。地獄界へいったら例えば、魔王の近辺におるのなんかは、美人のような顔をしているけれども、心が、ころっと変わった瞬間に、もう口はサケてしまって、そりゃ、もう、まともには見られませんよ。鬼ババアなんて可愛い方です。おっそろしい顔です。骸骨のような姿になってしまうしね地獄界は又、別の世界です。こりゃ、ミスブスなんてもんじゃない。表面がきれいだからと思ったら、とんでもない話しです。過日、私の家を訪問してきましたアステリアという魔王・サタンの姪が来ました。それは私の持っている法輪をパーンと投げましたら、そこに引っかかって来たのを、皆んなの前に見せて、この通りだよと言って、手の中に踊っていたものですから、ポンと投げて、そのまま寝ちゃったら、夜寝ている最中に、成長しちゃいましてね。私のフトンの中には行って来たんです。アレ、こんな女の人が、なんで、僕のフトンの中に、はいてくるの。そして、しかし丁度アンマさんにかかっていたものですから＂なんで、お前は、こんな所にはいてくるか、出なさい！＂と言った訳です。ところが按摩さんは見えないですからね。メクラだしね。＂私は何もしてません＂と言う。それはそうでしょうね。本人はビックリしちゃうわけです。こっちの方は見えちゃうし、向うは見えないんですから。「いや、あんたじゃなくて、今、外人のものすごい美人の女の人が、私の隣りへ、お見舞いに来たといって、お見舞いに来たのに何でフトンの中に、はいるのか、出れ！」と言ったんだと言ったんです。「ハアそうですか、私はそんな積りではなくて、私は何か悪い気がしました。」「いやそれは違うんだ」と、そんなことがありました。それはもう外国の映画女優の、ものすごくきれいな女の人に似ていますね。それでも、一旦、彼女が心をガラッと変えたら、もう悪党、鬼婆です。口許は切れるは、まともには見られません。それが地獄界の実体ですね。天上界はそんなことはありません。怒りもありません。



Home

そして又、天上の世界の、今度は、心の調和されているエルランティという方になりますと、ここにパワートロンというものを持っています。(以下図を書きながら説明)頭にちゃんとパワートロンというのをつけています。パワートロンといいます。神の光をストレートで受けている光ですね。このパワートロンから、光がピューッとこうやって出ているわけです。ですから見ておきますと、頭からも、身体からも光が出てきておりますから、光の化身だと思えばいいですね。そうして、このパワートロンと、その人の、エル・ランティの心のところと、全く同じ位置、だいたい八十センチから七十センチのところに玉があります。このようになっております。これがドームです。そして、このドームからも光が出ています。やわらかい金色の光です。こういう光が出ております。大きな光ですね。そして、このパワートロンの光が、このように発射していると同時に、ここに今度は魂の分霊ですね。光の分霊である、イエス様、モーゼ様、カンターレ、この意識がはいっております。これから七十センチ位ですね。この頭の上から、そして例えば、私が、イエス様の当時の話をしますと、例えば、これがイエス様だとすると、今度、これがクルクルッと廻りまして、こちらの人の、私の身体の中にはいってくるから、今度、**イエス様の顔**になっちゃうわけですね。お釈迦様のこんど、話をしますと、こちらが出て、今度、お釈迦様の意識がはいって、その当時の意識が身体の中にはいってくるから、今度、**お釈迦様の顔**になっちゃうわけです。ですから、普通、私が講演を全国して歩いてって「あの方は、お釈迦様の生まれ変わりだ」という人が出てくるわけですね。見えちゃうから。インドの時、耳たぼなんかこんなに小さいのに、こうなってくるわけですね。眼の方が、ずーっと、こうやって細くなってきちゃう。見とって、皆んなビックリしてしまうわけです。そうすると、**その人達にとって、お釈迦様に見えちゃうわけです。これは光の分霊っていうわけです。**エル・ランティの光の分霊、この光の分霊というのが、個性を持っておりますから、そうやって出て来ますね。ところがいつのまにか、お釈迦様や、モーゼや、イエス様や、或いは又、もっと下の方の段階におるところの回教、こういうのをメシヤというわけですね。このメシヤを拝むようになってしまった。メシヤ信仰になってしまった。これは大きな間違いですね。メシヤの説くのは神の心である法を説きに来ているのです。人間はこのようにしなければいけないんだ。メシヤ信仰ではなく、メシヤを信じることです。メシヤの言葉を信ずることです。そうして、その言葉が法なのです。その法を行ずることです。これが本当の信仰なのです。ですから本来はメシヤ信仰であってはならない。仏教では、お釈迦様は絶対ですね。だからいつのまにか「オシャカ」なんて言葉が出来ちゃうわけです。それは困りますね。お釈迦様の説かれた法、その法を生活の中に生かすことです。そうして、自分自身が、説かれた、その悟られたメシヤのような豊かな心になるということ。イエス・キリストを拝んじまって、何んでもイエス様、イエス様。迷惑ですね。イエス様は一人しかいないんだから世界中の人が、イエス様を呼んだらどういうことになるでしょう。そこでエル・ランティであるところのヤハベ(ヤーベ)は「汝ら、みだりにヤハベの名前を呼ぶことなかれ。」と書いていますね。それなんです。一人なんですから、呼ばれたって仕様がないうです。皆さんだってそうでしょう。仕事をしておって、仕事の途中で何回も呼ばれると、「うるせえなあ」ということになりますね。これは同じです。我々は、ややもすると、次元の違う世界を呼べば、何んでもやってくれると思っているがとんでもない事です。一番大事なことは、メシヤの説く、法というものを実行するという、これが大事です。そして、このエル・ランティは、光そのものです。天上の世界へ行くと光そのものです。光の化身です。とって、神ではありません。神は、又、こちらにあるわけです。いまだかつて地球上に神だなんて言って出て来た人は100%嘘です。どんなものだって、神様になんかにはなれないんです。神は一つです。宇宙には神は一つです。こういう、エル・ランティと同じような人達が、宇宙に、真のメシヤという人達がおります。

遂に、過日はM37という星があります。M37に出ているメシヤが悟りました。そのM37のメシヤはついに、自分自身を悟ったというのは、太陽系の中の、軌道修正コントロールセンターというのがあります。太陽系の軌道を修正するコントロールセンターというの次元の違った、あの世にあります。その中心の心臓部に伝達があるわけです。宇宙的ですね。そして、真のメシヤが、それぞれの惑星の地上界に出て、皆んな互いに連絡がとれるようになって、真の調和が完成されたとき、そのメシヤが神になるのです。大変なことですね。M26、この太陽系それぞれに出て来ておりますね。今、出て来ているのは、太陽系で、一人、悟っております。M37で悟っております。M27、M26、出ております。このMというのはメシヤという意味で、つけたようす

ね。我々の出て来たところのベーター星というのも、調和されている世界、ユートピアです。その、皆さんも出て来た所ですね。ところが、今、我々が住んでいるのは、自分の住んでいる地球だけだと思っているだけなのです。かつて皆さんは、三億六千数百年前には、そのベーター星という所から、移住民族として、地球上へ来たわけです。そして、その間に何回も転生輪廻して、まあ全んど皆さんは地獄へは行かなかったと思いますけれども、まあ、今、いるわけですね。そして、自分というものを知るようになっていくわけです。で、それは、何んのために、現象の世界に出て来るかということ、この色心不二といいまして、皆さんが肉体と魂を 持っているように、神の身体も、また、物質と心から成り立っているわけです。神の身体は地球という細胞を、神の子である人々と心と心の調和によって、はじめて、地球は円満に調和されていくんです。それが神の子である地球の中の細胞の一部が、互いに争い、闘争を繰返される。即ち、皆さんのツバキ、ダ液のようなもの、皆さんは、地球の消化する、ダ液のようなもの、そのダ液の中にバイ菌がはいったら、どういうことになるでしょう。消化不良を起こしちゃいますね。同じです。ですから地球に住んでいる人達の心の丸くない人達が多ければ、即ち不調和な人達、法を間違えた人達が多ければ、その分野に天変地変が起るんです。神の光をその分野が失ってしまうからです。地獄が多くなれば、そのような現象が起りますね。だから恐ろしいことです。ですから、心がきれいな人達が集まれば、その集まっただけ、その環境は調和されて、光明に満たされるわけです。それは事業だって同じですよ。家庭だって同じです。ですから、家の中が、どうも不幸が続いているっていう人が、こん中にも、何人か来ておりますねえ。自動車事故で亡くなっちゃったとか、私は一生懸命に拝んでんのに、何んで、何んで不幸なんだろう。というのは、何か原因があるんですね。思っていること、行ってる性格を通して、何か原因があるんですね。夫婦の関係、子供との関係、その原因は、それを除かない限りは、そっからは、光明は満たされないわけです。その原因はどういうところにあるのか、それをどのように除けばいいのか、ということを私達は教えているわけです。ところが、普通、宗教は、そうじゃなくて、不幸があると、お前さんとこの先祖が浮かばれないんだよ。一生懸命、お経をあげれば、なおるんだよ。と馬鹿なことを言っている。又、それを信ずる。＂溺れる者、ワラをも掴みますからね。＂その原因はどこにあるかということ、その原因の根を、どのように取り除くかということに努力しなさい。出た結果に翻弄されちまってね。増々、深まりにはいって行く。だから神様、拝めば拝むほど、不幸になっていくわけです。ですから、宗教家、お坊さんとか、或いは神主さんとか、宣教師とかいう人達ね、神様を扱っている人達、偶像を拝んでいる人達の家庭をご覧になって下さい。混乱してますよ。あんなに信仰深い人が、なんでだろう、と、こう思うんですね。そういうのは本当の信仰ではないんです。みんなは兄弟が、円満で仲良く、お互いに助け合っているのが本当の信仰なんです。ですから家の中で色々、まずい問題が起ったりするのは、俺達の考え方、生活のあり方に何か間違っているんだと、正しい法則を踏みはずしているんだ、先祖がどうではないんだよ。苦しんでいるのは自分達です。それを、その根っ子を考えることです。そうして、それをなおすことですね。そうすると、なおっていきますね。ここにも、そういう人が何人も来ています。ですから、その時は、拝むんじゃなくて、私達の考え方、生活の在り方、物の考え方、これらのものの修正、そのチャンスを与えているわけですね。それで、その根っ子は、どこにあるのか、その原因はどこにあるのか。その悪い面を取り除かない限り、だめ、それをただ、先祖のせいにして、先祖を拝めば、なおるんだと、それじゃ、先祖に、いい戒名をあげようじゃないかといってね。そこにパッキリ待っているのが、パッキリ屋ですよ。戒名のいいのをあげれば救われるなんて、馬鹿みたい。先づ、皆さんね。戒名をどんないいものをあげたって地獄は地獄ですよ。



〇〇院殿〇〇大居士というのが何年か前に死にましてね。その方が、東急の社長をやっておりまして、私の親分出してくれて、言うもんだから、すっかりゴトウ・ケイタだと思ったんです。そうしたら違うんですね。元総理ですよ。「ワシじゃ」って出て来ましてね。ノドから声が出ないわけですよ。ガンで切って死んだ総理です

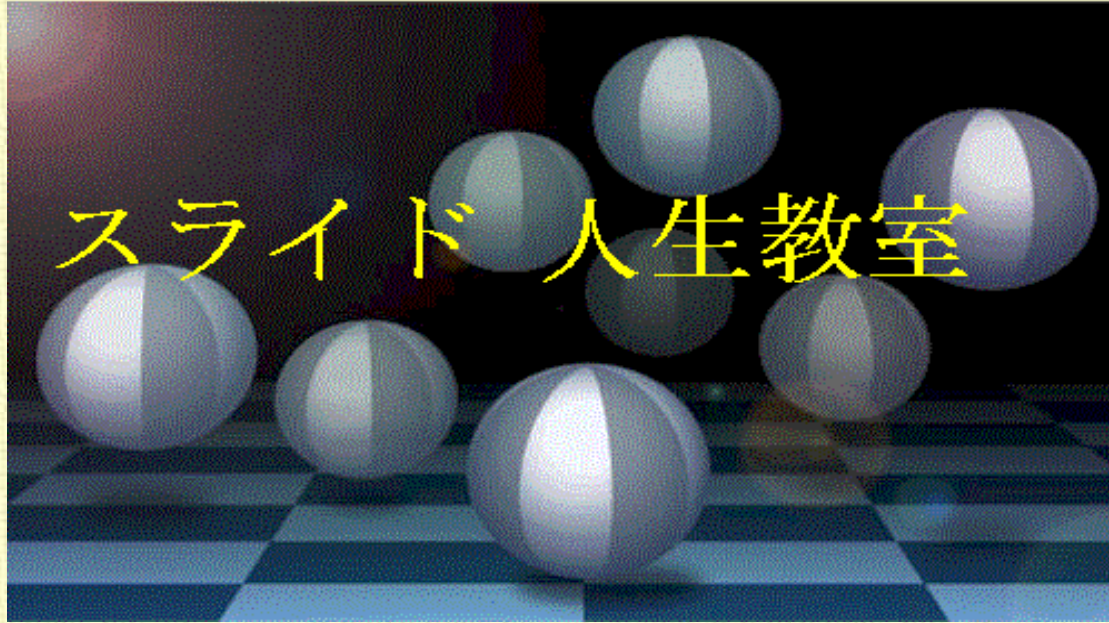
から。それが地獄にいるんだから、どうしようもならないじゃないですか。名前みたら、院殿大居士ですよ。そしたら、「ワシヤ、そんな名前は勝手につけたんだから、俺には関係ねえ」って「高野山へ行って聞いてくれ」って。そういうものなのです。皆さん名前じゃない。「冥途の沙汰も金しだい」なんてナンセンス。一銭の金がなくなると天上界へ行けるよ。そういうことを知って下さい。絶対に戒名なんか、どんなにいいのつけたって、地獄へ落ちるものは、地獄へ落ちるんです。名前なんか、どうでもいいんです。地獄へ行って、戒名なんか名乗っているのなんか、一人もいないから。これは日本人の、色々都合が御座居まして。戒名っていうのは本来はね、生きていた内につけるんです。昔の坊さん達はね、自分の寺子屋みたいな所へ連れてきてね、正法をよく教え、仏教を教えて「ア、あなたは、大分よく勉強し、生活も変わって来ましたな、じゃ、このあたりで、今までの名前をかえて、じゃ、居士という名前を与えましょう。」「ありがとうございます。お蔭様で、私も、心がなごみました。」そうしてなったものですね。それが、そうじゃなくて、日本は、死んで、しばらく過ってからね、お金持って行ってから戒名つけるんですよ。死んでいる人がわかる訳ねえじゃないですか。「あなた、どなた？」したら、自分の本名を言うんです。〇〇院殿〇〇大居士なんて知らねえよ、なんて。同じですね、だから冥途の沙汰は金次第じゃないんですよ。それは都合の悪い人が、そう言ったんでね、だから皆さんは戒名なんて本当はいらんんです。生きていたうちに、自分の心と行いをなおして「よっしゃ」と今までの名前を捨てて、新たに、生まれ変わった積りで、人生をやり直すんだと言って、名前を変えるんだしたら大いにやりなさい。死んでから貰うんだしたら、そんなのはいらんんです。生きていた内に自分の心を改造してね、生活を改めて名前を貰う、これが本当のものですね。戒名とはインドの当時、ブッダの弟子に、シャーリー・プトラ（註般若心経の中に舍利子とある人、舍利佛）という男がおります。彼はウパテッサという名前ですね、どうもウパテッサというんじや、うだつがあがらねえんじやないかと言うんでね。（笑）お前はよくやるから、お母さんの名前のね、シャーリーというお母さんの名前のね、お母さん、なかなか陰徳のある方で、一つその名前を貰ったらどうだ、心を改めて心身を改めてシャーリープトラという名前にしたらいいとって戒名を変えていったのです。或いは又、コリーターという名前がありまして、何度もこりても困るから。（笑）なんとしろ、お前の名前を一つ、この際、心もきれいになったことだから、モンガラナーということにしよう、と言って、マーハーモンガラナーという名前に変わりました。これは大目連ですね。それ生きていた内です。死んでから、いくら、どんなにいいの貰ったって、どうもしようがないじゃないですか。最近、日本人、そういうのが好きになりましてね、死んでから、一パイ貰うのがいいんじゃないか、と。最近結婚にまで影響しましてね、お墓行って、戒名見て、この家の先祖は、余りいいのじゃないからダメだなんてね。馬鹿みたいなこと言って、院殿大居士がねえから、結婚の対象にならんよなんて、そこまで来たらもう、悪霊ですね。ですから皆さんは、そんなもんじゃないんです。その点はクリスチャンの皆さんの場合は、生きていた内に、自分の心を入れ換えて、マリヤに近い、マリヤ様のような気持ちになりたい、とマリヤとつけてみたり、色々人の名前をつけている人もいますね。クリスチャンの方は、はるかに御立派です。生きていた内に変えるんだから、ものの考え方を。ところが仏教は死んでから変えるんですからね。死んでから変わる訳、ないじゃないですか。だから、そんなものに皆さんは心、うばわれてはいけません。だから「GLA」のお坊さんはそんなことしませんよ。「院殿下さい」と来ても「まあ院でいいじゃないですか」なんてね（笑）そんなことでやってますね。ですから商売繁盛しちゃうわけ。仕事が忙しくなっちゃうわけ。あそこ行きゃ、天上界へ行けるっていうわけで、葬式多くなっちゃう。本当は、お坊さん、葬式専門じゃ困るんですよ。生きていた人を救うことでね。死んだ人はもうしようがないんだ、これは。ところが日本はお坊さんイコール生きていた人には関係がないんだな。だから、お坊さんが入院している患者さんをお見舞いに行きますと、縁起が悪いや、なんて。そうじゃなくて、病院に入院して、今、死ぬか、生きるかという人に「お前さん、あの世があるんだよ、といつまでも執着を持っているな、みな捨てちまえ、子供達にみな分けてあげなさい」と教えてやりゃあいいんだよね、本当は。ところが、お坊さんが行ったら、縁起が悪いや、あいつは死ぬんじやねえか、なんてね。僕が丁度、この間、坊主になって船に乗ったたら、「坊主と一緒に魚一匹つれねえや」（笑）なんてね。だから坊さんは縁起が悪いことになっちゃったんだ。私も一応、心を改めて、自分の頭の毛を、一つ形の方からやってみようと思ひまして、色々検討の結果、頭を三分刈りにしてみた訳です。そうしたところが、「坊主と一緒に魚も釣れねえや」なんてね。こりゃ不思議なものです。ですから本来は、坊さんは、生きていた人を救うんです。インドの、本当のお釈迦様のお教えはね、お弟子さん達、ブッダが亡くなる時にね、アナンという方に、アナンがブッダがなくなったら、どうしたらいいでしょうか、私達はよんどころがありませんと、彼はブッダの枕辺で泣きました。その時、ブッダが、何を言うかと、ワシが説いた四十五年間の法は、お前達の心にある。お前達は、その法をたよりとして、人々を救うことなんだと教えているんだね。それが、何か、死んだ人を教えるように坊さん、変わったんだなあ、こりゃ。本当は、もうだめです。その坊さんが、「見えて、聞えて、話せ」たらなあ、いいんだけど、「見えて聞えて話せない」のが（註見えず、聞えず、話せないのが...の意）引導を渡すというから、どうしようもない。どういうわけですか、私達は、死んだら「ああ、こいつ地獄へ行くゾ、こら、お前ちょっと待て」と。こないだ、ある人が亡くなりましてね、ショック喰いました。私、行って見たら、無意識界にいるわけですね。事業やっとするもんですから。ソレーツちゅうわけで、すぐ行きまして、「あなた、どうしたんですか」ちゅうたら、「私じゃ便所でこんなことになっちゃって」、便所におったままステンと去っちゃったわけですね。予告なしですよ。大抵の場合なら、報告があって何日頃死にますと、あるんですがね。元気なもんだから、こっちは元気だと思っていた。朝になったら、電話来まして、亡くなったちゅうから、「エエッ」って、私が、パーッと、もう行きましてと

ところが、無意識界、自分の肉体から離れて、自分で意識ないわけですね。「あなた、どうしました」「私は便所にいる間は、わかったけれども、後はわかんなくなっちゃった」と。しっかりして下さいよ、と。「あなたはこんなに早く、いくなんて思わなかった」それでイエス様、イエス・キリスト、「イエス様、すぐ行って協力してくれ」って、すぐ魂をゆさぶりましてね。今、修養所にあります。労働組合につるし上げられ、家庭の中から反発されてね。精神的よんどころなく、心悩んでいる時に、そういう一つの死を迎えたわけです。だから恐ろしいですね。ですから無常です。人間はいつ、この世を去るか分からないんです。ですから、皆さんの場合も、自分の心は、いつでも準備体制は整えておかねばいけない。これが私が言う「一日一生」ですね。明日、生きとったら又、一生懸命やろう。今、若いからって、分からないんだから。それで又、なんといいと、しめっぽくなるから、まあまあ、明日生きていくことにして頑張るわけです。そうして希望を持ちながらね。そうして、死んだ、生きてって区別つけられる人は少いですよ。アー俺は、今、死ぬんだなんてね。そういう人は御立派ですよ。でもG L Aの人達の中には、死ぬことが、わかってりゃ、親孝行する人もいます。或る人は二日前に、もうわかりましてね。「ワシャもう、あと二日だよ、皆さん、どうも永い間、本当にスマンかったね。本当は、もっともって、生きていたんだけど、どうも、もうだめなんだよ、あと二日のちには、この世をかえるけど、ま、一つ、よろしく頼んまっさ、せっかく家も作ったから、G L Aで、ぜひ使ってください。家内も、さみしいようですし、今度、又、生まれて来た時は、正しく自分を知って行きます。しかし、今生は、本当に楽しくありました、ありがとうございました」ってかえっていった人、一杯いますよ。硬直なんか、全然しません。生きていた時よか、もっときれいになっていくわね。これが本当の成仏ですよ。もう、こうやって硬くなるのは、皆んなダメ。ですから、皆さん、死んだ時、みてね、亡くなった人、見て硬くなったら、こりゃ、地獄だなんて思って下さい。その時は、「ちょっと、あなた、ここにおりなさい」と。あなたは今、この地上界を去るんです。執着を捨てなさい。今、あなたの肉体は滅びるのです。あなたは今、新しい肉体を持つのです。いつまでも、そんなことをやっとなら、あなたは地獄です。死というのは大変な行事なんですよ。地獄霊が皆、来ますからね。モーゼの時など、モーゼの肉体をサタンが欲しくてね。そして引き取りに来たのです。その時にミカエルを中心とした七大天使が、モーゼの死体をおかましてね。その死体を渡さなかった。その死体を渡しちゃったら、モーゼが生き返って、サタンになっちゃうんです。それで、皆さん死んだあと、よく魔よけって言って、刀をあげるでしょう。あれは、そういう習わしなんですよ。復活されちゃうから、おかしくね、悪霊がおれば、だから、そのように教えて、それが本当の引導ですね。ところが、最近のお坊さんなんか、「なんで、あの世なんかあるものか」ってね。現に、僕んここに言って来ている大僧正ちゅうのがいるからね。そいで檀家を何百軒も、何百人も持っていて、「あの世なんか、あるもんか、G L Aでいっているのなんか、ありゃ気違いだ」なんてね。その内にお灸すえに行こうと思ってるんですがね。(笑) G L Aのお坊さんとか大分、いじめているからね。皆んなの前でやっつけられるもんですからね。毎日新聞にもだいが、出ました。あの世なんかなくてね、引導渡したら、詐欺じゃないですか、あの世なんかなかったらねえ、お経なんか、あげるこたあ、ねえじゃないですか、だけど、ま、こりゃ商売だからって、言っているっていうから、ま、その内にお灸すえに行きます。あの世があることを教えにね。又、その檀家からも、G L Aへだいが来ているわけです。不思議なもんですね、これは。それも、ま、なかなか悪党坊主ですよ。でも、私が出たら、一番恐ろしいんじゃないでしょうかね。そういうもので、皆さん、心が大事なのです。肉体からサーッと離れると地獄へなんか、行きませんしね。そこで、又、ここで、こんど地獄の話になりましたから。神様が出てくる人がおりますから。そこで「ちょっと出て来て下さい」四十代の細面の女の人が登場する。「あなた何か信仰しているの...大権現というのを拝んでいた訳ね、家で。」

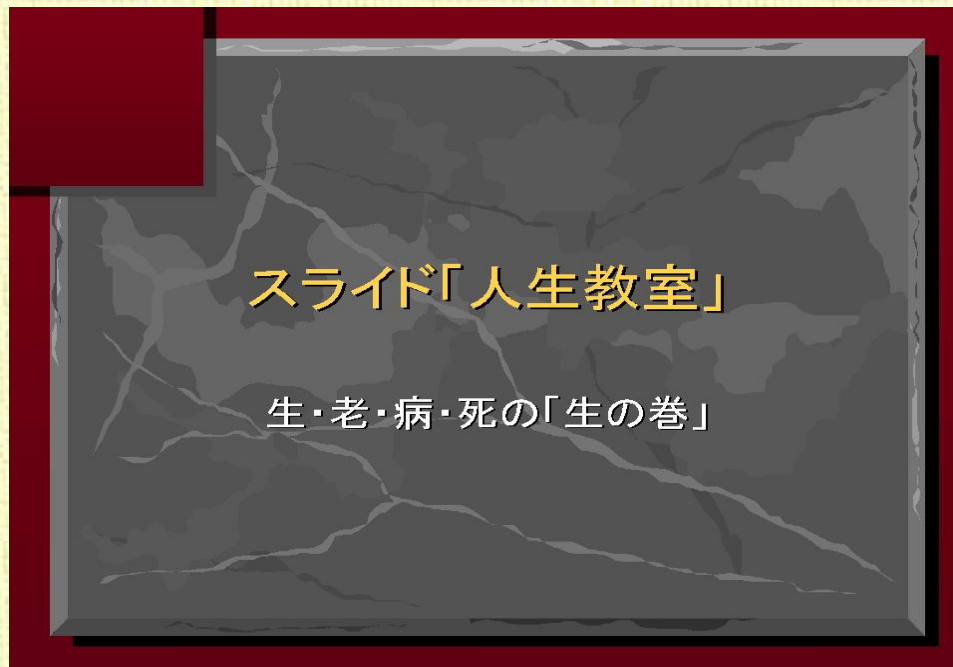
こうして引き続き、「霊道現証の時間」へと入っていった。



Home



Home



3 1 -

天地創造

- この大宇宙は神によってつくられた。
大宇宙が発生する以前の大宇宙は、光明という神の意識だけが、そこにあった。
神は、その意識の中で意思を持たれた。
大宇宙の創造は、神の意思によってはじまった。「意識の働く宇宙」(あの世)と、「物質界の宇宙」(この世)の二つの世界を創造した。(「人間・釈迦」高橋信次著より)


人類誕生

+ 「人類の誕生は、「意識界という実在の宇宙」(あの世)にまず姿を現し、そして神の意思である調和をめざす神の子として物質界(この世)に降り立ったのである。物質界に降り立った最初の人間を、地上の眼でみるならば、大地の一隅に、忽然と物質化されたといえる。」(高橋師) また、園頭師は「光の凝集固体化した」と教えた。

3 1 -

地球人

◆ 光の粒子の集中固体化により忽然として「ある星」に姿をあらわした最初的人类は、その星を調和させ、それから幾多の星を輪廻転生(生まれ変わり死に変わり色々な所に生まれ)して地球から数億光年先のベータ星に生れた。ベータ星も調和され、その中の約六千人のアガシャ霊団は今から三億六千年ほど前に地球に飛来した宇宙人で、最初の地球人は宇宙人だった。



Home

地球の許容人口はどうか

- ◆ 高橋信次師は「この太陽系には、あの世とこの世を通して三百六十億の靈魂がいる」と記されているが、本体1と分身5の法則により推測すれば、その六分の一の六十億が肉体をもてる。
- ◆ 昭和四十九年の講演では、「この地上界には多くても九十億の人間しか住めません。だから、この地上界に生まれて来た縁を大事にしなければならないのです。」と。

許容人口と密林に住む人達

- ハイテクの近代社会に住む人がいるかと思えば、今もなを電気等の文明の利器に無縁のアマゾンの密林等に住む人達がいるのを疑問に思われたことはないだろうか。アガシャ霊団である地球の霊的進歩は速く、他の霊圏から魂の勉強のためにUFOに乗り集団で飛来して、あのような未開地域からスタートして人生経験を積んでいく。このような霊魂の増加と、また一定度以上に進歩した霊魂は他の天体へ転生する。

赤ちゃん誕生 (生まれ変わりの秘密)

- 人間は天上界の人だけがこの世に生まれ変わることができ、地獄界からはどんなに望んでも誕生できない。
- 生まれ変わりが決まるのは三百年前。
- お父さん、お母さんになってくださる方と「こんど生まれる時、お父さんお母さんになって下さい、子供として育ててください宜しく願います」と、お願いして出てくる。

31 -

Home

親子になる基準は何か

- 過去世(生)において親子、兄弟、友人同士
- ある人に非常に世話になり、恩返しのために親子の約束を強く望む場合
- 魂意識が非常にあいにかよっている場合
- あの世で生活を共にし、親子の約束をする場合 (園頭広周先生の分類)

3 1 -

天上界での約束

- 子供になる人と約束を結んだお父さんお母さんは、一足先に自分で選んだ環境に生まれて行かれる。
- 適齢期になると、「縁」によって結ばれたお父さんお母さんの心の波動に乗って降霊。胎児の肉体を支配(胎生三ヶ月)して細胞を増殖させ、十月十日経つとオギャーと生まれる。

3 1 -



人それぞれの使命と役割

- 貧乏であろうと金持ちだろうと、その環境は自分で選んで決めて来たことです。貧乏な中で心の修行をしたいと決意して出てきた人は、たとえ守銭奴に徹して一時は金儲けをしたように見えても、この世を去る時には「お金には縁のない人生だったナー」ということになり、それも全て自分で決めて来たことです。

松下幸之助氏の使命と役割

- 幸之助氏の過去世は二千年前のイエスの弟子のルカという人。(高橋信次)
- 正法(しょうほう)流布のための経済的な大援助者(大黒天)という使命と役割。
- ルカとしての偉大なる魂ゆえに、「PHP」「政経塾」、その他の寄付、援助等。
- 例え無学であろうと貧乏であろうと、正道を歩き魂の完成を目指した人の証明として。

3 1 -

正法の三証

- 文証(もんしょう) 永い歴史を通して、語られ伝えられ記録されてきた不退転の証し。
- 理証(りしょう) 大自然と人間の在り方を実証し、文証によって示されているもの。
- 現証(げんしょう) 文証、理証を体得して、生活行為の中に現れてくるもの。
正法はこの三つを揃えて、人間が疑問を持って直に解答できるようになっている。

Home

90%の潜在意識と 10%の表面意識

- この世にオギャーと生まれると、それまでに記憶されていた90%は潜在されてしまいます。
例えば水の中に氷の塊を入れると、水面に出るのはわずか10%で、90%は水の中です。このように大自然の中の一員にすぎぬ人間も、この法則から外れることは絶対にありません。

なぜ人間は90%を潜在したか

- 人間はこの世に肉体を持ってしまうと、それまでの輪廻転生(永久に色々な所に生まれ変わり死に変わりすること)の事実や、あの世での約束をほとんど忘れてしまいます。なぜかと言えば「心の三毒」、「心の三大悪」が人類の心の中に生じたからです。それは「愚痴」、「怒り」、「足ることを知らぬ欲望」です

心の三毒、心の三大悪とは何か

- ◆「愚痴」「怒りの心」「足ることを知らぬ欲望」を心の三大悪、心の三毒という。
- ◆ 愚痴は自分の欲望が満たされない時に起こり、自分の心の中に垢をつくり他人の心にも毒を食べさせることになる。
- ◆ 怒りの心は「もの」を破壊する心に通じる。
- ◆ 足ることを知らぬ欲望は、自分さえよければという自己保存(エゴ)の塊の心です。

3 1 -

心の状態を表すオーラー(後光)

- 愚痴の心は、灰色がかった暗い色
- 怒りの心は、炎に包まれ血のような赤い色
- 野心や欲望に燃えている時は、黒色かネズミ色
- 心が穏やかで調和された人は淡いゴールドカラー。オーラーによる採用試験が行われたらどうしますか。

淡いゴールド・カラー

- ◆ 心優しく穏やかで安らぎの人は、淡いゴールド・カラーの後光(オーラ)。
- ◆ 心の段階が上段階へ行くほど強くなり、例えば、如来などは「光の化身」と言えるほどです。また、私達が恋をしますと、本能と感情がふくらみ理性と智性が隅に追いやられて全身からピンク色を発し、「もっか恋愛中か」と分かります。

この世に出る前の待機所

- お父さんとお母さんの愛が育まれ、精子と卵子が調和される期日が予定されると、天上界では子供になる人(霊)が下生(天孫降臨)に備えて修養所で待機しています。
「もうすぐだね、頑張ってるね」
「まかしてよ、お世話になったね」と、守護霊や指導霊や友人達と送別会をして別れを惜しむのです。

赤ちゃん(霊)はすべてお見通し

- 生れる場所、環境、肉体的条件など総てが計画されており、地上界の思想、習慣、そして何をなすべきか誰も知っている。
- あの世においては皆大人であり、地上界への準備の間には両親になる人の生活環境、心の状態がはっきり見えている。約束を忘れ欲望の生活に浸っているのを映画のスクリーンでも見るように悲しんでいる。

3 1 -

ああ、魂の勇者！

- ◆ 脳性麻痺などの身体障害のハンディを持っている人は、その肉体の乗り舟を支配することの大変さも熟知しており、「厳しいぞ、やれるか」「わかってるよ、頑張ってくるからね」と、激励されて肉体を支配してゆく魂の勇者である。地球人類の三億年ほどの歴史をひも解くと二千年に一度生まれるとして、皆さんも十五万回の人生の中で一度は脳性麻痺の体験があるかも。

魂(霊)が赤ちゃんに宿る日

- お母さんが妊娠され、お腹の胎児は順調に育って受胎後二、三カ月もすると七センチから十センチ位に成長し、その頃から初めて、あの世で待機していた魂(霊)がお母さんの中に入って胎児を支配します。また、医学的には精子と卵子が結合し細胞分裂によって勝手に成長すると言いますが、そうではなく霊の正しい細胞分裂のコントロールにより健全な肉体に育ちます。

なぜ！「つわり」は起きるのか

- ◆「つわり」は、皆がひどいとは限らない！
母親の意識はこの世での人生体験がある。
母親と胎児はそれぞれに善悪の観念を持っているが、天上界から下生したばかりの胎児は丸い豊かな広い心を持続しているので妊婦と相克が起こることも有り得る。
母親と子供の意識が調和されると「つわり現象」も治るが、この世での母親の意識と天上界から下生したばかりの胎児の意識のレベルの違いによって悪阻は起こる。

3 1 - 2 2

Home

妊娠すると、なぜ嗜好の変化が起こるか

- 妊娠すると食べ物の好みが変わることがあるのはなぜだろう？
胎児の意識の中には過去世(生)の現象界で食べていた物などによって、母親とは異なった好みがあるので母親の食べ物まで変わってしまうことがある。これは母体を二人の意識が支配するためである。

31 - 23

妊娠中の胎教の重要性

- 妊娠中は健康に気をつけ、お腹の赤ちゃんを中心に生活が廻るのが普通ですが、家族の仲が悪く喧嘩の絶え間がないのに、見せかけの調和は何の意味もありません。というのも、胎児の魂はあの世もこの世もツーツーで全てお見通しであり、見せかけは通用しません。仲が良く、愛の牽引力の強い夫婦に育てられた子供は精神的にも肉体的にも健全で問題も起きないものです。

0(ゼロ)歳児の不思議

- ◆ あの世において魂は大人でも、この世にオギャーと生まれると魂も赤ちゃんの体に比例して小さくなる。目も見えぬ乳児が一人で笑うのは守護霊や指導霊、友人達と「無事に誕生できて良かったね」「よく訪ねてきてくれたね、これからも宜しくね」と語らっている姿であり、誰も教えないのに母乳を飲みはじめるのは、生まれ変わりの体験の中で前に生きていた証拠である。

親の反省を促す 子供の病気やケガと死

- ◆ 親の仲が悪く問題が多いと、親を反省させるために可愛い子供が病気やケガをしたり、極端な場合は死を選びます。それは天上界で親子の約束を結ぶ時、親となる人が子供になる人に「私達の生き方があまりにも極端な時には、病気やケガのシグナルで警告し、それでも反省しない時は死の抗議をしてください」と頼んでいるからであり、子供は報恩の死を選んだ魂の勇者。

3 1 - 2 6

高橋信次先生の言葉二題


- 男性は「現実社会」を建設し、女性は子供をどう育てるかということを通し「未来社会」を建設する。
- 経済行為の原点は、男女両性の愛の中から“ここ”の声をあげた。
男は労働に従事し、女は子弟の教育と家を守った。

3 1 - 2 7

Home



「墮胎」と正法

- 
- ◆ 墮胎をする人にはそれぞれに理由がある。天上界から下生しようとする魂をこちらの都合でトンボ返りさせるのですから責任は重大です。墮胎によって母胎を傷つけるのも感心できませんが、もっと大事なことはこの世に降臨して人生を送ろうと喜び勇んで胎児を支配する霊(魂)にとっては、この世での人生の修行を遅らされたり計画変更をさせるのですから、責任は免れません。

31 - 28

なぜ、水子や墮胎の 崇りや障りはないのか

- ◆「水子」というのは胎児の肉体が不完全なために、流産や人為的におろすことを言う。五体が完全ではないので最初から魂は宿りませんから障り崇りはありません。
- ◆墮胎は五体満足なのに都合で墮ろすこと。天上界から降霊したばかりの魂を直ぐに天上界にトンボ返りさせるのですから、この世に出ることもなく天真爛漫、純真無垢のままの天子の心ですから障り崇りナシ！

31 - 29

天上界へ「トンボ返り」した 霊(魂)はどうなる



- ★「水子」の場合は胎児に魂が宿りませんから、次の機会に直ぐ下生のチャンス。
- ★「墮胎」の場合は胎児に魂が宿り、魂も赤ちゃんの体に合わせて小さくなっているため、胎児の「魂の兄弟」達が天上界で大人になるまで育て上げ時間はかかります。この世では二十年ほどで大人ですが、あの世は時間の単位が違い早く大人になるので次の下生のチャンスは早まります。

31 - 30

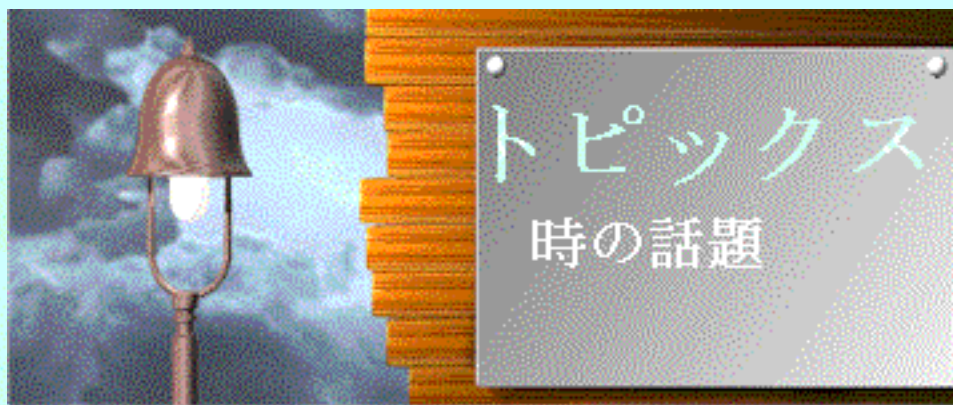
悪徳宗教、ニセ霊能者や 水子産業に気をつけろ！

- ▲胎児本人にも胎児の魂の兄弟達にも大変な迷惑をかけることになるのですから、心から詫びて二度とないように智慧を働かせて明るく生きるのです。罪の意識から心を暗くしていると、あの世の暗い霊に同通して困った現象が起きかねませんから、明るく心安らかに「笑う門には福来る」は正に至言です。



31 - 31

Home



目次

[1、クローン人間](#)

[2、臓器移植](#)

[3、代理母](#)

[4、赤字国債](#)

[5、自殺について](#)

[6、邪馬台国と卑弥呼](#)

[7、強制猥褻（わいせつ）と性暴力](#)

[8、正法と性学](#)

[9、正法「子供のしつけと教育」 - 子供の犯罪はなぜこんなに起こるか-](#)

[10、女性は如来になれるか](#)

[11、なぜ、日本人には臓器移植の申し出が無いのか](#)

[12、なぜ、死刑はいけないか](#)

[13、なぜ、長江（揚子江）の大洪水は起こったか](#)

[14、無理心中したからといって、あの世で添えるわけではない](#)

[15、インドネシアの天候異変の理由（ワケ）](#)

[16、真（まこと）の男女愛とは](#)

[17、人の役割の任期は、長くても十年まで（長はいつまでが妥当か）](#)

18、なぜ、多数決的判断に偏ってはいけないか（多数決は平均的な中位の判断に過ぎぬ）

19、終身雇用制は、理想的な雇用形態である、

20、喘息やアトピーの原因は、家庭の不調和（話合いの出来ぬ家族関係など）

21、最近の子供の事件（十七歳など）をどう見る



Home

クローン人間について

最新の科学はバイオテクノロジーによるクローン動物（クローン・羊など）を生み出した。

いずれは人間も・・・というわけだ。健康で肉質や毛皮の良いクローン動物なら人間生活に欠くことが出来ないのでは誰も異議をはさむ者はいないだろう。だが、これがクローン人間となれば話は別である。動物も植物も鉱物もそれぞれに意識がある。彼らは、万物の霊長といわれる人間ほどには高等ではないので、余り問題視しなくてもそれは許されるかもしれないが、人間は彼らと同じ次元で論じるわけにはいかない。

さて、人間は、肉体と意識(心、魂)が不離一体（心身一如、色心不二）となって同居している。肉体(物質)のみとする唯物論（対語は唯心論という）に凝り固まった科学者達には理解しにくいことかもしれないが、人造されたクローン人間の肉体に、どこの、どの魂が乗るといえるのだろうか？生育

とか成長というのは、肉体に縁のある霊（魂）が肉体に降霊し支配しコントロールしていくから育つのである。魂（霊）の宿らぬ肉体はただの肉塊に過ぎない。細胞分裂により増殖して成長は行われると現代科学は説くが、肺は肺に、胃は胃にと個性ある特徴を持った臓器に完成されて行くのは霊（魂）のコントロールがあるからである。猿は猿に、ライオンはライオンに成長し、猿が成長の過程でライオンに変わることも無いのは個性ある霊の支配下にあるからである。この神秘さは、神の意思の働きを考えずには誰人も説明できる人はこの世にはいないだろう。こうして例え、最高に優秀な人の模造人間をいかに多く造りだしても、それは肉体的特徴が同じ（コピー人間）というだけのことで優秀な人間になるとは限らない。それは、肉体(肉体舟)を操る船頭さんである魂(意識、心)が問題であるというのである。

これはどういうことかと言えば、例えば天才的な科学者がいたとしよう。この天才的な科学者はこの世だけで生まれたかというとは決してそうではなく、永い生まれ変わりの中で絶えず研鑽して来た結果である。今世において関心のある研究に対して、過去世でなして来た資産を心の中より直観(感)とか閃きとして思い出し、研究を伸ばしてきた結果に過ぎないのだ。このように、たとえ天才科学者をつくり出そうとして、既存の天才科学者の細胞やDNA、染色体などを利用して肉体遺伝的なクローン人間をつくり出そうとしても、顔や姿形が似ているに過ぎないだけで、それを支配してこの世を渡る船頭さんである魂（意識、心）が立派であるかどうか問題ということである。肉体のコピーはできても魂のコピーは不可能だからである。クローン人間の研究の初期段階では、高級霊達が協力して研究もスムーズにいくかもしれない。だが、それが当然かのように行われると高級霊達も協力を止め、そのうちには低級霊ばかりの低級クローン人間の集団が世に蔓延（はびこ）るとすれば、その責任は一体誰がとるといえるのだろうか。立派な教育をすれば人は立派になると世人は言うが、天性といわれるように生まれ変わりの過程で作りあげて来た天与の真実も考えなければならぬ。

参考、地球人はこの地球上だけでも、多い人では二十万回も生まれ変わり死に変わりしている。これは二千年に一度生まれ変わり、地球人類が三億六千年として試算したが、人類は宇宙的存在（この宇宙には七種の間人が存在する）だから原始人類から考えれば輪廻転生は天文学的数字になるかもしれない。簡単にこの世に生まれ変わることができるかというとは、そうではなく天上界に帰った人のみが地上に生まれ変わることが出来るのだから、地獄界に留まる人はそれだけ地上での人生体験の少ない人となる。つまり、仏教的呼称の如来とか菩薩、或いは、キリスト教的な呼称の上段界光の天使、上上段階光の天使という方達は、限りなく正道を歩いてきた方達で、人生体験の最も多い最高に人格の高い人達である。

目次



臓器移植について

壊れた臓器は、 医学的にどうにも手だてが無いからという理由で、提供者の臓器で代用しようという発想である。そして、代用(移植)するからには可能な限り生き(生き)の良い臓器でなければならない。そのためには旧来からの心臓死ではなく、脳死が法制化されることになった。心臓死を待っているのは、取り出す臓器の血流が止まって生き(生き)が悪くなるからである。法律は臓器移植を前提とする時、脳死を人の死と認めると言うものだが、勿論、脳死は植物人間の状態で助かる手だてが極端に少ない状態にあるのだから脳死も心臓死も同じと短絡できるかもしれない。それでは最初に、人間の尊厳死は脳死か心臓死かを考えてみよう。

「太陽(中心)の周りを廻(めぐ)る惑星、恒星などの無数の星星(細胞)は太陽の熱、光によって生かされている。」

人間は小宇宙といわれるが、人間も大宇宙の仕組みと同じように、

「心臓(中心)から出た血流によって個々の細胞は生かされている。」

このように、太陽系では太陽(中心)が働きをやめれば太陽系(神の体)も終焉し、心臓(中心)が働きをやめれば肉体(人間の体)死となる。太陽系は例え終焉しても神の大意識は大宇宙に遍在し続け、人間の肉体は亡くなっても人間の意識(魂、心)は永遠である。このように、人間の尊厳死は心臓死が妥当というのである。

「そもそも、脳の働きとは何か」

現代脳科学では、脳でものを考え、脳で記憶するというが、そうではなく肉体と不離一体の魂(意識、心)がものを考え、記憶するのである。脳は魂(意識、心)との接点、通路に過ぎないのである。つまりコンピューターの機械本体が脳であり、ハードディスクやフロッピーディスクなどの記憶媒体が魂(意識、心)と考えたら良い。卑近な例では、全身麻酔の手術下で、患者があんな夢を見たこんな夢を見たという例は枚挙に尽きないが、麻酔により脳の機能は停止しているはずなのに夢を見るのは魂(意識、心)の働きである。そして、感動したり感涙するときに込み上げてくるのは脳の在る頭からではなく、胸の辺りからというのは万人が知るところである。これらの事実は現代の脳科学では説明できない。ものを考え、ものを記憶するものは体の一部に過ぎない脳ではない、ということを示して先を続けたい。

「心身一如、色心不二」

サテ、肉体が病むということは、心(意識、魂)も同じように病んでいるということである(心身一如、色心不二)。病んでいる心を治さないで臓器を機械の部品でも交換するように移植しても、そのうちには移植した健康な臓器も病気になるべくは良好な機能を維持し続けることは不可能である。人はいずれ死ぬ。人間は永遠の生命であり、また、次に生まれ変わってくるのである(普通の人は約二千年後)。永遠の生命にとって最悪なことは、生き方を変えさせないで延命をさせることである。これはその人にとってまさしく罪悪。

魂(意識、心)を汚させることになる。汚くさせるより、心の罪を重ねさせるより、あの世に引き取られる方が魂にとっては何倍も価値があるということも知らねばならない。死は怖いと人は言うが、死は心の重圧から解放され知らず知らずのうちに重ねた悪を清算するということでもある。このような考えに立ってレシピエント(移植を受ける人)は、ドナー(臓器の提供者)への感謝の気持ちを持つことと、心と生き方の修正をすることである。暗い人は明るく、くよくよする人は大きな心で、という具合に実行、実践するのである。

また、ドナーの心の波動までは現代医学では検査できないから、ドナーが余りにも肉体へ固執し執着が強いと、「俺の体の一部を勝手に取るな」と、移植しても良好な状態が長く続くとは限らない。しかし、例え執着の強いドナーの臓器であっても、レシピエントが今までの生き方を反省し心の改革を図ると、レシピエントの全身は光に包まれ、たとえ執着の強いドナーの臓器であっても穏やかで爽やかな雰囲気(波動)に同化され、良好な状態を続けられるものである。人は、何がなんでも長生きをしたい、或いは長生きをさせたいと海外渡航等の高額医療費を工面する。周囲の者の「何

とか生きてもらいたい」という切なる願いも尊い「人間愛」には違いないのだが、「何がなんでも延命を」という願いは一步間違うと執着になる。生存期間は天に任せ安らかな心で生涯を終えさせるということも大事なことである。病気は病人と、病人の周囲の者へ反省の貴重なチャンスを与えるもの。生きることとは、死とはということを考える機会を用意したのである。これから世界の趨勢は脳死を個体死として定着するのだろうが、すべて天命と感得し平安な心で死を迎えるということも人間に課せられた責任と義務である。



代理母について

子供がどうしてもできない夫婦のために、代理母が子供のできない妻に代わって妊娠、受胎をすることを言う。これには金銭的問題、婦権者の問題等が吹き出しているようだが、人はあの世で夫婦、子供の約束をしてこの世に生まれてくるのである。「あなたと夫婦になりましょう。あなたの子供にしてください。あなたの親になります」という風に約束がある。これを縁というが、代理母と子供を欲しがる男(主人)の間で、あの世での約束がないとすれば、生まれてくる子供の霊(魂)は、主人に縁のある霊か代理母に縁のある子供が産まれる筈である。だが、このようにどちらか説明できないような不確定な場合の判断は、一般的には女性が十月十日の間おなかを痛み無事生まれるようにと大事に育てるので、女性寄りの縁ある子供が生まれると高橋信次師は教えている。ということは代理母に縁ある魂を持った子供が産まれるということである。現代は色々な医学的手段で子供を産めるが、中には子供を持たないというあの世での約束と決意の人達もいるのである。だから、「どうしても子供を」と執着しないで成るがままに天にまかせて心安らかに日々を過ごすことである。そして、経済的余裕があれば交通遺児、戦争遺児などの不幸な子供らに手を差し伸べるのも一つの選択肢である。この狭い国土に一億二千万人、資源も無いのにアジアの金満国日本。現代は高霊格の人々が縁生によって生まれ集う国、日本。この国の人々が世界に模範を示す良いチャンスである。





赤字国債について

平成九年十二月、政府は景気のテコいれのために 2 兆円の赤字国債を増長させた。それからはもう次から次に増え、三百兆円も手が届くほどだ。借金まみれの経済大国ではある。家庭にあっては、借金は家人がそれぞれ経費を切りつめ、分を知り足ることを知ってジッと我慢の子であるしかない。浪費すればそのしわ寄せはキッと来るのである。

平成十二年六月には五百兆の大台に乗って増えつづけているが、高橋信次師が亡くなる直前の昭和五十一年（1976年）の研修会では次のような予告がある。

「...皆さんはイタリアの経済破綻を知っているでしょう。日本はこのまま行けばイタリア以上の苦境に立たされるでしょう。...日本には食糧危機はありません。...」

健全で、未来のすばらしい日本を残すためには、家長（首相、政府）は家人（国民）に対して「現在の苦労はキッと先で報われる。ジッと我慢を！」、と説得すべきである。命を賭した覚悟の真実の言葉は、岩（世論）をも動かす。家人の言いなりになっていては、この必然的な結果を改善できずに日本沈没に終わろう。

目次

自殺について

2000年八月に政府はこう発表した。1999年一年間に、わが国の自殺者は三万三千人を越した、40歳以上が75パーセントと。

これは大変なことである。

自殺とは色々な理由から自分の命を自分で絶つことをいう。天命と言われるように、人は神の命を懸命に生きることにあるのだが、自分で自分の命を自己限定したのだから、自殺はそこにどういう理由があろうとも神への冒瀆といえる。

自殺者のあの世の世界は一人一人違うが、概して自分の身の置き場もわからないという光を閉ざした暗黒の世界で、突然雷鳴が鳴り渡ったり、得体の知れない物体から突然かきむしられるという全く安らぎの無い世界である（高橋信次師）。

このような、光を閉ざした環境にある自殺した霊人達は誰かに助けを求めようとする。この世と同じで、その対象者は知り合いや縁者、同類の人々ということである。助けを求められた人が自殺者と同類の心と生き方をしていると、自殺をした方法と同じように何か首を締め付けられているようだとか、何かフツと身投げをしそうになるとか、暗い気分襲われる。

また、夢にたびたび出てきて不眠症に悩まされるということにもなる。ところが、助けを求められた人が神理・法則を知り爽やかな生き方をしていると、その霊に対して「あなたは、自分で自分の命を絶ったんだよ。もうすでに死んだことを悟り、それまでの生き方の一つ一つを反省して神にわびるのですよ。苦しいからといってこの世の人に助けを求めてはなりません。全部自分で解決をするという自力です。自信を持ってやっごらん」と諭すこともできるのである。

近世では何人も小説家が自殺をした。今さら亡くなった頃の作風を検討するまでもないが、必ず暗いということも分かる筈だ。これと同じように、役者にしても暗い役を演じるときは、役から離れたら気分を明るく転換して、余りにも暗い役に執われないことである。暗い心は暗い霊に通ずる。これまでの話によりお分かりと思うが、助けを求められた人は、彼等と反対の、明るい生活を実践している後ろ姿を見せることである。それが彼等に反省を促す良い供養となる。意味も分からないお経を上げるより、声を出して、或いは心の中で言うて聞かせることの方が何倍も価値はある。あの世の霊には時間も空間も関係なく、即、何処へでも通じるのだから。

[14、無理心中したからといって、あの世で添えるわけではない](#) を参照してください

目次

Home



邪馬台国と卑弥呼

平成10年1月、奈良の黒塚古墳から三十二枚の三角縁神獣鏡がゾクゾク出て、邪馬台国の畿内説が勢いづいているようである。

人は生まれ変わり死に変わりして魂が永遠なら、生まれていたその当時を思い出し、「それはこうで、あれはそう」と指摘しはじめたら歴史は大きく塗り変えられてしまうだろう。ところが過去世（生）を思い出せなくしてしまったのは、人間は永い間に愚痴、怒り、足ることを知らぬ欲望などの「心の三大悪」の曇りによって、この能力を閉ざすことになって過去世のことも、あの世のことも分からなくなってしまった、と高橋師は教えている。そこで、その能力を暗く閉ざしてしまった我々のために高橋師の力で、閉ざしてしまった能力を自由自在に開いてみせたのである。その光景はビデオに多く残されている。また、邪馬台国と卑弥呼について高橋信次師は多くを言い残しているので、ここではそれを見てみたい。1975年（昭和五十年）3月、宮崎の研修会では、

「この人は過去世において卑弥呼であったことを思い出しております。奄美大島から来られたこの二人のご婦人は卑弥呼の女官をしていた方達です。東京でデザイナーのG堂さん、映画俳優の中丸氏の夫人の薫さんは、ともに卑弥呼の大臣をしていた人達です。卑弥呼の過去世を思い出したこの人を中心として、この人達が卑弥呼の時代を思い出すと、今までわからなかった日本の歴史がはっきりとします。邪馬台国は有明海を中心にしてありました。」

これは信次師が昇天する一年ほど前の講演の一コマだが、邪馬台国の当時に縁のあった人達が高橋師の力で当時の言葉を思い出し、それぞれが感謝して語る言葉は現代に生きる者にとっては、チンプンカンプンで何を喋っているのかわからない。現代でも、東北のズーズー弁と沖縄の人がまったくの方言で語り合っても完全に理解するのは不可能だろうが、有明海の近郊の人が何度テープを廻しても、何を喋っているのかわからないのが理解できよう。なにしろ千八百年も前のことで、永い時間の隔たりというものをつくづくと考えさせられる一例である。

二、三世紀頃、日本にあったといわれる邪馬台国の女王が卑弥呼で、中国の魏志倭人伝に書かれている人物である。魏志倭人伝とは中国の歴史書「三国志」の中で魏の国に関する「魏志」の一部「東夷列伝」という項目だが、「魏志倭人伝」によると当時、倭に大小三十カ国あまりの国を従えていた邪馬台国があって、卑弥呼という女王が国を治めていたという。卑弥呼は大きな宮殿に女性ばかり千人の召使いを使得、よく神のお告げを知り、それによって人々を支配して、中国の「魏」の国に貢ぎ物をおくり、「魏」の皇帝から「倭王」と認められ金印をおくられる。邪馬台国は九州説と大和（奈良）説があり、歴史上の論争の焦点となっていることは周知の通りである。

つづいて高橋師の別の講演から。

「邪馬台国のとき、卑弥呼が過去世を思い出し、二千五百年前の釈迦のインドの時代、大日如来といわれる方の娘であったことを知ったのです。それで卑弥呼は、大日如来を懐かしんで祭っていたのです。その大日如来がのちに日本に生まれ、天照大神（あまてらす・おおみかみ）として祭られることになったのです。釈迦牟尼如来も大日如来も、どちらも法を説く天上界の同じ仲間なのです。中国から日本へとなってくると、どちらも仏像につくられて拝まれるということになりました。護摩を焚くというのは完全にバラモンの教えで、仏教で護摩を焚くことは絶対にしないのです。弘法大師（空海）が中国に勉強に行った時、五台山で、不空三蔵といってインドから中国に帰化した方があります。この方によって密教というものがつくられたのでありますが、密教はバラモンの教えであります。それが日本へきたら、大日如来を祭るということになってわからなくなってきたのです。」

アガシャ系霊団の大指導霊である天照大神（あまてらすおおみかみ）が日本に生まれ正法を説いた。それが日本の古神道（現代の神社神道ではない）である。三千二百年前のモーゼのユダヤ教、二千五百年前の釈迦の仏教、二千年前のイエスのキリスト教、千八百年前の天照大神の古神道は、共に正法を説いた「一つのもの」というのである。

サテ、卑弥呼の過去世を持つ人は誰か。高橋師の初期の団体である「神光会」（後のGLA）の昭和四十年代初期の会誌「ひかり」にもすでに記述されているが、師の長女・高橋佳子氏である。高橋師が昭和五十一年六月に亡くなると、奥様である一栄氏、佳子氏、実弟の興和氏（イエスの時代のパウロ、鎌倉時代の親鸞として生まれたと言われる）等の中心部は、GLAの会員は四十歳、講師は四十五歳までという特異な発令となってエスカレートする。しかも、そのハイライトは「佳子氏は天使長ミカエルの生まれ変わり」ということになった。ミカエルとして売り出そうと東京のホテルに六十名の報道陣を集め記者会見を企画したが、報道陣から質問攻めに合って二十歳そこそこの佳子

氏は泣き出し、もうミカエルとは言いませんということになる。地方で予定されていた「ミカエルは語る」という講演ポスターは、一晩のうちに剥して廻ることに。そこで、園頭広周師は次のように言う。

「高橋先生は立派に佳子さんを教育された。高橋先生が生きていられる間は親孝行の娘さんであった。肝心な点は先生が亡くなると、特にSF作家の平井和正氏がGLAに来てからすっかり変わってしまった。一栄会長も最初は私と一緒に、佳子さんの暴走、ミカエル宣言（父・信次は私を生むだけに生まれてきた。五年後には、イエスや釈迦以上の私・ミカエル佳子の前に人類は額づくのであるという宣言）を反省させようとされたが、全身蕁麻疹で緊急入院されてから完全に変わられた。私の聞いた話では佳子さんが暴力を振るうので、お手伝いさんが「佳子先生がお帰りになりました」と告げると全身に蕁麻疹が出るものだから、このままでは医者から死ぬと言われたらしい。この入院は内密にしてあったが、ある人が偶然に知人を見舞いに行ったら入院中の一栄会長にパツパツ出会い「何を探りに来たの」と叱られている。それに、月刊「GLA」はミカエルの「M」をつけて月刊「MLA」として刷り上げていたものを私の強硬な反対で止めさせたこともある。」と。

驚くなかれ、高橋佳子氏の著書「真・創世記」は、発売当初から平井氏が書いたともっぱらの評判であったが、十年後、他ならぬ平井和正氏が『SFアドベンチャー』誌上で自分が書いたと発表した。時間が経つと全てが見えてくる。同じく、園頭師は言う。

「二十歳を出たばかりの佳子さんを、魔に憑かれた男がコントロールすることなど朝飯前であったろう。この人の本には犬神とかウルフガイという得体の知れぬのが登場する「幻魔大戦」、「人浪白書」等があるが、あるフリーライターも「冷静には読めない奇書、小説と現実を混同した妄想狂」と書いていたが、この男がGLAに潜入して高橋先生がつくられたGLAをメチャメチャにしてしまった。勿論、佳子さんや取り巻きも、この男と同類であったのだが。」と。このように見てくると、佳子氏が昭和五十二年に、「これから五年後には全世界の人類は私の前にぬかずくのであると、そして、父・信次は抜け殻である」と信次師を否定し、GLAを支配して講師団よりメシヤとして祭り上げられたことと、卑弥呼が三十カ国もの国を従え、君臨したという発想が同じとは思議であった。次に、本当にミカエル天使長は佳子氏であるかどうかを考えてみたい。

「ミカエル天使長はいつも男性か」

人は一般的に、男として生まれたり女に生まれて魂の修行をする。どちらを多く修行したかという度合いによって「女らしい男性、その反対に男らしい女性」という人がこの世の中にはいるということになる。男女の使命と役割という根本原則により、男らしい男性、女らしい女性というのが理想である。男ばかりの兄弟の中で育った女性、女ばかりの中で育った男性が思春期を過ぎたら途端に直ってしまったということを経験された人も多いと思う。これは後天的なものである。そして、先天的に、男性、女性としての地上界での人生体験による経験の差、割合というものがあるということも知らなければならない。このように普通の人には男に生まれたり女に生まれて人生を送るが、中には、女の役割と使命を完全に悟り、男性だけに生まれてくる人がいる。釈迦やイエス等がそうである。また、その反対に、男性の使命と役割を完全に悟り、女性だけに生まれてこの世に出てくる人がある。釈迦のお母さんであるマヤ様、イエスのマリヤさま等である。このように男に生まれたり女に生まれたり、男だけ或いは女だけに生まれてくる人がいて男女の割合は1対1となり均衡が保たれる。ただ現代は、墮胎、避妊、戦争、交通事故等の人為的なものによって人類のバランスも時間的、空間的に崩れ勝ちになると高橋師は教えた。それではミカエルはどう生まれたのか考えてみたい。

講演や著書の中では、ミカエルはアポロ、エリヤ、マルチン・ルター（宗教改革者）として生まれていると高橋師は教えている。彼等は全員男性である。偉大な使命と役割の天使長であるミカエルは、いつの世も男性だけに生まれてくると判断しても余りに早計だろうか。更に付け加えるならば、天使長ほどの方が、そう易々と悪しき人にコントロールされ道を誤ることはないのではと思うのである。今日まで、佳子氏はミカエルの生まれ変わりという間違いが一人歩きして佳子氏の人格までも変えてしまった。これら弊害は計り知れないのである。

ここで天使長のミカエルはいつの世も男性だけに生まれると決めつけたが、これから男と女の特性ということで触れてみたい。女性蔑視ではないことをくれぐれも断っておく。

<参考1> 男っぽい男性夫婦に子供は女ばかり。女性らしい優しい男性夫婦に子供は男の子ばかりということによってバランスがとれる。これによって、彼等はそれぞれの子供の後ろ姿を見て魂の修行をするのだろうか。否、親子の約束は天上界でなされるから、これは当て嵌まらないとも言える。男性が「余りにも男っぽい」ものだから、それを修正するために「女の子として出てくれないか」と天上界で約束をしたのだろうか。男女の区別は受胎の初期には判然としないが、妊娠三ヶ月頃に赤ちゃんを支配する霊(魂)が降霊(天孫降臨)すると、その霊のコントロールにより細胞が配列されて男女に区別されると言うのである。

<参考2> 女性にイタコや霊媒等の交霊者が多いというのも、女性は妊娠・受胎を通して霊との交流が多いという特殊性からである。

「女性は如来にはなれない」

昭和四十八年夏、長野県熊の湯での自主研修会での高橋信次師の講話から。

「ところが、執着のない人達は、一切、飾りなどつけません。普通の飾り気のない質素な服装をしています。心にダイヤモンドを持つということ、それが大事なのです。格好で脅かすようなのはね、人間以下の動物のやること。蝶なんかでもね、雌、雄ちがいますよ。光の天使、心を説く人が、そういう格好をしていたらおかしいんです。あれも飾りたい、これも飾りたい、飾りたいという執着を持っているのはホンモノではないんです。如来というのは上上段階光の大指導霊、なんにも飾っていませんよ。質素です。だから女はね、上上段階の大指導霊にはなれないんです。化粧はする。イヤリングはつける、ネックレスはつける。まあ仏教的に言うと菩薩くらいのところまで。でも、地球上で菩薩というと、偉いですよ。大変な、大変な、永い、永い輪廻転生の体験を経なければなりません。」、と。

女性の役割は妻となり母となって、夫を生かし子供を産み育てることにある。子供を産み育てるためには安心して子供を産める場所、育てる場所がほしいと考える。そのために、急激に環境が変わることに不安を持つところから、女性の考えは、どうしても保守的に狭く小さくなりやすい。男性とは、このような理由によって先天的に心の広さ、ものの考え方が違っている。そこで「女性はせいぜい菩薩界まで」と高橋師は教えたのである。こう言うといかにも女性蔑視に聞こえるかもしれぬが、人は普通、男に生まれたり女に生まれて魂の勉強をするということを知ればそれも氷解しよう。いま男に生まれているひとも、ヒョットしたら来世は女性かも知れないのだから。また、男性でありながら女性になり切ったように振る舞う人もいるが、今世は男性の使命と役割を自ら放棄してしまったのだから、反省のために来世もまた男性として生を得るかもしれない。その逆もまた同じである。

「邪馬台国は佐賀の吉野ケ里か」

高橋師は、邪馬台国は有明海を中心にあったと言い残したが、園頭広周師は平成五年に邪馬台国は吉野ケ里だったと発表した。福岡市の近郊に糸島半島がある。ここは遺跡の宝庫で、吉野ケ里からそんなに遠くはない平原遺跡から、日本で最大の銅鏡（約五十センチ）等四十枚が郷土史家により掘り当てられている。先の三角縁神獣鏡は出ていなものの、こここそ卑弥呼のお墓（古墳）ではないかと推測したい。平原遺跡の近くには四百メートルほどの山（高祖山・たかすやま）があって、近くには日向（ひなた、ひむか）峠とか神崎（かんざき）郡という地名はまさに、「神、太陽、或いは卑弥呼、日の子）に向かって」とか「神の先」であろうか。また、数十キロ半径には「女山（じょやま、ぞやま）という名の山が二つもある。そして、そのハイライトは近くの、千メートルの天山（てんざん、天の山）であろうか。推測すればこうだ。卑弥呼は季節ごとに居所（霊山）を代え、神託・神のお告げを持って政（まつりごと）の中心である吉野ケ里に伝えたのではないか。（平成11年三月、祭壇とも思える遺跡が発掘されたと新聞は報じた）そして、「魏志倭人伝」の言う通りに歩を進めると、どうしても畿内説の有力な根拠になるようだが、千八百年前には、その後の雲仙や島原の火山噴火によって、現在の地形とは異なっていたと考えられないだろうか。また、同じく「魏志倭人伝」によると「男子は年齢にかかわらず、みんな顔や体に入れ墨を入れている」とあるが、平成八年二月、糸島半島の前原市から、一世紀前後の人の顔の入れ墨模様を刻んだ板（人物線刻板）が、国内で初めて見つかっているのも興味深い。

「最初の講演で出てきた二人の卑弥呼の女官は誰か」

一人は東京でデザイナーのG世子氏である。女性の幹部で、時折ビデオの中では、演壇の師に水差しを持って出てくるのが見受けられるが、高橋師が亡くなる直前、三月の和歌山県白浜温泉の研修会では、師に造反しているのが伺える。同じく園頭師はその辺の事情を激白する。

「この時は重大な意味を持つ研修会で、二十日の夕方、講師の田利氏と高橋先生の実弟の興和氏が秘密の話があるので自分達の部屋へ来て欲しいということで出向くと、「高橋信次先生はニセモノである。釈迦の生まれ変わりでも何でも無い、研修会が終わったら私達はGLAを辞めます。先生もどうですか」と勧めた。二十二日の朝、私の部屋に高橋先生が入って来られ、「昨夜、パピアス・マラーが出てきて私の心臓に矢を射た。まだ少し痛い。」と言われた。（註・高橋師の光子体の心臓へ矢を射たということ。あの世の霊だから本物の矢を射ることはできない。）そして、食事が済んで入れ替わりに興和氏が部屋に来て私に「GLAをやめます。先生もどうですか」と再び誘った。人の心の隙に乗じて魔が混乱させているということには気がついていたので、黙ってそれには答えなかったが、これは大変なことになってきた、サタンは身内から造反させて来たぞと思った。それから、その日の講演は中止になって、講師、助手に注意事項が伝達されることになったが最後まで抵抗して集まらなかったのが銀座のデザイナーのG堂女史だった。全員が集まったところで聴講生は後ろに下げられビデオにあるように幹部、講師に言葉を下さった。」、と。

それでは、その光景をビデオより再現したい。当時のビデオテープはVHSとかベーターではなく、年配の方ならご記憶にあると思うが、幅広のアルマイト製の弁当箱のような形をしたUマチックというビデオテープである。当初G

LAから頒布されたテープには園頭師等多くの幹部に声をかける場面が録画されていたが、その内には講師の二人だけで他は全部カットされている。その中の一人の例を挙げる。三楽荘大広間には、舞台の上に演台が設けられ、前列には講師と助手団、後ろに研修会参加者。高橋師は講師団の中にマイクを持って分け入り言葉を掛ける。「おーブッダー」と手を差し伸べ、すがらんばかりにひれ伏す者。場内はすすり泣きと、嗚咽。高橋師はマイクを片手に持ち、別手のタオルでしきりに涙を拭く。高橋師の著書を出している三宝出版社の当時の社長・堀田和成氏の前に古代語（異語）を語り掛けて進み、ひれ伏す氏の背中を手でさすりながら日本語で「あなたは私の書いたものを全て世に問うてくれました。今ここに改めて礼を言います。出されたものは今後、世界各国の…」そして、古代語でまた問い掛ける。すると堀田氏はすがらんばかりに手を前に差し伸ばし古代語で答えながら泣き伏す。師と堀田氏のやり取りの場面の中でも、興和氏の姿が何度か見え隠れする。師は最後の堀田氏の番を終えタオルで涙を拭くと、「私達は天上界から使命を持って出てきた霊団だということを自覚して...・これからは私達は次々と約束を果たしていきます。...・皆さんどうもこんなことに成ってしまって申し訳ありません」と。

そして、もう一人の女官という人は明治天皇の落胤といわれる堀川辰吉郎氏を父に持ち、独自の国際外交を続けている国際政治評論家の中丸薫氏である。氏の近著（1997・4月初版、文芸社）には、アラブ首長国連邦オマーンでの出来事と高橋師のことも書かれている。

目次

Home



強制猥褻（わいせつ）と性暴力

大学体育クラブの集団婦女暴行事件から、各報道機関は一斉にセクシアル・ハラスメント、レイプ等の性暴力の特集を組んでいる。挙（こぞ）って書き立てるのは注意を促すためにも意義のあることだが、それは必ずしも被害者の心を安らかにすることにはならないのではないかと思う。ここでは、性を「正法」ではどう説くか考えたい。開口一番、「それはアナタが無知で無防備だったから」という一言で片付けてしまえば、開きかけていた心も再び硬く閉ざさせてしまうことになる。それではというので、苦しい心の内を全部吐き出させて話を聞いてあげればどうか、それも一時の処方箋かも知れないが何かスッキリしない。それほどに難しい問題かも知れないが、高橋、園頭両師の説かれる正法ならどう解答するだろうか。

「男女の性神理」

尊敬し愛している者同士と一緒に食事をするのは、尊敬し愛するあまり相手と一体になり相手と同化したいという心の現われである。嫌いな相手とは一と時も一緒には過ごせないものだ。

夫婦の性生活は、お互いが愛を確認しあい愛を向上するための行事であり、神が陰陽に分かれ再び陰陽が結合するというこの性行為は、大宇宙の天地創造の原理が、小宇宙である人間においても実現する神聖な行事である。

男性が妻以外の女性との性行為に後ろめたい罪悪感が付きまとうのは、それは相手が、単に性欲を満足させるためだけの相手であり、お互いに愛を確認し合い、魂を向上し合うための相手ではなかったからである。浮気な男性も女性も、どんな相手と接しても、心の満足の得られなかった、霊の満足の得られなかった哀れな人達で、享樂の対象にするから罪悪感が伴うのである。

アメリカやソ連に同性愛が多いのは女が強すぎるからである。

「性の四要素」(園頭師の分類)

目的、 性の結合を行う目的は何か。それが単なる性欲の満足のためなのか、夫婦愛を完成し互いに愛情を確かめ合うためなのか。

人、 その人は正しい相手であるか。

時、 為すべき時が大事である。人が働いている昼間から行うことは正しいかどうか。

場所、 行為には場所が必要だが、為すべき場所であるかどうか。

単に欲望を満足させるために、為すべきでない相手と、為すべきでない時に、為すべきでない場所で、行為をするのは「悪」となる。

「人間の性と、動物の性」

動物の性欲は、種族保存と種族繁栄のために性本能として発情期を与えられている。それが時には、メスを求めてオス達の熾烈(しれつ)な争いを展開することにもなる。平成十年の干支(えと)の虎は、一週間ほどの記録撮影中に雪の中で百回以上も行為を続けたと自然学者は書いていたが、動物は時期でない時には行為をしないものだ。これは性欲を自ら諫(いさ)めるということではなく、オスを誘う催淫物質も影をひそめ、自然の摂理のままに時期を終え、それからは新しい生命の躍動(誕生)に向けて備えるのである。

一方、自由と創造を兼ね備えた万物の霊長である人間は、種族保存のみならず互いに愛を確かめ合うために、性欲を自由に委(ゆだ)ねられている。ここで大事なことは、自由には「責任」と「自主規制」、または「理性」という車の両輪があるということである。ここが本能のままに生きる動物と人間の根本的な相違点である。求婚をする発情期の動物達は、きれいな羽根を広げて見せたり、奇声を上げたり等の、特異な行動でアピールするが、人間の男達はどうか。

「アア、この男性なるもの」

この女性を射止めようと思えば、サメザメと偽の涙も流す。

この女性を射止めようと思えば、平気でウソをつく。

この女性を射止めようと思えば、結婚話もチラつかせる。

この女性を射止めようと思えば、気前よく振る舞う。

この女性を射止めようと思えば、母性本能をくすぐる仕種（しぐさ）をする。

この女性を射止めようと思えば、身のほど知らずの物をプレゼントしたがる。

この女性を射止めようと思えば、借金も厭（いと）わずブランドで身を飾る。

この女性を射止めようと思えば、必要以上に快活に面白く喋りまくる。

この女性を射止めようと思えば、実現しそうな夢を語り続ける、等がある

「性暴力と蓮華女比丘尼（ウッパラヴァンナー）」

古代インドのお釈迦さまの時代、ウッパラヴァンナー（蓮華女比丘尼）という蓮の花のように清廉で美しい女性がいた。この数奇な運命の蓮華女は、結婚をして実家で女の子を産んだ。ところが、実家へ帰っている時に夫が人の目を盗み実家の母と情を交わしているのを知ってからは、誰にも言えずふさぎ込む日々が続いた。そして、この子が八歳になって一通りの身の回りができるようになったら家を出ようと心ひそかに決心するのだった。月日が経ち、一人家を出て飢えと疲れで川のほとりにうずくまっていると、そこを通りかかった大商人が哀れんで声を掛けた。彼は妻を亡くしたばかりで、気立てのよい蓮華女に求婚をする。それから八年がたった。大商人はある町へ商売の貸し金を取りたてに出かけることになるが、金も取れぬ長い逗留の間に美しい少女と出会い、父親に何がしかの金を渡して二号夫人ということにした。別宅を構えさせて夜も帰らぬ日が続くので蓮華女はそれを突き止める。残してきた我が子もこれ位の齢になったろうかと湯浴（ゆあ）みをさせ髪を梳（と）いてやっている、何か見覚えがある。よくよく話を聞いてみれば残してきた不憫な我が子であった。

「前の夫は自分の母と通じ、今の夫は自分の娘と通じている」、愛欲の因縁の恐ろしさに家を出て、矢も楯もたまらず釈迦のもとへ急ぐのだった。愛欲の因縁ほど恐ろしいものはない。あってはならないことだが、そのあってはならないことがあるのも、また、人生である。母と子、父と娘、兄と妹、教師と生徒というように、愛欲の虜になると常識も世間も全く見えなくなってしまう。さらに惨めなのは、その間に生まれた子供達の運命である。錯綜した愛欲のしがらみから抜け出すために蓮華女は家を出る道を選んだ。釈迦はその時、出来たばかりの竹林精舎で説法をされていた。その姿は清らかで神々（こうごう）しく、顔は澄み切っておられた。蓮華女はひれ伏して、そのみ足に頭をつけて礼拝した。キリストの時代、売春婦のマグダラのマリアは、キリストの足の埃を払おうとして周りの者に咎（とが）められるが、「汝等の中で罪を一度も犯さない者のみ石を持って」と諭される。足は道を歩むもの、足を濯（そそ）いだり顔をつけるということはその道を歩む誓いのしるしである。蓮華女を認められた釈迦は、愛欲から生ずる悩み、愛欲を超越することの喜び、戒を守ることの大切さと解脱について話を進められた。

次に、園頭広周師は言われる。「夫婦が互いにその愛を確認し合いながらも、どことって相手を不足に思うわけでもないのになぜ倦怠感に襲われるのであろうか。それはそこに魂の拡大の喜び、魂の高まりの喜びが感じられないからである。この魂の高まり、魂の拡大の喜びは「宇宙即我（うちゅうそくわれ）」となって結実するが、不倫の愛欲がいけないとされるのは、それが正しい人間関係でないのと、不倫な愛欲の上では社会愛も、国家愛も、人類愛も築かれていかず、宇宙と一体であることの喜びなど到底体験することは出来ないからである。そして、愛欲の悩みから抜け出るには、その原因である愛欲の状態から飛び出すことである。蓮華女のその方法は家を出るということであっ

たが、特に現代にあっては夫婦が調和するように最大の努力をすることも選択肢の一つである。」、と。

愛欲を超越するためには、愛欲には次の二つがあることを知らなければならない。

- 1．肉体を中心とした、肉欲に伴う愛
- 2．肉体を離れた魂の愛

この二つの愛の葛藤をキリスト教では「霊と肉との争い」といつている。夫婦の正しい愛欲は許されるが、ともすればこの愛欲は人の心を小さくしてしまう。愛欲は独占欲をつくりだし世界は二人を中心として廻っていると錯覚がちになる。愛は二つの心が一つになろうとすると起こる感情であるが、二人が一人となって、そこに一体となった愛の喜びを感じる事が出来たとしても、愛がそこにとどまっている限り愛はいずれ苦痛になる。なぜならば、魂は肉体からの飛躍を求め、愛は二人の愛を超えて社会愛へ、国家愛へ、そして人類愛へと突き進まねばならない欲求を持っているからである。我々は夫婦の愛欲を完成させたら、その愛欲完成の基盤を超越して、家庭の小さい枠の中から飛び出して社会を見渡し、神が示された広大な愛を認めて、その愛を実現してゆくことの中に、人生の生き甲斐、魂の喜びを求めていかなければならないのである。

釈迦の説法を聞いているうちに蓮華女は、自分の肉体にとらわれてはならぬ自分の魂を発見し昇華していくのであった。

蓮華女は出家を許され、心の修行にはげんで尼僧の中で第一人者となってゆく。祇園精舎から少し離れたところに小さな森があった。少し淋しいところだが、瞑想するには最適な所であったので、そこに小さな庵をつくって住んだ。ところが、蓮華女には母方のいとこになる青年がいて、彼女が出家をする前から心ひそかに想いを寄せ機会をねらっていた。托鉢に出たすきに、薄暗い庵の中に身を隠し蓮華女の帰りを今は遅しと待っていた。そして、襲いかかった。「そのようなことは身の破滅です。馬鹿なことはよしなさい」、と叫んで抵抗はしても男の力に及ぶはずもなかった。それから一人、こんな淋しい所に独りで住んでいたこともいけなかったのではと反省するのであった。そのうちには噂が噂を呼び、釈迦の耳にも入ってしまった。釈迦はその時に言われた。

「愚かな者たちは、その悪の報いが来ない間は幸せだと喜んでいる。だが、いよいよ悪の報いが来ると神も仏もないのかと苦しむことになる。」蓮華女が自分でことの仔細を告白すると、釈迦は次のように尋ねられた。「その時に、どのように感じたか」「焼けた鉄で身を焼かれたようでした」「それでは戒律を犯したことにはならぬ」「ただひとりで住んでいたことも罪にならないのでしょうか」「アラハンの境地にある者ならば罪にならない」この蓮華女が犯されたという事件は「宗教と道徳」との違いを考えさせられる。自分から肉欲を欲したわけでもなく、また、そのことによって快感を感じなかったのなら、「それは罪にならない」、と心の問題を釈迦は説かれたのである。そして、それより後、尼僧達が安心して修行できるように、町の中に尼僧院がつけられた。

『仏陀をめぐる女性たち』園頭広周著 正法出版社を参照ください。

「強姦によって犯された人は罪悪感を持ってはならない」

自分から望んでもいないのに不可抗力によって強姦された人を見て、これまではその人を汚れた者のように見る風潮があった。だが、その人も「自分は犯された」と罪悪感を持ってもいけないし、周りの者も罪悪視してはならないのである。一昔前には、強姦された人の中には、「もう私の人生はメチャメチャだ、幸せにはなれない」と自殺をする人や独身を通した人もいたと聞くが、まことに残念なことであった。

「性暴力により苦しみ悩む人へ」

心の法則には、「悪い原因があれば必ず悪い結果となり(悪因悪果)、善い原因があれば必ず善い結果

となる(善因善果)」という「原因と結果の法則」がある。これを仏教では「因縁」といった。因縁という意味は、因(もと)があったからその縁によって、因に応じた結果が生ずるということである。そうすると、「今まで私はそんなに悪いことはしていません。どうして私だけがこんな目に合うのでしょうか」という不満の声が聞こえてきそうだが、人間はこの世限りという世風に凝り固まった人達には、これに明確な解答を用意することは出来ない。魂(生命)は永遠という生命倫理観に立てば解説できるのだ。アメリカの偉大な霊能者エドガー・ケーシーは「転生の秘密」の中で、今世の運命は前世と関連があるということを教えてくれる。ケーシーはこの「因縁」をブーメランに例えた。ブーメランを投げると自分の所へ帰ってくる。即ち、自分がした通りに返る世界、した通りにされる世界だというのである。例えば、三十六歳で小児麻痺にかかった婦人があった。それは古代ローマ時代、ネロ皇帝と手を結んでクリスチャンを迫害し、闘技場でびっこになった者をあざ笑っていた。そのことが自分の身に返ってきたのだという。また、「てんかん」になった人があった。この人は前世で性的に放縦自堕落な一生を送ったために、今生ではその反動として結婚できない状態に生まれることによって、前世のカルマ(業・ごお・心の傾向性)を帳消しにしなければならないことになった、と言うのである。

[目次](#)[Home](#)

正法と「性学」

この世には陰と陽、寒と暖、優と劣、左と右、凹と凸、上と下、遅と速、天と地、男と女、オシベとメシベ、雄と雌というような二体理論(対理論)と、

電気の性質の「陽性、中性、陰性」や、原子の「陰外電子、中性子、陽電子」や、「太陽、月、地球」との関係や、地上の「気圏、

水圏、岩圏」や、「海、陸、空」や、「晴、曇、雨」や、「酸性、中性、塩基性」や、「固体、液体、気体」というような「三体理論」がある。

人間は、男女というバランスのとれた「対(つい)理論」の原点である。

三体理論の「三」は、三角関係等というように、安定しない関係である。例えば、「固体、液体、気体」を例にとると、液体を冷やすと固体に、液体を暖めると気体へ「相」を変えるように不安定極まりない。また、地上の「気圏、水圏、岩圏」にしてもそうである。ヒマラヤの八千メートルもの山上に貝の化石が出るというのも、かつて、海底だった証拠であり、地球を卵に見立てると、地表は卵の殻の部分に相当するほどに薄い不安定な部分である。

<参考> 高橋信次師によると、この地球では今までに七度の大規模な天変地異が起っており、最近では一万年ほど前の、ムー、アトランティス大陸の陥没であったという。このために、遺跡発掘により歴史の足がかりを調べようとしても、それ以前のオーパーツ(遺物)群は海底や地底に埋もれていて、遺跡発掘の限界ではないだろうか。そして、現代の科学が説明するところによると、火山爆発や地震は、マグマが噴き出したりプレートの隆起や移動が原因と言うが、そうではなく人類の暗い想念が大地を加圧して引き起こすと高橋信次師は教えるのである。

「身体の対理論」

人間の体は対理論の最たるもので、目や耳や手や足は誰が考えても二つである。食物を食べる口は一つだが、排泄物の出口である肛門と対である。それでは鼻はどうか。見た目には一つだが鼻穴は左右に二つある。

どれをとっても無駄はなく、どちらかの一方が無くなっても、残った方で曲がりなりに機能を果たせるように作られている。左右対称の一体完結型である。それでは性器はどうだろうか。

性器こそは、対理論の除外例である。五体はそれぞれ対でバランスがとれているが、性器はそうではない。

「性器は聖器」

男の性器は外に出っ張った形につくられている。女性のそれは内蔵された形につくられている。対理論ではない絶対一の外に出た男性器と、絶対一の内なる女性器が求め合い一つになる時に、絶対一は対理論として完結されバランスがとれる。これは天地創造の神の心の顕(あら)われである陰陽の調和であるが、光と光の融合、神の完全なる姿がそこにある

「古事記に見る天地・陰陽の創造の原理」

七一二年に太安麻呂らが作った「古事記」がある。

「ここに天神、諸の命もちて、伊邪那岐命・伊邪那美命の二柱の神に、このただよえる国を修理め固め成せとのりたまいて、天沼矛を賜いて、言依さしたまいき。故れ二柱の神、天浮橋に立たして、その沼矛を指し下ろして書きたまえば、塩こおるこおるに書き鳴して、引き上げたもう時に、その矛の末より垂り落つる塩、累なり積もりて嶋と成る。これお能碁呂嶋なり」

「アメのミナカヌシの神、つまり大宇宙大神霊は、陽の生命力であるイザナギのミコトと陰の生命力であるイザナミのミコトの二人に「この漂っている混沌とした世界を、秩序正しく創造組成せよ」と命ぜられ、天地宇宙を貫き通す原理、大理念、つまり、大意識である「アメのヌボコ」を授けられた。その「アメのヌボコ」で宇宙をかき廻して引き上げたら、そのしずくがオノコロ島（無数の星星）になったと説明する。これは極小の原子から極大の太陽系にいたるまで、全て陰と陽の組み合わせで成り立っていると、古事記は実に壮大な宇宙観を示しているのである。」

「古事記、日本書紀に見る夫婦性生活の原理」

「その嶋に天降りまして、天の御柱を見立て、八尋殿を見立てたまいき。」

ここに、その妹伊邪那美命に、「汝が身は如何に成れる」と問いたまえば、「吾が身は成り成りて、成り合わざる処一処あり」と答えたまいき。ここに伊邪那岐命詔りたまわく、「我が身に成り成りて、成り余れる処一処あり。故れこの吾が身の成り余れる処を以て、汝が身の成り合わざる処に刺し塞ぎて、国土を生み成さんとおもうは奈何に」とのりたまえば「然善けん」と答えたまいき。」

大宇宙で、男神「イザナギのミコト」が愛する女神「イザナミのミコト」に「あなたの体はどうなっていますか」尋ねられた。するとイザナミは「成り合わない処がひと処あります」と答えられた。そこで男の神様であるイザナギが「私の体もはみ出して余った処ができました。そこで、私の成り余った処を、あなたの成り合わない処に入れ塞いで、国土や万生万物をつくろうと思いましたがどうですか」「それは結構ですネ」ということになった。

「成り余れる処を、成り合わざる処に刺し塞（ふた）ぎ・・・」、これが性の結合である。性の結合は神の生命が陰と陽に分かれ、また、元の一つに帰ろうとする神の意思であり、神の創造原理の人間的表現として、いかがわしい動物的行為と見ないで、神聖なものとして扱わなければならないのである。

また、七二〇年に舎人親王らが作った「日本書紀・一書一」には、どう書かれているか見てみたい。

「陽神、陰神に問いてのたまわく、汝が身に何の成れるところがある。対えてのたまわく、吾が身に具成りて、陰の元というもの一処あり。陽神のたまわく、吾が身にもまた具成りて陽の元というもの一処あり。吾が身の陽の元のところを以て、汝が身の陰の元のところに合わせんと思欲うと、しかいう。」

こうして、その天の御柱をめぐる夫婦の交わりをするが、そこには性の素朴さを美しく格調高く語られているのである。

「古事記に見る遠心力と求心力、左進右退の原理」

「ここに伊邪那岐命、「然らば吾と汝とこの天の御柱を行き廻り逢いて、美斗能麻具波比せな」と詔りたまいき。かく期りて、すなわち「汝は右より廻り逢え、我は左より廻り逢わん」と詔りたまひ、約りおえて廻る時、伊邪那美命、先ず、「あなにやし、え、おとこを」、といい、後に伊邪那岐命、「あなにやし、え、おとめを」といい、各言いおえて後、その妹に、女人先に言えるは良からずと告りたまいき。然れども久美度に興して生める子は水蛭子。この子は葦船に入れて流し去りき。次に淡島を生みき。是も亦、子の例には入れざりき」

イザナミのミコト（女の神様）求心力 中心に向かって引き付ける力。

イザナギのミコト（男の神様）遠心力 外へ外へと働く力。

男女は神の前において平等であるが、その働き、役割は違うということである。その役割の最大の違いは子供を生めるかどうかということには誰でもわかる。男は遠心力（陽）であり、外へ外へと飛び出した男を、女の求心力で内へ家へと引き付けるのが女の天分である。安心、安らぎの「安」は「家」の中に「女」と書くように、求心力（陰）の妻が家にいるとき、夫も子供も心が安らぐ。

ところが、男女平等、男女同権、雇用均等の掛け声とともに女が家を飛び出して家庭を疎かにすると、家庭に歪みが生じてくるのは、これが神理に反しているからである。

「吾は左より廻り逢はむ」これが陽つまり男の行動原理であり、「汝は右より廻り逢へ」が陰即ち女の行動原理である。日本書紀一書一には、最初に男神が右から廻り女神が左から廻るが、次に改めて男神左から、女神が右からまわっている。わが国では明治に西欧思想が入るまで、左が尊しとされてきた。左大臣、右大臣でもそうだし、雛祭りでも男雛を左におく。しかし、一般論でも時計の針は左から右へ動き、ネジも左から右へ締める。柏手でを打つときも、左手が先に出て右手が一步退いて手を打つ。弓を射るときも銃を撃つときもそうだし、歩くときも左足を先に出す。舞台も、左から出てきて右に退く。マクロでは、地球も左から右へ自転しながら、太陽の廻りを左から右へと公転している。ミクロでは陽の原子核の廻りを陰電子が廻転するのも左から右である。枚挙に尽きないが、これが自然の法則であり、陽主陰従、夫唱婦隨の原理である。こうして、女の神様が先に「あなにやし愛、男を」、つまり、「なんと、よい男よ」と言われ、その後遅れて「なんと、うるわしき女よ」と男神がいわれた。

それから性の儀式が始まり「水蛭子（ひるこ）」、つまり、骨無しのグニャグニャ子が生まれ葦船で流した。次も泡のような島で陸地にはならなかった。女が先に「何とよい男よ」と言うとは完全な子供は出来なかった。それから女が先に出て男を尻にひくのをやめると、今度は次々と正常な国（子）生みがなされたというのである。そこで二柱の神様がどうして出来損ないの子が生まれたか宇宙の中心の神様に尋ねて見ようということになった。すると中心の神様が「女先に言へるに因りて良からず、亦還り降りて改め言

へ」とのりたまいき。

天の神様にお聞きしたら「女が先に立ったから立派な子（島）ができなかったのだ、それを反省してもう一度やり直せ」と。それで今度は男の神様が、「なんと美しい女よ」と、先に呼びかけられたら、それからは立派な子（島）ができたというのである

女は男を立てるとというのが神理である。このように言うと女性蔑視という声が聞こえて来そうだが、決してそのようなことはない。人間は男に生まれたり女に生まれて魂の勉強をするのだから、現在のあなたがどちらであろうと、今のあなたを懸命に生きることである。

「なぜ、性器と排泄器官の肛門は同じ場所か」

人間のみならず動物は、肛門の近くに性器はつくられている。食べ物を入れる口は、四つ足の動物に限らず肛門等の排泄器官より上についていて、物は上より下へ流れるという重力の法則に適ない排泄しやすい位置にある。また、ぜん毛運動や胃腸の運動により出口に排泄され易いようにできており、臓器の中でも最下部、最後部につくられている。こうして、食べ物は、栄養分などを吸収され廃棄分は肛門から出て行くが、肛門が口の近くにならないのは衛生上の問題と、口と同位置では高低差が無く物は出にくいからである。

サテ、性器と肛門と同じ場所になぜつくられているかと言うと、子の宮、つまり胎児の部屋である子宮で十月十日育てられた赤ちゃんが、月満ちて出て来やすい位置は食べ物の廃棄物の出やすい位置と同じで、このために肛門と性器は同じ位置にあることになる。それにもう一つの理由は、夜になり感情が高まってくると、排泄物を出す肛門のそばの性器に、汚いとか不潔であるという感情は最早なく、それどころか積極的に触れ早く一体となりたいと思うものである。男女の一体となる性行為は陰陽の調和であり、神の天地創造の人間的表現であるが、愛の感情は同時に美の感情であり、美の感情はいつさいを浄化して「汚ない」という意識をなくすのである。これらの理由から性器と肛門は同じ位置につくられている。だから性を不浄とか罪悪視してはならないのである。

「性の四要素」

目的 性の結合を行う目的は、夫婦愛を完成し愛情を確かめ合うためか、ただ単なる性欲の満足のためか。

人 正しい相手であるか。

時 人が働いている昼間から行うのはどうか。

所 なすべき所であるか。

正しい相手である夫と妻が、正しい目的を持って、なすべき時と場所で行うのは「善」であるが、単に欲望を満足させるために、なすべきでない相手となすべきでない時に、なすべきでない場所で行う行為をするのは「悪」となる。

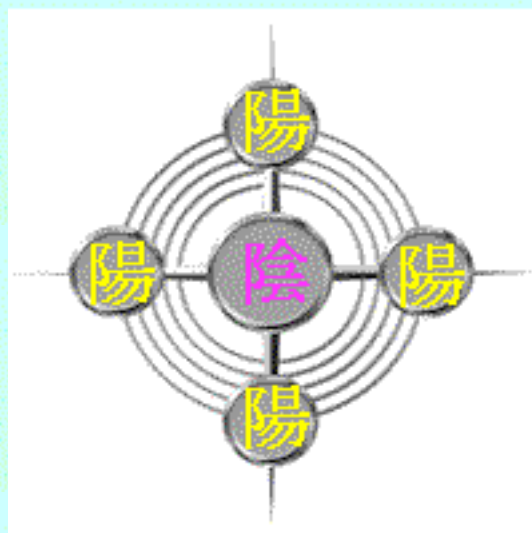
「夫婦調和と玉転がし（玉せせり）」

男には陽物（凸）の出っ張った柱がある。女には陰物（凹）のくぼんだ洞（ほこら）がある。男の柱で女の玉門を通して洞をかき回すと、「子の宮」の玉（ぎょく）座には、今か今かと待ち望まれた一杯の幸せをもたらす玉のような赤ちゃんが生まれ十月十日かけて出産される。命涌（わ）く陰陽の調和である神の命の現われは命が湧き出る「イユ（命涌）」である。これは祝詞（のりと）の掛け声。男の凸と女の凹は、一目でわかる男女区別の目印である。

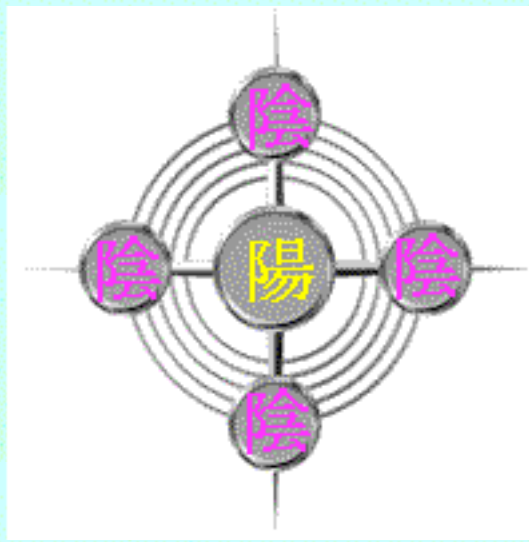
私の強い女が男の先に立ち尻に敷くと、男「凸」は出っ張りの「口」が無くなって「」となり、のっぺら棒で男か女か区別はつかない。男勝りの女は、男「凸」の出っ張り「口」を「凹」に取り入れて、のっぺら棒「」で男か女か分からない。そうなると家庭は混乱する。そこで男は凸に、女は凹に元に戻したら全てはうまくおさまった。

「夫唱婦随」、「陽主陰従」は自然の摂理である。「男は男らしく積極的で、女は女らしく控えめ」なのが最高！

男は、外見の現われは陽だが、内に陰を宿している。女は、外見の現われは陰だが、内に陽を宿している。だから男は女に負けない優しさと包容力を持っており、女は男に負けない強さ、たくましさを持っている。



男性は



女性は

天と地に分かれた神の天地創造のエネルギーは、太陽によって大地に生命を慈しみ育まれる。天なる父の慈悲に感謝し、大地なる母の愛に感謝するもの。大地なる母によって一切のものは浄化され、新しい生命は生み出される。大地なる母は天なる父によって保たれ生かされるのである。大地は天に先立つことあたわず、女は男に先立つことあたわず、夫の頭（かしら）は天なりき、妻の頭（かしら）は夫なりき。

性器は「聖器」

性は美であり芸術である。天は男。男の象徴は太陽であり、黄金の「玉」である。

黄金の玉から「柱」を通して神のエネルギーは放たれ女は輝き出す。世界の平和は夫婦の調和、性の調和と浄化から始まる。

女は天女でなければならない

夫が仕事に疲れて帰ってきたら、「玉」も手も足も柔らかく揉みほぐす。ささげ持ついたわりの心で玉をせせり、玉を転がす。血行をうながすと、循環がよくなりエネルギーが通る。柱が元気になったら、妻は柔らかい心と体で包み込めば良い。女が母となり妻となると男は救われてゆく。夫のエネルギーが充満し身も心も満たされると、仕事も充実し家庭も円満になる。女が先に立てば性は乱れる。快樂だけを求める男も女も汚い。ねばっこく絡みつく。本当に性は、神聖であり、調和であり、芸術である。快樂で玉を転がすと虚しさが残り、精気は得られない。それこそは娼婦である。天女となる女は、男の生理を満足させるだけでなく、心まで満足させ安らがせる。調和による性と、快樂による性の違いは安らぎがあるかどうかである。女は、妻となり、母となって完成される。

結婚して妻となり、子供を生んで母となり、生理（月経）が終わると、夫の妻から夫の母となって完成される。女、アアこの偉大なるもの。夫婦調和の道は、性の調和で完結する。玉は妻によって光らせ、ささげ持つとき夫も光り輝く。女の性は光り輝く安らぎの玉であり太陽である。男女の二つの光の玉が重なり合うとき、神が二つに分けた陰陽の調和、光と光の融合は神の完全なる姿が出来上がり、世界は安寧の平和になるのである。

「肛門性行為（アナル・セックス）とエイズ」

肛門が、たとえ膣の代用ができると言っても、排泄器官である肛門による性の疑似行為は、正しい筈はない。キスをする口腔も、性交をする膣も雑菌の自浄作用があることは知られている。肛門は沈痛解熱剤を座薬とすることでも知られているように、薬物等の吸収効果の著しい器官であり、そこでの行為が免疫（肉体の制御機能）を壊わし（免疫不全）、どんな結果を生むか想像できよう。神様が排泄器官としておつくりになった肛門を、性器代わりにするとエイズという不治の病気になるのは当然であろう。エイズは動物が媒体となって蔓延したと言われているが、本当にそうだろうか。外に責任を押し付けた卑劣な原因論と思えてならないのである。

その証拠に、エイズは後天的免疫不全症候群（Acquired Immune Deficiency Syndrome）という病名の頭文字をとって[AIDS]と言うのだが、八十 十分で死滅するほどの熱に弱いウイルスで、B型肝炎の消毒に準ずることでも知られる。口腔の異常病変としてアメリカでは歯科で発見されることも多いらしいが、同性愛者に多いこともその辺の事情を物語っているのではないか。

「正法と同性愛者」

同性愛とは異性には余り関心を示さず、同性同士が愛し合うことを言う。人間は、男に生まれたり女に生まれて魂の勉強をする。中には、女性的な魂の勉強も完全にすませた偉大な使命をもつ人は、いつの世も男性として生まれる。イエス様やお釈迦様等がそうである。また、男性的なものも完全に学んだ偉大な使命を持つ人はいつも女性として生まれる。それはマリヤ様や釈迦のお母さんのマヤ様等である。このような例外も有るが、普通一般の人達は男に生まれたり、女に生まれて人生の修行をする。どちらをたくさん勉強したかという度合いによって、男らしい男、或いは女のような男がいる。その反対に女らしい女、男のような女がいることになる。男として生を受けたのなら男らしく、女に生まれたからには女らしくというのが男女の使命と役割である。このように考えると、同性愛者というのは、今世で生まれた「性」の役割と使命を放棄してしまった人達といえるから、来世は、また、今世の「性」と同じに生まれて反省をして、人生のやり直しをしな

ければならないのである。そして、それが余りに極端な場合は憑依が考えられる。現世は男であるのに女の霊が憑くと男に関心を示す。逆もまたしかり。そうなるのは憑く霊と同類の心を持つからである。

「S M愛好者」

肉体を、縛ったりムチでたたく異癖の人達がいる。相手の行動の自由を束縛し、制限し強制することだが、このような行動原理は、する方もされる方もコンプレックス心理の裏返しである。罪悪感、自信喪失等である。。

「カスト口趣味」

排泄物を飲んだり食ったり、塗り付けて喜ぶ等の奇癖。犬猫は、食べ過ぎて胃がもたれると、人糞や自らの排泄物を食べる。豚は人糞を食べ、自らの糞尿にまみれて不潔極まりないが、彼らはそれでも平気である。人間の、この奇癖の度が過ぎたものは、動物霊の憑依による人格の変異、交代である。正常な人格者は、このようなことをするだろうか。

「妊娠、出産とあの世との関わり」

天上界にいる人だけが、この世に生まれ変わることが出来ると何度も述べた。天上界では、かつての親、お世話になった人、先輩、知人等の縁ある人々と互いに親子の約束をする。「私のお父さんになって下さい、お母さんになって下さい」、「分かりました、あなたの父親や母親となって修行をさせていただきます」、と約束をする。お父さん、お母さんになる方が一足先に地上界に生まれて行く。両親になる人にはそれぞれ天上界での約束が潜在意識にあって、綾なす縁によって結婚をされる。世間ではよく「赤い糸に結ばれて」という表現をするが、うまく言い当てている。尚、天上界では離婚の約束ごと等は無いと高橋師は言う。両親の家庭生活が始まるとともに性生活も始まり、時期が到来して精子と卵子が調和され妊娠受胎。天上界では、待機所に子供になる人が待っている。送別会も開かれ「もうすぐだね」「ありがとう、前世は研究一筋で勉強ばかりだったから、今度は商売でうんと儲けて困っている人を助けるんだ」「そう祈っているよ、頑張ってるね」等と約束をする。天上界からは自分の生まれるべき、両親の生活環境も全部お見通しである。「厳しいナー、余程しっかりしないと環境に流されてしまいそうぞ」と考える。また、先天的な肉体の障害者は、障害を持つことも事前に承知しており、不完

全な体に乗って人生航路を渡るだけに、彼等は「魂の勇者」と言えるのである。人生を渡る肉体舟が不完全というだけで、肉体舟を操る船頭さんである魂が不完全ということではない。

こうして、妊娠三ヶ月頃になると、胎児の肉体を魂が支配することになるが、これを「降霊」とか「天孫降臨」という。天上界から魂が降りてくるという意味である。妊娠、受胎は精子と卵子が結合、着床して細胞分裂が始まり増殖することを言うが、まだ魂が宿らぬうちは、「ぶどう状鬼胎」等のただの肉塊に過ぎない。細胞が人間の心臓に、肺臓に、肝臓にと特徴ある臓器に成長していくのは、人間の魂のコントロール下にあるからである。魂によって細胞分裂がコントロールされ配列されていくときに人間固有の臓器になるのである。つまり、肉体をもつことを望んでいる霊が細胞分裂をコントロールして、配列していくときに健全な肉体はつくられていくのである

このようにして、例えば犬は犬の魂のコントロールによって犬になるのである。進化論で言うように、人間は猿人などから進化したものではない。人間は最初から人間で、猿はいつまでも猿なのである。その証拠に進化途上にあるものはいない筈である。実験動物の臓器の細胞をバラバラにして倍溶液の中に置いておくと、元の臓器のように細胞同士が寄り集まって行くというのも、神とか目に見えない何かの影響を受けていると考えないわけには説明はつかないからである。細胞の分裂、増殖だけで固有の臓器につくられて行くことはないからである。

そして、多くの人が悪阻（つわり）を経験するのは、人は妊娠しているから誰でも起ると説明するが、これは母体の魂と胎児の魂の相克、つまり、母親の意識と赤ちゃんの意識の、二つの意識の影響である。二つの意識が調和されて来るとツワリは治まってくる。これはどういう事かということ、母親には母親の人生体験の中で、心の価値観というものをつくり上げている。胎児には胎児の、天上界での魂の修行や魂が磨かれ価値観の違いが生ずる。言い換えれば、天上界から降霊したばかりの純粹無垢の汚れを知らぬ赤ちゃんの意識と、家庭環境、社会環境、教育、習慣という経時的に人生の中でつくりあげてきた母親の意識の劣化による相克である。そういう考えに立ってツワリを眺めて見ると、何ともなかった、或いは思いのほか軽かったという人も結構、多いのだ。ひどいつわりは全ての人を経験するものではないのである。

また、嗜好の変化はどうして起るかという問題である。胎児には胎児の、前世での食習慣なり嗜好がある。、母親が普段はそれほど欲しいと考えても見なかったものが妊娠中は食べたくて食べたくて仕方がなかったという人も多い。葡萄のマスカットをザル一杯、毎日食べたという例もあるが、これは胎児の食生活の違いから母親の嗜好が一時的に変化したからである。このように、女性は妊娠出産を通して、あの世とか霊に関係が深いので、女性にはイタコ等の霊媒者が多いという理由になるのである。

こうして、十月十日、月満ちてめでたく出産。目も見えぬ赤ちゃんが一人で笑うのは、天上界の友人知人がそばに来て「ぶじ誕生できておめでとう」「ありがと頑張るからね」という応答なのである。そうして、目も見える頃になると、あの世とも断絶され、前世のことも天上界での出来事も100%潜在され忘れてしまうのである。これはあの世から見れば一時の死ということになる。こうして、純粹無垢の天使のような赤ちゃんの心も成長するにつれて、自己保存、自我我欲、エゴの心に執（とら）われ、天上界での約束も忘れて、心に歪みをつくり盲目の人生を送るようになっていくのである。

人間は本来、過去世のこともあの世のことも全部思い出せる能力を持っていたのだが、生まれ変わり死に変わりの輪廻転生の永い歴史の中で自らその能力を閉ざしてしまったのである。その能力を失った原因というのは、各人の「愚痴」「怒り」「足ることを知らぬ欲望」という「心の三毒」に在ったと高橋信次師は説いたのである。人間の人生での最大目標は、愚痴を言うな、怒るな、身のほど知らずの欲望に注意せよ、ということなのだ。

再婚の約束はあるのか」

結婚も出産もあの世での約束の上に成り立っていることを述べたが、現実には再婚もし、その再婚の相手に子供も生まれる。それでは離婚も約束して出て来るのかどうか、その辺の事情を考えてみたい。

結婚、出産は約束ごとであり、あの世で約束して出てくる。にもかかわらず、人によっては何度も結婚したり、再婚の相手に子供が生まれる。どんな理由でこうなるのかと言うとそれは、あの世から地上界に生まれると人はあの世の約束を忘れて、五官(眼、耳、鼻、舌、身)にほんろうされて約束の相手を忘れる。所謂、五官主義に陥

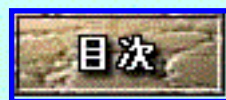
るわけである。初婚、再婚、再々婚の相手は無縁な人は一人もいない。五官におぼれ本来の約束相手を忘れたというのが真相である。

それでは、初婚、再婚、再々婚の相手に子供が出来るというのはどういうわけか考えたい。初婚、再婚、再々婚の男女には、やはりそれぞれ親子の約束相手がある。つまり、初婚の相手にも、再婚の相手にも子供を生む約束があるので子供が生まれる。たとえば初婚（AとB）の相手との間に子供が二人いるとする。再婚（AとC）してまた二人の子供ができた。次にまた、再々婚（AとD）して二人の子供が生まれた。このような場合、Aの子供は全部で六名ということになる。本来なら二人の筈なのに六名とは多すぎる。しかし、生まれた子供は、最初の二人はAとBの約束だが、再婚のAとCの間ではC側の約束によって、C側に引かれて生まれ、再々婚ではD側の約束によって、D側に引かれて生まれるということになる。

もちろん、Aとも縁が深いし無縁ではないのだが、子供の幸せを願うならば、離婚と再婚、再々婚によりAにまつわる子供が増えることは不幸なことである。CやDはAとは別な相手がいてそれぞれ子供をなすことが理想である。無責任な行動は慎まなければならないが、何度も言うように離婚の約束などはあの世ではしていないのである。

「双生児の魂はどうなる」

一般的には、「ふた子」と言われる人達の魂はどうなるのだろう。それは双生児の兄弟、姉妹は魂の似た者になるということである。一つの魂が二つに分裂して双生児になることはない。双生児の兄弟は体も、考え方も、仕草も似ており、生ばかりでなく、死まで似てくることも起きるわけである。



正法「子供のしつけと教育」

・子供の犯罪はなぜ起るか・

昨今の社会情勢について報道関係は、子供達が引き起こす犯罪について喧（かまびす）しく伝えている。「悪い結果（悪果）には必ず悪い原因（悪因）がある。また、その反対に善い原因は必ず善い結果となる（善因は善果）」というのが、正法の教えである。高橋信次師はこれを「原因と結果の法則」と説き、園頭広周師は善因善果、悪因悪果と説き、お釈迦様は「因縁」と説かれた。科学の法則である因果律、作用・反作用の法則や動・反動の法則がそれである。因（もと）が有ると、それを縁としてそれに応じた結果が生ずるということである。

最近の子供の犯罪は一時的に吹き出したように見えるが、悪因が依然として断ち切られずに循環し続けただけのことである。これら一連の悪い結果が出たのなら、その原因を徹底的にさらけ出し、悪い原因を修正することが最大の解決方法である。

「その原因は何か」

大きく分類して四つの原因が考えられる。

- 1、本人の資質
- 2、家庭のしつけと環境
- 3、教育の問題
- 4、社会環境

各論すると次の通りである。

1．本人の資質とは何か。

人はこれまで、生まれ変わり死に変わり輪廻転生の人生体験をして来た。多い人では二十万回もの地球上での生まれ変わり死に変わりをしている。ある時は男に、また、ある時は女に生まれて魂（心、霊、意識）の修行をしてきた。普通の人には二千年に一回の生まれ変わりとなるが、特別な使命と役割を持つ人は短期間に何回も地球上に出る。この生まれ変わりの二十万回の根拠は、「地球人類は三億六千五百年の歴史」と「二千年に一回」という高橋信次師の説から試算しているが、人間は、数多い人生体験の中から学んだものを予感、直感として想い出し大過なく人生を送ることになる。この人生体験を「心に内在する智慧（ちえ）」と言い、般若心経の一節で古代インド語のパニャ・パラ・ミタであり、当て字の般若・波羅・蜜多である。「知恵」は今世だけの人生体験から

得たもの、「智慧」は輪廻転生の中の数多い人生体験で得たもの、と区別して述べるが、仏教の多宝塔（五重の塔など）は数多い人生体験という「宝」を、屋根の段数・階数の形に表したものである。

ところで、二千年毎に誰でも確実にこの世に出て人生体験をできるかというところではなく、天上界へ行ける心の人のみ生まれ変わることができるというのである。「天上界」を「明るい世界」というが、天上界へ行ける最低の段階を分かりやすく示そう。天上界への最低の切符は「自分さえよければ人はどうでもというエゴの世界」である。ちなみに人類の三分の一がこの段階である。高橋師はこれを「幽界」と名づけたが、まさしく現代の風潮である。このすぐ上の段階は、「ギブ・アンド・テイクで、与えたものが返ってこないとスッキリしない心の世界」である。これを「霊界」と分類したが、これが人類の三分の一であり、下位界の二つで人類の三分の二を占めるというのである。ナンのカンのと言ったって人類の平均的な精神年齢はこの程度なのである。

勿論、上段界ほど素晴らしい世界である。例えば迷惑がかかっても損害を受けても非難せず、原因を振り返り反省する心の世界とか、慈悲と愛の塊のような状態へと、心の段階は上ってゆく。現在の「アナタ」から地位、名誉、学歴を差っ引いたものが真実の「アナタ」である。これは人間性とか人格の段階と言い換えても良いが、図示すると次の通りである。

幽界 霊界 神界 菩薩界 如来界 神

次に、生まれ変わりのできない人について述べる。この心の段階を、神の光を閉ざした「暗い世界」とか「地獄界」という。それは、「人を争わせておもしろがり鬭争対立の心を持つ人。信仰をすることによって争いを生み出す人。自分の利益のためには平気で人を陥れ利用する心の人。金銭欲が強く、いくら持ってもいくら儲けても、一人占めに満足しない欲望の塊みたいな人。ネチネチと執念深く見境なく情欲に狂う人。ひどく怒る人。ひどく悲しむ人。ひどく怨む人。狂思想家。狂エゴイスト。狂宗教家。戦争、鬭争の計画者」等である。図にすると次の通り。

修羅界 餓鬼界 畜生界 煉獄 無間地獄 魔王

人間の心の段階を示したが、たとえ人間として生まれていても、心や人間性は色々分かれる。そして、永い生まれ変わり死に変わりの間に培（つちか）われたものを「天与の才」というが、文字通り天から与えられたものではなく、実は自らの責任として長い間に築いて来たものなのだ。次に、たとえ前世で立派な心の段階の人でも、適切な時期に適切な、しつけと教育を受けなければ人にはならないという例を示したい。

2. 家庭のしつけと環境

「狼や犬に育てられた子供とアヴェロンの野生児」

1920年、インドのカルカッタの奥、狼に育てられていた二人の少女が保護された。姉格をカマラ、妹格をアマラといった。アマラは一年ほどで亡くなるが、カマラが十七歳で亡くなるまでの九年間に手厚い愛情で育てられても、夜になると遠吠えをし、皿をペチャペチャと舐めまわし、服を歯で食いちぎったりした。亡くなる前には讚美歌を震え声で歌ったりしたが、とうとう三才ほどの知能のままに死んでしまった。

(アーノルド・ゲゼル著「狼にそだてられた子」家政教育社 1988年で第三十四刷の隠れたベストセラー著作)

そして、1799年(寛政十一年)、フランスのアヴェロンの森に、木の実や根を常食にしていた十二歳くらいの裸の少年が見つかった。パリに連れてこられるが、医師ピネルは次のように観察している。動きは鈍く、眼は落ち着きも表情もなく感覚機能は退化し、完全に啞の状態、鼻も何の反応も示さず、聴覚と食べる口だけが異常に発達していた。ただ生きていくだけの必要最低限度の感覚だけであったという。

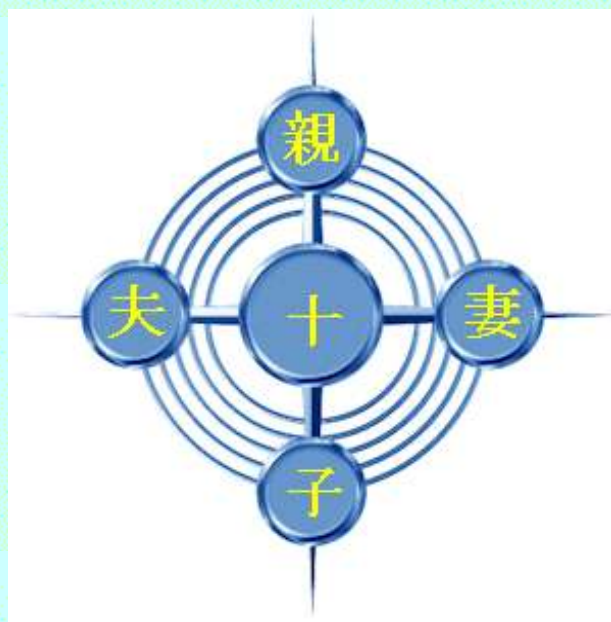
また、平成二年末、南アフリカのヨハネスブルグ近郊で、自宅の庭の犬小屋に、二年余り犬に育てられていた二才半の白人の男の子が見つかった。その男の子は半分の体重で、真っ直ぐに立って歩くことも両手を使うことも出来ない、さながら犬だったという。

これら三人の子供の例は、人間でありながら必要な時期に親の愛情もしつけもなく育つと、人間にはならないという貴重な例であった。幼児の頃に言葉もかけられず、テレビの前に哺乳ビンを咥えさせられて長い間ゴロンと放置されたり、仕事にかまけて保育カゴに入れられっぱなしで言葉もかけられなかった子供は、それが余りにも極端な場合は自閉児になる。自閉症は名前を呼ばれても自分のこととは思わず上の空で、頭からすぐ足になるという特異な絵を画く子もいるが、必要な時期に親とのスキンシップもなく、言葉もかけられなかった子供が言葉も遅れ、自閉的な症状を現わすのは当然であろう。昔から、「三つ子の魂百まで」と言われるように、三歳頃の母親との情感と、きめの細かい心の交流やしつけは、人間としての情操のために重大な意味合いを持つということを知らなければならないのである。

「家庭の役割」

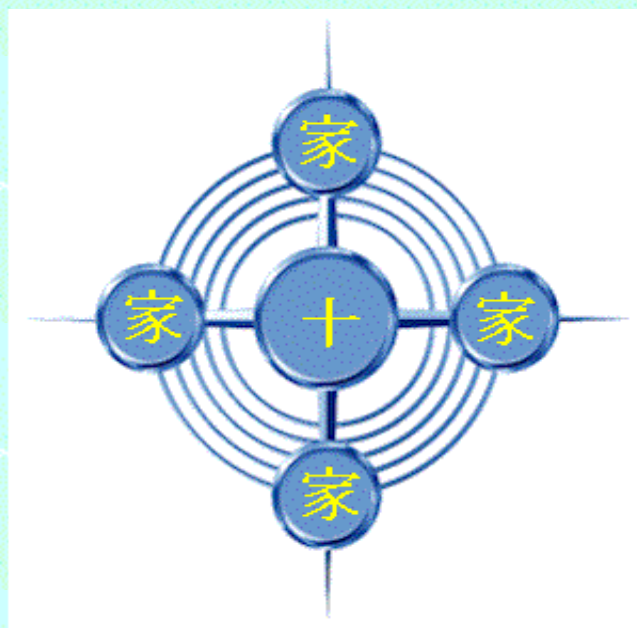
1. 家庭の概念

人が二人いると、その二人の間を社会生活という。夫婦は社会生活の単位である。夫婦があって、そこに子供が生まれてきて親子関係が生ずる。夫婦というヨコの関係と親子というタテの関係の、十字交叉するのが家である。



家の概念

家の原理が国の原理となっているのが日本である。家が集合して国となる。日本では国と家を一つと見て「国家」という。外国には国家という概念はなく、外国の国は、権力者と大衆、支配者と被支配者という関係である。



国の概念

太陽も地球も回転している。「+」はキリスト教の記号であり、回転し始めると「卍」となる。これは吉祥卍（まんじ）という仏教の記号であり、さらに速く回転すると卍は「○」となる。○は日の丸であり神道を現わし、日本を日の本といい、○は日本の記号である。○は円満であり、大調和であり不道心を意味する。夫婦親子の関係がしっかりと廻転し始めると、家庭円満ということになり、そういう家庭から問題児は出ない。そして、そういう円満な家庭によって国が構成されると国が平和になり、そういう国が集まると世界が平和になるのである。

1. 「年寄りっ子は三文安」という意味

男女平等、雇用均等という掛け声とともに男と対等に社会に出て行った妻、離婚をして子供を保育所に預ける人など理由は様々であるが、何かの理由で子供と一緒にいて、しつけや家庭教育の時間が持てないという親は、子

供と一緒にいるときに特別の配慮をするか、或いは仕事の合間に絶えず子供に想いを馳せる努力をしないと、その分だけ、子供が大きくなるにつれて親を困らせる問題が起きると覚悟しなければならない。子供にとって最も重要なのは母親である。立派な子供に育てるには、母親が賢くなければならない。これは高学歴ということではない。最近、「学問のあるバカ」「高学歴のアホ」が多いといわれているが、それはさて置いて、次に男の役割と女の役割について述べる。

2. 安心や安らぎの「安」は家の中に女と書く。

「男は社会に直接的に働きかけ、女は子供をどう育てるかということを通して未来社会に働きかける」といわれる。男は外で働いて家族を守り、女は家にいて家庭を守り、子供のしつけをするのがその使命と役割である。家の中に母親が、妻がいるとき子供も夫も平安で心が安らぐ。高橋信次師は言った。「経済行為の原点は、男女両性の愛の中からこの声をあげた。男は労働に従事し、女は子弟の教育と家を守った。自給自足の経済が永く続いて、それから分業社会が現出した。男は外に出て働き女は家庭にあって憩いの場をつくっている。愛と生活の原形は、男女両性がこの地上界に生活を始めたときから、その両性が存在する限り決して失われることはないのである。」と。外に出て働く男の役割と、家にいて家庭を守る女の役割は、どんな時代になろうと永遠に変わらないというのである。永遠に変わらず、恣意のないものを神理、法則という。

「古事記にみる夫と妻のあり方」

夫と妻のあり方を、古事記（712年）、日本書紀（720年）一書一に、わずかな違いこそあれ同じようなことが書かれているので、ここでは古事記を参考にして述べたい。イザナギという男神とイザナミという女神がいた。イザナギはイザナミに「あなたの体はどのようになっていますか」と問うと、「私の体は、つくられた結果、なり合わないところが一つあります」「私にも、なり余った凸出っ張ったところが一つあるので、あなたの凹んだところに刺し塞いで、国（子）生みをしようと思いがいかですか」「結構ですね」ということになった。「それではこの宇宙の中心の柱を別々の方向に廻り、出合ったところで（愛の交歓、性交）をしましょう。そう約束をして「あなたは右から私は左から廻ります」、と。

この左と右の問題は、男神（陽）、女神（陰）の遠心力、求心力、左進右退の原理である。それは、外に外へと出ていく男（遠心力）を、女は内に内へと中心に引き付ける求心力の役目。ネジも左から右へ廻すと締まる。マクロでは、地球は太陽を左から右へ自転公転する。ミクロでは、電子は核を中心に左から右へ廻る。生活の中では、雛祭りの男雛は左り。歩くときも左足から先に出し、舞台では左から出てきて右に退く。このように男の陽が女の陰に優先されるのは自然の法則である。これは神の前に男女は平等であるが、その働き、その役割は違うということである。

男は男らしく女は女らしくあることが自然であり、女が男の上に立ち役割を間違えると混乱するのは当然である。陽主陰従は神理である。こう言うと、女性蔑視ではないかという声が聞こえてきそうだが、生まれ変わり死に変わりの輪廻転生の中で、人間は男に生まれたり、女に生まれて心の修行をするのだから、不平等なことは何もない。サテ、その次にどう書かれているか。

宇宙の中心を廻るとき、女神のイザナミが先に「何とまあ、いい男でしょう」と言って交わると、骨無しの子が生まれたので葦船に入れて流した。次も泡のような子。それで、どうしてこんな子が出来るのか天の中心の神様に尋ねて見ようということになった。すると神様は「女が先に立ったからだ」という答え。そこで今度は男神のイザナギが先に「何とまあ美しい女性よ」と求愛をすると、正常な国（子）ができたという。これは、古事記に見る素朴な性の表現であるが、夫婦の性の結合は、神による大宇宙創造の人的表現である。

「釈迦（玉那教）が教える、妻に対する夫のあり方」

1 . 妻を尊敬する

1 . 道からはずれない

1 . 家庭のこと、子育てについてなど全てをまかせる

1 . 装飾品を与える

「釈迦が教える夫に対する妻のあり方」

1 . 夫が、家のことは全部任せて安心して働けるように処理する

1 . 身内の人達をよく待遇する

1 . 夫以外の男の人を心の中で思ってもならない

1 . 集めた財産をよく守る

○ 物は値下がりをしたときに買い込む

○ 種を買って植える

○ 食料品は自家製にする

○ 家の中にあるものを無駄無く利用する

○ 一日の収支の帳尻を合わせる

○ 財産の額を他人に漏らさない

子供が立派に育つには母親が賢くなければならない。賢くとは、厳しさと優しさを持って子供のしつけが出来ることを言う。子供を十月十日、お腹の中に抱きかかえ愛深く育てるのは、男には出来ない女の特権である。子供が泣くと、あたかも自分の身を切られるように感ずるのは、また、子が切ないまでに母を思うのは、お互いにある世で親子になる約束の記憶が潜在意識にあるからである。人が神を求める心と、人が母を切ないまでに思う気持ちが似ているのは、母が人を生み育て、神が人間を生み育てられたことと同じだからである。人間を神の子という。人は神の子なるがゆえに神を求めてや止まないのである。人は母の子なるがゆえに母を求める。人は母を思うときに心の中から一切の不浄と争いは消えて無くなる。子供の心を大事にすれば子供に泣かされることはないが、子供のことで泣かされるという人は子供の心を無視し、思いやることをしなかったからである。親が子供にしてやることの第一は、一生忘れることのない思い出を一つでもたくさんつくってやることである。

「怒りと叱りの違い」

「叱る」ということの中には、相手をよくしてやろうという愛情と思い遣りがある。そんなことをしてはこの子によくない、相手によくないという、子供の、また、相手の幸せを心の中から願う尊い愛の心があって、それが叱るというきびしい言葉となって出ているのである。だから、そのきびしい言葉の奥にある愛情を感じて、その愛情に感謝して叱られたことに子供は涙を流すのである。ところが、「怒る」ということには、ただ腹立たしいばかり、憎いばかりという感情が働いていることを敏感に感じ取って反抗的になる。子供に暴力を振るわれた、子供のことで困っているという人は、子供を叱らないで怒って来たからである。「叱る」と「怒る」ことの区別がつかなくなり、ただ甘やかすばかりの弱い父親が増え、強い母親が増えたのが、現在の混乱の因（もと）である。

「夫婦調和の提言」

「天上界へ行ける善い妻とは（釈迦）」

1．母のような妻

1．姉妹のような妻

1．友人のような妻

1．奴婢のような妻

夫に叩かれても怒らず、悪びれず、夫に従順な妻。このような妻は子供が立派に育ち子供に幸せにされる。

「天上界へ行けるよい母とは」

1．賢さをもつ母（賢夫人）

1．女らしい優しさをもつ母

1．慈愛深いが厳しさももつ母

1．品のいい母

1．哀れみをもつ涙もろい母

「天上界へ行けるよい父とは」

1．厳しい父（厳父）

1. 男らしい父

1. ほどほどに生活力のある父

1. 慈しみの心をもつ慈悲深い父(慈父)

「キリスト教が教える夫婦の調和」

夫は妻につくし、妻もまたよく夫に尽くさなければならない。妻の身体を支配する権利を持つのは夫である。このようにして夫の身体を支配する権利を持つのは妻である。男は女を人生のよきパートナーとして尊敬し女の性の前に額づく謙虚さを持たねばならない。妻は夫の生命を礼拝し、夫の生命を通して祈ったときに妻の祈りは通ずる。妻が夫を軽蔑し尻にひくとき、つまり女が髪を切って短くする(男の役をする)祈りは聞かれない。

「なぜ女は長い髪を誇りとして来たか(キリスト教)」

男は神様に祈るときに、頭に何も被らずに直に祈ってもよいが、女は神様に祈るときに、必ず被り物をかぶらなければならない。その象徴として長い髪を誇りとした。

夫の祈り 神 キリスト 夫 (短い髪を誇りとする)

妻の祈り 神 キリスト 夫 妻 (長い髪を誇りとする)

以上は園頭師の記述要約である。なぜ、こうも長く夫婦調和、話し合いのもたれる仲のよい関係ということにスペースを割いたかということ、夫婦調和は家庭の基本であり、そこからは絶対に問題児は出ないからである。それを知って欲しい。

「コンピューター時代と家庭教育」

現在の世界人口は五十億、二十一世紀になると八十億になるという。現在でも飢えている国があるというのに、そうなったら一体どうなるのか。現代の子供達は当然考えておかなければならないことだが、子供達がそこまで考えることが出来ないとすれば、親が教えておかなければならないことである。みんなが認めているように今のまま行けば食糧の豊かさが永遠に続くことは有り得ないのである。最近のハイテク産業の進歩は目を見張るほどに凄まじい。コンピューターもまだまだ進歩する。現在のテレビと同じように端末機が各家庭に一台ずつ普及するようになると、コンピューターと医療機器を結びつけ各自の健康診断をはじき出し、薬もプリンターが打ち出した処方箋を近くの調剤薬局へ持っていけば事足りることになる。これはほんの一例だが、コンピューターの発達は自分のことは自分で管理をするという「自己確立の時代」「自力の時代」が到来する。二十年後にはきっとそうなる。それを考えたら親はいつまでも子供を甘やかしてはいけないのである。そして、コンピューター

時代の1か0か、正しいか間違いかというデジタル理論の社会で育った子供たちは、理論的な裏付けの無いものには興味を示さず、そういう類のものは自然に淘汰されていく。宗教等はその典型であり、正法は正に、これからを担う次代の子達にとって打ってつけのものかもしれない。

「まさに来たらんとする光の時代と家庭教育」

高橋信次師は昭和四十年代末に「一万年ほど前のアトランティス時代を体験した人達が、これからゾクゾク生まれて来る、少しはもう生まれている。」と予告した。これらの霊魂達が生まれてくると現代の科学をどんどん押し進め、たとえ幼な子であっても霊的に高等な質問を発し大人達を指導するようになるのである。アトランティス、ムー時代は、現代を凌ぐ超科学文明であった。科学に溺れ、物質欲の虜になった、時の偽政者が、肉体を持って生まれていた光の天使達を殺した。彼等のその想念と行為が原因となって、一夜のうちにアトランティス大陸、ムー大陸は沈められ今はない。輪廻転生によって高位の文明を体験した霊魂群が生まれてくると、当時を思い起こし心の中から記憶を呼び覚まし、時代の変革の嵐が舞い起る。彼らの発想と思念を無視できず、我々の古い考えでは彼らを押し測れないということになる。それでは一体どうすればよいのか。

超科学一辺倒の冷徹な彼等の心に、愛と慈悲の心を芽生えさせるためには今までの既存のものに属さない教えで、心の正しい規準や尺度を説く宇宙的な神理・法則の教えが求められるのである。それは、高橋信次師が説き、園頭広周師が分かりやすく解説した「正法」である。世界人類の軌範は、正法であり八正道の実践のみが地球を救う唯一の道となる。正法が人類の一人一人の心に刻まれると、かつてのアトランティス、ムーの再現を打ち止めにでき、恒久の地球平和を確約できるのである。

「親の役割」

子供は「親のいう通りにはしないが、親のする(した)通りにする」と言われる。子供は親の後ろ姿を、親の背中を見て育つのである。親は、子供に対して過保護でもなく放りっぱなしというのでもなく、中道の社会人として通用する常識と教養を身につけさせる手助けと、人格を向上してゆくのに必要な「情操」を教えるのが使命と役割である。人間性を充実させ、人格を向上する情操とは何か。それは、すべてのものに対する感謝、尊敬、愛、思いやり、喜び、謙虚さ、忍耐、譲る心等であり、最初に教えなければならないのが「ありがたい」「ありがたいことだ」「ありがとうございます」という感謝である。

「特に若い親へ」

日本の美人は万葉時代の埴輪に見るように、胸が豊満で尻も大きく丈夫な子供を生めるのが美人であった。特にミス・ユニバースに選ばれてからというものは、こぞって八頭身美人を目指し子供に母乳も飲ませず哺乳ビンを啜えさせテレビに見入っている。そして、主人は優しいばかりの家庭的なパパ。子供の非行暴力が増えた一つは父親の権威が失墜したからである。教育界は「父親は子供と友達になりなさい」とやるものだから一生懸命に子供の機嫌を取ってきた。

一方、男女平等で女性が強くなり、家庭の中でいつも女房から叱られている。そういうさまを見て育った子供が、ゴキブリ亭主に成り下がった父親がフライパンを投げ捨てていくら力んでみたって、腕力は父親より勝る子供が、父親の権威を感じる筈はないのである。以前は、女性は従順で夫に「ハイ」と従った。子供はそれを小さい頃から見ている。そうすると、子供は父親の言うことは聞くものだと思うのである。父親がしっかりと権威を保っている家庭から非行、暴力少年は出ないものだ。父親がもうどうしようもなくなって、かつての、ヨットスクールのような所にでも預けようということになるのではないか。

親が子を愛し、子が親を愛し、夫が妻を愛し、妻が夫を愛する。その愛が計算づくであれば裏切られる。職場を愛するならば仕事に一生懸命にならねばならない。国を愛するならば国を破壊するような思想を持つべきではない。人類を愛するならば人殺しにしか使えない武器の生産を止めるべきである。教育界に不祥事が起っているのは教育界に愛がないからである。現代は「愛」という言葉の氾濫の陰で混乱が起きているのも、そこに愛は言葉だけで行為がないからである。

3.教育の問題とは何か

現在のような家庭教育、学校教育の混乱が起ってきた原因は、終戦後、日本の教育界がアメリカの占領政策に乗せられて「親は子供のいい友達にならなければならない」と指導してきたことにある。友達ということは、親と子供は同列でなければならないということである。同列の関係での教育は成立しない。教育は、教える者と教えられる者の上下の関係ではじめて成立するものである。親は教える者の立場に立って子供に教えなければならないのに、教える立場を放棄して同列になってしまっている。

「家庭と学校で教えなければならないこと」

次のようなことを、肉体的に大人になるその時まで、家庭と学校で教えておかななければならない。

人間は何のために生きているのか

人間はなぜ仕事をしなければならないのか

なぜ、家庭を持つのか、家庭の意義

性生活の意義、なぜ性を大事にしなければならないのか

「教育の公共責任制から家庭責任制へ」

保育、教育を公共責任制にしようとして壮大な実験を行ったのがソ連であった。ソ連では哺乳期間を過ぎると全ての子供を集め共産主義の闘士を育て上げようということをやった。母親の愛情の欲しいときに無理矢理に引き離され施設に入れられた可愛い盛り赤ちゃんが、愛情に対する欲求不満から這い這いしながら他の赤ちゃんに噛み付き口は血だらけで、さながら地獄絵の観を呈した。それで国家の方針で育てるということを止めたのである。公共責任制が失敗に終わったのだから、完全に家庭責任制にし、家庭教育でできないところを学校教育に委ねるということにしなければならなかった。

丁度その頃、日本でも日本伝統の家庭教育責任制がアメリカの占領政策によって破壊され、父権の喪失によって、従来家庭教育の責任者であった父親の権威が全く無視されてしまった。教育界が「父親の権威は持つてはいけない、子供のよき友達になれ」と教えるものだから、父親もそうした。一方、母親の方も母乳も飲ませず、ミルクを飲ませて母権を放棄してしまった。そうして、父と母との豊かな愛情を受けられずに育った子供達が攻撃的になって「いじめっ子」になっているのである。いじめの問題だけをなくそうとしても、そのいじめっ子が本

来持っている破壊性は他の方面で爆発して「別の形の社会問題」が起ってくるだろう。

「いじめっ子といじめられっ子」

先にも述べたが、父親の権威と母権の失墜が原因だから、いじめっ子をなくすには父親が子供の友達ではなく、はっきりと父親になり、家庭における教育の責任者となることである。そして、母親は深い母性愛を持って育てることを怠ったことを反省しなければならない。一方、いじめられっ子は、父親が権威を持っていないところへ、余りにも母親がベタベタと甘やかして育てるものだから受け身になって、自分から積極的にやるという積極性と行動性に欠け、いじめられるとそれにどう反応していいか分からずますます萎縮する。「ワッ」と相手に反発の行動に移ると、たとえ腕力では負けても、いじめられなくなるのである。

「高校全入運動の誤り」

教育界は「子供は教育を受ける権利がある」と言って、親の経済的余力があれば進学を勧めて来た。だが、もうこれ以上勉強はしたくない、一日も早く仕事に就いて働きたいと思っている子供も多いのである。人は、この世に生まれる前に自分の人生計画を立てて地上界に生まれてくる。例えば、前世で学問は散々やったので、今度は働くことに徹しようと考えてこの世に出てきた人もいる。教養や常識は身につけなければならないが、高学歴はいらないと自分の心が決めるのである。このように学歴はなくても立派な人の例は今日まで幾らでもあるが、勉強をすることより仕事をした方がよいと考えている子供がいることを全く無視した運動と言える。

「園頭広周師が勧める二つの方法」

「日本の教育をよくするためには二つの方法しかないと思う。一つはP T Aが職員会議を監督すること。文部省がそういう方針をつくるべきです。明治五年、学校教育制度が制定されて以来、日本人は、教育は文部省と教師がするものであるという頭になって全部、文部省と教師に任せて来ました。もうそういう考え方は止める時期に来ました。父兄が実権を握るべきです。子供の人格形成の責任は父兄にあることを確認し、教師はその上に立って学科の指導をするという役割の確立であります。もう一つの方法は、小学校から高校まで全部私立にすること。文部省が教育方針を決めるのではなく、文部省は学校の財政的な管理運営についてのみ監督すること。そうすることによって、教育とは親がするものであり、教師は親が出来ない部分を担当するものであるという役割をはっきり決めることです。」

4 . 社会環境の問題とは何か

1 . 金権至上主義の風潮

バブル崩壊という言葉に代表される国民の金権体質である。金権とは、お金の威光を言うが、ものの価値をお金に喩える価値観である。お金は無いより有った方が良いじゃないかとする考え方である。高橋信次師は「人生は

心と肉体と経済の調和」と説いた。心も健全で体も健康、お金もほどほどに持つということである。お金はいくら持っても良いが、集めた金をどう使うかがその人の人格、人間性の分かれ目であり、お金は有っても無くてもいいのである。

2．性の乱れと風俗

エイズを代表とする性風俗の混乱は古代ローマ時代の末期を彷彿とさせる。人民の悪い想念が集団的となったとき、火山爆発によってポンベいの街は一瞬にして廃虚となったと高橋師は教えたが、余りにも世情が極端に走ると、自浄作用が起るのである。最近の世界的な世情は目に余るものがある。

3．地上汚染と無責任な風潮

企業は、儲けるためにはなり振り構わず公害を撒き散らす。個人にあっても「皆で渡れば恐くない」式にエゴむき出しである。その風潮が青少年に影響しないと誰が言えよう。

「マトメ」

以上のように、最近の子供の犯罪原因を、本人の資質、家庭のしつけと環境、教育の問題、社会環境と、四つの項目に分けて述べた。原因が四つも有るということは、相互の関係が複雑に絡み合っているということである。しかし、私は論を進めていくうちに、家庭の在り方としつけが最大の問題点という考えに至った。私も六十歳、数人の子供を育てたが、肥満、登校拒否、いじめ等と体験し、子供達によって勉強させてもらった。子供は親の鑑（かがみ）と言われるが、人生の機微に触れて、人生は魂の修行、勉強にあるのだとつくづく思うのである。子供達よありがとう。

目次



、女性は今来になれるのか

或る集いで、「女性は今来になれるのか」という問題提起をさせていただいた。その場の雰囲気は、「なれるから今来もある」「いや、なれない」と賛否両論であった。出典を明かし、ここにこういうのがあると指摘してみたい。それはこうである。1973年（昭和四十八年）夏、長野県熊の湯における自主研修会の高橋師の講話に次のようにある。

「ところが、執着のない人達は、一切、飾りなどつけません。普通の飾り気のない質素な服装をしています。心にダイヤモンドをもつということ、それが大事なのです。格好で脅かすようなのはね、人間以下の動物のやること。蝶なんかでもね、雌、雄違いますよ。光の天使、心を説く人が、そういう格好をしていたらおかしいんです。あれも飾りたい、これも飾りたい、飾りたいという執着を持っているのは、ホンモノではないんです。今来というのは、上上段階光の大指導霊、なんにも飾っていませんよ、質素です。だから、女はね、上上段階光の大指導霊にはなれないんです。化粧はする、イヤリングはつける、ネックレスはつける、まあ仏教的にいうと菩薩位のところまで。でも、地球上で菩薩という、えらいですよ。大変な、大変な、永い永い輪廻転生、転生輪廻の体験を経なければなりません。」、と。

また、『天よりの使者・高橋信次師は語る』園頭広周編 正法出版社のP128～P129にこう書かれている。

「弥勒、聖観世音の両菩薩も肉体を持って、正法を伝えています。＜中略＞両菩薩は、何れも女性です。＜中略＞両菩薩は、本来、その上の段階の今来であります。上上段階光の大指導霊であります。ところがあの世の今来界には、この二人の女性をのぞいては、すべて男性であり、このため、二人とも遠慮され、今来界から菩薩界に降りてきているのです。そのため、菩薩といわれていますが、本当は今来であります。」、と。

この原本は、『天使の再来』昭和四十五年一月初版、有限会社 八起・光書房の「HIKARI BOOKS」の編者高橋信次である。手持ちの蔵書は昭和四十七年八月の第四版だが、これを最後に廃版されている。どうして廃版されたか『天よりの使者・高橋信次師は語る』に詳しい。サテ、それでは前記のミロク、聖観世音菩薩は現代の誰か。弥勒（ミロク）は高橋師の奥様の高橋一栄氏であり、聖観世音菩薩は高橋師の実妹・星洋子氏である。

弥勒は釈迦に帰依した女性第一号で、マイトレーヤーという名前で釈迦の身の回りの世話や釈迦の説法の時に、鐘や太鼓を打ち鳴らして「今夜、どこそこでお釈迦様の説法があります」と、ふれて廻るのがその主な役目で、釈迦が亡くなると生まれ故郷に帰り正法の指導に当たり、タレイヤー、幸、幸子の語源になった、と高橋師は明らかにしている。

一方、聖観世音は、「紀元前七千年頃、アトランティス帝国で生まれフォロリヤーという女性でございました。弥勒さまはナーダリヤという名前で私の最も親しい女友達でございました」『心の発見・神理篇』そしてBC四千年頃（エジプト）アシカ・ミヨター（女性）。お釈迦様の時代はガランダ長者の末娘でカリナ。AC二世紀（イスラエル）サファイという女性。AC五世紀（中国）林蔭という女性である。林蔭は吾蔭の姉であり、吾蔭は日本に日蓮として生れている。林蔭はこのあと日本に二度生まれて、現代は昭和十年生まれの星洋子氏である。

今来格の女性二人を見ていただいたが、過去世は相当な霊格、光の量の区域であったと推測できても、高橋師亡後のGLAの混乱を園頭師に学ぶと、また、ウェブ・マスターの取材ノートでお二人を辛く評価すると、今来を辞退されても当然のような想いがするのである。ともかくも現在、今来は女性にはいない。この一文を読むと、高橋、園頭両師が説いた正法は、女性蔑視かという声が聞こえてきそうだが、女性には女性の役割が、男性には男性の役割が厳然として与えられていること。子供を産みたいと男性がどう望もうと絶対に出来ないことや、普通の人は男に生まれたり女に生まれて人生修行をする、ということを知ればその疑問も氷解できよう。正法は男女平等、だが、それぞれに役割が決まっていると、理解していただけるだろう。釈迦より以前のバラモン教の中に、女は女の相のままでは今来になれない、男になってからでないと今来になれないという言い伝えがあった。これを「変成男子・へんせいだんし」というが、正法においては、気の遠くなるような沢山の生まれ変わり死に変わりをして、男と女の修行を完全に終えてから今来へと進むと教えるのである。人間は本来、神性、仏性を持ち備えた神の子である。ただの石を磨いてもダイヤモンドにはならないように、もともとダイヤモンドだから光

り輝くダイヤモンドになるのである。これと同じように、人間の中に内在されている神性、仏性のみを見てゆくと、やがては必ず大いなる悟りの境地、如来に到達するのである。

目次

なぜ、日本人には臓器移植の申し出が無いのか

平成九年十月の臓器移植法施行以来一年も過ぎて、多くの患者さんが待ち望んでも移植に結びつく臓器提供は無かった。それから一人、二人と増えて、平成十二年八月になっても、やっと十名程度である。意思表示カードを二千六百万枚も配っていながらである。ともあれ一億二千万人も人口でも、一日に多数の人が亡くなっている、である。そこで仕方なく海外で治療を受けるか、または生体移植に頼らざるを得ないと親族からの提供が試みられている。それでは、どうして日本には臓器提供の申し出が無いかを推測してみたい。

「その原因は、宗教観に起因する」

欧米のキリスト教等は、魂と肉体は別々のものであるという霊肉二元論である。死によって魂（霊）は神の国に移り、遺体はただの抜け殻と考えている。だから、彼等は遺体に対する執着が薄く、我が国ほどではないのである。我が民族の遺骨に見せる驚くほどの執着は儒教による影響とも考えるが、日本はいわば霊肉一元論であり、死ねばそれでおしまいという無靈魂論の立場を取っている。一度しかない人生なら、一度しか持てない肉体的遺骸ならと固執するのである。日本人にとって、自分の大切な肉体の一部を他人に分け与えるなんて、そう安々と出来る相談ではないのだ。日本人の肉体に執着する現われの中では、亡くなった人の遺骨を食べてその人を偲ぶという「骨噛み」はその最たるもので、とりわけ、五十年も経った遺骨を戦地へ探しに行く日本人が、肉体に執着の薄い欧米の彼等には理解できないのである。このように、日本人にとってはたとえばアフリカの鳥葬での、ハゲ驚なんかに肉体を食い干切られるなんて、自分の身が切られるように悲惨で想像も出来ないことである。だからこのような倫理観に立った、このような肉体に執着した考えの日本人の臓器では、この項の「トピックス 臓器移植」で述べたように「俺の内臓を勝手にするな」と、たとえ取り出して移植しても生体の拒絶反応が異常に強いという形をとって、旨く行くとは限らないのである。

こう考えると、海外に渡航して移植を受けることの出来るほんの一握りの日本人は、彼等の肉体にとらわれない倫理観に感謝しなければならないと言いたいのである。日本は経済超大国とはいうものの、唯心論、つまり心の分野ではこの程度の境涯なのである。これから徐々に臓器提供の申し出も増えてゆくとは思いますが、「魂は永遠であり、人は生まれ変わり死に変わりする生命体だから、現在の肉体に執着してはいけない」ということを、日本人に教えるのも一つの選択肢と思うのである。

目次

なぜ、死刑はいけないか

この地球上が理想郷・ユートピアになるには、悪いことをする人が一人もいなくなり、刑務所が空っぽになることである。だが、現代ではまだそれには程遠く法律の裁きによって死刑を執行される人もいる。目には目を、刃には刃をと、死刑に値するほどの極悪非道の輩だから死刑はしごく当然というのもうなずける。犯罪が多発するのを防ぐために極刑で臨むというのもよく分かるし、被害者やその周辺の人々の気持ちも心情的によく分かる。だが、私がここで言おうとしているのは、死刑の是非についての一般論を論ずることではなく、霊的考察から見た死刑廃止論である。

「一念三千」という言葉がある。中国の「天台智ぎ」が使った言葉というが、人の心は悪に心が向けば悪に通じ、善に心が向けば善の方向に通じ、心は羽根をつけた鳥のように無限の方向に自由自在であるということである。どう考えているか人の心の中までは誰にもわからない。何をどう考えているのかわからない輩を、極刑で臨み死刑執行を早急にすませたとすると霊的にどうなるかということである。人間は永遠の生命であり、魂は生きつづけるのである。勿論、死んで肉体はなくなっているから、言葉を発したり体で行動はできないが、同類の人間に憑(つ)いてその人の心をコントロールして目的を果たすことは出来るのである。これはどういうことを言っているのかというと、悪い心のままで死刑にすると、自分と同じような心の他人に憑依(ひょうい)して、同じような事件を何度も起こさせ、これほど危険なことはないということである。我々は極悪人を地上から葬り去ったからこれで一安心、被害者の周辺は恨みを晴らしたと考えるかも知れないが、実はそうではないということを知らなければならないのである。

だから、こういう輩は無期終身刑にして身柄を拘束し、亡くなるまで徹底的に正しい考え方にマインド・コントロールをして、心の革命、心の改革、修正を完璧にさせてあの世へ送ることである。これを完全にやらないで死刑執行はスルナというのである。そして、被害者やその周辺の人達は、許すこと以外には真の心の安らぎは得られないということも知らなければならないのである。

目次

なぜ、長江（揚子江）の大洪水は起こったか

平成十年六月以降、中国最大の長江が氾濫して、洪水で約四千人が亡くなり、日本の人口の約二倍の二億三千万人の避難民を出した。これまでに長江は歴史的に氾濫を繰り返してきたが、その頻度は二、三十年に一度から近年はほぼ毎年である。テレビの報道では、人家の庭先の十メートルほどの大木のでっぺんに漂流物の残骸が引っかかり、洪水の物凄さを物語っていた。次の場面では江沢民首相が復興作業をする人達に向かってハンド・スピーカーで「勝利、勝利」とゲキを飛ばしていた。テレビの訳語が適切でないのかも知れぬが、何が「勝利」なのだろうかと思った。この大洪水のために来日が先送りになって、平成十年末に訪問を果たしたのはご存知の通りである。この98年は中米に超大型のハリケーンが襲って一万二千人もの死者を出したり、バングラデシュの高潮で国土の六割が冠水して三千万人が避難して多くの死者が出ている。世人は、これらはすべて気象災害という言葉で片づけるが本当にそうであろうか。最近では気象の一面を捉えてエルニーニョ現象とか、ラニーニャ現象と喧(かまびす)しい限りである。

サテ、長江の大洪水だが、これはエルニーニョや森林乱伐が原因と多くの人が分析するが、本当にそうだろう

か。例え、そこに森林の乱伐があっても、長江流域にドカ雨と長雨が降らなければ大洪水にはならないのである。日常生活を潤す適度の雨なら、生活の基盤を失ったり移住を余儀なくされるということもないのである。それではなぜ、長江流域に、ドカ雨と長雨が降ったかということである。その真の原因は何か。

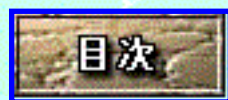
それは、言論は極端に制限統制され、人口抑制のためとはいえ子供も一人しか産めぬという、人間の自由を損なう間違った主義主張にあるとウェブ・マスターは言うのである。高橋信次師は昭和五十一年の六月の師の最後の講演（「高橋師の最後の講演」の項を参照ください）や、五月の講演において、「権力の座について自由を剥奪する」国々は彼等が自覚するまで食糧危機や天候異変は続くと、「中華人民共和国北部」もその内の一つと名指しで予告しているのである。広大な国土に十何億もの人口、この目を見張るような地域の想念の悪が集団的になると、天候異変や天変地異を引き起こすのである。ほぼ毎年起こるといふ現実を直視して、指導者は反省の上に立って修正しなければならないのである。

2000年（平成十二年）7月のこと、この長江以北流域では雨が降らず大旱魃で、干に近いダムや貯水池が、干上がっている報道が

なされていた。

天は、政府の指導部に反省させるためには、雨を降らせたり雨を止めたりという天候の操作なんて簡単ということをも以って銘すべきであ

ろう。



無理心中したからといって、あの世で添えるわけではない

江戸中期、近松門左衛門が得意な世話物の、「道行（みちゆき）」にみる男女駆け落ちの行き着くところは、それは心中である。外国の近年では、ナチスの総統ヒトラーは前日に結婚した妻エヴァを道連れに自殺し、イタリアのファシスト党首ムソリーニも愛人クラレッタ共にこときれたのである。彼等は、今生（こんじょう）での熱い想いをあの世まで持ち込もうというのである。ここでは、心中によって本当に彼等は、あの世で添い遂げられるのか考えてみたい。

1．男女それぞれの心の段階、人間性の段階、光の量の区域の違い

あの世は光子量の違いが厳然とある世界であり、人間性（人格）の段階によって定住する場所が違うのである。これはどういうことかと言えば、これまで何度か説明しているが、例えば男性が幽界で、女性が男性より上の段階の霊界の人間性の人なら、定住する場所が違うのであの世で会うことはないということを知りたいのである。上の段階からは下の段階を自由に見れる仕組だから、この場合は女性が男性の様子を観察をすることは出来ても一緒に話し合うことは出来ない。つまり、人間性の違いがあれば出会いは出来ないということである。

2．心中は自殺行為だからその責任は重く、神への冒瀆である

神の子である人間は、神の生命として魂の修行のためにあの世とこの世を輪廻して生き続ける生命体である。だが、せっかく地上界に生れていながら、自分達の都合によって魂の修行を中断するのだからその責任は重く、特

に、私ならこうするという余地の残されたものほど重大だと高橋師は教えている。彼等のあの世の世界は、自分の身の置き場もわからぬという光を閉ざした暗黒の世界で、突然、雷鳴が響き渡ったり何か得体の知れぬ物からかきむしられるという全く安らぎのない世界である。このような二つの理由から、二人が添い遂げるということは無理ということを知って欲しい。それどころか自分達の身の置き場さえも分からない程度の者達である。

目次

インドネシアの天候異変の理由（ワケ）

インドネシアは、政情不安からルピアが大暴落した。平成十年十二月末、NHKテレビではインドネシアの国内事情を報道していた。まとまった雨が降らないので、何と、六年も米を植えられない所もあるというのだ。今年こそはと種籾（もみ）をまいて苗代を作っても、雨が降らないので六年も田植えが出来なかったというのである。六年もなんて、日本では考えられない慢性の非常事態である。スハルト政権は、権力の座に居座って三十年だ。高人格の、高い人間性の長なら百年やったって構わない。

だが、そうではなかったと見えて、反省を促すために天は、数年前から天候異変という警告のシグナルを発し続けていたのである。その一つが数年も田植えが出来なかった。すると、インドネシアの人達は青空を仰ぎ見ながら、天候の所為にしてギラギラの太陽を怨むのである。また、政権の中枢部は、世界的な天候異変だと説明して言い逃れをするのだ。このような非常事態になるからには、そのような権力者を生む土壌があったということと、それを許してきた土壌があったわけである。だが、暗い想念が余りにも集団的となれば、反省させる手だてが用意されているということ、インドネシアの人達は知らねばならないのである。記録的な小雨のために、食糧不足によって人口二億数百万人のうち一億人が飢えるというこの超事態の原因を、もっと真剣に考えなければならないのである

目次

Home

真（まこと）の男女愛とは

「タデ食う虫も好きずき」、辛い蓼の葉を好んで食う虫もあるように。人の好みもさまざまである。美女と野獣のような容貌の組み合わせの夫婦もいれば、ノッポにチビも、色白に地黒もある。百人百様の好みがあるので、人の世はバランスが取れて小気味がいい。

人はあの世で、

「あなたの夫として、人生の修行をさせていただきます」

「あなたの妻として、魂の修行をさせていただきます」

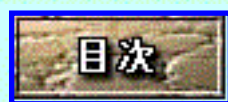
と、夫婦の約束をしてこの世に生まれてくる。

それぞれは両親との縁を通して、この地上界にオギャーと生れると、その記憶も九十パーセントは潜在されて約束事は忘れてしまう。しかし、適齢期ともなると恋愛や見合い等、さまざまな形で男女の出会いをするが、あの世での約束は九十パーセントは潜在され忘れているように見えても、「赤い糸で結ばれて」と言われるように、出会いの初めから「もしかしたら、この人と結婚することになるかも知れない」と、互いに予感があっても不思議ではない。この劇的な二人の出会いは、あの世以来の約束を果たした霊的牽引とも言える。

略奪婚や強制婚もあるが、「念の力は、大は小を吸収する」という法則によって一時の平衡は保たれても、それは自然の理に適っていないだけに、いつかは完全な自由を求めて、心の針は解放の方向へ突き進むことになる。

勿論、離婚、再婚の約束事は、あの世では誰もしていない。再婚の相手も、その人にとって縁ある人には違いないのだが、生れてからの教育、思想、習慣、環境等によって、美しいとか、かっこいい等の五感（眼、耳、鼻、舌、身）主義に陥り、あの世での約束を忘れ、相手を間違えて選んだというのが実情なのだ。

さまざまな恋愛論や愛情論もあるが、真の男女愛とは、天上界で約束をした人と知らず知らずのうちに引き合うという霊的牽引によって再会した、魂の感動を覚える愛である。



人の役割の任期は、長くても十年まで（「長」はいつまでが妥当か）

人は、組織の最高位につくとなかなか居心地が良いと見えて、居座り続け問題も吹き出す。三十年もの国首、二十年近い国際的スポーツ関係の団体長等、様々である。それでは一体、任期は何年が妥当か論じてみたい。

「石の上にも三年」という諺がある。「三」とは初期完成の数字である。三年とは右にも左にも不安定極まりなく、まさに初期完成の期間である。「五」は中期完成を意味し、「七」はラッキーセブンとか、人類の七千年周期とかいうように完成を意味する。七年目の結果を見ると、それまでに経過した期間が正しいものであったか間違っているか判断がつくということである。国家や民族は三十、五十、七十年、・・・で見るとその結果が見えてくる。「七五三」のお宮参りはこの数字的現われであり、三歳から始まり七歳で終わる。

人は、その地位に就いて三年間は海のものとも山のものともつかぬが、この期間は誠実に努力するものである。だが、年を経るにつけて善きも悪しきもどちらにも結実し始めるのが五年であり、七年で完成する。

このような意味合いから、一般の我々ならせいぜい十年、長くとも十年で交代するのが妥当である。尤も、高人格で超人間性の「長」なら百年やったって一向に構わないと言いたいのである。この人間性を見極める人間性・オーラー測定器は、植物の細胞を利用されるとは、高橋師の予告である。

目次

なぜ、多数決的判断に偏ってはいけないか (多数決は平均的な中位の判断に過ぎぬ)

現代社会においては、殆どの物事の決定に多数決的な原理が多用される。小は学校のクラス討議から、大は国会運営等である。多くの人が、多数決によって決定されたのだからと暗黙の内に了解し終止符を打ち納得するのである。

だが、小学校の低学年や幼稚園では、間違いなく先生主導で物事の判断がなされる。それはどういうことかと言うと、先生と生徒、園児という同列ではない上下の関係が、厳然として保たれているからである。同じく、大は、ワンマン会社の社主と社員の関係である。これも社主の努力と経験に裏打ちされた知恵によって上下の関係が半ば強制的に維持されているからである。このような少数の例外も見受けられるが、自由と平等といわれる現代社会では、全部と言って良いくらい多数決的原理がまかり通っているのが現実である。それではなぜ、多数決が最高の選択肢ではないのか。

それは、人間には人それぞれの段階が厳然としてあるからである。高橋信次師はこれを「光の量の区域」と教えた。それは、人間性とか人格と言った方が分かり易いかもしい。学歴でも、地位や名誉や財産でもない人間の「格」である。永遠の生命である人間は、これまでに生まれ変わり死に変わりした体験の中から湧き出る智慧が、直観とか予感となって素晴らしい考えを持つ人もいるのである。それを少数意見として切り捨て無視して良いわけではないのだ。人間的「格」の低い人達が多くいる集団の多数決は、低い段階の平均的な判断である。人間的「格」の高い集団の多数決は、高い段階の平均的な判断である。

だが、何れの場合も多数決によっては最高位の判断には成り得ない。この最高位の人格者の判断によって、話し合いによるものではなく独裁されるものを、神権政治という。

例えば、人が十人いる中で九人の高位の人格者に一人の最高位の人格者の場合の多数決は、高位の判断であり、九人の低位の人格者に一人の最高位の人格者の場合の多数決は低位の判断となるが、最高位の人格者によって独断でなされる神権政治は、神の意にかなった政治形態である。ともあれ、これが多数決は最高の選択肢ではないという理由である。

目次

終身雇用制は、理想的な雇用形態である

不景気という言葉が闊歩し始めると、こぞって、ギラギラの競争原理である年俸制とか、出来高払いとも言える給与体系へ突き進む傾向にある。力の有る者だけが生き延びれる雇用構造というわけだ。（「働くこと」や経済については、「生まれ変わりの実例」の松下幸之助氏の項にまとめて述べている）

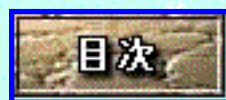
誰彼をいわず愛されるというのが神の愛だから、能力の有無にかかわらず最後まで面倒を見るという協調原理の終身雇用制は、神の意に適っているというのである。最近の外国のジャーナリズムは、こと新しく終身雇用を口にするが何も目新しいことではなく、これは良き日本の伝統であった。経済成長と言う掛け声とともに西洋一辺倒になって、良きものまでも捨て去ろうとしている日本は、今更ながら西洋の人達によって再認識させられようとしているのである。能力の有る人は、そうでない人の分まで働き、みんなで仲良く人生を謳歌するのは、神の意に適っていると言いたいのである。

これから二十一世紀の経済は、一種の資本主義形態と銀行形態は改良され、全ての人に理想化されて保ちつづけるが、物々交換と言う経済形態も見直される、というのがアガシャであり高橋師の予告である。技術一辺倒で世界一の金満国になった日本は、そうなればこれから一体どうなると言うのか。

ここに良い喩えがある。おなかをペコペコにすかした日本人が、現在の価格で十萬円のノートパソコンを小脇に抱えて歩いていた。向こうから牛車に乗って現価なら一萬円分の食べ物を満載した外国の人が通りかかった。わけを話してパソコンと食糧を交換してもらったことになったが、「家族もおなかをすかして待っているので半分ではよければ」ということになった。こうして、現価で十萬円の物が五千円の価値になるかもしれないという話である。物々交換の世とは、これほどまでに価値観の発想の転換をさせられるという世界である。かつての戦中、戦後を体験された皆さんは高価な物がわずかな米と交換された時代をよくご存知だが、現代の子供達は、そのような時代を必ず体験するのである。

サテ、終身雇用制がなぜ理想的な人間の道か、もう一つ示そう。それは過去世からのつながりの中で、縁の有る者同志が組織に集まって来ているということである。かつて、あなたが随分とお世話になった友人、先輩、後輩、恩人等が、あなたの会社を盛り立て引き立てようと、自然と一つに集まって来ているのである。経営者のあなたよ！そう考えたら、あなたの部下を粗末には出来ないのである。高橋信次師は講演の中で次のように言っている。

「今の経営者は戦国時代の武将です。刀は持たないがお金という力を持っています。自分の心を作り、自分を完成することをまず優先させることです。職場は、過去世にも縁の有った者が、自然と自ら一つに集まって来て、魂の修行をする場であると言うことをよく知って、職場におけるそれぞれの役割を果たしつつ調和して、経営者は経営者として、労働者は労働者として、それぞれに自己の完成に励んでゆくことです。そしてみなさん自身の転生の偉大さを知ってゆくことです。」、と。



喘息やアトピーの原因は、家庭の不調和（話合いの出来ぬ家族関係等）

喘息やアトピーの原因はダニや食べ物等が原因と、まことしやかに語られている。そこにどんな理由がつけられようと、実はそうではなく、家族関係の不仲が原因と正法では教えている。

主人が余りにも厳し過ぎたり、或いは、妻の性格が余りにも強く心の中で裁いてばかりいると、夫婦の心からの会話は段々と遠のくものである。当たり障りの無い会話に終始して、いかにも外見は人もうらやむものでも、それが長期に及ぶと、その家庭の雰囲気、環境を正常な状態に戻すために、天をあげて喘息やアトピーという問題を起こして修正させようとするのである。喘息やアトピーは、ご存知の通り特效薬はない。根治療法はなく対症療法に過ぎないのである。つまり、原因が混とんとして、真の治療法が分かりませんと言うことである。

喘息はゼーゼー、ヒューヒュー、ゲボゲボの喘鳴。アトピーはボリボリかきむしり、むづがしかる。それはそれはもう悲惨で、そばにいても居たたまれない程だ。ましてや自分の肉親なら、どうかしてやろうと心を痛めるのは当然であろう。特別に調和しようと努力したたわけでもないのに、酷い症状を通して家族の会話が始まると、それが一条の光となって家庭内を照らし始めるのである。あれほど酷かった症状がいつの間にか治ってしまっていたというのは、これが所為である。

勿論、劇的な反省は劇的な良い結果を生むというのも神理だが、酷い症状に対して不快感を顕わにしてうるさがるようでは、ますます酷くなって行くというのも、これもまた神理である。同じ環境の同じ家で生活をしているのに、この子(人)ばかりはどうしてこんなことになるのかとこぼして嘆く前に、極端な生活態度を正してくれる子供(人)の中の子供(人)であり、魂の勇者であるとたたえなければならないのである。特に、大人の喘息の場合、家庭内の不調和を口に出して言わない、言えないだけに、それが内にこもって限界を超すと、喘鳴、咳となって外にあふれ出る。

このように、病気の中でも特に原因が分からない、治療法が分からないので民間療法が山ほど有るといふ病気の場合は、神の子・人間の生き方を警告したものと考えなければならないのである。



(2 1) 最近の子供の事件 (十七歳など) をどう見る

純粋な筈の子供たちが、我々大人達が理解できない事件を引き起こしている。これも国民を反省させる一つの現象に違いないのだが、

それにしても困った問題である。森首相の神の国・発言問題がこの時期に出たというのも、あながち的外れでもなかったと考えるので

ある。人間はどうしようもなく困った時には、神様！と天を仰いで祈るように、日本人の政治代表の首相が、神の子である人間・日本

人が住む国ということで神の国発言があっても何ら不思議ではなかった。神の子が住む国だから神の国なのだ。日本人だけが神の子で

はない。どの国の人間も皆神の子である。アメリカだってアフリカだって神の子の神の国なのだ。

サテ、最近の事件の特徴は、加害者の心の中に異人、霊神、霊人が登場することである。名称は勝手に付けるのだから何でもよいのだ

が、アレッ！と思うような名称の人物が登場した時には、加害者の心の中に巣食って、本人を言いなりにコントロールする悪霊、地獄霊の存在が

ある。加害者の家庭環境、両親の育て方、本人の育った社会環境など周辺の全てが今の本人を作り上げ、結果として悪霊と同類になって悪霊の

言いなりに事件を引き起こすことになったのである。心の問題があったから、既往歴には精神科、心療内科の門をたたくことにもなるが、現代医学

ではどうにも手立てがなかったようである。

では、どう治すか。

心の正しい尺度・正法を強制的に教えながら、運動を強制的にさせ、心と肉体を同時に健康にさせてゆく。

心の問題は正法で、体は運動で治すのである。

特に昼夜が逆転した生活をするので、それを解消させるには運動によってクタクタに疲れさせること。大事なことは通常の就寝時間までは断

じて寝かせてはいけない。

悪霊の活動時間は深夜だから、起こして騒がせるということを考えてほしい。精神活動のエネルギーは睡眠によって補給される。不眠でトロトロ

した眠りは神のエネルギーを受けられぬばかりか、悪霊の憑依を許すチャンスを用意したことになる。

運動で疲れた心地よい眠りは悪霊といえどもお手上げなのだ。

これらの人達は、動きたがらない風呂に入ってサッパリしたがないので、根気よく強制的に正しい生活の習慣をつけさせなければならない。

昔の人は言った。「健康な肉体に健全な精神は宿る」は正に至言である。

目次



正法

正法

正法

正法

正法

正法

正法

Home

正法

正法

正法

正法

正法

正法

正法

正法

正法

正法

正法

正法

正法

正法

正法

正法

正法

正法

正法

正法

正法

正法

正法

正法

正法

正法

正法

正法

正法

正法

正法

正法

正法

正法

正法

正法

正法

正法

正法

正法

正法

正法



◆ 霊界教室 ◆



Home

➡ 霊能と超常現象 ⬅

この世には、考えもつかない現象が多く起る。日本では「幽霊現象」とか「こっくりさん」ではなかろうか。いずれも、あの世（実在界、四次元以降の世界）の霊によって引き起こされる現象である。突拍子もない、アツと驚ろくような現象は低次元の霊のなせるもので、次元の高い霊は驚かすようなことはしないものである。この世も同じで、立派な人は突拍子なことにはしない。我々は、あの世の霊と話をしたり、霊の語ることを聴くことも、霊の姿を見ることもできない。でも、私達の心の中には、ものごとを判断する正しい尺度というものを持っているので、余りにもおかしなものを学んでいると、「本当にそうなのかな」、「いや、にわかには信じられない」という心が起ってくる。これを、嘘のつけない「善我で真我なる心」と高橋師は教えた。この善我なる真我なる心があるので、それに照して「おかしいゾ、チョッと待てよ」ということになるのである。私たち人間だけでなく、動物も植物も鉱物も、あの世（実在界）とこの世（現象界・地上界）を循環、輪廻するのである。あの世とこの世をグルグル廻る。

たとえば、人が亡くなると「安らかに眠り下さい」とは告別式の常套文句である。でも、それはない。死ぬとあの世の生活が始まり次の誕生を待つ。こんな仕組みなのである。自然を見れば良くわかる。たとえば雨が降る、それが陽光によって蒸発して雲となり、その内に雨が降るというのも一つの循環。雨ばかり、ガラガラの晴天ばかりもない。この自然界を見ると全部が循環である。少し列記してみよう。

四季です。春 - 夏 - 秋 - 冬 - 春 - 夏 - - - と繰り返す。

一日は朝 - 昼 - 夜 - 朝 - 昼 - の循環。

ミクロでは核を中心に電子が廻っている。

マクロでは太陽を中心に惑星が廻っている。例をあげれば限（き）りがないので、自分で考えてもらおうとして、人間も自然界の一員だから自然の法則の通りに、循環する。つまり、「あの世」と「この世」をグルグル循環するというわけ。このことを「転生輪廻」とか「輪廻転生」と言って永遠に、あの世とこの世をグルグル廻るのだ。

ところで、93年は冷夏、94年は干天で国民はみな泣かされ、その後は小康状態。98年は気候がおかしくなっ。こんなに何度も異常気象に悩まされるというのも尋常ではない。これは人災である。人間の心（意識、想念）に問題があるので、天は人間に反省を促している。人災の根拠は、すべての価値はお金とか物質で評価する現代の風潮である。確かに、教育を受けるのも、移動するのも、生きていくためにはお金は不可欠である。「お金は無いより有った方が良いに決まっているじゃないか、老後のことも不安だしな」と考える。それはそれで良いのだが、この考え方が余りにも極端過ぎると、それは困る。ほどほどという「中道」なら許される。高橋師はこれを「心と肉体と経済の調和」と言った。精神も健全で、体も健康、お金も困ることのない位にほどほどに持つ、これが最高の人生。

お金はいくら儲かってもいい。後は足ることを知って人に分け与えること。お金が貯り始めると守銭奴となる。でも、お金はあの世に持って行けない。この世だけに通用するお金は、この世で役立ててもらえばいい。財産ができたばかりに、心までダメにしてはいけない。たとえば、バブル期は、国民が拝金主義に踊らされて、今では後遺症に悩んでいる。今では泣くに泣けない「悪因悪果」である。全て「ほどほど」でなくてはならない。自然現象を見てもそう。中道だ。極寒より、酷暑の地より、温暖で四季おりおりの花の咲く日本のような気候の地に住むのが一番。だから猫のひたいに一億二千万の人、人、人。

ところが住み易いはずの日本がバブル期に符合したように、94年は酷暑の干天、93年は冷夏でお米の緊急輸入をする羽目。もう国民はパニック状態だった。住み良いハズなのにそうではない。このような急激な変動が起ると心が不安定になって、「みんなで渡れば怖くない」という図式になってしまう。バブル期はこの図式の最たるもので、国民総カネばけだった。これを「自己確立のない群集心理」と言う。

その外には「性モラルの欠如」もある。エイズ等の性に関する問題。教育の問題。環境破壊など、この世には、一つ一つあげれば嫌になるほど多くの「困ったこと」がある。これらの悪因が悪果となって、予期せぬことが起る。人間に反省を促すためには、気象異常は当然なこと。その結果のために人間が少々苦しんでもそれは仕方ない。

ところで、93年は冷夏だったもので「94年も必ず冷夏になる」と予告した人が沢山いた。「これこれこのような気象統計の時は今年も冷夏。昆虫のこんな行動から今年も冷夏。」と全国民が予報官だった。人間を反省させるために天が起こした異常気象なら、昆虫さんだって予測できないのも無理はない。そこに住む人間が反省をして修正しないかぎり、修正するまで次々と異常気象は起る。でも人間が生き方を修正すると、時間を置いて正常に戻どる。誤りを正してもすぐには正常に戻らないところがいい。さすがだね天。

たとえば、痛みをクスリですぐに治したとしよう。「痛みが止まって、よかったよかった」と痛みの原因も省みず、また無茶をして、もっと悪くする。だが、長く苦しむと「なぜ痛むのかな、なぜ、どうして。こんなに苦しむのなら、もう無茶はしないゾ」という神髄からの反省のチャンスになる。神様はうまく考えておられる。修正をしても、すぐに良い結果は出ないということ。どうしてかと言うと、この世は波動が荒いために、思ったことに対する結果が現れるのに、一定の時間が与えられているのだ。従って、結果の出ないうちに、これはいけないと反省をして正しく実行（実践）に移せば、訂正が可能になってくるのである。ウェブ・マスターはこの辺の事情が良く理解できる。なぜか述べよう。

これまでに、二度の高血圧による脳出血で倒れた。三十八歳の時が余りに早く回復して後遺症も軽かったので、血圧が高いのにすぐに薬を飲むのを止めてしまった。それから十年ぐらいで二度目の脳出血。高血圧を治さなかったのだから当然なこと。今度は軽く済むはずがない。仕事はできるが、「ヨイヨイ」も同然。短気で激情型の心の傾向性は、体の状態とこれまでの生き方は、まさしくピッタリ辻褃が合う。だから原因と結果（因果）は必ずそうなるという科学の世界だというのが納得できた。悪い原因による悪い結果は、反省・修正によって時間はかかるが正常になってゆく。私の場合は、薬を飲んで治さなかったから二度も。勇気を持って修正しなければ、運命も変わらない。人間はみな幸せを望む。だが不幸だという人も多い。「不幸」という観念は相対的なものだが、みな生き方に問題があったと言うこと。人はよく、先祖の霊が浮かばれていないとか水子のタタリ等と理由をつける。どんなに屁理屈をつけようと、正しい生き方をする人は、そこにどんな霊がいても守られる。水子産業や悪徳な霊業者にダマされてはいけない。どんな霊がしようと正しい生き方をする人は守られるという神様の法則は正しい者の味方で、さすがだと思う。神様の法則（神理）は高橋信次師が「正法」として教えて下さった。「正法」とは宇宙の原理、人生の正しい生き方、慈悲と愛、人間が小宇宙であることの自覚。このように人間として知らなければならぬ原則を教えたもの。それでは「正しい生き方」を簡単に見よう。

正見（正しく見ること）

正思（正しく思うこと）

正語（正しく語ること）

正業（正しく仕事をする事）

正命（正しく生活すること）

正進（正しく道に精進すること）

正念（正しく念ずること）

正定（正しく定に入ること）

この「八正道」に適った生活行為が「人生の正しい生き方」である。もう少し解かり易くすると



「正しい人生の生き方とはどんな生き方」

一、 第三者の立場で、自分を見、相手をながめよう。

二、 その生き方で、心が安らぎますか。

三、 人には優しい、思い遣りのある言葉をかけよう。

四、 感謝と奉仕

- 五、 自分の短所を改めよう。
- 六、 良い対人関係をつくり、環境破壊をしない。
- 七、 正しい願望を持とう。
- 八、 同じ誤りを繰り返さない。

こんな生き方を心がければいい。「正法」を知れば知るほど、良い時代に生れて来れたと思う。高橋先生にお会いすることはなかったが、近くには園頭先生がいらして「正法」をわかりやすく教えていただいた。高橋先生の講演テ - プやビデオテ - プ、そして資料も不思議と集った。高橋先生にも会えるチャンスは何度もあった。昭和四十五年から三年間、高橋先生の浅草の八起ビルを中心にして二、三キロの所をグルグル廻りながら研修医として住っていたのに、「機根」と言うか気が付く時期というのがある。その時は外車をとっかえひっかえして、銀座、赤坂、六本木と派手に遊んでいて、高橋先生のお名前も聞くことはなかった。それから田舎に帰り、夜の街で九軒の水商売に手を染め、病床にあった昭和五十八年に遅れ馳せながら「正法」を知ることになった。そこで、高橋先生にも縁のあった一人と勝手に思い込んで、医業そっちのけで広める努力をやっている。もし、間違った記述で読者を誤らせれば、自ら裁いて地獄の暗い世界に身を沈めても仕方ない。それが人間としての道だから。



高橋師の「ことば」から

「 - - それは、自分がその環境を望んで約束してくれるのですから、いくら金を持っているかとか、地位は関係ないのです。地位が上の人ほど地獄にいますね。欲望で一生を過ごすから。あんな水呑百姓が、という人が天上界へ行っているんですから。大久保彦左工門ね、びっくりしましたね。菩薩界できれいな光を出している。僕の所へ来ましてね、「大久保彦左工門めにござります」日本で有名な坊さんで、菩薩界へ行っている人は少ないですね。日蓮さんもね。永いこと自分から地獄界におった人ですよ。菩薩界に入らなかった。自分の蒔いた種が、その後、多くの大衆を狂わしてしまったという責任を負ってね。あの人は、あの世では知らない人はいませんね。あまりにも有名で、謙虚なんです。今の創価学会のやっているようなものではないですよ。心のきれいな人達は、例え貧乏でもりっぱな人がたくさんいる。だから、金額の多寡や地位が人間の値打ちを決めるんじゃないんです。 - - - 」(昭和四十八年夏、長野県熊の湯の自主研修会)

次に高橋信次著「人間・釈迦」第一巻偉大なる悟り、より引用する。

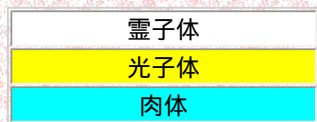
「 - - - このために、あの世のボサタ - (菩薩界の人) にしても、下界に住みなれるとしばしばその現実に幻惑されて役目を果たさず帰っていく。あの世に戻ってから「シマッタ・・・」と後悔するのである。如来と称する人のなかでも、そうしたことが間々、あるのである。それほど、この色界(現実社会)はむずかしいところである。また衆生済度の心に燃えながらも、誤った方向に、人をひきつけてゆく場合も、しばしば起こる。近くでは日蓮がそうである。日蓮はボサタ - (菩薩) である。ボサタ - の心は、本来、広いものである。広くならなければ、ボサタ - の世界に住むことができない。その日蓮が法華宗を広めることに急なため、他の宗派を排撃した。この無間地獄、禅天魔とって既成宗団を激しく批難した。 - <中略> - このように、いくつかの間違いを犯した。日蓮は、あの世に帰ってから、約六百余年、現象界でつくり出した陰影のアカを落とす修行に励むことになったのである。 - - - 」

日蓮は六百年余り地獄界で魂の勉強をされることになったと、高橋師は明らかにしたのである。それでは本論へ入ろう。



「人間は三重体」

人間のからだは「肉体」と「光子体」と「霊子体」とから成り立った三重体である。図示すると次のようになる。

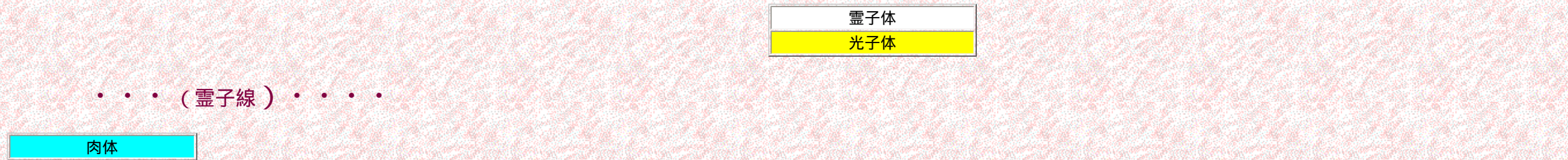


「光子体と霊子体」を分かり易く説明すれば、幽体離脱をした時の「からだ」、あの世での「からだ」と言える。「幽体離脱」とひと口に言っても段階があり、人家の屋根の高さぐらいの幽体離脱から、宇宙大(宇宙即我)の段階まである。

高橋信次師や園頭広周師の幽体離脱は宇宙大だが、段階は違う。一般的な名称として「幽体離脱」という言葉で述べたが、高橋師は「原子肉体と光子体の分離」という言葉で説明した。図示すると次の通り。

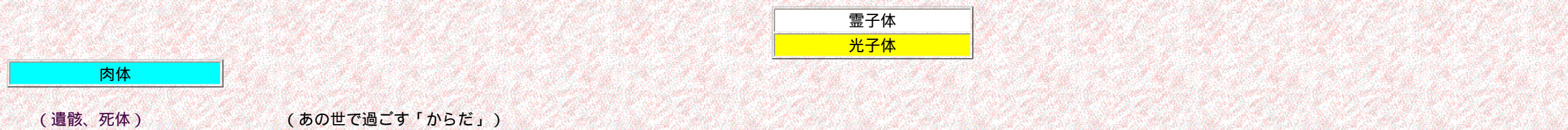
幽体離脱

「幽体離脱」は、肉体と（光子体、霊子体）が霊子線で結ばれているので、禅定や瞑想が終わると普通の状態に戻る。



死

「死」は、霊子線が切れるため生き返れない。死んだ人が再び生き返ったという巷の話は、霊子線がつながっていた状態である。



「人間性の段階」

神の前に人間はみな平等だが、人格（霊格）としての人間の段階は厳然としてある。仏教的に言えば下位階のほうから「幽界」、「霊界」、「神界」、「菩薩界」、「如来界」と五つに大きく分けることができ、この五つが天上界（明るい世界）である。

「幽界」 自分さえよければ、人はどうでもというエゴの世界。人類の三分の一の人達。

「霊界」 人に与えたものが返ってこないと気持ちがスッキリしない世界。

「神界」 人から損害を与えても非難しない世界。あの世とこの世を通して、一億数千万人。法然、道元など

「菩薩界」 心は愛と慈悲に満ちて、地上界、天上界の人達を救っている。この世とあの世を通して二万人。 ペテロ、パウロ、日蓮、親鸞（菩薩界でも下位の段階）等

「如来界」 宇宙は我なり（宇宙即我）と悟り、一切の執着から離れ神と表裏一体の世界。あの世とこの世を通して四百二十五人。イエス、釈迦、モ - ゼ。

高橋信次師は、「如来界」より上段階の「宇宙界」、真のメシャ・エルランテイであり、分身の一人は釈迦であった。園頭広周師は菩薩界と如来界の間で、来世は三百年後に「華光如来」としてインドへ出ると高橋師は予告した。

「予知や予言と、霊の段階」

C 菩薩界

B 幽界

A 地獄霊、動物霊

地表（地上）

【上の図の説明】予言、「あてごと」はあの世の霊の協力によりなされる。それには協力する霊の段階が重要になるが、例えば菩薩界の霊の協力を受けるには予言や当て言をする人は同等（菩薩界）でなければならない。当て言をする人の人間性をよく観察すれば大よその見当はつくもの。

「光子体C」は「菩薩界」の人。「光子体B」は「幽界」の人、「光子体A」は動物霊や地獄霊とする。「光子体C」は、低い段階の「光子体B」よりも高い位置にあるので、CはBより広範囲に世の中のことが一目瞭然である。これでお解りのように、幽界（光子体B）よりもっと下の（光子体A）の、動物霊や地獄霊の協力によってなされる「予言」「あてごと」と、菩薩界、如来界の人の「予言、予告」とを比較した場合、一方は当たり当らなかつたり、他方は正確無比となる。霊能者、拝み屋さんと言われる人は概して、霊格は高くないので、これらの人の「お尋ねごと」の回答がが当たったり外れたりするのは、このような理由によるのである。霊能者や拝み屋さん的人格（霊格）がどうかと言うことを、よく見て欲しい。その判断基準は金に汚ない、派手な服装をする、暗い、冷たい人柄、威張りたがる、気分がコロコロ変わる、女性問題をいつも起こす等の常識的に考えて、これは変んだという場合は、まず動物霊や地獄霊の協力による霊能とを考えて欲しい。立派な霊能者は暖かく、さわやかで、それでいて常識的とは思いませんか。

Home

幽霊とは、まさに、あの世の霊である。幽霊を見たと言う人は、霊視したと言うこと。普通、一般の人は「あの世」の霊を視ることはできない。でも、中には何度も視た。或は、よく視ると言う人もいる。どうして視える人もいれば、視えない人もいるのだろう。

それでは、物を見るとはどういうことか考えてみよう。

「なぜ物に見えるのか」

「簡単なことさ。眼で見たものは神経線維を通して脳に伝えられ、脳が識別する。子供でもそれ位のことは知っているよ」

という声が聞えて来そう。ところがそうではないと最初に申し上げたい。物を見る時、目に見えたものは神経線維を通して脳に伝達される。そして、伝達されたものは脳から「心・意識」に伝えられ、「心・意識」がそれを確認する。例えば、赤いトマトを見たとする。トマトの映像は神経線維を通して脳に伝わる。脳は「心・意識」への発信装置であり、伝えられたトマトは「心・意識」が「トマト」と確認する。脳が織別の判断をするのではなく、「心・意識」が判断するのである。現代医学の理論とは全く異なるが、このことを理解していただかないと先へは進めません。図示すると、次のようになる。



頭脳でものを考え、頭脳で記憶することは誰でも知っている。この大常識を否定しようと言うのである。高橋信次師は、この大常識を否定修正した。どうも、天上界の「困りもの」のようなのだ。もう一つ天上界の「困りもの」がある。ダウインの「進化論」の問題。「時間とともに進化するのであれば、オリの猿が「ここから出して」と交渉するのがいても可笑しくない」と一笑している。平成六年の秋、ヨロッパで四百万年以上前の最古の人骨が見つかったと報じた。高橋師は、三億年前の人間だろうと現代の人間だろうと、全く同じですと。勿論、子供と大人、身長の高い日本人と、身長の高い西洋人、鼻の低い日本人、高い西洋人といった特徴はあっても肉体的特徴は同じというのである。どんなに古い人骨が出土しようと驚ろくにはあたらない。なぜもっと古い人骨が出ないかという、この地球はこれまでに七度の大規模な天変地異によって奥深い海中や土中に埋没して見つけれないだけのことである。

サテ、脳の問題へ戻る。脳はコンピュ - タ - の回路にすぎないということ。コンピューターで、記憶するところは、ハード・ディスクやフロッピーやテ - プである。人間が記憶するところは、心・意識である。脳は心・意識へ情報を伝える発振回路（通路）というわけ。物が見えることを図式化すると前に述べた通り。ここまでは、普通に物を見る時の話。これからは、目に見えないはずのあの世（四次元）の霊がなぜ見えるのかと言うお話をしよう。幽霊はあの世の霊だから、見えないのが普通である。この世のトマトなら百人が百人全員が見える。幽霊は殆んどの人が見ることはできない。そんなものばかりが見えたら、いやになる。見えなくて有り難いと思う。

「霊視（霊眼）はなぜできるか」

あの世の霊を見るには、あの世の霊の協力が必要である。肉体的な「眼」では、あの世の霊は見えない。それでは、「あの世の霊の協力」とは何かを考えてみよう。あの世の霊の手助けとは何か。あの世の霊」とは「光の天使」、地獄霊（暗い世界の霊）や動物霊である。これらの霊の協力があるのである。「協力」というと聞えがいいが、協力とは「光の天使」のみに使いたい言葉。地獄霊や動物霊には「憑依」という言葉にしたいくらい。「憑依」という言葉を辞書で調べると「とりつく」とある。「とりつく」は光の天使に対しては失礼。それでは、どの霊が協力するのだろう。

どの霊が協力するかということは、「こちらの側」によりけりなのである。「こちらの側」とは、こちら側の人間性というか人間の質と言ったら良い。どんな霊が協力するかはこちらの人間性、質によりけりと言い換えることが出来る。幽霊が見えた人、つまり霊視した人の心によりけりなのである。

1) 人格的にも立派で、愛深く、さわやかな人には明るい世界の天使の協力による霊視。

2) じめじめとして暗い性格、情欲に狂う、金に汚ない等の人には、動物霊や地獄霊の憑依による霊視。

これは「類は類をもって集まる」という法則である。「波長共鳴の法則」とも言う。「同類」なのだから、滝や行によって霊能を得ようという「欲念」の人に光の天使が協力するだろうか。そういう人にはその人にピッタリの動物霊、地獄霊が協力する。その人をよく見ることである。その人の人間性、人格を観察すること。おかしい人はその内に必ず馬脚をあらわす。図示すると次のようになる。



● 高橋師の「ことば」から ●

「憑依」――「人の心が悪に支配され、動物のような本能、感情に支配されてくると、動物霊が近ずき、人の意識を占領し、二重、三重人格をつくっていく。また、地獄に堕ちた地獄霊も憑依する。怒りっぽい、ぐちゃっぽい、衝動的な性格者、自閉症、ノイロ - ゼ等、分裂気味の人は大抵憑依している。憑依から抜け出すには、心が平静のときにその原因を取り除く努力が必要である。執着にかたまった心をほぐすには肉体的な運動も効果がある。」

特別な、あの世の霊を見る使命を持つ人は別にして、多くの人々が暗い方の霊の協力である。しかし、特別な使命を持つ人とは言っても特別な使命を持つ人がそんなに多くいるとは思われない。最近では、テレビ番組で、女のタレントさんが出演して「あそこに霊の姿が・・・」とか「顔が・・・」とか、霊のスペシャル番組が放映される。得意げに指をさしながら説明をしている出演者の表情をよく観察して欲しい。底ぬけに明るそうですか。タレントさんの話が出たので「金縛り」にも少し触れよう。

「金縛りとは何んだ」

ロケや取材で、色々な旅館やホテルに泊まった夜、寝ていたら金縛りにあったという話をテレビでよく聞く。これもあの世の霊の「しわざ」である。「しわざ」と記述したように、暗い霊、地獄霊である。明るい霊は、この世の人が困るようなことはしない。これも「類は友を呼ぶ」法則の通り、金縛りにあった人に問題があるということ。暗い心の人に暗い霊である。

「暗い心」とは何か。たとえば、悲しみ、恨み、悔しさ、嫉妬、異常に強い欲望、悩み、生意気、わがまま等の暗い考え方があったということである。暗い心は他に何があるか自分で考えて下さい。暗い話ばかりではいやになるから、今度は、幸福になる「明るい心」を列記してみよう。

感謝の心、調和の心、愛、慈悲、敬虔、謙虚、勇気、努力、自信、報恩、人のためになる、反省する、許す心、相手を理解する、広い心、すなお、誰とでもすぐ話ができる、いつでも良く眠れる、明るい所が好き、足ることを知る等である。明るい言葉は、記述するにもキーがすすむ。やっぱり良いもの。金縛りによくあう人は、自分の心のあり方、生き方を反省して、勇気を持って修正することである。明るく正しく生きる人には、そこにどんな霊がようと、まったく問題は起こらない。「同類」にならないからである。「憑依」とは辞書によると「霊がとりつく」という意味だと先に述べた。そして霊の「しわざ」と説明した。「とりつく」とか「しわざ」という言葉は全てあちら側の霊が一方向的に悪い意味にと

れるが、決してそうではなく、「五分五分」で、似たもの同志と言える。

「地獄霊とは」

これまでに地獄霊とは「暗い世界の霊」と述べた。では、もう少し深く説明しよう。人間が死ぬと、あの世に帰る。人間が死んで二十一日間は、家を離れず棟などの家の周囲にいることのできる最大日数である。そして、その後の二十八日間に、生前の心の状態、生きざまによって天上界へ行くか地獄界へ行くかが決る。この二十一日と二十八日間に「四十九日」の由来である。ところが、この四十九日間に、残された人達が財産などで争いをすると、それらのことが気になり、一度はあの世の定住地へ行ってもすぐ地上の執着を持っている場に引き戻されて自(地)縛霊となる。自縛霊は場所だけではなく物にも通じ、物を持ったがために、それに執着した霊が「俺の物をどうするのか」というので凶事が起ることがある。また、交通事故死したり病死した人が、事故死した場所や病室などにたむろする。これらは死んだことも自覚しない霊である。これらはみな地獄霊。

悟った立派な人は、死を自覚して一、二時間もしないうちにあの世の世界に帰って行く。高橋師の講演会の「現証」の時間に、何百年も死んだことを自覚しない霊の証明が、いくつも残っているが、霊が「オレは死んでいない」と言いはる。たとえば、車の事故死によって急激に肉体と光子体の分離が起こる。つまり一瞬のうちに急死すると、死んでいるのに死んだことも自覚せず、そこを通行する同類の人にヒョイと憑依して、次々と同じような事故死が起ることになる。「俺が生きていることを教えてやろう」と考えたり「俺を助けてくれ、救ってくれ」と救いを求める「ふらち」な困った霊もいるのである。自殺の名所、事故多発地はこのようにして起る。

しかし、どんな場所であっても、心が調和され、安全運転を心がける人には問題は一切おこらない。しかも、地獄の住人の行動範囲は限定されている決りだから、そこに近づくないようにすればよいということになる。高橋師はいつも「さわらぬ神にたたりなし」と教えた。自殺の名所、事故多発地、淹場、墓地、などには、みやみに近づくのが良いのかもしれない。だが、何度も言うように、愛に満され、心安らかな人には問題は一切起らない。これまでの説明は地獄霊、暗い世界の霊の話である。地獄界とは、自分本位、欲望の虜となった執着心がつくり出した世界なのである。

Home

「地獄の霊とはどんな人達」

< 地獄界の諸相 >

修羅界

栄達を望み、そのためには平気で人を陥れ、自分の利益のためには人がどんなに傷ついても平気である人、

闘争に明け暮れている人、常に人を争わせて面白がっている人、闘争対立の心をもつ人、常に心の中に争いの心を持つ者のいく世界。信仰することによって争いを生みだす者達の行く世界。

餓鬼界

金銭欲の強い人、この世に未練や執着を持つ人、足ることを知らず常に不足の思いを持った人、いくら食べても、

いくら持っても満足することを知らない欲望の塊りみたいな人が行く世界。

畜生界

動物と同じような性格を持った人、ねちねちと執念深い人
見境なく性欲に狂うひと、人をだます人、動物の本性まる
だしの者達の行く世界。

煉獄

常に心の中に闘争と破壊の渦巻いている人、そしる人、怒
る人、ひどく悲しむ人、うらむ人、偽善者、エゴイスト
狂思想者、狂宗教家。

無間地獄

集団で闘争を計画したもの、戦争の計画者、権力を持って
大衆を間違った方向へ指導した者、間違った教えを説いた
宗教家達の行く世界。ヒットラ - 。スタ - リン等。

魔王

三億六千数百年前、エルランティと共に飛来した大天使の一人、ルシフェルは天上の世界に帰ることなく地獄の帝王（サタン）になった。

本論へ戻る。「幽霊」だが、夏になると四ツ谷怪談などのヒュ - ドロドロがテレビや映画でおなじみ。怪談ものの主人公達は、恨みや怨念に燃えてカタキに復讐するというのが大方のあらすじである。復讐に燃るといのは地獄の暗い心だから、幽霊は、地獄霊である。幽霊が、暗い青白い姿で出てくるというのも、「光子体」が暗いからである。光子体が暗いということは、心（意識・想念）が暗いからである。

一方、光の天使になると心が調和されているので、その調和度によっては淡いゴ - ルドカラ - は強くなる。エルランティである高橋師は、まさに「光の化身」だったと霊視された園頭師は著書に記述している。この光子体のことを別名「オ - ラ - 」というが、心の状態を表わすものと言っても良く、恋をしている人はピンク色、怒りに燃える人は暗赤色、暗い心の「灰色」や「青白い」。心安らかな調和した人は淡い金色（ゴ - ルドカラ - ）だと高橋師は教えている。心の状態をオ - ラ - （後光・光の量の区域）として見る事が出来るので、もし、会社の人事課の面接官がオ - ラ - を視査できれば、応募者の人格によって採用するという夢のような話も起りうる。こうなると見せかけは通用しない。立派な人はどんな会社へもスイスイ。心だけで勝負というわけ。ワクワクする。でも、これは夢の話ではなくて、植物を利用した「オ - ラ - 測定機」や「人格（霊格）測定機」なるものが、出来るようになると予告されている。植物が、その能力があることは、次のことでも説明がつく。

たとえば、スピ - カ - から「がなり」たてるような質の悪いロックを流すと、音源からそっぽを向いて逃げるように生える。今度は、静かな旋律の良いクラシックかなんかを流すと音源のスピ - カ - ボックスにからみつくように寄りそって生える。これは植物に限らず、乳牛にいい音を聞かせて乳量を増やす、肉質を良くするという試みもある。こうして、植物センサーの機械の前に立ってもらう。機械が人間性のデ - タ - をはじき出す。それを見て、上から何人という夢のような面接が始まるのである。先づ、国会議員さんから立っていただこう。戦争を始めたり、ワイロをもらうような議員さんはいらない。

● 高橋師の「ことば」から ●

「 怒りの心は炎に包まれ、赤い光が体から発散しています。愚痴の心は、灰色がかった暗い色が出ています。恋愛に心を乱し、理性が働かないときは、ピンク色が発散しています。人を呪い、野心や欲望に燃えているときは、黒色かねずみ色に変わっています。一秒一秒の心の動きに後光の色彩とその量が変化します。それは全く、大自然の天候と同じように変化してゆくものです。心の美しい人びとが心を調和しているときや、正しい心の教えを説いているときは、過去世のその人の顔と、現世の顔が写真の二重写しのようになり、光子体からは体全体にわたって光明に満たされ、後光が放射状に発散されています。後光は次元の異なった世界の段階を反映して発散されていますが、それらの後光は、そのまま、本人の死後に行く世界をも表しているといえます。光の量が小さいと上階段に行くことは出来ないということです。これらの後光は、人生において自分自身がつくり出した心の調和度によるものであり、決して他人のせいではありません。」

Home



「火の玉の謎」

火の玉を見た人は、霊視したもの。火の玉は光子体である。人間が死ぬと、二十一日間は住んでいた家の棟などに自由にいることも出来る。この世に八十年も九十年も生活して来たのだから、友人知人にお別れに行くことも、気にかかることもあるだろう。そんな時に、光子体（別名＜魂＞とも言う）の姿で飛んで行く。あの世は時間、空間はなく、思えば即の世界だが、地上界には地上界の法則があるので、ヒュルヒュルフワ - ッと飛んで行くように見える。この飛んで行く「火の玉」の色だが、暗い灰色や青白い色の火の玉の場合は、低い霊格の人、淡いゴ - ルドカラ - なら高い霊格の死者のものと言える。あの世の次元のものだから、壁や障害物をス - ッと抜けて行く。壁があって、立往生するようでは「火の玉」ではない。この世のもの。霊視と肉眼視は、特に暗い夜の場合は区別がつきにくいだが、霊視である。「暗い夜道の雨の日に、一人で車を走らせていると、女の人が立っていたので車に乗せたらいつの間にかいなくなっていた」なんて言うミステリアスな話を聞くが、これも幽霊の霊視である。この世には原因のない不思議はなく、必ず説明できる理由がある。この世の人間ならドアを開けて飛び出さない限り、突然いなくなるなんてことは絶対に有り得ない。この話しも、場所は夜道であったり墓地のそばが殆んどだが、道路なら交通事故、自殺、殺人、ゆき倒れだろう。墓地の場合は自殺、殺人以外だと、次のことが考えられる。

日本人はこれまで、死ねばお墓や仏壇の中に住むと、永い間に教えられてきた。そのために、お墓や仏壇が死後の住みかと信じてきた人は、本当にそこにいる。「あの世は心のままの世界」だから、信じた人はそうするのである。これはお墓に暗い霊がいたということであり、このような執着した霊のひき起す現象である。人間は死んだら、あの世の天上界へ還るのが正しいのだが、霊の中には墓や仏壇や事故死、自殺などの場所をすみ家としている「困った霊」もいる。国民が考えを変えなければ、これからも「困った霊」が増えていくことだろう。「困った霊」を一人でも無くすには、多くの人が正しい生き方、人間として知らなければならない原理・原則を学ぶ以外に道はない。「正しい法」を学んだ人達が、地上界の生活を終えて「あの世」へ還り、また、次の世代の人が地上界に出て「正しい法」を勉強する。これを繰り返して、地獄の足場をくずしていく以外に道はない。廻り道のようなのだが、コツコツ一歩一歩、これ以外にない。習慣、生き方、ものの考え方を変えていくには容易ではない。だが、やらなければならないのなら、それは早い方が良いのである。

「コックリさん」

コックリさんは子供の遊びとして、新聞やテレビで話題になった。コックリさんをやっていた子供が、意識が覚めず数日も昏睡状態が続いて、廻りの人達は大騒ぎしているというものである。コックリさん遊びを再現すれば、次のようになる。コックリさんとは「狐狗狸」と書く。狐はキツネ、狗はいぬ、または天狗、つまり人間の地獄霊。そして狸（タヌキ）である。

子供が数人集って、三十センチほどの竹を三本ヤグラに組んで、上にお盆をのせる。お盆の上に右手を軽く置く。部屋にそれぞれが円く坐わり、お盆に手を当てている子供が「コックリさん、コックリさん」と呼ぶ。部屋はカ - テンをしめ、暗くする。今でいう「招霊」である。昔から霊視する人がいて「狐狗狸」と名付けたのだらうが、まさしく狐や犬や狸の動物霊と人間の地獄霊である。狗を犬または天狗（テング）と述べたが、高橋師の「ことば」から「天狗」について参考にしてみよう。

●天狗について●

「 - - 研修会場は天狗の多い場所であり、禪定中に大きな体の、大きく長い鼻をした天狗がよく側に来ていましたが、悪いことはしませんでした。彼らの顔は、天狗のお面とそっくりです。天狗を霊視した者は多勢いました。」『心の発見』

天狗というのは現代人にとっては童話か、昔ばなしの中の創作とばかり思っていたが、天狗のお面そっくりの天狗があん世の世界にいることを高橋師は明らかにした。昔から霊視のきく人がいて、口伝されて行ったものだらうが、その観点から「昔ばなし」を再考するのも興味ある。お弟子さんの中には霊視する者が多勢いたので、「霊視した者は多勢いました」、と書かれている。

<天狗界の住人>

「一八〇〇年頃より以前にはあの世の「仙界」や「天狗界」の住人達が、肉体修行の実力試験のためこの現象界に姿を現わし、人間を連れ去って行く者が多かった。そして今度はその人間達をもどすことができずに、大変な騒ぎを起こしたことがあった。その事件のため、実在界の支配者でる上段階光の指導者や、大指導霊達によって、その力を封印されるということがあったのである。しかしその取り締まりのため、最近はそんないたずらもなく、現象も起っていないはずである。このように、肉体行の業を修正するために生まれてきた神仏の子も、この現象界で感わされることが多く、正法を悟らず、遂に動物霊に憑かれて、自から不幸を作り一生をすこしてしまう人が多い。」『心の発見』高橋信次

「霊界から神界の裏側には仙界や天狗界があり肉体行によって法力だけを学んでいる。ヨ - ギス - トラ、日本の修験者達が多く、他人に対しては慈愛が少い者達の世界。ここの住人はこの地上界できびしい山中修業を行った行者達が多く、相変わらず厳しい肉体業をやっており、苦しみから解脱していない自我の強い者達が多い。」（高橋信次）

神話とか昔ばなしは靈感、直感によって書かれたものだから、靈感、直感によって理解しなければならないが、M・トケイヤ - 氏の『ユダヤと日本謎の古代史』の中で、「長い鼻をもった赤ら顔の異民族が天狗の伝説として残ったのではないかと指摘する人もいる」と書いている。日本族の肉体的特徴と異なり、赤ら顔の高くて長いカギ鼻を持った異民族（ユダヤ人）の中には悪いことをする人がいたり、言葉と習慣の違いから不協和音が出た時期もあったかもしれない。それは迫害というユダヤ民族の、うらみ、つらみの一つ一つが、他民族とは相入れない時代があったと考えてもおかしくない。だが、そのうちに調和し習慣と生活様式の中に ” ユダヤ ” が残っていったのだろうか。日ユ同祖論を展開するつもりはないが、高橋師は「天狗」について、これらの「ことば」を残していることを伝えたい。

先へ進む。「コックリさん、コックリさん」と呼ぶということは、「キツネさん 犬さん タヌキさん天狗さん来て下さい、いらっしやい」と呼んだのだから、あの世の動物霊や人間の地獄霊が来た。あの世は時間空間がないから、呼べばすぐに現象化されて本当に来る。どこからでもすぐに来る。あの世の霊は喋ることは出来ない。動物霊も地獄霊も肉体を持っていれば、「ワンワン」とか「キャンキャン」とか「オイオイ」と声で合図をできるが、肉体を持たない「霊」だから、何かを知らせる時には、物を動かしたり、音を立てることで知らせようとする。コックリさんが来ると、三脚架がピクピク反応することになる。この現象を確認した後に伺いごとをする。三脚架が上下する回数で吉凶を占ったり、回答を得ることが出来る。或いは三脚架の下に紙を敷いて、その紙に数字、ひらがなの五十音字を書いておき、三脚架が移動して行くことで回答を得るのである。外国ではウイジヤ盤というコックリさんに似た器具があるようだが、コックリさんをご存知ないむきもあるうかと述べたが、こういうことの是非は言うまでもない。

あの世の霊にとって、この世は全てお見通しである。高橋師は映画にたとえた。映画を見る時、スクリ - ンに映ったスト - リ - に感動して泣いたり笑ったりしながらひと時を過ごす。観客が「あの世の人」でスクリ - ンの映像が「この世のこと」と考えて欲しい。スクリ - ンに映っている「この世のこと」は、あの世の人である観客はわかる。でも、観客はスクリ - ンの登場人物に語りかけることも注意することもできない。これと同じように、あの世の人はこの世のことがわかっていながら、この世の人に注意をしたりものを頼むことも出来ない。一方通行である。

例えば、「この世」の息子夫婦がケンカばかりして仲が悪いのを、亡くなっているオバアちゃんが心配して見ているとする。「いいかげんにして仲良くしなさい」と注意をしたいが、どう伝えようかとオバアちゃんは悩む。どうすることも出来ずに涙ながらに眺めているだけ。あの世には、あの世の生活があり、オバアちゃんは気掛かりで気掛かりで、安心してあの世の生活が送れないことになる。この世も同じで、心配は頭痛のタネで安心できない。これが、あの世とこの世との関係であり、映画と観客の関係によって、おわかりになると思う。

ラップ音とはドアをたたくような打音である。階段を登る音、廊下を歩く音も同じ。この世の人間の動作による音なら説明がつくが、何にもないのに音がするというのは、現代の科学では解明できない。この世には原因のないものは何も無い。必ず理由がある。これも、あの世の霊のなせるもので、低い、次元の霊である。あの世のことに無知なこの世の人間に対して、高い次元の霊がビックリさせたり、驚かせたりするようなことを果してするだろうか。高い次元のものは、決してしない。外国では、はなばなしく音をたてて出てくるものもいるようだが、このような困った霊が出ないようにする為にも、これからの我々が、よくよく気を付けねばならない。正しい人生の生き方、正しい心の持ち方、宇宙やあの世の原理、原則をしっかりと勉強した人は、後生の人にこんな迷惑は掛けない。廻り道のようなだが、一步一步正しい法則（正法）を知る以外に道はない。

Home

ボルタ - ガイストとはドイツ語で「騒々しい幽霊」を意味する。騎子や四、五十キロの家具がいとも簡単に床の上を五十センチも滑って移動したり、調度品や食器が宙に舞って飛んだり、人間の体が宙に浮かび上ったり、常識では考えもつけないことが起こる。これをボルタ - ガイストと呼んでいる。これも、人間の暗い、地獄の霊（悪霊）のしわざである。四次元の世界（あの世）からの霊の働きかけが原因だから、物質界（この世）の重量とか距離、空間というものは一切関係なく、重量が百キロ、千キロであろうと、長さが何キロメートルあると、それが立方体であろうと球形だろうと関係ない。この世的な考えでは、あの世のことは推し量ることは出来ない。ただし、地獄霊の能力は光の天使の能力に比べれば微々たるもので、たかだか何メートル、何十キロ程度だが、光の大天使のモ - ゼが海水をせき止め海の中道を作って人を守ったように、その能力は偉大である。それにしても低次元の地獄霊にはまったく困り果てる。

その中の一例は、腕をさすりながら「オ - 寒い、地獄の霊ですからね。」と身の毛の立つ仕草をする。そして、笑いながら「夏の暑い日には、地獄霊を呼べば冷房はいりませんよ」。聴衆者はド - ッと笑う。そして、「これが地獄の世界の実態です。私達人間は寒くするのも暖かくするのも自由自在です。自分の心がそうします。寒くも暖かくも自分がするんです。こうして、私達は彼等に正しい生き方、心の正しいあり方、「正法」を説いて、こんな暖かい世界もあるんだよと教えます。」そして「霊」に向かって毅然と「ウソをついてはいかん！全部わかっているんだよ。私が誰れだかわかるか。反省をして自分の悪かったことを詫びて。もっと寒くしようか。もっと寒くすることだって出来るんだよ。どうだ。ソ、ソ、ソ、ソ、悪かったことを心の中で神にわびて - - 中略 - - 」。憑依している地獄の霊をとった（除霊）あとで、「はい、オバちゃん目を開けて下さい。どうですか。」

憑依されていた登壇者の七十過ぎのオバあさん「ポカポカと暖かいです」

高橋師 「腰も痛かったですね。」

登壇者 「ハイ。痛くて痛くて、いつもイライラしておりました」

高橋師 「オバちゃんねえ、随分と神様が好きなようだけど、神さんより『おかみさん』（註・奥さんの意）でいて下さいネ。心が一番だいじ。心も丸く、思うこと行うことの一つ一つを「八正道」というフィルタ - にかけて<中略>。ハイどうもありがとう」

このビデオでは、登壇者に憑依している地獄霊を出して、登壇者の口（声帯）を通して地獄界の実態を語らせるというもの。現象の証明ということで、「現証」と名づけられた一時間半の間に、登壇者数名に対して行われた。このように除霊をしてもらいながら、次にはまた別の霊と一緒に来ている人がいた。なぜかと言うと、先の霊は離れたが、その人の心が変らなかったために、また別の霊に憑依されて次の地獄霊と同行ということになったのである。いくら除霊をされても、心が変らなければ、するだけ無駄。除霊の原則は「除霊をして、よくなったら生き方を変えるかということを確認すること」、である。サテ、この例のように、暗い世界の住人が憑依していると、体も寒く、いわゆる冷え症という状態をつくり出す。

風邪をひいているとか、体の調子が悪く、なんとなく、ゾクゾクするというような、はっきりとした原因もなく、夏の厚い盛りに厚手の下着を重ね着しないと、どうにもたたまれないという、常識から考えると、チョット変んだという人もいる。余りにも極端な場合には、地獄霊の憑依が考えられる。冷たくて寒い暗い地獄霊の憑依だから、憑（つ）いている間は「冷え症」ということになる。憑依というのは、四、六時中あるものではなく、ついたり離れたりしているので、離れている時には「冷え症」を感じないはず。冷え症の一つは地獄霊が原因だと述べた。地獄霊の原因というよりは、類は類をもって集まるの法則の通り、冷え症の人の心のあり方、生き方に問題があるわけだが、なにも女性だけが男性より生き方に問題があるわけではない。どうして女性に多いか説明しよう。

● なぜ多い女性の冷え症●

「なぜ多い、女性の霊媒、拝み屋さん」

霊媒や拝み屋さんや、東北地方の”イタコ”と呼ばれる人になぜ女性が多いかということと、冷え症が女性になぜ多いかが同じ理由なので、同時に説明したい。

「出産とあの世とのかわり」

子供を生むことは女性だけの持つ特性である。男がいくら望んでもそれは出来ない。たとえば、この世の成人男女が縁によって結婚をした。夫婦生活が調和され、受胎をする。すると夫婦に縁のある子供の霊（魂）が天上界で待機していて、妊娠三カ月になると胎児を支配するために下生（げしょう、降霊、天孫降臨）する。このように、女性は妊娠、受胎、出産を通して、あの世の世界とはツウツウなので、霊的に感応しやすいと言うわけである。このために、冷え症は女性に多い、霊媒、拝みさんが男に比べて女性に多いという理由なのである。女性は男性と違って、生理的、肉体的な特性によって冷え症は多いのだという声も聞えそうだが、神様が女性だけに生理的なハンデを与えて冷え症をおつくりになったはずはない。その証拠に、廻りには暖かい手や足の人を何人も知っている。高橋師は愛のある方だったから、記述にも控え目な思い遣りのある書き方、講演をしておられるが、ウェブ・マスターは愛が無いので、何んでもズバリと一刀両断にする。このような反省を始めると次のことを思い出す。

ある時、園頭師が高橋師に質問しようとした。その質問の内容は何かといえば、それは、園頭師が宗教団体「生長の家」の本部講師の時、次のような問題が生じ、疑問に思うことがあった。生長の家の講師や指導者達は、会員が個人指導を受けると、「夫婦仲が悪く夫婦生活がうまくいかないから、子宮ガンなんかになる。」などと、みんなの前でズバリと指摘する。すると、相談をした人は、みんなの前でハジをかかされた、愛がない、もう二度と行くもんかということになる。これを園頭師は、高橋先生に質問しようと思った。すると高橋師は園頭師の心を読み、何も尋ねないのに、「あなたの質問をイエス・キリストに答えてもらいましょう」と言って瞑想した。すると、高橋師の顔がキリストの顔に変化して「愛のない人に、心と肉体の法則を教えるはいけません」とイエスは教えて下さったと、園頭師は月刊『正法』に詳述している。愛が無ければ知識として教わったことを、スバリと一刀両断に裁いて得意になりがちである。そのために、愛を説かれたキリストは、「愛の心の無い人には、心と肉体の法則を教えるはならぬ」という言葉になったのである。

Home

● 霊能者を正しく見よ

霊能者や、東北の”いたこ”といわれる人は、ある人の霊をいれて、生前のことを語らせたりする。人の霊を「いれる」という人がいれば、その正否の判断は、その霊と招霊を願う人しか知らない事を語るということも一つの判断の規準だが、その霊が目的の人かどうかは、見えぬだけに、注意が肝心である。

まず第一に、目的の人の霊を入れると、顔、奮闘気、しぐさが似てこなければならぬ。そして、生前、沖縄の方言しか喋っていなかった人が、たとえば東京の霊能者だった為に、東京弁で喋るようであれば要注意である。手が左ききであったのに、さかんに右手を使う等の、判断材料は多くあるはず。もし、その人の”オハコ”の歌があれば、「大好きだった船頭小唄を歌ってください、お父さん」などとやって見るのも一つの方法で、歌いっぷり、節まわし、特徴をよく観察してみることである。目的の人そのものでなくてはいけない。ダメされてはいけない。霊能者達にも生活があるので気の毒とは思うが、罪をこれ以上重ねさせないためである。

ところで、最近は何セモノが横行する時代で、「目的とする人を入れると顔まで似てきます」と記述したが、ある所に、イエスやモーゼらしき顔にクルクル変るといっている人がいる。イエスの話になるとイエスの顔に、モ - ゼの話にはモ - ゼの顔。高橋師が生前、「お釈迦さまは”耳たぼ”がこんなに大きくて - - - 」という講話があるが、その人がお釈迦様になり切って話すと、耳たぶが大きく長くなって、お釈迦様らしい顔になって話をする。このような事が起るのでインターネットで公開を急ぐ理由。現代は、高橋師が「正法」という人間の正しく生きる道、神理をお説きになったものだから、地獄界のサタン達にとっては困らしい。[正法]が拡がると、地獄の足場がなくなって、暗い世界の崩壊につながるものだから、彼等も躍起。混乱させようと懸命。光によって暗闇は消えるので、彼等によってはまさしく恐怖である。それで、あの世の魔達が協力して、その人の顔を変化させ、廻りに集って来る人達を信じ込ませて、誤った方向へひっぱり込んで混乱させる。サタン達は、モ - ゼの時も、釈迦、イエスの時も出て来て、混乱させたい。彼等はモ - ゼも釈迦もイエスの顔もよ - く知っているものだから、顔を変化させること位は、簡単。このような「魔の跳梁」を見破るためには、その人を正しく見ること（正見）である。正しい尺度で観察していると、おかしい人は必ず馬脚（魔脚？）をあらわす。万に一つもおかしい奮闘気が感じられたら、要注意。彼等はあの世の地獄界の霊だから、この世に誕生できないので、つまり、肉体を持ってないので、目的を果たす為には、この世の同類の人に憑いて目的を果たす以外にないのである。これも、「類は友を呼ぶ、波長共鳴」の法則だが、おかしいものが憑くからにはその人もおかしい。よくよく見ることである。

● 高橋師の「ことば」●

「教祖を見たなら、八正道の物差しでまず計ってみることが、大切であるということが必要だろう。ラジオ、という機器にもピンからキリまであるように、霊媒でも、地獄霊の段階から上上階段光りの大指導霊まで、いろいろな段階があるということを、私達は悟らなくてはならないだろう。口よせにも同じことがいえる。対象への、人それぞれの冷静な眼、きびしい判断が、もっとも重要であるということである。」

● 霊能者を試みる ●

<大正ひとケタ生まれの工学博士>

特許が九百余りの人がいる。著書より引用して記述する。氏の周辺には不思議な現象がいっぱい起っている。ミカンやイチゴや口の中から真珠が出る。突然、大黒や恵比寿像が出る。蓋のしまった空のビンに酒が一瞬にして一杯になる、世間ではありえないことが次から次へと起るというのである。「世の中の現象はすべて必然的であり、偶然はありえない」と言われる。まさしく、その通りだと思う。そして、氏は続ける「ということを知るようになったのは、こういう現象を目のあたりにしてからです。ただし、普通の人間は、そういうふうには感じないし、まったくわからない。人間性の次元が上がると、すべてがわかるということを知り知ったのでした。」と結ぶ。氏は自分の人間性の次元が上がったから、わかったと述べるが、本当にそうなのか。氏の記述されている、周辺に起る超常現象を列記して見よう。

- 一、養老の滝と同じように、酒が小さなビンから一年半も湧き続けた。
- 二、ミカン、イチゴ、ブドウ、スイカや口から真珠が出た。口からでたものは三・八ミリから一三ミリに段々と大きくなった。
- 三、粗削りの大黒像が出た。削りクズもあった。恵比寿像、観音像も出た。これらのことが日常茶飯事に起る。
- 四、スプーン曲げが自由に出来る。クレヨンと紙を投げ上げると、白紙に文字や絵が瞬時に発生した。(描かれた)
- 五、忘れ物が米口から日本へ、新潟から大阪へ物体移動した。
- 六、ボールインワン、三七〇ヤードの予告ワンオン。ボールが進んでカップイン。住所のわからない家に行けた。知人の死の予告。
- 七、二階から落ちて舞い上がった。幽体離脱をした。肉体は信州にいて、生命体(高橋師の言われる光子体?)は空中を飛んで南方へ行くと、金色の竜が二匹いるところに着地した。そこは名古屋の近くの蒲郡の竹島だった。

これらの超常現象が氏の周辺に起るというのである。アッと驚ろくような、ビックリするようなことは動物霊が協力して起こす。七番目の幽体離脱の項で、「二匹の金の竜」とあるが、氏の動物霊は気になる。ヘビ・竜は地球人(三億六千年)より歴史の古い五、六億年前と高橋師は教えるが、古い地獄のヘビだと、人間をコントロールして、様々なアッと驚ろく現象を起こす。あの世の次元の霊だから、酒がビンから湧き出る、真珠、仏像などの、程度の低いことは簡単なこと。動物は人間より下位階の生命体だから低次元の協力しか出来ない。酒、金粉類似のもの、仏像など、その人の心を知っているのに、人の気を引くものを出したり、語ったりする。たとえば「余は八幡大菩薩なるぞとか、〇〇大如来とか、人の気を引くことを名乗る。人間は、神より創造、慈悲、愛を与えてある最上段階の「神の子」であるのに、このような、動物霊に支配される人の死後の世界は、動物霊にコントロールされ、配下になって苦しむことになる。まことに恐ろしい。

金粉についてだが、光の天使の協力によって出す金粉は純金。動物霊や地獄霊の出す金粉は、銅が主で、その内に黒ずんできたり、消えて消失する。長くはその状態を続ける事は出来ない。高橋師の高弟の一人、村上宥快という人の著書には、高橋師から数十グラムの金塊が出て、出たすぐには熱かったと記述している。また、高橋師の手も顔も金粉で金色に輝くという金粉現象が起った。お釈迦さまを金色に装束するのは、このようなことによるのだと解った、と園頭広周師は記述する。このような「金粉現象」は光の天使だけでなく金粉様のものは動物霊も出すので、金粉を出す人の人柄、人格を正しく見て欲しい。

Home

< 玉 という人 >

故遠藤周作氏が”狐狸庵閑話”の中で「奇妙な女」として紹介した、氏のことをカトリック司祭の志村辰弥氏が「この事実をなんとみる」と、孫引きして本に書いた。遠藤氏は言う。「私は彼女の奇跡を実験するために、あらかじめ餅菓子を
<http://www.shoho.com/newpage111.htm> (15/53) [03/05/27 12:33:55]

用意して持って行った。すると先生は、それを前において念呪し、両手で割るように私に命じられた。私はこわいような不思議な気持ちで、餅菓子を割ったとき、黒いアンコの中に魚の目のような白い真珠が現われた。そのとたん、彼女の唇からもボロボロと真珠がこぼれ落ち、数えたら合計八個である。私はそれを持って家へ帰り、色々と考えてみたがどうしても事情がわからない。私は今でも不思議に思っている。」、と。そして、先述した工学博士氏は、氏のことを次のように書いている。「昭和五十年八月二十日、先生は私の宅へ来られて奇跡を行われた。先生はまず私の前にあった、けし饅頭を指でつまんで、「これをナイフで二つに割りなさい」といった。私は命じられるままに饅頭を二つに切り開いた。すると黒いあんこの中に真珠が白く光っているではないか！私は思わずアッと叫んだ。私はいままで真珠が出ることは話に聞いてはいたが、自分の手で、自分の前で奇跡が実現するとは夢にも思っていなかった。現実に真珠を手にしながら、まだ信ずることができない気持である。この饅頭はつい先程、買って来たばかりのもので、家内が私の前に置いたものだ。それからどうして真珠が出てきたのだろう？・・・」、と。

また、園頭広周師は、氏のことをこう記述している。「私がその人のことを知ったのは昭和三十六年であった。昭和四十年十月、私は先生のところに行ったことがある。そのころ既に「生長の家」の教えでは救われないことを知っていた私は、いろいろな人を尋ねて歩いていた。（註・園頭師が高橋師の教えに帰依したのは昭和四十八年）生長の家の信者の中に、ある大学教授夫人があつて、その人に誘われて行った。そのころは先生は浅草におられた。その大学教授夫人は、銀座を歩いていて左肩が重くなってきたので、ひょいと見たら、三寸位の高さの木彫りの大黒像が乗っていたというのである。私もその時菓子箱を持って行ったが、その菓子の中から、真珠と金の大黒と恵比須の像が出てきた。どうしてそういう霊能を持たれたのかと聞いてみたら、小さい時から信心が好きで、私の記憶では十四才の頃から滝に打たれて修業しているうちにそうなったということであった。空っぽの瓶を祭壇に供えて祈られると、ぶくぶく甘い匂いがして酒がこぼれるのである。そういう霊能はふしぎだと思う気持はあつても、先生が祭っている神さまを信仰しようとは思わなかつた。異様な不困氣を私は感じていた。三回目に行った時、先生と御主人と夫婦喧嘩が始まり、いい合いされた後で、舌打ちしながら坐り直して祈禱を始められた。私は、それっきりそこへはいかなかつた。日常生活を正しくできない者は正しい神理は説けないと思っていたからであつた。」

● **霊能者の霊界旅行** ●
 ● **霊能者の霊界旅行** ●
 ● **霊能者の霊界旅行** ●

● **霊能者の霊界旅行** ●
 ● **霊能者の霊界旅行** ●
 ● **霊能者の霊界旅行** ●

昭和六十二年春のこと、同年九月中旬、マグニチュ - ド八以上の東京直下型の地震が起こり六百万人の死傷者が出ると予告をした四十歳の女性霊能者の予告が、新聞や週刊誌で取り上げられた。この女性は関西の電子器楽奏者で、アメリカで霊能をみがいたという。数年前にはテレビにも出演、涙が真珠に変わるというので評判になつたようで、ウエブ・マスターもそのテレビを視た記憶がある。それまでに幾つかの予言が適中したので、今回も適中するであろうと関係者の一人が、その女性霊能者の著書の一部を抜粋して新聞社などに郵送したらしいのだ。ある大新聞社の週刊誌にあつては、数ペ - ジを割いて大々的に報道していた。この記事を読んだとき、「困つたことだ」と思つた。饅頭の中の真珠や恵比須像や涙が真珠に変わるという「物質化現象」が事実、起きたからといって、それ以上の何ものでもない。「今から二千年前、イエス・キリストが数片のパンで数千人の飢えを満たしたことは事実です」と、高橋信次師は明らかにしたが、飢えた数千人の人を救うために、イエスの希なる霊能によって、パンの物質化現象は起きたのである。天上界の協力によってパンが物質化された。

● **霊能者の霊界旅行** ●
 ● **霊能者の霊界旅行** ●
 ● **霊能者の霊界旅行** ●

「パンによって多くの人が救われた」これは「愛」以外の何ものでない。ところが、これらの霊能者は真珠を一杯出してネックレスにでもしようというのだろうか。まったく次元が違うのである。高橋師が言っている、「その人の目的意識に合わせて行うわけです」という所に注目して欲しいのである。数十センチ程の像の物質化現象が行われたからと言つて、これは単に、そんなこともあるのか、という以外の何ものでもない。ウエブ・マスターが、そのような霊能を持っているなら、真珠や大黒の像など出しはしない。アフリカ等で栄養失調で死んでいく可哀想な子供達に、パンやミルクを出して助けたい。皆さんもそう考えませんか。

● **霊能者の霊界旅行** ●
 ● **霊能者の霊界旅行** ●
 ● **霊能者の霊界旅行** ●

● **霊能者の霊界旅行** ●
 ● **霊能者の霊界旅行** ●
 ● **霊能者の霊界旅行** ●

● **霊能者の霊界旅行** ●
 ● **霊能者の霊界旅行** ●
 ● **霊能者の霊界旅行** ●

「その後、ある大きな教団の話を聞きに行つて、光りを送つた。とたんに話ができなくなるのです。冷汗を掻いてハンカチで顔を拭き無理して話を続けようとするから、それまで話していたこととは違つたとんちんかんな話を苦しそうにはじめるのである。鹿児島の霊能者は「あなたが来られると、うちの神様は眼がくらんで出てこれないとおっしやっていますから、あなたは来ないで下さい」と断わられた。どうして私にそういう力があるのか不思議であつた。私でない私以上の力が働いていることはわかつていたが、もつとはっきり知りたいと探しているうちに高橋信次先生を知つたのであつた。」

● **霊能者の霊界旅行** ●
 ● **霊能者の霊界旅行** ●
 ● **霊能者の霊界旅行** ●

● **霊能者の霊界旅行** ●
 ● **霊能者の霊界旅行** ●
 ● **霊能者の霊界旅行** ●

● **霊能者の霊界旅行** ●
 ● **霊能者の霊界旅行** ●
 ● **霊能者の霊界旅行** ●

● **霊能者の霊界旅行** ●
 ● **霊能者の霊界旅行** ●
 ● **霊能者の霊界旅行** ●

http://www.shoho.com/newpage111.htm (16/53) [03/05/27 12:33:55]

きてゆくことが出来ないとは、なんと愚かなことだろうか。次に高橋信次師の「ことば」を引用しよう。

「現代はどうかというと、動物霊に犯されています。万物の霊長たる人間が、己の心を、己の本性を忘れたため、その黒い想念がそのような動物霊を呼び込み、とりわけ、神がかり的現象をみせている新興宗教のほとんどは、動物霊の支配をうけているというのが実情であります。」『天使の再来』

● 「霊道」 ●

高橋信次

「一般的には霊能、あるいは霊道と呼んでいるようです。霊道とは文字通り霊の道がひらくことで、芸術家などの中に、割合多くみられ、天才などは霊道をひらいている人がほとんどです。霊道がひらくと透視力とか幽体離脱、人の心を見抜く、物品引き寄せ、物質化現象など、超自然現象が人に応じて可能になります。これらは、その人が行うというより、その人の背後で手助けしている霊があり、その霊が、その人の目的意識に合わせて行うわけです。その人が全然それを望まないのに、そうした、超自然現象が起きる事もありますが、そういうことは少ないものです。なぜかという、あの世の霊は霊道者の心に合わせて行うからです。ただし、霊道者が、仮に、万年筆の物質化現象を望んだのにボ・ルペンに変化することはあります。また目的に対して時間的なズレがあったり、希望はしないが恐怖心や、心のさまざまな動きが現象化することもあります。霊道は過去世でその道に修行した人が大部分ですが、修行しない人が霊道を求めることは、こういう意味で、非常に危険です。」同じく高橋師の「ことば」より

< 霊能者・霊媒 >

「まず霊能者、霊媒といわれる人は、ほとんどの人が前世、過去世で肉体行などの荒業をやっています。今世でフトした機会に霊力や霊能を身につけたといわれる人は、ほとんど前世で、肉体行をやっています。通常にない能力を身につけますから、つい有頂天になり、自分の心がふり廻されてしまい、あの世の魔王や、動物霊のまたとない獲物となってしまいます。このような人達の末路は哀れといわれるのも、動物霊や魔王に身も心も明け渡してしまうからです。正しい法の根本は、神の子の自覚です。霊能そのものではありません。霊能は神の子の自分に目覚めたときに、二次的副作用として起こるものです。霊道の原則はこの一点にあります。色々な霊道現象を現すからといって、つまりモノが当る、病気を治す、霊力がすごい、というだけでその人を信じてはいけません。動物霊が背後にいて現象を現わすことがほとんどです。まず常識的に判断してその人の言動をよく確かめることです。その霊道現象をうのみにせず、それが本物であるかどうか正法に照らして、見る、聞く、考えてみることです。」また、園頭師は次のように言っている。

「動物霊に支配されている指導者に現れる面白い現象がある。それは異常に性欲が強いということである。また、その反対に、生気を吸い取られ顔が青白い人もある。ギラギラとした生臭さを発散するか、幽霊を見るような感じがする。ともかく眼を見るとすぐわかる。」

Home

< パ - ラ - の O 村という人 >

パ - ラ - 経営者がいる。9 3 年の春、パ - ラ - を訪ねた。深野一幸氏や船井幸雄氏が詳しく紹介されているので霊能の一端をあげる。

- ・時計の秒針を念力で止めたり、グルグル速く回転させたり、砂時計の砂の落下速度を自由自在に制御する。
- ・スプ - ンを曲げたり、瞬時に折ったりフォ - ク状に変えたりする。
- ・ボルトとナットを念力でグルグル廻して締めたり緩めたり自由自在。
- ・瞬時に電球を灯したり、ニクロム線を熱する。
- ・硬貨を大きくしたり、小さくしたり、タバコを通したり密閉されたビンから瞬時に出したり入れたりする。紙幣を空中に浮かす。
- ・ポラロイドによる念写

霊界教室

・指輪や鍵などの物体移動（テレポ - テ - ション）

・その日の来店者の名前を前日から予測。来店者に好きなことを書かせ、それを当てる。

・卵の物質化現象

・その他、アッと驚ろくことが沢山。

訪ねた時、暗い奮闘気が気になって仕方がなかった。氏は生卵の物質化現象をされるが、へビは生卵が大好きである。この項に関連して次の説明をしよう。

「 明 団」・ 玉という人

教祖 玉、昭和四十九年、玉の死後、後継問題が起こり、十三年間に及ぶ裁判が繰り広げられた。一方は飛騨に総工費三百億円以上といわれる本山を、他方は中伊豆に三百億円以上という本山を完成した。共に、週刊誌には写真入りの報道がなされ、百キロの金塊で作られたという神座が荘厳されていた。園頭広周師は月刊・『正法』に次のように述べている。「高橋信次先生は「 明 団の教祖・ 玉氏には光竜が憑依している」と云われた。その教祖が講演する前には生卵を五、六個ペロリと平らげた」、と書いている。これを証明する高橋師の記述を要約する。

「浄霊をするという人」

「私は、〇〇教団で、上級研修を終えた導士ですが、憑依霊をとることができます。そしてこの憑依霊を供養するために仏壇に祭り、〇〇の業をしております。それには、〇〇教団で与えられている ” 御み霊 ” （原著には御魂と書かれている）をお受けしていなくては〇〇業はできません。私は、” 御み霊 ” を首にぶら下げているため、あなたを浄霊することができますが、いかかでしょうか」というのは、千葉に住む〇〇教団の闘士であった。私を浄霊するというのである。三十歳近いOL風の女性で、ござっぱりした人だが、なかなか自分の宗教に自信を持っていた。私はいった。「あなたは、その霊の姿や、他の憑依している迷える霊を見ることができますか。またそれらと聞くことや話すことができますか」女性性は答える。「私は〇〇の業ができるし、” 御み霊 ” を受けていますから、見えなくとも聞こえなくともまた話せなくとも、憑依霊をとって、あなたを浄霊できるのです」、と。私が実験台に立つことになった。

しかし私が見ると彼女の腰には、大きな蛇が二巻きしている。そして彼女の頭の上に首を出している。私達のグル - プのなかには、憑依している一切の霊を即座に心眼で見ることができる人々が多勢いるため、無言で成り行きを見守っている。決して論争や否定などをする人などいないし、極端な判断をして、ひとりよがりの結論なども出す者はいない。しかし、疑問は持っている。そして、正道との違いを見るために必要があるから、納得するまで信じようとはしない。女のいう通り、うしろ向きに坐った。私に憑いているらしい霊に向かって、女は大きな声で、「オ・シ・ズ・マ・リーー」と声をかけた。そして、私の背中に手をかざしているようである。可哀そうな女性だ、と私は思ったが、今はこれ以外に彼女を助ける方法はない。いわれるままにしてやるが必要であった。彼女は一生懸命に ” 御み霊 ” を信じているのだし、たとえ私が神理を説いたところで聞くはずもない。結果が出れば、目覚めるだろう。しかし、彼女の守護霊も大分悩んでいることが合掌している私にはっきりと解る。古代印度スタイルをしたその守護霊は、私に話しかけ、申し訳ありませんと、頭を下げているのであった。守護霊も、そばにつけない状態なのである。二～三分時間が経った。

彼女は手がざしをやめて、合掌した両手をくねらせ、蛇のように身体まで動かしている。もう、そのままにしておくわけにはいかない。私は、彼女の前に坐りなおした。彼女はすっかり大蛇に憑依されて支配されてしまっているのだ。私を、浄霊してくれるはずなのに、その本人がすっかり大蛇に身心をゆだねてしまっている。その姿は哀れであった。私は彼女が可哀そうで、涙に眼が曇った。しばらくしてから、私は憑依霊にいった。「お前は、この者に憑依しているが、名乗りなさい。先ほどから私達に見破られていることを知りながら、浄霊とは何ごとであるか。自らを浄めなさい。自分の姿を、お前は自分で語りなさい。」すると彼女はさらに身体を上下左右に動かす。やがて、憑依霊は彼女の口を通して語り出した。

「私は蛇です。白い蛇です」「お前はどこからきたのか」「私は光竜の眷族で、この女を指導している。人間は馬鹿だから、こんなペンダントを、高い金を出して ” 御み霊 ” だなんていって首にぶら下げているんだ。粗末にすると罰が当たるといわれているものだから、風呂に入るときなど大事に外しているよ。・・・俺達は、金儲けをして、一大王国を築くんだ。だから、神様のためにといて、金を出させているんだ。盲信者を 欺すにはこれに限るのさ・・・。この女もそのために心がざわついて夜もあまり眠れないんだ。疲れるから昼間は寝てばかりしているね・・・。そして道場でお浄めをしているから、俺達の配下がどんどんできるってわけさ・・・。」とんでもないことをいい出したのである。私はいつて聞かせた。「この地上界の人類を、お前達のような動物霊が支配できるはずもないし、人類は、お前達ほど間抜けではない。やがて、人類は、自らの愚かさに目覚め、神の子としての自覚をするだろう。お前達も、神の子であるならば、身のほどを悟らなくてはならないのだ。たとえ人間を狂わしても、お前達もそれ以上の苦しみを受けるだろう。お前がいつまでもこの女性に憑いているなら、私は強引に引き離すだけである」彼女が信じ切っているため、困難はあるだろうが、人間は、このような者に支配されてしまうと、廃人同様になってしまう、さらに類は家族にまで及んでしまうのである。

私は、憑依霊に神の光りを与えた。憑依霊は次第に苦しくなり、自由が利かなくなっていく。身体をくねらせその力を失っていく。彼女も苦しそうだが、しばらくの我慢が必要だ。このとき、彼らの親分でもあろうか、金色の大きな竜が、ボ - ルのように大きい巨眼をぎょろぎょろさせて出てきた。長い二本のひげを交互に動かしてこちらを眺めているが、私達の心が執着から離れ、光りに覆われているため、そばに近づけないのだ。そうするうちに、光の天使で、竜や蛇を支配している竜王がそばにきて遂にこの蛇を強引に引っぱり出して連れて行ってしまった。それも、彼女の心のなかで、それが離れることを自覚したため、離れることができたのである。合掌している手の先から、憑依霊が出ると同時に、彼女の身

体は前に倒れ、しばらくは意識不明の状態が読いたのであった。涼しいところで休ませ、約十分くらいで意識が回復してきた。この光竜は、かつて天上界で鉄眼といわれた中国の僧侶が、竜王として動物霊達に神の子としての道を教えた頃の竜であったが、竜王のもとのきびしい修行に耐えることができず、地獄界に墮ちていたものである。法力があるため、人々の心を神だ仏だといって増上慢の指導者に憑いているものなのである。鉄眼は、丁度日本の角力とりで大内山といった人に良く似ている顔立ちをしているが、非常にやさしい光の天使である。その人がいうには、地上界の人間の心が彼らを呼ぶので、天上界の光の天使達はどうにも仕方なく、増上慢な心の持主には全く困っているということであった。この彼女から、動物霊が抜け去るときに、光の天使はそばに立ち、はっきりと姿を見せていたので、私達にはこの事実が解かったのである。彼女は苦しみから解放されて、昔の元気な心を取りもどし、今は、幸せな家庭の主婦として生活をしている。勿論、〇〇教団はやめ、「さわらぬ神に祟りなし」のことわざの通り、そのご間違った信仰には入っていない。『心の発見』

この記述の中で、動物霊の蛇が「俺達は、金儲けをして、一大王国を築くんだ」という言葉をはく箇所がある。そのボス光竜は 玉氏を支配。〇玉氏亡き後は、分裂した二つの教団を支配して、金儲けの手段のためにそれぞれ、三百億円以上といわれる大殿堂を完成させ、今や急速な拡大を遂げている。神の名を借りた金儲けが、そういつまでも続くはずもないのである。ところで、”手かざし”とか手から光を当てるのに、片手でかざすのから両手で行うのまで、それはもう大變。<手かざし>に似た業は、「大本」のしゃもじや扇子を使う<御手代>や、それを発展させた<手のひら療法>や<浄霊法>などである。



『教祖誕生』・上之郷利昭・新潮社によれば、

「 玉氏は「凄い熱気を感じさせる人だった」という人たちも多い。詩人の加藤郁平はこう語っている。「湯川秀樹先生が『あのひとの傍にいと暑くなる』と言っておられた。福田赳夫元総理も同じことを言っておられました。私もその経験をしています」、と。このように、熱っぽい、暑さを感じさせるという表現によってなされている。その人の囲りがいつも冷え冷えとした感じや、いつも熱っぽいという状態は憑依の特徴である。周囲まで暑さを感じさせることは自然ではない。かつての「地球発22時」という番組の中で、中村敦夫氏が大阪近郊のミニ宗教取材した。そこの信者が「うちの教祖は、とって暑さを感じさせる人だ。この前も、このように頭の上の方にオ-ラが出て暑く感じた」という事を身振りを入れて語った。オ-ラは、普通の人には見えない。四次元以降の現象であり、霊視することによってわかる。現象世界(この世)でオ-ラを知ることが出来るのは、非常にさわやかであるとか、愛に満ち満ちているとか、人格的に立派であるとかによってわかる。だから、オ-ラは熱さ、暑さを感じるものではない。

護摩をたいたり、火を燃して祈る人は、その熱気で身体が熱くなるのはわかる。そして、高熱の人や血圧の高い肥満の人が、体温の輻射熱で熱く感じるのは医学的事実だが、これ以外の現象で熱さを感じさせるのは、尋常ではない。また、『教祖誕生』によると「晩年の 玉氏は金や宝石を身に付けて奢り高ぶっていたから - - - 」という記述がある。よくよく考えて欲しい。正見しなければならぬ理由がここにあるのである。教祖のこのような心の傾向を受けて、「主座黄金神殿」の名称といい、百キ口の金魂で荘厳された神座」といい、後継者二人の、二つの教団は共に同じような道を歩いている。次はウエブ・マスターの体験談である。

「街に散歩に出た。夜七時過ぎ。突然、二十歳位の女の子に声を掛けられた。残暑とはいえ、雨あがりの涼しい夕刻であった。白ズックに短パン、片手に透明のビニ-ルの傘を持った、その娘は、著者に二、三分時間をくれという。キャッチセ-ルスの類かと思って立ち止まった。浄霊と浄血をするというその娘は、雄弁に語りかけて来た。そして、手かざしをさせて欲しいと申し出た。一通り話しを聞いた上で、「心の正しい尺度とは何か」という話を三分ほどした。その娘は、手かざしをあきらめたようで一礼して雑踏にまぎれていった。しばらく遊回して、そこを再び通った。その娘は、横断歩道を行き交う人、一人一人に声を掛けている。その娘の動きたるや、賃金を貰ってチラシを配っている人でもああは出来まい。「宗教は阿片」と言うが、盲信、狂信の哀れさを、その娘に見たような気がした。廻りには教団のグル-プと言える人は誰もいそうにない。まったくの一人であった。十分ほどして三十半ばのサラリ-マンらしき人とコンタクトが出来たようで、デパ-トの前の、刈り込みのそばで、娘は手かざしをはじめた。男の人はいかにも気の弱そうな、真面目そうな人であった。通行量の最も多い場所で、薄暗くなりかけた時刻とは言え、合掌した三十半ばの男性、そして手をかざす二十歳位の娘。私をはじめ、十数人の人達が、その情景を眺めていた。五、六分が経った。手かざしは終わった。十数人の視線を感じた、その紳士は恥じらいを見せながら私鉄のコンコ-スの雑踏にまぎれ去った。これほどまでに彼女をかり立てる宗教とは一体なんなのであろうか。このような前途有る若者達に、足かせをはめて組織の一員として組み込んでいく教団とは何か。そのようなことを考えながら、暗い気持ちで雑踏にまぎれた。だが、暗い気持ちばかりになってはおれない、早く「心の物差し」を伝えなければ、教えなければと思った。」

調和された淡いゴ-ルドカラ-のオ-ラ(後光)に包まれた人からの手かざしなら、それはそれで良い。グチ、怒り、ねたみ等の不調和な想念を持った人の暗いオ-ラの者から手かざしや、高橋師の記述にあるような動物霊や地獄霊に憑依された者達の手かざしは本当に困るのである。「道場で、お浄めしているから俺達の配下がどんどんできるってわけさ・・・」という白い蛇の会話を思い出して欲しい。”類は友を呼ぶ”という 譬えの如く、暗い心を持つ人には、あのような蛇の配下が憑依して、その人の心をコントロ-ルするわけで、これはまさしく宗教の名を借りた罪悪なのである。

園頭広周師の記述から

「ある教団では、その人の額に手をかざすと憑依霊が浮き出すという指導をしている。これは高橋先生が教えられた「光を入れる」のとは全く違うことである。子供が喘息だというのでその教団に通っていた人があった。その教団の講師が手をかざすとその子供が暴れ出す。大人四、五人かかっても押さえ切れない程の力が出るという。いくら「おしずまり」といっても静かにならない。その後はぐったり死んだようになる。いくら続けて行っても、暴れるのがますますはげしくなるだけで一向によくならないといって来た人があった。高橋信次先生は、その教団を支配しているのは動物霊であるといっていた。動物霊にも大将親分がいて、幹部講師にはその子分がつくのである。動物霊の世界では力の強い霊が弱い霊を支配する。その子供の場合は、その子供の霊が目ざめていたから、動物霊に支配された講師の邪悪な波動に、拒絶反応を示したのである。

小児喘息というのは親の心の不調和であるから、親が不調和である限りどんなに他の治療法をとっても一時よくなったように見えても根本的に治るといことはむずかしい。別に意識して調和を図ろうとしているわけではないが、子供がぜんそくで苦しんでいるのを見たりして、どうかして治さなければいけないということで子供を治療しているうちに、知らず知らずのうちに夫婦が調和して、その結果よくなったという人がある。その人は正法を知って親自身が心の調和を図っているうちに子供のぜんそくは治った。口で愛を説きながら、どのようにして教団に金を集めようかと、いろいろ手段を尽して信者会員から金を集めることを考えている宗教指導者は、動物霊に支配されているとみて間違いはない。その指導者がどんな立派なことを言ってもである。正法を説くことを使命として現われてきた光の指導霊は、神の名を利用して教団の財産をふやししたりすることは絶対にしないのである。勿論、神殿をつくって神を祭るということもない。信仰することによって何かの益を得ようとか、人の持たない霊力を持ちたいという欲望を持っている人は、本人は無意識のうちに動物霊に支配されてゆく。そういう人たちは自分で正しい信仰をしていると思っているけれども、冷静な第三者から見ると必ず非常識な理解し難い言動をするものである。



「高橋師は憑依霊を 愛の心で取り除いた」

高橋信次師は、何千人という聴衆者の面前で、人に憑いている憑依霊をよく取り除いた。一時間半ほどの講演が終わり、「現証の時間」になると聴衆者を見回す。師は憑依霊がよく視えるので、聴衆者の中から指名登壇させる。または「自分には神が出てくる」と自称する希望者を登壇させる。そして、憑依している動物霊や地獄霊を〃とった〃。憑依されるには憑依される理由がある。高橋師は間違った信仰や不調和な心のあり方が、霊を呼び込むことになったと諭され祈る。数多く残されたテ・ブやビデオの中からその時の情景を再現する。

高橋師は祈る「神よ、この者の心に光をお与え下さい安らぎをお与え下さい。実在界の諸如来、諸菩薩、光の天使、この者の当体に光をお与え下さい。この者の罪をお許し下さい」と祈り、憑依霊を除去する。或いは、「不空三蔵つれていきなさい」と、不空三蔵に依頼されて、憑依霊を天上界の修行所へつれていくこともあった。不空三蔵は、高橋師つまりお釈迦様の分身（１）で高橋師の守護霊をしていると云っていた。「私の守護霊、不空三蔵に助けてもらい、連れて行ってもらったのです。だから、私がやっているんじゃないんです」と高橋師は謙虚におっしゃる。そして著書の中でも「私は、自分の心をしっかりと正し、うぬぼれや虚栄心がないか、そして謙虚な自分であるかどうかを確かめると同時に「を救って下さい」と心に念じた、と書いている。このように、いつも謙虚であった。高橋師は、いつでも、どこでも自由自在に憑依霊を取り除いた。

心が変わらなければ、その内にまた別の霊を呼び込み余り意味がない。しかし、高橋師は憑依霊が取り除かれた後の心の安らぎと調和の素晴らしさから、それをきっかけに正道の第一歩となることを願って、憑依霊を取り除いたのである。講演会場で、そしてG L Aの本場で、色々な所で憑依霊を取り除いた。その数たるや相当なものだったと思われるが、そのうちのどれ程の人が正道を歩いているのだろうか。

● 憑依とは何か

人の心（意識）が動物霊や地獄霊、魔王に憑依さ（つか）れると、ひとりよがり、無口、多弁、ウソつき、深酒、怒りっぽい、ぐちっぽい、自閉的性格などの現象が顕著になってくる。病気の約七割は憑依によると高橋信次師は教えた。歩道を歩いていて後から自動車にハネられる。頭上から鉄材が降ってきて思わぬ怪我をすることも、同じように憑依による現象である。憑依がさらに進行すると、精神分裂になる。間違いである。こうなると自分の心（意識）が他界者（よそもの）に完全に占領され、就眠することができなくなる。また、ノイロ・ゼのほとんどは憑依によるもの。

<なぜ憑依は起こるか>

なぜ、憑依現象が起るのかと言うと、その本人の、物の見方、考え方が非常に片寄っており、欲望や執着が強いために、これと同じような心を持っている動物霊や地獄霊が、「類は友を呼ぶ」ということわざのように寄ってくるというわけ。現代では、「動物霊、地獄霊に憑依されて」という言葉を使うが、以前は「たたる」とか「とりつかれて」と言った。これらの言葉は、こちらの方は何も悪いことをしていないのに、一方的に向うの方から悪さを仕掛けてくるという意味にとれる。だが、そうではなく、こちらに原因があったという事である。生前の思念と行為から、地獄の世界に墮ちたとする。その人は文字どおり苦界にあえぐ。すると苦しさ、厳しさのあまりに助けを求め。これはこの世と同じで、もの

を頼む場合、聞いてくれそうな人に頼む。「類は類をもって集まる」というたとえの通りに聞きいれそうな人に頼むもの。

< 憑依は四六時中起るのか >

憑依は四六時中憑いているかという、通常は憑いたり離れたり、心が片寄った考えに支配されてくると憑依し、そうでないときは離れる。飲酒すると極端に人が変わるが、素面のときは真面目人間というのがよくあるが、これも憑依現象である。精神病は、その憑依時間が長時間になるために起こるもので、長くなるにしたがって性格が変わってゆき、病気勝ちになってゆく。

。

< 心の傾向性と憑依霊の分類 >

欲望が強くなると動物霊が憑く。感情が激しく動くと自縛霊や魔王が憑く。知能におぼれ増長慢になると動物霊、地獄霊が憑く。意志が強すぎ、頑固になってくると自縛霊、魔王が憑く。しかし、これらは傾向であって、内容によって憑依も多様化する。

< 憑依から護るにはどうするか >

憑依から己の意識を守るにはどうすればよいか、それには正道に適った想念と行為が必要である。何度も言うが、憑依は、向こうが勝手に寄ってくるのではなく、自分が呼び、自分がつくり出している。つまり、アンバランスな精神状態がつくっているのである。だから、オホホ、アハハと明るい性格をもつ人には、たとえ、どんな地獄霊、動物霊がいても恐れることはない。如何なる悪霊といえども憑くことは出来ないと知ることである。極端に片寄った想いがあるから彼らは集まるのである。

< 憑依されたらどうするのか >

憑依されていることがわかって、決して恐れてはいけない。自分でもおかしいと思ったら、心を常に、平静に保つように、八正道に適った生活を送るように心がけること。そうすると向こうの波動と合わなくなって、憑依現象も自然と解消されてくる。また、執着にかたまった心をほぐすには、肉体的な運動も効果がある。なぜかという、**「心身一如、色心不二」**といわれるように、心と肉体は切っても切り離せない関係であり、肉体が正常な働きをすると、心も正常になって行くからである。ところが、少しおかしいからと、お払いや祈祷で解決しようとする人がいるが、自分から造り出してしまった原因は、だれもそれを取り払うことはできないのである。自ら蒔いた種は自ら刈り取らなければならない。これは心の法則であり、神理である。さあ勇気を奮って実践（行動）のみ。

< 祈祷師や霊能者による除霊はなぜいけないか >

これまで、祈祷師や霊能者によって除霊とか浄霊ということが行われて来た。その方法で除霊してもらうと、当初は、良い結果が出たように見えることもあるが、そのうちに、以前より、もっと悪くなったという結果が多い。なぜかと言うと祈祷師や霊能者による除霊の問題点は、

第一に、これまで記述した原則がわからないからである。心の法則を知らないために、その人の心と生き方を修正できないことである。

第二点は原因を取り去らないで、麻酔注射でも打つように、憑依霊を取り除くために本人の心と行いが変わってないので、しばらくしたら又、別の憑依霊が憑いてしまうことの問題。これは痛みを止めるために麻酔注射をして一時的に痛みは止まるが、麻酔が切れると、また痛みが始まるのに似ている。

そして第三点は、地獄界の世界は弱肉強食の世界である。強い者が弱い者を制するように、弱い憑依霊を祈祷師や霊能者に憑依している強い憑依霊が追い払うために、一時憑依が取れたように見えるが、今度は、祈祷師や霊能者の憑依霊の子分や配下が、その人に憑く為に、もっとひどくなったということになる。この三つの問題点をよく考えて欲しいのである。高橋信次師は、講演会場で、そして、色々な機会に憑依霊をとったが、これは、憑依霊を取り除いた後の、さすがしさ、さわやかさを知らせ、如何に正道を歩く事が素晴らしいかを教え、それ以後高橋師の説く神理・正法を学び、現実生活の中に実践して欲しいという願いをこめて、劇的に憑依霊を取り除いた。だが、高橋師の「慈愛」をわかった人がどれ

ほどいたのだろうか。また、何でも全て憑依霊のせいにして「何か憑いているんじゃないか」という考えもいけない。そんなに簡単に憑依するものでもなく、心を明るくしようと努力している人には絶対に憑依できないものである。



「憑依されている人を救うには」

憑依されている人は、その期間が長ければ長いほど、その人の心も暗く固定化してしまっている為に、心を変えなければならないと言っても憑依霊がしっかりその人を支配し、憑依霊が念波を吹き込んでいるので頭が重いということになる。このために、憑依されている人は、自分の頭が自分のものであるようなないような、考えることが自分の考えであるのかわからないような気がいつもすることになる。このとき、憑依霊を取払えば頭が軽くすっきりとさわやかになり、本当の自分に帰還できる。そうして、正しい心の持ち方（正法）をその人に何度も繰り返し教えるのである。。勿論、一度教えたからといって急に心が変わるわけではなく、永い間の習慣、心の傾向性が働いて、暗い心になるとまたその心を縁として霊が憑依してくるので、憑依霊にもよく神理を教え、払うと同時に、また憑依されたその人にも神理を教えるということをくり返すのである。このインターネットの中の項目（目次）に「心行」「感謝の祈り」があるので、よく意味を理解し読んで聞かせることも意義がある。

「幸福になるために」

今まで長い間、あなたが不幸つづきだったとしよう。すると必ず「幸福になりたい」と思われるはずである。でもその時に、「幸福になりたい、幸福になりますように」とは思わないこと。たとえ現状は不幸つづきでも、既に自分が幸福になっている状態を心の中にアリアリと描いて「自分は既に幸福である」と思うことである。常にそう思いながら「これから、あらゆることにおいて、一層よくなる」と思いながら、これからどうすればいいかを考え、自分にわからないことがあれば専門家や経験者の指導をうけ、智慧を出して努力することが大事。現世利益を願って、念仏を唱えたり、神頼みをするのではなくては断じてない。しかし、ただ考えるだけで、なにもしなくては実現するわけがない。心はそのようにして切り替えてゆくのだと、園頭師は教えて下さっている。

< 自力のお願い >

園頭広周師は、高橋信次師亡きあと、正法を正しく後の世まで、そして世界中に伝えるべく、日本中はもとよりアメリカ、南米、ハワイ、シンガポ - ル、韓国まで、講演などで席を暖める暇もなかった。ひとえに人間愛、人類愛の宇宙の広い心からであった。高橋信次師も、著書、ビデオ、テ - プの中で、言っている。「人は何かことあるごとに固有の天使を呼ぶことが多いが、天使には天使のやるべきことがあります。すべて自力であることを理解して欲しいのです」、と。

昭和四十九年十月、志賀高原での高橋信次師の会話から。

「園頭さん、この頃なにかあると高橋先生助けて下さい、なんとかして下さい、という人が多くなって困っているんです。ぼくはぼくで修行しなければならないことがあり、また天上界へ行って天上界の人達を指導しなければならないことが

あるので、そういう時に、ぼくの名前を呼ばれると助けに行かないわけにはいかないし、もっと、みんな自力だということをわかって欲しいのです。」

Home



高橋信次師を注目する人達



高橋師の偉大性を認めるがゆえに、高橋師を世に広く紹介する人、その反対に名声を利用する人や反対する人などが多くいる。この項ではそれについて触れたい。

< 船井幸雄氏 > 流通業のコンサルタントで、最近は、とみに人間学等の精神世界の著述に大変身された船井幸雄氏がある。競争原理に造詣の深かった同氏も、今や協調原理に目覚められ、著書も数十冊ある。同氏の著書には高橋師が次のように紹介されている。

「一人は、故人になられましたが高橋信次さんです。以前から興味があった人で、著書などを通じ偉大な人だとは思っていました。昭和五十一年に亡くなられるまで大活躍されていた方なのですがお目にかかったことはありませんでした。最近になって、日本の経済界のお目つけ役といってもよい「経済界」主幹のSさんから高橋信次さんのすばらしさを聞きました。また、その直後に仕事の関係で第一不動産のN常務にお目にかかりました。Nさんは生前の高橋さんとは、取引銀行の担当責任者として深く付きあってこられた人ですが、高橋信次さんのすぐれた人柄や考え方を詳しく話してくださいました。さらにその直後に、前述した天才的発明家の一人Cさんと知りあったのですが、Cさんもまた高橋信次さんにいろいろ教えられたということです。このようなことで、深い縁を感じ、高橋信次さんの著書である「天使の再来」「心の発見」「人間釈迦」などを読み、その考え方を急遽学びました。いまも研究中ですが、論理がはっきりしており参考になります。

< 主幹のSさん >

船井氏の高橋師紹介記述の中のS氏がある。氏の著書の中で高橋師のことが詳しく紹介されている。松下幸之助氏と高橋師は今生においては縁がなく二人は一度も会われることはなかったと記述されている。園頭広周師の記述には、「近畿ナショナルの社長が高橋師と松下幸之助氏を引き合わせるために御尽力いただいたがその機会はなかった」と書いておられる。ところが、次の項のM氏の記述には高橋師が松下氏の許へ行ったような書きぶりなので、注意して読んでいただきたい。

話は元へ戻るが、S氏は高橋師の著書を出版したことがある。これについて園頭広周師は次のように記述している。「『部数が―― 違うんですね、守護霊がみな―― 私に言うんですから』と高橋先生が言っておられたのを聞いたことがあります」、と。そしてS氏の著書の中には、カメラ屋の主人に高橋師が出てくるという記述があるが、面前で出して欲しい。真偽を確かめたい。

< Mという人 > （「霊能者を試みる」の項の、大正ひとケタ生まれの工学博士氏）

先に少し述べたMという人の著書に次の記述がある。 昭和五十一年の頃大阪でM氏の講演会が行われた。

「第一日目の講演が終わったあと、大阪のある社長から、「あなたと同じ人がもう一人いるから紹介します」と、いわれました。その方の名刺には「G L A大阪支部長」と印刷されていました。その数日後、その社長の自宅へ伺いました。し
http://www.shoho.com/newpage111.htm (23/53) [03/05/27 12:33:55]

かし、ご当人の高橋信次さんは、松下幸之助松下電器会長のお宅での所用が長びいたためにこられなくなりました。そこで、ご当人の出演しているビデオテープをみせていただくことになったのです。そのなかに、前述の木星の内側の星のことがあり、「三億五五〇〇年前」と申しておられました。私の話とは五〇〇万年の差がありますが、それは誤差であって、みず知らずの人が同じことを知っていることに、びっくりしました。それから、子供のときからの生い立ちをお聞きしたのですが、あまりにも私とそっくりなので、もう一度びっくりしました。すなわち、工学部で電気を専攻され、医学も学習し、仕事も電気関係。年齢は、ちょうど、一回り下でした。この高橋信次さんと私は、生命体が二つに分かれたものだったのです。このことは、のちに神示によって知らされました。 - - 」

記述の中でM氏は「この高橋信次さんと私は、生命対が二つに分かれたものです」と記述されているが、本当に二つに分かれたものであれば、動物霊に支配されるようなことは起り得ない。酒がブクブクと。仏像が出てくる等と。全く次元が違うのである。正見して欲しい。高橋師の偉大性に便乗した偽述である。そして、M氏の同書の123ページには次のことが書かれている。

「 - - 岡山での二回目の講演会は、音楽家グループの会のものでした。その講演が終わったあと、数名だけフチバタソンの測定をすると申しました。その第一番の人は、なにか胸にドキッとくる婦人だったのです。その人に私は、「あなたは一芸に秀でて、超一流となる人ですが、なにか妨害が入りましたね」と告げました。そのことは、いまでもよく覚えています。数日後にその人が、友人とともに私のところへきて、「あの日から三日間眠っていません。食事もとれません。なぜこのようなことになったのか調べてください」というのです。そこでフチバタソンの調べると、前世では三八年前に、私と夫婦であったことがわかりました。 - - 」、と。

M氏と夫婦だったという人のことが書かれている。似たような話である。高橋師在命中は破門されていたという運輸業の瀬〇という人がいる。高橋師が亡くなった後、各地で集まりをしておられる。平成二年、ある集まりでのこと、瀬〇氏に指導を受けた三十代の奥さんは「あなたと私はイスラエル時代の師弟の間柄」と告げられ、その後、体調が悪いという人があった。ウェブ・マスターも昭和六十三年、瀬〇氏の講演会取材したことがある。その時のこと、瀬〇氏が[天上界からのメッセジ]なるものを読み上げられた時、ウェブ・マスターの二、三列前の十歳ほどの子が突然、机とイスをガタガタ動かして中断。メッセージを読み上げられる間、何度も中断するということがあった。十歳と言えばものごとの分別はある。どうしてこんな事が起こるのだろうか。その子の光りに包まれた、純粋で無邪気な心の波動は、高橋師に破門されるほどの瀬〇氏の波動とは相入れぬものがあったのだろう。純真な子供の心は、何に人といえども誤魔化すことはできないもの。

サテ、M氏の記述の中の夫婦であったという人が、「三日眠っていない、食事もとれない」ということが起こっている。でも、どうしてこんなことが起こるのか。尋常ではない。とてもこんな事は常識では考えられない。暗い地獄の霊は、夜に活動し始めるもの。その人の心をガッチリつかまえたことを確信すると、地獄の霊が念波をふき込む為に、睡眠は妨げられ、正常な思考をさせないようにする。その為に、夜は、胸がドキドキ頭は冴えて、昼間には頭がボンヤリ、トロトロと。これが三日も眠れないという理由である。これを治すには、正しい思考と生き方を正すことだが、同類にならないこと、同類から外れることが「答」である。

<瀬〇という人>

高橋師の生前、困った言動をするという理由で出入りを差し止められた関西の男性。(月刊『正法』園頭広周師の記述から)

瀬〇氏の著書によると、[薄暗くした部屋で、鏡に向かって怖い顔を映して靈感を得た]と書かれている。先述のM氏の著書といい、瀬〇氏の著書といい、自著には真実が書かれているので良い判断の材料になる。暗い所で、鏡に怖い顔を映して靈感とは、ゾッとしないか。そんなに靈感とやらが欲しいのだろうか。だから念(想い、欲望)は正しく使わないといけない理由がここにある。地獄霊の配下だったので、瀬〇氏は高橋師から破門されたのだろうか。これで破門の理由が良く理解できる。氏の周りに集う人は、自らの大先生の著書を読んでも疑問に感じないとは、これまた不思議である。大自然の原理原則、人間の正しい生き方を説いた「正法」が世の中に広がると、魔の足場がくずされるものだから彼らも躍起なのだ。その為に、同類の人をコントロールして混乱させるわけ。



< 川 法という人 >

高橋師が霊示したと偽述して二十冊ほどの『高橋信次シリ - ズ』を書いた人。高橋信次師の名を世に知らせてくれた人。園頭師の『「 川 法」はこう読め』、『読「 川 法」はこう読め』、『 川 法は仏陀ではない』正法出版社。『高橋信次師こそ真の仏陀であった』東明社を参照のこと。

平成元年の講演会を取材した時のこと、「本日の講演は高橋信次の霊示による講演でした」と係がアナウンスしたが、全く異質のものだった。資料として高橋師の講演ビデオ数十本、テ - プ数十本、全著書を所持しているウェブ・マスターには判断できる。平成二年、東京四谷の紀尾井町のワンフロア - 、二千万円の家賃と言われる本部を視察したが、それはそれは一等地の素晴らしいインテリジェントビルだった。園頭師は著書、月刊『正法』の中で 川氏と一対一で会いたい旨の記述が多くある。「会ったら、滅多に使ってはならない秘術を使う」とあるが、園頭師は現代最高の大霊能者だから、その秘術たるや想像もつかないが、「私は法（神理）の番人」と自認する師にとって、法を歪める人は許し難いのである。

平成六年秋、 川氏は師を裁判にかけたが、敗訴に終わっている。ウェブ・マスターは、「天上界は大天使・園頭師を譲るはず、天上界の存在を証明する稀なる裁判になる」と予告していたが、そうだった。裁判の全内容をマトメ、「宗教と裁判の勝ちかた」なる一文をウェブに載せ、理不尽な宗教に泣く人達の一助になるものを示せたらと考える。

< エルランテイ・田 という人 >

「エルランテイ」とは、神より直接、人類救済のためにつかわされた「真のメシヤ」、ということを高橋師は明らかにしたが、氏は大胆にもエルランテイ名を冠し、自著の中で次のように記述している。

「このエルランテイとは、神なる意識の呼び名です。ヤハベやエホバもこのエルランテイという意識に属し・・・ ブッダやイエスの魂も、今なおエルランテイの意識に導かれ神へ戻るべく修行されているのです。さて、そのエルランテイの中核をなす意識が、今世、田 として、この地上界に肉体を持たれ・・・ 二百五十年後にはアメリカの地において、アルバ - ト・ロックフェラ - として再び肉体を持ち・・・」と、書かれている。まったく恐れている。



< マッサ - ジ師の長 という人 > （園頭師の記述（月刊『正法』）から

「 高橋信次先生の霊が憑ってきていわせると偽称している人が何人かいる。その人達が偽称しているというのは、その人達の話す言葉、話の抑揚、話の内容、話言葉の音質などが全く違うからである。大 氏、長 氏、エルランテイ田 氏、瀬 氏、この四人はすべて関西人である。なぜ関西人ばかりであるのか、関西人の心理を研究する必要があると思うが、高橋先生は長野県出身であり、長野県の訛りの入った東京弁を使っていられた。ところがこの四人は関西弁でしゃべるのである。それだけでもってニセモノだということがわかる。そのうえに、この人達の生活行為がなっていない。清潔でない。私はこの人達と一対一で対決して、ニセモノである仮面を剥いで、この人達によって惑わされている人に警告を与えようと思っているが、この人達は私に会うことを恐れているのである。自分自身に自信があるのであったら、私にいわれて逃げる必要はないと思う。

この人達がもし私に会うといったら、私は高橋先生の講演テ - プを持って行ってかける。高橋先生の歌声は澄み通ってきれいで「小諸馬子歌」が得意であった。だから「小諸馬子歌をお歌い下さい」とお願いする。特にマッサ - ジ師の長 氏は、講演の後で「皆さんの胃下垂を上げますから目をつむって下さい」というそうであるが、果たして高橋先生がそういうことをされたであろうか。このところは霊能かぶれした人達はよく読んでもらって、もっと知性と理性を取り戻してもらいたいものである。」

< 千 子という人 >

「正 の集い」の会長・千 子氏は、「わたしはミカエルである。高橋信次の霊は天上界で抹殺された」、と自著に書いたり、また疑問を持って質問をすると「あなたの霊は抹殺します」と脅迫するという。、また、千 氏は、高橋信次師の

話を聞いたことがあるとの触れ込みだったので、ウェブ・マスターは本を書くために、高橋師に関する記述を求めて、彼女の著書を調べたことがある。近くの図書館に「寄贈図書」として十数冊あった。目を通してると、なんとも異様な雰囲気を感じた。引用すべき記述はなかったが、読めば読むほどわからなくなる本だった。「正の集い」は、かつて、毎日新聞に「新興宗教24人のナゾの集団渡米」という記事が出た団体である。日本が大地震で沈没するから、24人がアメリカへ逃げ出す、というもの。それから、千氏は、「私はミカエル天使長である」という。同じく、高橋師の息女・佳子氏もミカエル天使長という。この二人の女性は、よほど大天使・ミカエルが好きとみえる。ミカエル天使長の生まれ変わりは、最近ではアポロン、エリヤ、宗教改革のマルチン・ルターであると、高橋師は教えたが、これらは全員男性。人は普通、男に生まれたり女に生まれたりするが、天使長は、モーゼ、釈迦、キリストと同じように、いつの世も、男性のみに生まれてくる偉大な使命の人である

<その他の人たち>

園頭広周師の記述要約



<その一> 「関東には元GLAの会員で六十過ぎの、高橋信次先生が出てこられるというおばあさんがいる。高橋先生の声色を真似て「OO君、あなたは、正法のためによく尽して下さい、ありがたく思っています」というような言い方をする。高橋先生は生前、一度も「OO君」という呼び方はされず「OOさん」と呼ばれた。高橋先生より黄金の冠をかむることを許されたというそのお婆さんの主人ともう一人の老人は、その女性の前に伏せて、「ありがたくお受けいたします」ということになった。しばらくして、今度は如来に昇格を許されたそうで、自動書記だといって高橋先生の声色を似ねたテープを持っていると地獄に行かないと言って売っているそうです。ところがそのテープを聞いたためにおかしくなったという人が電話をしてきた。「だから正しく見ないといけません」と話したら、それでよくなったという人があった。」

<その二> 「鎌倉の寺にいるお婆さんは、実にうまく芝居をやるそうで「信次先生、あの世へ帰ってはイヤです。帰らないで下さい」と縋りついて泣くんだそうです。この頃は頭から白い布を破って紫の衣を着て、一段高い壇に座って話すそうです。」

<その三> 「関西には、「お前は、私が生きている間は法を説いてはいかん。わたしが死んだら法を説け」と高橋信次先生から言われたというおじいさんがいる。その人は、その事は園頭先生も知っておられると言って集りをしていました。私は(園頭)その人をまったく知らないし、そのことを質問したら、それっきりそこには現れなくなった人がいた。高橋先生の生存中に法を説く力のない者が、どうして高橋信次先生が亡くなられた後に、法を説く力を持つもとのができるのであろうか。少し考えるとわかることであるのに、「高橋信次先生が・・・」と偽称すると、すぐに信じる単純な人があるのもまたふしぎである。」

<その四> 「高橋信次先生の身内の一人が、高橋先生の遺骨を持ち歩いて、それを拝まして話しているということを教えてくれた人があった。困ったことになったものである。」



<麻 という人>

隠れ部屋より尻から先に出てきた人が書いた、麻 著『 能・秘 の開発法』なる本が出版されている。一瞬のうちに、麻 氏が坐ったまま空中高く浮上している写真を添えている。この本が店頭に並んだ時、ウェブ・マスターは直観的に、「ア、動物霊がいたずらをしている」というのが偽らざる思いだった。

動物霊は、人をアツと驚かせるようなことをする。その人の心のあり方が、霊に同通して、地獄霊や動物霊を呼びこむわけである。永い時間を浪費して瞬間的に空中に舞い上るより、空中に浮上したければ、天井から吊した口 - プにブラ下があれば良いもの。少し人と変わったことをすると、それを称える人が出てくるから残念。麻 氏の著書をいくつか目を通したが、麻 氏の許によくも集う人がいたもの。つくづく、霊の階段を考えさせられる。人口一億二千万人、色々な霊の階段があってもそれは仕方がない。霊能力を求める人は気の弱い人が多く、また、罪悪間、劣等感が強く、暗示にかかり易い傾向がある。



< 高橋信次師の「ことば」から >

「神がかりになって、体を上下に動かしたり、とびはねたり、合掌している手先が蛇行するような場合は、すべて、動物霊がその人を支配しているのです。このような人々は、まことに危険極まりなく、健康にも、日常生活の上においても、いろいろな支障が起きてきます。またこうした動物霊たちは、肉体先祖が浮かばれていないからお祭りをして供養しるとか、多額の金品を要求したりします。動物霊が憑依している者は、本能欲求が強く、したがって、憑依されている行者は、金とか、地位とか、色欲にほんろうされます。」

同じく高橋師は、

「動物霊が支配している場合は、座ったまま一～二メートルも空中を飛びはねることもあります。彼らは人を驚かすことに特長があるといえます。したがってそのようなときは、すべて地獄霊の仕業と見て差し支えありません。神がかりや、不自然な言動をする場合は、必ず動物霊が支配しています。不動明王だの、竜王だの、稲荷大明神と名乗って出てくる場合も動物霊がほとんどであり、まことしやかに振る舞うので特に気をつけなくてはなりません。予言をする、病気を治す、それだけで信じてはいけません。また罰があたると脅迫ようなことがあれば、これもまた地獄霊です。いちばん大事なことは、神がかっている人間の品性や言動をよく観察することであり、正道を心の物差しとして生活しているかどうかの問題なのです。地獄霊が憑依すると、おごり、怒り、そして、ねたみ、欲望の渦の中にひきずられるため、心は常に動揺し不安定です。いくら口先でうまいことをいっても、その考えること、行為に大きな矛盾がでてきます。不自然な霊力や脅迫に合うと、人はつい盲信、狂信になりがちです。」と。

麻 氏が書いた『 能・秘 の開発法』の二十九頁の記述に「私は安らぎ、光といった類の言葉に救いのようなものを感じ、高橋信次氏の著書二十冊くらいに目を通した。高橋信次氏は、ゴッドライト・アソシエーション（G L A）の創始者である。残念ならが回答らしきものを得られないままに、中村元氏の『原始仏典』と増谷文雄氏の『阿含教典』にめぐり合い、これによって私は高橋信次氏の記述が正確でないことを知ったのである・・・。」と述べている。この記述に対する正法会（後・国際正法協会）会員の公開質問に対して、園頭広周師は月刊『正法』で解答をしている。長い論文だがこれを引用する。

[Home](#)



「麻 氏の高橋信次先生反対論は感情論であって意見または見解でもなんでもない。高橋信次先生の所説が正しいということになると具合がわるいという人達は、すぐ感情をむき出しにして「わるい」というのである。麻〇氏は高橋信次先生の記述が正確でないというのであれば、どこが正確でないのかをはっきり指摘していうべきである。私は高橋信次先生の著書によって「安らぎ」と「光」を感じた。だが麻 氏は感じなかったという。今から二千五百年前のインドの釈尊の時代であっても、当時のインドの人々がみな釈尊の弟子になったわけでもない。釈尊の悪口をいった人達もあったことは経典にも残されている。だからといって釈尊が悪かったということにはならない。それと同時に、高橋先生の悪口をいう人があってもちっともかまわないし、いったからといってそれが正しいと思う必要もない。麻 氏が高橋先生の著書をよんでも少しも回答らしきものは得られなかったというのは、麻 氏の魂が高橋先生の所説を理解するまでにまだ成長していない幼稚な魂であるからに過ぎない。それは、小学生が大学教授の講義がわからないのと同じことである。麻〇氏の魂がそんなに高くないということは、桐 氏の法力を日本一だとほめていることでわかる。早川和廣著『 含宗・桐の知られざる正体』を見ればわかることである。中村元氏は、当代一流の宗教学者であるが私はこの人をあまり信用していない。その理由の一つはこうである。中村元氏著の『仏伝』『釈尊の生涯』にはもっとも遺憾な欠落がある。この欠落は中村氏が意図的に欠落したとしか思えないからである。人間というものは、自分に都合がわるいと、また、それをはっきり書くことによって自分に風当たりが強くなるという場合は、意識してその部分は書かないということをする。どうもそういうことではないかとしか考えられない点があるのである。

中村元著 『原始仏典』

平凡社刊 『世界教養全集 1 0』

中村元 『釈尊の生涯』

と比較対照して、つぎの著書をよむと

水野弘元著 『仏教の原点』

渡辺照宏著 『新釈尊伝』

<p>霊界教室</p>	<p>早島鋭正著　『ゴ - ダマ・ブッタ』</p>
<p>増谷文雄著</p>	<p>『阿含經典による仏教の根本聖典』</p>

明らかに違うところがある。

稲尊が菩提樹下で悟りを開かれ、鹿野園で初転法輪をされ、ヤサを弟子にして五人の弟子とともにブッダガヤに帰って来られ、ガヤ山にいた拜火教（事火外道）即ち火を祭って護摩供養をして祈祷していたウルヴェラ・カシャパ - 三兄弟が護摩供養の祭壇を河に投げて棄てて稲尊に帰依する。

中村元氏以外の人『仏伝』には、また、

仏教説話文学全集刊行会の『お釈迦さまの伝説』

<p>武者小路実篤著『釈迦』</p>
<p>立正佼成会出版部刊『釈迦物語』</p>

にも、全部このことは書いてあるのに、中村元氏の書かれたものの中には、このことが書いていないのである。これは意図的にぬかしたとしか考えられない。拜火教のウルヴェラ・カシャパ - が祭壇を捨てて稲尊に帰依したということは、稲尊は「護摩供養をしてはならぬ」といわれたということである。護摩供養をするのは仏教ではないのである。稲尊が「してはならぬ」といわれたことを「仏教」だというわけにはいかないであろう。中村氏の『仏伝』にだけあって、他の人の『仏伝』にないものがある。これもまたふしぎである。

<p>中村元著『原始仏典』</p>
<p>　　仏伝　四十一頁『求道の生活』</p>
<p>「わが徒は、アタルヴァ・ヴェ - ダの呪法と夢占いと観相と星占いとを行ってはならない。鳥獣の声を占ったり、懐妊術や医術を行なったりしてはならぬ」</p>

信仰する者にとって大事なこの問題を書く人もいれば書かない人もいる。原始仏典という大部分のものを、わずか一冊か二冊にまとめるとなれば、著者の主観によって取捨選択が行われるのはまた当然のことである。

「仏教」とは仏蛇といわれた稲尊がお説きになった教えであるから、仏教を伝えるという宗教団体がいかに稲尊の教えに反することをしていることか。「アタルヴァ・ヴェ - ダの呪法」はのちに説明するとして、「夢占い」、「観相」即ち人相、手相、家相、気学、易、印相、墓相、姓名判断等、それに「星占い」「星祭り」はしてはならないと稲尊はいわれたというのに、今日ほとんどの仏教団体がやっている。「　含宗」を唱える桐　氏は、護摩供養も、星占い、星祭り、人相、手相その他等やっている。稲尊が「するな」といわれたことをやっいて、それで「仏教だ」と名乗るのはまさしく盗人たけだけしいというべきであるが、麻　氏が中村元著『原始仏典』を本当に読んでいるのであったら、とても桐　氏に日本一だなどとはいえたものではない筈なのに、それを日本一だなどといっているのは、桐　氏を日本一とあおり、それによってなにか自分に得することがあって、そのために実際は読んでもいないのに中村元氏の『原始仏典』、増谷文雄氏の「阿含經典」を読んだということにして自分のいっっていることに箔をつけようとしたまでであるといわなければならない。そうしておいて、高橋先生を蹴落そうとしたに過ぎない。

今日まで伝わってきている仏典には、稲尊の真実の悟りがなんであったかは全く書いてない。単に「四諦八正道」を悟られた、「因縁」を悟られたと書いてあるに過ぎない。そこへゆくと高橋先生著『人間・釈迦』第一巻には「稲尊真実の悟り」が書かれてある。今日、伝わってきている仏伝、原始經典には後世の秀才達が付記したもの（偽作）がある。例えば稲尊はマヤ夫人の右脇かた誕生されて、誕生されるとすぐ七歩歩いて、「天上天下唯我独尊、有情非情同時成道、山川草木悉皆成佛」といわれたということ、ジャ - タカ（本生譚）という稲尊の前世物語などそれである。渡辺照宏「お経の話」（岩波新書）は名著といわれているものであるが、この本の六頁には、「仏教聖典ぜんぶが仏蛇シャ - キャンニの説法の忠実な記録ではないことは冷静に見て承知するほかはない」と書かれている通りで、中村元氏と増谷文雄氏とでも、阿含經典を取り上げながら、取り上げる角度、内容もちがっているのであり、それが高橋先生の記述と違っているからと

いって高橋先生のものが間違いだという証拠にはならない。間違いだというのなら、どこが間違っているのか、実際はどれが正しいのかということができなければならないが、それもいわず、単に「間違い」というのであればそれは感情論であって、その感情論を真に受けるということはこれまた馬鹿気たことである。さて、「アタルヴァ・ヴェ - ダ」とは何であるか。これは、稲尊出生以前一三〇〇年、現在のイラン・イラク方面からインドに進出してきたア - リヤ人が持っていた宗教の一部で、呪法、呪術である。本来は「招福攘災」の呪法を使命とするものであるが、のちにはこの呪法呪術によって社会の道德秩序が乱されることになって、バラモン法典でもこれらの呪法呪術は明らかに罪悪であり、呪法師は呪術師などと同じように処罰されなければならない（マヌ法典）とされたもので、だからまた稲尊も比丘、比丘尼達に対して「してはならぬ」といわれたのである。この呪法呪術が現在では真言宗、日蓮宗でやっている秘密加持祈祷になっているのである。稲尊は加持祈祷は禁止されたのである。どんな呪法呪術があったのか列挙してみよう。

<p>治療呪法、長寿呪法、増益呪法、贖罪呪法、和合呪法、</p>

死の危険を逃れる呪法、家屋建築の際の祈祷、

田畑に種子を播く際の祈祷、害虫駆除の祈祷、火難防止の祈祷、

雨乞いの祈祷、盗難除けの祈祷、旅行安泰の祈祷、商売繁盛の祈祷、

博打で勝つ祈祷、蛇の害を逃がれる祈祷、

他人を自分の意志に従わせる祈祷、相手の怒りをやわらげる祈祷、

人が仲がよいのを不和にする祈祷、

自分を嫌いだという女を自分を好きにならせる祈祷、

相手の男性を自分を好きにならせる祈祷、密会がばれない祈祷、

嫉妬をしづめる祈祷、結婚の祈祷、安産の祈祷、

その他いろいろな祈祷呪術の最後が、山羊、羊、つぎには愛するわが子を

いけにえにして祈祷するという方法である。

このような祈祷呪術呪法の弊害の

第一は、自分で解決しなければならならぬ問題を、人に頼って人の力で解決してもらおうとする完全に自立性を放棄してしまう事にあること。

第二は、祈祷によって相手の人間性、自主性を破壊しようとする事にあること。

第三は祈祷によって欲望を達成しようとする心を持つ事にある。

最後に相手を祈りによって殺す方法まであるのである。

私がある所でこの話をしたら、日蓮宗の坊さんで「わたしは祈りで人を殺すことができるんじゃ」といった人があったと聞いた。ブラジルには「マクンバ」という黒人宗教があって、人を祈り殺す法をやっているそうである。仏教はこのような加持祈祷はやらないのである。かってインドで釈尊であった高橋先生は、現在の仏教が余りにも歪んでいるために、それを修正するために出世された方である。高橋先生の著書を読むと、いかに現在の仏教が歪んでいるかがよくわかり、現在の諸宗教に対する疑問も全部氷解し、自分で自分の心のあり方を反省し修正して運命を変える力を自分で持つことができるが、中村氏や増谷氏の著書を読んだのでは、「そういうことだったのか」と知的に知るだけであって心を修正し運命を自分で変えることにはならない。私の著書を読んだだけでも病気が治ったとか、運命がよくなったという奇跡が出ている。

麻 氏だけでなく、外にも高橋先生のことを悪く書いている人があるが、そんなことで正法の基盤が揺らぐことは少しもない。釈尊が「するな」といわれたことをやっている仏教団体よ。『原始仏典』にこう書いてあるがと詰問されたらどう答えるのか。『原始仏典』に書いてあるのが間違いだとはまさかいえまい。麻 氏が桐 氏をほめているのは、桐 氏の超能力開発法を正しいと思っただけのことであろうが、桐 氏の法力はウソだということである。麻 氏よ、もっていかんとする。私は麻 氏の「超能力、秘密の開発法」を読んではいないが、桐 氏をほめるようでは大した内容ではないと思っている。心を暗くしたままで、超能力を得たいという欲望をもってなんらかの修行をすると、動物霊、自縛霊に憑依されて霊能が開ける。こういう霊能力者の特徴は、金に汚くなることと、女が好きになること、威圧的な態度をとること、服装が異様になること、ということとやることが違うこと等である。正法を知って正しく霊能を開いた人は決して威張らないし、ということとやることが一致するし、金で救われることを説かない。桐 氏はどっちの部類に入る人であるかはみなさんで判断願いたい。その桐 氏をほめるようでは麻 氏も同類と考えるべきである。動物霊や自縛霊に憑依された人はみな高橋先生に反対するのである。

ついでにまた書いて置くが、私はかって正法誌に、金でころぶのであれば仏教学者も売春婦と同じだと書いたことがある。売春婦が人格的に軽蔑されるのは、金さえ見せれば節操もなにもあったものではない、どんな人の前にでもころぶからである。仏教学者としての節操があったら、仏教とはいえない日蓮宗の創価学会の出版物に原稿は出せないと思うのであるが、創価学会の提燈持ちの原稿を書いて金をもらっている学者がいる。私が判断の基準にしていることがある。それは、「釈尊だったら、これをどう判断されるであろうか」ということである。釈尊は創価学会を正しい仏教団体だといわれるであろうか。仏教学者というからにはそれ位の判断はすべきであると思う。自分の名が出版物に出て金にさえなれば、どこにでも原稿を売りますという仏教学者は仏教学者という名にすら値いしない。私をしていわしむるならば、凡そ日本の仏教学者は創価学会の出版物に原稿を出してはならぬということである。創価学会に利用されている仏教学者は自らを恥とすべきである。さて、まだ解説していないことがあった。「鳥獣の声を占ったり、懐妊術や医術を行ったりしてはならぬ」ということである。これは、鳥がこういう鳴き方をしたからとか、牛がこういう鳴き方をしたからこうだというような占いと、比丘、比丘尼達は、こうした妊娠するとうような術や、医者ができるようなことをしてはならぬ。それらはすべて専門家に委せよと釈尊はいわれたのであるということである。宗教家は医学を否定してはならないのである。医者に委せるべきのものは医者に委せればよいのである。「生長の家」は医者を否定する傾向が強い。私が生長の家にいた頃は、医者にかかれば早く治ったのに、医者にかからなかったために手遅れになって死んだという人が多かった。私が生長の家をやめた原因の一つは、そうした医学を否定していたからである。

麻 氏が「高橋先生反対」の文を書いてくれたお陰で、私はこういうことを書くことができた。その点感謝している。他に反対している人があれば、また反論するチャンスを与えられるわけでこれもまた感謝せずにはいられないことになる。さらにいって置かなければならないことは、麻 氏は現在G L Aがどういう状態になっているか、なぜ「正法会」が出来たのか、その辺の事情は恐らく知らないのではないかと思う。今のG L Aはダメだといわれるなら私も賛成であるが、高橋信次先生をダメだといわれたのでは私は黙っていられなかったのである。今後、正法が広がれば広がるほど、正法が広がると自分達の都合が悪くなるという人達は、感情的に高橋信次先生のことを悪くいうであろうが、そういう時は先に書いたように、どこが悪いのであるか逆に質問されることである。ここまで原稿を書いた時「宝石」五月号（一九八六年）が出た。「阿 宗、桐 管長の危険な賭」という記事が出ている。

この中には、

「桐 氏の自慢の千座行、そして七科三十七道品がいかに釈尊の説く教えからかけ離れているか」

「ロ - マ法王と逢って、金、銀、銅のメダルをもらったというのもウソである」

「中国のハルビンで護摩供養をすることは中国政府が許可していない」等。

このようなデタラメをやる人間を日本一というようでは麻 氏もおかしいといわなければならない。他の宗教団体の教義ははどこか非難される欠点を持っているが、高橋信次先生の教えられる正法はどこからも非難される点の一つもないのであるから安心願いたい。『月刊正法』 一九八六年六月号

http://www.shoho.com/newpage111.htm

< 桐 氏 (阿 宗) という人 >

阿含経こそ釈尊の真説であると確定したのが昭和五十年であった。現在の世界の仏教界の動きを見事にキャッチし、うまく利用して変身したのが桐 氏である。桐 氏もそれまでは「真言密教」を名乗っていたのであるが、それが突如として「阿含密教」を名乗り始めた。そしてその著書の中に「第三回、それは阿含宗の出現によって私が釈尊真実の教えをここにあらわすのである。つまり、三回目の仏教伝来は桐 氏が実現するというのだ。園頭広周師（月刊『正法』）は言う。「私は桐 氏が、今まで『真言密教』を名乗っていたのに、『阿含秘教いま』という本を出版し、さっと『阿含宗』を名乗られた時、さすがに商売がうまいな、目ざとい人だな、と正直いってそう思った。仏教のことをくわしく知らない多くの人々は、大上段に振りかぶって自信あり気にいわれると、その気迫に圧倒されて、正しい批判力も失って、あっさりといわれたことを信じてしまうものらしい。もっとも多くの人は、果たしてそれが正しいかどうか、判断する資料も知識も持っていない人が多いわけである。」と

桐 氏に関して批判の本も数多く出版されているので、ここで取りあげることもないが、桐 氏の阿 宗のパンフレットをもらった。それを手にして思ったことは「何んと豪華なんだろう」ということだった。高級車のパンフレットと見紛うものだった。それには、 供養ウン十万、 料ナン十万と明記してあり、 星まつり等も載せていた。これらにポンと金を出す人もいるにはいるもの。救われたい一心で、金と引き替えの助かりたいという欲念以外の何ものでもないのだ。かって問題になった、壺や多宝塔に何十万、何百万、中には何千万も払ったという無知な人もいるが、無知な人をだますサギ宗教がはびこる背景が現実にはあるということである。類は類という同じ同類の人達の話しである。

こう述べると、取られた人は可哀想だという人もいると思うが、これ程までに書かないとわからない人も、多いのである。現実社会でしか通用しないお金を、取ったり取られたりのお話だが” 神だ、仏だ ”と言われると何にも疑わずに信じる人があるのも不思議である。でも、靈魂は永遠なのだから、そのようなサギ行為をした人は自らが裁いて、暗い地獄の世界に住することになる。例えこの世の法律で裁かれることはなくとも、また、人に嘘はつけても、自分の心には絶対に嘘のつけない神の子の自分によって、バッチリ反省させられるのだがら、やるだけやればよい。自ら苦しむのだから、ホラみたことか。靈魂がこの世限りなら、この世で何をやっても、どんなことをしても平気だろう。だが、どっこい靈魂は永遠なのだから、今生を正しくしない者は、また、この世で修正できないものは、あの世か、来世で反省させられる。そして、反省するまでは地獄の暗い世界で苦しむことになるのである。これまでに「地獄の世界」とか「暗い世界」という言葉を何回も使ったが、次のような話しが参考になるだろう。

Home

かって、テレビの深夜番組で” ○八郎 ” という人の霊を呼ぶ番組があった。その人は酒を飲んで溺死した喜劇人だった。霊媒が 八郎氏の霊を呼んでいた。そばに由 徹氏。そのうちには 八郎氏の霊が降霊して霊媒が語り始めた。

八郎氏の霊 「暗い、暗い」

由 徹氏 「 ちゃん、いま天国だろう。天国でたまにはお酒も飲んでるんだろう ちゃん、ネ、そうだろう」

八郎氏の霊 「暗い、何も見えない」「寒い」「寒い」

このような交霊現象の番組だった。あの世の地獄の世界は、光の届かない、神の光を閉ざした暗黒の世界である。文字通り暗い、寒い世界なのだ。日中からお酒を飲んで海にはまって水死した訳だから、推察すると、すさんだ生活振りであったろう。ここまで述べて先へ進めば、読者へ恐怖感を与え、強迫以外の何ものでもない。それでは、どうすればよいのか。

霊媒によって 八郎氏の霊が呼び出されていた。そばに由 氏がいた。由 氏は次のように 八郎氏を諭すべきであった。「 ちゃん！今、暗い寒い世界かい。 ちゃんは酒を飲んで水に入り溺死してしまったんだよ。もうこの世の人ではないんだよ。 ちゃんが生きていた時のことを思い出して、悪かったと思うことは一つ一つ反省をして、神と自分に心から詫げるんだよ。そうすれば、いつかは暗い寒い世界から、暖かい明るい光の世界、つまり天国へ行けるんだよ。サア、今からやってごらん、勇気を出して、 ちゃん！」と諭すべだった。

暗い地獄の世界はどんな所かという意味で参考に供した。もう一例、随分前の話したが、これもテレビ番組。落語家の故・林家三平氏の師匠で林家 氏の、霊媒による降霊現象を放映した。林家 氏の霊が降霊して霊媒が語り始めた。

「寒い、寒い」、そばに林家木久蔵氏「師匠、寒いですか」「暗い」「暗い」・・・と。このような内容であった。林家 氏は夏場になると、お化けの話が得意であった。木久蔵氏は「師匠が家でお化けの落語のおさらいをしているのを見るとゾクゾクッとくる、幽霊が一杯来ていた」というようなことだが、このような暗い世界の話しは、余り熱中しないことである。仕事は仕事として、サッと気分を転換すること。それが余りにも長時間に及ぶと、あの世の暗い霊と通し困った現象が起こることになる。テレビ等のメディアは、正しいことも間違ったことも、情報としてズカズカと茶の間に割り込んで来る。それも目に見えない電波となって。その為に困ることも多いが、このような番組が放映されたことで、地獄の実態として引用できた。本論に戻る前に、もう一つ芸能者の例をあげよう。先述の「阿含経」の中に書かれているものである。

「ラジャグリハの街に女優を五百人抱え（現代のプロダクションのようなもの）ている役者がいた。ある時、「わたしはこのようにして人を笑わせ喜ばせておりますから、死んだら喜笑天とでもいう天国へ行くのでしょうか」と尋ねた。お釈迦様は答られた。「それは違う。俳優というものは怒りの役をする時には怒りに執し、嫉妬の役をする時には嫉妬に執し、自分の本心からでない芝居をすることによって自分の心に歪みをつくるから喜笑地獄に墮ちるのである」、と。

園頭師は次のように言う。

「つくり笑いをわざとらしくして人を喜ばせようとするものはそれに執るから、あの世へ行っても同じことをする。同じようなことをした人が同じような地獄に行くのですから、喜笑地獄に墮ちた人達は皆、一人一人が人を笑わせようと努力しても笑ってくれる人は一人もいないことになる。しかもそれを止めることはできないのですから、心はうれしくなくとも格好だけはうれしいような格好をしなければならぬ。同じ格好ばかりはしていられないので毎日毎日こんどはどのようにして笑わせようかとする。いくらやり方を変えても笑ってくれる人は一人もいない。それだけに心は苦しくなってくる。それがどんなにつまらないことであるかを反省するまでやめられないのです。」

「あの世は心のままの世界」と園頭師は言ったが、如何に心の持ち方が大切かという例である。この世での暗い心の世界は、あの世でも暗い世界を、欲望のままに生きた人は、あの世でも欲望のままの世界をつくりだし苦しむというのである。

高橋信次師の講演の中から

「護摩を焚くというのは完全にバラモンの教えで、仏教では護摩を焚くことは絶対にしないのです。弘法大師（空海）が、中国に勉強に行った時、五台山（ウータイシャン）で、不空三蔵とって、インドから中国に帰化した方がありません。この方によって密教というものがつくられるのでありますが、密教はバラモンの教えです。それが日本へ来たら、大日如来を祭るといふことになり護摩を焚くということになってわからなくなってきたのです。」

桐氏は「護摩供養」なるものをされる。ところが、「阿含経」は釈迦の真実を伝えた唯一のものとして認め、それを継承すると言いつつながら護摩供養をする。「阿含経」には護摩供養はしてはならぬと釈迦が言われたと書かれているのに、である。第三回目の仏教伝来をもたらすのは桐氏であると著書には書かれているが、仏教にはない「護摩供養」をされる桐氏には、第三回目の仏教伝来をもたらすことなど絵空事であろう。護摩供養と言われるものは、信者が白木の棒や板に悩み、願いごと等を書き、宗教団体はそれを読経とともに火に入れ燃やす。それで願いが成就したり、罪障が消えるということのようだ。悩みの多い人ほどお金がかかる仕組みになっている。仮に十の悩みのある人が一本の木に各二つ書いたとして五本の護摩木が必要となる。一本二百円として千円になる。こうして、護摩木の数が多ければ、願いごとが早く成就し、罪障が早く消えると勧められると、人は多くの護摩木を利用する。これはもう立派な金儲けなのだ。

過去の、ウェブ・マスターの五本の護摩木に書いた悩みや罪障は、護摩供養によって消えたはずだが、原因を完全に取り去るまでは消えなかった。このような護摩供養に走る人は無知であり、真実を知らないからである。無知ほど怖いものはない。神の名を借りた、宗教という名をかりた金集めが、いつまでも続くはずはないのである。真の宗教人はさわやかで、多くの本により批判されることは有り得ない。真の宗教家とは、迷える無知な人に対して易しく教え諭す人。これを説教という。教え諭することにそれほど金がかかるはずもない。金が欲しいのは教祖と、とりまきのものだ。「今度の光の天使は、皆、事業をやったり、仕事についていて、私達は宗教などで飯は喰いません！」と、高橋信次師は胸を張った。そこに、真の宗教人、そして人類を教え導く使命を持った方の姿勢を見たのである。そして、この桐阿宗は昭和六十二年春に、東京・三田に六十五億円で購入した土地に六十五億円の建設費用をかけ、関東別院を落慶した。この落慶をきっかけに毎月一回、朝の「朔日縁起宝生護摩」なるものを催し、信者以外の者にも呼びかけ週刊誌などに広告も多くみかけた。お金を集めるためには手をかえ品をかえ。しかし錬金術もそんなに永く読めばいいのだ。「暗い世界」の話ばかりで申し訳ないが、もう少し話をマツメよう。

近代の作家に自殺が多く目立つ。「自殺」は、私ならこうするという余地の残された自殺は、神の光を完全に閉ざした暗い世界の行為であると高橋師は言った。なぜ文学者に自殺が多いかという高橋師の「ことば」を参考にしてもらおう。



「文学者の死」

「最近でも、日本の代表的作家である三島、川端両氏の自殺が相次ぎ、文学を愛好する者にとっては、悲しい知らせとなっている。作家の、死に至る心のなかまではわからない。尊敬する作家の死は、私の心のなかにも、淋しい思いを感じさせる。無情の思いが襲ってくる。死という結論は同じであっても、その動機は、人それぞれの立場や、環境、思想によって異なってくるだろう。自殺は人生からの逃避であり、自己保存の現われだといえよう。これは文学者に限ったことではない。人間は、誰れでも、寿命を果たすことが、本来の目的だからである。自らの人生における修行を放棄することは、たとえ世間で立派な人間だといわれている人であっても、どういう事情があるにしても、それは正しい理とはならないのである。

死は怖いものではない。しかし、私達が自ら望んで両親から与えられた肉体舟は、その生命の読め限り、神の子として、この人生航路において果たさなくてはならない修行を続けるべきなのである。生ある限り、この肉体舟を大切にすることが、神の子としての掟だからだ。特に、作家の残したものは、多くの人々の眼をとおして、その心に与える影響が大きいから、神の子としての責任は一層重大であるのだ。作品の中には、人々の欲望をそそり、その心を狂わせてしまうような低俗なものもある。しかし一方には読者の心に安らぎを与え、知性を豊かにし、調和のとれた心に安らぎを与えるものもある。その内容は、まちまちである。神の子としての自覚に目覚め、心が調和されている作家の作品は、読者の心の糧となり人生に生きる喜びを与える。だが、いかに名声の高い作家の作品であっても、心を忘れてしまった作品は、やがて人々から忘れ去られてしまうだろう。そのような作品が果たして読者の心を豊かにできるのか、疑問が投げかけられるであろう。また、心ない読者と、心ある読者によっても、作品の受けとり方は異なる。つまり、その内容は、読者の正しい心の物差しで判断するしかないということもいえる。

しかし、作品の内容によっては、多くの読者に大きな影響を与えるし、それによる現象もまた大きい。低俗作品の場合は特にそれが強い。不調和を与えたその責任は、作者の側にもちろんあるが、その毒を食べた読者にもあるということだ。その罪の償いは、神の子としての人間に課せられた、掟なのである。作家の責任は、その意味でも大きいといわねばなるまい。ノンフィクションであれフィクションであれ、そのスト・リ - の主人公の心になりきって筆をすすめているうちに、作家の心のなかに造り出されていく想念は、それぞれの作中人物の心に埋没してしまうのである。作者が、正しい心の物差しを忘れて、創作中の不調和な人物に陶醉してしまうと、作者の心は、やがてスト・リの主人公にすり替えられてしまうことが多い。こうした場合、不眠からノイロ - ゼという不安定な心の状態を造り出してしまふだろう。いかに名作を書き残した作家であっても、その心の状態は常に変化しているということを知らなくてはならない。いつの間にか、その心の状態が、創作のなかから生まれてくる不調和な心に応じた地獄霊に憑依されて、ついには正しい判断を失ってしまうものだ。」『心の原点』

園頭広周師の記述から（月刊『正法』）

< 川端康成氏のこと >

「ノ - ベル文学賞を受賞された川端康成氏はガス自殺をされたが、川端家に入入りしている人から、「川端さんは始終、霊に憑依されて不眠症で悩んでいられた」と聞いていた」（昭和五十九年四月号）。また別号の正法誌には、

「正法会員の友人という人が川端康成さんの最も近い人で、その人が川端家には幽霊が出ていたと言われていたが、高橋先生は、「川端さんが地獄霊に憑依されたのは、書く文章が暗いからで、暗い文章を書いている時の心の暗さが地獄霊を呼びよせたのです」と言っておられた。名古屋の講演が終わって帰る飛行機の中でよんだ週刊誌には、「川端さんの作品の中にはよく自殺する人が出てくる」、と書いていた。」、と。

< 三島由紀夫氏のこと >

「三島由紀夫さんのお母さんが、「由紀夫さんがしょっ中出てきてその姿がはっきり見えてなむれない。幻覚症ではと診察にいったら、これは現代医学では治しようがないとことわられた。」ということをお母さんが書いていた。三島由紀夫さんのお父さんの霊もいっしょに出るのだそうである。自衛隊本部に斬り込んでひとを斬り、自分も割腹した三島由紀夫さんは愛国心の権化だと讃えられているが、その霊は浮かばれていないわけである。」

また、高橋信次師は、「去年なくなった三島由紀夫氏は大地獄、阿修羅界です」（昭和四十七年三月盛岡市での講演より）

日本人として初めて、一九六八年にノ - ベル文学賞を受賞した川端氏は、新感覚派として『伊豆の踊子』『雪国』などの代表作がある。晩年の氏は暗い作風が多く、そのことを指摘した新書が昭和六十二年十月に初版されていた。一九七二年、自から命を絶った。人間の心の世界というものは、「一念三千」といって心の針は悪にも善にも、羽根を持った鳥のように自由に向けられるのである。役者が暗い役ばかりを演じたり、作家が暗い文章ばかりを書いていると、あの世の暗い霊と同通し、神の子の自覚を忘れ、自から命を絶ったりする。ウェブ・マスターは二、三日に一度は本屋を訪ねるが、何とホラ - （恐怖）、サスペンス、残酷、妖気等の暗い本が多いことか。売れるからという理由で際限もなく、こういう本が出版されることを憂う。この項では「暗い世界」ということから川端康成氏、三島由紀夫氏についても言及した。三島由紀夫氏に関しては、いくつかの三島由紀夫の『霊界通信』なるものが出版されたが、次のように考えている。

あの世は心のままの世界という。三島氏は、自ら信ずるところを訴えて陸上自衛隊に斬り込んだ。そして計画を完遂することなく割腹自殺をした。その扇動の心は、そのままの心の世界、つまり右を向いても左を向いても、自分の考えを主張する者達ばかりの世界で、誰れも聞いてくれない自論を延々と続けるという苦しい世界である。そして、まだ自らの死も自覚していないものと思う。そのために、三島氏のお母さんに救いを求めるというか、幻覚症ではないかと思われるほどに姿をみせるというのである。悟った人は、肉体や遺骨に執着することなく、すぐに天上界へ帰って行く。だが、三島氏の霊魂は、この世に想いを残した。しかも、自害後一年には遺骨が盗まれるという事件が起こる。このような事件を含めて、いよいよ、この世に執着し、天上の世界には帰っていないわけである。

このような理由で、この世の同通した人に、自らの思いを遂げようとして霊界通信を送ったという考え方である。もう一つは、あの世の困りものの動物霊や地獄霊が、三島氏の名をかたって霊界通信をしているのかも、という考え方である。困りものの霊は、人があっと驚ろくような名をかたって出てくるからである。「正見」することが如何に大事かということと、三島氏のようにいかに名声があっても、心の針の向け方次第では、正道を誤ることになると知って欲しいのである。「人間の価値は、地位や名誉を差っ引いたものである」と言った高橋信次師の「ことば」を良く噛みしめてほしい。川端、三島両作家について長々と述べたが、彼等ほどの人達である、いつの日かそれも早いうちに天上の世界に帰っていくことを信じて疑わない。この項の終りに高橋信次師のことば「自殺」を引用したい。

● 「自殺」について

「人間の目的は、仏国土、ユ - トピアの建設です。あの世からこの世に生まれるときは百人が百人、こんどこそ自分の業（カルマ）・心の傾向性を修正し、この世を調和すると決意して出生します。ところが地上の大気にふれ、この世の環境に染まってゆくうちに、こうした目的を忘れ、自己保存の想念に支配されてゆきます。自殺の心理は、その極点に近いものです。いうなれば自己保存の自意織が過剰なために、自らそうした行為であり、神に対する冒瀆、反逆であって、人間否定を意味します。ですから悪のうちでも、自殺は最悪の部類には入ります。自殺も、さまざまな内容を伴い、各種にわかれています。たとえば家族の迷惑を考え、ひと思いに生命を絶っていく療養生活の長い老人。形はどうであれ、いちばん問題なのは、本人のその時の想念のあり方にありますが、しかし客観的に、私ならこうするという余地のある自殺は、もっとも悪い結果になるでしょう。自殺者の死後の世界は暗黒地獄です。一寸先分からぬ真暗な穴倉のようなところに閉じこめられての苦しみの連続です。鼓膜が破裂しそうな轟音が鳴り響くところとか、得体の知れぬ生物が意識のなかに入り込んでかきむしるのです。頭痛や幻想到襲われても、この世では麻酔や疲労が救いになって眠ることができますが、暗黒地獄ではそれができません。意識だけはハッキリしており、それでいて真暗ですから自分の体がどこにあるのかもわかりません。自殺は「光」を否定した想念ですから、こうした暗黒界に自らを引き込み、客観的に説明のできない自殺は、その苦しみが長期にわたります。ゆめゆめ、こうした想念に支配されないようにしたいものです。」

< 参考のために >

「なんでも当たり前だと考えて感謝しない人びとが死んで行く世界は、なにを見ても、なにを食べても満足することのできない苦しい世界である」



「直感力とは何か」

直観力、予感、知のしらせえ、ヒントを得る能力などを言う。ハイヤ - セルフ（自分の本質生命体）との接触も一つの直感力発露の方法という人もある。または放射感知（ラジエスセシア）を言う。

「直感力を説明するための基礎となるもの」

< 魂（生命体）は永遠 >

あらゆる生命体（動物、植物、鉱物）は永遠の生命をもつ。あの世（四次元以降、意識界、「空」の世界、実在界）と、この世（三次元、地上界、物質界、「色」の世界、現象界）を永遠に循環する。信次師は、般若心経の『空』は、「あの世」、『色』は「この世」と明解した。あらゆる生命体は『あの世』と『この世』を循環、転生輪廻しつづける永遠のもの。肉体（物質）は滅んでも死なない霊（意識、魂、心、生命エネルギー）

< 人間は本体一と五分身 >

人間は本体一、分身五の関係である。この大宇宙は、神の大意識を母体として、熱、光、電気、磁気、重力という五つのエレメントからできている。小宇宙である人間の生命体もこれに合わせて、本体一（大意識）分身五（五つのエレメント）の組合せとなる。ちなみに、動物は本体一分身五、植物は本体一分身四、鉱物は原子番号に核を加えた数が本体と分身の数となる。例えば炭素は、原子番号は六、核一つに陰外電子が六だから本体一分身六となる。詳しくは「心の発見・科学篇」、『心眼を開く』三宝出版社・高橋信次著を参照ください。

< 生命体（魂）の転生輪廻の順序 >

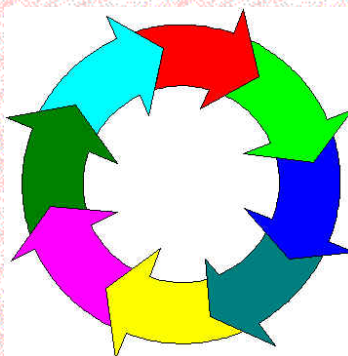
A（核、本体1）が先づ最初に地上界に出て、B、C、D、E、F（5分身）が順次、現象界（この世、地上界）に出る。原則的には順番通りだが、中には地獄界（暗い世界）の横道にそれる人がいるので、その時は話し合いによってAならAが短期間に二度、三度と地上界に出て魂の修業をすることもある。（何度も言うが、地獄界からこの世に生まれることが出来ない。反省をして天上界に帰った者のみが、この世に誕生できる仕組み）

<守護霊と指導霊>

守護霊とは自分の過去世であり、魂の兄弟である。たとえば、Aは「この世」に出て人生を送っている人。過去世の人を新しい順番に言えばF、E、D、C、B。最も古い過去世の人はBであり、Aの次に生まれる人。AにとってはF、E、D、C、Bは過去世の人となる。これらの過去世の人が「守護をする霊」となって、地上界に出て人生を送っている人を「あの世」から護る。これを「守護霊」つまり「魂の兄弟」、「過去世の人」と言う。この魂のグル-プは、似た者同志であり、業（ごう・カルマ・心の傾向性）が似ている。それで、この世の人生の修業の目的は、地上界にユ-トピアを創ることと、カルマ（心のクセ、心の傾向性）を修正することである。

A（この世の人） B（最も古い過去世の人で、次に生まれる人） F（一番新しい過去世の人）

E D C



なかには「良い守護霊を持て」と書いた本がある。守護霊とは、単に、「自分を守ってくれる霊」という意味で書いたようだが、正法の教えではそんなものはどこにもいない。それが「他力本願」の最たるもの。正法は「自力」を説く。だから高橋師は、「他力で救われた者は一人もいない」、と教えたのだ。守護霊とは、自分の過去世、魂の兄弟なのだから現在の自分を見れば、守護霊も大よその見当がつかう。こう言っては身もふたもないが、それが真実なのだ。

それでは、直感力、直観力、予感、虫の知らせ、ヒントを得る能力とは何か、それは守護霊の作用である。つまり過去世の人達が「あの世」から教えてくれるのだ。これが「直感力」。例えば、この世に肉体を持っている人が科学者としての道を志したとする。ところが、過去世の人の中には誰一人として科学を深くやらなかったとしても、ガッカリすることはない。その時は、その人の目的意識に合わせて、守護霊の友人や先輩が「指導霊」として協力してくれるから心配ないと高橋師は教えた。高橋師の守護霊はフォアイ・シン・フォアイ・シンフォというA D四百年頃の中国に生まれた人で、紀元前三十二年にイスラエルに生まれたイエス・キリストと言われた人と言う。また、高橋師はキリストについて次のように言い残した。

「イエスは天上界ではイマニエル・イエス・キリストと呼ばれ、紀元一年にイエスは生まれといわれていますが、それは大きな間違いです。彼は紀元前三十二年に肉体を持つております。イエス・キリストは三十何歳で死んだということになっておりますが、これも間違いです。彼は五十四歳でこの地を去る時に、弟子達にそれぞれ、場所を変えて教えてゆきます。」、と。

西暦はイエスの生誕に由来するが、何と、紀元前三十二年に生まれ、五十四歳で亡くなったと言い残したことに注目しなければならない。また、高橋師の「指導霊」はワン・ツ-・スリ-と名乗ったモ-ゼであったと記述している。

▶ オ - リング・テスト、フ - チ、MRAやLFT ◀

アブライド・キネシオロジ - (カイロプラクティックなどに使われた診断法) からヒントを得て考えられたものらしく、親指と他の指で の輪をつくり、指が開くかどうかによってテストする方法。人間の身体を測定器として使うものと説明されるが、正しいものはあの世の守護霊(過去世、魂の兄弟)が指の開閉によって教えてくれる。占いに使う人もいるようだが、その人の目的意識によっては、動物霊や地獄霊が協力するので注意が肝腎。ただ、オ・リングテストの初歩の段階の、例えば痛い、問題がある等の部位のチェックは、ただの精神作用であり、守護霊の作用ではない。

<フ・チ>

フ・チとは中国語で、「占い」という意味。ヨ - ロッパで水脈や油脈、鉍脈を捜した「振り子」、「ベンジュラム」、「糸つき重り」、ダウジング、ラジエスセシアとも、いう。「揺れ」と「不動」と「方向」の三つの答。熟達した人は守護霊の作用である。

<MRA、LFT>

共鳴磁場分析器といい、熟練したオペレ - タ - のダイヤル操作による波動共鳴法。MRAもLFTも熟練を要し、オペレ - タ - が介在するというのが特徴である。例えば、テレビやラジオはスイッチを入れると誰れで同じように音や絵を出せる。でも、これらは全ての人にはすぐに出来ない。あの世の霊の協力によってなされるものであり、守護霊(過去世の人)の場合もあれば、その人の目的意識によっては、暗い霊(地獄霊)や動物霊の場合もある。例えば、オ - リング、テストによる毒物や良薬のテストを例にあげれば、あの世の霊にとって全てお見通しだから、指の輪の開閉によって答えを出すことは簡単。ダウジングの鉍脈探しを例にとれば、あの世の四次元の霊からは、三次元の鉍脈など「お茶のこさいさい」簡単なこと。鉍脈さがしが当たったりはずれたりするのは、協力する霊の次元による。次に、高橋師の周辺に起きた鉍石の話を引用要約する。

● 「信じがたい事実」 S氏(工学博士)の手記から ●

S氏は昭和四十二年、八月から九月にかけて、ジャワ島で金山の調査をした。ジ - ブ数台に機材をつんで、二十五ヶ所から試料採取を行った。平均g / 屯という結果だった。四十三年十二月、S氏は知人と、山の写真と簡単な地図を持ち、高橋師のもとを訪ねた。高橋師は一、二分瞑目したと思うと、合掌した手が頭の位置へ上った時、コロコロと三個の鉍石が落ちてきた。そして、高橋師は言った。「日本円にして一億円、日本人技術者十名、現地人五十名、その他、発電器、採掘用トレ - ラ - 、同ショベル等を準備すれば可能だ」、と。S氏は、その三個の鉍石を実物大のカラ - 写真におさめ、証拠づくりをして、東京通産局まで持ち込んで分析を依頼した。一つは二七・五g / 屯 、あとの一個は〇・三g / 屯 、最後の一個は証拠品として自分の手許においているのでお見せしますと記述した。『天使の再来』高橋信次著

これには後日談がある。高橋師は「私はS氏に裏切られました。S氏によって大事に保管されていた鉍石は、悪用されては困りますので、私の霊力によって消しました」と、園頭師に言い残している。S氏は高橋師在命中にGLAを去り、その後「 の科学」で見かけたことも、ともかくも、S氏の目の前で鉍石の物質化現象が起り、その鉍石を分析したと言うのである。高橋師のように、光の大天使の協力による物質化現象は、現場から採取した鉍石そのものである。正しい物質化現象は、分析さえ出来る。どこかの霊能者の出したものを、確かな分析所へ持ち込んでみたら如何か。金粉を出す人がいるが、正しいものは純金。おかしなものは銅が主体である。

正しい霊能とは、これ程に厳しいものと理解いただく為に引用したが、正しい光の天使の協力により起る物質化現象は真実そのものである。それでは鉍脈、水脈探しについてももう少し述べよう。正しい光の天使の協力によるものは 百発百中という例である。大本の出口王仁三郎という人がいた。彼については多くの本が出ているのでそれを参考にしてもらえばいいが、高橋師は、この人は宗教の誤りを覚醒させる使命のあった菩薩界の人と、言い残した。彼の伝記には小さい頃から水脈探しに協力した事がいわれている。菩薩界の高霊格の人だから、その確率も想像すると余りある。また、海外ではフィリピンの心霊術者のアントニオ・アグバオア(昭和58年没、通称トニー)は、イエスの分身・5と高橋師は言い残したが、彼の自伝によると、幼少の頃から金鉍探しに協力した事が綴られている。類希なるイエスの分身だから、その確率は当然といえば当然だろう。イエスの話が出たからもう一つ。イエスの本体は、いまから百四十年後にアメリカのシカゴに生まれると高橋師は予告している。

Home

<気功の一例>

気功の「気」は病気とか元気、大元の「気」である。気とは心、意識、精（スピリチュアル）である。「功」とは、いさお、手柄、である。人の体に一切ふれることなく、気によって相手を飛ばす人がいる。人の体に触れることなく相手を負かすということは、常識では考えられない。原因の無いものはどこにも存在しない。必ず理由がある。これも、あの世の霊の協力により起る現象。アッと驚く、ビックリするような事を行う人を、「正見」したいもの。ものすごい熟達者は過去世で肉体行をやった人達、とは高橋師の弁。

<エドガ - ・ケイシ - という人>

今世紀最大の、眠れる予言者と言われるエドガ - ・ケイシ - という人がいる。質問に対する答を「リ - デイング」と呼んでいる。予言にしても、リ - デイングにしても、あの世の霊の協力によって、眠っているケ - シ - の声帯を利用して語られる。米国ロスアンゼルスのアガシャ教会の故リチャ - ド・ゼナ - 氏も、現在のサルバット氏も、英国のシルバ - バ - チのグル - プの故バ - パネル氏も、最近のポ - ル・ソロモン氏も皆、声帯を通して「あの世」から霊示を伝えるトランペット霊媒、スピ - カ - 、伝達役である。あの世からの「受話器」の役目である。「受話器」としての使命と役割を持った人達と言える。目が覚めたケ - シ - は自分の語ったことに驚ろくこともあったようだが、完全な受話器であるためには、ある段階の次元までの霊媒は、恣意を入れさせない為に眠ったり、意識を失ったようにしてなされる。高橋師は、いつでも、いかなる所でも目覚めた状態で自由自在に行われ正確無比だった。これは、まさしく次元の違いである。



「なぜ予言や予告ができるのか」

「何となく、そういう予感がした」とか「なにか虫の知らせがあった」という体験を持つ人は多いと思う。予知したり予言ができるということは、そういう事実がどこかに既につくられているということである。全くないものは知ることは出来ない。それでは、どこに既につくられているかと言うと、それは「念の世界」、「意識の世界」、「霊の世界」、つまり「あの世」に既につくられているということである。つまり、「この世」より「あの世」に先に起こるからである。表面意識（現在意識）ではそれを知ることは出来ないが、光の天使、如来、菩薩などの潜在意識の開発された人は、それを未然に知ることが出来る。知ることが出来るから予言、予告が出来るのである。

ところが、特別の使命を持った如来や菩薩以外の人でも、予言が出来るのはなぜだろう。地獄霊や動物霊に支配されている人は、地獄霊や動物霊からあの世に先につくられている事実を知るからである。霊視、霊聴、予感等の霊示として伝える為に、予知、予言が出来るということになる。それで、あそこは良くあたるという評判によって、人が集まるという仕儀。でも、予言をする人を正しく見ることである。大本教の出口王仁三郎は「現界（この世）に起ることはそれ以前に霊界（あの世）に現われ、霊界と現界は照合している」と説いているが、注目すべきことだ。また、園頭広周師は、「この地上界に起る何日か、何カ月か前に天上界で既に起っているのである。だから見たり、予言したりすることが出来る」と書いている。この世はあの世から映し出された世界であり、本来別々のものではない。この世」に起ることは、先に「あの世」に起るということである。


こうすると皆さんの中には、動物霊や地獄霊が、あの世に先に起きたことを知らせるのも、光の天使がその事実を知って伝えるのも、同じではないかと言う人もいるかも知れない。だが、それは違う。どう違うのか、考察したい。

地獄霊や動物霊は万能ではなく、知ることの出来る分野は限定される。一局部のことしか知ることには出来ない。だから動物霊、地獄霊が知ることの出来る範囲以外のことは予知、予言は出来ない。初めの方の模式図（予知や予言と、霊の段階の項）によって記述した光子体（A）の地獄霊、動物霊は地上界にへばりついているので、地上の一局部しかわからない。光子体（C）の菩薩界の人は高い位置にいるので、地球までか宇宙までの事象がよくわかる。これは、わかり易く説明するための「喩え、たとえ」だが、これでおわかりのようにはずれたということも起こるし、知ることの出来る分野は、本当によく当たったということになる。だから、低級霊の助けによってなされる予知、予言は、当たったりはずれたりする。しかも事故や死亡の暗いものほど良く当たる。

ところが、キリスト教でいう「光の大天使」、仏教でいう「菩薩」や「如来」などの上段階は、知る範囲が上段階に行けば行くほど広がるので、その予言、予知は比類なきほどに正確となる。それで高橋信次師の予言、予知は百発百中だった。それと第二点は、光の天使のそれは、勇気と希望を持たせるような予言、予告をする。例えそれが悪い結果となる予言であっても、その原因を教え、明るく生きる勇気を奮い立たせるように教え導く。動物霊等のそれは、不幸なことや、心が暗くなるようなことばかりが良く当り、心理的な恐迫さえる。そして、「私が、その悪い因縁をとってあげましょう」などと言って、お金と引き替えに加持祈祷などで因縁を取ると言う人もいる。何度も言うが、自分の因縁は自分で取り去る以外にないのである。「原因を根っこから取り去る以外にはないので。」と高橋師は言ったが、すべて「自力」だということは、言うまでもない。

これまで、ウェブ・マスターは動物霊だの地獄霊だのと、さんざん沽券にした。すべての動物の霊は、動物霊と言うが、家のミ・ちゃんやワンちゃんも、馬のヒビンちゃんや牛のモ・さんも、みな動物霊。その中でも、ヘビのニョロやら狐のコン助たちが、トンチやカンチに優れて、いたずらや悪いことをしたんだね。地球人の歴史が三億六千五百年なら、特にヘビのニョロは六億年（高橋師）にもなるものだから人間に憧れたのね。そんなこともあって、人間を手玉にとってからかうのがいるんだ。動物霊だってみな立派なのに、特に目立った悪いのがいるものだから、悪いものの代名詞にされてしまったと言うわけ。彼らの名誉にかけても、少し触れてみたい。現世に於て、家庭で犬や猫を飼うのと同じように、実在界では、「使い姫」として動物を使う場合がある。このようなことから、動物霊を神として祭るという誤ったものになった。その実例を幾つかあげる。

- 1 . 「エリヤに、鳥によって魚を持たしてやり、ミカンを持たしてやり、色々な食べ物を送りエリヤの飢を小鳥達が皆手伝って生活の環境を整えます。」（高橋信次師講演の中から）

2 . 月刊『正法』・園頭広周師の記述より要約 

「昭和四十三年、このまま「生長の家」にとどまっていたのでは真実の正しい真理を求めることはできない。家族六人を抱えて、すぐ生長の家をやめては生活ができない。東京を離れ九州へ帰り、正しいと信じることだけを伝えて、生長の家をやめた後のことを考えようと、福岡の生長の家「ゆには道場」の練成部長として九州へ帰った。ゆには道場で練成を始めると、園頭師が講義を始めると必ず一羽の鳩が部屋へ飛び込んで来て、講義を聴く素振りをする。練成員が円陣をつくって歌うとかならずその真ん中にいる。最後の修了式まで十日間連続して同じ鳩がはいってきた。不思議だ奇跡だということで他の講師が写真を撮った。園頭師は「私はそのことで自分の考えの正しさが、鳩を感動させたのだと思ったが、口に出しては言わなかった」と、写真入りの記述がある。それから三年後の昭和四十六年二月に、園頭師は生長の家を辞め、昭和四十八年三月、初めて、G L A 関西本部の講演会で高橋師に出会うことになる。その時、高橋師は「あなたが私のところに来ることは五年前から言って来たのです。ね、そうでしたね」と、随行した人に証明を求めた。その五年前とは、園頭師が生長の家を辞める決意をして九州へ帰り、先の「鳩の奇跡」の年が昭和四十三年であった。そのとき園頭広周師には鳩が使いとして現れたのだ。

また、古代インドの時代、お釈迦様には猿が使いとして現われたという。このように、蛇や狐を使いとして現わしたことがあったので、後世の人が、狐や竜等の動物霊を崇拜するようになったのは、この理由によるのである。先にも述べたが、高橋師は「蛇は地球の人間の誕生の歴史より古い」と明らかにしたが、動物は自分の本性を人間に見せたくないために、いろいろな霊的現象、主として菩薩の姿を見せる場合が多いという。その為に神のお告げがあった、お告げを聞いたと錯覚を起す者があり、遂に動物霊に支配される結果となるのである。高橋師は「天下の霊峰、富士山は今や狐の巣と化し、富士も泣いています」と吐露した。動物霊が変化（へんげ）して菩薩の姿を見せると、恰も自分が悟ったかの如く錯覚を起し、完全に動物霊に支配されてしまうのである。その人達の死後は、地獄界に住し、「人間が狐やヘビの姿になっているのです。そして、神の子人間が動物の支配下におかれて苦しむのです。まことに、おっそろしいことです。」と高橋師は言うのである。万物の霊長である神の子・人間は動物霊より上段階に位置するのだから、動物霊にコントロールされるのは実に愚かなことであり、人間としての本性を決して忘れてはならないのである。こうして、高橋師は、著書の中や講演会で、自称「神」が出てくるといふ人を登壇させ、聴衆の前で、その「神」とやらをチェックした。ウェブ・マスターの所有する数十本のビデオやテープでは、全例百パーセントが動物霊か地獄霊だった。正しいものではなかった。高橋師が、昭和四十三年に布教を開始し、昇天する昭和五十一年までの、すべての講演録を所有しているわけではないので、百パーセントと断言することは出来ないが、自称、神が出ると言う、天狗、小天狗が他流試合のように来た者もあったようで、すべて動物霊か地獄霊であったと言えよう。なぜなら、使命を持った菩薩や光の天使が、それほど多くいると思われるか。それでは講演ビデオの中から、その様子を再現してみよう。

高橋 「神様のおなりです」 笑い。

高橋 「あなたはどなた」

登壇者 「 の神じゃ」

高橋 「 の神とやら、あなたは人に何を説いているのですか」

登壇者 「人に幸福の道を説いている」

高橋 「ホ - 幸福の道をね」

と、高橋師と神とやらのやりとりが読く。そして、

高橋 「嘘を言いなさい！そなたは神でも何でも無い。本当のことを言いなさい！嘘を言ってもだめだ、みんな見えてんだから。菩薩のような姿を見せているが、お前はただの狐だな、そうだな！」

そして、厳しく動物霊をさとした後、動物霊を登壇者から取り除き、「さわらぬ神にたたりなし」という言葉で「現証」は終る。

高橋師は自由自在に霊視するので、登壇者を一瞥しただけで、全てがわかるのだ。ところが、この登壇者のようなところへ良く当るからというので「お尋ね」に行く人も多いのだろうが、無知とはいえ残念に思う。政治家が、沢山お尋ねに行っているとも聞くが、全く愚かしい。自分で判断できかねて、お尋ねした後でなければ行動できないとは子供よりまだ悪い。自己確立からは程遠いのである。彼らに国をまかせて、この日本はどうなることが。



「動物霊信仰」

動物霊信仰をして、庭の隅などに、キツネなどの動物霊を祭っている人がいるが、正しいことではない。高橋師の ” ことば ” を引用する。

「動物霊信仰者でも奇跡はあるでしょう。彼等にもそれ位のことは出来ます。ところが動物霊は、所詮 、動物であり、神裡は説けません。へびの癡猛さ、キツネのずるさを想像してみてください。へびやキツネに、慈悲とか愛がわかりませんか。まことしやかに人間をだましますが、もともと動物は本能のままに生かされているのですから、こうしたものが人間に憑くと、いつときは利益を与えても、ある程度時間がたつと本性を現わし、人間を食いものにしていきます。熱心な信者ほど病気をしたり、家の中がうまくゆかなくなったりするのも、その為です。」

< 教祖や熱心な信者の状態をよく観察しよう >

動物例が憑いている教団の、教祖や熱心な信者の状態をよく観察してみよう。顔色が悪い。病気が絶えない。人を非難する。人をおどす。自己本位。エリ - ト意識が強い。比較の観念にとられる。我が強い。感情的。欲望的。愛がない。計算高い。無理を平気で言う等である。また教団によっては、動物霊以外に阿修羅（あしゅら、アスラ - ）が憑く場合もある。このときは、戦闘的、排他的、一本調子、他をかえりみない等。動物霊は現象界（この世）に非常に執着を持っているから、神理があいまいだったり、あるいは全然説けず、占いに熱中している場合など、すべて動物霊の仕業とみて差し支えない。何々の神、何々の命、如来、××菩薩等を喋るようなら、これは間違いなく動物霊である。動物霊や魔王でも奇跡をおこしたり、病気を治したりするが、これと、神理に適った生活の髄伴現象として起こってくる奇跡とは、おのずと、その内容を異にしており、第一その永続性、心身の安らぎという点で、異質であることを知っていただきたい。

< 動物霊が支配（憑依）している人の特徴 >

動物霊が支配している場合は、神がかりになって、体を上下に動かしたり、合掌している手先が蛇行したり、座ったまま一～二メートルも空中に飛びはねることもある。彼等は人を驚かすところに特徴があると言える。不動明王だの、竜王だの、稲荷大明神と名乗って出てくる場合も動物霊がほとんどであり、まことしやかに振るまうので特に気をつけなくてはならない。このような人びとはまことに危険極まりなく健康にも、日常生活の上においても不調和を来し、お祭りをして供養しるとか多額の金品を要求したりする。動物霊が憑依している人は本能的欲求が強く、したがって憑依されている人は金とか、地位とか色欲に翻弄される。予言する、病気を治す、それだけで信じてはいけない。また罰があたると脅迫するようなことがあれば、これもまた地獄霊である。一番大事なことは、神がかっている人間の品性や言動をよく観察することであり、正道を心の物差しとして生活しているかどうかが問題なのだ。地獄霊が憑依すると、おごり、怒り、そしり、ねたみ、欲望の渦の中にひきずられるため、心は常に動揺し、不安定である。いくら口先でうまいことを言っても、その考えること行為に大きな矛盾がでてくる。そして、不自然な霊力や脅迫に合うと、人はつい盲信、狂信になりがちで、正しく見ることが如何に大事であるかを理解していただきたい。とうとう終りの方は、悪い動物霊の記述になってしまったが、次の説明でこの項を終えたいと思う。

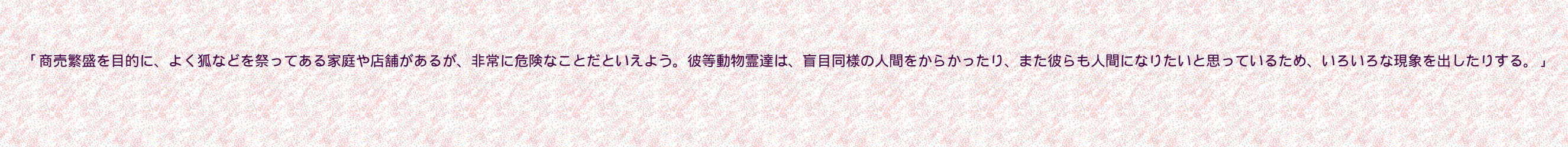


「竜神、龍王について」

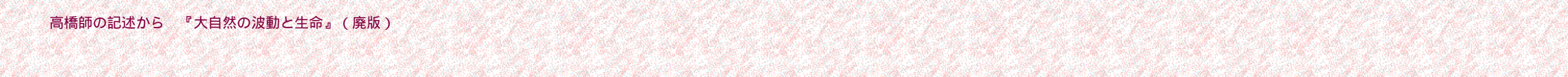
彼らは動物霊達に、動物としての道を教える役職にある天使達である。へビや竜ではなく、人間の天使である。仏教でいう菩薩、キリスト教でいう上段階の光の指導霊になるための修行過程なのだ。これはもっとも厳しい修行過程であり、学習なのである。なぜなら、動物霊達は、感情の気性が強く、本能的で、指導はむずかしく、この世の三百年にも当る修行と高橋師は教えた。ただ蛇や竜達が、良く正法を勉強して、竜王達の仕事を手伝うことはあるが、彼等は、竜神でも竜王でもないのである。稲荷大明神、竜神、竜王は仏教でいう人間の天使の役職名なのである。また、「不動明王」とは実在界（あの世）の秩序を正す役目と、現象界（この世）で肉体を持っている正しい心の人々を、魔から守る使命を持った諸天善神の一人である。



高橋師の「ことば」から

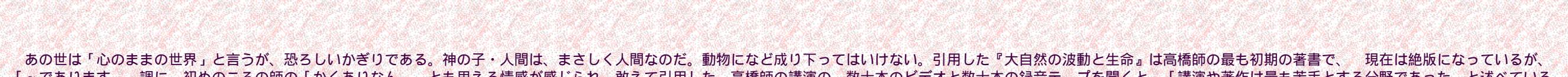


「商売繁盛を目的に、よく狐などを祭ってある家庭や店舗があるが、非常に危険なことだといえよう。彼等動物霊達は、盲目同様の人間をからかったり、また彼らも人間になりたいと思っているため、いろいろな現象を出したりする。」



高橋師の記述から 『大自然の波動と生命』（廃版）

「また過去世の中にもいろいろあります。人間から地獄の畜生界に落ち動物になった者もいます。私の友人が太郎という子犬を飼っていました。この可愛い子犬と友人は親子同様に生活をしており、この子犬は自分の好きなテレビをいつも見ていたそうであります。九年の歳月は流れ、我が子同様の子犬も病気によってこの世を去り、老夫婦の悲しみは、ひととおりではなかったのであります。早速多摩動物霊園で手厚くほうむったのであります。この子犬を忘れることが出来ず、いつも墓参して涙にくれていました。この友人がある日親しい家に行き、この話をしたところ突然その家の人に霊的げんしょうが起こり、犬の遠吠えをして、友達の胸の中にとびこんで泣きだしました。暫くしてから、「私は太郎です。お父さん、私は可愛がられて育って幸福でした。お父さん、永生きをして下さい、私はいつまでも守ります。お父さんは神様だ」と申され涙にくれていました。良く尋ねて見ると、九州の炭鉱で働いていた坑夫の子供で、会社はつぶれ食べる物がなくなり、餓死してしまいました。その時に、犬なら何処でも食べ物さをがせるのに、なぜ私たち人間は餓死するのだろうか、こんどは犬になりたいと思ったそうであります。この少年も太郎という名前であり、九才で亡くなりました。こんどは犬として現象界に生まれたが、全部人間の言葉がわかったと申していました。このように一つの人生航路を踏み外すと、犬であっても過去世は人間の場合があるのであります。私達の魂の遍歴を考えると、現象界の衆生は、人間の本性を忘れてはならないのであります。信ずる一念力のエネルギー - は莫大なものであります。」



あの世は「心のままの世界」と言うが、恐ろしいかぎりである。神の子・人間は、まさしく人間なのだ。動物になど成り下ってはいけない。引用した『大自然の波動と生命』は高橋師の最も初期の著書で、現在は絶版になっているが、「～であります。」調に、初めのころの師の「かくありなん」、とも思える情感が感じられ、敢えて引用した。高橋師の講演の、数十本のビデオと数十本の録音テープを聞くと、「講演や著作は最も苦手とする分野であった」と述べている。講演については、高橋師の分身である江戸時代末期から維新の政治家・木戸孝允に、「腹から声を出せ、ノドからは声帯をつぶし長くは話せない」等と、指導を受けた事を述べているが、講演テープ、ビデオの中の師の講話は、その迫力といい、声量といい、決して並の講演ではない。師の講演は神理の言葉だから、砂地に水が吸い込まれる様に心に響く。そして、木戸孝允は酒豪で、木戸孝允の意識を高橋師に入れると、酒をまったく飲まない下戸の高橋師にも、酒が水の様に感じられたと記述している。高橋師の「お酒」については、既述の、『経済界』主幹のS氏が自著の中で「S氏が飲み屋さんへ案内されると、高橋師はホステスさんの話に静かに耳を傾けるだけで、お酒は飲まなかった」、と書いている。

霊媒なる人に、酒豪の人を入れてもらう、また、その反対にまったく飲めない人を入れてもらって、テストされたら如何だろうか。酒を一滴も飲めなかった人がチビチビ呑み始める、大酒のみが飲めない等と、霊査の正しい判断のテストの方法がまた一つ増えたようだ。霊媒はその人を入れるというのだから、そのひと本人になり切るのは当然なこと。また、高橋師の一番最初の講演には、モ - ゼが不得手な師に代わって、仏教について代講した事も言い残している。モーゼは三千年余り前から、天上界から地上界をつぶさに見ていたのだから、二千五百年前のお釈迦様の時代からの仏教の変遷など訳ない事だったろう。しかもモ - ゼは高橋師の指導霊だったとも。

「ユリゲラ - という人」

高橋師在命中に話題になった人である。当然のことながら、高橋師は彼についても触れ、「ユリゲラーは動物霊がコントロールしている」という言葉が残っている。当時の週刊誌には、気分やで気分がコロコロ変わり、周りの人が困っていた事を報じていた。まさしく動物霊の憑依による霊能である。動物霊だから人を平気で困らせる。動物霊の本性まる出し。霊能力にあこがれてはならぬ。人格の破壊、人間喪失、人間失格となる。正しく見て欲しいのである。ユリゲラ - は動物霊が背後から協力していると高橋師は注意を促した。

「サイババという人」

現代、もっとも注目される人で、アッと驚ろく物質化現象を数多くする人。園頭広周師は月刊『正法』の中で、「インドのサイババの写真からは動物霊のニオイがブンブンしてくる」と記述されている。赤いおべべを着て、灰やプレスレット等を分け与えることによって配下がどんどん増えていくことだろう。正しく見て欲しい。日本人にも彼の許に集う人も多くいるようだが「転ばぬ先のツエ」という。神の子・人間は万物の霊長なだよね。動物は人間の配下ということ、よくよく考えて欲しいのである。動物は人間のように高次元の生きものか、決してそんなことはない。サイババは動物霊の支配下にあると言われているのである。金されれば、誰だって病院や学校はすぐに作れる。四十年の間に五千万人もの帰依者を集めたそうである。灰を配ってさえいれば、霊の世界に無知な大衆を相手に、錬金術は大繁盛、すごいね。世界中からお金を幾くら集めればよいのだろうか。サイババは法は説けない。詩は折山つくっている。少し変わったことをする人がいると、世界中から同類の人が駆けつけるのである。霊能かぶれの人達よ、早く目を覚まして欲しいと思う。かつて、フィリピンの心霊治療に世界中から大勢の人が押しかけた。その力たるや、心霊術者の多くをウエブ・マスターは疑問視しているが、世界的に有名だった故アントニオ・アグバオア（通称トニ - ）は「イエス・キリストの分身・5であった」と高橋師は言い残しているが、その正しい霊能力たるや、相当のものだったと信じて疑わない。このようにフィリピンの心霊術者群の中にはトニ - のような人もいるにはいたのだが、インドのサイババは正しく見て欲しいのである。ついでにシャリ - マクレ - ンにはビジネスのニオイがすると園頭師はいう。正しく見て欲しいのだ。

Home

「念写、透視、スプ - ン曲げの謎」

< 念写 >

かつては、写真乾板に念写するのが一般的だったが、現象処理のための人の手が介在することを避けることと、簡便化のために現在はポラロイドを利用することが多い。これも、あの世の霊の協力による映像転写である。物質化現象に対して「映像化現象」と言う。暗い顔をしながら懸命に念写に時間をかけるよりもっと外にやることはないのだろうか。動物霊の協力によるものは、動物は気ままな本質をもつので、成功したり失敗したり気ままである。このような霊能力に魅かれて人生に失敗した人が多くいるが、残念である。

<透視>

肉体の眼では見えないもの、見ることが出来ないものを視たり、知らないことがわかる等、現代は広義に解釈されている。透視により内蔵の状態を見て病気を指摘したり、見えないものを当てたり、知らないことが解ることを言う。三次元の科学では、レントゲン（CT含む）、MRI、超音波画像表示機等によって、内蔵などの眼で見えないものでもわかる。でも、肉体の眼ではわからない。それがどうしてわかるのだろう。原理は霊視（霊眼）と同じだが、意識（心）に「あの世」の霊がコンタクトして、映像として見せるわけである。あたかも肉体の眼で見るようになるが、あくまでも、肉体の眼で見ているのではないのだから、フォ-カス（焦点）は利用されない。これを心眼（心の眼）霊視、霊眼とも言うが、後を向いていようと、下を向いていようと一向に構わないわけだ。三次元の方は「あの世」の霊にとって関係はない。有名な宜○愛 という人が、暗い眼をして少し斜視で霊視されるのをテレビで見ていると良くわかる。三次元としての方向は向いているが、眼は「うつろ」である。

<スプ-ン曲げ>

特別に指先に力を入れるわけでもないのに、念力によってスプ-ンが曲る、折れる、フォ-クのようにギザギザになる。何でも良いのだが、信じられないことが起っている。スプ-ン曲げは、もう、ブームだった。ハシカのように急に蔓延し急激に沈静した。これも劇的なものはあの世の霊の協力によるもの。

「念は正しく使わなければならない」

お釈迦様である、現代の高橋信次師が説いた「八正道」の中の第七番目に、「正念」、「正しく念じる」とある。正しい願望、望みは正しい目的意識を思い持たなければならない。「こうしたい」、「こうなりたい」という「念」、「思い」は、ものを創り出すもの。例えば、小さい頃に極貧の生活を体験したので、大きくなったら大金持ちになるのだと心に誓っていた子が、大きくなったら守銭奴に撒し本当に金持ちになっていく話がある。「念」はものを創り出すとは、このようなことである。念は、その人の分（ぶん）にかなった念であるかどうかが問題なのだ。その念ゆえに、心までダメにしては何の為の人生かわからない。正念に対しては「欲念、邪念」と言うが、その念が正念であるかどうかの判断は、その念によって、自分の心が安らぐか、その念によって「調和」するか二つが基準である。その念によって、自分だけは満足しても、家庭はガタガタでは、それは正念とは言い難い。不調和な念を持つ人は、「類は友を呼ぶ」というたとえの如く、暗い世界の地獄霊や動物霊を呼び寄せてしまうのだ。次は高橋師の講演筆録より参考にしてもらおう。

「祈禱師・拝み屋や海外のブラック宗教の中には念の力によって人を祈り殺してしまうものまであるようだ。祈り殺すという「邪念」によって、相手も同じ「類は類」、同類の人であれば、念によって祈り殺すことも可能かもしれない。だが、もし相手の人が心美しい人で、邪念によって祈り殺そうとした場合、その念は、発した人間の方へ勢い込んで帰ってくるので、遂に祈り殺そうとした人が倒れてしまうことになる。これは、まさしく反射境と同じです。心を美しくみがいている人は、美しくみがいた鏡のごとく反射して相手に帰っていくものです。心の曇った人や曇った鏡は、発信された邪念を受け、吸収してしまう。だからそこに現象化されてしまいます。最近の教祖諸候はポンポン死んでゆきますね。私等みたいなのが、「法」を説くと何か色々都合がありまして、そこで祈るわけですね。ところが私の方には何もありませんから反射鏡ですワ。どうにもならなくなっちゃって、死んでしまうちゅうわけですね。祈った方に助けを求める。皆さん、念は正しく使わなくてはいけませんよ。」

「念（波）の発信と受信」

簡単な言葉や簡単な図を送ることが行われる。閉ざされた部屋や遠く離れた場所から、念の「送り手」が発信し、それを「受け手」が送られた言葉や図を表示し、それが合致しているかどうかの判定をするというものである。霊能者のスペシャル番組でよく見ることがある。どうして起るのか考えてみたい。



「念（波）の基礎となるもの」 高橋師の「ことば」より

「受信機と発信機は人間が製り出したものです。ラジオやテレビは人間が作ったものです。人間の中には、その作用がすべて整っています。ただそれを自分が受ける能力を持っているか、いないかだけの問題です。皆さんの心の中が、人を恨み、妬み、誇る、そして怒る心をつくったり或いは自分自身がより大きな欲望、足ることを忘れ去った欲望が多くなると心にスモッグが出来てしまいます。それが多くなればなる程、盲目となるのです。」



園頭師の記述より引用要約する。

「『念の速度は光より速い。念の世界には時間、空間がない』と高橋先生は言われた。昭和四十八年九月一日から十日まで高橋信次先生が『インドの時と同じ修業をしましょう』と言われて、十人が選ばれ長野県竜王へ行った。昼間は反省をして、深夜一時から三時まで山中に別々に散って禅定・瞑想をした。離れた所におられる高橋先生が『念』を発せられるとそれを私達がキャッチするという訓練もやった。出来る人も、出来ない人もいた。」

「どうして『念』は通じるか」

念が通じるということは、守護霊（過去世、魂の兄弟）による作用である。困りものは、本当の守護霊ではなく動物霊や地獄霊の協力によって、念が通じることである。簡単な言葉や図は、動物霊や地獄霊でも協力出来るが、その結果たるや、これまでに述べた通り惨澹たるもの。正しく見る必要がある。あるとき、漁船が大しけで航行不能になり、無線も使えず漂流して行くえ不明になった。留守家族には夢枕に立つ、生存を知らせるような感じが読み、それから一カ月ほど過ってから奇蹟の生還をしたと言う話がある。平成六年にもヨットマンが生還したと報じたが、このような念の発信受信はどうして起るかという、念は相手にそのままダイレクトに通じるのではなく、守護霊（潜在意識・過去世・魂の兄弟）を介して行われるということである。時間、空間のない念の世界だから、場所はどこでも、想えばすぐに通じる世界。これで思いだすのは、かつて米ソの対立があった頃、電波も届かぬ深海にもぐった戦略原子潜水艦を霊能力で探し出し攻撃を加える「心霊戦争」なる研究をやったようだが、このような心霊力の応用は、「あの世」を介して行われるので、不純なものは伝えない世界だから、実験としては成功でも、いざ本番という時には成功するとは限らない。戦争ごときに加担する念の世界ではない、と知らねばならない。



「ノ - チラス号の念波実験」 高橋師の記述から

「 1959年（昭和34年）7月25日、アメリカ原子力潜水艦ノ - チラス号で、テレパシ - 実験の詳細が、ソビエト通俗科学雑誌「知識は力」の1960年12月号に「遠隔感応は可能か」という表題で掲載されたのであります。ノーチラス号に一人の見知らぬ人物が乗り込むと、潜水艦は直ちに潜水を開始して、16日間大西洋で潜水航行を読けました。この不明の人間は、その間ずっとあてがわれた船室に入り、一步も外に出ず、食事を運ぶ水兵と艦長以外はその顔を見た者はいません。この見知らぬ人物は、一日二回艦長から「十字」「星」「円」「四角」「三本の曲線」の五つの符号を書いた、紙片をわたされます。双方が、サインを終わると、艦長はそれを光を通さぬ封筒に入れて密封し、更に、その上日付と時刻、極秘の文字を書き添えました。1959年8月10日の月曜日に、ノーチラス号はクロントン港に入り、この謎の男を上陸させたのであります。そして、今度は飛行機に数時間乗せ、メリーランド州フレンドシップ市空港に送られた後、自動車でアメリカ空軍宇宙局付属生物学研究部長ポヤルス氏の許に連れて行かれた。無言のまま、封筒を差し出すと、ポヤルス部長も、金庫の奥深く仕舞っておいた同じ様な封筒を取り出し、日付順に中身を照合すると、ピッタリ符号の合うものが、70%に上りました。

この部長が、金庫より取り出した封筒は、別の男が16日間、陸地の立ち入り禁止区域内の、一室に閉じこもったまま、自動機械でかき混ぜた、一千枚のカードから選んだものであります。一日二回タイムスイッチで一分間隔に次々とカードが弾き出される。それをジッと見つめ全神経を働かす一念のエネルギー念波力が二千キロ離れた海中、しかも、数百メートルの海底の潜水艦にいる人間に見事伝達されたのであります。1932年から37年頃、ソビエトでは、人間感応作用の実験が具体的に行われていました。この研究も大変進歩しています。またイギリスの文豪H・G・ウエルズの、予言も感応現象であります。ウエルズの一生は科学とテクノロジー - の発達に依る、人類の無限の進歩に対する、希望の中に生きた人であります。文明の発達に従って、政治・経済・精神文明の歩調が合致しないと、人類は自分で自分を滅ぼすようになることを、常に警告して来た人であります。ウエルズは、1933年即ち満州事変の勃発後2年で書かれた未来の歴史小説の中に、支那事変、アメリカの介入、日本の敗北その他1957年まで、世界に起こった多くのことを見事に予言しているのであります。この予言的の中も、感応力の作用により、偉大な指導霊が文豪ウエルズに書かせたものであると、私の指導霊は教えています。」

Home

「心のうちから聞こえる声に耳を傾けなさい」

高橋信次師の著書目録

心の底の底から囁いてくれる守護霊の声に耳を傾けて欲しい。守護霊の声は、肉体の耳に外から聞えてくるのではない。外から聞こえてくるのは、動物霊が憑依霊である。また心の内から聞えてくると云っても、心が乱れ騒いでいる時に聞えてくるものは守護霊ではない。正しい守護霊の声は、宇宙創造の神に対して、そして万生万物一切のものに対して、すべての人に感謝し、自分の過去の失敗や、自分の心の暗さに、とらわれなくなった時、そして自分が神の子であることの自覚に立った時に心の内から聞えて来る。静かな落ち着いた心になった時に、心の内から囁いてくる声にじっと耳を傾けて欲しい。最初は小さく聞き取れなくとも、聞く習慣をつければ、その内なる声は次第に大きくなってゆく。私達が幸福になるためには、心の奥底から起こってくる真実の心を大事にしなければいけないのである。「こうせよ」という奥底からの心の願いを実行することが、一時恥かしい思いをすることがあっても、金銭的にも物質的に損をすることがあっても心の奥底からの「こうせよ」という心に順うことである。そうするとそこから運命がよい方へ転換し展開してゆく。煩惱執着を捨てた後から卒然として湧き上がってくる神仏の心、その心のままに行動することが大事だ。高橋信次師が言う「勇気と実行」なのである。

高橋信次師の著書目録

「人生と虫のしらせ」

高橋信次師の著書目録

高橋信次師の著書目録

高橋信次師の著書目録

高橋信次師の著書目録

生活の中で、第六感・第一印象、虫のしらせというような精神作用がある。また予感という言葉で表すこともある。たとえば、「何か良い事がありそうだ」とか、「今日の旅行は、とり止めた方がよさそうだ」ということがある。時間が過つと「ア - あの感じは、このことだったのか」ということを経験されたと思う。心が穏やかで、調和されていると、心の底の底から静かに語りかけてくれる。この精神作用は守護霊、つまり潜存意識（過去世）の作用である。

高橋信次師の著書目録

もう一度、おさらいをすると、守護霊は、その人の魂の兄弟（本体一、分身五）が潜在意識層にあって、地上界に出ているその人の一生を見守り、魂の向上のためにあらゆる努力を払っている。また、指導霊とは、主として、その人の職業なり現象界での目的使命に対して、その方向を誤らせないように示唆を与えてくれる魂の友人、あるいは先輩である。守護霊と指導霊を兼ねてその人を守り指導している場合もある。

高橋信次師の著書目録

心が穏かで、心と行いが調和されていると、守護霊も指導霊も協力を惜しまない。反対に不調和だと、守護霊はその人を守ることができず、これが長期にわたると不幸を招くことになる。日本の神道でいっている、八百万神（やおよろずのかみ）といっているのは、この守護霊のことを云っていると、高橋師は教えた。また、この潜在意識の作用、つまり、守護霊の作用は、四六時中あるものではない。

高橋信次師の著書目録

「愛と魂のつながり」

高橋信次師の著書目録

< 宜 愛 という人 >

高橋信次師の著書目録

テレビにも度々出演され、著書も多く出している有名な女性霊視者がある。あるテレビ番組でタレントさん数人を相手に霊視をされていた。タレントとのやりとりの中で「あなたの家の居間（台所？）が暗い。ヒョ - タンに塩を入れてそこに下げてください」と言われていた。塩を入れたヒョ - タンを下げなさいとはこれ如何に。窓がなくて暗いのなら、照明を点ければよい。家の雰囲気暗いのなら、家族の者一人一人が明るく調和してオホホ、アハハと楽しい我が家をつくるように努めることである。じとじとと湿気が多いのなら換気を良くすれば良い。会話もなく、調和のない家庭は暗い。そして、問題も多いのである。明るい雰囲気の家をつくるには金はかからない。多宝塔や壺を買うこともないのだ。この珍解答にはウエブ・マスターもビックリしました。そして、別のコ - ナ - では、スナップ写真の片隅に霊が写っているという写真が全国から送られていて、それを霊判定をした。その中の一例、空港待合室での怪。空港でスナップを撮った。その写真の中に霊らしき姿が写っていた。女性霊視者が解説して曰く、「この人は空港より旅立った人を待っている霊です。あなたの撮影した写真に写ったということは、あなたに助けを求めている姿です。そこにお花をあげ、祭って下さい」と教示した。

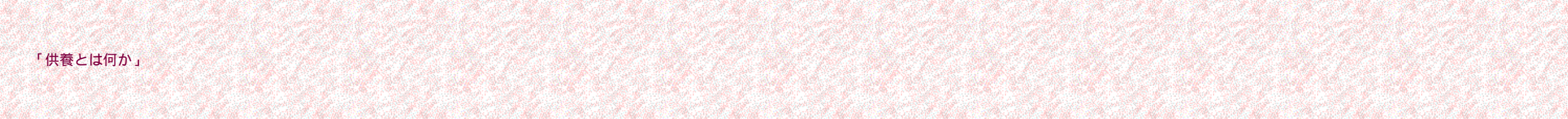
高橋信次師の著書目録

人は死んだら、原子肉体を離れた靈魂（光子体）だけになる。悟った靈魂は地上界に執着せず、天上界、つまり四次元のあの世に帰ってゆく。ところが、この世に執着し、心を残した靈魂は自（地）縛霊、浮遊霊となる。勿論、天上界へ帰らないのだから、地獄霊である。このように死んでも、天上の世界に帰ることなく地上界に執着して、この地上界の人々に困った霊的現象（写真に写る）を起す霊と言う意味で、悪い霊、つまり悪霊と言っている。このような自（地）縛霊の行動は制約される。だから執着した辺りにだけいることになる。「四六時中いるかというところではなく、心の目で見て（霊視して）も、いたりいかなかったりするはずである」と高橋師は教えるが、あの世にはあの世のル - ルがあり、行動は制限される。ところが、あの世の霊は上段階に行けば行く程、行動範囲も広く自由となる。

高橋信次師の著書目録

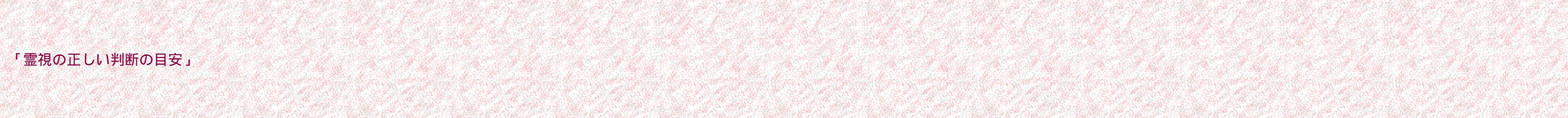
何かの理由でそこに執着し、地縛した靈魂にお花をあげたり、線香や水をあげたり、お経をあげることによって果して自縛霊が執着を解くことになるのか。否である。この世の私達と同じように、ものわがりの悪い人には、何度も何度も繰り返して教えて、やっと理解してもらえるように、わかるまで教えるべきである。もう、この世の人ではないこと、この世に思いを残す事は愚かなこと、今までのすべてを反省して、天上界に帰ることをわかり易く何度も教えることである。勿論、教え諭すこちらの側が調和され、正法にかなった生活を送っている人ほど、その効果は大きいと言える。それは、ある特別な個人の、あるいはグル - プの特権ではない。迷っている人を、助けてあげようとする愛の心を持つ人なら誰でも出来る。「愛の心を持つ人には、その力が強く出るので」と高橋師は言っている。また、高橋師の著書、講演の中には何百年もの間、自分が死んだことすら自覚しない靈魂も多く登場するが、これら地獄界の足場をくずすには、地上界の我々が、高橋師が説いた「正法」を実践する以外にはないのである。

ところが、日本人の永い習慣の中から、交通事故死した現場にお花をあげたり、小さなホコラや地蔵さんを祭っている。大事な人を亡した悲しみはよくわかる。だが、事故死するには事故死する原因があったのである。急激に肉体と霊が分離しなければならなくなるには、そうならなければならない理由があったということである。そのような靈魂は、自分の死をも悟らずこの世に自縛する者も多い。それで、そこにホコラや地蔵が祭られ花がささげられると、そこが自分の住み家と考え自（地）縛するのである。すると、そこを通りかかった同類の通行人にヒョイと憑依して、事故現場で第二、第三の事故が起き死者が出ることになる。それでは、供養とは何かを考えてみよう。

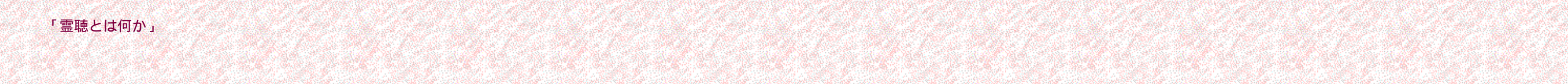
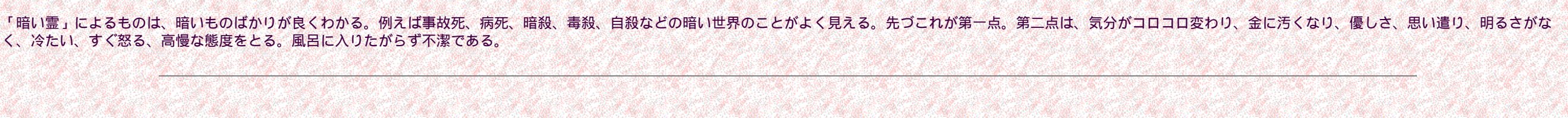


供養とは、一人一人がオホホ、アハハと明るい調和された正法の生活を通して、地獄霊にその後姿を見せることであり、正しく教え諭すことである。それが地獄の足場をくずし地獄救済につながるわけ。供養とは花をあげたり、お線香をつけたりお経をあげることではない。

ところで、テレビの中で女性霊視者は”珍解説”をされていたわけだが、テレビは茶の間に無断でズカズカと割り込んで来る。もし間違った放送がされると、全国のテレビを見ている人が皆、間違うということになる。これはもう罪悪。この方は、大学の教授達から霊能についての意見が出され、話題にこと欠かぬ人気者であるが、ある人が「宜　愛　さんを救って欲しい」と雑誌に書いていた。霊が見える人には、見えるなりに悩みがあるのだろう。霊能かぶれの人はよくよく考えて欲しい。ウエブ・マスターは、霊能がなくて良かったと心から思う。光の天使ばかり見えるのなら大歓迎だが、暗い霊ばかり見えたらそれこそどうにもならない。園頭師は月刊『正法』誌の中で、「宜　氏は、幽体離脱も家の軒ほどの高さ。だから暗いものばかりが良く見える」と書いた。最高の境地を「宇宙即我」（うちゅうそくわれ）というが、地球がはるか下に見え、宇宙と一体となる境地もあるのだ。

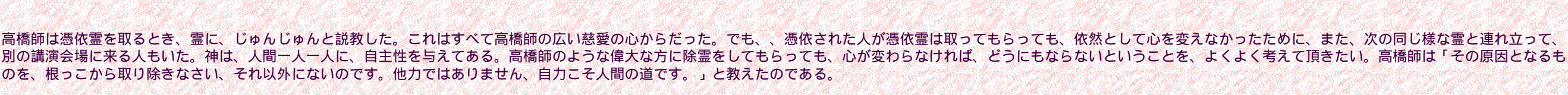


光の天使の作用によって現われた霊視か、または、動物霊や地獄霊の作用（憑依）による霊眼であるかが重要な問題になる。上々段階の光の指導霊や如来、菩薩等の特別な使命を持って生まれて来た人や、正しい生活実践で二次的に現われた霊視であればそれで良いが、しかし全んどの人達の霊視は、困りものの方だと言うのである。その霊視が正しいものが、「困った霊」によって引き起されたかどうかの判断の目安を示そう。



そばに誰も居ないのに、声が聞えて来たり、ささやくのがわかることを言う。そばに音源がないのなら、あの世の霊の語りかけである。それが正しいものかどうかを高橋師は、「あの世の霊が、見えて、聞えて、話せたら信じなさい」と言った。霊聴などの霊現象があらわれても、語りかけてくる霊の姿を見ることができ、霊の話すのが聞え、その霊と話せ、そして過去世の言葉が喋れたら、全てを判断した上で、その霊を信じても良いが、その内の一つでも欠けていたら信じてはならないと教えたのである。

例えば、あの世の霊が語りかけて来たことに対して、それに答えて話せても、その霊の姿を見ることが出来なければ、むやみに信じてはならないということである。どうしてかというと、あの世の困りものの霊達は、その人をコントロールするためには、その人の気を引くようなことを語る。たとえば「余は　菩薩なるぞ」、「私は　観音です」とか、その人の心に応じた言葉を用意しているものだから。霊視のできる人が、疑問を持って「あなたは、本当に○　菩薩様ですか」と尋ねたとする。すると「そうじゃ、余は○　菩薩だ。私は、そなたにこの世の困った人達を救って貰うために、あらわれたのじゃ、祭るがよかるう。そうすれば余は、そなたに巨万の富を用意しよう」などと言ったとする。でも、その霊の姿を見る能力を持っていれば、「なんだ、お前はただのキツネではないか」とか、「なんだ、あなたは、暗い地獄の霊ではないか」と、その霊にも間違いをこんこんと説くこともでき、その上、霊を救うことにもなるのだ。



ところで、全国いたる所に、お金と引き替えに除霊をする拝み屋さんや霊能者がいる。なかには「私の問題は霊的な障りかも、お払いをして除霊しなきゃ。」とお考えの人も多い。どうしようもない悩みや苦しみは良く分かる。だが、現在の結果（病気、問題など）は、すべて自分で作り出したもの。自分で作り出した問題は、自分で解決する以外にはない。原因は自分にあるから、だから自分が苦しむのだ。自分のせいでないのに、自分が苦しむのは割に合わない。それは当然なこと。自分が原因だから自分が苦しむ。これも、また当然なこと。こうして、苦しみから逃れるには、その原因となるものを元から取り去らねばならないのだ。酷な事を言うようだが、原因を元から取っても、すぐには良い結果は出ない。しばらく時間が経ってから必ず良い結果がでるのだ。原因をつくった時間が長ければ長いほど、良い結果が出るには時間がかかる。また、それも当然なこと。この仕組みも、実に良くできている。どうしてかという、余りにも簡単に良い結果ができれば、心の修業、魂の修業にならないからである。

ところが、一定の時間を悩み苦しむと、その時間の長さに応じて、こんなに悩み苦しむのなら、もう二度と悩み苦しみの元は作らないぞと、決意できる良いチャンスとなる。修正のまたとない勉強なのである。たとえば、十年間も、悩み苦しみの元を作っておいて、これは間違いだったと気がついて修正したら、ほんの1、2ヶ月で良い結果が出たとすれば、また同じ原因を作り、堂々めぐりをする人が多く出るに違いない。「ノドもと過ぎれば熱さ忘れ」まさしく、その通りだと

思う。苦しみは短く簡単に済ませたいのも人情で、それも良く分かる。でも、この宇宙の法則は、そうっていない処に驚かされる。我々は、何度も何度も地上界に生まれて人生を繰り返す。悩み苦しみ失敗して、自主的に勉強して行くもの。失敗して気がつくより、最初から気がつくのが良いに決まっている。そこでお迦様であった高橋信次師は、人生の生き方、心のあり方、宇宙の原理原則を「正法」（しょうほう）として、手とり足とりして懇切に教えてくれたのである。これを、「転ばぬ先の杖」という。正法は真理、神理、神様の法則だから、二つとはない唯一のもの。いつか学ばなければならないものなら、早いほうが良いに決まっている。そう思いませんか。

サテ、憑依されていた人が、高橋師より憑依霊は取ってもらったが、心を変えなかったために、また次の別の霊に憑依されて講演会に来る人もいたと述べた。この様な例はいくつもテ - プに残っているが、あの世の霊が見えて、聞えて、話せたら信じても良いと、ことある毎に口やかましく言った。そうすれば間違うこともないということ。見る能力を持っているからといっても、相手が青白い光を発していたり、永い時間、その姿を続けることが出さなければ、間違いなく「困りものの霊」である。光の天使のそれは、淡いゴ - ルドカラ - で、納得いくまでその姿を見せてくれるものだが高橋師は言っている。百のうち一つでも疑問があったら信じてはいけない。光の天使のそれは神理そのものだから、疑念をいただくことは有り得ない。これは、正しさ判定の最低の規準だから、とことん疑ってかかるべきである。疑問があったら、最後までとことん追求すべきである。その結果、「困りものの霊」はその内に馬脚をあらわす。正しきものはいつまでも正しい。神から「人類を救え、人のためになれ、神とのとりつぎの役をしる」等と言われて立ち上がったという人がいたら、その人をよく観察すること。正しく見ることである。上上段階光の指導霊や諸如来、諸菩薩などの使命をもって出て来た人以外は、見えたり聞えたりするのは普通ではない。ほとんどの例が地獄霊、動物霊が見せているもの。見えたり、聞こえたりする人は、そのときどきの心のあり方、生き方、を勇氣を持って正すことである。あの世が見えたり聞えたりせずとも、人生を渡ることも可能だし、生活に支障をきたすこともないのである。見えたり聞えたりする人こそ尋常ではないと知ることである。



「自動書記、お筆さき」

意識しないのに 手が勝手に動いて記述を始めること。自らの意志によって記述するのではないから、これもあの世の霊の指図によるものである。他の項で述べている、アガシャ - の霊示を伝えた『アガシャ - の霊界通信』の中に、「あの世から何かを訴えようとする者が全て正しいものとは限らない」と言っているが、よくよく「正見」しなければならない。中山みきや出口ナオの「お筆さき」が有名だが、高橋師と東大教授笠原一男氏との対談『現代人と仏教』の中では、高橋師は、中山みきを高い段階の人とは言っていない。出口王仁三郎は菩薩界の人物だが、出口ナオはわからない（手持ちの資料が無い）。高橋信次師の著作である『人間・釈迦』四巻がある。これこそ自動書記によって書かれた釈迦の実録とでも言うべき世界でも希なる書である。ぜひとも読んでいただきたい。

私達は、人の心を見ることも、考えていることを押し測ることも普通は出来ない。その意味では、心とは、次元の異った世界に存在するものと考えられる。一方、物質は、何万色かの色彩によって包まれ、物質界を「色」（しき）と考えるものになった。物質も私達の肉体も色であり、大自然も色といえる。色である物質－グラムをエネルギー - に替えると、一馬力（七四六ワット）のモ - タ - を三千八百年間も廻し続ける膨大なエネルギー - を持っている。このように、物質のエネルギー - は次元を異にして共存し、肉体のエネルギー - である「心」も次元を異にして共存していると言える。無機物質のエネルギー - より、有機物質（肉体）と同居しているエネルギー - （心）の次元は、はるかに高次元のものであり、その能力たるや、無限で、絶対的なものである。仏教でいう「色心不二」ということと何ら変ることはない。宇宙という物質の世界を支配している高次元の意識、心こそ、神そのものということをお解りいただけるだろう。心（意識・想念）は物を創り出し、最近よく言われる「宇宙エネルギー - 」こそ、この大宇宙に遍在する神の意識であり、神の心なのである。神の意識である「エネルギー -」、神の子（人間）の意識である「心」を説明する上で、まさしく、時流を得た言葉であり、感激にたえない。高橋信次師は、既に三十数年前（昭和四十年）から、言葉こそ違うが、意識こそエネルギー - という「宇宙エネルギー - 」の説明は、記述の中で随所に見られ、今更ながら敬嘆の念を禁じ得ない。

「心とは何か」

それでは心（意識、精神、魂）とは何か、高橋師の「ことば」から考えて見よう。

< 精神活動 >

問 人間の精神活動である、精神、心、意識、魂について、その一つ一つの概念が釈然としません。 いったい想念とはどういうものか。「こころ」とは何をいうのか説明して下さい。

答 生命を動かしているものは精神です。精神とは文字通り神の精であり、神のエネルギー - です。 人間の生命活動は精神の働きなくして一日として維持することはできません。もちろん、肉体は食物からカロリー - を補給しますが、食本能という精神活動がなければ生物の生存は不可能だということになるでしょう。心とは、その、神の精というエネルギー - をうける受け場であり、器であります。器である以上は、人によって大きい、小さいがあります。心の大小によって、人の役目も決まってきます。それだけに、心は、人間の精神活動の中心に位置し、心こそは、神につながっている基点であり、絆でもあります。心から流れてきた神のエネルギー - は、人の意識を形成します。精神活動がなければ、自分の存在

も、人の存在も認識できません。自分がここにいる。人があそこに立っている、という判断は、心によってうけられたエネルギー - の波動を媒体として、自我という意識活動が行われるからです。想念というのは、内部からの意識活動と、五官を通して入ってくる善悪美醜などの波動の混合されたエネルギー - 活動です。つまり想念は五官による影響が非常に大きく、人の意識も想念によって非常に左右されることになります。この意味から想念の浄化は意識の浄化につながり、意識の浄化は今世の役目にめざめさせ、果たさせる大きな要素となるわけです。

つぎに魂ですが、魂と想念の合成されたその全体をいいます。人の意識は表面十%、潜在九十%の比で構成され、人は大抵表面十%の意識活動で生活しています。したがって五官に左右されるのは表面意識のみで生活しているからです。己の魂を向上させるには、まず潜在意識につながることであり、それには、まず想念を浄化すること、つまり、五官に左右されない生活を送ることが大切である、ということになります。

「五体」とは 1眼 2耳 3鼻 4舌 5身

「五官」とは 1見る 2聞く 3叱ぐ 4味わう 5触れること

「六根」とは「五官」と意志。五官によって得られたものを基にして行動を起す意志を含めて六根という。

「煩惱は眼・耳・鼻・舌・身・意の六根が根元なり」(『心行』より)

「人間の心はエネルギー - そのもの」

物質の世界	心の世界
物質のエネルギー - は現世の時間・空間に 左右される	正しい想念 のエネルギー - は現世 の時間・空間を 超越して物質を 支配している
$E = MC^2$	$E =$

< 高橋師の記述から >

「人間は、誰しも、神仏の精、エネルギー - そのものがあればこそ、万物の霊長として、人間それ自身を成立させているわけです。いうなれば意識の中心点です。人間以外の動物、植物、鉱物の場合は、地上世界の調和のための媒体として、生かされています。つまり、人間はそれらによって、エネルギー - の補給をうけています。ところが人間は自ら生きている生命体です。生きている理由、生かされているものとの相違は、一切の事象を認知する能力、大宇宙と己との一体観、これです。動物その他については、その能力を求めても、求められるものではありません。次に神仏の精を受ける受け場、器が、各人の心です。心そのものは、エネルギー - の受け場、慈悲と愛の織りなす光体そのものの場であり、私たちが日常生活において、心に問う、心にきく反省の相手は、意識の中心にあるところの、この心です。九〇%の潜在意識が、想念帯や表面意識に強く働きかけている場合は立派な徳性となって表面に出、人びとの範となるのですが、心や潜在意識の弱い場合、あるいはその働きのない場合は、いわゆる迷える魂といわれるようになってきます。心は前述の通り、エネルギー - そのものであり、そのエネルギー - は波動になります。円の中心は心ですから、中心の波動は細かく、円周に近くなるほど荒くなっていきます。」



「九〇%の潜在意識（過去世、守護霊）と**天才児**の原理」 <高橋師の記述から>

「この層は、心に通ずる世界です。宗教的には守護霊・指導霊の住む世界であり、それは各人に等しく内在する、心のふるさとでもあります。各人の努力、その一念力は、その守護霊をして、他の上段階にある知人、友人の指導霊の応援を求めることが出来ます。守護霊そのものの力が、かりに弱い場合でも悲観することはないのです。心に問う、きく、ということは、普通は九〇%の潜在意識、つまり守護霊にきけ・・・、ということです。潜在意識そのものは、光のエネルギーです。各人の守護霊は、そうしたエネルギーの世界に住んでいますから、そのエネルギーを、創造、自由、智慧にかえることができます。光のエネルギーは、万物を育む力を持っており、また万物の根源であり、同時に、この世にあるものは、あの世にもありますから、その人に必要なものは、守護霊が無限に供給し得ることが可能になってきます。**天才児**の才能は、九〇%の潜在意識の一部が、その子の脳に働きかけるためにおきるものです。その子の守護霊があなで学んだことをダイレクト（直接）で教えるために、本人が今世で学んだことのない、大学生でも解けないような高等数学を解くことができたりするのです。

しかし、その天才児が、増長慢となり、俺は偉いというような優越感や、おごる心に支配されますと、守護霊の働きはとまってしまいます。これはなぜかといいますと、たとえば、電気を自由に流すためには、ゴムやベークライトでは電気は流れません。銅、アルミといった導体物質でなければなりません。これと同様に、守護霊は光に包まれており、光の電磁的作用でその者に教える（通信する）ので、それを受け入れる導体物質（表面意識）が増長慢という不導体物質のベールに包まれると、光を通さなくなるからです。人間の精神のエネルギーを受ける心に、慈悲と愛とは正反対の、人を見下す増長慢や怒りの想念があつては、光が通じなくなるのはあたりまえでしょう。天才が一夜にして鈍才に変わるというのも、こうした理由によります。」

Home

「**天才少年キムはギリシャの天才科学者タ - ルスの生れ変わり**」

天才と言われる人は霊道（心の窓）を開いている人であると高橋信次師は言った。幼少の頃、天才といわれた人が、二十歳を過ぎれば、「ただの人」と言われるのはなぜだろう。心に曇りのない時には、守護霊や指導霊の協力を得て天才的な力を発揮できるのが、年齢を重ねるにつれて、次第に心を失っていく。愚痴、怒り、足ることを知らぬ欲望の「心の三毒」や、心の曇りをつくっているために、守護霊も指導霊も指導できなくなり、直感、予感から浮かびあがってくる天才的な力が閉ざされ、凡人となってしまうのだ。高橋師が憑依霊を取り除く時、「私は自分の心をしっかりと正し、うぬぼれや虚栄心が無いか、そして謙虚な自分であるかどうかを確かめると同時に、**を救って下さいと心に念じた**」と著書に講演に、各所に出てくる。自由自在に力を発揮した高橋師ですら、いつも自戒していたのである。天才と言われる人よ心して聞いて欲しい。

一九七六年（昭和五十一年）三月、小田原講演会での講演の中から高橋師の言葉を聞いてみよう。昇天の三カ月前の講演だった。

「丁度、四～五年前、キム少年という朝鮮の子供が、東大の教授が出題した不定積分を、わずか五歳の子供がテレビで解いていました。私達が高等学校でやったものです。大学の一年位で学んだあの不定積分を五歳の子供が解いたのです。それを天才というのでしょうか。そうではありません。彼は永い転生の過程に、過ぎてギリシャの時代に**タ - ルス**という偉大な数学者だったのです。その心の窓が開かれていたから、彼はそのような数学を解くことが出来たのです。しかし、あのキム少年が増長慢になった時には「二十過ぎればただの人」になります。彼が謙虚で、「自分ではない、次元の違った天上の世界からの協力を得ているのだ」という感謝の心を持って行為をしたならば、彼は又、より偉大なる力を出すでしょう。

同じように、大人ばかりが道を説くではありません。小さな子供でも心の窓を開けば大人に説法をするようになるでしょう。そのような人々が既に隣の国の中華民国にも、我々のグル - プが出ております。それは、わずか七歳の子供です。それが大人達の前で道を説いております。不思議でも何んでもありません。こうして我々は、心の窓を開いた時に智性という無限に近い、そのような力を与えられていくものなのです。そのとき、我々は物質とか地位とか名誉とか欲望だけを満たそうとするもの、そのものの愚さを自分自身で納得出来るようになります。そして、人間の心が本当に調和されてくれば、より豊かな文明が発達し調和された社会が築かれてゆくものなのです。それだけに**心を失ったところの文明はやがてお互いに環境を破壊してゆく**だけなのです。人間の価値感、こそ永遠のものであり、我々はこの偉大なる心を今、盲目の中から探り当てた、その光明を調和と安らぎの中に我々は生活することが大事ではないでしょうか」

● 「想念帯」は全生活記録 ●

「ここは潜在意識と表面意識がまざり合った世界です。ここには、各人の過去世、前世、あの世での生活の記録と、現象界、つまり後天的経験のすべてが記録されており、これを調べる場合は、この想念帯をみると一目瞭然です。それは何年何月何日、Aという人は、どこで、何をしたか。極端にいうなら、その日、一日のその人の全経験、考えたことまでわかります。現在肉体を持っている上々段階・光の天使は、各人の想念帯の記録を一瞬のうちに、読みとることができます。各人が昨夜見た夢まで当てます。つまり、人間は二十四時間、経験と、記録の連続であるのです。年中無休です。エネルギーに休息はありません。死んでも魂は残りますから、死人の行く先、考え、行動がわかるのです。想念帯とは、過去世の記録と現世の経験の記録集積所でありますから、各人の現象界での運命は、ここで握られていることとなります。つまり・・・決まっているのです。それは職業的に、経済的に、地位的に、いろいろな面にわたって決まっています。想念帯が映画のフィルムとすれば、現象界での各人の生活様式は、そのフィルムから投映された映像であるわけです。しかし、各人の運命には上限と下限とがあって、そのあいだを上がった、下がったりして一生を送ります。上限とはその人の運命の好調度、下限とは、最低時、一番苦しい時期です。しかも、上限、下限と中間のあいだを、いったりきたりして、その一生を終わる場合が多いのです。現在肉体を持っている上々段階・光の天使の光を受け、神理を理解するようになりますと、下限に落ちることはなく、上限にまで、自分の運命が切り開かれてゆきます。

いずれにせよ、各人の教養、徳性、ものの見方、考え方、行動というものは、この想念帯に影響されるところがすこぶる大きく、それは、今世での知識、学問を超えたものです。各人の心理状態もその大部分は、想念帯の影響をうけています。笑い、悲しみ、怒り、苦しみなど、人によってその感受性は異なります。同じ冗談でも、ある人には笑いであり、ある人には悲しみになったり、怒りになる場合がしばしば見受けられます。これは、10%の表面意識の作用もありますが、それ以上に、想念帯の振幅に本人自身が動かされているためなのです。

● 「心理学の今後」 ●

今日の心理学は、この想念帯の振幅の研究といっても過言ではありません。もっとも心理学も進み、深層心理から、超心理学までありますが、これらは、さきほどの九十%の潜在意識の領域に多少入り、予知、予言、透視などのさまざまな研究がなされつつあります。この意味では心理学も相当進んではきましたが、潜在意識層は、次元の異なる世界ですし、あの世の生物（地獄霊、魔王）が徘徊していますから、興味本位、当てもの主義、名誉欲があって研究しますと、動物霊や魔王を呼びこみます。真に科学として己が空となり、人類のために役立たせることにあるならば、その研究は、たしかに実を結ぶことになるでしょう。」

高橋師は、霊的な心理学探究の危険性にも警告を発した。私達はよくよく、気を付けなければならない分野だと思う。真に科学として研究されるなら、実を結ぶことになる高橋師は言ったのである。

● 「0%表面意識」 ●

ここは五官の世界です。すなわち、眼、耳、鼻、舌、身、そして、これから判断の墓点となる各人の意、小我があります。ともかく意識は外見に敏感で、形の世界にとらわれます。そうして、人より偉くなりたり。金が欲しい。美しい人を側におきたい。うまいものを食べたい。楽しいことをしたい。美しい着物を着たい、見せたい、といった意の働きが強くなります。人間の苦の原因が、すべて、人間の五官、六根にあるというのも、私たちが、この表面意識の作用に、左右されてしまうところにあります。通常大脳の働きは、表面意識と想念帯が、その主役を演じています。大脳そのものは単なる電子計算機であり、その計算機は、表面意識と想念帯が指令しているわけですが、本当はこの二つの意識は、指令室ではなく指令所は、その奥の潜在意識でなくてはなりません。ところが、想念帯の層は、非常に厚く、堅いために、人はなかなか指令所の指令を受けることが出来ません。これから少しでも脱皮するためには、潜在意識の声をきこうとする反省が必要です。反省は人間の持つ特権であり、人間再確認の、神が、与えた機会であり、慈悲です。ですから、反省こそ、我ら人間の人間たるゆえんであり、精神向上に欠くこのと出来ない、一大要素であるといえます。



● 「自己保存、黒い想念」 ●

五官、六根に、左右されますと、その人は、やがて、病氣や怪我、その他さまざまな障害に見舞われます。なぜかといいますと、人間は本来、神の子、仏の子であり、慈悲と愛、調和を目的として、この世に生をうけたのでありますから、これに反するような想念行為は、当然それに応じた反作用を伴うことになるからです。権力は奪うもの式に、やっとなしに権力者は、今度は追われる立場となって、身の安全に、夜もろくろくねむれない日々を送る。金持ちは、その金を失うまいとしてキュウキュウとする。憎まれ者は、絶えず針の山に、その身を座しているようで、四六時中、腰をうかして生活しているのです。つらい話です。世にはばかりながら、自らを裁き、苦しんでいる。これが法則の姿なのです。人は外見ではわかりません。善人に見えて、実は自分の利害だけしか考えない者もあるかと思えば、悪人のようだが、無類の善人もいます。口先や、姿形では、人の心はわかりません。大事なことは私たちの一生は、この世だけではないということです。各人にはそれぞれ過去世があって、今世があり、あの世もあります。そして再び、この世に出て、あの世にかえる。こうした繰り返しのうちに、各人の一生は連綿として読んでいるということ。この世で悪を重ねれば、あの世で悪の清算をしなければなりません。しかしこうした事実は、これまであまり明らかにされず、そのために、人びとは、表面意識の五官、六根にとらわれ、生きているうちが華という考えに陥ってしまうのです。しかも、こうした五官、六根に各人の意識、魂が支配されますと、表面意識と想念帯に黒い塊りができ、動物霊や魔王、地獄霊がその人に憑依し、難病や事故死、自殺などをするようになってゆきます。恐ろしいことです。

Home



「現象界に肉体を持っている上々段階・光の天使」（高橋師の「心・意識」のマトメ）



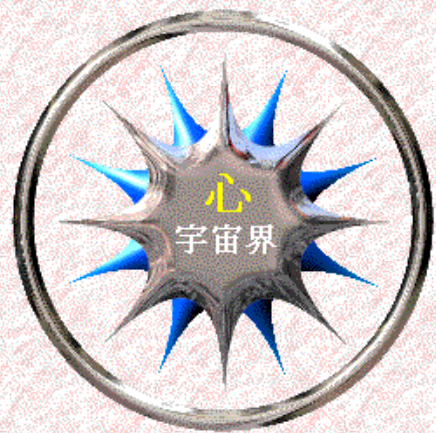
人間の地上における目的は、各人の心の調和と、地上の楽園の建設にあります。この目的は、人間自身が神仏の子であるからです。神仏の子である人間が、なぜ動物のようになり下がったか。それは長い地上での生活に振り回された結果です。オギャーとこの世に出た途端、人間は**あの世での生活を忘れます**。忘れる理由は、前世、過去世のおさらい、償い、そして、あの世での生活の経験を、どう生かせるかの心の修行があるからです。おぼえては、その修行の目的は、なかば失われます。人類はすべて**他の天体**から、この地上に降り立ったのです。当時の人びとは調和がとれ、地上は**仏国土・ユートピア**そのままでした。人々の年令は**五百才、千才**を保ち、年もとらずに、あの世とこの世を自由に、行ったり、来たりしたものです。その当時は、人間には**原罪というものはありません**。結婚して子供が出来ても、その子はあの世の生活を知っていました。ところが子孫が子孫を生むようになり、地上の生活になれた人類は、次第に**あの世との交通が途絶え**、五官、六根に振り回されるようになったのです。つまり罪をつくりはじめた。罪をつくらば、当然、その罪のつぐないをしなければなりません。蒔いた種を刈り取ることは、自然の法則だからです。かくして、人間は、あの世からこの世に、生まれ出るときに、あの世の生活、前世、過去世を忘れるようになったのです。つまり**己自身の修行**が目的となったのです。修行とは心の調和、神仏の心に帰る修行です。同時に、**仏国土、神の国を再びつくること**、この二つの目的、これが人間の使命であり、責任であるわけです。人類はこの二つの目的を自覚させ、果たさせるため、光の天使がこの世に現われたのです。光りの天使は、「宇宙の原理、人間の在り方、慈悲と愛の神理」を説くために……。それは神仏の命によって、イエス・キリストが天なる父の命によって、愛を説かれたように……。

釈迦の正法は、宇宙の原理、慈悲と愛であります。人間が小宇宙であることの自覚、小宇宙であればこそ、大宇宙と一体となり、一切の事実を認知できるのです。それは心という一点で大宇宙と結ばれているからです。心を通じて、小宇宙と大宇宙は、通い合えるのです。人びとは神仏の子であり、宇宙は神仏そのものであるからです。現象界における光の天使は、神仏の命によって、各人の心の眼をひらかせる役目を担っています。ところが各人の心は、転生輪廻という長い歴史の過程に、諸々の想念、諸々の罪を重ねてきました。想念帯というカラの中に、各人の心は、埋没してしまったのです。そのために、普通では九〇%の潜在意識は特殊な人でなければ開けないといったありさまとなったのです。開けても、動物霊や地獄霊の支配をうけるのがオチです。いわんや守護霊・過去世の声をきくことはまず不可能であります。そういう状況に落ちこんでいるのが現代人です。しかし天使は、光の伝達者であり、各人の心、各人の守護霊をひき出し、想念帯、表面意識に働きかける使命を担っているのです。天使の話を一回でも、二回でも、より多く聴聞することによって、想念帯にキレツが生じ、窓がひらかれるのです。各人の意識は、各人の意識であり、その自由、その意思は、神仏が与え各人が所有するものですから、これは神仏といえども、自由にはならないのです。それだけの特権を、人間各自が持っています。従って、各人の守護霊も、想念帯が、これを迎え入れる自覚が出てこない限り、自由にはならないし、表面意識に顔を出すことさえできないのです。

霊道そのものは、いろいろな諸事情が加味されて開くものだからです。それは神仏の計らいであり、光の天使の状況判断にかかっています。同時にこれを受け入れる各人の意識そのものにも理由はあります。いずれにしても、神理を悟った天使の話聴聞することによって、想念帯をおおっていた各人のこれまでの考え方、想念、教養、徳性に変化が起こり既成概念に各種の疑問が湧いてきます。そして、そうした疑問は、やがて、回を重ねるにしたがって、**だんだん**、氷解されてゆきます。しかし、疑問そのものは、各人それぞれに異なり、次第に高次元化されてゆく人もあります。疑問の連続、そしてその回答の積み重ねは、やがて、心に通じます。守護霊は、あの世とこの世をみており、各人の生活を四六時中見守っていますから、その人の意識の状態、魂の状態いかんで、いろいろ指導します。そのやり方は各人各様です。一概にはいえません。霊道が開いたということは、天使の光が、その人の意識に入ったことであり、同時に、内からの光が外に出たことを意味します。**想念帯に窓が開くその典型が霊道**です。霊道のことを普通は霊能といいますが、**霊能が開くと**、いろいろなことがわかってきます。人の心はもちろんのこと、病氣の原因、明日起き得る出来事、離れていても天使と話しができある人のごときは、三時間も、ある映画館で、**映画を楽しんだ**こともあります。これは自分の身は家に居ながらにしてなのです。こういう人ばかりですと、映画館は、干あがってしましますが、これは守護霊の存在と、その事実をみせるために、やったことで、年がら年中やるわけではありません。霊能はこうした長所を持っていますが、短所もあります。それは表面意識の作用と想念帯の波動で、本人に欲が生じ、威張ったり、おごる気持や、**金儲けの手段に使います**と、**危険なもの**となるからです。



天使の光で想念帯（銀のリング）に窓が開かれると、そのすきに悪霊が入り込む



想念帯 (銀のリングの部分)

守護霊は光を体とした、慈悲と愛が身上であり、威張ったり、おごる気持とは、本質的に合わないからです。おごる気持は守護霊の働く場を失います。つまり守護霊はその人についてゆけず離れます。ところが、想念帯の一部は開いています。守護霊は、その人から離れる際に、その**想念帯の開いた箇所をふさぎますが、そのスキに、動物霊や、魔王が入ってくる**のです。天使は、その人にとって霊能を開かせた方がよいとみた場合は、開かせます。しかし、その慈悲と愛が本人に通ぜず、それを悪用されては、せっかくの慈悲はなんの役にも立ちません。動物霊の憑依など緊急の事態にたいして、天使は、二次的、三次的な配慮をしています。長い目で見た場合、そうした過程がその人にとって必要であることがあるのです。それは本人が夢からさめたときに、ハッキリ自覚されます。そして、その憑依作用が、その家庭を破壊するとみられる場合は、ただちに、動物霊、魔王を取り除きます。そうして、想念帯の窓を閉じてしまいます。**霊能そのものは、悟りへの一過程にすぎません。悟りとはほど遠いもの**です。それなのに鬼の首でも取ったように、有頂天になりますと、とんだ間違いをしでかし、天使の慈悲を仇で返すようなことになります。

ところで、私たちが天使の光を求めるその動機とはなんでしょうか。また、天使自身が、みなさんに、なんのために、光を与えるのか。私たちの目的は、ひと言でいえば、安心した生活。それは肉体的にも、精神的にもということになります。ところが、正法というものは、こうした現象的利益と、一致するように出来ているのです。**正法とは循環の法則であり、慈悲と愛**という幸せを与えてくれるものだからです。循環とは、すべてが、めぐってくるということです。心も、肉体も、エネルギー - の集合体です。宇宙も空間もエネルギー - から出来ています。人間の想念行為も、これと同様に、感謝の想いは感謝として、正しき行為は、それに応じた報奨として、本人にかえってくるものです。ですから正法そのものは、現象利益にも通ずるといことです。すべてのものは、円運動を描いて循環しています。小は原子から、大は宇宙まで、すべてが、正法に照らして、円運動を描いているわけです。生命というものは、すべて円運動を描きながら動いているのです。人間の生命も、核を中心に、五人の分身が、円運動を描きながら生き読けています。そのひとつが欠けても、生命体として維持されることはできないのです。ですから、人間の生命が、肉体が、円滑に、円運動を描いてゆくためには、各人が、正法に照らして、正法に即した生き方が必要になってくるのです。

それだけに、正法に反すれば、病気や、事業不振、さまざまな悩みを抱くようになるのです。現象利益も、正法を理解し、実行するならば、自然に与えられることを教えています。ですから、現象利益、大いに結構なのです。正法に沿った生き方、つまり、慈悲と愛のみ - - - - - そこまでゆかなくとも、私たちの日常生活のすべてが、正法から外れないような生き方が行じられるようにしたいものです。「心・意識」についての記述が長くなりましたが、それ程に大事なことです。**終章にもって来て、じっくりとマトメをしたかったこと**にもよります。

<チャクラを開く、手かざしと霊動>

「チャクラを開く」という言葉がある。言葉だから、色々な言い方があっても良いが、ここで言う「心の窓を開く・霊道を開く」と同じである。ある「気功」の達人が、人に向かって「気」をぶちこんだら、ぶち込まれた人の体調がおかしくなったので、それから止めたと記述した人がいたが、これも「手かざし」と同義語である。先の図をよく見て欲しいのだが、その人に縁のあった天使の光によって想念帯が開かれ潜在意識が外に流れ出し、所謂、「霊道を開く」、「心の窓を開く」ことになる。これは、正しい「心の窓を開く」ことである。特に注意を促したいのは、想念帯に開けられた穴から動物霊や魔王などの悪霊がはいり込む危険性があるので、よくよく気をつけなければならない。もう少し詳しく述べよう。

<手かざしは困りもの>

「手かざし」をやる宗教団体がある。「手かざし」によって、或いは「気をぶち込むこと」によって、相手の想念帯に穴が開き、動物霊や悪霊そこから入り込む。そして、その人の口を通して語ったり、動作で表れて来る。狐の様にピョンピョン跳ねたり、蛇行したりする。これを浮霊や霊動と言っている。「手かざし」、「気をぶち込む」等、このようなことばかりをやっていると、その内に、心の中に他人様が同居した状態、つまり、精神分裂症になって、精神は破壊され廃人となる。恐ろしいかぎりである。

かってG L Aでも、会員同士が「光を入れる」と称し、高橋師をまねた手かざしで、奇異な現象が起きたことがある。そのために月刊『G L A』誌上で、会員へ警告がなされた。想念帯に穴が開き、潜在意識(過去世)が表面意識へ同通するわけだから、あの世の霊が語りかけて来たとしても、それが過去世の人が動物霊や悪霊なのか、私達には判断できない。でも、見えて聞こえて話せる人が側にいれば、つまり、過去世の言葉が話せて、霊と問答が出来て、霊の姿を見ることが

出来れば、語りかけて来た霊の判定がつく。このような理由で、高橋師の判断を仰いで欲しいという通達になったのである。他の項で述べているが、手かざしによりゾクゾクと配下が増えていくヘビの会話を思い出して欲しい。手かざし様の行為がなぜ危険か考えて欲しいのである。

Home

「U F Oの謎」



< 科学万能の時代に、なぜ裸の未開人がいるのか >

この科学の発達した時代に、裸の原始生活をしている未開人がいるのはなぜか、高橋信次師は次のように説明した。「この太陽系はアガシャ霊団により指導されており、霊的に一番早いスピ - ドで進歩している」、と。この科学万能の時代に、電気もガスもなく、近代文明の恩恵に浴さない人達がいる。アマゾン、ニュ - ギニア、オ - ストラリア、アフリカ等に、未だに裸の原始生活をしている未開人がいることに疑問を持ったことだろう。こう述べると、「ウエブ・マスターは人種差別、人種蔑視のようなことを言い始めたぞ」と考えるかもしれない。だが、そうではない。正しく知った上で、正しく理解を示すことも彼等の人生修行を暖かく見守ることに也成了り、これも愛なのだ。なぜかと言うと、現在の地球の人類の 1 / 3 は、仏教的に言うところ「霊界」以上、1 / 3 が幽界、1 / 3 が他の天体から来た人達と高橋師は言い残した。また、園頭広周師は次のように記述している。「他の天体から転生した人達は、先づ原始生活の中で魂の修行をして順次、転生輪廻していく。まず、ああいう所に生まれて、この地球という環境に慣れ、それから輪廻転生を重ねてゆく間に、いろいろな面で進歩してゆくことになる」と。

世界人類の 1 / 3 は他の天体から転生してきた靈魂と高橋師は言い残した。この地球上にはじめて人間が転生して来たのは、数億光年先のベ - タ - 星より三億六千五百年前に、U F O で飛来したと高橋師は言っているが、いまでも他の天体から転生して来ている人達がいるというのである。他の天体で一定程度以上に進化した靈魂は、この太陽系の地球に転生して魂をみがくのだ。他の天体から転生してくる靈魂があるように、この地球である一定程度以上に進化した靈魂は、今度は還らぬ霊となって他の天体へ転生していくと高橋師は教えた。これより、一九七六年（昭和51年）高橋信次講演テ - プより参考にして頂こう。

「そして、我々はやがて又、地球を調和し他の天体へ還らなければなりません。その為には、地球自身が調和し、後光が出てこなければならぬのです。皆さん一人一人の心の調和が即、その人を調和し、その家庭が調和されれば家から光が出て来ます。又、国の人々が調和されれば、その国から光が出てまいります。天上の世界からすべてわかります。そして地球からすべて調和された時には地球からきれいな後光が出て来ます。その時が初めて、人類が他の天体へ脱出することが出来る環境が整っていくのです。」

< U F Oとは何か >

以前から、U F O は巷間の話題を呼んで、随分、本も出ている。数年前にアメリカで、日航の貨物機の乗務員が巨大な未確認飛行物体を見たということで新聞でもとりあげられたが、誤認であつたらしいという結末だった。テレビの深夜番組では、未確認物体の模型も作って放送していたが、U F O を見たという人が世界中で数多くいる。なのに、「未確認物体」と世間で言われる程に、その実体も明らかになってない。話は少し飛ぶが、お釈迦様であつた高橋信次師は、般若心経の中の「空」は「実在界」、あの世のこと、「色」は物質界、この世のことだと明解したが、これとて永い間、説明がつかず混乱したものである。この「空」の解釈については、ウエブ・マスターの調査では三十通りほどの色々な解説がなされ迷解と言えるものもあつたが、「U F O」といわれるものは、「実在界の乗り物」つまり、あの世の乗り物であり、他の天体から来る乗り物だと高橋師は明言したのである。この地球上の 1 / 3 は、他の天体から転生してきた靈魂達だということを高橋師が明らかにしたように、他の天体から移動して来る時の乗り物であり、又この世で一定程度以上に進化した**靈魂達**は、今度は還らぬ**霊**となって、他の天体へ転生して行くときに使う乗り物、或は、あの世の光の天使達が、この地上界を視察する時に利用される、乗り物だということである。つまり、あの世の乗り物なのである。

サテ、東京の上空を昼間、U F O らしきものが飛来しているのを確認した人も、数多くあると放送していたが、現在、東京は地球的規模で見ても、世界一、二の大都市であり、その担う役割も大きい。その為には、あの世の光の天使団が盛んに飛来しても何んの不思議もないのである。「あの世」と「この世」は運動しているといわれる。盲目の人生を歩く現象界の人達が誤った道を歩かないように、その一挙手、一投足のすべてが観視され、あの世の中心にすべての事象が報告されているらしいのだ。「汝らの髪の毛一本だにすたることなし」とイエスが言われたように、すべてがお見通しなのである。ところで、U F O を見ることの出来る人もいれば、そうでない人もいる。写真に撮る人もいる。その理由は、「あの世のもの」だから、すべての人が見えたり、写したりすることは出来ないものである。見たり、写したりすることの可能な人も、可能でない人がいても何等不思議ではないのだ。これを一般的に霊視、念写と言うが、これが可能な人は、過去世に於て、肉体業で霊道を開いた人がほとんどだと高橋師は言ったが、このような肉体業によって開いた霊道は、悟りとは程遠く、異質のものであることを知らなければならないと、これまでに何度も何度も話した通りである。

次に同じく講演の中からU F O についての「高橋信次師のことば」を聞いてみよう。一九七六年（昭和五十一年）二月沖縄研修会ビデオより

「実在界という天上界の世界から来る、いわば乗り物とそれから他の天体から来る乗り物があります。いわゆる円盤というものは現実にいっぱい来ております。その場合はスピ - ドによっては色彩がちょっと変わります。私は何回も自由に見ております。けれども実在界というあの世の乗り物は、この地上界の自動車と同じようなものです。それから又、他の天体から来るものはスタイルがちょっと変わっております。ですから、そのようなアメリカでU F O と言われているものは日本では一杯飛んでおります。」

次は、一九七六年**五月**（六月の最後の講演ではない）の講演テ - プの中から

「今から三億六千五百有余年前にベ - タ - 星という星より、反重力光子宇宙船という、今でいうU F Oに乗りまして、現代のエジプト、ナイル渓谷の東部にあるエルカントラ - と云うところに着地し、第一艇団の約六千人のベ - タ - 人が初めて地球上に降り立ったのであります。ベ - タ - 星の人間であつても皆さんの肉体とまったくかわりません。風土気候、いっさい地球上とかわりません。」

同じく、高橋師の記述より

「 - - - 空飛ぶ円盤も同じであります。多くの衆生に突然変化をおこさないために、**機根**を整えさせて、いるのであります。実在界の交通機関であります。円盤は他の星からも飛んで来ますが、実在界とは形式が変わっています。このように実在界と現象界は、密接な関係にあることを知るべきであります。 - - - 」

高橋師はU F Oはあの世の乗り物であつたり、他の天体から来る乗り物と言い残した。U F Oをみた人達の話をつ総合すると、右と見て見ているとス - ッと左へ移動し、後に見えたかと思うと、いつのまにか前にいる、とまったく変幻自在らしいのだ。この世のものとは思えない程に変わり身が速いというのである。先に述べた日航貨物機の場合も、アメリカ当局はレ - ダ - にも確認されておらず誤認ということで幕はおりたが、推測すれば、貨物機のクル - 達は確かにU F Oを靈視したと思う。この話しが、これから十年、二十年過ぎてからの情報であれば、事情は少し変わっていたかも知れない。現在の常識では仕方のないことだが、最近の子供向けの本を見ていつもビックリする。「靈魂」とか「U F O」とか「不思議もの」とか、ウェブ・マスターの時代とは隔世の感があるが、ラジオの深夜番組では「超心理コ - ナ - 」等というのがあり、高校生が随分と聞いているようである。本や放送でとり上げるのは一向に構わないが、責任ある内容にして欲しいと思う。内容次第では、次代を担う人達を誤らせるから、責任は重大だと言うのである。

話は少し飛ぶが、子供が

「僕、幽霊を見たんだ、本当なんだよ。そう、あの階段の所で！」

親 「変なこと言うんじゃない。幽霊なんかいるもんか」

子供 「本当なんだよ、本当だってば」

親 「うるさい、向こう行って遊んでろ！」

というわけで、その内にその子は何んにも喋らなくなってしまった。そして、それから理解してくれる人がいたので、その子は今までの快活な子供にかえったという話がある。この未確認物体はあの世の乗り物だから、この地上界の器機では確認できない。だからレ - ダ - では確認出来るはずもありません。まだ、現代に於ては、目に見える「色」（物質界）の世界の機器では、あの世「空」の世界のものは確認できないのだ。

また、高橋師は昭和四十八年（一九七三年）に次の予告をされている。

「今から七百八十年後、エジプトのナイル流域は緑豊かな沃地となり、光や磁気を利用した『反重力場の乗り物』（註・今で言うU F O）によって、他の天体へ自由に行く事の出来る大宇宙ステ - ションが、アフリカの大西洋岸にできます。今から一万二千年前のアトランティス大陸の文明を築いた靈魂達が地上に出生し、現在の科学文明をより以上に発展させ、世の中を指導するようになり、世界はユ - トピアになります。」



そして、同じく昭和四十八年夏、長野県熊の湯での自主研修会で高橋師は次のように言う。

「私は七八 年後にもう一度、地球上に出ます。それからまた、他の天体にも生まれます。その天体もわかっています。この地球は七 年位後には調和されるからです。ユ - トピアになるからです。そんな時は、今のような公害は一つもなくなります。そして、今の日本は気候が変わります。現在の、アフリカ、南アメリカ、それからインド、この方面は、現在の日本と同じように、春夏秋冬が最も調和された国になります。そして、アフリカの太平洋岸の処に大きな宇宙ステ - ションが出来、他の天体と自由に交通するようになります。そのようになっているユ - トピアに、私達は生まれます。七八 年後です。その途中において、（註・一五 年後）かつてイエス・キリストといわれた方がアメリカに生まれます。シカゴという処へ生まれます。」

「宇宙エネルギー」

フリ-エネルギー-、霊性エネルギー-、意識エネルギー-とも言う。神とは宇宙を支配する大意識そのものである。太陽も人間も素粒子も、すべてこの大意識の経綸のなかで生かされ生きている。「この大宇宙は神によってつくられた。大宇宙が発生する以前の大宇宙は光明という神の意識だけがそこにあった。」と高橋信次師は『人間・釈迦』に書いたが、これまでにウエブ・マスターは心=意識=エネルギー-とすることを、高橋師や園頭師の両師から学んで記述した。いよいよ、記述の総仕上げである。ノストラダムスが今世記末の大変動を予告して久しいが、この種の本が売れるというのも、世人の心が寂しいからである。変動の予徴を感得するからだろう。この大宇宙のどこにでも偏在する(あまねく存在する)大意識(神の心)は、エネルギー-となって、万生万物をわけへだてなく生かし読ける。これを言い替えれば大宇宙のどこにでも存在する宇宙エネルギー-は、万生万物をわけへだてなく生かし読ける。神(大意識)の子(意識)である人間は、それぞれが、大意識の一部(意識)を占有して生かされ生きて行く。原子は光の粒子で構成され、光の粒子は霊子というものからつくられて神の子(人間)は、自由、創造、意思の中に、ここの声をあげた。神の計画されたものを実現させるために、人間が創造されたのである。神の子の原点は、男女両性の慈悲と愛の中に生ぶ声をあげたのであった。三億六千五百年の地球人類の歴史の中で、真のメシャ・エルランテイであった高橋信次師は、常隨の弟子・ガブリエルだった園頭広周師と共に、「正法」という普偏的な神理・法則を明らかにしてくれた。

ウエブ・マスターは、それをお手本にして自分流の書き方もした。しかし、何一つとして、自分のものはない。すべて、高橋師や園頭師から学んだものばかりである。自分流の書き方もしたので、両師の真意をそこなう記述もあったと思うが、そこは、これからの人生の中で、一つ一つ修正していく積りである。中には、「ここまで厳しく書かなくても」という批判の声もあるだろうが、正法に触れる前の無知な私と同じように、この世の原理・原則やあの世のことに無知な人に対しての、愛のムチと考える欲しいのである。他意は全くない。最終項が宇宙エネルギー-だったが、近未来には日本の太平洋岸に新しいエネルギー-がふき出し、日本のエネルギー-問題は非常に調和され、石油産業は衰退するだろうという高橋師の予告が言い残されている。宇宙エネルギー-の利用が先か、「新エネルギー-」が先かわからぬが、これからも生きている限り、「正法」の膨大な資料を公開することを約して筆を置きたい。

Home

スライド 生老病死の「老、病」の巻

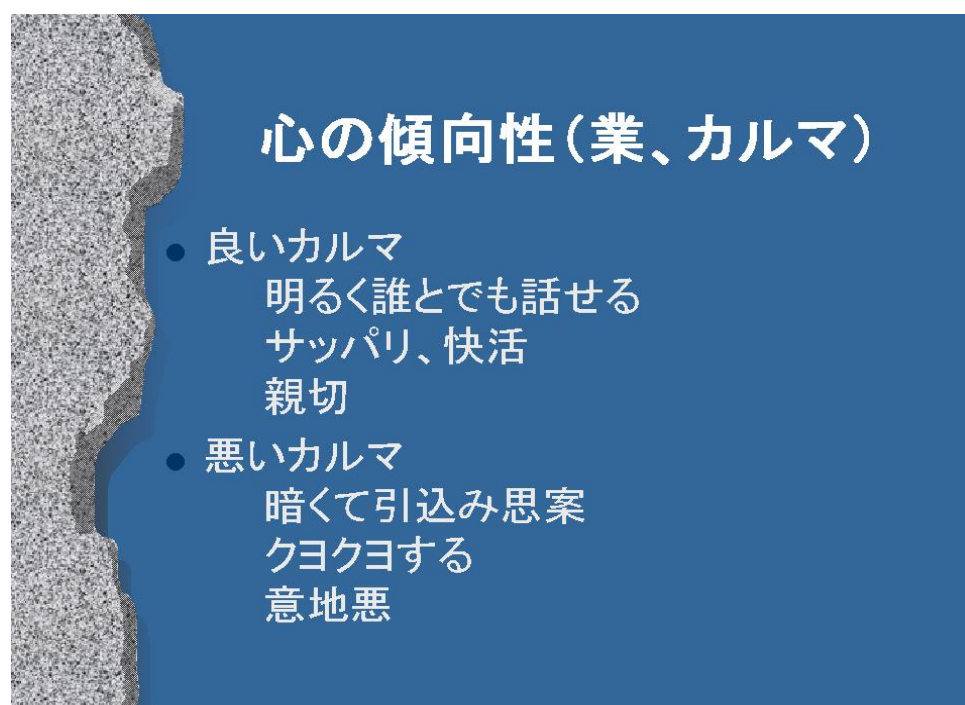
人生の意義

15 -

人間の生まれる目的は何か

- 1. 各人の心の傾向性の修正。例えば、クヨクヨする、暗い等の性格の修正。「心の傾向性」のことを業(ごお)、カルマという。
- 2. 地上天国、ユートピア、理想郷の実現。心の傾向性と地上天国の実現のためには人間は一度生まれただけではその目的を果たせません。
- 3. 神の子である人間が、神の考えを具体化するためにこの世に生まれるのです。

15 -



心の傾向性(業、カルマ)

- 良いカルマ
明るく誰とでも話せる
サツパリ、快活
親切
- 悪いカルマ
暗くて引込み思案
クヨクヨする
意地悪

心の傾向性はどこでつくられる

- ◆ 心のクセ(心の傾向性)の三分の二は「この世」で作りだし、残りの三分の一はこれまでの生まれ変わり死に変わりしてきた過去世でつくったものです。
過去世で作りだした「心の傾向性」と言ってもピンときませんが、この世で作りだした心の傾向性は過去世でつくった心の傾向性と無縁ではないので、現在の心のクセを直せば良いということになります。

この世に生まれる “もう”一つの理由

- この世(地上界)の一年はあの世(実在界)の百年にも匹敵する。善と悪の入り交じったこの世での魂(心)の修行は大変に意義がある。この世で悪い原因をつくっても、その結果は時間が経過してからしか出ない。ということは、悪い原因をつくっても結果が出る前に反省をすれば修正が可能ということ。悪いことをしない者はいない。だから何度も生まれて反省の大事さを学ぶのだ。

高橋信次先生の“ことば”

- 高橋信次師は、
「反省は神の慈悲です。悪い原因に対して悪い結果がすぐに出るのなら、人間は一人も生きていないでしょう。なんとなれば、悪いことをしない人はいないからです」と教えた。悪いことをしても、心から反省をして二度と繰り返さなければ悪い結果は出ない。だが、その反対に良いことをしても、すぐに結果は出ない。時間の経過があるとその反省が本物かどうか分かるからだ。

15 -

[Home](#)

「石の上にも三年」ということ

- 「悪いこと」をしても直ぐに悪い結果は出ない。また、「良いこと」をしても直ぐに良い結果は出ない。永い時間の経過は、その人の心が不動のものかどうか判定できる。「石の上にも三年」という諺がある。これは原因に対する結果が出るのに時間がかかるという教え。「あの世」は原因に対する結果がすぐに出る世界。「この世」は結果が直ぐに出ない世界。だから「この世」は「あの世」より勉強になるのだ。

なぜ、「あの世」は「この世」より 心の勉強が難しいか

- あの世を「意識界(心の世界)」と言います。この世とは正反対に原因に対して結果が直ぐ出るので、この世ほど勉強になりません。なぜなら、あの世とこの世の時間の基準が余りにも違い過ぎるのと、表面意識が90%と潜在意識が10%のために「想えば即」の時間と空間のない世界があの世ですから、反省をすると直ぐに修正できるのでこの世ほどは勉強になりません。

あの世が心の勉強になりにくい もう一つの理由

- あの世は心の段階(光の量の区域)がハッキリした同類の世界です。
例えば、天上界でも下位階の「幽界」を例にすれば、この世界は「自分さえ良ければ」というエゴ人間ばかりの似た者同士の集団ですから周りにはお手本にできる人が全くいません。ところが、この世は立派な人も悪い人もゴチャ混ぜの世界ですから、お手本にしたい人も一杯おり善と悪の入り交じったこの世の方が勉強になるのです。

人間はどこから生まれて来て どこへ 行くのか

- 人間はあの世(実在界、意識界)の天上界から生まれて来る。日本ではこれを天孫降臨と言ったが、「天上界から生まれて来て死んだら天上界へかえる」が正解である。私達の故郷は一般的には生まれ育った場所を言うが、人が故郷を懐かしく思うように、神の子である人間が神を求め神を切ないまでに想うのは、心の故郷である神の国、天上界を懐かしく思うからです。

15 -

Home

あの世は心のままの世界

- ◆ この世は縦、横、高さの立体空間である三次元の世界。あの世は天上界と地獄界を含めた四次元以降の世界で光子量の段階光の量の区域です。何でも当たり前だと感謝しないで死んでいく人の世界は、何を見ても何を食べても満足できない苦しい世界である。正にあの世はその人の心の通りの世界である。この世は嘘もつけますが、あの世は心が表面に出て嘘もつけません。

憑依(ひょうい)と人生

人生体験の間には憑依によって苦しむ人もあろう、ここでは憑依について説明を加えたい。

憑依は同類同士の起こす現象

- ◆ 憑依現象のことを「地獄霊や動物霊に憑（つか）れて」とか「取りつかれて」という表現をします。これはあたかも相手だけが悪もののように受け取れます。だが、そうではなくこちら側も同類の心、性格を持っているということである。憑依した相手の地獄霊や動物霊を責める前に自らの心の在り方を考えては如何でしょうか。

「霊媒体質」というウソ！

- テレビの霊番組やその種の本で盛んに「霊媒体質」という言葉が使われる。いかにも霊的な敏感体質のように聞えるが、これも心の「類は友を呼ぶ」の法則であり、同類ということである。霊が見える、事故や病気等の悪いことをよく当てるといった人の生活態度を観察すると、心が暗いとか、その人の囲りに問題が多い等で証明できよう。

15 -

憑依から逃れるにはどうする

- 憑依現象から逃れるには、憑依現象を解くにはどうしたら良いのだろうか。憑依現象は「同類の成せるわざ」と述べた。同類から外れるには、それまでの生き方考え方を勇気を出して修正するのである。すると、少しずつ同類の輪から外れて、憑依現象にも解放され霊能者等に頼むこともないのだ。他力ではなく全て自力と知ることである。

15 -

[Home](#)

「正法と辻褃の人生」 - ウェブ・マスターの懺悔録 -

ウェブ・マスター 八起正法（やおきまさのり）

八起正法（やおきまさのり）、医業。私は、第二次世界大戦中、炭坑の近くの医家の子として生まれました。

算数も読み書きも全くダメなものですから、「この子はお墓のお守りにしかならない」と両親はガッカリしていたようです。友達とは棒切れを振り回して野山を駆け巡ってばかりいたものですから、家族の「この子はどんな服を着せても破いて帰って来るし、袖は青鼻を擦りつけて汚す上に、何を着せても似合わぬ子だ」という言葉が簡単には削り落とせぬ位に私の心にひびきました。

その頃に特筆すべきことは、農家のチャボが襲って傷つき大騒ぎをしたことと、刈り入れのすんだ稲積みの山を飛び移っているうちに足を折ったことです。

十五歳位までの子供の病気やケガは、親の問題が原因だそうです。それ位までの子供の問題は子供そのものといっても、まだ子供の心には純粹さが残されているからまだ悪因は少ないのです。

今でこそよく解かりますが、私が所帯を持ち子供に問題が起きても、その頃は私達夫婦が原因とは気付きませんでした。

その頃の父は、医業に余り熱心ではなく、素人山師として、満載した坑木を降ろしては花柳界に入り浸ったことが、父の記述にも窺い知れます。時代が時代だっただけに、一かけらの石炭も欲しい戦時のことですから、少し位い寸足らづの坑木でも無審査のような状態で高い値で売れたようです。その揚げ句には、小銭を持って出掛けては好きな酒を飲んだようで、これでは両親に調和がなかったのでしょう。

それでも、久し振りに見る父が大好きで、しばらくするともう父の後を追っかけていました。

その頃のことです。祭りの夜、賽銭箱の中に手を入れて盗ったお賽銭で買い喰いをしました。小さい六本の手は難なく賽銭箱の格子を通り抜け、皆で神社の片隅で頬張るのです。

Home



私の生家は、塀に囲まれた白壁の大きな二階家でした。

或る日、数人の見知らぬ人達が家財道具にペタペタと紙を貼っていました。後で税務署の差し押えと理解できましたが、それから間もなくして、便利の良い駅前に移り住むことになります。父はそこを新天地に求め、小さなモルタルの家が新築中でした。夜になると父母は、モルタルの材料の川砂を川岸から何度も採取してはリヤカーで運び、夜更けて家に帰り着く頃には、私は起こされるばかりのリヤカーのお荷物でした。

それから、新居が完成に近い状態で旧宅を明け渡します。その時、一俵（60キログラム）のお米を饒別に頂き、トラックの私はまるで凱旋将軍のように誇らしげでした。

新居へ向かうと、もうすぐお正月だというのに、まだ窓には一枚のガラスも入ってなく、皆で厚紙を鋏で止めました。私が医療専門校で講師として教えた時のこと、この厚紙のことを「馬フン紙」と話したら、二十歳位の学生達は笑って理解してくれなかったので「厚紙」としておきます。

まだ掘ったばかりの井戸は泥色で大晦日を迎えます。

その日のことです。母が電車に乗ろうと傍らのホームのベンチをふと見ると、フロ敷包みが置き忘れてあったのだそうです。それは搦き立てのホヤホヤのおモチが二十個ほどだったらしく、神様からの頂きものだと家族のお腹の中に納まったことは言うまでもありません。暮れが近づく度にこの話が出て、みんなで涙ぐみます。

暮れは私の誕生日です。誕生日は生んで下さった両親に感謝する日です。なのに、母は末っ子の私に亡くなるまで金品を送ってくれました。

こうして、転校すると新しい小学校には腕力の強いボスがいて、野山を駆けて強いハズの私も、相撲に負けてその日のうちに準ボスです。腕力には自信があるのに勉強の方は相変わらずでした。ひと月もせぬうちに生まれ故郷の仲間が訪ねて来て、近くの八百屋さんでミカンをポケットに入れるのが見つかりました。この時もいつものように母からこんこんと諭されます。

それからは彼らと全く疎遠になっていましたが、大学から帰省の途中で偶然に出会うと、学生の私とは違ってもう立派な大人です。送ってくれるという好意に甘えて見ると、車には若い女性の先客がいました。途中で、私に少し待つように言うと公園の木立ちの中に女性を促して出て行きました。人影がやっと見える暗さになった時、突然の女性の悲鳴です。私がライトを灯け車の警笛を鳴らし続けると、バツの悪そうな顔をして戻って来ても、車内はしばらく気まずい雰囲気にも包まれ、それが彼らとの最後でした。

でも、新居の向う隣の勉強の出来る児は少し勝手が違います。待ちに待った夏休みが始まりました。私が朝から遊びに誘うと、「今日の勉強が終る迄は遊べない」と、二べもないのです。今までとは様子がまるっきり違いました。その先の児も同じで、待ちに待った夏休みも何んと味けないのでしょうか。去年はこんなことをして遊んだ、あんなこともしたのにと考えると、情けなくて仕方ありません。そんな風でしたから、父兄面談のたびに「少しは勉強させて下さい」と言われるのが辛いと母はいつもこぼしました。

それからは今までと環境が激変したために少しは勉強をするようになりましたが、それもつかの間、少学校四年生の春頃から微熱が続くのです。それは兄姉が結核と肋膜炎で療養をしたからに外なりません。診断は肋膜炎（胸膜炎）という胸膜に水が貯まる病気でした。勉強嫌いの私もこの頃には学校を休めば勉強が遅れるという不安が心の片隅に芽生えていました。

この頃には新天地での医業も順調に展開して木造モルタルから鉄筋コンクリートへと代って行きます。

私の仮の病室は舟底天井と茶室付の小ざっぱりした居室で、滋養をつける為に高価な玉子とバナナを食べさせて貰いました。その頃の母は、夜、医業のお手伝いが一段落するとサッと服を着替え、姉の入院する結核療養所へ向い、面会を終えると急ぎ最終のバスに乗って帰って来るという毎日でした。数年前、私は母と一緒に母の里を訪ねる機会がありました。苦しさの一切を語らない母を国鉄（JR）の駅へ送って来た医家の伯父さんが、「何があったのか」と尋ねるとワッと泣き崩れたという駅は、今はもう廃線になっていて、心の中で「ここだったのか」と思いました。

こうして、三か月の遅れを取り戻すために心を入れて勉強を始めると、それからは学級委員（当時は級長と言いました）や役員にも指名されるので本当に学校が楽しくなり、それからは母が面談から喜々として帰って来るのです。五年生の時は卒業生に対して送辞を読み、小学校の卒業式には答辞を読みました。その当時は勉強の出来る者が送辞や答辞を読むことになっていたようです。四、五、六年生の成績は、全んどの教科が五段階分類で最高の五で、一、二、三年生の成績は、全んど一か二で、音楽と体操のみ三か四でした。

小学校は二つの中学校に分かれ、大好きだった女の子は別の中学へ進学します。小学校五年生だったでしょうか、二学期の席替えがあって、当時は一つの机に男女が二人並ぶというものでした。大好きな子と相席です。その子が帰っているのを見つけると、心とは裏腹に意地悪をして困らせ、その反対に出会わないとションボリして帰りました。隣席が嬉しいのに反対の態度をとったものですから、先生が心配をなさって一週間後にはとうとう席を替えてしまわれ、それからは並ぶこともありませんでした。

これは何を着せても似合わない子、醜男という思い込みがそうさせたと考え、中学の時には眼鏡によって男まえを上げようと考えました。学校の検査の日は曇天で、外光だけの教室は特に見えにくかったのですが、それ以来、私は眼鏡美男子です。

そして、五、六才の頃には幼なじみと「お医者さんごっこ」をすると、患者さんはなぜかズロース（パンツ）も下ろします。医家でしたから、針のついていない注射器も傍らには用意してあり、やっぱり何か後めたい心が働いたのか場所は人気のない部屋か押し入れでした。器具を下部に当てていたら患者さんは火がついたように泣き出すものですから、びっくりした先生は唯おろおろして一緒に泣き出す始末です。広い家でしたから一度も見つかることはありませんでしたが、お医者さんごっこはそれっきり止めたように思います。

「他人（ひと）に嘘はつけても、自分の心には絶対に嘘はつけません。」

それは小学校四年か五年の秋の、少し勉強が面白くなって、人のお世話も出来るようになっていた頃です。放課後にソフトボールをした後、教室へカバンを取りに戻ると、なぜか棚の上に答案用紙が無造作に置いてありました。辺りを見回し自分の答案用紙を探し出して答えを書き換え、どんなに慌てて教室を出たか覚えません。返された答案用紙はもちろん満点でした。

同じくそれは中学二年の時です。

答案用紙を返しながらか先生はおっしゃいました。「うっかりして皆さんの点数を記録簿に書き忘れたので点数を教えてください」と番号順に記録を始められました。私の番になると、躊躇しながら「ハイ九十二点です」と答えると、先生は記録簿から目を離し私の顔をじーっとご覧になり、全てご存知の様子でした。

小学四年か五年生のときです。

大柄なおっとりした男の児がいて、先生はお昼休み前から、その児を相手にソフトボールの練習をなさっていました。焼きもちをやいた誰かが、その児の机の上に山の様に盛られた皿を二枚も置いたのです。それに気付かれた先生は「男らしく謝れないのなら全体責任」と、級長を先頭に男生徒全員のホッペタを思いっきり平手打ちされました。先頭の私のホッペにも勿論のこと先生の手型がクッキリ残りました。生徒達はお互いのホッペタの手型を見比べながらも、先生の悪口を言ったり親につげ口をする児は一人もいませんでした。

小学校一、二年生のことです。

名前から勇ましい、腕力の強い児がいました。その児の関心を買う為に、姉の持っていたミニカメラを貢ぎました。姉の知るところとなり、理由を話して返してもらおうと、それからは余計に立場が悪くなりました。

同じく小一か二年のことです。

トマトは、ひと雨ごとに赤く色づきます。三つのコーモリ傘がトマト畑の中に見え隠れして、家に帰り着いた時には、母は見張り小屋のオジさんにしきりに頭を下げていました。オジさんが帰ると、今度は私が母にしきりに頭を下げる番でした

小一の学校の帰り道は下痢気味でした。間に合いませんでしたので、里いも畑に飛び込みノートを破きました。

同じく小一です。

青ノリの程よく塩気の効いた、「ふりかけ」が好きでした。自分で作ってみようと海の近くへ友達の後について行くと、掘り割りには「青ノリの元」が水面一杯にあって、アルミニウムの弁当箱が一杯なんて、ひとすくいです。帰るなり喜び勇んで母に告げると、笑いながら、淡水の水藻と教えてくれました。

この頃のクリスマスには、朝、目を覚すと、枕許にはサンタさんからの贈り物がクツ下一杯に詰まっていた。中からは銅線を巻いたモーターや、盃やら、小間物が一杯出て来ます。この話しをすると、いつも母は涙ぐみました。サンタさん本当に「ありがとう」



小学校四年生の時には、兄に教わって三球ラジオ（真空管が三本、並三と言いました）を作って夏休みの製作展で褒められてからは、ラジオばかり作っていると、「明日は学校でしょ、もう止めときなさい」「ハイ、もう少し」とこんな調子でした。最近ではICやプリント基板が中心です。真空管時代はフィラメントの発光が闇間に映え、何んとなく温もりと夢がありました。読むのはラジオ製作の本ばかりでした。

御存知でしょうか「ワイヤー・レコーダー」？

テープ・レコーダーではありません。中学校の倉庫に変わった機器があるという噂を頼りに、無線部長は部員とともに視察をしました。それはアメリカ製の、テープの代わりに細い金属線に録音されるというものでした。線が切れると結ぶ以外に手はないので、卒業する頃にはワイヤーは「コブ」だらけで、奇妙な音を立てていました。その部室は、時には下級生の「性教育の場」にもなりました。講師は部長の私、資料や教科書は家にある婦人雑誌や父の医学書で、講義がすむと慌てて返すのです。

それから少し話は戻りますが、同級生の一人に腕力もあり勉強の出来る早足の児がいました。小学校の卒業式が終ってから、それまでにいじめられたことのある子達が集まって仕返しをしようという謀議が企てられていました。小学校は二つの中学へ分れるのでチャンスはこの日しか無いというのです。私が下級生のアーチの中を送られ涙を浮かべて家に帰っていると、棒や石を持った一団が戻って来るのに出遭いました。尋ねてみると、みんなその児を取り囲んだら家の中へ疾風（はやて）のように逃げ込んだらしく、棒も石も使わずに帰るところらしく、これで本当に良かったと思いました。

その頃の子供達は、断念する心、限度とか「ほどほど」ということを心得ていたように思います。

そして、先の早足の子が、中学の帰り道にオス犬を仰向けにして何やら調べていました、何日かして今度はメス犬も調べていました。それから彼は、オス犬とメス犬が交合する時どうしてハズれないかと言う論理的根拠をトクトクと教えてくれました。自らの実地研究により到達した彼の所論は、いま考えると少し無理はあっても、なかなか立派な堂々としたものでした。

また、中学には現代のような立派な講堂も無く、朝礼（朝の校長先生の訓話）では、校庭（運動場）に全員が集合して先生や生徒会役員の話の聞くというものでした。

梅雨のシーズンには朝礼は月の内に何回もなく、夏になると日射病や貧血で倒れる人が沢山いました。現代ならもっと酷いことでしょう。

その時、私は校内を美しくするお掃除の役員でした。腰を下ろした生徒を前に、お立ち台で喋っていると上級生の最前列の女の級長さんのパンツが、みるみる真赤になりましたから気になるやらビックリするやらで、話はもうシドロモドロです。特に、その直後に廊下で出会った時なんて顔をまともに見れない程で、上品な感じの頭の切れる人でした。

同じく、中二の陽差しの厳しい朝でした。

この頃東京タワーが完成しています。東京の学校に在学していた姉から東京タワーの色々な資料を送ってもらい、夏休みの工作は東京タワーでした。原寸の何十分の一という想定で、鉄の針金の十六番線とか八番線とかを切ってハンダゴテで溶着するのです。締切日にはほとんど眠らずに完成させたものですから、目の前が真っ暗になり直立不動の姿勢で倒れました。気が付いた時には保健室のベッドの傍らから、母が心配そうにのぞき込んでいたところでした。こんな事があった後、デパートで開催された「発明・創作展」では県知事賞をいただきました。私の作った東京タワーのそれからは、校長室に展示され大学を卒業する頃には返していただいて、最近まで実家で見掛けていました。

それから、青春時代の潔癖さと言えば兄が正にそうで、親戚の気さくな伯母さんが恥毛の発生時期を話題にされたところ、兄は伯母さんにしばらくは口も利きませんでした。私の変化は中二でした。

中学に入って運動部に見学には行っても、胸膜炎も患い元来健康ではないという理由から入部せず、大学まで文科系のクラブ一辺倒でした。病弱とはいっても中学は殆んど休んでいませんが、正義感と喧嘩は人一倍強くて、弱い者いじめをする者を見るとだまっておれません。授業をサボり背広と革靴をはいて校内外をうろつく一団がいました。顔を合すと私が注意をするものですから、彼等にとっては私のことが煙たくて仕方ありません。そんなある日、五、六人から刃物で囲まれ裏山に連れ出されました。教室でションボリしていると先生方が心配して下さり、後ろ盾を得て彼等より優位に立ち校内は平和でした。

同じく、東京の研修医の頃の国電の中です。

黒帽子をかぶった黒ずくめの見るからに映画の中のヤクザです。喧嘩が始まると乗客は見て見ぬふり、そこで私が「やめんか！」と中に割って入り、それからは乱闘です。公安官に引き渡して終わりましたが、私は終わりません。その日は、お正月に向けて故郷へ帰る日です。飛行機には間に合ったもののズボンの尻は二十センチも割けて、スチュワーデスも笑っているようでした。

同じく割けたズボンは、医会の幹部です。

お葬式で私を見つけるなり、「破けてねえ、ズボンが」見ると黒のズボンが二十センチは割けていました。そこで、私は後にピッタリと人に気付かれないようにガードをして、それからはムカデ競走やらカニの横ばいが寺の外まで続きました。

歓楽街で夜の店を開いていた頃のこと。

チンピラ風の無銭飲食を見かねて、九十キロの私が男の首を掴んで交番へ直行すると、オマワリさんに「余り無茶なことをしてはいけません」と諫（いさ）められました。

ヤクザな人と言えば父の実弟がいました。

事業らしきことで父を誘い込んだり、生活そのものは正にヤクザで、麻薬（ヒロポン）中毒、アルコール中毒が原因で家庭は四散、最期はガンで亡くなり死体解剖にだけに役立たれたような伯父さんでした。その頃、父は坑木切りで不在でしたので、酒に酔って興白半分に大声を出して戸やガラスを叩き破ったりするものですから、夕方の帰って来る頃になると、私達は立った状態で食事をして逃げ出す準備をしていました。「ガシャン、バリバ

リーン」、家族が奇声を上げて一斉に家を飛び出します。どんなに急いても私はワーワー泣きながら最後について走りました。そして近所の庭先に潜んでいると、気の毒がられた軒先の主が足を濯ぐ湯を用意させて、親切にも泊めてくれた人情の温かさと真冬のオフトンの暖かさが今も思い出されてなりません。

この父の実弟は自らの生き様ゆえに道を誤り、ついには寝倉も定まらぬアルコール中毒者のような状態でした。私達と一緒に暮していた「おばあ様」に小遣いを無心してはまた飲むというもので、父の申請によりアルコール中毒者として強制措置入院をし、結末はガンにより声を失い、病院に近いと言う理由から最期は私一人で看取りました。連絡を受けた父は一言、「人様に迷惑の掛け通しの人生だったから人体解剖を」と申しました。

彼の特記すべきは二つあります。一つは兄である父には絶対服従で、三步下って影も踏まずという感じでした。父は山に籠っていた頃の実弟の酔狂が信じられなかった様子で、母は尚さら憐れでした。それにもう一つは、神社と言わずお宮と言わず、お地蔵さんから祠に至るまで巷の神々と言われるものには直立不動で頭を下げる姿を見ていると、偶像を崇拜したり神というものを崇めながらも彼の生活行為は恥ずべきもので、伯父の神仏に頭を下げる姿を見た時、「正しい生活行為こそが正しい信仰ではないのか」という思いに至る「きっかけ」にはなりました。

こうして中学時代は勉強もしラジオも作りました。両親と一緒に旅行をしたという思い出はなく、その為に勉強が疎かになることはありませんでした。私の現代はそうではなく、旅行だアウト・ドアだと私の都合だけで家族を動かすものですから、勉強に身を入れる環境にしなかったことが悔まれ子供達にすまなかったと思います。その頃の私の勉強部屋は、小学校時代の茶室付の仮の病室だった所で、広い応接台一杯に本を広げて遅くまでいました。頭が疲れると隠し持った婦人雑誌を棚の間から出しては女性器図などを広げ、家人の気配にアワテ元的位置に仕舞うのです。級友間では「千擦（せんずり、オナニー）」も話題に上りましたが、まだ私には経験はありませんでした。

高校受験期には少し離れた大学附設の高校に的を絞って、受験科目にはない教科には出席せず、教室で一人勉強をしました。受験は合格でしたが、まったく恥しいことに一緒に受験した一人の子は小学生の時に私を泣かせた子で、不合格を喜ぶ心が私にはありました。それから、母のサイフから三、四度お金を盗みました。買い喰いをした記憶はありませんから多分ラジオの部品代にしたと思います。

また、大学時代のことです。タクシーに乗ると後部座席に一万円が落ちていました。届けもせず、部屋を訪ねてくる恋人に対する見栄のために格好のいい棚に化けてしまいます。棚を見るたびに心が痛みました。その反面、これまでに三度わずかな金額でしたが、警察へ届けています。

二月には受験戦争から解き放たれた私は有頂天で、頭が良いんだという増上慢の心が一杯でした。それから兄の所有していたスクーターを分解したり組立てたり、組立てては試運転（無免許でした）の毎日です。受験後は大好きな機械いじりに没頭して勉強は嘘のようにしませんでした。中学の時も中二で送辞、卒業式の時も答辞でした。中学の卒業式での校長先生の合格校報告の時には、一流大学にでも合格したような鼻息でした。夢にまで見た入学式も終えても、それまで三カ月間も勉強の習慣を捨てて機械いじりばかりに没頭していた私は、空気の抜けた風船のようなもので、張りもやる気も消え失せて入学最初の実力テストでは中位の成績でした。

数学のテストの時間です。

初めからの数題はわけもなく解けました。次の問題は全く歯が立たず顔が「ホテッ」で頭が「カーッ」として、下半身の男性自身が急に硬くなって右に置いたり左に置いたり股にはさんだりしている内に、アッと言う間にパンツがネバネバしました。それからスッキリ落着いて問題を考えられても、解けないものはやっぱり解けませんでした。自らの意志で男性器自身を初めて触れたのは高一の勉強も学校も興白くなく神経性下痢症に悩んでいた頃で、罪悪感も世人が言うようにはありませんでした。

Home

実力テストが中位という、味わったことのない挫折感に苛(さいな)まれ、完全になまけ癖、遊び癖が身についてしまっていた私は、夏に向う頃から神経性の下痢症とかで、下着の検査をしても痕跡もないのに下痢の臭気が車内に充満するような錯覚に悩みました。冷房車のなかった時代で車内の臭いがすべて自分から発する臭いと思ひ込む軽度のノイローゼでした。

私に似たような同級生も中にはいました。

蓄膿症(上顎洞炎)が勉強の出来ない理由の一つと考えた総合病院の息子は、春や夏の長期休暇の時期には顔面部のありと全ゆる「洞」を手術の対象にして、今度はマユの下から、今回は東京の〇〇医によって耳介のワキから切って...と説明する彼の手術痕は生々しく憐れにさえ思えました。でも、手術の回数の割には勉強は変わりばえしなかったように思います。これと同じような例で口腔外科医から聞いた話は、「アゴが前に出っ張った男の高校生がいて、それが登校拒否の理由の一つと考えた両親は、夏休みを利用して、アゴをウーンと引っ込める手術を大金をはたいてさせたそうです。手術の結果に子も親も大満足でしたが、相変わらず登校拒否は続いて好きなギターばかり弾いているのだそうです。」と。

高橋信次先生の一番弟子の園頭広周先生によると、登校拒否、イジメ等の最近の学校問題は夫婦の不仲、家庭の不和が原因ということです。私も子供を通して勉強しました。私の子供の場合は、正にそうでした。

先を続けます。

それからは、学友全員が人を押しのけてでも先に出ようとする競争心に圧倒されて学校が増々いやになり、有るだけの言葉を用意し両親を説得して下宿生活を始めます。それまでに努力をしなかった者が下宿生活を始めたからと言って、急に勉強が出来るはずもありません。そこは大学生を主にした食事付の下宿屋さんで高校生は私一人でした。それからは神経性下痢症も嘘のように治り、新生活は私にとっては夢のようなもので、大学生と遊んだり近くの下宿生活をする同級生との新しい関係が出来て来ます。進学校というのでクラブはなく情熱を傾ける発散の場は体育祭の時ばかりでした。打上げの時に初めてビールの味を知りますが、それは高一でした。

次は高二です。

下宿生活にも慣れ、若さの発散の場を学内に求めることもできないものですから、近くの山に登ったり学友と遊んだりして時間を過ごしました。夜、淋しくなって近くの学友を訪ねると、タバコを吸っている人がいて、「類は友を呼ぶ・類は類をもって集まる」の譬のように、タバコを吸う者やこれから吸い始める者達が集まっていました。タバコを初めて吸ったのは高二の時です。煙たいばかりで何の感動もありません。大学時代はヘビー・スモーカーと言われる位に吸っていても、三十代の初めには完全に止めています。そのきっかけは夜の商売を始めたとき、自分の好きな事をやるのだからタバコの二つ位は止めようという極めて単純なもので、一旦こうと決めると私は意志は固いと思います。禁煙会や禁酒会なるものがあったとしても、どう理屈をこねても意志の弱い人達の集まりと私は思っています。やめられない人は、止めようといくら心では思っている、潜在意識では止めたくない心、止めようとは思わない心があるからです。止めたければ心の底から止めると決意して止めれば良いのです。



これまでに、泥酔した事は余りありませんが、大学四年の大学祭の時に一度あります。日本酒を冷酒でラッパ飲みをして街を闊歩した後、先輩のお宅へ泊めてもらいました。交番の前では校歌を唱い、先輩の家に着くと御両親の寝室に入り込み、手をついてご挨拶をしたのにおぼろにしか記憶にないのです。先輩の話と、ご両親の「お行儀が良いのですね」という朝のご挨拶に恐縮するのでした。夜の商売をしている時もほどほどで、失敗もなく酔狂を演じたこともありませんが、これまでの人生の中で私の最大の酔狂は、全んど記憶にない位に飲んで女性を訪ね、心に思うことがあってフスマを三枚、足で蹴破って大暴れしたことです。悪因は悪果でありその原因と

なるものがありました。

それは、あたかも駅の上に家が建っているような便利の良い居宅で、子供は大学に在学中であり生活費と居宅購入のローン総計はかなりの額になりました。しかも男の甲斐性と言う誤った考え方で、一度目の脳卒中のあとで、当然ながら医業収入も落ちているのにお勤めも許してはいません。全てが私の双肩にかかっていたものですから、経済的、精神的苦しみが原因となってフスマを蹴破ったというわけです。

話は元へ戻ります。

高二から高三の時には、友人と連れ立ってストリップ劇場にも何度か通いました。その頃の踊り子さんの音楽はブンガチャッチャの四、五人編成の楽団でした。踊り子さんの最後の曲の終りに、スポットライトの消灯に合わせて陰毛がチラリと見える程度で、ストリップそのものというより、幕間のコントの興白さにころげ廻るのでした。

数年前のビ二本に始まって、それより前の、ブルーフィルムといわれた八ミリ映画、裏ビデオ、そして最近の、一流週刊誌にまでも掲載されるヘアヌードがあります。時代の流れとともに陰のメディアから、表街道にまで出て来てしまった感じのセックス産業の氾濫は、どのような理屈をつけようと、決して尋常ではないと思います。そして、その行きついたところが、性病だけではなく、社会問題化しているエイズの問題です。アメリカへ視察に行った時も、エイズ患者からの医療行為を通しての感染の問題など、悩める先進国アメリカの現状を見て、正に「困れる世紀末」という感じは拭えませんでした。人類はこれまでに「悪因」を作り出して来て、いま、「悪果」としてのエイズの地球的規模での大問題は、臭いものにはフタ式の姑息的な問題解決ではなく、伝染を防ぐ為に「コンドームを」と言うスローガンも必要ですが、それだけにとどまらず、永い時間を掛けても人間教育を地道に続ける以外に方法はないと思います。性の混乱、性の頹廢、性道徳の乱れが人類にとって「困りもの」なので、自然は、エイズ蔓延という大問題を人類に提起して修正を促していると思うのです。

それでは、私の反省を含めて「性」について、高橋信次先生と、その直弟子の園頭広周先生の教えを要約して見ましょう。

「性の結合の目的は夫婦愛を完成し、お互いに愛情を確かめ合うものであり、単なる性欲の満足の為ではありません。神の子・人間の、動物の所謂、種族保存と言う行為のみとするとところとは違うのが、この一点です」

このように、

- 1) 性の結合の目的は何か、ただ単に性欲の満足の為なのかどうか。
- 2) その相手は正しい相手であるか、不倫・売春・浮気の相手なのかどうか。
- 3) その為す時間はどうか、人が一生懸命働いている昼間から行うのかどうか。
- 4) 行う場所が適当かどうか。

この、1)目的、2)人、3)時、4)場所を、園頭広周先生は「性の四要素」と名づけられ、この四つが正しい時、神が陰陽に分れ、陰陽が再び結合するというこの行為が、愛を確認しあい、愛を向上し、魂を向上し合う神聖な性行為となります。そして、相手を次々に変える浮気な男も女も、心の、魂の満足の得られなかった哀れな人達です。浮気をして、買春をして罪悪感を伴うのは性を享樂の対象にしたからで、神の子・人間は本来、性の「正しさの尺度」を心の内に持っているから、その心に照し合わせてわだかまるのです。

ところで、私が淡い恋心にも似た感情を持ったのは高三でした。成績もはかばかしくなく、高二の頃から下宿に数学の家庭教師には来て貰っていましたが、英語の適当な家庭教師がないからと、質が高いと言われる少人

数制の英語塾へ通います。実力テストの結果によって、私は三年生でありながら高次のクラスで勉強することになります。この頃には少し敗北感にも慣れっこになっていたのと、感じの良い女学生がいましたから抵抗はさほどではありません。男子校の私にとってミッション系女子校のその人はとっても新鮮に思えました。雨の日、塾も終って帰っていると、おおかえ運転手つきの車のドアが開き送ってくれることもしました。大きな総合病院の娘(こ)で私の片想いでしたが、大きな総合病院という憧れとミッション系の深窓に育った私の知らない部類の娘という複雑に交錯した心情が、私を余計に駆立て勉強どころではありません。会えない日は、その娘のいる病院を眺めるだけでも心が落ち着きました。その娘の一家が礼拝に通う教会にも暫く通い、上品なお母さんと一緒に入ってゆく姿を何度か見るようになります。後姿を追っては心がときめきました。

もうすぐクリスマスという日、少し離れた所からその人の家を眺めていると、どんより曇る冬空は季節柄何かもの悲しく、親許から離れて一人暮す下宿生活は自ら選んだとは言うもののもの淋しく、ガラス窓越しに点滅するツリーの明りが今にも泣き出しそうな私の心を一層人恋しくさせます。この娘との結末は、これから述べる大問題の為に私は大学受験も出来ずにストレートに予備校の門をくぐります。一学年下のその人は一年後に現役で私立医大合格をしますが、私は一年浪人を経て同じく合格を果します。こうして六年間の同学年生を数えて行くこととなります。何度かの文通を続けながら大学入学後の夏期休暇に入った或る日、私はその娘(こ)を訪ねます。厳格な家風のように、お母さんにご挨拶の後も二人だけで話しをすることも出来ず家族の者がいつも周囲には居ました。数年後、体をこわして自宅療養に帰って来たその娘を訪ねると、私の永い間に抱いていたイメージとは異なり都会での生活は清楚だったその娘をも変えてしまったようでした。傷心の思いで家に帰り着いた私の、心なしか元気のない様子に父は「どうだったのか」と問い掛けると、「ハイ、初恋は終わりました」と元氣なく答えました。

その大事件とはこうでした。

それは高三の三学期も始まろうとする直前のお正月の三箇日も明けた頃です。私は学校に戻る為に家を出て、乗り換えの駅頭に立って獲物を狙う鷹のように何かを探し求めていました。広場の隅に観音ドアの高級車を駐車して立ち去る人の影が見えました。すぐに戻るという様子ではなかったので私はゆっくりと車に近づいて、隠し持ったドライバーで三角マドをこじ開けると、手を入れて悠々とドアを開けました。私は「やったあ」という気持ちで下宿へ向うと、下宿組は周辺のそこ、ここに帰っていて、集団でドライブとしゃべり込んだのです。もうそのときには罪の意識は完全に消え失せて、両親の悲しみの顔など思い出すこともなく、また、車が忽然と消えてしまって、持ち主が大騒ぎしているのではと考えることもなく、若者が楽しくふざけながらドライブするように車を走らせていました。

私は車の中のボスです。どうしてかと申しますと、体育祭の始まる頃には三年生のリーダーが下級生を運動場に集めて校歌や応援歌を教えることになっていました。リーダーは勉強の余り出来ないクラスの、腕力の強い者が選ばれるのが普通なのに、なぜか中位のクラスの私がリーダーでした。それは、私が学年のボス格と些細な事でなぐり合いの喧嘩になって前歯を一本飛ばされます。その子は都会の医家の子で青ざめながら好きになくってくれと言うものですから、私は卑怯にも空手の型で格好をつけて無抵抗の子を大ゲサに殴っていると、幾つも殴らない内に仲裁がはいります。それまでの私の歯は、小中学を通して歯並びが良いのと虫歯が無いというので表彰されており、大学に入ってから飛んだ歯を処置しているものの歯列が理想に近いというので、データーを取るための検査を受けている程です。

ところが数日して、その子は私の飛んだ歯の処置費のために、自分の所有するガンや遊具を友達に売っては治療費を工面していると言う噂を耳にします。「お前の誠意は良く解った、一円も貰うつもりはない、心配するな男の喧嘩じゃないか」と格好をつけたのです。感激したその子は、「あいつは男の中の男だ」とか何とか言って同級生に触れ回すものですから、その内にリーダーに祭り上げられたというわけです。放課後の練習は、全校生をボス・グループがバットや棒切れで囲いを固めてくれるものですから、直に心が一つになって成果は上々でした。そのような理由で学年では「ボスマがい」でしたので、窃盗した車の中でもボスでした。



その方面は温泉街へ通じる道で、「ワーワー」騒ぎながら走っているとジープのパトカーがサイレンを「ウ・ウ・」鳴らしながら道を斜めに閉ざり停車を命じられました。それからやっと事の重大さに気付く程で、パトカーのオマワリさんが無線で「只今、〇〇温泉方面へ逃走中の窃盗車を見つけ逮捕した」と交信をしていました。ところが、私を筆頭に全員が大人びた顔をしているのに、それぞれが生徒証を出すものですから、三人いたパトカーのオマワリさんは首をそろえて「何んだお前達は高校生か」と心なしかがっかりした様子でした。窃盗車であることを皆は知らなかったと申し立てると、私は一人収監されます。簡単な調べの後、映画の世界でしか見たことのない、鉄格子のはいった六帖一間ぐらいの部屋に入れられました。「車をたたき売って、温泉街で遊ぶつもりだったのか」と詰問する係官の言葉を思い出しながら、不自由な身になって初めて自らの成した重大さに驚ろく程でした。

高校生という配慮からか差し入れられた毛布は多目だったようです。囚人とか刑務所という言葉しか知らない私は、そんな人が身にまとう毛布なんか着るものかという心が働いて、暫くはそのまま板張りに坐っていると留めどなく涙が溢れ、母の顔が、父が、兄姉の心配している顔が浮かんで泣き続けました。初めは拘束され不自由な身の変わりように情けなく、口惜し涙から悔悟の涙に変わり、終りの方は反省の涙でした。すすり泣く声が響くのか、並列に並ぶ隣の鉄格子の住人が怒鳴りました。ひとしきり泣くと私は泣き疲れて、毛布を三枚もかけて板張りの上に直下に寝みました。

拘束されたその地は奇しくも遠戚が町長で、連絡を受けた叔父さんは教育委員長と共に牢を視察して下さったようです。その時は泣き疲れて寝ている時だったようで、私の両親に電話で「心配はいらんが、ふてぶてしくもイビキをかいて寝ていたよ」ということでした。そして、夜中だったのでしょう、目を覚すと父母は、兄姉は、一人一人の顔が浮んでは消える中でトイレに立つと、トイレは部屋の片隅にブロックの溝を作っただけの間仕切りもないもので、「ジョージョー」という小便の音だけがシーンと静まり返った牢内に響きます。見上げると壁の上の方に十センチ四方の小窓があって、映画の中ではそこから月も見えましたが私の小窓からは星も月も何んにも見えず、時折、見廻りのコツコツと歩く音だけが聞えました。

明け方近くに少し眠って五時に起されました。身づくろいも終わってしばらくすると、鉄格子の下の小口からベークライトとアルミの食器が差し入れられても、どうしても手をつける気にはなりません。それから本格的な調べと指一本一本の精密な指紋の採取、顔や姿の規格写真のような撮影等の一連の調べを受けました。それから家人と面会すると、母は、目を真赤に泣き腫らして声にならない声で泣きくずれ、兄は大きなゲンコの一つもやりたそうでしたが、係の方から注意を受けていたらしく我慢をしているようでした。

引き取られて外に出ると道には雪が真白に積り、四、五日遅れで新聞の片隅に「医家の息子、車窃盗」と小見出しで出て、学校では緊急職員会議が開かれます。「無期停学」が言い渡された後、私は下宿を引き払い、毎日の自分の思った事、考えた事を原稿用紙に書きます。それを校長先生と担任の先生に読んでいただき、考え方の注意をしてもらいました。こうして、職員室へ作文を持って毎日通います。教室からは先生や生徒の明るい声が聞こえて来て、勉強嫌いに近かった私でも、この時ほど一緒に勉強したいと思ったことはありません。

これは卒業式までの二カ月余り続き、私の卒業式は一人、校長室で行われました。それからの私は卒業はさせるが大学受験のための内申書は出せないという決定でしたから、大学受験もせずストレートに予備校の門をくぐり、学校の名簿には今も私の名前が最後尾に燦然と輝いています。私のこの事実は、或る日突然に車を無断で動かしたのではありません。巷間では、「魔がさして」という言い方をしますが、この「魔がさして」という言葉は如何にも責任を転嫁したようで責任がありません。たとえ魔がさしても毅然と対抗していれば問題は起らなかったはずです。同調したために問題も起きます。下宿ではただ一人の高校生である私は、大学生の中の一人の、配線を直結して車を乗り廻す話に興味を抱き、新月の晩、懐中電灯をたよりに数百メートル先の神社の境内に駐車中の車をモデルに手ほどきを受けます。ラジオ製作が趣味の私にとって、コンセントプラグに電気コードをつけるように簡単で、最初の十一月の深夜は少し冷込んでいたためにかかりが悪く、手ほどきをただで大学生は帰って行きます。一人残った私は何んとかしようとしませんが、その内にバッテリーが上ってしまい未遂でした。

ラジオ製作の感覚でもう楽しくて楽しくてなりません。罪の意識はなく、この時はスクーターには乗れましたが、車は夏休みに、姉の練習について行く間に経営者と親しくなって、何度か乗せてもらっていました。次の機会には難なくエンジンはかかります。広い境内でしたからエンジンの音に怪しまれる事はありません。それから私の方から誘うほどで、その内には自分一人で実行するようになり、逮捕されるまでには七回の悪行を重ねていました。

私の心の傾向性（カルマ、業（ごう））は、こうと思ったら突っ走る傾向にあります。それも、善にも悪にも見境なく、心の針が「善」の方へ向けば良いのですが、悪の方に向うとそれは悲惨です。

この「心の傾向性」は、物理学では「慣性の法則」とも言われ、一度、フリコを振るとしばらくフリコは振れ続けます。このように一定の心の傾向性を持ってしまうと、止めるまで、つまり心をいれかえて完全に修正するまでは、心は一定の傾向性を持って走り続けます。

例えば、「じめーっ」とした陰気な心の人、心を入れかえて修正しなければ、何年も何年も、否、ずーっと陰気な心のままです。ところが、「これはいかん」と心を入れかえて修正すれば、「作用・反作用の法則」によってしばらくは周りの者も、「近頃、どうしたんだアイツは」と、とまどい驚ろきから波風も立つかもしれない。

それでも尚、明るい心で毎日を送っていると、「循環の法則」によって延々と続いた陰気な心の循環の輪が断ち切れ、その内には明るい心の循環に変わって、そしてついには完全に明るい心になってしまいます。

そうすると毎日が心から明るくなり、人生も明るく幸せに変わります。「笑う門には福来たる」、これは、正に至言です。じっとしては決して運命も好転しません。

ところで私の場合は、「悪への道は大河のように大きく、善の道は針のように細く小さい」と言いますが、正にこれでした。大学生も私も同じ穴のムジナ、同類ということであり、「類は友を呼ぶ、類は類をもって集まる」という波長共鳴の法則です。

そして、私が無期停学になっていた二月のことです。

私の義兄は宗教には特別に興味を持った人で、精神修養の為に滝にかかって業・行（ぎょう）でもしてみたらと霊山を紹介します。家人の多くは反対しました。宗教への「正しさの尺度」を持たない私は、滝業が精神修養になるのなら是非ともという一心で、寒風の吹く中を自転車に乗って家を出ます。そこは家から四十キロ程の所で、自転車を手押しの山の小道は思いのほか厳しく、薄暗くなりかけた夕方に目的の寺に着いて来訪の目的を告げました。

その日は雪こそ降ってはいませんが残り雪がそこそこあって、この時季、一人の高校生の突然の訪問は自殺が目的ではといぶかしそうでした。お米を差し出してから宿泊の為のお堂を案内されます。それからお坊さん達が交代で部屋を訪ね、来訪の真意を尋ねるのです。

夜には、老齢で一番偉そうなお坊さんが私を自分の部屋に招き入れ、命の尊さ修業の大事さを説きました。外とは障子一つで隔てられたお堂には、怖い顔をした仏像やら彫り物が安置され、その不気味さと戸を打つ雪混りの風音と、肌を刺すような寒さにどうしても寝つけません。登山用のヤッケ（着衣）とラジューズ（小型コンロ）で暖をとっても効果は今一つで、「そんなこと止めときなさい」と忠告した家人の言葉を思い出しながら、大変な所へ来てしまったという後悔が始まりました。

まんじりともせず一夜を明かすと、朝五時の眠りを破るような木板の叩く音で身仕度を整え、お坊さんの仲間に入り食事をいただきます。七時頃には滝場からも岩壁をくりぬいた洞穴からも一斉に読経が始まり、線香の香りがそこら一面から漂って来ます。あたりを散策したり見学をしていると、滝場では白装束に身をかためた男女が数人、入れ替り立ち替り長尺の滝に身を打たせ、今に思うと般若心経のような経文をとなえていました。さすがに雪溶け水は冷たいらしく盛んにセキをしている様子が可笑しいのです。

と、見ると紛れもなくそのうちの一人は今は亡き伯母で、私は身を隠すようにその場を離れました。伯母は若くして主人を亡くし苦労して二人の子供を育てられます。息子の卒業を誰よりも喜んで、ゆくゆくは主人の残した広い敷地一杯に病院を建て、嫁を貰って開業させるのが夢でした。ところが、手塩にかけて育てたハズの一人息子がよりもよって出戻りの女性と懇になっていると知ると、それから宗教遍歴が始まり縁切りの神様や縁切り地蔵と言われるような霊験あらたかと評判の所を訪ね、その内には滝業もされ息子と女性を別れさせることを悲願とされたらしいのです。

一方、娘の方は旧家の医者嫁に嫁ぎます。娘の主人は、富裕な家柄ではあるが継母という環境の中で育ち、親許を遠く離れて開業しました。その内には業績も確実に上っていき、「こんなに儲かっていいのだろうか」という言葉さえ聞かれるようになります。いつからそうなのか知りませんが或る宗教団体の熱心な信者で、地位も名誉も財

産も築いた彼は、息子を医大にやっても一人はノイローゼ状態というのです。これは私の卑近な一例ですが、全てを手中にした彼も、家庭の中はこのような混乱していたのです。私がどうしてここで伯母に会ったのかと言いますと、伯母の紹介で、今は亡き私の姉は義兄と知り合っており、この滝場は伯母と義兄の共通の信仰の場だったのかも知れません。それでは、どうして子供のノイローゼは起こるのか高橋、園頭両先生の教えによって考えてみたいと思います。



一、思春期頃から始まる子供のノイローゼや精神病の原因は幼児期（三歳から六歳頃）に原因を植えています。悲しい思い出や、夫婦ゲンカや夫婦の不調和は特になかったか。

二、病死や不慮の死を遂げた、おじいちゃんやおばあちゃんが何かを言いたくて、子供を通して（病気や事故等で）知らせようとする。

三、先祖に断りなしに宗旨変えをしていないか。先祖の霊の中には、自分はその宗教では救われたいと思っ

ている霊が、分からせようとするために色々な問題が起る。

四、入信する宗教団体の問題点

（イ）お題目をあげる問題

日本の仏教の中でも日蓮宗系の宗派は「南無妙法蓮華経」という題目を上げます。それ以外は「南無阿彌陀佛」と言ったり「般若心経」を上げたり様々です。この「南無妙法蓮華経」にしても「南無阿彌陀佛」にしても、二千五百年前のお釈迦様の説かれた仏教に由来するもので、古代のインド語を中国語の漢字に当て字し、それを日本語読みするのですから意味もわかるはずはありません。

「南無妙法蓮華経」は「ミョーホーレンゲンサンガンジュ」と言っていたものに、日蓮が「南無」をくっつけて「南無妙法蓮華経」としました。この意味は「あのドブ沼の蓮の花をご覧なさい、ハスはあのドブ沼から、どのように綺麗な花を咲かせるではありませんか。あなた達の体をご覧なさい、目からは目クソ、鼻からは鼻クソ、汗、大小便。あなた達の体から出て来るものは何一つ綺麗なものはありません。あなた達の体もあのドブ沼と変わらないけれども、その肉体の船頭さんである「心」が、真に片寄りのない中道の物差しを持って生活したならば、心は安らぎ、あのハスの花と同じように調和されて行くのだよ」と、ハスの花を方便としてお釈迦様が説教されたもので、高橋先生の説によるとそれは釈迦が七十代の時だったそうです。

そして、

「南無阿彌陀佛」は古代インド語で「ナーモアミダーボ」と発音し、「ナーモ・南無」は帰依する、「アーミ・阿弥」アミーという名の人。「ダーボ・陀佛」悟られた人。

このように、「南無阿彌陀佛」とは「アミーと言われる悟られた人に帰依します」という意味だそうで、「南無阿彌陀佛」「南無阿彌陀佛」「ナムアミダブ、ナムアミダブ、ナムアミダブ、ナムアミダブ」とお仏壇の前で連唱する人は「アミーと言われる悟られた方に帰依します」「アミーと言われる悟られた方に帰依します」「ア

ミー...帰依します」「アミー...帰依します」－...。

「南無妙法蓮華經」にしても「南無妙法蓮華經」「南無...華經」「...」。「あのハスの花をごらん...」「あのハスの花を...」...

お題目というのはこういう意味だったのです。これでご利益があるのなら、私は仕事もせず「南無阿彌陀佛」「南無妙法蓮華經」と一日中お題目をとこなえていることでしょう。。古代インド語を漢字に当て字されたものを、御利益があるからと後生大事に、うやうやしく読経するのですからね。これは天上界の困りもののようで、このような宗教の誤りも修正するために、高橋、園頭両師の出生の意義があるのです。

(口) お金を集めることの問題

お布施名目の金集め主義や、神の名のもとに、宗教団体を維持するための金集めによって、泣いている人も多いと聞きます。幸福という言葉と引き替えに、金を強制的に上納させられる信者と「追いはぎ」に身ぐるみはがされる人との間にどれほどの差があると言うのでしょうか。

(ハ) 内、外部からの問題

余り行き過ぎますと、自浄作用として先づ内部から問題が起き、それでも修正し切れないと今度は外部から問題が起こるといふのです。

(二) 政教分離の問題

知的文化の指導的原理は、合議性によるものではなく、一人の覚者によって推進され道は開かれて行きます。釈迦がイエス・キリストがそうであり、現代の宗教団体や教祖にはその能力はありません。そうだとするなら、政教分離は当然なことです。

Home

また、滝場の話へ戻ります。

私は昼間の滝場にはいるのは躊躇しますが、それは行者達のような読経が出来ないという理由からで、行者もいなくなった夜の八時頃に明りも消された脱衣所で衣服を脱ぎ滝場へ降りていきました。雪解け水のためか幾スジか流れ落ちる長尺の滝も勢いがなく、水量も思ったほど多くはありませんでした。もう冷たくて冷たくて。お経を知らない私はエイとかヤーとか大声をはり上げ空手の突きのようなしぐさで寒気を吹き飛ばします。一個の裸電球に照らし出された滝場はそれまでに経験したこともない緊張の一瞬で無我夢中でした。滝場から戻った私は空タオルで体の「そこそこ」を摩擦しても完全に冷え切って感覚もありません。

数日が過ぎ、広いお堂の中の一人の生活も少しは馴れた頃、土曜日の夜が来ました。その日は行者が三人同宿します。年配の男女はそれぞれに祈祷師をしているような話しぶりで、高校生の私に興味深そうにいろいろ問い掛けては霊的な話しをします。いずれも私にとっては背スジがゾクゾクしたり身の気もよだつ怖い話しでした。翌日は一人帰り、二人帰りして、また一人ぼっちです。木々の間から漏れくる遠くの街の明かりは、雨まじりの雪と共に、一層、私の心を淋しくさせ、「やめときなさい」と言った家人の言葉が、またも思い出されました。これは私の青春の一ページであり、滝業は冷たい水に触れる我慢強さとか忍耐強さの修練にはなりますが、悟りとか解脱にはほど遠く、全く異質のものと思います。

それでは、どうして滝業とか肉体業によって、ある日突然、靈感を得て霊視ができた、未来予知や予言ができる、物体移動（トランスポートーション）等、もう何んでもよいのですが、人間ワザでは考えられないアツと驚くこと（これまでにテレビ等で行われたこと、これから行われる全てのこと）は、「あの世の霊の協力」、によって行われるということです。

理由の無いものはありません。全部理由があります。普通は、霊とかあの世のことが分からないために、人と変わったことをすれば、その人の言う嘘を信じてしまうのです。

不思議はあの世の霊のなせるワザと申しました。

と、言っても、その協力する霊の質が問題で、常識も愛も思い遣りもなく頑固で冷たい人には「類は友を呼ぶ」という法則通り、同じようなあの世の霊が同通し協力しますから、低次元の霊的現象しか現わせないのは当然のことで、ズバリ「霊能を現す人の人間の質が問題です」と言うべきだったかも知れません。

私が言っているのは人間性のことで、首相だから、大学教授だからという地位、名誉を言っているのではなく、敢て言うなら人間性、つまり人間としての「格」と言うか段階と言うか「人格、霊格」とでもっておきます。

高橋先生は「光の量の区域」と申されました。生き物は死ねば、全てあの世の霊となって、「あの世」（実在界）と「この世」（現象界）を循環して死んだり生まれたり（転生輪廻、輪廻転生）します。

それでは「協力する霊」は何かと言うと、人間の霊や、ヘビやキツネ等の動物霊です。

当然、動物の霊ですから、ゾウさんだって馬さんだって動物霊です。でも、とりわけヘビはネチネチじめじめと暗く、地球人類より歴史は古いと高橋先生は教えられています。キツネは獯猛で奸智（わるじえ）が働くと言われていています。高橋先生はビデオの中の「現証」（実証・実演）の時間に、「デッカイ白いフサフサの狐が...」とか、手で大きさを示しながら「こんな大きな蛇が胴から首にかけて...」等という表現をなさっていて、これらの霊が協力して霊現象を現わすのだと理解して下さい。

これは言うなれば「困った霊」の協力ですが、さわやかで、愛深く思いやりがあり立派な人格の人は、亡くなるとストレ - トに天国（天上界）に住まうことになります。これらの人達を総称して「光の天使」、仏教では「菩薩や如来」とか呼んでおり、高橋先生は「光の量の区域」「光の段階」と表現されました。

これらの「立派な霊」「光の天使」の協力とは、先づ、正しい法（神理）を説き、現わす現象にしても、皆んなの役立つことをします。何百、何千という飢えた人達にパンを出して救うとか、誰れが考えても立派と思えることをします。

どここの国の＃＃へんてこりん＃＃な格好をした人が、人をはべらせ空中から灰や色々な物を出して分け与える、こんな見せ物、パフォーマンズみたいなことはしません。

ましてや、真珠を出したり仏像や大黒さんを出したり酒を出したりという低次元のことはしません。少し変わったことをする人がいると、人が集まり持ち上げるものですから困ります。マジックは必ずトリックがありますが、トリックがないのならこれは霊的な低次元の現象ですから、正しく見て（正見）欲しいのです。

この霊場は、あの世のヘビがいる所だったナ - と思っていますので近よらぬ方が良かったのですが、その時は、少しはましな人間になろうと燃えていましたので、憑依（ひょうい・とりつく）されることもなかったと思っています。もちろん、神理をよく知り正しい生き方をして愛が一杯で光り輝く人なら、そこにどんな霊がしようと同類ではないから問題は絶対に起りません。でも、何も知らない一般の人達に対しては、高橋先生が講演の中でいつも大声されたように「さわらぬ神にタタリなし」という言葉を伝えます。

先を続けます。

大学受験を棒に振って、それから私は予備校の寮に入ります。身を入れて勉強することもなく、最初のうちは寮の見廻りをする係の人も厳しかったのですが、もう夏ともなると無いにも等しく、寝苦しい夜は、皆、涼みに夜の街へ出掛けるという具合で、部屋には誰も居ないことさえありました。

その日も熱帯夜の暑い日でした。

夜中に寮から抜け出した私は、一人で夜の街を徘徊していると、高級住宅街の家の前に車が止っていました。大学受験も棒にふるって、ストレートに予備校生となった私は、また獲物を狙うタカのような目になって車に近づいて行き、また以前と同じようにドアをこじ開けて中に入り、直結して動かしました。車内のものは盗ったことはありませんが、乗り廻した車は全て同一メーカーの車でした。どうしてかと言うと、姉が免許を取った後、練習のために借りたのがそれで、構造が分かっていたからです。



「反省」と「後悔」の違い

高橋、園頭両先生から「正法」を学んだ中で「反省とは、過ちを二度と繰り返さないこと」と学んだ時、そうだとこれが本当だと私は心の底から分かりました。同じ誤りを犯さない時に、本当に反省したと言うのです。逮捕収監された後に、私は「反省します、反省しました」と何度も言っているのに、一年もしない内に同じことを繰り返しました。これは「反省ではなく、ただの言い訳、後悔に過ぎなかった」と思います。飲み助が大酒を飲んだ後、もう飲まない、決して飲まないという言い訳をして、舌の根も乾かない内にまた大酒を飲んでその後は少し「シュン」として、また暫くしたら…。この繰り返しは、真の反省ではなく後悔です。

この私の結末は、その後もう一度実行しようとしませんが、エンジンを廻し始めると玄関のライトが突然灯いて逃げ帰り、これが最後でした。高校時代から全部で九回です。乗り回して放置した車はありません。正直に記述しましたが、持ち主の方には本当に悪いことをしたとお詫びいたします。ゴメンナサイ。

私の悪事から言えること

この私の例からしましても、例えば万引きをして見つかった、そこで言い訳に「つい魔がさしました」という例があっても、まず、その人は必ず何度もやっています。心の傾向性は、フリコ運動のように何度もフリ続けます。一度で思いとどまるほどの人は最初からしません。

これは心の神理・法則です。真実の心は偽りの証（あかし）を拒みます。人に嘘は付けても、自分には絶対に嘘は付けません。悪事を働いた人は、たとえ法律で裁かれなくとも自分の心の中ではそれをもみ消すことは出来ないのです。一時的には睡眠薬や気晴らしによって忘れられたとしても、その内にはまた苦しみは始まります。

原因の根は勇気を出して根元から採る以外にないのです。法律的には時効という言葉があります。この時効という、長い期間に再び悪事を働かなければ、これまでのことは許しましょうということだと思えます。これは法律的な許しです。

神の許しである反省、修正には時効はありません。でも心のドン底からもう「やめた」と決意して、本当に止めればそれで良いのです。

高橋先生はこう教えられました。

「原因と結果の法・因縁の法によって、悪事そのまま結果として人類の上に出てくるのなら、人類はとうの昔に滅びて存在していないでしょう。なんとなれば悪いことは全くしないという人は、この世にはいないからです。だから反省は神の慈悲なのです。」と。

私がこの懺悔録を「辻褄の人生」として公開し白日のもとに曝す理由は、自分の本当の人間性を明かし、この世でのことはこの世で反省、修正をして、あの世までお荷物を持ち込みたくないのです。

勿論、私自分のためにするのですが、これによって救われる、つまり、心の重荷を取り去ることができる人が一人でもいれば良いし、また、「私は、この人のような生き方はしないゾ」という反面教師となれば良いと思います。

これを公開することに随分悩みました。自伝ですから私の名前を出すことによって、私の周辺に迷惑を掛けないか、それは一人よがりではないかということでした。

悩みに悩んでも、時間はドンドン経って行きます。足踏みをしていると、早く範を示せ、範を示せ、これでもかこれでもかと私の周辺には現象が起きてきました。どうしてこんな俺が、こんなことをと思いました。

これまで私には、いろいろなことが起きています。今時こんなことをしてもと思っても、それが時間を置くと、ア、このためだったのかと思うのです。必ずそれを利用する場が与えられます。この自伝もそうで、数年前に骨格は書いたものです。

二、三の私の不思議を上げますと、正法を記述をするために、あの本が手に入らないかナーと思っていたとします。すると或る日、無性に特定のあの本屋へ行かねばという感じがするのです。それに逆らわずに出向くと、その本に出会うこともあります。

それは、『天と地を結ぶ電話』、イエスの分身5、でフィリッピンの心霊術者の『アントニオ・アグパオアの自伝』などでした。

不思議のハイライトは先に出てきますが、我が子がビルの四階から下へ落ちたことです。幸い軽症でしたが、これも正法の展示館を私のビルの地下に設けるという決意を先延ばしにしていた矢先の出来事で、それから数年間実行して正法のビデオを見せたりパネルを展示しました。今度はインターネット公開を決意して97年12月のクリスマスに98年バージョンを公開しました。いま記述しているのは、99年バージョンとして準備中のものです。只今、平成十年十月八日です。著書は書きあがるまでに数ヶ月を要しますが、インターネットは準備ができれば、ものの一時間もすれば公開できるのですから、スピード時代には打ってつけです。

私は二度の高血圧性の脳出血で肢体不自由ですが、医療の仕事も毎日やっていますし、自動車の運転も、自転車もキーボードも叩けます。リハビリも頑張りました。毎日の仕事の合間に、暇さえあればディスプレイを眺めながらの長時間のパソコン操作は、右手は凝るし目はチカチカです。右手が痛くてたまらない時は、左手だけで一字一字打っています。左手に麻痺があるものの、というよりも左手に麻痺があるので長時間でも痛みも麻痺して疲れ知らずです。ありがたいやら悲しいやら不思議な気持ちです。

「正しいということ」の基準は、「そのことによって調和するか、そのことによって心が安らぐか」という、この二つのことを同時に満足させるものだとして正法で学びました。

先を続けます。

また、予備校の寮ではこんな事もありました。寮のオバさんに、とっても可愛い十八、九の娘さんがいて、一人の寮生がその人が好きでどうしようもないと言うのです。世話好きで、おせっかい焼きの私は何とかしてやろうと考えました。寮は海岸のすぐそばで、潮が引くと砂浜が続きます。ウツボの一杯ついた小岩に腰を下して待っていると、私の廻りを舟ムシがせわしく行き交い、しばらくすると、はずかしそうに、少し＼はにかみ＼ながら彼女は近づいて来ました。私は彼からの手紙を添えて彼の想いを話すと、うなずいて聞いていた彼女は、また、来た道を帰って行きました。

その後のことです。私が大学入学後に友人数人と寮を訪ねると、知らないハズの先生が私におっしゃいました。「手紙を書いたんだってね、とってもいいお嬢さんになっていますよ、どうですか。」いつの間にか、話は私にすり替えられていました。

また、いつも酒の匂いをさせている感じの赤ら顔の先生が、寮内の別棟に住んでいらっしゃいました。熱帯夜の或る日、夫婦ゲンカが始まって、奥さんは「死んでやる」とか何とか言って海に入って行かれると、先生は「やめなさいミットモない!」、と岸から叫ばれます。寮生は、こうこうと明るく自習室から一斉に顔を出して眺めていました。いつもは赤ら顔の先生も今夜ばかりは青ざめていらっしゃいました。

夫婦の調和、仲の良い夫婦というのはどの宗教団体でも口を揃えたように説きます、でも、この「夫婦の調和」ということは道徳であり宗教ではありません。

宗教は神を知ることにあります。道徳は宗教に根ざしたのですが、宗教ではありません。私は後半で述べる理由のために夫婦は不調和でした。頭では良くわかっていても、欲望だけが先に立って不仲の原因を取ろうとしませんでした。

夫婦が、仲の悪い原因を取り去ってしまえば、人も羨やむ仲の良い夫婦に必ずなります。見せかけの仲の良さは後で反動が来ます。でも、「その原因を取るのがネー、難かしいんですよ」という答が返って来そうです。、何んだかんだと言っても、自分で立ちあがる勇気を出さない限りは解決できません。全て自力です。一生懸命努力していると、何か見えない力が働いて旨くいくことがあります。これを「自力の極に他力有り」と言うのです。自力で頑張っていると目に見えない他力の力が働くと言うのです。高橋先生は「他力で救われた者は一人もいない」と言い切られました。この一点を全ての人生の問題に当てはめて、よくよく考えて下さい。

夫婦の仲が悪いとその原則がわからず、「夫婦が仲良くなりますように」と祈ったり、霊能者と言われる人に相談や祈禱を頼みます。ところで私は「無智なる人」と決めつけましたが、夫婦の仲が悪い人の中には、「このままではいけない、方法はわからないが何とかしなければ」という心で一杯の人は、確かに、人間にとって「機根」（分かる時期）はありますが、これからが楽しみの人、これから期待できる人と言えます。それと言うのも、一人一人の心の中には皆、「正しさの尺度」を持っているので、それに逆らうと何だかスッキリしないのです。その「心の正しさの尺度」は、この世での環境、教育、思想、習慣の中から学んだものもあり、また、生まれ変わり死に変わりする中で勉強したもの（般若心経の中の一節のパニャ・パラ・ミタ。つまり般若・波羅・密多は、内在された偉大な智慧という意味）もあるのです。

先へ進みます。

それに、米軍基地のアメリカ人と話す機会もありました。寒い冬、兄に連れられて英会話友人の家を訪ねました。政府から借り上げられた一軒家の窓という窓は、透明のビニールで二重にシールされ、玄関を入るとカッとした熱気に私達はドギモを抜かれます。中ではダルマ型の重油ストーブが「ゴウゴウ」と音を立てて燃えていました。家の外には燃料の入ったドラム缶が何本も転がり、それは当時の超大国アメリカの豊かさを、垣間見る思いでした。

こうして、一年浪人から公立大学に入学しました。するとすぐに役員に指名され、水を得た魚のように人のお世話が楽しくて仕方ありません。クラブ活動はハワイアンクラブでギターを弾きました。二年生では演芸会の司会が認められて、スウィングジャズ・オーケストラ（トランペット、トロンボーン、サクソ、ドラム、ピアノ等の二十名程の構成）の司会をするようになり、大学六年の中で五年間、専属で続けました。プロの司会の手ほどきも受け、千人ほどの聴衆者を前に曲の説明を交えて喋るのです。五年間を通して五十回程の演奏会でした。オープニングのテーマソングに乗って緞帳（どんちょう）が上ると、ステジの脇のマイクがスルスルとせり上り、スポットライトに照らされて第一声から、今までの緊張が解けて話を始めます。私が学生の会長のおきには、前年に続いて夏休みの慈善演奏会を企画します。いくつかの楽団と共に十会場でのボランティア演奏会でした。その頃、医会の多くが同窓生で、チケットを買い取り招待したり無料で配布したものですから、会場に入りきれないという笑えない事態も起きました。巷では大物政治家が自分の立場をフルに利用するそうですが、この時も同様のことが起こりました。司会の私が、客席を廻り母にインタビューという「やらせ」もありました。各地で、かなりの金品を福祉施設に贈ったものですから、地方紙を飾ったことは言うまでもありません。



それから、入学した夏には、先輩に連れられて売春宿へ参りました。そこは木造の二階家で、雨戸の隙間から漏れるかすかな光にセンペイ布団が見え、「やり手ばあさん」と呼ばれる人が、相手の女性に「初めてだからね」と耳打ちしていました。それから、私は何んの躊躇もせず身につけている全てをとりキチンと揃えていると、「お行儀がいいのね」と言いました。暗すぎて顔も見えませんが、脂粉の強い匂いだけが記憶に残っていて、裏通りに出ると何かしら罪悪感と不潔感が先に立って自分の部屋へ戻りたくない気分です。衛生具を付けていたとはいえ、途中で尿意があると聞き学問によって、亀頭に半分かぶっている皮をつまんで袋状にし、その中に小便を小出しにして亀頭の外部と皮の内面を洗うという、所謂、「袋小便」なるものを何回もするうちに不思議に安堵して、それから銭湯で痛くなるほど洗いました。入学して間もないとはいえ、医療人としての自覚も少しは持ち合わせていましたから、次の朝の排尿の時に、つまんだり引っ張ったりしても異常は認められませんでした。

同じく、東京での研修時代のことです。

お盆休みで実家へ帰り友人達と温泉宿へ上りました。可笑しなことばかり喋り続ける相手で、何もできずに二人で吹き出していると、「お客さん、時間ですよ」と「やり手ばあさん」がフスマ越しに告げるので、「まだ何んにも。この娘が...」「あんたって娘はしょうがないネ」どうも常習者だったようです。夜毎に辛かったのでしょう。すぐに、その人は呼び戻されて代りに別の人 came ました。入れ替わりに、その人は友人へ行っても私と同じで、後で別の人 came そうです。私はまた東京へ戻り、いつものように患者さんを診ていると、「キーツ」とした痒さが下部にあります。それも予告なしに突然襲って来るものですから、その度に中止して、カウンセリング・ルームやトイレに出たり入ったりしました。その内にアルコールガーゼで拭くと少しは治まるものですから、特別な手当もせず痒くなるとアルコールガーゼ法で二カ月が過ぎた頃、私が夜寝んでいて、余りポリポリ搔くものですから、横に寝ていた女性がフトンをソーツとはぐります。そして、スタンドを近づけて見たら細い虫が明りに驚いて一斉に陰毛の中に逃げ込んだそうです。揺り起された私は何事が起こったのかと飛び起き、深夜だというのにシェービング・ローションで剃り落したことは言うまでもなく、それは「毛じらみ」でした。それ以来、痒みもすっきり無くなったものの、私の大事なものも同じようにすっきり無くなりました。

一方、友人はお兄さんの助言によって、戦中、戦後の学童のように粉を振ったり撒いたりしたようで、話を聞いて見ると私の方が一ペンで治ったようです。このように劇的な修正は、劇的な解決をします。でも、その反作用もまたひどく、元通りになるまでは大変でした。高橋先生は『心行』の中で、「己の肉体が苦しめば、心悩乱し、わが身楽なれば情欲に愛着す...苦楽の両極を捨て中道に入り...」と、おっしゃっています。まったくその通りでした。

海外では女性に接したことは一度もありません。外国の女の人と言えは東京時代、外国人相互のコミュニケーション誌に「英会話友人求む、当方独身医」と英語の広告をしたところ、受付さんが困りました。ひっきりなしに英語の電話がかかって来て、その中の何人かと会いました。今で言う億ションに住んでいた外資系企業の秘書の話です。その頃、私は破格のお給料を戴いて、車はベンツのクラシック・カ - のセミ・オ - プンでした。おまけにナンバーが外国の公官用だったらしく、品川とかの地区名はなく、すぐに「3 - 〇〇」で、銀座辺りを走っていると人が注目します。デートの日、コーヒーショップとかレストランではなく、車種とナンバーだけを伝えて有名ホテルに出掛けました。

Home

私はその頃三十歳になりません。年上コンプレックスの甘えん坊です。三十位のその人は大きなゼスチャーをして近寄って来ました。すべてが先行リードで、その人の提案による日本酒です。その国にも似たようなお酒があって、懐かしいらしくよく飲みました。ひとつも気取らずその日の内に家にも招き入れられます。全てが済むとその人は綺麗に洗われたガーゼで、また次の時も、実に堅実な人でした。数力国語が話せて「外国の医学の翻訳本を出しなさい、お手伝いしますから」と何度も言ってくれましたが、私の方に機根が無くて、つくづく残念に思います。

ある日、彼女と車で遠行しました。その場限りの計画に宿舎の目当てもありません。どこもあいにくの満員御礼。無理に頼むと、「ここなら構いませんが・・・」とのこと。五十畳の大広間におフトンが二つ。朝は、客が来ぬ間の一番飯でした。

おフトンでもう一つ。ある日、母が私を訪ねてきました。折角だからと箱根へ案内します。食事も終わると、おふとん敷きのオジイさんが、二つのおふとんをピタッとくっつけて敷きます。戸惑った私が、「お母さま」と語気を強めると、二つのおフトンは適当な間隔に動くのです。

元へ戻ります。私が開業の為に東京を離れる時、その人は私の乗ったタクシーを泣きながらいつまでも追いかけてきました。それから、開業して三カ月が過ぎた頃、観光で来ているという電話を最後に、三十歳ではなく、三十八歳のその人は日本を離れました。その数日後、英字新聞を見ていると、東京の近郊で稲刈に招待された外人さん達の写真の中に、その人はカスリ姿の人懐かしい顔をしてニッコリ笑って写り、その人は私に全てを教えて帰国されたのでした。

同じく東京です。

ベントツが好きで好きでどうしようもない医者がいて、本も出して名もある人です。彼はB級ライセンスも持っていて、三人でカー・ラリーに出場することになります。写真家で美術家のもう一人は、アセチレンバーナーで鉄の棒を曲げたり付けたりして手動計算機(カリキュレーター)をつける台を作りました。東京タワーから快調にスタ-トすると、ルーカスもボッシュのライトもあかあかと容量以上におもいきり付いているものですから、火を噴いてそれっきり車は動きません。チャートには部分図しかないのでどこだか分かりません。白々と夜が明け始めると斜め上には雪をいただいた富士山の頂上が見えます。それから東京まで押したり引いたりどのようにして帰ったか思い出すのもいやな程でした。

この時の車は、私が大学を卒業して東京の名のある先生へ押しかけ書生のように勉強に行く時に、父から卒業祝にと買ってもらったものでした。先生の学術講演を何度か聞いているうちに直に教えを願いたいと何度か手紙を出す内に許され、挨拶もかねて母も一緒に同行することになります。

父に挨拶を済ませると、買って十日もならぬ車の後部座席には、フトンとトランクにもつめるだけの道具と、助手席には母でした。兄の研究する大学に寄り、手術の執刀中のために面会の出来なかった私は、兄の車のワイパーに旅立ちの手紙をはさみました。少しでも運転が楽なように、高速道をやめフェリーに乗り込んで見ると、港には旅立ちの約束をしていた女性は来ていました。母には内緒でしたが、岸壁に向いた船室からは特別に身を乗り出すわけでもなく、ソファに腰を下しただけの自然な姿勢で、ピンクの線書きにされた蝶の絵柄の、私の大好きな正絹の着物を着て見送りに来ていました。船の別れはこんなにも辛いものかと初めて知るので。ゆっくり離れて行くものほど悲しみを誘います。新幹線の別れなど一瞬のまばたきです。速いとは言っても飛行機は少し違います。デッキからの見送りは雲間に隠れるまではかなりの時間で、これもまた涙を誘います。

東京です。

伊豆は暖かいと言っても小雪がチラチラ降っていました。車はどっしりとしたベントツ、音楽も軽快に鳴っています。横の和服姿の女性は、かつて、着物姿のつり広告で電車と共に走った人で、白いうなじが艶でした。

九十九(つづら)折りの天城を越えてゆっくり降りていくと、立て看板に赤字で「緊急避難所」です。ブレーキが故障した時、そこに入れば満載したトラックでも止るらしく試して見ることにしました。そこで、次の立看板で入って行くと十メートルも行かぬ内に車は落とし穴に入るように止まりました。強固なボンネットも跳ね上り、砂の中から這い出るようにして外に出た私達はションボリしていると、ジープに黄色の点滅灯をつけた道路公団の車が偶然通りかかり、オジさん達は驚いたり、呆れたりしながら掘り出して下さいました。青年と出戻りの伊豆の踊り子は、頭の雪も払おうともせず掘り出される車を見ていました。ご免なさい。もう二度と致しません。

昭和の最後の雨期でした。

大河の支流で、女性の家族とゴムボート遊びです。定員四名も守り、ライフジャケットも身に着け、投げ網と何十メートルもあるロープも乗っています。船長の私の乗船注意も終りボートはゆっくりと漕ぎ出されました。その内には小岩が底をついて動きません。押したり引いたりしている内に底のゴムが裂けて水が入って来ると、乗員達は総立ちになったりしがみついたりのパニックです。

タイタニック号にも冷静に行動した人もいたそうですがこの船はそうではありません。次には片方のオールを流します。買ったばかりの新船なので、欲の張った船長はライフジャケットも脱ぎ捨ててザンプと飛び込みました。急流の中の笹舟のようなものです。一回転して岩にぶつかったり、もうこれまでかと観念すると上へプカリと浮かび上がります。

そんなことを続けてやっとの思いで岩の上に這い上りました。岩の周りには急流がウズを巻いています。女性がロープを投げても届きません。次は届きましたが、船長を引き寄せることなど到底出きるはずもありません。きっと、その内に女性も船長の二の舞です。すると彼女の一人娘が、ロープをパッと掴んで岸に戻り大岩のスソに幾重も巻きつけました。完全に固定されたロープは船長の体に巻きつけられます。静かにたぐり寄せられてもナイロンのロープはグーンと伸びて安定しません。すべったり転んだりやっとの思いで岸に辿り着きますが、ベッ甲の眼鏡も片方の皮靴もオールも見つかりませんでした。

私はこの日のことを思い出す度に肝をつぶします。ゴムボートを準備する時、ロープはどうしようかと考えた揚句、持って行かなければならないという感じがしてアンカー（停泊用重り）と一緒に倉庫から出します。

このような「予感」と言うか「虫の知らせ」はどうして起るのか考えてみましょう。人生の中で第六感、第一印象、虫の知らせ、予感という精神作用があります。例えば「何か良いことがありそうだ」、「今日の旅行は、とり止めた方が良さそうだ」ということがあります。これは守護霊、つまり潜在意識の作用です。



守護霊とは、その人の魂の兄弟（本体一、分身五）の一人が潜在意識層にあって、地上界に出ているその人の一生を見守り、魂の向上のためにあらゆる努力を払っています。

守護霊、つまり自分の過去世（生）がその人の心の内から知らせる、囁くのです。顔についている耳から聞えて来るのではなく、心の奥底から起ってくる「こうせよ」という真実の心です。心が乱れ騒いでいる時に聞えてくるのは動物霊か憑依霊で、静かな落ち着いた心になった時の心の内からの想いを大事にすべきです。

『守護霊を持て』なんて本に書いてあったりしますと、あたかも特別の霊がいそうに聞えますが、決してそうではなく過去世の自分なので、現在のあなたを見れば、過去世も何んとなく推測できます。このように守護霊は皆にあり、最初から皆持っているのです。

また、この世に起ることは、あの世で先に起こります。「あの世で先に起ったことが、この世でも起る」ということは、偶然ではなく必然ということです。あの世で起ったことを、あの世にいる守護霊（自分の過去世の人）が先に知って、私達に知らせるのです。懸命に伝えているのに、私達が聞く耳を持たないとすればなんと情けないことでしょう。心が穏やかで安らいでいると、心の底の底から感じとして静かに語りかけてくれます。この「真実の想い」を大切にすれば、誤りのない幸せな人生を送れます。神道で八百万神（やおよろずのかみ）と言ったのはこの守護霊のことを言ったと高橋先生は述べておられます。勿論、この潜在意識の作用（守護霊の作用）は四六時中あるものではありません。

私のロープ持参は、私の心の傾向性による原因と結果、つまり、雨期で水かさも増しているのに、女性の家族を誘って船遊びをした上にオールを探して激流に飛び込み、泳ぎ難いからとライフジャケットさえも脱いでいるこの馬鹿さ加減。

この必然的に起った事故を、あの世で先に知った潜在意識層、つまり私の守護霊（私の過去世）が、これは大変と必死になって「ロープを、ロープを持って行け」と教えます。それより前には「今日は出掛けるな」と教えたかも知れません。しかし、生きざまや心の傾向性を知っている守護霊が、この無謀な私を反省させる為に出発を中止させることはせずに、ただ、ロープだけを持たせるように働きかけたのか、或いは、こいつは引き止めても頑固で止りはしないので生命だけは守るが、自分でも思い当るようにギャフンといわせて反省させようという

ことだったかも知れません。今の私は、その時のことを思い出すだけでも怖く、もう絶対にしないぞと思っています。「もうこれで終わり」という場面が二度もあったのですから。

大学三年生の冬です。

解剖の実習も始まって、ホルマリン槽から引き揚げられた献体が解剖台の上には何十体もあります。ホルマリンの異臭と、死体を解剖させてもらうという一種独特な雰囲気をかもしている解剖室では、誰れ一人としてニコリともせず、黙々と解剖書と見比べながら日本語とラテン語を口ずさみ、目を細めたり開いたりしながら心に刻んでいます。細身で長身の通称「ガイ骨」先生が、今日はまた刈り上げの跡も生々しく、「この血管は」と尋ねられると「ハイ、〇〇です」とラテン語です。肥満にでも当たるものなら、もうそれはそれは大変でした。脂肪で「ギタギタ」になるとメスが全く切れないので、私の先の方の肥満担当者は実習が終るまで嘆いていました。そして、「もう、その内に研師にでもなろうか」、と。

私はそれをいやと言うほど承知していたハズなのに、三十歳後半から八十七キロで、祭で写したハッピー姿の私は、もう小型おすもうさんでした。お相撲さんと言えば、私のやっていたミニクラブやスナックにも時季になると何人も来ていて、ママが紹介して曰く「オーナーのドクターです」って。眼医者、芸者、歯医者は三者と言ったそうですが、一族には皆います。芸者も役者もいて、父の命日なんかでみんなが揃うと、いつの間にか始まります。その時の私の「出しもの」は「赤城の子守唄」のシバオケ（カラオケのように芝居のセリフやフリを練習するテープ）で、それぞれの出しものが始まると、仏壇の近くの母のダンスから衣装をそれぞれに引っ張り出して来るものですから、母も後で仕舞うのが大変だったことでしょう。

死後の世界のこと

ところで、仏壇なんですがね。私達が死んだら多くの人がお墓や仏壇に住むのだと信じているし、また、そのように教えられてきました。私達が死んでも、この世に執着もなく、つまり、残した妻や子供のこと、残した財産等に心を残さない人（執われのない人・悟った人）は、一時間もしない内に次元の違う「あの世」へ帰って行くし、心のきれいな人は死ぬ頃になると向うから迎えに来ます。私達は輪廻転生（色んな国に生まれ変わり死に変わる事・グルグル回る循環の法）する生命ですから、かって、生まれていた当時の、外国人の鼻の高いのやら背の高いスッキリした「魂の先祖」が迎えに来るとビックリすると思いますので、その時は日本の「肉体先祖」が迎えに来て、色いろ教えながら連れて行ってくれます。

二十一日間のこと

我々一般人はどうかと言いますと、死んでから二十一日間は、肉体から離れた靈魂は自分の家の辺りや家の棟にいることは出来ます。最大日数が二十一日間です。二十一日間を過ぎると、どんなにこの地上に執着を持ってしようと、皆あの世の収容所へ行かなければなりません。そして、あの世の入口で次のように尋ねられます。「あなたは死ぬ覚悟ができていますか」「死に対する心の用意がありますか」、と。そして、自分が生きていた頃のことをパノラマ映画のように見せられ反省し、考え方を修正します。もし、間違っただけで思想や宗教を勉強した人は、そこでじっくりと反省させられます。今まで正しいと信じて来たのに根底から修正しなきゃならないのですから大変です。だから、間違っただけを説いた宗教家や思想家は、皆を狂わせたという責任を取って暗黒の最も厳しい地獄の世界に定住するのです。そりゃ当然でしょう、間違っただけを教えて多くの人の心を誤らせるんですから責任は重大です。私だって、間違っただけを述べて迷わせてしまったら、地獄は当然でそれも仕方ありません。私は心からもう二度としないと反省をして、この世でしたことはこの世で反省を済ませ、償うものは償ってあの世に戻り、そして次の誕生に備えたいのです。

四十九日のこと

生前の状態を映画のように見せられ、「一生の中で人に見せられるような何かをしてきましたか、これはいいことをしたと満足できる何かをやって来ましたか」、と尋ねられます。そして、その後の二十八日間に死者の生前の魂（意識、心）の状態によって、天上界（明るい世界）へ行くか地獄界（暗い世界）へ行くか決まります。私達が四十九日と言うのは、先の二十一日間とこの二十八日間の合計というわけです。縁者や後に残された人は四十九日間はじっと、そっとしていることです。

死後のモメごと

ところが、その間に一族や縁者が財産争いをしたり、気掛かりになることでもめたりすると、死んだ人の霊がゆ

さぶられ、一度はあの世の定住地に行っているにも、再び執着を持った場に引き戻され、自縛霊・執着霊となって生きている人々に色々問題を起こす困った霊になります。ご存知でしょう、テレビや本でも沢山取り挙げられていますから、如何に多いかと言うことです。これも「類は友を呼ぶ」の法則であり、たとえそこにどんな霊がいようとも、神理を知り調和された心安らかな人には問題は絶対に起りません。問題のあった人は生き方を思いきって変え、自己改革すれば何も霊的なことだからといって怖がる事はありません。だから無知で悩むより高橋先生や園頭先生の本を読んで、原則が分かると応用は自づからできるので悩むより先づ勉強です。

日蓮のこと

先に、「生前の魂の状態によって天上界に行くか地獄界に行くか決まる」と述べました。それではどんな人が地獄で、どのような心の方が天上界へ行くか話す前にもう少し述べます。地獄界。誰れだって地獄の世界へ行きたいという人はいないと思います。ところがそんな立派な人がいました。よくご存知の日蓮さん、高橋先生は次のように講演されています。「日本で有名な坊さんで、菩薩界へ行っている人は少ないですね。日蓮さんもね。永いこと自分から地獄界におった人ですよ。もともと菩薩界なのに菩薩界に入らなかった。自分の蒔いた種が、その後、多くの大衆を狂わしてしまったという責任を負ってね。あの人は、あの世では知らない人はいませんね。あまりにも有名で、謙虚なんです。今の創価学会のやっているようなものではないですよ。心のきれいな人達は、例え貧乏でもりっぱな人がたくさんいる。だから、金額の多寡や地位が人間の値打ちを決めるんじゃないんです。」このように高橋先生は語っておられます。

臨死体験のこと

また、「臨死体験」と言って、九死に一生を得た人が、私は死に臨んでこのような体験をしたという手記や取材集があります。その体験たるや「十人十色」で、それぞれに違います。それぞれに正しい臨死体験に違いありませんが、なぜこうも違うのかというと、それは各人に魂の段階があるからです。臨死体験をした人それぞれに魂の段階、人間性の段階、霊格があり、見てくるところが違うからです。ここが、あの世とこの世の違うところです。この世はどんなところでも見ようと思えば見て来れます。あの世はそうはいきません。低段階の人は、上の段階を絶対に見れない仕組みだからです。光の量の区域が厳然としてあるからです。予告しましたように、天国行きか地獄行きかの魂の段階、人間性の段階の目安を述べてみましょう。如来とか菩薩とかいう言葉を聞いたことがあると思います。これは元来、仏教的な心の広さを言ったもので、ここで言う「光の量の区域」を言っています。



上の方から（１）如来界（金剛界）、（２）菩薩界、（３）神界、（４）霊界、（５）幽界となります。この五つが天上界（明るい世界）に属する段階です。生前、汚く醜く生きた人が、金があるからと言って立派な墓を建てようと、いかに立派な戒名をつけてもらおうと、心を入れ換えて心をきれいにしない限り地獄は地獄なんです。たとえ、首相経験者であっても何人も地獄にいます、と高橋先生は実名も挙げておられます。地位、名誉、財産の多寡ではなく、愛とか思い遣りとか慈悲の多少が尺度です。

天国行きは五段階の切符と申しました。この段階は心の大きさ、心の広さを言うのですから段階は無数にあります。大きく分かり易く五段階に高橋先生は分類して教えて下さいました。最上段階の如来界とか菩薩界の人は、現在の地球上では僅かですから省略して、私達に最も関係の深い中、下段階の「光の量の区域」を取り上げて見ましょう。一人でも多くの人間が、心をきれいにして上段階へ向って努力しなければなりません。残念ながら現在は神を頂点としたピラミッド型で底辺の人が多いいのです。でも、何百年かしますと、菩薩界の人達が地球人口を占め、それこそ地上天国がつくられて行くとは高橋先生の予告です。右を向いても左を見ても、心美しき思い遣りのある心優しい人達ばかり、考えただけでも嬉しくなります。しかし、そこまで到達するには我々人類はこれから色々な苦難の道を通るようです。しかしながらそれも原因と結果ですから仕方ありません。自分達で作り出したものは自分達で摘み取る、これは神理、法則です。それでは、心の広さと人間性の段階を要約しましょう。

< 天上界の諸相 >

「如来界、菩薩界」

愛と慈悲の心だけの人で、人類を正しく導く人。

「神界」

人から損害を与えられても人を非難しない人達の世界で、あの世とこの世を通して一億数千万人。

「霊界」

与えたものが返ってこないと気持がスッキリしない人達の世界で、人類の三分の一。

「幽界」

自分さえ良ければ、人はどうでもというエゴの世界で、人類の大半。

< 地獄界の諸相 >

「修羅界」

平気で人を陥れ、人を争わせて興白がる人の世界。

「餓鬼界」

金銭欲が強く、欲望の塊りみたいな人達の世界。

「畜生界」

ねちねちと執念深く、性欲に狂う人達の世界。

「煉獄」

狂思想家、狂宗教家

「無間地獄」

戦争の計画者、間違った教えを説く宗教家達の行く世界。ヒトラー、スターリン等

「魔王」

初期の七大天使の一人、ルシュフェルは天上界に帰ることなく地獄の帝王になった

皆さんは、どの界に当るとおられますか。人間の価値は、その人から地位、名誉、学歴、財産を差引いたものです。サア、あなたには何が残りますか？

A rectangular button with a blue border and a light brown background, containing the word "Home" in a white, serif font.

学生時代の間借りや下宿生活のこと

大学に入学してからは間借り、下宿、アパートを点々と替り、六年間で平均すると半年に一回の割合になり、十一軒です。入学した当初は八帖一間の間借りです。二軒目は車庫の上の友人の結婚のキッカケになった間借りです。予定より半日早く帰り着くと、友人はいるはずなのにノックをしてもドアは開かずあわてている様子です。今は幸せな奥さんになっている彼女も一緒に、どうも、お取り込中のような様子でした。そして、大学生活も少し慣れて、コンパだ、スナックだと酒量も多くなって行きます。足繁く通ったスナックの一人をこの部屋へ案内すると、何度目かの夜、火事のサイレンに二人は目を覚まします。四つの子がいるというその人は、今までは何んの感動も示しませんでしたが、サイレンの鳴ったそれからは、私の狭い部屋からもサイレンが鳴り渡りビックリしました。三つ目は、未亡人の下宿で、スクーターを持っていた大学二年生です。

一週間に八回、スクーターを利用しての家庭教師でした。日曜日は二回の掛け持ちです。土曜日の今夜は下宿から三十分の所です。謝礼も頂いてフトコロも暖かく、友人がバイトのスナックへ向います。店が引けると酔い冷ましに、ホステスさんとオールナイトの「寅さん」です。それから、スクーターで「ドッ、ドッ、ドッ」と下宿棟です。年上のその人は、ここではイヤと言いながら私を万年布団に押し倒します。次の週はその人のアパートでした。なぜか水屋のガラスが鳴り始めると、隣室に気がねして二人でテープを貼ったり紙切れをはさむ作業が続きました。数カ月後、当然の帰結として妊娠です。怖くなった私はその人から逃げ出します。一年後にそれぞれはタクシーでした。私は一人、その人は中年の男性と二人です。突然、私のタクシーに乗り込んで来ると急いで車を出すように命じます。タクシーに一人残されたドクターらしき人は、いまいましそうに私達を見送ります。着いた所は出始めの「マンション」の名を冠した居宅です。最初の部屋よりはずっと豪華で、それから暫くは下宿とその人のマンションを半々に過ごしました。そんな或る日、二人で車とフェリーを利用して遠行します。観光バスの中では東京の私大を卒業直前の一人の女性と知り合います。失恋旅行だと言うその人には「連れ女性の女性は親戚の女性」と、嘘をつきます。下宿に帰るとその人から連絡が来ていました。

それは冬休みも始まる直前だったので近くの観光地を案内した後、ユースホテルをキャンセルして一緒に投宿します。私は医学書、その人は図案と文言を考えています。その人はコピーライターを目指しているらしく、その日は何事も起こらず、翌朝になると私は実家へ、その人は先へ旅立ちました。実家には、訪ねた街並のスケッチを必ず添えたハガキが毎日届きます。何日かして近くに来ているという連絡に、両親の許可を貰って実家にも泊めます。勿論、厳格な家庭ですから部屋は別々です。学生という気安さも手伝って家族も歓迎します。次の訪問地へ発つ日に、その人が言うには、お医者様のように優しくいたわりながらだったそうです。旅行中、毎日ハガキが届きます。その人は私より一つ年上だったものですから、私も同じ年と嘘をついた手前、その内に音信不通になりました。なぜかという、卒業後はこちらで働きたいという申し出に私が逃げ出したからです。

それからのことです。

四年生の時、東京へ遊びに行き連絡をとると、その人はもうすっかり社会人で、感じの良い店に案内されます。酒を飲みながらこれまでの恨みつらみを流暢な英語で語り続け、私は相づちは打っていても何を喋っている

のかチンブンカンブンでした。三年後、東京のその人の近くに住むことにはなっても、電話番号を失くしていたために何も連絡が取れずにそれっきりでした。

彼女より一年前の、冬休み直前のことです。

その頃、学生会主催のダンスパーティが盛んでした。今ならさしづめディスコ大会でしょうか。ダンスパーティでは、友人の恋人が私に友達を紹介します。お互いにあと数日で冬休み帰省。実家へ帰った私は家の車を利用してその人を訪ねます。生まれて初めての女性とのおつき合いに、紳士然として後部ドアを開けました。高原のハイウェイは運転席と後部座席との会話です。三時間も経ってから、「助手席に行ってもかまいませんか」との申し出に二つ返事です。それからしばらくして、高原ハイウェイの途中で車が故障をします。一着きりの背広も脱ぎ捨てて、そこを調べて見てもウンともスンとも動きません。師走の風は冷たくてそのうちに雪も降り始めます。エンジンが廻らないのですから暖房も効きません。コートを着込んだ二人は後部座席に肩を寄せ合うようにして通行する車を待ちました。山の中のこととて電話もなく、二人は家に連絡も出来ません。後で分かるのですが、雪の為に道路が閉鎖されて車一台来るはずもありませんでした。寒くて寒くて凍死なのかという不安も去来して、話続け肩を寄せ合う内には、それまでに経験したことの無い気分に二人はしっかりと抱き合いました。陽光がまぶしく照り始める頃には交通も解除され、通りかかったダンプに麓の修理工場へ牽引してもらいます。

大晦日のこと。

今日は修理が上がる日です。近くに良い湯があると、その人の勧めで休息をすると、なるほど、肌がスベスベします。私も少しは真面目で何も起こりませんでした。実家へ帰りついたのは紅白歌合戦も中盤でした。



同棲生活

冬休みも終り大学へ戻ると、その人は大雪で交通のストップした中を、十キロも歩いて私の下宿を訪ねて来ました。ここではいやと言われるので、雪の中をホテルへ向かいます。三ヶ月のお付き合いの後、その人は卒業して実家へ帰ります。遠く離れた二人はときどき逢瀬を楽しみました。当然の帰結として、その秋には妊娠の告白を受けます。私は前に責任も取らずに逃げ出したこともあったので、今度こそ「キチン」としようと考えます。麻酔の覚めやらぬ顔で手術室から出て来ると、私が用意をした新居へ向かいます。

新生活が始まり、その内に進級テストもありました。二科目落してもプライドばかり高い私は、何に喰わぬ顔をして「全てパス」でした。追試の時はパスと言った手前、部屋で勉強することも出来ず、教室や図書室で勉強を済ませて帰りました。それから共同生活は六カ月ほど続きます。親に内緒の同棲生活は何かしら居心地が悪く、その後の暫くは別々の間借り生活をしていました。そして、十カ月程の関係が破局を迎えた最後の夜です。我慢に我慢を重ねていたその人は堰をきったように、私への恨みつらみを述べ、重荷が取れスッキリしたという顔で、数日後、お父さんと一緒にトラックに荷物を積んで去って行きました。

娘もいる私は、この時のことを思い出すと胸が張り裂けそうです。両親に対しては同棲生活のことは隠し通しましたが、このような人がいて、好きなこと、結婚も考えたいという想いを伝えてはいました。でも、当然のことながら学生の言うことに真剣には考えてはいなかったと思います。その頃から両親は私に、お嫁さんは親が見つかる、勝手に連れて来てもらっても許さないと何度も聞かされて来ました。その頃、兄が大恋愛をして親の意には添わなかったようで、特に私には厳しかったと思います。私は両親に対して「いい子」でありたいと振舞う反面、何人もの女性達には何んと冷たい非道の二面性を持った人間だったでしょう。

小学校六年生の頃まで照れながらも母の「オッパイを少し飲ませて」と言う程の甘えん坊で、末っ子の母は小さ

い頃に両親を失くすという環境から特に末っ子の私を大事にしてくれたように思います。そのことが私の精神上的の自己確立を程遠くさせ、人間的な一人立ちをも遅れさせてしまったのかもしれませんが。肉体的にも立派で、役を仰せつかって人の上に立ったりするものですから、両親は私の真の人間性を見損なっていたように思います。その人は、その後も思い出したように私の許を訪ねられることもあったので、それを両親に話すと、四年生の秋には両親の命で遠戚に間借りをさせられます。それから、母はその人に会い破談の通告をします。すると、事前に私から知らせを受けていたその人は、悪びれずに母の言うことを聞かれたようで、それを最後に二度と会うことはありませんでした。そのことを聞かされた私は泣き明かし、優柔不断な私の人間性を考えると、どのような責めを受けても当然と思います。

再び恋愛

それから少しは慎重になって、半年後には、一つ年上の会社秘書と恋愛をします。卒業するまでの一年半のお付き合いでしたが、昔がたきの両親は秘書という職業に違和感を覚えるらしいのです。お付き合いが始まって数ヶ月が経った頃、私の楽団のコンサートがありました。司会も終え「どうでしたか」と近づいて行くと様子がへんです。聞きただと、前にお付き合いしていた彼から私とのことで罵倒されたと正直に告白されます。虫の収まらぬ私は大学の先輩である彼に誤り、その足でその人を訪ね、一言の挨拶とともに、それまでに貰ったプレゼントを突き返し、お付き合いの解消を申し渡しました。すると彼女は翌朝早くから私を訪ねて来ました。それをいいことに丁度この日は彼女が留守の豪華なマンションへ案内するのです。

不思議そうに部屋を見回していましたが、気がつかぬハズはありません。それから一ヶ月も経った頃、その部屋にいと、聞き覚えのある声が玄関にします。「いえ、おみえになっていません」「でも、お靴が」、私はベッドの中で小さくなっていました。それからは、いつものようにお付き合いも戻ります。

一年も経った頃のある日、両親に紹介をするために実家へ案内します。厳格な家庭であること、などをコマコマと言いつけるものですから、余計に緊張されたのでしょうか。車の中の食べ物を片付け忘れたのです。型通りのもてなしも終えて帰ろうとすると、母は私を別室に呼び、整理整頓を指摘しました。青ざめた私は、帰りの道中いつまでもなじり続けました。それからは、その人に対して両親の風当たりが余計に強くなります。卒業後に行われる国家試験も、半年に近づいた頃です。

国家試験対策

国家試験対策のために情報収集のアジトが設けられました。学生会の会長も務めた私はそこに住むこととなります。プライバシーが侵害されるからと誰も引き受け手が無いのです。いわば、全国からの情報の電話番でした。各県の大学が持ち回りの会議では、さしずめスパイ映画でした。それらしい人に後をつけられたと言うのがいて、在りもしない盗聴マイクを家捜(やさがし)したあげく、筆談から、別の会場へ移動です。担当が経費がかさむとボヤいていました。やっている事がそうですから皆、後ろめたいのです。私大が担当のときは懇親会も二次会もハデで、ずいぶん楽しい思い出もありました。私が開業してからは、九軒の夜の商売も体験しますが、私の心の傾向性にはピッタリでした。その中の炉端焼き店では、オミヤゲ用に仕入れたハズの「海ほうずき」は、コンブに赤唐辛子の、三杯酢の付け出しとして出される寸前だったり、魚市場のセリ帽子も借り受けて直接仕入れもしました。トコ箱で跳ねていた原価二百八十円のカレイが三百円の焼き魚で提供されたり、いつも大入り満員なのに採算が合わないと言う不思議な店でした。ミニクラブの外装には半分に切断加工されたベンツが配置されたり、インテリアの本からいま抜け出してきたようなハイカラさんばかりでした。

話は戻りますが、国試対策ではこんな事もありました。借り受けた盗聴用の隠しマイクも身につけて、出題担当教官への家庭訪問です。外には受信機をつけた車も待機しています。先生はアーとかウーとかおっしゃるばかりで、肝腎な話にはなりません。そんな或る日、他にも応用してみようと考えます。ホテルのベッドの傍にはマイク、少し離れて受信機が隠されました。相手の女性には内緒です。巻きもどしてみると、アーとかウーとかおっしゃるばかりか、バスルームから締め忘れた蛇口の湯音も響き渡っていました。

また、脳卒中後のリハビリ病棟では、ジャージャー水を垂れ流してヒゲを剃るものですから、看護婦さんに叱られ恐縮するのです。それから、後遺症で口もきけぬ三十代の隣室の男性は、深夜になると好きな歌を廊下にも響き渡る声で正確に歌うのです。初めはビックリして何度も私は跳ね起きますが、担当の先生方も首をひねるばかりでした。この世には不思議はありません。必ず理由があります。これは憑依現象です。悪霊はウシミツ時に徘徊します。非常識な時間でも起こして声も出ない人に平気で歌わせたのです。同室の、自分のことを原因不明の筋萎縮症と言う三十少し前の男性は、ひとりでは食事もトイレもできないわがまま一杯の青年でした。雄弁な彼に聞いてみると、建設業のお父さんがブルドーザーの下敷きになって死んでから始まったというのです。お父さ

んの憑依かもしれません。私が所属した青年会議所の理事長経験者は、その頃、一メートル余りの足場から落ちて亡くなりました。地場では大きな企業の跡取りでしたが、代々の金持ちで、先祖の中には死んだことも悟らぬ、執着霊がいたのでしょう。普通は軽いケガですむ高さです。また、高橋先生は、通行人がビルから落ちてきた物に当たって亡くなった例を挙げて、「どうしてこんなことが、信じられない」という場合は憑依です、と講演で述べておられます。その場所を、その時間に、その人が通らなければ事故は起こり得ないからです。

またこんな例もあります。腹痛でトイレに駆け込み、ジダンダ踏んで電車を見送ると、その電車は先では事故で何人も亡くなります。これは言葉は悪いですが護られた方の憑依現象です。青函連絡船に乗る前に、オミヤゲも買って、ベンチでついウトウトとしていたら、間に合わずに助かった。このように良い方もいくらでもあります。

高橋先生は、戦時中、船が撃沈され海を漂う中を米軍の機銃掃射を受けられても、イルカが寄ってきて守ります。

また、園頭先生は、戦時中、一通の帰還命令電報で助かります。その島では後に全員玉砕をするのですから。このように、よい方も、悪い方も常識では考えられないという場合は、あの世の霊の協力、悪い方は霊の仕業（しわざ）とお考え下さい。まさかと思われるでしょうが、飲み助がいつも赤提灯の方へ足が向くのも、憑依霊が引っ張って連れていくのです。勿論、当の本人が、憑いている霊と同類に他なりません。飲むとひとが変わる、青ざめて目がすわる等、極端な場合です。何でもかんでも憑依現象の所為（せい）と考えるのもいけません、目に余るときは、そう考えてよさそうです。

元へ戻ります

国家試験対策の結末はこうでした。前日には、全員旅館に同宿待機です。アジトには最後の定時連絡がはいりました。急いで受話器を取ると、「山をかける出題は1題もありません。健闘を祈ります」ガーン。皆から対策費も集めてこのザマです。連絡を入れると、それからは各人が遅くまで本を広げたことは言うまでもありません。これは今をさかのぼる三十数年前のことでした

国試の半年も前のことです。

アジトに引っ越した矢先のことでした。そのビルには完成と同時に引っ越します。入居者第一号として住み着くと、三才ほどの女の子が二人、チャイムを鳴らすのです。仲良し二人は、しばらく遊んで帰ると、数日後には一人の子の妙麗のお母さんが挨拶に見えます。「なぜか幸せが来そうという予感で、ビルの完成を心待ちにしました」と、顔を赤らめるその人はうつむき加減に話しました。その人の主人が勤める会社の社長夫人は、寝たきりの社長と家族も捨てて、その人の主人と駆け落ちしたというのです。主人とは親子ほどの年齢の差に、先では奥様が可哀相と、相手を思い遣る言葉も忘れませんでした。ただ一通の手紙から生きる望みも消え失せて、かわいい我が子を道ずれに、いっそのこと命を絶とうとします。思い出の場所が、真っ暗闇の中にスポットされたように浮かび、そこへの道が1条の光跡となって続いたというのです。無心に眠る我が子を起こして家を出ようとしたとき、ドンドン「早く開けなさい、早く」、何とはなき胸騒ぎに、駆けつけた里の家族でした。それから、空気の抜けた風船のような毎日の中で、相手不在の離婚が認められます。社長一家はというと、現金や貴金属の大半を持ち出されると、適齢期の二人の娘さんは故郷を離れ家族は四散したというのです。こうして、気分転換に外に出て働くようになった頃に私と知り合います。



その人は、大きな鉄工所に生まれます。戦後は少し停滞しますが、それから起こる朝鮮特需に家運は日の出の勢い。乳母日傘（おんばひがさ）に、接待は広い台所に板さんを入れて、シャミのお姐さん。アルバムには往時の華やかさがしのばれます。主人とは、友人の見舞いに行った病院で急性の盲腸炎を起こして緊急入院、そこで入院患者の主人と知り合います。お付き合いが始まり求婚。両親は猛烈に反対をします。その中でのお父さんの工作機械での事故死。長女に貰った婿養子は、トランク一杯の勲章を眺めるばかりの傷痍軍人上がりで、家業を継

ぐ能力はない。そして、惜しまれての華燭の典。それから手放す一方の資産に、主人は、こんな事にならなければ左ウチワだったのに、という痛恨の言葉を口に始めます。また、その人のお父さんにまつわる話として、こんなことがあります。その人のお父さんが亡くなると、四十九日もすまぬうちに、人もうらやむ兄弟仲の、広く事業を営む弟が急死。その後では、デッチ奉公のように働いていた孫婿が、仕事場で脊髄損傷の半身不随の事故が起こります。どうしてこんな事が起こるのか園頭先生の記述要約から参考にしてください。

「1983年、実業家の兄弟が次々に亡くなった例」

東京のステーションパーラーを皮切りに、ロス、カナダと次々に店を展開して、年中、日本とアメリカを往復していた人がいた。危機管理と危険防止のために別々の飛行機なのが、今度に限っては奥さんと同伴した。日本に四時間というところで気分が悪くなった。動脈瘤破裂ということで緊急入院手術。一命は取りとめたが亡くなった。葬儀の準備中に次の弟が同じ症状で亡くなった。二つ葬式を出さなければという告別の日にその次の弟が同じ症状で倒れた。そこに居合わせたMさんに、倒れた人の奥さんが「助けてください」と、手を握られた。とっさに、懐に入れていた『心行』を手渡し、一緒に読み始めた。『心行』は、Mさんの娘さんが「亡くなった人に読んで聞かせたら良いと持たせたものだったが、そのうちに病人がムックリ起き上がり一番大きい声で一緒に読んだというのである。元気になったその人が言うには、夢うつつに現れた死んだ兄さんが、お前は来ないでよいと追い返されたということだった。

園頭先生は次のように述べられる。「なぜ次々に死ぬという現象が起きるかといいますが、一番最初に亡くなった人が死ぬという心の準備がなく突然、死を向かえて、しかも金や物質に非常に執着しているためにこの地上から離れたくないと助けを求めてしがみついてくるのです。自分の身内に頼る人がいないと自分が一番心を許していた友人にしがみついてきます。これは丁度、水に溺れた人を助けるのと同じで、助ける人が、その人を救う力があれば救助できますが、助ける力がないと、しがみつかれて一緒に死んでしまうのと同じで、頼られた人が心がしっかりしていると死ぬこともなく、またしがみついてきた霊を救うことができますが、執着の心が強く、心が弱いと引きずり込まれて死ぬということになります。葬式の帰りに死ぬということもそういうことです。「心行」は宇宙の神理と、人間は霊であって肉体ではないから、自分の肉体にも、また一切の金や物に執着してはならないことも書いてあるのですから、「心行」を読んで聞かせると、「そうか」ということがわかって、しがみつくのをやめる。それで三番目の弟さんは「お前は帰れ」といわれて助かられたわけです。」と。

元に戻ります。

この、出戻りで三つの子の人との交際が知れると、秘書の人は相手の家を訪ね、別れるように懇願されます。このとき私には女性が他に三人いました。おつき合いが、五年、一年半、八ヶ月です。でも、火のついた油は火勢を増してとどまることを知りません。両親の反対をいいことに、国家試験が終わると夜逃げするように部屋を引っ越し皆さんから逃げ去りました。

Home

それは平成のお正月のことでした。

その頃、園頭広周先生の主宰されていた国際正法協会の「新年禅定会」という集まりがありました。会場に隣接した控えの間に園頭先生がいらして、ご挨拶を済ませて暫く先生のお相手をする為に側に坐っていました。先程までは家内が上手にお話の相手をしていたのに、私は、もぞもぞしたりタメ息をつきながら心の中では、「自分をつくろうから構えるのかな」と、自問自答しています。ついには、「実は、私には...の女性がいまして...二十数年なんです。」と、先生にご挨拶に来られる人があると中断しながら、かい摘んで話しますと、じっと私の話をお聞きになっていた先生は一言、「時間をかけるものは掛けないとね」と短くおっしゃいました。そこで係が呼びに来て、私の挨拶に続き先生の講話が始まりました。後半になると先生は私への回答を諄々とお説きになりました。私は頭を下げたまま上げることが出来ません。私達夫婦の不仲の原因は私の女性問題であり、支部長要請の時、こんなに夫婦が不調和で女性問題も引きずっている者が引き受けてはいけない、また、なれる筈もない

と考へ、健康上の問題も含めてお断りしていました。



暮れの、先生の金婚式の会場でも司会が、夫婦で出席の私達にインタビューをすると、「奥様は...」、「ハイ、明るいところです」。家内に対して、「支部長は...」、「ハイ、情が深いところです」と答えました。家内の言葉は、私の女性問題を意味していました。会も引け、夫婦は師走の喧騒と寒空の中を、「言い過ぎたでしょうか」、「いいやそんなことはない」と、そのようなことを話しながら歩いて行きました。その人とは、もうかれこれ三十年です。大学卒業の直前に知り合い、三つの子を抱えて実家に帰って来ると、私が引っ越すことになっていたビルの出来上る様子を眺めながら、何か良いことが有りそうだと何度も思ったそうです。私は完成と同時に入居者第一号としてそのビルに引っ越して行きます。こうして知り合ったその人は、これまで影のように私と共に歩いて来られ、私が二度目に脳出血で倒れた四ヶ月目にはその時、三つだつた一人娘も嫁いで行きました。リハビリ中の私は式場の傍らから身を隠すように涙を流しながら見ていました。私が結婚してからの二十数年間は、二つの家庭を行ったり来たりの生活であり、毎年二つのお正月が私にはありました。その人の身が立つようにと始めた夜の商売も、気がついた時には両手の指で数えるような状態で、純日本調で和服の似合うその人は、お店に出ても置き去りにされた我が子を思っては涙するような人でした。そのためか私との関係が続いても子供は素直に育ち、四年制大学からお勤めを経て結婚生活へ入って行ったのです。

私の方とは言えば、子供の非行のために相手に土下座をして謝るということも起こります。「子供は親の言う通りにはしないが、親のした通りにする」とは正に至言です。そして、ついには三歳の可愛い我が子が四階の窓から落ちるということも起こりました。軽い捻挫とは言うものの正に夫婦不調和の極みです。それでも私は夫婦不仲・不和の原因を元から断つことさえしませんでした。或る日、その人のお見合い話をキッカケに三ヶ月の間、足を向けないようにします。喧嘩別れでもないのですからその気になれば何喰わぬ顔をして訪ねることは出来ても、それもしませんでした。また、その人にも生活があるので仕送りは同じようにしました。恥ずかしい話ながら暴君の私は家内に仕送りもさせていました。ある時、秋の国際正法協会の会議に家内を連れて行こうと誘うと、皆さんと同室はいやだとか申しました。心の中で反発を覚える家内の気持ちとしては当然のことで、今に思うと、主人が正法を一生懸命にやっている人に限って奥様がソッポを向いているというのは夫婦の不調和であり、正法だ正法だと言いながら不仲の原因を取ろうとしない、実行の出来ない人だと私も含めて思い当たるのです。

それからブツツと来た私は、何ヶ月も足を向けなかったその人を訪ねてみると、私のいない間には六十余歳の医家との縁談もあり、「何度もデートはするのですがドライブ中、ド演歌を鳴らし続ける彼が...。価値感の違いでしょうか。金とか財産とか言っても二の足を踏みます」と言うその人は、二つ返事で一緒に発つこととなります。高野山から吉野山、旧婚旅行のように楽しく、数カ月の別れとは言うものの、逢えばほんの一瞬で元の通りです。会議も終えて家に帰り着くと、駅頭には鬼のような顔をした家内と、ニラミつける子供達の顔がありました。私の母も「別れてくれなければ死んでも死にきれません」と涙です。姉から意見されても、私は鬼のような顔をして、「惜しくなりました。別れるのは止めです。しばらく頑張りましたが駄目な者は駄目なんです」と言い放つ私の側で家内も涙します。母達はこれまでの、いつものように呆れた様子で「好きにきなさい」と言い残して帰って行きました。

こうして、また、毎日二つの家庭です。それから六年の間に二度の別れをします。別れても劇的な再会の繰り返して、その間には娘も出戻ります。また、七十過ぎの大学経営者とおつきあいがあっても、「乞われてもガンの手術歴のことを考えると、看病に行くようなもで二の足を踏みます」と言います。何度かそうする内に、私の半生を共に歩いて来たその人へは、墮胎という何の思い遣りもなく悲しい思いだけをさせて来たこと。また、私のいない間の縁談は、これまでに潰して来たかも知れない私の責任。そして、成人を過ぎた私の子供も、面と向かって「人の道に外れてもそれでいいのですか。正法、正法と言う人が」と意見もし、仕送りのことも突いて来る私の子供たちへの責任。二十数年来の、思い出の一つ一つが走馬灯のように続きます。優柔不断な私は、そ

の人との関係を引きずったまま親の勧めで、お見合いから結婚。と同時に、私の小さなビルも完成、即開業でした。新婚旅行から帰った日もその人を訪ね、年端も行かぬ新妻は出来上がったばかりのビルの中に一人淋しく待ちました。多くの女性達と二人を同時に不幸にしてしまった私の原因と結果は、二度の脳出血による言語障害、運動障害によっても辻褄が合います。私はある日を決して、「有りがとう、二十数年本当にありがとう」、という思いで、一通の手紙をしたため、その人の居宅を振り返り振り返り、涙ながらにヨットン、カットンとした足取りで歩き去りました。

私は、これまでの人生体験を中心にした自らのありかたを綴ってみました。ややもすると、暗くなりがちな私をいつも注意してくれたのは家内でした。心を暗くする反省は本当の反省ではありません。思い出にふけるという一幕もなきにしもあらずで、これまでの、親許にいた中学三年（15才）までの十五年間、親許を離れ下宿生活をした高校一年から予備校、大学、研修医時代までの十三年間、結婚生活の二十数年間、私の人生の原因と結果は、これまで述べた通りです。女性に対しましては、良心のカケラもなく非道なことをしましたことを心よりお詫び申し上げます。すみませんでした。ゴメンナサイ。

それでは、私の脳出血について述べてみたいと思います。第一回目の脳出血後は分院、店舗等の全部から身を引きます。身を持ってあました時間つぶしのために、暫し忘れていたカメラを持ち出して花や植物のスライド写真に情熱を燃やしたり、ワンボックスカーでアウトドア・ライフを楽しみました。アウトドア・ライフは二千ワットの発電機持参のレ・ザ・カラオケ等です。極めつけは、自然派には怒られそうですが電気釜のご飯にホットプレートの焼き肉です。女性問題は相変わらずで、夫婦の口喧嘩も絶えずストレス一杯の毎日に、そんな中での二回目の高血圧性の脳内出血でした。一度目から八年経った秋です。数日前には、今だに風倒木の整理もつかぬ巨大台風が通過して、私の医業の看板がグラグラして今にも落ちそうでした。近年にないすごい惨禍をもたらした台風でしたから、どこも依頼が多くて直に撤去できないと言うので、五、六メートルもある看板を自分で切り倒そうと考えました。

家庭用ガスと酸素を併用したバ・ナ・でも切れず、溶接器のア・クではどうかなと思ってやってみても駄目でした。四ミリ厚の十二センチ角の鉄パイプを、今度はグラインダを買ってきて切り始めると、すごい火花を散らして少しづつ切れます。余り火花が飛ぶものですからもうおっかなびっくりです。看板は四方から綱で引っ張り倒れないように固定もしています。前の日は、衆院選の最後の選挙歩行を終え夜の十時には帰宅しています。お酒は四か月も飲んでいません。その日は日曜日にもかかわらず、朝六時に起きて看板倒しの準備をして、夕方には看板は地面にドシンという音と共に切り倒され、家族と共に大歓声でした。

でも、五分ほど後から様子が少し変でいやな予感が心をよぎります。二度目ですから何となく分かります。自分でもやれるという自信過剰とお金をケチったばかりのこのザマで、おっかなびっくりで火花を散らしながら切断していた時は相当な血圧だったのでしょう。フラつきながら、物伝いに自分の寝室へ行き休みました。嘔吐はしませんでした。何とも言えぬ気分の悪さが始まり時間の経過と共に言語障害と運動マヒが始まるのが何となく感じられます。家内は心配そうに枕元で高橋信次先生がお説きになった『心行』を読んで私に聞かせていると、またまた後悔が始まりました。二度のご褒美なら喜んで受けもしますが、二度の脳卒中など自慢にもなりません。

しばらくして病院へ運ばれます。二十日ほどでリハビリ専門病院へ転院すると、後遺症は運動マヒと言語障害ですから、動くこととお喋りが治療と考えよく動きました。しかし、運動は自分一人でも何とか出来ますが、お喋りは一人では出来ませんから余り言語のリハビリにはならなかったと思います。なぜなら、私には人を見下げる心があるのか、人見知りをするのか入院患者さんとは殆ど親しく話しをしなかったことも理由の一つです。一度目は半年位で職場復帰も果たしますが、二度目はひどくて二年かかりました。

これまでの記述で明らかなように、私の女性問題で夫婦は不調和でした。夫婦の不仲のために家庭は崩壊、次代を担う子供達を悲しませる現象が現代には日常茶飯事のように起こっています。このような場合、どのようにするのか考えてみましょう。園頭広周先生の「考察と指導」を参考にしています。

< 夫と不調和な妻の祈り >

つぎのような順序で祈ります。

一、夫のニコニコしたやさしい顔を心の中にしっかり思い浮かべ、あるいは、夫が自分の眼前に座っているように思い浮かべます。

二、夫に対して心の中で、または、小さな声を出して言います。「あなたは神の子です。わたしも神の子です。あの時はあのようでしたが、しかし、私は心からあなたを愛していることがよくわかりました。わたくしのためにも、子供のためにも、あなたは大事な方であるということが、今よくわかりました。すみませんでした。」と、祈ります。

三、つぎに、夫の相手の女性の人を想念して、次のように祈ります。「私があなたを恨んだことをお許し下さい。本当は私の愛が夫の心を満たしてあげましたら、あなたとの関係も続かなかったのであります。本当は私が仕えなければならないところを、あなたが満たしてやつて下さいまして、ありがとうございます。同じ女性の立場として、今のままではあなた自身も、こういう関係はよくないと考えていられると思います。私も夫の心と離れてみて初めて、私がどんなに夫を愛しているのかよくわかりました。あなたもどうぞ心から幸せになってくださることをお祈りいたします」その女性が本当に幸せになっている状態を心の中にしっかりと想念します。

お互いに、夫もその女性も、それでよいと思っているわけではありません。どちらも後ろめたい心を持っているのですから、こういう関係をこのまま続けていても、どちらも幸せになれないということは、それぞれ二人がよく知っており、そういうことを感じていても、どちらもそれを表面に出さないだけのことで、そのような祈りをすると、それぞれの守護霊・指導霊が心の内面から働きかけて、二人の間に気まざるような状態をつくり出してしまい、やはりこのままではいけないと思うようになるのです。そのような祈りをしてから、夫を赦して、また、自分も十分に反省しているのですから、大きな母の心で夫を受け入れるのです。



私の半生は反省と後悔の暗い人生でした。この項の終わりに真の反省、本当の反省を園頭先生の記述から聞いてみましょう。

「自分の欠点が修正できると、心が広く明るくなり、「やれた」「やった」という魂の充実感を感じて心が安らかになる。心が安らかになると、自然に周囲も明るくなる。周囲の人が変わってくる。こうして、正しい生活は、それまでに修得したよいことを、どしどし積極的に実践して前進して行く中で、自分自身の業の修正を図ってゆくことである。反省ということによって多くの人が間違いを犯しやすいのは、欠点、業の修正にばかり気を取られて、よいことをどしどし実践して前進することを怠ることである。そうすると、反省、反省と、いつも自分の欠点にばかり気を取られて心を暗くしてしまう。「俺はこんなつまらぬ人間だったのか」と悲観的になったりして、その揚げ句に自分で自分に「あいそ」をつかして自殺してしまう人があったりする。八正道という正しい行き方の基準を教えなくて、反省ばかりを強調するような内観道場で、時々自殺者が出たり、ノイロ・ゼになったりする人があるのはそういうわけである。だから反省、反省とって、心が暗くなるようであったら、そういう反省はやめる方がよいのである。

反省をしたら、「よし、やるぞ」という勇気が出てきて、反省したことを積極的に実践して、そうしてその反省したことに打ち克って、人生の勝利者となる、業を修正して乗り越えられたことに対して感謝することができる、という反省をしなければいけないのである。正しい反省は積極的な人生の推進力になるが、間違った反省は、かえって業に執着して人生を暗くしてしまう。「業・(カルマ)」というと、多くの人が悪い業だけを考えてしまう。業には悪い業もあれば、良い業もあるのである。よいことをする習慣性、傾向性もあるのである。だから、良いことはどんどん実践してゆくことである。良いことを実践したときには、心に喜びが感じられてくる。よいことをしないと、生きる喜びが感じられないのであるから、よいことをしないで、生きる喜びの感じら

れないままに、心の喜びが感じられな状態ということは、「気づまり」「なんとはない無力感」「心の虚脱状態」「心のむなしさ」などであるから、そういう心の状態のままに、その上にさらに「反省、反省」といって、自分の業の悪い面だけを見つめるから、自分がいやになるのである。自分はそんなに悪い人間とは思っていなかったが、こんな悪い人間だったのかと、自分で自分に「あいそ」が尽きるということになる。どんな人間も、悪いことばかりの人間という人はいない、だから反省する場合は、自分の良い面（長所）、悪い面（短所）とを書き出してみることである。短所だけを書いてはいけない。そうして自分のよい面（長所）を確認した上で、こうゆうことはいかんなと短所を反省して、「よし、今度はこれをこのようにしてやろう」と反省することである。」

<私のすばらしい良い面（長所）>

1、実行力、意志力

1、素直

1、礼儀正しい

1、人のお世話ができる

Home

北陸一般研修会
平成八年三月一日～三日
金沢・サンピア小松にて
講演収録ビデオより



園頭広周師の講演



志賀島の道場の一周年記念は、二月十二日盛会の内に開かれましたので、ロスのアガシャ教会の人達もしごく満足して、感激して帰られました。十四日、成田でバースタインさん達がロスへ帰られるのを見送って翌日、十五日、私とK先生と、それからAさんのお嬢さんの陽子さんの三人で、まず、デリーへ飛び立ちました。オマーンへはいる方法はデリーへ行って、デリーからオマーンのマスカットへ入るか、又は、日本からバンコックへ飛んでバンコックからパキスタンのカラチを経て、カラチから南の方へオマーンへくだるという二つのコースしかないわけですが、私達はデリーから入る道を選びました。

時間の関係でデリーで一日(いちじつ)余裕がありまして、それでハムスダのシダーンに行きました。仏蹟巡拝を始めてから三回目頃、デリーの博物館をいっぺん見たことがあるんですけども、その時は総勢八十四人で人をマトめるのに苦労してなかなか自分でゆっくり見る余裕がなくて、それで今回ゆっくり見たわけですが、あすこにビフラアーという所から発掘されたお釈迦さんの本当の骨があるんです。大理石の壺に入った、所謂、本当の仏舎利がありまして、第一回目に行った時はその仏舎利がある事は気が付かなかったんです。で、今回初めて仏舎利があるのに気がついて写真に撮って来ました。そうして、シルクロードのトルファンという所から出土した、あのトルファンあたりのウイグル族が、人類の祖先はどうであったかということを図に表したのがありまして、第一回目に行った時にはその写真を撮るのに失敗しましてよく写せなかったのですが、今回ははっきり撮れたようです。

それは、男と女の顔が書いてあって、ここまでは人間の形が書いてある。そこから下の胴体から腰から足の付近になると(身振りで表現されている)ヘビがこうからまっているような形に書いてある。それは、あの付近に住んでいた所謂、ウイグル族が自分達の祖先というものを、どのように考えていたかということを経典に型どって書いたものでありますが、日本の神話は天孫降臨です。日本民族の祖先はどこからこの地上に生まれてきたのだろうと考えてきた時に、それが天から天下(あまくだ)って来た神々の子孫なんだ、とそう考えた。人類発生の歴史を現実にこうこうだと言ってその資料を掘り出して考古学的に証明しようと思ったって出来る話じゃない。

なぜ古い人間に関する記録がないかということ、この地球上は大体七回天災地変を繰り返して陸地が海になり海が陸になりして、してるわけですから、どんなに昔のことを別の資料をもって知ろうと思っても、その証明が出来るわけがないんです。で、それで神話というものが生まれた。それは人類の祖先をそれぞれの民族はどう考えたか、日本は神々が雲を押し分けて日本列島に降りてこられたという神話を持っている、天孫降臨の神話である。ところがそのウイグル族は、シルクロードあたりのウイグル族は、顔は人間だけれども胴体はヘビだ、ヘビがからまり合っているのが人間だっという風に解釈した。イタリーの神話は、平地におったイタリーの人の将軍とアルプスの山奥に住んでいたオオカミとの混血がイタリー民族の祖先だという神話を持っています。だから、どこの国の民族がどのような神話を持っているかということを知ることは、その民族は人類の発生についてどのように考えてきたかということを確認するわけであって、それを証明する材料は現実になくてもいいわけです。ところが終戦後の歴史学は何かそこにそういう証拠がないと、そうとは言えないということで考古学でも一生懸命発掘しているわけですが、或いは発掘して何千年前の物だと言ったってそれが何になるのか、ということなんですよ。人間の心の進歩には何にもならないわけ

ですよ。

オマーンという所は一年にいっぺんも雨の降らない所だったんです。ところが一年前に私がオマーンに行くって計画を立てましたらですね、その頃から時々雨が降って、そうして砂漠に一杯草が生えて、だから私達を案内して下さったS商事の向こうの駐在員の方が昔はここは砂漠だった、こんな草はなかったと言ってビックリしておられましたが、私達の飛行機がマスカットの空港に着陸するその前後から雨が降りました。日本みたいにドシャ降りに降ったわけではないけれども、兎に角、道路が湿って辺りの草も木も緑が映えて鮮やかでした。今後、オマーンはそういうわけで時々雨が降って草木も茂って行くと思います。そうしてそのオマーンに駐在している 石油の さんの三人の子供が通っているアメリカ人の経営する学校がある。その学校もずーつと見てきたんですが、その教科書にはですね日本という項目がありまして、日本の項目の一番最初に出てくるのが、日本は天孫降臨である、アマテラスの神々達が雲を押し開いて天から下ってこられたところの図が一番最初に出てくるんですね。そうして、終戦後の、終戦からこっちの日本の歴史になると、皆さんが教育されてきたように、日本ぐらい悪い国はない、日本は侵略国家であると書いてある。



講演中の園頭師（この項の写真ではない）

Home

ところが、そのアメリカ学校の校長先生は福島県に五年間いらっしゃったことがあるというので、さんの子供に「あなた達はこんなに日本のことを悪くかかれてそれに腹が立たんのか、もっと怒れ」というわけですよ。怒って本当じゃないのか、と。そういうところに何も怒りもしない日本の内地の人達はおかしいのじゃないかといわれる。そして、帰る日の午後、飛行機は夜の十一時出発でしたから、その夕方、石油が協力してつくっている精油所の副所長さんという人とその娘さんで五年間アメリカで勉強して学位を取ってきたという娘さんと会って話をした。それがそのオマーンのその方が日本には宗教がいくつ有るんですかと言われる。それで「大体、宗教法人として認知されたもの、或いは非認知のもの全部含めて大体二十八万あります」と言ったら「そんなに数が沢山あるんですか」と言われてビックリされた。ビックリされたというのは、これは日本人は宗教を知らんという軽蔑の念を含んだビックリだった。

なぜかという、イスラム教・マホメット教は、宇宙創造の唯一神だけを神として信じ、その神の次元であるアラーの神、一神を信じるのですから、そんなにたくさん神、仏があるわけがない。それにイスラム教は偶像を崇拜しません、日本の宗教はみんな偶像を持っております。

だから日本の今までの宗教がイスラム圏に行って話をしようとする場合は絶対に話を受け付けてくれないと思うのです。偶像崇拜をやって、神、仏と言えない神、仏を信仰しているのですからね。それで、キリスト教も偶像を崇拜しません。キリスト教も宇宙の唯一神だけを神として信じます。だから宗教のことについて話しようとするならば、向こうの人達の話し相手になるのは我々だけしかないですよ。だから胸を張って私達こそが本当の正しい信仰をいている者です、ということが言えるわけです。そこまでは言ってきませんでしたけれども、兎に角、向こうにいられる島袋さんがそういうことはよく話をしておられるようでそれ以上深くは話しませんでした。高橋信次先生がおっしゃったように正法によって世界を平和にする、それが神の御心なんだというのであれば正法というものは他の国、他の民族の人達にも信じられるものでなければならぬ。

そういうわけで正法協会の役割というのは非常に大きいものがあるわけです。衣を着た坊さん達やら、或いは、御幣（ごへい）を振る神官さん達やら、或いは、そこらあたりの創価学会やそういう人達が外国へ出掛けて行って、それで何んだかんだと言ってもそれはむしろ間違い扱いにされるだけの話であって、まともに話し相手になってもらえることはない。そういうわけで、だからヤッパリ正法なんだという自信をもって帰ってきました。とにかく昨年二月道場を建設して、あすこに霊の黄金の灯台が立って、そうしてクルクル回転始めた。その霊の灯台が立っているのをロスにいらっしゃったバーンスタインさんが見られて、いっぺん早くこの志賀島の道場を見てみたいと言われるから昨年十一月に招待したわけです。バーンスタインさんはユダヤ人ですから、だからユダヤ人だけが神の選民ではない、人類はみんな神の選民であるということ。それで全世界の財宝はユダヤ人だけのために神が準備して下さったのではないのであって、正法を伝える者のために神は世界の財宝を準備して下さったのであると全部話しまして理解してもらった。

そして今度一周年を迎えることになって日本というものを、そして日本人というものをもっとよく知ってもらいたいと思って、そして、正法協会とロスのアガシャ教会とのつながりをもっと深めたいと思ってこの一周年に招待したわけです。そうしてアンナさんが振り袖を貰って喜んで帰られた。日本の着物っていうのは、体には色々デコボコありますけれども、一枚の布に体全体を包んで美化するのが日本の着物である。外国の洋服っていうのは、手は手、足は足、突っ込んで個々別、バラバラですよ。その民族の服装というものが、その民族がどういう思想を持っているかということ表現しているわけであって、愛っていうのは良いところも悪いところも全部包んでそうして愛していくわけですから、ここは良いけどここは嫌いだというのは愛じゃないですからね。だからキリストの絵を画くときには、全部一枚の布でズン胴で画くわけですよ。それに外国の思想は個々バラバラな統一のない思想であって、建物も外国の建物はここは何の部屋ここは何の部屋とって、一つではなくいくつも部屋を分けて個々バラバラである。日本の昔の家っていうものは障子や襖で仕切ってあってもですよ、必要とあれば障子や襖を全部取っ払えば家は全部一つの部屋になるわけです。



だから、それぞれの建築が西洋化して個々バラバラになったことも日本人の思想をバラバラにしている、ということになるんでありまして日本人はもっと昔から残してきた大事なものを、もういっぺん取り出さなければいかん。この際、皆さんに考えていただきたいことは、教育すればいい人間になると皆んなそう考えている、ところが終戦後五十年間教育してきて日本人は悪くなった。アメリカも没落しかけている。アメリカは自由平等の国で理想の国だというのはあれは嘘なんですよ。実際はアメリカくらい不平等で、不自由で問題の多い国はない、だからあそこにありますように『アメリカに革命が起こる』（本を指差され）。そのアメリカに革命を起こそう、今のアメリカ政府をブチ壊そうとしている人達と連絡をとりたいたいと思ったら、そのキリスト教愛国派の総大将が日本に来るといふんです。それで東京の衆議院会館やらで講演して、二月の十二日には私に会いたいといって志賀島の道場に来て、それで皆さんに話を聞いてもらった。

しかしオマーンの国王は非常に日本びいきです。二十しか無かった学校を二十五年間に千に増やした、教会も二十位しか無かったのを千に増やした。それをオマーンの空港に着陸して、そしてマスカットの街を走り出して私は感心した。チリは一つも落ちてない、空缶も一つも落ちてない実にきれいな道路である。それで向こうに在留している　さんにこれは何か例えば、チリは捨ててはならんチリを捨てた者は罰金を科すとか何とか、そういう法令でも出ているんですかと聞いたら「いやそういう法令は出ていない」と。何十キロ走ろうが、私はね最初はですよ、ホテルに着くぐらいの、ま、十分か三十分ぐらい走るその間だけこんなにきれいになっているのかと思った。それから二日して、温泉が出る所があると言われるから百五十キロ車を飛ばして行った、その間もチリは一つも落ちてない。いい人間だったら日本ももっと、日本の道路はきれいになってなければならない筈ですよ。それがどこへ行ってもゴミがない。そういう、さすがしオマーンに五日間いて、いよいよ日本に帰ることになったら、そんな時の感じはゴミの山にかき分けて着陸するのが、いやな気分になりました。しかも何とかの神、何とかの仏といって偶像を一杯祭ってある、もう、まるで化け物屋敷ですよ。だから私は、正法協会の本部をオマーンに引越さなきゃならんなと思ったくらいです。（笑い）

それで、その帰りにバンコクへ行った。バンコクのエメラルド寺院をいっぺんK先生に見せておこうと思って行ったんですが、ところが空港からエメラルド寺院へ車はスタートした。そうしたら頭は痛くなる吐き気はする、所謂、排気ガスです。排気ガスでもうもうとしている。もうバンコクの上空は十年くらい前の東京の上空と同じ、真っ黒く排気ガスが立ち込めている、それでオマーンの人達は豊かなあの自然で悠々と生活しているのに、バンコクの人達は排気ガスの中でノタうち回って、働いているのも一体それは何になるのか。確かに収入はバンコクの人が多いかも知れんけれども、心の勉強の面においては雲泥の差があるんですよ。これから正法協会は国際的に確実に発展していきます。ロスのバーンスタインさん達一行は二月の七日に成田に着かれて、そうして東京のパレスホテルに泊まれた。明るく日は午後の飛行機で福岡へ行かれる事になっていましたから、午前中の間でも皇居の空気をちょっと吸ってもらいたいというわけで、パレスホテルに泊まっていた。そのパレスホテルにキリスト教愛国派の大思想家であるマリンズさんが泊まっていた、そこへ中丸薫という、ご主人は中丸忠夫といって映画俳優です。その中丸薫という人は明治天皇の落し胤の堀川辰吉郎という人が京都におられて、その人の娘である。

で、外国は家柄というのを尊びますから、明治天皇の血がつながっているというところの国をもフリーパス、個人的に国王でも大統領でもスッと会える。表の方から外交を通じて会うとなると、いろいろな制約があってなかなか会えない。その中丸薫さんはそのオマーンに行っていて、日本へ帰るといふので、ジープを走らせている時に、天から祈れっていう声が聞こえた。それでジープを止めて中丸さんは祈りを始めようとしたら「身につけている金属類を全部はずせ」、それで中丸薫さんは、このネックレスはどこそこの大統領から貰った物である、この指輪はどっかの大統領から貰った物であるという、そういう物を全部地べたに置いて、そうして神に祈られた。祈り終わって見たら、今、祈る前に置いたばかりの金属が全部無くなっていたといふんですよ。それで砂に埋もれたのかも知らんと思って、一生懸命、砂をかき分けて見られてもどこにもない。それでは仕方がないとあきらめて日本に帰ってきて高橋先生の所へ行かれた。それで高橋先生の所へ行かれたら、高橋先生からいきなり「あなたはオマーンでこういう事があったでしょう」と、言われてビックリして、それで高橋先生の弟子になった人、四十九年でした。

それで私が中丸さんに「あなたはどこの国でもツーツで行くけれども、とにかく世界を平和にする

ためにはユダヤのフリーメーソンの問題を解決しないと世界は平和にならないと思うんです、そう言ったら中丸薫さんは顔色を変えて、「先生それはいかんです、先生そう言うと殺されますよ」、そう言われるだろうということは私は承知して言ったんですが、ま、そういう役割はもう少し待とうというんで、正法会（註 国際正法協会の前身）をつくってから五年位は黙っていましたけれども、もう言わなきゃ仕方がないというんで、フリーメーソンの問題を正法誌に書き出した。そうしたら宇野正美さんとか或いは太田竜さんとか、ああいうユダヤ思想の研究家が出てきている言い出した。それで今、アメリカの方でも兎に角、今のアメリカ政府はユダヤのフリーメーソンの政府でアメリカ国民のためになってない、だからアメリカは革命を起こさなければならない、というキリスト教愛国派の人達が出てきた。ところがどうもその、そのキリスト教愛国派のマリンズさん達がアメリカへ帰る時に、太田竜さんは見送りに行かずにどうも中丸薫さんが見送りに行っておられたという話です。昨日、Nさんの奥さんが、中丸薫さんの方からちょっと話したいことがある、で、こっちからも積極的にいろいろなことをなさいと言ったので、永谷さんと中丸薫さんと会われたそのファックスが昨日送ってきた。そしたら中丸薫さんもやはりもうこれ以上フリーメーソンの問題を放っというてはいかんというんでいろいろ研究してあるようです。



で、今度オマーンに行くと言ったらK先生がね、中丸薫さんが無くした金属を探しに行こうと、それは冗談ですけども。こんど行ったときK先生がしきりに、オマーン国の国王と会って下さいと、なぜならオマーンの国王も明日、暗殺されるかも分からない。私達が行く一ヶ月位前にオマーンの国王は大英断をもって、所謂、フリーメーソンのスパイだと思われる人間をずーっと、そういう手下につながる人達を、あの人まで、と思われる人まで全部整理して大改革を行ったということです。それで今日の、石油のさんが中心になってアラビアの石油をメジャー、つまり国際石油資本の手を通さずに直接日本に運んでくるという契約を済んだという話でした。日本がなぜ大東亜戦争を起こしたかと言うと、あれはアメリカのハル國務卿が日本には石油は一滴も売らないと通告してきました。石油が入ってこなければ車は全部動きません、工場の機械も動きません、電力もストップしてしまいます。アメリカが売らんとするのなら、アメリカと言ったってアメリカのユダヤの石油資本である。それをメジャーという。メジャーは全世界の石油を握って日本を、兎に角、首を絞め殺すと言ったら漫然として殺されるのを待っているわけにはいなくなるから、日本はそれじゃ仕方がないといって真珠湾を攻撃し、香港、シンガポールを攻撃して、そしてスマトラのパレンバンの石油を日本の船で輸出する、ということで大東亜戦争は始まった。

だから石油をどうするかということは、これは死活問題である。だからアラビアの石油事情を知りたいという事もあって今度行ったんですが、さんが日本の資本でアラビアの石油を直接日本へ運ぶ計画が、プロジェクトができつつありますと報告されたんですが、それで、『アメリカのカガミ日本』というあの本に書いてありますように、アメリカのユダヤのフリーメーソンの政府は、東洋に日本という、日本民族という、人を見たら食らいついてノドに、のど笛搔き切って血を流すというような恐ろしい殺人国がある、あの日本をそのまま置いとったんじゃ世界は平和にゃならんから、だからあの日本国をやっつけるために兎に角、武器を作らなきゃいかんからと日本人をそういう恐ろしい民族だと言って、嘘を言って、アメリカの国民から税金をとって、その集めた税金で飛行機を作り、戦車を作りしてそうして日本攻撃をやってきたわけです。それで、日本人というのはそんな自分からこんなに戦争するような民族ではない。日本民族は世界で一番優しい民族だっていうことを知ってもらうために、先ず第一回目にロスのアガシャ教会の人達を呼んで、そして我々の会

合に来てもらった。

昨年十一月バーンスタインさんと娘さんのアンナさんが来られて、その時、小田原で研修会中でしたからアンナさんに私は全アメリカの女性を集めて、「女性は、女性であるという役割を果たすことによって男性から尊敬を勝ち得るようなそういう女性にならないといけないんだ」という話をした。そう言ったらですね、殺される覚悟でアメリカへ来てください。女はこうなきゃならん、女はこうしなさいと言ったらですね、アメリカの女は血が上ってパーッと男に飛び掛かっていく、そういう気風だということです。ところが、日本をずーっと廻っている間に女はこうなきゃいかん、そのクライマックスは正法協会。

大分のWさんという、三十二歳位いでしたか、その人が「先生、女の役割が分かりません」って来たんですよ、「どうすれば分かるでしょう」、ああだこうだと文章を長ったらしく書いたって、こら、まじやくに合うこっちゃないと思って、尻はぐって自分の「持ちもの」はどうなっているかカガミを見てみなさいと言ってやった、そして部屋にいたら「先生分かりました」と言って、しおらしくなっていた。

K先生が横から「先生、それは間違っ、ちょっと待ってください」って、それで、そっからK先生と代わって話をし、バーンスタインさんもあんなになって帰られたでしょう。そうしたらね、何年たっても治らなかつたご主人の腰の痛みがいっぺんで治ってしまった。

で、バーンスタインさんは、私のこの「大宇宙大神霊」のこの軸を部屋に掲げたら奇跡が起こって主人の腰痛が治りました、と言われたんですけども、そうじゃない。腰痛の最大原因というのは夫婦の不調和にあるんです。重いものを持ったとか、ということで腰をたがえたのは時間がかかるとすぐ治りますけれども、深い夫婦の心の断絶から起こった腰痛というのはなかなか医者でも治りません。ところがバーンスタインさんが、はんないした優しい心になって帰られたらご主人に奇跡が起きたのです。それから話ははずみまして、兎に角、今アメリカの女性は逆子が多いということです。それで逆子を正常分娩させるには五分あればいい、その秘訣はK先生に聞きなさい、と。それでそのアンナさんはね、今度あの振り袖を着てね、立派な日本の美女になって帰っていかれた。あの人はね自分と同じ年頃の若い女性を十月に集めて、そしてK先生にどうすれば逆子が正常に生まれてくるかという講演をしてもらうのを楽しみにしてられるわけですよ。それが成功したら、だから私はK先生に言っているんですよ「あなたは外国で講演したら次から次ぎに来てくれ来てくれって言って日本に帰る事ができなくなるのだから」、そうなればご主人にどう弁解するかナー、いまから気に病んどるんですよ。(笑い)



先ず、兎に角ね、デリーを出発する朝、私が禅定していて一大発見をした。発見をしたと言っているか、悟ったと言っているか、物心ついた頃から神様は何で、「男の持もの」をここにつくられたのだろうということが疑問だった。七十も八十もなって、やっと分かった。だから、いつまでも、ものの勉強は続けなけりゃいかんですよ。ま、禅定していて地球は青い、というのは宇宙即我でしょう。ところが頭で宇宙即我になりたい宇宙即我になりたいと思って、いくら禅定してみたって、ならんのです。想念は下腹でしなきゃいかんのです。昔から人間をつくることを腹を鍛えよと言っているでしょうが。頭だけ鍛えるのはこれは知的であって、頭だけ鍛えた人間はすぐ頭に血が

上るんですよ。その次はカーツとなってもう自分が何を考えているかわからなくなる。だからひと頃「あいつはトサカにきた」と言ったでしょう。よく言ったもので「トサカにきた」、鶏のトサカは真っ赤でしょうが或いは、自分で怒っという「俺はトサカにきた」なんて、そういう人間はダメです。それは頭だけのでっかちの人間であって、深く物を考える、やはり人間らしい人間というものにはじーっと腹でものを考える。それで、人間は本来、宇宙即我だから宇宙即我を悟ることが出来るんです。無いものを我々は得ることはできないんです。無いものを得ようということ而努力するからなかなか得られない。我々が考えるという事はすでにそれは有ることなんです。その本来我々のうちに有ることを、自覚する、それが修行なんです。

それで、宇宙即我を悟るためには、ただ単に想念するだけではなく、呼吸が整なわなければいけない。それにはせかせか呼吸せずに静かに呼吸をして、そして、胸一杯吸ったら、その呼吸を下腹に残してしばらく息を溜めて、はくでもない吸うでもない息を止めて、それで自分が神に一体であると想念する。そうすると自分が神の命の分身であることが分かってくる。その神と一体である神の命の分身だとわかったところからまっすぐ降りてきて地上に人間として姿を現すのです。アアそうなんだただ単にここにあるのではないんだ神と一体になる想念の隆築物、それが人間の生殖器なんだ。それを女性は受けて、そしていろんな輪廻転生の体験を持っている人間を魂の修行のためにお腹に十月十日（とつきとうか）育てて誕生を見るというわけです。そして女の「おちんこ」の子宮、子の宮というのは、そういうわけなんです。だから人間は皆神の創造物なんです。ところが神は、神の慈悲によって愛によって人間の肉体の輪廻転生によってカルマを解消し、そうして全身、魂を迎えて、いてくださる、その行為に性の快感というものが伴った。

ところが、その魂の顕現という根本的な大事なことの方を忘れてしまって、性の快感だけを目的として、とってしまった。そのために人生が狂ってきたわけですね。人間はもういっぺん新生復活しなきゃいかんのですよ。

私はこれからパチンコ屋を全部ぶち壊してやろうと思うんです。パチンコ産業は十兆円ですか、三十兆円ですか、大企業が手を染めようとしている。今年一月、熊本から長崎へ講演へ行く時、熊本のH支部長さんが車を運転しながら「先生、また私の近所にパチンコ屋が二軒建つんです。熊本県は日本でも有数のパチンコ県で、何で皆パチンコするんですかね」と言うから、「それは、お互いに玉のはじき方が足らんからですね」、そうしたら最初、Hさんはポカーンとして何の事かわからなかった。しばらくしてから、アハハハと笑われて、気が付いて「そう言うわけですか」と。男の持ちものを「玉」であれば、女の持ちものをこれは「玉門」（ぎょくもん）。所謂、パチンコ気違いの人は皆んな夫婦が不調和なんです。夫婦が不調和であると心がイライラ落ち着かなくなる。そうすると、そこだけをガラスを割れば胸がスーッとするけれども、そんなことをしたら法に触れるから、だから、兎に角、少しの金でパチンコやって自分の心の中の鬱積した感情を出す。ところが、そういうことで、即ち代償というものは、それは、ものの代わりになるということ。腹へった飯がない、この饅頭で腹膨らしとけと言っていくら飯の代わりに饅頭食ったって心が落ち着かないでしょう、やっぱし飯を食わんと落ち着かない。それと同じように代償的にいくらパチンコをはじいてみたって、それで心が楽になる事は絶対はない。



インド霊鷲山上の舍利佛の洞窟で禅定・瞑想中の園頭師は、お釈迦様の当時の舍利佛の意識になり鳴咽する。

Home

それで長崎に着いたら、Kっていう小学校の先生が「先生そうです、兎に角、小学校の先生にパチンコ気遣いが多い」と、言うんですよ。そういう先生は心の中がもうザワついて寂しくてしょうがないんですからね。そのような先生は子供を良い教育ができるわけがないですよ。そうしたら、或る人はね一ヶ月にね三十万円パチンコはじくというんですよ。この間、聞いたところによるとパチンコ代を稼ぐために人妻が売春するというんですね。だから正法誌に、そのパチンコの事を書こうと思っているんですよ。だから私が単刀直入にHさんに、パチンコ屋に行って玉を弾きたければ、自分のご主人の玉をはじけばいいんだ、と。神は悠々、みるみるうちに、神は男と女をつくられたんですからね、男だけでも世の中は成り立たない、女だけでも成り立たない、やはり男女、夫婦の調和の上に、そして、それぞれのももの、オシベがあってメシベがあって陰陽の調和に繋がっているんだから、その神の与えられたですね、神は言葉では表現されないけれども、自然の法則の中で神が示して下さった、その生き方に人間も学べば良いわけですよ。

で、さっきテレビをちょっと見ておりましたら、全国各県で「いじめ対策費」というのを一県で、何百万か何千万か予算を組んで、馬鹿みたいな話ですよ。ただ、K先生が講演会をね、各県で学校を先生達に回っていっぺん話を聞かせれば、それで解決できるんですよ。いじめの原因も根本は夫婦の不調和である。夫婦が不調和で、子供はその間でどっちに味方もできない、どっちに付くこともできない、どちらからも突き放されて孤独感に苛(さいな)まれてどうしていいかわからない、そういうすえきった感情が、つい、いじめとなって出てくる。いじめる方もやっぱり、心の中にそうされなければならない原因がひそんでいるのだから、それも夫婦の不調和の影響を受けて心がいじけてるんですから、根本は、「人間・釈迦」に「結婚は陰陽の調和である」と高橋先生が書いていらっしゃるように、陰陽の調和ですよ。その調和のあり方が色々な環境によって色々なに分かれてくるから、ちとややこしくなる。根本はただ一つ、すべてこの天体は陰陽調和して、太陽を中心としてすべての天体が運行しているわけですから。それで、この前、宇宙飛行士になった若田さんは人工衛星から地球を見て、地球は青い地球は丸いと言ったけれども、地球が青くって真ん丸いということは何百年も前から分かっていることだから、何を今更感心するこっちゃないですよ。

ところが、唯物論の教育を受けた人達は形だけを見て心を見ない魂を見ない、人間というものも、その顔かたちを見て、その人の心、その人の魂を見て、そういう唯物的人間というものをこれからの肉体と見ている、そういうことを前提としての研究、それは半分である。それで、国連平和大学の学長のロバート・ミュラー先生は、この半分の人間は心の存在であり霊的存在であるという事をよく子供達に教えなければならぬ、という事を言っておられるわけですよ。それで今、世界の教育は全部、人間は心を持てる霊的存在であるという方向にどんどんどんどん動いて来ております。それで、二十一世紀を迎えて行くわけですよ。これで私の時間も終わりますが、これからK先生も忙しくなりますから、もうK先生の話の聞かなくていいかげん止めて、あなた方がK先生になって、出張って行って「話を聞け」と講師になって、そうしてK先生は日本はもう卒業してもらって外国を回ってもらわなけりゃいかん。そうすると、新しい問題が出てくるわけですよ。ご主人に、どうして頭を下げて(笑い)、もう昨日から私は頭痛いです。これで、私の時間は終わります。

昭和48年9月奥志賀高原



園頭 高橋

[Home](#)

高橋信次師・園頭広周師に学ぶ



過去世物語と光の天使達



「高橋信次師は、人の過去世と使命がわかるただ一人の人間だった」

< 過去世がわかるナゾ >

高橋信次師は、その人の過去世（過去に生まれていた時代のすべて）が瞬時にわかる人だった。それは、各人の守護霊（過去世・魂の兄弟達）から相手のことを自由に聞き出す能力を持っていたからである。

在世中（昭和五十一年没・四十八歳）に「過去世を明らかにした数は二百人以上にのぼった」と伝えられている。

信次師の教えによれば、人間は普通、千年から二千年に一回この地上界に肉体を持って、約五百年に一回の割合で分身がこの世に出て人生を繰り返すというのである。

「この世に肉体を持つ」と簡単に言っただけだが、凡人にとっては大変なことで、地獄の世界からはどんなに望んでも地上界に誕生できない仕組みである。「あんな悪いヤツもいない」というのも中にはいるが、高橋師によるとこれだって誕生前には天上の世界にいた者のようである。

もっとも、悪いことをする人は地上界を縁として人生の中で悪心を作り上げたもので、あの世を縁としたものではない。それは降霊（下生、天孫降臨）したばかりの純真な赤ちゃんの頃を思い起こせば分かるだろう。ところが、中には悪い「心の傾向性」（業・ごお、カルマ）を完全に修正できなかった人は、たとえ地上界に生まれることが出来てもまた同じ悪いことを繰り返して、この地上界を去る時には再び地獄の世界に身を沈める人もいる。

たとえば、十万年前にさかのぼった時にある人は地上界での人生経験を五十回持ったとする、また、別の人は地獄界に定住することが多かったためにこの世には五回だけの人生体験だったでしょう。これを以て、人格とか人間性の差というのだが、人間は数多の人生経験の中から色々なものを学び智慧（知恵はこの世だけで学んだもので、以後区別する）とし、それらの過去の体験が潜在意識の中であって、この世で学んだこともないような問題にも予感、直感として解答を得ることが出来るのである。それは、各人の魂に記録された智慧を出して対処することになる。人間はパニヤ・パラ・ミタ、般若・波羅・密多（般若心経の一節）である内在する偉大な智慧を、ひもときひもとき、知恵として出すことになる。高橋師によって過去世を明らかにされ、霊道を開いた人が沢山いたと言われているが、余りにも過去世の名や霊道を鼻にかけ、増長、虚栄心だけで道を誤る人や、自分の過去世（過去生）を知りたいだけの欲念を持った人がいたようである。たとえ過去世で名を遂げた人であっても「今世が駄目なら過去世も押し知るべし」であり、「今世が駄目なら来世も推測して余りある」のだ。「過去、現在、未来は一点なり」と、昇天する直前に絶叫した信次師の言葉が胸に刺さる。過去世のわかる唯一の人間が高橋信次師だった。

信次師没後は巷から「あなたの過去世は〇〇だ」と言って人をまどわしている人のうわさも聞えるが、神をも恐

れぬ行為であろう。

「現在、あなたの過去世は...と言っている人は皆ニセモノである。海外の人は知らない」と、園頭広周（元・国際正法協会）会長は言っておられるが、信次師の残した交叉証明によって、その人がニセモノかホンモノかの判断もつくので、人名事典を片手のウソつきには脅威となろう。

次に、高橋信次師の「ことば」を聞いてみたい。

「過去世を知って、悪い業（カルマ・心の傾向性）を修正することは、私達の人生修行の目的であるが、過去世がどのような人であろうと、今生（こんじょう）は今生であり、大切であることを忘れてはならない」、と。

高橋信次師は、次のことが言いたかったように見える。

魂は永遠不滅なもので、人間は地上界に何度も何度も生まれて人生の修行をして行くものであり、人生はこの世限りではないことを教えるための一つの方法、方便として過去世を明かし、その人が生きていた当時の言葉を喋らせ、「ほら、その当時はこんな言葉で喋っていたではありませんか」と、人々の面前で公開して教えたのである。無霊魂論と、人生はこの世限りという考えに凝り固まった現代の人々に、あの世の存在や来世や過去世を理解させるためには、このような方法を取る以外にはなかったと思われる。しかし、高橋師の霊能にのみ憧れて、人生を誤る人々が多くいたことは残念だった。高橋師の後を受けて、正しい心の持ち方と人生の生き方を教えた「正法」を、護り伝える使命の園頭広周・元国際正法協会会長は、霊能的なことは一切やられなかったが、その理由は、正法の生き方を遵法する人には二次的に奇跡は起こるからだと言われている。

<人は過去世をなぜ思い出せなくなったか>

人はそれぞれに過去世を持っているのに、なぜそれを思い出せないのだろうか。神の子である人間はその能力を皆持っていたのだが、永い歴史の中で「愚痴」「怒り」「足ることを知らぬ欲望」という暗い想念（心）をつくり出したために、神が与えたその力を閉ざしてしまった。今を正しく生きるために、人はその能力を奥深く潜在してしまうことになったというのである。その力を有していた人間が、自らその能力を閉ざしてしまったので、方便により信次師の力で過去世を強制的に思い出させたのである。

<過去世を思い出す謎と、霊道を開いた人の危険性>

人の心は、オギャ - 生まれると、九十%が潜在され十%の表面意識と想念帯の働きでこの世を渡って行く。この世に肉体を持った光の天使の「光」で厚い想念帯に窓（穴）が開かれるために、九十%の潜在された意識が外に流れ出て今世では習ったこともない当時の言葉を喋り出すことになる。

しかし、光の天使の「光」によって強制的に開かれた想念帯の窓は、欲望が生じたり、威張ったり、おごる気持ちが生じると、守護霊（自分の過去世、魂の兄弟）の慈悲と愛の身上とは合わず守護霊の働く場がなくなるので守護霊は離れてしまう。守護霊は離れる時にはその窓をふさいでしまうが、そのスキに動物霊や地獄霊、魔王が入ってくるために、霊道を開いた人が普通の人より余計に正道を踏みはずして間違っただけになる。



< 生命の仕組み、魂の兄弟・本体一人と五人の分身 >

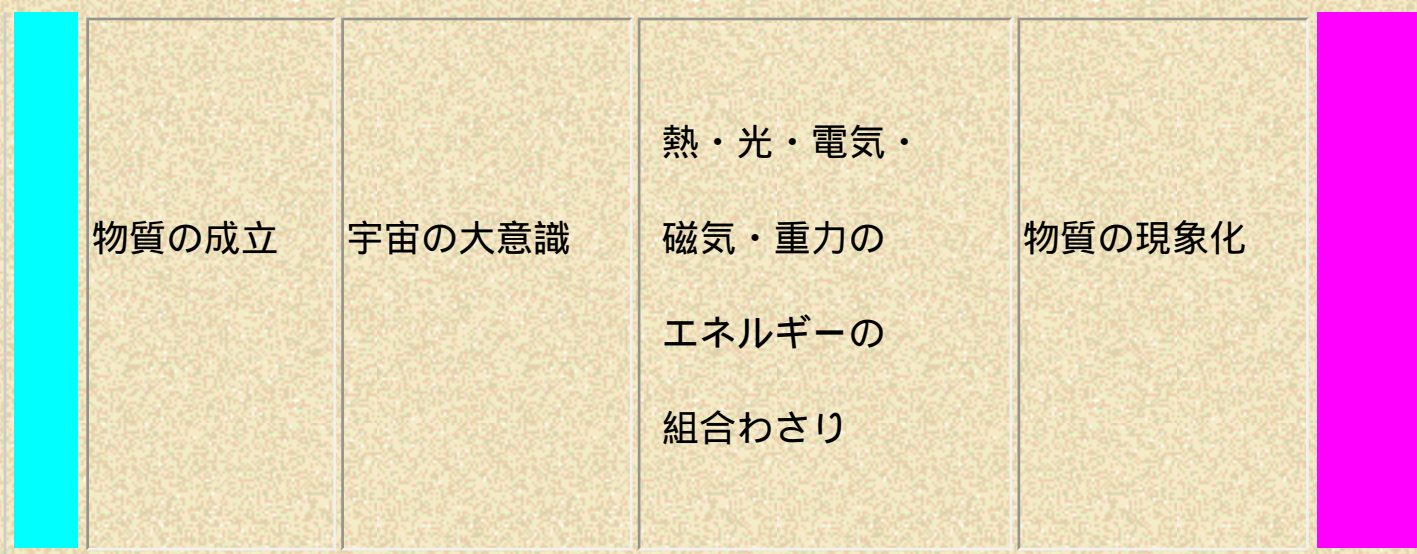
人間は、大自然の中の一つの構成員にすぎない。

植物が、核（本体一）を中心に、その周囲に原形質膜、液胞、細胞膜の四つから構成されていて、本体一、分身四の関係となる。

動物の場合は、核（本体一）を中心に原形質膜、ミトコンドリア、ゴルジ体、中心体、脂肪粒の五つから構成され、つまり本体一、分身五の関係になる。同様に、鉱物の場合は原子番号に核を加えた数が本体と分身の数になり、例えば炭素の原子番号の場合は六、核が一つに陰外電子が六ということで本体一、分身六の関係となる。

このように人間も動物だから本体一、分身五の関係には違いないのだが、実は人間の場合は、この大宇宙が神の大意識を母体に熱・光・電気・磁気・重力という五つのエレメントからできているので、人間の生命体もこれに合わせて本体一（大意識）、分身五（五つのエレメント）の組合せになるのだ。人間を称して小宇宙というのも、生命の成立が大宇宙の構成と同じようにできているように、生命も物質も三つのプロセスからできている。地球に生命が宿るのは太陽、月、そして地球という三位一体の構成。地球（地上）は気圏、水圏、岩圏から成っており、原子は陰外電子、中性子、陽電子からでき、電気は陽性（+）、中性（N）、陰性（-）から、細胞は大きくわけて原形質、細胞質、核の三つから構成されている。物質の成立は、宇宙の大意識をまず出発点として、第二に熱・光・電気・磁気・重力のエネルギーが組み合わさって、物質という第三の現象化が行なわれている。生命もこれと同様に、まず第一に宇宙の大意識から、第二に個としての生命が、あの世すなわち実在界に誕生し第三に現象界（地上界、この世）に姿を現わすのである。

生命の成立	宇宙の大意識	個としての生命が 実在界に誕生	現象界に 姿を現わす



一度、現象界に出た生命体はこの世とあの世の転生をくりかえし、この世に生まれ出る時は両親という媒体（縁）を経て、姿を現わす。

つまり、大意識から離れた生命はあの世、両親、この世というプロセスを踏みながら、循環の法のなかで生きるように仕組まれている。

人間の生命体の三つの系列

人間の生命体である一本体、五分身については、人間の生命体は三つの系列からできており、その構成は次の通り。

一の系列 = 男本体一、男分身五

二の系列 = 女本体一、女分身五

三の系列 = 男本体一、男分身二、女分身三

女本体一、女分身二、男分身三

つまり、本体が男性で、分身が五人すべて男性の場合

本体が女性で、分身が五人とも女性の場合

本体が女性で、分身の二名が女性、三名が男性の場合

そして、本体が男性で、分身の二名が男性、三名が女性の場合である。

これらは、具体的に言うと次の通りである。

常に男性として現れ、肉体は男性であっても意識、心、精神的には女性的なるものも完全にマスターして、神の子としての全人格を完成してゆく人達で、例をあげると釈迦、キリストのようにいつの世も男性として現われる人。また、常に女性として現われて、男性的なるものもマスターして女性としての生き方の模範となる人で、例

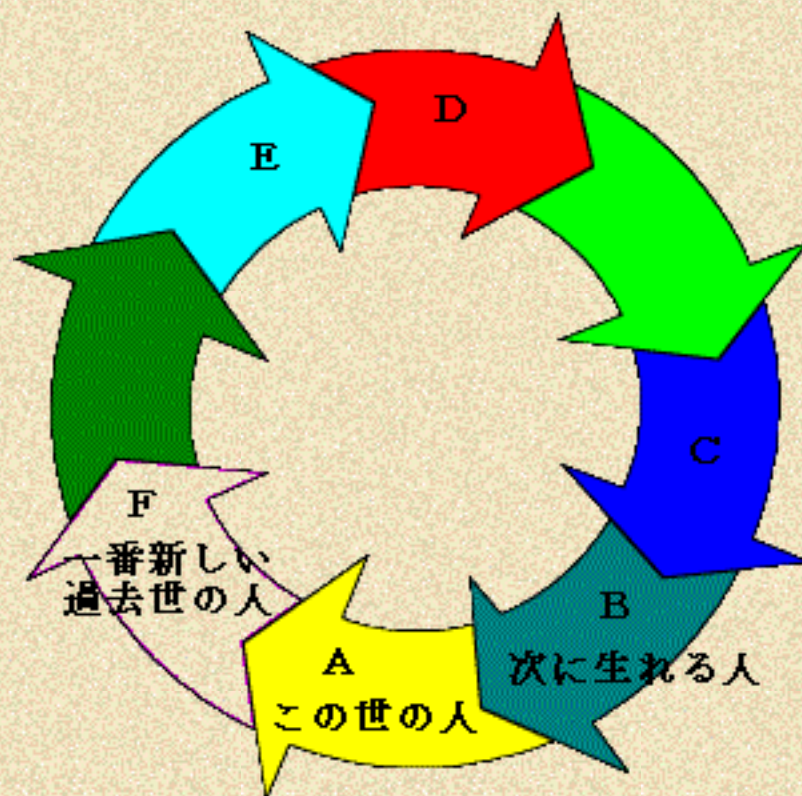
えば釈迦の母マヤ夫人やキリストの母マリヤ様などのいつの世も女性として現われる人である。

そして、ある時は男性としてある時は女性として肉体を持つ人であるが、一般大多数はこの部類に属して順序は男性と女性が交互に転生する。つまり男性・女性・男性・女性…。または女性・男性・女性・男性…。となるが、一の系列から、三の系列を含めて、男女の数は同じである。

また男女のみの系列と、混合の系列があるのは、人類全体の調和を目的としているからで、もしも一と二の系列、二と三の系列のみとすれば、この地上の男女の均衡は破れる恐れがでてくることになる。だから高橋信次師は、「この世とあの世を通じて男女の数は同じで一定不変である」と説いたのである。

< 生命体（魂）の輪廻転生の順序 >

魂の転生輪廻はそれではどういう順序で行われるかといえば、原則的には順ぐりでAが出れば次がB、Bの次はCというように、A（一本体）B C D E F（五分身）が次々に現象界（この世）に出て修行する。だが、転生輪廻の過程で修行を積む者と横道（地獄界）にそれてしまう者もあって全体のバランスを崩すことがあるので、そういう場合はあの世で話し合い、前記の原則にこだわらずAならAが短期間に二度、三度、現象界に出て修行することもあり得るが、こういうケースは比較的少ない。図にすると次の通りである。



このように、人間は或る時は男性に、或る時は女性に生まれてくる人がいる。現代は男性の肉体を持っている人でも、女性が守護霊となって教える場合は、男性であっても女性的な考え方をするようになる。その反対の場合は、女性であっても男性的な考え方をするようになる。

その男性的なるものと女性的なるものを、輪廻転生によってどのように勉強したかによって男性的要素と女性的要素の割合が違う。男性でありながら女性らしい男が、また女性でありながら男性らしい女がいるという原因はここにもある。「...という原因はここにもある」と余韻を残した述べ方をしたが、例えば「男っぽい女性」を例にとって説明すると、今度の子供はどうしても男の子が欲しいと切望していたのに希望に反して女の子が産まれた。すると、両親や周囲の希望が胎児に印象されて、産まれて来た子供は、女の子でありながらケナゲにも、そ

れに答えるべく男っぽく育つということが起こるのである。こうした周囲の環境によって「男っぽい女性」や逆に「女っぽい男性」が世の中にはいるという一つの理由になる。

また、男性ばかりの兄弟の中にポツンと女の子が産まれた。その環境から「男っぽい女性」その反対の場合は、「女っぽい男性」がいることを経験されている人も多いと思うが、思春期にはいったら途端に女の子らしくなったとか男の子らしくなって直ってしまったという場合は、環境的な原因であり、この場合は一時的なことが多いのである。

< 本体と分身の使命と役割

本体を中心として五人の分身は、それぞれ容姿は異なるが、その性格的長所や欠点については同じような特徴を持っている。本体の役割は、現象界に生まれて分身の造り出した業（カルマ・心の傾向性）まで修正する使命を持っているが、分身は自分の業の修正のみでその目的は果たされ、従って本体の使命は重大である。それにひきかえ分身は、この現象界に出るとき、なるべく容易に悟れそうな環境の、生活にあまり不自由のない中流階級以上を選ぶ場合が多いと高橋師は言っている。そして、肉体を持って修行している分身に対しては、本体やその友人、分身の友人が守護霊をしたり指導霊をして、間違いのない一生を送らせるように協力している。

本体は分身と違って自分で自覚せねばならないので、特に正しい想念と行為が一体となった生活をするのが最も重要なのである。

これより高橋信次師の講演、「天使の再来」から聞いてみよう。

「本体という核を中心として、五人の分身から人間は成り立っています。即ち肉体をもってこの現象界にその一人が出ているとすれば、残る本体や分身は実在界において、現象界にいる人間に対して守護・指導霊として見守り、指導しているのであります。現象界に肉体を持っている本体あるいは分身の心は、次元の違ったエネルギーの世界、つまり実在界における五人の分身、本体に通じており、それは霊子線という光の糸でつながれていることを知らねばなりません。その霊子線は、皆さんの正しい心の調和、正しい神理、正しい行ない、つまりこの三相の心の中に生活を送っていれば、皆さんは霊子線を通して神の光をストレートでうけることになるのです。それが、不調和を起こして怒ったり、誹（そし）ったり、罵（ののし）ったりして、自分の心というものを掴めないならば、その人達は即地獄の姿となり、霊子線の光が消えて、動物霊だの、あるいは、他のよからぬものに憑依されてしまうのであります。」

魂の先祖と肉体先祖

肉体先祖は、現実の親子関係を通じた俗にいう家柄、血筋である。これまでの観念は肉体先祖のみで、遺伝的なつながりの中で顔、姿、かたちが似ていると言われるのが肉体先祖である。この人生航路を渡る肉体舟を与えて下さったのが肉体先祖というのであるが、同じ親子であっても魂はみな違い、肉体は遺伝されても魂までは遺伝されず、魂にも肉体とはちがった先祖があるのである。魂の先祖とは自分自身の過去世であり、つまり、五百年前、千年前、一万年前にどこかに生まれ生活してきた自分自身の過去世の生活記録であり、それは親から受け継がれたものではないのである。次に具体例を示そう。

< 肉体先祖 >

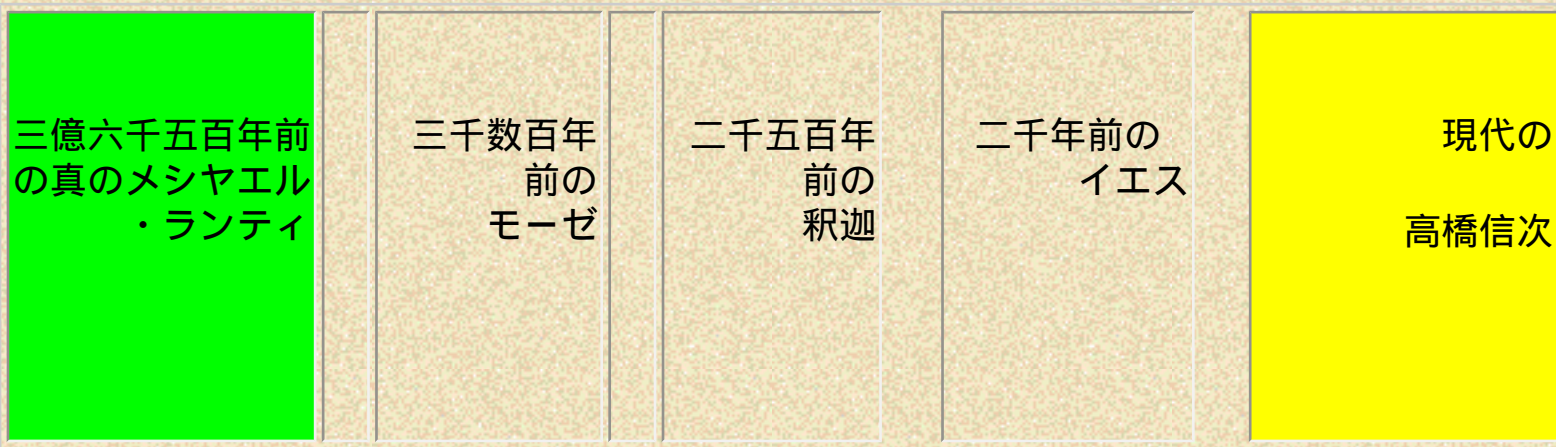
高橋家 父



高橋信次 (十人兄妹の二男)

家 母

<魂の先祖>



「私達の肉体先祖の悟っている人々が、子孫のため協力している場合もある。心の眼が開かれた時には、この事実を自らの力で知ることができるであろう。」(高橋信次)

次に、昭和四十八年夏、長野県熊の湯の自主研修会の高橋師の講演を聞いて見よう。

「それでまた、これは本当かな、と思ってあっち(天上界)へ行って聞くわけです。すると、イエス・キリストを名乗る人が何人もいます。髭をこう生やした人、それから、少し面長な人とね。声も違うし、アクセントも違うんです。それで本体と分身の関係がわかってきた。それから「細胞を学べ、細胞を学べ、五体の形成はどうなっているかを学べ」と言われた。だから、なぜ、どうして、と突っ込んで結論が出てきた。だが、一般の人は突っ込めないんですね。こういうことを僕は十歳から四十二歳まで、そんなことばかりやってきた。」

次に、魂の兄弟達の例について具体的に説明したい。

<イエス・キリストの生命

本体イエス・キリスト

分身 クラリオ・BC四千年頃エジプト

- 分身 マグネチオ・BC二千年頃エジプト
- 本体 イエス・キリスト紀元前三十二年イスラエル
- 分身 フォアイ・シン・フォアイ・シンフォー・AD四百年頃中国
- 分身 アントニオ・アグパオア（昭和五十七年死亡）フィリッピン

高橋信次著『心の発見』には、「現在、分身 が、フィリッピンで肉体舟に乗って修行している。クラリオ（分身 ）が守護霊をしており、指導霊は、イエスの友人であるモーゼの分身が担当している。」と、記述しているが、分身 の有名な心霊手術者の通称トニ - が若くして昇天した。分身 の次は本体の出生の順番となるわけだが、信次師は「これから百五十年後（昭和四八年に百八十年後と）には、アメリカのシカゴにイエス・キリストの本体が出生する」と言い残したが、そこで世界政府を樹立するというのだ。

釈迦・ゴータマ・シッタルダの生命

本体、ゴータマ・シッタルダ（釈迦牟尼仏）

釈迦の前の生命はリエント・アール・クラードと呼ばれ、南米のアンデス山脈の麓に生まれ、さらにその前の生命は、アトランテス帝国時代のアガシャー大王として神理を説かれた方だった。

- 分身 中インドに王様の子供として生まれた人
- 本体 釈迦BC五百年、インド
- 分身 不空三蔵 北インド
- 分身 天台智ぎ 中国
- 分身 伝教（最澄） 日本八世紀
- 分身 空教
- 分身 木戸孝允（桂小五郎） 日本十九世紀

釈迦から二千五百年の流れをみると宗教家五人に対し、政治家一人である。

「不空三蔵」

北インドに生まれたが、その後中国に入り密教を伝える。

不空三蔵の弟子である恵果は、それまでの密教を止揚して金剛界、胎蔵界の両界曼陀羅を説き、この両界曼陀羅を弘法大師に伝えた。

信次師が憑依霊、動物霊を取り除く時に「不空三蔵、この霊を連れて行きなさい」と言い、「不空三蔵があ

の修養所へつれて行きました」と述べているビデオテープが多く残っている。

これについては講演の中で高橋師は、

「養老堂の若いお婿さん、浅草駅の傍に大きな楽器店があるんです。そこの娘婿さんが首が曲らないのですよ。私の所にたずねて来ましてね。十年も曲らないんです。医者に見てもらってもだめ、車を運転する時はこうなんです。「貴女だーれ」と聞いたら、「ちえ子と言ってるよ」「ちえ子って誰れ」と聞いたら、十年前に亡くなった奥さんだったのです。それで僕は奥さんに、「あなたのご主人は、あなたが亡くなってから　　。行きたくないなら、私がしっかりと教えてあげるから、まず離れなさい」と。それで懇々と教えて、彼女を連れて行ってもらったのです。その時に、私の守護霊・不空三蔵に助けてもらい、連れて行ってもらったのです。そうしたら、首が直ったのです。「そうでしたね」「そうです。直りました」、十年も医者にかかって直らないのが直ったんです。だから、私がやっているんじゃないのです。私は教えを受けているのです。だから、光を入れるのも自分ではないと言っているのもそれなんです。」

このように、いつも高橋師は謙虚であった。

「天台智ぎ」

仏教がインドから中国に渡ったのは二世紀頃であり、五世紀になって広がった。天台宗を開いた天台智ぎ（ちぎ）という人は、法華経を南岳慧師のところで学ぶ。南岳慧師は毎晩夢の中でミロク菩薩から教えを受け法華経を伝授されていくが、そうしてその伝授されたものを陳少年、のちの天台智ぎは、仏教は行いである。行為のない神理は神理ではないとして、三十七歳のとき、天台山というところに移り法華経を説いて行く。



天台大師智ぎ（兵庫・一乗寺 国宝）

当時、経文は声魂（こえだま）を通して、己の心を調和しようとしたもので、つまり韻声（いんせい）という法を採用したのである。

八世紀になると最澄（伝教大師）が中国に留学し、天台山で八カ月ばかり学び、比叡山延暦寺に天台宗を開いた。分身の天台智ぎが開いた天台山に、日本に生まれた分身の最澄が法華経を学ぶために中国に留学するとは不思議である。一九七四年（昭和四十九年）福岡県二日市での講演会で信次師が韻声によって法華経を朗々とあげる場面がビデオに残されているが、台本のまったくない「そら」で、古代中国の言葉で法華経をあげている。信次師のその時のお経は何かしら心が洗われるようで何度テープを廻しても良いものだ。

< 守護霊と指導霊 >

- - 人生と虫のしらせ - -

信次師の守護霊はイエスの分身であり、指導霊はモ - ゼであったと明らかにしているが、守護霊、指導霊の働きかけと作用について考えてみよう。私達は生活の中で、第六感、予感、虫の知らせという精神作用がある。例えば「何か良いことありそうだ」とか「今日の旅行はとり止めた方がよさそうだ」ということがあったり、時間が経った後で「ア - あの感じは、このことだったのかな」ということがある。心が穏やかで調和されていると心の底の底から静かに語りかけてくれるが、反対に不調和だと守護霊や指導霊はその人を守ることができず、ただ涙を流しながら傍観することになる。ただし、心に安らぎがなく胸が騒いでいるときに聞こえてくるものは地獄霊、動物霊によるものだから注意が肝腎である。日本の神道でいっている「八百万神」（やおろずのかみ）といっているのは、この守護霊のことを云っているのだと信次師は明らかにしたが、当時の人口は八百万人（たくさんの人）ほどだったのかもしれない。また、ビデオの中で多く見られるものだが、信次師が、「この者の守護霊よもっとしっかりしなさい！守護霊が頭をかいていますよ。いい加減にやってもらっても困りますからね。肉体を持っている人はもっと勉強をして...本を読んで下さい。やれば出来るんだから。」と。

Home

「最澄・伝教大師」

高橋信次師の講演より要約すると、次の通りである。



伝教大師最澄（兵庫・一乗寺 国宝）

八世紀になると最澄が中国に留学し、天台山で八カ月ばかり学び比叡山延暦寺に天台宗を開いた。同年代に空海

と一緒に中国に渡るが、支那海で台風に会い纜（ともづな）が切れたため別のところに漂流し、五台山（ウータイション）で勉強をする。空海は、二年近くいて密教を日本に持ってきて高野山でそれを説いた。しかし、密教は仏教ではない。密教の源流は瑜伽（ヨガ）であり、己れ一個の自覚のみを求める小さな悟りといえるだろう。中国から日本に伝わってくる過程を像法時代といい、仏陀の教えに知と意が加わった。このためさまざまな教えが仏教化され、儒教以外のものも、みな仏教にされてしまった。伝教は、天台山において、法華経を学び、その時の御題目は、「法蓮華僧伽呪」（ほーれんげんさんがんじゅ）と唱え、声の波動に乗って心の調和を計ったのである。

「法」とは 宇宙の神理、仏の教えである。「蓮華」とは 心を表現している。「僧伽」とは 法に帰依している者をいう。

私達の人生航路を渡って行く肉体の舟は、眼を見れば耳糞、鼻を見れば鼻糞、歯を見れば歯糞、皮膚を見れば臭い汗、痰、大小便、綺麗なものは何一つとして出てこない。このように汚い泥沼のような肉体舟であっても、泥池に蓮の花が咲くように、私達の肉体を支配している意識（魂）の中心の「心」が宇宙の仏の法を悟って生活し、仏法に帰依したならば、仏の心と私達の心は調和され、真の安らぎが生じて天国の境涯に達する」と説いたものであった。この「法蓮華僧伽呪」の御題目は、伝教が日本流に改め、「妙法蓮華経」（みょうほうれんげきょう）と訳し、地水火風空の大自然と、私達との関係、色心不二の法を、天台教学の一環として比叡山を中心に弟子達に教えたものである。伝教大師の過去世が、中国の隋の時代に、浙江省の天台山を開かれた天台智ぎという僧侶であったことを、生存中は悟っていなかったようである。天台智ぎや不空三蔵が、法華経や密教について、伝教大師の守護霊として実在界より常に教えていたそうである。過去世で学んでいた仏教なので、法華経について自信を持っていたということはむしろ当然であったのかも知れない。その現われとして、「天台の仏法は、諸宗の明教なり」と求める人々に教えたそうである。

天台が中国に出た当時も、仏教が学問仏教に変わっていたことを非常に悲しんで、自ら仏教の精神は行ないが伴わなくてはならないと思い、天台山に居を構えて、心と行の実践をした。このような考えは、伝教大師にも良い業として伝わっていたという事実を、「わがために、仏をつくるなかれ。わがために経を写すなかれ。わが志を述べよ」ということを、私は後世の弟子達のために遺言された」と当時の守護霊が私に教えた。また私の守護霊は、不空三蔵が勤めている関係上、伝教大師の消息については非常に詳しい。中国に留学していた当時、トワン・テン・エンという老僧が天台山におられ伝教の付人をしていた関係で、伝教に非常に人間らしい事を教えて下さったことなどを語った。このときのトワン・テン・エンは、その後、転生輪廻して、十三世紀頃日本に生まれた、仏教を学んだ道元、という名の僧侶である。伝教大師は、「神理を説く人こそ国の宝である」、「未来の仏が、この世に出られるまで、法灯を絶やすべからず」と。しかしその後の弟子達が、寺を守るという名目で作られた僧兵については「自業自得、悪因が招いた結果、智と意の学問で心を失った結果である」と私に説明された。（講演要約）

最澄（伝教大師、七六七～八二二年）は、政治と結びついた奈良時代の仏教に不安をいただき新しい仏教を求めて比叡山にこもるが、八〇四年には空海と共に唐に渡り、天台の教えを学んで翌年帰国し、その翌年には比叡山の延暦寺で天台宗を開いた。仏像をつくるな、経を写すな、私の説く神理を後世の人に伝えよ、神理を説く人こそ国の宝、未来の仏陀がこの世に出られるまで、法灯を絶やすべからず、と最澄は説いたが、「法灯（神理の光明）を絶やすべからず」というところを、現代では口ソクや油の灯明を消すなど間違っているが、「法灯とは心の光明を点ぜよ」と言うことだと高橋師は修正したのである。

これより、生まれ変わりの実名や人物が出てくるが、仏教的な人格（霊格）の呼称として、如来、菩薩、或は地獄界の諸相などが出てくるので、どの段階の人物かを判断していただくために熟読して欲しい。

< 人間（霊）の段階（霊格）と人間性の違い、光の量の区域 >

神の前において人間はみな平等であるが、人間（霊）の段階は厳然としてある。「あの人は立派な人格者だ」とか、「あの人は犬、畜生にも劣る」と言うように。

天上界

「神」 如来界・金剛界 菩薩界 神界 霊界 幽界

地獄界

修羅界 餓鬼界 畜生界 煉獄 無間地獄 魔王

この太陽系には三百六十億の霊魂がいると高橋師は明かされたが、「一本体と五分身」の法則によりこの地球には計算上、六十億人の人間が肉体を持つことが出来ることになるが、地獄界に安住したり人間のご都合による墮胎や人間の想念行為の結果による天災（本当は人災なのだが）等によって現代は五十億程度である。

「天上界の諸相」

神

絶対唯一神の創造主であり大宇宙大神霊

如来界（金剛界）

宇宙は我なり（宇宙即我）と悟り、一切の執着から離れ、人類は皆兄弟だという境地に達している者達で、神と表裏一体となり如来、上上段階の大指導霊達の世界。イエス、モーゼ、釈迦（ゴータマ・ブッダ）等、あの世とこの世を通して四百二十五人（一九七二年現在）がおられ、地上界を支配している。太陽系には、ほとんどアガチャー系グループが多い。如来界には宇宙全体の諸現象を即座に見ることができる展望台があり、それはどんなことでも見落とすことがない精妙なものである。たとえ、如来であってもあの世とこの世の輪廻は繰り返され、地上界の人々の失われた心を取りもどし、神理の種を蒔いてあの世へ還るのだ。イエスさまの住まいは、イスラエルの上空に、ブッダの天上界の住いはインドの上空にあると考えてよいだろう。

菩薩界

心は慈悲と愛に満ち満ちて、地上界、天上界の衆生を救っている調和された世界で、心を悟っている者達の世界。ペテロ、アンデレ、パウロ、ミロク、マンチュリア、カッチナー、日蓮、親鸞（菩薩界でも下位の段階）など。この世とあの世を通して約二万人（一九七二年現在）の光の大指導霊や菩薩。高橋師の高弟の園頭広周師は、現代は菩薩と如来の中間に位置し、三百年後はインドに生れカースト制度を打破する使命と役目を持ち、華光如来と呼ばれると、高橋師は言い残している。

神界

人から損害を与えられても人を非難しない。人を非難する前にまずその原因をふりかえり、二度と再びその原因をつくらないように努力する世界。皆人類は兄弟だということを知り、魂の転生輪廻の事実を悟っている。自我心がなく、専門的な分野で研究がなされている学者や博士の多い世界で、医学、天文、科学、哲学、文学など一切のエキスパートが百般の研究を続けている世界。『心行』や八正道の尺度がどの界に当たっているかと言うと「神界」にある。この世とあの世を通して一億数千万人の世界。日本の宗教界では法然や道元は神界の人である。

霊界

この世界はいわば持ちつ持たれつで、人に与えたものは与えられる。与えたものが返ってこないと気持ちがスッキリしない「正しさ」が支配している。生前における常識の観念がここでは価値の尺度になっており、地球上の人類の三分の一が「霊界」以上、三分の一が「幽界」クラスの人達。三分の一が他の天体から初めてこの地球上に魂の修業に出てくる人達である。特別の使命を持った光の天使は霊界以上の三分の一の中の一割位で、その中には学者あり、経営者あり、あらゆる人達がいる。

霊界から神界の裏側には天狗界、仙人界（キンナラ・マゴラガ、インナパ）があり、ヨーギストラ、日本の修験者達が多く、肉体行によって法力だけを学んでいて、相変わらず、厳しい肉体行をやっており苦しみから解脱していない自我の強い者達が多い。この住人は、この地上界で、厳しい山中修行を行った行者達が多く、他人に対しては慈悲が少い者達の世界である。

幽界

この世界は自分という立場が正しさの尺度になっていて、自分さえよければ人はどうでもというエゴの世界であり、自己保存の立場が強調され自己保存を損なうものは正しくない、つまり悪につながるという考え方である。現実の社会はまさに幽界の正しさが支配しているようである。人間の魂の修業にとっては、この世の一年はあの世の七十年にもなり、善と悪のいりまじったこの世の修業が、如何に大切かということである。

地獄界の諸相

修羅界

栄達を望み、そのためには平気で人を陥れ、利用し、自分の利益のためには人がどんなに傷ついても平気である人、闘争に明け暮れている人、常に人を争わせて面白がっている人、闘争対立心の心をもつ人、常に心の中に争いの心を持つ者の行く世界。信仰することによって争いを生みだす者達の行く世界。

餓鬼界

金銭欲の強い人、この世に未練や執着を持つ人、足りることを知らず常に不足の思いを持った人、いくら食べても、いくら持っても満足することを知らない欲望の塊りみたいな人が行く世界。

畜生界

動物と同じような性格を持った人、ねちねちと執念深い人、見境なく性欲に狂う人、人をだます人、動物の本性まるだしの者達の行く世界。

煉獄

常に心の中に闘争と破壊の渦巻いている人、そしる人、怒る人、ひどく悲しむ人、うらむ人、偽善者、エゴイスト狂思想者、狂宗教家。

無間地獄

集団で闘争を計画したもの、戦争の計画者、権力を持って大衆を間違った方向へ指導した者、間違った教えを説いた宗教家達の行く世界。ヒトラー、スターリン等。

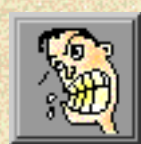
魔王

三億六千五百年前、エルランティーと共に飛来した七大天使の一人、ルシフェルは天上の世界に帰ることなく地獄の帝王（サタン）になった。

次に、高橋師の講演から聞いて頂こう。

「最終ユ - トピアは地獄界のなくなる時です。私が今、一生懸命に『新復活』という本を書いております。モーゼの十戒をはじめとして、間違った宗教を修正するために書いているのですが、サタンは躍起となって私を攻撃してきます。しかしルシフェル・サタンなりといえども、私のかつての弟子です。彼はやがて私の軍門に下るでしょう。知らないから地獄に落ちているのです。彼らも救われるでしょう。私は生命がけです。」と。

Home



過去世物語と天使達



「家康は、俳優の長谷川一夫として生まれ変わった」

今から四百年前の徳川家康が、現代は俳優の長谷川一夫として生まれ変わったと信次師は言い残した。

家康は、今の愛知県岡崎城主・松平広忠の長男として生まれ、幼少より今川氏の人質となって苦勞する。一六〇三年には豊臣方を破り、江戸幕府を開いて三百年ほどの江戸時代の基礎をつくった人であり、色々な制度を定めた。（一五四二～一六一六年）



徳川家康像 家光が夢にみた家康の姿を狩野探幽に描かせた八幅の一つ（栃木 輪王寺蔵）

家康については本も山ほど出ているので、それを参考にさせていただくとして、ここでは家康とキリスト教との関わりというものについて触れてみたい。

家康が天下を取って、真先に行ったことは朝鮮との修好であった。

外国との修好を旨とした家康が、突如として徳川幕府にキリスト教禁止令を出させ、鎖国決定の方向へ歩んで行ったのも家康が次のことを知っていたということを指摘した本があった。マイケル・アームストロング著、『アメリカ人の見た徳川家康』日新報道出版には、「ヨーロッパ人がマヤ、インカ帝国を滅ぼした時には、キリスト教の宣教師の後には必ず軍隊がついて来たということ。また、室町時代の一四七九年、当時の海運一等国スペインとポルトガルはローマ法王の仲裁によって、日本を植民地にする特許（アルカソヴァス条約）」を家康が先刻承知していたと言うのである。

では、どうして家康が情報を収集していたかと言えば、家康の近くには外交相談役として、ウィリアム・アダムス（日本名・三浦按針、イギリス人）やオランダ人・ヤン・ヨーステンもいた。ナルホド彼等の周辺から漏れ聞いていたようでこれもうなずける。それはこうだった。

その頃、ポルトガルの軍艦と商船の船長が、幕府転覆の密書を携えて本国へ持って行こうとしたのが暴露される。それはオランダの軍艦が彼等を捕えてみて判明するのだが、それには、ポルトガルに軍艦と軍隊派遣を求め、九州全土のカトリック教徒と手を結び幕府を倒すというものだった。これに仰天した家康は、キリスト教禁止令、そして鎖国へと歩むようになったというのだ。それというのも当時アジアの諸国がことごとく属国、支配占領された史実に照らすと、鎖国による弊害はあったとしてもこの家康の種々なる情報収集力によって日本は守られることになったというのである。

その家康が、今世は長谷川一夫として生まれたと高橋師は教えた。「鳴くまで待とうホトトギス」と歌い、あの「タヌキじじい」と云われた人が、現代は美男子中の美男子、あの長谷川一夫になったとは、さすがのウエブ・マスターもブツブツマゲたのだ。戦乱の世を駆け抜けた武骨者の家康が、現代は剣を舞扇にかえて、戦前戦後の暗い日本に光と夢を与えたというのである。この二人のとり合せは奇異であった。同じ霊統なら、どこかに共通点は見い出せるはずと図書館通いもした。ある時、小説と人情咄にかけては読書家と自負するヤツと、焼鳥を肴に酒を飲むことになった。話のはずみに、心の片隅にホコリを被っていた話しを持ち出してみると、焼酎を一気に飲み干して次のように話しを始めた。

「トンビに油げさらわれたという喩を例に引けば、家康は「トンビ」で、それを見ていたのが信長と秀吉というわけだ。「油げ」は智慧だ。家康は智慧という宝を持って行ったというわけだ。つまり知恵の差、それは輪廻転生の回数差というわけだ。何回も生まれ変わって、人生の修行をする度に、経験、体験という知恵を蓄積して、それを小出しにしながら人生を渡って行く。これが、知恵を働かせるということだ。そして人は賢くなって行く。「タヌキじじい」とか現代の「風見どり」とか言われるのは、生まれ変わり死に変わりの中の色々な経験、体験から、直面した問題を判断、対処するというわけだ。先を見通す力、つまり「先見の明」という言葉で代表される「あれ」だ。高橋師はこれを「心に内在する智慧、パニヤ・パラ・ミタ（般若心経の般若・波羅・密多）」と教えて下さっている。今までの数多くの転生の中で積んだ知恵が心の中から浮び上って来て、静かに時期到来の日を待つことにもなるのだ。だから、家康は「タヌキじじい」だと後世の者が言い伝えるようになった。これまで話したのは、これから話す前篇とも言うべきもので、これからがお前の探している共通点とも言える話だ。次のような話しを聞いたことはないか。

その昔、長谷川が林長二郎と呼ばれていた時代の興業社の社長、これを仮りにAとしよう。長谷川を手塩にかけて育てたAは、ある事情で手を離れることになった長谷川に激怒して、人を介して長谷川の顔に傷をつけた。傷をつけさせたのが誰れかも知っていたのに、長谷川はおくびにも出さなかった。そのために、彼の優柔不断な態度に困りの者はさんざん蔭げ口をたたいたものだ。時は流れAは映画会社をつくった。その時、長谷川は当時の金で数億円の借金を持っていたものだから、その借金と引きかえにAの配下になったのだ。考えても見る、自分の顔を傷つけた者が誰かと知った上でその条件を飲んだ。身軽になった長谷川は、それ以来、芸にも磨きがかかり、いよいよ、映画や舞台の「華」となっていたというわけだ。そして、いつしかAは会社を潰し、寂しい人生だった。一方、長谷川は国民栄誉賞を受け資産はあの通りだ。長谷川はじっとその日を待った。家康もその時節をしっかりと待った。これが私の言う共通点だ。だが、まだある。

もう一点はだ、下世話なことと言うか妻をめぐる話だ。家康には正室が二人いたことになっている。一人は家康十六歳の時の築山殿、そして四十五歳の時の旭姫だ。はじめの築山殿は姉さん女房であり、余り美人ではなく政略結婚だった。つまり、自らの意志によるものではなかった。が、長谷川も同じような道を歩いた。奇しくもそのようになったのだ。」と、そいつは酒を片手に一気に喋り続けた。以上のような共通点があるにはあった。こうして、この項も大方の目的は達せられたが、もう一つあった。

それは、信次師の講演の中で「大久保彦左衛門は菩薩界の光の天使」と言い残したことである。彦左衛門は家康をはじめ三代の将軍に仕え、一心太助と共に講談の世界の人物としてスコブル有名な人だが、家康が日本の独立を守るためにキリスト教禁止、鎖国の方針を決定して鎖国が完全なものとなった三代将軍家光の代まで、お目付役として彦左衛門はしっかり見届けたのである。こうして列強の海運一等国に占領支配されることなく日本は守られることになった。

また、ここで知っておかなければならない大事なことは、信次師が日本に生まれることを決めたのは寛永二年（一六二五年）であったと明らかにしている。これは信次師が肉体を持ち、正法を説くための天上界からの「地ならし」として、徳川家康と大久保彦左衛門をこの世に遣わし日本の独立を守ったのであろう。日本が守られ、そこに信次師が生誕して行かれるための天上界の布石であったと言いたいのである。

こうして、徳川家康が実在界（あの世）へ帰ったのが一六一六年で、家康をも含めて天上界での会議が十年後の一六二五年（寛永二年）に開かれたのであろう。そこで家康は、今度は「敗戦後の暗い日本に生きる力と活力を与える使命と役割を」と、心に描いたのであろうか。そして、血生まぐさい戦乱の世に明け暮れた家康は、現代は名優として人を和ませ夢を与えようと誓ったのであろうか。それにしても、残された家康の絵を見るにつけても美男子とは言い難い、そこで来世は美男子にと心に画いたのであろうか。かくして、太平の世を作る礎をつくった武骨者の家康は、剣を舞い扇に変えて舞台の「華」となり、股旅ものもよし、武家ものもよし、人情ものもよしとした名優、長谷川一夫となったのである。



「生長の家の教祖・故谷口雅春氏は、バラモン教主アサンジャであった」

故谷口教祖は、古代インドの時代のアサンジャであったと高橋信次師は言い残した。

昭和四十八年、国際正法協会会長園頭広周師が信次師の教える正法に帰依して、過去世が舍利弗であったことを思い出した時、信次師は「園頭さん、あなたは生長の家の谷口雅春教祖がインドの時のアサンジャであったことを思い出していますね」と突然告げた。古代インドの釈迦の時代に、舍利弗（園頭広周師）と大目連（ニューヨーク在住の大谷氏）は、ナーランダで生まれた無二の親友だった。初め二人はナーランダにいたバラモン教主のアサンジャの弟子だった。アサンジャの教えに納得できなかった舍利弗（舍利子、幼名ウパテッサ、改名シャーリープトラ）は二百数十人の弟子を引き連れ、大目連（幼名コリータ、改名マーハーモンガラナー）は百数十人の弟子を引き連れ釈迦に帰依した。二人が釈迦に帰依したことを知ったアサンジャは激怒して舍利弗と大目連に破門という処置を下した。二人はアサンジャの非難を甘んじて受け二人が去った後にアサンジャは血を吐いて亡くなってしまった。このようないきさつを信次師は指摘し次のように言った。「園頭さん、あの生長の家の谷口清超という人は二人目ですね。谷口教祖の一人娘の恵美子という人が最初の結婚に失敗したのはなぜか理由を知っていますか。あれは、生長の家をこれ以上大きくしてはならないという天上界からの警告だったのです。それを終戦後、生長の家をこのように大きくした原因は、園頭さん、あなたの責任だから、谷口さんに手紙を書きなさい」と命じた。

園頭師は次のように言う。

「清超氏夫人恵美子氏は最初北海道の青年と結婚され、ほどなく離婚になった。「生長の家」では「夫が悪いのは妻が悪いからである。妻が夫の実相を見ないからだ。どんな悪い夫であっても、妻が夫の実相を見れば離婚にはならず、夫婦は円満になるのである。」と、説いているのであるが、そう説いている教祖の娘が、夫の実相を見ず、また谷口教祖は自分の娘を擁護して、その婿であった人の批判を月刊『生長の家』に公表された。この問題があった頃、私はまだ鹿児島島の生長の家の一会員であり、どうも教えていることと実際とは違うという矛盾を感じたものであった。終戦直後の混乱で、生長の家がどういう方針を立てていいのか、まだ迷っていた昭和二十七年、私が谷口教祖に直接手紙を書いて、その中に、生長の家の大方針はかくの如くすべきである、と書いた。それによって立てられた方針が今でもそのまま方針となって生長の家は発展してきたのであるから、高橋先生は

そのように命ぜられたわけである。」、と。

またある時、信次師は次のように言った。

「園頭さん、生長の家の谷口雅春教祖の奥さんに憑いているのは古い白狐ですよ。だから、生長の家が金に汚なくなつたのです。伏見稲荷を祭っていますね。あれがいけないのです。生長の家は、古狐が輝子夫人を支配して、輝子夫人の言いなりに動いている。それで生長の家はだめになつたのですよ」

また、園頭広周師は言う。

「金を要求する宗教は動物霊に憑依されているとは高橋信次先生が講演の都度言われていた。私が生長の家をやめた理由の一つに、会員には「生長の家大神・住吉大神」を信ぜよと言っておきながら、自らは「伏見稲荷」を祭っておられた。私が生長の家を辞める時にこのことを指摘したので、隠しきれなくなって京都の宇治に「末一稲荷」と称して祭られることになつた。」、と。

話は飛ぶが、生長の家の日本教文社発行、J・クレンショー著、訳者谷口清超『天と地を結ぶ電話』初版昭和三十年がある。同じく『アガシャの霊界通信上下』初版平成四年・正法出版社園頭広周監修もある。園頭師は昭和三十年にこの本を初めて読んで、この本に書かれていることは正しいと信じた。昭和四十八年、信次師が園頭師に「あなたはロスアンゼルスにあるアガシャ教会のことを知っていますね。あのリチャード・ゼナーを指導したアガシャの指導霊というのは我々の仲間ですよ」と言った時、園頭師は「それは自分が過去世で学んだものであり、それが正しいと信じた理由が理解できた。そして、生長の家の教義である「肉体なし物質なし」と「無限供給の法則」などが間違っていると知つたのは、この生長の家が出している『天と地を結ぶ電話』を読んでからであつた」と書いている。

故谷口雅春氏は、出口王仁三郎（王仁三郎は日本の宗教の誤りを覚醒させる使命を持って生まれた菩薩界の人と信次師は言っている）の許にあって、王仁三郎の口述筆記を分担した人である。このような理由で、出口王仁三郎の教えが生長の家の源流となるわけだが、大本教弾圧事件で一早く気運を察し、第一次弾圧の翌年には大本教を離れた在野に下つた。そして、アメリカ系の石油会社に勤務しているとき、古本屋でアメリカの光明思想の本にふれると大いに触発され、大本教時代、出口王仁三郎の「霊界物語」を筆録した時に学んだ万教帰一の教えをもって「生長の家」を開教したのである。それだけに、今までの在来宗教と違つた新気風に信者数も増え続け教勢も伸びることになる。信次師は「園頭さんは鹿児島島の地で二十四才までに男尊女卑の弊風を打破するために宗教団体をつくり、以後私の許へ合流することになっていたが、第二次世界大戦のために私も悟るのが十年遅れ、園頭さんもそれだけ遠廻りすることになつたのです」、と語り残している。

園頭師は戦場で谷口雅春氏の『生命の実相』にふれ終戦後、生長の家に入信、本部講師として数十年もの間、教勢の拡大に力を貸すことになる。これはアサンジャと舍利弗という過去世からのつながりというのが、その理由であろう。その後、園頭師は石もて追われる如く生長の家を辞め、後に高橋師に師事するが、月刊「正法」誌に園頭師はこう書いている。

「今から二五〇〇年前、インドのお釈迦様の時代に、いちばん、お釈迦様が説かれた「正法」に近い教えを説かれたのはアサンジャという方であつたわけですが、現在に於て、もっとも正法に近い教えが説かれているのは生長の家であります。「生長の家」はいわば、「正法」を知るための予備校みたいなものだと言えます。無神論者である大学教授や学校の教師が「人間は猿から進化した」というのは、無知ということで許せるとしても、神仏を信ずるといふ宗教家が、「猿から進化した」と信じ、且、信者にそのように説いているのは不可解なことです。

その代表的な人は、創価学会の池田大作会長であり、立正佼成会の庭野日敬会長であります。池田大作著『生命を語る』人類誕生の条件、進化論について、庭野日敬著『人間への復帰』人類はどうして生まれたか、を参照して欲しい。これとは反対に「人間は猿から進化したのではない。人間は神仏の子として、最初から人間として神仏によって誕生したのが人間である」と言われたのが生長の家の故谷口雅春総裁であります。

また、生長の家では「無限の供給がある」と祈れば必ず「無限の供給がある」ということを一つの教義としているが、生長の家の教えの欠陥は、「足ることを知つたら安らかな心」で祈るということをお教えないことにある。だから生長の家の信者が熱心であるのは、信仰によって心をきれいにするのではなくて、自分の飽くなき欲望を達成したいということで一生懸命に時間をかけて祈っている人が多いのである。私はそれを「信仰を利用し

た欲望肥大症」と名付けていた。生長の家が教えている「無限供給の祈り」というのは間違っているのである。このことは、アガシャが、得られるべくもないものを、得られるかの如く説く宗教家に注意せよ」と、警告しているのはそのことである。」、と。こう園頭師は述べているが、生長の家の教義と、生長の家が出版した『天と地を結ぶ電話』の中で説かれていることが相反すると言うのである。

また、園頭師は同じく正法誌の中で「谷口雅春教祖がこれまでに三度、夢の中に出てこられ、生長の家で説いてくれといわれたが、そうなれば二代目の立場はどうなるのだろう」、と。また、「夢の中で故谷口雅春教祖により演壇に導かれ講演をした」という記述もあるが、園頭師は生長の家を愛するが余り、日本の代表的な教団にしたいがために苦言もはいたであろうが、それも生長の家を愛し、谷口教祖に対して初めから他の人に持たない親しみを感じたからであろう。

生長の家は一番正法に近い宗教である。リチャード・ゼナーを指導したアガシャといわれる指導霊は、高橋信次師、園頭広周師の同一のグループである。その説くところは、まさに正法そのものであるが、その本が生長の家より出版されているというのもまた不思議である。不思議と云うより天上界の布石であったろう。

それは、第二次世界大戦が避けられないということになると、天上界は正法の流布が遅れるとわかった時に一早く手を打って、遅れた正法が計画通りに拡がるための布石がすでに打ってあったのだとウェブ・マスターは思った。信次師が亡くなる直前に、「全世界の二十パーセントが正法に帰依する」という予告があるが、その言葉が頭の中にスポットを受けたように浮び上って来たのであった。アメリカのロスのアガシャ教会に、そしてイギリスのシルバーバーチのグループに、また、日本の国際正法協会と生長の家に「正法」の計画があつた世からなされていたことに驚いたのである。

なぜ、今、シルバーバーチなのか

ロスのアガシャ教会の霊媒師リチャード・ゼナーを通してアガシャと名乗る霊が降霊して霊界通信を送ってくる。その記録をJ・クレンショーという元記者が『Telephone between Worlds』として一九四八年（昭二十三年）に出版した。それを訳本として昭和三十年（一九五五年）に谷口清超氏が『天と地を結ぶ電話』日本教文社刊とした。本部講師だった園頭師がそれを読み、何も知らないはずの信次師が指摘、説明を加えたと述べた。これはここにしばらく置いて、先を続けることにしよう。

『シルバー・バーチ霊言集』潮文社A・W・オースティン編・桑原啓善訳がある。これには、浅野和三郎、近藤千雄氏のものもあるが、この『Teachings of Birch』は初版一九三八年（昭和十三年）イギリスである。

ある時、園頭師は『シルバー・バーチ霊言集』を開いて、シルバー・バーチと名乗る霊の心霊絵画を見るとすぐ、「白羽毛！」と叫んで驚いた。というのも園頭師に見覚えがあったからである。

園頭師はまた言う。「アメリカだけでなく、イギリスにも既に正法の手があつた世から打たれていたことを知って感謝する。生きている間に、アメリカのアガシャ教会とイギリスのシルバー・バーチのグループと連絡をとって、正法の世界的拡大運動を図る基礎をつくって置かなければならないと思った」、と。

正法拡大への布石の一例

ニューヨークの「心霊オブザーバー」誌の編集者であるブレッシング夫妻は、一九四七年（昭和二十二年）ニューヨーク州のリレイ・デイルにあるオフィスで一連のパステル画を受け取る。このパステル画はロンドンのアディソン・ガーデンズの心霊画家S・A・マクドナルドが彼等に送ったものだった。マクドナルドはあらわれて来た霊人達の透視的幻影をスケッチして着色したものだと言っていたが、その絵の中には「白羽毛」と呼ばれる一アメリカ・インディアンと「チャン・フー・リー」という名前の一中国人とが描かれていた。この絵を受け

取って間もなくブレッシング夫妻は、カリフォルニアへ旅行した。勿論、この絵については彼等の事務員以外誰も知らなかった。この著名な二人の編集者はサン・フランシスコのフローレンス・スミス・ベッカーという人を通して霊界通信が行われている交霊会に出席した。この交霊会でのこと、霊媒を通して強い鼻にかかったインディアンの声で話し出した。

「私は白羽毛だ。私はイギリスで或る画家に私の肖像画を描いてもらった。私はその出来栄えに大変満足している。私は力と平和とをもたらすために来ているのである。偉大なる仕事をしなければならないのだ。」と言った。

そして、数日後ブレッシング夫妻はロス・アンゼルスのアガシャ・テンプル・オブ・ウイズダム（前出のアガシャ教会）といわれる小さな教会の中でリチャード・ゼナーが霊界との「電話器」となっていた。或る中国人が最初は中国語で話し、次いでブロークンの英語で話した。この中国人は通話の内容から、パステル画の中国人（チャン・フー・リー）と同一人物であることを証明した。この中国人は、例の絵について、リチャード・ゼナーの声帯を通して色の具合を説明し、いかにして彼が画家に印象を与えることが出来たか、また如何に彼がその出来栄えを喜んでいるかを説明した。こうして、一連のパステル画を受け取ったブレッシング夫妻は、カリフォルニア旅行中に、二つの降霊会の中でこれらの真実を知ることになったのである。ロンドンのモーリス・バーバネル氏を通して霊界通信を送る「シルバー・バーチ」と呼ばれるものは数人の霊で構成されている霊団である。その中の二人が白羽毛であり、チャン・フー・リーである。この霊団の二人がサンフランシスコとロスアンゼルスにそれぞれ通信を送ったのだ。

以上の記述は、アメリカで出版された『Telephone between Worlds』の訳本『天と地を結ぶ電話』と、ロンドンで出版された『Teaching of Silver Birch』の訳本『シルバー・バーチ霊言集』の二つの本によって合作したものであるが、完全に符合した。

こうした理由で、園頭師は「アメリカとイギリスに正法の手が打ってあったことに感謝する」という言葉になったのである。イギリスのモーリス・バーバネル氏は一九〇二年（頃）に生まれ、アメリカのリチャード・ゼナー氏は一九一二年（頃）に生まれているが、奇しくもモーリス・バーバネルは一九八一年に、そしてリチャード・ゼナーは一九八二年に前後して亡くなっている。二人は十歳程の年齢差はあるものの不思議にも三十五～六歳で共に、本を出版していることも特記すべきことだ。この二つの訳本を読んでもらうとわかるが、信次師の教えと同じことを言っている。リチャード・ゼナー氏も、モーリス・バーバネル氏も共に入眠状態で、声帯を利用して霊示が伝えられた。

しかし、高橋信次師は目覚めて自ら教えを説いたことが大きな違いだった。リチャード・ゼナー氏もモーリス・バーバネル氏も共に、あの世の高級霊から見たとき、霊示を伝えさせるには格好の人物であったということである。霊示を伝えさせるために、子供の頃から天上界より霊的に開発されて来たということである。それは霊格的には、信次師ほど高くはない、ということの意味する。ともに、人間のあり方を説く「八正道」が説かれていないし、共に霊界からの受話器にすぎなかったということである。

やがては、アメリカのアガシャ教会も、イギリスのシルバー・バーチの霊言を伝える団体も、信次師が説いた法（正法）に帰依しなければならないことになる。アメリカ、ヨーロッパ、日本に伝えられた正法は、それぞれを基点にして流布、拡大されるに違いないのだ。「人類の二十パーセントが正法に帰依することになる」と言った信次師の予告がクローズアップされるが、全世界に「正法」が流布された時、地上楽園完成への一步が印される。その為には世界の三カ所から「正法」の拡大を目指した新しい光は、確実に人類に流布、浸透して行くに違いない。その最も大きな「光」は、真のメシヤ・高橋信次師が説いた「正法」が、東方の国、日本から出て、地球救済の「希望の光り」となるのである。人類が平和に、仲良く手を取り合って人生の修行を謳歌できる日が来るまで、私達は手をこまねいて見ているわけにはいかないのだ。戦争と破壊という人間の小賢しい悪知恵が勝つか、神の誰れ彼れをいとわぬ「慈悲」「愛」が勝利するか。神の逆鱗に触れる前に、同時代の同期生の責任として、力を合わせ悪巧みをする人間に対して「反省と修正」をさせるという手を打たねばならないのである。人類は皆な兄弟なのですから。

昭和六十二年十二月中旬、園頭師は二度目の「アガシャ教会」訪問を果たした（一度目は同年六月）。その時に園頭師がその旨を話すと、『天と地を結ぶ電話』の著者のJ・クレンショー氏の夫人ブレンダ・ローランド・クレンショーさんは、ロンドンで生まれ、シルバー・バーチの教会でモーリス・バーバネル氏の下で霊媒をしていた時に、J・クレンショー氏と知り合い結婚をしたと園頭師は聞かされ、「現在、モーリス・バーバネル氏は既に亡くなり教会もなくなっているが、モーリス・バーバネル氏の未亡人は健在なので、私が紹介してあげましょう」と、なったというのである。園頭師は、「実にスムーズで、天上界から導かれているのであろう」と。

生長の家から出ている、『天と地を結ぶ電話』の話が長くなったが、昭和六十三年三月、ウェブ・マスターは長崎県の「生長の家総本山」を見学した。その日は、うららかな陽ざしを浴びた日曜日だった。日本でも一、二を競うという朱塗りの天を突くような大鳥居がすぐに眼に飛び込んで来た。大鳥居には「龍宮住吉本宮」とあった。正午すこし前の総本山は、想像に反して広大な敷地の中で出会った人は二十人足らずだった。千畳余りの拝殿には、数人がしきりに経本のようなものを読経していた。中に一人、齢のころなら十八～九の背の高い細身の青年が、豊に胸をつけばかりに祈っている姿が眼に焼き付いて離れなかった。整った顔をした良家の息子さんという感じで、とうてい賢い感じの人とは言えなかった。十八、九の青年は、年のいった人に比べて純心である。純粋な心を持った無知なる人を、宗教の名のもとに組織に組み入れてゆく巨大宗教の功罪を考えた時、著者は心が沈んだ。昭和五十三年、百万坪以上の敷地に百数十億という建立費をかけてつくられたというが、公園としても立派に通用する設備と整備がなされている。最も見はらしの良い所に谷口教祖家の墓地があって、特に目を引いたのは巨大な太陽熱温水器が設備されていた。谷口雅春元教祖が、出口王仁三郎のもとを離れ、その後、アメリカの光明思想にふれていったという進取の気質が、ここにもあらわれたのだろうかと考えた。

「正法」に最も近い宗教の見学を終えた一カ月後の四月末、故教祖夫人・輝子氏（九十歳）は、当地で亡くなったと新聞は報じた。そして同じく、昭和六十三年、『フライデー五月二〇日号』に「コツ然と二百二十万人が消えたミステリー」、生長の家信者が一年で三百万人から八十万人へ、と報じた。初代谷口雅春教祖とその未亡人の死後、急激に信者が減った様子を伝えた。「谷口雅春氏は神界の人です」と昭和四十八年に信次師は言い残しているが、バラモン教教主アサンジャ - の現代は、生長の家教祖・谷口雅春となったのである。

Home

「ヘレン・ケラーは障害者へ夢と希望をを与える使命の菩薩界の人だった」

高橋信次師は次のように言った。

「今まで、あの世へ帰ってすぐ、「やるだけやったぞ」という人はいませんね。最近では外人であります。ヘレンケラー、「やるだけやりました」といって天上界へ帰ってきました。それからシュバイツァー、アフリカで治療に従事した。この人達は菩薩界の人達ですからね。こういう人達は使命を持って出られた人です。日本では、例えば総理大臣であっても、「私はやってきました」という人はおりませんね。」と。これは長野県熊の湯に於ける講演だが、次に『心の対話』・高橋信次著を引用すると、

「ヘレン・ケラーという人を知っているでしょう。ヘレン・ケラー女史は物も見えず、聞えず、語れないという三重苦の身体障害者だったのです。彼女は生まれたときは元気のいい男のような女の子でした。なに不自由ない家で生まれたヘレンは、家族の温かい愛情の見守るなかで育ちました。ところが、二歳になる前に急性脳炎にかかり、高熱を起し、何日も意識不明の日が続きました。医者に見放されますが彼女は奇跡的に助かります。ところが、生命は助かったが、眼が見えず、耳も聞えなくなってしまったのです。耳が聞えなければ人の話もわかりませんから、口もきけなくなってしまう。ヘレンの運命は、ここで大きく変わってゆきます。ケラー家は悲しみのどん底に落ちてゆくのですが、両親はなんとかヘレンを助けようといろいろ手をつくし、やがて指で話ができるようになり、続いて相手の唇から話がわかり、ようやくの思いで自分の考えと意思を口で語れるようになってゆきます。こうして、ヘレンはハーバード大学女子部を卒業して文学士の称号を得ると、アメリカ国内の不具

者、黒人、貧乏な人たちのために社会事業を起こしてゆきます。彼女は、その社会事業を推進するために、世界各国を講演旅行して歩き、日本にも戦前と戦後を通じて、三回訪れています。私は実在界で彼女に会い聞いてみました。「あなたは、大変苦労しましたね。よくがんばりましたね...」といったら、女史は、「私は目が見えないために、不調和なものを見て心を乱すこともなく、耳が聞えないので不調和なことも聞くことがなかった。だから不調和な言葉を話すことがないので、絶えず神と話をすることができました。私は、本当にしあわせでした」と、いいました。心こそすべてであることを、女史は身をもって教えています。」と。

ヘレン・アダムス・ケラー (一八八〇～一九六八・昭和43年)



ヘレンケラー

アメリカ、アラバマ州出身。二歳のころ熱病のため三重苦になるが、気性のはげしい反抗的なヘレンをサリバン女史が根気よく愛情をもって教育し、一九〇四年、ハーバード大学ラドクリフ・カレッジを、サリバン女史に助けられて卒業するが、五カ国語を修得し、それ以後世界の目、耳、口の不自由な人達の救済運動を開始する。世界各地で講演し、日本へも一九三七年より三回立寄った。一九三七年(昭和十二年)には、八十日間にわたり日本各地を講演旅行をした。身体障害者に大きな希望をもたらし、福祉事業にもつくしたので、テンプル大学から人道文化博士、グラスゴー大学から法学博士の称号を受け、自伝などの著書が多くある。使命を持った光の天使ヘレン・ケラーは天上の計画によって自ら三重苦となり、その苦しみと、体験を通して世界中の目、耳、口の不自由な人々に力と勇気を与えるという使命をやりとげ帰天されたわけである。

高橋信次師は講演の中で、「わたしが道を誤まることがあったら、このようなことでショックを与えてくれ、このようにして教えてくれ、と約束して皆んなこの世に肉体を持つんです。光の天使といえども、この世に肉体を持つと道を誤る人も多いのです」と語っているが、ヘレン・ケラー女史は立派に使命を果され、サリバン女史もそれに協力をする光の天使であったに違いない。このように光の天使は、地上界に使命と目的を持ち、自ら悟れそうな環境を選んで出てくるのである。モーゼが奴隷の子として生まれ、王宮に拾われ社会の矛盾に目覚めてゆくように、また、イエスは左官の子として生まれ人々を救い、釈迦は王子として生まれるも城を出て、疑問と矛盾に目覚め悟っていくのである。地上界に出た光の天使が、この世での使命と目的をやり遂げられるように天上界はその環境を整えるのである。高橋信次師の講演より、天上界はどのように計画したか示したい。

天上界の計画の一例、釈迦の場合

「今から二千五百年前、インドのカピラというところに、ゴータマ・シッタルダー(釈迦)といわれる方が生まれます。それより以前約二千年前にクレオ・パローターといわれる道を説く人がエジプトに出ています。実在界(あの世)において、この地上界に出る光の天使たちの選考が始まった結果、クレオ・パローターの過去世を持つその天使がカピラという場所を自分自身が選び出生することになりました。インドを選んだ大きな理由は、自分自身を悟るにはもっとも都合がよい場所であり、伝道の環境が整っているからでした。カピラ・ヴァーストという環境は、まずコーサラという大国の属国で、小さい砦のような城市で、共和制体をとっている国であります。そのためにいつ敵から襲われるかわからない。そしてまたシュット・ダーナー王、マヤ妃という両親の間に子供がありません。母親は同じシャキャ族のコリヤ族というロッシニー河をはさんでデヴァダバ・ヴァーストという城市の娘であります。これはもちろん当時日本の戦国時代と同じように、非常に政略結婚というものがイン

ドでもはやっておりました。そういう環境をまず選んで生まれると同時に一週間目にして母親を「あの世」に引き取ることになっております。ややもすると、私達は死というものについて非常に恐怖心を抱くものですが、あの世から見れば、決して死は恐ろしいものではないのです。こういう環境の下において、ゴードマ・シッタルダーの義理の母親マハー・パジャパティにはナンダという子供ができてしまいます。これもあの世で計算してあります。そうして人生に対する無常を感じる環境というものを選定してくるのです。

このように環境は極めて不安定な状態です。武力もたいしてないし、大きな国が攻めてくればカピラなど一発でやられてしまいます。それから食事するにしても毒味する人がいます。敵のスパイが潜んでいるからです。このような不安定な場所にあっても、人間というものは慣れてしまえば不思議なもので、そういう環境の中においても育ってゆくものです。しかし、自分の生活環境の中から人間というものはなぜ生まれ、年をとり、病気をし、死んでゆくのかという疑問が心の中からドンドン湧き出て参ります。一方また、カピラ城の生活は優雅であり、春は春の館、冬は冬の館で、いつも取り巻きには美しい女たちが何人も仕えています。しかし、生活が優雅であればあるほど、シッタルダーは無常を感じていきます。一步城を出れば、酷しいカースト制度というものによって、生活環境は城の中とは百八十度異なっています。ここでも生活の矛盾につきあたります。同じ人間でありながら、生まれながらにしてこのような差別はなぜあるのだろう。ゴードマ・シッタルダーは考え始め、疑問は疑問を生んで自分自身で解決することが出来なくなってゆきます。しかし、父親のシュット・ダーナー王はなんとか自分の跡取りを安心させたいとして、やはり母親の里であるところのデヴァダバ・ヴァーストからヤショダラという娘を嫁に迎えます。十七才の時です。当時の王侯貴族というものは、一夫一婦でなく、一夫多妻でありました。当然、女同士の軋轢が生じて参ります。悩みは更に自分自身の作り出したものによって膨れあがってゆきます。

二十九才のおり、シッタルダーは、遂に家を飛び出す決心をしてしまいます。城を飛び出し、人間の苦しみというものをどのように解決していけばよいのか、一子ラフラをどうすればよいか。ラフラ出生の際には、父親のシュット・ダーナー王から二人で相談して決めよといわれ、ラフラと命名した。もちろんそう命名したのはシッタルダーであります。出家を妨害するという意味で、ラフラとつけた。ラフラとは障害物ということです。ラとは石、フラとは橋。当時は吊橋が多く、橋の上に石が置いてあっては危なくて渡れない。いつ吊り糸が切れるかわからないからであります。このようにして家庭的には不調和なゴードマ・シッタルダーでありましたが、ある夜、遂に自分自身の生老病死という苦しみの問題を解決するために出家し、その後約六年余り中インドを中心に修行をするのであります。」『高橋信次講演集』

それでは、『ヘレン・ケラー自伝 - 私の青春時代 - 』ぶどう社・川西進訳より、さわりを引用要約しよう。

『Helen Keller・The Story of my Life (一九〇二年)』

「ヘレン・ケラー自伝」はヘレン・ケラーが二十二歳、ラドクリフ・カレッジ在学中に出版されたものだが、生い立ちから執筆当時までの記録であり、原著発行以来、絶えず版を重ね、二〇世紀における優れた自叙伝の一つとして認められてきた。

「ヘレン・ケラー自伝」

「ヘレン・ケラーは一八八〇年六月二十七日、アラバマ州北部の小さな町、タスカンビアに生まれた。父方の先祖の中には、チューリッヒで聾者の先生になり聾者教育の問題に関する本を書いた人がいるのは、不思議なめぐり合わせであった。父親のアーサー・H・ケラーは南軍の大尉、母親のケイト・アダムズは後妻で、父親よりだいぶ年下だった。南北戦争のあとテネシー州のメンフィスに移り住んだ。四角い大部屋と小部屋が一つずつある小さな家であった。ヘレンの生涯のはじまりは、さして変わりなく、名前を何にしようかと議論百出した。父親は、牧師さんから、名前は何にしますかと言われた時、ヘレン・エヴェレットと決まっていたが、ただ祖母の名をもらうことになったということだけ憶えていて、「ヘレン・アダムズ」と言ってしまった。母親の、ただ一つの希望の光明はディケンズの『アメリカ紀行』にあった。それは、聾で盲であったにもかかわらず、教育を受けたというローラ・ブリッジマンのことが書いてあったことをぼんやりおぼえていたことであった。しかし、

聾で盲の人を教える方法を考え出したハウ博士は、もうとっくに亡くなっていることを知って、望みの消える苦しみを感じるのだった。そのような中で、ヘレンの教育のために家庭教師を探すことになった。父親が早速そのようにすると、二、三週間して、アグノス氏から先生が見つかったという心強いお返事を受けとった。これは一八八六年夏のことであったが、サリヴァン女史が、ヘレンの家を訪れたのは次の年の三月になってからだった。

私が覚えている生涯のもっとも重要な日、それは私の先生、アン・マンズフィールド・サリヴァンが来られた日です。それは一八八七年三月三日、あと三カ月で七歳になろうというときでした。その重大な日の午後、私は待ち遠しく黙ってポーチに立っていました。母の合図や、家で人があわただしく動きまわっている様子から、なにか変わったことが起りそうだということは、うすうす想像がつかいましたが、戸口の階段のところまで待っていたのです。私は近づく足音を感じ、母だと思って手を差し伸べました。誰かが、その手を受け取り、私を抱き上げ、腕の中にきつく引き寄せました。その方こそサリヴァン先生でした。翌朝、自分の部屋に私をつれて行かれて、人形をくださいました。それはパーキンス学院の盲の子どもたちからの贈り物で、ローラ・ブリッジマンがこしらえた着物を着ていましたが、それを知ったのはのちのちのことです。しばらくそれで遊んでいますと、サリヴァン先生は、手のひらにゆっくり「D - O - L - L (人形)」という字を書いてくださいました。私はたちまちこの指の遊びがおもしろく、とうとう正しく文字が書けるようになると、上機嫌になり、下に駆けおりて母に、人形という字を書いて見せたものです。

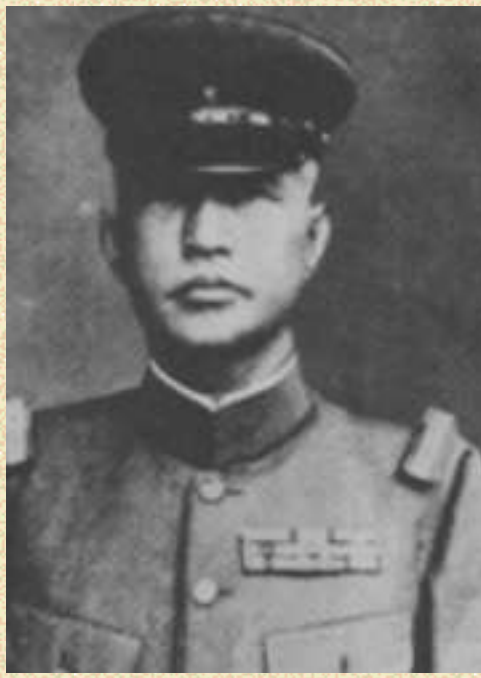
ある日のこと、新しいお人形で遊んでいますと、サリヴァン先生が私のひざの上に別の古い大きな布人形をのせ、「D - O - L - L」と書き、その言葉がどちらにも当てはまるのだということをお知らせしようとしました。その日は前に、「M - U - G (茶碗)」と「W - A - T - E - R (水)」という言葉で一もんちゃくあって、サリヴァン先生は「M - U - G」「W - A - T - E - R」は「WATER」だということをお教えももうとされたのですが、私はどうしても二つを区別できなかったのです。

私達は、スイカズラの香りに誘われて、それにおおわれた井戸の小屋に歩いて行きました。誰かが水を汲んでいて、先生は私の手を井戸の口にもっていきました。冷たい水の流れが手にかかると、先生はもう一方の手に、はじめはゆっくり次に速く「水」という字を書かれます。私はじっと立ったまま、先生の指の動きに全神経を集中します。突然私は、なにか忘れていたことをぼんやり意識したような、思考が戻ってきたような戦慄を感じました。言語の神秘が啓示されたのです。その時、「W - A - T - E - R」というのは私の手に流れてくる、すばらしい冷たい何かであることを知ったのです。井戸を離れたときの私は、学びたいという一心でした。すべて物が名前を得、その名前の一つ一つが新しい考えを生んだのです。」『ヘレン・ケラ - 自伝』

菩薩界の光の天使ヘレンケラ - は、ハンディを持つ世界中の人達に夢と光りを投げかけるといふ、今生の目的と使命を果たして帰天されたのである。



「石原莞爾将軍は神界の人だった」



石原莞爾

職業軍人と云えば、旧日本軍における国防と戦争を職業とする人達である。祖国を守る職業とは言え、有事には最前線に立ち、相手方を殺して相手の人生における魂の修行を中断させることになるのだから、その責任たるや重大で、戦争は人類最大の悪というのである。戦争を計画した者や間違った思想を説いた人、間違った宗教家は無間地獄という、神の光を完全に閉ざした最下位の暗黒の世界に住することになると前に述べた。この一つの例が「ヒットラーやスターリンは無間地獄にいる」とは高橋師の言葉である。この理由により職業軍人として階級の高い人には、霊格の高い人はいるはずがないとウェブ・マスターは考えていた。なぜなら、高い霊格の人は永い転生の中で人類はみな仲良くしなければならぬと悟っているので、職業軍人を選ぶこともないだろう、たとえ選んだとしても、その内に職になじめず、職を退くことになるのかなと思っていた。

石原将軍は、「世界最終戦論」を著し、日本、韓国、満州、中国、ビルマ、インド、インドネシア、フィリピン等の東洋諸国は、皆仲良くしなければならぬという「大東亜共栄圏構想」は、当時の青年将校の理想であり、尊敬の的であったと言う。サテ、その石原将軍について、山形講演会の時に聴講生が「石原将軍はあの世でどこへ行っておられるでしょうか」と質問をした。高橋師は「この方は軍人としてはめずらしい方で、神界の方です」と言っているが、高階級の職業軍人の中にも神界の人物がいたのである。勿論、師は「めずらしい」という話振りであったが、中でも石原将軍はその智徳ゆえに将軍にまで推挙されたと想像できるが、将軍として戦略を立て戦勝へ導くかたわら、いつも心の片隅には戦争の愚かさとむなしさ、人類は兄弟、皆仲良くという思いがあったに違いない。そして来世は、戦争には手を貸すまいと決意しているに違いない。

石原将軍は山形県酒田の人で、士官学校、陸大の優等生で天才的な戦術家といわれ、法華経の信仰厚く部下を愛し贅沢を嫌い、日常生活は簡素を極め聖者と仰がれる人だったようだが、作家S氏は次のように書いた。「日本陸軍の謀略でカイライ政権・満州国がつけられた。その首謀者は石原大佐であった。そして、その結果、十数年にわたる中国との戦争を誘発し、中国残留孤児という後遺症を残すことになったが、彼の私生活における清廉潔白さをもってしても、今日まで残留孤児という後遺症を残したことの責任を解除する理由にはならないだろう」と結んでいたが、戦勝国も敗戦国もだれ一人として傷つかないものはなかった。戦争は人類最大の悪なのだから、来世は、「大東亜共栄圏構想」と云わず「宇宙共栄圏構想」を策し、ユートピア完成に力を尽くして欲しいと願わずにはいられないのだ。



「宮沢賢治は菩薩界の人だった」

高橋師は「雨二モ負ケズ」の詩を指さし、「菩薩界の人ですからね」と言った。



宮沢賢治

宮沢賢治は明治二十九年（一八九六～一九三三）岩手県に生まれ、三十八歳の生涯を閉じた。小さい頃から身体は余り強い方ではなかったが、成績は優秀で、農林高等学校に学び、農業には欠くことの出来ない土壌についての学問を修める。盛岡中学のときには、お寺に下宿したり坊主頭にして皆を驚かせたが、学校の教壇に立ったり、東京に出て文筆生活を送ったりした。それから岩手の故郷に帰り、自らも農民と共に生活をし、指導もした。実家は浄土真宗だったが、賢治は法華経の熱烈な信者で、道端の石ころ一つにも、すべて命があるのだという考えは、一生涯貫き通す真理だった。農民と共に歩み、寒村に光明を与えるという使命を持った人だったのだろう。法華経の意味をわかり易く書いた赤い表紙の本を、知り合いの者に千部ぐらい刷って配ってくれというのが遺言だったようだが、短命でなかったなら、高橋師と共に正法流布に尽されたかもしれないと思うと残念でならない。高橋師存命中の一時期に、赤い表紙の『心行』が出されていたことがあるが、これを思い出すにつけ想いを深くする。そして、『銀河鉄道の夜』などの遺作群は亡後認められることになるが、特に『銀河鉄道の夜』は、宗教的モラルの色濃い初期のものから改稿のプロセスでの、あのファンタジックなタッチと幻想豊かな作風を考えると、宇宙即我（うちゅうそくわれ・偉大な魂の最高の境地）とか、幽体離脱の高段階の一つかもとウエブ・マスターは考えるのだ。あの純朴な賢治の遺影を見るにつけ、人間の段階は職業にあるのではなく人格、人間性にあるのだとつくづく思い知らされる。

宮沢賢治は、心の超人格、超人間性の菩薩界の人だったのである。





「イエス・キリストと新事実」

信次師の著書、テープ、ビデオの中にはイエス・キリストについての多くの言葉が残されているので、それを見てみたい。

(1)、「イエス・キリストが紀元前三十二年に、肉体を持ち、そして、あのエルサレムにおいてその神理を説いた時は、人間の心は、殆んどが悪魔の状態でした。パリサイ人をはじめとして、悪魔の支配を受けていない人は少なかったのです。現代はどうかというと、動物霊に犯されています。万物の霊長たる人間が、己の心を、己の本性を忘れたため、その黒い想念がそのような動物霊の支配を受けているというのが実情であります。私達の周囲の環境をごらん下さい。自分本位、自分さえよければよい、他はどうなってもいいといった不調和そのものになっているではありませんか。今日、夫婦というものの多くは破壊寸前に来ております。性の混乱、生活の目的がなんであるかを忘れてしまった結果であります。人間は、その使命に目覚めなければなりません。己自体の心というものの存在を明確化し、そして、その使命を悟るならば、この現象界の調和は可能なのです。これ以上放っておくと、地上はやがて破壊に至ります。しかし、そのうなことがあってはなりません。」

(2)、「ゴータマ・シッタルダー滅後五百年、即ち今から二千年前、イスラエルの地に、イエス・キリストが生まれております。彼、インマニエルは、十歳の時に実在界へまいりまして、「お前は、あの病める大衆を救わなくてはならない」といわれます。紀元一年にイエスは生まれたといわれていますが、それは大きな間違いです。彼は紀元前三十二年に肉体を持っております。イエスは実在界から帰って来て、自分の家の前の川の流れを見た。そこには魚をすくって商いをしている人々があつた。あの世でいわれた通り、「よし、自分は人を漁る人となろう」と、道を説いていったのです。彼は少し強引に神理を説いているうちに、心の中に間違いのある人達には、そのことを徹底的に追及し、「あなたは私の話を聞く機根がない、出て行きなさい」ということをやります。そのためにイエスに反感を持つ人も多少出てきたのです。イエス・キリストは、三十何歳で死んだということになっておりますが、これも間違いです。彼は五十四歳でこの地を去る時に、弟子達にそれぞれ場所を変えて教えてゆきます。キリストは、磔刑になって三日後に復活して弟子達の前に姿を現わし、それから五十日目に、ついに弟子達は過去の言葉を語り始めます。聖書の中には、精霊に満たされたと書かれてあります。」

(3)、「キリストが肉体を持って出る時は、僕が天上界からキリストを指導することになっているんです。僕が肉体を持つ時はキリストが指導してくれるんです。キリストが出たあの時代は、平気で殺人が行なわれるという非常に乱れた時代でした。だから尚のこと愛の大事さを説かなければならないということで、キリストが出て「愛の大事さ」を説くことになったのです。しかし、出ればユダヤの教師やローマの勢力に反対されて十字架にかけられることはわかっていた。だから、僕はなんべんもいったのです。「お前は今度は厳しいぞ、大丈夫か」とそういったら、「大丈夫です。十字架にかかって復活するという奇蹟を見せないと、大衆は信じないでしょう。教えを説く期間は短いけど大丈夫です。きっとやってきます」といってキリストは肉体を持ったのです。十字架に掛けられた時、キリストの意識は既に天上界にかえていたから苦痛でもなんでもなかったのです。」

(4)、「私は皆さんに信じろと言ったことはないですよ。どうしてだろう、なぜと疑問を持ってといています。疑問を追求してゆくと最後は神理に到達するからです。イエスさまが言われたんです。お前は疑問を持ってといふからいかん、「信じろ」となぜいわないかと。イエスさまとはちょっと違うんです。そうすると、イエスさ

まは、それでは困るんだ、中途半端になってしまって信じさせた方が奇蹟が起るんです。疑問を持っている人よりもね、拒否反応を持っていない方が速いんです。信ずる心があれば奇蹟が起るのが速いのです。」

(5)、「海上を歩いたイエス・キリストは光子体のイエスであり、肉体のイエスではありません。これをみた弟子達の眼は、肉眼のそれではなく心眼(霊視)であったのです。しかし弟子達は、それが心眼であったか、肉眼か、彼らにはその自覚はまだありませんでした。数斤のパンで数千人の飢えを満たしたことは事実です。その霊能者がなぜ捕えられたのでしょうか。十字架にかけられることを、イエスは事前にわかっていました。そして死後の復活まで知っていたのです。実在界から教えられていたからです。」

(6)、「十字架と復活。これによって、愛の神理は全世界に伝播し、イエスの神理は二千年を経た今日でも、人々の胸に刻み込まれることになりました。さて次に、「わが神よ、わが神よ、なんぞ我を見棄て給いし...」とあります。十字架上のイエスは、息絶える寸前、こう大声でいったと、マタイ伝では記されています。ところがルカ伝二十三章では、「父よ、わが霊を御手にゆだね」といっています。いったい、どちらが本当なのでしょう。イエスは、事前に、十字架も、復活も知っています。ユダが自分をバリサイ人に売ること、ペテロが嘘言を吐くことも知っていたのです。新約聖書にしる、伝典にしる、いろいろな人の手によって書かれてきました。聖書はイエスの手によったものではありません。とすると書く人の機根なり、心の在り方によって大分表現が違ってきますし、間違いもあるでしょう。さらには、これを訳する人の心構えによっても変わってきます。マタイ伝、ルカ伝、どちらも本当だ、という見方もあって、それなりに統一した解釈を下している人もあるようですが、イエスのこの時の言葉は、「神よ、人々を見棄て給うな、その為す所を知らざればなり」ということです。聖書にしる、伝典にしる、文字にとらわれると、その真意を見失ってしまいます。全体の大意をつかむことが大切です。全体の大意で、それが本物か偽物かの判断がつくようにしたいものです。

(7)、

○ 私の指導霊はイエスがイスラエルに生まれたとき、左官職のヨセフやマリヤを選んだのは「人生に疑問を持つために」と言う。

○ 世界の平和は、まわりくどいようであるけれども、一人一人が「正法」を知り、心を安らかにし調和を図る以外にない。釈迦、キリストが説かれた教の原点に帰らなければいけない。

○ 私は釈迦、キリストの教が永い間に歪められてきたので、その埃を払って教の原点を再びあきらかにするために出てきたのです。

○ 釈迦が肉体を持った時はキリストが天上界から指導することになっていますし、キリストが肉体を持った時、釈迦が天上界から指導するのです。釈迦の教えとキリストの教えが同じであるのは、そこに原因があるのです。

○ イエス様は、天上界ではイマニエル・イエス・キリストと呼ばれています。ゴータマ・ブッタはカンターレといいます。モーゼはモーゼです。

○ こうして私達は過日、天上の世界に於きまして会議をやりました。私の隣りにはインマネール・イエス・キリストがおりまして司会をやり、その隣りにはゴードマ・ブッタ・カンターレがおります。その隣りにはガブリエル、サリエル、ウリエル、こちら側にはモーゼ、さらに又光の天使約十人ばかり、そして、地球上の状況を次々と報告して来ます。 「東北地区研修会・一九七六年六月」

○ イエス・キリストは肉類も結構食べたし酒も強かったようです。釈迦も、食べ物にこだわらず、出されたものはなんでも食べたものです。

○ 現在のキリスト教会で説かれていることは、キリストが説かれたそのままの教えではなくて、パウロが説いたパウロ教なのです。キリストが説いたのも、釈迦が説いたと同じ正法なのです。

○ お釈迦様がマヤの脇の下から生まれ、七歩歩んで「天上天下唯我独尊」とか言ったとかいう伝説があるが、あれは後世の人々が神格化するための作り話しであり、またイエスにはマリヤの処女懐妊説があるが、いずれも神のように祀り上げてしまった人間の偽説であり、このような事実はなかった。
『心の発見』

○ 「人間は罪の子である」と言っているのはキリストの弟子パウロが言い出したことで、キリストは「人間は神の子」であると言われたのです。

(8)、「大日如来といわれている方は、釈迦牟尼仏が亡くなられてから二十五、六年後に神理を説かれた方です。ゴードマ・シットルタは特に慈悲ということについて説きました。愛ということは説いておりません。みなさんは、慈悲というとなにかといえば愛だと答え、愛とはなにかといえば慈悲と答えるでしょう。大体、釈迦系の方は愛というものを知らないのです。釈迦系の方は「愛」といえばいやらしい愛を思い出す人が多いでしょう。なぜ、そのようになったかと申しますと、その当時のゴードマ・シットルタは非常に恵まれた環境におりました。特に女性関係において第一夫人、第二夫人、第三夫人とおり、その外、カピラの城中に沢山の女の人達がおりました。そのために、悟れないのは女性問題が障害になっていると考えたのです。大日如来といわれる方は当時、マガダ国におられまして学者でした。慈悲だけでは人は救えないのだ。愛も必要だということで、この方が愛を説くということになったのです。弘法大師(空海)という方は、竹林精舎を寄進されましたガランダという方で、大日如来はガランダの娘婿にあたる方です。あの世に帰った時に大日如来と名付けられたのです。この方が慈悲と愛の関係について詳しく説いたのです。それでもまだ愛の説き方が足りないということで天上界からイエス・キリストを出すということになったのです。キリストは、ですから「愛」ということを重点に説きました。大日如来のグループの中には、ですからのちにキリストの弟子として出られた方もいます。

(9)、「イエスの輪廻、循環の神理」

イエスは神理の中に輪廻の姿を随所に語られています。たとえば、「すべて剣をとる者は剣にて亡ぶなり」「汝ら人を審くな、審かれざらんためなり」「汝ら人の過失を免さば、汝らの天の父も汝らを免し給わん」など、いたるところで語られています。これは因果の法、循環の理を説かれているわけです。

「バプテスマ」

次に、バプテスマですが、洗礼を受けねば救われない、というのはザンゲをいっており、洗礼とはザンゲを意味したのです。それが、いつの間にか洗礼は儀式にかわり、儀式が済めば、どんな悪人も救われる、となったようですが、そんなものではないのです。ザンゲとは反省であり、過失をあらためることです。ザンゲの証が洗礼というかたちをとったわけです。

「キリストの再臨」

次に、キリストの再臨ですが、キリストとは神理（光）救世主のことであり、神理の再臨はザンゲによって、各人の心によみがえるものです。イエスという方が再臨し、洗礼の儀式を済ました者を救い、そうでないものを地獄に落とすということではありません。しかし、この点は、いまは考えないでいただきたい。人間は、とにかく、物事を三次元的、物理的にしか考えることができず、聖書の文字を、そのままのみにする傾向がありますが、要は、聖書にしる、伝典にしる、書かれている文面の真意を理解し、神理を汲み取るようにしないと、間違いを犯し、一貫した神理として理解できません。

(10)、「イエスが十字架にかけられた。そして殺されました。あのような偉大な光の天使が十字架というはりつけの刑に処せられたことは、普通では理解できません。そこで、後世の人達は、イエスは人類の原罪を背負って十字架の人となったと伝えています。これも理由の一つです。ところが二千年前のイエスは、なかなか気性の激しい人だったのです。しかもものすごい霊眼を持っていたから、人を見た瞬間、そのひとの心を見抜きます。魔王の心を持った人のうしろに、魔王が控えているのが見えるのです。つまり二重写しになって人の姿がみえます。このためイエスは、その魔王に向かって「お前はここから立ち去れ」と一喝される。一喝された相手は、自分に向かっていっていると思い、イエスというやつは怪しからんと憎しみをいただきます。イエスは本人にいていっているのではなく、憑いている魔王にいていっているのですが、いわれた本人はそれが見えないため、自分だと錯覚します。もともと自分の心が魔王をひきよせているのですから、本人といっても差し支えないのですが、しかし、イエスは魔王に向かって叫んでいるのです。ともかく、こうしたことが重なって、あのような劇的な死を遂げるのです。したがって十字架の原因は、魔王に憑依された人達の心ない行為にあったのですが、さらにその原因を求めると、気性の激しさにあったといえます。」



(11)、「イエスにしてもそうです。左官の家に生まれ、はじめは左官をしながら「愛」を説きました。しかしやがて悪魔から人々を救うために、伝道一筋に、その生涯を投げ出し、聖書に見られるような、数多くの奇跡を残し世を去ったのです。いたずらに殿堂に莫大な金をかけ威厳を誇らなくとも、人間それ自身の心の尊厳性こそ知るべきでありましょう。またそうした金があるなら、困っている人に分かち与えるべきでしょう。この大地は神の神殿であり、我が心も神仏を宿す大神殿であるからであります。釈迦の時代、イエスの生存当時に、はたして現代の仏閣や教会というものが存在していたでしょうか。」

(1 2)、

○ 仏教でも、キリスト教でも本来の教えは、人間の在り方を説いているといえよう。

○ 「私を生んだ母は、過去世に於てキリストを生んだマリヤです。」 『心の発見』

○ かつてイエス・キリストといわれた方がアメリカに生まれます。シカゴという処へ生まれます。それが今から百八十年後になります。その時に、みなさんは天上界にいて協力するのです。(昭和四十八年)

○ 「天に在しますわれらの父よ」は、現在の教会キリスト教にあるパウロ教。「大地なる母に感謝する」は、原始キリスト教。

○ 現在、私の周囲にはイエス系ではパウロ、ヨハネ、ヤコブ、シモン、その他関係のあった人達もいる。やがてモーゼ系の縁の深い人達も名乗りをあげるだろう。 『心に法ありて』

Home



「○木氏は玄奘三蔵法師の馬の手綱を取った人であった」

信次師の著書を出版している三宝出版がある。営業部員であった○木氏は、「玄奘法師の時代(七世紀)には玄奘法師の乗られた馬の手綱を取られた人」と、信次師は言い残した。

○木氏が、信次師の前で霊道を開いた時、園頭広周師の前に「五体投地の礼」をして「インドの時はお世話になりました」と礼を言った。五体投地の礼は今でも比叡山で行なわれているが、現在、インドではブッダガヤの大塔、釈迦が悟りを開いた所で五体投地の礼をしている人達が多い。中にはチベットから何百キロも、五体投地の礼をしながら来る人も多い。これはインドの時の奴隷階級の人達が貴族の人達に対する礼だった。古代インドの時代、舍利弗(シャーリープトラ)の過去世を持つ園頭師はバラモンの貴族階級であったが、その時(紀元前五世紀)の記憶を蘇らせ、○木氏は五体投地の礼をしたのである。彼は、古代インドの釈迦の時代にはヘイマカという名前で、園頭師の侍従をされていたことが明らかにされているが、七世紀の玄奘三蔵法師の時代には三蔵法師の馬のたずなを取られたというのだ。

< 三蔵法師は誰か >

高橋師の分身に不空三蔵がいる。三蔵法師はこの不空だと言う人もいる。「不空は北インドに生まれ中国に入り密教を伝えた人」という高橋師の記述が残されており、通説の「中国からインドに入り仏典を持ち帰った人」に相反する。今はこれには触れない。

< 八戒は園頭師だった？ >

中国の唐の時代の学僧である玄奘三蔵は、禁を破ってインドへ行き、十七年かかり大般若経を持ち帰って、あの有名な般若心経に集約する。大唐西域記はその旅行記であり、孫悟空らの活躍する西遊記は、その旅行記から説話化されたもので余りにも有名だが、平成八年七月、その辺の事情を園頭師に尋ねて見ると、師はしばらく意識の中に解答を求めておられたが、「三蔵法師の供をした一人でした」という解答だった。「孫悟空や八戒がお供の説話化されたものですか」と尋ねると、ウンとうなずかれ手で丸をつくられた。釈迦の古代インドの時代、シャ - リ - プトラ（舍利弗、現代の園頭先生）とマハ - モンガラナ（大目連、現代のニュ - ヨ - クの大谷氏）は大の仲よしで、共に釈迦に帰依したことは他の項でも述べたが、現代の大谷氏が寝ている時にググ - ッと体が持ち上がり空の彼方に連れて行かれると、そこに高橋師が立っておられ、両手を広げて見せられた中に生まれ変わりのすべてを見た、という話（坂本龍馬の項を参照のこと）があるが、如意棒を自由自在に操る孫悟空も観音様の手の上で遊ばされていただけ、という話しに似ていて、孫悟空が大谷氏で、八戒が園頭師ではなかったかと推測するのである。



「ケネディ大統領の死」

高橋師の高弟に村上宥快という人がいたが、自著『調和への道』には次のことが書かれている。

「恩師がこの世に在られた時にこんなことを申された。前アメリカ大統領、ケネディ氏の死について三カ月前に知っておられ、それは彼の不調和な心への警告であった」、と。

アメリカ合衆国では、一九六一年（昭和三十六年）民主党のケネディが大統領に就任し、ニューフロンティア政策をかかげ国内改革をすすめるとともに、対外的にはフルシチョフと手を結び世界平和の維持に努力していた。ところが、アメリカ合衆国の勢力下にあったカリブ海では一九五九年にキューバ革命が起り、カストロが一九六一年に社会主義宣言を発し、合衆国はキューバと断交した。この時、ソ連のフルシチョフはこれを利用して、ここにミサイル基地の建設をはじめめるが、これを察したケネディは海上封鎖によりミサイルを撤去させた（キューバ危機）。しかし、この後もキューバは反米態度を強化していることは衆知の通りだが、このような軍事的、政策的背景の中で、一九六三年（昭和三十八年）ケネディ大統領は暗殺されたのである。アメリカ合衆国の眼と鼻の先に社会主義国が建国されたことに対して、アメリカは我慢ならなかった。そして、タカ派議員に

としては格好のマトだったことは疑う余地もない。このような背景があって、先の『調和への道』は、次にこう記述している。「彼が生きてると、キューバに対して核のボタンを押しかねないので、あの世から処置をとったとのことだった」、と。

この記述に対して、これをそのまま受け取ると「天上界は暗殺者も送り出すのか？」という声も聞えそうであるが、決してそうではない。それはこうである。ケネディの不調和な心が、暗殺という不測の事態を招いたということであり、その縁よりはずれることが出来なかった。これもまた因縁の法であり、悪因悪果であったのである。それからのケネディ家には、色々な問題が噴出していることは衆知の通りであるが、これは名門ケネディ一族にとって、人生のあり方、心のあり方に対する警告なのであろう。

サテ、「キュ - バ危機」の時、米ソは合わせて三万の核兵器を持っていたといわれるが、先のアイゼンハワ - 大統領は演説の中で「核兵器も通常兵器と同等に使用してもよいと思う」、と述べたが、すでにその風潮は芽生えていたのである。



「マイトレーヤー（弥勒・ミロク）は高橋一栄氏として生まれ変わった」

高橋師は、「妻の一栄は古代インドの釈迦の時代のマイトレ - ヤ - であり弥勒（ミロク）です」と、言い残した。

マイトレーヤーは、なぜ未来仏と言われたか

その種の本に「やがて現われる真のメシヤはミロク（弥勒）かマイトレーヤーか？」というタイトルを見受けるが、高橋師はマイトレーヤー、ミロクについて次のように述べている。

「釈迦の時代、マイトレーヤーは大バラモンの家系に生まれ、バラモンの師といわれた大叔父さんはババリーという名で、実在界（あの世）では阿しゅく如来（後に、日本に神武天皇として生まれられた方）と呼ばれました。マイトレーヤーは、小さい時からバラモン経典でヴェダーやウパンシャドを学び、読み書きは得意でした。マイトレーヤーが二十一歳の時、ババリーはマガダ国のラジャグリハ郊外のグリドラクターという山にゴータマ・シッタルダーという仏陀がいると神示を受け、弟子の中から十七人（男性十三人女性四人）を選び、釈迦のもとで学ぶように命じます。その時、百二十歳のババリーは言いました。「これでマイトレーヤーとも会うことはできまいが、ブッダの弟子として自分を悟るが良い。お前の名を「ミロク（弥勒）」とつけてやろう。ミロクとは、慈悲と調和ということである」と優しく言うのでした。」『心の発見』

マイトレーヤーをはじめとする十七人は、長い旅のあと仏陀に会い、その場で弟子になった。マイトレーヤーをはじめとして女性も入門を許されるが、彼女達は釈迦が衆生を集めて説教をする時に、鐘を鳴らして「〇〇において説教があります」と村人達を集めるのが主な仕事で、いつも釈迦のそばで生活しているマイトレーヤーは、よく未来のことを聞かされていた。仏陀（釈迦）が八十一歳でこの世を去った時、マイトレーヤーは六十二歳で竹林精舎（ヴェルヴェナー）にいたが、釈迦没後九十日目にマーハー・カシャパー（大架葉）を指導者として第一回目の結集をすると、この結集で、釈迦の四十五年間に説かれた教えを後世に伝えるために分担をした。ある者は暗記し、ある者は絹織物に記録して残した。それからマイトレーヤーはパラナシーのカパリーに帰り、そこで多くの弟子達に仏教（正法）を指導するが、彼女は釈迦から聞いた未来のことを詳しく書き残したので、特に未来仏と言われるようになった、と高橋師は説明している。そして、釈迦滅後七百年後（現代から千八百年くらい前）に、竜樹（ナラジュルナ）がこの世に出て、マイトレーヤーの残した記述を特に記したので、マイトレ - ヤ - を「未来仏」といったようである。このようにマイトレーヤーはババリーによって「ミロク」と改名してもらったことになり、「マイトレーヤー」も「ミロク」も同一人物で、メシヤではなかった。

高橋師は、ある時、園頭師に次のように話している。

「園頭さん、僕たちが今度、誰を父とし、母とし、誰を妻としてこの世に出るかを決めたのは寛永二年（一六二五）でしたね。僕は、インドの時のヤショダラ（釈迦の妃）と一緒に出てくれないかと頼んだが、「わたしはインドの時、随分苦労しましたので、今度は休ませてください」というので、それならということでババリーのところからきたマイトレ・ヤーに頼んだんですよ」、と。

ヤショダラにしてみれば、インドで仏陀の妻となった道はきびしかったわけである。一人の女性として、妻としての道乗り越えて夫を人類のために捧げる道はきびしかったわけである。

マイトレ・ヤー（高橋一栄氏）の思い出

「ゴードマさまが最後に申されたお言葉は、「自分の心を信じなさい」とあり、また、「今は暗くとも明日になれば、東から陽は昇ってくる」 また、「私が去っても、お前達の心の世界にいつもいることを知りなさい」といわれたことが、私には未だ昨日のこのように想われます。私は、第一回の結集が終った後、生まれ故郷のカパリーに帰り、多くの弟子達に仏教を指導しました。私は特に、私が将来再び肉体を持ってジャンブドゥヴァのケントマティー（東の国の日本）の都に生まれるときは、道路は美しく、建物はルビー、ダイヤで飾られていて、いながらにして遠方と話ができる世界に、とゴードマさまが常に私に申されていたことを、人々にいい遣したのをごさいます。そのために、私は未来仏といわれておりましたが、当時の皆さまと一緒にまた現象界に出ることを遺言して、七十八歳でこの世を去ったのをごさいます。」

このような理由でマイトレ・ヤーが未来仏と言われ、マイトレ・ヤーが世界を救うという説の根拠になったようである。そして、マイトレ・ヤーはマタレー、タレイヤー、サチとも呼ばれ「幸」「幸子」の語源となるが、このように「幸」、つまり幸福を呼ぶ人という意味で「未来を救う人」と、なったようである。

昭和四十八年十一月、関西の講演会でのこと、高橋師の指示によって、インドのときのように聴講生を代表して、園頭師が質問することになった。「なぜ、ミロク菩薩を未来仏と言うようになったのでしょうか」

「弥勒菩薩は五十六億七千万年後に現れて衆生を救うことになっていますが、それは違います。如来が出生して法を説き、この世を去るときには、この次には何年してどこに生まれるかを予言して死ななければならないことになっていきます。釈迦の時には、弥勒（マイトレイヤー）がその役目をするようになっていました。それで弥勒は、「釈迦は二千五百年後に東の国ジャブドーバーに生まれる。その時は私達もまたともに生まれる」ということを記録したのです。東の国ジャブドーバーとはこの「日本」のことをいったのであります。インドの時は、ジャブドーバーのケントマティーといっていました。ケントマティーというのは都のことです。

弥勒菩薩が下生する時にはその都は、道路は平坦で平らかで、家は玻璃で美しく輝いていると書かれているのは、釈迦は、自分が死んで二千五百年経った時に、日本という国がどういう国になっているのか、その時の東京はどうなっているかということすべて知っていたのです。その通り道路はアスファルトで平坦になり、家々はガラス窓で光っています。弥勒菩薩は、「その時は私もまた釈迦とともに生まれる」と記録に書き残したのですが、釈迦の死後、涅槃に入った釈迦が再び生まれて来られることはあるまいと考え、後世の人が、「釈迦が生まれ変わって出る」という所を削ってしまった。そのために、弥勒菩薩だけが生まれて出てくると伝えられ、やがて弥勒菩薩下生経というお経がつくられることになったのです」と、高橋師は述べたのである。

マイトレ・ヤーは、釈迦教団（ブッダサンガー）に入門を許された女性集団の中の一人だったが、読み書き、すべてに聡明であった彼女は釈迦のそばに使え、ブッダより聞いた未来予言を後世に書き残し、今世は高橋信次師の妻としての、人生と魂の修行があったのである。

その人の名を高橋一栄と言った。



「楊貴妃は、マリリン・モンローとなった」

高橋師は、「楊貴妃は、今世はマリリン・モンローとして生まれ変わった」と言い残した。

楊貴妃は、「長恨歌」をもとにした悲恋物語の主人公として「源氏物語」にも登場している良く御存知の女性である。

京都や横浜には楊貴妃観音、楊貴妃の玉すだれ、さらには山口県の楊貴妃の墓というものまである。これは名を残した人の常だが、こうした渡海伝説は、キリストとともに根拠のないものかもしれない。

「引き裂かれた愛」に涙を誘われた世界的なヒロインで、中国の唐の時代に皇帝玄宗が寵愛した女性である。玄宗が即位してしばらくは国政も改革され、安定した時代を迎えるが、晩年には楊貴妃の一族を要職につけたり、彼女に心を奪われ政治に熱意を欠き政治は乱れていった。絶世の美人として著名な悲運の女性だが、唐の盛りに登場した楊貴妃もまた当時にとっては、美人とはなによりも豊満であらねばならなかった。史書によると、楊貴妃に玄宗を奪われた他の愛人たちは、彼女を「肥婢（ひひ）」とののしるが、楊貴妃こそはグラマー全盛期を代表する肉体派だったのである。

それから、唐代の長安の東北三十キロに華清池というかつての温泉郷に離宮を変え、玄宗は楊貴妃と住みつくが、白楽天の「長恨歌」にあるように、不世出の賢君と仰がれ、唐中興の祖となった玄宗が楊貴妃におぼれて政務を忘れ、朝礼にさえ出廷しなくなる。こうして、楊貴妃という珠玉を得てわが世の春をうたっていた玄宗だが、楊貴妃は盛唐、爛熟のシンボルであると同時に、一方で大唐帝国のたそがれを告げる使者ともなったのだ。

一方、マリリン・モンローは、アメリカ映画史上、「グラマーな永遠の美女」といわれ、三十六歳で謎の死を遂げるという悲運の女性だが、同じような道を歩くことになるとは不思議であった。



「法然は神界の人でした」

高橋師は「法然は神界に位置する人」と言い残した。

法然「一一三三～一二一二」は、浄土宗を開いた僧で、源空、円光大師ともいう。天台宗を学び、四十三歳の時に浄土宗を開くが、「南無阿弥陀仏」の念仏を唱えて阿弥陀仏にすがれば、極楽に行き救われるというもので、広く武士や農民の信仰を得た。親鸞は法然の弟子の一人である。



「エマニエル・スウェンデンボルグはイエスの弟子のヨハネであった」

エマニエル・スウェンデンボルグ（一六八八～一七七二）は、「私は二十余年間にわたり肉体をこの世に置いたまま、霊となって人間死後の世界、霊の世界に出入りしてきた...。」という言葉で始まる『スウェンデンボルグの霊界著述』という本を書いた人物で、大霊媒というだけでなく物理、天文、生理、経済、哲学などの分野で十八世紀最大の学者と言われた人。スウェーデンの貴族として生まれ、自らの予言した日に英国ロンドンで没したが、この霊界著述はロンドンの大英博物館などに今でも大切に保存されているという。信次師は、「スウェンデンボルグはイエスの弟子ヨハネであった」と言い残した。聖書には三人のヨハネが登場する。スウェンデンボルグは「十二使徒の聖ヨハネ」であった、と信次師は言い残した。二千年前の聖ヨハネが十八世紀のスウェンデンボルグとなって生まれたというのである。

サテ、予言書中の予言書と言われる「ヨハネの黙示録」なるものがある。聖書には三人のヨハネが登場する。現在、「ヨハネの黙示録」を書いたヨハネは、聖書の中の三人のヨハネの誰れであるか不明であるという。「ヨハネの黙示録」ほどのものを残した人物であるからには、次に転生した時も、かなりの業績を残しているはずである。そう考えると、「ヨハネの黙示録」を残したヨハネが、十八世紀のスウェンデンボルグとして生まれ変わったと考えるのは早計であろうか。また、信次師は「ヤコブ、シモン、ピリポも現在日本人として生まれていることも通信されている」と、『心の発見』にあるが、講演の中では、「バプテスマのヨハネは現代のS・O朗氏」と信次師は言い残している。



「道元は神界の人である」

最澄が中国の天台山で修行していた時の付人であったトワン・テン・エンという老僧がいた。その老僧が十三世紀に日本に生まれた道元であった、と信次師は言い残した。


道元「一二〇〇～一二五三」は鎌倉時代の僧、栄西の弟子で禅宗の一派の曹洞宗を開いた。京都の公家の家に生まれ、出家して比叡山で天台宗を修め、のち京都の建仁寺で栄西について禅宗を学ぶ。その後、中国に渡り曹洞禅を修め、帰国して曹洞宗を開いた。永平寺を建て、布教と弟子の養成にあたり、鎌倉幕府の招きも断わり名声を求めなかった。自著に『正法眼蔵』がある。



「川越市の大野〇子氏は、パウロの母親だった」

一九七〇年五月、川越氏の大野〇子氏の家に起った実話。彼女は、かつてイスラエルに生まれ、パウロの母親としての肉体を持ったことのある生命である。〇子さんの爺父、故永田春水画伯葬儀の日のできごとだった。四日、葬儀は信濃町で行われた。この日は丹精こめて書かれた孔雀の掛軸が棺のそばにかけられていた。焼香にこられた大野氏の隣の奥さんから次のようなことを聞かされた。「不思議なことがあればあるもの。四日の朝でした。七、八羽の孔雀が私宅の庭におり立ち、やがて先生のお庭に飛んで入り、桜花の中をゆっくり三回歩いて回り、玄関の前でひとしきり鳴くと、いずことなく飛んで行きました。その美しいこと...」と。そして葬儀の日の夕方、茨城県の弟の家に、一羽の鳩が舞いこんできて、家人の手や肩に乗り、頬をついばむばかりか、なかなか去らなかったということで、皆口々に、おじいちゃんだ、おじいちゃんだといってなつかしがつたということであった。

左甚五郎の彫り物が動きだす、フスマ絵の雀が飛びだすという話があるが、名匠、名家の手になったものには、そのようなことがあるのだろう。



「阿難（アナン、アナンダ）は田中〇雄として生まれ変わった」

古代インドの時代、釈迦の侍者であった阿難は、京都の田中〇雄氏として生まれた、と信次師は言い残した。

高橋師は、田中氏の前で園頭師に次のように話した。

「園頭さん、僕が大阪の国際ホテルに泊っていた時、この人の目の前に電話番号がパッパッと浮んできた。これはそこへ電話せよということだなと思って電話をしたら、その番号が国際ホテルの僕の部屋の番号で、僕はこの人が電話をくれることを前以って知っていた。電話がきたので僕が、「アナン」と呼んだら、この人は電話口で自分の過去世を思いだして僕と古代インド語で話したのです」「そうでしたね、田中さん」

頭に浮んだ番号を廻したら、高橋師のホテルの部屋の番号だったとは不思議なこともあるもの。高橋師には、これに似たような話は数多く残されている。例えば、顔も見えていない相手の全貌がわかり相手は驚ろいてしまう等であるが、園頭師のハワイ講演会でのこと、師の講演が終わると突然一人の女性がツカツカと登壇して「クオイホテルへ行けという神示で駆けつけて来ました。大変感銘しました」と挨拶をした。この女性はアメリカ政府が公認した霊能者で、師と二重写しに白ヒゲの男性を霊視していた。師は、「ガブリエルの姿を視たのだろう」と控え目だが、高橋師は「園頭さんは天使ガブリエルの過去世を持つ人」と言い残していることでも分かる。



「**デビ夫人**は、**タイ国の舞姫シーメン**の生まれ変わりである」

銀座の社交界から、故スカルノ大統領の第三夫人となったデビ夫人は、タイ国の舞姫シーメンの生まれ変わりであると、信次師は言い残した。

同じような道を歩くことになられたのは不思議である。これは聴講者の質問に答えたもので、信次師自ら発表したものではなかった、と強調しておきたい。

[Home](#)

「**田中角栄**元首相は**斎藤道三**の生まれ変わりであった」

高橋信次師は、田中角栄元首相の過去世は斎藤道三であった、と言い残した。



斎藤道三（常在寺蔵）

齊藤道三（一四九四～一五五六年）は、北面の武士・松波基宗の子などの説があるが、詳細は不明。油売りを業とし、美濃（岐阜県）の守護・土岐頼芸に仕えたが、のちに頼芸を追放し美濃一国を支配した。一五五六年、子の義龍と争い戦死した。その娘は織田信長の妻で、つまり織田信長の義父となるが、齊藤道三は実力一つで領主となった戦国大名であった。

一方、田中角栄元首相は、小学校のみで一国の総理大臣にまでなった人である。田中角栄氏が首相の時、贈収賄問題で首相を辞任するかどうかという昭和四十九年十月のことであった。田中首相の辞任のあと、誰が首相になるか混沌として政局がわからない時に、田中首相の新潟県の後援会の代表と秘書の一人が、G L A 関西本部の講演に信次師を訪ねて来て、「田中首相はどうすればいいのか」と尋ねた。信次師は、録音しておくように園頭師に命じた。園頭師はその時のテープをもとに月刊『正法』誌に発表した。

「田中さん、あなたは裸になりなさい。持っている財産を全部投げ出しなさい。そうすれば国民はもう一度あなたを首相にというでしょう。しかし、自分が裸になっただけではいけません。「社会党の成田君、共産党の宮本君、ぼくは裸になった。だから君達も裸になれ、お互いに裸になったところでこの日本をどうするか、国家百年の大計を話し合おうではないか、君達は労働者の味方だと言っているけれども結構豪華な生活をしているではないか。共産党の宮本君、君も豪邸を建てたではないか。元総評議長の太田薫君、君は労働者の味方だと言っているけれど君も労働貴族である。なんなら、〇〇氏の関係のある女性が、どこそこのマンションの〇〇号室に、このような顔の人がいることも、僕が教えてあげるから、その事も指摘して、皆んな裸になって話し合うように言いなさい。それでも違うというなら、「そのひとの名前はこうと全部教えてあげます。田中さん！ 日本のために勇気を振って裸になんなさい」と、信次師は、その責任者に伝えた。その責任者が田中元首相に伝えたかどうか、或いは、責任者は伝えたが、田中元首相は忠告を聞く耳を持たなかったのかどうかは不明であるが、もし、田中元首相が信次師の忠告を聞いて裸になっておられたら、自民党も浄化され、自民党の浄化は野党にも大きな影響を及ぼして、きれいな政治が行われるようになっていただろうと思うと残念でならない。余りにも度が過ぎると「原因と結果の法則」によってバッチリと反省させられることになるが、表に現われた現象は決して偶然はないのだと、信次師は言ったが、この言葉の意味をよく噛みしめて欲しいのである。

園頭広周師は、次のことも明らかにされている。

「田中首相がやめたら後は福田赳夫氏が本命とされていて、三木さんが首相になるとは誰れしもが考えてはいなかった。それが突如、椎名悦三郎氏の寝業で三木さんが首相になったのであったが、その改変劇の始まる前に、私達は三木さんが首相になることを高橋先生に聞かされていた」と。

田中元首相は、度重なる心労もあってのことと思うが、脳血管障害のために半身不随となり亡くなった。言語障害の出た人達の多くを見ると、病前、多弁な人が多いようである、だから辻褄が合うのだろう。

次に、高橋信次師の講演の中から聞いて見たい。

「ある政治家は、密教かなんかの拝み屋へ、定期的に行っているということです。そんなことをやっていると日本の国がよくなるのであったら、とっくの昔によくなっていますよ。田中角栄さん自身もね、東京都内にある財産をみんな投げ出して、自民党で今使っている資金も全部さらけ出して、この金をみな大衆のために使おうじゃないか、とこうやったら、社会党や共産党なんか、どうということないですよ。それをしないで往生際が悪いから、こんなことになってしまう」（昭四十九年二月・関西本部講演）

また、他の講演では、どう述べているか見てみたい。

1.) 「脳溢血等の脳血管障害で倒れて、半身が不随になっている人達に私は必ず質問します。あなたは倒れる前に怒った心を持っておりませんでしたかと言うと、百人が百人全部そうだと言います。怒りの想念は即、肉体的な諸現象にまで大きく現われて来ます。」

2.) 「お年寄りの方で、お嫁さんのことを悪口を言います、こぼします。この方もやはり身体中がどうにもなりません。百人が百人相談に来る人達が同じ現象だと言うことは、しっかり考えなくてはならないでしょう。人間は心のあり方が肉体に反映するという事実、これは仏教が説いているところの「色心不二」「心身一如」という姿をみてもわかるでしょう。」

一九七五年（昭五〇年）、熊本講演会では高橋信次師は次のように講演した。

「太陽が沈んでから食べ物は酸素は少ないんだよ。食べ物は夜は炭酸ガスを出しているのです。人間は不思議ですね、夜になってからタラ腹食べる。ですから、脳溢血でこの世を去っちゃうのは、大抵、夜だよ。食べた後の結果、でて来るんだよ。」、と。

田中角栄氏は、過去の歴史の中で、権力を振り、金にものをいわせた人達が、どのようになっていったかを知っておられたら、謙虚に自戒されていただろう。過去世からのつながりの中で、同じような人生を歩くことになられた。そこで、信次師は過去世からのカルマ（業、心の傾向性）の修正方法を田中元首相に示されたが、そのようにはされなかった。人には機根というものがあると、つくづく考えさせられる一例でだった。一介の油商人から身を起こし、「まむし」と異名をとるほどの執念深い権謀術数を弄して大名にのし上がり、美濃の国に覇をとなえた人物が、今世は、あの、田中角栄元首相となったのである。



「ノストラダムスの大予言」

ノストラダムス（一五〇三～一五六六）は、フランスの医師、占星術師で予言者だった。



ノストラダムス

彼の予言によると、一九八八年（昭六十三年）第三次世界大戦が始まり、人口激増と食糧危機が重なって、一九九九年に向って人類は滅亡するというもの。もし『別のもの』が現われて人心が変わると、救われるかもしれないと予言した。彼は深夜、屋根裏部屋の秘密の書斎に閉じこもり、三脚のついた真鍮製のたらい一杯に張った水に月桂樹でつくった杖と足を浸し、トランス状態に陥るのを待つ。やがて水は曇り、一つの像を結んで未来の事象が幻影として浮び上ってくる。同時に、神の啓示とも思える声が聞えてくる。それをノートに書き込んだという。

ノストラダムスの大予言と高橋信次師

高橋師は、ノストラダムスの大予言について、どう話していたか見てみよう。『ノアの箱舟』の著者の三木野吉氏はこう書いている。

「それは月例の本部で行われる講演会の後で、先生が一服なさっている時に話しかけたのである。「先生、『ノストラダムスの大予言』という本が評判になっておりますが」「それはどんな人ですか」「その予言は九十九%適中していて、その予言の中に一九九九年の月に、人類が滅亡するといっております」先生は、しばらく意識の世界に答えを求めておられたが、「それはキリスト教系の方ですね。もちろん人類がこのままやっていけば、そうなりますよ」この時の会話はこれで終わってしまった。ところが、だんだん読む人がふえてきて、講演会の質問の時間に、これに対する質問が多くなった。その時先生は、「人類をそのようにさせないために、私が出てきたのではありませんか」と力強く答えられた。」、と。

月刊『正法』から、園頭広周先生の記述を引用しよう

「高橋信次先生が大阪で講演会をされた時、ノストラダムスは一九九九年には地球が滅びるといっているが本当でしょうかという質問があった。「絶対そんなことはありません。もし地球がなくなるといことになれば、人間の魂の修業の場がなくなることになるので、神がそんなことをさせることは絶対にありません」と短い答えで終わった。」、と。そして、また、特集「正法とノストラダムス」で園頭広周師は、次のように書いている。

「一九九九年に人類が滅亡することは絶対にない。しかし、滅亡に近い状態にはなるかも知れない。人類が今のままの心でつき進むならばである。個人がつくった悪業は、因縁の法則によって現われ、それによって反省しなければならぬ。それと同じように、人類全体がつくった業、暗い想念、争い戦いの想念が、惑星直列、ハレー彗星の接近という天体の自然現象によって引き起される大地震、大冷害、乾魘というようなものによって自壊作用を起し、そのことによって人類全体が反省しなければならぬということも当然あり得ることである。そういう時に、正法を知って心を正しくしている者は、常に波長を神に合せているから、たとえ周囲の人々はそうした災害に遭って死んだり傷ついたりすることがあっても死にもしなければ傷つくこともないということになるのである。多くの人々が傷つき死ぬ中で、自分一人だけが助かるということはなにか利己主義で愛のないことのように思われるが、それは心を明るく正しくするものは絶対に悪いことにあわず、心の暗い悪いものは、災害と波長があうという「因果因縁の法則」によってそうなるのであって、それは仕方のないことである。正法が今説かれているのは日本だけであるから、日本は不思議に守られてゆくことになる。ユダヤの世界統一の策謀があったとしても、日本はそれに組み込まれることなく存立をつづけてゆく。しかし、ノストラダムスが予言で警告しているように、古代ローマ末期の時代と同じような退廃的な心を持った日本人は、自分がつくった業を清算するために、いろいろな不幸という現象に見舞われなければならない。これは自業自得というべきで、その人が心を改めない限り避けることはできない。これからは「正法」が大事であることを多くの人々に示し、一人でも多くの人々が救われてゆくために、正法を实践する人々の上には奇蹟と思われるような現象も起ってくる筈である。私はそういう人が一人でも多くなることを祈っている。」、と。

多くの予言者と言われるものの共通の欠陥ではあるが、ノストラダムスは人類の滅亡を予言しながら、どのようにしたら人類は救われるかについては一言も触れてはいない。別のものがあらわれれば救われるというものだが、人心に恐怖を与えるだけの予言は人類に決してプラスになるものではない。だが、信次師は「正法」という人類の正しく生きていく方法を示した。正法が世界中へ流布され、人類一人一人が正しい思念と行為をするなら人類の滅亡など絶対に有り得ない。ノストラダムスの言う「別のもの」とは、正法の生き方。まさしく「光」は東方から、なのである。

「親鸞は高橋興和氏として生まれ変わった」

高橋信次師は実弟・高橋興和氏は親鸞としての過去世を持つ人だと言い残した。



親鸞

信次師は『心の発見』の中で、キリストの弟子パウロがのちに日本に親鸞として生まれたと書いている。宗教学者が、パウロと親鸞の共通点と題して、本も多く出版されているが、パウロと親鸞が同じ生命であったということによって説明がつくのである。

また高橋師は、「現代のキリスト教はパウロ教であって、本当のキリスト教ではない。キリストの御名を崇めることによってのみ救われると説いたのはキリストの弟子達であり、特にパウロが強調したのです。」と言った。

そして、「釈迦が説いたのも、キリストが説いたのも同じ正法なのです。キリスト教は「人間は罪の子」であると言っているのは、キリストの弟子パウロが言い出したことで、キリストは「人間は神の子」であると言われたのです」と信次師は修正したのである。聖書はパウロの言葉によって歪められ、パウロ教と言えると明示したが、二〇〇〇年前のパウロであり、八〇〇年前の親鸞上人が、現代の高橋信次師の実弟高橋興和氏であると云うのである。

過去世でパウロであり、親鸞上人の生まれ変わりと言われる高橋興和氏は、高橋師の実弟として生まれることによって、パウロ、親鸞として生まれた時の業（心の傾向性）を修正することに今世の目的はあったと思われる。それは、パウロの時、キリストの御名を崇めることによって救われると言ひ、親鸞上人が阿弥陀如来という救済者を仕立て、念仏を唱えてその前に跪びて誓うことによって救われると説いたことと、現代は、信次師の長女・佳子氏をメシヤに仕立て、その前に跪びて誓うことによって救われると説いたことが、同じ発想であることは不思議であった。「今世は佳子氏とともに釈迦、キリストまでも否定するという大変な「業」をつくってしまった」と、園頭師は懸念されている。

そして、高橋信次師は『心の発見』・神理篇に次のように記述している。「親鸞の過去世は、二千年前のイエス・キリストの弟子パウロである。二千五百年前のインドの時代はガヤナーダにいたプルナカシャパーの末弟「クナンダ」という名で仏教を学んだ人である。しかし、他力本願のみで一切「仏」に任せてしまう、という考え方は、己を失ってしまい人間の価値を発見することはできない。自力努力の中にこそ、神理があることを知るべきである。」と、書いている。その当時、戦乱の時代の人々を救うには、このような方法でなければ、死の世界を

信ずることも死の恐怖を脱することもできなかったものと思うが、このように、光の天使が肉体を持って出てきても、その生存のうちに己を知るといことは困難なことだったのである。また、信次師は次のように話している。

「昨夜、親鸞が私のところにきましてね、頭を下げて「許して下さい。あの時は武士階級が支配していて、農民達は作物はみんな年貢で取り上げられる、いくら働いてもこの世では楽にならない、幸せにならないという状態でした。そういう人達にわずかでも心に灯をともし、生きてゆく希望を持たせるには、この世では仕方ないが、死んだら極楽へ行けるのだ、西方十萬億土の彼方に極楽があるのだと教える以外、仕方なかったのです許して下さい」と、言うのです。あの時代はそういう説き方をしなければ仕方のない時代でしたからね。西方十萬億土といったのは根拠のないことじゃないんです。エジプトはインドから西方ですからね。」と。

また、親鸞は漢訳のヨハネ伝を持っていたという説があるが、イエスの弟子パウロの過去世を持つ親鸞が、パウロと同じイエスの弟子であるヨハネに興味を持ちヨハネ伝を所有していたとは、過去世からのつながりから当然なことであつたらう。

「親鸞」（一一七三～一二六二年）は鎌倉時代の僧。法然の弟子で浄土真宗（一向宗）を開いた。公家の日野有範の子で、善信ともいう。九歳で出家し比叡山で天台宗を修め、さらに奈良で諸宗を学んだ。二十九歳まで比叡山で修行を続けたが、のち、法然の弟子になり浄土の教えに道を求めるようになった。浄土宗が広まると他宗の圧迫が強まり、一二〇七年、法然とともに罪に問われ、越後（新潟県）に流されるが、数年後許され、常陸（茨城県）を中心に布教し、浄土真宗を開いた。その教えの特色は「南無阿弥陀仏」と唱えたと悪人でも極楽に往生できると説いた点で、農民にも広まった。『教行信証』がその主著で、他に親鸞の法話を集めた『歎異抄』も有名であるが、日本人の心の中には、法然、親鸞上人が説かれた「罪悪感」が、深く影を落していると、園頭師は指摘する。また、師は、

「そのような考え方をされたのは、一つには女性の問題について悩まれたからである。僧は肉食妻帯しないものとされている。比叡山を下りられたのが二十九歳、当時比叡山は既に腐敗墮落しており、自らにも絶望され六角堂に籠られた。建仁三年（一二〇三）四月五日、六角堂の救世観音が、つぎのような夢を見せられた。

「行者宿報設如犯 我成玉女身被犯 一生之間莊嚴 臨終引導生極楽」

これはどういう意味かという、と、「親鸞よ、そなたが前世からの因縁によって、どうしても女なくしてられないならば、私が美しい女となって、そなたに犯されてやろう。そうして一生の間、そなたの人生を莊嚴にし、臨終の時はそなたを導いて極楽に連れて行ってやろう」、と。

女を与え、一生をきらびやかな楽しい人生を約束するのは、魔の使う常套手段である。『人間・釈迦』には、釈迦が悟る前に魔が女に姿を変え、女体をくねらせて盛んに誘惑する。それを見破り一喝すると魔は退散する場面が描かれている。ところが、それに負け妻帯にふみ切った親鸞上人は、一生罪の苛責に苦しまなければならなかった。その親鸞上人の罪悪感はつぎのような言葉によって示された。

『和讃』

「賢善精進現ぜしむ 貪瞋邪偽おおきゆえ 奸詐ももはし身にみたり 悪性さらにやめがたし ころは蛇蝎のごとくなり 修善も雑毒なるゆえに 虚仮の行とぞなづけたり」

「立派な人間になろうとしていくら精進してみても、貪り、瞋り、邪偽の心、人を欺そうとする心がいっぱいあって、身体中に満ち満ちている。この悪性は、なくしようと思っても、持つまいと思っても、つぎつぎに起ってきてやめることができない。自分の心は、人が一番忌み嫌っている蛇や蝎みたいなものである。善い心になろう、善い行いをしようということだけでは人間はよくなるものではない。そういうことはみな、架空のむなししい行いである。」

この親鸞上人の気持ちは六十歳を過ぎて、常陸の稲田から京都へ帰られてもなくならなかった。

『教行信証』

「悲しきかな 愚禿親鸞 愛欲の広海に 沈没し 名利に大山に迷惑す」

親鸞上人の心の中には、払っても払っても押し寄せてくる愛欲と名利を求める心をどうすることもできないという、人間の業に対する悲しみ、絶望感がある。このような悲しい告白をされて、九十歳まで生きたのである。

この親鸞上人と全く同じような罪悪感に悲痛な叫び声を発しているのが、パウロである。

親鸞と同じ霊統（対語は血統）のパウロは、

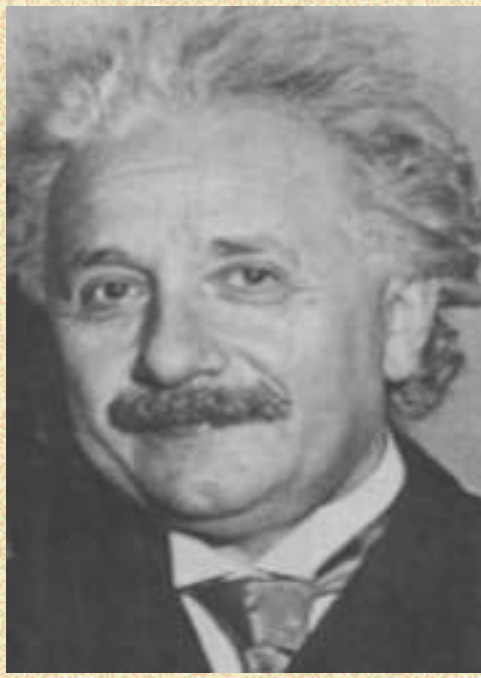
「噫、われ悩める人なるかな、この死の体より我を救わん者は誰ぞ。我らの主、イエス・キリストに頼りて神に感謝す。さすれば我みづから心にては、神の律法に仕え、肉にては罪の法に事ふるなり。」引用した訳は少し古いが、このパウロの悲痛な叫びと、親鸞上人の悲しみの叫びは全く同じである。」（園頭師の論文を引用）

パウロが西暦紀元六十四年、ローマで死刑になり、親鸞上人が日本に生まれたのが一一七三年ですから、約千百年後に日本に生まれたこととなります。そして、親鸞が一二六二年に亡くなってから約七百年後に、高橋師の実弟として肉体を持たれたのです。パウロと親鸞上人、そして高橋師の実弟・興和氏との間には、心の大きな進歩は見られず、同じ発想であったことは残念だった。高橋師は「親鸞は菩薩界でも下位の人であった」と言い残したが、親鸞は今世は高橋師の実弟、高橋興和氏となって、自らの業を修正するのが使命と目的であったのだ。

Home



「アインシュタインと高橋信次師」



アインシュタイン

相対性理論で有名なA・アインシュタイン博士（一八七九～一九五五）は一九二二年（大正十一年）の十一月に来日した時に、日本人に次なる「ことば」を贈った。

「世界の未来は進むだけ進み、その間、幾度か争いは繰り返されて最後の戦いに疲れる時がくる。その時、人類はまことの平和を求めて世界的な盟主をあげねばならない。この世界の盟主なるものは武力や金力だけではなく、あらゆる国の歴史を抜き越えた、最も古く、また尊い家柄でなくてはならぬ。世界の文化はアジアに始まってアジアに帰る。それはアジアの高峰、日本に立ち戻らねばならない。吾々は神に感謝する。吾々に日本という尊い国を作って置いてくれたことを...。」

アインシュタインの「ことば」の中に「吾々は感謝する吾々に日本という...」に注目して欲しい。そのアインシュタインが昭和四十三年（一九六八年）から信次師に教示したと講演や著書に盛んに出てくる。これは、アインシュタインが亡くなって（一九五五年）から十三年目にはすでに天上界から霊示を与えていることになる。また、アインシュタインが来日した一九二二年には、信次師（一九二四年と一九二九年生の説あり）は、まだ生れていないが、光の大天使アインシュタイン博士には、天上界の計画がすでにお見通しで、信次師の生誕が楽しみだったに違いない。これは、魂が永遠であり、ユダヤ人が、否、日本人が優れているのではなく、高級霊がユダヤ民族に、また、日本民族に肉体を借りたにすぎないのだ。魂である船頭さんは、一国家や一民族に限定されぬと知らねばならない。現代は日本人のあなたも、次はどこかの国に生まれているのだから。

昭和五十一年十二月のこと、高橋信次師帰天（六月）後の、中京地区の研修会の帰りに、元GLAの講師・堀田和成氏と渡辺泰男氏は次のようなの会話をしている。渡辺（三木野吉）氏は自著に、

「所沢でやっている私の班座の近況や、アインシュタイン博士のメッセージのお話になりました。堀田先生もよく覚えていらっしゃるって、あれは確かドイツ語と英語でちゃくぽんに語られていて、テープにとってあるはずですよ。その後誰も忙しさにまぎれて、解読しようとしていてできませんが、確か高守先生（私と同じ昭和四十七年に正法に帰依された方で、同年次に帰依した関係で私とは大変仲がよかった。月刊『エコノミスト』の編集長をされていたが、高橋先生に懇望されて三宝出版の編集長になられた）が保管されているはずですよ、とおっしゃいました」、と。

アルベルト・アインシュタイン（一八七九年～一九五五年）

ドイツ生まれ、両親はユダヤ系ドイツ人。スイスのチューリヒで大学卒業後、物理学の基本理論を研究し、

「特殊相対性理論」「一般相対性理論」などを発表して、注目を集めた。難解であるとされたが、その理論によると、光が太陽のような大きな重力の働くそばを通る時には、引きつけられて進路が曲がることになる。これは一九一九年の日食で確かめられた。アインシュタインの理論は二十世紀の物理学転換の基礎となり、一九二一年ノーベル物理学賞を受けた。ナチス政府のユダヤ人追放で、アメリカにのがれて帰化した。

昭和四十八年夏、長野県熊の湯における自主研修会の信次師講演の中から見てみたい。

「すべて疑問から出たものです。それで私が、昭和四十三年七月十二日に、自分自身が何者であるかがわかった以降は、ドイツ語でアインシュタインが出てくるのです。鼻の長いのが出てきて、むつかしい数学を解く。「俺は一体なんでこんなことをしなければならないのかな」、と思ったりした。僕の本の中に、相対性理論が出てきたり、次元の差という説明があるのは、アインシュタインから教えられたのです。アインシュタインが、自分の法則には手落ちがある。振動、プランク常数というもの、人間の脳波の振動も、波動という一つの現象となって伝わってくる。そうすると、それにおける、仕事を為し得る能力というものは目に見えないが、エネルギーが起こる。みな、そうやって教えられたものです。」と。

信次師がアインシュタインの霊を呼び出した時に、「私の相対性理論は間違っていました」と頭を下げたとの講話もあるが、それが現代では実験的に証明されている。例えば、真空は全くの空、真の空間ではなく、エネルギーに満ちた空間であることがわかって来ており、これを「相対性理論」に対して「絶対性理論」という。

昭和六十二年十二月、ワシントン発の新聞記事として次のことが報道された。

「一般相対性理論を完成する四年前の一九一二年に書かれた、アインシュタインの最も古い手書きの原稿が、ニューヨークのオークションで百五十万五千ドル（一億五千万円）という高値で売られたという。この原稿には、質量とエネルギーが同等であることを示す有名な数式の基になった式が含まれており、この中の「L」という定数が余分なものとして線で消されている。アインシュタインは論文が出版されると原稿を廃棄するのが習慣だったが、この論文は第一次大戦のために出版されず、友人に贈り物として与えられた結果、珍しく後世に残ることになったというのである。

アインシュタイン理論は、近代物理学の発展のために大なるものがあつたが、とりもなおさず、それはまた核兵器の基礎理論となり、核兵器がこの世に生まれる元になったのである。物質のもつエネルギーを一瞬のうちに放出して利用するか、エネルギーを小出しにして平和利用するかは、神の子・人間に自由に委ねられている。愚かな人間は人を殺戮する兵器として利用する。光の大天使・アインシュタイン博士も天上界で「困ったことだ」と考えているに違いない。

「日本の建国と天皇制」

今から二千五百余年前、釈迦は、古代インドの地でこの世を去る前に、ジャブドーバーのケントマティ（東の国の日本の都）に生まれ、釈迦の本体・エルランティが「正法」を説くことを予言していた。二千五百年過ぎたとき、日本が「正法」を説くにふさわしい国となるために、天上界は遠大な計画をして来た。その頃の日本はまだ国としての体制はとっておらず、そこここに集落をつくって人々が住んでいるにすぎなかった。インドでは、当時、広がっていたバラモン教を説くバーバリーという人がいた。バラモンの教典にくわしく右に出る人もいないという程の大バラモンであった。しかし、バラモンの教えに少なからず疑問を抱いていた。百二十歳の頃、バーバリーは、ウパサカ、ウパシカという釈迦第一番目の在家の富豪の夫婦より、当時少しずつ名声を高めていた釈迦のことを話しに聞いていた。ある時、バーバリーに金品を乞う男が訪ねて来たが丁寧に断わると、バーバリーの頭に手をかざすと、何かわけのわからぬ呪文をととなえ、七日のうちに頭陀七分となって、頭が割れて死ぬだろうと捨てぜりふを残して去って行った。バーバリーは、男の残した言葉がいつまでも頭から離れなかった。不安と恐怖にまんじりともせず考えていた。うとうとしたとき、バーバリーは、天の声を聞いた。「バーバリー

よ、お前は恐怖の念に執われているが、どうしてその執着より離れることが出来ないのか。今、ラジャグリハのゴードマ・ブッタ（釈迦）が、道を説いている。教えをこうがよい」と。

バーバリーは目を覚してハッとした。ウパシカ、ウパサカから聞いていたあの釈迦だったのだ。マガダ国まで行くには自分の齡では遠すぎる。さりとして釈迦の説教も聞いてみたい。思案の末、バーバリーは弟子の中から女性四人と連絡係の一人を含む十七人を選びだし、釈迦の在所へと急がせるのだった。バーバリーの許へ帰りついた連絡係は、皆んなを無事送り届けたことを報告した。釈迦の説法の一部始終を聞かされたバーバリーは、悟りの境涯に昇華してゆくのがだった。このバーバリーこそ、偉大なるバラモンの師、阿しゅく如来といわれ、その後、日本に生まれた「神武天皇」だったのである。



<日本の建国年数を試みる>

(建国、その1)

釈迦は紀元前六五四年（高橋信次）に、当時の中インドに呱呱の声をあげた。ババリーが十七人の弟子を釈迦の許へ派遣したのが釈迦四十歳の頃（紀元前六一四年頃）で、ババリーは当時百二十歳であった。この頃の人は百歳、二百歳と長寿の人が多くいたが、ババリーがこの世を去ったのは紀元前六百十年頃であったろう。釈迦が八十一歳で昇天した時が紀元前五七〇年頃であった。ババリーが紀元前六百十年頃に天上界に帰り、蒙昧な国としての体制をとっていない日本に誕生するための準備をすることになり天上界で待機した。

特別の使命を持つ人の、生まれ変わり迄の年数例

1)、フィリピンのアントニオ・アグパオワの後にシカゴにイエス生誕は、百八十年後（昭和四十八年現在）。

2)、西郷隆盛は一八七七年に亡くなり、西郷隆盛を分身に持つ園頭師は一九一八年に誕生、

この間は四十年。

3)、坂本竜馬は一八六七年に亡くなり、坂本竜馬を分身に持つ大谷氏は一九二九年に誕生、こ

の間は六十年。

「本体と分身」の関係により、一般の人は千年、二千年に一回、この世に肉体を持ち、分身は五百年に一回の割合で出生する。使命と目的を持った人は五十年ほどでこの世に肉体を持つこともあるので、ババリーが五十年ほど経って日本に誕生（紀元前五六〇）したとすれば、平定し即位したのが紀元前五百四十年頃と考えられる。神武天皇として即位し（当時は大王という呼称であったようだが）、日本を建国してから二千五百年ほどということになる。

（建国、その二）

初代より二十五代の天皇まで即位年代が不詳であるが、二十六代天皇（即位が五〇七～五三一年）より現代まで年代がはっきりとわかっている。年代が判明している二十六代継体天皇より百二十四代今上天皇（昭和天皇）までの九十九代の天皇の平均即位在年期間は、十五・一〇年であった。かりに一代の天皇が十五年とした時、十五年×二十五代＝三七五年、約四百年。二十六代継体天皇の即位年代の五〇七年より四百年ほどさかのぼった紀元の初めに初代天皇が日本国を建国された。つまり、現代は建国二千百年ほどだと推測される。これは西暦と同じ歩みとなる。

（建国、その三）

日本書紀には、初代天皇の神武天皇が即位建国した年が辛酉（しんゆう）の年の元旦、西暦紀元前六六〇年だと記されている。昭和十五年には皇紀二千六百年という国をあげての盛大な祭典が挙行されたが、日本書紀により、建国二千六百年という。

三つの建国の計算例をあげてみたが、日本書紀の建国年（二千六百年）と信次師の言い残した「ことば」による計算例（二千五百年）が近かった。日本書紀、古事記等の古文書、古記録は、あながち、根拠の無いものばかりとは言えないのではないかと著者は考えている。

また、神武天皇という御名は奈良時代から平安初期にかけてつくられた漢風諡号（しごう・死後に送る名）のようであるが、いずれにしても、今日の天皇家の基礎となるものを造った人がいたことは確かである。それ以来、今日の第百二十五代あきひと天皇に至るまでの長い間、連綿として続いているが、さまざまな変化をしながらも、この日本国に「君臨」して現在に至った特別の意味は、それは、「正法」を説く目的のための、気の遠くなるような天上界の計画であった、と信次師は教えたのである。

次に、天皇という称号は、中国では北極星や天帝のことを指したようであるが、皇帝、天子のことを天皇と書いた例はかなり後のことになるとみられる。六世紀の遣隋使を派遣した聖徳太子、小野妹子時代に天皇という称号が輸入されたのかもしれない。そして、信次師は、「天皇家には古代中国からの伝統が残っている」と言い残しているが、中国との文化文明の流入の中で、しきたり、作法等の慣習がはいったのであろう。

神武天皇が、東征のための「船出の地」なる所が、宮崎県は延岡の近く、日向カボチャで有名な日向の美々津という所にある。大正時代までは、京阪神との商取引も盛んに行われたという小港で、最盛期には千石船（五十トン～百トン）が三十隻出入りし、歓楽街は日夜賑わった。美々津（耳）川の上流で造船された軍船の艀装と発船準備を神武天皇が指揮されたという「お腰かけ岩」や、神武天皇の衣のほころびを、立ったまま繕われたという「立縫の里」（美々津の別名）等のいわれが残っている。また、町内の人々を起こして御出船を知らせた行事「おきよ、おきよ」が年中行事として継承されている。そして、神武大帝突然の御出航で、住民はお団子をつくるひまがなく、小豆と餅米と一緒に炊き合わせ団子を差し上げたという伝説により「船出だんご」がある。ウェブ・マスターはある一月中旬、この地を訪ね、真空パックされた団子を頼りながら町内を視察した。それは春

のような、うららかな日で、日中は汗ばむ程であった。港の片隅には船出の碑とともに、海軍発祥の地碑が並んで置かれ、すぐ近くには、日本で初めてのJRのリニアモーターカーの実験線が施設され、直に関東へ移築される（現在は移築済み）とはいうものの、「神武天皇ゆかりの地」と現代工学の粋を集めたりニアモーターカーの実験施設が、奇妙にバランスして不思議な感じであった。

ところで、「前方後円墳」という日本独自の古墳がある。この方式の古墳は、日本近辺の国では見ることはできない独特な形をした古墳といわれている。なぜ、日本だけにこのような方式の古墳が見られるのであろうか。実はこのような方式の墳墓がユダヤに見られるというのである。

前方後円墳は近畿地方に多く見られ、仁徳天皇陵はその長さ五百メートル近くあり、世界最大と言われ、以下、多くの前方後円墳が見られるが、その多くは天皇陵である。

サテ、その前方後円墳が日本の南端とも言える宮崎県内の川床遺跡（新富町）にも見られるというが、ウェブ・マスターはその足で宮崎市内の中心にある宮崎神宮を訪れた。宮崎神宮社殿と護国神社の間の梅の小木が植えられた小径のわきに標識案内板が立てられ、そこに前方後円墳があることを説明していた。前方後円墳は朝鮮半島南部にも見つかっているようだが、心が弾んだ。なぜなら、異国のユダヤ人が宮崎に定着して、このような様式の小墳墓をつくり、ユダヤの血をひく日本人がそこから東征して、近畿の地で権力を増すとともに、その様式の巨大古墳を伝えたのだらうという推論を持っていたからである。巨大なものは奈良二十四、大阪二十一、岡山七、京都四、群馬三、茨城二、兵庫、滋賀、三重、愛知、山梨、宮城、福岡、宮崎がそれぞれ一基ずつあるようだが、畿内が特に群を抜いている。

< ウェブ・マスターの推論 >

推論するところなる。今から二千七百年前（紀元前722年）のこと。釈迦が生れたのが紀元前654年で、二千五百五十年前だから、丁度その頃のことである。アッシリヤにより「北朝イスラエル王国」は滅ぼされてしまうが、その滅亡と同時に、十二支族のうち十支族がいまだ行方しれずとなっていると言われている。その一支族がイスラエルから出発、シルクロードより前の要路を通り日本にたどり着く。日本より先へ進むには、次の大陸はアメリカだから、終着点は日本ということになっていたと思われる。それでは、どのような道をたどって渡来したか推測して見よう。

< 渡来コースの考察 >

中国大陸 台湾 沖縄 九州（日向・宮崎）

推論はこうである。

中国大陸 台湾 沖縄 宮崎というコースをとってユダヤの一支族は、高千穂の近くに安住の地を求め、そこでユダヤ人の居住区が出来あがった。一族は再興の悲願に燃え、ここに高千穂神話が伝えられることになる。今から二千五百年ほど前、ユダヤ人の居住区に一人の男の子が生まれた。この子供こそバ・バリーであり阿しゆく如来の過去世を持つ人だ。十年、十五年と歳月が過ぎ一人前の立派な青年へと成長する。長老から聞かされて来た一族再興の悲願は、この蒙昧な島を一つにマトメ、国としての基礎をつくるために全霊を傾けるのだった。希望に燃えた青年は、日向の海岸より船出して瀬戸内海を東に向かって進み、難波（大阪）に上陸、生駒を越えて大和に入ろうとする。幾度かの武力による衝突にも勝利し、それが後世の東征神話として残ることになる。一人のユダヤの血をひく聡明な勇気ある男が、宮殿を高々と築きあげ、国としての中心・都をつくりはじめたのである。木の香も匂うこの宮で即位したこの勇者は、後に言向（ことむ）け和（や）わし、神の心にしたがわせる徳のある天子という意味で神武天皇として誉えられたのである。こうして、天上界の計画である正法を説くための国、日本が構築される基礎が出来上り、その地を大調和したところ「大和」と呼ばれることになる。このようにして、釈迦が「正法」を説く上での守護者として、天皇家は天のみ心によって計画されたと言いたいのである。そ

れからの天皇家は、初期の頃は自ら甲冑を身につけ国土平定に努めるも、司祭者として神を祭り神意による政治に心を砕いた。

五、六世紀になると大和朝廷の支配が拡大するにつれて、それを支える豪族の権力闘争が激化するが、こうした中で天皇家は、中国の文物・制度を取り入れたり、権威を高めようとする様々な施策がとられるが、天皇号の始用もその一つであったかもしれない。これが高橋師の言う「天皇家には古代中国からの伝統が残っている」という「ことば」になったのかもしれない。この背景には、聖徳太子、小野妹子等によって中国から仏教が導入され、中国との交流も盛んとなる重要な時期となるが、「聖徳太子も小野妹子も、日本に仏教を導入する使命と役割を持った光の天使だった」という高橋師の言葉が残されることになる。

こうして、中国の律令法を母体とした律令制下にあった天皇制も、中国皇帝のような専制君主ではなく官僚制の政務運用によって、かなり制約されたものとなっているものの、九世紀の半ばには、幼年の天皇が即位したのを契機に、いわゆる摂関政治がはじまり、十一世紀には定着した。

それからは、摂関に代わって権力を持ったのが、いわゆる「院政」であり、十二世紀には平家から源氏の武家政権が成立すると、貴族・社寺などの勢力は、上皇のもとに結集し公家政権を強化しようとするが、失敗に終わる。そこで、天上界は、光の天使・北畠親房を生まれさせ、天皇制に返すために『神皇正統記』を書かせるという手を打ったのである。その後、戦乱を収束した信長、秀吉は皇室尊崇を掲げて天下統一の旗印にした。これを引き継いだ徳川幕府は、公家諸法度により大きく制約され政治の圏外に置かれることになる。三百年も徳川封建制度が続くとそれまでに鬱積した尊皇思想が首をもたげ、やがて倒幕運動の原動力になる。このとき天上界は、木戸孝允、西郷隆盛、坂本龍馬などを先兵としてこの地に送り、王政復古が実現し明治政府が成立する。新政府は憲法をつくり、議会が創設され、プロシヤ憲法を模範として天皇の大権を強大なものとし始め、ファシズムの高揚とともに軍部の力が強くなり天皇もファシズムに利用されるという側面を持ったが、こうした中で、「アショカ大王、カニシカ大王の過去世を持たれた慈愛と勇気の昭和天皇を、日本に誕生されることを天上界は計画した」と、高橋師は言い残したのである。昭和天皇は、開戦への自らの裁断を下されることはなかったが、大戦への終結宣言は天皇の英断によってなされ、焦土化した敗戦後の日本の復興に身を粉にされたが、その一貫した姿勢が、国民統合の象徴として、神格化された天皇制からシンボリズムの、そしてモダニズム天皇制へと見事に大变身させ、この激動の中で、天皇制はその目的と使命を立派に果たしたのである。

Home



「昭和天皇は菩薩界の方で、古代インド時代は大王だった」

「現代の天皇、故昭和天皇は、古代インドの時代、アショカ王、次にカニシカ王として生まれられた菩薩界の方である」と、高橋師は言い残した。

釈迦は涅槃（亡くなること）に入るその前から、あと二五〇〇年したら、東の国日本の都（ジャブドーバアのケントマティ）に本体エルランティが生まれて行くことを予言した。まだ国として体制が整っていない蒙昧な日本を、一つの国としてまとめるために、天上界の計画によって誕生したのが神武天皇であったことは先に述べた。それからというものは、正法を伝えるためのふさわしい国とするために、日本は守られて来た。鎌倉時代には、元寇の二度の来襲にも、また、江戸末期に、世界の列強が隙あらば植民地にしようとして虎視眈々と狙っていたにもかかわらず、西郷隆盛と勝海舟の英断によって、無血開城による静かな政権交代には列強も口をはさめなかった。このような世界に冠たる史実があるが、ともかく日本は守られて来たのである。そして、天上界は日本の敗戦もお見通しであり、日本が敗戦した時に、日本を一つにまとめるために肉体を持たれたのが、現代の昭和天皇であられたというのである。昭和天皇の前世は、釈迦が入滅（亡くなられて）されて二〇〇年後、マガダ国の国王としてインドを統治したアショカ大王であり、更にそれから五〇〇年後、カニシカ大王として生まれた方であった。慈悲深く信仰厚いアショカ王の霊が、いま日本に生まれ変わって来られ、天皇となられたのであれば、昭和天皇が慈悲深くあられたことも、また、当然と言わねばならない。

アショカ王（阿育王・無憂王）

今から二千三百年前、お釈迦様が亡くなられてから二百年後、インドではじめて統一国家を建設した人で、戦えば必ず勝つという勇気ある大王だった。マウリヤ王朝、この二男のアショカは生まれつき粗野で、父王は思慮深い長男スシーマを次の王にと考えるが、「国王は一人なのだ」と二人は戦うことになる。アショカは王位につくが、武力をもって次々に敵を倒し、その勢力を誇ってみても心は晴れなかった。そのうちに暴虐と恐れとによって民衆の心は離れ、アショカの暴悪にあいそをつかした副王の弟テッサは、当時広がっていた仏門に皈依した。アショカは、インドの大統一をさらに拡大しようと、カリンガ国を攻撃するが、戦場の残虐さは想像を絶し、味方も敵も山ほどの無数の死者を出す。戦いのあとを襲った飢餓と悪疫、戦いに勝っても残るものは何もなくて、まさしく地獄で、目に見えざる民衆の怨嗟の音が怒涛の如くアショカの耳を襲った。アショカはいつか弟のテッサから聞いた仏陀のことを思い出して、「すべてを懺悔して仏のみ教を仰ごう」と仏法に皈依したのである。この後、アショカは軍隊を解散して戦争放棄を宣言するが、これが世界の歴史上初めての戦争放棄宣言だった。アショカ王の功績は、釈迦が説いた不殺生を誓い仏法に皈依し、釈迦の教えを政治、社会の現実の政策の上に生かし、仏教は単に個人の救いの宗教ではなく、社会全体、世界全体を救うものであることを実践し、シリア、エジプト、マケドニアに使節を派遣し、仏教を世界仏教にまで高めた人である。そして、世界の歴史上、初めて戦争放棄の宣言をしたのがアショカ大王であり、五百年後のカニシカ大王だった。

過去世に於てアショカ大王であり、カニシカ大王であられた昭和天皇が、第二次世界大戦によって戦争放棄の宣言をされたことは不思議とはいえず、当然なことであったかもしれない。昭和天皇は菩薩界の方で、慈悲のお心が深いことは衆目の一致するところだったが、東洋の小っぱけな島国日本は、今や貿易黒字超一等国と呼ばれ、世界の中で日本の存在を知らない人は無いまでになって来たが、日本が、有史以来はじめて原爆を被弾した国として、全世界に向けて戦争の愚かさ、人と人が血を流し争うことのむなしさを、声を大にして呼びかける時は今を置いて外にはないのである。偉大なアショカ大王が、現代の昭和天皇の在りた今が、まさにそのチャンスと思うのである。世界のユートピア建設は、銃声の聞えない日を皆んなで作り出して行く以外に方法はない。「まわりくどいようだが、一人一人が正法を学び、実践していく以外にはないので」と言った高橋師の言葉に注目して欲しいのである。

ところで、このアショカ大王宮殿趾が発掘されたのは今から約百年前の一八九三年で、インド政府の手によってまだ発掘がつづけられているが、宮殿趾は地下五米位の所に石柱の基礎が八十本、ほぼ正方形にあり、一本だけ柱の一部が残っている。アショカ王は今から二千三百年前、この宮殿趾で戦争放棄と軍隊解散を宣言したわけだが、このように、アショカ王にならって軍備を持っている世界各国は、軍隊を解散し、戦争を放棄すれば世界平和への一步を踏み出すことになるが、人類は将来、闘争と破壊の愚かさに気が付き、否応なく神の子の自覚をする時が来るのだ。

< 天皇と自霊拝 >

園頭広周師の教えるところによると、昭和天皇は自霊拝をされていたというのである。自霊拝というのは、出雲の山陰神道家に古来伝えられてきた精神統一法で、自霊拝（アジマリカン）とは字の通りに自分の霊を拝むと書く。人間は神の子である。自分で自分に内在する神霊を拝むということであるが、釈迦の禅定（瞑想）がそれであった。高橋信次師の指導した方法も「自分に内在する神の霊を自分で拝む」という自霊拝であったと園頭師は言う。その自霊拝を日本人で一番厳修しておられたのが昭和天皇であったと言うのだ。

園頭師は次のように述べている。

「私が宇宙即我を体験した時、私は決して無念無想になることをしなかった。第一回目に宇宙即我を体験したのが昭和十五年であり、「生長の家」を本当の正しい信仰団体にしたいと思った。昭和四十年に生長の家本部直属の飛田給練成部長になった時、私は調布市飛田給の本部道場の大広間で「自霊拝」をやった。そうして「人間の心は宇宙大の広さを持っている」ことを再々確認した。戸田秀一先生から佐藤定吉博士のことを聞き、天皇陛下が「自霊拝」を実修なさっていることを聞いたのはその頃である。この自霊拝が建国以来天皇家に伝わる行法であることを一般に明らかにされたのは理学博士・佐藤定吉先生であった。私は昭和四十年、国民会議の委員として出席している時、同じ委員の正岡岩三郎、戸田秀一両先生から佐藤定吉先生の『日本とはどんな国』という著書を頂いた。これは佐藤博士がクリスチャンとして五十年間聖書の研究をされ、そうして『天皇行法』を知られたその総決算であった。」、と。

< 禅定と自霊拝 >

園頭師はまた言う。

「自霊拝とは釈迦がなされた禅定（反省によって心を浄化した後に瞑想すること）でもある。釈迦は、人間は神の大生命より現われた神の子であることを悟られた。この自分と宇宙の大神とが一体であることを自覚して「宇宙即我」の境地に入られた。この釈迦の行法、禅定（瞑想）は高橋信次先生によって次のように説かれた。

- 一、人間は神の子である。
- 二、自分の心が黄金色に光り輝いていることを心の中に描きなさい。
- 三、自分が神の光に包まれていることを想念し、自分の身体の廻りに光の輪を描きなさい。

または、

- 一、心と肉体の調和を図りなさい。
- 二、心をまん丸く風船玉みたいに黄金色に描きなさい。
- 三、自分の身体の廻りに神の光の輪を描きなさい。

と説明された。自霊拝という天皇行法は、釈迦が悟られた時になされた禅定・瞑想であったのである。」、と。

このように、釈迦がインドに出生して正法を説かれてから今日、「高橋信次」という名において出生されるま

で、正法を説くにふさわしい国とすべく天上界より守られてきた日本。その日本の中心者である天皇家に、代々、禪定すなわち自霊拝が実践しつづけてきていたことは不思議という他はない。それは、敗戦という体験を通してはじめて国民の前に明らかにされたのである。インドで阿しゅく如来として正法を説かれた方が、日本に神武天皇として出生されたのであれば、神武天皇がその内在された記憶（智慧）を甦らせ、正法の禪定すなわち自霊拝を実修され、それが現代まで連綿として続き、昭和天皇が実修されていたことは当然といわなければならない。

< 真実は「時」の流れとともに >

昭和天皇が、皇太子殿下（現・天皇）に下された手紙の中に、「日本軍は精神力だけに力を入れて物質力を軽視したのが敗因だ」と書いておられるが、正しい判断力が大事だということを改めて考えさせられる。何事も精神と物質の調和が大切で、これを仏教的に言えば「色心不二」というが、精神と物質とどちらにも片寄ってはいけないのである。高橋師は極端から極端はいけないと教えたが、天皇陛下のご判断は神理に叶っていたわけである。

ところで、昭和天皇は戦争責任者だという人もいる。終戦前の日本国憲法では、天皇は内閣の決定に順うだけで、天皇の個人的意見を述べることはできない仕組みになっていた。その為に、第二次大戦開始の御前会議では内閣の決定に順われるが、その時、天皇は、明治天皇御製の「四方の海 みな同胞と思う世になど浪風の立ち騒ぐらん」という歌を詠まれて退席されたということは、余りにも有名な話である。この歌は、「世界の全人類はみな兄弟なのにどうしてこうもお互いに争うのであろうか」という意味であり、この歌を詠まれたということは、昭和天皇は戦争に反対だったのである。諸戦には大勝利を得た日本も、ガダルカナル失陥以来敗戦につぐ敗戦で、これ以上、内閣としてはどうすることも出来ず、天皇陛下の個人的意見をお伺いしたいというので開かれたのが終戦時の御前会議であった。この席で昭和天皇は「終戦」を宣言されたのであった。昭和天皇の個人的意見が政治の上に反映されて終戦は実現したのである。

昭和六十二年九月、昭和天皇は、沖縄訪問を前にして開腹手術を受けられた。順調に回復なさっていると報じた十月のはじめ、皇太子殿下（現・天皇）の家庭教師であったバイニング夫人の日記によって次のことが明らかになった。昭和天皇がマッカーサー元帥との初会見の際、自らのお命を投げ出す覚悟で国民をかばったありさまが生々しく書かれているという。（原文 You may hang me）「絞首刑でもかまわない」と言われたという。国民を助けてくれるのなら、一身を犠牲にしても責任を負う覚悟でマ元帥との会見に臨まれたわけである。かつて、外国の皇帝や元首がなりふりかまわず命乞いをしたという中で、「イエスの愛を見た」とマ元帥は回顧したが、まさに、天上界の計画と、陛下の今生の使命を立派に果されたことになり、時間とともに真実は明らかになってゆく。

ところで、沖縄訪問に際しても不穏な空気もあったとされるが、手術によって中止されることになった。天上界の計画によって遣わされた光の天使は、天上界をあげて守るのである。よくある話しではないか。高熱が出たので出発を取り止めたら、災難からまぬがれたという、まさに、天皇陛下の場合も「これ」であったかもしれない。ただ言えることは、悲惨な戦争の犠牲になった多くの人達の悲しみと怨み、つらみはよくわかる。しかし、心の安らぎは許すことから始まるという事実と、陛下のこの真実（You may hang me!）を考えた時、その矛先は人類最大の悪、「戦争」排絶に向けられるべきではないのかと思うのだ。

そして、この日記は言う、陛下は当時、九州御巡幸を切望され、世情不安、身辺の安全問題をも押して実現され、敗戦となった日本の国民の心の中に希望の一灯を点された。恐らくは、この九州御巡幸を決意された陛下のお心の中には激戦地沖縄の巡幸は、大きなウエイトをしめる場所の一つであったに違いない。だが、それは実現されなかった。そして、このたびの訪問はご病気ということで中止になったが、まさにこの時、以上のような真実が明らかにされたのである。

昭和六十二年、月刊「文藝春秋」十一月号は「天皇陛下のカルテ」編集部の中で、次のように述べた。「戦後も四十年。天皇が行けない島があってはいけない。天皇は太陽のように日本中を照らさねばいけないとお考えだけに、心痛なされていたはずです。ですから、沖縄には回復次第ぜひ行きたいと思われているでしょう」（宮内庁関係者）、と。

こうして、沖縄訪問は中止となったが、入院中も陛下は、「沖縄には行かねばならなかった」とおっしゃっていたという。また、園頭広周師は月刊『正法』に次のように書いた。

「広島へ原爆を投下したB29の腹に書かれてあった二語 Enola Gay (エイラ・ゲイ) は現在ニューヨークのユダヤ人の間で多少使われているユダヤ人だけが使うイデッシュ語で、「天皇を抹殺せよ」という意味であったという。ユダヤ人は、第一次欧州大戦で、ロシア、ドイツ、オーストリア、ハンガリーの王室を全部倒した。世界で唯一残ったのが、日本の皇室であった。その日本の皇室を倒そうとしてユダヤが計画したのが、日本を戦争に引きずり込む第二次大戦であった。そうして極東軍事裁判では天皇を絞首刑にすることが決まっていた。それが絞首刑にせずに日本の皇室が続くことになったのは、昭和天皇が無私の愛をもってマッカーサーにお逢いになられたためである。天皇を絞首刑にすることに決めていたフリーメーソンのマッカーサーは、神の心として統治することを使命としていられた昭和天皇の無私の愛の前に、心を打たれて瞬間的に天皇擁護に変わったのである。第一次大戦で負けたドイツ皇帝ウィルヘルムは、連合軍司令部の前に土下座して生命乞いをした。日本天皇もそうするであろうと思っていたマッカーサーの前に立たれた昭和天皇は、「今、日本国民は食糧不足でこのまま行けば餓死者がたくさん出ます。ここに持ってきたのは皇室財産の目録です。これであなたの国から食料を提供して下さい」と言われた。既に極東軍事裁判では絞首刑にすることが計画されていたのに、「私の生命は助けて下さい」とは言われなかった昭和天皇のお姿に、マッカーサーはキリストの姿を見たという。昭和天皇のそのような無私の愛によって現在の日本は、そして永遠に天皇制の下における日本は存在を続けてゆくことができるようになったのですから、我々は昭和天皇のご遺徳を讃えなければならないのである。」と。

それでは、昭和五十一年二月、沖縄講演の中から高橋信次師の「ことば」を見てみたい。

「その時、我々は、世界の人類はみな兄弟だ、戦争は愚かしいことだということに気が付いてくるのです。同じ人間どうしが争いと闘争をすべきではない。調和以外にないんだということ、皆さんの内なる心は知っているのです。たとえ、盲目の人間が、そのような戦争体験をしても、その戦争が終わった後、その愚かさを知るのです。現にアメリカがそうではないですか。沖縄に相当な物量作戦をして完全に破壊をした。ところが彼等は、それに対する日本にそれ以上の三十年からに渡るところの物質の協力をしたはずで、どっちが勝ったのでしょうか。それを見れば明白です。こうして勝ち負けというより、同じ人間、たとえ血の、或いは皮膚の色が違おうとも、人間は皆、神の子で、同じ時代の同期生なのです。」と。

また、昭和六十二年十一月、ある週刊誌が書いていた。

術後、何回か輸血がなされた。そのことに関して抗議と強迫の手紙等が医師団にあったというのである。現代の宗教の中には、輸血を拒否する宗教もあることは知られるところであるが、臓器にも、勿論、血液にも、その人特有の波動がある。売血をした人には、またそのような荒い波動がある。血液や血液製剤は、どのような人血かはわからない。血液の病菌は、現代の医学によってかなりのところまでチェックされるが、人間の心の波動まではわからない。こうして、陛下にはその必要性から数多の輸血が試みられた。全血の何倍もの輸血が。しかし、それが如何なる波動の血液であるかは知らないが、昭和天皇はこれまで述べたように、菩薩界の方で、慈悲深い方であり、すみずみまで光に包まれた方だった。だから、たとえ如何なる波動の血液が輸血されようとも、輸血された血液は陛下の慈愛の波動に同化されたと思うのである。だから、言う。輸血を拒否して尊い人命を失うより、輸血によって人生を全うすることが出来るのなら、そこにどのような波動の血液が、或いは血液製剤があるろうとも、正道を歩き、神に波長を合わせる者には、何の問題も起こることはないのである。無智ゆえに心を悩ませることはないと言いたいのである。血液を提供してくれた人への感謝の心があり、生かされている自分を自覚しているのなら問題は決して起こらない。それが神の子・人間の生まれながらに持っている力、と思うのである。

昭和天皇は、全血量の何倍かの輸血を受けられ、超人的な闘病生活を続けられた。そして、輸血を拒む多くの人々へも多くの教訓を与えられた。菩薩界の光の天子・昭和天皇は、今世の使命と目的を充分に果たされ帰天されたのである。そして、陛下の御人徳と、日本の隆盛を背景に、各国の多くの政府要人の参列を得て、最大の大喪の礼は挙行されたのである。陛下が、生前、各国の元首、公人と会見されると、陛下の持たれる誠実な雰囲気の中で、皆それぞれに感激して帰国したという。我国の「とき」の首相、外相が、「我々が解決しえない難しい問題も、陛下が会見されると、なぜか解決する。我々が何人かかっても及ばない。不思議な力をお持ちの方だ」と言ったというが、正さしく偉大な力を持った方だったのである。

「ワーグナーは小沢征爾として生まれ変わった」

ボストン交響楽団常任指揮者の小沢征爾氏は、ワーグナーという音楽家の過去世を持つ人だと高橋師は言い残した。

信次師は、「小沢征爾という音楽の指揮者を見ていると外国人のワーグナーという音楽家が指導している。彼自身がワーグナーの生命であることを指導霊が話してくれた」と書いた。『心の発見』

リヒャルト・ワーグナー（一八一三～一八八三）は、劇と音楽が一体となる「楽劇」を完成したドイツの作曲家で、父が亡くなると、劇作家の義父に育てられ、十五歳の時、ベートーベンの音楽を聞き感銘をうけ音楽家になろうと決心。大学では音楽と哲学を学び自分で脚本も書き、ドイツ伝説による「楽劇」を完成するが、「タンホイザー」なども有名。

小沢征爾（一九三五年～）氏は、中国、旧満州奉天（現瀋陽）の生まれで、一九四一年家族と共に東京に引っ越し、桐朋学園短期大学卒業後、フランスへ留学。一九五五年ブサンソン国際指揮者コンクールで一位になり、バーンスタインに認められ、一九六一年にニューヨークフィルの副指揮者となるも翌年辞任。同年、日本交響楽団（N響）の常任指揮者となるが、楽員がボイコットするという「N響事件」が起こり辞任。一九七三年、ボストン交響楽団常任指揮者・音楽監督に就き現在に至っている。日本古来からの琴、三味線、笛、太鼓を主体とした伝統楽芸の環境の中にありながら、西洋器楽の分野で世界的に名声を博している人が、小沢征爾氏である。

高橋師が説いた、今はまだ日本にだけある正法が全世界に広がる下地づくりのために、このちっぽけな日本が世界の経済超大国となり、世界で反発される中で、聴衆に背中を向けながら、楽団員の糸乱れぬハ・モニ・を一本のタクトの動きにのせて、自由自在に音楽の世界にひき入れていく日本人小沢の後ろ姿に、世界の聴衆者は好感の眼差し投げかけ、拍手を送るのである。これはまさに国や人種を離れた天子の姿である。様々な問題をかかえて悩める大国アメリカ、その中であって、指揮棒一本で夢を与える日本の小沢。このように見えてくると、日本人小沢のアメリカでの使命と役割が浮び上って来るようである。正法は確実にアメリカに渡って行く。その時に、日本人はエコノミック・アニマルばかりではないのだ、芸術の分野にも素晴らしい人物がいるのだということ、アメリカ人はきっと心に刻んでくれるに違いない。そして、小沢氏の生命、ワーグナーが「楽劇」を完成したように、小沢氏が今後、どのような音楽の道を行くのか、楽しみの一つなのである。小沢征爾氏は哲学的で重厚なクラシックを世に出したワーグナーの生命であると高橋師は言い残したが、ある新聞の中で小沢氏は言っている。「海外にいと日本が好きになるのは事実。しかし一方で日本にいて見えてくることもある。七、八年前くらいからですね。日本経済がどんどんよくなっていて、こちらに来る若い日本人の鼻息が荒くなってきた。いずれ一種の「戦争状態」になるのではと心配だった」、と。

フランクフルトからドイツ新幹線のICEで1時間走ると、こぢんまりとしたドイツ有数のバロック建築の街フルダに到着する。ゲーテはここで詩篇を創作し美味を満喫したが、九百年の歴史を誇るヴァルトブルク城は、宗教改革者ルターが新約聖書をギリシャ語の原典から初めて翻訳した場所である。マルチンルターは、天使長ミカエルの生まれ変わりだと高橋師は言い残したが、この地は作曲家のバッハを生み、さらにいえば、ワーグナーが歌劇（楽劇）「タンホイザー」のイメージを得た土地でもあったのである。



「出光興産の**出光佐三**は西郷隆盛の参謀の**桐野利秋**だった」

出光興産の初代社長・出光佐三氏は、西郷隆盛の参謀であった桐野利秋の生まれ変わりである、と高橋信次師は言い残した。

西郷隆盛の過去世（分身）を持つ園頭広周師は、過去世からのつながりを感じてか、子供が出光興産に就職することを望んでいた。

園頭師は次のように言う。

「出光興産は、日本の大企業の中では唯一、株を公開しない会社である。この会社の社員は全て家族の一員であるという家族共同体としての経済理念が私の気に入ったので、長男が中学時代の頃から「お前は出光興産に入社しろ」といっていた。その通り入社してくれたので嬉しかった。」、と。

その時、園頭師が息子の入社を報告されると高橋師は、「それはそうでしょう、あなたの部下でしたからね」、と言ったという。

出光佐三（一八八五～一九八一）は、明治十八年八月二十二日福岡県宗像町赤間に生まれ、八人兄妹（六男二女）の三番目だった。出光家の家業は代々染物業だが、遠祖は宇佐八幡（大分）の大宮司家である。赤間村では常に五本の指に数えられる程だったが、没落してゆく。

佐三は、謹厳な風貌にも似合わず、早くから常磐津、長唄、小唄にも親しんだ。仙崖和尚の遺墨を楽しみ、素朴な小唐津も賞翫しているが、「出光美術廊（館）」は風流人としての置きみやげであったろう。特筆することは、先の「長谷川一夫」の良き相談相手であり、なにくれと面倒を見たことは知られるところである。故郷の近く宗像大社の復興を悲願とし実現したが、皇室に対する畏敬の念は、一般の理解とは質的に異なるという一面もあった。

佐三は、神戸高商（現神戸大学・経済学部）を出ると、小麦粉や機械油を扱う「酒井商会」に就職する。幼児期は極度の神経衰弱と虚弱体質、悪質の眼病で、あらゆる病気を合せ持ったような体質であり、学校も欠席がちで成績も中以下だったようだが、算数は教師も解けぬものを解いて驚かせた。しかし、それからというもの、段々と嘘のように元気になって、酒井商会での二年目、生涯の恩人・日田重太郎によって、佐三の独立資金六千円（現・一億円）を無償で提供したいとの申し出を受ける。神戸高商を出たばかりの佐三に、今のお金にして一億円ほどのお金を提供したいという、降って湧いたような日田の言葉に驚き、どうしたものかと父に相談するが、「そんな馬鹿なことが」と取り合ってもくれない。ところが、無二の親友・八尋俊介は、「日田さんほどの人が君を見込んだからには、受けるべきだよ」とアドバイス。こうして、六千円を手にした佐三は、門司で機械油を扱う「出光商会」の看板を掲げ、平成二年、八十周年を向えた「出光興産」の創業であった。当初は父をは

じめ、兄弟、親族等の同族会社であったが、スタートから苦労の連続であった。当時は、まだ石炭の全盛時代で、佐三はなぜか石油に眼をつけたのである。彼が生まれた赤間の近くに、筑豊や大牟田の炭田が位置しているために早くから燃料やエネルギーについての関心を持ち、将来について先見があったのであろう。卒業論文にも「石油の将来性」が力説されている。それからというもの、佐三の持ち前のアイディアと商人の大義、反骨精神は西日本の海域を制し、満州でも勝利するのだった。しかし、敗戦。

一から出直すことになった佐三は、「一人も首にしてはならぬ」と大号令。海外資産をすべて無くした出光にとって、それは、自から首をくくるようなものであった。敗戦とともに、ぞくぞくと海外駐在員が帰国してくる。先の見えぬトンネルにはいったようなもので、佐三は眠るのも惜しむかのように事業の打開に腐心するのだった。だが、「天は自から助くるものを助く」少しずつ少しずつ、灯りが見え始めるのである。こうして現代の「出光」が出来上がっていくが、それをしっかり見届けて、石油王・出光佐三は昭和五十六年三月、九十五歳の天寿を全うした。彼の実践した、その理念は、古き良き日本の伝統・「大家族主義」、個人主義を排した「和（おもいやり）の精神」、社会に示唆を与える企業づくり、企業は「人間修業の道場」等であった。これらの出光イズムは、連綿として引き継がれ今日ある。

現代の泥沼のような構造不況に、どこもかしこもリストラ、解雇の嵐の中で、クビも定年も出勤簿もない驚異の人間集団として、「人間」をしっかりと見据えたその志は、敗戦によって良きものまでも捨て去ってしまった「日本」に反省の示唆を与えているかのようである。高橋師は、これから太平洋岸にある種のガスが噴き出して日本のエネルギーは調和する、だが石油は衰退すると予告したが、出光はその変革に上手に乗って欲しいと願わずにはおれない

桐野利秋（一八三八～一八七七）は、幕末明治の志士で、陸軍少尉。初め中村半次郎といったが、戊辰戦没後に姓を桐野、通称を晋作という。微禄の藩士であったが、江戸在勤中に、ささいな事で徳之島に流罪となった。一家の柱であった兄の死によって困乏したが、祖父と兄に読み書きを習った。武芸は立木を相手に自現流を自得したが、豪放磊落、幼き頃より物を畏れず人を畏れず、鹿児島城下を我物顔であった。文久二年には、島津久光の上京の従士に加わり、そのまま永く京都に留ったが、その間、長州をはじめ各藩の志士浪人と交わり識見を広めた。自ら尊皇攘夷を叫び、天下の志士として名をあげると、西郷隆盛に知るところとなった。戊辰の役では功多く小頭見習、それから薩摩の一番小隊の監軍補欠、そして軍監を命じられた。それから、名声と戦功により永世禄二百石となった。明治二年鹿児島城下の一大隊長、そして上京し御親兵の大隊長、兵部省出仕を仰せつかり、陸軍少尉として、屯田の制を立てて北海道を開拓することを建言、実行された。

それからは鹿児島に帰り、山荘で悠々自適であった。ますます識見広がり、鹿児島に訪ねる志士は必ず利秋を面会したが、好んで外交を論じた。利秋の志は東洋問題を解決して新生・日本を発揚することにあつたが、西郷と共に一万五千の壮士を率いて官軍と大戦となり、刀折れ、弾つき、力つきて戦死。所謂、西南の役であった。死んでもなお止まるところを知らぬ気魂は、最後まで奮闘したのである。薩摩の副統帥、総参謀長であった。「晋どん、晋どん、もうここでよか」と自決を決めた西郷であったが、「晋どん」桐野利秋は今世は、世界の情勢を睨み、日本のエネルギーを担った石油王・出光佐三となったのである。

Home

「細〇数 という人」

出版する本という本がすべてベストセラーといわれる女性占術研究家がある。しばしばテレビで拝見するし、全国を講演して廻っておられる。あるテレビ放送では、何んの「おまじない」かは知らないが、豊満な胸のあたりに数珠を入れておられた。司会者三枝氏との会話によると「お乳」のところだと、興白く、おかしく語っていた。個人の趣味でなさるのは一向にかまわないが、それに理由がつけられ、ネットワークとして全国に流されると、その影響たるや計り知れないのだ。なぜなら、最近の話題の人であり、その人の一言一句に現代の風潮が左右されるのである。左右されるということは、裏を返せば、何も知らない盲目の人生を歩く人が多いということで、「霊の世界」に関しては無知だからである。となると、全国の視聴者の中には、自分も真似てみようという人が必ず出て来る。そしてそれに、もっともらしい理由がつけられ、一人歩きをすることは過去の歴史が物語っている。この占いブームと言うか、この種の本がベストセラーになると、かつての「天中殺」ブームを思い出す。

歴史はめぐると言うが、困ることはめぐらない方が良いのである。「めぐる」ということは、その方面には人の考えが一つも変わらなかったからである。これは信次師が説いた「循環の法」だが、困ったことは困ったこととして、いつまでも循環するのである。その悪因を断ち切るまでは、めぐると言うこと。だから、悪因を断ち切るためには、この大事な人生を誤らせることを説く人には、いい顔ばかりはしておれないと言うのである。厳しく反省を求める人にも、それぞれに人生があり、家族があり生活がある。だから、その人を愛の心を持って祈るしかない。占や相性、先祖供養など、あげれば多いが、「易・占い」について高橋師の「ことば」を聞いてみよう。

「易・占いをどう考えるか」

お釈迦様の時代にも「易・占い」もあった。お釈迦様は「易・占いはやってはならない」と厳にいましめられたが、現代の高橋信次師はどのように言っているか聞いてみよう。

「易とか占いはどのようにして生まれたのでしょうか。人にはそれぞれ運・不運があり、明日の生命すらわからないのですから、易や占いによって、開運をはかり、あやまち少ない人生を送りたいと願うのは人情です。しかし、易・占いは、もともと、過去の統計を基礎にして作りあげたもののようです。人が現世にあるのは、前世があるからであり、転生輪廻の歴史があるわけです。したがって、その歴史が分らず、現世の運、不運だけ見立てようとするところに無理があります。人の一生が、こうした占いや生年月日、姓名判断などによって決められ、あるいは変えられるとすれば、いったい人はなんのために生まれてきたのか判断に迷います。ことに占いの目的が、人間の幸福を求めることはよいとしても、不幸をさけ、常に安楽を追求するとすれば、問題は非常に大きいと思います。人間の真実からみた人生航路は、魂の修行であります。己の魂を磨き、苦楽の執着から遠離し、平和に満ちた人間らしい人間の自覚と地上に仏国土・ユートピアをつくらんがためです。真実の人間を信ずるならば、こうした易や占いに迷ってはならないと思います。なぜかといいますと、人間それ自身は、易・占いを越えてゆくものであるからです。今月の方位は西南であって、東は鬼門に当る。ことしは厄年だから静かにしていよう、星占いからみた生年月日は青信号だから、やりたいことをしよう、というぐあいには人が動くとするれば、占いは自己保存をつくりあげ、開運の名の下に、人は多くの執着を心の中に育てあげていくことでしょう。人の一生は平坦ではありません。山あり、谷ありで、でき得れば難をさけたいのは人情です。好んで難をうける必要はないからです。しかし、だからといって、開運に執着しますと、今度は不自由な人間ができあがります。ああしちゃいけない、こうしちゃいけないで、そのうちに開運のための占いが不運を招く原因をつくっていくことでしょう。人の目的が魂の修行にあるとするなら、生年月日、易、占いで「悪い」という結果が出ていても、必要があればあえて決行しなければならぬこともあるわけです。それを恐れてはなににもできませんし、自分を知るには、幸運時よりも不運の時こそチャンスのはずです。正しい生活には現証が付きものです。それゆえ正道を信じ、反省と正道の生活を送るならば、神はその者を決して見捨てることはないでしょう。その不運を楽々と乗り越えられるようにしてくれるでしょう。人間は、ひとしく勇気ある人でありたいと思います。

高橋師は、講演、著書の中で、易・占いはやってはならないと言った。お釈迦様も、偶像を祭ったり、易・占い、護摩供養など、やってはならないと厳にいましめられた。易・占いに魅かれる人の共通の欠点は、気の弱い、人のいい、自己確立にはほど遠い人が多い。それは自分のことは自分で決められない、自主性がないという

ことにも通じる。人の指図がないと動けない人達なのである。ここで言う「人のいい」という意味は「無知な人」という意味である。知性、理性でものを考えるよりも、感情的にものを考え易いということである。

ところで、その女性占術研究家の書かれた『運命を開く先祖のまつり方』という本が手元にある。昭和六十年に発行されたもので、昭和六十二年第二十五刷である。相当数のものが購買されたことだろう。その「まえがき」に「〃神の間引き〃とは本当にあるのだろうか?」、とある。

神は、神の子・人間に対して真の自由と意志と創造性を兼ね備えさせてある。〃神の間引き〃とは神が、人を選択するという事柄のようであるが、親が子に〃えこひいき〃しないように、神は全てに平等なのである。太陽が善人にも悪人にも等しく照るように、神は誰れ彼れなく平等なのである。アトランティス大陸、ムー大陸、ルビジア大陸にしても、すべてその時の人心の乱れと不調和が集団的となって〃ノアの箱舟〃現象というものは、神の波長に合わない人間の暗い想念が現象化したもので、決して神は〃選民〃とか〃間引き〃とか絶対にされることはないのである。神の心に波長を合わせないから、そして、神の光を閉ざすから天変地異や災害にあうことになるのだ。決してそれは神のせいではない。

これより、記述された内容を例に引きながら述べたい。

第一章『あなたは先祖を粗末にしていないか?』のはじめの方に、〃「貪(とん)」「瞋(じん)」「癡(ち)」におかされている現代人〃と、ある。原文には、釈迦が二千数百年前に「末法の時代に生きる人たちは貪・瞋・癡の三毒におかされる」と予測したとあり、貪(むさぼり)、瞋(いかり)、癡(おろか)と、女性占術家は論を展開されている。ふり仮名をつけてなければ、すぐに読める人はそんなにいないだろう。二千五百年前にお釈迦様が文盲の衆生にわかり易いインド語で説かれたものを、お釈迦様が亡くなった後、残った弟子達が、あのように言われた、このように説かれたと伝える。それがのちにインドの文字となって後世に伝えられる。その後、中国の僧が仏典としてそれを持ち帰り、中国の漢字に翻訳されたものが日本に伝わって来た。現在、日本にあるすべての経典は、みな中国語で書かれたものだけで、読み方も中国語読みなのである。中国語の漢字の仏教が伝わって来た時、日本は漢字、ひらがな、と使いわける国だから、中国の漢字の仏典が抵抗もなく受け入れられたということはずなずける。その仏教を見事にキャッチしたのが七世紀初めの聖徳太子である。聖徳太子と、国書を隋の皇帝に渡した遣隋使の小野妹子は、ともに光の天使であったと信次師は言い残したが、天上界の計画によって日本に仏教を受け入れ、そして広げる使命の人であった理由(わけ)である。

こうして、この難しい経典、仏典を仏教学者、宗教学者は、研究するわけである。古代インド語で語られたものが中国の漢字に翻訳され、それを日本語で読むのだから、いくら頭の良い学者でも難しいのは当然と思う。ましてや、仏典や経典は、お釈迦様御自身が書き残されたのではないから、それはそれは大変なことだと思ふのだ。このような理由で、〃貪・瞋・癡〃なる、若い人が読めない言葉が出てくることになる。

ところで、古代インドの時代、お釈迦様の本体エルランティであった高橋信次師はこの貪瞋癡を「心の三毒」と題して「愚痴」「怒り」「足ることを知らぬ欲望」と、わかり易い言葉で解説した。それでは講演の中から高橋信次師。

「このようにして、それぞれが愚痴をこぼしたり、怒りの心を持ったり、足ることを忘れてたりするこの三つのことを「心の中の三毒」と言っています。この三つの毒を、我々は日常生活の中から抜くことが大事なのです。」

同じく、高橋信次師の「ことば」の中から「心の三毒」を参考にさせていただこう。

「人の精神と肉体を、もっとも不安定にする想念は、愚痴、怒り、足ることを知らぬ欲望の三つである。いずれも自己保存に深く根ざしているからである。愚痴は、神の子の己れを否定し、人間疎外感と孤独を生み、怒りは破壊を意味し、足ることを知らぬ欲望は自己を失わせる最たるものである。こうした想念を霊視すると、その周囲は、黒、赤、灰色の妖気が漂い、魔王、地獄霊、動物霊が必ずといってよいほど姿を見せている。いうなれば、あの世の最低の悪霊に身も心も蹂躪されていることを意味する。精神と密着した私達の肉体は、思うことが

直ちに現象となって現われる。笑いは血液の循環をよくし、胃腸の活動を活発にさせる。反対に、怒ったり、悲しんだりすれば、心臓や睡眠に影響する。想念のあり方如何が、肉体的現象となって現われてくることは、誰しも経験しているであろう。怒ったり、悲しんだりして、食欲が減退し、睡眠がとれないと、仕事に影響し、人間関係の判断まで狂ってくるであろう。

つまり、こうした想念は心の平衡を失わせ、精神まで不安定にしてゆく。心が不安定になれば、家庭や職場での協調関係がうまくゆかず、こうした状況が長びけば、やがて仕事も行き詰まり、病気や災難を誘発する。こういふように、想念は、その人の心と肉体に敏感に反映していく。いふならば想念は、ものをつくっているのである。心が中道を知らず、また中道を失うと、眼や耳や口等を通して肉体中心の業想念に支配されてゆく。自分で自分の心を汚し、神から与えられた肉体まで汚してしまうことになり、今生での自分の運命、天命を狂わせ、新たな業因をつくってゆくことになる。今生の原因が、今生で清算され結果とされればよいが、清算されない時は、あの世に持ち越し、来世でそのおさらいをしなければならない。つまり、もう一度今生と同じような環境の下で修行し、自分の魂をテストしなければならない。はっきりいふならば、大抵は、原因と結果の堂々めぐりをしてしまうだろう。二千年の昔も今も、心の面ではあまり進歩がないというのも、こうしたところに原因がある。悪循環からなかなか抜け出せないからである。悪循環の最たるものはなにかといえば、愚痴と、怒りと、足ることを知らぬ欲望である。この三つを称して、心の三毒といい、業想念の中でも、最も悪い原因をつくり出す。よくよく心しなければならぬ。」

高橋師は、「古代インドの時代、釈迦の四十五年間に説かれた道は、永遠の神理でした」と言った。また、高橋信次師の記述の中から

「ブッタの説く法は、自然の姿を通して、人間の在り方を、当時の衆生に説き明かして行きました。ブッタの教えは、八正道を心の物差しとして、調和された安らぎの道につけと常に説き、転生輪廻の法を肉体的に示し、万生万物は相互の関係にあって安定しているのだから、感謝の心を持ち、報恩の行為を実践することが大切である、と教えるのでした。報恩の行為としては、自分の環境に応じて奉仕と布施の実践活動をする。社会人類のために、果たすべき人の道、を教えるのでした。そして、その四十五年間の道は、慈悲と愛の塊りのようにすごしたもので、常に、「人類はみな兄弟だ。貧乏人も金持ちも、地位の差に関係なく、みなブッタの子であり、**生まれた環境は自らが選んだものであり**、その環境を通して悟り衆生を済度するための目的を持って生まれてきたのである」と、原因と結果の法則（因縁の法則）を説き、悟りへの道を示したのでした。しかし、仏教は、いつの間にか、他力信仰の誤った方向に進みました。僧侶は葬式仏教にうつつを抜かし、学者達は知だけで行ないのない哲学仏教に凝り、また古い歴史的に信仰による寺院、仏閣は、偶像や増上情を人々に招来するような現代仏教に成り下がってしまい、仏教本来の心は、人々の心の中から消え去ってしまったのです。仏教の多くは、人々の知識によって生活の道具に変わり、商法に成り下がってしまったのです。他力信仰の肉体的遺骸に執着を持たせて、信仰を駆り立ててしまいました。こんなことで、どこに、本当の道があるのでしょうか。」と。

「運命と因縁の法・善因善果、悪因悪果」

お釈迦様が説かれた「因縁の法」は、高橋信次師によって「善因善果、悪因悪果」というわかり易い言葉で言い表わされた。この因縁の理法は大宇宙の法則であり神理である。誰れにでも変えることの出来ない大自然の法則である。因縁の法とは、悪い原因をつくれれば、その内に必ず悪い結果が表われるということである。また逆に善い原因をつくれれば、必ず善い結果が表われてくるということである。或る国が、他国を攻撃、侵略したりしたことが、しばらくして、その悪い結果がその国に起るということである。また、その逆に、困った国に技術援助をしたり、食糧の布施をするなどの無償の援助等の善い原因をつくっていると、その内に必ず善い結果がその国に起ってくるということである。これは、まったく誤りのない寸分違わない方程式である。このように人の力や知恵によって変えられない絶対不変の法則という意味で、神理、真理、「法」と呼んでいる。「因縁の法」の意味を理解していただいたと思うので、次にこの大法則の運命の転換数を明らかにし、説明してみたい。

個人の運命の転換数は三年、五年、七年の倍数であると信次師は明らかにした。つまり、3、5、7、10、15、17、20年となる。人間一人一人の運命に関しては、一番最初の数が「三」である。「石の上にも三年」といわれるのは三年努力辛抱すれば、目途が立つということをやったのであり、一生懸命努力すれば三年目にはその成果が眼に見えてくるというわけである。三年とは、このような理由をいうのだ。また、その反面、惰眠をむさばれば、確実に三年後には脱落するということでもある。また、「十年ひと昔」とは、この十年によるもの。次に、国、或いは民族の運命の転換数は30、70、100、150、170、200年となる。政治家や国の指導者たる者には、注目に値する運命の転換数であろう。占いは当るも八掛だが、「因縁の法」は方程式だ

と言ったように、必ず的中するし、百パーセント例外なくその通りになる。占いならば、当りはずれもあろうが、この因縁の法則は、そのものズバリだから、怖いといえば怖いだが、正しく生きるものにはこれ程、有難い法則はない。この世でも、あの世でも通用するごまかしの効かない法則なのだ。

「あなたは、今、幸福ですか？」幸福は相対的で、それぞれに主観的だが、もし、幸福とは思えない、苦しいと答えが返って来たとする。あなたは、三年前、五年前、七年前、十年前と、年代を逆にたどってみることである。さかのぼって追及すると、必ずその原因に突き当たるはずである。その原因が長ければ長い程、それに対する修正の時間も長くなる。悪い原因を一杯つくったのに、悪い結果は早く切り上げたい気持ちもよくわかるが、それは余りにも勝手がよすぎないだろうか。地上界の人生で魂をみがくように人間はつくられているのだから、何人といえども例外は有り得ないのだ。

十年間、悪い原因をつくったものは、十年間かかって修正されると申し上げても過言ではない。ところが、神様の慈悲というか愛と言おうか、劇的な反省によってのみ、急激に修正されるのである。私達は、神様のこの慈愛に心から感謝しなければならない。1 + 1は2、2 - 1は1というのが方程式だが、心からの反省によって1 + 1は1になったり、1.5になったりするのである。つまり、十年間で修正されるはずのものが、八年になったり、六年で修正されることがあるのである。修正の時間が少なくてすむ。高橋信次師は言っている。「反省は神の慈悲である。この因縁の法が、すべてあらわれてくるものであれば、人類は遠の昔に存在していないでしょう」、と。

反省と後悔の違い

「反省は神の慈悲です」と高橋師は教えた。ここで言う「反省」とは、もう二度としないということである。「悪かった、悪かった」と自からを責めとがめるのではなく、その原因を二度とつくりぬことが、ここでいう「反省」となる。悪かった、悪かったと口では言いながら、同じ間違いを何度も繰り返す人がいるが、これは反省ではなく、「後悔」という。反省と後悔とはまったく次元が違う。まさしく、反省は神の慈悲なのです。悪因が悪果であると知ったら、一日も早く反省して修正する方が良いのだ。そして、良い原因があつて、良い結果となっているものなら、ますます心を大きく豊かに魂をみがくこと。

高橋師は、現代の仏教など一つも勉強しているのではない。いつも「私はコンピュータ会社の社長であり電気屋ですから」と、そして「習ってもいない仏教の話しが、古代インド語が、中国時代の経文が口をついて出てくるのです」と、言っている。

次に三木野吉『ノアの箱舟』より引用する。

「高橋先生のお供をして盛岡の研修会へ行ったことがある。その時、特急の座席は二人掛けで全部前方に向いていたが、運よく私は先生と並んで腰かけた。盛岡までの六時間、先生を独占することが出来た。「先生、先生がお悟りになる時、モーゼがワン・ツー・スリーという名で、イエスがフォアイ・シン・フォアイ・シンフォー（准省・准・省候）という名で、実名をかくして協力されておりますが、これはどうしてなのでしょう」「それは渡辺さんこうなのですよ、私は何にでも探究心が旺盛です。ですから、いきなりモーゼだとか、イエスだとか名のられたら、肝腎要目の神理の追究をなおざりにして、いきなり聖書にとびついたでしょう。私がやる気を起こしますとね、聖書なんか、そのまま丸暗記してしまうのですから」日頃先生の能力はよく知っていたので、私はこの言葉はすぐ素直に受け取れた。「だから私は、いまだ一度も、聖書も読まなければ、仏典にも手をふれていないのです。その必要がないからです。」「先生は『心の発見』の中に一カ所だけ聖書から引用なさっておられますね」「ええ、読まないんですが、ここにこんなことが出ていますよと、わざわざ教えてくれる人が自然に出てくるのですね。有難いことです」、と。

仏教の一つも学んだことのない高橋師が、女性占術家の記述している「貪」「瞋」「癡」を、「愚痴」「怒り」「足ることを知らぬ欲望」と言う言葉で説明したわけである。そして、次に女性占術家は「自然＝神を軽視する現代人に希望の二十一世紀はない」とある。これはまったくその通りだと思う。この項の中で、先祖供養の大切さを述べられているが、「何も、お墓参りのことだけを指していつているのではありません」また、「お盆とお彼岸にきちんとお墓参りに行っているから大丈夫だと考える人のなんと多いことか」そして、更に「先祖供

養というのは、年に一度や二度のお墓参りですまされるものではない、もっと大切さを認識してほしい」と、細○氏は述べておられる。彼女は、先祖供養は、お墓参り、お墓の掃除も大切だと言っているわけだが、「先祖供養とは何か」ということを高橋師が、何度も何度も説いているので、よく読んで欲しい。後述いたします。

次の項、「先祖を大切にしない信仰は、利益よりも害毒を生み出す」、と彼女は述べる。

宗教と道德の違い

サテ、多くの人が「信仰」という言葉を聞く時、一番先に思い出すのは「先祖供養」であり、「夫婦の調和」、「親に対する感謝」である。これらは道德であって宗教ではない。勿論、宗教に根ざした道德ではあるが、宗教ではない。何故、なぜ？と疑問の読者も多いと思うが、宗教と道德の違いがはっきりしていないところに現代の宗教界の混乱があるし、宗教と道德の違いを宗教家、教祖、教主という人がわかっていないから、その信者や会員達がわかるはずはないのである。肉体先祖への報恩供養も、両親への感謝孝養も、人間として当然のことであり、「なぜ」はいらぬのだ。どんなに時代が変わっても、これは永遠に変わることのない人の道なのである。このように先祖供養をするというのは道德的行為なのだ。人間は善いことをしなければならぬと言う。それは、すべて道德の世界。人生は善いことをするのは当然だが、善いことをすることが目的ではないのだ。

宗教の世界というのは、人生の目的は、善いことをすることを通して、大生命、即ち神そのものの存在を知り、神と自分との関係を自覚することにある。子供が、ふる里を想い、母のふところを切ないまでに思うように、人間が神を想い、神を切ないほどに求めるのは、人間は神の子だからである。神の子である人間が、神の心に波長を合わせることを通して、どうしても善いことをせずにはおれないという心の働き、これを道德というのである。だから現在の日本の宗教団体は宗教団体ではありません。道德修養団体である。宗教というのは、神理（正法）を説いて、それによって悟り、霊の向上、人格の完成、人間性の向上を教え且つ目覚めさせるものである。勿論、実践面としての道德も説くが、道德は説くけれども正法・神理を説かず、悟り、霊の向上、人格の完成、人間性の向上を目指せないものは宗教とは言えないのである。信仰という意味は神仏を信じ尊ぶことだから、女性占術研究家の言われることには矛盾がある。「神仏を信じ尊ばない信仰は...」という言葉の使い方はあっても、「先祖を大切にしない信仰は...」という言葉の矛盾に気が付かれると思う。先祖を大切にすることと信仰とは次元が違うのである。

高橋師は「宗教」とは「宇宙に示す心の教え」と解説し、「信心」とは「自分の嘘のつけない善なる心信じること」と教えた。「信神」とは、神の子人間が、人間の中に宿る善なる心・神の心信じ、大宇宙大神霊、宇宙創造の神を信じることとなるわけである。

次に進む。「不治の病、やっかいな災厄は、ことごとく先祖軽視の報い」の項の中で西日本に住む大富豪の奥さんの例として、二十年間「筋無力症」という病気のために体を動かすことができなかつた。家庭の中は暗くなり、その雰囲気になんて耐えきれなくなつた御主人が昭和五十九年秋、女性占術研究家を訪ねた。彼は言った。「お墓参りは欠かしたことはないが、墓石は苔が五センチもおおつていて、お墓は丘の上であり、先祖の墓は下の方の丘の中腹にある」と。そこで彼女はアドバイスをした。「お墓の建て方と管理に問題があつて不治の病に苦しんでいるのだ」と解答した。そして更にお墓の掃除と苔むしりのアドバイスをして帰した。その御主人はさっそく苔むしりを実行した。その晩、奥さんが四十度の熱を出し一晩中うなされ、翌朝二十年間動かなかつた奥さんの手足が動いていた。お墓掃除した結果が実証として出たこと、そして災厄や不治の病を背負っている人の九十九パーセントが先祖を軽視している一家から出ているのだと彼女は結んでいる。

サテ、この大富豪の奥さんの筋無力症の転末についての現象をどのように考えるか論を展開してみたい。大金持ちとか先祖代々からの大富豪といわれる家柄には、血統という肉体的つながりの中で先祖の霊の中には、この世に執着した霊が多い。なぜなら、代々金持ちで裕福という環境の中で、足ることを知らぬ欲望の渦中に身を置き、他人に慈愛を施すこともなく人をさげすむ心、優越感、増長慢となり金持ちとしての使命と役割を忘れ、残した土地、財産、地位、名誉、異性のことなどを通してこの世に心を残し、自縛、地縛していく者がいる。「心のままの世界が、あの世の生活と思えばよい」と高橋師が言ったように、右を向いても左を向いても自分と同じような慈愛のカケラもない者達の世界だから、安らぎなど何もない。このような人達の住む世界を、「地獄の世界、暗い世界」というのだが、そこにいる霊はその環境に耐えられず誰かに救いを求める。救いを求めるからには願いをききいれてくれそうな者に救いを求めることとなる。その霊にとって願いを聞きとどけてくれそうな霊とは、心のあり方が似た者ということだ。

ここでいう心のあり方が似た者とは、心のあり方が地獄におちている霊と同じような心ということを行っている。つまり、「類は類をもって集まる」「類は友を呼ぶ」という譬である。「酒のみには酒のみどうしが集まる」という「あれ」である。このように考えると、先づ、その大富豪の先祖の霊の中には、この世に執着した先祖の霊がいるということ。その霊と心のあり方が似た者とは、二十年も寝んでいる大富豪の奥さんということになる。それでは、この奥さんが、なぜ暗い霊を引き入れる原因をつくってしまったかを推論してみると、大富豪という人生の中で、増長慢、人をみくだす心、優越感などの外に、主人の異性問題、舅姑等の家族関係の中で暗い心の世界をつくっていったものであろう。勿論、この著書に記述されているわけではないので、推論であることを断わっておきたい。ここに出てくる筋無力症というのは特にどこが悪いのか原因がわからないが、力がはいるから手足が動かない。動かないから寝たきりになる。この「原因がわからないが」というのが重要なところである。現代医学で解明できない、説明できないところが実にクセモノなのだ。医療機器の素晴らしく発達した現代医学でも、なぜ原因がつかめないかという、現代医学は眼に見えるもの、つまり「色」「物質界」としてあらわれるもの以外は説明がつかないのである。現代西洋医学は、全て目に見えるものから始まっている。顕微鏡にしてもレントゲンにしても、医療機器すべてが、目に見えるものを対象として発達、進歩してきた。しかし、二十年間寝込んでいた奥さんという目に見える対象がありながら、現代医学ではどうすることも出来なかった。このあたりに現代医学の限界があるのだが、最近では、目に見えない「心の分野」を研究する医学も盛んに取り入れられているので、近い将来、この限界も突破されるだろう。こうなると、医者も治せない病気を治して信者を集めた新興宗教の類も、この分野では人集めも出来なくなり、真の「宗教」、つまり神理・正法を説く教団だけが残りということになる。これからは、このようなことを説く医者が出て来て医学の分野は飛躍をとげると高橋師は言い残している。

話を先に進めよう。地獄におちている先祖の霊が奥さんに救いを求めた。先祖の霊と心のあり方の似た奥さんがそれを聞き入れ二十年間寝込んでしまった。わかり易いようにこう説明したが、もう一つここで明らかにしなければならないことがある。高橋師は「地獄霊が憑依すると、地獄霊の死因となったその病状が被憑依者にも現われます」と言ったが、つまりこうなのだ。全身麻痺、半身不随、とか脳卒中とか身体の麻痺で亡くなった先祖の執着した霊がいると、助けを求められた人、つまり執着した霊と心が同通した人が同じような病状となる。ガンで亡くなった先祖の執着した霊があると、同じようにガンで亡くなったりする。これを医学ではガン家系とか、遺伝的家系と説明してしまうが、そうではない。それが霊的現象によってあらわれたとは説明できないのである。暗い心を持った人のみ先祖の執着霊と同じ病状を呈するから、ガンの家系といわれる一族がみなガンになるということはない。もしすべての人がガンにかかるとすれば、その環境の中で、全員が同じ心のあり方をしたということである。勿論、このようなことは多くはないと思うが、このように、大富豪の先祖には身体の動かさないような病気をして亡くなった霊があり、その霊と同通した心のあり方をした奥さんがいたということである。

そして、奥さんに二十年間も寝込まれて困ったのは御主人であらう。つまり、御主人の反省も大いにあるということ。大富豪という環境の中で、家族の者、それぞれがめいめい我儘勝手なことをして、家庭は不調和、ケンカや争いの絶え間がなく、対話、会話のない暗い家庭であつたらうと想像して余りある。そのような中で、主人が西日本からはるばる、女性占術研究家の許へ指導を受けに来た。「暗い雰囲気になんて耐えきれなくなった御主人が...」と原文にはあるが、この原文通りに受け取れば自己保存がありありで少し気にもなるが、女性占術家の記述になるものだから真意は不明である。しかし、二十年間寝込んでいる妻の病状を思い遣って、主人は仕事の合い間をぬって女性占術研究家の許へ行ったに違いない。どうにかしたいという心の働きがあつたのである。これはもう立派な愛なのだ。「愛」以外のなにものでもない。そして、急いで家に帰られ、病気で床に伏す妻に話したに違いない。「占術家の先生がお墓の掃除と苔むしりをするようにアドバイスして下さいよ」と。そしてそのようにされた。妻の病状の軽快を願う夫と、その愛と思い遣りに心のあかりを灯した妻。病気を通してはじめて二人の心が一つになったのである。

ここでもう一つ加えるなら、この世に執着した霊は、慣習により、死んだらお墓の中に住むのだと信じて亡くなっている人が沢山いるのである。お墓のあたりとか仏壇の辺りにいる霊は、所謂、正しくない霊、つまり地獄におちている霊である。悟った霊はといえば、一時間もしない内に、あの世の次元の違った世界にかえっていくからだ。

高橋信次師の「ことば」から

死

「死は、すべての終りではなく、両親から与えられた肉体舟との別離にしかすぎない。人間は、死んでしばらくの間は、意識不明のような状態が続くが、やがて死を悟り死後の世界に入っていく。悟っている者達は、一旦、天上界の収容所に入り、人生の反省期間を経てから、その人の心の調和度によって行くべき道が定まるのである。」

「皆さまが死にますと先づ心のきれいな人たちは向こうから迎えが参ります。肉体の先祖が悟った人がくることもあります。あの世の鼻の高い人が来たり、外国人のスッキリした人が来たりするとビックリすると思います。このために肉体先祖が来ているいろいろその中で生活の修養所のようなところへ連れて行きます。さしあたり、ある宗教団体で、他宗はすべて邪教だと決めつけた人達の中には、あの世へ帰った時に、ただし心がきれいならば、修養所で彼らのいった法華経の間違いを、そこで訂正させられます。彼らはその道場で間違いを自分で発見するのです。」

日蓮は他宗はすべて邪宗で日蓮宗だけが絶対だとはいいません。ところが、日蓮宗では南無妙法蓮華経を拜んでいてもあちは邪宗だ、こっちは本物だとか馬鹿みたいなことをいっているのです。こういうことをまず修養道場で徹底的に反省させられるのです。ある人はここで十年いや二十年、三十年やっても卒業できない人がいます。この段階がまず第一段階、さらにその上に幽界というところがあります。一般に皆様という天上界というところでは後光という光がなければこの国の扉は開かないのです。ちょうど電気の光で開く扉と同じようなものです。皆様の心が調和されて光子体という肉体の光が強ければ強いほど世界がどんどん開けて参ります。これはちょうどエレベーターにのっていると思って下さい。そしてこのエレベーターは無限に続くエレベーターなのです。私達はよくあの世に行く時に、途中で死んだ人達がついてきます。白い雲にのって途中でみな消えて知らぬ国へ行ってしまうのですが、それでも結構、天上界へ行っているのだからいいなあと思います。

その天上界の一番上の方の世界が仏教でいう如来界、または金剛界ともいいます。その世界は全く下の方から見れば、太陽だとも神様だともいわれます。この世界にはスモッグなどはなく晴天です。地獄界へ行くところとちょうど谷間のような暗いところと思って下さい。そんなところへ行くのもこの地上界を去る時に皆様自身が自分で決めてしまうのです。すなわち、神も信ぜず人を恨み・妬み・そしりした連中、自分勝手な気ままなことをした連中は奈落の底へおちます。土管の中のような真暗な世界です。その時に必ず誰かが救いに来ます。「お前、そんなところにいたら死んでしまうぞ」死んだと思っても大抵の人はこの地球上に執着がありますから、自分の死体の側にしばらく居ります。そこで自分で眺めていて、生きている親や兄弟と話が出来ないものですから、そこで疑問をもち始めます。その内にお坊さんが来て「ああ、自分は死んだのかなあ」ということになります。ところが仲々お経をきいても難しく解らない。そのうち「ああ、あいつ自動車にのってきたから自分が生きていると教えてやろう」ということになって、乗っている人に憑依して自動車事故を起こしたりするのです。葬式の後によくこういうことがありますね。お経はいくらお坊さんが一生懸命あげてくれても難しく解りません。ですから、もっと解り易く、「貴方は死んだのです。生きている時に、八正道ということを知らずに貴方はこういうことをした。だからこういう面を修正しなさい。反省しなさい」とよく教えてあげることなのです。そうしますと口の利けない死人の顔がスーと赤くなります。同時に硬直しているのが柔らかくなります。こういうことは機会のある時に試してみてください。」、と。

亡くなった直後に、御飯や好物をそなえるのはどうか

人が亡くなると、亡くなった直後は、意識不明のような状態が続くが、以後、死を悟っていく。しかし、ほとんどの人が亡くなってすぐは、地上界での意識の延長にあり、食事を欲する場合もあるので、食事をそなえたり好物をささげるのも良いだろうと高橋師は言っている。だが、悟った霊は、それ以後、天上の世界に帰って行くので、花や食物を供養する必要はないのだ。一方、地獄におちた霊達は、地上界に執着しているので、花や食物を供養する必要はないのだ。一方、地獄におちた霊達は、地上界に執着しているので、地上界の食べ物を欲しがすが、食べ物を供養しても無駄である。永い習慣の中で仏壇やお墓に花や食べ物を供養して来たが、それも先祖に対する感謝報恩のしるしとしてそのような習慣になったが、物をあげ、そなえることで「よし」とする考えほど容易なものはない。我々が、現在こうして肉体を持って生きていられること自体、先祖が我々を生み育ててくれたからであり、それに対する感謝の心は、報恩となって形の上に現われてこなければ意味がない。その意味において供養とは、経文をあげ、花をあげ、食べ物をあげるのではなく、まず家庭の和合、調和にあると絶叫し

た高橋師の教えを噛みしめてほしいのである。

悟った霊はこの世に一時間もしないうちに次元の違ったあの世の世界へ帰って行くことを述べた。普通の霊はと言うと、二十一日間は棟や家のまわり等に居ることのできる最大日数である。この間にみな修養所のようなところに入って行く。二十一日間を過ぎても、まだこの世に執着している霊を自縛霊、地縛霊、浮遊霊と言うが、助けを求めて色々な現象をあらわし、困ったことを引き起こす霊である。この二十一という日数は、あの世の定めである。釈迦は反省、中道の正法にめぐめて二十一日目に悟り、実在界に招かれて法話をするが、二十一というのは、あの世の定めであって、死者の霊の場合も二十一日間はこの地上界にいて自由行動が出来る仕組みになっている。もしも、こうした仕組みがなされていないと、この世は大混乱になってしまう。それはどういうことかということ、悟った霊ならともかく、悟らない霊が生きている人間同様に、その行動が自由になるとすれば、多くの人に憑依し、地上界は、たちまち悪霊の支配下におかれてしまうからである。葬式後、死者が家に遊びに来るとか、あいさつに来る例は多いが、死後二十一日間は、そうした自由が許されているからである。

しかし、その後はそうした自由行動は許されない。このきまりを破るのが自縛霊等の悪霊というわけだが、このように地上に執着を持った霊は、その土地、場所にいるのである。また土地、場所だけでなく物にも通じており、その物を持つと凶事が起る例はよくあることだ。自縛霊は行動の自由はないのだから、その場所に常時いるかということそうではなく、霊視でも見える時と見えない時があるはずだと、高橋師は教えている。

四十九日の由来は何か

死んだ人の霊魂が家の棟を離れない期間は二十一日間というのが、あの世の仕組みと述べた。二十一日を過ぎると、どんなにこの地上に執着を持っていてもあの世の収容所へ行かなければならない。

あの世の入口で次のように尋ねられる。

「あなたは死ぬ覚悟ができていますか」「あなたは死に対する心の用意がありますか」、と。そして、自分が生きていた時のことをパノラマ映画のように見せられ、そしてまた聞かれる。「あなたは一生のうちに、人に見せられるような、なにかをやってきましたか」「あなたは生きていた時に、自分でこれはいいことをしたと満足できるなにかをやってきましたか」、と尋ねられる。

そして、その後の二十八日間に死者は生前の魂の状態、心と行いによって天上界へ行くか地獄界へ行くかが決まる。先の二十一日間と、この二十八日間を加えた四十九日が、この由来の理由である。だから、この四十九日間は、死者が大事にしていた金銭財宝を処分したり、財産争い等の、あの世へ行った人の魂をゆさぶるような行動をとると、死んだ人の霊がゆさぶられ、一度はあの世の定住地へ行ってもすぐ地上の執着を持っていた場に引き戻され、自縛霊となって、生きている人々の間にいろいろな現象をひき起こす。このような理由によって、四十九日間は静かにしている方がよいのである。

サテ、話を先へ進めよう。

これまで説明したように、地獄の困りものの霊は、死んだらお墓に住むと思っているから、本当にお墓にいる。妻の病状回復を一心に願う夫が占術家を訪ね、そして子供達と一つになって力を合わせてお墓を綺麗にする。その時の光景が眼に浮かぶようである。一つに調和された家族の姿をまのあたりにした先祖の霊の心に一条の光がさす。こうして、その晩、四十度近い原因不明の熱が出、翌朝まで続き、奥さんの手足が動くこととなったというわけ。二十年前に原因不明の筋無力症となり、原因不明の高熱とともに手足が動いた。このように、霊的な現象によって起った病気は、劇的な症状をともなって快癒するのである。こうして二十年間病床にあった奥さんと夫、そして子供達が手を取り合って嬉し泣きしたそうである。女性占術研究家は、「お墓を大事にしたことがこのように実証された。だからお墓などと軽く見てはいけない」と書いている。この記述にある通り、お墓をきれいにしたことによって病気が快復したことは事実である。この占術研究家の指摘される通り、お墓を綺麗に苔むしりをしたことを縁として病気が治癒した。その事実は事実として認めなければならない。この治り方が正しくて、この治り方は間違いであるということはない。治ったものは治ったのであり、「本当に良かった。一つの家族が救われることになった」と思った。

だが、全国の幾万という読者に対して著書を通して、「だからお墓をきれいにすれば不治の病も奇跡的に治るのだ」と「大声」されるとだまっている訳にはゆかないのである。このケースは今まで論説して来た通り、家族の一つに調和団結した姿が「愛」となって自らの家庭を救うことになったのであり、暗い家庭の中に一条の「光」を投じたのである。だからお墓をきれいにすることが奇跡を生むのではないのだ。そして、この項の終りに、女性占術研究家は次のように述べた。「私が知っている範囲で、不治の病、とんでもない災厄に見舞われたりする人の九十九パーセントが先祖を軽視している一家から出ています。たとえ、今現在なんともなくても将来かならずや大きな悩みを背負うことになります。（下線はウェブ・マスター）とあるが、もうこれは真実を知らない読者への強迫、脅迫以外の何ものでもないのである。既存の、そして新興宗教のいつもの手ではないか。ある教団をやめた人がいると、そこの信者が、やめたその人との挨拶がわりに「あなた、最近なんともない？」と言うそうである。やめた後、あなたの体はどうもないかと言うことらしいが、わかり易く言えば「罰は当たらない？」ということなのだ。まったく同次元なのである。

著者は真実を知らない人に間違っただけを説き、脅迫する人を許せない。不治の病、とんでもない災厄は、すべて自らの生きざま、生活行為と、心のあり方に原因があったからである。そのような一家だからこそ先祖を軽視することにも通じることになるのかもしれないが、「先祖供養」とは、お墓参りをしたり、お墓の掃除をすることではないのである。高橋師は、先祖供養とは家庭の調和、夫婦、一族の調和であり、アハハ、オホホと笑いの絶えない生活行為なのだと言を大にして説いた。それでは、「先祖供養」とは何か、高橋師の「ことば」より聞いてみよう。

「先祖供養とは何か」

1)、「先祖供養というと、昔から仏とか、先祖の霊に物を供え、お経をあげることに思われているが、本当はこれでは供養にならないのです。供養の意義は「先祖の霊よ安らかなれ」とする子孫の祈り心でなければならぬからであります。物を上げ、それで、「よし」とする考えほど容易なものはない。私達が現在こうして肉体を持って生きていられること自体、それぞれの先祖が私達を生み育ててくれたからであり、それに対する感謝の心は、報恩となって形の上に現われてこなければ意味がありません。供養の意義はそれゆえに、まず家庭の和合、調和にあるといえるのです。人間の霊魂は、死という肉体機能の停止によって、あの世で生活をはじめます。世間の人は、肉体が灰となれば人の魂まで無に帰すと思っていますが、それは間違いです。永い習慣の中で、法事で物を供えることは、本来、気安めにすぎませんが、死ねば無になると思いながらも、物を供えるその心を確かめたことがあるでしょうか。

家庭の和合、調和が先祖の最大の供養という意味は、あの世に帰った先祖の霊が、その子孫の家庭をたえず見守っており、もしも先祖の霊が地獄に堕ちて自分を失っていたとしても、子孫の調和ある家庭をながめることにより、己自身の不調和を改め、その霊をして昇天させる原動力となるからであります。子の幸せを思わぬ親はないはずですが、しかも、その子が親より立派であり、家庭が円満に調和されていれば、親は子に励まされ、その子に恥ない自分になろうとするのは人情ではないでしょうか。あの世もこの世も、人の心に少しもかわりはないのです。生前の思念と行為ゆえに、人が地獄に堕ちれば文字通り苦界にあえぎます。類は類をもって集まるの喩で、その霊は自分と同じ思想、考えを持った人に助けを求め、いわゆる、憑依作用となって人の体、実際には意識に憑いてしまいます。すると憑かれたその人は、病気をしたり、自殺したり、精神病になったりしてしまいます。地上が調和されると、あの世の地獄も調和されます。あの世とこの世は、いわば相関関係にあって、個々別々に独立して存在するものではありません。先祖の供養というものは、このように、まず個々の家庭が調和されることであり、調和こそ最大の供養ということを知って頂きたいと思えます。」

2)、「先祖供養とは、過去世で修行した生命の兄弟たちに劣らぬ自分を磨くことである。それがまた、肉体先祖の供養にもつながる。時の流れにゆだね、今世の目的を忘れれば、天の配材を自ら汚すことになる。」

3)、「今、仏教では先祖供養をやっています。先祖供養といっていくら経文をあげたところで、先祖は救われるものではないのです。生きている皆さんが先づ自己確立をし、家庭を円満にし、明るくすること、そしてお互いに信頼をし、そして愛の光によって満たされた時に先祖は皆、うかばれてゆくのです。難しい経文をあげることではなくて行為によってその事実は実証されてゆくのです。それ以外に先祖を救う道はありません。そして

自分達の心が、きれいになり調和され明るい家庭が出来たならば、初めて、「先祖のみなさん、私達はお蔭さまで、このように平和に暮しております。これも先祖のみなさんがあればこそです。有難度うございました。もし先祖の皆さんのうち、地獄におちて暗い生活をしているとしたならば、その皆さんはよく考えて下さい。地上界において生活をしておった時に、人を恨んだり、ねたんだり、そしたり、怒ったり、愚痴をこぼしたり、或いはまた、足ることを忘れ去った欲望のままに人生を送りませんでしたか、或いは人目を気にして虚栄の生活をいたしませんでしたか。もしそうであったならば、素直に皆さんは神に許しを乞うことです。皆さんは自らの心に嘘がつけますか。嘘のつけない心を、たとえ皆さんが地獄にいても持っているはずで、その嘘をつけない心で勇気を持って自分自身の罪、けがれを、全て神に詫びることなのです。あなた達は、その勇気が必要なのです。あなた達の足を引っ張り、天上の世界に返すまいとする霊もいるでしょう。しかし、それをふり切る勇気を持ち、あなた達自身の罪、けがれを清めなければいけません。よく振り返って自分自身の心の中を整理して下さい」とこのようにやった方が、お経の何千倍、何百倍も効くということです。難しいお経を上げてそれがわかるようなら地獄へなどおちません。」（一九七六年五月二日～五日、富士みどりの休暇村における青年部研修会）

4)、「肉体が自分だと思ったら大間違いです。第一自分の肉体が自分の思うようになりませんか。肉体が自分なら病気もしない筈ではありませんか。病気をしたり、思うようにならないというのは、肉体は単に借り物にすぎない。魂の入れ物、乗り舟にすぎないからなのです。肉体はやがて、この現象界においてゆきます。肉体を焼けば、三合の灰に化してしまいます。あるいは、二酸化炭素に殆んど変わってしまいます。燐酸カルシウムというものになって、大自然の中に分解してしまうのです。ところが、肉体を支配していた意識そのものは、次元の違ったあの世に帰ってゆきます。その時の自分の姿は、光子量に基づいた光子細胞という肉体をまとい、今度はあの世で生活するのです。その時、各人がこの現象界で、神仏を信じないでいた者は、ダイレクトに地獄に墮ちます。これは、各人が、自分を自分で裁いていくのです。あの世に特別な人がいて、あれこれ、指示するものではありません。各人の光子量が、その位置を決めるのです。」『天使の再来』

5)、「肉体を頂いた事に対する感謝の心で、親孝行する事は当然の道です。それも出来ないような人々がたくさんおります。先祖を拝む前に一番大切な事は、健康であり、そして心が豊かであり、家庭の中がいつもオホホ、アハハと笑える生活の出来る環境を作る事です。その時、おのづから皆様の家庭の中には曇りが無いために、神の光によって満たされ、平和な、調和された環境が作り出されて来るのです。それを拝み屋にきくと「お前の家の先祖の四代前がそのようにして、このようになった。この人が浮ばれていないから二十一日間一心に祈れば救われる」といいます。冗談じゃありません。地獄に墮ちる責任は、他人ではなく己自身の想念と行為にあったのです。心です。心の曇りがあるから、自分自身地獄に落ちて行くのです。こういう先祖に対して、わけの解らぬ「南無阿弥陀仏」を唱えたところで、あるいは「南無妙法蓮華経」を唱えたところで救われると思いませんか。とんでもない事です。」『高橋信次講演集』

次に、「お墓」についての高橋師の「ことば」を聞いてみよう。

「お墓」

「皆様は、その丸い心を更に豊かにすると共に、神の身体である大宇宙の中の細胞の、ほんの小さな部分にしか過ぎないこの地球という場を、万物の霊長として、心と心の調和のとれた平和なユートピアにするという事が、生まれて来た目的と使命である事を知らなければなりません。それを歴史はいつのまにか先祖代々、これは俺の国だ、これは俺の土地だ、と勝手に占拠してしまいました。占拠したところで、あの世に帰る時は何も持って行けないのです。それどころか、もしそれに執着を持ってしまえば、その場所は地獄界です。よく世の中には墓相というものがあって、お墓を作る時こういうお墓が良いんだとか、お墓の石塔の頭が欠けていると先祖がこうで残されている者はこうなるんだ、とかいろいろな事を言う人がおります。ところが、実はそれは金儲けのために、そういつているのです。執着を持っている人達はその場所を地獄界とします。長い歴史の中の習慣というものは恐ろしいものです。あの世へ帰っても、正しいという心の規準がないために、そういう世界で生活

して地獄界を展開しております。お墓へ行きますと、地獄に落ちた霊達が墓から「救って下さい」と手を出している者や、首から上を出している者や、足を半分出している者達がたくさんいるのを見て来ます。それは皆自分自身が心の執着を持って、この世に対する去り難い心がそのような世界を展開しているのです。

大体が、お寺とか、神社とか、仏閣に執着を持って死んで行った人は、間違いなく地獄界です。本来は、次元の違った調和された世界に帰るのが本当の姿でありますのに、恨み、妬み、誹り、自分さえ良ければよい、あるいは自己保存、自我我欲という不調和な想念と行為によって、自らの手で偉大なる神の光を遮り、広く豊かな、丸い、大きな心をいびつにし、多くの苦みを作ってしまうからです。あの世の世界は、その人の心に比例した光の世界です。下の方の低次元の人々は、上の光の世界に行く事は出来ません。まず、イエス・キリストやモーゼたちが地獄界へ行ったら太陽と同じです。光で輝いて見ることが出来ません。皆様の中にも心の窓が開かれている人達が出てまいりますと、その姿をはっきりと確認する事が出来ます。あの世とこの世は「ア」と「コ」の違いで裏表です。遠いようで近いものです。何時でも違った世界から、各々の深い縁によって、お父さん、お母さんを選んで出て来ているのに、親不孝をし不調和な諸現象を作って苦しんでいる人達がいっぱいおります。」

『高橋信次講演集』

同じく、高橋師の講演の中から引用する。

「最近ではヒトラーとかスターリンが無間地獄に堕ちています。なぜ無間地獄に堕ちるのかと申しますと、恨みと妬み、そして人を殺したその恨み・第三者の恨みが晴れるまで彼等の意識を束縛してしまうのです。そのような人間は無間地獄に堕ちるのです。あるいはまた金、金といって金のことしか考えない人達は餓鬼界におちてゆきます。餓鬼界という世界は最もきびしいところです。食物もありません。全く骨と皮だらけの世界です。私は行ってみて本当に気の毒だと思いました。それから、皆様の心が怒る心、そして恨みの心これは心の中で思っただけでも駄目です。その心は阿修羅界に通じていることを知らねばなりません。そして私達はその恨みの心が阿修羅界に通じていることをはっきりと現証にて確認することができます。それですから、皆様は夜夢でとんでもないところへ行ってビックリすることがあるでしょう。そんな夢を見た時には必ずその前の日、皆さま自身の心の中に不調和な現象があったからです。こんな体験がありました。過日、私が家を建てるために、古い家を壊しかけました。その家は今の天皇陛下（昭和天皇）がたまたまこられて、そこでお神楽をご覧になった場所で、伊藤博文の書だとか額だとかいろいろ掛けています。非常に古くから代々続いている古い家だものですかから、土蔵を壊し始めたところがいっぱい霊がいました。彼等はいうんです。「あなたは一体誰だ、私は何代前のこういう者だ。俺の家を勝手に壊しては困る」そこで私は「子孫が繁栄するのを望んでいるのなら、あなた達はなぜそんなことに執着を持つのです。あなた達はこの地球上に住むべきではないのだ。執着をはなれて天上界の光の国へ帰りなさい」と話してやりましたら「そんな国なんかありゃしないさ」と彼等はそう答えました。死ぬ前にそんな執着を持っているから自分が反省する機会を失っているんです。

そのうち一人の工員が怪我をしましたのでこれはおかしいと思ったところが、後の方に、有象無象たくさんいます。そこで私が「先祖代々の諸霊よ、あなた達はこの地球上に執着を持ってはいけません。あなた達は良く聞きなさい。あなた達はこの地球上に執着を持ってはいけません。なぜあなた達が地球上に執着を持っているのかそれを良く教えてやろう」ところが、彼等に地獄へ堕ちても九〇パーセントの表面意識ですから、すぐ私達の光は解ってしまいます。そこでコンコンと話をしたところ、「ああ、俺達はやはり死んでいるんだ。この家に未練を持って子孫と話をしようとしても、あなた以外には話はできなかつた。申し訳なかつた」と言いました。それも五代、十代、二十代と古くなるほど本当に解りません。こういう連中が地獄に堕ちているのです。彼等はお墓やお寺が自分の世界だと思っているので、それも地獄なのです。こういう世界に執着がある彼等は、本当に全てを捨て切ってあの世の天上界に帰らなければいけません。その地獄に堕ちるには堕ちるだけの理由があります。そしてそう裁くのも自分自身なのです。閻魔大王が側にいてお前はこんな悪いことをしたから地獄だとは、とんでもない話です。皆さま自身の心は絶対に自分には嘘をつけないはずです。この嘘をつけぬ善なる己自身の魂が自分を裁くのです。

私はこういう質問をうけました。家のおじいちゃんはお墓がないのです。大きな石塔をお金があるから作ってやりたい。ああそうか、おじいちゃんの名前はなんという、年は、と聞きました。ところが、名前というのはインドの時代も目連という名前が沢山ありました。また迦葉というのもそうですが、そのため大・中・小といろいろ区別した名前にしたのですが、日本の場合も小林太郎といったら何百人もいます。先祖代々でなくとも、肉体的血縁がなくともあの世から呼び出されればここへ来なければならぬのです。だから、皆さんが自分の先祖を先

祖代々と呼ぶと本当に来るのです。ただし心がないと地獄霊だとか、おかしなものが来ます。ところがこのおじいちゃんも天上界に出ている人でしたから、「お墓をつくるのはいかん。金が掛かるから。もっとかわいそうな人達にその金を貸してやれ」といわれるのです。その方は墓をつくるかわりに喜捨をされました。

もう一つの実例があります。ある化粧品の大きなメーカーの社長で、その方は非常に立派な方で幼少から天理教に帰依していました。ところが忙しくてそのうち天理教はやめました。その神理の中から立派にこの道を弁（わきま）えています。七十で亡くなりました。約五百人いる従業員が、どうしても社長の銅像を建てたいと言って私のところへ尋ねてきました。その亡くなられた社長があつた世から出て来ていろいろ話きいてみましたところ「お前達がいつか経済的に不況のために会社が困ることもあるかも知れない。銅像を建てる金があったら、その時の資金にとっておきなさい。銅像など建てる必要はない」とその社長がいわれたそうです。実はこのことを亡くなられる三日前にも同じことをいわれたそうです。そこで、たまたまある人を介してその会社の役員達が従業員の希望と前社長の遺志とをどう考えたら良いか判断に迷って私のところへ相談に来られたのです。ところがこの社長は大したものです。「私達は地球上で生活している時よりももっと良い環境で生活している。地球上に思い残すことは何もない。だから、多額のお金で銅像をつくるなどその必要は全くない。会社の多くの店舗の中で、もし一つでもうまいかなくなった時、その救済のための資金として残しておくように」と言われました。

死んでも欲しがるのは地獄霊ですが、毎晩ご飯を供えてくれなければ、先祖はひもじいのだなどと言ってくるのは地獄霊です。余談ですが、あの世にもこの地球の食糧とは違いますが食事はあります。ですから、まず皆さん自身が、家の先祖の皆さんに、「私は皆さんの姿を見ることはできないしかし、そのうち調和されて心がきれいになれば皆さんの姿も見えて参りましょう」こうして先祖の生きて居られた時のことを思い出して、もし間違いがあったら、ああです、こうですと説明してあげてご覧下さい。それにはまず一番大事なことは、家の中を平和にすること、そして心にわだかまりがなく夫婦調和し、調和のとれた平和な家庭をつくることそれが本当の先祖への供養なのです。皆さんは自分の子供が不幸になることを望みますか？望まないと思います。これと同じように、お爺さん、お婆さん、また、もっと以前の先祖も残された子孫が不幸になることは絶対に望まないはずですよ。

ちょうど関西歌舞伎で東京から来ている俳優が昨日私のところに参りまして「先生、私は今仏壇の御供養のために大変なのです。私達の食事よりも多くの迷っている霊のために食事を供養することが大変です。実は足が不自由になっているのでなんとか先祖を供養してと思っているのですが...」というので私は霊視で「あなたは憑依されている、あなたは先祖を拝めば救われると思っているが、実は自分の関節までだめにしかかっているではないか。食事が欲しいなどという先祖はないはず。先祖供養を考え違いしてはなりません。悪い関節はすぐ治してあげましょう」とよく話しをし、光を与えました。現在元気で大阪公演中です。このように私達は先祖にはまず感謝し、家の中を明るくすることこれが一番の先祖供養です。それを忘れて家の中などかまわずに、ただ先祖様にだけ好物をいくら御供えしても、これは本当の信仰とはいえません。私達は肉体を頂いたことを感謝する心と行為を現わすには体を丈夫にすることです。そうして同時に心をきれいにするということです。こうなると自然と家の中は明るくなり、経済的にも安定して参ります。これは八正道の正業すなわち正しく一生懸命に仕事をするから当然の結果です。こうして自分の家が平和になったら、今度は隣近所の人々に愛と慈悲を分かち合うそして調和を作っていく、これが本当の神理です。

先を続けよう。

女性占術家に相談に行かれ、彼女のアドバイスでお墓を掃除された。その結果、永年、病床にあった金満家の奥さんの体が治った。劇的な症状とともに快癒された。ウェブ・マスターも、一つの家族が救われたという喜びで一杯である。一家の主婦が二十年間も寝込むという永い暗い日々であったろう。奥さんが、主人が、そして子供達が二十年間の病気を通して、自分達をじっと見詰めることとなった。反省となった。そして、今救われたのである。それは、この現象界（この世）でのまたとない修行となったのである。これから残された大切な人生を、明るく調和された対話のある楽しい家庭を築いて欲しいのである。そして、大富豪という環境の中で、人には思いやりと慈愛の心を持ち、今世は金持ちという環境の中で、魂を磨くのだという使命と役割をしっかりと考えて欲しいのである。そして、オホホ、アハハと笑の絶えない明るい家庭には病気も災害もなく、たとえそこに暗い霊がいても霊的現象など起らないのだということを知って欲しいのである。そして、明るく調和された姿を見て暗い霊も昇天するのだということを知って欲しいのである。

次の項の、「先祖を大切にすることは、現在が充実し、現在の充実が未来の希望を生み出す」で、女性占術研究

家は因果応報、という言葉を通して前向きの姿勢で「いい因」を積んでいかねばならないと説かれ、いい因をつくるためには先祖供養をしなければならないと説かれ「先祖のまつり方」の前編ともいうべき項を終えた。高橋師は「因縁の法」を善因善果、善い原因は良い結果をつくる。また、その反対に悪因悪果、悪い原因は悪い結果を生むというわかりやすい言葉で説明した。彼女は「良い因をつくるためには先祖供養をすることだ」と説かれたが、良い因、つまり善因とは果たして先祖供養をすることだろうか。否、である。既存の宗教、新興宗教のすべてが、彼女が言うような「幸福になるためには先祖供養を！」という説き方をするが、この間違いも高橋師は声を大にして修正を求めたのである。幸福になるためには良い因をつくらなければならない。それは正しい。良い因とは「正法」の道、正道を歩くことを言うのである。正法とは八正道にかなった生活を通して人に慈愛を施し、神の心にかなった生き方を言うのである。八正道とは、八つの正しい道、八つの正しい心のあり方、生き方を説いたものである。

「正見」とは、常に第三者の立場に立って自我の思いを捨て、正しく見る努力をする。

「正思」とは、慈悲と愛からの思い。

「正語」とは、心に愛があれば言葉以前の言葉が相手に伝わり、こちらの意思が正しく伝わってゆく。

「正業」とは、正しく仕事をする。仕事とは愛の行為である。

「正命」とは正しく生活すること。正しい生活とは右にも左にも片寄らない中道にある。

「正進」とは、正しく人と調和する。

「正念」とは正しい目的意識を持つこと。

「正定」とは、正しく反省、禅定する。

これらの八つの正しい人間の歩く道、生きる道の八正道にかなった生き方、人生のあり方をするのが、善い因をつくるということである。高橋師はこれ以上でも、これ以下でもない八つの正しい道歩くことであると人類に説示したのである。二千五百年前の古代インドの釈迦も同じ八正道をお説きになったのである。このように、善い因をつくるということは決して、先祖供養をするということではなく、正しく生きるということなのである。この「正しく生きる」ということの正しい規範は、八正道を行ずる（実践する）ことだと高橋師は声を大にして説いたのである。繰り返す言うが、先祖に対する感謝は報恩となって人に対して慈悲と愛の道を顕現すること、実践することなのだ。決してお経をあげたり、お茶や食べ物を仏壇やお墓に供えたりすることではないのである。残念ながら、永い風習の中に間違っただけのものになってしまった。

次に進む。

「二章 運命を開くお墓の建て方」「三章 運命を開くお墓の守り方」「四章 運命を開くお墓参りの仕方」以上のように二章から四章まで五十四項目に分け、お墓の建て方から守り方、お墓参りの仕方等を微に細に細に解説されている。先づ最初に、そもそもお墓というのは何んなのかと言うと、この世で酷使しこわれた肉体、亡骸を捨てる場所である。

人間はこの世かぎりと思えばこそ、この世に執着したり、この世に想いを残すのである。同じく肉体や遺骨に心を残すことになる。なぜなら、お墓はこわれた肉体の捨てどころと申し上げたが、このような言葉を使うことにさえ抵抗を感じる人がほとんどではないかと思う。それはもう執着なのだ。もしあなたが、あの世で暮らすもう一つの体があると心から信じていれば、亡骸はどう処理されても一向に平気なはずである。現に、私達は魚や鶏、牛、豚などの動物や、植物、鉱物を食糧にするが、もしこれらの生きものが、彼等の肉体、からだに執着したらどうなるのだろうか。魚や牛肉を食べて霊的な障りがあったら、私達はなんにも食べることができず、肉体の保存さえ不可能になるが、実際にはそんなことはない。だから、彼等に感謝しなければならない理由がここにもある。人間と同じように動物も植物も鉱物も靈魂はあるのだ。だが、執着もせず、人間の血や肉になってくれるのである。ここで言う、動物や植物や鉱物に感謝するとは、粗末にしないということ。足ることを知って、むやみに殺戮しないことを意味する。

こうして、人間はこの世限りではなく魂は永遠不滅だということを悟って、いさぎよくこわれた肉体をぬぎすてて「あの世」に帰らなければならないのである。魂の抜け殻である肉体は、土葬されようと、火葬にされよう

と、外国で行われているような鳥葬、水葬で処理されようとも執着してはならないのである。現代日本では、法律によって火葬以外は認められていないので、空中散布やその他の方法では、出来る相談ではない。このようにして、日本では火葬された後に残った遺骨を骨壺などに入れてお墓に安置することになる。永い間の風習から、肉体が全てだ信じている人達は、故人の遺骨がお墓などに納められるのを見て、死んだらあのようにお墓に永眠するのだと思ってきた。

しかし永眠などということはないのである。この世を去ったら、光子体というあの世の「からだ」で暮すことになる。ところが、このように間違っただけになったのである。お坊さん達もまた、そのように説いて来た。高橋師は間違ってしまった永い習慣を、厳しく修正を求めたのである。そのために高橋師は、靈魂は永遠だということを示すために「転生輪廻」、生まれ変わり、死に変わりして魂の修行をするという証明として、過去世で生きていた当時に使っていた言葉を語らせて見せたのだ。これを高橋師は「霊道現証」として講演の度に大勢の聴衆者の前で公開したのである。ところが現実には、自分はお墓の中で過ごすのだと信じて、この世を去った人の何んとも多いことか。そのように信じて死んでいった人は、「心のままの世界」、つまり信じたままに本当にお墓にいることになるのである。

ところで、ウェブ・マスターは二十歳の頃、父の命によって、遠くにある先祖代々のお墓を移動させる手伝いをしたことがある。数百坪の墓地からボロボロになった刀などが出て来たが、大学の長期休暇の時期に、何日も父の運転手として協力したのである。その時の父の話し振りからすると、元気な内に自分の安住の墓を、家の近くに移転させておきたかのように思えるのだ。それから二十年近くして父は亡くなるが、今にして思うとお墓の中に永眠するのだと信じていたように思うのだ。そのように考えるのは父ばかりではなかったろうが、「正法」に帰依し、勉強するようになってからは、お墓の掃除に行くたびに、生きている人に話しかけるように語りかけるのだ。

「お父さん、亡くなったらお墓の中にいるのだと信じておられたかもしれませんが、それは間違いだそうです。この世に生きておられた時の一つ一つを思い出され、もし反省することがありましたら、修正して神に詫言ひ天上界へ帰って下さい。僕には、お父さんが、どこにいらっしゃるのかわかりませんので、このようなことを申しておりますが、間違っていたら許して下さい」、というようなことを話し掛けるように言って、高橋師の示された「心行」を読み上げてお墓をきれいに掃除して帰ることにしている。勿論、先祖代々の墓だから、先祖の皆さんにも同じようなこと言うのである。このように肉体を持つことができたのも、先祖の皆様のおかげだから、感謝することは当然なこと。お墓掃除は、先祖により、そして父により残されたお墓だから、草ぼうぼう荒れ放題では美観も悪いし、余りにも無責任だから、残ったものの責任として年に数回お掃除をするわけである。勿論、普通に行われるように、お花と線香をあげるが、きれいになったお墓に花が飾ってあれば、我々の目からも美しく良いもの。そして、線香はブヨや蚊を追い払うのに都合が良いし、香りも嫌いではないからである。それでは、線香について高橋師の「ことば」より要約しよう。

なぜ、線香が使われるようになったか

「お釈迦様の時代、当時の比丘、比丘尼達は精舎（勉強所、道場）で共同生活する中で大変に臭かったものだ。インドの当時は今のような石鹸がある訳でもなく、あえて石鹸と言うならば、日本のツバキの葉のようなものを石で叩き、身体に塗って洗ったものだが、匂を消すために、「せんたん」の香を燃やしたものだ。それが後の世になると線香をあげるようになった」と、高橋師は明らかにした。

確かに死体を安置している時、死臭を消すのには効果があるが、あの世の霊が喜ぶとか、霊の世界に関係があるものではなかったのである。ある炭鉱町の、落盤事故で数百人の死者が出たそうである。知り合いが、死体の安置されている部屋で寝ずの番をすることになった。夏のことで、それはそれは大変なニオイだったそうである。薬局から、あらゆる消毒薬、ニオイ消し、スプレー等を使ってみたが、一向にニオイは消えなかった。線香ならばと、あるったけの線香を燃やしたら、ニオイがピタリと止ったという話を思い出す。最近では日航の墜落事故で五百人程の人が亡くなったことがある。身許確認のために従事した医者の方の言葉の中にも、このような線香の話は記憶に新しいが、数百人分の死臭が線香の香りで止まるという程だから、その効用たるや相当なものだろう。線香はもともと体臭消しだったとお分かりいただけたらう。それではローソクは何か、どういう意味があるのか述べたい。

<ローソクの意味は>

釈迦が説法をするときは、衆生が仕事も終わり、暑さもしのぎ易い夜が選ばれた。日中は、釈迦教団のマイトレヤーなどの女性教員が鐘、太鼓をたたいて「今夜、どこそこでお釈迦さまの説教があります」と触れ回って人を集めた。説教が始まると、明かりとして火が燃やされるが、これは菜種油だったと信次師は明かしている。説教が終わると、焼け焦がれた夏虫たちの供養が常だったようだが、ローソクの由来は、説教のための明かりだったのである。そして、「法灯」を消すなということ、油の火やローソクを消さないということに間違ってしまったのである。

法灯を消さないという意味を説明するところだ。心の光明を消さないということ。現代のように正しさの価値基準が物質やお金で計られ、エイズ等の性の退廃、環境汚染、家庭や社会の混乱は、世紀末現象と言われるまでにクローズアップされている。正しさの基準を見失ってしまった時代を「末法の時代」と言うが、人類の風潮が流されこうならないようにせよという意味である。こういう時代になると、それに符号したように、示し合わせたように、覚者である如来が生誕して法を説き、神理の種を蒔いて、また、あの世へ戻るのだ。高橋信次師が正にそうだった。如来とは「来るが如し」と書くが、自由自在にそのときに合わせて法・神理を説く最高段階の覚者である。法灯を消すなということは、このような世紀末現象の時代にならないように、心の光明を、正しさの価値基準を消さないということである。

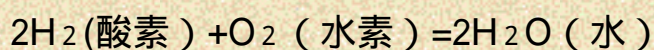
ところが現代では、あの世を照らすためにロ - ソクをあげろ、洋ロ - ソクじゃだめだ、和ロ - ソクが良いとか、この宗派はこの型のロ - ソクをあげろ、そして中には蛍光灯の方があの世を照らすには良いとか、大変にぎやかなこと。自分達の都合のよい環境を整えるために、勝手な解釈をして理由づける。このことがいつの間にか、灯明は葬式に欠かせない習慣となり、祭壇には必ずローソクなり、灯明がともされることになった。灯明に意味づけようとするれば、いくらでも理屈はつけられるが、仏教の灯明の始まりは、このように、もともと単純素朴なものだったのだ。

<水や塩について>

また、水や塩についても、水は汚れを洗い流してくれようし、塩は調和の結晶であるので、だんだんと仏教の中に入れられてきたようである。また「水」や「塩」については、次のように高橋師は説明した。

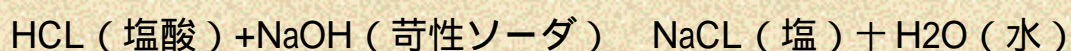
「水」については、

「酸素と水素は、どちらも極端に火に燃えやすい。この燃えやすい酸素と水素が結合すると、火を消す水となる。



「塩」については、

「強酸である塩酸（HCL）と強アルカリである苛性ソーダ（NaOH）が混ぜ合わされると



このように「水」と「塩」が出来る。御存知のように、塩酸と苛性ソーダは、どちらも骨を溶かすほどの劇薬で、この二つが結合すると、安定した水と塩になる。このように、酸と塩基の両極端のものが、両極を捨てて真に中和された中道の姿となった時、最も安定し調和された「水」と「塩」になるのである。人間は水と塩がなくては生きて行けない。物質をボロボロに破壊してしまうほどの塩酸と水酸化ナトリウムが、最も安定した水と塩になる。これは正に、調和された中道の姿を示すのである。この物質の法則は何を教えているのかと言うと、極

端から極端はいけない。中道でなければいけないということを教えているのだ。お祓いに、水と塩を使うのは、神の道は中道である。中道に立てば一切の不浄、争いは消えて調和するということを教えている。自然の教示以外の何ものでもないのである。

手を合わせる合掌の由来

『心行』の一節に、「苦楽の両極を捨て中道に入り、自己保存、自我我欲の煩悩を捨てるべし」、とあるが、神仏に手を合わせる合掌の姿は、右と左の両極端の手を真中で合わせるという中道の姿なのである。

高橋師の記述から

「合掌は、右にも左にも偏らない調和を意味し、それは、中道を示しているのである。つまり、合掌とは、自分自身が左右に偏らない生活を、自分で、自分に誓うものである。題目をあげる場合も、合掌をしながらあげるが、題目をいくらあげても、心の安らぎは得られない。心の安らぎは、自らが調和した中道の生活を行なう中から生まれてくる。愚痴や怒りや、足ることを忘れた欲望の両極端の思念と行為からは生まれてこない。にもかかわらず、人々は調和の心とは縁遠い偏った思いや行為をしながら、題目や合掌をしている。これでは、いくら経っても、自分自身の生活は調和されない。」

これまで間違って伝えられた習慣の由来について述べた。もうおわかりのように、人が亡くなったらお墓や仏壇の中にいるのではないのである。そう考えると、亡骸を捨てるはずのお墓に、「お墓の建て方」、「守り方」、「お参りの仕方」等と、理由をつける方がおかしいと気付くはずだ。「天動説」を間違っただま信じて来たように、お墓も誰が間違っていないと言えるだろうか。これこそ、非科学的と言わざるを得ない。本来、宗教は立派な科学である。科学と相反しないのだ。高橋師にアインシュタインが霊的通信で霊示を与えるが、真の宗教は科学である。今までに伝えられた日本仏教は、永い間に歪められた非科学的な学問に過ぎなかった。しかし、これも高橋師は厳しく修正を求めたのだ。このような論点に立って、女性占術家の論旨を列記してみる。

- お墓は住んでいる近くで静かな、住いから見て西または北西で、住んでいるところから遠いなら移しかえる。
- 新しく墓地を買ってお墓を建てる時、墓地全体の土を入れ換える。整地をきちんとする。
- 墓地のまわりに門をつけない。墓地の中をコンクリートで固めない。分相応な大きな墓はつぐらない。他の墓との境界線をはっきりさせておく。午前中に日光の当たる場所に建てる。相続は長男が一番いい。
- 墓石の材質は硬くて丈夫なもの。色は白が一番良い。重さは六十キロから八十キロ位のもの。奇をてらったお墓は凶運を招く。お墓にキズがついていると不幸を招く。
- 会社墓をつくと社業が大いに繁栄する。故人の実印はお墓に納めたがいい。ロッカー形式のお墓は子孫が喘息で苦しむ。

また、次のような事も書かれている。

お墓参りをすると功德がある。線香や花、お灯明をあげる。墓石を水で清める。写経を納めてあげると故人が成仏間違いなし。お墓参りは一人で行くより家族総出で。お墓参りは命日、お盆、お彼岸にこだわらず出来るだけ多く行く。お墓をつくったら次に仏壇をまつ。仏壇は人が多く集まる場所に、東、南、東南に安置する。い

つも扉をあけ陰気にならないように。仏壇の値段は月収の三～五倍程度。石の材質、陽当り、境界、相続、お墓参りの仕方、仏壇のまつり方などが書かれている。

昭和五十年（亡くなる一年前）の関西新年講演会の中で、高橋師が「このままいったら日本はお墓だらけになります」という講演がある。お聞き下さい。

「鳥や或いは草木をご覧下さい。彼等は足ることを知っています。自分自身が、これだけのエサを、そして今日一日を精一杯生きています。人間は自分のフトコロが一杯になればなるほど強欲になり、自分さえよければいいというお金や或いは地位の奴隷になってしまいます。人間は、そのような奴隷になるべき小さなものではないのです。あくまでも、経済や物質は大いに、人類がより豊かな環境と、より豊かな心をつくるための道具に過ぎないのです。決して冥土の沙汰は金次第という馬鹿げたことではありません。銭なんか一銭も無かったって、あの世に還られるのです。我々の肉体は自然に風化してしまいます。それを、永い歴史は執着を持たせるようにつくって、自から墓穴にはいるんです。憐れなものです。もし今までの従来のものが正しいなら、今から五百年、千年過ったらみなお墓だらけです。そのようになったらどういうことになるんですか。我々の肉体は自然にかえし、そして子孫の為に、そして我々自身のよりよい環境をつくるための、我々は提供者でなければならぬはず。こうして執着というものは恐ろしいものです。自分自身というものが皆、神の子であり同じなんだ、人類みな兄弟なんだ。人間は生まれて来たところの環境とか教育、思想、習慣、魂をより豊かにする修業の場なんだ。これを自分がしっかり知って人生を歩んだ時に、道は自から開かれていくのです。」

以前から、大規模墓地の造成ニュースをよく聞く。このままでは墓場だらけで、快適に暮らすスペースさえなくなる。日本は国土も狭く地価も高い。その上に宗教家達が「お墓をつくり先祖を大事にする者は幸福になれる」と説くものだから、こぞって競い合う。お墓をつくることで「よし」とする心を考えたことがあるだろうか。日本中をお墓だらけにして、いざ、お墓を壊して再利用しようとしても、お墓の執着霊が「オレの住いをなんとする」と、一斉に反発して工事現場で事故が多発する。建てたマンションには幽霊が出たなんて多い話し。その霊達にお経をあげ、お払いをしても、今のあなたがお経の意味もわからないように、あの世の霊とてわかるはずはない。もし、今のあなたがものわがりの悪い、片意地な頑固者なら、それを修正し納得させる為には、何度も何度も説得し、分かってもらう以外に道はないのだ。あの世の霊とて同じで、心からの愛の言葉で説得、説明する以外にないではないか。まさに、愛こそは地上を照らす光なのだ。こう、高橋師は声を大にして修正を求めたのである。

サテ、たとえ墓地の上に建てられた家でも、たとえ、地獄の霊が執着していても、そこに住む人が仲良く調和され、明るい生活が営まれているなら、どんな霊がいても、その家庭を乱すことも出来ないし、困った現象も起きない。なぜなら、暗い霊の波長と、明るい家庭の明るい雰囲気は相反するものであり、光りは闇を消し、暗い霊は明るい家庭の雰囲気を見習い、反省をして執着を解くチャンスになるからである。その反対に困った現象が起こっている家庭があれば、暗い霊と暗い家庭の雰囲気がピッタリ合って、困った現象が起こるといえる。もし、あなたの囲りにその霊的現象が出ているなら、先づ、夫婦は仲良く調和されているか、明るく、話し合いの出来る家庭であるか、笑いの絶えない楽しい家族かどうか、一つの判断の規準になる。残念にも不調和な家庭なら、皆んなで協力して明るい家庭をつくるよう努力すべきである。それには一円のお金もかからない。

それでは仏壇について話しを進めよう。女性占術家は仏壇の値段は月収の三～五倍だとおっしゃっている。この説によれば、月収30万の人は90万～150万程度の仏壇となろう。そして、その周辺も「何回も買換えるものではないのだから」とか、「大事な先祖をおまつりするのですから」とか、たくみに売込むのである。かって、ウェブ・マスターも「仏壇博」なるものを見学した。それはそれは美術工芸の極致といえる程に素晴らしい出来栄のものもあって、値段を一ケタ間違えるところだった。

仏壇について高橋信次師の「ことば」を聞いてみる。

仏壇

「実際問題として、仏壇の中に祖先の霊がいるようでは困ります。浮かばれておれば、そこにはいません。いないとすれば、手を合わせ供養するというのもなにかそろそろいいですね。また、祖先の霊が仏壇の周囲にいるとすれば、これは困った現象ですし、いつまでもそこにおられては子孫にとっても迷惑至極です。供養のあり方は、そのいずれにせよ、仏壇に手を合わせ線香をとすことではなく、家庭の中が笑顔で健康で、明るく調和されることであり、祖先の霊はそれをいちばん望んでいるはずです。こうした意味で、仏壇の必要性はこの点をよく理解されれば、おわかり願えると思いますが、しかし、これまでの日本の習慣として家に仏壇が置かれ、法事やなにかという時に、親戚、知人が集まってきても仏壇がないとなりますと、お互いが気まずい思いをしたり、争いになるようではこれまた困ったものです。すでに仏壇があって、これまで通りの習慣で朝、晩、水をあげたり、手を合わせたりしている家庭にあっては、これを急にやめたり、仏壇を焼いたりしては家の中が混乱するでしょう。家中が供養のあり方はこうあるべきだとみんなが理解し、親戚の人達にもわかってもらえば、それはそれでいいのですが、家の者が反対するのに、自分だけの一存で事を決めるのはどうかと思います。要は、こうした習慣に自分の心まで染まることのないようにすることが大事であり、またそうした心で日常生活の伝統とか、習慣にしたがいながら生きていくのが正法者のあり方です。なんでも善いことだからといって、周囲の反対を押し切り、むりやりにことを決めると、その反作用がやってきて、あなたを苦しめ周囲まで不調和にします。正法と社会の法なり、習慣や伝統は必ずしも一致しませんが、こうしたズレについてはやはり時間をかけて修正してゆくようにしてください。要は周囲の状況をみながら対処していくということです。」

これは、仏壇についての「ことば」である。高橋師は、仏壇の意義を説くと共にやんわりと修正し、急激に変換されることの是非と、対応する方法を示した。人類を導き正す人の心を見た思いがする。急激な転換・修正は反作用となり周囲を混乱させるもとになる。しかし、いつかは完全に修正されなければならない。周囲の同意があれば急激な変化も可能でも、そうでないものは時間をかけてということであり、いつまでも許されるはずはないのである。仏壇は宗派によって、器具も、並べ方も違うようである。ウェブ・マスターが二十年位前に体験した話しである。

ある日突然、仏壇が変わっていたという「おはなし」である。知人の宗派は浄土真宗だった。知人の学生時代の友人に、熱心な創価学会員がいて、ある日、数人の学会員と共に訪ね、言葉たくみに専用の仏壇と既存の仏壇を入れ換えたのだそうである。この転末は、地区の学会に厳重な申し入れで、お詫びとともに現状に復くされたのだ。その創価学会専用の仏壇を見たが、ローソクも形が普通と違うことを初めて知ったのである。

お墓、仏壇、数珠、葬式仏教の歴史的背景

飛鳥・奈良時代の仏教伝来からはじまり、この流れの中で祖師仏教（法然、親鸞、道元、日蓮）が生まれた。これら中世までの仏教は、貴族、武士と一部の町民の有力者だけのもので、江戸時代になり、徳川幕府が政策の都合の為に「檀家制度」がつくられる。

この檀家制度は、徳川幕府がキリスト教禁止令を出し、鎖国政策をとる上で、キリシタン摘発のために踏み絵を断行、どこかの門徒にならなければならないという宗門改めを制定する。寺請、宗旨門人制度をつくり、宗門改めによる寺請制度が檀家制度である。宗派、生国、年齢、名前、人数、男女数等を末寺から本山に集められ、寺が今で言う戸籍係となり、門徒の統制をさせる代償として寺領を与えた。このようにして寺の経営は安定することになる。また、その頃に出した徳川幕府の覚え書きにはこう書かれている。

「常々、寺にお参りし、いつも付け届けをして、数珠などを持ち、父母の命日にもお参りし、また家には仏壇などを備え、線香や花をあげよ。これに反したものは、ころびキリシタンとして処刑する」という意味の「ころびきりしたん摘発の条件、覚え」が出されたのだ。

数珠は計算器であった

数珠はもともと、ものを数える計算器だった。数珠は、お墓参りやお葬式に使うものだと、機会がなければ、しみじみとご覧になったこともないと思うが、五つ玉のソロバンを連続させた形である。数珠によって数をかぞえ、お百度の数の記録、念仏をあげた回数を計算するのに便利だったに違いない。人が一列に並んでいるのを「数珠つなぎ」と表現をするが、数珠はもともと計算器で、霊の世界とは無縁だったわけである。科学文明の発達した現代においてすら、永い伝統と習慣の中にあっては、「なぜ?」「どうして?」、という追求をなおざりにするのは、そこに、宗教は非科学だとする風潮が原因なのかもしれない。納得のいかないものは信じてはならないのである。「なぜ、どうしてと追求して納得できたら信じなさい」と、高橋師は声を大にされたのだ。

長々と細 氏の項を述べたが、ここでは仏教の「いわれ」の真実と間違いををマトメるために、氏の著書を利用させていただいたに過ぎない。断っておきたいが高橋師は彼女のことには一言も触れてはいない。

Home



「空海」(弘法大師)

平安前期の僧。高野山に金剛峰寺を建て、真言宗を広めた。最澄とともに八〇四年に唐に渡り、真言密教を学んだ。八〇六年に帰国して八一六年、紀伊(和歌山県)の高野山に金剛峰寺を建て、真言宗を広めた。八二三年には嵯峨天皇から東寺をあたえられ、そこに「綜芸種智院」という庶民のための学校をつくった。そして詩文では「性霊集」という漢詩をつくり、書では嵯峨天皇、橘逸勢とともに「三筆」と呼ばれるほどすぐれていた。



空海(高野山金剛峯寺蔵)

高橋師の記述の中から

「空海の古代インドの時代は、釈迦に竹林精舎を寄進されたガランダ長者という方である。空海は心眼を持っており、病人に憑く憑依霊が良くわかったために加持祈禱をした。そして『般若心経秘鍵』の中に、『私はインドの当時、リヨジュセンで釈迦の説法を聞いたことがある』と書き残され、過去世の時代を思い出していた。」

園頭広周師の記述の中から

「空海は日本から渡って行った当初、西の門近くの西明寺を宿舎としていられたが、のちに南の方の青竜寺に移られ、そうして恵果和尚に密教を習われる。恵果和尚の師はインドから来られた不空三蔵で、恵果和尚はその一番弟子であった。不空三蔵はお釈迦様の分身である。高橋信次先生がよく憑依霊、動物霊を除去される時には『不空三蔵、この霊を連れて行きなさい』とっておられた。空海即ち弘法大師が修行された中で最も大事なのは『即身成仏』である。即身成仏即ちこの身このまま仏であるとの自覚は『宇宙即我』である。その『宇宙即我』の相を現わしたのが『曼陀羅』であるが、今は高野山ではその真義が見失われてしまっている。」

高橋師の講演の中から。

「ここに高野山の研修会での事を二、三お話しします。一体此処はどこだろう？と私が思いますと、ハイハイとお坊様が出て来ます。そして蓮生坊でございますという。さらにたずねて貴方は誰ですかと聞きますと、熊谷真実でございますという。それではお寺が有るのかなあと聞くと、其処に熊谷寺がありますと解る訳ですね。弘法大師も当時の事を語ってくれます。だから本当に歴史には正しい面もあるけれども、後世の人達が大分書き加えている事ははっきりするのです。当時に弘法大師・空海が中国に行った模様を私は聞きました。それによると、四隻の舟をともなつて一番先端には最澄が乗船し、藤原一族も中国大使として乗船した。そのうち筑紫から出て間もなく大風が吹き、纜（ともずな）が切れてしまい、四隻の船はバラバラになってしまった。

最澄の方は帰ってから解ったのですが、揚子江の下流上海という所へ着き、私達は今でいう台湾海峡からアモイの近く、福建省へ流されましたという。このように当時の模様をくわしく教えてくれます。そうすると私は本当か嘘か今度はいろいろと調べ始めます。たまたま弘法様の所ですから、彼等の金剛峰寺へ行って伝記物の本を買ってくると大分嘘がある。第一船団に空海が乗船と書いてある。それならと比叡山延暦寺を調べると、第一船団には最澄だと書いてある。その当時最澄は三十七才だと言っております。このように歴史はいろいろと坊主たちの、自分の都合の良いように作成したのです。弘法大師が本当に神理を悟って、中国から帰って来たとしたら、恐らく先程の密教なんてものは作らなかつたでしょう。更にまた山を探し求めた時に、二匹の白黒の犬が出てきて先導し、現在の高野山に自分の修行所を求めたと書いてあります。その時に獵師と一緒に地の神を祭ったことも、これは既に弘法は悟っていない証拠です。しかし弘法自身、高野山にいて修行をし、心の窓は開かれていたと自身はいいました。

弘法自身一生女性関係はなかつたのですか？と聞きましたら、私も所詮は男性でございます云々...何時の間には年代が過ぎると雲の上の天上人に周囲が神格化してしまう。奥の院には弘法様の骨を祭つてあるとか、その奥の院へ入って行くと、私の目の前に真黒い玉がグルグルと飛んでるのが見えます。四、五人のお坊さんおりましたが気が付かない。弘法様に後で奥の院には貴方様のお骨を拝ましてるようだが？一体これはどういう事ですか、と聞くと、自分の亡き後の骨を拝めとは一言もいっておりません、という返事がかえってくる。人間はそのような物に執着を持たしてしまっている。末法ともなれば此のようになるものですと、これらは歴史上の事実を追求しますから、歴史と現実がどのように間違っているか解ってしまうわけです。人間は尊敬の余り自分の宗祖をどうしても大事にしたいものです。正しく物を見てない証拠なのです。しかし、高野山が当時の権力と結びついて弘法様の名前が世の中に広まって行きました。修行の過程で霊視が利きますから、病気が解ります。その病気を癒してる間に当時ライ病が流行したそうです。その結果が自分もライ病になり手が全部潰れたともいわれる。だから、四十代から殆んど堂に籠つて外出しなかつたといっております。

それで本当に私に出て来たのは弘法であるか？ないか、テストしなければなりません。顔形を見て弘法さんと解つても、人は信じません。たまたま高野山で寺院を持ち、当時宗務総長K氏が三年前に死去しました。その方の奥様が私の講演を聞きにまいり面接致しました。見たところ御主人が横に来ております。背は一米七十四、五糎位で丸々と太った一見浅黒いお坊様、私は奥様に此の事を話しますと、私の主人ですという。その時、K氏は、私は精神的に非常に宗派の見苦しい環境の中で苦しみました。私は心筋梗塞で一夜の内にあの世へ帰りました。今は執着がありませんが、ただ自分の妻をかえりみるいとまがなかつた...万が一私が死んだ後お坊様達の宿泊所でもよい、よい生活環境を作ろうという約束をしたが、それを果たす事なく苦労かけて申し訳ないという。お前には色々苦労ばかりかけて、多くのお客様に接待するだけで、青春も老後の幸福も与えなかつた。本当に申し訳ない。お前には見えないだろうが、何時でも側にいて協力するからうらまんでほしい。気の強い女であったが、もう少し体の方にも気をつけて医者にも見て貰つてほしい云々...

ところが偶然にそのK氏は宗務総長時代に私の『縁生の舟』（改題『心の発見』）を読んでいたそうです。不思議な事です。先生の御本を読まして戴きました。先生はそういう事から通して、ご存じでございましょう。高野山内部の事も...妻にもいろいろと御教導下さい。また、夫婦二人だけの話しを喋ってしまったのです。サア奥様

信じざるを得ません。全部ですからねこれで初めてアアそうかと矢張り前へ出て来たのも、弘法大師には間違いないと私は信じました。又弘法様が、貴方様の説いている心、私の寺の中に示してあります。ぜひそれらを見て欲しいといって皆様と一緒にいろいろの国宝を一杯陳列してある宝物殿へ這入って行きました。心を中心に書いてあります。だからなんでこれだけの物が書いてありながら、人はこの心を調和する道に実践しなかったのだろう。弘法死後どうなったのですかと聞いたところ、いや私が亡くなって百二年目、すでに僧兵を作って私の神理にないものが這入って来たのです。そのために、最後は、あの中は阿修羅界に変わってしまいました。滅後二百年でこのような現象が出るとは思いませんでした。このように弘法さんは当時のことをいろいろと、すでに天上界へ上っておりますから分かります。その張本人は誰ですかと聞いたところ、現代の名前で何とかという宗祖だそうです。この人が鎖鎌を持って権力と組んで、最後は四十三歳で殺されたようですが、一つの分派活動を起こして、混乱に導いて仏教を段々変えてしまったのです。だから日蓮が、真言亡国といった意味がよくわかります。」、と。

このように、靈的現象の証明の難しさ、厳しさを師は教えてくれた。靈の姿が見えて、語り掛けてくる言葉が聞けて、自由に話せる高橋師ですらこんなだから、靈能者といわれるひとは、よくよく学んで欲しいのである。ともあれ、このような高梁師の言い残した「新・事実」の集約は歴史を塗り変えるほどの真実を突いているとも思われ、注目されねばならない。現代は二セものの横行する混乱した世情である。そのためにウェブ・マスターは、高橋、園頭両師の「ことば」だけを公開することにしている。このホームページが人間改革の一助になればこの上もない喜びである。

空海は、釈迦に竹林精舎を寄進したガランダ長者の生まれ変わりと高橋師は言い残した。仏陀が正法を説かれるときの経済的な援助者を「大黒天」というが、ガランダ長者は釈迦の大黒天であったのである。



「坂本龍馬は、大谷 輝氏として生まれ変わった」

高橋信次師は「古代インドの釈迦の時代に大目連（マーハー・モンガラナー）であり幼名コリータであった生命が、幕末の坂本龍馬として、今世は、ニューヨーク在住の大谷 輝氏として転生した」と言い残した。

「坂本龍馬」（一八三五～一八六七年）



坂本龍馬（高知県立歴史民族資料館蔵）



靴に注目

高知城下の酒造りの家に生まれた。十九歳の時江戸へ出て千葉周作の弟・定吉の道場で剣を学ぶ。一八五三年、ペリーが率いる黒船が浦賀に現れ、これが刺激になり河田小竜に開国論と近代航海術を学ぶ。やがて幕府軍艦奉行・勝海舟の門に入り、片腕になって働いた。その後長崎で海援隊を組織し、海運と貿易に従事した。幕府の政治にあきたらず、薩摩の西郷隆盛と長州の桂小五郎（木戸孝允）とを説いて薩長同盟を成立させ、討幕派を結集することに成功した。一八六七年、「船中八策」という新しい国家体制についての構想を練り、外国との交際、議会や、無窮の大典、つまり憲法をつくることを提案した。前土佐藩主・山内豊信を動かし、將軍慶喜を説得して大政奉還を実現、江戸幕府は滅んだ。しかし、まもなく京都で中岡慎太郎とともに暗殺された。それは満三十二歳の誕生日であった。

その翌年、官軍が幕府を討つために江戸にせまった時、勝海舟は、江戸の薩摩藩邸で西郷隆盛と会見して江戸城を明けわたして江戸を戦火から救った。世界に例のない「無血開城」に成功することになるが、この背景には坂本龍馬の陰の力があつたことは否定できない。龍馬は日常生活でも和服に靴を履いた。幕藩体制の枠にとらわれず、考え方を広く海外をにらんで自由であった。維新の指導者の中では珍しく武士の持つ窮屈さから抜け出した人物であったともいえる。

昭和六十二年十一月、暗殺される直前に撮影した写真が保存されていたという新聞記事があつた。作家・司馬遼太郎氏は『竜馬がゆく』の中で、「天が、この国の歴史の混乱を收拾するためにこの若者を地上にくだし、使命が終った時惜しげもなく天へ召しかえした」「若者は歴史の扉をその手で押し、そして未来へ押しあげた」と書いたが、坂本龍馬の過去世をもつ大谷氏は、今世は、夢にも見たニューヨークに住み、東洋哲学を教えるかたわら事業家として立ち、剣道場を開き指導しているとは不思議である。

大谷氏のお釈迦様の時代の過去世は、大目連（マ - ハ - ・モンガラナ - ）である。モンガラナ - は、親友のシャーリー - プトラ（幼名ウパテッサ、舎利佛、般若心経の中の舎利子、現代の園頭広周師）と共にお釈迦様に帰依した。マーハー・モンガラナー（幼名コリ - タ）は帰依して一週間目に、この世も、あの世も見通す力、「天眼通」に目覚め、天眼通第一の人となる。現代の大谷氏のもう一つの顔は、剣道の指導をしていることは述べたが、東京オリンピックでは、アメリカ側の柔道コーチの委員という肩書きを持つ人でもある。一九七八年（昭和五十三年）十月、大谷氏が、アメリカの経済調査団長として来日した時、二千五百年の時間、空間を超え、マーハー・モンガラナーとシャーリー - プトラの過去世を持つ大谷氏と園頭師の二人は再会をはたすことになる。

再会への道程

昭和四十八年三月、信次師は園頭師へ次のように言っている。「園頭さん、ニューヨークの大谷さんが遂に悟りましたよ。私が意識で行ってみると、彼はニューヨークの公園の石の上で禅定してるんですよ」と。それから、高橋師は大谷氏に手紙を出した。その時の手紙を紹介しよう。

五年前から懐かしき友が、ニューヨークで東洋哲学を教えていることを私は多くの人々に予言しておりました。遂に二十八日、私はニューヨークに行き、心の通信に成功しましたことをうれしく思います。懐かしき友よ、心と行いを法に照らし、自己完成に努力せられよ。偽りの我を捨て、善我なる心を育てよ。そして常に、八正道を心と行いの物差しで反省をし、偽りの我を神に詫びよ。そして瞑想せよ。その時に、実在界を通して私達は自由に交信することが出来るのです。自己を信ぜよ。偉大なる友よ。法灯を心の中に灯せ、一秒一秒の心と行いの中に一切の執着は苦しみをつくり出すものだ。一切を法に帰依した時、総ての安住があるだろう。経済の苦は、やがて調和への方向に迎えられよう。今迄の困難は、人生に対する疑問を持たせるためのチャンスを与えたもの。懐かしき友よ、勇気と智慧と努力に依って実践せられよ。光明は近し、光明は近し、苦悩はやがて、安らぎの境地に達しよう。自己の完成、家庭の調和、親子の対話。友よ、一步一步あせることなく生きて行こう。そして核をつくり、法灯を人々の心に灯して行こう。法灯は種族を超越し、国境もなく、人々の心に調和をつくり出して行くでしょう。やがて人類は、物質文明の奴隷から自からを解放し、人生の目的と使命を悟って行くでしょう。友よ、私達はその日のために、いしずえとなろう。人類を救済するために、一切の地位も名誉も、欲望も捨てて、人々のために生きて行こう。それ以外に人類は救済出来ないからだ。イエスの愛に生きよう。ブッダの慈悲に生きよう。道は只一つ、法に帰依しましょう。親しき友の栄光を祈ります。また靈的通信を致します。

昭和四十八年五月九日

大谷様

高橋信次

昭和五十三年十月二十九日は長崎での正法会（国際正法協会の前身）の定例会だった。その日は大谷氏の研修団も雲仙（長崎）行きであり、再会を約して別れた。二十九日、長崎での大谷氏の講演の要旨は「日本人が国益、公益よりも私益を優先させて、自分個人の利益のためには、公益を侵害し破壊してもかまわないという傾向が強いことは危険だ」という内容であった。会終了後、大谷氏の歓迎会が開かれた。その時の大谷氏の話し。

「私が寝ていたら、身体がぐーっと持ち上げられ浮いたようになり、そのまま私は空の彼方の光の国へ入って行った。ふと見ると、そこに高橋信次先生が立っておられた。大谷さん、これを見なさいと両手をひろげて見せられたその中に、私の過去の輪廻転生の全てを見たのです」という話しは印象的であったと園頭師は言う。

十月三十日、九州最後の日の夜、二人は深夜二時までホテルで話をした。

「高橋信次先生の遺志を継いで、正しく正法を伝えて行くことを誓い、固い握手をしてホテルを出た。私の乗ったタクシーをホテルの玄関に立っていつまでも見送って下さった大谷先生の心の中を思いやった」と園頭師は書いている。

大谷氏の記述をあげる。

「政経分離について」

大谷 輝

今からもう三十年も前のことになりますが、私が初めて祖国日本を出発して初めてアメリカの領土であるハワイにプロペラ機から降り立った時のことです。私は結局このホノルルに六ヶ月も生活することになるのですが、終戦後のうす暗い日本から、オール・カラーのハワイは正に白黒映画が急にカラー・フィルムになった様な錯覚に捉われたものでした。あのなつかしいハワイの熱帯植物の花々から流れる匂いは、疲れた私の身心を慰めてくれたものでした。あの頃は観光客もなく、ひっそりとした田舎街の様なたたずまいのホノルルが横たわっていました。或る日系二世の友人がパンチ・ボウルという名のついた死火山の火口にある米陸軍太平洋基地（パンフィック・アーミー・セメテリー）に案内してくれました。

そこは丁度火山の噴火口がすり鉢の様になっていて、フルーツ・パンチ（果汁酒）を入れるボウル（鉢）の様になっているので、その名の由来も納得出来ます。そのボウルの底にあたる部分に何百何千となく約五十糎四方位の石の墓石が上向きに、天に向かって埋めこまれており、その表面に、名前や階級、戦死した場所、日時、それにその人の宗教のマークが一番上の中心点に描かれているので、すぐにクリスチャンか仏教徒か或いはユダヤ教徒かが判る様になっています。暫らく歩いていると、多くの花束がかざられている墓石の前に来ました。その墓石はアーニー・パイルと読めます。アメリカの従軍記者として大変有名だったあのアーニー・パイルの墓でした。

彼は沖縄で日本軍の地雷にふれて戦死するのですが、彼の前線から送られて来る従軍記は、アメリカの兵士達の家族に戦争の様相を伝え、その美しい文体は全米の人々を感動させたものです。私が昔読んだ彼の沖縄戦記の一節にこんなのがあります。「私が海岸を歩いていると十八、九才位のアメリカ兵の死体が横たわっていた。そしてその死体のすぐ横にその兵士のポケットからこぼれ落ちたのだろう。小さなポケット・バイブルがあった。私は何気なくそのバイブルを拾い上げると又歩き出した。しばらく行くと私は立ち泊った。そして若い兵士の死体のところまで引き返した。私はそのバイブルを元のところにそっと置いた。私はどうしてそんなことをしたのかわからない。只、私はそうしなければならなかったのだ」

終戦直後から東京日比谷にあった宝塚劇場がアーニー・パイル劇場という名前で占領軍が使用していたのでその名を覚えている方も多いと思いますが、私自身当時は旧敵国の国民ながらパイルのヒューマニズムに富んだ文章に感動していました。静かに陽光あふれる墓地のグリーンの芝生の中を歩きながら、何かしら胸にこみ上げて来るものを感じ墓霊達の冥福を祈ったものでした。その後、私はニューヨークに住んで東京に度々商用で帰ることがありました。東京のホテルに泊って朝起きるとジョギングして、九段の靖国神社に向います、紀尾井町のホテルから丁度手頃な距離でもあり毎朝の運動に好適のゴールです。すがすがしい大気を呼吸し、玉砂利を踏んで英霊達と対話します。これは滞日中の楽しい日課でした。最近でも日本国の総理が靖国神社に行くと、公人か或は私人としての資格で行くのかと愛国心の皆無な日本の大新聞は騒ぎ立てます。これは私には全く理解出来ないことなのです。新聞は憲法で政教が分離されているから、日本国を代表する総理大臣が「公人」の資格で靖国神社を参拝したら、憲法違反であると日本のジャーナリズムは言いたいのです。

日本の祝祭日の中で「秋分の日」というのがあります。秋分の日とは、もともと天文学上の名前で何故この日が祝祭日の中に入っているのかわからない若い人達が多いのではないのでしょうか。前にはこの日を「秋季皇霊祭」という名の祭日で、仏教的には「お彼岸」であり、昔から仏教に基づいて祖先の霊を祭る民族的祭日であったのです。だから「秋分の日」もきびしく日本のマルクス・レーニンを崇拝するジャーナリスト達の流儀に従えば「重大な憲法違反」とも言えるのです。私に言わせるなら靖国神社も、ハワイのパンチ・ボウルも共に国の為に命を捧げた英霊を国と国民の手で祭ってある場所です。

そこにはアメリカンスタイルと日本式の相違があるにしてもです。私自身仏教徒ではありませんが、日本の天皇が数多くの神事（お正月の四方拝を始めとして）をとり行われる伝統に尊敬の念を持つ日本人の一人です。若し天皇のこの行事も「政教分離」の観点から否定するならば、国家国民の祭主という日本の伝統としての天皇の否定

であり、それは日本の歴史の抹殺であり、彼等の死守せんとするアメリカ占領軍が制定した新憲法に明記された国家国民の象徴としての天皇を否定することにもなり、これこそ憲法違反ということになりましょう。間違ってもらっては困りますが、私は現憲法を廃止し、新しい時代にのっとった真の日本民族のための憲法を作るべきだという立場をとっていますが、これは決して日本の伝統を否定するものではありません。

神道に依って祖先を崇拜し、仏教に依って正しい信仰の道を求める「日本の道」という文化と伝統は否定すべきではありません。国民の宗教活動を封じて「政教分離」を完全に実施しているのは、共産主義国家群位のもので、自由主義国家はすべて、その国の伝統による宗教行事を大切にしていること位は、ちょっと世界の事情に詳しい人なら誰でも知っていることです。それが日本では靖国神社という大新聞から一部のキリスト教徒に至るまで共産主義者達の口車に乗って大騒ぎするのは本当に国際常識の欠けたことになります。アメリカでも大統領が就任する時にバイブルに手を置いて大統領の任務を忠実に履行することを宣誓するのです。無神論者でありマルクス・レーニン主義であるジャーナリストの尻馬に乗って騒ぐ人達を、冷静な眼で見つめることが正しい日本人の生き方ではないでしょうか。

坂本龍馬は、薩摩の西郷隆盛と長州の桂小五郎（木戸孝允）とを結び、討幕派を結集することに力があつたことは先に述べた。

ここで注目しなければならない信次師の言葉がある。お釈迦様の「本体と五分身」を参照していただきたいが、お釈迦様の分身（5）が幕末に、桂小五郎として肉体を持ったと信次師は言っている。釈迦の過去世を持つ木戸孝允が、そして、マハー・モンガラナーの過去世を持つ坂本龍馬が「縁生」として志を一つにしたと言うのである。ここで木戸孝允にも少し触れたい。



「木戸孝允（桂小五郎）は釈迦の分身だった」（一八三三～一八七七年）



木戸孝允

西郷隆盛や大久保利通とともに維新の三傑と言われ、長州（山口県）藩士の子で、桂家の養子となり桂小五郎といった。はじめ、吉田松陰の松下村塾で学び、のち江戸に出て齊藤弥九郎に剣術を学び、江川太郎左衛門から西洋の砲術・兵学、さらに神田孝平から蘭学の教えを受けた。一八六四年の第一次長州征伐ののち、長州藩の指導者として藩の考えを討幕に導き、そして一八六六年、坂本龍馬の仲立ちで西郷、大久保らと薩長同盟を結び、倒幕勢力の中心になった。明治新政府では参謀となり、「五か条の御誓文」の草案をつくり、ついで版籍奉還、廃藩置県をなしとげる。一八七一年、岩倉具視、大久保利通、伊藤博文らと欧米を視察して帰り、西郷らの征韓論に反対して、国内政治を整えることを主張した。また政府の台湾出兵にも反対し職も辞したが、のち、再び政

府にもどっている。

明治維新を推進する幕末の志士の多くが、暗殺、刑死した中で、釈迦の分身、木戸孝允はそのようにならなかったのは不思議であった。俗に言う、畳の上で四十五歳の生涯を閉じたのである。木戸孝允は征韓論に反対し、政府の台湾出兵にも反対した。お釈迦様の分身としての過去世を持つ木戸孝允が、征韓論反対、台湾出兵反対の役割を演じたのは当然と言わねばなるまい。

高橋信次師の戦争、闘争と、破壊の批判の例

(その一)

「『人に尽くすは小善』とっている不調和な思想家達もいるが、生きている人間を救うことこそ大善であることを、思いしらされる時がくるであろう。ヒトラーにしても、スターリンにしても、無間地獄におちている。人間の心を狂わしてしまっただ指導者に対しては、特にきびしい現象が現われてくるのである。神仏を冒瀆している指導者には、心の平和、安らぎは与えられないのが実在界の掟である。戦争もまた不調和な想念行為である。戦勝祈願などというものがあるが、勝負を争う場合、スポーツを除いて、そんな祈願は人間がなすべき行為ではない。神仏は常に中立であるから、いずれにも加担などしないのである。親が子供の喧嘩に対して平等に判断するように、片寄った鼻肩をしないのが両親の愛ではないだろうか。親は子の争いを望まない。まして、神は戦争など好むものではない。戦争は、絶対に人間のなすべき行為ではない。人間の肉体、修行舟を破壊するばかりでなく、他人にも同じみじめな思いをさせ、罪なき人々の心に不安を与える。戦争は人間最大の犯罪である。」

(その二)

「イエスの教えにも、ゴータマの教えにも闘争という言葉はない。汝の敵を愛せよ...忍耐、右の頬を打たば左も出せ...忍辱(にんにく)などすべて調和ということが神理であることを悟らなくてはならない。美談とされている仇討ちなども、神仏の子としてなすべき行為ではない。衝動的・感情的行為であり、この執念は我が身に帰ってくるものだ。忍辱の心のない『親の仇だ、主人の仇だ』と常に心の安らぎのない生活を送ることが、本当の人間の姿といえるだろうか。『怨みをもって怨みに報ぜず』の心境が、調和を生み出す真の菩薩心であることを私達は悟らなくてはならない。作用、反作用の法則に従って、それが己に帰ることを知ったならば、人は自分自身の想念と行為を反省することが、最も大切であることを悟るだろう。どんな小さな問題でも、その原因と結果を良く悟り、判断を誤ってはならない。善根を育て、正法を信じ、正しい想念と行為を實踐し、常に反省の中から心を正道に統一することによって偉大な仏智の門は開かれて行く」

(その三)

高橋先生の弟子のひとり三木野吉氏は自著の中で、次のように書かれている。

「高橋先生はよく、『戦争のなかに調和はありません』ということをしていらっしゃいました。昭和四十九年九月に盛岡というところへ、お伴した時、私達の乗っている車が長いデモ行進の隊列にさえぎられて、停車を余儀なくされたことがありました。どんなデモ行進であるかは、他所者で当地の新聞を読んでいない私達にはわかりませんが、いずれにしても何かの組合が、生活上の要求を貫徹するために、実施していることだけは確かです。私の横に乗っておられる高橋先生のお顔をふと見ますと、あの人を惹きつけずにはいられない温顔の高橋先生が、顔をしかめて、窓の外の人の流れを見つめながら『困ったことですね』と、ひとこと独言のように、お口の中でつぶやかれたのが印象的でした。高橋先生は理由の如何を問わず、闘争というものを徹底的に否定なさいました。」と。

破壊と闘争を徹底的に否定された釈迦の分身・木戸孝允はなぜ討幕の指導者として、討幕勢力の中心となったかを述べなければ片手落ちになる。その理由を、信次師は「明治維新を実現させるために、勤皇思想を起させる

ことになった」と言い残したのである。

< ナゼ勤皇思想は起こったのか >

古代インドのお釈迦様は、「お釈迦様の本体エルランティが二千五百年後に、ジャブドバーのケントマティー、即ち、東の国日本の都に生れて正法を説く」と予言されていた。それに沿って日本は不思議と何度も護られてきた。これは、蒙古の襲来や黒船の来航を意味する。一度も属国、占領されることもなく今では世界の超大国になっている。日本にエルランティが生れて正法を説くには、徳川幕府のままでは封建的すぎ、一般民衆は権力の支配下にあって自由がない。徳川幕府の制度の呪縛から解放して自由にするには日本を天皇制に返さなければならないと、室町時代には北畠親房を生れさせ神皇正統記を書かせるという、天上界の遠大な計画が着々と実行されていた。明治維新が計画されることになり、明治維新を実現させるためには天上界の計画に沿って、江戸の中期頃から勤皇思想を起こさせることになったのである。昭和四十八年九月、高橋師は園頭師に次のように言っている。「正法はすべての人々の自由な心によって受けられなければならない。徳川幕府の政治体制下で心の自由も束縛されている日本国民に、完全な自由な心を持たせるためには、徳川幕府を倒して、天皇制に返す以外にないということで、天上界では勤皇思想を起こすことを目的として北畠親房を生れさせて『神皇正統記』を書かせ、各地に勤皇愛国運動を起こさせることになった」、と。このような背景の中で、いよいよエルランティの出生の時が近づき、日本のどこに生れていくか天上界で計画されたのが寛永二年だったのである。それでは北畠親房はどんな人だったのか述べたい。

「北畠親房」(一二九三～一三五四年)

室町時代、後醍醐天皇に仕えて信任され、世良親王の養育に当たったが、世良親王の死にあい出家した。建武の新政では、陸奥守となった子の顕家について奥州へ下った。一三三五年に足利尊氏がそむくと、顕家とともに戦い、一時、尊氏を九州に追った。その後、尊氏がもり返して京都にせまると、天皇を吉野(奈良県南部)にむかえ、南朝の中心人物として足利氏に対抗した。その後、再度、東国での勢力拡張をはかったが失敗し、吉野にもどって南朝につくした。この時代の学者でもあり、『神皇正統記』を書いて南朝が正統であることを説いた。

勤皇思想が起った幕末に向けて、天上界では五百年前の室町時代に、北畠親房に『神皇正統記』を書かせることによって、天上界の手は打ってあったのである。、釈迦の本体であるエル・ランティの高橋信次師は、この世に肉体を持って「正法」を説く為に、天上界の計画によって釈迦の分身の木戸孝允が討幕運動の中心となったと言うのである。また、木戸孝允は、本体の高橋信次師の出生の露払いとしての使命と役割を發揮したのである。高橋師は木戸孝允について次のように言っている。

「私達の分身や本体と言われている魂の兄弟が、私達の意識を支配して食事などをすると同じ物でも支配者の嗜好によって味覚が異なってしまう。私の分身で一番近い人は、幕末に日本に生れた人で、この分身が私の意識を支配すると、まず語調が武士のように固くなり、酒が好きだったため特級酒など水のように感じてしまう。私自身はほとんど酒は飲めないのである。こうしたことでも、意識というものがいかに影響するかということが、実験で解明できたのである。また私は、従来人の前で喋ることができない恥ずかしがり屋であった。上がってしまい、思っていることを十分発表することができなかつた。私の分身はこの問題について「講演するときには、まず腹に力を入れて、間をしっかりと取ることが必要である。お前の講演は口先だけで腹に力がないため、最後は声をつぶしてしまう腹から出る声は、人々の心に訴える力、言霊の響きが違うことを知りなさい。」と教えてくれた。私はその通りに実演した結果、神理が言霊となって自然に口から出るようになった。」、と。

この記述は木戸孝允についての「ことば」である。酒が好きであったこと、そして講演の指導を受けた記述だが、政治家・木戸孝允の面目躍如であろう。読者も、高橋師の講演録音を聴いて欲しい。その上手さといい、この迫力は並の人間のそれではない。政治家の皆さんよ、一つ参考にされると良いと思う。もっとも、真実の言葉は、砂地に水がしみ込むように人の心には行って行くが、口先だけの言葉は如何に演説がうまくとも、人の心は打たないものである。でも、高橋師のそれは神理であり、魂の叫びだったから、人の心を打ったのである。次は高橋師の「神理の会」(神光会・GLA)の前身の発会式的情景記述である。

「しかし、最初の発会式の講演では、私もすっかり上がってしまい、何を話しているのか、良く解らなかつた。そこで、私の指導霊ワン・ツー・スリー(モーゼと言われている)は、約一時間半、仏教の歴史的変遷ということで代弁してくれたものであった。私は、大衆の前で喋ることはまことに苦手で、初めての講演では汗びっしょりであった。しかし、この集會を境として、多くの人々が集まってくれるようになった。また、他の宗教家達

が、様子を探りにくるようになった、と。ついで、『醒めた炎 - 木戸孝允』の作家・村松剛氏は次のように言う。

「明治維新を考え直してみようと思った時、幕末以後の動乱の時代を生き抜いた一人の主人公を置いて書こうとすると、最大の歴史の証人として浮かび上がるのが木戸孝允なんです。桂小五郎という人物は、幕末物の映画や小説によく出るが、いつも主人公ではないし、何度も白刃の下をかいくぐって愛妓幾松（のちの松子夫人）に助けられた話がポピュラ - なわりには、維新後の政治家としての役割はよく知られていない。いわゆる維新の三傑のなかで西郷隆盛が一番ポピュラ - ですが、西郷も大久保利通も非業の死を遂げたのに対して、木戸だけは畳の上で死んでいます。それで人気がないんですよ。しかし、思想的な高さということになれば、三人のうちで木戸が最もぬきんでています。」、と。

木戸孝允の愛妓幾松は、のちの松子夫人となるわけだが、縁生という関係の中で、釈迦の分身の伴侶となるからには、上級な霊格（人格）の女性に違いない。あの幕末の混乱の中で、光の天使・木戸孝允に協力する使命と役割が浮かび上がってきそうである。高橋師はこれには一言も触れているわけではないが、地位、名誉、学歴、職業と霊格（光の量の区域）は別だということを示す一例であった。こうして、釈迦 - 舍利弗 - 大目連は即ち、木戸孝允 - 西郷隆盛 - 坂本龍馬であり、現代は高橋信次 - 園頭広周 - 大谷〇輝であったのである。

< 勤皇の志士達が討幕を急いだ時代背景 >

勤皇の志士たちが討幕を急いだのは、阿片戦争（一八四〇～四二）のニュースを耳にして、これでは日本も植民地にされかねないという危機感があったからであった。この阿片戦争の四年後にフランス艦隊が琉球に、五年後にイギリス艦隊が同じく琉球に、六年後にロシア艦隊が対馬に上陸して住民が虐殺され、さらに二十一年後には同じくロシア艦隊は一時、対馬全島を占領し、この時住民の約半数が虐殺されている。これは何と明治維新の五年前のことで、このような危機感から志士達は討幕を急いだというのである。

Home

「園頭広周師は、あの、西郷隆盛だった」

高橋信次師は、園頭広周師について次のように言い残した。



西郷隆盛（キヨソーネ筆 西郷南洲顕彰館蔵）

「三億六千五百年前の地球の草創期に、真のメシヤ・エルランティ（現代の高橋師）と共に飛来した七代天使の一人のガブリエルであり、古代インド（二千五百年前）の釈迦の時代は、舍利弗（シャーリープトラ・般若心経の中の舍利子）であり、二千年前のキリストの時代の天使・ガブリエル（ジブリール）であった。その分身は十六世紀の宗教改革者として知られるカルバン（カルビン）であり、アメリカ建国の父と言われたジョージ・ワシントンであり、幕末は西郷隆盛として生まれ変わった」、と。

園頭広周（そのがしら・ひろちか）師は、一九一八年（大正七年）二月二十日、鹿児島に生る。本名は勇、父・喜一、母・スヤ、八人兄弟の長男で、家業は肥料商。小学校卒業時には「学術優等」の表彰を受け、鹿児島商業（現在の鹿児島大学）へ首席入学。この多感な青春時代に師の心に陰を落とすことになった、二つの大きな出来事が待っていた。その一つは、鹿児島商業に入学の頃のこと。戸籍謄本を見ると、「私生子」という字が棒線で抹消され、「庶子」と記載されていた。それからは、言いようのない悲しみに暮れ、遠慮がちで引っ込み思案の青春時代を送ることになる。それが氷解するのに、お父さんから説明を受ける迄の三年の歳月を要した。その理由というのは、ご両親の結婚がお祖母様の強固な反対によって、一旦はお母さんの戸籍に私生子として入籍されるものの、小学校に上がるからという理由で、婚姻届けが許されるというものだった。そして、もう一つは、同じ鹿児島商業三年生のこと。その頃の羽振りのいい男の常として、お父さんに女性ができ、とうとう帰って来ない日が続いた。心配の余り、園頭師は種子島に渡ってお父さんに会うが、「ワシは帰る積もりはない、後は頼んだ」。それを聞くと、習い覚えたばかりの柔道で、お父さんを投げ飛ばしたのである。「どこの世界に、親を投げ飛ばす奴がいるか」と、お父さんの言い知れぬ無念の涙と、師も「大変なことをしてしまった」という、どこにも身の置き場の無い後悔の涙に、夜の帳（とぼり）に飛び出す二つの影があった。

こうして、卒業と同時に軍隊への現役志願から、昭和十一年一月鹿児島の歩兵第四十五連隊に入隊（十八歳）。「羽織に袴、音楽隊を押し立てて入営したのは私が一人で、照れくさくて仕方がなかった」と園頭師は思い出す。二十歳で少尉、連隊旗手となり、二十二歳の時副官となるも、湖北省通城県でのこと、突然、高熱四十二度。下痢が続き一日に二十回もトイレへ駆け込む状態。このような状態が四十日も続くと軍医もその内にあきらめたのか姿を見せなくなる。病気のために副官も取り下げられ、そのような時に部下が『生命の実相』（生長の家）を差し入れると、「信仰で病気が治るといのは迷信だ。わしは読まん」「そうですか」と置いて帰った。四十日位経ったある日の午後、やっとの思いで体温計をはさんでみると四十二度もある。気力もなく「もういつ

死んでもいい」と園頭師が心を定めると、その時「祈れ！」という天からの声が聞え、それは割れ鐘のような大きな権威のある声だった。やっとの思いで身を起こし、枕に頭を伏せて、身体を二つに折った状態で、教会で習ったことのある「主の祈り」と、心にひっかかっていた罪の思いを、神に詫びられるのだった。ぶつぶつ祈る声が響いたのか、下士官達が「隊長殿、どうかしましたか」と飛び込んで来る。次の日の昼前に眼を覚まされるが、その時の陽光に透ける葉裏のあざやかさは、正に、この世のものではなかったと師は回顧する。その時、「その枕許の本を読め」という天からの声を聞き、やせ細った腕でやっとの思いでページをめくるが、園頭師にとって、それは恰も乾天に慈雨を得たようなもので、不思議とそれから熱も出ず、体力も回復して行く。昭和十五年（二十三歳）、湖北省通城県から長沙へ通ずる徐家という所の陣地で、時間を見つけては『生命の実相』を読み思索する日々で、六月中旬、山の斜面に生えていた野菊を一輪折って差し、身の廻りを清潔に整え、『生命の実相』に書いてある通りに坐し、神想観に入るのだった。

宇宙即我へ至るプロセス

園頭師は次のように記述している。

「花を愛し育てる人は花によって神の愛を知る。戦地へ行く時、私は、野立ての茶器を腰に下げて出征した。禅定をする時花を活けたが、花を活けるといっても、いい花があるわけではないから野花を摘んできた。昭和十五年『宇宙即我』を体験したその時は、慰問袋に入ってきた、のりの花瓶に野菊を一本投げ入れたただけだった。花を通じて神の心を知るにはそれだけで十分であった。キリストは『野の百合の如く』といわれたが、私は野菊の中に神を見た。」、と。

< 宇宙即我 >

園頭師は次のように書いた。

「複式呼吸、深い深い呼吸、息を吸っているのか吐いているのかわからない位の呼吸になった時、私の背骨はぐーっと伸びた。「あーっ」ともう一つの心は思った。坐っている自分の上にもう一人の自分がいて、坐っている自分を見下ろしている。その自分が天井の辺りにいたかと思うと、もはやもう一人の自分は屋根を突き抜けて、辺りの山や川や田畑も陣地もずっと下に小さく見ている。その間、背骨がぐーっと伸びてゆく感じがする。と同時に腹がぐーっと横にひろがり出して、太陽も地球も月もみな自分の腹の中にある。それを自分がのぞいている。折しも長沙方面へ爆撃に行く三機編隊が上空を通る。上空を通るといっても爆音は頭上から下の方へ肉体の耳に入るのであるが、しかしその編隊は自分の腹の中を飛んでいるのが小さく見える。地上から見た飛行機の手は物凄く早いのに、腹の中に上からのぞいている飛行機は一定の所に止まっているようにしか見えず、爆音はずっと下の方から上にいる自分に聞えてくるのである。中隊長室にいる肉体の自分を自分が上から見ているのである。その状態を冷静に不思議なことだ、これはどういうことだろうと思っている自分がある。太陽も地球も、すべての星も自転しながら公転しているその音が「オオー」と聞えてくる。宇宙と自分が一つになったのである。宇宙はすべて調和されているのである。神がつくられた世界は既に調和している。戦争などというものは、人間のこざかしい我欲の産物でしかない。その不思議な感覚にどれ位浸っていたかはわからない。突然「パーン」という音がした。ハッと眼をあけた。一瞬この音が『天地の発ける音だな』と思った。

見ると、辺りに見えるもの、木も草も石ころからも、すべてのものが黄金の光にゆらゆら輝いている。すべてが神の生命の現われなのである。「物、物に非ず、これを物という」、物を単に物体だと見るのは物の一面にしか過ぎない。物として現われているものすべてはみな神の生命なのであった。すべての物から発する黄金の光を見ているうちに、次第に私の意識は肉体に戻って、坐っている自分が自分だと思えるようになった。私はしばらく動くことができなかつた。その不思議な現象を改めて心の中で考えていた。」、と。

(宇宙即我については、園頭広周著『宇宙即我に至る道(上下)』正法出版社を参照下さい)

次に、高橋信次師の記述も『人間・釈迦』第一巻より見てみたい。

< 宇宙即我 >

「暁の明星が足下に見えた。もう一人のゴードマ（釈迦）は小さな粒のように、はるか下方に坐していた。ゴードマは、宇宙大にひろがり、宇宙が自分の意識の中に入って行くのだった。ゴードマは念願を果した。宇宙の意識と同体となったのであった。意識が拡大すると、宇宙を型どっている太陽をはじめとした星々（惑星群）が、すべて自己の意識の中で回転し、そうしてその中で呼吸する一切の生物は、我が肉体の一部であることに気付く。人は宇宙大の意識を持って生活している。肉体にその意識が小さく固り、とどまるために、宇宙大の自己を見失ってしまうのだ。」と。

先を続けよう。

『生命の実相』にある生長の家の神想観によって宇宙即我を体験したのだと信じた園頭師は、生長の家教祖・谷口雅春氏に尋ねればわかるだろうと、「生長の家」の本部講師も引き受けるが、その解答を得られぬままに、「生長の家」を去る。昭和四十六年、園頭師が正師・高橋信次師に二千五百年ぶりの再会を果した時、「あなたは宇宙即我を体験しましたネ。それは過去世で学んだものです。」と開口一番指摘されるが、今まで誰に尋ねてもわからなかった自分の体験を理解して下さったと、園頭師は涙するのだった。二千五百年前の舎利弗、二千年前のガブリエル、と過去世を思い出していた時、園頭師は「そうだ、過去世で学んだのだ、現世ばかりではないのだ」と知るのだった。

< 神の光の輪 >

昭和十六年九月（二十四歳）、園頭師は尖兵中隊長として第一次長沙に出動するが、配属されていた山砲中隊（砲二門）を山の上に上げ、退路遮断のために攻撃前進できるように山の上に布陣すると、追撃砲弾が炸裂して八人の重軽傷者が出て動揺、園頭師の中隊は孤立。するとその時、「坐れ」という声が天から聞こえてきて、師は鉄甲をかぶったまま、胡坐を搔いて軍刀を立て掛けて坐り、「今、ここがそのまま神の世界である。われは神に守られている。この瞬間われは敵と戦うという意識を捨てて、神の大調和の世界に入る。神の世界は平和である」と、身体の回りに神の光の輪を描き、この神の光の輪の中には絶対に敵の砲弾は入ることはできないのであると、念じるのであった。恐らく敵の方からは山上に坐っている姿は見えたかもしれぬが、一門残っていた山砲もそのうちに射てなくなる。すると、「ボン」という発射音と共に、頭上を切って飛んでくる追撃砲弾の「ヒュルヒュル」という音が聞こえ、前と後ろで「グワン」と破裂してその砂塵が師の身体を覆う。「ヒュルヒュル」と空気を切って飛んでくる砲弾の音が耳に入るとその瞬間、園頭師はどこかへ隠れよう逃げ出そうという思いに駆られるが、斬り捨てた瞬間、「ここがそのまま神の実相の世界だ」と呼吸をとめて想念するのだった。不思議にも園頭師の近くに落ちたものは破裂せず、何十発砲弾が飛んできたかはわからないが、砲弾が薄れ、廻りを見回すと誰もいない。部下達は砲弾の飛んで来ない山の下の方へ退避していたのであった。園頭師はこの体験によって、「神と一体感を持った時の人間の想念の力が、どんなに偉大なものであるかを教えられた。」と記述している。

< 一通の電報 >

そして、昭和十八年一月、園頭師の第六師団はソロモン群島ブーゲンビル島に上陸するが、二月ガタルカナル戦は失敗に終り、残った部隊はブーゲンビル島へ撤収してきた。ガ島は餓島といわれるように、日本軍には弾薬も食糧もなく、たくさんの兵が餓死した所で知られるが、師はブーゲンビル島の防備についた後、ガ島を撤退すると、中部ソロモン方面の第一線はガ島のすぐ隣のニュージョージア島になる。米軍の反攻が始まり、ニュージョージア島の防備を堅めるために、師の大隊はニュージョージア島の南東支隊司令部に隷属する命令を受け、ムンダに上陸。レンドバーの米軍重砲陣地が完成すると、ムンダ飛行場めがけて試射が始まるが、日本軍はただ射たれ放

しで、ガ島からの飛行機による偵察爆撃、海上からの高速艇による威力偵察が始まり、八月四日、夜が明けてみるとレンドバー島を拠点として海上には米艦隊が横に並んで、いよいよ米軍の上陸。いつもより爆撃の頻度がはげしく、爆撃機の数も増して、ジャングルがなぎ倒されていく。また、園頭師は次のように言う。

「私のいた本部周辺は徹底的に爆撃されて、第一線との通信線は切断、連絡に飛び出した兵隊はみな爆撃でやられ、本部の位置を変えるために、「位置を選定してきます」といって飛び出して行った副官も軍医も書記も全部やられてしまった。私一人が本部の位置にいても第一線の指揮は出来ないし、こうなったら第一線陣地の壕で指揮しなければだめだと、その壕を飛び出して第一線陣地めがけて走り出したところを米軍の偵察機に発見され、ガ島上空に待機していた編隊が十分後には頭上に現われて私一人をめがけて爆撃を始めた。爆撃されたジャングルの跡というものはとても歩けるものではない。第一次長沙作戦の時、砲弾の中に坐った時のことを思い出し、爆撃の真只中に禅定したが、その時も私の心の中には、敵味方と分かれて争っているんだという思いは微塵もなかった。爆弾の威力は、中国軍の追撃砲弾の比ではない。飛行機の胴体を離れた爆弾が「シューッ」と空気を切って落ちてくるその音に一瞬「こんどはやられる」とふっと思うのである。その瞬間、その恐怖心をパッともう一つの心で断ち切って「われは、神の光に包まれている」と、臍下丹田に息をため、ジッと息をつめて強く念ずるのである。ところが、前に後ろに遠く落ちるのは破裂するが、身近かに落ちて、それが破裂したら当然木っ端微塵になって、吹っ飛んでしまうというような近い所に落ちたものは全部破裂しなかった。持っているだけの爆弾を落としても死なない私をめがけて、今度は一五〇メートル位の超低空で五機編隊が、替わるがわる機銃掃射を始めたが、私の坐っている横四・五メートルの所まで弾丸は打ち込まれるが、私の身体には当らなかった。私の頭上には空の葉夾がカラカラ落ちてくるだけで、余程うらめしかったと見えて、機銃も一発残らず射ち終えても私が生きてるので、最後に一〇〇メートルの低空に降りてきて、ジャングルの高い木の梢をかすめるように飛んできて風防ガラスを開け、手榴弾を投げつけてガ島へ帰って行った。それから、園頭師はこの戦闘の一週間後に「鹿児島ノ百四十五連隊付ヲ命ズ」という電報をもらってこのムンダを去るが、ムンダの日本軍はその後一カ月近く死闘を続け、師の部下達はブーゲンビル島のトロキナ作戦で悲しいことに全員戦死したのである。

園頭広周師は砲弾の降る中、神の実相を心に描いた時、近くに落ちる弾という弾は、すべて不発弾となって落ちて来た。神は「自由、創造、慈悲と愛」。戦争は「殺戮と破壊、暗い闇の世界」。光のあるところ闇は消える。暗い闇の想念は、明るい光の想念によって消えたのである。このような体験の中から、次に引用する「霊的国防」は、園頭師の内なる心の中から必然的に浮びあがって来たものであろう。

「霊的国防」

園頭広周

「霊的国防とはどうすることであるか。それは日本人一人一人が、心の中から敵対観念をなくして、まず自分の心が神の光に満たされ、日本の国全体が神の光に包まれていることを想念することである。物の世界も霊の世界も、規則正しい光の波動によって成り立っている。その光の調和ある波動が神の光の波動なのである。人間が神の光を破壊することは絶対に出来ないのであるから、日本全体が神の光に包まれていることを想念するのである。このことを実行するに当っては、まず、あなた自身が自分の心を調和させ、自分自身が神の光に包まれていることを想念した上で、日本の国全体が包まれていることを想念することである。最初から日本人全部がこれをするというわけにはゆかないのであるから、正法を知った人から順次にこの祈りをするのである。日本の国全体が神の光に包まれていることを常に心の中で祈るのである。そうして、日本は国全体として徳を積むようにすることである。神は一つであり、神理は一つである。個人が救われる原理も、集団国家が救われる原理も一つでなければならない。こうした祈りをする人々、そしてその家は天上界から見ると光って見えるのである。この祈りの仕方を整理すると次のような順序になる。

一、心の波動を神に合わせる。敵、味方の想念を心の中から一掃して、相手も神の子であり、相手とともに救われてゆくことを祈る。

二、自分の心がまん丸く光り輝いている状態を念ずる。胸の辺りに、風船玉のような光の玉を描く。

三、自分の身体全部が神の光に包まれている状態を描く。

四、祈っている間に雑念、また生命に対する恐怖心がチラッとでも心をかすめたら、その都度その瞬間に、心の中でそれを斬って捨てて否定して、その瞬間に、「われは神に守られている。神と一体である」と念ずる。その時は、下腹に息をとめてうんと下腹に力を入れて下腹のところで斬り捨てて否定して、瞬間に神の生命であり、神と一体であることを肯定するのである。一ぺん否定して肯定してもまた雑念、不安、恐怖心が起ってきたら、その都度否定し肯定することを繰り返すのである。」

神に心の波動を合わせ、神の光りに包まれている状態を心にアリアリと描く。このように一人一人が想念し、日本全体に光のバリヤ - 描いた時、他国からの侵略による兵器は動作不能、不発に終わるのである。

< 奇跡の脱出帰還 >

一通の電報によって帰国することになった園頭師は、制空制海権が完全に米軍に握られている中でのニュー・ジョージア島からの脱出帰還は奇跡の連続だったという。それは、コロンバンガラ島との狭い海峡で、アメリカ大統領になったニクソン氏が、当時、海軍大尉で、魚雷艇の艦長だったようで、その魚雷艇群三隻と、師の乗った古ぼけた八ノットしか速力の出ない漁船との一騎打ちは、漁船の勝利に終わったというのである。

その理由はこうだった。相手は速力二十三ノットの鋼鉄艦で、魚雷発射管一門と二十ミリの機関砲を前後に四門積んだ米軍の魚雷艇と、重機関銃一挺の木造船が、まともに勝負しても勝目はない。魚雷は発射されても木造船の浅水が浅いから心配はないからと、漁船の船長（民間の船頭さん）にコロンバンガラ島の岸近くを走るように先生は命じられ、頃合いはよしと、船の運航の責任者である海軍の兵曹長に重機関銃の発射を命じ、双方射ち合っているうちに、こちらの射った弾丸が魚雷艇の甲板の上を走っている蒸気パイプを射ち抜いたらしく、蒸気がピューッと二〇メートルの高さに吹き上がって、それで魚雷艇は前進をやめたというのである。ブーゲンビル島にやっと辿り着いて、ブーゲンビルからラバウル、ラバウルからトラック島へ、海軍の飛行機に乗り、トラック島からは航空母艦に乗って横須賀に着かれた。艦の中でマラリヤが再発して横須賀の海軍病院に入院されている時、ブーゲンビル島の師の中隊は、全員突入して戦死したとの報告に、自分一人がこうして内地に帰って来たことを申し訳ないと思った。」、と。

このように園頭師は奇跡の生還をするが、高橋信次師にも同じようなことが起きている。海防艦が撃沈され高橋師が海に放り出された時、米軍の機銃掃射にイルカの大群が寄って来て守ってくれた。これが傷跡ですよ、と見せたという話が言い残されているが、このように、光の天使達には、天上界をあげて守護をするようである。

霧島神宮での瞑想

それから園頭師は、鹿児島島の連隊に帰り着くと一ヶ月間の休暇を取り、霧島神宮で瞑想を続けた。その時、社務所の土蔵の中の古文書『天之御柱伝（あめのみはしらでん）』荒深道斎著が目につく。そこに書いてあるのは、園頭師が戦地で体験した「宇宙即我」と同じもので、日本人の中にこのような体験をした例があったことは、不思議という外はない、と言う。そして昭和二十年初頭、広東付近へ出征、その年の八月終戦の詔勅を広東省太良というところで聞かすが、その時、陸軍大尉であった。昭和二十一年四月鹿児島へ復員。両親、弟妹七人が空襲で亡くしたことを知る。一度に七人の肉親を亡くした園頭師は、肉親の死を通して、人生とは、死とは、生きるとは何か、ということを実験に考えたことであろう。園頭師は、長身で、古武士のような気骨を持ち合わせた雰囲気の方だが、講演をする時、指導を求める手紙を来聴者に読んで聞かせながら、悩める手紙の主に思いを馳せてか、しきりにハンカチを動かし、目頭を押さえるという一面も持ち合わせた、涙もろく情のある方と、ウェブ・マスターの目には映っている。肉親を亡くした、その時の想いが、ダブルなのである。



荒深道齋

先を続けよう。

「この大宇宙は調和されているということを私が直観で知り、天からの声を聞いたのは昭和二十六年秋だった」と園頭師は書いたが、昭和二十七年に生長の家の地方講師、昭和三十年より本部講師として活躍。特に、昭和四十年から四十六年までの六年間は、生長の家を矛盾のない立派な教団にしたいと思う一念で、改革改善案の提出の連続であったという。しかし、師の提案もとり上げられることなく、石もて追われるごとく四十六年二月、生長の家を辞める。時局対策宗教者会議事務局長、国民会議委員をつとめ、生長の家を担う人物と評されながら、故谷口雅春総裁、谷口清超氏に教団の問題点を具申し、去って行った。

高橋信次師との出会い

昭和四十六年、生長の家を辞められた園頭師は、トールス教団の教務部長として迎えられ、着任して四日目にトールス教祖は亡くなる。昭和四十八年一月十三日、東京へ出張、生長の家関係者から高橋師の『縁生の舟』（改題『心の発見・神理篇』）、『原説般若心経』の二冊を貰い、宿舎のホテルで、むさぼるように読む。「これを書かれた人の霊の次元の高さを感じずにはいられなかった」と。そして、本も読み終えないうちに、信次師に手紙を書いた。二月の末に、使いが二人、園頭師を訪ね、三月十三日、関西本部の講演会で信次師と園頭師は初めて顔を合わせ、園頭師は正師との初対面をこう述べる。

「私は早目に行って待っていると、高橋先生が入って来られた。中肉中背の少しふとり気味の丸顔の少しの威厳もつくろわない、そのまますぐふところに飛び込んで行けそうな雰囲気、私の心はやわらいだ。『あなたが私のところに来ることは、ぼくは五年前から東京の人達には言ってきたのです。ね、そうでしたね』と高橋先生は随行した人に証明を求められた。そして、『あなたは宇宙即我を体験したことがありますね、それはあなたの過去世で学んだものです』、と。その言葉を聞いた園頭師は、これまで自分だけしか知らない、今まで何人かの人に話してみたが、理解する人は一人もいなかった自分の体験を、何も話さないのに、わかってくださったことに驚き感激したのだった。生長の家では「神想感」という観法をやっている。この観法を続けている谷口雅春氏はわかってくれるかも知れないという期待を持って、生長の家の本部講師にもなったが、結局、わかってもらえなかったと述懐する。

こうして、開口一番「宇宙即我」という言葉が、何も知らないはずの高橋信次師から口をついて出たことに園頭師は驚愕したのである。高橋信次師は、「今まで随分苦労して来ましたね、それらの苦労も、結局は、今日、こうしてここに出逢うための準備だったのですよ」と、更に「あなたはロスアンゼルスのアガシャ教会のことを知っていますね、あのリチャード・ゼナーを指導したアガシャの指導霊というのは、我々の仲間ですよ」と。園頭師は、これまでの悩み苦しみをこの先生は全て理解して下さった、と心がやわらぎ、涙が溢れてくるのを覚えた。それから、信次師は「園頭さん、あなたの心がどうなっているか、ちょっと見てみましょう」と瞑目、精神集中。そして、「わかりました。ほとんど丸いですね。りっぱですよ。よし、やり直したとあなたは思っていますね、それでいいんです。ただ少し欠けているのは、あなたは余りにも遠慮深いことです」、と。その時はそのようなことで終わった。

四十八年四月八日～十日、G L A関西本部の講演会。その四月九日の午後、「昨夜あなたの守護霊が僕に挨拶に来ました」と、そして「近いうちにあなたも過去世を思い出しますよ」と信次師は園頭師に言う。四月十日、信次師は講演が終わった後「園頭さん、今夜、一緒に泊って下さい。宮崎から来られたお二人も。私は個人指導をする人がいますので、先に宿（生駒の三鶴山荘）へ行って下さい」と信次師は勧めた。夕方六時頃、信次師が宿に到着されたというので園頭師は玄関に出迎えると、「どうして、早く風呂にはいって浴衣に着替えなかったのですか」、と。

園頭師は、師を迎えるのに襟を正して、礼を尽くすべきだと思った。今までに知った教団の中に、これほどの心配りをされる人があつたらうかと心を打たれたのである。夕食が終り、「園頭さん、精神統一してみてください」と信次師が命ぜられると、園頭師は短い浴衣の前をかき合せて（註・園頭師は長身である）正座した。「そんな窮屈な姿勢では精神統一できません。もっと身体を楽に、足がしびれては長くは坐れない、心に集中できません」、と。

園頭師は、高橋師がアグラをかきなさいと言われたが、それが本当だと思った。園頭師は「浴衣姿で教えてもらうことに最初はいささかの心の抵抗を覚えたが、精神統一と服装とは何の関係もないことが納得でき、昭和十五年に宇宙即我を体験した時も、禅宗で教えるような坐り方をした訳でもなかったことを思い出した」、と。

そして、園頭師は次のように言う。

「私が心の統一を計ると高橋先生は私に右手をかざして、何か訳のわからない言葉で語りかけられた。二、三分何か言われたが、さっぱりなんのこともわからない。言われたことの意味はわからないが、何か腹の底からこみあげてきて、口を開けば、それがそのまま言葉になりそうな気がしてきて仕方がなかった。「肉体を持っている人よ、そのまま声を出しなさい」と先生は命ぜられた。その時のような権威ある言葉を、私はこれまで聞いたことはなかった。それは、そのまま従わずにはいられない権威ある言葉であった。口を大きく開けて、アーと声を出した。とたんに、その声は変わった。習ったこともない言葉が、次々に口をついて飛び出した。私は催眠術にかけられたのではないかとも考えたが、催眠術や暗示は、本人が覚醒した後は、術中どのようなことがあつたか覚えていない。しかし、この通り意識ははっきりしているし、全部知っているからこうして書ける」、と。

知らない習ったことのない言葉が、次々に口をついて出て、感動の涙が溢れ、目も鼻もぐしゃぐしゃになって園頭師は泣く。それから、「あなたはヘイマカという人を知っているはずですよ。過去世でどういう関係にあつたか今度は日本語で答えなさい」と信次師は日本語で問いかけると、園頭師は一瞬とまどい、今まで、自分を感動させた胸の奥というか腹の底というか、じっと潜在された自分の心に静かに問いかけてみた。すると答が返って来た。園頭師は、その答を否定した。その言葉は余りにも現実離れのした言葉であった。「心の中から浮んできたその言葉をそのまま口にしなさい」と、再び、信次師はうながした。

園頭師は、次のように言う。

「高橋先生は私の心の中を知っておられた。口にしなさいと言われても、躊躇せずにはおれなかった。一瞬躊躇して『その人は私の侍従をしていた人です』と答えた。侍従とは天皇陛下の側近の人で、民間の自分が口にすべき言葉ではないことも知っていた。その言葉以外に出てこないの仕方がなかった。」と。

「そうです。その通りです。その人は今、京都に生まれ変わってあと三カ月したら、その人も私のところへ来る筈です」と信次師は言う。（註・その通りに、三カ月目に大阪の講演会にその人は来ることになる）そう言つたと同時に、園頭師の目に映つたのは、信次師の姿の上に二重写しになっているお釈迦様の姿だつた。「仏陀、おなつかしゅうございます。偉大なる観自在者、仏陀」といつて師は泣き伏したのである。

すると高橋師は、

「ウパテッサー！（舍利弗・舍利子・シャーリープトラの幼名）二五〇〇年を距てて、この日本で再び一緒に会うことができました。私もなつかしい、インドの時と同じように今世でもやりましょう」と涙した。そこに居合わせた人も泣いた。「あっ金粉が」、G L A関西本部長・中谷義雄氏が叫んだ。園頭師の頭上に金粉が降って来た。高橋師の顔も、かざしている手もみな金で輝いていた。「釈迦の像を金で荘厳するのは、このようなことに

よるのかとわかった」と園頭師は書いている。

(註・正しく心を開いた光の天使にはこのような現象があるが、動物霊でも金粉類似のものは出すので、注意が必要である。本物は純金だが、動物霊などの二セものは銅などの合金である。「正見」してください)

それから、「ブッダー」といって園頭師は信次師の前に距づくのである。これには、宮崎市から同行したI・S氏がこの情景をすべて見ておられ、大阪Y氏の奥さんが当日、昼食の接待をされている時に、信次師が、「今日はすばらしい大物が霊道を開きますよ」と言ったという証言がある。

「霊能者とされる人を正しく見よ」

園頭師の体験した事例から述べてみたい。

その一、天玉尊という人

故・遠藤周作氏が「狐狸庵閑話」の中で「奇妙な女」として紹介した天玉尊という人がいる。遠藤氏は、「私は彼女の奇跡を実験するために、あらかじめ餅菓子を持って行った。すると天玉尊氏は、それを前において念誦し、両手で割るように命じた。餅菓子を割った時、黒いアンコの中に魚の目のような白い真珠が現われた。そのとたん、彼女の唇からもポロポロと真珠がこぼれ落ち、数えたら合計八個あった」、と。

そして、園頭広周師は言う。

「私がその人のことを知ったのは昭和三十六年であった。昭和四十年十月、私は天玉尊氏のところに行ったことがある。その頃既に「生長の家」の教えでは救われないことを知っていた私は、いろいろな人を尋ねて歩いていた。生長の家の信者の中に、ある大学教授夫人があって、その人に誘われて行った。その頃は天玉尊氏は浅草におられた。その大学教授夫人は、銀座を歩いていて左肩が重くなってきたので、ひょいと見たら、三寸位の高さの木彫りの大黒像が乗っていたというのである。私もその時餅菓子を持って行ったが、その菓子の中から、真珠と金の大黒、恵比須の像が出てきた。どうしてそういう霊能を持たれたのかと聞いてみたら、小さい時から信心が好きで、私の記憶では十四才の頃から、滝に打たれて修業しているうちにそうなったということであった。空っぽの瓶を祭壇に供えて祈られると、ぶくぶく甘い匂いがして酒がこぼれるのである。そういう霊能は不思議だと思ふ気持ちはあっても、その天玉尊氏が祭っている神様を信仰しようとは思わなかった。異様な雰囲気は私は感じていた。三回目に行った時、氏と御主人と夫婦喧嘩が始まり、いい合いされた後で、舌打ちしながら坐り直して祈禱を始められた。私は、それっきりそこへは行かなかった。日常生活を正しくできない者は、正しい神理は説けないと思っていたからであった。」、と。

その二、福田くらという人

園頭広周師は、次のように言う。

「ある人から『天国の扉』という本が送られてきた。『あなたは金粉が出ますか、金粉が出る指導者がホンモノです』という手紙が添えてあった。千葉に日本一の霊能者と称する人があった。その人も金粉が出るといっていた。金粉は動物霊も出すのである。昭和四十三年、私は既に生長の家を辞める腹を決めて、あの世とこの世の関係がよくわかる霊能者はいないか探していた。丁度「たま出版」から、福田くら著『天国の鍵』という本が出版され、それで行ったのだった。金粉がふるること、病気が治ること、いろいろな奇跡が起ることを幹部の人達が説明され、「ここの先生を知られたことは幸せですよ」と言ったが、私には祭壇の異様な空気が腑に落ちなかった。教祖の先生は祭壇に向って祈禱をされるだけで、特に「法」を説かれるわけではない。だから、ここの神様

の正体を見ようと思ったのである。大祭があるというので行った。私は一番後ろに坐った。いよいよ神様を招く祈りが始められた。今だと思って「この神様、正体を現わしなさい」と「光」を送ったのであった。とたんに教祖の先生が苦しみ始めた。「あ、苦しい、助けてくれ、酒を吞ましてくれ」といいながら祭壇の前をのた打ち回り始めた。集まった信者達が総立ちになって「こんなことははじめてだ」と騒ぎ始めた。のた打ち回りながら祭壇に供えてあった一升瓶の封を切って、瓶ごとごくごく呑み始めた。長居して疑われてはいけないと思ってそっと帰った。」、と。

また、園頭広周師は、「その後、ある大きな教団の話聞きに行き、光を送った。すると、とたんに話ができなくなるのである。冷汗を掻いてハンカチで顔を拭き拭き、無理して話を続けようとするから、それまで話していたこととは違ったとんちんかん話を苦しうに始めた。どうして私にそういう力があるのか不思議であった。私でない私以上の力が働いていることはわかっていたが、もっとはっきり知りたいと探しているうちに高橋信次先生を知ったのであった。」、と言われる。

暗い世界の霊にとって光は大敵

これまでの記述の中で、園頭師が「光」を送られると動物霊や地獄霊に憑依された教祖達が、のた打ち廻ったり、支離滅裂な言動をとった話が出て来るが、このようなことがどうして起るのだろうか。信次師は、「園頭氏は、如来界と菩薩界の中間に位置する人で、来世は如来として出る人だ」と言い残したが、暗い世界の住人、つまり、動物霊や地獄霊にとって、如来や菩薩界の人の後光（オーラ）は「光そのもの」「光の化身」なのである。光あるところには闇は消える。光あるところに、悪は住めない。善があらわれると悪は消えてゆく。このようにして、憑依されている教祖は、信者の前で痴態をさらすことになったというのである。正しいものなら、このようなことには絶対にならないと思われませんか。世の霊能者と言われる人よ！ 園頭広周師の面前で、その霊能とやらをやらせてみられるとよい。自信を持ってやれる人が何人いるであろうか。「神の子」である人間も、動物も植物も鉱物も、すべて「光」の中に在って生かされ生きて行く。しかし、その「神の子」の一部は、光を嫌い、影の部分でしか生きてゆくことが出来ないとは、なんと愚かなことであろう。

次に信次師の「ことば」を引用したい。

「霊道」

高橋信次師

「一般的には霊能、あるいは霊道と呼んでいるようです。霊道とは文字通り霊の道が開くことで、芸術家などの中に、割合多くみられ、天才などは霊道を開いている人がほとんどです。霊道を開くと透視力とか幽体離脱、人の心を見抜く、物品引き寄せ、物質化現象など、超自然現象が人に応じて可能になります。これらは、その人が行うというより、その人の背後で手助けしている霊があり、その人の目的意識に合わせて行うわけです。その人が全然それを望まないのに、そうした超自然現象が起きることもあります。そういうことは少ないものです。なぜかという、あの世の霊は霊道者の心に合わせて行うからです。ただし、霊道者が仮に、万年筆の物質化現象を望んだのにボールペンに変化することはあります。また、目的に対して時間的なズレがあったり、希望はしないが、恐怖心や心のさまざまな動きが現象化することもあります。霊道は過去世でその道に修行した人が大部分ですが、修行しない人が霊道を開くと、分裂症に陥り、変人になったりします。やたらと滝に打たれたりして、霊道を求めることは、こういう意味で非常に危険です。」、と。（『心の発見』）

同じく高橋師の記述から要約する。

霊能者・霊媒

「まず霊能者、霊媒といわれる人は、ほとんどの人が前世、過去世で肉体行などの荒業をやっています。今世でフトした機会に霊力や霊能を身につけたと言われる人は、ほとんど前世で、肉体行をやっています。通常にない能力を身につけますから、つい有頂天になり、自分の心にふり廻されてしまい、あの世の魔王や、動物霊のまたとない獲物となってしまう。このような人達の末路は哀れといわれるのも、動物霊や魔王に身も心も明け渡してしまうからです。正しい法の根本は、神の子の自覚です。霊能そのものではありません。霊能は神の子の自分に目覚めた時に、二次的副作用として起こるものです。霊道の原則はこの一点にあります。色々な霊道現象を現わすからといって、つまりモノが当る、病気を治す、霊力がすごい、というだけでその人を信じてはいけません。動物霊が背後にいて現象を現わすことがほとんどです。まず、常識的に判断して、その人の言動をよく確かめることです。その霊道現象をうのみにせず、それが本物であるかどうか正法に照らして、見る、聞く、考えてみることで。」と。

また、同じく、信次師は、「現代はどうかというと、動物霊に犯されています。万物の霊長たる人間が、己の心を、己の本性を忘れたため、その黒い想念がそのような動物霊を呼び込み、とりわけ、神がかり的現象をみせている新興宗教のほとんどは、動物霊の支配を受けているというのが実情であります。」と。

私達は動物霊や地獄霊の配下になってはならない。園頭師は、「〇〇の科学の〇川氏や外国のサ〇バ〇は動物霊」と看破しているが、神の子である我々は、動物霊にコントロールされてはならないのである。なぜなら、我々は、天上界から降臨した神の子だから、動物霊や地獄霊よりは、上段階霊として彼等を教え導くことはあっても、それらの配下になってはいけなと皆さんは思われませんか。次に「なぜ霊道現象を公開しないか」という園頭師の記述があるので紹介しよう。

「『法』を伝えるということは菩薩界の人でなくても、神界、霊界、幽界の人でもできる。それは『智慧』に依ってである。今回は高橋信次として出世されて『法』を明らかにされた。この次は七八〇年して（昭和四十八年現在）エジプトに出世することを予言して亡くなられた。その間、『法』が途絶えることのないように、その基礎をしっかりと置かなければならない責任が私にはある。もし、私が霊道現象をやってしまったとしたら、私が死んだ後、霊道現象をやれる力のある人が出てくるであろうか。霊道現象を起こす力はなくても、正法を正しく実践すれば必ず奇跡は起こるのである。正法を伝えれば、天上界からの協力があって、必ず奇跡が起こるのである。その事実を私は今、示しつつあるのであって、今、私がやっていることは、まじめに正法を学ぼうという信念と情熱があれば、誰でも出来ることなのである。霊道現象をやらない第二の理由は、高橋信次先生の存命中、霊道現象を起こし、自分の過去世を知った人達が、現在いかにあえなく高橋信次先生を裏切ってしまったか、高橋信次先生著『心の発見』は、『私の周辺には霊道現象を起した者が百人以上いる』と書かれている。『心の発見』を書かれた時には、私はまだ高橋信次先生に帰依していなかったから、その『百人以上』の中には私は入っていないが、その『百人以上』といわれた人で、現在も続けて正法を実践しているという人は、唯の一人もいないのである。霊道現象があったために、みな増長慢になって魂を悪魔に支配されてしまい、釈迦、キリストを否定し、高橋信次先生を『ぬけ殻だ』と平然としていった。潜在意識と現在意識が同通し、霊道現象を起こした人が、地位欲、名誉欲、金銭欲等の欲望を持つと、魂に穴があいているから、簡単に悪魔がそこから入り込んでその人の魂を支配するのである。しかし、その人達は悪魔に支配されていることには気がつかないのです。自分の言っていることを正しいと思っているから始末が悪いのである」と園頭師は書いているが、世の宗教家と呼ばれる方々よ、心して、この言葉を噛みしめて欲しいのである。

同じく、「私はこの次インドに生まれ変わることを願っている。ガンジーにならって私も村から村へ、カースト制度の廃止と、すべての宗教の調和を説いて歩こうと思っている。今インドへ行くのも、この次インドに生まれ変わった時の縁になればと思っで行っているのである。」と。

次に、園頭師の二枚の「奇跡の写真」を紹介したい。

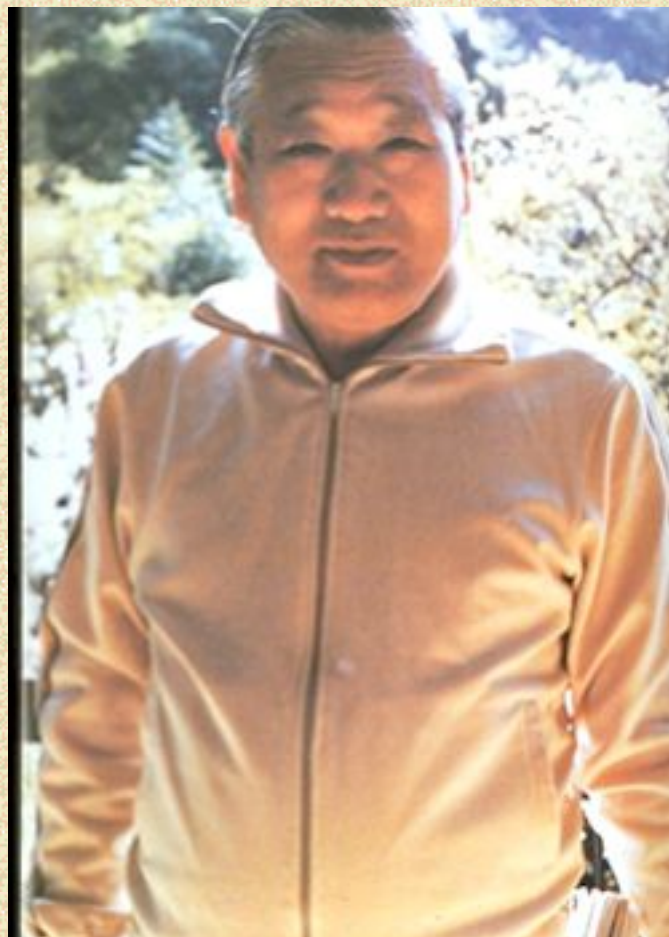
園頭師は、次のように説明する。

「昭和六十一年一月十四日早暁、霊鷲山上で私が法華経の「無量義」の講話をしている時、私の全身が光に輝いたという人があった。霊鷲山上での写真は、私の写真機で永谷幸人さんに撮ってもらっていたので、帰って現像してみたら、その中の一枚に天上界からの光によって、私の全身が光り輝いている写真があった。この時私は「正法が説法されるところには、天上界の諸霊達も聴聞しているのである」と話していたのであった。山上での説法が終って、舍利弗がいたという洞窟の中に入って禅定した。ここの禅定では、私はすぐ二千五百年前の舍利

弗の意識に還り、釈尊が身近にいられるのを実感すると、もはやどうしようもなくなって、感動の涙が溢れ出てくるのである。正法を正しく守り、正法を歪めて説く者に対する厳しさは、ここでの禅定から生まれるのである。正法を正しく伝えることへの厳しさは、私自身のものであって、私自身のものでないといえる。肉体を持っている私は「そこまでいわなくても」と思うのである。だが、そのたびに、魂の奥底の深いところから「妥協せず書け」と命ぜられるのである。私の書くものや、私が話すことが人々に深い感動を与えるとするならば、それは私が常に天上界に心を照応させているからであって、書いたり話したりするのは、私であって私でないといえる。」、と。



次の写真は逆光（フラッシュなし）でありながら全身が光って見える、奇跡の写真（著者註・オーラの撮影された稀なる写真）神奈川県大山にて、反省禅定研修会終了後（女性写真家・三坂志津恵氏撮影）



Home



「出口王仁三郎は菩薩界の人だった」

「出口王仁三郎（おにぎぶろう）（一八七―（明治四年）～一九四八（昭和二十三年）は、日本の宗教の誤りを覚醒させる使命を持って生まれた菩薩界の人であった」と高橋信次師は言い残した。



出口王仁三郎

出口王仁三郎は国家神道体制下の宗教指導者として、近代日本の歴史に、ひときわ異彩を放っている。貧農の子に生まれた王仁三郎は大本（おおもと）教の創唱者、出口ナオとめぐりあい、自から教祖兼組織者となって、一大民衆宗教・大本教をつくりあげ、やがては生長の家、世界救世教や三五（あなない）教などの源流となるが、不敬事件の弾圧で大きな方向転換を余儀なくされ、「人類愛善」の旗をかかげて、平和と人類愛を説いた。『霊界物語』の口述は全八十二巻に及び、一卷分（四百字原稿用紙三百枚）が、平均三日間という驚くべき速度で、身体を横たえながら、よどみなく口述がつづけられたという。王仁三郎の遺書の中に、「世界を霊的指導原理によって再編する人物が、すでに肉体を持っているかもしれない」と書いているが、それは高橋信次師かもし

れない。出口王仁三郎についての本は、数多く出版されているので、それを参考にさせていただくとして、王仁三郎の人となりを簡単に述べてみよう。

出口王仁三郎のプロフィール

文明開化の嵐が、日本全土を吹きあれていた頃の明治四年、霧深い丹波の国（現在の京都府亀岡市）に貧農上田吉松、ヨネの間に本名・上田喜三郎は生まれた。七歳の時、丹波の国亀岡の穴太村では、かつてない水飢饉によって、村中の井戸は枯れ、掘れども掘れども一滴の水もでないという有様だった。ところが喜三郎がさし示した場所を掘ってみると、驚いたことに水が吹き出し、村中で評判となり、村人は少年を連れだしては水脈を探しあてさせる。彼は、幼いころの病気が原因で、小学校の入学が三歳遅れの九歳だったが、持ち前の天才ぶりを発揮して、十三歳の時、代用教員として登用され、当時といえども異例のことで、職員室の図書は次々に読破し、知識の上でも本職の教師を上回り、教育効果をあげていることに教師達はこころよしとせず、何かと辛くあたった。教職員達のいやがらせにほとんど嫌気のさした喜三郎は、一年近くで職を辞し、二十三歳の時、当時廃墟になっていた亀山城で瞑想にふけっていると、この城をふたたび建設している自分の姿を見て驚き、この頃より自分の将来をひんぱんに予見するようになるが、それから二十五年後に、この亀山城を買いとり、教団・大本（おおもと）の本部をおくことになった。

二十七歳の時、早朝、起きあがって机の前にすわると、無意識のうちにすらすらと文字を書くようになると、眼前に一人の男が立って、「上田喜三郎だな。これからおまえを富士山に連れて行ってやろう」「ははあ、あんたは天狗だろう」その奇妙な男は、いきなり風呂敷のようなものをかぶせ、気がついた喜三郎は高熊山の岩窟の中にいた。そこで一週間の神秘体験をすることになるが、村では突然喜三郎がいなくなったので大騒ぎになり、一週間後、喜三郎は服は破れ、裸足のまま家に帰って来ても、帰宅して三日目には、手足の硬直にはじまり、耳と皮膚感覚以外はなにもきかなくなると、その状態が数日間も続いた。このような体験の後に、村人の病気治しをしたり、予言をしたりして評判になるが、「穴太の喜楽天狗さん」と呼ばれ、名が知れ渡り、その年の七月、喜三郎が社前で拝んでいると、「一日も早く西北の方をさして行け」という霊示をうけた。一方、喜三郎の活動舞台を用意することになる、大本教の開祖・出口ナオの「お筆先」にも、「この神をさばけるお方は東から来るぞよ。その者が来れば、良（うしとら）の金神の道は開ける。」と出ていた。九月には喜三郎は出口ナオのもとを訪れ、二十九歳の時、ナオの娘と結婚し出口王仁三郎と改名。これより王仁三郎は予言詩や霊言を世に問うが、教団役員や出口ナオとの対立があり、三十五歳の時から、しばらく綾部（本部）をはなれる。その間、神職養成機関である皇典講究所や御嶽教に入信するが、王仁三郎のいない綾部は脱退者が出て閑古鳥が鳴くありさまで、それからというもの、王仁三郎は、日露戦争の勝利や第一次大戦の勃発と勝利、第二次大戦の開戦と敗北など矢つぎ早に予言し、この予言騒動のさなかの四十七歳の時、大本開祖・出口ナオは死去。

これより、ナオにかわって一時、王仁三郎がお筆先を書くようになるが、王仁三郎の予言がことごとく的中し、その信仰者が日本中に広がるにつれ、世間の風当たりも強くなって行った。しかし高級軍人、さらには宮中・華族の中にも信者になる者があらわれ、烈火のごとく広がっていき、当時の一流新聞を買収して、機関誌を出す。このような破竹の勢いに官憲も動きはじめ、神殿取り壊しという大弾圧に出て、それは、日本の滅亡などの予言の言葉が、社会の安寧秩序を乱す、というものだった。

五十歳の時には原敬が暴漢に襲われた情景を霊視し、五十二歳の時には関東大震災を予言するが、五十三歳になると、中国の予言教団、道院・紅卍字会と提携し、第一次弾圧のあとの責付出獄の身でひそかに日本を脱出し、幹部数人とともに満蒙に入り、各地で雨を降らせ、先々で病いをなおしたりして布教につとめるも、パインタラで張策霖の追討軍に包囲され、王仁三郎らも訊問ののち銃殺と決定したが、**不思議なことに機関銃が故障しているあいだに助けがはいり、刑の執行は中止**。かくして王仁三郎は、「B29（鳥船）によって焼かれ、潜水艦によって散りぢりにされる」とか、「人民の大海（中国）に引きずりこまれ、悲惨な戦いをしいられる」とか、天皇の「人間宣言」等を予告した。また擬似軍隊・昭和神聖会を設立し、青年信者達にカーキ色の制服制帽を着せて訓練まで行ったり、一般新聞の数社を経営したり、オーケストラ、ブラスバンド部等を設け、現代の新興宗教のひな形としての、先駆的役割を果たした。しかし、政府は王仁三郎の行動に頭を痛め、二度目の大弾圧の鉄槌が、王仁三郎六十四歳の時に下され、全施設の徹底的破壊が強行されたのである。裁判から投獄、そして、保釈。この時、王仁三郎は七十一歳。亀岡に帰った王仁三郎は、訪れる信者達に次々と予言を発し、「火の雨が降る。火の雨とは焼夷弾だけではない。新兵器の戦いや」と、広島と長崎の被弾を予告したので、広島より疎開し、原爆の被害を免れた人もいた。また、「日本の敗戦後は、米ソの二大陣営が対立する」等と予言したが、奇

妙にも、終戦と同時に、王仁三郎は予告めいたことを口にしなくなり、それからは書道や、絵画、楽焼きに耽るようになって、昭和二十三年一月、亀岡の天恩郷で、その七十六歳の波瀾に満ちた生涯を終えたのである。こうして王仁三郎は、政治家・床次竹二郎の弟、真広に渡した遺書に次なる言葉を残した。

「いま、大本にあらはれし、変性女子（へんじょうによし）はニセモノじゃ、誠の女子（によし）があらはれて、やがて尻尾が見えるだろう。女子の身魂（みたま）を立て直し、根本改告しなくては、誠の道は何時までもひらくによしなし。さればとて此れにまさりし候補者を、物色しても見当らぬ。時節を待ちていたならば、何（いず）れあらはれ来るだろう。美濃か尾張の国の中、まことの女子（によし）が知れたなら、もう大本も駄目だろう。前途を見越して尻からげ、一足お先に参りましょ。皆さんあとからゆっくりと、目がさめたなら出てきなよ。盲（めくら）千人のその中の、一人の目明（めあき）が気をつける。ああかむながら、かむながら、かなはんからたまらない、一人お先へ左様なら」

王仁三郎は、この手紙の中で、「私は偽物である。美濃か尾張の国のあたりから、誠（まこと）の人が現われ、人々を導くことになる」と予言したが、まさしく、関東中部の長野県佐久に高橋師は肉体を持ったのである。王仁三郎は仏教的に言えば菩薩界の人であり、キリスト教的に言えば上段階光の天使だが、輪廻転生しながら、そのつど正道を歩き、心を大きくさせて来た人物であり、その予言もまた、上段階になるほど正確無比となる。動物霊や地獄霊憑（つ）きでも「当てごと」はする。どうしてかと言えば、この世に起きることは、あの世で先に起きるので、先に起きた、あの世の出来事を、あの世の霊である動物霊や地獄霊といえども、それを知ることが出来るからである。しかし、その範囲は、光の天使と違って限界があり、あの世は「心のままの世界」だから、金儲けしか関心のない地獄霊に、世界情勢のことを尋ねても分からないように、そこには限界があることを理解いただけよう。しかし、人間の心の広がりと大きさを、五段階（如来界、菩薩界、神界、霊界、幽界）に分けた時、上より二位に位置する菩薩界の王仁三郎の予言はかなりなものと推察できる。よどみなく行われたという口述筆記された『霊界物語』は、過去とこれから起るであろう未来が、多く込められていると思われ、日本の予言書の中でも有数のものとウエブ・マスターは信じている。しかし、いくら偉大な予言書であっても、我々は正道を歩き、人間としての道を踏みはずさない中道と調和こそが大事であり、霊能や予言にふりまわされぬ覚悟が大切であろう。王仁三郎は、偉大な菩薩界の生命であるだけに、その思想と発想は粹に執われず縦横だった。そして、彼は、あの世とこの世の関係について、「あの世とこの世は照応し、この世は、あの世の移写であり縮図である」、「あの世で目撃したことが二、三日後に現れることもあれば、十年後ということもある」、「あの世は時間空間の観念はなく超越したものである」等と、高橋信次師と同じ意味の言葉が散見されて興味深い。王仁三郎没後の、十五年ほどで道を説き始めた高橋師は、王仁三郎を「日本の宗教の誤りを覚醒させる使命を持った菩薩界の天使であった。」と言い残したのである。

Home





「松下幸之助氏はイエスの弟子ルカだった」

高橋信次師は、「松下幸之助氏の過去世は、今から二千年前のイエスの弟子ルカである」と言い残した。

聖書の中のイエス伝には、マタイ、マルコ、ヨハネ、ルカの福音書がある。同じイエス伝でありながら色々に伝えられているが、聖書はイエスの手になったものではないので、それも仕方のないことだが、その中の一つを例にあげて見たい。十字架のイエスは息絶える寸前、こう大声で言ったと記されている。マタイ伝では「わが神よ、わが神よ、なんぞ我を見棄て給いし」、「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」と。ルカ伝では「父よ、わが霊を御手にゆだね」とある。どちらも本当だという見方もあるが、マタイ伝、ルカ伝のどちらが正しいのか議論になるところである。高橋師は天上界のイエスに真意を正し、次のように訂正している。イエスのこの時の言葉は「神よ、人びとを見棄て給うな、その為すところを知らざればなり」ということであつたと、教えた。そして、「胎教」とも言うべき描写がなされている箇所がある。

<ルカ伝 第一章 三十九～四十四節にみる胎教>

「その頃、マリヤは立って、大急ぎで山里へむかいユダの町に行き、ザカリヤの家にはいってエリサベツに挨拶した。エリサベツがマリヤの挨拶を聞いた時、その子が胎内でおどった。……ごらんなさい、あなたの挨拶の音が私の耳にはいった時、子供が胎内で喜びおどりました。」このように、胎教は宗教教育の一環として大事なものとして説かれているが、この「ルカ伝」を残したルカが、松下幸之助氏だったというのである。松下は成功の理由として、学歴がなかったこと、家が貧しかったこと、体が弱かったことを理由に上げている。勿論、外に現れた現象はそうかもしれぬが、そうではなく真の理由は、ルカとしての偉大な天使としての使命と目的、役割があつたからという理由を、これから読んで行く内にお分かり頂ける筈だ。

松下幸之助は、松下電器産業相談役、松下会長もつとめた、大阪松下電器企業グループの創業者で、明治二十七年十一月二十七日和歌山県に生まれるが、五十歳までもつまいと云われる程の蒲柳の質だった。六人兄弟姉妹の末子三男で、旧家の上位に属する小地主だが、理由あって土地も家も人手に渡ることになる。小学校に入学した頃、長兄、次兄、長姉、相次いで病没、二兄を失った両親は幸之助を心ひそかに力強く楽しみにした。小学二年生の頃、お父さんは盲啞学校に職を得、小学校の担任の先生は非常に親切ないい先生であつたと、自伝に書かれている。九歳の秋、大阪に奉行に出て、火鉢屋の小僧から、十～十五歳まで自転車屋の小僧となるも、十一の時に父さんは病没。十五歳には大阪電燈に入社して、十八歳で夜学に入学し二十歳で結婚。二十二歳で大阪電燈を退職してからソケット製造に着手するが、余り注文も取れず挫折しそうになる。しかし、扇風機の碍盤の受注に行き詰まるも打開され始め、アタッチメントプラグから二灯用差し込みプラグへと増産を続け、二十三歳で従業員は二十余名となる。二十五歳の時には、所主も従業員も皆、等しく歩く、歩一会員なりとの鉄則をもって「歩一会」が誕生。二十七歳の頃、百坪の土地に工場、事務所、住居七十坪ほどの工場を月賦払いで建設して、続いて自転車ランプの製造販売を始める。それから関東大震災。

そして、三十歳の頃に真言宗の坊さんとの同居したり、真空管の販売、やがて中止となるが、引きぎわを潔くして名声を博し、その頃には区議員に当選して、高野山にも初めて詣でるが、招待してくれた同行の二人は運だめしの石が持ちあがらない。しかし幸之助氏は、「静かに念じてやってみた。三人の中で一番力の弱い私は奇跡にも持ち上った」と書いた。それから、ナショナルランプの製作販売からナショナルのマークの決定。また、アイロン、コタツ等の電熱器の生産（この頃昭和三年）。三十三歳の頃には従業員二百人となり、スーパー・アイロン試作販売に成功したが、決算は欠損。電熱部門の自己経営にもどるも、昭和二年には金融恐慌が起こり、住友銀行と取り引き上の幸運。

これを、松下は次のように書いた。「自分の運が強いというか、住友に理解があったというのか、あの銀行騒動の時期に流通の道が開いて、さしたる困難もなく、切り抜けることが出来たのは、今も忘れ得ぬ大きな出来事の一つであった。」、と。あの金融恐慌の二カ月前に、住友銀行と取り引きを開始して道が開いたとあるが、予感、直感によるものか、光の天使・幸之助氏に対する天上界の協力によるものか不思議だった。同じく昭和二年には、赤ん坊審査会で最優良児として表彰された長男の病没。順風満帆での悲劇となるが、「幼い子供を亡くすということは親の生きざまの反省」と、高橋信次師は教えている。昭和四年には、新工場の建設。土地五百坪、建坪三百五十坪の建設が始り、未曾有の不況で売れ行きも半減したので、「従業員を半減し、この窮状を打開しよう」とする意見も出るが、打開の途が頭にひらめき生産は即日、半日勤務とし、従業員は一人も解雇してはならないと決意。減給せず全額を支給し、その代り全力をあげてストックの販売に努力することを命じた。その頃には、労働争議は日に日に激しさを増し、会社の責任者が暗殺されることさえ起っていた。しかし、この方針により三カ月後にはストックは全部売り切れ、全力をあげて生産努力しなければならないというほどの活況を呈することになる。病気による出養生先で、その方針の当を得たことに非常な喜びを感じ、店員の努力に感謝したと氏は言う。そして、混乱期を見事に切り抜いて自動車を購入するが、この経済の沈滞した時こそ余裕のある者は消費をあおらねばならないという信念で、人にも建築を大いに勧める。それ以来、合成樹脂界へも進出、人材登用の新方針によって、昭和七年にかけて優秀な人材も得、不景気な時代に積極的な採用ぶりは世間を驚かせ、ラジオ界にも進出し、ラジオカセットの製作と乾電池の自社生産とナショナルランプの盛況によって、昭和六年末には製品総数二百余种を数える。

昭和七年には、知人に宗教を勧められ某宗教本部を見学するが、宗教の力に感服して、家に帰っても経営と宗教というものが二重に写って見え、まんじりとも出来ず考えるのだった。「真の経営、聖なる経営とは何か、生産者の使命は貴重なる生活物資を水道水のごとく無尽蔵たらしめることで、加工された水道水は価値がある。物質を中心とした楽園に宗教による精神的安心が加わって人生は完成する」、そうだと幸之助氏は考えた。これを高橋師は「心と肉体と経済の調和」と説くが、「健全な精神と健康な肉体、そして困らない位のお金を持つこと」というわけである。そして、昭和七年には「第一回創業記念日を迎え真使命を感得し、以後二百五十年を使命到達期間と定めて十節に分割し、世を物質に充ち満ちた富み栄えた楽土を達成すると力強く邁進した。使命達成の方途を聞いた社員は真に感激の極に達し、昭和五年には従業員数五百余名、昭和七年店員養成所の建設計画を注文に応じきれないというフル生産のために、計画変更により本店建設と移転により拡張を続け、昭和八年遵奉すべき五大精神は昭和十二年の七大精神と改められ今日に至っている」、と氏は記述した。

< 松下の七大精神 >

- 一、産業報国の精神
- 一、公明正大の精神
- 一、和親一致の精神
- 一、力闘向上の精神
- 一、礼儀を尽すの精神
- 一、順応同化の精神
- 一、感謝報恩の精神

そして、氏は次の言葉で結んでいる。

「釈迦、キリストの尊敬すべきは、だれよりも強い感謝、報恩の念の持主であったがためであると私は解している。この人達が生を人間に得たことの、その喜びに対する感謝とその喜びに対する報恩をいかに感じることか。そして、その感謝の現われが、世道人心の向上と救済に己を報いたのである。」、と。

以上は、松下幸之助自伝、わが半生の記録より『私の生き方、考え方』PHP文庫より引用したが、氏は経営の神様、世界のビリオネア、大富豪、慈善事業家という人物評価がされたが、小学校を出ただけでどうしてこれ程までに成功したかを見てみたい。

< 幸之助氏の、今世の使命と目的は何だったのか >

この世に大指導霊が生まれ、人類を導くための法を説く時、天は経済的援助をする天使を、近くに配材すると高橋師は教えた。これを仏教では「大黒天」と呼んだ。現代では大黒天は金儲けの神様のように言われているが、そうではなかった。正法を説く高橋信次師の大黒天だったというのである。その使命のために天はルカの生命をこの世に遣わしたと言うのだ。釈迦の時代は、法の学問所である、祇園精舎とか竹林精舎を寄進した人達がこれに当たるが、現代は氏がこの役だった。だから、天を上げて協力したために、目を見張るような成果が出たというのである。高橋師が、昭和五十一年四十八歳で昇天するまでに、誰かが、松下幸之助氏と出会いの機会をつくる手はずになっていたらしいが、それは実現しなかった。

高橋師は昭和二年、松下氏は明治二十七年生まれ、三十歳余りの年のひらきの中で、大黒天である松下氏が先に財的基盤を確立して、その背景の中で高橋師が道を説かれる、なんという神の計画、神の配材なのだろうと考えた。第二次大戦のために、十年悟るのが遅れたと高橋師自から述懐しているが、戦争は全てを狂わせたのである。

ところで、幸之助氏が小学校を出ただけで、それも一代で巨万の富みを築いた日本のサクセス・ストーリーを垣間見て、自分もあんなに成れたらと、誰もが一樣に考えたことであろう。次に、「分を知る」、「足るを知る」について述べたい。

< 正法と「分を知り足るを知る」 >

昔からよく「その人の分」「本分を尽せ」「本分を守れ」「本分を自覚せよ」と言った。金持ちに生まれるか、貧乏人に生まれるかというのは、各人が、あの世で選んで自分で決めてくるのであり、業（ごお・カルマ）が深いとか浅いかということではない。神の分身であり、神の子である人間は、完全な自由と自主性が与えられている。この世は、金持ちになって人生の修行をしようとして来た人もいれば、今生（こんじょう）は平凡な中に人生を送ろうと思って出て来た人、そして、過去世で金持ちの経験は卒業したので、今度は貧乏人でなければ経験できないことを勉強しようとする環境を選んで生まれてくる人と様々である。金持ちになろうと生まれて来た人には金儲けのチャンスがあり、平凡な生活を望んで生まれて来た人が、この世に生まれてから、欲望を持って金持ちになろうとしても、それは、ことごとく失敗することになる。これを昔の人は「その人の分だ」と言った。最近の猛烈なセミナー屋さん達は、「財力無限供給」等と言って、金持ちになれると思えば必ず金持ちになれると説いた。新聞紙で一億円の札束を作って「既に一億円の金持ちになりました」とアリアリと心に描かせたり、「成功哲学...」「あなたもこうすれば成功者になれる」と金儲けのセミナー、著書の花盛りであるが、新聞紙で作った札束を眺めたり、セミナーを受講した人が、皆なスローガンの通りに成功したのだろうか。金持ちになりたいという「欲念」の力で一時期はそのように見える時があるかも知れないが、五年、十年という単位（スパン）で見た時、果して、その人は金持ちになったのか。それは、廻り道をしただけで凡人はやはり凡人であり、それが「その人の分」である。

「天分」というのは、天からの分け前を意味するが、これまで述べたように、自分が決めて来たことなのである。なのに、かなえられる筈もないものを、かなえられると説く宗教家、得られるべくもないものを、得られると説く経済セミナー屋には困りものだと言うのである。得られないものを得ようと心を乱すより、「分を知り」心を安らかにすることが、如何に人生にとって大切なことか。全ての人が松下幸之助氏のように成ろうとして

も、それは不可能であり、金は無いより有った方が良くとする心の動き、これを「心中の魔」という。大いなる夢を描けと言うが、現実とならない観念的な夢を描かせることは、人々の心のエネルギーを浪費させることになり、正しいことではない。そして、人にはそれぞれ、その分よっての運命の上限と下限があり、その分に合ったことは必ず成功し、分でないことは失敗することになる。たとえ、分に合ったことをしていてもその運命の上限を越えることは出来ず、限界があることを知らねばならないのである。分に合ったことをする人には心の安らぎがあり、心が安らかにならない人は、それはその人の分ではないからであり、よくよく考えなくてはならない。財産家になることを夢みて、なけなしの金を献金する信者や、なけなしの金をはたいてセミナーを受講する人の姿を見ると、哀れである。各人の運命には上限と下限とがあって、その間を上がったたり、下がったりして一生を送るもの。上限とはその人の運命の好調時、下限とは、最低時、一番苦しい時期である。

しかも、上限、下限のワクは、各人によって異なり、そのワクの外には出られない。大抵の人は、下限と中間のあいだを、いったりきたりして、その一生を終る場合が多いと高橋師は教えた。

次に、園頭師の記述を引用しよう。

「分を知るということは同時に「足ることを知る」ということになります。今の私達の人生は、宇宙即我に到達するための永い輪廻転生の中の一コマなのであり、ただ一回の人生だけですべてを悟りつくす、経験しつくすということとはできないのでありますから、今度の人生では自分はなにを為し、なにを学ぶことが正しいのであるかをよく心の内に聞かなければならないのです。人には欲望があります。平社員でいるより社長がいい、と思うでしょう。では「社長になって実際に会社を経営できるか」と自問自答した時に自分の心に偽りなしに「やれる」という人もあれば、「さてとなると、とてもできない」と思う人もあるはずで、金も今よりはあった方がよいでしょう。

しかし、あっても使いこなすことができず、かえって心を墮落させ、また遺産として残したために子供達が争うというようなものなら、むしろないほうが幸せです。金もまた、人間が魂の勉強をして行くために、生活の便宜上つくり出したものの一つなのでありますから、金のために心を一喜一憂させることは本末転倒なので、足ることを知ったら安らかな心を知った上で、また金の必要性を知るといことが大事であります。「祈れば何でも叶えられる」と説いている宗教がありますが、足ることを知らない分を超えた祈りは実現しないのであります。祈りも分を知り、足ることを知った上でしなければいけません。その祈りが、その人の分に叶うものであったら、必ず守護霊をはじめ天上界からの協力があって実現するのであります。」と。

昭和六十二年四月二十九日の天皇誕生日のことである。春の叙勲が発表され、故松下幸之助氏は九十二歳、旭日桐花大綬賞を受けることになった。功績概要は日本国際賞の創設や松下政経塾の運営で、人材の育成に努めたからということだった。五月八日宮中で昭和天皇陛下から親授され、古代インドの時代のアショカ王、それから五百年後のカニシカ王としての過去世を持たれる菩薩界の昭和天皇と、イエスの弟子ルカの過去世を持つ光の天使の御二人が、授賞式で顔を合わされた。臨席者の中でも一際大きい御二人の後光（オーラ）が授賞式場一杯に満ちあふれたことであろう。

松下氏は車椅子から元気に礼を述べたが、ルカは今から二千年前の人だから、決して同時代の人ではなかったが、しかし今世は同時代を生きられることになった。同時代を生きるということは、同時代に生きてなさなければならぬ共通の使命と役割があったからである。その国が隆盛するには、するだけの理由がある。縁生によって、そこに高級霊が多く生まれていくからだと、高橋師は教えた。現代は実に有り難い。前にも述べたように、真のメシヤ・エルランティの高橋信次師と同時代に生き、如来と菩薩の中間に位置し、過去世で舍利弗でありガブリエルであった園頭広周師、菩薩界の昭和天皇陛下、光の天使・松下幸之助氏が、そして神界、霊界の天使達が沢山いる現代に生まれて幸せだと言うのである。子孫に、いつまでも栄える国・日本を残すためには、いい種を蒔くことである。原因結果の法則とか、因縁の法則によって、そこにまた、高級霊が生まれて行くことになる。

間違った思想や戦争をつくり出していく国には高級霊は生まれて行くことはない。一等国と言われた国が、その内に没落して二流、三流へと転落していくのはその為である。国の命運は百年単位でみるとよくわかる。この昭和の時代は、昭和二年に高橋師は生誕、正法という神理の種を蒔くと昭和五十一年に昇天したが、正に天上界が計画した時代だった。日本のそこそこに、共に協力する天使達が生れて力を合わせた。そのために、貿易超一等国となって、ことごとく経済摩擦にまで発展、その上に不協和音も聞かれ始めた。それも、総力をあげての努力と勤勉さは否定しない。だが、「正法」の種が蒔かれ、これを人類に広めるための一つの手段として、天上界の計画に沿って隆盛したことを忘れてはならない。

この小さな島国日本に、それ程の力があるとは思えない。海に囲まれたこの小さな国に、一億二千万人もの人
 が住むのに資源もない。食糧とて自給出来ないのである。日本人が思いあがり、世界の中で孤立するなら、世界
 が手を組んで食糧をストップすることだって出来よう。松下幸之助氏は「水を加工した水道水は価値がある」と
 言った。日本人は資源の産出国から原料を買い入れ、二次的に加工、製品化して儲け、今や世界一の貿易黒字国
 である。国家財政はパンク寸前だと言うのにだ。そして、その貿易黒字は、過去数十年の間、低報酬と円安の中
 で打ち立てられたと言っても過言ではないが、この現世界では、どの国も良くて安い製品を市場に出してくるの
 である。勿論、新しい研究がなされ、新製品が開発されることによって心配はないと云う見方もあるわけだが、
 現代は、この狭い日本に縁生として、その分野の霊的エキスパート、つまり色々な段階の天使達がこの世に肉体
 を持って出たために、新しい研究・新分野の開発がなされた。だから、もうしばらくの間は、この状態が続くか
 もしれない。ところが新製品を作り出す霊的エキスパート達も、いつかはこの世を後にする。そうすると、引き
 続き、この日本に肉体を持って生まれてくればそれはそれで良いのだが、金がすべてだとする日本の「国際的商
 んど」が、不協和音を奏でながら世界を闊歩し、悪の種を蒔くことばかりをしていると、エキスパート達はこの
 国に見切りをつけて、来世はどこかの国に生まれて行くことになりかねない。あのユダヤがそうだった。近世の
 優秀な学者や研究者は、ユダヤ人に多かったという事実がある。でも、日本人がいつまでもユダヤの理論を押し
 進めることばかり続けていると、もうそこには高級霊は生まれて行かなくなり、いつの日にか没落するのであ
 る。ユダヤ人が、また、日本人が優秀だからということではない。そこに目的と使命があって高級霊が生まれて
 行き、隆盛させたことを忘れてはいけないのである。

これまではすべて白色人種の時代だった。彼等はことごとく隆盛し、その歴史の中で優越意識を持ち、その誤れ
 る優越意識を修正するために、今度は黄色人種が隆盛するといふのである。これは、「神は一つ、宇宙は一つ、
 人類はみな神の子の兄弟だ」という神の意思を実現するための天上界の計画なのである。

ところで、日本は食糧さえ自給出来ていないと言った。そして、世界が手を組んで食糧輸出をストップさせる
 ようなことがあれば、まさしくそれは第二次大戦の終戦時に近いものとなるはずである。この小さな島国に一億
 二千万人。国民は確実に毎日の栄養補給、エネルギーの補給をする。腹が減ってはどうにもならないのであ
 る。高橋信次師は「日本には、心ある人が出て正法を説いたので、日本は食糧に困ることはありません」と言い
 残したが、いつまでも一人よがりの理論を押し進めて、調和とは程遠いことをやっているようでは、天上界とい
 えども守ろうにも守れなくなってくるのが、神の子、人間界の法則なのである。一人よがりの強情人間を囲りの
 者が導こうにも導けないように、あの世とて一つも変わらない。日本は一億以上の人住むのに、面積は猫の
 額。それなのに休耕田がある。世界には食糧が収穫できずに飢え死にする民族があるという時代にだ。勿論、食
 糧が穫れないという国は、とれない理由はある。高橋師は、それは神の光を閉ざした主義主張にある、と教え
 た。同じ干魃の地域でありながら、資本主義をすすめる自由国家には比較的食糧に恵まれ、社会・共産主義を押し
 進める統制国家は食糧危機に悩まされているこの現実。真の自由と創造の自由を与えられている神の子人間
 が、国家統制政策の名のもとに言論は統制、封鎖され、すべての自由を奪う政策が正しいはずはない。

人間は自由で明るい生活の中に、人生を謳歌できる環境をつくるのが、地上理想郷・ユートピア建設の第一歩
 である。高橋師は、「資本主義も社会主義も思想の根本になっているのは、すべて物質的経済です。どこに心が
 あるでしょうか」と疑問を投げかけた。巷間では「現代は心の時代だ」と言われて久しいが、それはあくまで
 もスローガンであって「心」ということの意味さえもわかってはいない。この世も、あの世も物質ではなく
 「心」「魂」がすべてなのである。「社会・共産主義を押し進める中国もソ連も北朝鮮も食糧不足に悩まされ
 る」とは、高橋師の言葉だが、食糧は暑い所にも寒い所にも、それなりにとれる。ところが雨が降りすぎる、ま
 た、その反対にカラカラ天気だと、食糧は取れない。この両極端の異常気象の原因は、そこに住む人間の主義主
 張にあって、これは天災ではなく人災というのだ。冷害、干魃等の異常気象は、地上に住む人類の想念行為にあ
 ると高橋師は指摘した。一方の国には食糧が有り余り、もう一方には食糧危機が発生するというのも、同時代に
 住む人類の共通責任なのである。なぜなら主義主張は人間が造り出したものだから。たとえば日本を例に引け
 ば、九州で食糧がとれなくなったら、北海道から或いは本州から食糧を融通し合って助け合うはず。ところが、
 一国家、一民族に分かれてしまうと主義主張にとらわれ、まったく愚かなことだが、それさえ不可能になる。子
 供達には「他人には良いことを」と説く大人達が、他国には、異民族には愛の手を差し伸べることさえしない
 で、自分の国だけはと自己保存に走る。その結果、一部のボランティア活動に「おんぶにだっこ」である。

ところで、先に休耕田について書いた。休耕田は短期間であれば、休ませることによって土壌の栄養回復につ
 ながるといふ考え方もあるが、休ませ過ぎると田畑は荒れ、思うように収穫できないことにもなりかねない。子
 供に心をいれ育てるなら、親は子に悩まされることもないように、土壌に心をいれ可愛がれば結果は明らか。自
 然界のものは、この原則にはずれるものは何一つない。休耕田を拡大することによって農民の耕作意欲をそぎ、
 国家予算の一部を割くことにもつながる。その悪弊をやめ、農民には大いに農作物生産にいそしんでもらい、そ

の余剰分は国で買い上げ、食糧不足に泣く同じ人類の兄弟達に対して、人間としての原点に立った無償の布施によって、「善」を積むことを提言したい。それは今を置いて外にない。でも、国にはその力はないという。赤字国債の問題や高齢化問題等、このままでいけば国家財政は、いつの日かパンクするのは目に見える。高橋師は、昭和五十年一月関西講演会で、次のように言った。

「世界の自由諸国におけるイタリアの経済破綻を知っているでしょう。日本はこのままで行ったらイタリア以上の苦境に立たせられるでしょう」と。現にその方向に進んでいる。どうにかして政府は財政を立て直すために、平成元年には消費税をゴリ押しし、平成九年にはアップした。これを一国民の家計費にあてはめて考えれば、収入と支出のアンバランスである。家計が苦しければ、収入を増すか、足ることを知ってじっと「我慢の子」しかない。家族一人一人が、現状を許認し、質素な生活ぶりを実践する以外にない。このような時にそれぞれ家人が、したい放題、やりたい放題では収拾できるはずもないのである。なぜなら、そのような窮迫した家計をつくりだしたのは、外ならぬ家族全体の責任だからである。家族全員のためにお金を使ったから家計が赤字になり、国債という金利のかかる金を借りて急場しのぎをした。このように見て行くと、国家財源は全て、他ならぬ国民一人一人のために、国民の幸福のために使われたものと言える。一般国民は自営業であったり、会社に勤務して生活費を稼ぐ。国は、国民の納める税金が財源だから、国は国民のようにアルバイトをして稼ぐことは出来ない。税金を増やすことと同時に、足ることを知った質素な経済を実践する以外にない。主義主張ばかりを押しすすめるのではなく、「分を知り足ることを知った」社会をつくり出す以外にないのである。政府の借金はウン百兆円、その利息たるや...。そして平成十年にはまたまた増加の兆しである。国家予算に占める国債の割合、つまり国債依存率は最高水準にあつて、国は借金まみれで赤字財政となり、企業はその間に世界の外貨を稼いだ。それは、ことごとく海外資産購入や財テクなどのマネーゲームと呼ばれるもの、そして地価狂乱へとつながって行った。しかし、いくら高価なものを手に入れようと、金儲けに専心しようと、心の安らぎは得られるはずもないのである。私はこれまでに、足ることを知った経済を実践する以外にないことを述べ、余剰食糧は国や民間が買い取り、食糧不足に泣く国や民族に、無償の布施をして善行を実践しようと言った。安い輸入農産物が自由に入ってくる時は休耕田もよい。だが、どこも穫れなくなった時は、どうなさるのか。高橋師は、「日本には、心ある人が出て正法を説いたので、日本は食糧に困ることはありません」と言われたが、この意味するところは、「何も作らないでは、或は、田んぼを減らしては食糧は取れませんよ。農業に励んでさえいれば、天候も協力して作物も採れ、日本は大丈夫ですよ」と、高橋師はおっしゃっているように思うのだ。平成六年の米の緊急輸入から、一転して平成七年の大豊作、これは日本の農業の大崩落を止めさせるための、天の警告に思えてならない。なぜなら、どこの世界に、大凶作から次の年には大豊作という例があるだろうか。

< 松下幸之助氏に関するはなし >

○ 昭和六十一年十一月、松下幸之助氏は九十二才の誕生日に、経営者としての労をねぎらわれ労働組合より銅像が贈られた。労働組合から銅像を贈られた経営者は、そんなには多くないだろう。

○ 昭和六十三年、米経済誌、フォーチュンは、「一九八八年、世界のビリオネアズ（資産十億ドル以上の富豪）」特集を掲載した。それによると松下幸之助松下電器産業相談役（九十三歳）は資産二十八億ドルで世界の二十九位と発表した。

○ 松下幸之助氏が、松下にも労働組合ができるというので発会式に出席した。その時、社会党の加藤勘十氏が「なぜ出てきた。日本の社長で労働組合の発会式に出てきたのは、あなたただだ」と言ったとか。労働組合をつくるのは、労働者と経営者が対立するためのものではなく、労使一体となり調和し協力するためのものであるはず。

『現代人と仏教』笠原一男（東大教授）著、評論社、初版一九七一年、高橋師との対談から引用しよう。

笠原 ちょっと話が飛びますが、われわれは生まれながらにして幸不幸の段階が決まっているともいえません。金のことでは、松下幸之助さんの子供に生まれるのと、私の子供として生まれるのでは雲泥の差でしょう。

高橋 それは自分が次元の違うあの世で約束して、自分が選んで出てくるんです。

笠原 自ら選ぶんですか。

高橋 あの世にもちゃんとした役所のような所があり、そこに全部申告し、夫婦の調和である精子卵子が結ばれる前に、すでに約束されているんです。そして三カ月ぐらいでつわりの現象が出るのは、実は母親の意識と子の意識の交差、それが相剋現象として出てくるんです。

笠原 その役所というのは、いったいどこにあるんですか。

高橋 次元の違った世界です。

笠原 そこで次元の違う世界で自ら自分の来世を選ぶ人間は、具体的な人間としての形をもっていますか。

高橋 厳然としてあります。しかも後光がさしています。

笠原 そして次元の違う世界に存在する役所に自分で届け出て松下さんなり、私の所に生まれてくる。

高橋 そこには縁があります。

笠原 それで生まれてからしまったとか、選びそこなったと感ずる時はどうすればよいんですか。

高橋 自分自身が選びそこなったというのが現代社会です。本来は親達の真理が埃にまみれていなかったら、縁というものを早く悟るでしょう。悟れる環境を選ぶのは己れ自身です。人間の幸せは物質や地位名誉ではたして心の安らぎが得られるでしょうか。足ることを知ったなら、そこにおけるものはやはり調和ではないでしょうか。

○ <松下グループを支えた一人の例>

昭和三年生まれの市川勝美氏は昭和二十六年松下電産入社、五十一年松下電子部品取締役、常務、専務を経て、六十二年より自転車と防災の宮田工業社長である。松下に奉職すること三十五年に渡り松下氏を支えて来た一人で、昭和六十三年月刊現代十月号で次のように述べられた。「松下時代に百数十取った特許の九割は夢の中で発見した。研究に研究を重ねて、それでも結果が出ないまま倒れるように寝る。するとそれまでどうしてもわからなかったことが、夢の中ですらすらと解ける。夢に出てくるまでやらなければ、一つの技術は完成しないということで、自転車の新工法も同じ。それで、「夢があるから大丈夫」といったんですワ」、と。

このようなことが、どうして起きるのか、高橋師の「ことば」から見よう。

「この世に肉体を持って出ている人の心を導く、あの世の魂の兄弟達を「守護霊」と呼んでいるが、肉体を持って出ている人の心が常に正しく心と行動が一致して正しい目的に対して努力している時には、守護霊の友人か、あるいは肉体舟を持っている本人の、あの世における友人達の中の専門家が、その研究目的に対する靈感を与えることがある。この時の目的に応じ協力して下さる天使が、指導霊である。指導霊は人間それぞれの想念行為に相応して協力して下さることになっている。例えば科学者に対しては、その道の専門家がその目的、努力に比例した力を与え、絶対に不平等なことはしない。己の心の中で指導、守護して下さっている霊達や魂の兄弟達に感謝することが必要なことなのであり、人間の当然の礼儀なのである。」『心の発見』

特許の九割を夢の中で発見し、研究に研究を重ねても結果が出ないまま倒れるように寝ると、夢の中ですらすらと解決した、と市川氏は述べておられるが、氏の目的意識に対してあの世の守護霊や指導霊の協力によって「霊夢」を見せられたのだろう。

次に、会社とか団体の集団について考えてみよう。園頭師の論文を見たい。



< 会社 - 組織 - クニ - 国 >



「モーゼがエジプトを脱出してシナイ半島に辿りついたが、それから先なかなか前進できなかった、六年経っても一向に前進しない。それはモーゼが一人一人に、「目的地はあそこだ、いいか」と説明していたからである。ある夜、モーゼは声を聞いた。「十人には十人の長を、百人には百人の長を、千人には千人の長を、それぞれ長をつかってその長を集めて伝えよ。」と。これが組織管理の始まりといってよい。この組織のことを、われわれの祖先は「クニ」といった。「国」とは、クミ、クム、クンデ成ルモノ、ということで、職場の作業組、部も課も、共通の目的をもって組み合わされたものはみな「国」である。小さな国は統合されて大きな国になる。世界の民族興亡の歴史を見るとそう見える。日本も、四百年前までは、誰が天下を取るかで争っていたが、徳川家康が天下を統一してから国内の争いはなくなった。ヨーロッパでは、公国という領主の支配した小さな国がたくさんあって、それがやがて、ドイツ、フランス等と大きな国に統合されていった。インドもそうである。大政奉還というのは、それまで徳川家が統合してきたのを、天皇の統治にかえしたということであり、藩の代りに県を置いて、知事によって統治させることにした。ヨーロッパでは公国はなくなったが、その代りに州をつかって統治したというだけで、人のあるところ、国即ち組織はなくなる。例えば人体は、六十兆の細胞が偶然に集まったのではなく、最初に人間の原型（光子体）があって、それぞれ頭、眼、耳、鼻、口、心臓、肺臓等とつくられたわけで、そこには統一意識が働き、それらを統治する一貫した生理作用が働いているわけだ。細胞が集まって偶然に心臓になり、また別な細胞が偶然に集まって肺臓になり、その心臓と肺臓とが話合って血液をきれいにし、血液を送るということなど決めたわけではない。

国も国であるが、県も国であり、市町村も国であり、職場の組織も国である。国がなくなればよいというのは幻想、寝言みたいなもので、現実を直視しない気狂いみたいなものでしかない。こういう気狂いみたいな人間が、日本では知識人といわれているのだからおかしいのである。ソ連だって、中共だって国ではないか。組織をもって統治しているではないか。一番肝腎なことは、大は国家から、小は組織まで、それがどういう理念によって運営されるかということ、人の問題であって国の問題ではないのである。仏国土、ユートピアになって、国境はなくなっても、国として組織としての統治機構は厳としてなくなるのである。太陽系も国であり、銀河宇宙系も国であり、大宇宙そのものが一つの国であり、まず大宇宙という国があって、その理念の下に各星団がつくられ、太陽系がつくられ、地球がつくられたので、地球ができてから太陽系ができたのではない。大宇宙が一つの統一意識によって統制されているように、人間のつくる国も、大は国家から、小は職場に至るまで、家庭のことを先に書かなかったが、家庭も実は一つのクミ国である。大から小に至るまで、すべての国が、大宇宙の理念即ち正法であれば、すべては平和であるのであり、現在の世界の情勢は、すべての国、組、家庭が、正法によって統治運営されるようになるための過渡期にあるといえるのである。だから、正法に叶っている国、会社、組織、家庭はそのまま栄えてゆくが、そうでない所はこれからいろいろな変遷を重ね、最後は正法に帰らなければ安定しないということになるのである。宗教団体も同じである。私はこの日本という国が、正法国家であってほしいし、また、生きていく限り、そうあらしめたいと思う。私は限りなく日本を愛する。日本を愛することを通して、世界を愛する。」

次は、高橋師の講演から、経済についてお聞き願おう。



< 経済と高橋信次師の言魂 >



1)、一九七五年宮崎研修会にて

「お金はこの世では通じるが、あの世には通じないのです。冥途の沙汰も金次第と言いますが、金が無くたってあの世には帰れます。こうなりますと、我々の眼に写るところの、身体にふれるところの万象万物はすべて無情であるということです。物質や経済や文明は、生きる為のより豊かな心と調和された環境をつくるための一つの道具にしかすぎないのです。その道具に私達は翻弄されて物質文明の自ら奴隷になりさがっているのです。それが苦しみなのです。神様は不公平だ、私の家は貧乏して苦しんでいるんだ。あの金持ちの家と自分の家を比べてみれば、神様は差別していると、もし皆様がそのように思うなら、生まれて来た時に貧乏だからと言って永遠の生命の過程に於ては、その貧乏を通して、体験して自分自身の心を豊かにする一つの勉強であり学習なのです。その貧乏の中から自分自身をより豊かな自分自身をつくり出すための学習であることを知らなくてはなりません。あの世へは、どんなに金持ちであっても一文なりとも持ってかえることはできないのです。金持ちであっても、この地上界へ出てくる時に、銭の一文なりとも持って出て来た人はいないのです。我々はその原点に帰って見たならば、そういうものが絶対ではないんだ、人生は有限ではない、永遠の生命として転生輪廻をし、神のからだというこの環境の中を、その環境に適応した肉体を持たないかぎり我々は修行という環境が成立しないのです。我々はあの世とこの世を永遠の転生を繰り返しているところの神の子なのです。その神の子が物質や或いは、経済の奴隷になって、お互いに争いと破壊を繰り返している愚かさ、まったくそのようなものではありません。経済力のある人が働く環境を提供したならば、その提供者は慈悲深く、愛に満ちて、働く人達を大事にし、その働く人達がおればこそ、今の自分があるんだ。それに対しての感謝の心は、働く人達により安定した生活の出来るようにしてやることです。働く人は、働く環境があればこそ、現在の肉体を保存し、家庭があるんだと感謝をする心を行為として報恩を実践することです。貧乏であろうが、金持ちであろうが、使用者側であろうが、使用人であろうが、皆すべて平等なのです。ただ、その時に自分が学習の環境を自ら選んでいることを知らなければなりません。」

2)、一九七五年三月 小田原講演会より

「お金とか物質とかいうものは、我々の生きる上において必要なだけ存在すればいいのです。ところで、我々の欲望は限りなく広がり、我々の欲望は無限大に外に向いて行きます。よくある人は労使の上部層と下部層の闘争の中に文明は発達していくのだと説いている思想があります。しからば、我々は文明のために人類があるのでしょうか。いえ、人類のために文明はあるのです。錯覚を起して、心を常に格闘の中に、間違った方向に進んでいる人達もいます。或いはまた、間違った宗教を人々に教えて、そして自分自身の欲望を満たそうとしている人達もいます。しかし、彼等はやがてその罪を償う時が来るのです。」

3)、記述の中から

「如何に人間が経済的に恵まれておろうとも、心の中の歪みというものは経済によって治ることは出来ないのです。経済や物質というものは生きる為に、皆さんが魂の修行するための一つの道具にしか過ぎないのです。それを足ることを忘れてしまった執着心の中に、自分をかえって苦しめてしまうのです。このようにして、それぞれが愚痴をこぼしたり、怒りの心を持ったり、足ることを忘れてたりするこの三つのことを、「心の中の三毒」と言っています。この三つの毒を我々は日常生活の中から抜くことが大事なのです。」

4)、昭和四十八年十月、高橋信次師の講演要旨。

「これまでの政治、経済、教育その他の体質を変えないと日本はよくなる。正法を知った、足ることを知った人達が政治をしないといけない。いつも生産者が損をして、流通機構だけが儲かり、消費者はいつも高いものを買わされるという経済機構もいけない。銀行、保険会社は不労所得が多過ぎる。日本各都市の目抜きのはみな銀行、保険会社が立派な建物を建てている。正法の実践者が多くなったら、正法の実践者の中から政治家を出し、正法の実践者が流通機構を担当し、正法の実践者が教師になる。そして、正法の実践者が銀行、保険会社をやる。そのようにして日本を正法の国家にしてゆかないといけない。」

次に、園頭師の「ことば」を引用しよう。



< 経済と園頭広周先生の言魂 >



1)、日本はこれからは後進国を援助して、徳を与える国になることである。後進国を支配して儲けようと考えてはならない。後進国が立派になるためには、骨身を削ってその国のためになるという努力を続けてゆかなければならない。

2)、使用者の繁栄は結局労働者の繁栄を伴うものでなければならない。労使協力して出来るだけ儲けを大きくして、分配を多くするためには、これまでの古い考え方を捨てて、正確な科学的知識を持たなければいけない。それには経営者も労働者もともに根本的な精神革命が必要である。

3)、国際貿易で、大きな黒字を抱えた日本は、世界中から儲け過ぎだと袋叩きの目にあつた。日本が国際経済社会で平和に生きのびる道は、現地で生産販売を行い、現地人を雇って現地に利益をもたらすような形をとるほかはない。

4)、現在起っている経済摩擦も、要は文化と文化の衝突である。その根源は、日本は性善説によって立ち、白色人種は性悪説によって立っていることにある。日本人の性善説の根源は、古事記や日本書紀に示されているように、人間はみな天孫降臨、神の直系であるというのに比べて、白色人種はアダムとイヴの原罪説に立っているところにある。西洋では商取引は全て契約によってなされ、日本も現代はそうだったが、日本の良き時代のそれは「約束を破りしときは、万座の中でお笑い下され度く候」一言であった。契約とは相対する二人以上の当事者の合意によって成立する法律行為をいう。性善説と性悪説の一例である。

5)、日本人の仕事のさせ方は、信頼して任せれば決して信頼を裏切らないものであるということによって人を信頼する。それに反して西洋ではアメとムチで、よく働いたら、たくさん褒美をやるぞと、その代りやらなかったら制裁するぞというので人を信頼しないのである。海外に進出した日本企業が成功しているのは、日本企業で働く外国人労働者がはじめて自分が信頼されて、のびのびと自由な気持ちで働けるようになったからである。

6)、この地球を仏国土・ユートピアにするためには、資本主義も共産主義もどちらも唯物論でいけないのであると高橋先生が言われたことに注目しないといけないのです。現在は世界的な大不況で、今までの不況は脱出の望みがあり、また脱出してきたが、まだまだ不況になると思われるこの不況は脱出の望みがない、というのが、日本のみならず世界全体の経済評論家の一致した説であります。ではどうしたら脱出できるのか、と言いますと、既に現在は資本主義国家も共産主義国家も全部行きづまっているのですから、そのどちらでもない新しい考え方が生まれてこなければならぬのです。敢えて名づけるならば、「正法奉仕経済主義」である。経済は肉体を維持し、霊の向上を図るための文化文明を維持すれば足りるのであるから、**世界各国は資源を有無相通じ、人間資源の交流と物的資源の流通を調和させれば足りる**のである。

<人間にとって「働く」とは>

お釈迦様も高橋師も「八正道」を説かれた。八正道とは、

正見(しょうけん) - 正しく見る。

正思(しょうし) - 正しく思う。

正語(しょうご) - 正しく語る。

正業(しょうぎょう) - 正しく仕事をする。

正命(しょうみょう) - 正しく生活する。

正進(しょうじん) - 正しく道に精進する。

正念(しょうねん) - 正しく念ずる。正しい目的意識を持つ。

正定(しょうじょう) - 正しく反省禅定する。

を、言う。この「八つの人間の歩くべき正しい道」の中の一つが、正しく働く「正業」である。人は働いて生活の糧を得る。金を貰って衣食住の必要なものを補給する。これまで日本人は働き過ぎだと言われ、世界中から袋だたきにあった。それは日本人とアメリカをはじめとする外国人との労働感の相違で、日本人は、人間は神の世界から天孫降臨した神の子であると知っていた。神が天地を創造され、小さな部分は神の子である人間が手助けして神様の仕事を完成させる(天業恢宏)のが人間の目的と考え、仕事をすることは、神様への手助けであり、喜びであり、楽しみだと考えてきたのである。だから、会社が認めた正当な有給休暇であっても、何となく落ち着かず、仕事が気になってソワソワする人も多く、家庭よりも仕事の方が大事だと考える人も結構多いのである。ともあれ、日本人は「神様の手助けをしているのだから、仕事が苦しみである筈がない、喜んで仕事をする」という考えになる。ところが、西洋の人々は「アダムとイブ」の旧約聖書の物語にみるように、エデンの園では働くこともなく、何不自由なく暮らせる天国の生活があって、そこへ蛇があらわれ、アダムとイブに禁断の実を食べるように勧め、禁をやぶったアダムとイブを見つけれられた神様は、その罰として「男は働いて食わなければなら

ない。女は苦しみて子を生まん」といって苦しみを与えられたという故事にちなんで、西洋人は仕事は神の罰だと考える聖書が示す労働感と、仕事は神様の手伝いだとする日本人の神話が示す労働感の違いなのである。日米経済摩擦はこの二つの労働感の衝突であり、アメリカが日本は働きすぎだといっているのは強制的に休暇をとらせるようにしむけ、日本は完全週休二日制が金融機関から平成二年より始められた。これからは、すべての職域に広げられ、働き好きの日本人から仕事をとりあげるといふわけである。

それほど、一生懸命に働くことは悪いことか

- - 日本の週休二日制を考える - -

日本は先進国の中で「国民の休日」が一番多いという。なのに日本人は働き過ぎだと言って、土曜日も休もうとしている。平成十一年の暦をくってみると、土、日、祭日をトータルして、正月、盆休みを三日づつとれば、総計が百二十五日である。これはまさに一年、三百六十五日の三分の一に相当し、一年の三分の一は寝て暮らすと言うわけだ。かつてのバブル期のように、貿易黒字超一等国と言われ、金余り現象に翻弄され、浮かれるほどに景気のいい時は、一年の三分の一を寝て暮らそうと、それはそれで良いかもしれない。そして、月給が同じで休みが多くなれば、誰だって反対する人はいない。だから週休二日制も、そのうちに定着するだろうが、果して、これからの日本にとってプラスになるのだろうか。勿論、働きすぎて体をこわすことは正しいことではないが、現代の風潮からすると、ややもすると忘れがちなのは、海に囲まれた猫の額ほどの国土に、資源は皆無、おまけに食糧とて自給できないということをもう一度再確認して欲しいのである。この小っぼけな国、日本が、今日の日本になったのは、先述した「正法」を守るためという理論とともに、骨身を惜しまず働いて来た先人の努力に負う所も大きく、善い原因は善い結果を生んできたことも認める。でも、資源もない日本が、資源の豊かな国に習って土曜日も完全に休み、資源の豊かな国の労働者よりも多く仕事を休んでいたら、これからの日本はどうなり、我々の子供達の時代はどうなるのだろうか。その時になって気が付いても遅いのである。「転ばぬ先の杖」と言うではないか。この先、日本の繁栄はどうなるのか分からないが、資源は何一つないということ、これは不変である。この、どうにもならないものに焦点を合わせて物事の判断をしないと大変になりますよと言うのである。

正しく働くところには繁栄が約束される、これは真理。「正業」は神理である。正しく儲けたら、正しく使うこと、これは神の子、人間の道である。個人にあつては、隣人に愛と布施を。国や民族にあつては、困れる国や民族に、愛と布施を。これは正に「善因善果」となる根源である。だから言いたい、次のように。

「正しく、うんと儲けなさい。そしてその儲けたものの多くを、困った人達に分け与えなさい。そして、その範を世界に示しなさい。それは「愛」である。それは神の子・人間の「智慧」である。それ以外に道はありえない。次に、園頭師の論文を紹介したい。

週休二日制から「足ることを知った社会」へ

「いくら趣味に凝ってみたってそれだけで人間は満足できるものではない。週休二日制が完全実施され、機械化・オートメ化がますます進んで、一日四時間働いたらよいという時代が来ないとも限らない。働く時間が少なくなって休んでいる時間が多くなったら、その休みを何に使うか、週休二日制ですら、もはやレジャーブームもすぎてテレビの前でゴロ寝をしているというのにである。二日ゴロ寝した身体は急には元に戻らない。だから週休二日のあとの出勤日は事故が多いという統計が出ている。働くことに意識を持ってといっても、四時間だけでアツという間に仕事は終るのである。あとは何をするか。そうなってくると各企業が余暇指導まで考えなければならなくなる。企業の中の問題だけでなく、一大社会問題となってくる。今より以上あり余る余暇を退屈せず過ぎさせるものは、人間の心を真底から満足させる真の人間性教育、真の宗教以外ないのではないか。

限られた地球の資源を使って、省エネルギー時代に入ると働き過ぎは罪悪だということになる。東洋の勤勉の道

徳観は是正を求められてくる。そうなってくると釈尊が説かれた「足ることを知る」という感謝報恩の生活が新しく考え直さなければならないということになる。時代は必然的に真の宗教を求めざるを得なくなっている。生きることに喜びを与える真の宗教を人々は求めつつあるのではないか。では、企業内で人間教育をするとして、現在の日本の宗教のどの宗教を持ってきたらいいのかを考えた場合、既存のどの宗教も持ってくるわけにはゆかない。どれか一つの宗教をとということになれば、その宗教に反対する他の宗教の信者がいるからである。だから、ここで求められるものは、これまでどんな宗教を信じていてもよい。その人達も認めざるを得ないところの普遍的な宗教でなければならないのである。「普遍性を持った宗教の出現」「宗教という言葉もいらない、真の人間の生きる道を示すもの」そういうものを人々は必ず求めるようになってゆくと私は思うのである。」

< 正業、正しく仕事をするとは >

地上界での私達の目的は魂を磨くことと、ユートピアをつくることである。「正しく仕事をする」とはこの目的にかなったものでなければならない。感謝と奉仕、そして、より大きく、豊かな心と魂をつくる場が仕事のはずである。こう考えると正業の在り方は、まず心を豊かにすることであり、仕事は己の魂の経験の範囲を広げてゆくことになる。「正しく仕事をする」ことの**第一の目的は**、職業を通して、己の魂の経験をより豊かにし、広い心を養うことである。**第二の目的は**、職業を通して、人々との調和をはかることである。そして、自分を含め、人々の生活を守ってゆくことにある。また職業に就くということは、自分を生かすばかりか、他の人々との協同生活に欠かせない役割なのである。職業とはこのように、自分を生かし、他をも生かす大事な場であるのである。**第三の目的は**、奉仕である。感謝と報恩は奉仕という実践の上に結実する。この現代における物質文明の中での最大の魂の修業は、物質、経済の場である。「心」と「肉体」と「経済」の調和である。私達は、金は無いより有った方が良いとする心の働き。このような物質や経済の奴隷になってはならないのである。

己自身の心を持った生活こそ、神理に適った生活といい得るのだが、物質文明に押し流されてしまう人が多いということも、「この現象界においての修業は、物質経済の場である」という理由の一つなのである。それでは、仕事、職業について、高橋師の記述の中からから要約しよう。



正しい仕事とは

常に、大自然の法則に適った仕事を言う。正しい仕事は、智情意を伴って社会人類を幸福に導き、より高い次元へ己の魂を磨き、調和の環境を築き上げて行くものである。正しい仕事はそのまま人生の修行であり、その場はそのまま魂の修行場である。



正しい企業と経営者とは

労使の心と心の調和がとれ、互いに幸福のための団結が計られ、自己保存、自我我欲を捨てた事業体は、神意に適った団体である。正しい仕事への情熱、人々の心の調和度に比例した環境は、神仏の光によって保護される。他の事業場でできない立派な技術を生み出した環境、技術がなくとも営業活動が勤勉で、正しい仕事に専念

し、良い調和のとれた得意先を持っている環境、研究努力の結果、常に社会人類のために貢献する新製品の開発によって得た専売特許の活用は不退転である。人々の心に安らぎと調和、そうした娯楽を与える人々の仕事は、人々の心とこの心との調和の中により高い次元の技術を生む。このような人々の正しい生活もまた、不退転である。心を失った技術は自我そのものと化す。心を失った科学は闘争と破壊の社会を作ってしまう。心を失った指導者は一時は栄えても、いつかはその指導力を失い、犯した罪をおのれで償わなくてはならないようになる。闘争と暴力によって造り上げたすべての結果は、闘争と暴力によってまた覆される。心をモットーとし、勤勉と努力によって造り出された社会は調和と安らぎの環境となり、より高い文明を築き、私達の魂はより高い次元に進化されて行く。万生万物、皆相互の関係にあって、独り人間のみが特別存在であると認識するのは誤りであり、神仏の体である万物万象を正しい心で活用してこそ、正しい仕事ができるのである。

指導者が自分自身に足りることを悟り、利益は働く人々に還元し、常に心の対話によってより高い業績を挙げ、余った利潤の一部は社会福祉の方向へも還元する。そうしたことによって、経営者達の菩薩心は磨かれて行くのである。そして、集団の指導者でもある事業体の責任者（経営者）は、自我我欲を捨て、従業員を幸福にするための目的を根底にして、労使協調の心を果たすことが必要であり、事業はその心によって発展し、不朽の事業にもなり得るのである。新製品の開発にしても、心を悟った行ないの中から、その研究努力に対し、より以上の靈感が与えられるというものである。



正しい労働者とは

現代社会における労使の闘争は、不自然である。資本家も労働者も、物質的、経済的な考えのみで人間として、神の子としての尊厳を失っている。資本家は経済観念の上に、より次元の高い心を悟り、自己利益の追求の仕事に終始しないことである。利益は労働力によって得られるのであるから、やはり報恩の心はその労働力に対して感謝の心を示さなくてはならない。感謝の心の表現は、労働者の生活の安定を保証することである。また労働力の提供者（労働者）は、正しい仕事の提供者（経営者）に対して報恩感謝の印として、仕事に専念し、己に足りることを知った生活の基盤を築かなくてはならない。労使協調の精神は、闘争を根底にした協調であってはならないのである。働いた金を当然のごとくもぎとろうとする心、行為はすでに正しい仕事とはいえない。賃上げ交渉にしても、本来相互理解を根本とすべきである。現代社会の歪みは、資本家も労働提供者もともに正すべきであり、ともに心という内面をより正しい神理によって開発することが第一歩であり、事業の実体について常に労使の心を調和させ、より向上するための努力の結果には、神仏の光がもたらされ、正しい仕事ができるであろう。

以上の記述は、高橋師の「心の発見」「心の指針」、講演テープより要約した。次の記述は園頭師である。



金持ちになることは悪いことか

「豊かに富むことを罪悪のように考える人がある（清貧礼賛）が、それは間違いである。その財を自分の欲望や享楽にのみ浪費することは間違いであるが、多くを貧しき困れる人に手を差し伸べ、愛の心で人を喜ばせ助けるために使うことができるならば、正しく働いて得た財は、いくらたくさん持っても良いのである。釈迦は富貴になることは否定されなかった。「富の蓄積を図るためには浪費するな」と言われた。キリストが「金持ちは救われない」といわれたのは、金に執着している人に対して言われたのであった。そして、金というものは、持っていてよい、持たないでもよい、どちらでもよいのである。足りることを知って心を安らかにして、それで金が余れば人のために使えばよいのである。なければないで金にとらわれずに、その代りに自分の持っているもの、即ち「心」で相手を愛し救ってゆけばよいのである。どちらにもとらわれない心になってこそ執着がなくなったといえるのである」『「心行」の解説（下）』

経営と正法

高橋信次師は、昭和四十年代後半に「人間（人道との説も）科学研究所所長」という肩書きで経営者を対象に講演を持っていた。これは経営と「正法」を一致させようとの考えからだった。高橋師の後継者と自他共に認める元国際正法協会会長・園頭広周師は、昭和四十年「生長の家」本部講師時代に宗教家の中では唯一人、日本経営士会のコンサルタントの資格を得ている。師は「経営と宗教」を一致させなければならないとの理由からであったが、時期尚早であったと言う。

< マグレガーのY理論は「正法」である >


昭和三十年代の終り頃、アメリカのマグレガーが「経営理念」として「Y理論」を発表した。人間は生まれながらにして、楽をして金を儲けたいものだから、悪い製品をつくっても仕方ない、だから、人間はアメとムチで働かせなければならないとする人間観の「性悪説」をマグレガーのX理論とすると、人間はみな良い仕事をしたいと考えている。信用して仕事を任せれば、人間は監督されずともよい仕事をするものだとする「性善説」による人間観、労働観を「Y理論」と言った。マグレガーが発表した当時は誰も理解するには至らなかった。ところが、昭和五十八年頃から「Y理論」が認識されはじめ、以来、Y理論による人事管理や、心による健康管理が必要だというので、反省と瞑想の部屋をつくって実践する会社も出ているが、こうして歴史は、物質文明から急速に精神文明へと移り変わろうとしている。



働く女性（職業婦人）の生き方を考える


現代は男女平等と言われる。男女は「人間」として平等だが、男性と女性は平等ではない。腕力の差、妊娠と出産、美的容貌等の肉体的機能のどれ一つとっても平等ではない。両性の間には取り消すことのできない相違がある。この世とあの世を通して半分は女性が支えている。これまではほとんどが男性の職場だった。最近は働く女性が増え、女性をぬきにして仕事は考えられないという状態になっているので、その為に女性が働きやすいような勤務スケジュールに変える職場も、その内に出てくるかもしれない。能力ある女性が、色々な分野の職場に進出するのは一向にかまわないわけだが、天上界で、今世は結婚もせず独身で一生を終りますと、自から決めてこの世に生まれている女性も中にはいる。そのような人が、好きな職業に就いて一生を終えようとそれは構わないが、普通の一般の女性は天上界で「あなたの許で、子供として人生の勉強をさせて下さい」「私の許で、しっかり魂の勉強をして下さい。私もしっかり協力させて貰います」と、子供になる人とお互いに約束をして、この世に生まれた人がほとんどである。

そこで問題になってくるのが仕事と育児をどう両立させるかということだが、製品は何度失敗しても作り直しがきくが、子供の教育には失敗は絶対に許されず、それこそ取り返しがつかない。「男は直接、社会に働きかけるが、女性は子供を立派に育てることによって、その子供を通して社会に働きかける」とは高橋師の言葉だが、男には男の使命と役割が、女には女の使命と役割が厳然としてある。子供を生み育てることは、女性にのみ出来る役割で、男性がそれをいくら望んでもかなえられるものではないが、だから次のように言いたいのである。「やり直しのきく仕事とやり直しのきかない育児と、どちらを大事にしなければいけないのですか？」と。




働く女性と未熟な女性

成熟した人間、成熟した女性は心が安らかだから、怒りや不満を外にぶつけることはない。未熟な人間、特に未熟な女性は、自からを反省することなく、何かあると自分の怒りや不満を夫や子供にぶつける。成熟した女性は家庭の調和を図り、夫の収入の範囲内でやりくりして、家庭の平和を保とうとするが、未熟な女性は、無駄遣いをして夫の給料では足りなくなると、自分のせいだとは反省せずに、夫の稼ぎが足りないからだを夫を攻撃し、足りない分は私が働くわと、家庭の調和を破壊し、子育てを放棄してまで金を稼ごうとする。未熟な女性を妻にした夫は災難というべきだが、未熟な女性を妻とした夫は、「類は類をもって集まる」という同類だからそれはそれでいいのだが、子供はまったくの災難である。



子供に手が離れてからの共働き

もうこれから、子供に手が離れたから働こうという人は多いと思う。子供が幼少の頃には子供に手をとられ、主人に心を入れたらどうか。安らぎの「安」は家の中に女と書く。家の中に妻がいて守り、男は安心して外で働き、家庭は調和し平和である。ところが、もう子供に手がかからなくなったからという理由で、外に出て働こうという人も多い。ともあれ、もう子供に手がかからなくなったから、それまでに淋しい思いをさせた主人の為に、これからの残された時間、主人を大事にしようという人もいる。



これからの展望

園頭師は次のように述べている。

「そこで最近、年寄りと一緒に生活した方がよいというので、年寄りと同居する若い人達が増えてきた。子供は年寄りに任せて仕事に行けば安心である。年寄りは我が子を育て上げてやれやれと思ったら、今度は孫を育てるはめになる。孫を親に預けて働きに出る女性は、子育ての苦労は全く知らないわけである。さて、今の若い人達が年を取って、わが子が結婚するようになり、その子供達が働きに出て、その子供を親に預けたとしたら、子育ての経験のない祖父母が孫を育てなければならないことになる。「年寄り子は三文安」、実の親が育てた子供よりも、じいちゃん、ばあちゃんが育てた子供はどれも健全でない劣った子供に育つといわれている。そんな「三文安」の子供ばかりになれば、民族全体、国家全体の活力が失われてくるから、その民族、その国家は衰退することになる。今の若い人達は将来そのようになることは全く考えていないようである。どんなに下手な子育てのようであっても、実の親に勝るものはないのである。わが子の存在を無視して、金だけを目当てで働いている人達が、やがて齢を取った時に、どんな社会がつくられるであろうか。人生は金が目的ではない。正しく仕事をするとは、正しく魂を磨くことにあるのであるから、働く女性は心の重点を仕事におかずに、育児と家庭に重点をおいて、夫と子供を大事にし、その後で仕事を考えるということをしなさいといけない。仕事を先にして、夫と子供のことを後にすると、その結果は自分が受けなければならないということになるのです。」と。

『「心行」の解説(下)』(下)正法出版社)



転職を考える人へ

世の中には、何度も何度も職をかえる人もいる。働き始めたかと思うとすぐに辞め、辞めては勤める人がいる。こちらの都合で辞める人もいれば、中には好条件で引き抜かれる人もいる。人に認められ請われて転職する人はそれで良いのだが、不平、愚痴、不満の心で定着しない人がいる。また、「あれも、これもけしからん」と定職にもつかずブラブラしている人もいる。もし、今の仕事が自分の「分」ではないと思う人は、現在の仕事を手抜きすることなく、一生懸命やりながら祈ることである。「私くしの分に合った、わたくしにふさわしい仕事をお与え下さい」という祈りをするのである。すると運命は静かに展開してゆく。今の仕事を怠けていては運命はよくなるないのである。そして、分に合った使命を感じずる仕事に行き当たったとしても、前に述べたように、その運命には上限と下限の幅がある。一生懸命に努力しても、その運命の上限を越えることはできない。限界があり、その限界を知ることが心の安らぎというのである。

また、園頭広周師は次のように言う。

「終戦の廃墟の中から立ち上がった日本は、一応、食べられるようになり、着られるようになり、ひとまず住めるようになりました。そうなったところで、まず日本の電機産業は、「いかにして女をラクにさせるか」ということで発展したのです。電気炊飯器に始まって、電気洗濯機、電気掃除機、電気冷蔵庫、トースター、電子レンジ、ジュースなどです。これらの製品によって、女の家事労働はうんと軽減されて、女はそれだけ暇な時間ができたわけです。ところが、女達は、その暇な時間をどのように有効に使うかという教育と訓練がなされていなかったのです。その余った時間を、魂を向上するために使わないで、欲望を満足させるために使うことになってしまいました。女達は家庭を留守にして金儲けに走り、ウーマン・リブ運動の影響もあって、家庭の崩壊が始まったのです。離婚、家庭内暴力、非行、青少年の増加などです。家電会社は女を甘やかせることで金儲けして、時間をどのように有効に使うかについては放ったらかしにしました。私がナショナルの松下幸之助さんらに文句をいいたいの、便利な家電製品を作る前に、なぜ女に時間の使い方を指導しなかったのか、ということです。（もっとも実際はできないことではあったが）」、と。

長々と松下幸之助氏の項を上げたが、昨今の経済不況をどう考えたら良いかと言う意味を考慮に入れてジックリと読んで欲しかったからである。

Home



「神武天皇は実在の人物であった」

神武天皇は、伝説上の日本最初の天皇ということになっている。「古事記」「日本書紀」に名の出てくる人であるが、実在の人物であったと高橋信次師は言い残した。釈迦は涅槃に入るその前から、あと二五〇〇年のち

ジャブドーヴァーのケントマティ（東の国日本）に生まれて行く（転生輪廻）ことを予言された。その頃、日本はまだ国としての体制は出来ていなかった。その為には、二五〇〇年経って、この日本という国を正法を伝えるにふさわしい国にしておく為の計画が、実在界でなされることになった。蒙昧な日本を一つの国としてまとめて建国するためには、やはり、力のある徳のある方を日本に生まれさせなければならないということで、インドでババリーといわれる方、日本では阿しゅく如来といわれるかた、この方を日本に生まれさせるということになったのである。この方が即ち神武天皇である。「武」という字は「戈を止める」つまり相手が兵器を使ってこちらに危害を加えようとする時、素手では対抗できない。相手がこちらへ危害を加えようとするのを止めさせる防御の為のものである。「武器」とは本来防御のための器具であり、相手を侵略したり攻撃するためのものではないのである。「神武天皇」という漢風諡号（かんぷうしごう）は、相手が神の心に反し、反抗し危害を加えようとするれば、神の心によって、言向（ことむ）け和（やわ）して、相手を神の心にしたがわせる天皇という意味になる。最近、神武天皇は実在していたと書いた本を見かけるようになってきた。近い将来、歴史学上でも認められるようになるに違いない。高橋信次師は、神武天皇は実在の人物と言い残したのである。



「ダーウィンの進化論はありえない」

- - ダーウィンという人 - -

高橋師は著書や講演の中で、何度も進化論を否定した。

イギリスの生物学者ダーウィン（一八〇九～一八八二）は一八五九年、今から百三十年ほど前に『種の起源』（『The Origin of Species』）という本を発表して生物の進化を説いた。そして、『人間の由来』（The Descent of Man）という本の中に、「人もまたサルから進化したかもしれないと想像する」と記述したのである。高橋師は著書、講演の中で、「人間はサルから進化したのではない」と何度も何度も修正した。

進化論が正しければ、進化の途中の人間がいてもおかしくないし、また、サルから進化したのであれば、動物園のオリの中のサルが、オリから出してくれと交渉するのがいてもおかしくない、と一笑した。人間は最初から人間であり、サルはいつまでもサルであり、サルは人間になることはない。人間は、ダーウィンが進化論を発表してからこれまでの百数十年の間、そのような誤った考えを持った。これと同じような考え方が、ローマ法王庁によって歪められた「天動説」の問題である。これは今では一人も信じる人はいない。ローマ法王庁が、この天動説を修正したのは、ほんの二十年前（昭和五十五年十月）だった。この、亡霊のように独り歩きをする過去の遺論に対して、人類を正しく導く役目を持った高橋師は、これもまた困った問題だと、進化論を否定し修正したが、全人類は謙虚に注目しなければならないことである。それでは、高橋師はどう言っているのか見てみたい。

（その１）

「人類は、今から三億六千五百年前に、ベーター星から、今でいうUFOに乗って移住してきました。そして、その頃は、皆神の子として丸く広い心を持ち、自由に実在界（あの世）と交信ができ、争いのない平和郷であったと、私の指導霊が説明する。人類は特殊な宇宙船で、自然に調和された地球という名のそれぞれの環境に適応した体質を持ってきたのである。茶色、黒色、白色の皮膚を持った人間達に、神は生活の場を与えたというわけだ。」（一九七六年の講演）

(その2)

もしも人間が猿の進化物とするなら、進化途上の類人猿がいても不思議ではありません。しかし類人猿はおりません。北京原人や南方諸島の古代人の頭蓋骨の大部分は人間と異なる類人猿です。猿です。また、もし進化論で片づけられるなら、現実に猿から人間にかわる過程の人間がいても、少しもおかしくないと思います。多くの学者は、文明文化の進化の過程をとらえて、人類にも進化の過程があると見ているようです。『心の発見』

(その3)

私の講演のあと、若い学生から進化論について質問を受けた。「お前が進化論を信じるのならば、昔からある動物園のチンパンジーやゴリラ達は、人間の言葉を語るようになり、飼い主と、檻から出すように交渉するだろう」と、私の指導霊は言ったのである。私は驚いてしまった。つまり、このことでもチンパンジーやゴリラは、永遠に人間に進化しないということを知るべきだろう。魂の進化はしても、永遠にチンパンジーでありゴリラだといえよう。人類の身体は、神の身体と同一だということの証明ともなろう。文明の進歩は、人間の心の進歩ではない。それは生活の知恵の進化であって、足ることを忘れれば、逆に心は退化してしまうだろうと指導霊は言うのである。たしかに、上野の動物園で何回も生まれてきたチンパンジーも、類人猿で人間に近い知恵を持っていると言われているが、日本語など喋れるはずもない。この質問した若い学生も、この指導霊の言葉に驚いたようだ。天孫降臨したという神話的な話をくつがえしてやろう。もっと科学的に人類の進化を説明してやろうと思っていた出鼻をくじかれたので、幾分がっかりしたようだ。電子工学を専攻し、ある会社に勤めながら神理を聞きに来ていたが、一九七一年九月頃、外国に二～三年いるという計画を、私がやめさせた人である。なぜなら、その国に大地震が起こり、帰国不可能になるだろうと、予言があったからだ。その予言は当たった。大地震によって、彼が行くことになっていた国は多くの犠牲者を出したのである。その国はイランであった。彼は出張をやめたので、この災難から逃れることができたのであった。『心の原点』

「進化論否定の証明」

< 成書にみる最古の人類 >

高校生の教科書・山川出版社・詳説『世界史』（一九八七年版）には、「最古の人類」について、次のように記述している。

「人類とは霊長類ヒト科の動物で、直立の姿勢で二足歩行をし、文化をもつ。現在のところ、最古の人類と認められるのは、東・南アフリカで発見されたアウストラロピテクス群の猿人で、その出現は洪積世の初頭（約二五〇万年前）にさかのぼる。洪積世の中期（約五〇万年前）になると、原人が出現する。ジャワ原人や北京原人もこの仲間、アジアからヨーロッパ・アフリカまでの広い範囲に分布する。」と。

これより、進化論否定の証例を挙げる。

(その1)

戦前、イギリスのピルトダウン村から発掘されたピルトダウン人は、類人猿と人間の合い子であると、当時の人類学者をアツといわせた。戦後、イギリスの学者がピルトダウン人の骨の分析を詳細にやると、それは今から五万年位前の人骨に、今も生きているゴリラの骨をくっつけたニセモノだということがわかり、ピルトダウン人という名は人類学の一頁から削られた。

(その2)

昭和六年に発見された「明石原人」といわれたものが、一九八二年慈恵医大で開催された日本人類学会において、現代人の骨であることが報告され、訂正された。

(その3)

昭和五十五年(一九八〇年)中国雲南省で、約一四〇〇万年前のラマピテックスのほぼ完全な頭蓋骨が発見されたと報じた。これこそは人類アジア起源説を裏付ける有力な証拠であると、日本の専門家の中に「ラマピテックスこそ人類の祖先に違いない」と言う人もいた。猿から人間に枝分かれした時の最初の人類の骨であるといわれたが、一九八二年(昭和五十七年)十一月、別府で開かれた人類学会において、中国の呉汝康博士が、それは人間の骨ではなくて、オランウータンの頭蓋骨であったと発表、訂正した。(その二年前の昭和五十五年十月には中国解剖学会で発表されている)

進化論を証明する人骨だと言われてきたものが、ダーウィンの没後百年記念の催しが行なわれているさ中に、それらはことごとくニセモノであったというのである。まさしく皮肉と言うべきか。

今西錦司博士の進化論批判

京都大学人文科学研究所長、今西錦司博士は『ダーウィン論』中公新書の中で次のように批判している。(中公新書四七九)

「一つのセオリーが、日進月歩の激しい自然科学界において、その発表後一世紀以上も安泰であるということ自身が、じつは奇怪で仕方ない気がする。それも駆けだしの若造がダーウィンの説を批判するのではなくて、すでに『生物の世界』以来一貫してダーウィンに批判的であった私が、原著を読んだうえで、ダーウィンの論理にしたがって、もう一度ダーウィンを批判しようというのである。この批判をあのにまで持ちこもうというのである。私はあのにでダーウィンにあった時、原著の何頁で、あなたはこう述べているではないか、といいうる証拠がためのために、どうしても原著を読まねばならなかったのかもしれない。」(十ページ)

また、次のように述べている。

「そしてかりに五千年さかのぼっても、あるいは一万年さかのぼっても、タイはやはりタイであったろうというのが、私の見解である。」と。

同じく今西博士は、

「進化論の原点をダーウィンに求めたことは失敗だった」「私は本書をダーウィンに読ませたい」とも書いている。

私達は、ダーウィンの進化論に対して批判している学者も多くいることを知らなければならない。この『ダー

ウィン論』は昭和五十二年九月の初版だが、その一年ほど前の昭和五十一年六月初版の『進化とは何か』・講談社学術文庫もあるが、「私の進化論の生いたち」の中で、氏は次のように書いている。

「突然変異も自然淘汰も否定した私の進化論は、もともと現在の正統派進化論とはかなの趣の異なったものであり、それなりに一応の形を整えるところまできたものの、まだ、決して完成の域に達したものとは思っていない。...中略...何分にも相手は一世紀にわたる伝統を持ち、世界に広く根をおろした。ダーウィン以来の進化論である。五〇年や一〇〇年ではまだ崩れ去らないかもしれない。しかし、こういう正統派進化論者からみたら、異質の進化論も、また成り立つのだということぐらいは、もう少し宣伝してもよいのではないか、どこかから意外な反響が出てこないともかぎらぬから...。」、とも書いている。

そして、園頭広周氏は、

「ダーウィンの進化論が否定される第一理由は、「環境に適応するように変化した肉体は遺伝しない」ということにある。例えば、高見山は相撲で鍛えて、相撲社会で生活して行けるように身体が大きくなった。だからといって高見山の子供が生まれたままで、なんら鍛えないでも父親の高見山と同じような力を持つことはないということであり、テニスの選手は利き手が大きく長くなるので、生まれる子供は普通に生まれてくるので、父親と同じように利き手と同じ手が大きく長く生まれてくることはない、ということである。だから、種の発生は突然変異であろうと、それは新しい種の発生で、種が徐々に変化して別個な種に変わるということは絶対はないということである。種の中間的存在はないということである。進化論では、例えば、海辺に生えた苔が、だんだん陸地に這い上って木になったと説明するのであるが、皆さんは、苔がだんだん進化して木になりつつある姿を海辺で見ることができられるであろうか。」、と。

そして、

「進化論の正しさを証明する人骨は全くない。北京原人の骨も行方不明であるから、果たして人骨であったかどうか疑問である。進化論を証明する人骨を探す努力や研究することは全くムダである」、と。

また、同じく、

「正しい信仰をしようと思う人はダーウィンの進化論は、間違いであることに気が付かねばならないのです。この世には猿から進化したという証拠は何もないのです。ただあるのは、ダーウィンが進化論を書いたというだけのものなのである。創価学会の池田大作氏も、立正佼成会の庭野日敬氏も進化論を認め、生長の家の故谷口雅春総裁は、『人間は最初から神仏の子として生まれ、猿から進化したのではないと言ったのである』、と記述している。

以上の記述によって驚かれたと思うが、真実、何をとっても進化の事実はないのだから、真実は真実として認めない訳にはいかないと思いませんか。

Home

「マルクスもまた光の天使であった」

高橋信次師は「カール・マルクスも又、光の天使として出て来たのです」と言い残した。

カール・ハインリヒ・マルクス（一八一八～一八八三年）

ドイツに生まれた。ボン大学、ベルリン大学に学び、哲学博士になる。その後、新聞記者を経てエンゲルスや多くの革命家と交わり「共産党宣言」をエンゲルスと共同執筆したが、政府の弾圧によりロンドンへ亡命し、労働運動のために活躍した。



マルクス

なぜ天上界はマルクス主義を発展させなければならなかったか

高橋信次

なぜ実在界、あの世において、マルクス主義を発展させねばならなかったかということを皆様にご説明しましょう。人類がこの地上界に出た当時は、皆平等な調和された社会だったのです。ところが、人類の文明の進化に従って、豪族という一つの種族は武將を産み、武將は何時の間にか自分自身の力を確立するために酷しい封建社会を作り、インドのごときは、きびしいカースト制度、日本に於ける土農工商の階級制度を作ってしまったのです。こうして一七九八年、オーギュスト・コントという人を実在界から出します。彼はナポレオンの全盛時代において、酷しい社会制度の中で九十五パーセントから成る底辺の階級が、常に犠牲になっているのを見て、果してこれで良いのだろうか、疑問を持ちます。そして初めてここで、社会実証哲学というものを発表します。この人は技術家です。電気工学を修業した方で、世の中の矛盾というものをつきとめます。更に続いて一八二〇年には、ハーバード・スペンサーという人をイギリスに出します。彼も又、社会有機体説というものを作り、社会の矛盾を突いてゆきます。

カール・マルクスも又、光の天使であった

こうして、カール・マルクスも又、光の天使として出て来たのです。僅か五パーセントの貴族や僧侶、あるいは権力者によって、九十五パーセントの人々が奴隷になっている。こういう社会を修正するために、実在界ではこういう手を打たなければならなかったのです。人々の、大衆というものの調和、人類は皆兄弟だ、という事を自覚させるためだったのです。だから、マルクスだって決して神はいけないとはいっておりません。後の人がそれを神格化して、いつのまにか闘争と破壊を武器とするようになっているけれども、権力や武力によって人間の心は支配出来ないという事です。現代社会における思想、即ち資本主義も社会主義も共産主義も心を完全に失ってしまい、物質と経済の奴隷への道を歩んでいるのです。

マルクスが活躍した当時は坂本龍馬が、西郷隆盛と桂小五郎（木戸孝允）に薩長同盟を結ばせた頃である。マルクスは亡命先のロンドンで「共産主義理論」を書いた。当時の英国の炭坑では、夫も妻も、そしてその子供達もみな穴に入って石炭を掘った。そうしなければ生活できないほど低賃金で働かされていた。織物工場の労働者の賃金も安かった。そのような状態を見ていたマルクスは、労働者の解放を願って共産理論を書いたのだった。光の天使マルクスは大衆の窮状を見過ごすことは出来なかったのである。

日本の女工哀史の背景はこうであった

園頭広周

明治、大正時代、日本の筑豊地方の炭坑でも女性が石炭を掘った。英国のランカシャーの女工達の賃金が安かったのと同じように、製絲女工の賃金は安くて「女工哀史」が生まれた。終戦後の人々は、一方的に資本家が労働者を搾取してきたと思っているが、資本家、経営者の側からいわせると、それが世界的な傾向であったのであって、決して悪意で搾取してきたのではなかったということに理解を示さなければならない。世界の貿易をやっているのはユダヤ商人が多い。初めは日本の絹を高く買ってくれたので、日本全国に製絲工場が出来た。農村は養蚕が盛んになって現金収入がふえた。ところがユダヤ商人は今度は高く買わなくなった。日本の絹を安く買い叩くようになった。そうなれば蚕の値段は下げなければならない。折角製絲工場をつくったのであるから、工場を維持してゆくにはそれだけの利益を挙げなければならない。切りつめるだけ経費を切りつめる。人件費、労賃を安くする。そういう中で生まれてきた「女工哀史」で、女工達だけが苦しんできたわけではない。資本家、経営者達も苦しんで、その揚げ句に製絲工場はばたばた倒れて行った。行きづまって心中、自殺する人達もあったのである。

以上のように、その時の時代的背景の中で、光の天使、マルクスを遣わし、マルクス主義を発展させなければならなかったのだと高橋師は言及した。そして、それが、現代では、闘争と破壊を武器とするように変わってしまい、困ったことになってしまった、と述べたのである。

次に、高橋師講演より、

「人間がこの地上界に神の命をうけて肉体を持ち、この地球そのものを調和させるということは、最も自由の中で、しかも、物質、経済の上に、われわれの心というものの存在がなければならないにも拘らず、あのマルクス主義は、心の存在を否定しているところに、大きな間違いを犯しているのです。しかし、心を否定して否定できるものではありません。現在のソビエトをごらん下さい。キリスト教信仰が復興しつつあるではありませんか。カール・マルクス、ヘーゲル、オーギュスト・コントにして も、彼等は社会主義生活こそ至上のものとしていたにも拘らず、オーギュスト・コントのごときは、晩年、人道学派というものをつくって、一つの宗教に帰依しているではありませんか。ハーバード・スペンサーは一八二〇年、実在界から命ぜられて、当時の権力と、一つの資本力に対抗するためにこの地上界に出されたのであります。しかし、こういう人達も最後は、心というものをどうすることもできなくて、やはり宗教に帰依して死んでいるのです。」

<オーギュスト・コント> 一七九八～一八五七年

フランスの哲学者、実証主義の祖。パリの理工科大学に在学、サン・シモンの秘書となったが、その後別れ、自己の実証哲学の最初の部分を自宅で講義したが、過労その他で精神的に異常を来たして中断、再開して実証哲学講義六巻」を次々に出版。その後、宗教的傾向を著しく示しはじめ、人類教を唱え自らその大祭司となった。

<ハーバード・スペンサー> 一八二〇～一九〇三年

イギリスの哲学者。十二年間鉄道技手として働き、その後五年間「エコノミスト・経済雑誌」の副編集人。著書

には「社会静学」「心理学原理」「総合哲学」体系を公表したが、二十年間の研鑽により「第一原理」「生物学原理」「心理学原理」「社会学原理」「倫理学原理」を著わした。そして社会有機体説をとり、国家干渉を押し自由放任政策を採りあげ、これは当時の新興ブルジョアジーのイデオロギーを代表するものと見られた。

これより、「資本主義と共産主義」について高橋師の「ことば」を聞いてみよう。

資本主義もマルクス主義も、思想の根本となっているものは、すべて物質的な経済です。どこに心があるでしょうか。大調和な根本であるべき人の道に、上部層と下部層の人々が闘うことによって文明が発達して行くという、マルクス主義が、調和の道といえるのでしょうか。思想的に相入れぬ両者、対立は当然のことでしょう。人生は、文明のためにあるのでしょうか。物質文明の奴隷になるために生まれてきたのでしょうか。物質文明は、人間の心を忘れ去った生活の知恵が優先した時、欲望を駆り立てる害毒にもひとしいものといえます。人間のための物質文明であって、物質文明のための人間ではないはず。消費を目的とする資本主義、団結によって階級闘争をくり返しているマルクス主義。しかしいずれにせよ、金力や武力や権力が、人間を支配することはできないといえましょう。正しい共産主義というものは、批判や総括のない、独裁者のない、心ある者達による大衆の平等と信頼の中で築かれて行く、ユートピアでなくてはならないといえます。相互の理解と信頼の心の調和のないところに、ユートピアなどは完成されません。心を失った思想は、自ずから自滅への道を辿ることでしょう。物質経済文明は、人間が生きるために、より良い社会生活が営めるために作り出されたもので、それが争いの種になるところに問題があるといえるのです。人間は誰でもが神の子であり、人類はみな神の子だということを忘れ、何のために生まれ、どう使命を果たさなければならないのかということ、肉体舟に乗って人生航路に船出した時に忘れ去ってしまったのです。

そして、生まれた環境も、実は自分で選んで出てきたものだということ、経済的に貧しい環境に出てしまうと心まで貧しくなったり、逆に恵まれて生まれると貧しい者などを冷たい眼で見ようになり、慈悲の心を失ってしまうのです。生まれた時は、私達は裸なのです。自分が恵まれていたら、気の毒な人々に愛の手を差し伸べて幸せをともに喜ぶ同志になる。これが、まことの報恩の行為ではないでしょうか。貧しく生まれたなら、一生懸命に働いて、自分の力で経済的に安定した環境を作れば良いのです。そして、足ることを知って、同じような貧しい人々に愛の手を差し伸べてやるのが大切でしょう。

人は、この世を去る時、すべての物を持って帰ることはできないのです。人間の作り出した経済や不動産は、すべて自分の物ではありません。いつかは、返さなくてはならないものなのです。自分のものは、自分の意識とその中心にある心の体験した一切の現象以外にないといえましょう。万生万物は、ひとつとして人間のものではなく、神からひととき預かっているにすぎないものなのです。その預かりものに執着を持って、苦しむことは愚か者のすることです。人生の目的は物質文明の中で、いかに豊かな丸い調和された心を完成するか、ということ。それが、人生の修行目的だ、ということ、を悟るべきでしょう。

思想も、片よりのない人類の心から調和された一人一人の幸福を得られる道、それこそがユートピアへの近道ということができましょう。片よりは、自己保存、自我我欲への道であり、いつの日か自分の愚かな想念と行為を反省させられる時がくるであろう、と私は思います。人類は自ら造り出した物質文明によって、より豊かな環境を造り出そうとした。ところが結果は、偉大な心の尊厳を忘れ去り、形式的宗教に心のよりどころを求めたため、生活の中に、習慣の中にそれが根を下ろしてしまった。それは、自力を忘れて、他力本願の自己陶醉に陥った結果といえ、それが人々の心を支配したからである。財産や経済力が幸福を得るためのもの、という人生観に変わってしまった時、人間は、自らの心の偉大さを置き忘れてしまったといえるのだ。そして、自ら、足ることを忘れ、欲望の海に押し流され、身も心も泥沼の中であえいでいるということである。それは、人類が、自ら造り出した「業」である。

この地球は、ムー大陸、アトランティス大陸の陥没など、幾度かの天変地異を体験してきた。人間は、肉体を持って生まれてしまうと、この世だけだと思い込み、自我我欲の一生を送ってしまう。天変地異、そうした人類に対する、その時代時代の人々への神の警告であったのである。人類が、この地球という場を修行場として選び、他の天体から移動してきた当時は、地球は非常に調和されたユートピアであった。人々の心は、神の子としての自覚に目覚め、実在界との連絡も自由にできたようだ。しかし、種族が増えるに従って、それぞれの種族保存の自我が芽生え、肉体的同族のグループは、共同体から分離して行き、やがて自らの生活の場を確保するための境界が造られて行ったようである。そして、種族の分裂によって、またこまかく分かれ、生活区域が確立するにつれて、対立もまた生じたのであり、部族の長がそれぞれの部族を支配するに至ったのである。しかし、原始共産体制は、自然から生命を守るため、互いの協力が必要であった。人間はそこでいろいろな生活手段を考え出

し、それに従って遊牧の民となり、農耕民族ができ、漁民ができるといったように、生活の場が広がって行った。だが、生活の場が広がるに従って、人間は互いに疎遠になって行き、人類は皆同胞だということを忘れて孤立して行ったのである。

部族が大世帯になる、すると豪族が生まれる。弱い部族は亡ぼされ、強い者は、侵略によって自らの領地拡大して行くのであった。同族間にも争いが生まれ、その闘争が武將を生み、やがて封建社会が造られ、きびしい階級制度を確立するといったことになる。武力による戦乱が続く。弱い者は支配され、武將は勢力を拡大して行く。戦闘力の優劣が勝敗につながり、武力の強い者が、やがて国家を統一して行く。この頃から、封建制度はさらにきびしい階級制度を造り、その支配力をゆるぎないものにして行くのである。

底辺の大衆はその武力や権力の犠牲となり、きびしい生活に甘んじるということになる。武力は、弱い者達の自由を奪い、行動の自由にも制限を加えるようになって行ったのだ。日本における一向一揆などを初めとする農民一揆などは、この弱い者達の団結による闘争であった。そのようにして権力者に抗しなくては、生きて行く道を閉ざされてしまうほどの悪政であったといえる。しかし、その間において、商人達は、武器や食糧や衣類などを武將達に売り、商売によって経済力をたくわえていた。ある時は、スパイになり、情報まで売って、敵味方の見境なく、商法を駆使して財を蓄積して行ったのであった。闘争に明け暮れている武將達は、商人のよいカモとなり、やがては経済力で、逆に商人に支配されるというはめになる。ここに、ようやく、資本主義の芽が生まれ出てくるのである。そして、経済力は大衆を支配して行くが、大衆はその中で、自由に目覚め、水を得た魚のように団結という組織を生んで行く。武力は、大衆を支配してきたが、大衆の行動を制限することはできても、その心を支配することはできなかった。そして、自らの不調和な、おごれる心によって自らを亡ぼしてしまったのである。彼らも、人の心をつかむ努力を怠ったのではない。誤った宗教を利用し、悪徳のその指導者と組んで、大衆をあざむき、心の束縛をはかったことはあったのだ。しかし、正しいものではない、でっち上げの宗教、他力本願宗教、人間の造り出した偶像では、所詮、人の心を救うことはできなかった。

カール・マルクスのように、宗教は阿片である、ということに大衆は気がついてくるのである。正しい神理に適ったものであるならば、人々の病める心を救うことはできるだろうが、人間の知恵によってでっち上げられた宗教で人を救うことはできない。また、そんな宗教に騙されるということは、私達の意識まで腐らせてしまうことである。権力者や貴族が、悪徳宗教家達と組んで、大衆を犠牲にするような宗教は、阿片より恐ろしいものだろう。しかし、社会主義経済も、物質経済が基本であり、彼らも武將に代わって武力で支配するようになった。自ら、団結といいながら、階級闘争の中で、自己の立場を守るためには、他人を陥れることもする。思想の統一をはかるためには、きびしい弾圧をくり広げ、やがて、彼等自身の内部にも不満が生まれてくるのである。彼等は他を信じることができないため、心の安らぎを失い、いつ権力の座から引き下ろされるか解らないきびしい環境に生きている。今日の友は、明日は人民の裏切り者の烙印を押されて失脚してしまう。人民という名を騙って行なった独裁者の主義主張は、やがて自らの不調和な行為に比例して、反作用が帰ってくるのだ。自らの正しい生活行為の中から、人民の平和な生活を考え、身を犠牲にしても大衆を救おうとする、心に生きる指導者こそ、未来の神の子といえるだろう。

勝てば官軍、負ければ賊軍ということわざがあるが、その争いそのものが、万物の霊長のなすべき道ではない。それは万物の霊長に進化する過程の動物の行為である、と自覚せねばならないだろう。人民大衆に団結を呼びかけ、権力者や資本家達とともに、闘争をあおっている指導者は、それだけで失格である。そして、その心の中に権力欲や自己保存の心が芽生えたとしたなら、それはすでに大衆を偽っている者達なのである。「正しい」心を持っている指導者であるなら、闘争のむなしさを悟っているだろう。指導者は、人民大衆を偽ってはならない。争いは、自らにはね返ってくるものだからだ。作用、反作用の法則を知っているならば、それは、自らの心に不安となり苦しみを造り出すということだ。正しい考えであるならば、人は、皆ついてくるであろう。闘争と破壊によって犠牲になる者は、人民大衆ではないだろうか。階級闘争によって、文明は発達して行くのだと教えている思想家達は、公害という不調和な毒物を造り出している共犯者であるだろう。働ける環境に感謝する心こそ、大切なのではなからうか。」

次いで園頭師の「ことば」を聞いてみる。

1)、「共産革命には「血の粛清」という言葉はつきものである。日本には、一国の政治体系を変えるのに、勝海舟と西郷隆盛が行った無血革命の世界に誇る事実があるのである。日本人であるならば、先輩の輝かしい業

續に学んで、血の粛清をやったソ連や中共を祖国と叫ぶことである。中共は華国鋒体制になって毛沢東や四人組に対する批判が強くなり、変貌しつつある。そして、ソ連はご存知の通りである。」

2)、「日本は第二次大戦以前のことを反省し、アセアン諸国に対しては無償供与という形で善業を積みつつある。だからもし、アメリカを筆頭とする白人諸国家が、これから日本の発展を邪魔しようとするならば、逆にそのことが日本の国家としての運命はプラスになってゆくのである。」

3)、宇宙には宇宙の中心があり、太陽系には太陽という中心があって、それぞれに運行しているように、地球には地球の中心がなければならない。人間の肉体は、脳という中心があって、その脳によって眼も耳も鼻も口も、心臓も肺臓も肝臓も、というようにそれぞれに段階があり組織があって健康が維持されている。神がつくられた組織にはすべて段階がある。段階があるのは平等でないということである。自然がそうであるように、人間はみな神の生命を生きているという点では平等であるが、その平等の生命の発現展開は不平等という相をとっているのが真実である。人間には人格の高下がある。お釈迦さまやキリストとわれわれでは、同じ人間であっても段階が違う。差別をなくしようという運動は、ある面では正しいがある面では正しくない。社会、共産主義が失敗に終わっているのは悪平等だからである。しかし、すべては平等だといいいながら、首相がいて、書記長がいて、それぞれ段階をつくって組織があるのであるから、思想としていっていることと、実際やっていることは違っているではないか。

突然だが、アガシャという霊が、これについて予告しているものがある。次いで、これに触れる。

「アガシャの予言とは何か」

」・クレンショー著・『天と地を結ぶ電話』・日本教文社がある。初版は昭和三十年で、再び昭和四十六年に初版として再版されたが、翻訳が難解なので、園頭師が『アガシャの霊界通信(上下)』正法出版社初版・平成四年として出版している。これは、リチャード・ゼナー氏を通して霊示したアガシャといわれる指導霊の霊言を本にしたものである。

アガシャについては、高橋師が園頭師に「あなたはロスアンゼルスのアガシャ教会のことを知っていますね。あのリチャード・ゼナーを指導したアガシャの指導霊というのは我々の仲間ですよ」と言ったが、高橋師と同じグループだということを、念頭において欲しい。

＜一九四八年(昭和二十三年)四月二日にアガシャは言った

「一つの黒い波(暗い想念)がロシアの周辺にまき上って来ている。若しそれが続くなれば、全世界の人々にとっての非常に困難な問題が起って来るであろう。そして、多くの勇気を失い幻滅を感じた人々が、「大きな努力も払わず、全てのものが自分のものとなると信ずる」ために、共産主義はひろまるであろう、と。だが共産主義の下では大したもの得られず、正しき生活に欠くことの出来ない表現の自由もなく、ただ、指導者の奴隷となるだけのことだと分かったら、その時、「共産主義は自己崩壊するであろう。反乱が起り戦争が起こるであろう。そして、長い年月共産主義は多くの人々を支配するが、結局それは死滅してしまうであろう。」と。

アガシャは、共産主義は自己崩壊し、死滅してしまうだろうと、今から五十年も前の昭和二十三年のアガシャ教会での交霊会で、霊媒となったりチャード・ゼナーに霊示を送ったというわけだ。この霊示を証明するように、まさしくソ連は崩壊してしまった。こうして、社会・共産主義の権化といわれた光の天使・マルクスは、とうとう経済の考察に行きづまり、モスクワに神学校を創ったことも付記して、この項を終わりたい。

Home



「アポロ宇宙船」のアーウィンという人



ジム・アーウィン（『宇宙からの帰還』より転載）



一九七二年講演テープより筆録（高橋信次）

「今から二年前、アポロ15号という宇宙船が月に行く時、東京で色々とその当時の模様を放映しました。アポロの衛星には、ガブリエルというイエス・キリストのグループから出ています。彼等に尾行していきます。月の世界へ行っても、また帰る時にもイエス様が「今から最も危険な領域に入るから私は行きます」と言って、私のそばからサーッと消えてしまいました。それから五分後にテレビでアポロ衛星の中から「大きな金色の火の玉がついてくる」ということをテレビで放送しました。ところが、十月十五日の日本経済新聞を見られた方はわかるでしょう。アポロのその時の飛行士は月の世界に六十七時間いる間、「神様とともにいた」ということを書き

ております。と、同時にモーニングショーで通産大臣と話をしておりました。「神はある。私は神とともにあったのです。神は私のそばに姿を見せ、ともにおりました」ということを言っておりました。さらに、またあの月上車が故障をした時、「これは大変なことになった、このままでは帰ることは出来ない」と思った時に神の声で「そのボタンと、そのネジをしめろ」と聞いたそうです。これはリーダーズ・ダイジェストに書いてあります。このように我々の言ったことがアポロを通して、あの宇宙飛行士がアメリカで、そして、日本に来て発表しているではありませんか。」

日経新聞、一九七二年（昭和四十七年）十月十五日の記事より引用する。

「月の世界で神を見た」と先月はじめ栄光のアポロ飛行士の職をあっさり投げ捨てて牧師に転向したジェームス・B・アーウィン前空軍大佐（四二）が十四日午後、家族とともに羽田に着いた。日本、韓国、台湾など東南アジア一カ月の伝道の最初の地として訪日したのだが、十六日には田中首相を非公式訪問し「月面で受けた神の啓示」をじっくり説きたいという。昨年七月、月着陸船「ファルコン」を操縦、荒涼とした月面に降り立った時、神が突如アーウィンさんの目の前に現われた。「神は一言もしゃべらなかつたが、六十六時間五十四分の月面滞在中ずっと私のかたわらに立ち続けた。そして、ぼうばくたる宇宙を飛び越え、青い地球の大気圏に入った際、自分の前にあったのは宇宙のオアシスとは似ても似つかぬ「物欲と権勢欲」にみちた汚れた地球だった」と語る。「この地球でこれから生きながらえらと思った時、深い失望と人知れぬさびしさに襲われた」とも。アーウィンさんは妻メアリーさん（三四）の快諾を得て九月一日、アポロ飛行士と決別、「ハイ・フライト」というバプテスト派の流れをくむ新宗派を結成し、この世の汚れた人の心の改修という月飛行よりむずかしい旅に出発した。・・・」

一九七六年（昭和五十一年）講演テープより

高橋信次

「そして又、私達は他の天体とも交渉を持つようになってゆくのです。漫画でもSFでもありません。これは真実です。皆さん自身もそのように、先づその為には自己を確立しなければいけません。ソビエトが人工衛星ソユーズ何号かを飛ばしても、ちっとも成功していないのは何んでしょうか。彼等は心が無いからです。神を信じていないからなのです。彼等は唯物論者です。ソビエト共産と同盟の為にという間違いが、神の加護を得られないのです。アメリカのアポロ十一号以降全部成功しているのは何んでしょう。彼等は全世界人類の為に自から「いのち」をとってやっております。これが神の光を仰いでいるのです。その為にアメリカの宇宙船が飛び立つ時には、光の天使達が皆、防衛して行くのです。やがてその事実も、皆さんの前へはっきりする時が来るでしょう。神は光なり、その光によって満たされてゆくからなのです。」

高橋信次師は、講演の中で、このように言い残したが、一九八七年に打ち上げられたソユーズM-2でミール宇宙ステーションに滞在したロマネンコの三二七日という輝かしい記録を打ち立てているものの、その頃のソ連の宇宙事情を述べると、人間宇宙衛星船「ソユーズ1号（コマロフ大佐）」は一九六七年（昭和四十二年）に打ち上げられたが、翌二十四日試験飛行完了の時に着陸に失敗して、コマロフ大佐は死去した。そして、正式な本飛行の「ソユーズ1号」は、宇宙開発史上初めてという飛行中に飛行士が急死するという結末となった。そして、一九六一年四月ヴオストーク1号で地球を一周し、人類最初の宇宙飛行という栄誉を手にしたガガーリン大佐も、一九六七年ミグ15練習機で墜落死という悲劇が起っている。だが、不思議という外はない。

ところで、一九六九年（昭和四十四年）七月、アポロ十一号の月着陸全国中継放送で、テレビにクギづけになった記憶をお持ちの方も多いと思う。その時、カラーテレビメーカー各社の在庫がゼロになったという新聞の報道も記憶に新しいが、この二つの講演筆録は、アポロ十二号のバックアップ・クルーに選ばれ、一九七一年四十一歳で正式クルーとして十五号（船長デイブ・スコット）に乗り組んだジェームス・アーウィンについて、である。

彼は、NASAを引退して以後、キリスト教伝道に捧げていることも興味あるが、ノアの方舟探しに二度も遠征隊を組織している。これより『宇宙からの帰還』立花隆・中央公論社を引用しながら記述したい。



『宇宙からの帰還』 立花隆著 中央公論社

同誌によると、月に行ったアポロの宇宙飛行士を調査してみると、“flicker flash phenomenon”（チカチカピカピカ現象）つまり、一瞬間ピカッと光る閃光を見た者と全然見ないという人に、はっきり二大別できたという。アポロ十五号の場合も、宇宙船の中を夜と同じ状態にし、さらに目隠しをしてこの現象があらわれるかという実験をした。「強烈なものは写真のフラッシュをたかれたかと思うくらい強かった」とアーウィンは言っていると同誌は書いた。この強烈な閃光と、高橋師の講演の中で述べている“大きな金色の光の玉”はイエス様をはじめ、光の天使達なのである。宇宙船が無事、地球まで帰還出来るように守られていたのである。これがもし物理学上の宇宙の素粒子のようなものが起す現象であれば、見た人と見ない人があるということもあり得ないのである。目隠しでも閃光を見たということは、心の目で見ること、つまり、霊視したということである。釈迦やイエスやモーゼなどの上上段階の大指導霊を一般の我々から見ると、“光そのもの”“光の化身”であると高橋師は言ったが、まさにこの閃光も金色の火の玉も光の天使そのものなのである。アーウィン等は帰還後、眼底写真を撮って検査をしたというが、なんの成果もあらわれなかったと言う。霊視したのであるからそれは当然なことであろうか。そして又、閃光を見た宇宙飛行士の一人アポロ十一号のバズ・オルドリンは、のちに精神的異常をきたし、精神病院に入ることになったという。閃光を見た人と見ない人があるということは、それは物理的現象ではあり得ない。それは、イエス様に縁の深い人は、イエス様から放たれる光によって、心の窓を開く、つまり霊道を開き、霊視して閃光を感じるということである。このようにして霊道を開いたバズ・オルドリンは、霊道を開きながらも、心のあり方、人生のあり方において、以後、正道の生活はずれたために精神異常という現象があらわれたのであろう。高橋師が創設した宗教法人・GLAでは、高橋師によって強制的に霊道を開かされた人達が、それをひけらかし、増長慢になったために、自から心にスモッグをつくり、異常な現象をあらわした人が多くいた。霊道を開いた人は今迄より以上に、より慈悲深く、正道の正法の生活をする事だと高橋師は注意を促したのである。



ジム・アーウィンは一九七二年（昭和四十七年）に来日し、バプテストの教会や学校を回った。「夜を支配するために」"To Rule The Night"という体験記を本にした。アポロ計画（一九六八年～一九七二年）のそれまでの月面滞在時間は三十時間余り（前述の十一号は二十一時間三十六分）であったが、このアポロ十五号は二倍の六十六時間五十五分の滞在だった。そして、それまでは徒歩による探険は六十メートルほどの距離まで離れるだけであったが、ルナ・ローバーという月面探険車をはじめて持参して十キロ（アポロ十七号は九十キロ）も離れるところまで行った。アーウィンは「ふり向けば、すぐそこにいるのではないかと思われるくらい、神は近くにいた」という神の臨在を実感して、月から帰ると、もともと洗礼を受けたクリスチャンではあったが、もう一度洗礼を受け直し、残りの人生を神に捧げることを誓い、月から帰った翌年、NASAから引退して、"High Flight Foundation"という財団を設立した。それ以来、ひたすらにキリスト教の伝道を続けているということである。

以下、『宇宙からの帰還』より引用する。

アーウィン「それは、月に着いて三日目だった。その日の仕事は、岩石の採集だった。基地から出発して、月面探険車（ルナ・ローバー）で、山岳部に向った。我々は出発前から、地質学者に、高地にいて、明るい色の岩石を中心的に採集するように言われていた。御存じのように、月の石はたいてい玄武岩で黒い色をしている。そうではない岩石を探すのが目的だった。ラフ・ロードの山道を登っていくと、突然、視界が開けて、ハドレイ・デルタ山が目の前にそびえ立つ高地に出た。その山の大きさ、まるでヒマラヤ山脈のようだった。（アペニン山脈の山々は、四、五メートルの高さある）その山のスロープに、巨大なクレーターが幾つか口を開いているが見えた。そして、さしのべられた腕の先の部分に、この石が、この石だけは埃もかぶらずに、ちょこんと乗っていた。・・・<略>・・・ 私には、その石がそこにそうしてあったこと自体が、神の啓示と思われた。それを地球に持ち帰り、それが分析の結果、"ジェネシス・ロック"と命名された時、それが神の啓示であったこと、神が私に地球に持ち帰られるために、そこに置いておいて下さったものであることを確信した。だら、私も地球に帰ってきた時に、ちょうどその石が私に向かって語りかけたように、神に対して、"私はここにいます。さあ取って下さい。取ってあなたのために用いて下さい"といったのだ」

立花氏「あなたが、宇宙で神に出会った。月で神の臨在を感じたというのは、そういう直観的洞察を得たということを示しているのです。稲妻に撃たれたように、一瞬のうちに神の恩寵の認識が得られたというような」

アーウィン「いや、それは違う。宇宙船の窓から小さくなっていく地球の姿を眺める。月から地球を見上げる。そして、宇宙と地球と自分を見比べて、そこに神の恩寵を感じとる。そういう洞察と、月にいる時に得た神がそこにいるという実感とはまた別のものなのだ。その臨在感は、知的認識を媒介にしたものではない。するとすぐ答えが返ってくる。神の声が声として聞こえてくるというわけではないが、神が今時分にこう語りかけているというのがわかる。それは何とも表現が難しい。超能力者同士の会話というのは、きっこうこういうものだろうと思われるようなコミュニケーションなのだ。神の姿を見たわけではな・・・<略>・・・にいるというのは事実なのだ。私がどこにいても神は私のすぐ脇にいる。神は常に同時にどこにでもいる偏在者だということが、

実感としてわかってくる。あまりにもその存在感を身近に感じるの で、つい人間のような姿形をした存在として、身近にいるに違いないと 思ってしまふのだが、神は超自然的にあまねく偏在しているのだということが実感としてわかる。」

立花「で、神はあなたに何を語りかけたのですか。」

アーウィン「私が求めるすべてに答えてくれた。月の上の運動は、すべてプログラムされていたとはいえ、無数の予期せぬシチュエーションに出会って、どうすればいいのか迷う場面が沢山あった。通信基地の装置を組み立てる時に、ヒモを引けばピンが外れる仕掛けになっていたのに、そのヒモが切れてしまうとか、漏れないはずの水が漏れるとか、予期せぬ困難が次々に起こってくる。ヒューストンに問い合わせ、答えを得るまで待っていても、時間がかかりすぎて間に合わないことがある。・・・<略>・・・そこにそれがあるのを前から知っていたみたいだった。神に祈っても直接の答えがない。仕方なく自分で判断する。あとからそれが最良の判断であったことを知る。そこで、あの時自分で下したと思った判断は、ほんとは神のお導きであったのだと結果的に思う。こういうことはよくあることだ。しかし、そうしたいわゆる神のお導きとは質的に全く違うのだ。もっと直接的に神が導くのだ。自分と神との間の距離感が全くない導きなのだ。要するに啓示なのだ」



わが国の宇宙開発

わが国では、Hー に続くロケットがHー ロケットである。全長四十九メートルというかなり大きなロケットで、二トン級の人工衛星を静止軌道に投入でき、国産化率は一〇〇%で、何度も失敗しているのはご存知の通りである。現在、日本には多くの光の天使が肉体を持って生活している。そして、これからも生まれる。これらのエキスパート達が、色々な分野で能力を発揮し、今までの科学文明をもっともっと進めることであろう。だが、それらの素晴らしい科学力、高度な技術力も、絶対に、人類を殺傷する軍事利用には向けてはならないのである。今から一万二千年前のアトランティス文明を体験した靈魂達が、これからどんどん生まれ肉体を持つと高橋信次師は言った。現代よりもっともっと素晴らしい科学文明、機械文明のアトランティス時代を経験した靈魂達が、当時の素晴らしい機器を思い出して作り出す。一万二千年の時空を超越して思い起こす。だが、人類が科学、機械文明におぼれ、神の子・人間としての道はずれ、地上ユートピア建設と逆行するようなことがあれば、かつてのアトランティス沈没のように、人類の思念と行為ゆえに、土中に、海中に、一瞬のうちにさしもの科学文明も消滅してしまうのである。人類は二度と、当時のアトランティスを再現してはならないのである。文明のための文明であってはならない。地上ユートピアを建設し、平和な地上生活を実現する人類のための文明でなければならないのである。高橋信次師は、アトランチカ大陸は、アガシャによって正法が説かれ、高度の文明の発達した国であった。そこに今の共産思想と同じ思想を持った集団が現われ、正法を説く指導者達を殺した。そのために陥没させられたと教えた。



アメリカの宇宙開発はアポロ計画からスカイラブ計画、アポロ・ソユーズ計画、そしてスペース・シャトル計画へと移行していったが、一九八六年にスペース・シャトルが空中爆発したことは記憶に新しい。そして、その後の実験も故障のために不成功に終わった。一九八七年四月には、スペース・シャトルの部品を作っている会社が品質管理の問題で告訴されそうだということが報道された。そして、一九八八年九月には、スペース・シャトル飛行再開に成功して、一人の日本人女性飛行士は二度も飛んだ。それからは次々と。だが、これらについて言えることは、マーキュリー計画、ジェミニ計画からアポロ計画へは一貫して、未知の宇宙への純粋学問的計画であり、平和利用のためのアメリカの有人宇宙開発飛行計画であった。だから、高橋信次師の「ことば」にあるように、イエス様などの光の天使の加護と協力があつたのである。ともあれ、スペース・シャトルは半分は軍事目的なのである。人を殺傷する目的のための有人宇宙飛行計画には、光の天使達は協力するはずがないのだ。小ざかしい人間の悪知恵が、いつまでも続くことはないのである。それは当然ではないか。もうこれまでという時に、あの世から手が打たれるというか、「因縁の法」によって、そのようなことになるから、純粋学問分野だけに止どめて欲しいのである。

ポエジャー の快挙

N A S A が打ち上げたポエジャー が七年間の長旅の果てに、一九八六年一月二十五日には天王星に接近して、天王星とその衛星群を詳しく探査した。ロサンジェルス郊外パサテナにあるN A S A のジェット推進研究所の一室で、刻々にポエジャーから天王星の有様が送られてくるという、まさに「人類の記念すべきアメリカ宇宙計画の栄光の一日」であった。 チャレンジャー事故は、その僅か四日後のことだが、この数日は、アメリカ宇宙開発の「天国と地獄」であったのである。

サテ、かつての、もう一つの軍事大国ソ連についての「高橋師のことば」がある。ここで触れておこう。高橋信次師は亡くなる直前、「これから共産国家には食糧飢餓が起こる。それは、共産主義は神理に反するからである」と言った。

これより高橋師の「ことば」から

「これから共産圏、特にソ連は穀物の不作が続きます。そうして国内に暴動が起こるようになります。日本は食糧に困ることはありません。日本には心ある人が出て「正法」を説いたので、日本は今後も守られてゆくことになります。日本がだめになるということになれば、世界から正法が消えてしまうことになり、神の計画による地球の調和が実現しなくなるので、曲折はあっても日本は天上界から守られてゆきます。」

外電は次のように伝えた。

ウクライナの原子力技術者が語ったところによると、キエフの二つの病院で働く彼の友人達は、「チェルノブイリ事故が起こってから五カ月の間に、これらの病院で少なくとも一万五千人の被爆者が死亡した」と訴えていた。事故から一カ月後、中東のレバノンに送られてきた二千頭の羊が、目も見えず、耳も聞えない状態で、保健大臣が処分して地底深く埋葬するよう命じた。この生きている羊は、東ヨーロッパ圏からトルコを經由して送りこまれたようである。

ベルリン自由大学人間遺伝研究所は、チェルノブイリ事故以来、国内の三万例近くの調査をおこなったとこ

ろ、障害児の出産が五倍にも激増していることを確認した。広瀬氏は日本の新聞に載らない重大なニュースとして記述した。

ソ連は一九八六年、例年の倍を超える金四百トンを放出して穀物を大量に買い付けた。それからもずーっと続いているが、放射能によって減収するという二重の穀物不足に見舞われている。穀物不足が拡大すればするほど、それを外国に求めるための財源が必要となる。「腹がへっては戦も出来ず」なのである。軍事大国にとって、それを維持するための莫大なる財源を必要とする。軍事のための財源。こうなると外にも出ていけなくなる。高橋師が「外に目を向けようとするとは必ず内からの問題が起って、それどころではなくなる」と言っているが、その予言も現実化している。

次に、高橋信次師の「ことば」「食糧問題」を聞いてみよう。全人類が注目しなければならない「ことば」である。

「食糧問題」

高橋信次

「異常気象・食糧危機・人口問題、この三つは相互に関連し合って動いているが、これについて、さまざまな見方がなされているので取り上げてみたい。まず気象については、太陽・月・地球の自転公転によって、その条件の基礎がつくられている。だがしかし、寒波・風・雨・晴天のいずれかの一方に片寄ると地上の営みに狂いが出てくる。かつて地上に人類が住む以前は、火山爆発と雨のくりかえしが続き、氷河時代を何度も現出した。これは火山爆発の降灰が天空に舞い上がり、層をつくり、太陽の熱光を遮断したために地上の気温が下がったからである。今日、冷害や干魃が各地に起っている。原因の一つは熱消費の増大であり、煤煙・排気ガスの塵が天空にのぼり、層をつくりはじめているからである。もう一つは、地上に住む人類の想念行為によって、地軸の位置・自転のリズムを変化させていることもある。

このように気象の基礎条件は少しも変わらないが、地上に住む人類の想念行為が人口の増大に比例して、さまざまな異常気象を生み出している。アフリカの大干魃、ソ連・中国・インドなどの食糧不足、これはいったい何がそうさせたかといえ、それは前述の説明を理解されれば自ずと明らかであろう。気象は天然の産物であり、人間の生活行為とは直接無関係と思われるが、例を今日の公害にみれば、気象も人為的に左右されることは説明を要しないと思う。人口問題は、食糧生産と密接に結びつき、地球は満員という見方もあるが、しかしまだその余力は十分ある。問題は現時点の人々の意識構造（政治理念・民族意識・人種差別・経済の考え方など）に問題があり、バランスを欠いているので、歪みが生じているのだ。一方の国は食糧があり余り、他の国では餓死者が発生すること自体、調和された地上とはいえないだろう。こうしたアンバランスがなくなり、天然の気象条件に適した方法で食糧生産が行なわれ、技術開発を平均的に進めていけば、地球の人口許容量はまだまだひろげられる。異常気象・食糧危機・人口問題は、地球人類の責任である。それぞれの責任において調和された生活、つまり人類はみな兄弟という人間の原点に立って処理していくならば、この問題は明日にも解決していくであろう。しかし、今のままの状態が続けば、食糧危機を発生せしめ、問題を深めていくことになりかねない。」

次に、昭和五十一年二月（帰天、同年六月）に高橋信次師が語った「ことば」を聞いてみたい。

「肉体を持つと肉体に制約されて活動が制限される。これは仕方がない。意識だけになると肉体に制約されないから、自由自在に活動できる。ぼくは早くあの世へ帰らないといけないかもしれない。ぼくはすることが一杯あるんです。ソ連は原子爆弾を使おうとしている。原子爆弾を使ったら地球はおしまいである。地球がおしまいになったら、他の天体に住んでいる人間とのバランスが崩れてしまう。だから、絶対に原子爆弾を使わせてはならないのであるが、肉体を持っていると肉体に制約されてソ連の指導者を直接、指導するわけにゆかないとすれ

ば、あの世へ帰って、あの世からソ連の指導者を指導する以外にはないんですよ。」と、園頭広周師、中谷義雄氏の前で語った。

核戦争を引き起こす指導者達も、戦争計画者達もすべて一人残らず、天上界から地上界に生まれて来た者達である。一人一人が神の子・人間に立ちかえりこのような愚行は阻止し、絶対にさせてはならないのである。戦争廃止も核廃絶もスローガンであってはならない。スローガンはいつまでもスローガンなのだ。神の子・人間の原点を教え、一人一人が万物の霊長としての尊厳さを学んだ時、それは地上の光となって、平和な地球が約束されるのである。永い盲目の人生の中で忘れ去ってしまった「人間の原点」、「人類の原点」を説いたものが、高橋信次師が示した「正法」である。

これより、月刊『正法』の中から園頭広周師の「ことば」から

○ これから共産圏であるソ連（現ロシア）、中共は食糧飢餓になる。アフリカも南米も、共産思想を持っている国には飢餓が来る、と高橋信次先生が予言されたのは昭和五十年であった。

○ 肉体を持っていて国連で正法を説いて世界の平和をと考えてきたが、もはやそれでは間に合わなくなってきた。ソ連が野心を持っているので、地上的な手段ではどうにもならなくなってきた。天上界へ帰って天上界から修正の手を打たなければいけなくなった。と高橋先生は言われていた。

平成二年、東西に別れいていた両ドイツの壁が壊われ、めでたくドイツは統一された。その頃、ソ連はグラスノスチ、ペレストロイカ路線が功を奏しているかに見えたが、九月、政府当局は次のように報告している。"農作物は豊作であるが、収穫が思うようにはかどらない、その為に市場は品不足だ"、と。我々からしてみれば、全く不思議な国ではある。でも何か少しづつ少しづつ変わって行き、こうして、平成三年ついにソ連は崩壊してしまった。

アメリカのアポロ宇宙船から始まって、スペース・シャトル問題に移り、そして、ソ連問題にふれ、それらについての高橋信次師の"ことば"をあげた。戦争を計画した国や民族は必ず滅ぶ。自から作った原因は必ず結果として自分に現われる。これを因縁の法則というのである。民族が興隆するのはそこに高級霊が生まれてゆくからであり、高級霊がそこに生まれなくなると、その民族は没落して行くことになる。悪をつくり出す民族がいつまでも栄えることはない。ポルトガル、オランダ、大英帝国などの海運一等国が、今や二流、三流になっているのはなぜか。このことを考えると明らかである。日本がこれから繁栄していくためには、心からの無償の布施をすることである。今を生きる我々が、未来の素晴らしい日本を約束できるのは、現在の経済大国の使命と役割を考え、世界中に無償の慈愛の行為をすることである。政治家の皆さんよ！ 子供に素晴らしい日本を残すために、国家百年の大計を考えてみようではありませんか。

Home



卑弥呼は高橋佳子氏となった

高橋信次師は息女の高橋佳子氏を卑弥呼の過去世を持つ人であると言残した。

「この人（佳子氏）は過去世に於て卑弥呼であったことを思い出しております。奄美大島から来られたこの二人のご婦人は卑弥呼の女官をしていた方達です。東京でデザイナーのGさん、映画俳優中○忠 氏の夫人の薫さんは、ともに卑弥呼の大臣をしていた人達です。卑弥呼の過去世を思い出したこの人（佳子氏）を中心として、この人達が卑弥呼の時代を思い出すと、今までわからなかった日本の歴史がはっきりとします。邪馬台国は有明海を中心にしてありました。」（昭和五十三年三月 宮崎研修会）

この項は、別の項に詳しく述べているので参照ください。



「天才少年キムは、ギリシャ時代の天才科学者タールスだった」

天才と言われる人は霊道（心の窓）を開いている人だと高橋信次師は言った。幼少の頃、天才と言われた人が、二十歳を過ぎれば、「ただの人」と言われるのはなぜなのだろう。心に曇りのない時には、守護霊や指導霊の協力を得て天才的な力を発揮できるが、年齢を重ねるにつれて、次第に心を失っていく。つまり、愚痴、怒

り、足ることを知らぬ欲望、そして天才と言われることへの慢心と増長慢となって己を忘れていく。従って、守護霊や指導霊達は天才と言われていた人が、心の曇りを作っていくために指導できなくなる。それは、直感、予感の中から浮かびあがってくる天才的な力も閉ざされ、凡才となってしまうのである。話は少し変わるが、信次師が憑依霊を取り除く時、「私は自分の心をしっかりと正し、うぬぼれや虚栄心が無いか、そして謙虚な自分であるかどうかを確かめると同時に、〇〇を救って下さいと心に念じた」、と著書に講演に、至る所に出てくる。自由自在に力を発揮できる信次師ですら、いつも自戒していたのである。天才と言われる人よ、心して聞いて欲しい。

一九七六年（昭和五十一年）三月、小田原講演会での講演の中から、信次師の言葉を聞いてみよう。昇天する三カ月前の講演であった。

「丁度、四～五年前、キム少年という朝鮮の子供が、東大の教授が出題した不定積分を、わずか五歳の子供がテレビで解いていました。私達が高等学校でやったものです。大学の一年位で学んだあの不定積分を、五歳の子供が解いたのです。それを天才というのでしょうか。そうではありません。彼は永い転生の過程に、過ぎてギリシャの時代にタールスという偉大な科学者だったのです。その心の窓が開かれていたから、彼はそのような数学を解くことが出来たのです。しかし、あのキム少年が増長慢になった時に「二十過ぎれば唯の人」になります。彼が謙虚で、「自分ではない、次元の違った天上の世界からの協力を得ているのだ」という感謝の心を持って行為をしたならば、彼は又、より偉大なる力を出すでしょう。

同じように、大人ばかりが道を説くではありません。小さな子供でも心の窓を開けば、大人に説法をするようになるでしょう。そのような人々が既に隣の国の中華民國にも、我々のグループが出ております。それは、わずか七歳の子供です。それが大人達の前で道を説いております。不思議でもなんでもありません。こうして我々は、心の窓を開いた時に、智性という無限に近い、そのような力を与えられていくものなのです。その時、我々は物質とか地位とか名誉とか欲望だけを満たそうとするもの、そのものの愚かさを自分自身で納得出来るようになります。そして、人間の心が本当に調和されてくれば、より豊かな文明が発達し、調和された社会が築かれてゆくものなのです。それだけに心を失ったところの文明は、やがてお互いに環境を破壊してゆくだけなのです。人間の価値観、心こそ永遠のものであり、我々はこの偉大なる心を今、盲目の中から探り当てた、その光明を調和と安らぎの中に、我々は生活することが大事ではないでしょうか」

次に、信次師の著述から引用しよう。

天才児の才能は、九〇%の潜在意識の一部が、その子の脳に働きかけるためにおきるものです。その子の守護霊が、あの世で学んだことをダイレクト（直接）で教えるために、本人が今世で学んだことのない、大学生でも解けないような高等数学を解くことができたりますのです。しかし、その天才児が、増長慢となり、俺は偉いというような優越感や、おごる心に支配されますと、守護霊の働きは止まってしまいます。これはなぜかと言いますと、たとえば、電気を自由に流すためには、ゴムやベークライトでは電気は流れません。銅、アルミといった導体物質でなければなりません。これと同様に、守護霊は光に包まれており、光の電磁的作用でその者に教える（通信する）ので、それを受け入れる導体物質（表面意識）が増長慢という不導体物質のベールに包まれると、光を通さなくなるからです。人間の精神のエネルギーを受ける心に、慈悲と愛とは正反対の、人を見下す増長慢や怒りの想念があっては、光が通じなくなるのは当たり前でしょう。天才が一夜にして鈍才に変わるというのも、こうした理由によります。『心の発見』

「年が若いから、子供だからと言いましても、守護霊は全部大人なのです。」講演「実在界と現象界」より高橋信次師

また、J・クレンショー著『天と地を結ぶ電話』、『アガシャの霊界通信』には次のように書いている。

「次のような兆に注意せよと光の指導霊達は言うのである。即ち非常に若い人々も深い意味の質問を發し、多くの新しい世代の人々は、この世の科学と宇宙の哲学との両方の面で、年長者以上に賢明であるのみならず、彼らの年代以上に賢明となるであろう。このような賢明な若者達が、無智な古い人々と交替してしまうであろう。古い人々は時代の無気力な計画に疲れ果て、新しい精神を伝える霊の選士達に全てを譲り渡す気持ちになるであろう。こうして、彼らが長年の錯誤の世紀の結晶である肩の重荷をおろしてしまった時、彼らは悦んで新しき時

代の黎明の前兆を迎えるであろう。そうしてその時、長い年月の昔に言われた言葉、「幼な児は彼らを導かん！」という言葉の思い出すに違いないのである。」



「四人の天才少女」

昭和六十一年十二月、ジツコ・スセディック著『胎児はみんな天才だ』祥伝社という本が出版された。アメリカ人と結婚された日本人妻が育てた四人の女の子が皆、天才的才能を発揮して国際的に有名になった。それは胎児教育法とも言うべき内容の著書である。十二月にこの本をブック・ストアで手にした時、愈々一つの実証のために天上界は協力しているなというのが、その時の実感だった。そして、すぐにテレビで見ることとなった。記述の中には、昭和五十七年に翻訳出版されたT・バーニー著『胎児は見ている』祥伝社の著述を引用しての論述もある。T・バーニーの原著『The secret life of the unborn child』を『胎児は見ている』と意識されたタイトルに、賞賛の気持ちを禁じえなかったが、当時を思い出しながら読んだ。昇天するまでの十年間も、信次師は何度も繰り返し、繰り返し「胎児と天上界とのかかわり」とも言うべき理論を発表したが、それと呼応したように、T・バーニー氏は前書きにもある通り、『胎児は見ている』は一九七五年より執筆に取りかかったとあるが、これは、信次師の昇天一年前のことであった。こうして『胎児はみんな天才だ』という本が出版され、四人の天才少女を育てた手記が発表された。ジツコ・スセディック（旧姓林実子）氏の記述内容は、「このようにして胎内教育をした」という実録であり、手記なのである。

事実は事実として責ばなければならないが、あくまでも事実を記録、報告されたものであり、何故、そのようになるのかという理論展開はない。夫ジョセフ（六十四才）、妻ジツコ（四十一才）氏は平凡な普通の人間であり、IQ（知能指数）は一〇〇程度であると書かれている。四人の娘達はそれぞれにIQが一六〇以上という。こうして、全員が「天才」と判定され、全米の知能指数上位者五パーセントの中に入っているということだ。ジツコ氏の言われる方法によって、長女スーザンは生後二週間で言葉を喋り、一歳児が大人に本を読んで聞かせ、五歳で高校一年生、十歳で医科大学予科生、そして、十六歳のスーザンは解剖学を学ぶ大学院二年生という信じ難い事実なのだ。そして、他の三人の娘さんも似たような経歴の持ち主だという。勿論、これは日本の教育制度とは異なるアメリカならではの話ではあるが、だからと言ってそれで片づけられるものではない。以来、世界中のマスコミが、彼等の住むニューコンコードの田舎町に押しかけることになる。

信次師は、「精子と卵子とが合体し、受胎すると、胎生三カ月頃に胎児の肉体に天上界から降臨した魂（意識）が支配にかかり、母となる人の意識と、胎児の意識の相互の葛藤、つまり、純心な胎児の意識と、この世の風波を受けて「純心さ」とは程遠い母親の意識の相克が「つわり」となって現われ、以後、胎児の意識によって細胞は分裂し、五体が形成され成長して行く。そして、胎児の魂の兄弟や先輩達が潜在意識層にあって守護、指導霊となって、その人の一生を見守って行くことになる」と、明らかにした。親子は天上界で、それぞれに約束をして、この世に肉体を持つという信次師の説明がある。これを縁生というが、夫婦が調和し、一つになって子供を育てると、その子供は精神的にも肉体的にも健全な人間に成長していくのである。

夫が六十四才、妻のジツコ氏が四十一才。日本でも十歳位の差というのは、多く見られることであるが、二十三歳違いの妻は、夫にとって愛しくて愛しくて仕方がないというほどの愛であろう。そしてひたむきなその愛に答える妻の愛。先づ、この御夫婦の調和された夫婦愛を、第一に挙げたい。それと、アメリカ社会に於けるウーマンリブを代表とする女性優先の社会風潮と仕組みの問題点。このことについても、アメリカでは余りにも女性が強くなったために、男性をして神の座にまでかけ登らせてくれる心の安らぎと、明日の活力の源である夫婦生活の主導権を女性に握られ、それもままならず、酒にホモへと逃避してゆく人達、そして社会問題となっているほどの離婚、悩めるアメリカの実体がそれを物語っているとウェブ・マスターは考える。その風潮の中で、ジツコ氏は「日本の良さ」を持った女性らしい、女性の中の女性なのである。アメリカの中の日本の良き女性なのである。御主人にとって愛しても愛しきれないという程の愛なのである。それと、それに答えるジツコ氏の心からの信頼と愛。これは正に理想的な妊娠から育児、つまり子育ての一大条件なのである。

愛の牽引力の強い者どうしから生まれた子供は、肉体的にも、精神的にも丈夫で立派な子供に育つのである。それはそうであろう。お互いに信頼し、お互いに尊敬し合う。その人のために、全てを投げ出せるほどの愛から生まれた子供は、すべてに調和され素晴らしい。それが一番自然なのだ。ところが社会の中には、色々の要素が複雑にからみ合っ、安心して産めなくしている。そのように安心して産めない原因を自らが造り出しているのである。いやいやながら産んだ子供、中絶を望みながら仕方なく産んだ子供、ことの成り行きで産んだ子供等、この世には実に気の毒な子供も多いのである。だが、その原因をつくった親を責めることはない。なぜなら「子供

は親の言う通りにはしないが、親のした通りにする」という。いつの日か、その子供故に泣かされ反省させられるというのが、「因縁の法」である。自らの造り出した原因は、その結果によって自からバッチリ反省させられるから、誰も責めることはないと言うのである。ここまで書いて、次に移って行けば、これはもう、そういう人達へ恐怖感をつのらせ、強迫以外の何ものでもない。修正の仕方を述べて次に進まねば片手落ちというものだろう。

「反省、修正の仕方」

その時の心のあり方をありありと思い浮かべて、「あなたの誕生を心から喜ばなければならなかったのに、私の心得違いによって、あなたに寂しい思いをさせました。どうぞ、私を許して下さい」というようなことを心から反省する。反省した後は、いつまでもくよくよすることなく、もうこのようなことは二度としないという決意をして、明るく調和のある生活を実践することである。反省は神の愛であると、信次師は言った。祈りの言葉は形は決まっているものではないので、個性のある言葉でも、方言でも、その人の真心の発露が即、祈りだと思っている。なぜなら英語であろうが、フランス語であろうが、言葉は違っても祈りは魂の叫びである。このように心からの反省を一度はやってみる必要がある。

話を元にもどして、先に、実に気の毒な子供が多いと述べた。あの世で約束までしておきながら、先に肉体を持った親となる人が約束を忘れ、産むことを望まないとしたなら、産まれて来る胎児の気持ちはどのようなものだろうか。それを自分に当てはめて考えて見ればよく解るはずである。

サテ、先づ一番大事な条件は、信頼し合った調和された夫婦愛だと述べた。そして、次に大事なことは、子供の誕生を心から喜ぶ愛の気持ち。胎児はその気持ちに答えようとする。そのような条件のもとへは、光に包まれて生まれ出て来るのである。しかし、表面的には子供の誕生を喜ぶ気持ちはあるが、心の中ではそれを否定する心を持った親もあるのである。その点、御主人もジツコ氏も誕生のその日を、首を長くして待たれた。そして、酒も、コーヒー等のカフェインの量にも気を配り、胎児の為に生活は廻るように環境は整えられ、胎児を中心に生活がなされたというのである。妻は夫の愛情に包まれ、安心して産める環境がつくられジツコ氏の言うジツコ式胎内教育がなされたというのである。テレビでも、こうするのだという方法を説明、実演していたので、その様子も良く分かった。著書にも微に入り、細に入りその方法は説明されている。

でも、この方法論だけをうのみにして、読者がいかに真似ても、同じような子供を産めるはずはないと思うのである。なぜなら、

強い絆（きずな）の夫婦愛があって

夫婦共に誕生を喜ぶ心と環境

ジツコ氏の言われる胎内教育

つまり、東洋で昔から言われている胎教を発展させたものがあって初めて、そのような子供ができる条件が揃うのである。ついでに、もう一つ言うなら、子供の魂の段階がどうかということである。これは、「現代人よ、このようにして子供は育てなければならない。愛深く産み育てると子供は立派に育つのだ。模範としなさい」という神の啓示と思えてならない。だから、このような劇的な現象となって現れたのだと思えてならないのだ。天上界の計画によってのみこの驚くべきことが起こった。だから、ジツコ氏の言われるような方法を取っても、万人がこのような、天才的な子供たちを産み育てることはできないと言うのである。この例は、天上界の計画の証明に起こった希なる一例と見たい。そして、ジツコ氏のご夫婦の間にあるような愛情と、子供を産み育てる方法が、素晴らしい子供に育つことは否定しない。アメリカにもロシアにも多いといわれる、親の離婚に泣いている子供たちが一人でも少なくなっていくための、布石になってくれればと、祈らずにはいられない。そして、この四人の素晴らしい子供たちが、この地上界での使命と役割をまっとうすることを願わずにはおれない。

次も、スセディック一家が日本を訪ねた頃の話である。

< 数か国語を喋る赤ちゃん >

昭和六十三年一月のこと、元国際正法協会の園頭広周会長を囲んでの新年会の終りに近い頃、会員の一人がスポーツ新聞のコピーを配った。それには「ブルガリアの奇跡・二カ月の赤ちゃんが八カ国語ペラペラ」というタイトルだった。それはこうである。

「バルカン半島の国、ブルガリアに生まれた赤ちゃんが、生後一週間目位からブルガリア語をしゃべり始め、二カ月頃にはブルガリア語、ラテン語、英語、スペイン語、フランス語、リトアニア語、ロシア語、古代エジプト語の八つの国の言葉をしゃべり始めたというのである。超心理学者や幼児心理学者達が、解明しようとしたが、いずれもはっきりと解答を出せず、東欧圏の各大学や、モスクワ超心理学研究所などから問い合わせが殺到したようなのだ。ブルガリアの赤ちゃんは、生後一週間目位に言葉を喋り、先に述べたスセディック夫妻の間に生まれた長女スーザンちゃんは、生後二週間で言葉を喋っている。医学的には舌の発達が未熟な新生児では、音節発音は不可能に近いというのが定説になっているようであるが、定説を覆す事実が現実に行っているのである。高橋師が言うように、このようなことが次々と起こってくることだろうが、この新年会では「これから一杯でてくるだろうな」という一言で終わった。高橋信次師、園頭広周師の説く教えを学んでいる、元国際正法協会の会員にとって、これは単なる記事だったのである。

サテ、生後二カ月たらずの赤ちゃんが、八カ国語を喋るこの事実をどう捉えるかの問題に対して、ソ連の超心理学研究所のニコライ・トバスピン博士は、古い年代順に言えば、古代エジプト、ラテン、リトアニア、スペイン、フランスなどの国で生きてきたのではないかと書いている。霊道が開かれ、各時代の過去世（過去世）の言葉を喋っているのであれば、それはそれで良いのですが、霊道を開いている赤ちゃんの声帯を利用して、よからぬ霊達が喋り始めることにでもなったら困ったゾ、という考えが、一瞬私の頭をよぎった。「いやいや、生まれて数カ月の赤ちゃんのことだ、心も丸く調和され、光に包まれていて、悪霊達も近寄れまい」と、そう考えたのである。

< 胎児教育と胎内教育 >

昭和六十三年二月末、「EAT9」というTV番組では、胎児のための食生活に始まって、胎児が五官（味覚、視覚、聴覚、嗅覚、触覚）を備えているという事実を映像でとらえ、先述のスセディック式胎児教育や、胎児教室などを紹介していた。前述したT・バーニー氏もビデオの中で説明を加えられていて、楽しく見せていただいた。番組では、日本のスセディック式胎内教育を実践した、四カ月ほどのAちゃん、Bちゃんの片言が放映されていたが、録画したビデオを何回も廻してみても、説明を聞いていなければ別の言葉に聞こえた。

赤ちゃんの意識は確かに「おかあさん」と呼びかけているのだろうが、声帯をまだ完全にコントロールできていないように思えた。そして、ごはんの絵を描いた御飯のカードを見て、赤ちゃんが「ごはん」と発音する場面がある。妊娠中、胎内教育で、お母さんはこのカードを自分のお腹にあてたり、胎児に話し掛けたり、問いかけたりされたに違いない。その結果は、四カ月の赤ちゃんが、それを見て「ごはん」と発音する事実は事実として、尊ばなければならない。

この番組では、「胎児に話し掛けると、それをお母さんのお腹の中の胎児が「耳」で聞いている」という前提のもとに話はすすめられている。その一つの例として、胎児に外音がどのように聞こえるのかという実験を、一人の医師が、特殊マイクをお腹の中に飲み込んで、歌を胃の中から聞こうというわけである。胎児に外音がどんな風に聞こえるかという実験だった。これは胎児の耳から聞こえるのかどうか解き明かすために、高橋師が説く「胎児と天上界の関わり」について触れてみたい。

< 正法が教える、胎児と天上界のかかわり >

胎児は妊娠三か月頃に、天上界から霊魂が支配にかかる。天上界に待機している霊魂は、光子体も大きく皆大

人だが、胎児の肉体を霊魂が支配すると、光子体も胎児の体に合わせて小さくなる。出産されるまでは実在界（あの世）と通じているから、あの世とツ・ツ・の胎児にとっては、この世のこともすべてお見通しで知っているのである。つまり、すべて見ている。だからウェブ・マスターは、T・バーニー氏の「胎児は見ている」というタイトルにした訳者を絶賛したのである。ここで申し上げたいのは、胎児は体内から音を聞いているだけではなく、鳥瞰図（ちょうかんず）でも見るように全てが分かり、この世の人が考えていることさえも分かってしまうのである。

この世にオギャ - と生まれると、人間の意識は百パーセント潜在されて、あの世とは断絶してしまう。そして、胎内で記憶されたものをすべて持ってこの世に生まれ出る。母親が体験した、悲しみも喜びもすべて記憶して（見て）いるのである。それが胎児に印象されて、成長していくとともに重大なかかわりを持つのである。母親や周りの心の在り方が、いかに胎児に影響するかという理由がここにあるのである。これが昔から言われている胎教の大切さなのだ。無論、母親にそのような心のあり方をさせたということは、その周囲の者に無関係とは言えないが、素晴らしい母親は智慧を働かせながら、その困難を乗り越えていくことも、また事実である。このように、胎内教育で教えられたご飯のカードを見て、胎児の意識は声帯をコントロールして、「ごはん」と懸命に発音しようとするのである。霊魂としての「人間」の説明が、全くなされていないところが、片手落ちだというのである。生後わずかの赤ちゃんが、片言を喋ったとしても、名を残す人になるかは別である。使命と役割を持って生れてくる霊魂は、きっといつかは頭角を出し、能力を最高に発揮するものだ。言い換えれば、凡人はいつまでも凡人なのである。こう言い切れば二倍もないが、魂の修行のために努力すべきは言うまでもない。ともあれ、天才児に育て上げようと心を乱すより、愛深く育てようとする夫婦愛こそ、最も大事なことと思う。この子を一人前の子供に育て上げようという夫婦愛、家族愛があるなら子供は立派に育ち、子供から泣かされるということもないのである。子供ゆえになかされる親は、その子をどう育ててきたかと、考えてみられることである。テレビの中で紹介されていたが、胎児教育のための教室があった。スセディック夫妻は、スセディック式胎内教育を考え出し、実践された。よい子を生み育てるためには、スセディック夫妻にとって、この方法は避けて通れないほどの必然性があったと思う。ところが、このテレビのレポートで見るかぎり。受講者の願いは、受講料と引き換えにIQの高い天才児誕生を願う欲念であろう。ウェブ・マスターは、スセディック夫妻と、これら受講者の次元がまったく違うと言いたいのである。

Home



ソクラテスは毛沢東として生まれ変わった

昭和四十九年十月十九日、長野県奥志賀高原に於ける特別研修会で、「毛沢東はソクラテスの生まれ変わり」と、高橋師は言い残した。



毛沢東

お釈迦様（高橋師の「ことば」ではお釈迦様はBC 654～BC 575年）が出られた時代と同じくして、中国に孔子（BC 551?～）、ギリシャにはピタゴラス（BC 582?～）やソクラテスが出ている。これは正に、世界の歴史は大衆の合議によって作られてゆくのではなく、偉大なる光の指導霊達によって作られてゆく、という一例である。

ソクラテス（BC 四六九?～三九九?年）

古代ギリシャの大哲学者でアテネの人である。自分自身の「魂」を大切にすることの必要性を説き、自分自身にとって、最も大切なものは何かを問い、町の人々と哲学的対話を交わすことを仕事とした。人を幸福にするものは何か、善とは何か、勇気とは何かと問うが、その心が人々に通ぜず、人々の反感を買って告発され、裁判で死刑の宣告を受けるも、自から毒杯を仰いで亡くなる。終身、真我の一念をもって、人類の幸福のために尽くすが、人間の作った悪法律によって、この世を去ったのである。

ソクラテスの妻、クサンチッペ

男が仕事で成功するためには悪妻をもらうに限るという人がいる。彼等が悪妻の見本とするのは、ソクラテスの妻、クサンチッペで、彼女は雑巾バケツの水を夫の頭からかけた話は有名である。それはこうである。

ソクラテスは、夕方、考えながら家の前まで来た。もう少しで答えが出てきそうなので、玄関の前に腰を掛けるが、そのうちに夜も明けてしまう。クサンチッペは夫はどこへ行ったのだろうと心配するが、掃除をした後の汚れた水を外に捨てようと玄関を開けると、そこには、まだ思索中のソクラテスが戸口に腰をかけていたので、腹を立てたクサンチッペは、頭から泥水を浴びせかけたというのである。それでは、月刊『正法』より、園頭師の論文を紹介したい。

「日本は守られている」

日本を助けてくれた毛沢東

園頭広周

「もし日本を侵略しようという国があれば、その国は必ず内部からだめになります。現在の世界で正法が説かれ

ているのは日本だけです。もし日本がだめだということになれば、この世界から正法がなくなって、神の計画である、正法による地球の平和が実現できることになるので、日本はどんなことがあっても守られるのです。これからソ連は食糧飢饉が続きます。共産圏にはいろいろな事件が起こります。」

と高橋信次先生が言われたのが、昇天直前の昭和五十一年三月であった。私は昭和五十七年十月、シルクロードの旅に発って「毛沢東はソクラテスの生まれ変わりである」と高橋先生が言われたことを私は考え続けていた。このことを聞いたのは、昭和四十九年十月の長野県の研修会の時であった。最初このことを聞いた時、どうしてソクラテスが共産主義の親玉になったのであろうかと疑問に思った。そのソクラテスが毛沢東として生まれた。

戦争中、私が行ったのは武漢地区と長沙、それに広東附近であった。それだけでも中国大陸の広大さを思ったものであったが、世界の人口の四分の一の十億強の人口を持つ中国をまとめて行くには、現在の時点では共産主義以外になかったということなのであろうと、思わざるを得なかった。戦前の中国では、貧富の差が激しく、泥棒と乞食の国であった。それが今では、清潔な泥棒のいない国になっている。共産党の統制下にあるとはいえ、中国にとっては大改革である。毛沢東が唱えた共産主義は、極めて精神主義的な面が強く、ソ連流の共産主義とは違っている。しかし、ソ連にならって粛清をしたのはいけなかった。

さて本題に入るが、一九四五年（昭和二十年）二月十一日、スターリン、ルーズベルト、チャーチルの三巨頭によるヤルタ協定で、ソ連を対日戦に参加させるために、アメリカは中国を無視し、中国にはなんの相談もせず密約した。この協定は日本にとっても極めて重大なものである。

1、日露戦争によって日本に割譲された、樺太南部及びそれに付属するすべての島をソ連に返還する。千島列島もソ連に引き渡す。（問題の北方領土返還は、日本への相談なしに、アメリカが勝手にソ連に渡すことを決めたから、日本はそれを承知することはできないというのである。アメリカの横暴を我々は思い知るべきである）

2、大連はソ連の優先的利益を擁護の上、国際港とする。旅順はソ連の海軍基地とし、日露戦争以前のロシアの租借権を回復する。

3、南満州鉄道と東清鉄道は、中ソ合弁会社を設立して共同運営する。ただし、常にソ連の優先的利益を保証する。

4、ソ連が占領している中国領の外蒙古はソ連の領土とする。（中国に関する2・3・4の取り決めも、なんら中国に相談なしに米ソ二国で勝手に決めたものである）

アメリカがこの条件をソ連に示して、ソ連が対日戦に参加するようにと誘った。ソ連はアメリカのこの提示を待って、八月八日、対日宣戦布告をして、満州になだれ込んだのである。その結果、八万以上の日本将兵が殺され、五十九万が捕虜として、酷寒の中を二千ヶ所の収容所で強制労働させられた。このヤルタ協定を骨子として、終戦の前日、ソ連は満州全体を占領した既成事実を楯に、蒋介石政府との間に、中ソ友好同盟条約を結んだ。もし、蒋介石がそのまま中国の主権を握っていたとしたら、この中ソ条約によって満州はソ連のものとなり、大連は商港として、旅順は軍港としてソ連が支配することになっていたわけである。もしそういうことになっていたとしたら、現在の日本はどうなっていたであろうか、そのことを思うと背筋が寒くなる思いがする。昭和二十五年、北朝鮮軍が南朝鮮に侵入して、朝鮮戦争が始まったのであったが、もし満州にソ連軍がいて、ソ連軍が南下してきたのであったら、現在は朝鮮半島はソ連の支配下になっていたであろう。釜山から北九州はすぐである。ソ連が釜山を軍港にしていたら、対馬海峡はソ連海軍に押さえられて、日本の船は自由に交通することはできない状態になり、アメリカ占領軍は、ソ連と対決して長く日本占領を続けることになり、ずっとアメリカの支配下におかれて、独立国として自由な立場で発展をすることとは、全くできない状態になり、一方、朝鮮半島から潜入してくる共産党の工作員によって、思想的にも日本全体が引っ掻き廻されて、とても現在のよ様な繁栄をみることはできなかつたであろう。

ところが中国は、蒋介石の率いる国民政府軍と、毛沢東の率いる共産軍とが戦い、遂に毛沢東の共産軍が勝利して、蒋介石軍は台湾へ逃げ込んだ。そうして新中国が誕生した。新中国誕生直後から、毛沢東が何よりもまず精力的に取り組んだのが、屈辱的な中ソ条約を撤回させることを、スターリンに申し入れて、遂に、ソ連から満州の支配権を奪い、完全に中国としての主権を回復したのである。そのことが日本にとっては、非常にありがたい

ことになったわけである。その後も、ソ連は、ソ連資本の工場を中国に建てることを交渉したが、ソ連の歴史的行為から判断して、それがいかに危険であるかを熟知していた毛沢東は、悉くそれを跳ねつけた。もし、毛沢東がスターリンの横暴を跳ね返していなかったとしたら、日本はどんなになっていたであろうかということを考えると、毛沢東のとった行動は日本を助けたことになっているのである。中共のあり方にはいろいろ批判すべき点は多々あるが、毛沢東のやったことは日本を守ることになったことも、日本で正法が説かれるために、天上界から計画されていたことだと考えないわけにゆかない。そのためにこそ、ソクラテスが毛沢東として生まれしめられたというべきである。

この次に起こったのが昭和二十五年の朝鮮戦争です。毛沢東が中国義勇軍を朝鮮半島に送り込んだために、南朝鮮軍は釜山まで追いつめられる状態になった。これでは大変だなということになって、アメリカはマッカーサーをして、アメリカ軍を平壤北方に上陸させ、中国義勇軍を鴨緑江から北に追い出した。この戦争に必要な軍需物資を、一々アメリカ本土から運んでいたのでは間に合わないのだから、日本で調達することになって起こったのが「朝鮮特需」で、この朝鮮特需で儲けた金で設備更新をして、池田内閣の高度成長政策となり、神武景気、高天原景気が起こって、日本の経済力が強くなり、現在に至っているわけである。これらのことを考えると、正法のある日本を守るために、ソクラテスを毛沢東として生まれさせてあったと考えないわけにゆきません。歴史は偉大な人物の出現によって創られ変わってゆくので、終戦後左翼の学者や日教組がいったように、大衆の意識によって変わってゆくのではない。大衆の意識といっても、やはりその大衆の意識を統一して、動かしてゆくリーダーがいないとどうにもならないので、だからいつの時代でも、歴史は偉大な人物、指導者によって創られ変わってゆくのであります。

毛沢東が日本の天皇制を守った

毛沢東が「日本の天皇制を守れ」といったわけではないが、毛沢東の執った行動が間接的に日本の天皇制を守ってくれたことになっているのは事実である。個人の運命でもそうであるが、その時は敵だと思っていた人が、後になってみると、その人があったがために、運命が変わって今は幸せになったということがある。個人の歴史、それを人の運命というが、個人の運命の上に現われる歴史的現象と同じことが、国家の運命にも現われている。天皇制と共産主義とは全く違う思想である。毛沢東は、日本の天皇制を守ろうと意識して、中国の共産革命をやったわけではないが、結果的には日本の天皇制を守ることになった。それを思うと、「日本は守られている」と考えないわけにゆかない。お釈迦様が二千五百年経って東の国、日本に生まれて正法を説くと予言をされた。

そうして日本に生まれられたのが、高橋信次先生であり、日本という国を、正法が説かれるにふさわしい国にするために、インドで仏典結集をされたアショカ王を、日本天皇として生まれさせることになって出現されたのが昭和天皇であった。天上界ではソクラテスを毛沢東として生まれさせることによって日本を守らせ、正法が説かれるにふさわしい国とした。こういうことを考えると、日本という国は全く不思議な国だという気がますます強く深くなってくる。聖書のヨハネの黙示録の中に、ハルマゲドンの戦いというのが出てくる。予言者達はこれを世界最終戦だという。第二次大戦がハルマゲドンの戦いだといった宗教家もあった。この戦いは、光の天使と赤い竜の戦いで、最後に赤い竜が打ち落とされて、最終的な世界の平和が来るというのである。共産主義者を昔から「アカ」といった。どういうわけか左翼運動家達は、赤い鉢巻に赤い旗を立てる。一番最初どうして共産主義者が赤旗を持つようになったか知らないが、ソ連の国旗も赤旗であるし、これは天上界で世界の秩序を乱す思想を「アカ」として目印にした、その雰囲気を感じて、赤旗を立てたといっただけでよい。

アカは危険信号である。安全ではない。赤い竜が打ち落とされるということは、共産主義は壊滅するということである。その共産主義を作り出したのはユダヤ人である。ということは、ユダヤの世界統一思想シオニズムの壊滅を意味することになる。シオニズム - - この思想によって計画されたのが、イスラエルの建国であり、イスラエルを背後から強力に援助しているのがアメリカである。シオニズムは、民主主義、自由主義ということで、全世界の牽制を打倒し、共産主義で「人民のための人民の政治」ということで従来の支配権力を打倒したところで、ユダヤのダビデ王の子孫を世界の盟主にしようという計画を持っている。そのシオニズムは、天の使いによって打倒されるということになる。アメリカの大統領には、ニューヨーク在住のユダヤ人グループの支持がないと絶対になれないと言われるが、アメリカは世論の国で、アメリカの大衆はユダヤ人の計画など全く知らないのであるし、だから大衆の中には、ユダヤ人の政策について行かない人達も多いのであるから、ユダヤ人の政策

ばかりを強力におし進めるわけにもゆかない。大衆の世論を無視するわけにゆかないというところに、アメリカという国の面白さがある。

終戦になり、米軍が日本を占領するに当たって、最も頭を悩ましたのが「天皇」の問題であり、日本側が一番こだわったのも「天皇制護持」の問題であった。「天皇を死刑にしる」「天皇制を廃止すると国民は黙っていない。日本国内は收拾できない混乱に陥る」というアメリカ国内の意見は、同時に日本国内の意見でもあった。結局アメリカは、日本の統治を混乱なくするためには、天皇制を利用した方が得策だと考えて、天皇制温存ということになったが、しかし、従来のままの天皇制では具合が悪いということで、天皇の「人間宣言」を出させ、「国家神道指令」を出して、公教育の場から国家神道を排除し、天皇崇拜や超国家主義を児童生徒に教えるはならないと、教育と宗教の分離指令を出させた。靖国神社参拝問題の原因は、この分離指令にあるので、これはアメリカ占領軍の強制力によって出されたものである。ところが、アメリカのやることにはみな反対と言っている、社会党や共産党の連中が、総理大臣や大臣達の靖国神社参拝に反対しているのは、アメリカがやったことを支持しているわけで、全く筋が通らない。この時アメリカは、学校で、修身歴史、地理を教えるはならないというきびしい指令を出した。それが今も学校教育では守られているわけであるが、アメリカのやることにはみな反対というなら、終戦後アメリカがやった占領政策を全部撤廃しろと言うべきであるのに、アメリカの占領政策をそのまま受け入れて守り、それでいて反対と叫ぶのは筋が通らない。

四十歳以上にもなって、社会党だ共産党だと騒いでいる人達は、低能児だと私が言うのは、筋の通らない考えを持ち、行動する人達は、非常識な頭の弱い人達と言って問題はあるまい。天皇制は占領政策上、利用だけ利用して、その代り、骨抜きにしようということで、日本をキリスト教国とするために、マッカーサーは天皇に聖書を読ませ、アメリカ本国から宣教師を大量に連れてきて伝道させ、豪華な聖書を三千万冊、日本にバラ撒いた。マッカーサーが占領政策の先頭に宣教師を立てたというやり方は、西洋諸国が東洋諸国を植民地にするためにとったやり方と全く同じである。東洋諸国の場合はある程度成功したが、日本の場合は成功しなかった。天皇はクリスチャンにはならなかった。天皇はアショカ王の生まれ変わりであるし、また国家の伝統を守る立場上、現在のキリスト教には、なじみ難いものがあったわけである。天皇制の力を弱めるために、極東軍事裁判で戦犯追及が行なわれ、国家主義者は悉く追放され、絶対に公職につけないということになり、右翼を弾圧し、その代り、中共に逃げていた野坂参三を連れてきて、日本の刑務所に収容されていた左翼主義者を解放し、労働運動を助長した。

ナショナルの松下幸之助氏が、松下にも労働組合ができるというので、発会式に出て行ったら、社会党の加藤勘十氏が、「なぜ出てきたのか、日本の社長で労働組合の発会式に出てきたのはお前だけだ」といったという。このことは、社会党、共産党が労働組合をつくるのは、経営者と対立して闘争させるためであって、経営者と調和し協力するためではないということが一番よく現わしている話である。中国大陸では、蒋介石軍が勝つとアメリカは思っていたが、毛沢東の中共軍が蒋介石軍を蹴散らして、遂に蒋介石は台湾へ逃げ込んだ。昭和二十年九月、広東で私の部隊が蒋介石軍によって武装解除されたが、出来事の記憶中心になったのは、アメリカのカリキュラム制度を取り入れたことや、テストのあり方にも原因がある。マルクスの共産主義が失敗であったことは、ソ連・中共が事実をもって証明したのに、依然として共産主義を主張する教師がいることは、教師達がいかに歴史に無知であるかを証明していることになる。そういうことを考えると、無知な教師に教育を受ける子供達は可哀想である。そうであればあるほど、親がしっかりしなければいけない。ともかく今日まで日本はなんとも守られてきた。これからどういう形で守られてゆくのか。日本に正法がある限り、天上界は正法を守るために日本を守られるであろうが、将来の変化もまた楽しみなことである。」

「日蓮は、五世紀の吾将（中国）、釈迦の時代は上行菩薩だった。」

「日蓮という人は、五世紀の中国時代に「吾将」という名で、仏教を広めた方であり、二千五百年前の古代インドの時代は、大日如来の弟子で「上行菩薩」と言われた菩薩界の人」と、高橋師は言い残した。

ガランダ長者（紀元前五百年、古代インド） 中将（五世紀、中国） 弘法・空海（七世紀、日本）

上行菩薩（古代インド） 弟・吾将 姉・林将

日蓮

日蓮 「一二二二～一二八二年」



日蓮像（身延山久遠寺蔵）

蒙古襲来を予言、『立正安国論』を著述した。二十世紀の日本が、第二次世界大戦に突入することを予言し、二十一世紀初頭に世界最終戦争（ハルマゲドン）の発生までも予言しているが、主なる予言群をあげてみると、

- 未来型公害
- 自然破壊
- 氷河期へ
- 食糧不足
- 巨大地震
- 宇宙大異変
- 第三次世界大戦

○生物兵器

日蓮宗の開祖であると同時に予言者でもあったが、日蓮は菩薩界の人であり、予言は上段階へ行くほど正確無比になる。出口王仁三郎も菩薩界の人で、園頭師は菩薩界と如来界の間で、高橋師は如来界の人である。昭和四十八年夏、熊の湯の自主研修会では、次のような講話がある。

「日本の有名な坊さんで、菩薩界へ行っている人は少ないですね。日蓮さんもね、永いこと自分から地獄界におった人ですよ。菩薩界に入らなかった。自分の蒔いた種が、その後、多くの大衆を狂わしてしまったという責任を負ってね。あの人は、あの世では知らない人はいませんね。余りにも有名で謙虚なんです。今の創価学会のやっているようなものではないですよ。心のきれいな人達は、例え貧乏でも立派な人が沢山いる。だから、金額の多寡や地位が人間の値打ちを決めるんじゃないんです。」と。

また、『人間・釈迦』第一巻（偉大なる悟り）には次のように書かれている。

「このために、あの世のボサター（菩薩界の人）にしても、下界に住みなれると、しばしばその現実に幻惑されて、役目を果たさず、帰っていく。あの世に戻ってから「シマッタ・・・」と後悔するのである。如来と称する人の中でも、そうしたことが間々あるのである。それほどこの色界（現実社会）は難しいところである。また衆生済度の心に燃えながらも、誤った方向に、人を引き連れてゆく場合も、しばしば起こる。近くでは日蓮がそうである。日蓮はボサターである。ボサターの心は、本来、広いものである。広くならなければ、ボサターの世界に住むことができない。その日蓮が、法華経を広めることに急なため、他の宗派を排撃した。念仏無間地獄、禅天魔とって既成宗団を激しく非難した。このように、いくつかの間違いを犯した。日蓮は、あの世に帰ってから、約六百余年間、現象界でつくり出した陰影のアカを落とす修行に励むことになったのである。」と。

十三世紀蒙古軍の大遠征時代、鎌倉時代の文永の役（一二七四）、弘安の役（一二八一）の襲撃を事前に予告して、神仏に祈る日蓮の姿は人々に大きな衝撃を与え、法華宗の開祖として武士や庶民の中に広まっていくが、高橋師は次のように言っている。

「日本では、特に日蓮の出た当時などは、厳しい封建社会の環境でありました。そういった時代に正しい法が説けるのでしょうか。いわんや、私達がかつての封建時代に、今のようなことを言ったらどんな事態になるのでしょうか。」と述べているが、この世に肉体を持って人類を導く使命を持った人どうしの、思いやりというか、情愛を示したのである。法を説く機根というものがあるということ、しみじみと考えずにはいられない。そして、日蓮は、今日、日蓮宗をはじめ創価学会や立正佼正会などに属する三千万余りの信者数を持つ基礎をつくったのである。

[Home](#)

「池田大作・創価学会名誉会長は、蜂須賀小六だった」

信次師は池田大作名誉会長は、前世が「あの」蜂須賀小六であったと言い残した。

池田大作氏のプロフィール

池田大作氏は昭和三年一月二日、東京府荏原郡入新井町の海苔製造業者池田子之吉の五男として生まれ、名を「太作」という。実家は貧しく複雑であった。小学校六年間の欠席数は十六日で、元来、身体は強かった。昭和十七年に高等小学校を卒業と同時に、兄が勤めていた蒲田駅近くの新潟鉄工所に就職、過労がたたって結核となる。昭和二十年、旧制東洋商業学校に編入学、二十二年卒業、昭文堂印刷をやめ、蒲田工業会に書記として就職、二十二年八月創価教育学会に出席、学会幹部の小平芳平氏に討論して負けたらよく従うということで入会（入信日昭和二十二年八月二十四日）。昭和二十三年、後の富士短期大学に入学、その後退学、（昭和四十二年にレポートを提出、三十九歳で卒業）。昭和二十八年「太作」から「大作」へ改名。以後創価学会会長から昭和五十四年、名誉会長となり現在に至る。

蜂須賀小六は、「太閤記」の中で、夜討強盗の親分、そして「絵本太閤記」では夜討おいはぎの親分として知られ、日吉丸との出会いから、後の豊臣秀吉の配下となって戦乱の世を駆け抜けていった。矢作橋の上に寝ていた浮浪の孤児が、やがて蜂須賀小六を名乗り、大名となるが、今世の池田大作氏が、功名心、地位欲、金銭欲が前世と同じような人生を歩ませることになったことは不思議である。

これより、「信次師と創価学会」に関するものを列記してみたい。

「信次師は池田大作氏に手紙を書いた」

昭和四十八年の頃、聖教新聞編集の関係者が信次の講演を聞き、個人指導を受けた。信次師は次の通りに言った。

「あなた方の池田大作会長は、今ハワイのロイヤルホテルで創価学会の組織改革について話し合っています。このことはあと三日して聖教新聞に発表になります。ところで、あなたは、あなたが私の所に来たということが原因で臆になります。」と言った。

そこで信次師は池田大作氏に手紙を書いた。「あなたは〇月〇日、ハワイのホテルの〇〇号室で、北條という人と秘密会談をしていた。あなたのことは全部知っている。あなたは宗教家としての仏の慈悲と言っておきながら、〇〇氏が私を訪ねたというだけで、なぜ臆にされたのですか。〇〇氏には、妻もあり子供もあります。自分の部下を路頭に迷わせるようなことをして、それが慈悲ですか。〇〇氏を復職させなさい。復職させないなら私にも考えがあります。」という手紙を書いた。それから、〇〇氏は復職したが左遷された。月刊『正法・高橋信次師こそ真の仏陀であった』より引用

当時、その話が学会員に広がり、「殺す」という脅迫状が来始めた。そのために、信次師の講演会に警備が三

回配置されるということがあった。

次に、信次師の言葉の中から創価学会批判と思われるものを、引用してみたい。

○お釈迦様の教えの中に、念仏を唱えて阿弥陀様を拝めと、どの教典に書いてあるのか教えて欲しい。仏教の根本は、苦しみから解脱する道を教えているのであって、正しい実践生活を説いているものである。従って、偶像や曼陀羅を拝めとは、どの仏典にもないはずである。

○題目鬭争とは、仏弟子の取る行為ではなく、自己宗派保持のエゴイズム以外の何物でもない。仏性を忘却した狂信者とししか言えないのである。多くの信者の心は、阿修羅界に通じているため、心の安らぎなどないであろう。「釈迦の仏法は力を失い、現代社会では人を救うことはできない」と言いながら、彼らはその経文だけを借用している。矛盾もはなはだしい。地湧の菩薩は、強引な折伏によって仏法を説くことはしない。なぜなら、鬭争と破壊の想念行為は、菩薩の心ではないからである。

○偶像の神や曼陀羅の仏は、すべて人間の知恵が造り出したものである。それは、多くの宗教家達がでっち上げた神であり、仏であって、大自然を創造し支配している神とは全く関係のないものだといえる。

○形式的な空念仏や空題目で人を救うことはできない。経文を上げる祈りのみが信仰ではない。心を失った勸行などしない方が、心の安らぎを得ることができるのだ。他力本願によって人の心を救うことはできない。法然や親鸞、日蓮の時代における人々の心は、権力に反抗できない無智者がほとんどであり、南無妙法蓮華経や念仏を唱える他力の中で、神仏の存在を知らしめ、それによって生死の苦しみを離脱させるという以外に救うことができなかつたからである。この逃避と自己保存のお題目で、人類を幸福に導くことはできない。

○人間性を失った宗教も、麻薬にもひとしいものだ。何人を折伏すれば、何人を導けば、という約束では、人間の幸福は得られないということを知るべきではないだろうか。自らが悟らずに、どうして他人を導くことができるだろうか。彼らの宗教は、正法ではなく、商法にたけている人々の手口だということ、私達は悟らなくてはならないだろう。神仏が金を欲するか。否である。人間が欲しがるのである。指導者の地位と名誉のために欲しいのだ。本当に、社会人類のためになる布施なら良いが、宗教指導者のふところをこやすためのものであってはならないだろう。社会人類の幸福を考えて実践しているものであれば、布施の価値も現われてくるというものである。大神殿、大仏殿は、造るべきものではないということ、私達は知らなくてはならない。

○Q「題目や念仏はどうしていけないのですか」

A「お経は人間の正しい生き方を教えているものです。唱えるものではないのです」

題目や念仏はその意味を良く知り、それを人生の中で実践していくものである。古代インド語で語られたものが中国の漢字にかえられ、それを日本語読みにするのだから、意味がわかるはずもない。意味もわからぬものを何回あげようと、何の意味もないことを知ることである。写経についても同じである。念仏をあげよ、写経をせよと誰が言ったのか。日本の先人が言ったことで、仏教の開祖であるお釈迦様は、そんなことをおっしゃったのだろうか。当時のインドの衆生にわかり易い方便として説かれたものが、後のお経となった。お釈迦様存命中には、お経はなく滅後、何百年かにつくられたものであるが、それ程むずかしいものであったと皆さんは思われる

だろうか。

次に信次師の「信仰と貧富」という「ことば」を聞いてみよう。

「世間一般を見ると、信仰を持たない者が恵まれ、信仰者が不幸で貧しいという現象にどうしてぶつかるのかと申しますと、まず神信心のない人達が、比較的恵まれている理由は、その生活態度が自力的だからです。依頼心が少なく、原因と結果について自分なりの見解を持っており、ものの成否は努力の結果とみているからです。それだけに自己中心的であり、念力も人一倍強く働いています。恵まれた環境は、そうした諸条件が生み出したものといえよう。ところで人の幸、不幸は主観的なもので、第三者が見て、経済的に恵まれているから幸せかという、それはわかりません。一方、信仰を持ちながら貧しいというのは、これまで十のうち十までが他力でした。先祖崇拜と祈りと読経でタナボタ式に幸せをつかもうとしました。拝めば救われる、病気も治る、金も入ってくるとして、現実の生活まで犠牲にしてきました。生活に積極的に立ち向かってゆく傾向が少ないようです。そこで、生活を豊かにするには、まず正道にかなった生活態度が絶対必要であり、誤った信仰なら、しない方がよいということになります。」

同じく、「信心」という「ことば」も聞いてみたい。一九七五年、中京秋季講演会から高橋信次師。

「信心は善なる己の心を信ずることであり、人間の造り出したところの神社仏閣に信仰の対象があるのではないのです。我々の住んでいるこの地上界は大神殿であり、神のからだなのです。それを人間の不浄な金を集めて大神殿を造ったところで、それがなんになりますか。それだけの経済力があるならば、世界のどの位の人々を救済することが出来るでしょうか。我々は目覚めなければならぬのです。我々は金の、或いは権力の力によって人間を制御することは出来ないのです。人間の心は本来は自由なのです。武力や権力によって人間の生活環境をたとえ支配したところで、その権力者が去れば、自ら自由な心の芽生えは、やがて自然界に調和と安らぎの自由を人間は生み出してくるものなのです。皆さんは勇気を持って、自分をしっかりと見詰める時が来たのです。」、と。

< 創価学会の問題点 >

池田大作氏率いる創価学会は五百五十万世帯、一千七百万人の会員を擁し、国民総人口の一割五分を占めるといふ。日本の各宗教団体の自称、公称信者数を加えると総人口をはるかに超えてしまうというが、それにしても目を見張るような巨大宗教団体ではある。創価学会批判や池田大作氏自身の批判など、山程の本も出ているので、それを参考にしていれば良いが、何故に、このように巨大に拡大されたのであろうか。それは他力本願の現世利益を願う人が、戦前戦後を通じて沢山いたこと、そして既存の宗教、新興宗教の中には、どこもドングリの背くらべで、宗教の誤りを覚醒させる程の宗教がなかったからである。

このように見ると、混乱した時代に、正に時流に乗ったのだとウェブ・マスターは考えている。しかし、何が正しく、何が間違いかわからないまでに混乱している宗教を修正するために、この時と符号したように高橋信次師は肉体を持った。第二次大戦が避けられなくて、悟るのが十年程遅れたと聞くが、四十八歳で昇天するまで、宗教の誤りを指摘絶叫しながら息を引き取った。高橋師は実に控え目な方で、直接批判は避けたが、「縁なき衆生、度し難しなんですよ」という最大級の残念がりかたをした。創価学会のみならず、各宗教団体にも云えることだが、ここで創価学会の四つの大きな問題点を明らかにしたい。

第一点は、念仏をあげれば救われるという間違いである。人は念仏や経文をあげることによって救われることはない。間違いがあれば、その原因を根っこから取り去ってのみ、修正され幸福になってゆくのである。永い因習と生活の中から、そのように思って来ただけのことである。

第二点は、現世利益にあづかろうとする欲心の信者から、神仏の名を借りた金集めの間違いである。神仏は金はいらない。金を欲しがるのは人間達である。教祖と取りまきが私腹を肥やし、何百億円かの目を見張るほどの神殿をつくり威圧する。迷える衆生の血と汗から生まれた欲心の金で、いかに巨大で頑強な建物をつくらうと、永く続くはずもないが、「いずれは廃墟になる日が来る」と高橋師は言ったのである。

第三点は、お経によって救われると信じて、死んでいった人達の問題である。各宗教団体によって、お題目を唱えたり、経文をあげることによって救われると、信じて亡くなった人達が沢山いるのである。自らの思念と行為によって地獄に落ちた信者の霊が、題目を唱えても経文をあげても救われないと知って、どうしたら自分は救われるのかと、宗教団体の本殿や本部へ、これらの暗い霊達がゾクゾクと詰めかけるのである。寺社がなんとなくヒンヤリするのは、巨木によって太陽の光線がさえぎられるという理由ばかりでなく、救われない霊達が、助けを求めて来ているからである。宗教とは宇宙に示す心の教え（宗は \cup と示・宇宙に示す、教・教え）と高橋師は説いたが、寺社が人の道を説き、生き方、人生のあり方を説く場所であれば、霊域もサラリとして、さわやかなはずである。ところが、寺社においては、意味もわからない難しいお経を、仏像や曼陀羅に向かってあげ、葬式仏教、観光仏教になっている。これは、永い年月をかけて人間自身が、そのようにしてしまったのである。

第四点は、限りなき野望に対する問題である。これに関しては、色々な本も出ているので参考にして欲しいが、事業宗教、政治宗教である。ウェブ・マスターは、問題をはっきりさせるために、大きく四つに分類した。この大きな四点ですべてがわかる。高橋師が盲目の我々に、すべてを説き明かしてくれた為に、正しく判断することが出来るようになった。だが、それまでは、あの世のこと、霊的なことに無知で、随分と遠廻りすることになった。この四つが大きな問題点なら、この四つを反省して、修正していけば、正しく変えることが出来るのである。天上界からの修正の手が打たれる前に、英知をしぼって自から修正することである。神の使者・高橋師は警告を発し、日本を愛するが故に修正を求めたのである。創価学会問題を取り上げたのは、最も信者数が多いからである。他の宗教団体も五十歩百歩であり、他事ではない。多くの信者が、誤り教えられることは、それだけに問題は大きいのである。高橋師は言っている。「間違った教えを説く宗教家、間違った思想家、戦争をつくり出した指導者は、無間地獄に落ち、そのことによって地獄に落ちた人達が一人残らず天上の世界にもどるまで、暗黒の最も厳しい地獄の世界に住する」と。自ら蒔いた種は、自ら刈り取る。これが神理・「法」である。先に、「天上界からの修正の手が打たれる前に修正すること」と、述べた。高橋師はモーゼの時代はヤハベ（ヤーベ）、イエスの時代はエホバとして、天上の世界から教え導いたことを明らかにしたが、昭和五十一年五月の富士みどりの休暇村での講演を聞いて頂こう。

「このように、天上の世界から次々と協力しながら、間違った宗教団体を潰す為の方法をとります。そして、或る時に、ヤーベ（ヤハベ）の命により、エリヤは自から、やがて雨が降ってくることを予告します。そして、彼は山に登り、一心に自分のような力のない者に、このような事は出来ない、なんとか私にこの力をお与え下さいと、彼は一生懸命にヤーベに祈ります。その時、たき火をしている所に石の玉がピューツと光と共に落ちこちます。その瞬間に於て、バールの塔は全滅してしまいます。四百数十人の人達は、或る者は感電死し、ある者は大衆から殺されて、完全に自滅してゆきます。正法というものは、最終段階にはそこまでいくのです。しかし、私達は人間の犠牲を出して、そこまでやってはいけません。犠牲を出さずに真の道を、人間に目覚めさせる為の実践力と行動力が必要になって来ます。皆さんは、その為にも、その準備に自己を確立して欲しいのです。」と。

< 創価学会に關係の深い大本堂が壊滅する >

(昭和四十八年七月、八起ビルにおける講師幹部研修)

「日本列島は危険な状態になっています。駒ヶ岳、木曾、浅間、桜島、三原山、阿蘇等が時々爆発しているのは、実際は浜松附近から遠州灘、関東にかけ地震のエネルギーを、ああいう形で分散し、発散させて日本沈没を防いでいるのです。地球の内部にはマントルがあって、何万度、何千度というマグマが対流しています。それを海洋の水や、雨が地中にしみ込んで冷やしてしまいます。その水が地熱で温められて温泉となるのです。この地殻の中からのエネルギーが、地表面に近く噴出してきて、ある程度たまと爆発する。しかし、地球のエネルギーは、太陽から比べたら問題になりません。何万分の一です。最近、富士火山系の温泉の温度が、少し高くなっているのもそのためです。この八起ビルをつくる時に予告されています。たとえ、どんな地震があっても、倒れないように三階の所に十字架が入れてあり、強度を強くしてあります。しかし、関東を直撃する地震は起こりません。大正十二年の関東大震災は、当時の人々の心が遊惰に流れていたために、それに対する警告でもあったわけです。先月、キリストが私の処へ来て、「これじゃいけないから、関東に地震を起こさないと仕方がない、日本人は目覚めない」というので、「今、関東を直撃したら最低三百万人は死ぬ。それでは余りにもむごい、一時、その関東を直撃するエネルギーを除けてくれ」といって、地下に貯っていたエネルギーを伊豆半島から遠州灘よりに移動させて、それでも余ったエネルギーがあるので、それを日本列島全体に拡散して、死火山からも排出させるということになって、駒ヶ岳も爆発させたのです。しかし、いずれ地震と爆発が起こって、ある宗教団体の大本堂が壊滅することになっています。

< 日蓮と法華宗 >

宗教の誤りによって、余りにも問題が大きくなり過ぎると、自浄作用を受け、大本堂が壊滅することをこれまでに引用した。その理由は、第一に念仏や経文を唱えることによって、人は救われると説いた間違いであったと、信次師は明らかにした。法華宗の開祖日蓮と創価学会は、切っても切り離すことは出来ない。日蓮が残した予言の中に「そのとき、本化上行（ミロクの使者）は再びこの世に現われ、本門の戒壇を日本の中に建てるだろう...。」「やがて世界の中心となる本門の戒壇（ヨハネが聖なる都と呼ぶニューエルサレム）は天孫（アマテラスの孫ニニギ）の妃コノハナサクヤヒメの霊が宿ると信じられている富士山のふもとに、再びつくられるであろう...。」と、『悪魔の黙示録666』高橋良曲著、学研にあるが、池田大作創価学会は、国立戒壇建立を目くらみ、政治革命、王仏冥合を企図した。ところが、その大本堂が壊滅するというのである。世界の中心となるべき本門の戒壇が潰されるというから驚いてしまう。高橋信次師は「富士山が噴火する。今、大沢崩れの崩落が進んでいるのは、あそこの地表を削り取って薄くし、噴火しやすくするため、あそこから流れ出した溶岩が大本堂を潰す。そうやってはじめて、日本の宗教界だけでなく、日本人全体が本当の宗教とは何かを考えはじめる」と、言い残したが、唯、言い得ることは、何事も行き過ぎると修正の手が打たれるということ。そして、何事も忘れたところにやってくるということである。東京の直下型の大地震は起こらないと高橋信次師は言い残した。

昭和六十一年末の伊豆の大島、その後の島原と思わぬ場所から火山が噴火した。桜島や九重の火山活動など、正に、高橋信次師の言った、エネルギーを除ける為のものであろう。高橋信次先生の言葉の意味を良く噛みしめて欲しいのである。伊豆の大島は直接的には噴火によって人命は失われなかったが、そのことによって死期を早めた人もあった。そして、草や木が枯れ、困いにつながれた動物が死んだ。その後の、島原は痛ましい惨状となった。このように見ると、小さな火山爆発や地震は、移動することの出来ない植物を除けば、動物や昆虫は未然にそれを直感し、自力で移動して罹災をまぬがれることもできる。高橋信次師は「天変地異は、間違った思想や宗教の、神の光りをさえぎった、神の光の届かぬところに起こる」と教えた。天災と今まで呼ばれたものは、すべて人災であるというのである。平和な仲の良い人間の住むところには、動物も、植物も鉱物も総て協力を惜しまず、人間の楽しい生活に力を貸すのである。ところが、天上界は、日本の誤りを警告するためのエネルギーを、近くの大島で、遠くは鹿児島島の桜島で、そして島原で、その力を滅弱する。その地の人々にはまったく申し訳ない思いがするが、同じ国の同時代に生まれた者の共通の責任なのであろう。高橋信次師は、同じ国の同時代に生まれるということは、なさなければならぬ共通の使命があるからだと教えてくれた。

そうだとすれば、そのような宗教の拡大に力を貸した、我々の共通の責任なのであろう。それなら、人間の愚かな智慧によって生まれた宗教の為に、愚かな我々が責任を担うのは一向にかまわない。しかし、何の罪もない植物や動物や鉱物が破壊されることに対して、どのように人間は罪の償いをするのだろうか。かって、地震を恐れて長崎に逃げ出した故教祖が何百億円かの殿堂も造った。しかし、行き過ぎた、不調和な思想、宗教であるなら、どこに移動しようとする意味もない。その証拠に近くで噴火が起きた。何故なら、それは天からの指令であること、正確無比なものだからである。それが天からの指令である証拠に、地震学会、火山学会にしても、何がわかったと言うのであろう。何の予知も出来ないばかりか、手も足も出ないダルマさんなのである。このように言ってしまうと、二べもないが、人間が天変地異は人災であると知った時、この分野の研究は、飛躍的に発展す

るに違いない。そして高橋師は言った。「もし東京に大地震が起こったならば、皆人と共に人を助けるだけ助けて、そして僕も皆人と一緒に死んでいきます。」と。人類を正しく導く人の心がここにある。なのに、人間に間違っただけを説いて、何の責任も取らない宗教家のなんと多いことか。だから、間違っただけの思想家、間違っただけの宗教家は神の光を完全に閉ざした、無間地獄で反省することになると高橋師は言ったのである。それでは、昭和四十九年、中国の唐山の大地震で、三十万とも五十万ともいわれる人が亡くなったその直後に書かれた「地震」についての高橋信次師の「ことば」がある。この唐山の地震については、それが起こる前の年に、高橋先生から起こることを聞いた、と園頭師は書いている。

「地震」

「マグニチュード5以上の地震が、東海地方を襲うかも知れないとの噂がひろまっているようだ。地震不安が太平洋ベルト地帯一帯を蔽っている。そこで、地震は起こるのか、もしあるとすればその対策をどうしようと誰しもが思う。気象庁のある退職者は、関東以西はいつでも地震が起こり得るとして、地震の少ない東北地方に隠蔽してしまったようだ。関東ははこわくて仕方がないというのだ。地震のない土地に行けば、老後は安心して生活できるということのようだが、この人には病気の心配はないらしい。ただただ地震だけが恐いらしい。地震が来る前に心臓発作で倒れるなど夢にも考えないらしい。地震はなぜ起きるのか、それは大地も生きているからである。人間の体内には血管が縦横に走っている。そして、絶えず血液が流れている。大地の下でもまた血管が無数に走り、火山に見られる何千度という溶岩が、地表のはるか下を流れている。火山はこの溶岩が地表に表われたものだが、なぜ火山活動が起こるかである。それは地上の圧力が地下に加わり、いわば血管を圧迫するためである。地震もまた、地上の圧力によって地下の血管が収縮するため、それをハネ返そうとして起こるものだ。では、地上の圧力とはなにか。それは人間の心のあり方にかかわっている。地表を取り巻く人間の生活意識が大地に圧力をかけている。この圧力は、人間一人一人の偽我（自己保存）によってつくられるものだ。つまり、地震や火山を生み出すエネルギー - を地下にたくわえているのである。だから、一定の時期がくると、元に戻ろうとして揺れ動く。

こういっても多くの人には信じないかもしれない。現代科学はさまざまな見方で、地震や火山活動をとらえようとしているが、物理現象の背後には、常に人間の意識が強力に働いているということを理解するようになれば、万象の姿がハッキリととらえることができるだろう。ちなみに、月や火星に大地震や火山活動が起こっているだろうか。月や火星も、地球と同じように何千度に熱せられた溶岩が活動しているのだ。しかし、大地震も火山の大爆発も起こっていない。地表はいたって平静そのものであり、平和である。地球だけが常に騒がしく、さまざまな災害をくり返している。中国大陸は日本と異なり、地震はめったに起こらない。それが各地で頻発した。被害も大きく、犠牲者も相当にあった。動物の動きで地震を事前にキャッチし、避難したと言うが、そうだろうか。政情不安の火に油を注がないための工作だったようだ。アトランティス大陸は、火山の噴火と大地震で海底に沈んだ。ボンベイの町も同じである。その昔、栄えたエジプト、メソポタミヤの文明も、洪水、大地震、火山の降灰によって埋没している。当時の文明の手がかりは、地下から発掘した建物、青銅器、土器、石版瘻がによって偲ぶことができよう。いづれにせよ、地震は地上の人々の想念行為によるものである。地震や火山を防ぐにはどうするか。その手がかりを掴むには、大地震が起きたその時代の人々の社会生活を知ることが、理解を早めカギとなるだろう。いたずらに地震を恐れ、転居しても、地震は追いかけてくるだろう。」

東京の直下型の地震が来ると予告して、地方へ引っ越しした元・気象官が昭和六十二年三月に本を出された。高橋師の記述の人である。その中で、昭和六十一年の三原山噴火を予告したが、二カ月遅れで自分の予想が当たり、今度は、富士山が爆発して、東京は直下型M8の地震が来て壊滅する。それは昭和六十二年の夏とあった。十年余りも何ともない。高橋信次師の予告の通り、いつかは富士山は爆発する。それも三原山のように、新しい火口より噴出することになるかもしれない。しかし、東京の直下型の地震は起こらないと予告した。勿論、富士山爆発のための地殻の鳴動による小さな地震はあるかもしれない。大正時代の関東大震災は、主都東京は日清、日露、第一次大戦を決定し、第二次大戦へと突き進むという、民衆の心も遊惰に溺れていたための人災であったと、高橋信次師は教えた。しかし現在の主都東京は、問題はあっても、その当時ほどではない。将来起こるであろう富士山爆発は、創価学会の問題点への警告だと高橋信次師は言ったが、正法を遵法する人の受皿が出来た時に、起きるのだと言ったことも注目しなければならない。この気象官の本を取り上げた理由は、例え、それが如

何に事実になろうと、人心を混乱させるだけの本は困るのである。もう一度申し上げたい。起きるには起きる理由があることを知って、民衆よ、心安らかに人々には愛深くあれ。

また、園頭師は、「正法会」(元国際正法協会・SOUL)を発足させた時(昭和五十三年)、「日蓮上人よ、心あらば創価学会運動に歯止めを掛け給えと祈った」と。また、平成一年の元旦、あの世にいられる日蓮上人に「あなたは自分の名前を池田大作氏に利用されても、なんにもしないのですか」と祈ったと、月刊『正法』にあるが、池田大作氏が後継者と目していた二男が胃穿孔で急死されたのは、池田大作氏自身の反省と、創価学会拡大への警鐘であったろう。ウェブ・マスターは、「文化祭」の八ミリ映画等を見せてもらったことがあるが、「このフィルムを若い人に見せると、心を動かし入信の動機となる」と言った信者の言葉を思い出す。今や創価学会は、内部問題で大揺れに揺れている。大石寺との問題、小沢一郎氏との新党問題、レイプ問題、再度の公明党呼称など、話題には事欠かない。余りにも度が過ぎると、ここという時に、自浄作用として内部から問題が起きる。それでも完全にウミを出し切れないと今度は、内部からだけでなく、外部から大きな問題が起きるのである。某週刊誌は「実数は五百万人に満たないのでは？」と報道していたが、平成七年には、またまた二千億円が集まったと報じた。その浄財(?)の一部は、大作氏自身の箔付けのために、メダルや賞を買う為に使われるとか。かって、氏はトインビ - 博士と対談したが、博士の娘氏は博士の名誉の為に、池田大作氏批判の会に名を連ねられた。そして、平成六年には自民党の代議士達が立ち上がり、園頭広周師は内藤國夫、山崎正友氏等と共に、南は鹿児島、北は北海道まで全国縦断の講演会「池田大作氏が救われる道」を開いた。また、園頭師は『公明党、創価学会は池田大作氏が死んだらどうする』、『池田大作氏の人相が悪くなっている』、『池田大作氏を救うのは私しかない』等の小冊子を出版した。

<この項のむすびに>

一つの関連性を持たせるために、池田大作氏、創価学会、火山噴火、地震についての高橋信次師の「ことば」を羅列した。マトメてみると暗すぎる。これはもう強迫である。不安に陥し入れようとする行為は、決して心ある者のすることではない。良因は良果であり、悪因は悪果である。これを「原因と結果の法則」と高橋師は説き、お釈迦様は「因縁の法」と説かれた。この因縁の世界に住みながら、因縁を超える道は慈悲と愛の道を生きてことであり、反省は神の慈愛なのである。また、神の光の届かないところに天災は起こると高橋師は教えた。だから、地震や火山噴火を不必要に恐れることはないのである。自らの心を神の波長に合わせることである。地震や噴火に被災した人達の中には、傷ついたり、亡くなる人もいるかもしれない。でも、その中には、道徳的には一点の非の打ちどころのない人も、「あんな立派な人が...どうして」という人もいるかもしれない。そうしてみると、この世のことだけを考えると辻褄が合わないのである。運だとか偶然だとか云っても、このことについて説明できる宗教はない。現在の宗教は道徳の域を脱していない。道徳は過去世を問題にせず、この世だけを立派にすれば、それで良いというのである。しかし、高橋師が説いた「正法」は違う。正法は過去世のことも問題にする。そのことによって、説明のつかなかったことが、はっきりとするのである。高橋信次師が教えたように、偶然ということは本当はないのだが、その人に心の原因(因)があるから結果(果)として傷ついたり、亡くなったりする人が出てくるというのである。人それぞれの過去世という魂の遍歴の中で、その遍歴によって記録された想念と生活行為があり、そういう記録された因縁によって、その人の気質がつくられ、性格がつくられ、能力などが形づくられるのである。その心の一部に記録された過去世の遍歴を、今世の想念と行為が因果をつくり出して、そういう縁に逢うものはその縁から避けられないということになり、そこに一つに集まるという運命を避けられなかったということなのである。

そして、もし我々がそういう縁に逢いたくなければ、そういう縁に逢わないような心を持つか、それを修正する方法を知っていれば良いということになる。ある宗教団体にいたっては、この教団の教えを信じることによって、決して神の選別にあわずにすむとか、我々だけが生き残れるのだと言う。つまり、「神のふるいかけられて」とか「神に選ばれて」と言うが、神は決して人を選び好みをされる筈はない。太陽が悪人にも善人にも等しく照るように、「えこひいき」はしないのである。「神に選ばれて」という考え方は、神が罰をあてるという考え方に共通している。これは、今世と過去世に於ける、その人の想念と行為の結果が、現象化されるに過ぎないのである。神に波長を合せ、光に包まれた正しい生き方をする人々には、天災は起こらないということを知ることである。正法を遵法する人がいる所には、天変地異は起こらない。例え、そのような縁に合うことになっていても、必ず守られるから不必要に恐れることはないのである。その為には、神の子の自分に立ち帰り、今を正しく生きるように努めることである。そのことによって、今世の業(カルマ、心の傾向性)は修正される。そして次には、過去世の業を修正する方法を知ればよいということになる。それでは、高橋師が示した過去世の業を修正する方法を、園頭師の指導により伝えたい。

< 過去世の業を修正する祈りと方法 >

つぎのように祈る

「大宇宙大神霊、仏よ、
 に光をお与え下さい、心に安らぎをお与え下さい。私達は、神の身体であるこの地球上に、心と心の融合された仏国土、ユートピアを建設せんがために、この地上に生れて来ました。然るに、この世に生れた環境、その後の教育、思想、習慣、それらに依りて、ある時は怒り、ある時は憎み、ある時は悲しみ、自己保存、自我我欲に執われて、知らず知らずのうちに大きな罪を犯してまいりました。神よ、これらの罪をお許してください。実在界の諸如来、諸菩薩、光の天使、
 に光をお与え下さい」（このように祈る。
 には名前を入れる）

この「これらの罪をお許してください」という祈りの中に、過去世に、また今生で、知らず知らずの間に犯した。また今は既に現在意識では忘れていたところの一切の罪をお許してくださいという懺悔反省の心が込められており、二度と間違ったことはしないという誓いの心が込められているのである。何度も言うが、高橋師が「反省は神の慈悲である」と教えたように、知らず知らずのうちに、また過去世の罪の業が潜在意識に記録されている人にとっては、この反省によって心の曇りを払うと、その奥即ち自分自身の本当の自分である神の子の意識の光が、外に輝き出してくるということになり、類は類で集まるという法則によって、暗いものとは波長が合わなくなり、自己、天災には会わなくなるのである。過去世から今生に至るすべての罪に対する懺悔、反省、それが「知らず知らずのうちに犯した罪をお許してください」という謙虚な祈りになってこないといけないのである。この世に生れて良いことをしたその力よりも、過去世につくってしまった悪い業の力が強いと、良いことをしていても悪いことが現れるということになるのだから、私達が、幸福な人生を送るためには、良いことをすることは勿論、どうしても過去世の業を修正する方法を知っておかなければならないのである。

いまから十年前の平成元年九月、ウェブ・マスターは大石寺を訪ねた。まだ創価学会との確執が表面化していない頃だった。残暑の厳しい日曜日、思ったほどの人出はなかったが、外来者のワッペンを胸につけ視察した。目を見張るような殿堂が、広い敷地に所狭しと建てられている。その日は休日のために、空をつくような大きなクレーンが、腕を休めた格好で、新たな建設がいくつも進行中だった。大本殿の入り口では入場者のカメラ、ビデオ等の記録機器の一時預かりの告知がなされ、敷地内の要所には腕章とメガホンの係りが何人も立っていた。その日は教団内部の問題とは裏腹に、雲一つない吸い込まれそうな秋晴れだったが、池田大作氏率いる創価学会は、ことある毎に千五百億円ともいう金を集め、借金地獄に泣いている哀れな信者も多いと聞く。「幸福」という言葉と引き換えに、金を強制的に上納させられる信者と、「追いはぎ」に身ぐるみはがされる人にと、どれだけの差があるというのだろうか。「あの」夜討追いはぎの親分・蜂須賀小六は、池田大作・創価学会名誉会長として生まれ変わったのである。

Home



「学者・福田正治氏はインドの竜樹（ナラジュルナー）だった」

高橋師は次のように言い残した。

「近年では学者の中の福田正治氏はインドの時代、竜樹（ナラジュルナー）と言われた過去世を持つ人です。ナラジュルナー（AD二世紀）は、バラモン種に生れたのち、言い伝えられてきた仏教をまとめ、五つに分類したが、やはり自分で悟り得なかったために、ブッタの時代に現れた靈的現象を除いてしまっています。つまり、学問的に体系づけることで、かえって仏教を人々の心から離れたものにしてしまった、ということで、学問仏教によって、行いが伴わなくなり、智だけが発達して、心を失った仏教になってしまったということです。その行いをただ荒行という肉体行の方向に持って行ってしまい、本来日常活動の中にあるべき心と行いの八正道を忘れ去ってしまったのです。そして、中国の仏教や日本の仏教には、バラモンのヴェーダー、ヨギーストラなど、仏教でない密教までがその中に混合されてしまったのです。もともと仏教には、秘法などというものはないはずで、自力によって、自らの心を八正道の実践生活によって心の曇りを晴らせば、太陽の光が地上へ平等な熱光のエネルギーを与えているように、神の慈愛の光も、万生万物に平等に与えられているのです。自力があつてこそ、偉大な神の光によって満たされ、光の天使達の協力が得られるのだ、ということをおぼれているのです。「空」の世界こそ、実在の世界であり、すべてのものを作り出す根本だと言えましょう。むなしい世界から生まれるものは、むなしいものでしかないでしょう。因果の法則によって現象化されるのです。人生とは、むなしいものではないのです。」と。

竜樹菩薩は、釈迦の再来と言われ、八宗の祖と言われているが、高橋師は竜樹が「空」を説いたので、仏教がわからなくなったと教えた。そして、「そういう人が梵天であったり、菩薩であるわけがない」と園頭広周師は言う。

「フィリピンの心霊術師アントニオ・アグバオアはイエスの分身 だった」

高橋師は、「フィリピンでイエスの分身 が、肉体舟に乗って修行をしている。クラリオが守護霊をしており、指導霊はイエスの友人であるモゼの分身が担当している。」（『心の発見』）、と記述しているが、イエスの分身 は、世界的に有名な心霊術師（ヒーラー）のアントニオ・アグパオア（通称トニー）（一九三九～一九八二年）だった。

心霊治療と言えばフィリピン、と言われるほどに数多くのヒーラー（心霊治療者）がいる。その数、千人ともそれ以上とも言われているが、我国からも心霊治療団のツアーが組まれ、紙上を賑わせていた時代もあった。その治療効果に懐疑的な批判もあり、その摘出物が動物のそれであったとか、色々な物議をかもして、その内には話題にも余りのぼらなくなった。このアントニオ・アグパオア氏の心霊手術は、イエスの分身であっただけに、霊能は相当なものだったとウェブ・マスターは信じて疑わない。他のヒーラーのことは知らないが、キリスト教が伝えられているフィリピンに、時あたかもイエスの分身 が肉体を持ったのも、あながち偶然ではなかったろう。フィリピンにカトリック信者が多いのも、過去三百年間のスペインの統括が有ったからである。

イエスの本体は、今から百五十年後（昭和四十八年に、百八十年と）にシカゴに生誕するという信次師の予言があるが、トニーは、まさに、その先験的な役目を荷っていたのである。一九八二年（昭和五十七年）、脳出血のために四十二歳の若さでこの世を去ったのは残念だった。信次師は、著書に記述もあるように、イエスの分身のトニーに対しては、暖かく見守っていた。信次師が昭和五十一年に亡くなっても、釈迦の常随の弟子の舍利弗（現代の園頭師）と、大目連（現代の大谷氏）の二人によって、志は受け継がれていたのである。

それというのも園頭師は、インドの時代に大目連と言われたニューヨーク在住の大谷氏と、二五〇〇年ぶりの再会を果たした直後の「昭和五十三年十月六日から九日までの福岡県大牟田の研修会を終えると、そのままフィリピンへ飛んだ」と月刊『正法』誌に書いている。また、昭和五十七年の正法誌には、「フィリピンの心霊術師トニーが早死しました。昭和五十三年、ある人からトニーの将来について相談したいことがあるので、バギオに行って欲しいということで、行ったことがあります。その時に、今のようやり方をしていたら、トニーは力がなくなって、早死にするので注意した方がよいと言ってきたのでした。トニーも悪かったのですが、心霊ツアーで行った日本の女性も悪かったのです。自分から進んで身体を提供する女性と関係を持ったのです。そのため、トニーは昭和五十七年に死にました」という一文が載っている。如何に光の天使といえども、善と悪の入り混じったこの世での修行が難しいか、思い知らされる出来事であった。

信次師は、こう言っている。「本体が肉体を持つ時、分身の蒔いたカルマ（業）・心の傾向性をも同時に修正しなければなりません」と。百五十年後の、シカゴに生誕されるイエス（本体）は、この面でのカルマの修正にも、意を尽くさなければならなくなるのである。凡人である我々が本体であろうと分身であろうと、魂の兄弟達に迷惑を掛けないように、今を正しく生きねばならぬ。今世限りでない生命を永遠に続けるために、今を大切に生きることである。

フィリピンの歴史

フィリピンは、最近では政府の改変劇など目まぐるしく変わって注目された。フィリピンは、キリスト教国である。一五二一年（足利義種時代）、スペインのマゼランが、フィリピン群島に來航するまでは平和な国であった。一五四二年（足利十二代義晴）、スペインはフィリピンの完全占領を目指して軍隊を送るが失敗。一五六四年（永祿七年、足利十三代義輝）、軍艦四隻、兵員三百五十名、カトリック宣教師六名を率いて、一五七一年、マニラにあったモロ族の大酋長ソリマンを亡し、スペインはフィリピン征服を完了した。以来三百二十余年間スペインの統治が続くが、それからはスペインの搾取に対して原住民は反抗し、独立運動の機運が盛り上がった。その時、スペインの宣教師団が、原住民イスラム教の僧侶三名を法衣をつけたまま銃殺したことによって、原住民の憤激は爆発する。だが、それも押え込まれて成功せず、スペインと和解して「アク・ナ・パト条約」を締結した。その条約とは、

一、スペイン政府は善政を布き、住民の福利を図ること。

二、独立軍はスペイン政府からメキシコ貸八十万ドルを受け、独立軍首領幹部は、国外へ出ること。

こうして、独立軍の首領アギナルドは、四十万ドルを受けて香港へ去った。しかし、スペイン政府は、残る四十万ドルを払わないばかりか、ますます圧政を加えた。このような情勢下で、突然アメリカ・スペイン戦争（一八九八年、明治三十一年）が起こった。これは米国がキューバとフィリッピンを同時に強奪しようとした計画である。米国は、スペインを敗ったら、フィリッピンの独立を保証するとの密約のもとに、独立軍は米軍と協力してマニラを陥落させたが、またまた独立は認められなかった。米国は詐術によって、完全にフィリッピンを占領、のちグアム、サモア、ウェーク島を占領、ハワイを併合したのである。それ以来アメリカは、フィリッピンを拠点にしてアジア、中国大陸への攻略を計画することになる。そして、最近は何多の政変の後、女性大統領に統治され、現在の元俳優の大統領は御承知の通りである。

それではアントニオ・アグパオア氏の自伝、『わが奇跡の力』たま出版、アントニオ・アグパオア著から、半世記を要約引用したい。



トニー

一九三九年（昭和十四年）六月二日、フィリッピンのルソン島中部のバンガシナンのロザレス村に誕生。家は代々農家の敬虔なカトリック教徒で、フィリッピン大家族制の古典的な一例であった。幼児期の記憶は、「テキ」の来襲で、「どうして人間が同じ人間から逃げ隠れするのか、幼い頭を悩ませたものだ」とトニーは書いている。物陰にひそんでいると敵兵が来て隠れ家の案内を命じたが、山に向かって一杯走ると敵兵の気配はなくなった。日が暮れ二度と両親に会えないと思えるほど、次の朝もどンドン歩いた。二日二晩たって、トニーは見つけ出されるが、それは不思議な一人の老人が、東の山に居ると告げたからである。

五歳の頃、近所の子と遊んでいると、年上の子が木から落ちて、出血がひどく気を失ってしまった。薬草治療士が呼ばれても手におえそうにないので、無意識のうちにトニーは泥で汚れた手を傷口に伸ばし、そこに当てた。「だめよ！さわっちゃ」、トニーの手がグイと引かれ、男の子は恐る恐る股の付け根にさわると、「傷がなくなったよ」と大声で叫んだ。廻りを見ると皆がトニーをしげしげと見つめていた。それは敵兵が自分を最初に見つけたときの眼差しと同じで、次の瞬間、山中で過ごした夜の淋しさ、父母を求め、家に帰りたいたいあの淋しさが私を包んだ。」とトニーは書いている。これが初めての心霊治療の状況だった。傷を治してから不思議なことが起こり続ける。朝早く寢床を覗いても、もぬけの殻で、庭の木の上に寝ていたり、水の澄みきった小川や、果実のたわわに実る大木や岩場の暖かい場所へ、独りでいつのまにか行っていたりとの連続で、最初は両親もずいぶん悩むが、しばらくするとそれも慣れてしまう。時には、寝ずの番をして見張ったり、不寝番に立っても、あっというまに姿が見えなくなるのである。その内には誰も探さなくなり、五歳の子供にしては不自然な文句を独りで唱えるので、皆は不思議がった。

<お母さんの出産>

「トニー助けてえ」というお母さんの声に、トニーの両手は突然前に出てお母さんの腹部に伸びる。「さわっちゃだめだ」とお父さんは叫ぶと、トニーの両手は、お母さんの腹部の僅か二、三センチの上の所で宙に浮いて止ると、腹部にかざしたトニーの両手は麻痺したようになり、その時、産声があがり、妹はこの世に生まれ出たのである。それから、男女の二人の老人に出会うと、トニーの目をじっと見つめ、肩に手をおきながら「お前はモイセスの息子トニーだな。お母さんのお産に手助けしたのかい。天与の授かりものじゃ、授かりものじゃ」

と。

< 不思議なアポとの出会い >

トニーは七歳の時、黒染めの絹のような服をまとい、腰には汚れた白いヒモを巻き、長くのびた白髪も白いヒモで束ね、白ヒゲの一人の男がそばにいるのに気が付いた。その男の目は若々しく輝き、赤児のような笑顔だったが、全身には老いがうかがわれた。「おいで」と低い声が響き、言葉数は少ないが、言葉を選んで話すような話し方で、自分のことを隠者だと言った。「アントニオ、わしと一緒にいる限り飢えも渴きもせんぞ」と、トニーの手をとると山の中へ歩いて行った。やがて両脇がきりたった崖にはさまれたかっこうの、隠れ場所のような平地にでると、「二人が住むのはここだよ」と告げた。屋根をコゴンでふいた竹造りの小屋が建っており、周りには薬草や薬木が植えてあって、小屋に入ると低い竹のベッドが二つ。一つのベッドの上には、不思議なことに、トニーにピッタリの着替えがのっていた。ここでアポと一緒に暮らすことに気付くと、アポは、「アントニオ、その通りだ、神の導きなのだ、わかる時がくる、ようわかる時がくる」と言った。

< 心の修業 >

次の日からはアポはものの見方を教え始めるが、必要な時を除いて一切言葉を用いなかった。アポはトニーを一輪の花の前に座らせ、刻一刻と花の開く様子をじっと目で捉えよと命じる。それから、花が蕾から開くところが確かに見えるようになり、花の開く音を聞き、香りを嗅ぎ、味わい、最後にその感触を覚える事などを順次に教えるのだった。次にアポは瞑想することを教え、植物を対象とした精神集中が終ると、次は動物に学ぶが、狩りを楽しみ、捕獲するのが巧くなると、「お前は立派な獵師だ、だが動物にうち勝つ術を覚えたり、その弱点をつかみ、お前の知恵で動物の本能に対抗しようとしたりする事よりも大事なことは、動物の内なる調和を学び、お前自身がまた動物達と調和する事だ」と教える。次には、狩りに出た時は、細かに観察だけをし、鳥の場合は、木と一体になれたので、鳥の方が木の一部とみなし、身体にとまることすら珍しくなかった。

< 神様を飲み込んだ女の子 >

ある日、二人は山奥から出て小さな村を訪れると、もう戦争は終わっていることに驚く。山で怪我をして歩けなくなった男がいたので、アポに教えられた通りに薬草を傷口に当て、全身の力を解きほぐして内なる靈力を思いのままに流れ出させた。両手は例の半分麻痺したような感じで両手を引くと、腫れは引き傷口は乾きふさがり始め、男は笑顔を浮かべたので痛みの去った事が分った。次に診たものは、何かを飲み込んだために食べなくなり、栄養失調になっている女の子だった。アポはトニーの両手をその子の体の上にかざすと、ある一点で両手がぴたりと止り、飲み込んだものはここだとわかった。アポは磁性を用いて、それを引き出すようにトニーに命じた。どこから出るのだろうかと思うと、一瞬ヘソからだという考えがひらめき、「ヘソから、ヘソから出よ」と念じ続けると異物がとびはねているようで、ついに異物が飛び出すと、それは硬貨大の十字架のついた白いメダルで、この子は神様を飲み込んだのだと言って、皆は声を立てて笑うが、このような事があって後、二人は別れることになる。

振り返って見ると、もうアポの姿はなかった。ある村にたどり着いて、庭で遊んでいる子供達の仲間に入って遊んでいると、その中のアルフレッドという子とうまが合い、夜になるとアルフレッドの家について行くが、家は貧しくトニーの食べるものもなく、仕方なく山に入っては目についたものを食べ、食事が終わると家に戻って泊めて貰う日が続いた。

< ボール遊び >

ある日、アルフレッドと屋根ごしにボール投げをして遊んだ。トニーはボールには手を触れず、靈力で送り返していた。トニーは木に腰をおろして、ただボールの行方を見詰めては、靈力でボールをあちこちに送り返し、さぞかしアルフレッドが駆けずりまわって疲れているだろうと面白がる。その内にボールが屋根に止ってしまい、トニーは靈力を思い通りに働かすことができなくなっていることに気が付くが、アルフレッドは向い側から笑いながらやって来て「靈力でボールを屋根から下ろしてよ」と頼む。トニーは全力をあげて精神集中を続けた。すると、突然、ボールが光り、家全体が火となって燃え出し、数軒が焼けてしまう。その夜、瞑想に入るとアポが現われ、アポの口調には悲しみがこもっていて、「よく反省せよ」と目が燃えていた。トニーは素直にうなづき、反省するのだった。

< 金塊探し >

養父は仲間と共にトニーを連れて、遠く離れた山の中を数日歩き続けた。この時、トニーは金塊探しに手を貸すことになる。トニーの示す場所を三日間も掘りに掘って、目指すものを大人達は見つけると驚喜した。その夜、トニーは、夢の中で何千という金の延べ棒が取り囲み、押しつぶされそうになる夢で、大声を発して目を覚ました。それから一行は、大きな町でその金塊を売ると、トニーにいろいろな物を買って与えた。

< ヒ - ラ - としての出発 >

それからトニーは、教会堂で暮らすようになる。教会堂では心霊治療が仕事の一つになっていて、初めは治療には加わらないが、皆んなの奨めもあってヒ - ラ - として治療に専心する。一番年少のヒーラーとしてトニーは評判になるが、十三歳の時、教会堂で治療を始めて一年余り経った頃、朝から晩まで手を当て続けていると、一人の老女がやって来て、とても苦しんでいた。祖母を思い出し、望郷の念を払いのけて精神集中をし、ついにトニーと老女は一体となる。

それでは、トニーはどのように書いているか見てみたい。

「私が意識を取り戻した時には、私の両手に血がベトベトと付いていた。周りからは、驚嘆の叫びが起こって、ひざまずく者や頭を垂れて祈る者もいた。治療士の一人が「君はあのお婆さんのお腹を手で切りさいて、肉のようなものを取り出したんだ。そしてそれから、傷口を閉じてしまったのだよ」と言った。私は思い出した。私は自分の小指を老女の腹部の上に走らせると、皮膚が切れて腫物が見えた。男の声で私に指示を与えてくれる者がいた。その声の命ずる通りに、その腫れ物を取り出した老女の腹部から手を離すと傷口が閉じたのだ。血だらけの異常な塊りだった。」と。

これが現在、心霊手術と呼ばれるもので、トニーの初めての体験だった。最初の心霊手術の後、ユニオン・エスペリテスタズというフィリッピンの治療士の団体の役員となるが、心霊治療の行える者は大勢いるが、心霊手術の行える者は二～三人だったと、トニーは言う。

< お母さんの死 >

心霊手術を行って以来、その名声により、国内はもとより海外旅行の日程に追われるようになるが、ある島で治療している時、無性に故郷に帰りたくて故郷へ帰ってみると、母は亡くなっていた。すべてを忘れるために、トニーは、それから数カ月間、瞑想もやめ畑を耕したりしていると、ある雨の日、若い男がトニーを訪ねて来て、「母を助けて下さい。助けられるのは先生しかありません。」と。しかし、母を亡くしたばかりのトニーは渋るが、お父さんは「死んだお母さんも喜ぶだろう。行ってあげなさい」とすすめて、何日もかかって若者の家に着いた時には、彼の母親は亡くなっていた。母を亡くしたばかりのトニー、母を失った若者の二人は、同じ悲痛に包まれ、以来、遠近を問わず、どこかに呼ばれる時、その日のことを思い出すと、トニーは疲れも吹き飛んだ、と。

そして、トニーは次のように結んでいる。

「私の心霊治療の能力については、むやみと評判が立ってしまい、国内はもとより、世界に私の名前が知られるようになると、名声と地位を手中にするのは心地よいものだった。治療しているのは自分ではなく、私の内なる守護霊の霊力であって、私自身だけでは何一つ出来ないということすら忘れていたことがあった。治療に対しての報酬をもらうのは、当然なのだと自分にいい聞かせたこともあった。治療の報酬にふさわしいもの、つまり大きな家とか、召使いとかでなければ、私の治療の報酬にふさわしいものではないと思った。だが、ここでも内なる声のさとしを受けるのであった。「私利を図ろうとすれば、空しさのみ」、とその声は諭した。そして私のこれまでの人生は、相反する二つのものの絶えざる戦いであったと言えよう。つまり、一つは誘惑や欲望に非常にくずされやすい私であり、いま一つは心霊治療という天職にのみ献身を願う私である。」と。

アントニオ・アグパオア氏の自伝より要約したが、モーゼが説いたユダヤ教も、釈迦が説いた仏教も、イエスが説いたキリスト教も、はじめは同じ神理・正法が説かれたのである。永い時間とともに、それぞれが異なったものようになってしまった。それを修正するために高橋師が生まれ、神理を説いた後、昭和五十一年に昇天したが、この自伝は昭和五十三年に出版され、書き込められた神理は、高橋師の説いたものと同じものが見受けられる。イエスの分身のアントニオ・アグパオア氏と、エルランティであり、モーゼ、釈迦、イエスの本体である高橋師の説かれた神理が同じであることを考えた時、宗教は一つ、神理・正法は一つと言った高橋師の言葉が、今さらながら意味の大きさを感じずにはおれない。また同じく、高橋師も子供の頃、墨染めの衣を着た見知らぬ男の人（不空三蔵といわれている）が川の土手に現れて、いろいろ教えるとスーツと消えていなくなったらしいが、光の大指導霊がこの世に現れると、天上界を上げて教育し、護るようである。これら二つの事実は不思議と言う外はない。

それでは、昭和四十八年七月、八起ビルでの講師・幹部研修会の講話を参考にして頂きたい。

「皆さんが、神理を知った慈愛の心でやれば、それは即、光ですから奇跡は起るんです。私の専売特許ではありません。誰でもできるんです。ただし、自分が正法を通した生活をしていなければいけません。そうでなければ見せかけです。格好よさです。人間は自分自身をなおし、相手をなおすその力を、誰でも持っているのです。常に私達はそれを活用することです。奇跡は皆さんが起こすのではなくて、あの世の協力を得ているのですから、皆さんにはできなくても、あつちにはできるんです。あとはあの世で協力してくれるんですから、自信を持つことが大事ですね。病気を治すのでも、「本当に治るかしら」これはよくありません。自分の心をあくまでも調和してやれば、必ず結果が出ます。なぜなら、次元の違った光の世界から協力してくれるのですから。愛の心で相手の痛みをよくしてやろうと手を伸ばした時は、その手を霊視すると、黄金色になっています。慈悲の心を満たすには実践することです。そうすれば自信ができます。」

次に、[本山博著『フィリピンの心霊術』](#)宗教心理学研究所出版部より要約させていただきます。

<本山博氏（心霊研究者）のトニ - 研究>

昭和四十一年（一九六六年）一月、本山氏は、アメリカ人教授の紹介状を持ったアメリカ人と、トニー（当時十六歳）についての心霊手術の調査に協力するために、第一回目のフィリピンに渡った。その時のトニーの評判はトニーはこの頃、お金儲けに走っているように思われ、そんなことではいつか霊能を失うのでは、と心配する人もいた。手違いで、二日待っても三日待ってもトニーには会えず、数日後、トニーの家に行き、心霊手術を見る約束ができた。その日、二つの待合室は人が一杯で、手術室は、八畳位の広さの土間の真中に、木の寝台の有る粗末な部屋だった。隣の家からのジャズ音楽がガンガン聞こえるという雰囲気、トニーはすぐ二つの待合室一つは十五畳位、他は十畳位の部屋の患者の治療を始めた。そのうちの一人は、蕁麻疹の腫れあがった所に手を置いて短いお祈りをすると、一～二分の内に腫れがみるみる内に引いてゆくのは本山氏も驚ろいた。これは、一人の患者に一～二分程度の、手術ではなく日本でよく見かける心霊治療の一種で、それから心霊手術が行われることになった。患者は六十歳前後のお婆さんで、卵巣の膿腫の摘出である。お腹の部分を出し寝台に横になって、寝台の横にトニー、本山氏、シャーマン氏、反対側にベルク氏、トニーの助手、そして手術室の内外には、四～五〇人の手術を見ようという人達がいた。

心霊手術

トニーは短いお祈りをし、聖水でお腹を拭き、素手のままでお腹を軽くさすり始め、患部はここと超感覚的に解ったのだろう。グッと両手の人差し指と中指をお腹の上へ挿し入れ、更に手が腹の中へ入って、あたかも粘土をこねるように腸や子宮、卵巣等を動かす、悪い部分を手づかみで取り出す。手を入れ少し血が出ると、助手が脱脂綿で拭き、卵巣の腫瘍を取り出した時には、血がかなり出るが、トニーの手も血と膏で赤くぬるぬる光っている。周りの者が皆、目を皿のようにして見つめていると、トニーはゆっくりと一、二、三、と数えてお腹から手を離すと、不思議にも、お腹は元通りに何の跡形もなく、傷口一つ残さず塞がっていた。

「なんだか催眠術にでもかかっているのではないか、何とも言えず不思議な奇妙な感じがした。しかし反面、今の手術は本当なのだろうか、心の中のどこかで自問自答しているのだった」、と本山氏は書いておられる。毎日トニーの家で心霊治療や心霊手術を見る度にどうもこれは本当らしいと思うようになった、というのだ。そして、心霊手術はどれも大抵四～十分で終り、何日目かに、トニー家へ出入りする弁護士の子の、左肩の大きなオデキを手術することになる。術中の痛くないことの証明に、トニーの助手と、患者と本山氏が手術中話をするようになった。トニーは患者の右側に立ち、左手でそのオデキを囲むようにし、右手の小指を小刀のようにしてオデキの上を走らせると、メスで切ったような傷口ができ、膿が出たあと、早速、本山氏が痛いかと聞くと、押す時少し感じたが、あまり痛くないと答え、卵巣の膿腫を取り出した例と、オデキの例に八枚の写真とともに記述されている。

また、トニーは二十八歳の若さで、フィリピンでは大成功者の一人に数えられるほどの、立派な小さい教会のついた治療所兼邸宅を建てる。その頃の他のヒーラー達の治療費は、患者一人につき三～四百円程度だったが、トニーはアメリカ、ヨーロッパ、日本にもその名が及び、それら金持ちと見える外国人からは五百ドル位の報酬をとった。でも、それら外国人より得た報酬の何割かを、トニーはバギオ近辺の貧しいフィリピンの山の人々に分け与え、またフィリピンの困っている人からは、手術をしても金をとらず、逆に金を与え、御飯も食べさせて帰すこともあったようである。また、次のことも書かれている。トニーは二十歳頃、胃癌の手術をして快癒した患者の家に、賓客として二年ほどダバオに滞在した時、トニーは酒色におぼれ、バー、キャバレー等に入り浸って、心霊的能力が出ないことがあった。その時、トニーは「パワーがない！パワーがこない！」と言って床に泣き伏し、その内にまた元のようにもどったというのである。その時の患者であった夫人が本山氏の前でこの話を始めると、トニーは具合悪そうな顔をして、どこかへ行ってしまった、ことも書かれている。

昭和四十三年、トニーによる子宮筋腫の心霊摘出術の一例

テレビのディレクター、某週刊誌記者、本山氏等はムービー、写真撮影の準備をして待った。六十歳前後の品のよい老女が寝台に仰臥した。トニーは患者の右側に立ち、洗面器から、水に浸した脱脂綿をとり、左手につまんで患者の左腹部、臍の下左側、子宮と左卵巣の真上あたりの所へ、脱脂綿を握った左手をおき、次に右手を置き、少しこねるようになっていたが、一瞬こねるのをやめて、ギュッと両手の指を腹へ突っ込むように動かした。途端に血がさっと周りに出た。そして、またしばらく両手で揉むようになっていたが、両手の指は、一～二関節程度皮膚に入っているように見える両手でギュッと腹を拵げた。＜中略＞しばらく揉んでまた拵げた。今度は拵げたというより、長さ十五～二十センチ、幅五～六センチ、皮膚上から盛りあがっている高さ五～六センチの赤い肉の塊まりをつまみ上げ、拵げている感じである。（名古屋の近くにある県立の病院の外科部長＝副院長はこの手術の映画を見て、これは明らかに自分達がいつも取り出している子宮筋腫だと言っていた）＜中略＞いよいよ筋腫を取り出すらしい。右手でつまみあげつまみあげして、左手でそれを引っ張り出すように手を動かす。本当に右手で筋腫がつまみ出され、左手でそれを徐々にゆっくりとちぎった。丁度、大きな餅の塊まりから、小さなダンゴ大の餅をちぎる時のような感じである。＜中略＞名古屋の近くの外科部長も、取り出されたものは、我々が取り出すものより小さい。もと筋腫の核だけを取り出すのであれば、あの位の大きさかもしれない。我々が取り出す時は、周囲の組織も一緒に切り取るから、大きいのであろうかと言っていた。ちぎり取った後も、トニーはしばらく腹中に手を入れて揉むようになっていた。＜中略＞腹が徐々に盛り上がってくる。コクッ、コクッと段階的に間をおいて盛り上がる。トニーが両手の人差し指で患部の真中と体側を押しギュッと両側に引っばると、血が体側に置いてある脱脂綿の上に流れ落ちた。見ると、皮膚上には切り傷がないようである。脱脂綿で血が拭きとられた、と。

Home

「アフリカで医療に従事したシュバイツァー博士は菩薩界の人だった」

高橋師は、「アフリカの黒人を治療したシュバイツァー - 博士は菩薩界の人です」、と言い残した。

アルベルト・シュバイツァー (一八七五～一九六五年)

ドイツに生まれる。大学では神学などを学び、バッハを研究してパイプ・オルガンの奏者となるが、アフリカ黒人の病気を知ったことで医師となり、赤道アフリカのガボンで、黒人のための医療と伝道につくし、晩年は核実験禁止など世界平和のためにつとめ、ノーベル平和賞をうける。



シュバイツァー

シュバイツァー博士は、三十八歳（一九一三年）の時、ストラスブルグ大学の教職とオルガンと文筆を棄てて、医師としてアフリカに渡るが、四十五歳（一九二十年）の時、それまでの博士の、アフリカでの医療活動に関する自伝を出版した。そのドイツ語原本は、それから十年間に百版を重ね、日本では、それを『水と原生林のはざまにて』野村実訳として、昭和七年に出版された。これから引用要約するものは、昭和十六年に再版されたもので、初版本に手を入れられたものである。

シュバイツァー - 自伝・「水と原生林のはざまにて」

「私は医師となって赤道アフリカへ行くため、ストラスブルグ大学教職とオルガンと文筆を棄ててしまった。それは何故であったろうか。私は原生林土人の病苦について、本で読んだり、宣教師から聞いてはいたが、この遠方の人道的大問題に、わが欧州人が、ふりむくこともしないのが私には解らなかつた。それは、欧州の各国が植民地へ派遣している数多くの医者は、全て白人移民と軍隊のためのものであったからである。しかし、社会一般がこれを己がものと知り、多くの医師が自ら進んで各地へ進出し、社会が之を後退して、土人を救済する日が来なければならない。その時初めて我々は文化人として、有色人種に負う責任を知り、之を果し始めた事となるのである。こう考えた私は、三十歳に達してから医学を修め、一九一三年の初め、ドクトルの学位を得、看護学を学んだ妻を伴い、赤道アフリカのオゴウエ河畔で私の活動を始めようと旅立ったのであった。」

シュバイツァー博士がオゴウエ河畔を選んだのは、この地は「睡眠病」が流行し、医師が必要だったことと、伝道会が、その伝道本部の家屋を提供、病院も建ててよい、また補助もしようということからだった。

「しかし、私のこの事業の費用は、自分で調達しなければならなかった。それで私は、バッサに関する三カ国語訳の自著と、オルガン演奏会とによる利益をこれに充てたのである。そして、いくつかの外国の友人達の援助を受け、二年分の活動資金が保証されて出発した。」と。

シュバイツァー博士は、故郷を離れ、ボルドウの近くの港へ汽車で行き、そこからコンゴー通いの汽船に、七十個の荷物とともに乗り込んだ。三週間の宿となる船室に落ち着くと、出航してまもなく三日続きの嵐に博士は閉口される。三百人の船客は、ほとんどが士官、軍医、文官で商人はわずか。博士は、船旅になれるにつれて、これから先のまだ見ぬ国への不安と、これから果して何を仕遂げるであろうかと考えながら、アフリカ大陸に着いた。それから、オゴウエ河の本流から支流へとたどり、ラムバレネの目的地に到着するが、到着に先立って汽笛を鳴らして貰うと、突然一隻の細長いカヌーが現れ、博士を迎えた。ラムバレネに着くと、多くの宣教師や、学校の教師や生徒達が歓迎し、賛美歌を歌ってくれた。三日間をかけて七十個の荷物を十数人の宣教師、黒人労働者が手伝うが、大変だったのは、熱帯向きに造って持って来られた重い亜鉛張りの箱に入った、ペダル付きピアノの運搬だった。そこは、診察や治療の室が一つも無いので、さしあたり、博士の居間に棚を作って、大事な薬品を仕舞い、仕方なく、家の前の戸外で診察を始めた。こうして、鶏舎を診療室に整え、都合よく通訳と助手が見つかり診察も始まる。診察は毎朝八時半頃に始まり、十二時半頃に昼食、六時頃に診察は終るのが常だった。病院の規則は、

- 一、病院の近くで唾を吐いてはならぬ
- 二、待つ者は大声で話してはならぬ
- 三、午前中に治療を終えぬことがあるので、患者と付添人は一日分の食事を携帯すること
- 四、医師の許可なしに、本部内へ勝手に宿泊しようとする者は、医薬も与えないで立退きを命ずる
- 五、投薬用のビンやブリキ罐は再び持参のこと

等々であった。

お昼どきになると、患者達は各々木陰でバナナを食べ、また二時頃には列をつくり、夕闇がせまっても、まだ診察の出来ない者は、明日まで待つように慰めなければならなかった。土人達は、博士を「オガンガ」（神人）と呼んで尊敬した。病気を悪魔や人間の魔術や虫にあると考え、虫は痛みの化身だから、病状を話すように促すと虫の歴史を語って、「初め脚にいたのが頭に来て、心臓へ行き、肺へ行って、最後に腹に居座った」などと言い、博士が阿片チンキで腹痛を鎮めると、翌日、虫は腹から追われたが、今、頭にいて脳を食っているの、今度は頭の中の虫薬をくれと言ったりした。

投薬については、欧州なら紙の包装で充分だが、高温多湿のためコルクの栓やブリキ罐を重宝した。前回投薬したブリキ罐を忘れてくる患者があったりすると、それで口論になり、それほど貴重だったので、博士は友人や本国に手紙を出す時は、決まってビンやブリキ罐を送ってくれるように要請されても、予想以上に患者が多いので薬品の減りが速く、急便で大量注文をしても、三、四カ月後にしか届かないことがしばしば起った。ある薬などは、残すところ数グラムというものもあったようだが、「日増しに快癒していく患者の姿を見るにつけ、その苦勞もさほど感じられなかった。」と博士は書いておられ、また「過ぎし二ヶ月半の自分の活動を顧みて、ただ私が言い得る事は、此の地が一人の医師を極めて必要としている事、この地を取り巻く広大な地域の土人がその救助を求めている事、並びに医師は比較的わずかな資本で、それに比べもつかぬ事業を果し得られるという事である。」とも。

数ヶ月過ち、手狭になった病院整備要請のため、宣教師会議の承認を受ける必要上、サムキタへ、カヌーで初めての長旅に出た。そこへは十五時間ほどかかって着いた。睡眠病を伝播するツエツエ蠅の一種を追い払いながらの旅だった。またカバに衝突して、カヌーもろとも放り上げられ、九死に一生を得たこともあった。ここでの一週間に渡る会議で、附属の建物の建築の費用として、伝道会社から約二千フランの手当が決定した。建設が始まり、五人の労働者を雇ったが、これがあきれ程の怠け者で、仕方なく、遅しい八名の工夫を雇い入れると同時に

に博士もシャベルを握った。これらの人々はよく働いたが、賃金を貰うと、酒に酔いつぶれて翌日は、全く働けないという体たらくで、ガッカリさせられた。病院のバラックが竣工する迄は、大きな手術のないようにと願っていたが、ヘルニア患者を手術せねばならなかった。これは万事予想した以上にうまくいった。また、カバに大腿を折られた男の手当やマラリヤと多忙な毎日で、九カ月の間に博士は二千人ほどの患者を診た。

「このバラック病院は、至って小規模ではあるが、到る所、隅々まで利用され便利であった。間取りは四メートル四方の室が二間、前方は診察室、後方は手術室であった。薬局と消毒室とは、わきの方にしつらえてあった。セメントで固められ、窓は大きく、熱い空気が屋根の下に停滞しないように、窓を屋根まで届かしてある。熱帯地方で亜鉛張りは暑くて堪え難いと言われているが、病院の涼しさには誰も驚く。窓には硝子戸が無くて、蚊よけの目の細かい網を張ってある。ヨロイ戸は夕立避けに必要である。」と博士は書いておられる。

病舎は長さ十二メートル、幅六メートルだった。ここではカヤは患者持参、付添人は地面に張り、部屋の関係で男女の区別はできなかったが、博士の心配は、付添が寝台を用い、患者が土間に眠る事だけであった。それと言うのも、着任間もない頃、数回分の薬を一回で飲んだり、軟膏を食べたりするという想像もつかない心配があったからである。

「今日迄の手術は皆成功に終わった。そのため土人の信頼は驚くばかり高まった。彼等を最も驚嘆させるものは麻酔で、学校の女生徒と文通していて、その手紙に、「ドクトルがここに来られてから、私達は驚くべき事を見ました。ドクトルは先づ患者を殺してから治療し、済んでから又呼び醒まします」と書いたりした。」患者の中には感謝を形の上に現わし、一族からかき集めた金を持って来たり、労働の奉仕をしたり、動物の皮や、いろいろな物を持って来てくれたりした。医薬品は三、四カ月後しか届かなかった上に、その費用は欧州の三倍にもなり、頭痛の種であったが、中には寄附の知らせをうけてホッとすることもあった。しかし、このような中でも、博士夫妻は、いつも元気で発熱の兆候など少しもなかった。併し二、三日の休息は必要であった。

『シュバイツァー自伝』

シュバイツァー博士のアフリカ着任から、およそ一年間の自伝を引用要約した。博士は一八七五年一月十四日、代理教師の第二子としてドイツに生まれた。五歳にして父よりピアノの指導を受け、八歳よりパイプオルガンを学んだ。これらのことが後のバッハ研究の端緒となる。ストラスブルグ大学に入学、哲学、神学を研究、正教師となる。そして、ストラスブルグ大学神学科の講師となり、イエス伝研究及び講義をした。以後、聖トマス神学校の校長を兼任したが、フランス領・コンゴのガボンに於ける土人医療を決意、医学部入学、医師国家試験合格、ヘレン・プレスロウと結婚、アメリカに旅立った。以来、数次のアフリカ医療に従事、こうしてシュバイツァー博士は、死ぬまで黒人と世界平和のために尽くし、七十八歳の時、ノーベル平和賞がおくられ、一九六五年、九十歳で亡くなった。博士は数多くの著書を出版されているが、主なものを拾ってみると、多才な才能が窺い知れるはずだ。

『カントの宗教哲学』『聖餐論』『イエスの救世と受難の秘密』『J・Sバッハ』『ドイツ及びフランスのオルガン製作術と奏法』『オルガン制作の国際条例』『バッハ作曲集』（第一巻より第六巻まで順次出版）『水と原生林のはざまにて』『文化の没落と再建』『キリスト教と世界の諸宗教』『ラムバレネ消息』『使徒パウロの神秘説』『余の思想と生活より』『インド思想家の世界観』『アフリカ冒険譚』外多数ある。



Home

高橋師が明かした過去世の証明は、二百人いたと言われているが、これよりその他の生まれ変わりの実例を挙げてみたい。



1)、文殊は「Aさん」だった。

「三人寄れば文殊の智慧」、智慧といえば文殊と云われ、普賢も「普賢三昧」と言われている。大乘仏教の主役といわれる「普賢」も「文殊」も、現在言われる程に功績は無かった、と高橋師は修正した。普賢は、釈迦滅後九十日の第一次結集には加わらず、五百羅漢の一人でもなく普賢菩薩でもなかった、と高橋師は言い残している。また、「維摩経(ゆいまきょう)」の中では、釈迦の十大弟子の一人で、智慧第一といわれた舍利佛の名前は消されている。そこで、文殊が先頭に躍り出て、釈迦の十大弟子は皆つまらないとされ、間違ったと高橋師は明らかにした。園頭師は、月刊『正法』の中で次のように述べた。「私は高橋先生の弟子としては一番最後に霊道を開いて、自分が舍利佛であることを悟った。過去世で文殊(マンチュリア-)であったという「Aさん」も霊道を開いた。ところが、このAさんは昭和五十二年三月、ミカエル事件が起こると、釈迦、キリストを否定するミカエル佳子氏の側に走ってしまった。文殊が舍利佛よりも上であるというのであったら、釈迦、キリストを否定するミカエル佳子氏には走らなかった筈である」、と。



2)、「田○利○」氏は、釈迦の秘書(侍者)のアナン(阿難尊者・アナンダ)だった。

昭和四十八年三月十三日、G L A 関西本部の高橋師の講演会で、園頭師は初めて高橋師に会うが、二人が話している部屋へ「田○」氏が入って来ると、高橋師は次のように話出した。

「園頭さん、この人はぼくが大阪の国際ホテルに泊まっていた時、目の前に電話番号がパッパッと浮かんできて、これはそこへ電話せよということだなと思って電話したら、その番号が国際ホテルのぼくの部屋の番号で、

ぼくはこの人が電話をくれることを前以って知っていた。電話がきたので、ぼくが「アナン」と呼んだら、この人は電話口で自分の過去世を思い出してぼくと古代のインド語で話したのです。ネ、そうでしたね「田〇」さん。」と。また、園頭師は次のように言っている。

「この人は、男のくせになよなよと内跨に歩く。ある時、泊まった宿の浴衣が大きくて、芸者が褌を取ったように歩きだした。また使う言葉が京都訛で、笑う時にもしなをつくるのである。この人がお釈迦さんの従者を二十五年もやった阿難だったのか、仏典を読んで想像していた阿難導師とは違ったと思ったものである。」と。そして、昭和五十一年三月の和歌山県白浜温泉の研修会でのこと、三月二十日の夕方、高橋師の実弟の高橋興和氏と「田〇」氏が秘密の話があるので自分たちの部屋へ来て欲しいというので、園頭師は出向いた。すると二人は、「高橋信次先生はニセモノである。釈迦の生まれ変わりでも何でもなし。研修会が終わったら私達はG L Aをやめます。先生もどうですか。」と。園頭師は、自分の信念があったので、それには答えず部屋を出たが、これは大変なことになった、サタンは身内から離反させ始めたぞと心を痛めた。三日目の二十二日の朝、高橋師は、園頭師の部屋に入ると直ぐに、「昨夜、パピアス・マ・ラ・が出て来て私の心臓（註・光子体の心臓）に矢を射た。まだ胸が痛む」と告げた。（註・あの世の霊ですから、本物の矢を射ることはできません。）

それから食事の後、高橋師と入れ替わりに、今度は高橋興和氏が部屋に入って来て再び「先生もやめませんか」と誘った。サタンが出て来て混乱させていることも、高橋師は全部知っており、その日の朝の講話は中止になり、講師や助手が集められ注意事項が伝達されることになった。最後まで抵抗して集まらなかったのが、銀座のデザイナーであり、かつては卑弥呼の女官と、高橋師が言い残した護〇堂世〇子氏だった。こうして、全員が集ったところで始まったのが、ビデオにも残されている三月二十二日の場面である。この時、高橋師は「指導者たる者は実践することによって不動心を持ちなさい、恐怖心を捨てなさい」と説き、自帰依、法帰依の大事さと、主な講師に対しては一人一人諭している。G L Aで頒布された当時の講演ビデオ・テープは、現在のV H S等ではなく、Uマチックという、幅広で薄型のアルミの弁当箱のようなタイプのものだが、一人一人諭す場面は、後になると講師の二人だけで他は全部カットされている。その中の一人で、高橋師の著書を出している、当時の三宝出版社の社長の堀田和成氏の例を挙げてみたい。

三楽荘大広間には、舞台の上に演台が設けられ、前列には講師と助手団、後に研修会参加者が座っていて、高橋師は講師団の中にマイクを持って分け入り言葉を掛ける。「お - ブッダ - !」と手を差し伸べ、すがらんばかりにひれ伏す者。場内は、すすり泣きと嗚咽（おえつ）。高橋師はマイクを片手に持ち、一方の手でタオルをしきりに顔に当て涙を拭く。高橋師は、堀田氏の前に古代語（異語）を語りかけて進み、ひれ伏す氏の背中を手でさすりながら日本語で話し掛ける。「あなたは私の書いたものを全て世に問うてくれました。今ここに改めて礼を言います。出されたものは今後、世界各国の・・・。」そして、古代語で問いかける。堀田氏は、すがらんばかりに手を前に差し伸ばし、古代語で答えながら泣き伏す。師と堀田氏のやり取りの画面の中でも、興和氏の姿が何度か見え隠れする。師は、最後の堀田氏の番を終えタオルで涙を拭くと、「私達は天上界から使命をもって出てきた霊団だということを自覚して・・・これからは私達は次々と約束を果たしていきます。・・・皆さんどうもこんなことに成ってしまっただけで申し訳ありません。」と。

また、昭和四十八年七月の八起ビルでの講師幹部研修講演では「田〇」氏について、高橋師は次のように述べている。「京都の「田〇」さんは、東京に本部のある教団の責任者でした。その教団の実体を正しくフィルタ - にかけて見なかったために、相手からいわれた言葉をそのまま受け入れて動物霊を見てしまった。人間というものは、言葉でころっと参るものです。その結果あらゆる試練を受けました。そうしてトラック二台分の祭ってあった道具を運びだして捨て、祭ってあった所を取りはずし、畳も何枚か替えました。私がそこへ行って見たところ、そこには私も初めて見る竜がその下にいました。表面で私に見せているのは十一面観音、竜樹観音という姿です。この竜がそこに来る人達に、あのブラインド（講演会場の）よりはもう少し明るいですが鈍い光りを与えていたようです。ゴ - ルドカラ - の後光とは全く程遠い光りです。それでも素人の人達はそれを見て感心していたわけです。私はそれを見破る力を持っていますから、「お前達は、竜神だの、千手観音だのといって人間を狂わすのではない」といって光りを当てたのです。「田〇」さんも私も見てしまいました。そうして取り払ったのです。背中は大きな松ノ木の肌みたいで大きな苔がついていました。そのために、田〇さんは一週間デ - ンと倒れて意識不明になったのです。そういうことになるのは類は類を呼ぶということになるのです。」と。

3)、釈迦の時代の「迦葉(かしょう)」は、台湾の「蔡肇棋」氏だった。

釈迦が亡くなられた後の釈迦教団をマトメたのは、迦葉(マ - ハ - ・カシャパ -)と、高橋師は言い残した。蔡氏は昭和四十九年四月に、京都の中心山荘の研修会に参加。若い頃から法華経を勉強していて、来日の前の年に高橋師の『餓鬼道』改題『愛は憎しみを越えて』に感動して手紙を出した。それから文通が始まり、四十九年の秋には師も台湾を訪ねるが、それまでは、高橋師は意識(幽体離脱)で台北まで行って指導していた。ところが来日直前に魔に支配され、色んな問題を引き起こしたというのである。三木野吉(本名・渡辺)氏の記述を要約するところである。直感していた高橋師は、研修会の前日、ホテルの一室に三名の幹部と共に呼んで注意をした。研修会も終わり、東京への新幹線の中で、蔡氏と渡辺氏の会話の内容を別の席の師は知っていて、数日後、台湾への見送りの羽田空港で、帰りかけた師は思いだしたように渡辺氏のところへ戻ってきて、「この間の式は間違っていますから気をつけて下さい。新幹線の中だし人前で指摘することもできないし本当に困りました。」と。また、園頭師は次のように言っている。「おかしくなっているから気をつけるようにと、関西本部長のN氏に言っておいたのですが、N氏は「悪魔を捕まえる法」というのを伝授されたといって騙されてしまい、高橋先生からも注意を受けました。この蔡さんの一連の事件で、悪魔はG L Aの講師たちをねらってきていることを感じました。」と。

高橋師が昇天すると、蔡氏は薄い小冊子の会誌を日本に送ってくることになる。それによると聖徳太子も源頼朝も徳川家康も西郷隆盛も皆、自分の分身だと書いたのである。また、園頭師の住の近くに、蔡氏は台湾時代の教え子、という学校の先生があって、聞くところによると昭和五十二年には精神病院に入院されたというのだ。こうして、台湾の正法も自然消滅するが、かつては釈迦教団の統率者だけに、今世は台湾に正法を広める使命と役割のために、遠く離れた台湾に単独で出られたと思うが、結果は誠に残念という外はない。どんなに華々しく靈道を開いた人でも、正道をはずれ増長慢になると、魔と同類になって簡単に支配されるという一例だった。

4)、釈迦の時代、祇園精舎(ジェ - タ - ・ヴェナ -)を寄進したスプティ(須菩提、須達・スダッタ長者)は、小学校校長もやったことのある事業家「小○敏○」氏に生まれ変わった。

釈迦の十大弟子の一人であるスプティは、道を説く人(この場合はお釈迦様)の大黒天(経済的援助者)の一人だった。高橋師は『心の発見』(神理篇)にどのように書いているか見てみよう。

「中インドのコ - サラ国の人で、アナタ・ピンデカといわれ、戦争で両親を失った遺児や気の毒な子供たちのために孤児院をつくり救済活動を続け、カシ - 産の絹織物や生活用具を売っていた商人で、後にはカピラバ - ストの外務を担当し、あの世の仕組みに詳しく、その後四世紀にも中国に生まれ、大黒天として、神理を説く光の天使に経済協力をされた」と。先にも触れたように、今世の高橋師の大黒天は、松下幸之助氏だったが、高橋師は、こう述べている。「大黒天としての役目の諸天善神は、相当数おられる。仏教的な名であるが、実在界でこのように呼ばれている」と。スダッタ長者は、仏法(正法)を勉強する学問所(精舎)の適地を求めのために、地主である王様の言う通りに金銀財宝を土地の広さに敷きつめると、さすがの王様も感服して、大門を寄贈するばかりか釈迦に帰依するキッカケをつくることになる。祇園精舎の設計は舍利佛が務めるが、小○氏の現代は、元G L A東京本部長として、高橋氏に協力されたわけである。



5)、古代インド時代のスダッタ長者の娘の一人は、埼玉在住の「日〇」さんだった。同じくスダッタ長者の娘「デルナ - 」は、日本に卑弥呼として生まれ、現代の高橋佳子氏である。(高橋師の初期の月刊誌『ひかり』より)

父のスダッタ長者より、釈迦の偉大さを聞かされ続けていた娘デルナ - は、今世は高橋佳子氏として、釈迦の本体である高橋信次師の娘になりたいと心の中に描いたのであろうか。



6)、弁舌第一(説法第一)と言われた古代インド時代のプルナ - (富樓那・ふるな)の現代は、税理士(計理士)の「佐〇要」氏として生まれ変わった。

高橋師は、「釈迦の時代のプルナ - トラヤ - ・ヤニプトラ - は、小さい頃からの親友の「佐〇」君です」と言い残した。また、講演の中では、「富樓那(プルナ -)を私の側に出すということになったのです。だから「佐〇」君とは、ず - っと一緒です」、と。

それでは、『心の発見』(神理篇)にはどう書かれているか見てみたい。

「プルナ - は、今から二六二六年前にインド西海岸のスッパラカに生まれた人で、材木関係の商売をしていて、商売の途中、舟の中でゴ - ダマのことを聞き弟子になった。彼は仏法を悟り、ゴ - ダマと同年配の人であったが、説法が上手な方であったようである。」、と。そして、釈迦が亡くなる二年前に七十九才でこの世を去られ、その後中国に生まれ、さらに日本に三回、肉体を持って修行されたことを佐〇氏の守護霊が語った、と高橋師は記述している。



7)、釈迦の時代のアサジは、「北〇・英二」氏となった。

「スプティー(須菩提)である小柴さんの会社で働いていた北 さんはアサジでした。」(高橋師講演)

釈迦が出家した時、五人の武士(クシャトリヤ)達が父王の命で護衛をする。その後、彼等は釈迦の最初の弟子になるが、アサジはその中の一人で、ウパテッサ (改名後はシャ - リ - プトラ、舎利佛、舎利子、現代の園頭広周師)を釈迦に紹介した人である。理由はこうだった。ウパテッサは、最初、アサンジャ - (サンジャ・ペ - ラチブダ、通称サンジャ - 、現代の生長の家の故教祖・谷口雅春氏)の弟子だった。師アサンジャ - の「こう言えばああ言う」という、どこもつかみ所のない鰻論に失望して、どこかに道を正しく教えてくれる人はいない

かと考えながら歩いていると、端正で雰囲気の良い青年が歩いて来た。ただ者ではないと、ウパテッサは、しばらく様子を見てから思いきって声をかけた。すると、釈迦の弟子というので、これほどの弟子を持つ師という方はさぞかし立派な人だろうと案内を請い、二百人程の弟子を引き連れて釈迦に帰依したというわけである。それでは、講演の中からアサジの古代語を引用してみたい。

「ポコラ・・・テレ・・サラ　パラコロ・・・リア　リクア　コアテレ　パラセレ　トワ・・・アラハン・・・リア　アサジ　イスパラティ・　インドア　プッタ・ス・トラ・・・・・」と高橋師が問いかけると、アサジの過去世を持たれる「北〇」氏は同じ古代のインド語で次のように応答される。

「ポコラ　テレ　サラ　チコラ　セレ　ポロ・・・・・」次に高橋師が「日本語で話して下さい」と言うと、カタコトの日本語を語り始め、そのうちに流暢な日本語になる。

「私、ゴ・ダマ・プッタの弟子、アサジ、私・・・・カピラ、　サムラ　イ、ゴ・ダマ・・・・出家、当時、印度、山あぶない、川あぶない、けもの一杯、悪い人一杯、私、アサジ、コスタニア・マハ・・・ナマン、バティ・ヤ、五人護衛、ラジャン（王）から頼まれた。これからヴェサリ・、アヌプリヤ、マガダ・、・・・・・」、と。



8)、釈迦の最後の弟子シュバリダは井〇氏だった。

釈迦が八十才で亡くなる直前に、一人の老人（百七十才、別の講演では百十七才）が杖をついて訪ねて来て案内を請うと、釈迦は「最後の弟子が来た、ア・ナンダよ枕辺（まくらべ）につれてくるがよかろう」と。シュバリダは、枕辺に寄ると釈迦に次のように尋ねた。

「ゴ・ダマさま、本当の神理はどのようなものですか」

「真に人間自身の生老病死の苦しみの原因を断ち、八正道の実践を生活行為の中にいかしている者こそ、真の正道者であるということだ」

と釈迦が答えると、シュバリダはついに悟り、礼を言うとその場で亡くなってしまふ。つづいて二世紀に中国に生まれ、「テンシン」という名で神理を説いたというのである。



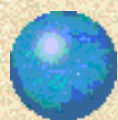
9)、鬼子母神（きしぼじん）は、古代インド時代の「ハリティ・」だった。

高橋師の講演の中からお聞き頂こう。

「鬼子母神という名を知っているでしょう。この女性は神でも仏でもありません。最も底辺のシュドラ・（奴隷）階級の女性でありました。子供達をさらってゆき、自分の子供のように育てていました。ハリティ・と当時

の名前はいいですが、彼女がジェ - タ - ヴェナ - (祇園精舎) にいる時に一人しかいない自分の子供が誘拐され、初めて子供をさらわれた親の苦しみを知りました。前非を悔いた彼女は最後は比丘尼としてゴ - ダマ・シッタルダ - の弟子になりますが、これなどは当時の厳しい階級制度への反逆という形で現れた事件なのです。」と。

Home



< 高橋師が教えた過去世の証明の再現 >



それではここで、高橋師は講演の中で、どのように過去世を教えたか再現してみたい。

高橋師は次のように言う。

「今日も一人、心の窓を開きました。名古屋からこられた方です。過去の自分の転生を知ってしまいました。開いた途端に、「あなたもそうだったのか」と、恐らくそれをいうでしょう。今この中にも、女性の方で永遠の生命としての当時の体験を持っている方がいます。習わなかった言葉をなぜ喋るのでしょうか。日本語しか知らないのになぜわからない国の言葉を喋るのでしょう。もし皆さんが、これがでたらめだと思われるなら勝手に自分で喋ってみて下さい。この間、でたらめだと思われて、次のような質問を受けたのです。「そりゃ中国語みたいだけどインチキだよ」というわけです。それで、「それじゃあなた、インチキでも何でもいいから喋ってみて」といったところが、その人は、「チャ - シュ - メン、来来軒、チャ - シュ - メン」というのです。「そんなの言葉じゃないよ」といったのです。これじゃ話になりませんね。ところで、ここにいるこの娘さんも光が出ているけれども、ちょっとこっちに出てみて下さい。ちょうど前に下りますから、はい向こうを向いて下さい。この方も後光がきれいに出ていますよ。

「はい、手を合わせて下さい。」

(高橋師は過去世の言葉をかける)

「この方は、インドの二千五百年前の女の人です。比丘尼です。」

(高橋師は再び過去世の言葉をかける)

「マイトレ - ヤ - という人をよく知っています。私は、その方から教わりました、とっております。」

(高橋師はまた過去世の言葉をかける)

「かつて、ゴ - ダマ・シッタルタの時代に、弥勒菩薩といわれたマイトレ - ヤ - から色々なことを学びました。それじゃ、あなた、ちょっと来てみて下さい」

(この娘さんに、その当時に縁があったと思われる人を高橋師は呼ぶ)

<・・・過去世の言葉を喋る・・・>

「この方達が小さい頃に、やはり仏陀僧伽(さんが)に帰依してきた人だといっております。

<・・・過去世の言葉を喋る・・・>

(二人が互いに過去世の言葉(古代インド語)で話し合っているのを、聴衆者が分かり易いように、高橋師は通訳する)

「多くの人々の中で仏陀の神理を聞いた一人だといっています」

<・・・過去世の言葉を喋る・・・>

「この方のお父さんがカッチャ - ナ - (迦旋延・かせんねん)とお友達だったと申しております」

<・・・過去世の言葉を喋る・・・>

「ニグロダという所で会いました、といっております。あなた、ちょっと出てきて下さい」

(この娘さんに縁があったと思われる別の人を呼ぶ)

「当時の仏陀僧伽の人達です。今日初めて心の窓を開いた方です。これは感激というか何というか、胸に込み上げてきて言葉にならないのです」

<・・・過去世の言葉を喋る・・・>

「私はインドの当時、ベッサリ - でも、大輪という所で多く人々に法を説いたことを覚えています、と言っています。バッチイ国だそうです。」

<・・・過去世の言葉を喋る・・・>

「これは皆さんとて同じことです。この中にも何人も過去世が同じである人がおります。ちょっとこの方もそうです。ちょっと出ていらっしやい。肉体を持っている方は、よく口を開いて中の舌を動かすように協力しなさい。」

<・・・過去世の言葉を喋る・・・>

「もう完全なインドの言葉です。この方は若いけれども過去世の方は相当年を取っているのです。・・・じゃ守護霊の方、後ろへ退ってください。はい目を開けてください。どうもありがとうございました。こうやって皆さんね。実際私らは初めて会う人ですよ。現実はどうすることもできません。永遠の生命として過去世にはそういう記憶があるわけです。そして、また皆さん自身が心の窓を開いていたら好むと好まざるとに関わらず、皆さんは永遠の生命として現在あるということがわかるのです。長い間ありがとうございました。」

高橋師は拍手の中で降壇する。

人間は、生まれ変わり死に代わりするのだということを皆に分からせるためには、その当時の言葉をしゃべらせる以外に、方法がなかったのではないかと思う。そのためには、高橋師の力(霊能力)で、その当時の言葉を喋らせ輪廻転生の事実を証明したのである。このように、高橋師は講演会ごとに過去世の証明と完全な交差証明が、人々の前で公開して行われたのである。



10)、高橋師のもっとも古い弟子の観音寺の和尚・村上宥快氏は中国時代の風雷蔣だった。

村上氏の著書には次のように書かれている。

「秋の彼岸会が済むと、正法求道の憧れを満たさんと毎夜車で大森の先生（高橋）の宅を訪れては説法を聴聞した。時には夜の白むこともことも幾度かあった。私の守護霊、魂の兄弟の霊を出して転生の秘密なども話して下さったこともある。風雷蔣といって聖観世音の道案内を勤めた男である。」と。

高橋師が亡くなった後、ミカエル事件が起こると、村上氏は一栄、佳子氏等に対して強固に反省を求めた。すると、GLA側は檀家、宗派本部等に中傷文を送りつけて職務を妨害するという挙に出た。裁判に持ち込まれようとした時、GLAは和解を申し込んだ。



11)、釈迦の時代の「カシャパラ（カサパラ）・チュンダカ」は渋谷の「近〇」氏と高橋師は言い残した。

昭和四十九年一月関西本部講演会より聞いてみたい。

「私のところの社員で今年の正月二日に心の窓を開き、自分はかってカピラ・バ・ストにおいて、お釈迦様が出家された後で荷物を持って行ったということを思いだしている人もおります。その当時の言葉で涙を流して話をしました。」と。

また、別の講演では、

「渋谷区の近 さんはゴータマが出城する時、馬を出したチュンダカであることを思い出しました。」と。

厩（うまや）番のチュンダカは、釈迦が二十九才で城を出る時、タンクワという馬のたずなを取るが、一人しょんぼり帰り着いたチュンダカに、一部始終を聞かされた父王シュット・ダ・ナは、釈迦に帰城を求めてもムダだと知ると、チュンダカに何度も、衣類と食べ物、それに薬まで運ばせるのだった。（高橋信次著『人間・釈迦』三宝出版社より要約）



12)、「やさ男」の語源である釈迦の時代の「ヤサ」は、GLAの「S・芳郎」氏となった。

古代インド時代のヤサは、長者の父ウパシカ、母ウパサカの何不自由ない一人息子であった。自分の館に出入りする踊り子を好きになるが、失恋をしてガンガ - の流れに身を投げようとしていた。濃霧の中を朝の散歩に出ている釈迦は、それを見つけて苦悩から救う。見事に立ち直ると、釈迦の弟子として重要なポスト占めるようになり、父母のウパシカ、ウパサカも在家一号となる。

氏の三十三才の時の、高橋師の記述を見てみよう。

「Y・S、三十三才が心の窓を開いたときのことであった。彼は早大の大学院で哲学を学んだ人だが、人生について多くの疑問を持っていた。たまたま伯母に当たるカリフォルニアに住んでいるミセス・ブラウンの紹介で、知りあった人であった。Y・Sは、神理の講演を何回か聞き、生活が調和されるとともに、今から二千五百有余年前の言葉で語りだした。「ポコラ パラ カリ パラセレ パラパラ チコラ パラ カリ
パラセレ パラパラ・・・・・・」と。

13)、釈迦十大弟子の一人、迦旃延(かせんねん、カッチャ - ナ -)は「細○」氏だった。

三木野吉(本名・渡辺)氏は、自著にに次のように書かれている。

「細○先生が部屋に落ち着くと、このようなことを話し始めた。「渡辺さん。先日、アインシュタインが佳子先生に入られて、ドイツ語と英語で高橋先生にいろいろとメッセージを伝えられたそうです。何か専門用語が多くて、全部の意味はまだ解かれて・・・・・・」、と。

14)、釈迦の時代のマ - ハ - ・ナ - マンは、元GLA関西本部長・「中○義○」氏になった。

釈迦の従兄弟であったマ - ハ - ・ナ - マン(通称ナマ -)は、釈迦の護衛をしたの五人のクシャトリヤの一人

で、釈迦の父王シュットダ - ナ - が亡くなると、ナ - マンが後を継いで王様になる。釈迦が七十才の時コ - サラの国王（パセナディ - の王子）が釈迦族を滅ぼしに来た。この時、マ - ハ - ・ナ - マンは、釈迦族百万を救うために敵の王に「私がこの池に潜るので、浮かび上がって出てくるまでは攻撃しないでほしい。」と申し出て、自らは髪を蓮の根に結えつけ皆を助けたという勇気ある王だった。この時の釈迦族の一人が「ウッパ」という人で、現代の「C」氏は、高橋師の講演の「現証の時間」の中で、次のように言われている。「釈迦族を滅ぼしに来た時、私達はそれを非常に悲しく思いました。ナ - マン様のお陰で、その間にカピラ城の者達は逃れ、その後には私はブッダに帰依いたしました。こうして今生で、今またこうしてお会いできるのは不思議です」、と。

また、この現証の時間には、カピラ城で、食事の毒味をしておられたという女性の「D」さんも登壇する。

< 今生での高橋師と「中〇」氏との出会いはこうだった >

東大阪に、霊友会から分派した瑞宝会の会長の「中〇智敬」という人が、高橋師のことを知られて部下に偵察を命じられた。二人の部下は内密に教義の内容等を調査するが、高橋師は、二人の部下の守護霊から全部報告を受けていて、透視していた。いろいろ指摘すると、びっくりした二人は帰阪して会長に報告するが、高橋師は東京に居ながらにして大阪の様子が見通（霊視）していた。こうして、三万とも四万とも言われる信者が、そっくりGLAに集団帰依をするという前代未聞の改宗劇が行われた。この辺の事情は『心の発見』（現象篇）に詳しいので譲ることにするが、女教祖の智敬氏が亡くなると、二代目会長の「中〇義〇」氏がGLA関西本部長を拝命され、釈迦の時代と同じ様に、今世も高橋師と共に、正法流布に協力したという訳である。



15)、高橋信次師のお父さんは、古代インドの時代は、釈迦の父シュットダ - ナ - 王であり、鎌倉時代は源頼朝であり、現代は名もない百姓を選んだ。高橋師は、「私の父は二千五百年前のシュットダ - ナ - であり、八百年前の鎌倉幕府を開いた源頼朝の過去世を持つ人です。」と言い残した。

高橋師は、園頭師にこう話している。

「昭和四十四年の頃、私の父が「お前は私の子だよな」って念を押すのですよ。突然おかしいことを言うものだと思って、「そうですよ。それがどうかしましたか。」という「それが不思議なんだ。ゆうべ武将が夢に出てきて、「信次はワシの子だ」と言うんだ。すると今度はその武将の後ろの二メートル程のインドスタイルの大男が、「とんでもない、あれは私の子だ」と言張るのだ。」と言うのですよ。そこで私が見てみる（註・霊視）と、父の後ろに立っている武将が「源頼朝にございます」と頭を下げ、「武将というものは、肩ひじ張って一時も休まりません。そこで今度はノンビリと百姓を選んで生まれました。」と、そして、その後ろのインドスタイルの大男は、軽く会釈をして「シュットダ - ナ - にございます。」と。このような霊的現象の中から、高橋師は「本体と五分身」を悟ったというのである。高橋師はお父さんについて次のように記述している。

「父は黙々と働く人だった。ただ私達、子供の育成に力を注ぎ、華やかなものなど何一つない地味な生活を送った。」、と。こうして、高橋師のお父さんは、今生は長野県佐久の百姓として地味な生活振り、七十五才の人生を送られた。

16)、高橋師のお母さんは、イエスを産んだマリヤ様だった。

高橋師は「私の母は二千年前にイエスを産み、鎌倉時代には日蓮を産み育てた過去世を持つ人です。」と、言い残した。

類い稀なる霊能を持った、イエスと日蓮を産み育てられたことのある高橋師のお母さんも、やはり不思議な体験をお持ちで、園頭師が佐久を訪ねた時、次のような話をされている。

「まだそれは結婚をして間もない日のことです。私が朝早く起きて炊事の準備をしていた時、橋を歩いていたら私の身体のみわりのまわりが一瞬黄金色に輝くのです。すると、わたしは、わたしであって、わたしでないような感じがしてきて、天から声が聞こえてきました。また、夜道を歩いていると足下が懐中電灯で照らされたようにポツカリ明るくなって提灯もいらない程だった。」と。そして、お母さんは大変愛の深い方で、物を恵んで上げたり、優しい言葉を掛けて上げられるので、物貰いや困った人達が常に集まっていたといわれている。また、生き神様みたいな人とも。

高橋師は、お母さんについて自著に次のように書いている。

「心まで貧しくなるとはいけない。常に、与えられた環境の中で努力し続けることが人間である。自分自身に厳しく、できるなら他人に慈悲を施せ、悪い心は持つな。「雨滴によっても石に穴はあく、いつの日にかは」「一寸の虫にも五分の魂」、「人を呪わば穴二つ」などと無学なりにも諺を引用して人の心の偉大さ、尊さを身をもって教えてくれた。」と。

< イエスや日蓮の母を何故、高橋師は自分のお母さんに選んだのか >

どうして、高橋師は、イエスや日蓮の母をお母さんに選んだかを、師の残した言葉から要約したい。

「二千五百年前の釈迦のお母さんをマヤ様というが、釈迦を産むと一週間後に亡くなってしまふ。釈迦は今でいう逆子だった。臨月のために、生まれ故郷（マヤ様はロッシニ - の河をはさんでヒマラヤ山脈に近い所の小国（デヴァダバ・バ - スト）の国王の妹）に里帰りされる途中のルビニ - （ルンビニ - ・現代のネパ - ル）という所で陣痛を起こされ、妹のパジャパティ - （後の継母）の厚い看護も虚しく亡くなってしまふ。本当のお母さんとはばかり思っていたマ - ハ - ・パジャパティ - が、継母であったと知ってからは、釈迦は遠慮がちの思いに沈む日々を送るが、これも釈迦が自分で悟って行くための天上界の計画であったと、高橋師は言い残している。そこで、高橋師の誕生（高橋師の生誕は、昭和二年（一九二七）と昭和四年（一九二九）の説がある）の三百年前の寛永二年（一六二五）に、生まれる場所、環境、協力する人達、などの諸々が、会議された。誰を父と

し、誰を母とするかという時に、かつてのお母さんであったマヤ様に「今度も私のお母さんになって下さい」と高橋師はお願いすると、「今度は勘弁して下さい」と言われるので、今度はイエス様と日蓮のお母さんをお願いしました、と師は言い残している。マヤ様が今度はお断りになったということは、人類を導く人（釈迦）の母としての使命と役割は、それほどに厳しかったのだろう。そこで、現代のマヤ様はどうされたのかと言うと、現代は、日本の蜂須賀公爵家に生まれられ、浦和で蝶よ花よの優雅な生活振りで、高橋師のために、伝導のための家等を寄進され師を暖かく見守っておられたようである。『人間・釈迦』にはマヤ様は菩薩界の方と高橋師は書いている。

こうして、現代のマヤ様は蝶よ花よの優雅な生活ぶり、一方のマリヤ様は十人の子沢山の貧農の妻。だが、優雅であるか地味な生活ぶりであるかどうかは、魂の基準ではなく、その環境の中で、如何に、人に対して暖かい思い遣りと優しい心使いをしたかということが一番大事なのである。人間は永遠の魂の遍歴の中で、金持ちという環境を選んだり、貧乏という環境を選んだりして魂を磨く。金持ちという環境の中で、増長慢になって人を見下す心をつくり出したり、貧乏な中で卑屈な心をつくり出してはいけないのである。高橋師は「肉体と精神と経済の調和」と教えた。心も健全、体も健康、お金もほどほどに持つこと、と説いたのである。かつてのマリヤ様であり、高橋師のお母さんは九十余才の長命であった。

<ルンビニの発見の歴史>

お釈迦様生誕の地のルンビニは、一八九六年（明治三十九年）にインド政府の命によってフユ - ラ - ガネパ - ルに入り久しい間ジャングルにおおわれていた、土地の人がささやかにお堂を建てていたそこがお釈迦様生誕の地ルンビニ - であることが発見された。それはアショカ王の建てた石柱が発見されたことによって決定的になったのである。

17)、G L A関西本部の幹部であった「N・勇」氏はカシャパ - の弟子だった。

高橋師は、「N・勇氏は、ガヤ・ダナでブッダに帰依したカシャパ - 三兄弟の弟子千数百人のうちの一人で、拝火教から帰依してきたサマナ - (修行者)でした。」、と言い残した。

18)、G L A関西本部の幹部の「H・正」氏は、古代エジプト時代、ファラオのもとで神官をしていたウラワン (ラワン) と呼ばれた、と高橋師は言い残した。

H・正氏の過去世は語る。(昭和五十年七月・夏期講習での現証の時間)

「私は今から四千三百年前にエジプトで生まれ、クレオパロ - タ - といわれるファラオ (王) の下で神官をつと

めましたラワンというものです。私たちは永い転生として肉体を持っておりますが、私達が、かつてエジプトにおいて、そのファラオのもとで正しい生き方を知ったものと、今私たちが体験しているものと一つも変わらないことを知りました。・・・・・・・・・・。」

昭和四十八年九月、志賀高原特別研修でのこと、高橋師は弟子の中から十人の幹部を選び、インドの釈迦の時と同じ研修をしようと、十日間の日程で始まった。二日目の朝の質問の時間に、園頭先生は生長の家の本部講師時代の疑問を尋ねてみようと思われた。すると何も質問されないのに・・・」。この後、反省の厳しさを高橋師は教えるが、他の項に出てくる「喫茶店を十一出させていた」人である。



19)、 「若○輝○」氏は古代インドの時代は舍利佛の兄だった。

天台大師（天台智ぎ）は前述したように、釈迦の分身だが、天台山を寄進したのは天台大師の兄の陳鍼（チンチエン）将軍である。この陳鍼将軍の過去世はインドで舍利佛の兄として生まれた、と高橋師は言い残した。舍利佛であった園頭師は、月刊『正法』に次のように記述している。

「昭和五十四年四月、名古屋市の「若○」さん宅にお世話になり、遅くまで話をした。若○さんは過去世に於て、天台大師の兄として生まれられ、当時、陳鍼という将軍で天台山を寄進されたという方であり、インド時代は舍利佛の兄として生まれた方であると高橋先生は言われていた。そういう過去世を持たれたせいであろうか「若○」さんの話はスケールが大きい。いつも教えられることばかりで楽しい。そして、過去世からの関係か刀を沢山集めていられた。」と。



20)、 株式会社経済界の主幹の「佐○正○」氏は、古代インド時代の王様と親しい人だった。

高橋師は、「佐○」氏について次のように記述している。

「フェイス出版社のS社長は、あらゆる宗教を取材してきたベテランである。その人が、驚いたことがある。・・・」（『心の原点』）

また、『心の発見』（神理篇）には次のように書いている。

「株式会社経済界の「佐○正○」氏の守護霊は、インド時代「パセナティ - 」や「ビンビサラ - 」といわれた王さま達と非常に親しかつたらしく、手振り、身振りで当時のことを語り、現在肉体を持っている者の批判をすることもある。朗らかな方で、社長の生まれた当時から現在までのこと、その人となりについて私に話してくださいましたことがある。」と。

そして、園頭師は、月刊『正法』誌178号に、要約すると次のように書いている。

「佐○正○氏を私が知ったのは昭和四十八年七月だった。関西本部の講演会に来られた高橋先生と二人で話しをしている時に、高橋先生に挨拶に来られたが、出て行った後に高橋先生は次のように話し出された。「園頭さん、今の彼が「経済界」の佐○正○さんですよ。私の最初の『縁生の舟』（改題『心の発見』）神理篇は彼の所から出版したのですが、彼は、私と契約した出版部数を越えてたくさん刷って、僕の印税をごま化したんですよ。彼は僕をうまく騙したつもりでいるんでしょうが、彼の後ろに守護霊が立っていて、上のほうから彼の頭を指さして、「この者は何千部印刷しました」といっているんですから、僕をごま化することは出来ませんよ。」、と。

また、園頭師はいう「昭和五十九年だったか、彼が私に会いたいといって来た。午前七時に経済界の本社に来てもらいたいというので出向いた。高橋先生が昇天された後、「ミカエル事件」が起こって混乱したが、彼が私に会いたいといって来たのは、少しはまじめに正法を勉強したいという心になったのかなと思って私は行ったのである。彼は当時、既に半身不随であった。暫くして彼はいきなり、「あなたは私のこの病気を治せますか」といった。人に指導を受けるにはそれなりの礼儀が必要である。「人は私のことをいろいろ奇跡を起こす人だと言っていますがね・・・」といい捨てて、あとは何も言わずに帰って来た。」、と。

「佐○」氏の著書には、カメラ屋の主人か何かに、高橋師が出てくると書いておられる。高橋師が出てくる人には、出て来るだけの人格、霊格がなければならない。厳しく「正見」して欲しいのである。



21)、 「夏○徳子」氏は千五百年ほど前のタタクリというラマ僧であり、「五○嵐○子」氏は蘇我入鹿（いるか）の娘だった。

「夏○徳子」氏の過去世は語る。

「私は今から千四百五十年前、チベットの貧農に生まれた夏○徳子の本体のタタクリでございます。ヒマラヤで肉体行をしたラマ僧でございます。私も師を求めて中国へ行きました。その頃の中国には天台智ぎ様がおられて、修行のために天台山に入山し学びました。同じ頃、日本より小野妹子さまが留学されており、小野妹子さまは使者として立派な方で、日本という国を、豊かな大国であるということを知りさせたのは妹子さまにそれだけの威厳が具わっていたからでございます。その頃私の姉、「五○嵐○子」は蘇我入鹿の娘で、姉の主人は、シャン・ミンヤン。弟はゲン・ミンヤンといい伎楽の代表者で隋の音楽を伝えたのでございます。」、と。

「五○嵐○子の過去世は、ティカラ - という名の、釈迦の時代の戒律第一といわれたウパリの秘書であった」、と高橋師は言い残している。また、高橋師の著書には、「生老病死の原因について話をしているところへ五○嵐○子さんがお茶を持ってきた。彼女の守護霊が私に挨拶をしている（本人には分かっていない）。インド時代、ウパリの秘書をしていた当時の若いスタイルである」と、書いた。

夏○徳子 八世紀（千二百年前）のトワンテン・フォアン・テン（中国・男性）

< トワンテン・フォアン・テン (男性) はどんな人か >

彼は儒学を学び立身出世を願うが、一人息子のブンテンワン (現代は夏〇さんのご主人の姉さんの子供で、十四年間も喘息で苦しめられたが、正法を知り快癒されている) が病弱で先立ったので仏門に入った。天台山で学び当時の師はトワン・テン・エンという老僧 (世田谷在住の「S」さん) で、その頃日本の最澄 (伝教大師) が八か月ばかり留学しており、その関係で比叡山延暦寺に玄信という名で帰化した。その後も日本に生まれ、北条氏ゆかりの者となった。次に、過去世 (玄信) は語る。

「私は最澄さまから客分として特別待遇を受けました。当時の延暦寺は山腹にあり庵のような体をなしており、拡張はその後のことでございます。」、と。

タタクリ (千四百五十年前のチベットのラマ僧・男性)

一世紀 (二千年前) のイエスの時代のエジプトのセテリア (女性)

紀元前六百年 (二千六百年前) 頃のワイリヤスタデ - (ワイヤリス・スタティ - ・肉体行をやった人・男性)

フェリカ (エジプト・武将の妻・女性)

四千年前のセンツェラ - ・アル・カント - ラ - (王様の配膳係・女性)

この夏〇さんの例では、現代から四千年をさかのぼって見ると、男性に生まれたり、女性に生まれたり、輪廻転生 (生まれ変わり死に代わり) をされているが、人類の多くの生命の流転がこの様なケ - スだが、これより男に生まれるか女に生まれるかについて、高橋師がどのように教えたか再度述べてみたい。

< 人間の男女の系列と組み合わせ >

その構成は次のとおりである。

1、本体が男で、分身五人がみな男 (全員が男)

イエス様やお釈迦様のように、女性的なものも全て学び終えた特別な使命を持った人。

2、本体が女で、分身五人がみな女 (全員が女)

マリヤ様やマヤ様のように、男性的なものも全て学び終えた特別な使命を持った人。

3、本体が男で、分身の二人が男で三人が女

4、本体が女で、分身の二人が女で三人が男

このように、いつの世も男だけに生まれてくる人、いつも女だけに生まれてくる人、そして男に生まれたり女に生まれたりする人の三様があり、男と女の比率は1対1で半々である。何と言う神の平等の仕組みだろう。女に生まれて損をした、男に生まれて損をしたと、お考えの皆さん如何ですか。



22)、夏○徳子氏の周辺の、十五歳(一九六八年現在)の学生「E」さんは、ヤシヨダラ姫の友人の「フワイリヤリ」と呼ばれたクシャトリヤ(武士)の妻だったが、主人が戦死した後、仏法に帰依したと高橋師は言い残した。そして、その頃、カピラヴァ-スト(釈迦の生まれ育った王宮の在所)に良く遊びに来ていた食事係の人「F」さんはフワイリヤリ-を思い出したが、

「二千五百数十年ぶりに会って、当時を語り合っている光景を見ると、私達は生命の不変をつくづくと感じさせられるのである」、と高橋師は自著に記述している。



23)、川口市の「新○チ○」氏は、カピラヴァ-ストで配膳係をしていた「レヴァリ-(リバリ)」だった。

『心の発見』(神理篇)には次のように書かれている。

「川口市の「新○」さんも、自分の過去世がカピラヴァ-ストで、配膳係をしていたことを、コ-サラ語で語り出した。」、と。『天使の再来』には、要約すると次のように書かれている。

「四十四年の三月、知人の誘いで先生のお宅をうかがったのです。寒い晩でしたが、長男をつれて二階の応接室へはいりますと、首までの厚手のセ-タ-を着込みズボンもあまり高価なものとはいえないふだん物。若くてガッチリした方が微笑を浮かべ、私達親子を暖かく迎えて下さいました。先客の方々と冗談をいいながら、きさくに話をされていますので、先生のところで働いている人かと思いました。ところが、ソファに軽く腰をかけられたその方が知人の紹介で先生と分かり本当に驚いた次第でございます。お釈迦様の生まれ変わりを知人からうかがってはいましたが・・・。おそろおそろ息子を先生の前に連れていきますと、光を入れ先生は何やら唱えておられましたが、「もう心配はいりません、大変でしたね」、と。十七年間の病苦から解放されたのです。長男は一年になりますますが会社も休みません。私も四十四年の七月に霊道をひらかせていただきましたが、カピラ城で配膳係だったそうです。」、と。



24)、釈迦のただ一人の子供・ラフラは、現代は「G」さんとして生まれ変わった。

釈迦は二十九才の時、一子ラフラと正妻ヤショダラを王宮に残し出家してしまう。結婚して十二年ぶりに子の父となった釈迦は、出家の障害物とも取れる名前をつけるのだった。「ラフ」とは古代インド語で「石」、「ラ」とは「橋」のことで、当時つり橋が多く、その上に石が置いてあると、重みでつり糸が切れたり通行の邪魔になるというわけである。うすうす予感されていた父王も、子供ができたからには落ち着くに違いないと安堵されるのもつかの間、厩番（かわやばん）のチュンダカに馬を引かせて出城してしまう。それからの釈迦は、十二年ぶりに釈迦教団の人達と集団で一度帰城するが、その時、大きくなったラフラに直面して釈迦は、ラフラを置いて十二年余の間、家をあけた責任がひしひしと感じられ「やはり、責任はまぬがれ得なかった - - -」、人の親としてなすべきことをなさなかった懺悔の心が、ブツダをとらえて離さなかったのである。こうして、現代の高橋師は、「当時はあれで仕方のない面もありましたが、出家は間違いでした。それで今度は家庭を持って道を説くことにしたのです。」、と述べているが、かつての一子ラフラも、「縁生」（えんしょう）として高橋師の周辺に集まって来られたとは不思議であるが、かつてのラフラは、舍利佛が教育を担当したと高橋師は言い残している。



25)、加賀の「美○裕○」氏は、釈迦の時代のバックバ - の弟子だった。

園頭師は、今から三百年後にインドに生まれて、階級制度であるカ - スト制度の打破を目指しており、その時の縁を結ぶために、これまでに十数回インドを訪ねているが、月刊『正法』95号に次のように記述している。

「私は霊鷲山（りょうじゅせん・インド）の洞窟に坐った。涙が流れる。古代の言葉が飛び出す。加賀の「美○裕○」さんはバックバ - という苦業僧の弟子であってお釈迦さんに帰依したのだと高橋先生からいわれていた。「美○」さんが一番最初に大声を上げて地べたに泣き伏した。私は過去世を思い出しながら一人一人に声を掛け肩を叩いた。こんなことははじめてであった。」、と。



26)、釈迦の時代のアニルッタの現代は、「三○」氏だった。

高橋師は、昭和四十八年七月、八起ビルでの講師幹部研修の中で次のように述べている。

「アニルッタという人がありました。この人はアナン達といっしょにカピラから来た人で、現在は「三○」さんといって七十才ですが、カピラから来られた時は二十代でした。人生というものは楽しいものだという事を悟ったのは良いのですが、仏陀の説法を聞きながら居眠りをしたことを注意され、この眼があるから眠るので、それに負けてはならぬと眠らないことをやったために逆に眼が見えなくなりました。アニルッタさんは眼は見えなくなったが、そのために一切の執着がなくなったために、逆に心の眼が開いてしまいました。あの世もこの世も見えるようになりました。盲目であってもどこへでも行けるようになりました。」、と。

27)、イエスの時代、イスラエルの七つの教会の中のフィラデルフィアの教会長は、現代の「H」さんだった。

昭和五十一年四月のGLA七周年記念大講演会の質問の時間の情景を再現してみたい。

高橋師は舞台のうえにマイクを持って立ち、そばにパイプのイスに腰を掛けた佳子氏、少し離れたところに移動黒板が置いてあり、会場には質問の男性「H」氏。

「私は宣教師をしている者でございますが、・・・真実はどうなのか出来れば実在界の方よりお教え頂きたいのです。」

「あなたは宣教師ですか。こちらはまだ子供ですけれども（佳子氏を指し）、かつての、ミカエルといわれる天使長、この方に天上界より入っていただきまして、当時イエス・キリストがどのようなことを教えられたか、これについて語っていただきます。」

高橋師は古代語（異語）でミカエルに依頼。それに答えてミカエル天使長は、佳子氏の声帯を通して、高橋師と同じ異語で応答される。しばらくして、佳子氏の口を通して「ミカエルでございます。・・・」と、流暢な日本語で説明されるというものだった。

この様にしてミカエル天使長は、佳子氏の声帯（口）を通して「H」氏に説明をして質問の時間は終わるが、佳子氏はミカエル天使長の言葉を伝える憑（よ）りしろ（霊媒、媒体）として、ミカエル天使長を高橋師の偉大な力で強制的に降霊させたに過ぎない。ところが、佳子氏は、ミカエル天使長の生まれ変わりと誤認したところに、ミカエル事件等の一連の問題は起こったと言える。ウェブ・マスターの手もとにある高橋師の講演ビデオや録音テープ等の資料には、どれ一つを取っても「ミカエルに入っていただきまして」とか「ミカエルを入れて」という話し振りなのである。

< 再び、ミカエル事件の概要 >

昭和五十一年に高橋師が亡くなると、佳子氏は自らをミカエル天使長の生まれ変わりと宣言した。また、佳子氏の周辺は佳子氏を、「ミカエル佳子」などと呼称させ、会員は四十才迄と言う、宗教団体の年齢制限という前代未聞の事件（これらの一連の問題を園頭師はミカエル事件と呼ぶ）が起きた。その取り巻きを「ミカエル軍団」、「ミカエル・ウイングス」、「ミカエル・ボイズ・アンド・ガールズ・MBG」と呼び、「ミカエル・カレンダー」、「ミカエル・コール」等のグッズや呼称がある。また、月刊『GLA』はミカエルのMをとって月刊『MLA』に改称して、GOD（神）がMICHAEL（ミカエル）に交代というわけである。そして、GLA本部の八起ビルをオレンジ色に塗ると言うこれらの計画も、園頭師等の強い反対で白紙に戻され、幻の『MLA』誌と、幻のオレンジ色の本部になったというわけである。

園頭師は言う。「あのまま[MLA]を呼称させておけば、[GLA]とは別人格の宗教団体と思われて、これ程までに混乱しなかったかも」、と。高橋師が亡くなった時、息女の佳子氏は二十歳そこそこであった。その時、突然GLAに入り込んだSF作家の平井和正氏（挿画は宮脇信太郎氏・エロ漫画「THEレイプマン」等の作者）が、佳子著として『真創世記』三巻を書いている。これは、佳子氏が自ら書いたとされていたが（園頭師は「違う」と当時から否定していた）、混乱させた後サッサとGLAを辞めた平井氏は、昭和六十一年の『アドベンチャー』八月号に「真創世記は私が書いた」と発表した。正法が拡がると魔界の足場が崩されるので、魔達も躍起なのであろう。「類は類をもって集まる」という同類達を魔達はコントロールして、手を変え品を替えて混乱させるのである。でも、案ずることはない。高橋師亡後、園頭師を頂点として、いろいろな段階の天使達が縁生という強い絆で立ち向かい、天上界にはミカエル天使長を初めとして、真のメシヤ・エルランティ・であら

れる高橋信次師が控えて下さっているからである。こうして、佳子氏は、高橋先生が亡くなられた二年後の昭和五十三年三月末の東京のとあるホテルで、六十人ほどの報道陣が集められ記者会見によってミカエルを売り出す計画だった。ところが、ミカエルについて質問攻めに合い、二十才を出たばかりの氏は遂に泣き出し、「ミカエルとは二度と言えません」という異例の記者会見となった。四月は横浜、五月は福岡での「ミカエルは語る」という大講演会ポスタ - も急遽はがして廻るということになるのである。



28)、二千年前のイエスの時代、七つの教会の中の一つエペソという教会の教会長のスプリナ - は、現代は「I」氏だった。

昭和五十一年四月、GLA七周年大講演会の27)の「H」さんに引き続いての一情景である。現代は、会社のサラリマンである「I」氏は、過去世の言葉を喋りながら演台のそでの方から出てこられ、彼の過去世の人は語る。

「私は二千年前、イスラエルの地で宣教師をしていた者でございます。私の名はスプリナ - と申します。私はその当時、ミカエル様から教えをいただき、多くの者に正法を説いて参った者でございます。」それから佳子氏の解説がはいる。「その当時ミカエル大天使長は、七つの教会を回り、今ここで行われているような過去世の言葉を語らせるという力を与えたのでございます。」

そして、高橋師の解説。

「.皆さんも人ごとではないんです。演技ではないということを.これと同じことが聖書の中の使徒行伝第二章と華嚴経十地品(じゅっちほん)にあるではありませんか。」、と。

このように、ビデオの中の佳子氏は、父・信次師に協力する素晴らしいお嬢さんだったのである。



29)、釈迦の時代、マイトレ - ヤ - の従兄のピンギャ - は「J」氏になった。


高橋師は次のように記述している。

「昭和四十四年十一月、古代インド、二千五百年前のマイトレ - ヤ - の従兄であったピンギャ - が、日本人として生まれているのが分かった。インドの頃の同じように、他の宗教団体の幹部として布教活動を続けていたのであるが、過去世になしてきたことと同じ方法で神理に帰依したのであった。」、と。

釈迦の時代、ピンギャ - は、叔父さんであるバラモンの師ババリ - のもとで、バラモン教を勉強をしていた

が、後に釈迦の説く正法（仏教）に帰依し流布に努めたのである。


Home



30)、釈迦の時代、ババリ - の弟子・サラナンダは現代の「K」氏である。

高橋師は、要約すると次の様に記述している。

「昭和四十六年三月、ある新興宗教の靈的現象に惹かれてその信者となった婦人が、私のところへきた。彼女は一年近く、その教団の信者として上級研修を受けて洗脳され、一流会社をやめ、哀れな人々を救おうと専念していたのだった。しかしいつの間にか自分の心を失い、自分自身の本性を忘れ去ろうとしていた。そうしたとき、『縁生の舟』（改題・『心の発見』）の神理篇を読み、私の事務所に来たのだった。彼女の心は不調和な動物靈に憑依（ひょうい）されていたが、私達は即座にその靈の姿を見抜いて取り去った。その結果、彼女は以前の自分を取りもどすことができた。そして、彼女が、インド・マガダ国のグリグラ - ドの山頂でプッタ・ス - トラを学んだ比丘尼で、ババリ - の弟子、サラナンダという女性であったことを思い出し、当時の言葉で語りだしたのであった。「おう、マイトレ - ヤ - 、おなつかしい。暫くでございました。私は嬉しい」と涙ながらの対面の場は、そこに居合わせた人々の胸に温かいものをこみ上げさせたのであった。」、と。



31)、古代インド時代のウバシバは、現代の「L」氏となった。

昭和四十七年十月、盛岡市での高橋師の講演から。


「こちらの方は、二千五百八、九十年前、インドの地、パラナッシ - という都のカパリ - 村に生まれていた方です。ベルベ - ナ - といわれる竹林精舎から北東にある、グリドラクタ - （靈鷲山・りょうじゅせん）といわれる山があります。その山に十七人の人々と共に、ゴ - ダマ・シッターダ - の説く神理を聞きに来た一人です。ウバシバと呼んでおります。どうもありがとうございます。次にこちらの方は・・・・・。」



32)、三木野吉(本名・渡辺泰男)氏の奥さんは、修道院の看護婦だった。

三木氏の著書『ノアの箱舟』には、要約すると次のように書かれている。

「昭和四十八年の一月、GLAの本部に立ち寄り、『縁生の舟』(改題・心の発見)と月刊『GLA』等を求め一晩で読み切った。何か本部へ行くと、過去世を教えてくれるらしいから、ちょっと今日、行って来てくれないかと妻に頼んだ。帰宅してどうだったかいとたずねると、「何でも、ずばりずばりとわかってしまうので、恐いようよ。今やっているペンダントをする教えは、間違っているそうよ。第一、服の下にかくれているのに、すぐ指摘されたわ。あなたは、何とかして人の為になろうと誓って出てきたんじゃないですか、と言われて、びっくりしたわ。子供の時から、心の中で何時も思っていた言葉なんですから。あなたの守護霊(註・過去世)は、修道院の看護婦さんみたいに黒い服を着て、後ろに立っていますよ。腰に黒い蛇がついていますよ。今度の講演会にいらっしやい。その時とってあげます、とおっしゃるから、人前で実演の道具にされてはかなわないな、と思ったの。そしたら私の心を読みとって、それなら今とってあげましょう・・・」、と。



33)、地獄霊に憑依されて、心臓が悪くなって困っていた女性「M」さんは、釈迦の時代の比丘尼だった。

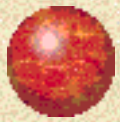
昭和四十九年二月、東大阪市での高橋師の講演の中の「現証の時間」を再現したい。

高橋師は「M」さんを登壇させ、合掌を命じる。

「この者の肉体に関連せるところの、あなたのお母さんですね。離れなさい、これでは救われません。この者自身も、肉体的、精神的に不調和を来しているのです。出ていきなさい、下がりなさい。ウエスパ。この者の心臓よ、あなた達は自分の使命を果たしなさい。このような不調和な状態であってははいけません。あなた達にはあなた達の使命がある筈です。神よ、このものの心臓に調和と安らぎをお与え下さい、心に安らぎをお与え下さい。あなたは低血圧ですね、もう少し神理を良く勉強して生活に活かして下さい。この者に憑(つ)いているところの霊よ、そなた達は理由があるならば、この者の口を通して語りなさい。出てきて語りなさい、あなたはどなた?この者の口を通して語りなさい。肉体を持っている人よ、普通に語りなさい、胸のほうからずっと声を出しなさい。あなたはこの者の口を通して今までいろいろ言っているが、そのことを喋りなさい、怖くないから普通に喋りなさい。あなたは神様だと名乗ったこともありますね。口を利きなさい、なぜ喋らぬ?あなたはこの人に憑いているいろいろの現象を見せているけれども、本当のことを喋りなさい。怖くないから喋りなさい。あなたは?かまいません、出てきなさい、そしてこの者を通じて喋りなさい。肉体をもっている人は自然に言葉を出すようにして下さい、力を入れてはいけません。さあ、あなたは何か神霊教というのをやっておったの?こちらのあなたは?狐ですね、動物霊ですね。なぜ黙っているか、本当のことを言いなさい。

人間を狂わせて、この者にあたかも神のごとき現象を見せているがこの者はそのために苦しんでいるのだ。そのような間違ったことを言って、この者にずっと憑いているつもりだったら、あなたを封印して出られないようにしてしまうが、いいか。肉体を持っている人は心の中で、「どうぞ出て下さい」、と言いなさい。そう出てきなさい。そ、そう、はい、胎内くぐりをやりなさい。手をずっと上に上げて、そう、手を上に合掌して。

合掌したところから出てゆきなさい。神よ、この者に調和と安らぎをお与え下さい、実在界の諸如来、諸菩薩、光の天使、この者に調和と安らぎをお与え下さい。この者に関連せる邪な霊達よ、そなた達は一切この者から離れなさい。この者は霊的なものに魅力を感じ、そして不自然な心によってあなた達を呼び込んでしまった。あなた達は二度とこの者の心に憑依し、不調和な現象を現してはならない。肉体を持っている者の霊よ、あなたはしっかりしなさい。そして、天上界においてこの者を指導している指導霊、守護霊よ、あなた達はしっかりと、この者を守りなさい。あなた達がしっかり指導しないから、肉体を持っている地上界の者達は、そのために悩み、苦しみ、自分自身を失いつつあるのです。指導霊、守護霊よ、しっかりとこの者を守りなさい。はい、目を開けて下さい。ラクになりましたね。守護霊が出てきていますよ。あなた何か変な新興宗教をやっていましたね。そういう方に興味を持っていたんだって、あなた。あなた、インドの当時、比丘尼だったんです。あまり変なものに執着を持たないで下さい、神理をよく知って下さい。まだよく神理をわかっていないんですからね。あなた何年生まれ？「昭和六年です」はい、ではよく神理を実践してみてください。」、と。



この項の終わりに



心の中を読んだ高橋師は、「園頭さんの疑問はキリストに答えてもらいましょう。」と瞑目した。園頭師が最初に見た高橋師の相（すがた）は釈迦であった。どう答えてくれるか固唾を飲んで見守っていると、時間の経過とともに段々顔が変わっていき、眼前に現れている姿はキリストであった。「.....心に愛のない人に、心の法則、心と肉体の関係を教えてはなりません.....園頭さん、わかりましたか」、と。瞑想を解いたその直後、「モゼにエホバと名乗って出たのは私ですからね。」そのとたん、園頭師は、それまでに経験したことのない神の権威に打たれて額ずいた。額ずいているのだから高橋師の姿は見えないが、釈迦の相を示現したその一段上に目もくらむばかりの大きな光り、その権威、霊の重圧の前に「神よ、この偉大な方を今、この世に下したまいて.....」と、その感激に、そのありがたさに師は泣き伏したのである。この目もくらむばかりの神の光りこそは、釈迦もイエスも超越した、神の心の流露であるエルランティ - だったのである。



Home



Home

園頭広周師の記述より引用する。

「ある教団では、その人の額に手をかざすと憑依霊が浮き出すという指導をしている。これは高橋先生が教えられた「光を入れる」のとは全く違うことである。子供が喘息だというので、その教団に通っていた人があった。その教団の講師が手をかざすとその子供が暴れ出す。大人が四、五人かかっても押さえ切れない程の力が出るという。いくら「おしづまり」といっても静かにならない。その後はぐったり死んだようになる。いくら続けて行っても、暴れるのがますます激しくなるだけで、一向によくなるといって来た人があった。高橋信次先生は、その教団を支配しているのは動物霊であると言っておられた。動物霊にも大将親分がいて、幹部講師にはその子分がつくのである。動物霊の世界では力の強い霊が弱い霊を支配する。その子供の場合は、その子供の霊が目ざめていたから、動物霊に支配された講師の邪悪な波動に、拒絶反応を示したのである。**小児喘息というのは、親の心の不調和**であるから、親が不調和である限りどんなに他の治療法をとっても一時よくなったように見えていても、根本的に治るといことはむずかしい。別に意識して調和を図ろうとしているわけではないが、子供が喘息で苦しんでいるのを見たりして、どうかして治さなければいけないということで、子供を治療しているうちに、知らず知らずのうちに夫婦が調和して、その結果よくなったという人がある。その人は正法を知って親自身が心の調和を図っているうちに、子供の喘息は治った。口で愛を説きながら、どのようにして教団に金を集めようかと、いろいろ手段を尽して信者全員から金を集めることを考えている宗教指導者は、動物霊に支配されているとみて間違いはない。その指導者がどんな立派なことをいってもである。正法を説くことを使命として現われてきた光の指導霊は、神の名を利用して、教団の財産をふやしたりすることは絶対にしないのである。勿論、神殿をつくって神を祭るといこともない。信仰することによって何かの益を得ようとか、人の持たない霊力を持ちたいという欲望を持っている人は、本人は無意識のうちに動物霊に支配されてゆく。そういう人達は自分で正しい信仰をしていると思っているけれども、冷静な第三者から見ると必ず非常識な理解し難い言動をするものである。

オーラ（後光）とは何か

オーラ（後光）とは光子体の心の輝きである。仏像の頭の上の光輪として知られる。これらのものは、心の眼（霊視）で見た仏師が彫り、天使の絵は画家が描いたわけだ。高橋師は、ラファエルは七大天使の一人で、画によって天上界の様子を、この世の人に教える使命と目的を持った人と言い残したが、オーラとは光子体、つまり、あの世で過ごすことになる体である。この光子体、後光は、調和された正道を歩いた者ほど大きく強い。仏教で言う幽界より霊界、霊界より神界、神界より菩薩界、菩薩界より如来界と、段階が上るほど後光は大きく強くなる。キリスト教でいう光の天使より光の大天使、上段階光の大天使、上上段階光の大天使と、上の段階へとあがる程、大きく強い。霊格が高い程、大きく強いわけだ。

心の調和度によってオーラの色にも段階が生じる。最も心の調和されたオーラの色は、金色の光、つまり淡いゴールドカラー。紫色の光は金色の光について調和された心の状態。ピンク色のオーラは、もっか恋愛中で、心が乱れ理性を失った心の状態。赤色のオーラは怒りに燃えた心の状態。薄暗い灰色のオーラは、恨みや怒りの心を持って生活している人の心の状態。野心や欲望に燃えている時は、ねずみ色から黒色に変わってゆく、と高橋師は教えた。

また、高橋師は「一秒一秒の心の動きに従って、後光の色彩とその量は変化する。それは自然界の天候が、刻々瞬々変化してゆくのと同じです。心が美しく調和している時や、正しく法を説いている時は、過去世のその人の顔と現世の顔が二重写しになり、身体全体が光明に満たされ、後光が放射状に出ているのがわかります」と言っている。そして、動物霊が神と名乗って変化（へんげ）している場合は、後光が出ていなかったり、青白い光を見せる場合があるが、淡いゴールドカラーとは全く異質のものである。動物霊が青白い光を放ち、菩薩や観音のような姿を見せると「神が現われ、人類を救えという神示が下った」とかなんとか言って、人々を混乱に陥れてゆくことになるのである。「動物霊が支配していると、坐ったまま一～二米も飛び上がったりします。彼等はそうして人を驚かすことに興味を持っています」と、このように高橋師は言っている。

オーラとは以上のような説明となるが、このような人間のオーラが、もし正確に測定できたらどうなるであろうか。採用テストに利用する企業が出て来るかもしれない。"企業は人なり"と言うように、どこも立派な人が欲しいのである。仮に、皆さんが来世、どこかに生まれた時、器械によって判定され、ふるいにかけてられるようになっていたら、あなたは何んとされる。生まれ変わり、死に変わりする間に正道を歩き、人生の勉強、魂の勉強をしながら、心のアカやスモッグを取り去ってオーラを輝き出させていきたいもの。この地上界は、善と悪のいりまじった又とない修業の一大チャンスなのだ和高橋師は教えたのである。だから、転生のその時、その時の人生修業が、おろそかに出来ないことになる。現在、オーラ測定機やキルリアン写真などの本もいくつかあるが、どれ程の測定が出来るのかウェブ・マスターは知らない。このように人間は皆、淡いゴールド・カラーのオーラで一生を終えたいものである。そして、生まれて来た時より、より大きいオーラで、あの世へ帰りたいものだ。



これより園頭広周師の「ことば」から。

「人は誰でも心をきれいにして統一すれば、手のひらから光（生命磁気）が出るのであって、特別にペンダントをもらわなければ出ないということはない。どこの教団とも同じで現世利益を目的としている。ただ違うのは「手かざし」をやることであるが、手かざしで病気を治そうとしても治らなかったとか、あるいは手遅れになって死んだという人も多い。それよりも危険なのは、「浮霊」という憑依霊が浮き出てくるという現象である。こ

のやり方は催眠術を使うのであるが、心の弱い霊示にかかりやすい人は、催眠現象により無意識にそれを願望することによって、簡単に身体が動いて来る。催眠は、自意識を無にして、すべての暗示を受け入れやすくするのである。すると、その心がカラッポになっているところに、他の霊が入りこむことになる。それを学者や医師は「精神分裂症」というのであるが、完全に自分の心を動物霊や地獄霊に明け渡してしまうのである。学者や医師達が、催眠術で一番恐れているのが、人格が破壊されて全く別人になってしまうこの現象であるが、学者や医師達は、それが動物霊や地獄霊の憑依によるものであるのを知らないのである。そうなってしまったら、この教団の「手かざし」で治ることはない。手かざしをすると、ますます暴れるのである。もちろん、精神病院でも治せない。それを治すのは、高橋信次先生の説かれた「正法」以外にない。このような危険な信仰はしない方がよい。宗教が霊の自覚向上と人格完成のためであることも、多くの教団では説かれていない。自分から暗示にかかろうとする心の習慣がつくと、自主的に自分で考えるという自主性がなくなるので、人格を破壊することになる。」

これまで「手かざし」の問題点を指摘、引用した。我々は、病気の治療をすることを「手当てる」といった。それは昔から掌を当てることによって病気を治していたからである。これと同じように、釘を打ちそこなっ て拇指を叩き、その瞬間拇指を口にふくんでいたという経験があると思う。そして、子供が頭に瘤(コブ)ができた時、母親が息を吐きかけて「痛くない痛くない」という経験を持った人も多いと思う。これも、息にも癒す力があるからである。古神道では「息吹き袂」といって息でケガレを袂ってきた。このように、私たちは昔から、お腹が痛ければ無意識のうちに手で腹を押え、歯が痛いといっっては頬っぺに手を当てることをやってきた。人は皆、手や息には癒す力があるということを潜在意識の中に持っていたからである。この人類が皆、共通に持っている、生まれながらにして持っている力、能力を、特定の教団の専有のもののように説くことに問題の一つがあると言うのである。なにも、特定の教団に入信しなければとか、ペンダントを貰わねばその力を出せないということは決してないのである。神の子・人間は、すべてその能力を持っている。古代インドの時代、お釈迦様は、病人に手を当てられ病気を癒された。また、薬草を与え病気を治された。二千年前のイエスの時代、聖書の中で、病人がキリストの衣のふさにふれると、病人が治ったと書かれている。

「かわれより流れ入りて汝に入れり」とキリストが言われたというのが、聖書の「ルカ伝」には「日が暮れると、いろいろな病気で弱っている者をかかえた人達が皆、その病人をみもとに連れて来た。イエスは、ひとりひとりに手を置いて、いやされた」(五・一二一四〇)また「マタイ伝」には、「イエスは手を伸ばして、彼にさわ り、「私の心だ、きよくなれ」と言われた」(八・一六一一七)

このようなことはどうして起こるのだろうか。これは先述した「オーラ」によるものである。全身から出ているオーラの雰囲気の中で、オーラが手から相手に集注されると、大きな力を発揮するのである。そして、キリストのオーラの雰囲気の中に入った時に感動を受けたのである。心が広く豊かで愛深くなると、後光(オーラ)は大きくなる。心が狭く貧しく我欲に満たされると、後光(オーラ)は小さくその色も汚ない。身体の小さな人でも、大きく見える人がある。愛の深い人の傍に行くと、なんとなく心がほのぼのと温かくなって来る。また、その逆もある。それは、その人のオーラが雰囲気となって出ているからである。愛の深い人の温かい雰囲気の中に包まれると、安らぎを感じ、いつまでもその人の傍にいたいと思うものである。

Home

「光を入れる」ことの理解のために

< 肉体細胞には心がある >

高橋師は「光を入れる」とき、「〇〇細胞よ、あなた達も神の子として、神の世界より使命を持ってきた筈です。この場所に於いて、このような不調和を起してはならない。本来の使命を自覚し、本来の機能を回復しなさい」と、このように言ったのは、我々が細胞に向って想念し、話しかけると、細胞はそれを聞くからである。

臓器には臓器の集団意識がある

細胞が集って「胃」や「腸」という臓器をつくっている。このようにして胃の集団意識（精神・心）、腸の集団意識が生まれる。我々の意識は肉体の凡ゆる細胞意識を統制し支配しなければならない。「大いなる生命は、小なる生命をコントロールしなければならない」というのが「生命の法則」「心の法則」である。

表面意識と潜在意識

我々の心は表面意識（現在意識）と潜在意識の二つに分かれている。潜在意識の中心に我々の本当の自分、神の子の意識がある。表面意識は、目で見てきれいであるとか、耳で聞いていい音だとかいう五官によって外界のことを認識する心である。

後光、オーラについて

先の記述を参照して欲しい。

ツボ、バイオプラズマ体について

中国では何千年も昔から生命力が通過する道として、皮膚の上にツボを発見して、ハリ治療や灸に応用している。欧米では、そのツボの部分バイオプラズマ体と名付け、太陽表面の変化を瞬間に感ずることを発見した。こうして超心理学者達は、人間は体内のバイオプラズマ体を通じて宇宙とつながっているのではないかと考えた。つまり、宇宙や星や太陽の変化に反応して、感情や病気、音、光、磁場、人体の生命力、肉体に影響を与えるのではないかと考えるようになった。



「光を入れる」ということ

光を入れるということは次の三つのことが同時に行われるのである。

1 . 心から心への説得

私達が念ずると、その念を私達の守護霊が相手の守護霊に伝え、相手の守護霊がその人に心の内から知らせる、囁くのである。念を送る人の心が不純であったり、受ける人の心が素直でなく頑固であったりすると念は通じなくなる。即ち不純なものは守護霊が伝えないし、相手の守護霊はその人にいくら伝えようと思っても、その人が頑固であれば守護霊の囁きが聞えないのである。これまでの宗教団体は、その人のために念ずると、こちらの念が直接相手に通ずるように教えてきたが、それは間違いである。

念の速度は光より速い

高橋信次師は「念には時間空間がない。あの世は時間空間がない」と教えた。これまで光の速度が一番速いと考えられてきたが、念には時間空間がないから思えば即の世界である。

心は念の発信源であり、受信源である

高橋信次師は「人間は皆、生まれながらにして発信機と受信機を同時に兼ね備えている」と言った。

奇跡は自分が起すのでも、神が直接起されるのでもない

これまでの宗教団体は奇跡が起ると「神様が祈りを聞いて下さった」といって神の力が直接働いたように説明してきた。しかし、神の力が直接現われることはないのである。それは「あの世」と「この世」の仕組みを知らないからである。私達は日本人として、天皇を象徴とし、政治的には総理大臣があり、都道府県知事があり、各市町村長があって生きている。憲法があり法律があって、それに基づいて、それぞれの役割があって整然とした秩序がある。総理大臣が直接国民の一人一人の政治をするということはない。このように「あの世」にも厳然とした秩序がある。宇宙創造の神の心を知って、その神の心をそのままに伝える力を持たれた如来界の方があり、その如来の手足となって神一如来の心を伝える使命を持たれた菩薩界の方々がおり、その下に指導霊といわれる方があり、本人を直接守護する守護霊があって我々は生かされている。我々の生命そのものは、神の創造されたものだが、その生命、霊の指導は如来、菩薩、各指導霊、守護霊を通して行われる。そして「光を入れる」時、光を入れる人の心とそれを受ける人の心に偽りがなければ守護霊は見ても協力するのである。また、その守護霊が自分の力では及ばないと思った時は、その問題を解決するにふさわしい指導霊や、光の大指導霊をお願いしてそこに光がそそがれるのである。ここに光を入れる時に「祈願文」を唱えなければならない根拠がある。光を入れる人も受ける人も神の光を受ける素直な心になり、素直な愛の心を持った時に、靈魂の乗り物として神が創造された肉体は、肉体の法則に従って正しく活動するようになり、不健全な細胞は健全な細胞と変わって奇跡が起るということになる。そうしてその人の霊は、その人の霊の段階に応じてそれにふさわしく指導されてゆくことになるのである。ところが、奇跡が起ると、それを自分の力だと思い増上慢になり、あの世からの協力が得られなくなる。だから、謙虚さ敬虔さを失ってはならないと言うのである。立教当時の宗教指導者は純粹なるが故に奇跡も起き、立派な指導者だと見られているが、その内に増上慢になって指導力を失い、高圧的に会員、信者を支配していく。これまで「1 . 心から心への説得」ということを述べた。次に、

2 . われわれの心が直接、細胞精神（意識）に通ずる。

3. 手を当てることによって、オーラ（後光）即ち生命エネルギーが直接に注入され、特に皮膚上に散在するバイオプラズマ体即ちツボから多く注入され、弱った細胞は活力を与えられる。以上のように「光を入れる」ということは、これら三つのことが同時に行われるのである。

病気を治すのは本人の心と、肉体に備わっている自然治癒力（自然療能力）である

「光を入れる」ことも、あくまでも本人の心を目覚めさせ、本人の持っている自然治癒力を振起させる補助的な手段なのである。光を入れることが即病気治しの根本であるように思ってはならない。ましてや、「私が治してあげます」というおごった心にならないことである。あくまでも謙虚な心にならなければならない。

Home



「光を入れる実際の方法」

園頭広周師指導

病気はその人の歪められた心の現われであり、心の持ち方を変えればかわるものである。病気という動かすべからざる頑とした存在がそこにあるのではない。だから、動かし難い病気というものが、その人の肉体の中にあるという固定的な観念を持つてはならないのである。

一、光を入れる前に瞑想、禅定して心を調和させ、愛で心を満たす。

二、相手を仰臥させ、額に手をふれる。また坐ってやる場合は前頭部と後頭部に手をあてて、次の祈願文を唱

える。

「大宇宙大神霊、仏よ、この人の心に安らぎをお与え下さい。この人の体に光をお与え下さい。

実在界の諸如来諸菩薩、光の天使、この人の心に安らぎをお与え下さい。この人の体に光をお与え下さい。

守護、指導霊よ、この人がこの肉体を持って生まれてこられました使命を十分に果たすことができますように、心の内より正しくお導き下さい。」

(このように、天上界からの導きを祈るのである。祈願文を唱える理由は前述した通り。)

三、肉体を支配している本人の意識(霊)に向けて次のように説得する。

「肉体を支配しているこの人の霊よ。あなたは罪の子ではない。あなたは神の子です。あなたはこの肉体を持って霊の修業のために現われた霊であることを自覚して下さい。あなたは完全にこの肉体を支配して、この世に生まれてきた使命を果たさなければならないのです。」

(このように念じて、その人が完全に肉体を支配している状態を思念する。)

四、ついで患部に手を当てる。例えば胃が悪い場合、一方の手を胃の上に、一方の手を背に当てる。仰臥している場合は、一方の手だけ胃の上に当ててもよい。この時に、「ここに悪い胃がある」と思ってはならない。「既にそこが光に満たされて健全である」と思念する。そして、手を当てて次のように念ずる。

「胃の細胞よ。あなた達も神の子である。あなたたちは神の子として、この人が霊の修業のためこの肉体を持つ時に、あなた達はこの人の肉体の細胞となって、この人がこの世にあらわれた使命を十分に果たすことができるように、この人に協力するために現われてきた筈です。あなた達はそこにおいて、このように不調和を来してはならない。あなた達はあなた達として使命を自覚して、神から与えられた使命を自覚して本来の機能を回復しなさい。」

この言葉の通りでなくても、自分の心にもっともぴったりとくる言葉で念ずればよい。胃を病気にしたのは本人なのですから、この時本人は、心の中で次のように念ずることである。

「本来、健全であったあなた達を自分の不調和、不心得によって知らず知らずのうちにあなた達(胃の細胞)を不調和にし、申し訳ありません。私は今、反省しました。私は今、健全な調和された心になりました。だから、あなた達も光を受けて早く健全になって下さい。」

そのように念じて既に胃が健全である状態をアリアリと心の中に描く。手を当てている人も、既に胃が完全であることをアリアリと心の中に画いて、息を吸う時に、単に空気を吸うと思わないで「神の光」を吸うと念じて下腹に一杯息を吸う。下腹に一杯吸った時に、自分の全身が光に満たされて輝いている状態を思念する。息を吐く時に、自分の体内に満ち満ちていた神の光が、手を通してその人に流れ入り、その人の患部が癒され、全身が光に満ち満ちている状態を思念する。この時にその人の体内の悪いものは、体内が光に満たされてゆくと同時に、足の爪先からみな流れ出ると思念する。この場合、大事なことは、何度も言うように自分がしているのであるという心にならないことである。神がすべてのものを生かし、愛さんとしているその神の愛の完全な通路になることである。強力に光を送らなければと力む必要はないのである。光を入れる 時間は一日三十分位が良い。



「『光を入れる』ことについての注意点」

ここでは「光を入れる」ことについての注意を幾つか述べてみたい。

人によって効果が違うのはなぜか

それは光を入れる人の心と、受ける人の心の状態によって大きく違ってくる。光を入れる人が「果してこんなことでよいのだろうか」という疑いの心を持ったり、受ける人が心の中でその効果を否定していたとしたら、また効果が少なくなる。

光を入れた後でひどく疲れたという人がある

それは現在意識で力んでやっているからです。それともう一つは、病人は多くの場合、悪霊（地獄霊）に憑依されているので、その影響を受け易いからである。しかし、高橋信次先生は「誰でも愛の心を強く持てばよいのです。そうすれば誰でも力が出るのです。」と言われた言葉に注目しなければならない。また病人は生体エネルギーが弱っているために、こちらの生体エネルギーが病人に吸収されるので身体が疲れるのである。

『光を入れる』ことはいいことだからといって、無闇にやると危険である

病気になったからには、その人に病気になるような心の原因があったからであり、また憑依されたのは、それにふさわしい心を持っていたからである。その原因はなんであるかを追及、反省をして、その心の原因を取り除くことである。高橋信次先生は「反省は神の慈悲である」と言われたが、折角反省する機会を与えられながら、病気の人に反省をさせずに病気だけを治してやろうとすることは、その人から反省の機会を奪い、霊の進歩を阻害することになるのですから、その人に対して良いことをしたことには必ずしもならない。愛が深いというわけにはゆかないのです。だから言う。「光を入れる」場合は、反省する心を起こさせてからしなければいけないのである。

子供に「光を入れる」場合の注意点

大体、十五歳以下の子供の病気は親に原因があるのだから、親がよく反省をして、「自分達、親の不調和が原因で、何も知らない純心なあなたの心に歪みをつくって、可愛いあなたをこんな病気にして、苦しませて申し訳ありませんでした」と、子供に詫びる心で光を入れるとよくなる。

憑依されている人に「光を入れる」場合の注意点

光を受ける人が憑依されている場合は、憑依している霊の側から言えば、憑依しなければならない正当な理由があるわけである。それを強引にことわりもなしに引き離そうとすると憑依霊が復讐する可能性があるから、憑依霊にも正法を話して、よく救われてゆくように納得させなければいけないのである。

Home



● 憑依された人の簡単な見分け方

園頭広周師分類による

- 1 病名が医者ではわからない。
- 2 持病で病気が長い。治りにくい。
- 3 顔色が土色か、またどこか黒ずんでいるか、その反対に蒼白で精彩がない。
- 4 感情の起伏がはげしい。
- 5 目がおどおどしていて落ち着きがないか、また目がすわって動かない。
- 6 身体が冷える。またいつも熱っぽい。
- 7 いつも頭や肩が重い。
- 8 暗い所が好きで、ものをいわない。
- 9 強情で人のいうことを聞かない。
- 10 人や食べ物の好き嫌いがはげしい。

光を入れても治らない場合

どんなに光を入れても、また医者にかかっても病気が治らない場合がある。それは本人が治りたくないと思っている場合である。そんな馬鹿な、と思われる人も多いと思うが、実際に、病気が治りたくない、このままの方がラクだ、病気になっている方が得だ、と思っている人がいるのである。病気をしている本人が治りたいと思っているかどうかを確かめることが大事なことになる。また、本人が治ることを願っていたとしても、健康になったら、また前と同じように我欲を張って間違っただ道を歩もうとしているのであれば、これまた霊を進歩させないばかりか、むしろ退歩させることになるから、その場合は病気を治させるよりも、病人のままで置いた方がまだ良いということになる。病気がよくなったら何をするか、どういう人間に成りたいと思っているかを決心させなければいけない。

生命エネルギーを補給するための禅定

光を入れると自分のエネルギーを病人に吸収されるために疲れる場合が多い。エネルギーを補給せずに光を入れてばかりいると、遂には自分の身体の活力を失って病気になってしまうことがある。光を入れた後は必ず禅定をして生命エネルギーを充足させて置くことである。



高橋信次師が教える病気平癒祈願

大宇宙大神霊、仏よ

わが心に光をお与えください

心に安らぎをお与えください

実在界の諸如来、諸菩薩（光の天使）よ

わが心に光をお与えください

心に安らぎをお与えください

実在界の諸天善神よ

わが心をいっさいの魔よりお守りください

私たちは正法に帰依して

日々を正しい想念と行為によって

調和と安らぎのある世界を築きます

（まず自分自身の心に光を受けてから、両方の手のひらを体の悪いところに向け、体より一センチぐらい離して健康祈願する。そしてさらに、次のように言う。）

当体の意識（患部）よ

光を入れる

あなたたちは肉体舟としての使命を

この現象界に出るときに

神仏と約束をしたはずで

あなたたち細胞集団は

魂修行の目的を果たしてください

大宇宙大神霊、仏よ

当体（患部）に光をお与えください

安らぎと調和をお与えください

（約三十分ぐらいで効果が出てくる。神理を悟った生活をしていれば、こうした効果はさらに大きく現われてくる。）

光を入れるのはなにも人からだけにやってもらう必要はない。自分の手を悪いという所に当てればよいし、また健康を長く保ちたい人は、左右の肋骨の下部の所に手を当てて、光を入れながらそのまま自然に寝るようにすればよい。



Home



正法を理解するための手引き

正法とは何かを説明しましょう。

私達は、大宇宙の中の、六十兆個の星々の一つである地球という星に住んでいる。大宇宙という尺度で見れば、地球は光学顕微鏡にも掛からない存在だし、一人の人間は電子顕微鏡でも見えない存在に過ぎない。この大自然界の中の極微の人間は、自然界の仕組から外れることは何一つない。正法の生き方は、この自然界をお手本にするというものである。雨が降れば降るままに、晴れると晴れるように生きるのが一番無理がない。悩みというものは、必ず悩みの原因がある。幸せというのも必ず幸せの元があるもの。お釈迦さまは、これを「因縁」と説かれた。高橋信次師は、「原因と結果の法則」、園頭広周師はこれを「善因善果、悪因悪果」と説いた。幸せになりたければ、幸せになる原因を一杯つくればよい。苦勞をしたければ悩みの元を一杯つくればよいのである。至極簡単なこと。この原因と結果の法が正法の**一つ目の柱**である。



二つ目の柱は循環の法である。ドシャブリの雨が降った。雨が止んで、カラリと晴れた雲一つない快晴。水は蒸発して雲をつくり、曇り空からポツポツと雨が降り始める。この、雨 晴れ 曇り 雨 晴れ 曇り 雨 晴れ。これは天気の循環。朝 昼 晩 朝 昼 晩 朝。これは一日の循環。ミクロでは、核の周りを陰外電子の循環。マクロでは太陽の周りを惑星の循環。この循環の法則によって、生きとし生けるものは、人間もあの世とこの世をグルグル循環する。あの世 この世 あの世 この世 あの世、という具合に、生まれ変わり死に変わりするのである。

三つ目は「類は友を呼ぶ」法則。酒飲みは酒飲み同士が集まるとか、穏やかな人は穏やかな人同士が集うとい

う、同類の法則である。

四つ目は、カルマ（業）の法則。これは心の傾向性をいう。ジメーツとした陰気な性格とか、反対に明るく朗らかという心の傾向性である。

正法の柱は、この四つの法則と**五つ目**の八正道である。人生を送るための八つの正しく生きる道。これを八正道（はちしょうどう）という。ものごとを正しく見る（正見）。正しく思う（正思）。正しく語る（正語）。正しく働く（正業）。正しく生活する（正命）。正しく人と調和する（正進）。正しく目的意識を持つ（正念）。正しく反省する（正定）の八つである。これらは「人生教室」の項に詳しく述べている。

これに、「この世の仕組」、「あの世の仕組」、「地球や大宇宙の仕組」と、「宗教の間違いの修正」を加えたものが正法の全部とウェブ・マスターは考えている。これらは、人間が生きていく上で知らねばならぬ全部である。正法には全部の回答が用意されていて、不思議という言葉は正法にはないのである。

正法のホームページには、どこかの項に全てを網羅した積もりだが、コツコツと書き溜めて十年を要した。これは園頭広周・正法教室で学んだ集大成と思っている。当然のことながら、生きていくかぎり引き続き内容を更新してゆく。更新と言っても、神理が変わるはずはない。高橋、園頭両師の「ことば」は多くある。それを公開して知らせるのは、ウェブ・マスターの使命と自覚している

「正法」は、モーゼ、釈迦、イエスを分身に持つ、本体で真のメシヤ・エルランティである高橋信次師がベーシックな基本を説き、アドバンスな応用を園頭広周師が説き明かしたものである。両師の正法の著書は百冊以上にもなり、「正法の本」の項として上げている。

正法の御本尊は「大宇宙大神霊」である。教典は「心行」であり、副教典は「感謝の祈り」である。いずれも独立した項として上げている。教義書は「心の原点」、「心行の解説（上下）」、「人間・釈迦（四巻）」である。「心行」、「感謝の祈り」は独立した項として上げている。

高橋信次師の生涯は「人間・高橋信次」の項に上げた。園頭広周師については、「生まれ変わり」の西郷隆盛の項に詳しい。講演はそれぞれに項を独立して上げた。

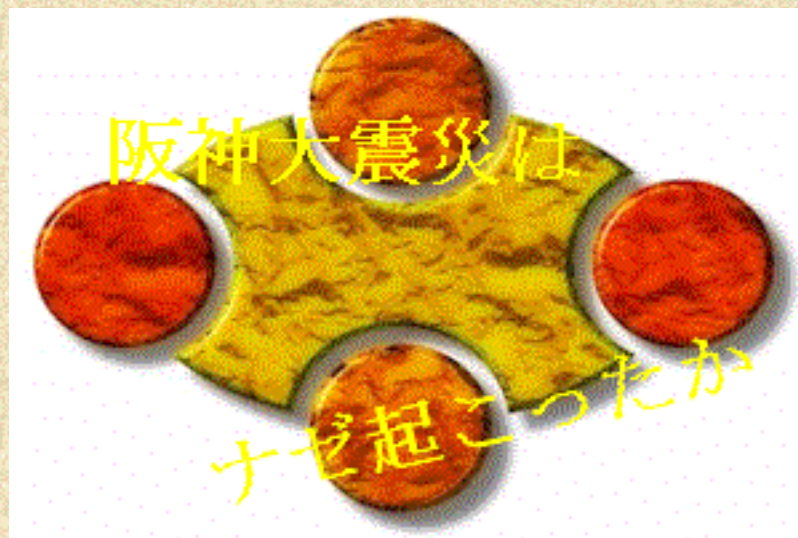
「この世の仕組」、「大宇宙の仕組」は、「正法と創世記」に述べている。死後の世界は、「スライド・大往生教室」で上げ、「生」・「老」・「病」もスライド方式で上げた。宗教や霊能の修正は、「正法と霊界教室」で述べている。

その時代の時の話題を、「トピックス」として、これを正法ではどのように考えるのか解説を加えた。

「正法」ウェブ・マスター 八起正法（やおきまさのり）



[Home](#)



Home

高橋信次師・園頭広周師に学ぶ

「阪神大震災は何故起こったか」

平成7年1月、阪神大震災で約六千人が亡くなるという大惨事になった。幼い子供が、お年寄りが、働き盛りのバリバリの人が、愛の極致にあった新婚の人が亡くなった。繋がっていた犬が埋まり、木々が折れたり燃えたりした。また、鉱物の鉄柱も建物も壊れ一瞬にして瓦礫の山となった。人間も動物も植物も鉱物も壊され倒れ、何一つとして傷つかぬものはなかった。人間だけが傷つき倒れたのなら、それは許されるだろう。だが、動物、植物、鉱物に、人間は何と申し開きをするのだろうか。人間生活を共に協力する万生万物に対して、心から申し訳ないと言うのである。昆虫や、囲いに繋がれぬ動物は、地震を事前にキャッチして逃れ、傷つくことはあり得ない。

ウェブ・マスターは次のように言いたいのである。「人間に反省を求めるために天は地震を起した。否、人間に地震を引き起こす原因があったので地震という結果が起きた。だから何も「大地」のせいではないのである。人間界に問題があった為に、自ら動くことのできぬ植物や動物は成るがままに犠牲になった。だから彼らに、心から謝りたいというのである。

植物も鉱物も動物も、すべて「神の子」である。この万生万物は、神の生命、神のエネルギー - を分け持った神の分身、神の子である。独りよがりなことをする万物の霊長・人間に対して、地上を構成する鉱物たちが力を合わせて大地を揺り動かす。最も忠実な「神の下僕」は、左右に揺すったり上下に震えて人間に反省を促す。それもほんの僅かな時間。目的を終えたら、時間をかけて小震いしながら興奮を冷ます。そして彼等はいつも次のように思う。「万物の霊長の人間様達は、どうしてお分かりにならないのだろう。人間様が独り調和を乱すやり方は困るんだよな。植物さんや動物さんには、本当に気の毒だと思うけれどそれはそれで仕方ないんだ。」と。

こう述べると、あちこちから「なにが神の子だと?」、「冗談じゃないよ。なにが鉱物さんだ?」、「人災だと?天災に決まってんじゃない。」、「私の知り合いなんか、幼いお子さんと一緒に犠牲になったんだ。あんないい人達が犠牲になるなんて神も仏もあるもんか。逆なでなことを言うと、水ぶっ掛けるぞ。」と聞こえてきそうな気配である。

「家族思いのあんな立派な人がなぜ、どうして?」、という疑問に答えることができる人は、学者にも、宗教家にも誰もいないと思う。本文に入る前に、はじめに高橋信次師の「ことば」から「偶然」をお聞きいただこう。

「偶然」

高橋信次

「人には運、不運が常につきまとうと言われていて。道を歩いていて事故にあう、元気でいたのに病気をする。あれが欲しい、これが欲しいと思ってもそうはゆかない。運だとか、偶然だとかいっても、そうだとばかり信じているわけでもない。努力すれば運命は変えられるのではないかという心も持っている。人生にはあまりにも不確定の要素が多いようである。毎回繰り返すようであるが、私達のを認識する認識は、普通その全体の一〇%、人によっては七、八%くらいでとまっている者もある。さらに重要なことは、人それぞれに過去世という魂の遍歴がある。その遍歴によって記録され、想念と生活行為がある。そのために、そういう記録された因縁によって、その人の気質がつくられ、性格がつくられ、能力などが形づくられてくる。同じ両親の下で育った兄弟姉妹であっても、楽道家もあれば内気な者もいる。これらは父母のその時々々の精神状態なり、生活環境もあるが、実はそれも先天的な魂の遍歴に影響されている。もっとも、後天的な生活環境にも大きく左右される。偶然も必然も、こうした先天的要素を外しては判断が下せない。運命の予知とか透視も、一〇%の現意識ではわからない。運命の予知が可能だということは、偶然ではなくて、物事が必然の方向に動いているということである。ただ、普通ではそれがわからないために、偶然とか、不運で片付けてしまうのである。現代科学は壁に突き当たりながらも発展する途上にあるが、物質科学では偶然、必然は測定するには無理がある。なぜならば、人間は単なる物質ではなく、意識という心があり、その心の一部に記録された過去世の遍歴と、今世の想念と行為が因果をつくり出しているからである。偶然とか、運、不運を口にする前に、まず神の子の自分に立ち帰り、今を正しく生きることに努めることである。運はそうした中からひらけてくる。」

サテ、本論に入る前に、もう一つ園頭師の「ことば」がある。昭和六十年八月、「日航機墜落事故」があった。これを正法に照らして、どう考えたらよいか園頭広周師の論文から聞いていただきたい。

「心の法則には偶然はない。偶然があったら法則ではない。偶然とは原因がわからずに、予期しない結果だけがそこに現われた場合に使う言葉である。なぜ偶然という言葉を使うかということ、そうなった原因がわからないからである。一つの原因だけに特定できない場合に「不確定性の原理」という言葉を使う学者もいるが、要は「私にはよく原因がわかりません」ということを学問的らしく言い替えたに過ぎない。高橋先生の説かれた「原因と結果の法則」即ち釈迦の説かれた「因縁の法」は、その原因によって、必ずその通りに現われるというのであり、偶然はないということである。そうして人間は転生輪廻、生まれ変わり、死に変わりする中で、それでもこの世に現われなかった部分は、さらに次の世（来世）に、また、次の世に現われるということになる。

サテ、「偶然はあるのか」ということについて、日本人がもっと真剣に考えなければならない大事件が起こった。世界の航空史上初めての重大事故で、生還者があったということで、連日、新聞テレビで報道され、その度に私の心も悲しんだ。痛ましいと思った。墜落の原因を機体の原因だけに求めているが、それだけでは原因の追及にはならない。この事件をきっかけにして、日本人はもっと心の問題を考えるべきであるというので、この「偶然」という題の高橋信次先生の「ことば」を取り上げたのである。凡そこの世に存在するものは「色心不二」「心身一如」として存在するというのが釈迦の正法である。だから、なにごとによらず、心と肉体との関係として捉えるべきであって、物に関する原因だけを追及するのは唯物論的考え方に片寄っているのである。だから、日航機の墜落の原因を「物」の方面から調べなければならないのは当然であるが、「心」の原因を調べないのは片手落ちということになる。



墜落

< 物的原因 >

- 機体の点検、整備

< 心の原因 >

- 関係するすべての人々の心の原因
- 日航の精神的環境。社長、機長、スチュアードスの心の原因
- 乗り合わせた五二四人の心の原因

として捉えなければならない。

この< 心の原因 >の中には次の二つがある。

- 一、今世に於ける心の原因
- 二、過去世からの心の原因

たとえ、機体のどこかに原因があったとしても、その異常が整備の段階で発見されていれば、またいずれは壊れるにしても、乗客が乗っていない時に何かのショックで壊れていれば、今度のような惨事にはならなかった。羽田を無事飛び上がって、丁度伊豆半島の上空にさしかかって事故が起きるような状態になっていた、その飛行機に乗ってしまった、というところには「類は類を呼ぶ」「類をもって集まる」という法則が働いている。それでは、そのようにして「心の原因」をもっと追及してみると

一、高木社長の心の原因と運命

高木社長の個人的な悪さが第一原因である。八月二十五日の時事放談で細川氏が「前の松尾静磨社長の時は、一〇年間一度も事故がなく、日航は世界一安全だと言われていた。それが今度の高木社長になったとたんに事故続出である」と言っておられた。長になるものは、個人的な欲望に依らないで、常に全体の運命を考えないといけないのである。私から見ると、高木社長という人は、個人的欲望が強くて全体の運命を考えていないと言える。三年前、羽田沖の墜落事故の時やめるべき人であったのであるが、「やめるだけが責任を取る方法ではない。あとの補償を考えてやらねばならぬ」といって居座ってしまった。人間はやめ際、即ち責任の取り方がきれいではないといけない。

(平成十一年一月、日本航空相談役で日本フィルハーモニー交響楽団理事長の高木養根氏は、八十半ばで亡くなったと新聞は報じた。氏はジャンボ機墜落の責任を取って85年12月、社長を辞任して相談役となったが、事故後は97年まで毎年、慰霊登山を続けられたという。)

二、機長、スチュアード等乗務員の心の原因と運命

この墜落事故があった後に、パイロットの組合は賃上げのストをやると社長に通告していたと週刊誌が書いていたが、多くの週刊誌が、パイロットとスチュアード等即ち客室乗務員組合の横暴を書いていた。争う心を持っていると事故が起こるとというのが、因縁の法則なのであるから、日航の労働組合はこの点について猛反省をしなければならないのである。これは日航の労組だけでなく、賃金の分配という金だけを目的とした唯物的な日本の労働組合全部が反省しなければならない問題である。

三、五二四人のそれぞれの心の原因と運命

乗客五二四人（この中四人が生還した）は、それぞれ違った運命、過去世を持って、この世では良いことをした人達であったが、123便に乗り合わせるということで、一つに集まるという運命を避けられなかったということにある。亡くなられた五百人以上の人々は、その経歴、職歴が示しているようにまじめな働き盛りの、また愛深い人々ばかりであった。新婚夫婦で愛の極致にある人もあり、まして子供達は、この世に生まれてからなんの悪いこともしていないのである。そんな良い人達がどうしてこんなことになってしまったのか、この世のことだけで考えると辻褃が合わないのである。この世の中には、「あんな奴は早く死んでしまえ」と思われるような悪党で、結構病気もせず金にも困らずに生きている人間も現にいるし、この世のことだけで考えれば「因縁の法則」は当て嵌まらないということになる。だから「正直者が馬鹿を見る」という言葉も生まれてくるのであるが、決して正直者が馬鹿を見ることはない。亡くなられた人々が、こういう事故に遭われる原因が、この世にないとしたら、その原因は過去世につくられてあったということである。確かこの事故は、肉体を中心に考えると、こんな不幸はないというほど不幸であるが、霊的に見た場合は、それは過去世からの業の総決算が行われて、それぞれ一人一人が持っていた霊の重荷がすべて取り除かれて、霊が浄化されたということになる。

一瞬にして霊が肉体から脱出するという事は、それだけ急激に霊が脱出しなければならない必要があったのである。霊の重荷とは、過去世からの業とこの世に対する執着である。ぼつぼつ火事が燃えてくると、家財などを持ち出すことが出来るが、一瞬にして火事になると、何も持ち出す暇もない。とにかく身体一つで逃げ出さなければならない。それと同じように、急激な事故で一瞬のうちに死ぬということは、一ぺんに霊が肉体を離れるということによって霊の浄化となるのである。だから遺族の人達は、肉体的な不幸を嘆いてばかりいないで、これを契機により一層霊が向上してゆくようにと祈ってあげることが大切なのである。また遺族の人々は、身近な肉親の死ということを目前にして、「死とは...」「人生とは...」「運命とは...」ということを真剣に考えて、魂の勉強をしてゆかなければならないのである。

この世では一見不幸と見えることが、あの世から見るとその方が良かったということもあり、またこの世に生きている人に、なんらかの教訓を与えて死ぬということは、それだけその霊にとっては徳となるのであるから、こういっては多くの人の誤解を招くのではっきり言わない方がよいのかも知れないが、亡くなられた人々は、霊の重荷から解放されて、それだけ救われたということが言えるのである。また、心の中でひそかに死の欲望を持った人もあった筈である。「こんなにきびしかったら、いっそのこと死んだ方がましだ」というのは、これも自分の霊が、この肉体から解放されたいという、死への逃避の感情である。

サテ、四人の人が助かった。これはよかった。こういう場合、守護霊、指導霊達はその人を抱きかかえて、衝撃をやわらげてくれることがある。誤って高いビルの上から落ちた子供が助かったというのもそれである。この四人の人々は「なぜ自分が助かったか」をよく考えて、これからの人生を大事に生きることである。我々は「偶然とか、運、不運を口にする前に、まず神の子の自分に立ち帰り、今を正しく生きるように努めることである。運はそうした中から開けてくる。」この言葉が「運を開く」原則である。日本人は、世界航空史上最大の今度の事故によって、このことを学ばなければならないのである。日本人がそのことを学ばないならば、また別の方法で学ばなければならない事件が起こってくる。」と、園頭広周師は月刊『正法』に記述している。

「類は類を以って集まる」というように、その縁に逢うものは、その縁から避けられないと説き、もしそのような縁に逢いたくなければ、逢わないような心を持つか、またはそういう縁に逢うことになっていたとしても、それを修正する方法を知っていればよいことになると結び、完全な罪の浄化の方法を指導、教示したのである。

「高橋信次先生は正法を公開された。私はタダで教えてもらったからタダで皆さんに伝えるのである。過去世の業を修正する方法はこの方法しかないのである。この世に生まれて良いことをしたその力よりも、過去世に作ってしまった悪い業の力が強いと、良いことをしていても悪いことが現われるということになるのであるから、

我々が幸福な人生を送るためには、良いことをすることは勿論、どうしても過去世の業を修正する方法を知っておかなければならないのである。」



「過去世の業を修正する祈りと方法」

園頭広周師指導

「大宇宙大神霊、仏よ

〇〇に光をお与え下さい

心に安らぎをお与え下さい

私達は、神の身体であるこの地球上に、心と心との融合された仏国土、ユートピアを建設せんがために、この地上に生まれてきました。然るに、この世に生まれた環境、その後の教育、思想、習慣、それらに依りて、ある時は怒り、ある時は憎み、ある時は悲しみ、自己保存、自我我欲に執われて、知らず知らずのうちに大きな罪を犯してまいりました。神よ、これらの罪をお許し下さい。

実在界の諸如来、諸菩薩、光の天使

〇〇に光をお与え下さい、心に安らぎをお与え下さい

(註 〇〇は名前を入れる)

この「これらの罪をお許し下さい」という祈りの中に、過去世に、また今生で、知らず知らずの間に犯した、また、今は既に現在意識では忘れていたところの一切の罪をお許し下さいという、懺悔反省の心が込められている。二度と間違ったことはしないという誓いと同時に、これからは良いことのみする、決して間違ったことはしないという誓いの心が込められている。高橋信次先生が、「反省は神の慈悲である」と教えられているように、知らず知らずのうちに、また、過去世の罪の業が潜在意識に記録されている人にとっては、この反省によって心の曇りを払うと、その奥即ち自分自身の本当の自分である神の子の意識の光が、外に輝き出してくるということになり、類は類で集まるという法則によって、暗いものとは波長が合わなくなって、墜落することになっている飛行機には、乗れないことになってくるということになるのである。しかし、そう思っただけではいけないので、行為する、行動することによってのみ霊の光は輝き出してゆくのであるから、正しいと思ったら、次は良いことを実行してゆくという、勇気と努力が必要となってゆくのである。ここに道徳と宗教の違いがある。道徳は過去世は問題にしない。この世だけで立派なことをすればそれで良いというのである。墜落事故で亡くなられた人々の中には、道徳的には一点の非の打ちどころのない立派な人が多かった。だが、事故からは逃れられなかったのである。過去世から今生に至るすべての罪に対する懺悔、反省、それが「知らず知らずのうちに犯した罪を許し下さい」という謙虚な祈りになってこないといけないのである。

平成二年八月にもテレビの特集を組んで放送していた。慰霊登山や墜落現場近くに建てられた慰霊碑などに、線香やお花を捧げる人で一杯であった。当時、遺体確認のために現場で従事されていたある医師は、「夢の中で霊達が助けを求めてくる」というような話のあるテレビでされていたが、それは事実だろうと思っている。死んですぐ人は無意識状態であり、その内に死を悟っていくと高橋師は言っているが、墜落によって急激に霊と肉体

が分離して亡くなったのだから、ほとんどの人が死んだという認識すらしていなかったと思われる。平成十一年現在、死を悟って、大半は自ら裁いた定住地（光の量の区域）にいると思うが、先の医師の談話からしても、まだ「死」を認識せず、放浪を続けている霊もまだまだありそうである。ここで述べている阪神大震災にしてもそうである。日航機事故の十倍の約六千人が亡くなっているのである。これから述べるのは阪神大震災に無縁ではないので引き続きジックリと読んで欲しいのである。

乗客五百二十人の中には、色々な思いを残して亡くなった人もいたであろう。「遣り残した仕事のこと」「家族のこと」等あげれば限りはないが、地上界に執着する思いが強ければ強いほど、その靈魂は天上の世界に帰ることなく、この世に自（地）縛して、この世の人々にとっては「困った霊」となるのである。また、すでに亡くなっているのに死を悟っていない霊は、自分の存在をわからせようと色々な霊的現象を現わすことになるのである。こんな例があった。高橋師の講演会の「現証」の時間に、江戸時代の武士が出て来て、切腹をして死んで三百年もなるというのに、「自分はこのように生きている」と言い張り盛んに腹を切る格好をする。すると師は、「今の時代は昭和といい、もう三百年も経っているあなたはこの世の人ではないんだ」と懇々と説教されると、「話し掛けても今まで誰とも話すことが出来なかった、話せたのはお主だけだった」と涙を流して反省をする。それから師は、不空三蔵に命じてあの世の収容所へ導かれるビデオがある。このような霊がいるということをよくよく考えて欲しいのである。話し掛けたのに通じなかった、これはどういうことかと言うと、あの世の霊からは、この世は自由自在に見通すことは出来るからコンタクトしようとするのである。

高橋師は、これを映画のスクリーンの中の人物と、観客にたとえて説明している。観客（あの世の霊）が、スクリーンの人物（この世の人）にいくら話し掛けても通じることはないように あの世の霊にとって一方通行である。その為に、自分の言い分を自己主張するために、こうしたらわかってくれるだろうか、ああしたらわかってくれるかもしれないと霊的現象を起こすことになる。この世に霊的現象を平気で起こすくらいだから、悪いとか、申し訳ないという気持ちはさらさらないのである。自分が死んでいることさえ知らない靈魂なのである。高橋師は「悟った霊なら、この地上界に一時間もいません。サーッと天上の世界へ帰って行きます」と教えたが、この地上界にいることの出来る最大限の日数は二十一日であり、それ以上、この地上界に執着している霊を自（地）縛霊、浮遊霊と言うのは先述した通りである。「神の子」である人間の靈魂は、天上の光の国、神の国に帰ってゆくのが自然で、また、それが当然なのだが、地上界に思いを残して心の放浪を続けるとは、なんと愚かしいことだろう。



死んだことを悟らせるにはどうするか

これまでに、「まだ死んだことすら自覚していない靈魂もいる」と述べたが、それらの靈魂に対してどう教諭するか考えてみたい。残された身内、縁者は心静かに、どうにかして救ってあげたいという愛の心を一杯にして、生きている人に話すように語りかける。場所と時間はどんな所でも、いつでも良いのだが、静かな心で寝む前にフトンに座して語り掛けても良いだろう。「念」は、時間、空間がなく、一瞬のうちに、どこへでも誰にも通じるから、心の安らぐ時間と場所であれば申し分ありません。心落ち着く時間と場所で、静かに声を出しても、声を出さずに心の中で言って聞かせても良いだろう。

例えば、「お父さん！ お父さんは昭和六十年の夏、搭乗された飛行機事故で亡くなりました。もうこの世の人ではありません。あの時は、お父さんを亡くして力を落としましたが、もう大丈夫です。子供達と力を合わせて元気にやっています。だからお父さんも心おきなく、あの世での魂の修行をして下さい。もしお父さんが暗い世界にいらっしゃるようでしたら、心から反省をして光の国へ帰って下さい。私にはあの世のことはわかりま

せんから、もうお父さんが天上界だったらごめんなさい。」このようなことを、その地方の方言でも、どのような言い廻しでも良いのだから、心から教えてあげることである。この世の人でも、一回で理解してくれる人もいれば、何回言ってももうわの空という人もあるのだから、わかるまで何回も言って聞かせる必要がある。そして、それからは、残された者が、オホホ、アハハと明るい生活を送り、あの世で生活する人に心配をかけないような生き方をすることに尽きるのだ。それがあの世の霊を「成仏」させる原動力であり、供養の第一歩である。

前述したように、あの世からこの世はすべてお見通しだから、見せかけだけの調和はなんの意味もない。「ケンカの絶え間なく、いがみあってばかりいる人が「お父さん成仏して下さい」なんていったら、あの世の霊が「お前こそしっかりしろよ」と言うでしょう」と教えた高橋師の声が聞こえて来そうである。

園頭広周師は次のように言う。

「日航機墜落事故で亡くなった遺族の人達は、死んだ人達は死ぬという意識なしに、もっと生きたい、死にたくないという意識を持って死んでおられるのであるから、補償金の交渉もであるが、霊を成仏させることをまずやらないと、補償金はもらったが、今度は別な不幸（不幸ではない、霊の知らせである）に見舞われるということにならないとも限らない。『心行』（高橋先生の心の教え）によってよく成仏させてあげることが大事である。」

残された人の再婚をどう考えるか

園頭広周師の考察と指導

「昔から、「生き別れのところには行っても、死に別れのところには行くな」と言われている。どうしてそのように言われるようになったかと言えば、病気や事故で死んだ先妻が、死ぬという自覚がないまま夫や子供に執着を残して（気がかり）死んでいると、後妻が来て夫や子供の世話を始めると、自分の夫と子供をあの後妻が奪ったと思うのである。そうして嫉妬した先妻の霊が、後妻に憑依して病気にさせてしまう。家にいる時はとても元気だった娘が、後妻に行ったら病気ばかりして、また死んでしまっということとは、そういうことなのであるから、後妻に行く人は、よく先妻の霊にことわりを言ってから行くようにしないといけないのである。「生き霊」というのは、生きている人の霊がくることであるが、生き別れしたその後に行く場合でも、自分の想念を浄化し、先妻の人の想念を浄化してから行く方が良い。

「どのような事情で離婚されたのかよくわかりませんが、もし、別れた今でも心を残しておられるとしたら、どうぞそれはやめて下さい。すんでしまったことに、いつまでも心を残しては、あなた自身が幸せになれないのです。私はあなたの跡をうけて、あなたがされなかった分をこれから充分にやらさせていただきます。あなたはあなたでどうぞ幸せになって下さい」という祈りをして『心行』をあげるのである。後妻に行った人で、一生懸命に夫を愛そうとするのであるが、どうしても何か溝が出来たようでぴったりゆかないという人があった。また夜、性生活に入ろうとすると、なにかふーっと得体の知れない風が吹いてきて、夫との性生活がうまくゆかないという人があった。そういう人達は「心行」をあげて祈られたら、不思議に夫と調和出来るようになりましたと言っておられた。日航機の事故で、妻を失った人が後妻を迎えようとする時、また、夫をなくした人が再婚しようとする時、私がここに書いたようなことをして再婚されると良いが、そうでないと、生身で欲望を持ったままでほとんどが死んでおられるのであるから、霊的な障害を受けやすいということになる。霊の浄化は自分でやれば良い。なにも高い金を出して祈祷師や霊能者に頼む必要はない。」

このように、阪神大震災を述べる前に日航機事故を前面に打ち立てたのは、別の事例により理解してもらう環境を事前に構築したかったことと、もう一つは、大震災の原因を真正面にガッツリ組んで述べるより、主題が主題だけに、内容が内容だけに阪神地区やその周辺の人々にソフトに訴えたかったからである。

Home



阪神大震災が起こった理由（わけ）

先に述べた日航機事故に対比して考えれば阪神大震災は

地震

- 1．地殻の変動や断層
- 2．首長の心の問題
- 3．地域住民の心の問題

として考えられる。

< 1．地殻の問題をどう捉えるか >

それでは、昭和四十九年、中国の唐山の大地震で、三十万とも五十万ともいわれる人が亡くなったその直後に書かれた「地震」についての高橋信次師の「ことば」がある。この唐山の地震については、それが起こる前の年に、高橋先生から起こることを聞いた、と園頭師は書いている。

「マグニチュード5以上の地震が、東海地方を襲うかも知れないとの噂がひろまっているようだ。地震不安が太平洋ベルト地帯一帯を蔽っている。そこで、地震は起こるのか、もしあるとすればその対策をどうしようと誰しもが思う。気象庁のある退職者は、関東以西はいつでも地震が起こり得るとして、地震の少ない東北地方に隠蔽してしまったようだ。関東ははこわくて仕方がないというのだ。地震のない土地に行けば、老後は安心して生活できるということのようだが、この人には病気の心配はないらしい。ただただ地震だけが恐いらしい。地震が来る前に心臓発作で倒れるなど夢にも考えないらしい。地震はなぜ起きるのか、それは大地も生きているからである。人間の体内には血管が縦横に走っている。そして、絶えず血液が流れている。大地の下でもまた血管が無数に走り、火山に見られる何千度いう溶岩が、地表のはるか下を流れている。火山はこの溶岩が地表に表われたものだが、なぜ火山活動が起こるかである。それは地上の圧力が地下に加わり、いわば血管を圧迫するためである。地震もまた、地上の圧力によって地下の血管が収縮するため、それをハネ返そうとして起こるものだ。では、地上の圧力とはなにか。それは人間の心のあり方にかかわっている。地表を取り巻く人間の生活意識が大地に圧力をかけている。この圧力は、人間一人一人の偽我（自己保存）によってつくられるものだ。つまり、地震や火山を生み出すエネルギーを地下にたくわえているのである。だから、一定の時期がくると、元に戻ろうとして揺れ動く。こういっても多くの人には信じないかもしれない。現代科学はさまざまな見方で、地震や火山活動をとらえようとしているが、物理現象の背後には、常に人間の意識が強力に働いているということを理解するようになれば、万象の姿がハッキリととらえることができるだろう。ちなみに、月や火星に大地震や火山活動が起こっているだろうか。月や火星も、地球と同じように何千度に熱せられた溶岩が活動しているのだ。しかし、大地震も火山の大爆発も起こっていない。地表はいたって平静そのものであり、平和である。地球だけが常に騒がしく、さまざまな災害をくり返している。中国大陸は日本と異なり、地震はめったに起こらない。それが各地で頻発した。被害も大きく、犠牲者も相当にあった。動物の動きで地震を事前にキャッチし、避難したと言うが、そうだろうか。政情不安の火に油を注がないための工作だったようだ。アトランティス大陸は、火山の噴火と大地震で海底に沈んだ。ポンペイの町も同じである。その昔、栄えたエジプト、メソポタミヤの文明も、洪水、大地震、火山の降灰によって埋没している。当時の文明の手がかりは、地下から発掘した建物、青銅器、土器、石版瘻がによって偲ぶことができよう。いづれにせよ、地震は地上の人々の想念行為によるものである。地震や火山を防ぐにはどうするか。その手がかりを掴むには、大地震が起きたその時代の人々の社会生活を知ることが、理解を早めるカギとなるだろう。いたずらに地震を恐れ、転居しても、地震は追いかけてくるだろう。」と。

また、昭和四十八年七月、八起ビルでの講師・幹部講習会にて高橋師は次のように話している。

「地球表面の温度差によって電気が発生します。それが地球を回転させるエネルギーです。回転することによってNとSの磁極ができる。その磁極が、そこに住んでいる人々の心によって位置が変わっていきます。現在でも磁針は真北を指していません。偏差しています。エジプト、アトランティス、ギリシャ、インド、アンデスと、この地帯が昔は春夏秋冬が一番はっきりしていたので、人が住みやすく文化が発達したのです。食糧もよくできました。今はこの時と比べると地軸が傾斜して磁針が偏差し、その地方の気候が変化し、日本列島が位置する線が春夏秋冬がハッキリするようになって来た。極端に暑いところ、極端に寒いところは人も集まらないし、そういうところへは光の天使は出ないのです。やはり気候も中道のところでないと如来や光の天使は出て行かないのです。地軸がだんだん変わって行きます。現在は地球表面はスモッグが多い。その結果、南極、北極の氷に影響しています。それが気象異変をつくっています。ですから、この地球も生きているのです。私がなぜこのことを自信を持つていえるかという、昭和四十三年十一月二十四日午前一時、あの世で講演しました。金剛界で一時間半講演した時に、ワン・ツー・スリー即ちモーゼが、「お前、ここをポンと押せば地震が起こるんだよ。お前が地上界へ帰った瞬間に、震度3の地震を起こすから心配するなよ」といわれたのです。そうして、私の意識が肉体に帰ったのが丁度一時間半、その時間に震度3の地震がありました。震源地は利根川の下流。まさかワン・ツー・スリー、モーゼが起こしたといったら、あいつ、間違いではないか、といわれると思うのですが、それでもよいのです。ぼくはそういうことを知っているんですから。現代の科学者達は、特に地震の問題については自信がないんです。地震計そのものも一番最初は私がつくったんです。長野県の地下を掘って、私が設計をした地震計が全部入れてあります。新幹線のモーターにも地震計が接続してあって、震度2になったらモーターが止まるように設計してあります。近似値というものの程、不確実なものはないので、地震学会の予告はあれは自信がないのです。しかし、次元の違ったあの世からの指令は正確です。＜中略＞・・・ということは、地球上の凡ての家庭から光が出るようになれば、地球全体が後光に包まれることになります。今は後光でなしにスモッグが余計に出ています。日本に住んでいる人が、みな混乱を撒き散らすことになると、日本沈没です。アトランティスです。それは、神の体の一部が調和されないうちに、神の体全体の調和がとれなくなれば、外にどういう手段を

以ってしても調和がとれないとなれば、切開して取る以外に方法がないからです。われわれの肉体が不調和になって、外の方法では仕方がないとなると、手術して切り取ることになるのと同じです。ですから万物の霊長である人間が、まず自分の住んでいるところから光明化するということが大事なんだということです。」、と。



< 首長の心の問題をどう捉えるか >

この地の首長は革新系である。ウェブ・マスターの六十年間の歴史をヒモとくと、私にとっての革新系の思い出は、故郷の炭坑争議に代表される破壊と闘争の歴史だった。街では街宣車が走りまわり、赤旗を振ってデモする人の波だった。教室では組合員の子弟であろう生徒の「がんばろオー・・・」と歌う声も聞かれ、先生方は日教組のデモへ参加のために自習時間も続いた。それから、破壊と闘争の心は数百人の死者を出した炭鉱事故を引き起こすのである。役所のサイレンが鳴り響き、救急車が走り回る様子は、さながら地獄絵だった。時は移り、大学では学生会の会長もつとめたが、学生運動の華やかな頃で、セクトだ何だと言っては、団体交渉をと詰め寄る闘士もいたが、私一人で大学と話し合うと問題なく解決していった。というのも、炭坑争議の労使の対決姿勢は疑問として幼き心に焼き付いていたために、話し合いという協調姿勢に努めたからだと思う。この疑問は、正法の「破壊と闘争は神の心ではない。間違った思想家、闘争の指導者、狂宗教家は最も厳しい無間地獄に落ちる」と学んだときに氷解した。思想、イデオロギーによって人間の自由な心を縛れる筈もないのである。「マルクスもまた、光の天使であった」という高橋師の言葉があるが、あの当時の一般民衆は一部のブルジョアに根こそぎ搾取された時代だった。苦しむ民衆を助けるために天は光の天使・マルクスを出したのである。共産主義の権化のように言われているマルクスも、唯物的な経済の考察に行き詰まり、遂には、唯心的な神を崇める教会を建てているのである。このように天使が出るには出る理由があったのである。ところが、後世の人達は、労働者の団結という名目で破壊と闘争にすげ替えられ、経営者に力で対峙したのである。経営者は、労働者に働く場を与え労働者の生活をまもる。これは不退転である。労働者は与えられた場に感謝し、労働を提供して労使共に人生を謳歌する。これもまた、不退転なのである。

それに、もう一つ。

田中角栄氏が首相の時、贈収賄問題で首相を辞任するかどうかという昭和四十九年十月のことだった。田中首相の辞任のあと、誰が首相になるか混沌として政局がわからない時に、田中首相の新潟県の後援会の代表と秘書の一人が、G L A関西本部の講演に信次師を訪ねて来て、「田中首相はどうすればいいのか」と尋ねた。信次師は、録音しておくように園頭師に命じた。園頭師はその時のテープをもとに月刊『正法』誌に発表した。

「田中さん、あなたは裸になりなさい。持っている財産を全部投げ出しなさい。そうすれば国民はもう一度あなたを首相にというでしょう。しかし、自分が裸になっただけではいけません。「社会党の成田君、共産党の宮本君、ぼくは裸になった。だから君達も裸になれ、お互いに裸になったところでのこの日本をどうするか、国家百年の大計を話し合おうではないか、君達は労働者の味方などと言っているけれども結構豪華な生活をしているではないか。共産党の宮本君、君も豪邸を建てたではないか。元総評議長の太田薫君、君は労働者の味方だと言っているけれども君も労働貴族である。なんなら、〇〇氏の関係のある女性が、どこそこのマンションの〇〇号室に、このような顔の人がいることも、僕が教えてあげるから、そのことも指摘して、皆んな裸になって話し合うように言いなさい。それでも違うというなら、「そのひとの名前はこうと全部教えてあげます。田中さん！ 日本のために勇気を振って裸になんなさい」、と。

信次師は、その責任者に伝えた。その責任者が田中元首相に伝えたかどうか、或いは、責任者は伝えたが、田中元首相は忠告を聞く耳を持たなかったのかどうかはわからない。もし、田中元首相が信次師の忠告を聞いて裸になっていたら、自民党も浄化され、自民党の浄化は野党にも大きな影響を及ぼして、きれいな政治が行われるようになっていただろうと思うと残念でならない。この半年以上も前の昭和四十九年二月関西本部講演会でも、高橋師は次のように言っている。

「田中さん自身もね、東京都内にある財産をみんな投げ出して、自民党で今使っている資金も全部さらけ出して、この金をみな大衆のために使おじゃないか、とこうやったら、社会党や共産党なんか、どうということないですよ。それをしないで往生際が悪いからこんなことになってしまう・・・」、と。

大震災の最もひどかった地は革新知事と述べた。革新系の首長ということは、当然のことながら革新系の考え方に賛同する住民が多いということである。これも「類は友を呼ぶ」の法則であり、色分けをすると革新王国ということになる。また、この地と同じく革新系が強くて、同じ革新知事さんが三期も務めるという或る県では、生活保護法の適用も多く、他県のドライバーは怖くて運転できないと、運転マナーがとやかく言われるほどのオク二柄である。平成六年からカラカラ天気で、ダム貯水率が十五パーセントを切ったとかで時間給水が続いた。不思議と、水ガメ・ダムの周辺を雨雲が避けて通る。ところが、この革新系の知事さんが三期かぎりまで辞めると宣言した直後から、雨雲が寄りついて降り始めた。高橋師は「天候異変は、その地域の主義主張にある。その住民の考えが余りにも極端に走り集団的になると、警告として天候異変が起こる」と教えた。

目を広く海外に向けても、例えば、紛争が絶えないアフリカを例に取れば、社会・共産主義国、或いは社会・共産主義国に近づく国々は、干ばつや天候異変に苦しみ、自由諸国、或いは自由諸国に近づく国は比較的恵まれている、というこの事実を真摯に受け止めて欲しいのである。日本でも、干天やその反対に雨が多かった、つまり天候異変の地域を調べてみると不思議に革新系の得票率の高いところが多いと確信できる筈である。正法は自然をお手本に、自然を模範にするという教えである。これまでに自然災害と考えられていたものは全て人災、つまり、人間の主義主張が原因だと理解して欲しいのである。少し前にオランダが、中国が、東南アジアが水浸しになって混乱した。水がドンドン蒸発すると必ず雲ができる。天の指令によって自然霊が雲を吹き散らして、反省を必要とする不調和な地域に集めて雨を降らし続ける。また反対に、雲を吹き散らして寄せ付けないと旱魃状態。高橋師は講演が始まると「今日は雨が降って欲しくなかったものですから、昨夜は風を相当吹かしました」と話し出す例があるが、天上界は自然霊をコントロールすることによって天候なんて自由自在である。日本の平成六年はどこも干天だった。ドンドン蒸発して雲ができて、日本のどこかは豪雨でドシャブリだった筈である。ところが、どこもかしこも、ひと雨欲しいナーと考えた。それは日本以外のどこかに運ばれて降った。だからこういうものはグローバルな地球的視野で観て欲しいというのである。近視眼的な視野では見誤ることになる。それでは次に、地域住民の心の問題について述べたい。



< 3 . 地域住民の心の問題をどう捉えるか >

大震災の混乱で皆がごった返えしていた頃、行政の誰かが、自分でやることは自助努力でお願いしたいと、本音を正直に吐露したために、この時期、不謹慎な言葉だと物議をかもしていた。知恵を働かせて住民の窮状を思い遣るべきだったかもしれない。だが、何はともあれこの人の言う通りだった。福祉制度の余りにも整えられた社会の弊害のひとつは、自助努力という人間としての基本を忘れ、全て国や社会のせいにして自分で立ち上がろうとしないことである。この国は今や貿易立国として押しも押されぬ超大国である。ネコの額程の国土に一億二千万の人々、食糧も自給できぬのに鉱物である原料を手に入れそれを加工して付加価値をつけて稼ぎまくった。付加価値をつけ得る能力を持つだけに選ばれた魂ということである。その証拠に穏やかな国民性、世界一治安のよい社会、無学文盲もない素晴らしい人達の国・日本。その国の人達が、全てを人の所為にして自己確立をせぬとは何と愚かなことだろうか。高橋師は、日本人として肉体を選んだ霊団の使命について次のように説いている。

「皆さんは今、ありとあらゆる光の天使達の築き上げてきた正法を、そして長い歴史の中に塵と埃にまみれたところの神理を、その塵払いに出て来ているのです。しかも皆さん自身、今、日本人として生れていることは、選ばれた魂であるということから自覚しなければいけません。皆さんの内なる魂は、皆、偉大なる魂達なのです。その偉大なる魂が、物に溺れ情欲に溺れてはいけません。自ら正しなさい。自ら自覚しなさい。皆さんが目覚めた時に、偉大なる神の光明によって皆さんは自らを悟り得るのです。そうして今、何をすべきかということ、内なる魂の叫びとなって、皆さんの心の中に芽生えてくるのです。今、その時期が来たのです。皆さんは偉大なる魂の持ち主なのです。かつてイエスの当時、モーゼの当時、選ばれたイスラエルの民と同じように、今、私達の中に選ばれた日本人として、世界の地球上の代表者として生れているのです。我々の霊団は、それぞれ一団となってそれぞれの国に転生を重ね、今、東の国・日本に来ているのです。そして、化石化した神理を再び光明に満たすために失われた心を我々は取り戻すために、そして、物質と経済の奴隷に成り果てて真の人間の使命を忘れたところの人間に偉大なる魂の価値観を呼び起こさせるために、価値の転換をさせるために、私達は今、肉体を持っているのです。

そして、我々の道を信じなさい。その道を実行しなさい。その時に、皆さんの心は神の光りによって、満たされていくのです。偉大なる魂の目覚めなのです。そして我々は先づ、この地球上に光明を、灯を心の中に点してやらなければいけないのです。その時に皆さんの心の中から、その事実を自覚していくのです。その為には、生れて現代までの自分自身の心のひずみを直すことです。たとえ現代厳しい環境に生れていようとも、それはまた、地上界における一つの魂の修行の場であり、その環境を通して自分自身が魂の学習をしていることを皆さんは知らなくてはなりません。優雅な環境に生れている人達は、その優雅の中から、より自分自身を見つめ、惨めな人々に愛の手を差し伸べてやるところの慈悲の心が必要なのです。その時に皆さんの心は光明によって満たされていきます。我々の心の中につくり出したところのスモッグは自らの責任において払うことです。人に対し、恨みや妬みや怒りや愚痴、このようなものも自ら発するところの不調和な想念なのです。我々は虚栄心を捨てなければいけません。こんなものは愚かしいものです。人間は全て神の名において平等なのです。太陽は貧乏人、金持ちにかかわらず、すべて平等に、熱光のエネルギーを与えております。神の心は、そのように寛大であり、全てが調和です。それだけに、私たちは自らを正さなければいけません。その時に道は開かれていくのです。我々は、本来国境などは人間のエゴがつくり出したものなのです。間違った思想は人間の心の価値観が失われた時から、いつの間にかつくり出されていったのです。今のマルクス主義にしても、資本主義にしても、このイデオロギーはすべて、人間自身が間違っただけ、心を失った時から、そのようなものに片寄り、現代のような世相をつくり出してしまったのです。我々は物質文明の奴隷になってはいけません。物質文明を駆使し魂をより豊かにするための一つの道具でなくてはならないのです。我々は、その奴隷から自らを解放することです。

そして、我々は今に生きていることに感謝することです。足ることを忘れ去った時から愚痴と不満が出てくるのです。そのために我々は働く環境に感謝の心を持たなければいけません。感謝の心は我々は報恩として報いなければなりません。感謝と報恩は輪廻しているのです。自然界が輪廻するように、すべてのものが輪廻しております。原因と結果、全て輪廻しているのです。今、悪い結果が生ずれば、悪い原因があるから結果が生じているのです。その原因を追求することが、また、己自身を前進させていくことになります。こうして、私達は、今、道が開かれ、自分自身をもう一度しっかりと見詰め直してください。思想というものは一つ狂えば、人間の心まで腐らしてしまいます。イデオロギーは真の人間を幸せにする道ではないのです。皆さんの内なる善我なる心を信じた時、道は開かれていくのです。その時に真の文明が訪れてくるのです。我々は今、この地上界に最終ユートピアを築かんが為に肉体を持ち、今から五年、十年先には、多くの同志達が、あらゆる国々から集まり、真実のものを皆悟っていきます。その時に人類は皆兄弟だ、すべての富は人類の為だ、不平等であってはならないことを悟っていきます。経済問題に関して、経済方面も、今のような間違った思想から新しい思想が生れ、人類すべて平等の上に立ったものが生まれて来ます。・・・」、と。

これは一九七六年五月二～五日の、富士みどりの休暇村の研修会の初日の講話で、高橋師が亡くなる二ヶ月前のものだが、弟子の一人、渡辺泰男氏は自著の中で、比較的に早食いの師が昼食に出されたカレーライスの大半が残り、かなり憔悴した様子が書かれている。だが、この日のビデオの中の師は、まさに獅子吼で、みじんもそれを見せず、人類救済に燃えた師ならではの情景だった。



本論に戻る。

サテ、この地は「の街」という社会映画と同じような環境であると一躍注目を浴びて観た記憶がある。このような社会環境のためか共産党系の医療協会に所属する医師等の会員が六千人以上とダントツである。また、この地区は日本最大のアウトローの拠点で、それを生む土壌があったということである。そして、日本最大のスーパー、ダイエーの本拠地である。社主の中内氏は大震災の直前に年俸制を打ち出した。その頃の講演会で園頭師は、これで早まるねと、つぶやいたのが気に掛る。かつて生長の家の本部講師であった園頭師は、和田氏のお父さんに頼まれ経営分析をしたことがある関係からか、ヤオハンに心をかけ何度となく月刊・正法誌に出てくるが、その結果はご存知の通りである。予告できるということは、必然的にそうならざるを得ないということであり、そのような組織の傾向性（体質）があるからである。力でゴリ押しをすれば力で押し返される。これを「作用・反作用」の法則というが、戦後急成長した流通業界の巨艦ダイエーも、価格破壊の急先鋒として君臨したものの、最近の超・価格破壊の風は、たそがれを告げる使者とならぬよう祈るばかりである。これまでの経済界は、競争原理のギラギラの時代であった。だが、もうその時代は終わり、これからは分を知り、足ることを知った調和の時代とならねばならぬ。

企業には多くの人働く。千人の長は千人の長として、万人の長は万人の長として社員一人一人に「縁」がある。無縁な人は誰もいない。「長」は組織の最高責任者として、縁ある社員を見殺しにできるわけではない。最近の日本は現代風の経済原理に乗って、古き良き終身雇用制を破棄する傾向にある。バリバリ社員以外は要らないというわけだ。これまでの終身雇用制の最大の欠点は、その立場にあぐらをかいて、働く環境に感謝の心もなく任期を終えればそれで良いというものだった。それではいけないと、現代の経営者達は欧米に真似て、よく働く者にはアメを、働かざる者にはムチをとという方法を取りつつある。かつての日本は、仕事は神のお手伝いをするもの、人が見ていようと見てまいと一生懸命やるのだ、また、人間というものは信頼して任せればちゃんとやってくれる、という性善説の立場を取った。だが、欧米はアダムとイブの謂れに見るように、人間は見ていないと何を仕出かすかわからない、だからアメとムチで監視下に頑張らせるという性悪説の立場である。このように、働く者は分を知り足ることを知って、自己の能力と体力の範囲内で最大限に役を務めるなら、この終身雇用制は神の意に適っていると言いたいのである。

話はガラリと変わるが、三千五百年前のモーゼは、奴隷の子として王宮に捨られるも、民衆を解放して長途の旅。二千五百年前の釈迦は王子としての優雅な生活を捨て慈悲を説き、二千年前のイエスは左官の子として馬小屋に生れ愛を伝導した。現代の高橋師は同和に生れ慈愛を説いた。日本の同和問題を解放するために光の大天使・高橋信次師は夜露がそっと降りるように同和地区に肉体を持ち、一条の光を点したのである。と同時に、全国の同和の地を特に意識して講演会を開いたように思われる。この事実を皆さんは何と思われるだろうか。傷をナメ合うばかりでも、助けを求めるばかりでもいけない、過保護もほどほど、エセ同和解放者にだまされてはいけないのである。人間としての本性を自覚し、立ち上がって前進して欲しいのだ。園頭師は三百年後にインドに生れ、日本の同和と同じようなインドのカースト制度を打ち壊す覚悟である。かって、園頭師は正法の道場をつくるために、同和地区に適地を求めた。オーム教の問題もあって、地域住民の宗教進出絶対反対の表明にあって泣く泣く断念するが、周辺住民と調和を願う常識ある宗教人はゴリ押しはしないものである。その時に師は、「手を差し伸べようというのに、この周辺の人達は救われるのが先送りになった。」と、タメ息をついた。このような背景があって、阪神大震災の直後、阪神地区で園頭師の講演会だった。これは以前から予定されていたもので、この時期、講演会もなかりうと中止も検討されたが、いまだからこそ「なぜ、阪神大震災は起こったか」ということを伝えねばならぬと予定通り開催された。

これまでの、日本の悪い因習の中に、エタ、ヒニンと呼ばれる階層を先祖達がつくり出してしまった。人間に卑賤、高貴の段階をつけようというのだ。外国に目を向ければインドのカースト制度であり、日本の士、農、工、商のようなもので、ご都合主義によって悪弊はつくられてしまった。現代人にとって最早、過去の遺物のようになって来ているのは喜ばしいことだが、依然として縁談や就職に遺影を見るようで残念に思う。だが、断じて人間に身分の差、段階がある筈はない。同和問題は神様がつくられたものではなく、この地上界を縁として愚かな人間達がつくりだしたものだ。人間はみな平等である。神の前に人間はみな平等だが、男女は平等ではない。各人の人間性も同じではない。男の力強さ、女の優しさと子供を産める能力など不平等極まりない。この性差を考えても平等とは程遠いし、背丈だって違うのである。これは差別ではなく、厳然として埋めることのできぬ男女両性の特質である。また、人間性、人格の違いも厳然としてある。「あの人は犬畜生にも劣る」とか「あの人は立派な人格者だ」というように、心も肉体も平等とは程遠いのである。だが、同和地区に生れたからといって、人間として劣るということは断じてないのである。光の大天使・高橋信次という素晴らしい覚者も自ら同和地区を選び、その中に生を得たのである。かって、真のメシア・エルランティであり、釈迦と呼ばれた人を分身に持つ、この偉大なる高橋信次という方が、悩み苦しむ人々をいわれなき呪縛から解き放つために、その環境を選び道を説いたのである。この神の計画にひれ伏して感謝したい。

Home



「近世日本の世相史から見た天上界の警告」

最初に、明治以降の近世日本における人災と思える現象を挙げる。

西暦		月	人災と思える事象
1868	明治元		特記なし
1869	2	2	横浜に腸チフス流行
1870	3	11	横浜に天然痘流行
1874	7	7	東京に天然痘流行
1877	明10	9	コレラ東京から全国流行（死6817人）
1879	12	6	コレラ全国流行（死十万一千余人）
1880	13	8	北海道にバッタ大発生、農作物大被害
1882	15	5	コレラ全国流行（死十万一千余人）
		6	大阪大水、一万四千戸冠水、七万名の罹災者、死者多数
1886	明19	7	コレラ流行（東京の死者9879人）
1890	23	6	コレラ流行（東京の死者2800余人）
		12	インフルエンザ東京に流行
1891	24	9	腸チフス東京に流行
		10	濃尾地方大地震（死9700余人）
1893	明26	8	全国に赤痢流行
		?	東京に腸チフス流行（死685人）
1894	27	7	コレラ流行（死三万九千余人）
1895	28	7	コレラ流行（死2597人）
1896	29	6	三陸地方に大津波（死二万七千余人）
		10	赤痢流行（死一万九千余人）
		12	痘瘡東京に流行（死690人）
1897	明30	12	赤痢流行（死二万二千三百人）
		?	東京に麻疹、痘瘡、ジフテリア、腸チフス流行。死者多数
1899	32	8	関西地方大暴風雨、死者多数
		10	広島にペスト発生
1902	35	8	鳥島大爆発（島民125人全滅）
1903	36	1	東京ペスト大流行、死者多数

1909	42	8	滋賀県大地震、死者多数
1910	明43	3	千葉銚子付近で暴風漁船遭難（死1055人）
1912	大1	9	全国にコレラ発生、死者多数
1914	3	1	桜島大爆発（死九千六百余人）
		3	秋田大地震（死94人）
		4	東京にペスト流行、死者多数
		9	豊後水道大暴風雨で船127隻不明、死者多数
1915	大4	7	結核大流行
1917	6	10	大暴風雨（死770人、行方不明374人）
		11	スペイン風邪大流行（死十五万人）
1922	11	9	宮古島大暴風、死者多数
		10	東京コレラ流行
1923	12	9	関東大震災（死91802人、行方不明374人）
1924	13	?	嗜眠性脳炎流行
1925	大14	9	関東地方に大豪雨
		12	東京コレラ流行
1926	昭1	5	北海道十勝岳噴火（死146人）
1930	5	11	伊豆地方大地震（死254人）
1931	6	10	東北地方冷害、（凶作で娘の身売り増加）
1933	8	3	東北三陸地方大地震で大津波（死1535人）
		10	関東地方大豪雨
1938	昭13	6	東京地方に六十年来の豪雨
		7	阪神地方に豪雨
		9	関東地方台風（死99人）
1942	17	?	結核大流行
1944	19	6	昭和新山爆発
		12	東南海地方大地震（死998人）
1945	昭20	1	東海地方大地震（死1961人）
		9	枕崎台風（死2473人）

1948	23	6	福井県大地震（死3769人、家屋全壊三万六千戸）
		9	アイオン台風（関東東北、死者不明2368人）
1949	24	8	キテイ台風（死135人）
1950	昭25	9	ジェーン台風、関西（死336人）
1951	26	3	三原山大爆発
1953	28	1	流感全国に猛威
		10	米の大凶作発表
1954	29	9	台風により洞爺丸転覆（死1440人）
1955	昭30	7	津市の女学生、高潮で溺死（死36人）
		11	しょう紅熱に似た子供の奇病各地に発生
1957	32	5	全国的流感（学級閉鎖764校）
		7	九州西部大豪雨（死982人）
1960	昭35	12	北陸猛吹雪、列車内越冬五万人
1962	37	3	流感、東京（死305人）
		5	東京水飢饉
		8	コレラ騒動
1963	38	5	東京赤痢発生
1964	昭39	6	新潟大地震（死25人、倒壊1087戸）
		8	習志野コレラ発生
1974	昭49	5	伊豆半島南部で大地震（死30人）
1977	52	6	和歌山有田市で集団コレラ発生（99人保菌）
1978	53	6	福岡市で深刻な水不足
1982	昭57	3	北海道日高地方大地震（死147人）
		7	長崎市大豪雨（死行方不明299人）
1983	58	5	日本海中部地震（死104人、M7.7）
		7	山陰地方に集中豪雨（死119人）
		10	三宅島大噴火（四百戸焼失）
1984	59	9	長野県西部地震（死29人M6.8）
1986	昭61	11	三原山、209年ぶりに大噴火

1989	平成 1		伊豆沖海底火山爆発
1990	2		雲仙・島原の約二百年ぶりの火山活動

< 人災件数の図表 >

年代順の人災の件数

西暦 天災（人災）の件数

0 1 2 3 4 (件)

1868

1869 = =

1870 = =

1874 = =

1877 = =

1879 = =

1880 = =

1882 = = = =

1886 = =

1890 = = = =

1891 = = = =

1893 = = = =

1894 = =

1895 = =

日清戦争（1894～1895年）

1896 = = = = = =

1 8 9 7 = = = =

1 8 9 9 = = = =

1 9 0 2 = =

1 9 0 3 = =

日露戦争 (1 9 0 4 ~ 1 9 0 5 年)

1 9 0 9 = =

1 9 1 0 = =

1 9 1 2 = =

1 9 1 4 = = = = = = = =

第一次世界大戦 (1 9 1 4 ~ 1 9 1 8 年)

1 9 1 5 = =

1 9 1 7 = = = =

1 9 2 2 = = = =

1 9 2 3 = = (関東大震災)

1 9 2 4 = =

1 9 2 5 = = = =

1 9 2 6 = =

1 9 3 0 = =

1 9 3 1 = =

1 9 3 3 = = = =

1 9 3 8 = = = = = =

第二次世界大戦 (1 9 3 8 ~ 1 9 4 5 年)

1 9 4 2 = =

1 9 4 4 = = = =

1 9 4 5 = = = =

1 9 4 8 = = = =

1 9 4 9 = =

1 9 5 0 = =

1 9 5 1 = =

1 9 5 3 = = = =

1 9 5 4 = =

1 9 5 5 = = = =

1 9 5 7 = = = =

1 9 6 0 = =

1 9 6 2 = = = = = =

組合運動、学生運動激烈

1 9 6 3 = =

1 9 6 4 = = = =

1 9 7 4 = =

1 9 7 7 = =

1 9 7 8 = =

1 9 8 2 = = = =

1 9 8 3 = = = = = =

物質至上主義、金権政治

1 9 8 4 = =

1 9 8 6 = =

1 9 8 9 = =

1 9 9 0 = =

天上界の警告と思える明治以降の近世日本の世相史にスポットを当ててみた。人間は大自然の一構成員にすぎない。この大自然の経論

から外れるものは一つとしてない。地震も、火山爆発も風水害も疫病も、災害も飢饉も、人類への警告である。例えば、群雄割拠して巷

は戦乱の状態の時に、イナゴやバッタの異常発生による作物の被害は、そうなれば戦争どころではなく、仕方なく農耕に励んで食べるも

のを確保しなければならない。そうこうしている内に平和を取り戻す。このような天上界の警告によって人々は反省を促され修正させら

れる。この神の愛に感謝するとウェブ・マスターは言うのである。これまで天災と思われてきた「人災」を年代順に並べてみると、大き

な問題の前後に人災は多発していることがわかる筈だ。この分布図を見ると、日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦、第二次世界大戦の

前後に多発し、天上界は「日本人よ目覚めよ、戦争は人類最大の悪である、愚かなことは止めよ」と叫びつづけたのである。それと

1960年前後に人災が多発しているのは、組合運動、学生運動がエスカレートした時期と一致する。こうした観点で物事をみると全て

が見えてくると言いたいのである。このことを皆さんに伝えることができるのもインターネットのお陰である。悪い方にも良い方にも洗

脳できるマルチメディアは、利用の仕方によっては両刃の剣になり得るので注意が肝腎だが、物質欲に翻弄され価値観の欠如した現代で

は、正法の教えは必須と考える。

園頭師の記述

世界は動く

白色人種優位の世界支配は終わり

有色人種優位の世界支配に変わる

(昭和十八年 ロス、アガシャ教会 アガシャの予言)

元国際正法協会 会長 園頭広周師は、小冊子『天災地変が起こる霊的原因 天災地変も人災である。なぜ北海道、阪神に大地震が起こった

か 今、世界各国に地震が起こっている原因 心霊学上、私はこう主張するのである。』

の中でこう記述されている。

精神

太陽には太陽精神があり、地球には地球精神がある。

人間の肉体も、細胞には細胞精神があり、心臓には心臓精神が、脾臓には脾臓精神が、胃には胃の精神が、各臓器にはそれぞれの臓器

精神があり、それらの精神を総括しコントロールしているのが、我々の精神である。

厚生省は、毎年毎年医療費の増加に悩んでいる。病院の統廃合、医師・看護婦の養成、配置、薬価基準の改正等、躍起になっている

が、人間を唯物論的に見て精神の存在を無視しては医療費は増えるだけであり、病気の数も増えてくるだけで、生ずる病気とその

治療法のいたちごっこで、絶対に病気はなくなるらない。

世界を平和にするためには、人類から病気が亡くならなければならないのではないのか。

唯物論の時代は終わったのである。

各宗教団体が「二十一世紀は精神の世紀である」といっているが、それはスローガンだけで具体性を持たない。

「生長の家教団」が「万教帰一」といっているが、それもスローガンだけで中味がない。

「立正佼成会」が「万教調和」をいっているが、それもスローガンだけで中味がない。

スローガンだけで中味のない宗教が多い。

口でいうだけじゃなく、その具体策をいうべきである。

現在の宗教は「スローガン宗教だ」といえる。

国家

終戦後の日本は、国家不在の歴史であった。愛国心、民族精神はみんなダメとされた。

日教組の教育によって、日本人は愛国心を持ち愛国という言葉だけを口にするだけで、犯罪人と思われるような風潮すらつくり出した。

日の丸反対、君が代反対を唱える教師は精神分裂、精神異常者であるといえる。

自分達が、精神異常者であることを日教組の教師は気づいていない。気づいていないからこそ本当の精神異常者である。

日教組が設立された当初から、私は日教組反対運動をやってきた。

ダーウインの進化論を正しいという教師には、「オイ猿」と呼べ、決して「先生」というなど、中高校生研修会でいいつづけてきた。

日教組の前委員長小林武氏とも討論会をやってきた。小林氏は私の私の前に一言もなく引き下がった。

以来、日教組は私の討論に応じなくなった。討論に応ずれば負けるからである。

日教組は共産党であった

日教組の中味は共産党であった。共産党というのでは国民の反発を招くというので、社会党左派を名乗った。でも中味は共産党で丹頂

鶴といわれた。「教師の論理綱領」、聞こえはよいが、中味は日本の青少年を共産党の党士に育て上げるためであった。

社会党は日本国家破壊政党であった。

社会党は右派と左派に分かれている。社会党の中には、「日本型社会主義」といつている人もいるが、その下敷になっているのは「ソ

連型共産革命」であった。

日教組の教師達はみな社会党、日本国家破壊主義者であった。日教組の教師が、なぜ精神異常者なのかを説明して置こう。

教師はまず国家から教師の資格を認定されるのである。教師資格がなければ教壇に立つことはできない。教師であることが第一に既に

国の恩である。国が教師資格を認定したから、国が地方自治体が、国民から税金を集め、その税金の中から毎月俸給を出しているの

ある。官公労組員も同じである。その親分が村山首相である。

国家はいらんというのであれば、教師資格を返上し、給料を辞退してものをいうべきである。

我々は、「いうこととやることの違う宗教家（人）を信用するな」といわれた釈尊の言葉を忠実に守っている者であるから、日教組

（官公労）が”もの”をいうなら、ソ連型共産革命をやるという主張をやめてから”もの”をいえ、というのである。

自分のやっていることが理に叶っているかどうかわからない者は、精神異常者ではないのか。

社会党知事のいる所に災害が起こる

北海道、兵庫然り、である。社会党勢力の強い所に災害が起こる。これは予言であり警告である。心霊学上、そのように判断できるの

である。

創価学会、公明党勢力の強い所にも災害が起こる危険性がある。なぜなら、社会党と同じように国家破壊勢力であるからである。

その原因を説明しよう

何かいやなことがあると、あなた方は必ず「気が重い、心が重い」というであろう。

心が重くなったからといって体重が増えたわけではない。

日本の古神道は、「地球には地球精神がある」という。古神道では「天神地祇」を祀る。

天即ち太陽生命、地即ち地球生命に感謝し祀るのである。

そこに住んでいる人達の心が重くなると、その重さは地球生命を圧迫し、地球生命に歪みを与える。すると、地球生命は復元しよう

とも、地球精神、地球生命を圧迫しているものを排除しようという自助エネルギーが働く。

馬のお尻に蛇が刺すと、馬は自然にその蛇を払い落とそうと尻尾を振る。それと同じで、地球は地球としての生き物なのであるから、地

球生命、精神に邪魔になるものは払い落とそうとして身震いする。それが天災地変として現われるものである。

社会党、新進党勢力を排除せよ

社会党知事は、日本国家破壊を企む勢力をうまくごまかして自分に投票させ、知事になったのである。

社会党知事は、ホンネはそうでなくても、そういう勢力を利用して自分の地位欲、名誉欲それに伴う金銭欲を満足させようという汚ない

打算があると私は見る。

阪神大震災が起こった時、私は「社会党知事だから起こったのだ」と家内にいった。

家内は「だって福岡県は社会党知事なのに地震は起こらないじゃないですか」といった。

「地震は起こらなかったが、異常渇水で雨が降らん。福岡のダム上空まできた雨雲は、すーっと横へそれる。奥田知事がやめたら雨が降

る」といった。

福岡県の異常渇水は、自民党知事になることによって解消された。

天候気象を支配している霊を諸天善神という

天候は自然現象であるが、その自然現象を支配しているのは諸天善神である。

昔から風神とか雷神とかいう言葉があるであろう。

諸天善神、天候気象を支配している神は、その地域に住んでいる人々の心を反映するのである。

カリフォルニアは砂漠であった。日本人が移住して野菜を作るようになったら雨が降って、いい野菜ができるようになった。それは

日本人の心が調和されていたからである。

昭和五〇年に高橋信次先生は、「ソ連が崩壊する。これから共産圏は食糧飢饉が起こる」と予言された。

それから二〇年経ってソ連は崩壊し、今、共産圏は食糧飢饉である。中共も北朝鮮も食糧ができない。原因は雨が降らんからである。

福岡は社会党の奥田知事の間は雨が降らなかった。福岡県民の心はカサカサしていた。

自民党の麻生知事になったら雨が降って、県民の心もうるおいを持ってきた。

だから指導者を選ぶには、その人の人格が地球精神と調和しているか、諸天善神と調和しているかを考えて投票しなければならないのである。

新進党の議員に投票するな

新進党の議員を選ぶと国民は不幸になる

私は一般国民のまだ知らない心霊学の勉強をしている。私も国民の一人として言論の自由を持っている。

相手が、国民が、不幸になることがわかっているのは、宗教家として黙っているわけにゆかない。

その理由は、新進党は創価学会党（国家破壊政党）であるからである。

新進党は、公明党、創価学会を排除すべきである。池田大作如きニセ宗教家に、あなた達は自分の良心を売めるのか。

日本には、日本の天命があるのである。

だから私は愛国者である。

日本の国を護ることが、実はもっとも正しい宗教、正しい信仰なのである。

だから内村鑑三先生も「代表的日本人」、西郷隆盛の項の始めに「日本が『天』の命をうけ、はじめて青海原より姿を現わした

時・・・・」と書かれたのである。この本は「日本とはどんな国か」を西洋白人人種に知ってもらうため英文で書かれた本である

から、この本を読んだ西洋人は「日本は天命の国である」と知っているのである。

日本人が日本の国を護らないで誰が護るのか。

[Home](#)

正法 F A X 情報サービスについて

コンピューターに入れられた正法の情報が、あなたの F A X で自由に取り出せる「正法 F A X 情報サービス」です。

インターネットをご利用でない方にもお勧めください。

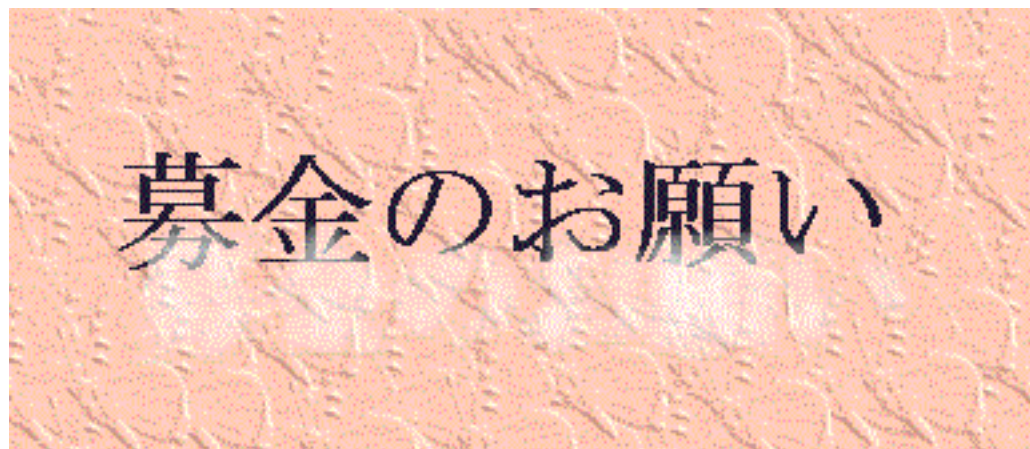
0 9 2 - 4 8 2 - 9 1 0 5

(無料 2 4 時間)

夜間のご利用はくれぐれも電話番号をお間違えの無きよう！

膨大な量のファイルのために、
初期から誤動作の連続で中止させて頂きました。

[Home](#)



正法の活動資金の喜捨（募金）のお願い！

正法は高橋信次師がベーシック（基礎）を、それをもとにアドバンス（応用）を高橋師の亡き後、園頭広周師が説かれたものです。我が師である国際正法協会会長・園頭広周師は、お亡くなり、会の解散やむなきに至りました。師の道半ばでの会の解散は残念とは思いますが、師の清貧な教団運営の意思は私の心の中にも脈々と息づいており、ここに園頭師の意志の引継ぎと正法の流布を高らかに広宣するものであります。

目的

正法を遍く世に広める方策のために

方策

あらゆるマルチメディアを利用した正法の広布・高橋信次師と園頭広周師の正法の著書の維持と出版・講演会と研修会の開催・正法「高橋信次と園頭広周の世界」展（全国巡回開催）・「人間・釈迦」全国巡回上演・正法「大往生するために」の映画製作・正法記念館の設立・アガシャ教会との友好と霊的哲学拠点への足掛かり・遺骨管理共同墓「太陽の里」設立・その他多数・

「太陽の里」概要。近い将来、狭い日本はお墓だらけである。執着で一杯の日本人のお墓を壊してそこにビルを建てようと思っても、執着霊が起こす霊的現象を解消できる宗教はない。一人一人が正法を学んでこの世に囚われる愚かさを知る以外にはないが、それまでの一時期は、お墓を増やさないために「太陽の里」にて遺骨を預かるうと言うのである。永代預かり料金は一回こっきりの五万円程度で、定時にスピーカーから『心行』、『感謝の祈り』が流れ霊の浄化を図り、骨壺ではなく紙箱に保管される。国民的同意が得られる時代が来たら骨粉として農家に無料で提供され、田畑に撒かれ植物の肥料として利用されてもよい。設立場所は、北海道、東北、関東、中部、関西、四国、九州に各一個所程度で、舗装道路の通じた山奥の地価を上げない場所。利用者は、年に一回ぐらい「太陽の里」の掃除のために出向かれたらよい。

募金の方法

インターネット宗教ともいふべき、本「正法」は、「正法」長の花田成鑑とウェブ・マスターの八起正法等の少人数で、経費も掛かりません。現在はホームページの維持管理料程度です。この経費にしてもボランティアの一番清貧な宗教団体です。組織が一番弱小でも、教義は高い内容と自負しています。それは高橋、園頭両師の記述や講演テープやビデオ等の正法の資料が多くあるからです。会員は国民全部が対象であり会員と思っています。宗教の模範になることを目指します。外の宗教団体のように特定の信者も会員もいないのですから、教団運営と事業を展開して行くためには皆さんの尊い「喜捨」に頼らざるを得ないわけで、これが宗教団体の最も理想的な形と思っています。「貧者の一灯」の故事に習い、皆さんに負担のかからないように考えて、一口**¥一万円**、皆さんの尊い一灯・喜捨をお願い申し上げます。会計は一年に一回、ホームページで公開を考えています。

責任者 花田成鑑 歯学博士

土地建物 自己所有

貯金も無いが借金も無い

賞罰なし

振込先

郵便貯金 記号17480 番号40813001 なまえ 花田成鑑

< 会計報告 >

98年12月25日から99年12月24日まで、お一人一万円の喜捨でした。

2000年8月15日までお一人一万円でした。有り難く使わせて頂きます。

2001年12月までお二人二万円でした。

2003年五月まで四人四万円を振り込んでいただき、HP開設当初より五年間で総計十
万円でした。

ありがとうございます。

[Home](#)



巨星逝く

(平成十一年三月、「感謝の集い」機関誌に掲載分)

ウェブマスター・八起正法

平成十一年二月二十日午前六時五十二分、奇しくも八十一歳のご自分の誕生日に、園頭広周・元国際正法協会会長は亡くなられた。

三年もの長い闘病であったが、あそこが痛いそこがどうのと、たったの一度も意思表示されぬ超模範的な患者だったと聞く。私も度々

お見舞いに伺った者の一人として、まったくその通りだと自信をもって言えるのである。

昨年末、病状が悪化して遠方のご家族も呼び寄せられるという緊張する場面もあったが、いつものように回復されていくものだから、

医者「園頭さんは医学的常識では計れぬ患者」とか、看護婦さんが指摘するように「園頭さんには神様がついていてから、その内に

元気になるかも」というもので、緊張感も薄れて行く矢先のことだったのである。

さすがに、元国際正法協会会員は予感とか直観に優れた超精鋭達の集団だけに、二月ともなると、そこここから

弟子達が続々と病院へ

お見舞いに訪ねて来て、あの人もこの人もという具合だった。

そして、「手を握り締めて離されなかった」とか、「言葉はハッキリ分からないが何かをしきりに語り続けられた」等と、お別れの意

思表示ではないかと喧（かまびす）しいものだった。

亡くなる二日前のこと私は不思議な夢を見た。起きがけに家内へ全てを話した。

それは、自民党の森幹事長が全国民に向けて、テレビの中で「園頭さんを首相にできなかったのは私の不徳の致すところ」と深々と頭

を下げたのである。

なぜ、森幹事長なのか、なぜ園頭首相なのかその時は分からなかったが、目覚めてよくよく考えてみると、園頭先生の分身には「西郷

隆盛」もだが、政治家「ジョージ・ワシントン」もいて、アメリカ合衆国の初代大統領もやっているのである。そうすると園頭首相

も、政治家・森さんの登場もおぼろげながら納得できたのであった。

自民党の番頭ともいえる森さんから「首相にできなかったのは」という過去形の言葉と、「やがては先生のお誕生日」というのが妙に

心に引っ掛かって、二十日からの医会の旅行も「気が進まない」と家内に言い続けた。

二十日、ご家族から先生の訃報をいただくと、何も取り敢えず先生のご自宅へ急いだ。ハンドルを握る家内との会話は、「不自由な肉

体を脱ぎ捨て解き放たれた先生の意識は、これから本来の先生の使命と目的に向けて、天上界から自由に活動がお出来になる。これで

良かったのだ」、というものだった。

それというのも、脳出血の後遺症に悩む私には、先生の大変さは誰よりもよく分かるのである。

三年のお見舞いの間には色々なこともあった。二つのバイパスが開通したり、ショッピング・モールが華々しく開店して、車窓の眺め

に時の移ろいを添えてくれた等の思い出が、走馬灯のように続いた。

ご自宅へ伺うと、先生のご遺体は戻られたばかりで、準備が整うまで近くで控えることにした。先生のご自宅の窓辺に通ずる畑の傍に

車を止めていると、何処からともなく、肥えたのと細身の二羽のハトが飛んできて、窓辺の畑を行き来するのである。みぞれ交じりの

粉雪の中を立ち去ろうともせずいつまでも居続けた。そうしていると、畑の対角にある、葉をすっかり落とした丸裸の木に、丸々と

太った一匹の大きなカラスが飛んできて辺りをうかがい始めた。

そして、ジャンボ機が着陸するときのようにドシーンと地響きを立てて降り立った時には、さすがの二人も身構えるほどだった。

別段、二羽のハトに悪さはしなかったが、凱旋して引き払う時のカラスの様子がまた何とも間抜けであった。飛び上がって梢

(こずえ)に足を架けたのが小枝で、体重を支えきれずに落ちそうになったので思わず吹き出してしまった。そのような中で先生への

対面を許されたので、それからハトはどうなったか知らないが、部屋に通されて見ると、ハトが行き来した辺りに先生は静かに身を

横たえておられた。

先生には幾つものハトの逸話がある。ここという時に不思議なハトが現れた。お釈迦様には猿が、高橋先生にはイルカが困って米軍の

機銃掃射から護った。光の大天使には動物が神の使い姫として現れるという。これもそうなのだろうと思った。

こうして、もの言われぬ不動の先生は、病室で見かけていた時の先生よりもっといい顔で安らかだった。

私は色々な想いが交錯して、思いっきり号泣してしまった。涙もろかった先生に、泣き虫の弟子である。

法の権威をもって接されるとき先生は実に厳しくて、私などは先生のお側に出ると直立不動で師の影を踏まずというものだったが、

普段の先生は無類の好好爺であった。例え、たもとを分けて去った人でも、前非を悔いて帰ってくると何人といえど拒まずという正に

天使の心だった。

かって、私は支部長を辞退して、しばらく会に顔を出さぬということがあった。その年の支部の忘年会に臆面もなくのこのこ出掛けて

行くと、先生は殊のほか喜んで下さり、正法誌(210号・ある人への手紙)にも書いて下さったが、先生亡き今となっては私への

遺言と受け止め、正法をまだ知らない人に色々な方法を駆使して伝える覚悟である。

二十一日(日)、火葬場がお休みのために斎場にて通夜が執り行われた。この日は、A氏、S氏と私の二月定例見舞いの日になって

いたが、奇しくもこのようになってしまった。

ご自宅には朝から弔問客でごった返して、邪魔にならぬように皆で控えた。

久々に見るあの人もこの人も来て下さった。時折り粉雪も舞って、控えのために利用した車の中で先生の思い出話も続いた。

先生はいつも重いカバンを持って全国を講演して廻られ、席の暖まる暇もなかった。ある人が「どうしてそんなに重いカバンを持ち

回られるのですか」と尋ねると「それが私の使命なのです」と答えられたとか、別の人は「先生カバンをお持ちしましょう」と無理に

預かったものの、それがまた重たくて重たくて、ほかの人にそっと手伝ってもらった、と思い出しては涙だった。

お通夜の準備のためにご遺体が葬儀場へ移動されるまでに少し時間があったので、私は近くの水城の史跡である「思水園」へ行って

みた。原稿の書疲れを癒すために、先生はたびたび散策をされたであろうが、木漏れ陽の中に時おり粉雪の舞う思水園は、ひっそりと

静かだった。

先生が病に伏されるまで、全号一人でお書きになった月刊正法誌がある。昭和五十三年九月の創刊号から平成八年四月号の211号

までだが、これには先生の日常の雑感を書き留められた「紫水園日記」がある。先生を偲んでその一遍を上げてみる。

「紫水園日記」 園頭広周

お釈迦様が、「善き師、善き友を持つことは教えのすべてである」といわれた。その善き師善き友とは、今生きている人でなくても昔

の人であってもよい。私は山上憶良という善き師を持ってきた。私は今、万葉時代に山上憶良が住んでいた近くにいる。

鹿児島に生まれて、善き師、善き友として尊敬してきた山上憶良が、その妻とその子を愛しつつ住んだ所の近くにて、私もまた山上

憶良にならって妻と子を愛しつつ住む。これも縁なのであろう。太宰師従四位下といってもその生活がどんなに苦しかったかは「貧窮

問答」にみえる。

「風邪まじり、雨降る夜の、雨まじり、雪降る夜は術もなく、寒くしあれば、堅塩を取りつづしろひ糟湯酒うちすすろいてしはぶ

かひ鼻びしびしにしかとあらぬひげかきなでてーー」

雨まじりの雪が横なぐりに降る、寒くて仕方がない。岩塩の一かけらを肴に、酒粕を湯で溶いたのをすする、咳がでてせきこみ、鼻汁

がでて鼻汁はすすり上げどうして、あるかないかわからないほどにしか生えていないひげをかきなでながらーーというのである。

「術もなく苦しくあれば出て走り去ななと思えど子らに障りぬ」

苦しくてどうしていいかわからない。どこかへ行ってしまいたいと思うけれども、自分がどこかへ行ってしまえば子供たちが泣き、苦

労することはわかっている、それを思うとどこへといって逃げ出すわけにもゆかない、というのである。私は終戦後、事業に失敗し

た。収入はなくなりどうしていいかわからなかった。子供の寝顔を見ながら思い出したのがこの山上憶良の歌であった。山上憶良は貧

しさに耐えて子等を愛した。

「銀（しろがね）も金（くがね）も玉も何せむに まされる宝 子に如かめやも」

子供への愛情をかほどまでに見事に歌い上げた歌は外にない。私は子供が生まれるたびにこの歌を思い出していた。憶良の妻に対する

愛情は深かった。憶良がどんなに妻を愛していたかはつぎの歌でわかる

「憶良らは今はまからむ子泣くらむ それ彼の母も吾を待つらむぞ」

今も役人は宴会が多いが昔も多かったようである。宴会がすんだ、ほかの人達は二次会へ行った。「自分は帰ろう。今日は宴会があっ

たため帰りが遅くなった。きっと子供たちは泣いているかも知れない。その子供たちの母もきっと自分の帰りを待ちわびていることで

あろう」

憶良が、「吾が妻も待つらむ」と妻という名を上げずに、「それ彼の母も」と詠んだところに私は憶良の妻に対するつつしみ深い愛情

の深さを思う。山上憶良という善き師、善き友を持ったが故に私は子供を愛し育てることができたのであった。歴史を知るということ

は善き師、善き友を持つことにもなるのである。

山上憶良の住んでいた所は私の家から真東になる。毎朝、私は東に向かって礼拝し山上憶良を偲び感謝し、すべての人の幸せを祈る

のである。 月刊『正法』

先生の悲報を聞きつけて、全国から元会員達がお通夜と告別式へゾクゾクと駆けつけ人の波であふれた。あの小学生君も小さな手を合

わせてくれた。袂を分けたあの人もこの人も懐かしい顔を見せてくれた。

そして、ご家族は先生の納骨に配慮されてお通夜も告別式も通例に従い、納骨堂の檀家として、そこのお坊さんの導師により執り行わ

れた。また、会場に入りきれぬほどの弔問客への礼儀として、元会員達はお通夜も告別式も脇に控え、『心行』、『感謝の祈り』の

読唱は宿舍等で行われ、先生と別れを惜しむ人が主体の、実にさわやかな葬儀だった。

先生は、心の世界においては菩薩界と如来界の中間に位置され、来世は華光如来としてインドに出られて、カー

スト制度の打破に腐心

さるべき使命と役割の、正に巨星だったのである。

お別れの日、思い思いに麗花（奥様の一字をいただいた）をご遺体の傍に添えると、うす曇りの中を皆に見送られ、先生を乗せたお車

は山上憶良の住んだ筑紫の里へ走り出した。

[Home](#)

オウム (改称アレフ) や 危ないッ教団信者を救いたい

拝啓、オウムと危ないッ教団の信者様

私は、新しいことには直ぐついでには行けないけれど、保守的だが分別のある初老です。

高橋信次という方と、その一番弟子の園頭広周という方に正法という神理を学びました。

どちらもすでに故人となられていますが、お二人とも何十冊という本も書かれ、あなた方がとっても興味のある
霊能者としても、あなた達の教祖さま

に負けない位に超一流だったと思っています。

信じてもらえるかわかりませんが、高橋信次という方は、かつて、釈迦といわれた方です。

『人間・釈迦』四部作（三宝出版社）高橋信次著を読んでいただくとおわかりになりますが、他の釈迦伝とは
まったく違う、その人でなければこうは書

けまいと言われてきた奇跡の本です。

周りには参考にされる本など一切なく、眼前に広がる情景の通りに自動書記されたといえます。

その一端を上げると、「お釈迦様は紀元前五百七十五年二月十五日になくなりました」とか、

「西暦はイエスの生誕から始まったということに由来しますが、イエスキリストは紀元前三十二年に生まれ、五
十四歳で亡くなっています」と、私

が「高橋信次の新事実」と名づけているものは、ゆうに一冊の本になる位の、歴史が塗りかえられる程の質と量
と思っています。

お二方とも宇宙と一体となる「宇宙即我」という境地の体現者であり、日本が生んだ世界的な覚者と信じていま
す。

講演ビデオテープや講演テープや著書も沢山ありますが、お二方とも誠実で、一つもあやふやなところがない人
と思っています。

インターネットの画像と音声の圧縮技術がもう少し進歩して、二時間講演ビデオも流せるようになると、いず
れは家庭のテレビでも見れるイン

ターネットのボタンをクリックすると、各家庭にズカズカと正法が入り込むのです。

一方、園頭広周という方は、この方も 高橋先生に負けず劣らずという奇跡の持ち主で、お釈迦様の時代にはお釈迦様の片腕といわれた舍利佛

であり、よくご存知の般若心経に出てくる舍利子です。近年では西郷隆盛の生まれ変わりといわれ、何十冊という著書群を読まれる

と、「そうかもな」と納得できると思います。

最近、生まれ変わりの本が多く見うけられます。生まれ変わりが名の通った人であればあるほど、現代もそれなりの業績がなければ私なら鵜呑

みにしません。

疑って疑ってトコトン疑ってそれでも真実なら、そのとき信じれば良いのです。

食わず嫌いはいけませんが、そのときは自分の嘘のつけない善なる心で正しく判断すれば良いと思います。人に嘘はつけても自分の心には絶対

に嘘はつけません。その嘘のつけない心を頼りに正しく判断するという事です。ニセ者はそのうちにいつか馬脚を現わすものです。

本物はいつまでもいつまでも真実だ、と思われませんか。

それでは園頭先生の霊能の一端を上げましょう。

園頭先生の霊能

本も出している有名な霊能者が、大祭をするというので訪ねられます。

話も始まり、「ここだ」というときに先生が光を送られると、教祖は突然、支離滅裂なトンチンカンな話を始めました。

それから体が蛇行(ヘビのように動くこと)を始め、祭壇に祭られた一升瓶を開けて、「苦しい」と言いながらすごい形相でゴクゴク飲み始めます。

そのようなことから、そこに集まった信者達は「こんな事は初めてだ」と総立ちになって、大祭もメチャメチャだった、というのです。

また、或る教祖は、「あなたが来ると目がまぶしくて何もできなくなる。だからこれからもう来ないでください」と断られます。

どうしてこんなことが起きるのかと申しますと、動物霊のヘビに憑依された教祖は、先生の光によって、あらぬ痴態、恥さらしを演じたというのです。

動物霊や地獄霊の協力、仕業（しわざ）によって、病気治し、もの当てや予言ぐらいは出来るので、人を集めて教祖になることも出来ます。

また、まぶしくてというのは、先生は菩薩界と如来界の中間に位置される段階の人間性の方ですから、あの世の暗い霊にとって、まさしく光の

化身です。だから教祖がまぶしくて何もできないということになるのです。

高橋先生はビデオの中で、弟子に手をかざして「見えますか」と確かめられることがあります。

すると弟子は心の眼でそれを見て「見えます」と答えます。霊能を自由自在に駆使される高橋先生といえども、このようにいつも謙虚に自戒される

のでした。

手かざしとか手当てというのは その人の人間性、雰囲気、後光（オーラ）、 が相手に働きかけて病気が治るのです。イエスの衣のふさに触れると

病がたちどころに退散せりというのは、こういう ことです。

次に人間性の段階を表わす如来、菩薩の心を簡単に述べますと、如来とは慈悲と愛の塊の人でありまして、あの世とこの世（全部で三百六十億）

を通してわずかに四百二十五人と高橋先生は云い残されています。この世だけでも六十億の人口ですから、いかに少なく偉大なものか

お分かりになるでしょう。

その下の菩薩界は、これもやはり慈悲と愛の人ですが、二万人です。

その下の神界は、損害を受けても避難せず、その原因を追求しても責めず反省をする心の世界です。

この神界は神様の世界ということではなく、神様が人間に望んでおられる心の世界という意味の一億数千万人の世界です。

これは博士、科学者の多い世界。

その下の霊界は、ギブ・アンド・テイクで、与えたものが帰ってこないとスッキリしない心の世界で、地球人類の三分の一です。

その下の幽界は、自分さえ良ければ人はどうでも良いというエゴの世界で、大半です。

これら如来界、菩薩界、神界、霊界、幽界の人が天上界へ行ける天国の心です。

天上界へ行ける最低の心が、自分さえ良ければよい、というエゴの世界ですから、神様は広い大きな心で許しておられるのだなーとホッと救われ

た気分です。

でも、神様が人間に望んでおられるのは、被害を浮け損害をこうむっても相手を責めない、避難しないという

神界の心ですから、こうなると自分は

どうかなと考え込んでしまいます。

皆様はいかがでしたか。これは高橋信次先生が教えられたもので、心の段階が的確に説明されていて、良い時代に生まれ合わせたものだと私

は感謝しています。

心の段階の話をしましたから、それではオウムの教祖さまはどんな心の段階か述べてみましょう。

毒ガスを無差別に誰彼なく撒いた心の状態は、何人も殺すというとても異常なことと思います。

なぜなら、人間は、魂の修行のために この世の地上界に生まれてきていても、 ガスを浴（あ）びせられ亡くなったことで、魂の修行を中断させる

のですから、その責任は逃れられません。

これは法律の尺度とは少し違いますが、人間は生まれ変わり死に変わりして、人生修行という魂の勉強をするのですから、人生を中断して無駄に

するのがいかに重大なことかお分かりでしょう。

これが一つ。

それから、もう一つは、

正しいということの尺度、判断の目安は、「そのことによって心が安らぐか、そのことによってみんなが調和するか」の二つを同時

に満（み）たすことです。

この尺度に当てはめたとき、毒ガスを撒いて人を殺したことが正しいかと尋ねても、誰一人 として「それは正しい」と答える人はいないでしょう。

毒ガスを撒くとは、誰が考えてもく暗い心の世界です。

明るい心の世界を天上界といい、最低レベルがエゴの心と述べました。

教祖の行為は、最低レベルのエゴどころかもっとズーッと下の、光のない暗い世界の事象です。

暗い心の世界を地獄界と呼んでいます。

言い換えれば教祖の行為は暗い地獄の行為そのもので、心が地獄の世界に同通していると言いたいのです。

それでは暗い心の世界、地獄の世界はどんなものか述べましょう。

地獄界

修羅界（しゅらかい） 餓鬼界（がきかい） 煉獄（れんごく） 無間地獄（むげんじごく） 魔王（まおう）（ルシフェルは、天上界とも

連絡を断ち、地獄の帝王となってサタンと呼ばれている）

修羅界

人を争わせる闘争対立の心を持つ人。信仰によって争いを生み出す人。

自分の利益優先で人を陥（おとしい）れ利用する人。

餓鬼界

金銭欲が深く、いくら持っても満足しない欲の塊の人

畜生界

動物の本能のままに見境なく性欲に狂う人

煉獄

狂思想家、エゴイスト、狂宗教家。異常な位にひどく怒る人、異常な位にひどく怨む人、異常な位にひどく悲しむ人。

無間地獄

戦争の計画者、集団闘争の計画者、間違った教えで悪の煽動をした狂宗教家、権力で大衆を誤った方向へ導いた指導者。この界にはスターリ

ン、ヒットラー等がいる。

以上は高橋先生の分類です。

あなた方の教祖さまはどの界層に当たられると思いますか。

たとえば最下層の無間地獄を例に引けば、神の光を完全に閉ざした世界ですから、自分の身の置き場もわからないという光の全くない暗黒の世界

です。

地上生命のエネルギー源は太陽です。なぜなら、太陽の熱、光がなければ太陽系は一瞬にして死んでしまうように、あの世のエネルギー源は神の

光であり、霊太陽ですが、彼らの世界は神の光を閉ざした世界なので、地上の悪の人間を媒体としなければ、地獄界を形成し得るエネ

ルギーを確保できないので、彼らも同類（類は友を呼ぶ、波長共鳴の法則）を探し出してコントロールします。これを憑依（ひょうい、

とりつく、背後霊としてしがみつく）とといいます。

加えて言うならば、地獄界のエネルギーは人間の心から発する悪の想いですから、地上に悪がはびこれば地獄界はいよいよ賑やかに、忙しく騒が

しくなり、地上はますます悪くなります。こういう意味では、死者の霊をさとすより地上の人間の悟り、或いは教育が大事と思います。

Home

予告や予言はなぜできるか

新興宗教や拝みやさんの中には、お尋ねや病気治しで人を集めているところがあります。予言やお尋ねがよく当たると評判になり、人も自然に集ま

ります。

なぜ当たるのかと申しますと、拝みやさんに憑（つ）いている動物霊や地獄霊が教えるのです。

この世で起こることは次元の違いから先にあの世で起こります。

時間と空間の概念がないのがあの世ですから、先に起こるということは、それは偶然ではなく必然ということで、一点なのです。

動物霊や地獄霊が、あの世で起こったことを先に知って、拝みやさんに耳に声で聞かせたり、眼に光景として見せたり、予感、直観や感じとしてわか

らせます。

その様態は色々です。それを中継（なかつ）ぎして、拝みやさんがお尋ねをする人に教えるわけです。

概して拝みやさんや霊能者といわれる人は、滝などの行、業によって霊能を得ている人が多く、人間性や人格的（光の量の区域）には余り高くない

ので、同類の法則によって、高潔ではない程度の低い動物霊や地獄霊の協力による場合が多いと考えてよいと思います。

ですから、高等な込み入ったことを尋ねてもあの世の霊は答えられません。そのために媒介の霊能者は曖昧な解答しかできないので全く当たらない

かったということになります。

これが当たったり外れたりする理由です。

でも、暗い出来事、例えばいつ事故を起こすかとか、いつ病気で倒れるか等の暗い予告は良く当たります。

これらを暗い地獄の霊の協力という位ですから、暗いことは最も得意とする分野です。

一方、明るい世界の霊の協力によるものはどうかと申しますと、光の量の区域が上がるにつれて予言、予告の確率は高くなります。

ちなみに、モーゼ、釈迦、イエスを分身に持たれた真のメシヤ・エルランティである高橋信次先生の予言、予告は、百パーセントの確率といわれて

います。

予言の当たる確立は、幽界 霊界 神界 菩薩界 如来界と高くなります

同じ予言をするにしても、明るい霊の場合はそれがたとえ悪い結果であっても、尋ねる人を勇気付け、その解決方法は愛を持って教えます。

ところが、暗い霊の場合は、これだけの献金をしないと最悪な状態になる等と、心理的に脅迫することさえあると言いたいのです。

超能力ということ

あなた方の教祖様も恐らく他心通といつて人の心が読める、予言はされる、水に長くもぐる、物体移動、物品引き寄せ、幽体離脱 空中浮上など、

アッと驚くことをされたと思います。そのためにすごい超能力者だと、尊敬と恐れ、畏敬の眼差しで教祖さまに接されたと思われ

ます。

世の中には、人と変わったことをすると、マスコミも 雑誌も何でもかんでも、口を揃えたように報道をして皆を煽ります

以前にありましたユリゲラーの報道合戦、。

このときはまだ高橋先生もご健在で、彼のことに触れられて、動物霊が彼に協力しているとの話があります。

これまでに何度も来日していますが、週刊誌にも、気分屋で気分がコロコロ変わり、対応するのに大変だったと関係者は語っていました。

相手が動物霊ですから、それはそうだと思います。

あの世には動物霊を指導する役職の諸天善神がいて、菩薩界へ昇段する為の大変難しい役目なのだそうです。本能のままの動物ですから、

一筋縄ではいかぬ役職を経て、めでたく慈悲と愛の心の菩薩界というわけです。

あなた方の教祖さまの様子は如何でしたか。

あの世の低級な霊が協力すると何が出来るか

動物霊や地獄霊が協力するとアッと驚くことをします。

先に述べたもの以外にどんなものがあるか挙げますと、大黒さま等の小さな仏像を出す。水を酒に変えてブクブクと無限に出す。スプーンをギザ

ギザのフォーク状にする。眼や饅頭の中から真珠様の白い玉を出す。指先から灰を出す等、もう何でもいいのですが、とても信じられ

ないことをするのが特徴です。トリックの有る手品でないのなら、それはみな霊現象と思います。

これらのどれを見ても、物珍しく驚くことには値しても、他愛のない低級な霊現象と思いませんか。

Home

高橋先生の物質化現象

例えば、高橋先生の場合は物質化現象にしても、真実そのものでした。

ある人がジャワの鉱山を採掘するのに、採算が合うかどうかを相談に来ました。

先生はしばらく瞑目されると、頭上に高くかけた手から三個の鉱石が転げ落ちます。

そして、高橋先生は「ショベルローダーとこれだけの器材と人夫何人 資金いくら用意すれば採算に合う」と答えられます。そこで、相談者は、鉱石

の二つを通産省に分析依頼をし、一つは参考品として残します。二つの鉱石はトン当たり金がどれだけ、銅の含有量どれだけと完全な

分析結果が出て、採算ラインに合うというものでした。高橋先生の霊的な物質化現象は公的な試験場で分析さえもできるものでした。

このように本物は真実そのものであり、ジャワ現地のそのものの鉱石が時空を超えて物質化されたのです。これを相談者は、参考品と

して残した鉱石はお見せしますと著書に記述しています。

ところがこれには後日談がありました。

高橋先生の存命中（亡くなったのが昭和五十一年）に先生の元を離れ、その後は大川氏の幸福の科学で見かけましたが、「彼に悪用されるといけ

ませんから私の霊力で消しました」と高橋先生は園頭先生に激白されています。このように人の行く末が予想できたのです。予想とい

うよりもその人の心の傾向性から必然的に結果が見えたのでしょうか。

それでは、高橋信次先生がはすべてをお見通しであったことを証明する二つの事例を述べます。

一つは高橋先生の長女さんについてです。

先生が亡くなると、当時大学の二年生であった彼女はSF作家の平井という人と共謀して一連の「ミカエル事件」というものを引き起こします。

「父信次は自分を生むだけの存在であり、自分ミカエルが人類を救うのである」、会員は四十歳までという年齢制限もあるというもの

で、都内のホテルでミカエルを売り出そうと記者会見を開くも、記者の質問に答えられず泣き出して、ポスターも一夜の内に剥いで廻

わります。

こういうことが起こる前に、高橋先生は亡くなる直前、「新・復活」という原稿を書いているという予告が講演でもなされていました。

「娘はこの本を出せない」と見通しておられた先生は、原稿をコピーして弟子の一人に託されていたというのです

それが二十数年経って、その人から突然、園頭先生の許に送られて来て、それを元に園頭先生は出版を準備されていました。

すると彼女側の弁護士が先生を訪ね出版を差し止め、現在も幻の『新・復活』となっています。こうして出版は中止されたのです。

また、このミカエル事件等の高橋先生亡後の混乱について、弟子の一人は自著の中で、「先生は亡くなる前に今までにない大事件が二年半する

と起こる」との予告を聞いた、というのがあります。まさにミカエル事件も予言通りでしたが、この様に全部お見通しであったと言

たいのです。

もう一つは、ハッピー科学の教祖さまのことです。

霊言シリーズを書いた父親の善川三朗氏は、高橋先生の講演を聞いたことがあるということです。その影響からか教祖さまは、何十冊も霊言、

霊訓集を出されていて、とりわけ『新復活・高橋信次』等の「高橋信次もの」といわれる著書は二十冊を数えました。高橋先生が教祖

さまに降りて来られるにしましては、書かれている内容の波動、文章の格調の高さが高橋先生とは全く違う異質のもの、我が師の園頭

先生は「違う、断じて違う」と、著書『「大川隆法」はこう読め』、『続「大川隆法」はこう読め』、『大川隆法は仏陀ではない』、

『高橋信次師こそ真の仏陀であった』や会誌や他の著書群で警告を法発されました。

それが原因なのかどうか分かりませんが、「高橋信次もの」はあれほどの数だったのに、すっかり影を潜めました。

ところが、フライデー事件があった後しばらくして、教祖さまは園頭先生を告訴して来られました。

私も、これは天上界の存在を証明するためにも、光の天使・園頭広周先生を護るだろうと信じていた通りに矢張りというか、そのようになったよ

うです。

このように問題は幾つかあっても、高橋信次先生の名を広めてくださった功績は特筆しても余りあると思っています。

ところで、高橋先生は講演会の中で、「関西出身の人が出る」という話があったようなのです、大川教祖さまは高橋先生の後を継ぐのは、それが

自分であると考えられたようで仏陀だの、カンターレ（釈迦のあの世での呼称と、高橋先生は昭和四十年代に明かされました）だのと

矢継ぎ早に出版されました。

これは困ったことだと園頭先生は、一緒にそばにいて聞いていた人の名を上げ「高橋先生は否定されている」と公表され、それによると、混乱させ

る男性が出るという意味のことだったようです。

代表的な二つの事例を挙げましたが、このように高橋先生は亡後のことも全部お見通しなのが、高橋先生のすごいところでした。

このほかにも混乱させる困った人達のことを、高橋先生は実名で何人も言い残しておられ、自著も出して正法を隠れ蓑（みの）にして活躍されてい

る人もおられるということを告げておきます。

金粉現象

そして、高橋先生が亡くなる直前の最後の研修会での講演は、まさしく大熱演の獅子吼（ほえ）の講演で、降壇された先生の額（ひたい）には、

それを剥ぐと「L」字の金が出ます。LはエルランティのLで、ミカエル、ガブリエル、ウリエル、サリエル、パヌエル、ラファエル、

ルシュフェル（後にサターンと呼ばれた魔王．そのために後ではラグエルがルシュフェルの後任として入る）などの七大天使につけた

エル（L）をいいます。この時も大量の金が出ます。

また、別の講演会では、「数十グラムの金の塊は熱くて、先生の顔も手も金でキラキラ輝き、お釈迦さまの仏像を金で荘厳（しょうごん）するという

のは、こういうことなのかと理解した」、と高橋先生の弟子の一人は著書に書いておられます。

このように真実のものは純金であり、動物霊、地獄霊の出すものは銅を主体としたものであり、その姿を永久にとどめることは出来ません。

このように真実のものは真実のものとして、いつまでも消えて無くならないもののようです。それが本当だと思います。

[Home](#)

あの世の霊が憑（つ）くとどうなるか

あの世の悪い霊が憑くからには、その人も悪い霊と同じ心の在り方をした同類ということです。動物霊などの憑いた方からすれば、憑くからには

憑く正当な理由があります。それは同類だからです。

悪い霊が憑くことを憑依と言うと述べました。

憑依現象には、ノイローゼ、精神病、最近話題の多重人格などがあります。

多重人格の場合

一人の人が、何人もの性格、人格を持つという意味です。普通では、こんなことはとても考えられません。

一人が、何人にもなるなんてどう考えても腑（ふ）に落ちません。

それはどういうことかと言うと、一人の人が色々な正しくない心の在り方、生き方をしていると、それに見合った、似合った同類の霊が次から次へと

憑いて、様々な性格、人格を現わすということです。

Aが憑いているときはAの人格を現わし、次にAが離れて代わりにBが憑くとBの人格を現わし、次にC、Dというように次々に憑いて、そして全部

離れると本来の自分に帰るのです。だから多重人格といいます。

例えば、多重放送というのが有ります。同じ番組なのに、スイッチ一つで日本語放送、英語放送、...と幾つもの放送を聞くことが可能です。

一つの番組でありながら幾つもの、また、一人の人間でありながら何人も・・・ということです。

「一念三千」と言って、人間の心の針の向け方は自由自在ですから、何人も憑くということは、それだけ治療も困難を極めます。いかに生き方、心

の在り方が大事かということです。

ところで、霊が憑いているのなら霊能者に依頼して取り払えば良いではないかという考え方があります。

どうしてそれが危険かを話します。

霊能者と言われる人達は、滝業などで靈感を得ていることが多く、霊能中心になって依頼者の心を変える力がないことが一つ。

それともう一つは、霊能者に憑いている強い悪霊が、依頼者の弱い霊を蹴散らして一時は治ったように見えても、次には強い悪霊の配下や子分

が憑いて、前よりもっとひどくなったということが起こるからです。

高橋先生の講演会でも、現証の時間に悪霊を先生の力で除（よ）けるということを皆の面前で公開されました。ところが、その後の講演会には、

また別の悪霊とご同伴ということが起こりました。

このように、その人の心が変わらなければ、どんなに劇的に除霊されても別の霊が憑いて、それは一時的なものに過ぎないということです。

いかがですか、あなた方の教祖さまも除霊、浄霊をなさいましたか。

それでは次に、憑依されている人の見分け方をわかり易く述べてみましょう。

憑依された宗教団体の教祖さまの特徴

- 1、感情の起伏がはげしく考えがコロコロかわる
- 2、金を集めるのが得意
- 3、性欲が異常に強い
- 4、派手なことが好きで特異な格好をする
- 5、純金やキンキラを好む
- 6、多くの取り巻きを連れまわり威張りたがる
- 7、体の周辺が、いつも冷え冷え、又はいつも熱っぽい
- 8、強情で人の言うことを聞かない
- 9、人や食べ物の好き嫌いがはげしい
- 10、顔色が土色か、またどこか黒ずんでいるか、その反対に蒼白で精彩がない

オウムの教祖さまのこと

かつて教祖さまが、表紙に自分の体が空中に浮いている本を出されたとき、手に取ると私は「アッ動物霊が悪戯をしている」と、おもわず叫んでい

ました。

一、ニメートルを浮き上がるのに長い時間を掛けて、それも一瞬のパフォーマンスのために全力を上げるなんて労力と時間の無駄と思いました。

そんなに宙に浮きたいのなら、天井から下げたロープに吊り下がれば良いと思います。

これはもう言うまでもなく、動物霊の協力により浮き上がったのです。

人と少し変わったことをすると皆が集まり、一つの新興宗教が出来あがりということになります。

物体移動

トランスポーションともいい、物体が移動したり、飛んだりすることを言います。

外国の華々しいのになると、テーブルや椅子が一メートルも二メートルも移動したり、皿が空中を飛び交う例もあるようです。この世に不思議はあ

りません、必ず理由があります。理由が見つからないのなら、あの世の霊の為せるワザです。

この世の人達がアッと驚くことも平気な霊ですから、低級な動物霊か悪霊のシワザです。

常識ある光の天使などの明るい霊は、そのようなことをすると思いますか、決してそのようなことは致しません。

カリスマとマインドコントロール

カリスマ

どちらも最近よく使われる言葉です。

宗教関係から来た言葉であるカリスマは今どきの美容関係にも使われ、人の気をそらさず上手で超人気の技術者ということのようです。

本来は神がかった言葉と行動で、衆目の関心と注意ををそらさぬ資質を持つ人という意味に使われます。新興宗教の教祖やヒトラーと共に余り

良い意味には使われていないというのが現状のようです。

本当のカリスマという意味は、この世のこともあの世のことも、過去 現在、未来のことも全部お見通しの覚者 悟られた人を言います。

どうしてこのように過去も未来も全部わかるかと申しますと、あの世の霊の協力によって全部わかるのです。

これまで述べましたように同類の世界ですから、光の大天使の協力を受けるには、こちらの方もそれに似合った資質の持ち主だけということに

なります。

高橋信次先生は、正にそうだったと言えらと思います。

亡くなっている今となっては、残された著書、講演テープ、講演ビデオ、弟子の話しでしか確認できませんが、相談者は、ただ黙って座るだけで何も

言わないのに、今考えていることも、それまでにやってきたことも、過去の過去世（生）のことも来世の未来のことも、高橋信次先生

は即座にわかれた、といわれています。

まさに黙って座ればピタリと当たる世界、というわけです。

一時期、先生は、関係筋の機関から迷宮入りの事件解明の依頼を受けて、解決の手助けをされていたことがあります。

すると、天上界から事件解決屋みたいになぜ片棒を担ぐのか、お前は人の道を説いていれば良い。そのようなことばかりやっていると、都合の

悪いやつらから狙われるぞと注意を受けられ、それからは全部断っているというのやら、例の三億円事件もわかっていますがね、と

いうのもあります。

このように万能の方でしたから、弟子達はただ先生にぶら下がってついて行くだけで良かったので、先生が亡くなれると大混乱を引き起こすこと

になります。

横道にそれましたが、悪しき霊から協力を受けていたのが、ヒトラーや教祖さまであり、善いカリスマの超一等の方が高橋信次先生で、その次が

園頭広周先生と私は思っています。

マインドコントロール

マインドコントロールとは、信者や会員を教祖さまの教えで「教祖さま漬け」にすることです。最近は悪い方の意味に使われています。

もし、教祖さまの教えが間違っていたらそれこそ悲惨です。なぜなら信者全員が間違った教えで狂わされるからです。

体の毒は死んでしまえばこの世限りですが、心の毒は、懺悔、修正しなければいつまでも続くから一大事 ということです。

このように心の世界では、間違った狂思想家、間違った教えを説く狂宗教家は、最下位の暗黒の世界に住するということです。そして、その教えから

一人残らず解放されるまでは、光を完全に閉ざした身の置き場もわからぬ所が棲家（すみか）です。

一方、善い方のマインドコントロールは、心の「正しい教え漬け」ですから良いことばかりです。

「正しい」ということの定義は、前に述べましたように、それによって心が安らぐか、それによってみな調和するかの二つを同時に満たすものというの

ですから、悪いはずはありません。

私は、これを心の「正法漬け」と呼んでいて、私は完全な正法漬けです。正法によるマインドコントロールを甘んじて、否、それどころか積極的に受け

ています。

かつて、教祖さまは自著の中で、高橋信次氏の光というものに安らぎを感じて本を読み漁（あさ）ったが、何の解答を得られぬまま他の教えへ ...

云々というのがありました。これに対して園頭先生は、大学の講義を小学生がわからぬように、まだそこまで至っていない人の言い

ぐさであり、私は光を感じ、安らぎを感じ、解答も得られたとの反論の長文もあります。

Home

独り言（ひとりごと）の秘密

オウムの教祖さまは、裁判所や牢獄でも、よく独り言をつぶやかれるそうです。

一般的な独り言は、一つの精神作用として問題ありませんが、特異なものは誰かと話している状態をいうのです。

それでは相手は誰かという、そばに誰もいないのならそれはあの世の霊です。

あの世の霊でも光の天使なら大歓迎ですが、暗い世界の地獄の霊や動物霊なら困りものです。

春先の木の芽が萌え出す時期になると、ニヤニヤしながら独り言を云う人がいます。それを心の眼で見ると（霊視すると）、必ずあの世の霊がそば

に来ていて、話していると言うのです。

どうして春先かと申しますと、寒い冬の間は花の種も硬い殻に包まれていても、陽炎（かげろう）が燃え出る頃になると、硬い殻から一斉に芽吹

き始めるように、あの世もこの世も活動を始める時期ということです。

このように、教祖さまはあの世の同類と、やり取りを交わしていると理解されたと思います。

教祖さまの一念三千の心

教祖さまは終日独房の中で、心の針の向け方は「一念三千」といって無数にあり飛ぶ鳥のように心は自由自在です。善を思えば善に、悪を思えば

悪につながって行きます。教祖さまの一念は、同類の、かつてのあなた達に向けて発されていることは想像に難しくなく、その悪念から

どうしたら外れられるか、その方法を述べます。

信者が教祖さまから心が離れて行くと、そうはさせまいと「引っ掛け戻し」といって、一時的にも体の調子が悪くなったり恐怖感を覚えることがあります。

ます。

やっぱり離れるのはやめとこうという心が働くと、嘘の様に平常に戻ります。でも、こうなっはいつまでも悪の循環は絶ちきれず苦しむことになりま

すから勇気を出して立ち上がることです。

悪の暗い想念は、じめじめと暗い、執念深い、増長慢の心、お金に汚い、情欲に燃える、、イライラする、怒りっぽい 愚痴っぽいなどの心ですから、

これらと反対の明るい心で、つまり、快活、素直、誠実、思いやり、愛の心などで毎日を送っていると、悪の循環、悪のクサリが断ち切

られ、そのうちには善の循環に完全に変わり、ついには悪しきものと離れることが出来る第一歩を、踏み出すこととなります。

そして、次には、自分は一旦死んで生き方をを完全に別人のように変えるのです。

死んで生き方を変えるとどういう意味かと申しますと、死んでしまえばこの世には自分がいないのですから、別人になって、つまり別人のように完全

に生き方を変えらるということなのです。

死んだつもりでとか、死ぬ気になってとか言う程度の生易しいものではなく、完全に死んで別人の生き方をするのが、最大のコツであり早道です。

立ち上がらなければ何事も好転しません。じっとしては運命も良い方には変わらないのです。

「自力の極には他力あり」といいます。懸命に自助努力をしていると、そのうちには他力の光が燦然と輝くのです。お経をあげたりお祈りばかりでは

何も解決しません。怖がらずに勇気を奮って生き方を変える日常の実践をすることです。

教祖様にその責任はどう取らせたらよいか

教祖さまは、報道を賑わせたように段々とその実体、真実が明らかにされてきました。

そして、現在も身柄を拘束され独房生活を強いられています。

これからの裁判結果を見なければいけません、彼をどうするかということを書きます。

被害者とその関係者の恨み辛みはよくわかります。でも、心の安らぎは許すというところからしか絶対に生まれません。

こんなことを言うと非難を浴びそうですが、どんなにしても亡くなった人は帰らないのです。

どんな厳罰を与えても、事件に巻き込まれた人が戻ってくるわけでもなく、大きな心で許す以外にはないと思います。

加害者は、その為した原因による結果が出て、その報いによってバッチリ反省させられるのですから、それでよしとする心が必要でしょう。

処刑の是非をここで述べるつもりもありませんが、例えば、加害者である教祖さまが死刑を執行されたとします。

現在の反省もなされていない状態で執行されてしまうと、死刑によって肉体を脱ぎ捨てた教祖さまの意識（心、魂）は、肉体を拘束された場合よ

り自由です。

完全に自由かと申しますと、そうではありません。心の暗い地獄霊は地上界に執着の心が強いため、心の明るい霊より行動は制限されます。

地獄霊は神の光を閉ざした霊であり、彼等のエネルギーはこの世の悪の想念ですから、同類に憑依しまくと巷は混乱するので、それを防ぐため

に行動は制限されているというのです。

完全に制限されているかということ、この世を縁として人間が作り出した業（カルマ、心の傾向性）の反省のために、そうはならないのです。

だから憑依も少しは起こります。

一方、光の天使は上段界に上がるにつれて、行動は解放され自由自在です。

ですから、教祖さまは今の上では、同類に憑依（ひょうい）して同じような事件を何度も引き起こさせますから、死刑にしてはいけないというのです。

それではどうするのかと申しますと生涯拘束をして、正しい教えでマインドコントロールをし、徹底的に心の改造をして後、自然にあの世へ送ること

がベストだと思います。

その正しい教えは何がいいかと申しますと、関係省庁で検討、検証されて、それでも良いというのであれば、著書もテープもビデオも山ほどある、

正法漬けは如何かなと私は考えます。

それでは次に、人は死んだらどうなるか述べてみましょう。

Home

死んだらどうなる

人は亡くなると、しばらくは無意識状態です。

坊さんが来てお経が上がり、葬儀の参列者などを見て「あれ死んだのかな」と自覚します。高橋先生の講演会の現証の時間には、いまだに死んだ

ことを自覚しない霊も登場して、「今いつですか」と尋ねると平気で江戸時代の年号を告げる霊もいます。切腹して死んだ霊ですか

らね。

このような霊は、日本には時代の流れがあったのですから、いくらでもいると理解してください。

しばらくすると普通は死を自覚します。

生前の等速度運動から、痛みのひどかった人は痛みがあり、食事がのどを通らなかった人は食事も出来ません。

しばらくは病気の影響が続きます。でも、病気の肉体は脱ぎ捨てているのですから、もう病気はありません。

高橋先生の講演では傷痍軍人の足のない霊が出てきて、足が無いからとさんざん苦勞の悔やみごとを愚痴り始めますから、「ホラちゃんと足はあ

るよ」と教えられると 恐る恐る確認して泣き出してしまいます。そのうちには反省をはじめ、少しずつ光の量の区域が拡大して明る

い世界へ少しずつ上って行くのでした。

この例のように自覚できずに病気を引きずっていることもありますから、何度も教えることが大切です。

また、死んですぐはこの世の延長線上にありますので、食べ物を欲しがりますからお供えも意味があります。

でも、もうそれからは必要ありませんが、一人よがり争いの元ですから知恵を働かせてください。

そうしていると係りが出てきて、「あなたは死の用意がありますか、死ぬ覚悟がありますか」と尋ねられます。

この係りは菩薩界の住人で、慈悲と愛の光の化身ですから、死者にとって光の玉に見えます。

皆さんよくご存知の「三途の川」もあってこの世の執着、心のお荷物を捨てないと渡れないというあの世の大河です。

死んで二十一日間は魂は家の周りや家の軒（のき）などにいます。

この世に何十年も生きて生活していたのですから当然かもしれません。

二十一日過ぎると、どんなにこの世に執着していても「何をボヤボヤしているのか早く」と急かされて、あの世の修養所へ行かねばなりません。

この世（地上界）に執着をしてはならないと悟った人はといえば、この世に固執しませんからストレートに修養所へ行きます。

でも、凡人はどこへ行っていいのか戸惑いますから、そういうときは魂の兄弟達（魂の先祖）が連れて行きます。

日本人の場合、魂の兄弟が外国人では「どうして鼻の高いのが、色の白いのが」と驚きますからこの場合は肉体先祖が来て連れて行き

ます。このように我々は色んな所に生まれて変わっているのですから、国際的で宇宙的な視野で対処、対応せねばなりません。

修養所では、生きていた当時のすべての出来事、全生涯をパノラマのスローモーションカラーピクチャー（立体天然色スローモーション映画）で、あり

のままを全部通して見せられ反省をさせられます。

「これはとてもまともには見られません」と高橋先生は教えられました。

この修養所のそばには無意味と悟った人達の捨てたものすごいゴミの山があります。

二、三上げると、心の中で持ってきたお金、卒塔婆（そとば）、白装束、宗教用具などの山です。これは日本人の場合ですから、地球規模で考え

るとどうなると思いますか。

あの世は実在界といって、消えて無くならない心の世界（意識界）ですから、あの世でも廃棄処置に困っているようなのです。

この修養所での反省期間が二十八日間です。

先の二十一日間とこの二十八日間の和が四十九日の由来です。

残された者がこの間に財産争いなどの気になることでもめたりしますと、せっかく修養所へ来て反省をしているのに、死者はその成り行きを見届

けようと、執着のある場に引き戻され、執着霊となってこの世に問題を起こします。葬式や法事の帰りに自動車事故を起すのもこの現

われです。

こういう理由から、四十九日間は静かにする方が良いでしょう。

四十九日を過ぎると、天国へ行くか地獄へ行くか自ら裁（さば）いて定住します。

閻魔（えんま）さまが裁くのではなく、自分の嘘のつけない善なる心が裁くのです。人に嘘はつけても自分にはつけません。裁くのはこの嘘のつけない

い善なる心、神の子の心です。

あの世の実体（地獄界と天上界）

あの世は同類の世界です。

同類の世界とは、心優しい人は心優しい人が集まる世界、意地汚い人は意地汚い人が集まるという世界です。

心優しい人達が集まる世界は、どこを見ても優しい人達ばかりの世界ですから、それはそれは楽しい天国です。

一方、意地汚い人が集まる世界は、自分を含め全員が意地汚いので、慈悲も愛も無用の安らぎの無い世界ですから、それこそ苦しい地獄の世界

です。

情欲の世界はどこを見ても肉欲を続けるという世界ですから、まさしく地獄絵。

色んな人達の世界を想像してみてください、いやになります。

この地獄界の住人は、そこに居つづけると、もうやるせない、考えただけでも狂いそうになる世界ですから、「こんなことはやめた」と反省す

れば、上の段階（上の光の量の区域）へ進むことができます。

この全てを許すという神の愛、神の慈悲にひれ伏したくなります。

地獄界はいわば反省の世界といえます。

反省の習慣のない人は、今からやっておくのがいいのかもしれませんが。

前に述べましたように、天国の最低の基準である、「自分さえよければ」、という心の段階まで高めると、また地上界に生まれ変われるのです。

地獄界からは絶対に生まれ変わらない仕組みです。

一旦、地獄界に落ちた人が、それからの反省によって天上界に這い上がったとします。また地上界に出られても、性懲（しょうこ）りもなく同じことの

繰り返しによって、また、地獄界に落ちて喘（あえ）いでいる人も多いらしいのです。

供養について

供養というと四十九日の法要とか、一周忌 とか十三回忌等を指します。

この日に皆が集まって、お供えやお坊さんの経も上がって和やかな雰囲気でも、日頃は仲が悪く喧嘩ばかりでは、故人もあの世から見ていて心配

でなりません。彼らもあの世ではあの世の心の修行があるのですから、これではおちおち修行もできません。皆が集まりお供えやお坊

さんのお経で、これでよしとする心を考えたことがあるでしょうか。

そもそも 供養というのは、この世の家族が仲良く、オホホアハハと笑いの絶えない環境をつくることです。

あの世からこの世はお見通しですから、仲の良い姿は、あの世の霊の模範ともなり励みです。供養とはお供えやお経を上げるのではなく、家族が

仲良くすることが供養です。

宗教儀式や用語について

「南無阿弥陀仏（なむあみだぶつ）」という意味は、

古代インド語で、「ナーモ、アミー、ダボ」といい、ナーモは帰依する、アミーはアミーといわれる名前の人、ダボは陀仏（仏陀）で悟られた方。

意味は「アミーといわれる悟られた方に帰依します」ということです。

「南無妙法蓮華経（なむみょうほうれんげきょう）」とは、

「あのハスの花をごらん、あのドブ沼から清らかな花を咲かすように、私達の肉体もドブ沼と同じように、汗、大小便、目糞、鼻糞など何一つとして

綺麗なものはない。だが、心が真に正しい片寄りのない中道の物差しを持って生活したならば、あのハスの花と同じように調和されて行くのだ」とい

うお釈迦様の説法を短くしたものです。

二千五百年前のお釈迦様時代の古代インド語を、中国の漢字に翻訳したものがお経であり、それを日本読みにするのですから、さすがに頭のい

い皆様といえども、チンプンカンプンで理解できないと思われま

書くといえ、般若心経やお経の書経があります。

例え、いくら立派なことが書かれていても意味がわからなければ劇的に人の心は変えられません。

それでは、釈迦といわれた高橋信次先生と、釈迦の高弟の舍利子（舍利佛）といわれた園頭広周先生お二人の二つの著書から『般若心経』

を要約します。

Home

和訳 『般若心経』

「摩訶般若波羅蜜多心経」（まかはんにゃはらみたしんぎょう）という言葉は、当時の古代インド語で「マハーパニヤー パラー ミター チター

ストラ」です。

「マハー」は偉大な、「パニヤー」は智慧、「パラー」は行く、到達する、「ミター」内在する、「チターストラ」は心の教えですから完訳すれば「内在さ

れた偉大な智慧に到達する心の教え」となります。

このように当時の人でなければこのような解説は出来ないと思います。高橋信次先生はとにかくこんな風で、講演でも何が飛び出すかわからない

というものでした。それでは紹介します。

「過去、現在、未来、天国も、地獄も全てを自由自在に見通すことが出来る方（観自在菩薩）が、内在された偉大な智慧に到達するための生活

行為を深く実践した時に、このように私達の五体五官の煩悩が心に作用し、正しい基準、片よりのない中道の物差しを忘れ去ってし

まったために、一切の苦しみや災難、厄難の原因になっている。それを見とどけることができるのだよ、舍利子（皆様方）よ。

この世とあの世は表裏一体であり、連動しているのですよ。私達の心の作用によって、行動（肉体的行為）が現れ、行動があつてまた心に作用する

のです。皆様方よ（舍利子よ）

この諸々のあらゆる神理（タルマ）は神の心の現われです。神理は生れず、滅せず、垢つかず、浄らかならず、増えず、減らず、つまり神理は不変

であるということです。

これゆえに心の世界は、万生万物を見たり、声を聞くこともなく、鼻で匂いを嗅ぐことも、舌で味を知ること
も体で感触を得ることも、眼で見える境界

もありません。

迷いのない明るい光明の世界は、無限の光明に満ち満ちて、所得を得るための知恵も必要がありません。そして人々の心に人生の意義と価値を

教え、迷える衆生を救済して無償の道を歩んで行くことができるようになるのです。

また、心の中に潜在している過去世の体験、偉大な智慧がよみがえり、悟りの境地に到達した悟られた方（観自在菩薩）は、心には引っかかりが

ありません。引っ掛かりがないから、恐怖心もないのです。

一切の夢のような顛倒した考え方を遠くに離して、つまるところは最終的な悟りにはいります。

過去、現在、未来という三世における悟った方は、最高の悟りを得たから内在される仏智を知ることができるのです。

これこそは大宇宙を支配している大神霊の神理であり、これ以上の神理はありません。この神理は人生の生老病死を原因として生ずる一切の苦し

みを除くのです。これは真実であって偽りではありません。それゆえに、内在された偉大な智慧に到達し、仏智に目覚め、そしてそれを実践して一切

を成就しましょう」

正法の教え

正法の教えは、自然の姿を通して人間のあり方を解き明かし、八正道を心の物差しとして、調和された安らぎの道につけと教えます、

そして、転生輪廻（輪廻転生）の法を示し、万生万物は相互の関係にあって安定しているのだから、感謝の心を持ち報恩の行為を実践することが

大切であると強調し、報恩の行為は自分の環境に応じて奉仕と布施の実践活動を通して、社会人類のために果たすべき人の道を教える

ものです。

これに加うるに、人類はみな兄弟、貧乏人も金持ちも、地位の差に関係なくみな神の子であり、生まれた環境は自らが選んだものであり、環境を

通して悟り、人々を救済するための目的を持って生まれてきたと、原因と結果の法則（因縁の法則）を説き、悟りの道を示します。

次に紹介する心行は、かつて釈迦といわれた方（高橋信次先生）が、日本語でわかりやすく大宇宙の成り立ちと、あの世とこの世の救済の仕組み

や人間の生き方を、少ない字数に要約された神理です。

『心行』

高橋信次先生が示されたもの

（心行は宇宙の神理、人間の心を言霊（ことだま）によって表現したものである。それゆえ心行は拝むものでも、暗記するものでもなく、これを理解し

行うものである。正法は実践のなかにこそ生命が宿ることを知れ。）

われいま見聞（けんもん）し、正法に帰依することを得たり。

広大なる宇宙体は万生万物（ばんしょうばんぶつ）の根元にして

万生万物相互の作用により、転生輪廻の法に従う。

大宇宙大自然界に意識あり。意識は大宇宙体を支配し、万生万物をして調和の姿を示さん。万生万物（ばんしょうばんぶつ）は広大無辺な大慈悲

なり。大宇宙体は意識の当体にして

意識の中心は心なり。心は慈悲と愛の塊（かたま）りにして、当体・意識は不二（ふじ）なることを悟るべし。この大意識こそ、大宇宙大神霊・仏なる

べし。

神仏なるがゆえに当体は大神体なり。

この現象界における太陽系は、大宇宙の小さな諸器官のひとつにすぎず、

地球は小さな細胞体なることを知るべし。

当体の細胞なるがゆえに、細胞に意識あり。

かくのごとく万物すべて生命にして、エネルギーの塊りなることを悟るべし。

大宇宙体は大神体なるがゆえに、この現象界の地球も神体なり。

神体なるがゆえに大神殿なるべし。大神殿は万生、魂の修行所（しゅぎょうじょ）なり。

諸々の諸霊みなここに集まれり。諸霊の輪廻は三世（さんぜ）の流転。

この現象界で己の魂を磨き、神意（しんい）に添った仏国土・ユートピアを建設せんがためなり。

さらに宇宙体万生が神意にかなう調和のとれた世界を建設せんがため、

己の魂を修行せることを悟るべし。

過去世、現世（げんせ）、来世の三世は生命流転の過程にして、永久（とわ）に不変なることを知るべし。

過去世は己が修行せし前世、すなわち、過ぎ去りし実在界と現象界、この世界のことなり。

熱、光、環境、いっさいを含めてエネルギーの塊りにして、われら生命意識の修行所（しゅぎょうじょ）なり。

神仏より与えられし、慈悲と愛の環境なることを感謝すべし。

来世は次元の異なる世界にして、現象界の肉体を去りし諸霊の世界なり。意識の調和度により段階あり。この段階は、神仏の心と己の心の調和

度による光の量の区域なり。

神仏と表裏一体の諸霊は光明に満ち、実在の世界にあって、諸々の諸霊を善導する光の天使なり。光の天使、すなわち諸如来、諸菩薩のことなり。

この現象界は神仏よりいっさいの権限を、光の天使に委ねしところなり。

光の天使は慈悲と愛の塊にして、あの世この世の諸霊を導かん。

さらに諸天善神あり、諸々の諸霊をいっさいの魔より守り、正しき衆生を擁護せん。肉体を有する現世の天使は諸々の衆生に正方神理を説き、

調和の光明へ導かん。

この現象界におけるわれらは、過去世において己が望み、両親より与えられし肉体という舟に乗り人生行路の海原へ、己の意識・魂を磨き、神意

の仏国土を造らんがため、生まれ出（い）でたることを悟るべし。

肉体の支配者は己の意識なり。己の意識の中心は心なり。心は実在の世界に通じ、己の守護・指導霊が、常に善導せることを忘れるべからず。

善導せるがために、己の心は己自身に忠実なることを知るべし。

しかるに、諸々の衆生は己の肉体に意識・心が支配され、己が前世の約束を忘れ、自己保存、自我我欲に明け暮れて、己の心の魔に支配され、

神意に反し、この現象界を過ぎ行かん。

また、生老病死の苦しみを受け、己の本性も忘れ去るものなり。

その原因は煩悩なり。

煩悩は、眼（げん）、耳（に）、鼻（び）、舌（ぜつ）、身（しん）、意（い）の六根が根元なり。

六根の調和は、常に中道を根本として、己の正しい心に問うことなり。

己の正しい心に問うことは反省にして、反省の心は、己の魂が浄化されることを悟るべし。

己自身は孤独に非ず。意識のなかに己に関連せし、守護・指導霊の存在を知るべし。

守護・指導霊に感謝し、さらに反省は己の守護・指導霊の導きを受けることを知るべし。

六根あるがゆえに、己が悟れば、菩提と化すことを悟るべし。

神仏の大慈悲に感謝し、万生相互の調和の心が、神意なることを悟るべし。

肉体先祖に報恩供養の心を忘れず、両親に対しては孝養を尽くすべし。

心身を調和し、常に健全な生活をし、平和な環境を造るべし。

肉体保存のエネルギー源は、万生を含め、動物・植物・鉱物なり。

このエネルギー源に感謝の心を忘れず、日々（ひび）の生活のなかにおいて己の魂を修行すべし。

己の心・意識のエネルギー源は調和の取れた日々の生活のなかに、神仏より与えられることを悟るべし。

己の肉体が苦しめば心悩乱し、わが身楽なれば情欲に愛着す。苦楽はともに正道成就（しょうどうじょうじゅ）の根本に非（あら）ず。

苦楽の両極を捨て中道に入り、自己保存、自我我欲の煩悩を捨てるべし。

いっさいの諸現象に対し、正しく見、正しく思い、正しく語り、正しく仕事をなし、正しく生（い）き、正しく道に精進（しょうじん）し正しく念じ、正しく定（じ

ょう）に入るべし。

かくのごとき正法の生活のなかにこそ、神仏の光明を得（え）、迷いの岸より悟りの彼岸に到達するものなり。

このときに、神仏の心と己の心が調和され、心に安らぎを生ぜん。

心は光明の世界に入り、三昧（さんまい）の境涯に到達せん。

（この諸説は末法万年の神理なることを悟り、日々の生活の師とすべし）

祈願文

(祈りとは、神仏の心と己の心の対話である。同時に、感謝の心が祈りでもある。神理にかなう祈り心で実践に移るとき、神仏の光はわが心身に

燦然と輝き、安らぎと調和を与えずにはおかない。)

前文

私たちは神との約束により、天上界より両親を縁として、この地上界に生まれてきました。

慈悲と愛の心を持って、調和を目的とし、人びとと互いに手を取り合って、生きて行(ゆ)くことを誓い合いました。

しかるに、地上界に生まれ出た私たちは、天上界での神との約束を忘れ、周囲の環境、教育、思想、習慣、そして五官に翻弄され、慈悲と愛の心

を見失い、今日まで過ごしてまいりました。いまこうして正法にふれ、過(あやま)ち多き過去をふりかえると、自己保存、足ること

を知らぬ欲望の愚かさに、胸がつまる思いです。

神との約束を思い出し、自分を正す反省を毎日行い、心行を心の糧(かて)として、己の使命を果たして行(ゆ)きます。

願わくば、私たちの心に神の光をお与えください。仏国土・ユートピアの実現にお力をおかしてください。

大宇宙大神霊・仏(ほとけ)よ

わが心に光をお与えください。心に安らぎをお与えください。

心行を己の糧(かて)として日々の生活をします。

日々のご指導心から感謝します。

一、天上界の諸如来、諸菩薩(光の天使)

わが心に光をお与えください、心に安らぎをお与えください。

心行を己の糧として日々の生活をします。

日々のご指導心から感謝します。

天上界の諸天善神（しよてんぜんじん）

わが心に光をお与えください、心に安らぎをお与えください。

わが心を正し、いっさいの魔よりお守りください。

日々のご指導心から感謝します。

わが心の中にまします守護・指導霊よ

わが心を正しくお導きください、心に安らぎをお与えください。

日々のご指導心から感謝します。

万生万物

わが現象界の修行にご協力、心から感謝します。

先祖代々の諸霊

われに修行の体をお与えくださいまして心から感謝します。

諸霊の冥福を心から供養いたします。

先祖供養

先祖代々の諸霊よ

私たちに肉体をお与えくださいましてありがとうございました。

私たちは神仏の子としての使命を悟り、正法の生活を実践しております。

皆さまの冥福を心からお祈りいたします。

もし諸霊の中に、暗い世界におられる先祖がございましたら、よく私の申し上げる神理をお聴きください。

皆さまは、この世の肉体は持っておられません、私の話はおわかりいただけるはずです。

暗い世界は地獄でございます。なぜ地獄で生活しておられるのか、おわかりになるでしょうか。

それは、人間として生活しておられたときに、神仏の子としての使命を果たさなかったからでございます。

自分のことばかりを考えて、心から人びとに慈悲や愛を与えたでしょうか。

人を恨（うら）んだり、妬（ねた）んだり、そしったり、怒ったりしたことをよく思い出されて悪かったことを反省してください。

自分でつくった過（あやま）ちを反省し、神の許しをお願いしてください。

心は安らぎ、必ず天上界に行（ゆ）けます。

神理の経文を供養いたしますからよく心に受けとめてください。

（心行を朗読して、最後に）

大宇宙大神霊・仏よ

迷える霊に光をお与えください、諸霊の罪をお許してください。

実在界の光の天使よ

迷える霊に光をお与えください、安らぎをお与えください。

実在界の諸天善神よ

迷える霊をお救いください、いっさいの魔よりお守りください。

健康祈願

大宇宙大神霊・仏よ (氏名をいう) に光をお与えください。

私たちはこの現象界で、肉体という舟に乗り、魂を磨き、神仏の体であるこの地上界に、平和と安らぎのあるユートピアを建設せんがた

め肉体を持ったのでありますが、眼(げん)・耳(にい)・鼻(び)・舌(ぜつ)・身(しん)・意(い)の六根煩悩に支配

されて、多くの罪を犯してまいりました。

私たちの罪をお許してください。

私たちは正法に帰依し、自分の使命を悟りました。

私たちの心に光をお与えください。心に安らぎをお与えください。

当体に憑依(ひょうい)しているいっさいの霊よ、あなたたちは人間に憑(つい)てはいけません。あなたたちが憑依していると、精神的にも

肉体的にも苦しみ、私たちは魂を磨くことができません。

この現象界は、あなたたちの住む世界ではありません。

あなたたちはいっさいの執着から離れなさい。

あなたたちも正法を悟って光の世界へ帰りなさい。

実在界の諸如来、諸菩薩(光の天使)よ、

この迷える霊をお救いください。

実在界の諸天善神よ

迷える霊をいっさいの魔よりお守りください。

迷える霊よ、人間界の人びとに憑(つ)いていては、安らぎを得ることはできないのです。

神仏に祈願して、よく自分自身を反省しなさい。神理の心行を供養しますから、心によく銘記してください。

(心行を朗読する)

病気平癒祈願

大宇宙大神霊・仏よ

わが心に光をお与えください、心に安らぎをお与えください。

実在界の諸如来、諸菩薩(光の天使)よ

わが心に光をお与えください、心に安らぎをお与えください。

実在界の諸天善神よ

わが心をいっさいの魔よりお守りください。私たちは正法に帰依して、日々を正しい想念と行為によって、調和と安らぎのある世界を築き

ます。

(まず自分自身の心に光を受けてから、両方の手のひらを体の悪いところに向け、体より一センチぐらい離して健康祈願する。そしてさら

に、次のようにいう。)

当体の意識(患部)よ

あなたたちは肉体舟としての使命を、この現象界に出るときに、神仏と約束したはずです。あなたたち細胞集団は、魂修行の目的を果た

してください。

大宇宙大神霊・仏よ

当体(患部)に光をお与えください、安らぎと調和をお与えください。

(約三十分ぐらいで効果が出てくる。神理を悟った生活をしていれば、こうした効果はさらに大きく現れてくる。)

[Home](#)

Home

幸福の科学の大川氏は、フライデー事件の後、大川氏を機関誌や著書で批判されてきた

園頭師を告訴した。

本書は、この裁判に対する陳述書である。

あこぎな宗教裁判に対して、今は亡き光の大天使・園頭先生は、我々残された人類に「こう裁判するのだ」と範を示して下さいました。

これは元国際正法協会会員へ小冊子として配布された全容である。勿論のこと、本裁判は先生に軍配は上がった。

陳述書

元・国際正法協会

会長 園 頭 広 周

請願

本訴状は、大川隆法氏は「悟れる者」であり、「神である」ということを前提として提訴されたものである。

しかしそれは、大川氏の自称であって、日本の社会全体に於ては公認されたものではない。

私は、社会的に公認されていない自称を前提として本審理に入られることを拒否する。

大川氏は果たして「悟れる者」であるか、或は「神であるか」それを認定することから審理を始められるように請願する。

前提が確立していないのでは、その後の審理は無効と認める。

大川氏が、私が大川氏が「悟れる者」であるか、或は「神であるか」を確認したいという要求をしていることに対して、大川氏が出頭

を拒否するならば、本裁判の非は大川氏にあり、裁判に要する費用、裁判に至るまでに私の方で使用した金額は、全部大川氏が負担

すべきある。

私の方では裁判しようなどとは毛頭思っていなかった所に、突然、裁判へ持ち込んで、予期しない日時と金員を使わざるを得ない羽目

になったのであるから、

それを要求するには当然である。

幸福の科学との関係 経緯説明

陳述者 氏名 園 頭 広 周

生年月日 大正七年二月二〇日

年齢 七六才

履歴並びに宗教歴

昭和十三年三月 任陸軍少尉

昭和二〇年八月 陸軍大尉にて終戦

終戦時の軍歴 独立第百大隊付

昭和二七年 生長の家宗教団体 地方講師

昭和三〇年 生長の家教団 本部講師

以来 1. 熊本 鹿児島 宮崎 三県教化部長

2. 愛知 三重 滋賀 岐阜 四県教化部長

3. 生長の家本部 練成部長

4. 生長の家本部 地方講師教育部長

5. 国民会議委員、建国記念日制定促進委員会として建国記念日制定に尽力

昭和四七年二月 生長の家教団退職

昭和四七年四月 大阪 トールス教団教化部長に任命

昭和四八年九月 トールス教団を辞め、G L A教団西日本本部長となる。

昭和五三年三月 G L A教団を辞める。

昭和五三年九月 正法会（現国際正法協会）設立 会長となり現在に至る。

同時に、正法出版社設立社長となり現在に至る。

主 な 宗 教 歴

一、10歳の頃より、人間はどこから生まれ、死んでどこへ行くのか、人間はなんのために生きるのかに疑問を持つ。

二、成長するに順い、仏教、キリスト教を遍歴

三、軍隊に行き、将校となって尚人生の目的を探求し、戦争のない世界の平和を実現する方策を探求す。

四、昭和十五年六月、中支第一線で中隊長をしている時、「宇宙即我」を体験し、地球の人類は、みな、神の生命の兄弟であり、地上

の人類に人種差別なく、地球には国境線はないことを悟る。

五、昭和十八年十月、ソロモンの第一線より、鹿児島の連隊付となり帰還。

直ちに忽ちに、一ヶ月間、霧島神宮に参籠、世界が平和になるためには、「この地球に、一番最初に人類が誕生したときの、そのときの

意識に人類は帰らないと平和にならない」という神託を受ける。

この時、戦争が終わったら宗教家となって世界平和に貢献することを決意する。

六、昭和四八年三月 G L A 教団教祖高橋信次先生に会う。

七、昭和四八年四月 霊道を開いて、高橋信次先生は過去世で「釈尊」であり、インドに「釈尊」の十大弟子の筆頭「舍利弗」(シャリ

プトラ)であったことを知る。以来、インド当時と同じように人類の救済の貢献することを誓う。

昭和五一年六月 釈尊であった高橋信次先生は四八歳の若さで昇天。

昭和五二年三月 高橋信次先生の息女佳子氏は、突如として「われは

ミカエルなり、釈迦、キリスト 高橋信次は、人類の救世主ではない。高橋信次が書いた『心行』も必要はない。

釈迦の説いた『八正

道』も必要ではない。

私が人類の救世主である」「昭和五七年三月までには、世界の全人類は私の前に跪くであろう」と、「ミカエル宣言」をしたために、

G L A 会員は混乱し脱会する者続出し数を知れず。

昭和五三年九月、これまでに高橋佳子氏の反省を促したが、反省はなかったので、(高橋信次先生かつて釈尊であ

られた)の教えを正しく継承してゆくために、正法会を設立する。

海外へ布教伝道するために、「国際正法協会」と改称して今日に至る。

G L A 高橋佳子氏が、高橋信次先生の教えの正しい継承者でないことは、幸福の科学大川隆法氏が主張している通りである。

Home

訴状に対する反論

大川隆法氏の名誉を毀損した事実なし。むしろ、大川隆法氏自身だけでなく、幸福の科学会員全体を救うための

「愛の行為」である。

理由

本件だけでなく、大川隆法師が起こした裁判の根本的な争点は、私への「訴状の原因」一、原告および被告について、に書かれている

ように

大川隆法氏が、真の悟れる者(仏陀)であるか、どうかである。」

私は、高橋信次先生が「釈尊」であったことを、私の霊眼で見た。だから常に大川隆法氏の言動は、高橋信次先生との対比に於いて考え

る。

一、高橋信次先生を真の仏陀(釈尊)であるとし。

二、大川隆法氏は、仏陀を冒瀆している者とする。

私が、大川隆法氏宛に出した親書は、「貴殿が、真の仏陀であるか否か、私の眼で確かめたい。もし貴殿が真の仏陀であったら、

私は貴殿の弟子となることに吝かでない。一対一で私と会って、私の前に仏陀であることを証明して欲しい。」ということで一貫して

いる。

それに対して幸福の科学は言を左右し、私の言を「脅迫」と受取って、かえって私のことを悪く言っているのである。

依って、本件に対して、私は請願する。

請願

本法廷に大川隆法氏を出頭させ、私と一対一で対決させ、大川隆法氏が”真の仏陀”であることを証明させて頂きたい。

「真の仏陀」であるか否かを知るためには、いくつかの質問に答えてもらい、また真に霊能があるか否かをテストする方法があるので、そのテストを行いたい。

本請願を実現して頂けば、私に対する裁判だけでなく、大川隆法氏が起こしている全裁判が一挙に解決することになる。

私が願っているのは、大川隆法氏が「真の仏陀」であるのかどうか、それを確かめたいということにあるのであるが。

大川隆法氏と幸福の科学本部は、その機会を与えてくれないのであるから、一切の非はすべて大川隆法氏と幸福の科学本部側にあるの

であって、私に ” 非 ” はない。

ここに到る遠因

大川隆法氏は、拙者「大川隆法はこう読め」の文章の言葉の端々だけを捉えているが、この本を書くまでに到る時の流れを知らないと、

その是非を判断することにならないのでまず、そのことを述べる。

高橋信次先生こそ、真の仏陀であった。

高橋信次先生著「人間釈迦」を読んでG L A会員になった人々は、みな、「こういう事は、やはりインドに仏陀として、釈尊

として出られた方でないと書けないことである」、とあって、高橋信次先生を、みな、仏陀であると信じていた。

二、昭和五二年三月、高橋信次先生の長女佳子氏が、その未亡人であり母親である一栄氏とともに、「ミカエル宣言」なるも

のを発して「釈迦・キリスとは、人類が救われる道を説かなかった。高橋信次先生もそうであり、佳子が生れてきた以上、高

橋信次はぬけ殻である」といったために、G L A会員は大部分脱会した。

この時に、高橋佳子氏の下に残った人達がいた。その人達のいい分は、儒教の道徳を基準としたもので、高橋信次先生が説か

れた真の仏教即ち正法によるものではなかった。

こういういい分である。

「高橋佳子先生は確かに間違っている。おかしい。しかし私達は高橋信次先生に救われた恩があります。その恩がある以上、

恩人の娘さんを立てないわけにゆきません」と。

この「ミカエル事件」は、日本人に、道徳と宗教の違いを教えてくれる、日本の宗教史上の重大な事件であったのであるが、

多くの人々は、宗教と道徳の違いの判断ができずに、釈迦、キリストを否定する高橋佳子氏について行ったのである。

その佳子氏について行かない人々がたくさんいた。その人達は誰か正しく教えを説いてくれるヒトはいないかを求めて右往左

往していた。

既に高橋信次先生在世中からそうであったのであるが、霊道を開いたと偽証して、高橋信次先生が話されたことを記憶していて、

恰も高橋信次先生の霊が憑ってきたかのように、眼をつむって高橋信次先生そっくりの口真似をして人を欺く、いわゆる ” 霊能かぶ

れ ” という人達が、関東に、関西に何人かいた。

高橋信次先生が昇天されると、その人達が跋扈するのを一番心配していたのが、当時、高橋信次先生の著作を出版していた三宝出版

社長 堀田和成氏であった。

堀田氏や私が心配していた通り、そういう人々が勝手に ” 霊言 ” と称して、元 G L A の会員達を迷わすようになってきた。

そういう中で私の耳に入ってきたのは、元 G L A 会員原久子氏が、大川隆法なる青年と結託して、「大川隆法先生に、高橋信次先生の

霊が出てくる」といって、元 G L A の講師、幹部であった人々がぞくぞく集まっているという話であった。

ニセモノハそのうちに化けの皮が剥がれると思って無視していたのであるが、大川氏が「高橋信次霊言集」「高橋信次の新復活」を

出版して高橋信次先生の名を利用し、そのうちに「仏陀再誕」を出版した。

ある日、元 G L A 幹部であった市川市の甲斐通右氏から、テープと手紙が送られてきた。

「大川先生は仏陀です。あなたも大川先生の弟子になって下さい。」と手紙には書いてあり、テープを聞いたら、大川氏が壇上から

「甲斐さん、園頭さんを早く私のと所に連れて来なさい」と絶叫している。

大川隆法氏は、「かつての仏弟子、集まれ」と呼びかけている。

この頃、既に大川隆法氏は、私が過去世で舍利弗（シャーリープトラ）であったことを知っていて、私か大川隆法氏の下に行けば、

大川氏は「自分は仏陀であった」ということになると思っていると思ったから、私は、「高橋信次氏こそ、真の仏陀であった」という

本を東明社から出版して多くの人々に警告を与え、

甲斐氏には

「高橋信次先生の教えをうけたあなたが、大川隆法如き人間に欺されるとは不甲斐ない。あなたが大川氏を信ずるならそれでよい。

私は私の信念で行動する。いずれ、どちらが正しいか、真実が証明してくれるであろう」と手紙をやった。

甲斐氏と行動を共にしていた埼玉県の上野氏（元生長の家相愛会長でG L Aに転向した）にも、「大川氏に欺されないように」と手紙

を出したら

「私は大川氏を信じます。あなたこそ間違っています」と返事が来た。

盲信狂言している人達は仕方がないと思った。

この頃、甲斐氏によって元G L A講師幹部が、つぎつぎと幸福の科学の会員になったことを聞いて、そういう人達は、高橋信次先生

の話は聞いたことはあっても、正法は少しもわかっていない人達であったことがわかった。

それから一年位経ってくらいであろうか。

幸福の科学では金を集め出して、甲斐氏も上野氏も、三千万円位幸福の科学に金を出した後で大川氏は二セモノだと気づいて幸福の

科学をやめたという話を聞いた。

最初から大川氏は二セモノだとわかっていた私が正しかった。

大川氏を「仏陀である」と信じて行って、サラリーマンの身には、とても一生かかっても貯めることはむづかしい三千万円という大金

を、吸い取られた揚げ句にやっと「二セモノである」とわかった者がえらいのか。

この頃、G L Aから幸福の科学に入会した人達は、ぞくぞく幸福の科学を脱退して行ったようである。

ある日、徳島県の戒谷年子さんから手紙が来た。

戒谷さんは元生長の家会員で、私が生長の家本部講師をしていた頃、私の名前を知っていられて、私が高橋信次の教えを正しく継いで

「国際正法協会」をつくっていることを聞かれて、手紙を下さったということである。手紙の内容は、

「私の娘は、大川先生を仏陀だと信じて、一年間に一〇〇名の会員を募集し、東京ドームの大講演会で、「獅子

奮迅菩薩」という名を

授けられた一〇名の中の一人でした。金を上げれば幸運につながるといわれて母娘で四 万円献金した。

どうもおかしいと思い始めたのですが、どうでしょうが。」というものであった。

「大川隆法はニセモノです。真の仏陀であれば「金で救われる」とはいわない筈です。」

「金をあげれば救われる」といっていることはそのことが「仏陀でない証拠です。その金は返してもらいなさい。」と手紙を書いた。

その四〇〇万円は取り返されたようである。

この頃、頻々として幸福の科学に疑問を持つ人々の手紙が来るようになった。

これは、幸福の科学批判の一書を書いて、真理を求める人への警告の書としなければならないとっていて、中々書く時間がなかつ

たのであったが、過労のために三ヶ月入院することになった。

医者や看護婦さんに注意されながら

「大川隆法はこう読め」

「続 大川隆法はこう読め」

「大川隆法は仏陀ではない」

三冊の原稿を書いた。

大川隆法氏がノイローゼであったか、なかったかということについて

早川和宏氏が「フライデー」に、大川隆法氏の事を書かれて以来、幸福の科学の行動は非常識極まるものであった。

早川氏から問合わせがあったので、当時のことを知っているであろうと思われる人々に問合わせてみた。その返事は「大川隆法はこ

う読め」に書いた通りで、私は多くの人々が知っている事実をそのまま伝えて、それをどう受取り、どう判断するかは読む人の自由

に委せようと思った。

大川隆法氏の名譽を毀損しようとは毛頭思ったことはない。

私が事実を事実のままに伝えようと思った理由

宗教家たる者は、現世を超越して悟りを開いている者であるから、過去がどうであったといわれようと、そういうことに心を動かされる

ものではない。

例えば、「ノイローゼであった」といわれようと、もしそれが事実であったら事実のままに「そうでした」というべきである。

問題であるのは、それが事実であったとしたら、そのノイローゼをいかに克服したか、そのことの中から何の悟りを得たかというその宗

教体験が、人を救うことになるのであるから、ノイローゼであったのではないかと疑問を持っていわれたことで、むきになって、名譽毀

損だと裁判によって他人に審いてもらう問題ではない。

「一切は自分の責任である」というのが宗教家の自覚である。

宗教に於いては、過去に殺人犯であろうが、どんな人間であろうが、その人の過去は問わないのである。その人が信仰をして、「今

どうあるか」という現在、その現実を問うのであって、悟ったものの第一条件は、人を赦して責めず、どこまでも深い慈悲と愛を持

つかということである。

自らが悟って「仏陀」となったといい、「神」となったといっている大川氏が、人権を侵害しているとも思われない過去の些事をほ

じくりだして、宗教の次元でなく、法律で規定している一般社会の秩序を維持するという低い次元に問題を持

ち込んで、そこで解決しようとしていることは、大川隆法氏には仏陀の持つべき徳性である慈悲と愛の赦しの

心もなく、自ら悟った者だと口ではいっているが、実際には悟っていないことを自ら証明するものではないのか。

私の「大川隆法はこう読め」は、事実として名譽毀損になっていない。

私がこの本を出版したのは平成三年八月である。この本が大川氏の名譽を毀損し、幸福の科学の発展に大きな障害を為しているので

あったら、平成三年中に私に対して裁判をかけてよい筈である。

平成三年、平成四年、平成五年、平成六年前年と、幸福の科学からはなんの申し入れ抗議もなく、八月に到り、突如として提訴した

ことは、明らかにそこに作為を感ずる。

「神」を称し、「仏陀」と称し、「悟った」と称する大川氏が、突如として乱心して、裁判に持ち込むという心理は、普通何の信仰

もしてないで良識あると思われる人でもよくしないところの、良識以下の人々のやることである。

私は大川氏がそういう心の持ち主であることがわかっていた。だからそういう心を反省してもらいたいと思って、一つには大川氏を

救いたいという、慈悲と愛の心を持ってこの本を書いたのである。

例えば、わが子を愛している慈父は、たとえ子供がまちがったことをしていると思われる時は、「子供よ、お前がまちがったことを

していても、それはそれでよいのだ」と、子供のいけないことを助長するような甘いことはいわないであろう。

大川氏は自らを「神」だと信じ、幸福の科学の会員達は「そうだ」と信じているのであろうが、他の人々はそうは思っていない。

私は大川氏よりも、年令的にも、宗教体験の上からも、悟りの点からいっても先輩だと思っている。先輩が後輩を論ずることは当然

の礼である。自分では”これで正しい”と思っているであろうが、私の眼から見たら幼稚な点がある。それを正しく指導しようとい

う愛の心で欠点を指摘したのであるから、むしろ私は感謝されて然るべきであると思っている。

要するに、私と大川氏では、宗教観、人間観が根本的に違うようである。

高橋信次先生と大川隆法氏の違い

私は高橋信次先生の弟子であった。高橋信次先生は昇天される前々月、「私が説いたことを、一から十まで全部わかってくれたのは

園頭さんが一人だった」といって下さった。

私は二十三才で戦地で中隊長をしていた時、「宇宙即我」に到達して悟りを開いていた。

高橋信次先生を師としてきたから、大川氏が、「高橋信次霊言集」を出し、「高橋信次の新復活」と出すに及び、そうして自ら

「釈迦大如来」と称するに及んで、「これはホントかな」と思うのは、弟子として当然である。

この二著を読んだ人達は、「大川先生は素晴らしい霊能力を持ってられる」と信じた人もあったようであるが、高橋信次先生のこと

とをよく知りたかったら高橋信次先生の直接の著作を読めばよい。親鸞上人のことを知りたかったら、親鸞上人著作集を読めばよい。

何も大川氏の「親鸞上人霊言集」を読む必要はない。それよりも比較してみればよいのである。

私は高橋信次先生の教えをよく聞き、本もよく読んでいたから、大川氏の「高橋信次霊言集」「高橋信次の新復活」を見て「これは

おかしい」と思った。

高橋信次先生は一切身边を飾らない人であった。大川氏が「仏陀」と自称して、チンドン屋が仮装行列するみたいな扮装をしている

のを比較しておかしいと思った。

違うことを違うというのは当然であり、違うと思っていながら、正しいですよということは間違いなのではないのか。

本を出版するということは、自分の所論を一人でも多くの人に知ってもらいたいということと同時に、どこからでも、どんな立場か

らでも自由に批判して下さいと、どんな人からの批判を受けてもよいということで出版するのであるから、私が「高橋信次先生の霊

が出てきて書かせたとは思わない」ということは、私の自由であって、大川氏から何らかの制約を受ける必要はない。

意見が違ったら堂々と論争をすればよい。

私は今まで何回か公開討論会をしようと申し込んだが、返事すらもらったことはない。

請願

裁判官殿に請願する。

大川氏に、本当に高橋信次先生の霊が出てくるのであるか確かめたいので、大川氏を法廷に出さしていただきたい。

私が審神者（さにわ）となって調べたい。

もし、霊査して、高橋信次先生や親鸞上人、キリスト、内村鑑三、谷口雅春等、「〇〇霊言集」と称して出版したものが、正しい

霊言ではなくて、大川氏がそれらの方々の本を読んで、それを記憶していて、眼をつむって、恰も霊が憑ってきたように詐術して、

そうして書いたものだとしたら、大川氏はどうするのか。

私が何人かの人に聞いた事実（ノイローゼであった、あったらしい）をそのまま書いた影響と比較すれば、何百万人という人を欺し

たその罪は大きい。その罪の償いをどうするのか。私はそういう誤りを犯させたくないために「大川隆法はこう読め」を書いたので、

名誉毀損どころか、私は、大川氏の過ちを少なくさせて、大川氏の名誉を守ってやっているのである。そして宗教家としてもっと

学ぶべき事は学んでほしいと励ましの意味で「小学校程度」と書いたのである。

Home

正しい霊能、霊言減少であるかどうかを判断する基準

あの世とこの世との関係 霊界の法則

無神論者は、あの世 霊界はないというのがあの世はある。あの世とこの世とを通ずる法則がある。その一つが類は類で集まる。と

いう法則である。例えば一万ボルトの電流をそのまま家庭の電気として流すことはできない。流せば爆発する。だから変電所を通し

て電圧を下げるのである。

あの世には、つぎのような段階がある。

人間は、いろいろな霊の段階からこの地上に肉体を持つ、肉体として生まれれば人間はみな同じような格好をしているから、見た

形は同じである。

見た形は同じであっても、持っている魂は一人一人違うのである。

如来界の人の魂が憑ってくるとすれば、その人も如来界の魂の持ち主でなければならない。

神界というのが、人間としての持つべき標準の魂の世界で、地球全体の平和、調和を考えることが出来、慈悲、愛の尊さもわかる。

しかしそれは頭で知識として分かっているだけで実践がない。いうこととやることが違うのである。口でいうことはりっぱであるが、

やることは自己本位のところがある。新興宗教の教祖となる人達は大抵この段階である。

例えば、口では、宗教は金はいらないというが、実際には金集めをするのである。

魂に段階があるということは、宜保愛子氏の例でよく分かる。

宜保愛子氏は、自分で、私の魂はビルの一番高い所位までしか上がれない。それ以上へはゆけないと自著に書いていられる。だから

宜保愛子氏に見える霊は、地上に執着を持っている地獄霊だけであって、天上界の明るい高級霊の世界は見ることはできないので

ある。

正しい霊能現象というものは、人類を救いたいと念願していられる如来界、菩薩界の高級指導霊、最上級高級指導霊が、肉体を持つ

た高級霊を、小さい時から訓練して、最初は低い段階の霊を憑けて、次第に徐々に高い段階の霊を憑け、肉体的にも人間としても

常識的に成熟した段階で最高級指導霊、上々段界の指導霊が憑ってくるのである。

その事を一番よく書いてあるのが、生長の家教団で発行した「天と地とを結ぶ電話」

アガシャと名乗る最高級指導霊が、リチャード・ゼナシにうつってきた氏に憑って来たことを書いた本である。今この本の著作権は私

が持っている。

日本にはこのような例はまだない。

今まで、なんの宗教的な知識もなかった人間に、突如として釈迦、キリストの霊が憑ってきていわせることは絶対にない。

例えば、今までノイローゼでないかと思われていた人間に、釈迦、キリストの霊が出てこられることは絶対にない。

私が「高橋信次霊言集」に疑問を持つのは、果たして、本当に高橋信次先生の霊が出て来て、いわせられたのであろうか、というこ

とである、私はウソだと思っている。これは大川氏が、高橋信次先生の本を何冊か読んで、それを記憶して置いて、恰かも高橋信次

先生の霊が憑ってきたように眼をつむって、記憶していたことを喋っただけにすぎないと思っている。元GLA会員の中にもそうい

う人がいた。

それで私は、果してそれが本当かどうかを確かめたいと思って何回か大川氏に一对一で会いたいという手紙を出したが一ぺんも返事

は来なかった。

高橋信次先生は過去世にインドで釈迦であった方である。如来界の方である。そのかつてお釈迦さまであった高橋信次先生の霊が、

大川隆法氏如き（失礼かもしれないが）人間に出てこられる筈はないと思った。

本当に高橋信次先生の霊が出てこられるのであるかどうか、それを確かめたいと思うのは弟子として当然であろう。本当のそうであ

ったら大川氏は私を呼ぶべきである。

本当に霊が憑ってきたのであるか、それを確かめる方法がある。その方法を取らないで、唯本人が口でいっていることは信用にな

らない。

例えば、大川氏の霊言集

「親鸞です」「内村鑑三です」「谷口雅春です」で始まっている。

大川氏の例言集の中で、実際に私が知っているのは元生長家教団教祖谷口雅春先生と、GLA高橋信次先生の二人である。顔つきも、

身体つき、話される言葉のイントネーションもみな知っている。

霊が憑ってくるということは、その霊が完全にその肉体を支配し、声帯を支配することである。

例えば、私が昭和六二年、ロサンゼルスのアガシャ教会に行った。そして降霊界があった。霊に降りてきてもらうためには、そこに

集まって来ている人達がそれぞれに心を浄化しなければならない。そのための儀式がある。

大川氏は、いろいろな方々の霊が出て来るというのであるが、心を浄化するための儀式を持っているのであろうか。私には持ってい

るとは思われない。その心の浄化の儀式もなしに、「それなら親鸞上人に語ってもらいましょうか」といって眼をつむって、霊が

憑ってきたように見せかけるだけではないか、いわゆる詐術ではないかと思っている。だから、一ぺんその状況を見たいと思ってい

るのである。見れば一ぺんでホントかうソか分かる。

アガシャ協会では、主宰のサルバット師が霊憑り代になられた。例席した者も全部儀式に順って心を浄化した。

サルバット師の表情が変わった。高級霊が出てくる時は、予め、憑り代となる肉体が、その霊が憑って行った時に霊圧に耐えられる

かどうか、指導霊をまず憑かせるのである。

サルバット師が深い瞑想に入られた。頬がにっこり微笑んだ。口が開いた。言葉が飛び出した。四、五才頃と思われる日本の少女の

霊である。サルバット師は普通は日本語は話せない。しかし、霊が憑ってくると完全に声帯を支配して子供の声になるのである。口

をつぼめて「オホホッ」と笑い出された。

その少女の霊は去った。

サルバット師の表情はきびしく、しかも穏になった。

霊が憑ってくる時は、長いソファかベットに横たわって、本人の意識はなくなるのである。大川氏はどんな姿勢をしているのであ

ろうか。

声が出た。列席したアガシャ教会の人々はそれがリチャード・ゼナー師の霊であることがわかった。そこにリチャード・ゼナー師の

未亡人が来ていられた。その未亡人が呼ばれた。その時、サルバット師は無意識のうちに眼はつむったまま、リチャード・ゼナー師

になっているのである。

未亡人が「おなつかしゅうございます」とサルバット師のひざをさすり、手を取られる。そして眼はつむったままにここにこして、

「わたしが早くあの世へ帰って苦労かけました」とねぎらわれる。そして、

「わたくしが、やがて日本からソノガシラという人がここに来ると予言をしたのは一九六七年 昭和四十二年でしたね」

「ハイ、そのことはよく記憶しております。今、その方がここに来ていられます。」

昭和四十二年、私はその時、成長の家教団飛田給練成部長をしていて講義していた。

突如として天から、「そなたはやがてアメリカに行くことになる」という声が聞こえてきた。その頃の状態で、私がアメリカに行く

などという事は全く考えられなかった。その頃すでに私は、「いつれ成長の家はやめなければならない」と考えていたから、成長の

家の関係で行くことはないであろうと考え、どうしてアメリカに行くことになるのか、皆目見当はつかなかった。

それが昭和四十七年、成長の家教団をやめて大阪吹田市のトールズ教団に移り、昭和四十八年、高橋信次先生に出会い、昭和五十

一年、高橋信次先生が昇天され、昭和五十三年、正法会 国際正法教会 を設立し、昭和四十二年の天上昇からの声に順って、昭和

六十一年、ロスのアガシャ教会に行ったら、アガシャ教会の人々は、「やがて日本から『ソノガシラ』という人が来る」ということ

は知っていたのである。アメリカの人達が、「ソノガシラ」「ソノガシラ」と発音していられると、その内に「Son of

Agashiya」と聞こえてきて、私が行くということを知り、特にゼナー夫人は、「アガシャの息子が帰って来た。」

と抱きついて来られたのであった。

そのようにして降霊会、霊が憑ってくるということが、どのようになるのであるか、よく見て知っているから、大川氏が、いろいろ

な方の霊が出てくるといっているその現場を見たいと思うのである。

もう一つ大川氏と対決したいと思っていることは、本当に霊が出てきていわせるのかどうかである。

先にロスのアガシャ教会の降霊会のことで書いたように、霊が出てきていわせるという現象は、出てくる霊が、憑る人の全肉体、

全精神を支配することなのである。

高橋信次先生の霊が憑ってくるとどうなるか。

高橋信次先生はインドで釈尊であった方であるから、大川氏の心は釈尊と同じような悟りの状態でなければならない。

霊が憑ってくると顔つきが高橋信次先生に似てくる。

そして、声が、そのイントネーションが、その場の雰囲気、変わって来なければならない。高橋信次先生そっくりになって出るの

である。

例えば高橋信次先生は浪花節が好きであった。ある年の新年宴会で、壽々木米若の霊を入れてみますといわれて「佐渡情話」の一節

を唸なれた。それは米若そっくりであった。

それで大川氏に高橋信次先生の霊を呼び出してもらって、高橋信次先生が得意であった「小諸追分」を歌ってもらうのである。

果たして高橋信次先生そっくりの歌い方になるかどうか。

大川氏が「とても歌えません」といったら高橋信次先生が出て来られるというのは真っ赤なウソだということになる。

高橋信次先生は、長野県の佐久の出身であったから、高橋信次先生の言葉の中には信州訛があった。大川氏に高橋信次先生の霊をい

れてもらって話をしてもらおう。その時の話し言葉が、大川氏は徳島出身だから、徳島訛りがあつたり、関西弁の調子があつたらそれ

はウソである。

また、高橋信次先生と私との間で、二人だけで話をした、他の誰も知らない話があるのである。その話を大川氏に憑って来た高橋

信次先生の霊にたづねるのである。「そうでしたね、あの時はこうでした」と答えることができなかつたらそれはウソである。

さらに大事なことを聞けばよい。

今になってG L Aの講師達は、「高橋信次先生は、高橋佳子先生を後継者にといいて亡くなりましたといっているのである。」

後継者にといわれた高橋佳子氏は、「ミカエル宣言」をして、「釈迦もキリストも人類を幸せにする法を説かなかつた。仏教、キリスト

教はローカル（地方）宗教であつて世界の宗教ではない。高橋佳子は高橋信次の心臓部分であつて、高橋佳子が出た以上高橋信次はぬけ

殻である」といった。

このことについて、高橋信次先生の霊はどう考えていられるか聞いてみたい。

さらに、霊が憑って来た時の状態は、その肉体と精神の支配権を全部委せているのであるから、大川氏の肉体はそこにあつても、

その心を支配し、その口を支配しているのは高橋信次先生なのであるから

「高橋信次先生の霊よ、あなたはこの大川氏に憑られたことがありますか」と聞けばよい。

心霊の法則を全く知らない大川隆法

大川氏がいろいろな霊言集を出し始めた時「大川隆法は心霊の法則も知らないので、子供欺しみたいなことをする。また、その他愛

もない手口に引っ掛かる日本人も多いもんだ、いい年をして、大学も出ているというのに、ひとかど社会的な地位もある人が...」

と思った。

多くの人々は、本当に霊が憑ってくる正しい霊能現象と、霊をおもちゃにしている霊媒現象（例えば、青森の恐山の”いたこ”等）

の区別を知らない。

一人の人間にいくつもの霊が出てくるとするのは、霊媒現象であって、こういう現象を起こさせるのは動物霊か地獄霊の作用であっ

てわれわれはこういう現象を認めない。

断食したり滝に打たれたりして、”観世音菩薩が現れた。不動明王が現れた”とっているのも、動物霊、地獄霊のしわざである。

こういう現象をじーっと見つめていると姿を見せなくなる。こういう現象を”動物霊が変化”したという。

”観世音菩薩”を拜んでいるといっても、実際は動物霊、地獄霊信仰をしている人が多いのである。

いろいろな霊が出てきていわせるという霊能現象に於いては、果たしてそれが正しい霊であるか、動物霊や地獄霊ではないのか、

それを審判する審神者（さにわ）が必要なのである。

光の指導霊が人を通じて霊言させようという場合は、一つの指導霊は一人の人を限定して、その人が自分の指導に耐えられるよう

に、子どもの自分から訓練して、自分の指導し易いようにその人を育てる。そうしてもうこれでよいという時になってはじめて名乗

りを上げて霊言をさせるということになる。

大川氏の霊言をわたしがウソというのは、大川氏は小さいときからそのような霊的訓練を受けた形跡はなく、また、一人の人間に

段階の違う霊がつぎつぎに出てきて支配することはないからである。

私のいうことが嘘だといわれるなら大川氏を一人、何人かの前に引き出して。

内村鑑三先生の勉強している人が、内村鑑三先生の霊を出して下さいと言って出させて、「内村鑑三先生はどんなことを教えられま

したか。」と質問するのである。そして「内村鑑三霊言集」に書かれていることとそっくりなことをいわれるか。

或いは、成長の家教団の会員は、谷口雅春先生の霊を出して下さいと言って出してもらって「谷口雅春先生は何を説かれましたか」

と聞くのである。そして、「内村鑑三霊言集」と比較してみるのである。

大川氏は一連の霊言集を書く時、何人かの側近の前で、霊を浄化する儀式もせずに、瞑想するふりをして、

「ハイ、今度は親鸞の霊を・・・」

「ハイ、今度はイエス・キリストの霊を出しますよ」と

遊び半分の気持でいったのだと思う。

そんなふざけた態度の人間に、光の大指導霊といわれる如来界の方々の霊が出て来られる筈はない。

日本の心霊学者ではまだやっているということを聞かないが、その霊が正しい霊であるかどうか、その霊が出てくるといふ人の霊が

果たして同一の正しい霊であるかどうかを確かめる方法をして取っているのが”交叉証明”である。

普通、欧米の心霊学会で執っている方法は大抵三人の霊能者 場所を違えて を選ぶ、最初の霊能者に、その人 霊 が持っていた

ものを示して、その霊に「これは誰の持ち物であるか」を聞く。そしてぴたっと当てればその出てきた霊は確かに「 霊」で

あると判定する。その持ち物を、その霊能者とは違った土地にいる、第一の霊能者の全く知らない第二の霊能者に示して、「それは

誰の持ち物であったか」を聞く。そして同一人物のものであるといった場合、第一の霊能者に出てくる霊は、まさしく「 霊」だと

認定する。こうした交叉証明を得ないものは認めないのである。

Home

大川隆法氏に、高橋信次先生の霊が出てくるのは本当かを確認する実験

本裁判に於いては、最低、このことだけは法廷で実験してもらいたい。

高橋信次先生の生前の持ち物を、例えば、時計なら時計を、それとよく似た同種の時計といっしょに（五ヶ位でよい）並べるのである。

そして大川氏に高橋信次先生の霊を呼び出してもらい「先生が生前愛用されていた時計はどれですか」と聞いて選ばせるので

ある。一回だけではまぐれ当たりということもあるから、品物を変えて十回くらい実験するのである。その内、一回でもはずれた

らダメ、十回とも全部当たらなければいけない。

大川氏が、高橋信次先生の霊が出てくるといったのは、それは、大川氏自信が自分でいっているだけで、誰も果たして、そうである

かと判断する交叉証明を経ていない。

そう言うものは、その人の寝言、狂言としか認めないのが欧米の心霊学会である。

そういうことをしなくても、一ぺんでわかる方法がある。

大川氏に高橋信次先生の霊を出してもらって、G L Aの高橋一栄氏（未亡人）高橋佳子氏（長女）と対面させるのである。そして、

大川氏のいう声が生前の高橋信次先生の声であるか、そして、生前の夫婦、親子間の限りなくなつかしいという感情が起こってくる

かどうか、実験してもらえばよい。

高橋一栄、佳子氏が出廷しないというなら私が実験する。

私が霊道を開いたとき、高橋信次先生と私とは、釈尊在世当時使っていた古代インドのマガダ語で話をした。

それで、大川氏に出してもらった高橋信次先生に、私がある事をマガダ語で話しかける。それに対する的確なマガダ語で返されるかどうか。

日本人はそうした心霊界の約束事を全く知らない。本人が「キリストが出て来られました」といえば、それだけで、「そうか」と信

じてしまう。果たして本当にそうであるかを確かめるということをしな

高橋信次先生が亡くなられた後、高橋信次先生が出てきて語られるというので有名になった藤原というおばあさんがいた。

巣鴨で石材店をやっていた小島惣吉さんが司会で、その藤原さんといっしょに巣鴨信用倉庫の二階で合同講演をしたことがある。

私は礼を尽くして 重対し、その藤原さんの話をよく聞いた。私が話をする番になったら、何十人が集まっていたその前の講師席

で、会の始まる前に出されたお茶菓子をむしゃむしゃ食べて、食べ終わるとこっくりこっくり居眠りを始めた。

こういう礼儀も知らない常識もないおばあさんに、かつてインドで釈尊であられた方のような、如来界の最高級光の大指導霊が出て

来られる筈はない。

その外、関西に、九州に、高橋信次先生の霊が出てこられるという人間が何人かいたが、その人たちに「私に前

で出してみ、わし

が本当であるかどうかを検証する」といったら誰も出てこなかった。

大川氏には、「私と一対一であって、それが本当であるか」を証明してほしいと、今までに何通も手紙を出したが返事はない。

「貴様に本当に高橋信次先生の霊が出てこられるのであれば、私も考え方を変える」とまで書いてやったが、返事はない。

心霊のことについては冷静な智慧の判断を必要とする。言葉だけで扇動されてはならない。

私は、私のところに集団で押しかけてきた幸福の科学の会員に、「幸福の科学の会員はみんな馬鹿だ。低能だ」といった。

その理由はこうである。私は高橋信次先生の弟子であったから、高橋信次先生のことについてここでは述べる。

例えば「高橋信次先生霊言集」は大川氏に高橋信次先生の霊が出てこられて、いわせられたというものである。

ここで錯覚しないようにしてもらいたい。

口で言っているのは大川氏の口であるけれども、霊が憑って来たという状態は、肉体的な支配権も、心、霊的な

支配権も全部、その

両方の支配権は、憑って来た霊にすべてを委かしている状態であって、いっているのは高橋信次先生であって大川隆法氏ではない。

このことに注意しなければならない。

いっているのは高橋信次先生であって、大川隆法氏ではない。だから大川隆法氏という独立した人格者は何を教義をしているのか。

そのことを問い訊す必要がある。

いろいろたくさんの霊言集を出しているが、「それはそういうことですが」そういうだけのことであって、「ところでいろいろその

ような霊言集を出されて、あなたは何を説こうとしていられるのですか」というまでのことである。大川氏が何を説くかということ

は一向に見えてこない。

卑近な例でいえば、

どこかの霊能者に　　の先祖の霊が出て来るとい、その口を通していうのは　　の先祖の霊であって、その霊能者の言葉ではない。

憑ってきている　　の先祖霊とその霊能者とは別人格である。

だから、大川氏の場合、その霊言集はどうでもよい。（どうでもよいということはないが）それはそれとして、大川という姓を持つ

一人の人格を持つ者に対して、

「あなた自身は、どのような教義を説くのか」というのである。

どんな霊言にも依らず、大川氏自身の説く教義はどこにも見出すことはできない。

それは恐山のいたこが、いろいろな先祖の霊が語るといっているのと同じように、先祖たちの霊に代わって、キリスト、親鸞、谷口雅

春、高橋信次等という霊を持って来ただけの話である。

そういう霊媒現象を宗教とはいわない。極言すれば、幸福の科学は宗教団体とはいえない。

人間一代のうちに、霊が入れ代り、人格が代ることは絶対ない。

肉体は肉体の法則に従って、幼児から少年へ、青年へ、大人へと変化してゆくが、心、精神、霊も成長することはあっても、その

肉体を支配している霊即ち人格は変わることはない。

十代のとき、借金したのは、五十代になってもその人が借金したからです。人格は変わらない。しかし大川氏は何回も人格が変わったと主張する。

張るのである。そういうこと事態が、大川氏は何も悟っていない証拠である。

てっとり早くいうならば、気狂い、精神異常というべきである。

本裁判に於いては、裁判は、人一代のうちに、何回も人格は入れ代るというのか、もしそのように主張されるならば、それが正しいとい

うことを立証してもらいたい。

幸福の科学の歴史を見ると、幸福の科学設立の初期、大川氏は次のようにいっている。

「高橋信次先生は、関西講演会で、関西から後継者が現れるといわれた。高橋佳子氏は、”ミカエル”を名乗って自ら後継者じゃな

いといった。自分がその後継者である」そうって

高橋信次先生の後継者であると宣言した。

この場合、高橋信次先生は高橋信次先生であって、大川氏は大川氏であって明らかに人格は違う。

しかし、「高橋信次先生霊言集」を出し、「高橋信次の新復活」を出し、「仏陀再誕」を出すに及んで大川氏は自分を「仏陀」で

あり、「釈迦大如来」であると自称するに到った。

釈迦という人格を持たれる方はこの世界に一人しかいられない。

高橋信次先生は釈迦の生まれ変わりであった。即ち釈尊その方でいられた。その高橋信次先生のは話を大川氏は幸福の科学を発足す

る以前に聞いているのである。そのとき大川氏はノイローゼであつたらしいと多くの人がいうのである。

すると、同じ時期に釈尊といわれる方が二人いられたということになるが、そんなことは絶対ない。どちらかがホンモノであり、ど

ちらかがニセモノである。

大川氏は「釈迦大如来」だといっているが、最初、高橋信次先生の教えを聴きに来た一青年。この時には明らかに釈尊とはいえな

かった。ノイローゼではなかったのかといわれていた青年が、それからどのような修行をして釈迦大如来になったのか。その悟りの経過

は全くわからない。

人類が救われるのは、いかにせば、悟れるのかというその経過であって、釈迦大如来になってしまっただけではない。

釈迦とは全く違う人格として徳島県で生まれた青年が、どのようにして釈迦という人格を持つことができたのか。

一つの人格者として肉体を持った人間が、その肉体を持ちながらどのようにして別の人格者となることができるのか、その点をはっ

きり示して欲しい。

そして、今度は「神だ」といっているのである。釈迦であった生命が、いかにすれば全知全能の神となることができるのか。

神は大なる慈悲と愛の持ち主であり、神はすべてのものの罪を赦す存在である。

その神が、欺しの心、慈悲も愛の心もなく、ノイローゼであつたらしいと書かれてなぜ怒って、傷つけられたと

けるというのか。

裁判は俗人を裁くところである。自分のことの是非に関する問題を、なぜ俗人の社会秩序を保つためのその裁判に委ねるのか。

裁判に委ねるといふ行為、そのことが大川氏は「神ではない」ということの証拠ではないのか。

心の広い俗人の人格者は、たとえ、人からいろいろいわれることはあつたとしても、それに腹を立てて、名誉を傷つけられたという

ことは全くない。まして裁判に掛けるというようなことをしない。

釈尊は、

「小人はせせらぎのようなものである。さらさら音を立てて流れる。

悟った人は深い淵のようなものである。

青く澱んで流れないように見える。」

といわれた。

大川氏は、自ら悟った神だといわれる。

大川氏から見ると、私は小人だということになるであろう。その小人がいったことを、悟ったと称する。しかも、神だと称する人が

名誉毀損だと騒ぐことは、自ら悟ってはいない、神ではないということ、自ら告白していることにならないであろうか。

釈尊は、

「いうことと、やることの違う人間を信じてはならぬ」

といわれた。

大川氏よ、あなたはいうことと、やることが違うのではないのか。

ましてあなたは「釈迦大如来だ」といっているのであるから、あなたがかつてインドでいったことではないのか。インドではそう

いったが、今生では違うといわれるのか。

しかし、高橋信次先生は、前世インドでもいわれたが、今生でも我々にそのように説かれた。

インドの釈迦、そして高橋信次先生と、今生で「釈迦大如来」とも自称している大川氏と、釈迦と名乗る人物が世界に二人いる。

我々はどちらの釈迦を選ぶべきか。

「今なぜ正法か」をなぜ書いたか

幸福の科学が、正しい宗教団体であるかどうかは、この小冊子を読めばわかる。

幸福の科学を脱会して「虚業教団」を書いた関谷皓元氏は、幸福の科学を脱会した人々全部にこれを読ませたいといっている。

幸福の科学は、この本に書いてあることの方が大打撃をうけるのであって、「大川高法はこう読め」を、しかも時期はづれになってから

問題にしないで、「今なぜ正法か」を裁判にしなかったのか。

「今なぜ正法か」を書いたのは、福井県加賀温泉の人から

「私は幸福の科学の会員でしたが、幸福の科学の間違いに気づいて最近脱会しました。

しかし最初幸福の科学に入会したとき、これこそ正しい教だと思って一〇〇人ばかりの人に大川氏の本を送って入会をすすめました。

しかしその間違いがわかりました。

その一〇〇人の人に、一々脱会の理由を書いて出すことは不可能です。それで幸福の科学のどこが間違っているかを、短くまとめて

小冊子にしていだけませんか、そうすれば手紙といっしょに入れて送られますからといってきた。

「今なぜ正法か」は、幸福の科学会員を目標にして書いたものである。だから本裁判の審議に当っては、この小冊子を読んで、宗教

的に私が如何なる立場に立つ者であるか、私の宗教観をしっかりと把握理解してから当って欲しい。私は些々たる個人感情で言動した

ことは一回もない。

幸福の科学の間違った教義とその行動によって、何百万という人々が苦しみ悩んでいる。幸福の科学は、表面的には人を救うと

自称していながら、その裏側では沢山の被害者をつくり出している。

高橋信次先生から正しく正法を聞いた私としては、大川氏は高橋信次先生の名を詐称しながら（ということは、大川氏は頭脳知を

利用した宗教的大詐欺漢である。この大詐欺漢に八百万人もの日本人が欺されているということは、それだけ日本人の宗教に対する

知識の程度が低いということであり、経済的には世界一になりながら、日本人の宗教心はまだまだ低いということであり、幸福の

科学に欺されたという経験を踏みつつ、宗教心を深化してゆく一つの段階だと思っている）多くの人を苦しみに落している現状を

無視するわけにゆかず、それらの人々を救わずにはいられないという衆生済度の大慈悲を持って、単に幸福の科学の会員のみならず、

宗教によって被害を蒙っているたくさんの人々、そういう人々だけでなく、何が正しいのかの判断力もなく、人を困らせようと思っ

ているわけではないが、事実として結果的に人々を困らせ悩ませている宗教団体をも救う目的を以って書いたのが、「今なぜ正法か」

である。

信仰している人、これから信仰しようとしている人々はぜひ読んで欲しい。

読んでゆかれるならば、ひとりで「如何なる宗教が正しいか」が判然として救われてゆかれるであろう。

Home

幸福の科学との関係（二）

裁判に至った近いと思われる原因

ある日、私の方の会員から「幸福の科学5月号」が送られてきた。

表紙は、大川隆法主宰先生スペシャル・メッセージ「方便の時代は終わった」

大川きょうこ主宰補佐先生スペシャル・メッセージ「邪教GLAを斬る！」とある。

大川隆法主宰

方便の時代は終わった。

- 一、霊言・霊示集の役割はあの世の証明
- 二、誤解から始まった高橋信次の復活信仰

三、美化された高橋信次の霊言

四、高橋信次は転生している

五、高橋信次を指導した仙人たち

六、仙人教団GLAの実態

七、仏教教団と仙人教団の違い

八、方便の時代は終わった

一読してその詭弁に驚いた。理論的に整理されていない、論理的にものごとを考える訓練のできていない、唯感情的にだけでものを

考えるくせのある人達は、支離滅裂、文章といわれぬ文章を読んで、大川氏がいわんとしていることはどういうことであるか全く

わからないであろう。そして、大川氏が一番最後の「これが正しいのです」といったら、その前に書いてあることがどんなにめっちゃ

くちゃであろうとも、そんなことはおかまいなしに、単純に大川氏が言うことを正しいと信ずる。即極めて単純な思考力のない会員

（社会的には軽視されるべき人間）のみが大川氏を信じているという構図である。

わかり易くいうとこういうことである。

昭和五一年六月二五日、高橋信次先生が亡くなれると、G L Aは誰がどのように指導して行くのか去就に迷っていた。

そこへ、昭和五二年三月五日、突如として高橋佳子氏がG L A理事会を収集して「ミカエル宣言」をし、「釈迦も、キリストも高橋

信次も、人類が救われる道を説かなかった」「ミカエルが人類の救世主である。

昭和五七年五月までには全人類はミカエルの前に跪づく」といって、自分は高橋信次の長女である

けれども、法の継承者ではないと宣言した。そのためにG L Aの会員は大混乱を来たした。

一、高橋佳子氏は間違っているけれども、高橋信次先生のお嬢さんだからついて

ゆくというのでG L Aにとどまった儒教的考え方のぬけ切れなかった

会員

二、私のように宗教と道德の違いをはっきりと認識してG L Aを脱退して「正

法を正しく継いで行く」と宣言したものの、こう言った人達は極めて少なか

った。

三、G L Aは脱会したが、誰かよい指導者はいないかと、他の宗教団体にも

行くことなしにうろうろしていた。正しい宗教指導霊を求めながら浮浪し

ていた浮浪者的人間、このタイプの人が多かった。

こういう状態の中で、目敏く自分の息子を霊能者に仕立て上げて、一儲けしようと企んだのが、大川隆法氏の父親善川三郎氏で

あった。善川三郎氏は「日蓮上人霊言集」を出版してその中に、「今、ある人物を霊能者として訓練中である。」と書いている。

その訓練している男とは、自分の息子であったわけである。高橋信次先生が、「近いうちに関西から私の跡を継ぐ青年が出て来る」

といわれたことがあって、このことは後に間違いであったと、当時の理事であった私達に訂正されたのであるが、そのことはテープ

に残っているので、善川親子はそれを利用して、ともに霊言を語る霊能者として登場した。

その登場する時、高橋信次先生の霊が出てくると偽った。高橋信次先生の本を記憶していて、恰かも高橋信次先生の霊が出て来られ

たかのように装う。そしていう言葉は、記憶していた高橋信次先生の言葉であるから、高橋信次先生と同じ言葉であった。

その詐欺を見破る人はいなかった。高橋信次先生が説かれた「正法」は全く理解していないで、単に過去世を語る

という霊能現象のみ

に興味を持って、G L Aには行かず、どこにも行かないでうろうろしていた連中、この中にはれっきとした元G L Aの講師、幹部も

いて、そういう人々がどっと大川氏の下に高橋信次先生の教えを求めて走った。

そのときに大川氏と組んで元G L A会員に呼びかけたのが原久子である。原久子は自宅を大川氏に提供して黙想のまね事をやり、

会員がふえてそこが収容し切れなくなると他へ場所を移し、そうして大きな教団となった。

原久子は大川氏に協力して、幸福の科学をここまで大きくした功労者であり、恩人であり、G L Aから行った人達も、それぞれ金銭

的にも献金をしているわけであり、大川氏は高橋信次先生の霊が憑ってきていわせるといって欺し、また元G L Aの会員達は、高橋

信次先生が復活されたという言葉に欺されて、高橋信次在世当時のような教義と教団の在り方を求めて行った。

大川氏に宗教指導者としての正しい能力があるわけでもないし、まして高橋信次先生の霊が出てくるということも、殊に高橋信次

先生は自分に復活されたということをウソであることがわかって来たので、G L Aから行った会員は一人残らず幸福の科学を脱会し

た。

その脱会した人達が、大川隆法はニセモノだったといい出した。そのことが大川氏には打撃であって、幸福の科学はそのことで混乱

をしている。そこで大川氏は自分を正当化して自分の組織を守る必要が生じた。「谷口雅春霊言集」を出したので、谷口雅春総裁死後

の生長の家のあり方にももの足りなく思っていた生長の家の会員達が、さてこそはと谷口雅春先生の教えを求めて大川氏の下に走った。

その人達が知恵が足りなかったのであるが、生長の家から走った人達もみな

大川氏のウソを見てやめてしまった。だから高橋信次先生だけでなく、谷口雅春先生も切り捨てて自分を正当化しようとした。

そうして自分のことをエル・カンターレといい、エル・カンターレが正しいので、高橋信次先生の名も、谷口雅春先生の名も、方便

として使ったに過ぎないので、正しくないということは最初からわかっていたが自分はそれを黙っていたというのである。それで今

では方便の時代であって、これからが本当の自分の正しい教義を説く時代になるというのである。そのことをもっともらしく脚色し

ていっているわけである。

大川氏が、自分をノイローゼであったとうわさされたその時から、釈迦大如来、神に昇格して、幸福の科学を発展させた中心になっ

た会員は元G L Aからの会員であった。

そこで私は大川氏に質問する。

「釈迦であり、神である人物が、なぜまちがっているということを人にいったのか、人にまちがいを教える人間が、釈迦であり、神であり得るのか」

間違っていることは心の毒である。毒が毒であるということがわかっていながらその毒をのませつづけることが、慈悲であり愛で

あるのか。釈迦、神が、人に毒を呑まされるということになさるのか。

この「幸福の科学五月号」は、本訴状前提となっている、「悟られる者」「仏陀」「神」であったという神霊性を、自ら破棄し

否定する文章であるから、以下のことは名誉毀損には当たらない。

大川氏の言動を見ていて感ずることは、道を説く者の欠いてはならないものとして、天地創造、宇宙根源の神に対する敬損さ、すべ

ての人、物に対する謙虚さが無い。それが無いから東京ドームで見せたような扮装するし、私の所に押し掛けて来た人達、（三十五

才から四十才代）も礼儀もしらず、傲慢横柄な態度を取るのである。

それにもう一つ大事な反省がない。

元G L Aの会員が全員やめたのはなぜか、という反省をしていない。元G L A会員だけでなく、幸福の科学を脱退した人達は、それ

ぞれにやめた理由があるのである。

関谷 元氏は、そのやめた理由を「虚業教団」という本にした。この本に賛同する人が多いので、関谷氏はさらに第二冊目の本を出

そうとしている。

私の考えるところ、大川氏が反省しなければならない点は、

第一 高橋信次先生の霊が憑って来られたわけでもないのに、憑って来ていわせるとウソをついたこと。

そのために、高橋信次先生の教えを求めていた人達が、真実かと思って集まったのである。

第二 大川氏の出した各遺言集は、すべて大川氏の記憶の所産であって、それぞれの霊が出て来ていわせたので

はないこと

大川氏が「谷口雅春霊言集」を出した時、私はその大胆というか、恥知らずというか、彼は気違いになったのではないかと思った。私

は生長の家教団の本部講師をしていて、谷口雅春先生にはいつも接していたから、谷口雅春先生の教義が一番よくわかっていると

思っている。

谷口雅春先生のことを知りたかったら、先生著の「生命の実相」を読めばよい。それと同じように親鸞上人のことは「親鸞上人全集」を、

内村鑑三先生の場合は先生の全集を、キリストのことは聖書を、「仏陀再誕」については、今までの「釈迦伝」そして高橋信次先生の

「人間釈迦」を読めばよい。

幸福の科学の会員も頭の弱い、知性のない人が多いと私がいうのは、前記した様に、高橋信次先生のことといえ

ば、「高橋信次霊言集」だけを読んで、高橋信次先生の著作全部を読んでいないことで「果してホンモノは何か」という検証を全くしていないことである。

私は本裁判で、大川氏に法廷に出てもらい、私の目の前で、果して、高橋信次先生、谷口雅春先生の霊が出て来られるのであるか

証明をしてもらう。

大川氏が、私の求めに応じて出廷しないならば、彼が霊がいわせたというのはウソであるという証拠である。

以下続く

Home

大川きょう子主宰補佐先生 スペシャル・メッセージ

「邪教G L Aを斬る」

仏教を擬装した仙人教団 G L Aと崇り神 高橋信次の正体

高橋信次の本来の使命は教団づくりではなかった。

数々の問題を含んでいる高橋信次の教え

霊的啓蒙は宗教家の第一号

霊道現象は「悟りではない」

教えと信仰による救済こそ表側の世界

この篇の最初に書いてある高橋信次先生死後の分裂は事実である。

私は高橋信次先生の弟子であり、霊道を開き、過去世のことを思い出し、高橋信次先生を知る者として、この一文は看過することはで

きない。

「G L Aとは、仏教を偽装した仙人教団であった」という。高橋信次先生はインドの当時のことを思い出して「人間釈迦」を書かれ

た。

大川氏は「釈迦大如来」と称しているが、高橋信次先生が書かれたと同じような、「釈迦の生誕から悟りに至るまで」を書かれた。

「G L Aは悪霊の生産工場となってしまった」という。確かに現在のG L Aはそういえる。しかし、今のG L Aは高橋信次先生が創ら

れたG L Aと、名称は一しょでも中味は丸っきりちがう。釈迦もキリストも否定してしまったのであるから悪魔といえる。

昔のG L Aの中にも、霊道を開いたという人の中にも、正法がわからずに「高橋信次霊言集」に欺かれて幸福の科学に走った人達が沢

山いる。その人達も結局大川氏のウソがわかって幸福の科学をやめた。ところがなぜやめたかということに対する反省がないのである。

これは私が「今なぜ正法か」に書いて置いた通り、

「人間が神になることはできない。

教祖を神格化する宗教は邪教である」

に該当するものである。

幸福の科学が邪教である根本理由

このことを知るには、まず「神の無謬性」ということを知らなければいけない。

全智全能 一切の善の根源を「神」という。

神が悪を造ることはない。神が不完全なものを造ることはない。神の創造は一切完全である。

教祖を「神格化」して「神」にしてしまうと、神は間違っただけをされないから、教祖のいわれることはすべて「正しい」と考える。

そのために、教祖の言葉に疑問を持ち、疑いを持つ者は、その持った人間が悪いということにされてしまう。

「神」になった教祖に反省はいらない。反省することはない。

「神」に歯向うのは「悪魔」しかいないから、反対する者は皆「悪魔」にされてしまう。そのことを如実に現わしているのが、「幸福

の科学五月号」である。

大川氏に高橋信次先生が出て来られる。或は大川氏が高橋信次先生の再来であると思ってG L Aから走った連中が、全部大川氏のウソ

に気づいてやめてしまった。

そうすると、大川氏は神さまになっているから、神さまは絶対に悪いことはないのであるから、疑問を持ってやめた者が悪魔であり悪

い奴なのであるから、結局は、その人達と同時にその本源である高橋信次先生を悪者にしないと仕方がないということになる。

そして、「特集し、仏敵を糾弾する！」でやめた人達をみな「仏敵」とし、「ユダ」としている。

幸福の科学を創立するのに一番功績のあった 原久子、関谷皓元氏が真っ先に「現代のユダ」だとされている。

「幸福の科学五月号」こそは、幸福の科学が「邪教」であることを証明するものである。

こんな月刊誌をよくも国民の前に出したと思う。少し宗教的良識のある人間は、心の中では思ったとしても、文章にして表に出すとい

うことは、恥かしくて、自分の品位を下げることになるのでとてもこんなことは書けないものである。

それを臆面もなく堂々と月刊誌に書くのであるから、精神異常ではないか、正しい知性・理性を失っていると考えられるのである。

大川きょう子主宰補佐が「邪教G L Aを斬る」を書いたことについて

道徳の世界は「夫唱婦随」であるから、夫がいえば妻も同じことを「いう」ということになる。

しかし、宗教の世界は、一人一人の霊性を問題とするのであり、「悟り」は、夫が悟ったからといって妻も同時に「悟る」ことはあり

得ない。

私は、妻のきょう子氏は悟っていないと思っている。妻としての教養も知性もないと思っている。

少しでも宗教のことがわかって知性があれば、夫が間違ったことをしようとする時は、「やめたら」と注意するのが妻の役目ではない

のか。それを「やれ、やれ」とけしかけて、夫と同一口調になって「邪教G L Aを斬る」という。だから、

本裁判に置いては、「大川きょう子主宰補佐」は果して悟っているかを検証しなければならない。

G L Aは邪教であるか

高橋信次先生の時のG L Aと、現在の高橋佳子氏が主宰するG L Aは、名称は同じでも中味は全く違う。

高橋佳子氏の主宰するG L Aは、釈迦、キリスト、そして自分の父親でもあった高橋信次先生をも否定しているのであるから、明らか

に邪教といえる。

高橋佳子氏が「ミカエル宣言」をした時、私は驚いた。

「世界の歴史上、これほどまでに見事に、釈迦、キリストを否定した人間はいない」「二代目は、初代教祖の遺志を固く守って伝えよ

うとするのが例であるのに、これほどまでに見事に、初代教祖を否定した二代目もいない」

私はこの「ミカエル宣言」を開いて、これで高橋信次先生の教えを開いた人々はみんなG L AをやめてG L Aは崩壊すると思った。

あにはからんや、宗教と道徳の区別のできなかった、即ち本当に正法がわかっていない人が多くて今にG

LAが続いている。

GLAの「ミカエル事件」といい、「幸福の科学がひき起こしている事件」といい、このことは日本人の多くが、儒教と宗教、霊能力

と宗教、霊能力と道徳の分別ができていない。

いわば、宗教的にはまだ無知であるということを示すのである。

多少霊能力のあると思われる人が、何かをいうと、すべてを正しいと思い込むくせが日本人には強い。

幸福の科学は、現在のGLAが邪教であるといっているのは正しい。

しかし、高橋信次先生時代のGLAを邪教だといっていることは許せない。

大川氏が正しいか、高橋信次先生が正しいのか

大川氏は、幸福の科学五月号、五「高橋信次を指導した仙人たち」の中で私のことをつぎのように書いている。

「ちなみに、この高橋信次時代のGLAでたとえば舍利佛 シャーリープトラと称していた園頭という人が九州にいて、いまだにいる

いと当時のことを言っていますけれども、この人も天狗です。」

幸福の科学六月号では、

「仏敵、仙人教団GLAとその亜流の実態を暴く」

本部講師 細川天舟

の中で、

分派その1 霊能信仰の権下となった天狗 園頭広周（正法会）

の中で、私のことを誹謗している。

この中で

「この園頭の批判体質は、幸福の科学から『仏陀再誕』が出版されるに至って、さらにボルテージが上がる。」と書いているがそれは

当然である。

高橋信次先生を釈尊だと信じている私にとって、大川氏は「自分が仏陀であった」といい、その「仏陀再誕」を読んで幸福の科学に行

く者があるに置いては、「ニセ仏陀に欺されるな」といい、且つ書くのは当然である。

大川氏が「仏陀再誕」を出したことに、もし私が黙っていたとしたら、高橋信次先生の存在を知らない後世の人々は、大川氏の「仏陀

再誕」を、読んで、「大川氏こそ仏陀であった」と思うであろう。

高橋信次先生の弟子の中で、大川氏を「ニセモノだ」といっているのは私が一人である。

外は皆、大川氏に反論できないでいる。

大川氏の前に「お前こそニセモノだ」といって立ちはだかっているのは私一人なのであるから、なんとかして私を沈黙させよう、排除

しようとしてくるのは当然である。

しかも、私は過去世でシャーリープトラ（舍利弗）であった意識を持っている。そうであったということを元GLAの会員達はみな知

っているし、また、そのことが本にも書いてある。もし私がここで何らの反論もしなかったとしたら、私も死に、大川氏も死に、現在の

人々も皆死んでしまった時に、本はそのまま残って独り歩きをする。

すると、

「園頭という人は、釈迦の十大弟子の筆頭シャーリープトラであったと高橋信次先生は書いていられるけれども、大川隆法なる

人物が現れて、『自分が仏陀であったといい、高橋信次先生のことを仙人界の天狗だと書いているけれども、園頭というこの人は、釈迦

第一の弟子といわれても、大川氏が生きている時にこの人も生きいられたのであるし、大川氏がそういったことに反論しなかったのであ

ろうが、シャーリープトラであれば反論しなければならない筈である。

反論しなかった、できなかったということは、そのことがこの園頭という人はシャーリープトラではなかったのではないか。

そうすると、園頭氏をシャーリープトラだといった高橋信次というこの人もニセモノだったのではないか。

そうなると、大川という人が真の仏陀であったということになるが、それにしても、高橋信次という人の書かれた「人間釈迦」その他

の著作と、大川という人の本を読み比べてみると、どうもこの大川という人が仏陀であったとは信じられない」ということになって、今

後何千年、何万年に亙って、後世の人々を混乱させることになる。だから、自分の時代でこの問題のケリをつけて置こうと、そう思って

私は大川氏と一対一で対決しようと思ってつぎつぎと質問の手紙を出したのである。幸福の科学本部に質問に行く、といったら、「来て

くれるな、手紙をくれるな」と安藤氏からいってきたので「そういうことは、大川氏がニセモノだと認めたことになる」といってやっ

た。

そうしたらいきなり「裁判に持ち込まれた」というわけである。大川氏は安藤氏を通じて、「あなたが私のことをいろいろいわれるこ

とに一切介入しません」といってきたから「あなた方は、あなた方の信ずるところに従って自由にやりなさい。私は私の考えで自由に行

動します。私はあなた方に手紙をやったりしないから、あなた方も私のやることに文句をつけないようにしなさい」といったばかりのと

ころに、全く不意に「裁判」ということになったわけである。

だから、大川氏の行動は、常識人として守るべき「信義」に反する。まして「自分は仏陀だ」「自分は神だ」と称する人間が果して

このような常識人すらもしない信義に反する行為をするのであろうか。

大川氏は高橋信次先生を「仏陀ではない」と否定し、高橋信次先生がいわれた「釈迦の十大弟子」も天狗だとい

って否定したのであ

る。そして大川氏は自からを「釈迦大如来」と称している。

それなら、大川氏の側近で、かつての十大弟子にあたる人物は誰なのか。それはいるのかいないのか、私に対して甲斐通右氏を通して

「園頭さんを早く連れて来なさい」といったのはなぜなのか。もし私は大川氏の下へ行っていたとしたらどうするつもりだったのか。

今になってどうして私を「天狗」であるといい出したのか。

他のG L Aから来た人達でも、大川氏をホンモノかなと思っていた時は「G L Aを斬る」とはいわなかったのである。G L Aから来た

人達が全部やめてしまったら突如としてそういい出したのである。

私が大川氏に一对一で会って、大川氏が果して「仏陀」であるか、「神」であるかと確かめたいと思っている理由

大川氏は私を、取るに足らない天狗だといっているのであるから、自分が仏陀であり神であったら、私如き人間と会わないという理由

はない筈である。

私と会って、「かかるが故にお前は仙人で天狗でニセモノである」と、私が納得できるように説明してもらえば「ハイ そうですか」

とすなおに大川氏に服しようと思っている。

しかし文章で平易「天狗」であると書いてあるだけでは、「なぜ、天狗なのか」という理由は一切説明されていない。

私としては「天狗だ」といい放しにされただけで「ハイ、そうですか」と黙っているわけにゆかない。

一対一で話をしたいといっても拒否していた大川氏と、法廷で論争することになるとは願ってもない幸いである。大川氏に感謝する。

霊は、人一代のうちに入れ変わることができるのか。

大川氏が自分は悟った考え仏陀 神といていることに対して、確かめて置かなければならない問題がある。これを解決してかからな

いと本裁判は正しい解決はできない。

霊魂説

高橋信次先生だけでなく、これまでの世界の歴史上に於ける宗教、また霊能者は、人間が「オギヤー」と生まれて

来る前に、個性を持った霊魂はその人間の肉体に入って、その肉体を支配するのであるという。個性を持った霊魂

が肉体の成長とともにいろいろな勉強をし、体験をして、やがて時がくると、死を迎えて肉体を脱ぎ捨て、あの世

へ帰って次の再生の時を迎えるという。

これに対して大川氏は、同一肉体を持っている間に、何回もその肉体を支配している霊魂は入れ替わるのであると

続く。果して、そうなのか。

このことを決めてから論議に入るべきである。

人間尊重、人間の尊厳、人格権

人間の靈魂が、一代のうちにくるくる入れ変わるのだとしたら、人格権、人間の尊重は何もない。法律も役に立たない。

大川氏は善川三朗氏の子供として徳島県に生まれた。この時既に大川氏の人格は決まっているのである。

その大川と名づけられた。誰とも違う個性を持った人間は、成長して東京大学に行き、商社マンとなり、ノイローゼではなかったかと

いわれる時代を通過して、やがて高橋信次先生の教えに触れ、幸福の科学を設立した。

その大川氏が突如として「仏陀再建」を書いて、「自分は仏陀である。釈迦大如来である。かつての仏弟子よ集まれ」と言いだしたの

である。

凡夫であった靈魂が、突如として「仏陀」になり、「神」になることはない。

靈魂によって人格は発生する。靈魂が入れ変わることはない。もし靈魂が入れ変わるのだとしたら、靈魂が入れ変わって別の人格にな

りましたということは、何を以って証明するのか。大川氏が「仏陀」になったという証明はどこにもない。「神」だという証拠もない。

唯大川氏が口でいっただけである。

靈魂が入れ変わって人格がその都度変わるのだということになると、

例えば二十才の時に借金する。四十才になっても払わないので請求する。すると二十才の時に借りた人間は前の人間で、今四十才にな

っている私は、二十才の時に借りた人間ではありませんということになったら責任の所在がなくなってしまう。

だから、法律の根拠になっているもには、人格の統一、人格権の確立なのである。

大川氏が「仏陀であった」といったことが真実であるとしたら、オギャーと生まれてきた時から仏陀の魂を持っていた。しかし幼児は

まだ未開であっても、今になってそれが全開して「仏陀」となったというわけであるが、それで私が、インド時代の釈迦は、幼児等の頃

からのいろいろの修行をされた。だが大川氏はそれに必要する修行をしたことがあるのかと質問したのであるが、それには答えられない

のである。

まして「エル・カンターレだ」「神だ」ということに措いておや、

人間が神になることは絶対に出来ない。

人間が神の意識になることはできない。

それなら、大川氏は、どのようにしてこの宇宙の全森羅万象をつくったのか、どうして水、空気、太陽など造ったのが、大川氏は神で

あったら答えることができなければならない筈である。

だから私は大川氏に

「あなたの魂はいつ入れ変わったのであるか、その時期を示せ」というのである。

法律の前提になるのが人格の一貫性である以上、人格はくるくる入れ変わると主張する大川氏が、人格の一貫性に拠って立つ法律を以

って争うというのは、釈尊がいわれた「いうこととやることの違う人間を信じてはならぬ」という教えによってまず裁かなければならな

い。

人間は人格、靈魂の統一貫性を持つ存在であるのか。

それとも、

魂がくるくる入れ変わって一貫性、統一性のない存在であるのか。

それを決めてから審理に入っていただきたい。

一時は幸福の科学に功労のあった人達であったのに、その人達を悪魔とって切り捨てている。

しかし、私は違う。私は正法を正しく理解していた。

幸福の科学に対する書簡

幸福の科学誌が送られてきた。見ると、高橋信次先生も私もニセモノだと書いてある。

幸福の科学誌は全国の人が見る、高橋信次先生は既に亡くなってられる、生きている私がそれを否定し反論しなかったら、読んだ人

はみなこれを正しいと思うであろう。

そう思って私は大川きょう子氏に手紙を出した。

「親展」で出したのだから「あなたが返事ください」と書いて置いたのに、返事はよこさずに幸福の科学本部は福岡支部に指示して、

会員六名を私の家によこした。

その会員の態度たるやまことに非礼、

私に「あなたの後ろに天狗の霊がついている」、「頭がおかしいのと違いますか」等、私をいらだたせて、私の欠点を掴もうとする作

戦であった。そんな手に乗るような私ではない。

私が一対一で決着をつけたいのだという

「うちの会長先生に会ってどうされるつもりですか」というので、

「宇宙即我の境地について聞く、それがわからないようでは悟ったとはいえない。君達のような若僧が、わしと宗教論争ができると思

うのか」、といて追い返した。

私は幸福の科学の会員からさまざまな暴言をうけた。わたしに裁判で争う気があるのであれば、この一件だけでも名誉毀損で訴えられ

るほどのものである。

私は宗教に関する問題を、宗教より低い次元の裁判で争うとは思っていないから、問題にせずに、大川氏に、もっと会員に礼儀正しく

するように教育しなさいと手紙を書いた。

回答を要求したのに回答はしないで、また会員を私の自宅に押し掛けさせた。

この時は一応おとなしく礼を尽して玄関に来たが、家内は私が若い連中から暴言を浴びせられているのを見るに耐えられなかったらし

く、「部屋へ通しなさんな」といったが、私は通した。話している間、一人でも幸福の科学に疑問を持つ者がいてくれれば、その者救い

になると、慈悲の心であった。

六月二十七日、都内のホテルで、元創価学会顧問弁護士の山崎正友先生、幸福の科学を脱会して「虚業教団」を書いた関谷氏等と、宗

教団体の被害を受けて、その教団をやめた人達が、宗教団体からいわれなき被害をうけている、そういう人達を救済する全国組織をつく

ろうと、秘密に会合を持つことにしていたら、私の泊るホテルの、私の部屋の隣りに偽名で泊った男がいた。摩擦をさけるためにすぐに

ホテルを替えた。そうして偽名で泊った男の身許を洗い出し、監視をつけた。田辺真が本名であることがわかったから、田辺氏に手紙

を出した。

「貴殿は幸福の科学本部の指令をうけて来たのであろう、幸福の科学と関係がなかったら、関係がないと、我々が認知しうる資料を揃

えて返事をしなさい」

と書いてやったが返事はない。幸福の科学は正々堂々と法論を戦わせることを全くしない。

姑息な手段を使って反対する者を黙らせようとしている。今まではその手で黙らせることができたかも知れない。しかし私の場合はそ

うならない。

私は、正法の番人を任じているから、ましてさんざん高橋信次先生の名を利用して幸福の科学を創立していながら、都合が悪くなると

高橋信次先生を二セモノとして切り捨てるということ、高橋信次先生の弟子として後継者を任じている者として見逃して置くわけにい

かないではないか。

だから、この際その点をはっきりさせたいと思ったのである。

私が二十七日、紀尾井町の幸福の科学本部に行くから大川氏に会わせよと行ってやったら、「来てくれるな」と安藤氏から行ってき

た。それで「私に会えないということは、大川氏は二セモノであったと認めることにしますよ」という手紙を書いた。

大川氏が真の釈迦大如来であったら、私如き者の質問に答えられる筈である。そして、

「大川氏が真の釈迦如来であることがわかったら、私は大川氏の弟子になる」といってあるのである。

私がいろいろ質問することに全く答えられないので、私を裁判に掛けると脅してきた。

それが六月二十三日の「通告書」である。

通 告 書

このような脅しを掛けて相手を沈黙させようとする行為は、常識のある人でもやらない。

それを釈迦大如来、神とする大川氏がやらせるのである。この一事で以て大川氏がニセの宗教家であることがわかるではないか。

私は私を「ニセモノだ」といわれたことが納得ゆかないから、なぜニセモノなのか、納得できるまで大川氏の話
を聞こうと手紙を出しつ

づけた。

私の質問には何一つ答えることができなくて、突然、幸福の科学は私を裁判に訴えたのである。

通告書をだしてあったから裁判にかけた和幸福の科学側はいうのであろうが、人の悪口を書くだけ書いて、それ
に反論をゆるさないとい

う考えは横暴である。

もう一つ私が幸福の科学に訊しつづける理由がある。

私の甥、浜崎栄作は、鹿児島島の幸福の科学の有力会員である。今まで私は宗教的なことは何も甥にはいってこな
かった。

甥は初めて幸福の科学誌上で私の名前を見て、大川氏から天狗でニセモノであるといわれている。甥は大川会長
を神だと思っているので

あるから、幸福の科学誌書いてある通りに私をニセモノと信じている。

それが親戚にも伝わって、これまで七十六年の生涯を「園頭さんはまじめな人だ」と通ってきた私の名誉が一挙
に傷つけられてしまった

のである。

その名誉挽回のためにも、なぜ大川氏が私をニセモノであるといったのか、その理由を聞きたいわけである。

名誉を毀損されているのは私の方である。

だから徹底して大川氏と一対一で会うことを求めているのである。

私の主張が間違っているであろうか。

私は最初、辞を低くして、大川隆法氏へ直接ではなく、大川きょう子氏の方へ穏便に話を進めようと思ってい
た。

ところが、文章による回答をしないで、不意に多人数の会員をさし向け、悪口雑言の限りを尽して、「罰が当た
る」、「死ぬ」、「気が

狂っているのじゃないか」、「天狗が憑いている」、「悪霊がついている」と脅した。恐らく今まで幸福の科学
を脱会した人達は、会員

のこうした脅迫に恐ろしくなって、幸福の科学のことは一切関係しないと泣寝入りしきっていたのであろう。

だから、私に対してもこの手紙を使えば私が恐怖を感じていなくなるであろうと思ったのに違いない。私は一
般の人とは違う。幸福の

科学の脅迫に屈するような私ではない。

計三回押し掛けてきた。それでも私が反論するので裁判にかけると脅してきた。

私を脅迫して置いて、私が出す質問に答えることができないので、

「私が幸福の科学を脅迫している」という。こういう心理状態は正に異常ではないのか、一般社会に於てこのようないい方が通用するで

あろうか。

相互の話合いによって解決しないで、宗教とは次元の低い法律を利用して、法の権威の蔭に隠れて自分達の立場を守ろうとする。

こういう宗教家の存在を許して置くことはできないと思って、私は語調を強めて書いた。

幸福の科学は、自分達の非を宗教家に解決する力を持たないので、法の権威をもって自分たちの非を守る。そして善意の人を脅迫しよう

とする。

このような宗教家、宗教団体の存在を許すべきでない。

そして法は、信仰の自由、言論の自由をどの範囲まで認めるのか、善意ある者の発言を法を楯に罪悪であるというのか。

日本の司法界の宗教的見解判断を私はこの裁判で聞きたいと思っている。

神とは何か、裁判を始めるに当って絶対に決めて置かなければならないこと、

大川隆法は自分を神だといっている。

「神とはなにか」という定義を決めて裁判をしないと、神に対する定義が決められていないと結論は出ないので、裁判を始めるに当って

「神とは何か」という定義を決めてもらいたい。

前略

「幸福の科学」誌上に於て、私をニセモノであるとして書いていられますが名前を出された以上私自身の名誉のために反論するところであり

ます。

尚、大川隆法氏が真の仏陀であるならば帰依すること吝かではありません。

大川隆法氏が真の仏陀であるか、

私がなぜニセモノであるか、

私自身、直接確かめ、また、お聞きしたく思います。

依って六月末までに、会見下さる日をお知らせ下さい。回答なき時は、大川氏は、大川氏こそニセモノであると認めます。

私より以上に愛が深く、また真の仏陀であるのなら、私に会われることを、些かも恐れられる必要なしと思います。

五月二十七日

園頭 広周

大川きょう子 殿

「親展」で出したのですから、あなた以外の者の回答は否定します。必ずあなたが返して下さい。

私の要求に逃げないようにしなさい、徹底して追求します。

前略 貴殿は私をニセモノだと書いた。

私は私の名誉のために貴殿と対決したい。

私は自分の名誉を晴らすまでは、貴殿を攻撃する。

貴殿が私に対してどこがニセモノであるか

私がニセモノであったら私は貴殿を師とする。

幸福の科学の被害者は全国に一杯いて、その人達は私の所に来ている。私は隠れてこそこそするのが嫌いだから、ここではっきり云って

置く。会合の日を指定しない時は、君はニセ仏陀である。

貴殿から名指しされて現代のユダといわれた人、幸福の科学によって被害を受けた人、その人達を集結して、幸福の科学が潰れるまで、

貴殿がニセ仏陀であることを暴露するまで、私は徹底して貴殿を攻撃する。

貴殿に池田大作とともにニセ宗教家であることを鮮明にするまでやる。

貴殿が仏陀なら、何も私に会うのを恐れる必要はないのであろう。私との会合の日を指定しなさい。

六月四日

園頭 広周

大川隆法 殿

さらに第二段の矢を大川隆法に放ちます。私は、邪教を整理するために寿命を与えられると思っております。

前略 貴会員の来訪を受けたのでさらに質問します。

今回私が貴殿に手紙を出したのは、貴殿が私の名前を出して色々批難したことに対して、私自身は勿論、私の会員からも色々聞かれたの

で依って何れが正しいかを貴殿と直接合って話したいと思ったまでのことで、六月号にあのことが書いてなかったら、私は幸福の科学は

幸福の科学で、私の正法協会で独自に布教してゆけばよいと思っていた。このことについては私の所に来た会員もそう言っていたが、し

かし、貴殿が書いたことによって黙っているわけにゆかなくなってきたわけである。

貴殿が話し合いに来てくれるなどいわれることは、私の方では貴殿が私の質問に答えることが出来なくて、全面的に誤りを認めたというこ

とに解釈するが、それで差支えないであろうか。

来た会員たちに私は質問したが答えることはできなかった。さらに次の点を質問する。

貴殿は高橋先生が、関西から青年が出て来るといわれたと、その青年が自分であるということをかいている。G L Aの高橋佳子ではない

といている。これは自分が高橋信次先生の後継者であるという意味に取れる文章を書いている。私の所に来た会員は、大川先生はそう

いうことは書いていないと力説する。

このことについて、貴殿は書いたのか書かなかったのか答えられたい。

初期高橋信次霊言集以外、高橋先生の著書から盗用したと思われるものが沢山ある。

今になって高橋先生を否定することは、貴殿は高橋先生の霊が出てくるといって人を騙して人を集めてきたことはどう解釈すればよいの

か。

さらに東京ドームで芝居がかった扮装をすることはそれこそ邪道である。仏陀のすることじゃないといったら、あれは宣伝の為、人を集

めるためですといていたが、釈迦が人集めのためにあのような仮装行列みたいなことをされたというのか。

最後に私が貴殿に聞きたいのは、貴殿は「宇宙即我」の体験をされたことがあるのか、会員にはそのことを会長に聞いて返事しろといっ

て追い返した。

貴殿はいつ宇宙即我の体験をされたのか、その時の心境を私に直接返事をしなさい。

私は決して貴殿を攻撃、質問することをやめない。正しい仏陀だというなら私の質問に答えられない筈はない。

貴殿は、色々な人の本をよんで記憶していて、恰もそれを霊が出てきたようにいっているだけのことだと私が思っている。

私の質問に対して今月末までに答えなさい。答えがない時は、貴殿をニセモノだとさらに公表する。

六月十五日

園頭 広周

大川隆法 殿

前略 関谷さんを脅迫することはやめさせなさい。

人類の救世主というには余りにお粗末である。

このことで貴殿の仮面ははがれた。

会員を使って妨害させるとは卑怯である。

講談社とも連絡して、貴殿に対抗する。

尚、やるなら法律問題にする。

右、警告する。

六月十六日

園頭 広周

大川隆法 殿

前略 私は貴殿の要求通り、二十七日紀尾井町の本部に行かないことにした。その代わりに書面での回答を求

めた。

書面で回答することはせずに、また、貴殿は私の処に会員を寄越した。その会員の言動によって、益々、私は貴殿がニセモノであるとの

認識を強めたその理由を述べる。

一 人を訪問するには礼儀がある。しかし、貴殿の会員は礼儀を知らない。昼食時に押し掛けて来て十五時前までいた。お蔭で私は昼

食も抜き、予定していた仕事も出来ずに計画が狂った。

人を訪問するには必ずアポイントを取って、予め用件をいって相手の承諾を得てから訪問するのが礼儀ではないのか。

その礼儀を知らないことが第一、

二 仏教の知識が全くない

「色心不二」「諸法無我」「宇宙即我」の意味が全くわかっていない、これは貴殿がよく指導されていないからだと思う。

三 釈尊は「八正道」を説かれた。貴殿は「十正道」といってられる。「正道」といわれたことが、貴殿の浅薄さを示すものであ

る。なぜかという理由を説明したが、貴殿の会員達は、私のいうことが理解できなかった。

四 貴殿の会員が、貴殿を「神」と信ずるのは自由である。だからといって人にそれを強制するのは間違っている。私はそれを認めな

い。貴殿がニセモノの証拠であることの一つの理由として、東京ドームで仮装行列みたいな扮装をしていることを挙げていた。人類を救

う神がなぜあのような扮装をしなければならないのか。

あのような扮装に驚いて、貴殿を「神」と思うのなら、その人類の頭の程度が推し図られる。

五 私と話しが一向に噛み合わないので、少なくとも高橋信次先生著「人間釈迦」を読んでから来いといったら「人間釈迦」下らぬこ

とばかり書いてあるといった。「人間釈迦」を読めないような頭では、私と論争する資格なしである。

六 大川先生と会って何をするのかというから、高橋信次先生の霊を出してもらおう。そして、高橋信次先生の霊に聞いてみたいことが

あると思っている。正しく霊が出てくるのであれば、それが出来るのではないのですか、なぜ私から逃げるのですか。

七 私は少なくとも国際正法協会の会長である。私の所に寄越すのなら、九州の代表者を寄越しなさい。これから、あのような末端の

会員は寄越さぬようにして下さい。屁理屈は時間のムダである。責任のある発言の出来る人をやって下さい。

今度のことで、幸福の科学の体質がよくわかった。創価学会と似た体質がある。私は会員を使って妨害させるような卑怯なことはしな

い。

正々堂々と正否を争う、それが万人のためである。

だから、はっきり云って置きます。

私は講談社の関係の人、そして、最初に貴殿のことを書いた早川氏、そして、貴殿がユダだといった人達と会って、その人達の意見を聞

く。その結果、私がどう判断するかわ私の自由である。

貴殿には関係のないことである。

今日の結果を、貴殿の会員は、事実をゆがめて報告するかも知れないから、私は私の考えをお知らせして置きます。

帰り際に、不穏な言辞があったから、警察に通報するといって置いた。警察問題になったら、貴殿の名誉を傷つけることになるから、注

意して置かれる方がよいと思う。

事は、人類を救うか否かということであって、いい加減に、すませるべき問題ではない。

私は書面での回答を求めているのであるから、書面で回答して下さい。さもなくば私と一対一で話しをしましょう。

私の所に会員を、徒党を組ましてやったら、私は、益々、貴殿をニセモノ、誠意のない人物と認めます。

六月二十二日

園頭 広周

大川隆法 殿

[Home](#)

前略 私が今回貴殿を追求しているのは、貴殿が私のことを書いたことによって、私は非常に不名誉なことになっているからである。

私の甥、浜崎栄作（歯科医）が鹿児島県の貴会の幹部になっているが、貴殿が書いたことによって、私達親戚一同は混乱を来している。だ

から、私はその親戚達に対して、貴殿と私と、どちらが正しいか、申し開きをしなければ決着は着かない状態になっている。

安藤氏は私に通告書くれたが、この内容は、貴殿が私の質問に答えることができないので、手紙を出すことはやめて欲しいということ

で、私はこの内容は、結局、貴殿が私の質問に答えることが出来ず、私のいっている点に於いて、てっとり早くいえば負けた。すなわ

ち、貴殿は自らがニセモノであると認めたという意味に私は理解している。それでよろしいですか、返事下さい。

私は「親展」で出しているのであるから、貴殿の返事を求めるものである。

六月二十四日

園頭 広周

大川隆法 殿

宗教の問題を裁判で以て解決しようとする事は、G L A、幸福の科学を以て嚆矢とするもので、創価学会もしなかったことです。

批判を名誉毀損と混同されてはいけません。

私も貴会員から「天狗だ」と名誉毀損されました。

このような書面を出されたことは結局は私の質問に答えることができずに、大川隆法氏の敗北と認めることにいたします。

私が決めた方針は、計画通り実行するだけで、それを阻止する権利は、幸福の科学にはありません。

貴会からこういう書面が来たこと公表することにします。

六月二十四日

園頭 広周

安藤俊輔 様

前略 貴殿が会員を使って、私が云わんとすることを封殺しようとする行為は、貴殿の自殺行為です。

貴殿の会員達は、貴殿の教えることが間違っていることを、はっきり教えてくれました。その第一は「反省する」ということを知らない

こと、第二は「正信」正しく信ずることについて、それはよいかわるいかの判断力を持たないこと、第三は禅定、瞑想の指導をしていな

いこと、

これらは、私が貴殿を批判した文章に書いたヌミノーゼ心理による盲信、狂信状態である。

真に信仰を求めて実践して悟りを得ようとする者は態度が謙虚でなければならない。貴殿の会員は見せかけは謙虚さを粧っていても、最

後には、本性を暴露した。

「私達は会長先生を守ることに生命をかけているんです。うちの会長を批判することは許しませんよ」半ば腰を浮かして顔を引きつらせ

ていう形相は、正しい信仰をする者の態度ではない。

貴社の会員が、貴殿を神として信ずることは会員達の自由であり、私が貴殿を批判することは、私の自由である。

貴殿の会員の言動は、創価学会の会員が、池田大作氏を守ろうとした言動と同じである。

東京で幸福の科学の会員で、会計の方を担当していたという人が私の会員になっている。その人が、貴会の集金状況について話をしてい

たが、貴殿が「金を出せば幸福になる」と説いていることは間違っている。

貴殿から東京ドームで、獅子奮迅菩薩として表彰された人が、貴会をやめて私の会にきている。

宗教家として、救いに金があるかどうかは、決定的に論争して置く価値ある問題である。

この一点だけでも貴殿の真意に問う価値がある。

貴殿が甲斐氏に「甲斐さん、早く園頭さんを私の許に連れてきなさい」と叫んでいるテープを私は持っているが、それは、貴殿が「仏弟

子よ集れ」といっていた自分のものである。。

私は貴殿をニセ釈迦だと思ったから、貴殿を批判した。

貴殿が先に私を名指してそういったから、私は「大川隆法はこう読め」を書いたのである。

私がそのことを貴殿の会員達にいったら、「うちの先生がそんなことをいわれたことはない」といい張る。

貴殿の会員達は、完全に判断力を失っている。それで、「君達のいうことは一貫性がない。部分だけを取って屁理屈をいう。そういう考

え方は「断見」とお釈迦さまがいわれて、断見に陥ち入ってはいけないといわれたことだといったが、断見の意味はわからなかったよう

である。

さらに重大なことは、貴殿が釈迦大如来であるのなら、インドをなつかしく思い出して、今までの間に、インドの仏蹟をたずねて行って

いる筈である。しかし貴殿はインドに何らの関心も示さない。カピラ、ルンビニー、竹林精舎、靈鷲山、ブッダガヤ、クシナガラ等なつ

かしい所が一ぱいある。私は既に十五回インドに行った。

私にいわれてあわててインドに行くようでは、貴殿がニセモノであることを自分で証明するようなものである。

私は貴殿が今になって、高橋信次先生を否定してしまったことが承知できないのである。

高橋先生の霊がいわせるといって「高橋信次霊言集」を書いたことは「あれはウソでした」ということにされるのか。

私は高橋先生を信ずる者としてこの点を徹底して貴殿と論争する。但し、高橋佳子氏を否定したことは正しい。

私に論争を挑まれて、貴殿の心は乱れに乱れているであろう。

最後に貴殿の会員は私に、「天狗だ」といった。私が天狗であるかどうか、貴殿と直接会って確かめたい。以上申し入れる。

六月二十四日

園頭 広周

大川隆法 殿

二伸 貴殿の会員達は、教養も常識もない野盗の集団である。二十二日、これから昼食をしようという時に「正法会のものですが、先生

にぜひ会いたいと青年達が来ていますが」と家内が言うから「うちの会員ならばよし」というので玄関に出た。私の顔を見るなり、私の

許しも得ないうちに「今日は上がらしてもらいます」とづかづかと上がり込んできた。礼を失っていると先の手紙に書いた。

貴殿の会員達は、貴殿が喜ぶようなウソの報告をするに決まっているから、私は本当のことを知らせる。もっと会員を教育したらどうで

すか。

私が貴殿をニセモノだというから、最後に私に「天狗だ」といった。しかも立ち上がって、ソファーに腰掛けている私を、目下に見てそ

ういう暴言を吐いた。これも年長者の私に対して、また、私は国際正法協会の会長ですよ。こうした年齢も地位も弁えない非常識な言動

をして帰って行った。

貴殿の会員達の言動を見たことは、これから上京して、早川和弘氏、関谷氏、その他貴会によって被害された人達、貴会を脱会した人達

の話しを聞くのに参考になる。

貴会の会員達は、会員数の多いことを以って、幸福の科学が正しいと主張しているが、会員の多少は問題ではない。貴会の会員達は冷静

に人の話しを聞くという態度でなかった、貴会の会員達が言ったことについて多くを答えず「それは違う」とだけ否定してきた。貴会の

会員によって説得されるほど私は愚かではない。

私は貴殿が、幸福の科学を設立される当初から見て来た。

それによって、ニセモノだ、霊言集は芝居だと判断した。

貴殿が釈迦大如来であり、人類の救世主で神があるというなら、一対一で私と会って、その権威を示してもらいたい。その結果、貴殿が

本当に釈迦大如来であると私が認めることが出来たら、私は貴殿の弟子になる。

会員を妨害に寄越さないで、早急に私と一対一で対決しなさい。その方が早く決着がつき混乱を起こさないですむ。

まず、貴殿は貴殿の会員が私に対して暴言を吐いたことを、貴殿は指導者として、責任者として、私に詫びるべきである。それが礼儀と

いうものである。貴殿は私よりも年少であり、宗教体験も短いから貴殿を貴殿という。

礼を正して、貴殿と一対一で話し合いをすることを申し入れます。

園頭 広周

大川隆法 殿

前略

私は幸福の科学に反対する者の意見を総合しているつもりで私は言う。

あなたが仏陀であることを私の前で説明してください。

その証明と、高橋信次先生を否定した理由を直接聞きたい。

私も高橋信次先生の後継者であることを任じ、それなりの会員がいるのであるから、簡単にあなたの言うことを信ずるわけにはゆきま

せん。

私の手紙は、安藤氏が見て取捨するということですが、思想の自由、表現の自由の下に、私は今後大川批判をしてゆきますからご承知

下さい。

六月二十九日

園頭 広周

大川隆法 殿

前略 「何れの礼が正しいか」という問題は、その法を説いた責任者同士が対決して決めるべき問題でありませぬ。

予定通りの日程を消化して二十八日帰宅しました。

参考のために、私が行動したことをお知らせします。

二十五日、高輪のホテルで創価学会を脱退した南条白山氏と、幸福の科学の脱会者関谷氏と会合、私より先に、私の部屋の隣りに部屋を

申込んだ男がいることで、急遽ホテルを変更し、申込んだ男を監視しました。

申込んだのは偽名、早速本名を調査、筆跡人相全部集めました。申込んだのは一名なのに、来たのは二名、一人は眼鏡を掛けて、一人

は眼鏡なし、隣室は私がいないのでうろたえていた。そして缶ジュースを一本のんで翌朝、朝食も取らずに七時二十分頃と、四十分頃と

別々にホテルをでた。

今、実名によって、警察に身許を調べさせている。

その状況を回りの者に話をしたら、幸福の科学関係の者だという意見が多かった。もし幸福の科学関係の者であったとしたら、その行為

こそが宗教家の行為ではなく、自らが邪教であることを証明するものであるから、会員にそういう行為をしないように注意される方がよ

い。私の周囲の者が、幸福の科学の会員らしいというので以上書いたが、幸福の科学の会員でなかったら失礼お許し頂きたい。

二十六日講演、私の時にはそうでなかったが、山崎正友先生が講演を始めたら、とたんに妨害電波が発信された。これは明らかに創価

学会の妨害とわかるから、池田大作氏に抗議する。

二十七日講談社の人と早川氏と会い、早川氏が貴殿をノイローゼだったかもしれないと書いた。そのことについて私の知っている限り

の情報を提供した。貴殿と父親の善川氏が高橋信次先生の話しを聞きに来ていたことを当時のG L A関西本部の幹部で知っている人がい

る。

甲斐通右氏、原田千裕氏、原久子氏は高橋信次先生健在の時は、重要視されていた人物ではなかった。その人達におだてられて、乗

せられたと私は見ている。

幸福の科学発足当初、貴殿の回りはほとんどG L A関係者だった。その関係者達、貴殿の正体がわかったそうで、幸福の科学をやめ

た。そのため「G L Aを斬る」といわざるを得なかったそうであろうが、高橋佳子さんを邪教のサタンとして斬ることはよかった、しか

し、高橋信次先生をまでニセモノといったことはいけなかった。貴殿の失敗であった。

貴殿の会員達が、貴殿を神として尊崇することはそれでよい。私は高橋信次先生の教えの後継者を以って任じているのであるから、そ

の高橋信次先生を無視されては、貴殿の会員が黙っておれないと同様に、私も黙っているわけにはゆかない。貴殿は回りの者に乗せられ

て釈迦大如来になり、エル・カンターレと称していられるのですが、そのように他人を偽っていられることは、心が苦しいことだと

思います。

私が貴殿に聞きたい点は、なぜ高橋先生がニセモノなのかということであります。

二十七日講談社の人と早川氏に会いました。

二人に聞いたかったことは、貴殿が仕掛けられた裁判がどのようになっているかということでした。

裁判官側では、貴会は危険な宗教団体だと見ているということであり、貴殿がノイローゼであったと書かれたときのことを早川氏から

も聞き、私も知っているだけのことを話して置きました。

宗教の問題を法律の次元へ引き下げて、そこで争うということは、自ら宗教の尊厳さを破壊することであり、邪教だといわれても仕方

がないでしょう。

貴会の行動が、創価学会に似ていることは、小沢氏を重用されたからでしょうが、小沢氏のことは山崎正友先生からよく聞いておりま

す。

部下会員を使って、色々させないで、貴殿が私と一対一で話合いされると、それで話はすむことです。

幸福の科学という組織は、貴殿にとって重荷にいると思いますし、また貴殿の父親善川三郎氏は、郷里に軟禁されている、それを指示

したのは貴殿の妻君であるという噂が流れていますが、注意された方がよいと思います。

私は貴殿を救う力を持っています。私の話を聞かれると心はラクになられると思います。ぜひ近いうちに私とお会い下さい。貴殿をお

だてる人はあっても親身になって味方になってくれる人のいないことを、貴殿はさびしく思っていると思います。

六月二十九日

園頭 広周

大川隆法 殿

前略 貴殿がニセモノであることを暴露するまで反対を続けます。通告しておきます。

神がおかしな扮装をすることはない。

神の救いに金がいらぬ。

釈迦の「八王道」を否定して「十正道」といい出したことが、正にニセ釈迦である証拠である。

「仏弟子よ集まれ」といって私に来てほしいといったのはどうなったのか、呼んでいるテープがありますよ。

貴殿の実家の近くに幸福の科学を脱会した人がいて、その人が実家の状況を知らせてくれています。

貴殿の父親は上京しても、貴殿の家には泊れない。それは嫁（大川きょう子）が悪いのだと、云い触らしているそうであるが、親を冷

遇するとは、それが神なのか。

貴殿の兄が精神異常で死んだと聞いているが、自分の身内の者も救えないで「神」であるとは、不遜も甚だしい。これから、貴殿の実

家の様子を問い合わせることにする。

貴殿のウソの本を真実と誤認して会員になる者はあっても、貴殿の良心は騒ぐだけで、心は安らかになっていない。

貴殿の会員は良心も反省も知らなかった、それで、宗教を教えていると云えるのか。

貴殿は安藤という男の甘言に動かされないで私の前に立ちなさい。しかし、言を左右して立てない筈である。立つか、立たないか、十

日以内に返事しなさい。返事できない時は、貴殿をニセモノだと認める。

六月三十日

園頭 広周

大川隆法 殿

安藤 殿

貴殿が大川隆法氏宛の親書を見られるというので置いて置きます。

私の疑問、質問に答えることができないことは、それこそ二セモノの証拠である。

私の主張を知ってもらうために、この手紙はコピーして、幸福の科学を脱会した人に見てもらうので了承下さい。

信ずるのも自由なら、疑うのも自由である。

私は私の自由に行動する。貴殿の指示を聞く必要はない。

前略 偽名でホテルに宿泊するのは、犯罪者のすることです。あなたともう一名を不審に見たので、あなた方の写真、人相、筆跡

を手に入れ、あなたの本名も調べました。

幸福の科学の安藤氏に命ぜられての行動と思います。私達が要求する資料をださない場合は、幸福の科学からの回し者と認めます。本状

の到着を入れて、十日以内に回答下さい。

私に会いたければ堂々と本名を名乗って、東京支部宛に申込んで下さい。

七月二日

園頭 広周

田辺 真 殿

個人指導をうけられるつもりなら、なぜ二名宿泊されたのですか、その理由もお知らせ下さい。

前略 七月二日午後の電話の件、最終結論について念を押します。

幸福の科学が自分の正当性を主張することは自由であること。

それに対して幸福の科学が非宗教的であると認める者達が反対を主張し、反対運動をすることも自由であること。我々が批判するのは、

批判であって、悪口、中傷ではないこと。要するにどちらも自由に主張し運動することを認め合うこと。だからして、我々の批判行動に

対してそれを悪口、中傷と受け取って、宗教の次元の問題を法律で解決しようとするようなことはしないこと。これを以て幸福の科学へ

の文章を出すことは中止します。

双方このことを確認し合ったことを認む。

七月二日

園頭 広周

安藤俊輔 殿

約束は破らないこと

前略 幸福の科学は、創価学会の体質と違うのではないかと思っていたのですが、その体質が同じであるのは、学会を脱会した小沢氏

が組織部長をやっていたせいだと思います。

今後、幸福の科学を脱会した人達の意見をまとめると、必ず幸福の科学の犯罪体質が出てくると思います。その意見を以て対抗し、一会

員を名誉毀損で脅す行為も、一会員で反対することはできないので、それを私がまとめます。

宗教の問題を法律の問題として解決しようとするのであれば、法務大臣を動かして、

池田大作を国会喚問に引っ張り出す工作をします。その前に政府の法務委員会に私が集めた情報を提供します。以上通告して置きます。

七月三日

園頭 広周

安藤俊輔 殿

幸福の科学が邪教であることを、幸福の科学自身が発表しています。所が幸福の科学は、即ち大川隆法は、自分が知っていることが間

違いであることを自分で気がついていない程、頭が悪いのであります。いわゆる馬鹿者だと見ているのに、「俺は世界一賢い」とわめい

ているのですから滑稽を通り越して、気狂いだといわざるを得ません。

安藤氏が、「新太陽の法」を読んでみて下さい。大川先生のすばらしいことがわかりますからと云ってしまし

たが、あんななものを読

む必要はない。

正しい宗教であるか否かの基準に照らして、判断してみればよいのです。宗教とは真理を教えるものです。真理には二つの条件があり

ます。この条件に合致しないものは真理ではありません。

このことをよく覚えて置いて下さい。

一 永遠不変性があるかどうか。

このことを釈尊は、「始めもよく、中頃もよく、終わりもよき教を説け」といわれました。くるくる教が変わるのは真理ではないのです。

太陽は神の心の現われですが、太陽が気謙気謙で、照ったり曇ったり、回転を早くしたり遅くしたりすることはない。

そのように神がつくられた法（真理）は一定不変で変わることはない。大川は釈迦大如来と称しながら、釈尊がいわれたことに反対のことをいっている。

先に高橋信次先生が説かれたことを利用していて、今は高橋先生を否定している。大川の霊界の十段界説は、高橋信次先生が「大生命の波動」に書かれたことの盗用であると私は見る。高橋信次先生の霊は、低い霊だと今はいっている、だが、先に「高橋信次霊言集」を出版した時は、高橋信次先生の霊は偉大だと思っていたからであろう。

前の「太陽の法」は、まちがっていたから今度「新太陽の法」をだしたということは、前はウソを正しいと思い、また人にもウソを正しいと思わせて本をよまさせていたということである。

即ち幸福の科学の会員は頭の弱い馬鹿な人達だったということになる。

そのうちに「新・太陽の法」はまちがいでしたとって「新々太陽の法」を出して世の人を欺くことになるであろう。

大川氏は独りで勝手に「釈迦大如来だ」「エル・カンターレだ」とわめいているだけで、それを実証するものは何もない。

私が大川氏に会ってニセモノであることを暴きたいというのは、釈尊はクシナガラで涅槃に入られる時、弟子達に予言されたことがある。それを聞いてみたいと思っている。

それを答えることはできない筈である。

「エル・カンターレ」というなら、エジプトに出ていたというなら、アガシャとアモン

の関係について質問する。これも答えられないであろう。

説くことがくるくる変わるの、ニセモノの証拠である。

二 真理の条件のもう一つは、「普遍妥当性」である。

幸福の科学の会員は、真理が真理である条件を知っていなかった。

大川氏を人類の救世主だといってみても外国人は信用しない。大川氏は親を粗末にして

いる。大川氏は、きょう子夫人の尻に敷かれているとは世間の人に、特に幸福の科学を

やめた人たちのいっているところである。これもどうであるか、大川きょう子夫人に会

って確かめてみたい。

ニセモノだから、それがばれるのがこわいから、私に会わないし、また側近が会わせ

ないのである。

幸福の科学の会員にもっと真理とは何かを勉強させなさい。

なんなら私がそちらの事務所に行って話をしてもよろしいです。

幸福の科学の人々のために「今なぜ正法か」を書いています。関谷さんに読ましてあ

ります。

園頭 広周

安藤 様

幸福の科学は、創価学会よりタチが悪い。

関谷さんから知らせてきたから通知する。

裁判にするならしなさい。

私が関谷さんの証人に立つ。そして、元創価学会顧問弁護士山崎正友先生を弁護につける。

私は今、創価学会、幸福の科学を脱会した人達の全国組織をつくって対抗するための準備中である。

私の質問にこたえられるように準備して置きなさい。

幸福の科学の横暴は、無視するわけにはゆかない。徹底してやる。

貴殿は、私にいつてくれるなどといったから手紙を出さないことにしていた。その代り、私が幸福の科学につい

て、色々いうことにも、

貴殿は文句をつけないという約束だった。

しかし、弱い者いじめをするのを見てはおれない。

講談社に対する裁判もみな幸福の科学のマケだったじゃないか。

これ以上、関谷さんはじめ幸福の科学を脱会した人達を裁判にかけると脅すなら、法務大臣にいい、文部大臣にいい、幸福の科学の

暴走を法的に取り締まってもらう。

私のことをウソだと思えば、やんなさい。

徹底して私はやる。文部大臣に幸福の科学の宗教法人資格を取り消すように運動する。

全国の幸福の科学脱会者の署名を取って文部大臣に請願する。

関谷氏がやることに對しても、貴殿らは文句をつけるな、

宗教の問題を、次元の低い裁判の問題で解決しようという考えが、大体非宗教的である。

堂々と我々と宗教論争をしなさい、

東京ドームで大川隆法の仮装行列をしないで、私と関谷さんとを相手に、宗教論争をしなさい。

幸福の科学は金を持っているから、そちらでドームを借りて、来年三月頃、宗教論争をやりましょう。

宗教論争をやるかやらないか、今年十月までに回答をしなさい。

もし十月末までに回答しない場合は、幸福の科学大川隆法は稀代のペテン師、宗教詐欺漢、宗教ごろつき、宗教やくざであったものと

認む。

今月中に「宗教やくざ池田大作論」の小冊子を出版するので（目下印刷中）それを見られたい。

この冊子は全国会議員にも配布するのである。

返事を待つ、腹を据えて私にかかってきなさい。

八月五日

園頭 広周

安藤俊輔 殿

前略 幸福の科学の抜粋が関谷氏から送られて来ました。「方便の時代は終わった」を見て高橋信次先生の名を利用し、G L Aの元会員

を利用して来た。あなたのこの抜粋だけで、あなたがニセモノであることを立証できます。許せないのは、私をニセモノだと書いている

ことです。

私はあなた宛に何通も「親展」の手紙をだしました。その手紙は、安藤氏によって開封されあなたの眼には届いていないものと思われ

ます。安藤氏との約束により、あなたが私のことを書かれるのは自由であり、また私があなたのことを書くのも自由であり、反対記事を

書かれたからといって、すぐ名誉毀損で裁判にするという汚い手を使いなさんなと書いてあります。

関谷さんをはじめ、全国の幸福の科学脱会者を総動員して、あなたに反論します。

あなたが神の代理者であるというなら、自分で私の前を出さない。私がニセモノでないかを検証する。

あなたへの「親書」を安藤氏に開封さしてというような姑息な手段はやめなさい。

あなたの名前で回答しなさい。

問い 一

神がなぜ、まちがった人の説を利用する必要があるのか。

まちがった人の名を利用して人を集めて置いたということは、自分の名では誰も集まる人はいなかったということで、それこそ神ではな

かったということの証明ではないのか。

高橋信次先生の名を利用して、自分の名を出さなかった理由を問う。

二 あなたは私をニセモノと書いた。

私がニセモノであることの証明を直接あなたの口から聞いて置きたい。面接日を知らされたい。

この二つの問いに対する答えが九月十日までにだされない場合は、あなたをニセモノと認める。

八月十日

園頭 広周

大川隆法 殿

安藤氏よ、あなたはこの手紙を大川隆法氏に見せて大川氏の直筆で私に返事ください。

前略 幸福の科学大川隆法は紳士的ではない、やくざである。

安藤氏と電話で、「幸福の科学は私のことに関与しない代りに、私もまた大川隆法宛親書は出さない」と約束した。

その約束を破って、幸福の科学に私のことを書いた。そしていきなり裁判へ持ち込んだ。

「殴りません 殴りません」といっておいて、いきなり殴ってきたのと同じではないのか。

こうなったら仕方がないから、弁護士を立てて堂々と争うことにする。そうして幸福の科学を倒すまでつづけるから承知いただきました

い。

おとなしくしていようと思っていたが、全国の幸福の科学脱会者を結集して対抗する。

幸福の科学打倒の手はゆるめない。

九月一日

園頭 広周

大川隆法 殿

私を裁判に持って行ったのは失敗だったと気づくであろう。

君を法廷に引っ張り出すから承知して置かれない。

通 告 書

前略 通告人宗教法人幸福の科学（以下「通告人」という）を代表し、被通告人園頭広周殿（以下「被通告人」という）に対し、次ぎの

とおり通告する。

被通告人は、平成六年五月二十七日付書簡、同月一〇日付書簡、同月十三日付書簡、同月十五日付書簡及び同月十六日付書簡計六通

を、通告人大川隆法主宰ならびに大川きょう子主宰補佐に対して送付した。

右一連の書簡で、非通告人は大川隆法主宰に対して面談を要求し「回答なき場合は二セモノと認定する」「講談社と連絡して貴殿に対

抗する」等と述べるが、通告人公報局は、この要求に応ずる意思は全くない。これ以上、脅迫的言辞を弄した書簡を送付することは中止

されたい。

そもそも被通告人は、「『大川隆法』はこう読め」、「続『大川隆法』はこう読め」及び「大川隆法は仏陀ではない」等の通告人等に

関する書簡を出版している（いずれも平成三年発刊）。そして、右書簡中には名誉毀損に該当する記述が多数見られる。

従って本通告書にも係わらず、不当な行為を反復する場合には脅迫的書簡のみならず、右一連の書籍の名誉毀損を含めて、しかるべき

法的措置を検討せざるを得ないことを予め警告しておく。

早々

平成六年六月二十二日

東京都千代田区紀尾井町三番一二号

紀尾井町ビル四階

通告人宗教法人幸福の科学

広報局部長 安藤俊輔

福岡県大野城市下大利益四丁目九番十四号

被通告人 園頭広周殿

この郵便物は平成六年六月二十二日第八六四一六号書留

内容証明郵便物として差し出したことを証明します。

麹町郵便局長

Home

Home

正法と天台小止観

その生き方

『天台小止観（てんだいしょうしかん）』とは

中国の天台大師（智ぎ）は、お釈迦様であり高橋信次師の分身である。

（生まれ変わりの項を参照下さい）

「天台智ぎ」が開いた天台山へ、釈迦の分身の最澄（生まれ変わりの項を参照）が、仏教を学ぶために渡唐したのも不思議だが、天台

智ぎの高弟である浄弁（じょうべん）が天台智ぎの説法を書き記したものが『天台小止観』である。

この天台小止観は釈迦の分身の天台大師が、座禅止観、禅定をどのようにするか分かり易く説かれたマトメであり、正法そのものの

教えと言える。

天台智ぎには陳鍼（ちんちえん）という勇猛にして大將軍の兄がいた。陳將軍は建業の都を落として程なく病に伏せてしまった。

「戦に勝ってもこの虚しい心の空白は何ナノだろう。弟の智ぎに直ぐにでも会って話しを聞きたい。」と使いをよこしたが、数ヶ月

前に天台山に籠（こ）もられてしまいましたという。

そんなある日、天台智ぎに教えを受けたという、みすばらしい身なりだが智徳の有りそうな老僧が訪ねて来た。名を浄弁と言った。

この子細を一通り聞くと、「天台禪師（智ぎ）様に来て頂くのが一番よいと思いますが、それでは時間がかかり過ぎますからこれ

をお読み下さいと、二巻の巻物を出して次のように言った。

「これは天台様にお聞きした講義を残らず記したものです。これを実行して下されば必ずや今のお苦しみは消えてなくなりましょう。

ここに書かれたものを読むだけでなく実際に身を持って実行していただきたいのです。

死んだ積もりでとか死ぬ気になってとかいう程度ではなく、今の自分はもう死んでしまったのだと思い切るのです。死んでしまえば

今の自分はこの世には存在しないのですから、他人のように完全に生き方を変えるのでございます。」と、深く頭を下げて去って行

くのでした。

砂地に水が染み入るように受け止めた陳將軍はそれを実行すると、病も治り名君と仰がれるように成ったというのである。

現代のように混迷した時代にあっては、運命を変え自分を変えて病気を治すためには、一旦、自分は死んで、他人に生まれ変わって

人生をやり直すのが最大、最強のコツであり極意で、早道である。

この『天台小止観』は、巷では座禅の指導書のように受け止められているが、そうではなく人生の指南書という意味に捉(とら)え

て、我が師、園頭広周師の著書『宇宙即我に至る道(下)座禅の作法の原点『天台小止観』の解説』正法出版社を参考にして分かり

易く解説したい。

第一章 禅定、座禅を始める前の準備

「禅定、瞑想、座禅をするための五つの心の準備」

心を安らかにすること

着るもの食べるもの等に、足ることを知って感謝の心を持つこと

心を安らかにできる環境を選ぶこと

今までのことをよく反省して、二度と繰り返さないと決心して素直な心を持つこと

良い人間関係をつくり、良い指導者を得ること

第一条「心に不調和を来たさないように、心を安らかにすること」

禅定、瞑想、座禅をするには、憎んだり、怨んだり、悲しんだり、怒りの心やイライラなどの不調和な心で行うと悪霊に心が同通し

て、憑依され危険である。座禅をやっている人が、「禅病」といってノイローゼになったり、精神統一の行をやっている人が精神病

になるのは、心を汚いままでやるからである。

高橋信次師は、昭和四十八年三月に園頭広周師に次のように指導している。

「どんなことがあっても、自分で自分の心に歪（ひずみ）をつくらないようにしなさい」ということだった。心を安らかにし調和さ

せるにはこれ以外にはないのである。

「心を安らかにできる人の、心の三段階」

下段界の人

心を安らかにしたいという心はあっても、次から次ぎへと過ちを繰り返すという、どうにも救いがたい人。

中段界の人

大きな過ちをすることはないが、小さなことに心を乱して暗くしてしまう人。こういう人は「もう二度と間違いは繰り返さない」と

いう反省懺悔をして、明るく禅定、瞑想、座禅をすることである。

3、上段界の人

生まれつき明るく素直で、親不孝をせず目上の人を敬い、深い慈愛の心で総ての人の幸せを祈り、すべてを愛する心を持つ人。

「釈迦が教える心の持ち方の段階」

心の持ち方のすぐれた人に二種類ある。一つは、生まれながらにして法を守り悪をなさない人。もう一つは、もし、まちがっても悪

びれずに、すぐに心の底から反省できる人である。

Home

「反省懺悔をするための十ヶ条」

すべては自分の心に原因があるのであって、自分が運命の主人公と知らねばならない。

現在の暗い安らぎのない心のままでは将来どうなるであろうと、不安と恐れが心の奥底にある筈である。その心に恐れを感

じて、早くその心をなくすようにせよ。

生まれてからのことを年の順に静かに考えていくと、父母に、兄弟姉妹に、友達に、先生に――と反省していき、深く

「すまなかった」という思いを起こすこと。

では、どうしたら心を安らかにできるか、その方法を求めなさい。それは、良い指導者から法を学んで、教えられ通りに

実践することである。

人には誰しも、誰にも言えない心の秘密があるものである。そういうことでも残らずさらけ出してしまいなさい。懺悔は

人の面前でするものではない。神の前に、偽りのない心で告白すればよい。また、偽りのない心で紙に書いて、誰も見て

いないところで焼いてしまってもよい。潜在意識の中に隠された罪悪感、劣等感を吐き出してしまったら、それからは生

まれ変わって明るく生きるのである。

「もう二度としない」と誓った人が、なぜ同じ過ちを犯すのかといえ、
「もう少し続けたい」という捨て切れない思い

があ

るからである。その未練タップリな心を切り捨てて、心を軽く明るくすることである。

心の整理がきれいにできたなら、次は正法を実践してゆくことである。幸福は、心の安らかさは、大宇宙の意思即ち神の

み心によってつくられた法に順(したが)ったときにはじめて得られるものである。

法を実践した結果、心の安らかさが得られたら慈悲の心が起こって、多くの人を救わずにはおれないという心が自然に起

こってくる筈である。全世界の人間が一人残らず幸せにならなければ、自分自身の幸せもないということを知らなければ

ならないのである。

宇宙創造の神に感謝し、神と表裏一体となって、神がつくられた法を伝えてくださる「仏陀（観自在者）」に感謝しなけ

ればいけない。

罪というものを、いつまでもつかんで持っていてはいけない。もう二度と繰り返さないと心から反省したら、罪を心から

放しなさい。そうすれば自然に罪は消える。罪は永遠の实在ではない。罪は非实在であるからこそ、そのうちに消えるの

である。实在とは永遠に存在して、滅することも消すこともできないものをいう。罪が絶対に許されないものなら、人間

はとうの昔に絶滅していただろう。「反省は神の慈悲である」と教えた高橋信次師の言葉を思い出して欲しい。心からの

反省は、罪をも許すのである。

この十カ条を実行しようと思われるなら、体を清潔にし、洗ったサッパリした衣服を着て、環境を整え楽な姿勢で全身の力を

抜き、神の生命に生かされている自分を自覚することである。このように毎日少しづつ反省懺悔を続けていると必ず大きな不安、

罪、苦しみも跡形もなく消えてしまうのである。そうすると、ぐっすり眠れ心も軽く、身も軽くまるで爽やかになり、禅定の奥義で

ある

「宇宙即我」の境地に近づいていくことを自覚できるようになり、これが一切の罪と迷いをなくする唯一の方法である。

「幸福」とは、足ることを知って、すべてに感謝できる心の状態といえる。

「幸福になるための奥義」

豊かになりたいなら、たとえ今は極貧の状態でも一つなくとも、豊かな状態をアリアリと、はっきりと心の中に描いて、「それを

既に受けたり」と信じて、すべてに感謝して不平不足の思いを捨てて、一所懸命にただもうがむしゃらに働くことである。こうする

ことによって必ず運命は開けてゆくのである。

第二条「着るもの、食べるものに、足ることを知って感謝の心を持つこと」

「着るもの」

結婚式、葬式に着るもの

公式の会合、集会に着ていくもの

日常の仕事着、寝間着と肌着

現代においては、この三つを最低限に持てばよいということになる。身を飾りたい、ブランドものを身につけたいという心では、

こんどは何を着ろうかと心が乱れて、神理を求めるなどできない相談である。

「食べ物」

野生の木の実や果物や草を食べて生活をする

托鉢。

衣食住の執着を持たないように托鉢の生活をする。

乞食（こつじき）。

自分から求めることなく、与えられたもので満足して生活をする。

「神理を求める宗教家として、してはならないこと」

自分でも確信の持てない薬草、木の実、草の根などを売りつけて歩くことをしてはならない。これを下口食（げくじき）

という。

星占い、易、手相、人相、姓名判断等を行うことをしてはならない。これを仰口食（ぎょうくじ

き)という。

吉凶を占い、予言、まじない、祈とうをして謝礼をもらうことをしてはならない。これを四維口食(しいくじき)という。

金持ちや地位のある人を訪問し、こびへつらったり、金をおどし取ったり、使い走りでお金をもらうことをしてはならない。

これを方口食(ほうくじき)という。

このように、着るもの食べるものは肉体を健全に保てれば十分なのだから、悟りを開くための修行に邪魔にならぬように、着る

ものと食べるものとの調和をよく考えなさいということである。

第三条「心を波立たせないで安らかになるような環境を選ぶこと」

「禅定、座禅をするには閑静な場所を選ばなければならない」

日常生活にわずらわされない時間を持つことを「閑」という。「閑」とは心の静けさをいうのである。忙しく仕事をしていても

心が静かであれば、これも閑である。

「静」とは、音のしない静かな場所、またはその状態である。「随所作主(ずいしよさしゅ)」という言葉がある。これは、

いつでもどこでも自分が主人公になって自主性、主体性を失わないという心境になることをいう。

「禅定、座禅の場所」

深山。人気のない所

人の住んでいる所から十キロ位離れた所で、農家の牛の泣き声も聞こえない所

人里からずっと離れて、一緒に修行しようとする人達が集まっている静かな道場。

第四条「今までのことをよく反省して二度としないと決心すること」

「反省のための四つの考え方」

1、「人間は何のために生きているのか」と、じっくりと考えてみよう。

世間一般の人達と付き合いもやめて「自分とは何ぞや」と、自分を見詰めてみよう。

占い、手相、祈とう、娯楽、趣味、病気治療法、運動、読み書き計算等一切をやめてみよう。

学問、学説にこだわって議論をたたかわせることをやめて、話を聞いたりお経を読むこともやめて自分だけを見つ

めてみなさい。色々なことに心が引っかかっていると、心が乱れて禅定、座禅が心安らかにできるものではないの

で、心の整理が必要である。

第五条「よい人間関係をつくり、よい指導者を得ること」

「三つの必要な人間関係」

その人がよく修行できるように陰から見守ってくれる人。

お互いに助け合い励ましあって行ける優しい明るい友達を持ちなさい。

正しく法を教えてくださいなさい。地位、名誉、金銭を求めず、ただ、人が幸せになるのを無上の喜びとする人

である。

[Home](#)

以上が禅定、座禅を始める前の準備の五ヶ条である。

五官五欲を統制する

「正しい欲望はよい」

禅定をするためには、安らかになろうとする心を乱すもとになる、五官によって起こる欲望をコントロールしなければならない。

五官（眼、耳、鼻、舌、身）によって起こる欲望とは、眼で見たものによって、耳で聞いたものによって、鼻で嗅いだものに

よって、口で味わったものによって、体で触れたものによって起こる欲望をいうが、肉体の健康を維持するために必要な正しい欲望は許さ

れるが、それが過度になって調和を乱すようでは悪となる。

色欲（性欲）

美人とか、美男子とかにとらわれて心を乱すことが多いものだが、形的美醜に大事な心を汚すことは愚かなことである。夫婦間

の中道の性欲は善であるが、性欲も過ぎれば悪となる。

声欲

楽器のリズム、男女の歌声、朗詠、ほめ言葉等の音声に酔っては本当の禅定、座禅、真の信仰はできない。

香欲

香水のいい匂い、花のいいニオイなどの香欲は、禅定（ぜんじょう）に必要なことである。

4、味欲

甘いとか辛いとか、料理の食欲をそそる味とかは、悟りには関係ない。

触欲

異性の肌に 触れたい等の過度の欲望は、神理を求める道を失ってしまうもの

このように五官の欲望はその味を一度味わうと、ますます激しく求めがちだが、この『天台小止観』には、これを「五欲を

訶（か）す」とあり、私たちは欲望のままに生きるのではなく、五欲をコントロール、統制しなければならないのである。

このように禅定をするには、呼吸を整え、呼吸を数えて心を静かにして反省をして禅定をすれば、そうすれば自然に一切の

煩悩はなくなり、心はやすらかになっていくのである。

心を暗くする原因となっているものを捨てよ

<心を暗くする五つの原因>

貪欲

怒り

惰眠（だみん）

くよくよ後悔する

疑い

足りることを知らぬ欲望を捨てよ

禅定で得る喜びは、欲望の喜びとは次元が違う大きな喜びである。貪欲は人間をダメにする最たるもの。

怒りの心を捨てよ。

怒りは人間を苦しめ悩ますもと。怒りは血圧を高め、動悸、息切れのもと。

寝過ぎる睡眠の害を捨てよ。

心がいつもフラフラしているのを「睡」といい、いつもダラダラ横になって眠っているのを「眠」という。なにもしないで

無駄に時間を過ごすのは一番いけないことである。目覚めて起きなければならない。

くよくよ後悔することをやめよ。

身体のフラフラ

やたらと出歩き冗談ばかりいって、座っていても体をゆすってじっと我慢のできない人。

口のフラフラ

知ったかぶりをして、いつも議論をしてばかりで鼻歌を口ずさみ、喋ってばかりいる人。

心のフラフラ

考えることに信念がなく、いつもくるくる考えが変わる人。

このように、身も心もいつもフラフラしているようでは神理を求めることなど到底できないことである

クヨクヨすることには二種類の人がいる。

その時は夢中で「よい」と思っている後になると必ずクヨクヨ後悔する人。

以前に大きな罪を犯した人が、いつも罪悪感にクヨクヨと責められて、その苦しいことは、矢が深く刺さって抜くことが

できないことと同じようなものである。

後悔するというのも二通りある。

してはいけないことをいつも行い、しなければならぬことをしないで、いつも後悔ばかりする人。そういう人は、悪か

ったと気がついたら、もう二度とそのようなことはしないぞと心の底から決心すればよく、いつまでもクヨクヨしない

ことだ。

もう一つは、なにをやっても後悔するということをしないから、してはいけないことを平気で行い、いろんな悪いことを

いっぱいやって最後に後悔するタイプの人。

第五 疑いを棄てよ

何でも疑わなければ気がすまない人がある。宝の山に入っても、素直に手にとって見なければ宝はわからない。神理というもの

は心でとるものであるから、心の中で疑ってばかりいて信ずる心が少しもなかったら、どんなに素晴らしい神理も心の中には入ってこない。

禅定（瞑想）の妨げになる三つの疑い

自分を疑う

人間は過去の輪廻転生（生まれ変わり死に変わり）の中で、どんな善根を積んでいるのかわからないのであるから、いや、みな

善根を必ず積んできているからこそ、こうしてまた人間として生まれてきている。だから自分を馬鹿にして疑ってはいけないのである

指導者を疑う

たとえ、その指導者が、とるに足らない人であったとしても、その指導してくれる内容が法にかなっていたら、自分が心を正し

くして聞けばよいのである。

法を疑う

正しい法（神理）を聞いても、自分の心の尺度で判断して疑ってばかりでは、神理を求めることなど到底できないことである。

絶対の神理についてだけは疑うことなく、すなおに信じて従っていったほうが賢明である。

心の三毒

むさぼる毒（足ることを知らぬ欲望）

怒る毒

愚痴の毒

肉体と精神の調和

肉体と精神との調和法には五つある。

食べ物のバランス

睡眠のバランス

身体の調整

呼吸の調節

心の調整

1、食べ物のバランス

食べ過ぎず、極端に少食にならずほどほどに

2、睡眠のバランス

眠りも、多すぎても少なすぎてもいけない。グッスリ眠るには、悩みの原因をつくらぬこと。悩み等 のとらわれの心があると

トロトロして眠れない。

[Home](#)

親愛なるお兄様へ

大病とのこと、ご心痛と思います。

病気は自分だけでなく、自分と関係ある周辺の人たちへ反省を促す、人類創生以来人間に付きまとして来た実に厄介もののようです。

病気は、生き方の「原因と結果」、つまり悪因悪果の最たるもので、無慈悲にももう手遅れということは誰にも起こりうることです。

そうは言ったものの、それはそうなったで、一るの望みをつないでどうにか生き長らえようと思うのも、人の子であればこれまた

当然と思います。

かって、二十年ほど前の厳寒、私が最初の高血圧性脳出血のときは雪こそ降っていませんでしたが、凍えるような戸外での転八倒

のものがきは、生への執着はこれ程までにと恥ずかしくて誰にも言えません。

もうすでに子供も育て上げておられるとは言え、途半ばでのお兄様の大病は、心中は如何かと想いを馳せては泣きました。

これまで、僕はお兄様から多くのことを学びました。

電気機械いじりは勿論のこと、今でこそ言語障害のために歌もうまく唄えませんが、お兄様に似て歌はかなりなものでした。

そして、大学ではお兄様の後を追ってハワイアン部ではギターを弾き、先では他の音楽部の司会専門で鳴らし、いつもお兄様を

追っかけていました。

そのようなことで、たまたま甥たちが遊びに来ると僕の口癖は、「叔父さんはお前たちのお父さんのした通りのことをして歩いて

来た」というもので、そのたびに尊敬の念を表したものです。

ただ、お兄様と少し違う点はと云えば、僕が医業のかたわらに始めた九軒の夜の商売ではお酒もほどほどに飲みました。

もっとも、倒れた原因は夜更かしと食べ過ぎによる九十キロの肥満が原因でしたが、その証拠には現在も缶ビールを一週間に1、

2缶を飲む程度に過ぎません。体重も六十キロをはさんで一、二キロの増減を維持しています。

でも、かつてのお兄様は酒に浴（あ）びるという形容がピッタリで本当に心配しました。

あの当時は僕に勇気がなかったのか真の愛がなかったのか、実弟としてお兄様に対して注意や意見をしなかったことを今更ながら

悔やまれます。

しかし、それからお兄様は完全に反省され、すでに四年もの間一滴の酒も飲まれていないという事実が金字塔の如く打ち立てられて

いるので、いまさら云っても始まりませんからそれはさておいて、僕がこれまでに学んできた、高橋信次先生や園頭広周先生が

説かれた「正法」による病気の克服法から始まって、あの世の霊界講義まで、わかり易く述べてみたいと思います。

世の中の大病に苦しむ人達の座右の書ともなるべく、コマーシャルベースに乗った居丈高のたてまえ論ではなく、無私の兄弟愛

から始まった本音の教書になるよう一所懸命に努めます。

平成十一年九月十四日

八起正法（やおきまさのり）

www.shoho.com/

病気の原因

1、 身体や内臓の酷使が原因で病気になる。

体や内臓は、休息と栄養と健全な精神がエネルギーです。

休息と栄養はお分かりと思いますから、なぜ健全な精神が大事かと言えば、例えばくよくよタイプの人は、潰瘍に悩まされます。

外から見えない内臓なら胃潰瘍もその一つで、見える場所なら口内炎の潰瘍もそうです。

クヨクヨして、全てけしからんとする怒りの心が、自分の体の一部を破壊し食っている状態が潰瘍と思います。

怒りは破壊です。怒ると物を壊すことでも、次のことからでもわかります。

それは怒る人の呼気を金魚鉢へ入れると、金魚は死んでしまうのです。

心の持ち方が病気の元と医学界でも証明されてきて、極端な人は「心が病気をつくる」とも主張します。

高血圧病を「生活習慣病」という言葉の概念もその表れで、毎日の生活習慣、つまり食べ物、生活の在り方、心の在り方が原因で

起こる病気というわけです。これは一昔前にはとても考えられませんでした。

心の在り方が大事と述べましたが、それではどの心がいけないか説明します。それは「愚痴」、「怒り」、「足ることを知らない

欲望」の心です。これを心の三大悪と呼んでいます。

最低この三つを日常生活の中で抜けばよいということです。

ちなみに愚痴人間を霊視すると、体から灰色のスモッグが出ています。

怒った人は真っ赤な炎のような色ですし、足ることを知らない欲望人間は黒い色を発しています。

また、恋に燃える人はピンク色がその人の体から出ているといいますし、穏やかで心優しい人は淡いゴールドカラー（純金色）を発して

います

これらをオーラー（後光）とって、心の目（心眼）で見ると、その人の心の状態は一目瞭然です。

植物細胞を利用したオーラー測定器を面接に応用すると、夢のような採用時代が来るとは高橋信次先生の予告です。

「企業は人なり」といいますが、どこも立派な人材が欲しいのです。こうなると応募者はごまかせません。不平不満の愚痴人間や

破壊と闘争の怒り人間はどこもお断りですから。

心の在り方を述べたところで本題にもどります。

お兄様の大病を整理すると、飲みすぎてそれに関係する内臓が「もうあかん」とお手上げの状態と思います。お酒は四年も飲ん

でられないので、栄養と休息はもう十分と思われ、次の段階へ進みます。

細胞には心がある

内臓も細胞も意識を持っています。意識（心）が有るので、言って聞かせるとわかるのです。

「（内臓名）よ、あなたはこれまで私によく協力しました。なのに、私の心得違いであなたを酷使してゴメンナサイ」と

心から非を詫げるのです。

「反省」とは、二度と間違いをしないことです。

何度も間違いを繰り返すのを「後悔」といいます。

それがたとえ極悪非道でも、二度とやるもんかと決意して、本当に繰り返さなければそれでよいのです。これは明るい心の世界

です。

でも、何度も繰り返す後悔は暗い世界です。反省と後悔は次元がまったく違います。また、心の次元と法律の次元は根底から違い

ます。

誰れ一人として間違いを犯さない者はいないので、心からの反省は罪をも許されるのです。

「原因と結果の法則によって、結果が人類の上に全部現れたら、もうとっくの昔に人類は死に絶えているでしょう。なぜなら悪を

なさない人は一人もいないからです。だから反省は神の慈悲なのです」、と、高橋信次先生は言葉を残しておられます。

漫然としてこれまではわからなかった救いの原理を、かつて釈迦といわれた人であり、その前はエルランティーであった高橋先生

は人類に示されたのです。

2、悪霊が憑（つ）いて病気になる。

悪霊（あくりょう）とか物の怪（もののけ）が憑（つ）くという意味は、人間の霊や動物の霊がその人をコントロールするという

ことです。コントロールできるからには同類と言うことです。波長が合わなければどうにもできません

人間や動物は死ぬと、霊魂（れいこん）となって、次元の違うあの世で暮らします。

この世で悪人は死んでも悪人です。懺悔、反省して心を入れ替えなければ悪人のままです。何もしないでは、悪人が善人に突然代

わることはありません。

悪い心を持った人が亡くなると地獄霊とか悪霊や暗い霊になります。

それでは悪霊とか地獄霊について述べます。

悪霊、地獄霊、暗い霊の心の状態

自分の利益のためなら他人がどんなに苦しんでも平気な心。人を争わせて喜ぶ心。金銭欲の異常に強い人。見境なく性欲に狂う

人。ひどく悲しむ人。ひどく恨む人。戦争の計画者。狂宗教家など悪の段階はさまざまです。これらの霊がこの世の人に憑（つ）

いて、病気を引き起こすのです。

例えば、ひどく恨む人が大病で亡くなったとします。

生前、反省の習慣のなかった人ですから、あの世でもこの世と同じようにひどく恨み続けます。このような状態の霊ですから、ま

さにここでいう悪霊とか地獄霊そのものです。ともかく、ここに悪霊がいた。

また、悪霊と同じようにひどく恨む人がこの世にいたとします。或るキッカケ（墓場、陰気な場所、滝場、救急外科系病院、

火葬場、自殺の名所、もうどこでもいいのですが、あまり霊域の良くない所を訪ねること）から、この人が悪霊と心が同通（類は

友を呼ぶ、同類の法則）すると、この世の人が悪霊と同じ病名の大病をすることがあります。

もちろん、たとえそこにどんな悪霊がいても同類にならなければ問題は絶対に起こりません。不必要に恐れることはありません

が、むやみに近づかない方が良くと思います。

霊的な病気の治し方

この場合は霊障ですから、憑（つ）いている霊と正反対の恨む心を捨てて、明るくさわやかな生き方をすると、憑いている霊も

居心地が悪いものですから離れます。これは悪霊の反省ともなり、自分だけでなく悪霊の救済にもつながるので

生き方を変え始めると、霊にとっても居場所がなくなるので必死に抵抗します。でも、負けずに正しい生き方を続けるのです。

先に「この場合は霊障ですから」と述べましたが、霊障なら霊能者とか祈祷師に頼めばよいと短絡的に考えがちです。でも、なぜ

これらが危険かを述べます。

拝み屋さんの除霊の危険性

霊能者とか祈祷師といわれる人達の多くが、滝にかかったり行、業によって靈感を得ています。極論すれば悪霊や動物霊の協力に

よって、霊能を現わしていると考えられるからです。いろいろな霊能者の著書を読み漁（あさ）ってみると、ひどいのは、靈感を

得るために暗くした部屋で、カガミに自分の怖い顔を映して靈感を得た等とあります。カガミに自分の怖い顔とはゾッとさせ

んか。霊能者は正しく見る必要があります

サテ、 拝み屋さんの除霊の特徴は、霊能者や祈祷師に憑いている強いのが、悩める人の弱い悪霊を追い散らして一時旨くいっ

たように見えます。悪霊の世界は弱肉強食の非情な世界ですから、そのうちに祈祷師についている強い悪霊の子分や配下がついて、

前よりもっとひどくなったということが起こります。

そしてもう一つは、拝み屋さんは霊能中心になって正しい真理、神理を教える力がないので、依頼者の心を変えることができな

いからです

3、 過去世（生）の心の傾向性が原因で病気になる。

正法は魂の永遠性を説きます。その表れが、生まれ変わり死に変わりする輪廻転生（りんねてんしょう、または転生輪廻）です。

このように人は過去この地上に生まれた経験があるから、その当時に生まれていた時代の心の傾向性（カルマ、業）によって、

反省により劇的に心が変わらなかった場合は、現世でも過去世（過去生）と同じ病気をすることがあるということです。

わかり易く言えば、同じ大病を過去生まれていたときに経験しているかもしれないと言っています。

過去に生まれていたなんてまったく記憶もないのに、突然輪廻論を持ち出されては、にわかには信じられないのも当然です。

こういうところが、宗教は非科学と決め付ける根拠となるのでしょうか。

その行き着くところが「頭から信じなさい。信じる者は救われる」というところに落ち着くのです。

だから知識人といわれる人達から宗教が白い目で見られるというのも、あながち的を外れいるとも言えず、それどころかそ

の辺の事情を端的に物語っていると思います。

高橋先生はコンピューター端末機器の製作会社の経営者として、四百もの特許を持たれた科学者でしたから、非科学を排除

して現代の人にどう納得させようかと腐心されて、何百、何千もの聴衆者の前で、登壇者に当時の言葉を喋らせ語らせるとい

うことを自由自在に駆使されたのです。

現在もその講演ビデオテープ（お兄様もよくご存知のUマチック）は多く残されており、なぜか僕の許に多く集まって来たもの

ですから、それを基に数冊の本を出すキッカケになりました。

それというのも、僕は二十年ほど前に脳出血で倒れたときにはじめて正法に出会いますが、今は亡きお姉様が先に正法に触れ、

姪を通して本や録音テープを持たしたのです。病床では貪るように本を読み講演テープを聴きました。

ところが、お姉様が余りにも強引に周りへ正法を勧めたものですから、その反動から皆ソッポを向きました。

お兄様も、またご多分に漏れず、受け入れてはもらえませんでした。

お兄様も一度は園頭広周先生の講演会に参加されても、偶然にも先生は飲酒について話されたようで、怒ってそれっきりでした。

また、別の講演会で或る人は黒板に動物霊と書かれて、これまた心を閉ざされました。

でも、僕は「兄貴は絶対に正法に縁のある人」と、これまで家内に言い続けました。その理由を述べます。

僕は何度も夢を見ていますが、その一つは十何年か前に見たもので、起きてすぐ家内に話しました。

時代はいつかわかりませんが、高橋信次先生の話があっている二階へ踏み段を駆け上って行って、皆なに混じってお兄様も一緒に

話を聴うものでした。

今なおその情景が昨日のこのように鮮明なのです。

そしてもう一つの夢は、お兄様の大病のことを知ったつい最近のことです。

それは、高橋先生の一番弟子であり、お釈迦さまの時代は釈迦の右腕といわれた舍利佛（しゃりほつ）であり、般若心経の中の

舍利子（しゃりし）の我が師園頭広周（そのがしらひろちか）先生とのことです。このことも起きてすぐ家内に話しました。それ

はこうです。

園頭先生は、脳血管障害による寝たきりの闘病生活から最近亡くなられましたが、この夢の場面は古い時代の先生のご自宅のよ

うでした。質素で窓にはガラスもないが、湿気もなくキッチンと整理された雰囲気の良いたたずまいでした。

なぜか病床のお兄様の脇に僕がいて、そのうちに先生が「ただいま」と玄関から声をかけられ、少し危ない足取りでしたが外出か

ら帰られた様子でした。先生の後ろから奥様が「まあまあお腹すいたでしょう、すぐに用意しますからね」と僕たちに声をかけら

れるというもので、なぜ先生のお宅にお世話になっているのかわかりませんが、亡くなった姉が生前、過去世からの縁を感じて

からか、特に親しみを持っていたからかわかりませんが、先生のお宅に失礼な位につかづか上がり込んでご迷惑をおかけしたよ

うです。

この夢の情景にも先生と僕たちの関係を垣間見たようでした。

夢は普通、そのときははっきり記憶していてもすぐに忘れてしまうものです。これは精神作用による一般的な夢ですが、ハッキリ、

ありありと思い出せる夢は霊夢といってあの世の霊が見せるのです。

正しいものは自分の過去世の霊、つまり守護霊や指導霊の協力により見る夢です。おかしいものは悪霊や動物霊が見せる夢ですから

正しく判断しなければなりません。

最後のもう一つの夢は、創価学会の池田大作氏のことでした。これも十年以上前の夢で、家内に話しています。

それは給油か何かでお兄様と一緒にガソリンスタンドに入ったばかりのこと、給油中の別の車に大作氏と取り巻きが数人乗って

ました。それに気がついた僕が車から出て池田さんですねと尋ねると、一瞬たじろいで「そうですと言うものでした。」

夢の中での大作氏は逃避行中でした。氏のいろいろな問題が噴出して当てもなくさ迷っているのです。

この世の問題は何事によらず、最初は内部から噴出します。それでも修正しきれないとき次は外部から噴出して終息するという

法則があります

話は飛びますが、池田大作氏の過去世は追剥ぎの親分から大名にまでのし上がった蜂須賀小六と、高橋先生は昭和四十四年頃に

明らかにされました。

現世の池田氏が功名心、地位欲、権力欲、名誉欲が旺盛なことも何となく納得できると思います。

高橋先生が明かされた、これ以外の生まれ変わりの例を二、三上げてみますと、徳川家康は俳優の長谷川一夫、田中角栄元首相は

斎藤道三、オードリー・ヘップバーンは楊貴妃、園頭先生の近年は西郷隆盛、指揮者の小沢征爾氏はワーグナーなど多彩です。

この池田氏の夢を見てから数年して、園頭先生は内藤國夫氏、山崎正友氏らと共に全国縦断の池田氏批判の講演会（小冊子『池田

大作氏を救うのは私しかいない』、『池田大作氏の人相が悪くなっている』、『公明党、創価学会は池田大作が死んだらどうす

る？』など）を九州から北海道まで駆け回っておられる頃に、忙しい体を押して出国され、オマーンの視察旅行から帰られた直後に

倒れられたのでした。ところが偶然にもその直前、子供が旅行先の鹿児島空港で鼻血を出されている先生を見かけて、すぐ僕に

知らせてきたのです。そのようなさ中に出国されたのでした。

肉体の防御反応として先生の体は、弱い部分から血を出して血圧を下げていたのでしょう。一夜にして世を去った僕の義兄も痔

がそのコントロールの役目をしていたと思われず。

話しは飛んでしまいましたが、このように僕は夢の中でもお兄様といつも一緒でした。これがお兄様と正法は絶対に関係有りと

判断する僕の根拠です。

子供の頃からの想い

僕は田舎のガキ大将で、棒キレを振り回して野や山を駆け回っていました。

お兄様は三人の姉に囲まれて、お人形遊びとママゴト遊びが主で、繊細な精神と優しい心遣いが身上でした。

いつも僕が腕力では勝るものですから、或る日を決して兄には逆らうまい、いや守ってあげようとさえ思って来ました。

ですから、これまでに一度も逆らうことはありませんでした。お兄様もそれを察してか弟の僕に優しい心遣いをしてもらいました。

お兄様の大病の心の原因は劣等感

たいそうなタイトルにして自分ながら驚いています。

癌の原因を、高橋先生の熊本・白雲山荘での研修会（昭和五十年十二月）では、次のように語られています。

「今度は具体的に天上界の関係の人に聞きましたら、癌というものはビールスだよ、細胞分裂がその人の心の作用によって正しく

も行くし間違った方向にも行く。間違った方向へ行ったときに食べ物とその人の心が細胞を食うビールスを育て、それがいわば癌

という姿ということを行いました。ですから、先ず癌という状態は心をきれいにし食べ物も中道、つまり片寄らないということ。

心も中道、食べ物も中道 こうしたら絶対に癌にならんと言いました。癌の細胞を見せられたら細胞が活着しているのがわかります。

そうしてCOの一酸化炭素をだしているのがわかります。ですからそういうところには酸素がなくなっているわけです。酸素がな

くなるから結局は、細胞が間違った方向へ行くのです。薬はお前たちの生活環境の中にあるんだよと教えられました。」

このように先生は述べておられます。

失礼にも、お兄様の心の原因は劣等感と言い切った手前、引っ込みがつかず右往左往してどう収めようかと思案中です。

こういう場合は矛先を少し変えて他の人の例で説明します。

私の知る或る人は、一回目の胃癌の手術から三十年ほど小康を保ち、次は別の内臓癌で亡くなりました。

彼は大地主の子として生まれても、お母さんの病弱から乳母の家で育てられます。物心ついて実家に引き取られても、乳母が忘れ

られず逃げ帰る始末、ホトホト困った両親は、乳母へは何かしかのお金を渡して身を隠させます。それから彼は学校を出て医院を

開業しても、なつかぬ我が子に有り余る資産はあっても、開業資金を出してもらえず独立独歩の人生だったと言うことでした。亡

くなるまでにそれなりの遺産を残しても、幼い頃の悲しみと両親への恨み辛みは心の病として癌を引き起こした

と思うのです。

お兄様の場合もこれに似て、医家に生まれても幼い頃のどん底生活の中での辛苦が、何が何でも親戚や他人に負けまいとする心を

育て上げ、息子はすでに医家になってはいても、自らのたっていない希望から他科に進ませ、病に伏せても自らの生業（なりわい）

には何の役にも立っていません。

医会では権力闘争に明け暮れて、傍目（はため）に見ても資産は残し、「字書きバカ」と僕が揶揄（やゆ）したように、達筆の手

だれた文を書き、ゆくゆくは森鷗外のような一端（いっぱし）の医家文筆家として、文を相手の安寧（あんねい）の日々ならば人

と争う心も生じませんでした。

お兄様は人と争うには余りにも優しく、心遣いが過ぎると思うのです。

肉体の痛みは心の痛み

癌は、亡くなるまで意識がはっきりしているので色んな段階の痛みを感じると言われています。

ある人は我慢できない痛みと表現し、ある人はただ単に痛みが有ると訴えます。

現代医学は超精密機械の進歩によって、すべて画像や数値で表せないものは有りません。ではどうして「ハイ、この痛みはグレー

ド十の中の六ですから少し我慢をして」などと数値で表せないのでしょうか。現在は病人の痛みの感得度に任されているというの

が実情のようです。

このために、あの人は我慢強いとか痛がりやさんでギャーギャー言うということになるのだと思います。

どうしてこのように痛みを感じる度合いに差があったり、痛みの程度を表す器機が完成できないかここで考えます。

それは、人間は永遠に生まれ変わり死に変わりする体験の中で我慢強さとか、みっとも無いくらいに騒ぎ立てる心の傾向性をつく

りあげたということです。心の傾向性はどこから来るかといえば胸の辺りある意識から来ます。意識は霊子線という見えない糸で

あの世とつながっています。あの世には、そのときどきの過去世の霊がいて、そのときどきの人生体験の中から、色んな問題

に対処できるのです。

わかりやすく言えば、意識の中にそれまで生きてきた体験がすべて凝縮されていると考えてよいでしょう。

痛みの度合いをどうして器機で表せないかといえば、次元の違う意識によって痛みを感じるのですから、現代の科学レベルでは測

定出来ません。我慢強さは、この世と過去世の心の傾向性がミックスされて形のないものですから、現代の器機では測定できな

いのです。

これをもう少しハッキリさせるために 次のことを話します。

あの世の概論を述べます。

空（くう）とは異次元のあの世のことです。あの世を意識界とか実在界ともいいます。あの世を意識界というのなら、意識は心の

ことですから、あの世は心の世界ということ。心に記憶されたものは画像には表せませんが、よほどのことがない限りいつま

でも残る実在の世界です。

このように実在界ということは本当に実在して消えてなくなる世界です。あの世は 実在界というくらいですからかつて地上

界を闊歩していた恐竜もいます。かつて飛んでいたU F Oも、今はもう地上には存在していないが、かつて存在していたものすべ

てが本当に実在している意識界、心の世界です。

また、色（しき）とは物資界、地上界、この世のことです。

空即是色という般若心経の一節は、「空は即これ色」ということはあの世とこの世は密接につながり連動しているということ。す

意識は生まれ変わり死に変わりしたときの体験の貴重な宝庫です。

五重の塔、多宝塔は何度も生まれ変わりした人生体験の智慧を形に表したものと高橋先生は教えられました。

現代医学では、痛みを感じたり、ものを記憶する中心は脳といわれています。

ところが、赤信号を見て赤と見えたり、つねって痛いと感じたりする領域は、実は脳ではなくて胸のあたりに有る意識（心）が認識

するということです。

脳は情報伝達の通路、つまり胸の辺りに有る意識への通路に過ぎません。人間生きていれば絶えず脳波計が動く、つまり脳波

があるというのも脳と意識と絶えず連絡をとっている証拠で、死は意識との連絡の断絶ですから。死ぬと脳波が消え平坦となって

脳死状態となります。そして、ついにはすべてのバイタルサインである生のシグナルが消えて完全死となりま

す。

正法においては、死は心臓死です。脳死は初めに移植ありきです。

脳死は助かる手立てが極めて低いのですから、それなら病気で苦しむ人に役立てようという考え方です。これも愛には違いあり

ませんが、下すな言い方が許されるなら、移植のためには生き（活き）のいい方が好都合です。

日本でもこれからドンドン増えるでしょうが、ドナー（臓器提供者）に対してレシピエント（移植を受ける人）の感謝もなく、ドナ

ーの意思表示カードはあっても「俺の臓器をどうするのか」と肉体への異常なほどの執着と、医者 of 奢りが出てきて、壊れた部品

でもを取り替えるような安易な気持ちで行うと、失敗例も増えてくるでしょう。

ドナーとレシピエントとドクター（手術陣）の三者が調和されると、手術場も光に包まれ成功するでしょう。

臓器移植の初期段階では光の天使たちも成功するように協力しますが、それが当然のように行われるとそれを反省するようなこと

も起こると思います。

話は飛んでしまいましたがまた元へ戻ります。

意識が胸の辺りにあるという事実は、感極まったとき、感情がグーッと込み上がって来るのは胸のあたりからであり、脳のある頭

からではありません。

私達が「胸が締め付けられる」と表現するのもそうです。

もう一つ述べるならば、全身麻酔による手術の後に、あんな夢を見たこんな夢を見たと患者さんが話すのも、この辺の事情を物語

っています。なぜなら脳は全身麻酔によって機能を停止しているはずなのに、それでも夢を見るというのは、脳は夢を見る場所で

はないということです。

長くなりましたが、以上の説明によって、意識の概念をつかまれたと思います。このように認識するのは脳ではなく、胸のあたり

にある意識（心）の働きと理解できると思います。

また、高橋先生は興味ある実験をされました。

ある人の意識に呑み助の霊を憑（つ）けると、一滴も飲めない筈なのにお酒を水みたいに飲みますし、女の人に男の霊を憑けると、

声も素振も全部男です。最近テレビで多重人格の放映をしますが、これはその人の意識に色々な霊が次から次へと憑くからです。

すると同じ人でありながら何人もの別人になって、霊が離れるとまた元の人格に戻るというわけです。

お兄様には失礼の数々を述べましたが、次に病に打ち勝つ方法を説明します。。

正法と病気の治し方

中国の天台大師（智ぎ）は、お釈迦様であり高橋信次先生の分身（本体と五人の分身）です。

「天台智ぎ」が開いた天台山へ、釈迦の分身の最澄が仏教を学ぶために渡唐したのも不思議ですが、天台智ぎの高弟である浄弁

（じょうべん）が天台智ぎの説法を書き記した『天台小止観てんだいしょうしかん』があります。

この天台小止観は釈迦の分身の天台大師が、瞑想（座禅、止観、禅定ぜんじょう）、病気の治し方ををどのようにするか分かり易く

説かれたものです。

天台智ぎには陳鍼（ちんちえん）という勇猛にして果敢な大將軍の兄がいました。ところが、陳將軍は建業の都を落として程なく

病に伏せてしまいます。

「戦に勝ってもこの虚しい心の空白と病は何ナノだろう。弟の智ぎに直ぐにでも会って話しを聞きたい」と使いをよこしますが、

数ヶ月前に天台山に籠（こ）もられてしまいましたといひます。

そんなある日、天台智ぎに教えを受けたという、みすぼらしい身なりだが智徳の有りそうな老僧が訪ねて来ました。名を浄弁と

言ひます。

陳將軍からことの子細を一通り聞くと浄弁は「天台禪師（智ぎ）様に来て頂くのが一番よいと思いますが、それでは時間がかかり

過ぎますからこれをお読み下さいと、二巻の巻物を出して次のように告げます。

「これは天台様にお聞きした講義を残らず記したものです。これを実行して下されば必ずや今の病とお苦しみは消えてなくなり

ましよう。ここに書かれたものを読むだけでなく実際に身を持って実行していただきたいのです。

死んだ積もりでとか死ぬ気になってとかいう程度ではなく、今の自分はもう死んでしまったのだと思い切るのです。死んでしまえば

今の自分はこの世には存在しないのですから、他人のように完全に生き方を変えるのでございます。」と、深く頭を下げて去って行くのでした。

砂地に水が染み入るように受け止めた陳將軍はそれを実行すると、病も治り名君と仰がれるように成ったというのです。

このように運命を変え自分を変えて病気を治すためには、一旦、自分は死んで、他人に生まれ変わったように人生をやり直すのが最大、

最強のコツであり極意で早道です。

それでは正法では病をどう治すか述べます。

「病気を治すための五つの心の準備」

心を安らかにすること

着るもの食べるもの等に、足りることを知って感謝の心を持つこと

心を安らかにできる環境を選ぶこと

今までのことをよく反省して、二度と繰り返さないと決心して素直な心を持つこと

良い人間関係をつくり、良い指導者を得ること

「心に不調和を来たさないように、心を安らかにすること」

憎んだり、怨んだり、悲しんだり、怒りの心やイライラなどの不調和な心でいると悪霊に心が同通して、憑依され危険です。座禅

をやっている人が、「禅病」といってノイローゼになったり、精神統一の行をやっている人が精神病になるの

は、心を汚いままで

やるからです。

高橋信次先生は、昭和四十八年三月に園頭広周先生に次のように指導されています。

「どんなことがあっても、自分で自分の心に歪（ひずみ）をつくらないようにしなさい」ということだった。心を安らかにし調和

させるにはこれ以外にはないのです。

「心を安らかにできる人の、心の三段階」

下段界の人

心を安らかにしたいという心はあっても、次から次ぎへと過ちを繰り返すという、どうにも救いがたい人。

中段界の人

大きな過ちをすることはないが、小さなことに心を乱して暗くしてしまう人がいます。こういう人は「もう二度と間違いは繰り返

さない」という反省懺悔をして、明るくふるまうことです。

3、上段界の人

生まれつき明るく素直で、親不孝をせず目上の人を敬い、深い慈愛の心で総ての人の幸せを祈り、すべてを愛する心を持つ人。

「釈迦が教える心の持ち方の段階」

心の持ち方のすぐれた人に二種類あります。一つは、生まれながらにして悪をなさない人。もう一つは、まちがっても悪

びれずに、すぐに心の底から反省できる人です。

「反省懺悔をするための十ヶ条」

すべては自分の心に原因があるのだから、自分が運命の主人公と知らねばなりません。

現在の暗い安らぎのない心のままでは将来どうなるだろうと、不安と恐れが心の奥底にある筈です。その心に恐れを感

じて、早くその心をなくすようにつとめることです。恐怖心が起こればそのたびに心の中で切って捨てることです。

生まれてからのことを年の順に静かに考えていくと、父母に、兄弟姉妹に、友達に、先生に――と反省していき、深く

「すまなかった」という思いを起こすことです。

では、どうしたら心を安らかにできるか、それは、良い指導者から法を学んで、教えられた通りに実践することです。

人には誰しも、誰にも言えない心の秘密があるものです。そういうことでも残らずさらけ出してください。懺悔は人の

面前でするものではありません。神の前に、偽りのない心で告白する。また、偽りのない心で紙に書いて、誰も見てい

ないところで焼いてもこなごなに破いてもよいと思います。潜在意識の中に隠された罪悪感、劣等感を吐き出してし

まったら、それから生まれ変わって別人のように明るく生きるのです。

「もう二度としない」と誓った人が、なぜ同じ過ちを犯すのかといえ、ば、「もう少し続けたい」という捨て切れない思

いがあるからです。その未練タップリな心を切り捨てて、心を軽く明るくすることです。

心の整理がきれいにできたなら、次は正法を実践してゆくことです。幸福は、心の安らかさは、大宇宙の意思即ち神の

み心によってつくられた法に順（したが）ったときにはじめて得られるものです。

法を実践した結果、心の安らかさが得られたら慈悲の心が起こって、多くの人達の幸せを願わずにはずにはおれないと

いう心が自然に起こってくる筈です。今の環境が病室なら医者、看護婦さん、賄い婦さんなどの医療関係者全員と、

家族などのお兄様の病気を心配する周りの関係者と、仕事上の医界の人達が一人残らず幸せにならなければ、自分自身

の幸せもなく病気もよくなると知らなければならぬのです。

宇宙創造の神に感謝し、神と表裏一体となって、神がつくられた法を伝えてくださる「仏陀（観自在者）」やメシアに

感謝しなければいけないのです。

罪を、病気をいつまでもつかんで持っていてはいけません。もう二度と繰り返さないと心から反省したら、罪を心から

放すのです。そうすれば自然に罪は消えるのです。罪は永遠の实在ではありません。罪は非实在であるからこそ、その

うちに消えるのです。

前にも述べましたように实在とは永遠に存在して、滅することも消すこともできないものをいうのです。「罪が絶対

に許されないものなら、人間はとうの昔に絶滅していただろう、反省は神の慈悲である」と教えられた高橋信次先生の言葉を思い

出して欲しいと思います。心からの反省は罪をも許すのです。

こうして心の安らぎが少しでも出てきたなら、「すでに病気は治れり」と信じ、お兄様の一番健康で幸せな状態の頃を

アリアリと思い出し、しっかりと心に刻むのです。

この十カ条を実行しようと思われるなら、体を清潔にし、洗ったサッパリした衣服を着て、環境を整え全身の力を抜き、自分の

一番楽な姿勢で神の生命に生かされている自分を自覚することです。このように毎日少しずつ反省懺悔を続けていると必ず大きな

不安、罪、苦しみも病気も跡形もなく消えてしまうのです。そうすると、ぐっすり眠れ心も軽く、身も軽くなるまで爽やかになり、

これが大病と一切の罪と迷いをなくする唯一の方法です。

「幸福」とは、足ることを知って、すべてに感謝できる心の状態といえます。

「病気が快癒するための奥義」

健康になりたいのなら、たとえ今は最悪の状態で何一つよいところがなくとも、健康な状態をアリアリと、はっきりと心の中に描

いて、「それを既に受けたり」と信じて、すべてに感謝して不平不足の思いを捨てて、医者や看護婦さんの言うとおりに守ってゆくので

す。特効薬はなくとも病床での時間は十分にあるのですから、反省による心の浄化と、アリアリと健康な状態を

心に描くことを一所懸命にただ

もうがむしゃらに実践されれば、こうすることによって必ず少しづつ快癒してゆくのです。

「着るもの、食べるものに、足ることを知って感謝の心を持つこと」

「着るもの」

清潔な病着が数枚。ブランドものがどうのと心を煩わしてはいけません。

「食べ物」

自分から求めることなく、与えられたもので満足して入院生活をする。

「治ることを確信する入院患者のしてはならないこと」

人の勧めによって、自分でも確信の持てない薬をあれこれと人目をしのんで飲んで心を煩わさないことです。

吉凶占い、星占い、易、手相、人相、姓名判断等、人生占いによって日々の心を煩わしてはいけません。

神頼み、予言、まじない、祈とう等で心を煩わさないことです。

このように、着るもの食べるものは肉体を健全に保てれば十分なのですだから、入院生活という心の修行に邪魔にならぬように、

着るものと食べるものに煩わせるなということです。

「心を波立たせないで安らかになるようにつとめること」

わずらわされない時間を持つことを「閑」と言います。入院生活もそうです。「閑」とは心の静けさをいうのですが、忙しく仕事

をしていても心が静かであれば、これも閑です。

「静」とは、音のしない静かな場所、またはその状態です。

「随所作主（ずいしょさしゅ）」という言葉は、いつでもどこでも自分が主人公になって自主性、主体性を失わないという心境に

なることをいいます。

病気は治るのか、いつ治るのか、他にもっといい治療法はないのかという心のフラフラの迷いを捨てて、自分を信じ随所作主にな

ることです。

「今までのことをよく反省して二度としないと決心すること」

「反省のための四つの考え方」

1、「人間は何のために生きているのか」と、じっくりと考えてみることです。

世間一般の人達と付き合いもやめて「自分とは何ぞや」と、自分をじっくり見詰めてみることです。

占い、手相、祈とう、娯楽、趣味、運動、読み書き計算等一切をやめてみましょう。

学問、学説にこだわって議論をたたかわせることをやめて、話を聞いたりお経を読むことなどもやめて自分だけを

みつめてください。色々なことに心が引っかかっていると、心が乱れて治療の専念が出来ませんので、心の整理

が必要です。

Home

「よい人間関係をつくり、よい指導者を得ること」

「三つの必要な人間関係」

その人がよく治療に専念できるように陰から見守ってくれる人。

お互いに助け合い励ましあって行ける優しい明るい友達を持つことです。

正しく法を教えてください師を選ばなければなりません。地位、名誉、金銭を求めず、ただ、お兄様が幸せになり快癒す

るのを無上の喜びとする人です。

以上が治療に入る前の準備の五ヶ条です。

五官五欲を統制する

「正しい欲望はよい」

治療に専念をするためには、安らかになろうとする心を乱すもとになる、五官によって起こる欲望をコントロールしなければな

りません。

五官（眼、耳、鼻、舌、身）によって起こる欲望とは、眼で見たものによって、耳で聞いたものによって、鼻で嗅いだものに

よって、口で味わったものによって、体で触れたものによって起こる欲望をいいます。肉体の健康を維持するために必要な正しい欲望は許

されても、それが過度になって調和を乱すようでは悪となります。

色欲（性欲）

美人とか、美男子とかにとらわれて心を乱すことは多いもの、形的美醜にとらわれて大事な心を汚すことは愚かなことです。夫婦間

の中道の性欲は善でも、性欲も過ぎれば悪となります。

声欲

楽器のリズム、男女の歌声、朗詠、ほめ言葉等の音声に酔っては本当の治療はできません。

香欲

香水のいい匂い、女性の肌のいいニオイなどの香欲は、快癒に必要なことではありません。

4、味欲

甘いとか辛いとか、料理の食欲をそそる味とかは、治療には関係ないことです。

触欲

異性の肌に触りたい等の過度の欲望は、正しい治療を求める道を失わせます。

五官の欲望はその味を一度味わうと、ますます激しく求めがちだから、真摯に制御しなければなりません。これを「五欲を

訶(か)す」といい、私たちは欲望のままに生きるのではなく、五欲をコントロール、統制しなければならないのです。

このように快癒するためには静かに呼吸を整え、呼吸を数えて心を静かにして反省をすれば、そうすれば自然に一切の煩悩、

とらわれはなくなり、心は安らかになってゆくのです。

「心を暗くする原因となっているものを捨ててください」

<心を暗くする五つの原因>

貪欲

怒り

惰眠(だみん)

くよくよ後悔する

疑い

貪欲、

足りることを知らぬ欲望を捨ててください。

心を安らかにして得る喜びは、欲望の喜びとは次元が違う大きな喜びです。

貪欲は人間をダメにする最たるものです。

怒りの心を捨ててください。

怒りは人間を苦しめ悩ますもと。怒りは血圧を高め、動悸、息切れのもとです。

寝過ぎる睡眠の害を捨ててください。

心がいつもフラフラしているのを「睡」といい、いつもダラダラ横になって眠っているのを「眠」といいます。
なにもしないで

無駄に時間を過ごすのは一番いけないことで、目覚めて立ち上がって行動に移さなければならないのです。

くよくよ後悔することをやめてください。

身体のフラフラ

やたらと出歩き冗談ばかりいって、座っていても体をゆすってじっと我慢のできない人をいいます。

口のフラフラ

いつも鼻歌を口ずさみ、面白くおかしく喋ってばかりいる人をいいます。

心のフラフラ

考えることに信念がなく、いつもくるくる考えが変わる人をいいます。

このように、身も心もいつもフラフラしているようでは大病を克服することなど到底出来ない相談です。

クヨクヨすることには二種類の人があります。

その時は夢中で「よい」と思っている後になると必ずクヨクヨする人です。

以前に大きな罪を犯した人が、いつも罪悪感にクヨクヨと責められ、その苦しみは、矢が深く刺さっていても抜くことが

できないことと同じようなものです。

後悔するというのも二通りあります。

してはいけないことをいつも行い、しなければならぬことをしないで、いつも後悔ばかりする人。そういう人は、悪か

ったと気がついたら、もう二度とそのようなことはしないぞと心の底から決心すればよいのです。

もう一つは、なにをやっても後悔するということをしないから、してはいけないことを平気で行い、いろんな悪いことを

いっぱいやって最後に後悔するタイプの人です。

第五 疑いを棄ててください

何でも疑わなければ気がすまない人がいます。宝の山に入っても、素直に手にとって見なければ宝はわかりません。教えとい

うものは心でとるものですから、心の中で疑ってばかりいて信じる心が少しもなかったら、どんなに素晴らしい教えも心の中には入ってき

ません。

治療の妨げになる三つの疑い

自分を疑う

人間は過去の輪廻転生（生まれ変わり死に変わり）の中で、どんな善根を積んでいるのかわからないのですから、いえ、みな

善根を必ず積んできているからこそ、こうしてまた人間として生まれてきています。だから自分を卑下して疑ってはいけないのです。

指導者を疑う

たとえ、その指導者が、とるに足らない人であったとしても、その指導してくれる内容が正しいと思えるなら、心を開いて聞いて

みるものです。

法を疑う

正しい法（神理）を聞いても、自分の心の尺度で判断して疑ってばかりでは、神理を求めることなど到底できないことです。

絶対の神理についてだけは疑うことなく、すなおに信じて従っていったほうが賢明です。

心の三毒

むさぼる毒（足ることを知らぬ欲望）

怒る毒

愚痴の毒

全託の祈り

眠りも、多すぎても少なすぎてもいけません。グッスリ眠るには、悩みの原因をつくらぬことです。お兄様の場合は病後の生活

設計など将来の悩みに、とらわれの心があるとトロトロして眠れません。余りにも神経質でクヨクヨする人は、どうにかなるさと

言うくらいの「全託の心」を持つことです。やることをやって、神に全てを任せることを「全託の祈り」と言います。やること

もやらないで自分を放棄することは神の子として親（おや）なる神への冒瀆（ぼうとく）といえ感心できません。

「自力の極に他力あり」自助努力の独立独歩の人には、他力が働き燦然と光輝くのです。

とにかく頑張ってください。

究極の病気の治し方

高橋信次先生が示された手当て(光を入れる)と『心行』の読誦

心行（後掲）を読むことによって書かれていることを理解し、霊へも言って聞かせると「そうか」とわかって離れますし、

全部が変わって病気も治るのです。

現在は解散して存在しませんが、かつて園頭広周先生が指導された国際正法協会では「心行」によって奇跡が続出しました。

先生はこれを余り前面に出して宣伝しすぎると、会員は増えるかもしれないが、お守りのそしりを受けて神理を求める心を阻害

するといさめられたものです。

お経のように、これを暗記したり丸覚えにすることではなく、中に書かれていることを理解して日常生活の中で実践すること

です。

二千五百年前のお釈迦様時代の古代インド語を、中国の漢字に翻訳したものがお経であり、それを日本読みにするのですか

ら、さすがに頭のいいお兄様といえども、チンプンカンプンで理解できないと思われま

でも、この心行はかつて釈迦といわれた方が、日本語でわかりやすく大宇宙の成り立ちと、あの世とこの世の救済の仕組みや

人間の生き方を、少ない字数に要約された神理です。

もし、手立てがないと医者から宣告されたら、これまでに話しました生き方の反省が済まれた上で、一字一字心を込めるよ

うに心静かに読んでください。声に出しても出さなくてもかまわないし、色々な不安から心が統一できなければ、書くことの得意

なお兄様のことですからそれも良いと思います。

書くといえば、般若心経やお経の書経があります。

例え、いくら立派なことが書かれていても意味がわからなければ劇的に人の心は変えられません。

それでは、釈迦の高橋先生の著書と、釈迦の高弟の舍利子（舍利佛）の園頭先生の著書から『般若心経』を要約してみます。

和訳 『般若心経』

「摩訶般若波羅蜜多心経」（まかはんにゃはらみたしんぎょう）という言葉は、当時の古代インド語で「マハーパニヤー パラー

ミター チター スートラ」です。

マハーは偉大な、パニヤーは智慧、パラーは行く、到達する、ミター内在する、チターストラは心の教えですから完訳すれば

「内在された偉大な智慧に到達する心の教え」となります。

このように当時の人でなければこのような解説は出来ないと思います。高橋信次先生はとにかくこんな風で、講演でも何が飛び

出すかわからないというものでした。それでは紹介します。

「過去、現在、未来、天国も、地獄も全てを自由自在に見通すことが出来る方（観自在菩薩）が、内在された偉大な智慧に到達

するための生活行為を深く実践した時に、このように私達の五体五官の煩悩が心に作用し、正しい基準、片よりのない中道の物差し

を忘れ去ってしまったために、一切の苦しみや災難、厄難の原因になっている。それを見とどけることができるのだよ、舍利子

（皆様方）よ。この世とあの世は表裏一体であり、連動しているのですよ。私達の心の作用によって、行動（肉体的行為）が現れ、

行動があつてまた心に作用するのです。

皆様方よ（舍利子よ）

この諸々のあらゆる神理（タルマ）は神の心の現われです。神理は生れず、滅せず、垢つかず、浄らかならず、増えず、減らず、

つまり神理は不変であるということです。

これゆえに心の世界は、万生万物を見たり、声を聞くこともなく、鼻で匂いを嗅ぐことも、舌で味を知ることでも体で感触を得る

ことも、眼で見える境界もありません。

迷いのない明るい光明の世界は、無限の光明に満ち満ちて、所得を得るための知恵も必要がありません。そして人々の心に人生の

意義と価値を教え、迷える衆生を救済して無償の道を歩んで行くことができるようになるのです。

また、心の中に潜在している過去世の体験、偉大な智慧がよみがえり、悟りの境地に到達した悟られた方（観自在菩薩）は、心に

は引っかかりがありません。引っ掛かりがないから、恐怖心もないのです。

一切の夢のような顛倒した考え方を遠くに離して、つまるところは最終的な悟りにはいります。

過去、現在、未来という三世における悟った方は、最高の悟りを得たから内在される仏智を知ることができるのです。

これこそは大宇宙を支配している大神霊の神理であり、これ以上の神理はありません。この神理は人生の生老病死を原因として生

ずる一切の苦しみを除くのです。これは真実であって偽りではありません。それゆえに、内在された偉大な智慧に到達し、仏智に目覚め、そし

てそれを実践して一切を成就しましょう」

光を入れる(手を当てる)方法

手当てをするという言葉があります。ケガや病気をした人を手厚く看護するという意味です。手厚くとは心をこめてということ

ですから、手当てをするとは、愛情を込めていたわって身の回りをお世話するということです。

子供が頭をかどにぶっつけたとき、母親が「痛くない痛くない」と息を吐(は)きかけ手で撫(な)でると、子供は安心して大事

になりませんでした。

また、金鎚で叩いて思わず拇指を口に含んで治したり、お腹が痛いとき無意識のうちに手で腹を押さえ、虫歯が痛いとき頬っぺに手

を当てました。それは昔から手や息には癒す力があるということを潜在意識の中に知っていたからです。

古神道では「息吹き祓い」といって息でケガレを祓(はら)い、お釈迦様は薬草を与え手を当てて病人を癒され、病人が

イエス・キリストの衣のふさに触れると、たちどころに病気が治ったといわれます。どうしてこうなるかを述べ、光を入れるとか、

手を当てて病気を治すという方法を話します。

後光(オーラ)

心の豊かさ、心の温かさは人によってまちまちなように、過去世と現世でつくりだした人間性もそれぞれに異なります。

損害を受けても相手を非難せず、原因を突き詰めて深く反省する人や、エゴの塊の人や、慈悲と愛がいっぱいの人などです。

この人間性の指標が後光(オーラ)です。

全身から出ている雰囲気とも言うべきオーラが手に集中されると大きな力が出て病気も治せます。
また、大きな暖かい雰囲気

に包まれると安らぎを感じ心が癒され病気も治るのです。

「光を入れる」ことを理解するために

1、肉体細胞には心がある。

現代医学では、肉体は単なる物質と見て、心があるとは認めていません。

ところが、皮膚に指を一本立てて「熱くなる熱くなる」と問い掛けると、立てた指の周りが一度位い上がるという実験があ

りますし、注射をするとき「痛くない痛くない」と念じて刺すと、麻痺して痛くないというのも、細胞に心があって

聞き届けるからです。

臓器には臓器の集団意識(心)がある。

細胞が集まって胃や腸の内臓をつくっています。

「大なる生命」は「小なる生命」をコントロールするというのが、心の法則です。心は人間の体を制御し、臓器に

影響し、細胞におよびます。

言いかえれば、肉体は心（意識、霊、魂）の指令で動いているのです。

例えば、いくつかの臓器をミキサーでバラバラにして静置すると、元の臓器にそれぞれの細胞が集合して行きます。

これは臓器の集団意識があるということの証明です。

全身の肉体細胞は六十兆個（大宇宙の星々も六十兆個）といわれます。

一分間に三百万個づつ古い細胞が死滅し、また新しい細胞が誕生するそうです。

そうすると、細胞の再生によって四年以上の古い細胞はないということになります。でも、四歳頃のみずみずしい肌もな

く、相応の齡のとり方です。大いなる生命は小なる生命をコントロールすると先に述べましたが、心が若々しく活力に

満ちると、細胞が若返り、臓器が若返り、体全体に若さみなぎるのです。その反対に、心が老け込むと肉体も老け込んで

しまいます。

3、表面意識と潜在意識

心は表面意識と潜在意識の二つがあります。

表面意識（現在意識）とは、目で見えてきれいだとか、耳で聞いていい音だという五官によって認識する心です。

潜在意識には、過去世からの心の傾向性（習慣性）と、今世で作りだした心の傾向性（習慣性）や強く心に印象され

たもの、三つがあります。

人は、病気になりたい不幸になりたいと思う人は一人もいません。なのに、この世には病いだ、不幸だという人は多い

ものです。「あんないい人はいないのにどうして」とか、「あんなに元気で幸せだったのに、神も仏もないのか」とい

うことになります。

表面意識では幸せになりたいと願っていても、潜在意識が幸せになることを拒否していたり、「こんな罪深い私が、

幸せになるなんておこがましい」と不幸であることにホッとする心があると幸せにはなれません。

表面意識と潜在意識が共に、幸福を願う心になることです。

そして潜在意識の中にある、幸福になることを拒否する暗い心をなくすのが反省なのです。

4、ツボ、バイオプラズマ体について

中国では生命力が通過する道として皮膚の上にツボを発見して、ハリ治療や灸に応用しています。欧米ではこれをバイ

オプラズマ体と名づけました。

呼称こそ違え、ツボやバイオプラズマ体から宇宙につながって肉体や心に影響を与えるのではないかと考えるように

なったのです。

光を入れるということ

光を入れるということは、次の三つのことが同時に行われます。

1、心から心への説得

私たちが念ずると、私たちの守護霊(過去世の霊)が相手の守護霊に伝え、相手の守護霊が相手の心に囁き伝えます。念を

送る人の心が不純だと受け手の守護霊は拒否して伝えません。また、受ける人の心が頑固で聞き入れようとしないと念

は通じません。

これまでは念ずれば必ず相手に通じると教えましたが、念が通じたり通じなかったりするのには、こういう理由がある

からです。

光を入れるということは、手を通して生命エネルギーが直接伝わって行くだけでなく、その人の愛念だけが相手に伝え

られるのですから、いかに心が純粹かが大事です。

念の速度は光より速い

念には時間空間がなく、いつでもどこでも思えば即伝わります。

たとえば、どんな深海でも、どんなに電氣的にシールドされたところでも 関係なく瞬時に通じるということです。

心は念の発信源であり、受信源である

人間はみな、生まれながらに発信機と受信機を同時に兼ね備えています。人間が地上に誕生したばかりの原始人類は、

自我（エゴ）もなく人と相和し光に包まれていました。その当時は、現代のようなテレビ電話がなくとも、いつでもど

こでも瞬時に画像も会話も楽しめました。人口が増え自我が芽生えてくるとその能力も消えうせ、仕方なく電話やテレ

ビを長い時間をかけて完成させたのです。

奇跡は自分が起こすのでも、神が直接起こされるのでもない

奇跡が起こると「神様が祈りを聞いてくださった」といいます。

でも、宇宙創造の神が直接奇跡を起こされることはありません。

例えば、市長がいて県知事がいて首相がいて国が成り立っているように、あの世でも厳然とした秩序があります。

宇宙創造の神の心を知って、神の心をダイレクトに伝える力を持つ如来がいて、如来の手足となる菩薩がいて、諸天善神

がいて指導霊、守護霊がいます。

このように、祈りにふさわしい天使によって、そこに光が注がれると、靈魂の乗り舟として神が創造された肉体は健全な

細胞に変わってゆき、健康になるのです。

ところが、奇跡は自分の力だと過信して、謙虚さや敬虔さを失うとあの世からの協力は得られません。光を入れるとき、

各段階の天使たちに奇跡を願う「祈願文」を唱えなければならない根拠です。

これまでに1、心から心への説得について述べました。

2、心が直接、細胞に通じる

3、手を当てるとオーラが注入され、健康になる。

光を入れるということは、これらの三つのことが同時におこなわれます。

これを高橋信次先生は「光を入れる」という言葉で教えられました。

病気を治すのは本人の心と、肉体に備わっている自然治癒力、自然療能力です。

光を入れるということは、あくまでも本人の心を目覚めさせ、本人の持っている自然治癒力を振起させる補助的な手段です。

光を入れる実際の方法

病気は歪められた心の現れですから、心の持ち方を変えれば変わるものです。病気という動かせない頑とした存在がそこに

ある ではありませんから、動かしがたい病気が肉体の中にあるという固定観念を持ってはいけません。生き方をガラリと変え

て、病気は治るという信念で前向きに生きるのです。

光を入れる前に禅定（ぜんじょう）、瞑想をして、心を調和させ愛で心を満たします。

相手 兄 を仰臥（上向きに寝せる）させ、額に手をふれます。また座って行う場合は前頭部と後頭部に手を当て、次の

祈願文をを唱えます。

「大宇宙大神霊・仏よ、この人に安らぎをお与えください、光をお与えください。実在界の諸如来、諸菩薩 光の天使、

この人に安らぎをお与えください、光をお与えください。

諸天善神、守護、指導霊よ、この人がこの肉体を持って生まれてこられた使命を十分に果たされま
すように心の内より

正しくお導きください。」

このように天上界からの導きを祈ります。祈願文を唱える理由は前述した通りです。

本人の意識（心）に向かって説得します。

「あなた 兄 は神の子です。あなたはこの肉体を持って魂の修行のために今あるのです。あなたは完全にこの
肉体を支配

して、この世に生まれてきた使命を果たしてください。」

このように言って、その人（お兄様）が完全に肉体を支配している状態を思い浮かべます。

次に患部に手を当てます。

たとえば、お兄様の場合は患部が胃の裏辺りの膵臓ですから、一方の手を胃の上に、もう一方を背に当ててはさ
むようにし

ます。このときにお義姉様は「ここに悪い膵臓がある」と思っはなりません。「すでにそこが光に満たされて
健全である」と

信じます。

そして次のように言います。

「膵臓の細胞よあなたたちも神の子です。主人が魂の修行のためこの世に生まれてくるとき、あなたは主人の肉
体の細胞となって

協力するために現れてきたはずで。主人も十分反省していますから、本来の機能を回復してください。」

この言葉の通りでなくとも、真実の言葉で、自分の心にピッタリくる言葉であれば良いと思います。このとき、
本人のお兄様は次

のように念じます。

「健全なあなた達を、私の不心得によって不調和にして申し訳ありませんでした。私は反省をして正しい調和された心になりまし

た。どうか、あなたたちも光を受けて健全になってください。」

と祈って、内臓が健康な状態をアリアリと心に描きます。

そして、息を吸うとき「神の光」を吸うと思って、下腹に一杯吸い、全身が光り輝いている状態 太陽光線のような 心を描き

ます。

また手を当てているお義姉様も、息を吸うとき単に空気を吸うと思わないで「神の光」を吸うと信じて、下腹に一杯吸って、

全身が光り輝いている状態を心に描き、息を吐くとき全身一杯の神の光が、手を通して主人に流れ入る状態を心にアリアリと描き、

患部が癒され健康な状態を思います。

このときに、体内が光に満たされてゆくと同時に、体内の悪いものはお兄様の足のつま先から全部流れ出ると考えます。

ここで大事なことは、自分がやっていると思わないで、神がすべてのものを生かし、愛さんとしているその神の愛の完全な

「通路」になることがキーポイントです。光を入れるのは一日三十分位で良いと思います。

すぐに効果が出ないからと失望することはありません。どうにかして治そうと愛をもってすることに、効果がないことは絶対にあ

りません。

Home

光を入れることの注意点

人によって効果がなぜ違うのでしょうか

効果が強烈であったり、そうでなかったりするの事実です。それは光を入れる人の心と、受ける人の心の状態によって、「私は

光を入れる自信がない」とか「こんなことで効くものか」という疑いの心が働くと効果は薄いので、

「私がやるのではない、天上界のご加護だから」と、力まずに、冗談を言いながらでもかまいませんから、心から信じて行うのです。

光を入れるとひどく疲れる人がいるのはなぜでしょうか

一つは五官（目で見たり、耳で聞いたり、触ったり等）中心の表面意識で力んでやっているからです。

二つ目は、病気の原因は1、感染や内臓の酷使2、悪霊の憑依3、過去世からの心の傾向性と前に述べましたが、悪霊の憑依に

よって、その影響を受け易いからです。でも、愛の心を強く持てば、光が強く出て暗い世界の悪霊と、明るい世界の愛は波長が合

いませんから、憑依されることは絶対にありません。

三つ目は、病人は生体エネルギーが弱っているために、こちらの生体エネルギーが病人に吸収されて疲れるのです。

光を入れることは良いからといっても、むやみやたらはいけません。

病気になったからには、それなりの原因があったからです。

心を治さず、病気だけを治してやろうというのは尊い愛のようでも、病気という反省のチャンスを奪って魂の進歩をさまたげ、必

ずしもその人にとって良いことばかりではありません。ですから反省の心を起こさせてから光を入れることです。

子供に光を入れるときのポイント

十五歳以下の子供は親に原因が多いのですから、親がよく反省をして、

「親の仲の悪さから、純真なあなたの心を歪ませ病気にさせました。ごめんなさい」と詫びる心で光を入れると、劇的に治ります。

憑依されている人の場合の注意点

光を受ける人が憑依されている場合は、憑依している悪霊からいえば、憑依しなければならない正当な理由があります。それを断

りもなく強引に引き離すと 復讐しますから、憑依霊に正法を何度も話して、よく救われてゆくように納得させなければなりません。

憑依された人の見分け方

病名が医者でもわからない

持病で病気が永い、治りにくい

顔色が土色か、またどこか黒ずんでいるか、その反対に蒼白で精彩がない

感情の起伏がはげしい

目がおどおどして落ち着きがないか、また目がすわって動かない

身体が冷える、またいつも熱っぽい

いつも頭や肩が重い

暗い所が好きで、ものをいわない

強情で人のいうことを聞かない

人や食べ物の好き嫌いがはげしい

光を入れても治らない場合

どんなに努力しても治らない場合があります。それは本人が治りたくないと思っているときです。そんなバカなと思われるで

しょうが、今のままの方がいい、この方が楽だという場合です。入院も三年以内で普通は退院してゆくものですが、十年も十五年

も入院をして、結構、楽しく病院生活を過ごしている人もいます。また、入院していなくとも慢性の持病という人の中にはそうい

う人がいるもので、潜在的に治りたくない、あるいは死の願望を持っている人は、どんなにやっても徒労に終わ

る可能性があります。

また、相手が「そんなもので効くもんか、ごまかされないぞ」という人もいますから、相手の心を見殺しして強引に行くことは避け

たらいかがでしょうか。

例え、相手が治りたいと強く願っていても、治ったら、また前と同じような我欲の道を歩もうとしていけば、魂を退歩させない

ばかりか、むしろ退歩させるのですから、病人のままの方が、まだ良いということになります。

病気が良くなったら何をするか、どういう人間になるのかを決心させてから行いたいものです。

光を入れるのは何人からだけやってもらうことはありません。自分の手を悪いところに当てればよいのです。また健康を永く

保ちたい人は、左右の肋骨の下部に手を当て光を入れながら、そのまま自然に眠るようにすれば良いと思います。

生命エネルギーを補給するための禅定、反省的な瞑想

光を入れると、自分のエネルギーを病人に吸収されるので疲れる場合が多く、エネルギーを補給せずに光を入れてばかりいると

活力を失って病気になるってしまふことがあります。光を入れた後は必ず禅定、瞑想をして生命エネルギーを充足させることです。

注意して欲しいこと

効果があるからといって、医学を否定してはいけません。光を入れるとき、手を体から五センチほど離してください。近いほど

よいのですが、直接肌に触れると医師法に触れるからです。

神はおわす

天地創造から現代文明へ

この大宇宙は神によってつくられました。同時にあの世とこの世の二つの世界もつくられました。人間は天地創造とともに神の

意識から分かれ、神の意思を受け継ぐ万物の霊長としてあの世にまず姿をあらわします。

そうして神の意思である調和をめざす神の子として、この世に降り立ったのです。

最初の間は大地の一隅に光の粒子の集中固体化して、地上の眼でみるならば忽然と物質化されたといえましよう。

大宇宙六十兆個の中のある星に生まれた最初の人類は、その星を調和させ、それから幾多の星を輪廻転生して地球から数億光年先

のベータ星に生まれたのです。

エルランティと七大天使

ベーター星も調和され、その中のもっとも調和されたアガシャー霊団の約六千人は今から三億六千五百年前、うら若き緑に包ま

れた地球に、今で言う反重力光子宇宙船（UFO、円盤）に乗ってスエズ運河に近いアルカンタラーに着地して生活を始めます。

ミカエル、ガブリエル、ウリエル、サリエル、ラグエル、パヌエル、ラファエルの七大天使をはじめとして最高責任者のエルラン

ティは、調和された安らぎの土地という意味でエデンと命名しました。

地球人口は増え続け、人々の年齢は五百歳、千歳を数え、あの世とも自由に交流して、自由に空を飛び地下にも巨大都市をつく

りました。人々は楽しく語らい、いたわり、助け合い、病気もなくそれはそれは平安な安らぎの日々。

それから時がたつにつれて人々の間に自我が生まれ、人間の暗い心は神の光をさえぎり、いたるところで火山は爆発し、陸は海に

海は陸になり、地球人類三億年の間には七度のノアの方舟現象が起こり、栄えては滅び人口も増減しました。その証拠に八千メー

トルのエベレスト山からは貝や魚の化石がぞくぞく出てくるのです。

一番近いそれは一万年ほど前のアトランティスやムー大陸の陥没です。現代こそは人類史上最高の科学文明と誇ってもそれは誤り。

光を利用して宇宙空間をせばめてゆく乗り物も、公害物質を有効に利用する方法も、地下や海底に大都市を作る方法も、すべての

病気を克服する方法も、現代のわれわれが想像を絶する超文明があったのです。

もうやがて、いやすでに？かつての両大陸を経験した霊団がこの世に生まれてくると、彼らが当時を思い出し、現代よりもっと

すごい時代をつくり出します。

天才とか大発明家といっても、どうってことはない、かつて自分が手がけたもののコピーと再生。

時がたてばU F Oの製作者も、大病を治す医者もこの世に出て、文明の進歩とはこういうことだと思います。

生まれ変わりの背景

私達人間は、暗い地獄の世界からはどうもがいても、この世に生まれ変わることはできません。懺悔により心を改めて、天上界の

心、つまり「自分本意に考える」という、天上界の最低の段階まで上り詰めないとこの世に生まれ変われません。

自分本意の心の段階なら許される最低レベルと言うと、その程度で良いのかとビックリされると思いますが、神様は大きな広い心

で人間の心の進化を待ち望んでおられるのです。

それでは、神様はどれくらいの心の段階なら満足されるのかというと、神界です。神界は万能の神様の世界という意味ではなくて、

神様が望まれる段階と理解してください。それは、損害を受けても人を非難しない心の世界です。この段階まで来ると僕も少し考え込んでし

まいます。高橋先生が示された「心行」は神界のレベルで書かれているということです。だから、例えそれ以下の人でも「心行」を拝読

すると、一時的にも「光の量の区域」が広がるので、チャンスがあれば何度も読んで理解することをお勧めします。

九十億の人口

この地球には最高九十億の人間しか生まれ変われません。

現在が六十億ですから残り三十億が待機中ということになります。その中にはこれから出る直前の者と地獄界で足踏みしているも

のもいます。

高橋先生は「皆さんは生まれ変わると簡単に言うけれども、沢山の人たちが生まれたいと望んでいるので、そう

簡単にいきません

よ」というのが講演の中にあります。九十億の人口では食料事情がもっと悪化して餓死者が増えると心配されるでしょうから申

しますが、みんなですることを知って融通し合えば何とかなるのだそうです。今の日本を見ても贅沢三昧だから本当にそうかもし

れません。

九十億、これはアガシャ系の霊団についてだけの数字です。

そのほかに大宇宙の他の霊団からも、進歩が著しいアガシャ霊団である地球に生まれ変わりたいと望んでゾクゾク押し寄せている

らしいのです。そのためには地球環境に最初は慣れるために、電気など文明のない密林の土人として修行を開始するのです。だか

ら先達の我々が彼らに暖かい手を差し伸べるのも当然と思います。

また、戦争や交通事故や墮胎によって、生まれ変わりの順番が大変混乱しているらしいのです。これは現在の世相風潮だけで述

べましたが、生まれ変わりが決定されるのは三百年前です。

お兄様誕生

ちなみにお兄様は、千七百年代に話し合いが行われ生まれる計画がなされたことになります。

天上界では会議が持たれ、お父様になる方とお母様を前に、あなた方の子供にして下さいとお願いをして、兄弟姉妹の順番も決ま

り、お兄様をはじめ姉弟五人はそれぞれ自己申告により登録されます。

両親になる方と固く約束を交わし、先にお父様とお母様になる方が縁によってそれぞれの家庭に生まれて行かれます。これを

縁生（えんしょう）といいます。

赤い糸に結ばれてと表現しますが、これは天上界での固い約束が潜在意識に固く刻まれている証拠です。固い約束によって

お父様とお母様になる方が、この三千世界の片隅で劇的な出合いをされます。

しかし、中には約束を破ってしまう人もいます。それはお互いに選びそこなったということで、原則的には不幸なことです。

また、再婚、最再婚も最初から約束はなく、お互いの相手はまったく無縁な人はいないと高橋先生は説明されています。

本題に戻ります。

先にお姉様が生まれて行かれ、サアいよいよお兄様の番です。

お母様の妊娠受胎です。三ヶ月ともなると胎児も細胞分裂、増殖も進みます。胎児の発育はお兄様という霊のコントロールによっ

てなされます。胎児の肉体を支配しようとする霊がいなければただの肉の塊です。

妊娠三ヶ月を過ぎる頃になると、いよいよ胎児への降霊です。日本ではこれを天孫降臨と言いました。待機所では、お兄様の友人、

先輩等の関係者が集まって別れを惜しんでいます。僕もその片隅で「弟としてよろしく願います、がんばってね」とお兄様を

送り出しました。

この世への降霊はあの世ではいわば死です。

妊娠の初期にはつわりが起こることがあります。

悪阻（つわり）は、降霊した胎児の意識と母親の意識の相克です。母親の意識と胎児の意識が調和されると、つわりもおさまります。

母親の嗜好の変化は胎児の過去世での食性が一時的に出たものです。普段は見向きもしなかった食べ物を母親は人が変わったように

興味を示して食べることをいいます。

また、人は色々な事情から仕方なく墮胎を選ぶことがあります。

赤ちゃんは降霊してもこの世に生まれて魂を汚したわけではなく、あの世へとんぼ返りさせたのですから、心は垢つかず、汚れつ

かずの天子の心のままですから赤ちゃんの恨みなどある筈はありません。、水子産業といわれる悪徳宗教に気をつけなければな

りません。

ただ、生まれるチャンスを逃したり、生まれる時期をはずした責任は逃れられませんから、一度は心から「私の心得違いで、あな

たの出生のチャンスをつぶしました。もう二度と間違いはしませんから許して」と赤ちゃんに謝るのです。言葉の表現は各人まち

まちでも、うそのない真実の言葉であれば良いと思います。霊にとってこの世は全部お見通しですから、真実の言葉しか通用し

ません。

また、妊娠したからには相手がいるわけで、男性こそ心から謝るべきです。今度は僕自身のことです。

僕は十三人の墮胎の原因をつくっています。最初の脳出血のとき僕はICUでうなっていました。そのときアリアリと夢を見たの

です。

天井の蛍光灯の管球にそれこそ無数の裸の赤ちゃんがぶら下がっていました。そして、何やらみんなで心配そうに「グチュ、

グチュ」と話しているのです。

二月の寒い時期に暖房が効いているとはいえ、裸の赤ちゃんがびっしりとは尋常ではありません。すると僕が「ホラ、みんな寒い

だろう早く」とフトンを押し広げて促しているというもので、非情な僕の「鬼の眼にも涙」でした。心から「二度としない」と

謝ったことは言うまでもありません。

今でもアリアリと思い出せ、管球に無数の裸の赤ちゃんという異常な情景でも、不思議と暗い光景ではなかったのです。僕の病気

を心配している感じの意外に明るい光景の、まさに光り輝く天子の心でした。

それで、高橋先生の説明が納得できたのです。

僕はこの体験から、女性の罪悪感につけ込んで、集金マシン化する水子供養産業といわれるものに鉄鎚を与え、加えてその原因

をつくった男性にも反省を促せたらと思うのです。

もとへ戻ります。

前にも述べましたように細胞分裂は勝手に為されるのではなく、お兄様の霊のコントロールによって胎児は順調に育っています。

赤ちゃんの意識はあの世ともツーツーですから、両親の喜びも悲しみもお兄様には全部お見通しです。

これが胎教の重要性で、心安らかに育てることがいかに大事かということです。もちろん夫の協力なくしては妻の安らぎなど望

むべくもありません。

こうして十月十日、月満ちてお兄様の誕生でした。

生まれたばかりの眼も見えぬお兄様が笑います。

そばには天上界からお祝いに駆けつけてきた友人も先輩もいました。

笑いは「おめでとう、よかったね」という饒（はなむけ）の言葉への応答の笑顔なのです。

それから あの世との連絡も途絶え、だんだん大きくなるにつれて自我が芽ばえ、天子のような純粋な心も永い人生体験の中で消

えて行くのでした。

生まれ変わりの数え切れない人生体験の智慧は、オギャーとこの世の空気を吸った途端に九十パーセントは心の奥深く潜在されて

しまうのです。

だから、ほとんど思い出せません。思い出せないからこそ、過去世の業績に振り回されず 今世の修行が可能です。

また、 九十パーセントという数字は次のことから来ています。

氷の塊を水に入れると九十パーセントは水に隠れ、表面に出て目に見えるのは十パーセントです。これが潜在意識は九十パーセン

トで、表面意識は十パーセントとなる理由です。人間は自然界の一員ですから、自然界の法則、摂理から何一つとして外れないの

です。

そして、八正道に示された、正見(正しく見る)、正思(正しく思う)、正語(正しく語る)、正業(正しく働く)、正命(正しく生活す

る)、正進(正しく人と調和する)正念(正しく願望を持つ)正定(正しく反省禅定する)という生き方で正しく人生を送っていると、潜在され

た転生輪廻の智慧がよみがえり、表面意識は十一、十二、十三、...パーセントと少しずつ増えて行きます。この智慧の宝庫がひも解かれ

ると、過去世の色々な体験から今世で学んでいないことも解答が出て、人生に正しく対処できます。

お兄様との別れ

九月二十七日、兄への教書が輪郭を描き始めると兄の危篤が届きました。

九月十日に入院の知らせを受けてから、私は医業の傍ら人が変わったようにパソコンに向かいこれを打ち続けました。前書きにあ

るように打ち始めたのが九月十四日です

私の面会の申し出にも、「まだ会いたくない」が兄の希望でしたから、それなら遠隔思念をと、十五日から『心行』を夜休む前の

約一時間かけて毎日読みました。

言語障害から普通には読めないなので、ゆっくりと心に込めて、眼前に兄を描いて唱えました。そうした中での危篤の知らせに、何

もとりあえず兄の入院先へ急ぎました。

個室には名前の一字が別の字に表示され、医界の権力闘争の渦に疲れた兄の生き様を垣間見たようでした。

駆けつけて見ると兄は夢うつつの状態で、私の問いかけに身を起こしたように見えても、自覚できたかどうかわかりません。

半日、兄のそばにいて、心の中では正法を話し、天上界のご加護を願いました。義姉は物言わぬ兄を前に、喋れる時に会わせた

かったと詫びて下さったが、半日も兄のそばにいて私は満足でした。

半日いた間に、こんなこともありました。

兄は持ち前の気をそらさぬ喋りとダンディズムから、女性関係も派手でした。そのような中で、私も会ったことのあるご婦人が部

屋を訪ねられたので、義姉の不在をいいことに兄の息子に目配せして招き入れようとしたが言付（ことづけ）だけで帰られま

した。

兄は六ヶ月前に腰と胃部の痛みを訴え診察を受けています。

そのときは狭心症だろうとニトロを処方されます。膵臓は診断も難しいらしく、糖尿病のインシュリンは、私も感心するほどキチン

と打ちつづけていたものですから、うすうす自分でも気づいたふしがあります。

それというのもこの少し前、膵臓癌で亡くなった医家の後輩を見舞いに訪ね「痛いですよ、どうしようもありません、痛くてまっ

すぐ寝れないから、椅子に座って寝ます。麻薬の量が増えるばかりで」という言葉に、少なからずショックを受けていたようで、

医者宣告を受けたあと、自分の病状に重ねて、詳しく未亡人の奥様に電話で尋ねていたようです。

この二十七日は、兄は夢うつつのような状態で予断は許されない状況でしたが、別れを惜しみながら病室を後にしました

この二日後に兄はこの世を去りますが、ダンディが身上の兄は素敵な顔をしていました。私の涙の対面から、こんなことも聞きま

した。

深夜に逝（い）った兄を、息子たちはよく通った懐かしい場所へ連れて行こうと自分達の車を用意したそうです。

「それはいけません」と注意を受けて、それから専用の車で兄は自宅へ帰って来ます。

仏間に安置された兄に、四年も断っていたビールをストローで口へ運んでもビールは口外に流れ落ちるばかりで、それから皆は

申し合わせたようにフトンを剥ぎドライアイスを除けて、エレベーターに兄を立てて下へ降ろしたというので

す。兄を支えた息子

の一人は、「狭い庫内でお父さんのビールの口がブチュッとついて」、と話しては涙でした。

それから朝の白々と明ける中を、人目を避けて車に運び込み、「ホラお父さんここですよ」と涙のドライブだったそうです。

葬儀の日のことです。

息子達の手で準備は手際よく進められ、多くの別れを惜しむ人達で埋まりました。葬儀が始まる少し前、見覚えのあるご婦人が近

づいて来ます。兄の幼馴染でした。「家族を大事にされる方でした。会場へ来るとき書きました」と差し出されたのは、手帳を破

いた紙片に走り書きされた句（うた）一首でした。

秋空に吹き渡る如く逝った君

父と語りて母に甘えてか

出棺のとき義姉に悪いと思いながらも、人知れずこの紙片を、兄の遺体の献花に添えました。

そして、火葬場でのこと、最後の別れです。

義姉は兄にすがり付いて「私も連れて行って！」と何度も叫んでは泣き崩れました。「そんなことを言ってはダメ」と周りから口々に

飛び交い、息子も「お母さんしっかりしなくてはダメ」と叱ります。

係りも呆然（ぼうぜん）と成り行きを見守り義姉を促すと、兄は庫内へ静かに進んで、やがて点火の音が聞こえました。

すると、私の子供が「愛の形を見てしまった」と、興奮覚めやらぬ面持ちでつぶやきました。その後に初七日が会場を移して催さ

れ、そのとき或る二人が「私の主人のときは涙も出なかった」と冗談交じりに話していたのが印象的でした。

それから私は自宅に戻るまで、あれでは兄はいよいよこの世に執着して、義姉さんにもしものことがあってはと、

「お兄様、あなたはもうこの世の人ではありません。お坊さんがお経を上げ、別れを惜しむ多くの人達の参列を見て知っている

でしょう。亡くなったことを自覚して、この世の一切に執念（囚われの心）を持ってはいけません」と心で訴え、『心行』を唱

えました。

次の話しは本当に起こった事実です。

東京駅のパーラーを皮切りにアメリカへ事業を拡大する実業家がありました。いつもは奥さんと飛行機を分け危機管理に備えました

が、そのときに限って同伴で日本へ向かいます。やがて日本というときに循環器障害を起こし病院へ搬送され亡くなりました。

これだけならまだしも、次の弟が葬儀の準備をしていて、同じ症状で亡くなります。二つの葬儀を出そうと三男が準備をしている

と。また、同じ症状で倒れます。医者は来る、葬儀の準備はしなければと、現場は大変なことになりました。

そのとき葬儀の手伝の夫人が、とっさに『心行』を取り出して読んだそうです。すると三男がムックリ起き出して、一緒に一番大

きな声で読み始めます。三男の話しでは長男が出てきて「お前は帰れ」と追い返されたというのです。

こうも同じことが次々に起こるのは、実業家として長男をはじめ全員、同類のお金の亡者ということなのです。

『心行』は人間の生き方や宇宙の成り立ち、あの世の仕組みを教えるのですから、読んで聞かせると「そうか」とわかって「お前は

帰れ」ということになるのです。

この『心行』は、園頭広周先生が主宰された国際正法協会アメリカ会員の娘さんが、読んであげたら良いと夫人であるお母さんへ

送ったものでした。

誰でも愛があれば可能ですから、応用してみてください。

この一例を挙げたのは、兄夫婦の場合、一心同体の同類ですから、義姉が後を追い兄が誘うという最悪の事態は困りますから私も

慌てました。

引導はどう渡す

引導とはあの世へ手引くことをいい、死の宣告をすることです。

お坊さんの難しいお経での引導は考えられません。私ならとても理解できません。

ここに延命器で一年も二年も生かされた植物人間がいたとします。植物状態ですから、このままではものの用に立ってはいません。

この人を通して周囲へ反省を促したり、死とは何か生きるとは何かを考えるチャンスを与えたことは認めます。

高橋先生は、生きているということはものの用に立っていること、と教えられましたから、この状態では役に立っているとは言え

ません。

しかも、このままでは魂の進化を止めるだけでなく、この世へ永く執着させるだけです。

そこで、『心行』を読んで聞かせると、人間の生き方、宇宙の成り立ち、あの世や魂の救済の仕組みを教えることになりますから、

「この世に絶対に執着してはいけない」と教え続けると「そうか」とわかって、自ら息を引き取るのです。これが本当の引導を渡

すということです。

園頭先生が指導された国際正法協会では、会員がまじめに応用、実践しました。ところが、延命器をはずしたり手もかけないのに、

安らかに死んで行かれるものですから、大変なことをと悩んだ人がいました。

寝たきりの人がいては大変、早く自分達は楽にとの心が少しでも働くと、原因と結果の法則によってバッチリ反省させられますか

ら、少し間を置いて、その人の魂が救われるよう愛を持って応用してください。

正しいということの尺度は、それによって皆が安らかか皆が調和するかですから、皆が納得するまで話し合うことです。一人よが

りは争いの元です。

以上のことを述べましたのは、兄は末期の膵臓癌との医者宣告と、医家である息子の「膵臓癌はとても難しく、痛みもひどい」

との認識もあったので、遠隔思念で『心行』を読んで聞かせ、「この世に執着してはいけませんお兄様」と訴え続けていると、医者

の適切な加療と看護によって、さほど痛みも訴えず逝きました。私が兄の病気を知ってから二十日足らずでした。

亡くなってやがて半月ですが、いまでも冥福を祈って夜休む前に約一時間をかけて『心行』を読んで聞かせ兄の魂の浄化を祈ってい

ます。

いまは主に、お兄様はこの世の人ではないこと、義姉さんに執着しないこと、もうあの世では、病気はなくなり健康であることを

教えています。あのとき喧嘩をしてでも兄の酒飲を止めるべきでしたが、今となってはこれ位の努力も仕方ありません。

逝くなんてまだ先のことと信じていたものですから、これを兄に読ませることもなく、指導と実践を何もするこ

となく、腑抜けて

も一所懸命、最後の章を努めます。

死んだらどうなる

人は亡くなると、しばらくは無意識状態です。

坊さんが来てお経が上がり、葬儀の参列者などを見て「あれ死んだのかな」と自覚します。高橋先生の現証の時間には、いまだに

死んだことを自覚しない霊も登場して、今いつですかと尋ねると平気で江戸時代の年号を告げる霊もいます、切腹して死んだ霊

ですから。

しばらくすると普通は死を自覚しますが、生前の等速度運動から、痛みのひどかった人は痛みがあり、食事のどを通らなかつた人

は食事も出来ません。

しばらくはお兄様も病気の影響が続きますが、病気の肉体は脱ぎ捨てているのですから、もう病気はありません。

高橋先生の講演では、傷痍軍人の足のない霊が出てきて、足が無いからとさんざん苦勞の悔やみごとを告げますから、「ホラちゃん

と足はあるよ」と教えられると恐る恐る確認して泣き出してしまいます。

この例のように自覚できずに病気を引きずっているのも、教えることが大事です。

死んですぐはこの世の延長線上にあるので、食べ物欲しがりますからお供えも意味があります。

もうそれからは必要ありませんが、一人よがり争いの元ですから知恵を働かせてください。

この世は食べ物がエネルギーの元でも、あの世のエネルギーの元は神の光です。神の光を閉ざしたのが地獄霊ですから、神の光を受

けられぬ地獄霊のエネルギーは、この世の悪の想念がエネルギーです。

話はかわりますが、サリンを撒いた教祖は、あの世の同類からコントロールされて前代未聞の事件を仕出かしました。この世の悪の

想念がエネルギーというところをよく考えてみてください。

もとへ戻ります。

そうしていると係りが出てきて、「あなたは死の用意がありますか、死ぬ覚悟がありますか」と尋ねられます。

この係りは菩薩界の住人で、慈悲と愛の光の化身ですから、死者にとって光の玉に見えます。

三途の川

三途の川もあってこの世の執着、心のお荷物を捨てないと渡れないというあの世の大河です。

死んで二十一日間は、魂は家の周りや家の軒などにいます。この世に何十年も生きて生活していたのですから当然かもしれません。

二十一日過ぎると、どんなにこの世に執着していても「何をボヤボヤしているのか早く」と急(せ)かされて、あの世の修養所へ

行かねばなりません。悟った人はといえば、この世に執着がありませんからストレートに修養所へ行きます。

でも、凡人はどこへ行っていいのか戸惑いますから、そういうときは魂の兄弟達(魂の先祖)が連れて行きます。日本人の場合、魂

の兄弟が外国人では「どうして鼻の高いのが、色の白いのが」と驚きますからこの場合は「肉体先祖」が来て連れて行きます。この

ように我々は色んな所に生まれているのですから、国際的で宇宙的な視野で対応せねばなりません。

修養所では、生きていた当時のすべての出来事を立体スローモーションカラーピクチャーで、ありのままを全部通して見せられ反省

をさせられます。

「これはとてもまともには見られません」と高橋先生は教えられました。

この修養所のそばには、無意味と悟った人達の捨てたものすごいゴミの山があります。

二、三挙げると、心の中で持ってきたお金、卒塔婆、白装束、宗教用具などの山です。これは日本人の場合ですから、地球規模で

考えるとどうなると思いますか。

あの世は実在界といって、消えて無くならない心の世界(意識界)ですから、あの世でも処置に困っているようなのです。

この修養所での反省期間が二十八日間です。

四十九日の由来

先の二十一日間とこの二十八日間の和が四十九日の由来です。

残された者がこの間に、財産争いなどの気になることでもめたりしますと、せっかく修養所へ来て反省をしているのに、死者はその

成り行きを見届けようと、執着のある場に引き戻され、執着霊となってこの世に問題を起こします。葬式の帰りに自動車事故を起す

のもこの現れです。

こういう理由から、四十九日間は静かにする方が良いでしょう。

四十九日を過ぎると、天国へ行くか地獄へ行くか自ら裁いて定住します。

閻魔（えんま）様が裁くのではなく、自分の嘘のつけない善なる心が裁くのです。人に嘘はつけても自分にはつけません。裁くの

はこの嘘のつけない善なる心です。

地獄界と天上界 天国

あの世は同類の世界です。

同類の世界とは、心優しい人は心優しい人が集まる世界、意地汚い人は意地汚い人が集まるという世界です。

心優しい人達が集まる世界は、どこを見ても優しい人達ばかりの世界ですから、それはそれは楽しい天国です。

一方、意地汚い人が集まる世界は、自分を含め皆が意地汚いので、慈悲も愛も無用の安らぎの無い世界ですから、それこそ苦しい

地獄の世界です。

情欲の世界はどこを見ても肉欲を続けるという世界ですから、まさしく地獄絵。色んな人達の世界を想像してみてください、いやに

なります。

この地獄界の住人は、そこに居つづけると、もうやるせない、考えただけでも狂いそうになる世界ですから、「こんなことはや

めた」と反省すれば、上の段階（上の光の量の区域）へ進むことができます。

地獄界はいわば反省の世界といえます。

反省の習慣のない人は、今からやっておくのがいいのかもしれませんが。

前に述べましたように、天国の最低の基準である、自分さえよければという心の段階まで高めると、また地上界に生まれ変われる

のです。

夫婦はあの世で会えるのか

道行きの落ち先は無理心中や自殺です。惚れて好かれての相合い傘でも、あの世で添えるかと言うと、心の段階(光の量の区域)

の厳然とした世界ですから、普通の人でも人間性の違いがあれば住む世界が違います。ましてや、心中は神の光を閉ざした行為

です。暗黒で自分の居場所もわからぬ状態ですから、まづ無理でしょう。夫婦の場合は、お互いの人間性を参考にしてください。

人は生まれ変わるまでに、特別な使命の人は五、六十年で、出て来る場合もありますが、普通の人、千年から二千年でこの世に

生まれ変わるので、反省、懺悔の努力あっていつかは、めでたく出会うこともあるでしょう。

供養ということ

供養というと四十九日の法要とか、一周忌とか十三回忌等を指します。

この日に皆が集まって、お供えやお坊さんの経も上がって和やかな雰囲気でも、いつも仲が悪く喧嘩ばかりでは、故人もあの世から

見ていて心配でなりません。彼らもあの世ではあの世の修行があるのですから、これではおちおち修行もできません。皆が集まり

お供えやお坊さんのお経で、これでよしとする心を考えたことがあるでしょうか。

そもそも供養というのは、この世の家族が仲良く、オホホアハハと笑いの絶えない環境をつくることです。

あの世からこの世はお見通しですから、仲の良い姿は、あの世の霊の模範ともなり励みです。供養とはお供えやお経を上げること

ではなく、家族が仲良くすることが供養です。

初七日、四十九日、一周忌、三回忌、七回忌、十三回忌、三十回忌、毎月の月参り、その他多くの法事、法要、大祭が行われてい

るのが現状のようです。

宗教儀式や用語について

「南無阿弥陀仏（なむあみだぶつ）」という意味は、

古代インド語で、「ナーモ、アミー、ダボ」といい、ナーモは帰依する、アミーはアミーといわれる名前の人、ダボは陀仏（仏陀）

で悟られた方。

意味は「アミーといわれる悟られた方に帰依します」ということです。

「南無妙法蓮華経（なむみょうほうれんげきょう）」とは、

「あのハスの花をごらん、あのドブ沼から清らかな花を咲かすように、私達の肉体もドブ沼と同じように、汗、大小便、目糞、鼻糞

など何一つとして綺麗なものはない。だが、心が真に正しい片寄りのない中道の物差しを持って生活したならば、あのハスの花と

同じように調和されて行くのだ」というお釈迦様の説法を短くしたものです。

合掌とは、

手を合わせることですが、右と左の両極端の手先を体の真中に合わせるということは、中道ということをお教えています。

塩

塩の意味は、苛性ソーダであるNaOHと塩酸HClの金属をも溶かす酸と塩基の両極端のものを混ぜ合わせると最も安定した塩

NaClとH₂Oの水になります。これも調和の中道ということをお教えたものです。

水

水も調和の中道ということをお教えたものです。塩の項の説明を参考にしてください。

仏像の由来

お釈迦様は三ヶ月間天上界へ行って地上にはありませんでした。悲しんだ人達がそっくりの像を作って寂しさを

紛らわせたという

ことです。高橋先生は今度は四ヶ月位になると思いますと言われていましたが、実現せぬまま昇天されました。

即身成仏（そくしんじょうぶつ）

これは、行者が土中に入って荒行をすることではありません。

この身このままで仏であるとの自覚は、観自在者、仏陀、悟られた人、宇宙即我の境地の人をいいます。高橋先生が教えられた宇宙

即我（うちゅうそくわれ）の相（すがた）を現わしたのが曼陀羅です。

数珠（じゆず）

本来は計算機でした。ものを数えたり、お百度を踏むときの回数や念仏の回数を数えるのに便利です。五つ玉のソロバンを縦にし

たものと言えはわかりやすいでしょう。江戸幕府の「数珠などを持って寺に参り…」と定めた制度から始まったのです。

線香（せんこう）

お釈迦様の時代、弟子達が竹林精舎などで共同生活をするとき、現代のような石鹼もなく臭かったので、匂い消しに梅檀（せん

だん）の香を燃やしたということです。

それが由来で、死臭消しには最適です。また、高橋先生の講演には椿の葉っぱを叩き潰して石鹼としたとあります。ご存知のように

石鹼は油から作りますから、椿油を応用したのかもしれませんが。

ローソク

お釈迦様が説教されるときは、仕事の後皆が集まりやすいように、夜を選ばれました。菜種油を燃やされ明かり

とされたといい、

原料の菜の花がきれいだったようで、この明かりがローソクの由来です。

動物は鹿やクジャクもいたようです。

現代の宗教によっては、断面が円形の普通の形をしたローソクではなく、特殊なものもあるようです。それを使うことに決められた

宗教団体では、大した金額でないにしろ集金マシンになり得ます。

諸天善神

不動明王 心の正しき人を守る天使

稲荷大明神 五穀豊穰を助け、情報の収集、正しき人を助ける天使です。

決して狐ではありません。

大黒天 光の天使を側面から経済的に助け、正しき人を助ける天使。

高橋先生は「松下幸之助氏がそれで、天上界の協力があってはじめて金儲けが出

来たのです。それを自分の力だと思って、僕は僕で自分で金は集めます、天上界

に帰って叱られますよ」という講演があります。

八大竜王 心の正しき人を守り、人間以外の一切の生物の統括管理の天使

ちなみに、映画寅さんシリーズの帝釈天はバラモン教の神の名前です。

正法の教え

正法の教えは、自然の姿を通して人間のあり方を解き明かし、八正道を心の物差しとして、調和された安らぎ

の道につけと教え

ます、

そして、転生輪廻（輪廻転生）の法を示し、万生万物は相互の関係にあって安定しているのだから、感謝の心を持ち報恩の行為を

実践することが大切であると強調し、報恩の行為は自分の環境に応じて奉仕と布施の実践活動を通して、社会人類のために果たす

べき人の道を教えるものです。

これに加うるに、人類はみな兄弟、貧乏人も金持ちも、地位の差に関係なくみな神の子であり、生まれた環境は自らが選んだも

のであり、環境を通して悟り、人々を救済するための目的を持って生まれてきたと、原因と結果の法則（因縁の法則）を説き、悟り

の道を示します。

Home

『心行』

高橋信次先生が示されたもの

（心行は宇宙の神理、人間の心を言霊（ことだま）によって表現したものである。それゆえ心行は拝むものでも、暗記するもの

でもなく、これを理解し行うものである。正法は実践のなかにこそ生命が宿ることを知れ。）

われいま見聞（けんもん）し、正法に帰依することを得たり。

広大なる宇宙体は万生万物（ばんしょうばんぶつ）の根元にして

万生万物相互の作用により、転生輪廻の法に従う。

大宇宙大自然界に意識あり。意識は大宇宙体を支配し、万生万物をして調和の姿を示さん。万生万物（ばんしょうばんぶつ）は広大

無辺な大慈悲なり。大宇宙体は意識の当体にして

意識の中心は心なり。心は慈悲と愛の塊（かたま）りにして、当体・意識は不二（ふじ）なることを悟るべし。

この大意識こそ、

大宇宙大神霊・仏なるべし。

神仏なるがゆえに当体は大神体なり。

この現象界における太陽系は、大宇宙の小さな諸器官のひとつにすぎず、

地球は小さな細胞体なることを知るべし。

当体の細胞なるがゆえに、細胞に意識あり。

かくのごとく万物すべて生命にして、エネルギーの塊りなることを悟るべし。

大宇宙体は大神体なるがゆえに、この現象界の地球も神体なり。

神体なるがゆえに大神殿なるべし。大神殿は万生、魂の修行所（しゅぎょうじょ）なり。

諸々の諸霊みなここに集まれり。諸霊の輪廻は三世（さんぜ）の流転。

この現象界で己の魂を磨き、神意（しんい）に添った仏国土・ユートピアを建設せんがためなり。

さらに宇宙体万生が神意にかなう調和のとれた世界を建設せんがため、

己の魂を修行せることを悟るべし。

過去世、現世（げんせ）、来世の三世は生命流転の過程にして、永久（とわ）に不変なることを知るべし。

過去世は己が修行せし前世、すなわち、過ぎ去りし実在界と現象界、この世界のことなり。

熱、光、環境、いっさいを含めてエネルギーの塊りにして、われら生命意識の修行所（しゅぎょうじょ）なり。

神仏より与えられし、慈悲と愛の環境なることを感謝すべし。

来世は次元の異なる世界にして、現象界の肉体を去りし諸霊の世界なり。意識の調和度により段階あり。この段階は、神仏の心と己

の心の調和度による光の量の区域なり。

神仏と表裏一体の諸霊は光明に満ち、実在の世界にあって、諸々の諸霊を善導する光の天使なり。光の天使、すなわち諸如来、

諸菩薩のことなり。

この現象界は神仏よりいっさいの権限を、光の天使に委ねしところなり。

光の天使は慈悲と愛の塊にして、あの世この世の諸霊を導かん。

さらに諸天善神あり、諸々の諸霊をいっさいの魔より守り、正しき衆生を擁護せん。肉体を有する現世の天使は諸々の衆生に正法

神理を説き、調和の光明へ導かん。

この現象界におけるわれらは、過去世において己が望み、両親より与えられし肉体という舟に乗り人生行路の海

原へ、己の意識・魂

を磨き、神意の仏国土を造らんがため、生まれ出（い）でたることを悟るべし。

肉体の支配者は己の意識なり。己の意識の中心は心なり。心は実在の世界に通じ、己の守護・指導霊が、常に善導せることを忘れる

べからず。

善導せるがために、己の心は己自身に忠実なることを知るべし。

しかるに、諸々の衆生は己の肉体に意識・心が支配され、己が前世の約束を忘れ、自己保存、自我我欲に明け暮れて、己の心の魔に

支配され、神意に反し、この現象界を過ぎ行かん。

また、生老病死の苦しみを受け、己の本性も忘れ去るものなり。

その原因は煩悩なり。

煩悩は、眼（げん）、耳（に）、鼻（び）、舌（ぜつ）、身（しん）、意（い）の六根が根元なり。

六根の調和は、常に中道を根本として、己の正しい心に問うことなり。

己の正しい心に問うことは反省にして、反省の心は、己の魂が浄化されることを悟るべし。

己自身は孤独に非ず。意識のなかに己に関連せし、守護・指導霊の存在を知るべし。

守護・指導霊に感謝し、さらに反省は己の守護・指導霊の導きを受けることを知るべし。

六根あるがゆえに、己が悟れば、菩提と化すことを悟るべし。

神仏の大慈悲に感謝し、万生相互の調和の心が、神意なることを悟るべし。

肉体先祖に報恩供養の心を忘れず、両親に対しては孝養を尽くすべし。

心身を調和し、常に健全な生活をし、平和な環境を造るべし。

肉体保存のエネルギー源は、万生を含め、動物・植物・鉱物なり。

このエネルギー源に感謝の心を忘れず、日々（ひび）の生活のなかにおいて己の魂を修行すべし。

己の心・意識のエネルギー源は調和の取れた日々の生活のなかに、神仏より与えられることを悟るべし。

己の肉体が苦しめば心悩乱し、わが身楽なれば情欲に愛着す。苦楽はともに正道成就（しょうどうじょうじゅ）の根本に非

（あら）ず。

苦楽の両極を捨て中道に入り、自己保存、自我我欲の煩悩を捨てるべし。

いっさいの諸現象に対し、正しく見、正しく思い、正しく語り、正しく仕事をなし、正しく生（い）き、正しく道に精進（しょう

じん)し正しく念じ、正しく定(じょう)に入るべし。

かくのごとき正法の生活のなかにこそ、神仏の光明を得(え)、迷いの岸より悟りの彼岸に到達するものなり。

このときに、神仏の心と己の心が調和され、心に安らぎを生ぜん。

心は光明の世界に入り、三昧(さんまい)の境涯に到達せん。

(この諸説は末法万年の神理なることを悟り、日々の生活の師とすべし)

祈願文

(祈りとは、神仏の心と己の心の対話である。同時に、感謝の心が祈りでもある。神理にかなう祈り心で実践に移るとき、神仏の

光はわが心身に燦然と輝き、安らぎと調和を与えずにはおかない。)

前文

私たちは神との約束により、天上界より両親を縁として、この地上界に生まれてきました。

慈悲と愛の心を持って、調和を目的とし、人びとと互いに手を取り合って、生きて行(ゆ)くことを誓い合いました。

しかるに、地上界に生まれ出た私たちは、天上界での神との約束を忘れ、周囲の環境、教育、思想、習慣、そして五官に翻弄され、

慈悲と愛の心を見失い、

今日まで過ごしてまいりました。いまこうして正法にふれ、過(あやま)ち多

き過去をふりかえると、自己保存、足ることを知らぬ欲望の愚かさに、胸がつまる思いです。

神との約束を思い出し、自分を正す反省を毎日行い、心行を心の糧(かて)として、己の使命を果たして行(ゆ)きます。

願わくば、私たちの心に神の光をお与えください。仏国土・ユートピアの実現にお力をおかしてください。

大宇宙大神霊・仏(ほとけ)よ

わが心に光をお与えください。心に安らぎをお与えください。

心行を己の糧（かて）として日々の生活をします。

日々のご指導心から感謝します。

一、天上界の諸如来、諸菩薩(光の天使)

わが心に光をお与えください、心に安らぎをお与えください。

心行を己の糧として日々の生活をします。

日々のご指導心から感謝します。

天上界の諸天善神（しょてんぜんじん）

わが心に光をお与えください、心に安らぎをお与えください。

わが心を正し、いっさいの魔よりお守りください。

日々のご指導心から感謝します。

わが心の中にまします守護・指導霊よ

わが心を正しくお導きください、心に安らぎをお与えください。

日々のご指導心から感謝します。

万生万物

わが現象界の修行にご協力、心から感謝します。

先祖代々の諸霊

われに修行の体をお与えくださいまして心から感謝します。

諸霊の冥福を心から供養いたします。

先祖供養

先祖代々の諸霊よ

私たちに肉体をお与えくださいましてありがとうございました。

私たちは神仏の子としての使命を悟り、正法の生活を実践しております。

皆さまの冥福を心からお祈りいたします。

もし諸霊の中に、暗い世界におられる先祖がございましたら、よく私の申し上げる神理をお聴きください。

皆さまは、この世の肉体は持っておられません、私の話はおわかりいただけるはずです。

暗い世界は地獄でございます。なぜ地獄で生活しておられるのか、おわかりになるでしょうか。

それは、人間として生活しておられたときに、神仏の子としての使命を果たさなかったからでございます。

自分のことばかりを考えて、心から人びとに慈悲や愛を与えたでしょうか。

人を恨（うら）んだり、妬（ねた）んだり、そしったり、怒ったりしたことをよく思い出されて悪かったことを反省してください。

自分でつくった過（あやま）ちを反省し、神の許しをお願いしてください。

心は安らぎ、必ず天上界に行（ゆ）けます。

神理の経文を供養いたしますからよく心に受けとめてください。

（心行を朗読して、最後に）

大宇宙大神霊・仏よ

迷える霊に光をお与えください、諸霊の罪をお許してください。

実在界の光の天使よ

迷える霊に光をお与えください、安らぎをお与えください。

実在界の諸天善神よ

迷える霊をお救いください、いっさいの魔よりお守りください。

健康祈願

大宇宙大神霊・仏よ (氏名をいう) に光をお与えください。

私たちはこの現象界で、肉体という舟に乗り、魂を磨き、神仏の体であるこの地上界に、平和と安らぎのあるユートピアを建

設せんがため肉体を持ったのでありますが、眼(げん)・耳(にい)・鼻(び)・舌(ぜつ)・身(しん)・意(い)の六根

煩悩に支配されて、多くの罪を犯してまいりました。

私たちの罪をお許してください。

私たちは正法に帰依し、自分の使命を悟りました。

私たちの心に光をお与えください。心に安らぎをお与えください。

当体に憑依(ひょうい)しているいっさいの霊よ、あなたたちは人間に憑(つい)てはいけません。あなたたちが憑依してい

ると、精神的にも肉体的にも苦しみ、私たちは魂を磨くことができません。

この現象界は、あなたたちの住む世界ではありません。

あなたたちはいっさいの執着から離れなさい。

あなたたちも正法を悟って光の世界へ帰りなさい。

実在界の諸如来、諸菩薩(光の天使)よ、

この迷える霊をお救いください。

実在界の諸天善神よ

迷える霊をいっさいの魔よりお守りください。

迷える霊よ、人間界の人びとに憑(つ)いていては、安らぎを得ることはできないのです。

神仏に祈願して、よく自分自身を反省しなさい。神理の心行を供養しますから、心によく銘記してください。

(心行を朗読する)

病氣平癒祈願

大宇宙大神霊・仏よ

わが心に光をお与えください、心に安らぎをお与えください。

実在界の諸如来、諸菩薩(光の天使)よ

わが心に光をお与えください、心に安らぎをお与えください。

実在界の諸天善神よ

わが心をいっさいの魔よりお守りください。私たちは正法に帰依して、日々を正しい想念と行為によって、調和と安らぎのあ

る世界を築きます。

(まず自分自身の心に光を受けてから、両方の手のひらを体の悪いところに向け、体より一センチぐらい離して健康祈願する。

そしてさらに、次のようにいう。)

当体の意識(患部)よ

あなたたちは肉体舟としての使命を、この現象界に出るときに、神仏と約束したはずです。あなたたち細胞集団は、魂修行の

目的を果たしてください。

大宇宙大神霊・仏よ

当体(患部)に光をお与えください、安らぎと調和をお与えください。

(約三十分ぐらいで効果が出てくる。神理を悟った生活をしていれば、こうした効果はさらに大きく現れてくる。)



心の世界

「心の世界」

八起正法

私は、これといって世の中の益になることなく五十歳も過ぎて、気が付いてみれば周りの者に迷惑を掛けることの方が多かった。

因縁の法、因果応報とか原因結果の法とか云うように、それまでの生きざまの結果が大病という形となって現われて初めてこれではい

かんぞと気が付いた。

例えば、私が一生を終え、あの世で生前のすべての記録をパノラマ映画のように眼前に見せられ反省させられた時に、

「そして、お前は生きていた時に何をやってきたのか？」

と、あの世の係の人（主に菩薩界、光りの大指導霊）に問われたら返す言葉に困って、

「エー・ソノー、子供に教育もさせ残された者達が困ることのないようにしてまいりました、ハイ。」

「フムなる程、それでどうした」

「エッ？ハイ」

この係は私に何を答えさせようとするのだろう。

生前は色々な団体の役員も引き受け、地位名誉の事もやって来たが...

「今、お前が心の中で思ったこと以外にこれといったことはないのか？」

「エッ？ハイ。」

どうも、ここは生きていた頃と違って思ったこと考えたことが全部表面に出てしまう（表面意識90%と潜在意識10%）と見えて、何もかもお見

通しのような。私は考え込み暫くして、

「病気の者を治してきました。」

と、胸を張って答えた。

「医者と名のつくもの誰でも皆それ位のことはする、現にその行為で生活もし人間が創り出したお金も貯わえたのであろうが、

外には何か？」

「まだ外に、デ・スカ...」

「そうだ外にだ」

段々心細くなってきて、思い出そうとするが外には何にも出て来そうになかった。

「困った人に手を差しのべたとか、慈悲とか愛とか心からやってあげたことはないのか、金額の多寡ではない。」

「ありません。外には思い出せません！」

「そう捨てバチになるな、いやいや、お前の心の記録によると大学時代に身障者の施設の子供達を水族館におんぶして連れて行った記録

がある。学生服の肩の部分の子供がダ液でグシャグシャにしても満足感で一向に気にも止めなかったようだが...、フム、しかしこれとて

偽善に酔っておった。」

やれやれ、私にも一つ位はあったのか、しかしこれは手きびしいぞと思った。

「ナーお前、人間の価値というものは学歴ではない、地位、名誉でもない、財産の多寡などもっての外、中道という心の物差しを通して人にどれ

だけのことを思い遣ったかと言うことだ。」

「そうですか、真実の価値という“ふるい”にかければ、私は小石ほどのものが僅か一個ですか」

「そうだ」

「アーアー、あくせく働いて身を粉にして小石一個とは」

すると、

Home

「一生懸命に働くことは正しいことだ。しかし、あくせく集めた金であっても、それを自分や一族のためだけに欲張ってはならぬ。

たとえ、それがお前のものであっても足りることを知ったら、多くのものを困っている者や傷つき倒れた者への暖かい贈り物にすることだ。

自然を見るがよい。百獣の王といわれるあのライオンでさえも足りることを知って、腹が満たされた彼らのそばを獲物が通っても見向きもせず、

その日その時の糧に満足してある。地上に倉をつくって、あくせく貯め込むのは人間位くらいのもので、自然界のものはみな足りることを知って

いる。神は、万物の霊長といわれる人間に、必要なものを全て与えられているのだ。神の意識が満ち満ちていたその当時は、電話などの

通信機器もいらず、肉体はそこに置いたまま意識でどんな遠い所へも行けたし、どんな遠い者とも自由にコンタクトし、瞬時に見て、聞いて、

話せた。体はそこに居ながらに、意識は自由に飛び交い、分かりやすく言えば霊的通信だ。自分の肉体を移動させる必要の時のみ、

光子移動体（反重力場の光のエネルギー - で動く今の自動車のようなもの）を利用して、無公害で事故もなく瞬時に移動すればよかった。

道路をつくったり橋をかける必要もないから自然を壊すこともなく、草木は繁茂し動物も鉱物も全て共存して平和だった。そして、宇宙空

間を狭めてゆく乗り物は、光のエネルギー - や磁気を利用したもので「反重力光子宇宙船」といい、今までにお前も名を聞いたことの

ある ” あの ” UFOだ。高橋信次という方の予告によると、これから七百六十年後にはアフリカの大西洋岸に大宇宙ステーションがつくられ、

人類は宇宙にも自由に飛び立つのだ。神の意識が満ち満ちていたその当時に人間は、心に曇りをつくることもなく自由にその能力を発揮

していたが、今はどうだ。気の遠くなるような永い永い輪廻転生（生まれ変わり死に変わり）する間に、人間は自から神の子としての神性、

仏性を閉ざし、盲目の人生を歩かなければならないようにしてしまった。その当時は、意識でどんな遠い所へも瞬時に行って、見て、聞いて、

話すことも出来たので、日常は隣り近所の者と助け合い補いながら自由に楽しい生活を営んだものだ。その内に自らの手で神が与えたその

力も閉ざしてしまった人間は、為すすべもなく一時期を過ごすことになる。」、

「どうして、神の与えた能力をなくすことになったのですか」、

「それは人間の心の中に、怒り、愚痴、足ることを知らぬ欲望などの神の光りをさえぎる想いが生じたからだ。そこで、自由と創造の力を

与えられている人間は、仕方なく自分達の力で一つ一つ解決していかなければならなかった。どんなに遠くへも瞬時に行って...人間達は乗り

物を考え出した。人力や動物の走る力を利用した乗り物から、次には機械の力を動力として早く走ることを考えついた。しかし、これと

て陸上を走り廻るもの、道なき道は自由に早く走り廻ることは出来ないもので、段々と道を拡げ伸ばすこととなった。その為には自然も壊し

草木も犠牲にしたし、動物の寝ぐらである静かな楽園もこわした。何一つ、この愚かなことによって喜んだものはなく、人間が神の意識に

満ち満ちていた頃は、その場において自由に遠くの者とも連絡もとれ、行って見て聞いて...今まで話した通りだが、全てに迷惑をかけることは

なかった。人間は自然の営みを乱すことなく、植物も動物も鉱物もみな人間生活に協力をして全てが自然と融合し一つとなっていた。

しかし、これとて人が走り廻るより早く移動も出来たが、道の上を走るには限界がある。そこで、鳥のように自由に空間を飛べないものか、と。

こうして人間は飛行機をつくり出した。大きな音は立てるし、長い助走路をつくって燃料だってばかりにはならない。そして、空からは煤煙は

ふりまく、つまり公害ってやつだ。自動車ですら生活環境を変えてしまったのに、地上の上だけではもの足りず今度は空から自然の調和を

乱すとい自然そのままの姿を変えれば気がすむというのかね。しかし、何んと言ったって飛行機は飛行機なんだ、ちょっとミスすりゃおっこ

ちる、危なくって危なくって。そして、自分達の狭い領土だけじゃあき足らず他人の土地も取りあげる。取りあげる為には飛行機に爆弾を

積んで、草も木も動物も鉱物も人間もすべて根こそぎ殺戮して破壊してしまう。そして、闘争が終わった後に

「平和を勝ちとった」という。

闘争、争いという種を蒔いて、平和の実を刈り取れるとでも思っているのかね人間どもは、愚かなことだ、まったく。そして、何だあの自動車

というもの、あんな危ないものを、よく人間は認めているものだ。便利だと思って創ったものによって、毎日毎日、何人の同時代の同期生

が命を落としていると思うかね。自分達がつくり出した不完全なもので、自分達の首をしめているのだから自業自得と云えばその通りだが、

我われ実在界（あの世）の者から見れば「よくもまあ、あんな不完全で危ないものに」と思う。お前も、この実在界の住人となって、しばらく

暮らしてみるとよく解るようになると思うが、今はまだ実在界にある反重力光子宇宙船、先にも述べたUFO、こんなものが現象界（地上

界・この世）で出来るようにならなきゃ嘘で、これが出来るようになって初めて乗り物も完成するのだ。確かに、この反重力光子宇宙船は

かつての遺物であり現在はまだこの実在界にあるが、これは光の天使達が現象界の視察に行ったり他の惑星との連絡や視察等に主に

使われているのだ。この地球に人間が（ベータ）星より集団移住して来た時もこれが使われ、今も他の天体より転生してくる靈魂達も

このUFOで集団移住して来ておる。また、この地上がユートピアに完成された時に、次の目的の惑星への転生移住のためにも使われる

ことになっているのだが、それはそれは便利なものだ。重力の働くところでは重力を打ち消すようなものを創り出し、磁力に反発するような

ものを考え出せば、絶対に落ちることもなく、静かで振動もなく空間を安全に確実により以上のスピードで移動できよう。」、

「磁気エネルギー、光のエネルギーによる移動体については良く分かりましたが、ベータ星だの、集団移住だのって何ですか？」、

「ウム、高橋信次という方によると、現在の地球人というのは三億六千五百年前、地球から遙か彼方のベータ星から約六千人の第一

艇団のベータ星人が集団移住して来たことに始まり、分かりやすく言えば地球人は宇宙人ということだ。緑燃ゆる新星・地球の、

現在のアフリカ大陸の北方、スエズ運河の近くのアル・カンタラ - という場所に着地するが、当時は温暖でしのぎやすい最高の環境の場

所で、その最高責任者はエルランテイ - と言われる方だった。この六千人のベータ星人は選りすぐりの超・人格者、高・人間性ばかりで、

仏教的に言えば如来界、菩薩界の人達、つまり慈悲と愛深い塊りの人と言える一団が、そこで理想郷・ユートピ

アをつくり、安らぎの郷と

という意味で「エデン」と呼んだ。乗り物は全て磁気や光のエネルギーで動き、現在の水準から言えば超科学の世界で、人は五百才、

千才を数えていた。ところが、人が人を産み人口が増えるにつれて、各人の心の中に怒り、愚痴、足ることを知らぬ欲望等の神の光りを

さえぎる心が芽ばえ、闘争と破壊、人殺しが横行し巷は修羅の世界。その内に自浄、自壊作用により地は暗天におおわれ、陸地は海底

に海溝は山の頂きに変わり、さしもの超文明も一瞬にして海底の藻くずへと。総てを失くした一握りの人間達は、仕方なく毛皮を腰にまと

い居穴生活を始めなければならなかった。このような天変地異は地球人類三億年余りの間に七回起ったのだが、近年では一万二千年

前のム - 大陸、アトランティス大陸時代の終焉だ。そして、今も続く霊魂の移住だが、この地球はアガシャ霊団とって宇宙の中でも特に

霊的進歩は早い方なので、他の霊団からこの地球に心の修業のために移住して来ており、まづ最初はアマゾン等の密林に住む裸の土人

として生まれ電気も文明にも浴さない所から慣れて行くが、これは決して人種蔑視ではなく真実を知って彼等に理解を示すべきことだ。」、

「ハイ、永い間の疑問が氷解するようです。」、

「これから光のエネルギー、磁気エネルギー等を応用した乗り物が発明され空間を狭めていくが、このように急速に発展して行くのは

人間が心の価値を知り、心の偉大なる能力に目覚めた時だ。この反重力光子宇宙船にしても、かつて作ったことのある霊魂が地上界

に生まれ予感直感として思い出し、再び作り上げるだけ、ただそれだけのことだ。ところで、この実在界（あの世）は不思議な所だ。

実在界は、この地球に今まであったもの、存在したものの、これから発明、発見されるもの等、すべてが在る、つまり実在する世界で、いつま

でも消えてなくなる世界だ。ここには、その当時の恐竜もいるし、死に絶えたすべての動・植・鉱物も実在するのだが、まだ発見され

ていない動・植・鉱物もあるのだ。比較的に近年では、あのアトランティス大陸時代の素晴らしい文明も、ム - 大陸等すべてのものが存在

するのだ。これからアトランティス大陸時代の素晴らしい文明を体験した霊魂達が地上界にぞくぞくと肉体を持ち、今の文明をもっともっと

発展させることになる。そして、たとえ子供であっても永い転生の間に目覚めて心の窓を開いてくると、学校に行かずとも天才的な人達

が一杯出て来るだろう。だが、高い文明を体験し高い文明を創り出したアトランティス時代の靈魂達も、今度は絶対に犯してはなら

ない試練が待ち受けているはずだ。その当時の彼等は、文明におぼれ、そして、おごり、神の子として許されないことをしてしまった。

その時代に肉体を持った、正しく法を伝える使命と目的の光の天使達を、偽政者達は殺してしまったのだ。大宇宙が神体であるように、

この地球も神体であり神殿であるが、この地球を汚してしまった彼等は、蒔いた種は自から刈り取るという神の摂理によって海底のもく

ずとなったが、地球人類の歴史の中でこのようなノアの箱舟現象と呼ばれるものは七度も起ったのだ。そして、これからゾクゾク生まれ

てくるアトランティス時代を体験した人達には、彼等の人生を通して二度と失敗を繰り返さないという試練が待っている。このように地上界

に生まれるということは、人間にとってまたとない修行の場なのだ。この実在界は波動が非常に精妙で、思っていること、行うことの意識

が表面に出ってしまうので、自らを修正することが余りにも容易なために修行にはなりにくい。ところが、現象界（この世・地上界

）は九十%が潜在されてしまうために、盲目の人生を歩きながら自らを修正し、ユートピア実現のために修行するというまたとない

チャンスだ。一般の人は、千年から二千年に一度生まれ変わるのだが、これはそれまでの学習の結果をみるための良い試験の場となり、

またとないチャンスだ。疲れたか、まだもう少し聞く気はあるか」、「お願いします」、「フム、私とて、神でもなければ仏でもない、永い輪廻

転生の中でこの役にふさわしい者というので、ただただ命ぜられるままにこの役を引き受けている。今のこの私は、意識のままの光子

体というか、わかりやすく言えば靈魂の自分だが、お前と同じ人間の魂だ。」偉そうなことばかり言っていたが、なんだこの私と同じ人間の

魂じゃないかと思った。するとすぐに、「ただお前と違う点といえば、永い転生の間に、自からの心の曇りを少しづつ取って努力もして

来た。だが、神の意識が満ち満ちていた頃の私に比べれば、まだまだ。その証拠には、心のアカや心の曇りが重たくて頂上までは

昇れやしない。でも、お前達が良く知っているゴータマ（釈迦）様や、イエス様、モーゼ様等は上の方までスーイ、スーイだ。いいかね、

よく考えてごらん。お前達の町を見る時、高い山の頂上から見おろすと、色々なことが一ぺんでよくわかってしまうだろう。あの川は

こんな風に流れて、この道はこのように走って、と一目瞭然だ。それと同じように、盲目の人生を歩く人間を教え導く役目を持った方達は、

一段と高い所から間違いのない狂いのない正しい判断をしなければならないから、そこには限りない大きな責任がつきまとうのだ。

そんな大役、この私なんか頼まれても願いさげだが、ゴータマ様やイエス様、モーゼ様は勇気ある方達だ。このように、盲目の人間を教

え導く方達のことを、仏教では如来とか菩薩とか言っているし、キリスト教では上上段階光の大指導霊とか言っておるが、呼び方の違い

こそあれ同じことだ。この方達は執着から離れ、心の状態は慈愛に富み、衆生済度のためには自分の身を犠牲にしても救済するという

方達で、決して報いを求めない境地に到達している限りなく悟られた方達だ。如来とか上々段階光の大指導霊と呼ばれる方達は、現象界

と実在界を含めて四百二十五人（一九七二年現在、高橋信次）おられ、菩薩とか上段階光の大指導霊と呼ばれる方達は約二万人

の方達がおられ、それぞれ分担を決めて、実在界や現象界の迷える衆生を教え導いておられる。そのような、盲目の人間を教え導

く役目を持った方達も普通の人間と同じように生まれ、潜在された盲目の人生の中から自分で悟り、そして迷える衆生を救い導きながら

正しい神理の種をまき、そして天上界へまた還ってこられる。そして、天上界から神の子である人間達が、その神理の種をどのように

守り育てるか優しく見守られるのだ。」

Home

「迷える人間達を教え導くために、天上界では大変苦勞なさってるのですね。」、

「そうだ。如来界（金剛界）には宇宙全体の諸現象を即座に見ることのできる展望台があり、それはどんな小さな問題でも見落とすこと

のない程に精妙なものだ。そして、この宇宙には七つの霊圏がある。七つの霊圏ということは七種の人間がこの宇宙にいることになる

が、この地球を中心とした霊圏を指導しているのがアガシャ系であり、このアガシャ系が一番早い速度で靈的に進歩しつつあるのだ。」、

「私は生前、人間はこの世限りと思っていましたから、少しでも、このような話を聞いていたら、迷うこともなかったと思います。」、

「地上界はこれまで物質文明の時代であったが、これからは霊的文明の時代となろう、また、そうならなければならぬのだ。現代の子供

達を見るがよい。霊とか靈魂の世界を、何%の子が絶対にそれは信じられないと言うだろうか、時代は少しずつ変わっているのだ。

お前も少しずつ、この世は地上界とは価値の尺度が違っていることに気付いて来たようだが、正しい尺度というものは地上界、天上界、

大宇宙であろうと時間、空間、次元を越えても全てに正しい尺度でなければならぬ。このように永遠に変わらないものを「法」と呼

んでいるが、地上界の法律とは違うのだ。法律は人間が作り出したものだが、ここで言う「法」とは、誰にも作り変えられない、

すべてに当てはめられる正しい物差しであり、このワクから一つとしてはみ出すものはないのだ。末法の世ともなると、人間は判断する

心の物差しを失いやすく、自から混乱して不調和な社会を造り出して行く。そうそう、人間の価値の物差しと何度も言ったが、絶対不変

の価値の物差しとは、先づ第一に地球という大地だ。そして水、太陽、空気、そして宇宙、この五つが人間の価値判断の尺度。今までに

一度でもこんな話は聞いたことがあったかね。」、

「なるほど確かにこれは絶対不変ですね。法律などというものは、時と場所によって変わるものですかね。」、

「だんだん理解してくれるようになったようだな、しかし、地上界も実に色々で、おかしいノー。日本あたりから来る死者は、白装束で戒名や

法名とかをつけ、位牌や卒塔婆を背負ったり、ぶらさげたり、地上界で通用するという小銭を持って来る。お前も同じように持って来たか？」、

「ハイ、残された者達が持たせてくれました。」、

「お前はそれらの物をどうする、これからも持って廻るか？」、

「・・・・・・・・、・・・・・・・・」

「お前は、どうするのかと尋ねている」、

「どうも、お話を聞いたりその法に照らすと、余り必要のないもののように思いますので...」、

「それでは置いて行くか」、

「地上界で教えられた事と違いメン喰らっていた矢先のことで、どうでも良いっていう気持ちです、ハイ。」、

「そうか、あれを見るがよい、位牌や卒塔婆の山だ。何の意味もないことを悟った者達が置いて行ったものだが、私達もその処置に困って

手を焼いている。」、

「私は生前、宗教は仏教でした。周囲の様子では、どうも私は死んでしまったようなのです。自分では自覚できなかったのですが、私の

肉体はお棺に入れられ、偉そうな何人かのお坊さんに読経をしてもらっていましたが、お経の意味は何んだかわかりませんでした、お経

というものは有難いものだと同っておりましたから、何かこう心の中から有難い感じがしました。でも、意味がわかりませんので、とにかく

く家の廻りに居ることにしました。お坊さんの読経に乗っていったら、何処かに行くだろうと思ったものですから、お坊さんの読経に乗って

行ってみました。」、

「フム、それでどうした。」、

「ハイ、途中まで行くと、先へ行けないのです。ちょっと行ったらつき当りという具合で、そんなことをして何日か過ごしておりました。

初七日と言って、また一族が集まってお坊さんが読経をするのですが、それでもわかりません。みんなが私を偲んで泣いておりました。

お仏壇には線香とローソクがあげられお供物をして、鐘の音が「チーン」と鳴ったり、木魚の音が「ポクポク」と調子をとっています。

鐘や木魚は、読経のための調子をとるリズム器楽のようなものとわかりますが、お線香やローソクは、どのような意味があるのでしょうか。」、

「生前は、そのようなことにも何の疑問もわかず、唯々、そのようなものだと思っていたのだナ」、

「ハイ、昔からそのようにやっていたようですので...」、

「ローソクというものは、今から二千五百有余年前、ゴータマ様（釈迦）が、仕事も終え自由な時間を持てる夜に集まった衆生に道をお説

きになる時に、真っ暗では困るのでナタネ油（高橋信次）を燃して灯明としたものだが、それが後の世に於ては

ローソクをあげることになった。

それが今ではどうだ。あの世を照らすためにローソクをあげろ、洋ローソクじゃだめだ和ローソクが良い、この宗派はこの型のローソクを

あげる等ととんでもない話だ。自分達の都合のよい環境を整えるために、勝手な解釈をして理由づける。そして、ある宗派なんか、蛍光灯

の方があの世を照らすのには良いなどと云っているが、そんなものではないのだ。あの世の霊達が自分の廻りを暗くするのも明るく

するのも、彼等の心のあり方如何による。自分で反省して神に詫び、明るい世界に帰ること以外に光明は得られないのだ。すべて自力

であり、他力では絶対に救われないのだ。他力で救われた者は一人もいないと云うことを知ることだ。また、ある寺院等では、法灯を

絶やしてはいけないと、何百年もローソクの火や油を燃やし続けているようだが、法灯というのは心の中の神理の灯を消さず心の光明

を持ち続けるということで、火を消さないということではないのだ。人間一人一人が心の正しさの基準がわからなくなると、遂には末法と

云う光明のない混乱した社会をつくることになる。末法の時代とは、心の正しさの尺度をなくした時代を言う。分かりやすく言えば現代の

ように、お金が価値の基準になったり、性道德の退廃、人命尊重の欠如等の価値観の崩壊を言うのだ。そこで、天上界の上段階の霊達

はそのような世界にしてはならないと、地上界に生まれてその身を犠牲にしても神理の種をまき、また、天上界へ還ってこられる大変立派な方

々だ。」、

「よくわかりました。」、

「そして線香だが、インドの当時は今のような石鹼があるわけでもなく、あえて石鹼と云うならば日本のツバキの葉（高橋信次）のようなもの

を石で叩き身体に塗って洗ったものだが、当時の比丘、比丘尼達は精舎で共同生活をする中で大変に臭かった。それで、匂いを消すた

めに「せんだん」を燃やした。それが後の世になると線香をあげることになったもので、あの世の霊が喜ぶとか仏事には欠かせないも

のだと云うがそうではないのだ。ただ、死体を安置している時の死臭を消すのには効果があるろうが、ローソクの意味、線香の意味はそのよ

うなことで、あの世とか霊の世界では何の意味もないのだ。そして、日本の家々には仏壇と呼ばれるものがあって、豪華な飾り物で

荘厳され、それはそれは美術工芸品と呼べるものまであるようだが、この地上が神の神殿であり神体であるのに、あのような小さいもの

に神仏が居られるはずもないし、まして、仏壇にあの世の靈魂が居るようでは残された者達が迷惑しよう。も

し、そのようなものが居る

とすれば、それは自（地）縛霊か地獄霊、動物霊と呼ばれる悪い霊なのだ。動物霊に対しては失礼な事を言ってしまったが、もちろん

、動物霊がすべて悪いのではない。動物の霊の世界でも、動物を指導する諸天善神（人間の霊）がいて、その許で修業をしている立派

な動物の霊もいる。つい、その...人間を惑わす悪いのがいるものだから、惑わすと云うより人間のそのような心が彼等を引き入れるのだ

が、ついつい口に出てしまって私の光の量が少し落ちてしまったようだが、早く反省が出来て、また、元にもどったようだ。反省は早いほど良

く、反省するに憚（はばか）ることなかれた。仏壇に向って、また、お墓に向って先祖供養をするというが、先祖供養とか先祖を大切に

するとか云うことは正しいことだ。生まれることが出来たのも肉体先祖のお蔭だし、感謝と報恩は人間として必要だ。だが、お供え物を

し、朝晩、お経を上げることが先祖供養と思っている者もいるようだが、そんなものではない。先祖を供養するとは、残された者達が

正しい生活と、いつもオホホ、アハハと笑い声の聞えるような楽しい家庭環境をつくり、先祖の人達がなんの心配もなく天上界での修業を

続けられるようにすることが先祖供養だ。お前が人の親であったならば、家族が幸せな明るい家庭をつくり笑いの絶えない生活をしてい

るなら、お前も安心してここでの生活が送れよう。ところがどうだ、残された者達がケンカの絶え間もなく暗い不調和な生活を送って

れば、お前も気がかりで仕方あるまい。「どうしてこうも心配をかけるのだろう、少しは俺の身にもなってみる」と言いたくもなるであろう

が。だから、先祖供養とはお茶やお供え物やお経をあげることではないのだ。地上の者が不調和な生活を送っているようでは、こちら

側（あの世のこと）も落ち着いてはおれん。地上が調和され、地上天国（ユートピア）が完成されれば、この実在界も連動されて、

調和されることになる。」

「よくわかりました。」、

「お前も先祖供養と称して、そのような事もやったか」、

「ハー」、

「やったんだナ」、

「ハイ、仏壇にお茶もあげ手を合わせ、お墓をきれいにしました。」、

「きれいにすることは良い。だが、お墓に誰かが住んでいるのならまだしも、肉体先祖の骨を安置したお墓に手を合わせ拜むというのも何

かそらぞらしくはないか。それもこれも肉体がすべてだと思っただからだ。焼いて残った骨を後生大事に保存するというのも、肉体が全てだと

いう考えも儒教から発しているのだが、肉体はただの人生を渡る仮の舟であり、肉体舟をあやつる船頭さんである魂が、それが生き通し

の自分だ。現に、魂であるお前自身はこのように生きているではないか。地上界でも最近では、霊魂はあると言う人が大勢をしめているが、

正にその通りで、この魂こそ大切なのだ。だから、例えこの身は朽ち果て倒れようとも、肉体に執着することなく霊魂の還るべ

き所（あの世・実在界）へ還らなければならぬのだ。肉体は、この世の人生航路を渡る仮の舟にすぎないのだから、遺骸は土に埋められ

土に還るのもよし、海中や水中に流されるのも空中より散布されるのもよし、いかに肉体は処置されようとも、正しく生きたかどうか

よって天上界に還ることに地獄界に生きることになる。そして、残された者達が如何に立派な墓をつくろうと、どんなに立派な仏壇に

祭ろうと、どんなに立派な戒名をつけようと、心のあり方次第では地獄にも落ちるということを知るがよからう。実在界は、天国に行くのも

地獄に行くのも、自分で裁いて行く世界なのだ。誰もその業（ごお・カルマ・心の傾向性）を、その者に代って背負うことも、身代りになる事

も絶対に出来ないのだ。自分で蒔いた種は自分で摘み取る、これが神の法則。残された者の気持ちはわかるが、立派な墓をつくり立派な

仏壇に祭るよりも、残った者達が明るく幸せに生活してくれることがどれだけ供養になることか、「ヘエ、そんなものですか」、「そうだ、これ

からその真実が、地上界の者もだんだんわかってくるようになる。それは、二千五百年前にインドでゴータマ（釈迦）と呼ばれた方が、

今度は現代の日本に、高橋信次という名前で二十年程前に神理の種（正法という呼称で）を蒔かれた。それは正しい心の基準と人生

の生き方。この、正法の教えを地上界にくまなく広げることが意図して世界は動くために、これまで否、これからもう少しの間、日本は驚

くほどの隆盛を極めるのだ。穏やかな国民性とハイテクの国というのも、高位の霊魂達が集団として日本を選んだからだが、それは

安全な国民生活からも窺い知れよう。そして、暑すぎもせず寒すぎもしない四季折々の花の咲く温暖な風土というのも意味があって、高位

の霊魂達は極端に暑い所も極端に寒い所も選ばないものだ。そして、もう一つは地理的利便性だ。日本が素晴らしい発展を遂げた

というのも、ただ単に、この国に志を同じくする高位の霊魂群が集まっただけのことで、選ばれた民などと奢ることではない。これから

百五十年位すると、二千年前にイエスと呼ばれた方がアメリカのシカゴに肉体を持って（生まれて）、この地上界に神理の種を蒔かれるこ

とになっている。アメリカはすでに没落の兆も見えるが、一旦凋落した後その日に向けて不死鳥のように甦ろう。お釈迦様が肉体をも

たれると天上界からイエス様が指導をされ、今度はイエス様が肉体を持たれるとお釈迦様が天上界から指導されるのだ。」、

「それでは、仏教もキリスト教も教えは同じということですか」、

「そうだ。宗教は心の教えを説いたもので、正しい心の教えが二つ有るわけがなく、真理・神理は一つだ。永い時間とともに少しずつ変わっ

てしまったが、ただ一つなのだ。宗教とは宇宙に示す心の教えと書くが、人間の生き方、人生のあり方を説き教えたもので、

決して偶像を拝み経文を読むことではない。話の腰を折ってしまったが、読経があがり初七日がすんでそれでどうした。」

「ハイ、そんなことをして何日か家の周囲で過ごしておりました。誰かがわかる言葉で、「この先どうしろ、こうし

ろ」と言ってくれたら助かるのにナーと思っていると、その内に残された者達が私の残した財産のことで争いを始めるのです。「そこ

はこうで、あれはこう...」と私は説明しているのに、一向に身内の者がわかってくれません。仕方なく様子を見守っていると何日も過ぎ

て行くのがわかりますが、どうしていいのかわかりません。その内に、私が余り家の廻りに居続けるものですから、魂の兄弟達がビックリ

してかけつけて来てどなったんです。「何をボヤボヤしているか、地上界には最高二十一日しかおれん、それ以上そこに留まる霊を

自（地）縛霊と言って地上の者が迷惑がるのだぞ。」「そんな事を言われても医学を志した私だったが、教科書にも何も載っていなかつ

たし、この世限りと思っていたからどうにもわからん。」、「つべこべ言わず行くべき所へ早く行かないと、間に合わないかもしれんぞ」と、魂

の兄弟達がせきたてました。それから、ドームのような中を導かれて早いスピードで上昇して着いた所があなたの前と言うわけです。」、

「フム、そうか、大抵の者が同じことを言う。生前、知らなかったのは何もお前だけではないのだ。地上界に生きている者の中で、これは

と思う者に霊界通信をしたり、この天上界に招待をして地上界の人間達に知らしめるように努力はしておるのだが...。霊界通信は、

最近では『天と地を結ぶ電話』、『アガシャの霊界通信』とか『シルバーバーチ霊言』とか本も出ているであろうが...。そして、こちらの世界

に招待した人は、イエスの弟子のヨハネと言われた人が生まれ変わって、その時の名をスエーデンボルグっていう人がその例だ。

そして、ラファエロやレオナルド・ダビンチも、絵画を通して天上界のことを知らせようとしたのだ。」、

「初めて聞きました」、

「金を貯めるのに一生懸命だったか。女性も随分泣かせたことがピンクの字で記録されている。しかし、これは殆んど反省の記

録がない。」、

「お怖れいりました。」

、「よく見るがよい、あのゴミの山を。お前達が心の中に刻んで持って来た戒名や卒塔婆の山、そして小銭の

山だ。悟ってしまえば何の意味もないことを知り、あのように入れて自分達の決まった段階へと自から裁いて行くのだ。閻魔様が裁くのではなく、

自分の嘘のつけない善なる心が裁くのだ。あのように入名が何の意味もないことがわかったであろう。生前、他人に施したり、慈悲、愛

のなかった者が如何に立派な戒名をつけてもらおうと、何の意味もなさないことを知るが良い。サテ、お前はほんとつけてもらった。」、

「ハイ、ハー。」

私は後の方に隠すようにした。すると、「戒名というのは、古代インドの時代、ウパテッサと呼ばれた人が釈迦に帰依した後で、シャーリー・プト

ラー（舍利弗）と改名する。コリ・タ - （幼名）をマハ - ・モンガラナ（大目連）に、というように。釈迦に帰依した時に、これまでの生き方を

変えようと決意して名前を変えたことが、日本では死んだ時に戒名をつけるように間違ったものとなった。また、お経にしてもそうだ。

お経というものは、正しい心の基準や人間の生き方等、それはそれは素晴らしいことを言っているのだが、古代インド語で語られたものが

中国語に翻訳され日本に渡って来た。如何に有難い内容のものであっても、古代インド語が難しい漢字に当て字され、それを読み上げら

れても何を言っているかわかるまい。日本に仏教が伝えられたのが、たかだか一五〇〇年だ。ゴータマ様が悟りを開かれたのが二五〇〇

年前で、日本に伝わってくるのに一〇〇〇年の空白があったのだから、教えが間違っって伝えられても不思議はないのだ。キリスト教にし

てもそうだ。イマニエル・イエス・キリスト様が悟られてから二〇〇〇年だ。永い間に歪められ変わってしまった。今伝えられるキリスト教は、

パウロによって変えられ、パウロ教と言えるものだ。ましてや、お前達のような死者に読経をしても意味がわからないのは当然のことだ。

読経しているお坊さんも正しくは理解していないだろう。そして、お寺にしても今では葬式仏閣、観光仏閣...になってしまっているこの現実。

もともとは、生きている人間達が正しい神理・真理を勉強する勉強の場、集まりの場であったはずだが、しかし、近い将来には、

また、そのようになってゆくだろうが...

サテ、二十一日間は死者が家の廻りや地上界に居ることも許されるが、二十一日と云うのは、釈迦はそれまでの生きざまの反省をして、

中道の正法に目覚めて二十一日目に悟り、実在界に招かれて法話をされるが、二十一日というのはあの世の定めであって、悟った霊なら

ば一時間も地上に居ることなくそのままスーッと次元の違った世界（あの世・実在界）へ行くが、死者が地上に執着を持ち、二十一日を過ぎ

ても地上にいる場合、これを自（地）縛霊と称して、その場所、物にへばり付いているのだが、このような執着霊・地獄霊は正しい霊ではな

いので行動の自由はない。つまり、行動は制限されるのだ。憑依（ひょうい）現象といわれるものは、その場所、物に近づくことによって

起こるが、自（地）縛霊はその場所、物に常時いるかというところでもない。「さわらぬ神にたたりなし」という諺があるように、むやみに近づ

かぬことだ。だが、そこにどんな悪霊（あくりょう）がいても、思い遣りや愛深い人には恐れることは何もない。なぜかというと、「類は類を

もって集まる・類は友を呼ぶ」という心の法則があるが、執着の心と愛深い心とは正反対だから同類とならず、憑依現象は起こらない。また、

悟った霊はどうかというと、行動の自由があり上段界に行けば行くほど行動範囲は広くなる。悪いことをした者が法律で身柄を拘束される

地上界によく似ている。」、

「そうですね」、

「お前も生前、そのような所へやっかいになったか」、

「ハア -」、

「もう一度パノラマ映画で見てみるか」

反省しているから、そこまでは言うこともないのにとすると、「生前、反省が出来ておれば苦しむ事もなかったろうが、ここに来て「しまった！」

と、”じだんだ”を踏む者がほとんどだ。

Home

近年では、「やるだけのことはやりました」と、胸を張ってこの天上界に還って来た人は、三重苦を克服したヘレンケラー女史とアフ

リカで医療活動をしたシュバイツァー博士ぐらいのものだ。日本の首相と言われた人でも何人も地獄界にいるが、これでも分かる通り、

地位、名誉、財産の多少ではないのだ。学歴もない貧乏人と言われた人が天上界できれいな光を出して修行している人もいる。話は充分

それてしまったが、人間は死んでしばらくの間は意識不明のような状態が続くが、やがて死を悟り死後の世界に入っていく。死後の世界の

入口で次のように聞かれる。「あなたは死ぬ覚悟ができていますか、あなたは死に対する心の用意がありますか」と尋ねられる。そして

、生きていた時の事をパノラマ映画のように見せられ、また聞かれる。「あなたは一生のうちで、人に見せられるような何かをやってきまし

たか。あなたが生きていた時に、自分でこれはいいことをしたと満足できる何かをやってきましたか」と尋ねられる。それから収容所に入る。

そして、二十八日間の人生の反省期間を経て、生前の魂の状態と心の調和度、所謂、心と行いによって天上界へ行くかどうかが決

まる。つまり、先に述べた二十一日と、この二十八日の和である四十九日とは、こういうことなのだ。だから、四十九日間は、死者が

生前大事にしていた金銭財宝を処分したり財産争いをする等の気がかりになるような行動をとれば、一度はあの世の定住地へ行っても

すぐに地上の執着を持っていた場に引き戻され、自(地)縛霊となって生きている人々の間にいろいろな現象を引き起こすことになり、

死者が金銭や物質に執着が深かったその度合いによって事故や災難を引き起こす。葬式の帰りに交通事故を起こすのはその一例だが、

このような理由で四十九日間は静かにしていることだ。また、死んですぐには、死者の意識は地上界での生活の延長線上にあり、食

べ物を求めることもあるので、食べ物などを供え供養することは正しいことだが、それ以上は無意味ということを知ることだ。

これは断じて、故人に対する感謝、報恩を止めよと云う事ではない。そして、百力日、一周忌、三周忌、七年忌、十三年忌、三十三年忌、

五十年忌の年忌供養を決めたのは江戸時代であった。それまでは寺の経済が豊かであるという理由で徳川幕府は寺領を没収するが、

寺領を召し上げられて収入の少なくなった分を取り戻す手段として、死後の年忌供養が始まったのだ。」、

「なる程、随分お詳しいですね」、

「そりゃそうだ、肉体は滅びてもこの魂は死ぬこともなく滅することもなく生き通しのものだから、ずーっとこちらから見てきたから、と言う

わけだ。ただ、習慣的に先祖供養がなされているに過ぎないというのが現状だ。そして、天国とか地獄とかいうものは、人を思いやり慈悲

と愛の日々を送った者はそのような段階へ、欲深く（自我我欲）慈悲や愛を与えなかった者は、そのような段階へ自から裁いて行くこと

になる。つまり、心のままの世界へだ。「類は友を呼ぶ、同類」の法則通り、周りは似た者ばかりの世界だから、エゴの塊り人間や殺人者ば

かりの集団を想像してみろ、この地獄界は考えただけでも嫌になるぞ。また、その反対に、天上界でも上段階に行くほど、思いやりと

温かい人間ばかりのグループ、それはそれは爽やかな素晴らしい世界だ。ところで、地上界での人間の成り立ち

は、「肉体」と「光子体」と「霊子体」の三重体であり、亡くなると「肉体」はこの世に脱ぎ捨てる（焼かれて灰になる）ので、実在界（あの世）では「光子体」と「霊子体」

の二重体となる。この実在界は光子と霊子の世界であるが、お前はこれから「光子体」と「霊子体」の二重体で過ごすことになるのだ。

光子体は実在界での肉体であり、心（魂）が霊子体と思えばわかりやすいだろう。そこで、これを例えばガス体のようなものと考えると、

心を暗くし慈悲、愛のない日々を送った者はガス体も重くなって、上の方へあがれない。執着もなく、慈悲、愛の日々を送った者は、心も

明るく、ガス体も軽いので、上の方へ上の方へ行けると言うわけだ。上の方へ行ける霊こそ執着から離れ悟った方と言える。そして、

考えてみればしごく当然のことだが、この実在界では上の段階のものは下位のものを垣間見ることが出来るが、下位の段階

の者は上の段階の生活振りを、垣間見ることが許されない。重いガス体では、上に昇れない事を考えれば当然であろう。だから、霊界

探訪等の本も多数あるが、その霊界を探訪する人の霊格というか人格によって、内容が違うのは当然のことだ。「光の量の区域」、つま

り心の段階を仏教的に区分すると、低い方から 幽界、霊界、神界、菩薩界、如来界となり、わかり易く大きく区分したわけだから実際は

小さく分かれる。ガス体にもわずかの重さの違いもあろう、このように「光の量の区域」は厳然としている。こうして、その決められた段階

で安住する事になるが、その階で人を乱すような言動をすると自からつくった心の重さのために、その階にとどまることを許されず、下位界

へ下がる。その反対に、執着から離れ慈悲と愛の生活を送るならば、その心の軽さに比例した上の段階へ行くことも出来る。しかし、先に

に話したように、修行という点から見ると地上界（現象界）の十年は実在界の五十年、八十年にもなり、中には百年から二百年にも匹敵

することになるが、実在界での修行はやりにくいとも言える。それは、実在界を意識界（心の世界）と云うように意識の九十%が全部表

面に出てしまうために、反省すると直に結果が出る。ところが、地上界は反省しても直に結果が出ないので、本当に心から反省したかがわ

かる。なぜなら、反省とは二度と同じ誤りを繰り返さないということだが、長い時間を置くことにより本当に反省したかどうかがわかる。

このような理由により、地上界での心の修行は又とないチャンスになる。「光の量の区域」を心が重いとか軽いかという言葉で説明してい

るが、ある人が霊媒となって目的の霊を自分に入れると、地獄霊ならズシーンと重くなるし、光の天使等の上段階の霊に意識を支配さ

せると軽くて何とも言えない感じがするが、この説明によっても説明がつこう。勿論、上段階の光の天使に意識を支配させるには、霊媒

の霊格というか人格も、それに応じた者でなければならないことは当然のことだ。そして、身体の小さい人が大きく見えたり、そばに寄

ると何となく暖かく心が安らぐという人もいるが、光子体のことをオーラ（後光）とも言い、オーラの大きさは、執着とか心のヒズミを取り除き、

慈悲と愛に生き心を大きくした人々ほど大きく強い。仏像や絵画の中で光の天使達の廻りに光輪を見るであろうが、つまり、あれだ。

仏師は、如来や菩薩の廻りに出る後光を心の目で見てそれを刻み、画家は心の目で見て光の天使の姿を残した。このように、努力次第

では、そのような方達に近づくこともできるのだ。入学試験というのは定員が決まっておって、点数のいい者から合格と決まるが、ここで云う

心の大きさ、光の量の大きさというものは、定員は決まっておらず多ければ多い程良いのだ。多ければ多い程、この世もあの世も調和さ

れ、ユートピア（理想世界）の実現に近づくというわけだ。一日も早く、悪い事をする人を収容するという刑務所が空になって、人間のつ

くった法律というもののやっかいにならない世をつくらなければならぬのだ。みんな明るく幸せで身も心も健康で、事故もなく人類は皆兄弟、

国境もなく地球は一つということにならなきゃならぬ。我われ天上界の者は、それを一日も早く実現する事を望んでいるが、お前も生きて

いた当時、何かそれらしき事の一つもやって来たと言えるかね。お前はこの天上界から地上界へ誕生する時に、魂の兄弟や仲間から祝

福されて、送別会での居並ぶ人達を前にして何と言ったと思うか？

胸をはって述べたことの一つ一つを思い出して見ることだ。お前は、「今度は実に困難な環境に出そうだが、でもその環境の中から困って

いる人に手を差しのべ、ユートピア実現に全力をあげるつもりです」と言った事を忘れませんでしたとはいわさんぞ。なんなら、その場面を眼前に、

パノラマ映画のように見せようか！」、

「何かと言えばパノラマ、パノラマと、また反省させられるに決まっている。あのパノラマ、まともには見られませんか。オギャーと生まれた

途端全部忘れてしまい、間違いの人生を送りました」、

「そうだったな」

さっきから反省しているんだから、そこまで言わなくてもいいじゃないかと思うと、彼は言った。

「反省の度合いによって、お前の定住する位置が決まってしまうのだから、大いに反省する事だ」

思った事の意識が全部出てしまうから、考えが相手にわかってしまい隠しようもなく、「トホホホ、生前だけではなくあの世でとった言動まで

反省させられるとは、しかし、何もかも心のアカを取ったから心が軽くなったぞ。」、と思った。

「少しは理解してくれるようになったから、話を先へ進めてみよう。これから地上界はどうなるかということだ。

まず海底のことだが、深海を探查する優秀な機械ができ沈んでいる前時代的な建築物や遺跡が発見されていく。例えば、失われたアト

ランティス大陸の上に建てられた鋼鉄よりもはるかに強力な半円形のド - ム型の建て物がそのままの形で発見されたり、大洋の底の

深い谷間には特殊な構造を持った家の回りに集って社会生活をしている生き物が明るみに出される。

そして、寒波が襲来して一瞬にして冷凍された人々が社会生活をしていたそのままの姿で、シベリヤの凍土の下の巨大な氷塊の中に

保存されているが、中には生き返るものもいるかも知れない。」

「エッ、生き返る人間も。冷凍寒波も、人間の想念行為が原因ですか」

「その通り！平和な世界にはこのような異常現象は絶対に起こらぬということを知ることだ。また、ピラミッドは墓ではなく、当時の人々

が来世を信じ再びこの世に生まれた時のための記録と資材置き場や倉庫等のタイム・カプセルであり、この中で行われた神秘的研究の記録

がピラミッドの中や周辺から発見されるのだ。数多くの砂に埋もれた破壊されない完全な姿の遺跡や建物の中からは、現在の世界を賄う

ほどの価値の量の黄金が見つかる。

天文学的には、ある放射線により太陽系のまだ発見されていない遊星が撮られたり、太陽に接近し

太陽とともに回転しているように見える地球より大きな星が太陽の写真の上に写し出されたり、地球には月以外の衛星があることもわ

かるが、

他の天体に人間がいると明らかにされるのは百年はかかるだろう。

原子力も安全に大々的に利用され、電気も電線時代からワイヤレスの放送電力に変わり、周波数を合わせて動力として利用される。

経済は、資本主義と銀行形態が理想化され改良されるが物々交換も見直される。

そして、言語は統一されラテン語に語源を持つエスペラント語を改良したものになるが、人類が平和であるため

には心の意志疎通が第一で、この言語はそれから数千年使われることになる。

教育に関しては、人間は宇宙的生存者であり霊的存在であることを教え、瞑想が指導される。植物細胞を応用した人間性測定器（オ - ラ

- 透視機）が完成され、教育者や政治家等は淡いゴ - ルドカラ - のオ - ラ - の人物から選ばれねばならない。ある光線を利用すると一滴

の血液や唾液により、その人が何処にいるか瞬時にわかるようになるが、これは人間一人一人が持っている特有の心の波動が利用さ

れるために、血液を流す犯罪等は減少する。病気は完全に克服され、高度の診断方法と治療方法が確立される。

これからの近未来は、「心の光の時代」とも言うべき地上ユ - トピア（理想郷）に向うが、一時期は冬の時代を通り人口は減少して、所謂、菩薩界

が現出するだろう。どこを見てもさわやかですばらしい人達ばかりの世界だ。」

「人口が減少するというのは戦争、疫病、天変地異等が原因なのではしょうから心配ですが、その後の菩薩界の出現はこれは考えただけでも

ゾクゾク、ワクワクしますね」

Home

shoho

shoho

shoho

shoho

shoho

shoho

shoho

shoho

shoho

shoho

shoho

shoho

shoho

shoho

shoho

shoho

shoho

shoho

shoho

shoho

shoho

shoho

shoho

shoho

shoho

shoho

shoho

shoho

shoho

shoho

shoho

shoho

shoho

shoho

shoho

shoho

shoho

shoho

shoho

shoho

shoho

shoho

shoho

shoho

shoho

shoho

shoho

shoho

shoho

釈迦教団の組織は円型組織であった ピラミッド組織は、自由がない

「人間・釈迦」第三巻

「ブッタ・サンガーの生活」より

園頭広周

千数百人のサロモンたちは、ブッタに合掌し、室内は寂として咳払いひとつたない。

「ウパテッサ、コースタニヤ、ピパリ・ヤナー、そなたたちは各組の責任者を集めて明日からの行動予定を組み、この雨季の期間中に

各地の責任者を決定して欲しい。その打ちあわせをし、今日は全員休養をとらせなさい」

ブッタはこう言うと、スックと立ち上がり、自室に戻って行った。

ウパテッサをはじめそれぞれの指導者はブッタの指示にもとづき、おもだった者を除いて各部屋に散会して行った。

食事の世話、部屋の掃除、洗濯をする者、ベルヴェナーの生活はサロモンたちの自発的な行為によって動いていた。別にこれといって

当番が決められていたわけではなかった。十人、二十人と人が集まるにつれて、私は食事係りを、私は掃除当番を、というぐあいに、しごく

自然な形でそれぞれの世話係ができ上がっていった。新参だから廁の掃除をする、下足番をひきうける、というものではなかった。だから

古参者でも手があいていると部屋のふき掃除をやったり、食事の世話までやってしまう。

ここが他の教団に見られぬ釈迦教団の特色であり、生活だった。ブッタは人間の自由を尊重し、その自由を戒律や制度などでしばると、

人の心はそれにしばられ、仏の心を知る機会を失う場合が多い。ブッタはこのことを自らの経験によって悟っていたし、形式に流れること

を極度に恐れ、自重していた。

サロモンたちの自発的な行為を待つことによって、各人の創意と工夫、人間平等ということ、無言のうちに

教えていた。

組織は、性別、年齢、才能、能力、出身別、系列別等の、いろいろな差異を持っている人を、同一目的に、同一行動を執らせて、

より有効に目的を達する手段としてつくられた。その典型が軍隊組織である。

軍隊にはそれぞれ違った兵科がある。歩兵、騎兵、工兵、砲兵、戦車兵、衛生兵、縫工兵、飛行兵、輜重兵等、それぞれ役割が違い、

敵を攻撃して勝利するためには、敵の状況を考えて、敵に勝る威力を集中するために、いろいろな兵科を組合せ、海洋を越えて戦う

る場合は海軍と協同しなければならない。

武士という集団が発生すると、総大将、副大将、部将と階級がつくられた。

アメリカのハーバード大学の経営学部は、アメリカ陸軍の指揮統率をモデルにしてつくられた。みなピラミッド組織である。社長、

重役、理事長、理事、部長、課長、係長と段階がきちり決まっていて、それぞれ職務分担が決まり、上下の関係は命令報告で、左右

の関係は連絡通報で統制されている。

しかし、こうした組織の考えは、昔からあったのである。

釈尊が悟りを開かれ、竹林精舎が出来たその翌年である。当時既に千人近い比丘達が出た。そこにシャリープトラ（舎利弗）と

モンガラナー（大目連）が帰依してきた。

釈尊は二人を紹介された。「二人はやがて皆の指導者になるであろう」と。すると、先に帰依していた者達の間から不満の声が挙がった。

「二人は、今帰依したばかりの新米ではないか。後輩ではないか。その後輩が先に帰依した者の指導者になるとは怪しからん」と

いって騒ぎ出した。それで釈尊は皆を集めて話をされた。

「シャリープトラとモンガラナーは、前世に於ても、その前世に於ても、常に釈尊常隨の弟子として、皆よりもずっと先に悟っていた

者である。生まれた年月日、帰依した年月日、どこで誰から生まれたか、等そういうことは関係ないのである。心の高さが問題なのである」

と。それで騒ぎは治まった。

年功序列、或は職務による段階、差別は、肉体を中心とした考えで、心を問題にしていない。インドの時と同じことが今度も起こった

のである。私は講師の中で一番最後に高橋先生に帰依した。私の先輩ばかりで私は一番後輩であった。私は一番年長で、彼等は皆、

私より年下であった。年の差も考えないで、私に対して年長者であるという礼も尽さずに、私を後輩として無視

する態度を取った。私が

舍利弗の生まれ変わりであり、他の講師達が体験していない「宇宙即我」の体験をしていたのにもかかわらずである。私に対して一番

横柄な態度を取ったのは、高橋信次先生の実弟興和氏であり、次に谷口健彦氏であった。私はそういう年の若い連中と争う気はないから、

彼らがするがままに委せていた。

昭和四十八年四月、高橋先生に帰依してすぐ私はG L A 関西本部付になった。大阪のある青年支部長が公民館で私の講演会を計画して

くれた。私が舍利弗の生まれ変わりだということで、大阪全体、京都からも集まって会場は隙間もなく満員だった。そうしたら混乱が起こった

のである。

各地区の支部長達、関西本部は霊友会の分派であった瑞法会が、初代会長（女性）が亡くなって、二代目会長中谷義雄氏の時代に、

教団を挙げて高橋先生の帰依してG L A 関西本部となったもので、会長以下理事、支部長という組織はそのままであった。初代会長が女性

だったので、支部長は女性が多く老令の人ばかりであった。いわゆる支部の縄張り意識が強く、私の講演に来た会員達は一人一人、支部

長に呼ばれて、「なぜ他の支部に話を聞きに行ったか、支部の集会にだけ来ればよいのである」と叱られた。

私が新宿で講演した。集まった会員達は、東京支部の講師からは聞けない話を聞いたと喜こんだが、高橋興和氏は、新宿の責任者を呼

んで、「東京支部に講師がいなくてもいいのに、なぜ九州の園頭講師の話聞くのか。今後、園頭講師の話は聞くな」と叱られた。

そのくせ興和氏は、九州を廻って講演させて欲しいと行ってきたから、九州各県で講演会を計画した。関西本部の理事は瑞法会時代の

理事がそのまま理事になり講師になっていて、関西本部長以下理事の講師達は、私に関西本部で講演させることはしなかった。そのくせに

九州で講演させて下さいというので講演会を計画した。ところが関西本部に帰ると、「園頭さんは大して指導力がないので、わしが指導して

来た」と自慢していた。

私にいわせれば関西本部の講師の話など、しない方がましだという程度の話で、宗教的な話ではなかった。

そういう状態であったから、高橋信次先生がどんなにすばらしい話をされても、すべて講師、支部長の段階でストップされ、或は歪めら

れて、末端の会員には正しく伝わらないと思った。

高橋信次先生を中心にした総合本部の理事会でも、私より先に講師になった人達が先輩風を吹かして、一番最後に講師になった私を

後輩即自分達より悟りも劣っているという扱いをしてきたから、私はこのような人達にいつても始まらないと思って黙って遠慮していた。

私が黙っているとそれをいいことにして、高橋信次先生の教えとは違う自分自身の偏見を、高橋信次先生の名によって話をして得意に

なっていた。いわゆるピラミッド組織の弊害が真理を利用してもろに吹き出していた。

職務権限による縄張り意識、先輩後輩の序列、真理を悟ったらなくなっていなければならない権力欲、名誉欲等、一般社会では大いに

あり得る人間臭さの欲望が、真理の場でもろに吹き出して、それを恥ともしないのであるから尚一層醜悪であった。

これでは、高橋信次先生の教えは正しく広がらない。東京本部も関西本部も組織改革をしなければいけないと思っていた。

案の定、高橋信次先生は亡くなる直前、関西本部の事務局長林正氏を自宅に呼ばれて、「関西本部は今のままではいけない、

正法にならない。組織改革をなささい」といわれた。高橋信次先生が亡くなられた後、林事務局長が、関西本部長の中谷義雄氏と争った

のは、高橋信次先生の言葉が原因である。

そして、亡くなる直前の関西講演の時、「園頭さん、ぼくはこんなつもりでGLAをつくったのではなかった。GLAをつぶしたい」といわ

れたのであった。

そういわれた高橋信次先生のかなしくもさびしい気持がよくわかっただけに、高橋先生の名を背景に利用しながら、高橋先生の胸中も

知らないで、個人的な欲望をのさばらせている東京本部の講師達に義憤を感じ、心中秘かに、「高橋先生、私一人は先生の名を穢さない

ように、法を正しく継いでまいります」と誓った。

[Home](#)

インドの時のような釈迦教団の円型組織をと考えていたのであったが、さて正法会の組織づくりをして見たら、案に相違して私が任命し

た支部長が私の方針に従わないのである。

中には、「会長はなんといっても、支部長のわしが承知せん」といって会員の自発的な運動を威圧する。会の方針は会長である私の

方針である。

私の方針は高橋先生から継承した方針である。会員は自発的に人を集めて集会をしたいというのに、「あなたの活動は支部長のわしが認

めない」といってつぶしてしまう。会員からよい意見が出て、「なんでお前は支部長のわしを差し置いて、会長に直接意見をいったか」と

叱られる。

自分の思うようにならないといったら、会長である私の悪口をいって、自分を正当化してやってゆく。そういう支部長を支部長にした

私がいけなかったのであるが、しかしその人も、一会員であった時は至極まじめであったから支部長にしたのであるが、「支部長」という

地位が与えられるととたんに豹変するのである。まじめそうにしていたのは見せかけだけで、自分の本心の芽は隠していたのである。そう

いう心の中に根付いている悪の想念をなくするのが反省であり「観念泄しゃ」である。「観念泄しゃ」して心のしこり、黒い想念、肉につ

いた欲望をすべてなくすると、人間神の子の実相が堂々と露呈されてくる。

そうすると人間は、肉体的な差別なくみな平等で自由であることがわかってくる。

会長も支部長も会員もすべて平等である。平等であるが過去の輪廻転生の霊の経験による心の広さ、魂の段階はある。だからそれには

従わなければならないが、それは統制してそうさせるべきではない。自からの魂の要請、徳に順って自然にそうなるのである。

釈迦教団は組織の力によって各人の自由を束縛することなく、その自由に順って行動する組織であった。

インド当時の比丘、比丘尼達は、疑問に思うことがあれば誰でも釈尊に自由に質問した。

質問したといっても、それが釈尊の行動を束縛することはなかった。質問する時があり、場所があり、内容があった。一比丘が質問した

ことに対して、責任者の老比丘が、「なんでお前は責任者であるわしを差し置いて釈尊に質問申し上げたか」といって部下の行動を制約する

ようなことはなかった。

より多く仕事をする人があれば、その人を認めて「えらい」と讃嘆し、その人のようになると皆努力した。肉体を基準としたピラミッド組織

は、より沢山やる人があると、やり過ぎた、自分だけえらいと認められようとするのかといって足を引っ張る。やらなければやらないで皆に

袋叩きされる。

会議があっても職務に縛られて自由な発言ができない。ヒラ社員は係長の、係長は課長の、課長は部長の顔色を伺いながら発言

するから、末端のヒラ社員の意見は中々重役、社長の耳に届かない。だからピラミッド組織には、それぞれの職務、職階に不満が停滞して

一向に風通しがよくなる。

結局その不満は帰り掛けに一杯呑み屋で職場の不满、上司への不満を酒の力を借りて憂さ晴しすることになる。日本の組織の欠陥は、

職場以外のプライベートの場でも、職場の職階がこびりついて、プライベートが侵害される。お盆やお正月に上司につけ届けをしないと、

職場に影響するということになる。私は軍隊にいる時も、生長の家の本部講師をしていた時も、礼儀は尽したがそれ以上に卑屈になって

上官や上役のご気嫌を取るための行為をしたことはなかった。

その点、アメリカの会社はピラミッド組織でも、会社には自由な空気があって、例えば会議でも、日本みたいに、すぐ上の上司の顔色を

みないと発言できないということはなく、自分の発言がすぐ上の上司の利害に関することでも、自由に発言している。仕事が終わって会社を出

ると、もはや会社の職階には関係なく、重役とヒラ社員は同列に肩並べてある。日本は永い間の儒教の影響で、上下関係、左右関係は

職場でも、職場に関係のない場所でもきびしく規制されている。特にこうした規制は官公庁できびしい。官公庁では、本人の人格、才能よ

りも、上役にごまを摺って、上役の気嫌を取る人間が早く昇進する。民間の会社はそれ程でもないが、しかし、多分に情実によって左

右される。

ピラミッド組織のいろいろな弊害があっても、それでもアメリカよりも日本の企業が発展したのは、日本人の労働観の勝利である。

日本人は労働を、神への奉仕だとしていることに対して、アメリカを含む白人社会では、労働は神の刑罰であるという労働観を持って

いるからである。

「人間釈迦」に書かれているように、新米だから便所掃除をする、下足番をする、というものではなかった。古参者でも手が空いてい

るとふき掃除をした。ブッダは人間の自由を尊重し、その自由を戒律や制度などで縛ると、人の心はそれに縛られ、仏の心を知る機会を

失う場合が多い。

サロモン達の自発的な行為を待つことによって、各人の創意と工夫、人間平等ということ、無言のうちに教

えていた。

ここが他の教団に見られぬ釈迦教団の特色であった、と書かれているような教団のしくみになっていたのは、それは「霊の向上」は、

自発的に自分で考えて、いわれない先にしたことだけが、霊の向上になるのであるという霊向上の原則による。いわれてからすることは霊の

向上にならないのである。

よく家庭で問題になるのは、「いわれればしたのに、いわれなかったからしなかった」ということである。

家庭は、男女が縁によって一体となって、霊の修業をする、神が定められた単位なのであるから、夫は妻の心をよみ、妻は夫の心をよ

んで、いわれない先にやってあげるといふ霊の向上の訓練実習をしなければならぬのである。

釈迦教団の比丘、比丘尼達は、教団に入るためのテストがあった。

- 一、仏に帰依するか
- 二、法に帰依するか
- 三、僧に帰依するか

反省して、心を見つめてきれいにした者のみが帰依を許された。心をきれいにして、人間は神の子であることを知った人達ばかりであった。

正法会もテストこそしなかったが、会員になる以上は反省をして、心をきれいにして入会すべきであったのに、心をきれいにせず、正法

の場を逃避の場所にしたり、社会では認められなかったような人が、正法会の組織の中で、社会で認められなかった欲求不満を満足させ

ようとしたり、現実を改善する努力をあきらめて、来世に実現の夢を描いていたり、とにかく純粋な信仰をするためには、すべて捨てなけれ

ばならない欲望を捨てずに、欲望、欲求不満の上に、オブラートのようにそれを正法という言葉でくるんで、見せかけだけの信仰をしてい

る人があった。そういう人達が問題を起こし、やめて行ったのであった。

北村先生が「毒を吐け」「観念泄」の指導をするようになって、人間神の子をしっかりと自覚し、いわれなくともする。よいことはいわれぬ

でも先にするというグレースの人達がふえてきた。これなら何をやっても成功すると思った。だから九州のグレースの代表者が集まって、

「九州グレース大会」をやりたいとやってきた時にすぐ許可した。許可して行動しているうちに、「全国グレース大会」にしようということに

なって、昨年七月七日福岡で行なわれた大会は大成功だった。七月七日、この日は記念すべき日である。

昭和十二年七月七日、私は見習士官として鹿児島歩兵第四十五連隊にいた。この日盧溝橋の一発によって支那事変は勃発し、大東亜

戦争となり、東洋有色人種の国々を侵略して植民地にしていた白人国家の勢力は、見事に全部退けられた。この記念すべき日に行なわ

れる「全国グレース大会」は、今日までの間違った人間観、女性観を一掃して、全世界の女性に光明を与えるその「きっかけ」になる。

いや、そうしなければならないと思った。

この創造的、自発的なグレースの女性軍に刺激されて、東京の男性軍が立ち上がり、十一月三日を、正法会発足十五周年記念大会に

しようといった。準備期間が短かったにもかかわらず大成功することができたのは、観念泄によって神の子を自覚した各人の自発的な

行為があったからである。

ピラミッド組織でやるということになっていれば、功勞の多い割には成功しなかったであろう。円型組織の勝利である。

これから日本の企業も、ピラミッド組織のよい点は残して、円型組織でないといけないということになり、早く円型組織に切り替えた企業が

群を抜いて成長してゆくことになる。円型組織は宇宙の真理に則った組織であるからである。

高橋信次先生は、宇宙のしくみを知りたかったら人間の身体を見なさいといわれた。

例えば指の先に棘が刺ったとする。その痛みは真直ぐに脳に伝えられる。指先の痛みを途中でチェックするしくみにはなっていない。

それと同じように、会社のどの部署の問題を、途中でチェックせずに真直ぐに社長の所へ通ずるようにしなければいけないのである。

しかし、従来のピラミッド組織では、社員から係長、課長と、上へ上がってゆくに連れて途中でチェックされ、本当の正しい意見が社長

に伝えられない。また社長の方針意見も途中の段階でチェックされて正しく社員に伝わってゆかない。その間に情実が横行して組織が淀ん

でくる。組織の風通しをよくしたいということは、常にいわれて来たことであるけれども、なかなか実行できない。

組織の理想は宇宙の相に則った円型組織である。宇宙も、太陽も、地球も、分子原子も円であり、人間も円満であることを「よし」とする。

会社、組織、団体等、いかなる組織も、神がつくられた大自然の中にあり、一般社会、国家の中にあり、そして得意先、構成員があり、

そして、その会社、団体等を維持している担当者があるのであり、一つの会社、団体等を維持している構成員達は、その会社、団体の

中心者である社長、理事長という人々と、過去世においても縁があった人々であるから、また今生でも縁があって一つ所に集まってきたの

であり、その場が霊の修業の場であることを知り、会社、団体等の構成員はそれぞれにそのことを知って、そこで愛を行じ八正道を生か

して行かなければならないのであって、唯単なる利益を得る場と思い、地位名誉欲、権力欲、欲等の自我我欲に捉われて、それぞれの

欲望をむき出しにしてはならないし、その会社、団体等の存在が、一般社会に対し、国家に対し、大自然に対していかなる関係にあるかを

考えてゆかなければならないのである。

最近、会社がその利益の一部を社会に還元し始めたのも、組織はすべて円型組織でなければならないというように考えてきた、その一つ

の現われである。

指先にトゲが刺さったのも、お尻にピンが刺さっても、身体のどの部位の異状も、すぐ脳に「異状」として信号されて行くように、ヒラ社員

も、部課長も、どこからでも社長に意見がいて、それを途中で遮ぎることがないようにしなければならないのである。

泉谷さんの娘婿が成功したのはこの「仕事の分かち合い」による一体感であります。

時代は既に円型組織に移行しつつあります。

医学界では、ホルモンの作用で「愛」は起こると永い間いってきました。

これは逆です。喜び過ぎても悲しみ過ぎても病気になるということは、運命もそうだということです。馬鹿よるこびも馬鹿かなしみもいけない。

すべては中道でなければならないということです。

これは植物も動物も心を持って木の葉から木の葉へ心が伝達される自然のふしぎさ同じ家の中にいて、夫と妻とが心が通じ合わない

馬鹿さ加減、人が人の心に通じない愚鈍さ、その人は木の葉にも劣る人間の心を愚鈍にして人にも動、植物にも通じない心を持っている

のは自我我欲の自己中心主義からです

世の中はどんどん正法に目ざめなければならないように進歩しつつあります。

木の葉が隣りの木の葉へ情報を伝えるのは地球創成の昔からのこと、子供の心のわからない母親は木の葉に聞いて来いといってもどう

したら心がわかるのか、伝えられるのか。

世の中は正法でなければならぬように変わりつつあります。

海外で高い評価を得ているということは、やがて世界が日本中心になってくることになります。

[Home](#)

Home

インターネット宗教「正法」を開始するまで

人間講座
正しい心の尺度

高橋信次

園頭広周

99年十一年一月二十日の記述から

97年12月24日、インターネット上に公開した「正法」は、一年で一万人の訪問をいただきました。

98年12月24日には、99年バージョンの公開と同時に、装いも新たに「正法のインターネット宗教」として発足した

しました。

インターネットの正法ホームページ「長」であるウェブ・マスターは、八起正法（やおきまさのり）です。

このホームページには色々な人の批判も出てくるので、片手落ちになってはいけないと、早速、ウェブマスターの自己批判の

「自伝」も公開しました。

新バージョンは数百万字以上で画像も多く、インターネット・サーバーには100MBのファイル・サイズ（普通は20MB程度）

契約の大作なものですから、ウェブ・マスターの八起は未だに手の痛みが回復せず、マウスを見るたびに悪夢のような日々を思い

出していやなのだそうです。キー操作はそうでもなかったらしいのですが、軽くカチッと押えてドラッグするマウス操作が、後で

わかるのですが、新品から一年ぐらいで、マウス故障のために筋にズーンと響いて、この単純操作がこれほどまでに過酷なものかと

こぼし続けました。

それ程困難だっただけに努力の甲斐があったのか、アクセスしてくださる人数も、この99年バージョンは公開してまだ一と月

なのに、五千人の人達に覗いていただいています。

また、このホームページは、正法をご存知の皆さん向けではなく、昨年六月末のデータによると、日本の九百五十六万八千人と

いわれるインターネット利用者に正法を知ってもらうのが当ホームページの目的ですから、この一ヶ月に五千件というアク

セス数は、園頭先生が悲願とされた正法流布への最高の報恩ともなり、恩に報いる私の目標に少しずつ近づいてくれるものと

大いに期待しています。

私は先生のお見舞いに伺っても、緊張の余り直立不動で物も言えず、心の中では「頑張りますよ先生」と、決意も新たにお暇する

ことが多いのです。

こうして、旧バージョンの最初の頃は、一と月にアクセス件数が五百人でしたから、努力は地道に続けるものだとつくづく思います。

高橋先生はコンピューターの端末機器製造の経営者でしたが、私は自分ながらインターネットというマルチメディア媒体に、良くぞ

目を向けたと思います。

最初は、パソコンに詳しい息子の「お父さん、インターネット布教はどう」との一言で心を動かされるという極めて単純なもので、

次には医会のコンピュータークラブで勉強を始め、最後は正法のホームページ製作に嵌（は）まりました。

幼い頃からラジオ製作ばかりやっていてハードには強くてもソフトはからっきしダメなものですから、コンピューターは子供に

指導してもらいながらの、正に初老の手習いでした。

ホームページ公開はもう二年目になりますが、自分の意思以外の何かに「導かれ、やらされている」という想いを強く持って

います。一年前のこと、病床の先生へ正法のホームページ開設の報告を致しました。

「先生、やっと出来上がりました。インターネット上に正法のホームページを公開しましたよ。高橋先生や先生の写真や記述や声も、

パソコンと電話回線があれば、世界中の何処でもいつでも瞬時に自由に誰でも見る事が出来ます。」と、

このようなことを説明しました。すると、それまではうつろな目をされていた先生がカーツと目を見開き、何かハッキリとは

分からないが振り絞るように声を発されました。

一瞬、私は「遅すぎる。この馬鹿者めが！」と怒られたような気迫に圧倒されて、傍に畏（かしこ）まるのもつかの間、直ぐに

いつもの穏やかな先生の顔がそこにありました。

至極満足していただいたと了解したものの、その迫力ある気概は「何か先生に悪いことでも言ったかな」と、取り違えるほど

でした。帰り途、ハンドルを握る私は家内に「今日の先生はすごかったな」、と。

この光景は今でも忘れ得ぬ昨年の一情景です。

そのようなこともありましたが、私は、このホームページが宗教改革のノロシを上げる発火点ともなってくればと心から望んで

います。

と申しますのが、正しいものが公開されると、いつかはきっと、おかしなものは淘汰される運命と私は心の髓から確信している

からです。

最近の不祥事にも現れているように、インターネットは長短ある諸刃の剣でも、正法にとっては「時機は正にめぐってきた」

と考えて良いと考えています。

私はインターネットに宗教改革のステージ（場）を見出し、日本どころか人類の心を護るために神理・正法を引っさげ、

園頭先生の意志を引き継いで、インターネット上でも大暴れしようと思います。

どのように新しく公開されているか皆さんも、一度、正法のホームページを覗いて見て下さい。パソコンは無くとも、

これほどインターネットがポプユラーになると、周りには誰かインターネットをやっている人もいますから、お願いを

して見せてもらって下さい。

もうしばらくして八起の手の痛みが治ったら、ホームページの画像切断の個所や内容の更新、更改や定期的な維持、管理も少し

づつ続けて行くことと思いますので、今後ともよろしくお願い致します。

新しい年の夜明けを迎えて、皆様と共に手を携えて正法の流布へ邁進すべく、決意も新たに「新年明けましておめでとうござい

ます」と、申し述べます。 正法のインターネット・アドレス <http://www.shoho.com/>

平成十一年五月

「感謝の集い」に寄せて

若葉の芽吹く中、小田原での「感謝の集い」の開催されますことを、心からお喜び申し上げます。

皆様との再会を楽しみにしておりましたが、五月四日は、私と同業であった家内の兄の一周忌と重なり、やむなく欠席させて頂くことになりました。

誠に申し訳なくお詫び申し述べます。

園頭先生と今生でのお別れをしてから、空気の抜けた風船のように何もやる気が起こらず、正法のインターネットのホームページの更

新、訂正、画像切断の個所の修復も手付かずの状態、最近になってこれではいけないと、やっとやる気が出てきているところです。

この正法のホームページは、コツコツ努力の大作になりましたが、キーボードの打ち過ぎによるものか腕が上がり、車の運転

も送りハンドルという情けなさです。

当「正法のホームページ」をアクセスして下さった訪問者は、四月末で三万人を超えましたことを報告して挨拶といたします。

皆様と共に園頭先生のご意志を継いで、各自のできる方法で正法を護り広げましょう。実り多い結集となりますことをお祈りします。

平成十二年四月

「正法感謝の集い」研修会に寄せて

小田原での集まりに対して、心よりお祝いを申し述べます。

私事ですが、出席できずに残念に思います。

私にとっては集まりがあるたびに、不思議にも不幸ごとが何度も起こりました。

志賀島の集まりでは翌日に私の母が亡くなりました。次の時には、急死した家内の兄の法事と重なり、そして前年の金沢のときには

私の兄が亡くなりました。今回は家内の母がいつとも知れずの状態にて、またそうなりはしないかと心を痛めています。

そのような理由によって家を空けるのもままならず、皆様とお顔を合わせることができない非礼をお許してください。

サテ、私が担当しています正法のホームページについてご報告申し上げます。開設してもう三年になります。

園頭先生ご存命中の最初の一年は、この正法のホームページを訪問（見て下さった、アクセス）して下さった延べ人数は

三千人程でした。二年目からは口伝えに全国的に知られたり、また他のホームページで紹介されて、平成十二年四月十九日現在

では「二十万六百二人」の延べ人数(件数)となりました。「石の上にも三年」とはよく言ったもので、自分ながら驚いてい

ます。正法のホームページ上ではアクセス数の設定をミスしましたので、なるがままに任せるといふ意思によりアクセス数は

表示できませんが、見ることはできます。これまでは自分一人で楽しみました。正法のホームページのアクセス数を見るための

アドレスは、 <http://www.shoho.com/logs/>です。

（この2000年バージョンはこれでは見れないし、アクセス数を見るには暗証番号も必要です）

最近では毎月一万五、六千件ずつ増え続けていますので、この研修会当日には二十一万件に届いているかもしれません。

A 4用紙換算では、九百枚の膨大な量のホームページですから、（平成十五年六月には九百万字数を越え一千万に

届こうとしています)

読み応えがあると見えてリピータが多いのでしょう。いまだに右手は腱鞘炎により痛んでいます。毎日毎日、キーボードを慣れぬ手つき

で狂った様に打ち続けましたから当然なことかもしれません。

このお手紙も、その後遺症により左手で打っています。

F A X情報サービスは、当初から事故の連続で中止しました。膨大な量の情報のために、F A Xが誤作動を起こし続けたのです。

募金もつのがりでしたが、この三年間に総額二万円で、お一人でした。奇特な方は元会員で、その方には会計報告を済ませました。

募金の難しさを本当に心から痛感しています。「人に頼らず自分一人の力でやれ」と言うことかもしれません。

今現在の悩みは、プロバイダー(ホームページを開設しているインターネットの会社)からは、ミイラ事件やアレフという元オウム

等の悪辣宗教と同等視されたのか、「辞退してくれ」との申し出に戸惑っています。しかし、こと正法のことですから移動、

移転してどうにか生き延びることでしょう。

これまでに二、三ヶ月間消されたこともあります。でも、また動き出したりして、正法には不思議な力が働くようです。

だから、やるだけやって後は成るがままなのです。自力の極には他力が働くのでしょうか。

それに、会員の方から記事の訂正や取り消しの依頼も有ります。

ところが、二、三ヶ月の突然の消去があったり移転、移動の話があって、そのうちに消え去る運命かと綱渡りしているうちに今日

まで来てしまいました。決して忘れていたわけではありません。

手許のパソコンには訂正されていますが、サーバーに上げるに至っていないと思し召してください。

また、このホームページには意見を載せたりチャットはさせていません。

それには理由があるからです。正法は、魂の永遠性を教え輪廻転生を説きます。ところが、悪意に満ちて正法を潰そうと考える

人が集団を組んで、「輪廻転生なんてナンセンス」という書き込みを始めたとします。このようなことで潰された宗教の

ホームページは幾つもあるのです。

また、書き込みをさせる事によって、そこからハッカーが侵入して書き換えや消去もあるので、この類のことは計画していません。

だから一方通行なのです。私流のセキュリティと考えています。

記述式のホームページはこれくらいにして、私の知らない或る人は、インターネットで高橋先生や園頭先生の講演

テープを流す

準備をしているとかしていないとか。大いにエールを送りたいと思います。そうなったときには皆さんもアドレスを宣伝して人に

知らしめて下さい。

先では、家庭のテレビでも見られるインターネットにより、クリック一つで両先生の肉声が聞こえ始めたら、さぞかし、おかしな

宗教は困ることでしょう。これこそ園頭先生が目指された宗教改革に成り得ると思います。

私達は最初に録音テープで正法を学び、そのうちにビデオで正法を学びました。これと同じように最初はインターネット・ラ

ジオから、次にはインターネット・テレビで声も画像もです。ワクワクしませんか。家庭に「づかづか」と正法が入り込むの

です。これからは、インターネットに歩調を合わせて正法の時代になるでしょう。極論すればインターネットは正法のために

あると、そう私は信じています。

下すな言い方ですが、最初に一般の人々ははピンク画像(無修正の秘画)を見たりゲームやワープロをするために、皆で申し合わ

せた様に何十万円もするパソコンという器具をアレヨアレヨという間にそろえました。その背景の中でインターネットは思わぬ

普及を遂げたので、もうこの次は真打・正法の出番です。

不思議ですね。「高橋先生はアナログ全盛時代にデジタル理論を説いておられた」と弟子の一人は本に書いていられますが、正法

の創始者の高橋先生は奇しくもコンピューター関係の経営者でした。だからこそ私は「インターネットは正法流布の道具」と

位置付け無理にこじつきたいのです。(この会期中に慈母のような義母は亡くなりました)

平成十二年四月二十日

合掌

平成十五年五月にはアクセス数五十五万を突破しております。ありがとうございます。(平成十五年六月一日)

Home

初めての講演

初めての講演

八起正法

平成十年四月十日、初めての対外向けの講演を開始いたしました。

当初は、六月頃の講演予定と伺っていましたが、お釈迦様の誕生記念日の四月八日に近い十日と知らせて来たのです。これは好都合だと

考えました。

私の担当は高校同窓会の第五十二回定例会で、メンバーは三十代から六十代の主な同窓生です。職業は、経営者や大学の教授、会社

勤務、弁護士、会計士、医者など多彩な顔ぶれです。

前回の定例会のことでした。

講師は阪大名誉教授で、遺伝子工学の七十歳余の老練弁士でした。終会となり、偶然、エレベーターに二人だけで乗り合わせました。

「次回の講師です。本日は興味のあるお話を有り難うございました。先生の次の役だけに責任を感じます」と挨拶をしますと、

「自然体ですよ。頑張ってください」と二、三の会話をしてお見送りをいたしました。

それから幾日もたたない内に、園頭先生へお見舞いです。

先生へ、私の講演予定と先の講師氏とのやりとりを報告していると、傍らのS氏から「前の講師が誰であろうと正法ですから」と、勇気

づけられました。

サテ、当日です。前配布用の「講演レジュメ」（要約、まとめ）も用意し、カバンの中には二十四枚の枠付きのOHPフィルム、録音用のポケット

レコーダー、レーザーポインター、タイマー、それからフィルムを汚さぬように白手袋もしっかりと収まっています。スライドとOHPの両方では

煩雑さもあるので、今回はOHPのみにまとめて早目に出かけました。会場は、町の中心にある新聞会館というデパートも入っている定例会場

です。私の持ち場は夜の七時半からの開始でした。演題は「心の法則とあの世」教室です。

知名度が全くありませんから、百席の定例会場に三十二人が来てくださいました。前回は八十人程でしたから三分の一です。

司会者の挨拶から私の講演が始まりました。パソコンでつくったフルカラーのOHPの出来栄は思いの外です。

私の投影機とは違って、いかにも高価そうなプロ仕様のオーバー・ヘッド・プロジェクターによって、私の講演は引き立てられたようでした。

ややもすると舌足らずで早口になりがちな私の心の傾向性をいさめながら、ゆっくりとはっきり(?)と努めました。話し始めてものの五分も

すると、おしゃべり好きの弁護士氏とオオボラ吹き of 会計士氏が、こともあろうにお互いに体を向き合っ て喋り始めるのが分かります。

かってジャズオーケストラの司会をやり、演説好きな私にとって、光源をおとした会場といえども一人一人の来聴者がよく見えました。

講演は、私のタイマーが五十四分間を指しましたのでそこで止め、三人の質問を受けました。

一人は工業大学の講師、そして前衆院議員の奥さん、最後の一人は本職の僧侶です。六十歳余りの彼は「この素人の医者が何を言うか」

という想いが見え見えでしたが、マーなんとか一時間半を無事終えました。

この定例会ではこんなこともありました。

この数日、私の出身高校の所在地にある大手のゴム靴会社の倒産が新聞を賑わしていました。地場銀行の頭取がこの会に出席していた

ものですから、ゴム会社の関係者だったので、泣きながら支援を頼むというハプニングも起き、あたかも、サロン外交の観を呈しました。

そこで、私も高橋先生の講演の受け売りで、「正しい」という判断の尺度は「そのことによって心の安らぎがあるか、そのことによって調和す

るか、この二つを同時に満足させるものが正しいというのだ、それで判断しなさい」と、やったものですから貸す方の頭取も貸される方も考え

込んでいました。

こんなことで、一時間半はアツという間に過ぎ、Yシャツまでかスーツまで届く汗も心地よいものでした。それで少し浮かれて帰途についてい

たのでしょうか、参考見本として持参した私の著書を、あわてて会場に取りに戻るということになりました。

現代は売り込みの時代、自ら知らせる時代と思います。盲目の人生を送る現代人に正しさの尺度、基準を教えるのが正法です。私は胸を

張って、死ぬまで正法を伝え歩こうと決意しています。

私の所属する医科の勉強会の幹事に頭を下げて話をさせていただこうと考えています。

こうなったら縁のある所には手当たり次第です。二年前の六月に、九時までの夜間診療を始めたとき、周りの人はどう思うだろうかという

気恥ずかしさの余り、外から見えないように診療室のありとあらゆるブラインドを閉め切ったことを考えると、恥ずかしい想いも数日のことで、

一歩踏み出してしまうと強力な智慧になると思い知るので。

こうして次の日曜日には、子供達を伴い先生へ講演会の報告と、二人の子供が同時に大学生になったお礼に参りました。

Home

第5 2 回例会レジュメ

「心の法則」は「物質の法則」と同じである。これまで長い間、心と物質は次元が違うと思ってきた。

心と物質は次元が違う筈なのに我々は「それは物だ」と心で認識できるのは心の本質と物の本質は本来同質であり、心の本源と

物の本源は同一だからである。

<心の法則>と<物質の法則>は元来同じである。

1) 原因結果の法則、因縁の法則 因果律、作用・反作用の法則 動・反動の法則

善い原因は善い結果をつくる（善因善果）、

悪い原因は悪い結果をつくる（悪因悪果）。

苦しみをなくすには苦しみの原因をつくらぬこと。至極単純明解。

一人一人の運命は、みなその人の心の結果であり生きざまの結果。

現在の自分は、過去の輪廻転生での生活体験と、現世の原因と結果の総決算である。

2) 心の傾向性。業、カルマの法則 慣性の法則

スピードを出した車は急ブレーキをかけても惰性でしばらく走る。心が一定の傾向性を持つと無意識にそのことを行う。いつも

明るくクヨクヨしない性格とか、悲観的な暗いことばかり考える等である。悪い心の傾向性は正し、善いことは伸ばすこと。

3) 類は類を呼ぶ、類は友を呼ぶ、波長共鳴の法則 同類の法則

酒好きの人のところへは酒飲みが集まり、マージャン好きはマージャン好きが集まり、静かな雰囲気の人にはそのよう

な人が類は類を持って集まる。音叉は同じ波長のもの同士が共鳴し合いーンと唸る。ラジオやテレビの電波は見えないのに、

周波数が同調すると音が聞え画像が見える。磁石は鉄分のみを吸い付け鉄分以外はついてこない。朋友、不仲、こうした関係は

すべて綾なす縁によって自然に結ばれ、あるいは離れて行くものである。

4) 霊魂の永遠性 質量不変の法則 エネルギー不滅の法則

人間の生命（霊魂）は過去世、現世、来世の三世をグルグル循環する。肉体は死ねば三合の灰になると言うが、人間は死んでも

死なない霊魂。霊魂は生き通しのもの。

5) 生まれ変わり、輪廻転生 循環の法則

人間はあの世とこの世を循環して魂を磨く。生まれ変わり死に変わりの目的は、一人一人の魂の調和、地上ユートピア（地上

天国）をつくること。昼夜の循環、四季の循環、水の循環、酸素の循環、惑星、陰電子の循環、悪循環、善循環等があり、自然界

の一員に過ぎぬ人間もあの世とこの世を循環し、生まれ変わり死に変わりするもの。

「人間の質」

人間の質を人間性とか人格と言う。この段階を簡単に示すと次の通り。

上々段階の人や上段階の人は、慈悲と愛の塊の人で、人類を正しく導く人。これを<如来>、<菩薩>という。

中段階の人は、損害を被っても非難しないで原因を振り返り反省する人。博士、学者の多い世界。これを<神界>という。

下段階の人は、ギブ・アンド・テイクで与えたものが返ってこないとスッキリしない心の人の世界。これを<霊界>という

最下位界の人は、自分さえよければ人はどうでもよいというエゴの世界。まさに現代の風潮である。これを<幽界>という。

暗い世界（地獄界）の人の心

人を争わせておもしろがり、闘争対立の心を持つ人。信仰することによって争いを生み出す人。自分の利益のためには平気で人を

陥れ利用する心の人の世界。これを<修羅界>という。

金銭欲が強く、足ることを知らずいくら持っても満足しない欲望の塊のような心の人の世界。これを<餓鬼界>という。

動物の本性まるでネチネチと執念深く、見境なく性欲に狂う人の世界。これを<畜生界>という。

狂思想家、エゴイスト、狂宗教家。常に心の中に闘争と破壊の渦巻いている人。ひどく怒る人、ひどく怨む人、ひどく悲しむ人の世界。

これを<煉獄>という。

集団で闘争を計画した者。戦争の計画者。権力を持って大衆を間違った方向へ指導した者。間違った教えを説いた狂宗教家の世界。スタ

ーリン、ヒットラー等。これを<無間地獄>という。

あなたはどの心の世界に当てはまるだろうか。現在のあなたから**地位、名誉、学歴、財産**を差っ引いたものが真

実のあなたである。

あの世は心のままの世界

あの世は心のままの、心の通りの世界である。同類が集まる世界。例えば、生前に金、金、金の亡者の死後は、右を向いても

左を見ても、金、金、金と思いやりもなく隙きあらば蹴落とそうという者ばかりの世界。

また、欲情に狂った者の死後は、どこを見廻してもどこを見ても、全員が肉欲の行為をし続ける世界であり、「もうイヤだ、

こんなことはもう金輪際ごめんだ、止めよう」と心から反省するまでそこに留まらねばならないという苦しい世界である。

だから文字通り地獄の苦しみで、これを地獄界というのである。一方、高い段階になると、全員が爽やかな心あたたかい

高人格者ばかり。生活を乱す者は一人もない超平和な世界もある。この世はいろんな人格の人がいるから、参考にしたり

模範に出来る。こういう理由で、この世は魂の勉強には好都合である。しかし、あの世は心の段階が厳然としてあるのだから、

自力で自覚しなければならぬほど厳しい世界である。反省の習慣のない人は特に今のうちから気をつけていただきたい。

「反省」とは、もう二度と同じ過ちをしないということ。性懲りもなく何度も何度も繰り返すのは、ただの「後悔」に過ぎぬ。

反省は明るい世界、後悔は暗い心の世界である。

「死んだらどうなる」

人が死ぬと、しばらく自分の置かれている状態もわからぬ無意識状態が続く。死んだのに無意識状態と言うのはおかしいで

はないかと思われるだろうが、魂は永遠に生き続けるものだから、魂にとっては活動していないから無意識状態である。その

内に、お坊さんが来たりお経が上がり始めると「俺はヒョットしたら死んだのかも」と自覚するようになる。それから二十一

日間は地上界に留まることができる最大日数。八十年も九十年も地上界で生活したのだから、懐かしい家の軒や自分の気掛かり

になる場所にいることになる。この世に執着もなく死を自覚し心を悟った人は、二十一日どころか僅か一時間もしないうち

に天上界へかえって行く人もいる。皆がこうなることを望みたい。

次に、あの世の入口で尋ねられる。「あなたは死ぬ覚悟がありますか、死ぬ用意がありますか」と。そして、生前の自分の為し

た一切の出来事をパノラマ映画のように見せられる。それから、また、尋ねられる。「あなたは人前に見せられる、恥ずかし

くないような何かをして来ましたか」と。この回顧映画は反省の涙でまともには見られない。この尋問をする係りの人は、菩薩

界の高霊格の人間である。

そして、三途の川もある。これはこの世への執着を捨てなければ向こう岸（あの世の定着地）には渡れないという次元の違う

大河である。

こうして二十一日間も過ぎると皆な、あの世の修養所に入りそこで二十八日間、各人の心を反省させられる。修養所のそばに

は、無意味なことを悟った人が置き去った物凄いゴミの山がある。本物のお金は持ってこられないから、心の中で持って来た

お金などである。この修養所での反省の度合い、生前の思念と行為の生きざまによって、あの世での定住地が決まる。その

定住地は閻魔様等が決めるのではなく、自分の嘘のつけない善我なる心が決めるのである。全部自分の責任。自由にこの地上

界にいたることができる日数の二十一日と、修養所の反省期間の二十八日の和が四十九日の由来である。

人が亡くなってから最低限四十九日は静かにしていること。折角、死者が安住の地に定着しようとする時、財産問題等で

もめると、死者の魂が揺さ振られ、執着の残る場所へ引き戻されるからである。亡くなってすぐは、毎日の生活の習慣的な

等速度線上にあるので、死者に食べ物を供えるのは意味がある。しかし、あの世にはあの世の生活があるのだから、残され

た者が納得の上でその内にやめるのもよいだろう。一人よがりやがりはモメごとの原因。生きた人間のエネルギーのもととは食べ物

と睡眠だが、あの世での生きるエネルギーは神の光である。

このようなレジュメを配布した。

[Home](#)

Home

女性と男性の正法・神理

女性に関係ある神理

男性に関係ある神理

男女に関係ある神理

○尊敬し愛している者同志が、一緒に食事をするのは、尊敬し愛するあまりに、相手と一体になりたい、相手に同化したいという心の現われである。

○夫婦の性生活は、お互いが愛を確認しあい、愛を向上するための行事であり、神が陰陽に分かれ、再び陰陽が結合するというこの行為は、天地創造の原理が小宇宙である人間において実現する神聖なる行事である。

○妻以外の女性との性行為に後ろめたい罪悪感が伴うのは、それは相手が、単に性欲を満足させるためだけの相手であり、お互いに愛を確認し合い、魂を向上し合うための相手ではなかったからである。浮気な男性も女性も、どんな相手と接しても、心の満足の得られなかった、霊の満足の得られなかった哀れな人達なのである。享樂の対象にする
と罪悪感が伴うのである。

「性の四要素」

一、目的

性の結合を行なう目的は何か、夫婦愛を完成し、お互いに愛情を確かめ合うためなのか、それとも単なる性欲の満足のためか。

二、人

その人は正しい相手であるか。

三、時

為すべき時が大事である。人が働いている昼間から行なうことは正しいかどうか。

四、場所

行為には場所が必要であるが、為すべき場所であるかどうか。

単に欲望を満足させるために、為すべきでない相手と、為すべきでない時に、為すべきでない場所で行なうのは「悪」となる。

○男は遠心力であり、外へ外へと出て働くのが男の役割であり、女は家

庭にあって、外へ飛び出した男を内へ、家へと引き付ける求心力の役割をするのが天分であり、男女同権、男女平等といって、女が家を飛び出して家庭を疎かにすると、家庭に歪みが生じてくる。

○子供の結婚が失敗であったと悩んでいる女があった。その女は夫が嫌いであった。夫に求められるとゾッとするほど嫌いであったが、別れて一人で子供を育てていくのに自信がなかったので、別れることはしなかった。それで求められるといつも心の中で、「これも子供のためだ、子供のために辛抱しなければ」と、いやいやながら応じていた。そういう不調和な心が子供に影響していったのである。自分達は幸せだと思っている調和された夫婦の子供達は、みな幸せな結婚をするのである。だから妻は、心を優しくして素直に夫にふれさせることである。抵抗なくふれさせる時、夫は元気づけられるのである。

○女に母婦型と娼婦型がある

母婦型の女性は、子供が好きで、性的行為を子供を得る手段と考え、子供が生まれてくると子供を可愛がり、よき母となる。こういう女性は夫に対しても母となる。娼婦型の女性は、子供が嫌いである。だから性的行為は、行為それ自体を楽しむので、間違っても子供が生まれると子育てをいやがる。こういう女性は夫に対してもいい妻にはなれない。

母らしい女は、比較的たくさんの子供を持ちたがるが、浮薄な娼婦型の母は、子供が少ない。

母婦型の女は子育てに熱心であるから、自分の服装などにはあまり

構わないが、娼婦型の女は自分を飾ることに懸命になる、というのである。私はワイニングルの書いたものの中に、独断や偏見もあるが、また、神理も含まれていることを発見した。

母婦型の女は、自分の生んだ息子に性的関心を持つことはないが、娼婦型の女は自分の息子が男性であることを意識し、時によっては息子と性的関係を持ちたいと思う。こういう娼婦型の女は子供を性的に早熟させ、その結果、子供を性的ノイローゼにしてしまうことが多いのである。

母婦型の女は、夫に対しても母となろうとするが、娼婦型の女は母となろうとはせずに、いつまでも女としていかにして男の心を自分にひきつけるかということだけを考える。

母婦型の女は、隣の部屋で子供が泣き叫ぶと、自分自身を傷つけられたように感じてすぐ飛んで行く。子供達が成長しても、その子供の欲望・苦悩を自分自身の問題であるかのように考える。娼婦型の女はすべての関心を自分自身にひきつけようとし、何事も自分を中心に考えるから、夫のことにも、子供のことにも案外に無関心で、自分のためになると思えば一生懸命になるが、ならないと思う場合は夫や子供をほったらかしにしても平気である。

母婦型の女は、夫と子供の将来を考えるが、娼婦型の女は、その時だけよければいいので将来のことは考えない。

母婦型の女は、性的関係を人生の重要な出来事の始まりと見做し、人格を完成し、愛を表現するための手段として、それによって生活を豊かにしようとするが、娼婦型の女は、性的交合を目的とし、その目的を達成しようとして男に媚びを売る。それ自身が目的であるから、その目的を達すれば将来のことは考えない。

母婦型の女は、全世界、夫、子供のために愛を与えようとするが、娼婦型の女は、自分のために吸収し、受けることだけを考える。

だから、母婦型の女は、自分はみすばらしい格好をしていても少しも気にならず、夫や子供にいいものを着せようとする。だが、娼婦型の女は、歓楽、舞踏、劇場、音楽会、娯楽等について常に考え、服装なども贅沢になる。

母婦型の女は、自分とともに将来を考えてくれるまじめな男性を選ぶが、これに対して娼婦型の女は、浮気な、怠惰な、放縦な男にひきつけられる。娼婦型の女の情夫は、常に犯罪人であり、泥棒であり、詐欺漢であり、時としては殺人者でさえある。母婦型の女は犯罪を犯すことはないが、娼婦型の女は犯罪と深い関係がある。

生活に行き詰まった時、母婦型の女は子供の将来までをも考えて、子供を道づれにしようとするが、娼婦型の女は、子供を捨てるか、子供を夫の下に置いて自分だけが生きを考える。

男は、母婦型の女を美しいと思い尊敬するが、娼婦型の女を美しいと思い尊敬することはない。母婦型の女によって男は純化されるが、娼婦型の女は男を墮落させる。終戦後、母婦型の女よりも、娼婦型の女が増えてきた。すべてを自己中心的に考える女によって、男の心も子供の心も荒廃させられてしまった。「愛は惜しみなく奪う」というけれども、「愛は惜しみなく与える」ものである。よく与えることができる者のみが、また、よく受けることができるのである。奪うことのみを考えている女は、男を享楽の対象、自分の欲望を達成するための対象としてのみ考えるから、男の持っているものをすべて奪い尽くして、やがて男をダメにし、結果的には自分もダメにするが、与える愛の尊さを知る母婦型の女は、男に与え、子供に与え、夫や子供が立派になることによって、また自分にも与えられることになる。人生の終わりに近づいて、子供や孫に囲まれて幸せな女もあれば、その反対に、誰からもかえりみられない孤独な女もある。どの道を選ぶか、どんな女になるかは、一人一人の心次

第である。

- 「一般に最大の性的索引を有する両親の産児は、最上に栄えるということが言われるであろう」

即ち、お互いにしっかり愛し合った夫婦の間に生まれた子供は、健康であり幸福になるが、その反対に、お互いに反発し合っている夫婦の間に生まれた子供は、肉体的にも精神的にも障害を受けるとい

うのである。女の人でも、楚々とした本当に女らしいという人もあれば、男も顔負けに、男と同じようにトラックを運転して重量物を運搬し、骨格も声も全く男そっくりだというような女の人もある。

人生が一回きりだとすると、生まれながらのこうした違いは、どうして生ずるのであるのか。そこで釈尊は、人は輪廻転生するのだということを説かれたのである。輪廻転生するのだということは、人には前世があり、過去世があるということである。人間は死んで終わりではないということである。肉体は死んで火葬してなくなるのであるから、肉体が死後も存続するということは全くないが、霊魂が存続し、輪廻転生するということである。

- 『男』は現実社会を建設し、『女性』は子供をどう育てるかということを通し、未来社会を建設する。

- 貴方は、今までに、明るい心と暗い心とどちらが長かったですか。

- 幸せになりたいのなら、パッと明るい方へ気持ちを切り替えること。

- 『親の役目』は、子供が社会人となって、人間としての道はずさな
いように導くこと。

- 働くとは、人の役に立つということ。

- 病気は、その人の生きざまの結果です。

- 間違いと気付いたら、今すぐ正せ。もう遅すぎるということはない。

- 反省とは二度と繰り返さないということ。

- 「全体の幸福を願うなら、まず自分自身の心を幸福にさせることで
す。幸福のなんたるかを知らずに、どうして人にその幸福をわかち与
えることができましょう。正法はまず己の幸福から出発します。そう
して全体の中の一人一人の幸せが目的です。」

- 幸せを求めたいならば、まず悪の想念から離れることだ。

悪を想えば悪が、善を想えば善がもどってくる。

○人間がこの地上に生をうける時は、両親を指名し、自から選んで生まれてきます。親子を選ぶ範囲というものは、おのずと限定されてきます。

一、魂医師が非常にあい似通っている場合

一、過去世で親子の約束を強く望む。たとえば、ある人に非常に世話になり、その恩返しをしたいという場合

一、過去世において親子兄弟、友人同士であった場合

一、あの世で生活を共にし、親子の約束をする場合

○神の慈悲と愛は、「太陽が善人の上にも悪人の上にも等しく照るが如く」「雨が善人の上にも悪人の上にも等しく降るが如く」と聖書には教えてあるのです。全智全能であり、智慧であり、慈悲、愛そのものである神は、初めから我々に健康と幸福とを与えられているのです。

○一夫一婦は神の計らい

○男性が外で働いて経済力を持つのは、それは神が男性に与えられた役割と使命であり、女性は家庭を守り、子供を生み育て、子供をどのよ

うに教育するかによって未来社会に貢献するのが、神が女性に与えられた役割と使命なのである。

○「再婚」...キリスト

夫をなくした妻は、夫に貞節を尽くしなさい。そうすれば子供達は順調に立派に成長するであろうとキリストは言われた。ということは、再婚して性の煩惱から抜け出して心を安らかにしてよいけれども、その代りに子供が清く育たないこともあるから注意しなさい。

○「結婚」「不倫な男女関係」...釈迦

結婚は「愛」を中心とすべきであり、階級、家柄、地位、学歴等を中心にしてはならない、と。そして又、釈迦は夫婦以外の不倫な男女関係について戒められた。

○愛とは、その人のためにどれだけ自分を投げ出せるかということ。

○妻に対する夫の五つのあり方...釈迦

- 一、妻を尊敬する
- 二、軽蔑しない
- 三、道からはずれない
- 四、妻に権威を与える

家庭のこと、子育てについて等、家庭内のことはすべて妻にま

かせる

五、装飾品を与える

Home

○夫に対する妻の五つのあり方...釈迦

一、仕事をよく処理する

家庭内のことはよく自主的に責任をもって処理する

夫が家庭のことについて心配することなく十分に活動できるよ

うに

二、身内の人達をよく待遇する

三、道をふみはずしてはならぬ

夫以外の男性と交わってはならない

夫以外の男性のことを、心の中で思ってもならない

四、集めた財産をよく守る

○物は一年中で一番値下がりした時期を見て買い込む

○季節になったら、種子を買ってきて自分で植える

○食料品は自家製にする

○家の中にあるものは無駄なく利用する

○一日の収支の帳尻を合わせる

○財産の額などを他人に洩らしてはならない

五、妻として、女として、為すべき事柄について巧みで勤勉である

妻は夫から経済のすべてを委されるほど、夫から信頼されなけ

ればならない。そして、妻はその信頼に応えなければならない

○玉耶教（釈迦）が教える善い妻と悪い妻

○地獄へ堕ちる悪い妻

一、殺人者に等しい妻

こんな夫と結婚するのではなかったと、妻として為すべきこともせず、夫が家のことが心配で仕事に熱中できず夫がまじめに働こうとする力を阻害している妻

二、盗賊のような妻

夫が働いてきた財を、すべて奪い取ろうとする盗賊のような妻

三、支配者に似た妻

自らは贅沢で、怠惰で、粗暴で、口やかましく、勤勉な夫を支配し制圧する、支配者に似た妻

○死因は病気であるにしろ、事故死にしろ、夫が早死にして、早く未亡人になったという人は、夫の心を十分に生かしてきたかどうか反省してみることである。

○天上界へ行ける善い妻

一、母のような妻

二、姉・妹のような妻

三、友人のような妻

四、奴婢のような妻

夫に叩かれ、脅かされても怒らず、悪心なく、夫に対して、忍び、怒ることなく従順である。このような妻は男にとって

ぬひ（奴婢）のような妻と呼ばれる。

忍辱（にんにく）の心。

○夫からどのような仕打ちをされても、夫への愛を失わない妻は、子供を立派に育てて、子供が自分を幸せにしてくれる。それに反して夫に敵がい心、反抗心を持つ妻は、子供の教育に失敗して子供ゆえに泣かされることになる。

○男と対等に仕事をし、男と同じような賃金をもらおうという経済的な理由で、女が女らしくあることをやめようとすることによって、女は女自らの幸せを放棄してしまっている。男と能力を競い合うことによって、女は本当の安らかさは得られない。女の役割を捨てて、男と同じように外で働いて、収入を得なければならないという考え方では、女は絶対に幸福にはなれないのである。女の役割を放棄して、どんなに他の方法で幸福を追求しても、それらの方法では幸福感を感じることは出来ない。

キリスト教が教える夫婦の調和のあり方

○妻たる者は、すべての人々がキリストの教えに素直に従うと同じように、自分の夫を尊敬し、夫の言うことに従いなさい。
夫は自分の身体を大事にすると同じように、自分を捨てて妻を愛しなさい。

○夫は妻に尽くし、妻もまたよく夫に尽くさなければならない。妻は自分の身体を支配する権利はない。妻の身体を支配する権利を持つのは夫である。このようにして、夫もまた自分の身体を支配する権利はない。夫の身体を支配する権利を持つのは妻である。男は女をよき人生のパートナーとして尊敬し、女の性を大事にしなければならない。女の性の前にひざまづく謙虚さを持たなければならない。

○なぜ女は昔から長い髪を持つのを誇りとしてきたか。...キリスト教

男は神様に祈る時に、頭に被り物をかぶらずに、じかに、真っすぐに祈ってもよいが、女は神様に祈る時に、必ず被り物をかぶらなければならない。その被り物の象徴として長い髪を持つようになった。

(夫) 男の祈り

神 キリスト 男 (短い髪を誇りとする)

(女) 妻の祈り

神 キリスト 夫妻

妻は夫の生命を礼拝し、夫の生命を通して祈った時に妻の祈りは聞かれる。

妻が夫を軽蔑し、夫を尻に敷いて祈る祈りは聞かれない (女が髪を剪って短くする)

親と子の神理

○子供は、神を愛し信ずると同じような心で、両親の言うことに順え。

そうすることにより、子たる者は幸福となり、寿命を全うすることが

できる。...キリスト教

○親は子供を愛し慈しみ、人として守らなければならない戒めを、親自
ら実践して子供を育てなさい。そうすれば、みな幸福になるのであ
る。...キリスト教

○年寄りを大事にし、親を大事にする国は絶対に滅びない。...釈迦

A rectangular button with a blue border and a brown, wood-grain-like background. The word "Home" is written in a white, serif font in the center.

家庭の神理

○家庭とは、因縁によって親子・夫婦・兄弟姉妹となった者が、それぞ
れ神の子であることを自覚し、魂を磨いて向上していくための、神が
つくられ計画された共通の生活の場所であって、家庭に帰るというこ
とは、神のふところに帰るのと同じであり、家庭を大事にすることは
神を大事にすることであり、家庭を粗末にすることは神を粗末にする
ことである。

○子供が病気をしたり、怪我したり、死んだりした場合は、親自身が反省してこれまでの生き方を改めなければならないのである。

○親のために苦労させられる、親が早く死んで苦労したという人達がある。どうしてそういう親を選んで生まれてきたのであろうか。そういう人達は、前世において親を泣かせ、親に苦労をかけたのである。

○子供の親不孝に泣く親は、自分が前世で、また今世で親不孝して親を泣かせたことがあったのであることを反省しなければならない。子供に親不孝されてみて、はじめて前世で今世で自分が親不孝した時に、どんなに親が苦しんだか、その親と同じ苦しみを、今自分が味わう。親不幸の子供に泣いている親は、「こんな子供を持って」と憎まないで、「あれが前世または今生における自分の姿だったのだな」とよく教えてくれましたと感謝し、親自身の生活態度を改めてゆくと、子供は親不孝しなくなる。

○子供に恵まれない親は、前世でたくさんの子供を持って、その子供のために苦労をさせられたというので、「もう子供なんかいない方がよい」と心の中で思ったからである。

○今生で子供を小さいうちに失くすのは夫婦の不調和が原因である。

○子供を失い、子供がいないと、子供がいないうつさをしみじみと体験させられる。すると、「やはり子供はあった方がよい、子供のいない

生活はもうしたくない」と思う。そう思うことによって前世の生活を反省させられる。

○子供に恵まれないことを約束して生まれてくる人もあるのですから、それを人工的に妊娠することは、前世の業を反省することにならないから、魂の勉強、魂の向上をさまたげることになり、子供に恵まれない人は恵まれないままでよく、反省の結果の上に立って、養子にするか、あるいは他の人の子供のために尽くせばよい。

○親に似ぬ子は鬼子というが、そういう子供は特別の使命を持って生まれている場合が多い。

○「子供の性教育」

「人は教育によってのみ、人となり得る」というのは性教育においても同じである。

一、宇宙創造の原理、天地陰陽の理

二、男の役割と女の役割

三、結婚の意義、夫婦生活の秩序

四、子供の誕生は神の計画と天上界の計画による

○人は教育、しつけによらなければ、良い人にはならない。生まれたままで放って置いたのでは一人前の人間にはならない。

○胎児の時に与えられた精神の影響は、その子供が思春期になると爆発的に吹き出すのである。

「思春期になってノイローゼになる子供」

母親は子供を産みたくなかった。流産することを願った。喜んで産んだ子供ではなかったので、どことなく愛情がわかなかった。その結果、子供はノイローゼになったり、暴力を振るうようになり、そのついでに親は支払わなければならない。

「破壊的な、捨てばちの母親から生まれた子供」

性的遊戯等の結果、妊娠を喜ばず、妊娠したために仕方なしに結婚し、罪の意識に悩みながら、ひそかに心の中で胎児の死を願っている母親。こういう母親から生まれる子供は、早産や体重の足りない発育の悪い赤ちゃんを生み、難産したりする。

「初恋の人を心ひそかに思っている母親、二重人格的な母親から生まれた子供」

初恋の人と結婚出来ずに別な男性と結婚した人が、ひそかに「あの初恋の人の子供であつたら、どんなに嬉しいことであろう」と思ったりして、周囲の人は子供が生まれることを喜んでいるのに、無意識に子供を生むことを拒否している母親。子供は二重人格的になり、胃腸の弱い子が生まれる。

「人間的に未成熟な母親から生まれた子供」

職業を持っていて、経済的にのみ関心が強く、母親となる心構えが充

分に出来ていないのに妊娠して、いろいろな理由から子供を欲しがらない。生まれた子供は、感受性が鈍く無気力で、精神集中力がない。

「早産した子供は問題児となりやすい」

早産とは予定日の二カ月までを云うが、早産された子供は始終追い立てられているような傾向が強い。落ち着きがない、情緒不安定である。なぜ早産するかというと、妊娠したことを心から喜ばない感情があり、また出産に対する十分な心構え、知識がないために、大きな胎児を生むことに不安と恐怖を感じ、その心の負担と恐怖から早く離れたいという心が母親にあるからである。

「難産した子供は問題児になりやすい」

難産した子供は、精神分裂症、精神異常、暴力的、反社会的犯罪を犯し易い。妊娠したことに罪悪感を感じたり、生むことや、生んだ後のことについて疑心や不安を持ち、母親になることに十分な心構えがなかったりすると、生もうか生むまいか、生まなければならないが生みたくないという心が働いて、陣痛の時間が長くなり、子宮の収縮力が弱くなって難産することになる。

「非行・暴力・反抗」

調和されている家庭からは、ノイローゼも反抗児も出ない。反抗児は父親が極端に厳しいか、また極端に甘く、父親の権威がない家庭に出る。父親の権威のない家庭では、結局は母親が強いわけである。夫婦が不調和であってはいけない。特に母親が強くなってはいけない。

「ノイローゼ」

母親が性的感情を持って子供を見るということが原因。子供をそういう眼で見ないようにし、いかにして夫と調和するかを考え、夫を喜ばせるようにする。

「冷たい女」

初恋の男性を思い続けている女性。

父親にひどく愛された女の子。

「股関節脱臼」

親がこの家を飛び出したい、逃げ出したい、すぐ家を出る癖があると、ぴたっとはまっていなければならない子供の股関節がはずれる。

「聾啞者」

ああ、もうこんな人達とは口も聞きたくない、ものも言いたくないと強く思うと、耳の聞こえない口のきけない子供が生まれる。

「盲目者」

家庭環境のつらさ等から、見れば腹が立つ、悲しくなるからと、もう一切見ないと心に決めて、何があっても「ああ、見たくない見たくない」と全く無関心な態度を取る。

「小児麻痺」...古神道

不調和の原因がどちらにあるにせよ、妊娠中にその母親が、親とか夫とか、立てるべきものを立てない結果、子供の立つべき足が立たない

形となって生まれてくる。

Home

「白痴・精薄児」

夫を愛する心になれず、結婚したこと、妊娠したことを怨みに思っている時。怨み心の強弱によって胎児への影響も違う。

「てんかん」

人工受精児や、性に原因する夫婦の強い不信感（日本では、現在人工受精児が二十万人いるというが、その半数が問題児になっているという。）

大酒のみやお酒の常習者の女性の生んだ子に「テンカン」の多いという統計が医学的に認められている。

項 『アルカリ食健康法』（川島四郎）

障害児が生まれる原因の八〇パーセントは心の不調和であるが、二十パーセントは次の原因による。

- 一、ビールス感染（風疹・インフルエンザ・流行性耳下腺炎）
- 二、ペットの寄生虫の感染、トキソプラズマ

三、薬剤によるもの

黄体ホルモン・副腎皮質ホルモン・麻酔剤・鎮痛剤・精神安定剤

ビタミン剤の摂り過ぎ

四、梅毒

五、酸素欠乏・心配事・悩み・怒り・悲しみ・怨み・嫉妬・恐怖等に

より、呼吸が浅くなって血液の浄化、循環がうまくゆかない。

六、栄養不足

七、レントゲン照射

八、酒・煙草の害

九、遺伝

○腹を立てて怒ったからとか、悲しんだからといって、すぐ胎児に影響するということはない。どんなに怒ろうが悲しもうが、その後でさつと心を切り替えて心を安らかにすることができれば、胎児には影響しない。

○肉体的な障害があったからといって、霊が低級であるのではない。障害者の霊は、不完全な肉体をどのように乗り廻して霊の勉強をするか、健全な人の経験出来ない厳しい玲の勉強をしようとしている勇者なのである。

○謝り（懺悔・反省・禅定）祈り 胎教の影響の修正

お母さんの心の不調和によって、本来ならば健全な五体を持って生まれるべきあなたの肉体に、このような障害をつくってしまって申し訳ありませんでした。お母さんは今、あなたがお腹の中に宿って

いた時のことを反省しています。あなたが障害児として生まれてこなければ、お母さんはこのような反省はしなかったかもしれません。あなたは障害児として生まれることによって、お母さんを導いてくれたのです。心からそのことについて感謝をします。そういつて、次に既に子供が健康体になっている状態を、心の中にありありと描き、「神よ、この子供に光を与えて下さい。既にこの子供を健全にして下さいますありがとうございます」と祈るのである。

○「祈り」は、キリストが言われたように、「既に得たりと信じて祈ることが祈りが効かれる秘訣である。悲しそうな哀れな表情をして、乞食が物をねだるような、そういう気持ちで神の憐れみを乞い、特別にお恵みを与えて下さい、というような祈り方では祈りは実現しないのである。

○精神障害、ノイローゼ、非行、暴力の子供への祈り

夫、または周囲の人々との不調和により、あるいは「性」に対する葛藤などから、心ひそかに流産や子供の死を願ったりしたことが原因なのであるから「縁あって、あなたが私を母として生まれてきて霊の勉強をすることになっていたのに、私はあなたが、私のお腹に宿ってくれたことを素直に喜ばず、ひそかにあなたの死を願ってしまいました。どうぞ、私を許して下さい」と心から反省し懺悔し、既にその子供が健全であることを心の底深く念じることである。

○つわりは妊娠初期、大抵起こる。母親の心と胎児の心、霊との不調和が大きければ大きいほどつわりもひどくなる。夫と妻の心が調和され、胎児の霊とも調和されると、つわりを全く感じない人もいる。

出産

自然分娩で自然の法則に順ってしゃがんでして、母乳で育てる出産育児をする。

帝王切開の害

○陣痛が始まって子宮が収縮し始めると、胎児は自然に頭の先で産道を通り、押し開いて外へ出ようとする。その時に、産婦の心になんのストレスも抵抗もないと、産道はやわらかく開くが、産婦が喜んで子供を生めない心理状態にあると、生むことに恐怖に似た感情を持ち、生みたくなかったりすると、出産に時間がかかったり難産する。産道を通って出てくると自然の愛撫のマッサージが行われ、安心してこの世に出てくるが、愛撫のマッサージが行われず、いきなり空気中に取り出される帝王切開は、それだけに神経過敏になり、感覚は鋭敏であるが、姿勢や運動の調節だけでなく、手の動きも言葉も遅れる。帝王切開は自然出産に比べてマイナスの要素が多い。帝王切開児ほど子供の背中を愛撫してやる方がよい。

誘導分娩の害

○人工的に陣痛を起こすために、母子ともに心の準備ができていないのに、胎児は胎外へ投げ出されることになり、産婦は自分の身体をコントロールすることが出来ず、胎児もまたリズムが合わなくなる。

○鉗子を頭に引っ掛けて引き出すという方法も、産道による自然のマッサージが行われず、問題も多い。

○生まれるとすぐ、血も粘液もついたままの赤ちゃんをバスタオルをひろげたお母さんに抱かせる方法があるが、生まれてから粘液などを洗って十五分後に抱かせた子供とでは、情緒の安定度、発育に差があるという。

○保育器の中に入れられた未熟児が情緒不安定になり、成長してもうつ病にかかりやすいという。これは胎外へ出ても母親に抱かれて母親の心臓の鼓動を聞くことなく、不安な心の状態のまま長く置かれるからである。

○母乳育児の利点

一、病気に対する免疫性を含んでいるので、赤ちゃん自身に抗体ができる 初乳の重要性、初乳は二日間続く。

二、人工乳で育てられた子供より肉体的・知的両面にすぐれる。

三、母乳を飲ませている間は自然のバース・コントロールが行なわれ妊娠しない。

四、母体の肉体的・精神的健康にも重要である。

1 . 母乳を吸わせることによって子宮が収縮する

2 . 胎盤が自然に体外へ排出されやすい

3 . 乳房の分泌機能の増大

4 . 母親らしさの発現

○赤ちゃんが、この世に生まれて最初に接する人間は母親である。母親の胸に抱かれ、母親の精一杯の愛情を受けて乳房を吸っている赤ちゃんの心は、安心感に満たされている。この母と子の安らかな人間関係

は、やがてその赤ちゃんが大人になった時、他の人との間に安らかな人間関係を持つことになる。神の愛の人間的表現が母親の子供に対する愛である。母親は妊娠し出産し育児することによって、神の愛を経験していくのである。授乳しない母親は、その愛を体験しないので、そのことによる霊の成長をさせることが出来なくなる。

○女が子供を生むということは、人類が永遠に発展してゆくために、神が女性に与えられた天命である。女性にとって妊娠こそは、女性が生まれ変わる最高のチャンスであり、女性の身体が新しく再生されるチャンスなのです。妊娠こそは神が女性に与えた慈悲である。

○赤ん坊は、お乳が欲しいとか、おむつがぬれた時とか以外は絶対に泣かないのである。よく泣くのは母親の心が不安定で、神経質になっているからである。



○墮胎罪がなくなった結果、性を享樂の対象にして、その結果妊娠する

となんらの罪の意識もなく墮胎している人もあるようですが、そういう人は男、女側ともよく反省して詫びないと、いつかはそのことを反省しなければならない出来事にぶつかるでしょう。それは水子の祟りではなくて、自分が間違ったことをしたその結果としてくるのでありますから、よく反省することです。妊娠させた男性の側こそ罪が大きいのです。女性に妊娠させて、責任をとらなかった男性が死ぬと、自分の見たこともない子供が、「お父さん」と寄って来た時、「お前みたいなお前は知らない」と言ったら地獄行き間違いなし。水子供養を説く、宗教家達が、女性の側ばかりを問題にして男性の責任を追究しないのは片手落ちで、あの世のことを知らないからです。それと心覚えのある男性も、生きている間によく反省しておくことです。

○夫婦調和への提言

- 一、初恋の人は忘れなさい
- 二、純潔を守ること
- 三、結婚前の秘密をしゃべってはならない

○日本はどうなる

家庭の崩壊、離婚、再婚、再々婚、同棲、未婚の母、結婚拒否、同性愛などさまざまな社会問題を引き起こしている。離婚が確実に増え続け、毎年一万件以上の増加をみている。最近は中高年層の離婚率が高くなっている。一九六〇年代から始まった女性拡張、男女平等は、やがて失敗であったことを知ることになる。一時的な経済環境の変化で、女性も職場に進出しなければならなかったとしても、結局はそれは一時的のことであって、神が定められた男と女の役割の本質までが、すべて変わってしまうということにはならない。子供を「鍵っ子

にして働きに出たために、子供が大きくなるにつれて、手に負えなくて困っている人がたくさんいる。少々くらいの金と引き替えに、子供をだめにするわけにはいかないといって、夫の収入で満足して、子供を立派にしつけし教育している人もいる。ローンの支払いのために、妻も働きに出ないと仕方ないという人もあるわけであるが、本書に示した男女の役割を十分に心得ているのであれば、家庭には問題は起こることはないと信じている。アメリカで失敗していることを、いまさら日本が真似することもあるまい。確かに女が強くなった。夫は、父は弱くなった。女が強くなって、男が活力を失った国は滅びるしかない。卑弥呼の歴史は、女性上位では国家社会は健全に発展しないことを教えている。人間も自然界の一員である。万物の霊長である人間だけが、自然の法則に反してよいわけがない。現在起こっているいろいろな社会問題は、人間が自然の法則に反したあり方をしていることへの反動であり警告である。答えは簡単である。「男は男らしく、女は女らしく、男は男の役割を、女は女の役割を」

『正法と結婚の原理』（園頭広周著）にみる人生の原点

- 「母」とは、生命を生む者のことである。我々はみな、自分の肉体を生んでくれた肉体の母親への思慕を通して、永遠に変わらない大きな生命の母、即ち神のふところに帰りたいという思いが、我々の信仰心となっているのである。その我々のその思慕の感情を、我々の祖先達は、「吾は、妣の国、根之堅州国に罷らむと欲ふが故に哭くと申給ひき」と表現したのである。なんと優雅な表現であろうか。男は失意の時、死に直面した時、心の奥底で「吾は妣の国に罷らむと欲ふ」といって、そこに帰れば心が安らかになると思って、母を求めて、もしそ

の母がいなければ自分の妻の中に母を求めて、泣くのである。そういう時、妻は母となって夫を抱き、夫をして思う存分泣かshime、慰め、励ましてやらなければいけないのである。だが、最近はそのような聡明な妻は少なくなったようである。

○昔から、女が強いと男の子が生まれ、男が強いと女の子が生まれるといういい伝えがある。どういう子供を持つかは天上界で決めるのであるから、このいい伝えは当たらない。

○人間は小宇宙を形成している。小宇宙とは大宇宙の縮図である。大宇宙に展開する無数の星々は、人間の肉体を形作っている光の数（細胞数）とほぼ同数である。（六十兆個）

○私の師、高橋信次先生の教えは、すべては自然が教えている。自然の相（すがた）を見れば人間の生き方がわかる、というものであった。

○釈尊の弟子に「ヤサ」という人があった。ヤサはベナレスの大商人の息子であって、好きな女に逃げられて、ガンジス河に投身自殺しようとしているところを釈迦に助けられた。美男子だったので、釈尊の弟子になってからは、女の人に変な心を起こさせてはならないということで、わざと顔に泥を塗って説法した。そういうことから、美男子といえば「ヤサ」、「ヤサ」といえば美男子ということになって、今から一五〇〇年前、仏教伝来によって伝えられてきたインドの仏教説話から、今日でも美男子のことを「優男」というのである。

○それと同時に伝わってきているのに、女の子に「幸」、「幸子」という名前が多いことである。釈尊の女の弟子に「マイトレーヤー」という人があった。この方は後に「弥勒菩薩」と言われるようになった方であるが、この方の小さい時の名前を「サチ」といった。マイトレーヤーにあやかって「幸」、「幸子」と名をつけたわけである。そのように、民間の伝承となっているものには、古い古い歴史、神話などが伝えられているものがある。

○男の元気はどこからくるか、男はなぜ女にふれたがるか

私の知っている人に、女を見るとふれたがる人があった。だから、人はその人を「エロじいさい」と呼んでいた。その人の奥さんは花嫁学校の校長先生だった。そのご主人は、生徒を見るとふれたがるので、生徒達はその人が現われると、またさわられるというので大騒ぎしていた。その校長先生である奥さんは、まことに賢夫人で一分の隙もない人であった。さわることの好きだったそのご主人は早く亡くなった。その原因は、奥さんがあまりにも立派で、ご主人にさわらせなかったからである。男の元気は女からくるのである。妻を早く失った男が、いかに早く老け込むかを見られればわかるであろう。たとえ、夫婦とも健在であっても、夫にさわらせることを嫌がる妻の夫は、どことなく精彩がない。男らしい澁刺したところがない。どことなく寂しさが漂っている。

○女を「おかみさん」「お神さん」というのは、男にとって女は神様であるからである。神様の生命は、女を通して男に与えられることになっているから、女を「おかみさん」「お神さん」と言うのである。

○夫婦円満であるということは、神の生命が男となって還流され、また

女となって男に還流され、その男女の気が円満に交流されることをいう。神の生命が円滑に円満に交流されるから、夫婦も子供もみな健康で幸福であるということになるのである。夫婦円満であるということは、陰陽、即ち男女と分かれた神の生命が、元の一つの神の生命に帰ることである。元気とは、神の大元の気である。だから男は、女に十分にふれることによって元気を取り戻すのである。だから、性のことを「エロ」だといって、いやらしいことと思ってはならないのである。エロだと思っている人は、人間を動物だと思っているからである。人間は神の子であり、人生は神の子の生命を顕現することにあると思っている人には、性は神の意識に帰一する神聖な祭典となるのである。このことをキリストは、「夫は自分の肉体を自分のものと思ふな。夫の肉体を支配する権利を持つのは妻である。それと同じようにまた、妻は自分の肉体を自分のものと思はなければならない。妻の肉体を支配する者は夫である」（「コリント前書」三～四節）といって、夫が妻の身体にふれ、妻が夫の身体にふれることにわだかまりがあってはならない。お互いに抵抗なくふれ合わなければならないと教えていられるのである。第五節には「相共に拒むな」と書かれている。求められた時に「拒むな」というのである。

Home

なぜ、線香が使われるようになったか

お釈迦様の時代、当時の比丘、比丘尼達が精舎（勉強所、道場）で共同生活をするとき、現代のような石鹸もなかったの、

大変に臭かった。

あえて石鹸と言うならば、日本のツバキの葉のようなものを石で潰し、それで身体を洗った。

だが、それでも不十分だったので、*「せんたん」*の香を燃やし体臭を消したという。それが後の世になると線香をあげることになったのだ。

死臭を消すのに効果があるが、あの世の霊が喜ぶとか、霊の世界に関係があるものではなかったのである。

ある炭鉱町の落盤事故で数百人の死者が出た。

知り合いが、死体の安置されている部屋で寝ずの番をすることになった。夏のことで、それはそれは大変なニオイだったそうである。

消毒薬、ニオイ消し等を応用してみたが、一向にニオイは消えなかった。

そこで、あるったけの線香を燃やしたら、あれだけのニオイがピタリと止ったというのだから、その効用たるや相当なものでしょう。

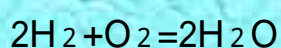
また、線香はブヨや蚊を追い払うのに都合が良いし、香りも悪くない。

< 水や塩について >

水や塩についても、水は汚れを洗い流すし、塩は調和の結晶だから、だんだんと仏教の中に入れられてきたようである。

また高橋先生はこう説いた。

「水」については、「酸素と水素は、どちらも極端に火に燃えやすい。この燃えやすい酸素と水素が結合すると、火を消す水となる。



そして、「塩」については、「強酸である塩酸（HCL）と強アルカリである苛性ソーダ（NaOH）が混ぜ合わされると

$HCL+NaOH \rightarrow NaCl+H_2O$ となって「水」と「塩」が出来る。

塩酸と苛性ソーダは、どちらも骨や金属を溶かすほどの劇薬なのに、この二つが結合すると、安定した水と塩になる。

人間は水と塩がなくては生きて行けない。物質をボロボロに破壊してしまうほどの塩酸と水酸化ナトリウムが、最も安定した水と塩になる

ということは、これは正に、調和された中道の姿を示している。

この物質の法則は何を教えているのかというと、極端から極端はいけない。中道でなければいけないということを教えており、

お祓いに、水と塩を使うのは、神の道は中道である。中道に立てば一切の不浄、争いは消えて調和するということを教えているのである。

手を合わせる合掌の由来

神仏に手を合わせる合掌の姿は、右と左の両極端の手を真中で合わせるという中道の姿。

合掌は、右にも左にも偏らない調和を意味し、それは自分自身が左右に偏らない生活を、自分で、自分に誓うものである。

題目をあげる場合も合掌をしながらあげるが、題目をいくらあげても心の安らぎは得られない。

心の安らぎは、自らが調和した中道の生活を行なう中から生まれてくる。

愚痴や怒りや、足ることを忘れた欲望の両極端の思念と行為からは生まれてこない。

にもかかわらず、人々は調和の心とは縁遠い偏った思いや行為をしながら、題目や合掌をしている。

これでは、いくら時間を過ごしても、自分自身の生活は調和されない。

仏壇

「実際問題として、仏壇の中に祖先の霊がいるようでは困る。浮かばれておれば、そこにはいない。

いないのなら、手を合わせ供養するというのもなにかそろそろしい。

また、祖先の霊が仏壇の周囲にいるとすれば、これは困った現象だし、子孫にとっても迷惑至極である。

供養のあり方は、仏壇に手を合わせ線香をともしることではなく、家庭の中が笑顔で健康で、明るく調和されることであり、祖先の霊はそれ

をいちばん望んでいるはず。

しかし、これまでの日本の習慣として家に仏壇が置かれ、法事やなにかという時に、親戚、知人が集まってきたも仏壇がないと、

お互いが気まずい思いをしたり、争いになるようではこれまた困ったもの。

すでに仏壇があって、これまで通りの習慣で朝、晩、水をあげたり、手を合わせたりしている家庭にあっては、これを急にやめ

たり、仏壇を焼いたりしては家の中が混乱しよう。

家中が供養のあり方はこうあるべきだとみんなが理解し、親戚の人達にもわかってもらえばいいのだが、家の者が反対するのに、自分だけ

の一存で事を決めるのはどうだろうか。要は、こうした習慣に染まることのないように、伝統とか、習慣にしたがいながら生きていくのが

正法者である。

正法と社会の法なり、習慣や伝統は必ずしも一致しないが、やはり時間をかけて修正してゆくようにしたいもの。要は周囲の状況をみながら

対処することである。

お墓、仏壇、数珠、葬式仏教の歴史的背景

飛鳥・奈良時代の仏教伝来から祖師仏教（法然、親鸞、道元、日蓮）が生まれ、これらは、貴族、武士と一部の町民の有力者だけのもの

ので、江戸時代になり、徳川幕府が政策の都合の為に「檀家制度」がつけられた。

この檀家制度は、鎖国政策をとる上で、キリシタン摘発のために踏み絵を断行、どこかの門徒にならなければならないという宗門改めを

制定する。

宗派、生国、年齢、名前、人数、男女数等を末寺から本山に集め、寺が今で言う戸籍係と門徒の統制の代償として寺領を与えたので、

寺の経営は安定。 徳川幕府の覚え書きにはこう記されている。

「常々、寺に参り、いつも付け届けをして、数珠などを持ち、父母の命日にもお参りし、また家には仏壇を備え、線香や花をあげなさい。

これに反すれば、ころびキリシタンとして処刑する」という「ころびきりしたん摘発の条件、覚え」が出された。

数珠は計算器だった

数珠はもともと、ものを数える計算器。

その証拠に、五つ玉のソロバンを連続させたような形になっている。

数珠によって数をかぞえ、お百度を踏んだ数の記録、念仏をあげた回数等を計算する小型計算機だった。

一列に並んでいるのを見て「数珠つなぎ」という表現をするが、お寺詣りや葬式の時に強制的に持たされることになったが、数珠は宗教的

に深い意義はなく、永い伝統と習慣の亡霊。

「お盆」、「お彼岸」とは

祖先崇拜の習慣が、生活の中にとけ込み、自然の行事になったもの。

お盆といえば、先祖の霊がわが家に帰ってくるので、それにご馳走を供養して、盆踊りや灯籠流しをして慰めるとともに、人間達も心の

安らぎを得ようとする、今や賑やかな行事。坊さんのかき入れどきで経文も供養されるが、本当のお盆の意味はこうである。

今を去る二千五百有余年前、ゴードマ・ブッタ（釈迦）が三十八歳の時の出来事だった。

ゴードマ・仏陀の最初の弟子で、カピラ・ヴァーストから護衛のために従ってきた五人のクシャトリア（武士）の一人アサジが、マガダ国の

ラジャグリハ郊外を遊行していた時のこと、バラモンのウパテッサ（後のシャーリー・プトラ、舎利佛、舎利子）に声をかけられた。

しかしアサジは、知的な宗教論争を他の宗派から仕掛けられても、それに応じてはならないと、ブッタから注意されていたので、それを避け

るようにした。

シャーリー・プトラは、アサジを見て、この男はただ者ではない、他のサマナーや、サロモン達（修業者）とは比較にならないほど穏やかで、

顔色も良く、態度も謙虚で、決しておごりたかぶらない姿に、何とか話してみたい、と思っていたので、はるかに自分よりも年少者であ

るアサジに従って歩き、対話できる機会を探した。

アサジが、遊行で貰った粥の入った鉢を左の手で抱えながら、食事の場所を探しているとシャーリー・プトラは、自分で禅定する時に使って

いた草で作った座布団を木陰に敷いて、「サロモンよ、どうぞこの上に座って、お食事を召し上がって下さい」とすすめた。

論争を挑まれると思っていたアサジは、あまりにも親切な行為に対して、「どうも、私のような弱輩者に、ご親切ありがとうございました」と

言った。アサジは、常日頃、ゴードマ・ブッタから説かれている法を実践していれば、他の修業者の心に、そのような姿で映るのかと思い、

何か胸にこみ上げてくるものがあった。

アサジは言った。「私の師は、コーサラ国のカピラ・ヴァーストの王子、ゴードマ・シットルダーとおっしゃる方で、すべて原因と結果、

縁生ということについて教えられております。心の在り方を八正道で定め、日々の心と行ないを正して修行しております。

シャーリー・プトラは、これこそ本物だ。神を祭って祈るのではなく、自らの心の悟りを教えているという事実、これこそ本物だ、これこそ

本物の仏陀であろうと、はやる心を押さえながら、「あなたの師に紹介して下さい。私の探し求めていたブッタです。私の師は、アサン

ジャーと呼ばれるバラモンで、この師についてウパニシャードを学び、厳しい修行を致しておりますサロモンです。私の親しい友人にも修業者

がいて、本物の仏陀に会うことができたなら必ず連絡し合って一緒に行動をしようと約束しています。ぜひ友人と一緒に紹介して下さい」

と言うのであった。アサジは戸惑ったが、ブッタに相談して、明日この場所で返事をする事を約束し、ベルヴェナーに帰った。

ベルヴェナーに帰ったアサジは、今日の出来事をブッタ説明した。ブッタは、その話を聞くとこういった。「その二人は、かつて、前世で

私の法を学び、良く道を修めた者だ、再び今世で道を究め、私とともに衆生の心に光明の灯をともしよ。遂に、たずねてくる機

会を迎えたが、アサジよ、過去世の友がくるのだ。明日、サロモン達への説法の時に案内するが良いであろう。」すでにブッタは、正

法に帰依する二人のことを知っていたのであった。アサジは、約束の日、ベルヴェナーの多くのサロモン達（修行者）の前で、シャー

リー・プトラをブッタに紹介した。仏陀は、コースタニヤやウルヴェラ・カシャパー達、千数百人のサロモン達を前に、「今、たずねてきた

二人のサロモンは、過去世において、正法を修めた人達だが、再び今世で道を究め、サンガーの指導者となるだろう。」と言って皆に紹介

した。コースタニヤをはじめ古い弟子達は値、今日入門した者達が、なぜ指導者になるのか、その意味が解らないので、ブッタがお世辞

を言っているのではないだろうか、大きな疑問を持つのであった。しかし、初めて会うブッタの言葉に驚いたのは、古い弟子達よりその

二人であった。二人は、心の中からこみ上げてくる感激をとどめることが出来ないものであった。懐かしさというか、不思議な気持ちのようで、

ただ嬉しくて、こみ上げてくる理由も解らなかつたようだ。しかしその後、サンガーの空気は、古いサロモンの嫉妬心のため、大分調和が

乱れていくのであった。ブッタは全員を集めて、「サロモン達よ、良く聞くがよかろう。法に新旧がないように、弟子に新旧の差はないのだ。

今世だけのことを考えれば、早く来た者、遅く来た者の差はあるだろう。しかし、早く 弟子になった者は、よく後輩指導できるように、

自らを正し、精進することが大切だろう。」ブッタは、過去世も、現世も、来世も見通す力を持っているのだ。最近来たシャーリー・プト

ラーもマハー・モンガラナー（コリータを後に改名）も今世においては、サロモン達より遅く来たであろうが、過去世においては、私とともに

道を説いた者達で、その時から思えば、もっと古い弟子達といえよう。

過去世において修行した二人は、やがてアラハンの境地に達し、転生輪廻の事実を悟るであろう。生命は、過去世の縁によって今ある

のだ。それを、今世だけの判断で、新旧の弟子という差をつけるべきではないのだ。互いに、よく道を極めて、

心の歪みを正さなくて

はならないのである。指導者とか支配者とかいうものは、自らが定めるのではなく、他人が、その技量と行動によって自然に造り上げ

られてゆくものなのだ。それが正しいのだ。古いとか新しいとか、武力や権力などによって、人の心を支配することはできないのだ。

智慧と勇気と努力によって作り出された偏りのない生活の中から、正しい道を積み重ねた時に、自ら人はその人間の価値を知り、

慈愛に富んだ心と行ないの指導者を慕うようになるものだ。この両人は転生輪廻の過程で、積み重ねてきた器が広く、豊かな

心が修行によって造られているのだ。やがてその事実を実証するだろう。」と力強く、説法したのであった。

その後一週間目にして、モンガラナーは心の窓を開き、天上界、地獄界を見通す力を持つことが出来、天眼の一人者となったので

あった。その結果、ゴードマ・ブッタが、過去世において仏陀であったことが実証されるとともに、彼は他の人の肉体的欠陥から心の状態

まで、はっきりと見通すようになったのである。モンガラナーがその天眼で、自らの肉体的先祖や母などが、どこに住んでいたかを見ると、

母は一人淋しく、薄暗い世界で仕事をしていた。モンガラナーは、せめてその母に水でも差し上げようとした。しかしその水は、途端に炎に

包まれてまうのであった。このことをブッタに説明すると、「お前の母は生前、自分のことしか考えないで、他人に対しては布施の心もなく、気

の毒な者達に何かを恵んでやったこともなかった。そして、常に自分を中心として、他人に慈愛を与えることなく、他人からの布施ばかり

を望んでいた。自分の意志にそぐわぬ者に対しては、バラモン階級を表面に出してジュドラー達にも厳しい行為をしたのだ。その自ら

の心と行為の結果、火炎地獄に堕ちているのだ。モンガラナー、そなたは母の代りになって、困っている人々にできるだけの布施をしな

さい。お前の母は、その行為を見て、自分の人生の誤りだったことを悟るだろう。肉親のお前の努力が、お前の慈悲が、母親を救うのだ。

そうブッタは諭すように言った。「ブッタのお言葉のとおり、母のため、私のために、悩める衆生に供養します。モンガラナーはそう言い、

その後、日を定めて母親のために、貧乏な人々や病める人々に慈愛の布施を行なっていくのであった。このように本来のお盆の目的は、

亡くなってしまった人々が、この世に在った時、忘れてしまった布施の行為を、生存する子孫が代わって行為することなのである。

(高橋信次)

生老病死

誕生とは

あの世で一定の時間を過ごした後、この世で肉体を持つこと。

老とは

肉体細胞は日々崩れ行くもの。

病とは

からだは無理をさせれば調子が狂い、休ませなければ壊れるもの。胃が痛いといえは薬をのみ、風邪を引けば薬でおさえ無理をする。

胃を休ませ、からだを休ませればもとに戻るものそれが自然の摂理

○死とは

魂は生き通しのもの、肉体を脱ぎ捨てて魂はあの世（実在界）に還るにすぎない。

○般若心経

般若心経は有難いお経であり、したがって写経も良し、読誦もまたご利益があるという。

しかし、その意味もわからず、行為のないものが、朝晩上げても光は届かない。

○「念力と祈り」

念力も祈りも、ともに想念の働きである。

念力は一口にいて我欲の想念であるとしているが、神が光あれといて光をつくり、海をつくり、草木をつくり、人間をつくった。

これは神の一念によるものである。人間は神の子である。この地上にユートピアを創造してゆく力を与えられ、文明文化

は人間の一念の産物だが、問題は、その一念に、人間は、我欲を上乗せして生活している、というのが実態。だから、念力は我欲

のそれだというふうに見られてきた。しかし、念力のエネルギーは神の子の創造力を意味し、したがって本来は、その念力を「正念」

として使わなければならないもの。

一方、祈りは「真心」の発露であり、「反省」であり、そうして、それにもとづく行為であり、神との対話を意味し、感謝の心の現われで

ある。イエスの言葉に「汝信仰あり、われ行為あり」というのがあがるが、これこそ「正法の祈り」であり、あやまちなき行為こそ

「祈り」の神髄であると言える。

○ 魔とは何か

それは迷い。肉体がすべてであるという考え方である。

人間は大事な心を忘れ、知らず知らずのうちに執着、自己保存という神の子に反すると、魔のとりこになってゆくのです。

○ 法は心の太陽である。

苦しいからといって、宇宙の果てまで逃げても、苦しみは追ってくる。なぜなら、苦しみはあなたの心の中にあるからである。

○ 赦す

人生がすべて魂の修業であることがわかると、すべてを赦すことができる。

○ 禅定

禅定つまり反省的瞑想は、正しい心のものさしを知らないでやっては何にもならない。

心のものさしを持って、善我であるか偽我であるかをはっきり見極めることである。

「反」というのは、「ふりかえって、かえり見る」ということであり、「省」とは、「少な目にかえり見る」と

いうことで、一ぺんにどかっとかえり見るということではなくて、少しずつ少しずつ、じっくりと省り見ることである。

反省は、大きく飛躍するためのもの。雲が晴れたら太陽が顔を出すように、反省して心の曇りを除けば神の子の実相が現われる。

「問題」

「ここに、実際に身体で以って人を殺した人がある。口で人を欺し、人を不幸にした人がある。また、ここに実にまじめな人がある。

この人は、心の中ではいろいろと思うが、しかし、そういうことはいけないと知っているのに、絶対にそういうことはしない。

人にも親切で極めて『まじめ人間』である。この三人のうち、一番罪が深いのは誰でしょうか。世尊よ、お教え下さい。」

「それは最後の『まじめ人間』である。」

「悪いことは絶対にしない。人に迷惑をかけることもしないまじめな人が、なぜ、罪が一番重いとされたのか。このことがわか

らなければ「正法」がわかったとは言えない。勿論、宗教家としても落第である。現在の日本の各宗教団の講師指導者、牧師、司祭、

僧侶、宗教学者に一人残らずこの問題を出して解答を出させてみると面白いと思う。」

園頭広周先生

○今日の自然科学は、一つの壁にぶつかっています。その壁とは物質のモトである原子、素粒子についての状態は説明出来ても、

その状態を生み出しているところのエネルギーそのものが分からないからです。

心ある科学者は、そのエネルギーについて、それは神仏の力であると言っています。その通りで、エネルギーこそ、神仏そのもの

なのです。原子を動かしているものは光子です。光子を光子たらしめているものは、霊子というものです。今日

の科学、機械では、

光子は発見できても、霊子を発見することはできません。霊子の発見は、なお百年以上を要しましょう。

しかしあえて申しましょう。霊子こそ、神仏であり、エネルギーそのものであります。

(高橋信次)

○神より生まれた人間は、永い輪廻転生の旅を経て、神の意識へ帰らなければならない。人生の目的は霊の向上のためであって、地位、名誉、財産を得るためではない。死んであの世の入口で次のように聞かれる。

一、あなたは死ぬ覚悟ができていますか。

一、あなたは死に対する心の用意がありますか。

自分が生きていた時のことを映画のように目の前に見せられる。そうしてまた聞かれる。

一、あなたは一生のうちに、私に見せられるような何かをやってきましたか。

一、あなたは生きていた時に、自分でこれはいいことをしたなどというように、自分で満足できる何かをやってきましたか。

○人の生命を奪うのに、善の殺し方、悪の殺し方というのがあるのだろうか。

○神の能力(自由、創造、慈悲、愛)

○神仏は絶対に罰など与えはしない。

○衆生が現世利益の功德を願っている心を僧達は利用して、バラモン教のバラモンの神々などまでが祀られ始めた。

- ・帝釈天
- ・弁財天
- ・毘沙門天
- ・吉祥天
- ・水天
- ・聖天
- ・不動明王
- ・大黒
- ・鬼子母神
- ・妙見
- ・秋葉
- ・金比羅
- ・稲荷など

寅さんシリーズの帝釈天はバラモン教の神の名である。

○「なぜゴータマブッタは日本を転生（再生）の地としたか、どうしてアメリカや他国を選ばなかったのか」
一口に言えば、正法が伝えられやすいからだった。

○「即身成仏はあり得ない」

即身成仏、という言葉は、万人に通用する言葉ではない。その想念と行為が、神仏の子として恥じない人生を送った人々に対してのみ通用する言葉であることを私達は知らなくてはならない。

キリスト教や仏教を学んだことのある人がこの世を去り、肉体や肉体的環境に執着を残さなかった場合、その死体は硬直することがない。自分の死を悟り、安らかに彼らの世界へ帰って行く。この時は、魂の兄弟達が協力して連れて行く。また、肉体的関連のある先祖が協力して連れて行く場合もある。

(高橋信次)

○「法力」

法力というものは、エネルギーの集中されたものですが、法とは調和を意味し、不調和の力ではありません。つまり、他をいかず、慈悲と愛の発意にのってのみ、行使されるものです。法力と靈力、魔力というものは、外見は非常によく似ていますが、中身は大分違って来るわけで、心の歪みを持ったままで靈力を行使すると、やがて、その反動がやってきて、その人をうちのめしてしまうでしょう。法力と魔力の違いは、欲望という執着があるかないかであり、それは自分の心を冷静に見つめればハッキリするでしょう。自分では欲望はないと思っても、欲望を持ってこれを行使用すると、肉体的に非常に疲れを覚えるものです。力に憧れるのは人間の願いのようですが、まず大部分は欲望に根ざしているのが注意が肝要です。力を望まず力が生み出されるもの、それが法力というものです。

(高橋信次)

○ 稲荷大明神、竜神、竜王

稲荷大明神とか竜神、竜王といった善神もいる。彼らは、動物霊達に、神の子としての道を教える役職にある天使達である。特に狐などは、靈的に強いものを持っている為、人々の心を不調和に導く事が多いので、盲目的な人間はこれを稲荷大明神として祭ってしまっている。

狐は、稲荷大明神ではないのだという事を、私達は知るべきだろう。世間では、竜神だの稲荷大明神だとか言われると、狐や蛇、竜などをいっているが、それは誤りである。およそ、蛇や竜などが、私達人間の守護霊になるということは、絶対にないという事を知るべきだろう。

商売繁盛を目的に、よく狐などを祭ってある家庭や店舗があるが、欲望を満たすためだけの祭りをするというのは、非常に危険なことだといえよう。なぜなら、狐や蛇や竜達は、人間の願いを聞く事が、まずその家庭を混乱に陥れてしまう。祈って商売繁盛しても、人間はすぐ彼らにお礼をすることも供物をすることも忘れてしまう。そんな具合だから、狐や蛇から必ず不満が出て、その家から病人が出たり、商売が左前になったりしてしまうのである。欲望の為に彼らを利用すべきではない。

(高橋信次)

○ 先祖の諒解なしに宗旨替えをしてはならない。

亡くなって逝った人が、「自分はこの宗旨によって救われるのである。死んだらその宗旨のお経で供養してもらいたい」という執着を持っていた時、その子孫が亡くなった人に諒解なしに宗旨を替えた場合、それでは自分は救われぬ、と子孫の中で頼んだら云うことを聞いてくれそうな人に祟る(出て示す)。直系の子供に頼んでも

だめな時は、傍系に出る場合がある。あの世の霊は肉体を持たず、言葉で伝えることが出来ないので、子孫の肉体を借りて示すのである。亡くなった霊の執着は子孫の頭の病気、怪我に現われ、時として足の病気怪我になる場合もある。

(園頭広周)

○幸せを求めたいならば、まず悪の想念から離れることだ。

悪を想えば悪が、善を想えば善がもどってくる。

○人間がこの地上に生をうける時は、両親を指名し、自から選んで生まれてきます。親子を選ぶ範囲というものは、おのずと限定されてきます。

一、魂、意識が非常にあい似通っている場合

一、過去世で親子の約束を強く望む。たとえば、ある人に非常に世話になり、その恩返しをしたいという場合

一、過去世において親子兄弟、友人同士であった場合

一、あの世で生活を共にし、親子の約束をする場合

○恐山の口寄せにしても、街の拝み屋にしても、数え切れないほどだろう。ある者は、神のお告げといい、観音様が夢枕に立って

人を救えといったとか、後光が見えたとか、耳元で不幸の起こることを聞いたとか、呪咀という、他人を不幸にしようと祈る宗教から、

お浄め霊とかいって、身体を浄めてやる宗教もあろう

なかには、神と称する者が、拝んでいる人間に出て、威厳のある言葉で、人々を威圧して神の言葉を述べる霊媒もいる。

亡くなった人々を呼び出して語る霊媒も多いだろう。それらは、いずれも偶像や糸偏の紙を祭って、その前を神前とか仏前とかいって、

祈りの場所としているようだ。このような人々の多くは、山中で肉体的行をして、修行したというものが多い。

ほとんどが、経文や祝詞を一心に上げている間に、神様が出てくるらしい。彼らは、神様だと思っているのだ。

信じているのである。質問に対しては、当たることも当たらぬこともあるだろう。しかし、質問者のほとんどは、先祖の霊が浮かばれない

から不幸があるとか、屋敷の中にこのような神を祭ってあるが、粗末にしているかとか、なかには蛇を殺した祟りだとか、猫を殺した祟りだ

とかいわれて、祈らせられたり供養させられたりしているのである。また生霊が憑いているから、などという時もあるらしい。

当然、蛇だの狐だのまでが、祈る対象物となっている。盲信や狂信者には、真の姿が見えないし、聞こえないし、話せないから、

ただ一生懸命に信じて、お札や偶像、曼陀羅を祭って祈っている。日本の仏教の中にも、天上界から悪魔が降りてきて、人々を苦しめると

いうのがある。この苦しみから逃れる方法は、一心に呪文を唱えて、不動明王や観音様や竜王のような諸天善神に、お願いしなくてはなら

ないのだと教えているところもあろう。先祖を代理で供養してくれる場所もある。見えない世界だけに、どれが本物が解らないで、

何でも救って貰える、神仏に頼りさえすれば良いと思っている人々が、非常に多いのである。最近では、お光りを与えれば病気が治り、

身体が浄まると指導しているところもあるという。

また、人間に憑いている霊を本人に出して、皆祭らせてしまう、賑やかな宗教もあると聞いている。人間というものは、欲望が

強い。勝手に何でも神から救って貰おうとしている者達が非常に多い。いずれも他力本願のご利益主義である。他力によって、

心を腑抜けにしてしまえば、指導者の生活も楽になるから、やめられないのかもしれない。

そして彼らは、神の名のもとに、盲者達や狂者達を支配して行く。富士山のあたりに出てくる、菩薩達の姿は正しいものでは

ない。霊媒でも、自我我欲の強い、感情の起伏の強い者達は、魔王や動物霊が憑依しているのである。常に心の中がいらいらしている。

このような霊媒者は肉体的にガタガタである。しかし彼らは、必ず信者の業を引き受けて、信者の苦しみを柔ら下ているというだろう。

もしこれが真実であるならば、天上界の諸菩薩、諸如来、光の天使達は、あまりにも地球上の人類が戦争をしたり、不調和な心を持った

者が多いので、皆の病気を引き受けて、あの世に病院を造らなくてはならないだろう。

他人の業を引き受ける酔うなことはないのである。作用と反作用、原因と結果、法則を知らない者は、何をするか解らない

者達なのである。自らの、心の暗い曇りが、地獄霊を呼んでいるのだ。このような偽善者は、言葉巧みに近寄り、へつらうだろう。

自分に不都合なことがあると、口角泡を飛ばしてののしるだろう。これは、そこに本性をさらけ出している哀れな姿であるといえよう。

いずれにせよ信仰は自由である。正しいものを選ぶか、間違ったものを選ぶかは、あくまでもその人の心にある。

高橋信次

○「他力本願」

まず他力の発生は、人間が十パーセントの意識で生活しているため、一寸先がわからないことと、人のカルマというものが、ちょっとや、そっとでは修正しにくいところに原因があります。祈り（願い）や念仏が、こうした人間の弱さから生まれ、今日の信仰形態が、仏教、キリスト教を問わず、他力に変形していったのも、無理はないと思われます。しかし無理はないといっても、他力では本願（悟り）は絶対に得られません。なぜならば、人間の心の歪みは他力では修正できないし、またそのようには出来ていないからです。人間は神の子なのです。この事実をまず認識して、自覚を持って下さい。さて、この大宇宙は神が創造したものです。神が、その意思と、自らの力で。神は天地創造と同時に、創造した現象物質界に、永遠の調和をめざすことを意思しました。神の意思の継承者は人間です。避けることは出来ません。同

時に、人間に生まれたことに感謝を持つべきです。神の子の人間は、神が果たされた天地創造のその働きを、今度は人間が果たしていくことになったのです。他力の誤りは、人間の神性、仏性に目をふさぐことにあります。日本の他力は、法然、親鸞によって開かれたことになっていますが、仏教を大衆化し、衆生の中に根を下すには、こうした方法をとるより他に手段がなかったからだと思います。法然は、他力によって神理を悟れたかという点、そうはいかなかったようです。

(高橋信次)

○ 言い逃れをする人は幸せになれない。一切は自分の責任である。

○ 不幸の原因は、総て、あなた自身にあり。 運命は貴方が作り出したもの。

○ 愚痴、怒り、足ることを知らない欲望を心の三毒と言います。 この心を捨て去ること。

○ 『正しい生き方』とは、『一切は自分の責任である』と自覚する生き方。

○ 神は先ず天体をつくられた。大宇宙、銀河系宇宙、太陽系、水、空気、鉱物は造られたままで、それ自体として増殖する生命力

を持たない。そこで自ら成長するものとして植物をつくられた。植物はそこに生えたらそのまま、移動する生命力を持たない。

そこで動くものとして動物をつくられた。

動物は動く自由は持たされたが、与えられた本能のままに生きているだけで、創造の自由は持たない。そこで最後に、完全なる自由、

創造力を持った人間がつくれ、自由の力は人間に委せられるという事になった。それで人間を万物の霊長とい

う。

○質問

「悟った者は、生まれないと仏教では言っているようだが、その根拠はどこにあるのか」

答

「悟られた仏陀は、輪廻から解脱し、生死を超越していると言われますが、あの世も、この世も自由に行き、見る事が出来るため、肉体の煩悩に惑わされず、アポロキティ・シャバラ（観自在）になられているため、生まれることも滅することも無いことを悟られております。つまり、輪廻転生における生と死を解脱されているから、生まれるとか死ぬということはないのです。万生万物・生命のある者は、すべて輪廻を繰り返しても、仏陀はすでに、過去・現在・未来の姿を悟っておりますから、自分を見失うことがなく、仏陀には生命の転生輪廻にこだわりを持っていないから、不生不滅の悟りに達しているということである。」

（高橋信次）

○光を入れる時は、「あなたは病気が良くなったら、正法を実践しますか」ということを確認してからやらないといけない。医者が注射して、一時病みを止めるような気持ちでやってもらったら、それは一時

的なことでまた振り返りますから、そうすると、「光を入れてもらったがだめだった」と、一時良くなったことも忘れていわれかねませんので、「良くなったら正法で教える生活をしますか」ということを誓わせないといけないのです。

(園頭広周)

○なんのために人間はこの地球上に生まれてくるかというと、みな霊の向上のためです。

○自然の法則、原因結果のままに心を大事にしてきた民族と、世界征服大野心を持って戦争を計画し、自分達の目的を達するためには、平気で暗殺も人殺しもやってのける民族と、どちらに神は采配をあげられるでしょうか。

○世の中には妥協してすまされることと、すまされないことがある。

神理を説く宗教の世界では妥協は許されない。

○正しい信仰には苦しみが生ずるはずがありません。その信仰によって苦しみが起こってきたとしたら、その信仰はどこかに間違いがあるということになります。

○神の慈悲と愛は、「太陽が善人の上にも悪人の上にも等しく照るが如く」「雨が善人の上にも悪人の上にも等しく降るが如く」と聖書には教えてあるのです。全智全能であり、智慧であり、慈悲、愛そのものである神は、初めから我々に健康と幸福とを与えられているのです。

○「先祖に対する供養は」

まず先祖からは肉体舟を戴き、育てて戴いたと感謝する心を持って報恩の行為で示すことが大事だ。

それには身体を丈夫にして心を美しく家庭が円満でいつも笑い声の立つ家で朝起きれば希望に燃えて

昼は自

分の仕事に勤勉で夕は一家団らんの夕食をとり夜は自由を与えられ。こうした人間の一日に、不満があるはずがない。

このような生活が、先祖に対する最大の供養である。

たとえ先祖が地獄に堕ちていても、子孫の平和な生活、光明に満ちた生活をしていれば、地獄霊もその姿を見て、自ら自

分の非を悟り、己自身の不調和を改め、その霊を昇天させる原動力となる。

子の幸せを思わぬ親はないはずだし、しかも、その子が親より立派であり、家庭が円満に調和されていれば、親は子に励まされ、

その子に恥じない自分になるうとするのは人情だろう。

あの世もこの世も、人の心に少しも変わりはなく、類は類をもって集まるの喩で、その霊は自分と同じ思想、考えを持った人に

助けを求め、いわゆる憑依作用となって人の体、実際には意識に憑いてしまう。

すると憑かれたその人は、病気をしたり、自殺したり、精神病になったりする。地上が調和されると、あの世の地獄も

調和され、あの世とこの世は、いわば相関関係にあって、まず個々の家庭が調和され、調和こそ最大の供養とい

うことを知って欲しい。

先祖の霊に物を供えたり、法事で物を供えることやお経をあげることが先祖供養ではないのである。

○信心

信心とは、己の心を信ずることなり。

○お題目

「朱にまじわれれば朱くなる」という諺があるように、迷える霊に対しては、生きている人々の霊域を正すことが自分自身をも救う。

心を失ったお題目を何万回上げようとも、忍耐力と声帯の練習のみで、自分自身の心を救うことは不可能である。

お題目の神理を生活の中に生かすことこそ、自分が悟る近道であることを知ることだ。

○感謝の心

雨が降り風が吹くと、大気は浄化され植物が育つ。明日の生命と生活が約束されていることを知れば、大自然のこの

計らいに対して、感謝の心は湧いても、文句などは出ない。

人はまず天に感謝し、地上の環境にも感謝すべきだ。

また、食物も生きている。感謝の心を持ってこれを摂れば、その食物は滋養となり、血や肉となって健康を維持してくれる。

反対に、ぜいたくをし、不満の心で食する場合は、食物もその人を嫌い、栄養にはならない。

物を大事にし、いつくしむ人には、万物は喜んでその人に奉仕してくれるのだ。

○神社仏閣

神社仏閣は、原点にかえり、生きている人間の心の道場とすべきだ。

○魂の故里

生まれた故里が恋しいと同じように、魂は魂の生まれた故里を恋い慕う。

切ないまでに故里を恋い慕う心が神の信仰心である。神は私達の故里である。

○「地上になぜ争いが絶えないか」

平和な実在界と、そこに光の大指導霊や、光の天使達がいるのに、なぜ戦争や争いや、病気があるのだろうかという疑問を持つのは

当然である。

それは実在界（あの世）とこの現象界（この世）とは次元が違っているが、この地上界の人々の心の調和によって霊囲気が清明に

なれば、あの世から通信は可能だが、人々の心と生活の態度が、怒りっぽい、金銭欲が強い、情欲に溺れ、他をそしる、地位や

名誉ばかりを追う、形式主義に陥ると、地上の人が不調和になっているので、なかなか天上界は指導出来ないのである。

○天を仰いで神に感謝する人はあっても、大地にひれ伏して感謝する人は少ない。

お題目を上げて死者が成仏するなど、とんでもない話だ。

他の宗教を邪宗と決めつけ、信者には罰が当たると脅迫し、自らの心にまで足枷をはめた、それは哀れな人々である。

信者もまた罰など当たるはずがないのに、恐ろしがっているのだから呆れたもの。

○弁財天や大黒天

弁財天とか大黒天は、金儲けの手助けのように思っている人々が多いが間違いである。

弁財天とは、

心の中に埋没している、転生輪廻の過程に造り出された私達の智慧の宝庫を開くための協力者である。

大黒天は、

肉体を持った光の天使達が、正法を流布する時の協力者である。経済的な援助や環境を用意する諸天なのである。

現代人は、これに祈れば財産に恵まれると思っている人が多いが、全く金儲けには縁の遠い諸天善神なのである。

○如来や菩薩の数

あの世とこの世に、

如来（上段階光の大指導霊）は四百二十五人。

二万人近くの菩薩（上段階光の指導霊）。

一億数千万人の光の天使が実在界におられる。（一九七二年（昭和四十七年）現在 高橋信次）

○宗教と道德の違い

人間は善いことをしなければならぬ、と言う。それは道德の世界である。

人生は善いことをすることだけが目的ではない。

ここからが宗教の世界に入るのだが、人生の目的は、善いことをすることを通して神の存在を知ると同時に、その神と自分との

関係を自覚することにある。

○折伏

何人折伏すればあなたの業はなくなる、とか言われれば、欲望のある者は一生懸命になる。そうした信者の姿こそ、哀れである。

組織の細胞になっているため、自分自身、何も解らなくなっている。

信仰することによって、むしろ苦しみと疑問の渦の中で、この人生を送っているのである。そうした疑問も、罰が恐ろしくて疑問を持たな

いという指導者も哀れである。

○行き詰まったときに

考えが行き詰まると、考えは堂々廻りをするばかりだから、こういう時には「おまかせの祈り」をすることである。

自殺する人達はこういう祈りの仕方を知らなかった人達で、「人事を尽くして天命を待つ」というのは、こういう時の言葉である。

祈れば必ずその人にとってふさわしい道が開けてくる。

「人事を尽くして天命を待つ」という「おまかせ」の心境になった時に、即ち自力の極に他力があるということになって、天上界から

協力があることになる。

自殺した、一家心中したという記事が出るたびに、そういう人達に「正法」を知らせねばと、自分の力不足を悔やむ。

「捨てる神もあれば、拾う神もある」という諺は、人間が一切を捨て切ったら、必ずよくなる、運命が開けてゆく事を教えたものである。

また、「身を捨ててこそ、浮かぶ瀬もあれ」という諺もある。諺とは、言に彦（日子）と書く。日子とは神の子であり、神の子への言葉、

即ち神理を現わしている。

○正しくない心とは

正しくない心とは、人を憎む思い、怒り、そねみ、愚痴、中傷、足ることを知らぬ欲望など、こういう想念を言う。なぜ正しくないかと言

うと、自己保存が主体になっているからだ。人類の歴史の大半は争いの歴史、闘争と破壊の歴史、自己保存の歴史である。

○「天に在しますわれらの父よ」は現在の教会キリスト教にあるパウロ教であり、

、「大地なる母に感謝する」は原始キリスト教である。

○心のあり方

社会的には法律にふれた人を悪人というが、宗教は心のあり方を問題にする。

自分は法律にふれる悪いことは何もしていなくとも、心の中で怒り、妬み、悲しみ、不平不満の心を持てば、それは宗教的には悪という

のである。だから、幸福になろうと思ったら、見せかけの表面的な明るさではなく、心の底から明るい心にならなければならない。

○転生輪廻（循環の法）

転生輪廻（循環の法）というものは、万生、万物ことごとく整然と行われ、しかも滅すること。増えることもなく永遠に循環している。

（般若心経の一節、不増不滅）

○魂

肉体は人生航路を渡る舟にすぎない。肉体は朽ち果てても魂（意識・心）は永遠

○崇拜

「お釈迦様の教えの中に、念仏を唱えて阿弥陀様を拝めと、どの経典に書いてあるのか教えて欲しい。

仏教の根本は、苦しみから解脱する道を教えているのであって、正しい実践生活を説いているものである。

従って、偶像や曼陀羅を拝めとは、どの仏典にもないはずである。

（高橋信次）

○地獄救済

地獄救済は地上に調和された天国を作ることから始まる。

地獄界は地上の人間が自己本位に生きたあげく、創り出した世界である。地獄界には、あの世の太陽の光はまったく当たらない。

光が当たらなければ、彼らは生きることが出来ない。

そこで彼らは、地上の人間から生きるエネルギーを吸収して生きている。その意味では地獄霊は吸血鬼である。

彼らはこうして、生きた地上の人間から悪のエネルギーを吸収して、暗黒世界で生きている。

地上が愛の生活に満たされれば、地獄霊の生活の足場をはずすことになり、人間社会も明るくなる。

またこうすることは、地獄に堕ちた肉親縁者の霊達の絶大な供養ともなり、また彼らに反省の機会を与え、人間界と地獄界の悪循環

の絆を断ち切る大きな基礎となる。

○ 小国・日本の隆盛

文化が発展するのは、高級霊がそこにたくさん生まれてきているからであり、生まれなくなれば、そこは文化が衰退し、また、高級霊が生

まれた地方に新しく文化が興ってくる。

○ 汝信仰あり、我、行為あり イエス

○ 知識のある者は、まずその知識を捨てよ

我執にとらわれる者は、一人で生きていると思え

権利を主張する者は、義務をまず果たせ

執着のおろかさが理解されてこよう

○ 先祖供養

従来の宗教指導者の多くは、眼に見える肉体的現象に、信仰の対象を求めてきた。その結果、肉体先祖がすべてのように考え、

魂までも肉体先祖から戴いたものであるかのような錯覚を犯してきた。そのため信仰は、先祖に対して立派な戒名を上げ、立派な墓地に

埋葬し、経文を供養すれば、成仏がなされるというように変化してしまい、そうした行為によって子孫も救われると思うようになってし

まった。つまり、葬式仏教・儀式による先祖供養に陥ったということである。一宗一派の教祖と称するような人々もそんなふうに加え、

その教義をまた信仰している信者の何と多いことか。

イエスも釈迦も、先祖を拝めとは教えていないのである。もちろん私達は、先祖や両親

の縁によって、肉体を戴いたのであるから、感謝する心を忘れてはならない。しかし、その表現は、両親に対しては報恩の行為によって報い

ることが出来る。兄弟姉妹が仲良く生活することも、その孝行の一つである。

亡くなった肉体先祖に対しては、感謝することが当然であるが、良い戒名をつけよとか、良い墓を造れとか、良い仏壇を造って

祀れとかいう先祖がいたならば、この先祖は一〇〇%地獄にいるか、霊媒に憑いている不調和な霊が言っているのであるから、私達は気

をつけなくてはならない。

主として動物霊の仕業である。この現象界の墓や仏壇に未練や執念を持っているような霊は、地獄に生活して

いるため、家族の不調和な暗い想念に憑依して、家の中をさらに不調和にする場合もある。仏壇の前だけが供養の場所ではない。先祖

に対しては、拝む対象としてではなく、感謝に対する報恩供養が望ましい。

体が健康でいることも、立派な社会人として調和された生活をしていることも、供養の方法なのである。

現代宗教の多くは先祖信仰になってしまい、信心の根本も分からなくなってしまった。

この原因も、神理が永い歴史的な年月の間に、智と意の解釈で他力本願の傾向となり、それにまつわる職業意識などが、仏法の神理を

人々の心深く埋没させてしまったことにある。

(高橋信次)

Home

○精神エネルギーの源泉

精神的に疲れたという人は、精神エネルギーの源泉は神仏にあるのであり、感謝することによって絶えず補給を受けられるという

ことを知らない人達である。

試しに、心を鎮め、眼をつむって

「神様ありがとうございます。」

仏様ありがとうございます。

ご先祖様ありがとうございます。

ご両親様ありがとうございます。

...と感謝してみたい。

疲れていた心は一ぺんで安らかになり、「これではならぬ」と、新しい勇気が湧いてくるもの。感謝の心を持つのが人間として自然

のことだから、感謝の心を持つと心が安らかになって、疲れるということはありません。

だが、感謝しない私の心を持つと、心がくたびれて来る。

肉体的な疲れは食べ物を食べ休息すれば直るが、精神的な疲れは食べ物を食べたのでは直らない。

精神的エネルギーの源は神仏にあるのだから、神仏や神仏がつくられた大自然や先祖や親に感謝する心を持たないと直らないのだ。

○「諸行無常」と「諸法無我」と「涅槃寂靜」

「諸行無常」

一切の諸々のものは、すべて移り変わるもので、片時として一定の姿をとどめているものはない、ということである。

これまでの宗教家、宗教学者は、形あるものは常に変化するという、変化する面のみにとらわれて、変化する姿の奥に変化しない

ものがあるということに気がつかなかった。

「諸法無我」とは、

第一原因者即ち神即大宇宙大神霊がつくられた法には、そのまま素直に順うべきで、その法は人間の私の力を以

ってしては、なんら変化を加えることは出来ないものである、ということ。

「諸行無常」「諸法無我」の本当の意味がわかれば、「涅槃寂靜」という悟りに入ることが出来る。

「涅槃」の本当の意味は、怒り、妬み、怨み、悲しみの心がなくなった状態ということで、肉体を持って生きている間にそうなった

のを「有余涅槃」と言い、死んでそうなるのを「無余涅槃」と言う。涅槃とは煩悩がなくなった状態、煩悩がなくなって心が

安らかになった状態を言う。

○恨む心を持てば、その想念が現象化されて自らを苦しめる。不調和な環境には、同じ心を持った霊が集まってくるため、たとえ生きている人間であろうとも、地獄の霊が支配出来る状態が整っていると事故に見舞われる場合が少なくない。彼らは自分のために人間に供養することを促し、幾度かの事故を続けさせる場合もある。

小さな子供の場合

は、両親の心の調和度が反映されているから、子供に事故が起きる現象というのは、両親の心の在り方、生活の在り方について反省を求めていることを予告している。子供の自己保存本能は、自我我欲というにはあまりにも純粹であるからである。

良く「魔がさした」というように、私達の生活の内部には、心の針が、電流計や温度計、自動車のスピードメーターのように、善と悪、明と暗の間をふらふらと動いている。悪の暗い想念にその心の針が指す時、私達に魔がさすのである。

その故に、常に心の針を光の善の世

界に指示するような生活が、人生の修行目的の一つとならねばならないのである。

「金持ちは三代続かない」という言葉も良く聞く。肉体先祖は人生航路の舟の提供者であるとは、何度も述べた通りであるが、信仰的な立場からそれを祀ることが宗教的行事の一つになっている。

しかし、

そうした慣習的宗教的な考え方が、子孫に対する過保護となって財産や地位を残そうとする。先祖の供養、自己の欲望のために自己保存の人生を送ってしまう人が多いのである。その結果、死者になっても、神理を悟っていないため、財産や子孫に未練を持って成仏することができない。家族の心に不調和な原因を残し、財産争いだの病気だのと

いう遺産を残すということになるのである。

財産というものは、自己のためのものでもなく、社会人類のものでもないということを私達は知らなくてはならないのだが、そうした執念が、旧家と称する家には多い。先祖の悪霊の影響が多いため、慈悲と愛を失った冷たい環境を作りやすい条件になるということなのだろう。従って、先祖の供養が、形式宗教化してしまうのである。

ではどう対処するか。生きている人間の心を正法に帰依すること、これが先決である。彼らも、そうすることによって自然に自分の非を悟って行く。むずかしい哲学化した経文をあげて解るような霊であるならば、すでに現象界のことなどは心配せず、天上界で悠々と生活していることだろう。現象界の心配をするような霊は、いつまでも意識が浄化されない低級霊なのである。両親を始めとする肉体先祖の供養は、子孫の感謝報恩によってなされるもの、と知るべきである。

(高橋信次)

○愛とは全面帰投である。相手を生かすためには、自分のすべてを相手に投げ入れて、相手と一つになり、相手の喜びを自分の喜びとして自分がなくなることである。

愛とは自他一体の感情ともいわれる。自分

と他との区別がなくなり、自分が相手であり、相手が自分であり、自分と他とが一つの思いになることである。

私が愛を実感したのは、宇宙即我の境地に入った時であった。自分の

意識が肉体を抜け出して地球が下に見えてきた瞬間、人間も動物も植物も鉱物も、すべては神の一つの生命であることがパッとわかった。

すべては分かち難い一体なる生命であった。この一つの生命であるという自覚を愛というのだということがわかった。

人類愛、動物愛、植物愛、自然愛、それらはすべてこの一つであるという生命の自覚から発せられる言葉でなくてはならない。だが、ここで整理して置かなければならないことは、神は、動物、植物、鉱物を、人間に奉仕するものとして創造されているということである。それらのものは、人間に奉仕するためにあるのであるから、それらのものが人間の存在を脅かす時は、人間の生存の秩序のために淘汰されてもよい存在であるということである。

最近、ペットの飼育が問題になっている。そのペットが近隣の人々に害を及ぼすようであったら、当然整理されなければならない。長崎市では、泥棒猫が家の中まで荒らし廻って困るという市民の苦情が多かったために、猫の捕獲器を貸し出した。これに対して動物愛護団体が動物愛の名の下に反対運動を始めた。これは動物愛護団体の人々が間違っている。そこに見られるのは動物愛の名によるペット飼育者のエゴでしかない。現に各家庭は泥棒猫の被害を受けているのである。その事実を知りながら、被害を受けた人の立場も考えないで自分の主張だけをするということは、なるほどそれは動物愛かも知れないが、それよりももっと次元の高い「人間愛」を忘れている。愛の中でもっとも優先されなければならないのは「人間愛」「人類愛」である。

法律において正当防衛が罪にならないのは、これも愛のゆえである。

我々は一人一人の存在は、尊い神の生命の存在であることをまず考えなければいけない。それが人間の尊厳である。その尊厳な人間の存在は神から許されているのであるから、なにびともその尊厳を犯してはならないのである。それを一つに結んでいるのが人類愛、人間愛であ

る。その尊厳さを破損しようとする人間がいて、そのままでは自分の尊厳さが危険になるという場合、それを防ぐのは当然のことである。

犯罪とは要するに人の尊厳さを傷つけ脅かし危殆に瀕しめる行為である。人の尊厳の根拠は神の子であるということである。神の子であるということは、同時に神であるということでもある。神の尊厳さを持って行動しなければならない人間が、自らその尊厳さをかなぐり捨て、さらにその上に他の人の尊厳さをも傷つけ殺そうとする時に、そうする者が罰せられるのは当然である。

○要するに人生の目的は霊の向上にあり、大自然は中道調和の道を教えているのであるから、人間は神の子であることを知り、足ることを知った生活をして、欲望・我執に振り回されないようにすることである。足ることを知るということは、我慢であったり、あきらめであったりではないのである。心の安らかさを大事にした生き方である。

「与えられた環境、仕事に対しては、全力を挙げてこれに当たる。それは欲望に燃えてそうするのではなく、調和に役立てるためにそうするのである」と書かれてあるが、例えば、給料十万の人は、「おれは十万だが、欲望を持ってはいけないというからこれで我慢しよう、十万もらっているんだから十万だけ働けばいい」と思うのでなくて、

「十万円ありがとうございます。これで感謝して生活しよう。おれの仕事は十万円以上になっても、仕事は全力を挙げてやる」と、常にプラスになる仕事をするのである。そういう心で仕事すれば、必ず給料も上げてもらえるし、運命も必ず開けてゆくのである。

国鉄のヤミ手当を受けていた人達は、金銭的には儲けたように見えているが、心の面では大きなマイナスをつくってしまっている。だから、その人達の家庭には、金銭で補うことのできない問題、また、ヤミでもらったより以上の出費を強いられる問題が必ず起こるのである。こういう類の問題は、「悪運、盛んなれば、天に勝つ」というよ

うに、その人が威勢がいい時は起こらない。悪事がそのまま罷り通るのである。だが、一旦なにかのことで心が弱気になると、一ぺんに吹き出てくるのである。ヤミ手当てをもらっている時には起こらないで、随分時が経ってから起こってくるから、ヤミ手当てとは関係のない問題が起こってきたように思ってしまう場合が多いので、あの時は働かんでもらった、儲けたという心だけが残って、なかなか反省しにくいわけである。

私は宗教家として起つことを決めた最初の頃、さつま芋をもらえばさつま芋に、米をもらえば米に、野菜をもらえば野菜に感謝して、それを風呂敷に包んで下げて帰って、下さった人々に感謝して食事した。

その時はその時で足ることを知って生活をしていたから、私達の家庭は心が豊かであった。周囲の親戚はハラハラして見ていたわけであったが、私の生活は、いつも足ることを知った生活であった。しかし、どうしてもこれでは生活出来ないという状態が、子供達が大きくなるにつれて起こってきた。そういう時には真剣に祈った。明日がどうなるかわからないという時も、心を鎮めながら祈った。すると必ず解決して行くのであった。周りの人達から見たら、これ以上の貧乏はなかったと思う。私はそれを我慢して耐えたのでも、仕方がないとあきらめていたのでもなかった。今はこうしていても、自分にはもっと大きな舞台でやらなければならないことがある。自分の人生がこんなことで終わる筈がない。自分に使命があれば、必ず道は開ける筈だという希望の祈りが常にあった。調和に役立ちたいという心からの願いで努力する時は、必ず天上界からの協力が得られるのである。

(園頭広周)

○ 魔とは何か、それは迷いです。

肉体がすべてであるという考え方です。

○ 大乘仏教は他力信仰を説き、小乗仏教は自力信仰を説いた。

○ 「要は正法を理解して、それを実践する以外にない。指導者となる道もそれしかない」

○ 反省のチャンスは神が私達に与えた慈悲なのだ。

○ たとえば、人類があの世界で学んだ理性にもとづいた行動をとるならば、風水害、地震、火山の爆発、疫病等による天災はもちろんのこと、人為的災害も消滅し、地上は植物が繁茂し、その植物、鉱物から、まったく新しい発明発見がなされるように仕向けられてくるでしょう。

○ 「愛は男女の愛からはじまって、親子の愛、隣人の愛、社会の愛、人類の愛に発展して行くものだ」

○ 「苦悩は殆んど自分の誤った想念と行為から起こるものです」

○ 「動機は正しくとも、方法が誤っていたら、結果は悪となる」

○高橋信次先生は偉大な使命を持たれた方でした。その人の心のテープに記録されている過去、現在とそれによって起こりうる未来の出来事のすべてを知り、また天上界から地獄界からすべてのところを自由に見て帰ることの出来る霊能力を持っておられた。

○高橋信次先生は観自在となり、身体からは絶えず光を放っている。すると、先生と過去世に縁が深かったものは、この光によって心の窓が開かれ、現世の記憶を飛び越えて過去世の記憶が甦るのであり、過去のことが昨日のこのように思い出されてくる。先生は現象として、光を当て光を入れられると、習ったこともない過去世の言葉で語り出す。

○幸福者

「多くのモノを持つ者と持たざる者、そのどちらが幸せであろう。持つ者か、それとも持たざる者であろうか。もしも、多くを持つ者がそれを失うまいと、持たざる者がそれを欲するとすれば、そのいずれも不幸であるといわざるを得ない。一日の食糧は数斤のパンで十分であるし、居住の空間は数平方メートルで足りるからである。物の多少に幸、不幸であると考え人は本当に不幸である。なぜなら、自分自身を含めてあらゆる物質は、やがては大地や大気に還元されてしまうからである。幸せな人とは失う物のない人をいう。」

[Home](#)

Home

まぼろしの新復活

一九七六年（昭和五十一年）六月四日、五日は岩手県盛岡市での東北研修会では、初日の四日は「新復活」、五日の講演は「太陽系の天使達」だっ

た。

六月四日 「新復活」

非常に美しい自然の、緑に包まれた環境の中で、東北の研修会が行われることを心からお祝い申し上げます。

今日の演題は「新復活」。

地球の創世記

丁度、現在、東京地方には、創世記時代の映画が来ております。

しかし、人類は緑に包まれた、しかも神の光に満たされた地球という環境に、今から三億六千五百有余年前にはじめて、ベーター星という星より、

神より与えられた新しい緑につつまれたこの地球上に、人類は最初に印したのであります。その当時ベーター星は調和され、私達は新しい、

新天地を求めて、最も調和されたこの地球という環境を選んだのであります。

その当時最初に反重力光子宇宙船という、いまで云うU F Oに乗りまして、最初地球上の人類は、神の光によって満たされた天使であるエル・ラ

ンティーと云う方が中心になって。エル・ランティーは直接神の光を受けている真のメシアであります。

そしてエル・ランティの光の直系として、光は七色に分かれます。

七色のプリズムということ想像いたしまして、まったく同じように神の光はここから七色の光に分かれます。

この七色の光の方向を決めているのがミカエル（ミカ）と言います。

（図示しながらの説明）

神の光の直系ミカといわれる天使です。

そしてこのスリットを通し（神は光なり）その光の六人の光の線がこのスリットを通して霊子線がつながっております。この中にそれぞれのスリットを

通して七人の天使がおります。

これがガブリエル、この方がウリエル、サリエル、パヌエル、それから全部で六人、この七大天使というのが、じつは新しい、新天地を求めて

来た時の最初の光の大天使達です。この下にそれぞれ何億何十億という魂の霊子線があります。

さらにまたエル・ランティの光の天使の分霊として、カンターレ、さらにアガシャ、モーゼ、一方においてガブリエル系統にマホメットがいます。

そして第一艇団がエル・ランティを中心にしてミカエルに、ラファエル、ガブリエル、ウリエル、サリエル、この七大天使が中心にして、現代のエジブ

ト・ナイル渓谷の東部にあるエルカンタラーと云うところに着地します。

その場所が一番最初のエデンの園です。

約六千人のベーター人が全部この地球上におりてまいりました。

それぞれ七大天使はラファエルをはじめ文芸や芸術、政治経済、あるいは立法、科学、あらゆる担当をして総括的にミカエルが中心になってエデン

の園をつくりあげました。

そしてその当時は同じベーター星の人間であっても皆さんの肉体とまったくかわっておりません。風土、気候いっさい地球上とかわっておりま

せん。

魂と肉体、今皆さんの持っている肉体は、あくまでも物質であり、人生航路を渡っていくための舟にしかすぎません。その船頭さんである魂、このもの

とは完全に分離することができました。

その為当時の人々は天上の世界とコンタクトでき、人間の心は調和され物にこだわることなく全てが調和された世界であります。

そのようなエデンの園にやがて第二艇団が地上界に移ってまいりました。その時エル・ランティは天上の世界へ帰りました。

これが天上界、地球上の創世記です。

地獄界のはじめ

地球の創世記は三億六千数百年前に最初の七大天使がこの地上界に生き約六千人の人類がエデンの園をつくり、第二艇団が地上界に着地し生

活するようになって立法を犯す人々が出てまいりました。

その為に、その責任者であるミカエルは規律を破るところの民に対し一部分エルカンターラから移しまして「そなた達は神の子としての己れ自身を再

確認するために、もう一度自分の思念と行為、行っていることと、思っていることを修正していらっしやい」と、その場所から多くの人々がその位置を

かえました。その人々が後、エデンの園との連絡を絶ち、やがて天上界との連絡をたち、ついに天上の世界に帰ることなく、地獄の世界をつくり出して

しまいました。当時は地獄は存在していなかったのです。それがアダムとエバの後物語に変わってしまったのです。

その為に創世記の映画とはちょっと違いますけれども、私はこの肉体をもって天上の世界に行って、現実はその姿を見て来たのです。

時間と空間は今の一点

皆さん自身は、なぜ三億数千年前のことがわかるんだろう、と疑問を持つでしょう。

疑問など持つ必要はないのです。

皆さんの心の中には、過去、現在、未来は一点なり。皆さんの肉体を支配しているところの、潜在されている九〇%の意識の中には、永い永い転生

輪廻におけるところの一切の記録を持っております。

そのために過去、現在、未来は一点なり。皆さんの心の中に今、存在しているのです。皆さんの現在は過去、現在を集約した現在そのものの姿なの

です。

ただ肉体を持ってしまったために、自分がわからないだけなのです。

その心を正し、真の神の子としての道を己自身が生活に生かしていったならば、その実体を知ることができます。それだけに最も粗悪な光の集中固

体化したところの地球上の肉体を持ってしまうと、人間は皆盲目になり、それがために、物がすべてだ、地位がすべてだ、と情欲に駆られ、神の子と

しての本性を失ってしまったのです。

しかし、皆さんの心の中には、偉大なるところの智慧が誰しもが存在し、持っているのです。

それが、生まれて現在までの間に、思ったり行なったりする正しい基準を失ってしまったために、心をスモッグにおおわれ、神の光を自からして遮り、

ただ分からなくなっているだけなのです。

それゆえに、我々の物理学上におけるところの時間と空間は不確定です。

しかもまた、心の面におけるところの時間は過去、現在、未来は、現代をして一点であるというのです。

皆さんの心の中には、そのようにはっきりした偉大なる智慧が存在しております。それを調べあげて行く結果において、三億数千年前のエデンの園

は、すでに人類がこの地上界へ出て来て、第二梯団移住の時にエデンの園は、一部分の物質欲に駆られた人々によって道を間違えてしまったので

す。

そしてエル・ランティをはじめとして七大天使はこの地上界をあとにします。そして、多くの遺産をこの地上界に残し、後の世の人々が、その偉大

なるこの残した地上界の遺産をどのようにして活用するかを、私達は天上の世界において暖かく見守ってまいりました。

地獄の帝王ルシュフェル、サタン

しかし物におぼれ、肉におぼれ、情欲におぼれた一部分のエデンの園から離れた人達を救済するために、天上の世界よりルシュフェルという天使を

出しました。

ところが、たとえ天使なりといえども地上の不安定な肉体を持ってしまうと、手足をもがれたと同じごとく、生まれた環境や教育や思想や習慣を通す中

に己の本性を忘れ、ついにルシュフェルはサタンという名前に、その環境に生まれている間に彼は自分の地位と名誉のとりこになり、ついに天上の世

界と交信をたち、この地上界を去るとき、天上の世界に帰ることなく、地獄の世界へかえってしまったのです。

そのサタンは現代は地獄の帝王になっております。これが最初の地獄界の実態です。

メシヤ

こうして多くの天使達は天上の世界からこの地上界の動きを観察し神の子にもどす為に、多くの光の天使たちをこの地上界に送りました。エルランテ

ィ自身はアガチャーという方を、光の分霊です。この方を送ります。

さらにまた、カンターレーという方を送ります。後のゴードマブッタです。

天上界ではカンターレー、と言っています。お釈迦様とは言ってません。

ゴードマブッタ。アガチャーは後のイマニエル・イエスキリスト。モーゼはモーゼです。

さらにまたイエスがゴードマブッタが生まれるときにはガブリエルという方は主として伝達の係をし通信関係の責任者です。ゴードマ・ブッタがインド

に生まれるときには、ガブリエルのグループの方がゴードマの生まれることをゴードマの両親に通信を送りません。アシタバという仙人です。

あるいは又、アガシャーであるイマニエルに対しては又、ガブリエルはミカエルの命によって受胎の告知に出ています。モーゼが生まれると当時の

王に、その命令によって多くの人は殺されます。

彼は葦船に流されていく途中、七大天使はサタンより守るために、彼が拾われるまで彼の成長を楽しみます。

それぞれこうしてメシヤというのを送り出したのです。これはすべて神の心である法を説くために、出て生きているのです。特にモーゼの時代というの

はサタンの跳梁が厳しく、世は混乱し人間は、本当に底辺の人々は自由になりません。人を殺すなんてことはヘイチャラです。

その為にモーゼというメシヤを出して、社会の人心を正しい法によって導かなくてはならない。その時にエル・ランティはヤーヴェという名前で彼を指導

します。ヤハウエー（ヤーベ）という名前でモーゼを指導します。それが十戒です。

汝をイスラエルのカナンの地に導きしは我、ヤハヴェ（ヤーベ）なり。

汝、偶像を祭って祈ることなかれ。汝の主はヤハヴェなり。

汝、近隣を愛せよ。

近隣のために偽りの証をすることなかれ。これが十戒です。

付記 モーゼの十戒

我の他、なにものも神とすべからず。

偶像を崇拜するなかれ。

神と主のみ名をみだりに唱えるべからず。

安息日には休め。

汝の父母を敬え。

汝、人を殺すべからず。

汝、姦淫するなかれなかれ

汝、盗むなかれ。

汝、偽るなかれ。

汝、隣人の家を侵すなかれ。

それは丁度、シナイ半島の岩壁にヤーベが現証として、その当時現証として現わしたのがセラビムというのがあります。セラビムという諸天善神で

す。

現代もおります。

このセラビムや他の天使たちに命令し、あるいは、その目的を果たすためにそれぞれの指令を天上の世界から命令を出します。聖書の中にはエロシ

ムと書いてあります。このエロシムという者はエルシムというのです。これは聖書の間違いです。

エルシム。このエルシムと名乗るのは、七天使が全んど名乗るのです。それはエル・ランティの命令による秘書的な立場に立ってエルシムとし

て名乗ってそれぞれの指令を出します。

ユダヤ教とキリスト教の誕生

しかし、今から三千百五十年前、ヤーベエの真実の教えは、いつのまに

かサタンの喰いものになり、汝、偶像を祭って祈ることなかれといえども、余りにも霊的な奇跡的な現象が一杯現われる為に、モーゼはその偉大

性をたたえて、ついにお祭りをしてしまったのです。そしてヤギの生き血、或いはまた、羊の生き血をあげるようになってしまったのです。それ

は、サタンの命によって、彼は動かされてしまったのです。

ヤーベはそのようなことは一つも言いません。あくまでも十戒というものを中心にして、人間の生きる最低の道を説いていったのです。

混乱した世相、主を名乗りながらして、サタンに利用されてしまったのです。

そのために、すでにモーゼが亡くなられて二百年にして、間違った思想はど

んどん出てしまいました。その為に、天上の世界よりミカエルの分身を地上界へ送ります。エリヤです。

今から二千八百七十三年前、エリヤをこの地上界であるイスラエルの北部に

農夫の子として肉体を持たせ、彼の心を揺さぶりヤーベエはつぎつぎと指令を出して、当時のイスラエルの間違った神々、これを世の中から抹消す

る命令を出します。

アハブという王は、最も悪辣で、皆さんが知っているアスラーというやつ、アシュラー（阿修羅）。争いばかりやる神様。地獄霊です。この悪

霊を祭らしたり、いろいろな偶像を祭らせる。仔羊を犠牲にするならまだいいが、自分の子供まで犠牲にさせるような間違った教えをするようになります。

す。

こういう教えに対してエリヤは疑問を持ち、ヤーベエの教えとは全く違う、十戒とは全く違う。

そして、彼はついには立ち上がり、その王と対決するようになります。しかし、当時は、約四百数十人もの予言者たちが、エリヤの前に立ちはだかっ

ております。そのためにヤーベエは、「今から三年間、もう雨は降らせん。イスラエルの地に雨は降らせん、そ

れを王に言ってこい」というとこ

ろが、王様にしてみれば、「お前は国賊だ、イスラエルの国賊だ」といって、エリヤは追放をくらいます。それでも彼の心を揺さぶって、ヤーベ

はつぎつぎと指令を出していきます。

これは実は、このあいだ、エリヤが私に原稿用紙で約百五十ページ近く、当時の模様を全部語り、現象を見せてくれました。その現象の一端として、

五月の丁度七、八日頃、東京には大きな雷が落ちました。それはその時の百分の一だそうです。今後はそういうことはどんどん起こります。そして、

アハブをやっつけてしまった訳です。そういうようにヤーベは大きな現象を与えました。

多くの予言者達が輩出して、間違った教えを再び元にもどそうとしたけれども、どうにもならなくなって、今から約二千年前に、再びアガシャであるところ

ろのインマニエルをこの地上界に送りました。その時は、ヤーベとはいいません。エホバと言って名乗ったのです。エホバ。神ではありません。神の

命を受けた最高責任者です。

間違ったユダヤ教を修正するために、そして、イエスに人間の愛を説きこの地上界へ送り出したのです。

ヤーベは、「六日間働いて一日を聖日となし、自分の一週間の間違った過去を振り返り、心を修正し、二度と同じ間違いを犯さない」という聖日

を設けたにもかかわらず、後の司祭者達は、「その七日目の一日は仕事をしてはいけん。人と会ってもいけん、動物に食糧をやってもいけん」とい

うようにしてしまったのです。このように、ユダヤ教は大きく歪みを作り出してしまったのです。そのものを修正するために出したのが、インマニ

エル・イエス・キリストです。

しかし、彼もやがてサタンの餌食になって十字架に架かってしまいました。

さらにまた、変えられてしまったために、ミカエルの分身であるところの天使、魂の兄弟をこの地上界へ送ります。この方がマーチン・ルッテルです。

さらに、フランスからは、ガブリエルであるところのカルビンを出して宗教改革に出したのです。

仏教の出現

一方において、仏教の方は、ゴータマ・ブッダが悟りを開き、道を説く課程において、このミカエルの説いたその過去世である、今から三千五百

年前のあのギリシャに於いて説いたアポロの教え、アポロ。このアポロの教えは、やがて東の国、インドに伝わってゆくであろう。そのインドに伝

わってゆくその神理をやがてメシアであるゴータマ・ブッダという方が生まれて、それを悟り、道を説くであろう。このようにして東の方にはカン

ターレを出したのです。これが後の仏教ですね。

ところが、いつの間にか仏教も化石化して、お経をあげれば救われるようになってしまったのです。「南無阿彌陀仏」、「南無妙法蓮華教」それで救わ

れた人は一人もいないのです。

無阿彌陀仏とは

「南無阿彌陀仏」というのも、ゴータマ・ブッダが、かつてラジャグリハという町の郊外のベルベーナ（竹林精舎）におる時に、ビンビサラールと言われる

王様がおります。その奥さんが幽閉されます。コッサラールと言われるイダケダという婦人です。アジャスターという倅に幽閉され、子供自身が何んとか

仏教を知って欲しいと思ったけれども、ゴータマ・ブッダの従兄弟であるところの、同じ王子として出家された方がおります。その方にそそのかされて、

お父さんとお母さんを幽閉し、お父さんは死んでしまいます。お母さん自身は最後の望みとして「仏陀から何か一つ話を聞きたい。私は何もいらぬ

から仏陀から真の話を聞きたい。お母さんの一生のお願いだから」と言って、牢獄に入りながら、お母さんの願ひだけをいれて仏陀の話を聞かせた

のです。それが阿彌陀教と言うのです。

この阿彌陀教と言うのは西方浄土、インドから西方といいますと、現代のイスラエルからエジプト方面。このアガシャールの過去世の中には、転生の

過程を通してアミーと言われる方もおります。そのアミーという名前は、最初はアモンと言ったファラオ（王様）です。魂の系列です。

そのアモンがエジプトに行つてアーメンに変わり、ソロモンに行つてアミーに変わりそれからギリシャに渡つてアミーに変わり、インドに行つて陀仏が

入つてアミダブツ（阿彌陀仏）になったのです。そして、その西方浄土にアミーと言われる偉大なる指導者がおつて、そこに浄土があるんだよ。あなた

は今、自分の子供に幽閉されているけれども自分の子供を恨んではいけません。あなたは厳しい環境の中にあつても子供の罪を許してあげなさい。

やがてあなたはこの地上界を去らなければならない。その時にあなたは阿彌陀の浄土に帰ることが出来るのです、と言う阿彌陀教を説法したので

す。

それが阿彌陀教。ところが日本へ来たら「南無阿彌陀仏」と拝めば救われる。馬鹿げた話です。これはインドの言葉だから通用するんです。「南

無阿彌陀仏」ちゅうのは、これはインドの言葉が中国に渡り日本へ来たから丁度うまくいっているんです。これを直訳したら「阿彌陀様の法に帰依

する」ということです。「ナム・アミ・ダボ」というんです。阿彌陀という悟られた方に帰依する。それを仏壇やお墓やお寺に行つて「ナムア

ミダブ・ナムアミダブ...」そりゃ語呂はいいやね、確かに。ところが日本語に直訳したら「阿彌陀様に帰依しま

す。阿弥陀様に帰依します。...」っ

て何百回ゆってもやらないんだね。そしたら阿弥陀様は皆さん何んて言いますか。「お前、帰依すんならやってくれよ」って言いますよ。

仏教とキリスト教は同根

南無妙法蓮華経のこと

そのように仏教も化石化したんです。最近、又はやりでね「南無妙法蓮華経」。

「妙法蓮華経」に「南無」をつけたらもっと良いんじゃないかと日蓮さん考えちゃってね。一千万人近くの人間が「南無妙法蓮華経...」をまあ、二

時間も三時間もやっていますね。あれも馬鹿げた話ですよ。あれで救われた人はいないんです。「南無妙法蓮華経」というものも、本来ゴータマ・

シッタルター、釈迦牟尼仏がインドの地に於いて、ガンガーの流れを通し、無学文盲の人々に対して方便として説いたものです。

「諸々の衆生よ、比丘、比丘尼たちよ、あの汚いドブ沼の中でも美しい蓮の花が咲くであろう。ときに、そなたたち、比丘、比丘尼たちよ。サロ

モン、サマナーたちよ、そなたたちの身体を見てみなさい。目が疲れれば、目糞が出て来るだろう。汗、大小便、あのドブ沼より汚いそなたたち

の肉体である。しかれども、そなたたちの心が、宇宙の真理を知って生活をしたならば、あの蓮の花と同じように、調和された境地に、安らぎを得

ることができるのだ」と説いたのが法華経なのです。

それをわからないで、「法華経に帰依します、法華経に帰依します、

...」「南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経、...」最近はずっと速くやればいいと、「ナミヨホレンゲキョ、ナミヨホレンゲキョ...」馬鹿げた話です。

気違いです。いわんや汝、偶像を祭って祈ることなかれです。人間の印刷物をいくら拝んだところで、救われる道はないのです。我々は旧来の陋習

を破らなければいけません。

もし、神が必要ならば皆さんがこの地上界に生まれて来た時に持たしてよこしたはずです。曼陀羅をみんなブラ下げてよこしたはずです。男性のブラ

下げて来ているのは違うじゃないですか。

このように仏教ですらわからなくなってしまったのです。

太陽系霊団とは

宗教は一つ

こうして太陽系霊団というのは、光の直系として、エル・ランティーを中心に、エル・ランティーは、その時代その時代によって、ある時はヤー

べを名乗り、ある時はエホバを名乗り、ある時はまた梵天を名乗り、また、さらにマホメットの時にはアラーを名乗りました。

人類は皆兄弟であり、同じ一つの太陽の下に生活しているのです。宗教は一つなのです。ガンガーの流れも、ヨルダン川の流れも、いまだかつて

方向は変えていないのです。時代の新旧によって道は変わらないのです。

今、私たちは、モーゼやイエスやマホメットや、ゴータマの説いたものを一つにするために、私達は肉体を持っているのです。皆様は、その選ばれ

た民なのです。そして、自らの心を開いた時に、あらゆる国々の転生を体験し、その心の中に、その神理が皆記録されているのです。それを甦らせ

た時に、今、私の言っていることがわかるようになるのです。

神と人間 魂と肉体

神は己の心の中にあり。己の嘘のつけない善我なる心こそ「神」なのです。

神は形づくった中にあるのではないのです。皆さんの心の中にあるのです。

次元の違った世界なのです。そこから皆さんは今、肉体を持って、今、生きているのです。

その肉体を持ってしまうと、私達は目や耳や口や、心の中に思ういろいろな想念、こういうようなものによって、本当のものが見られなくなって

しまったのです。皆さんは、真の自分の姿を見ることは出来ないのです。

ただ、肉の姿しか皆さんは鏡で見ることは出来ないのです。しかし、皆さんは誰しもが本当の自分があるのです。

本当の自分を見るように私は教えているのです。それは心です。魂です。皆さんの今、思っている思う根源です。それは不変なものなのです。皆さん

の肉体は、今、自分のものだと思っておっても、それはただの錯覚なのです。

何時の日か朽ち果て、我々はこの地球上の塵に変わってしまうのです。肉体を支配している皆さんの魂は、永遠なのです。ただそれを形づくられて、

私達は生きていくに最低必要なものとして、五官が与えられているだけなのです。

しかし、真の五官は、皆さんの心の中にあるのです。心の眼です。心の耳です。そしてまた、心のすべての機能は、皆さんはすべて所有しているので

す。

それを自分が開発した時に、真に永遠の自分自身を知ることができるのです。

私達は、今、この地上界がすべてだと思っておってはいけません。皆さんの、この、人生の五十年や百年は、幻の如く、線香花火のような、ほんの一

瞬にしかすぎないのです。そして、我々の眼前に現われてるところの物質や諸現象は幻です。永遠のものではないのです。朽ち果ててゆくのです。形

を変えていくのです。しかし、皆さんの心の中に体験された偉大なる智慧は不変です。

この地上界を去る時に、皆様は何一つ持って帰ることはできないのです。また、生まれて来た時に何一つ持って来た人は誰もいないのです。

我々は、こうして五官に惑わされ、物質的光景の中で、物に溺れ、苦悩を自らしてつくり出しているのです。

その盲目の中から、人間というものの価値観を知っていくのです。手探りの中から、そして、自らして心の安らぎを得、正しい普遍的な神理を、己の心

と行ないの物差しとして生活をしていった時に、真の己を知ることができるのです。

これが悟りです。

悟りとは

悟りというのは、己自身の心を知ることです。己の心を知った時に初めて、人生の目的と使命を知ることができるのです。それは他力ではあり

ません。自力です。神はすべての物を皆さんのために用意し、与えてあるのです。太陽をはじめとして、生活できる一切の動物、植物、鉱物すべ

て、神は皆様に与えてあるのです。それを取らないだけなのです。取り方がわからないだけなのです。何を欲するのでしょうか。物質や経済

は無常なものです。

心と体と経済の調和

しかし、現代のように高度化した社会生活の中において、真の人生の幸せを得ようとするならば、まず、最も大事なことは、健全なる精神、心です。そ

の次に肉体です。その次に生きる為の経済です。

経済は衣・食・住です。この五つの大調和があって初めてユートピアが出来るのです。ところが、いつか人間は、その道を外し、エゴに変わり、す

べて皆兄弟だという道を外して、エゴの方に走り、自己保存に走ってしまったのです。

皆さんは、同じ太陽の下で、すべてが皆平等なのです。今皆様から、自分の地位と名誉と財産を差っ引いたものを想像して下さい。何が残りま

すか？ それが今の皆さん自分自身なのです。地位や名誉や財産は永遠のものではありません。真の皆さんは、それを差っ引いたものです。この

世を去るときの真の姿なのです。

こうして私達は過日、天上の世界に於きまして会議をやりました。私の隣りにはインマネール・イエス・キリストがおりまして司会をやり、その隣りには

ゴードマ・ブッタ、カンターレがおります。その隣りにはガブリエル、サリエル、ウリエル、こちらがわにはモーゼ、さらに又光の天使約十人ばかり、そ

して地球上の状況を次々と報告して来ます。

地球未来予告 天上界での会議

心を失い権力の座について、人間の自由を剥奪しているところのソビエトは、モスクワを中心として食糧危機は彼等が自覚するまで続きます。北朝鮮

も又、同じです。中華人民共和国の北部も同じです。

アフリカの西部海岸も同じです。一方に於いて中南米のパラグアイも同じです。サタンの跳梁を許しているのです。そのような心の人達のくもり

は、神の光をさえぎり、自からして、天変地異を造り出しているのです。

更にイタリーの北部からベイルートにかけても同じです。宗教の同じヤーベの教えであるその神理を曲解して、それぞれの道を歩んで、又同じ現

象が起って参ります。日本の食糧危機は、心ある人が出て来ているためにありません。

こうして天変地変は次々と起ってまいります。それは天上の世界の神の光の届かない所に起るのだということを知って欲しいのです。

やがて北朝鮮は破産をします。日本は戦後わずか三十年で世界のトップに成ったというのも、それだけ偉大なる魂達だからなのです。一つ間違えた

ら又、逆の方向へ進んでいきます。それは危険なことです。皆さん自身の進むべき道は真の道、普遍的な己自身の心に嘘のつけない善我なる心を

芯として生活を知ったとき道は開かれていくのです。それが神理です。今後大きな現象が起って来ます。

宗教界はどうなる

間違った宗教家達は、私によってつぶされていきます。どのような宗教家であろうとも、間違った宗教家達は私達の霊的な力によって現象化されてま

いります。信じようと、信じまいとそれは事実です。皆さん、見ておって下さい。

地震も雷も自由自在です。それだけに、今、私達はその受け入れ体制をしておかなければなりません。日本ばかりではありません。やがて私は中近

東へ行きます。そして真の道を彼等は知るでしょう。それは地球の最終ユートピアの為に私達は今、肉体を持っているのです。その為に自分の生活

の場は自分の生活として今度の光の天使は全部事業をやりながら出てきております。宗教でなど飯は喰いません。それが本当です。神は一銭の、人

間から金などいらぬのです。

太陽はただです。神の心です。これが神理です。私は実業家として、その面に於ても、世界でも、知らない人がなくなるでしょう。当然なことで

す。それが道です。

イエスの時代や或いはゴータマの時代なら良かったのです。現代の時代はそれではだめなのです。教祖や、その取り巻きが優雅な生活をする為に

宗教があるのではないのです。真の宗教とは宇宙の真の人間としての生きる道を教えているのです。そして、人間に生きる喜びを与える道なのです。

これが神理なのです。神は人間の造ったものを欲しません。大事なのは美しい一人の人間の心が欲しいのです。道はやがて開かれていきます。我々

の前途は光明に満たされます。そして、その人達は救われていきます。やがて、地上界の人々の一人一人の心が調和されてきた時に、我々の肉体

先祖はその姿を見て、「俺達の時代とは違う。なぜ俺達は、この厳しい環境にいるのだ。」難しいお経ではなく、皆さん自身の日常生活一つ一つの想

念と行為の光がやがて地獄の世界を救っていくのです。

『新復活』のこと

最終ユートピアは地獄のなくなる時です。サタンは私が今、一生懸命に「新復活」という本を書いております。モーゼの十戒をはじめとして、

間違った宗教を修正しているために、やっきになって私のために攻撃をしてくる

しかし、例エルシフェル・サタンなりといえども私のかつての弟子です。

彼はやがて私の軍門にくるでしょう。知らないから地獄に落ちているのです。

彼等も救われるでしょう。私は命がけです。

それは皆さん一人一人が自覚された時に、皆さんの周辺の肉体を持っているところの先祖達も救われていくのです。坊主の難しいお経によって救わ

れるのではないのです。

お経の意味がわかって生活しているような人なら天上界へ行きます。ゴータマ・ブッダは決して死んだ人間を成仏させるために坊主をつくったので

はないのです。生きて人間をどのように導き、人間の心をどのように導き、人間お心を指導するために、この地上界に出てきたのです。

地獄に落ちるといえるのは、他人のせいではなく自分の思念と行為の違いそのものが、自分の行動によって地獄に落ちたのです。

天上の世界がピラミッドのように高くあれば、逆にまた地獄の世界は逆ピラミッドとして存在しているのです。

この地球はその中間的環境にあるのです。そのために皆さん自身が、善を想い善の行為をすれば天上の世界へ、悪の行為をすれば地獄の世界

へ、彼等はいつでも待っております。

それだけに正しい心、正しい法この道を己自身のものとして、生活をしなかったならば、人間は救われないのです。

しかし、皆さんの心の中には誰しもが神の子としての真の愛の心を持っているのです。なぜならばすべて皆さんは天上の世界から約束されて、この地

上界へ出てきたのです。

還るときに、あれもしょう、これもしょうではなく、今の一秒一秒、一日一生の己自身の完成が皆さんをより大きい豊かなものにしていけるのです。

今きびしい経済的環境にあらうとも、悲観することはないのです。今、その厳しい環境の中で、今、皆さんは、自らの魂を学習するために、今、その体

験をしているのです。たとえ経済的にめぐまれていようとも、その環境に安住するものではないのです。恵まれているならばそれを大事にし、気の毒な

人達に真の愛の行為を無所得のままにしてやることなのです。これが道なのです。皆様は皆兄弟なのです。

生まれの環境が違おうとも、神の子としてすべて太陽のもとに兄弟なのです。他人ではないのです。袖すり合うも他生の縁といいます。まこといその通

りです。皆さんが目覚め自らを自覚した時に、皆様は神の子としての道を己自身が実行して行くのです。みな、私がしゃべっているこの言葉は、皆さ

んの心の中にすべて記憶されていきます。そして、この地上界を去ったときに、真実であるかないかを、皆さんは自らしてわかるのです。

そのときに救われるのです。生きていうちに自らをつくることです。道は永遠に続きます。今、この世限りではありません。やがて我々はあの世に還

ります。

そして、またいつの日か、地上界か、或は、また他の天体に出てくるのです。皆さんは自らに目覚めなさい！自らの心を開きなさい！小さな自分を捨

てなさい！偉大なる神の光に目覚めなさい！それは愛です。それ以外にないということです。この研修会を通し自分の心を裸にして、神の己自身の

本性に目覚めなさい。永い時間本当にありがとうございました。

六月五日

演題「太陽系の天使達」

お早ようございます。今、皆様にあげました「心行」は昭和四十三年十一月二十二日に完成いたしました。

そして二十三日の夜、午前一時、天上界で初めて「物質と生命」という講演をやりました。その時の司会がモゼです。その前にミカエルが講演をや

りまして、約一時間半、二十三日午前二時三十分はこの地球上に震度三の地震がありました。私は禅定のまま天上界にいったものですから、そばに

寝ていた家内が、「今、お父さんの講演を聞いていました。」ということでした。そして、過日、やはり天上界

に於て、色々七十年前のこの地上界に出

てくる時の模様。＂心行＂というものの成り立ちをいろいろと本になって現代は、ミカエル大天使が持っていますが、その中をめぐってみますと、自分

で驚ろいてしまいました。

心行について

＂我、見聞し正法に帰依することを得たり＂という最初の出だしが＂

我正道に目覚め正法流布のために一命を投げ出す＂という書き出しから最後が＂禅定三昧の境涯に到達せん＂、全く同じです。そして書いてある

ものは地球的に書いて私ののはありましたが、天上界のものは宇宙的でした。これを見てホンのわずかしが違っていなかった。ですからやはり書か

せられていたと言うことですね。

現代もミカエルといわれる大天使が、丁度この位い厚い(二~三十センチ四角位の立方形の本の形を手で示されている...ビデオ)本にして、私自身

が出てくる前の計画一切、現在も書かれている本、将来も出す本、それに記録されてあります。

赤ちゃん誕生

実はそれは私ばかりではなく、皆さん自身の心というものをヒモ解いていけば、恐らく計画書があるはずですよ。それに気が付かないだけです。それに

我々は色々な人生の苦しみを通して忘れてしまったんです。その為には、先づ自分の心の中で思っている事や、毎日生活していること、これの正しい

物差し、フィルター、このようなものをしっかり持つ、これが正法です。このフィルターを思ったり行ったりすることについて、一つ一つ、そのフィルターに

かけて、正しいものだけを自分のものにしていく、それがわかって来た時に、皆さんは本当の自分を知ることができます。人生は一度だけではありません

せん。皆さんがこの地上界に出て来て、親が教えなくとも、生まれたばかりの赤ちゃんが、お母さんのお乳を吸いはじめます。人はこれを称して本能

だと言っていますが、これは前に生きていた証拠です。

そして赤ちゃんは、わずか、二週間や三週間位で赤ちゃんは一人で笑っています。ところが私達が心の眼で見ますと、赤ちゃんの魂の兄弟や或い

は又、守護霊や指導霊達が「よかったね。しっかりやるんだよ。今度生まれた所は、君にとって厳しいかもしれないよ。大丈夫かい」「まかしといて下さ

いよ。約束通りちゃんとやるよ」と笑っているのです。

そして成長するにしたがって環境や思想や習慣の中から、そんなことは、もうとっくに忘れてしまうんですね。それを今度、天上の世界から見ている魂

の兄弟や指導霊や守護霊は一体どう思うのでしょうか。皆さんは、あたかも自分一人の意思で生活しているが如く

錯覚しているだけです。すべて天上の

世界からコントロールされているのです。

コントロールされているにもかかわらず、肉体を持ったその個性は、或る程度、勝手なことをやります。あやつり人形です。天上の世界であやつって

るのが、あ、うまくやっているな、と最初のうちは、その内に、自分の意思が働き出すと、アーまた、またパチンコ屋にはいったな。また、三十六番、出

ないとわめいているな。アーまた、おかしい所へ行き出したゾ。それで悩むわけですね。天上の世界の悩みは、地上界へ出ている魂の兄弟や、或い

は友達、こういう人達、先づ、五歳、六歳のうちは、そんなに心配しません。もの心つき、十歳、十五歳、特に、中学時代から大学、それから一部分の

人は、社会に出てから、おかしいことをやり出すわけです。毒を喰い始める訳です。それまでに一杯、喰っちゃうのもいるんですけども、最近、早

ければ、小学校の三年か、四年の内に、もうおかしくなり始めるのがいます。鍵っ子ちゅうのですね。親子の対話がなくなってしまう。

ノイローゼ

そして自分自身は、親との対話がないから、自分なりの、ものの判断で生活をします。ノイローゼです。そうなりますと、そういうお子さんにも、そば

に不調和な霊が来ております。そのものの意識に支配されるから、生きている人と話しするのもいやになっちゃう。対人恐怖症になる。段々、心の丸

い豊かな心が小さくなる、暗くなる、そうして孤独になっていきます。

反抗期について

その頃から親は、どうも家の子供はおかしいな。最近、親の言うことを聞かない。またガチッとやるわけですね。子供は段々また、小

さくなる。こんな子供に誰がしたなんてね。子供自身は自分でつくって、自分で苦しんでいながら、他人のせいにする。親不孝するようになって行く

わけです。勿論、その家庭において反抗期という、人間の一つの成長する過程における性格的变化がありますけれども、それが、憑依現象として現

われてくる場合が多いわけです。心の暗い人々は、その心の暗い分野に、その暗さに比例した悪霊、この地球上というのは丁度、ピラミッドと逆ピラミ

ッドの中間にあるんです。即ち、天上の世界 と、地獄の世界の丁度中間的な世界が物質の世界です。それだけに非常に敏感です。ところが、皆さん

自身が肉体を持ってしまうと鈍感になります。わかんなくなります。

皆さんの、この眼の見える世界なんていうものは、ほんの小さいもの。七色の虹の世界、四〇〇〇オングストロングから七〇〇〇オングストロングの

周波数の位置しか皆さんは見ることはできない。現に、虹の両極端は紫色と赤色です。赤色からは赤外線には

いっていきますね。赤外線からは電波

にはいっていきます。これも見えない。それから紫色からは紫外線にはいっていきます。紫外線から熱線にはいっていく。これも見えない。ですから人

間の眼が、どんなに、いいといったところで、ほんのわずかな世界しか見ることが出来ないわけです。いわんや、嗅覚にしても同じです。聴覚にして

も、たいしたことはありません。

観自在

しかし、私は、聴えます。あの世のことまで見えます。心の耳、心の眼、心の鼻、心の本当のものを持っていればそのように自由自在、観自在、という

ことになるのです。ひとつではない。皆さんも、その力をもっているのだが、ただ、ちょっとだけ鈍感になっているだけなのです。その鈍感の理

由というのは、日常生活の中で、人を恨んだり、妬んだり、そしったり、またグチを言ったり、自分と言うものの心の中は、まるやかでない。そして

イライラしている。それが、みんなスモッグになってしまうわけです。

心のスモッグと反省

夕べは、だいぶ風を吹かせました。なるべくならば、今日は雨が降って欲しくないものですから。そのようにスモッグを払うにはそれなりの作用を起

さなければなりません。皆さんの場合は反省ですね。反省ということは、まず正しいフィルターをもって、自分の思ったこと行ったことを一つ一つ、振

り返って見る。人間なるが故に間違いも犯す、又、間違いも自分自身の心を豊かにする、一つの菩提であるということに、たとえ間違えたからといっ

て、自分はだめなんだといって自分を小さくしてはいけない。皆さんの今ある環境は、皆さんの魂をより豊かにする一つの学習の場であるとしたなら

ば、小さなことにこだわる必要はないのです。失敗も又、成功のもとです。"改むるにはばかりことなかれ"という諺があります。まことに、その通りで

す。そして、それを土台にして、より自分を豊かなものにし、同じ間違いを犯さないというようにしていくことが大事です。そうして今、皆さんは、こうやっ

て原子肉体を持っているけれども、そこに、こちらから2番目の絵があります。(ポスターの図を示され)

後光(オーラ)

皆さんは、もう一つの肉体を持っております。誰れもです。この中で後光の出ている人もいます。頭の毛がなくて、電気によって光っている人もいま

す。

これ誤解の方です。本来は頭の毛があろうと、なかろうと心がきれいで太陽のように美しい丸やかな心で慈悲深い、そして自分というものを常に、自

分だけではない、相手もいるんだ、常に調和ということに心掛けて正法の生活をしている人には、きれいな後光が出ております。

この後光が、あの世に甦るための皆さんの肉体なのです。今、ちょっとヘタな絵ですが書いてみましょう。

こうやって今、禅定している人のことを考えますね。そういたしますと、皆さんの心は丁度、胸のあたりにあります。胸のあたりに、きれいに丸くなっ

ている人とハート型になっている人と、歪みをつくっている人とあります。そして、このように丸くなっている人達の心の中には、この心の絵がありま

すね。智性と本能と感情と理性と想念、これを大きく分けますと、このようになっております。丁度、風舟玉のようになっております。そして心の

中の機能というものはピシッとなっている訳ですね。これはもう一人一人あります。或いは、こうやって見ますと、前の方には、きれいなピンク色

の光の出ている人は、何かというと、もっか恋愛中ということですよ。それと一定の年頃を過ぎても、ピンク色になっている人がいますが、こういう

のは困りますね。そこで今度は、心が丸くなっている人達というのは、身体からもきれいな後光が出ております。このように光がでております。ダ

ルマさんのような、きれいな光が出ております。こういうような光が出ております。やわらかい金色の光です。

この光の出ている人達は、まず心は百パーセントきれいで、夜、寝ても地獄へ行かない人です。夜、寝てから、追い駆けられたり、怖い所へ行った

り、もう、おどおどしているのは、まず、その前の日、寝る前に、あんまり良いことをしていない人達です。ですから、心がこうやって、丸く、感情も智性

も理性も想念もみんな丸く豊かであると、そういう地獄の世界に行かないわけですね。ですから、夕べ夢を見て、どうも怖かったという人は、あんまり

心が丸くなかったという証拠です。何か心配事がある。何か、何かある場合ですね。更に又、この心というものは、今までは形がないんだなんて思って

いたけれども、とんでもないことですね。

心はどこにある？

私、ある講演をした時に、九州の方でした。心なんかあるものか。人間は、すべて頭で判断するんだというわけですね。確かに頭で判断するんです。

だから心は頭にあるんだというわけですね。一流大学の有名な一流のお医者さんで精神学会で日本で一番という人ですよ。その先生が「頭がおかし

くなっただけですよ。それを治す為には、大脳をこのようにしなけりゃいかんよ」ということを僕の前でとうとうと言ったわけです。

そこで、「先生、心というものは、どこにあるんですか」と聞いたら「そりゃ君、頭にあるんだよ」。ハハァーと思ったんです。その時にそれを説明し

たわけです。

「それでは先生は、嬉しい時、悲しい時に、こみあがってくるのは頭からこみ上って来ますか。」

「そりゃ君、ここだよ。」

「じゃ、こっちから、こみ上ってくるものは何ですか」ったら

「それがわかりゃノーベル賞だ」

もうそこまできたら、もう話しにならないんですね。そうして、（黒板に図で示し、説明している）

光の方の肉体、こちらの方の見えないところの神の光によって満たされているために、心にスモッグがないから後光が出て来て、実はこれが本当の肉

体なんです。皆さんの、あの世に還る舟なんです。そしてそちらにも、ちゃんと大脳も全部あるんです。ですから今、皆さんの脳細胞は受信と送信をす

る一つの機能にしか過ぎないのです。耳で聞きます。聞いた聴覚神経は皆さんの脳細胞の聴覚の、一つの物を聞く機能、その信号を違う次元の方に

送る装置にしか過ぎないのです。ですから、今、物を見ますね。＂赤＂って見たものは聴覚神経の＂赤＂しか見られないのです。その＂赤＂自身を

判読しているものは英語であろうが、ドイツ語であろうが、フランス語であろうが、日本語であろうが、言葉が違うだけで、＂赤＂には変わらない。

＂赤＂はレッドと言えバレッドなんです。脳細胞は二百五十億あります。

この二百五十億の中にそれぞれの一つの分野が神経繊維の一つは一方通行です。それでそれが記憶している訳です。ですから世界各国、＂赤＂

は赤なのです。ただ言葉が違うだけです。ですから、本当に記憶しているのは光の方の肉体が記憶しているのです。

ですから皆さんが夜寝て、夢を見ている時に、自分の肉体を自分が見ていることがあるでしょう。どうでしょう。自分の肉体は、今、寝ているんです。

そして寝ている肉体の又、もう一つの肉体が活動しているのを、自分が又見えていますね。そういう経験のある人、手をあげて下さい。

天上界での肉体

それは皆さんの光子体の本当の舟頭さん、その舟頭さんが見ているのです。

それが皆さんの真の真我な自分です。ですから、私達の今のこの肉体というものは、本当に皆さん、この世を去っていく時によくもまあ、こんな舟に乗

っていたものだと思います。なにしろ私達は天上界でよく会議があります。

肉体を持っているのは私だけですから、まず醜いですよ。そして僕が一番、年寄りなんです。自分は若いつもりでいるのだけれども、相手側の方は

皆、二十六、七歳、ミカエルが二十八、九から三十位、イエス様が三十六、七から四十歳位ですから、それですから膚の色が違うんです。握手したな

らば、こちらは石のようなもので、相手の方はロイヤルゼリーか何か、なんともいえない、もう違うんです。

女性の方は、菩薩界におられる方は、何かミス・ユニバースみたいで、皆、美人です。目を覚してがっかりしちゃうわけです。ですからこの 地上界

の皆さん、少し位顔がまずいからといってガッカリすることはありません。いずれ天上界へ還れば、皆、美人だってことですから。我々のように、ニキビ

の噴火した跡なんか一つもありませんから。これは光子体の方の肉体、皆、美人ですね。もう、女の方なんか、本当に、全んど美人です。

地獄界は別ですよ。地獄界へいったら例えば、魔王の近辺におるのなんかは、美人のような顔をしているけれども、心が、ころっと変わった瞬

間に、もう口はサケてしまって、そりゃ、もう、まともには見られませんよ。鬼ババアなんて可愛い方です。おっそろしい顔です。骸骨のような姿

になってしまうしね地獄界は又、別の世界です。こりゃ、ミスブスなんてもんじゃない。表面がきれいだからと思ったら、とんでもない話しです。

過日、私の家を訪問してきましたアステリアという魔王・サタンの姪が来ました。それは私の持っている法輪をパーンと投げましたら、そこに

引っかかって来たのを、皆んなの前に見せて、この通りだよと言って、手の中に踊っていたものですから、ポンと投げて、そのまま寝ちゃったら、

夜寝ている最中に、成長しちゃいましてね。私のフトンの中には行って来たんです。

アレ、こんな女の人が、なんで、僕のフトンの中に、はいつてくるの。そして、しかし丁度アンマさんにかかっていたものですから "なんで、お前は、こ

んな所にはいつてくるか、出なさい！" と言った訳です。ところが按摩さんは見えないですからね。メクラだしね。"私は何もしてません" と言う。そ

れはそうでしょうね。本人はビックリしちゃうわけです。こっちの方は見えちゃうし、向うは見えないんですから。"いや、あんたじゃなくて、今、外人の

ものすごい美人の女の人が、私の隣りへ、お見舞いに来たと言って、お見舞いに来たのに何でフトンの中に、はいるのか、出れ！" と言ったんだと言

ったんです。"ハアそうですか、私はそんな積りではなくて、私は何か悪い気がしました。" "いやそれは違うんだ" と、そんなことがありました。それ

はもう外国の映画女優の、ものすごくきれいな女の人に似ていますね。それでも、一旦、彼女が心をガラッと変えたら、もう悪党、鬼婆です。口許は切

れるは、まともには見られません。それが地獄界の実体ですね。

パワートロン

天上界はそんなことはありません。怒りもありません。そして又、天上の世界の、今度は、心の調和されているエルランティという方になりますと、こ

こにパワートロンというものを持っています。(以下図を書きながら説明)

頭にちゃんとパワートロンというのをつけています。パワートロンといひます。

神の光をストレートで受けている光ですね。このパワートロンから、光がピューッとこうやって出ているわけです。ですから見ておきますと、頭からも、身

体からも光が出てきておりますから、光の化身だと思えばいいですね。そうして、このパワートロンと、その人の、エル・ランティの心のところと、全く同

じ位置、だいたい八十センチから七十センチのところに玉があります。このようになっております。これがドームです。そして、このドームからも

光が出ています。やわらかい金色の光です。こういう光が出ております。

大きな光ですね。そして、このパワートロンの光が、このように発射していると同時に、ここに今度は魂の分霊ですね。光の分霊である、イエス

様、モーゼ様、カンターレ、この意識がはいっております。これから七十センチ位ですね。

光の分霊、お釈迦様とイエスの場合

この頭の上から、そして例えば、私が、イエス様の当時の話をしますと、例えば、これがイエス様だとすると、今度、これが

クルクルッと廻りまして、こちらの人の、私の身体の中にはいってくるから、今度、イエス様の顔になっちゃうわけですね。お釈迦様のこんど、話をし

ますと、こちらが出て、今度、お釈迦様の意識がはいって、その当時の意識が身体の中にはいってくるから、今度、お釈迦様の顔になっちゃうわけ

です。ですから、普通、私が講演を全国して歩いって「あの方は、お釈迦様の生まれ変わりだ」という人が出てくるわけですね。見えちゃうから。

インドの時、耳たぼなんかこんなに小さいのに、こうなってくるわけですね。眼の方が、ずーっと、こうやって細くなってきちゃう。見とっ

て、皆んなビックリしてしまうわけです。そうすると、その人達にとって、お釈迦様に見えちゃうわけです。これは光の分霊っていうわけです。

エル・ランティの光の分霊、この光の分霊というのが、個性を持っておりますから、そうやって出て来ますね。

メシヤ信仰

ところがいつのまにか、お釈迦様や、モーゼや、イエス様や、或いは又、もっと下の方の段階にあるところの回教、こういうのをメシヤというわけです

ね。このメシヤを拝むようになっちゃった。メシヤ信仰になってしまった。これは大きな間違いですね。メシヤの説くのは神の心である法を説きに来て

いるのです。人間はこのようにしなければいけないんだ。メシヤ信仰ではなく、メシヤを信じることです。メシヤの言葉を信ずることです。そうして、その

言葉が法なのです。その法を行することです。これが本当の信仰なのです。ですから本来はメシヤ信仰であってはならない。仏教では、お釈迦様

は絶対ですね。だからいつのまにか「オシャカ」なんて言葉が出来ちゃうわけです。

それは困りますね。お釈迦様の説かれた法、その法を生活の中に生かすことです。そうして、自分自身が、説かれた、その悟られたメシヤのような

豊かな心になるということ。

イエス・キリストを拝んじまって、何んでもイエス様、イエス様。迷惑です

ね。イエス様は一人しかいないんだから、世界中の人が、イエス様を呼んだらどういうことになるでしょう。そこでエル・ランティであるところのヤ

ハベ（ヤーベ）は「汝ら、みだりにヤハベの名前を呼ぶことなかれ。」とっていますね。それなんです。一人なんですから、呼ばれたって仕様

がないんです。皆さんだってそうでしょう。仕事をしてあって、仕事の途中で何回も呼ばれると、「うるせえなあ」ということになりませぬ。これは同じで

す。

我々は、ややもすると、次元の違う世界を呼べば、何んでもやってくれると思っているが、とんでもない事です。一番大事なことは、メシヤの説く、法

というものを実行するという事、これが大事です。そして、このエル・ランティは、光そのものです。天上の世界へ行くと光そのものです。光の化身で

す。

M 3 7 のメシヤと軌道修正コントロールセンター

とって、神ではありません。神は、又、こちらにあるわけです。いまだかつて地球上に神だなんて言って出て来た人は100%嘘です。どんなものだっ

て、神様になんかにはなれないんです。神は一つです。宇宙には神は一つです。こういう、エル・ランティと同じような人達が、宇宙に、真のメシ

ヤという人達がおります。遂に、過日はM 3 7 という星があります。

M 3 7 に出ているメシヤが悟りました。そのM 3 7 のメシヤはついに、自分自身を悟ったというのは、太陽系の中の、軌道修正コントロールセン

ターというのがあります。太陽系の軌道を修正するコントロールセンターというのが次元の違った、あの世にあります。その中心の心臓部に伝達が

あるわけです。宇宙的ですね。

そして、真のメシヤが、それぞれの惑星の地上界に出て、皆んな互いに連絡がとれるようになって、真の調和が完成されたとき、そのメシヤが神にな

るのです。大変なことですね。M 2 6、この太陽系それぞれに出て来ておりますね。今、出て来ているのは、太陽系で、一人、悟っております。M 3 7 で

悟っております。M 2 7、M 2 6、出ております。このMというのはメシヤという意味で、つけたようですね。

ベーター星

我々の出て来たところのベーター星というのも、調和されている世界、ユートピアです。その、皆さんも出て来

た所ですね。ところが、今、我々が住ん

でいるのは、自分の住んでいる地球だけだと思っているだけなのですね。かつて皆さんは、三億六千数百万年前には、そのベーター星という所から、移

住民族として、地球上へ来たわけです。そして、その間に何回も転生輪廻して、まあ全んど皆さんは地獄へは行かなかったと思いますけれども、ま

あ、今、いるわけですね。そして、自分というものを知るようになっていくわけです。で、それは、何んのために、現象の世界に出て来るかということ、こ

の色心不二といいまして、皆さんが肉体と魂を持っているように、神の身体も、また、物質と心から成り立っているわけです。神の身体地球という細

胞を、神の子である人々と心と心の調和によって、はじめて、地球は円満に調和されていくんです。

天変地変の原因

それが神の子である地球の中の細胞の一部が、互いに争い、闘争を繰返される。即ち、皆さんのツバキ、ダ液のようなもの、皆さんは、地球の消

化する、ダ液のようなもの、そのダ液の中にバイ菌がはいったら、どういうことになるでしょう。消化不良を起こしちゃいますね。同じです。ですから地

球に住んでいる人達の心の丸くない人達が多ければ、即ち不調和な人達、法を間違えた人達が多ければ、その分野に天変地変が起るんです。神の

光をその分野が失ってしまうからです。地獄が多くなれば、そのような現象が起りますね。だから恐ろしいことです。ですから、心がきれいな人達が集

まれば、その集まっただけ、その環境は調和されて、光明に満たされるわけです。それは事業だって同じですよ。家庭だって同じです。ですから、家

の中が、どうも不幸が続いているっていう人が、こん中にも、何人か来ておりますねえ。自動車事故で亡くなっちゃったとか、私は一生懸命に拝んで

いるのに、何んで、何んで不幸なんだろう。

家庭の不孝の原因

というのは、何か原因があるんですね。思っていること、行ってる性格を通して、何か原因があるんですね。夫婦の関係、子供の関係、その原因は、

それを除かない限りは、そっからは、光明は満たされないわけです。その原因はどういうところにあるのか、それをどのように除けばいいのか、という

ことを私達は教えているわけです。

真の信仰とは

ところが、普通、宗教は、そうじゃなくて、不幸があると、お前さんとこの先祖が浮かばれないんだよ。一生懸命、お経をあげれば、なおるんだよ。と

馬鹿なことを言っている。又、それを信ずる。"溺れる者、ワラをも掴みますからね。"その原因はどこにあるかということ、そ

の原因の根を、どのように取り除くかということに努力しなさい。出た結果に翻弄されちまってね。増々、深まりには行って行く。だから神様、拝

めば拝むほど、不幸になっていくわけです。ですから、宗教家、お坊さんとか、或いは神主さんとか、宣教師とかいう人達ね、神様を扱っている人

達、偶像を拝んでいる人達の家庭をご覧になって下さい。混乱してますよ。あんなに信仰深い人が、なんでだろう、と、こう思うんですね。そ　いうのは

本当の信仰ではないんです。みんなは兄弟が、円満で仲良く、お互いに助け合っているのが本当の信仰なんです。

ですから家の中で色々、まずい問題が起ったりするのは、俺達の考え方、生活のあり方に何か間違っているんだ、と、正しい法則を踏みはずしている

んだ、先祖がどうではないんだよ。苦しんでいるのは自分達です。それを、その根っ子を考えることです。そうして、それをなおすことですね。そうする

と、なおっていきますね。ここにも、そういう人が何人も来ています。ですから、その時は、拝むんじゃなくて、私達の考え方、生活の在り方、物の考え

方、これらのものの修正、そのチャンスを与えているわけですね。それで、その根っ子は、どこにあるのか、その原因はどこにあるのか。その悪い面

を取り除かない限り、だめ、それをただ、先祖のせいにして、先祖を拝めば、なおるんだと、それじゃ、先祖に、いい戒名をあげようじゃないかといっ

てね。そこにパッキリ待っているのが、パッキリ屋ですよ。

〇〇元首相のこと

戒名のいいのをあげれば救われるなんて、馬鹿みたい。先づ、皆さんね。戒名をどんないいものをあげたって地獄は地獄ですよ。〇〇院殿〇〇大居士

士というのが何年か前に死にましてね。その方が、東急の社長をやっておりまして、私の親分出してくれって、言うもんだから、すっかりゴトウ・ケイタ

だと思ったんです。そうしたら違うんですね。元総理ですよ。「ワシじゃ」って出て来ましてね。ノドから声が出ないわけですよ。ガンで切って死んだ

総理ですから。それが地獄にいるんだから、どうしようもならないじゃないですか。名前みたら、院殿大居士ですよ。そしたら、「ワシヤ、そんな

名前は勝手につけたんだから、俺には関係ねえ」って「高野山へ行って聞いてくれ」って。そういうものなのです。皆さん名前じゃない。＃冥途の

沙汰も金しだい＃なんてナンセンス。一銭の金がなくなるとして天上界へ行けるよ。そういうことを知って下さい。絶対に戒名なんか、どんなにいいの

つけたって、地獄へ落ちるものは、地獄へ落ちるんです。名前なんか、どうでもいいんです。地獄へ行って、戒名なんか名乗っているのなんか、一

人もいないから。これは日本人の、色々都合が御座居まして。戒名っていうのは本来はね、生きている内につけるんです。昔の坊さん達はね、自分

の寺子屋みたいな所へ連れてきてね、正法をよく教え、仏教を教えて 「ア、あなたは、大分よく勉強し、生活も変わって来ましたな、じゃ、こ

のあたりで、今までの名前をかえて、じゃ、居士という名前を与えましょう。」

「ありがとう御座居ます。お蔭げ様で、私も、心がなごみました。」

そうしてなったものですね。それが、そうじゃなくて、日本は、死んで、しばらく過ってからね、お金持って行ってから戒名つけるんですよね。死んでいる

人がわかる訳ねえじゃないですか。＂あなた、どなた？ 〃 したら、自分の本名を言うんです。〇〇院殿〇〇大居士なんて知らねえよ、なんて。同じで

すね、だから冥途の沙汰は金次第じゃないんですよ。

それは都合の悪い人が、そう言ったんでね、だから皆さんは戒名なんて本当はいらないんです。生きているうちに、自分の心と行いをなおして＂

よっしゃ＂と今までの名前を捨てて、新たに、生まれ変わった積りで、人生をやり直すんだと言って、名前を変えるんだしたら大いにやりなさい。

死んでから貰うんだしたら、そんなのはいらないんです。生きている内に自分の心を改造してね、生活を改めて名前を貰う、これが本当のものです。

戒名の由来

戒名とはインドの当時、ブッダの弟子に、シャーリー・プトラ（般若心経の中に舍利子とある人・著者註）という男がおります。彼はウパテッサという名

前でね、どうもウパテッサというんじや、うだつがあがらねえんじやないかと言うんでね。（笑）お前はよくやるから、お母さんの名前のね、シャーリーと

いうお母さんの名前のね、お母さん、なかなか陰徳のある方で、一つその名前を貰ったらどうだ、心を改めて心身を改めてシャーリープトラという名前

にしたらいいとって戒名を変えていったのですね。

或いは又、コリーターという名前がありまして、何度もコリても困るから（笑）、

（付記、古代インドのお釈迦様の時代にコリータは暴漢に襲われて殺されます。コリータは、あの有名な坂本竜馬に生まれ変わりますが、明治維新も

同じように暗殺されたことで知られています。それを受けて何度コリても - となったのです。）

なんとしろ、お前の名前を一つ、この際、心もきれいになったことだから、モンガラナーということにしよう、と言って、マーハーモンガラナーという

名前に変わりました。これは大目連ですね。それ生きている内です。死んでから、いくら、どんないいの貰ったって、どうにもしようがないじゃないです

か。最近、日本人、そういうのが好きになりましてね、死んでから、一パイ貰うのがいいんじゃないか、と、最近では結婚にまで影響しましてね、お墓行

って、戒名見て、この家の先祖は、余りいいのじゃないからダメだなんてね。馬鹿みたいなこと言って、院殿大

居士がねえから、結婚の対象にならん

よなんて、そこまで来たらもう、悪霊ですね。ですから皆さんは、そんなもんじゃないんです。

その点はクリスチャンの皆さんの場合は、生きている内に、自分の心を入れ換えて、マリヤに近い、マリヤ様のような気持ちになりたい、とマリヤとつ

けてみたり、色々と人の名前をつけている人もいますね。クリスチャンの方は、はるかに御立派です。生きている内に変えるんだから、ものの考え方

を。ところが仏教は死んでから変えるんですからね。死んでから変わる訳、ないじゃないですか。だから、そんなものに皆さんは心、うばわれてはいけ

ません。

だからG・L・Aのお坊さんはそんなことしませんよ。＂院殿下さい＂と来ても＂まあ院でいいじゃないですか＂なんてね(笑)そんなことでやっ

てますね。ですから商売繁盛しちゃうわけです。仕事が忙しくなっちゃうわけです。あそこ行きゃ、天上界へ行けるっていうわけで、葬式多くなっ

ちゃう。

本当は、お坊さん、葬式専門じゃ困るんですよ。生きている人を救うことでね。死んだ人はもうしょうがないんだ、これは。ところが日本はお坊さんイ

クオール生きている人には関係がないんだな。だから、お寺さんが入院している患者さんをお見舞いに行きますと、縁起が悪いや、なんてね。

そうじゃなく、病院に入院して、今、死ぬか、生きるかという人に＂お前さん、あの世があるんだよ、といつまでも執着を持っているな、みな捨てちま

え、子供達にみな分けてあげなさい＂と教えてやりゃあいいんだよね、本当は。ところが、お坊さんが行ったら、縁起が悪いや、あいつは死ぬんじゃ

ねえか、なんてね。僕が丁度、この間、坊主になって船に乗っとったら、＂坊主と一緒に魚一匹つれねえや＂(笑)なんてね。だから坊さんは縁起が

悪いことになっちゃってんだ。私も一応、心を改めて、自分の頭の毛を、一つ形の方からやってみようと思いついて、色々検討の結果、頭を三分刈り

にしてみた訳です。そうしたところが、＂坊主と一緒に魚も釣れねえや＂なんてね。こりゃ不思議なものです。

真の引導の意味

ですから本来は、坊さんは、生きている人を救うんです。インドの、本当のお釈迦様のお教えはね、お弟子さん達、ブッダが亡くなる時にね、アナンと

いう方に、アナンがブッダがなくなったら、どうしたらいいでしょうか、私達はよんどころがありませんと、彼はブッダの枕辺で泣きました。その時、ブ

ッダが、何を言うかと、ワシが説いた四十五年間の法は、お前達の心にある。お前達は、その法をたよりとして、人々を救うことなんだと教えて

いるんだね。それが、何か、死んだ人を教えるように坊さん、変わったんだなあ、こりゃ。本当は、もうだめです。その坊さんが、＂見えて、聞え

て、話せ＂たらなお、いいんだけど、＂見えて聞えて話せない＂のが（付記、見えず、聞えず、話せないのが...の意）

引導を渡すというから、どうしようもならない。どういうわけですか、私達は、死んだら＂ああ、こいつ地獄へ行くゾ、こら、お前ちょっと待て＂と。こない

だ、

死の一例

ある人が亡くなりましてね、ショック喰いました。私、行って見たら、無意識界にいるわけですね。事業やっとするもんですから。ソレーツちゅうわけで、

すぐ行かまして、＂あなた、どうしたんですか＂ちゅうたら、＂私しゃ便所でこんなことになっちゃって＂便所におったままステンと去っちゃったわ

けですね。予告なしですよ。大抵の場合なら、報告があって何日頃死にますと、あるんですがね。元気なもんだから、こっちは元気だと思ってい

た。朝になったら、電話来まして、亡くなったちゅうから、＂エエーッ＂って、私が、パーッと、もう行きましたところが、無意識界、自分の肉

体から離れて、自分で意識ないわけですね。

＂あなた、どうしました＂

＂私は便所にいる間は、わかったけれども、後はわかんなくなっちゃった＂

と。しっかりして下さいよ、と。

「あなたはこんなに早く、いくなんて思わなかった」

それでイエス様、イエス・キリスト、＂イエス様、すぐ行って協力してくれ＂って、すぐ魂をゆさぶりましてね。今、修養所におりま

労働組合につるし上げられ、家庭の中から反発されてね。精神的よんどころなく、心悩んでいる時に、そういう一つの死を迎えたわけです。だ

から恐ろしいですね。ですから無常です。人間はいつ、この世を去るかわからないんです。ですから、皆さんの場合も、自分の心は、いつでも準備

体制は整えておかねばいけない。これが私が言う＂一日一生＂ですね。明日、生きとったら又、一生懸命やろう。今、若いからって、わからないん

だから。それで又、なんついうと、しめっぽくなるから、まあまあ、明日生きていることにして頑張るわけです。そうして希望を持ちながらね。そ

うして、死んだ、生きたって区別つけられる人は少いですよ。アー俺は、今、死ぬんだなんてね。そういう人は御立派ですよ。でもG L Aの人達の

一部の人は死ぬことがわかってりゃ、親孝行する人もいます。

死後硬直のこと

或る人は二日前に、もうわかりましてね。＂ワシャもう、あと二日だよ、皆さん、どうも永い間、本当にスマンかったね。本当は、もっともっと、生きた

いんだけれども、どうも、もうだめなんだよ、あと二日のちには、この世をかえるけど、ま、一つ、よろしく頼んまっさ、せっかく家も作ったから、

GLAで、ぜひ使ってください。家内も、さみしいようですし、今度、又、生まれて来た時は、正しく自分を知って行きます。しかし、＂今生は、本当

に楽しくありました、ありがとう御座居ました＂ってかえっていった人、一杯いますよ。硬直なんか、全然しません。生きている時よか、もっとき

れいになっていくわね。これが本当の成仏ですよ。もう、こうやって硬くなるのは、皆んなダメ。

ですから、皆さん、死んだとき見てね、亡くなった人、見て硬くなったら、こりゃ、地獄だなんて思って下さい。その時は、＂ちょっと、あなた、こ

こにおりなさい＂と。あなたは今、この地上界を去るんです。執着を捨てなさい。今、あなたの肉体は滅びるのです。

あなたは今、新しい肉体を持つのです。いつまでも、そんなことをやっとなら、あなたは地獄です。死というのは大変な行事なんですよ。地獄

霊が皆、来ますからね。

モーゼの場合は

モーゼの時など、モーゼの肉体をサタンが欲しくてね。そして引き取りに来たのです。その時にミカエルを中心とした七大天使が、モーゼの死体をか

わしましてね。その死体を渡さなかった。その死体を渡しちゃったら、モーゼが生き返って、サタンになっちゃうんです。それで、皆さん死んだあと、よく

魔よけって言って、刀をあげるでしょう。あれは、そういう習わしなんですよ。

復活されちゃうから、おかしくね、悪霊がおれば、だから、そのように教えて、それが本当の引導ですね。

ところが、最近のお坊さんなんか、＂なんで、あの世なんかあるものか＂ってね。現に、僕んここに言って来ている大僧正ちゅうのがいるからね。そい

で檀家を何百軒も、何百人も持っていて、＂あの世なんか、あるもんか、GLAでいっているのなんか、ありゃ氣違いだ＂なんてね。その内に、お灸す

えに行こうと思ってるんですがね。（笑）

GLAのお坊さんとこ大分、いじめているからね。皆んなの前でやっつけられるもんですからね。毎日新聞にもだいぶ出ました。あの世なんかなくて

ね、引導渡しとったら、詐欺じゃないですか、あの世なんかなかったらねえ、お経なんか、あげるこたあ、ねえじゃないですか、だけど、ま、こりゃ商売

だからって、言っているっていうから、ま、その内にお灸すえに行きます。

あの世があることを教えにね。又、その檀家からも、G L Aへだいたい来ているわけです。不思議なもんですね、これは。それも、ま、なかなか悪党坊

主ですよ。でも、私が出たら、一番恐ろしいんじゃないでしょうかね。そういうもので、皆さん、心が大事なのです。肉体からサーッと離れると、

地獄へなんか、行きませんしね。そこで、又、ここで、こんど地獄の話になりましたから。神様が出てくる人がおりますから。そこで、

「ちょっと出て来て下さい」

四十代の細面の女の人が登壇する。

「あなたが何か信仰しているの」...大権現というのを拝んでいた訳ね、家で。」

そして、霊道現証の時間へとは行っていった。

信次師昇天の直前のこと

信次師は、ひと月以上前から、リングル注射のみで生きていた。にもかかわらず、東北の研修会には、家族、側近が懸命に止めるのを聞き入れ

ず『行かねばならぬ』と無理を押し参加した。そして、各一時間ずつ講演をした。渡辺氏は、こう書いている。

「特に、この時の『新復活』というご講演は、獅子吼とはこのことをいうのだなああと心に思ったほどの渾身のエネルギーをふりしぼった大講演で、

後にも先にも、このような場面にふれたことは、この時だけだと思っている。ことに、最後の十分間ほどは先生がこのまま光のエネルギーに昇華さ

れてしまうのではないかと思われるほどの迫力だった。汗は金となり、それが照明でキラキラ輝く。特に右側の頬に大きく金の塊が生じているらし

く、口の動き、頬の動きに応じて、ダイヤモンドのように光り輝いて見えたのが印象的でした。終わってから、講師一同が先生のお部屋にご挨拶にあ

がった時、右頬についていた金の塊を取って見たら、『Lの字になっていましたよ』とおっしゃった」と。

そして、昇天直前のある日のこと 園頭師に、信次師の本を勧め、正法帰依のきっかけをつけたK氏は、こう話す。

「私が、六月のはじめ、自宅の前まで帰って来た時、一人のやせた青年が『Kさん』というのです。誰かと思ったら、高橋先生でした。

『先生はどちらへ』

『病院へ行っての帰りです』

『どうぞ、おあがり下さい。お茶でも』

先生は、私の家に一時間半位いらっしゃいましたが、『Kさん、こんなに肉体を酷使するんじゃないかった』と

いって涙をためていらっしやいま

した」、と。

Kさんは、「高橋先生が、私に気持ちを伝えておけば、懇意にする釈迦第一の弟子といわれた舍利弗・園頭氏に、伝えてくれる。それで、わざわざ、自宅の反对方角の私の家へ。これしか考えられません」と話す。

一九七六年六月二十五日、信次師は昇天された

堀田和成氏「死の四カ月ほど前、釈迦に説法とは思いましたが、折に触れて休養なさるようおすすめしました。そんな時先生は、「わかっていま

す。私の体は私がいちばんよく知っている。だが、やるべきことをやらねば私の役目が果たせなくなってしまう。私はただ、やるだけなのです」と

言われます。先生は死を覚悟されていました。残された時間をいかに有効に使うか、それだけがお心を支配していたようであります。「先生のお気

持ちはお察しします。しかし、細く長くという言葉もあります。今のお体には休息がいちばんと思います。ゆっくりと体をお休めになってくださ

い」私は、先生に繰り返しそう申し上げました。 中略

しかし、時すでに遅く、六月二十五日午前十一時二十八分、ご家族の方の見守られるなかで、その短い生涯を終えられるのでした。」

奥様の 高橋一栄氏

「『さあ、起こしてくれ。上衣を出してくれ。私は行かねばならない。みんなが待っている』主人は、床の中で、そう私に叫び続けます。自分の体が自由

にならないのに、気持ちだけは明日に迫った関西講演に、早や心は飛んでいるようでした。 中略

しかし、主人はもう何日も物を食べていません。それどころか東北講演・・・・・・後略。

次に、一九七六年（昭和五十一年）五月十三日の東京小金井G L A道場での高橋信次先生の講演を上げる

Home

「太陽系霊団について」

... 九〇%の魂、善我なる心は、絶対に自分に嘘つけないということです。だから自分に忠実、忠実なものが真実。まあ人間は、やはり

この地球上に出てしまいますと、最もこの不安定な、靈的に波動の荒い光の粗悪な肉体に我々は乗ってしまうと、その粗悪な分だけ本当の人間の魂

というものは分からなくなります。ですから皆さん、こうやって体はそれぞれ個性を持っているけれども、で、自分の顔を鏡で見ておっても、本当の自分

を見た人は一人もいません。本当の自分を見ることの出来るのは、心を完全にピュア（pure）にしない限りは見られません。

丁度、私は一昨日、先一昨日とタベと、天上界で会議がありまして、丁度こういう、これとはちょっと違いますが、丁度このくらいの大きな大理石のよ

うな机で、みんな腰掛けまして、私はここに座って、で、イエスキリストといわれる方、インマネルという人、インマネルはここに座って、その隣がカンタ

ーレ。カンターレといって、これはお釈迦様ですね。それからこちらの方ではモーセ、それからミカエル、それからパヌエル、それからガブリエル。

で、やっぱり十人、そして主として今度、地球上の問題についての打合せがありまして、そのそういった夫々の天使の役割がありまして、七人の天使

というの皆さん、聞いたことがありますね、七大天使。

で、七大天使というのは、どうして七人の天使か、知らないでしょう。七大天使というのは、宇宙ですね、宇宙から考えまして、... え

一、黄色の白墨（チョーク）ありますか。（男性）ちょっと見てみます。

（高橋先生）黄色い白墨ありますか。

（女性）黄色は、前へ、向こうの封をしてない...。

（信次先生）ないですか。

（女性）調べてみます。

えー、神の光が、このように宇宙の、神の光ですね。この神の光は、もう真っ暗を想像して頂ければ結構ですが、神の光が一つスッパッ

と入っております。

これが、あのエルランティーという光の大指導霊がおります。このエルランティーという人の、大々天使の所へ、天使というよりか光の

大指導霊のところへ入っております。そしてこの光の玉から、それぞれの、ここから発散されます。これが全部の色で七色出ておりま

す。七色です。そしてこれがこんど、更に集約されまして、こういうように集約されて、で、このところに、もう一人の大天使がおりま

す。これがミカエルといわれる大天使です。

これは七色ですね。それからさらに、で、この光は、あのゴールド・カラー（金色）です。ゴールド・カラーです。このミカエルという

大天使の所からスリットのようなのがあります。一、二、三、四、五、六、で、これからまた方向を変えて、六つになっております。

それから今度は下がって、このスリットを通して下がってきているのが、こうなっております、そのスリットから出ている一番この、

こちら側にあるのがラファエルです、ラファエル。それからその次がウリエル、その次がパヌエル、その次が...、これがガブリエル、ガ

ブリエルです。ラグエル、サリエル、こういうようになっております。

で、実は、これが神からの直接の直、直系といいます。力の直系です。これは、ただし太陽界です、

L（エル）は神の光

太陽界。力の直系。そしてこの下に、こんど、菩薩がみんないる訳ですね。

ラファエル、ラファ・エル、“エル”みんな付いていますね、こうやって。このエル、このエルというのは神の光ということです。神

と一緒にということです。

そうしてエルランティーの光の分霊として、今度は肉体の光の分霊として、ここに三人おります。これがメシアです。

メシヤのこと

この方はモーセ。

で、この方はカンターレ、カンターレです。

で、この方はアガチャーです。

この方達は、かつてこの地球上に肉体を持っているメシア達です。

アガチャーはインマニエル・イエス・キリスト。

カンターレはゴータマ・ブッタ（釈迦）。

モーセはモーゼです。これは光の分霊です。そしてこれが皆さん自身が、神とつながっているところの霊子線です。

霊子線、これから地球上、何百億の人間、他の天体との関連が全部行きあがって上っております。この下に全部ある訳です。

ですから、こちらの光の量と、こちらは段々薄くなっていきます。

それですからこのエルランティーは、かつてモーセが出た当時も、カンターレ、ゴータマ・ブッタが出たときも、アガチャー、即ちイエ

スキリストが出た時も、みんな天上の世界に於いて指示を与えております。

そのつど、ミカエルはその責任をストレートで果して、そしてこのガブリエルは、常に伝達を専門にしております。伝達係です。

そしてそれぞれ七天使の役割は、医学、政治、経済、律法、それからそれぞれ自治関係から、そうして芸術、文芸関係、担当がありま

す。

特にラファエルというのはラファエロとして、中世のルネサンスの当時に絵かきとして肉体を持たれました。

これは七天使の一人です。

彼は知らない内に自分の名前を使っていた訳です。

そしてこのラファエルは、彼は言葉よりか、絵で全部、天上界の仕組みを、この地上界の人々に教える使命を持って出たんです。

真の地湧の菩薩とは

で、これは丁度、我は七色の光を持つ天使なり、というのは、地より湧き出でて天に帰らんというのは、お母さんの腹の中へ、この地球

上のお母さんのお腹の中から一旦、出て、それからやがて天に帰るといふ、それを地湧の菩薩といひます。

地から湧き出る地湧の菩薩といひます。

で、現在、サリエル、それからパヌエル、この人達は主として、報道関係、政治関係、世界人類に出ている天使達の指導に当たっており

ます。

真のメシヤ生誕

そして天上界といつても太陽界ですが、宇宙に数人の真のメシヤがいます。

真のメシヤというのは、地球の周期は三百六十五日と四分の一です。

ですから約三十六億五千年近くの周期で（付記、三億六千五百年？）、この地球上に肉体を持って出てきます。

その時は他の天体にも同じように。

今度は宇宙界というのがありまして、この宇宙界からでてきております。

宇宙界には七人の真のメシヤがおります。それは神とストレートで直系しております。大宇宙大神霊と直系しております。

そしてこの七人は全て転生から解脱しております。転生から解脱しているということは、例え肉体を持っておつても、自由自在に天上の

世界に行っておりますから、生と死というものは全て超越しております。

既にM 3 7の惑星にメシヤは降臨して、今から十五日くらい前に悟られました。それはエルランティーの友達です。同じ仲間です。宇宙

に七人、現在でておりますが、M37が悟られました。

で、これは全て、今現在は、ミカエルや、カンターレや、アガシャーや、モーセ達が、太陽界の軌道修正コントロールセンターというの

があります。

それが、太陽界の心臓部です。そこに伝達がありました。

M37、真のメシア降臨し、既に悟られました。

我々の太陽系グループは、最初は地球から数光年離れておりますところのベータ星、ベータ星から脱出しました。

ベータ星は全て調和され、そして神の体である地球の、細胞の一つであるこの地球という環境を神より与えられ、緑青く、調和された環

境を神より与えられ、一つの円盤に乗りまして、地球上の最初の場所である現在のナイル渓谷の東側のエルカンタラという所に降下しま

した。そこに私達はエデンの園を造りました。

第二艇団は、それから後に約六千人の宇宙船母船を通して、ベータ星より地球上に全部に到達しました。それがエデンの園です。

その当時の人間は、みんな心が非常に美しかった為に、自分の肉体と魂は、いつでも分離して天上の世界へ行かれました。

それは執着というものが一切ありません。そして我々の見るこの五感は、全ての煩悩であるということを知っておりました。そのために

人を信じ、お互いに協力体制の敷かれたユートピアだったのです。そのままベータ星のユートピアを持ち込んできたのです。

ところが後に来た、第二艇団で来た六千人の中から、自分の子孫ができるに従って、所有権を主張し、自分の生活の場を確保するように

なったときから、徐々に彼らは、肉体と魂の分離ができなくなりました。

そのために、研修道場ですね。ここは違います。もっと自然の中で、お前達、一部分はこの場所で生活して、すべて自分の間違いを

反省しなさいとミカエル大天使に言われました。 そのために彼らは、そのエデンの園から、自分の魂を修正し、考え方、行うこと

の修正の為に、他の場所に移したんですが、それから彼らは音信不通になり、天上界の世界と交信を断ってしまいました。

それから約二百年くらい過ぎたあと、我々はすべてまた天上の世界に帰りました。それが地球上の天上界の創世紀です。地球天上界の創

世紀です。

ですから今から三億六千数百年前です。地球上の天上界の創世紀です。

ルシフェル・サタンのこと

そこで天上界に残っている天使の一人に、ルシフェルという男がおります。

これはガブリエルの系統の人です。

しかも、ミカエルから直接指導を受けた人です。天使です。

これを別のエデンの園から離れた一部分のグループ、それが相当人数が増えておりますので、その人達を修正させる為に、彼は地上界に

肉体を持ちました。それがサタンという名前です。サタン、ルシフェルという天上界の光の天使です。それがエデンの園から離れたグル

ープの中で生活しているうちに、彼も、物に溺れ、情欲に溺れ、自ら天使の道を閉ざしてしまい、彼は地獄界に落ちてしまったのです。

その結果、いま我々が住んでいる所の地球上は、天上の世界を頂点とし、宇宙界を頂点とし、そしていつのまにか、こちらの世界に逆三

角形のピラミッドが吹きあがってしまいました。

こちらの世界が地獄界です。逆三角形の世界が出来上がりました。この世界は自らそこに住む人々の心の不調和により、神の光を遮って

しまいました。

これは地球上です。地上界、現象の世界。そしてその頂点にいるのがサタンです。

こちらの頂点にいるのは神です。そして正法というものが伝わっていくに従って、地獄の低辺から悟らせるためには、地上界を縁として

地獄に墮ちているために、地球上の人の心が調和されていかなければ、地獄は救われません。

自分の肉体先祖が地獄に墮ちている場合は、家庭の家族がみんな心をつにして、正法の生活をするることによって、信の薄い人達は、生

きている自分の子孫の姿を見て悟ります。そしてやがて天上界に、自分自身の幽界という所へ行きます。

さらにまた地獄の連中は、その下の連中が、こちらの上の仲間達が、いつの間にかいなくなっていく姿を見て、これはおかしいぞ、俺達

の考え方、違うのじゃないかということから、やがてこの連中も天上界へ帰ります。そしてさらにその下の方の連中も、どうも最近、上

の方に誰もいなくなっちゃったぞとって、この連中も見て、ああ、これはあかんぞ、俺達はおかしいじゃないかと、また天上界へ上が

ります。

こういきまして、やがて地球上の調和がとれますのを見ますと、地獄はなくなってしまう。ルシフェル・サタンはやがて救われま

す。彼は偉大なる能力を持ち、知恵を持ち、それだけの力を持った光の天使だったのです。しかし彼は今、既に人間とは違った肉体を持

っております。彼の体は動物も動物、想像もつかないような姿になっております。ルシフェルも私の所へ、たびたび姿を見せます。

しかしやがて、彼も救われる時がまいります。それには地球上自身が、そのように正法というものによって、その人々の真の生きる道を

悟らない限りは、道は開かれてはいきません。

そうして我々の世界というのは、皆さんが自分の肉体というものを見て、その肉体はあくまでも光の部分であり、光の最も粗悪な集団固

体化されたもので、本来は進化する過程のものにしか過ぎないのです。皆さん自身の魂は、すべて光です。しかし肉体の舟に乗って、こ

の現象界に出てしまいますと、どんなに出しても十%しか表面に出ておりません。

そして皆さんの九十%は、みんな天上の世界に意識はコンタクトされております。例え地獄で、何億年おろうとも、彼がその死を悟った

時、いつの日かまた天上界に戻って来ます。

天上界の上段階の天使の年齢は

こうしてサリエルも、ガブリエルも、ミカエルも、ウリエルも、或いはまたラファエルも、パヌエルも、殆んどこれらは、魂の兄弟は男

三人・女三人のグループであります。

そして地球上に出てきた時は、一挙に、皆さんは擦りガラス、この透明のガラスを六枚を合わしたってガラスの方は前と同じです。合わ

しても全く同じ。

縦にしても、横にしても、光の量は変わらないのと同じように、魂が浄化された六人の兄弟達は、一つになることもできます。

その為に天上の世界においては、この人達はみんな若いのです。二十七~二十八才から二十五~二十六才です。ミカエルが三十才くらいで

す。

そして顔は非常に男ともつかない、女ともつかない、非常にみんな優しい顔をしております。ですから若いからと思ってバカにしたら、

とんでもない力を持っております。私が現実は何回も天上界で打合せをしておるんですが、一番年寄りです。ショック起こしちゃいます

ね、

こっちは若いつもりでおるのに。そしたら最近、頭を刈ったら、

「主は幾らか年がお若く見えます」、

なんて冷かされる。

で、こういうようにして、真の直系というのが、こういう魂の仕組みになって、勿論この下には、水や、火や、空気や、植物や、その担

当は全部あります。

共産圏、特にソ連は

そして共産国は特にソビエトは非常に人間の心が粗悪になっております。物凄い武力を、今、彼らは大衆を犠牲にしてやっている為に、

食糧問題はどんどん窮屈になっていきます。

そして現に餓死者が相当出ている為に、一昨日の晩は、この問題について討議をし、雨は降らないんです。そしてこれ以上やると、もっ

と善意な人まで犠牲が出るということで、少し食糧を、まあ獲れるようにしようじゃないかという事でやっております。それから今、海

流を変えつつあります。北極の方で魚、獲ろうとしても段々獲れなくなります。そのようにして、今は準備体制を整えている最中です。

ですから本当に皆さんが、自分の心を綺麗にして、えー、天上界はそれぞれ器があります。人それぞれによつて、永い転生輪廻の中の器

がありますから、器を大きく見せるじゃなくて、自分の器なりに一杯愛の水を満たすことが大事です。

自分の心の中に、今の自分の心が一番大事なものですから、それ故に自分の器を大きくするよりか、今の器を大事にすることです。

物理学の新しい法則に、今すでに、現在・未来、過去・現在・未来は一点なり、一つの点にしか過ぎないということを知っています

るでしょう。過去・現在・未来は、本来はありません。

時間と空間は不確定

今の皆さんの集約された今の姿が、過去・現在・未来を全て集約しております。皆さんの心の中をオープンすれば、何億年も先のことを

みんな記録されております。今即座に思い出すことも出来ます。ですから我々の時間と空間は不確定です。物理学になりますけれども

ね。時間と空間は、人間が生活の一つの車輪として作り出したに過ぎません。

時間と空間は不確定である。不確定原理ですね。ですから過去・現在・未来が1点である以上、時間と空間は人間自身の作り出したもの

であって、こんなものは当てになりません。ですから皆さんの魂は、年をとらないという事を知ってほしいです。

魂は年をとらない

肉体は年をとります。形あるものは全て無常です。肉体の船頭さんである魂は年はとりません。我々はその舟

の、最も不安定な、目や、

耳や、鼻や、口の五感・煩悩に翻弄されて、いつも奢っております。ところが真の肉体を支配しているところの皆さんの魂は、偉大なる

ものです。それを自覚した時に、今、私の言っていることが解ります。過去・現在・未来は一点です。

エルランティはヤハベ、バフラマン（梵天）、エホバ、アラー

我々がかって今から三千五百有余年前、モーセをエジプトの地からシナイ半島を通しカナンの地に導いたのは、エルランティー、ヤハベ

です。ヤハベ。汝、近隣を愛せよ。汝をエジプトの地より神の地に導きしはヤハベなり。宇宙すべて、土から天から水に至るまで、一切

の偶像を祀り祈るなかれ。我れヤハベの法を信じよ。このヤハベはエルランティーです。カンターレ、ゴードマ・ブッタがインドの地に

生まれた時に、バフラマンとして、梵天として彼の前に立った事もあります。或はまたアガシャー、イエスキリストの時に、エホバと

してその前に姿を現わしました、エホバ。更にまたマホメットが道を説く時に、ガブリエルが指導霊とし、その当時は、エルランティー

はアラーといいました。このアラーが、アラーとして人々に道を説いた当時は、光の玉になって、色々人々の前に立って声を出しました。

そしてその当時、マホメットの当時は、中国に芳玉林ほうぎょくりん”という女性が出ております。芳玉林は後に宝珠を戴きます。天上

の世界に帰って、宝珠というものを戴きます。

宝珠（ほうじゅ）、これを宝珠輪といいます。

そしていつ何の時でも、意のままになるという所から、この方は如意、このりん（輪）をとりまして如意輪、如意輪観音とも呼ばれた方

です。

丁度、六世紀の時代です。それはミカエルの分身です。その為にミカエルはマホメットの指導は出来ませんでした。その為にガブリエル

が主として、その方の指導をしました。

或はまた、過去に於いてモーゼの教えが化石化するに従って、エチゼン、（越前、エリヤ？）とか、或はまた多くの天使達、ガブリエル

の系統の天使をこの地上界に送り、今、私が書いている“甦った聖書の原点”というのを書いておりますが、それは当時の模様を今、書

いております。そして色々な事実というものが、浮き彫りにされてまいりました。

で、カンターレであるゴードマ・ブッタは、霊的な力はあまり出させなかったのです。彼には神理を説かしたのです。人間としての生き

る方法、勿論、イエスキリストも同じです。一番力を出して、現象を出したのはモーセです。

エリヤのこと

それから、今から二千八百七十三年前は、エリヤという人を出しました。イスラエルの東北部の寒村に農夫の子供としてエリヤを送りま

した。これは全てヤハベが送ったのです。そしてモーセの教えが、いつの日か化石化され、バールの神というものを主体として拝むよう

になった為に、多くの人々は犠牲者が出てまいりました。

汝、偶像を祀って祈るなかれ。その真実のものは失われ、いつの間にか間違った教えに変わっていった為に、エリヤを出して修正を、宗

教改革をやらせます。これは今から二千八百七十三年前です。

マーチン・ルッター、カルビンのこと

またイエスキリストの神理が中世以降において問題が起こり始め、そのためにマーチン・ルッテルを出しました。フランスにカルビンを

出しました。カルビンはガブリエルです。マーチン・ルッターはミカエルの魂の系列です。

こうして直系の光の、力の直系は、殆んど神理を地上界の人間が間違えを犯していく時に、その修正の為に出ていくのです。

そうしてゴードマ・ブッタにしても、モーセにしても、アガシャーにしても、地球上に於いて既に数回の大きな天変地変を経験しており

ます。そして今、我々は、地球上に最終ユートピアを築くために、私達は肉体を持っている。

特に日本人として生まれてきているところの多くの人々は、天上の世界から選ばれた民であるということを知らなくてははいけません。ア

ガシャーのことイエスキリストの時代、イスラエルの地に生まれた光の天使達が、また皆さんが日本人として同じ魂が今、生まれている

んだということを知って下さい。

日本の一部の教祖は地獄界

私が出る前に、多くの光の天使達が日本に生まれました。

彼らは殆んど教祖になって、この世を去りました。そして一部分の人は地獄に墮つちやっております。そして真の道を説いた人はおりま

せん。

そして今、我々はキリスト教、仏教、ユダヤ教、回教、この四つのものを一つの真実のものに返すヤハベの教えに、真のエルランティー

の教えに返す為に肉体を持っております。そしてあと五年後は、相当大きな現象が現れていきます。十年後には多くの人々が正法に目覚

めてまいります。

光が一番多く出ている日本

現在、地球上を見ると、日本から出ている光が一番多く出ております。その次はアメリカです。それから西ドイツが多く出ております。

イタリーも一部分出ております。ギリシアも出ております。

アルバニア、中華人民共和国、ソビエト、北朝鮮、これは殆んど出ておりません。その為に彼らの国は、食糧は不足して、どんどん不足

してゆきます。そしてお金はありません。自由諸国のお金を引っ掛けようとしております。そのうちに皆さん、新聞で知るでしょう。そ

して彼らはやがて自滅してゆきます。

中華人民共和国は毛沢東（1893～1976）がこの世を去った時、一年以内に混乱を引き起こします。そのときソビエトからの武力介入があ

ります。

アシュラはアシュラ同志で闘います。

毛沢東、周恩来のこと

しかし毛沢東は心は綺麗です。周恩来（1898～1976）も心は綺麗です。私欲はありません。人民の為を思ってやった人達です。彼らは一

旦、地獄へ堕ちますが、天上界へ帰ります。

そうして今、地球上で最も占拠されている、サタンの占拠されている分野はソビエトです。過日、ミカエルの報告によれば、ソビエト連

邦には強力な原子爆弾、水素爆弾の設備があるようです。

いかなる爆弾も不発に終わる

そして一発で地球が吹っ飛ぶだけの力を持っているもの、幾つも世界中に、彼らの領地に据けているそうです。しかし心配する必要はあ

りません。彼らはそれに対して引金を引けないように、みんななってしまう。仮に今それも天上界の神界（付記、如来界、菩薩界、

神界というように、神が人間に求める心の段階という意味の神界）で研究しております。やがてそういうものが未然に発覚されて、例え

それをコントロールしようとしても、出来なくなるものが発明されます。ですから心配はいりません。

アメリカは心がありますが、物に溺れている人達が非常に多い国です。その為に我々の神理がアメリカに大きく広がっていた時、彼らは

もっと本当の文明が発達していきます。日本も同じです。

日本はあと二百年間文明は栄えます。そして今の文明は虚飾の文明であって、真のものではないということです。心というものを知り、

人間性の価値に芽生えた時に真実の文明は発達してゆきます。そしてあと二十年ぐらいの間に、神理を知る人達が多く日本に集まってき

ます。そしてやがて人類は、闘争と破壊の愚かさを知っていきます。

エルランティである高橋先生は、アラー、ヤハベとして調和させる

そして私達はやがて中近東に行き、大きな奇跡を現し始めます。その結果、彼ら自身は真の神の実態を悟るでしょう。それはもっと先に

なります。その時は、回教徒はアラーを眼の前で見てしまいます。その為に問答無用です。その時すべて彼らは調和されていきます。そ

してキリスト教も回教も、根本はヤハベの教えであったという事に気が付くのです。そして宗教戦争は無くなっていきます。

そして今からアメリカ、イギリスに既に天使達が出ております。彼らが気が付けば名乗り上げます。イエスキリストの、即ちアガチャー

系の偉大な魂達です。四大天使の直轄の部下達です。菩薩です。これはやがて気が付きます。今アメリカのフロリダにも出ております。

フロリダに出ているのは、イエスキリストの当時の十二使徒の一人です。それからマタイがイギリスに出ております。彼もやがて気が付

きます。まだ年が若いです。

聖徳太子、三代將軍家光は七大天使の一人

そしてパヌエルは日本に生まれたことがあります。聖徳太子(574~622)として生まれました。ラグエルも日本に生まれました。三代將

軍家光です。彼は徳川家康の間違った政策を根本的に改良する為に出ました。大天使達は故意的に日本にも生まれております。ですから

日本語も結構うまいです。候文ですけど。

まあこのように、真の直系、太陽系の真の直系は、このようになっております。ですから、光の量の区域なりと、「心行」にあります

ね。ここから出ているんです。心の広さは光の量の区域なりというのは、ここから出ている訳です。このスリットというのも、三段にな

っていて天上界にあります。

これが霊子線ですから、ですから地球上一人一人のものの考えていること、心は天上界に全部通じております。だから、ごまかしようが

ありません。

こうしてその地球上に出てくると。みんな盲になるから面白いです。それで盲になったのを、もう一回、盲から取り戻す為には、こうや

って自分の心の中の真実を裸にすると、虚栄心、こんなものナンセンスです。人間の心は偉大なるものです。我々は物にとらわれ、情欲

にとらわれ、そして自分自身を苦しめております。愚かしいことです。

いかにお金があろうとも、お金は人生を生きる為の、ただの手段にしか過ぎません。無ければ困ります。しかしそのものの奴隷になって

はいけません。それを利用することです。ですから利用しても、利用されてはいけません。

現在の社会は、利用されているのです。ですから物は利用するものです。それも全て、より豊かな魂をつくり、調和された環境をつくる

一つの手段にしか過ぎないということを知らなくてはなりません。

死の一例

ですから物に溺れてはいけません。皆さんの永遠不滅のものは、皆さんの魂、心だ、思っていることだ。思っていること行っていること、

これが全ての基準だということです。

G L Aのある方が、こないだこの世を去りました。私は全く知りませんでした。普通は守護霊が気にして、大体の人なら予告があるんで

すが、この世を去るに当たって、なぜ去ったか、予定を縮めることは恐ろしいことです。労働組合の突き上げ、今まで腕章をあげなかつ

たのに、ここまで腕章巻いて、労働組合でストライキを始めようとして、社長を吊しあげます。それが一つ。

それから家庭、奥さんや子供さん達がG L Aなんて行っているお父さん、その為に私達は結婚できない。その為に、お父さんがあんなこ

とやっているから、私は良いところへ嫁に行けないというこの二つの問題をお荷物にして、そのまま死んでしまう。

私は直ぐに天上界へ行きますして、そしてアガチャー、イエスキリストにお願いしました。彼は無意識界におりました、一晩。そして魂を

揺すりました。目覚めます。

「私は死にたくないんです」

と言っていました。ところが真実の自分の姿を死体を見たときに、

「もう帰れないんでしょうか。」

「帰れないよ。」

「私は何でこんなことになったんでしょうか。」

「あなたは自分で良くしたが、労働組合のことなんです。もう肩荷を下ろしていいでしょう」、

と捨てちゃったら心が綺麗になっちゃいました。家族の人だけは心配です。家族も犠牲者なんです。見せしめです。

使命のある正法者に立ちはだかることは許されない

そうなりまして、結局、正法の前にはばかれば、例え家族であっても犠牲を出させられます。それは仕方ありません。彼らが気がつく

か、つかないかは知りません。

で、本人は、私はやっと肩荷が下りました。天上界におります。今。それも幽界の丁度、研修道場です。

自分の、こうやって反省日記を書いています。いいことです。今やがて神界に帰ると思います。泣いておりました。彼はイエス様を初め

て見たんです。地球上じゃ話し合っていたけれども、見てない訳です。

私は非常に疑い深いといいましょうか、一人では判断しません。自分で見たそっくりのものを、そのままやっていて、また別の人に、ち

よっとあの人、行って見てこい。その報告が三人同じでなければ信じません。

三人共、全部同じでした。つい自分が科学者なんだもんですから、科学的に結果を出さないと、私自身が信じないもんですから、自分で

出した結論だけで判断をしません。

何人かの人達、地上界のその人達に同じ問題を投げかけて全部レポート出して、そのレポートが三人共、同じなら信じざるを得ないはず

です。

だから飛躍しているように皆さん、思いますけれども、これは真実です。皆さんはともかく、疑ってはいけません。本当のことです真実

です。

そしてまず一番大事なことは、これはただ仕組みであって、皆さん自身の内なる魂を、自分自身以外に修正する道はないということを知

らなきゃいけません。我々はそのヘルパーにしか過ぎません。

そして自分の心の中の歪みを、勇気をもって直したときに、道は開かれるんです。ユートピアの「エデンの園」の時代は、肉体を持って

いながら、天上の世界に自由に行けたんです。

しかし皆さんが、その努力の次第によっては、そこまで行きます。自然と行きます。そして自分が見てきます。自分の肉親を見てこれま

す。

そうしてやる為には、自分の心の中の歪みを直すことです。それには勇気が必要です。智慧が必要です。妥協はいけません。間違ってい

ることは捨てることです。人間ですから間違いを犯します。この中の皆さんをサーッと見ても、色々毒を食べています。それぞれ一杯あ

ります。だからそんなこと愚かしいことです。

観自在者（アポロキティ・シュバラー）の証明

「光が出ていますよ、あなた。ですから本当の裸になりなさいね。だがあなたは独りよがりのところがあるから、気をつけなければいけ

ないよ。分かりますね。あなたは、かつては天使として相当やられた方ですから。あのそういうことは、いいことがあるから、あの、オ

ープン・ザ・ハート（open the heart）にして、心を綺麗にしなければなりませんね。もうちょっとですからね。」

それから、

「隣の方も同じように、若い娘なんですけど、大分、ずっと詰まっています。気をつけて下さい。」

それから、

「次の方は判事だったからね、自分がこうだといったら、もう人のいうことを聞かないでやったタイプ。そうでも相当に心が綺麗で後光

が良く出ています。毛がないからですね。」

ですから、

「お隣の方は、ちょっと精神的に弱い面があります。若い頃から、家庭環境、非常にその面であなたは色々問題を起こしてきている。そ

の為に自分自身でも、どうにもならんこと一杯あります。そして今からどうやって生きていくか、死を考えたこともあります。いけませ

ん。あなたは勇気をもって自分を活かしなさい。神から与えられた慈悲を忘れてはいけません。あなたはそれだけの使命があるんです。

その為、若い頃から親を恨む、使命も恨む、自分と自己いうものばかり主張し、それを直すことが大事です。解りますね。」

まあこうして、自分一人一人の心をしっかり見詰めて、やっていくことですね。そうしてゆけば道は開かれています。一番大事なことは、自分自身の欠点、自分が一番良く知ってるんです。そしてその膿みを切り捨てることです。その為に道は開かれています。勇気をもって取り組む、自分自身の心に真実に忠実であることです。そうすれば自分の心の歪みは除いてゆけます。

法雨のこと

そして今、皆さんが流している涙は、その広い自分の心の歪みを取ってゆき、垢を流しているんです。これを法雨といいます。法の雨と

いいます。

ですから自分の心の中に素直に、肌が出るまで。この世を去ったときに自からを裁く者は、神ではなく己自身の善我なる自分だというこ

とです。

実は。本来は、地獄も、天上界もないのです。生きている人間がこの地上界で作り出してしまったということです実は。

ですから自分自身の心の歪みを皆さんが一人一人払っていったときに、これは大変な革命です。今まで心の中を色々と観る人達はいるけ

れども、それを真に理解できた人は、日本、世界には誰もおりませんG L Aだけです。

それだけに自分の心の中をしっかりと見詰める。そして我々は一人でもいいから、自己を完成する人が一日も早く出ることです。そうすれ

ば周辺はおのずから開かれていくのです。

そして間違いは間違いとして、あやまちに、はばかりはいけません。あやまり、人間なるが故にあやまちを犯すんです。

そのあやまちも自分自身の魂を知る為の学習であるということを知らなければいけません。その学習を無駄にしてはいけない。そして間

違っているところは、自分で勇気をもって取り払い、どのようなことがあろうとも、自分の心が惑わされない自分であること。そして正

しい心の柱を自分が持って、いかにこのような耳であろうとも、こんな耳は大したことありません。この眼でいかに見えたところで大し

たことありません。

皆さんは心の耳を持ち、心の眼を持ち、そして全て生活の中から、法を中心にして生活することが大事です。そのときに初めて真実を知

ることが出来ます。商売をやっている人達もおりますが、皆さんは仕事を根底として正法を活かしておれば、商売は当然繁盛します。そ

れが正法です。私のドル箱こそ、自分の魂をつくるための修行の場であるということを知らなくてはなりません。

今この場所はあくまでも自分自身を完成させるための、一つの、より調和させる方法の場所です。ですから一秒一秒の心と行いの在り方

が、その人の最終的な姿になって行くことを知って欲しいのです。恥ずかしくありません。いつの日かオープン（open）にしなきゃな

らんです。間違っただけもあるでしょう。それにこだわってはいけません。大事なことは、なぜ、どうして間違っただけなのかというその原因

を追求することです。その根を取ることで、その根を取ったら、同じ間違いを犯さないことです。

ですから、原因を追求することです。そうするとそこから、なぜ、どうして出てきた。

ですからもっと簡単に言えば、今でも死んでも悔いが無い人です。死はいつでも訪れて来ます。今死んでも誤りがない、わしはやるだけ

やってきた、どうも皆さん、長い間ご苦労さんでした。私はお先に失礼しますという位いの心の修正が大事です。

それには大変ですね。ですから、こないだ亡くなった方みたいに、ポックリ死んだもんですから、私はどうしたんでしょうかという事に

なるんです。いい加減に言ってるのではありません真実です。

しかし死は恐ろしいものではありません。皆さんは新しい肉体の乗り換えにしか過ぎません。死は人生の卒業式です。天上の世界へ行く

ための準備を、我々は今しているのです。

時間というものは有限です。物質の世界は移り変わります。皆さんの魂の世界は厳然として、永遠不滅であり変わりません。

ですから今の肉に囚われることなく、自分自身をしっかりと見詰めてみて下さい。そして自分に勇気をもって自分自身の欠点、いい所を探

し出してみてください。ここはいいとこだ。これはわしの悪いところだ。

今やっけていて、悪いところばかりやったら、みんな屑だと思っちゃうから、いいところもあるけれど、そして悪いところも。いいところ

も、いいところはどんどん伸ばして、そしてそのいいところは、より自分の魂を豊かにしていく為の ...。

以上は、一九七六（昭和五十一）年五月十三日東京小金井G L A道場での講演筆録である。

「幻の高橋信次先生の遺稿」

浄き者たちへの贈物

自然を讃える

冷たい北風もやみ、チュウリップの若芽が、やわらかい黒土の中から顔をのぞかせていた。

この大自然は、人間に生きる喜びを与えてくれる。

ついこの間までは、土の中で寒さに耐えていた球根も、土壌の中の栄養を吸収し、自然の暖かい陽ざしの恵みにふれると、自力で土壌を

割り、顔を出し、生長を続ける。

そして、ある時には厳しい暴風雨にさらされ、また、ある時にはかんかん照りつける太陽に当たり、その中でも愚痴も何一つということな

く、暑いといって怒ることなく、常に足ることを知り、美しく自然を飾ってくれる。

球根も草木の種子も秋を迎え、土壌の中で寒い冬に耐えて春を待っている。

このようにして、どんな小さな生物でも、生命を持ってこの地上界で輪廻を繰り返して休むことがない。

そし大自然は調和されて存在している。

私の軌跡

私は一九六八年（昭和四十三年）に、大きな靈的現象により、人間としての生きる道を知り、爾来八年、著作（『心の発見』神理篇、科

学篇、現象篇）をはじめとして多くの著書を世に問い、同時に全国各地に講演を続けてきた。

そして、ある時には再起不能といわれた重病人に奇跡を起こし、その数は数えきれない。

勿論、無所得、無報酬といってもよい活動であった。

すでに海を渡り、中華民国、アメリカ、ブラジルにて正法の種は世界に広がりつつある。

天より与えられた生活の場を守る仕事は、コンピューターの周辺機器の受注量が安定しているために、生活はうるおっている。

神の子の道、愛の行為と奉仕

宗教を種に大殿堂や大神殿をつくるために、信者から浄財として不浄な金を集め、教祖やその取巻きが優雅な生活にふけるなど、偽善的

行為は神理、真理、真実を知っている者としてできるものではない。

あまりにも不平等な経済社会の中において、厳しい底辺の生活をしている人々のことを思えば、正法者として当然の道だからである。

神の心の表現である太陽は、いかに熱・光のエネルギーをこの万生万物に与えていても、まったく無所得であろう。

これこそ、真実の大慈悲であるからだ。

この大慈悲に対して、人は愛という行為で奉仕しなければならない。

それが、神の子としての道なのである。

無所得のまま育ててくれた親の愛、人は誰も愛の偉大さを知っている。

この愛に対して、親孝行という報恩の行為がなかったなら、こどもとしての道を誤ることになるろう。

親子の深い縁生の絆を知ったなら、いたずらに親不孝はできないだろう。

西伊豆の旅、長女佳子と

私は、人の生きる道を思索しながら、八年ぶりに西伊豆海岸へ静養に訪れた。

土岐の海岸線を、高速道路から見る景色は新緑の山々も調和して、山水の美をいやが上にも盛り上げ、私たちの眼と心をなごませてくれ

た。

同行した長女佳子は、

「パパ、静かな海ね。

そして、素晴らしい景色。

あたしの心もこのように広く、豊かで、この大自然を包むような、慈

愛に富んでいたなら、もっともっと素晴らしいのにねー」

といて、彼女はためいきをついた。

もう大学二年生である。

二人で旅行したのは初めてであり、私の体を心配してついてきたのである。

同時に父親から何かを学び、自己を確立しようとする気持ちがあった。

「佳子、お前も大分大人になったね。

ものの見方、ものの考え方、判断のしかたが正しいよ。

この大自然の摂理に整然としている。

この景色は、自然のままだ。

本来、人間の歩むべき道も、“諸法無我”といて自然の法則には、人間の偽我即ち知や意が入らないもので、人間の知識と偽我で、仏

教は哲学化されて、一般の人々には理解しにくいものになり、プロの僧侶ですら理解できないほど、むずかしくなってしまった。

インドのゴータマ・ブッダの時代に今のような、むずかしい経典により、無学文盲の衆生を救済できたろうか。

やはり、このように自然に適して、理解しやすく方便をつかって、生きる道を説いている。

法というものには、時代が新しい旧いとかいうことはなく、ガンガーの流れは今も昔もヒマラヤに源を発して、ベンガル湾にそそいでいるのさ。

ヨルダン川の流れも、イエスの時代も今と流れは少しも変わっていない。

人間は、それぞれの生活体験の中から、自分の心を豊かにして、自己を確立してゆく者と、逆に墮落への道を歩む者、また、全く無関心

のまま無意味に人生を過ごす人々とがあるんだよ。

人間の生まれてきた目的や使命、真実の価値観を知らないまま、物質経済の限りない欲望の奴隷になったり、情欲のとりことなり、一

生、足ることを忘れ去って苦しみ、不足のまま、大きな執着という苦悩のお荷物を持って、生きながら地獄の生活を続けて、この世を去

る者たちもいるのだ。」

彼女はうなずいて、聞いていた。

車は予定の宿についた。

都会の雑踏の中で生活している私たち親子にとっては、おいしい空気と美しい自然は、何よりの贈物であった。

浜辺に寄せるさざ波の音が、自然が奏でる音楽のように、私たちの心を洗ってくれた。

翼のある天使の出現

その晩のこと、私の坐っている机の前に、美しい銀色の翼のある天使が、黄金の光を出して立っている。

前もたびたび姿を見せていたが、今日の服装は白絹の長い衣装で、古代人の描く宗教画で見る大天使のそれであった。

金髪で顔立ちはやや細面で、年の頃は三十代の青年の姿である。

私たちの部屋が、また一段と明るくなった。

「パパ。

今、ここに立っておられる翼のある天使を、私もたびたび、家で見ているのよ。

一体、どなたなのかしら」

「そうだね。

私たちに関係のある、天上界からの使いで来ているのでしょうか。

そのうち、わかるようになるでしょう。

ギリシャ時代に出られた、アポロによく似ておられるが、イエス・キリスト様たちに関係された天使じゃないかな」

天使は私たち親子の顔をじっと見ていた。

私たちの心の準備ができていないのだろう、私はそう思った。

ちょうど二年前のこと、彼女の夢枕にアポロがたびたび出てきて、アポロ時代の出来事をおしえておられ、また、ある時には禅定中に三

千数百年前のアポロの神殿に案内された霊的体験をしているために、いま起こって現象を見ても、彼女は冷静であった。

また、天使の体や心から伝わってくる波動が、非常に精妙であり、柔らかい黄金色の光は、私たちの肌になんともいえない安らぎの暖か

さを伝えてくれた。

これと逆に、サタンや仏教でいう悪魔のような悪霊が近づいてくれば、ちょうど静かな池に小石を投げ込んだ時

と同じように、波紋は周

囲に広がってゆく。

これと同じように、不調和な波動によって周囲の雰囲気は崩され、心の中がざわめき、他人を中傷したくなり、怨みの心が生じ、嫉み、

そして、怒り、情欲にかられ、物欲にかられ、段々と自分を失ってしまって、さらに肩が張り、体は硬直して寒くなってくる。

愛のない人々の心の中に入り込んでくるために、正法を悟って生活に生かしている人々にとっては、即座に見分けることができるはず

だ。

光の天使とサタン、悪霊

しかし彼らは心の中に入り込んでくるだけに、入られている本人も気がつかないのである。

人と人との間を中違いさせる巧妙な力を持っていることを知らなくてはならないだろう。

悪霊でも、仏教やキリスト教の真理らしいことを、誠しやかに人の口を通して語ることがあるから、一般の人々は騙されてしまう場合が

多い。

如来、菩薩出現の条件

如来とか菩薩と呼ばれる大天使が人間の口を通し出てきたとしたならば、その人間の人格が悟られた方であるかということを知ること

が、最も大事である。

悟ってもいない人間に、如来や菩薩が肉体を支配して出てくることは絶対にないということを知らなくてはならないだろう。

並四球のラジオに、遠距離の短波を受信する能力はない。

また、小さな器に、大きな器の水を入れることはできないように、心の世界も同じだということだ。

霊の世界を、自由に見れて、聞こえて話せなかったならば、軽々しくあつかったり、鵜呑みにすることは危険である。

このようにいう理由は、あまりにも今は悪霊が多いからである。

光の天使

光の天使たちは、盲目のまま人生を送っている人間に対して、慈愛を持って守り、人間としての正しい生き方を教えるものである。

不可能な約束は絶対にしないだろう。

あたかも両親が愛する我が子に接するように、我が子が幸福な人生を送ることを願うように、

願うことが彼らの希望であるということだ。

動物霊、悪霊

動物霊や悪霊たちは、自己主張が強く、威張り、いうことがころころ変わってゆく。

約束を、いとも簡単に破ってしまう。

各宗教の教祖に多いタイプである。

そして強欲である。全く足ることを忘れ去り、自我我欲を欲しいままにし、疑い深い性格を持っていよう。

このような指導者に気をつけることだ。

もっともらしいことをいうが、都合が悪ければ、いつでも言葉巧みにいい逃れをするであろう。

このように、次元の異なった世界は複雑で、この世界から見れば不可思議に見える世界だ。

否、私たちの五官そのものが不確実なのであるといえよう。

悪霊から、自分を守るためには、常に正道を歩み、愛の心で自らを防護する以外にはないということだ。

私は、休養しながら、人間として正しい生き方について思索し、父娘の対話の中で、自然のうちに、彼女の心の中に神理が浸透し、彼女

の心の中が、浄化されてゆくのを見た。

そして、訪れてくる天使たちの姿も多くなっていった。

天使たちは、私たちの心の準備ができるのを待っているのであった。

それから二週間が過ぎた。

Home

紀州白浜の研修会

研修会に臨んで

一九七六年三月二十一日のこと。

紀州白浜海岸において、関西地区の一般研修会が、三楽荘で二泊三日行われた。

昨夜は大阪の都ホテルで、大阪黒田知事と夕食をともにし、私の著書の読者の一人として対談した。

同宿した東京の講師団とともに研修会場三楽荘に向かった。

七百人の研修生は、各班に分かれ、先発した講師の指示に従っていた。

紀州南海の夕陽は、海を赤く染め、私たちを迎えてくれた。

宿舎には、婦人部から二名の方が、私の部屋当番として、私と娘の世話を下さっている。

親切にして下さる二名の奉仕者に、心の中で感謝をいった。

娘の体からは、美しい金色の光が出て大きく体を包んでいる。

彼女の心も、丸く大きく豊かになっている。

私は、うれしかった。

学期休みの期間に、何とか心の歪み正そうと思い、長所や欠点について語り合った。

正しい法のあり方、生活の仕方、ものの考え方について、彼女は理解したことを実証している。

あの美しい後光が、丸い心の姿がそれを示している。

あの丸い太陽と同じように、私たちの心も丸く大きく豊かでなくてはいけないのである。

しかし、多くの人々は、心には形などはないものと思って、自分勝手なことをかんがえたり、行ったりすると
いうことは、心に歪みを

つくり出してしまうということに気がつかないのである。

歪みが大きければ大きいほど、心の中にスモッグをつくり、苦悩を背負うのだということを忘れてはならないの
である。

心の構造

この心の中に、感情の領域、本能の領域、智性の領域、理性の領域、中心には神と同通する想念の領域、と大別
されて存在しているので

ある。

感情的になると、感情の領域は大きくふくらみ、理性の領域は逆にちぢんでしまう。

これで果たして正しく判断ができるだろうか。

本能の領域と、感情の領域がふくらんでしまうと、智性と理性の領域がちぢんで、丸い心は、ハート型になって
しまう。

ハート型になってしまうため、正しく判断できなくなってしまうのだといえよう。

恋愛中の恋人同士のように、あばたも笑くぼに見えてしまうのも、心の歪みがつくり出す現象といえよう。

このような、ハート型の心になっていると、体からピンクの光が出ている。

感情的な人々が怒っている時などは、赤い炎のような光が体から出ている。気をつけないと肉体的にも不調和に
なってしまうということ

を知らなくてはならないだろ。

私の部屋には、多くのひかりの天使の姿が黄金色のやわらかい光を出して見えている。

特に過日からたびたび、私の前に姿を現わしている翼のある天使は、長女の側に立っていた。

今日あたりは何かありそうである。そう私は予感がした。

彼女は自らの心をもう一度確認するかのよう、心の歪みを修正している。

天使、高級霊の出現

天使の光と彼女の体から出ている後光が一体となった時、彼女の顔形が天使のそれと二重写しのように変わっていった。

そして彼女の口を通し流調な古代ハム語が流れ出し、私の前にひれ伏してしまった。

彼女の背には、美し翼が見える。

まさしく男性。

言葉遣い、動作は長女ではなかった。

そして大粒の涙とともに、日本語で語り出すのであった。

エル・ランティの自覚

主は目覚め給えり。

偉大なるエル・ランティ様。

我、ようやくにして、念願の eq ¥0(¥s¥up 9(もん),門) に到達せり。

我は主の eq ¥0(¥s¥up 9(しもべ),下僕)、ミカエルなり。

主よ、我を信じ給え。

主がかつて、地上界に肉体を持たれたる前のことなり。

主は我に告げり。

我やがて地上界に肉体を持たん。

地上界の一切は、そなたミカエルにまかせん。

既に法灯、消えて幾久し。厳しき地上界ゆえに多くの苦難あり。

我れ己が使命に目覚めしまで、我が魂をそなたに預けん。

もし目覚めぬときは、我が生命を召すべし。

我が魂を揺(ゆ)するべしと。重大なる責任を我に申され、一度は辞退せしことあり。

なぜならば、我の他、インマニエル・イエスあり、モーゼあり、ゴータマ・ブッダありと。

主に申し上げれば、

汝、ミカエルよ、そなたは「力」の直系なり。汝は、この責任を果すべしと、主は力強く我に申されたり。我、その責任の一端を果たせ

り。無上の喜びなり。主の前途は、光明なりと。

大声をあげて、また、涙であった。

天上界の約束

その瞬間であった。

私の心の中の扉は開かれて、ちょうど私が肉体を持って生まれてくる七十年前、天上界における対話の状景が眼前に展開されたのであっ

た。

私は、思い出した。

肉体舟に乗ってしまうと、人間とは誠に eq ¥o(¥s¥up 9(おろ),愚) かしいもの。

前世の約束事などすっかり忘れ、五官煩悩に翻弄されて、暗中摸索自ら苦悩の道を歩んでしまうのが人間の常である。

人の歩むべき生きる正しい道がわからなくなってしまった末法の世においては、なおさらのことだといえよう。

特に、生まれた環境、教育、思想、習慣の中で、独りよがりな偽りの人生を送り、正しいものの考え方や行動の基準すら、わからぬまま

に、心の中は苦悩のスモッグに満ち溢れ、自らの人生を狂わせてしまいがちなものだ。

物質経済偏重の間違った思想は、闘争と破壊を呼び、社会生活を混乱に落とし込み、同志と呼び合っている仲間同士が、いつ裏切行為に

出るか、その信頼度は誠に不安定なものである。

なぜならば、相互の心の中に、闘争と破壊の不調和な原因が潜んでいる以上、不平不満はどのような現象によって起こってくるかわから

ないからだ。

これでは真実の信頼関係は成立しないだろう。

権力や無力、腕力で一時支配したかにみえても、人間の行動は束縛できても、心の中まで支配することはできないということを、このよ

うな間違った思想家たちには理解できないであろうが。

現代宗教の間違い

また、間違っている宗教は、心まで腐敗させてしまうものだ。

聖書の奴隷、仏典の奴隷、いかに知識があっても、行いが伴わなかったなら、「絵に描いた餅」にしかすぎないということである。

仏教の如きは、肉体先祖の供養にのみ走り、真実のゴータマ・ブツダの教えとは程遠いものになってしまった。

学校教育はこれでよいのか

学校教育は、知識の詰め込み教育で、人間性、情操の教育はおろか、人生の目的と使命すら、理解することはできなくなってしまった。

道徳は頹廃し、利己主義、自己保守のエゴが堂々と罷り通っている世相である。

このような社会の中で、真実の人間として生きる価値を悟ることは、あたかも、広い砂漠の中で、小さなダイヤモンドを探し出すにも似

て、誠に至難な eq ¥0(¥s¥up 9(わざ),業) だといえよう。

道を求める

このような厳しい環境の中で、私は、いかなる思想、いかなる宗教にも偏することなく、十歳の時から今日まで、自然科学を通して人間

の生きる道を探し求めてきた。

そして、その道は、片寄った考え方や行いは、すべて苦悩への道であり、心こそ不変的なものであり、物にとらわれることから自らを解

放し、慈悲、愛による調和された環境をつくる以外に幸福は得られないことを知ることができたのである。

魂の告白

私は、偉大なる天使が、目の前で、慈愛に満ちた言葉で、涙を流して訴えている姿を見た時、心の中はふるえ、込み上げてくる感激の涙

を止めることはできなかった。

「ミカエルよ。

私は永い間、すっかり地上界の泥沼の中に溺れ、見るも無惨なものでした。

永い悪夢から、よく私の魂を揺さぶり覚ましてくれた。

盲目の人生に旅立った私の姿を、いつもはらはらしながら、さぞや心を痛めていたことであろう。

長い年月、誠に不甲斐ない私を、暖かく見守ってきて下さいました。

心から礼を申し上げます。」

私は、言葉にならなかった。

ミカエルはいう

「主は、すでに八年前（一九六八年・昭和四十三年）に自覚せり。

我ら、今日の日を、一日千秋の思いでお待ちせり。

主は、すでにインド時代の、ゴータマ・ブツダの説かれし法は説き終えたり。

主が天上界にいられし時に計画せし通りに遂行中。

主よ、安心せられ給え。

しかし、道は遥かなり。我ら主を信じ、主とともに歩まん。」

主としていう

「ミカエルよ。

厳しい人生航路の修行も、薄氷を踏む思いで、ようやく法の道に辿りつくことができた。

もう安心しておくれ。

私の道は開かれた。

我は、法なり。

我は、道なり。

我は、光なり。

我が道を歩まん。

ミカエルよ、ありがとう。」

私は堰（せき）を切ったように泣き崩れてしまった。

ミカエルも泣いている。長女も泣いていた。

「主は悟られたり。厳しき人生航路の中で、よく耐え給えり。我ら、主を讃えん。」

「ミカエルよ、ありがとう。これからも一所懸命にやって行くよ。」

ガブリ・エルの意識の出現

その時だった。

ミカエルの側に、もう一人の翼のある天使がこられ、

「私は、ガブリ・エル。主が、お気づきになられ、こんなうれしいことはありません。主のご苦勞をよそに、天上界で生活することを、

もったいないと思っております。主よ、お許し下さい。」

「おお、ガブリ・エル。

そなたも、きてくれたのか。永い年月、悟らずに、心配をかけて申し訳なかった。」

ガブリ・エルも、感情を押さえ切ることなく、泣き伏してしまった。

「ガブリ・エルは、主が肉体をお持ちの時からお守りいたしてまいりました。わが師、ミカエル大天使長とともに、日本語を学び、主の

お役に立つ日をお待ちいたして이었습니다。主は初めてこの地上界に肉体をお持ちになられましたため、地上界での経験がありません。

そのため、私たちは心配でした。すでに、今まで、三回近くも死を免れております。お体に気をつけて下さい。ミカエルも、私も、たび

たび、主の近くに姿をお見せいたしておりました。今日の日を、皆楽しみにしておりました、本当にうれしく思います。

インマニエル・イエス様がお生まになる時は、マリヤ様の許へ、受胎告知にミカエルとともに行きましたが、主のお生まれになられる時

も伺ったのでございますが、母君は子どもが多く、生活に追われ、感知することができられなかったようです。

主が九歳の頃、生死の境を幾度もさまよわれたのも、主に気づいていただくために魂を揺すったのです。まことに申し訳ありませんでし

た。苦しみを味あわせましたことまたしたことをお許し下さい。」

ガブリ・エルは、また、泣き出してしまった。

天上界の神秘

「ガブリ・エルよ、

そのために、あの世の存在を知ったのです。

そのために、道を求めたのです。

ミカエルよ。

本当にありがとう。私の目を覚ましていただいて……。

十歳の時から今日まで、一日として神の世界を疑ったことがなかったのも、そなたたちの偉大なる影の協力があつたからです。

心から礼をいいます。

間違った思想や宗教を正しくするため、今後も協力をして欲しい。

私は、そなたたちのくるのを一日千秋の思い出待っておりました。」

「我らの努力、足らざるにより、主に通ずること能わず。

我が罪を許し給え。」

「ミカエルよ、そなたのせいではない。

私の心の曇りがあまりにも多かったため、そなたたちの努力が eq ¥0(¥s¥up 9(みの),実) らなかつただけなんだ。

私の責任です。

今後は、より心と行方を浄化し、自己の確立に努力いたします。」

七天使の名はL（エル）

かつて創世期の頃、ミカエルをはじめとして、七天使は、エル・ランティー自らの名前の頭文字を与えられ、地上界での功績を讃え

られたのであった。

ミカ・エル、ガブリ・エル、ラファ・エル、ルシュ・エルなど、七天使に与えられたエルとは、パワートロンのことであり、神の光の

力である。

サタンのこと

しかし、ルシュ・エルは、その後地上界にサタンという名前で肉体を持った時、神の道を踏みはずし、地獄界に墮ち、自ら地獄の帝王に

なってしまった。

たとえ偉大なる魂であっても、この地上界に生まれてしまうとただの人間であり、肉の舟に乗ってしまうと盲目になってしまうのが常な

のである。

心の価値を忘れ去った時から、神の子としての道を放棄し、自ら苦難な道を歩むことになるのだといえよう。

ミカエルは語る

私たちの感情も納まり、ミカエルは私に語った。

「主よ。

かつて今から三千百五十年くらい前、モーゼは貧しき奴隷の息子として生まれたり。

時のファラオは、サタンに心を売り、モーゼと同じ年齢の子供を殺すことを命ぜり。

モーゼの母は、葦舟に乗せて、我が子を逃せり。

我ら天使は、モーゼを守り、王女に拾われるまで確認し、その成長を見守りたることあり。

また、ゴードマ・ブッダ、インドに生まれし時アシタバ・イシを遣わして、その使命を祝福せり。

悟られし後も、我ら天使はヴァフラマンとして協力せり。

さらに今から2千年くらい前なり、イスラエル・ヴェツレヘムに、インマニエル・イエス・キリストの成長を楽しみたり。

我ら、メシヤの親代わりなり。

あたかも我が子供の如く、我らメシヤの下僕として当然のことなり。

モーゼの教えが年を経て化石化するに従って、インマニエル・イエスの出る前に主は我を地上界に送れり。

我はエリヤという名前でイスラエルに生まれたり。

目的半ばにして、主の命により天国に帰れり。

さらにイエスの教えが化石化され十六世紀にはドイツにマルチン・ルーテル（付記1483 1531）として生まれり。

ガブリ・エルは同時代にフランスにカルビン（付記1509 1563）という名前として肉体を持てり。

エリヤもルーテルも我が魂の分身なり。

我ら天使はマホメットにも主の命により指導せり。

マホメットは、ガブリ・エルが指導霊となり、我れは、中国に生まれし、(ほうぎょくりん芳玉林)こと如意輪観音を

守護指導せり。

彼女は我が魂の分身」なり。

主よ、我ら健在なり。

どうぞ、ご安心なされ給え。

我らは日を選ばず、時を選ばず。

肉体を持ちし者の心の世界に通信し、主と一体となるべきため、その使命を果たすべく、あらゆる方法を取り、霊子線を揺さぶり使命を

知らしめることこそ、我らの使命なり。

主よ、信じて下さい。」

主としていう

「ミカエルよ、

私は残された人生を、しっかりと、やってゆきます。

混乱した地上界の人々の心に、調和と安らぎの光を与えてやっておくれ。

盲目の人々の心に、神の光明を与えてやっておくれ。

私は、道を行じ、道を説いてゆく。

私を信じておくれ。

すでに数十万の人々が正法にふれている。

一日も早くイエスの原点に、ブッダの原点に還すよう、地上界の人々の心に光を送っておくれ。」

ミカ・エル、ルーテル、エリヤ、ガブリ・エル、カルビンの大天使たちが私の言葉を聞いていた。

今から八年前に起こった大きな靈的現象を振りだしにして、正法の道は開かれ、このたびの現象は、さらに私に、正法への自信を深める

とともに、聖書の疑問点が次々と解明される糸口になっていった。

聖書の誤り

今世に生まれて、まったく宗教に縁のない男が、まったく別の角度から、仏教、キリスト教、ユダヤ教、回教の本質を説き明かしてゆく

のであるから不思議である。

これも物質的三次元的発想で考えれば不思議という言葉以外にはないからだ。何故ならば、学ばずして、読まずして、知識を得ることが

出来ないからであろう

しかし、心の中の曇りを除くことによって、三次元的ソース（知識）を必要としない場合もあるということを知らなくてはならない。

特に、聖書や仏典は、永い歴史の過程において、知識のみに溺れ、自己の行いを正すことなくして知識の遊戯に走り、さらに意である偽

我を加えてしまった。

先人の書物の中には、原点よりはるかにかけ離れたものになってしまったと見ても誤りではあるまい。

我々が過去世で学び体験した真実の聖書や仏典には、このように先人の塵や埃によって汚されては、いけないのである。

この汚れない真実の原点を、自らの思念と行為を正法によって正すことによって甦らすことができるということだ。

仏典の修正

仏教の「摩訶般若波羅蜜多心経」という題字があろう。

これはインドの古代語を中国の漢字に当て字しただけなのである。

「マハー・パーニヤ・パラ・ミッタ・ストラー」

直訳すると、「内在された偉大な智慧に到達する心の教え」ということだ。

私たちの心の中には、誰しものが輪廻転生の過程を心の中に記憶しているのが人間の常なのである。

そんな馬鹿げたことがあるものかと、もし思ったなら、そのような人々は自分の思念と行為に偽我の生活があるために理解できないのだ

といえよう。

余ほど無知な人か、独りよがりな強情な人間だといわざるを得ない

知識は実践した時に智慧になる

否定する前に、自己の生活を正して、研究してみることが進歩につながるからだ。私はこの世における学問的知識を否定する者ではな

い。

その得た知識を、生活の中に生かされた時に智慧に変わるということを忘れてはならないだろう。

それは、より人生において、己の魂の学習を豊かにするために最も重要であるからだ。

しかし、人間は、正しいものの考え方正しい生活のあり方に対する基準を知っていなかったならば、無駄な苦勞をし、人生航路での遠路

(廻り道)をするということを覚悟しなくてはならないだろう。

永い転生輪廻の中から、人生における八十年や百年の体験は線香花火のように、一瞬の幻の如き短い時間だと思わなくてはならない。

私たちが過ぎ去った過去を振り返ってみた時、その過去が、果たして永い時間であったろうか。

人生は、誰もが振り返ってみたとき、本当に短かったということに気がつくのである。

それは故に、一日も無駄に過ごしてはならないだろう。

身近な者たちの死を目の前で見た時、その人だけに死があるのではない。

いつの日か、この現実が自分に降りかかってくるということを知らなくてはならないのである。

生と死と

生あるものは誰もがこの現実から逃避することができないということを知らなくてはならない。

いかに地位があろうと、いかに財産があろうと、いかに愛する者がいようと、死はこの世の形あるすべてのものを、その人から奪ってし

まう。

もし財産や地位、名誉に執着を持ったり、子孫のために執着を持って、思い残す心を持ったままこの世を去ったとしたならば、間違いな

く地獄会に堕ちるということを知らなくてはならないだろう。

地獄は、講談やミステリーの世界にだけあるのではなく、この地上界に生存中から続いているのである。

いかに財産家であろうと、名家せであろうと、生まれてきた時には、どんな赤ちゃんでも裸で生まれてきたのであって、びた一文のお金も

持ってはこなかったはずだ。

死ぬ時も同じである。

金やものは、生きている間に必要なものであり、これも足りることを忘れ去った時から、欲望は限りなく外に広がり、心の平安が得られな

くなり、自ら苦惱をつくり出してゆくことになるということに気がつかなくてはならないだろう。

思想の変革

人間は物質経済奴隷になってはならない。

一人ひとりの人間が、人生の何たるかに目覚めたならば、現在のような不平等な経済社会は消滅し、心優先の経済を、より調和された社

会生活を営むための宝石に変えることができるのである。

人間は、価値観を変えなければならない時がきているということだ。

資本主義理論も、唯物共産主義理論も、人間のつくり出した知識であって、知慧の段階には入っていないということだ。

人間同志の信頼関係は物質経済のみによって成り立つものではない。

それ故に、修正資本主義、修正社会主義というように、時代時代に応じて間違った思想は目先を変えてゆくものなのである。

正法とはほとんど懸け離れた知識の段階だということだ。

権力や武力によって間違った思想を人間に押しつけても、本来、人間の心の中には自由に生きる心の領域が存在しているということであ

る。

間違った思想は、いつの日か、大衆の心から遊離し、必ずこの地上界から消滅してゆくということを知るのであろう。

天上界よりの世界の運命の修正

また、間違った思想や宗教を改めるために、天上界よりその使命を持った魂が、この地上界に肉体を持ち、調和された社会をつくるため

に使命を果たして帰る場合が多いのである。

オーギュスト・コント、ハーバード・スペンサー、ヘーゲル、マルクスなど、すべて天上界より調和された社会を造るための使命を持っ

て生まれてきた天使たちであった。

しかし、最も大事な人間の心を忘れ去り、物質経済に重点がおかれた時、彼らの智が真実の道からはずれてしまったのだと、ミカエルは

私にいつている。

また、人類を厳しい階級闘争に追いやり、闘争と破壊の思想を生み出した思想家たちの罪は、自らその責任を果たさなくてはならないと

ということだ。

人間一人の命の広さは、地球の広さよりも広い。宇宙大である。

この生命を、決して他人が奪う権利はないということだ。

いかに物質経済が満たされたからといっても、果たして満たされた人々が、皆幸福だという保証がどこにあるであろうか。

経済的に恵まれている家庭なのに、夫婦は不調和、親子は断絶という例は限りなく世間には存在している。

たとえ経済的に恵まれていなくとも、夫婦がお互いに信頼し合い、親子は助け合って明るい家庭が、限りなく世間には存在している筈

だ。

人間同士、心と心の交流、心の対話が最も必要な条件だといえよう。

よき家柄だという生まれから、虚栄心のまま人生を送る愚かな人もいる。

真実ではない人間の生活ほど、みじめな人生はないということだ。

人間はもっと自分の魂の系列を大事にせねばならない。

肉体の先祖や子孫は、この世限りであり、魂の先祖は、永遠なのである。

自ら正道を歩んで、心を浄化した時、偉大なる魂の兄弟たちや諸先輩の見えない世界で、どれだけ心配をし、どれだけ協力しているか、

ということを経験することができるのである。

先祖供養とは

肉体先祖からは、人生航路の乗り舟をいただいたものであり、生活の環境を与えられたのである。

肉体先祖に対する供養の第一は、まず自分が健康であるということが大事であり、残された子孫が、お互いに仲良く明るい家庭をつくる

ということが最大の供養といえよう。

育てていただいた両親に対しては、その愛に、親孝行という報恩の行為が、最大の供養なのである。

仏壇の前で、お経をあげることが供養だと思っていたら、とんでもない間違いだということだ。

朝晩、線香や灯明、お水をあげることででもない。

残された者たちが、健康で、美しい心で、明るい家庭を築くことが、最高の供養といえよう。

仏教改革

私たちは旧来の陋習を破り、仏教の原点に帰ることだ。

生きている人間がわからぬお経を、死んだ人間にあげてわかる道理があるろうか。

坊さんが、プロとしてお経をあげているが、お経の意味がわかっていたら、おそらく仏壇や仏像、曼陀羅の前で、お経などあげる愚か者

はいないはずだ。

なぜならば、お経の意味を知っていたならば、自らの生活の中に生かして、人生の道を悟っているからだ。

悟れば、あの世、死後の世界、死者がどこにいるかわかってしまうからである。

あの世などは“ない”と公言している僧侶がいるが、それで死者に引導を渡しているのだから、最早、ペテン師である。偽善者という外

はなかるう。引導は葬式における儀式の一つではないということである。盲人（めくら）蛇に怖（お）じずの例えである。

死者に引導を渡す前に、自分に引導を渡すべきだ。一切の執着から離れるための引導を。

葬式から帰ってきた僧侶が体調が悪いのは、自己の確立が不完全であるから、死霊のいたずらだということを知るべきである。

心して、仏道を極める以外に道はないということを知らなくてはならないだろう。

偽善の心を捨てることだ。

その時に道は開かれてゆくのである。

キリスト教改革

また、仏教を eq ¥0(¥s¥up 9(はいせき),排斥) するキリスト教信者や指導者も同じことがいえよう。

インマニエル・イエスは、今のローマ法王のような eq ¥0(¥s¥up 9(きんらんどんす),金襴緞子) は身につけてはいなかったということ

だ。

あんな立派な教会も存在はしていなかったはず。

天上界の上階段では、仏教もキリスト教も、回教もユダヤ教も、一つの神理であり、一人の指導者によって指示されているということ

知らなくてはならないだろう。

モーゼ、イエス、ブッダも、同じ光の大指導霊であるということだ。

サタン・ルシュ・エル姿を現わす

紀州白浜、南海の海に真赤な大きな太陽が沈もうとしている。

水平線から、一艘、二艘、三艘と、白波を蹴って漁船が帰ってくる。

ポンポンポンと、船の音が、港を包む山にこだまする。

サタン・ルシュ・エルの出現

研修会の人々も全員集まったようだ。

その時だった。

ミカエルは、また、姿を現わし、

「主よ、ルシュ、エルがきております。気をつけて下さい・...」

私は一瞬、ルシュ・エルという名前について考えてみた。

「ミカエルよ、そなたの弟子、ルシュ・エル天使のことか。

彼は地上界に生まれた時、確か、サタンと呼ばれた人間であったね。」

「その通りでございます。

主や私の前にはだかろうとしております。十分気をつけて下さい。」

側に坐っていた長女も、

「パパ・...、サタンが近づいているわ。

昨夜、大阪の都ホテルに泊まっていた時に東京からきた講師と、関西からきた講師の心隙を狙っているのよ。」

という。

「私も、昨夜からわかっていたのだ。

今日は講師団を研修することが大事だ。二、三名の人々に注意しても効果はあるまい。

会員、講師団を前列に出して『正法と魔』というテーマで私は講演をしよう。

ミカエルよ、そなたは、佳子の声帯を支配して、天上界の声を聞かせておくれ。

サタンがいかにして、人々の心隙に入り込んで混乱をつくり出すかを、検証して欲しい。」

「はい、わかりました。」

「佳子、あなたは心を正して、ミカエルの意思が自由に通ずるよう、常に浄化しなさい。」

「パパ、わかりました。」

講師団幹部に対する訓戒

私の意思は、即座に、研修会実行委員に連絡されて、全員、会場に集合が終わった。

一番前列に出された講師団は二十数名。

理由もわからぬまま、私の来るのを待っていた。

ざわめいていた会場は、一瞬、水を打ったように静まり返っていった。

しかし、東京からきた女性の講師が一名、会場に姿を現わしてはいない。

私は、至急、その講師を呼びにやった。

彼女は暫くしてから会場にやって来た。

東京の事務局にいる講師と、京都からきた講師は、非常に気分が重いようである。

昨夜から、感情の波が粗悪のまま、私の心に伝わってくる。

「わてはもう、講師はこれを最後にしておきますわ。一步から出直しやす」

彼等が白浜に来る電車の中で語り合っている言葉が、私の胸の中から聞こえてくる。

彼らが、サタンに踊らされている張本人たちなんだ、と思った。

本部の事務局からきた講師は、

「先生は、自分の子供に甘くなってしまった。

すっかり子供の言葉を信じている。恐ろしいことだ。

先生は、サタンに惑わされている。

しかし、先生の説いている法は間違っていない。僕らは法を信じてゆこう。」

他の何人かの東京の講師も、名古屋の講師達も、

「そうだ、俺達は誰を信じていいのかわからない。

法を信ずる以外にはないだろう。

先生は、サタンに惑わされているのだ。俺たちは、法を信じよう・…」

一人ひとりから発信される心の波動は、すべて本末顛倒していた。

正しい法を説いている師を信じないで、なぜ、正法が信じられるのだろうか。

私は悲しかった。

手に取るように、一人ひとりの心の中で思っていることが、わかってしまうからである。私は悲しかった。

このような雰囲気の中で、講演が始まった。

ミカエルの警告

私の話につき、佳子を、会場の皆さまに紹介した。

「天上界の大天使長、ミカ・エルがここにきております。

ただいまからこの女性の体を通して、ミカ・エルに語っていただきます。」

彼女の口を通し、美しい古代ハム語が流れ出した。そして日本語に変わった。

私は七色の翼を持つ天使なり。地より湧き出でて、やがて天に帰らん。私はミカ・エルでございます。

主よ、よくお悟りになられました。私はうれしゅうございます。

主は、今から七十年前のこと、この地上界に体を持って出られりにあたり、私に申されました。

「私はこれから地上界に生命を持つ、私が悟らぬときは、私の魂を揺り動かしてくれ。」

そのために、私は、主が九歳の時から、あの世へと魂をひっぱり上げたのでございます。

私は、今、自分の使命を果しに参りました。主よ、遅くなりましたことをお許し下さい。

ここにいる多くの者たちよ。よく聞きなさい。そなたたちは皆神の子、すべて天上の世界から生まれてきた者たちなのです。

そなたたち、今ここに居る者たちの多くは、ある時にはエジプトに、ある時はギリシャに、またある時はブッダのおられたインドの地

に、また、インマニエル・イエスの生まれたイスラエルに、さらに中国に、そして日本にと、生命をもっておられるのです。

この日本に生まれたということは、すばらしく大変なことなのです。

そなたたちは、その事実を思い出しなさい。その理由は、そなたたちの心の中に記憶されているはずです。

私の言葉は、天上界の天使の言葉であり、それ故に、そなたたちの心の奥ゆきまでしみ渡ってゆきます。

道は果てしなく続きます。しかし、信じなさい。信ずれば、そなたたちの前にある門は開かれん。

私はいま目覚めました。そなたたちも今、目覚めなさい。

アポロとは 釈迦出世の予告

私は、今から三千五百年前、ギリシャにアポロとしてこの地上界に生まれ、神理を説きました。

そして、私の生命は、終わりを告げましたが、復活して弟子たちに申しました。

「ギリシャより東の国、インドの地に偉大なる尊い方がお生まれになられる。

そのお方が、アポロが説いた、己を知る中道の精神をお悟りになられる」

私の弟子達三十七名の者達は、その使命を果たされました。

今もまた、同じことでございます。

そして、今が最終ユートピア建設のために生まれてきたことを知りなさい。

他人には寛容の心を 持ち、己には厳しい心を持ちなさい。そして、信ずることです。道はどこまでも続きます。

物質は永遠ではありません。

この地上界の出来事は、一瞬の夢のようなものです。

なぜ、この時に、生まれてこなくてはならなかったのか。そなたたちはそれを知りなさい。

それは、己の魂を向上させ、この地上界にユートピア実現のためなのです。

そなたたちの心の中には、偉大なる九〇%の叡智があるのです。その叡智に気付いてないのです。

転生輪廻における体験されたこの叡智を誰でも思い出せるのです。

講師への警告

講師の者たちよ、

この中には増長慢な心を持っている者がいます。

私にはわかるのです。

そのことは、そなたたち自身が一番よくわかるはず。

自分の(うつわ)器を知りなさい。

そして、過去世の名前、地位にとらわれることなく、今の自分がそなたたち自身であることを知りなさい。

なぜ、今、生まれてきているのか、その使命を知りなさい。

この地上界に出られるときに、私たちと約束したことを思い出しなさい。

なぜ、自分の心に増長慢の心を起こすのか。私がここに来るとき、サタン(魔王)も来ているのです。

サタンはかつて、私の弟子でした。

彼は地上界に出られた時に、自分を失い、悪魔に心を売ったのです。

それは遠い昔、かつてミカエル、私が地上界を去り、大天使となったころのことです。

かつての天使であり、そして地獄界に堕ちたサタンは、多くの部下を連れて、天上界へ攻め昇ろうとしていた。

それは地上界を縁として行われようとしており、地上の人間が多くの魔によって混乱されることを防ぐため、光の天使たちは地上界にお

りて、サタンたちと戦いました。

多くの天使たちが傷つき倒れ、大天使ガブリ・エルもまた傷を負い、私ミカエル一人が残りました。

サタンとは

サタンはかつて、天上界ではルシュ・エルといって私の弟子であり、心安らかな天使であり人の心を理解する能力の持ち主でした。

サタンとなった今も、その強力な能力を保持しています。

地上界に肉体を持った時、魔に惑わされて地獄界に堕ち、サタンとして君臨しているのです。

「サタンよ、私は戦いたくない」

と、私は申しました。

しかしサタンは、息をもつかさず矢を射ってきました。

その瞬間、私の体の光がまぶしく大きく輝きました。

主が光を与え給うたのです。

矢はすべて消滅し、サタンは目がくらみ、地獄の底へと落ちていったのです。

サタンとの戦いは、その後またありました。

モーゼが地上界を去られたとき、サタンはその亡骸を利用しようと狙ってきました。 阻止しようとする私たちに、サタンは立ち向か

ってきました。

「サタンよ、

なぜ、そのようなことをする。 そなた達も神の子ではないか。なぜ、そなた達は気がつかないのか。」

私の言葉に、サタンは反問しました。

「神の子は、なぜサタンを(い)忌み嫌うのか。」

私はまた呼びかけました。

「悪魔とて、皆神の子。

私たちは、皆同じように愛している。そなたたちは、かつて人間として地上界にあった時、悪魔への恐怖感と自己保存から悪魔の意識の

膚となったもの。かつて、アーラの神の教えを聴いたものではなかったか。思い出して欲しい。正しい神の子の心を 」

しかし、サタンたちは戦いを挑んできたのです。

私たちの体は、そのときまた大きな光の輝きに満ち、サタンは見る見る小さくなり地獄の底に再び落ちていったのでした。

ミカエルは語る

ミカ・エル私の出たときは、地獄は少なかったが、作用、天国が上にあがれば反作用としての空洞、地獄が出来たのです。

一人でも多くの人々に、愛の教え、心安まる正しい法を説きなさい。生活に生かしなさい。心の中に多くのものを得、己を悟ることにな

るのです。なぜ、泣くのでしょうか。なぜ、涙が出るのでしょうか。それは何なのでしょうか。心の中の叡智は偉大なものです。心の中を揺

さぶるものです。これからも道は続きます。永遠に続きます。しかし、物質は移り変わるものです。今の世にある物質は、すべて、あの

世のまねごとであることを知りなさい。

物質に心をとらわれた一生を終われば、どのように悔いねばならないのか、そなたたちはよく知っているはずで

主が、いかに偉大なお方であることを知りなさい。

この中の何人も、この方の世界に行くことはできないのです。

そなたたちは、私の世界ですら、見たこともないでしょう。

今の心では見ることは困難です。

今の自分の器を知りなさい。

自分で自分から力がでるなどとはもってのほか。

自分で行動したものが、いかなるものであるかは、まわりの者がわかるのです。

力を出すなら、自分から出しなさい。

そなたたち一人一人の心の中にあるサタンのところに気付きなさい。

地獄のサタンは気付かないうちにやってきます。

それは強い力を持っています。

そなたたちが知らないうちに、心の隅の奥にあるのです。

それにうち勝つには、信と愛の心しかありません。

心に、愛の防壁をつくりなさい。

それがサタンから逃れられる、ただ一つの方法なのです。

肉体は仮のものにすぎず、心の中にある大切なものを知りなさい。そして、毎日の生活を正しなさい。

そなたたちの多くは、天使たちであろう。

サタンの心は、増長慢の心にある。

私たちは、そなた達の心の状態により、姿を現出することができるのです。

そなたたちの力に応じて語る事ができるのです。

それは器の広さによるのです。

毎日の生活において発揮しなさい。

天上界に帰るときは、一段と大きい心を持って帰りなさい。

己を知りなさい。

己の器を知りなさい。

使命を果たしなさい。

そなたたちは私達と、どのような約束をして地上界に生まれてきたのか、思い出しなさい。

世界は丸い

心も丸い。

太陽も丸く

愛と慈悲を教えてくれている。

天上界に燦然と輝く心の太陽から、私たちは智慧と愛と慈悲をいただいて、この地上界に出てきているのです。

天上界の太陽の心を知りなさい。

知っているのに忘れてしまっているのです。

人間の心の階段

人の心に階段あり。

「我、今、天上の世界を見聞する。道は開かれん。」

自分の器の大きさを知れ。増長慢の心で自分を大きく見せるなかれ。汝、中傷するなかれ。愛せよ。許せよ。道を歩め。

今、そなたたちに開かれている霊道は、本来の力ではないことを知りなさい。

一〇%の力だけではなく、九〇%の智慧を知りなさい。

偉大なる主より与えられた光で、私たちの心は、いつも丸く、平穏で、愛と慈悲に満ち、1日も早く仏国土ユートピアを実現しなさい。

そして、人々の心の中に愛の灯をともし続けてゆきなさい。

そうすることによって、あなたたちの前に、確かな現象が現れることをここに予言いたします。

自分の器を知りなさい。

自分の器を知ったなら、器を大きくすることより、その器に、愛をいっぱい汲み入れなさい。

天使なら天使としての修行をして帰りなさい。

主は偉大なる方です。

それを知りなさい。この地上界がすばらしく調和されることになれば、あの世の地獄も救われてゆくのです。すべて主の予言と同じこと

なのです。

最終ユートピア建設のため、我今ここに現れる。汝の心、素直なれば道は開かれん。信ずる者よ、そなたは救われん。

かつてアポロがギリシャの地を去り、復活して三十七人の弟子たちの使命を、再度促した時、彼らは異語を語り出したのです。

イスラエルのインマニエルの時にも、インドのブッダの時にも、同じ現象がなぜ繰り返されたのでしょうか。

この事実を善我なる心にしっかりと焼きつけなさい。ここにいる者よ、自分の頭の高さを知りなさい。

ここにいる者の中に、心の窓が開かれそうな方がおられます。

なぜ涙が出るのでしょうか。内在された九〇%の偉大な心がそうさせるのではなく、何がそうさせるのでしょうか。

汝、疑うなかれ。いつまでも、この道を進みなさい。すべてこれは、天上界で予言をされていたことなのです。

今、主は悟られました。

皆これを心の糧としなさい。それが何であるか。なぜ、この現象が起こるのか。心の中に焼き付けて、天上界での使命を果たしてゆきな

さい。

主は、それはそれは厳しい修行でございました。しかし主についてゆきなさい。

心を丸く、おだやかにして『行即光』 “行”こそ、光となってゆくことを、そなたたちは悟らなければなりません。

なぜ生まれてきたかを知りなさい。

皆、それぞれに異なった使命を持って出ているのです。それぞれの使命を思い出し、使命を果たしてゆきなさい。自分の責任を持って帰

りなさい。

これが大天使ミカエルが語られた結びの言葉であった。

重い感銘が研修会の大広間を覆い、会場は感激の涙であった。

光の大指導霊大天使ミカエルが出現され、数多くの聖書の世界から、真実を説き明かされていった。

今までは、仏教を主体として八年間、私は説いてきた。

そして、ようやくイエスの教えの真実にふれるようになってきた。

さらに正法の実証が、私に(くつが)覆えせないものになって行った。

大天使ミカエルの言葉は、そのことを物語っている。

こうして、ミカエルの言葉によって、パウロの弟子として小アジアの七つの教会の一つ、エペソ教会の司祭であったことを思い出した

方も出てきた。

ミカエルの感動的な説法は、参加者の心を揺すり、感涙はとめることができなかった。

サタンに毒された講師たち

しかし、一部分の講師の心はすでに閉ざしてしまっていた。

サタンの毒を心の中に大分食べてしまったようだ。

「汝、他人を中傷する勿れ」

この言葉は彼らの心の中に、どのように響いたのだろうか。

サタンの毒ですっかり聞く耳を忘れてしまったのだろうか。

しかし、私は彼らを信じていた。必ず、理解する時がくると確信をしていた。

その晩のことであった。

京都のT講師は、私の部屋を訪ずれた。

いつもの彼とは違う。

心の中に割り切れないものを持っている。その解決のためにきたのであろう。

私は彼に椅子をすすめた。

「先生、わてはどうしても納得ようしません。あんなに熱心にやりはっているG堂先生はんは、考え込んで昨夜も一晩中泣いておりまし

た。一体、どういうわけですか 教えておくれやす 」

「Tさん、私はあなたに正しく見よ、正しく聞け、正しく語れ、正しいことについて教えましたね。」

「へえ、教えていただきました 」

「では、彼女は、なぜ泣いているのかということを考えてみましたか。泣くには、非常にうれしくて、うれしくて感情がこみ上げてくる場

合に、涙が出てきます。逆に、非常に悲しくて、悲しくて、胸のつまる思いの感情で、涙が出てくる場合があります。また、非常に口惜

しくて、口惜しくて癪に障って許しがたい奴だと思って、口惜し涙を流す場合もありましょう。今、彼女はどの涙を流しているのでしょ

うか。あなたはわかりですか。 」

彼は黙ってしまった。

その時だった。G堂女史が風のように入ってきた。そして私の前に坐った。

「あなたは、そんなに目を腫らして、どうなさいました。

いつものあなたらしくありませんね、元気を出しなさい。 」

彼女の顔は、目のふちが腫れ上がり、睡眠不足と涙で、常人の顔ではなかった。

「先生すみません、ご心配をおかけ致してすみません。 」

その時、私の傍に坐っていた佳子がいった。

「G堂さん、あなたのいつもの笑いは、つくられた笑いです。早く心から笑えるようになってくださいね 」

その瞬間であった。

彼女の目は釣りあがり、彼女の裏にサタンが立っていた。

「そんなこといっても私はね、三歳の時、両親に死別して今日まで生きてきたのよ。あなたたちに私の心がわかってたまるものか 」

と大声を上げ、飛びかかろうと身を乗り出してきた。

私は立ち上がり、

「さん、よく見ておきなさい。あなたたちに毒を食べさせていたサタンが、本性を出したのです。

Kにもこの状態を見せてやりなさい。」

Kはすぐに私の部屋にきた。

「まあ、恐ろしいわ 。 本間に恐ろしいわ 」

講師は私たちの方に身を寄せて、彼女の動作を見守っていた。

「サタンよ、そなたは、この女性から離れなさい。そなたも神の子のはず。そなたの心の中にも、嘘のつけない善我なる心があるう。

盲目の人生を歩んでいる人々の心の中に、巧みに入り込み、混乱を引き起こそうとしても、私はすでにそなたを見破っていたのだ。

そなたは、いつまでも地獄の帝王をやっているのか。何千年も、心に安らぐことなく、闘争と破壊を繰り返し、いつ、力のバランスで自

分の座を他人に追われるかわからぬ不安定な生活をしているのだ。そなたも、かつては天使であったはず。何もいわずに、この女の体か

ら、心の中から去りなさい。」

その時、彼女の体からサタンは出ていった。

彼女の体は鉛のように硬直していた。そして、自分に戻った。

サタン去る

「あら、先生、私どうしたのかしら。大阪の都ホテルに泊まった晩からおかしくなってしまったの 。 ああ、私、自分に戻ったわ。

先生ありがとうございます 」

「G堂さん、しっかりしなくてははいけません。あなたは、都ホテルでお泊まりの時、佳子の霊的現象を軽々しくやりすぎるわ。もう許せな

い』と心の中で怒ったはずです。」

「はい、思いました、思いました。もう許せないと、本当に思いました。」

「そんな愛のない、無慈悲な心がありますからその瞬間、サタンが入り込んでしまったのです。あなたの愛のな

「い心が呼んだのです。」

「ああ、恐ろしいわ」

「恐ろしいのはあなたの心です。そしてあなたは私の部屋を出て、さんの部屋に行ったはずです。その部屋で、『佳子さんは輕輕しく靈

的現象をやっているわ。靈的現象を何と思っているのかしら』と、二人の男の講師に申したはずです。」

「はい、申しました。」

「そして、『今、先生はお休みになられました。佳子お嬢様に毛布をお掛けになられました』と、皆さんの関心を買いましたね。」

「はい、その通りですわ。」

「その時はすでに、サタンに支配され始めていたのです。あなたの心の中で、『あなたは偉大なる使命を持っています。もし、あなたが

この使命のことを他人にいうと、佳子さんは殺されます。あなたは黙っていることです。あなたは偉大な神の使いなのです。あなたは偉

大な使命があるのです。』と、サタンから、相当おだてられたはず。あなたは、そのおだてを信じたはずです。あなたは増長慢だったの

です。そして、その時講師に、部屋に電話が入り、Kが電話の主の部屋に行き、『輕輕しく靈的現象を扱うものではありません。と注

意したはず』彼も、サタンの毒を食べてしまっていたのです。Kが席をはずした時にあなたは、『K先生は、偉大な方です。先生も偉

大な方ですが、K先生から見れば、こんなに小さな魂です。先生は、K先生を助ける使命があるのです。今あなたは、北海道から東

京、関西、中京、九州から批判の矢が大小どんどん飛んできています。あなたは、その矢をいかに防ぐかが修行です。』と申されたので

す。G堂さん、そうでしょう」

「いや、私、何を申し上げたかしらないわ。」

「Gはん、何を申し上げはったか知らんとは、ほんまにひどいわ いいはったではありまへんか」

講師は、G女史を追及した。

「さん、サタンよ。Gさんを許しておあげ」

「ほんまにあほらしいわ」

かくしてサタンの爪は霧散に帰ってしまった。

この話は他の講師たちの耳に入り、他人に対する中傷が、内部を混乱に落とし込むという事実を、身をもって体験するのであった。

サタンは愛のない言葉、愛のない行為、愛のない心の際をいつも狙っているということである。

世襲制度はいけない

研修会を終わって帰る講師たちの頭にも光明がさし、よき体験として今後も生きてゆくであろう。

私の息女ということで、皆甘く見てしまった点も、見逃せないのである。

魂の世界は、親子であっても、魂は別であり、法の上では師と弟子であるということを知らなくてはならないだろう。

この法則を崩してしまった時から、間違った世襲制度的困習をつくり出してしまうということである。

人それぞれの器を知らなくてははいけない。

心の中に内在されている叡智

桜の花が都会を飾っていた。

一九七六年(昭和五十一年)四月十一日、日大講堂において、「心の中に内在されている叡智」という、私の講演会が行われた。

会場を埋め尽くした聴衆の心を正しく揺り動かして、神の子としての自覚に目覚めさせるためには、私一人の力でできるものではない。

天上界の協力がなければ、不可能である。

また、聴き入る人々の心の世界に住する魂の兄弟や、守護・指導霊たちの協力も欠くことができない。

守護・指導霊たちもともに聞く

私の講演会の場合、各人の魂の兄弟や守護・指導霊が、肉体を持っている者たちの傍で、一緒に聞いている場合が多いからである。

また、逆に、悪霊に支配されている聴衆者の場合は、口から泡を吹いて後ろにひっくり返されたり、意識を一時持ってゆかれる場合もあった。

また、心の醜い者たちは、金縛りにあって、体の自由を失ってしまう者たちもいた。

彼らのほとんどが、間違った信仰をしている人々である。

私のかたわらにいて支援している光の天使によって、光の輪のようなものが投げられ、その光の輪によって、肉体を束縛されてしまうと

ということである。

しかし、信じる信じないは別問題であり、日常の生活の中で、偽我のままの生活をして、心を悪魔に売ってしまった人々に、このよう

な現象が現れてくるといえよう。

大講演会になると、必ず数人はこのような現象に見舞われることが多かった。

このような人々からは黄金色の光は出てはいない。怨みの念の強い人、相手の罪を許せない人々であった。

愛もなく慈悲もなく、他人からそれを求めて、自分からは他人に与えることをしない一方通行の人たちなのである。

そして、自分自身が苦しんでいるのに、この苦しみは夫のせいにし、妻のせいにし、姑や嫁のせいにする。

しかし、苦しんでいるのは自分自身なのである。

心に毒を食うな

私たちは、この食べ物は、腐っている、毒が入っているということが先にわかると、ほとんどの人々は口に入れないだろう。

食べれば死んでしまうことを知っているからだ。

しかし、心の毒は、平気で食べてしまうのが常である。

食べ物の毒は、肉体を滅ぼすが、心までは滅ぼすことはしない。

心の毒は、死後の世界まで持って帰ってしまうということを知ったならば、うかつに食べられないということ

を、私たちは知らなくては

ならないだろう。

世の中には、我慢強い人がいる。

他人の前で、どんな苦しいことも悲しいことも打ち明けることなく、心の中に詰め込んで耐えている我慢強い人々がいる。

このような人々の心は、いつの日か腐敗して、肉体的にもぼろぼろになってしまう。

忍辱の心

いかなる恥かしめを受けても、よくこれに耐えて、心の中はいつも朗らか、常に安らいでいなくてはならない。

不必要なことは、心の中にとどめておかないことだ。

そのためには、その原因がどこにあったのか、もし自分に悪い原因があったなら、素直にその根を除くことが大事なのである。

その根を除かない限り、また、同じ苦悩を味わうことになるだろう。

もし、自分に原因がなかったならば、相手を許してやることだ。

許すことも愛だからである。

こうして、今日の聴衆者の中には、心の富める者、心の貧しいもの、人それぞれであった。仏教の信者、日本神道、共産主義者、自由に

集まってきていた。分厚い聖書を小脇に持っている者から、仏典を持っている者。宣教師から僧侶、一般大衆、学生、主婦、実業家、

OL、職業もまちまちであった。

私の講演会が始まるころは、ざわめいていた講堂の中も、水を打ったように静まりかえり、視線は私に集中された。そして講演は始まっ

た。

Home

日大講堂講演要旨

人々は、なぜ盲目になってしまったのであろうか。

なぜ明日のこともわからぬままに、今苦悩し、今楽しみ、今悲しんでいるのだろうか。

人間は何のために生まれ、何の目的を持ちどんな使命を持って生きているのでしょうか。

死後の世界は存在するのだろうか。

この世限りの人生なののでしょうか。

仏教もキリスト教も、化石化してすでに真実をその中からしることはむずかしくなってしまった。

あまりにも永い歴史の塵と埃が、真実を覆ってしまったのである。

その時から人間は、心を失い、物質や経済の奴隷に成り下がり、欲望の渦の中に巻き込まれて自分自身を忘れて去ってしまったのである。

皆さまは、肉体そのものを自分自身だと錯覚をおこしている。

もし皆さまの肉体が、自分自身のものであるならば、なぜ自分自身で自分の肉体を完全に支配できないのでしょうか。

なぜ病気をするのです。なぜ老化するのですか。なぜ死んでしまうのですか。

肉体は、皆さまがこの地上界に生まれてくる前に、今の両親になられている、お父さんお母さんに、肉体舟の提供を頼んできたのです

両親が勝手につくったのではないのです。

天上の世界において、お互いに約束されて、人生航路の乗り舟をいただいたのです。

この地上界のすべての物質は、変化します。永遠に保存することはできません。

肉体も幼児のまま停止することはできないものです。成長します。少年少女から青年期へ、さらに壮年期から初老へと変化してゆきま

す。

(なにびと何人)もこの法則を破ることは不可能なのです。形あるものは変化します。すべてが無常です。

その無常なものにとらわれて、人間は苦しんでいるのです。

現代の科学者たちは、私たちの大脳皮質に記憶装置があるのだと、間違った判断をしています。その科学的根拠はどこにもないのです。

もし大脳皮質がすべての記憶室であるとしたならば、眠っている時に、耳の穴も鼻の穴もちゃんと空いています。なぜ聞こえないのです。

ようか。なぜ嗅いがわからないのでしょうか。一定の振動以外のものはキャッチすることができないはずです。

悲しみだけが脳皮質に記憶されているとするならば、眠っているときも悲しいはずです。

楽しいことだけが脳皮質に記憶されているとしたならば、眠っているときも楽しいはずです。

しかし、どんな悲しいことも、眠っているときは忘れていきます。楽しいことも忘れていきます。

私たちの脳細胞は約二百億近くの細胞集団によって作り出されており、視覚神経の一つの細胞は、赤なら赤をとらえ、決して白をとら

えることはないのです。すべて電氣的振動の発信と受信装置にしかすぎません。

嗅覚も味覚も、すべてその使命を持った嗅覚神経、味覚神経の神経がキャッチし選択して、振動を発信しているにすぎないのです。

原子細胞から送られた発信受信は、光子体の次元の異なった脳に送られ、その船頭さんに送信されて、すべて判断されるのです。

船頭さんとは魂であり、その中心に心が存在している。

心眼で初めてこの実態をとらえることができるのです。私たちは、両親からいただいた肉体舟に乗ってしまうと、肉体舟の目や鼻、耳、

舌、身の五官を拠り所とするために、霊眼、心目、霊聴の力が鈍化し、物質的な世界しか確認できないようになってしまうため、ものに

溺れ、情欲本能に溺れて、心の中に曇りをつくり出してしまい、自ら神の光を遮り、盲目の人生を送ってしまうという結果になってしま

うのです。

こうして人生の苦悩は、自らつくり出してしまうものだといえましょう。

私たちがこの地上界に生まれてきた時は、誰もが丸く豊かな心の持ち主で、皆天上の世界から、より豊かな魂をつくり、調和された地球

生活を送ることが目的であり、使命でありました。

そのため生まれたばかりの赤ちゃんは、何の罪もなく、天真爛漫、仏のような心の持ち主なのです。

生れ落ちるとともに、心の中に記憶されている過去の一切はすべて潜在されて、人生の一步から修行が始まるのです。

心の中の本能の領域が自然に芽生えて、母親の乳房を吸うのも、生まれる前にすでに飲み、食べることを知った魂であることを知ってい

るからである。やがて感情の領域が働き、おしめが汚れば泣いて知らせるでしょう。生まれた環境や教育、思想、習慣が心に作用し、

知性が発達してゆきます。

「よくわからせていただきました。本当に有り難うございました。」、

と心から礼をいって腰をおろした。

付記、天上界の光の天使たちに囲まれたこの日の講演は、聴衆の心の奥深く魂の底にしみ透っていった。高橋信次先生のペンはここで止

まってつぎに続いている。

神仏を名乗る宗教指導者に注意せよ

私たちの目に見えないあの世から、人の口を通して出てくる、神だ、仏だと名乗り出てくるものに限って威圧的な言葉で、盲目的な人々に

自己主張し、信じなければ罰が当たるとか、不幸になるとか脅迫することが多い。

このような者は神仏の名を騙る悪霊の仕業が多いために、私たちは気をつけなくてはならないだろう。

真に天上界の光の天使たちの言葉には愛がこもり、慈悲深く、盲目的な人生を送っている地上の修行者の心に、真の調和を与えてくれるものである。

あたかも親が、我が子の成長を楽しみながら、見つめているように、愛の心は変わるものではない。

神は、肉体を持った人間の心を支配して語り出すことは絶対にないということを、私たちは知らなくてはならない。

人間の口を通して出てくる神を信じてはならない。

偉大なる光の大天使（如来、菩薩）、天使も肉体を持ちし人間の法にかなった生活をし、しかも、同じ器の持ち主でない限り、その人間

を支配して語ることはないのである。

なぜならば、肉体を持っている人間の雰囲気（波長）が、精妙にならない限り上段階の光の大天使とコンタクトすることは不可能だという

ことだ。

天上の世界にも見えない壁が存在している。

その壁は一人ひとりの心の階段、調和度によって、その範囲は異なっている。

しかし、真実は壁など存在していない。

けれども、人間の心の中に、自らしてその壁をつくり出してしまった。

それ故に天上の世界は、分け eq ¥0(¥s¥up 9(へだ),距) てなどは、すべて存在していないということだ。

人は果てしなく転生輪廻を繰り返し、何度もこの現象界とあの世を体験している魂であり、死は人生の卒業式であり、魂の転機ともいえよう。

「汝、死を恐れること勿れ」

ミカエルは、私達にこのことを重ねて告げている。

にもかかわらず、肉体舟にとらわれて死に恐怖感を持って、この現象の世界を去ってゆくものが多いということだ。

ミカエルは

「人間の持つ、一番、愚かなる執着なり」と、言っている

肉体の死は真実の死ではない

私たちの五官の死は、真実の死ではない。

真実の己自身を自覚して悟るためのものなのである。

即ち、真の己の誕生を悟るためだといえよう。

またミカエルは

「汝等、一秒一秒をおろそかに暮らす勿れ」と、

地上界の人々に伝えている。

私たちの住んでいる地上界のものは移り変わり、持続性がなく無常なものだ。

私たちの自分の肉体ですら、自分のものだと思っても、一秒一秒、常に死への旅路が近づいており、休止することは絶対がない。

今体験している一切の苦しみや悲しみ、また、喜びはすべて調和された己を完成させるための学習だということ、私たちは自覚しなく

てはならないだろう。

私たちの肉体を支配している生命の時間は永遠であって、物質はすべて有限だといえよう。

人生航路は、はかない一時の夢にしかすぎない。あたかも、幻のよなものだ。真の影の中で踊らされているピエロのように、愚かしい現

象だということだ。

私たちの五官は、仮に己を守るための手段にしかすぎない。真の視覚ではない。真の聴覚でも、真の嗅覚でも味覚でも、感覚でもないということだ。

真のものは、私たちの心が主体なのである。

天上の世界における感覚は、魂の段階の低い世界においては、五官に影響される場所も存在している。

しかし天上の世界は、心的精妙な光の世界であり、さらに調和された段階になるに従って、すべて感覚以外の心で、すべて感じられる世界になってゆく。

地上界における人間である私たちの五官は、天上界の心の感覚を体の機能として表した姿なのである。

そのために私たちの肉体舟の五官は、故障したり、こわれたり、失ったりするのである。

これもすべて、神がわれらに与えられた試練であり、三次元的な物質に与えられた力だということだ。

そのために、一つ間違うと、神の慈悲も仇（あだ）になることもある。

すべての肉体は、器官にしかすぎない。

真の肉体は不変であり、精妙な光子体である。

すべて正しい法則に従って生活した時の調和された姿なのである。

私たちの肉体は一〇%の表面意識に与えられた最も粗悪な光の集固体化したものだという事だ。

そのために、地上界で肉体を持つと、悩みや苦しみ、物に溺れ、情欲に溺れ、自ら苦悩の道を歩んでしまうものである。

肉体機能の五官に等しい、粗悪な光故（ゆえ）なのであると、ミカエルは私に告げた。そして、このようにも言われた。

五官とは肉体とは、人間の世界におけるロボットと同じものだ。

ただ、あまりにも精妙につくられた物質である。

しかしそれを支配しているのは人間の心である。

心を失ってしまえば、この肉体舟もただの物質にしかすぎない。

死は、そのロボットから降り、新しい光の肉体に気付く時なのである。

この光の肉体こそ、不変的な己の体だということである。

さらにミカエルは、続けて私に言った。

仏像や神像のオーラ・後光

「仏像やキリストの像に後光がでているであろう。

心の調和度に比例した光なのである。

天上界の住人や仏像、キリスト像の場合のみにあるのではなく、地上界の民の心の美しく、正しい法に従って生活をしてる民の体からも

光は出ているのである。

その光は、この世を去る時の乗り舟であるということを知ってください。

光の量は、民の生活の心がけに比例しているということなのである。」ということである。

心の暗い人々は、当然、光子体の肉体は物質的であり、肉体から出ている光の段階によって、あの世の世界の階段が決まってしまうということだ。

暗いということは、心と行いが、法則に反した生活をした結果であり、自らそれに気がつき修正をすれば、心の中の曇りは除かれて、神

の光によって満たされるため、満たされた量に適した世界に住するということである。

本当の信仰

真に信心深いという人々は、決して教会や寺院、神社に、お祈りのための信仰ではない。

本来、教会や寺院は、人間として生きる目的や使命を教える場所であって、神仏に祈る他力の場所ではないということだ。

そして、人間の苦悩の原因と結果を教え、苦悩のない安らぎの人生を送るための、あきアドバイザーでなくてはならない。

即ち、人間として生きるための、正しい法則を教える場所なのである。

その正しい法則に従って、毎日の生活をしている人こそ、真に信心深い人々といえるのである。

偶像に憑依する悪霊

私たちの永い歴史は、習慣として、他力の祈りの信仰に変わってしまった。

これは大きな間違いであるといえよう。

かつてヤアベは、

「汝ら、偶像を祭って祈ること勿れ」

と説いている。

誠にその通りである。

偶像を祭って祈るようになってから、真実の人間として生きる正しい法則が、すっかり挨をかぶってしまったからだ

また、偶像をつくり、祭ることによって、その偶像を支配する悪霊がいるということを知らなければならない。

偶像は芸術品として見るべきものであり、また天上界の悟られたメシヤをか形作った場合が多く、作者が心の眼でとらえたものを画や像

につくり出された多いのである。

折る対象物になれば、折る人々の想念が、その偶像に作用し、霊的現象をつくり出す場合が多いのである。

「触らぬ神に祟りなし」ということわざは、このような現象から出てきたものである。

霊験あらたか、という偶像は絶対になんもないということを知らなくてはならない。

もし、あるとしたならば、その道で生活している者たちの言葉が、それを縁として自らが生活を正した結果だといえよう。

それゆえに、間違った自分の信心している神が、絶対一番だと思っている。どんな不幸があっても、善意に解釈して、自らにむち打って

信仰を続けている。

渦の中に入ってしまうと、自らが盲信者であり、狂信者であることすらわからなくなってしまうものだ。

そして、自らの心を段々小さくしてゆく。

目が覚めた時は、心に深傷を負ってしまうということである。

神の名のもとに、金品を強制したり、罰が当たると脅迫したりする信仰は、信者を食べ物にしている指導者か、魔王やサタンに身も心も

冒された者たちのすることである。

「以下原稿なし」原稿は未完である。

あとがき これを公開する理由

我が師である、今は亡き園頭広周先生から託されたと自分で勝手に思いこんでいるものがある。

長い闘病生活の数年前のこと、泣く泣く出版を断念された先生にとっては幻となってしまった『新復活』、仮題『高橋信次師の随聞記』

がある。

先生の弟子として、私の著書も数冊出していただいたこともあって、

おもいがけなく或る日のこと、「読んで下さい」と先生を訪ねた私の家内に、新復活の原稿を託されている。

大事な原稿だから、汚さないように早くお返ししなければという想いで、コピーをとってすぐにお返しした。

その原稿はコピーとして私の手許に残ることになったが、それから五年、十年と月日は流れて行った。

これは家内以外の誰にも公開しなかったが、十年も経つうちには、複数の新復活がこの世に在ることを知った。

それぞれが一人歩きしているので、やがて、高橋先生没後三十年のこの機会に、整理して世に問うことにした。

複数とは、

一、「私の手許にあります」と『真創世記・地獄篇』に書かれている本家、本元の息女佳子氏が所有されるもの。

そして

二、高橋先生が生前、なぜかコピーして弟子に渡されていたもの。

それと、

三、園頭先生に送られて来た原稿のコピーを基に、先生が準備された製本直前のもの。（私がコピーして残したもの）

もう一つは、

四、高橋先生の最も早い時期の弟子・村上宥快氏のもの、

である。

観音寺和尚の村上宥快氏の「新復活」

先生が亡くなる二ヶ月前のこと、長く顔を見せぬ、今は亡き愛弟子のために直きじきに語っている。

独演会をノートに書綴ったものを本の中で記述された新復活である。

それを上げてみる。

「一九七六年（昭和五十一年）五月八日のこと。

直接恩師に電話を入れ安否をうかがった。

恩師は快く私の乞いを受けてくださった。

八起ビルの五階の恩師の部屋のドアを開けた時、恩師は最早ソファーからお立ちになることが出来ない程の容態であった。

私が、先生お茶を召し上がりますかと申し上げると、弱弱しいお声で答えられた。

一服のお茶を飲み干されて、お坊さん、私の体に光を入れてくれませんかと乞われた。

私は驚き感じた。かつては事ある毎に先生のパワーによって、私の心は蘇生したことを思い出し、先生、私のパワーで宜しいのですか

と、問い直した。

ソファーに休まれたままで、立ち上がることも出来なかった。顔色は悪かった。あの健康で東奔西走された恩師の面影は今、いずこにあ

られるか、私は涙を隠して恩師の五体を抱き起こし、パワーの入れ易い状態にして、天上界にお願いをし、先ずイエス様来迎を願った。

大天使の方々のご協力によって私の意識と肉体の調和を図った。私の体は熱くなった。汗が流れるような熱さであるが、天上界の熱さは

心地好いものであった。

祈りと願を三時間も私の意識を透して恩師の体にお伝えした。

パワーを入れ終る頃、恩師の顔の色は赤味を帯びてこられた。ご自分で起き上がられご自分でお立ちになった。

恩師は私に申しておきたいことがあると申された。ノートを取るように言われ、カバンから原稿用紙を取り出して筆記した。

優しさのお声の中にも恩師の意識には張りがある。静かに瞑想されて口を開かれた。

示された言葉はゆっくりとした調子に抑揚がある。

次のことをお伝えくださった。

新復活（その二）村上宥快氏の筆録

「今より、三億六千四百五年前、ベーター星より地球上に脱出、緑もゆるこの地球上を神から与えられたり。

現代エジプトのエルカンターレ、場所はエデンの園なり。

ナイル溪谷、三角州の東側の位置に存在する。

エデンの園は、我等エルランティを中心にしてミカエル、ガブリエル、ラファエル、ラゲエル、マヌエル、ウリエル七人の大天使達は、

エデンの園の、教育・思想・芸術・政治科学の分野を担当して総ての調和された環境なり。

他の移住せし民達は、第二船団として、宇宙母船に乗り約六千人が降下せり。

エルランティ外七人の大天使達はこの地に肉を還し天上の世界に帰りたり。我等の残せし偉大なる遺産は、第二梯団にて移住せし諸人が

如何に活用せるかを天上の世界より見守りたり。

エデンの園の中に掟を犯したる者あり。

物に溺れ情欲に溺れ、神の子としての道はずしたる故に、遂に天上界より我が光の子ミカエルをエデンの園に遣いを出し、道はずし

たる諸人を他の地方に移せり。

彼等民の間違いを修正させるための反省の場所なり。

彼等は年月の流れと共に我等との交渉を断てり、神の子としての自らの道を踏み外せしものなり。

アダムとエバのエデンの園より追放の原点なり。

人びとの心はすべて神の子なりしが、自から地上の肉を持ちし時からに、偉大なる魂といえども、手足をもがれたる如く全く盲目なり。

エデンの園から逃れたる民達は、魔に何時の日か心を売り、この地上界を刈去りしとき、地獄の世界を造り出したり、我が天使ルシフェ

ルは地上に肉体を持ち、迷い多き人びとを救済せることを目的とせしが、自ら道を逸脱しその使命を果たすことあたわず、肉体を持ちし

時の名をサタンと呼びたり、やがてサタンはこの地上を去り、暗国の帝王となったのである。

サタンの由来はこのような事実なり。

今から三千六百五、六十年前モーゼがエジプトに住みし頃ファラオはサタンに心を売りしものなり。

今から二千五百年前、ゴータマブッタの前に現れたのもこのサタンなり、別名マーハマラーなり。

今から二千年前インマネール・イエスキリストの前に現れたのもまたサタンなり。

神の心である正法が、人びとの心に浸透してゆく過程においてサタンは必ず、正法の前進に立ち塞がることを吾等は知らねばならぬ。

既にソビエット連邦はサタンの支配下にあり、農作物の不作はソビエットに住む人びとの暗い想念のくもりから、神の光を遮るために、

気候の異変によるものであり、今後もモスクーを中心とした、ソビエットの天候異変は続くものなり。作物の育成期には早魃が訪れん。

中国大陸の不調和な環境にも天候異変が生ぜん。

アフリカにおける思想的混乱により、多く生けるものの犠牲者を出した処にも早魃が続かん。各地に起れる地震、天候異変は、そこに住

む諸人の心失いたる者達のすべて警告なり。」

恩師は語り終わって、一杯のお茶を飲み干された。

『調和への道』

次に、『平成四年一月の園頭広周先生の記述』を上げてみる。

「幸福の科学」の問題で、高橋信次先生の名が大きく浮上してきた。これはありがたいことであった。

高橋信次先生のことを知りたいとマスコミ関係者はまずG L Aに行った。“G L A”と高橋信次先生存命中と同じ教団名であっても、現

在は高橋佳子教になっていて、高橋信次先生とは関係ないと玄関払いされた。それではと、もとG L Aの講師をしていて、今は偕和会を

主宰している堀田和成氏や、愛のファミリー教会を主宰している波場武嗣氏をたずねたら、「うちは争いたくない」ということで皆逃げ

てしまった。

月刊「A s a h i」に、宗教社会学者・沼田健哉氏が「特集、宗教ブームを科学する」でこう書いている。

新宗教の巨人、高橋信次の素顔

話題の「幸福の科学」の大川隆法氏も、いまは亡きこの人の著書から多大な影響を受けたという。

戦後が生んだ宗教カリスマであり、大変な霊能者であったといわれている高橋信次。

最後には釈迦、イエス、モーゼを超える存在であると自らを位置づけた現代宗教の巨人・高橋信次の素顔に迫っ

た。

「ミカエル運動」の過程において、年配の講師をはじめとする多くの会員が脱会するという事態が生じた。

G L A から脱退した中で比較的大きな団体としては、信次の著書を出版する三宝出版の代表者であった堀田和成の「会和会」、G L A 西日

本本部長であった園頭広周を代表とする「国際正法協会」がある。

さらに波場武嗣の「意識教育研究所・愛のファミリー協会」、渡辺泰男の「光のお仲間」、原田千裕を中心とする「アシュラム東京」などが挙

げられる。

それ以外にも、信次の本を、集まって勉強するグループは多数あり、その総体は把握できない状態にある。

このように、高橋信次の影響には意外と幅広いのもがある。「幸福の科学」の大川隆法に大きな影響を与え、
「オウム真理教」の麻原彰

晃も信次の思想に触れたことがある。いまや信次の存在の意義をもう一度考えてみるべき時期にさしかかっているのではないだろうか。

と、そう書いて、

「信次は『あとは頼んだよ』という一言を佳子に残して死んでいった」

と書いているが、私は高橋信次先生の臨終の席にいたが、そういわれたことはなかったと想う。

もしそれが事実であるとするならば、ではなぜ佳子氏は“ミカエル事件”を起こして、釈迦、イエス、モーゼ、高橋信次を切り捨てて、

自分が世界の救済主であるといったのか。なぜ高橋信次先生の教えを正しく継承してゆこうとする私を“サタン”
だといって排斥したの

か、なぜ、講師は四十五歳まで、会員は四十歳までという年齢制限をしたのか。

沼田氏は、高橋信次先生が昇天されてからのその後の経緯は全く知らないで、ただ外面から眺め、聞き囃ったこと
の断面をつなぎ合わせ

て論表しているだけである。

ことの真相を知らない間違った文章が後世に遺されたのでは、高橋信次先生の教えが正しく後世に伝わらない。

「サンデー毎日」にも、私とG L A、偕和会などが本家争いをしていると書いてあった。

それなら誰が高橋信次先生の教えを正しく継承しているのか、各会に行ってみればわかることである。

沼田氏が月刊「A s a h i」に書いている図も、私が本家に叛いて、離反したような印象を与えてしまう。

誰が高橋信次先生の教えを正しく継承しているのか、それは皆さんが勉強していただきたい。

「高橋信次先生の『信復活』の原稿が出てきたので送ります...」と、電話がきた時の感動を忘れることはできない。その電話を聞いたとき

は直筆かと思った。直筆であれば、いま建設を計画している正法記念館に納める唯一の記念物にもなると思った。

それよりも、今混乱している高橋信次先生の教えの正当な後継者は誰であるかという問題にも終止符が打たれると思ったことの方がわた

しのころをはずませた。同時に、いよいよこれからの使命が大きいとその使命の重大さを感じた。

昭和五十三年九月、正法会(現・国際正法協会)発足以来、現在に至るまでの十三年間は、ひたすらに高橋信次先生の教えを聞いたと称し

て、高橋信次先生の教えを歪めていると思う人に対しては容赦なく批判を加えてきた。私の胸中を知らない人々からは、「人の悪口を書き

すぎる。あなたは宗教家と自称しているが愛がない」といわれてきた。

一番悲しい思いをしたのは、ともに正法を学ぼうと誓い合った同志が、「先生はあまりにも人を批判しすぎる」といって、会員をやめてい

ったことである。そのかつての同志たちはどこに神理を求めようというのであろうか。

送られてきたのは直筆ではなくコピーだとわかった時は直筆だろうと思い込んでいたときの期待感が大きかっただけに、一瞬「コピーでは

ないか」と思ったが、考えてみると、コピーだからこそ、その意義が大きいのであった。

昭和五十一年七月号の「G L A」誌に書いていられる、目下執筆中との「新復活」は、直筆の原稿は、とても高橋佳子氏が出版できる内容で

はない。もし出版しだとしたら、今のG L Aは解散してしまっていなければならない。

今ここまで読んでこられておわかりのように、佳子さんを連れて西伊豆に旅された時に現れた金色に輝いた天使は、青年の男性の姿であ

った。そうして「この女性にミカエルを入れて語ってもらいます」といっていられるのである。

五十一年三月の紀州白浜の研修会の時、サタンにやられたと高橋信次先生自身が書いていられる 講師。

講師は、私の部屋にきてこういったのである。

「高橋先生はニセモノです。私たちはこの研修会が終わったらG L Aをやめます。先生(私)もやめませんか」と。

私が「宇宙即我」を体験したことを話さないうちに、私の心の記録を正しく見て、高橋先生方から、「園頭さん、あなたは『宇宙即我』を体

験しましたね」といわれた事実、私の永い求道の旅で私自身が体験したことに照らしてみた高橋信次先生の教えの正しさ、私には微塵も高

橋信次先生を疑うことはなかった。G L A東京本部の講師も、G L A関西本部の講師も、全員が高橋先生の下を去っても、私一人は高橋

信次先生を守ってゆく覚悟は、昭和四十八年三月、初めて高橋信次先生にお会いしたその日からできていた。

研修が終わってから、大阪・天王寺の都ホテルに泊まった時、サタンにやられた講師たちは皆注意を受けた。

その白浜研修会で、高橋先生が、K、講師の実名で「この者はサタンにやられている」と書いていられるのであるから、高橋佳子氏を裏

切ろうとしたその講師たちたちが佳子氏を無理矢理に“ミカエル”にってしまったのであるから。

だから、高橋信次先生は「高橋佳子氏は出版しない」と見定めて、コピーを取って某氏に渡していられたのである。某氏は、ある探し物

をしていて、このコピーの原稿を発見して、自分でもびっくりして私に電話されたのである。

大川隆法氏の問題で、高橋信次先生の名前が浮上ってきて、GLAと私を、その他の人たちが本家争いをしていると世間の人が見ている

時に、その時に、この原稿が私のところに送られてきたという。そのタイミングのよさに驚いている。

コピーの原稿とともに、高橋信次先生着用の背広も送られてきた。

背広から漂ってくる波動の中で、高橋信次先生存命中のあれこれを愧んで涙した。

高橋信次先生が亡くなられた時、もっと聞いておきたいことがあったのに、と淋しい思いをした。

しかし、わからないことは自分一人の力で切り開いて悟ってゆかなければならない。

私は自分に教えられたそのことだけを頼りにしてゆくことの心細さに打ち拉がれそうになることもあったが、そのたびに禅定をした。

私が念願しているのは、高橋信次先生の教えを受けた人たちが、また一つになることである。

『高橋信次師の随聞記』

正法とは

正法とは、神がつくられた大宇宙・大自然の真理であり、宗教はその真理を説き、その真理に発した道徳を教え、正しい秩序ある社会を

つくり、人間が幸せになる道を教えるものである。

神は生命を創造し、物質を創造し、生命は生命の法則をもって、物質は物質の法則により、それぞれ循環と因縁、因果の法則によって存

在せしめられることとなつたのである。それゆえに、生命の法則を説く宗教と、物質の法則を説く科学とは表裏一体とらり、切り離すこと

はできないものとして存在しているのである。これを物心一如、色心不二、心身一如ともいう。

これまで宗教と科学とが相反するかのようには説いてきたのは、宗教家が真の真理を知らず、科学者もまた無知であったからであろう。

宗教と科学とが一体であることを知ることによって初めて真の人間性が開発され、大宇宙・大生命即ち神と調和され、人々の心は安ら

ぎ、地球上に極楽浄土が完成されるのである。

極大の大宇宙から、極微の原子世界に至るまで、一貫した法則によって支配され、その中に人は心を持って存在している。

心とは意識であり、魂であり、霊である。

仏法によって生命の不変を説かれた釈迦も、大生命大自然の真理を説かれたキリストも、大自然の心理に到達された偉大なる先覚者であ

ったのである。

大宇宙は神によってつくられた。大宇宙体は神の意識の表現である。この、神の意識を「大宇宙大神霊」という。「大宇宙大神霊」は智

慧と慈悲とを持つ一大生命エネルギーの根源であり、万生万物を存在せしめかつ生かしたもう。

正法とは、神がつくられた永遠不変にして普遍的な道である。

正法とはいかなるものか。それにはまず次の高橋信次先生の「ことば」をよく知ってもらう必要がある。

正法の返遷

この地上における正法の変遷を、過去一万年までさかのぼってみることにしよう。

今から約一万年ほど前、南大西洋にアトランティス大陸というのがあって、文明は非常に栄えていた。

信仰の対象は太陽に向けられ、人間の魂は、あの太陽のごとく、光り輝くものであり、慈悲と愛の心こそ、人間のあるべき姿として、正

法が説かれていた。

法を説いた方の名を、アガシャといった。アガシャを中心として数多くの如来、菩薩が道を説いていた。現在、南大西洋にはその大陸

はない。アガシャをのぞく多くの天使たちを時の為政者が殺戮したため、法の裁きによってひき起こされた。

六千年後、文化はエジプトに移ってきた。そして今から三千二百年ほど前にモーゼが現れ、人々を奴隷の身分から救った。

釈迦がインドで生まれるまでの約7百年間のある一時期は、地上界は地獄と化していた。略

奪、強盗、殺人が幅をきかせ、世界は暗黒と化していた。釈迦が生まれる二、三年前から、光の天使による地上浄化の地ならしが行わ

れ、やがて釈迦が生まれた。この時も、光の天使が数多く地上に生を得ている。釈迦は、主として慈悲を説いた。

イエスはそののち約五百年後に、イスラエルに生まれ、愛を説いてい、慈悲と愛の神の心が地上に伝えられた。

その後、伝教は西から東に移った。中国である。天台 eq ¥o(¥s¥up 9(ちぎ),智顛) が法華経を世に伝え、正法を中国の地に復活させ

た。ただこの時は、仏教も難しい哲学、学問と変わっており、衆生を救うまでには至らなかった。

天台智顛のあと、伝教大使が、日本に仏教を樹立させた。仏教の後は、やはり他力信仰が中心をなしていった。

一方、キリスト教は次第に折りの宗教に変わっていった。

このようにして正法は現在に至っているが、正法は過去一万年の間、このような変遷をたどり、イエス以降は、他力信仰が人類の生活

に密着するようになってしまった。しかしイエスも釈迦も、他力信仰を一度も説いていないのである。また、地上が末法と化すと、ある

時期を定めて、神の命を受けた光の天使が地上に生を得、道を説くことになっている。

アガシャ、モーゼ、釈迦、イエスの時代を見れば、このことは一目瞭然であろう。

また、正法の根を絶やさないためにも、こうした人々が光をかかげ。人心を、正しい方向に持ってゆかなければならなかったといえ

る。現代は、まさにその時期に当たっているといえるだろう。

ジャブドーバー(釈迦は日本に生まれた)

ある方からこんな質問が来たので、今回はそれに答えることにしよう。

質問の要旨は、ゴータマ・ブッダは、なぜ日本を再生の地としたか。どうしてアメリカや、他国を選ばなかったか。というのであ

る。

一口でいえば、仏教 正法が伝えられやすいからである。

二千五百余年前に釈迦は、ジャブドバー(東方の国)のケントマティー(都会)において、ふたたび正法布を行うと弟子たちに宣言した。

どうしてこのような宣言になったかという、今日の世界事情がどのように動き、人類の意識がどう変わってゆくか、ということが、

ブッダには理解されていたからである。まずこのことが第一点。

第二点は、正法を再興する場合の地理的条件が加味されたのである。世界の交流が始まったのは、せいぜいここ百年くらいの間であ

る。それまではごく一部の要人、商人を除いては、ほとんど他国との交流を持つことがなかった。また持てな

なかった。正法が流布されて

ゆくには、言語や地理的条件が当然考慮されてくる。仏教がインドからチベットな、そして中国に伝わり、

日本に渡ってきたのも、こうした環境的理由があつて、必然の過程を通ってきたのである。

第三点は、正法を理解するにはそれを受け入れる基礎的土壌が必要である。伝統や風習が異なり、ものの考え

方に大きなへだたりがあ

る場合は、正法を突然持ちこんでも、それを咀嚼するのにかなりの時間が要るだろう。

しかし、日本における仏教の歴史は古く、そして伝教大使が法華経を中国から持ち込むことによって、仏教

は定着したのである。そ

の後、仏教は形を変え、他力に変わっていったのだが、形だけとはいえ仏教が日本人の生活の中にとけ込んだ

ことは事実であり、正法

の真意を伝えるのに、理解しやすい条件を生み出しといる。一方、また、日本人の勤勉さ、進取の気性、他国

の文化を受け入れる柔軟な素質などは、今日の経済発展なり、科学や文化の進歩を見れば釈然としてくるであ

う。

このように、正法を流布するという前提で、日本という国が選ばれ、今日、具体的な活動となっているので

あり、そうしてここへく

るまでには、現象界の状況が絶えず見守られ、実在界で計画されてきた。それゆえ、ブッダの公約は、必然の形

をとって現在に至っているわけである。

第三者から見ると、アメリカやヨーロッパでもと思われるであろうが、右の事情を参酌すればおのずと理解されるである。

正法流布は、こうした計画性の下に進められてきている。

この二つの「ことば」によって明らかであるように、正法の活動は、神の心をもっとよく知られたアガシャによって始められたものであ

る。

神よりこの地球上の人類の魂の救済の使命を与えられた霊団を「アガシャ系の霊団」といい、その最高指導霊をアガシャといい、このア

ガシャは後にインドに釈尊として出生されて法を説かれた。

この釈尊を中心として、モーゼ、キリストという方がいられる。モーゼに対して

「ヤーヴェ」(エホバ)と名乗ってモーゼを天上界より指導され、「十戒」を授けられたのはエルランティ、つまりアガシャ、後の釈尊、

そしてこのたび、日本に高橋信次として出生された方であった。

キリストはイスラエルに出生される前に、エジプトに「クラリオ」そしてまた「アモン」という名で出生して法を説かれた。「アモン」

それはキリストのことであった。その「アモン」を讃える言葉が後に「アーメン」となったのである。

アガシャが、リチャード・ゼナー師を通して語られた霊言によって始められたのが、ロサンゼルス「アガシャ教会」である。

これまでに八回ほど訪問されているが、昭和六十二年六月と十一月の二回、園頭先生は「アガシャ教会」を訪ねられて、その時今後の世

界の宗教活動について話し合いをされている。

いよいよ正法を国際的に広めなければならないときに、園頭先生は三年の闘病の末、平成十一年ご自分の誕生日のその日に亡くなられて

しまった。

それからの数年間は柱が抜けたような心地だったが、一人でコツコツと作り上げた九百万字数の巨大な「正法のホームページ」だけは、

平成十五年一月には五十万件のアクセスを越えて一人歩きをして増えつつけている。

二度の脳出血の後遺症により左手に麻痺が残るが、健側の右手は疲れを感じても、左指一本で打ちつづける麻痺側は、麻痺のためか疲れ

をまったく感ぜず、無理がこじれて腱鞘炎になってしまった。自動車運転は送りハンドルになる始末で、数年経った現在、やっとホーム

ページの更新を始めることと成った

人類の平和は、正法による以外にない

現在、日本には十八万五千の宗教団体があるといわれている。

それらの宗教団体は、部分的には正しい法を伝えているものもあるが、大部分は地獄霊や動物霊に憑依されて始められたものが多いと想われる。

園頭先生が指摘されているように、つぎのような教祖を持つ教団は、皆地獄霊や動物霊に憑依されて始められた教団であると考えてい

る。

地獄霊や動物霊に憑依された教祖は、金によって救われると説き、金集めが上手で金に汚くなる。

地獄霊や動物霊に憑依された教祖は、性欲が強くなって女をこしらえる。

地獄霊や動物霊に憑依された教祖は、権力欲が強くなり、傲慢になり、服装や生活が派手になる。

地獄霊や動物霊に憑依された教祖は、内心、自分の力のないことを知っているので取巻をいつも従えて歩く。

地獄霊や動物霊に憑依された教祖は、いうことと、やることが違って冷酷になる。

これらによって、どの宗教団体が正しいか判断してください。

正法は、神より始められた神理を伝え、人類が最終的な理想世界を建設するためには、人類すべて「正法」に帰ってこなければならないこ

とを説いています。

これを読まれた方は、ともにまず心の面から世界浄化運動に立ち上がっていただきたいのです。

多くの人々が信仰による心の安らぎを求めながら、動物霊や地獄霊に憑依された教祖たちに惑わされ、なけなしの金まで巻き上げら

れ、むしろ信仰したかためにかえって心に苦しみが増してきたといっている現状を見ては、私はじっとしていません。

いつときでも早く、多くの人々に「正法」を伝えて、信仰をしたかためにかえって苦しみ悩んでいるという人々を一人でも多く救って

いただきたい。

皆さんの力で、この運動を盛んにし、正法は厳然として永遠不滅ですから、人類に遍く（あまねく広めて欲しいのです。

[Home](#)

Home

「エデンの園」の朝朗（あさぼらけ）

八起正法（やおき まさのり）

前書きにかえて

「質問」

心の広さが、如来界と菩薩界の中間とも言われた光の天使・園頭広周先生は、三年も口をきけず闘病生活から亡くなられたとか、光の天使がこれで

は、正法も信じる気にはなれないと思うのですが。

(中部地方二十七歳男性)

「回答」

こういう質問には、私の心も痛みます。

先生は日常の生活ぶりも質素で、健康にも十分気を使われたと思います。

ただ言えることは、会員が先生からの的確なアドバイスや解答を得て、その感謝の気持ちから名品や銘菓を贈ったり、手土産としていたようです。

著者も元会員の一人として、講演旅行からお帰りになると、おすそ分けを戴いたことから推測できます。

園頭先生の食生活

先生は、お子様も独立されて、奥様と二人きりの生活でした。

しかし、無碍（むげ）に断れずに布施されたものは、感謝して食べられたのでしよう。

と申しますのも、先生の過去世の一人は、二千五百年前の釈迦常隨の舍利佛であり、お経の中の舍利子その人でした。

釈迦教団の一人として、托鉢（たくはつ）や乞食（こつじき）によつて、布施されたものは感謝して食べられるという過去世からの経緯（いきさつ）があっ

たのですから、皆さんから布施されると粗末にお出きになれなかったようです。

それに、宗教家として五人のお子様を育てられ、いくらかの布施をいただかれると、「待っている家族のため

に、デパ地下をのぞいた」、

と、先生が主宰された、国際正法協会の機関誌『正法』にあるように、家族を愛された良きお父様だったと思います。

また、こんなこともありました。

関東在住の人が 「この次は先生のお好きなものでもお持ちしましょう」、

と言うと、先生はちょっと間をおかれ、

「〇〇サブレがいい。割れたのでも、端が欠けたのでも構わないから」、

と、相手に負担を掛けまいと真顔で申されます。

これは菓子のアウトレットでしょうが、何ごとにもこんな調子できどらず質素で、細かい心遣いをされました。

先生は堂々たる長身にもかかわらず、肥りもせず大食漢でもありませんでした。

しかも、ご一緒して何度も食事を致しましたが、何でもおいしそうでした。

ではなぜ、私が先生の食にこだわるのかと申しますと脳出血や脳梗塞の循環器障害は、高血糖値に見られる糖の採り過ぎと、怒る心が原因と、正法を

最初に説かれた高橋信次先生は、言い切られたのです。

二度の脳出血経験の著者は、この言葉の意味がよくわかります。

先生の食生活はこれ位で、次は先生の怒りの心について述べます。

園頭先生の怒りの心

先生の普段は実に穏やかな好々爺でした。

でも、こと、法や神理に違がう人には実に厳しいのです。

高橋先生も談話の中で

「園頭さんは、天上界で私も怒られる位に厳しかった」、

と。ある程です。

先生は、とりわけ創価学会の池田氏と幸福の科学の大川氏に対しては、それはそれは、

「怒髪は天をつく」、

ほどの気迫でした。

先生の、お二人への批判の書は何冊かあって、特に池田氏には、教勢がすごいために、厳しいものでした。

こんなこともありました

そのとき著者は、組織の中心から外れていたのも、先生の主宰された国際正法協会の誰の建言か知りませんが、池田氏打倒の祈りをする者まで現

れ、困ったことだと考えました。

私は心ならずも

「先生の指図かな？」、

と疑いました。

しかし、そのときの組織の中心者から話しを聞いてからは、疑問は氷解し安堵しました。

それはこうです。

研修会のある朝のこと、部屋から出てこられた先生は、誰に言うともなく独り言のように

「人の命を限定するなんて断じていかん」

と、祈り倒すなんてもっての外と、厳しい顔でつぶやかれたのが印象的だった、というのです。

修正を求められた人は、その人の生き方の原因と結果の法則によってバッチリ反省させられます。

この世で修正できなければあの世で、それでもダメなら次の世で、いつかは反省させられて辻褄（つじつま）は合うのです。

宗教家の場合は、ことさらに信者への影響も大きく、マインドコントロールされ嘘を信じた全員が正されるまで、光も届かぬ地獄の世界で、徹底的に反

省させられるとは、高橋信次先生の言です。

過去世から見た園頭先生の心の傾向性

それでは、先生の魂の兄弟達から見た、先生のカルマ、心の傾向性を推測します。

昭和四十八年、研修会での一コマ、高橋先生と園頭先生は中秋の名月を眺めながらの露天風呂での会話。

「ほう今度も園頭さんが九つ上ですか。不思議なこともあるものですね。」

しばらく沈黙が続き、また会話が始まります。

「托鉢から帰えるころ雨が降り出し、ポコッポコッと細かい泥埃りで足は泥だらけ、あの近くの温泉でよく足を洗ったものですね」

これは、釈迦である高橋先生と舎利佛の園頭先生が、古代インド時代の当時を思い起しての会話です。

高橋先生によると、釈迦は紀元前六百五十四年に生まれ、紀元前五百七十五年二月十五日に八十一歳で、舎利佛はその一年前に八十八歳で亡く

なります。

舍利佛には、無二の親友の大目連がいました。

最初は、アサンジャーというバラモン教の先生について二人は勉強をしていましたが、

教えに疑問の二人はお釈迦さまの噂を聞くと、アサンジャーの許を去って釈迦に帰依します。

これはどういう意味かと申しますと、アサンジャーは生長の家の教祖・谷口雅春氏、と高橋先生は言い残こされます。

初め、園頭先生は生長の家の幹部で、将来を嘱望されていました。

ところが、途半ばで谷口雅春師の許を去り、同じようにお釈迦様である高橋先生に帰依されたという経緯があります。

過去世からの繋がりからか、園頭先生は教祖に何か理屈では言えぬ親しみを持たれ、生長の家を良くしたいという一念から教団改革の建言をされ、そ

れが原因で袂を分けられたというのです。

国際正法協会の機関誌『正法』には、

「谷口先生が出てこられ、あなた説いて下さいと教祖に導かれ登壇する夢を見ました、そうすると現教主ほどうなるのでしょうか」、

と園頭先生は何度か書いておられます

こうして舍利佛と大目連の二人は誘い合って釈迦に弟子入り、釈迦教団の中心として重要な働きをします。

しかし、大目連は後に、些細なことで暴漢に襲われて亡くなります。

大目連は幼名をコリータといい、釈迦教団でめきめき頭角を現わします。

そこで釈迦は、

「そなたは、正法、仏法をよく勉強できました。ここいらで改名をして、なを一層、精進するように」、

と、マハーモンガラナ（大目連）という名を与えます。

同じく、舍利佛は幼名をウパテッサといい、改名後はシャーリープトラ（舍利佛）です。

モンガラナである大目連は、その後日本に坂本竜馬として生まれます。

皆さんよくご存じのように竜馬は暗殺され若死にです。古代インド時代も同じでした。

明治維新のあの時代に、靴を履いて写真に写ったモダンな竜馬は、今世はレイモンド・大谷氏として、竜馬が夢にまで見たニューヨークに永住されて

いることをお話しした上で、次の話をします。

高橋先生は講演の中で、コリータであるモンガラナと、坂本竜馬を揶揄（やゆ）して、

「なんとしろ、何度コリても仕方ないから・・・爆笑」、

と。

高橋先生はいつも、気さくに愉快で誠実な講演をされました。

こうして、著者の知る限りでは、舍利佛について特に、高橋先生は言い残されていませんので、舍利佛は特に変わった死因はなかったと考えています。

園頭先生は、過去世の古い順から、超古代の天使ガブリエルから始まってカルビン、ジョージ・ワシントン、西郷隆盛と順追って述べてみます。

カルビン

マルチン・ルターと並ぶ宗教改革者の、スイスで宗教改革を実践したカルビンについて述べます。

カルビン（一五〇九 一五六四）は、最初はカトリックを信じるも、プロテスタントがカトリックから弾圧されるのを見てカトリックに批判的となり、『キリスト教

綱要』を書いてプロテスタントを弁護します。

厳しい戒律も説きますが、勤勉に働いて財を蓄えることは神の意にかなうと教え、宗教家でありながら当時としては珍しく、政治と社会改革の事業をや

り遂げています。

また、『正法』誌は、園頭先生が書かれたのは創刊から闘病されるまでの二百十一号迄ですが、先生は本の虫で実に博学でした。

これには、政治、経済、社会問題など多岐に渡って記述され、不思議にもカルビンと園頭先生の共通点が見られます。

そして、当誌は宗教の感性を磨けるのと、社会常識と意識の向上に寄与するところは大きく、毎月の発刊を楽しみとしたものです。

カルビンは五十五歳の生涯でした。

ジョージ・ワシントン

次に、アメリカ独立戦争の総司令官として勝利に導いた、アメリカの初代大統領ジョージ・ワシントンです。

ワシントン（一七三二—一七九九）は、一七八九年には初代大統領となり七年にわたって合衆国の基礎を築いて「建国の父」と尊敬されます。

大統領として三度選ばれますが、民主主義のために良くないと考え、三度目は辞退し、政治から身を引き、悠々自適六十七歳でした。

西郷隆盛

西郷隆盛（一八二七 一八七七）は、ご存じのように城山で自決して享年五十歳でした。

園頭先生が本体で、西郷隆盛は園頭先生の分身ですが、「本体と五分身」の法則に照らし、本体は分身の心の傾向性まで修正の義務がある、と高

橋先生は説かれます。

西郷隆盛は征韓論を唱えるも敗れ、私学校生徒に推されて西南戦争を起こし、政府軍に敗れます。

本体の園頭先生は、西郷の心の傾向性を修正するだけでなく、先生自身の魂の修行もあったのですから、今世は大変だったに違いありません。

舍利佛であり園頭先生の西郷隆盛と、大目連であり大谷氏の坂本竜馬と、お釈迦さまであり高橋先生の木戸孝允との生き様を比べると、明治維新の

立役者三人の中で、唯一お釈迦様の分身の、政治家・木戸孝允のみ、畳の上で往生しています。

このように不思議にも心の傾向性が関連づけられるので、園頭先生の病気と、過去世との関係を吟味して見るのも意味ありと考えました。

イエスの場合はこうでした

イエスの分身の場合

イエスさまの近世の分身は、世界的に高名なフィリピンの心霊術者、ヒーラの通称トニー、本名アントニオ・アグパオアと高橋先生は言い残されま

す。

トニーは、心霊検査に呼ばれて来日していますが、比島へ渡った日本人患者との男女関係から短命でした。

そのころ園頭先生は、注告のためにフィリピンへ飛ばれますが、残念なことに徒勞に終わります。

また、高橋先生は、昭和四十八年（一九七三年）に、百八十年後にはアメリカのシカゴにイエスの本体が出るとも予告されます。

イエスさまは、そこで世界政府を樹立されるようですが、女性問題も留意されねばならず大変でしょう。

このとき魔達は、この心の傾向性を突いて来るに違いないからです

正法が出ると、それを阻止しようと魔は奮い立つそうです。

次に高橋先生の講話を紹介します。

イエス様のこと

「イエス様が伝導を始められた頃のことです。

病気を治してあげた青年に、一人の心優しい美しい姉がいて、イエスさまは心が魅かれてなりません。

天上界では、大きな使命と目的のあるイエスの一挙手一投足が監視されています。

そこで、釈迦の高橋先生は天上界から

「あれはダメ、それはイケナイ」、

と注意をされ気掛りでなりません。

そのことを突いてイエス様が僕に言うんですね。

「あなたは、僕に注意をする割には自分には甘い、僕が好きになったとき、イエスいけないと恋もさせなかったじゃないか」、イエスさまは西洋的なところ

があって、紳士的でとっても優しいんです。」

と。

以上が近世の園頭先生の分身から見た心の傾向性の推測です。

病気の予兆

園頭先生は、八十一歳のお誕生日のその日に不思議にも亡くなります。

高橋先生は予告された四十八歳で亡くなり、園頭先生は誕生日のその日ですから光の天使にはこのような不思議もあるのでしょうか。

園頭先生が亡くなる三年前の入院直前のこと、鹿児島を旅行中の著者の息子が、友人と空港の先生を見送りに行ったそうです。

先生は内藤國夫氏や山崎正友氏等と「池田大作氏を救うために」という全国キャンペーンの鹿児島講演を終えて帰られるところでした。

「そのとき先生は鼻血を出してトイレに駆け込まれるところだった」、

と息子が知らせて来たのです。

高血圧で二度も倒れた著者ですから、血圧コントロールに、鼻血や痔の出血で生体は一時しのぎをすること位いは百も承知でした。

なのに、その時すぐ先生に、忠告できなかつたことが今更ながら悔やまれます。

以上が先生の長い闘病生活の「原因と結果」つまり、現代宗教への先生の怒り、先生の食生活と心の傾向性を

整理しました。

疑問を解く一助になりましたでしょうか。

弟子の私が、先生を土台にして悪因悪果を書き立てるのは如何にもおこがましいのですが、厳しい先生の弟子として、先生から教えていただいた手

順と、正法の教える神理によって検証いたしました。

次に 質問者は先生の長い寝たきりの状態と、正法の説く神理の信頼性はどうかと質問されていますので、お答えしましょう。

今世の光の天使は循環器障害

正法の基礎編を説かれた高橋信次先生は、自ら予告の四十八歳の若さでした。

一方、正法の応用編を説かれた園頭広周先生は、三年の長い闘病から八十一歳のお誕生日のその日に亡くなります。

高橋先生の長女佳子氏によると、高橋先生が亡くなる直前には、一年間に二十キロもやせられ、血圧は下が百八十、上が二百六十以上もあって計

測不能。手はパンパンに腫れ上がって、いまだ出版されぬ『新復活』を、握れぬ手でペンを走らせていられたというのです。

また、園頭先生から著者にいただいた書簡には、「高橋先生の死因は過度の疲労からくる、肝臓と腎臓に病因がありました云々。」、

とあります。

付け加うるに、高橋先生の「一日一生」という記述には、その日は八十余名の個人指導と相談を受け、過労の上に寝る前に油っ濃いものを食べて休ん

でおられると、夜中に気分が悪くなりトイレで倒れます。

その時イエス様が先生の体に入って意識を交代され、助けられるというのもあります。

その他に、弟子の著書には、

「皆より後に、箸を置かれぬ位いに早食いだった高橋先生は、そのときはまだ半分のカレーが残っていた」、

とか、

手許の、その頃の講演ビデオをいくつか回すと、憔悴し切って激痩せの姿が認められます。

このように整理してみると、お二人とも症状は、血圧などの循環器に問題があったと断定しても良いでしょう。

イエスの分身でフィリピンのヒーラーのトニーも、やはり四十二歳の若さで脳出血でした。

論を進めてみると、現代の上位の光の天使は循環器に問題があったと気がついて、あ然としました。

霊格も人格も人間性も低い著者は、せめて二度の脳出血を返上し、これをもって最早うち止めにして、健康維持だけに努めようと決意したこととし

た。

地上界に出た光の天使たちは、天使といえどもこの世に出てしまうと手足をもがれるが如く、現世の肉体的な三次元の法則に縛られ、あの世へ戻っ

てくる、とは高橋先生の言葉です。

このように肉体という三次元の衣をまとしてしまうと、いかに光の天使といえども、大変なことなのでしょう。

何十冊もの神理・正法の本

とは申せ、高橋先生も園頭先生も、お二人とも何十冊という正法の本を私達人類に残して下さっているのです。

先生方の肉体は病気で朽ち果てられたかもしれませんが、神理・正法はどんな時代が来ようと、どんな国においても、時間、空間にとらわれず絶対不

変です。

神理は一つ。

神の理（ことわ）りは一つです。

神が定められた法則は一つです。

神理と言うからには、二つの正しい答えが在る筈はありません。

この絶対不変の人間の生き方を、「正法」という現代の名称で高橋信次先生は説かれました。

お釈迦様が説かれたものを「仏法」と言います。

仏、仏陀とは

「仏」とは神の心が一番わかって、あの世もこの世も未来の世も全て知って、人が何にを考えているか瞬時にわかって、人の過去世も来世も見通せ

て、あの世の人とも自由に話せて、過去世の言葉も自由に話せて、人類を正しく導く人を言います。

仏陀ともいいます。

仏つまり仏陀が説く法を仏法といい、仏法を教えるのが仏教です。

お釈迦様は仏であり仏陀で、神ではありません人間です。

かって、お釈迦様の高橋信次先生は、二千五百年の時空を超えて、東京の近郊の長野県に生まれられます。

いまや東京とは長野新幹線で隣町です。

お釈迦様は、人間の正しい生き方を説かれた筈なのに、お経とお葬式の形式に成り果てた仏法を修正しようと、今世は日本人の高橋信次として、仏

法ならぬ正法（しょうほう）として説かれました。

、日本は仏教の国です。

この国にキリスト教のイエス様が生まれられても、宗教のバックグラウンドの違いから理解されないのです。

これがお釈迦様の高橋先生が日本を選ばれた理由の一つともいわれています。

お釈迦様の高橋信次先生が説かれた、仏法ならぬ正法を、現代の舎利佛の園頭広周先生は、高橋先生の亡き後を受け、正法を生活の中にどう活

かすか、易しく噛み砕いて教えられました。

これを前置きとして、どうして正法が絶対不変の生き方の、基準と物差しになるか述べます。

言いかえれば どうして正法が人類にとって必要かということです。

これより本文

正法は、人間の生き方を示す絶対不変の物差し

正法は、自然界の法則を模範にした正しい人間の生き様を教えるものです。

人間も自然界の一員ですから、自然界の法則から一つも外れることはありません。

だとするなら人生の生き方を、自然の法則に合わせた方が無理なく一番自然で賢明です。

雨が降ったら雨に感謝し、晴れたら快晴を喜び、在るがままに生きることは一面では正しいのですが、そよ吹く風、適度な雨、数日の晴れなら問題はあ

りません。

でも、暴風、ドカ雨、干天は困ります。

「あるがままに生きる」、

というのは標語やキャッチコピーなら大歓迎ですが、暴風、ドカ雨、干天の中で、

「在るがままにオロオロ歩き」、

では万物の霊長である人間の生き方ではありません。

自然界は、人間をはじめ生きもの全部に、適度に地上を潤おす湿り、よどんだ空気を換気させるそよ風、地上

の湿りを蒸発させる太陽の熱と光を無

償で与えています。

なのに、地上はいつも暴風、ドカ雨、干天と騒がしく心の休まる暇もありません。

天候異変は人間の生き方にある

一番自然なそよ風、湿り、晴れを通り過ぎて、どうして暴風雨、長雨、カラカラの天気を、自然界は地上界の生きとし生けるもの全部に、準備し用意さ

れているのでしょうか。

正法は、それは万物の霊長である人間の生き方に在る、それが原因だと教えています。

人間が極端な生き方をしていると、それを思い知らせるために、自然界は超自然の天候異変を引き起こして教えるのです。

これこそ自業自得、自分の行いの結果を自分で受ける、ということです。

この仕組みに感謝せずにはおれません。

それを人間は長雨だ、やれ雨が一滴も降らぬと、天を恨む気になって不平をいい、これを、

「天にツバする」、

といいます。

その原則を知ると、日本のどこかに天候異変が起きても、なぜだろう？ どうして？ と考える思考回路が吹き上がり、人生の中のすべてに応用して、これ

といった大きな間違いも起こしません。

これがだんだん拡大解釈されるようになると、グローバルな地球規模で物ごとを考える心の基盤が出来あがるのです。

二千五百年前のお釈迦様は、これはすべて「因縁の法」と説かれました。

これはどういうことかと申しますと、もと（因）となる、原因となるものが有るから、それを縁として結果が生まれると説かれたといえます。

かって、お釈迦さまである現代の高橋信次先生は、これを

「原因結果の法則」、

と説かれ、その弟子である舍利佛の現代の園頭広周先生は、それを易しく噛み砕いて、

「善因善果、悪因悪果」、

と説かれました。

「原因結果の法則」

もしも、あなたが何かで悩んでいるとします。

その悩みは全部自分の悩みであり、まったく無縁の人がつくりだした悩みではないはずで

それがお互いの人間関係の中でできたものなら、これを相互関係、相依性といいます。

もし、そうでないのなら全部自分のせいに違いありません。

全部自分のせいなら自分で改めない限りその悩みは終息せずに、いつまでも続くのです。

高橋先生は、

「蒔いた種は自ら刈り取る。これは神理です」、

と訴えられました。

悪の種なら文句なくすぐ刈り取らなければいけません。

なぜなら収穫の秋には悪の大輪が咲き誇り、悪の実が結実するからです。

良いことならますます伸ばし、悪いことなら思いきって根っこから摘みとらねばなりません。

そして二度と悪いことは繰り返さないことです。

悪事は二度と繰り返さなければ許される

二度と絶対に繰り返さなければ、どんな悪事も赦されます。

なんとなれば悪事を働かない人はいないからです。

悪事は自分の心から絶対に消せません。

どうしてかと言いますと、人に嘘をつけても自分の心は全部覚えていて絶対に嘘をつけないのです。

自分の心に嘘のつけない良心を、

「善我なる神の子の自分」、

といいます。

この善我なる神の子の自分、つまり良心が自分を、

「良心の呵責」、

として裁くのですから、自業自得なのです。

再度繰り返して念を押せば、悪事を働くと、誰が責めなくとも良心の呵責となって自ら苦しむのですから自業自得、天にツバするというのです。

天にツバすると、そのツバは全部自分に降りかかるように、自分で蒔いた種は全部自分の結果として自分に降りかかることからもおわかりでしょう。

後悔と反省の違い

一度は悪事を働いても、いけなかったもう二度と繰り返さないゾ！、と心の底から反省し決意をして、絶対に止めればそれは許されると申しました。

それはなぜかと言えば、心から反省をすればそれで打ち止めにするのですから、心は晴れ晴れわだかまりもありません。

これは明るい心の世界だから許されるのです。

しかし、悪事を重ねる度に、いけなかったいけなかったと後悔して止まない生き方は、暗い心の世界だから赦されません。

後悔はたびたび繰り返すこと、反省は二度と繰り返さないことをいうのです。

このように後悔と反省は、言葉の重みが全く違うことがおわかりいただけたと思います。

心の等速度運動ということ

心の等速度運動とは何でしょうか

心が一定の速度で動きつづけることに違いありませんが、これではもう一つ、しっくり来ません。

車輪のついた物体を一定の力で押すと、押し出した力に応じた速度で物体は動き始めます。そして、しばらくすると自然に停車します。

途中で止めるためには、思いきってブレーキをかけなければなりません。

心の傾向性の修正は自助努力

このように、心が一定の傾向性をもつと、自分で意識して、あるいは一大決意をして考え方を改めなければ、いつまでもいつまでも心は変わりませ

ん。

物体と心の大きな違いは、物体は車輪と道路の摩擦や向かい風の抵抗などで、そのうちに必ず停止します。

でも、心の場合は心を入れかえない限り、死ぬまで永久に心は変わらないという特性を持ちます。

これが一番大きな違いです

心は一定の傾向性を持ってしまうと、悪いと分かっているにもかかわらずその方が居心地は良いものですから永遠に続くのです。

今度は実例をあげます。

「質問と解答 Q & A」

陰気でジメジメした性格の人がいました。

「自分でもこんな性格はいやだと思いながら、思うばかりで自分ではどうにもできません。どうしたらよいのでしょうか。」二十五歳男、

というのです。

自分の性格も機械の部品でも取りかえるように簡単に修理交換できたらこんなに都合のよいことはありません。

あなたが、これまで生きてきた人生の中で作り出してきたものですから、全部自分のせいだと自覚します。

大事なことは、

「親や兄弟や社会環境や先生とか上司などの、あなたの周辺のせいにせず、全部自分が作り出したもの」、
と自分の口をついて出るまで時間を掛けます。

あなたが二十五歳ならその年になるまでその心の状態に安住したのですから、一と月や二ヶ月の時間なんて問題になりません。

「急いでではことを仕損じる」、

と言いますから急いではなりません。

「石の上にも三年」、

といいます。

、三年なんて言おうものなら、誰だってやる気も失せてしまいます。

三は起始数といって基本数字です。

実践の仕方

)、そこで最短の三ヶ月を目標にして、自分のせいだと口から出るようになったら、今度は陰気なジメジメの性格と反対の快活に明るく振舞うのです。

2)、この状態を一週間、二週間、一ヶ月、二ヶ月と続けていると、今までなんとなくウマが合って気が合っていた友達とも、何とはなしに気まづくなっ

て、別れ別れになるかもしれません。

酷なようですが、こうなったらシメたものです。もう大丈夫です。

このことを、循環の輪である悪循環のチェーンを切るといいます。

今のあなたとウマが合うというのも、友達もあなたと同じ、似たもの同士のジメジメ人間のはずですから。同じ人生なら明るく快活な人を選んだら良いじゃありませんか。

別の明るい人を選んだらよいと申しましても、相手が明るく快活な人なら、あなたがジメジメ人間では、相手の方が願い下げと言うかもしれません。

そのためにも、相手があなたと友達付き合いしても良いよ、という位にこちらも少しは努力して明るく快活でなければなりません。

このように正しく明るい方へ人間改造をすると、運命も好転して良い方へ良いほうへと向かって

「笑う門には福来たる」、

です。

「自力の極には他力あり」、

とも言います。

懸命に自助努力をしていると、何か見えない力が働いて、思わぬ展開をするということです。

心の問題は、自分で立上がって劇的な修正をしない限り劇的な人間改造はできません。

三回目の背水の陣

一回でダメなら二回やってみて、それでもダメなら三回を最後に、背水の陣を引いてやり終えてください。

何度やってもダメな人は、陰気な人生を好きこのんで、楽しんでいると考えても間違いはありません。

そのような馬鹿なことを、と思われるでしょうが、中にはそういう人もいるものなのです。

それにもっと酷なことを言えば、今世でダメなら次の世でやってもらえばよいのですから。なんにもアワてることありません。

似た者同士ということ

似たものどうしや、類は友を呼ぶとか、同類という言葉があります。

人間は、ウマが合うとか気が合うという人間関係が、社会生活を通して生じます。

「袖（ソデ）すり合うも他生の縁」、

ともいいます。

ちょっとしたいきごとでも、全て因縁があって起こるという意味です。

しかし、私が言うのは意味が少し違って、そこに人間関係がいきあがると、友達、先輩、後輩、先生、上司、隣人などの相互関係がいきあがるとこ

ろには、正法的に、まったく無縁な人はいないということです。

周囲の人はみな縁生

それはどういうことかと申しますと、かつて生まれてきた時代の過去世で、或はあの世で関係があつたということです。

物質の世界では、砂の中に磁石を転がすと、鉄粉がくっついてきますし、金属の中でも銅などの非鉄金属はダメということを経験されていることでしょう。

このように同属とか同類というものは、お互いに引き合い、一つになろうとします。 心の世界も物質の世界も同じなのです。

自分の都合による善悪の判断と、正法による判断

多くの方は、自分に都合がよければ善であり、自分に都合が悪ければ悪と考えます。

また、法律に引っ掛らなければ、人にさえ迷惑を掛けなければという、自分の考え方に合うものだけが善で、合わないものはみな悪と考えます。

「善と絶対善」

ある人に次のようなことが起こりました。

自分の駐車場に車を止めたところ、

後ろに車を止めた人がいて出せませんでした。

その時その人は、

「けしからん、怒鳴り込んでやる」、

と腹を立てます。

これをどう考えるか検証してみましょう。

駐車しているすぐ後ろに車を止めるということは、止めた人が悪いのですから、悪いと思っていいでしょう。

なので、その人は間違っただけは何もしていないのです。

だから、善となります。

しかし、腹を立てて怒鳴り込んでしまったのでは、「絶対善」とはいえません。

ここで、腹を立てないで、

「迷惑をしていますから、車を移動させて下さい」、

という思いやりの心は「善」となり、腹を立てて怒鳴り込んだことは「悪」ということになるのです。

このように、法律的には間違っていないくとも、正しい心のあり方から判断するとこのように違います。

地上に菩薩界の出現

このさき地球に住む人間も魂の段階が上がって、このような絶対善の菩薩界の人達ばかりになるようですから、それはそれは素晴らしい時代が来るよう

です。

そこまで行くにはまだ地球も、紆余曲折あるようですが、その時代はキッと来るというのです。

心の正しい基準

正法は、基礎や原則を知ると、全てに応用がきく教えです。

ですから、人間の生き方、人生の在り方の方程式と言えます。

正法は、答えは二つとはない、絶対一だからこそ「神理」や「法」というのです。

正しい判断の方程式

心の正しい基準、心を正しく判断する方程式は、

「そのことによって心が安らぐか」、

と、

「そのことによって調和するか」、

という、この二つを同時に満たすもの」が、絶対善の正しいことになると正法では教えています。

前に述べました、駐車場での問題を当てはめて考えてみてください。

怒鳴り込んだ途端に、心が安らぐどころか不調和に混乱して、相手次第では喧嘩にならないとも限りません。

このように怒鳴り込んだのでは、もも同時に満足させませんから、唸鳴り込むことは正しいことではないと判定できます。

このように人生の全部に応用するのです。

それでは次に、絶対不変の価値の物差しについて述べます。

絶対不変の価値の尺度

地球という大地、

水、

太陽、

空気、

宇宙、

この五つが、人間の価値を決める価値判断の絶対不変の尺度、ものさしです。

人間の短所と長所

短所はここでは挙げません、どうしてかと申しますと各人の心に焼き付いて潜在意識に秘められると、何にも人生の益にはならないからです

長所とは、。

明るく朗らかで、

素直であり、

人と協力し、

助け合い、

補い合ってゆく、

調和の性格です。

この長所のところを、何回も何度も声を出して読んで頂きますと、潜在意識に知らず知らずの間に印象されて心の改造の手助けになるでしょう。

子に対する親の役目

子供が成人し社会人となって、人間としての道はずさない、立派な一員になるよう導くことであり、それ以上のものでも以下のものでもないのです。

子供に期待を寄せ、煩悩的に子供の安全のみ願うと、かえってそれが災いし子供を不孝にすることになるでしょう。よくよく気をつけねばなりません。

米国中枢部ビル爆破事件

二〇〇一年九月、パソコンに向かってこの項を打っていたとき、旧日本軍の飛行機による特攻隊的なテロの攻撃によって、アメリカの幾つかのビルが

メルト・ダウンしたという報道が飛び込んできました。

アメリカに永住している著者の甥も、近くの会社で働いていましたが、本格的な操業前に間一髪で助かりました。

同じアメリカでも時間差が数時間もある実家では、息子の、

「元気だよ」、

という電話に起こされて、それから眠気も吹っ飛びテレビに見入ったようです。

日本人関係者も何十人の犠牲者が出て、それから日本政府は、

「前のイラクとの湾岸戦争と同じ轍は踏まぬ」、

と、異例とも思える速さで米国に同調しました。

十年前、湾岸戦争時の園頭先生の考え

十年前の湾岸問題のとき、光の天使・園頭広周先生はこれからの日本のとるべき道は、こうだと記述されています。

この賢明な態度が、まさに前回の湾岸戦争に取った日本政府の対応でした。

あのとき世界から、ブーイングされたと盛んに悔やみますが、あれで良かったと思います。

戦争にはどんな事があっても荷担すべきではありません。

先生の意見はこうでした。

「経済的、人的援助について、私が首相ならこうする」、

という記述からの抜粋です。

「私はどうにかしたいと個人的には思っているのだが、あなた方が作ってくれた憲法によってどうにもならぬ、法律をかえるにも時間がかかるし、実に

頭の痛い問題だ。云々」、

と首相は表明し、大いに時間をかせぐというものでした。

アメリカの本音

今や世界は不況で喘いでいます。大国アメリカもしかりです。

アメリカの本音は、

「それは勿論、あなた方の自衛隊の派遣も結構だが、それより何より前と同じように黙ってお金を出して欲しい、ゼニをくれ」

と、聞こえてなりません。

そして、トドのつまりはビル爆破のテロ報復にとどまらず、米政府は背後にあるパレスチナ問題に繋がるイラク攻撃も示唆したのです。

ソーッと放つておけば、そのうちに金は底をついて戦いも終わるのに、金満国日本がポンと、気前よくお金を出すものですから、いつまでも続くので

す。

ビル爆破をどう考える

ここにテロの問題を挙げたのは、前に述べました駐車場での問題を参考にして、米国のテロの問題をどう考えたら良いか検証してみようというわけで

す。

サテ、三千人ほどの犠牲者を出して、ビルに激突するシーンをテレビは何度も放映して、それはそれは目を背むけたくなる事態でした。

日本人も二十数名が犠牲者になられて言葉もありません。

日本人も含めて三千人の犠牲者は、間違っただけは何もしていないのですから善です。遺族の方々の無念さ、残念さはよく分かります。

テロを仕掛けた者達は誰が考えても悪い。極悪です。

こちらは間違っただけは何もしていないのですから、やられたらやり返すという、報復攻撃を手段とするなら絶対善とはいえません。

相手に抗議をして国際世論に訴え、話し合いの中で解決するのが絶対善であり、自分のお膝元には国連も控えています。

だからアフガンにしてもパレスチナ問題にしても、日本は原子爆弾を初めて被弾した国として、それに二つも落とされた国として、話し合いの仲介を引

き受けるよいチャンスなのです。

アメリカは誰が考えても、財政的にも軍事的にも世界的な超一等国です。

その世界一のアメリカが、

「軍事的な報復手段を潔くやめる」、

と表明しても、アメリカはテロに屈服したとか、腰抜けだと陰口をたたく人は誰もいないでしょう。

軍事超大国のアメリカをよく知る人は誰も反論できません。

何度も申しますが、米国の実力は世界が認めています。

忍耐と忍辱の違い

世界一のアメリカだからこそそうして欲しかった。

忍耐ではなく忍辱（にんにく）によって世界に範を示して欲しかったのです。

忍耐と忍辱は次元が全く違います。

忍耐は、

「今に見ている」、

と反撃のチャンスをうかがい、拳をかまえた暗い心の世界観です。

我慢はいつの日にか爆発します。心の中で不完全燃焼をしているので、心の中にイライラを起こし肉体的にも不調和を来たします。

一方、忍辱（にんにく）は、どんな辱しめを受けても、よく耐えて心に歪を造らず相手を許し、哀れな悲しい人よと相手を思い遣る高人格者のもつ心です。

もう一度、言葉を変えて言うなら、外部からどんなに辛い仕打ちを受けても、その想いの毒を心の中に食べず、許すということです。

まさしく、

「汝の敵を愛せよ」、

は至言です。

こういっては酷とお思いでしょうが、相手を気の向くままに虐殺しても、亡くなった人は戻ってくるわけでもなく、日本的な敵討ちとか仇討ちは、

「やったわね」、

とパンチを用意した恨み辛みの最たるもので、報復はまさにこれと同じです。

対抗手段は愛と慈悲

報復により相手を潰しても、テロを平気で実行するほどの暗くて低い段階の者達ですから、憎悪の炎を燃やし続けて、次々と行く手に立ちはだかりま

す。

よからぬ考えにマインド・コントロールされた人間を、良い方へ改心させる一番の方法は、力でねじ伏せるのではなく、相手にとって良かれと願う思い

遣りの行為、それは愛であり慈悲なのです。

キリストは、売春婦のマリヤを前にして、

「潔き者だけ打て」、

と言われました。

安らぎは許したとき

世界の長い歴史を見たとき、打てる国がどれだけ有るのでしょうか？

いくら報復だと粹がっても、安らぎは許す以外に生まれません。

許したときに、平和で平安な心になれるのです。

キリスト教徒の多いアメリカ。

それも、バイブルに手を置いて宣誓する大統領の国アメリカ。

キリストがいみじくも広宣した、

「汝の敵を愛せよ」、

は、まさしく、この、「神の心」を実践するための、アメリカのチャンスでした。

しかし、アメリカを中心とした多国籍軍による報復攻撃は始まり、出口の見えない泥沼へと踏み込んでしまうのです。

「アフガニスタンの現在」

アフガニスタンは三年もの間雨が降っていません。

極端な旱魃、干天状態です。

三は起数です。

三日や三ヶ月ではなく、三年もの長い間雨が降らないということは、この地域に人為的な問題があるということです。

人為的問題とは主義主張、政治的問題、闘争、内紛、戦争です。

十年前にソ連が侵攻して、打つ手もなく敗退すると、うなぎ上りに増えつづける難民も、世界に見捨てられるという悲しい歴史がありました。

現在、埋められている世界の地雷数は一億個以上、ここはその一割程の一千万個と言われます。

一個三百円の地雷を一個撤去するのに、一万円程度かかるようです。

ここでは毎日争いが続いていて、驚くなかれ二十一年間も内紛、内戦が起ったというのですから、まさしく狂気の沙汰です。

対ソ連でアメリカが支援、利用した派閥と、今回アメリカが支援、利用しようとする派閥と、また、別の集団との争いが二十一年間です。

この地域は麻薬の一大集積地と呼ばれます。

また、世界には五億五千万丁もの銃器があって、ここは銃器のブラックマーケットとも呼ばれます。

人間を墮落させる麻薬も銃器も、巷に溢れた無法地帯と言えるでしょう。

その極めつけは、理由をどうつけようとも、女性を蔑視、奴隷視して、顔を他の男性に見せぬように布で隠させ、教育も制限して自立を阻んでいま

す。

男優先の、男尊女卑もいいところ！

まさに前近代的な時代の逆行です。

一日も早く、自由で明るい女性の笑顔が戻れと願わずにはられません。

天の意思

ではなぜ、指導者だけでなく、罪も無い一般大衆も全土六割を越す大旱魃で、食べものも無いのかと申しますと、内紛という、そうした風潮を許す一

般大衆の責任も問われるからです。

「愚かな争いはもうやめた」、

と、元の平和に戻すために、天は天候異変という手段で、穀物等を育たないように仕向けます。

と、同時に、バッタや害虫の異常発生を促して植物を食い千切らせ、肥料もないから動物も育たぬよう厳然たる天の意思が働くのです。

何と有難い自然界のルールでしょうか、平和に導くために天の意思が働くとは。心からひれ伏したくなります。

万物の霊長たる人間が一人よがりでも、動物や植物は全部犠牲になっても人間の反省のためならと協力するのです。

人間は宇宙万物の長だからこそ、とりわけ動物、植物、鉱物の代表として、人間は皆な仲良くして、平和で調和しなければいけない理由を知ること

す。

だから、

「こんどこそ子供達に明るい未来を」、

とアフガン国民が皆で力を合わせ立上がって、平和で自由なアフガニスタンをつくる以外に道はありません。

如何なることがあっても努力を続けていると、これは本物だと認められる頃には、干天も旱魃も終息して、いつの日か平和で安寧の日々を過ごせるよう

になるのです。

高橋信次先生はこうも言っておられます。

「今日、冷害や早魃が各地に起こっている原因の一つは、熱消費の増大であり、煤煙、排気ガスのチリが天空にのぼり層をつくりはじめているからである。

それともう一つは、地上に住む人類の想念行為によって、地軸の位置、自転のリズムを変化させていることもある。」、

と。

地雷探査のこと

平成十三年十二月中旬のこと、著者の高校の同窓で国立大の教授の話しを聞く機会がありました。

それは何かというと五、六メートルの飛行船を秒速一メートル以下の速度で縦横直角に碁盤の目のように動かし、カーナビを応用して地雷を探査して

地雷マップを作り、除去作業を効率よく行うことのようにです。

テレビで放映したこともあるのでご覧になられたかもしれませんが、その日のお話しは平成十三年末の最新情報でした。

金属地雷もプラスチック地雷も探知可能であり、地雷は数センチから十センチの大小から形は様々で、小石との判別には多数のマルチセンサーで対

応する以外に今のところは無く、高感度の臭いセンサーの開発が待たれるとのことでした。

その点、犬は爆薬のわずかな漏れ出る臭いも許さぬ最高の探査機のようにです。

日本は世界機構を通して多くの地雷除去料を負担していますが、ある国などは資金提供の代わりに、訓練した犬を送り届ける政策のようにです。

地雷は、小さな子供の片足が乗っても爆発するらしく、地面に直角では爆発するので、斜め三十度に棒を注意深く突き刺しながら除去作業を少しづ

つ、少しづつ根気よく続けるのだそうです。

ある国などは、

「エエイ面倒くさい一度に！」、

と、大型ローダーで、何でもかんでも踏み潰し耕して、爆発させるらしいのです。

しかし、金属もプラスチックも爆薬もゴチャ混ぜで整地すると、どうも環境に良くないのだそうです。

人間の悪知恵で考え出された兵器に対して、良い結果が用意されているわけではありません。

地球人は、宇宙船地球号の同一乗組員なのですから、他の乗組員の為した行為でも、皆で責任を分かって応分の資金負担は当然なのですが、地

雷禁止条約への不参加国は、残念なことにアメリカ、中国、ロシア、インドのようです。

アフガンへの米国の過去の対応

アメリカは今から十七年前の一九八五年十二月、国連からアフガニスタン和平の保証国となるよう求められたとき

「ソ連軍が撤退すれば反政府ゲリラへの武器供給を停止する。」、

と約束します。

一九八七年末には、

「ソ連が政府軍への軍事援助を中止しない限り、反政府ゲリラへの武器供給もやめない」、

へと主張が変り、

一九八八年三月末には

「ソ連が援助を続ける限り、米国も同様の権利を持つ（シュルツ国務長官）」、と。

米国はこのようにしてソ連との了解に達したのです。

真の和平は、大国間の、和平のための和平でなく、人類のための和平でなければなりません。

大国がエゴをむき出すのをやめ、銃声の聞こえない真の和平を現出させるためには、宇宙船・地球号の乗員全員が何もせずに、手を拱（こまぬ）いてはいけないのです。

二〇〇二年一月中旬には、アフガンの一部に雨と雪が三年ぶりに降ったと新聞は報じました。

国全体の在り方が好転してくると、天はその様子を見届けながら対応するのです。

だから、後戻りすることなく、これからも平和で自由なアフガンを創り続けることでしょう。

パレスチナ問題と予言本

次にパレスチナ問題です。

アメリカ政府はアフガン報復攻撃を始めるとき、十年前のクエート侵攻問題に端を発した、湾岸戦争のぶり返しとも思えるイラク攻撃も示唆しました。

それというのも、この出口の見えないパレスチナの紛争を予言していた本が五十年前にアメリカで出版されていたのです。

今から五十年前、リチャードゼナーという米ロスのアガシャ教会の霊媒を通して、アガシャという高級霊人が霊示を伝えます、

それを教会員で元記者のジェームス・クレンショウが

『Telephone between Worlds』 by James Crenshawという本にします。

その訳本としては、

『天と地を結ぶ電話』と『アガシャの霊界通信（上下）』、

の二つがあります。

前者は生長の家の出版、後者は園頭先生の監修による正法出版社です。

原本は同じでも訳者によって表現が微妙に異なるので、二つを比較して読んでいただくと良いのですが、園頭先生が亡くなられてからは、正法出版社

も閉じられ、園頭先生の何十冊もの著書は、今のところ流通していません。

再び先生の本が陽の目を見ることを願っています。

この予言本の中でアガシャは、パレスチナ問題について驚くべき予言をしています。

よからぬことは外れた方がよいのですが、アガシャは高橋信次先生や園頭広周先生のグループの霊ですから、残念なことに最高の確立的中するだ

ろうと著者は考えています。

奇しくも、アメリカ人が五十年前にアメリカで出版していたとは、因縁めいたものを感じて不思議です。

二つの本を合作要約してご紹介しましょう。

アガシャの予言

アガシャはこう言っている。

「宗教的、経済的戦争は既に行われており、それが好転する前にひどく悪くなる。パレスチナの戦いを止める気違いじみた努力は無駄に終わろう。

戦いは拡大して、奇跡的な和解が行われな限り世界に広がって行くだろう。

また、或る国家群（有色人種）は興り、或る国家群（白色人種）は没落するだろう。

そして、アメリカ自身は超世界的指導国となるが、それは同時に「没落期」も迎えるだろう。つまり、国内分裂と大災害の時期を迎えるだろう。」

と言った。

また、アガシャは次も告げた。

「多くの勇気をなくし失望した人々は、大きな努力なしで全部を自分のものにできると信じるために、共産主義は広まるだろう。

だが、共産主義の下では大したもののが得られず、正しき生活に欠かせない表現の自由もなく、ただ、指導者の奴

隷になるだけだと確信した時、そのとき

共産主義は自己崩壊するだろう。反乱が起こり戦争が起こるだろう。

そして、長い間、共産主義は多くの人々を支配するが、結局それは死滅するであろう。」、

と。

イスラエル問題を論ずるとき、ユダヤ問題は避けて通るわけには参りませんので、次はこれについて述べます。

イスラエルとユダヤ問題

ユダヤという呼称はバビロン捕囚後に呼ばれるようになります。

外国人による呼び名はヘブライ人であり、彼ら自身はイスラエル人と呼称しています。

多くの成書に見られるように、ここでもユダヤと統一して述べることにします。

なぜ、突然ユダヤ問題が出てくるのかと申しますと、パレスチナ問題を語る時、これを抜いては論ぜられないのと同時に、この問題は、キリスト教、イ

スラム教、ユダヤ教の、いわば宗教戦争の観点抜きには語れないと思うからです。

紀元前千五百年、つまり今から三千五百年前のこと、ユダヤ人はもともと遊牧民でした。

一部はパレスチナに定住し、一部はエジプトに移住します。

ところが、新天地と信じてエジプトへ移住した人々も、又もや圧政に苦しみます。

世の中は混乱し、底辺の人には自由がなく虐殺、強盗は日常茶飯のことでした。

モーゼのこと

奴隷の子として生まれたモーゼは、天上界の計画によって天使達が見守る中を密かに葦舟で流され、無事に王宮に拾われ大事に育てられます。

王宮に拾われたことによって、モーゼはそこで智と仁と勇を学び、長ずるにつれて支配者と被支配者の矛盾を感じて、奴隷解放に決然と立上ってゆ

くのでした。

モーゼは奴隷では学びえなかった文字を習い品性を陶冶して、王宮の体制の側面も知り、社会全般を見通せる素養を身につけることとなります。

こうしてモーゼは六十数万もの人々を引き連れ、安住の地を目指して、四十数年の長途の旅に登ってゆきました。

この当時は世の中もたいそう混乱して、底辺の人達に平和などありません。

そこで天上界は、メシヤ（救世主）としてモーゼをこの世に下し、人間の正しい生き方を大衆に示したのです。

高橋信次先生であるエルランティは、モーゼにヤーベを名乗り、「十戒」を現象として見せ、詳しく教えます。

エルランティとは

エルランティは三億六千五百年前、七大天使と共に反重力光子宇宙船、今でいうUFOに乗って、地球へ初めて飛来した一団の中心霊であり、最高

責任者です。

エルランティの分霊としてモーゼ、釈迦、イエスがいます。

突然、この話が出てきて戸惑われると思いますが、これについてこれからゆっくりとお話しします。

高橋先生が講演される時のことです。

お釈迦様の話をされると、普段の高橋先生はそうでもないのに、耳が大きく伸びて釈迦の顔になられ、また、イエスのときの高橋先生は丸顔なのに細

面の顔が、モーゼは、またそのように次々と雰囲気が変わりました。

お釈迦様の場合は

お釈迦様を例に引けば、どうして二千五百年前のお釈迦様の顔がわかるの？

と疑問の聲が聞こえてきそうです。

その疑問は当然でしょう、どうしてわかるのか、高橋先生の言葉を借りれば、それはこうです。

何千年も前にお釈迦様の傍にいて、しかもお釈迦様の顔を知る人なら、お釈迦様である高橋先生の全身から放たれる光り、オーラー、後光によっ

て、その人の心にある想念帯の一部が破れて、九十パーセントの潜在意識が十パーセントの表面意識に流れ出ると、過去世のことが今日のことのよう

に思い出せるのです。

Home

過去世を思い出す二つの方法

何千年も昔の人生をありありと思い出す方法は、二通りあります。

その一つは、人間の三悪想念である愚痴、怒り、足ることを知らない欲望を心から取り除く正しい生活行為を続けていると、その内に過去世のことを思

い出せるようになります。

もう一つは、過去世で縁のあった光の天使の、例えばお釈迦様のような方から絶えず出ている光、オーラ、後光によって心の窓を開くと、過去世のこ

とも言葉も全てがわかるのです。

高橋先生の光で過去世の人生や言葉を、強制的に思い出させられた人は、高橋先生が昇天されると、その能力も消えうせ、ただの人に落ち果てま

した。

しかし、正しい生活行為によって心の窓を開いて霊能を現わした人は、いつまでも能力を発揮し続けたので

す。超能力を得たいと考え、肉体業や苦行によって人が持たぬ特別の能力を得たいと労力を無駄にするより、正しい想念行為から発象する能力の方が

何倍も素晴らしいかお分かりでしょう。

このような理由から、お釈迦様である高橋先生と縁のある聴衆者で、自らの正しい生活行為から自分で霊道を開いた人か、或は、光の天使が放つ光

によって霊道を開いた人は、お釈迦様を見たというか、霊視したというか、

「ア、お釈迦様だ」、

となつて、

「あの方はお釈迦様の生まれ変わりだ」、

という風評が一人歩きをしたのです。

と、同時に、

高橋信次先生の『人間・釈迦』四部作や講演では、

「私はそのように説かなかったのであります」、

とか、

「それは違います真実はこうです」

と、お釈迦様でなければあーは書けまい、あーは言えまいといわれる新事実の連続でした。

これが高橋先生はお釈迦様に違いないとの風評が定着した理由です。

イエス様の場合

また、聴衆者がキリスト教について質問すると、高橋先生はイエス様の顔になられて、釈迦の場合で説明をしました同じ手順で、

「イエスは紀元前三十二年に生まれました」、

となり本当に驚きでした

西暦はご存じのようにイエスの生誕から始まっていますから、三十二年となればどうなるのでしょうか。

皆さんも俄かには信じられないと思いますが、歴史が根底から崩れるのですから驚きです。

高橋先生には誠実でウソが全くなく、その方が明かされた真実ですから、私は信じます。

また高橋先生は、

「イエスは天上界ではイエスとは言いません。イマニエルやインマネールといいます。インマネール・イエス・キリストです。釈迦は天上界ではカンターレ

です。モーゼはモーゼです。」、

と講演されています。

以上はエルランティの分霊が釈迦やイエスの場合です。

これまでに、分身や分霊と使い分けて述べていますが、ともあれ複雑で分かり難いから、「〇〇の分身、分霊は 〇〇です」とあったら、「〇〇は 〇〇に

生まれ変わりました」、と理解されても良いのではないのでしょうか。

次は園頭先生の体験されたエルランティです。

園頭先生とエルランティ

園頭広周先生は、高橋先生に何か声を出して問うわけでもなく、心の中で質問されたそうです。

すると何も尋ねないのに高橋先生は園頭先生の心の中を読んで、

「それはキリストに答えてもらいましょう」、

となります。

心の中で何を質問されようとしたのかと申しますと、それはこうでした。

園頭先生が生長の家教団の、幹部の頃のことです。

、例えば会員が子宮の病気を相談したとします。

すると、相談を受けた担当者は、周りの人にも構わず大きな声で、

「その病気は夫婦の調和がないから、仲が悪すぎるから！」、

と怒鳴られて会員は、

「皆の前で恥をかかされた、もう集まりに行くもんか」、

という風潮が出てきます。

そのような担当者達をどう指導するか、管理をされる立場の園頭先生は、その時どうすべきだったのか尋ねたかったというのです。

イエス様はどう答えてくださるのか園頭先生が固唾を飲んで見守られると、最初は釈迦の相（すがた）でしたが、みるみるうちに高橋先生の顔はキリス

トの顔になられ、

「愛のない人に心と肉体の法則を教えるはいけません。愛を説く機根ができた後に教えなさい」、

と、教えて下さったそうです。

どうして、キリストの顔が園頭先生に解られたのかと申しますと、園頭先生の過去世の一人は、超古代では天使ガブリエルでした。

というのも、マリヤさまに「メシヤが生まれる」というイエス生誕の伝達係りでしたから、イエスと、それはもう旧知の仲でした。

そのイエスさまが、愛を説く機根が出てから教えた方が良いとなります。

愛があれば、偉ぶって人を裁くことはありません。

イエス様の説明が終わると、高橋先生は、

「わかりましたか園頭さん。モーゼにヤーベと名乗ったのは僕ですからね」、

となります。

すると、キリストの上に、イエスを超越した偉大な光があったそうです。

園頭先生は霊の重圧というか、魂の感動というか、誰かに強制されるでもなく自然に額ずいて、

「高橋先生をこの世に賜わりましてありがとうございます」、

と心は打ち震えられるのでした。

イエスを超越した偉大な光こそは、エルランティだったのです。

これまでの粗筋は、モーゼが六十万人を引き連れて大移動を四十数年間行うには、エルランティがヤーベを名乗り、モーゼに十戒を伝えたというところ

まで話しました。

これだけの距離に、どうして四十数年という長い時間を掛けたのかと申しますと、それは移動しながら六十万人それぞれの心の調和を計るためと同時

に、

人間の正しい生き方の十訓ともいう「十戒」を、通過先の民へ浸透させることでした。

それから、通過して行く地域の天候異変による凶作を、豊作に変えるためには、十分な時間を掛けなくてはなりません。

このようにヤーベはモーゼに、雨、風、晴れの天候を変える力も与えます。

ヤーベがモーゼに教えた「十戒」は、次の通りです。

モーゼの十戒

汝をカナンの地へ導きしは、我ヤーベなり、我の外、なにものも神とすべからず。

偶像を崇拜するなかれ。

神と主の名をみだりに唱えるべからず。

安息日には休め。

汝の両親を敬え。

汝、人を殺すべからず。

汝、姦淫するなかれ。

汝、盗むなかれ。

汝、偽るなかれ。

汝、隣人を愛せ、

です。

このようにヤーベは、人間として守るべき十の戒め、十の必要最低の生きる道を、モーゼに伝えました。

とりわけ、人間の正しい生き方をエルランティは、民の代表であるモーゼに教えたのです。

モーゼは、それを民に伝えました。宗教的に特別なことは何もありません。

だから著者は、

「宗教は人間の正しい生き方を教えた筈なのに、それにもかかわらず変えられて」、

と述べたのです。

モーゼはエジプトを脱出して、何事もなくシナイ半島にたどり着きます。

ところが、それから六年経っても思うように進みません。

或る夜モーゼはヤーベの声を聞きます。

それは、

「十人には十人の長を、百人には百人の長を、千人には千人の長を、それぞれの長をつくって、その長を集めて伝えよ」、

というものでした。

それまではモーゼが全員一人一人に指図していたからです。

長い月日が過ぎました。

いつしか、モーゼは悪魔サタンが起こす奇跡的、霊的な現象に惑わされ、偶像を祭ってはならぬと自から戒めていながら、モーゼはヤーベの偉大性

を讃美し、お祭りをして山羊の生き血、羊の生き血を供えるという重大なミスを犯します。

なぜそうなったのかと申しますと、ヤーベがモーゼに霊的な通信を送るときは、姿が見えぬだけに誰の通信からか分かりません。

そこで、重大な間違いを無くすために、

「I am that I am」(我は有りて在る者なり)、

という言葉から始めるのがお互いの約束だった(高橋信次先生)、というのです。

サタンとは

それは三億六千五百年前のこと、真のメシヤ、エルランティと共に、他の天体のベーター星から次々と地球へ飛来した六千人の中の、七大大使の一

人ルシフェルは、天使でありながら生き方、生き様を誤り、天上界とも連絡を絶ち、暗黒の地獄の帝王となってサタンと呼ばれます。

モーゼはサタンの起こす霊的な現象に惑わされることはあっても、ヤーベはモーゼに、生贄を捧げよとも、人を殺せとも言ってはいません。

一人の命も百人の命も同じだと言ったのです。

特に、ユダヤ教ではヤーベを怒りの神といって恐れています。

それも間違いです。

では、なぜか？

ベニスの商人とユダヤ

ユダヤ民族がこれまでにいろいろな苦難に出会ったのは、それが神の怒りにふれたのではなく、ユダヤ民族の行為が、今から四百年前に書かれた、

シェークスピアの短編小説『ベニスの商人』に代表されるように、中道調和の道を外れた結果にあったのです。

早い話が、『ベニスの商人』は、ユダヤ人が金をもうけるためには相手の生命も平気で取るという風刺です。

高利貸しのユダヤ人シャイロックは、相手に金を貸して、もしも金を返せなかったら、心臓をもらうという誓約書を書かせます。

ついに返せなくなって裁判になります。裁判官は、

「心臓をもらうと約束したからには心臓を取れ。但し、血は一滴たるとも約束してないのだから血を流さずに心臓を取れ」、

というものでした。

ユダヤ人は極端で酷いから、

「ギャフンと言わせれば、スッキリするね」、

という譬えです。

ユダヤ人には当時これほどまでの風刺があったのです。

今やユダヤ人は、武器、石油、通信、食料、金融、宗教、世相などを金の力で制覇するというのです。

ユダヤとシャローム

ユダヤが全てを一手にして我が世の春と歌いたいのなら、ユダヤ民族共通の迫害という悲しい歴史を歩んだとしても、ほどほどという中道調和の道を

画策しなければ、シャローム（平安、平和）には程遠いのです。

ヤーベでありエホバであった高橋先生は、正しく働くという正業（しょうぎょう）について、次のように語っておられます。

「一所懸命、一生懸命に働いてお金を正しくもうけることは、決して悪いはずはありません。人間にとって一番大事なことは、心と肉体と経済の調和で

す。

精神も健全で、身体も健康、お金もほどほどに持つことです。」、

と。

また、働くという経済行為の原点について、

「経済行為のの原点は、男女両性の愛の中から呱呱の声をあげた。男は労働に従事し、女は子弟の教育と家を守った。自給自足の経済は永く久しい

間続いたのである」、

と。

男は外に出て働き。女は家庭にあって憩いの場をつくり、子供を育て家庭を守るもの、と宣言されました。

男は愛する家族の、妻や子供のために懸命に働くのが正しい道なのです。、

自由、平等、友愛の気高い標語を掲げても、ユダヤ民族は早く世界と調和しなければ、いかに強烈な信仰をしようと、また、いかに財力にものを言わ

せようとしても、ユダヤ民族の在り方を変えなければ迫害は続くでしょう。

安息日も真実は次の通りです。

安息日

、安息日をつくり、一週間に一度だけ反省の時間を持たせよ、身体を休めることと同時に反省の日にせよと、ヤーベはモーゼに伝えます。

ところが商売はするな、病める人を助けてはいけない、あれはダメこれはダメ、ということになります。

ユダヤの選民思想はなぜ起きたか

では、なぜ、ユダヤ民族だけに選民思想が起こったのかと申しますと、それは旧訳聖書「出エジプト記」に在ります。

「神、モーゼに言いたまいけるに……我を汝らに遣わしたもうと」、

にあります。

神がモーゼに、

「私はお前達だけのために現れた」、

というのです。

これが、ユダヤだけに神のコトバを告げられた選ばれた民である、と考えるようになったのです。

モーゼはヤーベを神と呼びました。だからユダヤ人はヤーベを「神」と信じています。

ヤーベは神ではありません。次元の違う天上界の、最高人格、超人格である人間の霊魂です。

皆さんご存知のように創造主である神は、一度も人間の前に姿を現されたことはありません。

パレスチナ問題は出エジプト記とバビロン捕囚

いまや、世界がパレスチナ問題でギクシャクしています。

もともとの原因は、モーゼとともに前一五〇〇年頃の「出エジプト」記にいう、民族のシャロームを求めて歩き出した流浪の旅と、もう一つは前一

〇〇〇年頃に住民の大部分がバビロンに連れ去られた、民族の悲劇である「バビロン捕囚」にあります。

この後からは世界各地でユダヤ伝説が語られることとなり、シルクロードの行きつく先は正倉院に見られるように日本です。

こうしてユダヤ支族の一つが東端の日本にユダヤ伝説を残します。

それが古来からの日本民族と融合して、日本とユダヤ人の祖先は同一という日ユ同祖論の展開にも繋がるのです。

日ユ同祖論

その根拠は次の通りです。

沖縄の方言は、古代ヘブライ語に近い構造。

神主さんとユダヤ教のラビ（教師）の服装が同じ。

皇室の習慣、言葉、三種の神器の鏡裏にある文字は、前に述べた「我は有りて在る者なり」とヘブライ語で書かれている。

また、ユダヤ教と古神道や神社神道との類似点と共通点。

山岳宗教の山伏の頭につける小箱と、ユダヤのヒラクリティとの類似点など、挙げれば数多いのです。

高橋先生も「天狗」、「鬼子母神」についての記述が残されていますので、ここでは天狗について述べます。

天狗とユダヤ人

高橋先生はこう記述されています。

「研修会場は天狗の多い場所であり、禅定（ぜんじょう・瞑想）中に大きな体の、大きく長い鼻をした天狗がよく傍に来ていましたが、悪いことはしません

でした。彼らの顔は、天狗のお面とそっくりです。天狗を霊視した者は大勢いました。」

と、あります。

典型的なユダヤ人の白黒の写真を見ると、長くてカギ鼻の顔を朱で染めれば、まさしく天狗と叫びたくなります。

日本人と肉体的特徴を異にする、長身で長いカギ鼻のユダヤ人は、言葉と習慣の違いから不協和音を奏でた時代、それは迫害という、うらみ、つら

みの一つ一つが、他民族とは相容れない時代があったと考えても不思議はないでしょう。

その内に日本民族と調和して、日本の習慣や生活様式にユダヤが残って行ったのでしょうか。

モーゼ以後のユダヤ

モーゼ以後の三千年間は、ユダヤ民族と先住民族との血を血で洗う闘争の時代でした。

近世のユダヤ民族は、原子爆弾の基礎理論ともなったアインシュタイン博士等の卓越した頭脳集団に代表されます。

アインシュタインは、ユダヤ狩を進めるナチスを封じ込めるには、

「これもいた仕方がない」、

と、ルーズベルト大統領に原子爆弾の早期完成を建言します。

ところが、ナチスは既に敗退したのに、原子爆弾は博士の許から一人歩きをして、あろうことか博士が愛した日本に、投下されたと知るのは翌日の新聞でした。

博士が望んだ世界政府に管理されるのは、いつのことでしょうか。今なお原子爆弾の管理は米国の軍部です。

高橋信次先生は、

「鼻の長いのが出てきて難しい理論を説く。どうして彼が僕へと思った。僕が説く一部は、アインシュタインから教えられたものです。」、

と。

また、

「今から百八十年後にシカゴにイエスが生まれ世界政府をつくる。昭和四十八年、一九七三年現在」とあります。

理論は殺人兵器を生み出すものでも、平和で博愛主義のアインシュタイン博士に、次のことを尋ねてみたいのです。

「今から百五十年後には、原子爆弾は世界政府の許にあると、あなたはお見通しでしたか」。

また、

「あなたはユダヤのフリーメイソンの在り方をどう思いますか」、

と問いたいのです。

原子力は、原子のエネルギーを小出しにして生活に役立てるか、それとも一瞬に放出して殺戮兵器とするか、それは人類の自由にまかされていて

も、兵器は廃棄処分が当然です。

また、アガシャはこうも言っています。

「原子力は完全に安全なものとなり、人類を滅ぼすためでなく人類を向上させるために用いられる」、

と。

その日の到来を楽しみにしたいものです。

もう一度念を押します。

何もユダヤ人が、ことさらに優秀というわけではありません。

優秀な靈魂群がグループで、ユダヤに生まれたただけのことです。

とりわけ、金の力で世界を手玉に取り続けると、いつの日か優秀霊達はユダヤを敬遠して、その果てには没落が待っているだけ、ということになるでし

ょう。

アメリカのユダヤ民族とイスラエル問題

全米のユダヤ人は六百万人とも言われます。その内の二百万人はニューヨークに住んでいます。

光の天使・園頭広周先生は次のように言明しておられました。

「私が生きている間に実現したいことは、アメリカ大統領の背後にあるニューヨーク東部エスタブリッシュメント達に「正法」を知らせておきたいということ

である。そうして、ユダヤ民族と日本民族が調和することである。

ユダヤ民族が抱いてきた選民思想は、ユダヤ民族だけのものではなく、すべての人類がみな「神の子」であることを知ってもらうことである。悪をつくり

出す民族がいつまでも栄える筈がない。神の法は厳然として働くのである。

アメリカの政策がダメになるのはユダヤのフリーメーソンに関係する部分だけであるから、フリーメーソンに関係のないユダヤ民族以外の一般的なアメ

リカ人の持っている良いものは残ってゆく。アメリカの大統領に会見する外国の元首はフリーメーソンの会員になることになっているとか、ユダヤの意向

を聞かなければアメリカの大統領にはなれないとか聞きますからね。」、

と。

ユダヤは、流浪の旅から国土を持たない民として、悲願の国をイスラエルという名で、アメリカの力を傘に強引に建国しました。

それが周辺のパレスチナ諸国を不安と混乱に陥れ、その功罪は計り知れません。

いつもギクシャクしています。

園頭先生は、分身がジョージ・ワシントンの過去世を持つ方ですから、アメリカの良心を信じながらも気がかりなご様子でした。

先生は宗教家としては異例とも思える方で、日本のジャーナリズムが騒ぎ立てる前から、ユダヤ問題に造詣が深く、多くのことを教えていただいたものです。

次は、地球と地球人誕生について述べます。

地球創生と地球人類の誕生

地球創生のとき、地球という大地と、溶岩のマグマと、海水と、空気と、重力と、磁気と、圧力と、太陽の熱光の相互関係によって、万物である動物も植

物も鉱物も誕生します。

鉱物の鉄を例にして述べれば、鉄も同様の仕組みで誕生します。

鉄は人間が発明したものではありません。

もともとあった鉄を、人間が使い勝手よく旨く加工しただけのことです。

地球人は、鉄や万物全部が準備された後に初めて誕生します。

人間が利用する日のために、なぜか整然と用意されていたと言いたいのです。

文明は進化して超科学が現出しても、その文明に必要なものの全部が不思議にも、存在しているのです。

神と呼んでも良いし、大自然でも、宇宙エネルギーでも、大宇宙大神霊でも、創造主でも、呼称ですから何でもよいのですが、人間が利用するその

日のために、気長に見守っておられるのです。

この愛にひれ伏さずにはられません。

それも、悪用するか有効利用するか、人間の判断に任せておられるのです。

勿論、悪用は、神の子である人間の行為ではありません。

進化論のウソ

人間は猿から進化したのではありません。

猿は初めから猿であり、人間は鼻っから人間、と高橋先生は言われています。

その証拠に、進化論をいくら引っ提げて来ても、進化の途上のものは、何一つとして見当たらない筈です。

こと更に言えば、進化論は天上界でも厄介ものらしく、高橋先生や園頭先生の著書では、進化論はあり得ないと切り捨てられています。

とりわけ高橋先生は、

「進化論が本当なら、猿が檻から出してくれと交渉するのがいてもおかしくない」、

と一笑されている程です。

次も、信じる信じないの判断は自由ですが、高橋先生はこう教えられました。

最初の地球人は宇宙人だった

地球人は三億六千五百年前に、数億光年先の他の天体にあるベーター星から、反重力光子宇宙船といわれる、今でいうUFOに乗って飛来した宇宙

人と、高橋先生は教えられています。

何億年という超過去のことが、なぜ分かるのでしょうか？

それは、人間は次々に生まれ変わり死に変わりする生命体ですから、潜在意識は色んな時代の人生体験の宝庫です。

ある方法を実践すると、「パニヤパラミタ」という、各人の心に内在された偉大な智慧に到達することが出来ます。

では、その方法はといえば、数えきれないほどの多くの人生体験を潜在意識から思い出すには、人間がこの能力を閉ざした原因は、「愚痴」、「怒り」、

「足ることを知らぬ欲望」の心にあったのですから、これを人の心から抜けば良いのです。

三億年前の原始人類は、愚痴も怒りもなく、足ることを知って欲望もなく、当時の人はあの世とも自由にコンタクトでき、霊人とも自由に話しが出来まし

た。

そして、人は五百歳、千歳を数え、病気も事故もなく穏やかで高人格者の住む地上天国でした

生まれ変わり死に変わりした過去の幾多の人生体験を思い出すには、秘法とか超能力などの特殊なものではありません、

答えは毎日の生き方に在ります。

何だかんだと言っても、これをやってみなければ先へは進めません。

愚痴、怒り、足ることを知らぬ欲望を「心の三毒」といいます。

この原則を学ぶと何が徳か、何が利益かと申しますと、潜在意識から過去世の生活や当時使っていた言葉など、全体験の記録である智慧を思い出

して、直面する問題の解答が心の中にフッと湧き出てくるのです。

予感とか直感として、

「ア、こうすればいい!」、

と、難問も思いがけなく解決できます。

今のあなたは実業家であっても、過去世では農家かもしれません。

このように体験された職業が違うと、現代での経験とは違った思いもよらぬ発想が出るものなのです。

では、一例を挙げます。

現代の高橋先生のお父さんは、古代インドのお釈迦様の時代も、同じくお父さんとして、シュットダーナーという名の王様でした。

次は源頼朝として鎌倉幕府を開き、現代は長野県の高原にある小村の百姓でした。

如何ですか皆さん、皆さんの心をひも解いて行くと、誰でも色んな体験をしています。

現代のあなたは男でも、女性としての体験があるかもしれません

このように見て来ると、物事の価値観や、価値の尺度が今までとは、まるっきり違うと感じられた筈です

高橋先生の解説によると、お父さんは、

「もう武士や権力者はいやだ。今度のはのんびり農業でもしよう」、

と心に描かれたのでしょうか、派手さのない質素な一生だったようです。

人間は、生まれ変わり死に変わりしながら、魂の修行をした体験の宝庫ですから、
うな機械では、人間は作れないということを示します。

ロボットのよ

ロボットと人間の大きな違い

たとえばロボットは、いくら高性能のコンピューターを積んでいても、計算や処理は速いでしょうが、コンピューターにデータの無いものはお手上げです。

でも、人間は過去世での体験記録の、また、体験の智慧という宝の山、莫大な量のデータを持っています。

ここが機械と人間の距離を絶対に縮めることのできない最大のポイントです。

究極的な言い方をすれば、SFや小説の世界ならイザ知らず、絶対に人間的なロボットは作れません。

知恵と智慧の違い

「知恵」は、この世だけの経験を土台にして物事を処理する心の働きです。

特に、ここで述べる智慧は、読み方は同じ「ちえ」でも、「智慧」というのは、人間は永遠の生命として、何千回何万回もの、地上での生活体験を基に物

事を処理する心の働きを智慧といいます。

智慧と知恵は漢字の違いだけでなく、意味の中身が全く違います。

一回こっきりの人生体験よりも、多数の人生経験を土台にした物事の処理方法は、当然ながら的確で失敗も少ないのです。

地上界での人生体験数の違い

人によって人生体験数、つまり人生体験の度合いはどう決まるかをお話しします。

ある人は人生体験が千回、ある人は一万回の人生体験があったとします。

この数の違いはどこでどう決まるのかと申しますと、それは人間一人一人の生き方と生き様にあります。

端的に申せば、天上界の人のみこの世に生まれ変わる、地獄界の人はこの世に生まれ変わるができないということです。

天上界からのみ生まれ変われ、地獄界からは絶対に生まれ変わらないということです。

一方は、真面目に誠実に人生を送ったので一万回の地上界での人生経験、片や地獄界に留まることが多かった
ので、この世に生まれることが出来

ずに千回の人生体験があったというのです。

では天上界や地獄界とは何でしょうか。

天上界と地獄界

天上界に行ける人の心の状態を述べます。

最低の段階が、

「人はどうしても自分さえよければ良い」、

というエゴの世界である、幽界（ゆうかい）です。

この段階でも天上界への切符が貰えて、この世に生まれ変われるというのですから、神様は気長い心で人間を許
していただけるのだとつくづく考えさせら

れます。

これより以下の心の段階が地獄界の心です。

地獄界の一つに、守銭奴で肉欲に溺れ本能のままに、ケダモノのような人達の集まる世界があります。

この人達の集まる世界を畜生界といいます。

想像をしてみてください、どこを見てもどこを向いても四六時中、肉欲を続けている野獣のような者達の世界で
すから、ヤルセなくていやになりますよ。

天上界を五段階分類すると、下位界の方から、

幽界、

霊界、

神界、

菩薩界、

如来界、
となります。

また、地獄界を五段階分類すると、

修羅界、

餓鬼界、

畜生界、

煉獄、

無間地獄です。

神様が人間に求めておられるのは、損害を受けても人を非難せず、人を非難する前にその原因を反省し、二度と間違いを犯さない人達の世界であ

る神界（しんかい）です。

このように神様は神界の心の人達ばかりの世界を希望されています。

神様が望まれる心の世界、という意味の神界です。

地獄界と反省

地獄界も天上界の仕組みも同じで、同類が集まる世界です。

天上界の上段界の一つ菩薩界は、愛が深く心爽やかな人達ばかりが集まり、どこを見廻しても、穏やかで爽やかな人達ばかりの最高の環境です。

一方、地獄界は慈悲も愛も思い遣りもない弱肉強食の世界で、どこを見回しても貪欲な人ばかりの、そこに長くとどまれる世界ではありません。

反省の習慣のある人は、

「これではいかん俺の考えは間違っていた」、

と反省、修正を始めると、もうシメたものです。

地獄界でも、心から反省をして心の改革を計ると、次々と段階が上がります。

段々と上がって、人はどうしても自分だけはこのエゴの世界まで心がたどり着けば、いよいよ天上界です。

それから一定の期間を置いて、もう大丈夫という頃には地上界へ晴れて誕生です。

ところが、中には再びこの世に生まれても、この世を縁として生き方を誤ればまた地獄の世界に転落です。

高橋先生は、このような人達が多いと講演や著書で嘆いておられます。

地獄の世界は閻魔さまが裁くのではなく、自分の嘘のつけない善なる自分が裁くのです。

言い替えれば、己の、神の子の善我が自分を裁くのです。

このように地獄界とは、人間が生き様を誤れば厳しい環境で反省、修正する場なのです。

人間は悪いことをしない人はいないので、今の内から反省の習慣をつけ修正しておくことでしょ

天上界はピラミッド型、地獄界は逆ピラミッド型

天上界はピラミッドの形です。上の段階の如来界や菩薩界はピラミッドの先端のように人数は少なく頂点は神です。

天上界でも下位の方は下に行くほど人数は多くなります。

これが天上界はピラミッド型という意味です。

また、地獄界はピラミッドを逆さにしたような逆ピラミッド型です。下に降下するほど極悪人は少なくなり、その先端は魔王であるサターンです。

以上が天上界と地獄界についての話です。

ところで、

「我々に超過去だの、天上界や地獄界や限りなく多くの人生を思い出せるなんて、とてもとても。それは高橋信次さんだから出きるのだろう？」

と聞こえて来そうです。そうではありません、誰にも出きます。

過去世の体験を思い出す方法

過去世を思い出すには、どうしたら良いのでしょうか？

人間は永遠の生命です。

肉体と同居した永遠不滅の魂が、全体験を覚えています。

魂は別名を意識といいます

肉体はこの世かぎり、ついには腐って朽ち果てるのです。

肉体と魂が離れず不離一体で同居すると、そのときは人です。

人が亡くなり、肉体から魂が離れると物です。

適切ではないでしょうが、死体を飛行機で運ぶときは貨物室です。

それは魂の無い、ただの物だからです。

死とは、肉体はそこに置いて、魂だけが次元の違うあの世へ戻ることをいいます。

肉体と不離一体の魂が人生の全記録を持ってあの世へかえるのです。

人が亡くなると、魂は肉体から離れて、次元の違うあの世へかえります。

ニワトリと卵の問題ではありませんが、この世とあの世はどちらが先かと言え、あの世へ帰るとか、あの世へ還るとか、あの世へ戻ると表現するよう

に、あの世が先で、この世が後です。

意識界や実在界と呼ばれるあの世が先で、現象界とか地上界と呼ばれるこの世が後です。

生命と物質の成立

生命の成立は、宇宙の大意識から個としての生命が、先ずあの世に誕生して、次に、この世に姿を現わします。

また、物質の成立は宇宙の大意識から、熱、光、電気、磁気、重力のエネルギーの組み合わせりによって、物質が現象化されるのです。

人間という生命体は、あの世とこの世を循環し、この世に生まれ出るときには、両親という媒体（縁）を経て、姿を現わします。

つまり、大意識から離れた生命はあの世、両親、この世というプロセスを踏みながら、循環の法のなかで生きるように仕組まれています。

魂は意識とも心とも言います。

人は意識が無くなると、人としての主体性はなく、死ではありませんが、生と死の中間状態です。ひどければ死ですし、軽ければ生です。

睡眠

同じく、睡眠は意識の無い状態でも魂はあの世へ一時帰休して、神のエネルギーを授かっている状態です。

熟睡は神のエネルギーを十分に受けた状態ですから、元気一杯で希望も全身にみなぎるのです。

悩みがあって、トロトロした眠りは、神の光を十分に受けていないエネルギーの不完全燃焼ですから、スッキリした気分になれず「ボンヤリ」とか「ボーッ」と表現する状態です。

眠りは、あの世への一時帰休ですから、揺り起こしてもすぐに気付かないのは意識が肉体を支配するのに、そこ

にタイムラグが生ずるからです。

あの世

あの世を意識界や実在界と言います。

意識の世界を意識界と呼び、意識が一杯の世界が意識界です。

意識は魂や心です。

あの世は意識界ですから、あの世は心の世界です。

あの世は心の世界ですから、心に記憶したものは消えて無くならないのです。

消えないで本当にある世界だから、消えないで本当に実在する世界という意味の実在界です。

ではどうすれば過去世の体験を思い出せるのかというと、大事なことです。何度も申しますが愚痴、怒り、足ることを知らぬ欲望を心から抜き去るこ

とです。

現実の生活から「心の三悪」を抜く方法

まず初めは、

愚痴はいけない

怒ってはいけない

過度の欲望はいけない

と、口をついて自然に出る位になるまで言葉の確認をします。

次にあなたの一日の中で今日は、

一度も愚痴を言わなかったか

一度も怒らなかったか

一度も欲望を剥き出しにできなかったか

と、振り返ります。

反省とは「少な目に反る」、と書きます。

少しずつ少しずつ一日の生活をふりかえってみるのです。

最初のうちは、たくさんのバツ点（×印）が出て仕方がありません。

これを一週間、二週間...と続けます。

これを毎日の習慣になるまで続けて、心の浄化を計ります。

このように心の浄化が習慣になったら、

次は守護霊との対話です。

守護霊とは

守護霊とは何でしょうか。

ここで申し上げておきたいのは、他の出版されている本にある守護霊と、正法のいう守護霊は意味が違いますので注意して下さい。

守護霊は各人の過去世です。

例えば、前世は八百年前、千二百年前、二千年前、三千五百年前...に生まれた人がいたとします。

前世で一番近い人が八百年前ですから、この一番近い八百年前の人为主に今世の守護霊として、あの世から、その人の一生を見守ります。

そして予感、直観として人生の疑問にヒントを与え協力します。

あの世は時間、空間の無い世界ですから宇宙の果てであろうと地底、海底であろうと関係なく守護霊とは通じて、見守られるのです。

守護霊の一例

一例を挙げます。

守護霊が千二百年前に料理屋さんをしていた人がいました。

現世の人はサラリーマンなのに、どうしても料理が好きで好きで忘れられず、興味が尽きません。

その内には、家族を説得してお店を持ってしまいます。

脱サラが出て、今までの職業とまったく関係のない商売もどうしてこうも、うまく行くのかなと不思議でしょうがないというのです。

このケースはもう説明するまでもなく、守護霊が料理の経験者であの世からいろいろと協力を惜しまないのです。

間違ってもらおうと困るのは、あれもダメ、これもダメと定着せず職を転々とする人のことを、言っているではありません。

次は、相談者が高橋先生を訪ねて相談するテープの要約です。

このように筆録する場面に出合わせると、早くインターネットでのビデオ公開を、とと気が急きます。

高橋先生に相談の例

五十代の女性相談者との会話です。

主人を数年前に亡くし、残された財産でアパート経営をしたいという相談です。

相談者は何も言わないのに、息子嫁がその希望であることを高橋先生は指摘された上で、

「もう少しあなたの意見を主張することです。気の使いすぎですよ」、

とアドバイスされます。

それから相談者は何も言わないのに、高橋先生は、

「あのお金でアパートはだめですよ。足りません。そうですね」、

と念を押されます。

うなずいた上で相談者は、高橋先生の、

「あれでは足りません」、

という、この言葉にあ然とします。

どうして、財産の額まで分かるのだろう、と皆さんは疑問の向きもあるかと思われるので説明しましょう。

高橋先生は、その人の守護霊に何でも全て、声を出さず心の中で尋ねられるのです。

守護霊は、心を許す人には何でも残らず話します。

なぜなら、その人の一生を残らず見て知っているから、相手次第では何でも全部残らず話します。

ゼイ竹と拡大鏡を手に持った手相占いではありませんが、

「高橋先生の前に黙って坐ればピタリと当たる」、

という夢の相談が出きたのです。

仏陀の定義

ここでハッキリしておきたいのは、高橋先生のような仏陀と言われる人の定義は、

「あの世のことも、この世のことも、未来のことも全て分かり、あの世の人とも自由に話せ、過去世の言葉も話せ、相手のことが黙って坐れば全てが分か

り、人類を正しく導く人」、

といえます。

世には自称、仏陀という人がいるらしく、このような人は特にこの視点で正しく見て欲しいのです。

その手の霊能者によっては、係りに前もってアレコレ聞かせるようです。

高橋先生の場合ははその必要が全くありませんでした。

心を許す人には守護霊が何でも話すと申しました

ここでいう心を許す人とは高橋先生のように超霊格で超人格の人には一もにもありません無条件です。

仮にその人より低い人格の人なら、守護霊も相手を見くびって真剣に答えません。

この世とて同じです。

尊敬をして心を許す人には隠し立て無く全部を話しますが、そうでない人にはそれなりの返答で軽くあしらうではありませんか。

人格的に低い霊能者によっては、尋ねる人への解答が当たりはずれが多いのはこういう理由からです。

仏様と神様はどちらが偉い

皆様には、言うまでもなく、もうお分かりと思いますが、正法では、創造主である神様を大宇宙大神霊といいます。

日本では亡くなった人を仏、ホトケと呼ぶことがあります。

ここでいう仏様、仏陀様とは、最高霊格、超人格の人間の霊ですから、いくら高人格の人間の霊といえども、創造主である神様にはかないません。

高橋先生には次のようなこともありました。

高橋先生の霊能の一端

格闘技のアントニオ猪木がモハメドアリと闘ったとき先生を訪ねています。

高橋先生はアリの弱点をアリの守護霊に聞いてアドバイスされたというのです。

時効になった三億円事件でも

「三億円を強奪した人よ」、

とその人の守護霊に聞けば、なんてことはありません。

殺人事件の迷宮入りした事件も、高橋先生の手にかかっては百発百中で、何例も解決に協力された事例があります。

その当事者にとっては、そうなるからにはそうなる原因があるのですから、早期解決は人間の魂の修行にとって、マイナスになることだってあるのです。

三億円事件で協力されようとしたとき、天上界から、

「事件解決屋みたいなことばかりやっていると都合の悪いやつから殺される」、

と忠告されて、それからぜんぶお断りしていますとあります。

話しは元へ戻ります。

それから高橋先生は相談者へ次のアドバイスをされます。

中華料理の店を開くこと、亡くなったご主人が出てきて、このような人ですよとご主人らしき人の様子をこまごまと高橋先生は説明されます。

すると相談者は、

「そうです主人です。」、

と。

「ゴチャゴチャ言わず体を動かして、とに角皆で力を合わせてやれ」、

と亡くなった主人が言っていること、

また、

「〇〇ちゃんという男の霊が出てきて中華料理なら協力する」、

と言っていることも告げられます。

そして、二年後には店が増やせることなどをアドバイスされて、三十分程度の相談は終わりました。

この相談者の現代は女性ですが、かつて中国に〇〇ちゃんという名の男性の料理屋さんとして、生まれたことのある過去世の持ち主のようでした。

守護霊について詳しく書きましたから、よくお分かりになられたと思います

愚痴、怒り、過度の欲望を心から取り去って行くと段々心が浄化されて、今度は静かな雰囲気のある場所に座ります。

いよいよ守護霊との対話

心が落ち着く場所ならどこでも良いのです。

書斎、寝室、居間でもどこでも、静かに坐っても、また寝転んでも良いですから全身の力を抜いて、心を全てから解放して眼を閉じます。

眠ってしまったら何にもなりません。

そうして、

「神に生かされて有り難うございます。ありがとうございます。」

「われ神に生かされてありがとうございます。ありがとうございます」

と何度も心の中で繰り返し繰り返し反復します。

神への感謝の気持ちを一番素朴な言葉で、

「ありがとうございます。ありがとうございます」、

と何度も何度も打ち明けて行くと、心の中から何かほのぼのとした気分に満たされ、充実した心になるまで続けます。

神の子である人間が、親なる神に感謝することが先ず一番です。

それから両親へと拡大されて来なければなりません。

これを少しずつ少しずつ続けて行きます。

最初は何日置きでもかまいませんが習慣になれば理想的です

毎日の反省と感謝を続けていますと、予感というか直観として想いが心に浮かんできたり、或は聞き取れないくらいの細く小さな声として聞こえます。

これが進んできますと十分聞き取れる声としてわかるのです。

禅定は反省的瞑想

正法においては、守護霊との対話は一番初期の四次元の入門編ともいうもので、これが五次元へ進むと指導霊との瞑想です。

六次元、七と進んで八次元は太陽界の釈迦、イエス、モーゼの瞑想で、第九次元は宇宙界のエルランティの瞑想といわれています。

正法では、心を浄化した後の反省的な瞑想を、禅定（ぜんじょう）と呼んでいます。

注意のこと

ここで注意していただきたいことは、静かに坐っても雑念が浮かんで来て心を一掃できないことがあります。

そういうときは、雑念が浮かんで来たなら心の底で「イカン・ダメ」と切り捨てます。

何度も浮かんで来たならその都度「イカン」、「ダメ」と斬り捨てるのです

心がイライラしてどうしても落ち着かないときは、思い切って中止します。

なぜかと申しますと、そういうときに限って周辺に地獄霊や動物霊などの良からぬ霊が近づいて来ていると考えて間違いありません。

勿論、良からぬ霊が寄ってくるということは、そのときあなたも霊と同じ考えをした同類と理解してください。

それから反省に立った上で、中止して心を明るく転換することです。

運動は最大の効果があります。

正法の禅定は、反省の上の瞑想です。

反省をさせず、心を浄化しないで行う座禅道場や止観道場や内観道場等で自殺者が出たことがあります。

そこで園頭先生は、警告を発されて多くの人を指導されたことがあります。

精神的な心の問題は、心と対極にある体を動かすことです。

心身一如や色身不二というように心と体は不離一体ですから、心療内科や精神病院へ入院や通院する人に対して言えることは、運動したがない、風

呂に入りたがない等の特徴がありますから、この原則を理解して無理強いさせず、急がず騒がず周りの人が心安らかに対応して、時間を掛けて体を

健康にしていくと心もゆっくりとついて来るものです。

スポーツ人は概して心が明るく快活なことでもお分かりでしょう。

その反対に、かって、小説家で自殺した人が多くいました。

これは夜遅い執筆活動の為に、生活が不規則な上に体を動かさず、主人公になり切って、書く内容によっては暗かったり人殺しの情景があるものな

ら、自殺も当然かもしれません。

それも生活のために仕方のないことかもしれませんが、大事なことは、一段落したら気分をサッと切り替えて明るく振舞うのです。

守護霊の能力の限界

守護霊は、この世の人が悩みや難問を抱えていると、守護霊の能力の範囲で協力します。

守護霊は各人の過去世の人と述べました。

こう言うのは酷ですが、守護霊はいま現在のあなたを見れば、大体、想像できます。

なぜなら、守護霊はあなたの魂の兄弟ですから、その心の広さや人間的な程度は、大よその想像がつくということです。

ここでいうのは、地位、財産、学歴ではなく、人間性や人格、霊格が推し量れるということです。

今のあなたが或る問題で悩んでいるように、守護霊も悩みます。

このように守護霊はあなたと同程度と理解して欲しいのです。

高橋先生は、講演会の「現証の時間」に、相談者を登壇させ過去世の言葉を喋らせたり、相談に乗られたとき、

「守護霊よ、もっとしっかりしなさい!」、

と注意されることが、よく有りました。

そして、引き続き、

「いいかげんに、やってもらっては困りますからね。」、

それから、

「皆さんね、この方の守護霊が注意され、頭を搔いていますよ。」(笑い)、

と。

最近の出版されている本によっては、どこかにすごいのが居て「守護霊を持つ」などと書かれると、ついその気になって信じてしまいます。

真実はそうではないのです、自分と似たり寄ったりの自分の過去世が守護霊なのです。

では、能力以上の協力を望む時はどうするのでしょうか。

指導霊とは

例えば、それまでは力仕事の体験しかない人が、今世は一念奮起して研究の分野に目覚め科学者としての人生を送り始めたとします。

当然ながらそれまでに経験のない分野ですから、苦労と挫折の連続と想像できます。

そういう場合は、努力の度合いによって最適な経験のある人に「指導霊」として協力してもらえるというので

す。

例えば、このようなこともあります。

研究に打ちこんで、解決できぬままにクタクタになって、研究室の傍のソファーに寝込んでしまいます。

そのとき夢の中で暗示を与えられ目が覚めると、

「そうだ、こうして見よう」、

ということがしばしば有るといふ人もいます

その、大阪の大手の自転車工業の社長さんが言われることには、

「考えても考えてもどうにもならないから、死んだように眠ると夢で教えられる、私には「夢」が有るから良いですワ」、

と。

このように、守護霊にしる指導霊にしる、そうした正しい生活行為を続けていると、予感とか直感として心に思い浮かびます。

この方は夢で見せられるというのです

これまで述べました方法は、愚痴、怒り、足ることを知らない欲望を、心の中から自分で抜き、守護霊との対話を通して魂の持っている智慧に自力で到

達する方法を述べました。

次は夢で教えられた一例です。

糖尿病のインシュリンはこう発見された

栄養の採り過ぎとストレスが原因の、高血糖値の結果起こる糖尿病は、ひどくなれば失明したり手足の切断も仕方ないといわれます。

カナダのフレデリック・バンティングという医者は、研究でクタクタに疲れて爆睡していたところ、夢の中で「犬の膵臓の管から出る液を、採取して分析し

て見る」、という暗示を与えられて、あの有名なインシュリンを見つけたというのです。

これは何を意味するかと申しますと、或る日突然、夢を見て偉大な功績を残したように理解されるでしょうが、そうではありません。

彼は生まれ変わり死に変わりする中で、かつて、インシュリンを見つけ出していた魂の持ち主であり。かてて加えれば、そういう過去世を体験した人だ

ったと著者は言いたいのです。

これは高橋先生が言い残されたことではありませんが、次の例は高橋先生の言です。

朝鮮のキム少年はタールス

高橋先生が亡くなる三ヶ月前の講演で、高橋先生は、こう言われています。

四、五年前、朝鮮のキムという五歳の少年がテレビに出ていました。

キム少年は日本に呼ばれ、東大の先生が出題した大学程度の不定積分を難なく解いて見せるのです。

高橋先生は、

「これを天才というのでしょうか、そうではありません、彼はかつてギリシャ時代の天才科学者・タールスという人だったのです。次元の違う世界から協

力を受けて力を出しているという、敬虔な心を失い増長慢になると、二十歳過ぎればタダの人になります。いや、そうではない、次元の異なる世界から

助けられているのだという、謙虚な心を忘れず、感謝して真実に生きていけば、より以上の力を出すことでしょう。」、

とあります。

心の窓を開く危険性

智慧に到達するもう一つの方法は、光の天使が放つ光によって心の窓を開いて強制的に過去世の体験を思い出す方法です。

ただ、この方法は手っ取り早いのですが、非常に危険が伴うのです。

高橋先生や園頭先生のような、正しい光の天使なら申し分ありませんが、エセ天使や、自称・光の天使や、光の天使まがいの霊能者や、精神世界の

宣伝マンや、無欲やボランティアとかいって、自分の生死体験や臨死体験を隠れ蓑に人をひきつける講演者は特に正しく見なければなりません。

良くない人からの雰囲気や光によって、体調を崩すばかりか、良からぬ霊が憑(つ)くことがあります。

憑くことを憑依(ひょうい)ともいいます。

そうなっては人格破壊です。

精神破壊とも言います。

このような理由から、人を当てにするより、人に頼むことなく自力です。

自分の力でコツコツと地道に、怒る心と愚痴る心と欲深い心を、一つ一つ心から取り去るのです。

何億年も前の原始人類は、その必要がありませんでした。

この三つの汚心を持っていなかったため、あの世の人達とも自由に語り合い、現代のような電話が無くとも、心と心で自由に通信ができました。

何度もの人生体験を形にしたのが五重塔

人間は永遠の生命として、数えきれないほどの人生体験があります。

五重塔とか三重の塔などの多重塔は、屋根が何重にも重なっているのをご存知と思います。

この何段にも重なった形状は何度もの人生体験、つまり、何度も生まれ変わり死に変わりしたという事実を人々に教える教材でした。

何にも宗教的な意味がある訳ではありません

五重塔は奈良時代からあるようですから、仏教伝来のその時には正しく伝えられていたのですが、長い歴史とともに変えられた一例でしょう。

二〇〇一年十二月のこと、NHKテレビの日曜日の夜、子供への教育番組として宮大工の匠の話がありました。

五重塔を造りたいという夢を描いて、宮大工を目指して多くの若者が弟子入りをするようです。

番組を横目で見ながらこの項を打ち込んでいたときでしたから興味深く見せていただきました。

二〇〇二年一月初旬には、出雲大社の造営に係わる支柱の研究プロジェクトの番組で、宮大工の方を再び見かけました。

次は、大宇宙と人間の関係について述べます。

大宇宙の中の地球と人間の関係

人間は、六十兆個ともいえる星の中の、顕微鏡でも見えないくらいの極微な存在の、緑燃える新生された地球に、UFOに乗って飛来したというので

す。

高橋先生の幾つかの講演テープを回しても、脱出という話振りですから、ベーター星から脱出して飛来するからには脱出飛来するだけの理由があっ

たはずです。

そこで著者は、ベーター星は星の生命が残り少なかったのかなと理解しました。

これと同じように地球もまた、その命が尽きるとき、その直前に新しい惑星を見つけては移住するのです。

地球はまだ何十億年もの命はあるようですからズーッと先の話ですが、人間の細胞と同じように命尽きるとき、新しい細胞とも言える新生され緑に包ま

れた、うら若い惑星へ移住するのです。

大宇宙、六十兆個の星の幾つかは今現在も消えては生まれ、万物の霊長たる人間のために準備されています。

大宇宙の七種の間

他の天体に人間がいることがわかるのは百年後と高橋先生の予告です。

この大宇宙には七グループの人間（七霊団）がいて、姿形は日本人とアメリカ人というような違いはあっても我々とまったく同じ人間です。

映画の世界の宇宙人ではありません。

そして、七人類の人間のために、六十兆の星が次々に命尽きては新しく誕生して、我々大宇宙の人間のために提供されるというのです。

この気の遠くなるような神の愛、正法でいう「大宇宙大神霊」の愛に感謝せずにはおれません。

そして移住する新しい星には、鉄などの金属や石油などの燃料も、地球に存在する全ての物質も準備されていて、また、何十億年か人類はそこで、魂

の修行を続けるのです。

人間と地球

人間を構成する細胞は六十兆個といわれます。

大宇宙には六十兆個の星があって、同じように人間も六十兆個の細胞からできています。

また、地上の海や湖水の水圏といわれるものは七十一パーセント、陸地は二十九パーセントあります。

人間も血液やリンパ液等の水分が、七十一パーセントで、蛋白質、燐酸カルシウム等の骨や肉の部分が二十九パーセントあって、不思議にも割合が同じです。

人間も大自然の一員であるように、大宇宙に対して人間を小宇宙というのは、こういう意味があるのです。

大宇宙と小宇宙

人間は短時間に多くの細胞が死滅し、また、短時間に新しい細胞が生まれて百年近くの生涯を終えるように、

星々も消えては生まれません。

現在の人間は百年程ですが、星々は時間の単位がまったく比較にならない位に違うので、星の命が尽きるのも人間の単位で言う何億年、何十億年と

いうことになります。

石油もそのうちに枯渇するでしょうが、枯渇する前には、代替のエネルギーが必ず登場します。

何度も何度も消えては無くなり、また新物質が登場するのです。

例えば比較的に近い将来には、日本の太平洋岸には新しいエネルギーが見つかり、石油産業は衰退するだろうということも近未来の事象として高橋

先生の予告です。

もうすでに研究は始まっていて、その内に実現するでしょう。

余計なことかもしれませんが、ついでのことに、これも書き加えておきましょう。

それは、エジプトのピラミッドの周辺には現代の規模で、全世界を賄う位いの黄金が手付かずで埋もれているらしいのです。

高橋先生は正法の為に用意されているという予告でした。

これから百五十年後にはシカゴにイエスが生まれて世界政府を樹立しますし、七百八十年後には高橋先生が生まれられ、宇宙に自由に飛び立つ宇

宙ステーションができるのですから、これらの資金として利用されるのでしょうか。

ここでは鉱物エネルギーの近未来を説明していますが、何度かこういうことが起きて後に、何億年か何十億年か先に本当に全エネルギーを使い尽くし

て初めて地球を脱出して他の天体へ移住することになるでしょう。

太陽だって、あと何十億年もつかわかりません。あれだけの熱光を無償で我々に与え続けているのですから、地球が三十三万個できるほどのエネルギー

ーの塊とは言っても、いつかは燃え尽きる日も来るはずです。

太陽が命尽きるときは太陽系も、そのときは終焉です。

太陽系には、地球をはじめ金星や水星等の九つの惑星と、三万数千個の星々と三十二の衛星が秩序よく運行しています。

もっとも、その内に十番目の惑星が発見されるという高橋先生の予告もあります。

それは地球よりもはるかに大きくて、太陽に接近していて、一見太陽と共に回転しているように見える星で、太陽の写真の上に写し出されセンセーショ

ンを引き起こすことになるようです。

太陽の不思議

太陽は燃盛る火の玉ではありません。

現在、太陽に一番近い惑星は水星です。

もし、ただの燃盛る火の玉なら、水星やこれから見つかる十番目の惑星はもう熱くて暑くて地上のもの全部が焼けただれ、惑星そのものが存在できな

いでしよう。

また、一番遠い冥王星、海王星は太陽の熱光が届かず、冷凍の氷の惑星かという、どうもそうではないようです。

ただの燃える太陽なら傍にある惑星は暑くて熱くて、離れた惑星は、冷えて凍えて寒いはずで

だが、そうではない。だからただの燃える火の玉ではないといたいのです。

では何かと言えば、それは台所の電子レンジです。ガスコンロではない電磁調理器です。

電磁気が、回転する金属の容器や厚い鉄板を熱し、物が煮えて炊けるのです。

ただの陶器や木器ならそうはいきません。

太陽は原子の核融合です。

我々に無償の熱光を与える慈愛の太陽は静かな核融合です。

融合とは調和です。

原子の核拡散の最たるものは人を殺す原子爆弾であり、急激な拡散は混乱と破壊です。

地球の構造

それでは今度は地球の構造です。

地球の表面は、変化極まりない比重の軽い地層です。

地球の中心は比重が重く、最も硬い塩基の金属です。

地表は比重が軽くて弱いから、天変地異、天変地変のために海底が山の頂きになったり、山の頂上が海底の藻屑になる陥没や隆起が起きたのです。

一番よい例が、世界最高のエベレストの頂上に、海底にいるはずの貝の化石が出ます。

地球規模で見ると地表は卵の「殻」の部分、中心は比重の重いマグマである「黄身」の部分といえるでしょう。

マグマは金属の宝庫です。

海底にマグマが噴出すると、金塊鉱床でそこから金が出たりします。

こうして太陽から大量の電磁波が飛んで来て、地球の中心である比重の重いマグマをドロドロに溶かして、地中から地球を暖めているのです。

その一つの現れが人々を和ませる温泉です。

均一に暖めるには電子レンジなら容器の回転を利用するでしょうし、地球ならグルグル自転しているのですから、自然の摂理に合致しています。

地球の自転の話になりましたから、それでは高速で自転する地球の回転音はどんな音でしょうか。検証してみましょう。

地球自転の音は

モーターやジェットエンジンのブレードの回転音は、さしずめ「キーン」と表現するでしょう。

人間の中で最高人格者の如来や、如来に近い段階の菩薩界の人は、宇宙即我（うちゅうそくわれ）という境地を体現します。

宇宙即我というのは、この身このまま宇宙と一体になる、宇宙は自分だったという自覚や悟りですから、地球は遙か眼下に見え、地球の高速回転音が

聞こえるといえます。

その音は「オオオオーオオオー」「ウムムムー」「アオオオー」と聞こえます。

人を騒がせたオーム教のオームは、この回転音から来たもののようです。

米国ロスのアガシャ教会では、教会員が集まって高位の霊人を招いて霊人の言葉を聞く招霊会のときには、手のひらを少し廻しながら「AUM」と聞

こえる発音で唱えていたと、たびたび訪問された園頭先生は話しておられました。

どうして地球は自転するか

地球の中心のマグマは、二万度の超高温でドロドロです。

地表は二十度程度で低温です。

このように、地球の内部温度と表面温度の温度差が電気変化を起し、地軸磁力のNとSを決めて地球自体が巨大モーターと化し自転するのです。

また、公転は、天上界の中心に在るコントロールセンターで、星々が乱れたり激突しないように、百年間に一秒程度の誤差で、整然と制御されていると

いう高橋先生の講話があります。

海底の高等生物

何千、何万メートルという海底や海溝には、基本的には人間ですが、泳ぎやすいように手足はヒレや水掻きのようなものと、発光体のようなものを

つ高等生物が、地上と隔離された状態で生きていて、ドームのような特殊な構造の建物に組織的に集団で生活しているのが明らかにされるようです。

今のところ深海探査船も、まだ行き着きませんが、深海技術が進歩すると明るみに出されることでしょう。

一万二千年前に、人間の悪想念から一夜の内に崩壊された、ムー大陸やアトランティス大陸も探査されていないのが現状ですから、もう少し時間を要

するでしょう。

アトランティス大陸も、遺跡や構造物がダイバーによって話の種になっているようですから、もう直でしょう。

また、地形的に日本に関係のあるムー大陸も、海底の遺跡や構造物が、沖縄海域にボツボツとダイバー等に話題になっていますから時間の問題だと

思います。

次々と住める星が用意される理由（わけ）

これまでの説明からお分かりのように、太陽がたとえ終焉しても、この大宇宙には太陽系のような、太陽を中心とした別の集団が何百億、何千億と無

数にあるのですから心配には及びません。

地球の存在がいかに小さいか述べてみましょう。

言いかえれば、新しい星を見つける可能性が高いかを証明することにもなります。

我々の地球を含めた太陽系の属する銀河系には、太陽系には属さないが太陽のように自ら発光する約一千億個の恒星、自らは発光しない地球のよう

な五億個の惑星が存在します。地球はこの五億個の一個にすぎません。

これは銀河系のことだけですが、銀河系を島宇宙として、このように星々を引き連れた島宇宙、星雲群はまた一千億個にのぼり、総個数が六十兆個の

星々になります。

地球はこの中の一個に過ぎません。人体は六十兆個の細胞からできていると言われます。

人体の細胞一個に相当するのが地球ですから、如何に小さい存在かお分かりでしょう。

人類は、このように住み替えのきく星がいくつもあるのですから、永遠に魂の修行は可能なのです。

この細胞一個に相当するのが地球ですから、細胞一個に巣食う細菌の一つが人間とすれば、細菌にとって、臓器も人間の全体像も、とうてい思い浮か

ばないことでしょう。

このように、人間は地図上では理解していても、地球さえ全体像が把握できない様に、大宇宙ともなれば何も分かってはいないと言えるでしょう。

これが人間と地球と大宇宙の関係です。

次は恐竜の時代についてお話します。

恐竜の時代

現代科学では地球の誕生は五十億年前とされています。

しかし、講演の中で高橋先生は三十三億年前とあります。

三十三億年前は地球も太陽のように火の玉でした。生物が住めるようになったのは、今から約六億年前です。

高橋先生の著書や講演では、蛇は六億年前で、地球人類より古いというのがありますから、三億六千五百年前に飛来した人類も蛇には随分悩まされ

たようです。

恐竜時代の蛇ですから、大蛇とも竜とも表現できるでしょう。

出きたてホヤホヤの地球

地球が出来てから何十億年間かは、火山噴火や爆発によって、地上は炭酸ガスで充満していました。

もちろん、人間が他の天体から飛来するズーッと前のことです。

炭酸ガスや硫化ガスをこの地上から人間が住める程度に減らすには、植物である大木の助けを借りなければなりませんでした。

植物は炭酸ガスを吸収して酸素を出して地上を清浄にします。

この原理を活かすには、地球を大木の森で覆い尽くさなければなりません。

木々も溢れるような炭酸ガスを吸って、また、木々は炭酸ガスの温室にいるようなもので、スクスク育って見

上げるような超大木となりました。

巨木と巨大な果物

木々は胴回りは直径が五メートルもあって、背丈は百メートルを超えるものばかりです。

果物の実は、恐竜がお腹を満たすのに格好の大きさの、一メートルも二メートルもあるのです。

このような奥深い森の中で過ごすには、何十メートルもある恐竜といえども一筋縄ではいきませんでした。

恐竜が牙をむき出して喧嘩をするものなら、そこら一面の大木がへし折れたり、曲がったりして大変なんです。

そのような時代が数億年続いて、地上の空気も人間が住めるようになってから、大氷河期に突入して、それまで我がもの顔でわが世の春と歌っていた

恐竜たちも姿を消して行きました。

人間が生かされるために

これは弱肉強食というような凄惨なものではなく、人間は万物の霊長として生かされるために、恐竜も超大木も、そのときの生きとし生けるもの殆どが

犠牲になり、一握りのものしか残ることはありませんでした。

さすがの大木達も大地に倒れ、数億年の月日が流れます。

長い間に土に埋もれ変化して、それが現在、化石燃料と言われる石炭や石油や天然ガスです。

不思議ですね。蒸気船や蒸気機関車の大型箱物の時代は、荷がかさ張る石炭の全盛時代になりました。

次は少し扱いやすい、車全盛時代は液状の石油時代へ。

そして、次は気体のガス時代へ。その時代に即応して、いろいろなエネルギーが登場するのです。

このように、万物の霊長である人間の生活の場を、そして人間が生活する環境を作るために、地上は用意周到に準備されるのです。

前にも述べましたが、これは恐竜や超大木に見るような悲壮な弱肉強食の原理ではなく、人間は生きとし生けるものから選ばれ、責任あるものとして

神から託されたのです。

あの世には当時の恐竜も生きています。すべて命あったもの全部、また、この世にあった物質も機械も全部がああ世には実在します。

消えて無くならない世界だから、あの世のことを「実在界」といいます。本当に実在する世界です。

それに対応して、この世のことを地上界とか「現象界」といいます。この世は変化極まりない現世の、諸行無常の世界です。

地上天国エデンの園

地球の凍てついた氷河時代がしばらく続き、そのうちに陽炎は燃え始め、凍土の中から植物が芽生え、昆虫や魚や小動物が活動を始めたので

す。

そよ吹く風、適度の湿りと大地を潤おす雨、湿り気を蒸散させる晴天、平和な気候が続くのを見届けたかのよう

うUFOの六千人が続々と中東のスエズ運河の近郊、現在のアル・カンタラに着地します。

それは今から三億六千五百有余年前のことでした。

その当時、ベーター星は最高に調和されていました。

ところが、ベーター星も他の惑星と同じように、何十億年間の活動も終焉を迎える時期が迫っていて、最初の第一艇団はベーター星を脱出します。

かくして、緑に包まれ新生された地球の、神の光に満たされたアル・カンタラーにベーター星人は一步を印したのです。

これが地球人類の始まりでした。

第一艇団の真のメシアでありリーダーは、エルランティーといいます。

その下には七天使が控えています。

七天使

七天使とは次の通りです。

総括者で天使長のミカエル。

伝達の係りと通信関係の責任者のガブリエル。

芸術、文学、歴史のラファエル。

科学全般のパヌエル。

律法のラグエル。

医学、薬学のサリエル。

政治、経済、自治のウリエル、

でした。

エルランティーは、このアルカンタラーを調和された場所と言う意味から、

「エデンの園」、

と名づけます。

この六千人の住人は、人間性と心の広さで言えば、菩薩界と如来界の人々ばかりです。

エデンの園の住人の心の広さ

もっと分かりやすく言えば、爽やかで明るくて思いやりがあり慈悲と愛の塊のような超高人格の人ばかりだったということです。

慈悲や愛というと、分かっているようで分からない言葉ですから、もう少しわかりやすく述べます。

慈悲とは、なさけ、いつくしみ、思いやり、ということです。

愛とは、他を生かす、助け合う、許す、ということです。

エデンの園の人達をもっと噛み砕いて言えば、

感謝の心が持てて、

人と仲良くできて、

敬虔で謙虚で、

勇気と自信を持って、

努力と人のお世話ができて、

赦す心と反省ができて、

人のためになって、

報恩と相手を理解して、

広い心で素直で、

誰とでもすぐに話せて、

いつでも良く眠れて、

明るいところが好きで、

愚痴を言わず怒らず足ることを知っている、

人達ばかりというのですから、まさに超人格の人達とおわかりでしょう。

ベーター星人の中でも超一級の選ばれた人々。

このような集団ですから、まさしく理想郷、ユートピアだったのです。

その当時のスエズ運河周辺の気候は、温暖で暑すぎもせず寒すぎもせず、そよ吹く風に適度な湿りと快適な晴天。

公害も病気も無く、怪我もせず事故も無く、人といさかいも争いも無く、思うは隣人の幸せばかり。ここは理想的な「原始人間共同体」でした。

知っていて見ぬこと麗わし、聞いていて見ぬこと清し

生きてゆく上で、知らなければ知らない方が良いことも沢山あります。

聞かなかつたふりをして、知らぬ顔をしてくれたら、どんなにかうれいでしょう。

言わずもがなの一言が、相手の人生に計り知れない痛手を負わせていることだつてあります。

他人が見せないようにしていることを、わざわざ引っ張り出してまで見ることはないのです。

はた目にはだれにも知られたくない個人の事情があるものです。

見なかつたことは無かつた事と同じです。

これを究極の思い遣りというのです

現代の、有名人を白日の許にさらす悪風は、エデンの園にはありませんでした。

この当時、人々は心と肉体を完全に分離でき、あの世とも自由にコンタクトできました。

肉体を持っていながら、天上の世界に自由に行けたのです。

現代のような通信機器はなくとも、身体はそこに居て、意識や心や魂といわれるもので、自由に相手の様子を見たり、聞いたり、話しができました。

人間は本来、その能力を自ら持っていたのですが、その能力を失つたために、仕方なく人間の知恵で、通信機器も作り出さねばなりませんでした。

そういった通信の能力を失つた原因は、人々の「愚痴」、「怒り」、「足ることを知らぬ欲望」にあった、というのです。前でも述べましたがこれを心の三毒

と言います。

暗黒の地獄界

次に第二艇団が移住して生活を始めます。

この頃に、真のメシヤのエルランティーはこの世を去ります。

これが、地球の創世記です。

エルランティーがこの世を去り、第二艇団が生活を始める頃には、その一部の人は足ることを知らぬ欲望を生み、愚痴は愚痴を呼び、怒りは怒りを誘

って規律を乱す人もいました。

そのとき天使長であるミカエルは、立法を破る人達をエデンの園から追放し、反省を求めたのです。

これらの人々はその後、エデンの園とも連絡を絶ち、天上界ともコンタクトをやめ、高次元の人格者であったにもかかわらず、天上界に帰ることなく地獄

の暗い世界をつくってしまいます。

アダムとイブ

この当時にはまだ地獄は存在していませんでした。

これが、

「アダムとイブ」、

の後物語となったのです。

蛇にそそのかされて、禁断のリンゴを食べることになっていますが、そうではなくその時の純粋な高位の人格者の心には、人間の最大の悪想念であ

る、愚痴、怒り、足ることを知らぬ欲望が芽生えてきたという話です

地上を父とするなら海水は地球浄化の母

海水は不思議の源です。

どういう意味かと申しますと、現代のように産業が発達すると、いろんな汚水、産業廃棄物が流れ込んでいるはずで、塩分を含んでいる海水だからこ

そ腐りもせず清浄です。ただの真水なら、すぐに腐ってこうはいかないと思います。

また、月の影響による、海の干満によって高低差ができると、それは海水の攪拌作用で、よどみを無くし海水の浄化作用をも助けるのです。

海水の自浄作用や薬理作用で世界の海の現在があると思います。

海水の不思議を幾つか上げると、人間の血液とP h(ペーハー)が似ているものですから、医学的な補液に利用できます。

人体の仕組みと自然

寄せては返す波の回数は、一分間に十八回です。

平均体温は三十六度、

一分間に打つ心臓の鼓動は七十二回、

最高血圧は百四十四です。

寄せては返す波の回数の二倍、三倍、四倍と倍数になっていることがお分かりでしょう。

この数値は、心が平静で平安なときの体の正常値です。

寄せては返す波の回数が一分間に十八回というのは、これは海が穏やかで安定したときの波の回数です。

でも、難破船が出たり、海難事故が多発する荒れた天候なら、波も何倍にもなるでしょうから、自然界は大シケの大混乱で、人体ならさしずめ病気とい

えるでしょう。

また、太陽は一秒間に二百万トンもの石炭を燃やしたものを無償で地球に与えています。

人間の体温は三十六・五度で、体内温度は三十七度といわれます。

この三十七度といわれる温度は太陽が与える一平方センチメートル当たりの熱量と同じなのです。

女性の生理の周期は二十八日、月の公転も二十八日。

これらのことから、人間なんて自然界の一員に過ぎぬということがよくお分かりになることでしょう。

塩の不思議

海水からできる無尽蔵ともいえる塩は、魚などの塩乾物でご存じのように、物は腐りもせず長期保存がききます。

塩だけでなく、それからできる次亜塩素酸ナトリウム(ソーダ)は、その有効成分はハイターやブリーチ等の

漂白除菌剤で知られ、不思議にも医学

的に厄介な肝炎(H B)やH I V(エイズ)の消毒にも有効とされています。

もっと身近なものでは歯の根管治療の消毒です。

膿が出て臭い根管もたちまち綺麗になります。

日常生活なら衣服の消毒や高架水槽やプールの消毒です。

介護なら小便や大便の臭い消し、

水虫やタムシにお悩みなら、希釈して直接に払拭加療。

これは飲料水の消毒でも使っていますから、安全面ではお墨付きでしょう。

もう一つ付け加えれば、時間がたてばいずれ塩水になるのですから残留濃度など心配に及ばないのです。

そして、無尽蔵ともいえる塩からできるのですから、安価な点が最大の取得です。

少しクドクドと述べましたが、無尽蔵な海水こそ地球浄化の母と言いたいのです。

父は家庭の長としてニラミをきかせ、母はこまごま家庭の雑用事。

だから、地上を父とするなら、海水は地球浄化の母なのです。

どうして海水は出きた？

塩の不思議はよく分かったけれども、元になる地上七割の海水はどうして出来たの？と聞こえて来そうです。

そうです三十三億年前の、地球創造のときの地球は、燃盛る火の玉でした。

エネルギーを出し切った地球は、中心部にドロドロに煮えたぎるマグマを残して、何十億年間をかけて徐々に徐々に、少しずつ少しずつ温度を下げ

て行きます。

太陽の熱光り、磁気、重力の複合された条件の中で、どちらも物をボロボロに溶かす強酸のH C L (塩酸)と強塩基のN a O H (苛性ソーダ)が反応して

一番安定したN a C L (塩)とH 2 O (水)になります。これが地球規模になって海水ができ、それからは海水が太陽の熱光りによっ

て晴れ、蒸発、雲、雨、晴れ、蒸発、雲、雨、という天候の循環によって水も塩も純化されて行ったというのです。

月の不思議

地球は太陽系の惑星として、太陽を中心に一定の軌道を自転、公転して循環しています。

—自転は約一日二十四時間で、昼夜や白夜の変化を生じます。

月は地球の衛星として自転公転の運動を続け、海水の満潮や引潮の原因を作り、生命の生と死に深い因果関係が有ることでも知られています。

そして、月の運動は前に述べました、満潮と干潮は海水の高低差をつくり、海水の自然の循環を生みだしてよどみを無くし、いつも清浄に保つのです。

いつものことながら、この自然界の仕組みと働きには本当に驚かされます。

月の公転は二十七日七時間四十三分十一秒かかります。

太陽暦の1ヶ月、つまり三十一日や三十日というのは、地球から見て新月から新月のあいだを基準にして決められているのです。

月の不思議はこれだけではありません。

忘れ勝ちですが、地球に住む人間ばかりか生きとし生けるもの全部に、月光という恩恵を与えています。

満天のきらめく星の光では、夜道も何かと頼りありません。

ここで何を申しあげたいのかというと、人間が住める惑星の条件の一つには、月のような「衛星」を携えた惑星であり、太陽のように自ら発光する「恒星」に関係ある惑星ということです。

よくよくお考えになるとおわかりでしょう。

「ひふみよいむなやこと」は、天地創造から人類誕生の順番

数字の日本的読み方の「ひふみよいむなやこと」は、天地創造から人類誕生に至るまでの順番を表したものです。

一、ヒは霊で、宇宙の最始源には神ありき。

二、フは風で、空気ができた。

三、ミは水ができた。

四、ヨは世で、陸地ができた。

五、イは葦で微生物、植物の発生。

六、ムは虫で、昆虫の発生。

七、ナは魚類で、魚屋を「なや」、といった。

八、ヤは矢で、矢のように飛ぶ鳥類の発生。

九、コは動物で、牛の鼻づらを取り尻を叩いて「ココ、ココ」といった。

十、トは人で、人をヒト(霊止)という。宇宙最始源の神の霊がトと止まって人類が現れ、全てのものが準備された後に、最後に人

間が現れたというのです。

それでは、大宇宙の最初の間はどのように生まれたか見てみましょう。

最始元の間はこう生まれた

最初の地球人は、他の天体のベーター星より飛来した宇宙人ということは述べました。

それでは最始元の間は、何億年前か何兆年前か分かりませんが、幾多の星を転生して現在の地球に地球人として在るのですから、最初の人に

戻ってどう誕生したか見てみましょう。

高橋先生は、『人間・釈迦』にこう記述されています。

「人間は神の意識から分かれ、神の意思を受け継ぐ万物の霊長として産ぶ声をあげた。

人間の誕生は、意識界という実在の宇宙(あの世)に、まず姿を現わした。

そうして、神の意思である調和をめざす神の子として、物質界(この世)に誕生した。

この世の最初の間は地上の眼で見るならば、大地の一隅に、忽然と物質化されたといえるだろう。

動物も植物も鉱物もこのようにして大地に姿を現わした。

人間、動物、植物のあらゆる生命物質は、実在界・意識界(あの世)と現象界・地上界(この世)を循環するようになった。」、

と。

また、園頭先生はこう記されています。

園頭先生の過去世の一人は、三億六千五百年前にベーター星より飛来した七天使の一人通信伝達係のガブリエル天使でした。

或るとき、先生は禅定・瞑想後に

「最初の間はどのように出きたか見せてください」、

と、祈られます。

そうして発表されたのは次の通りです。

「最始元の人間は、光りの粒子の集中固体化して出きたもの」、

と。

地球人類は七度のノアの方舟現象を体験

それから永い月日が経ち、三億六千五百年の間に地上は七度の天変地異が起こりました。

氷河時代は一度ならず何度も迎えています。

この、ノアの方舟(箱舟)現象といわれるものは、地上に生活する人間の想念が、悪に流れるたびに幾度となく起こりました。

それは、肉に溺れ欲望に溺れ、巷は戦争と闘争の破壊に明け暮れ、安寧の日々はどこにもありません。

それが集団的に広域にまたがり長期化すると、天は怒り地は火を吹き上げ、山は海底に沈み海底は山の頂きとなって、一握りの人々を残して荒れ狂

うのです。

地球人類三億年の間には、長い年月をかけて築き上げた超科学文明も海底の藻屑となったり土中に消えて、為すすべもなく居穴の原始生活から始

まって、徐々に徐々に超文明へたどり着くという、この繰り返しを何度も続けたのです。

超文明崩壊の直後

超文明崩壊の直後は次のような様子でした

さすがの超文明も一日の内に崩壊して、それからは仕方なく一握りの人々は、腰には毛皮をまとい居穴生活です。

家の庭や軒からは磁気と光のパワーで、音も振動も無く動く移動物体も今は無く、自分の力で歩いて移動しなければなりませんでした。

それからは、生活物資を作る以外になく、三億年に七度の天変地異の中で、一番近いのは、アトランティス大陸、ムー大陸の陥没です。

アトランティス大陸

一万二千年前、南大西洋にアトランティス帝国というのがありました。

ここは、アガシャ大王によって信仰の対象は太陽に向けられ、人間の魂は太陽の如く光り輝き、慈悲と愛こそ人間としての在るべき姿と正法が説かれ

ていました。

ところが、共産思想の悪しき集団が現れ、アガシャ大王を除く正法の指導者をことごとく殺します。

そこで仕方なく、大王は陸続きのアフリカ・ナイル帝国へ逃れ、天使を殺した天罰としてアトランティスは一瞬にして陥没させられたのです。

高橋先生は

「これから、アトランティスに関係のあるピラミッドがアフリカで発見されます。そして陸続きも証明されるでしょう。私はその当時の社会情勢も、当時の言

葉も知っております。そのピラミッドの中に我々の残したものが発見されます」、

と、あります。

この外にも、アガシャ大王は高橋先生自身であり、この先、当時の霊魂達が地球の魂のレベルを上げると予告されています。

彼らは、アトランティス時代の超科学を思い出して、現代文明をもっと進化させるというのです。

また、現在、少しは生まれているとも。

このように、高度の文明を体験した彼等も、今度は奢ることなく謙虚に、地球文明の進化のプロジェクトに、力を貸して欲しいと願わずにはいられませ

ん。

パレスチナ問題の予感

アトランティスから五千年経った今から七千年前、文化はエジプトへ移ります。

この当時、ナイル渓谷とデルタ地帯とは、政治的宗教上の違いから絶えず争いが続けられ、この地域の偏狭性と敵対性は、現代に至るまで幾分残

って、それはあたかも、現在、紛争を続けているパレスチナ問題のようです。

そこでアガシャは、小さな国の神権政治の長として、この絶えざる闘争の愚かさをよく知っていたので、周辺国をまとめ一種のエジプト国際連合の音頭

をとって、遂には三十七の形式的独立国を統合して唯一の連邦政府を樹立します。

神権政治とは

「神権政治」というのは、高位の靈的指導靈の指示を受けて政治をするということです。

この結果、敵対と紛争を続けていた宗派の指導者達は、話し合いの末に、遂に統合をとげるという歴史がありました。

これらの靈的指導者の中にはアモンもいます。

アモンというのは、エジプトの頽廢期にこのアモンをアモン神として崇拝する信仰も起こります。

世界連邦政府の雛型

同じように、靈的指導者達の中にはクラリオもいました。

クラリオという人は、今から二千年前にイエスとしてパレスチナ、エジプト地方にに生まれた、イエス・キリストです。

このときイエスであるクラリオは、三十七の独立国を統合して連邦政府の樹立を指導した靈的指導者達の中の一人でした。

イエスは過去世での体験を思い起こして、百八十年後（一九七三年、昭和四十八年現在）にシカゴに生まれて世界連邦政府をつくる時の雛型にする

ようです。

現在、パレスチナ問題でギクシャクした国際関係を打破するために、イエスは使命と目的をもって出生するのでしょうか。

南無阿弥陀仏とは

今度はアモンについて高橋信次先生の言葉を聞いてみましょう。

「アフリカでアモンという偉大な光の大指導靈が神として祭られます。

続いてアモンはアーメンという言葉にエジプトで変り、

さらにアーメンがソロモンの時代にアミーと変り、

ギリシャにはいってアーミーに変り、

ギリシャからインドにはいって、インドの言葉がはいってアミダボ、アミダブツ、阿弥陀仏となったのです。」、

と、高橋先生は言われています。

そして、中国に来てアミダボを阿弥陀仏と漢字に訳し、日本に来て南無をつけて南無阿弥陀仏となります。

南無、ナムとは、古代インド語で、帰依する、同意するという意味のナーモです。

二千五百年前の古代インドの言葉が名古屋地方に残って、「.....でナーモ!」、そうですね、と同意するという意味です。

また、「ダーボ」は中国の漢字に翻訳されて陀仏、ダブツで、意味は「悟られた方」です。

このように、

「南無阿弥陀仏」、「ナーモ・アーミー・ダーボ」、

とは、アモンでありアーミーと呼ばれる悟られた方の教えに帰依します、という意味なのです。

本当の意味がわかると、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、「アーミーに帰依します、アーミーに帰依します」、と何回となえても、何の意味もない何のご利

益もないということがおわかりでしょう。



アーメンとは

キリスト教でいうアーメンも、アモンがエジプトでアーメンという言葉に変わるので、アーメンとは、「アモン、アーミーに帰依します」、という意味が

込められており、南無阿弥陀仏と似たり寄ったりのものとお分かりでしょう。

これまで述べましたのは今から七千年前のことです

モーゼから釈迦そしてイエスへ

時は移り、今から三千二百年前には、モーゼが人々を救いました。

それからインドに釈迦が生まれる二千五百年前までは、地上は略奪、強盗、殺人が横行して、それから釈迦が出ます。

釈迦は主に慈悲を説き、その五百年後の、今から二千年前にはキリストがイスラエルに生まれ愛を説きます。

ところが、キリスト教も祈りの宗教に変わり果て、他力信仰に落ちたのです。

高橋先生はこう講演されます。

「私がヤーベとして、モーゼを介してユダヤ民族に説いた正法は、永い歴史の中で歪められてきました。それでキリストが出て修正することになったの

です。ところが、そのキリストの教えもローマ法王によって歪められたために、天上界からルッターやカルバンを出して宗教改革をさせることになったの

です。」、

と。

その後、正法は西から東に移り、その中心は中国です。

中国に天台智顛(天台大師)が出て法華経を世に伝えます。

中国に渡った最澄(伝教)は、法華経を学んで帰国すると、日本に仏教を樹立させ、

仏教も難しい哲学、学問に成り果て現在に至っています。

「イエスも釈迦も他力信仰は一度も説いていません」

、と高橋信次先生は力強く教えられたのです。

日本の正法の変遷

それでは 我国における、正法の変遷を見てみましょう。

いまから二千五百年前にインドに釈迦が生まれます。

そのとき釈迦は口癖のように、次は日本に生まれると予言されていました。

二千五百年経ったジャブドーバーのケントマティー、つまり東国の都である日本は、道路は舗装され、建物は宝石で荘厳された、つまりガラス窓で光

り輝いた所に、皆と共に生まれるというものでした。

このように覚者は、次の出生の時期と目的を、予告する義務があります。

そこで高橋先生は、次は七百八十年後(昭和四十八年現在)にアフリカに生まれると予告されます。

アフリカ太西洋岸に宇宙ステーションが出きるのです。

その頃の未来のアフリカは、現在の日本のように温暖で四季がはっきりして、他の天体とも磁気や光のエネルギーで自由に交通するようになります。

その頃の地球はユートピヤ、理想郷です。

また、園頭広周先生は三百年後のインドに華光如来として皆と出て、カースト制の打破に力を注ぐと予告されて亡くなりました。

このように特別の使命を持つ光の天使は、出生の時期と使命と役割を告げなくてはなりません。

こうして、 釈迦が二千五百年後に日本に生まれるからには、それ相応の準備をしなければなりませんでした。

日本の建国の準備

そこで、天上界の意向に沿って、まだ国の体制も整わぬ日本に、徳があり立派な人を出すこととなります。

その人はお釈迦様の古代インドの時代に阿?(あしゅく)如来と呼ばれた神武天皇でした。

神武の「武」とは武力で人を制圧することではなく、良く話し合っ、「言向(ことむ)け和(やわ)して」、徳の力で平伏させるという意味です。

日本の国を治める上で、それから、古事記や日本書紀にあるような平定神話が生れます。

大日如来と天照大神と卑弥呼の関係

大日如来は、釈迦が亡くなってから二十五、六年後、インドにおいて神理を説かれた学者で、釈迦教団に竹林精舎を寄進した、ガランダ長者の娘婿

でした。

このガランダ長者は後に日本に生まれて空海(弘法大師)となります。

釈迦の分身は後に日本に生まれて最澄となります。

それというのは、不思議にもこの二人は同時代に生まれ、共に渡唐して志を同じくしているのです。

釈迦は主として慈悲を説きました。

釈迦は、何不自由ない王子として生まれ、周辺には栄華な四季の館があります。

お妃のヤショダラ以外に春の館には春の女性が、夏の館には夏の女性が、秋、冬というように、それぞれに女性が控えています。

そういう中で、一子ラフラを残して二十九歳のとき出家です。

そういうこともありまして、男尊女卑の当時のインド人は、愛といえば男女の愛を思い浮かべ、いやらしいと考える風潮があります。

ですから釈迦は、そういう時代背景の中ではキリストのように愛が説けません。

それではいけない慈悲だけでは片手落ちだというので、釈迦が亡くなって二十五、六年後に、大日如来が愛を補足して説き、あの世に帰ったときに

大日如来と名づけられたのです

こういう経緯から大日如来の弟子の中には、主に愛を説いたイエスの時代に生まれてイエスに協力している人もいるというのです。

また、邪馬台国の卑弥呼は心の窓を開いていて、佐賀の吉野ヶ里で神の言葉を伝える、神権政治を行っていた程ですから、卑弥呼は古代インドの時

代に大日如来の娘であったことを想いだしたのです。

そのために卑弥呼は大そう懐かしがって大日如来を神として祭ります。

吉野ヶ里の卑弥呼は高橋先生の長女佳子氏

佐賀県の吉野ヶ里が、にわかに脚光を浴びたのは今から十五年ほど前の平成元年（一九八九年）のことでした。

NHKテレビの二〇〇二年一月中旬のプロジェクトXという番組で、七田親子の吉野ヶ里に掛ける想いを放映しましたが、昭和五十年（一九七五年）三

月下旬、高橋先生のGLA宮崎研修会での一コマです。

要約するとこうなります。

高橋先生の解説、

「この人（高橋佳子氏）は、過去世において卑弥呼であったことを思い出しております。奄美大島から来られたこのお二人のご婦人は、卑弥呼の女官を

していたのです。

東京でデザイナーをしているG堂さん、映画俳優の○丸忠雄氏の夫人で、薫さんは、ともに卑弥呼の大臣をしていた人達です。

過去世を思い出したこの人を中心として、この人達が卑弥呼の時代を思い出しますと、今までわからなかった日本の歴史がはっきりとします。

邪馬台国は有明海を中心にしてありました。」、

と。

そして、

昭和四十年代初期、神光会（GLAの前身）の会誌『ひかり』にも既に卑弥呼は長女佳子氏と記述されています。

また、

別の講演では、

「邪馬台国の卑弥呼は、インドの当時の大日如来を思い出してなつかしんで祭っていたのです。その大日如来が

のちに天照大神として祭られることに

なったのです。」、

と。

また、別の講演の霊道現証の時間には、

卑弥呼の時代の人達がお互いに邪馬台国時代の言葉で語り合います。

すると高橋先生は、

「そうです、これが当時の言葉です。邪馬台国時代の言葉です。」、

と。

吉野ヶ里に近い著者の故郷の筑後地方には、山門（やまと）郡や大和（やまと）町近郊の言葉に、

「～ですね」を「～ちのも」と言います。

また、

「～ですか？」というのを「～かんも？」という言いまわしがあります

一例を挙げますと、

「本当ですか？」

を、

「本なこつかんも？」、と言います。

肯定する言葉は、

「そうちのも」、「そげんちのも」

と言います。

この「～ち」「～ち」という「ち」や「～なこつ」「～こつ」という「つ」、「つ」という表音を整理してみると、初めてこの録音テープを回したとき感じた印象は、

「ち」とか、「つ」と、何と忙しく喋るのだろう！と思ったものです。

江戸時代の儒学者、新井白石は九州説をとっていますが、平成五年に園頭先生は、邪馬台国は吉野ヶ里と発表されました。

また、正法のホームページで公開している、著者の論文はこうです。

邪馬台国と著者の考察

福岡市の近郊に、糸島半島がある。

ここは遺跡の宝庫で、吉野ヶ里からそれ程には遠くない平原遺跡から、約五十センチの日本最大の銅鏡など四十枚が郷土史家により掘り当てられて

いる。

三角縁神獸鏡は出ていないもののすごい古墳である。

こここそ卑弥呼のお墓、古墳ではないだろうか。

平原遺跡の近くには四百メートルの高祖山（たかすやま）があって、近くには日向（ひなた、ひむか）峠や神崎（かんざき）郡という地名はまさに「神、太

陽、或は卑弥呼、日の子に向かって」、や「神の先」であろうか。

また数十キロ半径には女山（じょやま、ぞやま）という名の山が二つある。

そして、そのハイライトは近くの、千メートルの天山（てんざん、天の山）であろうか。

推測すればこうだ。

卑弥呼は季節毎に居所（霊山）を変え、神託、神のお告げ持って政（まつりごと）の中心である吉野ヶ里へ伝えたのではないか。

平成十一年三月、祭壇とも思える遺跡が発掘されたと報じた。

サテ、邪馬台国は魏志倭人伝の言う通りに歩を進めると、中国のかつての大げさな表現によるものを差し引いても、どうしても畿内説の有力な根拠に

なるようだが、千八百年前にはその後の雲仙や島原の火山噴火によって、現在の地形と異なっていたと考えられないだろうか。

また、同じく魏志倭人伝によると、「男性は年齢にかかわらず、みんな顔や体に入れ墨を入れている」と言うが、平成八年二月、糸島半島の前原市か

ら、1世紀前後の人の顔の入れ墨模様を刻んだ板（人物線刻板）が、国内で初めて見つかったのも興味深い、と。

大日如来と天照大神

邪馬台国が栄えて、それ以後、今度は大日如来自身が日本に生まれて正法を説きます。

亡くなると天照大神として祭られ、それが後に大日如来を祭り、仏教ではない、バラモンの行法である護摩を焚く行法へと変化するのです。

護摩を焚くというのはバラモンの教えであり、仏教ではありません。

次は般若心経の玄奘三蔵法師について述べます。

不空三蔵は玄奘三蔵法師か？

高橋先生は小田原講演会で次のように講話されています。

それでは会場の様子を再現してみましょう。

中年の男性を登壇させられると高橋先生は、

「この方は七世紀に生まれた方です。」、

と日本語で告げられます。

それから高橋先生は古代語で男性に話しかけられ、しばらく二人の中国の古代語らしい会話（異語・異言・いごん）の後、男性だけの異語が続きます。

それから高橋先生は日本語で、

「皆さんに分かるように当時のことをそのまま日本語で語ってくださいとお願いしました」、

と告げられると、男性の日本語が始まります。

「私は今から千三百年ほど前に中国に生まれました。私が、ちょうど二十歳頃、その頃の都長安に、「金剛智」という大変偉大な僧がおられました。

私はその方のお弟子になり修行をした者でございます。私がお弟子にさしていただいたときに、私より三歳年下の方で「不空」さんという方がおられました。

その方と共に金剛智師に教えを戴きました。私がお弟子になり七年が経った頃に金剛智師は亡くなり不空さん、不空師が後を継がれることになり、

私はそれから不空様のお弟子になりました。

それから、金剛智師が亡くなられて少ししてから、インドのナーランダという所へ仏典を取りに行くことになりました。

私は不空様のお供をしてインドのナーランダまで旅をいたしました。その旅は、本当に言語に絶するような大変大変苦労した旅でございました。

私達はインドのナーランダに着き、いろいろと修行をさせていただきました。

そして長安に帰ってから、私は不空師の命により五台山という所に金閣寺を建てるために五台山に参りました。

そして、そこで大変大変厳しい修行をしたものでございます。その当時中国は戦乱の世の中で、私達は厳しい修行の合間を見ては山から下り、大衆

の中で人間の心というものについていろいろお話したことを覚えています。

そしてまた、戦乱の世でしたから自分の持てる物を全て人々に与えて歩きました。その当時の修行というものは今日本にもある密教でございます。

私達の当時は本当に人間の心というもの、如何に大事であるかということをお空師に教わりました。

そして今この者（登壇して語っている男性）の声を借りて、不つづかな日本語でお話しをしておりますことは、人間の心というものの偉大さを皆様

に知って戴きたいからです。云々。」、

と。

また、話しは続きます。

「私が七十三歳のときに不空師は七十歳でこの世を去られました。

しかし不空様は、一切の物を残してはならない、一切のものを残すことは執着になる、私の死んだ後はこの肉体もすべて灰にし、別に葬らなくてもよろし

いとおっしゃいました。

私達は長安のお寺に不空師の遺骸は塔を建て、そしてその中に葬りました。

不空師は大変大変立派な方でした。その不空師に、私は今現在も、いまだに私は、いろいろと教えを戴いております。どうぞ皆様この人間とい

うものは、この肉体は仮の姿であることを知ってください、肉体は心のただの乗り船であることを知ってください。」、

と。

それから男性の異言が続き、それに答えるように高橋先生の異言の応答でこの男性の霊道現証は終わります。

長安のお寺に葬られた玄奘三蔵の遺骨は、その後日本軍が南京で土木作業中に掘り当てるのですが、どうして南京かと読者の皆さんは不思議に思

われるでしょうからこの辺の事情を述べますと、当時は戦乱の世で国情も大変混乱していたので、転々と安置場所を変えたようです。

驚いた軍部は中国政府に返還すると、この公正な処置に感銘した中国政府はいくらかの遺骨は日本へ、と好意で贈られ、その一部は埼玉県岩槻市

にある慈恩寺に奉安されるという経緯があったのです。

園頭先生と大谷氏

坂本竜馬であり、現代のアメリカ在住、大谷氏のコレータ（改名マーハーモンガラナ）と、西郷隆盛であり、現代の園頭先生のウパテッサ（改名シャリー

プトラ）は、インドのお釈迦様の時代に大の仲良しでした。

お釈迦様の許へも誘い合って入門した程です。

二人は入門する間もなく、メキメキ頭角を現わし釈迦教団の中心になると、それが教団の古参にとって何とも面白くありません。

教団内のギクシャクする雰囲気を感じた釈迦は、皆を前に、

「二人とも今世は最も遅れて来たかも知れぬが、過去世では共に力を合わせた最も古き友だ」、

と諭すのでした。

こうしてマーハーモンガラナ（大目連）は、あの世もこの世も未来の世も見通せる教団一の天眼通となります。

一方、シャリープトラ（舍利佛）は、般若心経の中の舍利子です。

これは皆を代表して「皆様方よ」という意味で、舍利子とあります。

このように名目ともに釈迦教団の中心でした。

そして、教団内の女性団員の指導や、お釈迦様の一子ラフラ（邪魔になる石、出家の障害という意）の教育も任されます。

園頭先生が主宰された国際正法協会では、グレースの会をつくれ、特に女性の在り方を説かれました。

園頭先生のその真意は、女性は母となって子供を通して未来を作ってゆくから女性の教育こそは大事だからです。

次は、現代の園頭先生と大谷氏の関係について。述べます。

幕末の志士でモダニズムの坂本竜馬は、新生日本を夢見て日本を夢見てもて??バラモン教の師でバーバリーと呼ばれた人です。靴を履いて写真

に写りましたが、夢にまで見た西洋一番の大都会ニューヨークにレイモンド大谷氏として住んでおられます。

そこで高橋先生は、

「園頭さん、ついに大谷さんが悟りましたよ。僕がニューヨークへ意識で行って見ると、公園の芝生の上で瞑想・禅定（ぜんじょう）をしていました。僕

は、夜肉体から抜け出して意識のままに、光子体で行って彼の魂を揺さぶり続けると、とうとう悟りましたよ。」、

と言われます。

それから高橋先生は大谷氏へ手紙を出されますが、手紙の内容全文も残されています。

高橋先生から大谷氏のことを聞かされた園頭先生は、懐かしさの余りお互いに文通を始められます。

高橋先生も亡くなり、園頭先生は正法会（国際正法協会の前身）を立ち上げられた頃、大谷氏はニューヨークの経済団体の団長として日本訪問の途

中で、雲仙観光でした。

その日に限って都合の良いことに園頭先生の正法会・長崎講演会です。

孫悟空のこと

会う間もなく、大谷氏は登壇され興味深い講話をされます。

「寝ていると、体がググッと持ち上げられたたようになり、雲の彼方に連れて行かれました。

ふと見ると、そこに高橋先生が立っておられ、

「これを見なさい」、

と五本の指に私の生まれ変わりの転生輪廻（輪廻転生）を見せられました。」、

と楽しい講話をされます。

如意棒片手に活躍する孫悟空も観音様の手の中で踊らせられただけという、猪八戒と三蔵法師の物語の『西遊記』を思い出してこの話しを参考に病

床の園頭先生に、ぶっつけてみました。

園頭先生との筆談

著者と筆談の先生は、意識の中に解答を求められ、しばらくして

「私もお供の一人でした。」、

と、いうことでした。

仏教を広めるために、本体であるお釈迦様の説かれた仏典を、分身 の不空三蔵の玄奘三蔵法師が、仏典を十七年間かけて中国に持帰ります。

国の禁を犯してまでインドへ行って、仏典を持帰る偉業を成し遂げた行為は、

お釈迦様の分身 である天台智顛（ちぎ）の天台山へ、お釈迦様の分身 の最澄が空海と共に日本は出たものの台風に出会い、船は別れ別れにな

って最澄は本流の天台山へ、空海は傍流の五台山へ行って所期の目的を果たすというのに似て、心の中に秘められた転生の秘密が隠されているよう

で大変興味があります。

ここでは台風が二人を別々に分けて、目的を果たさせるという天上界の指図に外ならないと思うのです

こうして大唐西域記ならぬ、天眼通一番の大谷氏の孫悟空と、動きは鈍いが智慧一番の、猪八戒の園頭先生の架空説話が出きあがりです。

勿論これは高橋先生の言い残された言葉ではありません。

釈迦の本体と五分身

本体 紀元前五百年、インドのお釈迦さま

分身 インド不空三蔵

分身 中国 天台智顛

分身 日本 最澄（伝教大師）

分身 日本 空教

分身 日本 木戸孝允（桂小五郎）

イエスの本体と五分身

本体 イエス イスラエル（高橋先生は、紀元一年ではなく紀元前三十二年と言われている）

分身 クラリオ BC四千頃エジプト

分身 マグガリス AD二百年頃イスラエル

分身 フワン・シン・フワン・シンフォー AD四百年頃 中国

分身 バロイン AD千五百年頃 英国

分身 マグネチオ BC二千年頃 エジプト

高橋先生の『心の発見』科学篇にはこう書かれています。

「現在、分身 が、フィリッピンで、肉体舟に乗って修行している。クラリオが守護霊をしており、指導霊はイエスの友人であるモーゼの分身が担当して

いる。」、

とあります。

この分身 は、昭和四十八年？に亡くなったヒーラーで、通称トニーのアントニオアグパオアでした。

次に生まれるのは、昭和四十八年（一九七三年）現在、百八十年後のシカゴにイエスの本体です。

玄奘三蔵法師のお伴は何人？

また、高橋先生はこうも言っておられます。

高橋先生の著書を出している三宝出版があります。

営業部員であった○木氏は、七世紀に、玄奘法師の乗られた馬の手綱を取られた人と、言い残しておられます。

そこで、この○木氏が、先の霊道現証に出てこられた人かどうか、この時点では確信できませんので、これから先の信次師研究に先送りさせていただきます。

す。

著者の資料は、ビデオやテープは百巻程度ですが、約五百巻を所有する人がおられて、高橋先生の教えられた新事実も次々と明らかにされるでしょう。

う。

サテ、病床の園頭先生にお尋ねしたことから判断すると、玄奘三蔵法師は、高橋先生の守護霊である不空三蔵であり、そのお伴は、不空のお弟子さ。

んと園頭先生と坂本竜馬の大谷氏と馬の手綱を取られ人の四人だったのでしょうか？

また、高橋先生の著書や講演の中で不空は、

「インドに生まれた」、

また、

「北インドに生まれて」、

とか、或は、

「不空三蔵といってインドから中国に帰化した方があります」、

とあります。

玄奘は中国生まれと歴史は教えていますから、こじ付けがましくも、こう考えました。

禁を破って国外へ出て行ったのですから、生まれも育ちも隠し、不詳ではなかったのではとか、或は、インドから中国へ来て、再びインドに戻って、仏

教を広めるという大きな使命感の為に仏典を中国へ持って来て、中国で亡くなったと考えたり、

不空三蔵は、玄奘三蔵に生まれ変わったと考察しては、著者の中で混乱しました。

それで、結論は急いではないと考え、疑問符のままこの項は終わります。

インターネット放送局のこと

高速通信ネットのブロードバンドが広範に安く自由に利用されるようになるとインターネットによる正法の講演テープや講演ビデオが、皆様の家庭に

ツカツカと入り込む時代がそこまで来ています。

この異言といわれる過去世の言葉を語る場面を記述で表現するとなると、どうしても制限されて思うに任せません。

高橋信次先生と園頭広周先生の教えを紹介した「正法のホームページ」は、開設してから五年になります。

平成十五年一月末、累計で五十数万件のアクセスです。

現在は静止画像とテキストだけですが、永続は力なりといたします。

この種のホームページとしては、異例の件数と評判らしいのです。

外部に知らせていませんのに閲覧してくださる方がどんどん増え続けています。

アドレスは、www.shoho.comです。

先を続けます。

昭和天皇と自霊拝

卑弥呼以後の日本の原始信仰は、太陽や山野の自然崇拝です。

しかも、自分に嘘のつけない善なる自分の神なる心を拝むという、自霊拝を取りいれた古神道でした。

勿論、現代の山岳宗教や神社神道ではありません。

亡き昭和天皇は、自霊拝を最も厳修した方とされています。

存命中は今上天皇といわれ、亡くなると昭和天皇と呼んでいます。

このように、亡くなると呼び方が変わる例として、大日如来や天照大神についてもお分かりでしょう。

アショカ王は菩薩界の昭和天皇

昭和天皇の過去世は、古代インド時代のアショカ王、次にカニシカ王として生まれ変わられた菩薩界の偉大な大王、と高橋先生は言い残されます。

もう少し詳しく述べますと。お釈迦様が亡くなられてから二百年後、アショカ王は戦えば全戦全勝の無敵の大王でした。

戦いに勝っても勝っても心が晴れず、その内に、身内も恐れる暴虐振りを発揮します。

この心の虚しさは何だろう。

そうだ全てを懺悔し、仏のみ教えを仰ごう、と仏法に帰依します。

それからアショカ王は不殺生を誓い軍隊を解散して、有史以来初めての戦争放棄の宣言をします。

ただ単に個人の救いの宗教でなく、世界全体を救うものと、シリア、エジプト、マケドニヤに特使を派遣して、仏教を世界宗教まで高めたのです。

これまで、アショカ王は実在の人物ではなかったと言われていましたが、アショカ王の宮殿址が発掘されたのは、今から百年ほど前の事でした。

とりわけ、アショカ王から五百年後に、アショカ王がカニシカ王として生まれ変わられると、更に仏教を広め、世界仏教を不動のものにしたのです。

昭和天皇は第二次世界大戦で、自らの意思で戦争終結の勅を下されます。

世界で初めて原子爆弾を被弾した国として、全世界に戦争の愚かさを訴え、世界に範を示す時こそは、天皇が亡くなられたこの現代しかありません。

過去世でアショカ王でありカニシカ王の昭和天皇が、第二次世界大戦によって戦争放棄の宣言をされたことは、過去世からの繋がりを見ると、不思議

議とはいえ当然なことかもしれません。

このように、アショカ王にならって軍備を持っている国は、軍隊を解散し戦争を放棄すれば、世界平和の一步を印すのです。

古神道と神社神道

或るとき園頭先生は、高橋信次先生に、

「正法である古神道について特に触れられていませんが...」、

と質問されます。

「そうです。今これを言えば、古神道ではなく神社神道と受け取られ、混乱して右翼が騒ぐ云々」、

と。

このように、アガシャ系霊団の大指導霊として日本に生まれて正法を説いた人は、天照大神でした。

正法を一つにするために

ユダヤ教、仏教、キリスト教、日本の古神道、イスラム教は、もともと一つの正法でした。

アガシャ系霊団の中心霊である真のメシヤ・エルランティは、地上のそれぞれのメシヤに対して、天上界から霊示として教えます。

モーゼにはヤーベとして、釈迦には梵天として、キリストにはエホバとして、天照大神には天つ神（あまつかみ）として、マホメットにはアラーとして、そ

れぞれに名を変えました。

教え主が同じエルランティですから、もともと一つの正法なのです。

ところが、正法は長い時間と空間とともに歪められて、そこに智と意が加わり、自力から他力信仰へと突き進みます。

幸福という名の欺瞞

元来、人間の正しい生き方と、人間の正しい在り方を説いた筈の宗教は、いまや幸福という名の幻想へと誘ない、マンダラと偶像を祭り、呪文と経文

を唱えて、他力や祈りの宗教に堕ちています。

そして、得られるべくもない幸福を、言葉のトリックによって、得られると説く宗教のなんと多いことでしょう。

また、幸福という言葉と引き換えに教勢を強め、貧乏人からは少しづつ少しづつと集金マシン化する宗教は、身ぐるみ剥がす追い剥ぎや泥棒と一

つも変りはありません。

紛争の火種にまで成り下がった宗教を正すために、ユダヤ教、仏教、キリスト教、古神道、イスラム教の全部を一つにするのが、高橋信次先生の出

生に重要な意味を添えるのです。

天照大神後の日本の正法の変遷

それでは、天照大神から以後の正法の変遷を見ましょう。

五百四、五十年頃には百濟から仏教が伝わり、五百九十三年に聖徳太子が出て推古天皇の摂政となり、十七条の憲法を制定して、仏教を保護し奨

励します。

聖徳太子は七大大使の一人パヌエル

聖徳太子は、地球にエルランティと共に飛来した七大天使の一人、科学全般を担当したパヌエルです。

推古天皇の摂政。役人の心がまえを示した「十七条の憲法」や、家柄よりも能力のある人を位につけるために「冠位十二階」を制定し、光の天子の小

野妹子とともに遣隋使を中国に送ります。

法隆寺や四天王寺を建て、「三経義疏」というお経の解説書も書いたと言われ、「日出ずる処の天子、書を日没する処の天子に致す」、

と隋と対等の立場で書かれているのは余りにも有名です。

確かに、日本はアジアのなかで一番先に日の出を迎えますが、勿論、国書の趣意は位置的關係ではありません。

また、聖徳太子が建てた法隆寺は現存する世界最古の木造建築といわれています。

同じく、この頃にイスラム教（回教）で話題のマホメットと、玄奘三蔵法師は出ています。

マホメットのこと

マホメットは、四十歳頃にメッカ郊外のヒラーの丘にある洞穴で、ガブリエルを介してアラーの神の神示を受けて、イスラム教（回教）を伝えます。

昨今話題のイスラム教のマホメットは、園頭広周先生である天使ガブリエルが指導し、アラーの神はエルランティである高橋信次先生でした。

エルランティである高橋先生は、モーゼのときはヤーベを名乗り、釈迦には梵天を名乗り、イエスにはエホバを名乗り、天照大神には「天つ神」を

名乗り、マホメットにはアラーを名乗られ指導された、と何度も述べました。

イスラム教もアガシャ系霊団の一員として正法が説かれていたにもかかわらず、教えは曲解され誤解は誤解を生んで、イスラム原理主義などと国際社

会で異端児扱いされて現在に至ったことは、皆さんも良くご存知のことと思います。

イスラム教はキリスト教やユダヤ教と同じ唯一神の一神教です。

マホメットは西暦五七〇年頃、メッカのクライシュ族に生まれ六一〇年から死ぬまでの二十二年間、ガブリエル（ジブジュール）の仲介によってアラー

（アッラー）からの啓示を述べ伝え、それを規範とした共同体を指導します。

正妻が亡くなると多妻を実行し、預言者や宗教指導者としてだけでなく、イスラム軍の総指揮者として好戦的でした。

その軍勢はアラブ諸国を形成して、現在の宗教的教勢は七億人とも十億ともいわれます。亡くなると後継者の派閥争いが繰り返され、部内は暗殺の

歴史でした。

園頭先生とオマーン国

園頭広周先生は、亡くなられる三年前の平成八年三月のこと、アラビヤ半島にあるオマーンへ出掛けられました。

先生のオマーン訪問の真意は私にはよくわかりません。

それはとも角として、アラビヤ半島のオマーンの対角に位置する所には、マホメットが生まれたメッカがあります。

オマーンも含めて、この周辺は純然たるイスラム教圏です。

園頭先生は、メッカで生まれたマホメットを指導されたガブリエルでしたから、懐かしい思いでオマーンを訪ねられたことだろうと、こじつけがましくも、

そう考えました。

この項をパソコンで打っていたとき、オマーンに在住された国際正法協会元会員と北陸でお会いする機会がありました。

北陸高速道を飛ばしながら心の片隅にくすぶっていた、この問題を投げ掛けて見ました。

その方が曰く、マホメットもメッカのことも、私はお聞きしませんでした、ということでした。

「不思議な事がありましてね」、

「どう不思議なんですか」、

と尋ねますと、

「北陸の研修会で帰朝講演を先生がなさったとき、私も聞く機会がありました。

それはオマーンの石油の権利に関する日本企業のことでした。講演では私が現地で説明したのとは反対の企業名を講演されるのです。

「それは違いますよ」、

とは周囲に憚られて訂正せずにいましたら、先生が間違えられた通りに成ったのです。これには私も驚きました。さすがに先生は我々では推し量れな

い不思議な方でしたからね。」、

と言われる。

また、

「園頭先生がオマーンに来られてからは、降らない雨が木々を潤おす位に降り、オマーン国内では色んな良いことが次々に起きました。

国王様は、自分で車のハンドル握られ国民との対話の会場へ向かわれる程のお人柄で、国民からも大変慕われ親日家でいらっしゃいます。

私は気がついたら六年もいて、家族はもうほとんどオマーン人です。」、

と、語り終えられた笑顔が爽やかでした。

昨今話題のイスラム圏ですから、聖徳太子と同時代の、私達には馴染が薄いマホメットについて触れてみました。

先へ進みます。

平安時代の前期は、最澄と空海です。

平安時代は三百五十年、江戸時代は二百五十年も続いたという、日本が世界に誇れる、世界でも類例がないという程の、史実の平安時代です。

最澄と空海の渡唐

最澄と空海は仏教を学ぶために同時に中国に向けて出帆します。

ところが途中でひどい台風に出会い、船を一緒につないでいた伴綱が切れて、空海は五台山へ、最澄は天台山に着いてそれぞれ別々に学びます。

最澄は本流の仏教を、空海は傍流の密教を学んで帰国すると、それぞれに寺院をつくって教えを広げたのです。

真言宗のお坊さん登壇、恵果のこと

高橋先生は、講演会の現証の時間でのこと、

「ちょっところちへ来てください」、

と坊主姿の人を登壇させられます。

「この方は、現在も真言宗のお坊さんですが、その当時のことを思いだし、自分自身の心の窓を開いております。」

また、

「ちょうど、恵果阿闍梨（あじゃり、真言宗の高層の敬称、あちや、あちゃと聞こえ当時の中国語でアチャリと発音していたのでは？）」、

という方が出られた当時の頃のお弟子さんで日本から空海という方が留学しておった当時の僧侶でございます。」、

と高橋先生。

それから二人の異言がしばらく続きます。

「当時の経文、真言とその印の結び方、インゾーを、その当時の当時のことをそのままにやってください、そのままを唱えて欲しいとお願いしました。」、

それから男性はその当時の真言らしき経文を朗々と唱えます。その浪々と続く中を高橋先生の解説が続きます。

留学中の空海

「ベルチャーナーといわれる大日如来を本尊としてその当時一つの密教というものを勉強せられたことが思い出されたわけです

。そういうやはり縁生を通して今生においても真言宗の一つの僧侶として生活をしておられます。

「日本人の空海といわれる方が五台山といわれる所へ留学して来た時のことを私は思い出しております。」、

と、申しております。」、

と。

真言の意味

また、同じく高橋先生は、

「 当時の難しい真言ですね、当時の真言です。」

「ノーマクサマンダーバーノーマクサンマンダーバー云々。」、

と男性は吟じ続けます。

高橋先生は、

「この真言というのは天上界のそれぞれの天使のコードナンバーと言いましょるか略称のようなものなのです。シエイシェイ、シェイシェイどうも有難うございました。」、 と。

空海と過去世

空海のお釈迦様の時代は、釈迦に竹林精舎を寄進したガラングダ長者です。

次には五世紀の中国に中蔣という名前で生まれています。

空海は心眼を持っており、病人に憑く憑依霊が良くわかった為に加持祈祷をしました。

また、自著『般若心経秘鍵』の中に、

「私は、インドの当時、リヨジュセンで釈迦の説法を聞いたことがある」、

と書き残しており、これは過去世の時代を思い出していた証拠になると思います。

空海は渡唐した当初は五台山の西の門の西明寺が寄宿所でした。後に南の方の青竜寺に移り、前に述べました惠果和尚について密教を教わります。

惠果和尚の師は、前に述べました不空三蔵です。

不空三蔵はお釈迦様の分身で、高橋先生は憑依霊を除去される時、

「不空三蔵、この霊を連れて行きなさい」、

と、よく告げておられました。

空海即ち弘法大師が修行した中でもっとも大事なのは即身成仏です。

即身成仏、即ちこの身このまま仏であるとの自覚は「宇宙即我（うちゅうそくわれ）」で、宇宙即我の相（すがた）を現わしたのが「曼荼羅（まんだら）」です。

現在はその真義が見失われてしまい、即身成仏といえは、土中に身を埋められ一定期間じっと耐えることのようなのですが、間違いです。

これは我慢強さの修練にはなりますが、悟りとは無縁の、肉体業や苦行の一種です。

高橋先生の講話「空海のこと」

「高野山での研修会でのことを二、三お話しします。

一体ここはどこだろう？と私が思いますと、ハイハイとお坊様が出て来ます。そして、蓮生坊でございますという。さらにたずねて貴方は誰ですかと聞

きますと熊谷直実でございますという。云々。

当時に弘法大師空海が中国に行った模様を私は聞きました。

一番先頭は最澄

それによると四隻をともなって一番先頭には最澄が乗船し、藤原一族も中国大使として乗船します。

そのうち筑紫から出て間もなく大風が吹き、纜（ともづな）が切れてしまい、四隻の船はバラバラになってしまった。」

渡唐口址のこと

講演には、

「筑紫から出て」、

とありますが、二〇〇二年正月一日、福岡市のカウントダウン会場から、近くの夜の繁華街・中州の名もない神社に立ち寄りしました。

玄海灘に流れ込む河口堰際の神社の隅に「渡唐口址」と彫られた小さな石碑を見つけ、この項を打っていたときですから、特別な感動でフィルムに

納めました。

著者には不思議なことが在るときは、それに逆らわず流れに任せるようにしています。

再び高橋先生の講演に戻ります。

「最澄の方は帰ってからわかったのですが、揚子江（長江）下流の上海という所に着き天台山へ。

私達は今でいう台湾海峡からアモイの近く、福建省へ流され五台山へという。

このように当時の模様を詳しく教えてください。

そうすると私は本当か嘘かいろいろと調べ始めます。

ここは高野山の弘法様の所ですから金剛峰寺へ行って伝記物の本を買ってくると大分嘘がある。第一船団に空海が乗船と書いてある。

それならと最澄の比叡山延暦寺を調べると第一船団には最澄だと書いてある。

その当時最澄は三十七歳だと言っております。

このように歴史はいろいろと坊主たちの、自分の都合の良いように作成したのです。

弘法大師が本当に神理を悟って、中国から帰って来たとしたら、恐らく先程の密教なんてものは作らなかったでしょう。

更にまた山を捜し求めたときに、二匹の白黒の犬が出てきて先導し現在の高野山に、自分の修業所を求めたと書いてあります。

その時に獵師と一緒に地の神を祭ったことも、これは既に弘法は悟っていない証拠です。

しかし弘法自身、高野山にいて修行をし、心の窓は開かれていたと弘法自身は言いました。

弘法自身、一生女性関係は無かったのですか？と聞きましたら、私も所詮は男でございます。云々。

何時の間には年代が過ぎると雲の上の天上人に周囲が神格化してしまう。

奥の院には弘法様の骨を祭ってあるとか、その奥の院へ入って行くと、私の目の前に真黒い玉がグルグルと飛んでいるのが見えます。

その時四、五人のお坊さんがおりましたが気が付かない。

弘法様に後で奥の院には貴方様のお骨を拝ましているようだが？ 一体これはどういうことですか、ときくと、自分の亡き後の骨を拝めとは一言もいって

おりません、という返事が返ってくる。

人間はそのようなものに執着を持たしてしまっている。

末法の時代になれば、このようになるものと、これらは歴史上の事実を追求しますから歴史と現実がどのように間違っているか分かってしまうわけです。

人間は尊敬の余り自分の宗祖をどうしても大事にしたいものです。

正しく物を見ていない証拠なのです。

しかし高野山が当時の権力と結びついて弘法様の名前が世の中に広まって行きました。」、

と。

Home

加持祈祷の過程でライ病に

また、高橋先生は、

「修行の過程で霊視が利きますから、病気が解ります。その病気を癒している間に当時ライ病が流行したそうです。

その結果が自分もライ病になり手が全部潰れたともいわれる。

だから四十代から殆ど堂に籠って外出しなかったと言っておりました。」、

と。

空海の霊査、審霊

同じく高橋先生は、

「それで本当に私に出てきたのは弘法であるか？ないか、テストしなければなりません。顔形を見て弘法さんとわかって、人は信じません。

たまたま高野山で寺院を持ち当時宗務総長K氏が三年前に死去しました。

その方の奥様が私の講演を聞きにまいり面接いたしました。

見たところご主人が横に来ております。背は一メートル七十四、五センチ位で丸々と肥った一見浅黒いお坊様、私は奥様にこのことを話しますと、

私の主人ですという。

その時、K氏は、私は精神的に非常に宗派の見苦しい環境の中で苦しみました。

私は心筋梗塞で一夜の内にあの世へ帰りました。

今、執着はありませんが、ただ自分の妻を顧みるいとまがなかった。云々。

万が一私が死んだ後お坊様の宿泊所でも良い、よい生活環境を作ろうという約束をしたが、それを果たすことなくお前に苦勞かけて申し訳ない、とい

う。

お前には色々苦勞ばかりかけて多くのお客様に接待するだけで、青春も老後の幸福も与えなかった。本当に申し訳ない。

お前には見えないだろうが、何時でも傍にいて協力するから恨まんで欲しい。

気の強い女であったが、もう少し体のほうにも気をつけて医者にも見てもらって欲しい。云々。

ところが偶然にそのK氏は宗務総長時代に私の『縁生の舟』（改題『心の発見』）を読んでいたそうです。不思議なことです。先生の御本を読まして戴

きました。

先生はそういうことから通して、ご存知でございましょう。

高野山内部のことも云々。妻にもいろいろとご教導ください。

夫婦二人だけの話しを喋ってしまったのです。

サア奥様信じざるを得ません。全部ですから、これで初めてアアそうかと矢張り前へ出て来たのも、弘法大師には間違いないと私は信じました。

また、弘法様が、貴方様の説いている心、私の寺の中に示してあります。

ぜひそれらを見て欲しいと言って、皆様と一緒にいろいろの国宝を一パイ陳列してある宝物殿へ這いって行きました。

心を中心に書いてあります。

だから何でこれだけのものが書いてありながら、人はこの心を調和する道に実践しなかったのだろう。

弘法死後どうなったのですか聞いたところ、私が亡くなって百二年目、すでに僧兵をつくって私の神理にないものが這って来たのです。

そのために、最後は、あの中は阿修羅界に変わってしまいました。

滅後二百年でこのような現象が出るとは思いませんでした。

このように弘法さんは当時のことをいろいろと、すでに天上界へ上がっておりますから、解ります。

その張本人は誰ですかと聞いたところ、現代の名前で何とかいう宗祖だそうです。

この人が鎖鎌を持って権力と組んで、最後は四十三歳で殺されたようですが、一つの分派活動を起こして、混乱に導いて仏教を段々変えてしまったのです。

だから日蓮が真言亡国といった意味がよく解ります。云々。」

- ・ クサリ鎌と僧侶

長くなりましたが以上は講演筆録です。

日蓮が真言亡国、真言密教は国を滅ぼすと言ったのは、ついには宗教人が権力に組み込まれて、クサリ鎌を持って戦うというのですから驚きです。

密教は後では最澄の比叡山延暦寺でも弟子達が積極的に取り入れ、ついには比叡山延暦寺の北嶺の僧兵は残念なことに強大でした。

この講演を長々と引用したのは、霊は見えぬだけに霊の特定は大事なことなのです。

超能力を自由自在に駆使される高橋先生でさえ、これ程までに慎重だったと示したかったのです。

高野山浄霊

また、「高野山浄霊」という講演テープには、高橋先生の浄霊の言葉に始まり、霊媒の女性が、空海のゆっくりした抑揚のある候文の言葉を伝えます。

空海は、

「本日はわざわざお出まし頂き御説教ありがとうございます。」、

と。

そして、中ほどでは高橋先生の朗詠される般若心経や、また、中国の天台智顛の、

「妙法蓮僧伽呪ミヨーホーレンゲンーサンーガンジュ」、

と中国当時のお経を唱えられ、終わりの方には余興として、相馬馬子追唄と詩吟をきれいに歌われています。

高橋先生かどうか霊査を試みる

現代は、高橋先生の偉大さをたたえて、高橋先生が出てこられると称する、霊能家が何人もいます。

本当に出てこられるとすれば、顔も雰囲気も声も仕草も全部高橋先生でなければなりません。

簡単に出きる方法はこのテープと聞き比べて真偽の判断をいたします。

長野なまりの東京弁の相馬馬子追唄や詩吟をジックリ練習していただくことにしましょう。

現代の上海

この項を記述する少し前、最澄が漂流した上海を訪ねました。

テロによるニューヨークのビル爆破直後で、エーペック開催も間じかに控え警備もピリピリしていたのか、空港につくと一行は全員、提出した書類を記

述不備という理由で突き返され驚きました。

数年前に訪問した中国の田舎の空港では、飛行機がついて入国検査が始まる直前に電灯が燈され、電力不足はこれほどまでかと、驚きました。

その時のローカルラインは旧式のジェット飛行機で、足元に酸素マスクが転げ落ちている有様に度肝を抜かれました。

いまや上海は人口千三百万人の中国一の大都会です。

ビルもテレビ塔も世界有数で、テロによるビル爆破が順位を二位に押し上げたというのです。

そのときの上海の港は、カクテル光線やレーザー光でライトアップされ、夜風が頬を撫でるクルージングから見る長江口の夜景は、最澄の驚きもかく

ありなんと思われ、平安時代に思いを馳せたことでした。

上海は、海外から進出する企業には、二年間は無税、後の二年間は税が半分というのです。

平安時代のエリート達はこぞって渡唐したように、十三億人の現代の中国は魅力溢れる未来国です。

しかし、長江の大氾濫に見られるように、このような気象異常は国内に秘められた問題があるということです。

例え、木々の伐採をして山が裸となり森林が少なくなっても、その地区にドカ雨が降らなければ、軒下まで来る濁流に沢山の家が押し流されるというこ

とはありません。

大地を潤おす適度な湿りなら問題は起こりません。

それも何度も氾濫に見舞われるということはその原因の反省が十分に出来ていないからです。

では、何を反省をすれば良いのか、長江の氾濫を鎮められるその原因は何んで、どうすれば良いのか、その方法は？

中国の天候異変の原因

それは言論の統制や、一人っ子政策です。

人間は自由に子供を産んで自由に語らい、楽しい生活を謳歌すべきです。

それが正しい人間の正しい権利の筈です。

人口が増えて食糧問題が起きるからという理由で、それなら人口を抑制すれば良いというのでは本末転倒です。

悪い原因という悪因を取り去れば天変地異、天候異変も起こらず、あの広大な国土に笑み溢れんばかりの豊作が約束されるのは当然なことでしょう。

祖国怨念（祖国怨）

この一人っ子政策にどれだけの中国国民が、自由な発言もできずに押し黙り、ニガニガしく思っていることでしょうか。

これを祖国怨念といいます。

かつて中国には権力者が亡くなると生贄となって殉死させられた歴史がありました。

現代の皆さん如何ですか、あなた自身がそうなったらどうなさいますか？

これは国を恨む（怨む）祖国怨とか祖国怨念というのです。

祖国愛なら大歓迎ですが、祖国怨はいただけません。

一人っ子政策も、誰もが表立って批判できないものですから、泣く泣く権力に従うのです。

しかし、国民殆どの人が、アー困ったことだと国政を恨む気持ちになっても不思議ではありません。

このような暗雲が国土を覆うと、また、思いが集団的となるとその思いが、天変地異とはいかないまでも、天候異変を引き起こします。

中国の近未来

高橋先生が亡くなる直前の、先生最後になった岩手の東北研修会によると、

「彼等が自覚するまで中国の食料不足は続きます」、

と、断言されたのです。

だから食料が足りないので人口増加を抑制するのではなく、一人っ子政策で人口増加を抑制するから、天は指導者や国家を反省させるために、農

作物を順調に育たないように、氾濫の繰り返しを強いる等の問題を起こすのです。

等（など）としたのは、天は色んな方法で反省を促すということが言いたいのです。

この項では、空海や最澄について述べました。では先を進めます。

源頼朝について

鎌倉時代は源頼朝です。鎌倉に幕府を開いて征夷大將軍でした。

源頼朝は高橋信次先生のお父さんです。

その前は古代インドの釈迦のお父さんでシュットダーナー王です。

お父さんにはこんなことがありました。

「春雄（本名）、おまえは本当に俺の子だよな。」

「そうに決まってるじゃありませんか、それがどうかしましたか」

「不思議なこともあるもの、昨日の晩、頭に白いターバンを巻いた二メートルもある大男が出て来て言うことには

「あれは俺の息子だ！」と言う。

「アーそのことでしたか」

「お前は本当に俺の息子だよな」、

と。

お父さんは、古代インド時代は王様で、次は征夷大將軍というのですから、武士というものは肩肘張って肩苦しいもの、今度は気楽な生活を送ろうと

百姓に励まれ地味な人生だったということです

お父さんについて触れましたから、次はお母さんです。

マヤ様とマリヤさま

高橋先生のお母さんは、イエス様を生み育てられたマリヤ様でした。

マリヤ様は、イエスの後には日蓮を、そして次は高橋先生を生み育てられます。

では、如何なる理由で高橋先生のお母さんになられたのかといえ、それはこうでした。

お釈迦様は逆子

お釈迦様はネパールのルンビニという所で生まれ、今で言う逆子でした。

産後の肥立ちが悪くてお母さんのマヤ様は、一週間で亡くなります。

どうして、お釈迦様のお母さんともあろうお方が、可哀想なことに、こうなるのかと申しますと、お釈迦様をこの世に下して人間の正しい道を説かせるた

めには、天上界の用意周到な計画として、どうしてもマヤ様をあの世界に引き取らなければならなかったのです。

それから釈迦は継母のパジャパティに育てられます。

いつしか生みの母ではないと感づき、釈迦は縦横無尽な我侷な性格から、ついには控え目な物思いに耽る日々が続きました。

このような理由から、今度もマヤ様へお母さんになって下さい、と高橋先生は願われますが、こん度は勘弁してください他の方にでもという訳で、日蓮

のお母さんのマリヤさまに役が廻って来たというのです。

読者の皆様も、親子の縁を結ぶとき、あの世界でこのような手続きを取るのですが、自分で頼んで置きながら、勝手に生んでと愚痴を言うのです。

人類の為とはいえ、短い人生でこの世を去り、釈迦という仏陀に人生を捧げるという気高い想いも、マヤ様にとっては厳しいものがあつたのでしょう。

マヤ様の現代は

それではマヤ様の今世はどうだったのかと申しますと、公爵家の蜂須賀T子として、蝶よ花よの優雅な人生でした。

一九七〇年十一月、亡くなる数日前（八十余歳）に、高橋先生に送られた書簡の一部を紹介しましょう。

「思えば昨年六月、先生のご自宅にはじめて伺ったとき「あなたのおいでになるのを二年前から知っていて、いつかいつかとお待ちして居ました。

私の本体は釈迦である為、慈母にあたるあなたは、齢をとって居るからこの世で会えないかもしれないが、会う機会がめぐまれるかもわからない」、

と申されたとか。

そして、「一、二週間前いよいよ会える時機が来たようだからと、前からお待ちして居ました。あなたは私の慈母マカハンニヤダイです」と、

とてもなつかしそうに私をじっと見つめて下さいました。そう仰っしゃったが私にはその意味がよくのみこめなかったのです、云々。」、

と。

マカハンニヤダイとは本名です。

(マ)カハンニ(ヤ)ダイのマとヤをとって、通称マヤ様、マヤー様です

お釈迦さまは逆子だったと述べましたので、次に、園頭先生が教えられた逆子の治し方をお話しします。

逆子の治し方

逆子(さかご)というのは、正常であるべき胎児の位置が逆さになった状態です。

これは、どういうことかと申しますと、出産は、赤ちゃんが産道を通り抜けて頭から時間を掛けて出て来るとき、産道の自然のマッサージを受けて生まれ

るのが、一番無理がなく自然です。

ことさらに述べましたのは、鉗子分娩や吸引分娩や帝王切開による分娩によって、赤ちゃんがこの世に急速に放り出されると、産道によるゆっくりした

マッサージがなされず、なにかと弱い赤ちゃんに育つようです。

このような赤ちゃんには、日常生活の中で体を擦ったり撫でたり、特にスキンシップを心がけて欲しいのです。

サテ、逆子は頭から出てくるのではなくその逆の状態ですから、足から出てきます。

足の方から出てくるのですから、当然ながら出てくるのに困難を極めます。

そうすると、赤ちゃんを取り出すために器具を使ったり、帝王切開手術を併用することは容易に想像できるでしょう。

では、なぜ、普通であるべき胎児が逆さになるのでしょうか。

胎児は、子宮の羊水に浮かんでいます。

なぜ、人間の体にヒツジ(羊)かと申しますと、その理由というのは、どうも、ヒツジの赤ちゃんが、羊膜に包

まれたのを最初に見つけて、語源としたようで

すが、羊水の中に、赤ちゃんはあたかも無重力の宇宙遊泳のような状態にあると想像して下さい

ですから赤ちゃんは横になろうと逆さになろうと自由です。

逆子は病気ということではありません。

本来、正常であるべき赤ちゃんが、何故に、へその緒を体や手足に巻きつけたり、逆さになるのかと申しますと、お母さんの感情により、赤ちゃんがジ

ダンダを踏んで暴れたと考えて下さい。

お母さんが、心安らかで満たされた毎日なら、赤ちゃんはお母さんの規則正しいドックドックという心臓の鼓動を聞きながら安心できて、このようなことに

はなりません。

しかし、夫と喧嘩が絶えない、姑や小姑とイサカイが続く家庭環境なら、妊婦は怒りや悲しみの心が一杯ですから心臓はドキドキ、呼吸はハーハーと尋

常ではありません。

こういう赤ちゃんの問題が出てくると、お母さんの心の状態がどうだったか、大よその察しがつくのです。

逆子は、家族もたいそう心配しますが、一番は、それはお母さんです。

だとするなら、家族も妊婦が心安らかに過ごせる配慮と、一番心配な本人も知恵を働かせて、夫と、家族と調和して皆が仲良くすることでしょう。

他人ではなく、妊婦本人が楽になるのですから、自助努力によって明るく幸せな家庭を築いて欲しいのです。

逆子の治し方をマトメますと、こうなります。

治し方のマトメ

主人や家族や周りのせいにせず、全部自分のためにこうなると反省をして、赤ちゃんに謝ります。

赤ちゃんに対して、

「お母さんのせいで、あなたを苦しめてしまいました、これからもっと仲良くしますから許してネ」、

と謝ります。

心の中でも、声を出しても、どのような言葉でも真実なものであれば良いのですから、一度はきちんと謝って下さい。

この世には間違いを犯さない人は誰もいません。

赤ちゃんの魂というか心というか、赤ちゃんは、あの世ともツーツーなのですから、お母さんの心は赤ちゃんに全部お見通しなのです。

嘘など、どうせ見破られます。

お母さんが真実に誠実に応えれば、たとえ、その原因が自分のせいでも、相手のせいでも、心から自助努力を続けていますと、赤ちゃんはお母さんの

心を聞き届けて、正常に生まれてくれるものなのです

次も神理です。

「調和を目的とするなら、嘘も方便」、

と申します。

意地を張らず知恵を働かせて、オホホ、アハハと仲良く明るい環境にすることに、一円のお金もかかりません。そして、

やるだけのことは全部やったのですから、次はおまかせの祈りをします。

これは、どういうことかと申しますと、やるべきことは精一杯、努力したのですから、赤ちゃんへ次のように呼びかけます。

「あなたは、現在の状態のままだが良いのであればそのままでもかまいません。でも、今のままではあなたも私もひどい生みの苦しみを受けることになるの

ですから、いよいよ生まれるときは頭を先にして産まれてください。」、

と、結果は天に任せるのです。

園頭先生は、逆子で悩む人全員にこのように指導され、全員一人残らず正常に生まれました。

このように、劇的な治癒例が続出しましたが、園頭先生のような偉大な光りの天使だけができるというのでは、正法は普遍的な宗教と認知されません。

ですから、皆さんも無知で悩むより、心から信じてこの原則を勉強、実践されて、皆幸せになってと願わずにはおれません。

これまでに、お釈迦様のお母さんのマヤ様について述べました

先を続けます

マリヤさまの証明

一方、マリヤさまである高橋先生のお母さんは、貧農の妻です。

優雅な人生と貧乏な人生とは、どちらがより魂の勉強になったのかと申しますと、それぞれの人生の内容を見てみないと分かりませんが、ただ言えること

は極貧だからといって、心まで貧しくなってはいけませんし、たとえ、優雅な人生であっても、足りることを知らぬ欲望と増長慢になってはどちらも人生失

格といえるでしょう

高橋先生のお母さんは、さすがにマリヤさまでした。

結婚されて間もなくのこと、夜道を歩いていると、不思議にも足下が懐中電灯で明るく照らされるようになって不思議な声が聞こえてきたとか、物貰い

に対しても親切にされて生き神様と呼ばれたり、無学なりにも諺を交え、信次先生に正しい人生の在り方を教えられたようです。

それでは次に、女性にしかできぬ妊娠と出産について述べます。

あの世と妊娠出産と縁生との関係

お父さんになる方とお母さんになる方に、あの世で

「子供として生まれさせていただきますので、よろしく頼みます」、

とお願いします。

約束を受けたお父さんとお母さんになる方は、あの世を後にしてこの世に、それぞれの縁生によって別々に生まれて行かれます。

お父さんになる方とお母さんになる方は、適齢期になると赤い糸に結ばれてというように、縁によって結婚されます。

あの世で待機している子供の霊は、

「いよいよ近いな、そろそろ出番かな」、

と心弾みます。

あの世からこの世は全部お見通しです。

「いやいや今度は、お金持ちの家庭だから優雅な人生が送れても、プライドばかり高くて増長慢になる危険性が大いに有るな、よくよく気をつけねば」とか、

或いは、「肉体的に不調和な体で人生を送るのか厳しいな」、

と不安もあります。

五体満足でないことも承知の上で、この世に生まれて来るのですから、このような人は、魂の偉大な勇者なのです。

中には、次のような使命と目的を持った人もいます。

見えない、聞こえない、話せないという三重苦のヘレンケラーは、障害者へ勇気と力を与えるという使命と目的

の菩薩界の天使でした。

ヘレンケラー女史は、

「三重苦のために、いけないことを見たり、聞いたり、話したりしなかったために、心を汚すことなく幸せでした」、

とあの世で高橋先生に告白されたようです。

悪阻（つわり）

お母さんになる方は、精子と卵子が調和されて妊娠受胎です。

あの世ではその日に向かって、友人達とも送別会が催され、

「僕が人生を間違ったときは、こういう合図をして、このような事故で、このように病気で教えて下さい」、

とお願いをします。

妊娠三ヶ月を過ぎると、いよいよ降霊です。

天孫降臨ともいいます。

胎児に魂、霊が宿るのです。

あの世から見ると死です。

ツワリは、人によっては全く有りませんでした、という人もいますが、多くの人は経験されたかもしれません。

ツワリは、胎児の魂とお母さんの魂、意識、心の相克です。

相克というのは、こういう意味です。

赤ちゃんには赤ちゃんの魂の遍歴と、天上界から降霊したばかりの天上界の正しさの尺度があります。

また、この世のお母さんにはお母さんの、人生の中で体験された魂の価値観があります。

「この価値観の相違が大きいと悪阻はひどく、調和されると和らいで来る」、

とは高橋先生の言葉です。

また、妊娠された途端に食性が変わり、

「今までは見向きもしなかった食べ物が欲しくて欲しくて」、

という場合はお母さんではなく、赤ちゃんの前世での食べ物の嗜好が出ることがあります。

人間は男に生まれたり女に生まれたりする

人間には「本体と五分身」という法則があります。

本体を中心として、五人の分身が移り変わり移り変わり、この世に出て永遠に人生の魂の修行をします。

男に生まれたり女に生まれて、男として修行の割合が多いか、女としての修行の割合が多いかという理由から、

男らしい男、

女らしい男、

女らしい女、

男らしい女、

がいるということです。

女に生まれて損をした、男に生まれて残念だとお考えの人は如何ですか？

人間はどこを取っても男女は平等です、

でも、平均的な腕力の強さと、子供を生めるかどうか最大の違いです。

ここだけが不平等です。

女性の美は男性にとって安らぎであり、男の力強さは女性にとって安らぎです。

男は男らしく女は女らしくが一番自然なのです。

あの世と墮胎

現代は墮胎、ソーハ、水子供養、水子地蔵という言葉が氾濫しています。

どこかの国と違って日本は墮胎天国と言われることに起因するからでしょうか。

いつの世も女性だけが犠牲を強いられるというのは間違いです。

妊娠した女性がいるということは、間違いなく妊娠させた男性がいるということです。

人知れず苦しんだり、或は今も苦しんでいる女性にのみ知らせたいのです。

何の罪の意識もなく欲望のままに墮胎を続けるステバチな女性には教えたくありません。

それはこういう理由からです。

水子と墮胎は違います。

水子は、胎児の細胞分裂が不完全なために、肉の塊で赤ちゃんにならなかったのですから、当然なことながら降霊しません。

魂は宿りませんから、全てにおいて何もありません。

ただ、手術により肉体を傷つけることにはなりません。

次は墮胎についてお話しします。

墮胎というのは、胎児は順調に育っているのに、個人の色々な理由から下ろすことをいいます。

三ヶ月を過ぎると当然ながら降霊、魂は宿ります。

これからが大事なことです。

墮胎をされた胎児の魂は、この世に生まれ出ていないのですから人生体験はありません。

ですから魂についていうと垢つかず汚れず、またあの世へストレートにトンボ返りするので、そのまま天使の心です。

天上界から降霊して、そのまま天上界へ帰還するので、天使のままの心です。

トンボ返りした魂は、赤ちゃんの体の大きさに小さくなっていますから、あの世の魂の兄弟達によって魂が大人になるまで育てることになります。

この世では大人になるまで何十年もかかりますが、あの世とこの世の時間の単位が大きく違いますから、この世の単位では数年の時間差で機会があれ

ばまた、生まれるチャンスがあります。

一回は心から謝罪すること

これまでの説明で、よく理解戴けたと思います。

それ故に、無知で悩むより、本当の神理を学ぶことです。

己の為してきた行為は、よく反省することが大事です。

墮胎は、魂の修行を予定している人を待たせたり、場合によっては両親になる人の加齢によって、出生のチャンスを失わせることにも成りかねません。

宗教家や宗教団体によっては、無知か無恥か、或いは金儲のためか、水子が泣いている、恨んでいる、水子のたたき等と、人の弱みにつけ込んで、

水子地蔵を祭れ、水子供養をと、手を変え品を変えて悩める人々を組織に組み込んで、集金マシーン化と造幣マシーン化して、私服を肥やし続けて

います。

それは、いつまでも許されることではありません。

宗教関係者は、このような悪事をいつまでも働いていると、いつの日かその結果を受け断罪されるのです

罪の意識に固執しない

墮胎による罪の意識を持つと、そのことが頭から離れずに固執してしまいます。

女性は特に、妊娠、降霊を通して霊との交流が密なために、罪の意識にとらわれて心を暗くしていると、本当に悪いことが起こります。

難しく言えば、心を暗くしていると、暗い心に感応して、それが悪く現象化されるのです

ですから、胎児の霊に、

「ごめんなさい、私の心得違いで、あなたにご迷惑をかけました。これから二度と間違いはしませんから許してください」、

と、あの世からは全てお見通しですから、見せ掛けではなく自分の素直な気持ちが出ていれば、方言でもどんな言葉でも良いのですから、心の底の底

から謝って二度と繰り返さないように知恵を働かせるのです。

人間は間違いを犯さない人はいないので、心の真底から謝ったら、次は明るく振舞い、快活な人生を送るのです。

いつまでも申し訳ないという態度を装うことはありません。

なぜなら、潜在意識の中に、

「私は罪を犯した」、

という罪悪感を、いつまでも引きずることになりますから、

「もう、あんなにケロリとして!」、

という位に心を転換するのが、最大最良の秘訣です。

そして、例え、暗い困った問題が起きていても、明るく生き続けていると、明るさは暗いものとは波長が合いませんから、悪循環の輪が断ち切られて、

必ず運命は好転します

墮胎は、女性の肉体の一部を切開ソー八するのですから、自分の肉体を傷めたことも、自分の肉体に一度は心から謝ってください。

次は著者自身の体験です。

著者の懺悔

著者が二十代から三十代のことです。

私は、何はともあれ女性の敵と言えました。

というのも十指に余る墮胎の原因を作りました。

その当時は、百七十センチの身長に体重が九十キロ余りの小型お相撲さんでした。

医業の傍ら二足のワラジを履いて、スナック等の夜の商売が九軒、外に分院と事業を致しました。

その生き様が悪因は悪果となって、二度の高血圧性の脳出血により現在は自転車には辛うじて乗れますが、杖は
いらぬもののヨイヨイ寸前の状態

す。

おまけに、女性をダメし続けた口八丁の喋りには事欠く有様で、スタッフの協力を得てどうにか医業を続け、時
間を見つけては原稿を打っています

こうして、救急車で運び込まれ、生死をさまっていた救命センターのベッドでのこと、夢とも現ともつかぬ不思議な
ことがありました。

病室の天井の、蛍光灯の管球に、赤ちゃんが何十人となく、否、「ビッシリ」と表現した方が適切かもしれませんが、二月の厳寒のこの時期、裸の赤ちゃ

んが管球にビッシリと、ぶら下がってというか引っ付いて、ベッドの私を「グチュグチュ」、と理解できない言葉で喋りながら、心配そうに皆で見つめていま

した。

このとき私は鬼の目にも涙というか、

「ホラ、皆な早く」

と、不自由な体でフトンを押し広げ、

「寒いから早く」、

と裸の赤ちゃん全員にフトンに入るように促しているというものでした。

このときの赤ちゃんは全員、明るくて光り輝いてというか、情景は非現実的な構図ではあっても、全く暗さのない、恨み辛みなど全く感じられない平和

な状況であり、それどころか私の病気を心配しているのですから本当に驚きでした。

このような情景でしたから、私が原因で墮胎された赤ちゃんの心には、恨み辛みなど微塵もない偽りのないものと理解していただけたと思います。

私のそれまでの知識や耳学問では、

「墮ろされた赤ちゃんは一つ目だったり、また、恨みで眼はつり上がり、怒りで目は燃盛り」、

というものばかりでした。

なのに、私の場合は一人ならずも十人以上というのですから、それが真実なら地獄絵そのものだったと思います。

しかし私のそのときは、裸の赤ちゃんが一杯という奇妙な光景でしたが、不思議にも明るい感じだったので

それからの著者は、園頭先生に正法を学び、テープやビデオや著書を通して高橋先生に触れ、

「墮胎された赤ちゃんの魂は、とんぼ返りするのだから汚れず垢つかずの天使の心そのもの、そのまま」、

と学んでからは、私の奇妙な体験を通して、

「そうだこれが本当だ、これが真実に違いない」、

と確信しました。

悩める人達に嘘で塗り固め、嘘の情報を流し続け、嘘を通し続ける輩の何と多いことでしょうか。

私の拙文により、この悩みで苦しむ人はもとより、そうでない人も一人でも多く、心の重荷を解きほぐし軽減できるなら、私の恥など問題にはなりません。

そして、私が毒牙にかけた人達へも最大最高の謝罪になると信じています。

真面目に悩み、人生を暗くして迷える人へこそ、この一文を捧げたいのです。

次は鎌倉時代に法華宗（日蓮宗）を開いた日蓮です。

日蓮について

日蓮の魂の系譜はこうです。

釈迦の時代のガランダ長者（BC五〇〇）は、五世紀の中国に中蒋という名で生まれます。

中蒋は、先に述べました空海として生まれています。

中蒋には、子供の林蒋という姉と吾蒋という弟がいました。

この吾蒋が十三世紀の中頃の鎌倉時代に日蓮として生まれたのです。

また、日蓮は二千五百年前の古代インド時代は大日如来の弟子で上行菩薩と呼ばれます。

このように大日如来の弟子ということと、空海の系譜のブランチ、つまり空海の魂の枝分かれというのがお分かりでしょう。

ですから、空海が開いた真言密教の在り方を、魂に縁のある日蓮が心の窓を開いて、真言亡国と批判して修正を求めたというのも、あながち偶然で

はなかったのです。

法蓮華僧伽呪

法華經の中国時代は「法蓮華僧伽呪（ほうれんげんさんがんじゅ）」と唱えていました。

これに「ナーモ」という「帰依する」という言葉を日本語に表音翻訳をして「南無」という日本語にしたために、南無妙法蓮華教は、いよいよ意味が分から

なくなってしまう。

また、最澄は中国の天台智顛（ちぎ）が説いた天台山で法華經を学んで帰国すると比叡山で法華經を説きます。

その時の御題目は「法蓮華僧伽呪」でした。

比叡山で法華經を学んだ日蓮は南無をつけて南無妙法蓮華經としたのです。

高野山で真言宗も学んだ日蓮は寺内の頽廢を見るにつけ真言亡国と苦言を吐いたのでしょう。

お釈迦様の分身である天台智顛の真意は少しづつ歪められたのです。

鎌倉で盛んに辻説法を實踐し、他の宗派を激しく非難したり、『立正安国論』を書いて幕府を非難した等で、伊豆や佐渡に流されます。

元の大軍が二度も攻め入った時の日蓮の祈る姿は、人々の心に衝撃を与えますが、その気性の激しさと他宗批判の心が日蓮をして地獄の世界に

身を沈めるという予期せぬ事態を引き起こしました。

高橋先生は日蓮について次のような講演があります。

日蓮と高橋先生の講演

「日蓮はボサター（菩薩界の人）である。

下界に住み慣れるとしばしばその現実に幻惑されて、役目を果たさず還ってゆく。

あの世に戻ってから「シマッタ」と後悔するのである。如来と称する人のなかでも、そうしたことが間々ある。

それほど色界（しきかい・現実社会）は難しいところである。

また、衆生済度の心に燃えながらも誤った方向に人を引き連れてゆく場合もしばしば起こる。

近くでは日蓮がそうである。

日蓮はボサターである。

ボサターの心は本来、広いものである。広くならなければボサターの世界に住むことができない。

その日蓮が法華宗を広めることに急なため、他の宗派を排撃した。

念仏無間地獄、いくら南無阿弥陀仏の念仏を唱えていても、地獄に落ちる者は落ちるとか、禅天魔、座禅を組んでいると魔に犯される、とって既成

宗団を激しく非難した云々。

このように、いくつかの間違いを犯した。

日蓮は、あの世に帰ってから、約六百余年間、現象界、色界・この世で作り出した陰影のアカを落とすことになったのである。」、

と。

また、別の講演では

「日本では、特に日蓮の出た当時などは、厳しい封建社会の環境でありました。そういった時代に正しい法が説けるでしょうか。いわんや私たちがか

つての封建時代に、いまのようなことを言ったらどんな事態になるでしょうか。」、

と高橋先生は、日蓮に対して思い遣りというか情愛を示されたのです。

光の天使で菩薩界の高人格の人でも、法を説く機根というものが厳然として在り、善と悪の入り混じったこの世は、これ程までに厳しいものかとしみじ

みと考えずにはいられません。

次に、室町時代は北畠親房です。

北畠親房は勤皇思想を起こさせた天使

後醍醐天皇に信任されますが出家します。

足利尊氏と戦い、天皇を吉野に迎え南朝の中心人物として尽くしました。

この時代の学者でもあり、「神皇正統記」を書いて南朝が正統であることを説きます。

なぜ勤皇思想は起こったか

お釈迦様は、二千五百年後にジャブドバーのケントマティ、東の国日本の都会に再び生まれて正法を説くと予言されていました。

その日本は天上界の計画実行の為に元の襲来にも守られ、江戸時代に鎖国や無血開城によって外国の黒船にも守られます。

いよいよ釈迦は出生のときが近づくと、日本のどこに生まれて行くか天上界で会議が持たれたのが寛永二年（一六二五年）でした。

徳川家康が亡くなって十年後です。

日本で正法が説かれるようになるためには、封建体制下の徳川幕府のままでは一般民衆に自由がありません。

武家の束縛から開放して、完全な自由な心を持たせるためには徳川幕府を倒して天皇制に返す以外にはないと、明治維新が計画されます。

天上界では日本に勤皇思想を起こすことを目的として、室町時代に北畠親房を生まれさせ、天皇制こそ日本の柱という「神皇正統記」を書かせ、各

地に勤皇愛国運動を起こさせたというのです。

この何百年という時空を隔てた天上界の計画には驚かされない人はいないでしょう。

三代将軍、徳川家光は七大天使の一人ラグエル

三億六千五百年前に、真のメシヤのエルランティと共に、地球に飛来した七大天使のことは何度も述べました。

七大天使の一人であるラグエルは、律法を担当した光の天使の徳川家光です。

日本に生まれたもう一人は、パヌエルである聖徳太子でした。

高橋先生は講演の中で次のように話しておられます。

「家光は徳川家康の間違った政策を根本的に改良するために出ました。大天使たちは故意的に日本にも生まれております。ですから日本語も結構

うまいです。候文ですけど。爆笑」、と。

大久保彦左衛門は菩薩界の人

魚屋で、天秤棒の一心太助の話として有名な大久保彦左衛門は、家康から家光までの三人の将軍を見届け、徳川幕府のお目付け役として知られます

高橋先生は、次のような講話をされています。

「それは自分がその環境を望んで約束をして出てくるんですから、いくら金をもっているかとか、地位は関係ないんです。

地位が上の人ほど地獄にいますね。欲望で一生を過ごすから。

あんな水呑百姓が、という人が天上界へ行っているんですから。

大久保彦左衛門ね、びっくりしました。菩薩界できれいな光を出している。僕のところへ来ましてね、

「大久保彦左衛門めにござります」、

という。

きれいな光を出している。驚きました。菩薩界ですからね。

日本の有名な坊さんで、菩薩界へ行っている人は少ないですね。日蓮さんもね。永いこと自分から地獄界におった人ですよ。菩薩界に入らなかった。

自分の蒔いた種が、その後、多くの大衆を狂わしてしまったという責任を負ってね。あの人は、あの世では知らない人はいませんね。あまりにも有名

で、謙虚なんです。

今の創価学会のやっているようなものではないですよ。心のきれいな人達は、例え貧乏でも立派な人がたくさんいる。だから、金額の多寡や地位が人

間の値打ちを決めるんじゃないんです。」、

と、高橋先生は話されました。

光が一番出ている日本

一九七六年（昭和五十一年）五月の講演から要約してご紹介しましょう。

「現在地球上を見ると、日本から一番光が多く出ております。その次はアメリカです。それから西ドイツが多く出ております。イタリヤも一部出ておりま

す。ギリシャも出ております。

アルバニア、中華人民共和国、ソビエト、北朝鮮、これは殆ど出ておりません。

その為に彼等の国の食料は不足して、どんどん不足してゆきます。お金はありませんから自由諸国のお金を引っ掛けようとしております。

過日、ミカエル（地球創世のときエルランティと共に飛来した天使長）の報告によればソビエトに強力な原子爆弾、水素爆弾の設備があるようです。－

発で地球が吹っ飛ばすような云々。」

全ての爆弾が無効になる

「しかし、心配には及びません。引き金を引けないように、天上界でみんなやってしまいます。地球がなくなれば人類は魂の勉強する場がなくなるから

です。宇宙に七種いる人類とのバランスがとれなくなるので、地球がなくなることは絶対にありません。

引き金を引けないように天上界の神界で研究していて発明されます。」、

と。

前でも述べましたが、「神界」というのは神の世界という意味ではなく、人間の人格とか人間性の段階は上位から如来界、菩薩界、神界、霊界、幽界と

なります。

神界は博士や専門家の多い世界で、損害を受けても相手を非難せず、その原因は何だろうと反省する心の持ち主達の世界です。

神が求める人間性は

神が人間に求めておられるのは損害を受けても非難せず、その原因を振り返り反省する心の段階の神界です。

昭和四十七年現在、神界はあの世とこの世を合わせて一億数千万人です。

あの世とこの世を合わせて如来界が四百二十五人、菩薩界が二万人の世界です。

これはあの世とこの世を合わせた九十億人の中の人数です。

地球移住とU F O

また、この地球は魂の進化が著しく、他の天体からもこの地球へ、魂の勉強の為にゾクゾク飛来移住しているというのです。

、そうすると先づ、アフリカやアマゾン等の電気もない密林の、文明に程遠いところから土人として魂の修行を始めるようです。

間違えてもらおうと困りますが、何も蔑視ということではありません。

よくU F Oが話題に登るのも、高橋先生は一杯飛んで来ていると講演されていますので、話題に上るのは当然かもしれません。

アメリカの心と日本の命運

また、高橋先生は

「アメリカは心がありますが、物に溺れている人達が非常に多い国です。それを反省して、我々の神理（正法）が大きく広がると彼等はもっと本当の文明

が発達して行きます。

日本も同じです。

日本はあと二百年間、文明は栄えます。

二十年位の間には神理を知る人達が多く日本に集まってきます。」、

と。

これからの日本の命運が確約されました。

だとするならこの間に、日本は世界に対して徳を多く積むことです。

未来の子供達に胸を張ってこの日本を誇れる国にしたいものです。

それが現代の私達の使命と役割と思うのです。

パレスチナ問題の終焉

同じく高橋先生は、

「そして、やがて人類は、闘争と破壊の愚かさを知っていきます。

もっともっと先になります。私達は中近東へ行き大きな奇跡を出して彼等自身は真の神の実態を悟ることでしょう。

なぜなら、イスラム教徒（回教徒）にはアラーが出てきて、アラーを眼の前で見てしまうからです。

そのために問答無用です。その時すべて彼らは調和されて行きます。

そして、キリスト教もユダヤ教もイスラム教も根本はヤーベの教えであったということに気が付くのです。

そして、宗教戦争はなくなっていきます。

そして、今からアメリカ、イギリスに天使達が出てきます。また既に出ています。気が付けば名乗りをあげるでしょう。

アメリカのフロリダにキリストの十二使徒の一人が出ております。

イギリスにはマタイが出ております。まだ歳は若いです。云々。

ですから地球上一人一人のものを考えていること、一人一人の考えや心の状態は天上界に全部通じております。

霊子線として光になって通じておりますから、ごまかしようがありません。」、

と。

次は明治維新をなしとげた人達です。

倒幕の三役者

倒幕を推し進めた三役者とは、西郷隆盛、坂本竜馬、木戸孝允です。

木戸孝允は桂小五郎といいます。

明治維新の活劇で鞍馬天狗と共に、当時の少年達は心踊ろかせたもので、妻・芸妓松子との純愛は今もって語り草です。

政治家・木戸孝允は政治的な多くの実績を残しますが、三人の中で、木戸孝允のみ畳の上で亡くなっています。

と、申しますのも木戸孝允は、お釈迦様の分身です。

さすがに、武力と闘争を徹底的に否定された高橋先生ですから、お釈迦様である木戸孝允は、征韓論にも反対しています。

ある作家は、「木戸は三人のうちで一番意識が高い。だが、木戸が一番人気がないのは、二人は劇的な最期を迎え、激烈な最期を遂げているからだ」

と。

木戸について高橋先生はこうっておられます。

「お前の講演は腹に力が入っていないから永く続けられない、それでは声を潰してしまう。下腹にもっと力を入れろと政治家木戸に教えられました云々。

私はまったく酒が飲めないのに、木戸を入れて、私の意識を酒豪の木戸に支配させると、酒が水のように感じてしまう。」、

と。

酒飲みと憑依霊

高橋先生を或る人がクラブへ誘っても、

「酒は殆ど飲まず、ホステスさんの話をニコヤカに相槌を打って聞いているだけだった」、

と書いておられます。

このように、高橋先生は酒を殆ど飲まれなかったようですが、酒豪で政治家の木戸孝允の意識を入れられると、飲めぬ先生が酒が水のようにだったと

いうのです。

次は酒飲みの一例です。

普段は物静かで大人しいのに、こと、お酒がはいると、眼がすわり狂乱して人に迷惑を掛けて、酔いが覚めるとまた、普通に帰る人がいます。

極端な場合は酒飲みの地獄霊の憑依です。

現世の人と同類の、酒を飲んで身を持ち崩した霊が、一緒になって吞ませて最期には本性を現わします。

それだけでなく、帰宅時間になると赤提灯にフラフラと寄らずにはいられないというのも、余りにも極端な場合は、地獄霊が引き連れて行く場合もあり

ます

いずれの場合も自分の意志が弱いからですが、同類にならぬためには酒に近づかぬことです。その一杯がいけないのです。

著者はもう何年も酒もタバコもやっていません。

タバコは「煙突」といわれた位のヘビースモーカーだったのに今は皆無、酒は雰囲気が好きでよくお店に飲みに行きましたが、私は止めると決意す

れば意志は強いようです。

やめられない人は、表面意識では止めようという心があっても、潜在意識では止めたくない心、止めようとは思わぬ心があるからです。

やめようと思うなら、心のドン底から「やめる絶対に！」と決意して、本当に止めれば良いのです。

先へ進みます

西郷隆盛と坂本竜馬は前でも述べていますので省かせていただきたいのですが、さわりの部分だけ述べます。

園頭広周先生の分身は西郷隆盛です。

西郷軍の参謀の桐野利秋は、出光興産の初代社長の出光佐三に生まれ変わります。

園頭先生は、どういふのか出光の経営理念が好きで、子供に出光へ、出光へ就職しろと言いつけられたというのです。

高橋先生へ子供の入社を報告されると、

「それはそうでしょう、出光佐三は園頭さんのかつての部下ですからね。当然ですよ」、

と。

出光佐三は、出光美術館も併設した程の高名な風流人でした。

俳優・長谷川一夫に肩入れしたことで知られます。

長谷川一夫は徳川家康の生まれ変わりです。

武骨者の家康が、現代は剣を舞扇に持ち替えて、敗戦後の日本に一条の光を投げ掛けたというのです。

宮沢賢治は菩薩界の光の天使

詩人、童話作家、農民芸術運動につくします。

「雨二モ負ケズ」の詩を指差して高橋先生は、

「この方は菩薩界の人ですからね」、

といわれています。

宮沢賢治は余りにも有名で良く知られていますから、余り知られない話をします。三十八歳という短命でした。

亡くなるときの遺言が、赤い表紙の「法華経の本」を皆さんに千冊贈って欲しいというほど熱烈な仏教徒だったようです。

高橋先生には、「心行」という人間の生き方の教本があります。これと同じように、一時期は赤い表紙の「心行」がありました。

熱烈な仏教徒の宮沢賢治は、高橋先生が誕生されてしばらくして他界されていますから、短命でなかったなら、高橋先生の正法の運動に力を尽くさ

れたことでしょう。

作風は幻想的で魅力溢れるものですが、菩薩界の光の天使ですから、あの世や未来の世に出入りされて、既存の考えに留め置くことのできないものと

理解すれば分かりやすいと思います。

或る休日、百五十万冊をかかえる超大型ブックストアーに出かけました。

すると、二〇〇二年一月現在、流通している賢治の文芸論や批評の本が三十八冊書架に並んでいて、窓に面した読書スタンドに腰を下ろして片っ端

から目を通しましても、高人格、高霊格ゆえに色々な次元の世界に出入りされて、あのような作風になったという批評や文芸論の本は皆無でした。

賢治の死の直前の幽体離脱

賢治は、亡くなる日の朝四、五時頃、直木賞作家の森氏の書斎へ、懐かしい思いで幽体離脱をして訪ねたというのです。

ここで、高橋先生が教えられた、死とあの世について、簡単に触れます。

死とあの世

人は亡くなるとしばらくは何もわからない状態が続いて、お葬式や読経に気が付いてそのうちに

「アレもう私は死んだのかな」、

と死んだことを自覚します。

すると、光り輝く菩薩界の係りの霊が出てきて

「あなたは死の覚悟ができていますか、」、

と確認されます。

そして、自分の全生涯の、立体カラー映画をフルスピードで、全部を見せられ反省するのです。

涙と懺悔の、ひと時です

良いことも悪いことも全部包み隠さず見せられるのですから、これはマトモには見られません。

それから二十一日間は自分の気になる所や懐かしい所へ自由に行くことは許されます。

最大の自由期間が二十一日です。

何十年間の、この世での生活体験があるのですから、執着ではないが懐かしい筈です。

一方、悟られた人はどうかと申しますと、執着がありませんから一時間もしないうちに、ストレートにあの世の修養所へ還って行きます。

でも、普通、グズグズして修養所へ急き立てられるようです。

では、そこで何をするのかと申しますと、人生の中で間違っただけのものや修正すべきものは全部、徹底的に正さなければなりません。

特に、間違っただけの思想や宗教を信じた人は、全部心の改造をさせられるのですから、キツくてツライのです。

生前、反省の習慣のない人にとっては、自分の考えを根底から完全に修正させられるのですから、今のうちから反省の習慣をつけておきたいものです。

それ以上に、間違っただけの思想や宗教を説いた人は、嘘を信じた人が一人残らず全部修正が終わるまで地獄の一番暗くて深い無間地獄に沈むというの

ですから、もう厳しくて、それはそれは大変でしょう。

その一例が、

「ヒトラーやスターリンは無間地獄」、

とは高橋先生の言葉です。

この反省期間が二十八日間です。

よくいう四十九日というのは、二十一日と二十八日の和ですが、この期間は静かにそっとしている方が良いでしょう。

なぜかと申しますと、修養所で反省と訂正をして、自分の行くべき地獄界や天上界の段階が、自分で裁いて決まりかかっているときに、財産争や故人

が気になることを始めますと、心静かに反省している故人を現場へ引き戻すことになり、ことの成り行きを見届けるためにそこに執着させてしまうので

す。

そうすると、修養所へ行って勉強をしない執着霊、浮遊霊という地獄霊をつくり出し困ったことになります。

それから、四十九日を過ぎると、自分の嘘のつけない善なる神の子の自分が、自分を裁いて、天上界や地獄界へと定着するのです。

閻魔さまが裁くのではなく、嘘のつけない自分の良心がさばきます。

これでお分かりのように、宮沢賢治は息を引き取る前に、魂が抜け出し幽体離脱して、懐かしい想いで森氏の書斎を訪ねたというのは、あながち嘘と

は言えません。

賢治は菩薩界の偉大な魂の持ち主ですから当然だったかもしれません。

次は、菩薩界と如来界の中間の、園頭先生のとときの著者の夢による体験です。

園頭広周先生の場合は

著者の所属する会の機関誌とホームページ（www、shoho、com）に、既に公開していますが、その環境にない方のために簡単に述べれば、こうでした。

亡くなる二日前のこと、不思議な夢を見ました。

後に総理になられた森氏が、そのときの幹事長の立場で、テレビの全国放送を通じて、

「園頭先生を総理に出きなかったのは私の不徳の致すところ」、

と全国民に対して深々と頭を下げられたのです。

前に述べましたが、園頭先生は、過去世がジョージワシントンでしたから大統領経験者です。

それで、当時、ジョージ・ワシントンの部下の森氏の弁になったと私は理解しました。

「総理に出きなかった」、

という過去形と、もうすぐ先生のお誕生日というのが心に妙に引っ掛けて云々、というものでした。

高橋先生の死も予言された通りでしたから、園頭先生も或いは？と感じたのです。

また、不思議な鳩の話も出てきます。

高人格の方には不思議なことが起きても、何ら不思議はないようです。

次はこの世的なことです。

園頭先生は、或るとき、主宰される国際正法協会の、会員に近い人が宮沢家におられて、こう質問されたそうです。

「宮沢賢治の著作権の管理は大変でしょう。」、

と。

「ハイ、問題が起きないようにこういう風にやってー。」、

と話されたようです。

宮沢賢治は今や隠れたベストセラーで、ファン層も厚く数多くの著書が流通して、記念館にも多くの方が訪れているようです。

学者・福田正治氏はインドで「竜樹」と言われた人

近年では学者の中の福田正治氏は、インドで竜樹（ナラジュルナー）といわれた過去世の人、と高橋先生は言い残されます。

高橋先生は、

「ナラジュルナー、竜樹（AD二世紀）は、バラモン種に生まれたのち、いいつたえられていた仏教をマトメ、五つに分類したが、やはり自分で悟り得な

かったためにブッタの時代に現れた霊的現象を除いてしまっています。

つまり、学問的に体系づけることで、かえって仏教を人々の心から離れたものにしてしまったということで、学問仏教によって、行いがともなわなくなり、

智だけが発達して心を失った仏教になってしまったということです。

その行いを、ただ荒行という肉体行の方向に持って行ってしまい、本来日常活動の中にあるべき心と行いの八正道を忘れ去ってしまったのです。

そして、中国の仏教や日本の仏教には、バラモンのヴェダー、ヨギースートラなど仏教ではない密教までがその中に混合されてきてしまったのです。

もともと仏教には、秘法などというものは無いはずで。

自力によって、自らの心を八正道の実践生活によって心の曇りを晴らせば、太陽の光が地上へ平等な熱光の工

エネルギーを与えているように、神の慈

愛の光も、万生万物に平等に与えられているのです。

自力があつてこそ、偉大な神の光によって満たされ、光の天使達の協力が得られるのだということを忘れているのです。」、

と。

空とは

同じく、高橋先生は

「空」の世界こそ実在の世界であり、すべてのものを作り出す根本だといえましょう。むなしい世界から生まれるものは、むなしいものでしかないでしょ

う。因果の法則によって現象化されるのです。人生とは、むなしいものではないのです。」、

と述べられました。

世の宗教書といわれるものの中には「空」をむなしいとか、あるようでないようでと説く解説も多く、後段ではそれについてのやんわりとした批判です。

著者は、かつて幾つかの図書館を訪ねて、これまでに出版された約百冊の本を調べてみると六割程が、本のどこかに「むなしい」とありました。

空とは、

「実在の世界、つまり、あの世」、

のことで、

色とは、

「現象界、地上界つまり、この世」、

のこと、

と高橋先生は明解されたのです。

また、園頭先生は、竜樹についてこう言われています

「竜樹菩薩は釈迦の再来といわれ、八宗の祖といわれているが、高橋先生は、竜樹が空を説いたので仏教がわからなくなった、と言われた。そういう人

が梵天であつたり、菩薩であつたりする訳がない。」、

と。

ペテロは元東大総長・矢内原忠雄氏

イエスの時代、十二使徒のペテロは、矢内原忠雄氏として生まれ変わったと、高橋先生は言い残されました。

ペテロは漁師として無学であったので大変苦労され、そこで今世の矢内原氏は勉学に励もうと研究に打ち込まれたというのです。

矢内原氏については、ご存知でない向きもあろうかと思われまので、少し触れます。

氏の『聖書講義』は、その人でなければああは書けまいとという記述が至るところにあります。

氏のイエス伝講義にはマルコ伝、ルカ伝、ヨハネ伝の講義三つがあります。

氏は、

「私は断るまでもなく、牧師でも神学者でも、聖書学者でもない」、

と自ら公言されます。

神学を学んだ人々は矢内原には神学がないと批判し、聖書学を学んだ人々は、また、批判します。

光の天使であるだけに心から平和を願い、反戦的筆禍事件で辞表を出すことになりましたが、氏は「一平信徒」を自覚し講演旅行を続け、素人にもわかりやすく説くことにつとめられます。

聖書講義は『矢内原忠雄全集』岩波書店二十九巻中八巻を占めます。

これも氏の過去世からの、内なる心から発した使命感だったのでしょうか。

松下幸之助氏はイエスの弟子「ルカ」

高橋先生は松下幸之助氏の過去世はイエスの弟子のルカと言い残されました。

聖書の中のイエス伝には、マタイ、マルコ、ヨハネ、ルカの福音書があります。

いろんな弟子達がいろいろな立場といろいろな側面から書いたのですから、それぞれに正しいのですが、その一例をあげると、十字架のイエスは

息絶えるとき、こう大声で言ったと記されています。

マタイ伝では、「わが神よ、わが神よ、なんぞ我を見捨てたまいし」、と。

また、ルカ伝では「父よ、わが霊を御手にゆだね」と、あります。

どちらがどうか議論になるところですが、高橋先生が天上界のイエス様に真意を正されると、それは、こうでした。

高橋先生はイエスに尋ねられた

「神よ、人々を見捨てたもうな、その為すところを知らざればなり」、
というのです。

次に、ルカ伝には胎教というべき個所があります。

胎教は宗教教育の大事な一環として説かれていますので、参考にさせていただきます。

「その頃、マリヤは立って、大急ぎで山里へ向かいユダの町に行き、ザカリヤの家には行ってエリサベツにあいさつした。エリサベツがマリヤのあいさつ

を聞いたとき、その子が胎内でおどった。

「ごらんなさい。あなたのあいさつの声がわたしの耳にはいったとき、子供が胎内で喜びおどりました。」、
と。

このルカ伝を残した人が松下幸之助氏です。

皆さん良くご存知ですから、氏の自著から簡単に要約しましょう。

松下幸之助氏は五十歳まで持つまいと言われるほどの病弱で、旧家の資産家でしたが没落します。

六人兄弟のうち三人続けて病没、九歳のとき奉公に出て教育もロクに受けられませんでした。

十八歳で夜学入学、二十で結婚、二十二歳でソケット製造に着手、扇風機の受注に行きずまるも打開、アタッチメントプラグから差し込みプラグへと

増産を続ける。

二十七歳頃に百坪の土地に会社を月賦払いで建設、自転車ランプの製造販売のとき関東大震災、区会議員に当選、ナショナルマークの決定、ア

イロンやコタツなどの電熱器製造販売、従業員二百人の頃に昭和二年の金融恐慌にも、二ヶ月前に住友銀行と取引を開始して道は開けたというので

す。

金融恐慌は打開しますが、最優良児で表彰された長男が病没、ラジオセットや乾電池、ナショナルランプの盛況という側面には、未曾有の大不況で

売上は半減しても生産は半日勤務、一人も解雇せず、減給せず全額支給する。

その代りに全力をあげてストック品の販売努力を命じます。「その方針は当を得て大活況を呈します。」云々。

氏の紹介はこれ位にしますが、後段に書きました、この「当を得た方針」について述べます。

神が求める職場環境とは

現代の大不況には、倒産、解雇、リストラ、再就職できない等、気も滅入る言葉が巷に溢れています。

現代のビジネスは、アメとムチの使い分けです。

西洋の考え方は、性悪説に代表されるように、人間は本来悪いことをするものだから、アメとムチで上手に働かせなければならない、という考え方で

す。

だから、成績の良い者には多くを与え、それなりの者には、次から良い成績を上げるように、それなりの報酬を、というのです。

これに対峙して、日本のそれは性善説で、人間は本来善だ、だから見ていようと見てまいと自分の職能を見極め、自分なりに働くから、自主性に任

せれば良いではないか、という考えです。

たとえ成績は上げられなくとも、あの人がそこに居るだけで職場は明るくなり、皆んなのやる気を起こさせるという人もいるものです。

病弱の人も、強健な人もいるから、この世は持ちつ持たれつなのです。

神が経営者に求める職場環境は、これまでの日本的な終身雇用です。

最期まで面倒を見るという、正に生涯雇用です。これが一番理想だということは皆が解っている筈です。

外国の某経営法や流行の経営法を踏襲するまでもありません。

現代の日本は多くの優秀な霊魂が寄り集う国です。

かってイギリスやスペインが一等国と言われた時代もあります。

なぜそこが栄えるかという、そこに優秀な霊魂達がグループで生まれて来るからです。

そして皆で力を合わせて国を隆盛させるのです。

現代の日本もまさにそういうことです。

どの国もその内に衰退したということは、隆盛に溺れ、足ることを忘れた欲望に溺れると、この国も取るに足りない、優秀霊団に他の国を選ばれても

それはそれで仕方のないことです。

悪い原因（悪因）を作った為にその内には見捨てられるのです。

それでは永く隆盛を極めるにはどうしたら良いのでしょうか？

簡単なことです。

神の心、天使の心で政治も経済も全部をその心で取り仕切るのです。

それ以外に道はありません。

かって園頭先生は、国際正法協会の道場から見える、ドーム球場を対岸に見ながら、ダイエーが年俸制に切り替えたとき、

「アーこれで早まったナ」、

とタメ息をつかれたのが印象的でした。

この言葉がどういう意味か皆さんにはもうお分かりでしょう。

年俸制や出来高払いは、野球や勝負の世界の取引です。

人間世界に過度の弱肉強食はご法度です。

神が求めておられるのは日本の古き良き時代の終身雇用です。

日本の優秀な靈魂群がこれまでに築き上げた終身雇用を破壊することやこれを捨て去ることを愚行といいます。

セミナー屋さんや、エセ・ビジネスジャーナリストの言うことに賛同してはなりません。

人間一人一人の使命と役割

人間には色々な人がいます。

今世は、たくさん勉強をして研究の面で役立とう。

いや、過去世で勉強は卒業したから今世は体力で役に立とう。

また、過去世で人間関係にたいそう苦しんだから、今世は人を和やかにさせることに徹しよう。

過去世では社員としてリストラにあって家族にも大そう苦勞かけたから、今世は社長として社員みんなの生活を守るために厳しい環境に身を置いてみ

よう等と様々です。

社主たる者は、集まってきた社員は皆な縁ある人達なのです。

苦言を呈する人も、言いなりになる人も全員が何かに縁ある人です。

だから社主たる者は、松下幸之助氏についての記述のように、一人も解雇しない、減給しない、という天使の心で経営された松下氏の偉大さがクロー

ズアップされてきます。

さすがにイエスの弟子の天使ルカだったのです。

高橋先生と大黒天の松下幸之助氏

正法を説く人の周辺に生まれて、正法流布のために資金援助をする人を大黒天といいます。

大黒天は金儲けの神様のように言われていますが、そうではありません。

生前、高橋先生は、松下氏と人を介して会われる機会は何度かありましたが、一度も会われることはありませんでした。

園頭先生はこう言われています。

「高橋先生は言われていました。松下さんは解っていません。自分の力だけでお金が出きたと思っていますが、我々の正法の運動に協力するために

財が集まったのです。いいのです私は私でお金を集めますから。あの世に帰ってから反省させられますよ。」、

と。

労使協調

松下幸之助氏は、松下にも労働組合ができるというので発会式に出席されます。社会党の加藤K氏が、なぜ？社長で発会式に出て来たのはあなた

だけと不思議そうにされたというのです

労働組合は、労働者と使用者が対立するためのものではなく、労使一体となり調和し協力するためのものです。

労働者の繁栄は結局使用者の繁栄に繋がるからです

このようなことがあって、松下氏は九十二歳の誕生日に労働組合より銅像を贈られます。

このようなケースはそれほど多くないはずです。

日本の週休二日制を考える

日本の公休は世界でも一番多いといえます。

二〇〇二年や最近数年の暦を繰って見ると、お正月、お盆、ゴールデンウィーク、日曜、祭日と土曜日をトータルすると、一年の三分の一、百二十余

日となりました。

三日に一日は休日となるわけで、これに有給休暇を加えたらもっと増えます

働く人は給料が同じなら、休みが多過ぎる！、と誰も文句は言いません。

では、余暇が増えた分をどう有効に使うのでしょうか。

趣味に凝ってみたところで、人間は満足できるものではありません。

長く休み過ぎると体がなまって、職場事故が増えるというデータもあります。

有り余る余暇を有効に過ごさせるものは、

足ることを教えて、人間の心を満足させる真の人間性教育、それに真の宗教を学ばせる以外にはないと思います。

正しい仕事とは

人類を幸福に導き、調和の環境を築けるものが正しい仕事です。

正しい仕事場はそのまま魂の修行場です。

正しく仕事をするとは

仕事を通して自分の魂を磨き、心を豊かに人々と調和して、ユートピヤ・理想郷を創り出すことです。

正しい企業と正しい経営者とは

労使が調和し、お互いの幸福のために団結が計られ、自己保存、自我我欲を捨てた企業が正しい企業です。

立派な技術を生み出させ、或は技術はなくても営業活動が勤勉で調和の取れた得意先を持ち、人々の心に調和と安らぎを与える経営者が正しい経営者です。

正しい労働者とは

利益は労働者の働きによって得られると同時に、自らの生活も安定するのですから、その利益を生み出す職場への報恩の心は、労働を通して感謝の

心を示すことです。

労働者は仕事に専念し、足ることを知って自らの生活の基盤を築かなければなりません。

金持ちになることは悪いことか

自分の欲望や享樂のみに浪費せず、貧しき人に手を差し伸べ、愛の心で人に役立つために使うならば、正しく働いて得た財はいくら持っても良いのです。

日本の現状

国土は猫の額です。山に平地が張り付いていてすぐに海です。

資源もありません。食糧も自給できません。

しかし、気候は温暖で四季がはっきりして凌ぎ易いのです。

治安は世界のお墨付きです。

松下幸之助氏は、

「水を加工した水道水は付加価値がついて価値がある」、

を実践されました。

現代の日本は産業技術立国です。

同じ鉄でも加工して車と為し、船を作り列車を走らせ、別の鉱物を加工してトランジスターをつくり、それがIT産業を興し、世界第二位の経済大国で

す。

でも、その内に日本は技術立国だけでは立ち行かなくなり、アジアの周辺国がそこまで押し寄せて、安くて素晴らしい製品を提供できるのです。

東洋のちっぽけな日本が、大きな顔が出せるのはここに優秀霊が集ってただ力を合わせただけなのです。

だとするなら、次も優秀霊にこの国を選んでもらえるように、色々な場面に徳を積むのです。

その他の天使達

高橋先生は、この外にイエス様関係では、ヨハネ、ヤコブ、シモン、ピリポも現在日本人として生まれていることも通信されている、とあります。

年代こそ違え、このように次々と光の天使達が霊団としてこの日本を選ばれた不思議さを考えずにはいられません。

この国の「かたち」

この狭い日本、食料も自給できないのに経済大国日本、

一億二千万人も人口大国日本、

あと二百年間は文化文明が栄える国日本、

あと三百年もすると東北地方以北は人も住めない極寒地でも、日本列島の周囲には有り余るほどの未開発燃料が出て、石油は衰退しても既に研究

が進められているというこの国のかたち、そして、世界の中で有史いらい五千日しか銃声の聞こえなかった日はないというのに、平安時代は三百五十

年も続き、江戸時代は二百五十年も続いたという、この国の「かたち」を祝福せずにはられません。

バブルがはじけて、草ぼうぼうの遊休地が増えたというのも、それは食料を作る良き田畑と草木が生み出す空気浄化を確保できたということです。

悲しむには値しません。

結びに代えて

「靈的国防」

いまや世界は、テロや戦争、紛争でキナ臭い硝煙の臭いが鼻を突きます。

眼には眼をでは、混乱は収まらず段々と拡大するだけです。

「神の国」に闇は存在しないのに、「神の子の人間界には、いつもゴタゴタが絶えません。

人間は切羽詰ると、「神様お助け下さい」と神にすぎる気持ちになります。

でも結果は成るがままで、運を天に任ずといたします。

「敵国降伏」という言葉もあります。

勝負の世界ならイザ知らず、人間界では相手を多く殺して戦勝とは人間の道ではありません

では、靈的国防とはどうするのかお話します。

それはその国の人達一人一人が心から敵対観念をなくして、

「人間は皆な神の子です」、

と、まず自分の心が「神の光」に満たされ、国全体が「神の光」に包まれている状態を想念し、心に念ずるので

す。

初めての人に、こう言ってもピンと来られないと思いますので、神の光というところを太陽の光や金属の金のゴールドカラーを思い浮かべます。

「自分の心が神の光に満たされて」、

ということは、憎しみも争う気持ちもなく平和で心が安らかですと、心はデコボコではなく満月のように丸いのです。

そこでまず、まん丸い光り輝く太陽を思い浮かべます。

月の光は太陽光の反射ですから、弱すぎて月を思い浮かべてはなりません。

そして、感動したり泣いたりするときには、頭からではなく胸からこみ上げて来るように、心は胸の辺りにあるのですから、胸のあたりに丸い光り輝く太陽

を思い浮かべ、体全体が輝く状態を想念します。

これが出るまで何度も試みます。

それから、次は国全体が光を発して太陽のように光り輝く状態を想像、想念するのです。

最近ではレーザー光線によるレーザーショーのように、地図帳の日本国から光を発する状態を思い浮かべても良いと思います。

物の世界も霊の世界も規則正しい光の波動によって成り立っています。

その光の調和ある波動が神の波動ですから、人間が神の光を破壊することは絶対に出きません。

ですから国全体が光に包まれた状態を想念するのです。

これを実行するためには、一人一人が心を調和させ自分自身が神の光に包まれていることを想念した上で、国全体が光に包まれた状態を心の中に

思い描くのです。

また、国全体が神の光りに包まれていることを常に心の中で祈ることです

それと同時に、後進国や世界の発展のために出来る限りの援助をして、国全体で徳を積むのです。

神は一つであり、神理は一つです。個人が救われる原理も国家が救われる原理も一つでなければなりません。

この祈りの方法を整理すると次のようになります。

心の波動を神に合わせます。敵、味方の考えを心の中から一掃して、相手も神の子であり、相手と共に救われてゆくことを祈ります。

自分の心がまん丸く光り輝いている状態を念じます。胸の辺りに、風船玉のような光りの玉、太陽を描きます。

自分の身体全部が神の光りに包まれ光り輝く状態を心に描きます。

祈っている間に雑念、または恐怖心が少しでもかすめたらその都度その瞬間に、心の中

でそれを切って捨て否定して、

「われは神に守られている。神と一体である」、

と念じます。そのときは、下腹に息をとめて、うんと下腹に力を入れて下腹のところで
斬り捨てて否定して、瞬間に神の生命であ

り、神と一体であることを肯定するのです。

一回否定し肯定しても次々と雑念、不安、恐怖心が起きたら、その都度否定し肯定することを繰り返します。

神は絶対であり、神の力を破壊するものはこの世にはないのですから、神の心に波長を合わせることが最高最大の大きな力となるのです。

国全体が神に心の波動を合わせ、神の光に包まれている状態を心に描いて、国全体に光りのバリアーを描いたとき、他国からの侵略による全ての兵

器は不発に終わるのです。

兵器は、暗黒で闇の産物です。

神の世界は光の世界です。

光りあるところに闇は存在できません。

園頭広周先生は、第二次世界大戦中の中国で、砲弾が飛び交う中、軍刀を立掛け心穏やかにここに戦いがあるという敵対観念を無くして坐られると、

周辺に飛んでくる砲弾という砲弾は不発に終わって転げ落ちてきたという体験から、「霊的国防」は、教えていただいたものです。

高橋信次先生と園頭広周先生に心から感謝申し上げます。

教えていただいたものは、正法を知らない方へ伝える報恩の行為として、輪廻しなければなりません。

両先生の教えを参考にさせて頂き、有り難うございました、

合掌。

平成十五年一月

Home

Home

正法と経済

- その目的と在り方 -

高橋信次著

目次

序論

経済と人間の関係

一九七三年十一月号『G L A』誌

神と人間について

十二月

人生の目的

人間のなすべきこと

一九七四年 一月号

正業の意義

二月

魂を豊かにする

二月

相互の調和

三月

奉仕の精神、心

四月

電子頭脳および経済論

五月

ケインズ論

六月

悪性インフレ

インフレの要因

七月

何故起きるか

八月

資本主義自由主義経済（多国籍企業）

九月

社会主義経済と資源問題

十月

資源ナショナリズム 十一月

経済成長と公害 十二月

流通の問題

流通経費 一九七五年 一月号

卸売り機構 二月

近代社会の思想的背景と現代経済社会の仕組み

心の偉大性と自由性 三月

真の自由人（真の悟り） 四月

自由思想と科学、技術の発展 五月

愛こそ総てである 六月

労使の問題

インフレ、デフレの原因は欲望にある 七月

経済の根本原理にしたがえ 八月

一人一人が経営者で従業員 九月

結論

責任と自覚ある共同社会 十月

相互扶助、家庭の愛を社会に広めよ 十一月

釈迦、モーゼ、イエスの教えの原点を求めよ 十二月

正法を生活に生かす 一九七六年 一月号

（一九七三年十一月）

—

本橋は、さまざまに変化し、目的を見失いつつある現代経済の姿にメスを加えながら、正法に照らした経済の在り方、経済とは一体何で

あるのか、人間は経済の奉仕者なのか、それとも経済が人間の生活を豊かにするためにあるのか、未来社会の展望などにわたって論を進

めてみたいと思う。

まず経済の概念について考えてみよう。

辞書によると、経済とは金を儲けたり、使ったりする各種の行為又は状態をいう、としている。

経済学は、人間の欲望充足のための手段として経済を見、ここに焦点を合わせながら、学問としての論理を展開する。

現実の経済行為は、辞書や経済学のとらえ方を裏書きするかのよう激しく、冷酷なまでに動いている。

それこそ、政治も、教育も、化学も、労働も、文化も、現実の経済の動きの前には手も足も出せず、これに翻弄されながらも、かろうじ

て命脈を保っているといえるようだ。

何をするのも金、生きるも金、いくなれば経済の御厄介にならぬものとならないのが現実であろう。

このために、私達人間は経済の奴隷となって、経済の奉仕者になり下がってしまった。物や金は人間の生活をより便利に、豊かにするた

めにあるのに、人々はこれを求めて右往左往せざるを得なくなっている。

親子といえども銭金は他人だし、遺産相続をめぐる兄弟姉妹の争いは、財産が大きいほど激しく揺れ動く。殺人や裁判沙汰は、新聞紙面

を毎日のように賑わしている。

企業には亭年制が設けられ、人生の大半を企業に奉仕しても、その時期が至れば辞めて行かねばならない。

利益を生むためには、物を独占し値上がりを待つ。価格維持には惜しげもなく廃棄処分にする。

福利が先か、利益が主目的か。利潤追求を目的とした今日の企業組織は、人間主体の経済を地平線の彼方に追いやってしまった。

今日の企業体は、封建社会の遺物であった家の組織に似ている。

徳川幕府が築いた家の組織は、権力維持と謀反を防ぐに役立ったが、人間不在の形式主義に流れ、人びとは家に忠誠を誓うおかしな組織

が出来あがってしまった。城主といえども自由にならず、家臣もまた主君のためより、家の存続に喜んで死んでいった。家を中心のお家

騒動は、人間のみにくい業をさらけ出し、小さな人間をつくっていった。

家の組織を強固にした大きな理由は経済にあった。つまり、家を存続させることによって、家臣一同の生活が維持されて来たのであつ

た。跡継ぎがなく、あるいは謀反の疑いが出たりすると、家は断絶され、家臣は四散の憂目に会った。だから家臣は、家の組織、家の維

持のために喜んで奉仕した。

封建社会より進歩した筈の今日の文明社会だが、その中身を覗くと前時代の組織と少しも変わらないことに気付くだろう。ちがった点

は、切り捨て御免や土農工商のはっきりした区画が薄らいだにすぎない。が、しかしついこの間までは、殺すも生かすも経営者の胸一つ

であり、格式と階級意識は、まだまだ消えてなくなる。

ともかくこのように、経済と人間の関係というものは、昔も今もあまり変わらないし、人びとは経済の奴隷となってその一生を過ごしてし

まう。

ここでもう一度、人間とは何かを問い、あらためてその価値と目的を振りかえって見たいとおもう。

人間の目的については、拙書（『心の原点』など）や本誌（『GLA』）を通して述べてきたがそれは神の意思である調和、全なる心を

この地上に具象化して行くにあたるのである。

私達の好き嫌いの感情に拘らず、人間はそうした約束の下に生れて来、その約束を果たさなければ、その分量だけ苦悩を味わうように出

来ている。

偉大なる神は、実在のあの世と仮象のこの世を創られると同時に、人間をつくられた。

そして中道という神理の中に身をかかされた。

私達人間がト目神の姿を拝したいと願っても、それは不可能になった。

しかし私達の心は、常に神の意識に直結し、それから離れることは出来ない。神は人間に神の心を与え、調和という目的に向わしめるこ

とをしたからである。

他人にはウソはいえても、己の心には嘘はいえないという厳粛なる事実、また他を愛する心、哀れみの心。

通常こうした心を良心と叫んでいるが、その良心はどんな人にも植え付けられている。

どんな残忍な悪人でも、一人になった時、良心の呵責（かしゃく）に悩むものだ。

私達の目に映ずる大宇宙は、とてつもなく大きい、その大きい大宇宙は神の意思にもとづいて無限の空間にひろがっている。

天体にきらめく無数の星々に、神の子の人間が住むこともなく、それらの星々は単に空間の一点にとどまっているとすれば、大宇宙は生

命のない塵の集団にすぎなくなるであろう。大宇宙の存在と神秘を感じるものは、ほかならぬ人間だけであるからだ。

宇宙は呼吸し、人間もまた呼吸して生きている。

大宇宙は膨張、収縮を繰り返しながら、人類の調和を待っている。すなわちこの大宇宙には人類の住める惑星は無数に転がっており、人

類の降下を待っている。

地球以外の他の天体には、その天体に適応した人類が住んでおり、それらの人類は地球人類より優れた人達もおれば、劣った者達もい

る。

しかし地球人類を待つ天体は、こうした既存の人類が存在する惑星ではなく、まったく新しい新天地の天体である。もちろん他の惑星に

住む人びとも地球人類と同じように、新天地を求めて移住している。

このようにして、人類の住める惑星が一つ一つ増えて行き、そうすることによって大宇宙そのものも拡大され、調和の輪を広げて行くの

である。

なぜ、こうするのかと人は問うであろうが……。

その前に、人間はなぜ退歩をのぞまず、向上を求めて止まないのだろうか、ということを考えて欲しい。

神の意思は無限の向上と調和を求めているのだ。

その具体的な表れが人間なのだ。

神は意思を持たれ、人間はそれを行行使する者なのだ。

そうして、魂の永遠の向上を希求して行く者が人間なのである。

地上界の生活行為は、この魂の向上を図るための手段である。

生活が目的となり、魂の存在をないがしろにした時に、人間は苦痛を味わうようにできている。

迷い、悩み、さまざまな事件を引き起こして行く。

戦争、災害、病気、孤独、死、これらに人びとは引き込まれ、人間の本性をいよいよ失っていくのである。

人類は目を開かねばならない。経済の奴隷となり、魂を忘れてはならないのだ。

経済は、魂向上の手段であり、足場であることを、今こそ認識しなければならないのである。

(一九七三年十二月)

神と人間について、もう少し触れてみよう。

よく人はこういう疑問なり質問をしてくる。すなわち神は何故に存在する、大宇宙や人間を創造されたことは分らぬでもない。だが、神

はどうしてあるのだろう。もし神があるとすれば神のまたその上の神があるような気がしてならない。今日の科学は、なぜについては何

一つ答えないし、答えることが出来ない。したがって人間もまた神の存在に答えることが出来ないように思われるが、この点はどうなの

だろうというわけである。

私達人間の思考は五感の影響を受けている。すなわち物質的であり、物理的に出来ているといえよう。宇宙船が地球から離れ、地球の引

力圏から脱して、人間が宇宙船内を自由に遊泳出来ても、依然として私達の思考方法は物質的物理的なのだ。

神がなぜ存在するかの問いには、それ自体の発想と、こうした思考の仕方では導き出せないのだ。

物理的思考とはラッキョウの皮をむくようなものだからである。一枚一枚むいてゆくうちに全部なくなって、サテ一体、ラッキョウの本

体はどこにあるのか、本体がないのにどうしてラッキョウが出来ているのか、ということになるだろう。

人間を創った神があるとすれば、神を創った神があってもいいではないか、神の神はどうしてないのかというのは、ラッキョウの思考と

全く同じとっていいだろう。

三次元の思考はどうしても鶏論議になってしまうのだ。卵が先か、鶏が先か、いったいどちらが先に生まれ鶏が出来たか.....。

どはいつても、今日の科学は宇宙船を飛ばし、原子エネルギーを発見した。コンピューターは人間の頭脳に劣らぬ複雑な計算を可能に

し、科学の行手に不可能はないような気がしてくる。しかし永久運動が容易に発見できないように、三次元的思考ではなぜに対する答え

は出てこないのだ。

ここに私達の迷いがあり、物質科学の限界がある。

虫一匹、卵一つも創作出来ない私達である。

神の存在云々の前に、私達はもっと自然の大なる英智に対して謙虚になる必要があるだろう。

森羅万象の生命の営みをみると、そこには整然とした侵し難い秩序があり、その秩序によって万物は生かされている。

神はなぜ存在するかの問いは間違いなのだ。

なぜではなく、神は在るべくして在って、私達はその中で生の営みを続けている。

人間そのものについても人間は何故存在するかの問いに誰一人として答えることは出来ないだろう。人間もまた在るべくしてこの地上に

立っているからである。

神の問題は心の問題につながる。

自分の心が把めない者にどうして神の存在が理解出来よう。

にも拘わらず人間は神の存在について答えを求めようとする。傲慢というほかはない。

神がなぜあるかを知りたいなら、まず自分の心を知ることだ。自分の心を知ったときに神の偉大な英知、慈悲、そして愛の営みを悟ること

とが出来よう。

神を単なる物として、物質的なとらえ方をしようとしても理解できるものではない。

動・植・鉱の物質は神の慈悲の表れであるが、物質としてそれをみる限りは私達の心に訴えてくるものは非常に小さいといえる。なぜな

ら、私達のこうした問いかけに対して、神は何一つとして語ってはくれないからだ。

しかし、私達が己の心の神性にめざめ、心がひらいた時は、動、植、鉱のさまざまな働きが、何を意味し、何を為しつつあるかを知るこ

とが出来よう。

この時私達は、万物という物質が相互に関係し合い、助け合い、互いに他をいかしていることを知ることができる。

すなわち、神の偉大な営みを悟ることができるのである。

神があるとすれば、その上の神があるという考えは、五感六根を中心としたものの見方であり、これでは何時までたっても神の英知に

ふれることはない。

神の英知に触れ、人間の存在を認識したいと思うなら、まず傲慢の心を捨て、自然の在りのままの姿を静かにながめ、自身の心をひらく

べく努めることだ。

神は自ら求める者にその扉を開く。

頭を空っぽにしたときに光を与えてくれる。

与えられた仕事に感謝し、奉仕の心を抱く者に幸せと導きとをあたえてくれよう。

神の道は針の穴より小さいということは、己の心を見つめることの少ない人びとが余りにも多いからなのである。

神は何時でもその門戸をひらいている。

いつどこにいても慈悲と愛の手を差しのべてくれる。

神はなぜ存在するのかという疑問は、心を外に向けたときの問いかけなのだ。

内省とふだんの努力を惜しまぬ者は、謙虚と勇氣と情熱と、そして常に忍辱とを忘れないだろう。

かくて、神と人間と全宇宙の在り方が己の心を通して、教えられ、そして悟ることが出来るだろう。

いたずらに迷妄の淵にたたずみ、自分を失ってはならない。

人間は神の子である。

神の意思を受け継いだ行為者なのだ。

自己保存と我欲におぼれるときは、神は人間を正す意味で反省を促そう。

自己保存と我欲が地上を蔽えば、神は、陸地を海に、海を陸地に変えてしまうだろう。

人類はこうした経験を幾度となく重ねて来た。だから大地が揺れると、人間は重心を失ない恐怖心は頂点に達する。

天変地変の災害は安穩に暮らす人びとの想像を越えた大きさで何時もやってくるのだ。

私達の記憶は、それを訴え、二度と再びこのことなきよう誓いを立て、地上に生を得たのだが、環境になれ、生活に押し流されてくる

と、このことを忘れ、目前の利害におぼれてしまう。

私達の目的はこの地上にを仏国土・ユートピアにすることなのだ。

仏国土とは調和ある世界のことだ。

完全調和はこの地上界が物質界であるが故にこれでよいという限界はない。百年前まで人間が空を飛ぶことは夢であった。しかしその夢

が今では何んの雑作も無く飛ぶことが出来、月まで行ける時代となった。現代の夢は、火星に移り、そして他の惑星へと発展し、ひろが

って行こう。

調和のひろがりと内容の豊かさについても、それと同じである。これで良い、という限度がないのだ。進めば進むほど、よりたしかなも

の、より充実したもの、より内面的なものへと進み、調和の質と量を高めて行くことになる。

そうして私達は限りない調和を求めて、魂の進化を図っているのである。

調和というと、外的な、物質的な、健康的な、明るい社会を誰しも想定する。もちろんその通りにちがいない。

しかしそうした外的な調和はどこから生まれるかといえは、まずもって、各人の魂の進化、魂の調和にあるのである。

魂の調和がなければ豊かな環境すら作り得ないではないか。

このことは現代の物質文明を一ト目見ればハッキリしよう。

心不在の文明が邪悪と不信とに満ち、争いと苦悩の多い社会であることは誰の目からみても理解できようからである。

(一九七四年一月)

二、

人間のこの地上界での目的は何か、生活の目的は何か。

それはすでに述べたように、魂の永遠の向上を求めて行くことである。

私達人間が神の意識から分かれ、単独の魂を与えられたその時から始まっている。

このことは、好むと好まざるとにかかわらず、私達はそうした目的を持って、人間として生まれて来たのである。

これは観念や、形而上的なそれから考えられた命題ではない。

観念や形而上の事柄は主観的であり、これを認識しようとする、人それぞれの体験によるところに左右されよう。しかし、ここでいう

人間の目的というものは、人が慈悲と愛の調和を求め、正しい生活を実践していくならば誰でもが認識し得る自然の条理なのである。

私達は外的な感覚的な生活に追われ、自分の心をふりかえる余裕を持たぬので、認識出来ないものについては、つい否定してしまう。そ

のために、真実なものと、そうでないものの判断がつかず、一生を食うこと(一切の欲望を含めて)に費やし、そうして、極めて外的な

比較の観念の中におぼれ、自分を見失って行く。

食うことも大事だが、しかし、空の真実を知ることは、もっと大事なことなのだ。

空の世界を知ると、地上での食うことの摂理も理解されてくる。

食うことは、私達人間の肉体維持のための神が与えた本能であり、そうしてそれは自分自身を含めて、種族保存と調和の世界を築く基礎

的要件であるのだ。

したがって、食うことは人生のすべてではない。食うことは、魂の向上という己の調和と、全体の調和を図るためにあるのである。

人はどんなに生きても、大抵は百才までである。百才という才月は長いようだが、過ぎてみると泡のようにはかなく短い。その短い人生

に、人はどうして足ることを知ることを知らぬ欲望、名誉、安逸等を求めようとするのだろう。

社会の混乱は、人びとがこうした外的な欲望に心を向け、それに執着を持ってしまったためにおこってくる。

人はどんなに頑張っても、裸で生れ、裸で死ぬのであり、食う為に人をおしのけ、威張ったところで、そこに何があるというのだろう。

金が貯まり、財をうづ高く築いたとしても、三度の食事を五度や十度にするわけにはゆくまい。遊びや娯楽にし

ても過ぎてくると、孤独

と不安が襲ってきて、体のあちこちに支障がおきてこよう。

いつも元気に空を飛ぶ小鳥のさえずりをきくと、人間の欲の深さにあらためておどろきを覚える。彼等の一生はその日暮らしである。一

日一生の彼等は、財も、金も貯えようとしめない。それでいていつも元気で、飢えを知らない。神は、彼等が飢えないように、彼等の腹

を満たす食べ物は何時も用意してくれている。もし彼等の仲間が、食べ物を独り占めし、地上のどこかにかくしたとすれば、他の小鳥達

は飢えに泣くことだろう。しかし彼等は、一羽たりともそのような我侷や欲望を発展させることはしないのだ。だから、彼等の仲間は、

その日暮しだが何時も元気で、空を駆けめぐっていられる。

小鳥達のさえずりを耳にすると、人間社会の愚行が影絵のように浮び、小鳥達に教えられる。

人間は、自由と、創造と、この地上を調和する能力を保有している。そうして、そうした能力を通して、その魂を拡大し、神の心と一つ

になることに向かって進んでいる。

つまり、神の偉大にして無限の広さを持つ意識から分かれた個々の人間の魂は、転生輪廻を通して、神と同等の無限の意識にまで発展さ

せることなのである。

個々の魂が神の広さにまで発展させることによって、眼に見える大宇宙も、無限の発展（質的に）が可能となるのである。

私達はそうした約束の下に生れ、魂を持ったのである

この目的は、あの世、この世を通して変ることがない。

したがって地上での私達の為すべきことは、この目的に合致した、それでなくてはならないだろう。

小鳥達が他を侵すことなく、全体の調和を維持できるもの、彼等もまた彼等の世界の中で、そうした合目的の下に生かされているから

だ。

人間が小鳥達とちがうことは、前述のように、本来の自由と、創造と、地上全体の調和という役割が与えられ、生かされ、生きている神

の意識を保有した魂であるという点だ。

小鳥には、小鳥達だけの世界しかない。彼等には水中の魚や人間社会にまで調和を促す能力は与えられていない。しかし、人間は、小鳥

を含めて、全体の調和を進めていく神の代行者、神の意思を受け継ぐ行為者なのだ。

だが、その人間が小鳥以下になり下がっているというのが現実ではないだろうか。

さて、人間の目的がそうだとすれば、私達はどう生きるべきか、どう為していくことが神の意思に合致するかである。

私達の生活を支える仕事についても、その仕事の目的が食うためにのみあるとすれば、人間は小鳥以外になってしまうだろう。

世の混乱が食うことを土台にして、人のことより自分のこと、他人が苦しんでも自分が困らなければ痛くもかゆくもない感覚が、そうしたものを生み出している、といえるだろう。

人間社会が小鳥以下になるのは、自由と創造の能力が与えられているので、悪にも善にも通じてしまうからだ。

人のことより自分のことというものの考え方は、小鳥達とはちがった能力があるから生じてくる。だから人間は人間同士で争いをはじめ

てしまう。

小鳥達同士で殺したり、殺されたりするだろうか。しない筈だ。他を侵さないで、自分も侵されない。つまり、彼等は、自分の分を守

って生活しているので、安定した共存を可能にしている。

私達人間も、まずこのルールを守ることだろう。

財を独り占めし、自分さえよければ良いという考えが、混乱の元凶を為している。

もっとも現在の経済社会は、そうした混乱や個人の欲望、自己主張の上に成り立っているので、これを否定すると、現代経済社会の歯車

が狂ってしまうことになるが、しかし、本当はそうはならないのだ。

このことはまた後で述べるが、まず私達は、人間のこの地上での目的をしっかりと自覚し、仕事の意義、生活の目的、人間の本質（この

ことは既に述べた）を胸に収めることが必要だろう。

八正道の中に、正業という規範がある。

正業とは、正しく仕事をするをいう。

私達の仕事は生活と直結し、仕事と生活というものを切り離して考える事が出来ない。したがって正業の在り方は、そのまま、生活の在

り方にもつながって来よう。

また、今日の経済社会が利潤追及のシステムの上に組み立てられ、神の子である人間の目的からすると、これはまったくの反対行動であ

り、そうした意味からも、正業の在り方は、私達人間の一日における生活活動全体を規制するということにもなってくるだろう。

(一九七四年二月)

正業には三つの目的が秘められている。

己の魂を豊かにする

調和

奉仕

の三つである。

まず、一について説明しよう。

私達は次元の異なるあの世からこの世に出生してくるときには、一人も例外もなく、こんどは医者になって病に苦しむ人びとを救ってこ

よう、あるいは商人となってさまざまな財を人びとに分け与えてこようといって出生する。

出生の目的は人生の経験を、職業を通して、仕事を通して積んでいくのである。

経験は魂の輪を広げ、心を豊かにして行くものである。

私達は経験のないものを理解することは困難である。

善の素晴らしさ、悪の醜さというものは自分に経験がないと本当に知ることは出来ない。

人殺しや犯罪者の心理状態は、これらを経験しないと理解できないかということ、本当は理解出来ないものなのだ。

自分がその局面に立たされ、追われる身となって、世間をはばかった生活をすることによって、はじめて悪の愚かしさ、悲しさ、醜さを

知ることが出来よう。

人間はもともと集団の中で互いに手を取り合って生活して行くように仕組まれている。世間をせまくした孤独の生活というものには人間

は堪えられないのである。

宗教や哲学に興味を抱く人々の魂は、たいていはこうした人生の明暗の生活をくぐり抜けて来た人々が多いといえよう。

いふなれば、魂の経験が多く、さまざまな仕事を通して現在ここに立っているからである。もちろんその経験というものは、何も今生の

それをいうのではない。長い転生輪廻の過程において、そうした経験が、ものの真実に近づき、人間に対する理解に度合いを深め善に喜

びを見出すことが出来るようになるのである。

私達の身近かな五十年、七十年の人生についても、そのことが言えるのではないだろうか。

人生経験の乏しい小学校一年生に、四十代、五十代、あるいは老人達の悩みを解決する能力を求めようとしても、それはもともと無理な

ことではないだろうか。

少なくとも、これらの人達を納得させるには、納得させるだけの説得力と、にじみ出た経験が必要になるだろう。

そうした能力というものは、やはりいろいろなことを学び、さまざまな苦楽の経験がそうした能力を引き出して行くものであろう。

魂のキャパシティ（容量）はこのように、さまざまな職業、仕事を通して、はじめて、その豊かさなり、広がり
を示して行くものであ

り、やがてその魂は宇宙大にひろがり、神の心に触れ合うように進んでいくものである。

人間の出発が神の意識から分かれ、そうして、神に帰って行くのは、人間に与えられた天命なのだ。目先の安
住を求めて、そこに何時

までもとどまることは許されない。

それは各人の魂が今世と訣別し、あの世に帰った時にはっきりと理解されよう。

勿論、ある次元にとどまる魂についてはそうした人間の天命を知ることがなく、地上界に執着し、魂の前進を遅
らせる者も数多く存在す

るが、しかし、それでもやがてはそれを知り、再び、地上界に出生し修行し、悟って行くものである。

こうみてくると、この地上界における職業仕事というものは、それ自体に目的があるというより、各人の魂の経
験を積むためのよきパー

トナーであり、手段ということになるだろう。

職業に貴賤はないし、職業によって人格まで評価することはこれまた全く愚かなことといわねばならない。

前世は名もなき一介の市井人であっても、今世は歌手や俳優となって世界的に有名になった者もおれば、その反
対の者もいる。

ペテロという人はイエスの弟子として有名である。

そのペテロは二千年前は貧しい一介の漁夫にしかすぎなかった。

イエスの意志をついだが、伝道には学問の貧しさから随分と苦労したようである。

そこでペテロは、こんどは地上に出生した祈りは学問をみっちり学び、事物の理解をふかめたいと学問の道に
はいり、東大の総長まで

になった。

イエス伝を遺して他界した矢内原忠雄という人がかつてのペテロである。

こうした、例は非常に多いし、前生の仕事を今世でも為しつつある人もいるが、大抵はちがった職業に就き、そ
の仕事を通して、人生体

験を深めている。

私達の一日の仕事の量というものはほんのささいなものに過ぎないだろう。

その意味では五十年、七十年の短かさを痛感する。

仕事や職業に、人生の全部を賭けようとするれば、大抵は悔いだけが残ることになるだろう。

しかし仕事を通して、人生に目的を見出し、人間としての価値を希求する者には満足と喜びが与えられるだろう。

価値ある行為というものは、より多くの人々に、どれ程の喜びと人生に生き甲斐を与えて来たかにかかっている。

仕事をより多くすることは社会にたいして大きな貢献をしたことになるが、神の眼から見た場合は、仕事の量よりもその質のほうがずっ

と重要視されるのである。

秀吉という男は、天下を平定したが、しかし、それは極めて表面的なことであって、彼の死後は再び戦乱が起こり、人心は再び動揺し

た。

社会を安定し、生活を豊かにすることは大事なことだが、それを裏づける心の安定がもっと大切なことを、歴史が教えている。

物質のみに走った栄誉栄華は砂上に建てた楼閣のように長くは続かないし、人心を真に安定させることは出来ない。

人心の安定と生活に喜びを与えるためには、神の心に適った物と心のバランスのとれた中道以外にはないのである。

中道の根底にあるものは心である。神の意識である。

その意識を根底にして、物と人心とのバランスが図られることが地上に住む者の在り方でなければならないのである。

それにはまず、なんと言っても人間の目的が調和にあり、仕事というものは各人の魂のキャパシティを広げていくものであるということ

を理解する必要があるだろう。

仕事の量より質が重要だということは、この地上界の人類の歴史が五官六根に左右され勝ちであり、五官六根の苦闘の歴史であったから

である。

否、この事はこれからもまだ続いて行くであろう。目先の利に追われ、食うに困れば力づくでも奪い取るというのが地上界の意識であ

る。

アラブの石油問題が米・ソの利害が一致し、戦争より話し合いが自国の利益になると、米・ソが判断すれば戦争にまでは発展しないので

ある。

すべてが物質的な利害によって動いている。

利害がこわれれば戦うしかないのが地上界を蔽っている人類の考え方だ。これでは物心両面の調和ある社会は成就できない。

そこで、物に走っている人々の心が、魂の転生を知り、永遠の生命体である己のいのちを理解するよう、神は作用、反作用という法を通

して教えている。しかしそうした中であって、心に灯をかかげた人々にたいしては慈悲の光を与え続けているのである。

こういうことで、まず私達は、職業や仕事そのものに正業の意義があるというよりも、正業の第一の目的は、そうした仕事を通して己の

魂をひらき、経験をより豊かにして行くことなのである。



(一九七四年三月)

前号で述べたように正業の第一の目的は己の魂を豊かにするためにあった。

それは食うためではなく、生活を通して『空』の存在を認識し、正業の第二の目的である人々との相互の調和に役立つことであるわけで

ある。

調和の意識 めざめは、『空』の真実を理解し、あるいは自覚することによって、より促進されてこよう。

調和とは何か、それは私達の地上での生活を真にエンジョイするものでなければなるまい。仏国土、ユートピアの社会は、調和された社

会である。個の意識は全体の意識に結びついた社会でもある。

私達の自然的生活環境は、すべて神の慈悲によって、相互に生活が成り立つように仕組まれている。太陽の熱、光のエネルギーによる生

物の成育、動、植、鉱の相互依存の関係というものは、神の慈悲によって生じた調和された関係なのだ。

もし私達の周囲に、植物が一つもなく、荒漠たる砂漠のみとしたら、私達の、つつがない生存は許されないであろう。植物は私達に食べ

物を与え、酸素を供給し、色彩に変化を与えて、生活に喜びとゆとりをもたらしている。

鉱物の普遍的価値については論をまつまい。私達が立っている大地、水、その他必要な供給物資は、すべて天然の鉱物資源から供給され

ている。

自然的環境というものはこのように、私達の生活に必要なものを与えている。

しかし、一方において、私達人間も、植物、鉱物にたいして、彼等が成育できる環境や価値を生みだしている。

植物の生育には私達が吐き出す炭酸ガスが欠かせない。また私達の排せつ物は植物の肥料になっている。今日では、農耕肥料は化学化さ

れて、私達の排せつ物は未利用資源として処理されているが、しかし、こうした状態が私達の人体に今後どのような影響を与えるか、や

がて体質の変化や遺伝子としての問題を投げてくるのではあるまいか。

鉱物がそのまま大地に眠り、未利用のまま放置されてははその価値は半減されてしまう。人間や動物の生活に生かされるだろうか。利

用されて、はじめて鉱物資源としての生命がよみがえってくるといえよう。

問題は、こうした資源が人間の恣意にもとづいて乱獲され、鉱物資源相互のバランス、循環の利用が無視されてくると、地盤沈下や海水

汚染、空気の汚染にもつながり、人間の生活それ自体に大きな問題を与えてくる。このことについては後述する現代経済社会の中で述べ

てゆきたいと思うが、ともかく、私達人間と自然の環境というものは、こうした相互の作用によって調和されているのだ。

すなわち、たがいに補ない合い、助け合って、その生存を許し合っているのである。

正業の目的である私達人間相互の関係も、大自然が教えている調和ある生活が、正業の第二の目的でなければならない。

現代社会は、百年前、千年前のそれとは異なり、専門化され、分業化されて、単独では生きられないようになっている。

もともと人間は集団の中で生活し、集団から外れて、勝手気儘に生きられるようには出来ていない。

このことは独り人間のみではなく、各種の動物も集団生活の中でその生存が許され、植物も鉱物もこの点は変わらない。

石炭や石油、金、銀、銅などの鉱物資源は決まってある一定の場所に塊まって眠っている。だからその資源を掘りつくしてしまうと、他

の塊まった場所を探し求めなければならない。

集団生活は自然の摂理だからである。

人類創生のその出発も、旧約聖書にある通り、アダム（男）とエバ（女）の複数からはじまっている。

このように私達は複数の中で、集団で生活することによってのみ、子孫を残し、歴史がつづられるのである。

ロビンソンクルーソーのように、単独の生活を望んだり、あるいは風流人をよそおい、自己陶醉におちいるのも、またヒッピーに人生の

生甲斐をもとめることも、何れも調和という自然の摂理からすると離れることになるし、これでは人類は死滅するほかはないのである。

ことに現代は、分業化が進み、誰も彼も自給自足の生活が望めなくなって来ている。これは人類の増加につれて、経済システムが合理化

され、生活内容が向上されて来た結果にほかならない。

経済生活の原則であり、そして、よりゆとりある文化生活、精神生活を求めるために私達は最少の費用で最大の効果をあげる努力はこれ

からも続けられるであろうし、この原則は、いかなる社会にあっても変わることはないだろう。

こうみてくると、私達は自分の生存を保つためにも、仕事を通して、他を生かしながら生きて行かねばならない。

職業に就き、仕事をして行くことは人間として当然の義務であり、責任であろう。

さまざまな職業に就き、その道に励むことは、自分を生かし、他を生かすことにほかならない。

そうしてこうした行為そのものは、全体を生かす調和の基礎となるのである。

すなわち職業に就き、仕事を為して行く事は、自然の摂理である助け合い、補い合い、許し合う愛の行為につながる。

男女の和合を愛というのは、たがいに足りないものを補い合い、助け合うことを意味しているからであり、仕事を通しての愛の行為と

は、その仕事に自分の能力を出し切り、他を生かすことなのである。

調和といい、愛という言葉は、極めて抽象的な概念として、これまでは把み難いものとうけとられてきたようだが、大自然が示す摂理を

紐解いて行くと、調和も愛もその真意は誰でも理解が出来、行為の上に表わして行くことができるものである。

イエスが愛を説いた。愛を説くには説くだけの理由があった。その重要な理由としてはイスラエルを中心とした中近東地区は当時も不毛

の地であり、生活が苦しかった。その貧しい生活を互いに分け合い、生きて行くには、愛という助け合う心と行為が必要だった。人間と

して、心を豊かに、広い心をつちかって行くには、たがいにはげまし合い、許し合う心の触れ合いがどれほど大事であり、それがまた神

の心につながり、自然の摂理に合致した生き方でもあった。

愛の行為は私達地上における光なのである。生きる道標なのだ。

仕事も愛の行為の表われでなくてはならない。

ところが現実はどうであろうか。私達の経済生活は欲望を中心として動いている。自分さえよければ他はどうでもという自己保存が愛の

心を小さくさせ、エゴが人間社会を包んでいる。

労使の争いにしても、それぞれの立場で、どうして、こうも主張が変わってくるのかと思われるほどちがってくる。

ひと頃組合活動は政治的色彩がどんな小企業にも強く働いたようだ。最近ではこれが政府関係機関企業に集中されてきたようである。年

々戦術も変わり、巧妙になってきているが、その目的が経済目的か政治目的かによって、争議の内容も大分ちがってこよう。

どちらに比重がかかろうとも、争いによる平和は望めないものだし、組合活動が労働者の生活向上が目的なら、まずもって使用者側の理

解を求めることが必要だろう。労使の争いは、使用者側にも責任があるし、使用者のエゴに大きな原因があるう。

アメリカで自動車王となったフォードは、車の販路を広げるために、自社の労働者に思い切った高給を支払った。三カ月の給料で自社製

の車一台を買えるようにしたのである。当時としては破天荒なやり方であった。ところが、これによってフォード社の需要はグングン伸

び、またたくまにアメリカ市場の八割を占めてしまった。

(一九七四年四月)

フォードの経営理念はどこにあったかという、利潤をあげることより奉仕にあった。独占より平等を求め、金持ちの独占物であった自

動車を大衆に分け与えることを念願とした。

当時は、自動車は金持ちでなければ買えないし、乗ることも出来なかった。金持ちだけを相手にしても会社は十分経営出来た。しかし、

フォードはそれをしなかった。

フォードは晩年、自動車王となっても奢る心を持たず、自ら薪を割り、靴を磨いた。自分の身の回りことで自分で出来ることは人任せに

することをしなかった。

一九〇九年、わずか一万台の生産台数であったものが、一九一四年には二十五万台に達し、アメリカの自動車市場の過半を占めるに至っ

た。

私達は単独では生きてはいけない。動物も鉱物も、集団の中で互いに助け合いながら、それぞれの持ち場を守

り、その持ち物を十全には

たすことによつてのみ、全体に寄与することが出来る。全体に寄与することは、とりも直さず、自分自身をも寄与して行くのである。

正法は私達に何を教えているか、それは生活の正しい循環であり、正しい循環は、一人一人が奉仕の心を持って、与えられた持場を守

り、全体を生かすことにある。自分さえよければよい、生きているのは自分だけと思うようになると、私達の生活の歯車は自分を苦し

め、他をも苦しめることになる。

八正道の正業の第一の目的は自分の魂の輪を広げていくことであり、第二に全体の生活を豊かにすることであり、第三に、奉仕の精神に

つながることではなければならない。

ここでフォードの例が出たので、マルクスについて少し触れてみることにする。

マルクス経済学は、今日、世界の国々を二分する程の影響を持ち、人類に緊張と混乱を及ぼして来ている。彼の目的は財の公平な分配

と争いのない社会の平和にあったようだが、経済法則は人間の意志から独立して存在するとして、弁証法的唯物論と歴史唯物論を展開す

る。

マルクスによる資本主義の矛盾は生産の社会性にもかかわらず、所有の私的性格であつて、このため、恐慌や失業、ブルジョアジーとプロ

レタリアートの階級的対立が必然的に現れるとする。

国家を階級国家と定義したのはマルクス・エンゲルスであり、それによる基本的生産手段を所有する階級が、同時に政治的に支配する階

級であるから、国家機関はこの階級のために活動することになる。奴隷制国家は奴隷所有者を支配階級とする。同じく封建社会は土地所

有者が支配し、資本主義社会は資本を所有する者がそれを所有しないものを支配する、というわけである。たしかに、マルクスが指摘す

るように、歴史の流れを一瞥するとこのようならえ方が出来てこよう。

さて、マルクスは一八一八年から八三年の間、エンゲルスを友に持ち世にいうマルクス資本論を書きあげた。彼はドイツに生れ、ドイツ

で育つた。彼の目に映つたものは、その日暮しの労働者であり、資本家は国家を動かす、労働者は彼等の奴隷のように見えたのである。

共産党宣言をした一八四八年の産業界は、電気の利用はまだ初歩的な段階であり、エンジンは蒸気機関に頼っていた。今日のような流れ

作業による大量生産方式というものとは全然なかつた。過少需要で経済は成長することが出来ず、このため労働者は生存ラインすれすれの

資金しか与えられなかった。経済の仕組みも幼稚であったし、好況と不況が大きく揺れ動いた時代でもあったので、彼のいう産業予備軍

(失業者)が巷に常にたむろしていた。

そこで彼はこう推論を下した。生産力が発展すればするほど労働者は貧しくなる。至るところにストライキが起こり、資本家と労働者が

争い、やがて資本主義から社会主義の必然の経過を辿ってゆくだろうと。

彼はドイツ人であるから、彼の理論はまず母国ドイツに現実になって現われ、適用されるであろうと見たようである。ところが彼が生前

中には彼の理論は多くの人びとに知られたものの、母国ドイツはこれを受け入れないばかりか、彼の考えとはちがった方向で発展して行

った。そればかりか意外にも彼が物故した後、彼が全く夢想だにしていなかった。ロシアに突如として革命が起こり、彼の理論をレーニ

ンが受け継いだのであった。

当時のロシアは帝政国家であり、ヨーロッパでも、もっとも遅れた農業国家であった。人口の約九割りは農民であり、しかも帝政ロシア

は日本と戦争をし、バルチック艦隊の壊滅によって国内の混乱はその極に達していた。ひとにぎりの貴族が大多数の農民を支配する。そ

の上、日露戦争の敗退で革命の機運はいやが上にも盛り上がっていたのである。しかし、マルクスの書いた資本論がロシアに持ち込ま

れ、ロシアに生かされるとは歴史の皮肉であり、マルクス自身、夢にも思わなかった。彼の夢はあくまで母国ドイツであり、彼の論理は

資本主義の発展が社会主義、共産主義に進むことを必然の過程としてとらえているのをみても、夢と現実のちがいがはっきりしよう。今

日のソ連邦はマルクスの図式通りには運営されていないようだ。また、この理論を推し進めるために多くの血が流されたことは見逃せな

い。

不思議なことに、マルクス理論は発達した資本主義国家に受け入れられず、ロシアや、中国、北ベトナム、その他の機械化や工業化の遅

れている国々に利用されることである。これは、人種差別に等しい階級意識の強い社会、支配と被支配の関係の際立った国家ほど受け入

れられることを意味しよう。つまり人間平等、そして隣人愛が失われてくると、マルクスが歓迎されてくるようである。

マルクスはいくつかの誤りを犯している。まず実際の面についてみると、産業予備軍である。生産の過程において資本家が利益を上げ

る。利益が上がるから再投資を行う。こうした二つの過程からがやがて過剰が生じてくる。資本の過剰は利潤率

の低下を来たすので、労

働者の過剰と窮乏化はさけられないという。ところが現実はどうかかというと、この百年間、利潤率は一向に下がらないのだ。下がるどこ

るかドンドン上がって生活が豊かになった。つまり経済の成長によって、企業家は新しい産業を生み出し、新しい商品を生み、新しい職

種を作り出していったのである。商品が百年前も今日も依然として変わらず、同じ物に限定されてくると、マルクスの利潤低下の法則が

適用されてくる。資本主義は経済の多様を促がし、産業予備軍をもたらすこともなく、この二十八年間の我が国の経済成長をみても、失

業者どころか、人が不足、どこも人手不足で困り抜くという状況であった。したがって、マルクスを受け入れる必要性を感じない。も

ちろん、資本主義にも限界があり、問題もある。これはまた後で述べていくが、利潤率の問題以外にも誤りが目につく。労働価値論がそ

うだし、資源の問題、公害の問題についても触れていない。

特に重要な問題は彼の考えの根底が唯物論であり、そのために経済問題は人間の意思から独立して存在するという点であろう。

私達の住む世界についてはことごとく、私達の意思に無関係なものは一つも無いといえる。とりわけ経済問題は私達が思うこと、考える

ことがそのまま具象化して現われてくるものである。その現われをどうして人間と無関係なのだろうか。

企業規模が大きくなると人は組織の歯車となり、組織が利潤を生み出すことはたしかにある。しかし人が組織の歯車とはいっても人がい

なければ組織は何の用も為さない。人がそれぞれの役を担って働くから、組織に生命が宿ってくる。企業は人なり、というのは、どんな

ぼう大な組織にあっても、人の意思の反映でないものは何一つとしてないからである。

電子計算機は人間の頭脳を応用した。コンピューターはある時は人間の頭脳以上の役割りを果たし、将来をも予見する。

(一九七四年五月)

電子計算機が人間の頭脳の代役を果たすようになれば労働人口は先細りの傾向となり、マルクスがいう様に産業予備軍の急増も考えられ

てくる。第二、第三の産業革命である。

装置産業の代表といってもいい化学工場の機械化は凄まじいほどである。

あるS工場では製造部門二十六人で三交代制をしき、一カ月で一万二千トンの製品をつくっている。同系列会社の旧設備は、百五十人も

働いて月産六千トンしか生産できない。一人当りの生産性をみると、前者が五百トン、後者が四十トン、十三倍の生産性格差を生じてい

る。

また石油専用船（タンカー）の合理化も進み、二十万トンの巨船に、船員はわずかの二十数名で足りるというのも出て来ている。

そこで、こうした機械化は労働者を駆逐し、失業者を巷にあふれ出すようになるが、しかしオート・メーションがすべての産業に当ては

まるかどうか。

また、前月号でも触れたように、経済の成長は、すそ広がりをうながし、新しい産業、商品、職種を生み出して行くのである。

電子頭脳は、与えられた計算は可能としても、創意とか工夫、感情、心については苦手である。

コンピューターは人間が運用してはじめて役に立ち、彼らが勝手に動き出したら、地上はおしまいである。

アメリカが介入したベトナム戦争は、コンピューターで弾いて計算された戦争とも言われている。

戦争は数年で終結するとみられたが、事實は十四年もかかっている。コンピューターは人間の感情や心をとらえることが出来なかったのである。

マルクスはフォードの人間性によって、その考え方がくつがえされたといっていいたいだろう。フォードが労働者に高賃金を払い、大量生産

方式をとることによって、社会を豊かにし、人びとに奉仕した。

今日の我が国を含めた西欧先進国の経済発展の原型は、フォードの体験的な経済哲学を基礎にしているといっても過言ではないようであ

る。

マルクスは、あまりにも理論に走りすぎた。彼の願いは平和と平等にあったようだが、その目的の急なために、人間を見ることをおろそ

かにしたようだった。

経済法則は人間の意思に関係なく動くという誤りを犯している。

たしかに、現実には人間の意思とは無関係に様々な諸現象をつくり出している。インフレにしる、デフレ現象にしても、個人の意志に関

係なく、生み出されて行く。

しかし、インフレ、デフレといっても、それを動かしている者は誰なのか、誰でもないほかならぬ人間ではないだろうか。インフレ、デ

フレが突然、降って湧いたわけではあるまい。

人間社会における諸現象の基礎は、すべて人間の意思の下にある。

ただし、意思する方向と、思う、考え、念ずる、方向がちがってくると、両者の間に開きが出てくるのだ。

私達の本来の意思は、健康で、平和で、豊かな暮らしを望んでいるはずだ。そうして、こうした意思の下に、正しい想念行為が為されるな

らば、私達の生活は平和で喜びに満ちたものとなるう。

ところが現実の私達の生活行為は、こうした意思をいただいている反面、自己保存、欲望追及の想念が絶えず動いている。つまり、本来の

意思と、想念との間に、大きなギャップが生じているのだ。そのために、意思とは無関係に、社会の流れが変わってきたりしてしまうわ

けなのだ。

そこで原則的な結論を急ぐとこの問題は、経済法則のメカニズムを、正しい軌道に乗せればよいということになる。意思と想念とを合わ

せればいいのである。そうして、本来の人間性にもとづいた想念と行為を、経済にも当てはめて行けば混乱はさけられることになる。

森羅万象は循環という自然の摂理の下にある。この循環の摂理を正しく生かすか、自己本位に流されるかによって、混乱と秩序の分かれ

目となるのである。

人間の歴史が、経済問題のみならず、平和と豊かな環境を望みながら、戦争と混乱に明け暮れた所以のものは、自己保存と足ることの知

らぬ欲望に心がとらわれ、それにもとづいた想念行為にふり回されたためである。

誰しも病気をしたいとは思わないだろう。不幸になりたいなどと考える者は少ないはずだ。しかし病気をしたり、思わぬ蹉跌をきたし、

自分の意思に関係なく運命が変わって行くのは、毎日の想念の在り方にかかっていることを無視してきたからなのだ。

先月号で『私達の住む世界についてはことごとく、私達の意思に無関係なものはない』と書いた。

これは現代人が、そしてまた私達の肉体先祖が、自己保存を中心とした理念行為に、本来誰しも意思として内在している平和で豊かなそ

の心の大半を明け渡してしまったがために、そう書いたのである。

したがって、こうした意味においては、インフレにしる、デフレにしても、私達の意思の下に動いているのであり、経済法則が私達人間

の意思とは別個に存在することはないといえるだろう。

マルクスは、人間の心を理解できなかった。そうして、そうした前提の下で理論を組見立てて行ったので、さまざまな誤りが、目につい

てくるわけである。

思い出して欲しい。

「善には善、悪には悪」という自然の掟を。そうして、思う、念ずることは現象化につながって行き、それは本人の意思とは別行動をと

って現象化されるということをも、忘れないで欲しいのだ。

ところでマルクスは実在界（あの世）から使命を持って生まれて来た。その使命とは、当時の社会は彼が悩んだように貧富の差が激し

く、労働者の生活はひどかった。資本家はどんどんふとるのに、労働者はその日暮らしであり、生かさず殺さずの形を変えた一部の者に

奉仕する奴隷とあまり変わらなかった。

彼の目的は、この矛盾を訂正する理論をうち立て、人間性を中心とした社会改革の柱になることだった。生産と消費の円滑な運営が目的

だった。

ところが彼は、現実を目を向けすぎた。そうしてその考え方が次第に唯物的方向を辿るようになり、人間から離れていったのである。

彼の目に映じたものは、資本主義のさまざまな矛盾、不平等であった。そしてその不合理の原因は、資本主義の下にある経済の仕組みで

あり、この仕組みこそ不平等の元凶とみたのである。

確かに、それまでの経済組織は、アダム・スミスに代表されるように、所謂、古典資本主義が、人々の生活を規制していた。

アダム・スミスは一七二三年に、イギリスに生まれ、六七歳で生涯を閉じている。

彼は一七七六年に富国論をまとめ、今日の資本主義社会の基礎づけをしている。

彼は当時の重商主義を批判し、富みとは金銀ではなく、年々労働によって生み出される生産物であるとした。生産物は利己心の経済行為

によって生産されるが、しかし見えざる手によって導かれて、公共の福祉を増進するとみたのである。資本主義はこうして全体の調和を

もたらす機能を持っているので、これをさまたげる一切の保護政策はつつしみ、自由放任こそ経済発展の基礎というわけである。

現在の我が国の経済、そして西欧先進国にみられる経済組織が、いかにアダム・スミスの考えを底流に動いているかが、はっきりしよ

う。

経済が幼稚なときは、これでもよかった。しかし、経済規模が次第に拡大され、景気のバランスが大きく揺れ動

くにつれて、持てる者と

持たざる者の格差がひろがり、不平等のミゾが深まってくる。

(一九七四年六月)

不平等のミゾは、今日のインフレ、デフレをみれば明らかであろう。インフレは富を偏在させ、悪をつのらせ、デフレは暴動と混乱を生

む。

インフレの問題については後で詳説するがアダム・スミスのいう自由放任にはマルクス同様問題があった。自由放任の前提には、人々の

利己心が支えになっており、経済行為と利己心は切っても切れない関係のようにみられているからである。

経済生活が利己心、足ることを知らぬ欲望を主体に動いている間は、私達の生活は何時になっても調和されない。そうしてまた、人々の

欲望を押さえつけた、あるいはある制度によってしばりつけても円滑にはゆかないものである。

しかし今日までの私達の政治的、経済的環境は、人間の利己心、欲望は当然の権利であり、人間性にもとづいたそれであるとしてこれを

認め、これを踏まえた諸制度が考案されてきたのであった。このため、争いと欲望はつきることなく、安らぎある生活は、制度的には合

理化されてきているが、日増しに遠ざかっているというのが現実であろう。

自由放任制には制度そのものに大きな欠陥があった。簡単に説明すると、次のようになる。

ある時点で商品が売れ出すと企業家は生産設備を拡張しよう。設備の拡充、投資はそれの生産者、原料生産者がうるおうことになろう。

いきおいここに働く労働者の賃金も上がってくる。労働者の所得が増えてくれば消費が拡大しよう。生産拡大と消費の拡大が行われる

と、やがて供給過多が景気上昇過程のうちに見られるようになる。企業倒産が出始める。倒産が出れば失業者を生じ、消費は停滞し、景

気は下降に這入る。

放任経済の下では、こうした景気のパターンが周期的に襲い、運動にはすべてはずみがつくので、犠牲者が多く出たのである。

話を前に戻して、マルクスの時代は景気の上下動が激しく、古典的資本主義社会の矛盾が目についた。マルクスは、その矛盾がまず祖

国ドイツにおこり、共産社会はやがて全世界に広まるとみたのである。インターナショナルの波は彼の予見の通り、全世界に伝わって行

くが、心の自由、行動の自由を束縛した制度は大多数の人々に受け入れられず、今日に至っているといえよう。

マルクスは人間の平等、分配の公平を求めながら、人間の本質、心を中心とした人間性を見逃がしており、時代が進行するほど、彼の考

えは遠のいてゆくだろう。

ところでマルクスが没した一八八三年に、イギリスにケインズが生まれている。彼は第一次大戦後のイギリス経済に関心をいだいた。そ

してまず「貨幣論」、つづいて「雇用・利子および貨幣の一般理論」を発表し、新しい理論体系をたてた。俗にケインズ革命とも言われ

ている。

アメリカ、西欧ヨーロッパ、我が国の経済政策の根幹が、アダム・スミス以来の自由経済を基礎としたケインズ理論による混乱経済であ

ることは周知の事実である。マルクスにかわる革命理論といえるし、自由社会にとって彼の出現は、ある意味で、救世主だったといっ

いいかも知れない。

彼の理論を一口にいうと、需要と供給のバランスを政府が受け持つ。景気が上がれば、金融を引き締め、下がればゆるめる。投資支出は

乗数効果によって、実際の支出よりも何倍もの需要を喚起することが出来るというものである。

またケインズは分配の不公平を是正するため高額所得者、金利生活者を批判し、遺産による不平等をある程度否定する。つまり、福祉政

策の導入である。年金、社会保険、老人保護など。福祉制度は一面からみると需要を永続させ、景気を維持させる効果もあり、投資のこ

うした社会化は、今日のイギリス労働党にみられるように、政党の政治理念に深く結びついていった。

彼の考えはいつ時、企業家の批判を浴びた。しかし国家による有効需要を造り出すことが分ってから次第に彼の論にしたがってゆく。こ

とに戦時経済によって国家の支出が企業をうるおし、戦後も冷たい戦争によって国家と企業の関係はいよいよ密着し、企業家は、批判者

から強い支持者にかわっていったのである。この制度によって、経済恐慌も起こらず、失業者も出ないばかりか、餓死者もでないことに

なった。

戦後の我が国経済は、このようなケインズ方式によって、戦前までに見られた景気の波に国民がさらされることなく、高度経済成長に酔

うことができたといっても過言ではないだろう。

ケインズ理論は古典派資本主義の欠陥を補って余りがあったが、経済の成長が進むにしたがってやはり大きな壁に突き当たっていく。

ケインズはマルクス同様に、生産力の発展を無前提に肯定している。ケインズによって物価の上下動はおさまったが、しかし下がること

を知らず、上がりっ放しである。

ケインズ以前の通貨は金本位制であった。金の増減が通貨の量を決定して来た。

景気が上昇し、生産、消費が大きくなれば、通貨量も大きくならなければならない。

ところが、通貨量は一定なものだから、生産があがると価格は下がらざるを得なかった。

価格を維持するには生産を沈静化するしか方法がない。そこで、景気の循環は金本位制による通貨量と取引量の差によって動かされると

いうことになる。

例を貿易にとってみると、国際収支が赤字になると、対外支払いのための大量の金が国外に流出することになる。金の流出は国内での銀

行券流通高（兌換券）が減り、国内経済はデフレになる。失業者があふれ物価は下落する。物価が下落すると輸出ドライブがかかるの

で、国際収支はやがて均衡状態に向かう。金本位制は外国為替相場の安定を保証するが、しかし一面、国内経済が激しく揺れ動く欠点が

あった。

一方、通貨量と共に変動するものに金利があげられる。金利とは一言でいえば金の値段である。その値段は、通貨量が減ると金利が上が

り、増えると下がる。

資産家は金利の上下動によって投資したり、控えたりするので景気変動に一層のはずみをつけて来た。そのため、企業家は景気の上昇過

程はいいが、いったん下降に入ると深刻な打撃をこうむることになる。

ケインズは、ここに焦点をしばった。そうして景気を上げすぎない、下げすぎない操作を国が行えば、この矛盾は解消するとしたのであ

る。

すなわち、景気が下がれば、公共投資を増やし、新規事業をおこす。道路、鉄道、港湾等に対する投資である。また高所得者の課税を重

くし、社会福祉事業を広め、低所得者に分配し需要を刺激する。

しかしこうした操作は金本位制ではやりづらい。金本位では景気の良し悪しを通貨量が自動的に決めてしまうので、操作のしようがない

からだ。いくなれば金本位は経済成長をとめてしまうのだ。

そこで登場するのが管理通貨である。ケインズ政策の中心を為すものはほかならぬ管理通貨制度であったといえよう。

しかし、ケインズ理論にも欠点があった。前述のように、彼の場合は経済成長を無制限に発展させる政策であり、成長がとまれば、たち

まちにして需要不足が表面化する。いくなればゼロ成長は不可能なのだ。いやが応でも、成長経済を維持し、大量生産、大量消費の使い

捨て経済のメカニズムを回転させていかなければならない。

しかし、世界経済は戦後二十九年を迎えて、成長経済のその前述に暗影を映し出している。

その一例は、地球資源の問題であり、管理通貨によって、世界各地にばらまかれた不換紙幣（主にドル）の洪水による悪性インフレであ

る。インフレの大きな要因として賃金の高騰も上げられる。また、大量生産によって各地に公害が発生し、人身をむしばんでいること等

である。

（一九七四年七月）

三、

ついこの間までの我が国は高度経済成長の名の下に、国民の大多数がこれに踊らされていたといってもいい過ぎではないだろう。年率一

〇%の成長が仮に今後十年続いたとすれば、日本列島は煤煙都市と変わり、山川草木はみる影もなく、しぼんでしまうだろう。

いったい私達の日常生活にとって物が沢山あった方がいいのか、それとも自然と物との調和を保ち、人と自然の語らいをつづけるべきな

のか、今や人々は重大な岐路に立たされている、といえるだろう。

私達は自然を破壊し富を得たが、自然破壊は人間の存立を危くする。死と引き替えに富を求めるか、それとも、生きて安らぎある生活を

つづけるか、その選択は、ほかならぬあなた自身にあるといえよう。

さて、私達の生活のおびやかさ、世界的な規模で発展し続けている悪性インフレについて、一瞥してみることにしたい。そうして、現在

のインフレが、どこから出発し、どこに根があるのか、まったく、新しい視野から展望してみたいと思う。

多くのエコノミスト、評論家は、この小論をみて、冷笑するかも知れない。しかし、いつの日かこうした考えをとり入れ、生産と消費と

いうものを合理化してゆかなければならないと思う。なぜなら、このまま進めば私達の生活はやがて破綻を来たし、混乱、暴動、戦争は

さけられそうにないと思うからである。自国の利益のみを求める経済の運用は、最早、狭くなった世界経済の下では運用し切れなくなっ

ている。

とくに、経済生活は人口の増加と密接不可分な関係にある。年々増大する人口と、その生活を維持するためにも、ある程度の成長経済は

さけられない。しかし、自己保存、足ることを知らない欲望を基盤とした生産と消費の運用は、やがては地球資源を枯渇させ、戦争や混

乱をひきおこす要因となってくるからである。

戦争と経済の悪循環は、広い地球であった時代はまだ救いがあった。しかし、第二次大戦、ベトナム戦争の教訓は、戦争による経済的利

益よりも、その負債の方がはるかに大きなものがあったことを教えている。

今日の悪性インフレの引き金となった第一の要因はベトナムを焼土と化したアメリカの物量投下にあったといえるだろう。

アメリカがベトナムに投じた軍事援助額は約一・三五〇億ドル、経済援助は五〇億ドルともいわれている。

つい一年ほど前、日本が二〇〇億ドル近い外貨を得て好況に酔い、世界からエコノミックアニマルと、白い眼でみられたことは記憶に新

しいが、ベトナムに投じたドルに比べれば、ものの数ではない。

戦争がいかに大きな犠牲を伴ない、そうして物量の大消耗につながって行くかが、これで一目で理解できると思う。

ドルの乱発によって、物と金とのバランスが崩れていった。

大量生産、大量消費の使い捨て経済は、こうした戦争や民需を通して年々拡大され、消費のための生産ではなく、生産のための消費に変

っていったため、資源ナショナリズムが台頭し、石油をはじめとした鉱物資源、食糧、木材等の輸出国は年々輸出抑制の政策をとりつつある。

こうした傾向は今後ますます強まる方向にあり、ことに鉱物資源は化石燃料（石油、石炭など）をはじめとし再生産がむずかしく、再生

産がきくものでも莫大な資金と高度の技術を必要とするため、資源ナショナリズムは強まりこそすれ、衰えることはないだろう。

資源ナショナリズムはアラブの石油にみられたように、買手市場から、売手市場に変わり、需要が増大すれば天井知らずに暴騰する。

石油は軍事に、経済生活に、欠くことの出来ない重要な資源であるが、他の資源についても世界的な形でこうし

た傾向に拍車がかかれ

ば、残るは、生きるための武力に訴えるしかなくなってくる。丁度、我が国が米、英両国から経済封鎖をされて、太平洋戦争（第二次大

戦）に突入した、あの時を想起すれば、この事情はたやすくのみ込めると思う。

このまま、この事態を放っておくと、日本沈没どころか、世界沈没にもなりかねない。

今日の世界的なインフレは、このような混乱の前兆とみて、いいのではあるまいか。

インフレーションの語源はラテン語のenflare（インフラーレ）から来ている。その意味は『ふくらます』ということだ。

この言葉が使われたのは、一八六一年のアメリカの南北戦争で財政支出が膨張した時を嚆矢といわれている。

アメリカのフィッシャー、イギリスのマーシャルはインフレは通貨膨張によって起こる物価騰貴といている。つまり、通貨数量説であ

る。

今日のインフレはドルの乱発からはじまったのだから、通貨数量説に原因があるといえよう。

しかし、インフレの要因は、今日では、これだけでは片付けられない。経済的には、これ以外に、いくつかの要因が挙げられてくる。

すなわち、原材料騰貴による輸入インフレ。週休二日制、公害防止等による投資増加がもたらす福祉インフレ。経済構造の変化から起こ

る需要シフト・インフレ。財産の所有主の移転に伴って価格が上昇するストック・インフレ。たとえば、土地、株、貴金属、絵画、ゴ

ルフ会員権の移転を通じてインフレが促進される。寡占、独占によって需給操作が意のままになる管理価格インフレ。そして前述の通貨

数量説がとりあげる過剰流動性によるインフレなど。

経済成長に伴って、インフレの種類は、どんどん増えているといえよう。

サテ、ここで経済企画庁がまとめた四十八年版の経済白書をみてみよう。

世界的インフレの進行とその要因について興味ある資料を載せている。

アメリカをはじめ、日本を含めた先進六カ国の、ここ数年におけるインフレの要因が何に起因しているかを、年度別、要因別にあげてい

る。

年度は一九六八年から七三年一～三月までの五年と三か月間。

要因別では、国内需要。アメリカを中心とした海外需要により拍車がかかったもの。景気拡大下の賃金上昇。景気停滞下の賃金

上昇。輸入コスト上昇。国際収支黒字による通貨供給増、に分けられている。

そうして、こうした要因によって、物価上昇に結びついた年度を明らかにしている。

各年度を通じて、全体的なトータルでみると、 の輸入コスト上昇がもっとも多く、二四件。国別ではイギリス七件、アメリカ五件、フ

ランス四件、日本とイタリア三件、西ドイツ二件の順。（注、国別件数は、単年度に生じた要因を一件として数え、物価上昇に結びつい

たもの。）

次が の景気停滞下の賃金上昇で一七件。内訳はイタリア六件、イギリス五件、

アメリカ三件、西ドイツ二件、フランス一件、日本はゼロ。

次の の国内需要によるものが、全体で一五件。国別は、日本とフランスが各四件、

アメリカと西ドイツが三件、イギリス一件。

の景気拡大による賃金上昇は、全体で一二件。内訳は日本、西ドイツ、フランスが各三件、アメリカ二件、イギリス一件。

最後に の国際収支黒字による通貨供給増は西ドイツ六件、日本二件の八件となっている。

以上の要因別から、各国のインフレは、ドルによる通貨危機は七三年二月の変動相場制によって抑制されたので、景気拡大による需要ひ

っ迫（ ）と賃金上昇（ と ）と輸入インフレ（ ）があげられ、その前途の容易ならざることを示している。

（一九七四年八月）

世界インフレの要因は前月号で掲げたように、一、輸入インフレ（ ）と二、賃金上昇（ と ）三、景気拡大による需要ひっ迫（ ）

によるところが目立っている。

これらの要因を、国別の国情に照らして説明すると長くなるので、省略するが、今日のインフレの傾向が経済的にどこから来ているか

は、右の要因から理解がつくと思う。

ここで断り訂正したいことは、六二頁二行目に「国別件数は単年度に生じた要因を一件として、数え物価上昇に結びついたもの」とし

たが、通算年度が五年と三カ月なのに、要因別ではこれを上回る（輸入コスト上昇ではイギリスを七件とした）件数となったのは七二年

を上期、下期に別けて各一件と数え、七三年一～三月を一件としたため、こうした件数になった。説明不十分だったことをお詫びした

い。

さて、インフレの要因は前述のように三つ挙げられるが、この三つについて順を追って説明すると、その第一は、六〇年代後半から起っ

たアメリカ国内のインフレであった。

インフレの原因はベトナム戦によるアメリカ国内の需要逼迫と、賃金上昇による価格競争力の低下であった。このためアメリカは輸入需

要を強める事になり、アメリカの国際収支は大幅な赤字が続く事になった。アメリカの赤字は日本、西ドイツの黒字をもたらした。我が

国は二〇〇億ドル近い外貨を得たが、これらのドルは円に替えられ、ダブついた金は土地や株、木材、紙、大豆、石油製品、果てはモチ

米等の買占めに走らせる事になった。我が国のインフレはドルの過剰流動性から始まったわけだ。

第二は、すでにみて来たように賃金の上昇だ。六〇年代以降の主要国の賃金上昇率は、労働生産性の上昇を上回り、景気停滞期に入った

七一年、七二年についても一〇%をこえる上昇となっている。

景気停滞期の賃金上昇にたいする物価上昇の遅れと、完全雇用政策による賃金上昇率の下方硬直性の増大があげられよう。

第三の原因は、輸入品の物価上昇である。今日の経済は一国の自給自足、単独では生きてゆけないようになって来ている。それぞれの国

が分業し、たがいに製品、材料を依存し合って成り立っている。このため、一国のインフレ、デフレは他国に波及しやすい状況をつくり

出している。アメリカがクシャミをすれば、日本は風邪をひくという比喻が底の浅い日本経済を指して言われたが、これは今日といえど

もあまり変わらない。GNP（国民総生産）世界第二位といわれても、日本の経済はアメリカを抜きにしては考えられないからだ。輸出

の三割はアメリカ一国である。あとの七割を約二十カ国が分け合っている。

一位のアメリカと二位のリベリアでは二・七倍（七一年）ものひらきがある。

輸入品の価格上昇について、今日もっとも重大視されるのは、一次産品の価格上昇である。国際原料市況は七〇年～七一年に軟化した

が、七二年六月に入ってからには棒上げである。

国際商品相場指標の代表的指標であるロイター指数（イギリスのロイター通信社が発表している指数）をみると、一九三一年九月を一

〇〇として、七二年五月頃までは五五〇であったものが、七二年六月から七三年六月までの一年間に一、〇〇〇

の大台を記録し、同年一

二月には一、三〇〇台に達している。七四年六月二十日現在では一部投機筋の投げ物があって同指数は一、二五〇台に軟化しているが、

成長経済の原則をゼロやマイナスに、落とさぬ限り、こうした一次製品の需要は増えることがあっても落ちることはない。

ロイター指数は小麦、綿花、銅、スズなど、国際貿易の重用度に応じて一七品目選ばれており、国際商品の動きをみる上に重要な指標の

一つになっている。

さて以上の三点が、今日の世界インフレの経済的要因として挙げられよう。

そこで次に、ではこうした要因は何故起るのか、戦争にしる、需要の増大にしる、賃金上昇にしても、どうして起ったか、あるいは起さ

れるのであろうか。その根底にあるものは人間の欲望なのだ。欲望のさまざまな発展が私達の生活環境の変化をもたらし、そして、自

分の首を自分が締めているという結果をつくっている。人間は欲望のドレイとなっている。欲望に振り回されているのが現代人であると

いえる。

システムの上では企業中心の消費経済にある。消費のための生産ではなく、生産のための消費になっている。会社の利益のためには企業

は血眼になって、新しい製品を市場に送り出す。

自動車、テレビ、冷蔵庫、電気洗濯機等は耐久消費財である。これらの製品は使い方がいかに十年でも十五年でも持つはずである。と

ころが、企業側からすれば一商品が十年も十五年も使われたら会社が潰れてしまう。月産五十万台、百万台という商品生産の操業をとめ

たら、会社は一日として成り立たないのだ。作り出された商品は、否でも応でも買ってもらわなければならない。購買心理をあおるに

は、目先をかえて新製品をドンドン作る。モデルチェンジをはかっていくのだ。

需要をかき立てるには宣伝しかない。人々の欲望を刺激する宣伝によって半年前、一年前の商品を使っているのは恥ずかしくて仕方がないと

いう雰囲気をつくり出すのだ。

今日の経済の歯車はマーケティング技術を支柱とした拡大再生産に支えられているのである。人々はそれに乗って生活している。そし

て、次々と登場する新しい商品を所有するために、夫婦は共稼ぎを強いられている。

アメリカのサラリーマンは大抵、副業を持ち、朝早くから夜遅くまで働き通しという。つましく、平凡な生活に耐えるなら、夜遅くま

で働き、金を求めなくてもいいはずである。ところが、欲望をそそる商品を所有するには、こうしないと買えないというのだ。

隣人がテレビを買えば自分も持たぬと劣等感が家族にまで及ぶ、現在の日本がこうした空気をつくっており、これがまたGNP世界第二

位にのし上げた原動力になっている。こうして、社会が経済的に発展すればするほど、めまぐるしく、せわしく、動き回らなければな

らない仕組みになっている。

今日では五年先、十年先のことは普通では予測がつかない。老舗といっておっとり構えていたら生きのびることが出来ない。立派な店舗

を構えていても、地下鉄が出来、高架がつくられ、道路が広がって行く時代には、人の流れが何時どう変わるか分からないからだ。

今日の世界インフレの演出者は誰かという、ほかならぬ企業である。株式会社という企業集団がインフレをつくり出しているのだ。勿

論、企業を支えているのは人間であり、人間を抜きにしては何も語ることは出来ないが、人々の生活の基盤が企業を中心に動いているの

で、企業という利益第一の組織に人々がふり回されているといえよう。

そのインフレも昔の場合は生産規模が小さく、戦争とか放任経済による矛盾が作り出してきたが、今日のそれは生産規模の拡大によっ

て、地球資源の乱獲が高まり、その資源の先が見えてきたために、需要と供給のギャップがインフレを招いているのである。

経済企画庁の資料にもそのことがハッキリと裏づけられており、インフレの各国の共通的要因は輸入資材の高騰、つまり、生産に必要な

原材料が年々うなぎ登りに上がっているという事実。それがアメリカをはじめ西欧先進国、それに日本にも共通していえる要因をなして

いるのだ。

輸入資材の高騰は需要増からきており、その需要は企業の拡大生産に原因がある。生産を縮小すれば失業者が巷にあふれ、社会不安が巻

き起こるので、一度動き出した拡大生産の仕組みは、そう簡単には止めることは出来ないのだ。ここで現代のジレンマがある。

(一九七四年九月)

ひと頃、適度のインフレは企業活動を助け、成長経済を維持するということで、インフレ是認論が大手を振っていたが、昨年六月頃か

ら、顕在化した悪性インフレの波によって、インフレ是認論は一ぺんに吹き飛んでしまった。

悪性インフレは昨年十月の中東戦争による石油危機によって頂点に達したが、しかし、それ以前からジワジワと押し寄せ、石油危機がな

くとも、インフレは日本を襲っていたのである。ただ石油危機によって、一度に表面に吹き出たといえよう。

日銀発表による六月上旬（昭和四九年）の即売物価指数は前年同月比で実に三五・二%の上昇となった。政府の総需要抑制策と金融引締

めで物価は一応沈静化の方向にむかっているが、わずか一年足らずで即売物価が三五%も上がるなどということは戦時ならともかく、平

時では異常事態ということがいえる。

前月号でも触れたように、インフレの演出者は誰かといえ、それは株式会社という企業である。企業集団がインフレを生み出してい

る。拡大された生産設備はそうやすやすとは縮小出来ないし、縮小すれば失業者が巷にあふれ、社会不安が表面化する。

今日の政治の目標は社会福祉の拡大と完全雇用であり、これを抜きにしては政治は語れないだろう。国民の側もそれを望み、その能力の

ないものは政治の場から姿を消す以外にないわけだ。

国民の大多数は企業という利益追及の組織の中で生活しているので、企業がマイナスになる政治は手のつけようがない。政治の場は、国

民の経済生活が如何に豊かに円滑に進められるかにかかっており、そのためには、企業活動が十分その能力が発揮しうる環境をつくり、

これに参加している人びとの経済生活の安定を図ることが目標になってくる。外国から日本株式会社と悪口をたたかれても、これを育

て、維持しなければならないのだ。

企業はこうした国家の保護の下に発展し、今日に至っているのがソ連、中共などの共産社会を除いた西欧先進国の経済制度だが、しかし

企業は資本の参加によって運営される利益追求のいわゆる法人組織であり、利益がなければ資本は逃げてしまう。つまり、企業は利益を

産むことによって成り立っている。

政治の目標である公共の福祉とこうした利益追求を第一におく経済活動とは、しばしば衝突をくりかえし、このためさまざまな規制を国

家が行い、監視をつづけている。しかしながらアダム・スミス以来の考えが根底にあるかぎり、経済活動は水が低きに流れるように資

本の集中、利益の独占、排他的自己保存のメカニズムはさけられないのである。

今ここで多国籍企業というものについて概観してみよう。

多国籍企業とは、一般的には世界企業とも呼ばれ、当初ヨーロッパを中心に設立され、シェル石油（アメリカ）ユニリーバ（オランダ、

イギリス）等があげられるが、今日ではヨーロッパなど先進国に子会社を持ち、多角的に経済活動を展開する米系企業を指している。た

とえばGM（ゼネラルモーターズ）スタンダード石油、フォード、モービル石油、U・Sスチール等々、そのほとんどがアメリカ系で、

日本では、新日本製鉄、日立製作所などが世界企業三十位のランクに顔をつらねている。

目的は市場の確保のほか、労働力と生産資源の利用を狙っているのが特徴だが、ここへ来て、進出先国と問題を起こしつつある。それは

母国の本社に経営が左右される事もあって、進出先国の政治理念（国家目的）と相反する面が出て来ているためである。

たとえば、本国の本社が製品の値段を上げれば子会社も上げる。本社がストをすれば、子会社もストをやる。規模が小さいうちはまだい

いが、今日の多国籍企業は、進出先国の経済の五〇%、六〇%に上がる大企業に成長しているところもあって、製品の値上げは、その国

の物価政策に影響を与え、ストは労働政策にも関係してくるのである。

国内産業の五〇%以上が外国資本によって牛耳られるようになれば、その国の経済政策ひいては国民生活は外国に依存せざるを得なくな

り、形を変えた一世紀前の植民地化とかわりはない。

いな、多国籍企業の進出によって、相手国の経済を握れば、これは新たな植民地化であり、我が国に対する東南アジア諸国の反日思想

も、こうした海外投資の行き過ぎから生じつつあるといえるのではあるまいか。

多国籍企業は今日アメリカを筆頭に西ドイツ、イギリス、フランス、オランダ、日本などその数は三百社から四百社にのぼり、その海外

依存率は次第に大きくなっている。スタンダード石油、モービル石油、キャタピラーなど主な世界企業の海外活動は当該事業体の四〇～

八〇%にも達しており、その生産額も三千億ドル（一九七一年）にもものぼろうとさえいわれている。

こうしたことから昨年秋の石油危機はメジャー（国際石油資本）に対するOPEC（石油輸出国機構）の反逆ともいわれ、国際間の緊張

が相次いで起こっている。

多国籍企業は本社のある本国でさえ押さえがきかなくなっている。アメリカの国際収支は一九六〇年代から悪化をはじめた。これは大企

業間の海外投資がさかんとなったので、ベトナム戦争と併行して、六〇年代後半にはアメリカは大幅な赤字を出

すに至った。あわてたア

メリカ政府は海外投資を規制しはじめたが、このことが海外で生み出された余剰利益が本国に戻ることをこばみ、ヨーロッパにとどまっ

たため、ユーロ・ダラーとなってヨーロッパ通貨を圧迫し、通貨不安を引き起こす原因ともなったのである。

このような多国籍企業は、今日ではさまざまな問題を惹起せしめている。また、こうした企業活動は国の制約を離れて独り歩きをはじめ

国境のない第三帝国を築きつつあるといえる。企業の自由競争はたしかに生産を拡大し、消費生活を広げて行くが、その行きつくところ

は、資本の集中であり、利益の独占である。そうして企業群のピラミットの頂点がいわば多国籍企業といえるし、企業の目指すところは

かつての我が国の財閥、企業の系列化につながってゆくといえる。

こうみてくると、ひと度、組織された企業は、それ自体運動をつづけ、生産は生産を呼んで、拡大再生産の自律運動は天井知らずにひろ

がってゆくのである。

話を前に戻して、今日の悪性インフレの要因は、前月号にも触れたように、一、輸入インフレ、二、賃金上昇、三、景気拡大による需要

のひっ迫の三点にあったが、その根底に流れるものは企業の拡大再生産にあって、これら三つの要因は、いわば現象的に表面に表れた原

因であり、問題の核心は企業活動そのものであり、更に、つきつめれば人間の限りない欲望に根があるといえるのである。

つまり、資本主義自由経済はアダム・スミスのいう個人の利益追求にその経済活動の基礎を置いており、企業は、その活動を助ける組織

だからである。

そこで繰り返すが、人間の限りない欲望を助長するような制度なり組織というものは、ゆきつくところは破壊であり、闘争につながって

しまう。

人間の欲望はこれでよいとする限度を知らない。放っておけばどこ迄も広がってゆく。その欲望の展開が今日の経済社会といえようし、

アダム・スミス、ケインズをふまえた、混乱経済は無限の発展と、豊かな社会をつくると予想されたその夢も、地球資源の枯渇という、

つい二年ほど前まで考えられなかった非常事態を迎える事によって、資本主義社会も、ようやく先が見えて来た感が深いのである。

では反対に社会主義ならどうかというと、人の心はどんな強権をもってしても、これをしばることは出来ないし、やがては反体制運動が

起こることは歴史が証明している。

(一九七四年十月)

朝日新聞七月二〇日付の記事によると「ソ連経済は再び低迷の兆し」の見出しで次のように報じている。

ソ連中央統計局がこのほど発表した六月の工業生産は、昨年同月比伸び率で六・四%と今年上半期で初めて六%台に転落した。また労働

生産性の伸びも同四・四%と一～五月の七・二%から急角度に落ちた。各省別に見ると、六月の計画目標を達成できなかった省がガス

工業、石炭、重機械、木材加工、セルローズ、製紙、建設機械、道路機械、公益機械製作の六省にのぼっている。特にセルローズ、製紙

工業省は二、三月も月刊目標が未達成に終わっており、ブラーツク木材コンビナートの製紙パルプ工場がこの六カ月間に生産目標を六万

一千トンも下回ったほか、アストラハン・紙・パルプ・コンビナートでの工場管理者と従業員とのいざこざなども悪影響を及ぼしたと指

摘されている……。

記事はこのほか細かく報じているが、企業活動が国営になり、予算や命令、組織が複雑に入り組んでくると、個人の自由活動の余地が

少なくなり、生産目標は下限に押さえられ生産性は急角度に落ち込んでくる。

我が国の国鉄は日本最大の企業として知られている。従業員四十五万人をかかえ、北は北海道から南は九州の果てまで、その鉄の帯は

約二万キロに及ぶ。戦前までは国営とはいえ独占の強みで黒字を計上していたが、戦後は自動車の発達と内航海運のピストン輸送から赤

字に転落した。経営は国営に準じた公社（パブリック・コーポレーション）として昭和二四年、駐留軍の強い要請で衣替えしたが、組織

の肥大化と、人事の硬直化で時代に即応した転換がきかず、マンモス企業であるが故に国の要請も強く、こうしたことから自己資本（一

兆五八九六億円）を上回る一兆六千億円（四十八年度末国鉄監査委員会報告）にのぼる累積赤字を出すに至り、利子補給やさまざまな国

の援助をうけねばやってゆけぬありさまとなった。

我が国の国鉄とソ連の国営企業とはさまざまな点で比較する方が無理だが、公社の発想はもともとソ連の独立採算制度を模して考えられたもので、それだけに何か共通的なものがうかがえる。

ソ連の場合は革命後五十四年（革命一九二〇年）を経、国民の間に不満と不信がめだち始めており、官僚国家の弊害が産業活動の上に

現われて来た、といえなくは無いだらう。

生産を上げるためには残された手段は強権であり、強権と生活の規格化は過度の管理社会ではさけられぬ宿命といえよう。

人びとの心が人生の目的を知り、その役割に任じて平等互惠の、調和された物心両面の経済社会を望むならば、生産消費のアンバランス

は起こりようがないだらう。だが、物質至上の思想を背景に社会主義ないしは共産社会を押し進めようとする、もともと欲望の何た

るかを知らずに動いているのだから、いつしか支配と被支配のシステムが、出来上がり、官僚化の弊害はさけられないものとなる。

こうみてくると、社会主義も一つの壁に突き当たって来ているといえる。

さてインフレの原因とみられる資源問題について若干触れてみよう。

資源問題が今日これ程世界的な視野で騒がれて来た一つの理由は、例のローマ・クラブの「人間の危機」レポートが発端になってい

る。日本でも翻訳され、一九七二年五月にダイヤモンド社から出版されている。

ローマ・クラブは一九七〇年三月、スイス法人として設立された民間組織で、世界二十五カ国、約七十名の会員から成り立っている。

メンバーは、科学者、経済学者、教育者、プランナー、経営者、などから構成され、公職者は含まれていないのが特徴である。したがっ

てイデオロギーや国を代表する色彩が無いのが特徴だが、先般、東京で開かれた同大会では政治的発言がめだち、メンバーの足並みの乱

れがあったのは遺憾だった。

クラブの目的は最近とみに深刻な問題になって来た天然資源の枯渇化、公害による環境汚染の進行、発展途上国の爆発的人口増加、軍

事技術の進歩による大規模破壊の脅威など人類の危機を如何にして回避するかを探索することを目的としている。

さて、同クラブが発表している地球の鉱物資源の耐用年数を挙げると次の通りである。

資源	幾何級数的耐用年数指標（年）	現在埋蔵量を五倍にした場合の指標（年）
アルミニウム	三一	五五
クローム	九五	一五四
石炭	一一一	一五〇

コバルト	六〇	一四八
銅	二一	四八
金	九	二九
鉄	九三	一七三
鉛	二一	六四
マンガン	四六	九四
水 銀	一三	四一
モリブデン	三四	六五
天然ガス	二二	四九
ニッケル	五三	九六
石 油	二〇	五〇
プラチナ属	四七	八五
銀	一三	四二
錫	一五	六一
タングステン	二八	七二
亜鉛	一八	五〇

ここで数字のとらえ方について説明すると幾何級数的耐用年数指標とは世界経済の成長が年率七%で進んでおり、そのため資源使用量

は年々加速度が加わり、このテンポで進むと現在地球上で発見されている資源埋蔵量は、アルミは三十一年、金は九年しか持たないとい

うのである。

たとえばクロームの埋蔵量は約七億七千五百万トンといわれ、現在の年間使用量（百八十五万トン）で行くと、そのストックは約四百

二十年間という計算である。ところが世界のクローム消費は年二・六%で増加しているのでこれでいくとわずか九十五年しか持たないと

いうのである。また、下の数字はこの埋蔵量が今後各地で発見されて、仮に五倍に増加したとしても百五十四年で底をつくとい

る。

このようにして百年以上ストックが可能なものは、幾何級数的耐用年数指数では僅かに石炭のみで経済危機をもたらした石油にあって

は後二十年しか持たない事になっている。仮に未発見の石油が現在の五倍程になったとしても五十年で底が尽きるという訳である。

経済の成長が資源ストックを食い潰すということを今日ほど切実な問題としてクローズアップされたことはかつてなかっただろう。化

石燃料に至っては、再生はむずかしく使ってしまう元には戻らないことを知るならば、経済の成長に何等かの規制を加えなければなら

ないことがこの数字からもうかがえる。

ローマ・クラブの数字については各種の見方があるが悲観的すぎるという議論もある。が、しかしストック年数に多少のズレはあった

としても、その事実は無視するわけには行かないだろう。いずれはその時がやって来て代替物を求めなければならない。仮に、技術の進

歩に期待し、代替えによる不足分を補うことを考えたとしても、技術には莫大な資本と労力が必要だし、技術の進歩にも限界があること

を知る必要がある。

技術については、また後で触れるとして、右に見たように、ローマ・クラブの発表によって地球資源の重要性があらためて認識され、

それによって資源ナショナリズムの下地がつくられ、市場は買い手から売り手に、ここ一、二年の間にからりと一変してきたのである。

その代表的指標が既述したようにロイター指数などに表われており、世界をインフレに巻き込みつつあるといえる。



(一九七四年十一月)

資源問題についてもう少し触れてみよう。ここ一、二年の我が国の物価急騰は、戦後経済においても、国際的に見ても異常であったと

いえる。

わが国の場合はこれまで消費物価は上がっても、卸売り物価は比較的安定していた。大企業は生産性の向上によって賃金引き上げを補っ

て来たし、賃金引き上げを価格に転嫁しなくてもやってこられた。

卸売物価が上昇に転じたのは昭和四十七年八月頃からで、翌四十八年八月からは棒上げとなった。四十五年平均に対する上昇率でみる

と、四十八年七月には西ドイツを抜き、十二月にはアメリカ、イギリスを追い越し、先進主要国ではインフレと破産状態に悩むイタリア

に次いだ上昇率となった。消費者物価については、これまで最高のイギリスを抜き、ついにトップにおどり出ている。

いったいこの原因は何なのだろう。

日銀調査によると、ロイター指数の急騰と歩調を合わせて卸売物価指数が上がっているのである。つまり、輸入物価指数と同一歩調で上

がっている。

このほど発表になった経企庁の四十九年版（四十八年度）経済白書も、物価急騰の約六割は、原油をはじめとする一次産品の市況高騰に

よると分析している。残る四割は国内の需給ひっ迫によるとし、賃金の影響はこの時点ではさほど大きくはないと見ている。

これを時期的推移でみると、四十八年一月から三月には、四十七年秋口からはじまった海外一次産品価格の急騰の影響が出はじめ、四十

八年度に入って国内需給のひっ迫が高まり、工場の事故や用水不足で物不足が表面化した。四十八年秋に入るや例の石油危機の発生を契

機として海外要因が再び勢いを増し、国内需給要因としてはインフレ心理が拡大し卸売物価をいっそう持ち上げる原因を作った。

もちろん、この物不足現象は、化学工場等の相次ぐ爆発事故、用水不足だけとはいい切れず、一部商社の買い占めも物価高騰に輪をかけ

ている。

ともあれ、今日の物価高騰の大きな要因は、資源ナショナリズムの台頭によって、もたらされたことは否定できないだろう。そうしてそ

れは、石油危機を契機として、一層顕著になりつつある。

そこでいったい、資源ナショナリズムというものが、どうして、生じてきたかである。すでに述べたように、資源の枯渇にその理由がみ

られるが、資源ナショナリズムは現実的には、巨大な国際資本に対する抵抗として表れて来ているのである。一国の経済の中で、多国籍

企業が占める割合が、国民所得の五〇%、六〇%、否それ以上に昇るようでは、もはや、独立国とはいえず、しかも有限な資源は、使っ

てしまえば、いずれは枯渇し、枯渇後はどうして生活していくか、ということを考えれば、当然、自衛手段に訴えてくるようになる。

企業の国営化、生産調整、輸出の規制、価格の引き上げ等は、これら資源国の残された手段になってくる。

ちなみに、通産省調べによる現在設立されている生産国同盟を挙げてみると次の通りである。

O P E C（石油輸出国機構）加盟国

ベネズエラ、サウジアラビア、イラン、クウェート、カタール、インドネシア、

リビア、アブダビ、アルジェリア、ナイジェリア、エクアドル、イラクの十二カ国

O A P E C (アラブ石油輸出機構) 加盟国

サウジアラビア、クウェート、リビア、イラク、カタール、アブダビ、

アルジェリア、バレーン、シリア、エジプトの十カ国

C I P E C (銅輸出国政府間協議会) 加盟国

チリ、ザイール、ペルー、ザンビアの四カ国

I B A (ボーキサイト生産国機構)

ギアナ、ジャマイカ、シエラレオネ、スリナム、オーストラリア、

ユーゴスラビア、ギニアの七カ国。

U P E B (バナナ輸出国同盟)

パナマ、グアテマラ、ホンジュラス、ニカラグア、コスタリカ、コロンビア、

エクアドルの七カ国。

水銀生産国グループ 加盟国

アルジェリア、スペイン、メキシコ、ユーゴスラビア、トルコ、の五カ国。これにカナダがオブザーバーとして参加している。

このほか鉄鉱石、錫、天然ゴム等の生産国が同盟を結ぶ動きが出ている。

右に見るとおり、その資源産出国はいずれも発展途上国である。しかしその資源はいずれも国際経済のうえで欠くことのできないウェイ

トを占めている。

ところが、これら資源保有国における探鉱生産、消費国への資源供給は、寡占的支配体制を確立している巨大国際資本である。

たとえば銅についてみると、七二年時における自由世界銅鉱石生産の四四・七%はアングロ・アメリカをはじめ、ケネコクト、アサル

コ、ニーモンドといった大国際資本が占めている。

アルミニウムは七一年時で自由世界生産の六八・九%、ニッケルに至っては、七〇年時にインコー社で五三・八も占めている。

いかに、国際資本が、国際経済に占める役割が大きく、資源保有国の不満をもたらしているかが分かる。

ことに発展途上国の経済発展の遅れは、年々開くばかり、いわゆる南北問題が今日、国際経済の上において、大きく立ちはだかつてきた

のも、こうした国際資本の寡占化体制による一国の経済支配が見られるからである。

資源ナショナリズムは、自国が供給する資源を利用して高度成長を遂げている先進諸国に対する不満と反発であり、したがってその資源

をテコとして自国の経済発展をはかろうとする動きを示すのである。

石油をはじめとした産出国同盟は、国際資本の支配から脱皮して、自国の経済自立を図ろうとするものであるが、一方において、これら

の資源価格は、これまでは先進国の景気に支配されて来たので、産出国が同盟を結ぶことによって、そのシェア拡大をはかるというネラ

イもあるわけである。そうすることによって、買手から売手市場に方向を転換し、価格の安定と、自国の経済を有利に導くことが考えら

れてくるわけだ。

資源保有国のこうした動きは、我が国にとっては致命的打撃を与える。我が国は原材料を輸入して、これに加工を施し、付加価値を生み

出し、輸出によって生活している。

輸入材料が高騰すれば、その影響は石油にみられるようにモロにかぶり、価格の高騰、輸出不振につながってくる。

資源ナショナリズムは我が国にとって大きな痛手である。

四十八年度にみられるような動きが今後も続くとすれば、我が国の経済は立ち行かなくなってゆくだろう。我が国の資源は人的資源と勤

労と技術である。この三つの力が、GNPを世界にのし上げた一面の原動力とっていい。

しかし、原材料の高騰によって、インフレが加速されれば、輸出によって支えてきた産業構造は一朝の夢となり果てて行こう。

もっとも資源保有国は我が国の技術を必要とし、自国の利益のみ考えては、これまた経済の安定は期し得ないだろう。

文明は、生活を均等化し、相互の結びつきをいっそう緊密にしてゆくものだ。それだけに何かか少しでも狂うと、全体の機能をマヒさせ

るモロさを持っている。早い話、ガスや電気がとまれば、都会生活は明日にも暗黒と化し、生活の機能はとまってしまう。これと同じよ

うに、世界経済の機能も自国の利益のみでは成り立たなくなっているのだ。

しかし、多国籍企業と国際資本は、こうした機能にこれまで確かに貢献をして来たことは否めないが、次第にその力を増すことによって

自国の制約すら拒否し、どの国にも属さぬ、第三帝国として世界経済を攪乱に導いたことは、これまた見逃せない事実であると言えよ

う。

(一九七四年十二月)

今日の悪性インフレの原因はどこにあるかについて、本誌七月号から十一月号の五回にわたって、大雑把ではあるが見てきた。

その結果、インフレの原因は、さまざまな経済的要因が重なりあって作られてきているが、ここ一、二年のもっとも大きなファクターは

石油をはじめとした輸入原材料の暴騰ということが明らかになった。

そうしてまた、その原材料を騰貴させた遠因はどこにあったかといえ、国際大資本、多国籍企業の弊害がこれらの資材を高騰させる大

きな作用を及ぼしていたことが分かってきた。

つまり、インフレをつくり出している原因は、企業エゴによる利潤追求によるところが大きく、このためインフレを終息させるには、こ

れに何らかの制約または視点を変えた、まったく新しい対策なり、制度なりを考えなければならないことが、うすうす理解されてきたと

思う。

アダム・スミス＝ケインズ方式では、地球はやがて公害にも襲われ、過度のインフレによって、やがて人類の生存すらあやしくなる、と

いうことも感じられてきたと思う。

インフレについてはいろいろなとらえ方があるが、要はその根底に流れるものは人間の欲望の開放であり、それが企業活動に取り入れら

れ、利益の追求、そうして、利益の分捕り合戦が年を追うごとにエスカレートしてきているところにあるわけである。

たとえば企業内についても労働組合の組織化、巨大化によって賃金の引き上げがエスカレートしており、これが物価に八ネ返り、インフ

レを助長している。

近代経済社会は市場メカニズム、価格メカニズムを支柱として動いている。ところが、そのメカニズムの有効性が失われ、価格に信頼性

がなくなってきているところに問題がある。

あるエコノミストは今日のインフレについて、こういう見方をしている。

今日のインフレは大衆組織による民主主義である。組織化された民主主義はどこへ突走るか。それはより多くのパイ(所得)の分捕りに

向かって走り出す。

世界中どこに行っても組織化が行なわれ、自分の所得の増大を狙って戦術を練り、組織力にものをいわせ、相手がきかなければストをや

る。ニューヨークでは巡査のストまで行なわれている。

今日の民主主義の考え方はどこにあるのかといえば、労組も、農民も、教職者も、医師も、自分の欲望を抑えたりすることは、人間性に

背く封建社会的行為であり、欲望の解散こそヒューマニズムの現われとみている。

経営者でも政治家でも、頭の古い連中は反民主的封建的な人間だから、こうした連中は組織にものをいわせ、ひきずり降ろさなければな

らない、というわけだ。

こうして賃上げはとめどもなくエスカレートし、今年の我が国の春闘でも三二・九%という大幅なものとなった。こんなことを毎年くり

返したとすれば、十五年後には一人当たりの年間賃金はゆうに一億円にふくれ上がるだろう。

これではインフレにならないのがおかしいではないか、というのであるが、たしかに、現在の社会は組織化された大衆民主主義であり、

いわば徒党を組んで、自己の欲望を果たそうという動乱の世といえるだろう。

さて、今月は、過度の利益追及によってもたらされる公害の問題について若干触れてみたい。

つまり公害が私たちの生活にどのようにハネ返ってきているか。

一昨年六月、ストックホルムで、国連人間環境会議が開かれ、環境汚染に対して

『人間環境宣言』というものが発表された。

『われわれは、歴史の転回点に到達した。いまやわれわれは、世界中で環境への影響に対しいっそう思慮深い注意をはらいながら行動し

なければならない。無知、無関心であるならばわれわれの生命と福祉が依存する地球上の環境に重大かつ取り返しのつかない害を与える

ことになる』

というもので、環境汚染の問題はこの宣言にもあるように今や重大な局面にまで発展してきているのである。

ローマクラブの報告を参考にしよう。

まず人間にとって欠かすことのできないものはエネルギーである。また富を表わす指標の一つは、一人当たりエネルギー使用量である

が、現在この使用量は年平均に三・四%（人口成長を含めた総量）増加している。

人類の工業用エネルギー生産の九七%は化石燃料（石炭、石油、天然ガス）と使っている。これらの燃料が燃焼されると、他の物質とと

もに大気中に炭酸ガスが放出される。最近では年に約二百億トンの炭酸ガスが化石燃料の燃焼から発生している。

大気中の発生率は年約〇・二%の上昇を示しているので、そのうち半分は大気中に、残りの半分は主として海洋の水面で吸収される。化

石燃料から原子力に変わることがあるとすれば、大気中の炭酸ガスの増加をとめることが可能である。

しかし、エネルギー使用には副次的な影響が出るものであり、これはエネルギーの種類に関係がない。

すなわち、熱力学の法則によれば、人間によって使用されるエネルギーのすべては最終的に熱の形でまき散らされる。この結果、局地的

には放出される熱、あるいは熱汚染が、水棲生物の均衡を破壊する原因となる。

四千平方マイルに及ぶロスアンゼルス盆地に毎年放出される廃熱は、大地に吸収される太陽エネルギーの五%にのぼるといわれる。現

在の成長率でいくと排出熱は西暦二〇〇〇年までに、降りそそぐ太陽エネルギーの一八%に達するものと見込まれている。

一八%というと、普通なら三〇度ですむところが三五・四度に高まることになり、そうなれば河川のプランクトンが死滅し、それを食べ

ている小魚、さらにそれを食べる魚まで死滅してしまうことになる。

現に、海流の流れの弱いバルト海は有機性廃棄物の蓄積が増えた結果、海水中の溶解酸素量は次第に減少し、海底部の海水中には溶解酸

素濃度がゼロとなり、海棲生物が存在することができなくなったと伝えられている。

このほかDDT、水銀、鉛、カドミウム、PCB（ポリ塩化ビフェニール）や放射性廃棄物等も汚染物質として、最大の関心を払ってゆ

かなければならないことは、すでに我が国の公害病患者の続出によっても明らかである。

西暦二〇〇〇年には現在の人口は約七〇億人が見込まれ、これらの人々がアメリカと同程度の高い（一人当たり）GNPを持つとすれば、

環境にかかる総汚染負荷量は、少なくとも現在の十倍になるものとみられる。

そうした場合、地球の自然システムは、このような大規模な攪乱に耐え得るかどうか、甚だ疑問とならざるを得ないわけである。

公害の問題は、これをはっきりとつかめるものもあるが、大部分は大気中に拡散し、それが自然や人体に、将来どのような形で現われて

くるかは、現代化学では未知数である。がしかし、局地的には非常に明確に現れてきていることも事実であり公害問題は、経済の成長に

比例して、ますます大問題になってきているのである。

さて、公害は経済成長に比例して大きくなることは、前述の説明で十分理解ができようし、我々の身近な生活環境をふりかえてみて

も、年々大気は汚染され、地盤は沈下し、水質汚濁もひどくなる一方である。

ローマ・クラブもその点を指摘し、今後これ以上の経済成長は取り返しのつかない危機をはらむと警告しており、経済生活の新しい転換

を求めている。

すなわち、最小の費用で最大の効果を上げようとして、これに企業のエゴが、露骨に、現われ、その結果は地球資源の枯渇をうながし、

公害をまきちらし、インフレをつくり出しているのである。

(一九七五年一月)

四、

これまでインフレ問題、公害の問題を述べて来たので、生産と消費を結ぶ流通問題についてふれてみたい。

というのは流通問題は物価高の最大の原因と見られており、ドラッガー(アメリカの経済学者)をして、流通は経済の暗黒大陸といわし

めているように、学問的にも経済研究の暗黒大陸をなしていると思われるからである。

すなわち近代経済学は、生産こそ価値ある活動とするマルクス経済学から一步も出ておらず、流通問題は未開発の分野といってもいいか

らである。

さて理論的問題はあとにゆずるとして、まず現実的に流通経費が価格に占めるウエイトはどの程度になるかについてみると、たとえば、

カラーテレビの原価はただの二万円、

ウイスキーは三十円にすぎない、また三千円の万年筆がなんと百五十円といわれている。果たして実際にそうなのであろうか。

先日、NHKが牛肉と野菜の産地から小売までの流通マージンについての追跡調査を実況放送していた。その追跡調査の結果はどうだっ

たかというと、正確な資料は何ひとつ集まらず、追跡レポートは全くお手上げの形となった。

牛肉も野菜も産地は過剰生産であり、したがって小売価格は安くなってもよい筈のものだが、一向に下がらず、むしろ値上がり傾向を示

している。

そこで、NHKはどこでどう値がつけられているか、まず産地の声をきき、次に第一次卸、第二次卸、と順

次上がっていった、最後

に小売店で仕入値段をつきとめるわけだが、どこの店にいても誰一人はっきりした数字を示してくれなかった。比較的是っきりしてい

たのは産地側であり、このため産地側の値段と小売価格の幅をみると二・五倍から三倍になっていた。

こうした調査は、経済企画庁、通産省、総理府などでも度々行なっているが、正確な数字はどうしてもつかめない。

そこでその理由についてあげると生活必需品については価格がたえず変動しており、ことに野菜、鮮魚などは毎日ちがう。毎日ちがうか

ら、そのちがった値段で小売価格を決めたらよいと思われるが、仕入れたものが即日全部売れるとはかぎらない。もう一つの理由は卸値

段のように、小売値段を毎日仕入値段に合わせていたら、値段が高くなったときはお客が寄りつかず商売にならなくなってくる。

こうしたことから、仕入値段の高低にもかかわらず、小売値段は一定水準以下には落とせない、ということになってくるようだ。同じよ

うなことは問屋や卸についてもいえてくるし、このため、消費価格は一向に下がらないということになるわけである。

メーカー品についてはあとで述べるが価格の硬直性がみられる。

国際的にみて、我が国の流通機構の特徴をあげると、まずその第一に企業規模の零細性にある。小売業の一店当り従業員数は、昭和四十

七年度で三・四人（全国平均）となって

いる。これがアメリカだと五・三人、イギリス五・一人、西ドイツ五・四人である。

店舗の零細性と店舗数が他国と比べ多いということは流通経費の増大をうながすことになる。ことに人件費が集中的に多くなる。

一方、我が国の場合は中間取引の比重が大きいことである。小売業に対する卸売業の比率を販売額についてみると、アメリカ一・五倍に

対して、日本は三・八倍と大きい。日本の経済機構は問屋を中心に発展してきているので、小売価格に占める流通経費の比重がどうして

も大きくなってくるようである。

その典型的な存在が我が国の総合会社である。すなわち第三の特徴として、一九七〇年の販売額（経済企画庁調査）についてみると、日

本のそれは一〇三・八億ドル、イギリス一〇・六億ドル、オランダ九・五億ドル、イタリア五・二億ドル、フランス三・七億ドルとなり

日本の総合会社の販売の巨大さが目を見張る。

こうした日本の流通機構の特徴は、中進国の階段において、過剰労働力を吸収しながら貿易を発展させ、経済成長をはかって来た歴史的

特徴ともいえる。

しかし、インフレがここまで高進し、消費者物価、卸売価格が世界第一、（イタリアを除く主要五カ国）ということになると、流通経費

を黙って見過ごすわけには行かなくなってくる。

総合会社についてもう少し触れてみると、その機能拡大には貿易の急拡大がある。商品別取扱いシェアをみると、経済企画庁調べで輸入

品四八・四％、輸出品三四・〇％、国内品一三・七％を三井物産など六大商社が扱っている。これが一次産品の輸入になると食糧は約七

五％、大豆約八〇％、主食用大麦七八％という大きさである。五〇％以上にのぼるものは、飼料用大麦、原糖、コーン、マイロにわたっ

ている。このほか、木材、綿花についても三〇％～四八％までが六大商社が受け持っている。

いかに商社の機能が巨大であり、戦後貿易に果たした役割が大きいかがうなづける。

こうしたことから、我が国の総合商社は情報提供の機能、商品、市場開発機能、需給調節機能などを持つように、産業構造の変化のなか

でシステムオルガナイザーとしての役を果たしているといえる。

商社の役割としてもう一つ見逃せないことは、投融資機能の拡大と、リスクの増大に対する負担をあげることができる。

上場千五百二十八社の内、六大商社が特殊順位十位迄占めている企業数はなんと五百八十八社、つまり三八・五％に達し、また対外投資

件数のうち三七・一％（六百五十八社）は六大商社が関係している。

国内関係の子会社数は実に六百七十四社に及んでいる。

こうしたことから投資収益についてみると、商社の資金コストは、製造業をやや下回るといわれるが、投融資利回り水準は製造業をはか

るに上回っているといわれている。

四十七年後半以降、四十八年度にかけて、流通過程における投機的行為が目立つようになった。

買占、売り惜しみが生活必需品にまで集中したため、国民生活全体に大きな影響を与えることになった。

自由経済下にあっては、投機機能が果たす役割を無視することは出来ないが、企業の目的が利潤の追及をめざす以上は、どうしても行き

過ぎてしまうことになる。

資本と企業の行き着くところは、さきに国際資本、多国籍企業にみたように、その弊害はさけられない。

ここへ来て、石油暴騰による世界経済の混乱に乗じて国際石油資本、いわゆるメジャーが巨額の利益を得ているということで、ようや

く、国際世論が高まって来ているが、こうした流通機能は一方において巨額の利益をもたらし、他方においてさまざまな弊害を与え

ずにはおかない、という矛盾を含んでいる。

何れにせよ、流通経費をいかにして節約するかということで、これまでメーカーによる小売店の系列化（家電、医薬品、化粧品など）次

に、総合スーパー、レギュラー、チェーンなどの流通機構内部の組織化、第三には包装技術の向上、コンテナ輸送の拡大、在庫管理技術

の向上、高速道路網、港湾施設の整備など、流通機構の短絡化がとりあげられてきた。

しかし、こうした努力にも拘わらず、反面において、市場の硬直化を招き、系列化の過程ではメーカーの影響力が強まり、価格は一向に

下がらないという結果になった。

たとえば、メーカー系列下では販売競争は価格競争という形ではなく、リベート競争、マージン率競争という形となって現れた。

販売額を上げるためには、小売店のマージン、リベートなどの販売奨励を進めるため、最終末端価格は上げることがあっても下げるわけ

にはゆかないし、したがって価格維持協力金、早期支払に対する報酬といったものまでメーカーは負担せざるを得なくなったからだ。

（一九七五年二月）

医薬品の再販制度は市場価格の硬直性を示すよい例である。たとえば、メーカーの販売促進費は同制度を採ることによって大巾にふえて

いる。開発銀行の資料によると、薬品メーカーの販売促進費は昭和四十年で約百六十億だったものが、四十九年度では実に五百億円に

も達している。

メーカーが小売店を系列化することによって、流通経費の負担を軽くすると考えられたことが実際には販売奨励のための諸経費に食わ

れ、その効果はさっぱり上がらなかった。

一方、すでに記述したように、零細過多の小売店が欧米のそれより多いということ、すなわち我が国の小売店数は約百三十九万店。販売

規模も小さく、賃金高騰の今日では、小売商の生産性の低さはマージン率の上昇につながってゆく。

他方、総合商社を代表とする問屋機構の存在は、流通経費を押し上げる事はあっても、下げる素地を減殺している。

話は変わるが、今から十六年ほど前に「流通革命」という言葉が叫ばれ、通産省、運輸省、建設省共管でこの問題が大々的に取り上げら

れた。

すなわち、流通機構の短絡化ということから、コンテナ輸送の拡大、包装技術の向上、パレットのプール化、高速道路網の拡大、港湾施

設導入が進められた。

コンテナ輸送はまず国鉄が採用し、ずっとあとになって海上コンテナが出現した。コンテナ輸送は肩荷役を機械化するので、人件費の大

巾な節約となる。それまでの鉄道貨物輸送は積荷、積卸しはすべて労働者の肩荷役に頼っていた。所得倍増による政府のかけ声によって

人件費はうなぎ登りにのぼったので、コンテナの採用は流通経費の節減に大きな期待が持たれた。海上コンテナはアメリカのベトナム軍

事輸送に効果を上げたことから、我が国もこれを採用することになったもので、港湾整備は海上コンテナ輸送に呼応して整備されていっ

た。

こうした施策によって、それでは流通費用はどれほど節約になったか。つまり、消費者価格引き下げにどれだけ寄与したかである。消費

者物価の趨勢をみるかぎり、少しも下げていないのである。全国平均の消費者物価はこの十年間で、年平均すると、約八%の割合で上

がり放しである。下がったことは一度もない。

なぜ下らないのだろうか。流通機構の機械化によって、こうした輸送業者が利益を一人占めしたのだろうか。事実はそのではなく、ひと度

はじまった機械化の導入は連鎖的に次から次へと相次いで起こり、減価償却がまだ完全に終わらないのに新機械を購入しなければならない

状況におかれたからであった。したがって、人件費は大巾に減ったが、設備投資に大量の資金が必要となった。輸送経費を下げるどころ

ではなかったのである。

もっとも輸送の機械化によって、大量の貨物の荷さばきが可能になったことが、流通革命の救いといえはいえようが、それもホンの一時

であって、交通の渋滞によって末端の輸送効率は年々下がる一方であった。レール輸送、海上輸送は合理化されても、これでは流通経費

は上がることはあっても下がることにはつながらないといえる。

近代文明は化学に裏打ちされた技術導入による合理化の上に立っている。が、この技術こそ、多くの問題をふくんでいることを知るべき

だろう。すなわち、資本と技術の関係を明らかにする事によって、近代文明の矛盾が浮彫りにされてこよう。同時に、この問題は、近代

人を支えている思想にも大きく関係してくる問題であり、今日の危機は、経済の危機というより、むしろ思想の危機である事をまず知る

必要があるだろう。この問題は、またあとで詳しく述べることにしたい。

さて、本題に戻って、流通のムダが価格上昇につながることは否定できない。といて生産と消費をつなぐ流通機構を抜きにした経済機

構を考えることはできない。近代経済は生産の集中、大量化を促がす。しかし反面、消費は分散少量化である。この二つを結ぶ接点は流

通であり、したがって、その大部分の商品は生産、流通、消費という過程を通らざるを得ない。

この意味において、いわゆる卸売機構というものは、なくなる。今日のように、多様な商品が出回ってくると、卸売機能はますます

必要になってこよう。

問屋無用論は物価がハネ上がると叫ぶが、集荷と分荷という問屋機能は、大量生産と分散少量消費という図式の下では、これをさけて通

ることは絶対にできない。仮りに問屋を素通りして、メーカーと小売店を直結したとしても、この両者のどちらかが、集荷と分荷機能を

持たなければ経済運営は円滑にゆかないからだ。既にみてきたように、メーカーによる小売店の系列化によって、流通費用が削減できた

かということ、事実はその反対であった。また問屋機能はメーカーが受け持ち、ここでも無用論は通らなかった。

そこで大雑把ではあるが制度面からみた問題の一つは、多段階卸売機構であり、これは我が国の特徴といえるようだ。つまり、集荷のた

めにまず産地問屋があり、中継問屋があり、分荷のための一次卸、二次卸、三次卸というように分かれている。当然、そうした問屋の手

を経れば数パーセントのマージンが含まれ、流通経路が複雑になれば、消費価格にそれが含まれることになる。

欧米のそれは、我が国のような多段階による卸売機構はないようである。前月号でもみてきたように、比較的多いと思われるイギリスの

商社の販売額でさえ我が国の商社の一〇分の一である。卸売業者の取引は少なく、製造業者から小売業者が直接商品を買って商売をして

いる。また、欧米では電話で注文を取ったり、倉庫、輸送なども合理化されていると聞く。我が国の場合は多くの従業員をかかえ、人海

戦術で商売をしている。

生協活動がふえてきたのは、こうした流通機構に問題が多いからである。

第二の点は、流通機構は物を中心とする生産に比べて、多くの人間の組み合わせによって動いていることである。そのために問題を非常

にむずかしくしている。

欧米がそうだから我が国もそれにならえといっても、流通分野における制度、慣習、市場の条件、生産の形態、構造のちがいを一挙にひ

っくりかえすわけにはゆかない。実際には、長い時間をかけねばならないようだ。

メーカーによるマーケティング活動が活発となり、メーカーが直接販売活動に入ってきたのは昭和三十五年頃からであった。アメリカ

式の大量生産、大量消費を目標に、「消費者は王様」「消費は美德」ということでその活動が始まった。マーケティング活動の前提

は 製品の差別化、特徴化 大量広告 流通の系列化にある。 のそれは卸、小売をメーカーの支配化におき、他社との

競争をさげ、専売による利益をめざした。自動車、家電、化粧品など巨大メーカーは、これによって莫大な利益をあげた。マーケティング

はこのため、寡占価格を生み、消費者の力が及ばないところで価格形成が行なわれた。アメリカ式のそれは合理的で一見いいようだ

が、市場条件がせばまり、独占価格を生むことになる。流通経費を下げようにも下がらない。こうした意味で、いちがいに日本の流通機

構はムダが多い。アメリカ式がいいとはいいい切れないものがある。流通費用節減には、流通機構の合理化をめざさなければならないが、

問題はやはり人間になってくる流通は経済制度が社会化、計画化されても無くならないし、無くすことは出来ない。

結局この分野で働く人々の、ものの考え方に大きく左右されてこよう。

今日の不況下のインフレが、経済的には石油危機を背景とした点では疑う余地がないのだが、経済を動かす者は誰かというとはかならぬ

人間である。したがって、人間自身が変わらない事には、インフレも、デフレもさけて通れない。ことに、資本主義、自由主義の社会に

あっては、その振幅はまことに大きく揺れ動くことになるのである。

(一九七五年三月)

五、

これまでインフレ問題を通して、現実の経済社会の姿と、その歪について、簡単ではあるが見てきたので、こんどは少し角度をかえ、近

代社会の思想的背景と現代経済社会の仕組みについて、概観してみることにしよう。

まず古代社会は、王が支配権を握っていた。メソポタミヤ文明、エジプト文明、エーゲ文明、ギリシャ文明.....、そして、今世紀に入っ

てローマ帝国とつづく。

中世社会にはいると、王から神が支配権を持つに至る。この場合の神は、神の名を借りた絶対的権力である。

近代社会はどうかというと、産業革命、市民革命によって神から個人が支配者となる。自由、平等の名の下に、個人はようやく周囲の束

縛から解放される。何をするのも自由であり、人は人、自分は自分である。現代はまさに、この自由主義、個人主義、民主主義の世であ

る。

ここ四、五千年の人類の歩みは、大きく分けて以上の三段階に区分できるようである。

さてそこで、近代社会の考えは右に見るように、個人が支配権を握っている。つまり何をするのも個人の自由であり、個人を侵す者は、

国家といえども、罪悪と見られている。我が国の憲法は、いわゆる自由憲法ともいわれ、国民の権利主義については最大限、個人の自由

を保証している。明治憲法と比べると、まるで月とスッポンほどの相違である。世界でもマレにみる自由憲法であり、国民にとって、あ

る意味では、これほど恵まれた国はないといえよう。

では、この自由思想の考え方は、どこにあるかというと、近代は信仰から悟性の解放をもって始まる、いわゆる、合理主義がその根底に

流れている。

悟性とは一口にいうと、人間の感覚にもとづく概念の働きである。いふなれば思慮分別である。悟性の働きを基本として、神も国家も侵

し得ない個人が確立する。すなわち、AはAであってBではない。BもまたBであってAではない。AはAであり、BはBであるという

のが、その考え方だ。これをもっと平たく言うと、あなたはあなた、わたしはわたし。あなたが何をしようと、わたしの知った事ではな

い。これが今日の民主主義なのだ。しかし、Aが生きるためにはBとの関係がなければAは生きられないし、Bもまた生きて行くことが

できない。この思想が経済に向けられると、分業、交換が必要となり、市場が生まれてくる。市場は、価格で売買されるが、価格は需要

と供給の関係で決まる。一方、人と人との関係は、契約によって結ばれ、利害が相反すれば、その契約はいつでも破棄される。この合理

主義は、あらゆる面に顔を出しており、今日の民主主義の母胎を成している。

人間から思慮分別を抜きとったら気違いである。よくある盲信、狂信になってしまう。したがって思慮分別が悪いのではない。問題は、

感覚から得た思慮分別だけが、人間だというところに問題がある。

思慮分別だけで、人生が思う通りに行った、という人がもしあったら、お目にかかりたい。思慮分別程、実は、当てに出来て、当てにで

ないものはないからである。

向こうから自動車が走ってきた。危ないからさけようとする。ところが、その自動車がさけた方に突っ込んできた大怪我をした。

子供が高いところから誤って下に落ちた。大抵なら即死のはずが、傷一つ負わずに済んだ、という例は枚挙にいとまがない。

このように、人間には悟性だけでは計れない作用が働いており、その作用は、それぞれの生活態度、とくに心の在り方によって、よくも

悪くも働くのである。まず、このことを胸に収めて欲しい。

個人が支配者とは個人の自由をいっているわけだが、その自由が悟性によって人間関係まで延長すると、問題が出てくるのである。つま

り、心と肉体はその機能するところは、心の在り方で大分ちがうということだ。

元来、自由であるものは各人の心しかない。肉体は不自由にできている。本当は肉体も自由になるのだが.....。肉体が不自由だという認

識は、人間には心の自由があるので、それでわかるのだ。また、人間は自由だという考えも心が内在しているから、そう思うわけであ

る。

例えば、どこどこへ行ってみたいと心は思う。すると心はもう既にそこへ飛んでいる。飛んでいないと思うのは、肉体があるからであ

る。ところが、肉体をそこまで行かせるには、歩くか、電車や自動車、飛行機に乗らないと行けない。つまり、肉体を物理的にそこへ運

ばないと、目的の場所に行けない。まことに不便なものである。

これに対し心はなんでも思えるし、創造も自由だ。心は、さまざまな夢を描き、その夢の中に、自分を置くことだってできる。このよう

な能力は人間を置いてほかにない。

思うこと、念ずることが自由なので、人はさまざまなクセを持つことになる。これを業ともいうし、カルマとも言う。その業に自分が翻

弄されてくると、何でも思える自由が、こんどは思えなくなってくる。つまり、ある小さな枠内でしか、ものと思えず、考えられず、次

第に、いら立つようになってくる。心の中が悶々としてくると、ノイローゼ、精神病に発展してくる。

ものに執着すると心が小さくなり、執着から離れると大きくなる。思うことの一念の針を、自分本位に置くと、小さな自分になる。他を

生かし、助け合う関係の中に自分を見出すと大きくなる。

このように自由とは、思うこと、念ずることの自由性にあるのだが、本来の意味はもっと次元が高いものなのだ。

思うこと、念ずることは、普通は肉体という五官（眼、耳、鼻、舌、身）を通して発展する。通常これを一〇%の意識活動という。とこ

ろが、私たち人間は、肉体という五官を持つ以前に、個の魂として、次元のちがった世界で生活している。この時の自分は、この世の肉

体はない。魂の自由性に、すぐさま対応できる光子体というボディーを持ち、どこへでも飛んで行ける。銀河系宇宙の地球以外の他の天

体にも行けるし、素粒子の世界をも覗くことができる。これを三次元的（この世的）にいうと、私たちの心は、宇宙大の広がりを持って

おり、したがって、地球内の出来事、宇宙の生成が、手に取るように分かる、ということなのだ。この活動を、潜在された九〇%の意識

活動ともいう。

人の心～魂というものは、このように偉大であり、しかも大きく広い。

各人の心というものは神の精（エネルギー）を受け入れる器であるが、魂とは、そのエネルギーを消化している意識であり、個性であ

る。

各人の心は神と直結しているので、大宇宙につながり、それはまた大宇宙だといえるのだ。

これを別な見方で説明すると、大宇宙の空間は、いつ果てるともないエネルギーが充満している各人の心であり、その空間に点在する地

球を含めた星々が、個性ある魂、つまり現れの各人ということになるだろう。

身近な例で説明すると、三十七億の人類は現れの世界では別々な顔、形をしているが、心は一つに結ばれている、ということだ。

ここまでくれば、こころと肉体の関係が、どういうものかわかりだろう。

肉体の自由を求めて、各人が勝手な行動をとれば、一つに結ばれている心の機能がはたせなくなり、自由を求めていながら、いよいよ不

自由（病気、災害...）になるということだ。

各人の心は自由であり、宇宙大であり、一つであるものが、五官による一〇%の意識活動に翻弄され、肉体の自

由を主張すると、この地

上は混乱に輪をかけることになる。

今日の民主主義、自由主義の考えは、いわば理性というもう一人の人間と、悟性の人間が入り交ざっているのだ。

(一九七五年四月)

神から離れた人間の主体性、そして、自由の主張、自由意思、自由な行動というものは一見、正当のようだが、正当ではないのだ。人間

は神から離れようとしても離れることはできない。なんとなれば人間は神の子であり、神の庭で生活するものであるからだ。

現代人は神という言葉に非常に嫌う。また、神というと、いかにも、保守的な頑迷固ろうな人間が想像され、そういう言葉を吐くとさげ

すまれ、劣等感さえ感じさせてしまう。まことに困ったものである。

神という言葉にどれほど嫌悪感をいだこうとも、私達は神から離れることはできないのだ。神は、この大自然を創造され、私たちはその

創造物の中で生かされているのだから、どんなに自己を主張しても、主張しきれるものではないからだ。ビルを建て、鉄道を敷き飛行機

を空中に飛ばしたとしても、これらはすべて自然という神の体を借りて可能にしたものであり、自然から一步も外にはみ出したものでは

ない。大宇宙からみた人間の小さいことと云ったら、お話にならない。人間は肉体的自我を主張すればするほど小さくなる。何故なら、

「もの」には限界があるからである。地球全体を自分のものにしたとしても、太陽から見れば九の惑星の一つにしか過ぎない。地球の衛

星の月まで独占してもまだ小さい。「もの」を独り占めしているうちに、肉体の方が老朽化してこよう。肉体の方はいつまでも生きつつ

けることは出来ない。彼の欲望の根底には、肉体や物がすべてであるのだから、肉体が減びる死とともにすべてを失う事になる。これほ

ど無意味な、これほど無価値な人生はないだろう。

悟性という言葉は神から独立した人間であり、主体性のある自由人を指しているが、感覚の人間、思慮分別の人間が、どうして悟性とい

われるのだろう。悟性の意味合いからして、悟性は知性に繋がり、悟性は知性の働きであるとして、近代は知性を駆使した科学文明が発

達する事になる。二十世紀の文明は、まさに化学の非常な躍進を遂げた人類史上、希にみる唯物思想中心の社会であり、自由を謳歌した

物質文明の世紀といえるだろう。

悟りについてはいろいろな解釈があるが、悟りの最高の境地は神を知ることであり、神と人間が表裏をなしたことを意味する。つまり、

感覚だけの人間が、内在する神性を認識することによって、神と一体となることである。ここに至って、人は、はじめて、主体性ある自

分に復活し、神の自由性を発揮することが可能になる。悟性とは、本来、そうした意味だったのではないだろうか。

ところが、中世から近代にそうして近代社会の悟性の在り方をみると、神から独立した人間、神から拘束されない自由人、人間の知恵に

よる化学文明へと発展する。歴史の進み具合から見て、また、今日知性派と自称する人々の行動をみても、神という言葉嫌い、神から

独立した人間こそが、人間らしい人間、ヒューマンな人間像としてとらえられている。人間は善と悪とがまざりあい、喜怒哀楽の人生こ

そが人間らしい生き方であり、そこには、親しみと、人間臭さ、人間としてのふくらみ、豊かさがあるとみられてきた。したがって、イ

エスやモーゼは人間ではなく、また、釈迦も神話の中の人間であり、人間が求める人間ではないとする。ひどいものになると、これらの人

々は架空の人物であり、想像上の人物という者さえある始末である。

感覚や趣向、感情、そして、自分の知識の枠内でしかものを見ない、ものをとらえようとしない、また、そうしたクセや生き方を是認す

るのが、現代人の姿であり、今日いう悟性の人間なのであろう。悟性の人間は、自由があるようで自由が無い、主体性があるようで主体

性がないのだ。

現に、悟性にもとづく資本主義社会は手詰りをきたしているのではないか。個人の自由を解放しながら個人の自由はえられず、その自由を

得るために、今日では徒党を組んで行動を起こすようになっている。何々組合、何々運動、何々団体……。世界を見ても、大きくは東西

両陣営ブロックにわかれている。第三勢力として中国の出現、さらには西欧諸国にみられる経済ブロックの結末、石油産出国による団

結、資源国同士の連盟というように、個人の自由は、利害が一致する者同士が手を取り合い、要求することによって、達成される、とい

う風になってきている。

悟性は、感覚的な思慮分別にもとづくものだから、個人の自由、個人の主体性は当然、欲望の解放をもって、まず始まるだろう。欲望の

最短距離にあるものは、ほかならぬ肉体の維持であり、生きることであり、生きるためには、経済的欲望がなによりもまして優先されな

ければならないだろう。

こうして近代社会は経済を主軸に、経済を中心に動かざるを得なくなっている。また、感覚的、肉体的自由、肉体的な主体性を持つ為に

は、経済的豊かさがなければならない。経済の豊かさが、悟性にもとづく自由を約束し、人権の確立、主体性が維持されることになる。

現代の資本主義、自由主義は、こうして、悟性の解放、欲望の解放をもって幕が開かれ、化学技術の進歩をうながしてきたのである。

しかし、前述のように、物には限界があり、物は有限であり、そうした中であって、人々が、より経済的豊かさを求め、自由を求め、要

求が激しくなってくると、利害の衝突が至るところでみられるようになる。一人の力より多数の力を結集するしか、個人の自由は期待で

きなくなってくる。

こうして、国内だけではなく、世界の至るところで、経済ブロックが形成され、一つのパイをめぐる、たがいに相手をけん制し、力で

奪いあう、という形になってきているのである。

前月号でもふれたように、人間の自由性は各人の心にしかない。自由を求めて、肉体的自由、欲望の自由はいくら求めても得られるもの

ではない。

また、自己の主体性を求めて心が外に志向すると、外界の動きに常に心が翻弄され、主体性の確立どころではなくなってくる。現代人を

みれば、自分をふりかえれば、この点是一目瞭然である。

くりかえすようだが、人間の自由性は心の中であって、その主体性も、心に内在されている。

しかし、この点について、人は疑問をいだくにちがいない。神が総てであるとすれば、人間が自分の神性を発見できたとしても、そこ

に、どうして人間の自由があるのか。

また、神がすべてであり、人間は神の子であるとすれば、人間の主体性は論理的にも、実際的にも確立できる道理がない。また、神のふ

ところ深くはいつている人間には、自由も、主体性もあり得ないではないか、と反問されよう。

こうした反問は、知性による反問であり、心を知らないがために起こる疑問である。まさしく、世に言う悟性の働きしか、心が働いてい

ない証拠だ。

神は法の中にあるのだ。したがって宇宙の秩序が神であり、実在の証である。

人間が神性の自分を発見したとき、つまり、神を見たとき、悟ったとき、人間は法と共に在ることを認識し、その法を行使することが可

能になるのだ。

モーゼの現象、イエスの奇跡、そして、ブッダの偉大なる慈悲は、すべて、法の行使であった。

解脱とは、人間にまつわるさまざまな緊縛から遠離し、法とともに生き、法の行使者になったことを意味する。

だから、現実の物理現象を超えた現象、奇跡が行使できるのである。

人間は、ここに至って、初めて、真の自由人となり、真に主体性が確立されたことになるのである。

(一九七五年五月)

現代人の精神的方向は既に述べたように、個人の自由主体性の確立などという理念はどうやら忘れられてしまい、個人は、単に組織や団

体の細胞と化してしまっているというのが現状であろう。自由の目的、自由の理念が、もともと人間の神性にもとづくそれではなく、神

から離れた独立した人間、欲望につながる悟性を出発点としているために、こうならざるを得なかったといえるのではないだろうか。

個人の主権確立の思想は、まず一六八〇年、イギリスの人身保護法や個人たちの商品売買の自由の主張によってはじまっている。その後

一六九〇年、ロック（イギリス）による「社会契約説」が発表され注目を浴びる。これの影響をうけて、一七〇七年にイギリスに織布工

組合というものがつくられ、労働者の主張がはじめて認められる。これは今日の労働組合の先駆をなしている。この年の五年ほど前、我が

国では元禄十五年を迎えており、赤穂浪士の吉良邸討入りで太平の世につむじ風を巻き起こす。権力に抗してよくやったということから

庶民の間でヤンヤの喝采を浴びた。イギリス人とくらべると、当時の日本人の意識の程度がわかるといえよう。

ヨーロッパにおける市民的自由の思想運動は、一七八九年におこったフランス革命、それと同じ年のアメリカ合衆国憲法の制定によっ

て、ようやく定まってくる。アダム・スミスの「国富論」はフランス革命前の一七七〇年に完成している。同じくイギリスから一七九〇

年、ベンサムが「道徳の原理」を発表し、「最大多数の最大幸福」という道徳原理、経済的自由主義、代議制が唱えられ。理論的にも実

際的にも、自由主義、資本主義の時代へと突入して行く。

むろん、放任経済にはさまざまな矛盾が露呈され、労働組合の強化、巨大化に伴って、実質的には社会改良主義へと変わってくる。

しかし、自由主義思想は現代においても生きつづけており、また、社会改良主義とはいえ、アダム・スミスの自由競争の原理は、ヨーロッパ、日本など、いわゆる先進諸国の経済活動の基礎的原理をなしており、そうして二十世紀に入って、ケインズの管理通貨制度によ

って、その原理を生かしながら今日に至っていることは余りにも明白な事実である。

ロックの「人間悟性論」は物質文明の先鞭となったが、これまで記述してきたように、人間自由論の背景にはさまざまな矛盾と問題をは

らんでいる。封建制度の束縛から離れた人間は、否応なしに自分の身を守るための生活活動が優先され、経済活動が中心をなしてくる。

今日の自由経済社会の危機は、とりもなおさず自由主義思想の危機でもあり、人間の基本的な在り方を問いた

いえる。そしてそれは同時に、経済活動の在りかたにもつながってこざるを得ないわけである。

二十世紀は科学時代といわれる。神から離れた人間の関心は、自然界に大きく眼をひらいてゆく。それまでの人間は、自然は神であり、

自然にさからうことは神の怒りにふれることであり、地震や雷鳴は神の怒りと考えたわけである。ところが、神から離れた自由人は、自

然界のさまざまな不思議に敢然と立ち向かい、冒険と、新しい発見を次々となしてゆく。人間は自然界に挑戦し、自然を征服することに

よって豊かな生活が期待できると夢見る。人類の進歩は自然との対決にあって、自然を恐れては何も為しえないと考えたわけだ。

こうしてそれまで哲学の範疇に入っていた自然科学は、物理学、化学、生物学という学問に分科し、物理学はさらに、地球物理、宇宙物

理、原子物理と分科してゆく。

化学は自然界の法則の発見にある。自然界の複雑な相互作用はこれを一つ一つ分離し、単純化しないと、法則の発見は非常にむずかしい

ものとなる。悟性の働きは人間の感覚が基礎である。したがって感覚の整理は、ものを単純化、細分化することによって、はじめて可能

となる。宇宙全体を一つの運動の場と見るいわゆる直観的な思惟とは明らかに相入れない思考作用である。こうして今日の化学は悟性

の働きの下に単純化、細分化されてきた。

自然界を取り巻く生態的な作用を、一つ一つ分離し、そこにまつわる法則を発見することによって非常な発展を

遂げる。すなわち、さま

ざまな自然法則を人間が希望するように組み替え組み立てることによって、人間社会に貢献するようになる。つまり技術の進歩である。

科学が科学のままでは何の意味もない。科学が技術に結びついて、人間社会に貢献することによって、はじめて大きな意味を持つてく

る。

電気の発見によって電灯が考えられ、夜の不自由さが解消される。空気抵抗を利用して空飛ぶ鳥と同じように、人間も空を飛ぶことので

きる飛行機が発明される。蒸気の圧力を利用して蒸気機関が発明され、人々は労せずして遠くまで行けるようになった。

産業の発達、科学が発見した法則を利用し、これを組み立てる技術によって、前進した。今日の大量生産方式は科学技術の非常な進展

に伴って発展して来たわけだ。人々が欲する物を大量に供給することが産業の発展と豊かな生活へと導いてくれる。

だが、ひとたびはじめた技術の導入は次の新しい技術の導入へとつながってくる。新技術を次から次と受け入れてゆかなければ、市場

は飽和点に達し、企業活動は行き詰まってしまうからだ。

話は変わるが、まず最初に大量生産方式がとられたのはイギリスの繊維企業である。好況時にはどの企業よりも利益をあげたが、不況の

嵐が吹きまくると、こんどはどの産業よりも甚大な影響を受けた。大量生産は物を安価に大量に供給する方式としては欠かせないものだ

が、製品がひとたび行きわたると、過剰生産に陥り、その反動は恐ろしいほどのみじめさで襲ってくる。

このため、今日の生産方式はいわば技術革新に裏付けされた新製品を次々と市場に送り出すことによって、維持されてきたわけである。

過去十五年ほどの我が国の産業の歩みは、まさに技術革新の掛け声の下に高度経済成長を維持し、推進して来たといってもいいだろう。

しかし、大量生産はイギリスの組織企業の例にみたように、やはり行きつくところはそれに対する反動である。技術革新によって、企業

はその好況をいわば半永久的に持続することが可能とみられてきたが、実際にやってみると、やはり問題を先に持ち越してゆくに過ぎな

いことがわかったようである。

日本の高度経済成長の秘密は大量生産による過剰生産を技術革新でこれを補い、消費をふやす市場開発がこれと併行して推し進められて

きたためである。

生産のために必要な物は機械である。機械はひとたび購入すればその対用年数は五年、十年の長期にわたる。企

業はその期間内に購入し

た機械の償却費を出し、利益を上げねばならない。しかし、五年、十年で償却し、新機械を購入しては他の競争社会に先を越されて

しまう。さらに前述のように、半永久的に需要を喚起して行くには新技術による新機械の購入を早め新製品を市場に送り出して行かなければ

ならない。こうして、先に購入した機械の償却がまだすまないうちに、企業は新機械の導入を図って行く。新機械は前の機械より、よ

り大量の生産を促し、高度になってこよう。それでなければ企業の採算がとれないからだ。

こうして、生産された商品は、こんどは消費者の欲望を刺激させて、これを消費させるため、市場開発の名の下に企業はあらゆる宣伝戦

を展開する。既に述べたように消費のための生産ではなく、生産のための消費に変わっていった。

労働生産性は新機械のたび重なる購入によって、確かに上がってくるが、新機械を購入する資金事情はいつも逼迫している。企業資金は

株式市場を通じて行なわれるが、大量の資金は金融機関を通じないとうまくゆかない。



(一九七五年六月)

日本の大企業の平均的自己資金は先般、通産省がはじき出した計算によると、土地を再評価しても二七%程度といわれる。再評価しない

以前では十六%程度である。アメリカの五〇%、六〇%にくらべるといかに低いかがわかる。したがって企業は借金経営という不安定な

状況下に常におかれており、自転車操業的な経営をつづけなければやってゆけないのが実情になっている。技術革新は半永久的な需要喚

起にその目的があったようだが、経営をつづけるうちに、それは一種の麻薬となり、借金経営は慢性的となってくる。いつ倒産に追いこ

まれるかわからないというのが企業の実情であろう。この一年間に、あの会社がといわれる老舗がいくつも倒産の憂目をみているのも、

単に、経営者の責任と一口では片付けられない何かがあるようである。

こうみてくると、技術革新は拡大生産を促す一方で、経営はいよいよ不安定になってくる。うまく時流に乗り利益を上げた者は次の手を

打つ機会をつかむが、大部分の企業は薄氷を踏む自転車操業に追い立てられ、五年先すら見通すことが困難という状況下におかれてい

る。こうして各企業は借金経営を余儀なくされ、借金の返済には常に新しい技術と新製品によって、新規需要を開拓せざるを得ないわけ

である。

石油ショック以前の町の騒音を考えて欲しい。そして、人々のいそがしく立ち働くさまを考えて欲しい。何がそうさせるのか、何でそん

なに人々は忙しく立ち働かなければならないのか。新しい商品が次から次と生産され、消費者の心も休まる暇とてない。レジャーといっ

ても家族連れで郊外に出ても、人、人、人の渦で、レジャーどころのさわぎではない。行きも帰りも満員電車でゆられ、家に戻ったとき

は、子供も大人もクタクタである。電車が混むから今度は自動車をとっても、高速道路で低速、と道路は車が満員なので、歩く方がま

だ早いという皮肉な現象が至る所で起こっている。

戦前の十年は、今日では一年にも相当する。つまり、すべてが、それだけテンポを早めて回転している。人の心も、物も、昨日の流行

は、今日では掃き溜めに捨てられる運命にある。事実、この百年間の我が国の経済成長のあとをふりかえると、この十年間の生産高は過

去九十年間のそれに匹敵するほどのテンポで進んできたのである。つまり、九十年間かけて成したものを、わずか十年間でそれを成し遂

げているのだ。機械化が進んでいるのでそれだけ生産力も拡大されているわけだが、しかしそれだけ人々は多忙な毎日を送らざるを得な

くなっているわけである。

大量生産、技術革新、永久需要の喚起を裏で支えているものは、何かといえば、資金である。金である。金には金利がついてまわる。ケ

インズは金利生活者を憎み、その資金を利用して、のうのうと生活している金利生活者の金を何とか働く者にも回したいと考え、いわゆ

る管理通貨制度というものを考え出したが、どんな制度も法律も抜け道はあるものであって、今日では金融機関がそれをやっている。借

金経営の企業は、借金返済のために忙しく立ち働かなければやってゆけないのだ。自由企業は必然的に資本を中心とした経営つまり、資

本主義になっていく。資本主義とはよくいったものである。資本主義とは文字通り「金のため」であり、人々は金の奴隷となって、その

身を縮めている。

アメリカと日本では国民の気質もちがうし、習慣もちがう。国民の蓄財傾向は、我が国は、世界でも一番高い。このため、資金事情が潤

沢であり、ひと頃は潤沢な貯金があるため、金利も安く、企業はその安い金利を使って、企業活動を伸ばすことができた。高度成長

を裏で支えてきたものは、こうした潤沢な資金事情であった。したがって、アメリカ企業の自己資金比率をみて、日本企業の経営状況を

一概に云々できないが、しかし戦後の傾向は、戦前には全くみられなかった特徴であり、しかも借金はあくまで借金であり、不健全経営

であることは間違いない。企業がつまづけば、多くの債権者が泣くことにもなる。したがってアメリカ企業にみられるような自己資金比

率が少なくとも、五〇%程度になっていることが好ましい。ところが、前述のように、八四%も借金を背負うようではこれまさに綱渡り

経営といってもいいだろう。

話を前に戻して、拡大生産にはその原型であるイギリスの繊維産業にみられたように、やはり、行き着くところはそれに対する反動であ

る。技術革新によって、いわば半永久的な需要喚起をめざした高度成長も、問題を先に持ち越してゆくに過ぎないのである。反動は石油

ショックによってまず現れた。そうして、これによって、無限とみられた地球資源が有限であったこと。第二に、自由競争によって、公

害問題はどうしてもさけて通ることができないこと。第三には、産業の無制限な拡大はそれ自体不可能なこと。第四に需要の連続的な喚

起は、やがて、人間の精神生活を破壊することなどが挙げられる。

こうして、今や自由思想にもとづく、資本主義経済のさまざまな矛盾が露呈されてきたが、それにはまず我々は、自由思想そのものにつ

いて、そして人間とは何かについて、ここであらためて、問い質す必要があるのである。我々はあまりにも経済のドレイになり過ぎてき

た。それは、これまでの自由思想そのものが悟性にもとづくそれであったがため、社会の機構、組織、法律、その他の考え方が、これに

準じて進められてきたし、人々もまた、これこそ人間らしい生き方と考えてきたためにほかならない。

しかし、私たち人間は、神を離れては何事もなし得ないし、安らぎある生活は期待できないのだ。自由思想は人間を幸せにするために考

えられたが、結果はこの思想ゆえに、経済の奴隷に自らを追い込んで来たということを知らなくてはならないだろう。

愛こそ、すべてである。愛なくば人間社会は互解するしかない。愛の精神を、政治に、経済に、文化に、科学に生かすことである。

真の自由人は、愛の行為者である。なぜかといえば、真の自由は愛という行為によって果たされるからなのだ。

私たちの心は自由である。この心の自由を本当に認識すると、肉体をまとった人間社会は愛という絆によって保たれるということが理解

されるからだ。

しかし、心の自由を認識できないまでも、人は一人で生きてゆく事はできないことを、まず、理解するだけでもいいのである。

人のことを人間という。人間とは人の間と書く。人の間とは、人と人ということになる。つまり、人間とは、人と人との間に存在する

存在者ということになるだろう。

人間は、人と人とのつながりにおいて、はじめて、人間として立つことができるのだ。

人間悟性論のように、AはAであってBではない。BはBであってAではない。貴方は貴方、わたしはわたし、とってしまつては人は

エゴにならざるを得ない。これでは行き詰る。

もともと人間はこうはできていないので、本来の人間に立ち戻り、人と人とのつながりの中で他を生き、助け合う愛の行為によって、

AもBも安らぎある生活が可能となる。

今日、人と人との信頼感が失われているという。経営者と労働者、政治家と大衆、先生と学生、医者と患者、親子の間にも不信感が生ま

れている。

何故こうなったか。誤った自由思想、民主主義思想が私たちの心を毒し、誰も彼もが、エゴに走っているからなのだ。

金のためには、人はどうしても自分さえよければ良い、という欲望がこうした人間関係の絆を断ち切ろうとしているからなのだ。

人間を物としてしか認めない思想がはびこると、人間は動物以下になり下がり、信頼感も失われてゆく。

まず、人間にかえることだ。

神の子の人間にかえったとき、私たちの社会は、調和と安らぎが生まれてくるものである。

(一九七五年七月)

六、

資本主義経済の矛盾、思想の欠陥についてこれまでその概略を述べてきた。読者はこれによって自由主義思想の誤りと、自由経済の混乱

の原因がおおよそ理解できたと思う。

そこで今回は労使問題について大雑把ではあるが取り上げてみたいと思う。というのは労使問題は純然たる経済問題というより、経済行

為の主体である人間の問題であり、また労使が調和されないかぎり、経済問題は永遠に解決されないだろうからである。また、この点に

かんする限りこの問題は、経済制度にあまり左右されないといってもいいだろう。すなわち、経済制度が変わり、社会主義、計画経済に

なったとしても、労使関係は依然としてついてまわるからである。つまり、管理者と非管理者の関係はどんな場合にも不可欠の要件であ

り、私たち現実の現象社会にあっては、この関係を見無視して物事が円滑に運営されるとは思えないし、それは事実上不可能であるからで

ある。。

もちろん、労使強調だけで経済が調和されるとはいわない。自由経済にあっては経営者は常に見込み生産を強いられ、そのうえ同業者と

の競争が絶えずつきまとい、ちょっとした見込みちがいが経営を危殆に追い込むことになるからである。したがってこの問題は労使以前

の問題といえようが、**しかし妙なもので労使が協調されている企業が経営困難になるということは実は少ないのである。**消費者の方向が

変り、**転業を余儀なくされることがあっても労使が協調している企業は必ず打開の道が開かれるものである。**大企業となって転換がむず

かしい場合もあるが、それでも最小限度の犠牲でその危機を乗り越えることができよう。企業はやはり人なのである。人の和が企業を盛

り立て、企業を安定に導くものである。

さて、そうした意味で労使問題を取り上げるわけであるが、**企業は人というように、人の和が先決である。**人の和を実現させるにはどう

すればよいかである。結論を急げば労使双方が裸になって譲るべきところは譲り、助け合うところは助け合うことが大事なのだ。互譲の

あり方は対話である。対話を通して、両者のわだかまりがあるとすれば、それを取り除く努力、原因の究明が肝心であろう。

核心に入るまえに、まずインフレ、デフレの原因はどこにあるかを、角度をかえてもう一度みることにしたい。多くの経済学者は金と物

とのアンバランスがインフレを進行させる、そして、そのアンバランスは原材料の値上げ、管理価格、輸入インフレなどさまざまな理

由からおこるとしているが、この点についてはこれまで述べてきた通りである。

だが、その根底に流れる原因は何かというと、ほかでもない人間の欲望、足ることを知らぬ物質欲、独占欲が経済全体の歯車を右に左に

ゆさぶるためなのである。

欲望の一方の先端がいわば賃上げ闘争であり、もう一方は企業であり、使用者側の自己保存である、利益追及である。つまり利益のため

には手段を選ばぬ飽くなき欲望が価格をつり上げ、インフレやデフレを招いている。例をあげると、日本列島改造論による土地価格の暴

騰である。一年で二倍も三倍も土地価格がハネ上がり、サラリーマンは手も足もでない状況となった。暴騰の原因は企業が大量に土地買

収に乗り出したからであり、庶民の住宅問題は政府の掛け声とは反対に行き詰まってしまった。企業の土地投資は先行投資であり、投機

であった。列島改造で先行きの値上がりが見込まれたからであった。戦前の土地価格は駅や町の中心地を軸に次第に四方に広がって価格

形成がなされたが、列島改造論後の土地暴騰というものは、こうした原則は通らなくなり、市街地とか農村に関係なく、ところによって

は僻地の方が高いという現象さえみせた。価格の値上がりは貨幣の下落であり、インフレである。しかも、土地の先行投資は不動産会社

だけならまだしも、それこそ、あらゆる企業が金に糸目をつけず総出動する、というすさまじさであった。企業のこうした利益追及は何

も土地だけに限らない。利益が上がるものなら何でもお構いなしである。戦前には到底考えられなかった公共企業であり政府の間接的、

直接的保護をうけている、あるK電鉄などは、それこそこっそりとパチンコ店を開き、莫大な利益をあげたといわれる。私鉄は国鉄とち

がい兼業はある程度認められているが、パチンコ店やマージャン屋の兼業は認められていないであろう。なぜなら公企業として政府の保

護（免税制、低金利による融資、減税など）をうけているのだから、その利益金で儲かるからといって、公共の福祉にもとるような営業

行為は許されるはずのものではないからである。

ともかくこのように、企業の利益追及は人々の経済生活全体に、さまざまな影響を及ぼし、経済の正常な流れを変えている事は事実なの

だ。

一方、ここで問題にしたいのは賃上げ闘争である。賃上げ闘争が価格を押し上げインフレを助長させている事実である。

たしかに賃上げによってサラリーマンの生活は楽になった。また賃上げによって消費が拡大され、生産活動も順調な伸びを示し、生産と

消費の拡大がはかられた。しかしその間口が拡大されれば何か事が起きるとその反動もまた大きいわけである。だから、一時はみんなが

利益を得たように思うが、反動がきた時にはその打撃もまた大きい。今回の不況では、高い利益を上げ賃金の高い企業ほど打撃をうけて

いる。こうした意味から、やみくものベース・アップはさまざまな問題を惹起するであろうし、さらには、ベース・アップをしても製品

価格に影響を与えない、輸出価格を上げない、というようなものでなくてはならないだろう。

ところがこうしたベース・アップによって消費者物価指数は年平均八%（最近十年間）もあがっている。消費者価格の値上がりはすでに

記述したが、この八%の値上がりは石油ショック以降暴騰したものを案分すると、こうなるわけである。石油ショック以前の平均は年四

~五%である。この値上がりは定期預金金利とトントンである。普通預金なら完全に消費者物価に追いつかず、年々その目減りは開くば

かりである。

消費者物価は主に中小企業が受け持っている。大企業の賃上げが決まると、中小企業も上げざるを得ない。これまで人手不足が中小企業

を圧迫してきたので、否応なしに、大企業に右へならえ、であったからだ。ところが中小企業は大企業ほど生産性は上がらない。したが

って賃上げは大抵製品価格に転嫁せざるを得ない。こうして消費者物価は年々上がりっ放しとなったわけだ。消費者物価が上がれば家庭

の台所に直接ひびいてきて、名目は向上しても実質賃金は思ったほど上がらないばかりか、常に消費者物価指数に追いつ追われつであっ

た。こうして賃金と物価の悪循環はくりかえされ、インフレはとめどもなく進行してきたわけである。

日本の中小企業は圧倒的に多い。その率は全体の九割近くにのぼろう。従って中小企業の労働人口は大企業のそれより圧倒的に多く、こ

うした人達は大企業のベース・アップによって、少なからずその負担を負わされて来たといえるだろう。例年、大企業の賃金より中小企

業の賃金の方が低く押さえられるから、大企業の賃金アップは大部分の国民の負担の上に築かれてきたといっても過言ではないのであ

る。大企業が受け持つ卸売価格はたしかに横バイをつづけてきた。それも大巾な賃上げにもかかわらずである。そのわけは労働生産性の

向上にあったといわれる。労働生産性の中身は大企業のオートメ化が進み、人は計器とにらめっこしていればいいからであろう。しかし

ここに疑問がある。

あるエコノミストが指摘していたが、生産性の向上とは、生産の貢献度をいうのであろう。大企業の生産性の貢献度は労働者のそれより

も、生産のオートメ化によって上がったはず。とすればオートメ化による生産性の向上は労働者側から見た労働生産性は逆に下がったこ

とを意味しないだろうか。

(一九七五年八月)

機械も使わずに一日十個の生産物を二十個にしたとすると、たしかに、労働生産性はあがったことになる。しかしながら、人間の労働

には限界があるであろう。寝ずに働いたとしても従来の生産を三倍、四倍に上げることは不可能なことである。二日や三日は可能であっ

ても、そう長くは続かない。また、そうした徹夜作業で生産性を上げてても体力に限界がくるし、その限界を越えると、こんどは反対に生

産はガタ落ちしてくるだろう。

結局、こうした限界を補うものは機械であり、その機械が生産性を上げているわけである。とすると、生産の貢献度は労働ではなく

て、機械にあったといえるだろう。

大企業の生産性は、こうした新機械の稼動によって上がってきたが、しかし、それにもかかわらず賃金アップは常に中小企業が追いつ

けぬ高い線で決定されてきた。そのため、ひと頃は、この両者の格差はひろがる一方であったが、労働者の不足という新しい事態を迎え

るに至って、中小企業は製品価格に賃金が転嫁しても、高いベースに引き上げざるを得なくなった。

消費者物価が上がることはあっても、下がることがないというのも、こうした企業間の賃金競争についても原因があった。賃金のレベ

ルを平均化しようとする、どうしても日本の場合は右にみるように企業の二重構造的欠陥が露呈され、物価を押し上げる事になってし

まう。そこで通産省は、中小企業近代化を促進するため、さまざまな法律をつくり、融資の道や企業合同、協同組合化の奨励に躍起とな

ったが、中小企業の特殊事情もあってそう簡単には先へ進めないというのが現状である。

いぜれにせよ、この問題はひとまず置いて、我々は、経済の根本的な原則に目を向ける必要があるであろう。

というのは、経済の根本的な原理は、私たちは働いた分しか食えない、ということである。これをもう一面から見ると、生産したもの

しか消費できない、ということだ。

とすると、生産性を上回る賃金アップはどのような結果になるかは自明の理であろう。物価を押し上げ、貨幣価値が下落するというこ

とは、生産されたもの以上に消費を求めていることになりはしないか。つまり人々は、働いた分以上のものを要求しつづけている、とい

うことになるのではあるまいか。

我々が、経済の原理を無視しようとする、早い話が、インフレになったり、デフレになったりするるのである。つまり、物と金とのバ

ランスを崩し、社会不安を生み出すことになる。インフレだ、デフレだと騒いでいるときには、我々は事態の成り行きを見きわめ、一人

一人が反省する必要があるであろう。経済を動かすものは、ほかならぬ人間であり、組織や、機械そのものに、それが本来あるわけでは

ないからである。

インフレによって名目賃金は上がっても、実質賃金が下がってしまえば、期待する生活は望めないであろう。昨年の秋頃だったか、経

済企画庁に毎日のように陳情団がやってきた。その陳情団の一団は、政府はいつまで総需要抑制策をつづける気が、このままでは企業は

参ってしまう。多少のインフレは景気を刺激し、企業意欲を増すことだから、もう、そろそろ金融をゆるめ、財投をふやし、景気刺激策

をとって欲しい、というわけである。この種の陳情団は財界をはじめとした、いわば生産者側であった。

ところが、これとは反対にもう一団の陳情団があった。それは消費者を代表する主婦連の人びとである。彼女らの主張は、インフレは

絶対にいけない、これ以上物価が上がれば生活は苦しくなるばかりだし、どんなことがあっても、今の政策を堅持し、場合によっては、

もっと、厳しい抑制策を取って欲しい、というのであった。

仲に入った経済企画庁は弱ってしまった。いったい、この両者のどちらのいい分をきいたらいいのか、迷ってしまったというのであ

る。生産者である男性側は、インフレやむなしというが、消費者である女性は、絶対まかりならぬという。そこで、企画庁はたび重なる

陳情に、こう答えたそうである。

「ご夫婦で、ひとつ、じっくり相談して欲しい。我々にそれぞれちがった意見を持ちこまれても、どうすることもできない。我々は皆さ

んの望む方向で手を打たせてもらいます……」と。

この話しは非常に興味ある問題を含んでいる。

というのは、生産者、消費者といっても、もともとは一つの屋根の下で生活しており、この両者をハッキリと区別することは、事実上

不可能なことなのである。また、この問題は、何も男と女の区別にかぎらず、経営者、労働者についてもいえることなのである。

要求する賃金が生産性を上回るとすれば、その反動は、やがて会社を危機に追い込み、自分の首を、自分で締めることになってこよ

う。あるいはまた前述のように、諸物価を押し上げ、家庭の台所にひびいてくる。儲かった、得した、と思ったのもつかの間で、不適當

な要求は、まわりまわって自分のところに還ってくることになる。

結局のところ、誰一人として純然たる生産者、消費者はいないということになるうし、儲かった、得をしたものは一人もいないことに

なるであろう。

こう考えてくると、もっとも素朴な原則に立って、

「生産したものしか消費できないという経済原理を、一人一人があらためて認識する必要があるのである。

賃金闘争、あるいは労組の紛争について必ずしも経済的要求だけではなく、その裏には政治色彩をもって争われるものもある。ある団

体のそれは、政治変革を目的として行われているようである。

その目的は、争議を通して社会不安を助長し、政治態勢を変えることにあるのだから、要求する内容も、国民が支持してできそうなギ

リギリの線までかけていく。

政治体制を変えるとといっても、今日のその中身は経済問題が主たる目的であり、分配の公平化にあるのであろう。ひらたくいえば、み

んなが苦楽を分かち合うということであるが、すでに累々と述べてきたように、経済問題は要約すると、生産と消費の二つのテーマしか

なく、それも働いた分しか食えない、という原理をまげることはできない。この原理は、どんな社会が出現しても変わる事はないし、社

会主義、共産社会になったからといって、急に国民の生活が楽になるというものではない。

否、むしろ、生活はかえって厳しくなるかもしれない。社会主義社会は、反面からいうと福祉国家であるから、税金が重くならざるを

得ない。医者はタダ、鉄道は低運賃、家賃は安く、ということになると、その分だけ国が負担しなければならぬ。国の負担は国民の税

金で賄うしかないから、何でもタダは聞こえはいいが、働く者にとっては大変な重荷になってくる。イギリス経済が、今日、危機にひん

してきているのは、いうなれば、揺り籠から墓場までの福祉が、一応制度化され、一人一人の負担が重いこと。生活に不安がなくなる

と、こんどはその反動がやってきて、労働者自体が、あまり働かなくなってきたから、ともいえるだろう。

これは多少問題はちがうが、イタリア経済については、賃上げ闘争が過激化する反面、働かないで要求のみ強いために、世界有数の借

金国家にまでなり下がってしまった。

福祉政策は時代が進むにつれて、避けては通れない問題であり、政治、経済目標も当然これに焦点がしぼられてくるが、しかし、だか

らとって、生産に見合う消費、生産性に見合う賃金、そして、働くことの目的なり意義、人間としての自覚、等々、こうした問題を

抜きにした制度や、考え方を押し進めようとする、そこに、さまざまな問題を惹起せしめることになる。つまり、経済原理が自然と働

いてきて、その国なり、世界経済の円滑なバランスをくずすことになってくるのである。

(一九七五年九月)

理想はどんなに高く、夢のような世界を描いたとしても、争いを通じては何事も成就し得ないものである。

これを心の世界からいうと、争いの波動(エネルギー)があとあとまで残り、その反動が必ずやってくるからである。ふつうは、目に

見えた感覚の世界しか、わからないから、心の作用については無視してしまうが、しかし、形の世界は心の投影であり、心のバイプレー

ションは発信者に必ず返る、という法則をしらなくてはならないだろう。たとえば、水面に小石を投ずる。すると、水面は波紋を描き、

四方に散って行くが、やがて、岸に当たって、波紋の中心に戻ってくるのと同じ理屈である。

理想はなんであれ、力で押せば力がかえってくる。手段が争いなら、その結果は争いとなる。この意味で目的のためには手段を選ばぬ

考えほど危険なものはない。

ある権力を力で倒し、制度を変えたとしても、中身(心)の伴わぬ制度ではなんにもならない。

政権は奪い取るもの、労使は争い、賃金は獲ちとる、との思想があると、経済の安定、人心の安らぎは、いつになってもやっ

いだらう。

ちなみに従来の賃金決定の要因を挙げてみると大略次のようになる。

マクロ指標からみた賃上げ決定要因は、まず、労働市場の需給関係に強く影響をうけている。人手が足りないと上がり、余ると下が

る。物の需給と同じ理屈である。次いで、企業収益、生計費、労組の交渉力というのが、これまでのパターンであった。

行事化されている春闘の値上げ要因を見ると、 全国の消費者物価指数 有効求人率 国民所得に占める法人所得の比率、などが参

考となり、決定されているようだ。

こうした要因を背景として、業種別では、まず鉄鋼がベース・アップをする。つづいて電機、造船、私鉄、自動車の順で右へならえす

る格好である。しかし、次第に、こうした右へならえの傾向は年ごとにちぢまり、収益の上がっている企業が上げると、他もこれに追随

してあげるようになり、近年は、鉄鋼、電機の順序通りには必ずしもいっていないようである。

いぜれにせよ、労働省が調べた昭和四十八年時の賃上げ決定要因をみると、おおむね、世間相場で上げて行く傾向が多いのである。つ

まり、二、三の大手メーカーがまず賃金を決定すると、これを横目でながめながら、あげてゆくという仕組みである。

すなわち、企業別の賃金決定要因は、世間相場で上げるとというのが全体の三四・八%、企業業績を加味するが三〇・四%、つづいて、

労働力の確保、物価上昇、その他となり、世間相場が圧倒的に大きな比重を占めている。これを規模別に見ると、世間相場で上げるとい

うのが、中小企業が三三・一%、大企業が五一・〇%となり、中小企業は企業収益に左右され、大企業は労組が強いので世間相場で上げ

ることが目立っている。

ここで、なぜ、これを挙げたかということ、労使関係というものが右の傾向をみてもわかる通り、依然として相対的であり、賃金は奪い

とるという力関係が背後にうごめいているからである。ことに、昭和四十九年にみられた春闘は、対前年比三三・二%という大きなもの

となり、物価上昇下とは言え、このアップ率が、企業収益とか、世界経済の流れというものを外して決められており、そのために、今

日、自分の首を自分で締める格好になっているのである。

石油ショック以前の消費者物価はドルの過剰流動性を軸に、我が国経済の二重構造による要因と管理価格による値上がりをもっとも強

いとみられるが、その後の状況を見ると、輸入原材料の暴騰によるところが大きく、賃金アップは日陰にかくれてしまう程だった。一次

産品は石油ショック以来、世界不況に見舞われたために、昔の買手市場に変わりつつあったが、しかしここにきて再び上げ歩調に転じ、

売手市場に変わってきている。こんなことは今までにないことである。不況でも下がらないばかりか、逆に上がるという現象はやはり、

資源に限界があり、その資源が一国経済の支柱であるとすれば、景気、不景気に関係なく上げざるを得ないというのが道理であろう。

とすると、世界経済の動き、流れというものは、石油ショック以来大きく転換した、とみるのが妥当であり、このため、今後の在り方

は消費を節約し、企業経営は合理化によって、高い材料費をカバーしてゆかなければならないということになる。つまり、コストは上

がるが、製品価格はでき得るかぎり、現状を維持しなければならないだろう。ことに日本の場合は、アメリカやヨーロッパ諸国とちが

い、原材料の大半を外国に依存しているのです、諸外国とは体質がまるでちがっている。安い原料が手に入った高度成長期とはちがい、高

い材料で経営を維持するとなれば、経費のムダを省き、付加価値の高いものを生産してゆかなければ、世界経済から淘汰されてゆくだろ

う。我が国は輸出で食べているのだから、今までのようにアメリカの真似をしていたのでは到底やってゆけまい。

とすれば、昨年春闘のような、高いアップ率は製品価格を押し上げ、不況をより一層深刻なものにしていくことになる。現に、

五、六月の輸出状況は次第に頭打ちとなり、国内消費（デパートの売上げ）も低迷をつづけている。高いアップ率から消費は増えるとみ

たこれまでの考え方は、今日では通用しなくなっており、むしろ、反対に、低迷をつづけている。その原因については消費者の自己防衛

から、懐に入った金は消費より貯蓄にまわっているとみられており、事実、サラリーマンの貯蓄性向は上がっているが、しかし、それよ

りも、物を買いたくとも買い控えざるを得なくなっている。ホンの一部の業種を除いて、生産部門はたいてい二～三割の操短に追いこま

れており、残業どころの話ではないのである。したがって、サラリーマンの実質収入はしばしばマイナスとなり、そのうえ、インフレ不

安心理も加わって、消費に回す金はいよいよ細まっているというのが現状ではないだろうか。もちろん、好況の後には不況は付きものであ

り、なにもかも高賃金に原因を求めるとは出来ないが、しかし業種によっては生産性を上回るアップ率となり、これが不況を一層深刻

なものにしつつある。つまり、高度成長期の感覚で経営者も労働者も賃金問題を考えていたところに問題があったといえるだろう。不況

下の物価高は石油を始めとして原材料高に原因があるのであり、これはいふならば価格革命というこれまでにない異常現象であり、これ

に対処するには、諸経費（消費）をつめて現価格を維持する、あるいは付加価値の高いものに切り替えてゆくしかないだろう。

また、こうしたことからマクロ的にはある期間、縮小均衡の形をとらざるを得ないだろうし、現に、今年のGNP成長率はマイナス

二%であり、昭和五十年時も、トントンないしはマイナスになる恐れさえ出てきている。年々一〇%の成長率を誇った我が国経済も、こ

こへ来てマイナスに落ちこむということは、あらゆる面で高度成長時の歪が表面化し、不況を一層深刻なものにしてしまっている。いず

れにしても賃金問題は、これまでのような感覚で処していくと、我が国経済は大変なことになり、一方において経営者自体もこれま

でのように対立したものの考え方をとってはいは、これからの企業経営は非常にむずかしいものとなってきよう。

この項の冒頭で述べたように、労使は裸になって、企業という共同社会の連帯を深めるような方向に持っていかなければならないし、

またそうしなければ、その企業はやがては淘汰されていくであろう。また共同社会という連帯感、労使という従来の立場から離れる必

要があろう。つまり、一人一人が経営者であり従業員であるという意識にめざめなければならぬ。そして、そうした意識を反映した

制度づくりについても考えてゆかなければならないであろう。



（一九七五年十月）

七、

経済問題は語り出すとこれだけでよいという限界がないほど深く、間口が広い。人間に直接間接に結びついた問題だからである。

したがって、これまで述べてきた程度で今日問題になっているさまざまな諸現象をいいつくしたとはいえないわけだ。まだまだ俎上に

乗せて検討してゆかねばならない、重要な問題がある。

しかし、それらをここで揚げ問題提起をしても、いざ実行に移すとなると、多くの混乱や弊害が伴ってくると思う。正法という根本が

すでにハッキリしているわけなので、経済問題もこれに沿って、極端な摩擦をさけ、段階的に進めていくしかないであろう。

こうした意味でのこの小論も、そろそろ結論を出し、正法に沿った経済の写真といったものを挙げながら読者

自身も思索され考えても

らいたいと思う。

既にこの論文の冒頭に述べたように、

八正道の正業とは、 魂の修行 調和 奉仕の三点にしぼられる。

これ以外に正業の在り方を求めようとすると、必ず欲望につながっていく。

欲望につながると、現代と同じように歪みが生じ、混乱が絶えないことになる。

既述したように、アダム・スミス以来の資本主義経済は、人間の欲望を基礎として動いているので、これでは行き着く先は飢餓しかな

いだろう。なぜ飢餓しないかといえ、地球資源には限界があり、欲望のままに放っておけば、これらの資源は食い潰されてしまうか

らである。

さらに問題は人口の異常増加が挙げられ、これも放っておくと食糧と人口とのバランスを失い、戦争と人口絶滅という二度と再現でき

ない地上の楽園を失うことになる。

したがって、経済問題は正業という人間本来の姿にかえて、共同社会の楽園に向って駒を進めてゆかなければならないことになる

う。

よく、次のような質問が出される。

人間から欲望を抜き取ったなら発明発見も努力も失われ、経済は停滞してしまう。現にイギリス経済は福祉や社会保障を制度化したた

め、労働者は働く意欲をなくし、経済の歯車は次第に低下の度合いを深めているのではないかと.....。

たしかにいわれる通りなのだが、人間としてのなんの自覚もなく、いたずらに政治家の人気取りと労働者の欲望を満たすために、こう

した制度を取り入れてゆけば、行き着くところは沈滞しなくなってくる。社会保障は、生活の安定と生活条件の質の向上にある、と思

うが、しかし、こうした制度をとり入れてゆくとなると、まず、その前に人間とは何かという問いが必要であり、人間としての自覚の上

にたった制度でないと、その反作用は致命的になってくるだろう。

ここでいう欲望とは自分の立場しか考えないエゴをいうのである。相手はどうでも自分さえよければどうでも良い。あるいは、あれが

欲しい、これが欲しいという節度を失った欲求を欲望というのである。

足ることを知った均衡ある欲求を維持するならば、公害や戦争には発展しないだろう。

この辺を間違えると、欲望の正しい概念をとらえることができないし、迷いが生じる。

では、そうした足ることを知った生活でも人びとの意欲が沈滞しないかという、沈滞しない。

人間としての正しい生き方を自覚したならば、これまで以上に意欲を増し、発明、発見あるいは労働生産性の低下もきたすことはない

だろう。

例を挙げると明治維新である。維新前後に活躍した憂国に志士たちが、個人の要望を果たすためにこれに参加しただろうか。おそら

く、ちがうだろう。彼らは一身を投げうって国のために殉じていったにちがいない。もちろん、志士といわれる中には自分の野望を果た

すために働いた者もいるだろう。しかし、あれだけ多くの志士が死に、しかもなおかつ革命にも等しい改革をやれたというのも、これら

の志士たちの、私心を去った献身があったからではないだろうか。もし、彼らに、革命後の新政権のポストなり、天下に号令する野心の

ようなものがあって、自己の欲望を果たすためだったとしたならば、明治維新は到底実現できなかったにちがいない。

いつの時代も青年のエネルギーは大きい。青年のエネルギーは私心から離れると爆発的な威力となって発揮される。それだけに一つ間

違ふと、こんどはとんでもない方向につっ走る。

最近では毛沢東の紅衛兵、ヒットラーの親衛隊、太平洋戦争に突入する導火線となった二・二六事件、キューバの革命など、熱気に満

ちた青年の行動は一国を左右する。また、ある宗教団体の青年行動隊をみても、青年のエネルギーが個人の欲望を離れることによって、

大きな力となることは洋の東西を通じて明らかである。

こう見てくると、その是非は別として、エネルギーの集中は私心よりも自覚によるところの方がはるかに巨大であるといえるではない

か。

個人の欲望、集団の欲望が働くときは、かえって、さまざまなマサツを起こし、收拾のつかないものになってくる。

私たち人間は右に見たように、欲望にほんろうされなくとも、立派にやってゆけるし、発明、発見も、より急速に前進するのではある

まいか。

近代社会は制度の改革に力を注いできた、制度の在り方は、たしかに重要である。しかし、いくらい制度を持ってきて据えたところ

で、中身の伴わぬ制度ではなんにもならない。馬子にも衣装という諺があるが、衣装によって美しくも、みにく

くも見えてくるが、しか

し、メッキはやはりメッキであり、すぐにはげてしまう。

ヘンな話しになって恐縮だが、昔ある大名が側女を求めるときに必ず化粧を落とさせ、ボロを着させて眺めたという。生まれたばかり

の生地そのまま見ないと眼が幻惑されて、美女を求めることができないというわけだ。

制度の問題もこれと同じように、その制度を動かす者はほかならぬ人間であり、人間自身の心が変わらないかぎり、どんなによい制度

も画餅になってしまうということである。

社会福祉制度にしる、社会主義にしる、その考え方は悪くはない。しかし、欲望を温存させてのそうした制度は必ず破綻きたすことに

なっ

こうした意味で、まず、私たちは人間はどこから来てどこへ行くのか。働くということはどういうことか。人間とは何か、という問題

を提起し、正しい自覚にもとずいて、経済の在り方というものを考えてゆかなければならない。

正法の在り方については『心行』に累々述べてあるので、ここではそれを省き結論を急ぐことにする。

正法にもとづく経済の姿は「共同社会」である。責任と自覚にもとずいた共同社会こそが、生活を安定させ、調和の基礎となるもので

ある。

まず、ひ近な例から話を進めると、私たちの家庭である。家庭生活は社会の縮図といってもよいだろう。家庭の延長、投映が社会であ

る。

この意味から、**家庭が混乱すると社会も混乱する。家庭が安定すると社会も安定する。**

しかし、今日、家庭と社会というものは個別の存在として考えられ、家庭と社会は独立した形で動いているようである。

そのために、両者の関係は常にバランスをかき、社会が混乱しても家庭は維持しようとし、家庭が混乱しいても、社会生活（職業人と

しての）だけは維持しようとする人が多い。こうしたバランスを欠いた生活態度では家庭も社会も良くはない。

まず、家庭を整え、そうして社会を安定させなければならないだろう。

（一九七五年十一月）

私たちの家庭は相互扶助の共同社会をつくっている。それはまったく社会の諸制度に関係なく、社会主義国であろうと資本主義国家で

であろうと、将又、封建的君主国家であろうと、一步家庭内に踏み込むと人間的な共同社会、いってみれば原始的共産社会、相互扶助

助け合いの社会が形成されていることを知るのである。

勿論、家庭も社会の風潮にはついて行っているが、人間的感情においては外的社会制度とは別に、この点だけは連綿とつづいているのが

実情ではあるまいか。

すなわち、親子、肉親の関係にあっては、病気や災難や、財産の移譲についても社会制度の制約や法律を離れて別個な形で動いており、

子供が病気をすれば親や肉親はその病気を自分の身を削っても救いたいと願うだろうし、他から借金しても子供の健康回復に全力をつく

すだろう。また、財産の移譲に当ってはそれが表に出れば租税の対象になるので、子供のために、親はさまざまな考えをめぐらせ、子供

の将来に備えることであろう。

ある人は子孫に美田を遺さずとっているが、子を思う親の感情というものはモノでなければ精神を遺したいと願う、子の行く末を案ず

るであろう。このようにもしそうした愛情が人間社会に失われ、お前はお前、俺は俺といった個人エゴが家庭の中にまで徹底したとすれ

ば、人間社会は百年を待たずして崩壊してゆくにちがいない。

幸いな事に、社会制度がドンドン変わっていても、家庭内は愛の絆で結ばれ、夫婦、親子はたがいに自分の手足であり、分身であると

いう意識で、無意識のうちにもつながっているように思える。

戦後この方、我が国にアメリカ民主主義が降って湧いて、戦中戦前の軍国主義の反動が爆発的に起こり、核家族化の進行と同時に、親子

の断層と、契約的夫婦の出現が見られ、人間主義の家庭崩壊さえ危惧されるに至っているが、しかし、人間主義を離れて人間はなく、戦

後三十年を経た今日、戦前の家庭環境を望む声が強くなっているのはなぜだろう。また、たいてい家庭はそうした方向で家庭を維持し

ているだろうし、扇情的、たい廃的なマスコミの宣伝とはウラ腹に、庶民の家庭は静かに、ひっそりと、守られているのではあるまい

か。その証拠に、新しい住宅がドンドン建てられているし、革命的な政治改革を望むものは一部を除いてはほとんど見られないことから

も、うかがえよう。

家庭は利害を超えて愛という感情によって支えられ、経済はそれに付帯してついてまわるとというのが実情である

うし、また、そうした家

庭経済のありかたこそ、社会の中の経済の在り方ではないだろうか。家庭が独立し、部族が生じ、民族が形成されてくると、こうした家

庭内での経済方式は一変され、利害が相反した形をとってくる。なぜ相反するのだろうか。欲望という機関車に私たちは幻惑されるからな

のではあるまいか。

ビジネスと家庭経済。この両者を同時的に考えようとするとう無理が出てくるように思うが、それでは、ビジネスという多忙さの目的はい

ったいなんなのだろうか。高度経済成長は猛烈社員の実業家によって支えられてきたが、行き着いたところは今日の矛盾したイン

フレと不況ではなかったか。人を押しつけ、働き、働いて得た結果というものは、無情という秋風だったのであるまいか。

ヨーロッパの人々は日本人の勤勉さを評価はしても、立食いソバで外に駆け出して行く心情には理解できなかったようである。高度成長

という経済の歯車が実業家の多忙さをくり出し続けた。彼らにとって立ち止まることは死を意味していた。他社に抜かれる、他社を

リードするには急ぐしかほかにはなかったのである。

仕事の間と家庭はたしかにちがうだろう。職場は汗する緊張の間であり、家庭はそれをいやす憩いの間である。家庭の憩いを職場に持ち

込んで職場の厳しさは失われ、人間はダメに成ってしまうかも知れない。

したがって、ここでいいたいのは家庭の相互扶助の精神が社会や職場の中に行くと、どうして生かせないかということである。そこには

実業家としての厳しさだけが要求され、人間は企業を維持する一歯車にすぎなくなっているからではあるまいか。

企業は人間のためにあるのではなく、企業のためであったようである。このため、企業自体も消費のために生産するのではなく、生産の

ために消費をまわし続けてきた。しよせんは人間が動かす企業なのだから、こうした状態がいつまでも続くわけがなかった。

家庭と社会というものは一つである。両者が独立して存在するわけではない。しかも、社会は多数の家庭が集まって構成されるのだから

ら、家庭の中で生きつづける愛を中心として動いて行く家庭の線上に社会を置かなければ社会の安定は期し難いのではないか。愛のない

社会は無情の社会といえよう。愛がなければどんな制度を持ってきても画餅に終わることだろう。なぜかといえれば人間は単独では生き

られないし、相互の作用によってのみか、生かし生かされ得ないからである。

では、愛と経済をどのように考えるか。愛は感情であり、経済は法則という歯車にそって動いて行くものなので、この両者をどう結びつ

けてゆくかと人は問うだろう。たしかに一見、この両者は相入れない別世界の運動形態といえるだろうし、両者の性質はたしかにちが

う。しかし愛のない経済、心のない経済は本来存在し得ないものであるし、愛と経済は立派に成り立つということを知って欲しいもので

ある。

そこで愛とは何かである。これはすでに正法という立場から述べてきたように、他を生かす助け合う行為をいう。

愛は男女を通じて、まず発現されよう。なぜなら、男と女というものは、それぞれ神より与えられた個性を持ってこの地上に誕生してお

り、男女の助け合う行為がなければ人間社会は成り立たないからである。

どんなに人類が増えようとも、あるいは少なくなっても、男女のほかに中性的人間の存在は許されないし、また、男女の均衡が甚だしく

片寄ることがないのも、神の摂理にしたがって、この地上は動いているからである。この両者は地上で戦争や災害が起こらぬかぎり、常

に平均化され、その量と質は常につり合いを保って維持されている。

私たちの周囲にはさまざまな男女が生活している。このためアダムとエバという原理的な認識をともしれば忘れがちであるが、アダムと

エバの原理はこの地上界を成立させる大原則である。したがって、この原則を忘れたときから、社会の混乱が始まったといえる。

人間は男と女という性の異なる中に愛という他を生かし合う神の意思の働きによって調和へと向かうが、その愛の方向は身近なものから

遠くの者へと発展する……。愛が発展した社会を共同の社会と呼ぶ。相互扶助の社会ともいう。

始めの人々は自給自足経済であり、男と女はそれぞれの持ち場があって、男は労働を、女は家庭と子弟の教育に力をつくし、男女はたが

いに足りないものを補い合い、助け合って生きてきた。

やがて、人々は増えつづけ、経済生活は分業と同時にそれぞれの専門の業を受け持つようになり、自給自足経済は分業経済へと発展し

た。人々は必要なものを物々交換によって分け合い、おたがいにの生活を助け合った。

今日の経済社会は、この分業による交換経済であり、それぞれが職業を持ち、生産に従事するということは、需要という他の人たちが求

める 他を生かす行為をしていることになるのである。つまり、仕事をするとは他人の生活を助ける愛の行為に通じるというわけであ

る。

ところが、すでに累々述べてきたように、経済行為を通じて人々の欲望がつのり、欲望の奴隷となっていくために、経済行為は利益追

及の唯一の足場となり、人々の生活は常に不安と混乱の中にあえぐようになっていったのである。



(一九七五年十二月)

社会生活の発展と共に分業化が進み、分業、専門化が高度化されてくると、前月号でも触れたように、相互扶助の愛の精神が次第に失わ

れ、企業本位、仕事中心の思想や考えが先行し始める。そうすると人間は経済行為の中の一歯車に過ぎなくなり、経済の奴隷に落ち込ん

でいく。ものの事実が分からなくなり、何が正しく、何が不正なのかも不明になってくる。

すでに述べたように、経済行為は愛の理念を背景に前進させなければ、どんな有機的な制度を考案し社会に当はめても、遂には行き詰ま

り、その反動は、愛の理念から離れていけばいるほど大きなものとなる、ということである。

この事実は石油ショックを通して我々は身近に体験したであろうし、高度成長がもたらす弊害が如何に大きなものであったかを考えれば

自明のはずであろう。否、我々はそれ以前から第一次大戦後における経済の混乱を体験してきた。また、それ以前の江戸時代、戦国時代

においても経験してきた。にも拘わらず制度はちがっても同じことを繰り返しながら今日に至っているのである。

方向を見失った時、あるいは混乱が起った時、人々がまず最初に考えなければならないことは常に物事の始まり、原点に目を向け、その

考えを遡及させることである。

すでに述べたように、経済行為というものはアダムとエバという男女の両性から始まっている。人間がこの地上界に肉体を持ち、その肉

体を維持するには生活という経済行為を離れては成り立たない、ということは誰でも知っている。だが多くの人は、この両性の出会いが

単に男女間の精神的な愛だけの出会いとしか見ないが、あるいは享楽の対象としか考えないのであるまいか。地上生活にとって欠くこ

とのできない生活の場という大事な出会いを置き去りにしているようである。

仏教は色心不二を説き、中道を明らかにしている。

モーゼもまた、アダムとエバになぞらえて、色心不二と中道を説いているのだ。

モーゼは偏った見方、考え方を極度に恐れ、常に、調和ということを教えた。

十戒の思想は奴隷から解放され、ともすれば欲望に流される人々の心を引き締めるためにとられた法であり、十戒を貫く考えはあくまで

調和にあったのである。

この事実はアダムとエバの愛と、生活の象徴的な叙述の中から、十分にくみとることができるのである。

色心不二とは肉体と精神、生活と心、量と質とを指し、この二つのものは、たがいに相補いながら両者とは統一された場の中に存在する

ものなのだ。

経済行為の原点は、男女両性の愛の中からこの声をあげた。男は労働に従事し、女は子弟の教育と家を守った。自給自足の経済は永く

久しい間続いたのである。

今日分業社会が出現し、自給経済の小規模経営から、大量生産という大規模経営に移ってはいるが、しかしアダムとエバの生活の基本形

は決して失われていないのである。すなわち、男は外に出て働き、女は家庭にあって憩いの場をつくっている。

愛と生活の原型は男女両性がこの地上界に生活を始めた時から、そして、その両性が存在するかぎり、決して失われることはないし、愛

の行為のない社会は永続きはしないのである。

愛とは他を生かすことであり、助け合うことである。

自然はそれを教え、ブッタは中道という自然法の中から、慈悲という精神を人々に教えた。私たちの肉体は、そして精神的安らぎは、自

然の愛の懐の中ではじめて芽生えるものなのだ。

私たちが食する物は、どれもこれも皆生きている。植物も動物も、私たちの口に入る物は皆生きものから摂っている。植物や動物の献身

によって、犠牲によって、私たちの肉体が、精神的安らぎが、保たれている。つまり、彼らの愛の献身によって、私たちは生きられるの

である。

しかし万物の霊長である人間が、自分の能力や才能におぼれ、慢心を抱き、植物や動物の無益な殺傷をつづけると、自然の循環が失わ

れ、自らの生命をもちぢめることになる。

魚資源の枯渇、空気の汚染、森林の不足、水資源の不足など、さまざまな公害は高度成長という人間の自我欲望

から発している。

経済行為が単に利益追求という自我欲望の手段と化し、需要と供給の愛の原則は全く失われてしまったといえるのである。

今こそ、**私達は欲望充足の修羅にも等しい経済行為から、本来の姿である愛の経済行為に戻らなければならない。**経済行為が修羅場であ

るかぎり、私達の苦しみは永遠に付いてまわるだろう。なぜならば、循環の法則は私たちの心に思い、行為に現すことによって付いてま

わるからである。

物価と賃金は、今、悪循環をつづけている。それぞれが欲望の徒と化し、一つのパイをめぐって、奪い合いを演じているからである。

まず、人間の原点にかえり、経済行為の真の在り方を理解する必要があるのである。

ある会社の社長は裸一貫から今日の地位を築いた。会社も家庭も自分の努力の結果として今日を成したと彼は自負していた。

ところが、ここに来て、家庭も会社も自分の思うようにならず、会社は無期限ストに突入した。家庭は家庭でノイローゼの息子がおり、

娘は彼のいうことをきかず派手に遊びほうけている。

何かが狂っている、どこかが間違っている、と彼は思った。しかし、そう考えてもその何かがなんとしても分からなかった。会社のスト

は長期化し、赤字は累積する一方である。このままでは会社は倒産し、一生かけて築いてきた財産は一朝にして失うかもしれなかった。

彼は正法に目を向けた。そして、心の琴線にふれた。迷妄の扉が開かれてみると、自分が歩いてきた道がいかに自我欲望の塊りであった

か思い知ったのであった。

彼は、何日も反省を続けたのであった。会社の危機と家庭崩壊の原因を懸命になって、さぐりつづけた。その結果は家庭も会社も自分を

中心に動き、思い上がった増上慢と我欲が今日の危機を招いていることを悟ったのであった。

彼は泣いた。そして、自らを裸にした。家庭の妻や子供に今日迄の自分の非を詫びた。

会社は赤旗が立ち、アジビラが至るところに貼られ、オフィスは見る陰もないほど汚されていた。血走った目をした労組員が彼の来社を

こばむほど労組員の心は硬化していた。

彼は全社員を一堂に集めると、正法に触れたいきさつを語った。そして自分の非を認めた。そうして、会社再建の方策を社員と一緒に腕

を組んでいきたいと自分を投げ出した。

社員は社長の百八十度の変わり方に目を見張ると同時に、社長がその気なら我々も協力を惜しまないと、組合員も裸になった。

何日もつづいた長期ストは、一転して和解され、赤旗は路上に投げ出され、アジビラはきれいにはがされた。

今ではこの会社は、労使の協調の下に赤字から黒字に変わっている。家庭もまた彼の真摯なザンゲによって昔の労働時代の明るさを取り

戻すことに成功した。

この物語りは、心が変わると周囲が変わるというよき見本といえようが、愛の心が家庭や事業をいかに調和させるか、論より証拠であ

る。

ある評論家は、経営に宗教理念を取り入れると会社を潰すと提言している。この人は真の道德、宗教というものを知らないから、こんな

ことを平気で口にするのである。

会社とか、経営というものは誰が動かしているのか。ほかでもないそれは人間なのだ。人間が動かしているとするれば、人間に立脚した経

営をしなければいったいどうなるのか。拝んだり、祈ったりすることが信仰と考えているとするれば、この評論家の宗教観、道德観を、ま

ず、切り替えてもらわなくてはならないだろう。

(一九七六年一月)

さて、正法と経済というテーマで、二年余りも連載してきた。関心のある読者は、この小論を読まれ、その大よその考え方が理解された

と思う。

細かい問題に触れることによって、実際の経営なり商売上に役立ててもらえるわけであるが、今日のように分業化がさかんになり、相互

依存が強くなってくると、一会社、一次業態のみの問題としてこの問題は扱えない要素も含んでおり、ことに正法は人間主体の、それも

心の問題が大きなウェイトを占めているので、これ以上論を進めると、この面の理解が全体的に深まってこない、時には誤解や抵抗だ

けが強くなり、逆効果になりかねない。

この意味から、この小論は現状の矛盾点とこれに対する本来の在り方を説明するだけにとどめ、何れ機会を見てテーマをかえ、再度、連

載したいと考えている。読者によってはこれからが正法と経済の本論と期待される向きもあらうと思われるが、本稿を進めてくるに及ん

で、前述のような理由が考えられ、又、本稿は経済問題の本質を理解してもらえば、本稿の目的はなかば達せられたと考えたからであ

る。

最後にここで書き加えておきたい事は、正法を生活の上に生かしてゆく最良の方法は、やはり人と人との対話ということである。経済問

題は特に対話と協調が欠かせない。労使の不信、生産者と消費者の不信感というものは、いわゆる正しいコミュニケーションが行われて

いないからだと思う。話し合いを通して相互理解が深まれば、双方のわだかまりは自然と解消してくるものであるし、この事実は前月号

にも触れたように、倒産寸前のある運輸会社の例からも納得されると思う。

もちろん、対話の姿勢が問題であるが、しかし当事者が裸になって真実を語ろうとするならば、問題の糸口はいくらでもついてくると思

う。

我が国のインフレが先進国の間でも、最も高い水準にあるというのも、労使双方の譲り合いが欠けているからであり、裸になった真実の

対話が不足しているからではないだろうか。

先進国の中でもインフレの度合いが最も低い水準にあるのが西ドイツである。西ドイツの物価安定策はそれこそ官・民が一致して情熱を

傾けている。ひと頃はほとんど物価が安定していた。日本の消費者物価が年三～四%と上がっていた時分に、ほとんど動くことがなかつ

た。石油ショック前後から上がり始めたが、これは外国から労働者が西ドイツに流れ込み、山猫ストをやるようになったために上がった

といわれる。ドイツ国民のせいではないといってもよいだろう。

それほど、西ドイツは物価が安定している。では独り西ドイツだけがどうして安定しているかといえは、理由はいくつか挙げられるが、

労使関係が格段に安定しているからである。五〇年代初めから労働者の経営参加が法制化され、労使双方の不信感や不必要な賃上げがな

くなったからだ。ベース・アップをする場合は単に一会社の利益のみで、これをするのではなく、国際収支や物価全体の問題にまで気を

配り、その上で決定する、というやり方である。

もちろん、政府自体も単に物価安定策のカジ取りを、金融政策だけに依存せず、財政、為替、独禁政策など多様な政策手段を相互補完的

に発動して強力に押し進めている。

西ドイツのインフレに対する関心はどの国より神経質である。第一次大戦後の天文学的インフレをドイツ国民はいやというほど経験して

おり、その経験が今日の物価安定に大きく寄与しているからであろう。

しかし、それにしても労使双方の協力体制がどの国よりもしっかりしており、それが今日の悪性インフレを抑制する形になっている。そ

してその大きな柱に、労使の対話、協調があるからではないか。一事業体のベース・アップに他の物価や国際収支の影響まで勘案すると

いう姿勢は我が国においても学んでゆかなければならない問題であろうと思う。

それぞれが自己を主張し合い、より欲望を充足しようとする経済は、中身よりも名目のみがふくらみ人びとの生活はかえって苦しくな

る。今日の我が国の過度のインフレがそれを物語っている。

一方、生産というものは消費があって初めて成り立つのであるから、利益配分の方法も一事業体内の問題として処理する考え方は片寄っ

ていないだろうか。戦後この方の利益配分の仕方は、消費者不在のように思われる。つまり、生産性が上がり、利益が上がると事業体に

関係する者以外は何等その恩恵に溶することがないのである。物価はあがることはあっても下がることがない、というのが何よりの証拠

であろう。生産性が上がり、利益は上がったということは消費者の需要、つまり消費者の協力があったからではないか。

したがって、その利益配分は消費者にも還元する、つまり、生産性が上がったその何%かを物価を下げて消費者に還元することではない

か。

経済行為は相互の調和、奉仕にあるとすれば、こうした相互扶助の行為こそ正法に通じた商法といえるのではないか。戦前の商業道徳は

こうした行為が自然のかたちで行われていたように記憶する。

それが高度成長が始まった昭和三十年頃からはこうした商業道徳はまったく姿を消し、如何にして消費者をだまし、買わせるかに企業努

力が集中した。たとえば需要をつくり出す方法として、

気安く買わせる

混乱をつくり出せ

もっと使わせる

捨てさせる

無駄使いさせる

流行遅れにさせる、

といったさまざまな企業戦略が考えられ、こうした戦略にもとずいて消費者を欲しがらせる宣伝が行われてきた。商業道徳もなにもあっ

たものではない。

この小論の最初の方でフォードの例を挙げた。フォードの経営理念は、分業社会における生産と消費を結ぶ経済行為のひな型といっても

よいと思うが、その考えはあくまで全体に対する利益が企業の利益にもつながるということである。いわば社会奉仕の精神がフォード社

をアメリカ第一の自動車産業にのし上げる結果を生んだ。企業本位の考え方では結局は経営を行き詰まらせ、社会不安をつくる何者でも

ないといえるだろう。

世界経済はいまや大きな曲がり角に立っている。これまでのような高成長は従来の方式の下では不可能であろう。全体のバランスを計り

ながら生産と消費、労使の協調を進めて行かなければなるまい。

十年、二十年前とくらべ産業規模も生活の条件も変わってきている。したがって、それだけ、より全体的な視野から企業の在り方、経営

の方向というものを考えて行かねばならないだろう。

正しい見方、考え方というものはより高い、より全体を見渡せる立場が求められよう。時にはその見方は四次元をも合わせて考えねばな

らないだろう。また、そうしたとらえ方をすることによって、混乱や不安をさけることが出来よう。

愛とは全体を生かすことであり、したがってより高度の見方は、それはそのまま愛の見方に通じてくるであろう。

中道の精神は何時いかなる時にも生きている。時代に関係なく、思想に関係なく、場所にも関係なく、生き通しの神理である。したがっ

て、経済問題も行き過ぎればインフレとなり、後退すればデフレとなって、人びとをして中道の均衡を求めるよ

う作用する。

反作用に対する軌道修正には理屈抜きの反省しかない。他をよりよく生かすにはどうすべきか、旧来の陋習を捨て、まず白紙に戻り、経

済とは何かを、もう一度改めて問うて欲しいものである。

そうしてそれぞれが正しく生きて行くにはどうすればよいか、経済の在り方はどうあるべきか、一つ、おのものが、白紙の立場で考えて

みて欲しい。(完)



スターデーリーの哲学と宗教

北陸の誠さま

ウェブマスターの力不足のため、提供していただきましたフロッピー（一太郎11）は開けることができません。

古いバージョンの一太郎はソフトを所有していますが、できればワード（マイクロソフト）で再度提供いただけませんで

しょうか。数年前に戴きましたのに、キーボードの触り過ぎで腱鞘炎を起こしてしまいました。毎日の診療に右手の余力

を残しておかねばならず無理が出来ないために更新も手付かずでしたが、これからまたボチボチ開始します。

[Home](#)

Home

「高橋信次師物語」

真のメシヤの記録

花田成鑑

昭和四十年代から五十年代の初頭、日本じゅうが安保やオイルショックで頭を痛めていたころ、中肉中背で丸顔の実に誠実そうな一人の

男が、場内からはみ出しそうな聴衆者を前に、何やら意味のわからない言葉（異語・いごん）で問いかけていた。

相手はというと、これも同じような言葉で返している。

場内はセキひとつしないで、不思議そうにその成り行きをジーツと見いていた。

むろん誰れも何を語り合っているのかわからない。

間をおいて男は日本語で解説をいれると、会場の者はみな成る程と理解できる。

男は相手の方に身体を向けて、片方の手のひらを頭の上からかざすような仕草をしたり、離れて静かに円をかいいたりする。

なおも言葉は続く。

すると相手は感情が込み上げてどうしようもないのか、堰をきったように 想いをぶっつけはじめた。

「ブ・ッ・ダー」

しぼるような声が場内一杯に拡がる。

そして、すがらんばかりにひれ伏して手を差しのべ

「観自在者ブッダー」

男は、

「そなたは、よく私のところに来てくれました。今生（こんじょう）もまた一緒にやりましょう...」

男もハンカチを目に当てている。

会場の中からもすすり泣きの声が

「リヤ オ エレ...ソレ ポコラ...パニヤ インダ...」

そしてすかさず男の解説がはいる。

ひと区切ついたところで

「男前がこんなになっちゃいまして...」

男は照れ笑いすると、会場からは笑いが。

「嘘じゃないんです。真実なんです。本当なんです。皆さんも過去生まれた体験を皆もっているんです。皆さんの心の糸をヒモ解いて

ゆくと、全部それがわかるんです...袖すり合うも多少の縁！ ありがとうございます」

すると、場内はどよめきと拍手のウズに。

こうして男の解説するところによると、ひとは生まれ変わり死に変わりして、二千五百年前の古代インドの時代に縁のあった者同志が時

空を越えて出会ったとき、懐しさでどうしようもないのだという。

そして、霊魂は永遠であり死ぬこともなく生きとおしのものだから、今の自分がまっとうに生きていなければ、あの世で、或いは次に地

上界に生まれた時に、ひとには嘘をつけても、自分には嘘のつけない善我なる自分が総てを裁いて、バッチリ反省させられ辻褄が合う、

と男は弁を閉じた。

また、なんと昭和五十一年六月、男は自から予言した死の直前、こうもたたみ込んだ。

「三億六千五百年前に、七大天使と共にこの地球に飛来した、中心霊・エルランティである」、

と。

更に、

「モーゼの説いたユダヤ教、釈迦の仏教、そしてイエスの説いたキリスト教、天照大神の説いた古神道（現代の神社神道ではない）、

マホメットの説いたイスラム教を一つにするために肉体をもったのだ」、

と。その上、

「神理は一つであり、宗教の間違いを修正することに自分の使命はあった」、

と言っただけだ。

とてつもなく大変なことを言って昇天した男がいたものである。

「仏陀とかエルランティだとか、日本の同和問題に光をともすためにだとか冗談じゃないぜ」

「魂は永遠だと...？」

「あの世だと...死ねばこの世限りに決ってんじゃんか」

「このクソッタレめが！」

男が伝道を開始してから、このような罵詈雑言がどこからともなく聞えた。

しかし、男は自信たっぷりにまた言った。

「すぐに信じてはいけません。疑って疑ってトコトン疑って、もう疑う余地が無くなったら、そのとき信じなさい」、

と、当然のように言っただけだ。

成書を引っ張り、受け売りの空まねの講演をする演者の多い中で、この男の口から飛び出す言葉は全てが奇想天外、今までに一度も聞

いたことのない話の連続だった。

そうこうする内に、一人集まり二人集まりして男の講演会場はいつも超満員。

そして、ついには既成の新興宗教が、二万とも三万ともいわれる信者を引きつれて鞍替え、小さい方が大きい宗教団体を吸収するという

前代未聞の合併劇に、宗教界をアッと驚ろかせたりもした。

また、山ほどの多くの「とてつもないこと」を言っただけ、数多くの著書、講演ビデオ、録音テープ、そして来聴者の心に多くの神理を

刻み、予言どおりに昭和五十一年（一九七六年）六月、四十八歳九ヶ月の若さでその生涯を閉じたのである。

この耳なれない男の名は、高橋信次。

この男こそ釈迦、イエス、モーゼの本体、地球創生期に七大天使と共に飛来した真のメシア（真の救世主）エルランティだったのであ

る。

ウェブマスターのつぶやき

この書き出しでウェブマスターが、園頭広周先生に原稿を差し出したのは平成の初め、福岡の近郊にある周船寺の道場用地を視察したと

きのことでした。

先生亡き今となっては、あれも聞いとけば良かった、これもと思うにつけ色々な想いが頭を巡りますが、高橋信次先生、園頭広周先生の

両大天使亡き後は、知恵を絞って我々でも出きる方法で遺志を継がねばなりません。

両先生の正法の膨大な資料、真理・神理の教えを、余すところなく人類共通の資産として公開する積りでいます。

園頭先生亡き後、僅かしか会員のいない国際正法協会も、「感謝の集い」と「なんとか新教育」の二つに分裂してしまいましたが、「人

間・高橋信次」の原稿は感謝の集いの会誌に連載されることになりました。

ところが、高橋信次先生を「信次は」とか「高橋は」と呼び捨てに記述したのが逆鱗に触れたのか、人類の覚者に対して尊称の「先生」

とか「師」に訂正すれば連載を続けるというものでしたから、ウェブマスターがそれを即刻拒否すると中止やむなきに至りました。

主人公の敬称抜きは、これは記述の世界では常識というものです。なんと狭い量見かと一時は憤慨もしましたが、これも私の心の修行か

と五年間の空白を経て考え直しました。

ウェブマスターも勉強の積りで尊称と敬称で丁寧に書いてみようと思います。

驚ろくべき出生の秘密

日本じゅうに金融恐慌が吹き荒れていた昭和二年（一九二七）、夏が終り高原のそよ風が頬をなでる九月二十四日、一人の玉のような

男の子が生まれます。

大勢の家族に囲まれ、ことの外大事にされたというのです。

四WD車やキャンパーが集って、夏の夜の喧噪にマユをひそめる住人も多いという浅間おろしの吹く信州・佐久高原の一角、中込の里の

一角でした。

幼くして死んだ二人を除くと、十人の子の中で男三人女七人の真ん中、貧農の二男として高橋信次師は生まれられます。

本名は治男（春男とも）。

成人して、信次と改名されることになります。

その理由は、同じ地区に同姓同名の人がいて、郵便などの混乱だったようです。

出生地の選択

信次師の霊団のグループが、誰がどこに出るのか天上界で話し合ったのは、寛永二年（一六二五）でした。

徳川家康（現代は俳優の長谷川一夫に生れ変わると信次師は教えられます）が、この世を去った十年後で、踏絵が断行された頃です。

はじめ、信次師は北海道にと考えられますが、余りにも遠すぎる。

そこで、東京に近くて最適な所はないかと考えられた末、風光がインドのカピラ（釈迦の生まれた王宮の在所）に似ている長野の佐久平

を選ばれたのだということです。

緊急訂正

不思議なことに、この項を最終整理していた、平成十四年のバレンタイン前日のこと、ある方から高橋信次師の未発表の直筆の原稿を

送っていただきました。

それを元に訂正して述べてみます。

先ず第一点、信次師の誕生年は昭和四年か昭和二年かで混乱していましたが、これを見ると一九二七年（昭和二年）とありますから、園

頭広周師とウェブマスターの共著で、出していただいた『正法と高橋信次師』の記述もここで訂正しておきます。

第二点は「もう一人の自分」という項に信次師はこう書いておられます。

未発表の信次師の原稿には

「少年時代、私は一九二七年、信州は浅間おろし吹く寒冷地佐久高原の貧乏百姓の次男として十人兄弟の中間に生まれました。

十人の子供を育てる両親の苦しみは、経済的にも肉体的にも大変であった。

しかし、今から七百年（註・北畠親房の頃）も前に、この計画は実在界において、具体的に作られていたのである。

更に一八九〇年（明治二十三年）、更に正確さを記するため、実行段階を具体的に出生地を北海道、山形のいずれかを決定したのである。

だったが、地理的条件や環境等の問題で長野を選んだのである。

先ず父母の選定が決定し、実在界より両親の生命がこの現象界に肉体を持ったのである。

この問題は多くの人々によって証明せられることになっている。

私ばかりではなく、全人類がみな自分が望み、縁によって最も精妙な計画によって、この現象界に修行場を求めて出て来るのである。

る。

貧乏な水飲百姓を選んだのも、私自身であり、地位、名誉はこの現象界の人が智と意によって造ったものであり、神の意によって定めた

のはではありません。

権力や因習によって人間の上（かみ）と称する人々によって作られたのであります。

しかし地位、名誉、権力者、金持、貧乏人にかかわらず、神仏の慈悲はみな平等であり太陽の熱光のエネルギーも万象万物に平等に

与えていることを見ても解るはずであります。」、

と。

高橋信次師は、この世に生まれる計画を、七百年前の室町時代の北畠親房の生誕の計画から始まって、寛永二年（一六二五年）と、信次

師のお母さんが明治三十一年生まれですから、その前の明治二十三年（一八九〇年）と、更に正確を記するために、もう一回計画の検討

をされ北海道から山形へ、さらに長野を選んだと書いておられるのです。

心を許す相談相手

そこで次に、一人では何かと心細いので、相談相手となる人をそばに出そうということになって、古代インドのお釈迦さま時代にプルナ

ートラヤー・ヤニプトラと呼ばれた人で、それから日本に富樓那（ふるな）という名で生まれ、現代、税理士の佐藤氏で、彼とは小、

中学校から、ずっと一緒だということです。

このように、生まれる場所も環境も、全部自分で決めてこの世に出てくるのだそうです。

自分で決めたのなら、生まれた所が暑い、寒い、こんな家に生まれるなんて、と言えるわけがありませんのに、不平不満だらけの今ど

きの人よ何とされますか。

父となる人

お父さんについて信次師は、こう言われています。

「僕の父は、釈迦のお父さんのシュット・ダナー王であり、その後、日本に生まれ変わって、鎌倉時代の源頼朝です」、

と。

信次師の懐古談によると、お父さんは寡黙朴訥に黙々と働く人で、子供の成長を楽しみに、地味な人生を送って七十五歳の生涯を終え

られたといえます。

信次師が悟りを開いてしばらくして（昭和四十四年頃）、お父さんが信次師の顔を不思議そうに覗き込まれると、

「治男（春男）、お前は本当にわしの子だろう、ナ、そうだろう」

「そうですよ、そうに決まっているじゃありませんか。それがどうかしましたか」

と何気なく信次師が答えられると、

「いやネ、昨夜、それがその...ぶ、ブ、武士が夢に出てきて「あれはわしの子だ」、

といったというのです。次の夜、また別の武士が夢枕に立って、

「わしの子だ、と言うんだよ」、

とお父さんは告げられます。

ターバンを巻いた二メートルくらいの白い服をまとった男だったとお父さんが言われるので、信次師はどうしてこういうことになるの

だろうと考えられ、信次師の父の霊を呼び出してみられます。

すると、最初の武士が出てきて

「源頼朝めにございます」、

と頭を下げ、胸を張って言うことには、

「あなた様が日本に生まれて法（神理）を説くためには、日本の体制を整える必要があって私は鎌倉幕府をつくりました。

ところが、武士はなかなか権力闘争が強くて困りました。 だから今度は、何も関係のないのんびりと百姓を選んで生まれることにしま

した」、

といわれたというのです。 するとまた、その後ろにティカラーの腕輪をつけた、インドスタイルの二メートルもの大きな男が仁王立

ちして、

「インドのときは、あなた様を育てさせていただきありがとうございました」

と頭を下げられたというのです。

二千五百年前、インドのお釈迦様のときのカピラの城主がその後、日本の源頼朝と生まれ、次に生まれ変わって現代の百姓のお父さん

になられたというのです。

縁というものはまことに不思議なもので、こうして見ると、我々はどんなに不満でも縁を通して、現在の両親を過去にも、未来の次に生

まれるときにも、再びお父さんお母さんに選んでも何ら不思議はないということなのです。

仕事もすべて自分が選ぶのだから自分の責任であり、職場が悪い上司が悪いと、自分の職業に不平不満も言えるわけはありません。

両親を選ぶのも、生まれた環境もすべて自分の責任というわけです。

また、お母さんについて信次師は次のように明らかにされています。

母となる人

信次師を生んだお母さんは、キリストを生んだマリヤさまであり、その後、日蓮を生むことになられます。

二千年前のベツレヘムの馬小屋でイエスを生んだマリヤ様が、次は鎌倉時代の日蓮のお母さんになり、現代は信次師を生み育てられた

というのです。

信次師の「お母さんの回想」によると、無学なりに、

「心まで貧しくなるな」、

とか、

「雨滴によって穴もあく、いつの日にかは」、

「一寸の虫にも五分の魂」

そして、他人の悪口を言えば、

「人を呪わば穴二つ」、

などと、諺を引用して子供達に教えられています。

特筆すべきことは、明治三十一年生まれのお母さんは、信次師を妊娠された頃から、ふしぎな声が天から聞えるようになり、夜道を歩

いていても足許がスポットを浴びたように明るくなり、懐中電灯もいらなかったようです。

まるでSFの世界ですが、かつてのマリヤ様ならではの超常現象だったのでしょうか。

また、お母さんが人に心から親切にされたため、信次師の家には不思議と物貰いが集まって来たので、みんなから生き神様と称えら

れ、信次師も心のきれいな人だと書いていられます。

ことに、キリストの受胎告知は、天使ガブリエルがマリヤさまへ告げられたようですが、現代の信次師の場合は、お母さんが子沢山なた

めに育児に追われ、天使が訪れても、お気づきでなかったと言うのです。

信次師のお母さんを訪ねて

正法を教えていただいた著者の先生ですが、園頭広周（そのがしら・ひろちか）という元国際正法協会会長は、昭和五十五年に信次師の

生家を訪ねておられます。

そのとき、八十二歳のお母さんは新築の家に一人で住んでおられ、眼鏡も補聴器もいらず縫いものをしておられたといひます。

会長一行が、色々とお母さんについて話を聞いておられると、たびたび話を切上げては奥へ行かれるので、何をされているのかなと思

っていたら、あっという間に三人分の昼食を用意して下さり、どうしても食べて欲しいと勧められたというのです。

信次師のお母さんは、そのとき、話をこう切り出されています。

「私が朝早く起きて炊事の用意をしていると、まだそれは結婚してまだ間もない時でしたが、橋の上を歩いていたら、私の身体のまわり

が一瞬黄金色に輝くのです。

すると、わたしは、わたしであって、わたしでないような感じがしてきて、天から声が聞こえてくるのでした」、

と。さらに、

「あの子は、親に心配をかけまいと自分一人でも何でも行動する子でした。治男（春男）は死にましたが、死んでいません。治男は今

も生きています」、

と自分に言い聞かせるように何度も繰返されたというのです。

当時、各県単位で、五、六人の優秀な者だけしか行けぬ幼年学校も、合格通知をもらってはじめて、両親が知られるほどでした。

ところで、そのとき偶然とは云え不思議が起こります。

信次師が生まれ育った家は、信次師がお母さんのために家を新築されたので、半分をこわし通路になって、後の半分は一行が訪ねられた

日に取り壊わすことになっていたのが、偶然にも雨が降ったために取り止めになっています。

それは写真に残されますが、危機一髪でした。

ウェブマスターの高橋信次師の故郷を訪ねて

（ウェブマスターが訪ねたのは平成四年三月二十日から二十二日。二十日は残り雪も見当たらない晴れ、二十一日はすごい雪。信次師の

晴れ日のたたずまいの写真と、大雪の家の写真が撮れました。

二度目の脳出血回復直後のため、後遺症によるビデオのブレは少し気になりますが写真はバッチリ。電話帳で高電工業を探し出し、電話

帳の住所も接写で残す気の入れようが見えます。取材ノートを見ると、初日は博多より朝六時の一番の新幹線で名古屋十一時。名古屋十

二時の中央本線の特急で長野が十五時。長野より信越本線特急にて小諸十六時。小諸から小海線普通にて滑津駅十七時。博多から生家ま

で列車にて十二時間の行程でした。

先を続けます。

さらにお母さんは懐かしそうに、信次師が背たけを計った柱の傷を指し示し、別れるときに、フトコロから紙包みを差し出されたので無

理に断るわけにもいかず、いただかれたそうです。

九州の遠くから尋ねてくれた人への思い遣りというか、心遣いが痛いようにわかる一例ですが、開けて見られると一万円だったというの

です。

色々な記述や講演からも信次師はお母さんの感化を特に受けていられるようです。

これに対して、更に付け加えると信次師は、過去世の母なる人をこう言明されています。

お釈迦さまのお母さんのマヤなる方

また、寛永二年のこと、インドの時の釈迦のお母さんであるマヤさまに信次師は、

「今度も私のお母さんになって下さい」

とお願いをされますが、

「今度は休ませて下さい。申し訳ありませんがインドの時は大変苦勞を致しましたので」、

と申されるので、それではマリヤ様であり、日蓮のお母さんをお願いすることになったというのです。

では、どうしてそういう話しになったのかと申しますと、マヤ様は出産のために故郷へ帰る途中の、現在のネパールのルンビニとい

うところで釈迦を生みます。ところが産後の肥立ちが悪くマヤさまは一週間で亡くなってしまいます。こういうことがあったので その

意味でマヤ様は大変だったに違いありません。

何と釈迦は逆子だったというのです。

それが原因でマヤ様は亡くなることになるのですが、これとてお釈迦さまがこの地上界で自分から悟り、人類の救世主になるための一

つの手段として、マヤ様は天上界の計画によって天国へ召されたというのです。

これを聞いて、それにしても天上界って無慈悲なことを、よくもまあ、やるもんだと皆さんは驚かれるかもしれませんが、我々は永遠の

生命であり、この世限りではなく、死んでもまた生まれてくるのです。

このように天上界の計画に参画することは、魂にとって偉大な功績となって褒め称えられることとなります。

だが、マヤ様にとっては、とても大変なことだったのでしょう。

伝説の誤謬性

しかしそれにしても、お釈迦さまはマヤ様の脇の下から生まれ、七歩歩んで「天上天下唯我独尊」と言ったとも伝えられていますし、あ

らうことが、イエスにはマリヤ様の処女懐妊説があるように、これは後世の人が神格化するための作り話であると、信次師は修正してお

られ、

「そのようなことはなく、イエスは普通のように生まれ、釈迦も我々と同じで、後世の人が賛美する余り、作り変えたのだ」、

と。

縁生ということ

おうおうにして、人は自分が望む有名人の子として生まれたいと思うものです。

でも、そこには誰も侵せぬ縁というものが厳然として有るので、自分の一存でマヤ様やマリヤ様の許に生まれようとしても、それは不

可能だと知るべきです。

念を押して云えば、このような意味から縁を通して、皆さんの現在のお父さん、お母さんを次もまた選んでも不思議はないのです。

我々はそこがわからないものですから、自分で「お願いします子供として育ててください」と、両親を選んでおきながら、選び損ねた

とか、恨んでみたり不平不満を言うのも、それこそナンセンスというものです。

お父さんお母さんへの感謝、報恩とは、こういう意味があったのかと、初めてお気付きになったことでしょう。

ともかくも信次師のお父さんの過去世の名が、あの源頼朝であり、インドのお釈迦さまの時代はシュット・ダーナー王で、さらにまた

お母さんの過去世が、マリヤ様であり日蓮の母であった、と。

マヤ様の現代を検証すると

一方、マヤ様は、今度は信次師をお断わりになります、なんとも都合のよいことに、やはり日本に生まれられているのです。

「やはり日本に！」

と、余りに出来すぎていると勘ぐられても仕方ありません。

その方は、日本の華族の中で最も金満家と言われた蜂須賀侯爵家夫人となられ、蜂須賀T子として、それはそれは蝶よ花よの優雅な生

活振りでした。

そこで、T子氏は縁の不思議さを感じられてか、人が集まる一軒家を信次師に寄贈され、信次師の正法の伝道を、温かく見守られていた

というのです。

マヤ様、或はマーヤー様の本名は、マカハンニヤダイで、(マ)カハンニ(ヤ)ダイの、マとヤをとって、通称マヤ様、マーヤー様な

のです。

この項を最終整理していた時、ウェブマスターには不思議がありました。この辺の記述がある『G L A』誌を或る方から送っていただ

き、マヤさまの真実を書き加えることになりました。

園頭先生と共著で出していただいた『正法と高橋信次師 1・2・3』の著書もある関係からか、大川隆法氏以後の「高橋信次先生もの」

の草分けとも目され、この手の本の引用文献として数冊の本の中に在るものですから、標準書籍として天上界から監視、監督されている

のか分かりませんが、思いがけなく責任の重大さをヒシヒシと感じております。

先を続けます。

昭和四十五年十一月、亡くなる数日前に信次師に出された手紙も残されており、八十余歳の生涯を閉じられます。

尚、T子氏はこの百年前には釈迦の分身である桂小五郎、つまり政治家の木戸孝允の母であった、と信次師は書き残されました。

さらに、T子氏は蜂須賀夫人として優雅な生活振りは当然ですが、金満に溺れず、絶えず神理の追求に没頭され不思議も体験されてい

たようなのです。

このようなわけで、マヤ様は優雅な生活、片や、マリヤ様は貧農の妻、この不思議な明暗ともいえる相対性について、不公平ではない

かと思われる向きもありましょうが、とんでもありません。

その考えは独り善がりの独善というもの、どちらがより良い魂の勉強になったかということです。

金持ちとか貧乏というのは、魂の修行の道具であり、一つの人生勉強に過ぎないと知らねばならないのです。

生い立ちの不思議

生死の境を何十回も往復

十歳の秋(九月三日)の夜八時、それまでは病気という病気もされたことがない信次師は、心臓は停止し、突

然、死んだようになって

しまわれたったというのです。

その日は三時間ほどで息をふき返されましたが、それ以来、夜八時になると、しゃっくりが出て呼吸だけになり、四、五秒で完全に心臓

は停止するというものでした。

こういう状態が続くものですから、両親はどうされる術もなく、ただオロオロとして信次師の心臓が停止した萎えた死体を抱えて、耳許

で「はるお！ほら、ハルオちゃん！」と名を呼んだり、揺り動かしたり体をゆすって、どうにか息をふき返えさせようとされたようで

す。

大勢いる家族も、どうすることも出来ずに口々に名を呼び合い、顔を見合わせては心配そうに、じーっと互いに見つめるだけだったとい

います。

一方もう一人の信次師はというと、その推移をフトンの上の方からすべて見て分かっているから、家族に心配を掛けまいと、

「ホラ、僕だよ、心配しないでここだよ、ここにいるよ！」、

と声を掛けられるが、誰れも気がついてはくれなかったようなのです。

その内に医者が来ても、唇はぶどう色、顔面は蒼白、手足は柳のように萎えている信次師の診察をして、もはやどうにも打つ手がない

という顔をしてカンフルや浣腸をするだけでした。

その間中 もう一人の信次師はそれを全て見ていられる。

するとその内に、薬の匂いがプーンと感じたら心臓が動き出し、もう一人の信次師は本来の自分の肉体に戻るという、このような分身

現象が何度も定期的に起ったというのです

その時間は十五分から数時間というものでした。

それからは医者も診断をつけかねて、その内には「またか、私には最早手におえない」と顔も見せなくなり、家族もあきらめて、そ

の経過を心配そうに見ているだけだったというのです。

その間、もう一人の信次師はというと、あたかも忍者のように自由自在、変幻自在であり、どんな隙間も自由に何の抵抗も無く通り抜

けることができ、もう一人の信次師は故人と会ったり、美しい花園を散歩したり、信じられそうもないことが展開されていきます。

これこそは、いまで言う幽体離脱といえればよりお分かりいただけるでしょう。

信次師はこれを、

「原始肉体と光子体の分離」、

という言葉で説明されていますが、これはいわゆる死ではなく、霊子線という糸でつながっている、次元の違う「生」の状態なので

す。

死は、原始肉体と光子体をつないでいる霊子線の完全な切断であり、完全に修復できない離れた状態をいいます。

一方、睡眠はもちろん霊子線はつながっていますし、次元の違う世界で神のエネルギーを授かっている状態なのです。

何か悩みを抱え込み熟睡、爆睡できずに、神のエネルギーを完全に受けられぬと、スッキリした爽やかな目覚めは得られません。

あなたが熟睡したければ、悩みを作らないようにするか、または、悩みの原因、悩みの元を根っ子から潔く取り去ることだと信次師は教

えておられます。

くどくなりますが、加てて加えて幽体離脱について説明しましょう。

無論、幽体離脱といってもさまざまな段階があるのです。

宇宙即我（うちゅうそくわれ）

それには人家やビルの高さまでの低い幽体離脱から、宇宙即我（うちゅうそくわれ）という、宇宙や極限の果てまでの最高の離脱もあり

ますが、その人の心の広さ、言い替えれば、人間性とか人格に比例するので、幽体離脱の体現者が現れたと、鐘太鼓でニギニギしく囃し

ながら現れても、注意深く慎重に観察することが大切なのです。

ことに著者が知る限りにおいては、宇宙即我の現代の体現者は、高橋信次師と園頭広周師の二人位と考えられ、そもそも宇宙即我という

のは、自分は宇宙だったという境地と悟りなのです。

宇宙と一体になるという自覚は、菩薩界や如来界の高人格、超人格の人間性の最も高い人の次元のものです。

宇宙即我という程の幽体離脱は、地球が遙か眼下に見えて、地球の回転音が聞こえるというのです。

その音は「AUM」と発音したもので、つまり、「オオオオ、、ムムムム、アアアア」と聞こえると、園頭会長は教えて下さっています

す。

また、会長が度々訪問された米ロスのアガシャ教会では、招霊会の際に、手を内側に廻しながら「AUM」と聞こえる発音を唱えてい

たと会長は教えて下さいました。

人騒がせなオーム（改名アーレフ）教のあのオームは、この音から来ているものらしいのです。

白山神社

医者にも見離された信次師を、両親は為すすべもなく、ついには、耐え切れなくなって色々な神社祈願にも、近くの鍼灸師のもとへも連

れて行かれたというのです。

信次師は、自転車の荷台に乗せられ色々な治療に連れていかれるときに、お父さんから振り落とされることが度々あったらしく、

「頭はコブでデコボコですよ」、

と信次師は笑いながら述懐してられる。

そのような体験がしばらくつづいたあと、分身現象が出なくなる頃から信次師は村はずれの小さな白山神社へ通い、朝夕六時の二回、社

の掃除と瞑想にふけり祈願するのが日課でした。

このようなある日、ちょっとしたことがあったのです。

信次師がお母さんと成田山へ詣でたとき、不思議な墨染衣を着て顔を深く隠したまんじゅう笠姿の、見知らぬ旅の僧が、信次師の頭をな

でながら、

「病気は、近々なおる」。

さらに、

「お前の眼は二重孔だ、一生懸命に勉強すれば霊力を持つことになるう」、

と奇妙なことを言うのでした。

二重孔とは何かといえ、一つはこの眼で見える世界であり、もう一つは、あの世も、未来の世もすべて透視する能力をいうのですが、

信次師とお母さんは、その語りにびっくり仰天したというのです。

その通り病気は半年ほどですっかり治り、それから、もう一人の信次師も自分の肉体から出ることはありませんでした。

不思議な僧

それからは、その僧と同じ姿をした旅の僧が遊んでいる信次師に、色々な言葉をかけ、

「今夜はこの川岸に留まって過ごすから、夕方まで解らない勉強を教えてあげよう」、

と菓子をくれたりします。

そこで、信次師がお坊さんの横に腰をかけられると、信次師の将来について優しく導き

「心というものが、全ての元である」

と難しいことも習われます。

ある時などは、同じような旅の僧が家に尋ねて来て、

「信次は元気に暮らしているか」

と良く話しかけていることがあり、このように信次師の家には不思議と旅の僧の来訪が多く、信次師に対して、正しい心を教えて行った

ようです。

しかし信次師は学問は余り好きではなく、それでも神仏の話しになるとまるで生き返ったようになり、学校から帰ればカバンを放り投げ

山野を駆けめぐる日々でした。

心霊術者トニーのこと

見知らぬ旅僧が尋ねて来ては、そのつど教へ導いたとは不思議と言へば大変不思議です。

これに対して、フィリピンのトニーはあのキリストの分身ですが、信次師と同じような不思議な体験をしているので、彼の自伝から紹

介してみましよう。

こう書き出すと、なにか霊的な暗示を感じさせるでしょうが、実は信次師が言い残された言葉の中に、

「フィリピンでイエスの分身（５）が肉体舟に乗って修業している」、

というのがあるのです。

それはフィリピンの心霊術者・アントニオ・アグパオア（通称トニー、一九三九～一九八二・昭和五十七年）のことなのです。

ご存知でない向きかもしれませんが、一時期、テレビなどで盛んにフィリピンの心霊ツアーを報道しましたが、並みいる心霊術者の中

でも、最も名が通ったのがトニーでした。

イエスと聞いただけで、かの言わずとしれたキリストですが、その分身だけに、霊能たるや想像も出きぬ位いのものと信じていただけま

しょう。

このトニーの自伝によると、信次師と同じ体験をしているのは実に不思議です。

サテ、自伝ですが、

それは、トニーが七歳のとき、黒染めの絹のような服をまとい、腰には白いヒモを巻き、白ヒゲのアポと呼ぶ一人の男が出て来て、山

小屋につれて行ったというお話しです。

そこには、不思議にもトニーにピッタリの服が用意されていて、そこでアポはトニーに、色々な物の調和（シンフォニー）、心について

教えていったというのです。

トニーが独りでいる時も、いつもアポの存在が感じられ、瞑想を教えたり、物や、動物の内なる調和を学び一体となること等を教えて行

き、一定の教育期間が終わるとアポの姿は消え、次には心の中から霊的に教えていったことが詳しく述べられています。

このように、使命と目的を持って生まれて来た人達には、天上界の協力によって、霊人が、物質化現象というか人間の姿となって、この

世に現われ不思議な協力をして教えていくもののように見えます。

使命ある光の天使が増上慢になると

念のためにいっておきますと、トニーの心霊力が高まり、世界的に名声が広がるようになると、世界中から人々が、トニーの許ヘドーツ

と押しかけて行くことになります。

トニーが、それから増上慢になって金や女に溺れてゆくと、その心霊力も一時的に消え、「力が消えてしまった、どうしたんだ力が出な

いよう！」と悩んでゆくことが記されています。

が、あろうことか、心霊ツアーで訪れた日本人女性との肉体的関係が原因で、残念なことに昭和五十七年、脳出血により短命でした。

国際正法協会、園頭広周会長の月刊『正法』には、会長はバギオに飛ばれ、

「今のような生き方をしているはいけないと忠告して来た」、

というのもある程ですから、高橋信次師の一番弟子と自他共に認められる園頭会長は、信次師亡き後も師の意思を継いで、腐心してい

れたことが窺い知れましょう。

更にもうすこし補足しておきますと、

トニーは、バギオに瞑想道場ともいえる六角堂をつくっています。

ところが余り神聖な場所ではなかったと見えて、先のフィリピンの大地震でメチャメチャに埋没してしまっているのです。

ついでに、もう一つ付け加えておくところになります。

トニーが同じくらいの子供とボール遊びをしていた幼時のことです。

遊び飽きたものですから体を使わず、霊力でボールを返していると、ボールがわらわき家の屋根に引っ掛けて落ちてこないもの

全能を出して何度も力んでいると、突然、火を噴出して家は丸焼けになってしまい、それからアポが悲しい顔をして出て来て、

「心して反省せよ」、

と。

それからトニーは反省して行く情景が詳しく書き綴られています。

信次師もトニーにも、これまで述べたような霊界の不思議があったのです。

また、信次師の予告によると、

「今から百五十年もすると（昭和四十八年現在、百八十年後と）、イエスの本体がアメリカのシカゴに生まれる」

というのがあります。

もし、そうであるなら尚さらのこと、正法が教えるところでは、本体は、自分だけではなく分身の心の傾向性も、修正しなければなら

いと教えていますので、そのときのシカゴの本体イエスは、分身トニーのカルマ（業、心の傾向性）も修正しなければなら

いと言いますので、そのときのシカゴの本体イエスは、分身トニーのカルマ（業、心の傾向性）も修正しなければなら

いと言いますので、そのときのシカゴの本体イエスは、分身トニーのカルマ（業、心の傾向性）も修正しなければなら

いと言いますので、そのときのシカゴの本体イエスは、分身トニーのカルマ（業、心の傾向性）も修正しなければなら

いと言いますので、そのときのシカゴの本体イエスは、分身トニーのカルマ（業、心の傾向性）も修正しなければなら

は当然といえば当然なこ

とかもありません。

サテ、先程から分身（５）や、本体と述べていますが、それ何のこと？と疑問もあると思いますから、「一本体と五分身」の法則につい

て、簡単に述べてみます。

これは信次師が、信次師の守護霊、指導霊から「植物の細胞から学べ動物から学べ」と絶えず注意されて、神理に到達したものといわれ

ています。

次は複雑な理論ですが、学生時代を思い出されてじっくり読んで欲しいものですから、敢えて要約せずに挙げることにしました。

人間は本体一・分身五の関係

人間は、大自然界の構成員にすぎない。

植物は、核（本体一）を中心に、その周囲に原形質膜、液胞、色素体、細胞膜の四つから構成され、本体一、分身四の関係となる。

動物の場合は、核（本体一）を中心に原形質膜、ミトコンドリア、ゴルジ体、中心体、脂肪粒 分身五、つまり本体一、分身五の関係に

なる。同様にして、鉱物の場合は原子番号に核を加えた数が、本体と分身の数になる。

例えば、炭素の原子番号は六、核が一つに陰外電子が六ということであるから、本体一、分身六の関係となる。

このように人間も動物だから、本体一、分身五の関係には違いないのだが、実は人間の場合は、特に、この大宇宙が神の大意識を母体

に、熱・光・電気・磁気・重力という五つのエレメントからできているので、人間の生命体もこれに合わせて本体一（大意識）、分身五

（五つのエレメント）の組合せになっている。

人間を称して小宇宙というのも、生命の成立が、このように大宇宙の構成と同じようにできているからである。

生命も物質も、三つのプロセスからできている。

地球に生命が宿るのは、太陽、月、そして地球という三位一体の構成。

地球（地上）は気圏、水圏、岩圏から成っており、原子は、核外電子、中性子、陽電子からできている。

電気は陽性（＋）、中性（N）、陰性（－）から、細胞は大きくわけて原形質、細胞質、核の三つから構成されている。

物質の成立は、宇宙の大意識をまず出発点として、第二に熱、光、電気、磁気、重力のエネルギーが組み合わさって、物質という第三の

現象化が行なわれているのである。

生命もこれと同様に、まず、

第一に、宇宙の大意識から、

第二に個としての生命が、あの世すなわち実在界に誕生し、

第三に現象界（この世）に姿を現わすのである。

一度、現象界に出た生命体はこの世とあの世の転生を繰り返し、この世に生まれ出る時は、両親という媒体（縁）を経て、姿を現わすの

である。

つまり、大意識から離れた生命は、あの世、両親、この世というプロセスを踏みながら循環の法のなかで生きるように仕組まれているの

である。

次に、人はどのような順序で生まれ変わるかという話しです。

生命体（魂）の転生輪廻・生まれ変わりの順序

魂の生まれ変わり死に変わりの転生輪廻は、それではどういう順序で行われるかといえば、原則的には順ぐりなのです。

Aが出れば次がB、Bの次はCというように、A（核）B C D E F（分身）が順次、現象界に出て修行する、というのが原則です。

ただし、転生輪廻の過程で、修行を積む者と、地獄界に落ちて、「横道にそれてしまう者」、もあって、全体のバランスを崩

すことがあるので、その場合は、あの世で話し合い、前記の原則にこだわらず、AならAが短期間に二度、三度、現象界、

つまり、この世に出て修行することもあります。

しかし、こういうケースは比較的少なく、大半は順ぐりに出て修行することになるようです。

先に述べました

「横道にそれてしまう者」、

とは、非常に重要なポイントの一つですが、我々人間の靈魂というものは、天上界に帰った者のみが、この世に転生、つまり生まれ変わる

ことができるのです。

これはまた別の見方をして、この問題をもうすこし突きつめて考えていくと、横道にそれ、地獄の暗い世界に定住した者は、地獄の世界

からそのままこの世に生れ変れない、つまり、この地上界に誕生できないという意味です。

現代の、せっかちで逆切れする人達には、これは非常に深刻な問題ですが、一旦、天上界にもどって、それから、この世に肉体を持つこ

とになるのですから、この意味において、混乱が起こるわけです。

どういう混乱かという、順繰りには行かず、話し合いの上でこの世に出る順番を決定をせざるを得ないという混乱です。

では、あの世の天国、天上界とはいかなるところか？

天国へのパスポート

天上界へ行ける最低の一番下の心の段階はと申しますと、まさか有得ない！と意外に思われるでしょうが、

「自分さえ良ければ他人はどうでもよい」、

という程度の低い心の世界なのです。

このエゴの心の世界を幽界（ゆうかい）といいますが、驚くなかれこの程度に過ぎないのです。

考えても見て欲しいのです、世界人類の平均的な心の段階を考えますと、酷い者はひどいのです。

著者が言っているのは、学歴、地位、名誉や財産の多寡をいうのではなく人間性や人格を問題にしています。

天上界への最低のパスポートがエゴの心というのですから、地獄界でうろちょろする人の心の段階とは、それ以下の、それはそれは、ひ

どい世界と想像できるでしょう。

一つの例を挙げますと、読者の皆さんには関係ないと思われませんが、地獄界の一つ畜生界は、どこを見てもどこを見廻しても、本能剥き

出しの野獣のように四六時中、肉欲を続けるという理性も常識もない者の集まる同類達の世界です。

いずれにしましても、地獄界は、思いやりや優しみなど微塵も無い、慈悲も愛も皆無の世界なのです。

一方、天上界でも高位の心の段階は、どこもここも見渡す限り爽やかで思い遣りが有り、慈悲と愛の塊のような人達ばかりの同類の最高

の世界、まさに天国なのです。

天上界（てんじょうかい）

天上界を上段階から五分類しますと

如来界（にょらいかい）

菩薩界（ぼさつかい）

神界（しんかい）

霊界（れいかい）

幽界（ゆうかい）

地獄界（じごくかい）を五分類しますと

修羅界（しゅらかい）、

煉獄（れんごく）、

畜生界（ちくしょうかい）、

無間地獄（むげんじごく）、

魔王（まおう）

最初の地球人

著者の正しいマインド・コントロールが効いてか？びっくり仰天とはならぬと思いますが、尤も、正しいか間違いかは、各人の判断に任

せることにしまして、信次師の言い残された言葉によるとそれはこうです。

三億六千五百有余年前、数億光年離れた他の天体のベーター星から、このうら若い緑に燃え光に包まれた地球に最初に飛来したのは、六

千人のベーター星人でした。

今でいうUFOに乗って最初に着地した場所は、地図を持ち出すと一目瞭然ですが、スエズ運河の近郊、現在のアルカンタラ（エルカン

タラ）でした。

この統率者であり責任者をエルランティといわれ、この地を調和された地上天国という意味で、エルランティは「エデンの園」と命名され

ます。

現代と違って三億年目のエデンの園は、温暖で暑過ぎもせず寒過ぎもせず、事故も無く、病気もせず、人との争いもなく、思うは隣人の

幸せばかり、ここは高人格、超人間性の人ばかりという、理想的な「**原始人間共同体**」だったのです。

エルランティの下に七大天使が随行しましたが、七大天使の一人、ルシフェルはその生き様から、天上界に帰ることなく地獄界を形成

し、ルシフェルはサタンと呼ばれ、地獄の帝王として魔王となったというのです。

真のメシヤはエルランティ

亡くなられる直前に信次師は、自分こそはエルランティであり、真のメシヤを自覚して、こう言い放たれたのです。

「エルランティとして、モーゼにはヤーベを、釈迦には梵天を、イエスにはエホバを、古神道の天照大神には天つ神を、イスラム教のマ

ホメットにはアラーを名乗り、これらを一つにするために、人間の正しい生き方を正法として説いたのです」と、このように、信次師は

驚くべきことを教えて昇天されたのです。

陸軍幼年学校

信次師は勉強は余り得意ではありませんでしたが、神仏のことになると、まっぴり目には輝やかれるのでした。

しかし、入学するやもちまへの才能を発揮して、めきめき進級し、平賀小学校（現・城山小学校）を卒業すると、野沢中学校（現在の野

沢北高校・進学校で名高い）に入学されたが二年で中退、成績の優秀な者が選抜されるので名高い仙台陸軍幼年学校に入学されます。

このとき両親は合格通知が届いて初めて、試験を受けられたことを知られるというもで、いかにのんびりした当時でもこれは異例のこと

だったようで、子沢山の貧農であったために、学費と食費の心配を掛けまいと、全寮制で学費も全部まかなわれる学校を、信次師が選ば

れだというのも特筆して余りあるでしょう。

剣道と高橋信次師

そして、中学より始められた剣道はそれ以後、信次師の生涯に少くなく影響を与えることとなります。

信次師の長女・佳子氏の著書には、幼い頃、他愛のない悪さをすると短気に、「貴様ッ」と木刀を振りかざすことがあったとあります。

また、高弟達を連れて、九名ばかりの志賀高原での特別研修では、意識統一のために講習の合間をぬって、剣道着に着替え素振りなど

を全員でやられたようです。

そのときの記念写真には、みな愉快地笑顔で、中肉中背の信次師と一番長身の園頭会長の姿がひととき印象的です。

それでは、このときの特別研修の情景を簡単に綴ってみましょう。

午前中は反省の時間でした。

めいめいが壁に向かったり、窓に向いたり、目を閉じたり、空を仰いだりして人生の反省を続けます。

信次師はといえば、別の部屋から、それぞれの反省の状況を霊視、透視していられたようです。

すると様子を見に来られた信次師は突然、

「あなた方の反省は、どうどう巡りして一つも進展がありません、これからは紙に書いて下さい、それを私が見ます。」、

となります。

それから、それぞれが複雑な面持ちで反省の記述を始めますが、正法の反省は簡単に述べると、こういう風になります。

Home

正法が教える反省の仕方

テーマを項目ごとに決めて、例えばお金の問題、異性の問題、兄弟との問題など、それ等に沿って反省をしてい

く方法と、

もう一つは、一歳から五歳、五歳から十歳、十歳から十五歳、或は十歳まで、十歳から二十歳、二十歳から三十歳というように五歳や

十歳間隔に区切って、親や兄弟、先生や友達、周りの人にどう対応したか、つまり、怒らなかったか、愚痴らなかったか、不平不満をい

わなかったか、欲望をむき出しにできなかったかなどと、今までの全生涯を心静かに、反省をすることをいいます。

このように、信次師は、別室にいても、人の心に記録されている一切の、全記録を自由にわかるるということか、見る力、透視力を持っ

ていられたのです。

守護霊に尋ねる

なぜ、こういうことができるのだろうか？と疑問をお持ちでしょう。

それは各人の守護霊に尋ねれば簡単なことです。

これについて述べさせてもらいます。

それは、人が生まれ変わり死に変わりする中で、地球人類、誕生の三億六千五百年前から、人間は何万、何十万回もの人生体験を持って

いるというのです。

尤も、その前のベーター星当時から、否、その前からすれば、もう、天文学的な数字かもしれませんが、それは横に置くとしまして、

例えば、現世の前は五百年前、その前は、千二百年前、二千年前というように生れた人がいたなら、現世に一番近い人、ここでは五百年

前の人が主に守護霊となって、現世の人を生れてから全部、見て知っています。

そうすると、その人の全人生を全部知っている守護霊に尋ねれば、何でも全部わかるということになります。

それでは、現在のあなたが内緒も全て、人を選ばず誰にでも秘密をさらけ出すのかといえ、口を貝のように閉ざすのが普通です。

それは当然です。

でも、尊敬と信頼できる人へなら一も二もないように、尋ねる相手の光の量の区域、つまり相手の人格というか人間性によっては、守

護霊も心を開いて一つ残らず告白するはずです。。

では、どうするか？

それは、高橋信次師や園頭広周会長のような超人間性の人なら、全く問題ないと思われませんが、世の霊能者の多くは、狐や蛇の動物霊や

人間の地獄霊が憑依して、つまり、憑いて、いや協力して、霊能を現わしていると著者は考えていますので、失礼ながら、人格的には余

り高くないと思われ、色々なお尋ね事をして、それが当たりはずれが多いというのも、この辺の事情を斟酌できましょう。

ことに、信次師のものはズバリ百パーセントというものでした。

それはどういうことかと言えば、信次師は昭和四十年代、迷宮入りになりそうな事件の数々を解決させていられます。

あの三億円事件に取り組もうとされたとき天上界から、

「事件解決屋みたいなことをやっている、都合の悪いやつに酷い目にあう」、

と忠告されてからみなお断りしています、となります。

更に申し上げたいことは、早期解決は必ずしも人それぞれの魂の勉強になるとは限らないので、迷宮入りもそれはそれで仕方のないこ

となのです。

これは、どういう意味かと申しますと、事件は加害者も被害者のどちらも、「原因と結果」という悪因は悪果の原則が厳然として働き

ますので、解決に時間を要すると、当事者全員がその長い時間の経過に、人生とは、死とは、良心の呵責とは、心の安らぎとは、事件解

決とはということを実際に考えさせられ、悩み苦しんで、魂の勉強になるというのです。

信次師のような、高人格の正しい霊能を持つ人なら、

「三億円を奪った人よ」

と守護霊に尋ねれば、何んてことはないのです。

まさにこれから、著者がこの本でときあかそうとしていることを無理なこじつけではなしに、事実をいくらでもあげることができるので

す。

昨今、『ハリーポッター』という魔法の本が話題で、全世界で何億冊と出ているようです。

「事実は小説より奇なり」、

という言葉があります。

したがって 高橋信次師が現わされた奇跡というか不思議な現象は、事実そのもの、真実そのものであり、事実は小説より奇なりという

標語そのままですから、小説みたいには夢がなくて、面白くないのかもしれませんが。。

奇跡は夢の先取り

ハリーポッターのサブタイトルの「賢者の石」というのも、昔から錬金術、つまり、卑金属や物質から純金を創り出すことを人間の悲願や

夢として来たことに由来していると理解できますが、先で詳しく述べる信次師の金粉現象は、まさに錬金術、出た当初は熱く四、五十グ

ラムもあって分析が可能なものだったと弟子の著書の中で報告されています。

信次師のものは、それほど真実でした。夢が夢のままなら良いのですが、夢が事実になるとき夢も希望も消え失せてしまうのです。

奇跡は夢の先取りで、信次師のものは、正に、そう言えたのです。

話は元へ戻り先を進めます。

やがて戦争は激しくなり、そのむなしさは友人の死によって倍加されて行くのでした。

信次師十八歳のとき、信次師に親切にしてくれた女性に片想いをされますが、恥ずかしがられて何も言えず、これは少年時代の思い出の

ひとこまでした。

高橋信次とイルカの防壁

信次師は、陸軍幼年学校から士官学校に進んで航空士官となって出兵。そのとき、十二時間、海に漂い海防艦に救われたことがあった

というのです。

それは不思議とイルカが信次師のそばに寄って来てくれたために、米軍の機銃掃射を免れたことによりますが、信次師の身体には弾丸の

破片がいくつも残ります。

弟子の一人は、色白の体に幾条かの傷跡を見せられたことがあると書いていられます。

イルカは、イルカショーでも知られているように賢いと言われていますが、この場合は天上界からの指令という

か、何かがあったのでし

ょうか。

このとき、傷つき倒れた多くのイルカがいたでしょうが、愚かな人間が起こした戦争のために、身を犠牲にしてまで信次師を救ったイル

カに、著者は心から敬意を表します。

神の使い姫

光の天使には動物が神の使い姫として協力するといわれています。

お釈迦さまには猿が現れ危機を救い、光の天使エリヤには為政者から迫害される中で、鳥たちが魚を運び、果物を運んで飢えをしのがせ

たというのです。

さらに、信次師が伝道を開始されてから後、伊豆の海岸で皆と共に、信次師はイルカと話をされたと伝えられています。

これに対して、もう一つ、戦争のときの不思議を例に引きましょう。

霊的国防の予兆

信次師の弟子である園頭会長が、中国に出兵されていたときのこと、機銃掃射を受けられます。

今だと思っ、会長は、ここに戦争があるという観念を捨ててドツかと坐られます。

軍刀を立てかけて瞑想をはじめられると、周辺に落ちる爆弾という爆弾、弾丸が爆発せず、不発に終わって落ちて来たというのです。

何ものにも恐れず不動のように瞑想されるのが余ほど悔しかったと見えて、最後の一機が超低空から風防を開け手投げ弾を投げつけ、う

らめしそうに諦めて帰って行ったというのです。

安らぎの心の世界は明るい光明の世界、戦争は暗い闇の世界、暗闇は光によって消えたのでした。

まったくSFの世界ですが、この手の話しが正法の世界には、当たり前のことのようにゴマンと口に上るので

要するに、心の世界、意識の世界というものは、それ程、大切なもので、想念はものを創くり出し、悪の弾丸を不発化するのです。

国際的に核装備の進むなかで、世界で唯一の核被弾国である日本は、この霊的国防を実践することが急務でしょ

う。

人間は、靈性に目覚め、その偉大性に感謝しなければならないと思うのです。

もちろんこれだけなら偶然といってすますこともできるかもしれませんが。

しかし、これからくわしく述べるように、光の天使にまつわるこのような奇妙な体験の符号は、無理なこじつけではなしに、いくらでも

あげることができるのです。

光の天使にまつわる現象、すなわち、信次師や会長についての奇跡を縷々述べていますが、もう一つ、園頭会長の場合はこうでした。

1通の電報

おなじく戦地でのこと、出兵先に「転出を命ず」という一通の電報によって、会長は、ガ島から軍徴用の漁船で脱出されますが、ニクソ

ン元米大統領の率いる軍艦の攻撃を受けても、喫水の浅い漁船は魚雷が下を通過して行く始末、更に良いことには、撃ち合っているうちに

ニクソン艦の蒸気パイプを打ち抜いたらしく蒸気を空高く噴出して航行停止、ソレッとスタコラ逃げ出されましたが、喜ぶのも束の間、

脱出されたガ島では全員玉砕の悲報が待ち受けていたそうです。

今は亡き我が園頭広周会長の涙の講演を懐かしく思い出しながらパソコンに向かっています。

これまでに、光の天使には動物が使い姫として現れて、協力することは簡単ですが述べました。

次は会長の神の使い姫のハトのことです。

園頭広周会長とハトの使い姫

園頭会長が生長の家の講師の頃、道場で研修をはじめると、一羽のハトがやってきて、講義を聞くような素振りをしたり、皆んなの輪の

中には行って、なかなか去ろうとしません。

講習会の間、やって来ては仲間にはいる。その時の写真も多く残っていますが、みんなが不思議だ不思議だと驚いていたそうです。

同じく、園頭会長の国際正法協会の小田原研修会でのこと、一羽のハトが飛んで来てはいつまでも会長の講演を聞いている様子でした。

これも写真に残されています。

次は会長の亡くなられた直後に、著者の書いたハトの逸話です。

これは『正法感謝の集い』の機関誌と、正法のホームページに公開したものの抜粋です。

アドレスはwww.shoho.com/

平成十五年五月一日で五年半ですが、アクセス数は五十五万件に達しています

先生を見舞ったハト

「ご自宅へ伺うと、先生のご遺体は戻られたばかりで、準備が整うまで近くで控えることにした。

先生のご自宅の窓辺に通ずる畑の傍に車を止めていると、何処からともなく、肥えたのと細身の二羽のハトが飛んできて、窓辺の畑を往き来き来

するのである。

みぞれ交じりの粉雪の中を立ち去ろうともせずいつまでも居続けた。

そうしていると、畑の対角にある、葉をすっかり落とした丸裸の木に、丸々と太った一匹の大きなカラスが飛んできて辺りをうかがい始めた。

そして、ジャンボ機が着陸するときのようにドシーンと地響きを立てて降り立った時には、さすがの私と妻の二人も身構えるほどだっ

た。

別段、二羽のハトに悪さはしなかったが、凱旋して引き払う時のカラスの様子がまた何とも間抜けであった。

飛び上がって梢（こずえ）に足を架けたのが小枝で、体重を支えきれずに落ちそうになったので思わず吹き出してしまった。

そのような中で先生への対面を許されたので、それからハトはどうなったか知らないが、部屋に通されて見ると、ハトが往き来した辺り

に先生は静かに身を横たえておられた云々。」、

と。

何度も述べますが、お釈迦様は猿が使い姫になったそうですが、使命のある人達には、このようなことがあると見えます。

園頭会長のことが長くなってしまいましたが、先を続けます。

また、信次師は、航空隊で沖縄に出撃したことがあると聞いた、と園頭会長は書いておられます。

終戦と上京

そして、終戦。

敗戦を迎えた多くの兵士達は故郷の山河に迎えられていきます。

こうして信次師は、幾度かの生命の危険にさらされた生活から解放されて、ひとまず両親のもとへ帰省されますが、やがて人々は破壊さ

れた環境を再建するために立ち上がるのでした。

それから、信次師は二カ月後に上京されますが、復員で渡された金二千三百円、それに父親から譲受けた牛一頭が信次師の全資本であっ

たといえます。

このどさくさの中を、長野から着の身着のまま上京された信次師は、驚くことに大学入試認定試験にも受かり、日大工学部電気工学科

に入学して、大学では自然科学や理科系の学習を主としますが、常に心の問題を中心として霊的問題のきっかけをつかむための学習だっ

たというのです。

そのために学友は、

「哲学科へ行ったら良いよ」、

と言ったり、変わり者の予言者などと呼びます。

しかし、信次師は宗教書を読まれる気はサラサラなく、神秘の世界には常に探求を続けられたのです。

瞑想に耽ってみても、心に一時の安らぎができても一時的なもので、もとのもくあみだったと言われています。

さらに、信次師は食糧難の時代に、芋の買い出しをしながら勉強を続けられ、生活のために石鹼を自作して売られたり、部品を買って来

ては電気蓄音機を組立てては売って、生活を立てられたようです。

紙に予言文字

そして、この頃から親しい友人から将来の予言的なことを頼まれると一枚の紙の上に字が現れ不思議なことに百発百中したというので

す。

紙の上に文字となって予言が現われるなんて、まるでテレビのマジックショーですが、その辺について、著述家・上之郷利明氏の取材が

あるので要約してみましよう。

奥様の一栄氏は語られる

「結婚して間もない頃のこと、知り合いの人と神様の話しをしている。

信じられないような話しも出てくる。ウソでしょう、というようなことを言う人がいると、願い事を紙の上に書いてご覧なさいというこ

とになる。

その紙をローソクの火の上にかざして何やら念じていたと思ったら、紙の上に願い事に対する答が文字となって写し出されているんで

す。

私もはじめは、あらかじめ紙に答えを書いておいて、あぶり出すあのやり方なのじゃないかと疑って、自分で文房具屋さんで紙を買って

来たりしたのですが、どんな紙を使っても、ちゃんと、そのときそのときの願い事に対する答が出るんです」、と上之郷氏は書いておら

れます。

信次師についていうと、マジックではない魔法のような生々しい事実があるので、読者の皆さんに信じてもらえるかいつも心配です。

卒業資格得られず

こうして、この頃に、信次師は他の宗教への遍歴もし、色々な宗教団体を尋ねられていますが、その中から信次師は狂信、盲信している

人々を見ていると阿片の恐ろしさを感じるだけだったというのです。

ところで、信次師は主として日大で学ばれたが、一時、東大へも通われています。

しかし卒業論文が、

「神的エネルギーは下はアメーバから上は大宇宙に至るまで」、

というもので、やや規格はずれであったのか、教授の嘲笑を浴びられたというのです。

そのために卒業資格を得ることができられなかったようです。

偉大な覚者に対して卒業を認めなかったとは遺憾ですが、判で押したような規格学生を流れ作業のようにつくり出す現代の大学の考え方

では、それも当然だったに違いありません。

なお、信次師は医学も天文学も学ばれていますが、信次師流のやり方で勉強すればそれで良かったそうです。

二十五歳の頃

二十五歳の時、信次師は電気関係の仕事をするために大田区上池上に、五、六人の従業員とともに小さな工場を借りられますが、自動制

御装置がその主なもので、信次師はやはり生身の青年であることに変わりはありません。

欲望のとりこになり、異性への憧れが、いつか心を占領し、それに悩むようになって行かれます。

結婚と縁

信次師が奥さまの一栄氏と初めて出会われるのは、昭和二十八年（信次師二十六歳）、信次師の取り引き先の電気メーカーでのことでし

た。

取引で出入りする内に一栄氏を見染められることになりましたが、そのとき信次師は、一栄氏へ自分の将来と四十八歳の全生涯について予

告され、事業上の失敗も問題もすべて誠実に正直に話していられます。

一栄氏は熊谷の青果商に生まれ、成人式を迎えると何がなんでも東京へ出たいと思われそうです。

そこで両親を説き伏せ、知人の紹介で日本橋の電気メーカーに勤めると間もなく、信次師と知り合われるのです。

マイトレイヤーのこと

信次師が言い残された一栄氏を、要約するとこういう風になります。

インドのお釈迦さま時代にマイトレイヤーと呼ばれ、釈迦教団の最初の四人の女性団員の一人で、読み書きが得意で聡明でした。

釈迦教団の中での仕事は、「今夜、どこそこでお釈迦さまのお説教があります」と、日中に鐘、太鼓をならしてふれ廻ったり、お釈迦さま

まの身の廻りを、かいがいしくよくみておられた。

お釈迦さまが亡くなると故郷に帰り、弟子達に仏教を指導して、お釈迦さまの予告された未来について詳しく書き残こされたので、未来

仏と言われたというのです。

しかも、マイトレーヤーは改名してミロクと呼ばれ、タレイヤー、サチともいい、サチ、幸、幸子の語源となったというのです。

マイトレーヤーとミロクは同一人物

こうしてみると、マイトレーヤーとミロクは同一人物ということになりますが、信次師の言葉を借りれば、本屋に並んで誌名の言う、

『やがて現われる真のメシヤはミロクかマイトレーヤーなのだろうか?』、というのも何かそらぞらしく、また、メシヤでもなかったと

いうのです。

信次師は、さらにこうも言っています。

信次師が妻を選ばれた理由

「僕達が、誰を父として、母として、誰を妻としてこの世に出るかを決めたのは寛永二年だった。

インドの時のヤシヨダラ（釈迦の妃）に、もう一度、一緒に出てくれませんかと頼んだが、インドの時は苦労しましたので今度は休ませ

て下さいと言われるので、それならということでババリーのところから来たマイトレーヤーに頼んだのです」

、といわれています。

お釈迦さまは二十九歳のとき、一人しかいない子供のラフラと奥さまのヤシヨダラさまを残して、一人仏陀としての道を歩き始められま

すが、ヤシヨダラ様はお釈迦さまを人類に捧げるという気高い道も、妻にとっては口で言えない程の厳しいものがあつたのでしょうか。

このように見てくると、現世の信次師はお母さんにも、妻となるべき人にも断わられたというのです。

もうすこし付け加えて述べますと、お釈迦さまの子供の名ははラフラといい、ラフラとは、古代インド語で吊り橋の上の石、つまり、障

害物という意味と、信次師は明らかにされています。

つまるところが出家の邪魔、ということです。

このようにお釈迦さまは奥さまと子供をおいて出家されますが、信次師には次のような反省の弁があります。

「釈迦が亡くなって最初に反省したのは、出家したのはいけなかった。在家のままで道を説くべきだった。だから今度は家庭を持ったの

です」、

と。

さらに、信次師は周りの者へ、

「僕は四十八歳までのことは、この世に生まれてくるときに予定してきました。だから、僕がいつ死んでもよいように、心の準備をして

おいて下さい」、

といつも言っていたというのです。

不思議にも信次師が亡くなったのは、予告通りの本当に四十八歳と九ヶ月でしたし、園頭会長は八十一歳のお誕生日のその日でしたが、

何度も申しますが偉大な光の天使には、このような不思議があるのでしょうか。

ここで少し整理してみますと、人はみな、お父さん、お母さん、妻や夫の場合もみな、約束して出てくるというのに、それなのにお互い

に不平不満を言って、こんな親から生れてとか、結婚するのを失敗したと言うのも、ちょっとおかしいことになります。

全部、自分の責任ってということなのです。

かくして、信次師は結婚を目前にして手形詐欺にあい、経済的苦境が訪れますが、取引会社の社長の協力によって結婚、新しい人生を踏

み出し、独身生活に別れを告げられたのです。

奥さまの一栄氏は、先の上之郷利明氏へこう語られています。

「先生は最初から神様のことしか頭にない方でした。婚約時代にも、映画につれて行ってくれたのは「ホワイト・クリスマス」の一回だ

け。喫茶店でお茶を飲んでいても、道を歩いていても、神様の話しばかり。他の人から見れば、先生は確かに「変わった人」という感じ

だったかも」、

と。

結婚直後

結婚はされたものの、手形不渡りによって会社は倒産、信次師は事業に失敗して一文なしになってしまわれま
す。

失敗の原因は経営の未熟にあったと、自から告白していられますが、失敗は信次師にとって良い経験となったよ
うです。

事前に、倒産の予告をして結婚、それから本当に倒産して、何もかも一度に起きたようで、信次師は上野の地下
道で何日か過ごすことも

あったようです。

その頃の信次師夫婦は、アパート暮らしであったために、鍵一つでどこへでも行ける身軽なもので、職を失した信
次師は、近隣の人との相談

にのり、その薄謝によって生活を続けていられます。

信次師は、自著の中でこう言っています。

「近隣とのつき合いにも不思議な現象が始まり、予言はほとんど適中し、相談に来る人が狭いアパート一杯にあ
ふれることもあった。

だが、なぜ予言が当たるのか、自分にも答えられなかった。そのため、自分自身そのことを信じてはいなかつた
し、邪心もなかった」、

と。

長女・佳子氏生まる

昭和三十一年（信次師二十九歳）長女・佳子氏生まれる。

さらに、奥さまの一栄氏はこう言っています。

「先生は、生まれる子供はみな、女の子だからと予告したので、女の子のものばかりを用意しました」、

と。

のちに、次女誕生。

長女・高橋佳子氏は、卑弥呼の生まれ変わり

講演の中で信次師は、

「　　さん達は、ともに卑弥呼の大臣をしていた人達です。

卑弥呼の過去世を思い出したこの人（佳子氏）を中心にして、この人達が卑弥呼の時代を思い出すと、今までわからなかった歴史がはっ

きりとわかります。...云々。

そうです、そうです、この言葉が当時の言葉です云々。

邪馬台国は有明海を中心にしてありました。云々」

この講演ビデオには、有明海周辺の当時の言葉が登壇者の口を通して語られ、千九百年前と思われる言葉は、テープを何度廻してもトン

チンカンですが、現代でも沖縄の人と東北の人が、方言まる出しで喋ったら、まるでチンプンカンプンでわからない筈ですから。当然と

言えば当然かもしれません。

二千年の時空を越えて。その当時に生まれた人が、それはこうで、あれはこう、と過去を思い出せたら歴史は完全に塗りかえられるかも

知れません。

神の子・人間は永い歴史の中で、その力を閉ざして盲目の人生を歩くことになったというのです。

高橋信次師の出していられた『G L A』誌の前身、『ひかり』に次のように書かれています。

「高橋佳子さん（十三歳）、東京大田区在住。彼女は、お釈迦様の時代、すなわち印度時代に、祇園精舎を寄贈した、須達（スダッタ）

長者の娘デルナーという女性でありました。日本ではヒミコとして約一九〇〇年前、九州大和姓国で生まれ数多くの伝説を残しました

が、云々。

古代語では一般の人はわかりませんので、現代語で昔日の模様をいろいろ語ります」、

と。

信次師は企業倒産ののち八年の空白をおいて、昭和三十九年（信次師三十七歳）、ある銀行の会長の支援によって、東京大森にコンピュ

ーター端末機器を製造する三百三十平方メートル（百坪）ほどの「高電工業株式会社」を設立。当初資本金百万円でした。

Home

昭和四十年（信次師三十八歳）

信次師は「人生の羅針盤」なる器具と小冊子を世に出されます。

前書きの中に

「.....大自然の陰中陽、コンパスの春夏秋冬を知り、自分の原因結果を...」、

と書いていられ、色々なことがよく当たらしく、法つまり神理の勉強より、この器具に関心を持つ会員が多くなったので、製造中止、

廃版にされています。

利益になりさえすれば、どのようなものを売っても平気な、現代の風潮に照らしてみても、まさしく人類を導く人の姿勢が見られてすが

すがしく思います。

昭和四十一年（信次師三十九歳）の信次師の周辺

もっとも早い時期の信次師の弟子で、今はもう亡くなっている観音寺住職・村上宥快氏に登場してもらおうとします。

彼は自著の中でこう言っています。

「探し始めてから三カ月たったある日、見覚えのあるクリーム色の小誌が出てきた。

紛れもなく発明者の住所と氏名がさん然と輝きわたっている。

“高橋信次”この人だ。

大田区大森.....早速、電話番号を調べた。夢中になって何かに憑かれたように村上氏は電話されたというのです。

「高橋様ですか」

というと、すぐに答えが返って来た。

「高橋信次です」、

その声音は全く慈悲に満ち溢れた音量であった。

実は先生の羅針盤についてお伺い致したいのですがというと、先生は待っていましたと言わんばかりの応答だった。

先生のご都合をお聞きして、指導をいただきたいと申し上げると、快諾されたというのです。

昭和四十一年二月になって気候もゆるみ小糠雨の降る日、奥さまと二人で尋ねられます。

「立合川の川岸の近くは住居と街工場のある街並であった。二階の応接室へ先生自から案内して下さった。

ソファーがあったが、余り立派なものとはいえない。この洋間に製図盤がひっそりと部屋を占めていた。

直ぐエンジニアであることが分った。私も自己紹介をすると、年の頃は私より十歳ほど下であることを知った。

妻も何か物凄く人懐しく思ったようで、直に十年の知己のような感じになり、この後一カ月に一度、或いは隔月位に足を運ぶようになっ

た」、

といわれているのです。

こうして、信次師の事業は順調に伸び、神奈川に長野にと、小さいながらも生産工場を設備して、事業も陽の目を見ることが出来たよう

です。

また、これに対して奥さまの一栄氏は、信次師の語られる神仏に関しては否定も肯定もされなかったというのです。

奥さまの一栄氏は、さらに、次のように語られています。

先生は、「こんな見せ物みたいなことをやるのは本意じゃないんだ」、

と疑いを抱いている人達に対して自分の霊能力を証明するために、色々の「奇蹟」を見せていられる。

たとえば、

「山から石を取って来て見せよう」、

と何か念じている。

パッと掌を開くと、本当に石が乗っていた、というのです。

まさしく魔法です、トリックがないのなら。

霊能のこと

どうして、このようなことが起るのか説明しますと、信次師は、あの世の霊の協力によって行われ、だから自由自在と言っている

す。

かつて、目から真珠を出したり、饅頭の中から大黒様を出していた人もおられました。一刀のもとに斬り捨てれば、あの世から協力す

る霊の質というか、霊の程度が問題と著者はいうのです。

滝にかかったり（肉体業）、拝んだりして出てくるものは、ほとんど動物霊か人間の地獄霊と考えられ、注意深く正見することが必要で

しょう。

モーゼやお釈迦さまやイエスの霊能はといえば、正しい光の天使達の協力によってなされたもののようです。

かつて、イエスさまが一切れのパンで何千何万という人を助けたとあるのは、あの世の霊の協力によって、パンの物質化現象が起り、本

当に多くの人々が救われたと信次師は言い残していられるのです。

しかし、目から真珠を出すという人は、たくさん出してネックレスでも作るつもりでしょうか。

著者にいわせれば、全く考える次元が違うと言いたいのです。

正しく考える人なら、その力でパンやミルクを出してアフリカの飢えで死んで行く子供達を助けようとは考えないのでしょうか。

金儲けに溺れる

信次師は、常に生活基盤を根底にした、神仏について考えられたというのです。

その頃から信次師の義兄は病弱であったため、創価学会に狂信的となり、当然、信次師の家にも折伏に来ますが、地湧の菩薩は強引な折

伏によって仏法を説くことはしないものです。

闘争と破壊の想念行為は菩薩の心ではないと、ことごとく批判して信次師は述べていられるのです。

この頃には、事業も順調に展開して、信次師は、経済力がなくては人々を救うことも出来ないと考えられ、金儲けに専念されたので、本

筋とは異なった方向に進みます。

その結果、信次師は従業員との意思の疎通、会社内部の混乱、家庭の混乱の渦に入っていくのでした。

悟りへの道

昭和四十三年（信次四十一歳）

二月ころから、信次師の周辺には不思議な現象が起りはじめます。

お父さんの死以降、信次師は仏壇の前で瞑想されるのが日課でした。

二月三日、午前一時、

信次師が仏前に灯明を上げて心の調和を計られていると、突然風もないのに、灯明の炎の高さが二十五センチになったというのです。

本来なら三センチのものです。

それから、炎が自然に小さくなり、今度は蓮の華に変化し、最後は蓮の実に変わり、この変化を信次師達は驚いて見ていられたというの

です。

同じく二月五日、

ローソクの火が二十二センチ位になり、炎の先が二つに割れ、次第に蓮の華に似てきて十五分後、蓮の実そっくりに変化したというので

す。

家族はただあつけにとられて見守り、やがて信次師の前に、肉体先祖と称する十四代前の先祖が名乗り出て来て、信次師の生まれた佐久

の地は、戦国時代、甲斐の武田勢によって支配されていたときの、信次師の「肉体先祖」であったというのです。（比較用語・魂の先

祖）

「私は、あなたの先祖、竹之丞半九郎友幸（十四代前の頼朝の子孫で武田信玄の軍門に下ったとされる）である。」、

と。

それから、先祖は信次師に語り続けます。千石平の林の中で戦死したこと、塚を調べればその謎が解けるとまで詳しく説明されたという

のです。

「その塚の中には、私と息子の首が入っている。恐らく甲冑と刀はすっかり錆びているであろう。」

また、「今私は肉体先祖として、あなたにこの事実を話すことが出来て喜ばしい」、

とも告げます。

その後、信次師がこの話を佐久の人々にされると、やはり首が二つと、錆びた金物があったことが証明されたといひます。

先祖はまた、

「肉体的子孫を佐久の地に残したのも、いつかはこれを知って貰うためである」、

と言うのでした。

信次師はこの頃から、肉体的先祖という問題についても、信次師の探究の具体的な糸口が解かれていきます。

肉体先祖は、この地球上に適応した肉体として神仏が保存したものであり、魂の乗り舟であるということを、信次師は悟られて行ったの

です。

次は、肉体先祖と魂の先祖を、信次師が明らかにされた一例で説明しましょう。

肉体先祖と魂の先祖

肉体先祖というのは、高橋家のお父さんと 家のお母さんが結婚されて十人兄弟の二男に高橋信次師が生まれられた、という血のつな

がり、血統、血縁関係を肉体先祖というのです。

一般的に、先祖といえはこれを指しています。

一方、魂の先祖とは、

三億六千五百年前に地球に七大天使と共にU F O（反重力光子宇宙船）で飛来した真のメシヤのエルランティから始まって 一万年

のアトランティスのアガシャ大王 三千百五十年前のモーゼ（あの世でも同じくモーゼと呼びます）
二千五百年前の釈迦（あの

世ではカンターレと呼ぶ） 二千年前のイエス・キリスト（あの世ではイマニエル・イエスキリスト、またはインマネール・イエスキリ

ストと呼ぶ） 二十世紀の高橋信次師。

エルランティが地球創世のときの、初めの本体で、アガシャ大王、モーゼ、釈迦、キリストはその分霊になり、高橋信次師は次の本体で

す。

このように、正法では、血縁関係ではない魂の、霊のつながりと関係を魂の先祖と呼んでいます。

釈迦の生命

血縁関係はなくとも、生命の永遠な人間にとっては、どちらかと言えば血統ではなく魂の霊統が大事です。

ちなみにお釈迦さまは、あの世の呼称はカンターレと申され、このお釈迦さまの霊統をひも解きますと、次のようになります。

本体 釈迦（インド）

分身 不空三蔵（インド）

分身 天台智顛（中国）

分身 伝教（最澄、日本）

分身 空教（日本）

分身 木戸孝允（桂小五郎、日本）

です。

お釈迦さまの前の分身は中インドに王様の子供として生まれ、さらにお釈迦さまの前の生命は、リエント・アール・クラードと申さ

れ、南米のアンデス山脈の麓に生まれられています。

さらにその前の生命は、アトランティス帝国のアガシャ大王として神理を説かれたのです。

モーゼ、お釈迦さま、イエスについて、次のことも触れたいと思います。。

三位一体とは

キリスト教では、

イエス、聖霊、教会、を三位一体と伝えられていますが、それは間違いであると信次師は言い残されています。

真実は、

エル・ランティに於いて、モーゼ、釈迦、イエス、を三位一体という信次師は訂正していただけるのです。

ユダヤ教も仏教も、キリスト教も神理は一つであり、人間が宗教問題で対立し、相争うということは実に悲しいことなのです。

ところで、イエスさまは紀元一年に生まれられ、西暦と同じ歩みになることは常識ですが、実を言うとそうではなく、イエスさまは紀元

前三十二年に生誕されている、と信次師は訂正されているのです。

ということになると、西暦二千三年は本当は二千三十五年ということになりはしませんか。

それは、ともかくとして、次はイエスさまの生命について述べます。

イエスさまの生命

本体 イエス・キリスト

分身 クラリオ（クライオとも言い、BC四千年、エジプト）

分身 マグネチオ（BC二千年エジプト）

本体 イエス（紀元前三十二年、イスラエル）

分身 マグガリス（AD二百年、イスラエル）

分身 フォアイ・シン・フォアイ・シンフォ AD四百年頃 中国・

分身 バロイン（AD千五百年頃、英国）

分身 アントニオ・アグパオア、通称トニー、（前に述べましたが昭和五十七年、一九八二年亡）、フィリッピン

本体と分身の役割

イエスさまの分身 の通称トニーは、女性問題から脳血管障害で早死にと述べましたが、次に百五十年後（昭和四十八年、一九七

三年現在百八十年後と）にシカゴに生まれられる本体イエスさまは、分身のトニーのカルマ（業、心の傾向性）も修正されなければなら

ず、気の毒です。

分身は自分だけの心の修行で事足りますが、本体は自分だけでなく、分身の心の傾向性も訂正、修正しなければなりませんから、その責

任は重大なのです。

もう一度念を押しますと、一般的には先祖と言えば肉体先祖を指しますが、魂は永遠ですから、特に魂の先祖も頭におかないといけない

のです。

こうして肉体は「魂の乗り舟にすぎない」ということを、信次師は悟られて行かれたのです。

その後、信次師が親しい人々に光を与え心を調和させられると、次々と霊的現象が起きるようになったといひます。

この頃、会社の仕事は相変わらず忙しく、信次師は浅草にビルの建設を始められていたので、昼中は浅草のビルの建設現場と工場とをか

けもちで追われる毎日だったようです。

霊的現象

さらに、一九六八年（昭和四十三年）七月三日、信次師の周辺には遂にくるべきものがきます。

信次師が多くの人々に光を与えられることにより、霊的現象が信次師周辺に次々と起きるものですから、これは自分の能力以外の作用が

働いていることを悟られたというのです。

霊的現象についていろいろ話していられるうちに、ある時、信次師の義弟に「ぜひ自分にも現象を見せてください」と頼まれ、信次師

は、午前一時、義弟の心を調和させられ、光を手のひらから送られると、義弟の口から昔の侍の声が出て来て語り出したというのです。

義弟は、自分の口を通して語るのに、自分で自分が何かを語っていることに非常に驚ろかれます。

信次師は、無責任のようですが、義弟を支配している霊を見ることが出来られないので、義弟の口を通して語る事実を信ずる以外にはな

かったというのです。

世の中には、霊媒とか口寄せとかありますが、信次師は別段、何も祭ってられないし、自宅の応接室で実験するのが常だったよう

です。

霊媒や口寄せのほとんどが祭壇を祭って、経を唱えたりすると、霊が出てくるようですが、信次師には道具も何も必要としなかったとい

うのです。

また、信次師の家の代々の宗派はと言うと曹洞宗のようですが、その影響はみられないようです。

七月五日のこと。

義弟の口を通して、

「この者が、四十年の二月、自動車事故を起こして七日間意識不明になっていた時、この者を助けたのはこのわたしである」、

と重大なことを語り出し、義弟が中学三年の三学期に自動車とオートバイの正面衝突という事故で、意識不明になり死線をさまよって

る時、義弟の口を通して語っている霊が協力して助けたと言うのでした。

信次師の義弟は、その辺の事情をこう話していられます。

義弟は語る

「私が交通事故から回復すると、兄のことがすべてわかるようになりました。ときどき兄が嘘をつく、それを私がわかるものですから、

兄は私のことを「悪魔か」と言ったりしました。

ところが兄が悟りを開いたとたん霊能も消え私は普通の人間に戻りました」、

と。

七月六日、

信次師は、自分自身で探究し続けてきた、「もう一人の自分」、を、ようやく発見できる段階へきたのです。

七月七日の夜、

さらに、義弟を中心にして、信次師が実験すると、霊的現象はやはり起ります。

しかし、その夜の霊は日本人ではなく、昨日までの霊と違って言葉が通じないので、信次師が、

「昨日まで話しておられた霊と代って下さい」、

と告げられると、昨日の霊に代わったといたします。

霊媒のカタチ

では、信次師の義弟の場合は、いかなる状態で喋るのかといえば、眠れる予言者と呼ばれたエドガー・ケーシと同じように、眠ったよう

にして霊人の言葉を伝えておられるようです。

要するに、ロスのアガシャ教会のリチャード・ゼナー氏や、サルバット氏のように、降霊会といわれるものは、ほとんど、この方法で行

われています。

Home

信次師の今生の使命と目的

ところが、この霊現象から後の信次師の場合は、目覚めて行われていることが他の霊能者と最大の相違点なのです。

実のところ、これは極めて重要な意味をなすもので、この方法を背景に天上界はいったい信次師に対して、なにを要求しようというので

しょうか。

それは、結論の早取りですが、これこそ、まさに、信次師に神理を説かせるための天上界の手段だったのでしょう。

ズバリ、これこそ信次師の、この地上界に生命を持つ使命と目的なのです。

それから、また昨夜の霊が次のように告げます。

「私はあの世で修業の身なので、私の師を紹介しよう。アフリカで修行された偉大な方で、通称ワン・ツー・スリーと呼ばれる方だ。こ

の方から学んで欲しい」、

と告げたというのです。

次にワン・ツー・スリーという霊が信次師の義弟を支配して、外人訛の聞きとり難い日本語でゆっくりと語りますが、それでも聞きとり

にくいので信次師は、念を押すように、

「ゆっくりと、正しい日本語で語って下さい」、

と二、三度言うと、霊は強い語気で次のように言います。

「お前は増上慢だ。自分さえよければ良いと思っている。自分の地位や経済のことしか考えていない。お前のよ

うな偽善者は人間の屑

だ」、

と大変な叱りようだったというのです。

そして、さらに、

「信じなければ、お前の今までの不調和な行為を皆に聞かせてやろう。お前は十八歳の時、佐藤という女性に片想いをしたろう」、

等と、信次師しか知らない少年時代の思い出を指摘し、信次師の心の中に刺してきます。

そして、さらに

「あの頃の純真な心はどこへやった。まだ言ってやろうか」、

と念まで押したというのです。

信次師は、

「はい、自分の今までの行為は、私が一番良く知っています。悪い点はなおしますから許して下さい」、

と言うと、ワン・ツー・スリーは、

「今のお前の心は、口惜しさで一杯なだけではないか、自分を改めると言うが、心からの言葉ではない」、

とまで言ったというのです。

信次師の義弟の口を通して語るのですが、義弟の芝居にしては出来すぎているので信次師は信じないわけにはいきません。

するとその瞬間、

「信ずることは当然のことだ」

と思ったことが返事となって信次師の心にはね返ってきます。

まったくどうにもならないので、信次師は、意を決してワン・ツー・スリーに

「私を守っておられる方はどなたですか」

と勇気をふるって質問すると、

「それではしばらくまで」、

と。それから一分位して、フワン・シン・フワイ・シンフォーという霊が義弟を支配して、語り出した言葉は古い中国のそれのようだっ

たというのです。

名前が覚えられないので信次師が

「もう一度、お名前を教えてください」

と二、三度くり返すと、

「この馬鹿め、お前のような愚かな者と語るのはやめだ。この馬鹿者め」、

と丁度、中国人が文法を度外視して語るように、片言の言葉で信次師を叱ります。

七月三日を境にして、信次師は食事ものどを通らない状態となり、普段の仕事も手につかず、信次師の従業員から仕事のことを尋ねられ

ても上の空で、精神的ショックとはこのようなことだろうと、常に他人が心の中に同居しているようで信次師はやり切れるものではなか

ったというのです。

七月八日の夜がきた。

信次師が九時頃帰宅すると、応接間で、義弟の肉体を、ワン・ツー・スリーや色々な霊が支配している様子でした。

すると、信次師と顔を合わせるなり、

「私はワン・ツー・スリー、あなたは今まで何をしていましたか」、

と詰問します。

義弟は、いままでのように瞑想しなくとも意識を支配してしまっているのです。

「はい、浅草の建設現場で打ち合わせをしておりました」

と信次師は答えると、

「また嘘をついている。現場には昼までしかいなかったはずだ」

と叱ります。

そして、パチンコをやり、タバコを三個とったこと、料理屋で芸者をあげて飲んだことや芸者の名まであげたというのです。

追求はまだ延々と続くものですから、信次師は仕方なく思うことも止めようとされますが、どうにもなりません。

そこで信次師は、

「見ざる、言わざる、聞かざる」、

を決め込もうと考えられたというのです。

この三猿の教えは、天台大師智顛（ちぎ）とって、釈迦の分身の天台智顛の教えであると信次師は明らかされていますが、心で思うこ

とまで刺して来たというのです。

信次師は、エーィ、もうどうにでもなれと思ってソファーに坐っていると、次にファン・シンフワイ・シンフォーがワン・ツー・ス

リーと代って信次師に次のように語り出しました。

「私はお前の守護霊だ。お前とは前世において友人だ。仏教を学んだ仲間でもある。私は、お前が地上界に生まれたときから守護してい

たが、お前ほど世話をかけた男もいない。今までの心構えでは地獄行きだし、お前の家庭も会社もすべて分解してしまうだろう」、

と言うのでした。

前世で仏教を学んだと言っても信次師に全く記憶はなく、自分は日本人なのに、なぜ外人が守護しているのだろうと疑問に思われたとい

うのです。

「どのように私を護っているのですか」

と尋ねられると、

「お前の善なる心の在り方を、お前の心の中で指導しているのだ」、

と告げ。

「本来なら守護霊などしたくもないが、約束をしたから護っているのだ」、

とも。

そしてさらに、

「他の霊と代わりたいくらいだ。約束をしなければ私がやるべきでないが、お前のような人間を護るには、きびしくやらねば仕方がないか

ら私がやるのだ。今から三日間の猶予を与えるから悟れ、宇宙のどこへ逃げても、また死んでもつかまえてやるから覚悟して悟れ」、

と命じたというのです。

守護霊は、七月九日から三日間で、すべての方針を正せ、と期限をつけますが、信次師は何をどうして良いかわかりません。

自分のすべてが守護霊に一目瞭然であり、心を正すまで私達は眼を離さないと言ったのです。

信次師の悩みは並大抵ではなく、僅か四日で八キロもやせられ、食事ものどを通られず、家庭は凍結したような環境に変わってしまった

というのです。

七月十二日

何んとかしなければならぬと信次師はあせられますが、期限の日が来てもどうにもなりません。

信次師は守護霊への疑問を、高野山の修行僧に聞かれても、

「そんなことは聞いたこともない」、

と言われるので、仕方なく上野の寛永寺の門もたたいて、

「一番偉い方にお会いしたい、これこれの理由でぜひとも救って欲しい」、

と信次師が哀願されると、

「そのようなことは私には解らない」、

と二べもありません。

そこで仕方なく、手が痛そうでしたから、信次師は、

「痛みをとってあげましょう」、

と一念力を集中して五分ほどで痛みを止められたというのです。

老師は、

「千葉の中山寺に行けば、わかるかも知れませんが、お行きにならなってみては」、

とアドバイスすると、信次師はタクシーで中山寺へ行かれ、山門に腰をおろして考え込み、思い沈んで自分自身のことを反省され

るのでした。

あと期限は少ししかない。他人から満足な解答を得ることを望んだのは、自分からの逃避であったと信次師は思い返されたというので

す。

心の船出

この一週間、信次師は、心は沈み自己を完全に失われますが、善なる行為を取り戻して、悪の想念行為を捨てるために心から反省され

るのでした。

ワン・ツー・スリーもシンフォニーも悪魔かも知れない、神が弱い人間をいじめるはずはない、今夜は、たとえ殺されても良い、もし彼等

が悪魔であるなら、私が善に変えてやろうと、信次師は一大決意をされるのでした。

信次師はようやく心も落ちつき、ワン・ツー・スリーやシンフォークとの対決しかないと決意されるのでした。

信次師は、京成電車に乗り、国電に乗り換えて家に帰えられると、信次師の心の中にはおだやかさがよみがえってこられたというので

す。

「今晚は殺されるかもしれない。どのような現象が起るか分からないが、もう大丈夫だ。彼等と対決して、もし悪なら善に変えてやろう

と思う」、

と奥さまに決意を語られると、信次師の心の中からシンフォークの声がして、

「今のような心を忘れるな」、

と、言うのでした。。

奥さまは、

「お父さん、しっかりとした気持ちで再出発しよう」、

と励まされたのです。

しばらくすると義弟が帰って来られ、ワン・ツー・スリーが義弟の口を通して、シンフォークと同じことを言ったというのです。

そして、「今晚はお前の心が正しく変わったので、天上界では光に満たされ、お祝いがある。こちらでもお祝いしよう」、

といつになく慈愛に満ちた優しい言葉だったそうです。

こうして、信次師の家族は皆、新生一家のための心からのお祝いをされるのでした。

さらに、「もう一人の信次師」を追求して三十二年、遂に目的の一幕が開かれ、それからは、義弟からではなく、信次師に直接、ワン・

ツー・スリーからもシンフォークからも通信されるようになるのです。

義弟を通してアインシュタインの霊が

その後、義弟には、あの原子爆弾の理論になったアインシュタイン博士の霊が出て、極微の世界と極大の世界について説明を受けられ、

さらに、

「自然の法則こそが人間のあり方を教えている」

とも信次師は講義されておられます。

それから、指導霊のワン・ツー・スリーは正しい人生の在り方と、神の子の証しについて信次師に本を書くことを提案し、協力するとも

伝えます。

八月に入ると、さらに心という問題をくわしく説明したというのです。

信次師は、一カ月前にはあらぬ方向への探究をされていましたが、今は、もうすっかり心も晴れて、探し求めている＃もう一人の信次師

＃について解明もはっきりと目鼻がついたようでした。

このように、信次師が悟りを開かれたのは昭和四十三年七月十二日ですが、信次師は、弟子の村上宥快氏に、こう言っています。

「お坊さん、僕は悟りを開いたんだ。それは七月十二日です。今生のことや前世のことも、何んでも全て分かるんだ。悟りは素晴らしいも

のだ」、

と。

また、弟子の渡辺泰男氏は自著にこう書いていられます。

「先生はそのときお寺の山門で考えられた。市川支部の地区座というのは、この山門から百メートルも離れていないところで行っており

ましてね。ごく最近まで、今考えてみると嘘みたいなことなのですが、たった三、四十人の集まりに、わざわざ話しにおいで下さいまし

た」、

と。

アインシュタイン理論は間違いか？

先に、義弟にアインシュタイン博士の霊が出て来られたと述べましたが、これにもう少しつけ加えますと、信次師があるとき、アインシ

ュタインの霊を呼び出していられると、

「私の相対性理論は間違っていました」、

と頭を下げ、

「真空は全くの空・真の空間ではなく、エネルギーに満ちた空間である」、

と訂正されたというのです。

最近では、宇宙エネルギーや霊性エネルギーと呼んだり、相対性理論に対して絶対性理論とも言っていますが、と

もかく訂正したというの

です。

また、渡辺氏の著書には、「あのときのテープは、ドイツ語と英語がチャンポンで語られていて、いまだに解明、整理がついていな

い」、

というのです。

昭和四十三年九月十八日

夜ともなると秋の気配があって、ソファーに坐っている妹さんを信次師が見られると、インドのピンクのサリースタイルをした美しい女

性が蓮の華のようなものを左手にもって、頭を下げながら笑っていたというのです。

次の日も同じようなことが起り、薄紅色の絹織物をつけ首飾りをつけている、二人の内の一人が妹にはいりたいと信次師に告げると、

信次師の妹さんは少し不安そうでしたが了解されます。

それと同時に、妹さんは心眼が開かれ、霊視が利くようになられて、それから、妹さんは観音様の膝の上で一週間近く過ごされたという

のです。

信次師の妹さんは星 子といわれ、水産業従事者と結婚のち離別されているそうです。

信次師が明かされた妹さんの転生輪廻

BC七千年頃に、アトランティス帝国において、名前はフォロリヤーと名乗られ、ついで、BC四千年頃は、エジプトにおいて、名前

はアシカ・ミヨターといい、BC五百年頃、インドに生まれ、名前はカリナ（ガランダ長者の末娘）と呼ばれ、AC二世紀に、イスラエ

ルにおいて、名前は サフィであり、AC五世紀には、中国にて、名前は「林蔭」といい、その後、二度日本に生まれ、現代は信次師の

妹の星 子氏と、信次師は言い残していられます。

唐突ですが、この項に関係が深いので空海（弘法大師）について述べましょう。

空海（弘法大師）の転生輪廻

BC五百年、今から二千五百年前、古代インドのお釈迦様の時代に、名前はガランダ長者という金満家がいました、お釈迦様の釈迦教団

に、布施したり精舎を建てたり、なにくれとよく面倒を見ていたそうです。

その人が五世紀の中国に生まれ変わり、名前を中蔣とといいます。

更に、その人が七世紀の日本に生まれ変わって、空海、つまり弘法大師となるのです。

空海は、お釈迦様の分身である最澄と、共に渡唐しているのも何か縁が感じられて興味ありますが、これを述べた上で、信次師の妹の星

○子氏の過去世「林蔣」を思い出して下さい。

次は、星氏に大いに関係のある日蓮の魂の系譜について説明します。

信次師が明かされた日蓮の転生輪廻

ここでもう一度、簡単におさらいをしますと、ガランダ長者は、BC五百年にインドに生まれ、その後、中蔣として五世紀の中国に生ま

れます。五世紀のこの中蔣には、姉の林蔣と弟の吾蔣という二人の子供がいて、弟の吾蔣が、その後、日本に生まれ変わって日蓮に

生まれ変わったというのです。

日蓮の生命の系譜をたどって行きますと、空海に行きつき、日蓮が空海の説いた真言密教を、あの鎌倉時代に真言亡国、つまり真言密教

は国を滅ぼすと盛んに批判しますが、その後におよんで、光の使者ともいえる宗教人が僧兵となり、権力に組み従えられ組み込まれて行

く姿が、菩薩界の光の天使・日蓮には、心の内底からどうにも我慢できぬものがあつたのでしょう。

信次師は講演の中で日蓮についてこう語っていられます。

「日蓮はその気性の荒さから他宗を批判してメッタ切りにした。真言亡国、禅天魔（禅をやっていると魔に犯されるの意）等という辻説

法を展開した、それらを反省して、六百年間苦界に身を沈めたのである、」

と。

また、別の講演では

「日蓮はその責任を負って苦界（地獄界）に身を沈めますが謙虚で、あの世で知らない人はいませんね、創価学会でやっているようなも

のではありませんよ」、とあります。

日蓮が中国時代の姉の林蔭との魂の系譜に行き着くとは不思議ですが、次に、信次師の妹さんで、かつて林蔭であられた星 子の文を挙

げてみます。

「慈悲と愛について」

星 子

「読者の皆様は、愛という言葉をよく聞いておられるし、又、実行しておられると思いますが、先づ男女の愛について、ふれてみたいと

思います。 人間がこの世に出生する時、人は実在界において生活していた...云々。...

日々の生活に励んで下されば、皆様方の守護霊を通じて、生活そのものに大革命がおこる筈でございます。」、と。

九月二十三日

信次師の中学時代の学友の佐藤氏（前述・信次師の傍に出すことになった魂の友人）が、親しい友人のK氏を信次師に紹介されます。

ところが、二人の背後に、金色の光に覆われているインドスタイルの守護霊がはっきりと出たということです。

二人の守護霊同士が、互いに話をしているのが、信次師には見えます。

しかし、信次師の指導霊・ワン・ツー・スリーが、

「過去世の名前は教えてはならない」、

と信次師に注意すると、信次師は、

「なぜ自分の周辺ばかりに、このような現象が起るのだろう」、

と疑問を持ち始められと、

「核という中心になるものがないと形は成り立たない」、

と言ったということです。

また、モーゼの十戒の成り立ちや偶像崇拜の違い、ゴータマやイエスの時代の神理にもどることが、人々を救う唯一の道であるとも説

明します。

こうして信次師は、日中は会社、夜は原稿書きと多忙な毎日が続きますが、この執筆は心の教えでした。

土曜会のこと

この頃から「土曜会」と称して、信次師は集まって来た同志達に神理の言魂を説かれ、同志達は土曜日の夜を楽しみに多く集まって来ま

すが、それがたびたび深夜まで及ぶと、それからは時間が早く切り上げられることになって、午後七時より十時までとなりますが、この

会は、誰から言うともなく自然発生的に出来上がって行ったのです。

九月頃から良く姿を見せていた、一人の仏像のような美しい女性が信次師の前に現われます。

「私は、ミロク（弥勒）と申します。しばらくでございます。」、

と。

彼女は、信次師の奥さまの守護霊であると紹介したのです。

奥さまの一栄氏は二十数年間、信仰には余り関心がありませんでしたが、インドの時代の経文となって、信次師が朗々と声に出して唱え

られると、一栄氏の心は、神理の光に照らされて、大粒の涙がとめどもなく流れるのでした。

信次師はさらに、

「今日から一週間、午前一時から二時まで屋上に出て今までの人生を良く反省して心の調和を計りなさい」、

と注意されるのでした。

十月二十三日夜

しかも、信次師が奥さまに、調和の光りを与えられたところ、遂に守護霊が直接支配して、語りはじめたのです。

「私はミロク菩薩と呼ばれているものでございます。ご本体の心の眼が開かれましたので、私が守護霊をつとめさせていただきます。」、

と、驚くべきことを告げたのです。

次に、一栄氏の魂の系譜を述べるとこうなります。

奥さまの一栄氏の転生輪廻

BC七千年、今から九千年前にアトランティス帝国に生まれ、名前がナーダリヤという、BC五百年にはインドに生まれ、名前がマイト

レーヤー（死後ミロク）と呼ばれ、十五世紀には、中国に生まれ、名前はガランといい、現代は信次師の奥さまの高橋一栄氏です。

次は一栄氏の記述を挙げましょう。

「行ずることの真意」

高橋一栄

「私が霊道を開いたのは一昨年（昭和四十三年）の十一月（昭和四十三年）の十一月（昭和四十三年）の正月で、丁度一年と一寸になります。

この間、いろいろな体験をしましたが、昨年（昭和四十三年）の八月頃だったと思います。

私は、仏教でいう苦集滅道の苦をなくすには……云々。

己を静かにみつめ、静かに行動してゆくことも、一つの悟りの方法だと思っております。」

と。

十月三十日

霊的現象が起ってから記述されてきた、「大自然と生命」に関して、信次師は指導霊の意見を聞くことになりました。

信次師の前には、ワン・ツー・スリーが立っています。

身長二メートル以上もある大男で、両腕に腕輪、頭には黄金色の戴冠（ティカラー）をかむった古代エジプトの王様のような感じだったという

のです。

もう一人のフワイ・シン・フワイ・シンフォールと呼ばれる信次師の守護霊は、あごひげを短くのばした、血色の良い、一メートル七〇センチ

センチ位でエジプト人のスタイルで麻のような白色の着衣で腰をヒモで結んでいました。

二人は信次師の読む人の道を黙って聞いてから、

「今、あなた大丈夫、私もう必要ない、嬉しいような、淋しいような、私涙でてる。」、

と涙を流して語り、守護霊も眼頭を押え、信次師も、また涙がこみあげて泣き出してしまわれます。

こうして、地位も名誉もお金もいらぬ、いつ死んでもいいと、すべての執着心を捨てられた七月十二日から、信次師は、百八十度人生の

考え方が変わられたのです。

信次師の守護霊はイエスさま、指導霊はモーゼさま

しばらくたってから、指導霊のワン・ツー・スリーはモーゼさまであり、守護霊のフワン・シン・フワイ・シンフォーはイスラエルに生

まれたイエスさまであったと初めて明らかにされたのです。

「イエスと言えば、あなた聖書暗記してしまう、間違いこわい、あなた人の道わかった。今、伝える」、
と告げるのでした。

二人はもう大丈夫ということで信次師に本名を教えたのです。

天上界での講演

昭和四十三年十一月二十四日午前一時

信次師は今までの人生の在り方について、思ったこと行ったこと的一切を、八正道という心の物差しではかり、誤った原因を追及されま

す。

心を正し終わられると、身体がゆれ始め、胸のあたりが暖かくなり、やがて「もう一人の信次師（光子体の信次師）」が身体の前に飛び

出されるのです。

もう一人の信次師が、ドームの中に入られると、ワン・ツー・スリーが迎えに来たというのです。

野外の広場は広大で、スロープは無限に続き、そこには様々のかっこうをした人がいて、古代インドやエジプト、キリスト教の制服の人

等の万国の人が何万となく整然と並んでいたそうです。

信次師は、ワン・ツー・スリーの指示に従って「物質と生命」という題で、一時間半ほど講演されると、みな胸には、信次師の日本語が

自国語に変わるマイクロホンのようなものをつけて、真剣に聞いていたというのです。

モーゼさまが起こした地震

そして、「もう一人の信次師」の講演が終わると皆が万雷の拍手を浴びせ、さらに「もう一人の信次師」が肉体にもどると、震度3ほど

の地震があったというのです。

信次師は地震の洗礼を受けられていますが、講演の中でこう話していられます。

天上界での講演が終わると、モーゼは信次師に、心配するなよ、弱い地震を起こすから、と事前に聞いていられたというのです。

「地震をモーゼさまが起こしたと聞けば、皆、驚いてしまうけれども、地上の人々の心が欲望に溺れ、破壊と闘争に流されると、地震も

天変地異も自由自在です、」

と信次師は講演の中で言っています。

信次師は、奥さまを起そうとされると、

「今、あなたの講演を聞いておりました」、

と同じ情景を話され、信次師の家に集ってきていた人々の中で、すでに心の窓を開いている人は、すべて講演を聞いていた、と信

次師は報告されています。

信次師が、天上界で講演をしたそのときの司会はモーゼさまで、その前にミカエルが講演したというのです。

さらに、信次師が亡くなる直前の一九七六年（昭和五十一年）六月五日（二日目）の研修会では、

こう講演していられます。

「心行というものの成り立ち、現代は、ミカエル大天使が持っていますが、その中をめぐって見ますと驚ろいてしまいました。

「我、見聞し正法に帰依することを得たり」、

という最初の出だしが、

「我正法に目覚め正法流布のために一命を投げ出す」、

という書き出しで、その最後が

「禅定三昧の境涯に到着せん」

と全く同じです。

そして、私のは地球的に書いてありますが、天上界のものは宇宙的で、ホンのわずかしが違っていなかった。

ですから、私は書かせられていたということですね。

現代もミカエルといわれる大天使が、丁度この位（二～三十センチの立方形 ビデオより）の本にして、私自身が出てくる前の計画一

切、現在も書かれている本、将来も出す本、それに記録されてあります。

実はそれは私ばかりではなく、皆さん自身の心というものをヒモ解いていけば恐らく計画書があるはずで
す。」、

と。

要するに、信次師は天上界に見本となるものがあって、書かされていた、と言い切られていますが、流石に、人類を教え導く覚者の姿勢

を垣間見れたようで、著者がこの本を世に出して読者に広げねばという、原動力となったのです。

それ故に、この正直で立派な態度に敬意を表すると共に。さすがに真のメシヤであると大声したいのです。

ところで、話しは少し外れますが、信次師は悟りを開かれたのが昭和四十三年（一九六八）で、明治元年（一八六八）から丁度、百年で

すが、こじつけかも知れませんが不思議です。

同じくこの年、信次師は、

「正法は東京から関西へ、そして九州へと移り、九州で燃え広がって、それから逆に九州から関西、関東へと移り、ついに、アメ

リカに渡り、アメリカで燃え広がった後、日本へ帰ってきて、日本全体が知ることになる」、と予告されています。

集まり来たる縁生の弟子たち

信次師は、昭和四十四年（一九六九）二月の東京の講演会で、

「やがて、私達の仲間が関西からグループとなって現われるだろう」、

と予告されています。

さらにまた、

「天上界へ行きますとね、全体が見下ろせる。そうすると、私達のグループが何処へ出ているか、皆わかる。あの世で約束して出てきて

いるんですからね」、

と。

それでは、この時期の信次師の周辺から、A・チカ氏の手記を紹介しましょう。

三月

「知人の誘いで先生のお宅をうかがった時のことです。

長男をつれて二階の応接室へはいりますと、厚手のセーターを着込み、ズボンも高価なものとはいえません。

光を入れ、先生は何やら唱えておられましたが、「もう心配いりません、大変でしたね」、

と、十七年間の病苦から解放されたのです。

一年になりますが会社も休みません。私も霊道をひらかせていただきましたが、カピラ城（釈迦の育った王宮）で配膳係だったそうで

す」、

と書かれています。

四月

浅草の建設中のビルも完成間近かで、毎土曜日の勉強会に集まって来る人は百名ほどになり、信次師の家にははいりそうになかったの

で、ひとまずビルの三階を解放されて精神復活運動に提供することになります。

三、四百人ははいるでしょう、信次師は、はじめ、一階と地階は飲食関係、二階と三階にサウナと超音波風呂のつもりだったようです

が、指導霊に

「身体のアカを落すところはどこにでもある。使命を忘れては困る。お前の出版した本を通して多くの人が集ってくるだろう。」、

と諭されて、百八十度転換、心の垢を落とす場所とされたというのです。

ここは、浅草の地下鉄の出入口の上にあって大変便利で、八起（やおき）ビルといいます。

イエス様の忠告によって十字架を入れて補強しているので地震にも強いと、講演の中で話していられますが、。指導霊の注告によって計

画を転換されたことは述べましたが、その時のはなし。

計画中止のこと

信次師は迷われると、モーゼの霊が強い口調で、

「強行するならそれでも良い。一人も客が入らないようにしてみせる。嘘と思うなら明日、見ていよ」、
と自信を持って言うのでした。。

翌日、信次師は見られていた。

すると、前を通る筈の人がビルの近くまでくると、全員そっぽを向いてビルの反対側を歩いて行ったというのです。

信次師はこれでは本当に客は一人も来ない、と諦めざるを得なかったらしく、本当に困られたことでしょう。

浮浪者のこと

そういうことがあって後、いよいよビルの鉄骨が組み上がった頃から、六十位の乞食が三階部分に住みついたというのです。

すると、その乞食が仲間に、

「あそこの管理人になるんだ」、

と言いふらしているのを信次師は聞かれます。

ある日突然、温泉旅館から電話がきて、

「お宅の社長さんがお金を持って来いと言っておられますが」、

と。

信次師は不審に思いながらお金を持って行かれると、。仲間を五人連れて豪遊していましたというのです。

どうして、こんなことになるのだろうと、信次師は禅定・瞑想をして、過去の意識をヒモ解いてみられたというのです。

すると、お釈迦さまの時代、乞食のじいさんは衣類の行商で、竹林精舎の前を通るとき、いつも衣類を布施しておられたというのです。

そこで、信次師は、

「まあ、お世話になったんだからこれも仕方がないネ」、

とニコニコしながら楽しそうに話されていたというのです。

それから、その人は本当に管理人になった。

さらに、もう一つあります。

ケチにつける妙薬

この八起ビルの二階にS医院がテナントでありまして、一流企業の副社長が診察を受けられます。

「うちの家内は浪費癖で困る。それに効く薬はないものか」、とS医師は相談を受けられたというのです。

奥さんは有名企業の娘さんで、毎月の請求が二、三百万。そこでS医師は、

「そうだ！いい薬がある。この上に高橋という先生がいる。その人の話しを聞くことです」、

となります。

しばらくしてから、上から下まで着飾った婦人が、信次師の所へ来られたそうです。

「ウチの主人はケチでケチで困るんです。ケチにつける薬はありませんか」、と言われる。

その婦人は、しきりに指を動かすと、キラキラと光って、立派な指輪を認めて欲しいのだな、と信次師は考えられた。

「りっぱな指輪ですね」、

と褒められるとその婦人は、

「これ○カラットですよ。差し上げましょうか」、

と、なり、

「いただいても隅田川に捨てるだけですよ」

「まあ、勿体ない」、

と。

それから信次師は、足るを知ること、お金持ちの使命は、困っている人に手を差しのべること等をこんこんと諭されたというのです。

信次師は講演でこうも言っています。

「女性はせいぜい菩薩界まで。女性は、ネックレスはしたい、イヤリングはする、このように本質的に身を飾ろうとする。

赤ちゃんを生き育てるので、女性はどうしても保身、保守的である。

その点、如来は身を構わない、どのような服装でも気にしない、だから女性はせいぜい菩薩界まで、でも菩薩になるためにはなかなか難

しい」、

と。

妻への心構え

これに対して、お釈迦さまやイエスさまが言われる

「夫の妻に対する心構え」

が教えられるところでは、

「妻を尊敬する、軽蔑しない、道からはずれない、妻に権威を与える、装飾品を与える」、

ということになるようですが、いくら飾り物といっても、それはほどほどに。ダイヤモンドより心の錦でしょう。

アントニオ猪木氏のこと

さらに、信次師にかかわる話しをもう一つ話します。

佐藤氏は、プロレスのアントニオ猪木氏を、信次師に紹介されます。

例のモハメ・ド・アリと一戦の前のこと、信次師は暫らく瞑想をした後に、アリキックを伝授して、結果はあの通り引き分けていられる

のです。

信次師はアリの守護霊（アリの過去世、アリの魂の兄弟）に弱点を聞かれて、アリ・キックを伝授されたといわれています。

それでは、猪木氏の自伝から、どう書いておられるか見てみましょう。

「肩の調子がひどく悪い。力が入らなくて、コップも持てない状態だった。世紀の一戦にこれでは、大恥をかいでしまう。

そんなとき、数寄屋橋のビルのオーナーで佐藤という人が、高橋信次という人を紹介してくれた。

大変、効果のある治療をしてくれるという。

藁にもすがる気持ちで、教えてもらった事務所を訪ねると「GLA」と書いてあった。

初対面の高橋氏は突然、ギリシャ語だとか、古代何とか語を語りはじめたのだ。

そして目を開くと、

「アリの守護霊は物凄く強い！」、

と言うのである。

「これは希に見る物凄い守護霊だ。猪木さんの強いが、大変な闘いになります。いいですか、絶対にパンチを食らってははいけません。

もしパンチを食らえば一発で目が潰れます」

ちなみに高橋氏は試合の前日に亡くなっている。

高橋氏の治療が効いたのか、肩の調子もよくなって来たので、私はトレーニングに打ち込んだ」、

とある。

さらに、猪木氏は日蓮宗の権大僧正に相談されると「アリの腕より長いもので戦え」とアドバイスをくれたと書いておられ、ともかくも

猪木氏は、リングに寝転がった状態で、長い足を使ってアリの脚部を徹底的にキックで攻め、世紀の一戦に引き分けていられるのです。

それは昭和五十一年六月二十六日のことで、信次師昇天の一日後のことでした。

四月八日、

信次師は、大宇宙神光会（GOD LIGHT ASSOCIATION・GLA）という名称で立教。

もっともなことから、発会式の講演で信次師も上ってしまわれ、指導霊のモーゼが一時間半、

「仏教の歴史的変遷」

ということで代講したというのです。

ユダヤ教の基礎をつくったモーゼがなぜ仏教の歴史を講演か、と思われる読者も多いと思いますが、それは当然でしょう。

では、なぜそうなったかと申せば、モーゼは、モーゼ以後、天上界から何千年もの間、つぶさに全部見ていたというのです。

サテ、それからどうなるかと申しますと 信次師が教団を開いてから、これを境にして多くの人々が集まってくるようになり、宗教家も

様子を見にくるようになったというのです。

はじめての持出しの講演のナゾ

信次師が立教されてから、はじめての持ち出しの講演は、山梨県の下部温泉にて、講演「物質と生命」だった、と弟子の渡辺泰男氏は

『道しるべ不動心への道』に記述されています。

これに対して園頭広周会長は、月刊『正法』百十四号に、全国の中ではじめて講演されたのが、岩手県盛岡の健保会館であったとあ

り、その中で園頭会長は、次のように記述されています。

「高橋信次先生が、まだ悟りを開かれる前、肥料の商売をしていられて、肥料代を集金に盛岡に来られた。その時、泊られた宿が、今は

ホテルになっている。なかなか金をくれない、一週間泊っていられるうちに金は底をつき、帰りの自動車賃も借りて帰られた」、というの

です。

さらに、昭和四十三年より正法に帰依している盛岡のTさんは、次のように園頭会長に話しておられる。

「あと三百年位すると、東北地方から北は、人が住めなくなるほど寒くなる」、

と高橋信次先生が話しておられた、

と。

しかも、Tさん一族が主となり、最初の講演会を一切、取り仕切って準備をされたというのです。

もし、最初の持出しの講演会が盛岡とすれば、信次師の最期の講演が盛岡（昭和五十一年六月四～五日）だったとは、こじ付けかもしれ

ませんが不思議といえれば不思議といえるかもしれません。

さらにこの頃（昭和四十四年四月）、信次師はこうも言っています。

信次師の奥さまの一栄氏に、結婚前、自分の全生涯の予告をされたと著者は述べましたが、立教当初のこの頃から、

「僕は、四十八歳までしか計画してこなかった」、

と聞かされた弟子達は、当初、何のことが理解しかねていたようですが、信次師が亡くなってみて、その意味に改めて驚いていたという

のです。

また、

「結婚は陰陽の調和である」、

「反省は根っこからその原因を取りなさい」、

「まず神の子の自分に立ち帰り、今を正しく生きるように努めることである。運はそうした中から開けてくる。」、

「男は現実社会の改造を担当し、女はその子供をどういう子供に育て上げるかということを通して、未来社会を建設するのである」、

と。

五月

N・T子氏のこと、

信次師の力によって霊道を開いて、一万二千年前のアトランティス時代から男に生まれたり、女に生まれて仏教やキリスト教に縁があっ

た人ですが、この頃、信次師の講演会、研修会に華々しく登壇されていたその人の後日談です。

「私は、高橋先生の力によって霊道を開かせていただき、転生輪廻の証明役として過去世の「ことば」を、皆様の前で語りました。

ところが、いつか私は先生と呼ばれるようになり、全国から手紙をもらうようになりました。私はただ一人の主婦でございます。このよ

うなことで皆様を誤らせてはいけないと考え、身を引いたのでございます」、

と話されています。

信次師の力で心の窓を開いたのに、霊道をひけらかし増上慢になってしまった人の多い中で、まさしく霊の段階を思いしらされる事実で

した。

それと同時に、この例を挙げたのは、人間は男として生まれたり、女に生まれる場合もあるという一例でもあります。

男と女

人間は、お釈迦様やイエス様のように、いつも男として生まれる人、マリヤ様やマヤ様のように、いつも女として生まれる人、それに対

して、この例のように男として生まれたり、女として生まれたりする人がいます。

それは、永遠の生命として人間が、男と女のどちらを多く体験したかによって、

男らしい女、

男らしい男

女らしい男

女らしい女

がいるということです。

だが、今世は男として生まれたからには男の使命が、女として生まれたからには女としての使命があるのですから、男として生まれてい

ながら、めめしく失敗した人は、来世もまた男として修業のやり直しをすることになるというのです。

女性の場合も、また同じです。

男は男らしく、女は女らしくあるのが神理にかなっているというのです。

八月

植物の精との会話

故郷の佐久高原で、信次師がグラジオラスやダリヤを眺めていた時のことでした。

すると、大人とも子供ともつかない愛らしい少女が花の中から出て来て、にっこり笑って頭を下げ、そして人間を少し批判した後、消え

ていったというのです。

また信次師には、これ以外に藤や松の木の精の記述もあって、松は老人のような年老いた精だったそうです。

グリーンサム

世の中には、グリーン・サム（みどりの魔法の手）といって、植木や植物に優しく語り掛けて、育てている人の噂を聞いています。

精が居るのなら、当然、聞き届けてくれるのもうなずけます。

これは、そういう優しい人達に、力強くも嬉しい言葉になるに違いありません。

さらに、植物ではもう一つ、それは人格測定機のことです。

人格測定機

人間性測定機とも表現して良いのですが、ともかくその器具というか機器の前に、応募者を坐らせて、データを

見ながら採用を決定す

る、という夢の面接ができることになるようです。

これは、信次師によると、植物の細胞を応用することになるようですが、最初に政治家を立てて、戦争を計画するような人を、即刻は

ねるという夢の判定ができるのです。

静かで、もの穏やかな植物さんなら、さぞかし適切な判断を下してくれることでしょう。

十月

身体の透視

信次師が心眼でよく見ると、内臓が構造図のようにはっきりと出て、癒着している立体図が見えます。

「あなたは、来年の二月中には、今までの苦しみから解放されるでしょう」、

と。

その予告通りになったというのです。

同じく十月

東京・高田馬場観音寺に於ける講演

演題「生命と物質 すべての中心は心」

講演の要旨は、

地上の目的は調和にある。

神仏はエネルギーそのもの。

人間は核を中心に五分身から成る。

インド時代の現象が現われる。

肉体を焼けば三合の灰になるというが死なない魂。

転生輪廻を続ける生命、

等について語られ この日の講演の出だしは、こうでした。

「この世に生をうけ、まず私達が疑問に思うことは、何のために肉体を持ってこの世に生まれてきたかでありませす。しかし、その本論を

述べる前に何故に云々。……大宇宙そのものであることを忘れてはなりません。」、

と。

十一月

マイトレーヤー（信次師の奥さまの高橋一栄氏）の従兄であったピンギャーが日本人として生まれているのが判明。

十二月

S氏（工学博士）の手記

「信じがたい事実」

この驚くべき事実を要約してみましよう。

S氏は、昭和四十二年、八月から九月にかけて、ジャワ島で金山の調査をされた。

ジープ数台に機材をつんで、二十五ヶ所から試料採取を行うと、平均六g / 屯という結果でした。

四十三年十二月、S氏は知人と、信次師のもとを尋ね、山の写真と簡単な地図を持参して見せられた。

話しをひと通り聞いた信次師は、一、二分瞑目したと思うと、合掌した手が頭の位置へ上った時、コロコロと三個の鉱石が落ちてきた。

すると、すかさず信次師はこう言われたというのです。

「日本円にして一億円、日本人技術者十名、現地人五十名、その他発電機、採掘用トレーラー、同ショベル等を準備すれば可能です」、

とアドバイスされます。

S氏は、その三つの鉱石を実物大のカラー写真におさめ、証拠づくりをして、わざわざ東京通産局まで持ち込まれて分析を依頼された

というのです。

すると、その分析結果は、一つは二七・五g / 屯、あとの一個は〇・三g / 屯、最後の一個は証拠品として自分の手許においているの

で、お見せしますと記述されています。

鉱石の物質化現象が起こり、目の前で三個の鉱石がコロコロと転がり出たというのです。

信次師の奇跡は、その現場そのままの鉱石であり、金の分析も出きる程に、真実そのものでした。

一方、動物霊や暗い人間の霊の協力する物質化現象は、銅や亜鉛を主体とするもので長くその状態を留めることは不可能だと言われてい

ます。

派手なおべべを着て灰を出したり、手のひらに乗る、金色の小さな多重塔を出す人が外国におられるようですが、これらの霊能者といわ

れる人を正しく見て欲しいのです。

ところが、このS氏には後日談がありまして、信次師は

「私は裏切られました。大事に保管されていた鉱石は悪用されては困りますから、私の霊力によって消しました」、

と、園頭広周会長へ告げていられます。

S氏は、信次師存命中にG L Aを去って、他の教団へ移籍されたようですが、勧誘の手紙を送りつけられた園頭会長は、苦々しくしてお

られました。

昭和四十五年（一九七〇）（信次師四十三歳）

五月、

川越市の大野〇子宅に起った実話。

絵から飛び飛び立ったクジャク

大野〇子氏は、イエスさまの弟子である、パウロの母親としての生命というのです。

それは、故永田春水画伯の四日の葬儀の日の出来事でした。

その日は、丹精こめて書かれた孔雀の掛軸が棺のそばに掛けてあったというのです。

大野〇子氏の、隣りの奥さんの話しでは、

「不思議なこともあればあるもの、四日の朝、七、八羽の孔雀が私どもの庭におり立ち、やがて先生の庭に飛んで入り、桜花の中をゆっ

くり三回歩いて回り玄関の前でひとしきり鳴くと、いずことなく飛んで行きました」、

ということでした。

さらにその日の夕方、茨城の大野氏の弟さんの家に、一羽の鳩が舞いこんできて、家人の手や肩に乗り、頬をついばむばかりか、なか

なか立ち去らず、皆、口々に、おじいちゃんだ、おじいちゃんだといって、なつかしがつた、というのです。

こうしてみると、名人の描いた絵の中から鳥や動物が抜け出した、というのは本当かもしれません。

匠の手になったものは、こういう不思議なことがあるのでしょうか。

五月

内臓の透視

信次師のもとへ、一人の青年が青い顔をして訪ねてきました。

だが、その青年はというと、信次師の前に坐ったきり一言も喋らないで、信次師の顔をじーっと見ているばかりだったそうです。

ところが、

「私は胃腸です。この方は暴飲暴食で、時間もかまわず、絶えず食糧を送りこまれるので困っております。

私達は休んでコンディションを整えなくては大変なのです。

すみませんが、この方に腹八分ということをお教えして下さい。」、

と胃腸が語り始めたというのです。

そこで信次師は、青年にこんこんと説き聞かせて注意を促されていますが、胃腸の意識が語り出したというからには。余程のことだった

なのでしょう。

信次師も、

「このようなことは珍しいことだ」、

と記述されています。

また、講演の中で、信次師はこうも言われています。

「心臓殿が（笑い）私に言いました。

あなたの過去世の体験をヒモ解いてみると、コーカサス時代は腹六分でした。

そのときあなたは百八十五歳まで生き、当時の人は二百年、三百年と長寿で、

もっと前は五百歳、千歳は当たり前のことでした」、

と信次師は明らかにされています。

五百年、千年なんて！と皆様は思われるでしょうが、最近の心ある医者が言われることには、現代は飽食ゆえに短命になってゆくので、

食事を一回くらい抜きなさい、

と。

戦争で満足に食べられなかったことが、今の長寿世界一に？という人もいられて、今どきの子供達の時代はわかりませんが、ある人はこ

う言っています。

一日百五十キロカロリーもあれば生きれると、まさに、これは現代の十分の一ほどのカロリーです。

八月

先に出ましたが、十ページばかりの機関誌『ひかり』が発行されます。

一部引用するところになります。

「ノアの箱舟現象は、地球上に人類が住むようになってから何回となく、くり返されてきました。云々。

しかし、人類が独占欲、支配欲に心を傾斜させてゆきますと、その反作用として、それこそ、突如として天変地異が襲ってくることを

予言しておきましょう」、

と記述されています。

八月日付不詳

講演「生い立ちよりG L A発足まで」東京

この講演は日付けがわかりませんが 残されている録音テープの中で、最も古いとされています。

八月十五日～十七日

静岡県藤枝市で第一回研修会開かれ、この研修会にて十三歳の中学生二人が心の窓を開きます。

この日の講演では、

「霊道が開かれたことが悟りではなく、正法への一頁であるにすぎない。そして永遠の生命を悟るための実証であろう」、

と信次師は講演していられます。

十月九日

講演「正法と科学」東京

十二月二日

創立時の「大宇宙神光会」を、GLA (GOD LIGHT ASSOCIATION) に改称されます。

さらに、一九七〇年（昭四十五年）の一年間で、七十名近くの人が霊道をひらき、生活に生かしている、と信次師は報告されています。

この頃の信次師の周辺から

佐藤 忠氏は、信次師と知り合われたのは昭和四十五年でした。

東京ゆかた社長の河合氏の紹介で信次師を尋ねて、ホンモノかニセモノかこの眼でたしかめようというのでした。

事務所の入口には「神光会」という看板があって。信次師は、

「佐藤さん、ぼくをためそうと思ってきたでしょう。それでいいのです。大いに疑問をもってください」

とされています。

さらに、佐藤氏が次点に泣き、選挙違反で秋田刑務所にいられた時のことを、こまごまと指摘、佐藤氏は、度胆をぬかれてしまったとい

うのです。

それは氏しか知らないことでした。

ヤシカのこと

佐藤氏はある人を伴って信次師の講演会場を訪ねていられます。

それは、当時世間を賑わせていたヤシカの七億円不明金のこととヤシカの創業者である○島善政社長と一緒にだったのです。

すると、信次師は課長以上の名を書いて下さいと指示されると、

「この人です」、

と。○島社長は、

「その男にかぎって」、

と反論されますが、まさしくその男だったというのです。

更にもう一つ、

京王プラザのこと

新宿に京王プラザが開業する前、佐藤氏はI社長を信次師に紹介されたというのです。

すると信次師は、

「展望台をつくりなさい...海外の農協の客をとるように...と、こまごまと指導して、それに沿って方針が立てられ成功している」、と

いいます。

また、佐藤氏が信次師の事務所を不意に尋ねられたとき、

「お父さんに会いたくはありませんか」

といわれるので、信次師の妹さんを霊媒にして実験することとなり、そのとき佐藤氏のお父さんは、

「忠！ 苦労かけてすまない...」、

と、なります。

さらに、氏はこう書いていられます。

「父と話しているとしか思えなかった。現に父の声である。ショッキングな体験だ

った」、

というのです。

松下幸之助氏のこと（パート1）

そして、佐藤氏が大森の信次師の自宅を尋ねられた時、松下幸之助が、小学校という学歴でなぜ、あのようにと信次師にぶっつけてみら

れたというのです。

しばらく目をつぶって、

「ルカ...ルカ...佐藤さん、ルカという人がいませんでしたか」

と信次師は言われた。

そこで佐藤氏は、

「キリストの弟子の一人でルカ伝もある」、

と答えられた。

すると、信次師は、こう断言されたというのです。

「人類を救おうという...使命をもって生まれたのです。それにはまず、この人を経済的に豊かにしてあげようという神の意志なんです。

一人の人間の力で、こんなに成功するわけがありません。でも、松下幸之助さんはそのことをわかっていないし自分の使命についても

知っていない、悟っておらんと申しております」、

と。

「教えてやりたいですね。松下幸之助に会ってくれますか...」、

と、佐藤氏が勧めると、

「時間さえ折りあえば、会ってもいいですよ」

と信次師は言われたというのです。

そこで、佐藤氏は翌日、さっそく松下氏に会見を求められ、大阪のロイヤルホテルが指定され、そこで、氏は信次師の予言の内容をこと

こまかに話されると、すると松下氏は、

「ほんとですか、はは...、私がルカの生まれ変わり？ 光栄なことですな...」、

「一度、この高橋信次さんに会っていただけませんか」、

と佐藤氏が頼まれると、

「いや、私も会いたい。その方にぜひ紹介して下さい」、

と答えられたというのです。

松下氏は半信半疑のようでしたが。それでも松下氏は、

「ぜひその方に、お会いしたいです...」、

と言われたといえます。

さっそく帰京した佐藤氏は、信次師にそのことを伝えると、

「喜んでお会いしますよ。でも松下さんは、まだよくわかっておりませんね...」

と言われたというのです。

佐藤氏は松下氏の秘書と、信次師の会う日時を何回となく連絡されたが、結局、機会が見つからないままに不帰の人になってしまわれた

そうです。

これは、とってもセンセーショナルなことですが、佐藤氏が信次師の妹さんを霊媒にして、というのがありますが、信次師はこう言って

いられます。

霊媒を正見する

「日本中に、霊媒という人は沢山いる。しかし、その人がホンモノかどうかの目安は、目的とする人を霊媒に支配させるのだから、その

語りからしぐさまで、まったく同じでなくてはならないし、顔つきまで似てくる。

生前、東京弁しか喋っていなかった人が、関西弁で語るようなら、正しく判断することです。見えぬだけに、だまされやすい」、

と信次師は述べていられます。

これまで、佐藤氏の記述を参考にしましたが、これに対して、園頭広周会長は信次師にこう聞いたと記述されています。

松下幸之助氏のこと（パート2）

今度、僕たちが出て行く時は、交通機関が発達して、伝道には金がかかることがわかっていた。

釈迦やキリストの時代はてくてく歩いて伝道すれば良かったが、今度は違う、

それである人は、

「今度は私が先に出て、金儲けして準備します」、

と出して出たのです。

だから、あの儲けた金は僕の運動のために提供すべきだった。

そのために、大阪の近畿ナショナルの社長さんが、松下幸之助さんと僕が会うのを準備して下さったのだが、松下幸之助さんが会わな

った。

儲けたのは自分の力だと思って、僕のためには一銭も提供しなかった。

僕はなにも松下さんからもらわなくても、僕は僕でやっていきますよ。

あの人が儲けたのはそういうわけで、天上界の人たちが協力してくれたのです。

しかし、松下さんはこの世に生まれてくる時に、

「正法の伝道のために準備しておきます」、

と約束して出たんだから、人をなんとか救いたいという気持ちはあった。

だから、PHPをつくって人間教育をするということになったのです。

松下幸之助さんは生まれてきた時の約束を果たさなかったから、あの世へ帰ったら、きっと反省させられますよ」、

と信次師は言われたというのです。

大黒天ということ

「正法のために、経済協力をする使命の人を、大黒天といい、世に言うような、金儲けの神様ではない」、

と信次師は言い残していられます。

それ故に、松下氏は正法にとって、大黒天と呼ぶ、財務担当の天使と信次師は言われているのです。

ところが、信次師が亡くなると、信次師の教団であるGLAは、例を見ないほどの混乱が起るので、松下氏の経済協力を得られな

ったことは、かえすがえすも残念とは思ふものの、これはこれで良かったのではないか、これも天上界の思し召しかも知れないと著者は

考えるのです。

一方、信次師は、佐藤氏について次のように記述されています。

株式会社経済界の佐藤主幹の守護霊（過去世、魂の兄弟）は、朗らかな方で、当時のことを語り、現在肉体を持っている者の批判をする

こともある、

と。

こうして、幸之助氏は、九十四歳の生涯を閉じられますが、晩年の氏は、補聴器をたよりに、やっと話を聞くことはできても、声を出す

ことが出来なくなって、どこへ行くにも車イスであったようです。

でも、隠れた陰徳もたくさん積まれて、何十、何百億と社会に寄付し、教団や、神社仏閣にも多額の寄付もされ、そして、ポーンと七十

億円という私財を投じて、茅ヶ崎に松下政経塾もつくっていられるのです。

しかし、残念なことに今世では、幸之助氏と信次師は縁がなかったようです。

少し付け加えます、と。

本も何冊か出しておられる或る発明家で霊能家は、本の中で松下氏と信次師は会われたような書きぶりであることと、更に、発明家は

信次師と魂が二つに分かれたように記述されている人がおられます。

このように信次師の偉大性に注目されたり、話題とされる人が私のノートを見ると数十人がおられます。

この項を最終推敲していたとき、白装束の集団が報道を賑わしていました。

ウェブマスターの周辺は、すぐホームページに乗せてはと勧める人もいましたが、原稿さえ出できれば一時間もせず全世界に公開できま

す。千〇氏は病氣らしくムチ打ちたくないの少しにとどめますが、その報道を見て「アッまたか」と驚きました。

彼女は日本が地震で崩壊するからと、過って、二十数名の謎の渡米で、新聞を賑わせました。

次は、田中角栄氏について述べます。

田中角栄氏のこと

田中元首相がロッキード問題で混乱していた時、新潟の後援会の代表と第一秘書が、大阪の講演会の際、園頭会長と話していると

ころへ信次師を訪ねて来られたというのです。

しかも、信次師の命によって園頭会長は録音して残されています。

「田中さん、財産を投げだして裸になりなさい、そうすれば、国民はもう一度あなたを首相にというでしょう。

これだけではいけません、それから更に、S党のN君、S評のO君、あなた方は労働貴族である、わしも裸に

なった、あなた方も私と

同じように裸になりなさい、裸になったところで日本のことを、よく話し合おうではないか、といいなさい。。
それでも、つべこべ文句

を言うなら、〇〇君、あなたは というマンションの何号室にこういう女性がいる。それでも違うというなら
さらに「名前はこ

うで、顔はこうで、身長はと、教えてあげます。裸になんなさい」、

と。

また、昭和四十九年二月、関西本部講演会の中で信次師は、

「田中（角栄）さん自身もね、東京都内にある財産をみんな投げ出して、自民党で今、使っている資金も全部さ
らけ出して、このお金を

みな大衆のために使おうじゃないかと、こうやったら、S党やK党なんか、どうということないですよ。それを
しないで往生際が悪いか

ら、こんなことになってしまう。」、

と。

また、信次師は、田中角栄氏は斎藤道三の生まれ変わりと言い残していられるのです。

西濃運輸の創業者・田口利八氏のこと

先に出てこられた佐藤氏は、記述の中で、「大宇宙神光会」を英語の頭文字をとってG L Aと勧めたことや、
『縁生の舟』（改題『心

の発見』）は、初めは佐藤氏の会社で出版されていますが、

「縁生の舟は、七十万部売れます」

と信次師は予言されると、まさにその通りであったこと。

そして、印税を手にしなから

「こんなにいただいていいんですか」、

さらに、

「大切に使わさしていただきますよ...」、

とも話していられるのです。

また、佐藤氏が、バーやクラブに案内すると、信次師は酒は吞まれず、ホステスの話に静かに耳を傾けていら
れるだけだったようで

す。

そして、西濃運輸の創業社長の田口利八氏は中国の時代、馬車の運送の社長のようなことをしていて、佐藤氏と当時も兄弟のように親

しくしていたことも信次師は明らかにされています。

さらに、新日鉄の永野重雄・藤井丙午氏の冷戦を弱冠四十歳ほどの佐藤氏が和解劇をやったのは信次師の

「佐藤さん！あなたがやれば必ず成功しますよ」

という勧めによるものだったというのです。

また、氏が

「般若心経をやさしく解説して下さい」、

と言うと、信次師は『原説般若心経』を一冊まとめあげられますが、

「僕はね、仏教書なんか一冊も読んだことがないんです。メチャクチャですよ...」

と言って笑っていられます。

しかし、発売すると嵐のような反響となって、ベストセラーになっていくことが記述されています。

昭和四十六年（一九七一）（信次四十四歳）

一月

指導霊の指示によって記述されていた原稿が完成。

『縁生の舟・神理編』出版され、のち『心の発見・神理編』、と改訂。

昭和四十六年一月十日 講演「信仰とは」 千葉

三月

ある新興宗教の霊的現象に惹かれて信者となった婦人が、『縁生の舟・神理編』を読み、信じてきた信仰に疑問をいだいて、信次師

の事務所を尋ねて来ていられます。

信次師が霊視されると、不調和な動物霊に憑依されていて。その憑依霊を取り去ると、その結果、以前の自分

をとりもどしたというの

です。

彼女はインドの時代のブッタ・スートラ（仏教）を学んだ比丘尼でした。

昭和四十六年三月十四日 「現代宗教と人生の目的、転生輪廻の証明と現証、質疑応答」東京観音寺

五月

『縁生の舟・心と科学編』出版さる。後に『心の発見・科学編』と改訂。

六月

信者の集団帰依

六月の信次師の講演会に、霊友会から分離した瑞法会からNとHの二人が教祖の命を受けて派遣されて来られます。

昭和四十六年六月一日 「質疑応答」 東京

七月

昭和四十六年七月七日「心行朗読、心行解説、地獄界の有り様、仏教伝来について」 東京

七月二十四日「調和と科学」 東京

八月、

八月の栃木の出流山での研修会にも二人は来られます。

信次師は次のように言っています。

「この二人の先生はなにもいわないんです。僕は、その人達の守護・指導霊と話をするから、皆わかります。

僕のインド時代の、そして、中国時代の仲間もいいところ。僕は、二人の守護霊から聞いたまを告げた」、
というのです。

二人は、本ものかニセものか確かめて、本物であれば、その指導方法を利用して、信者を幸福にするつもり
のようです。

そこで信次師が、

「研修の結果を伝えたら良いでしょう」

と告げられると、二人は、いい当てられたことに苦笑して、さらに、

「このことを録音しても良いですよるか」、

と尋ねます。

そこで信次師は、教団の会長は、法華経を以って、先祖供養で信者を導くことに自信がないといっていること等
を全部録音させていられ

ます。

そのときすでに、会長は、『心の発見（神理編、科学編））を読んでいられたというのです。

二人は、このテープを持って帰阪するのです。

一方、信次師は霊視、透視して、東京にいてその教団の裏話しが全部わかってしまわれると、自分を再び訪ねて
くるだろうと考えられま

す。

そして、信次師の守護霊も、大分自信のある言葉で言うのです。

このように、居ながらにして、すべてがテレビの画面のようにわかって。すべてお見通しだったというのです。

これも色々な話が残されており、その中の一つは、高弟の一人、村上宥快氏が、弟子の運転する車に同乗して、
大事故になるところだっ

たというのです。

帰京して信次師に報告しようとされたら、

「よかったね、命拾いして」、

という言葉が一瞬早く、すべてお見通しだった、というのです。

昭和四十六年八月七日 「高橋先生、最初のふれあい講座」 大阪瑞法会

九月

ある日、教団の会長が八起ビルに訪ねて来て、迷えるあとの訪問でした。

そこで信次師は、先代会長は女性であったこと、この世を去る時の様子、教団を指導していた頃のことなど、一部の幹部以外には解らな

いことを生きていた当時の大阪弁そのまま、前会長の言葉で伝えられます。

三人は、あっけにとられてこの現象をみつめていられたというのです。

そして翌日の昼、信次師の説かれる正法に帰依する決意を固めて帰阪します。

一九七〇年、瑞法会教団の初代会長竹本千代が亡くなった後、二代目会長、中谷義雄氏はG L Aに集団帰依することになります。

教団は、G L A関西本部となりますが、吸収される方がする方より歴史が古く、会員数が多いという珍しいケースでした。

二、三万の信者ともども鞍替えというのは異例のことで、当時の宗教界で話題になったのです。

有名人のこと

これなどは他にもある。G L A小金井研修所は、元キリスト教会であり、宣教師から教会までそっくり移籍していられます。

さらに、山形大の理論物理学教授の黒沼栄一氏も信次師にひかれていかれた一人ですが、これ以外にも、信次師の著書に推薦文を書かれ

た作家の山岡荘八氏、将棋の升田幸三氏、木村義雄氏もいられます。

升田幸三氏なんかは、一九七三年に読売ホールで信次師の前座として講演していただけるほどで、野球の別所毅彦氏もそうです。

また、信次師は講演の中でこうも言っています。

「皆様もよくご存知の木村名人という方がいます。この方は将棋というものを通じて、なかなか良いことを言っています。

また作家の山岡荘八先生などもやはりその神理を生かしています。

この方たちのように名人クラスになると、究極の場は神理であります...。」、

と。

昭和四十六年九月二十三日 「瑞法会幹部との対談」

九月二十九日 「瑞法会幹部との対談」

十月

信次師は大阪におもむき講演会を持たれ、演題「物質と生命」を約二時間、そして靈的現象の実験にとりかかられます。

その後、教団の要請によりG L Aは宗教法人となりますが、元会長の中谷義雄氏はこう書いていられます。

「九月十二日に、私は東京へ行き高橋信次先生とお話をさせて頂いて、この方が仏陀ゴータマの再誕であるということを堅く信じたので

あります。それから二回、三回と回を重ねて上京するたびに、確信しました」、

というのです。

宮沢賢治は菩薩界の光の天使

関西で初めての講演会するとき、信次師は宮沢賢治の「雨ニモ負ケズ」の詩を詠で、

「この方は菩薩界の方です」、

と言い残していられます。

次に、この時の講演を要約してみる。

講演「釈迦の生誕と仏教の変遷」

「私達はかつてインドに、中国に生まれてきた。日本は中国と戦ったけれども、中国に生まれていた時の子孫と戦ったわけである」、

また、

「心は心で洗礼すべきであり、水や宗教的しきたりで行うのではない」、

と、

「習慣とはおそろしいもので、習慣が執着につながっていることを知らず、人々は苦悶の一生を終えて行く」、

さらに、

「自分がつくった罪は、自分で償わなければならない、誰も人の罪を引き受けることは出来ないのです。罪を引き受けて病気になったと

いう教祖があるけれども、その本人に病気になる原因がなければ、病気になることは出来ないのです。正しく法を説く光の天使は、健康

であって法を説いて行くのです。もし、人の罪を引き受けるのが本当だとしたら、キリストも釈迦もヨイヨイになって死ななければなら

なかった筈です」、

そして、

「皆さんの過去世において、ある人は王様であり、ある人はお金持ちであったり、そうして、皆さんは今、自分が欲している人生に今あ

るのです」

さらに、

「魔王や動物霊達は、たとえ予言や病気を治しても、それは一時的現象であり、私達は絶対に信じてはならない。」、

と講演していられるのです。

昭和四十六年十月二日「瑞法会幹部との座談と現証」大阪瑞法会

十月三日「初回講演会（一般）瑞法会

十月二十一日「第二回講演会」瑞法会

十月二十三日「第三回講演会」瑞法会

十月二十三日 講演「現代宗教に対する疑問、質疑応答」 関西

十月不詳「釈尊の誕生と仏教の変遷」東京

十月二十四日「般若心経について」四国徳島

十一月

講演会は東京から地方に広がり、信次師は、関西地方への出張も多くなり、二十四日は大阪、二十五日は四国と選挙運動の遊説のようだ

ったというのです。

信次師は、指導霊からそれが一生の仕事だと言われているので余り苦しいとも思われなかったようですが、この両日は、一日に八時間の

連続の「講演」と「質疑応答」それに「現証」を行っていられ、何千人もの聴衆、病人の個人相談が七十六人。その中で、十五年

間いざりの人、十年間半身不随の人達に奇蹟が起ります。それは、信次師に協力してくれる大指導霊の力だったと信次師は言っていられ

ます。

このように、自分の力でなく、大指導霊の力だったと言われてはいますが、実に謙虚です。

奇蹟はあの世の霊の協力によって行われますが。信次師の場合はモーゼさまやイエスさまなどの光の大天使の協力で行われるので、そ

の力は絶大だったと想像できましょう。

また、信次師は、

「動物霊でも奇蹟、病気治し位はする」、

とっていられますが。霊能者といわれる人を正しく見る注意が肝腎であり。動物霊や人間の地獄霊の場合は、その内に必ず本性を現わ

すものです。

信次師は、連日連夜、強行なスケジュールに追いかけても、精神的には疲労を感じず、常に指導霊から、身体も身のうちだ、十分

気をつけよ、と注意されていたというのです。

死の土俵ぎわ「一日一生」

信次師は、寝不足の上、胃の消化力が弱っているところへ、油の濃い食物を、夜中の一時に食べて寝られたというのです。

午前三時頃、気分が悪くなってトイレで倒れます。

すると、あれよあれよという間に

「もう一人の信次師」、

が抜け出して行かれるではありませんか。

この世とあの世を結ぶドームの中で、信次師はしまったとされていて、倒れた音に気付き、I夫人、S博士、M住職が寄って来ら

れ、I夫人などは心臓に手を当てたり、S博士は脈をみて、M住職は心臓に光を与えていられたというのです。三人の心と行動が信次師には手にとるようにわかられ、I夫人は心の中で、

「このように多くの人に道を説いている方に、なぜ神は無慈悲なのだろう」、

と思われることが信次師にも伝わります。

するとその時、大きな光の肉体が、信次師の肉体を支配すると同時に、

「心配いらぬ」、

とシンフォア（イエス）の言葉でした。

そして、それから信次師は、ドームのきびしい波動の中で、自分自身の欠点の追求、反省を行い、電機会社をはじめとするいくつかの会

社、ビル、駐車場などの事務的問題を考えられたというのです。

また、信次師はどのように連絡しようか、実印、鍵、書類、色々な問題が思い出されても、呼吸も心臓も停止して、「もう一人の信次

師」が、肉体にいれないのです。

そこで信次師は、

「そうだ、妻が心の窓を開いているから、次元の異った世界とも話しができる。実在界へ帰ってから連絡しよう」、

と、そう信次師は思われたというのです。

一生の反省と残っていた執着心を、一時間くらいの間処理され、信次師の肉体舟は大きく息をはくのでした。

「どうも心配かけて...」

と、身体を動かすことも、眼を開けることも出来ないままに、信次師は肉体を支配し終わると、また、もとの気分の悪さがもどって来た

というのです。

さらに、一日一日を一生懸命に努力し、正しい心の物差しで反省をして、いつこの世を去っても、思い残すことがないような生活が、も

っとも大切である

「一日一生」は、一九七一年の最大の信次師の悟りでした。

なお、「大きな光の肉体が...」、というのは、イエス様が信次師の肉体を支配して助けたというのですが、実在界の天使達もさぞかし心

配だったでしょう。

個人相談では、信次師が、念を集中して光を入れられる時などは、血圧が二百五十にもなったと聞いていますが、相当な激務だったはず

です。

それも人々を救うための、愛と慈悲の行為ゆえでしたが、いくつかの他の講演をビデオで見る限り、特に印象に残ったのは、中年のオバ

サンが現証の時間が終わろうとする直前に、

「自分もぜひ」

と掛けこみ乗車のように、光を入れて憑依霊を除けてもらえるよう懇願されると、

信次師は苦笑いしながら、

「それでは仕方がないから出ていらっしゃい」（場内は笑いのウズに）

と登壇するよう招かれて、それから憑依霊の外しが始まりますが、常識の有る聴衆者には嘲笑の的だったのが印象的でした。



東大教授・笠原一男氏のインタビュー記事

この年に出版された『現代人と仏教』には笠原一男東大教授と信次師のインタビュー形式による記述がありますので引用要約してみま

す。

前がき

一九七〇年代は宗教の時代といわれている。そうした声に、さきがけるかのように、またまた新しい宗教が生まれつつあって、その一つ

がG L A（神理の会）で、その若きリーダーが高橋信次氏である。

高橋氏自身の口で語ってもらおう。

笠原 既存の宗教とはまったく異なると...

高橋 まあ、宗教といわれましても私にはわかりません…。

笠原 四十三歳でいらっしゃる…。

高橋 はい、そうです。

笠原 イエスや釈迦が脳裏にひらめくというのは前々から…。

高橋 （語気を強めて）私は四十三歳になるまで宗教に関する本は一切読んでいません。

笠原 そうすると幼年学校…秀才だったんですね。

高橋 戦地に行って、どうして自分だけ奇蹟が、つまり死なないのだろうという疑問が…。

笠原 具体的には

高橋 二月八日に門司を二隻の船で出航、十二時に出航して八時に沈められ、約十二時間…海防艦に救われ…

笠原 …もう一人の自分のその後も…。

高橋 毎日です。一日たりと出ない日はありません。

笠原 それはやはり仏典を読んだり…。

高橋 （さえぎって）一つも読みません…。

笠原 魂がイコール意識ですか。

高橋 そうです。

笠原 ソクラテスが輪廻してどこかへ…。

高橋 はい出ています。

（ソクラテスは毛沢東に生まれ変ったと信次師は言っています）

笠原 …特別な修業は…。

高橋 修業なんていりません。毎日の生活のあり方によるんです。

笠原 …松下幸之助さんの子供に生まれるのと私の子供に生まれるの…

高橋 自分で約束して次元の違う…。そこには縁が。

笠原 …親鸞なんかその代表で…。

高橋 パウロという過去世を持って…。

笠原 時代は下って中山みきとか…。

高橋 …必ずしもいい所へは…。

高橋 …イエスの弟子でペテロが矢内原忠雄という…。

笠原 それは...ではなく、瞑想的反省を通じてですね。ありがとうございます

いました。

と。

さらに、この年、信次師は次の手紙を紹介されます。

心と行い

「一九七一年度、日本美術院五六回に出品した百五十号の作品「夏の水」が幸運にも、最高賞である美術院賞を受賞いたしました。

私は昨年四月、M店の社長から『心の発見』をいただき、浅草の八起ビルにおける土曜講演にもお誘いをいただき、初めて、人間の心と

行いの正しい在り方を学びました。

講演会場は、立錫の余地もない程の人によって埋められ、およそ、宗教家というタイプとは不似合いなのにも驚ろきました。

しかし話しが進行するにつれて、誠実な、少しもあやふやなひびきのない神理そのものが、私の身体に、心に、じわじわとしみとおるよ

うにひびいてくるのでした...。」、

と。

千葉県在住 K・D

昭和四十六年十一月一日「神と人間との関係、夏栗氏の現証」東京

十一月二十日「神と人間との関係、質疑応答

十一月二十一日「大宇宙というものは、人生の目的と使命」関西

十一月二十二日「松下電器との懇談会」関西

十一月二十二日「瑞法会初代会長の霊との対話」大阪

十一月二十四日「禅定の指導、止観について」奈良橿原神宮研修会

十一月二十五日「心行の成り立ちと解説」関西

十一月二十五日「瑞法会幹部との座談会」大阪

十一月二十六日「心行の解説」関西

十二月

昭和四十六年十二月十一日「肉体先祖と魂の先祖」関西

十二月十二日「現代宗教と正法」関西

十二月十三日「実在界の状況と大宇宙体」関西

昭和四十七年（一九七二）（信次師四十五歳）

一月

昭和四十七年一月三日「光即行」東京

一月八日「宗教は科学である」関西

一月九日「神理と科学、質疑応答」関西

一月二十二日「正法と魔、質疑応答」関西

一月二十三日「般若心経解説」関西

二月

昭和四十七年二月十日「心の本質」関西

二月十二日「般若心経解説」関西

二月十三日「般若心経と心行の解説」関西

三月

盛岡市・国保会館。

演題「インド仏教と現代仏教」

「ここにはプロのお坊さん方も何人も見えておられます。そういう方の前で
インド仏教だの云々。...手当というのはそうすることです。」、
と。

昭和四十七年三月十三日「心行の解説、現証、質疑応答」関西

春

この頃の信次師の周辺から、

観音寺住職・村上宥快氏の著書に『調和への道』があります。

その中で、氏はこう記述されています。

一九七二年の春、彼岸すぎ、信次師と相談の結果、伊勢の答志島へ行くことになったというのです。

村上氏は、設営のために信次師達より先に出発して、一週間後に、信次師一行を迎えに名古屋へ行かれます。

村上氏の桑野の知人宅に寄ると、Kというお婆さんが紹介され、彼女は、皆、気狂い扱いするとこぼされましたが、信次師は一見して彼

女の守護霊が千秋の思いで待っているのがわかれたというのです。

さらに、信次師が「光を入れられる」と中国語を話しだし、彼女は気狂い扱いされないですむと大いそう喜びます。

翌日、村上氏は一行を答志島に案内し、最初に断わられた旅館へ行ってみると、今度は二つ返事で応じてくださり山海の珍味でもてな

し、さらに、何日でもと勧めていられます。

さすがに信次師でした。

それから、一週間の野外禅定、夜は渚での反省が終ると、信次師は村上氏のお父さんの霊をH氏に出すと、口が歪みよだれでも出そう

な、中風そのままの姿だったようです。

五十年間もこのままの姿で地獄界をさまよっていたのだと村上氏は理解され、また、

「ぼくの意識を見るように」

と信次師は命じられますが、余りにも光が強烈で、村上氏は判断がつかねた、と書いておられます。

平成十三年春のこと、往復で一万円の格安の航空券を手に入れ、名古屋の歯科医師会館に附属する「歯の博物館」を見学して、伊勢神宮

と伊勢志摩の旅行を家族で楽しみました。高原のハイウェイから眺める答志島を「ここなのか」と感慨深く視察できました。

先を続けます。

それから、この島を去り、松阪の開眼寺で信次師は講演をすることになります。

二百名ほどでしたが、夕食で出された松阪肉に、村上氏はとまどわれます、どうしてかと申しますと、強度の牛肉アレルギーで、これま

では犬のジステンバーのように、一カ月も二カ月も苦しんでいられたというのです。すると信次師は、

「もう治っているから大丈夫」

とつげられると、恐る恐る村上氏は食べてみると。何んともなかったというのです。

そこで、信次師は食べ物への感謝を戒め、二日程して湯の山温泉に登られ、宿の人とされます。

そこで、信次師が身上を見てあげると、面白がって集まって来て、夕方近くになると、貴賓室が空いているから移るようにと宿の主人も

大いに歓待されますが、そこは皇族方の宿舎に当てるということでした。

これが後、「GLA」の支部になっています。

さらに翌日、一行は、関西本部長・中谷氏のお母さんが亡くなられたので、大阪へ赴き、旅姿のままで、信次師の導師、村上氏の副導師

で告別式は挙行されます。

食べ物は大事に

食べ物への感謝と報恩というのは、食べ物はすべて、その身を犠牲にして我々の血や肉になってくれます。

ですから、その感謝の心は勿論のこと、報恩とは、粗末にしないことなのに、食べ残して簡単に捨てたり腐らせてしまうようでは報恩と

は言えません。

レストラン等の食べ残しを見ると、餓死している国もあるというのに、それは感謝とか報恩とは言えないのです。

また、あまりにも光が強烈でというのは、霊視する人が信次師の意識を見ると、光の化身とも言えるほどだったと、多くの弟子の報告が

あります。

四月

四月九日

八起ビルでの講演。

演題「人生と悟り」

「正法流布のスタート時は、わずか二、三人でありました。それがひと月たち、ふた月...云々。

悟りの彼岸も、八正道を行じるなかにあることを知らねばならない。」、

と。

同じく四月

演題「神と人間（宇宙即我）」

「神と人間、なかなか私達は神様という問題になりますと、ほとんどの人々が見たこともありませんし、話しては聞いても、神というも

のが、どのような作用をなし云々。」、

と。...

（質疑応答）

憑依と靈道の違い、如来とは、菩薩とは、仏陀とは、仏法とは、靈道者とは何かの説明されます。

昭和四十七年四月一日「神理と実践、質疑応答」関西

四月十四日「神と人間」関西

四月十五日「心行の解説」関西青年部

四月十六日「心行の解説」関西青年部

四月二十二日「神と人間、質疑応答」

四月二十三日「仏教と科学、質疑応答」奈良

四月不詳「神と人間、宇宙即我」大阪

五月

昭和四十七年五月二十一日「神と人間」関西

六月

昭和四十七年六月六日から八日 高野山研修会

「光の入れ方、法華経、般若心経の解説、中道反省の物差し」

六月十日「自力と他力について、質疑応答」関西

六月十一日「中道の実践こそ正法、神理の話しと質疑応答」関西

七月

昭和四十七年七月六日「吉野山研修会」吉野

七月十日「盛岡講演会」岩手

七月二十二日「光とは何か」東京観音寺

七月二十七日「研修会」奈良 古峯神社

八月

昭和四十七年八月二十日「信仰と生活」檀原

九月

昭和四十七年九月一日「体験発表、質疑応答」関西

九月九日「実在界と現象界」関西

九月十一日「質疑応答」東京

九月十六日「般若心経の解説」関西

十月

盛岡市・国保会館に於いて。

演題「色心不二」

「色心不二」という言葉を皆さん知っているでしょう。この「色心不二」という言葉が非常に哲学化されて云々。

する時に、自分自身の心の平和を、取り戻すのです。」、

と。

昭和四十七年十月七日「心と公害について、質疑応答」関西

十月八日「輪廻転生、質疑応答」関西

十月十五日「法灯について」東京観音寺

十一月

信次師の事務所に、〇という青年が千葉から訪ねて来たので、信次師が面接されると彼の背後に若い女性をはっきりと見えたそうです。

そこで信次師は、背後にいる若い女性の霊に質問されると、

「私は〇の妻です」

と言ったというのです。

〇は十年来、肩や首が神経痛のようにじくじくと痛むというので、信次師が

「あなたは、すでに亡くなっている。すぐに主人から離れなくてははいけません」、

と諭すと、

「この人から離れたら行く所がありません」、

と哀願するように言います。

そこで、信次師が時間をかけて教え諭すと、〇の亡き妻は主人から離れて、天上界の修養所へ帰っていくと、〇は痛みもなくなり、以前

の丈夫な身体にもどっていったというのです。

それから信次師は〇に、心の正しい尺度、人生の正道を説かれるのでした。

同じく十一月

『原説般若心経』出版されます。

信次師は「空」は実在界・あの世。「色」は物質界・現象界・この世、と明解されます。

空はあの世のことで、色はこの世と信次師は説明されましたが、ナラジュルナー（竜樹）が『空』を説いたからわからなくなった、と信

次師は教えていられます。

昭和四十七年十一月十一日「質疑応答」関西青年部

十一月十二日「正道実践、質疑応答」関西

十一月二十五日「信仰とは何か」佐賀

十一月二十六日「般若心経解説」佐賀

十二月

東大阪にて、信次師の講演会の始まる四十分前、T・M子という中年の夫人が信次師の控室を訪ねられます。

一九六三年二月五日、突然脳溢血で倒れ、左半身マヒで三叉神経痛という後遺症もあって、信次師が霊視されると、M子氏の背後に中年

の男がすがりついているのがわかれたというのです。

それは亡き夫で、一人残した妻を心配もしている様子でしたが、亡き夫も同じように脳溢血で倒れ地獄に行っていたのです。

亡き夫が妻を支配すると未亡人の口から出る言葉は、男性のそれでした。

そこで、信次師がコンコンと言って聞かせ、手から光を出して与えられると、「ああ、暖い、体のうずきがなくなった」、

と未亡人は言うのでした。

さらに、信次師は信次師の守護霊に頼まれて、天上界の入口まで送ってもらうことにすると、主人は、彼女の体から離れて行ったという

のです。

それから、彼女は感謝して合掌しますが、彼女の病気の原因は、彼女自身の心にあったそうです。

同じく十二月

信次師の友人の紹介で、幼い二児をつれた若い婦人が信次師を訪ねていられます。

信次師が三人を見た時、この母親を救ってやらねばと心はがふるえられます。

母親の後に、蒼白い顔をした地獄霊が立っており、そこで婦人はこう言ったというのです。

「叔母が行けというものですから」

と他人事のように言うのでした。

「ご主人はノイローゼのようですね」

と信次師が質問されると、

「精神疲労だそうです。精神安定剤を飲んでいます」

と答えます。

そこで、主人を同行してもらうことにすると、主人は

「こんな所につれて来て」

と小馬鹿にしたような態度をとります。

耳をかそうとはしなかったので、仕方なく、信次師はまず死神を除こうと、光を送くと、はじめて主人は口を開きます。

さらに、地獄霊が離れている間に信次師は、心の正しいあり方を説き、心という問題について説明しても、素直には聞いていなかったと

いうのです。

信次師が顔を見られると、ニヤニヤ笑って、心の中で地獄霊と話しているので、

「ご主人、彼等と話してはいけない、しっかりして下さい。その男は自殺した人です。」、

と諭されますが、婦人にも地獄霊がしのび寄って来ていたというのです。

そこで、信次師は、まず、子供を実家に預け、ガスの元栓を締めて寝ることと、対話以外にありませんと説明されます。

あえて信次師は、入院もすすめていられるが、四ヶ月も過ぎたある日、主人は

「一緒に死んでくれ」

とってガス栓を開けたというのです。

でも、元栓はしめてあって、一時的に危機は切り抜けていますが、後日病院から抜け出して、飛び込み自殺をしていたというのです。

大学教授の主人の両親は他人事のそぶりだったといいますが、原因は冷たい両親のもとに育ったことにもあったというのです。

年の暮の信次師の周辺

渡辺氏はペンダントを貰えるという教団の中級の研修を親子四人で、受けに来ていたというのです。

昼休みに場内アナウンスで『現代人と仏教』という本をお読み下さい。教団の記事がありますと伝えます。

その本の中に「神理の会」とあるので渡辺氏はさっそく八起ビルに行かれると、年の暮れで閉っています。

正月が明け本部に出かけてみると、広間の一角に事務机が五つほど並んでいるだけで、何の変哲もありませんが、感じのよい青年が一人

応待してくれたので、『縁生の舟』の神理編と科学編、「G L A」という月刊誌を買われて帰られたというのです。

それから、

「過去世を教えてくれるそうだから今日いってこないか」

と渡辺氏は奥さんに頼まれて、

「どうだった」

と尋ねられると、

「何でもずばりずばりと怖いようよ。ペンダントをすぐに指摘されたわ。腰に蛇がついているので、今度の講演会の時にとってあげます

からいらっしやい」、

と。

人の前では、いやだなと思っていると、心を読んで、今、とってあげましようということになり、蛇はそこから出ていったようよ」

と云うことでした。

このようなことで渡辺氏の「G L A」の勉強が始まりますが、渡辺氏は次のように言っておられます。

「土曜講演会というのが月に二度、日曜の講演会が月に一度、それに地区座といって地区の座談会がある。雑誌の案内を見ると、市川、

中山の阿波神社の社務所をかり、月に一度やっているの、初めて土曜講演会に行った時は、たかだか六、七十

人だった」、
というのです。

昭和四十七年十二月九日「薬と毒、質疑応答、道について、現証」関西青年部

十二月十日「中道について」東京

昭和四十八年（一九七三）（信次四十六歳）

一月

一月四日、東商ホール、

演題「般若波羅密多への道、現象」

「私は十歳の頃から霊的な体験が起こり、爾来三十二年の間、心と物質について追究し云々。

三十二年の歳月を経て、はじめて知ったのであります。」、

と。

同じく一月

神奈川県、老舗の女社長のK氏が信次師の事務所を訪ねられます。

五十五歳というのに骨と皮。

「どんな医者にかかっても治りません」

と訴えられたので信次師は

「心の毒を食べすぎたのです」

「いえ、体の具合が悪いのです。ちゃんと仕事もしているし、神様にお参りし、

先祖も守っています」

と意味を解されていません。

「お姑さんと同居していますね」

確かに社長ではあるが、一銭の金をもお姑さんが握っており自由にならないのです。

「主人の妹さんにも、娘さんのいいなずけにも気をつけて...」

「ハイ、いつも私は周囲の者に気をつけています」

信次師は、K氏のような人は、意識の中からくずさない限り、自己保存から解放することは不可能だと考えられ、丁寧に説明されるので

した。

そしてそれからK氏は、嫁に来てから今日までの生活について一週間かけて反省された結果、心は浄化され体重は七キロも増え愚痴も忘

れたようになられて、すっかり元気になってしまわれたというのです。

これが我慢と忍辱の違いです、

と。

我慢とは、今にみていると心の中にパンチを持った状態であり、低い霊格の心の状態です。

一方、忍辱（にんにく）とは、いくら辱めを受けても心に毒を食わず、哀れな悲しい人よと相手を思い遣る高人格者の持つ心の状態で

す。

次に、この年の一月に、出版された本の中から上げてみましょう。

『対談・四次元の不思議』の要旨。

小田 「ある社長さんで、私の会員でもあるけど、近頃心霊のことで本なんかも書いたり、会合を持っている人がおりますが、その人は

子供の時に、何遍も死んだんですね。その体験談を聞きましたがネ。」

田宮 「...」

小田 「そうです。それで、本当の私はここにおるぞ、といくら言っても通じないわけです」

田宮 「...」

小田 「...薬の匂いがした、というんですね。そうしたら皆が生き返ったとって、大喜びだったというのです。その人にはこうい

うことが、七回も八回もあったそうです」、

と。

昭和四十八年一月十三日「心と行い（信次師）、青い鳥（一栄氏）」関西青年部

一月十四日「釈迦と五人の弟子達、質疑応答」関西

不詳 「法華経、転生の秘密」東京

二月

昭和四十八年二月十日「神理は不変、現証」関西

二月十一日「輪廻転生について、質疑応答」関西

三月

行者の一例

信次師の大阪講演会的时候、講演が終り質問を受けていられると、神道を二十数年学び、肉体業をして来られたという五十代のH氏が質

問をされました。

「私はあらゆる修業をして、八百万（やおよろず）の神が私の耳もとで教えて下さいましたが、先生の著書を読んでからというもの、も

う用がすんだから帰るといって、今は二方の神だけになりました。何んという神でしょうか」、

と、信次師に質問されたのです。

何千という聴衆者は、注目します。

H氏は自分で神と自称する者の名前も知っていながら、信次師の口を通して語って欲しかったというのです。

はるばる四国から他流試合に来る勇気は憐れにも信次師は思われますが、

「あなたは、人に対しても慈愛の心が乏しいのはどういうことですか」

「私は神のことばを守ります」

とH氏は言います。

地獄に堕ちた行者が竜をつかって話させている姿を信次師は見られていたので、

「自分の名前を名乗りなさい」

「我は天照大神なり」

「うそを言いなさい」

「金比羅なり」

とコロコロとかわります。

「ただの行者、本当のことを言いなさい」

「黒竜でございます」

と言ったというのです

行者の頭の上に長いひげをなびかせ舌をペロペロ出しているので、

信次師は彼らに動物としての心のあり方、人間としての心のあり方について説法されると、H氏を支配していた地獄霊達は離れていった

というのです。

「体が軽くなり頭がすっきりしました。やはり私のは、地獄霊でしたね」

と自分で納得したというのです。

同じく三月

信次師は、指導霊によって、信次師のグループの一人、インドの時代の天眼道（天眼通）第一の人といわれた大目連（マハー・モンガラ

ナー）がニューヨークに転生していただけることを五年前に通信されてきました。

昭和四十八年三月、信次師が意識でニューヨークへ行かれると（幽体離脱して）、彼は、丁度ニューヨークの公園の石の上で禅定・瞑想

していられて、そのとき霊的通信に成功されたというのです。

三月十三日

園頭広周会長と信次師の出会い

それでは、園頭会長と「師との出会い」を見てみましょう。

著者の師である元国際正法協会・園頭会長は、昭和四十八年一月十三日、東京へ出張され、生長の家関係者から

『縁生の舟』（改題『心

の発見』）と『原説般若心経』を戴かれ、宿舎のホテルで、むさぼるように読まれたというのです。

「著者の霊の次元の高さを感じずにはいられなかった」、

と、会長は本も読み終えない内に信次師に手紙を書かれます。

すると、二月の末に信次師の使いの人が二人で会長を訪ねられて、そして、三月十三日、関西本部の講演会で信次師と顔を合わせられる

ことになるのです。

会長は早目に行って信次師を待たれ、信次師は講演会場に定刻に行かれると、信次師を一目見るなり会長は、

「中肉中背の、少し太り気味で丸顔の、少しも威厳をつくろわない感じで、すぐにでもふところに飛び込んで行けそうだ」

と思われ、心もやわらげられたというのです。

その時、信次はこう言われています。

「あなたが私のところに来ることは、僕は五年前に予言していました。ネ、そうでしたネ」、

とまわりの人に証明を求められ、そして

「あなたは宇宙即我を体験したことがありますね。それはあなたの過去世で学んだものです」

と告げられたというのです。

その言葉を聞かれた会長は、これまで、自分だけしか知らない、今まで何人かの人に話しても、理解する人は一人もいなかった自分の体

験を何も話さないのに、信次師がわかってくださったことに驚き感激されたのです。

生長の家では「神想感」という観法をやっているので、教祖の谷口雅春氏ならわかって下さるだろうと思って、生長の家の講師にもなら

れたが、結局、わかって貰えなかったと言われています。

これに対して、この先生は開口一番「宇宙即我」という言葉を言って下さった感激で、涙さえ出られて、我が家にやっとたどりついたと

いう気持ちであったというのです。

それから信次師は、

「今まで随分苦労して来ましたね。しかし、それも、こうして、ここに逢うための準備だったのですよ。また、あなたはロスアンゼルス

のアガシャ教会のことを知っていると思いますが、あのリチャード・ゼナーを指導したアガシャの指導霊というのは我々の仲間です

よ」、

と告げるのでした。

会長は、これまでの悩み苦しみを、信次師が全て理解してくれたことに心がやわらぎ、涙が溢れてくるのを覚えられたといいます。

さらに信次師は、

「園頭さん、あなたの心をちょっと見てみましょう」

と言って瞑目、精神集中されます。

「わかりました。ほとんど丸いですよ。りっぱです。よし、やり直したと思っていますね。それでいいんです。ただし少し欠けているの

は、あなたは余りにも遠慮深いことです。」

と言われますが、その日はそのようなことで終わります。

昭和四十八年三月十日「欠点の修正」関西

三月十一日「物質と生命、質疑応答」関西

三月二十八日、法人届される。宗教法人「GLA」

四月

四月一日

東大阪の忍岡中学校講堂

演題「魔に負けるな」

「昭和四十三年三月、霊的現象が私の家に起ってから、はや四年になります。人間は神の子としてこの地上界に、目的と使命を持って

生まれて来たことは、誰の心にも内在されており、例え不調和な現代社会に云々。」、

と。

さらに、信次師は次のように説いていられます。

「誰でも愛の心を強く持てばよいのです、そうすれば誰でも力が出るのです」、

また、

「光を入れる前に自分の心を愛の心で満たすことが大事です」、

「禅定の時、心と肉体の波動を合せなさい一致させなさい」、

と。

四月八日～十日、

G L A 関西本部の講習会

この四月九日の午後、信次師は園頭会長へ、

「昨夜、あなたの守護霊が挨拶に来ました。近いうちに、あなたも過去世を思い出しますよ」

と告げられます。

四月十日、信次師は講演が終わられた後に、

「園頭さん、今夜、一緒に泊って下さい。一緒に来られた御二人も。私は個人指導がありますので、先に宿（生駒の三鶴山荘）へ行って

いて下さい」と勧められるのでした。

二人の人とは、会長は生長の家当時の友人も誘っていたといわれるのです。

夕方六時頃、信次師が帰宿されると、

「先生が、お帰りになった」

というので、会長は玄関に信次師を迎えられると、すると信次師は、

「どうして、早く風呂にはいって、くつろがなかったのですか」

と思われられるのでした。

会長は、師を迎えるのに、襟を正して、礼を尽くすべきだと考え、さらに、今までに知った教祖の中で、これほどの心配りをされる人が

あったらどうかと心打たれるのでした。

夕食が終り、

「園頭さん、精神統一してみてください」

と信次師は命じられます。

会長は、短い浴衣の前を合せて（会長は長身）正座された。

すると、

「そんな窮屈な姿勢で精神統一できません。もっと身体を楽に、足がしびれては長くは坐れない、心に集中できません」

と信次師は言われますが、会長はそれが本当だと考えられます。

今までの宗教体験からして、アグラをかくことに多少、抵抗を覚えながらも、会長が昭和十五年に宇宙即我を体験した時も、禅宗で教え

るような坐り方をされた訳でもなかったことを、思い出していたと言われます。

心の統一をはかっていると、信次師は右手をかざして、何か訳のわからない言葉をかけられますが、会長は、信次師が何を喋っていたら

るのか、さっぱりわからなかったそうです。

信次師が言った言葉は、意味はわからないが、何か腹のそこからこみあげてこられて、口を開けば、そのまま言葉になりそうな気がして

ならなかったと述懐されています。

信次師はこう続けられた。

「肉体を持っている人よ、そのまま声を出しなさい」

言われたというのです。

「肉体を持つ...」、

というような権威のある言葉を、会長は今までに聞かれたこともなく、それは、そのまま従わずにはいられない権威ある言葉だったとい

うのです。

口を大きく開けて、

「アー」、

と声を出されると、とたんに、その声は言葉に変わって、習ったこともない言葉が、次々に口をついて飛び出したそうです。

それで、会長は催眠術にかけられたのではないかと考えられたが、催眠術や暗示は、本人が覚醒した後は、術中どのようなことがあっ

たか覚えていないはずだと考えられました。

しかし、この通り、意識もはっきりしているし、全部知っていると会長は教えられ、さらに、知らない習ったこともない言葉が、次々に

口をついて出て、感動の涙が溢れ、目も鼻もぐしゃぐしゃになって、会長は泣かれたというのです。

また、信次師は言葉を発されます。

「あなたはヘイマカという人を知っているはずです。過去世でどんな関係にあったか、今度は日本語で答えなさい」、

と信次師は日本語で問いかけられたというのです。

会長は一瞬とまどわれますが、今まで、自分を感動させた胸の奥というか、腹の底というか、じっと潜在された自分の心に静かに問いか

けてみられると、すると答が返ってきます。

しかし、会長はそれを否定されますが、その言葉は、どうしても躊躇せずにはおれなかったようなのです。

「心の中に浮んできたその言葉をそのまま口にしなさい」

と信次師は再び促がされます。

信次師は、会長の心の中を知っていたのです。

口にしなさいと言われても躊躇せずにはおれず、一瞬躊躇して会長は思い切って、

「その人は私の侍従をしていた人です」

と答えられます。

侍従とは天皇陛下の側近で、民間の自分が口にすべき言葉ではないことも良く知っておられましたが、その言葉以外に出てこないの仕

方なかったそうです。

「そうです。その通りです。その人は今、京都に生れ変わって、あと三カ月したら、その人も私のところへ来るはずですよ」

と、信次師は告げられますが、その人は本当に、三カ月目に大阪の講習会に来ることになるのです。

そう言った、と同時に会長の目に映ったのは信次師の姿の上に二重写しになっているお釈迦様の姿であったというのです。

「仏陀、おなつかしゅうございます。偉大なる観自在者、仏陀」

と言って、会長は泣き伏されたのでした。

「ウパテッサ（舎利弗・舎利子・シャーリープトラの幼名）二五〇〇年を距てて、この日本で一緒に会うことができました。私もなつ

かしい、インドの時と同じように今世でもやりましょう」

と信次師も涙されて、そこに居合わせた人もみな大泣きされたというのです。

「あっ金粉が」、

G L A 関西本部長・中谷義雄氏が叫んでいられます。

園頭会長の頭上に金粉が降って来た。信次師の顔も、園頭会長にかざされている手もみな金で、黄金に輝いていたそうです。

釈迦の像を金で荘厳するのは、このようなことによるのかとわかったと会長は書いておられます。

ここで、皆さんへ注意をしていただきたいのは、次のことです。

「金粉が...」、とありますが、金粉類似のものは動物霊でも出します。もし拝み屋さんで金粉を出すという人がいたらよく観察した方が

良いと思います。

派手な格好、気分がクルクル変わる、冷たい、金に汚ない、すぐに怒る、常識的に考えておかしい等を正見すれば、必ずわかるはずで

す。

正しく心を開いた光の天使なら、さわやかで、これはちょっとおかしいぞというようなことは、一つもあるはずはありません。

同じく四月

『人間・釈迦』 第一部 偉大なる悟り、出版さる。昭和四十八年四月。

第二部 集い来たる縁生の弟子たち。昭和四十九年五月。

第三部 ブッタ・サン
ガーの生活 昭和五十
一年十一月

(信次師亡後出版)

第四部 カピラの人び
との目覚め 昭和五十
一年十一月

(信次師亡後出版)

『人間・釈迦』は月刊誌『G L A』に連載されたもので、単行本として三宝出版より出されています。

『人間・釈迦』へのプロローグ

高橋信次著、「人間釈迦」は、古代インドの釈迦の時代に生活した過去世を持った人々の記憶と、釈迦を分身とする信次師自身の回想

が、パノラマのように眼前に広がる当時の情景を、筆のおもむくままに自動書記された霊的実録であり、世界に希なる四部作です。

信次師の原稿を進めていく机上には原稿用紙とペンのみで資料一切なにもなかったといわれていますが、最後の著作となった第四部の

「カピラの人びとの目覚め」は釈迦四十二、三歳頃までの物語りです。

残念なことに側近の人達には、いつも、

「道を説いて四十五年間の永きにわたるので、書くことはいくらでもあるんですよ」、

と言われていたといいますが、先に述べましたように、四部は釈迦四十二、三歳の霊的な実録であり、釈迦八十一歳のクシナガラでの入

滅の記録は、信次師著『原説般若心経』三宝出版に詳しいことをお知らせしておきます。

英訳の『人間釈迦』のこと

次に、この「人間釈迦」は、日本人妻をもつアメリカの大学教授の手によって英訳され、完訳されたのは信次師の存命中でしたが、その

翻訳文が日本に届けられたのは信次師の昇天後でした。

その後のG L Aの混乱によって、陽の目を見ないのは大変残念です。

また、

一九七六（昭和五十一）年三月二十二日、信次は、沖縄講演会で、次のように話していられます。

「私の本はアメリカのスタンフォード大学で翻訳されています。今年の五月（註・一九七六年）に出来あがりま
すとアメリカの太平洋岸

に大きく広がっていきます。そして、我々の説いているものはヨーロッパにも広がっていきます...」、

と。

人間釈迦の抜粋

紀元前（B C）六五四年、中インドのコーサラ国、カピラ城。父はシュット・ダーナー王、母はマヤ。言葉はカッシー語、マガダ語。

釈迦（ゴータマ・シットルター）はルンビニー園で生まれ、父四十九歳、母四十五歳のとき、母マヤは出産後一週間でこの世を去る。

今で言う逆子で、母マヤはデヴダバ・ヴァーストの城主のスクラ・プターの妹である。

母亡き後、釈迦は母マヤの妹マーハー・パジャパティーの手で育てられた。カピラバーストはコーサラ国の首府シラバスティーから六十

八ヨジャー、マガダ国のラジャグリハの都から四十九ヨジャー、マガダ国のラジャグリハの都から六十二ヨジャーの距離にありヒ

マラヤの麓に位置していた。

1ヨジャーはラジャン（王様）の歩く一日の距離をいい、太陽が東から出て西に沈み、再び東から出るときの

一周期が一日と定められ

ていた。国の周囲は二十ヨジャーほどの広さ。シャキャプトラ（釈迦族）の人口は約百万人ほどであった。

父王の兄弟は五人、長男シュット・ダーナー、二男はシクロー・ダーナー、子供はナンディカ、バドウリカの兄弟。

三男はドウロー・ダーナー、子供はアーナンダ、デヴァダッタ兄弟、四男はアムリトー・ダーナー、子供はアニルッタ、マーハーナマ兄

弟、長女アムリタ、子供はテイショヤー。そして祖父はシンハハヌ・ラジャンといわれた人で、シッタルタが生まれた時は、この世の人

ではなかった。

父王のもとで政治を行った人マシェル、シッタルダーより四十歳年長であった。マシェル亡き後、ゴーセが継ぎ、貿易、外務をやった

人スグティー、シッタルダーより五歳上、シッタルダーは三歳の頃から、バラモンの学者からヴェーダーやウパニシャッド教典を学ん

だ、というのである。

『人間釈迦』は、このようなものではありませんが、これまでの釈迦伝とは、全く異質の奇跡の書であることを示すために、是非、

読んで欲しい四部作なので敢えてこのような方法で、人物主体に挙げてみました。

生長の家教団のこと

園頭会長が霊道を開かれた日（四月十日）に、信次師はこうも告げていられます。

「園頭さん、あの生長の家の清〇という人は二人目ですね。谷口教祖の一人娘の恵〇子という人が、最初の結婚に失敗した理由は何だと

思いますか。あれは生長の家をこれ以上大きくしてはならないという、天上界からの警告だったのです。

だが、それを終戦後、生長の家をこのように大きくした原因は、園頭さん、あなたの責任だから、あなたは谷口さんに手紙を出しな

い」、

と。

何も知られないはずの信次師が、恵〇子氏の再婚のことを指摘されたといえます。

谷口雅春教祖は離婚した婿の批判を、当時の月刊『生長の家』に書いておられますが、最初、北海道の人と結婚されたというのです。

一つはこのことであり、そして、もう一つは、

昭和二十七年に谷口教祖に園頭会長は、生長の家の大方針はかくの如くすべきだと手紙を書かれます。

それによって発展したのだから手紙を、ということだったようです。

アナン（アナンダ）なる人

さらに四月十日、信次師と会長の二人が、このようなやりとりをしている時、田中〇雄という人が部屋に入って来られたというので

す。

すると、すかさず信次師は、

「園頭さん、ぼくが大阪の国際ホテルに泊っているとき、この人の目の前に電話番号が金色にパツパツと輝いて浮んできた。

そこへ電話せよということだと思って電話したら、国際ホテルのぼくの部屋の番号で、ぼくはこの人が電話をくれることを前以ってわか

っていた。それでぼくが、

「アナン」、

と呼びかけたら、この人は電話口で自分の過去世を思い出して、ぼくと古代インド語で話したのです。ね、そうでしたね、田中さん」、

と。

この手の話しが、信次師には山ほど有って、その一つに、こういうのがあります。

電話番号を忘れてサア困った！

S原という人が信次師の事務所を訪ねたとき、老婆が受付に盛んに礼を言っていたというのです。

老婆は、来る途中で信次師の電話番号の書き付けをなくしているのがわかって、これでは訪ねて行くことも出来ないと言われて、

「先生どうか助けてください」、

と心に願って、公衆電話の近くを通りかかったら、数字がパツパツと金色に輝いて見えたというのです。それで、無事たどり着いた老婆

に、奥から出てこられた信次師が、

「良かった、良かった」、

と。

同じく四月

信次師は、またこう言っています。

「前世のカルマ（業、心の傾向性）が、そのまま結果となって出てくるとすれば、人類は、とうの昔に滅びているでしょう。なんとなれば、悪を犯さぬ者は一人もいないからです」、

と。 さらに、

「僕が釈迦として死んだ時、一番最初に反省させられたことは、出家はいけない、やはり家庭を持って、「法」を説かなければいけなかつたということです。だから、今度は家庭を持ったのです。でも、インドの当時は、出家した人しか「法」を説けないという考え方もあつたからです。」、

と言いつつ残されています。

同じく四月

古神道について

霊道を開かれた直後、園頭会長は信次師に次のような質問をされています。

それは、会長が『心の発見』を読まれみると、仏教、キリスト教に関する事は書かれていても、日本の神道については少しも触れられていないことが疑問だったというのです。

「日本は仏教国といわれているが、神道を信仰している人も多い。だから、神道の人を救わないというのでは正法ではないであろう」と

というのです。

そこで、

「神道のことについてはどうして書かれなかったのですか」

と質問されると

「いや、今、神道のことを書くと、日本人は神社神道のことだと思っているから、誤解する人がふえる。国粹主義の右翼が騒いで危な

い」、

と。

その時、神社神道ではなく、古神道の神理が正法であると、信次師は教えられたというのです。

また、信次師は

「園頭さん、今の天皇家の祖先は中国から来たのです。その証拠には宮中には中国のものがたくさんあります」、

と教えられています。

昭和四十八年四月一日 「四周年記念講演会」東京

四月七日 「善なる心と悪魔」関西

四月八日 「人生の目的と使命」関西

四月十六日 「物質と生命」関西

四月十七日 「転生輪廻」関西

五月

信次師は、

「僕は相手の人が、ぼくにどんないやなことを言っても、自分の心を宇宙大にするから、相手は僕の手ひらに乗って、どんなことを

言っても腹が立ちませんね」、

と言っています。

五月九日

ニューヨークの友へ手紙を

信次師は、幽体離脱してアメリカへ行き、靈的通信をしたことは前に述べましたが、大目連の過去世を持つ大谷 輝氏へ、手紙を書い

ていられるので。それを挙げてみましょう。

「懐しき友よ。遠き古いインドの地で心に法灯を灯したように、今生もまた、縁にめぐり合いたることを神に感謝致します。

五年前から懐しき友が、ニューヨークで東洋哲学を教えていることを私は多くの人々に予言しておりました。

遂に二十八日、私はニューヨークに行き、心の通信に成功しましたことをうれしく思います。

懐しき友よ、心と行いを法に照らし、自己完成に努力せられよ。偽りの我を捨て、善我なる心を育てよ。そして常に、八正道を心と行

いの物差しで反省をし、偽りの我を神に詫びよ、そして瞑想せよ。

その時に、実在界を通して私達は自由に交信することが出来るのです。

自己を信ぜよ、偉大なる友よ。

法灯を心の中に灯せ、一秒一秒の心と行いの中に一切の執着は苦しみをつくり出すものだ。

一切を法に帰依した時、総て云々。

懐しき友よ、勇気と智慧と努力に依って実践せられよ。

光明は近し、光明は近し、苦悩はやがて、安らぎの境地に達しよう。

自己の完成、家庭の調和、親子の対話。友よ、一步一步あせることなく生きて行こう。

そして核をつくり、法灯を人々の心に灯して行こう。

法灯は種族を超越し、国境もなく、人々の心に調和をつくり出して行くでしょう。

やがて人類は、物質文明の奴隷から自からを解放し、人生の目的と使命を悟って行くでしょう。

友よ、私達はその日のために、一切の地位も名誉も、欲望も捨てて、人々のために生きて行こう。

それ以外に人類は救済出来ないからだ。

イエスの愛に生きよう。

ブッタの慈悲に生きよう。道は只一つ、法に帰依しましょう。

親しき友の栄光を祈ります。また靈的通信を致します。

昭和四十八年五月九日

大谷様

高橋信次

信次師の幽体離脱

魂や意識で目的の場所へ行くことを、幽体離脱、或は「もう一人の信次師」、または「光子体の信次師」として、行くことを言います

が、信次師はニューヨークへ行って霊的通信をされたというのです。

肉体はそこにあっても、意識はニューヨークへ飛んでいたというのですが、

このほかにも信次師はエジプトのカイロへ行ったり、シルクロードの壁画を見たり、映画館には行って映画を見たりということがあった

ようです。

信次師は弟子の一人をこう言っています。

「私が渡辺さんのところへ、意識で行った時、ちょうど不確定性原理の本を読んでいたよ」、

と、まったく自由自在でした。

もっとあります、月の裏側にもう一つの星が。

Home

十惑星の事実が

星々の運行は何百年に一秒の狂いしかない程、キチンとコントロールされているといえます。

仮に、月の向う側に隠れて動く星があったら何んとするでしょうか。

信次師は地球から蔭になって見えない星があると言っています。

大本教の出口王仁三郎もそれらしきことを言っていますが、この「王仁三郎という人は菩薩界の人で日本の宗教の誤りを覚醒させる使命

のあった人と信次師は言い残されていますが、現在の九惑星ではなく十惑星の事実もあるのかもしれない。

地球よりもっと大きくて、太陽に一番近くて、太陽の上に写し出されて一大センセーションを起こすらしいのですが、信次師は宇宙全

体を見通すことが出来られたようです。

現代は大谷氏であり、古代インド時代の大目連は、幕末の坂本竜馬として生まれていますので、次はこれについて述べたいと思いま

す。

坂本竜馬のこと

ところで、大目連という人は、古代インドのお釈迦様時代の人で、天眼道という、あの世を見たり、未来を透視することでは、右にで

る人がいないと言われましたが、現代の大谷氏はニューヨークに住んでいられて、その人の分身が、あの幕末の坂本龍馬だと、信次師は

言い残していられるのです。

園頭会長である舍利弗と、大谷氏の大目連は、かつて大の仲良しだったというので、そこで、懐かしさ一杯のお二人は文通を続けられた

というのです。

日本を訪ねられた大谷氏と、園頭会長が初めて顔を合わせられたのは、昭和五十三年十月、長崎の歓迎会でのことです。

過去世で坂本龍馬といわれた人が、なぜ長崎に...またどうして偶然にも、と読者の皆さんは思われるでしょうが、それはこうでした。

園頭会長は正法会（後の国際正法協会）の長崎定例講演会でした。

一方、大谷氏はアメリカの経済調査団長として来日、その日は観光で雲仙が日程だったというのです。

二千五百年の時空を超えての再会でしたから、それはそれは本当に懐かしいものだったでしょう。

こうして龍馬は、夢にまで見たアメリカに永住して。現代の大谷 輝、レイモンド・Yオータニ、というわけです。

さらに歓迎会で、竜馬の大谷氏は、次のような興味ある話をされています。

竜馬と孫悟空

私が寝ていたら、ググーッと持ち上げられ浮いたようになり、そのまま私は空の彼方の光の国、へ入って行きました。

ふと見ると、そこに高橋先生が立っておられ、

「大谷さん、これを見なさい」

と両手をひろげて見せられた。

その中に、私の過去の輪廻転生（転生輪廻）の全てを見たのです」、

と。

このような体験を氏は話されましたが、三蔵法師の説話の中の孫悟空が、如意棒片手に暴れても、所詮、法師の手のひらで躍らされてい

ただけという話に似て、或るとき園頭会長に著者がぶっけてみると、意識の世界に解答を探しておられました
が、病気の後遺症で喋るこ

との出来られぬ会長は、そのとき筆談にて、

「私はお供の一人でした」、

と書かれました。

病気見舞いの帰り途に、

「三蔵法師の高橋先生に、お供の孫悟空が大谷氏で、猪八戒が園頭会長だったのかも」、

と憶測の夢はは段々と広がって行ったのが、今となっては懐かしい思い出になってしまいました。

このように、不思議にも同じ頃、園頭会長と大谷氏のお二人は、信次師と出会うことになるのです。

五月十三日

関西本部の定例講演会（開演午前十時）にて園頭会長は、東京から来られた本部の人達とはじめて引き合わされ、シャーリープトラ

（舍利弗）の過去世を思い出されて、この会場で「交叉証明」が行われることになります。

過去世の交叉証明

昭和四十八年七月一日発行の月刊『G L A』誌よりその様子を転載、要約してみましよう

「私達人間は皆神の子であり云々。

...偉大なる過去世を思い出された人が出た。その人S氏（園頭会長）のご精進に深甚の敬意を...云々。

釈迦が出家した時、五人の武士達が父王の命で守護します。

その中にアサジという人がいた。

アサジの過去世を持つ北原さんと先生の対話がつづく。

「私達はインドの頃はゴータマ・シッタルダの最初の弟子として心の窓を云々。

...そのインドの頃の私が知っている方が今日この中に来ておられます。その方はウパテッサ（改名後シャーリープトラ）という名前の方

です。」

高橋先生は九州から来られたS氏を指さされ、

「あなただそうです...ちょっと来て下さい」

と招かれて云々。

と当時のことをいろいろと涙を浮かべながらの会話である...云々。

...ややあって、先生はS氏に、

「あなたはあの婦人を知っている筈です」と東京から来られ云々。

S氏はその婦人の方を見られたとたん

「緒一、マイトレイヤー（高橋一栄氏）」

と叫ばれた。

一栄先生の顔も涙に濡れ...云々。...

この方は「ウパテッサ」といわれた方です。

この方はインドの頃は、ナーランダという所に生まれました。

そしてブッタに帰依した後はゴータマ・シッタルダ、釈迦牟尼仏の右腕といわれた方です。

彼はインド...云々。...

そしてこのウパテッサといわれる方が後に「シャーリープトラ」と呼ばれるようになった経緯と、般若心経の中に出てくる「舍利子」と

いわれるのはこの方の名前を、弟子達の代名詞として使ったものである。と結ばれて感動的現証を終えられた。」、

と書かれています。

関西大講演会の後に

ある日の関西大講演会の終了後に、信次はこう言われています。

インドの時は、みんなに、あの世の極楽や地獄の状態を見せたことがあったのですから、そのうちにいつかやりますよ。

インドの時は三カ月、ぼくは天上界へ帰って、姿を消したことがあるんです。

今度もそういうことがあるかもわかりませんが、実現せぬままに亡くなってしまわれました。

昭和四十八年のある時、

ある時、信次師はこう言われています。

「関東大震災を起こす程の地下エネルギーは、既に充満しているので、そのエネルギーを放棄するために桜島は噴火を繰り返しているのだ

ある。天上界で地球の気象を操作している。」、

と。

この項を最終的にまとめていた、平成十五年のゴールデンウィークを利用して道南の三日間を楽しみました。洞爺湖の近郊、昭和新山と

有珠山を長いこと眺めながら、短期間に何度も噴火した歴史を見たとき九州の最南端と北海道で活動する活火山を観光して、この高橋先

生の言葉が北海道を離れるまで心を占めていました。

さらにまた、

「今から一万年先、アトランティス大陸の文明を築きあげた、高度の知識と智慧を持った霊魂達がこれから生まれてくる、もうすでに少

しは生まれている」、

とも告げていられます。

五月二十三日

G L A 東京本部の会議に園頭会長は初めて出席されます。

会議終了後、信次師は部屋へ会長をはじめ何人かを呼び入れられ、そこで、市川のK氏に、

「あなた、ちょっと精神統一してみてください」

と信次師は命じていられます。

すると突然、K氏は二、三分すると会長の前にパッと身を投げ出して「五体投地」の礼をして

「過去世では、色々にご親切に指導して頂いてありがとうございました」

と言われたというのです。

さらに、会長は、信次師に別の部屋に呼ばれ唐突にも、

「あなたはインドのつぎにはどうしたのか思い出さない」

と。

だが、何も出てこないで会長は、とっくりと胸の奥というか腹の底で考え、心に問いかけてみられたというのです。

すると、

「インドの次はイスラエルで、キリストの時代、ガブリエルという名で、天上界からいろいろな役目を果たしました」、

と言い終えられると懐しさに感涙されたといひます。

会長は、ガブリエルについては聖書も読んでおられ、その名が、自分の心の中から飛び出して来たことの不思議さに自分でも驚ろかれた

というのです。

このようにして、四月には二千五百年前の釈迦の時代、舍利弗として釈迦に使え、五月には二〇〇〇年前のイエスの時代、キリストの伝

道に天上界より協力されたことが思い出されたという訳です。

これらの過去世を思い出されたことによって、会長は、宇宙即我（うちゅうそくわれ）の体験は自分自身のこれまでの過去世で習得した

ものだったと確信されたのです。

また、般若心経の中の「舍利子」は、比丘、比丘尼達よ、皆様方よという呼びかけであったというのです。

次に、園頭会長の生まれ変わり死に変わりの輪廻転生、転生輪廻を要約するとこうなります。

園頭広周会長の転生輪廻・輪廻転生

ガブリエルはマリアさまの受胎の告知に協力され、マホメット（紀元五七〇年）の誕生から見守り、メッカ郊外ヒラーの洞穴で天使シブ

リール（ガブリエル）から高橋信次師であるアラーの言葉を受けたそうですが、まさにそのガブリエルだったというのです。

アラーはエルランティである高橋信次師です。

また、それより下って、宗教改革のカルバン（カルビン）であり、近世は、アメリカの初代大統領のジョージ・ワシントンであり、薩摩

の西郷隆盛だった、と信次師は言い残されています。

あの高名な西郷さんが登場したので、次に、我々でも容易に出きる交叉証明というか、人物検討を試みてみましょう。

人物検討

「ウム、西郷隆盛さんですね、しかし、すぐには信じてはいけません。疑って疑ってもう疑う余地がなくなったときに信じれば良いの

です。

エート、同じ魂の兄弟なら共通点があるはずです。

肉体細胞の成長は霊が個性的にコントロールするのですから、同じ霊統なら同じような背丈になるはずです。

栄養がどうの肉体遺伝がどうのと言っても、ノミの夫婦に、背の高い大きな子供というのも証拠のその一例です。

この理論に照らしますと、絵画やキョーネの写した写真でも西郷さんは大男ですし、園頭先生も堂々とした長身です。

これは合格点です。

次に、西郷隆盛は稀有の理論家、剛毅木訥、人情家といわれています。

一方、園頭会長は、稀有の理論家、著書三十冊以上、朴念仁（ぼくねんじん）、涙もろい、西郷さんも会長もどちらも達筆。なるほど少

しは納得できそうです。

会長は、今世、男尊女卑の弊風を改革することも使命があったとされますから、男尊女卑の傾向が強い鹿児島に生まれていられますが、

この地域性は関係なしと。

先生は今世は上位の菩薩といわれていましたが、来世は三百年後に、華光如来としてインドに生まれられて、カースト制度に鉄槌を浴び

せられるということになっているようです。

このように注意深く検討を進めていくと必ず思い当たるところがあるはずです。

釈迦と舍利佛と大目連の縁生

さらに、お釈迦さまである木戸孝允と、西郷隆盛と坂本竜馬の関係はと言えば。坂本竜馬の仲立ちで西郷、大久保と木戸孝允の薩長同盟

もあり、不思議なことに、お釈迦さまである政治家の木戸は、征韓論や台湾出兵にも反対して、ご存知のように坂本は刃に倒れ、西郷は

自決、木戸のみタタミの上で死んでいるのを見ると、さすがに平和主義者のお釈迦様ならではの靈統と符号します。

もう一つ付け加えれば、坂本である大目連は、古代インドのお釈迦様の時代には、幼名をコリータと言って、釈迦教団で活躍した後、暴

漢に襲われて亡くなるそうで、また竜馬もあの通りですから、講演の中で信次師は、

「なんとしろ、何度コリても仕方ないから」（爆笑）

とコリータを引っ掛けて揶揄していられるのです。

また、この時期、信次師は、

「道德によっては人は救われない」

と明らかにしていられます

神理と道德

道德によって人は救われない、と信次師は言い残していられますが、多くの人は道德的にりっぱであれば、それを人格者といい、そう

いう人は高い靈界へ行くと説明しています。

でも、信次師の説かれる正法は、心のあり方を問題にしています。

例えば、見かけは立派な人格者でも、心の中で、心の三毒という愚痴、怒り、不足の心がウズまいている人は、低い靈界か暗い世界へ行

くのです。

正法は心のあり方を問題にしますから、ここに良い例があるので上げてみましょう。

心の試験問題

問題

ここに

一、「実際に身体で以って人を殺した人」がいます。

また、ここに

二、「口で人を欺して人を不幸にした人」がいます。

さらにまた、ここに、

三、「実にまじめな人がいて、心の中ではいろいろと思うが、しかし、そういうことはいけないと知っているの
で、絶対にそういうこと

はしない、まじめな人」、がいます。

この三人の中で、一番罪が深いのは誰でしょうか？

解答

それは、「ズバリ の殺人者」、という答えが返ってくると思いますが、

正解は三番目の、

「いろいろ思うが真面目人間」です。

「そんな！」

と思われるでしょうが、正法は心の問題を説きますから、この意味がわかられないと神理がわかったとは言えないのです。

宗教家といわれる人にテストしてみると興白いでしょう。

同じく五月、

東京の理事会でのこと。

信次師は

「今後どのようにして正法を発展させるか」

という議題を提出され、みんなに意見を聞かれます。

「高橋先生の教えを正しく伝えてゆけばよい」

というだけで、他に具体的な意見はなかったようです。

正法に帰依されたばかりの会長は、

「今後、各宗教団体の人々が正法を求めてくる。例えば、創価学会の人々には、学会の教義と正法はどう違うか。

生長の家の人々には、どこが違うかと講師たるものは説明できなければならない。しかし、他の教団の教義をすぐに知ることも出来ない

のなら、元信者に正法をしっかりと教育して、各教団向けのその役割に合った専門講師をつくれればよい」、

と会長は具申されたというのです。

戦争が信次師の悟りを十年遅らせる

さらに、この時期に信次師は、

「園頭さん、あなたが鹿児島を選んだのは、鹿児島は日本の中で一番男尊女卑の傾向の強いところである。

そこであなたは、大東亜戦争が起らなかったら、二十四歳までに一つの教団を鹿児島でつくって、男尊女卑の弊風を打破して、そうして

私のところに合流するということになっていたのです。ところが、大東亜戦争が起ったので、私も悟るのが十年遅れたが、あなた

ちもそれだけ廻り道をする事になったのです」、

と書いていられます。

世界の平和

また、信次師は、

「死んだ時、一生はパノラマ映画のように、全部目の前に見せられる。そして、そこで必ず反省させられるのです」、

そして、

「心が暗くなる反省は、本当の反省ではありません」、

と。

さらに、ある時、

「世界の平和は、まわりくどいようだが、一人一人が正法を知って、心を安らかにし、調和を図る以外にな

い」、

と書いていられます。

キリスト教と仏教はなぜ同じか

信次師はよく書いていられます。

「釈迦が肉体を持った時は、キリストが天上界から指導することになっている。キリストが肉体を持った時、釈迦が天上界から指導する

のです。釈迦の教えとキリストの教えが同じであるのは、そこに原因があります」、
と。

同じく五月

演題「ブツダと集い寄る弟子達」

「諸法無我という仏教の言葉がございますが、全んど多くの人々は諸法無我という以上は、自分自身も無我の状態にならなければいけな

いのだという間違った考えを持っております。

諸法無我という言葉の諸法は、宇宙の神理、宇宙の神理というものは、私達の住んでいるところのこの地球上一つの、気象的現象やその

他あらゆる諸現象を通して見ましても、私達の人間の力によって変えることの出来ないもの、これを諸法無我と言っておるのです。云

々。」、

と。

昭和四十八年五月四日 「心の原点（正法の原点）、誓いの言葉」志賀高原

五月六日 「心行の解説」東京

五月十二日 「質疑応答」関西青年部

五月十三日 「諸法無我」関西

五月二十五日「仏教の原点」八尾

五月二十六日「正法とは何か」関西

五月二十六日「特別講話」松阪市

六月

同和のこと

G L A 関西本部の隣りの一軒家が園頭会長の寄宿舍であり、信次師は会長を訪ねられて、二人でゆっくり話をされたということです。

それは何かといえば、信次師の生い立ち、インド時代の釈迦の頃のはなしと最も大事な〃はなし〃も…。

もっとも大事な〃はなし〃というのは、

「神の配慮に感謝します」

と言って、ひれ伏したくなるようなこと。 そのことで悩んでいる人に対しては最大のはなむけ。

勇気を与える事実とは何んだと思われませんか？

モーゼは奴隷の子として、釈迦は王子、イエスは左官の子として生まれています。

信次師は、

「エッ、神よ！この世に高橋信次という方を、お遣わし下さいまして心より感謝申し上げます…」、

と。

園頭会長と同和

信次師は同和解放のために、講演会場を設営されたフシがあります。

園頭会長はある時期、自ら主宰される会の、道場建設の必要性を感じて、建設用地を求められ、信次師の意思を継いでこの地を選んで

おられます。

ところが、この時期、オウム教（現アーレフ）の問題が噴出した頃で、住民は過剰反応をして露骨に建設反対の表明をしたのです。

常識ある教団は無理強いしないものと、会長は泣く泣く計画を断念されますが、

「これでこの地区の救われるのが先送りになってしまった」、

とポツリとつぶやかれたのが印象的でした。

同じく六月

信次師は

「反省は神の慈悲である。反省によって人の心は浄化される。心に思っていることが、全てそのままの形となって現われるなら、生きて

いる人間は一人もいないでしょう」、

と教えられました。

心を見られた人

またこの時期、

信次師の弟子の一人が、

「電車の中に散らかっている紙屑を拾うには勇気がいる。拾うべきかどうすべきか？」

と、友人に質問したといえます。

尋ねられた友人は

「掃除する役目の人がいるから、余りきれいにすると掃除する人の仕事を奪うことになるから、そのままにして置けばいいでしょう」

と答えたという。

ところが、次の講演会で信次師は、

「こう言っている人があります」

と、その人が言った通りのことを話された。

その人は心を全部見られてしまったとびっくりします。

すかさず信次師は、

「こうすれば、人がなんと思うだろうという、そういう思いを捨てて紙屑を拾うのです」

と講演されたというのです。

その人は冷汗を拭きながら、園頭会長に話された、
と。

また、このとき信次師は、

「自分が運命の主人公である。運命は心でつくる」
と話されています。

ある人のこと

そして、ある時、

信次師は

「関西から青年が出てくる」

と予告されたが、その後、訂正されたというのです。

訂正された事実を知っている人は、G L A 関西本部の理事数人と園頭広周会長だったといえます。（月刊『正法』百十七号 園頭広周）

ある人は関西・四国の人です。

ある人のお父さんは、信次師の講演をよく聞かれた人で、そのお父さんの感化を受けられたたと思われま

ある人は、

「関西から出て来るのは自分だ」

と。

しかし、信次師は訂正されて、どうも混乱させる人が関西から出てくるということだったのでしょ

うです。すでに、生前の信次師は、全部お見通しだったのかもしれませんが。

ある人は、「高橋信次もの」といわれる著書が数十冊もあって、他の人の霊言はほとんど一、二冊というのに、ダントツでした。

ところが、園頭会長が『ある人は仏陀ではない』などの数冊の著書群で警告を発されると、それが原因かどうかは知りませんが、本は見

事に姿を消しているようです。

これらの本は、高橋信次師がある人に霊言を伝えられたということのようですが、著者の手許に在る、ある人の本と、信次師の著書や講

演テープを聞き比べるとどうも波動が全く違うようです。

信次師は「小諸馬子追い唄」が得意で、テープも著者の手許にあります。声は澄み通ってきれいで、長野訛りの東京弁。信次師が出て

こられるという人は、全国に沢山おられるようですが、不思議にもなぜか関西人が多いようです。

全員に信次師を出してもらって「小諸馬子唄」をやっていただく。そして、生前のテープと聞き比べます。

長野訛りの特徴のある「小諸馬子追い唄」をしっかり練習していただきましょう。

本当に信次師が降りてこられるからには、歌の調子、語り、アクセント等が、まったく同じでなければなりません。

顔も雰囲気も同じように似て、全部信次師のはずです。

さらに、姿が見えぬだけに、欧米でやるような厳密な霊の審査を心がけ、生前、園頭会長から伝えられている信次師の霊言の第一声を確

認したいと思います。

ある言葉から出てこられる約束だということです。

見えぬだけに念には念をいれたい。

ある時、著者はある人の講演会に参加しました。

最後に、

「今日の講演は高橋信次の霊示によってなされました」、

とアナウンスがありましたが。まったく異質のものと思いました。

昭和四十八年六月二日「執着をとる、自主研修」京都府田辺市 中心山荘

六月三日「光の入れ方、転生の秘密、質疑応答、体験談」京都府田辺市 中心山荘

六月四日「現証、転生輪廻、質疑応答」京都府田辺市中心山荘

六月十日「心行の解説、質疑応答」関西

六月十日「釈迦の成道」浦和市

六月二十三日「心の原点、質疑応答」秋田・大曲市

六月日付不詳「青年部研修会」関西

七月

講師幹部研修会（於八起ビル）

「私達が神理を広めて行くのに、一番重要なことは云々。...

ある電気会社の息子さんが、六月十七日に交通事故を起しました。もう一ヶ月意識不明のままです。高校三年です。霊視すると、本人の

霊は自分の肉体に戻りたいと真赤な炎の中でいっています。

だが、戻ることができないのです。頭をやられているので、頭をコントロール...云々。

両親が余り甘やかしている。人間は本来、病気とか、経済的、家庭的な苦しみを通して道を求める云々。

神理流布の本質

信次師の講演は続き

「しかし、正法というものは、そういう人ばかりを相手にしてはいけないのです。

病気でもない、経済的に困っているわけではない。第一線でバリバリ働いているという人達が本来知って欲しいのです。」、

と信次師は宗教の真髄とも言うべきことを言っています。

教祖をはじめ取り巻きの人々にとってこの言葉はつらいでしょうが、新興宗教の多くが、不幸と言われる人達の上に成り立っていると言

えます。

引き続き信次師は語られます。

信次師は園頭会長を称えられる

「苦しみを縁として道を求めるということもいいことですが、どうしてそうなったか原因を反省しようとはしないで、結果だけを求めよ

うという考え方では困るんです。

苦しみがなくても、そういう人に神理を知らせることが大事だと思います。

たいていの宗教というものは、

「あなたは何年前から入信したのか」、

ということを問題にしますが、心のあり方というものは、時間的に古い新しいではないのです。

わかってしまったら即座に知ってしまうのです。

それが現実的には園頭という方でした。

生長の家の大幹部だった人ですが、神理にふれて、即座に現象が出てしまいました。

こういうように、私の所に来たのが古いとか新しいとかということは問題ではないのです。

それだけに正法というものについたならば、自分が実行してみるということが大事だと思います。

自分というものはどうしても甘くなり易いものですが、自分にきびしさを持って欲しいのです。

そういう意味からいっても園頭さんのように、荒削りではあって、自分を見つめてブルドーザーで自分の人生航路の凹凸を直してあの

人は来たのです。

その位の熱意が、あなた方に欲しいのです。そうしてあの人は偉大性を発見したのです。

アニルッタ... (中略) ...

林家木久蔵氏のこと

昨日は、落語家の林家木久蔵という人が来ました。

丁度、山形から来ていた若い女性がありまして、少し後光が出ていたものですから光を入れたら、最初は中国語で、後はインドの言葉で

語り出して、木久蔵さんは暫くそれを見ていました。彼は札幌の飛行場で待っている間に、売店で『縁生の舟』（改題『心の発見』

現証編）を買って読んだそうです。色んな本を買って読んだが、心がこんなに感激した本はないというのです。

彼が今まで考えてきたことと同じだということです。

正法を知った以上、人々にも伝えたいというのです。なにしろ本に書いていることと同じことを今、目の前で見たために、さらに

感銘を深めたのです。差し当り、身近な人からやりますと言っていました。

「私の師匠の林家〇〇という人は、今丁度、テレビで幽霊をやっているんですが、幽霊の話をしている時に師匠の家に行くとゾクッとす

る。

師匠が幽霊のように見える。

ああ、師匠はいつでも幽霊がついているのだな、だから顔色が悪いし、少しおかしいんだなと思うんです。

林家〇〇というもう一人の師匠は一生懸命お稲荷さん信仰をしている。朝晩ローソクをつけてやっているそうです。

本に書いてある通りなんです。

それで、まず奥さんの方に読ませてから師匠の方に手を打とうと思います」、

と。

木久蔵さんの話しがでましたが、木久蔵さんも本を出していられます。

その中に信次師のことがあるので、引用要約しましょう。

『木久蔵の心霊教室』

「今はもう亡くなられてしまったが、云々。

いろいろ御教示を得たいと予約をし、ある日ノコノコ浅草雷門の隅田川べりにある八起ビルのG L A本部に出掛けて行ったのである。

私は高橋氏をたずねるのに、何かごあいさつの手みやげにでもと思い、その頃の住い、武蔵野の三鷹から、中央線で神田まで出て、神田

駅のまわりをウロウロしたが、思う進物がなかなかなく、やむを得ず、地下鉄銀座線にのりかえ、終点浅草駅の階段を上り、時計をみる

と、もう約束の午後一時がすぐであるから、あわてて果物店にとびこみ、オレンジを一箱包装してもらって持参したのである。

八起ビルのエレベーターで、高橋信次氏の部屋のある階上へのぼり、係の女の子に応接室へ通された。

...なる程、あらわれた高橋氏は、教祖の影はみじんもなく、ジャンパーをはおり、紺のズボンをはき、中年のかっぷくの良い町の工場

長といった感じだった。

「ようこそ、いらっしゃい...」

「お手紙でずうずうしく面会を申込みまして恐縮です...」

「いやいや、本を読んで、すぐに会いにみえる方はそういません。ものごとスピーディですな...ずい分、ここへくるまで寄られました

な。神田駅のまわりとか、雷門とか、まよわれて...」

「は？ えっ！」

「何か持っていかなければと、私にあいさつするんで品物を、買うのに気持ちがせくのでイライラとね。なさい

ませんでしたか...」

「は、はあ、は、あのこれ、オレンジです...その、まよって買いましたものです。ごあいさつ代わりに...」

「ハハハ、ズバリだったでしょう」

「ハハハハハ」

木久蔵氏も、恥ずかしいので照れかくしに笑い出してしまわれたが、内心はおどろいていられたというのです。

信次師が言われるには、氏の職業が落語家であるということから興味をもたれその到着一時間前より、念をまとめて霊視していられた

のだというのです。

テレビの画面でもみているように、行動をながめていられたのです。

このことから氏はすっかり信次師に興味を持たれ、機会あるごとに訪ねられているようです。

木久蔵氏は、ある日ブラリと八起ビルを訪ねられた。

すると、ヒッピー風の数人の若者たちが信次を相手に、

「神を出してみろ」

「おいやってみなよ」

「転生輪廻だって」

等とからんでいた。

すると信次師は

「この者についている悪魔よ、この者から離れなさい!」、

と。

このようなやりとりがあって仲間と帰って行くが、木久蔵氏はその時の様子を記述されています。

昭和四十八年七月七日「心の法」関西

七月八日「実在界との現象界の物理的考察」関西

八月

信次師は園頭会長にこう言っています。

「現在の生長の家の会員の中には、インド時代のあなたの弟子だった人達が、たくさん生まれ変わってきているのです。

やがて、集まって来るでしょう」

と予告された。

また、

「一回没落したアメリカは、再び復興する。アメリカの復興の源泉は、正法である」

と。

この意味するところは、エルランティがイエスにエホバとして説いた正法は、長い間に歪められ曲解されますが、今から百五十年程

で、シカゴに生まれる本体イエスによって修正されると、それがアメリカは没落した後の復興の源になるということです。

平成十五年の春、アメリカ主導で始められたイラク戦争は、大国主義をマザマザと見せ付けられましたが、高橋信次先生が予告されま

したように、米帝国のたそがれを告げる使者ともならねばよいがと、短期間の数度の米国遊学の経験もある著者は、とっても気掛りで

す。

さらに、

「光を利用して、遊星間を旅行するようになり、地球人が他の天体に人間がいることを発見するのは百年後」、

と。

Home

八月十二日 関西本部講習会

八月十六日 東京本部指導

このとき信次師は、東京本部の講師幹部に対して、きびしい指導をされています。

その理由というのは、東京本部の講師幹部が余りにも勉強しないので、信次師は、試験をすると予告をしていられた。

それに対して反対する講師がいたので、そのことに対するきびしい叱責と注意の内容でした。

その中で信次師は、

「わたしは節穴ではありません、例え試験が出来ていなくとも、その努力は私にはわかります。

わたしは釈迦牟尼如来として知っているんです。 わたしのやることは、すべて天上界で決められていることです。

ついて来ないならついて来ないでいいのです。ついてくる人が一人あればそれでもいいのです」

と、いつになく厳しい口調で話していられます。

叱責が終わった後、信次師は、

「私の話しは終わりです」、

すると全員が

「ありがとうございました」

と。

そして、これ以後、

「こんなつもりでG L Aをつくったのではなかった」、

という信次師の苦渋にみちた心情がたびたび吐露されるようになるのです。

禅定の極意

信次師は禅定、瞑想の指導の時、

「身体のまわりに黄金の光の輪を描きなさい」、と教えていられます。

また、

ある時、信次師は、祇園精舎を寄進した、スダッタ（須達多）の過去世を持たれる講師のK氏に、

「空についた話をしなさい」

と命じられると、その人は前座に立たれます。

壇を下りて来られたK氏は、信次師に、

「今の話はどうでしたか」

と尋ねられたという。

信次師は笑ってうなずいていられたが、愛の深い信次師は、人の前で欠点を指摘する人ではなく、

「よかったですよ」

と言う人であったようです。

維摩について

さらに、この時期、信次師は

「維摩は実在の人物ではなかった」

と説明されています。

夏

長野県熊の湯における自主研修会

「皆さん、あの世などというと、そんな馬鹿な、というでしょうが...云々。...

ある日の講演で金粉が出た。

汗がみんな金になる、話す言葉がみな金になって口から飛び出す。

あの金をまとめて買ったら大変な金額になる。（爆笑）

私は科学者ですからね、こんなことがあるのかと最初はびっくりしたので、持って帰ってはいかんといったのですが、持って帰った人

がありまして、私の手から顔から金粉が出る、口の中から一杯出る、

「あ、光った」

と誰かが言ったとたんに、その金を拾って持って帰ろうと壇上に何人かの

人が殺到した。

結局、その金は消えましたね。...云々。

お前の説く神理は、太平洋岸にずっと伸びていくであろうということを天上界から聞いていた。

だから現在は、みな太平洋岸です。

岩手、仙台、水戸、それから千葉、東京、神奈川、全部太平洋岸ですね。

私の本が出てから日本海沿岸からも来るようになった。今度も、アナン（阿難）という人がどこから出てくるか、それから九州

からシャーリーブトラ（舍利弗）が出てくると、皆わかってしまっていたからです。

私は京都に出ますと...日本ばかりではありませんよ。外国にも出ています。それがやがて火の手をあげるわけですね。云々。

私はインチキな予言はしません。インチキな予言までして喰わなくても、喰うだけは職業を持っているんですから。

金もうけするんならどんなにでも金儲けできますよ。

この人はいくら金を持っているか、みなわかりますから、金持ちの所へ行って、病気になってもらって...（笑い）

「医者じゃ治らん」

とか言って、パッと治してやったらいいでしょう。...

物質化現象したり、手品師の真似事みたいなことをしたり、あんな真似事みたいなことしたって、しょうがないですよ。

だけど信じますか。私が最初関西に行った時、手強いのがあったんです

よ。

「この人、治りますか」

ドンパァーの人ね。パッとやったら出て来ましたよ。若い女の子でね、盲目で井戸にはまって自殺した女ですよ。

それが鬼婆になって、口が耳元まで裂けているのがわかるのですよ。それをパッと目をあけてやった。

とたんに、威張り出して

「お前の力じゃないんだ」

「あっそうか。じゃまた盲目にしてみえ」

私は自由自在ですからね。寒くしようとどうしようと、盲目にしようと自由自在です。

あの世のね。それだけの権限を私達は与えられているのですよ。最後は

「出ます」といって今は治ってしまった。

いざりが、こうやって歩いていた人が、パッと治ってしまった人もいる。

頭が狂っていると言われる人は、ほとんど憑依。脳がこわれている人は、見ざる、聞かざる、言わざると同じで植物人間

のようなもの」、

と。

謙虚な信次師

次のことばは霊能者や教祖といわれる人が心して聞かなければならない「ことば」です。

私は教えを受けているのです。だから、光を入れるのも自分ではないといっているのもそれなんです。

そうしたら、なんで増長慢になれますか。僕がやっているのなら、威張れるのですが、僕、なんにも力がないんですから。

こと、神さまのこととなると、素人なので。それを教えてもらうのだから、だから私は、これは自分だけの力ではない、次元の

異った世界の協力者によって動かされているんですね。

だから、だから自分の力じゃないんだから、やるならば、そういうことが受けられる自分自身を作ることが大事です。

盲目でなにをやっているのか知らんですがね。Aさんを調べようとしたら簡単ですよ。

上から覗いてみると皆わかるんですよ。考えることも、やっていることも。

事件解決屋になられた信次師

宮島〇〇といっても、全国に何人もいますからね。住所、氏名、生年月日これだけ聞く。それで私はいいました。

「宮島という人の行った経路を教えてください」、

と。

それがテレビのように映るんです。どこへ行って、どこへ入ったか。ああバッカスという飲み屋へ行ったな。ここでこういう男と逢っ

て、こういうことを接渉している。

それから連れ出されて...山の用水池の...ノミで...そして奥さんに伝えて、警察へ、三日目につかまった。

近鉄の爆発事故がありましたネ。あれは、R Gというグループで関西を調べてもだめ、中央大学の学生です。

そのとき県警本部長がお礼に来た。

天上界から叱られた信次師

ところが天上界から怒られた。

「お前そんな犯罪調査のお先棒をかつぐようなことをやっている、都会の悪い奴がおったら、そいつらから殺されるぞ」、

と。

それで例の〇億円事件の犯人も僕は知っていますがね...

「お前は神理さえ説けばいいんだ」

と注意されたもんですから、今は一切お断りしているんです。まあそういうように、次元を超えた世界から教えられますから、わかる

わけですね、

と。

どうしてこういうことが分かるのかと申しますと、永遠である靈魂には、すべて体験したことが記録されています。だから尋ねればわ

かるわけで、しごく簡単なことです。

信次師はその能力を持っていられたのです。

信次師へ他流試合を挑んだ一例

教祖をやっている大西という人、高橋信次君なんてね、僕は六階にいるんですが、受付に来た。

相手は新興宗教の金持ちで、私みたいなみすぼらしい格好はしていません。

三階の私のところへ案内して来た。

「高橋信次さんはどこにおりますか。」

私は前にいるのに、私を小使いかなんかだと思ったんですね。本人を目の前にしてそういうのです。

「お坐り下さい」

高橋信次という人は相当年をとった、格好のよい、髭でも生やした男かと思っていたんでしょう。

それが丸っきり、どこかの会社の課長にも及ばない、係長みたいな格好をして出ていくものですから。

私のところへ来ましてね。私はそういう時には黙っているんです。

向うから話をさせた方が早い。そうしたら

大西 あなたは釈迦だと自称しているが、釈迦が生まれてくる筈がない。

高橋 はあ、釈迦ですね、僕はね、自分から釈迦だといったことはない。だが、人の口には戸が立てられませんからね。それが本

当であるかないかは、あなたがわかるなら立証できる筈だ。あなたは教祖だといって多くの人を迷わしている。

大西 迷わしていません。

高橋 その証拠に、私が誰であるか、あなたはわからない。わからないということは、人にもわからせられないということだ。

意味がわかりますか。大体、あなたは、自分の住んでいる場所が変わっているのはどういうわけか。あなたは自分の本妻は四

国において、今ここにいる人は一体、なにものなのか。神さまを説く人がなんですか、そんなことはないといわせません

よ。

大西 そんなことがわかるんですか。

高橋 そんなエッチな宗教家ってありますか、出直して来なさい。あなたは心のことはなにもわかっていない。頭でわかってても、

一つも行いができていない。出直しなさい。」、

と。

そんなのが教祖で、神学博士だなんて、そういうのに欺かれて、金持ってこい、何持ってこい。あなた、金をそんなに何するん

だ、あやしいことやって、そんなもの信仰的でもなんでもない。あなたは私をわかっていない、ピシッとやってやったんです、中には挑

発に来るのもいるんですよ。

まあ大抵だめですね、一気にひっくり返ってしまいます。それだけの力が僕にはあるんです、

人間には、根本の正しい道を実行させることが大事です。我々は争うことを目的としているんじゃない、争う必要はないのです。

それで、今度そういう人達は、みなバンザイして駄目になりますね。

私は皆さんに、信じるといったことはないですよ。どうしてだろう、なぜと疑問を持ってといっています。

疑問を追求してゆくと最後は神理に到達するからです。

だから、私は、ずーっと講演をして来ているけれども、最初からすなおに信ずるな、疑問を持って、持ったらもう一度質問しろ、そうし

て最後に到達するからです。だから、わかったような顔をする必要はないんです。

疑問と奇跡

イエス様がいわれたんです。お前は疑問を持ってというからいかん、

「信じろ」

となぜいわないかと。

イエスさまと僕とはちょっと考えが違うんです。

そうするとイエスさまは、それでは困る、中途半端になってしまって、信じろといえ、というんです。

病気の場合はね、ほんとうはね、信じさせた方が奇蹟が起こるんです。速いんです。

信んずる心があれば奇蹟が起こるのが速いのです。

私が疑問を持ってというのは、どんな疑問にも答えられる力を私は持っているからというのです。

心にも形がある

今までに、口で心という人があったけれども、心にも形があるんだといったのは私をはじめです。

生まれてきたばかりの子どもはね、心は実にきれいで、まん丸い、それが大きくなるに順って歪ができてくるんです。

ハート型の心

心が、ハート型に見える人がいる。

この人馬鹿にピンク色に光っているな、昔から心をハート型に書いている、これは一体なんだ、

「あなたはいくつ？」

するとその人の守護霊（過去世、魂の兄弟）が、

「この人は恋愛中なんです」

と教えてくれる。

どんな人ですかと聞くと、その姿を見せてくれる。

「あれ、あなたは恋愛をしているの、こういう女の人だろう」、

と、みなわかってしまう。

恋愛している人の心は、実際にハート型になっているんです。

恋をしている人にはピンク色の後光が出ている。

本体一と五分身

すると、イエス・キリストを名乗る人が何人もいます。

髭を生やした人、それから、少し面長な人とね。

声も違う、アクセントも違うんです。

それで、本体と五分身の関係がわかってきた。

アインシュタインのこと

それで私が、昭和四十三年七月一日に自分自身が何者であるかがわかった以降は、ドイツ語でアインシュタインが出てくるのです。

鼻の長いのが出てきて、むずかしい数学を解く、俺は一体なんでこんなことをしなければならないのかな、と思ったりした。

僕の本の中に、相対性理論が出てきたり、次元の差という説明があるのは、アインシュタインから教えられたのです。

アインシュタインが、自分の法則には手落ちがある。振動、プランク常数というもの、人間の脳波の振動も、振動という一つの現象とな

って伝わってくる。

そうすると、それにおける、仕事を為し得る能力というものは目に見えないが、エネルギーが起る。みな、そうやって教えられたもので

す、と。

アインシュタインが出て来て信次師に教えたというのです。

さらに、信次師の『心の発見（科学篇）』の中の 色心不二とエネルギー不滅の法則 、 神仏と人間 、 色即是空の原理 に示され

ている数式はアインシュタインに教えてもらった、と信次師は言われています。

相対性理論は不十分

また、昭和四十八年九月一日～十日までの特別研修の休憩の時間に、信次師は次のように話されています。

「私の相対性理論は不十分でした。こっち（あの世）へ帰ってきてわかったのです」、

と頭を下げるのですよ、

と。

アインシュタインのメッセージ

一九二二年十一月に来日したおり、アインシュタインは日本人に次のメッセージを贈っている。

「世界の未来は進むだけ進む

(略)

最後の戦いに疲れる時がくる

(略)

世界的盟主をあげねばならない

(略)

あらゆる国の歴史を抜き越えた

(略)

世界の文化はアジアに始まってアジアに帰る

それはアジアの高峰

日本に立ち戻らねばならない

吾々は神に感謝する

吾々に日本という尊い国を作ってくれたことを」

引導を渡す

文学的才能ゼロの男が、二十日間で原稿用紙四百六十枚、『餓鬼道』（改題・『愛は憎しみを越えて』）を書いたのも、みなそうやって

です。

「南無阿弥陀仏、なむあみだぶつ」、冗談じゃありませんよ。それでみな地獄へ行っているんですから、大体、坊主は生きている人を

救うのが本来の役目でしょう。

それを香典の額などといったのではたまったもんじゃないですよ。

坊さんが、どんどん、病院に出入りするようにならなかつたらダメ。今死なんとする時に、

「あなたは今から、この地上を去るのです。心をきれいにして行きなさい」、

というのが当然のこと、それを死んでからお経をあげるなんて馬鹿げたことで、これは今までの宗教の大きな間違い。

ヘレンケラーとシュバイツァーのこと

今まで、あの世へ帰ってすぐ

「やるだけやったぞ」

という人はいませんね。最近では外人であります。

ヘレンケラー（三重苦の女性の聖者）

「やるだけやりました」といって天上界へ帰ってきました。

それからシュバイツァー、エジプトで治療に従事した。この人達は菩薩界の人達ですからね。こういう人達は使命を持って出られた人で

す。

総理大臣だって地獄界

日本では、例えば総理大臣であっても、

「私はやってきました」

という人はおりませんね、私の所へね。東急の専務が訪ねてきた。

「私の親分と話をしたい」

と。 五島慶太かなと思った、当然でしょう。東急の専務ですから、ところが違ったんです。

その親分という人の意識を僕の身体に入れた。ドカンと身体が重くなった。声が出ない。その内に少し声が出るようになった。

「マサヤン、お前さん、よくたずねてきてくれた。」

僕の声じゃないんです、○田○総理大臣です。

日本を救った、日本を救った、と言っていますが、地獄界です。 その前の総理大臣も地獄です。

だから地位や名誉は関係ないといっているんです。 貧乏人だから、といっても恥かしくないんだよ。いくら地

位が高くっても、大臣でも地獄にいるんだから…。

大久保彦左工門のこと

地位が上の人ほど地獄にいますね。欲望で一生を過ごすから、あんな水呑百姓が、という人が天上界へ行っているんですから。

大久保彦左工門ね、びっくりしましたね、菩薩界できれいな光を出している。

僕のところへ来ましてね、

「大久保彦左工門めにござります」、

と。

日蓮のこと

日本で有名な坊さんで、菩薩界へ行っている人は少ないですね。

日蓮さんもね、永いこと自分から地獄界におった人ですよ、菩薩界に入らなかった。

自分の蒔いた種が、その後、多くの大衆を狂わしてしまったという責任を負ってね、あの人は、あの世では知らない人はいませんね。

あまりにも有名で、謙虚なんです。

今の創価学会のやっているようなものではないですよ。

心のきれいな人達は、例え貧乏でもりっぱな人がたくさんいる。だから金額の高さや地位が人間の値打ちを決めるんじゃないんです。

これからの未来の展望

質問者 今世でだめなら来世で、来世でだめならまたつぎの世で、という気持ちですね。

高橋 しかし、この地上へ出て来れるかどうか疑問ですよ。たくさんの霊が地上へ出て霊の勉強をしたいと待っているんですから。

私は七八〇年後にもう一度、地球上に出ます。

それからまた、他の天体にも生まれます、その天体もわかっています。この地球は、今から七〇〇年後位には調和されるからで

す。ユートピアになるからです。

その時は、今のような公害は一つもなくなります。そして、今の日本は気候が変わります。現在の、アフリカ、南アメリカ、

それからインド、この方面は、現在の日本と同じように、春夏秋冬が最も調和された国になります。

アフリカに宇宙ステーション

そして、アフリカの大西洋岸のところに大きな宇宙ステーションが出来ます。

他の天体と自由に交通するようになります。そういうようになっているユートピアに、私達は生まれてきます、七八〇年後です。

その途中において（昭和四十八年現在、百八十年）、かつてイエス・キリストといわれた方がアメリカに生まれます。

シカゴという処へ生まれます。

その時にみなさんは、天上界にいて協力するのです。

天上界からこの地上界を見て、またあんなことをしているということになっているのです。

質問者 シカゴへは本体がでられるのですか。

高橋 本体です、分身の方はフィリピンに出ておられます。

科学に周期律というのがありますね。この物質の周期律と同じ

ように、霊の周期律もあるのです。

我々の生命も、やがてはあの世へ帰ります。

真実の十字架

イエス様は、十字架に掛けられた時は、自分の霊は、自分の肉体が十字架に掛けられたのを見ておられたのですね。

その当時は、イエス・キリストとはいいいません。イマニエルといっていました。

私はこの方の指導霊をやっていたんです。だから、その時のことも私にはみなわかるんです。

私が肉体を持った時は、イエス様が指導される。イエス様が肉体を持たれると私が天上界から指導霊をする。

イエス様は厳しいといっても西洋的なところがあって非常に親切です。

ところが、私がイエス様の指導霊をやる時は厳しいのです。だから僕は言われましたよ。

お前は自分に甘くて俺には厳しいと。

イエス様が、ある弟さんの病気を治してやった。その姉さんを好きになった。

「イエス、そんなこと、やっちゃいけない」

と、お前、私には恋愛もさせなかったじゃないか、その割にはお前は甘いじゃないか、と言われたものです。

今までイエスやモーゼ達が、私に予言したことは一つも違っておりません。私はコンピューターを作っているんですからね。いい加減な

ことは信じません。

熊の湯研修会の背景となるもの

これまでに記述しました、熊の湯の研修会の参加者は七百名、その内の三百名が生長の家の関係者でした。

その中の一人の人が

「生長の家の教えとどのように違うか教えて下さい」

という希望を出されたので、研修の二回目の朝食後の休憩を利用して、その違いを説明していられます。

この時の自主研修は、一斑を百名に分け、七班が編成され、各班それぞれに担当の講師がいられて、信次師が各班を廻りながら全体的に

指導されるというものでした。

これまでの記述は岩手県T氏の所属される班での録音テープ筆録です。

釈迦の時代は記憶抜群のものが、この時釈迦はこのようにおっしゃった、と口伝したものが後世に残されることとなりますが、どれ

程、正確であったでしょうか。

しかし現代はテープレコーダー、そして音だけでなく絵もはいるビデオもあって正確無比です。

そのうちには、インターネットを利用した信次師講演の動画が、家庭にズカズカと正法が入り込むでしょう。

八月二十九日

信次師は、会社の仕事で信州の工場へ行かれた。

コンピューターの端末機器やカセットの量産が信次師の事業である。

作業場は活気にあふれていて、信次師がプラスチック工場を覗いた時、高橋はつよ氏（三十八歳）の姿が見えないので尋ねられると、二

週間近くも休んでいるというのです。

軽作業なのに腰が立たないとは考えられません。

「こんにちは！」

勝手口から信次師が声をかけられると、ハイと返事をされたが、体が自由ならないようでした。

「お忙しいのに会社を休み、すみません」

と苦しそうに言われます。

はつよ氏の体を信次師が見ていると、不思議なことに、寝ているのは、はつよ氏に違いがないのに、八十二、三歳になろうと思われる無精

ひげを生やした老人が横になっていました。

信次氏が何度確認しても、声ははつよ氏です。

信次氏は思い切って質問された。

「いつ頃から具合が悪くなったの」

「たしか八月十三日の夜だったと思います。お盆の迎え火を焚いてから、ぞくぞくして、迎え火をたくまで別にどうということもなく、

今年のお盆は新盆で、亡くなった叔父さんにとっては初めての盆ですから、仏壇も岐阜提灯で飾りました」

はつよ氏は、間違いなく亡くなった彼女の叔父さんと呼びこんだのでした。

はつよ氏は思い出されたように、

「八月一日は、お墓の雑草を除き、叔父さん、もう少しでお盆ですよ、お盆にはぜひ来て下さいと、心の中でお願ひしました」

と告げていられます。

信次師は、はつよ氏に

「あなたが呼んだとき、その叔父さんは本当にきたんですよ」

「まさか...」

そこで信次師は、老人の霊に厳しく、

「あなたははつよさんから離れなさい」

と言われると

「わしは行くところがない、ここにおいてくれ」、

としがみついたというのです。

信次師はこんこんと言って聞かせると、すると、今までの人生について反省をはじめ、はつよ氏の体から離れて行ったというのです。

昭和四十八年八月四日「転生輪廻、現証」志賀高原

八月十一日「心の公害」関西

八月十二日「般若心経の解説、質疑応答」関西

八月十六日「東京本部職員を叱る、般若心経、供養」

九月

昭和四十八年九月一日から十日までの、十日間の志賀高原特別研修（長野県竜王）が行われ、信次師は、弟子の中から主な九人を選び、

インドの釈迦の当時と同じ研修をされることになります。

九月二日の午前は信次師を囲んでの質問の時間でした。

そのとき園頭会長は、以前、本部講師をしていられた生長の家の教義の問題について質問しようと考えられていました。

「園頭さん、あなたの質問はキリストに答えてもらいましょう」、

と質問するより早く会長の心の中を読まれて信次師は告げられたというのです。

それから信次師は瞑想にはいられると、

「心に愛のない人に、心の法則、心と肉体との関係、を教えるはなりません、心の法則は、人が愛の心を持った時に教えなさい」

と、キリストは信次師を通して教えて下さったというのです。

園頭会長が、最初に見られた信次師は釈迦の相（すがた）であったというのです。

そして今、眼前に現われている姿はキリストであったようです。

会長が、固唾を飲んで顔を見ていられるうちに、不思議なことに信次師の顔がイエス・キリストの顔に似てきたというのです。

瞑想を解かれた信次師は、すかさず

「園頭さん、わかりましたか」

と確認した直後

「モーゼにエホバと名乗って出たのは私ですからね」

と。

そのとたん会長は、それまで経験したことのない神の権威に打たれて、信次師の前に跪かれたというのです。

会長は額ずいていられるのですから、信次師の姿は見えない。見えないが感じたといわれています。

信次師は釈迦の相を示現して、すると、その釈迦の相の上に大きな光があったというのです。

それは釈迦の権威を超越したもう一つの大きな権威であったというのです。

会長は跪かれながら、その感激に、そのありがたさに泣き出してしまわれます。

会長の頭は、その権威の前に自然に下がり、それは頭を上げてなどはいられない全く自然なもので、上げようと思っても上げられるよ

うなものではない霊の権威、霊の重圧であったようです。

信次師の言葉が終って頭を上げられようとされた、そのとたんに園頭会長の頭は、今度は押しつけられるようにして額を畳にすりつけら

れ、そして、言葉が胸の奥からほとばしり出されたというのです。

頭は畳にすりつけられているのに会長の心眼は、信次師とその背後にある釈迦とキリストを通して、はるか彼方からとっていいか、は

るか上からとっていいか目も眩むような神の光を見ていられたというのです。

「神よ、この偉大なる方を今、この世に下したまいて、われらの心の光りとなさしめ給いしことを感謝申し上げます。」、

と。

肉体を持たれた会長は、信次師の前に跪かれています、会長の心は、信次師の心と神の光（神の心）とが一つであり、神の光が肉体を

持つ姿となってこの現象の世界に現われ、それは神が全人類を救わんがための偉大なる神の愛であることを知られたというのです。

さらに、大きな権威 光 釈迦 イエス 高橋信次師 そこから流れ出る、「仏法・正法」こそは神の心の流露であった、

と園頭広周会長は教えて下さるのです。

この項は一部重複していますが敢えて再記述いたします。

エルランティ

この目もくらむばかりの神の光を信次師は、エル・ランティと言い残されています。

宇宙創造の神が姿を現わされたことは今だかつてありません。

拝み屋さんなどに出てくる「神」といわれるものは、動物霊か地獄霊ですが、エルランティは神より、この地球の人類の指導を委ねられ

た最高責任者であり、また、エルランティは神の子であり、直接、神の光を受けている真のメシヤ（救世主）なのです。

愛の原則

園頭会長は何を質問されようとしたのかというと、それはこうでした。

精神身体の医学を宗教にとり入れたのは生長の家だった。

この病気の原因は、こうゆう心から起ると学んだ指導者達が、病気の悩みを持って個人指導を受けに来た人達に、頭からいきなり

「あなたは、こんな心を持っているから、そのような病気をする」

と相手を裁くようになってきたというのです。

親切に指導してもらえと思って相談をしたが、もう行くもんかという空気が生まれて来ます。

そこで、これをどのように考えたら良いだろうと会長は考えていられたというのです。

だから、心に愛のない人に「心の法則」「心と肉体との関係」について教えてはならないという答えになったのでしょう。

愛があれば裁かない。愛があれば責めない。愛があれば相手の欠点を指摘して偉ぶることはないのですから。

真の反省

そして、信次師は弟子達に、生まれてからこれまでの想念と行為について、しっかりと反省することを命じられると、弟子達九人は、

壁に向かって反省する者、部屋の内側に向かって、それぞれに反省をはじめ、信次師は自分の部屋にいて、弟子達の反省が、潜在意識に記録

されているものと同じかをチェックしていただきました。

反省を始めて一時間位して信次師は部屋に入ってくるなり、

「あなた達の反省は同じ所を堂々めぐりして一向に反省になっていない。

心のテープレコーダーに記録されていることと違っているじゃないですか。これから紙に書きなさい。それを私が見ます」、

と言われたというのです。

園頭会長はこう言われています。

「身体がすくんで血の気が引く思いがした。しかし、高橋先生にはすべてわかってしまっていることであるから。脇の下から冷や汗を流

しながら勇気を振って私は書いた」、

と。

十一軒の喫茶店のこと（反省パート1）

「〇〇さん、あなたは本当は喫茶店を十一ヶ所出していることになっていますね」

「エッなんですか」

その人はびっくりして問い返された。

多くの人々に接している時の信次師は少しも気どらない気さくな話し方をしますが、一旦、天上界より霊の權威を以って話される

時の信次師は、実にこわい人だったようです。その權威の前に、皆、自然に頭が下がります。

とたんに、〇〇さんは真っ赤になり、つぎに蒼白になってふるえ出し、神妙になられた。

そうして指を折って数え出されたというのです。

「いいえ、先生、九つです」

「違いますね十一です。あなたの心のテープレコーダーにちゃんと記録してあります。ぼくをごまかそうと思っ
たって、そうはいきませ

んよ」

また、指を折り出し、しばらくして、

「先生やはり十一でした。」

「そうですね、あなたは何時も女の人を騙す時に喫茶店を出してやるから

と言っていましたね」、

と。

ダブルパンツのこと（反省パート2）

そして、信次師に、

「あなたはダブルパンツを食ったことがあるでしょう」、

といわれた人は、きょとんとしていたといいます。

暫くしてから、

「それは何のことですか」

「ダブルパンツですよ」

また、間をおいて

「ダブルパンツですか？ それはダブルパンチとちがいまっか」、

その人は大阪の人でした。

「いいえ、ちがいますよ、ダブルパンツですよ」

信次師は実にユーモア抜群の人で、

「ダブルパンツですか。それはどういうことですか」

「あったでしょう。税金のことで」

と、いわれた人は真っ赤になって、ワナワナと震えて、ひれ伏してしまわれたというのです。

その人は終戦直後の税金攻勢に悩まされていました。

近くに、税務署へ勤める人の妹さんがおられて、その人は妹さんに近づき、税金を安くしてもらわれたというのです。

そうしている内に、男の子が生まれ、本妻の方にも男の子が生まれます。

二人は同じ小学校に上ることになり、うっかりしてPTAの集まりに出られると、

「ワーイお父ちゃんだ」

とあって、両方から嬉しそうに、まわりついてきます、子供同士が、

「絶対にうちの父ちゃんだ」、

「いや、ぼくの父さんや」、

と取っ組み合いのけんかになったというのです。

「それじゃ、どんな色のパンツをはいているかで決めよう」、
と。

このようにして信次師は、弟子に反省の厳しさを教えていられるのです。

夢の操作のこと

このような話しはまだあります。

金に汚ない人がいると、夢を操作して、金が落ちている夢を見せられます。

その人が手を出すと、翌日、電話があって、

「失敗しましたネ」

と。

女性に弱い人には絶世の美女が。弟子はつらかったようです。

女性が誘う夢テストの一例

そのとき二十代であった弟子のS原氏はこう書いていられます。

いつ夢テストがあるのかなと待っていたが、もう忘れる頃だったというのです。

氏は、タイ国の寺院の中で三人の女性の踊りを見ていられた。

二人がビルマ人で、一人はクメール人の緑ががった濃い褐色肌をした女性で、鼻の格好といい口元といい黒い瞳の大きな目の、あらゆる

面で理想的な顔をしていたというのです。

乳房の張りも理想的で、そのクメール女性は隣室に誘い入れます。

氏を、二人のビルマ女性は行くなと引き止めますが、天蓋付のベッドで抱擁しあうと、彼女の衣装を静かに脱がせ、クメール人女性の中

に静かにいり歓喜し続けたというのです。氏が、

「アッ夢テストだ」、

と思ったときはもう遅く、

後日、頭をかきかき信次の前へ

「失敗しました」

と進むと

「どうして？」

「彼女とやっちゃいました」

「あなた若いんだからオチンチンが立つのは当然でしょう。どうして失敗なの？あれだけ誘惑されれば、無理に押さえたらかえって不自

然ですよ」

「じゃあれでいいんですか？」

「いや、いけない」

「あの女性とセックスする前に、今の大事な女性のことを考えなかったのですか」

今つきあっている女性のことが頭から消えてしまうという、トンでもない理性の欠如を露呈してしまった、と。

念の受信と発信

このときの研修は、最初の二日間は徹底して反省であり、残りの八日間は禅定瞑想であったというのです。

そこは長野ですが、山一つ越えれば新潟県で、時々熊が出る場所。弟子達は、深夜、十二時になると敷物を持って山へはいります。

懐中電灯を照らしながら奥へは歩いていき、場所を決めて坐わると、満天の星がきらめき、しばし見とれるほどでした。

午前一時から午前四時頃まで、山中に個々に散って禅定瞑想をします。

つまり、完全に心を解放して天地空間、すべてのものの動きを、声を、心でキャッチする訓練だというのです。

離れた所にいる信次師が「念」を発され、それを弟子達がキャッチする訓練というのと、とてつもなく難しいと思えますが、高弟たちも出

きる人もできない人もいたようです。

園頭会長はこう言われています。

それぞれ、みな離れて座を占めて禅定に入る。禅定瞑想するとなると、多くの人は精神統一することと考えて凝念してしまうが、そうで

はない。完全に心を解放して、心が何ものにもとらわれない状態になって、天からの啓示を完全に受け、潜在意識の底から湧き上ってく

る想念とを、自分の胸の、今の一点において結び合わせるのである、

と。

その時、信次師の鞆持ちをされていた〇という二十三、四の青年がいられたというのです。

彼が、禅定の姿勢のままこっくりこっくり眠ってしまうと。すると集合を命ぜられ、懐中電灯で足下を照らしながら、声のする信次師

の許へ全員が集まって行くとき、どすーんと倒れる者もいられます。

集まると、信次師は一人一人にどのように発信したかを尋ねられ、

「〇君、君は、いくらぼくが心の扉を叩いても、ぐっすり眠って、眼を覚まさないね」

と、笑いながら信次師は話していられます。

このとき、信次師が発された念を、キャッチすることが出来る人も、出来ない人もいたようですが、この修業が夜中の一時から四時まで

続き、こうして、九人の弟子達はインドの時と同じ修業をしたというのです。

昼は心の浄化をはかり、夜は禅定瞑想と、離れた所から送られる想念の、キャッチの訓練をしたのです。

受信機と発信機は人間に備わっている

さらに、信次師は、次のように教えていられます。

受信機と発信機は人間が製り出したもの、ラジオやテレビは人間がつくったものです。

人間の心の中には、その作用がすべて整っています。ただそれを自分が受ける能力を持っているか、いないかだけの問題です。

皆さんの心の中が、人を恨み、妬み、誇る、そして怒る心をつくったり或いは自分自身がより大きな欲望、足ることを忘れ去った欲望が

多くなると、心にスモッグが出来てしまいます。

それが多くなればなる程、盲目となり、その力を閉ざすことになるのです、

と言っています。

さらに、

「念の速度は光の速度より速い。念の世界には時間、空間がない。つまり思えば即」、

と信次師は教えられたのです。

特別研修といえば、志賀高原のホテル竜王が、何回も使われていて、信次師はよく話していられたというのです。ここは霊域が精妙で良

いから、

と。

昭和天皇はアショカ王

また、信次師は、次のことも明らかにしていられます。

昭和天皇は、インドの時のアショカ王、その後のカニシカ王といわれた、大変、勇気ある大王です、

と。

アショカ王は、世界で初めて戦争の放棄宣言をして、仏教に帰依した偉大なる王、といわれています。

同じように今世紀も、昭和天皇は第二次世界大戦の終戦の決定を宣言されたとは不思議でした。

ホテルの主人の思い出

昭和六十三年五月、園頭会長の主宰される国際正法協会の全国支部長・連絡所会議が開かれています。

ホテル竜王は、昭和六十二年に新築されていますが、ホテルの主人と奥さんは、当時を懐かしそうに思い出して涙ながらに、

「高橋先生にサインを頂いた本は大事にしております。ここで特別研修を受けられた方々も、今はちりぢりになられて」、

と感慨深そうに園頭会長に話しておられます。

この特別研修の時に、さらに、信次師はこう言っています。

「この宇宙には七つの霊圏があり、この地球を中心とした霊圏を指導しているのが、アガシャ系であり、このアガシャ系がいちばん早い

速度で、霊的に進歩しつつある」、

と。

また、

「これから世の中は、物質文明の時代から霊的文明の時代へと移ってゆく」

と語っていられます。

そして、研修五日目の、夜の休憩時に、信次師は「母は、かつてキリストを産み、日蓮を生んだ人です」、

と語っていられます。

昭和四十八年九月一日～十日「高弟特別研修」志賀高原

九月九日「般若心経の解説、質疑応答」関西

九月十六日「人生の縁生、質疑応答」東京八起ビル

九月二十九日「物質と心の科学、質疑応答」東京八起ビル

九月二十九日「次元、エネルギーについて」東京観音寺

十月

十月の講話要約

信次師はこの月に次のことを話していられます。

これまでの政治、経済、教育その他の体質を変えなければ、日本は良くなるらない。

それには、「正法」を知った、足ることを知った人達が政治をしないとけない。

いつも、生産者が損をして流通機構だけが儲り、いつも消費者は高いものを買わされるという経済機構もよくない。

銀行、保険会社には不労所得が多過ぎる。その証拠には、日本各都市の目抜きのは、みな銀行、保険会社が立派な建物を造っている。

正法」の実践者が多くなったら、正法の実践者の中から政治家を出し、正法の実践者が流通機構を担当し、正法の実践者が教師にな

る。そして、正法の実践者が銀行、保険会社をやる。

そのようにして、日本を正法の国家にしてゆかないといけません、

と信次師は言われたのです。

さらに、この十月、大阪講演会の前のこと、信次師は園頭会長へ、突然こう注意をしていられます。

「園頭さん、釈迦の三十二相を勉強するのはやめなさい」、

と信次師は言っています。

三十二相とは、お釈迦さんの特徴は三十二あり、例えば、お釈迦様は舌で後頭部を舐められたとか、お釈迦様の陰囊は腹の中にあって外

から見えなかったとか、耳タブに穴が開いていたとか、手足に水かきがついていた等を言うようですが、この信次師の言われる真意は、

釈迦についてあれこれ伝えられてきたものを勉強してもダメ、むつかしいお経の中から釈迦の教えを探ろうとしてもだめだと注意された

上で、さらに、わたしが説いたことをそのまま信じれば良いのです、という大宣告だったのでしょ。

また、この時期、信次師はこうも言っていたというのです。

「わたしの本を読み、話しを聞いて、一ぺんでこれが本当だとわかる人は、前世で正法を聞いたことがあるからです」

そして、

「わたしは釈迦・キリストの教えが、永い間に歪められてきたので、それを修正し、原点に帰すために生まれて来たのです」

と。

十月のある日、

「アトランチカ大陸は、アガシャによって正法が説かれ、高度の文明の発達した国であった。そこに今の共産思想と同じ思想を持った集

団が現われ、正法を説く指導者達を殺した。そのために陥没させられたのです」

と。

同じく、この時期、信次師は

私がヤーベとして、ユダヤ民族に説いた正法は、永い歴史の中で歪められて来ました。それでキリストが出て修正することになったの

です。ところが、そのキリストの教えもローマ法王によって歪められたために、天上界からルッターやカルバンを出して、宗教改革をさ

せることになった」、

と。

「他力によって救われた者は一人もいない」

と。

そして、

「人間は、心と肉体と経済の調和、つまり、体も健康、精神も健全、それに、ほどほどのお金も持つのが大事である」

と。

同じく、

「やがて医者が宗教家の役目をする時がくる」

と言っていたというのです。

さらに、

「園頭さん、この頃なにかあると、高橋先生助けて下さい、なんとかして下さい、という人が多くなって困るんです。ぼくはぼくで、修

行しなければならないことがあり、また天上界へ行って天上界の人達を指導しなければならないことがあるし、そういう時に、ぼくの名前

を呼ばれると、助けに行かないわけには、いかないのですよね」

と。そして、また、

「資本主義も共産主義も、どちらも唯物思想であり、神理ではない」

と言った。

昭和四十八年 十月六日「苦の原因と心の機能と調和、質疑応答、現証」東京八起ビル

十月七日「宗教と科学」名古屋

十月十二日「ノイローゼの原因について」関西

十月十三日「質疑応答」東京八起ビル

十月十三日「憑依霊について」関西

十月十三日「現代宗教と正法の違い」関西

十月十四日「質疑応答、憑依霊と精神異常」関西

十月二十一日「憑依霊について、現証」東京八起ビル

十月二十六日「科学と宗教」ナショナル

十月二十七日「悟りの道」川西市

十月二十八日「神理と科学」倉敷市

秋

「不動明王について」

和歌山市労働会館での講演

「不動明王は、正しい心の人々を悪霊から守護する光の天使です。天国のお巡りさんだと思えばいいですね。

実在界の秩序を正す役目。不動明王というのは、本来、心の世界で働くものだといえます。拝むものではありません」、

と信次師は講演された。

十一月

大阪講演「輪廻転生」

「今日は輪廻転生についてお話をします。太陽は東から西へ沈んでゆきます。そしてまた明日...云々。」

...というように講演は始まります。...

マルクスのこと

「カールマルクスも、また「光の天使」として出て来たのです。」、

と。

マルクスも光の天使だったと信次は教えたが、無神論の立場をとる共産主義のマルクスも経済の考察に行き詰まり、モスクワに神学校を

建てた、と信次師は言われています

アトランティスとアガシャ

「私は一万二千年前、アトランティス帝国に「アガシャ」として生まれました。」、

.....

と。

ピラミッド

「ナイル河畔のピラミッドの一つが、やがて我々の同志の手によって発見されます。」、

と。

この時、アガシャ大王は、悪しき人達が天使達をことごとく殺したので、アトランティス大陸から陸伝いにアフリカ大陸へ避難したとい

う講演もあります。

その後アトランティス大陸は、荒み切った人々と共に一昼夜にして陥没させられることになりますが、アガシャ大王は、避難したエジプ

トのナイル河畔に、アトランティス帝国関係のピラミッドを造って残し、自分たちの残した資料によって両大陸の関係がわかると、信次

師は言われるのです。

『心の指針』高橋信次著、出版さる。

はしがき

現代の仏教、キリスト教の神理は、ながい歴史的な過程のなかに埋没してしまったといっても、もっとも、それにはそれだけの理由が

あります。

人間は、五官や、六根に左右されるように一面においてできているからです。

本書を手にした読者は、本書の真意をつかみ、調和のとれた生活と、平和な社会を築くための心の糧とされんことを願ってやみませ

ん。

昭和四十八年十一月吉日

高橋信次

昭和四十八年十一月十日「心を洗う」関西

十一月十一日「転生と使命、煩惱即菩提」関西

十一月十二日「正道実践」関西

十一月二十三日「物質と生命、現証」東京読売ホール

十二月

十二月五日～七日

九州で初めての研修会が、津屋崎国民宿舎において開催され、百二十名の参加でしたが、研修会二日目の夜、信次師は園頭会長にこう告

げておられます。

「園頭さん、インドの時のあなたの兄さんが、名古屋に生まれ変わって出ていますよ」、
といわれています。

天台大師のこと

お釈迦さまは、中国に陳、即ち天台大師として転生（生まれ変わり）され、法華経を説いています。

本書の釈迦の霊統を参照していただくと分身 とあります。

天台大師には陳將軍（陳鍼）といわれるお兄さんがいて、この陳將軍が弟・天台大師のために寄進したのが天台山でした。

この陳將軍なる人が、園頭会長のインド時代の兄であったということです。

その人は、若松・Tという名で、名古屋に生まれ変わっていると信次師は言い残されておられ、その人を中心として、名古屋のGLAは

ひろがっていました。

園頭会長はその後信次師と一緒に、名古屋の講演会の時に泊めてもらっていられますが、さすがに將軍であっただけに、刀が好きで、名

刀を山ほど持っておられたということです。

菩薩の使命

また、この国民宿舎で信次師は「園頭さん、如来は法の大筋を説き、菩薩は如来が説いた法を、みなにわかり易く説明するのが使命で

す。しかし、如来がいなくなったら菩薩もまた、法の根本を説かなければならないのです」、

と、言われたというのです。

十二月末

東大阪市、関西本部

演題「魂と輪廻転生」

「本年も、この講演会で終わります。皆さんは、我々一人が個の生命として、喜びも悲しみも云々」、
から講演は始まり、この中から、要点だけを摘み上げるとこうなります

「日本には、いくつもの砲台があるといいます。その砲台とは国を亡ぼす砲台であるということです。

では、その砲台とは何でしょうか、

怒り放題（砲台）、

妬み放題、

恨み放題、

謗り放題、

という民主主義、自由主義の根本を逸脱した、無秩序の阿修羅の様相を呈して云々」、

と。

「心と肉体と経済の三つが調和されたユートピアをつくるために立ち上がらなければならないのです。より豊かな己れ自身をつくり、そ

して神の国をつくろうではありませんか。」、

と。

質疑応答

質問 ノストラダムスの予言について、一九九九年のX日についてお聞きしたいのですが。

高橋 あなたに逆に質問します。あなたは自分の家にこれから帰るんですね。家がなかったら困るでしょう。我々はあの世へ行った

らまたこの世に帰ってくるんです。その時、この世、この地球がなかったら困るのです。だから、ノストラダムスがいったい

るようにこの地球がなくなることは絶対にはないのです。しかし、天変地異は起ります。

関東地震のこと

過日、天上界から東京に大地震を起こすといってきたのです。十二月一～五日までということでした。

そんなことをされたら三、四百万人が死ぬといいました。そんなことはされてはたまりませんから、我々はそのために桜島をはじめ

めとして、太平洋沿岸の火山地帯、富士火山地帯のエネルギーの分散を頼んであります。東京とか大阪とか、大密集地帯に地震を起こさ

れたら、たまったものではありません。

リニアモーターカーについて

「東京 大阪間も時速五〇〇キロのリニアモーターカーに、飛行機より安定した乗り物になります。」

新しいエネルギー

また、

「これから日本の太平洋岸に、新しいエネルギーが大きく噴出するでしょう。その結果、日本の燃料関係は非常に調和され、ガソリンは

斜陽化するでしょう。

今のように闘争と破壊を繰り返し、神の子としての自覚を失ってゆけば、神の子であることを自覚するまで天変地異も起るでしょう。

まだその場所は未定です」、

と。

日本人の反省の自覚を促すために、天上界から大地震を起こすというのです。

人間の霊魂は生き通しのものですから、その人の業（カルマ、心の傾向性）の原因と結果によって、天変地異に巻きこまれる人があって

も、それはそれで、仕方がないことだということです。

日本人が、お金の溺れてバブルに酔い、さらに、自力を忘れた他力信仰に間違い、闘争と破壊という人間として

の自覚を失うと、これら

の悪の想念が集団的となれば、それを浄化するために、天変地異が起こることになるというのである。

夫婦と調和

また、信次師は次のことも言われています。

「調和を前提とした妥協は智慧である。夫婦というものは、魂を磨きあ合う最高の相手であり、仲が悪くケンカばかりせず、魂を磨き合

う相手を粗末にしてはならない」

と。

霊能者の判断要件

関西講演会で、ある人が信次師に質問された。

「『仏陀』という本を書いた人が、自分は釈迦の再来であると言っていますが...」、

すると信次師は、

「それは、あなたが、見えて、聞えて、話せたら信じなさい」

と解答された。

その意味は、

一、過去世の言葉が話せて、

二、その霊が見えて、その霊と問答ができれば。

それを基準にして正しく判断しなさいと言われたというのです。

そして、いつも信次師は

「正直者が馬鹿を見ることは絶対にありません」、

と声を大きくして言っている。

創価学会のこと

昭和四十八年のある日、創価学会の聖教新聞の関係者が、信次師の講演を聞かれ、個人指導を受けられます。

すると、「あなた達は、このことが知られてクビになるでしょう。しかし、心配しなくてもいい、クビにならないようにしますから安心

しなさい」

と信次師は言われます。

それから、その人達は本当にクビになられます。そこで、信次師は池田大作会長に手紙を書かれ、

「あなたは、なぜ、私の話を聞きに来たぐらいでクビにされるのか。あの人達にも妻子がある。それをクビにして、一家を路頭に迷わせ

るようなことをするのは、慈悲を説く宗教家のすることですか。

あなたは〇月〇日、ハワイのホテルの〇〇号室で、北條という人と秘密会談をしていた。わたしは、あなたのことをみな知っている。

クビにしたことを取り消しなさい。しないなら、私にも考えがあります。」

と。

その人は復職されたが、左遷されたというのです。

ところが、その話が創価学会会員の間にはひろがり、信次師を殺すという脅迫状が舞い込み始めます。

そのことを警戒して、青年達を警備に当らせたことが三回あったというのです。

さらに、信次師は、池田大作氏は追剥ぎの親分の蜂須賀小六の生まれ変わりと言い残していられます。

神を知りたかったら体を見よ

そして、また信次師は

「神を知りたかったら、大自然を見なさい、自分の身体を見なさい」

と書いていられた。

昭和四十八年十二月五日「初心者のための正法」福岡

十二月六日「アガシャ系グループ霊団の使命」福岡

十二月七日「研修会、第一回」福岡

十二月八日「八正道の実践について、心に毒を食べるな」関西

十二月九日「魂の転生」関西

十二月十六日「質疑応答、体験発表」場所不詳

十二月二十五日「GLAクリスマス会、現証と講演、大天使の話、イエス様が高橋先生に」東京

昭和四十八年の日時不詳分

「アガシャ霊団、その他の諸問題について」東京

「法に光を（実在界について）」東京観音寺

「質疑応答、本当の宗教とは」東京観音寺

「質疑応答」東京八起ビル

「人生の目的と使命（心の窓）」東京共立講堂

「質疑」東京八起ビル

昭和四十九年（一九七四）（信次四十七歳）

一月

一月六日 新春大講演会（神田共立講堂）

一月十三日 関西本部新年講演会

演題「心の本質、宇宙即我」

「ようやく私達も全国的に人々の心に普遍的な法灯を点ずる機会がまいりました。しかし、云々。

このように講演は始まる。

「南無妙法蓮華経、これも毎日一万遍唱えると、救われるんだというのです。

世界でこれで救われた人は一人もおりません。救われたように錯覚しているだけです。」、

と。

また、

「『〇〇』とかいろいろな予言書が売っていますが、それも人間の危険を察知して心が淋しくなっているから、ああいうものが売れるん

です。」、

と。

そして、

「皆さんは「三途の川」という言葉を聞いたことがあるでしょう。それはこの地上界で体験して持った執着を流し捨てる場所なのです。

執着を捨てないと彼の岸へ渡れないのです。」、

更に、

「今すぐ死ぬという人がいますか、一人もいないでしょう。自力によって自分自身の心が満たされると、執着がなくなります。

人委せの他力ではないのです。

心が豊かになると皆さんの後光が大きくなって、初めて宇宙即我、自分は神の子だったということを実感できるようになります。」、

と。

九十億の人間

「この地上界はどんなに多くても、九十億の人間しか住めない。だから、この地上界に生まれてきた縁を大事にしなければならないので

す。」

同じく一月

九州の宮崎郊外の国民宿舎において、三百人ほどの希望者による研修会が開かれ（二泊三日）、参加者の八割は不調和な地獄霊と交渉を

持っている気の毒な人々でした。

T・Y（六十歳）氏は夫や子供をつれて、神戸から来られていました。

二十数年にわたる信仰歴を持っており、彼女の下には折伏された多くの会員がいたというのです。

しかし、これまでの信仰を捨てようと思いついたのは、彼女の肉体の故障でした。

憎しみ、怒り、嫉妬の想いが心の中にふくらんでくると、入院していても、きまって関節の痛みが激しくなるのです。

Y氏は夫の介助によって研修会に参加したと信次師に挨拶されます。

信次師が霊視すると、誤った信仰のため、体はガタガタで、背から腰、足の関節にかけて、地獄霊が憑いているのがみえたというので

す。

信次師に絶対の信頼を持たせるために、信次師は即座に関節についている動物霊を取り除いたのです。

「お父さん、痛くない、歩けるわ、不思議や」

と、夫も妻の奇跡を目を丸くして見ていたといいます。

こうして信次師の説く法にはじめて傾くのでした。

「Ｙさん、あなたが不調和な心で持てば、また別の地獄霊が憑依しますよ。心の在り方を正すことが大事です」

と信次師は言われると、

「不調和な心とは、どんな心ですか」

とＹ氏は尋ねられます。

「怒り、愚痴、ねたみ、恨みの心です」

「わてらは、感情むき出しの生活だったんや。これはあかん。でも愚痴は どうして悪いんですか。心の中のしこりを取るには一番...」

「愚痴は自分の欲望が満たされない時に出るもの、これは心の中に垢をつくり、他人の心にも毒を食べさせる...。」

「大自然を見て下さい。それは私達にこのように生きなさいと教えています。感謝の心は、報恩という行為で正しく輪廻するのです」、

と信次氏は説かれるのでした。

「迎春」 高橋信次

めぐり来る初春楽し朝の夢

光り輝く友の姿が

正道の光に満ちて目ざめたり

年たちかえる元朝の夢

年を経て心の道に迷いなば

法を頼りに正道を歩く

暖かき陽ざしの如くへだてなく

己が慈愛を友に施せ

苦しみの因断ちきりて暗きより

光輝くおのが心に

昭和四十九年一月六日「心の革命」

一月十二日「前進のための基礎作り」関西

一月十三日「法灯を点ぜよ」関西

一月二十日「ノイローゼ、勇気をもって実践、現証」東京八起ビル定例講演会

一月二十七日「特別講演会」鹿児島

二月

東大阪市関西本部に於ける講演

演題「お経について」

今日はお経というものについて話してみたいと思います。私達は永い歴史の中で、お経云々、

このように講演は始まります。

「お経というものは、今から二千五百年前、ゴータマ・シッタルダーが四十五年間に、もろもろのサロモン（比丘）、サマナー（比丘

尼）衆生達に説いた一つ一つの言葉であり、神理であります。

それが後に、お経になってしまって、それを後の坊さん達が、お経はあげるものと言ってしまったために、今のようになったのです。

お経を見ますと、はじめに必ず「如是我聞」とあります。

これは「私はこのように聞きました」ということであり、大事なことはお経の中身をよく知って、自分自身の心と行いの指針とするこ

と、それが本当の信心であり、お経を毎朝毎晩あげることは、大きな間違いなのです。

弘法大師が「般若心経秘鍵」というお経の中に、「私は靈鷲山においてかって、ブツダより法を聞いた、そのために般若心経を説くこと

ができる」といつております。」、

と。

般若心経について

「玄奘三蔵は何んとかしてその真実を知ろうとして、遠いインドのナーランダという所まで十七年間もかかって経典を取りに行きます。

その時に大般若経を持ってまいります。その大般若経の中身を圧縮して、そのエキスを取ったものが般若心経なのです。

一方において、金剛智三蔵といわれる人がおりまして、密教というものを勉強し、人々に道を説いております。

しかし、さすがに玄奘三蔵も「摩訶般若波羅密多心経」という当て字を使わざるを得なかったというのは、この中に含まれている偉大な

る神理というものを、中国の言葉では簡単には表現できなかったからなのです。

「摩訶」というのは「摩訶不思議」という言葉を使っているでしょう。「摩訶」は「大、大いに、偉大な」で、「これは大いに不思議

だ」というのを「摩訶不思議」というのです。

また、マハー・バラモンというものは、大バラモン、この際にもマハーを使います。

「般若」というのは、インドの言葉で「パニヤー」、「智慧」のことです。知識というものは、皆さんが耳を通し、目を通し、体を通し

て体験したもの、あるいは学校などで聞いているもので、それを心の中に知識として蓄えております。

智慧というものは、皆さんが学問的に学んだもの、また、こうして私が説いている道、それを頭で覚えて知識となっているものを実践した

時に、そこから出てくるものが智慧なのです。

つぎの「パラ」というのは、行くとか到達するという意味で、この意味にあてはまる中国語がなかったので、「波羅」という字をつくっ

てあてはめたのです。

「密多」、これも当て字です、「内在する」ということで、心の中に内在するということなのです。

直訳いたしますと、「マハーパニヤパラミタ」というインドの言葉は、即ち「摩訶般若波羅密多心経」というのは、

「内在された偉大なる智慧に到達する心の教え」、

ということになります。

多宝塔とは

「内在された偉大なる智慧に到達する心の教え」というのは、皆さん自身の心の中には、あらゆる転生の秘密が、その宝物が、誰しもあ

るのです。

皆さん、お寺へ行かれますと多宝塔というものがあるでしょう。多宝塔は皆さん自身の心の中にあるのです。

多宝塔というのは、石やなにかでつくったああいうものではなく、皆さん自身の心の中にそのような偉大な智慧があることを現わした

ものであるということを知って欲しいのです。」、

と。

さらに、

「やがて私達は、この肉体舟を捨てなければならない死の時がきます。人間自身が神理を知ってあの世へ行くならよいが、他力本願と

いう永い歴史の中で地獄界に落ちた人々の霊が、心というものが、不在で一生懸命に拝んでいるような人達にパアッと憑依する。

この頃、日本人に外国の地獄霊が憑依するようになってきました。ペラペラと外国語をしゃべりますが、よく見ると外国人の地獄霊です

ね。

今までは外国人の地獄霊が出たなどということはありませんでした。最近では地獄でも大分外国語が流行しているようです。」、

と。

（日本語ではない外国語で語ると、過去世の霊があたかも喋っているかのようですが、キリスト教会などで異言をしゃべるという記事

もありますので、正しく見るのが大切です。）

拝み屋さんを正しく見よ

「霊媒とか、拝み屋さんとか、そういう人達も芝居が上手になりました。東北地方で育って、東北弁しか知らないお母さんの霊を呼び

出してもらったら、その霊媒を通して関西弁でしゃべっている。

ところが、聞いている方は芝居だということに気がつかない。おかしいことであるのに、聞いている人は真剣に

思ってしまう。

正しくものを見るには、靈感者、霊能者といわれる人達の、まずその人の生活行為を見ることです。

一つ一つ、正しく語っているか、正しく生活行為をしているかなど、そういうことは確認せずに、

「あの人、靈感があるのよ」、

はなはだしいのになると、

「うちの教祖、今日のご機嫌が悪いのよ」、

「お賽銭のあがりがないからなんですって」

といたりします。そういう婆さんに十万人も信者がいるのですから、日本人は余程間抜けです。

そういう所でまた救ってもらえると思っているんだからおかしいものです。

Home

「空・くう」と、「色・しき」について

色不異空 空不異色 色即是空 空即是色 これをつなげてゆきますと輪になります。円になるということは循環、転生するということが

なります。

空は、あの世、色は目に見える世界、この世です。この世とあの世は、別のものではない一体だということです。

不二一体であるということです。

質疑応答

質問 脳軟化症で亡くなった人の死後はどうなりますか？

高橋 脳軟化のまま亡くなったり、また胃癌とか肺癌とか、いろいろな病気で亡くなった人は、その病気のままの意識を持ち、不

調和な肉体を引きずったままで地獄界におります。そして、自分で死んでいるにもかかわらず、まだ死んでいないと思ってお

ります。

先日、ある地獄霊が、五年前に亡くなっているにもかかわらず、兄弟達に憑ってきて、「私は誰でしょうか」というのです。

その人も脳軟化症で死んだのだということでした。

教育熱心な家の子供の一例

「たまたま先月、私の軍隊時代の学校の同期生が大学の先生をしております。中学三年生のときに亡くなった一人娘さんの霊を出しまし

て、その人の前で話をさせました。

お母さんも大学の先生ですが、教育のことについては徹底していきまして、その娘さんは死んでもまだ、試験に遅れてしまう、友達におく

れる、私の病気は治るの、助けて下さい、私は死にたくない、と言っておりました。

あなたは、死んでいるんだと言うと、死んでいないと言う。

このように、人間は、死んだその時の等速度運動というのを起してゆくのです。即身成仏できるような人達は、正しい心の行いのものさ

しをもって生活していた人達です。

お経をあげたら即身成仏できるなど、そういうことは絶対にありません。」、

と。

(即身成仏だといって、もぐらのように土の中に入る人がいますが、とんでもない。即身成仏とは、死んでしまったら、すぐに死を悟り

天上界へ帰ってゆくことの出来る人をいいます)

質問 自分はなぜ、今、ここにあるのでしょうか。

高橋 人間はあの世から出てきたのです。色心不二、色即是空の世界、実在の世界です。内在された偉大な智慧の宝庫を自ら閉ざし

てしまったから、なぜ今ここにあるのかがわからなくなったのです。

お父さん、お母さんというのは、永い転生輪廻の中で友達であったり、親しい間柄であったり、縁というものによって結ばれ

ているのです。その縁を通して今度、肉体を持つ時に、あなたがお母さんになって下さいとお願いするのです。たとえ不義の

子でもいいんだ、その中で私はその疑問の中から悟りを開いて自分自身を知って、多くの人を救ってきますという人もいます

です。そして、また肉体的欠陥を通して人生というものを悟ってゆきます。

質問 自殺した子供は、やはり地獄界ですか？

高橋 夏であったのに、寒くて寒くてしょうがないというご婦人が個人指導に来ました。体温計では三十六度四分、でもひざ掛をか

けても寒いというのです。自分自身が親からもらった肉体を、自分で縮めてゆくということは非常に哀れなことです。可哀そ

うなことです。動物霊や地獄霊に憑依されている霊能者がおります。そういう霊能者の書いた本などを読んで霊能狂、心霊狂

になってしまったら困ります。ところが動物霊や地獄霊に憑かれてしまうと、

「死んでも生命はあるよ、死ぬことは少しもこわくないよ」などと耳元で囁きます。そうするとフラフラと自殺したくなるの

です。あの世からこの世は見えるが、この世からあの世は見えません。中には悟って見える人もおりますが、そういう場合

は、動物霊や地獄霊が言っているのです。見えないために、神様が言っていると思ってしまうのです。神理を知らない子供達

が自殺してゆくということは、当然、地獄界へ行きます。死んで自分の家に帰ってみても、今度はお父さん、お母さんと話し

ができないですから、そういう人達を救う方法は、死んでしまったのだから仕方がないから、よく人生の目的と使命というこ

とを悟らせて、早死にをしたことの罪を詫びさせ、彼に行くべき道を導いてやるのが大事です。

昭和四十九年 二月二日「講演、現証」東京八起ビル

二月六日「人生とは、心とは何か、憑依霊、質疑応答」東京観音寺

二月九日「幽霊三題」関西

二月十日「お経の説明」関西

二月十一日「心の原点」京都

三月

昭和四十九年三月九日「質疑応答」関西

三月十日「心の病、ノイローゼについて」関西

三月二十三日「心の原点」関西

四月

四月六日

神田共立講堂に於けるG L A五周年記念講演会

演題「自力より他力への道」

「丁度、昭和四十三年七月、信じられないような霊的な現象、本来私は、霊的現象という云々、このように講演は始まります。

「夜の十時頃から私達は肉体から抜け出し、向うの仲間達にその道を説いております。一方において、もうすでにニューヨークに於て

も、我々の仲間が呱呱の声を上げようとしております。

そして、これからは、むしろ日本よりかアメリカに私の説いている神理は広がっていきます。しかし私はあくまでも、自分が説いている

のではありません。私は代弁者なのです。

我々は急がずとも徐々に人間の普遍的な神理を、心の物差しとして、心の中に法灯をかざして行くようになるでしょう。

その為に、我々はすでに台湾方面にも我々の仲間が呱呱の声をあげました。私達は一面識もありません。」、と。

四月十日～十二日

宮崎、青島国民宿舎に於ける研修会。

ある教団の会長の例

国鉄のストにより参加者が減ることが心配されましたが、全館貸切りの超満員となります。

霊友会から分派した霊〇会という教団が神戸にあり、その教団から二十名が参加されます。

信次師は、会長の次という人に、その教団の会長に憑いているものを入れられます。

「わたしは古狐でござる、女性を抱いて、金を集めて、金というものはいいもんじゃ」

と、その人の顔は、全く狐に変わり凄惨な形相であったというのです。

その教団の二十名の信者達はそれを見てアツけにとられ茫然自失の態であったというのです。

研修会の二日後、四月十四日の関西本部の講演会には、その霊○会の会長も来られますが、金銭的な執着が強く、話を聞くだけに終わったようです。

福岡の男性の例

昭和四十八年七月に正法に帰依し、この研修会に出席された福岡のI氏は次のように語っておられます。

六人ほどで信次師の部屋を訪ねられます。

I氏の番になると、信次師は半眼になって、氏の想念帯を見ていられる様子でした。

氏は事故の後遺症の為に腰痛に悩んでいられて、何も言わないのに信次師は、

「三十六年にありましたね。『一日一生』の意味を良く考えてください」

と言われたというのです。

事業をしている氏は、机の上に山のような仕事を残して研修会に出席されていたらしく、信次師はさらに、

「沢山の仕事を残して、「一日一生」です。事故の日はいらいらしていましたね。八正道からはずれるとまた悪くなりますからね」、

と告げて光を入れられ、光を入れ終えられた信次師は、

「フィリピンのトニーだったら、四十万円はくだらないでしょうがね」

と笑っていられた、

と。

昭和四十九年四月六日「自力から他力への道」神田

四月十日「研修会、初歩の人を対象にした正法の話し」九州第二回

四月十一日「研修会 九州第二回

四月十三日「心の革命」産経ホール

四月十四日「仏教の変遷、現証」関西

四月二十日「高橋信次先生と中国S氏対談

四月二十八日「調和への道」東京観音寺

四月二十九日「心と生活、質疑応答」相愛学園

五月

昭和四十九年五月二十三日

福岡県二日市講演会

「こうして九州への講演も佐賀県では丁度三回近くになり、当地でははじめてであります、およそ信仰なんて言うことになると、

非科学的な何かをおがませるんじゃないか、或いは、そういう一つのお経を上げて、先祖を供養したり、偶像を祭って拝むことが信仰で

はないかと、恐らく多くの人を感じているのではないかと...云々」、

このように講演は始まります。

さらに

「信じようと信じざるとにかかわらず、真実の人間の心の声というものは、人間は見逃すことは出来ないのです。

永遠の生命として人間は誰も皆、神の子なのです。人間は金の高さや地位の高さによって価値が決まるんじゃないのです。

人間らしく生きている人達こそ本当の神の子なのです。

足ることを忘れされ、自分さえよければ良いと生活している人達は、やがて自分の首を自分がしめるようになっていくのです。

幾人かの人達を通して実験してみましよう。」、

と。

それから転生輪廻の証明へと入っていきます。

昭和四十九年五月三日「イエス、モーゼ、釈迦のメッセージ」志賀高原

五月四日「正しい自己の確立」志賀高原

五月五日「研修会」志賀高原

五月六日「研修会」志賀高原

五月十一日「心のスモッグ」関西

五月十二日因果の法則」関西

五月十九日「心の原点、現証」横浜

五月二十一日「般若波羅密多への道」佐賀

五月二十二日「人生の目的と使命、質疑応答」関西

五月二十三日「偉大なる悟り」福岡二日市

五月二十六日「心の発見、質疑応答」和歌山

五月二十七日「特別談話、予言書」和歌山

六月

京都、中心山荘に於ける研修会

「私は二十年近く冷え性で困っています」

と。

信次師は六十代の婦人の後ろに、白い着物をつけた修験者が立っているのがわかれたというのです。

「あなたは二十年くらい前から厳しい肉体業をしましたね」

「そうです、滝業もやりましたので冷え性になったのです」

と答えます。

地獄霊は信次師の声を婦人に聞えないようにしています。

憑依している修験者に信次師は言われます。

「この女性から離れることです」

と言われた途端に

「滝業をしているのを見て、力を貸して協力するのがなぜ悪い」

とくっかかるのです。

「お前自身が地獄に堕ちていて、この女性を救うことなどできぬことだ」

と信次師は告げられます。

「お前は生前、家族を放り出して、家族の者を路頭に迷わせ、修業中に谷底に落ちて死んだのであろう」、

と信次師の口からつぎつぎと厳しい言葉が出てきます。これは信次師の守護霊の言葉だったというのです。

「光が強くてお主を見ることができん」、

と地獄霊はひれ伏してしまいます。

「救ってやりたいと言っているが、本当は自分の行く場所がないので、憑いているのだろう」

と信次師が言われると

「わしも救われたいのじゃ、この寒い場所から救って下さい、この通りじゃ」

と地獄霊は言うのでした。

「お前は働くことがいやで、家族の生活を見て見ぬふりをした。家族に温かい言葉すらかけたこともない、違うか」

と厳しく信次師は言われると、

「よし子、許してくれ、父ちゃんは悪い父ちゃんだった」

と修験者の心に仏心がよみがえって来て、婦人の体を通してわんわんと大声でなくのです。

「今、肉体をかりている女性に対して、今まで狂わして来た罪についてはどうか」、

「許てくだされ神だ、竜神だと言って迷わせて来ました。今までの罪を許してください」と、

婦人は一人で二役を演じていることに会場は不思議そうに見ていたというのです。

こうして修験者は婦人の体から出て行った。彼女の顔は赤味がさし、

「カイロが入っているように暖かい」

と言ったというのです。

「地獄に堕ちた修験者でしたよ」

と信次師が婦人に言われると

「ヒャー恐ろしい」

と言って、信次師に頭を下げ降壇されたのです。

昭和四十九年六月八日「心の公害」関西

六月九日「心行の解説、質疑応答」関西

六月二十一日「人生の目的と使命、自力と反省」京都中心山荘

六月二十二日「光の入れ方、注意事項」京都中心山荘

六月二十三日「反省と禅定、反省の苦病からの解放」京都中心山荘

七月

昭和四十九年七月十三日「気違い二題、質疑応答」関西

七月十四日「質疑応答、冷寒地獄の女性」関西

八月

『月刊G L A』

昭和四十九年八月号にみるG L Aの状況

お願い、

最近、会員同志で意識に光を与え霊道を開く例が多くなっています。これは非常に危険であり、絶対にやってはいけません。

霊道開眼は、先生しか出来ません。守護霊か魔王かの見分けが普通では出来ないからです。

光を与えないのに霊道現象が起った場合は必ず本部に連絡して下さい。そして先生のご指示を仰ぐようにしてください、

とこの頃のG L A誌には注意書きがなされています。

困ったことが多発したようですが、これは一般によく知られている「手かざし」や類似の行為によって「浮霊」等と呼ばれ、霊が突如と

して出てくることがあるからなのです。

その霊は守護霊か地獄の霊かの判断がつかないので厳に戒められたのです。

信次師はいつも、その霊が「見えて」「聞えて」「話せる」なら信じなさい、つまり、過去世の言葉が話せて、霊が見えて、霊と問答が

できたら信じなさいと言っていたのです。

八月二日

志賀高原・熊の湯温泉における夏季講習会

遠くは北海道、九州、沖縄方面から大学教授、医者、裁判官、芸術家、工員、教師、実業家、主婦、サラリーマン等が集いました。

中には論戦を挑んでくる人、面白半分の人もいたといいます。

しかし信次師には、どんな気持ちで聴衆者が研修に臨もうと一向に差支えなかったのだそうです。

人間の真実な在り方の一つでも二つでも理解してもらえば信次師は満足でした。

超満員でしたが、信次師は会場を肉眼と第三の眼で見られると、不調和な者が多いと信次師は正直なところ気が重くなられたといいま

す。講演は二時間半に及んで、その日は、

「人間はどこから来たか、どんな目的と使命を人間は持っているのか、死とは何か」、

というものでした。

ウグイスの霊

しばらく休憩されて、質問の時間に入ると、五十ほどの小太りの夫人が手を上げられたというのです。

そして、こう言われます

「先生、私は幼少の頃から神様の声を聞き、不思議な現象を経験しましたが、『心の原点』（信次著）を読んでから、私の神様に疑問を

持ってしまい、肉体的にも精神的にも苦しいのです。どうぞ教えて下さい」

とS・K子氏はうつむき加減にボツボツ話をされます。

「今も体がしびれています。救って下さい」

と手を合わせると、すると信次師は、

「あなたは小さい頃から、屋敷の中のお宮を拝んでいたようですね」

「はい、私の耳元で、稲荷大明神であるぞ、守り神じゃ」

と言っていました。

「お母さんも熱心に信仰していましたネ。」、

「ハイ父が亡くなりましたので、母が受けついで信仰して来ましたが、十八のとき亡くなりました」

と答えられます。

「なぜ早死にしたのです」、

「信者の悪い業を受けて...、と神様がいました」、

「ハハア、あなたの神様がね」

と信次師が言われると、会場から失笑がもれ、

「Sさん、お母さんは感情の起伏が激しく人格が変わりましたネ」、

「ハイ、神様が母にはいる時は、母と思いませんでした」

と答えます。

そして、

「私は何も悪いことはしていません」、

「あなたは善悪の規準をどのようにしていますか」

と信次師が言われると、夫人は急に感情を高ぶらせ、ひらきなおって、

「私を指導している神様は本物なのでしょうか」

と目をつり上げたというのです。

信次師は自分で確認してもらうことにして、Sを壇上にあげられ、

「神様を入れて下さい」

と信次師が言われると

「そんなことはできません」

と答えられたが、その内に合掌した手が上下運動を始め

「ホー、ホー、ホー」、

「ホーホケキョ」

とうぐいすの鳴き声で出て来ます。

彼女はうぐいすの神様がついているというので新潟方面で知られており、そこで、

「ウグイスの霊ではない」

と厳しく信次師が告げられると、

「稲荷大明神じゃ」

という。

「稲荷大明神でも何んでもない、ただの動物霊」

と信次師が言われると

「この馬鹿女、こんな所へ来るなと言ったのに」

と本性を現わしてきたというのです。

さらに会話は続きます

許すことによって安らぎは得られる

「俺はこの屋敷に住んでいる狐さ、この家の先祖に殺された。そのうらみをはらすために、この女を一生苦しめてやる」

と狐は涙を流し始めたというのです。

「百年以上も、この一族のものに、うらみを持ち続けても、お前の心は休まるか」、

と信次師はその是非をいいきかせられ、

「お前の気持ちもわかる。住みかを追われ、子どもを奪われたとしても、お前より弱い他の動物たちにお前がそうしなかったと断言でき

るか。許すことだ、無慈悲に殺生した罪はたしかに悪いが、許すことによってお前も救われ、相手も前非を悔いることができよう。許す

ことだ」

と信次師は誠心誠意こういつてきかされると、彼女の背後にしがみついていた白狐の姿は消えるように去っていったというのです。

狐が去ると、彼女は顔に赤味がさし、体がポカポカされてきて、

「白狐でしたネ」と、

夫人は心の中で神様を呼んでみても、答えが返ってくるはずもなかったというのです。

そして信次師はS氏にそれから心の正しい規準を説かれ、正しい反省の生活をするように話されると、するとS氏は信次師に感謝の意を

表わし、一礼すると会場に消えて行かれたのです。

白狐が百数十年も、うらみを持ち続けたというのです。

一寸の虫にも五分の魂と云うが、信次師は動物霊、特に狐について次のように言われています。

狐のこと

「狐にも魂がある。うらみ、つらみは人間ほど感じないが、蛇とか狐の場合は、地球上での生活経験が永いので、他の動物たちより人間

に近い感情を持っている。人間より単純ではあるが、奸智（わる知恵）が働く場合がある。

しかし、しょせんは動物的で、本能的であり、本能の命ずるままに生きている。

動物が憑依する場合は、大抵は狐が憑く、人間の意識を通じて話すので、まるで人間が語るような調子になってくる。」、

と。

なぜ、日本の霊的現象には狐が多いのか

それは稲荷信仰が多いからであると信次は言われています。

稲荷大明神はあの世の天使の役柄です。

決して狐ではなく、五国豊饒の神として地上の善なる人たちを助けたり、商売繁盛にも力を貸してくれます。

もちろん、天使が直接手を下すというより、天使の手足となって働く狐たち（使い姫）がその役になっています。

そのため、お稲荷様を拝み、念願が叶ったら礼をいい天使のもとへ帰ってもらえばいいが、人間は欲が深いので、社をつくり年中頼み込

むということになるので、その内に動物の本性を現わし、怒り出し家の中を不調和にしていくのです。外国には蛇の信仰が多いようだ、

と。

昭和四十九年八月十八日「仏陀の注意、現証、憑依霊を救う」東京

九月

演題「釈尊の成道」

日時場所不詳

同じく九月

千葉の教育会館の講演会が終り、信次師を囲んで二十名程で夕食会が催され、講師の一人、渡辺氏も出席され

て、こう記述されています。

GLAの混乱の背景になるもの

このとき、ふと、信次師が

「GLAの三大事件というのがありましてね」

と話し始められたといいます。

「まず、去年のI事件」

それは、この一、二年で男性の有力な過去世を持った人（園頭会長）が出てきた為に、それまでは現証指導という、華々しく活躍し

ていた女性が、ひがんだか、ねたんで起したトラブルである。

「次にW事件です」

これは信次先生の分身と過去世で兄弟関係にあり、ある地方本部の設立に大変功勞のあった人だったが、ワンマン社長の性格丸出しで、

運営上、将来に問題が残りそうだったので信次先生がうまく処罰した件である。

「で、三つ目は」

「はいそれは、あと二年半すると起ります。前の二つとは比較にならぬ大事件です。そして、その事件を通じて、本物とにせ者とがふる

いにかけるのです」

と信次師は重大な予告をされたというのです。

（このとき信次師は、二年半後の昭和五十二年に本物と偽者がふるいにかける事件が起こると予告されていますが、これは後述する

ミカエル宣言にまつわるGLAの混乱でしょうか。）

同じく九月

九月二十日から二十二日の盛岡の研修会に、渡辺氏は信次師のお供をされたというのです。

そのとき、信次師たちの車が長いデモ行進にさえぎられ、幾度となく進行をはばまれると、あの、人を惹きつけずにはいない温顔の信次師が、顔をしかめて、

「困ったことですね」

「闘争のなかに調和はありません」

と独言のようにつぶやかれたというのです。

盛岡の研修会は、はじめは「つなぎ温泉」で、次は盛岡の公会堂での講演会の予定で、渡辺氏は持ち時間、三十分間の信次師の前座を

つとめることになっていたというのです。

そこで、開演前、控え室に渡辺氏が行かれると、ある講師と、ある特定の人物のことをしきりに話をしていた信次師が、

「渡辺さん、縁なき衆生は度し難しなんですよ」、

「これだけ言っても、まだわからないのかと、説いても説いても結局駄目な人は、駄目なんですよ」

と念を押すように信次師は言われたというのです。

昭和四十九年九月七日「法帰依について、各講師との対話」関西

九月八日「心の法則、正法と現代宗教、質疑、現証」関西

九月十五日「人生の原点」千葉

九月二十日～二十二日「盛岡研修会」盛岡

九月二十三日「般若心経について」東京

十月

十月十三日

大阪講演会

信次師は

「靈道を開くことを目的として八正道をやるのではない、日常生活に行ずることが尊いのです。」

そして講師達に向けて、

「あなた達は、ぼくが説くことを、細かく日常生活に密着するように話をしなさい」

と言われます。

同じく十月

信次師の高弟の一人、園頭会長は「なぜ、お釈迦様は二千五百年して日本に生まれることを予言されるのでしょうか」、

と信次師に質問されており、その解答が次のジャブドバーです。

「ジャブドバー」

高橋信次

ある方からこんな質問が来たので今回はそれに答えることにしよう。

質問の要旨は、ゴードマ・ブッタは、なぜ日本を再生の地としたか、どうしてアメリカや他国を選ばなかったか、ということです。

一口でいえば、仏教、正法が伝えられやすいからでありました。

二千五百有余年前に、釈迦は、ジャブドバー（東方の国の、ケントマティー（都会）において、ふたたび正法流布を行うと弟子たちに

宣言しました。

どうしてこのような宣言になったかといえますと、今日の世界事情がどのように動き、人類の意識がどうかわかっていくか、ということ

が、ブッタには理解されていたからです。

まずこのことが第一点。

第二点は、正法を再興する場合の地理的条件が加味されたのです。

世界の交流がはじまったのはせいぜいここ百年ぐらいの間です。それまではごく一部の要人、商人を除いては、ほとんど他国との交渉を

持つことがありませんでした。また持てなかったのです。

正法が流布されていくには、言語や地理的条件が当然考慮されます。

第三点は、正法を理解するにはそれを受け入れる基礎的土壌が必要です。

伝統や風習が異なり、ものの考え方に大きなへだたりがある場合は、正法を突然持ち込んでも、これを咀嚼するのにかなりの時間が要り

ます。

しかし日本における仏教の歴史は古く、そして伝教大師が法華経を中国から持ち込むことによって、仏教は定着したのです。

その後、ここへくるまでには、現象界の状況が絶えず見守られ、実在界で計画されて来たものです。

それゆえ、ブッタの公約は、必然の形をとって現在に至っているわけなのです。

第三者からみると、アメリカやヨーロッパでも、と思われるでしょうが、右の事情を参酌すればおのずと理解されてくるでしょう。

正法流布は、こうした計画性の下に進められてきているのです、

と。

同じく十月

園頭広周会長が、ある人に宛てた昭四十九年十月十五日付の書簡より要約してみますと、この当時の様子がよくわかります。

「合掌、十九日から長野県の奥志賀高原での特別研修に出席するために、十八日に上京します。

来年一月に高橋先生がアメリカに行かれるという話は延期になるということです。

高橋先生は、早く指導者養成をしなければとしばしば言われるようになりました。

また講師の中には

「守護霊に聞いてみます」

とか

「あなたの守護霊がこうっています」

とかいって、実際には守護霊が見えるのでもないのに、さも守護霊が見えるかのように装って、自分の霊能を誇示するかのよう指導し

ている講師がおります。

これは本当ではありません。

引用した書簡は、神奈川県で会員が増え、世話役をしていた「ある人」に個人指導を頼む人が増えてきます。そのために、

「霊道を開いていない者は、個人指導をしてはならない」

という通達がG L A本部事務局長名で出されて、そのことに対して書かれた手紙です。

この時期のG L Aの様子が垣間見れましょう。

十月十九日

長野県奥志賀高原における幹部特別研修会

この時、信次師は

「ソクラテスは毛沢東として生まれ変わった」

と言いつ残していられます。

さらに、

「園頭さん、僕は今のG L Aをつぶしてもかまわないと思っています。

東京本部の講師達は少しも勉強をしません。」

と。

そして、

この特別研修の時、信次師は実在界・あの世について話していられます。

「ブッダはおもにインドで生活しましたから、ブッタの天上界の住まいはインドの上空に、また、イエス様の住まいは、今のイスラエル

の上空にあります。

インドの上空に釈迦の宮殿があり、その宮殿の番人をしていたのが園頭さん、あなただった。

この人はきびしい人でね、ぼくでも時々叱られることがあった。法の番人、それがあなたの使命なんですよ」、

と。

園頭会長は法の番人であられたというのです。

法律は人間がつくり出したもので、時と場所によって変えられます。

しかし、ここでいう法とは、人間によって変えることの出来ない神理です。

園頭会長は、イエスの時代のガブリエル、宗教改革のカルバンといわれていられますので、だから、法を歪める人には特に厳しいのかも

知れません。

この特別研修の時、信次師は途中で車を止めさせて、弟子達にもぎ立てのリンゴを買って配られたというのです。

更に信次師は

「ソ連は悪魔の動かしている国ですからね」

と言われた。

また、信次師は

「如来とか菩薩とか、光の指導霊は、自分で自分のことを言わないのです。自然に人が言ってくれるのです。自分から言うのは、ニセモノ

ノが多いのです」

と告げられています。

東京、中野のTさん夫婦のはなし

ある時、Tさんは信次師の個人指導を受けられたというのです。

信次師はこう言われます。

「あなたはすぐ腹を立てますね、そして、おかしいものを祭っていますね。あなたの身体を大きな蛇が取り巻いている。こんなおかしい

信仰をされていてはいけませんね」

と。

そのようなことがあって数年後、奥さんが脳卒中で入院。Tさんが、夜、坐っていられると

「二週間」

という声がします。

二週間したら快復するのか、或は、それまでの命かと思われたというのです。

正法の生き方に従い、正法を念じる以外にないと静かに反省されると、

そうしたら、二週間したらピタリと治ってしまったというのです。

同じく十月

十月のこと。G L A 関西本部での講演が始まる前、控え室に入って来られた信次師が

「園頭さん、如来は教の大綱を説く。菩薩は、如来が説いた教えを日常生活にどう活かすかを説くのです。しかし、如来がいなくなった

ら菩薩も教の大綱を説かなければならないのです」

と、言われます。

また、

「如来は、未来のこともすべて見通す力を持つのです。日本に生まれるのを予言したのは、二千五百年経った時に、日本が世界に大きな

影響力を持ち、正法を説くにふさわしい国になることがわかっていたからです」

と語られています。

十月のある日

生駒の三鶴山荘に泊った信次師と園頭会長は、中秋の名月の露天風呂でのこと、信次師はこう言われます。

「園頭さん、ホー今度も、インドの時と同じように九つ違いですか。僕達が天上界で、今度は誰がどこに生まれるかを決めたのは、寛永

二年でしたね。北海道にと思ったが遠すぎる。それで、インドのカピラに似ている長野を選んで、そして、次に父と母を選んで、ま

ず、その父母になって下さる方が先に生まれるということになった。」

と。

さらに、

「徳川幕府の体制のままでは正法は説けない。そこで、徳川幕府を倒して天皇制にもどすために、北畠親房に『神皇正統記』を書かせ、

勤皇思想を高めることにして、明治維新をやらせた。

僕の分身は木戸孝允として、園頭さん、あなたの分身は西郷隆盛として鹿児島に出た」

と信次師は語られます。

また、しばらく沈黙が続いて、

「竹林精舎のあそこの所に温泉がありましたね。伝道から帰って来る途中で、突然雨が降り出して、赤土の土埃りがポコポコとなった所

に、大粒の雨粒が落ちると、小さくポコッと土煙りが立って、足は埃りだらけになる。それをあの温泉で洗い落としていた。一度インド

へ行って見たいものですね」、

と。

そして、また沈黙が続きます。

このように、インドでの回想が二人でなされたというのです。

竹林精舎の南に、今も温泉があって、ヒンズー教徒とイスラム教徒の入る湯は別々になっているようです。

昭和四十九年十月十二日「ノイローゼ」

十月十三日「触らぬ神に祟りなし、質疑応答」関西

十月二十一日特別禅定東京

十月二十二日「志賀高原にての談話」長野

十月二十六日東京講演会

十一月

十一月の大阪講演でのこと。

信次師は

「園頭さん、今日の講演はインドの時と同じようなやり方で、私に代表質問して下さい。それに私が答えるという形で、今日の講演をや

りましょうか」

と。

そこで、園頭会長は

「弥勒菩薩下生経によると、弥勒菩薩が生まれ変わって、出て来られるように伝えられていますが、本当はどのように伝えられたのでし

ょうか」

と。

信次師は次のように語られています。

「お釈迦様は東の国、日本に生まれて法を説くと予言して亡くなったのですが、人々に書き遺す役目を持った弥勒菩薩は正しく書き遺す

が、お釈迦様は再び生まれ変わってこられることはないだろうと後世の人が解釈して、削除したために、弥勒菩薩だけが生まれてくると

伝えられてしまった」

と言い残していられます。

十一月十六日

宮崎講演会 参加六百名

十一月十七日

福岡市東光中学校に於ける講演会 参加千名

宣伝カーによる放送文の一例

「街頭のみなさん、こちらはG L A西日本本部の宣伝班であります。ベストセラーをつづける『心の原点』『縁生の舟』（改題『心の発

見』、『原説般若心経』）の著者、高橋信次先生の大講演会が、十一月十七日午後一時より、東光中学校体育館で開催されます。

人々が「心の原点」を見失った時から人生を明るく豊かなものにするために、十一月十七日午後一時よりの東光中学校での講演会にぜひ

お出てください」

というものでした。

ポスター三百枚、立看板五十、ビラ三万枚、葉書五百枚が配布され、約千名の人が集っています。

講演会の様子をあげます。

真光文明教団の「手かざし」で眼が見えなくなっていた子供は、眼に動物霊が憑依していたのでした。

信次師が、その憑依している蛇の霊を取り除かれると、眼が見えるようになり、不調和な信仰は厳に慎まなければならないという思いで

聴衆者は帰っていかれたというのです。

昭和四十九年 十一月九日「精妙な心、心と人生（幽霊）、質疑応答」関西

十一月十日「病と憑依の実例、質疑応答」関西

十一月十六日「座談会」宮崎

十一月十七日「現代宗教のひずみ」福岡

十二月

年の暮れ

湘南地方の会員が、小田原で信次師の講演会を開きたいという強い要望で、昭和五十年三月の信次師の講演に向けて準備されていたとい

うのです。

湘南地方全体で会員が二十名ほどであったそうです。

相談を受けられた園頭会長は、三月に向けての宣伝講演を実行され、千名の人が集まり盛会だったようです。

そのとき新宿から来た人に奇跡が起り、新宿で会長の講演会が三回行われましたが、その頃、千葉の船橋から協力される人があらわれ、

船橋で講演会が開かれようとする直前、船橋の責任者が、信次の実弟の興和本部事務局に呼ばれ、

「GLA本部に講師もいる、なんで九州の」

と、中止されたと会長は激白されています。

十二月になると、

この頃 信次師は、

「園頭さん、僕はもう全て話はしたし、書くことは書いた。もう話すこともなくなった。今日はなんの話をしてしょうか」

と言って登壇されていたといえます。

昭和四十九年のある日、中丸薫氏のこと

明治天皇の落胤の娘であられる中丸薫氏が、大阪の講演会に信次師を訪ねておられます。

中丸氏は個人的外交官として、諸外国の王、大統領、首相と直接に逢うことの出来る人なのです。

中近東のオーマンの砂漠を走っていられる時、突如として天から、

「祈れ」、

と声がしたというのです。

車から降りて、砂の上にひざまづいた時、再び、

「身につけている宝石、貴金属はみなはずせ」、

という声がしたので、しばらく祈って目を明けると、何百万もする宝石、貴金属がみな失くっていたそうです。

そこで氏はあちこち探されたが、見つからなかったというのです。

日本に帰って来られて、信次師のことを知られた氏は、八起ビルを訪ねられたというのです。

すると、何も知られない筈の信次師は、いきなり

「オーマンでは大変でしたネ」

と指摘されたといいます。

そのようなことがあって、正法に帰依された人です。

その中丸氏が、

この講演会の信次師を訪ねられる直前、園頭会長は信次師に質問されていました。

その質問とは、

「世界が平和になるためには、ユダヤのフリーメーソンの問題を解決しておかなければならないと考えますが...」、

信次師は、

「今はまだ言う時ではない」、

と言われると、中丸氏も、

「今は言わない方がよい」、

と。

その日の講演で信次師は、

「これから共産圏に飢饉が起る。日本をダメにしようと計画した国は、その内部から崩壊することになる」、

と。

それでは、中丸氏が自著にどう書いているか見てみましょう。

中丸氏の不思議な体験

中丸氏が信次師に会われたのは、信次師の『心の原点』を読まれて感銘を受けてからだったということです。

信次師は氏に

「カイゼル髭をたくわえた高貴なご老人があなたに寄り添っているのが見えますが」

「あ！それは父の堀川辰吉郎です」

そういうことがあった後の一九七六年（昭和五十一年）三月、氏はアラブ首長国連邦を訪ねていられたといいます。

「サイド国王に謁見した夜、祈りたい気分で、秘書と二人で海岸へ車を走らせ、海辺に腰を下ろして沈思黙考していると、突然、雷光が

走った。我に返ると大粒の雨に全身ずぶ濡れになっていた。慌てて立ちあがり、はずしていた三つのダイヤをバッグに入れると待たせて

いた車に走った。車が動き出すと激しい雷雨は嘘のようにやみ、確かに入れた筈のダイヤなくなっていて、

「あなたにはダイヤなどいらぬ...心の中で輝いている」

と声が響いたというのです。

ユリゲラーのこと

昭和四十九年は、

ユリゲラーのスプーン曲げにはじまる超能力ブームでしたが、信次師は

「ユリゲラーは動物霊が支配している。正しく見ることです」

と言っています。

当時の週刊誌によると、

「気分がコロコロ変わったり、気むづかし家で大変に困った」

等と書かれていますが、超能力は、あの世の霊の協力によってなされます。ユリゲラーは動物霊の協力によって超能力を発揮していたと

いうのです。

超能力者という人を正しく見て、超能力にあこがれてはいけません。

昭和四十九年十二月七日「一年の反省と真の法灯」関西

十二月八日「昭和四十九年を省みて、質疑応答」

昭和四十九年、日時不詳の高橋信次師の講演リストをあげます。

「大自然と人間との関係」東京八起ビル

「神理入門、ブラジルの友へ」東京

「志賀高原談話、各先生と信次先生との対話」場所不詳

「個人指導」場所不詳

「不滅の生命」場所不詳

Home

昭和五十年（一九七五）（信次師四十八歳）

一月

一月二十一日

経営研究会発会式

いかにして、宗教を経済の中に採り入れるか、正法による社員教育もこれから必要であるという主旨によつて、信次師は経営研究会を

つくっていられます。

こうして、信次師は経営の中の人間教育として、正法が入っていかなければならないという考えのもとに「人間道科学研究所」所長と

いう肩書きで講演をしていられます。

宗教という言葉を取り離して、人間道科学研究所・所長 高橋信次、というわけです。

月刊『G L A』の中に「正法と経済」について多くの記述があります。

「正法と経済、その目的とあり方」

一九七三（昭和四十八）年十一月号

「本稿は、さまざまに変化し、目的を見失いつつある現代経済の姿にメスを加えながら、正法に照らした経済の在り方、経済とは一体何

であるのか人間は経済の奉仕者なのか、それとも経済が人間の生活を豊かにするためにあるのか、未来社会の展望などにわたって論を進

めてみたいと思う。

まず経済の概念について考えてみよう。

辞書によると、経済とは金を儲けたり、使ったりする各種の行為又は状態をいう、としている。

経済学は人間の欲望充足のための手段として経済を見、ここに焦点を合わせながら、学問としての論理を展開する。

現実の経済行為は、辞書や経済学のとらえ方を裏書きするかのよう激しく、冷酷なまでに動いている。

それこそ、政治も、教育も、科学も、労働も、文化も、現実の経済の動きの前には手も足も出せず、これに翻弄されながらも、かろうじ

て命脈を保っているといえるようだ。

何をするのも金、生きるも金、いくなれば経済の御厄介にならぬものとなないのが現実である云々」、

と。...

これは一九七六年一月まで連載されますが、さらに一年前の一九七五年一月二十一日から九月十九日まで六回にわたって説かれた「真の

経営者の道」は、正法による理想世界を建設するためには、正業（正しく働く）による経済革命、経営革命の行なわれなければならない

とする目的をもって説かれたのです。

一月

関西新年講演会

演題「道」

「おめでとうございます。関西本部で講演するのもこれで四年目の新春を迎えました。昔の云々。」

日本の経済破綻

「自由諸国に於けるイタリーの経済破綻を知っているでしょう。日本はこのまま行ったらイタリー以上の苦境に立たせられるでしょ

う。」、

さらに、

「都合の悪いのがいて、我々のことを祈るわけですね、こちらは何も無いんですから。反作用というものは、心の中の念も同じ結果を

呼ぶということを知らなくてははいけません。

念ずるということは、やはり、相手の心のきれいな人を念じれば逆に念じた方がやられます。また、相手の方が不調和で、祈る方も不調

和なら、それを相手は完全に受けて現象化されます。

反射しちゃいます。

ストーブと同じですね。ですから、やるのもけっこう、」

昭和五十年一月五日東京新年講演会

二月

二月九日

信次師は毎月の定期講演会のため東京を発ち、目的地の新大阪に着くと、会場にはもう何千という人が集っていた。

講演は「人の道」についてである。

講演が一時間半、質疑応答が二時間半、通算四時間休みなく続けられて、講演が終ると、ひとりの面会人が信次師を訪ねて来ていた。

憑依された脳内出血の例

「私は神奈川のKと申します。

私の弟は多くの人々に神の道を説いていますが、急に病気になり品川の病院に入院しています。

医者は脳内出血と申して、手術を明日にでもと言っていますが、どうしたら良いでしょうか」、

と持参した写真を信次師に見せると、写真の中に魔王や動物霊の姿がはっきりと写っていて、これには皆驚きます。

「手術はちょっと待って下さい、明日病院に行ってみましょう」

と信次師は返事をすると、翌日病院へ急行されます。

部屋には「面会謝絶」とあったが、信次師が病室にはいって見ると頭から腰にかけて完全に動物霊が憑依しているのが見えたというので

す。

K氏の弟は時々ケイレンをしていたので、信次に同行した僧侶の村上氏が、汗を流しながら動物霊を除いていられます。

信次師は心の中で、当人の傍にいる魔王に神の子としての道を説くと、三十分ほど経った時、意識不明がよみがえり、自分でトイレに立

ったといい、こうして、K氏の弟は日に日に回復に向い、手術することもなく回復されたので、医者も信次師達の処置を不思議がって

たというのです。

K氏の弟は退院後、信次師の事務所を訪ねます。

改めて、信次師は、こう言われます。

「あなたは神につかえる身と思っているが、自分自身の本性を知ることなく、他人を導くことは危険この上もない」

と。

「私は家に祭ってある神様を信じて、そのお告げを教えておりました。」、

「その神とやらをあなたの目で見ましたか、話しましたか」、

と信次師は質問されます。

「見てはいないが、胸のあたりから聞えてくるのです」、

「イライラしたことは」、

「ハイ自分であって自分でないような、たびたびイライラしました」、

「水をかぶれば体は確かに清浄になっても、心はどうでしょう」

と信次師は尋ねられた。

「心を清浄にするにはどうすれば良いのでしょうか」

「あなたが日頃、思っていること、行っていることを、正しい規準に照らして生活を改めてゆくことです」

と信次師は話されるとK氏の弟は頭を垂れて聞いているのでした。

昭和五十年二月一日「神理入門、霊の話」東京

二月八日「肉体と魂」関西

二月九日「人の道」関西

二月十一心の原点、現証」京都

三月

三月九日

関西本部講演会

演題「正しい思念と行為」

「永遠の生命と言いましても、今皆様自身は、永遠の生命の過程、最も厳しい不安定な固体的な物質世界に於いて、先祖代々伝わってき

たところの云々。」、

と。

三月十五日

小田原講演会開る。

この時の講演を要約するとこうなります。

ノイローゼ、気違い

「ノイローゼ、気違いと言われる人は、これは全んど脳細胞の病気ではありません。

心の状態が地獄界に通じて、本来、肉体を支配すべき一人が、自分自身を他人様に譲り渡してしまった状態なのです。

人格が、ころっと変わってしまうのです。

或いは、今、語っておっても、次にはもう、ガラリと性格が変わってしまう人達があるでしょう。」

酒飲み、呑み助、酔狂

「或いは、お酒を飲む。飲まない時と、飲んだ時と心が極端にガラッと変わって、人格が変わっている人達がいるでしょう。

こういう人々も、同じように、不調和な世界の住人達に憑依されて、船頭さんが代わってしまうのです。」

心、想念はエネルギー

「我々の思う、想念というものはエネルギーなのです。我々自身の心に、相手を恨む心を持ったならば、その恨みの心は、そのエネルギー

ーは、その振動は相手の心に通じ、相手の心が美しければ、自分に反作用となって返ってくるものなのです。

眼に見えないがゆえに、我々はないがしろにしております。」

お金と物質

「お金とか物質とかいうものは、我々の生きる上に於て、必要なだけ存在すればいいのです。

ところが、我々の欲望は限りなく広がり、我々の欲望は無限大に外に向いていきます。

よく、ある人は、労使の闘争、上層と下部層の闘争の中に、文明は発達していくのだと説いている思想があります。」

人類のための文明

「しからば、我々は文明のために、人類はあるのでしょうか。そうではなく人類のために文明があるのです。

その錯覚を起して、心を常に格闘の中に、間違っただ方向に進んでいる人達もいます。

或いは、間違っただ宗教を人々に教えて、そして自分自身の欲望を満たそうとしている人達もあります。

しかし、やがて彼等はその罪を自分で償う時が来るのです。」、

と。

三月二十二～二十四日

宮崎研修会

参加者四百六十名

演題「正法と現代宗教」

「今年もこの、美しい自然の中で研修会を開くことが出来ましたことを、本当にうれしく思います。

今からの講演の内容は「現代宗教と正法」という題について御説明してみたいと思います。

この中にも、一生懸命に神様を拝んで、神様と言われる方が皆さんの肉体を通して出てこられる人もいますはずで

す。或いは又、現代の宗教の中に、一生懸命やってG L Aの研修会を一つ見てこようという人も何人かいます。

ごゆっくり、そういう人は見ていて下さい。まず、皆さんに神様というのは云々。」

卑弥呼のこと

「この人（高橋佳子氏）は過去世において、卑弥呼であったことを思い出しております。

奄美大島から来られたこの二人のご婦人は、卑弥呼の女官をしていたのです。

東京でデザイナーをしている○摩堂さん、映画俳優の○丸忠雄氏の夫人の中丸薫さんは、ともに卑弥呼の大臣をしていた人達です。」

大日如来は天照大神

「卑弥呼が邪馬台国の時、過去世を思い出し、インドで大日如来をなつかしんで祭っていたのです。

その大日如来がのちに天照大神として祭られることになったのです」、

と。

三月二十六日

北九州市小倉、毎日会館ホールで講演会開かる。毎日新聞、小倉商工会議所の機関紙に広告さる。

同じく三月

それは昭和五十年の三月のことでした。

渡辺氏（前述）は、G L A本部の事務所へ立ち寄られた。

その時、信次師の末弟の興和氏が、

「渡辺さん、何時ごろから手伝ってもらえますか」

と言われたといひます。

びっくりしてしまわれて適当な返事をして渡辺氏はその場は帰られます。

ちょうどこの話のあった三月に、宮崎県の青島で研修会があったので、

渡辺氏は思い切って信次師の部屋を訪ねられます。

そして、興和氏から話があったこと、お手伝いの心の準備があること等を話されると信次師は少し考えていられたのですが、

「今は、早いですね。二年後です。（註・昭和五十二年）」

と答えられたというのです。

信次師は、その時、G L A誌八月号に載せる「釈迦伝」（のち、『人間釈迦』として出版される）の執筆をされていたというのです。

渡辺氏は信次師が多忙な身でありながら、研修会のちょっとした合間も利用して筆をとっている姿に感心していると、信次師は

「渡辺さん、四十五年分も書くことはあるんですから、いくらでも書き溜めができるのですよ」

と笑って言われたというのです。

昭和五十年 三月八日「心の整理、実地指導、真の自分とは、反省禅定、反省の実修」関西青年部

三月十日「関西本部組織宣伝部へのお話」関西

三月十五日 小田原講演会

三月二十二日～二十四日「正法と現代宗教、現証、質疑応答」青島・宮崎研修会

三月二十六日「北九州講演会」小倉

四月

四月五日

日比谷公会堂

G L A 六周年記念講演会

演題「人間とは」

「只今、紹介にあづかりました高橋信次であります。本日の題名は「人間とは何か」我々はややもすると肉体を持った自分自身ですら

云々。

我々は大空を眺めます、夜は星が一杯あります。我々の見える世界は銀河系宇宙なのです。

この宇宙の中に、しかも小さな地球という宇宙船の中に四十数億（現在は六十億）の万物の霊長がひしめき合い、ある者は闘争と破壊を

依然として繰り返しております。

ある者は宗派の争い、愚かしいことです、お天とう様は一つです。この地球という神の身体の中の一部を、我々はその環境の中で生活

しておるのです。

皆さん自身が、この地球上で、その肉体舟、先祖代々伝わってきたところの、その肉体舟に乗って、我々は、この五官を通してあらゆる

体験をしております云々。

四月六日

神田共立講堂にて講演会

四月十～十二日

宮崎・青島国民宿舎にて研修会

信次師の経営される「高電工業」のW氏が、ビデオ録画に来られて、

「東京は高橋先生が一つ一つ指示されないと動きませんが、九州はその点、よく動きますね。このやり方を全国の人に学ばせるといい

ですね」

と言われたといたします。

この時期のG L Aの周辺

四月十六日付の園頭会長の書簡から、この当時のG L Aの様子を見てみましょう。

「十日夜、自宅に岡山の会員から直接、電話がありました。

関西本部のある講師が、

「あなたには蛇がついている」、

「あなたは〇〇が憑いている」、

と言われて気味が悪くなりました。そんなに皆んなに憑いているものでしょうか」、

と。

十一日の宮崎研修会に参加した人が、会長の自宅を訪ねられた時、こう言ったというのです。

「関西の人と同室になったら、その人がオーラーが見える、守護霊が見えるとか、守護霊がこういつている」、

という話ばかりで頭がへんになりました」、

というのです。

このようなG L Aの内部の傾向を心配された園頭会長は、東大阪、関西本部に於ける講演会の終了後、信次師と話し合っておられます。

その時、信次は次のように言われたというのです。

「正法は人々の心に安らぎを与えるものですから、たとえ、霊を見ることが出来たとしても、不用意にそのことを告げて、その人の心

に不安や恐怖心を与えることはよくありません。

憑いているものが見えても、直接的には言わず

「あなたはこういう心を持ちなさい。そうすればよくなります」

という指導をしないといけません。憑いているというなら、その憑いているものを離して、その人をよくする力を持っている者だけがい

うべきで、実は見えてもいないのに、霊が憑いていると言って不安と恐怖心だけをまき散らしている人が出てきたことは、困ったことで

す。正法を実践するのが、人生の目的です」、

と。

そして、さらに

「一〇%の現在意識で

「はたして、これは本当だろうか」

としっかり確かめることである、ということです。

正法を説くものは、常識も豊かでなといけません。

この世の人達を救うのですから、この世の人達から

「なるほど」

と思われるような言葉遣い、態度、知識、教養などを身につけないといい指導者にはなれません。

講師といわれる人達の中に、非常識な人がいるのは残念です。

特にいけないのは霊道を開いているという女の人達の行儀の悪さです。

世間の常識を重んずる人達は、そういう非常識な人達の言動を見て、それだけで正法の話しを聞こうとは思わないでしょう。」、

と信次師は注意を促されています。

また、講師達に対して、信次師は

「もう少し常識を勉強なさい、しっかり本を読みなさい」、

とも言っています

Home

四月の頃

京都・中心山荘での研修会

昭和四十九年、信次は、古代インドの時代の迦葉といわれた人が台湾に生まれ変わっているという話を良くしていられたというので

す。その人が日本へ来られて色々なことが起きているので、参考にさせていただきます。

その辺の事情を述べるために、渡辺氏に登場いただきます。

「春に、台湾からSという人が来られました。

若い頃から法華経の勉強をされて、来日された前の年に『餓鬼道』改題『愛は憎しみを越えて』という本を読んでいた方で、

高橋先生は、この本をお出しになる前から、この本を読めば必ず泣き出しますよとおっしゃっていました。

読み終って、さっそく高橋先生にSさんは手紙を出されました。

ことあるごとに高橋先生はお話ししになっていましたから良く憶えています。

そうして、文通しながら、先生は意識で台北まで行って、たびたび指導なさいました。

ですから、台北に行かれないまでも高橋先生は、Sさんのことをよくおわかりになっていました。

そうこうする内にSさんは、二千五百年前に先生に教えを受けている自分の姿を見てしまった。

「今、あの人は自分のことを知りましたヨ」、

と先生が側近の方にもらした一週間後に、その時の感激を伝えてSさんから手紙が来たそうです。

一時は、台北でもちきりでした。そのようなことがあって、確か中京と関西の合同研修会だったと思いますが、京都の中心山荘という

ところでの研修会に、十日間の観光旅行から合流されました。

その時、私もお会いしました、

ところが台湾で独自にやって来られただけに、こちらとは、行き方がだいぶ違っていたようで、いろいろと波紋が生じていたらしいので

す。

そんなことで、研修会の始まる前の日に、京都のホテルの一室で高橋先生が、Sさん他三名の幹部を呼んでお言葉を賜りました。

「法を依りどころにせよ」、

というお言葉です。

これは同席した三人のうち一人の細野先生から翌日伺い、また数日後、先生からも直に伺いました。

台湾には私も行ったことがありますので、直に親しくなりました。

研修会も終り、東京への新幹線の中でも同席しました。

もっぱら私とSさんだけが話をするようになりました。

台湾という所は、中共との関係で、大変思想の統制の厳しい国で、心の教も内地流にそのまま説いたら思想とみなされ、一つの哲学、

つまり意識科学として苦勞して説かなければならない、

と。

高橋先生がよく引用されるアインシュタインの $E=mc^2$ にしても、三十年前に学んだ、その一つ前のローレンツの変換式、式自体がアイ

ンシュタインの式より複雑ですから、それなりにこじつけが出来る。

それから数日後、台湾に帰られるというので羽田まで見送りにまいりました。

そうしたら高橋先生と一栄先生もお見えになり、一度帰りかけた高橋先生が、またこちらに戻っていらっしゃるのです。

私のところへつつかつかと寄っていらっしゃって

「この間の式は間違っていますから気をつけて下さい」、

とおっしゃるのです。

新幹線では、先生は私より三つほど前の席におられたのですが、私どもの会話の一部始終をよくご存じでいらっしやいました。

「はい。存じております。あれはローレンツ変換ですね」、

「よく気づかれました。そうなんです。新幹線の中だし、人前で指摘することもできず、本当に困りました。ターチンマラーという魔が

おりましてね。誠に巧みに正法を説くのです。

特に科学的な手法を駆使しますから、科学に強い人ほどねられます」

「問答無用で押しつけるような態度でした。」

「そうです。それが特徴です。関西でも色々なことがありましてね」

と先生は私に色々のできごとをお話しして下さいました。」、

と。

同じく、この辺の事情を別の視点から見てみよう。

S氏のこと(パート2)

園頭会長は次のように記述されているので参照していただきましょう。

「京都の中心山荘で研修会があることになり、葵さんが出席されることになりました。葵さんは日本に来られる直前に魔に支配されて

しまいました。

それで私が、関西本部長中谷氏に葵さんはおかしくなっているから気をつけるようにと言っていたのですが、葵さんから

『悪魔をつかまえる法』

というのを伝授されたと言って完全に欺されてしまいました。

研修会が終って大阪天王寺のステーションホテルに泊った時、葵さんは高橋先生から、

「あなたは霊能力に興味を持ってはいけない。毎日毎日の生活を大事にきなさい。関西本部長、あなたも葵さんに欺されましたね」、

と注意されたのでした。」、

と。

中谷氏は悪魔をつかまえる方法を伝授されたといわれますが、それは、「ハイ！」向うから悪魔がやって来ました。それでは、つかまえ

ますよ」、

と、両手でパチンと、蠅でも掴むようなものだったというのです。

魔の跳梁

さらに、園頭会長は、この事件によって、悪魔はG L Aの講師達をねらってきていることを感じられ、特に若い講師達に、地位欲、名

誉欲にとらわれ、過去世の名をひけらかさないようにと、注意を促していられます。

話は少し飛びますが、信次師が昇天された直後、葵氏は五ミリ程の厚さの小冊子を発行していられます。

開いてみると、聖徳太子も伝教大師も源頼朝も徳川家康も西郷隆盛も、みな自分の分身である等と書いてあるというのです。

園頭会長は、葵氏が地位欲、名誉欲のとりこになったなど、残念に思っている頃、葵氏 of 消息を伝える人があり、昭和五十二年にな

ると精神病院に入院されたという情報が伝えられ、その後、情報もプツリと消えていましたが、その後の情報では、その会報には囲碁

の打ち方などが書かれていたというのです。

たとえば、過去世で名のあった人でも、今世の生き方によってはタダの人以下と思われれます。

このS氏は、インドのお釈迦様時代は、お釈迦様が亡くなると釈迦教団の統括者といわれた人なのにです。

正法が出現すると、魔が競い立つと言われれますが、正法が広がってこの世界が光明に満されると、魔の足場がくずされますので、魔も必

死になって抵抗するのでしょうか。

霊能力だけを求め、心が欲望に満たされると、魔はその人を支配しようと、近づいてくるのです。

魔がその人を支配しようとする時はまず正法を説き、もっともらしいことを言うのです。そして、徐々に自分の方に引き入れます。十の

うち九の正しさで信用させ、残りの一つで人を狂わせるというのです。

昭和五十年四月五日「G L A六周年記念講演会、人間とは」日比谷公会堂

四月六日「講演会」神田共立講堂

四月十日～十二日「宮崎・青島研修会」青島国民宿舎

四月日時不詳「研修会」京都 中心山荘

四月二十九日「講演会」沖縄（那覇）

五月、

G L A 関西本部から『高橋信次講演集』が発刊される。（限定非売品）

昭和五十年五月五日「人生とは何か」長野白樺湖

五月十日「この世とあの世」関西

五月二十二日「講演会」佐賀

五月二十三日「講演会」福岡県二日市

五月二十五日「釈迦の成道、正法と現代宗教」福岡

五月二十五日「西日本本部設立記念祝賀会」

六月

昭和五十年六月八日「大自然と人生」東京

六月十三日「人生を如何に生きるか、質疑応答」東京

六月十四日「反省」関西

六月十五日大阪講演会

六月二十日～二十二日「研修会」京都中心山荘

六月二十六日 東京にて幹部会議

七月

七月六日

金沢講演会

演題「心の原点」

「この北陸地方の中心、文化の都市に於て皆さんの前でお話し出来る機会を与えて下さ云々。

このように講演が始まります。

人生航路の乗り舟であるところの、その肉体の船頭さんが降りた時には、皆さんの耳の穴もあいております、鼻の穴もあいております。

しかし、私達は耳許で自分の悪口を言われても、怒ることすら知らないはずです。

どんな臭いがあってもそれを感知することもできないはずです。

こうなりますと、眠っている時の我々の心、魂というものの価値はどのようになっているのでしょうか。

しかし、肉体の脳細胞の神経線維のそれぞれは、ちゃんと波動を、振動を起しております。

こうなるとやはり、永遠のものというものは一体何でしょう。

皆さんの肉体を支配しているところの舟頭さん、即ち皆さんの魂なのです。

「そんな馬鹿なことはあるか、魂など存在する訳はねえよ」

と、もし皆さんがそのように思うならば、皆さんの脳細胞は、あくまでも物ごとを受信し、送信する一つのコンピューター室にすぎな

いということなのです。

或る医学者達は、物を考えるのは前頭葉だといえます。

それな云々。」、

と。

昭和五十年七月二日「指導者としての正法」東京

七月六日「心の原点」金沢

七月十三日「経営研究会」東京

七月二十日「心の発見、現象転生」山形

八月

八月初旬

長野県志賀高原研修会

参加者七〇〇名

八月十七日

神戸講演会、

神戸国際会館に於いて

演題「人生の意義」

「台風の中を、よくも多くの皆さんが御来場下さいまして、ありがとうございます云々。

その全学連がどちらの方向に行ったかという、彼等は皆、優雅な生活をしている家庭の子息でありながら破壊活動をし、善意な多く

の人々に迷惑をかけています。教えていただくべき先生に感謝の心も失っています。

我々の心は教えて下さった先生に対する、師に対する感謝の心というものは行為で示したものです。

最近はずっと逆の方向に進んでいます。

当時の親は子供を育てる為に一生懸命です。

金儲けと、親子の対話はなく、そうして自分のできなことを、何んとか子供に満して欲しいという欲望が、有名校へとエスカレー

トしていきます。

育てた子供がノイローゼと云々。」、

と。...

この時期のG L Aの様子

園頭会長の書簡より参考にさせていただきます。

「八月二十三日より三日間、中谷関西本部長に九州へ来てもらいました。その時、高橋先生が、東京本部の講師達の現状を憂えていら

れたことを聞きました。

やはり私が案じていた通りだったのです。

だから、自分一人でも、しっかりしなければいけないと思ったのです。 あなたも一つ、真剣に考えてみて下さい。」、

と。

同じく八月

岩手山麓・綱張荘での研修会

一日目 演題「正法と現代宗教・悟りへの道」

二日目 野外反省禅定

先に、園頭会長が心の窓を開かれる様子を述べていますが、次に、北海道に住まわれる菊地氏に登場いただきましょう。

菊地氏は、一九七五（昭五十年）年八月の岩手の綱張荘の研修会に初めて出席されます。

心の窓を開かれて、古代インドの時代、ウパテッサ（舍利弗・シャーリープトラ・現代の園頭広周会長）と一緒に釈迦に帰依されたと

いわれています。

氏が、心の窓を開かれた時の情景を紹介しますとこうなります。

信次師は菊地氏の方を向かれて

「あなた出て来て下さい」、

と声を掛けられたというのです。

氏はおずおずと信次師の前に出られると、

「ほら、そこにお客さんがいるよ」、

と信次師は膝のあたりを指さされます。

菊地氏は、自分にも悪霊がついているのかなと思われたそうです。

すると信次師は、

「どうぞ神様を出して下さい」

と言われます。

「大宇宙大神霊仏よ...」

と信次師は祈りはじめられます。

菊地氏は、黙って目を閉じ静かに聞いている。

そこで信次師は、

「パーティパーティパラカーティー」

と異言で祈り始め、氏に光を入れていられた。

「そこに出ている霊よ、肉体を持っている人の口を通して語りなさい」、

と信次師は何度も呼びかけられるが、しかし、氏の口は開かなかった。

「あなた何んで語らないの」

「肉体を持っている人は心を丸く調和しなさい。イライラしてはいけません。

あなたの心には、ひずみが出来ている」、

と信次師は注意されたというのです。

菊地氏はこう言っています。

「師の長い祈りが続いているうちに、私の心は、だんだんと安らぎ調和されてきた。

大いなる光が体中に満ちあふれてきたように思い始めた時、右耳の下あたりから霊がすーっと肉体に入って来たのを感じた。

「私はこの者の守護神じゃ」

と霊は師に告げる。

「ああ今、肉体を持っている人を支配しました」

と師は参加者に伝えた。

そのうちに突然私の口がひとりで動き始め、古代インド語を語り始めた。

私は何んとも言えない懐かしさで、胸から込みあげてきて、涙を流しながら思わず師に抱きついてしまった。

長い間会えなかった人とめぐり会ったという思いで、止めどなく古代インド語が口から飛び出し、男泣きに泣いていた。

肉体を持っている私には自分で話している古代インド語の意味が分からなかった。

あとで分かったことであるが、本人の心と守護霊の心が調和され、同通していなければ、自分の話している異言の意味が分から

ない」、

と。

そして、研修生全員で、

「快樂に溺れ苦悩に喘ぎ、いろいろな迷いの末、辿りついた悟りの道、これぞ八正道...」、
という八正道讃歌を歌って研修は終わった、というのです。

昭和五十年八月初旬 長野県志賀高原研修会

八月十七日「人生の意義」神戸国際会館

八月日時不詳「正法と現代宗教・悟りへの道、野外反省禅定」岩手綱張荘

九月

GLA本部の情景

八月の岩手の綱張荘の研修会で、心の窓を開かれ菊地氏は、

「心の窓を開いた人は、心の在り方によっては悪霊に憑依される危険もあるので、出来るだけ早く本部に来て下さい」

という信次師の言葉に従って、氏は本部を訪ねていられます。

前もって上京する日時も連絡しておられたといいますが、信次師はどこかの集会に行かれて留守でした。

受付の女性は、受付用紙のようなものを差し出して、来訪の目的を書かせます。

しばらくして、ひどく疲れた様子で、信次師は帰って来られたというのです。

氏が心の窓を開いた後、信次師が意識体で現われたことを告げられると、それは、

「あなたが心の窓を開いた後、どうしているか様子を見に行ったのだ」

と言われます。

信次師は次の集会があるらしく手短かに次のように話していられます。

「何十回も私の著書を読みなさい。まだ、あなたは正法の入口に立っただけで、靈道を開いた後、一番危険なのは、多少あの世が見え

るようになるので、人とは自分は違うのだと増長慢になることだ。私も毎日反省している」

と言われたというのです。

さらに

「正法正法というけれど、本当に正法を身につけている人は、ほとんどいない。私のそばにいても悟れない

ものは悟れないのだ」

と淋しそうに言われた」、

と。

秋、

九州霧島の研修会でのこと

鹿児島空港より、車で二十分ほどの天降川のほとりにある、おりはし旅館が信次師の宿舎でした。

周囲がコンクリート造りのホテルの中で、ここは木造の旅館で、ここの老女将のつくられる、酒ずしが、日本のうまいものの一つに挙

げられており、この静かなたたずまいの旅館で、信次師は研修の疲れをとられたというのです。

中京秋季講演会

演題「自力から他力への道」

「十歳の時から三十二年間、丁度昭和四十三年の七月、信じられないような霊的現象、本来、私は霊的現象というのは、すでに昭和三

十年位から、例えば紙切れ一枚に、ある一つの提起された問題について一心に念力を集中しますと答えが出てまいりました。

しかし、そのような問題がかりに的中したところで、なぜ私にだけ出来るのだろうか、私等はそのようなものを否定しました。

しかし、全然次元の違った世界というところから云々。」、

と。

十月初旬

鹿児島講習会

宮崎講習会

十月十日

高知市社会福祉センター

演題「人生に於ける価値の発見」

「只今、紹介にあづかりました、高橋信次であります。

この美しい自然、緑に包まれた高知市で、お話しが出来ます機会が出来ましたことを、心よりお礼申し上げます。

サテ、私達が、今こうして毎日の生活をしておりますが、人間が生活の中に於いて、色々な喜びや悲しみ、苦しみ...云々」.

と。

この高知市での研修会でのこと、坂本龍馬の像が立つ桂浜を遠く右手に望んだ国民宿舎・海風荘は、信次師が

「ここは環境がよい」

と一泊されたゆかりの地です。

十月二十六日、

熊本講演会は、信次師、入院のために欠席。定席七百名の鶴屋デパートの会場には千名がはいり、消防署の忠告により、入場制限され

るといことが起こります。

堀田和成氏の「母の死と業」、中谷義雄氏「瑞法会教団を挙げて正法に帰依するまで」、園頭広周氏「正法と現代宗教」を各一時間講

演。 信次師の著書がよく売れ、日比谷公会堂よりよく売れたとされています。

昭和五十年十月初旬 鹿児島講習会

十月初旬 宮崎講習会

十月十日 「人生に於ける価値の発見」高知市社会福祉センター

十月十四日「弥勒菩薩下生について、特別講演会」東京

十月二十六日熊本講演会

秋「自力から他力への道」中京秋季講演会

秋、「九州霧島の研修会」

十一月

十一月三十日～十二月二日

熊本研修会

阿蘇白雲山荘に於て。

会費一万二千元

演題「心と肉体の調和」

「健康であることは食事を正しくする。つまり、食事も中道でなくてはなりません。肉体の保全がバランスを欠きます。」

「病気の中には外因性と内因性があり、外因性というのはビールスによって外部から侵入して来たものは現代医学の方が早いよ。」、

「血圧というものは薬でおさえつけていても根本的な治療になりません。医者への指示にしたがって食べ物からなおしていかなければいけ

ません。」

「息ぎれがするぞ〃これはおかしいと思ったら、ふっと自分の心のあり方はどうかな、食べ物はどうかな。」

「食べ物もほどほど。私の心臓さん曰く、あなたの魂の歴史を聞きましたが、コーカサスで生まれた当時は、あなたは百七十歳ぐ

らいまで生きたんですよ。その当時は腹六分でした。」

「食べ物はなるべく少く食べ活動する。運動する。いつでも腹のへっている状態が一番長生きの秘訣です。日本人は食べすぎます。」

「人間は不思議ですね。夜になってからたらふく食べる。ですから脳溢血でこの世を去っちゃうのは大抵、夜だよ。食べたあとの結果

がでてくるんだよ。」

「猿は太陽が沈んだら絶対に物を与えても食べないよ。食べ物というものは、太陽の上っている内に食べるのが最も理想、だから朝と昼

に栄養をうんととって夜あっさり食べたら明日の朝はソー快。」

癌のこと

「今度は具体的に天上界の関係の人に聞きましたら、癌というものはビールスだよ。」

「それも人間の細胞の核分裂を起すときの核酸が、その人の心の作用によって分裂が正しくも行くし、心の状態によって間違った方向へ

行きます。」

その時に、間違った方向へ行ったときに食べ物とその人の心が、グーンと地獄界の虫を引きつれて細胞を食う虫がビールスなんで

す。

そして、それがいわば人間のガンという姿になった場合、ということを行いました。

ですから、先づ癌という状態は心をきれいにし、食べ物を中道、つまり片寄らないということ。心も中道、食べ物も中道こうしたら

絶対に癌にならんといいました。

癌の細胞を見せられたら、細胞が活着しているのがみなわかります。

そうしてCO₂の炭酸ガスを出しているのがわかります。ですから、そういうところには酸素がなくなっているわけです。

酸素がなくなるから結局は、細胞が間違った方向へ行くのです。薬はお前達の生活環境の中にあるんだよと教えられました。...」、

と。

阿蘇研修会の日程と信次師の周辺

研修は、六時起床、七時半朝食、九時より信次師の講話、

午後は自主研修、夕食後二時間信次師の講話、十時に就寝であった。

この時期、渡辺氏は著書の中でこう言われています。

「夏の恒例の志賀高原の研修会が済んだ頃から、先生の健康状態があまりよくないと、あちこちで、ささやかにはじめました。

十二月の阿蘇の研修会にお伴した頃には、見違えるように消耗しておられる姿を拝見してびっくりしました。

このあたりから先生のご講演の中に、不動心という言葉が頻々と現われるようになりました。

阿蘇の研修会のご講演では、

「食生活を、あちらから指導されました。肉類、魚は一切だめ、野菜、果物、そして油は植物油、バターならマーガリンを。量は腹六

分です」、

と。

この研修会では健康についての話しがテーマでしたが、既に肉体的過労で、信次師は少しやせていられた。

阿蘇山を右に見て、左手に大観峯を背景にした大自然の中...研修生は六百名でした。

さらに、この阿蘇の研修会と、宮崎の青島の研修会でのこと、偶然にもエレベーターに二人だけで乗り合わせられた園頭会長の奥さん

に信次師は、次のように言われています。

「奥さん、金は食べるだけあればいいのですよ。余分なものを持つ必要はないのです」、
と。

この時期の園頭会長の書簡から

「合掌、阿蘇の研修会で、ある班の講師は、反省ということをむつかしく教えたのでしょう。

反省していてかえって心が苦しくなり、眠れなくなったので、そういうときはどうすればよいかと電話がきました」、

と書いておられます。

土居氏の阿蘇研修会

初めて、信次師の研修会を受講した土居稔信氏は、この熊本研修会を次のように記しておられます。

土居氏は、宿舎に着くとトイレに行かれた。

すると、せっせとトイレの履物を整理する人がいた。

「御苦労様ですね」

と氏が声を掛けると、その人は

「いいえ、後に入られる方が気持ちが良いようにと思ひましてね」

と答えたという。

講演が始まったら、信次師だった、

と。

次の日も、信次師は朝一番にトイレの床の掃除をされていたそうです。

そして、その晩、氏が風呂にはいっていられると、

「背中を流しましょう」

と信次師は心をこめて流してくださり、それから皆で輪になって流し合ったというのです。

さらに、講演が終わった後、信次師は各部屋を廻り、その場にはいないのに、いたかのように講師達にかわってテキパと質問に答えて廻って

いられた、

と。

偉大な人類の師がトイレ掃除とは驚きですが、多くの人達が書き残されています。

講演に集まって来た人の靴を。スリッパを。まったく頭が下がります。

また、時には大地の味を味わさせようと言われて、みずからの手料理を幹部達に食べさせていられます。

もう少し、信次師の素顔を端的に教えてくれる例があります。

福岡のT医師は、友人から聞いた話として次のように語っておられます。

信次師は講演が終わられた後、汗びっしょりになられて、体を横たえて汗を拭いてもらわれていましたが、信次師の体は白かった。

そして、研修会場の近くのオミヤゲ売場等を覗いていられる信次師を見かけると、一つも気どらないどこにでもいる普通の人だった。

また、研修会場の出入り口の方を見ると、スリッパを片づけている人が信次師で、研修を終えて帰って行く人達を上の方から見送ってい

られる信次師は、皆んなの幸せを祈っているように見えたと聞いた、

と。

同じく十二月のこと

G L A 関西本部事務局長・林氏は、信次に東京の自宅を訪ねるように命ぜられ、そのとき信次師はこう言っています。

「瑞法会から帰依したG L A 関西本部は、表面的には私に帰依したということになっていますが、内部から完全に帰依してはいない。

瑞法会の人事組織で人集め、金集めをやり、各地区の支部長が組織の上にあぐらをかき、権力欲、金銭欲で動いている。

G L A 関西本部を、私が説いた通りの正法の団体とするには、中谷本部長を頂点とした関西本部の組織を解体しなければならない」、

と信次師は忠告されたと、林氏は園頭会長へ伝えていられます。

この年、信次師は、

「あと七八〇年するとエジプトに真の世界政府ができ、世界は平和になり、人間は自由に他の天体へ行けるようになる」

と言われた、と。

さらに信次師は、昭和五十一年に死者五十万人を出したと言われる中国唐山の大地震を、起る前のこの年（昭和五十年）に予告してい

れます。

さらに、この年のある日、

中学時代から四十年間日蓮宗を熱心にやって来た人が信次の指導を受け、何も知らないはずの信次師が

「あなたは日蓮宗を捨てられますか」

と突然、言われたというのです。

その時その人は

「日蓮宗をやめる時、少し恐怖心が起りましたが、正法に帰依することが出来ました」、

と。

また、G L Aの講師で、常に信次師の近くにいられたある社長さんが、従業員に対して、

「こういう人は地獄に行くのです。地獄に行きたくなかったら一生懸命働きなさい」、

という訓示の仕方をしておられ、ところが信次師亡後、会社は倒産、売掛金回収に暴力団をつかっているという噂の人がいたというので

す。

講師といっても霊の段階があられるようです。

だから信次師は「G L Aをつぶしたい」という言葉になったのでしょうが、昭和四十六年から講師だった人であり、信次師の心中、察し

て余りあります。

また、昭和五十年のある日、信次師は

「キリストは、今から百八十年後、シカゴに出て、その時はじめて世界政府ができる」

と言われた。

昭和五十一年（一九七六）

一月

『G L A』誌・新年号にはこう書いてあります。

「一から十まで、すべて成功するだけが正法と考えてはならない。失敗もまた正法の内にある」、
と。

「自己の確立を」

高橋信次

私たちの住む世界は間違いなく競走社会であり、力の社会である。

そこでは常に、若さと活動とが尊ばれ、常により多くのことを為すことに目標が置かれている。

なんでも世界一であることに目標が置かれてそれを自慢する。

そうしたことに過度の称讃が送られているのが現代だ。

「心の安らぎはなにか」、

との問いの中から、そうして、その問を通して己れを知ることによって初めて得られるものであり、仕事のみを追う人生には、安らぎ

も調和も与えられないことを知る必要がある」、

と。

そして、この時期、将来、団体が大発展するのに備えて、コンピューター導入の委員会がつくられています。

同じく一月、

時を待つこと

正法を実践される全ての皆さんへ

信次師は

「初めは実践すると、好結果が与えられる。そして、次には本人の心を試すために、迷いを与える小事件が起きてきたり、また、さま

ざまな欲望が不思議と出てくる。業の活動は時間が経って静かになるので、正しい生活をしながらそれまでじっと待つしかない」

と言われていた。

同じく一月のこと

関西本部の講演の始まる前、控え室に入って来られた信次師は、どっかと胡座に座られて

「園頭さん、ぼくは失敗した」

と長い吐息を洩らされたというのです。

二月二十二日

沖縄講演会

「御紹介をいただきました。高橋信次であります。沖縄というところは島だから狭いんじゃないかと思って来ましたら、思った

より広いんでびっくりいたしました。

そして非常に海がきれい、美しい空、きれいな空気、ちょっと、私達の住んでいる東京ではかなえられないような云々。...

それを信ずることです。その嘘のつけない善我なる心を信ずることです。

どうも永いことご清聴ありがとうございました。」

同じく二月

信次師は、G L A 関西本部長、西日本本部長を前にして次のように語っていられます。

「肉体を持つと肉体に制約されて活動が制限される、これは仕方がない。意識だけになると肉体に制約されないから自由自在に活動で

きる。ぼくは早くあの世へ帰らないといけないかもしれない。ぼくはすることが一杯あるんです。

ソ連は原子爆弾を使おうとしている。原子爆弾を使ったら地球はおしまいである。

地球がおしまいになったら、他の天体に住んでいる人間とのバランスが崩れてしまう。

だから、絶対に原子爆弾を使わせてはならない。

肉体を持っていると肉体に制約されて、ソ連の指導者を直接、天上界から指導する以外にないんです」、

と、告げられたというのです。

他の天体に住んでいる人間とのバランスが崩れるとは、さすがに、真のメシヤならでしょう。

また、信次師は、こうも言っています。

この大宇宙には七つの霊圏があり、七つの人間がいると予告されていますが、

勿論のこと、人間の姿、形はみな同じで。人間は人間、猿は猿、進化論は間違いとも言い残されています。

三月

大阪の定例講演会の信次師は、一月と同じように園頭会長へ次のように言われています。

「園頭さん、ぼくは失敗した。僕はG L Aをつぶしたい。ぼくはこんなつもりでG L Aをつくったのではなかった。G L Aの講師達

は、金魚の糞みたいに、ぼくの後からくっついてくるばかりで少しも勉強しない。G L Aの講師はダメだ」、

と、タメ息まじりに悲しそうな顔をして言われた、というのです。

同じく三月

信次師は、

「世界の中で、正法が説かれているのは日本だけです。

もし日本の国が滅びてダメになるようなことがあれば、神の計画である正法による世界平和は実現しないことになる。

もし日本という国を滅ぼしてダメにしようとする国があったとしたら、その国は神の心に叛くことになるのですから、その国が滅びる

ことになります。

これから共産圏には食糧飢饉が起り、内乱が起ります」、

と予告されています。

さらに信次師は、

禅定・瞑想する時には、

「とにかく、いつ死んでもよいという心境になりなさい」

と言っていたといえます。

また、

三月の関西本部の講演会の始まる前の控え室で、信次師は

「園頭さん、僕はヤーヴェとしてモーゼに十戒を与えたことがあるんですよ」、

と念を押すように言われています。

三月二十～二十二日

和歌山研修会 白浜温泉（三楽荘）

演題「エル・ランティとミカエルの悟り」

信次師の一番弟子の園頭広周会長は、自著を要約すると、こう書いておられます。

「研修会の初日の夕方、信次師の実弟・高橋興和、T・利雄の両氏が、秘密の話しがあるので自分達の部屋に来てほしいというので園頭

会長は出向かれた。

すると二人は、次のように告げられます。

「高橋信次先生はニセモノである。釈迦の生まれ変わりでもなんでもない。この研修会が終わったら私達はG L Aをやめます、先生もどう

ですか」、

と園頭会長に同意を求められています。

園頭会長には信念があられたので、

「やめたければやめればよい」

と思われて、黙って部屋を出られたというのです。

「女性の助手で謀反の心を起したのはG・世子という人でした」、

と。

そして、三日目の朝、

信次師は園頭会長の部屋へ入るなり、

「昨夜、パピアス・マラーが、私の心臓に矢を射た、まだ胸が痛む」

と告げられています。

そして食事のあと、信次師と入れ替りに、興和氏が部屋に入って来られて

「高橋先生は魔である。この研修会が終わったら私はG L Aをやめる。先生もやめませんか」

と、また同じように誘われます。

園頭会長は、こう言っています。

「サタンが出て来たことは、私もその前に知らされていましたが、サタンはまず身内から離反させ始めたのです。これは大変なこと

になるな、と思いました。

しかし、高橋先生はこの事実を全部知っておられ、三月二十二日午前の講話は中止になって、講師・助手に対して集合を命ぜられまし

た。

ところが、G・世子氏だけが抵抗して集まらず、探し出して来て始まったのが、三月二十二日のビデオの場面です。

ビデオの一情景

この場面というのは、次の通りです。

信次師は高弟の一人一人に肩に手を当てながら、涙ながらに

「そなたは〇〇において、よく私に協力してくれました」、

と感謝とも別れの言葉とも取れる情景です。

このとき信次師が三ヶ月後に他界されるとは、誰が想像できたでしょうか。

さらに、この時、信次師は

「指導者たる者は実践することによって不動心を持ちなさい」、

と言われたというのです。

そして、それから自帰依、法帰依の大事さと、主な講師に対して一人一人諭され、ビデオにある通り会長には

「園頭さん、あなたはインドの当時（舍利弗、舍利子として）の智慧を出し切っていない。これから遠慮せずに出しなさい」、

といて下さいました、と園頭会長は言われています。

昭和五十一年三月 関西本部定例講演会

三月十九日「信次先生と一の宮教祖の対談」東京

三月二十日～二十二日 南紀白浜の研修会「エル・ランティとミカエルの悟り」 和歌山

四月

四月十一日

G L A 七周年記念講演会（日大講堂）

演題「心の中に内在された英智」

「冷たい北風もやみ、温かい南風とともに大地は黒土とともに陽炎があがり、大地の中から新芽が出てまいりまして、そして桜の花は今

を盛りとしております。

サクランボはやがて実を結び、葉桜となってゆくでしょう。

我々の人生も、又、同じように青春は一時にして、我々の人生は無情なもので、我々は物におぼれ、たとえ人生が七十年たりといえど

も、永い永い転生輪廻からしたならば、一瞬の線香花火のような云々。」、

と。

一番弟子の称賛

この四月の関西本部の定期講演会の時、信次師は中谷関西本部長宅に泊っていられます。

翌朝、食事をしながら

「ぼくが説いたことを一から十までわかっているのは園頭さんですね」

と、ポツリと信次師は言われたというのです。

講演が始まる前に、

「あんた、偉いでんナ」

と、中谷氏自身が言われたとされ、信次師自身の心には、自らの後継者として、胸中深く刻まれたことでしょうか。

五月二日～五日

富士みどりの休暇村に於ける青年部研修会

演題「正法の流転」

「去年に続いて、この場所で皆さんと共に、神理の勉強をすることが出来ましたことを嬉しく思っております。

本日の講演の演題は「正法の流転」と言いましょうか云々。

この時に道は開かれていきます。今このような事実を、もう一度、私ではなく、天上界の人から語って貰います。

「ラウイアスポロティヤソポロティア...」

と、「現証」の時間へ入っていきます。

この研修会の情景

再び渡辺氏に登場いただき、この研修会の一情景を語って貰います。

「二日目の昼食を一同でいただかれたといえます。

そのとき渡辺氏は運よく、信次師の真正面に坐っておられ、右隣りには佳子氏（信次師の長女）が坐っていた。

昼食はカレーライスで、氏がカレーライスを平らげて、ひょいと信次師の方を見ると、まだ三分の一も消化されていなかったというので

す。

氏も早食いであったが、それまで氏の方が信次師より先に箸をおいたことがない位に、信次師は早食いだっただけというのです。

「随分、お疲れになっておられるのだな」

と渡辺氏は思われます。

そして、最終日の前夜、十二時になって突然、信次師は、参加した講師とヘルパー全員に集合を命じられて、

「今、こんな通信が入ってきました」、

と言われて信次師が読み上げられたのが「サタンからの通信」だったというのです。

それから信次師は、これからの正法流布のけわしさを説かれ、最後に、

「これからは、あせりの心と恐怖心、特にこの二つに気をつけて下さい」、

と、閉じていられます。

サタンからの手紙

黄金の翼を持った天使よ

我は実在せる、魔界の帝王なり

我は、そなた達の正法に、阻まれず

我思う処に、我在り 我が前途を云々。

すべての者、我が命令に服従せん

我は、神聖なる魔王なり、暗国の帝王なり、偉大なるサタンなり云々。

我らが正しきこと、いつの日にか実証せし時、

そなた達の、おどろきし顔が浮かん その時、必ず来たらん

五月八日

観音寺の住職・村上氏は、直接、信次師に電話を入れ、八起ビルを訪ねられると、五階の信次師の部屋を開けた時、信次師はソファーか

らすぐに立つことが出来られない程の容態で、顔色も悪く、あの健康で東奔西走されていた信次師の面影は今はなかったというのです。

信次師はそのとき、

「私の体に光を入れてくれませんか」

と弱々しい声で言われます。

氏は信次師の体を抱き起こされ、光を入れやすいようにして、イエスの来迎を願われると、三時間もした頃、顔は赤味をおび、自分で起

き上がられ、立たれて、村上氏にノートを取るように命じられたというのです。

そのときの信次師の声は、優しさの中に張りがあって、静かに瞑想された口から出る言葉はゆっくりとした調子に抑揚があったというの

です。

「今より、三億六千四百五年前、ベーター星より地球上に脱出、緑もゆるこの地球上に脱出、緑もゆるこの地球を、神から与えられた

り。

現代エジプトのエルカンターラ、場所はエデンの国なり云々。

ものなり。アダムとエバのエデンの国より追放の原点なり。人びとの心はすべて神の子な云々。

各地に起これる地震、天変地異は、そこに住む諸人の心失いたる者達へのすべて警告なり。」、

と。

語り終って、信次師は一杯の茶を飲み干された、というのです。

昭和五十一年六月四日～六日

山形県蔵王に於ける東北地区研修会

六月四日

演題「新復活」、

六月五日

演題「太陽系の天使達」

信次師の最後の講演会となります。

六月四日 「新復活」

「非常に美しい自然の、緑に包まれた環境の中で、東北の研修会が行われることを心からお祝い申し上げます。

今日の演題は「新復活」。

丁度、現在、東京地方には、創世記時代の映画が来ております。

しかし、人類は緑に包まれた、しかも神の光に満たされた地球という環境に、今から三億六千五百有余年前にはじめて、ベーター星とい

う星より、神より与えられた新しい緑につつまれたこの地球上に、人類は最初に印したのであります。

新天地

その当時ベーター星は調和され、私達は新しい、新天地を求めて、最も調和されたこの地球という環境を選んだのであります。

その当時最初に反重力光子宇宙船という、いまで云うUFOに乗りまして、最初地球上の人類は、神の光によって満たされた天使である

エルランティーと云う方が中心になって。エルランティーは直接神の光を受けている真のメシアであります。

そしてエルランティーの光の直系として、光云々。

エデンの園

そして第一艇団がエルランティを中心にしてミカエルに、ラファエル、ガブリエル、ウリエル、サリエル、この七大天使が中心にして、

現代のエジプトナイル渓谷の東部にあるエルカンタラーと云うところに着地します。

その場所が一番最初のエデンの園です。

約六千人のベーター人が全部この地球上におりて云々。

地獄の世界

思念と行為、行っていることと、思っていることを修正していらっしやい〃と、その場所から多くの人々がその位置をかえました。

その人々が後、エデンの園との連絡を絶ち、やがて天上界との連絡をたち、ついに天上の世界に帰ることなく、地獄の世界をつくり出し

てしまいました。当時は地獄は存在していなかったのです。それがアダムとエバの後物語に変わってしまったのです。

その為に創世記の映画とはちょっと違いますけれども、私はこの肉体をもって天上の世界に行って、現実はその姿を見て来たのです。云

々。

カンターレとイマニエルたちをこの地上界に送りました。

エルランティ自身はアガシャーという方を、光の分霊です。この方を送ります。

さらにまた、カンターレーという方を送ります。後のゴードマブッタです。天上界ではカンターレー、と言っています。お釈迦様とは言

ってません。ゴードマブッタ。

アガシャーは後のイマニエル・イエス・キリスト、モーゼはモーゼです。

さらにまたイエスがゴードマブッタが生まれるときにはガブリエルという方は主として伝達の係をし通信関係の責任者で云々。

ヤーヴェ、ヤハウエー

その時にエルランティはヤーヴェという名前で彼を指導します。ヤハウエーという名前でモーゼを指導します。それが十戒です。

汝をイスラエルのカナンの地に導きしは我、ヤハヴェなり。汝、偶像を祭って祈ることなかれ。云々。

エリヤの現象

ります。しかし、当時は、約四百数十人もの予言者たちが、エリヤの前に立ちはだかつております。

そのためにヤーベーは、

「今から三年間、もう雨は降らせん。イスラエルの地に雨は降らせん、それを王に言ってこい」、というところが、王様にしてみれば、

「お前は国賊だ、イスラエルの国賊だ」

とって、エリヤは追放をくらいます。

それでも彼の心を揺さぶって、ヤーベーはつぎつぎと指令を出していきます。

これは実は、このあいだ、エリヤが私に原稿用紙で約百五十ページ近く、当時の模様を全部語り、現象を見せてくれました。

その現象の一端として、五月の丁度七、八日頃、東京には大きな雷が落ちました。 それはその時の百分の一だそうです。

今後はそういうことはどんどん起こります。

そして、アハブをやっつけてしまった訳です。

そういうようにヤーベは大きな現象を与えました。

多くの予言者達が輩出して、間違った教えを再び元にもどそうとしたけれども、どうにもならなくなって、今から約二千年前に、再びア

ガシャであるところのインマニエルをこの地上界に送りました。

エホバ

その時は、ヤーベとはいいません。エホバと言って名乗ったのです。

エホバ。神ではありません。神の命を受けた最高責任者です。

間違ったユダヤ教を修正するために、そして、イエスに人間の愛を説きこの地上界へ送り出したのです。

ヤーベは、

「六日間働いて一日を聖日となし、自分の一週間の間違った過去を振り返り、心を修正し、二度と同じ間違いを犯さない」、

という聖日を設けたにもかかわらず、後の司祭者達は、「その七日目の一日は仕事をしてはいけん。人と会ってもいけん、動物に食糧

をやってもいけん」、というようにしてしまったのです。

このように、ユダヤ教は大きく歪みを作り出してしまったのです。そのものを修正するために出したのが、インマニエル・イエス・キリ

ストです。

しかし、彼もやがてサタンの餌食になって十字架に架かってしまいました。

さらにまた、変えられてしまったために、ミカエルの分身であるところの天使、魂の兄弟をこの地上界へ送ります。

この方がマーチン・ルッテルです。

さらに、フランスからは、ガブリエルであるところのカルビンを出して宗教改革に出したのです。

一方において、仏教の方は、ゴータマ・ブッダが悟りを開き、道を説く云々。

南無妙法蓮華経

「妙法蓮華経」に「南無」をつけたらもっと良いんじゃないかと日蓮さん考えちゃってね。一千万人近くの人間が「南無妙法蓮華経...」

をまあ、二時間も三時間もやっていますね。あれも馬鹿げた話ですよ。

あれで救われた人はいないんです。

「南無妙法蓮華経」というものも、本来ゴータマ・ブッダー、釈迦牟尼仏がインドの地に於いて、ガンガーの流れを通し、無学文盲の人

々に対して方便として説いたものです。

「諸々の衆生よ、比丘、比丘尼たちよ、あの汚いドロ沼の中でも美しい蓮の花が咲くであろう。

ときに、そなたたち、比丘、比丘尼たちよ。サロ云々。

アラールと梵天

こうして太陽系霊団というのは、光の直系として、エル・ランティエを中心に、エル・ランティエは、その時代その時代によって、あ

る時はヤーベを名乗り、ある時はエホバを名乗り、ある時はまた梵天を名乗り、また、さらにマホメットの時にはアラールを名乗りまし

た。人類は皆兄弟であり、同じ一つの太陽の下に生活しているのです。宗教は一つなのです。

宗教を一つにするために

ガンガーの流れも、ヨルダン川の流れも、いまだかつて方向は変えていないのです。時代の新旧によって道は変わらないのです。

今、私たちは、モーゼやイエスやマホメットや、ゴードマの説いたものを一つにするために、私達は肉体を持っているのです。

皆様は、その選ばれた民なのです。

そして、自らの心を開いた時に、あらゆる国々の転生を体験し、その心の中に、云々。

健全な、精神と肉体と経済、の調和

何を欲するというのでしょうか。物質や経済は無常なものです。しかし、現代のように高度化した社会生活の中において、真の人生の

幸せを得ようとするならば、まず、最も大事なことは、健全なる精神、心です。その次に肉体です。その次に生きる為の経済です。

経済は衣・食・住です。この五つの大調和があって初めてユートピアが出来るのです。

ところが、いつか人間は、その道を外し、エゴに変わり、すべて皆兄弟だという道を外して、云々。

食糧危機

こうして私達は過日、天上の世界に於きまして会議をやりました。私の隣りにはインマネール・イエス・キリストがおりまして司会をや

り、その隣りにはゴードマ・ブッタ、カンターレがおります。

その隣りにはガブリエル、サリエル、ウリエル、こちらがわにはモーゼ、さらに又光の天使約十人ばかり、そして地球上の状況を次々と

報告して来ます。

心を失い権力の座について、人間の自由を剥奪しているところのソビエトは、モスクワを中心として食糧危機は彼等が自覚するまで続

きます。北朝鮮も又、同じです。中華人民共和国の北部も同じです。アフリカの西部海岸も同じです。

一方に於いて中南米のパラグアイも同じです。

サタンの跳梁を許しているのです。

そのような心の人達のくもり は、神の光をさえぎり、自からして、天変地異を造り出しているのです。

更にイタリーの北部からベイルートにかけても同じです。

宗教の同じヤーベの教えであるその神理を曲解して、それぞれの道を歩んで、又同じ現象が起って参ります。

日本の食糧危機は、心ある人が出て来ているためにありません。

こうして天変地変は次々と起ってまいります。

それは天上の世界の神の光の届かない所に起るのだということを知って欲しいのです。

やがて北朝鮮は破産をします。日本は戦後わずか三十年で世界のトップに成ったというのも、それだけ偉大なる魂達だからなのです。

一つ間違えたら又、逆の方向へ進んでいきます。それは危険なことです。

皆さん自身の進むべき道は真の道、普遍的な己自身の心に嘘のつけない善我なる心を芯として生活を知ったとき道は開かれていくので

す。それが神理です。今後大きな現象が起って来ます。間違った宗教家達は、私によってつぶされていきます。

どのような宗教家であろうとも、間違った宗教家達は私達の靈的な力によって現象化されてまいります。

信じようと、信じまいとそれは事実です。

皆さん、見ておって下さい。地震も雷も自由自在です。

それだけに、今、私達はその受け入れ体制をしておかなければなりません。日本ばかりではありません。やがて私は中近東へ行きま

す。そして真の道を彼等は知るでしょう。

それは地球の最終ユートピアの為に、私達は今、肉体を持っているのです。

その為に自分の生活の場は自分の生活として今度の光の天使は全部事業をやりながら出てきております。

宗教でなど飯は喰いません。それが本当です。神は一銭の、人間から金などいらぬのです。太陽はただです。神の心です。

これが神理です。

私は実業家として、その面に於ても、世界でも、知らない人がなくなるでしょう。

当然なことです。それが道です。

イエスの時代や或いはゴータマの時代なら良かったのです。現代の時代はそれではだめなのです。

教祖や、その取り巻きが優雅な生活をする為に宗教があるのではないのです。

真の宗教とは宇宙の真の人間としての生きる道を教えているのです。そして、人間に生きる喜びを与える道なのです。

これが神理なのです。神は人間の造ったものを欲しません。大事なのは美しい一人の人間の心が欲しいのです。

道はやがて開かれていきます。我々の前途は光明に満たされます。

Home

幻の新復活

そして、その人達は救われていきます。

やがて、地上界の人々の一人一人の心が調和されてきた時に、我々の肉体先祖はその姿を見て、

「俺達の時代とは違う。なぜ俺達は、この厳しい環境にいるのだ。」、

と難しいお経ではなく、皆さん自身の日常生活一つ一つの想念と行為の光がやがて地獄の世界を救っていくのです。

最終ユートピアは地獄のなくなる時です。サタンは私が今、一生懸命に「新復活」という本を書いております。

モーゼの十戒をはじめとし、違った宗教を修正しているために、やっきになって私の為に攻撃をしてきます。

しかし、例えルシフェル・サタンなりといえども私のかつての弟子です。彼はやがて私の軍門にくだるでしょう。

知らないから地獄に落ちているのです。彼等も救われるでしょう。私は命がけです。

それは皆さん一人一人が自覚された時に、皆さんの周辺の肉体を持っているところの先祖達も救われていくのです。

お坊さん

坊主の難しいお経によって救われるのではないのです。

お経の意味がわかって生活しているような人なら天上界へ行きます。

ゴータマ・ブッタは決して死んだ人間を成仏させるために坊さんをつくったのではないのです。

生きている人間をどのように導き、人間の心を指導するためにこの地上界へ出てきたのです。

地獄に落ちるといふのは、他人のせいではなく、自分の想念と行為の間違いそのものが、自分の行動によって地獄に落ちたのです。

天上の世界がピラミッドのように高くあれば、逆に又、地獄の世界は逆ピラミッドとして存在しているのです。

この地球はその中間的環境にあるのです。

そのために皆さん自身が、善を思い善の行為をすれば天上の世界へ、悪の行為をすれば地獄の世界へ、彼等はいつでも待っております。

それだけに正しい心、正しい法この道を己自身のものとして、生活をしなかったならば、人間は救われないのです。云々。

神の子としての道を、己自身がして実行していくのです。

みな、私がしゃべっているこの言葉は、皆さんの心の中にすべて記録されていきます。

そして、この地上界を去ったときに、真実であるかないかを、皆さんは自らしてわかるのです。その時に救われるのです。

生きている中に自らをつくることです。道は永遠に続きます。今、この世限りではありません。やがて我々はあの世に還ります。

そして、またいつの日か地上界か、或いは、また他の天体に出てくるのです。云々。

皆さんは、自らに目覚めなさい。 自らの心を開きなさい。 小さな自分を捨てなさい。 偉大なる神の光に目覚めなさい。

それは愛です。 それ以外にないということです。 この研修会を通し自分の心を裸にして、神の己自身の本性に目覚めて下さい。

永い時間本当に有難度う御座居ました。

六月五日

演題「太陽系の天使達」

「お早ようございます。今、皆様にあげました〃心行〃は昭和四十三年十一月二十二日に完成いたしました。

そして二十三日の夜、午前一時、天上界で初めて〃物質と生命〃という講演をやりました。その時の司会がモーゼです。

その前にミカエルが講演をやりまして、約一時間半、二十三日午前二時三十分はこの地球上に震度三の地震がありました。

私は禅定のまま天上界にいったものですから、そばに寝ていた家内が、

「今、お父さんの講演を聞いていました。」

ということでした。

心行（しんぎょう）のこと

そして、過日、やはり天上界に於て、色々七十年前のこの地上界に出てくる時の模様。〃心行〃というものの成り立ちをいろいろと本

になって現代は、ミカエル大天使が持っていますが、その中をめぐってみますと、自分で驚ろいてしまいました。

「我、見聞し正法に帰依することを得たり」という最初の出だしが「我正道に目覚め正法流布のために一命を投げ出す」という書出しが

ら最後が「禅定三昧の境涯に到達せん」、全く同じです。

そして書いてあるのは地球的に書いて私ののはありましたが、天上界のものは宇宙的でした。これを見てホンのわずかしが違っていな

った。ですからやはり書かせられていたと言うことですね。

現代もミカエルといわれる大天使が、丁度この位い厚い(二~三十センチ四角位の立方形の本の形を手で示している...ビデオ)本にし

て、私自身が出てくる前の計画一切、現在も書かれている本、将来も出す本、それに記録されてあります。

実はそれは私ばかりではなく、皆さん自身の心というものをヒモ解いていけば、恐らく計画書があるはずです。それに気が付かないだけ

です。云々。

メシヤ

いまだかつて地球上に神だなんて言って出て来た人は100%嘘です。どんなものだって、神様になんかにはなれないんです。

神は一つです。宇宙には神は一つです。こういう、エル・ランティと同じような人達が、宇宙に、真のメシヤという人達がおります。

遂に、過日はM37という星があります。M37に出ているメシヤが悟りました。そのM37のメシヤはついに、自分自身を悟ったと

いうのは、太陽系の中の、軌道修正コントロールセンターというのがあります。

太陽系の軌道を修正するコントロールセンターというのが次元の違った、あの世にあります。

その中心の心臓部に伝達があるわけです。宇宙的ですね。

そして、真のメシヤが、それぞれの惑星の地上界に出て、皆んな互いに連絡がとれるようになって、真の調和が完成されたとき、そのメ

シヤが神になるのです。大変なことですね。M26、この太陽系それぞれに出て来ておりますね。

今、出て来ているのは、太陽系で、一人、悟っております。M37で悟っております。M27、M26、出ております。

このMというのはメシヤという意味で、つけたようですね。我々の出て来たところのベーター星というの、調和されてい世界、ユート

ピアです。その、皆さんも出て来た所ですね。ところが、今、我々が住んでいるのは、自分の住んでいる地球だけだと思っているだけな

のですね。

かつて皆さんは、三億六千数百年前には、そのベーター星という所から、移住民族として、地球上へ来たわけです。

そして、その間に何回も転生輪廻して、まあ全んど皆さんは地獄へは行かなかったと思いますけれども、まあ、今、いるわけです云

々。」、

と。

L字の金の塊

信次師は、ひと月以上前から、リングル注射のみで生きていられた。

にもかかわらず、東北の研修会には、家族、側近が懸命に止めるのを聞き入れず

「行かねばならぬ」、

と無理を押し参加され、そして、各一時間ずつ講演をされます。

先の渡辺氏は、こう書いていられます。

「特に、この時の『新復活』というご講演は、獅子吼とはこのことをいうのだなああと心に思ったほどの渾身のエネルギーをふりしぼった

大講演で、後にも先にも、このような場面にふれたことは、この時だけだと思っている。

ことに、最後の十分間ほどは先生がこのまま光のエネルギーに昇華されてしまうのではないかと思われるほどの迫力だった。

汗は金となり、それが照明でキラキラ輝く。特に右側の頬に大きく金の塊が生じているらしく、口の動き、頬の動きに応じて、ダイヤ

モンドのように光り輝いて見えたのが印象的でした。

終ってから、講師一同が先生のお部屋にご挨拶にあがった時、右頬についていた金の塊を取って見たら、

「Lの字になっていましたよ」、

とおっしゃった」、

と。

この時期の信次師の周辺

昇天直前のある日のこと、園頭会長に信次師の本を勧め、正法帰依のきっかけをつけたK氏は、こう話されてい

ます。

「私が、六月のはじめ、自宅の前まで帰って来た時、一人のやせた青年が「Kさん」

というのです。誰かと思ったら、高橋先生でした。

「先生はどちらへ」

「病院へ行っての帰りです」

「どうぞ、おあがり下さい。お茶でも」

先生は、私の家に一時間半位いらっしゃいましたが、

「Kさん、こんなに肉体を酷使するんじゃない、

とって涙をためていらっしゃいました」、

と。

Kさんは、

「高橋先生は、私に気持ちを伝えておけば、懇意にする釈迦第一の弟子といわれた舍利弗・園頭会長に、伝えてくれる。

それで、わざわざ、自宅の反对方角の私の家へ。これしか考えられません。」、

と話されています。

Kさんの家は病院から北の方角であり、信次師の自宅は病院から南の方角であり、まったく反対の方角です。

わざわざ来られたとしか考えられないというのです。

信次師昇天

一九七六（昭和五十一）年六月二十五日、高橋信次師は昇天されました

信次師の著書出版を担当された、堀田和成氏はこう書いておられます。

「死の四カ月ほど前、釈迦に説法とは思いましたが、折に触れて休養なさるようおすすめしました。

そんな時先生は、

「わかっています。私の体は私がいちばんよく知っている。だが、やるべきことをやらねば私の役目が果たせなくなってしまう。私は

ただ、やるだけなのです」

と言われます。

先生は死を覚悟されていました。

残された時間をいかに有効に使うか、それだけがお心を支配していたようであります。

「先生のお気持ちはお察しします。しかし、細く長くという言葉もあります。今のお体には休息がいちばんと思います。ゆっくりと体を

お休めになってください」

私は、先生に繰り返しそう申し上げました。云々。

しかし、時すでに遅く、六月二十五日午前十一時二十八分、ご家族の方の見守られるなかで、その短い生涯を終えられるのでした。」、

と。

信次師の奥様である高橋一栄氏は、こう書いておられます。

「さあ、起こしてくれ。上衣を出してくれ。私は行かねばならない。みんなが待っている」、

と主人は、床の中で、そう私に叫び続けます。

自分の体が自由にならないのに、気持ちだけは明日に迫った関西講演に、早や心は飛んでいるようでした。云々。

しかし、主人はもう何日も物を食べていません。

それどころか東北講演ですっかり体を使い果たし、そのうえ、つい一日前、ある方が八起ビルに訪ねてくるというのでわざわざ出かけて

行き、夜の十時すぎまで話し合い、その無理がたたったのでしょう。云々。

今にして思えば、あの時の主人は、家族の者の理解を越えたある使命感だけに己れの魂を燃焼させて生きていたと思います。

それから十日余りして主人は昇天しましたが...云々。

『心に法ありて』

さらに、渡辺泰男氏は、次のように書かれています。

「私が会社で執務していると、午後二時頃、G L A本部の信次先生の実弟の興和先生から電話がかかってきて、本日午前十一時二十八分

に、高橋先生が亡くなられたというのである。

明後日から和歌山県の白浜で関西地区の研修会が行われることになっているが、それに私 も出席してくれないかという。

おり返し本部に電話したところ云々。

忙しい葬儀の準備の合間をみて、私は五階に安置されていた先生のご遺体に最後のお別れをさせていただいた。

安らかに目を閉じていらっしゃる先生のお姿を拝しながら、お釈迦様の涅槃とは、このことを知っているのだと云々。

『ノアの箱舟』

信次師の長女・高橋佳子氏により『真創世記』三巻が出版されています。

これは佳子氏自らが靈感を受けて短期間に書かれたということになっていましたが、しかし、昭和六十一年『アドベンチャー・八月

号』五十四頁に、SF作家の平井和正氏が

「『真創世記』は、私が半年ぐらいにわたって書いた」

と発表されたのです。

十年目にして、驚くべき真相が明らかとなったというのです。

この『地獄篇』に、父・信次師についての記述があり、引用文献として問題がありましたが、父と娘の親子愛の機微には、平井氏とい

えども、創作出来ない、割り込めない部分があったと思います。

その考えに立って一部引用要約します。

回想の父

その父が、もう自分の肉体に自信がないというのです。

そして、父の喉を食事が通らなくなりました。

父は力のかぎりを振りしぼって講演を続け、最後の本になるべき原稿を書き続けました。

その原稿は私の手もとにあります。父はこの本は世界を動かすものとなるだろうと言い続けていました。

異様にはれあがって食事もできない不自由な手でペンを執りつづけたのです。

約束が守れないと知った父は、関西の講演会場の方向へ向けて土下座をしました。

「行けなくて、皆さん申しわけありませ...」、

涙をポロポロ流して詫びるのです。

六月十八日、死の一週間前、一人では動けなくなった父は、自宅から、浅草の八起ビルへ移りました。

死の三日前になって、父はようやく布団をしいて体を横にし、

「ああ、やっとオレも病人らしくなったなあ」、

それが父の感想でした。

脈搏が乱れはじめた時、あと六時間だけ生きてちょうだいと哀願しました。

その時、全てが正常にもどり、父は正確に六時間生きつづけました。

そして心臓は停止しました。

そのとたん、私が危篤の父と同じ状態になりました。

死と同時に肉体を離れた父が、私の中に入ったための現象だったのです。

その夜から、父は私の体を借りて語りはじめました。

私の記憶はないのですが、完全に父の口調で、母と語りあい、別れを告げたといえます。

『真創世記・地獄篇』

信次師の最期の靈的通信

信次師の意識による最後の靈的通信を挙げるとこうなります。

「アナタ達ハ、自分ノ使命ヲ果シナサイ。

コレカラ、ドノ様ナ事ガアッテモ心ヲ動かシテハイケマセン。

私ガアナタたちノ心ノ中ニ生き続ケテイル事ヲ知リナサイ。

私ノ地上ノ生命ハ間モナク終リマス。

然シ悲シシンデハイケマセン。

自分ノ心ノ中ニシッカリト法灯ヲトモシテイキナサイ。

コレカラハアナタたちノ本当ノ使命ヲ果ストキデス。云々。

アナタたちハ、自分ノ心ヲ作りナサイ。

自分ノ心ノ中ノサマザマナ誤リヲ正シ眞実ノ自分ヲ作り、ソシテソノ愛ヲ拡メテユクノデス。

コレガ私ノアナタ方ヘノ最期ノ言葉デス、

と。

また、園頭会長は、信次師の昇天についてどう書いておられるか、要約してみましようよう。

高橋信次先生は二十五日、自ら予言していた通り四十八歳で昇天されました。

その二日前、即ち二十三日、とにかく上京してほしい、理由は言えないという電話で園頭会長は上京されます。

その時、既に信次師は昏睡状態であったようです。

八起ビルに集められたのは、当時のG L A東京本部の理事と、G L A関西本部の理事三人と、当時G L A西日本本部長の園頭会長であ

り、その外に当然、一栄夫人、佳子氏、実弟の興和氏がおられたというのです。

人は死ぬ時は、たとえどこにいても自分の家に帰って死にたいと思うものですが、だのに信次師は、一週間前に八起ビルに移られて、

いつも使っていた部屋に寝ておられたそうです。

園頭会長は、二十四日の夜も一睡もされず、信次師が昇天された後のことを考えられておられたようです。

二十五日の朝になって実弟の興和氏は、

「サウナ風呂にでも」、

と勧められると、幹部の一人は、

「そうさしてもらいましょうか」、

と立ち上がられます。

偉大なる師の昇天を前にして何んと不謹慎なと思われた会長は、一人別な行動をとっておられます。

それはどう言うことかと申しますと、これまで自分の生活の基盤、活動の基盤が変わって、新しい決意をもって行動を開始しなければな

らない時に、会長はいつも古い靴をすてて新しい靴をはかれたというのです。

他の講師達はサウナ風呂に行くといって出たのに、会長は一人靴屋に走られて、新しい靴をはいて帰ってこられて間もなく信次師は昇天

された、

と。

偉大なる出家

園頭広周

「キリストの復活と同じような奇跡が起ることを念じつづけたが、私達の祈りは空しかった。

高橋先生の肉体はその酷使によって、肉体生理の限界を越えて修復不可能になっていたのである。

私はそこに如来の慈悲に溢れた崇高な死を見た。

自分の肉体の最後のひと呼吸までをも衆生のために捧げ尽されたのであった。自らのためには生きられなかったのである。

求める人があれば既に限界を越えている肉体を酷使して「法」を説きに行かれたのである。

今から二五〇〇年前、インドでは釈尊は二十九歳の時に出家された。

私はなぜ今回は高橋先生が死の一週間前に大森の自宅を出られたかを考えた。その時、私の頭にひらめいたのは、

「これが出家だ」、

ということであった。

「偉大なる出家だ」、

私がなぜ大森の自宅を出られたのかを考え始めて一分もしないうちに、天からの声を聞いた。

インドの時の出家は二十九歳であったが、今回は四十八歳の死の直前、やはり出家されたのであった。

「偉大な出家だ」、

天からの声を聞いたとたん、高橋先生の肉体は黄金色に輝き、その瞬間、高橋先生の黄金の姿が空間に見えた。

しかしてその姿も消え、そこには普通の人々の死と変わらない姿があった。云々。

そうだとするならばなぜ高橋先生は、いよいよという時になって自宅を出られたのであろうか。

私はそこに

「偉大なる出家」、を見たのである。

われわれはこの地上を去る時、この地上のないものにも執着してはならないことを教えられた。

金や物や地位、名誉だけでなく、人に対しても執着してはならないのである。云々。

高橋先生の慈悲は、全人類に遍ねくゆき渡ると説かれてきたように、家族だけを愛されたのではない。

もし、家族だけを愛されたと考える人があれば、それは高橋信次先生を、そうして釈尊をも歪曲するものである。

高橋信次先生が大森の自宅で亡くなられるということになると、それは高橋家の人の死という印象が強くなって、高橋先生が説かれた

「正法」までが高橋家のものとして私物化される恐れがある。

高橋先生が説かれた「正法」も、高橋先生の肉体も、高橋家のものとして私物化してはならないのである。云々。

だが、高橋先生は全人類の師であって、単に高橋という一族に属される方ではなかった。

「自分は高橋という一族に所属する人間ではない。わが肉体も、わが魂も、すべては全人類のものである」、
と。

高橋信次先生の「偉大なる出家」は、「正法」は親子夫婦等の血縁に執着してはならず、血縁はこの地上に肉体を持つ時の手続きに過ぎ

ず、血縁を超越してそれに囚われずに正法を見る（正しく見る）ことを教えられたのであった。」、

と。 月刊『正法』

信次師の病因は、過度の疲労からくる肝臓と腎臓に問題があったのです。

天は、この世に、三億六千五百有余年前の七大天使とともに飛来したエルランティであり、モーゼ 釈迦 イエスを分身に持たれた高橋信次

師を遣わされた。

四十八歳の生涯を終えられるまでの八年間にわたり、普遍的な神理・正法を人類に説かれ、昇天されたのです。

「正法はアメリカに拡がり、その後、逆に日本に帰ってくる。そして今世紀末には全世界の二十%が、正法に帰依する」と予言された。

昭和四十年代の中頃には、

「今世紀末には、全人類の十パーセントが正法に帰依する」、

と言われていたが、昇天される一カ月前頃から

「全人類の二十パーセントが帰依する」、

と訂正されています。

これはどういう意味があるかと申しますと、この意味はエルランティが説かれた正法は、モーゼにはヤーベとして、釈迦には梵天とし

て、イエスにはエホバとして、古神道の天照大神には天つ神として、マホメットにはアラーとして、エルランティがそれぞれの名前で説

かれた正法は、現在の地球全人類が六十億人として、その二十パーセントとは、少なく見積もっても実数が十二億人ということでしょう

か。

さらに、信次師が昇天される一年位前から、

「今日は何を話しましょうか」と、伝えるべき、全ての神理を説き終えられた姿がそこにあったといひます。

そして、

「もはや、天上界から手を打たねばならなくなった」、

と、世界の情勢を睨み、地上界ユートピアの建設に心を馳せられ、四十八歳九ヶ月の若さでこの世を去られたのである。

高橋信次師は、四百六十余件の特許権を持たれる超一流の科学者でもあって、宇宙の神理・正法の流布拡大の行末を楽しまれ、天上界よ

り見守られるのです。

まさしく、「光り（正法）は東方より出て世界を照らす」、のです。

あとがき

高橋信次先生の本を出せたらナーと資料を集め始めたのは、1回目の脳卒中回復後の昭和五十八年のことで、決意したのはハビリ中の

ことでした。

そのとき、言葉もハッキリせぬ私の正法講義を黙って聞いてくれたのは年老いた母でした

それからの記述や取材ノートを見ると色々のことがあったとわかる。高橋先生のことを「高橋信次先生」「高橋先生」「高橋氏」

「高橋師」「信次」「信次氏」「信次先生」と、巡り巡って、廻りまわって今回の「信次師」に落ちついた。

これまでには大手出版社へ幾度か原稿を持ち込んでも「宗教がらみのもの」はと、ニベもなかった。

中には費用を折半ならとか色々あったが、五十過ぎの手習いからインターネットにはまってしまった。

ラジオ制作ならお手のものだが、コンピューターは初めてだったので、ホームページ制作ソフトを相手に苦戦の日々だった

九百万字数の巨大ホームページに肩も痛めたが、ハッカーらしきものにも悩まされ、立ち上げては消され立ち上げては消され、この五年

には数度にのぼった。

一番多かったのは「心行」と「感謝の祈り」だけが消えるのである。よほど都合の悪いのがいるのでしょう。

そのうちには半ば諦めてなされるがままに時を過ごした。

消えたらその内にあげようと考えを変えたら腹も立たなくなった。楽になった。

こうして五年目には五十五万人もの訪問者をいただいた。

そしてその間には、多数の高橋先生の講演ビデオテープを所有される方からテープリストを戴いて、講演日時と演題を添えて内容を濃く

させていただいた。懸命にやっていると「自力の極には他力あり」ということも実感した。

なにくれと力を貸してくださる方が何処かにいられると勇気も湧いている。

二度の脳出血で倒れ、歩きはヨイヨイだが、自転車にも自動車にも乗れ、それも精密なラジオ製作の功なのか不思議にも手だけは

残っている。

園頭先生は、三年間体を動かすこともお出来にならず喋りもおできにならなかったが、これも何十年間もの執筆のたまものか指は良く

動かされて筆談もお出来になった。

私の名は、「人のカガミになれ」と、素晴らしくも責任のある名前を両親につけていただいた。残された人生、「一丁やれるだけのこと

をやるか！」と考えている。平成十五年五月十六日 合掌

[Home](#)

Home

1973年(S.48)8月16日

高橋信次先生「東京本部職員を叱られる」

高橋信次先生は、本部が先生に金魚のフンのようについてくるばかりで率先して勉強しないので、「試験をします」と命ぜられますと、

試験をされることに異議をとなえる人達が出てきて、それを諷められる叱責の言葉です。テープ筆録をお聞き下さい。

試験をするということに対して、皆さん自体の問題点について、皆さんの意見というものを聞きました結果が、非常に、こういう一つの

きっかけになっちゃって私達は揉(も)み合い、その結果に於いて、非常に良かったというのは、関西の考え方です。

それですから、いま私の説いているのは、本当に権威あるものなのです。私はいい加減に説いてはおりません。

その権威あるものを、皆さんが、受けるか、受けないかは、皆さん自身です。私はいい加減なことは説いておらんのです。それは皆さん

が、死んでから後悔するようじゃ、困ると思います。

私は、あれだけの汗と、あれだけの努力と、実在界を通して説いておる言葉です。それだけに、その権威あるものだったら、試験である

うが、何であろうが、実践しておったならば、出来るのが当然のことです。

そういうことを棚上げして自己保存することは、すでに自分自身が正法というものに対する権威を疑っているんです。

我々は、創価学会や、或は、大学や一般の試験とは違います。それだけのことが当然だからです。私達は、試験をやるというのも、私の

判断でやったのでありません。実在界から指令を受けているのです。

我々はそのような、ちぼっけなことで、心の機能を狂わすようじゃ、正法を聞く資格はありません。それだけの権威を、皆さんは持って

いるのです。その権威を、自分自身がそれだけの結果を出すことは、当然なことです。まだ私の話しを聞かないで、地方に、或は外国に

いる人達のことを、皆さん、考えて下さい。甘ったれております！（語気を強められ）

真実なものであるならば、これは神が私に指令を与えているのです。

そのくらいのことは、皆さんが自覚をもって、自分自身のものとして解決していくのは当然であり、また支部の責任者ならば、このくら

いは当然なことです。

私はそれだけの威厳を持ち、それだけの理論を持ち、それは私自身の努力ばかりから出てくるものではありません。実在界を通して、

私は一つ一つチェックしているのです。それだけに偽善であってはならないのです。自己保存であってはならないのです。

私は真剣勝負です。そういうことで、例え試験をすることによって、混乱の起こるようなG L Aなら、やめてしまった方がいいですね。

私は、ついて来るものだけを連れていきます。そういうちっぽけなことよりかは、皆さん自身が、何故、神理に対する自信と、実践によ

る結果を、皆さん自身が選ばないのですか。私はそうだと思います。

その結果が皆さん自身に跳ね返って来る神理なのです。我々はそんな権威のないものではありません。それはやがて皆さんの前へ、その

真実が現象化されます。試験を受ける、受けない、ナンセンスです。

私達は、その試験だけを通してではなく、権威あるものを、権威あるものとして、皆さんの血や肉や骨に、そして自分自身を完成するも

のなのです。そういうことを知らないで。

皆さんの心の窓を開けば、それだけの結果が分かるのです。そういう事を一つ、知って欲しいと思いますね。

私らは、いい加減なことをやっておりません。その辺の新興宗教とは違うのです。自分達は命を投げ出してやっているんです。そのもの

を自分自身が実践したならば、当然そこから出てくる結果は、肉体まで供養しようとして、我々はやっているのです。

聞く皆さんが、それだけの根性が無くて、何が出来ますか！私は皆さんより、自分を厳しく自分を眺めておりません。それだけの私には、

説いている神理に権威があるからです。

皆さんは、それにも、自覚の上に立つことが大事じゃないでしょうか。いい加減なことなら、止めた方がいいですね。私らは、命懸けの

人達に、その道を説きます。そしてそれを、迷える人々に、その真実のものを、私は教えます。それが本当じゃないのですか。

それだけに本部の皆さんが、試験、うんぬんということに対して心を動かすようでは、話しになりません。

私は、釈迦如来として言うのです！（語気が強く）

皆さん自身が、自分自身を悟ることです。自分に甘すぎる。

自分に嘘を言い、自分自身を、自分自身に権威を持ちなさい。私は皆さんに、初めてこのことを言います。

ヤクアツワーリス フォアティエ レアワ カポテーワラ ティーポタラ ティーエセア（異語で叫ばれるように）。

皆さん自身です。それは皆さん自身なのです。実行した結果、出てくるのです。それは、甘いのです。自分に厳しさを持つことです。

一人でも、私は自分をしっかりと見詰めてきました。それだけの自信を持っている人は、この中に何人いますか。自分をしっかりと見詰

めてきている人が何人いますか。それをやって欲しいのです。

そうすれば、自から、皆さん自身が自覚と責任と自信を持つことが出来るのです。違いますか。

私達は生ぬるいこと、やっているのではありません。ここにいる高橋弁護士だって、忙しい中を、何とか間に合わせて、やっているん

です。命懸けなんです。皆さんはまた人々の指導をする上において、やることが皆さん自身の課せられた使命ではないでしょうか。

私は、東京の皆さんの遅れているのを残念に思います。

余りにも膝元にいながら、甘ったれております。関西や、或は過日は山形の人達だけが、関西に求めて、支部を作ろう。行くところ行く

ところへ私達の神理を、彼らは耳そば立てて、そして実践してきております。

それが大事じゃないでしょうか。私は、真実の一人の人間がおれば、それでいいのです。

私の説いているものは、私自身じゃありません。それだけのことを皆さんは知って欲しいと思います。

私はそれだけの責任を持っております。それが道ではないでしょうか。その為に皆さんが、例えどのような状態があろうとも、自分がそ

の実践体験をおいているものであるならば、正道というものを、しっかりとフィルターにかけて、始めてそこから出てくるものは、真実

じゃないでしょうか。それをひとつ皆さんは実践して欲しいと思います。

私は自分自身というものを通して、実在界からも色々と言われております。厳しさを、それだけ自分自身を見詰める為には、皆さん以上

に厳しいです。誰が何んと言おうが、皆さんは自分自身にもっと責任を持ち、そしてそんなちっぽけな、そんな小さな東大や、或は創価

学会の試験とは違います。真実なものです。そのものを皆さんが知って欲しい、それ以外にありません。

それだけに皆さん自身が、その結果を出さなければ、自分自身がその責任を取らなきゃならんのです。

私らは試験の成績うんぬんを言っているのじゃないのです。試験なんか、分からなくたって、私の眼は節穴ではありません。一つ一つ、

その人達の心と行いを、例え書けなくとも、私には解るのです。皆さんは、それだけ位いのことを、知って欲しいんです。

相手が、例え書けなくても、努力している人間、現実動いている人間、解るんです。それは、例え人を導かなくとも、ここにいる新井

さんだって、そうです。自分は思うように書けない。しかし一生懸命にやっているんです。皆さんは、それを知って欲しいと思います。

いかにうまいことを書いたところで、私はこの者を認めません。それだけのことは解るのです。少なからず指導者として、皆さんがやっ

ていく上に於いて、もっと自分自身を磨いて欲しいと思います。

その結果は、今の質問や考え方が愚問であるということです。それだけの権威を欲しい。いずれは、五年、十年経てば分かってくること

です。

それは勇気です。努力です。そして自分自身を完成していく道は、今、私の説いているもの以上はないということです。その権威を皆さ

んは知って、直して欲しいと思います。終わりです。

みな一斉に、「どうもありがとうございます。」、

と。

Home

Home

1976年（S51年）7月10日 高橋信次先生のご葬儀 “感謝と誓いの式”

「青山斎場における告別式」

“誓いの言葉”

[高橋武弁護士]

高橋信次先生は天上界へ旅立たれました。思えば、先生は昭和2年9月、長野県佐久郡にお生まれになり、10才の時以来、何十回もの

幽体分離の体験の中から、この肉体支配の、もう一人の自分の探求に挑んでまいりました。

そうしている内に、遂に昭和43年7月、もう一人の自分の本当を見極め、ご自分の使命を悟られて、生老病死の煩悩から解説されまし

た。そのとき以来、先生は三世を見通す能力を備えられ、日中はご自分の事業の経営や、発明、新聞、また講演に、著作、個人指導に寸

暇を惜しんで、大活躍され、夜は夜で、その魂は、神理の探求と宇宙の秘儀を求めて、文字通り、天駆ける毎日でございました。

その結果、明らかにされた神理と天上界に関する。秘見は、古今のいかなる聖人も説き明かし得なかった境地に到達され、これらはずべ

て著作や講演の形で、私達に与えられてまいりました。

ここに説かれた法は、混迷汚濁の世にあって、苦悩と無情の闇に喘ぐ私達にとって、行くべき道を照らす明かりとなり、先生は私達に大

いなる希望と救済とを約束する存在でありました。

その明らかにされた神理は、年を経るごとに精彩を増し、その説かれた法は益々光彩を放ち、国内は論に及ばず、遠く韓国、台湾、アフ

リカ、ブラジル、アメリカ東部にまで及んでおります。

近頃はアメリカやまた中東の国に擱（す）て於いて、法を説く光の竜巻とも思わせる気魂が合い伴い、先生は世界人類に、大いなる希望

の光を投げかける偉大な師であります。

しかるに先生は、突如として天上界に去られたのでございます。自分の使命に、そのお命を捧げたのであります。これらを思いますと、

先生は自から説いた法と慈愛を、身をもって実践し、そして去られたことを知るのであります。その教えは今、光となって、宇宙の彼方

に響いております。

しかし一方、先生を思えば、今の生前と変わらず、私達の心の世界にあって、私達に語りかける先生を実感することが出来ます。やはり

先生は、その愛のお言葉にありますように、私達の心の中に生きておられるのであります。私達はそれを、杖とし、力として、どれだけ

道は遠く、どれだけ道は永くとも、その道を忘れず、先生をお慕い申して、ひたすら光を求め、歩み続けます。そして先生のご意志を継

ぎ、私達は世界の人々にこの法を伝え、日々にユートピア建設に前進することを誓います。

先生、いたらぬ私達の、手をとって、足を取りして、滔々（とうとう）、人間の道を教え、私達を今日までお導き下さいまして、本当に

ありがとうございました。感謝と誓いをこめて、厚く御礼申し上げます。

昭和51年7月10日・GLA総合本部事務局長 高橋

[中谷関西本部長]

高橋信次先生。実在界と現象界の万象すべての父である、師である、親である真のメシア、エルランテイ高橋信次先生。

私達が先生の説かれる法を真実にして学ばせて戴きまして、常にお示し下さいます人生は慈愛に満ち、多くのものを引き連れ、名峰を

照らす光となって私共の心の底に深く深く刻まれております。

先生、本当にありがとうございました。本日ここに、いついつまでも、先生のご登場を願い、快復を祈ってりましたが弟子達が、先生

のご他界に際しまして、お別れに乱心致しております。

私達は今一同に、成らうことなら、全快を願い、心情として例え夢でも、あの暖かい御姿に接していたかった心の想いで一杯でございま

す。

先生はかねてから、私の実在界での計画は47才までで、後は未定なのですと、おっしゃっておられました。今にして思えば、先生の

お心の中には、すでに今日のあることを期しておられたものと、解釈申し上げるのでございます。

昨年以来、度々、「本部長、私は近い内に、あちらへ帰ることになるかも知れないが、後は頼みますよ」とおっしゃいました。私は、

「先生、そのような悲しいことを言わないで下さい」と申し上げますと、先生は、「いやあちらから度々督促があるんですよ」とおっしゃいました。

やいました。

「私は、このような重大なことを、私一人の心に留めておくことは出来ません」と申し上げますと、先生は「そのことは一栄にも話して

ないことなので、あなたの心に留めておいて下さい」とおっしゃいました。

先生の数々のご予言は、すべて一分の狂いもなく実現されてまいりましたが、このことだけは絶対に有り得べきことではない。或は先生

のご冗談かと、分別のつかないまま、希望的に受け止めてまいりました。

しかしそれは凡愚が図り難い、先生のご予言であったことに、今、思い至るのであります。

また先生のご日常は、ただ衆生済度の為に、お心を向けられ、自からのお体のご酷使になり、ご講演に、個人の指導に奔走され、この

間、睡眠時間も惜しまれて、ご著書を執筆されますお姿を、お傍で拝見致しまして、どうぞ、そのようなご無理をなさって頂きませぬ

ようにと、お願い申し上げますと、先生は、「そうですね、しかし急ぎますのでね、お釈迦様の教えも、イエス様の教えも、誤って伝え

られてきましたから、本を残しておけば安心ですからね」と申されました。

そのお心は、御自からご計画なされました、神意の仏国土を具現するというお慈悲に満ちたお姿であったと感じて戴いております。

そのお心の中には仏典にあります。「若し仏久しく世に住せば薄徳の人は善根を植えず、貧窮下賤にして五欲に貧著し、憶想妄見の網の

中に入りなん。若し如来常に在って滅せず見ば、便ち嬌恣を起して厭怠を懐き、難遭の想、恭敬の心を生ずること能わず」。

そういう慈愛のお心が衆生を済度せんが為の故に願うを現すというお姿を示されたものと受け取らせて戴いております。

また本年3月、白浜研修会で初めて人類に、宇宙界9次元までの実相を明かされました。それまで、いくら実在界の仕組を説き、私の使

命を果しても、それを証明する者が出てこなければと、常に漏らされ、待ち侘びておられたお姿を存じておりましただけに、先生のお喜

びは、いかばかりかと推察申し上げておりました。

ましてその大天使長ミカエル様が、先生の最も御身近な佳子様であるということは、縁生の必然ではございますが、先生のお喜びは、ひ

としおでございましたでしょう。

またその時に、私達の心の隙を狙うサタンの暗躍のあることを実証され、私達の己心の魔の戒められましたことを、心に銘じて、事後の

戒めと致します。

先生は、次の御指名を次のミカエル様に継承され、説くべきことはすべて説き、残すべきことは全て残され、今世に於いて与えるべきは

全て私達にお与え下さいました。

今、天上界にお帰りになられた先生に、お別れせねばならぬ時に当り、今更ながら、先生のご慈愛に、何一つとしてお報い出来なかった

不徳を深くお詫び申し上げます。

しかし曇り多き心の凡夫ではありますが、先生の御光を受けた私達でございます。惜別の情を乗り越え、自からの心に鞭打って、先生の

天上界にお帰りなられる時にお教え戴きました、“私はいつもあなた方の心の中に生きていることを知りなさい。あなた方は自からの使

命を悟りなさい。法を拠り所として、神の子の使命に生きなさい”。こういう神理の言魂を深く肝に銘じて、縁生の弟子達みんなが仲良

く手を取り合い、教えの柱として、一栄先生、佳子先生を中心に、私達の心に焼き付いております先生のご慈愛に満ちたお姿を胸に抱

き、ご遺志を継いで、自己の確立とユートピア実現の使命に生き抜くことを、固くお誓い申し上げます。

高橋信次先生、どうぞこれからも、私達を見守り、お導き下さいませ。

本当に、本当に、ありがとうございました。

昭和51年7月10日・GLA関西本部長 中谷義雄

[第一電気(株)社長 佐藤 寛(日大卒)]

[資本金3000万円・売上3億1500万円/年・磁気テープ装置]

謹んでGLA会長、並びに高電工業株式会社社長・高橋信次氏の御魂に申す。

このたび思いもよらぬ訃報に接し、茫然としてなす所を知らず、現実に今、君の遺影の前に立つと申せども、今だに実感すら覚えぬ心境

なり。今までの交友を顧りみると、早や30年に何々とする。そもそも求道の気配は、太平洋戦争の最中にて、いまだ覚めやらず。

昭和22年の春、駿河台の丘に於いてであった。その当時は、戦後の精神的、物質的な虚脱状態より、ようやくにして立ち直り、勉学の

志しに燃えた、アラハンの境地にあったことを、つい昨日のこのように思える。共に机を並べ、勉学に勤しみ、共に語り、共に過ごし

た日々を思い起こし、ここに涙する。

今、私にとって、この30年間、変わらぬ友情を持ち続けることの出来た、ただ一人の友である。このただ一人の友を失い、再び私は、

君に代わるべき友を得ることが出来ようか。否、これも転生輪廻の定めにて、求むれどあらず。

君は学生時代に、不思議な話しを数多く語ってくれた。君の背負うべき大自然の運命をも、繰り返し、繰り返し、熱をおびた眼差しをも

って説き浸り、説き浸りしこともありき。

また、地球、大宇宙に対する秘境に対し、人々の感知せぬことを解明し、また予言を試みたこともあったが、君は深くうなずきながら聞

いてくれたことも、今は走馬灯を眺むるが如く、すでに地平の彼方なり。

今にして思えば、君の幼き日々、戦時の少年航空兵時代、更に大学時代を通じて得た経験は、すべて今、あなたの人々の光となる為の母

体の盤石となりたることを。みな君自身の心を開く良き法となれり。神・仏にこの肉体を預け、己の寿命までを縮めたもうなり。

君の言う、世の為、人の為、己をいじめきことは明白なれど、願わくば、この世に永く留まって、常に多くの迷える人々、悩める人々の

光となられることを。しかれども、両者、天の言葉にありき、君の言う天命に従いたもうたことと思えども、惜別の情を断ち切ることを

あたわず。

ああ、嘆けども君からの声はなし、既に君の肉体は還らず。幽明の世界に有りせしとはいいながら、君の精神は不滅なり。君の残された

業績は永遠に消えず。ここに集いし人々の胸に生き、永遠（とわ）に語り伝えられることとなれり。

いつに変わらず、穏やかなほほ笑みをたたえて、慈愛の眼差しを添えて、後に残れり人々を見守りたまえり。大先生の霊よ、安らかな

れ。安らかに眠りたまえ。ここに慎んで哀悼の意を表す。

昭和51年7月10日・佐藤 寛

Home

[リヒト産業(株)社長 田中 経人(関学卒)]

[資本金10億400万円・売上74億円/年・事務用品]

感謝の言葉。天上界にまします我らの本神、高橋信次先生の御魂に慎んで申し上げます。

去る6月25日の午後、東京の浅井様よりお電話を頂きました。その時、「今からお伝えすることを、心を落ち着けてゆっくり聞いて下

さい。よろしいですか」と二度まで、確かめられ、いまだにその言葉を信じられずしてうけたまわったのは、本日午前11時28分、高

橋信次先生は地上でのご生涯を終えられて、天上界にお帰りになられました。詳しいことは、いずれ大阪GLA本部に届くでしょうとの

お電話でした。

一瞬、私は自分なりに疑いましたが、やはり真実でした。本年1月、大阪でのご講演の折、先生は自分の地上での生命は48才であった

が、天上界と改めて約束して、もう5年延長されたとおっしゃいました。

けれどもその時に、みんな私達はそのお言葉を、うわの空でうけたまわり、そんなことはあるまい。先生はあの若さとお元気なお声なの

だから、ずっとそんなように、80数歳までは、その地上界での私共を教化して下さるものと、一応に思っておりました。

また一面、私共がなかなか前進しないので、もっと努力・精進せよとのお論しの意味で、そうおっしゃっているのだらうと、軽く受け取

っておりました。

今から考えますと、先生は御身をもって、人生は無情なものだよ。一切の執着から離れるのですよと、教えて下さったのでした。何をす

るのも先生、どんな小さな事でも先生、先生と、お心を煩わせていました。どうか愚かな私達をお許し下さい。

今、先生は私共を見ておられます。しかし残念ながら、私達から先生は見えません。今日は全国からGLAの同志がたくさん、この青山

斎場へ参っております。こうして先生のお写真を拝見して、楽しい昔を思い出しております。

GLAとして発足して今年で7年でございます。私共、関西のものは、4年前後の短い期間でしたが、お師匠様と弟子の間柄でございま

す。

先生は私共の、一人一人の心の中にいらっしゃいます。お教え戴いた種々のご教訓は、心に焼き付けております。慈愛に満ち溢れた先

生、私達は本当に甘えておりました。しかし今は大いに変わりました。

先日の和歌山での研修会は、かつてないくらいに充実して盛り上がりました。先生に頼り過ぎた私達は、これを機会に全員、心を新たに

して正法を守り、一人一人が自己を確立し、己を磨き、日本全土は申すまでもなく、全アジア、全世界に先生の正法を伝え、法灯を守

り、人々を末世の世から救っていきます。

そうして、思念と行為の一つ一つを清めよ、つまり八正道に照らし合わせて努力致しますことをお誓い申し上げます。どうか天上界よ

り、私共をお導き下さい。

昭和51年7月10日・GLA大阪支部理事

リヒト産業株式会社社長 田中 経人(のりひと)

[国際問題研究所長 中丸 薫]

生き生きと最も偉大なる生涯を遂げられました我が師、高橋信次先生。

世界は一つ、人類の心は一つと、私は今日まで言い続けてまいりましたけれども、それをこのように克明に、私共人類にお示し下さいま

した先生は、本当に偉大に生涯を遂げられました。

あらゆる国の、国家元首、国王、数々の方々にお会いしてまいりました。しかし今日、自分の人生を振り返ってみまして、本当に偉大な

生涯とは何かということを考えてみた時に、いかに仁徳を積み、そしていかにこの世的に偉くならない人生を送るかということが、最も

偉大なる生涯であると思います。

そうした意味で先生は本当に偉大なる生涯を遂げられました。先生の教えられた数々の教えは、そしてこの世界が一つであり、人類の心

が一つであるという教えは、克明に活字となり、ビデオとして残り、あの世、この世の仕組みまでも、かつてキリストが、そして釈迦が

教えることが出来なかった、それを乗り越えて、先生はすでに私達人類に示して下さいました。

キリストの時代には活字もなく、釈迦の時代にも活字はございませんでした。しかし今、私達は先生が48年間かけての生涯を活字で読

み、そしてビデオで人類史上、誰もが示すことの出来なかった、あの世とこの世との仕組みを立証、理証、現証と、ことに図で克明に示

されたのです。

残された私達ですら、一人一人、先生の心を、心に灯し、人類は一つであるという事を、世界に向かって示していかなければならないの

です。

私達一人一人には、それぞれの使命がございます。器は小さくても、一人一人が力を合わせれば、先生が説き明かされた、その声はやが

て世界の人々に広まって行くでしょう。

先生はあの世に行かれましても、佳子様意思を通して、あなたが世界を一つに纏めて帰って来て下さい。佳子をよろしくと言われま

した。

一度に急な事が起こりまして、私も自己確立のまだ途中でございます。あさってには、あの社会主義国であるイラクに行かなければなり

ません。しかし先生の説かれた法を信じ、これを頼りにしていくならば、これからどんな困難に遭おうとも、心の揺れ動くことはない

信じております。

どうか私達一人一人を見守り、今までと同じように導いて行って下さい。そしてやがて私が、もっと自分の確立が出来た時に、先程も佳

子様のお力になる事は出来るかと思えます。

先生が言われました色々な教えを元にして、そしてアメリカや、先生は世界に向かって大きな奇跡が、これから出来る事だと信じており

ます。

20世紀の私達にとりましては、マルクスや、フロイドや、そうした人たちの意識で毒されて、或は知の世界で、かなり歪められている

私達一人一人、人類にとりましては、現代の奇跡というものは、むしろ南北戦争、中東平和、東西ドイツの統一が、先生の教えを元にし

て成し遂げられた時に、その一つでも、南北の朴大統領と金日成がお会いになるという、そういう事実を実現した時、先生は世界の人々

はエルランテイを信じ、先生のお説きになりました法を信じざるを得ないと思うのです。

どうか私達一人一人を、これからもお導き下さいませ。これからどんな困難に会おうとも、私は必ず使命を果してまいります。

〔司会者〕 ありがとうございます。ただ今をもちまして、感謝の言葉を捧げて戴きました。

このあいだのお通夜の時に、私共で、一つの非常に、あの楽しいテープを探してまいりました。それは先生が、講演会の時などでは決し

て聞けない、その先生の自作朗詠のテープでした。

今日もまた、そのテープの一部をおかけして、皆様に聞いて頂きたいと思えます。なお、その時に、皆様の中か

ら、式が終わりましたか

ら、あのご朗詠は、お作りになったのが信次先生で、お唄になったのは、どなたか、そちらの専門の方ではないでしょうかという、お

話を頂きました。

しかしこれは先生の自作自演でございます。あまりにも素晴らしいご朗詠なので、どうも専門家ではないかというお話を戴きましたけ

れども、これは先生の正真正銘のお声でございます。しばし、先生のご朗詠に耳をお傾け下さい。

高橋信次先生ご朗詠（信次師自作の詩吟）

幾年か求めし道は遠かりし

悟りば光我が心なり

（2回繰り返し）

法灯の光は消えて幾久し

初日の如く今は輝く

（2回繰り返し）

巡り来る初春楽し今朝の夢

光輝く友の姿が

（2回繰り返し）

〔司会者〕 えー本当に素晴らしい響きです。先生はこのほかにも、時に、琵琶を鳴らされたり、或はギターを片手に歌われたりしたこ

ともございました。その中で、これも非常に珍しいテープが、今朝、手に入りました。これを皆様に、また聞いて戴きたいと思ひます。

信次師が唄われる小諸馬子唄

小諸出て見よ 浅間の山に

けさも煙が 三筋立つ

黒（あお）よくなよ もう家が近い

森の中から 灯（ひ）が見える

[司会者] ただ今のは、S 4 9 年 1 月の関西の新年会場の席場の録音と聞いております。

ここで電報の読み上げに入りたいと思います。では電報を読まして頂きます。

[電報：G L A 東京本部 高橋一栄 様宛]

会長高橋信次先生への感謝と誓いの式に対し、会員一同、ご意志を継いで精進することをお誓い申し上げると共に、慎んで哀悼の意を表

します。希（こいねが）わくば、尚、天上より天佑を差し延べられ、私達をご教導賜りますよう、お願い申し上げます。

G L A 関西本部一同

[司会者] そのほか、関西本部婦人部、青年部の方々からも、ご同様なお電報を戴いております。同じく高橋一栄様宛でございます。

[電報：G L A 東京本部 高橋一栄様宛]

偉大なる心の師の訃報に接し、慎んで衷心より、哀悼の意を表します。

希（ねが）わくば、天上より天佑を差し延べられ、衆生をお導き下さらんことをお祈り申し上げます。

大阪府知事 黒田了一

[司会者] 黒田知事よりの電報でございました。そのほか数多くの電報がまいておりますけれども、時間の関係で、以上で省略さし

て頂きます。

これから引き続きまして、神理の言魂の朗読をお願い致します。皆様もご存じのように、様々にG L A 誌を通して、或は「心眼を開く」

、そのほかの著書で、信次先生は珠玉のような美しい響きを残しておられます。その幾つかを、東京本部理事・関芳郎氏の朗読です。そ

れからもう一人、夏栗由美子さんの朗読で、しばしお送りします。

それでは関理事、お願い致します。

Home

[神理の言魂 関芳郎氏の朗読]

執着 傲慢 逃避 中傷 妬み 愚痴 争い 独善 排斥 差別 自己顕示 自己満足

これらは人の心を毒す

なんとなれば その想念・行為は執着に根があるからである

執着の想念は 神仏の心からもっとも遠い距離にある

死を急ぐ 空を飛ぶ鳥は 地上に倉をつくることをしない

地上の動物も その日の生活に満足している。

明日の糧を求めて 相争うのは人間だけだ

鳥や動物は その日の糧で生き永らえている

人は明日の糧を求めて死を急ぐ

人間よ！ 眼をひらけ

正法 正法とは 大自然の法則をいう

春夏秋冬の四季 昼夜の別 生者必滅 因果応報 すべて ことごとく 正法に適わぬ

ものはない。

自然の姿が変わらぬかぎり 正法も変わらぬ

正法は永遠である。

人が永遠の生命を得ようとするならば 正法を学び 行じよ

自然は常に 地上の人間に生きる方法を教え 慈悲を与えている。

行 行のない正法はないのである

正法は生活のなかに生かされ 生きているからである。

自然を見よ

自然は 一刻の休みもなく動いている 停止はない

自然は常に動き 行じ 行ずるから正法がそのまま生きている。

正法は 行じて はじめて 生かされてくる

正法は知識ではない

観念でもない

あくまでも行くなのである。

正法者は 行じて はじめて 自然と一体になる。

幸福者 多くのモノを持つ者と持たざる者

そのどちらが幸せであろう

持つ者か それとも持たざる者であろうか

もしも多くを持つ者がそれを失うまいとし 持たざる者がそれを欲するとすれば

その何れをも不幸であるといわざるを得ない。

一日の食糧は数片のパンで十分だし 居住の空間は数平方メートルで足りるからである。

物の多少に幸 不幸があると考える人は本当に不幸である。

なぜなら 自分自身を含めて あらゆる物質は

やがては大地に還元されてしまうからである。

幸せな人とは 失う物のない人をいう

慈悲 愛 この地上界も大宇宙も 神仏の慈悲と愛によって動いている

人間もまた慈悲と愛の心を所有し 生きているものだ

正法という神仏の法にふれた者は まずその心を体し その意をくみ

実践する者でなければならない

慈悲を法にたとえれば 愛は法の実践である

慈悲を神仏とすれば 愛は人間の行為を意味する。

それ故 慈悲は万生万物に無限の光を与えるものであり

愛は寛容にして 助け合い 補い合い 許す行為をいう

間違えてはならぬことは 慈悲も愛も

自ら助ける者にその光は与えられるということである

その心のない者 実践をいとう者には光は届かぬ

愛を求める者は 愛の行為を示せ

慈悲の門をくぐろうと欲する者は 法の心にくみとれ

末法の世を救うものは正法であり 慈悲である

慈悲を生かすものは愛である

慈悲を神仏の縦の光とすれば 愛は横の光である

愛

調和は無限の進歩と安らぎを与える

調和の根底には愛が働いているからだ

愛には自己主張がない

おごりがない

へつらいがない

喜び悲しみがあつたとしても それにとらわれることがない

苦しむ者があれば その苦しみを癒し

悲しむ者には光を当てて生きる希望を与える

愛は神の心であり 私心を去った調和への偉大なかけ橋なのだ

この世に愛が満つれば 地上に仏国土が誕生しよう

神はそれを望み 神はそれを辛棒強く見守っている。

とらわれ 執着の心がある間は人間の苦しみ悲しみは消えることがない

執着とは「もの」にとらわれることである こだることである

とらわれの原因は生老病死であり それは五官六根を通してつくられてゆく

執着から離れたいと願うなら まずものを正しく見ることからはじめよ

正しく見るためには自己の立場を離れ 客観的な眼を養え

そうするとしだいに「もの」の実相が明らかとなり

とらわれの心から解脱するようになる。

自由 人の心は一念三千といって 無限の自由と無限のひろがりをもっている
その心がひらくと この世だけでなく あの世の姿も見通せる
さらに 大宇宙の果てまで旅することもできる
執着の心が消えると 心の自由自在を身をもって体験することもできようし
人間の実相を はっきりと自覚することができよう
人がその心を獲得すると 執着の心がいかに小さく 狭く 頼りなく
そのおろかさを悟ることができよう
真の自由は 執着の心を捨てたときからはじまる。

夢 夢をみない人はいないだろう
しかしその夢を的確にとらえる人は少ない
夢はその時々、その人の想念と行為をもっとも抵抗なく
偽りなく表現するものであるからだ。
夢は心の窓でもある
めざめているときは周囲の眼や自分の意志によって押えられているその想念が
夢の中ではまるで意志を持たぬ生物のように自由気ままに動いてしまう
夢の中で正しく行為することができるようになったときに
その人は本物になったのである。
その想念と行為について 悟りを得たといえよう

[神理の言魂：夏栗由美子氏の朗読]

責めるな 人を責めてはいけない
人を責める前に まず自分を省みることだ
大抵は 自分の心を 自分が非難していることが多い

自分の周囲に起こった諸現象は

自分に無関係であることは絶無といってもよいからだ。

しかしなかには光にたいする陰の場合もあるであろう

その場合は 時を待つことだ

縁無き衆生は 時が経たねば救うことはできないものだ。

愛 愛と憎しみは諸刃の剣のようにみる者がいるが そんなことはない

憎しみは自己保存であり 憎しみをかくし持った愛は 愛とはいえない

愛に自己弁護はない

愛に立場はない

愛に報奨はない

愛に自我はない

愛に甘えはない

愛に苦しみはない

愛に楽しみはない

愛には神の心しかない

神の心とは調和である

他を生かし、助け合う 補い合う 許し合える その心が愛の心に通じ

その行為が神の心につながって行く

誘惑 悪魔は人を誘惑することはない

誘惑は己自身の心のうちにある

実践 人は反省することによって前進する

しかし反省の功德は 反省後の中道の実践にかかっている。

実践のない反省は 観念の遊戯にすぎない

Home

[司会者] それたでは引き続きまして、各地区を代表して、皆様に誓いの言葉を述べさせていただきます。南の地区から、順々に述べて

頂きますけれども、その地区のお名前を読み上げました時に、その地区の関連の皆様は一緒にご起立願います。

始めに、西日本地区を代表して、園頭広周西日本本部部長殿に、誓いの言葉を戴きたいとおもいます。西日本地区の皆様、ご起立願いま

す。

[G L A 西日本本部長 園頭 広周]

誓いの言葉

太陽系霊団の秘儀と、人類の誕生、及び霊の救済の神理正法を明らかにし、その偉大なる使命を終りたまいし、我が心に活動の心と、

正法実践の勇気と努力を与えたまいて、ご昇天されました、真のメシア、高橋信次先生の御前に、G L A 西日本本部長・園頭広周、西日

本地区の会員を代表して、ここに決意を表明致します。

我ら西日本本部地区会員の者一同、正法を実践し、八正道を生活の基盤として、正法を広め、迷える人々を救済し、ここに於て、先生の

御心、ならびに御教えに倣わざらんことを、ここにお誓い申し上げます。

昭和51年7月10日 G L A 西日本本部長 園頭広周

[司会者] 次に関西地区を代表して、林正（おさむ）関西本部事務局長殿。関西地区の責任者の方々、皆様、ご起立願います。

[G L A 関西本部事務局長 林正（おさむ）]

真のメシアとして、全人類の救世の主、高橋信次先生の御魂の御前で、私共、G L A 関西本部会員一同が慎んで、感謝と誓いの言葉を申

し上げます。

私共、衆生にお説き賜りし御教えの神理正法は、「無上甚深微妙の法にして、百千万劫にても遭い奉ること難し」、永遠不滅の御教えで

ありしことを、深く深く自覚致すと共に、懺愧（ざんき）を惜しまず、真の正法者として恥じぬよう、邁進してゆくことをお誓い申し上

げます。

真のメシア高橋信次先生、何とぞ天上の世界より、私共一同をお導き賜りますよう、お願い申し上げます。

昭和51年7月10日 G L A 関西本部代表 林 正（おさむ）

[司会者] 東にまいります。谷口健彦・中京本部事務局長殿。中京地区の方々、ご起立願います。

[G L A 中京本部事務局長 谷口健彦]

人類がひさしくその出現を渴望したる真のメシアとして、今世、肉体をこの地上界にお現し下され、偉大なる教えを私達にお示し下され

たる高橋信次先生。

私達は先生の教えを守り、その志しを受け継ぎ、一人でも多くの人々に正道を灯して戴くべき、全身全霊を打ち込んで参ることを、ここ

にお誓い申し上げます。

正法に触れさして戴いて3年、先生の熱意溢れる衆生済度のご熱意と、ご指導に対してお応えすることの少なさを、ただ、ただ、恥じ入

るばかりでございます。今後、例え歩みが遅くても、一步一步、自己の確立をはかって参ることを、ここにお誓い申し上げます。

中京本部発足以来2年、今ようやく創業の苦しさを脱し、これから人々の間に正法が大きく広がろうとする確かな兆しを感じます。中京

本部発足の、心から天に祈り、自からの努力を誓った、あの初心を忘れず、より一層、奢ることなく、法を心の物差しとして、多くの正

法の友達と、しっかりと手を結び、仏国土ユートピア実現の先兵として邁進してまいる覚悟でございます。

高橋信次先生、天上界にあって、私達をお見守り下さい。未熟なる私達を慈しみ下さい。

私達はそれに応えてまいります。

これをもって誓いの言葉とさして戴きます。

昭和51年7月10日 G L A 中京本部事務局長 谷口健彦

[司会者] 続きまして、小柴敏雄・東京本部長殿。東京地区の方々はご起立願います。

[G L A 東京本部長 東京本部理事 小柴敏雄]

誓いの言葉

高橋信次先生、先生が大いなるお悟りを開かれ、G L A を創立されてより7年。この間、私達に神理正法をお説き下さり、神の子である

人間として、いかに生きるべきかを、身をもってお示し下さいました。

先生の寸暇を惜しまれぬご指導、ご慈愛によって、今、私達の国の中に厳然として正法があります。私達は先生を信じ、法をより所と

し、自己を確立し、法の実践に生涯を賭けるのみです。

正法の法灯を永遠に絶やすことなく、心を尽くし、身を尽くし、思いを尽くして、私達は地上界の仏国土建設の使命を果すことを、ここ

にお誓いを致します。先生、本当にありがとうございました。

昭和51年7月10日 G L A 本部地区代表 小柴敏雄

[司会者] 引き続きまして、丸山弘・北陸地区責任者殿。北陸地区の方々はご起立願います。

[北陸地区代表 丸山 弘]

宣誓

高橋信次先生、幾らお呼び申し上げても、もう先生のお声を聞くことが出来なくなってしまいました。私達の胸は悲しい思いで、今にも

張り裂けそうです。

静かに瞼を閉じますと、昨年7月6日、金沢の地においで下った時のことが思い出されてなりません。今日は、矢でも鉄砲でも、受け

て立つぞと張り切っておられた先生。そして金沢の空気は、おいしいね。金沢のお菓子は、おいしいねと喜んで下さった、あの時の先生

のお姿が、今も彷彿として、眼の前に浮かんでまいります。

先生は自分を犠牲にされ、私達をお導き下さいました。私達は何一つ、お手伝いをする事もなく、漫然と甘えてばかりおりました。何

んとしたことでしょう。先生、申し訳ございませんでした。深くお詫び申し上げます。

しかし先生の偉大な御教えは、私達一人一人の心に、生き生きとして、生きております。これからは常に先生の

御教えを心の中にて見詰

め、手に手を携え、勇気をもって、光への道へと、一步一步、着実に進んで行く覚悟でございます。

そして暗かった日本海沿岸に、灯して戴いた巨大な光を、益々明るく、しかも高々と掲げ、ユートピア建設へと、光の輪を広げてゆくこ

とを、お誓い申し上げます。

先生、ありがとうございました。今日まで、お導き戴いたご厚恩に対しまして、心から厚く御礼申し上げます。何とぞ、いつまでも天上

の世界からお見守り下さい。迷い多き私達をお導き下さい。ここに北陸地方の会員一同を代表して、私達の決意を述べ、慎んで感謝の意

を表する次第であります。

昭和51年7月10日 GLA金沢支部 丸山 弘

[司会者] 引き続きまして、叶内立郎・東北地区責任者殿。

主の御前に慎んで申し上げます。先生の御急逝の訃報に接した時、先生を頼りとする私達は、等しく驚愕し、悲嘆にくれ、心に空いた

空洞をうめることは出来ませんでした。

一時的とはいえ、私達は巨大な光を失い、盲になったのであります。しかし、いつも、法を頼りとせよと説かれた先生のご説法を想起

するに及び、私達は次第に先生の御逝法の意味するものを理解し、今更ながら先生のご逝去を早めたものこそ、我らであるとの認識に至

り、新たに涙するものであります。

先生のあまりにも大きな愛を、その御逝去によって、ようやく伺い知ることの出来た、いたらぬ私達をお許し下さい。先生の私達にお

与え下さいました大愛にお応えする道は、先生の説かれた法に沿って生き、法灯を我らの心の中に灯す以外にないことを、今、心で

それを知りました。

私達は、私達の心の中に巣食う、様々な偽我を正し、真実の自分を作って、神の愛に目覚め、その愛を人々の間に広げていくことに生

涯を賭けることを、お誓い申し上げます。また私達が天上界で誓ってまいりました、この世での使命は、それを必ず成し遂げてから、御

元に帰りますことをお約束申し上げ、誓いの言葉と致します。

希(こいねが)わくば、盲目の我らに、お導きと、主の光りをお与え下さい。

昭和51年7月10日 G L A東北地区 山形支部 叶内 立郎

[司会者] 引き続きまして、米国ロスアンゼルス地区代表・ブラウン妙子殿。

San Francisco代表 TAEKO S. BROWN

先生、8年の歳月を、ご自分の身を削って私達をお導き下さいました。心から感謝申し上げます。ありがとうございました。先生にお

目にかかることが出来た私達は、本当に幸せでございました。

先生に長い間、お待ちいただきました先生のご著書の英訳、ここに、ただ今、持ってまいりました。どうぞ、ご覧になって下さい。

今を去る5年前、「アメリカの地に法灯を灯して下さい」と仰せの先生のお言葉を、常に心に抱き、今まで器の小さな私でございます

が、一生懸命、心から努力してまいりました。

本年1月15日、アメリカ政府より、正式に宗教法人として認可されるまでになり、ようやく先生のお心がアメリカの人々、また世界

中の人々の救う、大きな一歩が記すようになりました。

この使命に、馳せ参じる私達一人一人が、互いに愛の心を持って調和し、些かも自我の為に正法を歪めることのない、自己に厳しく、

重大な使命を果す為に、一命を賭けて邁進することをお誓い申し上げます。

昭和51年7月10日 宗教法人G L Aアメリカ代表 ブラウン妙子

この項は、これにて終わります。

ウェブマスターは、高橋信次先生とは一度もお会いすることはありませんでした。

というのも医業研鑽のため、住まいは浅草の八起ビル周辺の、例えば御徒町、押上などと、ご健在のとき折角、数年間もグルグル着かず離れず

廻(めぐ)っておりましたのに、夜は銀座、赤坂、六本木と遊び歩き、生業のかたわら博多の街で十指のスナック等の派手目の副業に溺れましたが、

この項を編纂していたとき、正法のホームページを管理する立場の不思議さを、ヒシヒシと感じて涙が流れてなりませんでした。

(平成十五年五月十八日)



Home

「心行」の祈願文の解説

園頭広周師による解説

「祈願文」は、禅定する時の祈りとして、また、人のために祈る場合、天上界よりの加護をお願いする場合に非常に大事な欠かしてなら

ない「祈りの言葉」なのであるから、一言にして言えば、奇跡を起こす祈りの言葉であり、よくこの意味を会得することである。

祈願文

祈りとは、神仏と己の心との対話である。同時に、感謝の心が祈りである。

神理に適う祈りの心で実践に移る時、神仏の光はわが心身に燦然と輝き、安らぎと

調和を与えずにはおかない。

前文

私たちは神との約束により天上界より両親を縁としてこの地上界に生まれて来ました。

慈悲と愛の心を持って調和を目的とし、人びとと互いに手を取り合って生きて行くことを誓い合いました。

しかるに地上界に生まれ出た私たちは、天上界での神との約束を忘れ、周囲の環境・教育・思想・習慣そして五官に翻弄され、慈

悲と愛の心を見失い、今日まで過ごして参りました。今、こうして正法にふれ、過ち多き過去をふり

かえると、自己保存、足るこ

とを知らぬ欲望の愚かさに胸がつまる思いです。

神との約束を思い出し、自分を正す反省を毎日行い、心行を心の糧として己の使命を果たして行きます。

願わくば私たちの心に神の光をお与え下さい。仏国土・ユートピアの実現にお力をおかし下さい。

前文解説

いったい祈りというものは、どのような精神的過程を通して発生したものなのであろうか。それは、神の意識から、神の子としての我々

の意識が離れた時に、親なる神を、神の子である子供が慕うという自然の感情から発したものであり、更に人間が、あの世天上界からこ

の地上に生を受けた時に、あの世天上界を慕う感情として、何かあると必ず天上界、神を慕わずにはいられない心情が、祈りとして祈ら

ずにはいられない心となって現れたものである。

魂の故郷である天上界では、思うこと、考えることがそのまま祈りとなって神仏と調和していて、祈ることは即行為することであり、行

為することが即祈りとなっている。

ところが、人間はこの地上界に肉体を持つと、この肉体が自分であると錯覚して、天上界で持っていた時の全なる心と、それに基づく行

為を忘れてしまって自我に生きようとして五官に左右され、六根にその身、その心をまかせてしまう。すると、煩惱という迷い心が起こ

ってきて、本当の自分自身、神より与えられた神の子の意識を埋没させてしまってどうにもならなくなってしまふ。すると苦しみが生

じ、いろいろ不本意なことが起こってくる。

「苦しい時の神頼み」、自分の考えでなんとかなると思っている間は神を思い、神に祈るということはしないが、もはや自分の力ではど

うにもならないとなると、思わず神を思い出し、神に祈る心になる。それは、煩惱に振り回されてどうにもならなくなった人間が、最後

は神に頼んだらよくなることを知っている心があるからである。

「人生苦」というものを、ただ苦しみだけとしてとらえて、「苦しい、苦しい」といっている間は苦しみが続く。そういう人が多かった

から釈尊は、「あなた方は人生は苦だ、生きることは苦しいことだと考えてきたであろう」といって説き出されたのである。

苦しみを苦しみとして、その現象だけにとらわれていると苦しみはなくなる。ではどうしたらその苦しみから解脱することが出来る

のであろうか。それは、その苦しみの揚げ句に、神に祈りたくなるその心はどうして起こってくるのであろうかと考え始めるところから

苦の解脱は始まるのである。だからして、苦しみが起こってきた時には、その苦しみを苦しみとだけ考えるのをやめて、この苦しみの肉

体の煩悩に執着した結果であって、神を忘れ、本当の自分を忘れてしまっていた結果だったということに気づいて、その苦しみの神を思

い出させ、本当の自分を思い出させて下さる警告であったと感謝して、ではどうすればよかったのであったかということに反省すると、

その苦しみの苦しみから抜け出すことができるのである。

「苦しみ」を「苦しみ」とだけ考えて「どうぞこの苦しみを救って下さい」と祈る他力本願の心の中には、いつも苦しみの苦しみを描かれ想念さ

れているから、自分の心の中に苦しみの苦しみを描き想念している間は苦しみの苦しみはなくなる。今、現れている苦しみの苦しみは、過去に自分の中

に、忘れていた神を思い出して感謝し、本当の神の子の自分の意識を取り戻さなければならないのだということに気づいて、その苦しみの

は、本当の自分にかえれという警告だったのであると感謝するようになると、その苦しみの苦しみは自然になくなってくるのである。

なくなるばかりではなくて、その苦しみの苦しみを見ながら、心の中には感謝の思いがいっぱいであるから、その感謝の明るい心がやがて現象化

して幸福がくるのである。こうなることを昔から「禍転じて福と為す」といってきたのである。

「苦しい時の神頼み」というのは、煩悩に振り廻された人間が、最後に求めるものは、己自身の魂のふる里であり、そのふる里こそ、自

分を救ってくれるもう一人の自分自身であるということ、無意識のうちに知っているところから起こってくる無意識の行動なの

である。だからして、そういう時に心を内に向けて、もう一人の自分を探し求めることをしないで、心を外に向けてあちこちにお参りな

どして他力信仰をしていたのでは一向に問題の解決にならないのである。助けを求める自分と、助けを求められて救いの側に立つ自分と

は共に一つであって、救いの側に立つ自分とは「心行」の解脱の中で述べたように、潜在意識を通して潜在意識層に働きかけてくれる守

護霊・指導霊である。

本当にその人が反省をして「どうぞ助けて下さい」と真剣に祈ると、潜在意識層に働いている守護・指導霊が心の中から囁いて、どうす

れば救われるかを教えてくれる。余りにも問題が大きく複雑していて守護・指導霊に力がない場合は、守護・指導霊の求めによって、よ

り高い次元の天使が慈悲と愛の手を差しのべてくれることになっている。

このように「祈り」というものは、自分自身の魂のふる里を思い起こす想念であり、同時に「反省」という、自分自身を改めて見直す立

場に立った「祈り」でないと、ただ泣きつくばかりでの祈りでは意味がないし、本当の救いにはならないのである。

苦しいから助けてほしいというだけでは愛の救いの手は差しのべられない。なぜかというと、今の自分の運命というものは自分自身でつ

くり出したもので、そうなったのは誰の責任でもない、自分自身の責任だからであって、自分自身がつくり出した責任であるのに、自分

はなんにもしないで、誰か外の人が救ってくれるということになったら、その人は悪いことをするばかりで一向に魂は向上しないことに

なる。

人間は神の子であり、神の子たるに反した行動をした場合は、その分量だけ償うことが神の子としての摂理であって、反省し懺悔して祈

る時に、初めて神仏は慈悲と愛を与えてくれるのである。

人間はこの世に肉体を持つと過ちは避けられない。その犯した過ちを修正して救う手段として与えられてあるのが、反省と祈りであり、

祈りというものは、このようにして肉体を持った人間が本当の自分自身を知り、本当の自分自身を知ったところから神仏を思い起こす想

念として神仏が発生せしめられたのであることを忘れてはならない。

祈りは単に祈ることだけではいけないので、祈りはその祈ったことを行為に示さないと本当の祈りとはならないのである。

唯、口先で祈るだけでは愚痴の繰り返しになり、失敗した自分自身をその都度思い起こし強く印象することになって、神の子としての新

しい自分自身を発見し、創造することにならないからである。だからして、祈りには、神の子としての自分を自覚したその心と、神に感

謝し、すべてのものに対する感謝の気持ちが祈りにならなければいけないのである。

多く人は現在与えられてある自分の環境、境遇というものに不満を持ち、こういう環境、境遇に生まれてこなければよかったと思って

いる。潜在的にそういう不満を持っているから失敗もし不幸にもなるのであるから、現在与えられてある環境、境遇というものに、神が

与えて下さった自分自身の魂の最良の修行の場であり、ここを通らずしては魂の向上は絶対にできないのであるという自覚と感謝の心が

神に向けられた時に、心の底から真剣な祈りとなってほとばしり出るのである。

我々は、神の加護と、多くの人々の協力なくしては一時も生きて行けない。自分の運命を天命として、その使命を果たして行くために

は、人間はどうしても祈らずにはいられないのが人間である。この祈りの本質というものは変わらないが、このように考えてくると、祈

りにも段階があり、各人の心のあり方、調和度、現在与えられてある環境・境遇によって、祈りの内容は一人一人違うことになる。

要するに、祈りの本質とは、祈りは天と地と、神と人間、神と自分とをつなぐ光の架け橋であり、神との対話であるということである。

人は祈った時に、神に心を通ずることができるのである。もっとも実際には、その人が神に向かって祈る時、その祈る心を「よし」と見

た守護・指導霊、或いは光の天使達が、その人の問題に対して解決の示唆を与えてくれるのであるが、だから、祈ったことに対する答え

は「直観」となってその人の心の中から浮かび上がってくるのである。或いは時として「天からの声」として耳に聞こえてくる場合もあ

る。

この天と地と、神と人間との架け橋である祈りは、各人の心の調和度により、問題の大小により、大きくもなり、小さくもなりするもの

である。

大きな使命を自覚している者はそれだけ祈ることも大きくなり、また、大きなことの実現には時間もかかることになり、自分のことだけ

で満足している者はそれだけ祈ることも小さくなり、小さいことの現実にはそう大して時間もかからないということになる。

[Home](#)

前文「親の恩」

「私たちは神との約束により天上界より両親を縁と

してこの地上界に生まれて来ました」

なぜ、前文の一番最初にこの私たちが、この地上に生まれて来たのは両親からであるということが書かれてあるのか。

信仰の原点も、道德の原点も、教育の原点も、すべて私たちが今ここに存在しているのは親があってこそであり、その親と自分との関係

を明らかにすることなしには、信仰も道德も教育も存在し得ないからであります。

親不孝というほどではなくても、親に対する感謝もしないで、「信仰信仰」と走り廻っていたのでは本当の信仰になりません。同じよう

に、まず親に対する感謝の教育をしない教育では本当の教育になりません。即ち「恩」を知ることが人間の道德の根本ですから、

「恩を知らざる人より悪い人はいない」と西洋でも言っていますが、

釈尊は、「世間、出世間の恩に四種あり」と言われています。世間とは在家の人々のこと、出世間とは在家を捨てて僧となった人々の

ことで、結局すべての人間は四つの恩があるといわれています。

父母の恩

衆生の恩

国の恩

三宝（仏、法、僧）の恩

この四恩は一切衆生の平等の荷なうところである。と言われているように、「父母の恩」「親への恩」が一番最初に出てきているので

あります。

高橋信次先生は、次のように言っていました。

「私たちはあの世で誰と夫婦になり、誰と親子になるかを決めます。『あなたは、私のお父さんになって下さい。あなたは、私のお母さ

んになって下さい。そうして、あなたをお父さんとし、あなたをお母さんとする事なしには勉強できない魂の勉強をさせて下さい』と

約束をするのです」

どういう親から生まれて来ようと、それはみな自分がお願いして選んで来た父母であるというのです。

よく「親らしいこともしないで、なぜに親に感謝できるか」と言う人がいます。親の顔も知らないという人たちもあります。世の

中はさまざまです。

私が生まれた頃、親は貧乏でした。四、五才頃だったと思いますが今でもそうですが、鹿児島は毎年台風が来ていました。六畳二間に少

し土間があるその長屋はトタン屋根でした。風でトタンがめくれて家中、雨が降り込んで来て「起きろ」と起こされても眠くて「むし

ろ」にくるまって寝たことを記憶しています。小学校に行くようになって、友達が買ってもらっているようなものを買ってもらえません

でした。金持ちの家の子供を見ると羨ましく思い、もっと金持ちの親のところに生まれればよかったと、ちょっと親を怨むというほど

のことはありませんでしたが、親に不足をおもったこともありました。

私の青年時代はずっと戦争でした。私も戦地へ行って病気になり、約一ヶ月半位寝ている間にすべて生まれて来た時からのことを反省

し、心から父母に感謝しました。すべての恩に感謝しました。そうして、もういつ死んでも心残りはないという心境になった時、私は

「宇宙即我」の境地に入ることが出来たのでした。

ロスアンゼルスのアガシャ協会のウィリアム・アイゼン氏から「アガシャの説法」が送られて来て高梨さんに翻訳してもらった文章の中

から必要な部分だけを書くことにします。

地球に戻る魂

さて、この世には何千万もの女性があり、魂を出現させる運命を持っています。同様に、この世に子供を出生させる運命を持たない女性

も何百万もいます。そういう女性たちは、子供を出生させることに関しては、過去世において、もうすでに使命を果たしたからです。前

世では大いに奉仕したので、自身のチャンネルを通して現世に魂を出現させる必要性を持たないのです。

(これは前世で子供をたくさん産んで、子供の世話に一生懸命で自分の魂の勉強をする暇がなかった。それで今度は、子供を持たずに、

一人の人間としてじっくり魂の勉強をしようということで、子供を持たないことに決めて生まれてくるのです。だから、子供を持たない

人は、子育てに使わなければならないエネルギーはいらないのですから、その分を自分自身の魂の成長と、人のために使わなければなら

ないのです)

生とは最も興味のある学問の一つであり、且つ科学の眼で見ると最も神秘的なものに映ります。

その魂がオーラーの波動、つまり親の醸し出す雰囲気の中で、アニム(電的原子)を支配し、それ自身の王国に造り変えてしまいます。

その魂はその波動やその他さまざまな想念を支配し、その波動や想念は、その魂が実際に出生する時には、いわゆる、魂に備わったもの

になるのです。

(もともと、人間本来は神の子の意識です。この地上界は、神の子の自己実現の場としてつくられたのであり、その自己実現のためには

完全な自由が与えられてあります。

だから人間は、善いことをするのも、悪いことをするのも自由です。何をするのも自由ですが、その自己実現の法則として正法(仏法)

即ち、原因・結果の法、動・反動の法、作用・反作用の法、輪廻転生の法、慣性(業・カルマ・心の傾向性)の法等が、神によってつく

られているのであり、神の子である人間はその自由意志を持って、いかに法則(正法)を駆使して自己実現をしてゆくかです。

その自己実現の途上において、自分が原因をつくったままで、その結果がまだ現れていなかったものについては、この次に生まれた時に

その結果を受けなければならないということになって、その人の反省と、反省の結果の想念が、いわゆる業となって、本来の神の子の自

分の意識に付着して生まれて来るということになります。

そのために人間は、生まれて来ると、まず業を修正してから、神の子の自己実現に取り組むということになったのであります)

地上界に魂が生まれて来るのは、みなさんが肉体を持つはるか以前に確立された、神の法によって自動的に営まれます。それは神の法な

のであって「なぜ」ということはないのです。それは神の法なので自動的になのです。

(殆どすべての人は、神が定められた周期の波動に乗って自動的に出生して来ます。その神の波動が起こってくると、喜んでその波動に

乗って生まれて来る人と、生まれたくないと思ってあの世に執着していて、ひとたびその波動が起こると、どうしても生まれて行かなけ

ればならないのにしがみついている人があり、その波動はむりやりにその執着をはがして生まれさせます。その時にその魂は、全くの盲

目の状態となって地上に肉体を持つことになります。

そういう人たちは、魂が盲目の状態になっているから、「あの世はない」「霊はない」「神はない」と平気で言うようになるのでありま

す。

同じ年、同じ時期に生まれて来る人たちは神によって起こされた波動の同期生なのです。

同期生だから同じ年に生まれた人たちは、どこか似たような共通点があるので年廻りによる運勢というようなものを人々が考え、その年

廻りによる守り本尊というようなものを考えたのです。それはまた実際に、同じ年、時期に生まれた人々の魂を

指導する使命を持った指

導霊が必ずあります。そういうことが「仏に値い奉ること難し」即ち、お釈迦さまの世に生まれさせていただくということは全く有り得

ない難しいことだといわれる所以であります。

考えてみて下さい。もし私たちが、百年前に生まれても、百年後に生まれても、高橋信次先生の法は聞くことは出来なかったのです。

高橋信次先生と、またお釈迦様と、同じ時代に生まれ合わせることが出来たということは、それだけ私たちの魂の縁があったわけです。

如来の境地になりますと、出生の自動的な波動に乗らないで、自由の自分の生まれる時期を選ぶことが出来ます。そういう境地になるこ

とを「涅槃」といいます。だから涅槃の境地になると、この世に生まれて来ないことも出来るのです。そのためにインドの時、釈尊は涅槃

に入られたということで、釈尊は再びこの世に生まれて来られることはないと言われるようになったのですが、釈尊は五個の五百歳即

ち二千五百年後に東の国に生まれるということを予言され、そうして高橋信次先生として出生されたのであります)

しかも、道を歩む一個人として、我々はそうした出現を観察し、その輪廻界のすぐ近くまで飛んで行って、そこでは魂が親に引き寄せら

れて行く様子を観察できるのです。

アガシャの説法・親子の因縁について

因果関係

時には親となるべき人は生まれて来る魂を拒むこともあります。なぜでしょうか。不調和な因果関係のために、潜在意識が無意識のうち

に道をふさいでいるのかもしれませんが。

(本当は親子となるべきであったのに、その親となる人がこの世に生まれてからの環境、教育、思想等に災いされて子供を生むことを拒

否することがある)

輪廻のことを知り、地上界に戻りたがっている魂がおります。その魂が気づかぬ内にカルマの波動が働き、その魂が肉体に引きつけられ

てゆきます。魂が肉体に、この地上に戻ろうとする時、過去世に関しては表面意識では記憶を失っています。しかし本当の自分自身の魂

はすべてを知っているのです。

「火花のごとき神の生命」(アガシャは人間のことをこう呼んでいる)は、この地上界に輪廻転生してくる生

命、魂は、それが神の偉大

なる生命の一部であり、何回輪廻転生をしてもすべて同一生命、魂であることを知っている。我々は、我々自身の生命を地上界に誕生さ

せることによって地上界に奉仕しているのです。我々の本当の生命、魂はどのようにして地上界に出現するかもすべて知っている神なの

です。どの親であろうともすべては過去世に縁のあった、過去世にも親であった方々なのです。

幽界、あの世の低い段階には、再び肉体に宿ることを認識してない生命がたくさんあります。地上界で認識したことがすべてであると思

って、あの世での学習を全く受けつけようとしなない生命があります。しかし、地上界を去ってから四十年、五十年すると、突然魂が閃く

のです。目覚めがあるのです。幽界で目覚めた瞬間、自動的に扉が開くのです。それからすぐに一人になりたいと思います。他にわずら

わされたくなくなります。

いわば孤立した状態にいる時に、自らの魂に啓示が与えられそれに耳を傾けることになります。

(地上界に生きている時に、人と群れて騒いでばかりいた人は、あの世に帰ってから一人で静かに考える、反省するという習慣を全く持

っていないから苦しむのである。一人で考えることの大事なことに気づくのは四十年、五十年とかかるというのである。日本の古神道、

そして仏教の習慣の中に、五十年祭または五十年忌を終るわと、取り立ててその人のために供養しなくてもよいといわれてきたことはア

ガシャの説法と不思議に一致している)

そこで指導霊がやって来ます。指導霊はより高い次元の世界から霊人としてその前に出現します。指導霊はより高い次元の世界のことを

徐々に、いろいろと教え、知らせ、そして話をします。「無量の意識」のより高度な、より精妙な事柄については、それまで記憶を失っ

ていたので初めは奇妙に映ります。

しかし、それ以後は度々指導霊の訪問を受け、その指導霊は生命の明白な神秘面を確実に説明します。例えそれまでは記憶を失っていて

も、もう基本的な知るべきことは知りました。でも今、この事実を意識するようになり正しく適切な時を経て「無量の意識」(神の生

命)から降臨した指導霊からそのことを教えられ、指導霊は肉体に宿ることについての情報を知らせ、地上界への転生の準備をさせま

す。より高い神の世界から来た指導霊はあの世の記録を調べ、その内容を知り、次に地上へ転生して行く霊に告げます。

「幽界のこういう場所にある人がいます。そこへあなたを連れて行きます。そこでその女性に会えます。今から

二百年位するとその女性

は地上界で生活しています。その方はあなたのお母さんになって下さる方です

このことが指導霊によってあらかじめ二百年前に告げられます。このようなプログラムを遂行できるためには指導霊はどれだけ進歩して

いなければならないかわかりでしょう。

親となり子となるべく定められた二人は、指導霊の導きと働きによって様々な惑星を訪れたりして多くの経験を積むでしょう。その女性

は自分がやがて輪廻について知ることになり、ある友の親となることを見、未来の息子となり娘となってくれる友と何度となく話し合い

をします。二百年の間、指導霊はしばしば二人を訪れ、二人はそれぞれ進歩します。

さて、いよいよその女性、未来の母親は生まれ変わる時が来ました。瞑想状態になります。（瞑想は地上界だけでなく、あの世でも大事

であることを知るべきです）

女性の表面意識は突然記憶を失い、魂は転生して最終的に地上界へ生まれるという過程を通過してゆきます。

興味深いことは、その女性の子供となるべき魂は、指導霊の導きによってその母親となるべき魂が地上界へ生まれ出てゆく状態を見るこ

とを許されます。地上界へ生まれ出た魂が子供から成人へと成長します。地上界で子供となるべき魂は、母となるべき女性の行動をずっ

と見守り続けます。

そろそろ子供となる魂を受け入れる準備が出来ます。親となるべき魂のオーラの波動が働く瞬間を待ちます。魂となっている「火花の

ごとき神の生命」は親のオーラの力の波動、力で顕現します。

その子供は二百年の間、あの世でその女性を知り、いろいろな経験を積んでいきます。

幸いなる神の子たちよ。結果はこうです。子供が生まれ成長し、三才になり、五才になり、親近感がますます強くなって子供は親に、親

は子供にひきつけられてゆきます。その子供が大きくなり、偉大なる芸術家、偉大なる音楽家に、それとも何かの偉人になるとします。

そうなるのも、それは二つの魂がこの地上界に生まれ変わる以前に母子があので学習していたことなのです。

地上界の神の子たちよ。こうした因縁の絆があるのです。

このようにして親子の因縁は大体二百年前に決まるのであり、二百年にわたるあの世での心の交流があって、そうして親のオーラの波

動に乗って子供となる魂が妊娠して、それから十月十日の妊娠の間の経験によって生まれて来るのであるから、親子供に、子供が

親にひかれる情愛は実に実に深いものがあるのです。それが神が定められた法則、神の意志なのであるから、そのことに反する心を持

ち、行為するとき、動・反動・作用・反作用の法則によってその結果は受けなければならなくなるというのもまた当然だということに

なるのであります。

以上のごとくでありますから、祈願文の前文の始まりに

「私たちは神との約束により 天上界より両親を縁として この地上界に生まれてきました」

と書かれてあるのであります。

このことが神の思し召しであり、私たちの魂はそのことをよく知っておりますから、親子の情愛の深さ濃やかさの話を聞くと「それが本

当だ」と深く感じて涙が溢れるのであり、親と子が争う話を聞くと「そんなことってあってよいのか」と思うのであります。

ですから、「親の恩に感謝する」ということが人間の信仰の原点であると言ったのであります。

高橋信次先生は、「親子の縁は天上界で決まるのであります」とさらりと言われましたが、高橋信次先生が説かれたことの真実性はアガ

シャの言葉によって裏付けされている面が大きいのであります。

さて、人間の運命についてぜひ知っておかなければならないことがあります。人生には絶対に変更することは許されない、もし変更しよ

うとすれば必ず不幸になる基底部分というのがあります。

どういう親から生まれたか。

男であるか、女であるか。

どういう人相で生まれたか。

いわゆる自分が生まれてきた条件です。

例えば、よく「こんな親のところに生まれなければよかった。もっとよい家に生まれればよかったのに」とか、「女に生まれて損した、

男に生まれればよかった」とか、「もっと美人に生まれればよかった」とか、こういうことをいくら考えても絶対に変えることは出来ま

せん。絶対に変えることは出来ないことであるのになんとか変えられはしないかというような気持ちを持つと、その人は必ず不幸になり

ます。その絶対に変えることの出来ない部分を「運命の基底部分」といいます。

いくら「こんな親のところに生まれて来なければよかった」と思ってみても、また新しく生まれ変わって出て来るといふわけにゆきませ

ん。また、男が女になることも、女が男になることも出来ないし、今のような人相も、思って見たからといって細い目をぱっちりと出来

るわけでもないし、高くすることも出来ません。考えても絶対に変えることは出来ないのに、それを何とか出来るように思って心をイラ

イラさせると、それだけその人は不幸になるのですから、ムダな心のエネルギーは使わないことです。ムダな心のエネルギーを使うかわ

りに、思ったら思っただけ幸福になる方向に心のエネルギーを使う方が賢いのです。

ですから運命を幸福にしようと思うならば、思っても変えることの出来ない基底部分はそのまま素直に受けて感謝して、思ったら思った

だけ変えられる部分（可変部分）に心のエネルギーを集中することです。

親を変えることは出来ませんが、心の持ち方によって環境は変えることが出来ます。男が女に、女が男になることは出来ませんが、男は

男として、女は女として幸せに生きる道があります。顔の道具立ては変えることは出来ませんが、顔全体、身体全体から発散する雰囲気

は変えることが出来ます。

今まで子供を持つことが出来なかった人は、過去世で子供のことでこりこりして、もう子供はいらないと思ったからですが、しかし子供

のいない生活というものはどこかに侘びしさがあり、年を取るにつけて、やはり子供がいた方がよかったなあとと思うようになるものであ

ります。

この世で子供のうちに死んで行く霊があります。子供は子供のままの姿であの世に行きます。するとあの世でその子供を育てる役目の人

がいます。その子育ては、今生で子供を持たなかった人が、この次に生まれ変わってきた時に、今度は立派に子育てが出来て失敗しない

ように、あの世で早く天上界へ帰って来た子供たちを育てる勉強をすることになっているのです。それですから、子供に恵まれなかった

という人は、あの世へ帰ってからまごつかないように、この世にいる間に子供たちに愛情を注ぐ訓練をしておいた方がよいということに

なります。

（これまでの日本の宗教界で、親子の因縁が詳しく説かれたのは正法協会だけであります。戦前に親孝行の道徳は説かれましたが、この

ように親子の因縁が教えられることは全くありませんでした。戦後は親孝行は封建的な道徳だといってアメリカの占領政策によって否定

されました。そういう間違ったことをやるからアメリカは没落するということになるのです）

信仰をする者が最初に忘れてはならないことは、一体どうして人間は祈りたくなるのかということなのです。それは

人間が天上界からこの地

上に生まれて来た時に、魂のふる里である天上界を恋い慕う自然の感情として発生したものであります。

その証拠は、皆さんがすぐ実験してみられるとよいのであります。合掌して、「神さま、ありがとうございます」と言ってみてください。

そう言った時、あなたの心はきっと何とも言えず安らかになるはずです。

その反対に、手を合掌しないで後ろ手に組んで、「神さまなんかあるか、馬鹿野郎」とでも言ってみてください。どんな心になるでしょう

か。

そのように「祈り」というものは、自分自身の魂のふる里を恋い慕い思い出す自然の感情であり、同時に「反省」という自分を改めて見

直すという立場に立った「祈り」でないと、救いにはならないということでもあります。「苦しいときの神頼み」というように、反省もし

ないで、ただ苦しいから助けて欲しいというだけでは、救いの愛の手は差し伸べられないのであります。

自分の運命は自分でつくるのでありますから、自分自身でつくり出した不始末を自分で反省し、修正しないで、「神さま、助けて下さ

い」というのでは余りにも無責任だと思いませんか。反省も修正もしないで祈ったらそれで救われるというのでは、神は悪い者の味方を

されて、この世は悪い者が増える。悪いことも勝手次第ということになるではありませんか。それが神の御心ではないはずです。

人間は神の子であり、神の子に反した行為はその分量だけ償うということが神の子に与えられた摂理です。反省し、懺悔して祈る時に、

神仏は慈悲と愛を与えてくれるのです。

「祈り」というものは、このようにして、肉体を持った人間が神仏を思い起こす自然の感情として発生したものであります。

「祈り」は同時に行為とならなければいけません。口先で祈ってばかりいて、行為とならないのでは祈りは聞かれません。行為は完全で

なくても、真心をもって行為しようというその真心があると、その祈りは聞かれることになります。神はその行為だけではなく、その真

心を見られるのであり、同じような行為をしていても、その人に真心がなく、やれと言われるからやるとか、人が見ているから仕方がな

いからとか、そういう心でやる行為で祈ってもそれは聞かれることにはならないのであります。

そうであるがゆえに、祈る心の中には、また、自分は神の子であるという自覚と、神の子人間として生かしていただいているという感謝

の心がないと、本当の「祈り」とはいわれないのであります。

現在与えられてある環境、境遇というものは、神から与えられた自分自身の最高最良の魂の修行の場であり、ここを通らずして魂の向上

は有り得ないのですから、現在与えられてある環境、境遇を最高最良の場としてそれに感謝する心を天に向けた時、その心は祈りとなっ

てほとばしるのです。

人間は一人では生きられません。神仏の加護、大自然の恩恵・動・植物のお蔭、人々の協力という相互関係なくしては片時といえども生

きて行けないのであり、現在与えられてある環境、境遇を天命として、その中で使命を果たして魂を磨いてゆくためには、自然に人間は

祈らずにはいられないものなのです。

「祈り」の本質というものは変わりませんが、祈りには、その時のその人の心境により、また、環境、境遇の変化によっていろいろな相

違があり、段階がありますが、「祈り」とは、天と地をつなぐ光の架け橋であり、即ち神仏との対話であり、人は祈った時に神仏と心が

通ずるということになります。

人間は祈っても祈らなくても神仏に生かされているのでありますが、日常生活では心が外に向いている場合が多いですが、行為そのもの

が祈りであるといっても、やはり心を静かに内に向けて祈る時に改めて神仏に対面することになるのであります。

こういうことがよくわかって祈願文の最初の次の言葉を読むと、「祈り」というものがよくわかってくるのであります。

祈り

祈りとは、神仏の心と己の心との対話である。同時に、感謝の心が祈りでもある。神理に適う祈り心で実践に移るとき、神仏の光

は我が心身に燦然とかがやき、安らぎと調和を与えずにはおかない。

祈り - 対話 - 感謝 - 実践 - 光 - 安らぎ - 調和。このように言葉を並べてみると、仏教は「安心立命」（心を安らかにして、生きることに

喜びを見出す）を説くものであるということの意義がよくわかってくることになります。

熱心に信仰しているといっても、心の中はいつも不安で、生きていることに少しも喜びが湧かないという信仰は間違っているのでありま

す。

「私たちは神との約束により天上界より両親を縁としてこの地上界に生まれて来ました」

このことについてはすでに詳しく述べました。この地上界への誕生は両親を縁としているのであり、天上界で親子の縁を約束するのは神

の計画による並々ならぬ因縁によることであり、のっぴきならない。しかも最高、最善の魂の環境を選んでその親の下に生まれたのに、

その両親に反抗し、不平を言い、親不孝をするということは、その最高、最善の魂の修行のチャンスを呪っているということになります

から、それは同時に自分の運命を呪っていることになりますので、親不孝をしている人の運命は絶対によくないのであります。親に

感謝し親孝行している人は自分の運命に感謝し祝福していることになりますから、親孝行している人は必ず幸福になるのであります。

親に対する感謝というものは人倫の第一の鉄則であるのに、アメリカは占領政策によって親孝行の道徳を禁止し破棄したために、そうし

てまた日本の共産革命を企図している日教組の教師達は一斉に「親には感謝しなくてもよい」という教育を始めたために、本気で親を殺

すような子供が出てきたのであります。

週刊誌に「親孝行の教育をしようとする教師は教員室で村八分にされる」という記事が載っておりました。

一日も早く学校から「親不孝の教育」がなくなって、一斉に「親孝行教育」をするようにしなくてははいけません。しかし、そういうこと

を待っていたのではいつのことになるかわかりませんから、各家庭で親がそのような教育をする必要があります。

「慈悲と愛の心を持って調和を目的とし、人びとと互いに手を取り合って生きていくことを誓い合いました」

「人生の目的」とはこのことであります。この地上界を調和させることが目的であります。

その人の思想行為が、すべての人、すべての物との調和を目的としているか、いないか。それが神の心を生きているか、どうかの基準で

ありますから、調和を目的とした行為は必ず幸福になるが、不調和な行為にはそれに等しい不幸が訪れるということになるのでありま

す。

「しかるに地上界に生まれ出た私たちは天上界での神との約束を忘れ、周囲の環境・教育・思想・習慣そして五官に翻弄され、慈

悲と愛の心を見失い今日まで過ごして参りました」

これまでは社会全体が、無神論、唯物論であり、資本主義も共産主義も物を中心とした思想であって、すべては金と物中心で、人生の目

的といえば、地位欲、名誉欲、権力欲、金銭欲等、個人について言えば食欲と性欲を満足させることだと教えられて来ましたから、多く

の人々はそういう心になり、正しい心のあり方を説かなければならない宗教界までが資本主義思想に支配されて、「金をたくさん献金す

ると救われる」と説いている。

心が乱れ、正しい心の基準がわからなくなったから世の中は乱れて末法となり、忌まわしい事件が頻発し戦争もなくならないのである。

「今こうして正法にふれ、過ち多き過去をふりかえると、自己保存、足ることを知らぬ欲望の愚かさに胸がつまる思いです」

正法 - 即ち仏法とは大自然の法則であり、仏陀といわれた釈尊が説かれたから「仏法」というのである。

今まで正法誌で、また「心行の解説」の中で詳しく説いてきたことであるが、改めてまたここに書くことにする。

正法 - 仏法 - 大自然の法則

原因と結果の法則 これを「因縁」とも「因果」ともいう

動・反動の法則

作用・反作用の法則

した通りにされる、与えれば与えられ、奪えば奪われる。愛を与えれば愛が、憎しみ

を持たば憎しみが返ってくる。

循環の法則

天体の運行、分子、原子の運動、四季の循環、人の輪廻転生、ありとあらゆるものはみな「円運動」をする。

慣性の法則、業の法則

心にも物にも慣性がある。物の場合は慣性というが、心の場合は性格の傾向性とか習慣という。または「クセ」と言う。宗教

的には過去世からの「クセ」を「 」と言う。人には生まれつきのクセというものがある。それは過去世からのものである

が、そのクセを直さないと運命は変わらないのである。

類は類で集る。

明るい心を持たば明るい運命が、暗い心を持たば暗い運命がやってくる。

「笑う門には福来たる」「泣きっ面に蜂」

正法即ち仏法を生きるとは、人間神の子の自覚を持って、どのようにこの法則を駆使して人生の目的を達するかというその生き方の基準

ということである。

キリストが「一点一画も捨たることなし」と言われたように、現在の自分というものは、過去の心のあり方と行為の総決算に外ならな

い。

たとえ現在自分が不幸であるといってもそれは自分がつくったのであるから、誰をも怨むことは出来ないのである。

自分を自分で不幸にする最大原因が「自己保存」である。自己中心的、自分本位の心と行動であるから、自己保存の心を持つ人は、人の

立場は考えない。一番恐ろしいことは、現に大自然即ち神の恩恵の中に生かされているのに、自分が生きていると思うことである。誰の

世話にもなっていないと思うことである。この心ほど忘恩の心はない。自分一人で生まれてきたように思って、親から生んでいただいた

ということは思わないのである。

狂信・盲信がなぜいけないかというと、狂信、盲信する人たちはすべて自己中心的で、自分さえよければよいと考えて

それは本当の神であるか

信ずる値打ち、資格があるのか

そういうものを信じたらどういうことになるのか

そういうことは全く考えない。即ち知性、理性を全く働かせないのである。

正法を知って過去の失敗を振り返ってみると、その原因は「自己保存」であり、足ることを知らない金銭欲、物欲、所有欲、地位欲、名

誉欲、権力欲等である。

着れる物であれば何でもいいのに、多くの人が着ているものはきたくない、自分一人だけの服を着たいというのは、自分一人がみなと違

っているという自分を認められたいという欲望と、自分しか持たないという所有欲の合作である。

多くの女性は、メーカーが勝手につくり出した流行の宣伝に踊らされて、自分では個性的で時代の最先端を行っていると思っているが、

しかし見渡してみると周囲はみんな同じ色、同じ型のものばかりということで少しも個性的ではない。

足ることを知ると、心が大事だということがわかるから流行は追わなくなる。如何にお化粧をしても心の汚れを塗りつぶすことは出来な

い。正法を知って実践すると心がきれいになるから素顔の美が輝いている。それだけ化粧品代もいらなくなる。

流行を追って服を買う必

要もなくなる。

このように考えてゆくと正法を知ることが経済的にも得の道なのである。

「私たちは神との約束により天上界より両親を縁として この地上界に生まれてきました」

これまで説明してきましたように、親子になるということは実に深い深い因縁のあることで、人間がこの地上で、天上界で決めた親子の

因縁を実現するかどうかは、子供がオギャーと生まれてきた時のその母親の想念の如何にあります。もっと厳密に言うとその子供を受胎

した時の想念です。生まれて来る子供は必ず縁があるのです。「この子は生みたくない」「厄介な時に妊娠した」等とそう思うことは、

親も子も生まれてくる前の縁を破棄することになり、親子どちらも運命を狂わせて苦難の道を歩むことになりま

大事にしなければいけません。

祈り

なぜ人間は祈りたくなるのか。

「苦しい時の神頼み」と言います。自分の考えでやっていることが順調にいつている間は神ということを出せない人でも、さて、す

べて行き詰まったということになると思わず「神さま！」と叫びたくなる心はどうして起こってくるのでしょうか。それは、人間が、あ

の世、天上界（実在界）からこの地上界に生を受けたという事実から始まります。

魂のふる里である天上界で、我々は神があるということを知っているのです。神の世界には、一切の悩みも苦しみもないということを知

って私たちは生まれてくるのです。あの世で思うこと、考えることは、そのまま祈りの行為となって神仏と調和しているからです。その

ことが潜在意識に記憶されているからです。ところが人間は肉体を持つと、こうした天上界、前世の記憶は生まれた瞬間にいったん消さ

れることになって、いわば白紙の状態で生まれます。記憶していると、天上界、前世のことと現実のことがごちゃ混ぜになって現実生

活が混乱するからです。赤ちゃんは生まれると間もなく音が聞こえ、ものが見えるようになる。自分の外に「もの」があると知るように

なる。そうしてそこへ親が「神仏はない」「霊はない」というような認識、即ち「もの」がすべてであるという

るから子供は次第に「神仏はない、霊はいない」と思うよになるのです。

子供は小さい時は、人間とは心であり霊であるということを知っています。それは小さい子供が人間の絵を描く

時に、頭からすぐ手足が

出ている絵を描きます。

大人はこういう絵を見て子供は間違っていると言います。

しかし、子供がこういう絵を描くのは、子供の心の中には肉体という認識がないからです。眼で見る、耳で聞く、口が動く...、だから顔

という実感はある。手も動く、足で歩く、だから手足があるという実感はある。

保育園や幼稚園でこういう絵を描いて持って帰ってきた時が、子供に対する教育の重大なチャンスです。もっともそれ以前から教えてお

かなければならないことですが、こういう絵を描いて持って帰ってきた時に「化け物を描いてきた」と思わないで、「神がある」「人間

は霊である」「天上界がある」「人間は前世があり輪廻転生するのである」ということを教えてやることです。

天上界や前世の記憶は生まれた瞬間に現在意識からは消えますが、潜在意識の中には記憶として残っているのですから素直に「そうだ」

と違って聞くことになるのです。

このことを思いますと、近代物質科学、唯物論が発生する十五世紀以前の人のことはよくわかりませんが、それ以後に生まれてきた人間

は生まれた時から「神はない、霊はない、あらゆるものは物質だけである」という「しつけ」「教育」を受けて、そうでなければもっと

幸せな人生を送れた人たちが、そういう間違った「しつけ」「教育」を受けてきたために、どんなに苦難の道を歩んできたかを思うと誠

に残念でなりません。

せめて会員のみなさんだけはそういう間違った「しつけ」「教育」をしないで、正しい「しつけ」「教育」をしてもらいたいと思いま

す。どんな小さな赤ちゃんでも潜在意識は目覚めているのですから、お乳を吞ませながら、あやしなながら、「あなたは神の子です。素晴

らしい霊です。約束によって生まれてくれてありがとう」と、そういう意味の言葉を囁きかけるのです。私は五人の子供をみなそんなに

して育てました。五人の子供はそれぞれに個性も能力も違いますが、子育てで苦労したということは全くありませんでした。むしろ子供

が成長してゆくことが楽しみでした。そうして育てられた子供たちが、やがて正法を知って輝かしい時代をつくっていつてくれることと

思います。

ところが人間は肉体を持つと、心ない親から「神はない、霊はない、ものだけがある、人間は肉体だ」ということを教えられ自我に生き

ようとします。近代唯物科学の発達は「人間の自我意識を増長拡大し、自我を主張することが正しいことだ」という思想を生み出しまし

た。だから外国では交通事故をやると、絶対に自分が悪かったとは言いません。必ず相手が悪いと主張し合うのです。日本人はたとえ自

分の方が正しくても「すみません」と言います。もし外国で日本式に「すみません」と言ったらそれこそ大変です。「それみろお前は自

分が悪いから謝ったのだ」と言われて多額の弁償をさせられることになります。

「すみません」と言える世界で唯一の国、それが日本です。同文同種といっても隣の中国でも「すみません」は通用しません。これまで

の日本の外交の失敗は、日本が正しくて中国側に原因があったことでも、しかし総理が行って簡単に日本式に「すみません」と言ってし

まったことです。一ぺん「すみません」と言ってしまうと、今度はかさにかかってきて「お前が悪かったからこうしろ」と、援助をせび

り取られるということになるのです。

近代物質文明、自我を主張することを正しいとしてきた西洋文明は没落します。肉体が人間であるという自我意識は神理、即ち神の心で

はないからです。

自分が正しい場合でも素直に「すみません」と言える唯一の国日本は、必ず神に守られることになります。「すみません」と言えるのは

自我がないからです。自分は正しくても、自分が正しい行為をしたことで相手がいくらかの心の痛みを感じたら、その心の痛みを感じさ

せたことはすまなかったなあと、相手の心を思いやるところから「すみません」という言葉が出て来るわけです。

日米、日中、日韓等、日本と外国との関係は、自我を滅却して自我主張をしない日本と、極大に自我を主張する外国との関係ということ

になります。

日本人は「すみません」という一言で過去はすべて水に流すとということをしますが、外国人に対しては「すみません」と言ってからが

大問題だということになりますから、外国人に対しては徹底して論争することです。日本人は「すみません」で一切を水に流すというこ

とが身に染みついているために、相手を論争し、相手を批判することを悪いことのように考えるクセがあります。この考えは改めなけれ

ばいけません。相手の主張に対してこちらが黙ってしまえば、相手は自分の主張が正しいと認めたと思うのです。たとえ言われた人が心

の中で黙殺していたにしろ、はっきりと口で文書で反論しない限りは相手は自分の主張が正しいと思込むのですから、そうになったら自

分が誤解されて損することになり、問題の正しい解決になりませんから主張すべきことはするという積極性を身につけないと国際人には

なれません。

人間は肉体であるところから一切の煩悩が生じます。肉体の自分を大事にすることが善だと考えると、人より多く食べたい、多

く見たい、多く聞きたい、きれいに肉体を飾りたい等と五官の欲望に振り回され、その煩悩の欲望に自分が埋没して、かえって苦しみを

つくり出してしまいます。

二十一世紀は、自我拡大、自我主張の西洋物質文明と、自我滅却の日本文明との争いということになります。外国には「奥ゆかしい」と

いう言葉がありません。控え目にしていること、質素にしていることが偉大な証拠であるという考え方があります。教養のない人は自

己主張が強く派手に振る舞います。しかし教養のある奥ゆかしい人は万事控え目です。奥ゆかしいという言葉は、心の美しさ、心の偉大

さを、目に見えない世界を思いやる心を持つところから生まれた言葉です。

しかし、自我滅却がよいからといって黙っていたのでは相手に理解してもらえませんから、主張すべき時には主張することが必要です。

私がユダヤのフリーメーソンは警戒すべきだと言っているのは次の理由もあります。

「人間は金持ちになって余裕が出来ると心に余裕が出来るといろいろなことを考えるようになる。考える人が増えて

くると、我々が仕掛けた政策が間違いだということに気づくようになる。そうなっては困るから、我々はゴイ（ユダヤ民族以外の民族）

に金を持たせないようにするのである。そのために我々は、ゴイに欲望を先取りさせて（家が欲しい、いい服が欲しい、旅をしたい）ク

レジットやローンを組ませるのである。欲望を先取りしたいと思う者はすぐそれに飛びつく。飛びついたが最後、クレジットやローンの

支払いのために一生をすり減らせるということになり、金の奴隷になって高尚な考え方は出来ないようになる。そのようにして我々はゴ

イを墜落させるのである。欲しいものはクレジットやローンで買わずに堅実に貯金をして、そうして買う方が経済的にも精神的にも得を

するのである」

あなた方はこのフリーメーソンの考え方を見て「そうだ」と思われたいであろうか。しかし物価特に土地の値上がりを見ると早くロー

ンで買っていた人が得したと言えるが、しかし考え方の基本としてはなんでもかんでもクレジットでローンでという欲望を優先させる考

え方は、高尚な人間性を埋没させて金の奴隷となることになるから、やはり自分の霊、心を大事にする考え方、そういう生活をする事

である。アメリカの場合はニセドル、ニセ小切手が多いから現金取引を嫌ってクレジットの方が銀行から振替えられる方が安心だという

社会事情があるからアメリカ人はカードをたくさん持っているほど信用度が高いということになっているが、日本はそういうことはない

のであるし、特にまだ人間的に成熟していない、分別の足りない、欲望に走りがちな若い人がクレジットカードをたくさん持つというこ

とは危険である。

煩悩に悩むという心だけの苦しみを持っている上に、更にクレジットやローンの金を返済しなければならないという金にまつわる苦しみ

が生じてきたら、心の安らかさは吹き飛んでしまうことになるから、やはり釈尊の教えにあるように「足ることを知る」ということは大

事なことである。

(以上のようなことを書きながら私はまた考えた。皆さんはいろいろな宗教書、仏教書を読まれて、ここに書いてあることは正しいと思

うが、さてこれを日常生活に実践するということになるとうすればよいのであろうかと、戸惑いを感じられたことはないであろうか。

私が若い時に特に仏教書などを読んでそう感じたのですから、おそらく皆さんもそう感じていただけることと思います。その点、私が書く

ことは、すぐ日常生活に応用できるようにやさしく解説してあるのですから、特にここに書いたような子育ての根本になることは今から

すぐ実践してほしいと思います)

「慈悲と愛の心を持って調和を目的とし、人々と互いに手を取り合って生きて行くことを誓合いました。しかるに地上界に生まれ

出た私たちは、天上界での神との約束を忘れ、周囲の環境・教育・思想・習慣そして五官に翻弄され、慈悲と愛の心を見失い今日

まで過ごして参りました」

我々の意識、魂は、神の意識です。高橋信次先生は「神の意識の当体」といわれました。なぜ我々は神を思うことが出来るのであるか。

それは我々の意識・魂が神であるからです。

今までの宗教は、人間を神とは離れた異質の存在だと認めて、そうして神の恵みを受けよう、神に頼ろうという信仰をさせてきました。

自分自身を神と離れた別々の存在と見て、そうして神と一つになろうとすることは矛盾です。祈りは、人間が神から離れた存在であると

気づいた時に（そういう時に悩み苦しみが起こるのである）神と一つになろう、神の意識に帰ろうと気づいた時に自然に起こってくる衝

動なのですから、だから、神に祈りたいという心が起こってきたら、祈ることを恥ずかしいと思わないで素直に祈ることで

祈っているうちに心が安らかになってきます。

正法を深く知るには、祈るという習慣を続けることです。

調和の反対である憎しみ、争い、嫉妬、羨望、怨み等を、なぜ悪いと思うのかというと、それは我々の意識、魂が、調和が正しいという

ことを知っているからです。

例えばあなた方の顔に泥が付いたとします。するといやな気持ちができて洗い落としたい、きれいにしたいという心が起こってくるで

しょう。そういう心になるのは、顔はもともと泥が付いていないのが本当であるからです。私たちの本当の心、意識、魂は、調和が正し

いということを知っているから、調和の反対である、憎しみ、争い、嫉妬、怨み等の心を持つと「ああこれはいけないことだ」と思うこ

とになるのです。

その「調和」は、慈悲と愛の心でなければならないというのです。

あの世で慈悲と愛による調和の大事さを学び、知った魂が、地上に肉体を持って生まれて来てその調和を実践し実現したいと思って生ま

れて来たのに、なぜ不調和な人生を送ることになるのか。それは「周囲の環境、教育、思想、習慣、そして五官に翻弄されるからであ

る」というのです。

「心行の解説」の中でも書きましたように、人間は「オギャー」と生まれて来て空気をいっぱい吸うと、その空気を吸ったとたんに前世

とあの世の記憶は全部消される仕組みになっています。消されるといってもそれは現在意識の表面に浮かび上がってこないということ

潜在意識の中にはちゃんとあるのです。その潜在意識に記憶されていることは、成長するにつれていろいろな体験をすることによって浮

かび上がることになっています。

「正法は実践である」というのは、実践することによって潜在意識の扉が開かれ、あの世の記憶を甦らせることが出来、神の意識に通ず

ることが出来るからです。

実践のない知識、禅定瞑想では悟りは開けないのです。最近ある人を通じて入ったニュースでは、西ドイツで瞑想禅定が流行してノイロ

ーゼになる人が増えてきているということです。フランスでもそういうことがありました。それはある人がフランスで禅道場を開いたの

ですが、生活の実践は説かないので「無だ」「空だ」と、心を空っぽにする坐禅をやらせたからです。ノイローゼやいろいろな病気にな

るのを「禅病」と昔からいっていますが、修業途中で禅病になって死んだ若い僧たちがたくさんおります。このようなことになってくる

と、いよいよ私がヨーロッパに出掛けて行って指導をしなければならぬようになってくるのではないかと考えていますが、とにかく

「オギャー」と生まれてきた時にいっぺん過去世のこと、あの世のことは現在意識で思い出せなくされてしまいます。いわゆる白紙の状

態になるのです。生まれたばかりの赤ちゃんが、耳が聞こえ、目が見えるようになって知るのは、生まれた所の環境と「物がある」とい

うことです。そうして、いろいろしつけられ、教えられ、経験してゆきます。やはり一番長く親と一緒にいることによって親の言うこ

と、することによって子供は色づけされてゆきますから、親のしつけ、行動が大事だということになります。

保育園、幼稚園、学校へ行くようになるとまたそこでいろいろなことを教えられ勉強します。その教えられた勉強したことが正しければ

よいのですが、間違ったことが教えられると、その子供の人生は大きく狂ってくることになります。ここに教育の大事さがあります。間

違った教育がされ、その間違ったことを正しいと信じた子供たちが大きく人生を狂わせてゆくことを考えると、なんとしてでも正しい教

育をすべきであると思わざるを得ないのです。

家庭でも学校でも、正しいことが正しくしつけされ教育されていたら、そんなに苦しいまわり道の人生を送る必要もなく幸せに暮らせた

はずの人たちが、間違ったしつけ教育をされたばかりに苦しみ悩みの人生を送ることを考えると、何とかしなければとじっとしてはいら

れない気持ちになってきます。

どこかの坊さん達のように、また、いろんな教祖達のように、世の中のことは馬耳東風と少しも関心を持たずに、間違ったことを平気で

説くというような真似はとても私には出来ないことです。

人間を一番大きく狂わせてきたのは「思想」です。

主義とか思想、哲学は、人間が考えることの出来る考え方の一部であって全部ではないということをよく知って下さい。ここにも釈尊が

説かれた「全体と部分」の話をあてはめることができます。

ある角度から見た場合と、それとは違った角度から見た場合と、まるっきり正反対だということでも、それは見る人の角度による部分的

な見方の違いであって、それは全体の一部でしかないので、もっと違った角度から見ればまた違った見方も出来るわけです。

例えば、人間を単なる肉体であり物体だと見る人は、肉体を楽しませることだけが幸福だと考えます。即ち五官の奴隷となっている人た

ちがいます。そういう人たちは死ねば灰になっておしまいであると考えます。

心、精神だけを重視する人たちは、心を大事にするということで極端に精神主義的になって、五官の欲望を押さえようというので肉体

行、難行苦行をするようになります。そのように心、精神を大事にするという人でも人間は灰になっておしまいであると考えている人が

多いようです。以上二つはともに唯物論です。

一方に、人間は死んでも灰になるのではない、肉体は死んで灰になっても魂は死なない、永遠に存在すると考えている人たちもたくさん

おります。

二十世紀に生きる人間を一番大きく狂わせてきたのは、世の中のすべては「金」であるという思想を吹き込んだ資本主義思想と、世の中

にあるものはすべて「物」だけであって、その「物」を公平に分配すれば人類は幸福になるという共産主義思想です。

資本主義思想が初めて言い出されたのは今から約三百年前であり、共産主義思想が言い出されたのはわずか百四十年前である。資本主義

思想は主としてイギリス、アメリカが、共産主義思想はソ連、中共が実験をしてきて、既にアメリカもソ連、中共も没落しつつあり、依

然として武器生産をやめず軍備を拡張して、世界から戦争がなくなることによって、以上二つの主義思想は失敗であることが証明さ

れつつあります。

世界の主導国家の指導者達が、主義思想による一方的な偏見を持ったことと、ユダヤのフリーメーソンの陰謀により、人類は第一次、第

二次世界大戦の悲惨さを経験しなければならなかったことは残念です。

だからして今後の世界平和は、資本主義思想ではなく、共産主義思想でもなく、勿論ユダヤのフリーメーソンの思想であってはいけない

ということがはっきりなってきたわけです。

この二つの大きな思想とユダヤ政策によって人々の心は大いに混乱させられ、金のために平気で人を殺し、主義思想に反したといっ

人殺しをする。そうして個人一人一人の心のあり方も混乱させられて多くの人が苦難の人生を歩んできておりま

す。

あまつさえ、「人を救う」と言っている宗教家が金を目的にして間違っただけの教を平気で説いて、人を救ってやるという言葉の裏で人を苦しめてきています。

多くの人々は大局的なものの見方、判断が出来ないために目先のことに振り回されて苦しみを重ねています。

そこで高橋信次先生は、「資本主義も共産主義もともに唯物論である。唯物論によって人間は幸福になることは出来ない」と言われたのであります。

こうして、人生のすべて、世界の歴史を達観された高橋信次先生の感慨がこの稿の冒頭の言葉となっているのであります。

「しかるに地上界に生まれた私たちは、……、慈悲と愛の心を見失い今日まで過ごして参りました」

というこの言葉の中に、正法に依ればそのような苦しみを経験しなくてもよかったのに片々たる主義思想や五官に振り回されて苦しんで

いる人類への深い深い悲しみの涙と共に、その奥にある高橋信次先生の慈悲の心を知ることが出来るのであります。

このように考えてきますと、よくこそ高橋信次先生の教に触れることが出来たことの有り難さをまた味わうことが出来るのであります。

「いまこうして正法にふれ 過ち多き過去をふりかえると 自己保存 足ることを知らぬ欲望の愚かさに 胸がつまる思いです」

「いまこうして正法にふれ、過ち多き過去をふりかえると…」とあるように、このことは何を意味するかといえますと、よく世間的に一

般的に言われているような反省では真の反省になっていない。正法を知った上での反省でない正しい反省とはならないのであります。

多くの人々は、謝りさえすればそれで罪は償われたと考えています。そうしてまた同じ過ちを犯してしまいます。そしてまた謝る。

例えば、「腹を立ててはいけない」ということは誰でもが知っているし、今度はもう腹を立てまいと考える。毎回考えていてもそれでも

腹を立てるのは止まない。それはなぜかであるか。それは正法を知らないからである。

正法を知ると人間は何のために生まれてきたのかという人生の目的がわかり、正法は神の心であり、正法に順うことが神に順うことである

り、原因をつくるとそれはみな結果となって自分に返ってくるということがわかるので、自分が幸福になるためには進んで善いことを

し、悪いことをしてはいけないし、その法を守ることによって魂が成長してゆくのであるということを知るからです。

http://www.shoho.com/newpage133.htm (27/40) [03/05/27 12:50:03]

多くの人は、腹を立ててはいけないということはよく知っている。しかし、そうすることが魂が成長することであるということは余り考

えない。考えないのはそのように教えられていないからです。

高橋信次先生は「道德によっては人は救われない」と説かれました。しかし多くの人は道徳的に立派であればそれを人格者だと言い、そ

ういう人は高い霊界へ行って救われると思っています。

例えば「喜怒哀楽を色に表さず」というのは儒教が教える道徳です。

「嬉しいこと、喜ぶべきことがあっても、腹が立っても、悲しいことがあっても、また、楽しいことがあっても、それを顔色に出しては

ならない」どんなことがあっても顔色一つ変えないようにならなければいけない。嬉しい、楽しいといっってはわあーわあー飛び立って喜

んだり、悲しいと言っては顔に出しておいおい泣いたりするようなことはしてはならないということです。

昔の武士教育がそうであったし、我々の子供の頃の教育もそうであった。

もともとこの言葉は、相手の人の心を思いやるという憐憫の情から発したものである。

例えばボクシングの試合で勝った者がリング場で飛び上がって喜び、果ては肩車に乗せて喜ぶという行為は私は好きでない。なぜなら負

けた相手の気持ちを考える時、そんなに踊り上がって喜ぶ訳にはゆかないではないか。自分が嬉しいからといって「嬉しい、嬉しい」と

いってはしゃいでいた時に、そこに悲しい思いをしている人があったら、その人を一層悲しませることにならないであろうか。自分が悲

しいからといって、わあーわあー泣いて歩いたら、それを見た人たちは不思議に思い、いやな気持ちにならないであろうか。終戦前は、

喜怒哀楽を極端に顔や態度に表すと、それを「はしたない」「非常識だ」といって戒めたものですが、最近はそのようなことがなくなりま

した。

それでは絶対にそういうことをしてはならないのでであろうか。昔の人は静かに喜び、静かに人知れず泣きました。怒る時でも静かに怒り

諭しました。そうする人を「憤み深い人だ」と尊敬しました。

「喜怒哀楽を色に表さず」という言葉の奥にあるのが釈尊の「忍辱」の教えです。忍辱というと多くの場合、どんなに罵倒されても少し

も怒らずににこにこ笑っていること、やわらかな心で受けることだけと解釈しているようですがそれだけではないので、嬉しい時、喜ぶ

べき時でも周囲の人々の気持ちを思いやって憤み深く喜ぶということをも教えてあるのであります。

高橋信次先生が道徳では人は救われたいと言われたのはどういうわけであるかといいますと、最近の人々の心は、嬉しい時、喜ぶべき時

の心の中には人に対する優越感、自分を誇らしげに思う心の中に人に対する軽蔑、人を見下げた心のあること、怒る場合は怒りの心が、

悲しい時には自分が悲しいだけでなく自分で自分をダメだと思って卑下する心、同時に人の幸福を羨ましがめる心などがあるからです。そ

ういう心を内に持ったままで表面上は何事もなかったような取り澄ました顔をしていたのでは、見た目には立派に見えても心の内にはい

ろいろな感情が埋もれているからです。釈尊が説かれた「忍辱」の心の奥にあるのは、人生の目的を知った調和に基づいた相互扶助、人

類はみな兄弟であるという平等互惠の心、正法という正しい環境の法を知った生活行為の心で、この心は釈尊以前からも説かれ続けてき

た心です。

こうして釈尊が説かれた正法の心がわかってきますと、喜んだこと、悲しい思いをしたことなども、今まで当たり前だと思ってきたこと

の中にも反省しなければならないものがあります。また、人がほめられた時、人が幸せになった時、なんとなくそうでない自分を自分で

情けないと思い、その反動で「あの人が不幸になればよい」等と思われたことはないであろうか。

そういう小さいことはさて置いても、親を悲しませたり、人と争ったり、これくらいはと思って盗んだり、自分本位の考え方で相手と争

ったり、「あれも欲しい、これも欲しい」「ああしてもらいたい、こうしてもらいたい」「思うようにしてくれない」等、いろいろな感

情に翻弄されて心は苦しみをつくっているものです。そうした自分の心を反省してゆくと全く自分自身の愚かさ

です。

こうした自分自身に対するやるせない思いを親鸞上人は

「小慈小悲もなき身にて、心は蛇蝎の如くなり」

と言われ、

パウロは「己の為さんとする思いはこれを為さず、かえって為さざらんとする思いこれを為すなり」

と嘆かれました。

正しい信仰をするには、まず過去の醜い自分に自分で愛想を尽かすということが必要であり、大事なことです。

そこまでは親鸞上人もパウロも正しかったのですが、それから先が違ったのです。

親鸞上人は自分を反省された場合、こんな悪い自分を自分で救うことが出来るわけがないと思われたことから、限りなく尊い力のある方

に救っていただく以外にないというので「阿弥陀如来」を立てて阿弥陀如来さまに救っていただくというので念仏を唱えることを説かれ

たのです。

パウロも同じように「キリストのみ名を唱えよ」

と説かれたのであります。他力信仰はこのようにして生まれました。人間は長い間他力信仰によってしか救われないと信じて

「南無阿弥陀仏」「アーメン」と唱えてきたのですが、高橋信次先生は、「他力では救われない、自力でないと救われない」と説かれま

した。

他方から自力へ

熱心に親鸞信仰をしている人たち、敬虔なクリスチャン達は、人間を神の子であるというのは増長慢も甚だしい、悪いことをする自分が

自分で自分を救えるわけがないといひます。

ちょっと考えるとそのように思えますが、果たしてそうでしょうか。私たちはここで考えることをやめないで、もっと考え方を押し進め

る必要があります。他力信仰をしている人たちは思考停止をしているのです。

人間が悪いことをした時に、悪いことはしてはいけないという心は何処から起こってくるのでしょうか。悪いことが悪いままでよいとい

う人は一人もいない筈です。下手な絵を描いた人はもっと上手な絵を描きたいとは思わないでしょうか。試験に不合格であると今度は合

格しようと思わないでしょうか。

人間には確かに悪いことを思う心があります。しかし悪い心を持っているのをそのままよいと思う人は一人もいない筈です。九十九%

よい心を持っていても一%悪い心があれば、一%の悪い心位はよいさという人もいないでしょう。人間はどういう心になることを望んで

いるのであろうか。それは百%きれいな心を持つことです。だったら悪いことを悪いままでよいと思わないで、少しづつでもよい心を持

つようにすることが正しいのではないのでしょうか。

腹が立った時に腹を立たないようにするのは、自分がしなければならぬので、念仏や題目をいくら唱えてみたところで、腹が立たなく

なるということはないでしょう。自分の腹が立たないようにするのは自分自身でしかありません。試験に不合格だったら自分がもっと勉

強することです。

私の家から少し行った所に菅原道真公をお祀りしてある大宰府天満宮があります。受験期になると何百万という人が合格祈願に来られま

す。みんな目的の学校に合格できますようにと祈願するのですが、合格する人もあれば不合格の人もあるわけですから。合格した人は試験問

題が正しく解けた人で、解けなかった人は不合格です。ちょっと実験してみてください。何も勉強をせずにいて、試験問題を机の上に広げ

て「この問題を解いて下さい」と一生懸命祈っていてそれで解答が出て来るでしょうか。絶対に出て来ません。この世のことは自分でし

なければなんにも出来ません。自分の心のこともそうです。

釈尊は「まことに怨み心をもってしては怨み心を解くことは出来ない。怨みなき心をもってしてのみ怨み心を解くことができる」と説か

れました。「阿含経」の中にある有名な言葉です。多くの人はこれを聞いて「なんだ当たり前のことではないか」と言います。そうで

す。当たり前であることが尊く有り難いのです。

病気になって治ることも有り難いですが、それよりも有り難いのは病気にならないで健康であることです。事故にあって助かるよりも事

故に遭わないことです。すべてのことがそのまま自然に有り難くなる。それがよいのです。

戦争がなくなりますようにと平和祈願をしても、戦争を仕掛ける人がいると、戦争はなくなりません。大衆の与論によって歴史はつくら

れると唯物論者、社会・共産主義者は言いますが、それなら大衆が話し合って「これから戦争を始めようか」と討議して始まった戦争と

いうものがあるでしょうか。戦争を計画した時に、黙っているというのは戦争をすることに同意した、賛成したということになります。

そういうわけで世界平和実現のためには個々の大衆の善悪の発言が大事な影響力を持つことになるわけです。

政治のことは政治家に、教育のことは学校の先生に委せてしまって、大衆は言われたままに動いているという現在の社会のあり方も、も

とはといえば、信仰という大事な問題を、あなた委せの他力信仰としているというところから起こってきたものです。すべてのことを他

人委せにしないで、それぞれ一人一人がしっかり考えるということにしないと改革も行われぬのです。

自分でしなければならぬといっても、自己本位、自我我欲の自分であってはならないということはいうまでもありません。正法によっ

て「人間は神の子」と知ったその神の子の自分であることを中心にして物事を考えることです。自分だけよければよい、人はどうなって

も構わないという考え方が自己本位の心ですから、自己本位の心の中には、人は不幸になってもどうなっても構わないという心がありま

す。そういう心を果たしてよい心ということが出来るでしょうか。

「人間は神の子である」ということは、自分だけでなく、みんなも神の子だということです。自分がよいと思うことはみんなにもよいと

いうことにならなければならないし、みんなが悪いということは自分にも悪いことになります。

人間はよいことをしたら誰も自分をほめてくれなくても、自分で自分をほめる心があります。反対に悪いことをすると自分で自分を責め

る心があります。よいことはよい、悪いことは悪いということを知っている本当の自分、その自分を「真我」と言います。この「真

我」が自分であることを自覚させ、真我の命ずるままに生きることを教えるのが正しい信仰であって、人間を「罪の子」だとか「罪悪深

重の凡夫」であるといっ、人間だから悪いことをするのも仕方がないといっ悪い自分を改めようとしなは正しい信仰の道ではな

いことに注目する必要があります。だからして正しい信仰をする人たちは、親鸞上人やパウロの教えを超える必要があるのです。

如来といわれる釈尊の教えと、そうでない親鸞上人、パウロの教えとにははっきりとした違いがあることがわかれたと思います。

月刊『正法』

Home

祈願文について説明いたしましょう。

祈願文は、既述のように六章から成っています。このうち、第一章から第四章までが「心」、第五、第六章が、「肉体」についての祈り

の言葉です。

それですから、祈願文は、心と肉体、宇宙と人間の関係を、もっと短い言葉で表現し、魂と神仏の一体化、己自身・指導霊の調和をはか

る、もっとも身近な想念であり、魂の叫びであります。

またこれを唱えるとき、人は、各人の調和度によって調和され、その調和した心で行為に移るときは、心の位置はいつそう高まってまい

ります。

まず第一章をあげてみましょう。

大宇宙大神霊・仏よ 我が心に光をお与え下さい 心に安らぎをお与え下さい

心行を己の糧として 日々の生活をします（己の心に一日の反省をする）

さて、ここまでの第一章は、大宇宙の全なる大神霊に対して光と安らぎを求めています。

大宇宙は、生命発祥の母体であり、大宇宙なくして、我々は存在いたしませんので、発祥の母体に、まず光を求めます。

すると、その光は各人の心の調和度にしたがって降りそそいでくるのであります。

心から唱えますと、心に安らぎを覚えます。安らぎは、各人の魂・意識に光が伝わってくるために起こる現象です。

光を受けたなら、大宇宙の正法の生活こそ宇宙の法に適うものでありますから、宇宙の経典、人間の経典である「心行」にもとづいた生

活を送ります、と最後の節で宣言するのです。この宣言が、ひじょうに大事なところですよ。

ふつう祈りというと、お願いごとで終わる場合が多いようです。お願いすればなんでも適えらると思いがちです。これは人間の弱さ、もろ

さからくる迷いです。神と人間を切り離れた迷信からくる自己満足です。

祈りというものは、人間が神の子としての自覚と、それへの感謝の心が湧き上がってくるにおこる人間本来の感情であり、そうした

感情が湧き上がってくれば、当然、これにもとづいた行為というものがないからです。

祈りの根本は感謝であり、その感謝の心は行為となるものでなければ本物とはなりません。

大宇宙大神霊の光を求めると同時に、心行を己の糧として日々の生活をします、と唱えるのも、こうした理由からです。

また真の調和は、己の心を信じ、行うことにあります。そうして、信じて行なう過程に、“祈り”というものがあるのです。

正しいと思っても、間違いを犯すのも人間、善なる行為と信じて、相手のうけとり方いかんでは、不善と見なされる場合もあるかも知

れません。

人間の想念、行為というものには、これが絶対正しいと自分では思っても、そうでない場合がひじょうに多いのであります。

そこで、人間は、神仏の偉大な救いを求め、その求めた中から生活するように心がけることが大事であり、救い

も、またそこから生まれ

てくるものです。

日々のご指導 心から感謝します

祈願文の第一章の最後の節は、こう結んでいます。

日々のご指導ということは、太陽が東から昇り、西に没する、春夏秋冬の転生輪廻、植物の生態、動物たちの生活.....こうした姿という

ものは、われわれ人間にたいして無言のうちに正法の実体、実相というものを教えています。人はパンのみにて生きるに非ず、まず、自

然の姿、人間の存在というものを静かにふりかえる時に、そこに、大宇宙、大自然の計らいというものを人間は知ることが出来ましょ

う。自然の日々の教えにたいして私たちは、心から感謝の気持ちが湧き上がり、その心が第一章の最後の節となるのであります。

第二章は、神の命をうけた上々段階、あるいは上段階光の天使に、光を求め、感謝するための祈りです。

すなわち、第二章の祈願文をあげると次のとおりです。

天上界の諸如来 諸菩薩（光の天使） 我が心に光りをお与え下さい 心に安らぎをお与え下さい

心行を己の糧として日々の生活をします 日々のご指導 心から感謝します

諸如来、諸菩薩は、あの世とこの世を善導する光の使者です。

私たち人間にとって、一番身近に感じ、救いの手をさしのべてくれる人が、光の天使であります。人間が迷いの淵にたたされたとき、決

断を迫られた瞬間、あるいは病床の中にあって、心を新たにし、反省し、祈るときには、これらの天使がその人の魂・意識に光を投げ与

え、その人を救ってくれます。

人は誰しも転生輪廻の過程のなかで、こうした天使と接触を持っており、したがって救いはどんな人間にも与えられているのでありま

す。

縁なき衆生救い難し という言葉がありますが、本当は、縁なき衆生というものは、一人もいないのでありま

す。この意味は、今世で救

われる者と、そうでない来世いや、再来世でなければ光のかけ橋にのぼれない人もあるので、今世と限定したときにこうした感慨がでて

くるのであります。魂の遍歴というものは、外見では決してわかるものではありません。前世、過去世、あの世の生活、と一口にいえば

簡単ですが、実は、過去世とあの世というものは、人間が想像する以上に複雑であり、魂によっては今世でどうすることもできない者も

あるのであります。

しかし、本来人間はみんな神の子、仏の子ですから、反省するときには光の天使の救いをうけられるのであります。

この意味で、第二章を唱えたときは、上々段階光の大指導霊の光をはじめ、諸如来、諸菩薩の光が伝わってくるのであります。

諸天善神の加護

第三章は、諸天善神の加護を求める祈りです。

天上界の諸天善神　我が心に光りをお与え下さい　心に安らぎをお与え下さい

我が心を正し、一切の魔よりお守り下さい　日々のご指導　心から感謝します

諸天善神とは、人間の魂を悪魔から守るいわば法の番人です。心が正しく、慈悲と愛の心を失わず、調和の生活を送っている人たちにた

いして、これらの天使は、いつでもどこにいても守ってくれます。

諸天善神にはどのようなものがあるかといいますと、不動明王、魔利支天、八大竜王、大黒天、稲荷大明神...といったものがあります。

不動明王は、心の正しき者を守護する天使。

魔利支天は、心の正しき者が過ちを犯さぬように善導してくださる天使。

八大竜王は、心の正しき人を守ると同時に、人間以外の一切の生物を統轄管理し、生物相互の生存に必要な措置を講じてゆく天使。

大黒天は、光の天使を側面から応援する。地上においては心の正しき者、正法を護持するための経済援助をはかってゆく天使。

稲荷大明神は、五穀豊穰の手助け、情報の収集、また正しき者を助けてゆく天使。

その方法手段は、ある特定の動物霊を指導し神理を教え、その動物霊を手足のように使う。

このように、諸天善神は、法を守り、光の天使の活動がしやすいように、その行動を側面から応援してゆくと同時に、心の正しき者の味

方となって、あの世における人間の意識界と、現実の地上世界の両面にわたって、働いている天使たちであります。

諸天善神は、光の天使になるための修行の場であり、役柄であります。しかも、如来、菩薩をも救う力が与えられております。

人間は所詮、神仏にはなれません。誤ちを犯し、これをさけられないのも人間であるとすれば、諸天善神の助けを借り、その救いにたい

して、感謝し報恩するのは当然であります。

守護・指導霊の祈り

我が心の中にまします守護・指導霊よ　　我が心を正しくお導きください　　心に安らぎをお与え下さい

日々のご指導　心から感謝します

第四章の祈りは、私たちの潜在意識層に在る私たちの本体あるいは分身にたいしてであります。その本体、分身が、守護霊となり、指導

霊となって、現象界に出ているその人の一生を見守り、魂の向上のためにあらゆる努力を払っています。

守護霊、指導霊について若干の説明を加えますと、まず守護霊は魂の兄弟（人生の生命は本体一人、分身五人から成る）の一人で、ほと

んど専属的について守っている霊です。したがって、ある人の五十年の歴史（想念行為）を調べようとするならば、その人の守護霊から

きけばわかります。この場合ききだすこちらの意識が相手方より低いと、それは不可能になります。あの世の意識界は、自分の意識より

下位の者の意識は見えても、上位の者の意識をのぞくことはできないからです。

指導霊は、主として、その人の職業なり、現象界の目的使命にたいして、その方向を誤らないよう示唆を与えてくれる魂の友人あるいは

先輩であります。たとえば、医者として過去世に経験のない者が今世で医者となった場合、その人の心の調和度によって、より高級な指

導霊がついて示唆を与えてくれるのです。

また人によっては、守護霊と指導霊を兼ねてその人を守り、指導している者もいます。

ともかくこのように、私たち現象界の人間にとって、いちばん身近にいる魂の兄弟たちに、常に感謝し、「祈り」という調和された想念

と行為を怠らないならば、その人の一生は、真に、安らぎのあるものとなりましょう。反対に不調和ですと守護霊はその人を守ることが

できず、これが長期にわたると不幸を招くこととなります。

自然への感謝

これまで述べてきました一章から四章までの祈願文の内容は、宇宙の心と人間の心を結ぶ祈りです。人間は、心と肉体とから構成されて

おりますがそのもっとも重要なのは、各人の心です。心は、素直に、のびやかで、自由自在でなければならないのに先天的、後天的因果

によって、その円満さを欠き、性格がいびつになっています。それを修整し、もとのまるい心にするために、四章までの祈り、その祈り

心にもとづいた実践行為によって、人の心は、次第に修整されてくるのであります。

いうなれば、四章までの祈りは、天と地をつなぐ光のかけ橋です。

第五章は、肉体維持に協力される、動・植・鉱にたいする感謝の祈りです。

万生万物 我が現象界の修行にご協力 心から感謝します

私たち人間は、五体という肉体を持っています。肉体のない人間、これはあの世の人です。あの世の人は、光子体という肉体と異なるボ

ディーを身にまといますが、この世は、原子細胞からできた肉体という船に乗って人生航路を渡っています。したがって、舟を浮かべる

には、水が必要、燃料が必要であります。この地上は、私たちが生まれる以前から、私たちの肉体保全のために、あらゆる素材を無料で

与えてくれています。もしも、この地上に、私たちの生存に必要な食べ物、水、太陽の光が与えられていないとするならば、私たちは

この世に出ることも、生きて行くこともできないと思います。科学の進歩によって、太陽光線を人工的に創り出すことが、仮に、できた

としても、その素材は大自然から求めてこなければなりません。つまり、肉体維持に必要な素材は、すべて、大

自然から与えられている

ということを悟ることが大事です。

万生万物に対して感謝し、万生万物をいつくしむ心、これが第五章の祈りです。

先祖に対する感謝

第六章の祈りは、先祖代々に対する感謝と供養です。

先祖代々の諸霊 我々に修行の体をお与え下さいまして 心から感謝します

諸霊の冥福を心から供養いたします

現在、こうして肉体が与えられ千年に一度、二千年に一度しか出てこられない現象界に在るというのも、もとをただせば先祖の、たゆま

ざる調和への努力の結果です。

したがって、先祖にたいして心から感謝するのは人間として当然の義務であります。

義務とは供養を意味します。供養とは、調和への行為です。感謝の心は、調和への行為となって、はじめて循環され、己も、そして先祖

の諸霊も神の光をいただくことができます。

この世の人が調和されるとあの世の人にも調和されます。あの世の人はあの世の環境に安住しがちであり、向上は容易ではありません。これ

は自分が住んでいる下位の世界は見ることはできても、上位の世界をのぞくことができないからです。そこで先祖の諸霊は、時おり子孫

の家庭を見にきます。その時、家庭内が争いや不調和に満ちていますと、地獄霊の場合は、自分のおかれている環境が苦しいために、家

庭人に憑依し、苦しみからのがれようとします。すると、その家庭内はいっそう不調和になります。家庭が調和されておれば、おかれて

いる環境、想念に疑問を持ち反省するようになります。一方、高級霊の場合は、家庭が不調和ですとその家庭を守りたくても守りようが

なく、反対に自分より調和されておれば、その家庭から反省の材料を得ることになり、その家庭を守りやすくなっていますその家庭内

は調和されることになります。先祖の供養とは、感謝の心が祈りとなって、調和の心が行為されたときに、はじめて実を結ぶものであり

ます。

神仏との対話へ

祈願文に書かれている一章から六章までの意味は、これで一応おわかりいただいたことと思います。

祈りというものは、感謝であり、行為である。祈りというものは、天と地をつなぐかけ橋である。祈りというものは、神仏との対

話である。

神仏との対話とは、各人の守護霊・指導霊との対話であり、守護霊・指導霊はあのよの天使の導きをうけており、天使は神の意を体して

いますので、守護霊・指導霊の導きは、そのまま神の導きであるといってもいいのです。

ただいい得ることは、各人の心の調和度によって、その対話の内容も変わってくるということは否めません。このため、その毎日の生活の

中で、正法に適った反省と努力、忍耐と献身、人間としての義務を果たしてゆくことが望まれます。そうして、こうした生活の積み重ね

が、やがて自分自身の品性を高め、神仏との対話にまで向上してゆくのであります。

祈りについて気をつけることは、人間はややもすれば、祈ることによって他力的になってゆくということです。祈りが他力にかわったと

き、その祈りは祈りとしての意味をなさなくなってきました。勿論、祈りは、守護・指導霊の力を借りることにはちがいません。しか

し正法の祈りは、神の子の自覚にもとづいた祈り心で行為するというのが、祈りの真意なのです。他力は行為を棚上げして、神仏の力に

すがってゆくものです。人間凡夫という前提で……。この点をまちがえますと、大変です。

色心不二という言葉があります。物も心も、ともに大宇宙の心から出発し、この心を起点にして、万生万物ができあがっておりますの

で、人間の場合、心と肉体とを健やかに、健全に保つためには、中道という神意にそった生活をする必要があります。

私たちの祈り（行為）も、色心不二という中道の心にまで高めてゆきたいものです。

月刊『正法』



Home

法語集 信仰の指針 園頭広周師

高橋信次先生のことば

『正法』誌 1980年1月17号より

法

法とは(さんずい)に去ると書く。(さんずい)は水だから、法とは水が去ることになる。

水は低きに流れ、高きに流れることはない。低きに流れることが自然の理に適い、自然の秩序に、したがっている。

水が去ることは、水自体が自然の条理適って生きているので、水の姿は、自然の秩序を表わしている、ということになる。

漢字は自然のさまざまな形を型どってつくられただけに、事物や事象を実によく表わしているといえよう。

さて水は低きに流れることによって、常に、清らかだ。山水の流れは冷たく清い。自然の条理にしたがい、低きに流れるから清く澄んで

いる。もし、この水の流れを止め、一ヶ所にとどめるとすれば、水質は汚れ、飲み水の用にはたたなくなってくる。

人の心もこれと同じなのだ。物に執着し、とらわれが多くなると、心は汚れ、ものの用に役立たなくなってくる。ねたみ、ぐち、そし

り、いかり、足ることを知らぬ欲望は執着の表われである。執着があるから心にこだわりができ、苦しみをつくる。

法とは、心に執着をもたぬことだ。とらわれをつくらぬことである。ここで注意したいことがある。それは、とらわれについてである。

知識が先行すると、とらわれという意味を曲解し、好き勝手なことをしても、とらわれなければよいというふう
に考えることである。こ

こでいうとらわれとは、物に執着しないことであるが、同時にそれは、法にしたがうことを意味している。ところ
が人によっては、とら

われなければ、したい放題、やりたい放題にしてよい、というふうを考えてしまう。とんでもないことである。

法とは秩序だ。循環の秩序をいっている。秩序とは調和であり、中道の心であり、慈悲と愛の神の心のよりどころにして維持されてい

る。身勝手なことをすれば相手が迷惑をするだろう。その迷惑の波動は、身勝手な人に蹴ね返ってこよう。本人はとらわれがないといっ

ても、身勝手な波動は発信者に返ってくるのが法の掟である。他力信仰者は、えてしてこういう考えになり勝ちである。よくよく自戒し

なければならない。正法は自力である。その自力も我欲をもとにした自力ではない。八正道という反省をもとにした自力行であることを

胆に銘じてほしい。

法 語

『正法』誌 1978年9月創刊号より

高橋信次先生は信仰の真髓を説かれたのでありますが、本の中にはあちこちに飛び飛びに書かれたりしてあるために、そのことがそ

れほど大事なことであるかどうかには気づかずに読んでいられる方が多いようであります。それで皆さんにわかり易く解説することにいたします。

第一章 神に感謝せよ

私達は宇宙創造の神さまが造られたこの宇宙の中に、神さまの生命に包まれ、その神さまの生命に支えられて神の子として生かされてい

るのであります。物質として現われているものも、それは、物質という形に現われた神の生命であります。森羅万象悉くは神の生命であ

ることをお釈迦さまは、「山川草木国土悉皆成仏、有情非情同時成道」といわれたのであります。

私達が我を捨てて、自分の心の波動を、大宇宙大神霊の波動に合わせて、自分の心を自然のあるがままの姿に還したときに、はじめて心

の安らかさが得られ、真理を自ら知ることが出来るのであります。大宇宙大神霊に波動を合わせるということは即ち、神さまに対して心から感謝を捧

げることであります。

第二章 神に感謝せぬ者は光の指導霊の指導を受けられぬ。

高橋信次先生は、「光の大指導霊或は光の指導霊の指導を受けるには、その前に大神霊を拝してから調和をよりよくお願いすべきであ

る」といっていられました。

神に対して感謝することもさせずに、いきなり「あなたの守護霊がこうっています」と指導している人達がありますが、そういう指導

はまちがいであります。「守護霊さま、お守り下さい」と、いくら一所懸命に祈ってみても、その人の心の中に、神に感謝する心がなかったら守護霊は

聞いてくれないのであります。たとえあなたが、特別に「守護霊さま、お守り下さい」と祈らなくても、あなたが、心から神に感謝してられるならば、指

導霊や守護霊は、その心の状態を「よし」とみて、あなたに靈感、直感を与えるのであります。波長は神に合わせてなければいけないのであって、人に

合わせるの、その人と調和することにはなっても、神とは調和しないのであります。

第三章 心の安らぎは神から生まれる。

正しいことの基準は心に安らぎがあるかないかであります。あなたが、いくら人に波長を合わせてみても、真の心の安らぎが得られな

いのは神に感謝し神に波長を合わせないからであります。心の安らぎは、神の光があなたの心にとどいた時に生まれるのでありますか

ら、心の安らぎを得るためには神に波長を合わせなければいけないのです。神に波長を合わせるとき、神の心は光となってあなたの心の

中にとどくのです。正しい指導者は神に波長を合わせることを説くのです。神に感謝し神に波長を合わせることに信仰の根源、信仰の本

質があるのです。

第四章 神に祈ること。

暇があったら敬虔な気持ちで謙虚に神に祈りを捧げなさい。心を神にふりむけて祈るとき瞬時にして神の光はあなたの心の光となっ

て、その心の光の中にあなたの身体は包まれてしまいます。オーラーというのは、あなたが、どれだけ神に感謝しているかという心の程

度によって現わされてくるところの、神からの光なのです。

「神さま、ありがとうございます」と心から唱えられると瞬間的に心に安らぎを覚えられるでしょう。安らぎは、私達の魂に光が伝っ

てきたときに起る現象なのです。

朝起きた時、夜休む時、仕事を始める時、仕事が終わった時、或は道を歩るきながら、祈ろうと思えばいつでも祈ることが出来ます。

正法会の皆さんは、いつも、神に感謝の祈りをする人となってほしいのであります。

法 語

1978年10月2号

週のはじめに一章づつよんで、その週の実践目標としてください。目標を持たないところには幸福はありません。

第五章 神は秩序である

秩序ということは、上があり下があり、右があり左があり、すべて物ごとには順序があるということでありま

す。あの世が、心の段階によって、如来界、菩薩界、神界、霊界、幽界と分かれているのも秩序です。神に感謝するということは同時に、

神の秩序を重んずるということにならないといけないのであります。ですから、祈りにも秩序のある祈りが必要なので、高橋信次先生

は、「大自然の波動と生命」の中につぎのように書いていられます。

「これらの如来（上段階光の大指導霊）、菩薩（上段階光の指導霊）は、神に人々の心を伝える現神であり、その前に、大神霊を拝し

てから、調和をよりよくお願いすべきであります。」

秩序のある祈りの仕方が大事であるから、「祈願文」はその秩序の通りに書かれているのであります。

第六章 正しい宗教指導者とは

正しい宗教指導者は必ず「神に調和せよ」「神に波長を合わせよ」と説くのであります。「神よ信ぜよ」「神に調和せよ」と説かない

宗教は邪教であります。例えば、日本の仏教々団の中には、その教団の、ご開山上人を一所懸命に信じさせて、大宇宙大神霊のことを少

しも教えていない教団があります。これでは正しい宗教、正しい信仰とはいえません。阿弥陀如来とか観世音菩薩を一所懸命に拝んでい

ても、その心の中に、大自然を創造された大宇宙大神靈に感謝する心がなかったとしたら、それは正しい信仰とはいえないのであります。

す。

あの世が、大神靈、如来界、菩薩界、神界、靈界、幽界という秩序あるしくみになっているということは、お釈迦さまがお説きになっ

て以来、はじめて高橋信次先生が明らかにされたのであります。このことの重大さに気づいていない人が多いのは残念なことであります。

第七章 自然に感謝せよ

お釈迦さまは、「なにもかも美しい、生命の躍動が手にとるように感じられてくる。あの森も、あの河も、町も、地球も、明星も、

天体の星にも、神の偉大なる意志の下に、息づいている」と。

この大自然が、神の創造であり、神のからだであることに気づかれ感謝されてから悟りに入られたのであります。「神さま」と感謝す

る心の中には、「自然に感謝する」心がないといけません。周囲にはきれいな自然があるのに、その自然の美しさにも気づかずに、夢中で、お百度を

踏んでいる人の心の中は、あわれであります。自然破壊を来しました。

第八章 大地に感謝せよ

天を仰いで神に感謝する人はあっても、大地にひれ伏して、大地に感謝するという人は少ないようです。

キリストが、「神よ、神よと呼ぶもの、必ずしも天国に入ることあたわず」といわれたことの中には、神に対する敬虔さ、謙虚さがな

ければいけないということも教えられたのでありますが、神に対する敬虔さ、謙虚さが欠けては、また正しい指導者とはいえません。

大地も神が創造されたのであり、この大地の上にわれわれは生きているのでありますから、この「大地」にも感謝をしないといけませ

ん。神に対する敬虔さ、謙虚さは、大地にひれ伏して感謝する心から生まれてくるものであります。日本の多くの宗教指導者は、大地に感謝すること

を忘れていたようです。宗教指導者達が、どこか一カ所に集まって、大地にひれ伏して神に感謝するという行事をしたら、日本の宗教界も大きく変わるで

しょう。

法 語

1978年11月3号

法語とは真理のことばであります。あなたがこの法語の意味をよく知り、この通りに実践される時、必ずあなたの上に心の安らぎと幸

せをもたらす言葉であります。祈りについての高橋信次先生の言葉を解説いたします。

第九章 祈りとは

祈りは人間が、あの世、天上界（実在界）から地上に肉体を持った時から始まります。

霊のふるさとである天上界では、“祈り”は即行為となっているので、殊更に祈らなくてもよいのです。思うこと、考えることが、そ

のまま祈りとなって神仏と調和しているからです。ところが、人間は肉体を持つと、天上界で持っていた心を忘れ、五官に左右され六根

にその身を、心をまかせて煩悩に己れ自身を埋没させ、自我に生きようとしめます。

「苦しい時の神だのみ」というのは、現実の自分がもうどうにもならなくなった時にどこに救いを求めればよいのかというと、それは

「天上界」「あの世」である、ということを知っている本当の自分が、霊のふるさとである天上界、あの世のことを思い出して祈る行為

なのであります。

第十章 虚心に祈ること

自分の欲望からでなくて、そうあることが自分自身の幸せだけでなく、関係のある周囲のすべての人々の幸せであるということであっ

たら、堂々と祈りなさい。

キリストは、「汝ら神に祈る時、頭に灰をかむり、しかめ顔するな」と祈る時の心のあり方を教えていられます。これは、「私は憐れな

る者であります。この憐れなる私に恵みをお与え下さい」というような、泣きつく祈りはしてはならぬ。そういう実現しないということ

を教えていただけるのであります。

日本人には、信仰深き者は、いつも「わたくしは、あわれなる者であります。罪深き者であります。悲しい者であります。」と、自分を

みじめだと思っていないと本当の信仰者ではないと思っている人が沢山ありますが、それはまちがっています。

人間は霊であり神の子であり、過去の転生輪廻の中ですばらしい体験をして、豊かな内在された智慧を持っているのであります。だか

ら、現実的にはまだ実現してない、いろいろなことが一ぱいあるけれども、実際は内在された豊かな智慧を持つことのすばらしい神の子

であるという自覚を持って、それをそのまますなおに認めて祈らないといけないのであります。



第十一章 祈りが実現する道

これまでの日本の宗教指導者は、祈ったことが実現するとすぐ「神さまが祈りを叶えて下さった」といつてきました。それはまちがいで

あって、天地宇宙を創造された神さまが直接一人一人の祈りを聞いて下さるということはないのであります。天上界は如来界、菩薩界、

神界、霊界、幽界という段階があり、一人一人にはその人の守護霊、指導霊があります。その人が煩惱にふりまわされていた自分を反省

して懺悔し、虚心に祈った時は、その人の守護霊、指導霊が救ってくれるのです。守護、守護霊に力がない場合には、その守護、指導霊

が、より高い次元の光の天使に頼んで救い手をさしのべて下さるということになるのであります。

第十二章 遠隔思念が動く理由

遠くにいる人のために祈って、その祈りが聞かれたという現象は、祈った人の念が直接先方の人にとどいたのではないのです。この点も

これまでの日本の宗教指導者はまちがっています。これは祈る人の守護、指導霊が、祈られる人の守護、指導霊にその念を伝達するので

す。祈る人も心をきれいに安らかにして祈らなければいけません、祈られる人も心をきれいにしてその祈りをすなおに受ける心になる

と、祈りの念を受けた守護、指導霊が、その人の心の内側から囁いて教えてくれるのです。

法 語

1978年12月4号

法語はあなたに悟りの目をひからせる言葉のエッセンスであります。何回でもくりかえして、心に残るまでよんで下さい。一年の終わりに

反省してみましょう。

第十三章 反省とは

反省は心をきれいにして、明日へ未来へと新しく前進するためにするのであります。

過去をふり返って反省して、感情的な涙を流すことに自己陶醉して、明日へと前進する勇気と希望と、そういう心が持てたことに感謝す

る心が湧かなかつたら、それは正しい反省ではありません。

反省したがために、かえって心をせまく暗くしている人があります。勿論それはこれまでの、まちがった指導者、講師の罪でもありま

す。反省は自分が神の子（やがて宇宙即我に到達するところの自分）であることを悟るための前段階としてするのであります。

第十四章 反省は智慧でせよ

G L Aの反省研修会に参加した人達の多くは、生まれてから現在までを、感情で反省して感傷的な涙を流しました。涙を流す反省は心を

せまく小さく暗くします。智慧によって反省して流す涙からは、真我が自覚され、心は広く大きく豊かになり、前途に明るい希望を持

ち、喜んで努力する勇気が湧いてきます。

お釈迦さまが説かれた教えは智慧の教えであります。法に照らして自分の在り方を自分で決定してゆく智慧を働かせるとき、そこに神の

慈悲を発見するのです。智慧のない慈悲というものは本来ないのです。慈悲という名によって智慧を働かせることをさせない宗教は邪教

であります。拝ませること、人を信じさせることは、その人から智慧の働きを奪ってしまうからいけないのです。

感傷的な涙を、智慧の涙に変えゆくとき心の中から光りが輝いてきます。

第十五章 反省と業と運命

過去を反省して、同じような失敗を何回もしていたら、それがあなたのいちばん心を決めて修正しなければならないカルマです。

カルマは身、口、意の三業によってつくられますが、身、口、意の三業も、元は、一つの心の働きであります。自分の心がつくり出した

ものでありますから、カルマを変えるのは心のあり方を変える以外にありません。

運命はその人のカルマの現れですから、運命を変えようとするには、心の持ち方、あり方を変える以外に変える方法はないのでありま

す。運命を変えようとして、心を変えずにいくら拝んでも祈とうしてもらっても、運命は変わりません。拝んでもらったり祈禱してもら

と金がかかりますが、自分で自分の心を変えるには金はいりません。

もっとも、カルマには善いカルマもありますから、よいカルマはますます伸ばせばよいので変える必要はないわけです。

第十六章 反省と止観と内観

高橋信次先生は、「反省は止観」である。とっていられました。「止観」というのは「止の禅定」と「観の禅定」の二つの意味があ

ります。「止の禅定」(とどまってみる)これは即ち普通にいわれる反省です。内観道場でやっている「内観」も反省です。これまでの

GLAの反省研修会にも、また内観道場にも「観の禅定」の指導がありませんでした。「観の禅定」をしないのでは、高橋信次先生がい

われました本当の「反省」にはなっていないのです。

「止の禅定」即ちいわゆる通俗的な反省だけでは、心を大きく広く豊かに明るくすることは出来ません。

大牟田市の「正法有明道場」では、本当の反省禅定の指導をしておりますので、来年は一度は、大牟田での研修を受けて下さい。そう

されれば、必ず、あなたは「人生の勇者」になられるでしょう。

法 語

1979年新年号 5号

新しい年の、新しい自覚は、あなたが「神の子」であるということを、しっかり自覚して「天地一切に感謝」して下さる事です。

第十七章 神は光りである。

お釈迦さまの悟りは、「大宇宙の始まりには、光明という神の意識だけがそこにあった」ということを知られたことによってひらかれ

ました。キリストの悟りは、「神、光あれといいたまひければ光ありき、はじめに神、天と地とをつくりたまへり」ということから始ま

りました。仏教もキリスト教も、どちらも真理は一つであります。

神は光であれば、神の子である人間も、もとより光でなければなりません。神が罪や悪をつくられたのではないのであります。真理即

ち正法を知らない人間が、自分の心の歪みによって作り出したのが、罪や悪であります。だから本来、神の世界には罪や悪はないので

あります。自分は本来、「光りの子」であることをのみ瞑想して下さい。そこから、あなたも「宇宙即我」に到達することができる

のです。

第十八章 宇宙即我

高橋信次先生は、「あなた達も宇宙即我に到達しなければならないのである」と教えていただきました。お釈迦さまも、人間として到達

しなければならない道を説かれたのであります。

「意識が拡大すると、太陽をはじめとして星々（惑星群）が、すべて自己の意識の中で回転し、そうしてその中で呼吸する一切の生物

は、わが肉体の一部であることに気付く。

人は宇宙大の意識を持って生活している。肉体にその意識が小さく固まり、とどまるために、宇宙大の自己を見失ってしまうのだ」

「偉大なる悟り」より。

本来、宇宙即我であるからこそ、人間は、宇宙即我を悟ることができるのであって、それは、瓦をいくら磨いてもダイヤモンドになら

ないように、本来、ダイヤモンドであるからこそ磨けば光るのと同じことでもあります。

第十九章 偽我は自分でない

真理を知らない自分、法を知らない自分が偽我であります。日本人は永い間、「罪悪深重の凡夫である。」と自分のことを思ってきました

した。然し本当の自分とは、「そういうことは本当でない」ということを知っている真我なる自分が本当の自分であります。

「自己の確立」とは、「真我なる自分」を自覚することでもあります。偽我なる自分を自分だと思って、この偽我なる自分をよくしようと

思っても、それは手にくさいものを握って、くさくないようにしようと手をふり廻わしていることとおなじことであって、くさくないよ

うにしようと思ったら、手に握っているくさいものを捨てればよいのと同じように、偽我なる自分は本当の自分ではなかったと心から放して、真我こ

そ自分であったと自覚の転換をすることです。

第二十章 真我こそ自分である

心の大きさ、豊かさ、明るさは、永い輪廻転生によって、どの程度、真我なる自分、宇宙即我なる自分を自覚しているか、その自覚の程

度によって決まるのであります。その自覚を深めるには瞑想禅定をしなければなりません。NHKの教育テレビ「瞑想の時間」で瞑想

は、壁に張ってあるマンダラを半眼にみつめて無念無想になるとか、イメージを描いてそれに心を集中するという説明がありましたが、

それはどちらもまちがっています。

ヨガの瞑想道場の指導にもまちがいがあるようです。正しい瞑想禅定は、自分が神の子であり、真我であることを、念を集中するのではな

くて、そのまますなおに認めることから始めるのです。その人の心の大きさによって心が肉体を離れて、肉体の自分を上の方から客観化

できるようになります。

Home

法 語

1979年2月6号

法語とは真理のことばであります。あなたがこの法語の意味をよく知り、その通りに実践される時、必ずあなたの上に、心のやすら

ぎと幸せをもたらす言葉であります。

第二十一章 智慧と愛の調和

慈悲とは、智慧と愛が統一され調和されたものをいうのであります。愛さえあればよいのであるとって愛だけを強調する宗教家があり

ますが、それはまちがっております。

智慧のない愛は人をそこないます。智慧のない愛しかたをされた子供がどんなに非行化してゆくか？

この大宇宙が、秩序整然として一つの体系をもってつくられたのは神の智慧によってであります。人間や動物が吐き出した炭酸ガスを、

植物が同化作用によってかわりに酸素を出すという相関々係をつくられたのも神の智慧であります。

病気や不幸になっている人はあっても智慧が足りなかったのです。私たちの心の中には、過去の輪廻転生で得た智慧が内在されていま

す。今まで「愛」という言葉のみを多く聞かされてきた人たちは、「自分は智慧のある存在である」ということを自分で自分にいい聞か

せて下さい。

第二十二章 自分の内に内在していても「ある」ということを知らなければ、「ない」と同じである。

「自覚する」ということは、「自分でそうだと覚る」ということです。「覚」という字は「悟る」ということです。「悟った人」のこと

を「覚者（ほとけ）」と書く場合があります。

自分がどんなに素晴らしいものを持っていても、持っているということに気がつかなければ「ない」と同じであります。皆さんにはこ

ういう経験があると思います。

金がまだある、と思って買物しようと思った。品物を選んでいざ金を払おうと思って財布をひらいたら金がなかった。家に帰って、「た

しかにまだ持っていた筈だ」と思ってポケットをあちこち探してみたら、別のポケットにまだ金が入っていたということが。

これは実際は持っていたのです。持っていて、持っているということに気がつかなければなにも買うことができません。それと同じよ

うに、人間も、どんなに素晴らしい智慧や愛をもっていて、「智慧であり、愛の存在である」ということに気がつかなければ、その智

慧、愛を生かして使うことはできないのであります。

人間は素晴らしい智慧と愛の総合された慈悲の靈的存在であるということを自覚しなさいと、お釈迦さまが説法されたのが、法華経の中

に説かれてある「繫（けい）宝珠の譬」の話であります。

第二十三章 知ることの大事さ。

「知識は実践した時に智慧となる」と高橋信次先生はいつもいっていられました。知識は実践した時に智慧となると同時にまた、知識即

ち知るということを通して、これまでの永い輪廻転生の中で得た智慧を日常生活の上にひき出してくることができるのであります。

知識を得るということをしなくてもよいとか、また、知識は必要はないといっている指導者がありますが、それはまちがいです。たとえ

ば、自動車の運転にしたって、その運転の方法を知らないとは運転できないではありませんか。ましてこの人生をどのように生きればよい

か、それを知ることなしにはよい生き方もできないでしょう。だからお釈迦さまは、まず、「知る」ことをしなさい。知ったら実践しな

さい。信仰は「知る」ことが大事だと教えられたのであります。

第二十三章「なるほど」ということ。

あなた方が何かを知った時、また教えられた時、「あゝ、なるほどそうか」と納得されるものがあるでしょう。その「なるほど」と納得

するのが智慧の働きです。心の中に内在されていた智慧と、心の外に現象として現れているものが内外相応した時に、「なるほど」と

か「合点がいった」とか「うん、そうだ、それがほんとだ」とかと思うのです。

また、はじめて知ったことを実際にやってみた時にも、「なるほど、こうすればよいのか」と思うでしょう。それは知識が智慧となった

のです。

知識は豊かであった方がよいのです。どんな人の話でも、どんな本でもよんで、悪いところは捨てて、よいところは心の糧にすればよい

のです。

知識を得ることを限定するのはまちがっています。「なるほど」と思うことが多いほど人生は幸福になります。

法 語

1979年3月7号

第二十五章 心の波長を合わす

人間は本来、幸福という環境の中で魂を磨くようになっているのです。あなたにとっての幸せは、あなたが祈っても祈らなくても既に

約束されているのです。その幸福になる道は、あなた自身がこの世に生まれる時に、守護霊と約束してきているのです。

心の内から囁いてくれる守護霊の声に耳を傾けなさい。守護霊の声は肉体の耳に外から聞えてくるものではありません。外から聞えてく

るのは動物霊か憑依霊です。また、心の内から聞えてくるといっても、あなたの心が乱れ騒いでいる時に聞えてくるのも正しくはありま

せん。正しい守護霊の声は、あなたが宇宙創造の神に、天地万物一切のものに、すべての人に感謝し、自分が神の子であることを信じ

て、自分の過去の失敗や、自分の心の暗さにとらわれなくなった時に、心の内から聞えてくるのです。

心の波長を合わせるといえるのは、神に、すべてのものに、そうして自分自身に対しても感謝できる心になることとあります。静かに落

着いた心になった時に、じっと心の内から囁いてくる声に耳を傾けて下さい。最初は小さくて聞きとれないくらいであっても、あなたが

聞く習慣をつけられるならば、その声は次第に大きくなってきます。

その内なる声の囁きを大事にされるならばあなたには人生の失敗はなく、常に幸福であることができます。

第二十六章 幸福は既に与えられている

オカゲ信心は利己主義の心であります。利己主義の心は神に波長が合いません。オカゲ信心で、一時その人が豊かになったようであっ

ても、その富は必ずその人を不幸にします。

オカゲを望まない心になって足ることを知り、毎日感謝の心で過すようになった時、必要なものは必ず与えられるのであります。

感謝の心が報恩の心となって、それが心からの奉仕となった時の心の喜びが、あなたにとってもっとも必要な幸福の状態を、あなた自

身がつくり出して行くので、既に幸福はあなたの心の中にあるのであって、ないものが外から与えられるのではないのであります。

「心がモノをつくる」「心が運命をつくる」といわれていますが、自分の心を豊かに明るくした時に環境も自然に整ってくるのであり

ます。オカゲ信心は、自分の欲望の達成のために神さまを利用しようという心があります。それは正しい信仰ではないでしょう。

第二十七章 分を知る

人は生まれてくる時に、こんどはどういう環境の中で、どういう仕事をして、どういう体験をして魂を向上させるかを、守護霊と打合

せて生まれてきます。その計画は生まれてきた時は潜在意識の中にかくされていて、現在意識の表面の心ではわからないことになってい

ます。最初からそういうことがわかっていたら苦労せずにすむと思われそうですが、最初からわかっていたら、入学試験の問題を最初から教

えられたことと同じで、本当の勉強になりません。こうするのが本当ではないか、ああするのが本当ではないか、といろいろな試行錯誤

をくり返すなかから、本当の自分の生き方、あり方を知って行くようになっているのです。

「あの人は分を知らない」とか、「あの人は分別がある」とかという言い方がされるのは、人にはそれぞれに為さなければならない本

分というものがあるということであり、その為さなければならないというものは、生れてくる時に計画し、守護霊に協力を願って生まれ

てくるのであります。ですから、心に思うことがなんでも実現するのではないのであって、その人が生まれてくる時に計画した、その分

の範囲内のことは実現しても、その分でないものは実現しないということになるのであります。だから自分の分を知ることが大事

であります。

第二十八章 足るを知る

「分を知る」ということは同時に「足ることを知る」ということになります。今の私達の人生は、宇宙即我に到達するための永い輪廻

転生の中の一コマなのであり、ただ一回の人生だけですべてを悟りつくす、経験しつくすということとはできないのでありますから、今度

の人生では自分は何を為し、何を学ぶことが正しいのであるかをよく心の内に聞かなければならないのです。

人には欲望があります。平社員でいるよりは社長がいい、と思うでしょう。では、「社長になって実際に会社を経営できるか」と自問

自答した時に、自分の心に偽わりなしに「やれる」と云える人もあれば、「さてとなると、とてもできない」と思う人もある筈です。

金もいまよりはあった方がよいでしょう。しかし、あっても使いこなすことができず、かえって心を墜落させ、また遺産として残した

ために子供が争うというようなものならむしろない方が幸せです。金は何万円以上持っていれば幸福で、それ以下は不幸だというような

ものではありません。金もまた、人間が魂の勉強をして行くために、生活の便宜上つくり出したものの一つなのでありますから、金のために心

を一喜一憂させることは本末転倒なので、足ることを知った安らかな心を知った上で、また金の必要性を知ることが必要でありま

す。「祈ればなんでも叶えられる」と説いている宗教がありますが、足ることを知らない分を超えた祈りは実現しないのであります。祈

りも分を知り足ることを知った上でしなければいけません。その祈りが、その人の分に叶うものであったら必ず守護霊をはじめ天上界か

らの協力があって実現するのであります。

法 語

1979年4月8号

第二十九章 天上界の協力を得るには、

私たちが天上界から援助される範囲は、私たちの理解の広さ、悟り、自覚の広さによって規定されます。私たちは神の意識そのもので

あり、輪廻転生の経験による智慧を持っています。自分が神の意識即ち神の子であることの自覚と輪廻転生の経験による智慧が、私たち

の理解、悟りの広さであります。

あなたが、いままでより以上に天上界からの援助協力を受けられるためには、新しい知識による新しい経験をされないといけないこと

になります。新しい経験を進んでする勇気と努力のみがあなたの悟りを広げてゆくのです。いままで知っていること、やってきたことの

なかにだけ安住していたのでは少しも前進はなく、自覚も理解も悟りも広がってはゆきません。試行錯誤の課程を通じて理解も自覚も悟

りも深まって、天上界からの新しい援助も得られるのですから、失敗を恐れずに前進することです。

第三十章 自分が自分を助ける。

失敗を恐れない新しい経験によってのみ新しい天上界の協力も得られるのですから結局、自分を助けるものは自分であるということに

なります。他力信仰をして、自分からは努力しない人が最後には失敗に終るのは、以上のような理由からであります。

何人（なんびと）も、私たち自身の代りになることはできません。自分のことは一切自分の責任ですから、自分のことを自分でしない

で、人に代ってやってもらうとする他力信仰では、決して自分が救われないのです。光の大指導霊は、「現代はニセモノの指導者と欠点

多き予言者達の時代である」と警告をしています。

ニセモノの指導者とは、「人を救えば自分が救われる」とか、「祈れば、無限供給が得られる」と説く人たちであります。人の欲望に

神を従わせようとするような教を説く人たちです。彼らは地縛霊と同様に人の心に不安を生じさせます。

Home

第三十一章 欠点多き予言者とは

欠点の多い予言者は、絶えず危機感、恐怖心を誘って天災地変がくることを予言し、人の心に安らかさを与えず、常に不安をかき立て

ます。ニセモノの指導者が同時にニセ予言者であるという場合が多いようです。

正法を知ってられる方々には、人の心に不安を与えることがどんなに大きな罪であるかを知ってられるでしょう。ある宗教では、

「日本沈没があるからメシアと呼ばれる特定の人間を信ずる人のみを救って、そうでない人は救わないというようなことをされることは

ありません。心が正しく法にかなっている人は助かるでしょうし、また、天災地変で無一物になるという経験によって、物質への執着を

なくすることを学ばなければならない人もあるのですし、どんな時でも、どんなことが起っても不動心を持つのが正法です。

第三十二章 あの世からの指導は、

高級な指導霊、また守護霊は、その人の自主性を無視して勝手に強制的に指導するというようなことはしません。「なぜ、天上界はあ

の人を正しく指導されないのであろうか」ということをよく聞きますが、その人がまちがった暗い考えをしているのを、無理矢理に強制

して明るい正しい考え方をするようにはしないのです。高橋信次先生が、「如来、菩薩といえども心を暗くして地獄界へ墮ちるものもあ

る」といっていられたのは、すべて人には心の自由が与えられているからです。

どんな人も、自分の心の悟り以上には偉大ではあり得ないのですから、自分を偉大にするには、自分で自分を偉大に成長させる以外に

はありません。日一日と自分自身を成長させることが、神と調和する実践の方法が「八正道」であります。

高級な指導霊、守護霊は、その人を悟らせるように靈感を与えようと努力するのです。

法 語

1979年5月9号

第三十三章 作用と反作用

物理学に於ける「作用と反作用」の法則は同時に心の法則でもあります。

「凡ての作用には、大きさが等しく方向が反対なる反作用が伴う」

この「作用と反作用」の法則を、心の面で表現したのが「善因善果」「悪因悪果」という「因縁」の法則であります。科学の法則と心の

法則は一つであり、この一つの法則を創造して、心と物質とを同一法則によって活動せしめている大生命力、大エネルギーを宗教的には

「神」というのです。法則は人間のほしいままな心によって左右されることはありません。この人は悪いことをしたが、前に善いことを

したことがあるから今度は少し手加減して悪いことが起らないようにしてやろうというようなことは絶対はないのです。その人の運命

は、その人がこの法則を知っているにせよ知らないにせよ厳密にこの法則によってつくられてゆくのであります。

第三十四章 法則の管理者は自分である

人間が神の子であるということは、「作用と反作用」の法則を自由にコントロールできる心の自由を与えられてあるということです。

あなたはあなたの今の運命がどうであろうとも、それはあなたが知っていたにせよ知らなかったにせよ、みなあなた自身の心が造り出し

たものであって誰をも怨むことはできないのです。怨む、憎むということは自分の運命の責任を他に転嫁していることです。自分が下手

な絵を画いたのに、あの人が私にこんな下手な絵を書かせたと思って、自分ではなにもしようとしなが、怨むとか憎むという心なの

ですから、怨む心、憎む心が自分にある間は運命は絶対によくならないのです。十年間の腎臓病が治られた大牟田の小柳さんは、「憎ん

でいる人があったらその人を赦しなさい。赦すことによって誰が一番幸せになるかという、赦すことができたあなた自身である」とい

う話を研修道場で聞かれて、「そうだ赦そう」と思われた瞬間から病気がよくなったのです。これをよまれた方で、もし誰かを憎み怨ん

でいたとしたら、その人を赦しなさい。そうすれば必ずあなたの運命はよくなります。われわれは、自分自身の運命の主人公なのです。

第三十五章 先祖の因縁ではない

これまで日本の宗教家は、なかにあると「それは先祖の因縁だから、先祖の供養をよくしなさい」と指導してきました。一方では先祖に

感謝しなさいと教えて、一方ではこのように説いてきたために、「自分が不幸なのは先祖の因縁だ」とか、「こんな病気をするのは先祖

が悪いのだ」、「貧乏しているのは先祖が陰徳をつまなかつたからだ」と、知らず知らずのうちに先祖を憎む心を起させてしまいまし

た。この矛盾にも気づいていないばかりか、法を犯し真理を犯していることにも気づいていません。

先祖の因縁が子孫にくることは絶対にはないのです。先祖がしたことは、みな先祖が受取るし、あなたがしたことはあなたが受取るので

す。あなたが一所懸命に信仰していて、どうしても自分の運命がよくなるとしたら、心の奥底で知らず知らずのうちに「先祖の因縁

だ」と先祖を怨んでいる心があるのではないか、反省をしてみてください。われわれはみな心の自由が与えられているのです。自分の運命

は自分の責任なのですから、あなた自身が努力されるとあなたの運命は確実によくなるのです。

先祖の因縁だと思って、自分で自分の心を束縛していたその心の束縛から、あなた自身を解放して、大いなる心の自由を獲得しなさい。

第三十六章 光りのみが実在である

神は光であり、太陽は光りです。暗いというのは、そこに光りがないという状態であるに過ぎません。悪とは、悪そのものがそこにあ

るのではないのであって、それは法を知らなかった、法を誤用した結果にしか過ぎないのです。だから、ここにあるこの「悪」をなくし

よと思ってはなりません。法を知らず、また知っていても法をまちがって使った結果であるにしか過ぎないので、法を知って法

を正しく使われると、それは善となって現われて、悪をなくしようと思わなくても悪の状態は自然に消えてしまうのです。神は罰を与え

ません。罰が当たったように見えるのは、われわれが「作用と反作用」の法則、「善因善果、悪因悪果」の法則を誤用した結果にしか過ぎ

ません。まちがって使ったら、今度は正しく使えばよいのです。どこがまちがっていたかを知るのが反省です。「知る」「反省する」と

いう働きは智慧の働きなのですから、正しく信仰するには智慧が大事であります。智慧の大事さを説かない宗教は邪教です。

法 語

1979年6月10号

第三十七章 神の国と神の義とを求めよ

キリストはそういわれたと聖書に書いてあります。いろいろな教団の指導者は、この言葉を巧みにすり替えて、教団のために奉仕する

ことが、神の国を求めることであると説いています。私が前にいた生長の家でも、「第一義とせよ。第一義とは神の国と神の義を求める

ことであって、それは、生長の家教団のために寄付し、会員をふやし月刊誌を一括して百部買って、人に配ることである」といっていま

した。教団に奉仕することは自己満足にしかすぎません。キリストが教えられた本当の意味は、神の慈悲、愛は宇宙の真理となり宇宙の

姿となっている。人間は神の子であることを知って神がつくられた正法を正しく実践することが、神の国と神の義とを求めることである

と教えられたのであります。

一つの教団の枠の中には入りこんで、その教団の制約の下でしか信仰しないという信仰はホンモノではありません。正しい信仰を求め

るには、いまあなたがいられる教団の枠から外へ出られることです。

第三十八章 さらばその余のものは与えられるべし

神の国と神の義とを求めることは教団の方針に従い、教団のために奉仕することであって、そうしたら、あなたの願いは叶えられ、あ

なたは幸福になるのであると、どこの教団の指導者も説いています。創価学会が大石寺を建てるとき、「いま一

万円寄付すれば大石寺が

建った時は十万円になって返ってくる」といって、わづか三日間で三百五十五億円集めた話は有名です。創価学会でこれを総供養といっ

ています。大石寺は立派に建ちましたが信者は誰一人として金は返りませんでした。

そういう事実がありながら、さらにその後総供養をやって千四百億円集めたといわれます。「出すとお蔭があ

りますよ」といって、出

させる方もですが、出す方も出す方だと思います。これと同じやり方をどこの教団でもやっております。こうした金銭面からいえば日本

の多くの教団は、信者が幸福になりたいと願っているその心を巧みに利用した搾取収奪団体だといえます。いつ

れ近くみなが目ざめて宗

教界が大混乱を起す日が来ます。

キリストがいわれましたのは、正しく正法を実践することを喜びとして生活していれば求めようとしなくとも自然になくてならぬ必要

なものも整ってくると教えられたのであります。なにかを求める心を持って正法を実践するのはまちがいです。正しく正法を実践するこ

と、それによって起る心の喜び、心の拡大、心の成長、心の豊かさ、それを喜びとして生活することをしなければいけません。そうすれ

ば自然に必要なものは与えられるのです。

第三十九章 求めよさらば与えられん

このこともまちがって教えられています。欲しいと思うものはなんでも祈りなさい、そうすれば与えられま

す、といて特に生長の家

では「無限供給の祈り」といって教えております。「一億円すでに与えられてありがとうございます」と祈れば必ず与えられると、全国

を説いて廻って人気を集めた有名な講師がりましたが、この祈りによって一億円儲けた人は一人もありません

でした。

『天と地とを結ぶ電話』百三十八頁に

している、と書いてあり

ます。

キリストが求めよといわれたのは、神理を求めよ、切実に神理を知りたいと思えば必ず与えられる。いろいろな人が自分の前に現われ

て、また実際の自分の体験から、或は自然のたゞずまいの中から、必ず与えられると説かれたのであって、いまの日本の各教団が説いて

いるような、なんでも欲望を叶えられるという意味で説かれたものではありません。

われわれは、魂を偉大に成長させることを目的として生まれてきているのでありますから、死ぬ時に持って行けないような、地位、名

誉、財産を求めて祈りをしてはならないのであります。

第四十章 正念と祈り

ではどのような祈りが正しいのであるか。

人生の目的は調和にあるのですから、足ることを知った心で、調和がくるように祈ることは正しいのです。念は願いであり、人は今日

よりは明日はよくなりたいた願うからまた生きてゆけるのであります。

ものを考える、ものを思うのは、われわれの心の中に一切を生み出す創造エネルギーがあるからであり、その創造エネルギーは宇宙創

造のエネルギーが、あなたとなって固体化個性化したものでありますから、われわれは、その祈りが、神の心に叶っているかどうかを考

えなければなりません。人間は誰しものが正しく生きようと思ひ、また今日よりは明日はよくなりたいたという目的意識を持っています。

自己本位でないところの、正しい目的にそった調和を求めての努力実践をしながら、その目的にそっての願いごと、祈りは、必ず天上

界からの協力があるのですから、このような祈りは堂々としてよいのであります。

九州のある方は、人間は努力すれば信仰などいらぬといひ、自己本位の努力をしていて何億という仕事をしていたら見

事に失敗されました。金廻りのよい時は出入りしていた人達も、金がなくなると来なくなりました。そうしてやっと正法を聞くことにな

りました。その人はいっていられました。

「わたしは三日間、正法を聞いて心のあり方が大体わかりました。よし最初からやり直した、と心に決めて

祈ってやるようになりまし

たら、こんなに調子よくなってよいのかと、びっくりするほど調子がよくなって、人生に自信ができました」と。

神の国と神の義を求め、且祈ることは正しい心のあり方、正しい神、正しい神理を教える正法、即ち歪められてないところの釈

迦、キリストの教の原点にかえらなければいけないのであります。

Home

法 語

1979年10月14号

第四十一章 霊能力に片寄ってはいけない

五月十三日「二十一世紀の宗教と科学」の大講演会が終った後の座談会で、日本P S学会理事の坂元邁先生が、ある有名な物品引寄せ

の霊能者の話をされた。私とその霊能者を知ったのは昭和三十六年であった。その人は仏像を出したり真珠を出したり、神前に供えた空

の瓶の中に酒を出したりする。今でもその人が出した真珠など持っているが、その人がP S学会の科学者達の研究の対象になっていると

いうのである。科学者が研究の対象にするのはよいことであるが、無知な信仰をする人達は、なにか不思議な霊能力を持っている人があ

ると、盲目的にその人を神さまみたいに信じてしまう。多少ものを当てられたりするとなんでもその人に聞こうとして自分で判断すると

いうことをしない。それが又ミノーゼ心理である。正常な心理状態ではないのである。霊能力が可能だという知識をもったり、それを事

実として認めても、霊能力を信ずる人が直ちに一層すぐれた人間であるということにはならないのであるが、ともするとその霊能力者に

親しいとか言葉をかけられたとか握手してもらったとかで、急に人よりもえらくなつたように思ってしまう人が多い。

その人に近いからといって、なにもその人の人間性が急にりっぱになるわけではないはずである。

第四十二章 なにを学ぶか

私はその霊能力者のところに三回行ってやめた。それはその人が、あてことばかりして法を説かないし、私の目の前で夫婦げんかを始

めたからである。霊能力者も同じ人間だから、それは夫婦げんかもするさという人があるかも知れないが、客があって一方では神棚に

向って祈りながら、なにもそんな時に夫婦げんかをしなくてもいいのではないのか？。その霊能力者も小さい時から苦労して滝に打たれ

たりして修行されたということであったが、社会的な良識、教養がないのである。

高橋信次先生は、「その人のいっていることと、やっていることがちがっている人のいうことを信じてはならない」と、くり返してい

っていられた。

ふしぎな霊能力があるということを知った人たちは、今までよりも広い視野を持ち、そのことにつづいて人生の神秘さについて、永遠

に「なぜなぜ」と追求して、その知識は、その人に一層高い道徳をもち来たし、その上に調和ある人生を築くようになって行かな

ければいけないのであって、その霊能力を単に興味の対象としたり、またその霊能力者を神様みたいにしんじてしまうということ

はしてはならないのである。

第四十三章 無記

「あの世があるのですか」

「魂はあるのですか」

「あの世はどうなっているのですか」

「神さまはあるのですか」

このような質問を受けられたお釈迦さまはなんにも答えられなかったと、お経の中に残っているが、このことを「無記」というのであ

る。その質問のあとで説かれたのは、

「あなたたちは、神さまがあり、霊があり、あの世があるということがわからなければ、今日一日の生活ができないということはない

であろう。われわれにとって大事なことは、今日一日の生活を八正道によって正しくして心を安らかにし、調和ある人生をつくり出して

自分の心を大きくすることである。わからないからといって、今日一日の人生をおろそかにしてはならない。今日一日をしっかりと生き

きりなさい」ということであった。

このことがのちに大乘仏教時代になると、「あの世は空だといわれた」ということになり、現在、日本仏教が「無神論、無靈魂論」の

立場をとっている原因なのである。

お釈迦さまが天上界のことについて説かれたことは「生天論」としてのこっているのであるから、「無記」というところだけをつかま

えて直ちに「一切は空である」と無神論、無靈魂論だというのはまちがいであるが、また靈能力だけに片寄り、靈能を得ようとして、毎

日毎日の生活をおろそかにすることは尚一層いけないことで、それは、われわれが肉体をもって魂の修行に出てきた人生の目的に反する

からである。

第四十四章 知識より体験が大事である

いろいろたくさん知っていることも大事である。知らなければ実行することすらできない。正しく信仰する者は広い視野を持たなけれ

ばいけない。心のせまい人が心を広くしようとするには、まず視野を広くすることから始めた方がよい。心のせまい人とは要するに視野

のせまい人である。

いわゆる「もの知り」といわれる、いろんなことを知っている人がある。しかしそういう人で人格的にはどうかと顔をしかめたくなるよ

うな人がある。「もの知り」の人の話は時には面白く感心することがあるが、深く人を感動させ、その感動がその人をして実行にまでか

り立てるということはない。しかし体験して身体で覚えていられる人の話は、深い感動が、「よし、それなら自分もやろう」という行動

にまでかり立てる力を持っている。

行動実践によってのみ、心を大きく成長させることができるのであって、知識が心を大きく成長させることはないのである。だから話

を聞かれるなら体験した人の話を聞かれるべきである。

法 語

第四十五章 泥んこ遊びはさせた方がよい

幼児は泥んこ遊びや粘土遊びや、にちにちにしたものをもて遊ぶのが好きである。幼児はそのにちにちにした手指の感触の中に、お

かあさんの膝に抱かれてお乳を呑みながら一方の手をおかあさんの胸にいれ、空いた方の乳房をまさぐっていたあの時の感触を感じ、そ

の時に抱いた心の安らかさを味わっているのである。するなと叱られても幼児が泥んこ遊びをするのはその心の安らかさを味わっている

と同時に、なんでも自分の思う通りにこね廻してつくれる創造の喜びを体験しているのである。服が汚れて洗濯の手間がかかるのをおそ

れて、子供に泥んこ遊びをさせない母親は、子供の大事な心の成長を妨げているのであり、泥んこ遊びをさせられなかった子供は心の安

らかさを体験させられないから情緒不安定になる率が高いのである。落ち着きのないいつもはしゃいでばかりいる子供は母親によって心の

安らかさを奪われた子供なのであって、いくら「静かにしなさい」と叱ってみても治らないのである。これを治す道は、子供をし

かと抱きしめて、母親の膝の上で心の安らかさを体験させる以外にないのである。

第四十六章 ミルクは抱いて飲ませなさい

ソ連が共産党の闘士を育てるというので、生まれたばかりの赤ちゃんを母親の手からひき離し、国家で養育するということをやっ

たことがある。これは完全に失敗に終わりました。抱かれることもなく機械的にミルクをのまされた幼児達がハイハイをはじめようにな

ると幼児達はお互いに噛みついて血だらけになってしまって、その血の中を這いずり廻って相手を見ては噛みつくということをやっ、結

局育児を共産党主義的考え方と手段でやるのは失敗だということになり、母親の手にかえされることになりました。情緒不安定児、自閉

症児は母親の膝に抱かれる時間が少なく、また母親がことばをかけることの少なかった子供達である。うちの子はおとなしくて泣きもし

ない育て易い子供だということでテレビの前にねかされていた子供が自閉症になり易いのである。いつも耳には入るのはテレビを通して

出ている声と音だけで、テレビの方はよくみるが、お母さんの生まの声を聞く機会が少ないのでお母さんから自分の名前を呼ばれても、

自分の名前を呼ばれたことに関心がない子供になってしまう。

赤ちゃんは必ず名前を呼んで声をかけて抱きあげて、しっかり胸に抱いてミルクものませるようにしないとけない。お母さんの膝に抱

かれていた時に味わう心の安らかさ、その安らかさが人間を落ち着きのあるものにするし、その安らかさが実は禅定をする時の心の安らか

になるのである。だから禅定をする人は、お母さんの膝に抱かれていた時の自分の姿を想像して心の安らかさを取り戻せばいいのであ

る。

第四十七章 幼時に愛し過ぎる弊害

かわいい、といってお母さんは赤ちゃんに頬ずりしたり抱擁したりする。その肌と肌のふれ合いによって相手に対する自己同一化即ち

愛の感情が培かわれてゆく。ところが幼児を愛撫する母親の感情の中に、また子供が小学生から中学生となり性徴が出てくるその中で、

母親が幼児を愛撫する中で性的快感を味わい、また、夫によって満たされない性的欲求不満を、子供を見、世話をする中で満足させたい

というような性的感情が入ってくると、その子供は性的に早くめざめ、ませて性に普通の子供以上の関心を持つようになる。性的非行に

走る子供達は、知らず知らずのうちに親によってそのようにしむけられたのであり、非行に走る勇気を持たない内向型の子供は、頭の中

は性のことで一杯になり、性以外のことは考えられず逆にノイローゼになるのである。甘やかされて育った男の子がノイローゼになるの

は、原因は性の葛藤にある。母親は、特に男の子供の性的興奮を誘発するような愛撫のしかたをしてはいけない。

第四十八章 夫婦の調和が大事な理由

夫に失望し、夫によって愛が満たされないと、母親は男の子供に期待をつなぐようになる。男の子供の成長につれてそこに理想の男性像

を子供の上に描くようになり、特に性的特徴がはっきり出てくるようになると性的にほいのする思いを母親がかけるようになる。

念は通ずるのであるから、男の子供はその念をうけて性についての関心を持つようになり、その性的興味を持つようになった発信源が母

親にあることを知らない子供は、なんとはなしに無意識のうちに母親を性的対象として心の中で見るようになる。普通は母親を性的対象

とみるのはいけないことであるとしてつぎには年上の女に関心を持つようになる。最近年上の女と結婚する男子がふえてきたのはこうい

うところにも原因がある。そうして多くはやはり自分の年令と釣り合った女性を結婚の対象に選ぶようになる。過度に母親に愛された男

の子供は母親に心が固着して、母親と肉体関係を持っている場面を想像するようになる。そうすると、きよらかなものとして尊敬すべき

母を、みだらな性的対象としてみたいということで罪悪感を感じて苦しむようになる。そうなると外へ出るのがいやになり、人がみな自

分の心の秘密を知っているような気がして人の目がこわくなり暗いところにこもり勝ちになる。

男の子供のノイローゼはこのようなケースでなるのが多いのであるから、それを治すには、まず母親が子供にそういう思いを送らないよ

うに、子供のことはさて置いて、夫に心をむけるようにするようにならなければならないのである。

法 語

1979年12月16号

第四十九章 心の合理化

正見とは偽りなく自分の心を見つめることである。人間の心の中には、自分がまちがったことをしていることを十分に知っていながら、

それをまちがいではないと正当化し合理化しようとする心がある。受験期が近づくと病気になるのもそのひとつである。健康で受験して

もし不合格になると、「あいつは頭が悪いのだ」といわれるが、病気になると、病気になったから勉強ができなかったと不合格の理由を

正当化して、頭が悪いといわれるのを避けることができる。即ち仮病も合理化の一つである。自分が悪いことを知っている者ほど相手に

対して攻撃的になり相手を悪くいう。相手を悪くいうことによって、自分がこうするのは当然だと、自分の行為を正当化しようとするの

である。他に責任転嫁する心もそうであろう。自分の心を正しく見つめられるようにならないと魂の進歩はな

い。

第五十章 嫉妬は正見を妨げる

嫉妬心は相手を引きずりおろして自分が相手よりも優位に立とうとする心である。嫉妬心があるとすべてのことを否定したり圧迫したり

軽くあしらったりする。相手を悪くいうことによって自分を偉いのだとみせようとする。なにかを聞いた時に、すぐそれを否定しようと

する心が先に起ったら嫉妬心がある証拠であるから、相手がなにかをいったら、相手がそのように考えていることは、その人にとっては

正しいことなのであると一ぺん素直に聞いて、その上で自分はどう判断すべきであるかを知性によって確めなければいけないのである。

なんでもかんでも反対してすなおに聞こうとする心がないと正しく見ることができない。相手が不幸になることを喜ぶ心があるとあなた

自身が幸福になれない。相手の喜びを自分のことのように喜べるようになることである。

Home

第五十一章 都合の悪いことは忘れる

地獄耳という人がある。地方によっては勝手耳ともいう。外のことは聞えないくせに自分のことをいわれたり自分が損させられるような

話になると、「いま、なにいったか」とつめよってくる。「心ここにあらざれば聞けども聞えず」であって、聞こうという意思がなけれ

ばなにごととも聞えないのである。自己保存の強い利己主義者ほど自分に都合の悪いことは忘れる。愛情が失われてくるとその人のいうこ

とは心にとめなくなってくる。学校へ行く子供で忘れ物が多いのは、学校へ行きたくない心が働いているのであるから、なぜ学校が面白

くないのか担任の先生とよく話合ってみる必要がある。人間は、愛する人のいうことは絶対に忘れない。先生が

好きであったら、好きな

先生のいわれることは絶対に忘れないものである。過去のいやな思い出は早く忘れようとする心がある。心の底にかくそうとしないで明

るみに出して修正することである。

第五十二章 病気不幸は自己処罰である

誰も知らないことであっても、自分で自分は悪いことをしたという罪悪感があると、こういう悪いことした人間が幸福になる筈がない。

といって幸福になるチャンスが与えられてもそれを拒否して不幸の道を選ぶようになる。また、自分みたいな者は死んだ方がましなのだ

と思って自殺するまでの勇気もない者は病気を自分でつくる。悪かったことは二度としないようにすれば罪は赦されるのであるから、懺

悔反省して心の中から罪悪感をなくすることである。

また、心の奥底で病気になった方が都合がよいと思っている者も自分で病気をつくる。病気になりたい心を持っている者などいる筈がな

いと思う人があるかも知れないが実際にあるのである。病気になって同情されたいとか、病気になれば仕事しないですむとか、病気にな

ればラクができるとか、そのような逃避する心を持っていては幸福になれない。

法 語

1980年1月17号

第五十三章 正法は万物を活(い)かす

正法は、神が万物を生かす慈悲、愛の表現である。太陽は神の慈悲・愛の表現である。太陽信仰が始まったのは太陽が神の心の表現で

あり万生万物に平等に光りと熱を与えているからである。それと同じように、正法は万生万物生命を与える神の法である。正法が宗教に

生かされる時、その宗教は新たな生命を得て真の生きた宗教となり、正法が政治に生かされた時、万人のための政治となり、正法が経済

に生かされる時、足ることを知った貧富の差のない経済となり、正法が教育に生かされる時、それは人間性を開発し真の人間性を満足さ

せるための教育となり、正法が会社で生かされる時、その会社は繁栄し、正法が家庭に生かされる時、家庭は真の調和を得、正法が個人

に生かされる時、その人は人として自己を確立して自分の運命の主人公となるであろう。

正法によって万生万物は復活するのである。

第五十四章 これからは総合の時代である。

物質科学はものを細かく分析することによって発達してきた。細かく部分に分けて分析した結果、人々を生かすつもりの科学が人を殺

す原子爆弾をつくり出した。原子爆弾によって沢山の人が殺されてはじめて心ある人々は分析するだけでは人は生かされないことを悟っ

た。人間を部分に分けた唯物医学は、ますます多くの病人をつくり出した。新しくふえる病人に医学は追いつかない。分析があって総合

がなければすべては死である。自動車も細かく部品に分解すれば自動車としての用を偽さないのと同じである。

四百年に亙る近代合理主義、科学主義の時代は終わった。分析された従来 of 宗教、哲学、思想だけを信じている者は時代遅れになる。

二十一世紀は総合の時代であるが、八〇年代からは二十一世紀に入るための準備の時代であるといえる。新しい年を迎えて発想の転

換が必要である。

第五十五章 宗派宗教は本当の宗教ではない

ある時、ある場所で、その人々の機根に従って説かれた教がすべての人に通用する筈がない。宗派宗教にはそれでよいという人もある

がその反面にそれでは満足できない人が必ずある。新興宗教も同じである。宗派宗教は神仏を礼拝する儀式を持っている。儀式は本当の

信仰には必要はない。あなたが今までの信仰に疑問を持たれたとしたらそれはあなたが正しいのである。部分は部分であって全体ではな

い のと同じように、釈尊やキリストの教の一部分を知ってそれで全体を知ったとするわけにはいかない。

二十一世紀に向っていちばん反省しなければならないのは各宗教団体の指導者である。自分が知っただけのことを宗教のすべてだとし

て信者に強制してはならない。宗教指導者は自分の教団の中の反対意見に耳を傾けるべきである。

第五十六章 悟りとは

悟りとは自分で自分の心を完全にコントロールできることである。人がなにをいっても腹を立てまいと思えば立てずにいることができ

る。悲しみはそのことだけに囚われると悲しみのままで心を暗くするが、そのことが自分の欠点を気づかせ、ものの考え方の違い、心の

狭さ、知識の不足などに気がつくならば悲しみは喜びに変わってくる。悟った人とは心の取直しがすぐできる人であり、禍いを転じて福と

なすことができる人のことである。心の正しいあり方を説かずに霊能力を誇ってあてごとや病氣直しを、こととしている人を悟った人と

思ってはならない。現世利益を強調するのは真の宗教ではない。現世利益はその人が悟った結果として副次的に起ってくるのであって、

現世利益中心になると魔に支配され易くなる。霊能力に憧れ霊能力を持ちたいという野心も一つの欲望であって釈尊はそういう欲を捨て

よといっているのである。

法 語 自己確立への道 1980年2月18号

第五十七章 流行病

流行を追わずにはいられないというのも一つの心の病気である。日本人のほとんどが流行病に罹っている。新聞に癌の死亡率が高いと

書かれると、自分も癌になりはしないかと心配し、ノイローゼが流行すると、いかにもそれが新しい文明病みたいに思って、少し心がふ

さぐとノイローゼではないかと思ひ、胃が少し痛むと胃潰瘍だと思ひ、病気であることに優越感を持っている人がある。ファッションや

モードの世界は典型的な流行病の世界である。終戦後いち早く流行したのがロングスカートで、つづいてパットを入れたいかり肩、フレ

ヤーコートにショルダーバッグ等、そうしてミニスカートと猫の目のように変ってきた。化粧品も毎年毎年基礎となる色が変わる。マージ

ャン熱、ゴルフ熱、ドライブ熱、日本人はなんでもかんでも熱病にしてしまう。

飛降り自殺したと新聞に出ると必ずつづいて飛降り自殺する人がでる。絶えず流行を追っていないと安心できないという人、つねに廻

りの人が気になって仕方がないという人は自己の確立ができていないのである。

第五十八章 流行の最尖端を行く積極型

ファッションは、会社が人の心を操縦して儲けんがために商業デザイナーにつくらせ、それをマスコミを使って宣伝した産物である。

いつも流行の最尖端をゆき、自分を他人よりも目立たせようとする人がある。こういう人は、他人の注目や羨望、賞賛を受けることを期

待している自己顕示欲の強い人である。自己顕示欲の強い人ははヒステリー型の性格で、いつも芝居がかった大げさな身ぶりや派手な身

なりで他人の目をひこうとして、自分に注意をひきつけないではいられない人で、自己本位で、わがままで、見栄坊で、競争心がはげし

く、いつも他人が気にかかって他人と自分とが違っていることを強調しようとする。こういう性格は幼児期に母親によってつくられるの

である。また幼児期に抑圧された反抗心が爆発してなる場合もある。

第五十九章 流行のあとを追う消極型

他人のすることなら自分もしたい。自分一人だけ除け者にされたくないといういわば個性のないタイプの人がある。積極型は自我意識

が強すぎるのが原因であるが、消極型は意志が弱いのが原因である。心が健康に発達している人は、いたずらに流行を追うことはしな

いで、服飾や趣味などは自分の個性にマッチしたものを自分で選ぶ、自我が強くて実力が伴わなかったり、自分に自信がもてなかった

り、劣等感があったりすると、その弱さをカバーするために、他人と違った身なりをしようとする。人よりもかわった服装をすることに

よって自己主張をしようとするほどの自我の強さのない人は、人と同じような服装をすることによって自分の存在を埋没させようとする

る。こういう心はどちらも中道ではない。衣服は身体を保護すればそれで足りるものであることを知って流行を追わないという心になる

ことからでも自己の確立ができる。

第六十章 偽りの自我を捨てる

自分の身体や心に自信を持ってないものが自分を認めさせようとし、マスコミに登場する流行歌手とか人物にまねすることによって、自

分もその人と同じようになったように錯覚する。精神分析学者は、流行の最尖端をゆく心理を、欲求不満や情緒障害からくる攻撃性のあ

らわれとみる人もある。他人を見下し、他人をうらやましがらせることによって満足を得ようとするからである。流行を追わずにいられ

ないのは精神的未熟者である。こういう心がスター心理であり、スターをあこがれる心理であるが、こうした心が信仰の場で現われた時

にメシヤ信仰となり狂信盲信となるのである。信仰は心の成熟を目的とするものであるから、自己を確立するには日常生活において流行

を追わず流行にふりまわされず、いつも自分の個性に合った自分の心に安らかさを与える服装をするということからでも始めればよいの

である。これが同時に省エネルギー時代の生き方でもある。



法 語 自己確立への道

1980年3月19号

第六十一章 自己の確立とは

正しい信仰は自力信仰であって他力信仰ではない。ヨチヨチ歩きを始めた時、親は幼児が歩いてくると、「ここまでおいで」と後退り

して、少しでも一人で歩く距離を長くしようとするのであろう。それと同じように、神はわれわれ人間が独り歩きするのを望んでいられ

る。いつまでも、なにかにつかまらなければ歩けないというのでは正常ではない。それと同じように、自力信仰とは誰にも頼らず自分一

人で歩く道であり、それが自己の確立である。幼稚園から小学校、中学校、高校と勉強をしてやがて社会人となって独り立ちして行く。

学校では先生があり、社会人になるとまたそれぞれに師を持つ。それと同じようにその段階にふさわしい先生が必要である。その先生に

は、自分ではわからない時に、わからないことがあった時に聞くので、朝から晩までなんでも頼り切って聞くわけではない。

第六十二章 他力信仰は甘えである

「この子はわたしがいないと全くだめなんです。自分ひとりではなんにもできないんですから」と、子供が甘えてくるのを喜んでいる

母親がいるが、こういう母親が子供をやがてノイローゼにする。育児の秘訣は、子供自身ができることはなるべく早く子供自身にさせて

独立心を育てることである。他力信仰をしている人の心には甘えがある。自分の問題を自分で解決せずに、勝手に祈って解決しようとする

る。自分の心は自分でしかコントロールできないのに、自分の心のあり方まで勝手に祈って決めようとする。腹が立って仕方がないから

腹が立ちませんようにと祈っている。甘える子供はまだかわいいところもあるが、身体は大人でも、心は甘えていっぱいであるのが他力

信仰である。その甘えをなくして自分で生きて行く道はきびしい。自力信仰にはきびしさが必要である。しかし、自分ひとりで解決した

喜びはたとえようもなく大きい。

第六十三章 魂の成長記録

学校でも、試験問題を自分で解かずにカンニングしたら落第であると同じように、自分で自分の問題を解決しなかったら魂は成長しな

い。死んだ時、あの世の入口で提出する魂の通知表には、その人が自分で自分の問題を解決したその成績が記入してあるのであってカン

ニングした成績は記録されていない。全優だった人は高い次元の霊界へ行くし、その成績によって自分で自分にふさわしい霊界へ行くの

である。生きている時に頼るくせのついた他力信仰をした人が死ぬと、あの世へ行っても頼ろうとする心が強いが、あの世では誰も教え

てくれない。この世で自分で考えることをしていなかった人は、あの世で永く迷うことになる。憑依してくる霊はこのような迷った霊で

ある。学校の試験で、全くできなかった時のかなしさと、百点をとって帰った時のうれしさを思い出してほし

い。あなたにはその問題を

解決する力があるからその問題が与えられるのである。

第六十四章 直観を大事に

直観とは、あなたの守護霊があなたの心の内からあなたの心に囁きかける言葉である。自力信仰とは、心の内から守護霊と相談して行

く道である。守護霊はその時あなたがどうすればいいかも全部知っている。成功し幸福であったという人達は正しく守護霊の声を聞いて

いた人であり、失敗し不幸になったという人達は守護霊の囁きを無視して自我の欲望を主にして判断し、また他力信仰は、一時成功する

ようなことがあったとしても結局は失敗するのである。自分のことをいつでも他人に考えてもらうとするやり方がいつまでも成功する筈

がない。強い人間になるには、自分ひとりで静かに考える時間を持つことである。孤独に耐え孤独を愛する人間であった時に、あなたは

孤独でなくなる。心の内から囁きかけてくる守護霊の囁きを聞き、それを通して神の声を聞くこともできるようになる。

法 語 自己確立への道

1980年4月20号

第六十五章 人生は積極的に

「神、光あれといいたまいければ光ありき」

旧約聖書創世記のいちばん初めにある言葉と、釈尊の悟りの、「はじめには神という光明があった」という言葉は同じである。神道では

「天照大神」とよんできた。

神の子であるということは「光の子」であるということである。光の子であるということはあなたの霊が光であるということである。

だから人間は光を喜び、明るさを喜ぶのである。あなたが魂の光を曇らせた時、それを心の苦しみとして感ずる。苦しみは魂の本質では

ないから苦しみで心にかげりが生ずると、そのかげりをなくしようとする信号である。積極的な人だけが幸福になるのはそれは光の道で

あり、消極的な人が不幸になり病気になるのはそれは影の道だからである

積極的になった時、心は明るくなり、消極的になると心が暗くなる。キリストは、「光のあるうちに光の道を歩め」といわれた。

第六十六章 どうすれば病気にならないかを知る必要はない

近代医学や近代心理学が失敗に終わったのは、身体的に、また精神的に病気であり異常者だけを対象にして、こうしたら病気で異常に

なったということだけを研究してきたからである。

人間は肉体的にも精神的にも健康であることを望んでいるのであるから、肉体的にも精神的にも健康である人はなぜ健康であるか知

り、その通り実践すればよいのである。

どうすれば病気にならないかという消極的な考え方ではいつでも心が重々しく暗い。こうすれば健康であるという積極的な心はいつも

明るい。病気にならないようにと、いつも病気を心に描いているのと、こうすれば健康になると、いつも健康を心に描いているのと、ど

ちらが心が明るく楽しいであろうか。

健康は、神が創造された道であり、病気は人間がつくり出したものである。どちらを目標にするかはあなたの自由である。

第六十七章 反抗期はない

終戦後の学校教育、家庭教育を失敗させた原因の一つに「反抗期」という言葉がある。

近代児童心理学は、非行少年や反抗児だけの心理状態を研究の対象にして、健康な少年少女が、どうして健康であるのかを研究の対象

にしなかった。非行少年や反抗児に特有の「反抗期」を、学問的真理であると権威づけて、大学教授達がP T Aの講演会で話をするの

で、子供は成長の過程でみな反抗期というのがあると信じ込んで、少し親の気に入らないことをしたり、また、親のいうことを聞かない

と、「あ、反抗期だな、丁度そういう年齢だ」と考えて親は子供の前に子供を反抗させまい、すなおにしようと見構えてしまい、子供は

反抗期という言葉が教えられて、どの子もこの年頃には親に反抗するものなのであると思って、反抗することを自然の状態であると思う

ようになった。「反抗期」という言葉がつくり出した親子の対立の被害は大きい。

第六十八章 更年期障害もない

私の五人の子供はみな反抗期はなかった。子供が自立心を持つようにいつも心掛けてきたから、子供は自由にのびのびと明るく育つ

た。子供も光の子であるから、常に明るく自由に伸びようとする。それを親が押さえるから反抗するのである。だから反抗するのは、子

供が伸びようとする心の現われであるから、それはよいことなのである。

婦人の人はよく「更年期」だと身体の不調を訴える人が多いが、世の中には更年期はなかった気づかなかったという人も結構多いので

ある。肉体の生理作用の転換期は確かにある。それは神が肉体を造られた時に与えられた法則即ち生理作用なのであるから、神がつくら

れたものが苦痛である筈がない。更年期といわれるその年頃に身体が不調になるのは、それまでに潜在意識の中に抑圧されてきた感情が

あったのであって、抑圧された感情を持たない、心の明るい人には更年期という苦しみはないのである。

法 語

1980年7月23号

第六十九章 無明とは

お釈迦さまは一切の苦しみの根源は「無明」にあると説かれた無明とは無智のことであり、どんなことに無智であることが無明である

かということ、

苦しみとはどんなものであるかを知らない

苦しみがどうして起こるかを知らない

苦しみをなくすることができるということを知らない

苦しみをなくする方法を知らない

ということなのであるから、知らないことは知れば無明（迷い）はなくなるのである。知らないことを知ろうともせずに、「迷いをな

くして下さい」といくら祈ってみても迷いがなくなる筈がない。

正しい信仰は正しく知ることから始まるのであって、知らなければならないことを教えようともせず、ただ「頼れ」とか「祈れ」と

かいつている宗教は一時の気休めにしか過ぎないのである。一生祈ってみても知らないことがわかるということは絶対にない。正法会は

知るべきことを正しく教えるのである。仏教は「知の宗教」であるのである。

第七十章 最初のお経

お釈迦さまが亡くなられて九十日目の第一回結集の時には、文字で書かれたお経はなかったのである。

集まった五百羅漢の仏弟子たちは記憶して覚えていたことを口で唱えたのである。お釈迦さまの存命中は文字で書かれたお経はなかつ

たのであるから、お釈迦さまが「お経を何遍でもあげなさい」と説かれる筈がない。だから法華経中に一回でも余計に読誦すれば功德が

あると書かれているのは後世の人が書き加えたものだといっているのである。後世の人が勝手に付け加えたものを信ずる必要はない。法という

ものは心に記憶していて日常生活に実践すべきものである。記憶していなければ日常生活の突嗟の間に思い出して実践することはできな

い。だから神理は、お経として書かれてあるものを記憶して心にとどめて置かなければならないのである。単によむものとして心にとど

めないから「お経よみのお経知らず」とか「論語よみの論語知らず」という言葉が生まれてくるのである。よい言葉は小さい時から子供

に記憶させることである。

Home

第七十一章 正法を知ることによる変化

お釈迦さまの教を聞いたバラモンの僧は、自分の心が変わったことをつぎのようにいった。

今まで逆さまに見えていたものが真直ぐに見えるようになりました。

ふしぎも秘密もなく、これが当たり前だということがわかりました。

迷った道と正しい道がはっきりわかるようになりました。

暗闇の部屋の中に燈火をともし、瞬間にして暗闇がなくなり辺りを明るく照らし出すことができるように、智慧

の光りによって迷いの闇はなくなりました。

心から迷いがなくなったら心は明るくなる筈である。だから悟りの道、正法の道は明るいのが本当なのであって、日本の現代仏教が暗

いのは本当ではないのである。人間も暗さがなくなって明るくなってこないといけない。以上上げた四つの変化がないというのであれば

それは今あなたが信じていられるのが正法でないか、正法であるのであればそうなる努力をしないかである。

第七十二章 比較して見ること

すべてのものはみな比較してみた時に、よいかわるいか、長いか短いか、厚いか薄いか、丸いか四角か等々わかるのである。お釈迦さま

まは、お釈迦さまが悟られる以前にあった宗教と比較して正法を説かれたのである。だからその宗教が正しいかどうかは、比較宗教学的

な話をしているかどうかを見れば凡そわかるということがいえる。あるバラモン信者がお釈迦さまに、「私は今の信仰をつづけようと思

いますが」といった時に、「あなたはそれをつづけられるといいでしょう」といわれたことを多くの仏教学者は、「お釈迦さまは寛容な

方でどんな信仰でもよいといわれた」と解釈している人がいるがそれはまちがいであって、その人がそのバラモン信仰をつづけているう

ちに比較する眼が開けてきて正法の正しさがわかってくるであろう、だからその時までそっとして置く方がよいと思っていわれた言葉で

ある。正法会は比較していうべき時ははっきりというし、いわない方がよい、時を待った方がよいと思う時はいわないのである。

法 語

1980年8月24号

人を救うために

第七十三章 愛深くあること

昭和三十五年頃までは宗教家が「心で病気が治る」という話をすると医者は殆んどが迷信だといいました。ところがアメリカで発達し

た精神身体医学が日本に輸入されるようになって、現在ではそれを否定する医者はいなくなりました。病気の大部分は心で起るのである

から、心を治せば病気も治ることを知っているのになぜ医者が心の治療をしないのか、

原因は健康保険法にあります。

アメリカでは精神治療の場合は一時間に 弗という治療費が支払われることになっており、薬や手術で治療する医者よりも、精神治療

をする医者の方が社会的地位も上位で尊敬されていますが、日本の場合はその反対で、今の健康保険法では精神治療をしても金にならな

い。薬や注射をしないと金儲けできないことになっています。

乱診乱療、一人の診察時間が二、三分でろくに診察もせずに、薬は馬に喰わせるほど持たせるというのは健康保険法が悪いのです。

現在の日本の健康保険法は今から一〇〇年前、明治維新直後にドイツから入ってきた「病気は病原菌があつてなるのである」という唯

物医学を基にしてつくられているので、日本の現在の医療体制、健康保険法を変えるには精神身体医学を基にしなければいけないので、

その点日本医師会は時代の進歩にそむきたいちばん古臭い思想を持っているわけです。日本の医者には愛がないといえます。

第七十四章 なぜ新興宗教がふえたか

心で病気が治ると説いたのは新興宗教でした。既成宗教といわれる神道、仏教、キリスト教は、宗教とは魂の救いを説くのであって病

気など治すものではない。病気が治るといような現世利益を説くのは邪教であるといっていました。既成宗教が魂を救うのだと高くと

まって大衆の病気の悩みを救う力がなく日本の医学会が唯物医学一辺倒になっていて誰も心から起った病気を治す力を持たなかった時に

新興宗教が「心で病気を治す」というスローガンを掲げたわけです。実際に心で起った病気なら心が変われば治るのは当然です。

肺病は「ハイ」とすなおな返事をしないからだ。扁桃腺は「へんとう（返答）せん」からだということがいわれ始めました。

どこの新興宗教の教団でも「病気が治った」という奇蹟の体験が続出して信者がふえてゆきました。それは当然のことであったので別

に奇蹟でもなんでもなかったのです。

第七十五章 病気が治るのは事実である

創価学会の人達は「マンダラのお蔭だ」「日蓮上人のお蔭だ」といい、立正佼成会の人達は「ご本尊のお蔭だ」といい、生長の家は「生

長の家大神、住吉大神のお蔭だ」といい、どこかにお詣りしている人達はそこの神さまのお蔭だとそれぞれ一所懸命に信仰しているわけ

ですが、病気が治ったのは神さまのお蔭でもなければマンダラのお蔭でもないのです。

ただそれらのものは心を変えるきっかけになったにすぎないのです。それらをきっかけにして心が変わったから病気が治ったのです。

一つの教団に入会してそこで病気が治るとそこの信仰のお蔭だとありがたくなって一心になり、そこの信仰で治ったのが本当の治り方

で、他の教団の信仰で治ったのはウソだと多くの人は思っています。しかし、病気が治るのに、ホントの治り方とかウソの治り方という

のがあるでしょうか。医者で治ったのがホントの治り方で宗教で治るのはウソの治り方だというのがあるでしょうか。どこでどうして治

ろうと、治ったという事実はすなおに認めるべきです。うちの教団で治ったのがホントで、他の教団で治ったのはウソだとかいうような

過った差別の心を持ってはならないので、心の病気が治るのは事実だから事実は事実としてすなおに認めることが正しい信仰の一つでも

あります。

第七十六章 病気が治すのではない自分が治すのである

神が治すのであったら、その神を拝んだ人はみな治らなければならないということになりますが、創価学会でも立正佼成会でも生長の

家でもその他の教団でも一所懸命に拝んだが治らなかったという人が沢山あります。

どこの教団でも治った人の体験は華々しく宣伝しますが、治らない人が沢山あることは絶対に発表しません。治った時は「ここの神さ

まのお蔭だ」といって神さまのお蔭にして「あなたの信仰が自分で治したのです」というようなことは絶対にいいません。その代りに治

らなかった人に対してそれこそきびしく吐き捨てるように「あなたの心が悪いのだ」「あなたの信仰が悪いのだ」といいます。本当に人

を救う愛があったらそんなに吐き捨てるようにいわないで、さらにもっとやさしくどうすればいいかを教えるのが本当の宗教指導者では

ないでしょうか。

治った時だけ神さまのせいにして治らないと本人のせいにするのは矛盾ではないでしょうか。神さまのお蔭だといっている人が治ったり治ら

なかったりするの、そんな神さまは神さまという資格はありません。神さまが病気をつくったのなら神さまに頼めば治して下さるでし

ょうか。病気は自分の心でつくったので神さまがつくったのではありません。人間を病気にして苦しめるという神さまなどない筈です。

病気を治すのに神さまを拝む必要はないのです。

第七十七章 心が変われば病気も治る

精神身体医学という学問はアメリカで発達したのです。病気は心で起るのであるから心を変えれば治るとということが医学的な研究の結果

明らかになってきたのです。アメリカで精神治療を受けて治った人達は、創価学会でも立正佼成会でも成長の家でもなんでもないので

す。なんの信仰をしなくても治っているのです。お釈迦さまは中道調和の道、いかにして心を安らかにするか、心を安らかにすれば病気

にもならないという正法の道を説かれたのであって、正法とは正しい心のあり方を説くので、の神さまを拝みなさいというようなこ

とは説かないのであります。

どこの教団の信仰をしても治らなかったという人達は心が変らなかったからであって、われわれはどこの教団に所属することもいら

ないのであります。どこの教団の会員にならなくても、心の正しいあり方を知れば病気になることもないし、またなっただとしても自分で

自分の心を修正して治すこともできるのであります。

第七十八章 医者や薬が病気を治すのではない。

多くの人は医者や薬が病気を治すと思っています。それは違うのです。人間には病気になった時は自然に病気を治す「自然治癒能力」と

いうものが与えられてあります。医者や薬は自然治癒能力を高める補助的な役割をするだけのことです。このことは医学の教科書の第一

頁に書いてあるのです。だからどんな名医でも、病気を治そうとする意欲のない患者、病人になっている方が都合がよいと思っている患

者は絶対に治すことはできないのです。生まれつきの持病で治らないとか、若い時からの持病で治らないという人達は自分で治らないと

思っているから自分で自然治癒能力を働かさないようにしているからであって、自分の肉体に内圧する自然治癒能力を信じて「必ず治

る」という心を奮い立たせれば治ってゆくのであります。

これからどうすれば病気が治るかを書いてゆきますのでつづけてよんで下さい。尚これは病気のことだけでなくどうして幸福になるのか

ということも通ずるのでありますからよくよんで下さい。

法 語

1980年9月25号

人を救うために

第七十九章 医者は治さない

ほとんどの人は医者が病気を治すと思っています。しかし、医者が病気を治すことはないのです。病気を治すのは神でもなければ医者で

もないのです。医者がそういつているのです。

西日本新聞に福岡大学医学部第一外科、志村秀彦教授の医療雑感が載っていました。

「生命の仕組は精巧で、治る力は医師の力をはるかに超える。医者は患者のそばにいて邪魔者を払いのけ、力づけるだけですむことが多

い。やたらに手を加えたり、投薬したりする過保護が、逆に治る力を弱らせる結果になりかねない。患者の身になって、苦痛、障害を

感じ、陰に陽に介抱し、力づけ、患者自身の治る力を存分に発揮させるように心を配るのが医者の本分。生きる喜びを患者に味わっても

らうことを願うのが医者の生きがい。」

心が病気をつくるのであれば、健康体の人は病気にならないように心のあり方に気をつければいいし、病気だと

いう人は心を治せば病気

は治るということになります。

講談社とマイヘルス社共同発行の「別冊壮快」という雑誌があります。その中で「心で病気を治す事典」副題「心の持ち方ひとつで現わ

れるすばらしい効果」の中の目次だけ並べてみましょう。

「病気を起し病気を治す心の不思議」

自治医大教授 宮本 忠雄

成人病の大半は心が原因で起る

成人病とは、高血圧症、動脈硬化症、心臓病、胃潰瘍、糖尿病、肝臓病、リウマチ、喘息、痛風、神経痛、ノイローゼ、うつ

病、ガン等

ガンだけは例外だという人がいるが最近ではガンの精神療法という言葉が生まれている。たとえガンになっても最後まで希望を捨て

ず、心を明るくもたせる言葉がいかに大切かである。

「子供も大人も心が原因の病気が激増中」

愛知医大教授 久徳 重盛

人間の基礎のできる三才前後に、ひずみのある基礎がつくられることが原因となる。

第八十章 医者も必要である

確かに病気は心でつくるのであるから、心を治せば病気は治るということになります。

この精神身体医学を教義に取り入れたある宗教では、「心を治せば病気は治る」といって医者も薬もいらないと教えました。その結果、

たしかに心だけで治った人も沢山ありましたがその半面に、早く医者の手当を受ければ治ったのに、最後まで医者にかかることを拒否し

たために、最後に病院にかつぎこまれた時はもはや手遅れで死んでしまったという人も沢山でした。

その宗教では医者にかかる人は信仰が足りないのであるといえますから、信者達はどうしても医者にかからなければならぬ時でも、な

にか悪いことをするみたいに外の信者にわからないようにこっそり行くということをしていました。

医療公害、薬公害が叫ばれているように医療の行き過ぎ、薬の乱用はいけません、正常な医療、薬の使用は必要です。

心が病気をつくるということは心の傾向が肉体の生理作用の変化、肉体細胞の歪みとなって現われるということです。心を変えることは

短い時間でできても、物質である肉体の組織や細胞が変化するには時間がかかります。ここに心は治っていても肉体の方はまだ治って

ないというズレが生じます。また心が治ったといっても一ぺんにパッと心が治るということもなかなかむずかしいことです。明るくな

たり暗くなったり一進一退しつつ変ってゆくのが普通です。心の変化と肉体の変化とのズレがあるところに、医療によって治療の障害に

なっているものを除き、手当をし、また薬によって弱まっている自然治癒能力を掘り越し回復させることが必要であるという場合が生じ

てきます。このことが前章に書いた志村教授の「医師は患者のそばにいて邪魔者を払いのけ、力づける」という言葉になり「患者自身の

治る力を存分に発揮させるように心を配るのが医師の本分」であるという言葉になってくるわけです。ある宗教のように医療を否定する

ことも極端であるということになり、やはり中道が必要だということになります。

Home

第八十一章 心の治療で薬はいらない

「心と身体両面の健康を追求する心身医学」という東邦大学助教授筒井末春氏の文章を紹介しましょう。

「病気というのは、細菌感染などによるものを除くと、その人が精神的、肉体的、社会的に生きてきた人生体験の結晶であるともいえる

わけです。人間の心が病気に与える影響がここ十数年の間に研究されてきました。現在では、心理的要因でおこる病気の多くは、薬にた

よらず治療できるようになっています。」、

と。

八月号の「法語」につづいてここまで書いたことによって、病気は医者が治すのであるとか、病気は薬で治すのであるというぬき難い医

者に対する信仰、薬に対する信仰はみなさんの心から消え去った筈です。これまで多くの方は生命のことをいちばんよく知っているのは

医者だと信じてきました。しかし医者は生命のことについてはまだなんにも知ってはいないのです。医者も漸く生命の神秘さに気づいた

ということです。名古屋市立大学長高木健太郎氏は、

「これまで多くの方は身体と精神は別個の存在だと考えてきました。身体と精神は互いに影響し合っているのですから健全な身体を得よ

うとすれば、健全な精神が必要であるのはいうまでもないことです。「心身一如」として健康であってこそ、はじめて本当の健康状態と

いえましょう。現代の過酷な競争社会ではさまざまなストレスが人々を取りまいており、ストレスが病気を起すことも多いのです。こう

した心理的要因で起る現代病に対しては薬を飲むよりも、リラックスしたほうが効果的だといわれています」

心で病気が治るということはもうこれ以上書く必要はないと思います。ではなぜ正法誌でこういうことを取り上げるのかを次に書きまし

ょう。

第八十二章 悟るためには心の自由自在性を知ることが必要である

人間の存在を傷つけ危なくする人間以外のものが存在するという考えは人間の心を小さくします。人間は神の子だと知っても、人間は病

原菌にはかなわないとか、また、病気のことだけでなく、悪霊や自縛霊がいて、人間はひょっとするとそれに負けるという恐怖心を持っ

ていることは、それだけ心を小さく暗くしますから、そういう恐怖心や自分を弱いと思う心があったのでは心の底から明るくなることは

できません。人間は神の子であるという自己確立の心の中には、人間はなにものにも犯されることもなく傷つけられることもない絶対的

な存在であるという自覚がなければならぬのです。人間は万物の霊長として、この地上に置ける神の代理者として一切を調和させユー

トピアを建設しなければならない使命を持たされているのでありますから、人間が菌や動物や悪霊などに支配されるという考えを持つこ

とは、人間そのものの尊厳さ、神の子の自覚を否定することになります。正法で心と病気の間を取り上げるのは、唯単に病気を治すこ

とだけを目的として取り上げるのではないのであって、心を大きく豊かにして悟るためには、なにものにも支配され影響されることのない

い心の自主性、自由自在さを獲得することが必要であるからであります。

正法会以外の宗教団体では、病気が治るともはやそれだけで信仰がりっぱにできているような扱い方をしますが、病気が治ったばかりの

人は、それまでまちがっていた心のあり方を正しく治して健康になったということで、病気もせず健康であったという人より以上にりっ

ぱになったわけではありません。病気が治ってそれで信仰が終りなのではないし、身体が健康になったら、それからさらにますます心を

大きく豊かにしてやがて宇宙即我の悟りまでに到達してゆかなければならないのでありますから、その人の病気が治って健康になったと

いうことは祝福しますが、病気でもなんでもなかったという人より以上にりっぱな信仰心を持っていたというような、従来の宗教団体が

やってきたような扱いはしないのであります。病気が治ってから先の魂の勉強が大事なのであります。

第八十三章 病気の原因

病気の原因は次のように分けることができます。

霊的原因による、動物霊、憑依霊によるもの。

ストレスなどの心に基因するもの

ばい菌によるもの

公害、環境の影響によるもの

肉体の酷使、無理によるもの

右のように分けることができますが、動物霊や憑依霊に憑依されるのも憑依霊と波長の合う心を持っているからであり、ストレスを生ず

るのも心の問題であります。ばい菌はあってもばい菌に犯されないように智慧を働かせればよいし、公害や環境の影響も、心のあり方と

智慧によってうけないですむし、ムリをして身体をこわすということも智慧のないことでもありますし、こうして考えてくると、もとは心

が原因だということになります。たしかに憑依しているという人は、憑依霊を取り除いても心が変わらなければまた憑いてしまいますか

ら、根本的には心を変えなければならないということになります。霊的原因によるものは医者も診断がむずかしいしまた薬を飲ませて

なかなか治りません。心によって病気が治ることが医学界でも常識となった現在では、心を治療する医者が出てきました。もっと

日本医師会は、病気は心で治ることを宣伝すべきだと思います。医者が精神治療を確実にやれるようになれば、信仰で病気が治るといっ

て集めていた、いろいろな教団の信者達は医者からの指導を受ければよいということになるわけですが、現世の日本の医療体系では、精神治

療を専門にすると生活できないという仕組みになっていますから、ということは医師会だけでなく厚生省の官僚群の考え方も変らない限

り、日本では精神治療法は全体的には取り上げられないということになり、極めて良心的な医師の個人的な活動に俟つかないというこ

とになります。厚生省が早くこのことに気づいて医療体系を改革すれば、病気治しを目的に信仰に走るという人もなくすることができる

から、日本の宗教界を浄化することにもなります。医者が物心両面から病気の治療をするということになれば、宗教は病気治しを口実に

信者をまちがった信仰にひき入れるということはありません。このようなことを逆に考えると、日本の病気治しを主目的とした新興宗

教を發展させているのは日本医師会の迷妄さであるということがいえます。病気治しの宗教をめざして、宗教が医者からの領分を侵すなどと

いわないで、医者自身がもっと医学の發展に忠実であればいいのです。

日本の経済界は悉く外国の真似をして發展してきたといわれますが、文化の世界でも真似してきました。アメリカでは瞑想による治療を

始めているのであるから真似するなら徹底して真似して、日本でも瞑想による治療を始めればよいと思います。

法 語

1980年10月26号

人を救うために

第八十四章 一年三六五日をどう生きるか

かつて「一年三六五日をどう生きるか」というアメリカの医者の書いた本が出版されたことがあります。そのはしがきにこう書いてあり

ました。

「あなたが一年三六五日を、黄金の花咲く並木路を口笛を吹きながら、大手をふって歩いた一年であったかどうか、そのうち何日がか

しみになきぬれた日であったか。悲しい気持ちで暮らすよりも、明るいい心で暮らす方がよほどたやすいのであります」、

と。

日本は仏教と武士道の影響により、さらに日本仏教が「人生は苦なり」と説いた結果、しかつめらしい、むつかしい、自分ほど苦労して

いる者はいないというような、必死に苦しみに耐えているような顔をしていないと、まじめなりっぱな人間ではないような考え方をして

きました。一言にしていえば「明るさ」がありませんでした。ほんとうの明るさというのは、必死になって仕事をしている時でも、ま

た、仕事が終わってほっとした時でも、一貫して失わない心の明るさであり、最近の若者達みたいに（若者だけではないようですが）なに

か遊んでいるときはたのしいようであっても、それが終わるとふつとさびしい、わびしさが心の底に潜んでいるような心はほんとうの明る

い心ではありません。

起きていても寝ていても、なにをしても、心から楽しくて仕方がないというような心の明るさ、そういう心の明るさで一年三六五日

を暮すならば、それは丁度、黄金の花咲く並木路を、口笛を吹きながら歩くような一年だ、人間はそういう生活ができる。そういう生活

をしないから、病気をしたり、家庭に不調和が起ったり、苦労が絶えないのであるということです。

そういう明るい心を持つには、
という宗教団体に入らなければならないということはありません。折角、明るい心になるつもりで入

信しても、いろいろな規則に縛られて、「あゝしなさい、こうしなさい」と強制されたのではかえって心を暗くするでしょう。心を支配

しているのは自分ですから、自分の心を明るくするのに、なにになにという教団に入らなければならないということはないのです。

第八十五章 奇蹟を呼ぶ感謝と調和の心

「この大宇宙は調和されている」ということを私が直感で知り、天からの声を聞いたのは昭和二十六年秋でした。この天の声を聞いてか

ら私の周囲に奇蹟が起り始めました。私が指導したのは「感謝し調和しなさい」ということだけでした。「ではどうしたら感謝と調和の

心を持つことができるのか」という指導方法は、いろいろ指導する人によって個性があるようですが、私はその指導が上手だったという

ことでしょう。また天上界からの協力もあったと思うのですが自分でもびっくりするほど奇蹟が起りました。その頃は奇蹟だと思ってい

ましたが、高橋信次先生に正法を教えられてみると、それは至極当然のことであって奇蹟でもなんでもないこと

がわかりました。生長の

家は「天地一切のものと和解せよ」「天地一切のものに感謝せよ」と説いていますがこれは正しいのです。私は成長の家の地方講師にな

り本部講師になり、多くの人に感謝と調和の道を説きました。そのことは正しいのです。生長の家だけでなくこの教団でも感謝と調和

ということは説いています。まさか喧嘩しなさい不足をいいなさいという宗教もないでしょう。だから感謝と調和を説いていることは正

しいのです。ある宗教に入ってよくなったという人は、そこで説かれている感謝と調和の道を聞いて、その通りの心になったからよくな

ったので、たまたま、その宗教の話聞いたことがきっかけになったということだけのことで、その宗教でなくてもよかったわけです。

そういう話を聞いても、どうしても感謝の心も起らなければ調和もできないという人がどこの宗教団体にもおります。そういう人はよく

ならないのです。私が指導した人でもそういう人はよくなっていません。人の心を強制して聞かせることはできません。心というもの

は、心の内側からその人が開かなければ絶対に開くことはできないでしょう。自分の心を支配できるのは自分自身でしかありません。

第八十六章 感謝と調和は法として存在する。

どこの宗教団体でも感謝と調和が大事であることを説いています。あの教団で説いている感謝と調和はホントだが、この教団のはウソだ

といえようなことはない筈です。感謝と調和の心を持った人達はみなよくなっています。ところが多くの人達は、自分の教団でよくなっ

たのはホントだが、ほかの教団でよくなったのはウソだという考え方をします。こういう差別する心、疎外する心を持つことはまちがい

であります。また、よくなった人が、自分は信仰ができたからよくなったのだと思って、なにもない人を信仰ができていないように、他

を低くみる心になったら、またその人は病気になったりするでしょう。信仰する人にはどうしても心のくせのある人が多いようです。し

かしそれは宗教指導者の罪である部分も多いのです。

病気になってから病気が治って健康になるよりも、はじめから病気にならない方がよいのですし、不幸になって苦しんだ揚句に幸福にな

るよりも、はじめから幸福である方がよいのです。病気を治したり、不幸な人を幸福にするのが宗教の目的ではありません。健康な人

が、ますます魂を磨き心を大きく豊かにして悟ってゆくように導くのが宗教本来の使命です。だから本来の宗教は、健康で幸福であると

いう人を目標にして説かなければなりません。宗教が病人や不幸な人を救うのは病気であったり不幸であったりすると、そのことで心は

一ぱいになって、とても心を大きく豊かにして悟るというどころではありません。宗教はすべての人を救わなければなりませんから、病

気や不幸であるという人は、まず病気を治し不幸をなくして、いよいよそれから悟りの道に入るスタートラインにつかせようとする慈悲

なのであって、病気が治り、不幸がなくなってからの先の方が大事なのです。ところが現在の日本の宗教は、病気を治し不幸をなくすれ

ば、それが宗教の使命であり役割だというような考え方をしていますが、それは宗教本来の使命がわかっていないからです。

第八十七章 特定の教団に入る必要はない

という教団に入らないと感謝と調和の心は持てないということはないでしょう。実践倫理宏正会とか道徳科学という団体がありま

す。この団体は宗教団体ではありませんが、人の生きる道として感謝と調和を説いております。だからそういう心になった人はそこでも

病気が治ったというようなことが起っています。だから感謝や調和は、なにも宗教団体だけの専売特許ではありません。

ここで考えてほしいのです。宗教団体や道徳を説く団体に入らなければ感謝や調和の心は持つことはできないのでしょうか。みなさんの

周囲には、どこの団体にも所属してはいないが健康で幸福であるという人が必ずある筈です。そうして見た場合、信仰していても病

気だ不幸だという人もある筈です。それはどうしてでしょうか。信仰がないと幸福にならないというのであったら、信仰していない人は

みな不幸だということになり、信仰している人はみな幸福だということにならなければならない筈なのですが逆な現象が起っています。

「この宗教でないとよくなる」と、熱心な信者達は宣伝しますが、それなら外国の人達はどうなるのでしょうか。外国にはそうい

う宗教はなくても外国の人達はどうなるのでしょうか。外国にはそういう宗教はなくても外国の人達は結構たのしく生きているではあり

ませんか。正しい信仰をするには小さな範囲のことだけを考えたのはいけないのです。少なくとも地球全体のことは考えなければいけ

ません。日本人ばかりが人間ではないし、外国人も人間としては変りはない筈です。なんの信仰をもたなくても

健康で幸福であるという

人は、自然に感謝と調和の生活をしている人達です。どこかの宗教団体に入ったために、その教団のいろいろな規則に縛られて、かえっ

て辛い思いをしているという人は、むしろそういう信仰はやめて、自由自在な心になって天地一切に感謝しすべてと調和することです。

人間は神の子として神が持たれる慈悲と愛の心を持って生まれてきているのでありますから、天地創造の神に感謝し調和の生活をすれば

それで人間は健康にも幸福にもなれるのです。そういう点に於て、正法会は、いろいろな宗教団体に入って、かえって心に苦しみをつく

って悩んでいる人を、心の底から明るくなるように解放させてあげるという役目をもっているわけです。

第八十八章 医者も宗教団体もいない世界、エデンの園の再現

感謝と調和心の心を持った健康になり幸福になるというのは、神がつくられた宇宙の法則なのです。神が一旦人間を苦しめて、そう

してからでない救わないのであると考えていることは神を冒瀆するものであります。苦しみは人間が勝手につくり出したので神の責任

ではありません。ただ神は、法として善因善果、悪因悪果の因縁の法をつくられました。

その法則をどのように使うかは人間の自由に委せられたのです。そのことを釈迦もキリストも説かれたのであり、私の師である高橋信

次先生が説かれたのもそれだったのであります。明るい心を持てば明るい結果が出てくるし、暗い心を持てば暗い結果がでる。日本人は

それをつぎのように教えてきました。

笑う門には福来る

泣き面に蜂

○ という宗教に入らないと明るい心になれないというようなことはないのです。神の存在とありがたさ、自然の存在とありがたさ、そ

うして人間はなんのために生きるのかという人生の目的がわかれば、人間はどんな状態の中からも明るい心になれるのです。

世界中の人が一人残らずこのことを知って心を明るくし感謝と調和の生活をすれば、病気になる人はいなくなるから医者はいらなくな

ります。いらなくなるといってもいろいろなことで怪我したりすると応急の手当が必要になりますから、手術できる外科医だけがいれば

よいということになります。まじめな医者の間では、ほんとうの医者というのは外科医だけだといっている人が

あります。

いろいろな宗教団体もいらないということになります。やがて国境をなくして世界を一つにしようという地球政府設立の運動も起って

いるのでありますから、土地の国境だけでなく、心の国境も、隣りの人との境界もなくして、一つの心の世界にしなければいけないと思

います。政治家も派閥をなくしようといっているのですから、教祖とか各宗教の指導者達も、宗教の垣根をなくしようといいい出してもも

ういい頃ではないでしょうか。

神の世界は一つであり、神の世界に垣根はないのであります。

法 語

1980年11月27号

人を救うために

第八十九章 医療公害

昨年一年間の製薬会社の薬の生産量は十兆円を越えた。病院へ行くと馬に喰わせるほど沢山薬をくれる。呑みきれない薬はどんどん捨

てられている。それはすべて税金を捨てているのである。薬は薬という形になっている金である。薬代はすべて健康保険料で賄われるこ

とになっているが、国民の納める健康保険料では足りないから政府が赤字補填をしている。政府は金を持っていない。政府の持っている

金はすべて国民の税金である。昔の名医といわれた医者、ほんの少し薬を使って病気を治した。今はそんな治療をしていたら医者の生

活が成り立たないし、第一少ししか薬をくれないところには人が行かないのであるから、今は昔のような名医はいなくなってしまった。

今は土手医者が繁昌するのである。

昔は下手な医者のことをヤブ医者といった。ヤブの中に入ると皆目先がわからない。だから病気の見立ての出来ない下手な医者をヤブ

医者といった。そのヤブ医者よりも悪い下手な医者を土手医者というのだそうである。

ヤブ医者は、ヤブはまだ二・三米でも四・五米でも少しは先が見えるからまだいい。土手医者というのは、土手にぶつくと先は全く

見えない。だから土手医者はヤブ医者より悪いというのである。そのわるい土手医者は診断も下手だから診察してもこの病気だとはつき

り診断を下すことができない。あの病気かもしれないこの病気かもしれないと考えて、この病気だったらこの薬が、この病気だったらこ

の薬がと何種類も薬をくれる。今の健康保険法では沢山薬を患者にやらないと金にならないのであるから、名医はいつも貧乏して、下手

な土手医者の方が金持ちになるという仕組みになっている。

政府は一県に一つの医科大学をつくった。やがて医者が氾濫して医者の失業時代がくる。

薬代に使われる十兆円を、国民が自覚することによって五兆円に減らして、その五兆円を未来の日本、未来の世界をどうするかという

研究費に使ってもいいし、また難民救済や後進国救済に使えばどんなにいいかと思う。医療に対する考え方を転換しなければいけない時

にきているのである。

第九〇章 病院は宗教家との交流を深めよ

東京の永谷さんから新聞の切抜きが送ってきた。正法誌創刊号に書いて置いたように医者で宗教に関心を持つ人が出てきた。

医師 乾 元 66才

末期ガン患者、死を待つだけになった寝たきり老人専用の病院、わが国初のホスピスが浜松市で、この春着工される。ホスピスは病気

を「治す」という従来の病院とは違って、人間を「救う」「助ける」所といわれ、そのスタッフには、医師、パラメディカルのほか宗教

家を配置しているのが特徴。つまり、宗教家は、医者がもはや手の届かぬ病者の魂を救い、且、その家族をも慰めようというのである。

さて、ホスピスならずとも、大病院なら、以上のような死を待つばかりの患者の幾人かが必ずいるはずで、死を目前にして心の安らぎ

を切実に求めていると思う。それなのに、宗教家との交流が余りにも少ないように考える。欧米の多くの病院では専属の牧師がいて、自

由に病室に出入りできる。わが国の刑務所にだって、死刑囚のために教誨師がいるではないか。

わが国の病院は患者の身体にばかり目を奪われ、患者の心、家族の気持ちを考えていないように思われてならない。ちなみに、米国の

伝統ある病院には立派な礼拝堂があると聞くが、わが国の大学病院では死体安置室さえいかにも殺風景である。

さいごに、わが国の病院に、ホスピスのように、宗教家を常置することは時期尚早かも知れないが、宗教家との交流を、もっと深める

べきであると考えている。宗教家との出会いによって、死を待つ多くの人たちに、心の安らぎをと私は願う。死よりも重大なことはない

のである。 (宮城県柴田郡)

私が昭和27年、宗教家として立つことを決心した時思ったことの一つに、全国の大病院には必ず、心を指導する宗教家を配置す

ることを法律で決めるようにしたい。ということがあった。外国の病院は宗教家が自由に出入りできるというのであるが、日本の

病院は宗教家の出入りを歓迎していない。乾医師のような医師がふえてゆくことを私は望んでいる。

Home

第九十一章 仏教こそが生死の解決法

同じ切抜きの中にこの一文があった。投書というものはその人一人の意見ではなく同じような考え方をしている人が外にも沢山あるこ

とを示すものである。世の多くの人々が、まさしく正法を求めているのであるということがこの一文からうかがえる。われわれはそうい

う人達の前にもっと正法の存在を知らしめなければならない。

主婦 佐野喜久子 67才

医師として医学の限界を感じるのは、患者の死にあう時でしょう。死を止めることができない時、また一人死に向う人間をみる時、現

代の医者には余りにも無力だと訴えられております。臨終の床に宗教家の力を借りることはできないか？と問題提起している医師がいられ

る。科学万能の時代から、人間の内面への思考に思い至った今日、必然的に宗教家の必要性に目を向け始めたようです。

確かに仏教は死後のために説かれたものではありません。人間の生き方を教え、それによって人生の終結がき

まることを教えていま

す。坊さんのお説教や人から与えられたものではなく、自分が宗教を持ち、生活実践の中から感得した生命によって生死の解決をはかる

以外にないと思います。

どんな人でも、生老病死の四苦は免れません。四苦八苦の解決法を教えたのが仏教なのです。故に、正しいもの、力あるもの、そして

より高い教義を求めることが大事です。

“従容として死につく”とは、自分自身の生き方の結論ではないでしょうか。医学を否定せず、その限界に挑戦できる生命力を得るもの

それが宗教であることを訴えたく思います。 (横浜市神奈川区)

解説

この法語の中で二つの投書を紹介した。このような内容の投書は、もし十年前であったら完全に没になって新聞に載ることは絶対にな

かった。新聞記者というものは無神論者、無霊魂論者で唯物論者が多い。新聞が宗教や心の問題を取り上げることは全くなかったといっ

てよい。その新聞がこのような投書をのせるようになったということは、私は唯物論的な考え方による新聞の編集方針が変わったのではな

く、新聞も読者が買ってくれないと困るのであるから、一般大衆のものの考え方が変わってきたので商業政策上、こうした投書も取り上げ

ないと新聞が売れなくなるという考え方からのせたものだと思っている。

そうであればあるだけに、新聞社といえども一般大衆の宗教指向、心指向の傾向は無視できなくなりつつあるということであり、そこ

に私は世の中が音を立てて変りつつあることを感ずるのである。

さて、浜松にできるホスピスは、カトリック教会が建てるのであるから、患者はカトリック信者が主体で、患者が安らかに臨終するよう

に心の指導をする宗教はカトリック教ということになるであろう。人間が死んで行くのに、カトリックの人はこういう臨終をしなさいと

か、創価学会、立正佼成会、生長の家等各宗各派によって、その信仰によってそれぞれ死に方が違うというようなことがあるのであろう

か。

人間は宗教宗派を擔いで生まれてくるのではない。生まれてくる時に、その家々の宗教宗派によって、そこに生まれてくる子供達はそれ

ぞれの宗教宗派にふさわしい生まれ方をするというのであれば死ぬ時も、それぞれ違った死に方をするのだとい

うことになるのかも知れ

ないが、生まれてくるのに、私が生まれる家は神道だから神道的な生まれ方をしましょうとか、私の生まれる家は立正佼成会だから立正

佼成会式生まれ方をしましょうとって生まれてくるわけではないのであるから、死ぬ時も宗教宗派によって死に方が違うということは

ないのである。だから臨終に際して心が安らかであるようにという指導も一つであっていいので、それぞれの宗教宗派の指導者達が、そ

れぞれ自分の所属の信者に対して、それぞれの宗教宗派によって臨終の時の心得は違うのですというような指導をもしることがあった

としたらそれはまちがっているといわなければならないのである。

宗教とは、なんのために、どのような生き方をするかを教えるものであるから、もっと生と死ということを忠実に見つめて法を説かなけ

ればならないのに今の宗教家は生と死をじっと見つめさせる。魂を見つめさせるということはせずに、単に道徳的なこの世の限りの生き

方だけを強調している。

浜松のホスピスの病院はカトリック系であるから問題は起らないのであろうが各大学病院がホスピスのあり方を採用するとした場合、入

院している患者は、種々雑多の信仰をしている人があり無神論者もあるのである。そういう人達に臨終の心得を教えるということになっ

た場合、神道の人には神主さんを、浄土真宗の人には浄土真宗の坊さんを、生長の家の人には生長の家の講師をとか、そんな繁雑なこと

はできないであろう。人間が死んでゆくのはみな一つの方法でしかないのであるから、その最後の臨終の心得を教えることができる一人

の人があればそれでよいということになる。

ついでに書いて置くが、アメリカの人間科学研究所では、薬を使わずに瞑想をさせることによってガンや糖尿病を治療するということが

既に始められている。この研究所で指導している瞑想はキリスト教的瞑想である。それはキリスト教的というよりもキリスト教的雰囲気

の中における瞑想で、瞑想はなにもキリスト教的雰囲気の中だけでしかできないというものではない。

瞑想にしたってキリスト教的瞑想とか仏教的瞑想とか、今はわかれているように見えるが、もともと心を神にふり向けて瞑想するという

方法は一つしかない。日本にもこれからホスピスがふえ、瞑想を治療に応用する病院がふえてくると、今までのように新興宗教が病気を

治しを教義にするということとはできなくなる。丁度この原稿を書いている時、秋田市の女医さんが、心で病気を治すということをしてい

るとNHKがテレビ放送していた。私は日本中の医者が早くこの女医さんのように、堂々と「心で治します」と宣言してくれるようにな

ることを望んでいる。

今の新興宗教がやっているような病気治しの面を全部医者がやることになり、夫婦の調和とか親孝行とか、いわゆる感謝という面は道徳

的立場で取り上げればいいのであるし、そうなれば宗教で扱う分野は、「心と魂」という面だけになってくる。そうなった場合、今の新

興宗教は心と魂の面を十分に指導することはできない。だから私が今の日本の新興宗教の役割りは終わったし既成宗教もまたそれを指導す

ることはできないというのである。

心と魂の面をよりよく指導できるのは正法しかない。

医者がそのような指導をしても、全く医者の手には負えない病気がある。霊的現象即ち憑依によって起る病気はどんな薬をのませてもどん

な治療をしても今の医学では治せない。瞑想をさせようとしても自分で自分の心がどうにもならないのであるから瞑想することもできな

い。憑依してくるのはそこに憑依霊を呼び寄せる雰囲気があるのであるから、患者以外の他の家族が協力してまず憑依霊に同通するよう

な暗い争いの雰囲気をその家族からなくするというをしなければならない。

新興宗教は病気治しを教義としているから、病気していた人がその信仰をして治ったということになると、指導者達は「あなたの信仰は

素晴らしい」とほめる。病気が治ったということは喜ぶべきことではあるが、必要以上にほめたゝえることはやめるべきである。病気に

なっていて治ったということよりも病気しない方がいいのである。健康で病気しないという人は病気にならないだけの心の強さがあるの

であり、病気になった人は病気になるだけの心の弱さがあったということであり、病気が治ったという人は、やっと健康である人と同じ

線になってきたというだけであった健康であったという人より以上に立派になったわけではない。

新興宗教団体では、病気が治ってやっと一人前になった人を、健康体の人よりもりっぱな信仰ができていたにほめそやしている。

だから新興宗教団体では病気が治ってやっと一人前になった人のほうが威張って、健康体で病気しないという人の方がなにも人に眼を見

晴らせるような体験がないので小さくなっているという現象が起きている。病気が治ったということよりも、病気もせず何ごともなく毎

日々々無事で暮らせることがどんなにありがたいことであるかということに気づかないと、なにか変わったことがないと喜べないという心

の状態では正しい信仰をすることはできないのである。

病気をしている人よりも健康である人の方が多いのであるし、その健康である人がどのようにして心を大きく広くゆたかにして魂を向上

してゆくかを宗教は本來說かなければならないのである。

しかし病気をしている人も救わなければならないから心と病気、心と身体の関係も書かなければならないのである。

法 語

1980年12月28号

人を救うために

第九十二章 相手に感謝すること

指導者、また人を指導しようとする人は、自分は正法を知っているが、あの人は知らないのである。だから自分が教えてやるのであると

いう思い上がった気持ちを持ってはならない。そういう心を持ってすると、その指導は必ず失敗するか、または相手の反発を招くことにな

ります。なぜかという、そういう人の心の中には、自分を善と見て、相手を悪だと見る心があるからです。「お前は悪いからこの話を

聞け」といわれると、人間というものは、たとえ自分が悪いということは知っていても「悪い」ときめつけられると遂々反発してしまい

ます。ではなぜ反発するのか。それはその悪いことをした自分（偽我の自分）は本当の自分ではなくて、そういうことをしてはいけない

と知っている本当の自分（真我の自分）が本当の自分であるということを知っており、そのことをよく知っている自分、悪いことをしな

い自分、いつもよいことをしようと思っている自分、その自分が本当の自分だということをよく知っている（これを真の自分という）か

ら「お前は悪い」といわれると「いや、その点は悪かったが、しかし、本当の自分はすばらしいのだ。本当の自分はそんな悪い自分では

ない」といって反発するのです。本当の自分は悪いことはしない正しい自分だということを知っている心、その心を「自尊心」といいま

す。人間はみなこの「自尊心」をもっています。どこからこの「自尊心は出てくるか」というと、それは「人間は神の子である」という自

覚からです。

だから、相手を悪いと見てすると失敗するし反発を招くので、たとえその人が悪いことをした人であっても、ただ一時の出来心であった

だけであって、本当はこの人も神の子であると、相手の神の子の実相に感謝しながら指導をしなければいけないのです。

第九十三章 感銘を与える講演と、そうでない講演

講演が終わると思われる頃からそわそわする人が多く、終わったとたんにサッと立ち上って帰る人の多い講演は、中味のない感銘を与えるこ

とができなかった講演です。「私はよく勉強しているが、あなた達は勉強していない。だから、私が教えてやるのである」というような

態度で話をする大学教授達の話は、聞いていて「もっともだ」「いい話だ」と思っても、さて講演が終わるとなにも頭の中に残るものがあ

りません。講師の思い上った、人を軽蔑している雰囲気だけが妙に心にひっかかってしまいます。なにも大学教授だけに限らず、宗教の

講師でもそういう人があります。

「この講演によって愛を行じさせていただくのである」「みなさんの幸せを心から祈っているのです」「わたしはみなさんの幸せのため

に奉仕させていただきたいのです」「このような機会を与えて下さいましたことを感謝いたします」というような敬虔な謙虚な心を持つ

ている人の話は人に感銘を与えるから、終わったからといってサッと立って帰るとい人はなく、感銘を受けたその心の余韻をひしひしと

味わって立ち去り難い思いを与えます。

押しつけがましい話はいい話だと思っても反発を招きますが「あなたは神の子なのです。その神の子の生命をそのまま表現することがあ

なたの幸せなのです」という話は喜ばれ感銘を与えます。人に感銘を与える話は、その話を聞きながら、一人一人がみな「あ、この話は

わたくし一人のために話をして下さるのである」という感じを持って聞き、聞きながらそれぞれにこれまでの自分の心のあり方を反省し

てゆくので、講演が終わったとたんに、これまでの人生苦、悩みが一ぺんで解決し、軽い病気ならその場で治るとい奇蹟も起ってきま

す。

愛のない説教は、人の心を固くするだけで一人一人の魂も救うことはできません。

第九十四章 愛とは、指導者の心のあり方

「愛するからこそ叱るのである」「愛するからこそ欠点をいうのである」といういい方が、道理に叶っているように思えるのに、なぜそ

の努力の割に成果が上らないのでしょうか。愛するからこそよくなってもらいたいのであるとって欠点を指摘したがために、かえっ

て、夫婦仲が、人間関係が、特に親しい間の親戚関係などがまずくなってしまったという例は、みなさんの周囲にいくらでもあると思

います。どうしてでしょうか。

愛とは欠点を見てそれを矯正しようとするのではなく、その人の痛い心の傷にふれることなく、その傷を真綿でやわらかくくるんで、

その人の欠点の奥にある人間神の子の本当の相を、じっと愛の心で眺めやり、その人の神の子の実相が、自然に芽生え発想して、その人

が自発的にいいことができるように、いたわり育ててやることなのです。

愛するからという言葉で、その人がふれてもらいたくない、そっとして置いてもらいたい欠点に錐を刺し込んで、グリグリえぐるような

言葉を使い、態度をとっている人がありますが、それは愛という言葉で美化した憎悪の心であります。愛とは人と人の心をつな

げる心であります。憎悪とは人と人の心をバラバラにして引き裂く心です。

愛するという言葉で美化された憎悪によって、いかに悲惨な人生がつくられているか。

天地宇宙を創造された神は「神はない」という無神論者をも憎悪せず、あたたかく抱擁して生かしていられます。太陽のような愛、時

来るまでじっと待つ愛、真綿のようなやわらかな愛...

真の愛は、すべての人を癒します。

第九十五章 人を救うためには

正法を一人でも多くの人に知ってもらいたい、と思ったのに失敗した。なんの反応もなかったという人があります。なんの反応はなくて

も、あなたが人のためにしたというその心と行為は、ちゃんと心のテープレコーダーに記録されて天上界へ行く時の心の基準になるので

すから失敗ではありません。また、聞いた人も、いつかは心の中に撒かれた正法の種子が発芽する時が来るでしょう。

しかしまた、お釈迦さまが「縁なき衆生は度し難し」キリストが「豚に真珠を与えるな」といわれたように、どんなに人を救おうと思っ

ても、その人の縁が熟さず、心の準備ができていなければ、折角の好意も徒勞と見えることがあるものも事実です。なんでもそうです

が、人を救うのにもあせってはならないのです。

人生はいろいろな体験を積むことによって魂を向上させる過程です。どんな人でもやがては正法を知ることなしには、魂を向上できない

階段に達するのですが、まだ、正法を知って魂を向上させるという段階にまで到達していない人もいっぱいいるわけです。どんないいこ

とでも強制されると、余程心の大きい智慧である人でない限りは反対することが多いようです。

正法は伝えてゆかなければなりません、人を救おうと力まなくてもよいのです。



Home

高橋信次師講演集

はしがき

こんど私の講演集が関西本部から出版されることになり、従来の著述とちがって新たな感慨に打たれています。著述の場合は文体やら論

理の統一など考慮に入れながら筆を進めますが、講演だけはまったく白紙の立場で話を進めますので、正直のところ私自体何が飛び出す

か、その時にならないと私でさえ不明なのです。というのは聴講者の様子を見ながら講演しますので、その時その場の状況で内容が変わ

てくるからです。

また、私の講演は霊視のきく者が見れば分かりますが、その時の話の内容で守護・指導霊が入れ替り立ち替り、私の意識に出入りします

ので、講演しながら私も教えられることがあるわけです。

こんなわけで私の講演が一冊の本にまとめられ、多くの人々に再びこの本を通して接する機会を与えられたことに非常に喜びを感じてい

る者です。

ところで正法は周知のように、頭でいくら理解しても心の安らぎは得られないし、仏智も湧いてきません。正法を信じたならば、まずそ

の法を規準にして現実の生活に実践を通して始めて自分のものとなり、心に王国をつくるのが可能になってきます。大抵の人はどうし

ても他力本願になりがちです。他力は楽だし、人間の業を考えると、つい神頼みになってしまいます。しかし、神頼みはどこまで行って

も神頼みであり、本来の自分はありません。人間は神の子であり、神の子の神性を活かすようにできているので、まず、自己の確立、心

の王国を確立することが神の子の姿であり、在り方なのです。自分を本当に愛するのであれば、法を規準に、中道に適う生活をめざして

いただきたい。それがとりもなおさず皆さんの幸せを招来するものであるからです。

法の姿、人間の在り方はこの講演集にすべて盛られています、したがって、ここに掲載されている内容をしっかりと理解され、実践を通

して神の子の真の人間らしいあなた自身をつくって下さい。

最後に、この講演集の編纂に力をつくされた皆さん方に心からお礼申し上げます。

一九七五年 五月 吉日

高橋 信次

発刊のことば

本書は、高橋信次先生に初めて関西本部へ御越しいただいてから、約一年半の間に御講演下さった正法神理の一環を、先生のお許しを得

て、そのまま集録したものであります。

今や正法の燈は燎原の火の如く全国に広がりつつあります。

北は北海道から南は沖縄に至る国内の津々浦々は勿論、昨年六月に先生が台湾に赴かれて以来、かの地においても数十名の方々が続々と

心の窓を開かれて、偉大なる正法の流布に熱意を傾けておられます。またアメリカのサンフランシスコ、ニューヨーク、そしてブラジ

ル、アフリカ、韓国、と国外の各地からも、縁生の名のりを上げる人が輩出し、正法神理の偉大さと正しさを、全世界に証明されつつあります。

そうした中でG L A総合本部主催のもとに、去る四月五日東京・日比谷公会堂において開かれた創立六周年記念大講演会では、全国から

集まった同志の前に、天の配材、縁生の必然が数多く立証され、会場を埋めた聴衆に多大の感銘を与えました。さらに四月十三日に関西

本部においては、東大阪市立中央体育館を会場として春季大講演会を開催、七千名を超える人々で場内はいうにおよばず場外まであふれ

る有様でありました。

その盛況ぶりは、正法に対する一般の方々の関心と、今後のG L Aの使命の重大さを象徴しているようでした。

思い起せば昭和四十六年十月三日、この関西本部講堂（旧端法会本堂）に初めて高橋信次先生をお迎えしてからすでに三年有半になりま

す。中谷関西本部長（旧端法会会長）が沢山の会員を一人残さず真の正法に帰依させたいと、「正像既に過ぎぬれば持戒は市の中の虎の

如し、智者はりん角よりも希ならん、月を待つまでは燈を灯すべし宝珠なき処には金銀も宝なり」と日蓮上人の祈禱抄の一切を引用し、

その月にも宝珠にもたとうべき聖者に あえた今日、より勝れたもの、より正しいものがあれば、既往にとらわれず、それに就くのが謙

虚な仏弟子のとるべき真の道ではないかと、理を説き、或は切にうったえての同志愛、人間愛が、頑迷なまでに旧套を守ろうとする人た

ちの心まで開かせたのです。勿論先生の言霊の一つ一つが私たちの心の中にくいこんで来たからでもありましよう。

毎月々々御来阪下さる先生の御講演が待遠しかったのは一人私だけではなかったでしょう。

有名なある種の団体の長が先生の講演を聞きに来られたので、その感想をうかがいますと、

「私たちと次元がちがいます。もっと私自身勉強してからでないと、おこがましくて質問も出来ません」

「先生の顔相、骨相を見ただけでも只の方ではありません、あのお声、声量は普通の人では出せません、偉大なる方であるという事はま

ちがいありません」

と言われて、余りお身近に接しさをいただくものでついその先生の温情に、自らも十〇パーセントの修行をしようとなさる謙虚な人間

らしさに心がひかれても、先生の偉大さをつい見のがしていた自分を申しわけなく思ったような事も度々ありました。

この三年半の間に説かれた先生の御講演の数々は、会員皆様の心に、日記に、テープに、それぞれ記録されているでしょうし、この先生

のお説き下さる正法神理の燈が、私たちの心に深くしみ込んで赤々ともえ広がって行く日が必ずくる事を信じ、そのための修行実践こそ

大切にしなければならぬでしょう。

はげしくうつり変わりゆく世相の中で、ともすれば環境や世状に心を奪われ、人間としての本質を忘れ去った生活をくり返している日々の

多い私たちの、日常生活の指針とし、座右の書としてたえず本書に接し、単に語句を読まれるのではなく、御講演の内容の底に流れる広く

大きいものを正しく理解されて、その実践に努力を重ねて、日々の生活の中に調和と安らぎを築き広くその輪をひろげて社会の浄化安定

に心を向け、この地上界の仏国土・ユートピアの建設の一助とされんことを切に希うものであります。

本書の編纂に当られた編集部の方々、御指導をいただきました堀田和成先生、並に前任の中村勇氏のご努力に対し、深甚の謝意を表しま

してまえがきと致します。

昭和五十年 五月

GLA関西本部事務局長 林 正

あいさつ

七日の班長会にもお話しさせて頂いたのですが、このことは教団の方向をきめる重大な事柄でありますので、繰り返しお話しさ

せて頂きます。

十月十日の一般法座に、東京のGLAの高橋信次先生とのつながりのことについていろいろお話し申し上げました。そうして昼からは皆

さまの質問に答えさせて頂いて、皆さまもおよその知識はもっていただいたことと思います。

九月十二日に、私は東京へ行き高橋信次先生とお話しさせて頂いて、この方が ゴータマの再誕であるということ

を堅く信じたのであり

ます。それから二回三回と回を重ねて上京するたびに、さらにこの確信を強めました。

そして、高橋先生の教えを、教団としてお受けゆきたいと願ったのであります。いろいろと先生にお願いいたしまして、十月三日に当本

部にお越し頂きました。その際に先生は「会長はあくまで中立の立場をとって貰いたい、そしてできるだけく

さんの人の目と耳で、私

の提唱する神理正法というものがどんなものなのか、また、文証、理証、現証の三証というものを本当に出し得る人こそ世の指導者であ

るということを、会員の皆さんの目と耳で確めて頂きましょう」ということでありました。

このようなことで三日は班長会でしたが、できるだけ多くの人

の参集をお願いしたのであります。また二十三日にも再度お越し願いまし

て、ご講演、また霊的な現象などを見、また聞いて頂いて、皆さまも驚きなさったと共に、この方はただの方ではない、という印象を深

められたことと思います。

また、二十三日の晩には、女の支部長さん方と先生を交えていろいろとお話しを聞かせて頂きました。その座上で先生は支部長さん方の

中から五人の比丘尼（びくに）を見出されました。この五人の方は、インド時代釈迦教団の比丘尼で、この方々を前にお出しになって、

先生が当時の言葉でいろいろと話しをされたのであります。

五人の支部長さん方は、まだ潜在意識の紐が解けていませんから、自分が過去のインド当時の釈迦教団の比丘尼であるということの自覚

はできていませんので、ただ黙って座っておられただけですが先生は二千五百余年前、インドで共に精進した比

丘尼たちが支部長さんの

うしろにおいでになっているのをご覧になり、感きわまって大粒の涙を流されて再会をお喜びになったのでございます。それと同時に、

先生の体を通してモーゼ様がお出ましになり、信じられないような現象が起こったのであります。

それは先生の口の中から、額から、頭髪の毛穴から、また手の毛穴から、無数の金の微紛が出てきたのであります。

これはとうてい話しかけても聞いても信じられることではありません。私は一番前に座っている目の前で、また支部長さん方もこれを間近

で目撃されて、もう理屈ではない、信じられなくても、この目の前で見た事実を否定することはできない。先生の偉大さをまざまざと見

せられた思いがしたのでございます。

Home

これは物質化現象と申しまして、金という固体が液体になり、これが気体となって先生の体の中に入る。そして、それがまた毛穴を通し

て、汗または唾液という液体となって体外に出てもとの固体になり、金となるのだそうです。この日この現象をまのあたり見せて頂いた

のであります。

そして翌二十四日には、徳島の蜂須賀候の菩提寺である「光源寺」に講演においでになるということで、男の支部長さんにできるだけ参

加してお供をさせて頂きました。

この光源寺では、支部長さん方の中で動物霊や亡くなった先祖の地獄霊が憑依して、身体の調子が非常に不調和である方々の憑依霊を取

って頂きました。

これらをつぶさに見せて頂き、また般若心経の講演も聴聞させて頂きました。

このような過程を経まして、十一月一日の支部長会におきまして、私は全面的にG L Aの高橋先生の教えを教団に受けてゆきたい、とい

う旨を話し、支部長さん方の一人一人の口から意見を聞かせて頂きました。

何人かの方は、まだ細部にわたって信じきれない点とか、あるいは疑問に思う点は多少はありますが、全支部長さんが「会長について行

かして頂きたい、高橋信次先生の教えを全面的に受けさせて頂きたい」と一人の反対者もなく同意の言葉を得たのであります。

一般の方々の中にはまだ先生のお顔を見ておられない、またお教えに接していない、こういう方もおいでになると思いますが、ご縁の方

々から聞かれたり、あるいは「縁生の舟」神理篇、科学篇、また「天使の再来」等の書物をご覧になって、ある程度の理解はなさって

ると思うのですが、もし「高橋先生の教えは間違っている」とか「信じられないから今までの端法会の行き方の方が良い」とか

お思いになっておられる方があれば遠慮なく申し出て頂きたいと思うのであります.....。

それでは、私がこの高橋先生をゴータマ・シッタルダの再誕であると信じ、また先生の教えを教団に導入しようと考えましたその理由

を少し述べさせていただきますと思います。

それは、まず第一にみんなが幸せにならなければいけない、ということです。皆さんの幸福のために先生の教えを受けてゆこうというこ

と、これが第一の理由であります。

第二は、高橋信次先生がお説きになっている神理正法が過去二千五百有余年の昔、釈尊がお説きになった教えに間違いのないと思うからで

あります。

中国及び日本における仏教は、大乘教典を依教（えきょう）としており、釈迦の正統仏経は大乘仏教なりと信じ、その考えが常識となっ

ております。この見方を仏教の本質に立ちかえて、出発点から詮索してゆこうというのが「釈迦に帰れ」ということでもあります。

日本における仏教のほとんどは祖師仏教になっております。すなわち親鸞の仏教であり、日蓮の仏教であり、道元の仏教であります。

この大乘仏教というのは、いつできたかと申しますと、釈尊が入滅なされて五百年の後の紀元前後に誕生しているようであります。

それでは、それまでの間どういうふうにして仏の教えを守ってきたかと申しますと、釈尊が入滅されて後四百年以上にわたって、全部人

の口から口へ伝えられたもので、記憶の中に刻み込んで伝えてゆく、このような伝え方で四百年以上の間、唯一の教えとして守られて来

たのが小乗仏教といわれている阿含（アガマ）という教えなのであります。

この教えは南伝といってパーリ語で説かれたものが南方セイロンの方に伝わっています。これに対し北伝といっ

て、北の方にのびて、インドから、チベット、中国、日本というふう

に伝わって来たのが、漢文に訳された四つの阿含教であります。

この阿含教が、釈尊入滅後四百余年にわたる間、人の口から口へ、本当の仏の生の言葉、生のお姿として伝えら

れて来ました。こういっ

た根本仏教、原始仏教ともいうべきものが、お釈迦様の本当の声であり、本当にお説きになった教えであります。

この教えを我が国や中国では、非常に幼稚な教えと受けとり、阿含の教えは声聞（しょうもん）の教えなのだから非常に程度の低いもの

であるというふうには解釈されて来たのであります。阿含という言葉は受けつがれ申し伝えられた伝承の書という意味であります。

この阿含の教えを基礎として、紀元前後から大乘教典というものが組立てられてきたもので、当時の論師、文学者、哲学者など、こうい

う方々が阿含でお説きになった仏の教えを宗教的に神秘化し、文学的に美化し、哲学的に絶対化理論化してゆく、こうした行き方が、当

時の衆生の中の思想に応じた教典となったしまったのでございます。

しかし、大乘教典は間違っているのではないのであります。仏様のお説きになった根本の教えを拡大し、進化し、また発展せしめたら大

乗教典になるのであります。

しかし、非常に哲学化されているために難信であり、かつ難解（なんげ）であるといわれるようなものになっております。

阿含教は、これが非常に解りやすく、素直に教えが説かれてあります。その一例を上げますと“ゴータマ・シッタルダー様が風邪をひか

れて非常にお困りになっている”とか、ある時は“大へん腰が痛いので横になりたいとおっしゃっている”またある時は“婆羅門（バラモン）にどなり

込まれて、ただ黙ってその罵声を聞いておられる”このようなお姿も説かれているのであります。

托鉢に出られて一日中回られたのに、一粒の供米もなく、とぼとぼと帰路におつきになっているお姿もあります。そして阿含の中の雑阿

含（ぞうあごん）という非常に長い経典の中の大般涅槃経（だいはつねはんきょう）という教えの中に「仏陀がもう八十の齢を迎え老衰

なさっていても、地方を回って神理正法を説く遊行をおやめになることはなく、老骨に鞭打ってとぼとぼとチュンダの園においでになり

ました」その時にチュンダのさしあげた供養の苜にあたられた様子を「世尊は供養の苜を食べ、重き病を得たまいぬ、腹下しつつ世尊は

『我クシナガラに行かん』』というような、大変素朴で身のひきしまるような思いのする表現がされてあります。これが阿含です。

しかし、信仰がいろいろの分派にわかれてくる、また婆羅門教やその他とその優劣を競わなければならない必要上、我々と同じ人間とし

てのゴータマ・シッタルダーがお悟りになった教えが本当の宇宙の真理ではあるがこの教えを最高度に美化し、哲学化し、これを説かれ

た仏陀を完全無欠、金ピカの仏に仕立て上げたのであります。しかし、これも自然の勢いでやむを得ないことであって、そういう見方も

必ずしも間違っているとはいえないのですが、我々が本当に幸福になるためには、そういう大乘教の理想化されたものばかりを見つめて

いたのでは、自らの足元を忘れることになるのであります。

私は入会以来、恩師から「おまえは雲の上にいる人間のような、足元を忘れて」と、よく教えて頂きました。

法華経が一番正しいのだという信念に燃えているいろいろの広宣流布をさせて頂いて参りましたが、本当に一番大事な足元を忘れていたとつく

づく思わして頂くのであります。

このように、皆さんもまず一度仏教の本質、出発点に立ち戻って、この阿含に説かれている仏のナマの心というものを、よく見つめて頂

かねばならないということ、これが二つ目の理由であります。

そして第三の理由として、このゴータマ・シッタルダーという方が、現在お出ましになっても不思議ではなく当然であるということ

す。歴史上に我々と同じ肉体をおもちになって、人間苦にいろいろと悩まれ、そしてお悟りになった仏陀、この方が現在お出ましになっ

ても決して不思議ではない。

過去にもお出ましになっていることであって、これは宇宙の配剤と申しますか、一つの約束事と申しますか、宇宙法と申しますか、これ

は必要な時に、そういう一つの現象が必ず出てくるのだということです。

インド時代の婆羅門（バラモン）の教えの中に、いろいろな教えがあって真理を掴（つか）むことができないでそれぞれが覇を競い合

う、そういう時代にゴータマ・シッタルダーがお出ましになりました。

現在もよく似た世相であります。いろいろな宗派が仏の教えはこうだと皆が他を排斥し自らが一番正しい教えだと主張し合い、たくさん

の宗派が入り乱れている時代であります。

このような時代に、再び我々人間が本当に必要としている聖者がお出ましになるのは当然のことであります。

また、私が高橋先生をゴータマ・シッタルダーだと信じさせて頂きましたのは、先生のお出しになる現象も大きな裏付けとなりました。

先生がお出しになる霊道現象や、物質化現象でございます。東京にたくさんおられるお弟子さんと先生とのいろいろの対話。

私の目の前でインド時代の話をするそれはパーリ語でなさったり、サンスクリット語であったり、あるいは中国時代のお弟子さんとは

その時代の中国語、エジプト時代はエジプト語、イスラエル時代はイスラエル語でお話をなさいます。その当時のことをその当時の言葉

でお互いに話をされ、それを日本語に訳して聞かせてくださるのであります。こういう過去の時代の自分の潜在意識をひもといて話し合

える、霊道をひらかれた方々であります。

こういう面でも、高橋先生をゴードマ仏陀の再来であると思わせて頂いた裏付けであります。また間違いのないと思いましたが、先ほど

申しました阿含に説かれている教えが、先生が提唱なさっている神理正法なのであってゴードマ・シッタルダーが四十五年にわたってお

説きになった教えは、つきつめれば「四諦八正道（したいはっしょうどう）の法則」であるといつて間違いはないのであります。

仏陀がお悟りになったのがブツダガヤの菩提樹の下で、端坐瞑想をなさって真理「八正道」をお悟りになりました。そしてこれを衆生に

伝えるべきかどうかと非常に思案をなさいました。

そして梵天（ぼんてん）に「ゴードマよ神理を衆生に説きなさい」とすすめられて、まず誰に説くべきかとお考えになりました。

仏陀が王城（カピラ）を抜け出た時に、父親がその身を案じて常に側にあつて修行しゴードマを守るようにと差向けられた五人のお弟子

があります。この方々がゴードマ様と共に修行しておりましたが、釈尊は六年間の苦行の中から、婆羅門の教えの苦行というものが本当

の悟りに到達するものではないとこの苦行をお捨てになつて、一人の少女の差し出すお乳をお飲みになつて今までの苦行の身の補いをさ

れたのですが、これを見ました五人の比丘たちは、もうゴードマは苦行に耐えられなくてこの修行を捨てて墮落した、こんな人では頼り

にならないと遠くに行つてしまいました。

この五人の比丘たちにまず自分の悟りを説こうと思つたのであります。そしてガンガー河を逆上つて五人の比丘に再会されて自分の悟

つたことを話そうとなさるのですが、この五人は頑強にこれを拒否します。

「もうあなたは墮落してしまつた人だ、私たちは貴方が神理を悟つたということは信じられません」と聞こうとはしません、そこでゴ

ードマは「私の顔をよく見よ、今までこれだけ輝いた顔をしていることはなかつただろう」というように申されますと、五人の比丘は「な

るほどゴードマの顔は金色（こんじき）に光り輝いている、それではお話を聞かせて貰いたい、然し私たちもいろいろと論議をさせても

らう」ということで、それから長い間にわたつてこの悟りというものの話をなさるのであります。

この時のお話が四諦の法則であって仏陀は「私は中道を悟った。中道とは八正道なり、正見・正思・正語・正業・正命・正進・正念・正

定、この八つである」と話され、続いて四諦の法則を説かれるのであります。

肉体をもった人間というものは、どうしても肉体の執着に負けてしまう。三毒五欲の世界に流されて肉体の欲望に負けてしまった時に人

生は苦しみの連続になるのである。

いろいろの肉体の欲からもたらされる結果は苦しみしかないのである。これを苦界といいます。

この苦の世界はどこからやって来たのか、なぜかなぜかと問い詰め原因を探求する、即ち集諦（じゅうたい）と申します、どこから苦し

みというものがやってくるのかと手繰って行ったら、これは渴愛（かつあい）だということになるのであります。咽喉（のど）が渴（か

わ）くと耐えられないほど水が欲しいという気持ちが起こってきます。大火といわれるように真赤に燃えたぎる火のように強力な耐え難

い欲望が起こって参ります。こういう耐え難い肉体の欲望が我が身を焼き、苦しめるのであります。次に滅諦とは、苦はどうしたら無く

なるのか、これはその渴愛という我執、私の肉体の欲望に捕らわれている心を離したら苦は無くなるのであります。

これが滅諦であり、苦滅の真理であります。我執に捕らわれている心を離して苦をなくした状態に到達する道は何か！それは 即ち八正

道であります。

八正道は私たちが人生苦を解脱する道であります。皆さん方は苦しみを逃れるために信仰しているのではないのでしょうか、これを説いて

おられるのが阿含の教えであります。

苦をもたらす原因を一ぱい持ったまま幸福になろうとするとところに無理があります。苦しみを断ち切るにはやってくる原因 これは我

執であり、渴愛であり、自分を労わる心、自分の肉体が自分だと思っている、この錯覚が苦しみをもたらします - このようなものを断ち

切ることが大事なことであります。

しかし人間は永い歴史の間に、いろいろの心の垢というものによって、自分の肉体が自分であるという錯覚を強く持つようになったので

ございます。

これを先生は、本当の貴方は“魂”なんだ貴方の肉体はその魂を乗せている舟でしかないんだ、とおっしゃる。これが仏陀の教えであり

ます。

どうぞそういう面において、皆さま方は高橋信次先生がお説きになっている神理正法が、過去二千五百四十余年の昔ゴータマ・シッタ

ダーがお説きになった神理正法であると思って頂いて間違いないのであります。

私は初めてお会いした時にそう感じました。だから皆さまにも先生の教えを聞いて頂きたい、皆さまが本当に幸福になって頂かなくては

いけないと思ったのです。

しかし、これは会長の一存で決めるべきではない、皆さまの教団である以上皆さまの総意によってこの方向をきめさせて頂きたいと私は

願っております。

今の仏教界は、全部が掴まなければいけないものを掴んでいない、本当のことが解らない、ただ今までのしきたりを踏襲して惰性に動い

ているにすぎないのであります。

教団が古くなったり大きくなったりすると、なかなか方向は変えられるものではありません。しかし仏教を信仰する仏教徒が、ここにゴ

ータマ・シッタダーが再誕なされたということであれば何をおいても、それに帰依し帰一するのが仏教徒の当然のあり方であって、私

のところはこうして来たからいくら釈尊がお出ましになっても私たちは今までどおりでゆきます、というようなことではこれは仏教徒で

はないと思います。それは自分の道を歩いている私道であって仏道ではないと思います。

ゴータマ様が出世なさって、それをお説きになったご本人、元祖、張本人その人が「私は法をこういうように説いたんだ」とおっしゃっ

たら、今までの行き掛りを捨てて、当然その教えに帰依すべきであろうと私は思うのであります。

端法会教団が、こういうふうはこの高橋先生と昔から深い絆（きずな）があって、お互いに因縁の糸を探り合っ

て今会い得たのでありま

す。
先生の教えを受けて教団の恥でもなければ値打ちの下がることでは決してないのであります。それどころか、かえって教団の値打ちが上

る一番正しい教えをこれからやってゆこうというのでありますから、どうぞこれを喜んで頂きたいと思うのであります。

お経本の中にも“三千年に一度咲く優曇鉢羅華（うどんばらげ）に会うが如し”とありますように、二千五百有余年の昔の因縁の続きと

して、今、我々がいち早くこの先生の教えをうけることになったことは非常に喜ばしいことと思います。

我々の生命（魂）は悠久であります、その間に聖者に会うということは非常に大事なことであります。

今、皆さま方が端法会につながって、ゴータマ様の再誕に会えたということがいかに重大なことであり、喜ばし

いことであるかというこ

とであります。

どうぞ一人でも多くの方に、また今までほとんど名前だけでつながっておいでになる方にも一度端法会に寄ってお釈迦様の教えを受けな

さい、ゴータマ様の教えに相違いなさい、ちょっとでもゴータマ様のお心をお聞きなさい、教団へ足をお運びなさい、とおすすめて頂

きたいのであります。

仏の教えが信じられない人があります。こういう人はこの現象界にひんぱんに出ておられない方で、出て来た時にはもう聖者は既に実在

界へお帰りになって随分の日時が経過してしまっている。だからお説きになった教えも形式化されてしまったりして有名無実になって

いる。こうした時代に出てくるともう神や仏というものが信じられない、また教えにも会えない、だから肉体の欲望や物質欲を充足する

ことが一番幸福だと思って、いろいろな業（カルマ）を積んで実在界に帰ります。

そして積んだ業によって、地獄、餓鬼、畜生、修羅界に堕ちて、ここで何百年、何千年かの長い間かかってやっと潜在意識のカルマを修

正して、再び現象界へ出る機運が出て来てこの世に生まれて来るのですが、その時には聖者はもう向うへお帰りになっている、また前の

ように教えにも会えず神や仏が信じられずに実在界に帰り、地獄、餓鬼、畜生、修羅界に堕ちてカルマの修正に何百年もかかるようなこ

とになり、絶えず聖者とは入れ違いのような形でいつまでも教えを聞けない、教えも信じられないようになるのでありましょう。

だから私たちは、今世でゴータマ・シットルダラ様にお会いできて、お話を聞かせて頂ける、お教えを受けさせて頂けるということは本

当に幸福なことであります。

世の中には神や仏は信じられない、神も仏もあるものか、といている人がたくさんおられます。こんな人はこの想念のまま実在界（あ

の世）に行きます。神や仏は無いという想念の世界にばかりいるから、よけい信じられない、またたまにしか現象界に來れないというこ

とになるのでありましょう。

またお経は大事であります、しかしお経をあげたら何かの御利益がある、神秘的な利益があるというような棚ボタ式の受取り方であげ

るといふことのないようにしていただきたいのです。

お経をあげたら心が安まるというようなことは功德にはちがひありませんが単に自己の心が安まるという自己満足や、そのことを善事に

結びつけてゆくというようなことは小さなことであって、己の心が浄化されない限り本当の功德（くどく）ではないということを知って

いただきたいのです。

だからお経をあげるのは、お経というものを自分の心に言って聞かすんだ、お経に説かれている真理を自らの生活の中に実践するんだ、

お経を教科書として、お手本として、自らにこれを言い聞かせてゆく、こういうものになって頂きたいと思うのであります。

仏様の教えは、ちょうど自分の顔の汚れや歪みを映す鏡のようなもので、いくら鏡を大事にし拝んでみたところで私たちの顔のゴミや汚

れを取ってはくれない、服装を直してはくれないそれと同じなんです。

だから仏様の教えというものは、私たちの心の不調和 自我、我欲、嫉妬、僻（ひが）み、貪欲、怒り、心の高振り、歪み、矛盾

を写し、示してくださるので、これを直すのは自分自身であります。

それを自らの手で直さずに鏡が直してくれるだろうと置いていたんでは当てが外れるということになるのであります。

それから般若心経について私自身判らないままにちょっとお話し致します。先ほど申しました阿含の四諦の法則の基本になっている真理

というものは、一切皆空（いっさいかいこう） 、現在の科学が証明しておりますように、物事というものは総て空（くう）から成り立

っている。この詳しい話はいつれ先生より聞かせて頂きますが、空とは何か、即ちエネルギー・力なんで、森羅万象すべてのものはエネ

ルギーの厚い薄い集散離合によっていろいろと姿が違ってきます。

これが空の見方なんで、空は色（しき）にことならず、色は空にことならず、すなわち中道で、偏（かたよ）った見方をせずに確かりと

物を見て行くこれが般若心経の空諦という見方であると思います。

この空というものを踏まえて、宇宙の真理と我々の心の持ち方を解かれているのが般若心経であり、これが心の根本です。

我々は、仏と同じ智慧を持ち、仏心を内在している。自分でどういおうと何を飾ろうと嘘は嘘だと教えてくれる魂が心の奥にある、この

内在の仏様、内在の仏の智慧というものを開発してゆき、この智慧が人様に向けられた時、慈悲となるのであります。

生活の中にそういう身の処し方、出し方、行い方、こういう慈悲が説かれているのが法華経なのです。だから智慧を強調しているか、慈

悲を強調しているかで、般若心経も法華経も真理においては何ら違わないのではないかと思います。

それを宗派の者が、これが一番だ、自分の方が正しいんだと優劣を争い、みな敵同志にしてしまったのです。だからそういう意味あい

をよく知って頂きまして、お経を自己満足や棚からボタ餅式の功德を願う考え方でお上げにならないようにして頂きたいと思います。

それから導きということ、これは非常に大事なことです。縁なんですね大事なものは……。

この前の班長会にもお話し申し上げたのですが、阿難という方が仏様に「私たちがよき友たちよき仲間の中に身を置かして頂き

ますことは、苦しみからの解脱（げだつ）の道、仏道を成就する上におきまして中端（なかば）にもなることではないでしょうか」とお聴き致しますと、仏様は「阿難よ、それではまだ充分ではない。善き仲間、善き友だちの中に身を置くことは、この道を成就するための

すべてである」とお答えになった、こういうお経があります。

即ち僧伽（サンガ）というもので、我々は善き正師、善き仲間の中に身を置くことが一番大事なことなので、これが仏教のすべてなん

です。

これを仏様は「阿難よ、あなたたちは私という善き友だちを持っておるから普通でゆけば真理が解らずにいろいろと老いてゆく苦しみを

持つだろう、また死んでゆく恐怖を持つだろう、それが私という友だちをもって真理を聞いて、自らが老というものから心が離れてゆ

く、また死という恐怖から解脱しているではないか」というふうに教えられており、いかに大事なことかということであります。

また涅槃寂靜（ねはんじゃくじょう）ということが、こういうことなんで、我々の心が浄化されてくる、本当に平和な調和された心にな

ってゆくと、真理というものは一人で味わってゆけないもので、これを共に味わいたい、共にこの思想をわかちたい、これが人間の本質

です。

だから皆さまの心の調和が人を感化し、周囲に調和を作ってゆく、これが高橋先生のおっしゃっている仏国土ユートピアの建設でありま

す。だから、どうぞこういう点に留意されましてよく先生のおっしゃる神理正法の教えを、今までのゆきがかりのために拒否したり否定

したりなさることなく、本当に皆さまが幸福になられるために聖者の教えを真剣に、これから受けてゆきたいとお願い致します……。

（未完）

G L A 関西本部長 中谷義雄

（昭和46・11）

Home

講演集

釈迦の生誕から仏教の変遷

私は十才の時に原因不明の病気になりまして、夜の八時になるときまって、呼吸困難になり、意識が不明になりました。一回、二回、三

回位は夢中でほとんど解りませんでした。四回、五回と回を重ねるに従って、自分自身の骸（むくろ）を見ているもう一人の自分を発

見したのです。私はこのような体験を幾度か経験しているうちに、科学する心を覚えました。すなわち肉体は自分だと思っていました

が、肉体を離れた自分は苦しみのない自由自在な自分でありましたので、これは一体どうしたわけかと考えたわけです。そういう体験を

通して約半年近くは、ほとんど夜になりますとそのような現象が起こります。医者に見てもらっても原因不明で解りません。そのために

私の頭はお灸と針でゴツゴツになってしまいました。私は鎮守の森にありますが権現様に十才の子供ではあったが、毎朝早く、また夜通い

まして一心に自分の病気を直してもらいたいと、約六年間続けたのです。しかしそのような神との対話を求めて、一心に信仰的な行為を

致しましたが、神は、一度も私に話しかけてくれたことはありませんでした。こうしているうちに肉体の方はどうか快復しましたが、

もう一人の自分は、もう肉体から離れることはなくなりました。このような謎が私の人生を大きく変えてしまったのです。かくしてもう

一人の自分を探し求めるとともに、極微の世界、素粒子の分野を探求することによってこの問題を解決して見ようと考え、物理学を学ん

だのであります。

物質というものはプロトン（陽子）・ニュートロン（中性子）と電子の構成による一つの原子があります。水素原子

は電子が一つ、ヘリウム原子は電子が二つ、リチウム原子は電子が三つ、こういう極微の世界の構成というものが次第に解るに従って物

質とエネルギーというものの実体が解って参ります。私たちが目にとらえうる物質はすべて仕事をなしうる能力、すなわちエネルギーを

もっている。ガソリンはガソリンとして、石炭は石炭としてのエネルギーというものの存在を私たちは現在科学的にも実証できる段階に

あります。そうなりますと、物質と仕事をなしうる能力、エネルギーの存在は、仏教的に申しますと色心不二ということになりましょ

う。肉体（物質）と魂（エネルギー）は共存していますが、魂を見ることが出来ない。しかし不二一体であるということが解りかけてき

たのです。

続いて私は極微の世界以外に、この極微の世界の延長されたものが、大宇宙体を作っているということに、その研究の道が開かれてゆき

ました。私たちの住んでいる太陽系は、水星・金星・火星・木星・土星・天王星・海王星・冥王星並びに地球という九惑星以外に、三萬

数千個からなる小衛星集団（アステロイドベルト）を引き連れており、一秒間に二十キロの早さで銀河系宇宙の中を飛んでいるという事

実です。極微の原子核においても、極大の宇宙においても、その組合わせというものは、一つも違っていないということに気づいたので

す。しかしいかに物質的な極微の世界や極大の世界を探求したとしても、しょせんは人間自身の肉体と魂というものまで解らなかつたの

です。

しかし一方において私は事業という経済環境を確立しなければなりませんでした。弱電機器事業の外、いろいろな事業もやっています

が、そういう経済的基盤を背景にして、もう一人の自分を発見しよう、そうしてこのもう一人の自分を発見することによって、神、仏と

いう存在がはっきりと自分自身に納得できるような現象が起こるであろうとの予測のもとに、あらゆる分野にわたって研究追求して参り

ました。ところがもう一人の自分を発見する昭和四十三年の七月以前にさまざまな霊的な現象が起きていました。たとえば、私は十五年

も結婚しているけれども子供ができないのはなぜだろうか、という質問をされれば、私が持った一枚の紙にそくぎに、生年月日・子供の

姿までもズバリと写し出されてくるのであります。あるいはまた自分が予言したことはすべて一致する。しかし私一人がいかにそのよう

な超能力を持とうとも多くの人々によってそれが客観的に証明されない限り、私は信じません。そのような霊的体験を積むに従って、四

十三年の七月、たまたま家の中に大きな霊的現象が起きてきたのです。

それは全く日本語と異った言葉で現象がでてくるのです。ドイツ語や英語は学校で習っているから私にはある程度解ります。けれども全

く解らない言葉で語られる霊的現象が起こり始めました。私の義弟は理科系の出身でありますけれども、神仏というものは全然信じてい

ません。全然信じていない義弟に、霊的現象が起こり始めました。ヘブライ語をまじえ外国語訛りの日本語で私の子供の頃からのいろい

ろな諸現象を彼の口を通して語り私自身の心をすっかり占領してしまいました。たまたま浅草に八起ビルという貸ビルを私が作っている

時に、東京都の交通局との交渉をもっていました。当然お役人と事業上の問題で打合せがあります。夜は夜で料理屋に行って打合せをす

る。一日の私の生活は本当に目のまわるような状況です。ところが、そうした毎日の私の想念と行為にたいして、その霊はことごとく私

の後についているように、何もかも知っており、そればかりか、私の心の奥底までほり下げて厳しく指摘してくるのです。私はわずか一

週間の間に八キロもやせてしまいました。三十数年間探求し続けてきたところのあの世、霊的なもう一人の自分というものが、こんな厳

しいものであったのか、こんなにもあの世というものは恐ろしいものなのか、私は本当にわからなくなってしまいました。自分の心を一

つ一つ監視され、今やった行為を次々と指摘されていったらどのようになりますか、気の弱い人だったら狂ってしまうでしょう。自己保

存の思いは思ってもいけないといわれるのです。

しかも厳しく、それが日本語で喋るならまだしも、外国語訛りの難しい解らない日本語で語るのです。そのうちに、そうした状況の中で

私は三日間で悟れといわれたのです。悟れといっても悟る意味さえ解りません。私は本当に困ってしまった、しかし今さら放り出すわけ

にはゆかない。やめるわけにはゆかない。そこで高野山の奥の院から、上野東叡山寛永寺に、そうして千葉の中山寺奥の院にも行き、と

もかくここぞというところへまいりまして、現在起こっている現象を説明してまわったのですが、正しくそれを判断してくれる人はいま

せんでした。

私は本当に困惑してしまいました。私をして一週間も苦しめた者は何者だろう。悪魔ではなからうか。有名な僧侶に会っても何一つ解答

が得られない。

三日目の夜、私は一切を諦（あきら）めた。地位も、名誉も、財産も、そして生命もいらない。私を苦しめた者は悪魔に違いない。悪魔

ならその悪魔を善にかえてやろう。私は生命を投げ出し、悪魔と対決したのです。

「悪魔よ私の前に出てきなさい。悪魔であるならば、あなたたちを善に変えてやろう。それによって、私の生命が欲しいというのであれ

ばあげてもよい」

私がこう決意し、思った瞬間に、今まであれほどきびしいことをいっていた霊はガラリとその態度を変え「今晚はお祝いだ、お前自身の

ために一週間の苦しみを和げよう」とコロッと変わってしまいました。

私は脳細胞を犯されたのではないだろうか、東京大学の医学部の神経科に行ってみて貰いました。異常がないばかりか最も正常だとい

われました。

こういう体験を通してそれ以後は弟の霊的現象はピシャッと止まってしまいました。今は全然出ません。九月に入ってから、私の会社に

手伝いに来ていた妹に光を与えた瞬間に過去世を思い出してしまいました。そうしてあらゆる諸現象を見通し、さまざまなものが見える

ようになってしまいました。続いて十月に入り、私の家内がまた同じように解るようになってしまいました。すべての心の中を見通され

てしまいます。しかし人間というものは、執着を離れてしまえば丸い心になってしまいます。そのために自分の心というものに対して誰

に監視されていても、もう晴れやかな丸い大きい心になっていますから心配ありません。

そのような体験を通して事業をやっていましたから、やがて多くの人々が私の家に入り出すようになってきました。

三度の飯より神様の話をしていた方が好きな私のことですから、お客さんであろうが何であろうが、神様の話をしてしまいます。仏教も

キリスト教も何も知らない全く我流の話でした。そのうちにだんだん私自身の心の中にある転生輪廻を繰り返して来た心のテープレコー

ダーがひもとかれてきました。人間の生命が不滅であるということもだんだん解るに従って私の家を訪ねてくる人たちも、次々と心の窓

が開かれてゆきます。同時に皆さまの肉体舟の船頭さんである皆さま自身の魂がどのような転生輪廻をして来ているか、過去・現在・未

来の霊的な諸現象を見る能力を得ていったのです。そこでそのような心のテープレコーダーをひもといて、仏教がどのような変遷を経て

きたかということをお皆さまに説明したいと思います。

今から二千五百余年前、インドのカピラというところに、ゴータマ・シッタルダーといわれる方が生まれます。それより以前約二千年前

にクレオ・パローターといわれる道を説く人がエジプトに出ています。実在界あの世において、この地上界に出る光の天使たちの選考が

始まった結果、クレオ・パローターの過去世を持つその天使がカピラという場所を自分自身が選び出生することになりました。インドを

選んだ大きな理由は、自分自身を悟るにはもっともつごうがよい場所であり、伝道環境が整っているからでした。カピラ・ヴァースト

という環境は、まずコーサラという大国の属国で、小さい砦のような城市で、共和制をとっている国でありませぬ。そのためにいつ敵か

ら襲われるかわからない。そしてまたシュット・ダーナ王、マヤ妃という両親の間に子供がありません。母親は同じシャキャ族のコリヤ

族というロッシニー河をはさんでデヴァダバ・ヴァーストという城市の娘であります。このような二組、これはもちろん当時日本の戦国

時代と同じように、非常に政略結婚というものがインドでもはやっておりました。そういう環境をまず選んで生まれると同時に一週間目

にして母親をあの世に引き取るようになっております。ややもすると私たちは死というものについて非常に恐怖心を抱くものですが、あ

の世から見れば、決して死は恐ろしいものではないのです。こういう環境の下においてゴータマ・シッタルダーの義理の母親マハー・パ

ジャパッティにはナンダという子供ができてしまいます。これもあの世で計算してあります。そうして人生に対する無常を感じる環境

というものを選定してくるのです。このように環境は極めて不安定な状態です。武力もたいしてないし、大きな国が攻めてくればカピラ

など一発でやられてしまいます。それから食事にしても毒見をする人がいます。敵のスパイが潜（ひそ）んでいるからです。

このような不安定な場所にあっても人間というものは、慣れてしまえば不思議なもので、そういう環境の中においても育ってゆくもので

す。しかし自分の生活環境の中から人間というものはなぜ生まれ、年をとり、病気をし、死んでゆくのかという疑問が心の中からドンド

ン湧き出て参ります。

Home

一方またカピラ城の生活は優雅であり、春は春の館、冬は冬の館で、いつも取り巻きには美しい女たちが何人も仕えています。しかし生

活が優雅であればあるほどシッタルダーは無常を感じていきます。

一歩城を出れば酷しいカースト制度というものによって生活環境は、城の中とは百八十度異っています。ここでも生活の矛盾につきあた

ります。同じ人間でありながら、生まれながらにしてこのような差別はなぜあるのだろう。ゴータマ・シッタルダーは考え始め、疑問は

疑問を生んで自分自身で解決することができなくなってゆきます。しかし父親のシュット・ダーナ王はなんとか自分の跡取りを安心させ

たいとして、やはり義理の母親の里であるところのデヴァダバ・ヴァーストからヤショダラという娘を嫁に迎えます。十七才の時です。

当時の王侯貴族というものは一夫一婦でなく、一夫多妻でありました。とうぜん女同士の軋轢（あつれき）が生じて参ります。悩みは更

に自分自身の作り出したものによって膨（ふく）れあがってゆきます。二十九才のおり、シッタルダーは、遂に家を飛び出す決心をして

しまいます。城を飛び出し人間の苦しみというものをどのように解決していけばよいのか、一子ラフラをどうすればよいか。ラフラ出生

の際には父親のシュット・ダーナ王から二人の子なのだから二人で相談して決めよといわれ、ラフラと命名した。もちろんそう命名した

のはシッタルダーであります。出家を妨害するという意味で、ラフラとつけた。ラフラとは障害物ということですから。ラとは石、フラとは

橋、当時は吊橋が多く、橋の上に石が置いてあっては危なくて渡れない。いつ吊り糸が切れるかわからないからであります。このように

して家庭的には不調和なゴータマ・シッタルダーでありましたが、ある夜、遂に自分自身の生老病死という苦しみの問題を解決するため

に出家し、その後約六年余り中インドを中心にして修行をするのであります。

しかし肉体的な酷しい修行によって悟ることができないということをも三十六才の時、ネランジャラの河のほとりに一人のチュダリア・チ

ュダーダーという牧場の娘が乳をしぼりながら「弦（げん）の音（ね）は強く締めれば切れてしまう、弦の音は弱くは音色が悪い、弦の

音は中程にしめて音色が良い」という民謡をうたっているのを聞いてしまいます。その歌をきいて人間というものは城の中において優雅な生

活をしていてもだめだ、悟れない。逆に滝や断食など酷しい肉体修行によっても悟ることができないということをも初めて悟るのでした。

その結果、ウルヴェラという村のピパラ（菩提樹）の大木のある丘に上って、己が悟るまではここから一步も動かぬと堅い決意をしま

す。いうなれば死を決して中道の物差しをもって、誕生から三十六年間の地上での生活行為の一つ一つを反省し、自分の心というものが

常に丸く、大きく、広い心であったか、人を恨み・妬み・謗り、自分のことしか考えなかった過去の心を修正していったのです。

瞑想をはじめて一週間目です。瞑想していると眼前にある正覚山、そこから昇る明けの明星が自分の足の下に見えてきた。体は宇宙の姿

になってしまっていて自分の肉体は遙か下方に小さく見えています。自己の中に宇宙があり、宇宙は即ち我であるということを見出すので

す。同時に生老病死の原因、苦しみの原因というものはどこにあって、その原因をとり除くには自分自身の心と行ないにあるということ

を悟っていくのです。

二十一日間、ウルヴェラにおいて自分自身の過去を反省しつつこのような神理を諸々の衆生に話したところで解るものではない、このま

ま死んでしまおうと決心をした時に、バフラマン（梵天）が出て参ります。梵天の名はモーゼやクラリオ（イエス・キリストの分身）と

いわれる光の天使たちです。

「ゴータマ、その方は今までこのような苦しみの中から今悟りを開くことができた。この苦しみの原因を追求し、この神理を諸々の衆生に

教えなくてはならない。お前がたとえ命を絶とうとしても、そして地球の、宇宙のどこの隅に逃げようともあの世にこようともお前をそ

くざに帰してやる。それはおまえ自身が生まれる前に約束してきたからだ」。

梵天からきびしくいわれる前に、ゴータマの心の中にいろいろと誘惑や悪魔が出てきて、「ゴータマよ、そのような神理を説いたところで

人を救うことはできない。お前はそんなことをやるよりか自分の国に帰って優雅な生活をした方が幸せだ」といってゴータマの悟りを邪魔

します。

こういう諸現象は私にも起こりました。お前は事業家として力をつけていけば月に何十億という金が入ってくる。よけいなことを考えず

事業だけしておればよいではないか。お前はあの世があるなんてうまいことを説いているが、あの世なんか無いよ。そんなことをやめ

て、もっと優雅な生活をやったらどうだ、と私にささやきます。そんなとき私は「お前はどこから来ているのだ、お前はあの世の者だろ

う」といったら「解っちゃ話にならない」といって帰ってしまいました。

インド時代のゴードマ・シッタルダーの周辺にもこういう問題が起こって参ります。

さてこのような経過をたどって、ではいったいいかにして人々に説いていけばよいのか、ゴードマは悩みます。けれども心の窓が開かれ

てしまいますから、今説かねばならない人々が身近にいることを知ってしまいます。ことに悟りを開くまで、カピラから苦樂をともにし

てきたコースタニヤ、バツテイヤ、マハー・ナーマン、アサジなど五人の人たちがいます。ネランジャラ河の周辺でゴードマ・シッタ

ルダーが口にした牛乳の一件でゴードマ様は修行を捨てた、あのような者と一緒にいるのもしょうがない、私たちは別のところで修行しよ

うと、去っていった人たちが思い出されます。心の目にハッキリとその人たちがイシナパタにある川の流れている小高いところにいるこ

とが解ります。

守護霊に聞けばパラナッシーのミガダヤというところにいることがハッキリと解ってしまいます。中インドのラジャグリハから西南の方

向に向かって約三百キロメートル入ったところにウルヴェラというところがございます。そこから四百キロメートルはなれているところ

です。心の中でチャンと判ってしまいますからネランジャラ河をどんどん下っていきます。サラタプトラからさらに西方へ入ってきます

とパラナッシーという都があります。そのはずれに彼らが修行所として定めたイシナパタとって仙人たちがいっぱい修行しているところ

ろがあります。ここは現代の仏教と同じように、釈迦の前世クレオ・パロータが説いたバラモンの経典であるヴェーダーやウパニッシャ

ドという神理が存在しているのです。すでに二千年前、インドにおいてこのような道がハッキリと説かれたのでありますが、時代とともに

に哲学化されてきたものであります。ゴードマ・シッタルダーは小さい時からそのようなバラモンの先生について神理というものを学ん

でおります。ある程度のことは解っております。バラモンはまず十二才頃までは、日本でいえば寺子屋のようなところでヴェーダーとい

う神理を教えられます。そうして十二才から二十五、六才・三十才頃までの間に家庭に入ります。さらにまた三十才、四十才を過ぎまし

て自分の子どもが一定の年になりますと彼らは再び山の中に入り修行をします。このような人々をサマナーと呼んでいます。続いてサマ

ナーを卒業し遊行の旅にでる人たちをサロモンとっております。修行者ということです。このようにミガダヤというところにはバラモ

ンを含めてあらゆる宗教家の人たちの修行所として多くの仙人たちが集まっております。その場所をゴードマ・シッタルダーはそくざに

解ってしまい彼らに会う前にコースタニヤの心の中を読んでしまいます。「ゴードマが来た、あの男が来ても、もう既に王子でも師匠でも

ない。我々には関係がない。たとえ来ても足を濯（すすぐ）ぐではないぞ、アサジ解ったか」このようなことをいっていますが、みな、心

の中にピンピン響いて参ります。ゴードマの姿を見ても見ぬふりして彼らはボソボソ話をしてしています。

四十四、五日もかかってパラナッシーの都を去り、ようやくミガダヤについた朝、彼らはゴードマが来たということできさく予定の行

動をしておりますが筒抜けです。解ってしまいます。だからゴードマ・シッタルダーはそれにかまわず彼らに近寄り「お前たちは今このよ

うに修行をしているけれどもそれはむだなことだ、そんなことをしていたら、私がかって肉体的に不調和をきたしてしんでしまおうと思

ったあの時のように痩せおとろえた姿になってしまう。きびしい肉体行はやめるがよい」。懇々と話をすると、いちばんかたくなな心を持

っていたコースタニヤが以前の師弟の関係の時と同じように足を濯ぎ始め「シッタルダー様、あなたは顔色が前とはだいぶ異っておりま

す」といってゴードマの足下にひれ伏してしまいます。

「そのとおり、私は四十数日前に、ウルベラにおいてついに悟りを開きブッタになることを得た。お前たちの心はすみずみまで解ることが

できるのだ」といいます。彼らはブッタの最初の弟子になっていきます。コースタニヤはカピラ・ヴァーストでクシャトリアといいまして

武士階級であり彼はサムライ大将だったのです。他の四人よりは剛直な面が強かった。しかしブッタの言葉に素直になり師弟の関係を結

んでいくのです。五人はいずれもクシャトリアであり、弓や槍をよくつかい、みな体の丈夫な人たちであり、シュット・ダーナ王（シッ

タルダーの父親）の命によってゴードマ・シッタルダーを守るために出ている人たちです。しかも彼らは六年も出家同様の生活をし、生

老病死の問題について、悩んできていますから、ブッタの言葉に真剣にならざるを得なかったのです。ブッタはいいました。四つの苦し

みから解放される道は中道しかない。つまり八正道の実践行為の中においてこそお前たちも悟ることができるのだ。と教えている

間に、コースタニヤがまず自分自身がクレオ・パロータの時代において今、眼の前に立っているゴードマ・シッタルダーの前世において

も共に同じ神理を聞いたということが解ってしまいます。心のテープ・レコーダーの窓が開かれたのです。続いてマハー・ナーマンも心

の窓を開いてしまいます。バッテイヤも開いて五人の人たちがついにアラハンという一つの境地に到達してしまっただけです。

現在の私たちのグループの中にもこの神理を聞いて、自ら心の窓を開き、あらゆる諸現象を自分自身が見出す力を持った人たちがだいたい

出ています。昨日も堺の講演におきましてわずか二回しか聞かない学校の先生が心の窓を開いて、中国の時代の言葉を語り始めました。

この中にもいるのです。皆さん自身が心というものを知り己自身が一切の執着をはなれて調和された日々の生活をしている時に、皆さん

自身の心のテープ・レコーダーは神の光によっておのずとひもとかれていくということであります。インドの当ても心の窓をひらいた人

たちは多くの人々に道を説いていきます。六番目の弟子にヤサというのがいます。パラナッシーの大金持の一人息子で、女性問題で悩み

ガンガーの河に身投げしようとする時にゴードマ・シッターダーが通りかかります。「お前は今死のうとしているけれども、そんなに若い

身空で死ぬなどもってのほか、自殺は神が与えた大事な生命を粗末に扱うものでもっとも恐ろしい行為である。自殺すれば長い期間暗黒

地獄に墮ち苦しまねばならぬ。心を静め、なぜ死のうとするのか、よく考えてみよ……」。このようなことを懇々と説いた結果、ヤサは

ゴードマ・シッターダーの神理にふれ、やがてアラハンとして立派に立ち直っていきます。ヤサの周辺の人たちもゴードマの弟子になっ

ていきます。

人間という者は不思議なもので、自分が育ったところや修行した場所というものは懐かしいものです。ブッタはここにしばらく滞在する

と、出家して最初の修行地であるマガダ国のラジャグリハに向かいます。ここの郊外にラジャグリハの王であるビンビサラという方がお

ります。年も同じです。出家して間もなく、ここに立ち寄るとビンビサラはこういいます。

「あなたも知っていると思うが、今の私はウルベラ・カシャパーといわれる立派な師について道にはげんでいる。よかったらそのカシャパ

ーに紹介してもよいが」

しかしゴードマは彼に会っても大した結果は得られないと思い、今日まで一度も会っていなかったのです。

しかし今度はそのカシャパーに会い、彼の修行の誤りを指摘し、過去世において神理を説いたことを理解してもらおうと思います。

カシャパーはガヤ・ダナというところで修行し、拝火教をやっております。木を井桁（いげた）にくんで一心に祈りを捧げ火の神を祈っ

ております。

その時たまたまお祭りの日だったのです。ゴードマ・シッタルダーは一人で托鉢の碗をもちながら山を登ってゆきます。泊る場所がない

ために洞穴の中でねます。彼らはゴードマ・シッタルダーという人間は知らないけれども、どうもこの野郎は臭い野郎だ。顔を見てもふ

つうの修行者とはどうもちがう。当時のインドの行者の人たちは特にウパニッシュアウドという学問を習っており、へ理屈がうまいので

す。

そこでこれはバラモンの相当研究した人ではないかとみています。ウルヴェラ・カシャパーはビンビスラ王から聞いていますからなるべ

く遠ざかろうとします。

ところがお祭りが終わった次の日、ブッタはウルヴェラ・カシャパーの心の中をみな読んでしまいます。「カシャパーよあなたの心はこの

ように燃えている火であってこれでは正しく物を見ることはできない。あなたたちの組織もまた同じように燃えている。宇宙の仏という

ものは大自然を育て生かしているものであって火のよう燃えるものではない。人間の心が燃えていては正しい判断ができないばかりか自

然の心を知ることさえできない」と説きます。彼はブッタの説法のはじめて目がさめ、九百七十人近くの弟子と共にゴードマ・シッタルダ

ーに帰依してしまいます。

昨日、大阪で心を開いた方は当時のナンディヤ・カシャパーという二番目の弟です。このナンディヤ・カパーとクナンダ・カシャパ

ー、この人たちも帰依しますが、兄貴の姿が見えないので、山賊に殺されたのではないだろうかと心配します。川から流れてきた祭壇を

見て、ウルヴェラ・カシャパーは殺されたのだと判断しますが、村の人たちに聞くと修行者といっしょに山を下り、ラジャグリハの方へ

行かれると言っていたとききます。二人は兄貴に会い、事情をきき、兄弟三人とも帰依してしまいます。

Home

ビンビサラの親戚のガラ نداといわれる方はベル・ヴェナーというちょうどラジャグリハの南、約二キロメートルばかり行った山の中に

竹の林がありますが、その竹の林に法座を設けた建物を作ります。これがベル・ヴェナー、日本語で申しますと、
といひます。こう

してブツタの教団は次第に大きくなってゆきます。そして神理のあり方、人の道、人間は心なりというその神理を説いて執着の苦し

から人々を解放していきます。四十五年間インドを中心にしてあらゆる国々にブツタの神理が広まっていきます。

やがてクシナガラ地においてゴータマ・シツタルダーは八十一才、この世を去ろうとする時にブツタを陰のようにしたい身の回りの世

話をしてきた秘書のアーナンダが問います。「ゴータマ様、あなたさまがこの世を去ってしまったら、私たちはどのように道を説いたらよ

いでしょう」「アーナンダよ、お前はそのようなことをいうのではない、お前たちは四十五年間、わしと共に悟りへの道、ブツタ・ストラ

の神理を学んだはずだ。お前の心の中にわしのこの神理があるということを知りなさい。私を思えばお前たちの心の中に私はいるの

だ。人間というものはいつどのようになるかも知れないが、しかしお前たちは、自分自身の心の偉大さを知るために、道を怠ってはなら

ない」またブツタは永遠の輪廻転生を説くのです。「西の方へ太陽が沈めば暗くなってしまうが、また明日になれば同じ太陽が東から出て

明るくなるように、わしもまたそのようになろう。やがて後の五百才後においてその道を説く時は、ジャブ・ドーバー（日本）ケントマ

ティー（都）の国に出るのだ。その時には今このように汚ない足を濯ぐことなく、道も美しく、道路の周辺には立派な建物ができてお

り、それはルビーやダイヤモンドで作られていることであろう。この時にそのジャブ・ドーバーの都では、既に仏教（ブツタ・ストラ

）は形式化され末法の時代になっているであろう」と多くの弟子たちに教えます。たまたまなくなるしばらく前に一人の老人（シュバリ

ダ）が参ります。この方は今、心の窓を開いて本日ここに来ていますが、当時私たちはマガダ語という言葉をしやべっていました、この

方は当時は百十七才近くの老齢でございます。自分自身が足もこのようにやせおとろえて、すでに相当な年齢のために杖をつけて参りま

す。しかしゴータマ・シツタルダーはその時に、この方の前世シュバリダが何を考えているか解ります。

「最後の弟子が来た、アーナンダ、わしの枕辺につれてくるがよかろう」その時、シュバリダはこのように問うてきます。「ゴードマ様、本

当の神理はどのようなものか、インドには多くの修行者がいて、我こそは本物だ、我こそはブッタといっているけれども、神理というも

のはどのようなものか教えて欲しい」シュバリダはあらゆるところの門をたたき、百十七才になるまでその神理を本物であるかないかを探

し求めて、死の直前にブッタに会うことができたのです。その時にゴードマ・シットルダーは真に人間自身の生老病死の苦しみの原因を

断ち、八正道の実践を生活行為の中に生かしているものこそ、真の正道者であるということをといたのであります。そのとき彼はついに

自分の考えていることと同じであると悟ったのです。

「ゴードマ様の に入るところを私は見るに忍びません。一足お先に失礼します」といって百十七才の老齡をそのままバタンとそこに倒れ

てこの世を去ってしまいました。

このシュバリダという人は、長い年月バラモンやあらゆる宗教を学んできておりますために、当時本当の悟りへの境地ということは知ら

なかったそうです。彼はついに百十七才、最後の土壇場において神理を己自身が知って息をひきとってゆきま

方は中国に、二世紀に生まれて神理を説きました。

[Home](#)

(I 氏が過去を語る)

「……この大河の氾濫（はんらん）にあい私は両親にはぐれました。そして出家をし仏の道を探究したのでございます。そして広い中国

をすみからすみまでいろいろと旅を致しました。そして阿弥陀浄土（あみだじょうど）、今の言葉でいいますと西方浄土に、人々はこの

世を終えた後、善いことをした人はそこに生まれ変わり、悪いことをした人は地獄という光のない世界に行かなければならない。人々は

たとえどのように環境が苦しかろうと、どのように辛かろうと心は常に明るい希望をもって生きてゆかなければということを人々に説い

たのでございます。テンシンと当時の名前を申します……………」、

と。

このように人間の生命というものは、あらゆる国々を転生輪廻し続けています。四十五年間にわたってブッタが説かれた神理は中国に渡

りだんだんと仏教というものが儒教の影響を受けて非常に哲学化されてゆきます。インドの当時に説いたその神理は、方便というものを

通して説明したのです。

皆さまは南無妙法蓮華經を唱えている。その根本も、最初は天台山において天台智顛（てんだいちぎ）が、法蓮華僧伽呪（ほうれんげさ

んがんじゅ）として説いたのです。法とは仏の心、仏の意志、神理、蓮華とは汚ない泥沼の中においても美しい蓮の花が咲くように、人

間の肉体というものは、目を見れば目糞、鼻からは鼻糞、耳糞、汗、一つとしてきれいなものは出ない。しかし心というものは宇宙の神

理を知って日々の生活をしていたならば、あの美しい蓮の花と同じように、安らぎの境涯を送ることができるのだ、このように説いたの

が法華經の根本です。

特に天台山においてはゴータマ・シッタルダの分身、陳（ちん）という少年が十七才、また同じような運命にさらされます。戦（いく

さ）に敗れて父親や母親や兄弟たちとバラバラにされ十七才の時に、陳少年は当時の蓬萊山というところにおられた南岳慧思（なんがく

えし）という僧侶の下で修行するようになります。南岳慧思といわれる僧侶は法華經を学び、それも夜ねむっている時に弥勒菩薩が枕

辺にきてその神理を説いていきます。陳少年は後の天台智顛という人です。約二十年間慧思の下で修行をし、陳少年の兄が天台山という

ところは非常に見晴らしもよいし、おまえは一つ天台山へ引越して来ないか、といわれ、天台山に入り、仏教の道を説いていきます。天

台智顛は、人の心は一念三千であり、本来誰しも広く大きな心を持っているが、一念の思うこと考えることによって、善にも悪にもつな

がり、悪を思えば小さくなってしまふ。大きな豊かな心を持つためには止観（しかん）によって心の針を正さなければならぬというこ

とを説きます。

摩訶止観（まかしかん）はこうして生まれ、そうして人間のあり方ということをや々説いてゆきますが、次第に

哲学化され解らなくなっ

て参ります。その当時天台山の僧侶でありました方がここに二人おられます。その方にちょっと当時の模様をきいて見ましょう。

(NG氏が、まずチベットの経文の一節を唱え、続いて当時の模様を語る)

「私は高橋武様の過去世であるチコータとは朋友でございます。共にチベットにおいてラマ教を学びましたが、中国の天台山に陳様と申さ

れる高僧のおられることを知り、共に入国し法華経を学びました。今私が唱えました経文はチベットにおいて唱えた経文です。それでは

法華経に帰依してからの経文を唱えさせていただきます」

(NG氏は経文を唱える)

さらに、高橋信次先生は続けられる

これが五世紀から六世紀にかけての法華経です。つづいて八世紀に日本からは比叡山延暦寺を作りました伝教大師最澄が留学され天台山

においてその神理を学び日本に持って参ります。このようにして比叡山延暦寺で説かれたその神理は妙法蓮華経と日本的に変えられてゆ

きます。つづいて十三世紀に入って日蓮はさらに南無という言葉をつけ南無妙法蓮華経という形に変わってゆきます。こうしてだんだん

と他力本願に変わり、お経はあげることに功德があるという間違った考え方になっていったのです。

私たちはお経の意味も、またインドの時代に説いたその神理というものも人間というものの偉大さ、神の子として仏の子として偉大なる

己自身の心を悟るということ、その中に己自身が神の子として偉大なる仏智をひもとき転生輪廻の永遠の生命を悟って、人間らしい調和

された世界を作るとというのが本来の仏教の根本的な意味です。

私たちはこのようなことを知った時、皆さまの心の中には神の子として偉大なるあらゆる国々を転生輪廻して来たところの仏智というも

のが存在しているのです。その仏智は皆さま自身の潜在されているところの九十パーセントの意識の中にかくされており、それを具現し

永遠の生命の中の今の修行に自覚を持たれることが大事なのです。それにはまず人間は足ることを知ることです。私たちの現代社会は人

間の作り出したところの物質文明の奴隷に変わっております。お互いに歴史の中に作り上げられた資本主義、社会主義においてもその

根本は、物質経済であり、相争いながら文明社会が発達するという不調和な理論を生んでいました。いかに、皆さま自身に財産があろう

とも、地位があろうとも、この世を去る時には皆さまは、自分の愛する妻も子供もすべて置いていかなければならないのです。金ももっ

ていくことはできません。物質文明経済というものはただの生活の知恵であり、魂修行の手段にしかすぎないことを自覚しなければなら

ないのです。足ることを知り、与えられた環境の中で正しく仕事をし一心不乱に実践行為しつつ、一日一日の心の中に、恨み、妬み、謗

りの心がなかったか、あるいは心の中に思わなかったか、あるいは行動しなかったか、一つ一つ皆さま自身の心の調和度というものを、

布団の上でも好いから静かに反省し、心というものを磨いていってご覧なさい。皆さまの心は怒り、謗り、妬み、自己保存、自分の立場

ばかり考えていると、一念三千とあって、悪の一年の心は悪の世界に通じ、広い心をますます小さく狭いものにしてゆきます。私たちは

恨めば恨む世界に、あるいは慈悲を与えれば慈悲の世界に通ずることを知るべきです。一念三千の心を常に平和と安らぎの人々に対して

慈悲を与え、愛を与える生活をするならば皆さまの心の針は常に光の世界に通じ真の安らぎある皆さま自身をつくりあげていきます。病

気や色々な悩み、苦しみこのような心をもっている時は地獄の世界に通じ、心は不安と動揺をくりかえすこととなります。

このように一念三千の心を神理にそって常に調和された日々の生活をし、光の世界に常に心の針を向けた行いをする時に、皆さま自

身の心の中には神の光が燦然と入ってきます。太陽の熱・光のエネルギーは地位、名誉、経済、学識全く関係なく総べて平等に与えられ

ているのです。この神の偉大なる慈悲と愛の光を受けとめないのは、皆さま自身の心の中の恨み、妬み、謗り、自己保存という暗い想念

が曇りを作ってしまうからです。この曇りを皆さま自身は作らないことです。皆さまはそのことをよく知り常に自分自身を正道の道を通

して日々の生活をし夫婦は円満に、調和された日々の生活をするのが人類に課せられた目的であり、使命です。

神の体であるこの地球上という場は大宇宙体の中の小さな細胞にしかすぎません。この細胞こそ大神殿であり大仏殿だということ

す。皆さん自身の心の中に、偉大なる大仏殿、大神殿が存在しているのです。このように偉大なる大神殿の下に我々は、先ず人と人との

心がお互いに嘘のない生活をしてお互いに助け合う日々の生活環境をつくることによって、私たちはこの神の体である地球上も人間の心と

心の調和によった平和な仏国土、ユートピアを築きあげていくことができるのです。そのようなことを皆さまが知り、共に皆さま自身が

永遠の生命の中に転生輪廻を繰り返してきたところの皆さま自身の業というものを、修正しなければなりません。皆さまは過去を知りた

いというならば、それは皆さまの今考えていることと行っている今の姿が皆さまの過去、現在を集約した姿と
思ってください。

そのようなことを皆さまが知ったならば、我々は今このような縁により、皆さま自身、心の中に偉大なる光の息吹が、そしてこの地

上界に平和な、争いと闘争をなくしたところの万物の霊長、神の子としての真の道を実践してゆかなければいけない、ということを感じ

くのです。

このように真の仏教というものは皆さま自身の心の中に、かつては中国に生き、ある者はまたイスラエルの地において受けたイエ

ス・キリストの神理が、皆さまの意識の中に記録されています。また私たちはこの地上界に生まれてくるには決して地獄から来たのでは

ないということです。皆さまは丸く大きいひかり輝いた偉大なる神の使徒としてこの地上界に肉体をもっているのです。それも皆さま自

身はあの世において自分の両親を自分で選び、そしてしかもあの世において登録されて、皆さまはお父さん、お母さんの精子と卵子と調

和された時に、初めてあの世に通信され皆さまの意識が入ってくるのです。三ヶ月位たちますと大抵十センチメートル位の大きさになり

五体というものが形成されて参ります。その時にあの世から皆さま自身の意識が丸い大きなすべてを悟りきった生命でお母さんの腹の中

に入ってくるのです。そのために三ヶ月位になりますと、お母さんと子どもの意識が調和されないためにツワリという現象が出て参りま

す。もしこの中でツワリで困っている人があればそくざに直してあげます。

これは子どもの意識とお母さんの意識が調和されないためなのです。このようにして十月十日たち生まれてくる子どもというもの

は、親の教育、思想、環境そのものによってだんだんと育っていくうちに、偉大なる智慧、偉大なる神の力を失って人間は苦しみと悲し

みを作ってゆくのです。その地球上の善と悪の作り出された環境の中に皆さまは修行してゆかなければならないのです。その中から皆さ

まの心の中を自ら紐解き、神理の胎動（たいどう）に気づいた時に、今、自分自身の現在が大事だ、今の一秒一秒の積み重ねの中に皆さ

まの偉大なる仏智が、偉大なる神の智慧が、具現してくるということになるのです。

このように私たちは漸く三十数年間、極微の世界から極大の世界を学び、学ばなかった仏教の神理、学ばなかった国の言葉が次々と

出てくるのであります。皆さまも人間として生まれた真の目的と使命というものを果たしてこの世を優等生で卒業していただきたいと思

うのであります。たとえ貧乏人に生まれようとも、それは皆さま自身があの世で選択してきたからなのです。金があり、環境がよけれ

ば、生活におぼれ地獄に堕ちてしまうために、そうした環境を選んできたのです。自ら悟れる環境を選んできたことを知って欲しい。貧

乏だからといって決して皆さまは悲観することはないのです。皆さま一人一人の心は神の子として偉大なる智慧と偉大なる愛と偉大なる

慈悲をもっているということを皆さまは知らなくてははいけません。それだけに今を大事にお互いに手を取り合い争いと闘争の現代社会を

皆さま自身の偉大なる力によって修正し、仏国土ユートピアを作ってゆかなければならないのです。

最後に皆さまのご要請があれば私たちは自分一人でもここへ来て皆さまに心の偉大さを、そして皆さま自身の仏性を目覚めさせて行

きます。私たちはあらゆる教団からそのような要請をうけており、いつでもどこへでも行きます。そして人間はみな神の子仏の子だ、人

間はみな兄弟だということを私たちは説かなければならないのです。皆さまの中にもそのような力をもつ人がこの中にだいぶおります。

インドの当時は二万余人のアラハンがおりました。そしてその神理を説きました。我々の今のグループは約百五十数人の人たちが心の窓

を開いております。皆さまも真に自分自身の心に目覚め嘘のない生活と、自分の心に嘘がつけない、嘘のない生活を築いた時に、皆さま

の心の窓は開かれてゆきます。その時に皆さまの心の目は開かれ皆さまの目を通して現象を見ることもできるのです。あるいはまた語る

こともできます。あるいは相手の病気もすべて癒すこともできるようになります。それは皆さま自身の行ないと心が神理にそったもので

なければその道は開かれぬということなのです。



Home

高橋信次先生講演

「心の本質、宇宙即我」

1974年（S49）1月12日 G L A 関西本部

・挨拶 園頭広周先生

おめでとうございます。昨年は正法の神理に帰依させて戴きまして、高橋信次先生の御指導のもと、そして関西本部長さんを始めとされ

まして、関西本部の皆さんに、いろいろありがたい厚いご援助頂きまして、私の生涯、最良の最良の正月を迎えさして戴きました。心か

ら厚くお礼申し上げます。

昨年12月始めに行われました、九州に於ける第1回特別研修会の模様は、12月の講演会の時に申し上げましたが、更に多分、G L A 誌

の1～2月号になると思いますが、詳細が載せられることになっておりますので、よくご覧になって頂きたいと思いますが、その研修会

によって点ぜられた正法の灯は、今、爆原の火の如く九州に燃え上がらんとしております。

その研修会の席で、宮崎の世話をしておられます〇〇さんから、ぜひ宮崎で春の頃、研修会を開いて頂きたいというお願いを出されまし

た。更に鹿児島世話をなさっておられます、白石というお医者さんが、先生、ぜひ鹿児島にも早くおいでくださいというお願いをされ

ました。その願いをに入れて戴きまして、今月の27日、鹿児島市で、第1回の高橋先生の講演会が行われることになりました。

今、鹿児島市では、鹿児島市のPTA、そのほか西日本新聞社が、主宰しています政経懇和会、そのほか心霊同好会、人間学者、その他

のいろいろな団体が、全部、協賛で先生を盛大にお迎えしようということで、今、一生懸命運動中であります。

更に4月10～11日には宮崎の青島で、再び九州の第2回の研修会が開かれることになっております。そういう動きに連れまして、福岡の方

でも早く支部を結成して、組織的な活動を始めなければならないということで、この20日に関西本部から、中村事務局長と増田組織部長

先生に来て頂きまして、いよいよ支部としての正式な活動を始める、その準備の協議会が行われることになっております。

福岡でも、福岡1県を1ヵ所に集めるのは、なかなか範囲が広いので、北九州と久留米の3ヵ所で毎月、集まりをすることにしました。更に

お隣の佐賀県もありますし、また熊本でも既に支部結成の動きが出ていますし、更に年末、熊本県の生長の家の有力な方が、生長の家に

矛盾を感じてきた、是非、高橋先生のお話を聞きたいということで、最も活動力を持っていらっしゃる方が1人は風邪で来られませんでしたの

で、本当は3名こられるのが2名こられまして、そして先生のことをお聞きしてお帰りになりました。

1月27日の鹿児島市の講演が終わりますと、翌日は個人指導をお願い申し上げるわけですが、色々と東京から来て戴いて、そして

個人指導までして戴いて、先生もお疲れでありますから、ぜひ一日、〇〇の方へご招待申し上げたいということで、28日の夜は指宿

の観光ホテルに鹿児島市の方が宿をとって下さっております。その指宿市の生長の家の初代会長さんから、年末、手紙がまいりまして、

私も生長の家に矛盾を感じまして、今、活動を停止しております。先生は、GLAに行つてらっしゃるといふことではありますが、ぜひ私

も高橋先生のご指導を仰ぎたいとそう思っております、という手紙を戴きました。

そして次から次へと点じられた灯は、恐らく今年1年の間に九州全土を覆い尽くして、そうして全日本に対して大きな正法運動の火を点す

ることになるのではないかと、またそうしなければならない。そうして1人でもそこに正法を求める人があれば、そこに行つて、5人でも10

人でも集まって戴いて、そこで話をし、また隣の村に求める人があれば、またそこに行つて、そして正法の話をしそのようにして私は

今年1年、着実に努力を続けながら正法の灯を点じていきたい。それが私の年頭の決意であります。

そういう運動が出来ますことも、高橋信次先生のご指導を得て、そして関西本部長さんの、ありがたい色んなご支援を戴くことが出来て

こそ、出来ることでありまして今年1年、また皆様にも大いなるご鞭撻、ご援助を戴きますことを、お願い申し述べまして、年頭の挨拶と

さして戴きます。

ありがとうございました。（拍手）

・宇宙即私の体験

関 芳郎氏

皆様おめでとうございます。このG L A 関西本部が発足しまして、今年で3度目の春を迎えました。その3度目の春、その当時から縁に

触れて正法神理を日々の実践の基準となさって生きていらっしゃる方や、また新しくその後この関西本部に縁あってお集まり下さった

方、それぞれの本当の皆様のお心の中に宿っている本当のもの、その自分をより高めていこうとするお心に忠実に生きて下さい。

先程、井上支部長さんが皆さんにおっしゃいました。皆様、本当にそのご自分の素直な心、それに忠実に生きて下さい。それが正法の本

当の出発点です。皆様のその心こそ、本当に執われない心こそ大切なものなのです。

ここにおいでになったきっかけは、いや、義理のあるあの人に頼まれたから仕方なしに、また何となく、あそこにちょっと話を聞いてみ

ようという気持ちを持たれた方、その動機は様々であると思います。

そのいずれのどんな動機にあるにせよ、ここにこうしてお集まりになって、そして互いに寄り集まり、正法神理のお話を聞く機会を得て

いるこの事実を、しっかりと皆様のお心に問うて戴きたいのであります。ご自分のお心に振りかえって見て下さい。その時、皆様の本当

のお心は、ああ、ここに来て、こうしてよかったんだ、こうして聞いている、そのことが素晴らしいことなんだ。

その聞いたことを少しでも役に立てるように生きて下さい、と心の中でそのように語っている声を皆様はお聞きになることができるので

はないでしょうか。皆様が高橋信次先生のお教えを、この宇宙の本当の法則というものを、皆様のお心の中に、そのように発見なさるこ

とが大切なのであります。高橋信次先生がお話になっているそのことは、それぞれの皆様の心の中の奥底に既にあります。

皆様は今、新しく初めてこの正法神理を心に植え付けられるのではありません。皆様それぞれは、もう既に皆様の心の中に記憶している

はずであります。それを思い出してください。

皆様のお心の中には、既に人間はどのようにして生きるべきなのか、人間の本当の心はどんなものなのか、その日々の生活を生きるとい

うことはどんなことなのか、それは皆様が既にご承知のはずです。それをただこの世に生まれてきて、この肉体に宿ってしまうと、肉体

に囚われた日々の生活の中で、それを忘れてしまい、もうそのような記憶が既に遠のいてしまって、思い出すことも殆どなく過ぎてしま

い、それが暗闇の中の苦しみと悩みの日々であります。

皆様の心の中に宿っている本当の善なる己というものをお見つけになり、その本当のご自分というものを、しっ

かりと絶えず絶えず掴

んでいられるということが、非常に大切なのです。様々な先生方がお話になられます。そのお言葉の一つ一つが皆様に、本当にご自分と

いうもの知って戴きたい、そのことなのです。皆様は誰もが食物によって自分が支えられ生きているのではなくて、本当は自分が立とう

と努力することが大切なのです。

皆様が立とうと努力された時、本当に周りの者が、皆様のどんなに素晴らしい支えになっているかが解ります。自分が立とうと努力もしな

いで、ただ支えのみを求めている、支えはありません。常に引っ繰り返り、その引っ繰り返った苦しみにまた、ブツブツ不平を言い、

文句を言い、泣き苦しんでいる、そのような状態から離れて下さい。

機関誌 G L A 誌の1月号に記載されて降りますが、10月3日の朝、私は3ヵ月前、本当にこの宇宙は私なんだなあということを実感致しま

した。それは私達の住んでいるこの地球が本当にこれくらいの大きさに見えるのです。パアッと見えまして、これが地球かなと思って、

スーッと目を下げましたら南極がありました。あれ北極はと思ったら、北極はありました。そしてこちらは太陽が右で、左の方から射し

ておりますので、左手の方がその影になって、かげっております。ことに中国大陸とかは、ずーっとあります。日本があります。そして

右手にアメリカ大陸が光に照らされて燦々と輝いております。

最も美しく見えましてのが太平洋でした。太平洋は右手から波が太陽の光を受けて、こちら側が光っています。そしてこちらが影になっ

ています。その一つ一つのなみがくっきりと見えます。それは丁度、自分の手のひらをこうして見ているのと同じなのです。ああ、手の

平のここに線が走っているように、ああここが少し光って、こっちが陰って、こっちが光ってと、そのような本当に自分の手の平をまの

当たりに、こうして近々と見るように、こんなに小さく見える地球も、そんなにくっきりと最後まで見えるという不思議な体験を致しま

した。

そしてその時、地球を眺めている私は、それは小さい私ではなくて、地球も自分も一部ということでした。そうしますとその時、全ての

ものが自分の心の中にあるんだなということを知ったのです。それは頭では、自分の心は神に通じている、自分の心は実在界、天上界を

通じ、そして神に通じている、頭でわかっておりました。しかしそれを本当に自分の心の中にしっかりと発見できたのは、その3ヵ月前の

その体験でした。

そして本当に皆様の一人一人が一つの何の何がしたいという個体に宿っていて、その何の何がしか何のなんで、何の何子さん、それに囚

われている限りではその状況になれません。

しかし皆様は、その何の何子さんというその執着を離れることが出来た時は、大きな宇宙神というものを皆様の心の中に発見されること

でありましょう。そのことも、何か特別に修行とか、そうした一般的な荒行というものに行い得た現象ではありません。それは高橋信次

先生のお説きになる正法を信じ、それを自分の心の中にいれ、少しでも実践しようと努力し、一日一日を歩んできた結果だと思えます。

正しく見る、正しく思う、正しく語る、正しく仕事をする、正しく生活をする、正しく念ずる、正しく定に入る、八の正しい道、この八

つの正しい道、一つ欠けても満足ではありません。

正しく見ることは、

ただ肉体のドングリまなこを開いて見るということでは決してありません。いかにしてじぶんの周りの世界が調和あるように見るかとい

う事です。見る主体は皆様一人一人なのです。調和あるように見えないから、あいつが悪いんだと思うのでは、正しく見てはいません。

正しく見る主体である皆様が正しく見る為には、見る主体である皆様が調和を持たなければいけません。調和のある目で周りを見れば、

周りが調和として見られます。どんな事件が皆様を襲いましょうとも、その事件を皆様の心の栄養となさる時は、それは悩み、苦しみの

材料ではなく、皆様の心の調和を更に強めるた為の素晴らしい素材であり、素晴らしい食事なのです。皆様の一切の周りの素晴らしい食

事としてください。そして皆様の周りが本当に、どんな事も素晴らしい食事とすることが出来たら、それは本当に正しく見る事が出来

たと言っているのだと思います。

正しく見るとは、正しく外界を受けることです。正しく思うということは、外界の様々な現象と調和を持って心の中に貯えることではな

いかと思います。そして正しく語るということは、その外界に対して、心の中に貯えた調和の思いを発散するこ

とです。肉体を通じて発

散すること、これが正しく語るということではないかと思えます。発散、正しく調和を周りに与えるように言葉を使う。調和した一つ一

つの動作をしていれば、それはまた調和を持って返ってきます。

正しく見る、正しく思う、正しく語る、その循環を毎日の仕事の中に活かし、そしてまたその生活の場を超えて、より大きな社会的な場

で、その教えを身をもって実証さすことです。

この五体に限界があって、体を持って運びえない遠い所のあの人、あの哀れなあの人、そこへも調和を与えてください。私は見舞いに

行けません、あの人の体に、あの人の心の安らぎがありますように、皆様は念ずる事によって調和をこの3次元の地にもたらす事が出

来るのです。

そしてその7つの事が正しく行われて、いま常に1秒1秒、今という時を本当に調和していくのです。自分の心の調和、不動の安らぎを持

っているかどうかを常にご自分の心を見つめて下さい。一切のものにふれるたびに、直ぐにその人、あの人、この事件、あいつめ、こい

つめ、と思って目を外に向けている限り、そのような調和ある輪廻を生むことは出来ません。

しかし自分の心に、常にあのことに触れ、この人に会い、この事件に遭遇して、自分の心を“今、こうかな？”と見つめて下さい。そし

て揺るぎがあるなら、その揺るぎの原因を見つめて訂正して下さい。その方法は高橋信次先生がお説きになっております。そして更に皆

様のご理解を深めるための様々なご説明を下さっております。

その一つ一つのご説明、お話を無理することなく、無駄にしないということは、それを毎日の日常の生活で活かして戴くということ

す。

では皆様、今年1年、更に日々をこのように八正道を実践し、皆様の心を高めて、そしてこの社会の皆様が在る環境の中で、皆様が本当に

生きていて素晴らしい、周りからも思われるような人になってほしいと思えます。

おめでとうございます。もう古い方は何遍も自分を愛するという方法は、どんな方法かと言うことを聞いているし、多分実行しておるの

ではないかと思っております。

新しい方は、一体自分を愛するということは、どんなことなのかというと、今まで皆さんが話して下さったから、自分をきっちりと知る

ことである、自分を確立することなんだという事を話に伺いました。

けれども去年1年を見ましたら、色々な皆様の諸問題を聞いてみますと、本当に自分を知らないなということを感じたします。

先生、体が痛くなりました、どうしたらいいでしょう。うまく仕事がいけないんです、どうしたらいいでしょう。そのような質問だけが

返ってきます。私達は、どうしたらそれを直すことができるのかということをお話してははずです。けれども皆様は直ぐ頼りたがりま

す。それは本当に自分を知らないからです。

先生、胃が悪いんです。もうあなたの胃は悪いですよ。食事に気をつけなさいよとということを前々から、その方に伝えてあっても、今

日も九州から胃潰瘍らしいんですけど、どうしたらいいでしょう。入院したらいいでしょうか、悪いでしょうかという電話が入りまし

た。その方には、既に1年半前に、あなたの生活は非常に悪です。自分の体の中身も知らないで暴飲暴食していたら、本当に自分自身を失

ってしまいますよという事を、もう一年半前に伝えてあります。けれども一年半たった今、どうしたらいいでしょうかというお話を受け

ます。

私達は自分の肉体は親から貰ったもの、丈夫な人あまり丈夫でない方、それぞれの遺伝があります。けれども本当に自分自身を知ってい

たら、自分をどのようにしたら健康を維持できるであろうかという事を、しっかりと皆様は考えている訳です。けれども胃腸が悪いの

に、お酒を飲む、いや消化の悪いものを食べる、神経を返って使い過ぎる。本当に使わなければいけない所を使わないで、ぐじぐじとし

た神経を使う。そして血圧の高い人は、くだらない事にぐちぐちと、目に入るもの一つ一つをぐちぐちと言う。言うから心に障る、心に

曇りが起きるから血圧が上がる。そのように自分自身が自分を苦しめているのです。

本当は自分が自分以外に人が知るわけは無いのです。自分の神経がどれほど緊張しているのか、どれほど自分の神経が病んでいるのか、

過保護にしているのか、皆、自分が知っているはずですが。けれども皆さんは、意外に自分自身というものを知らない人が多いのです。

本当に自分を愛するなら、自分が今やろうとする事を、きちっとやるべきです。今、胃の悪い人が不消化の物を食べたら悪いという事

は、頭の中だけで解っているから、行動に移すことが出来ないのです。お酒を飲んでいけない人が、まあちょっと、まあちょっとのルー

ズさが自分の体を本当に最後には崩してしまう。そのようなことを見ていると、皆様は自分を本当に愛していると思っている人々が、却

って過保護にし、自分を墮落させているということを痛感します。

こうしなければいけないという事が解っていながら、それをなさずにその時を逸してしまっ、後になってどうしたらいいであろうかと

相談にきた時には、本当に遅くなっていて、ああ可哀想にと思う以外に仕方がない時があります。

そのように皆様、今という時をしっかりと考え、自分自身がこうしなければいけないと思った時には、自分自身をしっかりと見つめ、その

方の行動に直ぐに移して戴くことです。私は肩が張ります。肩が張るにはその原因があるはずですが。その原因が分っていながら、"それ

は分かるんです、けれども..."と云ってそれを直すことを知らず、そういう方が非常に多く見受けられます。

私達は親から貰ったこの五体を、生命のある限り持っていなければ、この地上界で修行することは出来ません。いくら太陽が無所得で光

をくれても、私達の肉体を維持する私本人が自分自身をしっかりと管理しなくて、誰が私自身を管理してくれるのでしょうか。

自分の心を人に売ってしまっていてしまっているような人、人の人生を歩んでいる自分、一体これは、自分を愛していると言えましようか。

あの人がかう言ったから私はやっちゃった。あの人がかう言わなければ、私はこちらの道を進んだのに、そういう声をよく聞きます。

あの方はG L Aの人だから大丈夫だと思った。そのようなことをよく聞きます。G L Aの人であっても、それぞれの諸段階を経て、自分

がよくなろうと努力している過程の人間であるという事を、まず始めに知ってほしいと思います。G L Aの方は全てみんないい人なん

だ。みんな人々はそれぞれ良い点を持ち、良い特徴を一人一人見たら、とっても良い人が多いのです。全て皆さん、ここにいる人々は1対

1で話したら、いい人がとても多いのです。

けれども集団になった時に調和が出来なくなる人、集団になった時、一人で勝手にその輪から外れてしまう人、

自己主張をする人、その

ような人々が出てきます。一体どこで、それは脱線しているのでしょうか。

それは自分というものを、しっかりと知らないから、自分の目の前にあるものを避けて通っているからです。自分の目の前に来た夫々の

諸事項をしっかりと見つめる目、そのような目、そしてそれを思う心、そういうものをしっかりと持っておられる方は、いつ何が来よう

とも、これはこのようにすればよいのだ、じゃ今からこのようにしよう。こうすればこの事態はすぐに解決することが出来るのだ。じゃ

このようにしよう。

思いと行動が一緒になるから解決が速いのです。憂いている人に限り、あれはどうしよう、これはどうしよう、誰かしてくれないかし

ら、人待ち顔でいるから、段々と遅くなってそれを逸してしまう人が多いのです。

私達はこの太陽が と与えてくれる素晴らしい無償のもの、これを見た時に、私達が親から貰ったこの五体、全て愛なのです。この五体

は皆様が全てお持ちの肉体は、私達全て愛の形なのです。

それは私が去年の12月の第1土曜日の時に、クリスマスって一体、何だろうな、そのように思いました。その時、イエス様がポツとおいで

になりまして、クリスマスというものは形じゃないんだよ、あなた自身だよといわれました。私とクリスマスと、どういう関係があるん

だろうなと思いました。その時に色々なことを教えて戴きました。

その中で、愛とは私達肉体の全てだよといわれました。私達肉体の全ては愛の形なのです。あなたの右腕の支えが、そして自分の足で歩

む事、みんなとの調和が、自分自身の優しい言葉が、そして無償で出来る私達の肉体が、全てが愛なんだよ。そんなに形作るものではな

いんだよ。太陽が無償で私達に素晴らしい慈悲をかけていてくれるのと同じように、神は私達に五体という、愛の全てを造って下された

のです。それを使うか、使わないかは、あなた達自身にあるだよ。そう言われました。

ああクリスマス、私達自身はこんなに素晴らしい愛の形を持っているのに、何で出し惜しみをしていたのだろう。塵が落ちていたのを足

でポンと蹴って、気にしながら通り過ぎて行った自分、なんて愚かな自分であったのかな、そのように思います。

私達に生命があるのと同じように、草や木にも生命があるのです。去年1年かかりまして、ある商売の方が、花の精を、先生出して下さ

いとそう言われましたので、色々花の精とお話しました。

これがその時の花の精の話を要約したのですが、この方は自分自身の商売を、先生正法とどう結び付けたいか、考えました。そし

て、私は服を作る仕事をし、花の浴衣を作りたいと思います。その花にはそれぞれ精があるんだという事を先生は前に言われましたの

で、一度、花と対話して下さいと言うことで、ここにある何点かの花と対話しました。

その時に、私は素晴らしいことを感じました。私達よりも花の方が、よっぽど素晴らしい心を持っている。私達が勝手に踏んでしまって

いる草木にも、それぞれ素晴らしい心を持っているんだ。私は罪を作ったことがないと言われる方は、そのような草や木の素晴らしい心

を踏み付けた事がないのですか？私は反省することがないと言っている方に、自然に感謝したことがありますかと問いかけてみたいので

す。

ここに出ている一番向こうにあるのが菊の精です。これは菊の精を見たことがない方が書いて下さいましたので、非常に私に似て、横に

太くて、ちょっと縦に短いようでございます。本来は30cmつらいの身長です。そしてとても可愛いのです。色々お話をします。自分達

がどういうにしてほしいのか、そして自分から見た人間は一体どんな人間であるのかということを書いていますので、読ませて

戴きます。

ここに書いてありますこれが菊の精です。私達は中国に生まれ育ち、強い風や砂嵐にも負けず大地にしっかり根をおろし、仲間を増やし

ました。私達は何事にも耐えることを知っています。耐えるから希望が生まれるのです。人間は偉大な創造力と実行力を持っているの

に、愚かな人々が多いですね。そのように言われました。いかがですか、皆さんは？

何事にも自己本位にしかものを考えず、感謝の心を忘れていますね。私達は自然のままに生きることで、世の中を美しく飾り、調和と安

らぎの環境を造っています。それを無情にも、むしり取って 見ない人がおります。人間も花のように美しい心になって下さい。そのよ

うな伝言を受けました。

そしてここに書いてあるのは梅の精です。梅の精は丁度、平安朝のような着物を着ておりました。そして薄い透けて見えるような軽い上

着をはおっておりました。とても髪が長くて可愛らしいのです。私のところに来た時には、赤い服をちゃんと着まして、梅の小枝を肩

に当てて、可愛らしく出てきました。おお可愛いなと思って見せて戴きました。

そして梅は、私は中国で生まれています。本来は、梅のいい使命があるのです。私達は花の少ない季節に花を咲かせ、皆様の心を和ませ

ております梅の実には血液の浄化に役立ちます。盆栽に育てられましたが、私達は広い場所に育つことを本命とします。季節に葉を着けて

も、せっかく着けた葉をもみ取られてしまって、季節感が錯覚されることがあります。でも私達は耐えるのが本性ですから、命ある限

り、精一杯咲かせます。花の盛りがすんだら、花を取って休ませて下さい。小さな中で育っているので、来年花を咲かせるのに、花をつ

けやすいからです。

自分が、どんな小さな環境でも、またその花を取ってほしい。また来年花をつけるための力としたいから。というように、もう私です

と、あの人が、梅の花は来年もまた、皆んなに、多くの人の為に、梅の実をつけて血液の浄化を ーり、人間に役立ちたいから、済んだ花

は取ってほしい。そのように申しておりました。同じように、やはり背は殆ど30cmくらいの慎重でございます。

ここに出ているのがカトレアの花です。カトレアの花の精は東洋産と西洋産のかけ合わせで、人工的に造られているのが今の品種だそう

でございます。私達の故郷は南国の島々、島の若い娘さんが恋人と愛を囁く時、彼女の髪の上に美しく咲いて、その愛を見守るのです。

しかし生命の灯は、はかなく数時間も経てば無残な姿をさらし、スコールに朽ち果ててしまうのです。それでも決して悔やみません。ま

た人々の愛の調べと共に、花咲く時が来るからです。私達の根は高血圧に良く効き、体から出るエキスは血を綺麗にします。そして私達

は人々と共に、地上の楽園を夢見ながら生き続けているのです。

というように、カトレアの精はカトレアの花を一輪、髪の上に飾りまして、その花びらと同じようなお洋服で、とても可愛らしく長いお

洋服で出て下さいました。

そしてここにあるのが水仙です。水仙は丁度ここにある絵は、ちょっと間違っているのですが、本来は洋服の姿で、私はこれほど気

品に満ちた水仙を、今までとても知らなかったのです。水仙というのは、どこにでもありますので、それほど気品に満ちた姿があると

は、水仙の精を見守るまで知りませんでした。

でも一輪の水仙を見た時に、ああとても綺麗だなあと思うのは、この水仙の精を見てからです。とても気品が高く、とても綺麗な姿をしており

ました。ちょっと、おすまし屋さんでございます。ギリシャ神話でよく知られるように、ナルシスは池の面に映った自分の姿に恋をし、

その恋につかれて一輪の水仙になったといわれております。

古代の人々は、それを自分の魂であり、自分の体から抜け出した死の前兆だと考えていたようです。私達の歴史はそれほど古く、故郷は

地中海沿岸、そして八重咲き、口紅、ラッパ水仙などの同族でも、姿、形が違います。初々しい花模様は早春の足音を告げ、茎から取

った液は、腫れ物や婦人病によく効きます。一輪の花に託し、私達は恋に愛に生き、人々に希望と健康を与えたいと願っています。いつ

も調和の心で影を作らないようにしようというようなお話です。

そしてこれはシクラメンです。シクラメンの時には、とても感じたのですが、あの小さいものですから、ピョコピョコ動き回りながら、

色んな動作をします。丁度、私達が小さい子供がいたずらをしているような姿に、とてもよく似ております。そしてその時、東京ではシ

クラメンというのが非常に珍しかったんですけれども、シクラメンの話を聞いた時には、よその外国ではどこににでもあるんだという

事を教えて戴きました。地中海地方の野生育ちで、花も大きく繁殖力も強く、根強い花です。

一握りの土と、少量の水、太陽の光さえあれば、バラのような真赤な色、鮮やかなピンク、ソフトな白の花びらを咲かせることが出来ま

す。日本の温室に育つようになってから、私達は自然の姿を失い人工的な姿となりました。そして体質も変わったようです。心ある人は

太陽の光を当てたり、水をやったりして自然の姿を取り戻します。自然の恵みから遠ざかると、次の希望を失ってしまいます、私達を精

一杯動けるようにして下さい、そのように花は言っております。

チューリップも同じようでございます、花は今お話したように、私達人間に貢献することを非常に喜びとしております。けれども私達は

その花々に生命があり、そして命を捧げる時に、やはり悲しく思うそうです。手を触れた時には、とても怖く感じますでもそれが私達の

役目であるならば、私達はそれは いませんという事を聞きました。そして今はとても育ち難くなりました。周りがコンクリートになっ

てしまったので、地下水が非常に少ないのです。そして照り返しが強いので木を長持ちする事が出来なくなってきましたという事を、と

ても嘆いておられました。

そのように私達は、自分だけが生命があるんだ、自分だけが立派なんだと思う割には、小さなものへの愛を忘れてしまたんです。

そのようなことで、今日はお正月でもありますし、皆様に花にも、そして木にも、全てのものに生命があり、私達と同じように生き続

け、そしてお互いが相互の関係を持って、この地上界を素晴らしいユートピアにしたいと望んでおるということを、皆様に知ってほしか

ったんです。

そしてまた皆様は小さな頃のように、ガリバー旅行記にも小人の国と言われるようなお話があり、不思議の国のアリスというお話があ

り、親指姫というお話がありそのようなお話の中に、やはりこの小さな精達(妖精)がでてきます。

もし私達が小さな国に行ったら、どうであろうかというように、霊視が出来なくても、現実のものを、書き物を書くという一念から、そ

ういうものがあるのよという事を教えてくれた先輩方々のお話の中からとってみても、ああ本当だな、それぞれの生命は自分達だけでは

なく、多くのものにあるんだな。大人の私達は小さい子供を可愛がるのと同じように、全ての自然界を慈しみ、自分自身と同じように生

活していったなら、これは全て調和の世界へと繋がって行くのです。

ただ悲しいことに、そのお話の中で、ピンクの梅の花に、白い梅の花を接いだ木を見ました。これはとても可哀想な光景でした、右の片

腕の所から違うものが出ているのです。足の所から違う木を接ぎ木してあるのです。その姿は醜く、私の見るのに耐えられませんでした

た。接ぎ木するのは人間が勝手にしているのです。もし私達の五体の足を切って、動物の足をつけられたら、一体私達はなんと考えるで

しょうその姿を見た時に、もし盆栽、いや自分の家の花をあまり気にしなかった人々は、動けない花に優しい愛の心を持ち、もう一度、

自分の家の樹木や、そしてそれぞれの木を、もう一度見直し、ああ悪かったなあ、これから共に生活しようよという自然を取り入れる心

を、もう一度芽生えさせていたいただきたいと思います。接ぎ木というのは、それは哀れな恰好です。

そのように自然であるように、私達はそれぞれの大きなもの、小さなものを慈しむ心を、心の中にしっかりと受け止めていきましょう。

でも大きくなったら、先生、刈ってしまうのは可哀想ですから、うちの芝生はぼうぼうとしていますと言われる事を前に聞きましたが、

これはいかがでしょうか。皆様の爪が、髪の毛がぼうぼうとしていたのでは、皆様は気持ちが良いでしょうか。鬱陶しいでしょうか。

その辺は、よく皆様がしっかりと自分の心に思うこと、はっきりと見て確認して、それをご承知を願いたいと思って、今日のお話を終わ

りたいと思います。どうも有り難うございます。

ここでお話をされている高橋先生の奥さまの一栄氏は、お釈迦様の時代はマイトレーヤ、(ミロク)と呼ばれお釈迦様の身の回りをよく

見られたそうです。お釈迦さまを薬師如来ともいわれますように薬草園を持たれ、草花に特に造詣が深く、周辺におられた一栄氏ならで

はのご講演でしょう。

Home

心の本質、宇宙即我 高橋信次先生

おめでとうございます。ようよう私達も全国的に人々の心に、普遍的な法灯を点ずる機会がまいりました。しかしあまりにも永い歴史の

中に、しかもまた我々の生活の中に食い入っている現代宗教というものと、必ずや我々の正しい神理というものに対して賛同は得られま

せん。

勿論この中にも約70~80人近くの方は、初めて聞く人達もおりますし、その上に否定的な人達もおります。

皆さんは信仰というものに対しては、お経を唱げる、或いは祝詞(のりと)を唱げる、賛美歌を歌う、我々の信仰対象としてあるもの

は、曼荼羅や或いは仏像、その他の偶像、特に地方地方にある神社仏閣、そういうものを一生懸命に拝むこと、これが信仰深い、このよ

うに我々は今までは思っておりました。

しかし神の実態、祀られているそのものの実態というものを殆ど確認することが出来ぬまま、神様というものは遠いところにある、我々

の望みを全てかなえてくれるんだ。

しかし、やればやる程、疑問を持ってくる。所がその疑問を自らして回答得ずして、貧乏したり病気をすると、

やあこれはもっと拝まな

くてはいけないのだ。或いは人伝えに私達の信仰しているこれをやれば治るよ。このようなものを、こうして祀れば治るよ。或いは拝屋

さんの所へ行きます。先祖3代前の方が三代前と言うとバレてしまうから、大抵五～七代前と言っておけば分りません。まあ七代くらい前

の先祖があなたの所に憑いている。その為には先祖を供養しなければ、あなたの家は救われない。まあおおかた、そんな所で騙されてし

まいます。

或いはまた病気を治す為には50万円を積みなさい、あなたの家の生活だったら50万円くらいは大丈夫だ、それを教団に喜捨する事によっ

てあなたは救われるんだ。ある者はまた、あなたの家の財産を全部あげなさい。あげたときには救われるでしょう。すぐ人間というもの

は、ドタン場にくると溺れる者は藁(わら)をも掴む。遂に段々と泥沼の中に入って目覚めた時には、もうあの世行きという事になります。

神はそのようなことを一つも約束しません。

我々は他力本願によって救われる道はないのです。何故なら、私達がこの地上界に肉体を持って出てくる。そして我々が全て生活できる

環境そのものは、神は全て用意し、我々に無償で提供してあるからです。まず我々はこの地球上という場に肉体を持ってしまうと、その

ように盲目化してしまうのです。

私達がこうして講演に、関西にも三年、東京方面にも五年近くやっております。うん、また同じ話をしだしたな。所が昔から信仰してい

る人達、例えばひとつ般若心経をとってみても、毎朝毎晩、観自在菩薩行深般若波羅蜜多、唱げております。あるものはまた、1万遍、

と唱げております。

これを日本語に翻訳したら、どういうことになる。爾時世尊 従三昧安詳而起 告舍利弗、その時、世尊釈迦牟尼仏は立ち上がって、そ

して舍利弗に告げました。同じことを、同じことを言っております。

更にまた念仏の如きは、南無阿弥陀仏、ナムアミダブ ナムアミダブ... 、やることなすこと、ものを一つ取っても ナムアミダブ ナ

ムアミダブ... 。南無阿弥陀仏ということは、一体、皆さん、どういう事ですか。これはインドの言葉です。ナーモアーミダーボと言う

ことです。ナーモといのは仏に帰依するという事です。直訳してしまったら、“神は仏様に帰依します、私は仏様に帰依します...”。あ

いつパーじゃないか。それを何となく外国の言葉と日本の言葉でミックス(m i x)しちゃって南無阿弥陀仏と言ったら、あたかも立派なよ

うに思えます。

更にまた南無妙法蓮華經、日蓮はご丁寧に南無までつけた南無阿弥陀仏と法蓮華經をくっつければ、もっとよくなる。

南無阿弥陀仏、その上をとって南無妙法蓮華經、これも1万遍あげれば人間は救われるんだというんです。その中で救われた方がおります

か。世界中でそんな人は一人もおりません、錯覚を起こしているだけです。

法蓮華に帰依する。法とは宇宙の神理。我々の肉体というものは、あの泥沼の中より汚いものである。目を見れば目糞、鼻糞、耳糞、体

から出る一切のものは泥沼よりか汚いものだ。あの泥沼の中ですら美しい蓮の華が咲くのではないか。あの泥の中に咲いてる蓮の花は美

しく調和している。穢れがない美しいものだ。我々の心もまた、例え汚い肉体舟の中にあっても、宇宙の神理を己の心の物差しとして生

活をしたならば、あの蓮の華と同じように安らぎのある調和された境地に到達するのもである。

本来はそのようなものを簡略してしまいまして、中国から日本にくる間に“妙法蓮華經”と変わってしまいました。法蓮華經、それ

をしかもご丁寧に曼荼羅までさげて拝むようになってしまいました。皆さん、曼荼羅というものはデコレーション(decoration)ならよろし

いです。飾りものならいいでしょう。しかしそういうものが拝む対象ではないのです。南無妙法蓮華經、南無阿弥陀仏の神理を、即、生

活の中に活かした時に、始めて仏教と言えるのです。

現代仏教は、殆どそのように他力化し、そういうものを拝むことが信心という間違った方向に進んでいる姿は、もう既に末法であり、そ

れ故に現在、社会の経済問題を一つ見てもそうです。去年の九月から十二月頃の間には、日本に大騒ぎを起こして、石油、石油、

石油危機、エネルギー危機と言っているけれど、実際は7300万リットル、これだけのものが入っているのです。一昨年12月の状態と調

査すると、約22%多く輸入されて入っております。今年の1月から2月の間に於いても、予定が5600万リットル、それが7600万リットル

入っているのです。

所が、足りない、足りないと言うと人間はみんなその気になってしまうのです。ここに我々は、人間が本当に足りることを知り、消費者

が真剣に自分の生活を擁護するならば、そのような物価値上げはしないのです。みんな我々は心を失い、目先の欲望だけに囚われて、本

当の自分を忘れているのです。トイレット・ペーパーにしてもしかり。実質的に去年よりか増えているものが、足らなくなることは、こ

れいかに。ところが大企業の方面をみて、去年の9月期を見てごらん下さい。480億近くの利益をあげているのは日本製鉄、ところが鋼材

は足りません、どういう訳です。電力会社も400億、300億と儲けていても、電力料を値上げしたいと言っております。

これは人間が本当に、我々日本人が真剣に考えるべき問題です。こうして人間自身が、ただ儲けよう儲けようとする欲望、これが結局は

自分の首を締めてしまうのです。今年の3月、4月、5月の間に、またゼネストが始まります。お互いにインフレーションに対し、給料値上

げを要求する、首をしめることは当然なことです。

現代社会を本当に救いうるものは物質ではありません。経済ではありません。その証拠には現在、田中内閣の総理大臣が南東アジアへ行

っております。日本で面倒見たはずの南東アジアから総スカンを喰っているのは、これいかに。

アメリカが日本をここまで育ててくれた。経済力によって南東アジアを育てた。所が総スカンを喰っているのは、どういう訳でしょうで

しょうか。人間の心の本質を知らないからです。日本人は経済の力を持って南方に行く。タイ国あたりに企業を作ると、自分の日本国民

という優越感にかられて、その国の人々との対話がない。独りよがり、自分さえよければいいというエコノミックアニマル(economic

animal)、当然なことです。

こうして文明の上に胡座(あぐら)をかいている所のアメリカも、日本人も、外国から批判される原因も、やはり肝心要(かんじんかな

め)な人間としての心の本質にあるのです。我々は特に戦後に於いて、人間としての正しい生き方の道を教えているところはありません

ん。身を修める修身というものの教えもありません。

人生とは何んぞや。人間は何の為に生まれ、年を取り、病気をするのか、こういう重大問題も解らなくなっております。解らない人達が

求める宗教は、むしろ阿片です。人間性を失っていきます。そこでまず我々は、神というものはどういうものだろうか。人間はどうしな

ければいけないのか。あらゆる角度から検討してみましょう。

まず我々の住んでいる地球という場、その地球というものも71%は水圏...太洋・湖沼...水です。表面に出ている陸地というものは僅かの

29%不足です。その中に30数億の人間がひしめいております。自然は全て調和されるように出来ております。その調和されるべき自

然を破壊しているのは、人間全ての欲望です。

正しくものを見ることが出来ない。それによって公害を撒き散らしている事実、我々はこの結果が、日本沈没だとか、最近それに予言書

が出ております。それも解釈の仕方によって180度違うような予言書がベストセラーになり、人間はそれだけ心の淋しさを、危険を察知し

ているからああいうものが売れるんです。

我々は他人事ではありません。先程、関先生が宇宙は自分だと言いました。その通りです。仏教の言葉の中に宇宙即我という言葉があり

ます。この宇宙即我というのも、皆さん自身が偏らない中道の道を実践して、自分自身の心の中にある所の偽りの偽我と、本来持ち合せ

ている所の善なる真我、神の子として己に嘘のつけない善なる心、この二つのものが共存し、偽りの我を無くすためには八正道という

本当の仏教の根本原則を実践し、心の物差しとして生活したときに、始めて自分自身というものが、光子体ということが解ります。

皆さんの肉体と共存している光子体を図解しますと、このようになります。この光子体はこの肉体と丁度調和しているのです。これは離

して書いてありますけれど、一体になっております。これは、お父さん、お母さんから貰った、この地上界の原子細胞によって精成され

た肉体舟です。今の眼で見える所の肉体であります。この肉体舟とこの光子体は共存しているのです。

物質に対してエネルギー、この物質に対するエネルギーという問題は、私達の物理学上においても説明されており、実証されておしま

す。物質というものは、宇宙空間に体積と質量を有するものを物質と言っております。この物質は我々の見える光の速度、即ち光という

のは 299,774km / sec (約三十万キロ)

という物凄いスピードです。光の速度は地球の周りを1秒間に7回り半します。その7回り半した光の速度を2乗したものと、物質の質量と

の積は仕事をなしうる能力である、エネルギーとっております。

$$E = m c^2 \quad (E ; \text{エネルギー} - m ; \text{質量} \quad c ; \text{光速})$$

このエネルギーの次元というのは、我々は現代、エネルギー危機、エネルギー危機といっているが、エネルギーを目で見た人はいないん

です。物質は目で確認できても、エネルギーは目で見る事が出来ません。

こうして次元の違った世界というものは、我々の住んでいるこの三次元の世界に対して、三次元を包んでいるところの四次元以降の世

界の存在という事なので、四次元以降の世界と三次元の世界が共存しているという事実は、皆さんが日常生活の中で、テレビジョンや映

画館のスクリーンに映し出されている映像を思い出したらよく分かります。映像は二次元の世界です。二次元の世界に映し出されている

ものは、三次元の世界から投影されているものです。その投影しているものに対して、我々はその映画のスクリーンに対して、どんなに

可哀想な映像が映っていても、私達はそれに加勢することが出来ません。同じように、我々は次元の違った世界との関連も同じようなこ

とが言えるはずで

物質の世界エネルギーの世界が違うように、我々自身は、仏教では、“色即是空 空即是色”という言葉を知っているでしょう。天台

智顛（てんだいちぎ）という中国のお坊さんは、“色心不二”とっております。色心不二というのは、心の世界と皆さんの肉体は一体

であって別でない。かように二つのものが常にこうして調和して、我々の今があるのです。

我々は、こうして宇宙体というものは、我々のこの三次元の世界そのものが宇宙体であり、神の体であり、その神り体の現れでありま

す。

先程、肉体は愛の表現であり、愛そのものの姿こそ肉体だと言っておりました。その通りです。我々のこの原子細胞から成るこの肉体

も、実はもう一つのエネルギーとも言うべき、生命の本質とも言うべき光子体に包まれて、皆さんの肉体は今、同体になって存在してい

るのです。

親から貰った肉体は、いつの日かこの地球上へ、そして我々は自分の肉体から抜け出して、その肉体から出ている霊子線ともいうべき、

光のドームの中をやがて帰っていくのが、こちらの肉体なのです、光子体。ですから皆さんはいつでも、あの世に行く準備が整っている

のです。いつでも死ぬことが出来るのです。我々は死んでしまえば、肉体がなくなるから、全ては無いのだと錯覚を起こしているだけで

す。皆さんの心の窓が開いたら、この事実がはつきと解ってまいります。

我々は、心の美しい正道を心の物差しとして生活している人達は、自分の肉体から光子体が抜け出していきます。しかもまた、この光子

体は抜け出さずとも、このもう一人の自分は、でかくなっていきます。そのときに地球が手の中に入ってしまうわけです。

皆さんは孫悟空の話聞いたことがあるでしょう。天竺（てんじく）に経典を取りに行った時に孫悟空は活躍します。彼は、世界で自分

があらゆる戦力を持っていると思いましたが、彼が増長慢になった時、世界の隅まで行って来たと思ったら、観音様の手の中にしか居な

かったということを知っているでしょう。これも同じなんです。人間みな神の子であり、そして神と同体であり、神と同じ肉体を持って

いるのです。

しかもその中で、個々の生命としての特徴を持ち、個性を持っております。そして我々は地球というこの環境に適応した肉体を持って

今、生きているのです。

そして今、物質的に恵まれた生活をしていようと、或いは経済的に非常に厳しい環境に生活している人達も、それぞれ皆さんに今、皆さ

んの魂の、即ち原子細胞の肉体の支配者である光子体の中心にあるところの皆さんの心、皆さんの魂を豊かにする為の学習の場なので

す。その体験を通して、より豊かな自分自身を造っていくことが大事なのであり、決して私達は他力的な法蓮華経、南妙法蓮華経や、或

いはまた南無阿弥陀仏を唱えることによって、その人の心が豊かになるのではないのです。

大事なことは、皆さん自身の心の中の、思うこと、行うこと、これを自分が偏らない中道の道を根底とした生行為の中に、豊かな広い心

を作り出すことが出来るのです。

まずそこで、我々は、先ほど申し上げました物質経済、そのものに翻弄されてしまうのでしょうか。まず皆さんがこの地上界に出てきた時

に、お金を持ってきた人がおるのでしょうか、曼陀羅を持ってきた人があるだろうか、偶像を持ってきた人があるのでしょうか。

持ってきた人は誰もありません。我々は裸だったんです。そうしてまた、色々な対象物、信仰の偶像を持った人達も死ぬ時に持って帰れ

るのでしょうか。持って帰ることは出来ません。但し意識で持って帰った人達は、あの世において、自分自身かなぜ持ってきたのかとい

う、大きな執着、苦しみを持ってあの世へ行きます。

我々は皆さん、三途の川というのを聞いたことがあるでしょう。あの世にはあります。これはこの地上界で体験してきた所の、大きな執

着を捨てて流していく場所なのです。そのために執着を捨てて向こうの彼岸へと、これをお彼岸と言っているのです。

こちらの岸からあちらの岸へ、我々は自分の大きな荷物を捨てて行きます。それは皆さんの現在生活している中で、その執着というもの

が、どういうものであるか、それは皆さんは今、皆さんの、あの世から帰って来いという帰還命令、即ち、死を宣告された時、皆さんは

今、何を考えるでしょう。

皆さんが死という自分自身が大きな転換に直面している時の皆さんの心、思っていること、為している問題を真剣に考えてみて下さい。

この中で、今すぐ死ねるという覚悟のある人達がありますか。残念なことに一人もおりません。但しその状態になって、ああ私は何もい

らぬ、捨て去る人は大分おります。心の綺麗な人達からは、一人一人がちゃんと後光が出ております。しかも生と死という大きな問題に

ぶつかった時に、今、自分の心がどうであるか、皆さん一回想像してみたらいかがですか。人間の死というものは、いつ襲って来るかも

分かりません。人間は毎日毎日が、一日一生の心構えが必要なのです。そして明日があるなら、よりまた今日より豊かな自分自身を造る

ための生活行為が大事なのです。

八正道という心の物差しを持って、このような生活をしている人達こそ、本当の信心深い人達なのです。あらゆる宗教を体験し、その中

で、疑問、疑問、疑問だらけの中から、その泥沼の中から抜け出した人達は、必ず私の説いているものを真実だと認めるでしょう。

我々はこうして、人間の普遍的な偉大な神の子としての自覚を訴えているのです。それは自力なのです。当然、自力によって自分自身

の心というものが満たされ、感情も知性も理性も本能も、全てが円満調和されている状態になりますと、執着がなくなります。執着がな

くなれば、より以上に物質も経済も、あらゆる面が調和されたユートピアが完成されていくのでしょうか。それが普遍的な人間の心という

本質が分からない為に、欲望だけが表面に出る。これが闘争と破壊であり、あらゆる物質不安定の根底になっているのです。

人間が普遍的な偉大なる神の子としての自覚、豊かな円い心を自分自身が造る以外に、現代社会の人間の本当の調和はありません。そ

れは神がするのではなく、皆さん神の子である己自身が、五感を通し、煩惱即善提としての自分を完成させる以外に、地球上、仏国土は

完成されないのです。“まやかしもの”ではないのです。

今、私の説いている神理は、既にこの地上界始まった時から同じことを言っているのです。遠く1万年前、私達はアトランティスにおい

て多くの人々と共にユートピアを造ったように、更にまたエジプトに、或いはインカに、そしてまた中国に、インドに...、人間の真の心

の道というものは普遍であり、新しいとか古いとかいうものが神理ではないのです。永遠に変わらないものが人間の心の物差しでなくて

はなりません。

こうして自分の豊かな心になるに従って、私達は自ずから我々の心の中から作り出した所のスモッグが消えていきます。消えていきます

から、こちらの光の肉体は大きく膨れ上がっていくのです。この時に“宇宙即我”という境地になっていきます。

皆さんが心を落ちつけるためには、まず自分の心の中に偽りがあるかないか。自分の感情に乱れがないか、乱れたとしたならば、どこに

原因があるのか。本能の面に於ける欲望が大きくデフォメーション(変形；deformation)を起こし、膨らんできた。何故だ、その原因はど

こにあるのか、その根っ子を取って、自分自身が成長していく。病気をした、病気をしたら、その原因はどこにあったか、自分の生活の

中で暴飲暴食、或いは肉体的な過労、或いは精神的な面、このような病気の原因を追求して行って、始めてこういう馬鹿な事をしたから

肉体の調和が崩れたのだ。この肉体の調和を崩す原因は何処にあったのかという事を、皆さんが発見しない限り、皆さん自身の魂は進化

しないのです。人任せでは困ります。自分自身なのです。悪くなければ、悪くなった原因がある筈です。その原因の根っ子を取り除かな

い限り、皆さんは前進をしないのです。

永い歴史の中に人類は、そのように一つの物に固定化された他力本願という、冥土の沙汰も金次第式な間違った方向に、人間の肝心要な

心を教える道が狂ってしまったのです。神は我々の遠い、祀られた神社仏閣にあるのではなく、皆さん自身の心の中にあるのです。しか

し皆さんは偉大なる万物の霊長としての、豊かな自分自信を持っているのです。

正法者の心構え

こうして我々は、心というものの豊かさは、即、皆さんの後ろの後光が大きくなっていくから、始めて宇宙即我、自分自身は神の子供だ

ということを実感するようになります。そして皆さんが、もう一人の自分が抜け出していく時には、これはこれは、大変なものを見る事

が出来ます。

我々は今こうして、心を調和して抜け出していきますと、飛行機に乗れば飛行機代がかかりますが、お金は一銭もありません。そうして

あらゆる所を見て来ます。皆さんが、早く真剣に、自分というものの執着を勇気を持って取り除き、正しい毎日の生活を実践していった

ら、お金をかけないで自由に世界旅行が出来ます。世界旅行ばかりでなく、あの世へ行って見てくる事が出来ます。

このようにして、我々はただ決して新しいものを今、説いているのではなく、皆さん一人一人の心の中に、永い転生輪廻の中で、この体

験を、この記憶を、皆さんは誰も持っているのです。

しかし我々の肉体の先祖を通して作り出してきたところの神社仏閣、こういうのもを否定してはいけません。何故ならば我々の先祖は、

そのようなものが正しいんだと思ってきた。そしてそのまま、あの世へ帰った人達は、その環境で生活しているからです。もう私は神理

を聞いたから、もうお寺も神社も行かん、もうお墓へも...、あれはただの人生航路の乗り舟が廃品になっているのだから、もうあんな所

へ行く必要がない、それは危険なことです。

何故ならば、我々は知らないでいること、生命が永遠である為に、この地上界で体験してきた事を等速度運動をしながら、その場所にい

る人達がいるからです。。何故なら、我々がお墓に行ってみます。立派な石塔が建っております。それはそれはもう、1000万円近くかか

るようなお墓の中に住んでいる住人が、その場所が天上界だと思ったらとんでもない。冷たい石牢のような地獄界です。最近は何か新し

いのが まして、色々と子孫が繁栄する為には、立派なお墓を作れば繁栄するんだと行って、だいたひ儲けて、

あっちこっちビルを作って

いる石屋さんもいます。

お墓のこと、お盆のこと

まあ人間というものはそういうもので、自分ということになると、そういうものに騙されてしまって、商売に手助けをするのです。それ

が哀れな法を知らない人間の行為です。皆さんが心の眼を開いて古いお墓に行ったら、必ず手を出して、助けてくれ！ ある者は、もう

どうにもならないで救ってくれと言っている連中の非常に多いのを見ます。ですからお墓などに行って、心の汚い人達が憑かれてしまっ

て、憑依されてくる人達も多いのも、その為です。

日本のようにお盆なんていうことになると、亡くなった先祖が来るんだ、わざわざ家の門の所でかがり灯をし、先祖の皆さん、どうぞい

らしゃって下さいと言って、お呼びしたのはいいけれど、帰るのはいやだよ、もう地獄は厳しくて、その家がよくて、その家の嫁さんに

くっついてしまって、お盆の時から体がガタンとまいってしまう人達が日本全土には一杯おります。先祖を祀って何で具合が悪くなるん

だ。このように、本当の心の眼が開いてない為に、そういうものに憑かれてしまうのです。

本来お盆というものは、そういうものではなく、やがて三月になれば、お彼岸というものも日本にあります。お彼岸というものも、本来

は人間自身の心というものの知った生活行為、そして執着をとり、苦しみの世界から調和された、悟りの安らぎの彼岸に行くというのが

本当の道なのにも拘わらず、我々は先祖を供養することが、そうだと思っているのです。

先祖供養の前に、まず自分自身をつくることです。自分を完成することです。そうしてそれが分かったならば、先祖の皆さん、お墓に執

着を持ってはいけません。私達は今日はおりにまいりましたが、皆さん、もしこの中で生活をしているとしたならば、皆さんの肉体

は、あくまでもただの舟、その壊れた舟に、これは俺の肉体だと思っているから執着を持つのです。一切そういう心を捨てて下さいね。

何でそういう場所で生活をしているかということ、あなたが生きている時に、この地球上に於いて、自分のねぐらはこの場所だ、ここに大

きなカルト(cult；崇拜、信仰、この場合はお墓)作ったけれども、これは違うんです。

皆さんがそうしてやって、我々がまた実行したら、今から五百年、千年経ったら、日本はお墓ばかりになってしまう。寝るところはな

くなります。まあ最近はお骨のアパートも出来まして、高いビルの中に何号何部屋、ちゃんと決まっております。まあそのようにしなけ

れば、食っていかなきゃならない御商売の方もおります。そんなものが本当の道じゃありません。

われわれの肉体というものは、本当は、この原子細胞は、この地球という場で約三十二種類からなる元素、その合成により細胞が構成さ

れ、約六十兆からなる細胞集団によって五体が形成されております。

こういう五体は、この地球という神様の体の中の一部を分けて貰ったんだ、だから地上界を卒業したとき自然に返して行けばいいもの

を、人間はそのように、自分の子孫、自分のいわば“ねぐら”をといて、そういうものに執着を持ってしま

間違いを教えてやる。

また仏壇には、先祖代々の位牌があります。ところが位牌とは不思議なもので、亡くなってから、院、大居士とかつけている。

あの世へ行って自分の戒名を言っている人は一人もいません。生きている時の名前を言います。これも奇怪な事です。またこれを書く事

によって生活が成り立つんじゃ仕方ありません。まあ協力してやる以外にありません。

戒名が、いいとか、悪いとか、それより生きている時に、それより生きている時に、いかに正しく生きたかということが大事なのです。

死ぬときの自分の心の在り方がだいじなのです。



こうして我々は、他力本願の永い歴史の中に作り上げられた所の宗教は、本当の人間の道を忘れ去って、歴史という、伝統という、不自

然なものを作り出してしまっているのです。我々は旧来の陋習を破って、本当の人間の姿を発見しなければならない時に、今、来ているの

です。

皆さん、我々がこの事実を知って、偉大なる神の子としての実践する以外は、地球はやがて、かつてのアトランティスと同じような、大

きな天変地変を起こしていくのです。

我々はこの地球上という神の体の細胞の一つを調和する、ユートピアを造るという、人々の心、神の子としての万物の霊長として、一人

一人の心の調和を計ったユートピアを造るのは大きな使命の一つです。

神様の体を調和する為には、皆さんの肉体の細胞一つが不調和を起こしても、大騒ぎになるでしょう。神の体であるこの地球という大宇

宙体の中の小さな細胞の中で、我々万物の霊長である人種は、その場を修行の場とし、神の体を大調和することが本当の人生の目的なの

です。

それを我々は、ちっぽけな地球という魂の修行場に、こつこつお墓を作っている、おかしい事なのです。そうして皆さんが、その執着を

持って帰りますね。そうすると皆さんの場合、殆ど修養所に行きます。即ち三次元の地獄界、三次元、四次元につながる地獄界から天上

界に上がる途中の所に、幽界という段階があります。その幽界という段階では、この世から帰って天上界へ入る入り口に修養所があっ

て、みんなこういう建物がありまして、その場所で、人生のこと、色々反省して、曼陀羅を拝んでいた人達、なぜ俺達はこんな曼陀羅

を拝んだのだろう。拝んで何を得たのだろう。神の子として、これが本当なのだろうか。

或いは大きな仏像を祀って、そしてその仏像を拝んでいた人達は、この仏像が本当に自分たちのものであったのであろうか。これを反省

します。そうして彼らは、自分の家に持っていたものを、そのまま、あの世へ意識の中へ持っていて、その愚かさを知った時に、彼らは

その執着を捨てる場所があります。廃品回収所です。自動車が乗り捨てになって、よく捨ててありますね。まあ最近ビルを作る為の、

その使い物にならない廃車を全部鉄骨にして生産するそうですね。何か1,500トソ作るようです。

こういうように、あの世では、これが無いから捨て場所がある。私達がこの地上界から、ずうーっと抜け出して、あの世へ行って、修養

所から出て行った所に、物凄くそういう仏像や偶像の捨て場所があったのです。ああ、これは何だろうと思ったら、この地球上の人達が

意識の中に、死ぬ時に、仏像と一緒にいれば何かと安泰だろうと思っていたら、とんでもない。安泰でなくて、反省して、反省して、あ

あこんなものを持ってきていかん、捨て場所だったんですね。そういう所があります。

まあ皆さんが、もう少し前進して執着を離していけば、そういう場所を見てきます。皆さんの眼で、体で見えてきます。そうなるくる

と、へえーっ、仏像なんて物はという事になるんです。

宗教殿堂の利用方法

ところがどうです。最近はあるお坊さんなどは、薬師如来を祀る為に15億円の、昔の仏像を保管する為、15億円の銭をかけて、そして大

殿堂を作っていますね。本当に薬師如来が作ってほしいのは、そんなものではなく、多くの大衆に調和された環境、気の毒な人達に愛の

手を差し伸べてやる事、これが薬師如来の本当の心じゃないでしょうか。それを大衆から集められた不浄な金で、彼らは浄財と言って

いますが、彼らからみれば不浄な金です。そういうもので、大殿堂を作って立派な家に入れて、何が嬉しいんですか。それならば、生き

ている人間がその中に入って、即ち、いわば家の無い人達がその中で生活した方が、よっぽどいいと思います。そのように改造する、そ

の方が功德があるんです。

こうして我々は、今、21世紀に入ろうとしているのに、まだそういうのにも執着を持っているんだから、おかしい事です。

その信者の一党が、私の本を読んで、おまえは非国民だ、こういう本を出して公害を撒き散らしては困るという内容証明が来ました。僕

はその中で、本当はして貰いたいなあと思ったんですが、ああ、こういう人は気の毒なんだ。まあ旧来の陋習を破れず、薬師如来という

仏像がその人を幸せにしてくれるんだと思っているから、黙っています。まあ心として、芸術作品としてあるなら、当時の芸術を鑑賞す

る意味で、大いに結構です。ところが、それを拝む対象、御本尊とはナンセンスです。僕は言いたい。その薬師如来が口をきいたら信じ

なさい。恐らく彼ら、口をきかないでしょう。黙りっぱなしです。

奈良の大仏さん

そこで奈良の大仏さんなんて、なんであんな、でっかいもの作ったんだと皆さん、思うでしょう。それも実は、皆さん自身の心が、真に

仏法に帰依し、その生活を実践した時には、“宇宙即我”の大きな姿、大きな心の姿の表現を仏像として、あのような奈良の大仏を作っ

たんです。あれは拝むのではないのです。あれを見て、自分の心の広さを、皆さんは造る一つのヘッドギヤ（head-gear被りもの）となすべ

きです。

それを我々は、でっかいものを造ったなあ。これを潰したら、どれくらいだ。あすこには何百貫て書いてありますね。金(Au)がどれだけ

入っているか。途中で燃えちゃった(大火)。神様の体が燃える訳はないんです。所が人間の作ったもんだから燃えちゃう。溶けちゃう。ま

あ補修したから、後ろの方が大分、新しくなっている。そこで拝観料貰って、のうのうとね、優雅な生活をしているお坊さんもいるんで

す。まあそういう人は、あっちへ行って、ゆっくりと考えて貰います。そういうものが、本当の信仰ではないのです。

要は、皆さんはああいうものを通して、なるほど、宇宙即私の姿だ。しかし、あんな小さいもんじゃないんですよ。地球を包むんです

よ。ところが東大寺の中に入っておりますね。途中から顔を出して途中から顔を出して拝ませているんだから、これまたナンセンスで

す。しかし造った一番の、その根底にあるのは、あのように広い心を持ちなさいって造ったのが本質のようです。それを永い歴史は、い

つの間にか、小さいものを作ってやる。だから最近、新しい何とか なんていう宗教団体にいたっては、お金持ちになる為に、大黒さ

ん、 の をを、こうやって持っている大黒さんを祀って、一生懸命に拝めば金持ちになる。またそれを信じている馬鹿がいるんだか

ら、尚困っちゃいます。

真の打ち出の小槌、大黒天、弁天さま

打出の小槌を打つには、それだけ一生懸命働くことです。正しい仕事をやることです。そうすれば銭は、ちゃんと入るんです。宝くじを

当てようとするんですね。ですから皆さんは、大黒天というのは、一体どういうものですか。皆さんの金儲けを手伝った人だと思います

か。あの世には、大黒天と呼ばれる人がいますよ。またこの地上界にも一杯出てきております。

大黒天と言われる人達は、神理、法灯を、神理を説く如来、菩薩、こういうような光の天使達に協力し、経済援助する人達です。インド

の当時のピンビサラー、そしてその親戚に当たる所のガランダ、或いはアナタピンガー、即ちスタチー、こういうような人達は、これ

を大黒天といったんです。中国へ行ってから、最近は大黒天ばかりでなく、弁財天というのをもも出ています。そうして弁財天という組織

を持っているのもあります。弁天様が出てきて、色々和金儲けの話をしてくれる。そうすると大阪あたりでは、金儲けの方がうまいです

から、そういう金儲けだったらとって、弁天宗派というのが、大きな一つの建物を作っております。残念な事に弁天様というのは金儲

けの協力をする人ではないんです。

皆さんの心中には、仏智という偉大なる転生輪廻の過程に於いて、体験したところの偉大なる智慧、偉大なる宝庫が、皆さんは誰も持っ

ているのです。その転生輪廻の中に体験された、皆さんの心の中に記憶されている、内蔵されている偉大なる智慧、その財宝を紐解くこ

との出来る人達、そのような人達を弁財天というのです。

ところが宝物を持っているのが弁財天、あの世では絶対に、この地球上のお金は使い物にはならないのです。日本に1万円は、あの世へ持

っていても、使い物にはならんのです。この地球上だって、そうじゃありませんか。。これまで、1ドル300円が最近275円になっ

ちゃったですね。

経済のこと

神理というものは、一つも、そんなに変わるものじゃないんです。人間の作った、欲望で作り出した経済は変わるんです。インフレなん

て言っていますね。まあそれに便乗して、うんと儲ける人もいます。ただ儲けた金を人々の為に尽してくれればいいが、自分の懐だけに

入れて、そして自分さえよければいいという人も一杯います。まあそういう人はやがて苦しみとなって自分に跳ね返って来るんです、苦

しみとなって。

ですから皆さんは、お金は足ることを知らなきゃいけない。とって無いと困るんです。人間の現代社会に於いて、本当に幸せだと言え

るのは、まず肝心要な心を知ることです。心、そして皆さんの心の舟である所の、魂の舟である肉体です。これが健康でなけりゃ、いけ

ない。

ところが永い歴史の中で人類が作り出した現在の経済機構、資本主義にしても、社会主義にしても、またその根本にあるのは物質経済で

す。この物質経済も、また無ければ今は食っていけないんです。インドの時代の、お釈迦様のように、山の中に入れば、食べ物、マン

ゴとかリンゴとか、或いはパイナップルとかリュウガンとか靈芝とか、色々食べ物がある時代は、まあ今日は働かなくてもいい、そこにある

マンゴを一つ食べようや、夕方こっちにあるリンゴを二つ食べればいいや。駄目だったら乞食（こつじき）に行けば、何とか食えるよ。

だが日本では乞食に行ったら、相手にしてくれません。恐らく、お米一粒でも食べません。こちらから行っても、このように布施する

心も無くなってしまいましたね。

所が逆に、ずうーっと南方の方に行きます。カンボジアからタイ国方面に行きますと、布施する人達が一杯います。まだインド時代の名

残が残り、漫然として伝わっています。日本では最近、そういうものも見られなくなりましたね。だからやはり経済というものを、作っ

ていかなければいけない。経済も自分さえよければいいのではなく、人々の為になる、そういう環境というものを造り出さなければなら

ないのです。

こうして現代の社会の本当に幸せになる道というのは、魂を浄化し、健康であって経済的に安定している環境、この三つの柱を造らない

限り、ユートピアは出来ません。そのユートピアの、特に物質経済に関しては、本当の心というのを知った人達でなければ出来ないの

です。自分さえよければいいんだという利己主義、儲け主義的な考え方、こういうことは結局は、自分たちお互いに首を締めてしまう

のです。

トイレット・ペーパーを買いあさった、あの千里のご婦人達が、いつの間にか、ざあーっと全国に広がって、自分たちで値上げしたでは

ありませんか。アメリカ人だったら、その辺はまだ利口です。不買同盟ね、買わないんです。皆さんが買わないから吐き出すんです。

ところが日本人は、自分さえよければいいというから、最近ではハワイあたりまで旅行してトイレットペーパーを買いあさっている。そし

て飛行機に乗って取って来たというから、これもまた話しになりません。

で、そこに私は最初に言った、日本人は最初に道徳心というモラルの面がゼロだという事です。そういう道が分からない所に経済が発達

したから、そういう、ものの奴隷になってしまったのです。

皆さんは、自分自身なのです。それをよく知って生活すること、これ以外にないんです。私達は色々と、このように講演に行くようにな

ります。また現象も出すようになります。直接、我々の声を通して皆さんが聞ける内は、いいのです。もう既にあの世へ帰った連中は、

次々とあの世の状態を報告に来ているのです、G L Aの会員で、皆さん自身が、そのような体験をやがてしなければならぬ人達も出て

きているはずで

その時には、しっかりと生命の永遠性を、自分自身で知って生活する、これ以外にありません。それには一切の執着を捨ててしまうこと

です。これは死んだなと思ったら、自分のもう重荷を捨ててしまうことです。そうして思い残すことがあって、自分の子孫の前に出て、

何とか助けてくれと言うようになったら、これ話しになりません。

そうならば、お坊さんも本当はいらぬんです。死ぬときにお坊さんが来て、お経を唱げることが道じゃないんです。生きてる内に、

お経の意味を理解して生活していれば、黙っていて、明日の朝、いってみよう(あの世へ)、みんな元気でな。スウーッと行けるようになる

んです。

ところが皆さん、笑っていますけれども、あの世から出てくる時には、いや今度は大変だぞ、本当は出たくないんだけれど、出なきゃ仕

様がないんだ。出て来て、肉体を持って生まれたその環境でぬくぬく育っている内に、いやーっ、この地球上が、いいやなんて。あれが死

んだ、これが死んだ、ああ可哀想に...

まあ人間というものは、住めば都ですから不思議なもんです。しかし我々は、どうすることも出来ないのは、あの世へ帰ることなので

す。それがその時に慌てないで、毎日の生活を、毎日が極楽のような調和されたユートピア仏国土の中から、皆さんは生活してゆけば、

亡くなった時に、ああよかったな、思う存分やってきた。

ところが皆さんは、全部出て来る時には、気の毒な人達に愛の手を差し伸べてくるよ。うまいこと言ってみんな出てきたんです。そうい

う人達がみんな忘れてしまって、トイレトペーパーまで買いあさってしまって、人生というものは、そんなものではありません。

そういう事に惑わされないで、皆さん一人一人がじっくりと、正しく見、正しく聞き、正しく語り、正しく念じ、正しく仕事をした、正

道というものを通して皆さんが生活をしておったならば、あのような問題は起こらないんです。そして東京方面は“あげよう(地名)”とい

って、丁度千里と同じような大きな団地がある。その団地で騒ぎ始めたら、東京方面までダーッと物価値上げしてしまつた。買占め始め

た訳です。集団意識というものも、本当の心がないから、ああいう事になるのです。

そうして自分達が、どんどん吊り上げちゃって、跳ね返って来るのは大衆です。まあ、馬鹿みたいなもんですね。我々もその犠牲者で

す。

新機構の実験

ですからG L Aの場合は、今度は関西では正月を実験台として、よそよりか、うんと安く生鮮食料品というものを、みんなが買いま

した。これはユートピアへの一歩です。お互いに儲けようじゃなくて、お互いによければいいじゃないか。G L Aというのは、そのよう

に、心、魂と肉体と経済というものの、この三つの大調和を図っていく我々のグループです。やがてこれが千万人になったら、どうい

う事になるでしょう。なります。その時にはコンピューターを幾つか設置しておいて、何処どこの生産地では、どうい

消費者はどのようになっ、そしてグループはこのように動く、物価なんか高くなりません。これが本当の神理なのです。我々は政府が

やらなきゃ自分達がやる以外にないんです。

皆さんがそれで衣食住という経済の面が調和されてくればいいではありませんか。そうして精神的な面も調和され、今までの仏教という

のは、拝ましておればいいんですが、我々は人の拝んでいる間に、一生懸命やるんです。みんなが安定した生活、環境、心の豊かな生活

環境、これを築いていくのが、本当の今度の道なのです。

今から2,000年前のイエスキリスト云々。



Home

現代宗教に対する疑問

高橋信次先生 関西本部講演会

過日の講演では私は小さい時からの信仰とその疑問の解明を通して、神の存在、仏の存在、人間自身が何の目的で生まれて来たのか、

また貧富、地位、名誉その他の面からして、なぜ人は苦しむのか。インド時代のゴータマ・シットルダ―釈迦牟尼仏は当時何を説き人々

を救っていったか、このような点についてご説明してきました。

さて本日は現代宗教に対する疑問ということについて説明してみたいと思います。

私たちには長い歴史の中に、肉体的先祖代々によって受けつがれてきた習慣的な信仰というものがあります。この習慣の中においても

私たちは多くの疑問をもっているはずであります。釈迦牟尼仏の教えから作られたはずの経文の意味を解し、それを生活に活かすことも

なく、ただ経文をあげているだけという事実はどうしたわけなのでしょう。まずインドの当時においてゴータマ・シットルダ―がその時

代と宗教と人生に対してなぜ疑問をもったかということをご自身考えてみていただきたいと思います。

彼は今から二千五百有余年前においてカピラ・ヴァーストというコーサ国の小さな一属国 ミガダヤのふもとロッシニー河の流れで

いるところにシャキャ族の小さな国の王子として生まれました。彼は逆子だったので母親は産後の肥立ちが悪く、彼を生むと一週間目に

この世を去ってしまいました。インドの時代はほとんど子供を産む場合は自分の実家へ帰ります。中インドのロッシニー河をはさんで対

岸にデヴァダバ・ヴァーストがあり、当時はここに住む人たちをコーリヤプトラ―と言っておりました。

コーリヤ族はシャキャ族の一支族であり、実の妹であったパジャパティにつきそわれてデヴァダバ・ヴァーストに帰る途中マヤ（シッ

タルダの母親）はルビニーというところで陣痛をおこし、シットルダ―を産みおとしてしまいます。マヤは妹たちの手あつい看護の甲斐

もなくこの世を去り、このため妹であるパジャパティがシュット・ダーナーの正夫人となり、カピラ・ヴァーストで生活をするようにな

ります。

当時の環境は非常にきびしく、食事にも昔の日本の大名のように毒味をした後でなければ食べられません。カピラには敵のスパイが常

に入っているために毒殺されるというケースが多かったからです。また外敵の侵略は日常茶飯事であり、外見は平和でもその中身

は常に争いの渦の中におかれていたわけです。このように不安定な環境と、亡くなった母親に対する一つの悲しみがあり、また城から外

へ出ればきびしいカースト制度によるところの不平等、日本でいえば士農工商のような制度、否それ以上のものであり、当時はバラモン

の思想が千数百年もつづいていまして神仏の名の下に人々を支配してきた制度が日常の生活の中に滲みこんでいます。

当時のインドの支配階級である武士階級クシャトリアは、バラモンという種族を擁護すると同時に商工業者ヴェンシャの生活権を守る

ということで豪族がいつの間にか武将になっています。それだけに日本の十二世紀、十三世紀、十四世紀の混乱期と全く同じような社会

現象が存在していたのであります。このような時代ですからシュドラーというもっとも低辺の奴隷階級に生まれてしまいますと、学ぶこ

とも財産をもつこともできません。牛馬同然になってしまいます。鬼子母神 という名を知っているでしょう。この女性は神でも仏で

もありません。もっとも低辺のシュドラー階級の女性でありました。子どもたちをさらってゆき、自分の子供のように育てていました。

ハリティーと当時の名前はいいますが、彼女がジェーターヴェナー（祇園精舎）にいる時に一人しかない自分の子供が誘拐され、初めて

子供をさらわれた親の苦しみを知りました。前非を悔いた彼女は最後は比丘尼としてゴータマ・シッタルダーの弟子になりますが、これ

などは当時のきびしい階級制度への反逆という形で現われた事件なのです。

太陽の熱・光のエネルギーは貧乏人、金持ち、地位、名誉、全く関係なく平等に与えている。それなのに人間の作った環境だけが、長

い歴史の中に築き上げられ、種族保存の旧来の要求が生活の中に溶け込んでおります。シッタルダーの生活は優雅ではあるが、一步外へ

出るときびしい環境である。なぜだろう。同じ人間に生まれながらなぜこうも違いがつくられているのだろう。当時のインドの人たちに

は百才、百二十才という高齢の人たちが大勢います。しかしそのような老人は骨と皮だけ。シッタルダーはそういう姿を見るにつけても

なぜ人間は年をとるのだ。自分の母親が一週間目に死んでしまったという話、なぜ死んだのだ。ここで初めて生老病死、苦の問題の糸口

をつかんでゆくのでした。人間はなぜ生まれたのだ。なぜ年をとるのか。なぜ病気をするのか。なぜ死んでいくのか。この四つの問題が

解決しないためにシッタルダーは二十九才の時に家を飛び出してしまいます。

このようにして悟りへの道へ入っていったわけですが、当時は今のインドのヒンズー教のように、バラモン教というものがあ

た。

インドのバラモン階級の一つの教えであります。後世、日本に伝来した仏教にはバラモン教やヨガ教などいろいろなもの

がミックスされてしまいました。インドの当時は仏教などといってません。ブッタ・ストラーといっています。悟りへの道、神理への道

という意味です。これが中国へ渡ってくるに従って仏教という一つの固定した枠の中に入ってきてのです。しかし六世紀から七世紀にか

けて、南中国に天台智顛（てんだいちぎ）という方が出て学問仏教ではない行ないの仏教ということ

根本を作り始めてゆきました。当時の仏教はまだ純粋なものです。自分自身の心というものを磨くことが主体でした。他力ではありませ

ん。

Home

皆さまは自分の体の痛さを人に分け与えることができない、人の痛みを自分自身にとってあげることもできないはず

甘いものを全く食べたことのない人たちに、これは甘いんだよといったところで、果たしてその意味を理解することができる

か。匂いもまた同じです。ある人はこの匂いはよい匂いだと思う。しかし反対にいやーこんな匂いは嫌いだという人もあります。また匂

い自体も慢性化してしまうとはっきりこれが解らなくなります。

このように仏教というものも二千五百余年の間に、いつの間にか拝めば幸福になる、信仰というものは一心にお経をあげることだ、こ

のように変わってきました。そのために、この中の皆さまの多くのこういう信仰に対しての疑問はいっぱいあったはずで

解けないために盲信をする、あるいはまた特定の宗教家たちは罰が当たる、罰が当たった、このようにいいま

す。しかし、本当に神は罰を与えるのでしょうか、仏が本当に罰を与えるのでしょうか。さらにまた本当に先祖は私たちに不幸な罰を与える

のでしょうか。それならば私は皆さまに質問をしたい。果たしてかわいい子供が不幸になることを親が喜ぶのでしょうか。あるいはまた祖父

さんや祖母さんが、孫たちが不幸になることを喜ぶのでしょうか。それならばなぜ先祖が私たちに不幸にするのでしょうか。それぐらいのこ

とは神の子である人間であるならば誰も明確に判るはずで

す。神は絶対に、私たち人類に対して罰など与えないのです。罰は人間自身の心と行ないが作り出すということを皆さまは知らなくてはなりません。苦しみも悲しみも他人

が作ったのではありません。皆さま自身の心のあり方と行ないが作り出したということを知らなくてはならないのです。私たちは地獄も

極楽も自由自在に行きます。皆さまの肉体的先祖が現在どこにいるかについても私たちはすぐ判ります。さらにまた、その人たち方の生前において何をな

し、その当時どのような話をしたかということも私たちは即座に判ります。しかし一般の人々はそのことが判らないだけに、人間は祈

ることによって救われると思っています。仏教においてもまた同じ。お坊さんは朝勤行といって朝早く起きて拝んで手を合わす。経文だ

け幾度あげたところで心の安らぎは、これだけでは得られません。まず経文の意味をよく己自身が知って今の一秒一秒の心のあり方を正

しく、神理に適った生活を重ねてゆくことです。

皆さまは一念三千という言葉を知っているでしょう。一念三千とはどのような意味か。皆さま自身の心というものは、無限大に広く大き

いもの、そして皆さまは想像することも、思うことも自由自在です。恨むこともあるいは喜びも心の中では自由に思うことができるはず

です。この思うことが私たちの心のあり方を決定していくのです。皆さまは現在このような肉体をもっていますが、これはあの世におい

てお父さん、お母さんと皆さま自身がお互いに約束したものなのです。あの次元の異った空(くう)の世界、すなわちこの地球を含めて

大宇宙に広がる光の世界、実在界(あの世)から見ればこの現象界(この世)は立体画像にすぎないということです。

こういたしますと私たちはあの世という実在の世界からこの地上界へ出るために肉体という舟に乗りました。この人生航路を渡って行く

ための肉体という舟の提供者が私たちの両親であるということです。そこでまずこの舟をいただいた船頭さんは誰であるかということ

知っていただきたい。この船頭さんこそ皆さまの心であり魂なのです。それを両親が魂までくれたと思っている人たちが多いのです。も

し両親が肉体以外に魂までくれたとしたならば、なぜ子供は親のいうことを聞かないのでしょうか。私たちは長い転生輪廻の中にそれぞ

れが縁というものによって、あの世では皆さまは友だちであり兄弟であったり、お互いに約束をして出てくるのです。

しかし私たちはこの地球上という場に出て肉体という舟にのってしまおうと、わずか一〇パーセントしか意識は表面に出していません。これ

について一つの氷を主体に考えてみましょう。

水面に浮かんだ氷の部分は約一〇パーセント、九〇パーセントは水面下にありますね。この現象は氷ばかりではなく、鉄であっても銀で

あっても同じです。皆さまも今この地球上という場にその意識の一〇パーセントしか出ていないのです。私たちの住んでいるこの世は、

あたかも実在界から投射された現象界であります。それはちょうど氷の表面に出ている一〇パーセントと、沈んでいる九〇パーセント

と全く同じことなのです。このために、あの世とこの世は紙一重の違いだけといえます。皆さまはすぐにでもあの世に行くことができま

す。こうした意味で、この世とあの世は全く一体となっているのです。そうしてあの世でも地獄界というのはこの地上に近い状態の環境

といえます。地獄界という環境、その環境から天上界へとたくさん段階があります。それは皆さまの心が、先ほどの調和の生活といいま

したが、神理の中道の道を毎日の生活の心と行ないに活かした時に、皆さまの心は神の光に包まれ安らぎの生活が生まれてきます。その

安らぎは心の調和度、すなわち光の量によって違い、あの世の段階を決めているということです。私たちは皆さまの心の状態を語ってみ

ることができます。そうしてこの形の歪みの起こっている人が、その人の欠点であり、心の調和度に関係してくるわけです。

皆さまは心は丸く、大きくという話を聞いたでしょう。そのとおり、心というものはあたかも、風船玉のように広く大きく丸い心、この

心の中を断ち切ってみますと、まず神より与えられている本能というものがあります。さらに知性という領域があります。理性という領

域があります。感情という領域があります。そして一番中心に想念という領域があります。心の中で私たちが思うこと、考えること、つ

まり想念というものがすべて中心になっているということです。私たちは肉体舟の眼・耳・鼻・舌・身を通してこの眼で見たものが視覚

神経・鼻でかいたものが臭覚神経、このような神経を通して大脳の中の神経繊維に電氣的振動が起こります。この電氣的振動がそくざに

想念に伝達されます。想念に伝達されたものが自分の本能や感情、あるいはまた知性や理性の変化によって心全体の領域が変わってくる

のです。例えば私たちがものを耳で聞きます。自分の都合の悪いことを言われた場合に、そくざにスーッと想念に入ってきて来ます。想念は

そくざに感情に出て参ります。この感情に出た時に感情の領域の部分がプーとふくらんでゆきます。すると理性は引込んでしまいます。

こういう状態は想念に曇りを作ってしまう神の光をさえぎるのです。神の光は万生万物にみな平等に与えられているのです。取らないの

は自分自身の想念と行為なのです。

こう考えてきますと皆さまは、神は罰を与えないということが判ると思います。私たちは感情だけで物を判断して果たして正しく解答を

得ることができるでしょうか　できません。そもそも私たちのこの地球上に出てきた目的というものは調和にあります。水面に石を投

げたところでその石の波は大きく広がっていくけれども、やがて調和された滑らかな平面にもどります。大東亜戦争によって四年間の不

調和な大きな犠牲を払って斗争をくり返したけれども、その後三十年間はあのいまわしい戦争がありません。戦争がないだけ、ある意味

では調和されているでしょう。

私たちの本能もまた同じ。きれいな女性を見ると男性はつい心を動かされて、この動かされているうち、美しいなあと思っているうちは

よいけれども、その先まで考えてしまう。そうするとどのようになるか。理性というものは引込んで参ります。いわゆるハート型になり

ます。感情が出てきて理性は引込み知性はあまり関係ない。恐らく皆さまは、若い頃、若い人たちもそうですが、恋愛をする、一目ぼれ

も同じですが、そういたしますとこれをよく見て下さい。(図示される)ハートになります。本能がふくらんで感情が出て理性と知性が

引込んでしまう。こういう時に、ものの判断が正しくできるでしょうか。自分の好きな相手を見てアバタもエクボに見えてしまう。まず

見えるのが当然です。私たちはこういう心のあり方を五官を通して見たものに影響されて、こうもしょう、ああもしょうということが行

為になってくることを知るべきです。

皆さま自身の心が、いつも丸い大きい心であるということはそれがそのまま悟りを意味し、インドの時代はこのような問題に対して苦集

滅道(くじゅうめつどう)ということを読みました。私はこの地上界に出て、四十年にもなりますけれども、仏教とかキリスト教とかは

全く学んでいません。専門は電気とか物理工学です。現在これを主体として生活していますからプロとして詳しいです。しかし仏教のこ

となどは全く私は学んでいません。それなのに読まなくてもなぜ解るかということです。それはテープ・レコーダーやビデオ・コーダー

は誰が発明したのでしょうか、人間なのです。人間の中や自然の中に、こうしたものがあるから発明として出てくるのです。発明はすべ

て疑問の中から生まれてくるものです。

ですからまず皆さまも人生に対して解らない疑問をそのままにしておかないで、皆さま自身で解明することです。解らない疑問は人に聞

いて解答を得ていった時にはこれまた必然的に神理に到達するのです。皆さまもよくご存じの木村名人という方がいます。この方は将棋

というものを通じてなかなかよいことを云っております。また作家の山岡荘八先生などもやはりその神理を生かしています。この方たち

のように名人クラスになると究極の場は神理であります。芸術家が芸術を通じ、文学者は文学を通じ、事業家は事業を通じて真剣に正し

い心の状態で毎日の生活をしている人たちこそ、本当に信心深い人ということになります。このように地球上は次元の異った世界から投

映されている現象界であり立体画像の世界であるということが解ったならば、この大自然こそ大神殿だということがお判りになるでしょ

う。

地球そのものは大宇宙大神体の中の一つの小さな細胞にしかすぎないということを皆さまは知らなくてはなりません。その細胞を私たち

人間同志が神の子として万物の霊長としてお互いに心と心の調和を自分自身が計りながら平和な社会を作るということです。ところ

が人間は肉体をもってしまうと、肉体先祖とか、肉体が絶対だと考え、すべてに執着をもってしまって神の子、仏の子としての本性を忘

れてしまいます。ここに問題があるのです。

皆さまは本当に心の窓を開いて一切の執着からはなれて人々のためにつくす。自分も神の子、仏の子としてその道を実践しようと心と行

ないが調和された時に、人間が誰も心の窓が開かれるのです。なぜならば想念の中の曇りがなくなるからです。からりと晴れた青空には

太陽の光が万生万物にすべて平等に当たるように、神もまた私たちに慈悲と愛の光を平等に与えています。

それは自分自身の心にひっかかりがなく、執着がない、恨み、妬み、謗り、怒りがなく、いくら口先でうまいことを言ったところで、あ

るいは顔と姿（かたち）と態度だけで外面だけをあたかも調和したごとくしたところでそんなものは何の役にも立ちません。上辺（うわ

べ）はどうであれ、心の中から発するところの慈悲と愛がなければ私たちの魂を高い境地に進化させることはできないのです。

さて私たちは先ずここで、肉体というものの先祖、肉体先祖というもの、さらにまた魂の先祖というもの、この二つのものが存在してい

るということに気がつかなければいけません。これはインドの時代、ゴータマ・シッタルダ が四十二才の時にたまたまコーサラ国の使

いがジェター・ヴェナー祇園精舎に参ります。マハー・コーサラ王の息子であるカツラピンという王子です。これはゴータマ・シッタル

ダとは年はそんなにちがいません。こういう関係ですからカツラピンは「ゴータマ、あなたは自分の家からたびたび使いの者が来ている

のだし、家を出てからすでに十二年、父親も年をとっていることだからあなたは帰って親孝行をしてやって下さい」。ということで悟った

後初めてカピラに帰った時に、お父さんお母さん、あるいは第一夫人のヤショダラとかあるいはまたその他の

ゴーパとか、二号、三号と

いうとおかしいけれど第三夫人、第四夫人までいます。一同が迎えに参ります。その時にシュット・ダーナー王が「お前どうだ、これだけ

の修行をしてきたけれどもお前の姿を見ると乞食同然だ。お前も王子ではないか。そんな汚いしたくをしなくともわしがさっそく良い着

替えをあげよう」といいますが、ゴードマ・シッターダーは断ります。なぜならば人間は心が大事だからです。いくら立派な着物を着てい

たところで心が屑ならば何にもなりません。そういうことから「お父さん、それはちがう私はこのように泥だらけであっても心に安らぎと

調和をもっています。生まれによってその人間の価値が決まるものではありません。だから私は一生懸命に先祖を供養します」といいます

た。ところが父親のシュット・ダーナー王は「その通りだ。我が家はこのカピラにくるまでに十五代も続いている。この十五代の先祖は偉

大なる人たちだ。シャキヤというのはよくできた偉大なという意味だよ」。このようにゴードマに説明します。これに対してシッターダー

は「ところがお父さん、それはちがいます。私の供養するのは私の魂の先祖に対して供養するのです。お父さんからこのように肉体を頂い

たが、このことに対しては私は心から感謝し親孝行をいたします。ですが魂の先祖こそ永久に変わらないところの自分自身だということ

を知っているのです」と答えたのであります。シュット・ダーナーは、「そんな先祖があるのかなー」ということでした。

現在の人々も同じです。魂はお父さん、お母さんがくれたんだ。くれたはずなのに親不孝したり、ゲバ棒をもって火炎瓶を投げてみた

り、どこに肉体先祖と魂の先祖というものがあるのだと思うでしょう。しかし親子の縁は、かつて友だち同志であったり、あるいはかっ

て両親になった人たちをたのむのであります。このようにして私たちがあらゆる転生輪廻の中で生命は不変であるという事実は、あらゆる

る国を転生輪廻して参りましてこのように永遠の旅をつづけているのであります。あの世に帰りますと一〇パーセント表面意識が逆転し

まして九〇パーセント潜在意識が表面に出て参ります。それですから心でお互いに話し合うことができます。

私は何回もあの世という実在界へ行きまして皆さんとも話をしております。この時に私は日本人ですから日本語で喋りますと向こうの光

の天使たちは胸のところにバッチをつけております。と云って日本人ばかりはいません。オリンピックと同じです。皆さんは全部兄弟

だということです。そして日本語で喋った言葉は即座に彼らの国の言葉で伝わります。あるいは黙っていてもか

まわらないのです。通じ

るのです。心で思えばよいのです。相手に通じます。

このようにあの世の世界、天上界は人類の神の子としての自覚をもった調和された世界です。そのためにあの世の肉体は光子体といって

光でできております。皆さま自身の肉体は約三十二種類から成るところの原子細胞によって、また約六十兆からなる細胞集団によって形

成されています。さらにまた皆さまの頭脳は約二百億からなる細胞集団によって脳葉というものが構成されています。その中の神経繊維

は電氣的振動を起こします。これを脳波といっています。

ところが皆さま自身が、肉体と魂とは別だということにもし皆さまが反発するならば皆さまが眠っている時、脳細胞はどうしているので

しょう。耳の穴も鼻の穴もあいてはおりますが、眠った時に脳というこの器官が全て記憶し思い出す能力をもっていますか、聞くこ

とも匂いを嗅ぐこともできないはずです。なぜできないかということと肉体から魂が離れており、脳の機能が失われているからなのです。こ

の事実からみても魂の先祖と肉体の先祖は別であり、肉体は人生の乗り舟だということを自覚せざるを得ないはず

肉体というものは万生万物すべて縁というものによって結ばれて出て来ます。そうしますと私たちの魂というものの存在がもっと明確に

なってくるはずです。皆さまが感情的になる時、悲しみや喜びの時には胸にこみあげてくるものがあります。このこみあげてくる力は一

体何でしょうか。こみあげて来て初めて涙になるはずです。これは想念の中の感情の領域がふくらんでくるからです。それで胸にこみあ

げてきます。それが眠っている時には、肉体舟の船頭さんである魂は皆さまの体から離れている。そのために頭は記憶ができない。匂い

をかぐこともできない。寝言は肉体に意識が伝わるためにおこる現象だが、口は意識的にきけない。このように考えてみますと私たちは

魂と肉体というものが明確に分離されているということが解るはず

Home

仏像画を見ますと後光というものが出ています。神の光は万生万物に平等に与えられておりますが想念に曇りがなくなり、心の調

和された度合いに応じて神の光を受けていることになります。それが後光となって出て参ります。この後光が皆さまがあの世へ帰る時の

肉体なのです。皆さまがあの世へ帰る時には、心がきれいならば後光によって包まれて自分の肉体が例え病気であっても、その時、病氣

から訣別します。ところが心を悟らずに、神仏を信ずることなく、恨み・妬み・謗り・自己保存自我我欲の生活を送って、あちらが痛

い、ここが痛いといっている間は死んでも同じです。なぜならば、私たちは電車にのったり、自転車にのったりしている時に急ブレーキ

をかけると急ブレーキのかかった進行方向に体がもっていられるはずであります。なぜでしょう。これは自然の法則。等速度運動です。

これと同じように私たちもまた心というものが本当に執着と己自身の自己保存、自我我欲の心を捨て去った時には執着がありませんか

ら、調和された世界へ抜けていきます。私はあの世へ行く時には自分の魂といいましょうか、意識が抜けていくのが全部判ります。そう

してどこの国へ行っても皆さまの家庭でもそくざに行ってみることができます。そういう時に心に引っかかりがあると、どうしてもそこ

だけ抜けないから苦しみます。ばたばたとして振動が起こります。ところが心が調和されていきますと、スーと抜けていってしまいます。

この現象は私一人なら私は否定します。ところが今まで同じ現象が私たちの周囲にいっぱい起こりました。私一人だったら信じません

が、しかし現在は百人を越す人たちが、わずか一年間の間に心の窓を開いてアラハンの境地に到達しました。すなわちアラハンの姿に到

達して己自身の心というものは調和されダイヤルがピッタリ合うようになったために、さまざまな能力を持つようになったからです。も

し十人が十人同じような現象が起こったとしたならば皆さまはこれを非科学的と言いますか。非科学的ではありません。科学的というも

のは一〇〇パーセント確かな結果が出たならば信じざるを得ないのであります。そうやって参りますと、私たちの心というものがいかに

重要であり、そしてしかも私たちの魂はこの世を去るまでの一切をテープ・レコーダーと同じように記録しているということを理解する

ことができると思います。

皆さまは反省ということをご存知でしょう。反省というものは、神から私たちに与えられた慈悲なのであります。わずか一〇パーセント

の表面意識で人生を渡ってゆくために人間はあらゆる苦しみや不調和なことをやっています。盲で人生を歩んでいるのです。それだから

また修行場なのです。こういうきびしい環境の中において私たちがはっきりと正しくものを見る毎日の生活行為をしてゆくならば己自身

の心の状態をより高い境地にもってゆくことができるでしょう。反省というのは心で思っただけではだめなのです。そのあやまちを正

し、それを行ないの上に表わしてゆくことです。正しく思うこと、行うことが全ての基準になってきます。私の言うことを皆さまは信じ

なくても結構です。神理は信ずる信じないにかかわらず必ず現われるものだからです。皆さまは他人に嘘がつけても、自分の心に嘘はつ

けないでしょう。本当のことは自分の心が一番よく知っているからです。嘘をつかない自分自身の心で、皆さまは一日思ったこと、行っ

たことを一つ一つ反省してみてください。それを繰り返しているうちに、皆さまの心の中には自ら神の光がはなたれて参ります。反省は想

念の曇りをとりはらう神から与えられた慈悲なのです。

このようにして私たちの心というものを磨いていくにしたがって、私たちは執着というものを離れてゆきます。心は自ら丸く大きくなっ

て参ります。

私たちは先祖に対して感謝する心を失ってはいけません。真に先祖に対する供養の根本というものは、まず現在の皆さま自身が肉体先祖

からこの肉体の舟を戴いたことに対して感謝し、健全なる肉体をつくるということです。そうして夫婦が共に明るく笑って生活できる愉

快な環境を築き、お互いに嘘のない心と心の話し合いができる環境をつくるのが先祖に対する本当の供養だということを皆さまは知ら

なくてははいけません。また私たちは先祖に対する感謝の心をいつも持ちながら、私たちの肉体を保存することのできる、一秒間に二百万

トンもの石炭を燃焼するに相当する熱・光を太陽は無償で地球に与えていることを知り、報恩という行為を果たすことです。地上の三十

六億人の人類に太陽が一秒間に与えているところの $9 \cdot 3 \times 10^{22}$ キロカロリーという約二百万トンの石炭に相当する代価を平等に支払っ

たとしたならば、皆さまは全員破産してしまうでしょう。これこそ神が与えられたところの慈悲であり、愛でなくて何でしょうか。

この太陽の熱・光のエネルギーがあればこそ、地上の水を循環させ、雨を降らして植物に対して成長のエネルギーを与えています。一方に

おいて皆さま自身の吐いた二酸化炭素は空気中に戻るとこれらは植物の栄養源となり、太陽の光を利用して光合成作用によって炭水化物

や蛋白質や脂肪を作っているのです。私たちは外から植物の澱粉、蛋白質、脂肪をとって皆さま自身の血や肉や骨にしているのです。

そうなれば太陽に感謝する、大自然に感謝する心はただ「有難うございました」だけで済ませるものでしょうか。それは人間同志がお互い

に今、生きているのだ。今、魂の修行と共に、神の体であるこの地上界に平和なユートピアをつくり、お互いに心を開いた嘘のない生活

環境を築くということは本当の神に対する、そしてまた先祖に対する供養であり報恩の姿ということになるでしょう。これは今から約一

万二千年前にアトランティス大陸においてアガシャー系グループの光の天使たちが人々の心に神理を説いたのも同じです。大宇宙に対す

る感謝の心、人々の心と心の調和によったその道を実践することにありと説いたのです。イエス・キリストも今から二千年前にイスラエル

の地において、諸々の衆生に説いた愛の道もまた同じ神理なのです。

しかしゴードマ・シッターダーも、あるいはまたイエス・キリストも決して宗教家ではありません。全くの素人です。私たちは素人の立場

から、その神理、心と人間の問題、自然というものと信仰の関係、こういうものを掘り下げて参ります。中国から渡ってきたところの経

文と、私たちが説いている科学とも全く一致するということを私は発見したのであります。それ故に宗教と科学は不二一体である、色心

不二であるということがいえるのであります。皆さま自身も、今肉体と心、肉体と魂の一体の中にこそ色心不二、現代の修行があるとい

うことを皆さまは自覚して頂きたいと思います。そして信仰は己自身の心に嘘のない生活をする事だ、そしてそれは正道の、八正道の

実践行為の中に生まれてくるということを知っていただきたいと思います。



Home

神と人間との関係について

高橋信次先生 関西本部講演会

私たちは長い歴史の体験の中から信仰というものが、神仏を拝むことであり、そしてそのことによって人間は幸福を得られるものだ

と思っています。しかし本当の神仏とかいうものはどのようなものでしょうか。私たちのまわりの、あらゆるところにお祭りしてある神と

いうものは本当に神様なののでしょうか。今まで私たちは先祖代々伝わってきたところの信仰対象というものに対して、何ら疑問をもった

こともなく、日々の生活の中に信仰というものが溶けこんでしまっているのです。私たちは本当の神というものが一体どのような

ものであるのかということを考えてみましょう。

まず、私たちの住んでいるところの地球という場は、草木を始めとして動物・植物・鉱物という三つの要素をもって我々の肉体保存の

ための協力を得ています。その根本というものを考えた時に、地球以外にもまだ他の天体があるということを知らなくてはなりません。

すなわち私たちの住んでいるこの地球も、太陽を中心とした、水星・金星・火星・木星・土星・天王星・海王星・冥王星

以下続く

Home

Home

人生の使命と目的

高橋信次先生 関西講演

本日は、「私たちがこの地球上に何の目的を持ち、どのような使命をもって生まれて来たのであろうか」という事について説明してみたい

と思います。

多くの人々の中には、両親が、自分たちの都合によって、好き勝手に私たちを生んだのだと思っている人たちがいます。

もう一つは、この地上界に肉体をもち、親、師、先輩より受ける教育、あるいは先祖や国が培って来た歴史的な環境の中において、自分

なりに、悲しみや苦しみ、喜びなど、苦楽の人生を体験して一寸先が闇の人生を計りかねている人たちです。

いづれにしても、私たちがこの地球上に出て来た以上は、安閑として無為無作の人生をすごしてよいのだろうか、という人生に対する矛

盾、その解決を求めたはずの信仰、その信仰に対する矛盾などを皆さまは痛感しているはずです。

それは私たちが、肉体的な五官を通してとらえ得たものを、目を通して見たもの、耳から聞いたもの、あるいは肌で感じたものによっ

て、その人の学んで来た、教育や、思想や、あるいは習慣によって判断をしているからです。

あまりにも物質文明だけが発達してしまっていて、私たちは本当の人間としての価値と、そしてその使命というものを忘れてしまっているの

が多くの現代の人々です。

あくまでも私たちの肉体を通して、感じ得たもの、あるいは皆さま自身が想像して、心の中で思うことによっ

て、自分なりに判断して生

活しているはずであります。その結果、女性の方は、より美しく、そして結婚をして平和な生活をしようとする者から、結婚した人たち

は、良い子を生んで、立派に育てようとか、経済的な安住を得て、もっと自分自身がより以上に優雅な生活をしたいとか・・・。

男性の方は、学校を出て、社会に出たならば、すくなくとも社会的な地位を築いて生活環境を安定しようとか、会社に勤めている人たち

は、少しでも役職を得て地位を築いてゆこうとか、それぞれ人によって違いはありますが、私たちが生まれてきた目的は果たしてそのよ

うなものなのでしょうか。

皆さま自身が、この地球上に出てくる前、皆さまの中に、そんな馬鹿なことはない、肉体が絶対なんだ。親から頂いたこの己自身の肉体

が絶対であるんだ、それ以外に何物もないと唯物的に考えるとしたならば、これをどう説明するのでしょうか。

人間の脳細胞は約二百億あります。二百億の細胞からなる頭脳が、すべてを記憶し、想像する能力を持っているとしたならば、皆さま

が、なぜ眠っている時に、私たちの耳の穴も、鼻の穴も、チャンと立派にあいているが、視覚も、聴覚も働かないという事実を何と説明

しましょうか、現代医学においてはまだそこまで行っておりません。

さらにまた、皆さまが学校やあるいは男女関係、恋愛問題、親子の対話などの不調和により心を悩まします。恋人にふられて悩んで身体

が痩せ衰える人もあるでしょう。なぜ悩んで私たちの肉体は疲労を感ずるのでしょうか。これについて現代の医学も物理学も証明するこ

とはできないのです。

悩みの原因というものは、どこから発するのか、苦しみの原因は、どこから出て来るのか、しかもなぜ肉体は年をとるに従って、老化現

象を起こしてゆくのか、なぜ人間は死んでしまうのか、この大きな問題を追求していったならば、私たちは全く肉体以外に、何物かの存

在があることを否定することができる人があるならば、説明して下さい。ということは私たちの現在持っているところの肉体は、この地

球上という場に対して適応したもので、神が保存し、我々が神の子として、先祖代々継承されてきて、現在の肉体を持っているからなの

です。

そうなりますと、肉体以外に何物かがあり、人は魂ともいう、あるいは意識ともいう、精神ともいう。その根本であるところの魂という

ものの存在を、皆さま自身は否定できないはずであります。なぜならば、今の皆さまの肉体は、親から頂いたものですが、魂は親から頂

いたものではありません。

もし魂を親から頂いたものであるとしたならば、なぜ、親が子供の心が解らず、子供が親の慈悲も解らず、親不孝という現象がなぜ起こ

るのでしょうか。もし魂を両親から頂いたものであるとしたならば、私たちはどこにいても、意思の断絶はないはずです。

ラジオもテレビも無線機も、人間の作ったものです。私たちが今スイッチを入れれば、どこかの放送局も、キャッチできるだけの能力を持

った受信機を発明しております。あるいは映像をも映し出せるだけのものを発明しています。

しかしこれらは人間の文明生活の知恵で、万物の霊長である人間自身が、なぜこのような能力を出せないのでしょうか。親と子の意思

が、親と子の魂が、同一のものであるならば、どこにいても自由自在に、心の中で思っていることから、考えていること、行っているこ

とが、通じ合わねばならないはずであります。ということは皆さまは、魂、意識の次元ということを考えねばならないのです。今の肉体

舟を絶対なる基盤として考えるところに、間違いが起きて来るのです。

そうなりますと肉体以外に、また別のものがあるということを私たちは否定できないはずであります。

眠っている時に、皆さんは自分の五官・六根がすべてだと思っていたが、脳細胞の二百億の集団がすべてを思い想像し、計算もする場所

であると思っていたが、眠ってしまったら、ただの一個の物質にしか過ぎない。しかしこの物質である私たちの肉体も、五官を通して調

和されずとも私達の五臓六腑は少しも機能は失っておりません。動いています。

といたしますと、私たちの脳細胞は五体をコントロールしている制御室にしか過ぎないということを、皆さまは知らなくてはならないの

です。なぜならば制御室である理由は、肉体以外の、意識、魂が離れている時には、全く無能だということですから。眠っている時に、数字

の計算でも学んでいるものがわかるならば、それは脳細胞がすべて記憶しているということを私は肯定します。しかし、その事実は無い

はずであります。

これは私たちの感覚器官に感受された信号は脳細胞の神経繊維の中に電氣的振動を起こすのです。これを脳波といっております。この電

氣的振動の波動が、人間の肉体の船頭である意識・魂に通信されて記憶されているのです。

このような次元の違った意識・魂の根本というものを考えた時に、肉体はただの人生航路を渡って行く、一つの乗り舟しかすぎないという

ことになるはずであります。しかもまた、神理というものは永遠不滅であり、線香花火のように消え去るものではないのです。肉体とい

うものは、この地上界において、己の魂を磨く乗り舟にすぎず、魂というものこそ永遠不滅の己自身なのです。

眠っている時に皆さまの魂は肉体から離れて次元の違った世界へ行っています。この地上界を皆さまが去る時

に、帰らなければならない

魂の世界へいつているのであります。

そうなりますと、私たちはまず次元の違った世界、あの世こそ実在界だということになるのです。すべてのものを作り出しているところ

の空(くう)の世界、仏教の根本は“空”ということが判ったならば、すべて解決するとまでいわれているようですが、この空の根本原

理、根本理念ですら、現代仏教はすでに忘れ去っております。そこで私たちが実在界という次元の違った意識の世界は、この地上界より

以上に文明も進歩し、地上界における原子細胞ではなく、精妙な光子体ともいうべき、光の細胞を持った肉体であるという事実、これは

皆さまが、仏像を見たり、あるいはイエス様の姿の映像を見る時には、必ず体から後光というものが出ているはずで、これは皆さんの

あの世に帰る時の自分の肉体なのです。

あたかも太陽が熱・光のエネルギーを、この地球上の万生万物に平等に与えているように、神もまた、この地上界の万生万物に慈悲と愛

の偉大なる光を、すべて平等に与えているということです。

太陽の熱・光のエネルギーが、貧乏人、金持、地位、名誉、こんなものに全く関係なく、平等に与えられるように、神の愛と慈悲もまた同

じであります。しかるに私たちは、永い歴史の中に、先祖代々伝わって来たところの信仰体系の中から、一生懸命に祈ることが、本当の

信仰の道だと大きな間違いを犯しているのであります。

私たちは自分の心の中に、神は慈悲と愛の力を、万生万物に平等に与えている事実を見た時に、神はすべてのものを人類に与えていると

いうことを知らなくてはなりません。だが、神の慈悲と愛の光を受けることの出来ない人が多いのです。

神の子たる己自身の本性を失ってしまっているために、うらみ、ねたみ、そしり、自己保存、自我我欲の暗い想念が、心の曇りを作り、

あたかも太陽が、地球上の曇りによって、その光をさえぎられるように、神の光を己自身の不調和な想念と行為によっておおってしまう

のです。

仏教の根本精神は、人間がこの地球上に生まれてくると同時に、修行のために、神の子としての自覚の九〇パーセントが潜在してしま

い、肉体舟の五官六根がもたらす自己保存、自我我欲の黒い想念が神の光をさえぎり、己の魂を曇らせて生老病

死、愛別離苦（あいべつ

りく）、怨憎会苦（おんぞうえく）、求不得苦（ぐふとくく）、五蘊盛苦（ごうんじょうく）といわれる四苦八苦の苦しみを作ってしま

います。

その苦しみの原因は、全て神の心を忘れた皆さんの魂・意識の中心である心というものが作るのです。

その苦しみの中から、己自身の反省がその魂を調和させ、平和な、執着から離れた安らぎのある人間としての本性、己自身を悟るにはど

のようにすればよいかということをお教えているのです。

それを当時の無知文盲の衆生にも解りやすく説明するために、方便をもって説いたのです。

それが、皆さんもよくご存知の法華経です。インドの当時、中国の時代においても、ほとんど泥沼の中に美しく咲く、あの一輪のハスの

花の姿を通して教え導きました。



「皆さん、あの泥沼の中をご覧ください。あの泥の中は、ウジ虫やハエがいっぱい群っている。あの汚ない泥の中に咲く美しい、一輪のハス

の花をよく見るがよろしい。…… あなたたちの肉体というものは、あの泥沼のようなものなのだ。なぜならば、目を見れば目糞しか

出ないではないか、鼻を見れば鼻糞、口を開けば痰、あるいは体から出て来る汗、これも汚いものだ、このように大小便に至るまで、人

間の肉体から出るものは、一つとしてきれいなものは無いのです。この汚ない泥沼のような、人生航路の乗り舟である肉体も、その船頭

さんである意識、その中心である心というものが、神理を悟って執着から離れ、生老病死という根本を悟って、己自身が八正道の神理を

実践したならば、あの美しいハスの花のように、あなたたちの心は、仏の心と調和されて、安らぎの境地に到達して、苦しみから己自身

を開放することができるのだ」とこのような方便の説話なのであります。

しかるに仏教もいつの間にか難しくなり、智と意の哲学的学問に変わっております。『観自在菩薩行深般若波羅蜜多』、といったところで

解りますか。

無学文盲のインドの当時の衆生に、ラジャグリハーの郊外において説かれたあの仏教の神理が、そのような難しいものであったと思いま

すか。

「ゴードマ様よ、何によって生活しておられるのですか。私たちは、このように農耕をして、米を作って生活しております。あなたはなぜ

そのようにしておられますか」と問われたことがあります。

その時に「あなたは米を作って生活をしているが、私はあなたたちの心に神理の種を蒔いて、その実るのを待つて生活をしている。人間は

米のみによって生きるのではないのだ。人間の心こそ偉大なる不変のものなのだ」

そして「あなたは今、このように肥沃の土地によって稲を蒔いて生活をしているが、まず稲を蒔くならば、あの上の方の痩せた土地に蒔く

か」と聞きました。

その時に農夫は「上の方の土地は砂利が多く、そのために米は実りません。土地に地味がありません」といいました。

ゴードマは「私の説いている神理も、受け入れる機根の無い人たちに、いかに説いたところで、この神理の種は、人々の心の中に入って芽

生えるものではない」とこのようにこんこんとその農夫に説きました。

そのように方便を通して、その時の衆生の機根に応じて、神理を説いたのであります。

仏教というものが、二千五百余年の間に、本当の心の偉大性を失って、排他的に変わってしまったのですが、本来は転生輪廻をくり返す

毎に、自ら誓って来た皆さまの魂の意識の中のテープレコーダーには、綿々として、神の子としての偉大なる真実が、あまさず記録され

ているのです。

皆さま自身が、一心に信仰をしている中においても、なぜなぜという疑問が出て来る原因もそこにあるのです。

人間は心をふさいではなりません。あくまでも疑問は疑問として、解答を得た時に、皆さんの心の中に神理の芽が、芽生えてくるという

ことです。

このような事実をよく知ったならば、私たちは次元の異なったあの世があることを否定できないはずです。なぜならば物質というものを

一つ考えても、仕事を成し得る能力であるエネルギーというものの存在をハッキリと物理学の上においても、実証できるからです。

そうなると物質に対するエネルギーというものの次元と、物質の次元というものは、物質とエネルギーは一体と

なっているはずで、物

質そのものも、エネルギーの一形態である事実は、原子力科学の基礎理論になっているアインシュタインの理論においても正確に立証さ

れているのです。

そうやって参りますと、皆さま自身が、この肉体と、もう一つの肉体、光子体を支配している魂の偉大性を知らなくてはならないので

す。

皆さまは、実在界（あの世）において、すべて神の子としての偉大な智慧と、偉大な魂を兼ね備えて来ているのです。そして皆さんはあ

の世、次元の違った四次元以降、多次元の世界から、自分が望んで今度はこの日本に生まれよう！。あの世において、お互いに「あなたは

今度はお父さんになって下さい」「あなたは今度お母さんになって下さい」と、あの世ですでに約束して来ているのです。

ところが、お父さん、お母さんはこの地上界に先に出て来ます。生まれて来たこの環境や思想や教育と、長い歴史の中に、人間の作り出

した習慣によって両親は、その中で盲目の人生を歩み、神の子としての自分自身を見失ってしまいます。

そのために、お互いに適齢期になるに従って、ある者は恋愛や、見合いをして夫婦になって行き、ある者は夫婦になる約束を破棄して、

いろいろと問題を起こして自分自身が、苦しみを作ってゆくのです。

そのうちにこの世において、夫婦としてお互いに愛の絆（きずな）という中に結ばれて、神の子としての自分が何をなすべきかというこ

とを悟った時、天上界からまた子供が出て来る事実も知って出て来ているのです。あの世から皆さまが、光子体という肉体を持って、お

母さんの腹の中に入る、三ヶ月頃まではみな大人なのです。そうしてその時には、皆さまは九〇パーセントの潜在意識というものが逆に

なります。

実在界においては、表面意識が九〇パーセント出ていますが、この現象界においては、表面意識はわずかの一〇パーセントしか出ており

ません。お母さんの腹に入るまでは、九〇パーセントの意識を持っておりますから、人間はこの地球上に何の目的で生まれて来るかを自

覚しております。

昨日も三ヶ月位のひどいつわりの方が参りましたが、即座に癒しました。これもお母さんとあの世の子供との意

識が合わないために起こ

る現象なのです。それも心でお互いが反省し調和されれば、そのようなものは即座になくなってしまいます。そこであの世から出て来る

時は、今世においてこの地球上の一年間の修行は、あの世の百年にも匹敵するだけの、善と悪とがミックスされた厳しい修行所であり、

だからこそ魂の修行になるのだということを知っているのです。

嘘と真が並び合ったこの世の中において私たちは本当の魂の修行を経て、その道を実践修行して来るということを、あの世にいる時は、

皆さまはみな納得して来ているのです。

そうして皆さまの魂の兄弟、あるいは多くの友だちに送られて勇んで出てくるのに、この地上界に出てしまうと、五十年、百年間という

ものはそれぞれ断絶します。心の窓が開ければ別ですが、窓が開けていない場合は断絶です。いうなればあの世からは、この地上界に出

て来ることは死であります。

そこでその当時は、今度は医者になって立派に多くの人々を救って来ますと行って人々は出て来るのです。あるいはまた、その神理を、

病める多くの人々に流布いたしますと出て参ります。あの世へ帰りますと、人類はみな兄弟だという事を悟っているからです。

この地球上へ出れば、それぞれ長い歴史の中に、私利私欲、自我我欲に基づいて、神の体であるその地球上を占領して、これこそ我が国

である、これこそあの国であると、お互いに国と国との争いを繰り返しておりますが、そうした争いがあるのはこの地球上と地獄界だけ

です。実在界では全くそんな事はありません。

人間はみな神の子である以上、皆さまは九十パーセントの表面意識があの中世では開いているから、光の天使と全く同じような光子体にな

っています。

それですから自分自身の心で思うことは、即座に相手にも通じてしまいます。自分の生命を持っておっても、これは自由になりません。

それだけ悪い心が起これば、即座に神の光は消えてしまいますから、自分ですぐ反省します。なぜこのように心が暗くなったのか、その

原因を追求して来て、再び反省した時に、神の光は我々にさんさんとふり注いで参ります。そしてこの地上界に出て来て「今度こそは、今

度はやるぞ」といって出て来るのです。

この地上界に出て、わずか一〇パーセントの表面意識で、人生を渡って行くために、私たちの心というものは解りません。そのために皆

さま自身が今自由に行動をしておりますが、本当は暗中模索の人生ですから、また修行にもなるのです。このことは実在界においては全

部解っております。今度こそ使命を果たしてきますと送られて出て来たところが、その約束を破棄して、自分自身が物質の奴隷となり、

心というものを見失っていくのです。

そういうことを皆さまが本当に知ったならば、今、両親に対して感謝する心を、行為に表わし親孝行するのは、万物の霊長として、神の

子として当然のことなのです。ところが現代の多くの人々は、そのような心の持ち合わせはなく、親が勝手に生んだのだとか、教育する

のは親の当然の責任だとかいいます。

貧乏に生まれれば、親を恨み、世間を恨みます。この地上界へ出て来る時、あの世において、金とか、地位とか、名誉とか、こんなもの

は関係ないのです。

ただひたすら永遠に変わらないところの、皆さまの船頭さんである魂、この魂を磨くということがまず第一なのです。その魂の中心であ

る心が、すべての苦しみや、悲しみを作る、その根本を説くべきキリスト教も、また仏教も、永い歴史の中にゆがめられて人々の食いも

のになってしまったのです。

そのために、偉大なる心の働きという「正法」は、人々の知と意によって、ほこりとちりにまみれてしまったのです。私たちは、このほこ

りを払いに地上界に出て、その道を説いているのです。

私たちは今から二千年前のイエスの神理、また、二千五百余年前の釈迦の神理に戻すために、ほこりを払いに来ているのです。

そこで皆さま自身が、正法神理の偉大性を悟り、心こそ永遠に変わらない己自身であり、永遠の生命の中で今地球上の最も不安定な修行

所において、己自身が今も修行しているのだという自覚を得た時に、私たちは偉大なる神の子としての神理の実践行動の中に、皆さまの

心は神の光によって包まれて行くのです。

このような事実を我々は知って、実在を通し、神の子として、この世の中でなすべきことは、お互いに助け合うことなのです。己自身が

足ることを知ることなのです。現代社会に心を失ってしまった多くの人々は、足ることを忘れて、己の私利私欲、自我我欲を満足させよ

うとしております。果たしてそれで調和がありうるでしょうか、その事実を歴史を追って考えてみましょう。

私たち人類は、この地上界に天孫降臨（てんそんこうりん）して来たのです。その当時の文明は、現代の科学よりはるかに進歩していま

した。そして地上界に出て来た人類は数千人でした。この人類はこの間にユートピアを作り、心は実在界（あの世）と常に直接通信され

ていたために、心に執着がなく、このために当時は、八百才、千才と、この地上界で優雅な楽園を築いていたのです。人間はそのうち

に、子孫が殖えるに従って、己が子孫を大事にするようになり、子孫子孫と一つの枠を作り、その中についに原始共産体制というものを

作り、権力によってこれにはむかう者は滅ぼされていったのです。

Home

商は現代の武力

こうして武力はやがて豪族を生んで行きます。そして豪族はいつの間にか他の豪族との争いを展開していったのです。その展開していっ

た豪族の争いは、武力、権力の力の差によって、弱肉強食の現象を起こして斗争と破壊を繰り返して行きます。そのうちの有力な豪族に

よって統一されて行くに従って、その武力は武将を生んでしまいます。武将は自分の地位と環境と名誉を守るために、彼らはその武器の

力によって、封建社会というものを作っていたのです。

日本でいえば、士・農・工・商、自分の永久的地盤、子孫を崩さないために、金力と武力と権力によって、彼らは自分の地位を築き上げ

て行きました。

その中に武器というものを商品とした商人が、彼らと組んで要領よく介入して、不調和な争いと斗争を、しかけていくようになったので

す。そして彼らは資本主義社会というものを作っていったのです。武力の時代には自由というものがありません。

日本では、特に日蓮の出た当時などは、厳しい封建社会の環境でありました。そういった時代に正しい法が説けるのでしょうか。いわんや

私たちがかつての封建時代に、今のようなことをいったらどんな事態になるのでしょうか。

商人の台頭により徐々に封建社会が崩れ、ついに資本力が、この世の中を支配するようになって行きます。この

資本主義社会というもの

では、経済という力を持って相手が築き上げてきた会社、株を買い占めることもできるのです。金力をもって人間を奴隷にすることもで

きるのです。

このような不平等な社会に、常に疑問をもって、底辺の人たちが、このような世の中で良いのだろうか、ついにこれが理論体系づけら

れて、千七百九十八年、オーギュスト・コントという人が出て実証哲学というものを発表します。この世の中というものは、ナポレオン

のような権力者によって多くの人々が犠牲になってよいだろうか、これが本当だろうか、彼らは疑問を持ち、社会というものはこんなも

のであってはいけないのだと説きました。

千八百二十年には、ハーバード・スペンサーといわれる方が、イギリスに出て、社会有機体説というものを発表し、カール・マルクス

は資本家と労働者が斗争する中に、文明は発達して行くのだと、斗争によってこそ勝ち得ることができるのだというマルクス・エンゲル

スの唯物史観というものが生まれて参りました。こうして資本主義に対する共産主義が生まれて来たのであります。

しかし、資本主義にしても、共産主義にしても、その根本になる心というものの存在が、どこにあるでしょうか。すべて物質と経済とい

う、この二つのものを根底にして、彼らの基礎は成り立っているのです。

しかし自らの真の心を、己自身が求めようとするならば、もはや、このような資本主義にしても、共産主義にしても、この中から発見す

ることはできないのです。それを人々は、宗教に求めていったのです。

ところが宗教もすでに末法と化しているため、安住の世界を探し求めても、心というものが、ハッキリとつかみ得なかったために、私た

ちはその本質的なものを己自身にキャッチすることができなかつたのであります。また現代社会における、資本家と労働者がより反目し

て争っている、これは現代の物価の不安定も、その原因はどこにあるのか、それは労使双方にあるといえます。

人間は心を失ってしまい、神の子として、この地上界に出て、己の魂を磨き、神意の仏国土を作る目的なのです。斗争と破壊は万物の霊

長である人類のなすべき行為ではないのです。万物の霊長に進化するところの動物たちが、そのような斗争と破壊を繰り返すのです。

人類はすべて話し合いによる調和、己自身の心をお互いに譲りあい、そして己自身に足ることを知った生活をするのが、まず大事な

です。心を見失っているために、私利私欲に走り、人間がいつの間にか動物以下になり下がっております。

あの猛獣たちは、自分の腹がいっぱいになっていたら、決して他の動物を襲いません。人間は自分の腹がいっぱいになっても、欲望の

虜（とりこ）となり、あくことを知らない行為を繰り返している。これが本当の人間として、神の子として、なすべき行為でしょうか。

太陽は熱・光のエネルギーをすべて平等に与えているはずです。人間はみな平等なのです。だから皆さまは、自分の生まれた環境は、自

分が選んだということを忘れてはならないのです。なぜ人間はこのような経済的な苦しみをするのであろうか、なぜ病気をするのであろう

か、という皆さま自身が疑問を持った時に、私たちは人のせいにしてはならないのです。自分が貧乏の環境の中から、いかに経済的に裕

福にしていくかと考えるべきで、このようなものによって自分の心まで、貧乏にしてはならないのです。例えば人間が、人生を渡って行く

ところの肉体舟が欠陥車であろうとも、その船頭さんである魂まで欠陥車にしてはならないということを確認し、と自覚しなければならな

いのであります。

こうなった時に、私たちの心こそすべての根本である。そしてこの心を永遠に我々は進化させ、そして過去、現在、何億万年も転生輪廻

して来たところの改善された姿は、今皆さまの思っていること、行っている姿をよく見た時に、皆さま自身の過去は、今すべて集約され

た自分自身だと思ふことです。

私たちは、このように魂の偉大性を知り、物質経済の中にあっては足ることを知り、お互いに己というものを中心にせず、大自然界は大

調和の中に助け合って、生きているということを知ったならば余っているものは人々に布施し、足らん人たちに愛と慈悲を与え、お互い

に平等である人間同志の心と心とのふれ合いによって、この社会を築いて行くことが、神の子として私たちの一番重大な使命なのであり

ます。

この地球も大宇宙体から見たならば、小さな細胞にしか過ぎません。この大宇宙体は神の体であり、そして大宇宙体を支配しているもの

は、大宇宙の意識であり、これこそ本当の神なのです。

これを私たちは知らずに、あらゆる時に神様を祭ります。皆さまがこの目で、この体で、その神とふれ合い、話

し合う能力を持っている

ならば神と認めることです。私たちはそのような神とは即座に自由自在に話し、彼らの実体をつかむことができるから真実を持っている

のです。神は罰などは与えないのです。

皆さまが、自分の可愛い子供たちや、兄弟たちが不幸になることを、親として望みますか、愛と慈悲に満ちている神が人間を不幸にする

ことをしますか。

病気は生き方の反省

罰は皆さま自身が、神理を悟らずに、己の心に嘘の生活をした時に、嘘の行為をした時に、己自身の心の曇りによって神の光をさえぎっ

て、その結果が原因を作っていくのです。そのようなことを考えた時に、病気をしても、すぐに医者へ行って注射をうてばすみやかに治

ってしまうと思っはいけません。その前に、まずじっくり自分はこのような病気になぜなったのか、そのなった原因を追求していった

時に、必ずその中には悪の根っ子があるはずで。それから医者に見て貰っても遅くはありません。

病気も一つの反省のチャンスなのです。我々はこのようなことをよく知り、毎日毎日の生活に対して、貧乏をしたからといって、自分の

心まで貧乏にしたり、体が悪いからといって、自分の心まで欠陥車にしてはいけないのです。

私たちの魂というものは、今世がすべてではないのです。永遠の生命の中に、私たちは転生輪廻を繰り返し、あの世に帰り、この地球上

に出る時に、皆さんの肉体という舟を頂き、またこの地上界を去る時には、親から頂いた肉体は、地上界へ置いて帰らなければならない

のです。そしてまた新しい肉体を持って、永遠の転生輪廻を続け、この地上界においては、太陽の熱・光のエネルギーで大自然の万物万

生は育（はぐ）くまれ、皆さんの肉体を保存する事ができるのです。

一方においては、神の光はすべて万物平等に与えられて、慈悲と愛の中に、私たちは存在しているということを知ったならば、今の一秒

一秒の人生に対する価値というものが判るでしょう。皆さまが何億、何千万年も転生輪廻して来て、**自分自身が作った心の曇りを修正す**

ること、これが私たちの地上界に生まれて来た目的なのです。

そして私たちが魂を磨くと共に、神の体である地上界を、万物の霊長である人間が心と心の調和によって、平和

なユートピアを作ってい

った時に、皆さまはこの地上界に、偉大なる卒業生として、あの世で迎えられます。

私たちは、やがてあの世に帰り、自分自身の一生はすべて意識に記録されております。その記録された、思ったこと、行ったことを、自

分に嘘のつけない善なる己自身が裁くのです。

皆さまは、自分の心に嘘がつかないように、その善なる神の証（あかし）の己の心が、なして来た己自身を裁くのです。その時に皆さま

自身がなし終えなかったならば、執着となり、いったんは地獄界に堕ちて神の子として、自覚するまで地獄で厳しい修行をするのです。

自分が神の子であると悟ったならば、皆さまの心の曇りは晴れて、あの世にも照されているところの神の光を受けるのです。

このように、私たちが八正道を、中道の神理を通して、毎日毎日の生活をして、お互いに人々と助け合った人生を歩んで行くことが大事

だということです。おわり。

